

広島原爆戦災誌

序

原子爆弾第一号による広島の大惨禍は、まさに人類の反省として、永遠に語り伝えられなければならないことである。

原子爆弾の投下は、第二次世界大戦終結の決定的契機をもたらしたが、一方、新エネルギー開放時代の扉を開いた。そして、世界平和への運動を促進し、現在なお、激動の中に発展しつつある。この意味において、残酷無比な犠牲を強いられた広島市は、また新しい世界建設への基点ともなったのであるが、この歴史的事実を書きとどめておくことは、世界恒久平和の確立を願う広島市の使命でもあり、莫大な数の犠牲者に対する最も意義深い慰霊であると言えよう。

原子爆弾の特異性は、他のTNT爆弾の威力をはるかに超越した破壊力を有することと共に、放射能線による障害の、長期にわたる発生であるが、被爆後、各界の権威者によって調査されているとおり、人体のあらゆる造血機能を冒し、治療なき疾患に陥らしめるという恐るべき作用は、文字どおり人類滅亡につながるものである。

すなわち、原子爆弾が「最後の兵器」と言われるゆえんであり、再びこの世界において、使用されてはならない凶器であるということは、もはや議論の余地はない。この事は、本誌の記述に示すとおり、身をもって広島市が証明するところであり、全世界に訴えてやまない真実である。

ここに広島市は、原子爆弾の炸裂に伴う惨禍を、多くの被爆体験者の証言や各種の調査資料など、つぶさに集大成して「広島原爆戦災誌」を公刊し、二十数万に及ぶ犠牲者の冥福を祈ると共に、平和を記念する永遠の献花とする次第である。

昭和四十六年八月六日

広島市長 山田節夫

例言

- 一、広島原爆戦災誌は、本論四巻・資料編一巻計五巻よりなる。
- 一、本巻は、「第一巻総説」である。まず、大軍事基地広島市の概要を説明し、原子爆弾の投下・炸裂による破壊状況と、その特異性を述べ、生存者の果敢な救護活動から、復興第一歩までの模様が把握できるようにつとめた。
- 一、本文の叙述は、現代かなづかいとし、なるべく平易につとめたが、戦前の資料、または漢字制限以前の資料が多いため、当用外の漢字を使用した場合もある。なお、地方的な固有名詞にはふりがなをつけて、通読に便利なようにつとめた。また、敬語は省略させていただいた。
- 一、本文の叙述にあたり、体験記・談話、あるいは引用図書など、その出典を明らかにするようにつとめた。
- 一、各巻に使用した被爆関係の写真は、その歴史的記録を尊重し、それぞれ撮影者、撮影年月日、撮影場所などを明記するようにつとめた。ただし、一部には不明のものもある。
- 一、各巻の執筆は、小堺吉光がおこなった。
- 一、各巻の監修は、今堀誠二・後藤陽一・四竈一郎がおこなった。
- 一、各巻の背文字は、広島市長山田節夫の揮毫になる。
- 一、各巻の編集にあたり、被爆者をはじめ多くの人々から資料の提供、貸与、あるいは種々の指示や便宜を与えられたことに対し、深く感謝の意を表する。

以上

昭和四十六年八月六日

広島原爆戦災誌 全五巻 構成

第一巻第一編 総説 付録 (一)原子爆弾被害状況・広島市街説明図 (二)焦土広島の写真

第二巻第二編 各説 第一章 広島市内各地区の被爆状況

第三巻第二編 各説 第二章 市内主要官公庁・事業所の被爆状況

第四巻第二編 各説 第三章 市内各学校の被爆状況 第四章 市内主要神社・寺社・教会の被爆状況 第五章

関連市町村の状況

第五巻 資料編

第一編 総説

序章 広島市の概要 1

第一章 第二次世界大戦下の広島市 16

第二章 原子爆弾の惨禍 51

第一節 投下・炸裂 51

第二節 威力と障害 88

第三節 人的・物的被害 158

第三章 救護活動 203

第一節 救護状況概要 203

第二節 広島陸軍船舶部隊の活動 217

第一項 陸軍船舶司令部隷下の諸部隊 217

第二項 陸軍船舶司令部 221

第三項 陸軍船舶練習部 249

(一) 陸軍船舶練習部本部 249

(二) 陸軍船舶練習部第10教育隊 256

第四項 教育船舶兵団司令部 282

第五項 陸軍船舶砲兵団司令部 284

(一) 陸軍船舶砲兵団衛生教育隊 285

(二) 陸軍船舶砲兵団第1聯隊第1中隊 290

第六項 暁第一六〇九部隊芙蓉隊明石隊 292

第三節 陸軍軍需輸送統制部の活動 294

第四節 呉海軍鎮守府の活動 301

第一項 呉海軍鎮守府 301

第二項 賀茂海軍衛生学校 312

第五節 広島陸軍病院の活動 329

第一項 陸軍病院の概要 329

第二項 広島第一陸軍病院 354

第三項 広島第二陸軍病院 399

第四項 大野陸軍病院 417

第六節 歩兵第三二一聯隊の活動 429

第七節 市内各病院の活動 434

第一項 広島赤十字病院 434

第二項 広島通信病院 465

第三項 三菱重工業株式会社構内病院・構内診療所 477

第四項 広島陸軍共済病院 484

第五項 県立広島病院 490

第八節 県下医療救護班の活動 501

第九節 県地方事務所職員・警察官・警防団の活動 526

第十節 県外その他からの救援 549

第四章 被爆直後の広島 565

第一節 焼野原の生活 565

第二節 復旧への努力 578

一、広島新開地干拓図	15
二、広島市大避難実施要領	33
三、広島市内陸軍諸部隊の概要	
(一) 在広主要部隊配置図	36
(二) 広島市軍用通信網	37
(三) 在広部隊一覧表	38
四、残留放射能による障害調査概要	136
五、原子爆弾による人的被害数(推定)表	165
六、重要建物被災状況表	198
七、県内医療救護班応援状況表	516
八、県下警防団出動状況表	545
九、県外医療救護班応援状況表	550
一〇、被爆後の人口復帰状況	621
一一、被爆後の建物復興状況	622

序章 広島市の概要... 1

平和祈念の聖地

広島市は、太田川[おおたがわ]の形成した三角州の上に発達した都会である。太田川[おおたがわ]は、その源を中国山脈に発し、安佐郡可部町[あさぐんかべちょう]付近で、広島平野の東辺を流れ下り、広島市に入ってから東に神田川[かんだがわ]、西に三篠川[みささがわ]を分派し、市の中央部では、東から猿猴川[えんこうがわ]・京橋川[きょうばしがわ]・元安川[もとやすがわ]・本川[ほんかわ]（太田川の本流）・天満川[てんまがわ]・福島川[ふくしまがわ]（現在・放水路完成により廃川、埋立）・山手川[やまてがわ]（現在・太田川放水路）の七川を分岐しつつ広島湾にそそいでいる。これら七つの川の流出する土砂によって、今日までたゆみなく三角州が形成されて来た。

瀬戸内海沿岸都市である広島市は、寡雨乾燥地域であり、気候は温和で快適、天災地変も少なく、明治二十二年（一八八九）四月一日、市制を施行してからは、一段と産業・文化両面にはなばなしい発展をとげた。

昭和二十年（一九四五）八月六日午前八時十五分、世界最初の原子爆弾によって、空前の大惨禍を受けた広島市は、その後、市民のなみなみならぬ努力と、天恵の好立地条件から、内外の人々の瞠目する復興を成しとげた。

現在の市域は八六・六八平方キロメートル（約二八八万九、〇〇〇坪昭和四十年十月一日現在）、世帯数は一八五、八五八世帯・人口は五四八、八六七人（男二七四、六八〇人、女二七四、一八七人、昭和四十四年十月末現在）。このほか、外国人が男四、〇九八人・女三、六八二人合計七、七八〇人（世帯数二、四八五世帯）が住居している。

この人口は、原子爆弾爆直後の昭和二十年十一月一日の調査（勅令第五三三号）による総人口一三六、五一八人（男六八、五五七人、女六七、九六一人）、総世帯数三三、二七二世帯と比較すると、実に驚異的な膨脹というほかなく、気候・風土に恵まれた広島市は、中国・四国両地方におけるすべての分野の中心的大都市であり、産業経済、文化教育面のいちじるしい伸長は、まさに雄都の名をほしいままにするものである。国鉄山陽新幹線の完成も近く、その上、すでに自動車の中国縦貫道も策定されており、尾道からの四国架橋（国道）が成り、島根県の松江市・浜田市を結ぶ新鉄道ができれば、名実ともに重要な拠点都市として飛躍発展するであろう。

被爆後、広島市の復興にあたり、新生広島市の性格について多く論じられたが、昭和二十四年八月六日、恒久の平和を誠実に実現しようとする理想を、高くかけて公布された広島平和記念都市法は、その後永く広島市民の精神的支柱となり、世界史の上にも、人類の平和祈念の聖地として、現代から未来へむかって重要な役割を持つ都市となったことは、人々のあまねく知るところである。

戦後復興した町々に無数の原爆慰霊碑が建立されると共に、一方では原水爆禁止運動の中心地ともなった広島市は、遠くさかのぼれば、その沿革は縄文時代に始っている。

古代の状況

縄文時代にはまだ、金輪[かなわ]・宇品[うじな]・似島[にのしま]はもとより、比治山[ひじやま]（海拔六九・六メートル）・仁保島[にほしま]（黄金山・海拔二一・二メートル）・江波山[えばやま]（小丘陵・海拔三五・七メートル）などは、遠く陸地部から離れて点在する島々であって、牛田[うした]・中山[なかやま]・矢野[やの]などの海辺に、原始的な小集落があったにすぎなかった。

この頃、安芸国[あきのくに]における一拠点は賀茂郡の西条盆地であったが、現在、広島湾周辺部あるいは太田川下流域沿いにも、弥生時代や古墳時代の多数の遺跡が発見されており、また安芸の国名の由緒につながる安芸郡安芸郷の所在からみても、広島湾一帯もすでに重要な地位を占めていたことがうかがわれる。広島市に接する安芸郡府中町は、地名から律令制度の国府の所在地に由来することが考えられ、近年その下岡田から官衙と思われる遺構が発掘されている。

黎明期

八世紀末、大和国西大寺の庄園が牛田におかれ、十世紀初めに、佐伯郡速谷[はやたに]神社、および伊都伎島[いつきしま]神社・安芸郡多家[たけ]神社が、延喜式神名帳に式内社として載るようになると、この頃、広島湾沿岸地域はいよいよ安芸の国の中心的地位を固めてきたのである。古代末期、平家一門による厳島神社に対する異常なまでの崇敬は、この地域の重要性を一層明らかにした。

承久の変（一二二一）後、京都進攻軍として功績をたてた武田信光が、安芸の守護に任ぜられ、安佐郡銀山城に拠

ったが、高田郡吉田の郡山城に拠る毛利氏も隣接地域に、その勢力をのぼし、戦国時代に入ると、太田川の支流三篠川の流域にまで進出し、ついに安芸の国を中心にして、中国地方の広い範囲を統一した。

毛利輝元の築城

豊臣時代に入って、毛利輝元[もうりてるもと]は領国経営の上から吉田の郡山城を去って、広島湾頭太田川河口の地に、新城池を選定して進出して来た。

天正十七年(一五八九)二月・輝元は吉田を出発し、五ヶ村(白島・広瀬・平塚・鍛冶塚・在間五か所で、広島(古称)の現地調査を行ない、明星院山(二葉山)・新山(牛田)・己斐松山に登って検分した結果、太田川デルタのうち、「最も広い島地」のなかに築城することにした。

天正十八年末、石垣の一部を除いて竣工、翌十九年正月八日に多くの家臣団を率いて入城したのであった。

城郭の築かれた地域を、「広島」と命名されたのもこの時であると、言われているが、なぜ広島と称したかは諸説あってさだかでない。

豊臣政権ならびに毛利氏の体制強化を背景にして、今日の基町地区全般にわたる広島築城は進み、城下町の町割もこれに併行しておこなわれた。これまで小集落の散在に過ぎなかった「五ヶ村」の海辺には、家臣団の住宅がたくさん並び、また、各地から商人や職人を招き、それぞれの居住地区を定めて、交易を盛んにした。

同時に、水運の便を開くため、太田川の多くの分流を利して整備が進められ、多くの運河(西塔川[せいとうがわ]・平田屋川[ひらたやがわ]など)や船着場(天神町)が作られ、運河に沿う商人町は栄えていった。

このようにして、一二万石の大領主にふさわしい城下町が、一応できあがった、このとき名づけられた町名が、四五〇余年後の原子爆弾被災時にまで数多く残っており、それぞれの町の特徴が伝えられていた。

毛利氏去る

慶長五年(一六〇〇)、関ヶ原の役に際し、豊臣の総帥を勤めた毛利氏は、同役後に徳川家康に罪を責められ、ついに安芸国を去って、長門の萩に転じた。すなわち毛利氏は、鎌倉時代に安芸国吉田に所領を得てから三八〇年、これに移住してからおよそ二七〇年、広島に本拠を占めてから僅か一〇年にして、この地方の支配から離れたのである。

福島氏の在城

慶長五年十一月、芸備両国に新しく福島正則[ふくしままさのり]が封じられたが、元利五年(三九)六月、洪水によって損傷した広島城を、無断修築したという科によって改易になった。在城わずかに一九年間であった。

浅野氏の治政

元和五年八月六日、紀州藩主浅野長晟[あさのながあきら]が安芸国一円と備後国内八郡、都合四二六、〇〇〇石の領、主として転封された。爾来二五〇年間、明治初頭まで二二代続き、中国地方のかなめとして治政にあたった。

新開地の発達

六〇〇年の昔、九州探題として赴任の途次、今川了俊が干潮時に徒渉して、「しほひの浜」と記録に残した地域や、その頃まで海底であった場所が、現在の市域の海岸線から、はるかに奥まった地域にあることを思えば、太田川の吐出する土砂の堆積と相まって、新開の干拓が盛んに進められたということがわかる。

干拓事業(別図参照)は、築城時の大規模な干拓につづいて、面積において、ほとんどその五、六倍に達する市域の拡大が、浅野時代二五〇年間における干拓事業として達成された。従って、山地部や平野部に発展した町村のような古い伝承や民謡などの諸文化にめぐまれなかったとも言えよう。

封建時代、広島は常に軍国の府であり、領国支配の政庁所在地として発展を続けたが、新開地の拡大と相まって、商工業の発達も著しく、西国第一の城下町として富強と繁栄を誇る都会となっていた。

明治維新

明治維新は、封建大名の支配を脱した広島が、城下町から近代都市へと飛躍する大きな転機となった。

広島県となる

明治四年(一八七一)、廃藩置県により、藩知事浅野長勲[あさのながこと]に代って、中央政府から大参事河野敏謙が来任(八月)し、県庁内部の職制を改めて人心の一新をおこなった。

宇品築港

明治十三年(一八八〇)、千田貞暁[せんださだあき]が県令(明治十九年に県知事に改む)として着任し、宇品湾における新開築造と共に、港湾埠頭の築造を具体化した。多くの障害を乗り越えて、明治十七年九月五日に起工式を

挙行し、明治二十二年十一月にほぼ工事を完成し、翌年四月二十一日、落成式をおこなった。築港に要した経費は、当初予算の数倍にあたる三〇万円余に達したが築造によって得た土地面積は六二八、一二一坪に及び、皆実新開以南宇品島に至る海面が、広大な陸地となって出現した。

第五師団の発足

すでに早く明治六年、新兵制による広島鎮台が広島城内に設置されたが、明治十九年一月、第五師団と改称され、広島鎮台司令官陸軍中将野津道貫が第五師団長に任命された。第五師団は、次々とその機構を拡大していき、後年、日本有数の大軍事基地広島市となる基盤となった。

広島市の発足

明治二十二年(一八八九)四月一日、わが国最初の市として東京市以下三二市が誕生したが、このとき広島市も発足した。市役所は、中島新町の従前の広島区役所の建物を引継ぎ、初代市長に三木達が就任した。

鉄道の開通

日清戦争の勃発直前、明治二十七年(一八九四)六月十日に神戸以西糸崎まで開通していた山陽鉄道が広島まで開通し、広島駅が新しい玄関口として、東部の大須賀村東松原の一角に設けられた、続いて軍事上の必要から、広島駅と宇品港を結ぶ鉄道(現在の宇品線)が、同年八月二十日に開通した。

なお、山陽鉄道が広島市以西徳山まで開通したのは、明治三十年九月で、このとき横川・己斐両駅が設けられた。

こうして維新後の広島は、中国地方の中心的地位を占める都市として、各種の分野にわたり着々と近代化を押し進めていくと共に、一方では、軍事上の中心地ともなり、ますます軍都的性格を強めていった。

日清戦争

明治二十七年八月、日清戦争が勃発して、広島市はついにわが国軍の戦略中心地となった。連日、全国から多数の兵員が集中し、続々と宇品港から征途についた。このとき、千田県知事の築いた宇品港が、開通したばかりの山陽鉄道と相まって、軍事上の輸送基地としての機能を遺憾なく発揮することとなったのである。

大本營の設置

同年九月十五日、対清作戦のため、明治天皇は大本營を広島に進めて指揮にあたられたから、文武百官がこれに随行し、広島市はまさに臨時首都の様相を示したと、当時の市民が記録している。

明治天皇は、翌年四月二十七日まで滞在されたが、この間、市は空前の活況を示し、各種の産業も興り、経済力も著しく充実した。

軍事施設の増加

明治三十年、広島陸軍糧秣支廠(宇品町海岸通り)、および広島陸軍兵器支廠(基町)が設置され、また同年広島陸軍幼年学校(基町)が開校された。

広島高等師範学校の設置

しかし、明治三十五年(一九〇四)に広島高等師範学校が設置されたことの意味も大きい。この事は明治維新以後の広島の新しい文化導入の基になったとも言われ、著名な新進有為の学者を教授陣に迎え入れて、市内外に及ぼした教育上の影響は大きかった。

こうして、広島市は軍都であり、経済都市であるとともに、また、文教都市としての性格を持つようになった。

日露戦争

一方、明治三十三年の北清事変、さらに明治三十七年(一九〇四)の日露戦争と相次ぐ大陸への出征にあたり、広島はいよいよ大規模な軍隊の集中と移動の基地となり、市中はふたたび異常な活気を呈した。そしてこの後、広島市はますます軍都としての性格を強め、軍事基地的色彩を濃くすることになったのである。

電車の開通と繁華街の伸展

日清・日露両戦役によって人口激増し、明治四十年代から大正にかけては、旧城濠と西塔川が埋立てられると共に、大正元年から六年にかけて、広島駅前・紙屋町・御幸橋間、八丁堀・白島間、紙屋町・己斐間(以上大正元年)、御幸橋・宇品間(以上大正四年)、左官町・横川間(大正六年)に「電車」が開通した。これが直接的な原因となって、広島市の繁華街が移動した。すなわち、明治維新の動乱もようやくおさまった明治十五年から大正へかけて、中島本町(現在・平和公園)から横町にわたって出現した歓楽地帯が、次第に中島から東部へ移動し、新しい盛場として千日前(八丁堀)・新天地ができ、広島駅前の松原町付近の飲食店街や本通り商店街、または海陸をつなぐ宇品町の海岸通りなどが栄えるようになった。

第一次世界大戦

大正三年八月二十三日、第一次世界大戦が勃発したが、この時期を境として各種の軍需工業が急速に発展し、温和な大正年間を通じて着実に伸びると共に、都市の経済力も蓄積されていった。

新しい歓楽街

第一次世界大戦後の大正十年九月、堀川町の広島中央勸商場の跡に、新しい歓楽街「新天地」が新天地株式会社によって作られ、さらに、昭和二年一月、薬研堀から流川筋にかけて「東新天地」が出現した。

電車交叉点として賑わう八丁堀の繁栄と共に、これに続いて「本通り商店街」も賑わうようになった。本通りは、元安橋東詰めから新天地入口までの通りで、大正十年夏にスズラン灯が常置された。

都市計画法の適用

大正十二年、広島市は都市計画法の適用を受け、商業地域・工業地域・住居地域を定めると共に、街路計画の整備を進めていき、いよいよ本格的な都市づくりの第一歩を踏みだした。

すなわち、市内の街路事業や公園緑地事業・墓園事業が計画され、下水道事業・土地区画整理事業などが次々と実施されることになったが、その後相ついで勃発した事変や戦争の影響を受けて、必然的にこれらの事業計画は、軍事上や防空上からの新しい視野が織りこまれることになった。そのつど種々の検討が加えられて、あるいは促進され、あるいは遅滞し、変更されたのである。

市域の拡大

市制施行当時の市域は、面積二六・九五四平方キロメートル(約八九万八、四七〇坪)に過ぎなかったが、明治三十七年(一九〇四)九月に、仁保島村宇品島を元宇品町と改名して市域に編入し、昭和四年(一九二九)四月、仁保村・矢賀村・牛田村・三篠町・己斐町・古田村・草津町の隣接七か町村を編入して、市域は六九・八八〇平方キロメートル(二三二万九、三〇〇坪)となり、当初の約二・六倍に膨脹した。

(このような市域の拡張や都市計画事業の進捗により、広島市の人口は大きく移動し、昭和四年すでに二七万人を数えていた人口が、大東亜戦争開始の年でもある昭和十六年末には、四一万三、八八九人に及んだ。

なお、大東亜戦争終結の前年昭和十九年二月に実施された国勢調査では、三三万六、四八三人となっている。)

金座街

昭和の初め、本通りのうち新天地人口から八丁堀電車停留所までが「金座街」と呼ばれるようになった。ちなみに、昭和三年十一月から御大典記念として前記スズラン灯に代って、鉄製鈴蘭電飾塔(大東亜戦争中に撤去し供出した。)が作られ、昭和四年十月一日、福屋百貨店(現在の福屋の北側前の位置)が開店して、八丁堀の繁華街を決定的なものにした。また、昭和三年には、広島乗合自動車株式会社が「バス」を市内に走らせて、市民の足を新しい繁華街に運びこんだ。

(本通り商店街が、原子爆弾による廃墟から復興したのは、被爆後三か年も四か年も経てからであった。それは爆心に近く徹底的な潰滅が原因であると共に、まともな商業は、市民生活の健康な回復を待たねばならなかったからである。)

港湾修築事業など進む

昭和七年十二月、宇品港が広島港と改称され、翌八年一月には第二種重要港湾に指定されると共に、大規模な港湾修築工事が進められた。さらに海軍基地呉市に通ずる国道第三二号線が創設され、続いて太田川の改修工事などの大工事が、いずれも内務省直轄事業として、大々的に開始された。

日華事変

昭和六年、満州事変、ついで上海事変が起り、さらに昭和十二年日華事変にと発展したが、この間、広島市は軍隊の集結・発航の重要軍事基地となり、全市は騒然たる戦時色につつまれていった。同時に一段と軍需基地化も進み、全国有数の大兵器工場を持つ都市となった。

また、戦傷病兵の増加に備えて、広島赤十字病院が拡張改築工事を始め、その落成をみた昭和十四年には、宇品町の運輸部構内に凱旋館が竣工し、翌十五年には、矢賀町に鉄道省の広島車輛工場(現在の国鉄広島工場)の建設が始ったが、いずれも戦争遂行上の重要な布石であった。

第二次世界大戦勃発

日華事変は、昭和十二年十一月の大本営設置、同年十二月の南京占領から、十三年十月の武漢三鎮の占領、十四年の海南島占領から十五年の仏印進駐と拡大の一途をたどっていったが、一方、ヨーロッパでは、この年九月に第

二次世界大戦が勃発した。

物心両面の統制

このような非常時局の進展にともない、国民生活は物心両面にわたって、強く統制を要請され、上下国民の大同団結が期せられることになり、市民の自由というものは強く狭められていった。

町内会制度の発足

昭和十六年に商工会議所が大政翼賛の協力態勢をとり、広島市は同年三月から四月にかけて、これまでの町総代制を廃して、隣組を下部組織とする町内会制度を実施した。実施当時の町内会は三三八町内会で、町内会を国民学校(昭和十六年に小学校を改称)の学区制に分けて、三一の連合町内会が結成され、以後戦時態勢の強固な下部組織体となった。

防衛課の新設

なお、同年十月、市役所に防衛課が新設され、戦局の進展に応ずる態勢がとられた。防衛課は後に防衛本部の機構に入り、「広島市防空計画」などを作成し、戦時下、軍の作戦遂行に適した市民指導にあたった。

生活環境の緊迫

重要産業統制法(昭和六年公布)は次第に各部門に及んだ。昭利十三年に広島県風紀営業取締要綱が制定されて以来、逐年嚴重の度を加え、十四年には価格等統制令の公布があり、建築資材の配給制が実施され、十五年四月には市役所商工課内に、統制経済係が新設された。更に同年七月七日から奢侈品等製造販売制限規則(七・七禁止令と呼ぶ)が実施され、九月に広島県奢侈生活抑制実施要綱の制定を見、十一月から食糧品の配給切符制がはじまり、翌年一月から主食にサツマ芋の配給が加えられることになった。

大東亜戦争に突入

昭利十六年(一九四一)十二月八日、日本はついに大東亜戦争(第二次世界大戦)に突入した。このころから一段と、広島全市は軍事一色に塗りがためられ、あらゆる抒情性が封殺された。他都市には見られない緊迫感がみなぎり、市内外の軍事施設の膨脹拡大に反比例して、市民生活はいちじるしく圧迫されていったのであった。

広島新開地干拓図



一般的戦況

昭和十六年(一九四一)十二月八日、日本の陸海軍はハワイの真珠湾攻撃と、北部マレー半島に対する上陸作戦を、一挙に敢行して、大東亜戦争(アメリカでは太平洋戦争という)に突入した。

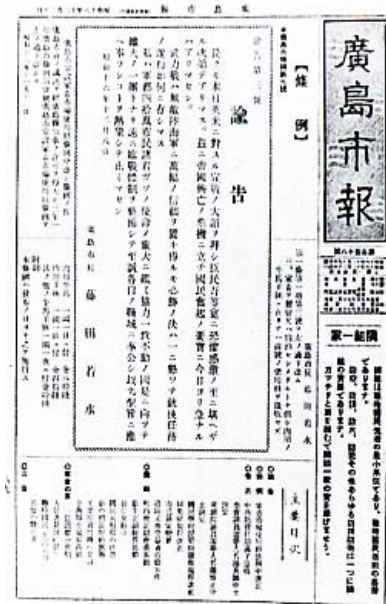
緒戦において、日本軍はマレー・フィリピン・ジャワ島を破竹の勢いで占領し、続いてビルマ作戦に勝利を得、開戦後、半年で東南アジアの要域をことごとく占領した。

しかし、十七年六月五日のミッドウェー海戦に敗れ、さらに八月に始まったガダルカナル島の戦いにも敗れてからは、いわゆる「戦略的転進」と称する敗退が続いた。

ガダルカナル島から、日本軍が敗退した十八年二月、ヨーロッパ戦線においては、スターリングラードのドイツ軍が降服しており、東西両戦線で、時を同じくして日独両国が、敗北への道を進んでいたのである。

このころアメリカは、超極秘のうちに原子爆弾の開発を急ぎ、巨費を投じて着々とその完成に近づきつつあった。日本においても、東京の理化学研究所、及び京都帝国大学において、その研究が進められていたが、第二次世界大戦中には恐らくどの国も完成しないだろうと考えられていた。

ともあれ、戦局の傾斜と共に軍部は一段と国内の戦争態勢を嚴重にし、戦備の充実をはかった。



広島市報 (昭和 16 年 12 月 20 日付)

警防団の活動

昭和十二年に防空法が制定されて、各市町村に防護団が組織されていたが、日華事変が始まると、防空態勢の充実には迫られ、防護団と消防団とを合体して、昭和十四年四月一日に、新しく組織されたのが「警防団」である。

警防団は、団長の下に分団長・部長・班長および警防員の階級が設けられた。組織は本部・警備部・消防部・防毒部・配給部・工作部を設け、区域内枢要の地に分団を置き、強力な部隊組織を確立し、各部とも訓練を重ねた結果、昭和十七年ごろには、優秀な組織となった。

警防団は、民間防空の主要な組織であると共に、多分に警察機関の補助的役割を持つものであったから、戦時下、警防警察事務の膨脹と、警察官の応召による欠員補充のため、昭和十九年八月に警察補助員制度を設け、枢要な警察署に団員中から採用して配備した。



空襲警報下の退避方法説明図 (昭和 16 年 3 月 5 日発行「家庭防空」所載)

これら補助員は、防空警報下の警察業務に従事した。すなわち防空警報発令と同時に出勤し、各警察署長の指揮を受け、交通統制・救出・救護などの業務にあたった。

昭和十九年以来、本土空襲が激烈となったが、この空襲下、警防団は市民防空組織の主体として敢闘すると共に、家庭防空群の指導訓練に、あるいは警察の補助機関として、防空警備に活躍した。

昭和二十年一月現在の、広島市警防団の配備状況は次のとおりである。

(新編広島県警察史)

団名	定員	実人員	自動車 唧筒	自動車 三輪	手ひきガソリン 唧筒	腕用唧筒
東警防団	1,798	1,300	-	3	20	22
西警防団	不明	推定 600	-	7	20	9
宇品警防団	953	507	-	-	8	10
合計		約 2,407	-	10	48	41

この表に見るように広島市内の警防団の配備は、設立趣旨に反して極めて貧弱で、広島に集められた消防機械は、

ほとんど消防署をはじめ、その他の重要施設、特設自衛団に配置された。設備だけでなく、団員も二、四〇七人を推定されるが、警報発令下の消防署・警察署に出動する警察消防補助員を差引けば、原子爆弾罹災直前の警防団固有の業務に従事する人員は、一、〇〇〇人足らずであったと思われる。

なお、警防団の各分団の配置は次のとおりである。

東警防団…青崎・大洲・矢賀・尾長・荒神・牛田・白島・幟町・竹屋・段原・比治山・仁保

西警防団…大手町・袋町・中島・本川・広瀬・神崎・舟入・江波・三篠・大芝・天満・観音・福島・己斐・古田・草津

宇品警防団…千田・皆実・大河・楠那・宇品・宇品海上・似島



家庭の防空・防火用設備

(広島県警防課発行の発行「家庭防空」昭和16年3月5日号所載)

防空本部開設

大東亜戦争の進展にともなって、広島市の防空態勢の急速な整備がおこなわれた。すなわち、昭和十六年九月に「広島県防空本部」が開設され、同年十二月の防空法改正・防空監視隊令の制定により、「広島県防空監視隊本部」が新設されることになり、広島・尾道に防空監視隊が置かれ、県下二八か所の防空監視哨が、その指揮下に設けられた。

昭和十八年一月には、広島市に東・西特設消防隊が設けられて、同年三月一日に東練兵場において、大規模な防空演習が実施されたが、このとき以後、「防空演習」が本格化したのであった。なお、同年十二月には、「広島県学校報国防空補助隊動員要綱」が制定された。

昭和十九年五月、空襲下の治安維持に備えて、「広島県警察警備隊」が創設され、広島市一円を担当する広島小隊が、水主町(現在・加古町)の警察練習所内に設けられた。

中国行政協議会設置

このほか、行政面でも戦時態勢が進められ、昭和十八年七月一日、中国行政協議会(会長は県知事)が発足し、行政の集権化がはかられた。

休日の廃止

広島市役所は、昭和十八年十月一日から休日を廃止し決戦態勢をかためた。同年十月二十日付広島市報に「日毎に凄槍苛烈の度を加へて行く決戦下の現状に即応すべく、本市は去る十月一日以来執務時間に一大改正を断行し、前線の心を心とする、日曜・祭日全廃を執行して、一路決戦への路を邁進している…」と報じている。



広島市報(昭和18年10月20日付)

経済統制強化

このころ、市民の生活は完全に戦時統制下におかれ、ほとんどの物資が切符制となった。ことに消費面は極度の窮乏をつけ、生活らしい「生活」は、次第にできなくなっていった。

戦時適正生活の実践

昭和十七年九月二十日付広島市報に「戦時適正生活の実践運動を実施」するにあたって「…敵国米英は緒戦以来の敗戦にも拘らず国家の総力を結集して反撃を策し、重慶政権亦無益の抗戦を続け、戦は容易に終息するの形勢なく、大東亜共栄圏の建設と相俟って、更に十年百年の長期に耐へる覚悟を固くし、一切の障礙を破砕して、勝って勝ち抜き、肇国の大理想を顕現せねばなりません。…」と、市民に生活程度の徹底的切下げを呼びかけている。十八年代に入ると、広島市報の記事に「鉄瓶を華器を! 熔鋳爐へブチ込め」とか、「有害無益の道路撒水/断然止めませう」、あるいは、「寄付や保俵料に/国債流用は禁物」とか、また、「戦時生活手帳」と題して「茶殻と魚骨粉は、蛋白質と脂肪の給源で、茶殻の栄養価は米・麦・玉蜀黍などの遠く及ぶ所でなく、子供も食べて喜ぶし、蛋白質は米の四倍ある…」などと、戦争遂行に協力し、あらゆる苦難に耐えるよう市民を叱咤している。

食糧の窮乏

とりわけ食糧不足は深刻で、昭和十九年四月ごろから、市内に広島県食糧営団経営の「雑炊食堂」が設けられた。その雑炊は、米三勺に野菜や海草などを入れて二合五勺に増やし、箸をまん中に立てて倒れない程度のものであった。雑炊食堂(福屋百貨店地下など)の前には、すきっ腹をかかえた市民が、延々と、長蛇の列をつくって順番を待つ風景が、毎日繰り返されてきた。

雑炊を食べかけたら、空襲警報が発令されたので、そのまま置いて防空壕に退避した人が、解除後、残りを食べるに行ってみると、すでに誰かに食べられていた。そこで、またすぐ列の最後尾に走って行って順番を待っているうち、半分以上進んだころ、「本日は終り」となったという笑えない実話がある。

広島市報では、たびたび「野菜飢餓の克服・空地空箱での野菜作り」とか、「灰も時局に御奉公・婦人の力で食糧の大増産」などの見出しで、食糧対策の記事を載せ、市民に呼びかけているが、これらの記事が示すとおり市民生活はまったくすさまじいまでの窮乏に陥っていたのである。

思想言論の統制

経済統制と共に、思想言論もまた厳重に統制されて、市民はすべて、ただ軍や政府の戦争指導理念や戦争遂行手段に対し、黙々と従うことが強要された。

通信検閲は、開戦直前の十月すでに、臨時郵便取締令が制定されていて、広島県では広島郵便局において行なわれていたが、開戦直後に、「言論・出版・集会・結社等取締法」が制定され、いっさいの出版・集会・結社は許可制となり、言論についても厳重な取締りが行なわれた。特に、軍の重要基地である広島市および呉市は、防諜上から他都市に比類を見ないほど苛酷をきわめたものであった。

広島市では、昭和十六年四月に軍部市民防諜訓(一〇項目)し、「スパイはどこにでも居る」から、「親しき仲にも軍機は秘密」などと、当時の広島市報に掲載して、こまかに市民に警告している。



昭和16年3月5日発行のパンフレット

外国人の移送

なお、敵国外人は、開戦と同時に県北三次町の収容所に集められた。原子爆弾投下に際して、アメリカ側は広島市内に自国の俘虜がいはいしまいかと案じたと言われるが、投下により被爆した外国人は、撃墜されたB29などの落下傘降下兵の捕虜などの特殊な者を除いてはあまり居なかった。

栗屋仙吉市長着任

昭和十八年七月、栗屋仙吉が広島市に就任した。日本の敗色がようやく濃くなり、軍部広島は一段の緊張に包まれている時であった。宿舎は当初半年間は幟町の浅野邸を借り、後は水主町の公舎に起居した。栗屋市長は、内村鑑三の指導を受けた敬虔グッド・クリスチャンで、「忠実なキリストの証人」とも称され、自作の和歌に「波の上歩み得たるを疑いてペテロは湖に沈みけるかな」と、心境をうたっている。市長就任以来、きわめて人望高く、軍部とも連絡を密にし、多事多難な市政を積極的に推進した。

空襲の激化

昭和十九年二月、マーシャル群島のクエゼリン・ルオット両島にアメリカ軍が上陸、続いて四月には、ニューギニアに、さらに六月十五日には、日本の国防上、絶対不可欠の守備要域であったマリアナ群島のサイパン・テニアン両島がアメリカ軍に占領された。このテニアン島に、昭和二十年初めごろ、アメリカ軍は「原子爆弾作戦基地」を設置、突貫工事で長大な滑走路を建設し、ここから飛び立ったB29によって、原子爆弾第一号が広島に投下されたのであった。

サイパン島に空軍基地を持ったアメリカ軍は、すでに制海権・制空権を失っていた日本に対し、自由自在に空襲できる立場を確立したのである。

広島地区特設警備隊の設置

大本営は更に本土決戦の準備を進め、昭和十九年七月には連合軍の本土上陸にそなえる作戦準備を、内地の諸部隊に下命した。続いて政府は「総動員警備要綱」と「国内防衛方策要綱」を決定した。これに基づき、広島県下では、十月に三六の「広島地区特設警備隊」(地区司令部隷下)を設けた。このうち広島市内には第一特設警備隊(隊長 陸軍大佐 山内二男 所在地・幟町国民学校内)と第二特設警備隊(隊長 陸軍中佐 諏訪他一郎 所在地・広瀬国

民学校内)とが配置れた。

また、このとき、特設警備第二五一大隊(隊長 陸軍少将 世良孝熊 所在地・陸軍偕行社及び済美学校内)と、第二〇五特設警備工兵隊(隊長 陸軍大尉 陰山稔・本部を平野町の山本実一疎開留守宅におき、仮兵舎を広島文理科大学校舎とした。)が配置され、工兵隊は、市内の道路・橋梁・飛行場の確保を任務とした。

なお、県下の特設警備隊は、後述の建物疎開作業を行なうため、交替で広島市に出動した。原子爆弾炸裂下、賀茂郡竹原町の第一六特設警備隊・豊田郡河内町の第一七特設警備隊・世羅郡東大田村の第二一特設警備隊・芦品郡広谷村の第二三特設警備隊・甲奴郡上下町の第二四特設警備隊・比婆郡庄原町の第二六特設警備隊が、それぞれ市内に出動中であつたから、多大な犠牲者を出した。

建物疎開の実施

日増しに激化する本土空襲に対処して、大都市では、防空法に基づく建物の強制疎開が実施されることになった。

昭和十九年十一月十八日、広島市もまた焼夷弾や爆弾による火災の延焼を防ぐため、消防道路、ならびに防空小空地を造ることになった。市内で一三三か所(八、二〇〇坪)の間引き疎開を実施するよう内務省から告示され、十九年末までに第一次建物疎開四〇〇件、人員疎開一、〇二九件、四、二一〇人を完了した。

昭和二十年になって、引続き第二次人員疎開五、五三二件を実施した。建物疎開は、第二次二、一五四件、第三次一、四〇〇件、第四次二、一八〇件、第五次一六七件を実施し、第六次二、五〇〇件は、その実施中に原子爆弾の炸裂に遭遇した。この疎開作業に出動していた後述の市内各国民義勇隊、市内各中等学校生徒の勤労奉仕隊、および近郊市町村及び各事業所の国民義勇隊などが無残な犠牲となった。

学童疎開の実施

昭和十九年七月に発表された「学童疎開実施要綱」に基づいて、広島市では昭和二十年四月から、国民学校三年生以上の集団疎開と、個々の縁故疎開による学童疎開を実施し、同年七月ごろまでに大体完了した。

この間に疎開した児童は、集団疎開児童が八、五〇〇人で、これらは県北の山間部へ疎開し、疎開先の学校で集団教育を受けた。また、縁故疎開した児童は総数約一五、〇〇〇人で、合計二三、五〇〇人に達した。なお、集団疎開児童のなかには、広島市の被爆により、その肉親や縁故者を失って、帰るに家のない孤児となった者もあった。

人口の激減

以上のような強制疎開の進行は、広島市の人口推移に反映し、昭和十七年に四一万九、一八二人であつた常住人口が、昭和二十年六月には二四万五、四二三人・戸数六万八、〇五七戸(但し、米穀通帳登録人員)に激減した。

自由疎開の禁止

法令に基づく強制疎開とは別に、空襲の危険を怖れる市民の自由疎開も多かった。二十年四月三十日の空襲で、小町の中国配電株式会社を中心に、一〇か所にわたって爆弾が投下され、同会社の倉庫が炎上し、かなりの死傷者も出たが、この頃から特に疎開する者が多くなり、市の防空要員の確保にも支障が出るありさまとなつたので、逆に疎開することを禁止した。

しかし、完全には守られず、空襲の多い夜間だけ近郊の縁故先に疎開する者も多かったので、市内の要所に警防団員が見張りに立ち、これらを取締つた。

なお、医療従事者は厳しく疎開を禁じられて、空襲時の災害に備えていたため、原子爆弾の被爆により、全滅に近い憂き目を蒙つたのである。被爆後、広島市医師会が再建されたとき、会員は僅かに二〇数人に過ぎなかつた。

敵軍本土に迫る

昭和二十年(一九四五)三月十七日、硫黄島の日本軍は凄烈な玉砕をし、四月一日には沖縄本島に激戦の末、アメリカ軍が上陸した。ついで五日には、ソ連が日ソ中立条約不延長を通告、五月七日には、ヨーロッパ戦線でドイツが無条件降伏をした。イタリアはすでに十八年(一九四三)に無条件降伏をしていたから、ここに枢軸三国は解体し、最後まで残つた日本は、ついに世界の孤児となり、完全に袋の中のネズミと化した。

防空本部の設置

昭和二十年三月九日、東京都がアメリカ空軍の大空襲を受けたが、これを契機として、アメリカ軍は大編隊による夜間無差別焼夷弾攻撃に移り、さらに全国の中小都市に対する焼夷弾攻撃を繰返して来た。

このような状況下で、広島市にも空襲必至と見て、一段と警防態勢の強化につとめ、この三月、空襲時などの前後処置の敏速、かつ統一的な運営をはかる目的から、県庁内に「県防空本部」を、また、市役所内に「市防空本部」を設置した。

防空本部は、B 29 三〇〇機(うち一五〇機は焼夷弾・一五〇機は爆弾搭載)の襲来を仮定し、各河川に筏を設け、船舶部隊から浮袋二〇万人分を借りて市民に配給し、また同部隊の舟艇を川の要所に配備すると共に、県下各警察署からの非常給食の準備を進め、市民の訓練としてバケツ注水などの防空指導を行なった。

第二総軍司令部の設置

戦局は最悪の状態に陥り、大本営は本土決戦態勢を一段と堅固にした。昭和二十年四月七日、東日本のかなめとして東京に第一総軍司令部を、西日本のかなめとして広島に第二総軍司令部を設置した。

第二総軍司令部は、市内二葉の里の騎兵第五聯隊内に入り、司令官に畑俊六大将(のち元帥)が着任し、陸軍と海軍を統轄した。

中国地方総監府の設置

また、六月十日には、敵の攻撃により本土が分断された場合、その地方独自の活動ができるよう「中国地方総監府」が、市内千田町の広島文理科大学内に設けられて、本土決戦態勢の枢軸となった。総監に大塚惟精、副総監に服部直彰が就任、幹部には内務省の官吏が出向し、広島県庁の事務官もこれに加わった。このとき、さきの昭和十九年二月に、中国五県を管轄区域とする中国地方軍需監理部が、中島新町の元広島県農会事務所に設けられていたが、総監府の発足にともない、「軍需監理局」となって、総監府の機構内に組みこまれ、被爆当時は八丁堀の福屋百貨店ビル内にあった。

国民義勇隊の編成

昭和二十年六月、政府は「国民義勇兵役法」、および「国民義勇戦闘隊統率令」を制定した。これによって、一五歳から六〇歳までの男子、一七歳から四〇歳までの女子は、義勇兵役に服し、国民義勇戦闘隊に編成されることになった。

広島市では、市長栗屋仙吉を隊長とし、森下重格助役以下、助役・部長を幕僚とする地域義勇隊と、軍管理工場を単位とする職域義勇隊を編成した。

地域義勇隊は東西の二個部隊に分かれ、東部隊長奥久登・副隊長村上哲夫、西部隊長田中好一・副隊長倉本周誓のもと、連合町内会単位に大隊を、町内会単位に中隊を、隣組単位に小隊を編成した。

この義勇隊の組織は六月中に編成を完了すると、大隊ごとに義勇隊精神透徹講演会を開催し、引続いて戦闘隊転移査閲訓練をおこなった。

なお、これら事務処理のため市役所に義勇隊本部を設け、陸軍少将川瀬健吉が顧問に委嘱され、広島市主事村上敏夫が事務局長に任命された。

警防態勢の強化

広島県警察部は、広島市内警防の強化をはかり、市役所内の県警察部に警察官約二〇〇人、水主町の警察警備隊に警察官一〇〇人、東・西・宇品の三警察署に警察官約二〇〇人を配備すると共に、東・西両消防署に消防官約四〇〇人と、消防自動車四九台を配置した。

なお、七月一日のB 29 延約八〇機による呉市大空襲ののちは、呉消防署からも消防自動車六台、および消防隊五二人が広島市に派遣され、自動車は宇品出張所へ一台、市役所前へ二台、仁保町の東洋工業株式会社構内へ二台、日本製鋼株式会社構内へ一台ずつ配備された。

また、警察警備隊呉小隊も、市内の比治山多聞院に移動配置するなど、広島市の消防力・警備力を集中的に強化した。

なお、大規模な空襲による災害における消防活動は、多くの非常手段が必要なため、正規の消防隊のほかに「特設消防隊」が編成された。特設消防隊は、建築士・石工・トビ職その他特技を持つ者によって構成された破壊消防隊と、自動車の整備その他機械技術に堪能な者によって構成された整備消防隊とあり、東消防署には破壊消防隊四〇人・整備消防隊二〇人、西消防署には破壊消防隊四六人・整備消防隊二五人が配備された。

大避難計画樹立

一方、空襲により火災が発生し、消火活動も及ばない事態に陥った場合に備えて、別紙のような「広島市大避難実施要領」が設定された。これによって各町内会は、町籍簿その他重要文書、或いは、避難生活に必要な食糧・医薬品などを、指定避難先の町村にあらかじめ備蓄しておくようにした。

空襲状況

このように、広島市の防空態勢は、軍事基地にふさわしく他都市に類例を見たいほど鉄壁の布陣であったが、全

国各都市が次々と空襲されるなかで、広島市のみは忘れられているようであった。

広島県では、昭和十九年十一月十一日、B29一機が御調郡原田村の山林中に、焼夷弾一二個を投下したのを最初として、県下各地に小規模の空襲が続いた。

広島市には、三月十八、十九日の艦載機編隊による小空襲について、B29一機が来襲し、爆弾一〇個を投下、死者一〇人・重傷者五人・軽傷者一人、建物は全壊一四戸・半壊一五戸・全焼五戸・半焼五戸という被害があった。

さらに六月二十二日に、B29延約二九〇機が、呉市および安芸郡音戸町に来襲し、爆弾五八個を投下、死者六九人・重傷者三人・軽傷者九人・行方不明一人、建物全壊四六戸・半壊一五三戸という被害があり、七月一日夜十一時五十分ごろから、二日午前二時三十分ごろにかけて、呉市全域にわたり、B29延約八〇機の空襲があり、焼夷弾約八万一一〇個を投下、死者一、八一七人・重傷者一一六人・軽傷者三三七人・行方不明五二人、建物も全焼二万二、〇五二戸・半焼一一六戸という被害で、呉市の中心部はほとんど灰燼に帰した。

その後、引続いて七月中は、毎日のように県下に空襲があり、七月末までに広島・呉両市を中心に前後四〇回の爆撃を受けた。

しかし、アメリカ空軍機は、広島県下はもとより日本全土にわたって、まさに傍若無人の空襲を繰返しているにもかかわらず、広島市だけは、それほど空襲もなく、ずっと取残されていた。

八月に入ってから、警報発令はあったが、いずれも素通りしていった。矢賀警防分団の警防日誌によると、次のとおりである。

八月一日

警戒警報

午後九時六分発令

空襲警報

午後十時二分 空襲警報解除

午後十時十五分 警戒警報解除

警戒警報 午後十一時一分発令

空襲警報 午後十一時二十二分発令

二日 午前〇時十二分 空襲警報解除

午前〇時十七分 警戒警報解除

三日 なし

四日 警戒警報 午後十一時五十分発令

五日 午前〇時三十五分警戒警報解除

警戒警報 午後九時二十分発令

空襲警報 午後九時二十七分発令

午後十一時五十五分 空襲警報解除

六日 空襲警報 午前〇時二十五分発令

午前二時十分 空襲警報解除

午前二時十五分 警戒警報解除

警戒警報 午前七時九分発令

午前七時三十一分 警戒警報解除

このように一月になってからは、急に来襲が少なくなった。二日と三日にはまったく姿を見せず、市民たちは不思議に思ったほどであるが、五日の夜になると、急に来襲を繰返したので、そのつど防空要員は部署につき、その他の老人・婦女子は防空壕へ出入りして眠る時間もないまま、六日の朝を迎えたのであった。

【別表】

広島市大避難実施要領(広島市 東西宇品警察署)

一、大避難実施予定ノ趣旨

防空必勝ハ初期防火必勝ニ帰スルハ最近ノ大都市空襲ノ実相に徴シ明カニシテ従来ノ防空施策ハ総テ敵ノ焼打戦

法ニ対処シ絶対ニ完勝スルノ方途タリ茲ニ最後の措置トシテノ大避難実施ヲ予定スル所以ノモノハ実ニ各自ハ戦闘
 冊置ニ於テ持場死守ニ専心セシメンガ為ナリ、即チ初期防火ニ挺身敢闘ノ極不幸人事及バズ避難ノ外ナキ最後ノ事
 態ニ処スルノ方策ニシテ之ヲ要スルニ安全ナル遊離先ノ指定ニ依リ後顧ノ憂ナク最後迄防火ニ挺身セシメンガ為ナ
 リ

二、大避難実施方法

- 1、大避難ハ爆弾ノ被害又ハ小地域ノ火災等ニ依リ直チニ実施スルコトナク火災発生ノ地域大ニシテ而モ火勢強
 烈ニシテ到底防火ニ人事及バザルトキニ限り実施スルコト
- 2、大避難ノ開始ハ市長又ハ警察署長ノ別命ナクシテ各自ノ状況判断ニ依リ実施スルコト
- 3、避難先ニ至ル順路ハ各自随意選定ノコト
- 4、避難ニ当リ必ズシモ一定ノ場所ニ集結及団体行動ヲ採ルノ要ナキモ相互扶助ノ精神ニ悖ルコトナキヤウ行動
 スルコト
- 5、指定避難先以外ニ縁故ヲ有スル者ハ一応指定町村ニ避難シ状況ニ依リ縁故先ニ落付クコト
- 6、指定避難先ニ至リタルトキハ町村役場に連絡ノ上町村長ノ指揮ヲ受クルコト
- 7、避難ノ受入ハ原則トシテ各自ノ名票ニ依ル從テ常時名票ヲ附シ置クコト
- 8、市民ハ一人残ラズ各自ノ指定避難先ノ郡町村名、位置、方角、里程、順路等ヲ平時ヨリ充分承知シ置クコト
- 9、指定避難先町村ハ左記一覽表ノ通り

備考

学童疎開地域設定ニ伴ヒ安佐郡福木、伴、久地、日浦、佐伯郡友和、玖島、河内ヲ指定避難先ヨリ除キ曩ニ発表
 セル避難先指定町村ヲ本表ノ如ク一部改正ス

避難先指定町村一覽表 (昭和二十年四月十七日現在)			
指定町村名		防空小区別	同上小区内町名
郡別	町村別		
佐伯郡	井口・石内	西部小区	己斐一円、古田町一円、庚午一円、草津町一円
	八幡・観音	福島小区	福島町一円、南三篠町
	観音	大手小区	大手町六丁目乃至九丁目、国泰寺町、雑魚場町
	八幡 (過剩ハ五日市へ)	舟入・江波小区	舟入幸町、舟入川口町、江波町一円
	五日市	神崎小区	河原町、西新町、西地方町、小網町、舟入町、舟入仲 町、舟入本町
	地御前	観音小区	観音一円、昭和新開
	大野	宇品小区	宇品町一円、元宇品町
	宮内 (過剩ハ平良・原へ)	天満小区	天満町一円、中広町一円
	平良・原	中島小区	中島本町、中島新町、天神町、材木町、木挽町、元柳 町、水主町一円、吉島町一円
廿日市	千田小区	千田町一円、平野町、南竹屋町	
安佐郡	古市・川内	広瀬・本川小区	空鞘町、鷹匠町、差館長、十日市町、鍛冶屋町、油屋 町、猫屋町、塚町一円、塚本町、西大工町、寺町、西 引御堂町、広瀬町一円、錦町、西九軒町、榎町、北榎 町、横堀町、新市町
	安	横川小区	楠木町一円、横川町一円、三篠本町一円、新庄町、打 越町、大芝町、三滝町、山手町
	可部・八木 緑井	袋潮小区	基町、東魚屋町、立町、研屋町、紙屋町、平田屋町、 播磨屋町、革屋町、鉄砲町、新川場町、中町、下中町、 袋町、西魚屋町、小町、塩屋町、尾道町、猿樂町、細 工長、横町、鳥屋町、大手町一丁目乃至五丁目
		竹屋小区	薬研掘、下流川町、三川町、平塚町一円、田中町、竹 屋町、鶴見町一円、宝町一円、富士見町一円、昭和町 一円、新天地一円、弥生町
	祇園	白島・幟小区	白島町一円、上柳町、下柳町、橋本町、幟町一円、上 流川一円、鉄砲町一円、八丁堀一円、石見屋町、山口 町、銀山町、東胡町、胡町、斜屋町、堀川町
		皆実小区	皆実町一円、翠町
	戸坂・口田	牛田小区	牛田町一円
	落合・深川 (過剩ハ口田へ)	段原小区	台屋町、京橋町、的場町、金屋町一円、比治山本町、 比治山町、松川町、稻荷町一円、土手町、桐木町、段 原町、段原大畑町、比治山公園
	狩小川	荒神小区	西蟹屋町一円、荒神町一円、猿猴橋町、松原町、大須 賀町、二葉ノ里

安芸郡	中山・温品	矢賀・尾長小区	尾長町一円、東蟹屋町、愛宕町一円、若草町、矢賀町
	畑賀 (過剩ハ奥海田へ)	青崎小区	仁保町堀越、仁保町向洋、大洲町、南蟹屋町
	瀬野	大河・楠那小区	霞町、出汐町、旭町、仁保町大河、仁保町日宇那、仁保町丹那
	中野・奥海田	比治山 仁保小区	段原末広町、段原新町一円、段原日出町、段原山崎町、段原中町一円、南段原町一円、段原東浦町一円、東雲町一円、仁保町本浦、仁保町瀨崎、仁保町柞木

在広主要部隊配置図



広島市軍用通信網



昭和二十年八月六日当時

在広部隊一覧表

部隊名(通称号)	部隊長	備考(本部所在地等)
大本営中国軍管区		
第二総軍司令部 (西方)	大将 畑 俊六	二葉の里(元騎兵第五聯隊跡)
大本営第二陸軍通信部 (線第一三三七部隊)	大佐 中路 虚雄	尾長国民学校及び松本工業学校
大本営中国軍管区	中将 藤井 祥治	基町(城跡) (旧留守第五師団司令部)
中国軍管区歩兵第一補充隊 (中国第一〇四部隊)	中佐 須藤 重夫	基町(城跡東側) (通称二部隊旧歩兵第一一聯隊)
中国軍管区砲兵補充隊 (中国第一一一部隊)	中佐 川副 源吉	基町(城跡西側) (通称六部隊旧野砲兵第五聯隊)
中国軍管区工兵補充隊 (中国第一一四部隊)	少佐 谷川 熊彦	基町(通称七部隊旧工兵第五聯隊)
中国軍管区輜重兵補充隊 (中国第一九三部隊)	少佐 田島 権平	基町(太田川左岸) (通称一〇部隊旧輜重兵第五聯隊)
中国軍管区通信補充隊 (中国第一二一部隊)	大尉 富岡 善藏	基町(中国一〇四部隊内)
中国軍管区教育隊	少佐 柳生 峯登	基町(城跡北側)
広島聯隊区司令部	少将 富士井 末吉	基町(京口御門) 大半は安佐郡可部町に疎開していた。
広島地区司令部	少将 富士井 末吉	基町(京口御門)
広島地区特設警備隊		
特設警備第二五一大隊 (中国第七一六一部隊)	少将 世良 孝熊	基町(偕行社内)
第二〇五特設警備工兵隊 (中国第二七八四部隊)	大尉 陰山 稔	東千田町(文理大内)
広島地区第一特設警備隊 (中国第三二〇三七部隊)	大佐 山内 二男磨	幟町(幟町国民学校)
広島地区第二特設警備隊 (中国第三二〇三八部隊)	中佐 諏訪 他一郎	広瀬北町(広瀬国民学校)
広島地区第一六特設警備隊 (中国第三二〇五二部隊)	獣医少佐 鍋島 重雄	(通称賀茂部隊駐屯地賀茂郡竹原町 昭和二〇・八・六日在広)
広島地区第一七特設警備隊 (中国第三二〇五三部隊)		(通称豊北部隊駐屯地豊田郡河内町 昭和二〇・八・六日在広)

広島地区第二一特設警備隊 (中国第三二〇五七部隊)	中尉 大原 静雄	幟町(幟町国民学校) (通称世羅部隊駐屯地世羅郡大田町 昭和二〇・八・六日在広)
広島地区第二三特設警備隊 (中国第三二〇五九部隊)	中尉 宗清 常一	水主町(現加古町) (通称芦名部隊駐屯地芦品郡広谷町 昭和二〇・八・六日在広)
広島地区第二四特設警備隊 (中国第三二〇六〇部隊)	中尉 三原 清雄	基町(中国一〇四部隊内) (通称甲神部隊駐屯地甲奴郡上下町 昭和二〇・八・六日在広)
広島地区第二六特設警備隊 (中国第三二〇六二部隊)	大尉 高坂 昭正	(通称比婆部隊駐屯地比婆群庄原町 昭和二〇・八・六日在広)
広島陸軍病院		
広島第一陸軍病院	軍医少将 元吉 慶四郎	基町(西練兵場西北側)
同 江波分院	軍医大尉 下間 仲一	江波町
同 広島赤十字病院	軍医少将 竹内 釦	千田町一丁目(赤十字病院内)
広島第二陸軍病院	軍医大佐 木谷 祐寛	基町(大田川左岸三篠橋下)
同 三滝分院	軍医中佐 肥後 研吉	三滝町(山手川右岸)
広島陸軍病院看護婦生徒教育隊	衛生大尉 花房 光一	基町(三篠橋東詰)
中国憲兵隊		
中国憲兵隊司令部 (広島憲兵隊本部)	憲兵大佐 瀬川 寛 (憲兵中佐 中村)	基町(電車通り北側)
広島憲兵分隊	憲兵大尉 田中 要次	猫屋町(光道館)
宇品憲兵分隊 (広島憲兵隊本部所属) 特別機動隊	憲兵大尉 高橋 太郎 陸軍大尉	宇品町(船舶司令部正門前) 猫屋町(光道館)

第五九軍		
第三五航空情報隊 (師第七四三七部隊)	中尉 畑中 正毅	尾長町(尾長国民学校)
第五九軍司令部 (山陽第三二二〇〇部隊)	中将 藤井 祥治	基町(城跡)
第二二四師団司令部 (赤穂第二八三二九部隊)	中将 河村 参郎	基町
歩兵第三四〇聯隊 (赤穂第二八三三〇部隊)	中佐 友沢 兼夫	基町(中国一〇四部隊内)
第二二四師団迫撃砲隊 (赤穂第二八三三三部隊)	中佐 友沢 兼夫	編成中
第二二四師団工兵隊 (赤穂第二八三三四部隊)	少佐 柄木 省躬	白島北町(中国一一四部隊内)編成中
第二二四師団通信隊 (赤穂第二八三三五部隊)	大尉 古光 保夫	基町(中国一二一部隊内)編成中
館第二二四師団輜重隊 (赤穂第二八三三六部隊)	中将 河村 参郎	基町(中国二一一九部隊内)編成中
独立混成第一二四旅団砲兵隊 (鬼城第二八三六八部隊)	大尉 山本 信夫	基町(中国一〇四部隊内)編成中
独立混成第一二四旅団工兵隊 (鬼城第二八三六九部隊)	大尉 岩崎 純道	白島北町(中国一一四部隊内)編成中
独立混成第一二四旅団通信隊 (鬼城第二八三七〇部隊)	中尉 戸井 功	基町(中国一二一部隊内)編成中
第一五四師団		
第一五四師団通信隊 (護路第二二七〇八部隊)	大尉 富依 英男	基町(中国一二一部隊内)編成中
第一五四師団輜重隊 (護路第二二七〇九部隊)	少佐 萩原 国雄	基町(中国一三九部隊内)編成中
第一五四師団砲兵隊 (護路第二八三五六部隊)		基町(中国一一一部隊内)編成中

高射砲第三師団		
高射砲第一二一聯隊 (第四中隊)(炸第七六五〇部隊)	中尉 船木 恒雄	
高射砲第一二二聯隊 (炸第七六五一部隊)		
高射砲第一二三聯隊 (第一中隊)(炸第四一六八部隊)	大尉 辻 芳郎	
独立高射砲第二二大隊本部 (炸第八〇七七部隊)	少佐 内山 恒太	向宇品町
船舶司令部		

船舶司令部 (暁第二九四〇部隊)	中将 佐伯 文郎	宇品町(元運輸部) (防疫部は似島町)
船舶司令部三次支部 (暁第二九四〇部隊)	(兼務) 少将 畑 勇三郎	宇品町(元運輸部)
教育船舶団司令部 (暁第六一六七部隊)	中将 沢田 保富	仁保町丹那
船舶砲兵団司令部 (暁第六一八〇部隊)	少将 中井 千万騎	比治山山上 衛生教育隊は南段原町(女子商)
船舶砲兵教導聯隊 (暁第一九七七部隊)	中佐 佐々木 秀綱	宇品町(大和紡績跡)
船舶通信補充隊 (暁第一六七一〇部隊)	大佐 日山 千里	皆実町一丁目(電信第二聯隊跡)
船舶練習部	少将 芳村 正義	宇品町(大和紡績跡)
野戦船舶本廠 (暁第六一四〇部隊)	少将 梶 秀逸	宇品町(元運輸部)及び金輪島
船舶整備教育隊 (暁第一九八〇九部隊)	少佐 伊藤 敏	坂町(金輪島)
陸上勤務第二二〇中隊 (暁第一九八八六部隊)	中尉 本橋 武	佐伯郡井口村(現在井ノ口町)
陸上勤務第二〇八中隊 (暁第一九八九四部隊)	中尉 菅 悟	横川町
陸上勤務第二〇九中隊 (暁第一九八九五部隊)	中尉 井村 法端	金輪島
病院船衛生第一四班 (暁第七一四〇部隊)	中佐 竹中 長造	似島町
病院船衛生第五三班 (暁第六一六五部隊)	中佐 池田 苗夫	似島町
船舶衛生隊本部 (暁第六一七七部隊)	大尉 西村 幸之助	似島町
船舶通信聯隊 (暁第二九五五部隊)	大佐 太田 千太郎	皆実町一丁目(電信第一聯隊跡)
船舶通信第二大隊 (暁第一六七一九部隊)		皆実町
第一船舶輸送司令部	中将 佐伯 文郎	宇品町(船舶司令部内)
海上駆逐第一大隊 (暁第一六七〇八部隊)		宇品町
海上輸送第二〇大隊 (暁第一九八三四部隊)		宇品町
船員教育隊		仁保町

広島陸軍需輸送統制部	少将 畑 勇三郎	宇品町(元運輸部構内)
特設陸上勤務第一〇三中隊 (中部八八七六部隊)	中尉 中塩 正義	海田市(元陸軍輸送基地)
特設水上勤務第一三二中隊 (中部一一一七〇部隊)	中尉 堀 利雄	海田市(元陸軍輸送基地)

広島兵站部		
広島地区鉄道司令部	少将 阿部 芳光	松原町(広島駅構内)
広島停車場司令部 (線第一五〇八〇部隊)	中佐 幸田 康孝	松原町(広島駅構内)
独立鉄道第二大隊 (線第一三三五二部隊)	中佐 斉藤 進	楠木町四丁目(崇徳中学校)
第一八独立鉄道作業隊		大芝町(大芝国民学校)
独立工兵第一一六大隊 (中部第二八三七四部隊)	大尉 幸田 貞一	三篠本町(三篠国民学校)編成中
独立工兵第一一七大隊 (中部第二八三七五部隊)	大尉 入村 公爾	三篠本町(三篠国民学校)編成中
広島陸軍兵器補給廠	大佐 田山 吉治	霞町
広島陸軍被服支廠	大佐 佐藤 種三郎	旭町
広島陸軍糧秣支廠	大佐 石光 榮	宇品町

(付) 昭和二十年八月六日当時

広島・山口県内所在部隊一覧表

部隊名(通称号)	本部所在地
大本营中国軍管区	
中国軍管区歩兵第三補充隊(中国第一一〇部隊)	山口県山口市

山口聯隊区司令部	山口県山口市
広島第一陸軍病院柳井分院	山口県熊毛郡柳井町
広島第一陸軍病院櫛ヶ浜分院	山口県熊毛郡花岡町
山口陸軍病院	山口県山口市
福山陸軍病院	福山市
大野陸軍病院	佐伯郡大野町
広島地区第三特設警備隊(中国第三二〇三九部隊)	呉市
広島地区第四特設警備隊(中国第三二〇四〇部隊)	尾道市
広島地区第五特設警備隊(中国第三二〇四一部隊)	福山市
広島地区第六特設警備隊(中国第三二〇四二部隊)	三原市
広島地区第七特設警備隊(中国第三二〇四三部隊)	安芸郡海田市町
広島地区第八特設警備隊(中国第三二〇四四部隊)	佐伯郡中村
広島地区第九特設警備隊(中国第三二〇四五部隊)	佐伯郡廿日市町
広島地区第一〇特設警備隊(中国第三二〇四六部隊)	佐伯郡津田町
広島地区第一一特設警備隊(中国第三二〇四七部隊)	安佐郡可部町
広島地区第一二特設警備隊(中国第三二〇四八部隊)	山県郡加計町
広島地区第一三特設警備隊(中国第三二〇四九部隊)	高田郡吉田町
広島地区第一四特設警備隊(中国第三二〇五〇部隊)	賀茂郡西条町
広島地区第一五特設警備隊(中国第三二〇五一部隊)	賀茂郡安浦町
広島地区第一八特設警備隊(中国第三二〇五四部隊)	豊田郡幸崎町
広島地区第一九特設警備隊(中国第三二〇五五部隊)	豊田郡木江町
広島地区第二〇特設警備隊(中国第三二〇五六部隊)	御調郡土生町
広島地区第二二特設警備隊(中国第三二〇五八部隊)	沼隈郡松永町
広島地区第二五特設警備隊(中国第三二〇六一部隊)	双三郡三次町

第五九軍	
第二三〇師団歩兵第三三聯隊(総武第二七六九五部隊)	賀茂郡原村
第二三〇師団輜重隊(総武第二七六九九部隊)	賀茂郡原村
第二三一師団司令部(大国第二八三四三部隊)	山口県山口市
歩兵第三四六聯隊(大国第二八三四四部隊)	山口県大津郡蕨海町
歩兵第三四八聯隊(大国第二八三四六部隊)	山口県秋吉台
第二三一師団迫撃砲隊(大国第二八三四七部隊)	山口県山口市
第二三一師団工兵隊(大国第二八三四八部隊)	山口県萩市
第二三一師団通信隊(大国第二八三四九部隊)	山口県山口市
第二三一師団輜重隊(大国第二八三五〇部隊)	山口県山口市
第二一三師団兵器勤務隊(大国第二八三五一部隊)	山口県山口市
第二三一師団病馬廠(大国第二八三五五部隊)	山口県山口市
独立混成第一二四旅団司令部(鬼城第二八三五九部隊)	山口県豊浦郡川棚
独立歩兵第七四八大隊(鬼城第二八三六四部隊)	山口県豊浦郡川棚
第二二四師団歩兵第三四〇聯隊(赤穂第二八三一二〇部隊)	山口県山口市

中国憲兵隊	
海田市憲兵派遣所	安芸郡海田市町
江田島憲兵分隊	安芸郡江田島町
廿日市憲兵分駐所	佐伯郡廿日市町
安浦憲兵分駐所	賀茂郡安浦町
忠海憲兵分隊	豊田郡忠海町
呉憲兵隊	呉市中通り
広島憲兵隊	呉市広町
尾道憲兵分遣隊	尾道市
因島憲兵分駐所	御調郡土生町
福山憲兵分隊	福山市
山口憲兵隊	山口県山口市
宇部憲兵分隊	山口県宇部市
防府憲兵分隊	山口県防府市
光憲兵分隊	山口県光市
徳山憲兵分隊	山口県徳山市
下関憲兵分隊	山口県下関市
柳井憲兵分遣隊	山口県熊毛郡柳井町
萩憲兵派遣所	山口県萩市
岩国憲兵分隊	山口県岩国市

船舶部隊	
特設水上勤務第一二二中隊(中隊第一一七〇部隊)	安芸郡矢野町
海上輸送第二六大隊(楠第二八三八〇部隊)	山口県虹ヶ浜
迫撃砲第一八大隊(中部第二八三四一部隊)	山口県山口市
陸上勤務第二〇一中隊(暁第一九八八七部隊)	福山市

陸上勤務第二〇六中隊(暁第一九八九二部隊)	山口県下関市
陸上勤務第二〇七中隊(暁第一九八九三部隊)	山口県下関市
船舶工兵第三七部隊(暁第一九八二二部隊)	山口県萩市仙崎町
機動輸送第七中隊(暁第一六七三一部隊)	山口県萩市
機動輸送第一〇中隊(暁第一六七三四部隊)	山口県萩市仙崎町
機動輸送第一四中隊(暁第一六七三八部隊)	山口県萩市
機動輸送策一六中隊(暁第一六七六二部隊)	山口県櫛ヶ浜
機動輸送第二六中隊(暁第一六七七二部隊)	尾道市
機動輸送補充隊(暁第一六七一一部隊)	山口県櫛ヶ浜
機動輸送第一八中隊(暁第一六七七四部隊)	山口県萩市
機動輸送第二二中隊(暁第一六七七八部隊)	山口県下松市
自第一一～至二〇(自暁第一九八七六部隊)	
海上挺身整備隊(至暁第一九八八五部隊)	安芸郡海田市町
海上輸送第一六大隊(暁第一九八一八部隊)	山口県下関市
海上輸送第一九大隊(暁第一九八二〇部隊)	山口県下関市
海上輸送第一大隊(暁第一九八三三部隊)	沼隈郡千年村
高速輸送第一大隊(暁第一六七〇七部隊)	山口県下関市
船舶工兵第一聯隊補充隊(暁第六一六九部隊)	山口県宇部市
船舶工兵第六聯隊補充隊(暁第六一七四部隊)	山口県熊毛郡柳井町
船舶工兵第九聯隊補充隊(暁第一六七六九部隊)	尾道市
海上駆逐隊補充隊(暁第一六七一二部隊)	山口県櫛ヶ浜
船舶砲兵第一聯隊(暁第二九五三部隊)	福山市
船舶機関砲第一聯隊(暁第六一九八部隊)	福山市
船舶通信第五大隊(暁第一九七七五部隊)	山口県下関市
海上挺身第三〇戦隊(暁第一九七六九部隊)	安芸郡江田島町

兵站部隊	
広島地区鉄道司令部(尚武第一〇三一五部隊)	佐伯郡廿日市町
大阪陸軍軍需品廠広島出張所	安芸郡海田市町

(註)在広部隊一覧表は、広島県民生労働部援護課調査係神田正昭氏の調査資料及び本誌編集係の調査に基づいて作成したが、なお、調査もれが少なくないと思われる。

第一節 投下・炸裂...51

広島の温存

昭和二十年(一九四五)七月十六日、アメリカ陸軍はニューメキシコ州のアラモゴードの砂漠の中で、原子爆弾の爆発突撃行なって、起爆に成功した。しかし、この爆発が一つの都市(建物・人間その他)に対して、どんな威力(破壊・障害その他の現象)を示すかということについては、実際に使用してみなければ判らないことであった。それを現実に把握したいためから、アメリカは原子爆弾投下目標都市の現状をそこなわぬよう空襲を禁じ、投下の日まで温存していた。

警告ビラの有無

したがって、広島市民に原子爆弾投下を予告して、爆撃目的を減殺するような警告ビラなどは、当然撒布しなかったと考えられる。

ただし、市民の中(正田篠枝・山崎与三郎など)には、「原子爆弾を投下すると、明確には書かれていなかったが、破壊力の凄い爆弾で攻撃するから、市民は直ちに疎開せよ。」という意味の書かれた宣伝ビラが、八月に入って多数撒かれたと語る者もある。



アメリカ空軍の撒いた宣伝ビラ



戦時中流通した紙幣ににせた宣伝ビラ

(半田金鍮提供・広島平和記念資料館所蔵) (岡村道信提供・平和記念資料館所蔵)

また、当時、江波の陸軍被服廠の材料倉庫に、守衛長代理として勤務していた松窪熊市の手記「あの日の広島」(宮崎県原爆被害者の会発行「閃光は今もなお」)には、炸裂の一週間前の七月三十日に、「一週間以内に広島市内を爆撃す。罪ない市民に被害は与えたくはないが、爆弾には目がない故御用心」と書いたビラが飛行機から撒き散らされたと記述されている。

しかし、広島県警察部発行(昭和二十一年頃作成)の「広島県下に於ける空襲被害状況表」によると、七月二十八日、県下沿岸部、主として呉市・呉軍港・安芸郡江田島村・御調郡土生町において、艦船並びに軍施設、及び重要工場に対し銃爆撃を加えた際、宣伝ビラ約六万枚を撒布。七月三十一日には、豊田郡豊浜村中心に約二万枚、同日、福山市中心に約八万枚のビラをまいているほかは、広島市被爆の八月六日までに、広島市内に宣伝ビラ撒布の記録がない。ただし、七月二十八日に呉軍港を攻撃した延約一〇機のうちの二機が、広島市の上空で撃墜されている所から推察すると、時には他地区を攻撃するついでに広島市に侵入して、宣伝ビラをまいたこともあろうかと考えられるが、よしんば撒かれたとしても、それは広島市民に対して、人道的配慮から特別に用意されたものではなく、他都市に撒布されたものと同様のものではなかったと思われる。

アメリカの原子爆弾計画の最高責任者レスリー・R・グローブス(Leslie R. Groves)は、投下の予告や警告は、戦略効果を見放すものとして、無警告奇襲攻撃を主張してゆずらず、結局、その主張どおりに実施したといわれる。

八月五日の夜

八月五日は日曜日であったが、月火水木金金の休日返上で、本土決戦態勢下、市民たちは食うや食わずの空腹も、滅私奉公の精神にかえて、それぞれの立場から、勝って勝ち抜く決意に燃えながら、あわただしいその一日を送った。その夜、勤労に疲れはてた身体ながら、仰ぐ夜空はひろびろと澄みきっていて、無数の星くずが美しく光っていた。

午後九時二十分、その夜空に警戒警報発令のサイレンがけたたましく鳴りひびいた。引続いて二十七分には、空襲警報が発令された。

八月に入って急に敵機の来襲が少なくなり、無気味な静寂をたもっていた町々は、にわかに騒然となった。ただちに嚴重な灯火管制がおこなわれ、マッチ一本の火も戒めて、防空要員は一せいにそれぞれの部署についた。老幼婦女子・病人などの多くは、近くの防空壕や指定された避難場所へ待避した。

ラジオは、敵機一〇機より成る編隊三個梯団が、豊後水道から広島湾上空へ侵入したことを告げたが、その敵機は、市の上空を数十分旋回しただけで、進路を山口県の光海軍工廠と思われる西南方にとって飛び去った。

ここ数日、警報の発令もまばらで、八月二日、三日、四日とほとんど発令されない日が続いたから、市民のあいだでは希望的な推察で、「広島は安芸門徒の多い宗教都市だから空襲しない。」とか、「昔からの移民県で、アメリカに二世がたくさんいるから避けている。」などと、たあいない流説もささやかれていたが、これを打ち消すような警報発令であった。

八月六日明ける

六日午前零時二十五分、ふたたび空襲警報が発令され、二時十分に解除、二時十五分には警戒警報も解除された。

市民たちは警報発令のつど、出たり入ったりで、五日の夜から六日にかけて眠るひまもなかった。明け方になって、やっと防空服装のまま横になり、まどろみかけたとき、また、警戒警報のサイレンで叩き起された。

六日午前七時九分、ラジオは「敵B 29 四機が広島市西北方上空を旋回中」と、報じたが、まもなく退去し、七時三十一分にはこの警戒警報も解除され、「中国軍管区内上空に敵機なし」と報ぜられた。

空もまったく明けきり、市民たちは昨夜からの緊張を解いて、ホッとひと息ついた。空襲は多く夜間であったから、誰しもまずは良かったと思った。

町内会の役員や警防団員は、前夜から警報続出のため、ずっと詰所に出動しずめで、灯火管制や警報の伝達、待避の連絡・誘導、あるいは防空監視哨の立哨などおこない、クタクタに疲れていたが、ようやく解除になって、それぞれ自宅へ帰るか、帰る準備をしていた。

各官庁をはじめ、会社・工場などの事業所でも、その近くの居住者は出動して防衛の任についたり、また防衛当番で一晩中不寝番を続けた者らが、そのまま宿直室でくつろいだり、昼間の当番と交替したり、自宅へ朝食をとり帰ったりしていた。

大きな軍需工場や重要な施設では、屋上の対空機関銃座などに出勤していた兵士らも、防空態勢を解いて帰営した。

一般の各家庭では、防空壕や指定避難場所からみな帰宅し、遅い朝食をとっていた。中にはもう職場へ出勤する者もあった。

敵機に慣れる

この頃、日本の制海制空権を完全に奪っていたアメリカは、自由自在に日本の上空を飛びまわったから、子どもですら「今のはBの爆音だ。」と、その機種を判別するまでになっていた。

連日連夜の空襲で、一種の慣れっこになっていたためか、あるいは来襲のたびに騒いでいると、生産活動に支障を招くためからか、一機や二機の来襲のときは、警報さえ発令されないことがあった。当時の体験者の語るところによると、事実として、敵機は一万メートルの上空から侵入し、高射砲もとどかなければ、迎撃機も上昇するのが間にあわなかった。空襲警報も「安芸の宮島附近を…」と言っているときは、すでに敵機は一〇分前に通過したあとであった。またあるときは、警報が発せられていないときでも、一万メートルの上空を白い雲の尾をひいて敵機が通過するのをしばしば見たという(森宗寿人著「紫色の閃光」)。

市民も、敵機の爆音を聴いても「朝帰りのお客さまか…」と、気安く思い、振りかえりもしないで歩いていた(原爆体験記・陸勝利)。また、警戒警報発令中でも、「毎日のことなので、特別な危険も感じないで」町に行く者もたくさんいた(原爆体験記・北山二葉)。

第六次建物疎開作業

この朝、広島市内では都市防衛のため、空地作りの建物強制疎開作業が進められていた。八月六日は第六次の作業実施中で、作業場所は、(一) 雑魚場町附近(市役所裏)(二) 土橋附近(小網町・西新町・堺町など)(三) 県庁附近(水主町・天神町・中島新町・材木町など)(四) 鶴見橋・比治山橋附近(鶴見町・昭和町)(五) 電信隊附近(皆実町)(六) 八丁堀附近であった。

朝七時からの作業開始で、出動命令を受けた各地域・職域の国民義勇隊員や中学校・高等女学校の低学年生によ

る動員学徒らは、指定された現場に続々と集合していた。なかにはすでに作業に取りかかっている隊もあったし、町内の通りに整列して、出発前の点呼や隊長訓辞を受けている隊もあった。

危険な建物解体作業は、特設警備隊など臨時召集の老兵の部隊が主体となっておこなったが、まず瓦を除き、柱をノコギリで切断し、要所にロープをかけて引倒すのであった。作業兵は、竹の筒で作った水筒と、竹製のゴボウ剣を腰にさげ、地下足袋をはいた服装で、埃まみれになりながら汗水たらして働いた。

引倒された建物を片づけるのが、動員学徒らの作業であったが、炎天下に黙々と一四、五歳の少年少女たちは、大豆やイモ・カボチャなどの代用食の、それも七、八分めばかり入っているだけの弁当箱を、作業場近くの塀の陰や木の茂みに一まとめにしておき、「僕はこれよりほか、今はお国の役に立つことはない(星は見ている・故佐々木研治)。』と、引率教師の指揮に従ってけなげに立ち働いていた。

このほか、近郊町村の義勇隊もつぎつぎに入市して、現場に集結しつつあった。また、各事業所からも多数の義勇隊員が動員されていたが、中には薄板にワラジを打ちつけた手製の下駄を履いている者もいた。これら大人にまじって、一緒に働く国民学校高等科の学童の姿も見られた。

この朝、広島市の上空は紫紺色に澄みわたり、視界に雲一つなかった。真夏の眩惑的な太陽の光線は、灼けつくようにジリジリと市街地をくまなく照射し、建物疎開に立ち働く人々の汗を容赦なく掻きたてていた。

敵機の爆音聴く

一方、七時三十一分に警報が解除されてからも、県警察部(広島市役所内)の久城革目警部は、警防課長寺岡警視から警察電話で、「警戒警報は解除されたが広島上空に米機の爆音を聞くから警戒を十分にしよう」連絡があったが、その直前に、ラジオが「広島県に侵入した米機は、広島湾上空を南下しつつある」と報じていたので、南下途中にある米機の爆音とも思料され、注意警戒中であった(新編成広島県警察史・久城革目手記)。

原子爆弾の炸裂

この時、上流川町の広島中央放送局では、情報連絡室から、突如、警報発令合図のベルが鳴った。軍管区司令部から情報が入ったときに、アナウンサーに知らせるベルである。

古田正信アナウンサーは、第二スタジオ脇の警報事務室に駆けこんだ。

「午前八時十三分、中国軍管区情報、敵大型三機、西條上空を西進しつつあり、嚴重なる警戒を要す。」

古田アナウンサーは、廊下を足ばやに歩きながら、ざっと原稿に目を通し、スタジオに入るなり、プザーを押した。

時に八時十五分!

「中国軍管区情報!敵大型三機、西条上空を…」

と、ここまで読みあげた瞬間、メリメリッとすさまじい音、鉄筋の建物がグラッと傾くのを感じ、フワァーッと体が宙に浮きあがった(原爆被災誌・広島中央放送局)。

昭和二十年(一九四五)八月六日午前八時十五分。

市民には寝耳に水の、まさに無警告奇襲爆撃であった。

天を裂く熾烈な閃光と、地軸を揺るがす大爆音によって、一瞬、広島市は地面に叩きつぶされていた。街衢は、すでにそこになく、巨大な火柱が、中天めがけて奔騰した。煙雲はモウモウとして黒く天を覆い、ために全地域が深い冥暗にとざされてしまった。

死者・負傷者が続出し、全市が阿鼻叫喚の修羅場と化すや、各所に火災が発生、たちまち猛火となった。火勢は刻々と激しさを加え、強いつむじ風が吹き荒れるなかを、全裸半裸のドス黒く汚れた血だるまの群衆が、幽鬼の姿で逃げまどい、バタバタと死んでいった。物の下敷きになって、生きながらに焼き殺される者も無数にあり、肉親を呼ぶ声、救助を求める声が、舞い狂う火炎のなかに聞えたが、そのほとんどは今生の別れとなった。

被爆者の体験

白島国民学校(爆心地から一、五キロメートル)の土田康訓導(旧姓三角)は、二階の教員室で出勤簿に捺印し、自分の教室にもどろうと廊下を歩いて来たその時である。かすかにB29の爆音を聞いたように思われた。空襲解除後の安堵感から、友軍機だろうと気にもとめなかったが、次の瞬間、ピカッとものすごい光が目射した。それはダイダイ色の火の玉が落ちたようにも思ったし、雷鳴時の稲妻のようにも感じた。

目もくらむような眩しい金属性の閃光は、いつも訓練で見せられるエレクトロン弾の大型のものの炸裂のように思えた。ハッとして、思わず窓越しに校庭を見ると、相撲場の幕が燃えながら落ちていた。土田訓導は夢中で目の前

のコンクリート製の水槽へ走り寄った。

そして、そばのバケツを取ろうとしたときである。天も裂けそうな大爆発音とともに、全身をコン棒で打ちのめされたように、その場に叩きつけられたという。

また、千田町の広島赤十字病院(爆心地から一・六キロメートル)に入院していた橋本不二夫海軍見習士官は、病室から片岡実習生が、同じ病棟にある配膳室にかえり着いたかと思われるころ、廊下をへだてた北側の窓から、一度に多量のマグネシウムを燃焼させたような閃光と、病院の中庭あたりに、二五キロほどのロケット爆弾の直撃を受けたような、空気の激しい振動を感じた。同時に、病室にある付添人用の控室のガラス戸が、右顔面に吹きとんで来るのが目に入った。

空襲だと思ふや、隣室から話しに来ていた益谷陸軍中尉と、折り重なるようにして、ベッドの下にもぐりこんでいた。

そして、息を殺して周囲の変化を待ったが、何の変化もおこらない。頭かくして尻かくさずの恰好で、頭だけベッドの下に突っこんでいたため、腰から下は外にあり、その上に鉄筋の室の内装の厚さ二、三〇センチメートルもあるセメント壁が、上下左右から落ちかかって、したたか腰を打たれた。そして、益谷中尉は吹きとんだ先きほどのガラス戸に、顔面を打たれたらしく、白衣の上に、血がしたたり落ちていた。

その後、飛行機の爆音もなく、爆弾投下の模様もなく、たった一発の爆弾に、しかも広島のみただ中において被爆した不運を、折り重なった上下で話しあったが、廊下越しに聞える軍患者や看護婦たちの叫喚に、ただならぬ様子を感じ、おそるおそる室を出て、屋上にあがった。そして、屋上から目に入る町々が、一変しているのに驚いた。すぐ近くにあった貯金局と、かなり離れた所の八丁堀のデパートの建物、その他二、三のコンクリート建物を残して、広島市は一瞬にして消え去っていた(橋本不二夫手記)。

このような炸裂下の凄惨な状況は、第二編各説において具体的に記述するところであるが、爆心直下では閃光も爆発音もなく、文字どおり瞬時に押しつぶされ、まったく灰燼に帰したのである。

ピカ・ドン

この爆弾が「原子爆弾」であるということは、一般市民には八月十五日の終戦を迎えるまで知らされないでいたが、市民たちは自己の体験から「ピカ・ドン」と呼んだ。ピカッと光ってドンと爆発音がきこえたからであるが、何時誰れが言いだしたともなく、たちまち流布されて、ついに世界語となった。

昭和二十二年八月五日付中国新聞に、「世界語ピカドン」と題して、「原子爆弾の異名“ピカドン”は世界語として通用されている。その由来は罹災直後は投下された爆弾が不明のまま、市民の間でピカリの一瞬にやられたというところから“ピカー(イチ)”と呼んでいたが、ピカリの次にドンと爆風が来たというので誰言うとなく“ピカドン”に変わった。ピカドンは医学上もピカドン、ティーズピカドン症で世界で通用し、ほかに外国記者たどを通じて世界に普及したといわれている。」と記載されている。

呉鎮守府の記録

原子爆弾の投下・炸裂に関する呉海軍鎮守府の記録(原子爆弾災害調査報告集第一分冊・広島市における原子爆弾に関する調査(一般調査))では、次のように、当時の模様が述べられている。

広島市における原子爆弾に関する調査(一般調査)＝抄＝ 呉鎮守府

気象状況

イ、気象状況

晴天、高雲少量視程 15-20 軒南風 2 米程度(④)

(雲量 1 視界 30 軒南々東風(③))

敵機と行動と防衛隊制

ロ、敵機の行動と防衛態勢(付図第 1 参照)

八月六日 ○七〇九 広島県警戒警報発令

豊後水道及び国東半島を北上せる敵大型 3 機は広島湾西部を経て広島県中部を旋回

○七二五 播磨灘に脱去す

○七三一 広島県警戒警報解除

○八〇六 松永監視哨は敵大型 2 機西北進中を発見

○八〇九 同哨より 3 機と訂正(以上④)

○八一四 中野探照灯台西條方向に大型機爆音を聴取す

○八一五 西條上空 B29 進行方向西 (12 糶双眼鏡内同一視野に 2 機のみを認む) 中野上空通過時時々南寄り高度七千間隔二百乃至三千米 (以上中野探照灯台) (西條上空に 1 機のみ発見) (板城探照灯台)

付図第一・侵入経路 (推定)

ハ、爆発前後敵機の行動

各種所見一致せず不的確なるも概ね次の如し。

(1)④の所見 B29 3機 (或は大型3小型1 といひ或は大型1ともいふ) 高度八千五百東北より広島上空に進入投弾し後左方向に反転離脱せるものの如し。

(2)③の所見 ○八一七 B29 2機雁行中先頭機右旋回す (中野より望見せるままの光景) 旋回中投弾せるものあり、最初の1個開傘せず。後3個の落下傘開けり後続機は先頭機より1乃至2秒後れて垂直旋回に近く左に急旋回す此の後続機旋回始めんとする時閃光あり。

(3)③の所見 (板城探照灯台) ○八一七 広島上空にて変針と思わるる頃落下傘三個投下七倍積鏡の一分割位に変針中の B29 見えた瞬間強烈たる閃光に驚けり (板城より望見せるままの光景)

爆撃後の行動を伝えたもの少なく ○八二〇 板城探照灯台は右旋せる敵1機は東方に変針し中野北方の雲中に消滅せるを認めたり (3)

以上を綜合するに総機数は3機なるべくも市内の観察者も或は1機と言ひ3機と称し不同なり中野・板城両探照灯台共双眼鏡に依る確実たる報告にして且夫々2機又は1機のみを認めたるは双眼鏡の視野狭少にして3機中1機が高度或は進路に於て別行動を採る為別目標を捕捉せるに非ずとの推定も可能なり之は前述の松永監視哨の初めに2機と言ひ後3機と討正せることにも關聯す市内にて爆撃直前敵1機のみを認めたるもの3例あり (⑤)。市中にて3機を見たりと謂うも落下傘3個と機数とを關聯せしめ漠然と事後判断を加え居れるものを見ること屢々なり尚小型1機が爆撃直前南方より飛來し低空にて頭上を通過せりとの意見もあり (第2 総軍参謀長談)。

落下傘付無線装置 (テレメーター)

原子爆弾搭載機の僚機二機のうち、一機は爆発の様を調べる観測無線通信装置を落下傘により投下した。もう一機は写真観測を行なつた。八月十日、広島兵器補給廠において陸海軍が研究会を開催した際の記録に、無線装置の調査結果が、次のように記されている (当時・呉海軍工廠電気部無線工事主任・大野茂海軍技術中佐の提供史料)。

「落下傘付無電装置ニ就テ」

一、本装置鹵獲ニ至ル迄ノ経緯

(一) 呉警備隊ナカ砲台ノ当直員ノ観測ニ依レバ、八月六日○八一五、B29一機、続イテ他ノ一機、上空通過、広島方向ニ向フ。高度七、〇〇〇、間隔二〇〇～三〇〇、先頭ノ一機、先ヅ広島上空ニテ北ニ変針。二番機ハ南ニ、殆ド垂直旋回カト思ハレル程度ノ急旋回ヲナシ、夫ト殆ド同時刻頃、閃光ヲ認ム。北ニ旋回シタル一番機ハ、落下傘四個ヲ投下。最初ノ一個ハ開傘セズ、残りノ三個ハ開傘。落下傘ヲ見失ヒタル頃、閃光ヲ認ム。

(二) 海軍側調査団ノ調査ニ依レバ、閃光ヲ發シタル時刻、本落下傘ノ位置ハ、可部町附近ニアリシ目撃者ノ言ニ依レバ、其ノ南方、落合村附近ニシテ、其ノ高度ハ閃光源ノ高度ト略同一ナリ。(閃光源ト落下傘トノ距離ハ約八kmナリ)

尚、本落下傘付装置ハ、殆ド損傷ヲ受ケズシテ、可部町北方、龜山村大毛寺ノ水田中ニ落着セリ。

二、本装置ノ機能

(一) 回路

自励式原振器、緩衝増幅器、中間増幅器、電力増幅器、電源部ヨリナル。

自励式原振器ノ發振回路ニ並列、外気圧ノ変化ニヨリ、容量ノ変化スル特殊蓄電器ヲ有ス。

真空管 3A5 (複3極管) ノ一方ヲ原振器用、他ノ方ヲ緩衝増幅用トス。中間増幅用ハ 6C4 一個ヲ、電力増幅用



ハ 8 3 2 一個ヲ使用ス。

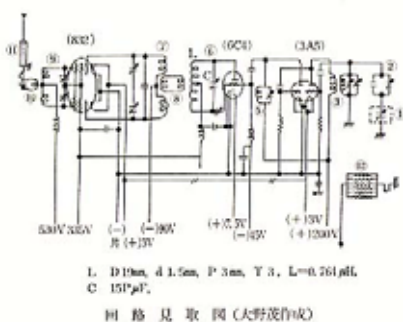
空中線ハ管体内ニ高周波ケーブルニテ導キ、其ノ外部ニ長サ二・五四mノ単条空中線ヲ有ス。

(二) 構造

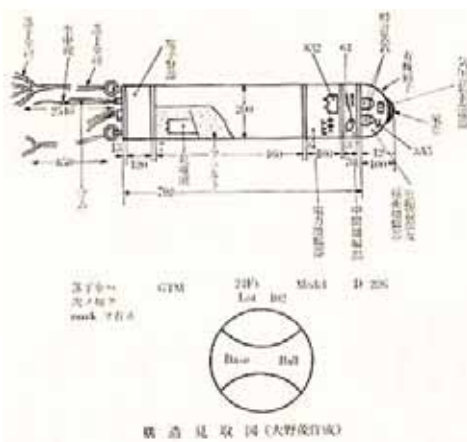
長サ九五〇mm、直径二〇〇mm、重量二四・三kg、円錐形ノ主体及ビ直径約一一m、重量七・一kgノ落下傘トヨリ成ル。

主体ノ頭部ニハ自励式原振器、第一増幅器、拉ニ圧力計型空気蓄電器、圧力調節装置等ヲ有シ、有機硝子製半球状覆ヲ以テ被フ。其ノ中央ニハ通気孔ヲ有シ、外圧ノ変化が直チニ圧力計型蓄電器ニ及ブ如ク配置ス。

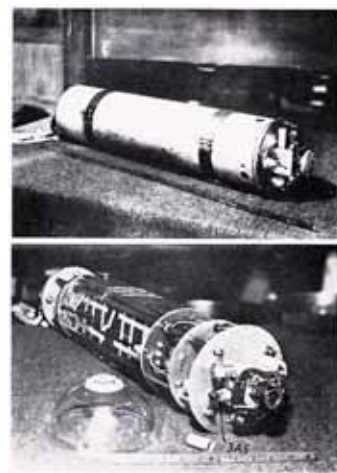
可部町附近の山林中や水田に到着した三個の落下傘つき観測器について、第二総軍司令部に報告があり、同司令部に一個が回収された。この一個は有末調査団の一人陸軍省軍事課新妻清一中佐が、八月十二日、総軍機で東京に持ち帰ったと言われる。また、他の二個は海軍総隊航空参謀瀧田美津雄大佐らが収納した。このうち一個は呉海軍工廠において分解し、研究され、前記のような内容が究明されたが、他の一個は、終戦の混乱時に工廠内のドックに投棄する寸前、大野茂(青梅市在住)が保管した。なお現品は電池室に相当する下半分が欠如されている。昭和四十五年八月、調査記録と共に、広島平和記念資料館に寄贈された。



回路見取図 (大野茂作成)



構造見取図 (大野茂作成)



落下傘付無線装置 (大野茂提供・広島平和記念資料館所蔵)

(付記・アメリカ側の記録)

アメリカ側の記録

アメリカの原子爆弾投下作戦の最高指揮官レスリー・リチャード・グローブス陸軍少将は、自著「私が原爆計画を指揮した＝マンハッタン計画」(富沢謙吾・実松讓共訳)に、原子爆弾に関する興味深い事柄を記述しているが、それによると、まず原子爆弾投下は、目標都市が目視爆撃できる好天候の時期として・八月一日以後上旬までに実施することとし、当初目標では、小倉・広島・新潟・京都であったが、最終目標として第一目標広島、第二目標小倉、第三目標長崎と決定し、広島市爆撃の照準点は基町の陸軍司令部に接近した地点とした。

広島市決定の理由

広島市が選ばれた理由について、グローブスは「広島はきわめて重要な軍事目標であった。陸軍司令部は城跡に設置され、約二五、〇〇〇人の兵力が各地に駐屯していた。それは、九州と本州を結ぶ補給と運輸交通の中心地宇品をひかえていた。広島は京都を除いて、空襲によってまだ損害を受けない最大の都市であった。人口は三〇万を越すものと信じられており、中程度の規模の工場と小工場・ならびにほとんどの各民家でも、せっせと精を出して軍需工場の、さながら蜂蜜の巣の観を呈していた。」と、記述している。

超極秘の計画

超極秘のうちに原子爆弾の研究と製造が進められた。一九四三年(昭和十八年)の後半、アメリカ陸軍省の防諜部による機密保持が困難になり、マンハッタン工兵管区の中に特別防諜隊が編成され、従前の治安機構をこれに統合した。

特別防諜隊は、地区工兵将校の指揮下におかれ、すべての研究所と工場その他の施設に隊員が配置された防諜隊員は、「抜け穴」という名で呼ばれ、終戦時まで四八五人に達したといわれる。

計画の機密保持のため、前記の特別組織を持つと共に、報道の統制を厳重に行なった。

報道統制の原則は、第一に重要な情報を完全に発表しないこと。第二にマンハッタン計画に関心をそそるようなことを発表しないこと。第三に敵側の諜報員または科学の進歩について知識のある人が読む可能性のある新聞や雑誌に、何が実施されているかを想像できる記事を報道させないこと、であった。

機密保持の目標は、第一は、ドイツ人にアメリカの努力や技術上と科学上の成功を知らせないこと。第二は、原子爆弾を戦闘で最初に使用する場合、完全な奇襲となるよう全力をあげること。第三は、できるかぎりソ連にアメリカの設計と製造過程の発見とその詳細を知らせないこと、という以上の三つであった。

投下反対論の黙殺

昭和二十年(一九四五)六月一日、暫定委員会(原子爆弾使用の決定に重大な役割を持つ特別委員会)が、日本に対する原子爆弾の使用決定をおこなったとき、原子爆弾の製造に関係したシカゴ在住の科学者の一団—シカゴ大学教授ジェームズ・フランクを委員長とするドウナルド・J・ヒュージュ、J・J・ニクソン、ユウジン・ラビノビッチ、グレン・T・シーボルク、ジョイス・C・スターンズ、レオ・ジラード以上七人の科学者は、無警告使用を特に賢明でないと主張し、通常「フランク覚書」と称する使用反対の意見書をトルーマン大統領に送って、猛烈な反対運動を展開したが、「反対論は検討のうえ、取りあげられないか、黙殺されることになった(レスリー・R・グローブス)」のである。

テニアン基地

原子爆弾第一号を搭載したB29 エノラ・ゲイ号(機長チベッツ陸軍大佐の母の名という・ENOLA GAY)が進発したテニアン基地は、マリアナ諸島に属するテニアン島にあった。

現在、アメリカの信託統治領になっているマリアナ諸島は、太平洋の西部、東経一四六度附近に南北に長く連なっており、北緯一一三度から二一度におよぶ一五個の島から成っている。そのうち、北部の九島は富士火山帯に属する火山島であり、南部六島は隆起珊瑚島である。主要な島は、サイパン・テニアン・ロタ・パガン・グーグワン・アグリハン・アグイジャン・アナタハンなどの諸島嶼である。

位置は、北島東方約一、五〇〇マイル、日本本土の南方約一、三五〇マイルの距離にある。

一五二一年、マジェラン世界周航の途次に発見され、二二〇年間のスペイン領時代を経て、一八八九年ドイツに売却され、ついで一九一九年(大正八年)から日本の委任統治領となっていた。日本では、これら諸島で砂糖の生産に力をそそいで来た。

テニアン島“Tinianls”は、サイパン島の南南東にあり、昭和十九年(一九四四)七月七日のサイパン島玉砕陥落に続いて、七月二十三日、ついにアメリカ軍の上陸占拠するところとなった。

アメリカ軍は、ここに四つの滑走路を備えた北飛行場(ノース・フィールド)を、急ぎ完成したが、当時としては世界最大規模の爆撃基地と言われた。

島全体が石灰岩の台地をなす島で、水際は、ほとんど高い岸壁を形成しているが、島そのものは平坦で、島内最高地点であるラツソ山でも、海拔一七〇メートルに過ぎない。そこには日本軍が造成した良い道路がいたるところに行きわたっていた。

原子爆弾搭載機

大東亜戦争の後半になってから、アメリカ軍は長距離爆撃機B29を大量に出動させて、遠隔の基地から盛んに大規模攻撃を試みているが、日本の主要都市も、この大型爆撃機の長駆来襲によって、そのほとんどが焼き払われていったのである。

広島市に対する原子爆弾攻撃も、このB29七機で編成された爆撃飛行隊によって実行された。

B29の生産計画は、早くも一九三九年(昭和十四年)十一月に、その机上設計が完成し、一九四三(昭和十八年)には実際の生産に入った。あたかも南方の各戦線において、アメリカ軍の反攻がようやく熾烈化してくるころであった。

B29のおおまかな要目は、次のとおりである。

翼の全長 四二メートル

高さ 八・四メートル

胴体の長さ 三〇メートル

推進エンジン 二、二〇〇馬力四基

テニアン島～広島市間の距離は、一、七〇〇マイル(約二、七四〇キロメートル)で、最新鋭機B29をもってしても片道六時間半を要するものであった。また、原子爆弾搭載機エノラ・ゲイ号が、八月六日午前二時四十五分(日本時間では午前一時四十五分)、テニアン基地を離陸した時の総重量は六五トン、搭載燃料油七、〇〇〇ガロンであったとされる。

エノラ・ゲイ号を除く六機のうち、二機はエノラ・ゲイ号に随伴し、一機は途中にある硫黄島の地上に待機、残り三機は約一時間前に先発して、広島・小倉・長崎の三都市上空一万メートルから、それぞれの都市上空の気象状況を観測して、本隊三機に無電連絡をする任務を果たした。

予備基地硫黄島に待機した一機は、原子爆弾搭載機がテニアン基地から発進後故障を生じた場合の予備機であった。

投下作戦の遂行

この作戦(センターボード作戦と暗号で呼ぶ)には、アメリカ軍第二〇航空軍の第五・九混成部隊(ポール・チベッツ陸軍大佐指揮)が慎重に編成され、昭和二十年(一九四五)二月ごろからB29を使用し、同年五月後半にテニアン基地に到着して、秘密裡に空中投下などの特殊な訓練を続けた。

原子爆弾第一号は、一九四五年七月十六日の早朝、サンフランシスコで重巡洋艦インディアナポリスに積みこまれて出港し、全速力で西航、途中、ハワイのパールハーバー(真珠湾)で燃料補給のため二、三時間停泊しただけで、七月二十六日にテニアン基地に到着し荷揚げされた。なお、荷揚げをすませたインディアナポリスはフィリピン海域に向ったが、七月三十日、日本の伊五八号潜水艦の魚雷攻撃を受けて撃沈された。八月二日、現場海域に駆逐艦セシル・J・ドイル号が救助に出動したが、海中から救出された生存者は、乗組員一、一九九人中わずかに三一六人であったといわれる。

投下命令

一九四五年七月十七日から八月二日まで、ポツダム会談が開催されたが、その七月二十五日、トルーマン大統領は日本に対する原子爆弾の投下命令をくだした。それは、日本に対する降伏勧告ポツダム宣言を発表する一日前であった。

ポツダム宣言は、日本が無条件降伏するか、それでなければ即時完全破壊かのどちらかであるという対日最後通告であった。しかし、原子爆弾のことについては、まったく触れていなかった。

投下理由

アメリカの国内でも反対論のあった非人道的な原子爆弾を使用した理由は、(一)アメリカ軍将兵の犠牲の大きい日本本土侵攻作戦(オリンピック作戦という。二十年十一月ごろ上陸予定とした)を行なわないで、戦争を短期に終結できる。(二)ソビエト参戦前に原子爆弾を投下し、日本降伏の決定的最大の原因を先取して、戦後の日本処理における発言権を独占しようとした、と言われている。

投下準備完了

ともあれ、テニアン基地に運ばれた原子爆弾は、同島北飛行場近くの冷房つき倉庫(砲弾組立所)内で組立てられ、八月五日の夕方早く、B29エノラ・ゲイ号に積みこまれて発進準備を完了した。

(註)

エノラ・ゲイ号の搭乗員は、一二人で、機長・操縦士ポール・チベッツ陸軍大佐、副操縦士(爆弾取付け主任)ウィリアム・S・パーソンズ海軍大佐、及び副操縦士ロバート・ルイス大尉、爆撃手トマス・フィリビー陸軍少佐、航空士セオドア・バン・カーク大尉、尾部砲手ジョージ・R・キャロン軍曹、機上整備士ワイアット・デューゼンベリ軍曹、整備助手ロバート・シャマード軍曹、レーダー担当ジョー・スチポーク軍曹、通信士リチャード・ネルソン伍長、パーソンズ大佐の副官モリス・ジェブソン中尉、放電探知装置(ECM)担当ヤコブ・ビーゼル中尉

爆撃の時間的経過

広島爆撃の経過は、パーソンズ大佐の航空日誌によれば、つぎのとおりである。

一九四五年八月六日午前二時四十五分―離陸

三時―最終起爆装置取付けに着手

三時十五分―起爆装置取付け完了

六時五分―硫黄島上空より日本へ向う

七時三十分―赤プラグを挿入す(投下すれば爆発する状態に爆弾を置いた)

七時四十一分ー上昇開始。気象状況受信ー第一・第三目標上空は良好、第二目標上空は不良

八時三十八分ー高度三二、七〇〇フィート(約九、九七〇メートル)で水平飛行に移る

八時四十七分ー電子信管テスト、結果良好

九時四分ー針路西

九時九分ー目標広島視界に入る

九時十五分三十秒ー原子爆弾投下

高度三一、六〇〇フィート(約九、六〇〇メートル)で原子爆弾を目視投下するや、エノラ・ガイ号は右一五八度の急旋回をおこなって北上、山陰上空へ向って離脱した。爆弾は投下後四十三秒にして閃光を起し、機体が衝撃によりグラリと傾いた。そのときエノラ・ガイ号はすでに、爆発点から一五マイル遠ざかっていた。

パーソンズ大佐は、さらに航空日誌に、つぎのように記録している。

閃光、つづいて二回の衝撃波きたる。巨大な原子雲起る。

午前十時ーまだ雲が見える。高さは四万フィート(約一二、〇〇〇メートル)以上にちがいない。

十時三分ー「戦闘機見ゆ」との報告あり。

十時四十一分ー雲見えなくなる。広島を去る三六二マイル(約五八〇キロメートル)の地点、高度は二万六、〇〇〇フィート(約八、〇〇〇メートル)。

(註・以上はテニアン島現地時間・日本との時差一時間)

攻撃機および観測機二機の報告によれば、原子爆弾投下から五分後に、直径約三マイル(約五キロメートル)に達する暗灰色の巨大な雲が、広島市の中心部上空に垂れさがっていた。この雲の中心からは白い煙の柱が立ちのぼって、やがて三万五、〇〇〇フィート(約一七、〇〇〇メートル)に達し、その頂上はかなりの大きさにひろがった。投下の四時間後、広島上空に達した写真偵察機は、広島市全体がいぜんとして煙の雲におおわれ、ようやくその周辺の火災を認めることができたのであった。

投下成功

テニアン基地の第三一三飛行連隊の作戦室では、ファレル、パーネル、アシュワース、モイナハンなどが、何時間もソワソワとしてエノラ・ガイ号からの報告を待っていた。パーネルは、戦闘概況報告をする際、地図や黒板をさすのに使うゴルフのクラブをたいくつしのぎにふりまわしていた。ファレルは、イライラと眼鏡をいじったり、よごれた暗号簿を何度となく、めくったりしていた。

最初の通信を下士官が持って飛び込んで来た。待ちかねていた一同は、さっと取囲んだ。ファレルは驚いた。平文で送られてくるなどとは想像もしていなかった。そのうえ、これだけでは、爆弾を投下したということ以外にあまりくわしいことはわからない。二番目の通信文を一目見て、ファレルは、成功だと悟った。そして暗号簿を使うまでもなく、声をあげて平文に翻訳した。

「明らかに、すべての点で成功。目撃効果、トリニティ(ニューメキシコでの実験)より大。広島に投下。投下後の本機の状態は正常。基地に向け帰投中。」

ファレルは喜びのあまり、ウォーッと叫んだ。一同もおどりがあがって背中を叩きあった。何秒かたって興奮が静まると、ファレルは陸軍通信部隊の黄色い用紙をとって、インクで通信文を書いた。

発信地 K K E E 〇六〇〇〇六 Z (テニアン時間八月六日午前十時六分)

宛先、陸軍省

ファレルよりオレアリーあて、私信。

テーブル六ラインー七(広島)のテーブル六ライン二五(目標)を〇五二三一五 Z 時、雲量 1 の状態で目視照準により攻撃。戦闘機なし。高射砲火なし。〇五二三三〇 Z 時におけるジャッジ(パーソンズ)よりの無電報告、つぎのとおり。ー明らかにすべての点で成功。目撃効果、トリニティより大。投下後の機の状態は正常。基地(テニアン)に向け、帰投中。発表手続きのすべてをとられたし。ジャッジより後刻詳報するはず。全員より祝意を送る。

グローブスあての報告だが、保安をおもんばかって秘書のオレアリー夫人の名を使って送られたこの通信で、第



五〇九飛行隊で長い間守られてきた「秘密」も破られることになった。

またたくまに、話は基地中にひろまった。飛行隊司令部でコーヒーをすすっていた憲兵隊のシャッフアーは、将校がとびこんで来て、どなるのをきいた。

「やったぞ。広島をやっつけたぞ。チベッツが引きあげてくる！」

こうしたニュースは冷房装置をほどこした爆弾組立所にもすぐさま伝わった。そこでは、科学者や第一特別飛行大隊(原始爆弾投下の中核隊)の兵隊が二番手の爆弾(プルトニウム爆弾—長崎に投下)の準備に大わらわであった。

ラムゼーはすぐ、東京の周波数に合わせて短波ラジオのスイッチをひねった。まもなく東京ローズの甘ったるい声がきこえた。それは、広島で米機三機による小爆撃があった、と報じていた。爆撃についてはそれだけで、やがて一時間ほどして、広島行きの列車が一時不通になった、と東京放送が伝えた、といわれる(もはや高地なし、ヒロシマ原爆投下の秘密。F・ニーベル/C・ベイリー共著・笹川博/杉淵玲子共訳)。

原子爆弾の判定

ただ一発の爆弾によって、全市が壊滅に瀕し、多大の犠牲者が出現した状況から、県警察部の石原虎好部長らは、これは原子爆弾であると断定したが、呉海軍病院の福井信立軍医中將も、炸裂の瞬間を偶然、病院の庭から眺めていて、それと知った。また、広島赤十字病院の重藤文夫博士は、登院途中で被爆し、防空壕に退避したとき、原子爆弾だろうと直感した。一般市民の中にも幾人かは、読書知識などから推察したのがあり、それぞれの体験記に述べているが、宇品の陸軍船舶練習部では、被爆前日の八月五日、広島文理科大学の三村剛昂博士から、原子爆弾実現の可能性を聴いている。

同練習部の芳村部隊長から、将校の教養講座開催のため、講師を招くよう命令を受けた広瀬自助陸軍少尉は、広島文理科大学の理論物理学学者三村剛昂教授を招いた。三村教授の講演が終り、質疑応答がおこなわれたとき、加藤中佐が立って、「原子爆弾とは如何なるものですか。今次戦争に実用化可能ですか。」と、質問した。

三村教授は、構造式を黒板に書いて説明し、「東京の仁科博士一派の研究室は、すでに究明されており、偉大な性能のものです。今次戦争には、到底間に合いません。」と答え、「要するにキャラメル一個大の原子核が爆発すれば、広島市くらいは一度に壊滅するものです。」と説明した。加藤中佐は、それで一応安心したと言われるが、皮肉にもその翌六日に原子爆弾に見舞われた。負傷した三村教授は広瀬中尉を呼んで、「昨日は誤ったことを話して申しわけない。」と言って、深く詫びた(広瀬自助手記)。

中央への報告

広島の様子は、各機関からそれぞれ通報されたが宇品の陸軍船舶司令部からは、すぐに呉の海軍鎮守府へ連絡され、そこからようやく中央へ報告された。中央もまた、原子爆弾が今次戦争中に出現するとは考えていなかったから、報告もまともに受取られなかった。

東京麹町霞ヶ関の海軍省構内の地下防空壕の二階にいた、大本営海軍参謀奥宮正武海軍中佐の記録によれば、呉鎮守府防空指揮所からの直通電話を、何気なく受取ったときの様子を、次のように述べている。

「たった今、広島の上空で、大閃光とともに、キノコ型のとてつもない大きな雲ができた。遠い雷のような音を聞いた者もいる。様子が変だから、陸軍の第二総軍司令部に電話したが、応答がない。詳細は後から報告するが、とりあえず……。」

相手は、呉鎮守府航空参謀広木中佐である。

八時三十分を少し過ぎている。

「空襲ですか?それとも地上爆発ですか。」

「はっきりわからない。飛行機はB29を二機見ただけだ。」

「天気は?」

「快晴だ。」

気になるので、直ちに陸軍の参謀本部と、航空司令部に電話する。どちらも、何も知らない。内務省にも連絡がないという。

〈これは一大事だ!〉

不吉な予感がする。しかしその正体を説明してくれる知識人は、軍司令部にはいない。そこで海軍航空本部の安井大佐に電話をかける。

「原子爆弾かも知れないが、現場を見なければわからない。」という返事である。

奥宮中佐はやっと思い出した。一敵はこれを使用したのだろうか？

そのうち参謀本部から何度も電話がかかってくる。広島は陸軍の大策源地だ。そこからの連絡がないから心配するのも無理はない。

昼前になって、やっと呉から

「今朝八時三十分前、広島上空を、B 29 が二機高速度で通過した直後、突然、ピカッと大閃光を發し、ついで轟音とともに、瞬時に家が倒れ、火災が起きて、大混乱中である。火災と避難民のために、海田市から先は、目下のところ、連絡がつかない。」

ということを報らせてきた。何はともあれ、現地を見なくてはと、安井大佐その他の人々と、調査のため広島に赴くことにした。

空襲に妨げられて、ダグラス機で広島上空についた時は、翌七日の日没近くであったから、上空から詳細に調査する間もなく、岩国海軍航空隊に迂りこんだ。

翌八日、一行は第五航空艦隊参謀今村正己少佐の案内で、広島に入った(奥宮正武著・「翼なき操縦士」)。

呉の海軍鎮守府は、六日当日すでに救援隊と共に災害調査班を広島市へ派遣したが、外部からの調査班は、この奥宮参謀一行が最初であった。

調査班の入市

この八日には、陸軍省の救護調査班として、陸軍軍医学校・臨時東京第一陸軍病院から島田中佐ら五人が来広した。

同日、また、大本営から、参謀本部第二部長有末精三陸軍中将を団長とする調査団(有末調査団という)が来広した。有末調査団は、理化学研究所の仁科芳雄博士を中心とする軍医や技術関係者ら約三〇人で編成され、八日夕刻、DC-3 型輸送機で広島の吉島飛行場に到着した。ただし、団長有末中将は、単身で、一日前の七日に飛行機で乗りこんで来たとも一説に言われている。

有末団長の言葉(読売新聞社刊・昭和史の天皇4)によれば、「着陸してみると、飛行場に生えている草という草はすべて赤茶けた色に変わり、しかも一方に一斉になびいていた。町とおぼしき方角に一本だけ枯木になった木が立っているのが、ひどく印象に残った。青いものは、全く見あたらず、自分の経験では関東大震災のときと同じものであった。出迎えは誰もいなかったが、傍の防空壕から、飛行場長らしい顔の半分が焼けた中佐があらわれた。」とある。

また、仁科博士は、機上から焼野原の広島を俯瞰して、原子爆弾による惨状であると判断したという。調査団一行は、すぐに宇品の船舶司令部を訪ね、その夜は、同司令部近くの松乃家旅館に泊った。

入市第一電

旅館で、仁科博士と新妻清一中佐(陸軍省軍事課)、及び片桐技術中佐(航空本部技術研究所)、陸軍軍医学校の医師三人は、一刻も早く対策をたてる必要があるとして、協議した結果、とりあえず、肌を露出しないこと、白い衣服を着ていた方がよいこと、爆風が強いから遮蔽物に身をかくすことなど、有末調査団長の名で、大本営へ入市第一電を送った。

内山少佐の測定

翌九日、元宇品の独立高射砲第二十二人隊本部を訪れ、同隊が前もって調査測定していた結果を聴問した。内山恒太少佐(大隊長・現姓加藤)は、その朝、閃光と轟音を聴いたあと、すぐに船舶司令部に連絡してから、陣地の板囲いの板に一定角度で、キツネ色にこげた跡を見つけた。今の強烈な爆弾は空中で炸裂したのかも知れないと直感し、江波・打越の陣地に電話(電話が通じた)し、その焼こげの有無と斜角が何度か調査させた。その報告を総合して、部下に計算させ、約五五〇メートル上空で炸裂したという結果を得ていたのであった。

ここから仁科博士らは二葉山の第二総軍司令部に行き、調査の協力を依頼した。総軍司令部は、すぐに猫屋町の憲兵隊(光道館)に連絡し、柳田博憲兵准尉に案内を命じた。柳田准尉は仁科博士一行七、八人をトラック(運転手は自動車班長別府栄助軍曹)で、市内一円にわたって案内した。

仁科博士は、トラックの上で、助手たちを指示して、ほとんど目測により、ビルの残骸その他の物件の調査を行い、爆弾の炸裂した高度、あるいは地点などをはかった。この間、仁科博士はまったく沈痛な面持ちで、周囲の者にもあまり口をきかなかった(柳田博談)

同日、引続き一行は宇品の船舶練習部（旧大和紡績工場）をたずねて、十三日まで人体障害について科学的な調査を実施した。このとき、仁科博士の調査活動に協力した一人である同練習部経理課長木村経一陸軍主計少佐は、次のようにその模様を本誌編集担当者に報告している。

屍体の解剖

「仁科博士は、国民服・国民帽に巻脚胖姿で、数人の同行者と共に非常に元気で、広島この惨状にも臆した様子うかがえなかった。練習部本部で私が対応したとき、仁科博士は『外観上損傷のない新しい屍体を解剖したい』旨、申しいでられた。当時、陸軍船舶練習部の経理責任者であった私は、兵站支援関係の責任を持っており、その責任の中には屍体の取扱いも含まれていたと解釈された関係で、私が死体提供の話に応じたのであった。中国軍管区隷下の各部隊は、爆心地に所在していた関係から、将兵の死傷者は最も多く、その中で仁科博士所望の外観上損傷のない屍体も、相当数が練習部へ運ばれていたから、その中の一体をまず提供するように、部下に命じた。

屍体解剖は、練習部医務室（旧大和紡績広島工場の実験室）で行なわれた。そのときの医務室のなかには、ホルマリンの臭気が充満していて息もつけないような気がした。解剖に立会したのは、衛生課次級の小坂軍医少佐と私と、その他数人の白衣の人がいたように思った。練習部衛生課長大谷軍医中佐は、八月六日、紙屋町付近の電車の中で爆死したらしく、所在不明であったため、衛生課の次級者が立会したものである。

最初の屍体は、若い将兵の屍体で、無傷のためか美しいような感さえた。手術衣を着た仁科博士の立会により、素早く解剖が始められた。メスが一寸動いたと思う間もなく、すぐに内臓が目飛び込んで来た。

博士は、びらんした内臓を手で持ち上げ、『解りますか、これは間違いなく原子爆弾による内臓の破壊です。』と、周囲の人々に宣言するように申された。

仁科博士ら調査団による屍体解剖は、その他に数体が実施されたと思うが、私は第一回目の解剖が終ると同時に、医務室を飛び出してしまった。やがて、われわれ被爆者も、あのような運命を辿るのかと考え、とても耐えられない気持ちであった。」という。

放射能の人体に関する影響について、当時、物理学界では仁科博士が最も権威ある学者であったことを、同調査団の新妻清一中佐も語っている（昭和三十九年八月六日付中国新聞）。

広島爆撃調査報告

なお、仁科博士らは、十日、焼野原の中で、京都帝国大学から来た荒勝文策教授ら（海軍の原子爆弾研究機関）の調査隊と出会い、その夜、在広の陸海軍の調査隊と共にその調査資料を持寄って、兵器補給廠（爆心地から二キロ東方）の一室で合同会議を開き、原子爆弾であることを確認しあい、今後の対策などを協議した。

この会議で、「航本技術部」の名における昭和二十年八月十日付「広島爆撃調査報告」が正式に大本営に、飛行便と電報で送られた。

調査報告には「判決」として三項目をあげ、第一に「一、本爆弾の主体は普通爆薬または焼夷剤をしようせるものに非ず、原子爆弾なりと認む。」とある。

しかし、本土決戦をもくろむ軍部は、現地調査隊から正式な報告を得ながらも、国民の前に「原子爆弾である。」ということ、なお発表させなかった。

長崎市の被爆

ソ連軍が宣戦布告した同日の九日午前十時五十八分、長崎市に第二の原子爆弾（プルトニウム）が投下され、死者（行方不明者を含む）二六、七七二人・傷者四〇、九九三人合計六七、七六五人、建物は全焼壊三三、三六〇戸・半焼壊二五、二〇〇戸（原子爆弾災害調査報告集第一分冊・木内信蔵記録）という災害を受けてから、さしもの軍部も暗黙のうちに、シブシブながら認めざるを得ない事になったといわれるが、結局、原子爆弾であるということは、終戦になるまで一般国民には知らされなかったのである。

ようやく発表

八月十四日、日本はついにポツダム宣言を受諾し、無条件降伏を決定したが、この日ようやく仁科博士らの調査結果が公表され、「原子爆弾」という名称が一般に知らされた。日本の各新聞は、終戦の日の十五日付、または十六日付紙面に、仁科博士の談話とともに、これを一斉に報道したのである。

フィルムの感光

なお、広島赤十字病院の重藤文夫副院長は、被爆状況からみて、原子爆弾が投下されたと直感したと言われるが、確証を得ようと、市内の焼跡を歩いているとき、瓦の表面にペソペソ草の陰が写っているのを見て病院のレントゲ

ン・フィルムにも包装箱の釘の陰が写ってはいないかと考えつき、たくさん現像させて調べた。同時に、この悲惨な状況を普通写真に写しておこうと思い、斉藤誠二病理検査技手にたのんだ。当時、一般市民は市内の撮影が禁止されていたので、斉藤技手は疎開先からカメラを取寄せて写したところ、装填してあったフィルムが全部感光しており、また焼付の印画紙もみな放射線を被っていた。また、京都帝国大学の菊池武彦教授の調査班と行動を共にしていた同病院の黒石勝レントゲン技手は、菊池教授からレントゲン・フィルムを調べてみたらどうかと言われて、現像してみると、やはり感光していた。フィルムは病院の薬局の地下室に収めてあり、少しずつ出して二階の暗室の中のフィルム交換箱に入れていたが、放射線が何枚かの厚いコンクリートの壁やその中の鉛を通して感光していた。さらに地下室のを調べてみると、骨折の診断くらいなら使える程度の感光であったという。

また、この頃、宇品の陸軍船舶部隊(暁部隊)の将校が、「どうもおかしいからこのフィルムを現像してみしてほしい。」と言って、レントゲン・フィルムを病院に持参したので、黒石技手が現像したところ、あきらかに感光していた。

この事は、広島原爆医療史にも詳しく語られているが、フィルムの感光は、当時、原子爆弾確認のための一つの大きな根拠とたったのである。

最初の爆発実験

人類史上最初の原子爆弾第一号は、広島市に投下されて、言語に絶する未曾有の惨禍を惹起したが、その前にまずアメリカでは、昭和二十年(一九四五)七月十六日午前五時三十分(アメリカ現地時間)、ニューメキシコ州アラモゴードから八〇キロメートル離れた砂漠のなかで、プルトニウム原子爆弾の爆発実験がおこなわれ、そして成功した。広島市に空輸投下に先立つこと、わずかに二〇日前であった。

この爆弾は、高さ約三〇メートルの鉄塔の上に乗せて炸裂させたものであって、空中投下は、まさに広島が最初の試みであった。

このテストでは、炸裂の瞬間、四〇〇キロメートルにわたって、天空をいろどった閃光が、爆心地に無数の太陽がきらめいたかのように輝きわたり、巨大な光の玉が広がった。同時に、熱風が大波のようにほどばしり、白煙が巨柱となって中天に突きあがった。やがて一二、〇〇〇メートルの上空にまでキノコ型の雲柱を打立てた。そして、同地方の広範な地域にわたって、人々はもの凄い轟音を耳にし、太陽が突然昇ったと思うと、すぐに沈んだような不思議な現象を見た、とされている。

原子爆弾の開発は、昭和十四年(一九三九)以前から、原子力を解放することの理論的可能性が、科学者によって唱えられていたが、昭和十七年(一九四二)十二月二日、アメリカのシカゴ大学内の原子炉で、ウラニウム 235 の連鎖反応がはじめて確認されて以来、その複雑な構造を設計し、二十億ドルという巨大な予算を使い、製造計画とその関連部門に五四万人を動員し、二年半を要して生産にまで持ちこむことができ、ついに前記昭和二十年七月十六日の爆発実験の成功を獲得するに、至ったものである。

特性

原子爆弾は、その破壊効果が主として爆風、または衝撃波によるものであることは、普通(または高性能)の爆弾と同じである。しかし、本質的な相違は、単に最人級の T・N・T 爆弾の数千倍も強力なものを作ることができるという以外に、まず第一に、核爆発のエネルギーの大部分が、光と熱の形で放出される。これを一般に「熱線」と呼ぶが、この熱線は、かなりの距離においても火傷を生じたり、火災を発生させたりすることができるのである。

次に、爆発に際して、透過力の非常に強い、有害な、目に見えない「初期核放射線」と呼ぶ放射線を出すのが特徴である。

しかも、爆発のあとに残された物質が、放射能をおびており、非常に長い期間にわたって、有害な放射線を出し続ける。これを「残留核放射線」、または「残留放射能」という(S・グラストン著・原子力ハンドブック)。

放射性毒ガス

東京帝国大学の都築正男博士(大正十二年・放射線学についての研究論文で学位をとる。)は、被爆後の広島に来て調査した結果、原子爆弾の被害は、熱線・爆風・放射能のほかに、「放射性毒ガス」によるものがあることを、被爆者の症状からつきとめて、帰京後、昭和二十年十一月にこのことを書いたパンフレット三〇部を各地の知名医に配布した。

これをマッカーサー司令部が探知して、全部数を回収し、博士に対し「放射性毒ガスの文字を削除し、英文にして外国へ配布せよ」と命令した。博士が、これを拒否したため、マッカーサー司令部は昭和二十一年秋、初代 ABC 所長テスマー博士を、横須賀の CIC で都築博士と会見させ、妥協させようとはかったが実現しなかった、同年末、都築博士は東京帝国大学教授から追放され、まもなく復帰したが、その後も博士が自説をまげず、放射性毒ガスのあったことを主張したので、二十二年はじめ第二次追放令が発せられ、平和条約発効の年まで第一線に立たなかった(昭和三十九年七月二十九日付中国新聞)。

広島型と長崎型

昭和三十五年(一九六〇)十二月七日、八日の日本の各新聞は、アメリカ政府が、十二月六日に広島・長崎両市の爆撃に用いた最初の原子爆弾の写真を公開したと報じた。広島市が被爆してから実に一五年四か月ぶりのことで、この公開は、太平洋戦争勃発満十九年を記念して、アメリカ国防総省と政府原子力委員会との共同で行なわれた。

広島市攻撃に用いられた爆弾の外観は、第一図のもので、「小さい男の子」"LITTLE BOY"という暗号で、公表された。

簡単な要目は、次のとおりである。

(要目)

(イ) 広島型原子爆弾(ウラニウム爆弾)

長さ 一二〇インチ(約三メートル)

直径 二八インチ(約〇・七メートル)

重さ 九、〇〇〇ポンド(約四トン)

爆発方式 火砲型

二つの臨界量部分を火砲の場合のように発射して、ぶっつけ合わすことで、爆発が起る。従って細長くなっている。

破壊力 通常火薬 TNT 爆薬の約二万トンに相当する。

(注) TNT (Trinitrotoluence Powder)は、火薬爆弾として最高の性能を持つトリニトロルエンで作った爆薬。

(ロ) 長崎型原子爆弾(プルトニウム爆弾)

長さ 一二八インチ(約三・五二メートル)

直径 六〇インチ(約一・五メートル)

重さ 一〇、〇〇〇ポンド(約四・五トン)

爆発方式 内部へ破裂する方式

球の外側に二つの臨界部分があり、通常火薬で球を破壊して、この二部分をぶっつけ合わせて爆発させる。従って、形が肥大している。通称、「肥った男」"Fat Man"と呼ばれた。アラモゴードで実験した爆弾と同種である。(第二図)

爆源と爆央

原子爆弾は、その投下から炸裂までに四三秒間(アメリカ軍の記録)を要したが、原子爆弾が炸裂した空中の位置を「爆源」といい、爆源直下の地点を「爆央」という。爆源と爆央の決定は、理化学研究所木村一治・田島英三、及び東京帝国大学地震研究所金井清、東京帝国大学工学部真島正市、広島管区气象台菅原芳生・北勲・山根正演・中根清之・西川宗隆らの、被爆直後から九月下旬に亘る調査(第三図参照)によって行なわれた。即ち、現在の商工会議所(相生橋東詰)の北側辺り(当時・護国神社の所在地)前の電車通りの南方約一二五メートル、島外科病院(細工町十九番地)の玄関から東南方約二五メートルの地点が爆央(爆心地)とされている。しかし、一説では、写真家佐々木雄一郎その他の撮影した被爆現場の写真により、爆央付近の電柱・鉄塔の倒れた方角、屋根瓦の落下堆積状態、電車の軌道からのはずれ方、あるいは熱線による石の焦げようなどから、爆央は島外科病院の裏庭付近から「東北方」の地点とすべきではないかという見解もある。この場合、前記の調査団の決定基準となった元安橋の左右に別れた欄干の倒れ方などについて、なお研究の余地があると思われる。

爆源の高さ

爆源の高さは、原子爆弾災害調査報告集第一分冊には、「ひさしの影がその後の壁にできている場合や、煙突の梯子の踏み棒が煙突の側面の影を作った資料が得られると、放射線の仰角を知ることができるので、これと爆央距離とから爆源の、高さが分る(木村一治・田島英三調査報告)。」とし、爆央に近い場所では良い資料が得られず、また仰角が九〇度近くなると角測定における誤差が大きき影響してくるので、遠距離から得た値を用いて、爆央の上空五七七メートル(±二〇メートル)の空中で炸裂したと、調査結果が報告されている(第三図参照)。なお爆源の高さは、調査団の来広以前に、宇品の高射砲隊が、約五五〇メートルであると調査していた。

(第三図) 爆央(爆心地)の決定

(原子爆弾災害調査報告書

理化学研究所 副研究員 木村一治

助手 田島英三)

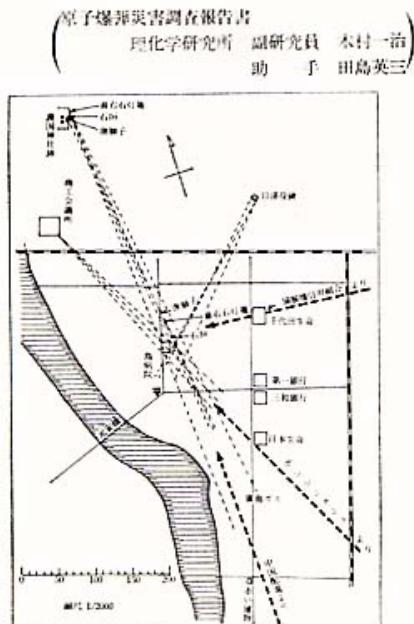
観測場所	爆央からの距離(m)	資料	影の出来ている物の材質	爆源の高さ	火球の直径
中国配電株式会社(小町)	730	屋上ドームの窓枠の影	木	560 585	-
中国配電株式会社(小町)	730	屋上にあるお宮の柱の影	木	-	-

中国配電株式会社(小町)	730	屋上にあるお宮の柱の影	木	581 571	87, 補正值 100
通信局(東白島町)	1,350	屋上の防空壕の柱	木	594 589 540	
貯金支局(千田町2丁目)	1,600	窓枠の影	テックス	-	
信用組合(猿猴橋)	1,8860	屋上の防空壕	木	599	
平均				577*	

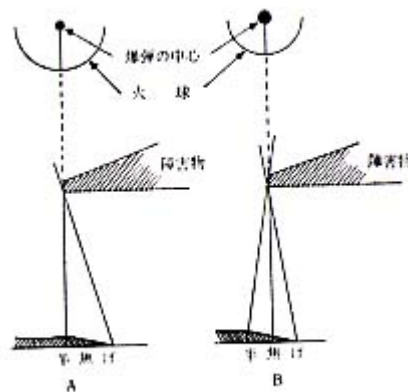
護国神社	350	石灯籠	花崗岩	550 546	70 51
護国神社	350	唐獅子	〃	517 493	
護国神社	350	石垣	〃	-	
日清役碑	230	台石	〃	525 452 630	
平均				556*	

* 高度の最終的結果としては 577m の方を採用する。

(第三圖) 爆央(爆心地)の決定



(第四圖) 火球の大きさ



(第四圖) 火球の大きさ

火球

炸裂高時に、空中に「火球」ができたが、その火球の大きさは、直径約一〇〇メートル(一説には六〇メートル)あったと考えられている。爆弾が炸裂した次の瞬間にできた火球は、相当の大きさの火球に拡がっても、なお、焦夷力を有しており、地上の物体に相当の拡がりをもつ半影の部分を生ずるから、この半影の拡がりや爆央までの距離とによって大きさが決定された(第四図参照)。

火球の温度は、炸裂直後、一万分の一秒のとき半径一七メートルで約三〇万度 C、火球が直径一〇〇メートルになったとき、九、〇〇〇度～二、〇〇〇度 C で、爆心直下では少くとも六、〇〇〇度 C の照射を受けたものと推量されている(原子爆弾災害調査報告集第一分冊、その他資料)。

閃光

爆弾炸裂による閃光は、殺人光線ともいふべきもので、「新修広島市史」に「市内にいた者は黄赤色と感じ、比較的遠い場所にいた者は、マグネシウム様の青白色を感じた」と記述しているが、被爆者の体験記や談話によってもおおむねそのとおりである。この閃光の照射時間は一・四秒であったといわれる。

炸裂によってできた火球を中心にして、円形にひろがった火炎の前面は、白色ないし赤白色の光幕を張ったように、推定秒速四キロメートルという凄い速度で四方に走り、直径四キロメートルにわたり、ほとんど広島全市を笠で上から伏せた型で、あるいは赤い朝顔の花をさかさまに伏せたように覆いつつんでいた(広島管区气象台)。この

閃光の状況について、第三巻各説第二章市内主要官公庁・事業所のうち、東洋工業株式会社の項に添付した体験記「炸裂の瞬光を望見する・栗田要」、および「炸裂瞬間の目撃状況・山田稔」になまなましく報告されている。

また、日本学術振興会刊・原子爆弾災害調査報告書によれば、「爆発の瞬間に発生した強烈な熱波及び光波の作用によって、爆心直下から半径四キロメートルまでの地域内に、露出部を主とする熱傷をはなはだ多数に発生せしめた。これらの障害は熱及び光の瞬間の作用によるものであるから、半径二キロメートル以遠の地域では障害は比較的表在性であり、かつ軽度であったが、爆心直下から半径二キロメートル以内の地域内では多数の重篤な熱傷者を発生した。特に一キロメートル以内の中心地域では、その障害ははなはだ強烈であって、皮膚全層を焼きつくすばかりでなく、内部の組織及び臓器までも、かなりの程度に熱障害を与えた。従って、即死または瀕死の重熱傷を蒙り、数日のうちに死亡するに至った者がかなりの数に達した。」また、「原子爆弾熱傷といえども、爆心直下から三キロメートル以遠の地点で発生した者は、単なる紅斑または小水泡形成を見ただけで、日焦けのやや強度であるものに比すべき症状を呈するに過ぎないで一〜二週間で治癒し得るような軽い症例が多かったが、三キロメートル以内の地点では障害の程度に浅深はあるが、病理的にはいずれも第三度熱傷であって、組織焼壊死を来すものである。これらの射熱傷は原因の熱度がはなはだ、高く(中心地区では推定摂氏六、〇〇〇度以上)、一方作用する時間ははなはだ短い(1/2 秒以下)のために特別の様相を呈する。すなわち超高熱による熱傷に類する状態を示すものである。」と、調査結果を報告している。

キノコ雲

原子爆弾炸裂によるキノコ型の雲煙は、その強烈さを示す象徴的な現象であるが、その発生の成長状況について、広島管区気象台発行・広島原子爆弾被害調査報告(第五巻資料編参照)によれば、閃光に続いて、黒煙がほとんど同時に市中央部の地上より立ち昇って、高度数千メートルに及び全市を蔽ったが、一方、火の玉は消失するとともに、白い煙のような雲に化して更に高く昇った。

この状況を望見すると、白い雲を頂きにして赤黒い雲を中にし、黄色を帯びた雲を側辺にめぐらして、五色の雲塊はあたかもマツタケの生えでるように、またはカボチャの上へ上へと伸びあがっていくような形をして、左右にモクモクと白黒赤黄ともつかぬ彩雲を渦巻きつつ、入道雲状に発達していった。

爆風と爆圧・熱線の複合威力

一方、閃光の走るに続いて、煙が波状に拡がると見るまもなく、疎密波をなして爆風が襲いかかり、ドーンと瞬間的に次から次へと破壊力をたくましくしていった。炸裂瞬間の衝撃波(爆風)の速度は、一秒間に四、四キロメートル(推定)に達した。また、衝撃波と熱線の破壊力・焼夷力は高性能のT・N・T爆弾二万トンの威力に相当する約二〇兆カロリー(推定)というエネルギーを発揮したといわれる。この強烈な爆風により一瞬吹き飛ばされ、失神する者、負傷する者、圧死する者などが無数に出現し、全市が収拾つかぬ大混乱に陥った。

前記の原子爆弾災害調査報告書には、「原子爆弾の爆発に際して発生する機械的威力、すなわち爆風はその威力がはなはだ強烈であって、まったく想像を絶するものがある。本委員会(文部省学術研究会議原子爆弾災害調査研究特別委員会)土木建築科会の調査によると、爆心直下における圧力の強度は、広島では一平方メートルあたり四・五〜六・七トン、長崎では一平方メートルあたり六・七トン〜一〇トン程度であり、その継続時間は両地共に約〇・四秒であると推定されている。

広島では、爆心直下を中心とし、だいたい半径二キロメートルまでの地域内では、木造家屋はまったく崩壊し、かつ全く焼失した。堅牢なコンクリート建物はだいたいにおいて崩壊はしなかったが、窓は全部吹き飛ばされ、内部はことごとく焼失した。家屋の焼失は、家屋の崩壊のために二次的に起ったとの観察もあるが、土木建築科会の調査の結果から、爆心直下から六三〇メートルへの地点へは摂氏約二、〇〇〇度の熱が到達したと推定せられるので、半径一・八キロメートルの円周圏内では輻射熱の直射によって、一次的に火災発生の可能であることが十分に想像し得られると思う。

広島では更に二キロメートルないし四キロメートルの圏内は、木造家屋はその距離に応じて、全壊または半壊したが火災は起らなかった。窓ガラスの破損は遠く一六キロメートル以上の地点まで及んでおり、樹木への影響は二〇キロメートル程度、爆風を感じたのは六〇キロメートル辺りまで及んでいる。」そして「家屋の崩壊その他によつての圧死あるいは圧迫による内臓または骨の重篤損傷を初めとし、家屋家具の破壊飛散などによつては夥しい色々の種類の機械的損傷を発生した。また、ガラスの破片飛散による負傷は、はなはだ多数に、かつ遠くの地点に至るまで発生した。」とある。ただし、後日の調査で半径二・七キロメートル離れた地点(尾長町の端川寺など)でも、

自然着火により全焼した例がある。

火災

閃光に続く激烈な爆風が通過したあと、しばらくして思い煙のすじが幾本も、倒壊した市中から立ち昇り、火災となった。火災の発生は、鉄道の枕木・橋げた・板塀・屋根などに見られる炸裂の熱閃光による自然着火と、炊飯などの残火による副次的な原因による発火とであった。

自然着火は、市域の相当広範囲にわたって火点が撒布されているが、副次的な発火をも含めて、全市一瞬に火災となったわけではなかった。

火災は、午前九時ごろから拡大し、午前十時から午後二時ごろのあいだが、もっとも盛んであった。狂い立った火勢はすべてを焼きつくして、当日夕方にはさすがに衰えたが、場所によっては、なお二、三日間も燃え続けた。六日は一日中、広島市は火災の煙で包まれていた。

火災嵐

S・グラストン著「核兵器の効果」によれば、爆弾炸裂後、約二〇分たったとき、「火災嵐」という現象が発生したという。

火災嵐とは、炎上している市街部に対して、すべての方向から猛烈な風が吹きつけることをいうが、爆発の二、三時間後には、最高時速三〇ないし四〇マイルに達し、六時間後には軽風ないし中程度のものとなり、風向きが変わったといわれる。

この現象は、川の上や広場に「龍巻」を起した原因と考えられると共に、この逆風によって損壊物を爆心方向に向って動かさせたという説もある。

驟雨(黒い雨)

被爆当日は、終日、巨大な塔状の積乱雲が発達した。その黒雲は、爆発後二〇分ないし三〇分から、つぎつぎと北北西方へ移動していき、午前九時から午後四時ごろの間にわたって「驟雨現象」を起した。

驟雨(にわか雨)は、市中心部では軽く、西部(己斐・高須方面)と北部(可部方面)では土砂降りの豪雨となった。豪雨区域では、一時間ないし三時間くらいのあいだに五〇ないし一〇〇ミリメートルの降雨量があったと推定されているが、このため己斐・山手方面の山火事がすっかり消された。

雨は当初、まっ黒い泥分の多い、ねばっこく雹のような大粒の雨で、被爆者の裸身には痛いほどに粗いものであった。一時間ないし二時間ほど「黒い雨」の降ったあとは、続いて白い普通の雨が降った。

黒い雨に含まれた成分は、爆弾の炸裂したさいに黒煙として昇った泥塵と、火災による煤塵を主体にしたもので、これに放射性物質体など、爆弾に起源して空中に浮遊し、あるいは一たん地に落ちた物質塵を複合したものであるといわれる。

降雨の最中は、盛夏の暑い日であったにもかかわらず、気温が急降下し、裸か薄着で身をもって脱出した人々が、寒くてブルブル震えるほどであった。

文部省派遣調査団の物理学化学地学科会藤原咲平委員(物理班)の調査報告によれば、黒い雨の成分を調べてみると、爆心地付近の土を多量に含んでおり、いちじるしい放射性物質が認められ、爆発後、五〇日以上も経って検査されたときに、それが五〇ノルマルの程度であり、かえって、爆心地における同時期のものよりも数倍強かったそうである。この物理的現象について、藤原委員は「その意味はわれわれにはまだわかりませんが、雨が降るといふようなことについて、その基礎物理に、やはり原子核の問題が関与するのではないか、というような考えに誘われがちであります。長崎では火事による雨はほとんど弱く、原子爆弾爆発の直接作用によるもののように考えられます。しかし、この少量の雨の区域内で放射能が強く後まで残留していたことは広島と同様であります、云々」とも言っている(原子爆弾災害調査報告集第一分冊)。なお、この黒い雨を浴びた人で原爆症状に罹った事例がかなりある。

広島管区気象台の「広島原子爆弾被害調査報告」では、雨水中の泥分(高須にて採取)は理化学研究所調査班の検査結果として、前記藤原咲平委員の調査報告と同様に、強大な放射能の含有について説明し、その影響による現象を報告している。

「すなわち、池の鯉や川のナマズ・ウナギなどの魚族が、黒雨水の流入によって斃死浮上した。エビ・カニは生き残った。

また、牛が泥雨のかかった草を喰べて下痢し、人間でも己斐・高須方面の人は、爆発後約三か月にわたって下痢

する者が頗る多数にのぼった。これは水道破壊のため井戸水(地下水)を飲用したことが関与するものと推察せられる。」とある。

さらに、稲田の螟虫(ズイムシ)がいなくなり、焼損されなかった稲には特別な肥効の与えられたように異常な生育をなし、豊作を楽しまれたが、九月と十月の台風水害により、豊作の希望は水の泡となった。

雷鳴

降雨中の午前十時から十一時ごろ、ないしその後に数回爆発音か砲声に似た特異な雷鳴があった。その音は、爆心から一〇キロメートル以上離れた地点においても聴かれたというが、山県郡殿賀村・安野村のような爆心から二〇キロメートル以上も隔たった地点においても、雷の鳴った記録がある(広島管区気象台の報告)。

岩石類その他の変容

人体のみならず花崗岩その他の岩石類、および屋根瓦などの窯業製品にも多大の影響を与えた。東京帝国大学理学部(渡辺武男・山崎正男)・広島文理科大学(小島丈児・長岡省吾)および地質調査所(平田健)などが、昭和二十年十月上旬から被爆災害地域を系統的に巡回し、その地区の岩石や窯業製品の被災状況を観察した記録(原子爆弾災害調査報告総括編)によれば、まず花崗岩表面の剥離現象から、爆央の決定を行ない、また、表面剥離を起している限界線を調査した結果、爆央を中心にした半径一、〇〇〇メートルの円が、この限界となった。すなわち、この線上においては、僅かな剥離がカスリ状に起っていた。

さらに岩石表面の熔融状態を、岩石学的に観察した結果、花崗岩中の角閃石・黒雲母などが熔融して、黒色ガラスを形成していた、次に窯業製品として、屋根瓦の表面について観察したところ、爆央から半径六〇〇メートルの円内では、表面が熔融して、泡立ちを示していた。

交通機関・橋梁などの被害

強烈な瞬間的爆風によって、汽車・電車、その他牛馬車に至るまで、次表のような損害を受けた。

(昭和二十年八月二十日・県警察部発表)

区 分	罹災前 実動車 数	被害車数		罹災直後の 実動可能車数	摘 要
		焼失 (又ハ全 壊)	破損 (又ハ半 壊)		
汽車		27	63		
電車	123	24	35	64	
乗合自動車	52	10	21	16	5台修理中
普通貨物自動車	166	182	2	41	
小型貨物自動車	25	19	3	3	
荷牛馬車	394	212	56	126	
自動車ポンプ	56	33	11		

また、橋梁の被害は、本誌編集にあたって調査したところでは、主要橋四九橋のうち、被爆直後に存在していた橋は四一橋である。橋梁の被害は主としてランカンの破壊・転落、あるいは親柱の陥落、点灯装置の裝飾部の移動などである、相生橋は爆圧が川の水面で反射して、歩道部分の床板(鉄筋コンクリート造・厚さ一五種・幅員二・五米・延長二五米)が、爆心と反対側の北へ七〇~九〇センチメートル移動し、車道部分との間に大きな口が開いた。護岸などの被害

相生橋を中心にして太田川(本川)、および元安川に沿い、約一〇〇メートルのあいだに、六か所の岸で石垣護岸が崩壊した。いずれも間知石積で、旧相生橋台その他基礎の裏込み、または施工に不良箇所があったと認められる部分であったと、言われる。

この種の護岸の被害は、爆央付近に限られている現象であって、市内の他の地域には見られなかった。なお、かなり遠くの佐伯郡五日市町付近の山腹が、爆風圧によってかなり大きく地すべりの現象を起し、その傷あとが長く見られたという住民からの報告がある。

水道施設の被害

広島市の水源は、爆心地から北方へ約五キロメートル離れていて、比較的被害軽微であったが、送電線約二キロメートル区間が断絶し、碍子そのほか電話ポンプ台・配電設備に被害があった。牛田浄水場(爆心地から約二・五キロメートル)は、送水ポンプ室内・内燃機関室などの煉瓦建ては、その鉄骨屋根・扉枠など爆破され、木造建物

は、ほとんど全壊にひとしい被害であった。

この水道施設については、第二編各説第二章の主要官公庁(広島市役所)の項に記述する。

植物の変異

放射能の障害は、人間のみならず植物にも影響をあたえた。秋ふけるころ焼野原に生えた雑草は鉄道草(ヒメムカシヨモギ)がもっとも勢いよく成長し、青々と風になびく風景は、まさに海原のように眺められたが、そのほかの雑草も、それなりに生い茂ったのである。

これらの雑草のなかには、放射能の影響を受けて、形の変った珍しいものが発生して話題をまいた。広島文理科大学の藤田哲夫教授は、この変容にいち早く気づき、実地に研究したところ、花ベンヤガクの数の変ったものには、ハコベ・ミミナグサなどがあり、株全体が小さくなったりしていた。また、葉に白い模様ができたものには、ヒメヨモギ草・ナズナなどがあつた。また、同大学堀川芳雄教授が国泰寺(爆心地から約六〇〇メートル)の横で発見したクサギは、緑の葉にまじって一枚だけ葉に白い波紋をつくっていた。

これらの具体的調査については、原子爆弾災害調査報告集第一分冊の生物学編に、多くの変容事例が発表されているが、放射能線の影響をあまり受けなかったものとして、ゲンゴロウ・ミミズなどの水棲・地棲の高等動物があり、同様に植物は、爆心地から一キロメートル範囲の焼失枯死した樹木でも、地下部は残存していて、再び発芽するものも見られた。また、溜池や池沼のなかの植物にもほとんど被害が認められなかった、という。

放射能障害

原子爆弾の特徴は、放射能威力による障害であるが、このことについては、被爆直後に入市した多数の調査団によって、恐るべき事例が幾つも発表されている。

原子爆弾の炸裂と同時に、あらゆる種類の放射能線が発散したようであるが、このうちレントゲン線・ガンマ線、および中性子の三つが主として人体に障害を与えた。

爆心地から半径一キロメートル以内の地域では、想像を絶する多量の放射能が到達し、戸外にいた人々はすべて放射能障害を受けた。しかし、コンクリート建物の地下室などの十分に遮蔽された場所にいた人は、比較的障害の程度が軽かったようである。

障害の状態

放射能威力の作用は、だいたい半径四キロメートルまでの地域に及んでいるが、人体ではまず「血液」がその障害を受け、ついで造血臓としての「骨髄・脾臓・リンパ腺」などである。なかでもリンパ球はもっとも感受性が強く、ただちに破壊されてしまう。続いて、肺臓・胃腸管・肝臓・腎臓などの「内臓」が侵されて機能障害を起す。

このような障害を高度に受けた多くの人は数日のうちに死亡し、一部の人は二週間までのあいだに死亡する。中度の障害を受けた人は、大多数の者が二週間から六週間くらいの中に、重篤な症状を発生して多く死亡するが、軽度の障害であった人は、死亡は免れても数か月にわたって種々の故障が起りやすい。

各調査団の総合的な結論によると、だいたい爆心地から一キロメートル以内の地域にいた者は高度の障害を受け、一〜二キロメートルの地域内にいた人は中度の障害を受けており、二〜四キロメートルの地域内の人は、軽度の障害を受けたという。

高度の障害

高度の障害を受けた人は、多くは数日のうちに死亡したが、原子爆弾の炸裂時に、戸外にいて被爆した人は、放射能障害と熱波、および光波の障害を同時に受けた。そのうえ、強烈な爆風・爆圧の作用を蒙った人が多く、非常に重篤な症状を呈し、高熱を発すると共に、極度の全身不快、脱力感を訴え、嘔吐・吐血・咯血・下血・血尿などの症状を示したのである。

これらの症状は、全身の血液、諸内臓の高度の障害に基づくものといわれ、出血症状は、肺胞の障害、胃腸粘膜の障害、および腎臓細尿管の障害に起因するものとされている。意識障害、または興奮状態に陥る者もあるが、多くは最後まで意識明瞭で、全身衰弱の徴候をあらわして死亡する。

爆心地から五〇〇メートルまでの地域内にいた人々のうち、建物内にいた人で、幸いにも圧死・焼死をまぬがれ、重傷も蒙らなかつた人々も、相当高度の放射能障害を受けたものと考えられるが、これらの人々は数日ないし一〇日くらいの中に、ひどい吐血・下血、あるいは歯ぐきの出血、粘液血液をまぜた下痢などの出血症状を現わして死亡する者が、たいへん多かつた。

これらの人々は、いずれも摂氏三八度ないし四〇度くらいの高熱を続けたため、その当時、赤痢が流行しはじめ

たのではないかと考えられて、外郭だけ残った福屋百貨店の一室を伝染病棟に指定するなど、急ぎ防疫態勢がとられるということもあった。しかし、一部の地区には、真性の赤痢、またはチフス性疾患が流行していたことも事実である。

爆心地から五〇〇メートルないし一キロメートル内外の地域内にいた人々で、木造家屋（多くは二階）内、または戸外の物陰におり、負傷もせず、重い熱傷も受けなかった人々は、その多くが、二週間くらい経ってから、頭髮が脱げはじめ、発熱し、引続き出血性ないしエソ性の歯齦炎[しぎんえん]、あるいはヘントウセン炎を発生し、ついで顔面・胴体・手足などの皮膚に、散発的な赤紫色の溢血斑点を現わした。また、ある人は粘液性の血のまじった下痢をした。この下痢便は、膿性を混在していないことが特徴と言われる。なかには鼻血を訴える者もあった。これらの出血症状を示した人々は、多くは、被爆当日かその後二、三日のあいだに嘔吐を催し、発病前の一〜二週間は、食欲がほとんど無くなった。そして、発病と同時に摂氏三九度前後の高熱を続け、時には摂氏四一度近い高熱を現わした人もあった。また、中には発熱に際して、悪感または戦慄を訴える者も少数ながらあった。

このようだ負傷者の症状は、ほぼ同様であって、発病者の大多数は、一週間前後の経過で高熱を続けつつ死亡する。一週間くらいの後に下降しはじめた多くの場合は、予後は良好で、すべての症状が好転した。

中度の障害

爆心地から半径一キロメートルないし二キロメートル以内にいた人々は、中度の障害を受けたが、戸外にいた人は、熱傷とともに比較的強い障害を蒙った。しかし、屋内や物陰にいて、重い外傷や熱傷を受けなかった人でも、軽い放射能障害を受けた。これらのうち約半数の人が、被爆後、二週間〜六週間くらいのあいだに、脱毛・発熱・出血などの症状を示し、ついに死亡した。

これらの人々は、被爆直後、嘔吐を来し、数日にわたって食欲不振や食欲皆無に陥った人が多かった。いったんこれらの胃腸症状が消散したあと、ある期間を経て、脱毛・出血などを発来した人が多かった。このような重い容体に陥ったのは、過労・感冒・胃腸障害などが原因したと言われる。

このことは、多くの被爆体験記にも語られているが、被爆後ただちに、新鮮な空気の郊外へ避難して、体力を消耗しないよう安静を保ち、新鮮なものを食べて療養に努めたため、危機を脱したという例が多い。反面、被爆後も焼跡を去らず救助作業にあたり、肉親や縁故者を探しまわるとかの無理な行動をとったため、さらに障害を進めて容体の悪化を招いた人もたくさんある。

このような人々が発病して、脱毛、および出血症状を呈するようになると、それまでほとんど治癒しかかっていた軽い搔過傷・挫創、あるいは熱傷創が悪化の傾向をたどり、普通の療法ではなかなか治癒しないような危険な症状に陥り、多くの場合、予後不良で死亡したと言われる。なお、外傷がまったくなく無傷と思われた人が、放射能による内部障害で、あつてなく死亡した例も多い。

原子爆弾症と名づける

原子爆弾災害調査報告書(総括編)では、「第一章原子爆弾爆発の人体に及ぼす障害作用」において、各種の障害を説明したあと、いわゆる「原子爆弾症」について、次のように考察している。

「…放射能威力によって起る障害状況は、これを一括して『原子爆弾放射能傷』又は『原子爆弾放射能症』と称するのを適当と考える。この放射能障害状況を分析して考える時に、単に『原子爆弾症』と称し、原子爆弾の爆発によって発生する熱傷などと対峙せしめるのは妥当でないと思う。又、被爆後四〜五週を経て、血液中の顆粒細胞が減少した時期のみの血液検査所見だけから考察して、原子爆弾の災害時に起る血液の変化は『無顆粒細胞症』の病変であると唱えた研究者があり、更にかかる症状を有する症状を以て『純原子爆弾症』と言うべきだとさえ唱えたものがあつたようであるが、かかる考え方は、ことの全般を見とおしてから組立てられたものでないことは言うまでもない。」とあり、また、「原子爆弾の爆発に際して発生する災害威力は、これを分析的に考察すると、(一)熱及び光の威力(二)機械的威力(三)放射能の威力の三種となり、それぞれが各々特殊の障害作用を惹起し得るものであるが、実際問題としては、爆発と同時にすべての威力が同時に作用して、はなはだ複雑な障害作用を現わすものである。従つてこれらを全体として観察するときは『原子爆弾傷』あるいは『原子爆弾症』と称するのが適当である。当初は多くの人々が『原子爆弾傷』という名称を使用したのが、後になって『原子爆弾症』という名称を使用する人々が多かつた。この両者は、しいていづれか一つにまとめる必要はない。各人の好むに従つて使用してよいと思う。云々」と記述されている。後にこれを略して「原爆症」と呼ぶようになった。

原子爆弾症の経過

原子爆弾症の症状の経過について、医学的な立場からの観察では、都築正男博士の研究によると、次の四期に分つことができる。

第一期(早期)－被爆直後から第二週の終わりまで。(八月六日～十九日)

原子爆弾の強烈な諸種威力の障害作用によって、この第一期のあいだに死ぬる者は、その十分の九までが死亡した。即死者またはこれに準ずる死亡者の状況は高度の全身熱傷・全身爆傷・建物崩壊による圧死・重篤圧迫損傷のまま、火災による焼死などが主な原因であった。

第二期(中期)－第三週の初めから第八週の終わりまで。(八月二十日～十月上旬)

第二期の前半期まで、生き永らえ得た熱傷者は、中度的ないし軽度障害者である。医療機関ならびに治療資材の不足から、全身の衰弱を招来して、不良な予後へと陥った者が多かった。しかし、二キロメートル以上の地点にいた者は、ごく表層だけの射熱傷を受けたに過ぎない者が多かったので、大部分は前半期に治癒した。

後半期に入ってから、放射能傷の継続発症の出る者がかなり多かった。しかし、後半期の終りに近づくと、重篤な容体を示していた者も、その大部分は回復の徴を示すようになり、原子爆弾傷の破壊的な病変は、第二期の終ると共に進行を止めた。

第三期(晩期)－二月目の初めから四月目の終わりまで。(十月上旬～十二月上旬)

この時期には、すべての障害が、いずれも回復の経過をたどっていった。外傷にしても、熱傷にしても、それまで治癒が遅延していたものも、放射能威力による血液ならびに内臓諸臓器の機能障害が回復すると共に、いちじるしく治癒傾向を増し、第三期の終りまでには、だいたい治癒した。

脱毛症状は、第二期の後半期ごろより多くは停止し、第三期に入ると共に、細疎毛の新生を認める者が多くなった。脱毛の程度が軽かった者は、第三期の終りまでに大半発毛をみたが、高度の脱毛を来した者は、第三期の終りごろになって、ようやく発毛が始まった。しかし、一部には、第三期に入ってから、更に障害の程度が増進した者もあったし、男女生殖器に、顕著な障害(精子数減少・不妊など)があらわれた。

第四期(後期)－(十二月上旬以後)

五月目以後被爆による人体への主な影響は、ほぼ過ぎ去って、各種障害もだいたい回復したようであるが、後遺症が残った。熱傷および外傷治癒後の遺症としては、瘢痕拘縮・末梢神経損傷後遺症・血管脈瘤・瘢痕蟹足腫などが主なものである。

事例

次に掲載する佐伯敏子(主婦)の体験記「一族一三人の死」は、被爆負傷した肉親が、苦悶して次々に死んでいく経過を、看護する立場から刻明に記述したものである。しかも、原爆症にともなって発生する人間的・社会的諸問題が、縷々と述べられてあり、原子爆弾の戦慄をありありとかがうことができる。

一族一三人の死

佐伯敏子

昭和二十年四月頃、長男を田舎の姉のもと(安佐郡伴村字大塚)に預かってもらい、広島に勤めを持つ私は、土曜・日曜をかけて会いに行った。

八月五日(土曜)も子供の顔見たさに出かけて行き、夕方、山越えをして帰るつもりでいたのに、いつもはおとなしく私を見送ってくれていた長男が、その日に限って、僕も広島に帰ると言って駄々をこねた、それを見ていた姉夫婦は、「こんなに泣く子を、置いたまま帰られたのでは、あとで困るから、今日は泊って、明日の朝早くバスに乗ったら…」と、すすめるので、その夜は子供を抱いて床についた。あけて六日、一番のバスに乗ろうと仕度をし、子供には次に会いに来るまで、おとなしく待っているようにさと納得させ、姉に別れを告げようとしたが、そんなに急いで帰らなくても、少し手伝って行ってくれと頼まれ、子供の機嫌のよいうちにと、内心いらだちを覚えながらも、世話をしてもらっている手前もあって、断るわけにもいかず、農具の片づけやなにかと、姉のさしずどおりに動いているうちに、もうバスは通りすぎてしまった。人の気も知らぬげに、姉は縁側に腰をおろして、次から次と色々の事を話しかける。少しでも母のそばにと、まつわる子供とはしゃぎながら、私も姉の言葉に合づちを打っている間に、時計は八時を過ぎようとしていた。ところが、急に空襲警報のサイレンが鳴りだした。さあ、私は気が気ではなく、広島にいる母や兄姉の事が案じられて、じっとしていられなかった。

田舎の人はのんびりしたもので、警報が鳴ってもまだ田の草取りを、ゆうゆうと続けている人もあり、姉もそん

なものど吹く風とばかり落ちついたものである。山一つ越えただけでも、こんなにも広島をあわただしさと違うものかと驚かされた。しばらくして空襲警報解除となり、ヤレヤレと胸をなでおろしたやさき、山の上空を飛行機が一機飛び去ったかと思う束の間、すぐまた引返してどこかに消え去ってしまった。敵か味方か判らないまま、空を見上げていた瞬間、異様な光が空をこがし、全身熱気に触れたように熱く感じた。それから間もなく、大音響がして、家の建具が吹きとぶしまつ。あわてふためく姉は、すぐ倉の中に逃げようとすすめ、自分の子の手をひいてサッサと入ってしまった。私はただ呆然と空を眺め、モクモクと立ち昇る、かつてみた事もない無気味な煙を見つめ、右往左往しているのであろう広島肉親を思い、大声で泣きだした。物音も消え、静かになった庭に出て来た姉は、広島方面がただ事でないことを悟ったのか、「母さん、母さん。」と、広島に住む母を呼んで涙を流した。この光景に、子供たちもしゃくりあげて、しがみついて来る。そのうち、曇ってきた空からは、黒い黒い大粒の雨が降り、私は敵機から石油でも撒いたのでは、と思い、両手の中に雨をためて臭いをかいだり、なめてもみたが、そのような気配は無かった。雨と共に何枚かのピラが舞い下り、拾って活字を確かめようとしたが、焼け焦げて読みとることはできなかった。

「広島がやられた。」と、直感した私は、オロオロとする姉に頼んで、おにぎりを作ってもらい、中に梅干も入れてくれた姉の手から、それを受取り、水筒に一ぱい水も入れて、救急袋と共に肩にかけ、広島へ急ぐことにした。気づかう姉は、「何はともあれ、一刻も早く母や妹を連れて来るように…」と、せきたてる。走るようにして、バス通りに出て見て、私は立ちすくんでしまった。あの異様な光と大音響、そして大粒の黒い雨と矢つぎ早やに起った情景から、二時間もたたぬ間に、道路は避難してくる人々が、長蛇の列をなして走り去っていくのである。どの顔も、どの表情も、血走った眼をして、振りむこうともしない。私は一人の男を呼びとめて、「広島の中の辺がやられましたか?」と尋ねたが、その人は、「やられました、やられました。ひどい事を…」と、言うだけで、立ち止まりもせず走って行ってしまった。三〇分も歩いたかと思うころ、全裸の男に出合う。その男は、焼けたトタン板を頭にかざし、私の方に向かって進んで来る。恐る恐る見る顔は、血で汚れ、体も手足も黒ずんで、この世の人の姿とも思われぬほど変り果て、まともに見ることもはばかられ、私は道の片側に身をよせて、その人の通りすぎるのを待った。後ろ姿を見送るうち、「あの、ちょっと…」と、思わず知らず私は声をかけていた。目をギラギラ光らせ、ふしぎそうな面持ちで、その男はしばらく私の顔を見つめていたが、「敏子ではないか…」と言いながら、オイオイ声をあげて泣きだした。声を聞いて初めて私は次兄だということを知った。恐ろしい姿と知りながら、声をかけずにはいられなかった血のつながりのふしぎさを思い、流れる涙をお互いにぬぐいあった。

立ったままの兄の話では、朝食をとろうと思って洗顔していた時にやられたのだという。母は二階の物干場に上がっていたらしいという。日ごろ、体の弱い妹は、医者のもとにでかけ、家の裏に住んでいた長兄一家五人は、炎に包まれ、呼んでも応答がなく、母の姿も見当らないまま、自分だけこうして火傷をおいながらも逃げて来たのだと話す。「妹が焼跡に帰って困っているであろうからすぐ行ってやってくれ。おれはこれから家内や子供が疎開している姉の家に急ぐから…」といい、「その体では無理だから、私が連れて行ってあげよう。」と、幾ら肩をかそうとしても聞き入れず、「早う早う、広島へ…」と、おいやるようになるので、後髪をひかれる思いをしながら、次兄と別れ、私は反対の道を小走りに歩いた。

その間も、人の波は一向に減る様子はなく、山を登りつめる頃には、女子供が転がるようにしてこちらに近づき、その身には、まとう一枚の布もなく、みな裸のままであった。避難して来る人はあっても、広島へ向う者のない山道で、ある人は、「女の身で、今、広島に出てもどうにもならぬ。肉親に会えぬどころか、あなたも死に行くようなものだ。悪いことは言わぬから、すぐ引返しなさい。」と、注意してくれたが、はやる心は、その好意のままに動くことを許さず、一刻も早く広島へ広島へと足を運んだ。途中、けがをして苦しんでいる人々には、救急箱から赤チンを出してつけてあげたが、手当らしいことのできないのが残念であった。

姉の家を出てから、五時間後にやっと広島町に入ることができた。

町は一面火の海と化し、どこをどう進んでよいものか、さっぱり見当がつかない。道という道は、死体とケガ人がふさいでいて通ることもできず、やむなく、これらの人々をまたいで歩くしまつ。八月の暑気と火災の熱風のため、足の裏まで熱くなり、思いのままに進むこともできないまま、水槽の水を頭からかぶり、全身びしょ濡れにして、目ざす母のもとに急いだ。途中の町々には、生地獄さながら、死を前にしてもがき苦しむ人には、水筒の水を含ませて励まし、その中に妹によく似た女性を見つけて、名前を呼び続けたが、その娘さんは言葉もなく、かすかに首を横にふっただけで、こと切れてしまった。

母がいる広瀬町には、どうしても近寄ることができない。広島駅・宇品・比治山は、一望のもとに見渡せるほどの荒れぶりである。家に帰ることを諦めて、避難所になっていた三滝山のふもとをさして歩きはじめた。一人では歩くこともできず困っている人を見ては、そのまま見すごしもならず、肩にすがらせて、横川の橋を渡り、鉄橋を越えて線路のわきにその人と坐りこんで、三時間ぶっとおして、焼野ヶ原を歩いた足を休めていると、ふと、後で私の肩をたたく人がある。驚いて見上げれば、見知らぬ男がたっている。「おねえさん、広島は大変なことになったね。でも助かったからには、元気を出してがんばってください。これでも飲んで下さい。」と、差出された水筒。そういえば私が姉の家から持ってきた一ぱい水が入っていた水筒は、何人かの人たちに飲ませて、もうカラになっていた。夢中で歩いた時は、自分の咽喉の渇きなど感じもしなかったのに、こうして他人から優しく労われてみれば、一度に水が欲しくなり、早速、好意に甘えて一口飲んで驚いた。戦争が始ってから、ついぞ口にしたことのなかったサイダーなのである。ある所にはやはりあったのだ。その人は、関西訛りのある三二、三歳の立派な風格の紳士で、鞆の中からビスケットを取出し、自分はこれから海田の方まで歩いたら、次の汽車に乗れるかもしれないからと言って、そのサイダーを全部私の水筒に入れかえてくれ、「がんばるんだよ。」と、励まして立ち去って行った。連れの人にも分けて、その人を避難所に落ちつかせ、肉親の顔の一人でもと探し求めて歩いたが、どの避難所にもその姿は見当らなかつた。時がたつにつれて、母は到底生きてはいまいと思うようになった。妹よ、生きていてくれ、長兄の家族よいざこと、跡かたもないわが家を目前に、夕方近くまで立っていたが、誰も帰っては来ず、重い足を引きずって、祇園町の姉のもとに行こうと、歩きかけたとたん、「おねえさん。おねえさん。」と、呼びとめる声がする。ふり向くと、走ってくるその人は、近所に住んでいた朝鮮人で、話によれば、朝早く廿日市に仕事に行き、広島のことを知って急いで帰って見たが、家族の安否がつかめず困っているとのこと、あなたの行く方に連れて行ってくれと泣くので、鞆からおにぎりを二つ出して与え、共に道を急いだ。祇園町の姉の家には、家族の姿は見えず、そのかわり兄の隣組の人が一五、六人も横になり、皆はそれぞれ怪我をしてうめき続けている。奥に入ってみると、兄の嫁はかいがいしく食事の仕度をしていた。傍によってお互いに手を取りあって涙を流し、無事を喜びあった。しかし、間もなく、「どうしよう敏子さん。うちの人が死にそうなのよ。早く行ってみてあげて……。」という言葉に驚き、部屋に上がって見ると、昨日まで元気であった長兄の姿とは思えない変りはてたそのむごさ。頭骸骨が、そのままあらわれ、流れ出る血は頬を汚し、苦しきのあまり、のたうちまわっている。「兄さん。兄さん。」と呼ばば、ようやく判ったのか、「敏子か、よく来てくれた。待っていたよ。こんな姿になって、おれはどうすることもできない。ここまで逃げてくるのがやっとだった。近所の人を助け出し、家内や子供を連れてここまで来たが、もう命がもてそうもない。子供をみてやってくれ。頼む。」と、苦しい息の下で、とぎれとぎれに言う兄。ふと横を見れば、裸の男の子が全身焼けただれ、目は飛び出し、指は全部ふくれあがり、声さえ出さず元気はなく、「ウ・ウ・ウ…」と、小声でうめき苦しんでいる。六歳の女の子は、胸の骨が二本も突き出て動くこともできず、唸るのもやっとの有様。兄は、自分の痛さよりも、二人のわが子のことを案じて、「敏子、お願いだ。早く医者の方に連れて行ってやってくれ。」と、私に頼むのだが、今まで広島を歩いてみて、その怪我人の多いことを目のあたりにして、医師の手の施しようのない事も、充分知りつくしているだけに、すぐ連れて出ることではできなかった。持っていた風呂敷を裂き、兄や姪の深い傷のまわりに、残り少ない赤チンをつけてやり、ほんの気休めの手当をした。「兄さん、私はこれから田舎に急いで連絡し、すぐ荷車を持ってみんなを迎えに来ますから、それまで我慢して待っていて下さい。」と、言えば、「頼む。待っている。せめて長男だけでも連れて行ってやってくれんか。あの子は、幸いにも傷を負ってないから。今度、ここでまたやられでもしたら、折角、助かった長男がかわいそうだ。」と言う。傍で聞いていた近所の人々は、「私たちを助けるために、あなたの兄さんはこんなひどいことになってしまって、本当に申しわけない。」と、皆一様に私に謝るのである。兄は、隣組の組長をしていたので、その責任上、炎の中に入って皆を助け出したらしい。五歳の甥をおんぶして、私は田舎の姉の家へ急いだ。

途中、兄の近所の人に出会い、祇園町の姉夫婦が妹を連れて、緑井という村の竹やぶの中に避難していると聞かされ、私は飛び立つ思いで避難先へ行って見た。みんな元気である様子を見て、今まで張りつめていた気持も一時に崩れ、ただ手を取りあってむせび泣いた。母が死んだらしいということは、妹には話さず、次兄が全身火傷して田舎に帰っている事を聞かせ、それとなく母のことをさとらせようとした。妹は右肩のところを一センチほど斬っていたが、これまで大きな傷の人たちばかりを見てきた私には、ほんのかすり傷ぐらいにしか映らなかった。こうして話している間も、長兄一家の事は念頭から片時も離れず、姉たちが止めるのも聞かず連絡に走ろうとしたが、妹も一緒に行くと言って、止めても聞こうとしない。足をけがしていた妹は、八丁堀の医師のもとで診てもらった

め、服を脱いだところで被爆し、先生に手を取られて猿猴橋まで逃げたが、炎に包まれて川に飛びこび、気がついた時は、先生の姿は見失って砂の上に坐っていたという。姉のすすめもあり、リヤカーを借りて妹と甥を乗せて、田舎へ向うことにし、その場を離れたが、竹やぶももう見えなくなったころ、急に車輪がはずれ、進むことができなくなった。妹は、甥だけ残して自分だけ連れていってくれと言ひ、「広島火はもう見たくない。あの火を見ていると気が狂いそうだ。」と、駄々をこねて私をいらだたせる。仕方なく、今来た道を引返して甥は姉に預け、今度はリヤカー無しで妹を支えながら歩いたが、傷ついた足は予想外に痛むらしく、なかなか進むことができず、何度も休んでは足をさすってやり、水を与えたりで、難行苦行の道程であった。

広島空を望めば、牛田の山は炎で真赤になり、その火は夜空をこがし、一向に衰えようとしな。普通四〇分ほどの道程も、傷ついた妹をつれているために、三時間近くもかかって、やっと安の国民学校の近くまで辿りつくことができた。水筒の水も飲みつくし、妹は、たった一つでいいから、梅干が食べたいと言ひだした。朝、作ってもらったおにぎりも、一つ残らず人にあげてしまっていたので、私の鞆の中には、食べるものは何一つ入っていなかった。

私は、一軒の農家の戸をたたき、事情を話して、出て来たその家の主婦に、たった一つでいいから、妹のために梅干をあててほしいと頼んだが、けんもほろろのその婦人は、「家には梅干など一つもありません。すぐ出ていってください。戸を閉めますよ。」と、追いたてるようにして、中に入ってしまった。泣くにも泣けない気持ちを抱いて、私は妹を慰め励まし、苦しがるのを我慢させて、安の国民学校の受付を訪れ、今夜中に田舎の家に行く事は困難と知ったので、一夜の宿を依頼してみた。親切な当直の先生は、快く迎えてくださって、梅干もどこからかすぐ持って来て、妹にあたえられたときの嬉しさ。地獄で仏とはまさにこのことであろう。静まりかえった教室からは、行くあてもない避難者たちなのであろう。苦しうにうめく声が聞えて、私は横になる気にもなれない。妹は、早く姉さんのところに連れていってと、傷の痛みを訴えながら、しきりに私をせきたてる。見かねた先生が、「連絡先がわかっていたら、すぐ知らせる。」と言われ、姉の住所を言っお願いした。

翌朝五時過ぎ、私の名を呼ぶ声がある。義兄と、昨日火傷した次兄と二人で、荷車をひいて迎えに来てくれたのであった。昨夜、連絡のあったのが十二時過ぎ、てっきり私が広島で怪我をして運ばれたものと思ひこみ、すぐその足で、夜通し歩いて来たのだという。昨日は、私の子が、「母ちゃん、母ちゃん。」と言っむずかり、姉を困らせ、敏子を広島にやるのではなかったと、後悔していたという。妹を車に乗せ、次兄も気を張っているというものの、被爆の身で弱っているの、時々乗ってもらい、八時過ぎに家に着き、妹を寝かせてから、姉夫婦に広島の惨状をかいつままで話し、長兄一家の目もあてられぬ様子を話して聞かせた。「頼むから迎えに行っやってくれないか。私もすぐ一緒に行くから…」と、頼んでみたが、姉夫婦は顔を見合せて、「困ったことになった。」と言ひのみで、長兄を救っやろうとは言っくれなかった。私は、これ以上迷惑をかけては済まぬと思ひ、祇園町の姉に相談するよりほかはなく、主人の着物と子供たちの着がえを風呂敷に包んで、疲れきった体を休める間もなく、出かける事にして、姉に弁当の用意だけ頼んでみた。さすがに姉はかわいそうに思っのか、着がえは主人に持たせると言ひ、長兄たちはここに連れて来るよりも、祇園町の姉のもとに預ってもらいたいと言ひ。そのうち、姉は母の死を知り、熱を出してオイオイ泣いてばかりで、食事ものを通らなくなっている。私はどうしてよいものか迷っってしまった。

祇園町では、長兄夫婦や子供たちが、私が帰るのを待っていることであろう。主人の両親の安否もきずかわれる。意を決して九時過ぎ、再び山越えをして広島に向うことにした。妹がかわいそうであったが、あの子は姉が面倒みってくれるだろうという安心感があった。山路では八人の死体が転がっていて、山中のあちこちには避難者が住んでいた、己斐国民学校に、あれでも母が避難しているのではと思っ、立ち寄っみたが、数えきれないほどの死体が積まれてあるだけで、元気な母の姿に会うことはできなかった。

広瀬町の家は、柱だけ残っただくすぶっていた。母はここにもいなかった。電車の中は焼死の人が重なり、川には死人が浮び、道には半焼けの馬が転がり、学徒動員の若者は、作中に被爆したのか、将棋倒しになっ息絶えていた。

主人の両親が住んでいる白島町へは、なかなか行くことができず、長兄の事が案じられるので、祇園町へ行っみた。昨日、肋骨が突き出っ長女は、私が外に出て間もなく息をひきとったといい、二男は七日朝早く逝っしまっていた。涙もかれた様子の兄夫婦は、ただ呆然として居るのみで、慰める言葉もない。義兄にことづけた子供たちの衣類に手を通すこともできず、裸のままで亡くなっ二人の幼い子たち。兄だけが主人の浴衣を喜んで着

てくれていた。田舎の事情は、私が伝える先に義兄から聞いて知っていた。

「兄さん、ごめんね。あんなに約束しておきながら、田舎に連れて行ってあげられなくて…」と、詫げる私に、兄は、「お前が悪いのではない。日ごろおれが心よくつきあっていなかったから、仕方のないことだ。二人の子どももここで亡くなったのだ。自分も子どもの後を追ってやったほうが幸せだ。」と、しみじみ語るのであった。傍で義姉は、「父ちゃん、しっかりして。きっと何とかするから、気を大きくもってね。今に私の里に連れて行って病院に入れてあげるよ。」と、優しく励ましている。やはり夫婦なればこそと胸が熱くなる。私にも、「主人のことは心配しないでね。それより妹や次の兄さんの面倒をよく見てあげてね。」と、この心の美しい義姉は、反対に励ましてくれるのであった。

後髪をひかれる思いで兄夫婦に別れ、私は妹やわが子の待っている田舎に、またも急がねばならなかった。夜道を二時間ばかりで、家についてみれば、待ちこがれていた妹は、「姉ちゃん。とても待っていたのよ。ああ水がほしい。足が痛い。さすって…」と、赤ん坊のように甘えて、私を離さない。

私には、まだ戦地にいる主人の両親の生死を、広島に出てたしかめなければならぬ役目が残っている。明朝早く出て見なければと話す私の言葉に、姉も妹もわが子も反対して止めさせようとする。「八日はひどい空襲があるということだ。お前が家にいてくれなければ、仕事の都合もあるし、妹の看護はようしてやれない。それに、自分の身内の者ばかり引取っては、主人の手前悪くていけない。」と、姉がぐちをこぼす。無理もないこと、広い農家とはいいながら、姉の身内ばかり転げこんで、総勢一六人がお世話になっているのであった。それがみんな傷ついたり、足手まといの幼子を連れていたり、抱えていたり、誰一人も、忙しい農婦の姉を手伝う者はいなかった。少しでも動ける者は手伝うのが当然である。六日から私は少しも眠っていなかったが、八日に出かけることはあきらめて、姉の手助けをした。畠のこと、食事の仕度、夜は妹の側で背をなでたり、頭を冷やしてやったりで、ゆっくりまどろむこともできない。それにつけても思い出されるのは、戦地へ行ったままの主人のこと、今頃はどのようにしているのだろうか。広島のことを知っているのだろうか。思えば思うほど目は冴えるばかり。

九日は思いきって、姑をさがすために家を出た。一望焼野ケ原の市内は、暑い太陽をよける場所はどこにもなく、壊れた瓦や切れた電線、電柱がゴロゴロしていて、足の踏み場もないありさま。被爆してから四日ぶりの町には、縁者の死体を探し求めて、あちらこちらを掘っている人の群れが目についた。私も姑の家の辺りのレンガや瓦を取除き、何か手がかりがあればと、手で掘ってみたが、何の反応もなくがっかりしている所へ、近くのお宮の神主さんが、「佐伯さんとこのお嫁さんですか。」と、声をかけられた。「佐伯のおばさんはお気の毒ですが亡くなりました。避難する途中倒れた家の下敷きになり、誰もが先を急いでいるし、それに炎の中だったので、たすけてあげることもできなかった。八日に工兵隊の兵隊さんが来て、大勢で取出し、死体は他のと一緒に、お寺に集めて積み重ね、焼かれましたよ。」と、親切にそのお寺も教えられ、私はせめてその焼けた土でもと思い、湯呑みに入れて持ち帰った。父の方は、主人にとっても義理があったが、行き先でも知りたくて問うと、六日の朝、大手町方面へ行ったというだけで、それからの足どりは、どうしてもつかめなかった。

帰りついてみれば、もう夜の八時、それからわが子と妹の食事の仕度である。ひもじくても妹は待っていてくれるが、五歳の長男は待ちくたびれて、そのまま眠りこんでいる。ああこんなとき主人がいてくれたらと、張りつめた気持ちも崩れようとするのを、自分で自分を励まし、耐えしのんだ。妹は、「姉ちゃん、骨と身が離れていくようだ。痛い、痛い。もっとさすって…」と、すがる。さすってやればなお痛い泣き、いろいろなだめながら、昼間の疲れでウトウトすれば、淋しがりの妹は、「こんな時、母さんがいてくれたらなあー」と、一人つぶやいている。そうだ。母さんさえ妹の側にいてくれたら、私もどんなにか安心して出かけられるのに、このままでは、共倒れになってしまいそうだと気づき、十日は一日中家にいて他の部屋へ引越し、三番目の姉の家から、長姉・次姉・兄嫁のいる離れに妹を連れて行って、自分の不在中は面倒をみってくれるように頼んだ。

十一日は、初めて気持ちも軽くなって、母の死体を探するために広島に出たが、無駄に終わってしまった。帰る足の重いこと、姉の家に帰ってみれば、みんなが集って何やらひそひそと話している。上の姉が私を物陰に呼んで、「今日は妹が大変だったよ。洗面器に一ぱい血を吐いて、そのうえ便は出るし、下に敷いてやるボロ布もなく、本当に困ってしまった。側にいてやりたくても、何とも嫌な臭いがして、坐っている事ができなくて…」と、眉をしかめる。

姉たちは、妹が多量の血を吐いたので、てっきり肺病になったんだなと思ひこみ、大げさに言うのだと思った。私は別にいたたまれないほどの気持ちにもならず、遠のく姉たちは頼りにせず、相変わらず、妹の面倒をみてやった。

血をわけた姉妹なのに、このような冷たい態度をする姉たちが憎らしく思われてならなかった。毎日、足を棒にして広島に出ていく私を、みんな心よく思っていなかったのだ。生みの母の最期の様子もわからないままなのに、誰もそれを見究めに出てみようとする者がいないのである。次兄は、あれから寝たきりでいるし、長姉は産後の身、次の姉も病身だし、三番目の姉は百姓仕事で忙しく、それに避難家族のことで頭を痛めているのに、たとえ母をさがしに行くにしても、それは夫にどうしても言いだせないことであった。そうしてみると、家族に気兼ねなしに出ているのは、私一人なのである。十二、十三、十四日と相次いで出かけ、母を探したが、やはり何の手がかりもなかった。主人の義父のことも気になり、宇品・広島駅・紙屋町・横川・己斐と、あらゆる所に張り出されてある死亡者の名前を見てまわったが、どこにもそれらしい名前は載っていなかった。

毎日病状が悪化していく妹は、私が出かけるといえば、泣いてとめるのであった。「姉ちゃんが側にいてくれなければ、淋しくてやりきれない。気分が悪くなって、上の姉ちゃんたちを呼ぶと、お前の側にいると気持ちが悪くなるといい、手足が痛いと言えば、そのくらい我慢するもんだと叱られて悲しくなる。」と、訴えて泣きじゃくり、かわいそうで仕方がない。今までは母に甘えて、苦勞知らずに大きくなった妹だもの、一人ぼっちに寝かされて、淋しがるのも無理はない。こんな私でも、心の支えとしてすがってくれるのに、毎日傍につききりでいてやれたら、どんなに喜ぶことであろうに…。しかし、母の死を確認するまでは、どうしても私が出て探さなければならないのだ。それでも十五日は、家において面倒をみてやり、妹もわが子も上気嫌であった。珍らしく笑顔をみせてくれた。

お昼過ぎ、ラジオで終戦を知り、姉妹そろって涙を流した。これから先、何の生きる望みもなく、姉たちもあまりものを言わなくなり、今まで元気づいていた妹も、四時ごろ、また苦しみだし、再び血を吐いた。その夜から足もたたず、体中どす黒い斑点が出て、痛みも激しく、声はだんだん小さくなって危篤状態に陥った。早く医者をとんでも、来てくれない事はわかっていた。不眠不休で患者の手当を続けている医師は、どんな患者でも、連れていかなければ診てもらえなかった。こんな妹を動かすこともできず、容体を詳しく話して、ようやくのことで薬をもらうことができた。部落では、広島から傷ついて来た人が、次々に亡くなっていった。多い日には、五、六人昇天し、焼場に困って土の上に寝かせたまま、茶毘にふす人もあった。今は人の身、明日はわが身かと、みな暗い表情でささやきあった。

十五日夜、長姉の二〇歳の息子が、終戦になったため職場から帰って来た。今まで若者のいなかった部屋には活気が満ち、急に家の隅々まで元気づいてきたようであった。ことに妹の喜びようは大したもの、今までの仮死状態はどこへやら、人が変わったようにはなやいで、鏡を見ては顔の傷を気にするようになった。二つ違いとはいえ、叔母、甥の間柄であるが、小さい時から一緒に遊んでいたのも、姉弟のように親しく、よく気も合っていたようであった。

十六日、私は甥に妹のことをよく頼んで、今日こそ、母や舅のいずれかを探しあてようと、張りきって家を出た。白島町に舅でも帰って居はせぬかと思い、行ってみたが姿はなく、主人のいとこが姑を探しに来ていたので、死んだことを告げたら、そのまま帰ってしまった。私は、ふと生前姑が話していた言葉を思いだした。それは万が一広島がやられるようなことがあったら、八畳の間の床下を掘ってみよと、言っていたことであった。何がそこに埋められているかは知らず、近所の人からスコップを借りて、一生懸命に掘ってみた。初めにトタンが三枚焼けたまま現われた。それを取除くと、今度は厚い板が並べてあり、その下にまた板があり、釘づけにしてあるため、女の手では一本抜くのも容易なことではない。トタン板や棒切れを寄せ集めて作られたバラック小屋から、私のする事を何人かの人が眺めていたが、誰一人手を借そうと言ってくれる人はいない。それもそのはず、申合せたように被爆し、家族のうち何人かは命を失い、後に残った人は生ける屍も同然、もの言わぬ人形と少しも変ることのない、無表情になってしまった人たちばかりであった。

午前八時過ぎに来てから、昼過ぎになっても、まだ品物は見つける事ができず、三時も過ぎたころ、やっと中のぞくことができたが、深さは私の背よりも深く、その中にはタンスの引出しが二重ね入れてあり、足袋から腰巻に至るまで、きちんと納められていた。コタツもあり、カンには米と麦が三升余り、梅干・塩・針も入れられ、鍋・釜は上の方にあつたため、使用できぬほどに痛んでいたが、その他は、元のままの形を保ち、無事であった。全部取出したころには、時計は五時をまわっていた。お宮の神主さんは、奥さんを亡くされ、娘さんが寂しそうにしておられたので、コタツや米・麦・針・糸と、それぞれ分けてあげて喜ばれた。大切な品物だけ背中にしょって、残りの品は神主さんに預かってもらい、明日来るからと言って家路についた。それにしても、よく気のつく姑であったと、しみじみありがたく、私を真からかわいがってくれたことを偲び、一人で泣いたのであった。

妹は案外顔色も良くなって、「今夜からお姉ちゃんを困らせるようなことをしたらいけないと言われた。」と言って明るく笑っている。甥がさとしてくれたのだと知って非常にうれしく、当分気分的に楽になれることを内心喜んだ。

明日はわが子に初めて、被爆後の広島を見せておきたくなり、おばあちゃんの形見の品を取りに行くからと言って早く休ませ、六日以来、初めて妹とゆっくり母の思い出話をした。私がいままで泣くものだから、妹が慰め役になって、なだめてくれるのであった。「北支から兄さんが帰ってきて、私と一緒に暮してね。母が亡くなった今では、敏子姉さんだけが私の味方よ。今までいろいろ悲しい事が多かったけど、毎日、広島から疲れて帰る姉さんを見ると気の毒で、自分のことなんか話す気にもなれず、じっとがまんしていたのよ。」と言う。私の留守中は、三人の姉がそばにおりながら、食事も運んでくれず、たった五つの長男が、妹の指示に従って何でもしてくれたといった。姉たちは何人もの子どもをかかえていて、血を吐くような妹の重い病気が、万一自分の子どもに伝染したら困るといったことも、その夜、私は初めて知らされた。

元気そうに見えても、妹の弱り様はひとつではなく、便にも血がまじりだした。夜中に二人は手を握りあって寝た。もしもの事がある時は、私の手をつねってくれとあって、私は眠りについた。

十七日の朝、甥に後の事を頼んでいるところへ、長姉が来て私を叱った。「妹の看護を息子にさせることはできない。若い者は病気がうつり易いから、この子に倒られるようになったら、自分たちが困る。お前が妹の世話をし、広島に行くことはもうやめたらいいではないか。荷車まで引いて取りに行くほど大した品物でもあるまいに…」と、さんざん嫌味を並べた。私は、「品物がほしくて行くのではない。主人の両親がせつかく心をこめて埋めておいてくれた、そのやさしい気持ちを無にしたくないから行くのであって、あのまま放っておくことは、私の気持ちが許さない。」と、いつになく反発し、「今日、取りに行ったら、もう当分は広島に出ることはないから、今日だけ妹の面倒を見てやってほしい。」と、手を合せんばかりに頼んだが、良い返事は得られなかった。側で気をもむ妹が、「姉ちゃん、これから三番目の姉さんとここに連れて行って。姉ちゃんが帰るまで、あそこで休んで待っているから。」と言ってくれたので、そのようにして姉にすぎた。

私は、子どもを車に乗せて山道を急ぎ、白島町で荷造りして、子供には綱を曳かせて、ヨイコラ・ヨイコラと暑い盛りの町を歩いた。祇園町の姉のところまで荷物を少し下ろし、帰りの登り坂をあえぎながら越そうとしたが、なかなか思うように荷車は進もうとしない。小さなわが子が、「お母ちゃん、もっと元気を出して。もうちよっと。」と、声援してくれることがいじらしくて、またしても、未だに復員して来ない夫のことが案じられ、早く帰ってと、祈らずにはいられなかった。

思案にくれているところへ、運よく復員姿の人がリュックを背負い、手にも荷物をさげて通りかかり、「荷物を乗せてください。車は自分が曳きますから…」と言われ、私も助け舟に乗った心地がして承知した。子どもと荷物を車に乗せ、私が綱をひっぱって歩いた。年頃もちょうど夫と同じぐらいで、道行く人々は、親子三人連れで家路にむかっているとばかり思うらしく、「ご主人がお帰りになって良かったですなあ。子どもさんも嬉しいことでしょうなあ。」と、言葉をかけるしまつに、その人は違うのだとも言わず、ただ笑って車をひいてくれていた。どこの誰とも知らぬまま別れて、三番目の姉の所に行き、妹を連れて帰ろうとしたが、姉は、今夜苦しうだからこのまま家に寝かせておいた方が良からうと言う。私も疲れているし、一晩ぐらい姉に看てもらってもと思い、子どもだけ連れて帰ろうとしたら、妹がフラフラと立ちあがって、どうしても敏子姉さんのところに帰りたい、明日からはもう出ないで私の側におって、姉ちゃんどでないと、淋しくて淋しくて、と泣きだしてしまった。せつかく甥と再会して、あんなに喜んでいただけなのに、無慈悲な長姉に悪病と言われ、今は生きる望みを失ってしまったかわいそうな妹。

次兄は、案外傷も良くなって、妻子を養うために出かけては、僅かずつの品物で米にかえてくるようになった。家の下敷きにでもなっているかもしれない母を、掘り当ててくれたらと思っても、この兄は自分の家の焼跡は見るのが辛いとあって、一度も行こうとしなかった。

十八日は、妹の看護につききりであった。便の回数もひどくなり、意識もうすらぎ、舌はもつれて言葉は出なくなった。淋しさをこらえて、私の留守中、姉たちからは、うとまれどうしであった妹よ。亡くなった母さんを探すことよりも、生きてお前の方が大切であったのに、それに気づかず出てばかりいた姉ちゃんが悪かった。どうか許してくれと謝れば、言葉はなく、弱りきった力をふりしぼって、私の手を握ってくれた。この妹が、これから先幾日命が保てるやらと思えば、悪病という冷たい姉たちが、真底から憎くてたまらなくなった。翌十九日は、亡父の命日であった。私は、妹を迎えに来るような予感がしてならなかった。

夜の十時過ぎになって苦しみだし、「姉ちゃん、助けて。ああ、骨と身がはずれる。手が痛い。足が痛い。」と言いつつ、私が力強くもんでやるのに、まだ私の手をさがそうとしている。「目が見えない。」という妹の声に驚き、姉や甥、兄嫁を起し、「今夜はどうもおかしいから、朝までみんなで見てやって。とても淋しがるし、一晚ぐらいあんたたちも、見てやってくれてもよいではないか。」と言おうとしたが、後の言葉はのどにつまって声にならない。

目が見えなくなったことにびっくりして、急にみんなで、「しっかりせえ。しっかりせい。」と励ましている姿を見ては、よけい怒りがこみあげて、その場に坐っていることが苦しくなり、私は裏山に一人立って、妹の名を呼びながら泣いていた。しばらくすると、兄嫁が迎えに来て、妹が呼んでいるからすぐ帰ってきてと言うので部屋に入り、「姉さんよ。」と、声をかけると、聞えたのか、「姉ちゃん、お世話になったね。」と、弱りながらもはっきり言ってくれたのが、最期の言葉になってしまった。私が部屋を出たあとで、姉たちには、「姉妹仲よくしてね。」と言った由。この妹の言葉を姉たちはどんな思いで聞いたのであろうか。傷ついてから一三日余り、その間ありとあらゆる苦しみと仕打ちにあいながら、この妹は、何一つ姉たちにむかってグチらしいことは言わずじまいで、あかりがついているのに、「暗い、暗い。」と言いつつ、私や姉の手を握って、眠るように息をひきとった妹よ。肉体の苦しみも去って、母のふところに抱かれ、静かにほほえむ妹の姿が浮ぶ。

一三年前、父が亡くなった同じ頃の時刻であったこともふしぎで、その事も姉たちが話しあっていた。大切にしていたアルコールで全身を浄めてやり、両手を合せて念仏とともに数珠をかけ、浴衣を着せて、北枕に寝かせ、みんなで仏となった妹の前でお通夜をしてやり、生前の思い出話をしていると、急に停電になり、ロウソクも残り少なくなったので、そのままつけておくこともできず、みんながそれぞれの部屋で横になることにした。

私は、次兄がその夜は不在であったので、兄嫁と共に横になった。姉たちはいろいろな話をして起きていたが、私は何も話したくなくて、ふとんをかぶって泣いていた。二時間もたったであろうかと思う頃、何やら長姉が大きな声でどなる気配がする。耳をすまして聞いていると、相手は息をひきとったはずの妹ではないか。私は驚くというよりも恐ろしくて、全身の血が一度にひいていくようで、わが子を夢中で抱きしめ、妹の声を聞いていた。起つこともできず、目が見えないと言って間もなく息がとだえ、手足も冷たくなって、唇の色も変り、両手を合せてやる時は、指もかたくなりかけていた妹であったのに、その声は、何とも形容しがたい、この世の人の声ではなかった。長姉の部屋のふすまの側に行っているらしく、姉と甥の名前をかわるがわる呼び、「話があるから開けて聞いてくれ。」という。すると、姉が大きな声で、「あんたは死んだはずだから、ここに来てはいけません。早く母さんの側にいきなさい。」と言っている。妹は、それでも話を聞いてもらわねば行けないと言い、あえぎあえぎ甥の名を呼んでいたが、甥も返事をせず、姉がかわって、「もうすぐ夜が明けるから、話は朝になって聞いてあげるから、ふとんの上に行ってやすみなさい。」と、なだめている。妹は、「もう動けない。ふとんのところまで連れて行って。」と、頼んでいるが、「一人でここまで来たのだから、行けないことはないだろう。」と、やはりふすま越しで言う声がある。妹は苦しそうに、「水をください。それを飲んだら帰ります。」と言っている。最後に、「話を聞いてくれないからくやしい。」と言ったきりで声はしなくなった。欲しがる水は兄嫁が汲んで、コップを、ふすまをほんの少し開けてそのまま置き、「これを飲んだら静かにいきなさいね。」と、声をかけたが、返事はなく、真暗な部屋で、誰も口をきく者はなく、妹は暗がりの中でどうしているものやら、物音一つせず、日頃あんなに私を慕い、私も一番かわいがっていた妹なのに、あの無気味な声を聞いた瞬間、気が抜けたようで、行って見てやることもできず、ただ念仏を唱えてばかりいた。

夜が明けるのを待って、姉と二人で、そっとふすまを開けてみた。歩いていったものか、それともいざって前に進んだものか、縁側の障子の前で倒れたまま、うつ伏せになってこと切れていた。私の気のせいかもしれないが、とてもくやしそうに、妹の顔はゆがんでいるように見えた。何を言いたかったのかは、私には判りすぎるほどよくわかった。姉は知っていて、それを言わせなかったのかもしれない。今もあのことは心残りではたらないが、言わずに死んでかえって良かったのかもしれない。姉たちのためにも…。甥は、その後、二年ほどしてから結婚したが、一年もたたないうちに悶死してしまった。

次兄は翌朝帰宅して妹の死を知り、なげき悲しみ、生き返ったことも聞いて、姉につめより、「なぜ姉さんは、妹の話聞いてやってはくれなかったのか。」と怒りをぶちまけた。姉は、「いったん死んだ者から、あのような声で話される身になってみよ。死神にでもとりつかれたら大変だ。あんなとき、やさしい言葉をかけると大変な事になりそうだから、自分は心を鬼にして叱ったのだ。」とも言っていた。

八月二十三日、次兄は西条の病院に入院している長兄を見舞いに行った。兄は、八日の日に三人の人の力をかり

て、兄嫁の実家に運ばれ、そしてすぐ入院して、妻の手厚い看護を受けていたのであった。次兄は病院に一夜し、兄嫁と交替して、兄の看護をして家に帰った。そして私に、二、三日でもいいから義姉を休ませて、兄につきそってやってくれと言った。私も行ってやりたいのは山々であったが、妹を失ってから、一時に疲れが出て、体がだるく、熱もあるしで、動くことがとても難儀に思えてならなかった。それでも、幼いわが子を連れていては、休んでいることもできず、歯をくいしばって、姉の農事を手伝って暮しを支えていたのであった。しかし、あの大けがをして苦しんでいる兄の事を思えば、知らん顔もできず、三、四日先になったら行ってみようと言ったところ、次兄は、とても喜んでいて。

二十七日、次兄は、突然四〇度を越える高熱を出し、西条に行って疲れたのだろうといていたが、毎日悪化して、「今度はおれの番かもしれない。」と、口走るようになった。歯ぐきから血が出て止まらなくなった。医師は呼んでも来てもらえず、胃薬を飲んで一時しのぎをしていたが、三十日ごろになって、今度は私がひどい熱を出して、床についてしまった。西条の兄を見舞うどころのさわぎではない。次兄は、家内が側にいて看病してもらっているが、私は妹同様、誰もかまってはくれず、五歳のがが子に水を汲んできてもらったり、オカユを炊かせたり、おかずだけは姉が作ってくれるが、運んで来るのは長男ばかり。姉は私の臭いがくさいから、「少しでも近寄ると倒れてしまうという。」母や妹が招いているのでは、と、思ったりしたが、戦地から夫が帰るまでは、何が何でも生きのびなければと、弱まる心に、自分で鞭をあてつづけた。

それから間もなく、長兄が亡くなったという知らせが届いた。誰も行く者はない。行きたくても行けないのである。それから兄嫁が夫の後を追うようにして逝ったということも聞かされた。五歳の長男と一歳の子を残して……。二人の子は、西条の祖母が引取って育てているということであった。両親がなくても、あの子たちにはやさしい祖母がある。私が今ここで事切れても、愛児を引取ってやろうという肉親は一人もいないだろう。母や姑もこの世になく、三人もいる伯母だって、あのように薄情な人たちではないか。死んではならぬ、死ぬものかと、またしても私は心に言い聞かせた。

長姉の夫が四国から元気な姿で復員してきた。姉の子たちは、父さん父さん、とまつわりつく。その様子を、そっと庭から眺めて帰るわが子は、「僕の父ちゃんはいつ帰るの。」と、さみしそうに私に聞くのであった。

九月六日、義兄は未だに手がかりのない母の消息を知るために、広島に出かけることになった。被爆してから、ちょうど一か月、変り果てた町を眺めて、義兄はさぞ驚いている事だろうと、いろいろ床の中で想像し、どうか母の姿がわかりますようにと、一心に祈り、子どものように、ただただ義兄の帰りを待ちわびたのであった。

夕方になって、やっと帰ってきた義兄が、「母さんを連れて帰ったぞ。」と、さけぶ声に驚き、兄も私も起てない身をもがきながら、いざるように出てみたが、母の姿など一向に見ることはできない。かつがれたと思い、「かあさんはどこにいたのですか。」と問えば、「この中だよ。」と、風呂敷の中を指さす。ああやっぱり死んでいたのかと、覚悟はしていたものの、がっかりしてしまった。風呂敷の中から出されたものは、驚いたことに、爆風で飛ばさ

れた母の首であった。前面は焼けてわからず、後の部分だけ残って、それと判る程度。つけまげと眼鏡も、まさしく母のもの。眼鏡のツルは鉛のようにまがり、玉も変形してしまっている。この遺品は、今でも三番目の姉が大切におさめている。一か月ぶりに見る母の無残な頭、生前のあのやさしい姿はもうかえってこない。それにしても、あれ程、狂気のように毎日探しまわった私の目の前に現われず、血も通わぬ義兄の手に抱かれて帰るなんて、どうした事であろうと、私は自問自答してみた。子ぼんのうな母であつたればこそ、私にその姿を見せたくなかったに違いない。もしも私があの時、このようなこわい母の顔をみつけたら、きっとその場で気絶したに違いなからう。やはり母の慈愛は、死んだあとも生きていたのである。

妹を、兄を、そしてまた母の死を確認した次兄は、非常なショックを受けたらしく、それからというもの、気が変になって、時々、大声を出して急に外に飛び出し、アメリカ兵をやっつけてやるんだと言っては、周囲をキョロキョロ見まわすようになった。

辛うじて生残りながらも、人間を気遣いにおとし入れ、例えようのない苦しみのはてに悶死させる爆弾が、ほかにあろうか。次兄が死ぬる前日、義兄を呼んで、これからは自分の言うようにして欲しいと頼み、砂糖水を持って来てもらって飲んだ。ところが、砂糖水が鼻から流れでたり、喉へ流れこんだと思ったら気管に流れこむのか、ひどくむせては、しばらくのあいだ苦しむ。「そっと飲んだら…」と、私が言葉をかけると、「心配するなよ。ひさびさの砂糖水に、腹の虫が驚いて騒ぎ出すのだ。お前が心配することはない。」と、次兄は大声で笑う。

「これから大事な実験を始める。もし実験が無事に終わったら、お前の病気を第一番になおしてやるぞ。そして広島町の町で苦しんでいる人もなおしてあげるんじゃ。」

次兄はこんなことを言いながら、義兄にむかって、「これからが大事なことで、わしの言うように頼むよ。白い布を巻きつけてください。目と鼻と口だけ出して、全身を布で巻いてもらわないと、ウラニウムが体から逃げだすと、実験ができなくなるけん。わしの体を固く、くくりつけてもらいたい。そして、バケツに半分ほど水をに入れて、細い竹を一本、口にくわえさせてくれ。時々飲むように…。」と、たのんでいる。

義兄は言葉どおりに一生懸命に、「これでよいか、これでよいのじゃの。」と、念を押しながら言うとおりにした。

私は隣の部屋の戸のふし穴から、この二人を見て、これから何が始められて、何が起り、どうなるのであろうと思うと、床の中で眠ることもできず、熱のあるのも忘れてじっと成行きを見守った。

次兄は義兄にむかって、「兄さん、世話をかけてすまんの。これで実験に入れる。」と言って、白布でつまれた頭をコックリとさげた。義兄はオドオドしながら、「ほんとにこれでよいんじゃの。」と、何度も尋ねている。「兄さん、これでよいけん、実験が終るまで家に帰って待っていてくれんさいよ。これからは、わしに近寄るとあぶない。何が起きても呼ぶまでは近づかんようにしてもらいたい。」と、義兄に言う。義兄は「それじゃー、家に帰って待っておるぞ。用事のあるときは呼ぶのだぞ。」と、やさしく答えて出て行った。

私はもうふし穴の所から、離れられなくなってしまった。義兄が家に帰ったことだし、夜になっていくこれから先を思うと、涙が出た。次兄の姿は霞に包まれたように、ボンヤリと浮んでいる。月の光と鼻の穴、時々動く口だけが取残されているようで、狂人の次兄を見るのが辛く、私は両手で顔を押えた。狂人になった次兄の言葉は、私がかつて一度も耳にしたこともないウランとか、ウラニウムとか、わけの判らないことを叫びながら、身動き一つせずじっとしている。

「ウラニウムとは何のことなのよ？」と、恐る恐る尋ねてみたが、兄は手足を動かせながら、「今、大事な実験をしているときだぞ。静かに、静かに…」と、言って手をふった。

時々、バケツの中の水がゴボ・ゴボ・ゴボと、無気味な音をたてる。

しばらくして、また穴をのぞいてみると、いっどのようにして取りはずしたのか、全裸になっている次兄は、気を失ったように、少しも動かない。驚いて、「兄さん、兄さん、兄さん！」と叫ぶと、「敏子か、残念だがもうダメなんだよ。実験は不成功に終わったんだよ。」と、言いながら泣きだした。私も泣き、二人はいつまでも泣くことしか知らなくなった人のように泣いてばかりいた。

そのとき、突然次兄が大声で、「ああ、骨が軽石のようになってしもうたぞ。骨がダメになってしもうた。骨がだぞ。敏子ッ！」と、強い声で叫んだ。また、「手が、指が、こんなに長く、背丈もこんなに高くなってしもうたでしょう。天井に穴をあけてくれなくては、起きて歩けんようになってのう。とてもこれでは、生きられまい。」とも言う。

「どこもかしこも痛いんだ。敏子、なんとかして助けてくれんか。わしのこの苦しみをの一。」と、叫びながら、次兄はせまい部屋の中を駆けまわり、壁にぶつかり、戸に突き当る。「お母さん、痛いよー。助けてようー。なんとか、なんとかできんもんかいの一。」と、体をもてあましながらかぶ。

「骨と肉がはずれそうだ。痛い、痛い。助けて！なんとかしてよー。」と、叫びつづける。

この次兄の苦しみのように、今度は私になるのではないかと思うと、耐えられなくなって、とうとう両耳の穴を指でふさぎ、次兄の叫び声を一生懸命に聴かぬようにした。しばらくして指のふたを少しあけてみると、叫び声もなく静かになっていた。

また、穴からのぞいて、よく見ると、次兄は口をモグモグさせ、何やら食べているようである。「兄さん、何を食べているのよ。」と尋ねると、笑いながら、「敏子や、わしが苦しんでいたら、亡くなったはずのお母さんが来てのう。そっと、ハスの実を三つ手の上ののせてくれてのう。すぐにこれを食べよ。食べると苦しみがなおる。きつときつと楽になるからと教えてくれた。いま二つめを食べとるんだが、残りの一つが落ちてしもうた、探しても見つからん。お前も来て探して食べて見ろよ。とても楽になるぞ。」と言う。高熱のせいで、次兄は夢でも見たのであろうと思い、「兄さん、そんな事あるものですか。」と私が言うと、「何をいうか。夢じゃないぞ。お母さんの姿が、この目ではっきり見えたぞ。何をいうか。」と、強い言葉を繰り返す。「兄さん、疲れたでしょうから、少し眠ってはどうか。」と言うと、「うん、朝まで寝るぞ。疲れとるからの一。」と答えて、裸体のままゴロリと横になった。

すでにふとんを頭からかぶって寝ている兄嫁に、午前三時を過ぎる頃まで続いた次兄のことを話すと、「まだ狂っ

ておってんよね。悲しくても、どうしようもないことよね。」と、言うだけであった。

次兄が変なことを言いだしてからは、狂人を怖れて、夜になると、幼子をつれて私の部屋に泊りに来ていた兄嫁は、いつものように、朝は自分たちの部屋に帰った。帰ると大声で、「敏子さん。うちの人が死んでいる。どうしよう、どうしよう。」と泣き叫び、私に知らせ、近くの義兄のもとに走っていった。「やっぱり利行は狂っていたのか…」と、やってきた義兄は泣きながら言って、次兄に着物をきせた。

私は、起てない足を曳きずり曳きずり、次兄の傍に行き、次兄に取りすがりながら、義兄に昨夜の事を話したが、半分ほど口をひらいて笑いかけた顔からは、あのような苦しみは、感じとられなかった。うつろな半開きの目に光るものは、涙であったかも知れない。

夫はまだ帰って来ない。しかし健康な義兄が復員後の疲労も口に出さず、私たちの面倒をよくみてくれて、非常に救われた。

九月十五日、三〇歳の若さで、次兄は露のように消えていった。私をよく労ってくれた兄であったが、野辺の送りをする体力がなかった。歯ぐきからは、次兄と同じように血が出るし、手や足には「黒斑」があらわれだした。もう自分の番が来たようで、どうしてこの苦悩を制御してよいものか、迷わざるを得なかった。この子を残して逝けない。どうか元の体にして下さいと、一心に神仏に祈願をした。祈れば通じるの諺どおり、ふしぎと快方にむかい、熱も下がり、血も出なくなった。天は、奇跡をもたらしてくれたのである。十月の村祭りには、愛児の手をひいて、お礼参りもできたのである。

ふりかえってみれば、広島に、八月六日、一瞬の魔光が射してから七〇日余りの間に、私の母、夫の両親、私の長兄、次兄、妹、義姉、甥、姪、伯父二人、伯母、いとこ、以上一三人の命は、その光の中に吸いこまれて、再びかえっては来ないのである。

夫は無事に私のもとに帰ってきてくれた、ささやかながら、親子三人、平和を呼びもどすことができた。あの歎き、あの悲しみも悪夢となってすぎ去ってしまった。しかし、戦争の傷跡は、私に「原爆症」という難病を残して立ち去っていき、次男、三男と子宝に恵まれはしたものの、この病だけは、二〇年経った今なお、私をさいなみ、家族は私と共に悩み、気づかい続けて、弱い体を労ってくれている。すこやかな妻を、たくましい母を持つことのできない夫の苦悩と子らの悲しみを思うとき、私は戦うことのむなしさを強調せずにはいられない。

第二次放射能障害

原子爆弾の直接的な被害者ではなく、被爆直後の広島市内に、家族を探索に行き、焼跡を歩きまわった人、あるいは、暁部隊の兵士をはじめ郡部から急ぎ入市した警防団などの救援隊の人々、また、避難して来た負傷者を看護した人々が、倒壊物や人体に残留する、いわゆる二次的放射能によって、直接被爆者と同様の症状を示して苦悶するとともに、ついには死亡者も出るという悲劇を招いた。

被爆直後、入市した軍その他の調査機関の諸博士は、いち早く残留放射能の危険性について忠告したが、それはごく一部の人々の間のみ知らされただけであったから、多くの人々は気がつかず、探索に、救護に連日行動したのであった。このことは救護に当たった一般医師たちも、当時は知識がなく、適切な処置を取ることができなかったのである。

第二次放射能障害について、蜂谷道彦博士(当時・通信病院院長)は次のように語っている(広島原爆医療史)。

「広島に投下された爆弾の性質を、われわれがはっきり原子爆弾と知ったのは、八月十五日終戦の日以後であります。軍当局は早く察知していたらしく、わたしの聞き知るところでは八月十二、三日ごろ、原子物理学の権威、仁科博士や松前博士が広島に来て、爆心地付近の放射能を調べ、被爆後二週間ぐらいは相当量の二次的放射能が証明されたということでありました。われわれの病院において、二次的放射能の存在を証明したのは、十月末から十一月の初めと記憶しています。

すなわち病理解剖の結果得られた人骨の一片の、レントゲンフィルム感光試験をおこない、感光時間二四時間後のフィルムを現像したところ、人骨の影像を証明することができたのであります。すなわち、十一月現在においても、致死量の放射線を受けた患者の骨髄から、なお二次的放射線が放出されていたのであります。さらにその後一年半～二年ばかりして勝部先生が原爆症患者の整形手術あるいは死体解剖などにより得られた組織の放射線を測定し、これらの組織は一か年以上二次的放射能を保存していたことを証明しています。

以上の事実から考え、広島市の上空で原子爆弾が炸裂した瞬間、爆心を中心として、大きな放射圏ができ、空気

層に吸収されていた放射線はまもなく空気の拡散、あるいは風によって消失し、地上の建築物、その他の物質に吸収された放射線は、かなり長期間二次的放射能として残存し、原子爆弾炸裂瞬間にあった一次的放射線に比すれば、ごく微量であったに違いありませんが、とにかく二次的放射線を放出していたことは疑いをはさむ余地はありません。

したがって、この二次的放射線圏内にいた生物は、すべて一樣にごく微量ながらも持続的に、二次的放射線を受けていたのであります。放射線の強度と、放射線を受けていた時間を掛けたもの(I×T)が放射線受射量であり、放射線受射量が放射線病発病量に達したときには、当然放射線病を発病してしかるべきであります。」と述べ、続いて二次的放射線による発病者の実例をあげている。

恐怖の実例

広島原爆戦災誌の編集にあたり、別記要領により、被爆直後、急遽入市して救護活動をおこなった陸軍船舶司令部隷下の将兵について、二次的放射線障害にかかわる調査をおこなったところ、蜂谷博士の研究を実証する次のような恐るべき結果を得た。

残留放射能による障害調査概要

一、調査対象

(イ) アンケート(往復葉書)発送 四〇〇通

(表) (裏)

郵便往復はがき			
返信	7	3	3
当 時 の 年 令	当 時 の 所 属 部 隊 名 或 い は 基 地 名	氏 名	住 所
広島原爆戦災誌編集室			
広島市 中島町一 番三 号 広島 平和 記念 資料 館内			

広島救援活動以後の健康状態	
1	救援活動をした場所(町名建物名川等)と、活動した期間 イ 場所(8月9日から 日まで)
2	救援内容(該当に○印をつけて下さい) 警備 医療 食糧配給 負傷者輸送 負傷者収容 看護 死体収容 火葬 埋葬 道路或いは建物清掃 名簿作成その他
3	健康状態 イ 救援活動以後、いつ頃発病したか 昭和 年 月 日 ロ 症状(脱毛、嘔吐、ケン怠、白血球減少など)について ハ 現在の身体の具合について
4	原爆症状によって死亡した知人が ありますか………有・無 (有の場合) イ 所属部隊 氏名 ロ 死亡年月日 昭和 年 月 日 ハ 病気の模様

(内訳)

(一) 回答者 二三三通

(二) 回答なし 一五二通

(三) 返送分(住所変更など) 一五通

計 四〇〇通

(ロ) 対象者(二三三人)別

(内訳)

(一) 安芸郡江田島幸[えたじまこう]の浦[うら]基地(爆心地から約一二キロメートル)

陸軍船舶練習部第十教育隊 二〇一人

(二) 豊田郡忠海[ただのうみ]基地(爆心地から約五〇キロメートル忠海高等女学校駐屯)

陸軍船舶工兵補充隊 三二人

二、調査時点

(イ) アンケート発送昭和四十四年一月十日

(ロ) 回答収集終了 同 二月末日

(ハ) 集計完了の日時 同 四月末日

三、対象者の活動範囲と期間

(イ) 幸の浦基地救援隊

○原爆炸裂当日、基地から舟艇により宇品に上陸、正午前すでに市内に進出した。周囲は猛火と死者・負傷者・避難者を見るのみ。直ちに活動を開始し、負傷者の安全地帯への集結をおこなう。

○六日夜から七日早朝にかけて、中央部へ進出、主として、大手町・紙屋町・相生橋付近、元安川にて活動した。

○六日から一週間後の十二、三日まで活動し、幸の浦に帰還した。

(ロ) 忠海基地救援隊

○七日朝から、市周辺(東練兵場・大河・宇品・その他主要道路ぞいなど)の負傷者の多数集結場所において、救援を行なう。

四、対象者の年齢別

(一) 十八歳 六〇人

(二) 十九歳 五七人

(三) 十七歳 四五人

(四) 二十歳 二九人

(五) 十六歳 二四人

(六) 十五歳 四人

(七) 二十一歳 二人

(八) 十四歳、二十三歳、二十九歳 各一人

計 三人

(九) 不明(記入なし) 九人

以上 計 二三三人

五、救護作業の内容

作業従事者数の順では、次のとおりとなる。ただし、一人の者が、二つ以上の別作業に従事しているのが、かなりあって数的には重複している。

(一) 死体の収容と火葬……収容一七六人・火葬一四六人

(二) 負傷者の収容(安全と思われる随時の一個所に集める)と輸送(所定の臨時救護所に送り届ける)……収容一三四人・輸送九八人

(三) 道路・建物の清掃……九〇人

(四) 遺骨(火葬のあと)の埋葬 五九人

(五) 収容所での看護 五九人

(六) 焼跡の警備 三七人

(七) 食糧配給 二七人

(八) その他医療(一人)・名簿作成(四人)・消火作業・水道修理など

六、障害の状況

(一) 出動中の症状

(イ) 二日目(八日)頃から、下痢患者多数続出する

(ロ) 食欲不振

(二) 基地帰投直後の症状(軍医診断)

(イ) 白血球三、〇〇〇以下、ほとんど全員に及ぶ

(ロ) 下痢患者出る(ただし、重患なし)

(ハ) 内発熱する者、点状出血、脱毛の症状の者が少数ながらあった

(三) 復員後、経験した症状(救援内容別集計)

(イ) 倦怠感 一六八人

- (ロ) 白血球の減少 一二〇人
- (ハ) 脱毛 八〇人
- (ニ) 嘔吐 五五人
- (ホ) 下痢 二四人
- (ヘ) その他、肝臓病一四人・十二指腸潰瘍一人・結核九人など(以下略)
- (四) 現在の身体の具合(救援内容別集計)
- (イ) 倦怠感 一一二人
- (ロ) 胃腸障害 四〇人
- (ハ) 肝臓障害 三八人
- (ニ) 高血圧 二七人
- (ホ) 鼻・歯の出血 二七人
- (ヘ) その他、白血球減少二三人・めまい二〇人・貧血一五人など(以下略)

(右の原爆症状は、二、三種の症状が一個人の身体に出ているのが多い。従って数字的には重複している。なお、発病者は、死体及び負傷者の収容作業従事者が最も多く、ついで、火葬、負傷者輸送その他の順である。)

- (五) その他
- (イ) 死亡者一〇人内外(原爆症と認定された者)
- (ロ) 子供に恵まれない者二、三人
- (ハ) 遺伝的疾患一人(子の視神経不全)

(註)原爆症状は特定の症状であるから、広島以外の他府県では患者の訴えを、単に「原因不明の病気」として扱い、原爆症と認定されないでいる者がかかりある。

症状例

一、高田三郎(和歌山県)

昭和二十年八月十二日ごろから疲労感・頭痛・目まいなどがあり、普通の疲れぐらいに思っていたが、九月十日ごろから、下痢・腹痛・脱毛などがあり、眼痛をともなった。九月十三日復員したが、その後も同じ状態が続き、治療のきいもなく左眼は昭和二十六年九月末に失明した。

二、山村重定(北海道)

九月十二日江田島幸の浦を出発、十六日夜、北海道の自宅に帰ったが、体がだるく通院した。医師は栄養失調と診断した。一か月ぐらいで元気になり現在に至る。

三、岩野庄吉(広島市)

取立てて病気はないが、倦怠感は常時ある。眼球疲労がある。現在なお消化器系が弱く太らない。

四、某(呉市)

八月六日広島に救援出動。その後、健康であるが、子供の一人は生れつき片目が見えず、多くの病院を廻ったが、視神経が先天的に発達不全でつながっておらず、医師は父親が受けた放射能の故であろうという。

五、義之栄光(青森市)

八月九日午前十時ごろまで作業をすると、のびてしまった。昼前、部隊から迎えの大発(大型発動艇)が来て、いったん幸の浦に引揚げたが、その夕方から高熱を發し寝込んでしまった。翌日の夜であったか、軍医の診察を受けると「破傷風」の疑いありということで、夜中に広島市の赤十字病院へかけこむ。そのまま入院したが、破傷風ではあるまいという事で二日程で退院した。しかし熱はあり下痢は続き、全身から力が抜けて何か重い病気にかかったような感じであった。起きられるようになったのは十三日ごろであった。

復員後、ひどい視力障害、毛穴からの出血、ほとんど一年を周期とする発熱・発疹・下痢症状などが、昭和三十二年ごろまで続いた。

六、三吉義隆(東京都調布市)

市内の巡察・指揮・死体収容と焼却などに従事し、軽度の原爆症にかかり一か年間療養の必要を生じたが、現在はどうやら健康をとりもどしている。

七、田村繁雄(広島市)

九月十二日～十三日ごろ幸の浦を撤収し、十月末まで宇品船舶練習部において、残務整理後に復員したが、同年十一月から十二月ごろにかけて、歯ぐきから出血を見たり、ちょっとしたことに下痢したり、発熱し風邪をひきやすい状態であった。その後は異常ない。

八、清水健(東京都小平市)

白血球減少症(三、〇〇〇以下)

九、石塚恒蔵(神奈川県)

救援後、部隊へ帰って来て、医務室で白血球の数を精査してもらったとき、軍医が首をかしげていた。「どうしたんだ」とたずねたら、白血球がだいぶ減っていて八〇〇ぐらいとか言っていた。そのころは治療法がはっきりしていなかったので、お灸かレバーのようなものを喰べたら良いだろうと言われた。

一〇、栗田栄一(群馬県)

昭和三十三年五月ごろから約二年間で、全身脱毛したが、現在(昭和四十四年)眉毛以外はほぼ正常にもどった。なお一年に二回ほど激しい倦怠感があるほかは異常ない。

一一、神品富高(大分県)

倦怠を感じる日が多い。腕に約一センチほど原因不明の紫斑ができてとれない。

一二、青木一彦(焼津市)

昭和二十七年六月に沼津国立病院で検査の結果、白血球が三、六〇〇であった。健康ではあるが人より疲れが多いようである。

一三、二宮陽三(広島県)

昭和二十八年八月に軽い脱毛症状があった。特に風邪をひきやすい。

一四、川網重治(広島県)

昭和二十五年七月と昭和三十八年三月の二回にわたって脱毛症状があった。長湯すると目まいがする。乗物に乗ると吐気がする。アレルギー鼻炎で、時々クシャミと鼻水が多量に出る。

一五、槇野正(総社市)

白血球三～四、〇〇〇である。肝臓肥大の症状がある。

一六、佐藤豊[イナ]治(仙台市)

昭和二十七年、仙台国立病院に二四日間入院加療した。昭和三十年六月及び昭和四十二年十月の二回入院したが、いずれも症状不明の診断であった。

一七、末光常雄(広島県)

高血圧・肝炎など必ずしも健康ではないが、公務員として勤務中である。

一八、桑波田景紀(鹿児島県)

昭和二十年九月中旬復員後、四か月ぐらい下痢が続いた。現在は健康。

一九、子川等美(香川県)

昭和二十三年四月から身体の倦怠を感じている。

二〇、齊藤忠治(山形県)

昭和二十六年ごろまで、ちょっとしたかすり傷でも化膿して大きくなり、なかなか治らないので非常に苦労した。季節の変わり目やその他のときでも倦怠・目まいなどがあり、風邪などにも非常にかかりやすい。

二一、早乙女考三(栃木県)

昭和四十二年ごろから白内障にかかり、治療中である。

二二、吉竹説雪(福岡県)

根気が続かず、疲れやすく、病気がちである。肝臓障害。

二三、松村昭祐(明石市)

年齢に比して疲労感や倦怠感が甚だしい。

二四、奥山寿穂(清水市)

健康状態の精密検査を受けたことはなく、直接の関係はないかも知れないが、歯が弱くなった。

二五、土屋圭示(笠岡市)

救援活動のあと脱毛した。現在は低血圧で、ひどく疲れたとき歯から血が出る。

二六、飯島信一(千葉県)

三十七年ごろから「歯そう膿漏」となり、四十二年に自分の歯七本を残し、全部義歯となる。血族中には、歯の悪い者や弱い者は一人もいないが、自分だけが突然こんなことになった。

二七、福井進(岡山県)

倦怠感がある。血圧一一三～六三。血沈は一時間一ミリ。

二八、樽見亨二(下関市)

体力減少し、抵抗力がない。

二九、奥平寛(山梨県)

腰痛がひどく来る。

三〇、一瀬保(山梨県)

胃・腹・肝臓病にて治療中。

三一、沢野実(石川県)

救援活動後約一か月下痢が続いた。現在は良好状態にあるが、眼病を治療中である。

三二、国井宏泰(福島県)

川に流れる死体の引揚げ、火・埋葬作業に従事後、常時倦怠感あり白血球も減少した。

三三、小番幸一(秋田県)

昭和二十一年八月二十日、急性胃潰瘍にかかり約一か年治療した。現在異状ない。

三四、富田良一(岡山市)

昭和二十年十月ごろ、脱毛した。歯ブラシ使用中に歯ぐきの出血などがあったが、現在は良好である。

三五、佐川安正(福島県)

昭和二十年九月ごろから体全体がだるく、約一か年働くことができなかった。現在のところ別に異状はないが、吹出物ができて六年間ぐらい治癒しなかった。

三六、大沢茂(群馬県)

昭和二十年九月、倦怠症状があったが、以後、日常生活に影響がない程度に腸が悪い。

三七、古田輝吾(広島県)

常時、倦怠感がある。風邪をひきやすく、寝汗がよくでる。

三八、西塔光喜(山形県)

復員直後の健康診断で白血球に異状ありと言われたが、特別自覚症状がないので、そのままにしている。しかし結婚十年たっても子供ができないので、医師の診察を受けたところ、生殖細胞に異状があるとのことであった。十年程前から時々目まい・頭痛があり、耳鳴りが激しい。

三九、谷口勝太郎(石川県)

救援作業後、即ち八月十二日診察の結果白血球減少し、下痢・貧血など患う。

四〇、大沢和彦(愛知県)

最近まで異状なかったが、四十三年九月末以後、倦怠があり、白血球減少症状があらわれ、肝臓が弱い。

四一、栗田勲(福岡市)

二十五年二月頃、倦怠を強く覚え一時肝臓肥大があった。

四二、田坂常和(東京都)

二十年九月初旬、倦怠強く、呼吸困難におちいり、高熱を發した。また数回卒倒した。現在は特に異状ない。

四三、向後政治(千葉県)

救援作業後、脱毛し白血球が減少した。現在でも二日働くと一日休まないと鼻血が出る。

四四、秋元泰博(伊丹市)

二十年十月半ば頃から約一か年ぐらい倦怠を感じ、脱毛した。現在は常態である。

四五、古沢義孝(福島県)

二十六年八月頃、白血球減少で東大病院に入院した。現在は良好。

四六、矢ノ根和夫(大阪市)

昭和三十五年、白血球減少の症状があり、赤十字病院に現在も通院加療中である。

四七、横田利雄(徳島県)

二十年八月十二日から倦怠と下痢症状があり、現在も続いている。

四八、川尻鉄己(北海道)

三十二年四月、脱毛症状があったが、現在は特別に悪いところはない。

四九、佐藤光(大宮市)

復員の際、激しい血便があり、後一週間ほどで止まったが、現在でも時々体調が悪い。

五〇、笹山徳松(東京都)

三十五年十月、白血球減少のため全身的に皮膚病を患った。現在は普通である。

五一、今忠行(札幌市)

胃腸が弱く、嘔吐するときがある。頭痛がある。

五二、高橋繁太郎(北海道)

精密検査は受けていないが、腎炎・胃腸悪く、虚弱体である。

五三、福島行義(長崎県)

二十年九月初旬から倦怠を感じると共に痔ロウのため多量の膿血を排出し、約一か年治療をした。肺結核。時々鼻や歯ぐきから出血する。

死亡者例

一、泰平 智(大分県)

八月六日から五日間、負傷者収容や死体処理作業に従事。二十八年ごろから心臓弱り臨床がちとなる。三十年十月十五日ごろから脱毛現象起り、顔色青ざめ、爪だけが赤くなった。四十一年一月七日午前七時に激しい瘰癧が三回起きた。いろいろ医者診察を受けたが病名不詳のまま、同年六月、床の中でうわ言をいうようになった。七月十四日、別府の九州大学温泉治療研究所で、頭の中にデキモノありと診断され、同所で頭部切開手術を受け、牛肉の脂身に似たもの二個を摘出した。以後経過よく八月八日に退院し、自宅療養を続けたが、四十二年三月から再び悪化、同年四月十日に再び九州大学温泉治療研究所に入院し、二か月間セシウム治療を続けたが、同所ではこれ以上の治療方法なく自宅に帰り、同年九月三十日ついに死没した。三九歳。

二、鈴木 一(静岡県)

復員後、一九年間元気で福祉事務所に勤務していたが、四十年九月に白血球減少の症状が出、名古屋大学附属病院に入院して治療を受けていたが、四十一年九月、同病院で永眠した。

三、浅岡万寿雄(宇和島市)

二十年秋に復員したが、二十一年三月七日に急性肝炎を発して死去した。

四、杉山健三郎(茨城県)

復員後、警察官となっていたが、三十八年二月二十九日、無熱肺炎のため死没した。

五、山口典雄(藤沢市)

復員後元気でいたが、ふと体の具合が悪くなり、神奈川県病院で検査を受け、そのまま入院した。病状は当初は鼻血が毎日のように出血し、そのうち造血機能不良で、四十三年二月二十三日、血管が切れはじめ僅か一日で死亡した。

被災概要

被爆当時の、広島市の市域総面積は二、二〇〇万坪(七、二七二万六、五〇〇平方メートル)である。このうち、原子爆弾の直接・間接の影響で焼失した地域は約四〇一万坪(一、三二五万平方メートル)で、総面積の一八パーセントにあたる。しかし、原子爆弾の特殊な威力を考慮にいれて罹災範囲を求めると約九二〇万坪で、総面積の四二パーセントにのぼる。

前記総面積のうち利用面積は約一、〇〇〇万坪であるから、その九二パーセントが罹災したことになるし、またその利用面積の約四〇パーセントが焦土となったのである(昭和二十年十月調査課調)。

昭和二十年十月、広島市の調査した被害見積額は次表のとおりであるが、この見積額の中には、教育施設や上・下水道施設、各種車輛被害その他のものが計上されていない。それは被爆後二か月ばかりの調査で、手近かに計上できる範囲の最小限度のものにとどまったからであるが、それでも約八億円近い額に達している。これは昭和二十年度の広島市の当初予算額一、三五一万六、二四五円、被爆後当面の応急処置に要する費用を補正しての最終予算額五、七七八万六、〇一六円(市勢要覧昭和二十一年版)と比較すると、被害の最少限度見積額でさえ、如何に激甚であったかが容易に理解できる。

区分	被害見積額(円)	摘要
民家	440,000,000	賃貸価格の22倍を見積る
ビルディング	250,000,000	
橋梁	8,000,000	主橋40
道路	1,500,000	
家財	33,930,000	
通信施設	30,000,000	
計	763,430,000	

(市勢要覧昭和21年版所載・昭和20年10月調べ)

人的被害もまた空前のもので、死傷者おおよそ二十数万人に達したのである。ただし原子爆弾による障害は非常に長期間にわたるものであるから、一つの時点で確定することはできない。それは昭和四十五年(一九七〇)一月十八日現在でも、日本赤十字社広島原爆病院に入院加療中の被爆者が一四一人(男六一人・女八〇人)あり、これに通院者・自己加療者を加えると相当な人数にのぼり、二十五年後の今日なお、つぎつぎと死亡者が出ていることでもわかる。

被爆当時の常住人口

戦前、広島市の人口は通常四四万人程度であったが、防空計画に基づく建物の強制疎開作業その他の理由によって変動し、原子爆弾被爆当時の人口としては、昭和二十一年八月十日に市調査課が各町内会を通じて被爆時の人口調査を行なった結果、軍関係を除いて三一万二、二七七人であったといわれる。

在広軍人の数

軍事基地広島市には、当然軍関係者も多数いたことと考えられるが、広島市が新修広島市史の編集(昭和三十七年全七巻完成)にあたり、昭和二十八年七月三十日に元広島師団の動員関係者ら一六人を集めて調べたところ、第二総軍司令部(三〇〇人)・中国軍管区司令部(五〇〇人)・広島聯隊区司令部(三〇〇人)・十一聯隊(三、〇〇〇人)・野砲隊(三、〇〇〇人)・輜重隊(一、五〇〇人)・赤穂部隊(二万人)・工兵隊(三、〇〇〇人)・陸軍病院関係(二、五〇〇人)以上計三万四、一〇〇人で、その他、被爆当時入営した一、〇〇〇人を加えても四万人を越えないと言われる(昭和二十八年七月三十一日付朝日新聞)。このほか宇品に陸軍船舶司令部があり、この隷下諸部隊のうち、広島市内に駐屯していた将兵は約五～六、〇〇〇人(斉藤義雄談)であったといわれるから、これらを総合計すると当時の広島市の常住人口は三五万人程度であろう。

昼間人口

これに、八月六日朝入市した郊外からの一般通勤者、および官庁・会社・工場、あるいは建物疎開作業に出動して来た人々、推定総数約二万人(新修広島市史)を加えると、昼間人口は総計三七万人程度となる。しかし、当時の昼間人口はいちじるしく増大したとも言われ、四〇万人前後であったという見方もある。

前記のような理由により、郊外から入市する者が如何に多かったかということは、八月六日午前〇時から同八時三十分までの間に、広島・横川両駅に到着した列車に関する長岡省吾資料(昭和二十年十一月広島駅で調査)によれ

ば、総計二三本(内訳・本線上り五・本線下り八・可部線三・芸備線三)を数えるが、いずれも超満員であったし、市内電車(被爆時広島駅前では五〇〇人位の列を作った。重藤文夫談)もバス長い列をつくってようやく乗るという混雑ぶりであったことでもわかる。これらのことは被爆者の体験記に多く語られているところであるが、また、乗物のみならず建物疎開作業隊などの多くは、大竹町の国民義勇隊のように一定場所(大竹隊は己斐駅から)から徒歩で入市し、現場へ向うという人々もあり、町すじにはたくさんの市民がそれぞれの仕事場へ足を急がせていたことも事実である。

米穀通帳登録人員

次表は、アメリカの原子爆弾災害調査団と日本政府・東京帝国大学医学部の協力によって集計された「推定人口」である。ただし、これも軍関係は含まれていない。

この表の、八月六日当日の推定人口の算出方法は、市外からの通勤者・登録もれ人口・郡部(佐伯・安佐・安芸)から出動した家屋疎開動員数(一、七六八人と算定)の総計を二万人と推定し、六月三十日以降の減員を一二、三五〇人と推定して加除したうえ、算出したものである(新修広島市史)。しかし、前記のような状況から、当時の昼間人口は非常に膨脹した事は事実であって、八月六日当日の推定人口二五万五、二〇〇人という数字は、最少限度を示したものと見えよう。

被爆当時の広島市人口(推定)

	地区	米穀通帳登録人員 (昭和20年6月30日)	8月6日推定人口
1	牛田	7,019	7,900
2	尾長	8,034	9,000
3	矢賀	1,887	1,900
4	青崎	6,187	6,200
5	荒神	5,508	5,600
6	段原	10,342	10,400
7	比治山	10,440	11,400
8	仁保	4,074	4,100
9	楠那	2,178	2,200
10	大河	4,793	4,800
11	皆実	10,187	11,100
12	宇品	12,110	12,100
13	似島	1,765	1,800
14	白島	7,104	7,200
15	幟町	8,082	8,200
16	竹屋	12,353	12,500
17	千田	9,165	9,300
18	袋町	6,036	5,100
19	大手	6,076	5,500
20	中島	9,196	3,900
21	広瀬	4,980	6,200
22	本川	5,237	6,500
23	神崎	9,637	10,900
24	舟入	5,983	6,900
25	江波	6,000	6,900
26	大芝	10,057	11,000
27	三篠	12,393	12,500
28	天満	7,389	7,500
29	観音	18,429	18,500
30	福島	4,065	4,000
31	己斐	7,780	7,800
32	古田	3,830	3,800
33	草津	7,107	7,100
	計	245,423	225,200

人的被害の実数

このように被爆当時の、広島市の人口そのものが不明確であるから、人的被害の正確な把握は、さらに困難である。なぜ不明確なままで過ぎたかと言えば、原子爆弾の激甚な破壊により、行政機関自体が著しく疲弊していたうえ、種々の救護対策に追われ、これに続く無条件降伏という敗戦と、初めて経験する進駐軍問題で、世情が上下共に人混乱に陥ったためである。

また、占領軍が上陸する前に、日本の国力を示す多くの文書類が、意識的に焼却されたことも大きな原因であるとともに、敗戦による既存権力機構の信頼喪失、戦時体制からの急激な無秩序的解放、ひいては精神の弛緩・荒廃をまねき、加えて、日常生活のいちじるしい窮乏など、個人的にも、身心ともに苦しい混迷期の長く続いたがため、緻密な調査活動を行なう余裕が無かったといえよう。また、占領直後、アメリカ軍が惨禍の実態発表をきびしく取締ったことも原因したのである。

県警察部の調査

人的被害については、新修広島市史が上梓されるにあたって、その第一巻と第二巻に広範な文献資料と慎重な専門的考察によって、種々論じているが、結論は、昭和二十年十一月三十日現在で広島県警察部がおこなった次の調査結果が、公式発表としてはもっとも信頼性の高いものとしている。

死者 七八、一五〇人

重傷者 九、四二八人

軽傷者 二七、九九七人

行方不明 一三、九八三人(即死した者と推定される)

罹災者 一七六、九八七人

計 三〇六、五四五人

この県警察部の調査結果は、当時、新畑十力警部補が作成したものであるが、あくまでも推定数であって、被爆者一人一人の氏名を確認して作られたものではない。また、推定の経過も不明である。

県衛生課の調査

このほか、広島県衛生課の調査(昭和二十年八月二十五日現在)では、死亡者四六、一八五人・行方不明者一七、四二八人・重傷者一九、六九一人・軽傷者四四、九七九人とあり、行方不明者を死亡者に加えると六三、六一三人となり、負傷者は合計六四、六七〇人で、このほか一般罹災者が二三五、六五六人と計上されているので、推定総計三六三、九三九人が被爆したことになるが、調査時期がなお混乱中で信頼性が少ない。

氏名確認数

氏名の確認されたものでは、現在中島公園内の原爆慰霊碑に納められている「過去帖」の記名七二、六八二人(昭和四十四年八月六日現在・男三八、七九七人、女三三、八八〇人、性別不明五人)がある。また、同公園内北の原爆犠牲者供養塔の地下安置所内の無縁仏(遺骨)一二万体的ないし一三万体的のうち、氏名の判っている二、三五五人がある。

また、広島東警察署検視調書の記名八、三四一人、広島第一陸軍病院の病床日誌四五六人、広島市死亡届書名簿一、四一四人、地御前村戦災者収容名簿一、九四八人、及び佐東町原爆死没者調査表(昭和三十一年調・佐東町)三九四人(八木七九人・川内二四四人・緑井七一人)などが氏名の確認された数字であるが、いずれも部分的なものでしかない。このほか広島平和文化センターの資料(次表)にも氏名の確認された死亡者・負傷者があり、昭和二十五年十月一日実施の国勢調査において、広島市比治山公園内にある「原爆傷害調査委員会(A B C C)」の要請により行なわれた全国的調査(被爆者の氏名・生年月日・性別・広島、長崎別・住所)では、広島の被爆者(生存者)一五八、六〇七人の氏名が判明し、そのうち市内に九八、一〇二人居住している。また、昭利四十年十一月一日、厚生省が実施した調査では、広島・長崎の被爆者の合計は二七七、九五五人で、このうち広島被爆者は一七六、〇〇五人となっているが、死亡者数を知ることができないため、やはり部分的な数字にほかならない。

昭和 44 年 7 月現在までの原爆死没者名簿 (広島平和文化センター調査)

	番号	名簿種別	人員(人)	名簿形態	備考
43 年 7 月 20 25 日 公開	①	原爆死亡者イロハ名簿(広島東警察署関係)	8,341	B4版 111枚	広島東警察署
	②	原爆死亡者身元不明関係分名簿	87	B4版 18枚	広島東警察署
	③	原爆死没者供養塔納骨名簿	2,355	B4版 127枚	広島市福利課
	4	死亡届署名簿(広島市届出分・一般死因を含む)	1,414	A4版 45枚	A B C C
	⑤	広島第1陸軍病院職員死亡者名簿(軍医予備員を含む)	136	B4版 2枚	国立柳井診療所
	6	広島第1陸軍病院入院患者名簿(被爆関係者)	18	B4版 1枚	国立柳井診療所
	⑦	広島第1陸軍病院宇品分院死亡者名簿(被爆関係者)	28	B4版 2枚	国立柳井診療所
	8	広島赤十字分院病床日誌索引簿	456	B4版 34枚	国立柳井診療所
	⑨	広島第1陸軍病院死亡者名簿	56	B4版 1枚	国立柳井診療所
	10	広島第2陸軍病院宇品分院地方患者名簿	51	B4版 3枚	国立呉病院

分	11	広島第2陸軍病院入院患者イロハ名簿	983	B4版 74枚	国立呉病院
	⑫	広島第2陸軍病院死亡者名簿(被爆関係者)	2	B5版 1枚	国立呉病院
	⑬	広島第2陸軍病院死亡者名簿(軍医予備員関係)	47	B5版 1枚	国立呉病院
	14	戦災者収容名簿(旧地御前村関係分)	1,948	B4版 178枚	廿日市町
	小 計		15,922		
新規発見分	①	遺骨名簿(安古市専蔵寺・豊平町仙徳寺安置分)	11	B4版 1枚	
	②	罹災者収容名簿(五日市八幡公民館保存)	1,342	B4版 47枚	
	③	罹災者収容名簿(大竹市玖波支所ほか)	499	B4版 23枚	玖波・大竹
	4	原爆被災生存・死没者調査名簿	約 56,000	B4版 2,500枚	長岡省吾調査 (昭和23~24年)
	⑤	認許証請求書・死亡診断書名簿(旧五日市保存)	325	B4版 18枚	佐伯郡五日市町
	⑥	遺骨名簿(旧五日市・廿日市町の寺院に安置されているもの)	40	B4版 1枚 B5版 1枚	
	⑦	遺骨名簿(旧五日市町光禅寺・坂町小屋浦西昭寺安置分)	10	B4版 1枚	
	⑧	過去帳写(五日市正向寺関係分)	81	B4版 10枚	
	小 計		58,308		
	合 計		74,230		

市調査課の集計

昭和二十一年(一九四六)八月十日、広島市調査課では、県下の各市町村長をはじめ、市内の各町内会長、各新聞紙を通じて、被爆のとき市内に世帯があり、かつ、現に市内に居合せた人々の、被爆当時の状況やその後の状況について、本人や縁故者の報告を求め、調査課長菅尾真登以下一八人及び広島市立高等女学校生徒の応援により、次のように氏名を確認して集計をおこなっている。

昭和二十年八月六日 原子爆弾による広島市民の人的被害及び其の後一ヶ月間の状況調査統計書

広島市役所調査課

本調査は昭和二十一年八月十日を期し、県下市町村長・市内各町内会長及び新聞紙上を通じ、被爆当時、市内に世帯を有し、現に市内にありたる者に付、該当者又は其の縁故者より、被爆の状況及び現在の状況等の報告を求め、同年十二月末迄に提出ありたる十五万四千二百名の内、非該当者(市外に在りたる者、偶々市外より入市したる者、軍隊関係者等)八千五百九十九名を除きたる十四万二千八百八十三名の報告に基づき、各人の状況を整理集計したものである。因に被爆当時の広島市人口は約二十四万五千名と推定されているので、報告数を差引きたる十万二千百十七名の状況は、この統計表に含まれていない。

尚、報告中不備のもの等に付いては、次の通り処理した。

- 一、被爆時所在の町名記入なきものは、当時世帯所在の町に在ったものとして取扱った。
- 二、重・軽傷の区分なきものは、全治一ヶ月以内を軽傷とし、一ヶ月を超ゆるものを重傷として取扱った。
- 三、爆心地からの距離町名は、別表によった。

(調査用紙・集計用個人票添付)

昭和二十年八月六日 原子爆弾ニヨル人的被害報告調査表 広島市調査課(昭和二十一年八月十日調)											
距離別	報告 件数	死亡		生死不明		重傷		軽傷		無傷	
		人員	割合	人員	割合	人員	割合	人員	割合	人員	割合
0.5キロ以内	4,290	3,352	7.81	360	0.84	199	0.46	169	0.40	210	0.49
1.0キロ以内	14,689	9,333	6.35	963	0.66	1,894	1.29	1,512	1.03	987	0.67
1.5キロ以内	24,414	6,615	2.71	475	0.19	5,293	2.17	7,372	3.02	4,659	1.91
2.0キロ以内	24,711	2,646	1.07	168	0.07	4,785	1.93	8,991	3.64	8,121	3.29
2.5キロ以内	25,457	1,216	0.48	74	0.03	3,057	1.20	8,626	3.39	12,484	4.90
3.0キロ以内	16,871	400	0.24	24	0.01	1,190	0.71	4,808	2.85	10,449	6.19
3.5キロ以内	8,563	114	0.13	2	0.002	263	0.31	1,549	1.81	6,635	7.74
4.0キロ以内	9,650	98	0.10	7	0.007	206	0.21	1,516	1.57	7,823	8.11
4.5キロ以内	2,919	23	0.08	5	0.017	62	0.21	357	1.22	2,472	8.47
5.0キロ以内	4,686	31	0.06	1	0.002	36	0.08	145	0.31	4,473	9.54
5.0キロヲ超	6,633	42	0.06	167	0.25	19	0.03	136	0.21	6,269	9.45

ユルモノ											
計	142,883	23,870	1.67	2,246	0.16	17,004	1.19	35,181	2.46	64,582	4.52

昭和二十年八月六日 原子爆弾ニヨル死亡内訳 広島市調査課(昭和二十一年八月十日調)											
爆心地ヨリノ距離別	報告ニヨル所在人口	一ヶ年間の死亡総		同上内訳							
				即日死	同上ヨリ一週間以内	同上ヨリ二週間以内	同上ヨリ一ヶ月以内	同上ヨリ六ヶ月以内	同上ヨリ一ヶ年以内		
0.5キロ以内	4,290	人	3,352	2,848	246	179	55	22	2		
		%	78.1	84.96	7.34	5.34	1.64	0.66	0.06		
1.0キロ以内	14,689	人	9,333	5,180	1,527	882	1,255	452	37		
		%	63.5	55.50	16.37	9.45	13.45	4.83	0.4		
1.5キロ以内	24,414	人	24,414	6,615	3,553	998	481	838	677		
		%	27.1	53.71	15.09	7.27	12.67	10.23	1.03		
2.0キロ以内	24,711	人	2,646	1,354	442	208	189	379	74		
		%	10.7	51.17	16.71	7.86	7.14	14.32	2.80		
2.5キロ以内	25,457	人	1,216	435	227	118	106	281	49		
		%	4.8	35.77	18.67	9.70	8.72	23.11	4.03		
3.0キロ以内	16,871	人	400	117	63	29	41	124	26		
		%	2.4	29.25	15.75	7.25	10.25	31.00	6.50		
3.5キロ以内	8,563	人	114	21	13	10	12	40	18		
		%	1.3	18.42	11.40	8.77	10.53	35.09	15.79		
4.0キロ以内	9,650	人	98	15	31	4	16	25	7		
		%	1.0	15.31	31.63	4.08	16.33	21.51	7.14		
4.5キロ以内	2,919	人	23	3	8	3	5	4			
		%	0.8	13.04	34.78	13.04	21.74	17.39			
5.0キロ以内	4,686	人	31	5	16	2	3	4	1		
		%	0.6	16.13	51.61	6.45	9.68	12.90	3.23		
5.0キロヲ超ユルモノ	6,633	人	42	13	17	2	4	5	1		
		%	0.6	30.95	40.48	4.76	9.52	11.91	2.38		
計	142,883	人	23,870	13,544	3,588	1,918	2,524	2,013	283		
		%	16.7	56.74	15.03	8.04	10.57	8.43	1.19		

昭和二十年八月六日 原子爆弾ニヨル傷害内訳 広島市調査課(昭和二十一年八月十日調)				
距離別	症別	重傷	軽傷	重軽傷計
0.5キロ以内	火	62	48	110
	切	56	49	105
	打	40	39	79
	症	41	33	74
	計	199	169	368
1.0キロ以内	火	486	239	725
	切	553	576	1,129
	打	326	373	699
	症	529	324	853
	計	1,894	1,512	3,406
1.5キロ以内	火	1,794	1,069	2,863
	切	1,659	3,039	4,698
	打	1,128	2,134	3,262
	症	712	1,130	1,842
	計	5,293	7,372	12,665
2.0キロ以内	火	1,950	2,221	4,171
	切	1,414	3,285	4,699
	打	909	2,431	3,340
	症	512	1,054	1,566
	計	4,785	8,991	13,776
2.5キロ以内	火	1,250	1,492	2,742
	切	918	4,082	5,000
	打	528	2,043	2,571

	症	361	1,009	1,370
	計	3,057	8,626	11,683
3.0キロ以内	火	440	940	1,380
	切	321	1,892	2,213
	打	218	969	1,187
	症	211	1,007	1,218
	計	1,190	4,808	5,998
3.5キロ以内	火	81	323	404
	切	71	652	723
	打	39	311	349
	症	73	263	336
	計	263	1,549	1,812
4.0キロ以内	火	24	193	217
	切	78	792	870
	打	36	280	316
	症	68	251	319
	計	206	1,516	1,722
4.5キロ以内	火	18	76	94
	切	13	102	115
	打	14	100	114
	症	17	79	96
	計	62	357	419
5.0キロ以内	火	1	23	24
	切	10	56	66
	打	11	29	40
	症	14	37	51
	計	36	145	181
0.5キロ以内ヲ超ユルモノ	火	5	22	27
	切	1	57	58
	打	6	33	39
	症	7	24	31
	計	19	136	155
計	火	6,111	6,646	12,757
	切	5,094	14,582	19,676
	打	3,254	8,742	11,996
	症	2,545	5,211	7,756
	計	17,004	35,181	52,185

距離別町名表

距離別町名表(爆心地を細工町元島病院付近とす)

○・五軒以内(二四ヶ町)

紙屋町 研屋町 播磨屋町 袋町 西魚屋町 塩屋町 革屋町 尾道町 大手町一丁目 大手町二丁目 大手町三丁目 大手町四丁目 大手町五丁目 猿楽町 鳥屋町 細工町 横町 中島本町 材木町 天神町 鷹匠町 塚本町 左官町 鍛冶屋町

一・〇軒以内(四六ヶ町)

鉄砲町 東胡町 斜屋町 下流川町 八丁堀 胡町 平田屋町 堀川町 三川町 基町 東魚屋町 立町 鉄砲屋町 中町 新川場町 下中町 大手町六丁目 大手町七丁目 木挽町 元柳町 中島新町 水主町 空鞘町 油屋町 猫屋町 堺町一丁目 堺町二丁目 堺町三丁目 堺町四丁目 西地方町 西引御堂町 錦町 十日市町 西新町 広瀬元町 横堀町 西九軒町 西大工町 榎町 北榎町 小網町 舟入町 小町 雑魚場町 竹屋町 新市町

一・五軒以内(三七ヶ町)

稲荷町 土手町 上柳町 平塚町 幟町 石見屋町 下柳町 山口町 鶴見町 上流川町 銀山町 弥生町 薬研堀 田中町 宝町 西白島町 富士見町 南竹屋町 東千田町 国泰寺町 横川町一丁目 大手町八丁目 大手町九丁目 寺町 広瀬北町 河原町 舟入仲町 舟入本町 中広町 上天満町 天満町 東観音町一丁目 東観音町二丁目 西観音町一丁目 西天満町 橋本町 千田町一丁目

二・〇軒以内(三五ヶ町)

松原町 的場町 段原大畑町 桐木町 大須賀町 台屋町 京橋町 金屋町 段原町 二葉ノ里 松川町 白島九軒町 東白島町 比治山本町 皆実町一丁目 昭和町 白島東中町 白島中町 平野町 白島北町 白島西中町 千田町一丁目 楠木町一丁目 楠木町二丁目 三篠木町一丁目 横川町二丁目 横川町三丁目 吉島町 吉島羽衣

町 打越町 舟入幸町 南三篠町 西観音町二丁目 観音本町 比治山町

二・五軒以内(二四ヶ町)

若草町 愛宕町 西蟹屋町 段原末広町 牛田町 猿猴橋町 荒神町 段原新町 段原中町 段原東浦町 南段原町 皆実町二丁目 楠木町三丁目 楠木町四丁目 千田町三丁目 南千田町 三篠本町二丁目 三滝町 吉島本町 山手町 舟入川口町 南観音町 福島町 比治山公園

三・〇軒以内(一八ヶ町)

尾長町 東蟹屋町 南蟹屋町 段原山崎町 霞町 出汐町 皆実町三丁目 翠町 宇品町十五丁目 宇品町十六丁目 宇品町十七丁目 宇品町十八丁目 大芝町 三篠本町三丁目 三篠本町四丁目 己斐町 段原日之出町 曙町

三・五軒以内(九ヶ町)

仁保町大河 旭町 宇品町十丁目 宇品町十一丁目 宇品町十二丁目 宇品町十三丁目 宇品町十四丁目 新庄町 江波町

四・〇軒以内(一一ヶ町)

矢賀町 大洲町 東雲町 仁保町本浦 仁保町丹那 宇品町六丁目 宇品町七丁目 宇品町八丁目 宇品町九丁目 古田町 庚午町

四・五軒以内(六ヶ町)

仁保町楠那 宇品町一丁目 宇品町二丁目 宇品町三丁目 宇品町四丁目 宇品町五丁目

五・〇軒以内(五ヶ町)

仁保町湊崎 仁保町日宇那 草津東町 草津本町 草津浜町

五・〇軒以上(五ヶ町)

仁保町向洋 仁保町堀越 元品町 似島町 草津南町

この昭和二十一年八月十日の調査結果について、二十二年二月二十五日に都築正男博士が来広の際、集計表を提示して意見を求めたところ、「統計学的には不可能につき、このまま資料とするほかない。」と語った(市調査課資料メモ)。

近接被害推定数

しかし、この調査結果は部分的に過ぎ、実数とはあまりにも離れているので、これを基礎として、当時の市内在住者で被爆状況を目撃した人々、および被爆直後にこれら被害状況を調査した諸種の計数などをにらみ合わせて、調査課はさらに、次表のような推計をこころみているが、この推計数が軍隊を除く実数に、もっとも近接したものと考えられる。

原子爆弾による人的被害数(推定)表 (昭和21年8月10日市役所調査課)

距離別	死亡者数	重傷者数	軽症者数	生死不明者数	無傷者数	合計
0.5 軒以内	19,329	478	338	593	924	21,662
1.0 軒 "	42,271	3,046	1,919	1,366	4,434	53,036
1.5 軒 "	37,689	7,732	9,522	1,188	9,140	56,271
2.0 軒 "	13,422	7,627	11,516	227	11,698	44,490
2.5 軒 "	4,513	7,830	14,149	98	26,096	52,686
3.0 軒 "	1,139	2,923	6,795	32	19,907	30,796
3.5 軒 "	117	474	1,934	2	10,250	12,777
4.0 軒 "	100	295	1,768	3	13,513	15,679
4.5 軒 "	8	64	373		4260	4,705
5.0 軒 "	31	36	156	1	6593	6,817
5.0 軒以上	42	19	136	167	11,798	12,162
合計	118,661	30,524	48,606	3,677	118,613	320,081

すなわち、次のような結果となる。

死亡者 一一八、六六一人…38%

負傷者(イ) 七九、一三〇人

(内訳)重傷者 三〇、五二四人

軽傷者 四八、六〇六人 25%

生死不明者(ロ) 三、六七七人

((イ) + (ロ) = 八二、八〇七人)

以上被害者合計 二〇一、四六八人…63%

無傷者 二八、六一三人…37%

(比率は当時の総人口三二〇、〇八一とみた場合である)

この集計にあたって、調査課資料綴(広島平和記念資料館所蔵)には次のような作成経過が記録されている。

(調査課記録)

◎本表は昭和二十一年八月十日現在を以って、広島県下の市町村長(広島市内は町内会長)へ調査を依頼し、得た結果一五一、四一二名(町内名不明、生死不明者一、〇三一名・市外負傷者数((被爆時、市外にて負傷))一二〇名・軍隊関係一、四一一名・本調査より除外すべききものと認められるもの七、三七八名、計九、九四〇名)、及び当時市在住者にして被爆状況を目撃せる人々の意見、被爆直後に之等被害状況を調査されたる計数等を睨み寡合わせて、総合結果を作成したるものなり。従って推計はどこまでも推計であることを脱し得ない憾みはあるが、最も事実に近い数字であることを信じて記載せり。

◎被害を受けた町を単位として統計するが、立前なるも、事實は之に反するものあること。之は申告員数と被爆直前在住人口との間に余りに懸隔ある為、このバランスをとる為、本表作成上、無理を来したること。

◎一部町内会(十五か町)にては、申告事項の集計を無修正のまま記載せり。之は、当時、在住人口と比較し、申告数多き為、実数なりと認めたるが為なり。

◎本統計は、申告書を生かす意味に於て、正直に受入れたる統計数字なる為、その表われたる数字に疑義を生ずる点尠からずと思われる。

◎申告書に於て、被爆時、現に居たる場所の不明なる場合は、被爆当時の世帯を以て、便宜集計したり。

◎重軽傷不明のありたる場合は、全治一か月以内を軽傷とし、他を重傷とせり。

◎全滅なりと思われる町内より、無傷者の出たるは、遇々市外出張中、旅行中、市内の他の地域へ外出中のものと思さる。＝処置

◎前記と逆の場合も考えられる。即ち死亡者無しと思われる町に、死亡者相当数に及ぶは、死亡場所を誤って申告書に記入せる為と思われる。＝処置

◎町別人口、同時に店内会長に申告を願いたる被爆直前人口による。但し、一部(六八町)町内会単位の不詳により、同申告の建物被害の部より戸数の割合により推定人口を記載す。

◎軍隊関係は之を除外したり、(申告数一、四一一名、実数は五万を出るものと思わる)

◎町名区分の判明して居ないもの一八町区分(八五)に及びたり。之は同一数字を当つ。

例 実申告に於て

流川と単にたっているのを、上流川・下流川

中島—中島本町・中島新町

字品—自一丁目 至十七丁目

(一八か町)(八五区分)

この推計資料一件は、原爆戦災誌編集にあたり、広島市の所蔵する資料を調査中、他の古い文書綴りと共に焼却される寸前に発見して持ち帰った簿冊「原子爆弾による人的被害及び一か年後の状況調査綴 調査課」のなかにとじこまれていたもので、昭和二十一年八月十日付調査を基礎として、他の資料などを勘案して、さらに近接数を求めたものである。当時、調査課の私案として作成されたものか、これまで、発表されたことはなかったように思われる。

しかし、集計表につけられた作成経過に述べられているとおおり、あくまでも推計であることには間違いはない。

現在(昭和四十五年一月)、広島大学原爆放射能医学研究所とNHK広島中央放送局が、広島市の協力を得て、全市域にわたり進めている被爆地図復元作業が完成したあかつきには、科学的に証明できうる実数が掌握されるものと期待されている。

外国人被爆者

しかし、これらの被爆者のほかに、朝鮮人・中国人・アメリカ人・白系ロシア人、西ドイツ人、あるいはインドネシア・マレーなどからの留学生など、日本人以外の被爆者がかなりいたことを忘れてはならない。

朝鮮人・中国人

第二総軍教育参謀李グウ公殿下の死亡は暫くおき、特に注目すべきは、朝鮮半島から戦時中労務対策による集団移入によって、内地在留朝鮮人の数は、極度に膨張し、終戦時全国で一九三万人いたと推定され、このうち集団移入労務者が約二五万を占める状況であり、終戦直後の広島県下在住朝鮮人は約六万人、このうち三、四万人が広島市内にいて被爆したという事実である。

平和公園内の原爆慰霊碑の過去帖には、現在(昭和四十五年)一五五人の朝鮮人死没者が記名されているが、実数はまだまだ多数であろうことは確かである。

昭和四十年(一九六五)十一月初め、中国新聞社の平岡敬報道部長は、朝鮮人被爆者の実態調査のため、大韓民国を訪れたが、帰国後発表した手記において、「植民地政策の進行に伴って、没落農民たちは故郷を捨てて日本へ流れて来た。さらに太平洋戦争の激化とともに、強制徴用や徴兵によって多くの朝鮮人が“人的資源”として日本に連行され、戦争に協力させられた。一九三九年(昭和十四年)から四五年(昭和二十年)までに、日本に徴用された朝鮮人は約百万、朝鮮本国内で動員された者四五〇万、軍人・軍属は三七万人といわれている。広島・長崎にあった造船所や軍需工場にも、もちろん多数の朝鮮人労務者がいた。広島市郊外に住む元協和会指導員だった老人の話によると、戦時中広島の三菱造船所と三菱機械製作所に合わせて一、五〇〇人の朝鮮人がいたという。“協和会”は昭和十三年ごろから全国各府県につくられた組織で、在日朝鮮人の同化をめざすとともに、その動向を常に掌握・監視し、これを総動員体制に組込むためのものであった。内務省警保局調査の数字では、一九四三年(昭和十八年)の広島県在住朝鮮人は六八、二七四人、翌年には八一、八六三人と激増している。とすれば、被爆時広島市内には三万人くらいはいたと思われる。ところが、死亡者数も帰国者数も全くわからない。そのような調査はこれまで一度も行なわれたことがなかったからである。

現在、韓国には一万人以上の被爆者がいると推定される。(中略)…韓国原爆被害者援護協会は社団法人として認可された。登録会員は一九六八年六月末現在で一、七九〇人。居住地別にみるとソウル市四二一人、釜山市二三四人、慶尚南道二八四人、慶尚北道二二一人、忠清北道一七〇人といった分布で、韓国南部に集中している。しかも会員から届け出のあった死亡者だけでも二六四人もいることは、何の救いも受けぬまま死んでいった被爆者が、まだほかにたくさんいることを暗示している。会員の被害状況については、多い順に並べると、火傷二三四、半身不具者九二、心臓病五五、精神異常者三四、内臓障害三二などとなっている。もちろん、この調査はアンケートであり、医学的正確さには欠けると思われるが、被爆者たちは、このアンケートにこれまで訴えるすべもなかった悲しみ、恨み、怒りをこめているに違いない。(以下略) (ドキュメント日本人8・アンチヒューマン)」と、調査状況を述べている。

平岡記者は、韓国を訪れて面談した被爆者の一人、林福順について、「…暗いオンドル部屋で、薄い布団にくるまっていた。もう半年も寝こんだきりだという彼女は、人が変わったようにやつれていた。そばに二男の金充植君(一九五五年生れ)も病気で寝ている。

『米が買えないので、小麦粉ばかり食べている。せめて治療費がもらえれば、生活に追われないですむのだが…』と語った。

理髪師の夫の収入は月一五、〇〇〇ウオン(約二万円)足らず。薬代が五、六〇〇ウオンもかかるので、一家五人の生活は苦しい。林さんの言う治療費など、どこからも出るはずのないことは、彼女自身が身にしみて知っているはずだ。だからこそ彼女は言うのであろう。『生きていても役に立たないので、このからだを“原子病”の研究材料にしてほしい』(以下略)」と、被爆による障害の、生活破壊の悲惨な状況を報告している。

この林福順(旧日本名林ヤス子)は、昭和四十三年(一九六八)十二月十日、巖粉連(旧日本名皆川粉連)と二人で、広島市を訪れ、日本赤十字社広島原爆病院で治療を受けたいと願い出た。両人は十二月八日に京都で開催された第二次大戦韓国犠牲者慰霊祭に参列する韓国代表の一員として日本に来たのであった。しかし、観光ビザで入国したため原爆手帳が支給されず、入院費がかさむので中途退院のやむなきに至ったが、その時、崔益守牧師を通じて、次のような被爆体験記を、巖粉連と共に戦災誌の資料にと提出した。

広島で生れて 林福順(旧日本名 林ヤス子 当時・一五歳)

私の家は、皆実町三丁目西部二十二組にあり、第三国民学校(高等科)に通学していました。

八月六日、市役所の裏の雑魚場町で建物疎開作業に出動中、被爆したのです。

突然、いな光りと同じような光りかたをしたと思うと、ドーンと大爆発する音をききました。両手で耳と目をお

さえて、すぐ伏さったのですが、石ドウロの下敷きになりました。

私は気絶していました。

何分ぐらいたったか知りませんが、私が気づいたときには、周囲がまるでくもった日のように暗く、なァにも見えませんでした。

起きようとしたのですが起きられません。

「たすけて!たすけて!」と、私は幾度も大声でくりかえし叫びましたが、助けに来てくれる人はいませんでした。

私は少しずつ身体をうごかしながら、ようやく脱け出すことができました。

だが、どこへ逃げていけばよいのか道がわからないので泣いていました。

そこへ兵隊さんが来て、「あっちの方へいったら巡査がいるから、道をきいて逃げなさい。泣いちゃダメ…」と、言われた。

私は教えられたとおりに行くと、皮膚が破れて垂れさがっている巡査さんがいて、道を教えてくださいました。

御幸橋まで行ったとき、左右の腕やら顔が痛みはじめました。見るとヤケドした皮膚が破れ頭巾のようになって、ブラ下がっていました。

顔は見ることはできませんが、ズクズクとうずくのです。その痛みは言葉で言うことはできません。

家に帰ったのは、十一時過ぎたころだと思います。

家に帰ってからは、目まいがするし、ノドはかわくし、苦しくてたまりませんでした。

父も兄も火傷をしていました。

その年十二月中頃、家族八人と共に韓国へ引揚げましたが、頭髪のない女なので、私は世間の笑い者となり、一年半、就職はもちろんできませんでした。

その後、ずっと病人のような状態から抜けられません。

なお、軍人・軍属関係の被爆者もかなりいるはずであるが、現在、広島陸軍病院関係の入院患者カルテを保管している山口県の柳井国立療養所において調査(昭和四十四年)したところ、次表のような人々の記録があった。しかし、これが全数でないことは当然で、広島陸軍病院本院から中国地方各地の分院へ、カルテを持って転送された者が、かなりあることを念頭におく必要がある。

軍関係の被爆者

朝鮮の部

順	氏名	出身地	所属	被爆場所	受傷状況	年齢
1	金川甲在	金羅南道海南郡北平面万樹里	炸第八〇七七部隊高橋隊陸軍一等兵	広島市	切創(全身)脱毛	大正十三年生
2	佐伯鳳京	平安北道龍川郡東上面城東洞	中部一〇四部隊陸軍一等兵	広島市	頭部背腰部右大腿上腹部爆弾破片傷	大正九年生
3	平林洛成	金羅北道益山郡王宮面都巡里三三	中国第一三九部隊陸軍一等兵	所属部隊にて防空警備中	顔面胸部両手火傷(第三度)死亡(20.8.22)	大正十三年生
4	倉田清治	忠清南道青洋郡青用面相川里	暁第一六七一〇部隊サ隊陸軍二等兵	船舶通信部補充隊兵営内	右顔面背部両手足火傷	大正十五年生
5	天野義勇	忠清南道唐津郡牛江面松山里三〇三	機動輸送隊補充隊材料廠陸軍二等兵	第一陸軍病院入院中		大正十四年生

台湾の部

1	張 金江	台中州台中市下橋市頭	浪第八一一部隊軍属	所属部隊にて防空警備中	第二度火傷(顔面右手背兼脊背部擦過傷)死亡(20.8.28)	大正十三年生
2	史 天培	高雄州岡山郡岡山街二八二	中部五十一部隊軍属	広島市	背胸部打撲傷死亡(20.9.4)	明治四十四年生

(註)一、第一陸軍病院関係のみである。

二、朝鮮の部は、二冊のうち「その一」がない

三、台湾の部は、二冊のうち、原爆関係は「その一」に右表に二人の名前のみがある。

右表の「台湾の部」の二人のほかにも、牛を盗殺した科により、西警察署に留置されていて被爆、死亡したと言われる張樹寛・李成仁・楊子玉・呂君仁・王文章以上五人(旧内務省警保局関係調書)が判明している。この五人は、昭和十九年七月、華北勞工協会が中国山東省から日本へ強制移住させた労務者で、同年八月六日から一年間、広島県山県郡安野村(西松組作業場)において、強制労働に従っていたものであるという。

中国選抜留学生

このほか、NHK報道局長屋龍人プロデューサーの調書資料によれば、「中国選抜留学生」として、広島文理科大学および広島高等師範学校に在学していた人々がいる。これらの人々は、現在、中国に帰っている留学生関係者その他の証言では、当時、中国大陸からの留学生は一二、三人ぐらいおり、四人ないし六人(満州・モンゴル出身)が被爆死亡した。このうち氏名の判っているのは内モンゴル出身の張家驥一人である。

学校で授業開始直前に被爆し、かなりの負傷をしたが、現存(昭和四十五年十月)して氏名の判っている人々は、中華民国蘇州出身で、現在、中華民国大使館勤務の朱定裕の証言によると、次のとおりである。

出身地	氏名	学校名	摘要
蘇州	朱定裕	広島高等師範学校(文科)	(一)朱定裕以外の四人は、昭和二十六、七年ごろ中国に帰った。 (二)初慶芝は被爆後、東京文理科大学で、ダントの研究により学位をとり帰国した。
北京	董永増	広島高等師範学校(理科)	
満州	由明哲	広島文理科大学(理科)	
満州	王大文	広島高等師範学校(理科)	
満州	初慶芝(女性)	広島文理科大学(文科)	

留学生たちは、清風荘(雑魚場町三二三)・興南寮(大手町八丁目付近)、あるいは東千田町・平野町・富士見町などの市民の家に下宿して通っていたが、中華民国の留学生は、主として南方留学生と同じ興南寮に人っており、満州・モンゴルからの留学生は、爆心地に近い某外科医の屋敷内にいたため、全滅したと言われる。

なお、広島文理科大学の永原敏夫教授がまとめた「外国学生生徒名簿—広島文理科大学・広島高等師範学校」によると、昭和二十年の時点で留学生一四人が数えられる。このほか、金という姓の朝鮮系満州人が、被爆直後、生残っていたという(朱定裕談)。

さらに、留学生関係者のあいだでは、広島刑務所にいた中国人捕虜約六人が死亡したと語られている。ただし、この六人は、前記の西警察署に留置中被爆した五人のことかもしれない。また、中華民国・満州・モンゴルから中学生くらいの少年が三、四人、広島市民の家庭に、養子のような形で住み、学校に通っていて被爆したと言われるが、現在、その確証は得がたく、勿論、生死についてもまったく判っていない。

西ドイツ人

このほか外国人被爆者としては、幟町のカトリック教会のアーゴ・ラ・サール神父、及びウィルヘルム・クラインブルグ神父(両者とも西ドイツ出身、戦後、日本に帰化した)が教会で被爆、負傷したが生命は助かった。

白系ロシア人

また、京橋町で洋服店を営んでいた白系ロシア人のフェードル・パラシェチン、アレクサンドラ夫妻は、店内で被爆、負傷したが、現在、神戸市に住み、健在である。更に、上柳町(現在・橋本町)に居住し、毎日、市内にロシアパンを売り歩いていた白いヒゲのパン屋のポール・ボルゼンスキーが被爆、行方不明(死亡)となり、生前親交のあった洋品店主原安夫が遺族代りとなって広島市役所に届けいで、原爆慰霊碑の過去帖に記名された。また、コーカサス人で白系ロシア軍の中佐であった音楽家夫妻(失名)と、その子のアンナ、デビット姉弟が被爆(場所不明)し、倒壊家屋の下敷きになって四人とも負傷したが、死は免れた(トルーストロー(二十五年)五月号、アンナ・ドレイゴ手記)。

アメリカ人

原爆慰霊碑の過去帖には、上野幸吉の届け出によって、広島憲兵隊本部内で死亡したアメリカ軍の航空少尉トニー・某と、広島城内の中国軍管区司令部法務部の拘留所で被爆死亡したアメリカ兵捕虜ジョン・アラン・ロングが甥のロバート・ロング牧師の届け出(昭和四十五年八月六日)によって記名されている。毎日新聞社銭本三千年記老の資料によると、ジョン・アラン・ロングは、昭和二十年七月二十八日、呉軍港に停泊中の戦艦「榛名」攻撃作戦に、フィリピンから出撃し、爆撃中に日本の対空砲火により撃墜された。その乗員八人のうち、ジョンら三人がパラシュートで脱出し、呉市に抑留されたのち、八月四日、ジョン一人が広島に移送されて被爆、死亡したと言われ

る。

当時中国地方に來襲して撃墜された敵機は、かなりの数にのぼるが、パラシュートで脱出後、捕虜になったアメリカ兵は、すべて中国憲兵隊司令部に送られた。このうち将校は東京(大本營)に転送されたが、下士官以下は、中国憲兵隊司令部・歩兵第一補充隊・中国軍管区司令部の三か所に分散抑留された(元憲兵准尉柳田博談)。

昭和二十年七月二十六日、來襲したコンソリデーテッドB24四機のうち、一機が佐伯郡八幡村の山中に墜落、二人の搭乗員がパラシュートで脱出した。このとき、歩兵第一補充隊(二部隊)から約二〇人の武装兵がトラックで降下現場に駆けつけ、警防団に捕えられていた二人を、その日の夕方、同隊に連れて帰った。この時、出動した兵士の一人である同隊医務室勤務の増本春男衛生上等兵は、その二人の捕虜の食事(米飯・ふかしジャガイモ・みそ汁)を運んだが、その時、腕などの擦過傷の手当(ヨーチン塗布)もした。捕虜の二人は、航空兵とは思われないような青みがかった簡単な作業服を着ており、頭髪は茶褐色で短い兵隊刈り、一人は二〇歳くらい、他の一人は二六、七歳の若い兵隊で、何かおびえており、「おそろしい、おそろしい」と言う。通訳の見習士官が、「捕虜になったから恐ろしいのか?」とたずねると、「いや、ここにいたら死ぬるのだ。近いうちに広島が全滅するような爆弾が投下される。ここにいては死ぬる。」と答えた。捕虜二人は二日間、同部隊にいて、その後は憲兵隊に渡されたようである(増本春男談)。

この二人の捕虜を加えて、このころアメリカ兵捕虜二三人(うち、一人か二人は女性通信員という)が、前記三か所に抑留されていて被爆したという。戦後、憲兵隊司令部の金庫に保管してあったアメリカ兵捕虜の認識票二三個を、柳田博の案内により、進駐軍が死亡捕虜の証拠品として持ち帰った(柳田博談)。なお、金庫は、憲兵隊の焼跡で発見された。

中国軍管区司令部の地下通信室に学徒隊として出動していた岡ヨシエ(旧姓大倉)が、被爆の翌七日、司令部の焼跡に行ったとき、「第一の城門わきに、まだ年若いアメリカ兵が横になっていた。しきりに『ウオーター、ウオーター』と、私達に呼びかける。」と、その手記「交換台と共に」の中で記述しているが、中国新聞社の大佐古一郎記者も、被爆当日、司令部に乗りこんだ際、このアメリカ兵を目撃して話しかけたと語っている。このことについて、猫屋町の広島憲兵分隊(光道館内)に勤務中に被爆し、辛うじて生残った柳田博憲兵准尉(中国憲兵隊司令部特別協力班長(兼)広島憲兵分隊勤務班長)に対し、翌七日、中国憲兵隊司令部の蔵本数夫憲兵軍曹が、“中国軍管区司令部付近で、二五、六歳の小柄な茶色の髪のアメリカ兵を発見した。瀕死の重傷であったが、猫屋町の広島憲兵分隊へ連行する途中、自分も被爆して倒れそうなため、やむをえず、相生橋の手前の土手に置いて来た”という意味のことを報告した(柳田博談)。

また、今堀誠二著「原水爆時代(上)」には、被爆の翌七日午前十一時頃、毎日新聞の重富芳衛記者が、相生橋を東に渡って、護国神社付近にさしかかったとき、前方の紙屋町の方角から、裸に近い服装の背の高いアメリカ人が、電車通りにそって駆け足でやって来た。ちょうどその頃、相生橋の橋畔では芸備線の奥地から出動した警防団の一隊が、被爆により埋もれた道路の啓開作業に当たっていたが、アメリカ人を見つけると、トビグチやシャベルなどを取って、行く手をこぼみ、うしろ手にしぼりあげた。縄などない焼跡のことで、路上に落ちている切れた電線を使い、アメリカ兵をうつ伏せに押しつけたうえ、路傍に倒れていた電柱に手錠代りの電線じりを結びつけた。早朝来、同胞の凄惨な屍体を何千となく見てきた警防団員は、「この仇を討て」とばかり、口々に罵倒したり、なぐったり蹴ったりして、闘志を燃やした。ということが記述されているが、重富記者の感違いか、柳田博の談話と、経過がやや異なっている。

このアメリカ兵捕虜の死体は、多数の市民が目撃しているが、西練兵場西南端にあった陸軍偕行社(中国憲兵隊司令部隣り)の焼跡にも、アメリカ兵が死亡していたと言われる。この両捕虜とも氏名がわからないが、毎日新聞の記事(昭和四十五年七月十二日付)によれば、八月五日朝、中国憲兵隊からアメリカ人捕虜を取調べるよう第二総軍司令部に依頼があり、同司令部参謀部第二課の東田和四見習士官が通訳一人(氏名不詳・教授)を連れて出向し、同日午後一時ごろ、憲兵隊一階の会議室で捕虜二人に会った。一人は「ビジネスキー」と名乗る中尉で、身長約一・八メートル、二二、三歳、赤茶けた髪の好青年、薄茶色の飛行服を着ていた。他の一人は、身長がやや低く小柄。草色の飛行服で、階級は軍曹であったようである、と報道している。しかし、東田見習士官が取調べた捕虜二人が、偕行社跡や相生橋畔(東詰の北側とも南側ともいう)で死んでいたアメリカ兵かどうかは、はっきりしない。なお、広島憲兵隊本部の西門の所にもアメリカ兵が一人死んでいたという(柳田博談)。これら死亡したアメリカ兵捕虜のうち、相生橋東詰で死んだ一人だけは、川本福一が葬り、後日、平和公園内の供養塔に、その遺骨を納めた。

前記柳田博の語る中国憲兵隊の金庫に納められていた認識票のことについて、朝日新聞(昭和四十五年九月十二日付)の報ずるところによれば、「…U P I 通信が二か月間にわたり、米国で関係記録を捜した結果、“コンフィデンシャル”(秘密)と格付けされた米側記録の存在をワシントンの国立記録文書保存所で突止め、同日この内容が秘密解除された。問題の文書は当時、日本で収容されていた米兵捕虜たちの身元・氏名を調査したもので、その中には一九四五年八月六日、原爆死した捕虜としてラルフ・J・ニール軍曹、ポール・タレット・ガンナー(階級不明)(二人は原爆投下の十日前、乗機のB24が撃墜され捕虜収容所入り)、ノーマン・R・プリセット(名前以外は不明)の氏名が記載され、原爆死した事実は同年九月、米軍当局が内密に調査したうえ、近親者に通知したという。云々」とあるが、原子爆弾投下の十日前に撃墜されたB24の搭乗員二人のうちのどちらかが、相生橋畔で死亡した捕虜ではなかろうかと思われる。

また、七日、陸軍船舶司令官佐伯文郎中将が、広島警備司令官に任命され、市内を四区分して復旧・救護作業に乗りだしたが、このとき、中央部の担任司令官となった船舶練習部司令官芳村正義中将は、午後一時過ぎ、中国軍管区司令部に松村中将を訪ね、就任報告を行なった。その際、芳村中将に随行した野村清副官は、天幕張りの司令部の前に、うしろ手にしばられたアメリカ兵捕虜が、石に腰かけているのを目撃した。アメリカ兵はまだ若く二六、七歳で、上半身は、はだかであったが、傷を受けておらず、元気であったという。このアメリカ兵が、その後、どうなったかについては不明である。

さらに、宇品の運輸部構内にあった陸軍軍需輸送統制部の統制班班長田村治郎陸軍大尉が、被爆負傷者の救援作業の合間に、土橋付近の建物疎開作業に出動していた妻(のち死亡判明)の安否をたずねてゆく途中、七日午前九時ごろ相生橋にさしかかった際、橋の東詰めで、一人の若い金髪のアメリカ兵が焼跡の中に、横たわっているのを見つけた。アメリカ兵は、赤・青・黄の原色の派手な花模様のパンツだけの裸体で、まだ生きており、負傷した老婆が石を投げつけていた。アメリカ兵は、田村大尉を見ると、かすかに片目をとじて、何か合図をしたようであった。足もとには、投げつけられた石が、幾つか転がっていた。妻の安否が気にかかり、そのまま通り過ぎて、夕方五時頃、再び通ったときには、朝見た場所ですでに死んでいたという。

次の日八日、旧城内の師団司令部に田村大尉が行った際には、胸毛の多い三、四〇歳の肥満した丈の高いアメリカ兵二人が、両手をしばられて死んでいるのを目撃したという(田村治郎談)。

また、中国新聞社写真部の松重美人部員が6日夜十一時頃、被爆状況を視察して翠町(電車通り)の自宅に帰っていたとき、家の前を、毛布を頭からかぶせた丈の高いアメリカ兵を、一人の憲兵が宇品の方へ歩かせていくのを目撃したと語っているが、その後どうなったかは不明である。後日、宇品のある畑(現在競輪場)に外人名の白木の墓標が立っていたが、同人のものかどうかこれも不明である(佐々木雄一郎談)。

南方特別留学生

また、戦時中來日した大東亜共栄圏文化交流留学生在が、広島文理科大学で授講中に被爆した。

当時、大東亜省は、大東亜共栄圏構想の一環として、中国大陸と東南アジア地域から、官費留學生を迎え入れていた。この留學生制度は、前述の中国大陸からの「中国選抜留學生」と東南アジア地域からの「南方特別留學生」からなり、広島では広島文理科大学・広島高等師範学校が、毎年受入れていた。

「国際学友会」の沿革誌によれば、昭和十八年八月に南方留學生二七人來日、一九年に一五人來日、二十年に、広島文理科大学在学中の南方特別留學生九人が原子爆弾によって被災し、このうち三人が死亡したと記されている。

また、広島大学理学部保管の文書の中に、昭和二十年三月二十三日立案の「特設学級生徒進級ニ付伺」(広島文理科大学用紙)があり、つぎのような氏名が列挙してあるが、これらが被爆当日まで在学していたと考えられる(長屋龍人資料)。

(一) アバカル (二) オマール (三) サアリ (四) サガラ (五) サム・スハエディ (六) サントス
(七) スクリスト (八) スディオ (九) スパディ (一〇) ダイラミ (一一) タルミディ (一二) チャン
チェンボ (一三) パーシルニー (一四) ポスタム (一五) モスカルナ (一六) モンウィンチュ (一七)
モンテットン (一八) モンモンソー (一九) ユソフ

当時、これら留學生は、インドネシア・ビルマ・マレーシア・フィリピン・ボルネオなどの各地から二〇余人留學していたが、現在(昭和四十五年)判明している人々は、次のとおりである(毎日新聞記者・錢本三千年資料その他)。
死没者(四人?)

インドネシア…サイード・オマール(昭和二十年九月三日、京都大学病院にて原爆症発生死去・京都円光寺に葬る)

国籍不明…NIK YUSOF BIN NIK ALI(広島県佐伯郡五日市町光禅寺にある墓銘)

生存者(四人)

インドネシア…アリフィン・ベイ(現在・駐日インドネシア大使館参事官)

右同…サガラ・アディル(現在・貿易商)

ブルネイ(北ボルネオ)…ペンギラン・ユソフ(現在・ブルネイ王国総理大臣)

マレーシア…ハッサン・ラザノ(消息不明)

被爆壊滅の思い出

一九四五年八月六日の広島(原文英語小倉馨訳)

アリフィン・ベイ

(当時・広島文理科大学留学生 現在・駐日インドネシア大使館参事官)

八時を何分か過ぎた快晴の夏の朝であった。

東南アジアから来ていた私たち四人は、自然科学の講義を受けるため、教室で教授の来るのをまだかと待っていた。教授はその時、警戒警報が二〇分前に鳴ったので、待避壕の中に入っていた。

私たち学生は、つまりインドネシアから二人と、マラヤ・ボルネオからそれぞれ一人ずつの者は、警戒警報に対して、あまりかまう気持ちがなかった。しかし、教授は非常に注意深い方であった。

警戒警報が解除されてすぐ、教授は部屋に入ってきて、「おはよう」と言いながら、白いチョークを取りあげ、講義をはじめた。「先週話しました…」と、言いながら、黒板の方に歩み寄り、右手を挙げて何か書こうとした。

その瞬間、今思いですが、教室の左側の窓から光が飛んできた。突然、まっ暗になった…。私たちの木造の建物が崩れた。

無意識のまま、気がついたときには、部屋は、まっ暗であった。窓から外を見たが、戸外の陽が落ちたようであった。

私は、友だちも同様だが、あの美しい夏の朝は、一体どうしたんだろうと思った。破壊的な地震があったのだろうか。誰にも震動が感じられなかった！それとも、時限爆弾の爆発があったのだろうか。誰も音を聞いていない！それとも、天が落ちてきたのだろうか。そうでなければ、あの塵ぼこりは、みな一体どこから来たのだろうか。

そして、私たちの中の一人が「先生はどこなんだ」と尋ねた！返事がなかった。まさか、倒壊物に打たれて、その下に埋まったのではあるまいか。また、誰か声をかけた。またも返事がなかった。

恐れおののいて落下物の中を這い出て、窓を抜け、校庭におりた。少しは暗さが薄らいだようであった。校庭にはあまり人がいなかった。

大通りに出てみると、人があっちこっちの方向へむけて走っていた。とにかく早く逃げださねばと思って…。

中には黙って走り、多くの者は泣いたり、叫んだりしていた。街並みはパシャンコになった。立っているのはコンクリート建てだけである。あっちこっちで火事がおきていた。

驚き、こわくなり、私たちも興南寮へと一目散に帰った。ちょうど歩いて一〇分くらいの距離で元安川畔の所であった。学校の正門を出て人通りに出ると、狼狽している男の人、女の人が道路に充満していた。電車が一部焼けて放り出されている。たくさんの子供が裸で、腕から皮膚を剥げたままさがらせ、痛みを訴えていた。馬が一頭、道路わきで横になって死んでいた。そのそばで、百姓さんの大八車が燃えつづけていた。

寮への近道をしているあいだにも、火が、だんだんと激しくなった。倒壊した家の中から泣き叫ぶ女や子供のカン高い声が、胸をツンざく。

広島赤十字病院の前では、群衆が詰めかけ、治療を求めている。が、その数も多すぎて手がまわらないようである。

川岸にたどりつく前に、風が強く吹きはじめた。あっちこっちの火の手が、勢いをまして次々と家をなめまわった。そんな状況下で、寮を探すことは難しかった。どこの家の倒壊も同じありさまに見えた。

それでも、あるいは、この大災害に見舞われたとき、寮の中にいたかも知れぬ人の名前を呼んでみたらわかるかも知れぬと思った。

寮母さん！松下さん！サガラさん！オマルさん！

私たちは皆で呼び続けた。すると、かすかな声が倒壊物の中から応えてきた。私たち皆で、そこに走っていき掘

りはじめた。まもなく、寮母さんらしい人を救い出した。その人は結局、近所の事務所の婦人だった。

寮母さんは、自分では救いを求めなかった。彼女の声が聞えた場所に行ってみると、実は、自分を訪ねてきた妹を探してくださいと頼んだ。妹さんは、家が倒れた時には、台所にいたはずであると言う。

私たちは探しに探した。そしてついに、かすかな声が聞きとれた。それは、私たちの先輩であったサガラさんであった。彼は洋服ダンスの下敷きとなっていた。頭は、落ちてきた破片で打撲を受けていた。サガラさんのいうには、血が目をおおって何も見えないと…。

私たちは二人きりで、ダンスの上の落下物を取除こうとしたとき、真黒い煙が眼に入り、私たちの眼は、視力を失わんばかりであった。そして、火の熱さを感じはじめた。サガラさんは相当深く埋まっている。他の二人は、まだ寮母さんを助け出そうとしていた。

彼を救いだす時間があるだろうか。それとも、放っておいて川に逃げ、竹イカダに乗って自分の命を救うことにしようか？

「もう一回、がんばってみよう。強く引っ張ってみよう。ひどく痛むかもしれぬ。が、一瞬も手遅れとなつてはならぬ。」

友だちは、そう言った。二人で重なり合っている破片の中に、しっかり足固めをして、一緒に力をしぼった。

突然、何かが“音をたてて倒れた”。ダンスが、サガラさんの体から外れ落ちた。そして、煙で充満した中に、彼の頭が見え、体がのぞいた…。

間一髪だった。彼をかついで、川の筏にのせたとき、頭は血だらけだった。が、彼はまだ、自分で動く。元気が残っていた…。

川岸にそって、三〇人くらいの若い少女たちがいて、数人助けを求めながら、瀕死の状態で横たわっていた。勤労奉仕のため、早朝、近所に出かけてきた女子生徒で、彼女らは、万一、市が爆撃を受けた場合に備えて、火道を切るための家屋疎開を手伝っていたのである。

惨禍は、重労働の最中の彼女らを襲ったにちがいない。彼女らの皮膚は赤くなっていた。皮膚はまた、むげて落ちかけていた。まだ歩いたり、這ったりできる者もいた。が、ほとんどの者はどうすることもできなかった。そして、火は徐々に近づいてきた。

もうすでに遅かったので、崩れ落ちた家の下から、誰も助けだすことはできないとわかったとき、私たちは、少女たちを川筏に運ぶことに決めた。私は、川岸までもが火に包まれてしまう前に、どれだけの人を川の中に降ろして助けることができたか覚えていない。

三〇人以上だったことはまちがいないのだが…。二台の筏は、人でいっぱいになった。

しかし、川の中でさえも、狂った風にあおられた火が届き、避難場所がなくなった。風が更に強くなったとき、広い川もまた、灼熱に包まれていった。

橋の上に避難した人々は、川に飛びこまねばならなかった。

筏には、充分の余地もなかったので、私たちは、ずっと水の中にいた。熱気をいやすために、私たちは時々、頭を水につけた。イカダの上では避難民たちがみな、大声をあげて泣き叫んでいた。

火災がどのくらい続いたか、まったく記憶にない。恐ろしい熱気が下火になったのは、すでに暗くたってからだった。しかしながら、苦痛は始ったばかりであった。川の中では、見渡すかぎり、火ぶくれした人々が、苦痛に、泣き叫んでいた…。

それは、あたかも、生皮をはがれた人のようであった。私たちが、筏に乗せた若い女子学生も例外ではなかった。彼女らは苦痛に泣き、乾きに苦悶していた。夜中じゅう、私たちは水道管が破裂した場所に通った。バケツを持って、私たちは、おさえ切りたい乾きのようなものをいやそうとして、何回も何回も往復した。水をくれ、さもなくば殺してくれ！と叫ぶ。

夜になると、叫び声は幾分おさまった。幾人かの幸運な罹災者は、眠れたかも知れなかった。ひどく苦しんだ人の多くは死に、永久に苦痛から救われたのだが…。夜が更けて、軍用ボートがビスケットの配給に来た。

拡声器が、罹災者は水を飲むことを、さしひかえるよう注意した。

「遅かったなあ」と、私たちは思った。多くの人々が、川の汚水まで飲んだのに…。

翌朝、火災が完全におさまってから、私たちは学校へ帰ることに決めた。私たちの意図は、私たちの状態を学校当局へ報告することであった。

救助が必要であった多くの少女たちは、一緒に連れて行くと懇願した。

私たちが大学付近にさしかかったとき、誰れかが、アメリカは広島に「特殊爆弾」を投下したんだと、言っているのを聞いた。

(以上)

異国の友

稲富栄次郎(当時・広島文理科大学教授)

一

明くれば八月九日の朝である。空はやはりカラリと晴れて、朝から晩夏の太陽が、射るように照りつける。

「今日もまた焦土の町は熱かろう。」

私はこう考えながら、棒のような足をひこずって学校に出た。白島の電車終点に出るころは、もう汗でびしょりになる。無恰好な軍靴が、両足に錘[おもり]でもつけたように、膝頭にこたえる。

混乱狼籍を極めて、殆んど手のつけようもない学内だったが、二日三日とたつうちには、一つ一つ灰燼の教室が清掃せられて、どうにか集った教職員の腰を落ちつけるだけの余地が作られていった。

学園の善後処置や復興は、遅々として捗らない、どこから手をつけてよいやら、誰を相手に話を進めてよいのやら、全く五里霧中の有様だったが、それでも教職員の動静を調査したり、学生の安否をただしたりの仕事は、少しずつ進捗していった。初め漠然として、さっぱり見当がつかなかった学園関係の犠牲者も、次第にその全貌があきらかになってきた。

明治橋の上の死体は、正本修教授であることがわかった永原敏夫教授は、南方留学生の宿舎の付近で斃れていた。頭部に重傷した君付寅之助教授は、自宅で昨日死亡した。細川藤右エ門教授は理論物理研究所でやられた。増本政次郎教授と佐藤伊喜雄助教授とは、矢賀町の防空壕の中で死んでいた。大芝公園に、大学関係のそれらしい死体の一つあるが、或いは山本講師の死体であるのかもわからない。などの悲報が、次々と舞いこんでくる。これらを集計していくと、学園関係の犠牲者の数は、毎日の真夏の水銀のように、グングン昇っていくのだった。この統計を玄関脇の掲示板に張り出すと、たえまない来訪者の憂いにとざされた眼が、えぐるようにこれを凝視していくのである。

それでも大学の犠牲者は、他に比べると極めて軽微だった。というのは、学生は特殊の者を除くほか、殆んど全部通年動員で、近郊や他県に出動しており、学校はガラ空きの有様だったからである。これがもし平時のように、全部授業をやっている時だったら、その犠牲者は、恐らく莫大な数に上ったことであろう。現にその時学校に出ていた者は、全部が全部、痛ましい遭難者だったのである。けれども教職員の家族には、随分悲惨な者も多かった、五人、六人或いは八人という大家族で、たった二人残ったとか、三人しか残らなかったとかいうような例も二、三に止まらない。親か子か兄弟かのうち、一人か二人亡くなったというのが常識で、一家こぞって健在などというのは、稀な例外にすぎなかった。私は、ガタガタの破れ机に陣取って、あちこちからの情報に基づいて、教職員住所録の整理をしていた。市内から焼け出された者は、たいてい縁故をたよって、郡部や近県に逃げ延びている。グラウンドの一隅に小屋がけを作って、焼トタンの下に一家五人が、積み重なって寝ているという者もあった。どこかの防空壕の中で、名も知らぬ避難民と一緒にゴロ寝をしているという同僚もあった。これらを一々調査して、完全な住所録を作り上げ、学校との連絡をとるのは、大へんな仕事だった。突然、「やあ、ご苦労さん。」と、私の肩をたたいたのは、同僚斯波六郎教授である。聞けば、南方と中国の留学生に、大分ひどい患者がいるから、赤十字病院の方へでも入院させるよう、取計らってもらえぬかと言うのだった。

私の教室には、二、三か月前から、東京より転学して来た南方の留学生数人をあずかっていた。この外に中国の留学生も五、六人いたが、その中に朱という、特に私と親しい学生もいた。その矢先、留学生の係だった永原教授が遭難したので、私と斯波教授とが、その後釜を仰せつかっていたのである。

斯波教授からこの相談をうけると、私は一応留学生たちを見舞ってから、赤十字病院に出かけることにした。負傷した留学生たちが収容されていたのは、一階植物学の実験室である。焼け落ちた電線や試験管の破片で、ひどく混乱したところを、とにかく多少の取片づけをして、負傷者たちがあちこちに寝ころんでいる。私はまず中央の実験台に陣取っている朱定裕君の枕辺に足を運んだのである。

朱君は相当の重傷らしかった。熱も大分高いと見えて、息づかいは、いかにも苦しそうだった。それなのに私が

枕頭に立つと、いきなり、

「先生、来る八月十四日は、ヘルバルトの命日です。僕はその日になったら、お訪ねして先生のお話を聞こうと思って、先生の『ヘルバルト』を読んでいる最中でした。それなのに、こんな目にあって残念です。」と、言って、男泣きに泣くのである。

最近の二、三か月間私は、教室の疎開や勤労働員、防空警備などに追いまわされて、ヘルバルトの命日が数日の後に迫っていることなどは、全然忘れてしまっていた。ところが、この朱君は、私が五、六年前に書いた著書「ヘルバルト」を読んで、命日が来たら、一夕私を訪れて、大教育家の面影を偲びたいと念じていたのである。しかも私の顔を見るなり、紋切型の挨拶も見舞いも抜きにして、だしぬけに、「先生、八月十四日はヘルバルトの命日です。」と言ったところを見ると、余程真剣にヘルバルトを研究していたものらしい。こう思って、改めて朱君の顔を見ると、生死を知らぬ重傷の身でありながら、感涙にぬれたその両眼は、真理に対する情熱に、爛々と燃えているのだった。

私は、朱君のこうした態度を見ると、たとえ戦争という、余儀ない現実には追いまわられたとはいえ、ひたむきな究理の生活を放擲しなければならなかったこの頃の自分の身の上を、つくづく恥ずかしく思った。と同時に、朱君と私と、国籍民族を異にし、しかも国家興亡の関頭に立ちながら、こうして二人の心を固く結びつける学問の力に、強く打たれたのである。そして今が今まで、国が滅びて、何の学問があるかと思ひこんでいた私の頭に、ガンと一撃、大きな鉄槌を打ち降ろされたような感じもするのだった。

朱君のこうした言葉に対して、私は、

「そうかね。それは残念なことだった。そう、ヘルバルトが、エナの大学で、『教育学講義綱要』の講義をしながら斃れたのは、八月十四日だったね。もう八日、この空襲が遅かったなら、君と一夕ヘルバルトを偲びながら語ることができたのにね。」

と、答えはしたものの、朱君の生死を越えた熱情的な言葉に対して、私のこの言葉の、何と月並的な、影薄いものであったことだろう。私は「先生」と呼ばれ、真理を探究する身の辛さを、つくづく痛感したのである。

ヘルバルトの話が一通り終ると、

「怪我はどうかね。気分はどう？」と、私は、改めて問い返した。

朱君は、自分の怪我のことなどには、大した関心もないものの如く、答えた口数は極めて少なかった。ただ一つ、こういう話があった。

朱君は、空襲の数日前から、首筋に皮膚病ができて、繃帯を巻いていた。ところが空襲で首から肩のあたりをひどくやられたが、この皮膚病のために巻いていたぶ厚な繃帯によって、致命傷を免れたというのである。

人間というものは、どんなことが幸福の種になり、またどんなことが不幸の基になるやら、分ったものではない。朱君がもし被爆前に皮膚病を病んでいなかったら、彼はもう一命を失っていたのだ。不幸と思われた皮膚病が、実は、朱君の一命を救ってくれたのだ。とにかく出合いがしらにヘルバルトを云々したり、皮膚病に原因された数奇な運命を語り合ったり、私はこの日の朱君との会見から、忘れ難い印象を受けたのだった。

二

朱君の枕頭を去った私は、転じて隣室に南方の留学生たちを見舞った。やはり足の踏み場もなく散乱した実験室の中に、あちこちスペースを作っては、毛布にくるまった負傷者たちがころがっている。ボルネオのS君(サーリカサガラか不明)は、即死したことが確かであるが、屍体はまだ見つからない。マレイのオマール君は、顔面にかなりの重傷である。スマトラのハッサン君は、足をやられている。みんな異国の友人にみとられ、室の隅で、配給された食糧を炊きながら、露命をつないでいるのだった。

それでも私が訪ねて行くと、早速、

「先生、おあがり下さい。」

と、言って差し出したのは、小さいいくつかのサツマイモだった。

「これは珍しい。どこで手に入れたのだね。」

私が尋ねると、食糧増産のため、学内の運動場を打ちおこして植えた甘藷を掘って来たものであると言う。

私は南方留学生たちの、こうした有様を見て、こみ上げて来る涙を、いかんともすることができなかつた。彼らは、日本の勝利を頼みに、大東亜の建設といううつろな看板につられて、遠い異国から日本に渡って来たのである。そして、東京が危くなると、日本の中で比較的安全な所として、広島に送られたのだが、笈を広島に落ちつ

けるいとまもなく、こうした世紀の悲劇に出くわしたのである。

彼らにも、勿論親もあろう。兄弟もあろう。また彼らの帰国を待ちわびている恋人もあるだろう。それなのに、今日の悲運は一たいどうしたことか。更に彼らの明日の運命はどうなることだろう。しかも私が顔を見せると、みんな「先生、先生」と、親しみながら、鍋の底から梅干大のイモを取出して、紙片の上に並べるのである。私は、国境を越え、民族を越えて、何かしら人間共通の悩みを悩み、人間共通の心に触れていくような感じがしてならなかった。

やがて改まって、「先生、すみませんでした。」というハッサン君の言葉を聞けば、彼らが私から借りていたプラトン全集の第三巻を、一昨日の空襲で焼いてしまったというのである。

私の教室では、初めは南方の学生も、日本の学生と同じ講義を聴講させていたが、日本の学生が全部勤労働員で不在になってから、私は南方の学生だけに、ジョウエットの英訳で、プラトンのファイドンを読ますことにした。けれども、そのテキストは到底手に入りそうにもない。幸い、ボルネオから来たS君が、タイプライターが巧いというので、私から全集を借り、これを写して、彼らの手で演習用のテキストを作りかけていたのだった。ところが、原爆の一撃で、当のS君は死亡し、プラトン全集は灰になってしまったのである。私は五冊揃の全集が、一冊だけ欠本になるという惜しさよりも、この書物の焼失を頻りに詫げる留学生たちの姿が、無性にいじらしくなった。そしてほんの今、朱君と共に、ヘルバルトの命日について語った時と、全く同じ感銘に打たれたのだった。

三

私は、留学生たちの病室を出ると、すぐその足で、向い側の広島赤十字病院を訪ねた。斯波教授もついて来てくれた。大学の玄関から、赤十字病院の門にたどりつくまでに、もう体は汗でびしょりになった。病院の建物は火災と崩壊とで、満身創痍の有様ではあるが、周囲の建物に比べると、被害は極めて軽微な方だった。とにかく見渡す限り灰燼のさ中に焼残って、どうにか使用にたえるということだけでも、大したものである。

ところが病院の門を一歩くぐると、そこはまだ依然として阿鼻叫喚の修羅場である、玄関を中心として、門と間のアスファルトの上からたたきの上、下足場からホール、廊下と瀕死の重傷者が、担架で運びこまれたまま、或いは喘ぎ喘ぎたどりついて、そこにばったりと倒れたまま、何千ともなく放りっぱなしになっている。その間に、やっと一人通れる位の道があげてある。余程気をつけて通らないと、足の先で死人の頭をこづきそうである。

しかも私たちが通りかかると、まだいささかでも息の根の通っている病人たちは、十人が十人、断末魔の凄惨な眼付きで、ジロジロとその顔を見るのである。多分自分の身内の者か知人かが来たのではないかと思って見るのであろう。エビのように飛び出した眼、逆に眼窩深く落ちこんだ眼、焼けただれて眼ぶたが裏返しになった眼、見えても見えなくても、病人たちは一斉に十人十色の、そのお化けのような両眼を、私の方にさし向けるのである。私はほんとうに地獄の閻をまたぐような気持ちだった。

看護婦や医員などは、どこにどうしているのやら、容易に姿は見つからない、多分、看護婦や医員たちも、一昨日の一撃で、総なめにやられてしまったものであろう。たとえ十人や二十人の看護婦が残っていたところで、この大量の出血と重病人とを、どうとも始末のできようはずはないのである。それに薬品や資材なども、こう押しかけられては、とても行きわたるどころの話ではない。

「せめて、留学生たちを赤十字病院にでも入院させたら、手当ても給与も、いくらかまじらう。」と考えながら、ここまで来た私は、「これでは手当てもくそもあったものではない。学校の焼跡の方がよっぽどましだ。」と考えなおしたのである。

けれども相手は外国人のことである。何とか多少の便宜は計ってもらえるのかも分からない。とにかく院長に会って見ようと、引返しかけた踵を、またもとに戻して、足の踏み場もない地獄の細道を、押しわけ踏みわけ、竹内院長の室までたどりついた。

院長室は、一階向って右側の、一番奥の室だった。地獄さながらの病院であるが、ここだけはともかくも室らしい姿を留めている。看護婦に名刺を渡してドアをあけると、院長自身も重傷を負って、ばったりと寝台に倒れていた。それでも私と斯波教授とが枕頭に立つと、寝台の上に上半身を起して応接してくれたが、勿論期待したような特別の便宜は、全然期待できないことだった。私らが駄目とは知りつつも一応の懇請を終ると、院長は、

「おいでになるのは差し支えありませんが、こんな実状で…」と答える。「こんな実状で…」と言われると、玄関からここまで、まざまざと実状を目撃してきた私にとって、もう二の句はつげない。

院長の話によれば、病院には広島で知名の士が、いくらか頼って来たが、勿論無名の士も知名の士もあったもの

ではない。たたきの上や、廊下の隅っこに放ったらかしたまま、ろくに繻帯一つ巻いてやれない有様だということだった。

留学生援護の問題を、自分の方から打ちきった私は、同じ牛田町で、すぐ目と鼻の所に住んでいる竹内院長と、しばし雑談をかわした。牛田町の被害状況から、今度の新型爆弾の性能など。更に医学上の立場から見て、このたび受けた傷害の特徴など。けれども、自身病床に呻吟している院長には、まだこれという見通しも対策もあろうはずはない。私は院長の快癒を祈りながら、病院をあたふたと辞去したのである(昭和二十四年、広島図書株式会社刊・稲富栄次郎著「世紀の閃光」抜粋)。

建物被害状況

建造物の被害は、人的被害とまた同様に、爆風圧により一瞬に倒壊粉碎し、続く火災の発生によりまたたくまに猛火に包まれ、当日午後四時ごろまでに、ほぼ自然鎮火した。

ただし、爆心地付近の建物は、人間とおなじく、炸裂の瞬間、一挙に焼失という状態であったであろうことは想像できる。爆心地から半径五〇〇メートル以内の地域は、被爆直後に踏みこんだ市民の体験によれば、地域一帯が相当な深さの白い灰によっておおわれていたという。

木造家屋

原子爆弾災害調査報告書にも、木造家屋は、爆心直下から半径一キロメートルの圏内では、大部分が瞬間的に粉碎せられ、一〜二キロメートルの範囲内では全壊し、二〜三キロメートルでは大破、三〜四キロメートルでは中破の損害を受けたとしている。

大破とは、到底住むに耐えない程度までに破壊された状態を言い、ところによっては、タタミまで巻きあげられたくらいであった。中破とは、辛うじて住み得る程度の損傷ではあるが、戸障子など建具類はすべて吹きとばされ、屋根瓦がはぐれたり滑ったりして、激しい雨もりを起した。建具の被害は、六キロメートル離れた地点でも見受けられ、瓦すべりは八キロメートルまでに及び、窓ガラスの破損程度に至っては、一六キロメートルあたりまでに及んでいる。このほか軽微な破損は、実に二〇キロメートルあたりの地点にまで達している。

鉄筋コンクリート建物

鉄筋コンクリート建物は、爆風圧に対する抵抗が強かったが、爆心地付近では最上層部の天井が破壊せられ、落下したり、落ちくぼんだり、ひどい亀裂を生じたりした。また、鉄製の窓わく・扉が吹きとばされ、ペシャンコになったのが多かった。室内の什器類は、部屋をひっくり返したように雑然と散乱し、メチャクチャに破損した。

爆心地から一キロメートルへだった地点の鉄筋コンクリート建物は、建物自体の被害はわずかであった。しかし、二キロメートルくらいまで離れている所でも、窓ガラスが全部吹きとばされ、爆心に向っている側では、ガラスのみならず窓わくも、ネジ曲げられて吹き飛ばされた。

火災の被害

爆風に続く猛火によって、爆心地から一キロメートル以内の建物は、木造建も鉄筋コンクリート建も共に全焼し、一〜二キロメートルの範囲では大部分が焼失し、二〜三キロメートルでは部分的に焼失した。

ただし、堅牢な鉄筋コンクリート建物は、一キロメートル以内の地区でも、部分的に焼失をまぬがれたところもある。

爆心地から約五〇〇メートルという至近距離の日本銀行広島支店(鉄筋コンクリート三階建)は、三階だけが焼失し、一、二階は火災をまぬがれた。また、爆心地から一、三〇〇メートル離れた山口町の東警察署(鉄筋コンクリート四階建)は、周囲を猛火に襲われながらも、署員の死闘的消火活動によって火災からまぬがれたのである。

県警察部調査

昭和二十年十一月三十日の時点で、広島県警察部が発表した建物被害状況は、次のとおりである。

全焼 五五、〇〇〇戸

半焼 二、二九〇戸

全壊 六、八二〇戸

半壊 三、七五〇戸

(以上合計六七、八六〇戸)

山林火災 一二件

市調査課集計表

また、昭和二十一年八月十日、広島市調査課が市内各町内会長を通じて、調査したところによると、さらに災害程度が高くなっている。次表はその集計表で、被爆前の市内の建物七六、三二七戸として、そのうちおおよそ九二パーセントに近い七〇、一四七戸が、半壊半焼以上の災害を受けたことになっており、人的被害数と同様に、県警察部発表の数より災害が増加している。

距離別	被爆前ノ建物	五割以上ノ損傷建物	同上内訳				一部損傷以下ノ建物
			全焼	全壊	半焼	半壊	
〇・五キロ以内	5,608	5,608	5,607	1			
一・〇キロ以内	14,059	14,059	14,052	3	3		
一・五キロ以内	14,598	14,595	14,427	136	4	28	3
二・〇キロ以内	10,928	10,627	9,254	796	18	559	301
二・五キロ以内	12,168	11,557	3,830	2,138	1,18	5,471	611
三・〇キロ以内	7,383	6,280	780	650	62	4,788	1,103
三・五キロ以内	2,433	2,060	14	19	48	1,979	373
四・〇キロ以内	3,727	3,066	5	57		3,004	661
四・五キロ以内	1,160	874		5		869	286
五・〇キロ以内	1,577	947				947	630
五・〇キロ以上	2,686	474		13		461	2,212
合計	76,327	70,147	47,969	3,818	253	18,107	6,180

距離別	被爆前ノ建物	五割以上ノ損傷建物	全焼				全壊			
			鉄筋コンクリート	石造・一部コンクリート	木造・その他	計	鉄筋コンクリート	石造・一部コンクリート	木造・その他	計
〇・五キロ以内	5,608	5,608	14	5	5,588	5,607		1		1
一・〇キロ以内	14,059	14,059	13	71	13,968	14,052	1	2		3
一・五キロ以内	14,598	14,595	10	54	14,363	14,472	2		134	136
二・〇キロ以内	10,928	10,627	8	19	9,227	9,254		7	789	796
二・五キロ以内	12,168	11,557	3	5	3,822	3,830	1	6	2,131	2,138
三・〇キロ以内	7,383	6,280		5	775	780		6	644	650
三・五キロ以内	2,433	2,060			14	14			19	19
四・〇キロ以内	3,727	3,066			5	5			57	57
四・五キロ以内	1,160	874							5	5
五・〇キロ以内	1,577	947								
五・〇キロ以上	2,686	474							13	13
合計	76,327	70,147	48	159	47,762	47,969	4	22	3,792	3,818

距離別	半焼				半壊				一部損傷以下
	鉄筋コンクリート	石造・一部コンクリート	木造・その他	計	鉄筋コンクリート	石造・一部コンクリート	木造・その他	計	
〇・五キロ以内									
一・〇キロ以内	3			3	1			1	
一・五キロ以内	3		1	4	6	1	21	28	3
二・〇キロ以内			18	18	6	13	540	559	301
二・五キロ以内		1	117	118	3	11	5,457	5,471	611
三・〇キロ以内			62	62		49	4,739	4,788	1,103
三・五キロ以内			48	48			1,979	1,979	373
四・〇キロ以内					4	3	2,997	3,004	661
四・五キロ以内							869	869	286
五・〇キロ以内						1	946	947	630
五・〇キロ以上							461	461	2,212
合計	6	1	246	253	20	78	18,009	18,107	6,180

調査課は、また、「市民税によって推定算出」した戸数七四、一六五戸とし、被爆直後の八月三十一日現在の戸数一八、〇一八戸を差し引き、五六、一四七戸減という試算もおこなっている。

さらに東京帝国大学木内信蔵教授の被爆直後の調査報告（原子爆弾災害調査報告書）によると、被災家屋数は、全焼・全壊家屋五九、五三七戸、半焼半壊家屋六、九五二戸となっている。

重要建物被災状況

被爆によって在広島市の官公署・学校・重要会社・工場、その他の特殊施設の多くに多大な被害を蒙ったが、その状況は次の通りである。

重要建物被災状況表

種別	全 焼	半 焼	全 壊	半 壊
官公庁	中国総監府	広島地方専売局		宇品警察署
	広島県庁			東警察署
	中国軍需監理局			
	広島市役所			
	中国海運局			
	広島控訴院			
	広島地方裁判所			
	広島区裁判所			
	広島鉄道管理部			
	広島通信局			
	広島駅			
官公庁	広島貯金局			
	広島財務局			
	広島郵便局			
	広島駅前郵便局			
	西警察署			
	東消防署			
	西消防署			
	広島国民勤労働員署			
	広島税務署			
	広島営林署			
地方鉱山監督局広島支局				
学校	広島文理科大学		広島高等工業学校	広島高等学校
	広島高等師範学校		中等学校四校	広島女子専門学校
	広島女子高等師範学校		国民学校一校	中等学校一〇校
	広島女学院専門部			国民学校一〇校
	中等学校一五校			
	国民学校一七校			
重要会社	中国新聞社	日本銀行広島支店	広島電鉄	
	広島中央放送局			
	同盟通信広島支局			
	日発広島支店			
	中国配電			
	県食糧営団			
	住友銀行広島支店			
	芸備銀行広島本店			
	帝国銀行広島支店			
	日本勸業銀行広島支店			
	日通広島支店			
自動車配給会社				
劇場映画館一二館				
重要工場	東洋製罐		旭兵器	帝人工場
	広島瓦斯		倉敷航空	三菱機械
	東洋軽金属		中国塗料	三菱造船
	大橋工業		帝国兵器	東洋工業
	その他全半焼 六、〇二八工場 罹災工員 二六、四二〇人		藤川製鋼	
			中国配電製作所	
		その他全半壊 一五六工場 罹災工員 三四、八一七人		
軍事施設	第二総軍司令部			
	中国軍管区司令部			
	留守第五師団司令部			
	広島聯隊区司令部			
	第五九軍司令部			
	中国憲兵隊司令部			
	広島憲兵隊			
歩兵第十一聯隊				

	野砲兵第五聯隊			
	騎兵第五聯隊			
	輜重兵第五聯隊			
	工兵第五聯隊			
	電信第五聯隊各補充隊			
	広島陸軍幼年学校			
	兵站司令部			
	陸軍第一・第二病院			
その他	大本営跡	通信病院	比治山御便殿	陸軍共済病院
	産業奨励館		広島城	広島赤十字病院
	護国神社			
	山陽記念館			
	県病院			
	鉄道病院			
(註)本表は広島県警察部調査資料、その他資料により調製した。				

第一節 救護状況概要...203

防衛機能壊滅

宇品の陸軍船舶部隊を除く、市内の陸軍諸部隊をはじめ、広島県庁・同防空本部・同警察部(警防団を含む)、および広島市役所・同防空本部など、その管下各機関の末端に至るまで被爆により壊滅し、一部周辺部を除いて広島市の防衛機能は、まったく停止した。

県防空本部設置

被爆した六日午後五時ごろ、石原虎好警察部長が比治山の多聞院にたどりつき、とりあえずここに「県防空本部」を設けた。続いて六時半ごろ、中国地方総監府の服部直彰副総監が重傷の身をおして到着し、更に相前後して、備後に出張中であった高野源進県知事が急ぎ帰任した。

また、八時過ぎには備後松永に分駐していた警察警備隊一個小隊(小隊長・池田勉)が到着し、ようやく県防空本部は、五、六〇人の体制となった。

救援の要請

夜、防空本部ではロウソクを囲んで、県知事を中心に戦災対策を協議した。その結果、内務省へは安佐郡原村の広島放送局中継所を通じて、広島被災の状況報告を行ない、同時に近県に対して医師・医薬品などの応援を要請し、県下各警察署・地方事務所に対しては、海田市署・可部署などの警察電話で食糧の供出、警察官・警防団・医療救護班の急遽出動を下命した。詳細は第二編各説第二章第二節官公庁の部(第三卷)に記述してあるが、被爆後一二時間もたつて、ようやく救援を要請したのであった。

仮県庁設置

当日は各機関との連絡も充分につかないまま、大混乱のうちに七日となった。七日午前一時、県防空本部は当面の応急処置をこうじたあと、焼失をまぬがれた山口町の東警察署二階に移ったが、この時なお総勢わずかに一〇〇人余りであった。なお、高野県知事も朝六時に東警察署に移り、ひとまず「仮県庁」と定めた。

広島警備司令官を任命

この七日午前十時、二葉山の防空壕に避難している第二総軍司令部において、軍・官・民三者合同会議が開催され、罹災者救護対策・復興作業について協議された。第二総軍の申入れにより同軍の主催会議とし、被爆後初めての本格的な罹災対策が検討された。

この合同会議の結果、総監府の大塚総監が被爆死したため、臨機の処置として、第二総軍司令官が広島市の警備・復旧に関し、広島県知事・広島市長(栗屋市長は被爆死亡のため助役が代理)・在広陸海軍諸部隊を区処することが決せられた。同時に畑俊六総軍司令官は、その権限を陸軍船舶司令官佐伯文郎中将に委譲した。すなわち、佐伯中将が広島警備司令官に任命され、以後の市内警備・復旧に関する全般の指揮を執り、救護・復旧作業にあたったのであった。

広島警備司令部は、市内を東・西・中・北の四部に分け、陸軍船舶部隊を主力にした各地区担任司令官を次のとおりが発令した。

- 東部 教育船舶団司令官 陸軍中将 沢田保富
- 西部 野戦船舶本廠司令官 陸軍少将 梶秀逸
- 中部 船舶練習部司令官 陸軍中将 芳村正義
- 北部 船舶砲兵団司令官 陸軍少将 中井千万騎

警備司令部の七日付布告には、宇品地区(船舶司令部内)があり、北部が無い。また、設置場所は、この宇品のほか、東部は丹那橋東側・中部は紙屋町芸備銀行・西部は住吉橋西側となっているが、これは市内の状況の刻々の変化に応じて、救護態勢もそのつど変更されたものであろう。

海軍の来援

呉海軍鎮守府では、六日、広島市の惨禍が伝わるや、ただちに隷下諸部隊から救援隊を出動させ、広島警備司令部の作業を援助した。海軍は、広島駅から十日市・土橋の各町を経て、己斐町に至る電車線以北の地域における救

護にあたると共に、広島駅およびその付近の復旧に任じた。陸軍と海軍が重複する地域では、広島駅付近を除くほか、陸軍が主体となって活動した。

作業の進捗

被爆直後から宇品の陸軍船舶司令部は独自の救護活動に入っており、この事について、佐伯司令官は昭和三十三年末、巢鴨ブリズンで執筆した「広島市戦災処理の概要」の「八月六日」の項に、

「被爆直後、爆発の状況は全く不明であった。市内中心部の上空には入道雲が折り重なって天に押し、実に凄惨な痛ましい状況を呈した。総軍・中国軍管区司令部・県庁・市役所に連絡したところ、通信不通で状況が不明であったが、市内に火災が起ったことは現実に認められた。

そのうちに火傷した患者が、構内に陸続と押しかけて来たので凱旋館に収容し、船舶軍医が総がかりで応急手当をした。

今や一刻も忽せにし難い状況になったものと認められたので、午前八時五十分取敢えず、市内の消火並びに救難に対応処置をとると共に、患者を最も安全地帯たる似島検疫所に輸送することにした。云々」

と記述しているが、七日以後、広島警備司令部が設置されてから救護・復旧作業も、ようやく計画的に実行できるようになり、佐伯司令官は負傷者の救護・死体の処理・主要道路の啓開などの第一次作業を、九日までに完了するよう命令した。

救護所設置

作業はまず速やかに負傷者の救護にあたることとし、救護所および設置担任区分を次のとおりに定めた。

- | | | |
|--------------------|---|----------|
| 一、比治山西側聖橋(註・比治山橋か) | } | 東地区警備隊長 |
| 二、御幸橋東側三叉路 | | |
| 三、住吉橋 | | |
| 四、観音町中央十字路市立商業北側付近 | | 陸軍燃料廠救護班 |
| 五、東練兵場 | } | 海軍増援部隊 |
| 六、土橋 | | |
| 七、横川駅 | | |
| 八、己斐駅 | | |
| 九、東警察署 | } | 広島県 |
| 十、市役所 | | |
| 十一、泉邸跡 | | |

救護対策など積極的に進める

被爆して焦土になったとはいえ、なお本土決戦態勢下であったから、戦略上からも広島市の都市機能の回復が急がれたのでもあるが、罹災者の救護作業をはじめとして、一連の応急対策が昼夜の別なく、次のように積極的に進められた。

一、飲料水問題

当時、一日四万立方メートルの給水能力しかなくなっていた水道の給水能力を、努力して一日八万立方メートルに復旧した。

二、道路の清掃啓開

主要幹線道路上の雑多な倒壊飛散物を、すみやかに除却し、トラックなどの交通ができるようにした。

三、罹災者相談所を各所に開設

四、屍体ならびに患者収容

新たに野戦病院を開設すると共に、各救護班へ軍医を派遣した。

五、防疫対策の実施

大阪に、防疫液ならびに給水浄化剤の補給、および救護班の派遣を要請した。

六、食糧の補給

兵器補給廠において四、〇〇〇人分、呉海軍部隊において七、〇〇〇人分、船舶部隊において三、〇〇〇人分の炊出しを実施すると共に、小豆島から醤油、竹原からカンヅメ二四万個、愛媛県からイリコを搬入した。

七、通信機関の復旧

工兵隊から兵員五〇人、電柱三〇〇本を提供し、大阪電気中隊一個小隊約一、〇〇〇人の派遣を求めた。同時に民心安定のため、放送局およびその他の報道機関の復旧につとめた。

屍体の処理

莫大な数量の屍体の処理は、非常に困難をきわめた。火傷者は特に、皮膚がズルッとむけて手に持つのがむつかしく、また、輸送力もなかったので、随時、焼跡の適当な場所に集めたうえ、その場で火葬したものが多かった。

河川に浮き沈みする屍体も多く、これを一体ずつ引きあげたが、これらの作業には刑務所の囚人四〇〇人も働いた。

このように被爆の六日は、宇品の陸軍船舶司令部隷下諸部隊の緊急出動によって、応急の救護活動が展開され、引続き県下の各警察署・地方事務所から警防団・医療救護班の出動、また近県からの応援もあって、広島警備司令部の救護・復旧対策は進められたのであった。

これらの詳細については、次項に記述するとおりであるが、世界空前の原子爆弾の徹底的な、かつ広範囲にわたる一瞬の破壊は、かねて計画していた防衛対策では、到底解決できることではなかった。

死者続出

上幟町の泉邸内に、被爆直後、暁部隊の救援隊が建てた負傷者収容のトタン葺バラックがあった。ここにはたっくさんの避難者がそのまま住みついていて、それらも次々と死んでいった。

全身がひどい脱力感と倦怠感におそわれ、赤痢のような下痢症状を起す者、頭髮がバサッと、まるでワラ束をつかむように抜ける者、歯ぐきから出血する者、皮膚に紫斑が地図のように浮び出る者などが続出し、みんな明日の命も知れぬ不安にさいなまれた。

バラック小屋の生活は、深い虚脱感におおわれたその日暮しであったが、一晩中、もたえ苦しみ、うめきとおした人が、夜明けと共に息を引取っていく。それを傍に横たわったり、坐ったりして見ながら、誰一人としてどうすることもできなかった。

バラック小屋だけでなく、半壊の防空壕の中や瓦礫の堆積した露天に野宿する負傷者も多くいたが、救護の手のさしのべられないまま、多くの人々が毎日毎日死んでいった。

一方、千田町の広島赤十字病院、宇品町の陸軍共済病院、江波町と観音町の三菱重工業構内病院、白島町の通信病院をはじめ、江波・宇品・似島その他の陸軍関係の病院など、被爆から免れた市周辺部の医療機関は、いずれも超満員であったが、医師・看護婦も被爆して働ける者が少なく、医薬品も欠乏がちであったから、全力をあげての活動にもかかわらず、むなしく死んでいく人が多くあった。

郊外の国民学校や集会所・社寺などの臨時収容所でも死者が続出し、惨禍は一向に減る様子ではなかった。

当初、即死者の死体処理は暁部隊が中心になって実施し、八月十日ごろまでに一応は片づけられたが、その後の死者は、近くの罹災者が縁故の有無にかかわらず、焼残りの木材を集めて来て茶毘にふした。

また、市内を貫流する七つの河川に流れていった死体も多く、広島湾沿岸の浜に打ちあげられたものも数あったが、被爆後二、三か月後になっても沿岸部の海面や川に浮上して来る死体が見られた。

死体は一応見える場所のものは片づけられたが、誰れとも知れぬ白骨は、いつまでも、そのまま焼跡の上に散乱していた。

迷子・孤児の収容

焦土の中で家や肉親を失った子どもが多く、市役所や警察署が協議して、賀茂郡西条町ほか六か所に「孤児・迷子収容所」を設置したが、市内では八月八日、大破した比治山国民学校を迷子収容所とした。これは幼児主体の応急施設で、二十日ごろまでに約六〇人を収容した。張り札の掲示その他で一般市民へ周知をはかったため、一時は収容児が一五五人にも達した。この世話にあたった女教師の一人斗榭良江訓導は、その記録(資料編参照)の「頬に穴のあいた子」という一文の中で、「…この子は母の乳ばかり飲んでいたらしく、ミルクを与えてもゴムの乳首になじめず、てんで飲もうとしない。私は(忙しくて)ほとんど(自分の)子供と顔を合わすこともできない状態なので、私の乳はかなりはっていた。試みに乳房をくわえさせると、おいしそうにゴクゴクと飲みはじめていた。

また恐怖の夜が来た。毎夜毎夜、空襲警報におびやかされ、壕への待避をくりかえしていると、しまいには私達も子供もヘトヘトにつかれ切ってしまった。はじめのうちは、子供たち皆をつれて待避していたが、しまいには目のさめた子供だけつれて待避するようになった。

夜更けて壕の中にいると、突然赤ちゃんの泣く声、あのほっぺに穴のある子が目をさましたのだ。黒々と横たわる巨大な校舎は、何か魔物を思わせる不気味さである。その校舎も砕けよとばかり母を求めて泣き叫ぶ赤子の声は、まったく悲痛の限りで、私の肺腑はえぐられるようであった。たまりかねた私は、いつのまにか、その子のいる衛生室に向って歩き出していた。(短歌)わが母と思いで乳を吸いつくし眠りぬ頼に穴のあきし子」とある。

同年十二月二十三日、山下義信夫妻の努力により、佐伯郡五日市町の元広島県農事試験場に「広島戦災児育成所」が開設され、八六人を収容した。このうち二七人は被爆直後から比治山国民学校に収容されていたもの（多くは収容中に死亡した）で、残る五九人は、集団疎開しているとき、市内の家族が被爆全滅して孤児となった子どもである。この施設は昭和二十八年一月から広島市に移管され、「広島市戦災児育成所」となった。

また、広島県同胞援護財団によって、昭和二十年十月、基町の旧野砲聯隊跡に設立された「新生学園」もフィリピン・ミンダナオ島ダバオ市地区から引揚げた子どもで、無縁故児童八五人のほか、翌二十一年から一般戦災児や浮浪児とともに、原爆孤児をも収容することにした。

昭和二十一年九月には、似ノ島の元陸軍兵器廠似島倉庫および旧陸軍運輸部似島倉庫を改築して、「広島県戦災児教育所似島学園」が開設され、学童疎開から広島市に帰って、一応は縁故者に引きとられた戦災孤児をはじめ、敗戦社会が生んだ種々な事情から浮浪孤児となった児童たちを収容した。当初は、広島駅近辺に放浪する家なき子・親なき子三四人の孤児を入園させた。

さらに、昭和二十二年八月、カトリック系の福音の光の姉妹修道会が経営主体で、「光の園摂理の家」が、安佐郡祇園町に設置され、二十三年一月に市内基町に新築移転、さらに三十二年一月、佐伯郡廿日市町地御前に移った。ここは当初から原爆孤児だけでなく、他の戦災孤児・引揚げ孤児を収容、保護した。

昭和二十二年四月、市内では孤児収容施設として最古の歴史をもつ「広島修道院(戦時中、院児五七人を安佐郡日浦町に疎開させていて、被爆から免れた)」は、被爆により全焼したが、もとの若草町に復興して活動をはじめた。

異常児童の保護施設「六方学園」は、当時、矢賀町に所在し、爆風により大破したが、昭和二十四年一月に古田町高須に移転してから、原爆孤児をも収容した。

これら施設は、主として生活保護法・児童福祉法・社会福祉事業法・社会福祉振興法などによって経営されたが、二十二年来の共同募金「赤い羽根」による資金も大きな財源となった。

食糧配給

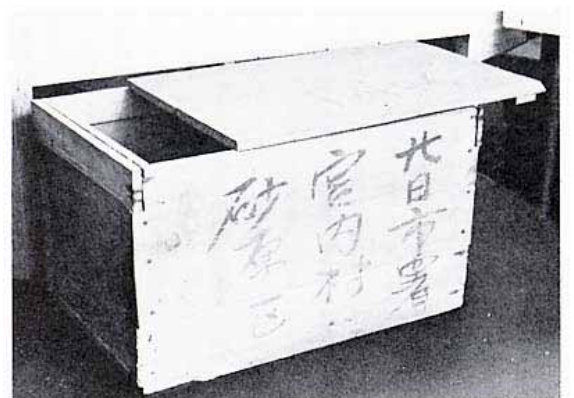
罹災者に対する食糧は、被爆直後は近郊市町村からの炊出し(にぎりめし)によってまかなわれた。八月十二日に市内に食糧営団配給所を要所に開設して、通常配給に切りかえたが、配給量そのものが僅かで、罹災者たちは被爆の打撃の上に、さらに飢餓に襲われた。

連合町内会長ら初会合

同月十三日、生き残った連合町内会長らが、外郭だけの市役所地階に集合して、被爆後初めての会議を開き、罹災者の救護・配給、町の復旧対策など当面の生活問題について協議した。しかし、いずれの問題もまったく応急的なことしかできず、途方にくれるばかりであった。

軍の収容者引取り

十四日には、広島県が軍隊諸施設に収容中の一般市民負傷者約一五、〇〇〇人を引取り、廿日市・大竹・可部・海田市・広・忠海・竹原・西条・河内・吉田・三次・庄原の各警察署に割当てて収容した。なお、県病院は施設・人員などほとんど壊滅状態に陥っていたが、わずかの生存者が草津国民学校に拠って治療活動をおこなった。



救援のにぎりめしを運んだ木箱（藤原博提供・広島平和記念資料館所蔵）

広島市医師会の再建

広島市医師会吉田賢一会長が、救護活動中にみずからも原爆症により殉職したため、広島県衛生課喜多島健麿課長の斡旋で、十四日、仮県庁(東警察署)の三階に生存会員二〇数人が集合し、医師会役員中、ただ一人の生残りである京極一久医師を医師会長に決定した。

ここに広島市医師会が再建され、協議の結果、地元の残存医師による救護態勢を再び整え、ただちに治療作業に

従った。そして十月五日に日本医療団病院に移るまで、医療救護活動を続けた。

軍需物資の放出

同じくこの十四日、政府がポツダム宣言受諾を決定したが、このとき、軍の保有資材を一斉に民間に払下げ、売却することにした。

二十七日になり、閣議で払下げが中止されたが、広島市には、市内はじめ全県下にわたって莫大な軍需物資が備蓄されていたから、軍の放出は、すべてを失っていた罹災者の生活をうるおした。

市は、軍用品の食料油タンカー一隻分・軍用被服一万コオリをはじめ、工兵隊・陸軍船舶諸部隊・電信隊などの焼残った部隊の食糧・備品・消耗品などの払下げを受けたが、これらの軍需物資は、後日、広島市の再建に大きな活力源となった。反面、闇商人の跳梁する原資ともなった。

終戦

八月十五日、終戦となって第二総軍司令部は戦災応急処理の指揮を解除したので、以後は県・市が行なうことになった。ちなみに、前日十四日に、第二総軍司令部が二葉山に、中国地方総監府が三滝山に、県・市両庁は己斐の山間部にそれぞれ疎開を決定して、本土決戦に備えることにしたところであった。

軍の救護作業解除

翌十六日、状況は急変し、全陸海軍部隊に停戦命令が発せられ、在広諸部隊もつぎつぎと解散することになった。すなわち、この日までに軍隊が果たした救護・復旧作業は、遺憾なくその機動力を発揮し、被爆直後の大混乱の中にも、実に多大な成果をあげたが、この日を限って軍隊による救援復旧作業が停止されたのである。

伝染病病院設置

十七日、被爆者の中に血便の出る者が増加するので、放射能障害によるものと気づかず、赤痢患者として八丁堀の福屋百貨店ビル内に臨時伝染病病院を設置し、これに収容した。ただし、一部には赤痢の発生したことも事実であるといわれる。

県衛生課活動

二十日になって、県庁は東警察署から安芸郡府中町の東洋工業株式会社の三階に移転した。ただし、衛生課は袋町国民学校に移って活動を続けることにし、被爆者の便宜をはかった。この頃になっても、被爆者は脱毛したり出血したりして、死亡者があとを絶たなかった。外傷は、一般の怪我とははっきり違い、治療しても一〇日も二〇日も治癒せず、かえって悪化し、ついに死んでいく者が多かった。また、無傷ながらも、急に気力が衰えたり、発病したりして死亡する者が多く、無気味な恐怖はひろがるばかりであった。

療養方針の発表

被爆から第三週目に入るところから、ようやく治療態勢も本格的になってきたが、九月一日、広島陸軍病院宇品分院の職員と陸軍軍医学校・東京帝国大学医学部から来広した調査診療班とが研究した結果を、都築正男博士がまとめ、「原子爆弾傷の療養方針」として権威ある内容のものが初めて発表された。

死体処理数

広島県警察史によれば、八月二十日までに処理した死体の数は、次のとおりである。

軍隊の処理数 一二、〇五四体

警察機関の処理数 一七、八六五体

市外に避難して死亡したもの 三、〇四〇体

合計 三二、九五九体

このほか、河から海へ流れ出て行方不明となった死体(五〇〇以上)もおびただしくあったし、また、焼跡に残存する罹災者らが、バラックの共同生活中に死んでいった人々を焼いたものも、相当な数にのぼった。更に、中心部では白骨さえもとどめず完全に灰となってしまった人々も多くあったのである。

原子爆弾災害調査特別研究会の発足

九月十四日には、文部省学術研究会議の「原子爆弾災害調査研究特別委員会」が発足した。

学術研究会議議長林春雄を委員長とし、その機構は、物理化学地学科会・生物学科会・機械金属科会・電力通信学科会・土木建築学科会・医学科会・農水産学科会・林学科会・獣医学畜産学科会の九分科であった。

このうち医学科会(科会長・都築博士)は、当初一二人の要員で活動に着手したが、十月に入ってから東京・京都・大阪・岡山・九州・長崎・熊本各大学教授など二九人の委員のほか、各研究機関からの研究員一五〇人・助手約

一、〇〇〇人が選ばれ、調査と救援にあたった。この調査報告をまとめた「原子爆弾災害調査報告書(昭和二十六年八月一日発行)」と、この報告書の資料となった同報告集の第一分冊および第二分冊(昭和二十八年発行)は、各種の課題を科学的に調査した貴重な文献である。

日本医療団病院の発足

十月五日、戦時災害保護法の期限が切れたため、救急救護所(五日現在一か所、治療患者は、入院四七九人・外来一、二四八人)を閉鎖し、矢賀・仁保・江波・大芝・草津の五学校と福島診療所に、日本医療団病院を開設して原爆症医療を含む一般医療にあたった。これ以後、患者は自己資金によって治療をすることになった。

なお、陸軍関係の救護病院は十月二十二日に閉鎖された。

無料巡回診療の開始

一方、広島県庁は十一月十九日から、市内六か所において被爆者に対する「無料巡回診療」を開始し、家庭や生活まで破壊されて塗炭の苦しみを受けている多数の負傷者の救援にあたった。

第二節 広島陸軍船舶部隊の活動...217

第一項 陸軍船舶司令部隷下の諸部隊...217

部隊の概要

大東亜戦争勃発の前後、大軍事基地広島市の軍事施設は、あらゆる部門にわたって拡充強化されていった。

呉の海軍基地と相まって、広島の陸軍基地は、都市全域が陸軍関係の施設その他作戦上の諸機関によって埋まったと言っても過言ではない。市内の大多数の会社・工場は軍需会社・軍需工場に指定され、市民の多くも、学生を加えて軍関係の仕事に従事した。

軍事輸送の陸の大動脈である広島駅の整備と共に、海上輸送の基地としての広島港の整備も着々と実施され、次々と軍事機密に属する設備が行なわれていき、西日本の要、(かなめ)としての陸軍策源地広島は更に強化された。その一つとして、昭和十七年八月、第一船舶輸送司令部のほかに、第二おま第三船舶輸送司令部が設置されることになったため、広島市に陸軍船舶司令部(司令官・佐伯文郎中将)が置かれた。

この陸軍船舶司令部隷下の諸部隊は次のとおりである。

船舶教育兵団司令部(仁保町)

船舶砲兵団司令部(比治山)

船舶砲兵教導聯隊(宇品町・大和紡績工場跡)

船舶通信隊補充隊(皆実町)

野戦船舶本廠(宇品町)

陸軍船舶練習部(宇品町・大和紡績工場跡)

陸上勤務第二〇八中隊(横川町)

陸上勤務第二二〇中隊(井口村)

病院船衛生第一四班(似ノ島)

病院船衛生第五三班(似ノ島)

船舶衛生隊本部(似ノ島)

船舶通信第二大隊(皆実町)

陸上勤務第二〇九中隊(金輪島)

海上輸送第二〇大隊(宇品町)

船舶司令部広島支部(仁保町)

船員教育隊(仁保町)

以上が、広島市内に設置されていた部隊で、このほか、次の諸部隊をもその隷下においていた。

船舶整備教育隊(坂町鯛尾)・船舶団・船舶工兵(忠海)・特設警備勤務中隊・機動輸送中隊・海上挺進整備隊・海上輸送大隊・陸上勤務中隊・高速輸送大隊・特設水上勤務中隊、および敵潜水艦爆雷攻撃を行なう海上駆逐隊、海上挺進戦隊の訓練を行なう船舶練習部第十教育隊、船舶機関砲隊などがあった。

秘密部隊が多く、外部との通信はすべて「宇品郵便局気付」でおこなわれた。

炸裂下の部隊本部

原子爆弾の炸裂によって、一挙に広島市の防衛機構は壊滅状態におちいったが、市の南端海岸部に位置する陸軍船舶練習部その他の各部隊は辛うじて災害からまぬがれ、猛火荒れ狂う広島市内に緊急出動し、逃げまどう市民や無数の重軽傷者の救護活動を迅速果敢に展開したのであった。

この船舶部隊の活動がなかったら、広島市の惨禍は、さらに凄惨をきわめていたであろうし、復興の第一歩も遅れたに違いない。

船舶部隊の全部を統括指揮する船舶司令部は、宇品町一丁目の凱旋館にあった。

船舶参謀篠原優大佐は、凱旋館の二階廊下を通行中、眼前一〇メートルばかり先に、突如、青白の強烈な閃光を感じた。同時に、ドンという轟音を聴取した。

その後、数分のあと、屋上に登って、何ごとかと望見すると、市の上空にキノコ状の巨大な雲が立ちのぼっていた。

一時間ぐらいの後には、市内の各所に火炎の立ち昇るのが見られた。

司令部の建物は、爆風で窓ガラスがこわれた程度であったが、凱旋館大広間（現在・第六管区海上保安本部一階）に、市中から続々と負傷者が歩いて入って来て、たちまち百数十人に達した。皆瀕死の重傷で、気力もつき、次々に倒れていった。

病院には、軍医二人・衛生兵三人・看護婦五人ばかりが勤務していたが、被害はなくただちに負傷者の治療にあたった。

連絡の困難

船舶司令部は、第二総軍司令部・中国軍管区司令部・県庁・市役所などに電話連絡して状況を知ろうとしたが、通信不通なため、将校を連絡に出した。

午前十時前ごろ、篠原参謀は旧城内の中国軍管区司令部との連絡（距離約四・五キロメートル）を命ぜられ国泰寺町の市役所付近（距離約三キロメートル）まで前進したが、大火災の最中で通過できず、引返さざるを得なかった。

また、仙頭大佐と篠原参謀は徒歩で、二葉の里の第二総軍司令部との連絡（距離約五キロメートル）に出発し、途中、市役所に立ち寄り、浴衣がけで罹災者に乾メンボウを配給している森下助役に出会ったが、特別な話のできる状況ではなかった。

この前後に、第二総軍司令部から伝令が到着し、第二総軍司令部をはじめ、市中の陸軍諸部隊が壊滅的打撃を受けたことが判明した。

佐伯船舶司令官は、船舶衛生隊長に命じ、救護班をただちに第二総軍司令部に派遣するとともに、堀尾参謀を業務連絡のためトラックで急遽派遣した。しかし、命令を受領して堀尾参謀が帰って来たのは、午後三時ごろであった。約七キロメートルの道程に五時間余り要したのである。

救援隊出動命令と中央への報告

通信も途絶え、連絡もなかなかつかぬという大混乱のなかで、佐伯船舶司令官は、広島市の惨禍が予想外に激甚であることを観察し、連絡のつく前に独自の判断から消火隊ならびに救援隊の出動を、いち早く隷下諸部隊に命じたのであった。同時に、呉海軍鎮守府に対しても、無線電話で広島壊滅の状況を知らせ、救援隊の出動を依頼した。

一方、陸軍大臣・参謀総長あてに被爆の概況について電報で報告した。

被爆して三五分後から、船舶各部隊は続々と救援隊を出動させたが、陸路は、火災のため中心部に前進することが不可能であったから、主として舟艇を利用して、河川を溯江、兩岸の消火と河岸に脱出した避難者の救護にあたった。市中心部へは昼過ぎごろから夜にかけて、徐々に前進するほかなかった。

また、救援の連絡を受けて、六日午後から七日にかけて、県下は勿論、近県及び大阪・兵庫・九州の各部隊が急ぎ来援したのである。

戦災処理の概要

猛火の市中に急遽救護隊の出動を下命した状況について、船舶司令官佐伯文郎中将が、昭和三十年三月末に巢鴨ブリズンにおいて記述した「広島市戦災処理の概要」（厚生省援護局資料）によれば、次のとおりである。

（前言省略）

八月六日

原爆直後、爆発の状況は全く不明であった。市内中心部の上空には入道雲が折り重なって天に押し、実に凄惨な痛ましい状況を呈した。総軍・中国軍管区司令部・県庁・市役所に連絡した処、通信不通で状況が不明であったが、市内に火災が起ったことは現実に認められた。そのうちに火傷した患者が構内に、陸続と押しかけて来たので凱旋館屋内に収容し、船舶軍医部が総がかりで応急手当をした。今や一刻も忽せにし難い状況になったものと認められたので、午前八時五〇分取敢えず、市内の消火並びに救難に対応処置をとると共に、患者を最も安全地帯たる似島検疫所に輸送することとした。

以下、当日の行動を時を逐うて概記するならば次のとおりである。

八時五〇分

- 1、海上防衛隊長に命じ、消火艇を以て京橋川兩岸を消火せしめた。
 - 2、広島船舶隊長に命じ、救難艇を以て逐次患者を似島に護送すると共に、主力を以て京橋川を溯江、救難に任せしめた。
 - 3、野戦船舶本廠長に命じ、救難隊を以て京橋川を溯江、救難に任せ、一部を以て市内の消防に当らしめた。
 - 4、船舶練習部長に命じ、救難隊を中央棧橋付近に出し、出発準備、一部は通信隊補充隊を救援せしめた。
- 註・船舶通信補充隊の特別幹部候補生部隊は、上半身裸体で体操実施中であつたから、全身火傷を受け重傷のものが多発した。兵舎の破壊は船舶部隊中、最も甚だしかった。
- 5、教育船舶兵団長に命じ、一部を以て千田町特別幹部候補生通信隊の救難に任せると共に、主力を以て破壊消防を準備させた。
 - 6、船舶砲兵団長に命じ、速やかに砲兵教導隊の一部を以て通信補充隊を救援せしめた。
 - 7、幸の浦・江の口部隊は、待機せしめた。

九時三〇分

元安川東方地区一部火災の発生の報告により、次のとおり処置した。

- 1、海上防衛隊長に命じ、消火艇二隻を以て元安川を溯江、赤十字病院付近の消火に任せしめた。
- 2、船舶練習部長に命じ、救難艇三隻を以て元安川を溯江、救難に任せしめた。

一〇時

第二総軍司令部及び其付近の被害相当大なる旨報告があつたので、次の通り処置した。

- 1、船舶衛生隊長に命じ、救護班一を第二総軍司令部に派遣救護せしめた。
- 2、堀尾参謀を第二総軍司令部に派し、業務連絡に当らしめた。爾後、市内の状況が、逐次判明して来たので、爆撃の実体について種々研究を進めることとした。研究会の席上、誰れであつたか、「米国が新しい爆弾を作つて居るとの情報があつたが、今度のはそれではないか」との発言があり、確定に至らなかつたが、或いは然らんと結論に一致したようであつた。

陸軍大臣・参謀総長宛、広島被爆の概況につき、電報報告をした。

一〇時四〇分

火災は京橋川西岸に延焼、死傷者続出の情報があつたので、次の通り処置した。

- 1、船舶衛生隊長に命じ、傷者の救護に任せしめた。
- 2、船舶練習部長に命じ、救難班を出し、船舶衛生隊長の区処を受けしめた。
- 3、広島船舶隊長に命じ、所要の船艇をして傷者を似島に輸送せしめた。
- 4、野戦船舶本廠長に命じ、速やかに百名を専売局付近に派遣、破壊消防に任せ、主力は破壊消防を準備せしめた。また、機動付艇四隻を元安川南大橋付近に出し救難に任せしめた。

一一時三三分

似島収容所救護を強化する為、第十教育隊の百名を増加した。

一二時

比治山北側地区の火災拡大する由、情報があったので、海上防衛隊長に命じ、消火艇の一部を以て猿猴川を溯江し、比治山北側地区の消火に任せしめた。

一三時一分

南大橋北側元安川東岸地区の火災猶延焼中で死傷相当多数に上ったとの報告に接したので、左記部隊を以て南大橋付近に至り、破壊消防並びに救難に任せしめた。

防空勤務中隊 将校以下 二五名

野戦船舶本廠 将校以下 一一〇名

第十教育隊救護班 軍医以下 一〇名

一三時二〇分

宇品地区の水道減水し、使用不可能となった為、幸の浦より衛生濾水器一を宇品中央棧橋に輸送し、船舶防疫部長をして防疫給水に任せしめた。

一三時二五分

呉鎮守府救援隊将校以下七三名を、鷹野橋付近に至り、救援に任せしめた。

一三時三〇分

被爆情報は、刻々その惨烈を伝えるに至ったので、船舶司令部は、電報班を除き、常務を停止し、全力を挙げて救護救難に任ずることとした。隷下部隊にも一一時三〇分、平常業務及び教育を中止し救護に任ずる如く指示を与えた。

一三時五二分

福星丸及び交通船二隻を中央棧橋に差出し、似島への患者輸送を強化した。

一四時

船舶司令部に於て、此時迄に収容した傷者は、約千三百名内外であった。

患者の収容護送の処置として、船舶本廠長に命じ、一四時以降患者の収容並びに似島への輸送に任せしめ、また、患者増加の為、似島の収容困難となったのに鑑み、船舶練習部長に命じ一五時以後、同部に患者収容の準備をなさしめた。

一四時五五分

爾後の救難に対処する為、氣象教育隊及び船舶練習部より、待機部隊を編成した。

一六時

野戦船舶本廠より下士官以下四六名を出し、比治山橋付近の宇品憲兵隊長の指揮下に入り、傷者の収容に任せしめた。

一六時四〇分

第十教育隊三二〇名を南大橋北側元安川東岸地区の部隊に増加し、南大橋・明治橋・住吉橋、各付近の救難に任せしめた。

一六時五〇分

罹災者用衣糧として、船舶倉庫長に命じ、差当り左記を市に交付せしめた。交付に当っては己斐・宇品両方面より都心部に及ぶ如くし、分配に関しては、積極的に市側に協力することに留意せしめ、また、補助憲兵三〇名を出し、二十日市憲兵隊長の指揮を受けしめる如くした。

	乾パン	作業衣袴	蜜柑缶詰(患者用)
己斐方面より	3,000	1,500	2,000
宇品方面より	6,600	5,000	5,000

船舶司令官としては、以上の如く自主的に処置する処があったが、夕刻近く、左記要旨の総軍命令を受けたので、之に基づき、更に警備並びに戦災処理に関し、所要の処置をとることとした。

一、船舶司令官は、在広部隊並びに逐次広島付近に到着する陸軍部隊を併せ指揮し、速やかに戦災処理に任ずべし。戦災処置の為警備に関し在広機関を区処すべし。

二、中国地方総監・広島県知事及び広島市長は、予め計画する処に従い、速やかに官民の救護給養並びに災害の復旧に任ずべし。広島近傍の警備に関し、船舶司令官の区処を受くべし。

右、命令を受けた船舶部隊は一在広諸部隊並びに救援部隊の状況全く不明であったので一取敢えず船舶部隊のみを以て、救護警備に任ぜんとし、次の如くその担任区域を示し、戦災処理に任ぜしめた。

1、教育船舶兵団長(東地区)・船舶練習部長(中地区)・野戦船舶本廠長(西地区)は、別図の如く救護警備を担当し、戦災処理に任ず。

2、船舶砲兵団長は、広島への救護警備に関し、船舶兵団長の指揮を受けること。

3、海上防衛隊長は、前任務を続行すること。

右に続いて、更に左記の如き指示を与えた。

1、救護・警備の重点は、第二総軍司令部・中国軍管区司令部・中国地方総監府・広島県庁・広島市役所・広島駅各付近及び主要交通路上の要点とする。

2、先ず重点付近の傷病者難民の処置を完了する。

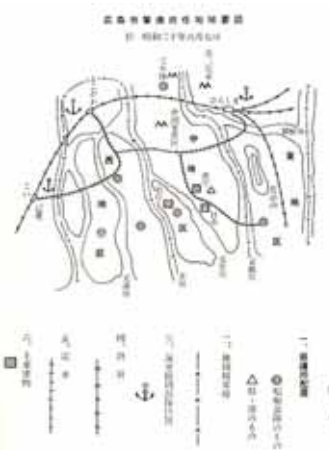
3、次いで成るべく速やかに主要幹線交通路を啓開し交通を維持する。

4、流言蜚語を防止し、民心を安定せしめる。

5、救援警備は、現態勢に吻合せしめつつ着手し、現在の任務を達成した後、逐次部署を変更し、八月七日一二時迄に新配備に以降する如く努める。

然しながら前述の如く、船舶舞台は被爆時と共に自主的に救難消火に当たっていたので、既にとっていた処の応急処置の態勢から、逐次新なる組織的の配備につくを要し、その時期を七日正午と定め、着々処理を進めたのであった。

広島市警備担任地域要図



之より先、一六時頃、李グウ公殿下の御所在が不明であるとのことで、その搜索を命ぜられた。

暫らくしてから、李グウ公殿下は、相生橋付近に居られたことが判明したが、陸上の自動車交通は不可能であったので、夕刻満潮を待って発動艇で凱旋館に緒迎した。手及び顔面に少し火傷を見たのみで緒元気であられた。早速診断申上げたが、別条がない。殿下は、腸に異常がないかとの御言葉であったので、再度診断したがその時は、特に御異常を見なかった。

当時、軍医部の殆んど全部は、似島で治療に当り、宇品には外科医一名が居たのに過ぎなかったので、内科専門の高級軍医を似島から招致して、二二時頃更に診断申上げたが、前の診断と同様、内臓には特に御異常を認めなかった。が、安全な似島で御静養願うこととして同島に御送りした。似島御到着後も元気であられたが、七日三時過ぎ、御容体急変して薨去せられた。爆発点も直下を乗馬行進中であられたので、腸に強い衝撃を受けられたのは事実で、然も同時に原子的交感を受けられたものと拝察された。

八日早朝・御遺骸を朝鮮に御送りする直前、御付武官吉成弘中佐は、似島の宿舎看刃し壮烈な最後を遂げた。蓋し、六日朝、所用の為、殿下に御随行出来なかった責任を痛感したが故であって、その誠実に対し、人々は深く感激する処があった。

一八時

似島収容所に於ける救護の手が不足との旨、通報に接したので、船舶本廠の女子百名を増加した。

二〇時四〇分

かかる間にも、患者は激増する一方で、為之、手当が不十分となるに至ったので、左記の如く療養所を開設し、此処に輸送して治療を容易にした。

横浜国民学校 四〇〇名

同説教所 二〇〇名

坂国民学校 二〇〇名

整備教育隊第五中隊 二〇〇名

海上防衛隊長が機帆船曳船で輸送した。

二一時三〇分

元安川・太田川(本川)流域付近(県庁付近と推定す)の火勢が、逐次増大したので、海上防衛隊長をして消火艇の主力を以て消火に任ぜしめた。同時に各警備地区隊長に現状報告を要求した。

八月六日当日は、以上の如く次々と処置をこうじたが、何れも応急の処理であって、また、状況が判明するに従って、消火救難の為の兵力を増強し、且つ衣糧需品を市に交付するなど、処置に遺憾なきを期した。而して夕刻近く総軍命令により明確に任務を指示せられ、爾後の戦災処理に一段の進展を期待し得るに至った。

八月七日

時の経過と共に被告が予想外に甚大であることが判明した。船舶部隊以外の在広部隊は、災害を受け、戦災処理に使用することが困難であったが、船在広部隊の兵力も、六日中に使用し尽し、尚、不足を告ぐるの状況であった。

依って広島市以外に駐屯しておる船舶部隊を招致する手段をとり、これらの部隊及び他の救援部隊の逐次到着と共に、直ちに救護・警備部隊を増強し、対応処置を促進した。

被爆患者は次々に収容したのであるが、未収容患者が、少なくなからず随処に残置せられて居ることが判明し、これが収容をも急がなければならぬ必要に駆られた。

が、一方、衛生作業力については、全く手不足となったので、止むなく、応急処療を終わった既収容患者の事後の治療を一時中止して未収容患者の収容治療するという非常手段をとらなければならないこととなった。

主なる行動は次の如くである。

○時二五分

船舶工兵第六聯隊補充隊・特設工兵第五二聯隊・船舶通信聯隊三原分屯隊の主力(衛生部は全員)を宇品に前進せしめ、直轄とした。

八時

船舶倉庫長をして向宇品に患者用衛生材料(主として火傷)二単位を集積し補給せしめた。

七時

未収容の患者を速やかに応急手当する為、教育船舶兵団長・船舶練習部長・船舶砲兵団長及び野戦船舶本廠長をして、現在収容しある患者の治療を一時停止し、第一線に進出し、初療の普及に勉めしめ、また、船舶衛生隊長に対しても、現収容患者の治療を一時中止し、救護班三ヶを船舶練習部長の指揮に入らしめた。

一〇時二〇分

市の水道及び電灯復旧工事作業に対し、兵力を出し援助した。

一五時

井の口に在る陸上勤務第二百中隊の長以下、約百名を船舶練習部長に増加した。

一七時

市内警防伝達用として揮発油一〇〇罐を広島市に交付した。

八月八日

本早朝(五時三〇分)救護並びに治安維持の為の戦闘司令所を市庁舎南側に推進すると共に、所要の兵力を警備地区隊に増加して処理を敏活ならしめた。

六時

船舶衛生部教育隊長を野戦船舶本廠長の指揮に入れ、西地区の救護に任せしめた。

六時三七分

船舶工兵第六聯隊補充隊を西地区警備隊長の指揮に入らしめた。

七時

船舶通信補充隊三原分屯隊の主力(将校以下五九七名)を東地区警備隊長の指揮に入らしめた。

九時

配属憲兵を各地区に配属して秩序の維持を強化した。

十時

東京第二造兵廠忠海製作所の軍医大尉以下一二名の救護班を日赤(病院)に位置し救護に任せしめた。

一四時三〇分

病院船衛生第五十六班の救護班(軍医以下一四名)を似島船舶衛生隊長の指揮に入れた。

一六時

特設船舶工兵第五十二聯隊を中地区警備隊に増加した。

尚、此の日午後、軍・県・市・其他の各機関を比治山西北麓大幡神社境内に集め、戦災処理の協議を行なった。社殿は焼失せられ、付近一帯は焼野原であったが、参道を中心として烈日の下、会議を開いたのであった。

集合者は、軍関係者の外、県知事・市側・鉄道・通信・海運局等、関係者約三、四〇名位であった。船舶司令部側からは司令部主脳者・各地区警備司令官が集った。

協議は、戦災処理を敏速に行なうことを主眼として始められたが、先ず現在の状況につき各警備地区の指揮官・県・市・其他各機関より説明を行なった後、逐次その具体的処理について検討した。主なる事項は左の如くであり、尚、当時主要なる道路は概ね啓開せられ、自動車の通行をなし得る状態で各方面共救護に専心し復旧は漸く萌芽の状態にあった。

1、水道

貯水は平常八万立方米であるが、被災後二日現在は四万立方米に減じ且つ、水圧低下し機能不十分となったので、之を高上する為不要個所の給水を中止し、漏水を速やかに閉塞することに意を用いる。

閉塞の為、楔または栓を支給するよう準備すること。

尚水道の為、重油一日百立方米を必要とする。

2、炊出しは今日まで実行中であるが、今後八日間位は継続を要する見込み。

3、警備地域毎に患者の収容並びに屍体処置を促進する。

4、火災を其儘に放置せず、速やかに消火すること。

米が焼けて居る場合、消火した者に支給する趣旨を明らかにして、速やかに消火に努める。

5、道路の啓開も地区毎に継続実施する。

6、罹災証明書は、各警備地区の指揮官に於て、今後一週間発行する。

県・市・警察側の機能が、復旧するに至った後は、これらにても発行する。

7、小豆島より醤油、四国よりイリコ、竹原より罐詰二四万個、至急送付の手配をする。

8、電車復旧の為、工兵隊及び其他都市より技術者を集め、即急に処置する。

9、県内外の労務者及び軍側の作業力をフルに活用し、一人の遊兵もなからしめる。為之、的確に任務を付与し、戦災処理に対し能率的援助を為さしめること。

10、精米の可否については、船舶司令部の経理部長にて調査する。

11、復旧は県中心にて実行する。

八月九日

この頃になると火災は概ね鎮火し、主要交通の啓開も一応出来るようになったが、患者の収容並びに屍体の処理は尚少なくなからず残されて居た。

電話は一部開通し、放送も実行し得るに至った。

軍・官に於ける対策主任者の会同は本日も実施し、情報の交換を行なって現況を説明し、促進を図ることとした。此の日の主な申合せ事項は、次の通りであった。

1、会同には責任者が出席し、総て即決実行を期することに努める。

2、小豆島より醤油約三五〇t、四国よりイリコ約一〇〇tを輸送する。

3、駅に案内所を設ける。

4、報道を整備し、報道の一元化を図る。

5、「トラック」三〇輦を統制使用する。

6、需品廠の板・木材を使用する。

7、各救援隊の援助状況及び実績を記録する。

8、処置した事項の大要は、総軍に筆記報告提出する。

9、各地区に於ける救護警備の部隊は、戦闘要報の如き様式で報告する。

10、船舶司令部経理部長は車輛の蒐集方につき適宜手配する。

11、船舶司令部軍医部長は、患者収容治療の為、野戦病院設置につき即急に研究手配する。

12、主要交通路の啓開は概成せられたが、その他の交通路も速やかに啓開するようにする。一般に市の南部地区に対し、一層、促進を期する。

13、水道は主機械の破損はないので早く給水し得る如く、軍に於て援助し漏水を速やかに防止する。

14、中国軍管区・中国地方総監府・県・市・海運局・文理大・新聞社にて、罹災者に救恤品を発送する。

船舶司令官は総軍司令官に対し、次のように意見具申した。

- 1、自動車に至急増加配属され度いこと。
- 2、工兵部隊を増強され度いこと。
- 3、医薬物品等を増加交付されたいこと。
- 4、運搬具を増加送付され度いこと。

各地区に対し、陸上勤務中隊 一〇二、水上勤務中隊 五〇、建築勤務中隊 一二〇、総軍第一大隊 九三〇、総軍第二大隊 五八五、独立工兵隊 五九六、計二、三八三名を救難隊として増強し、また、警防団四〇名を中地区に増加した。

患者収容の状況は、本日十二時迄に於て西地区 二、一三〇、中央地区 二、〇一〇で、このほかに治療を受けて帰ったもの約四、〇〇〇名に上り、また、主なる個所に芝救護所を増設するのみならず、自ら救護所に行けぬ重患者に対する処療に遺憾なからしめるよう努めることとし、為之、救護班を細分して、特に巡回救護班を励行し、小なる道路内を行動して救護に手落ちなからしめ、また、河の中其他の屍体処理を迅速ならしむることとした。此の日収容した屍体の概数は、白島方面 約一、七〇〇、中央地区方面 約三、六五〇、西地区 約八四〇、計約六、一九〇で、その中約八割は、八月九日夜、火葬終了したが、河の中の死体収容は未了であった。

尚、氏名不明のものに対しては、遺骨と所持品を添えて標示陳列し、死体搜索者に便宜を与えることとした。

此の夜、駅の電灯工事概了し、三日振りに点灯するに至った。

電線二〇万米(各種類)は鉄道輸送により逐次到着し、また電話工事の為九米電柱約三〇〇本を兵器補給廠より補給を受けた。

船舶司令部一総軍司令部間、中国軍管区市役所一中地区間は、この日野戦建築一中隊で架設し、兎に角、有線電話は開通し、また、放送は地区毎(?)にて実行するに至った。

非常用受信機(岡山のもの)

観音町の予備は異常なし

此の日、ソ聯参戦の報に接したが、第二総軍司令官は隷下将兵に次の要旨の訓示を行なった。

国際情勢の変転に際し人心を安定せしめること。

ソ聯と交戦状態に入ることとなったが、この事は、予て予期して居た事であるので、特別に方針に変化はない。神州不滅に向って断乎毅然として実行が必要であること。

八月十日

電車の一部は開通準備を概了したが、市中には未だ屍体処理未了のものが少なくない。軍官主任者に於ける責任者会合は従来の通りであるが、市庁舎の取片付けが終ったので今回からは市庁舎で行なった。主な研究事項の概要は次の如くである。

- 1、焼失家屋で交通妨害のものを処理する。
- 2、放送線で不通の個所は通信局にて修理する。
- 3、電車は、本日四時より一部折返し試運転を実施し、明十一日午前中焼失なき区間を運転し、逐次平常に復する予定。
- 4、警防団員で戦災処理希望のものは、地区毎に充用する(?)
- 5、地区警備の司令官は罹災証明書のほか、死亡証明書をも発行する。
- 6、各地区は、現在の使用兵力・作業概要・復旧進捗程度を報告する。
- 7、馬車一〇輛を配電会社に配当する。

水道は、一七時に至り給水完成し、放送は第二総軍及び中国軍管区の手によって実施された。

かくて、復旧は徐々にその緒につくこととなったが、本日になってもまだ県庁付近にすら屍体が残置せられ、之が収容に追われる有様であった。

八月十一日

已に、患者は概ね収容し、屍体は海中を除き、取片付け概了した。道路の啓開も完成し、電灯・電車・バス共に一部復旧、水道また一部の漏水はあるが、殆んど全域に対し給水可能となり、また、郵便函も新設された。

此の日、今次爆弾の性能及び対策についての研究の結果に基づく説明並びに指示があった。

1、性能

- A 高度 550m にて爆発、弾量 1 kg - 6 kg
- B 火傷、光線ダータンヤン(?) 持続す。
- C 引火・可燃性で火災の原因をなす。
- D 単機或いは小数機で投下する。

2、対策

一般

- A 警戒警報にて指示の屋外に退避。
- B 遮蔽下に姿勢を低くする。潜行後空地に脱出する。
- C 露出部を少なくし厚着すること。
- D 火傷の薬を応急的に使用すること。
- E 硝子窓を撤去する。日本家屋は半地下式に改築。
- F 成るべく、白衣作業衣を着用(木綿のこと)。
- G 入口に爆風除けを設く。
- H 消防器具は屋外壕内に置く。
- I 総て黒いものは不可。
- J 「オゾン」「ガンマー」線、X光線の治療の方法をこうずること。

軍関係

- A 掩蓋地下施設を必要とする。
- B 高射砲隊の掩体を高くする。
- C 遮蔽を重視する。
- D 舟艇の燃料と弾薬とを分離する。

会報事項の主なるものは次の如くである。

1、主要の個所に連絡所を設け、処理を迅速にする。

2、本日午後、水道量は八万キロ米に達した。変圧機・変電機異常なく、更に漏水処置を徹底し、また一般に水道栓の閉塞を十分ならしめることが必要である。

3、交通

- A 道路の啓開は完了した。
- B 便所を主要個所に増設することが必要である。
- C 本日よりバス六輛運転、今後更に修理中の一〇輛完成次第増加する。
- D 主要橋梁の中完全破壊のもの五橋、一部のみのもの八橋である。
- E 電車は、一八輛焼失し、今、七〇-八〇輛ある。

電鉄技術者が少い、一応の復旧には今後一三日を要する見込みであるが、一〇日位で先ず大体の復旧は出来る予定。

4、各官庁・市庁等の主要個所には連絡郵便制度をとり、また、郵便函を新設する。

5、電灯復旧

此の日、大体、高等学校以南一字品地区、段原一比治山以南地区、草津一己斐地区、府中地区の電灯が復旧し、荒涼たる被災地に漸く希望の灯がつくようにたった。

6、資材の補給を中央に、また労務者を近県より仰ぐことに対し処理することとした。

八月九日まで船舶司令部に於て放出した食糧は、乾パン一三五万食、塩一一、六〇〇t、握り飯七五万食であったが、なお、其他に近隣町村の救護の為少なくなからず食糧を供出した。

また、九日二〇時迄に收容した患者は約一万四千名、十日夕迄に收容した患者は約一万六千名(異常共済病院收容約五千乃至六千名、死亡二一九名を含む)で、ほかに海田市・廿日市・可部町に於て、約三千名を收容したので、十日夕迄の概数約一万九千名に上り、また、屍体については、九日夕迄に約九千名、十日夕迄に約一万一千五百名を收容したが、なお、此の時、海中に於ける約五〇〇体は未処理であった。

通信については、通信局の無線のうち、広島一下関のものは近日中に復旧の見込みであったが、大本営一船舶司

司令部間の通信は、電力四割減となり、交信時間が六回の処、二(三)回に減じたが、夫でも十分受信することが出来た。

また、有線については、通信局・電話局が全部焼失したので、兵力一二〇名にて取片付け作業に移り、十一日頃は、なおその作業中であつたが、東京一門司一福岡の電信は十一日中に復旧することとなつた。

なお、市内通信のうち、軍管区一県庁一放送局、通信局一軍管区、及び防衛通信(監視所一軍管区)については、電信第四十八聯隊及び船舶通信隊にて復旧作業に努め、十一日には概了、十二(三)日には完成する目途があつた。

放送は、原村局・電信第四十五聯隊にて実施し、ラジオの受信も逐次実施されることとなつた。

八月十二日

患者の救護施設は一層整い、食糧も野菜配給を行なうことが出来るようになった。

軍官の会報に於ける主なる事項は次の通りである。

1、従来、船舶司令官の担任していた東・中・西地区の救護警備を、明十三日より広島地区司令官の指揮に移すこととする。

(註、但し、被災地全般に対する船舶司令官の任務は依然従来のままである。)

警備は原則として県・市にて担当し、警察署・警防団・憲兵之に当る如くする。

2、明十三日より会報を取止め、県庁にて所要の連絡事項を配布するようにする。

3、郵便については「はがき」を支給し、また、官公庁用連絡郵便を開始する。

4、河川の筏を除去のこと。

5、此の日、総軍一鶴見橋間の電灯が復旧した。

水道については、一般に漏水多く、水圧が依然甚だ低いので、漏水防止の水栓を配布するなど、之が対策に一段の努力を要した。

食糧については、前にも記した如く、野菜配給が行なわれることになつたが、一般に、配給機構の要員は七(八)百名を要するのに、質実七、八十名に過ぎず之が強化が期待された。

また、配給機構は国民学校の組織により家庭に通ぜしめた。尚配給は、戦時災害保護法によつて無料配給であつたことは当然である。

註・此の頃迄に行なわれた見舞金の支給は、一戸当り五十円、三千戸分計十五万円であつた。

本日、己斐国民学校に收容して居た患者は、約八百名で、之が給養は、船舶司令部で担当したが、此の他、部隊は、通行戦災者二千名に対し炊出しを行なつた。

尚、本日現在、收容していた患者は、己斐の他に、第三七病院に五、七五四、尾長町に六〇〇、他に一、五三〇、計約八、六八四名という有様で、また、救護機関としては、市内に県救護所二〇個所(一、三〇〇名收容(?))の他、別に学校などに更に七ヶ所の救護所を設け、これらの作業には、災厄を免れた女子学生が献身的に協力看護した。

因に、市内の医師は、重傷者を含み四二名という状況であつた。

伝染病は、幸いに発生せず、広島の日赤に二八名を收容した他、廿日市・地御前・太田川上流地区に若干散発した程度であつた。

此の日、船舶通信聯隊兵員二二〇名を、通信第四十五聯隊長に指揮せしめ、また、電話の中継所を中央電話局に入れた他、本日を以て二十四回線を完成することが出来た。

註・主な通信系は次の通りである。

大阪一下関(多重式)	西部軍一第一総軍		
		広島一山口(防空回線)	西部軍一第二総軍
		東京一門司	中国軍一西部軍
		広島一下関	呉鎮一西部軍
		広島一字部(防空回線)	宇品一西部軍
		同盟通信	朝鮮軍一第二総軍

防府放送	呉鎮一舞鶴

{ 宇品－門司(船司) 呉－	大阪－広島
	東京－広島(多量)
{ 西部軍－善通寺	中部軍－中国軍管区
	呉鎮－大阪警備庁
{ 東京－釜山 大阪－福岡(多重)	

内、無線については、已に重要回線は復旧し、また、防衛通信のうち、西向きのは十二日、東向きのは十三日、南向きのは十八日、夫々完成の目途を得るに至った。

八月十三日

関係者の会報に於て伝えられた主なる事項は次の通りである。

1、船舶司令部其他から放出した食糧の量は、概要次の如くである。

八月六日 三五万食

九日 一八万食

十三日 一七万九千食(一般配給)

2、配給については一応目鼻がつき得るに至った。

3、収容せる屍体は約二万八千、患者は約一万三千に上り、尚ほかに市内外に五、六千名は発生しつつある。

患者の救護には女学生が献身的に当たっている。

4、道路啓開は殆んど大部完了した。

5、中国新聞は、十五日より発行される筈。

6、金融郵便事務開始は、目下手配中である。

7、孤児院を六ヶ所設置する。

8、旅館を開設する意向である。

水道に対する漏水を処置したもの十二日までに五、七五〇ヶ所であった。

患者は、十二日に牛田付近に於て約一、六〇〇、長束付近に於て約三、〇〇〇、其他一、七七九を収容した他、太田川左岸地区、日赤及び市内国民学校にも相当数あり、逐次県収容所に集結することとした。

検問所を宇品・広島駅・岩鼻・己斐東北端・草津入口・京橋川の六ヶ所に配置した。

電車は、本川町・横川町に対し運転を開始した。

架線台がなかったので、鉄道兵を以て、焼却電車を除去したが、全部の撤収には二週間を要する見込みである。

尚、此の日屍体処理要領を定めたが、その結果屍体は凡て、市に於て処理し、特に本人所持の財布金員其他の遺留品の処置に遺漏なきを期することとした。

八月十四日

船舶司令官は、終戦処理の為、十四日発東京に招致せられたので、爾後は参謀長をして代行せしめた。

八月十五日

二総作命甲号外第二号を以て、船舶司令官の戦災処理の主務を中国軍管区司令官に移譲することとされたが、所要の援助は依然之を継続することとせられた。

また、中国軍管区司令官の地方側に対する警備上の区処は続行せしめられた。

(回想省略)

以上の佐伯司令官の手記のとおり、被爆直後から負傷者の救護対策が臨機応変に打ち出されたが、原子爆弾の惨禍は、救護の手をさしのべる余地もないほどの激甚さであり、想像を絶するものであった。

しかし、市中心部の陸軍諸部隊をはじめ、各官公庁が壊滅したなかにあつて、宇品地区の船舶部隊だけでも残つて、勇敢に救護活動を展開したことは惨禍の増大を防ぐ上で、大きな役割を果たしたと言えよう。

(一) 陸軍船舶練習部本部...249

船舶練習部の状況

宇品町七丁目の旧大和紡績工場構内には、船舶兵の将校教育を行なう、陸軍船舶練習部(隊員数約一、〇〇〇人・本部・教育部・研究部)及び・材料廠・砲兵教導聯隊などが駐屯していた。また、各兵種の学生(将校)が市内の借上宿舎に分宿して通勤していた。

このほかに船舶幹部候補生隊・船舶特別幹部候補生隊がいたが、前者は四国豊浜に、後者は小豆島に本隊が駐屯しているため人数は不明である。

八月六日

八月六日朝は対空監視哨・対空射撃部隊・部隊衛兵などの勤務者を除く各部課や教導聯隊などは、それぞれ日課予定表に基づいて作業準備をしたり、教育作業に従事していた。

公用で船舶司令部その他の関係諸部隊に外出中の者、あるいは部隊外居住者(営外居住者という)で、課業時間の関係上、未登庁の者も若干いたが、それはきわめて少数で、大部分の者が営内にいた。

船舶練習部副官野村清少佐は、副官室で机上の書類を閲覧中、突然、ピカリと淡黄色の強烈な閃光を感じた。一、二秒の間をおいて、ゴーッと地鳴りのような爆発音と共に、強烈な爆風が正面から襲来した。窓枠・窓ガラス・帽子掛・刀架などが一度に吹っこんで来たので、顔を両手で掩うやすばやく床に俯伏した。すぐ起き上がり、隣室の部隊長芳村正義中将の安否を確認しようと、部隊長室に入ってみると、芳村部隊長は、飛散したガラスの破片で腹部に軽傷を負っていた。そして、野村副官に対し、ただちに全般の状況知得のための処置を執るよう指令した。

野村副官は、双眼鏡を持って屋上の対空監視哨に走り上がり、市街の状況を展望した。

広島市の市街は全体が灰色の霧[モヤ]につつまれている。まだ火炎を挙げていなかったが、その異様な街相を見て、部隊長に対する適切な報告の言葉がなくて困ったという。

八時三十分ごろ、各部・課・隊から芳村部隊長のもとへ状況報告があり、本部自体も視察を行なって、次のような状況がわかった。

(一) 爆発物は異常な爆弾らしいが詳細については不明。

(二) 隊内被害状況

イ、人員＝ガラス破片、または器物の散乱などにより若干の軽傷者が発生したが、隊内者にて生命にかかわる程の重傷者なし。

ロ、兵器・器材に異常なし。

ハ、舟艇にて練習部棧橋に在りたるもの若干破損、または沈没せるものあり。

ニ、外出中の者については未だ不明。

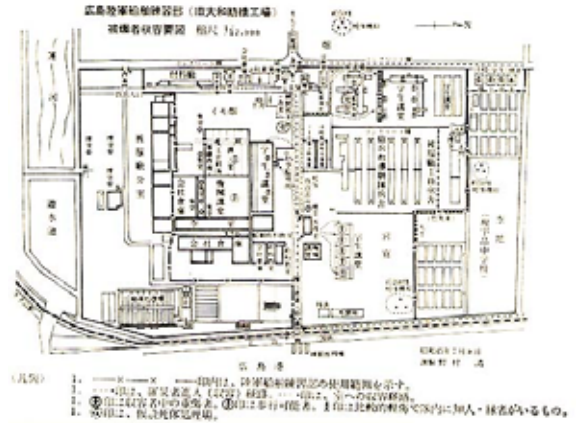
臨時陸軍野戦病院開設

芳村部隊長は凱旋館の船舶司令部に対し、部隊内各部・各課・各隊・各廠の被害実情を総合して報告すると共に、部隊内の負傷者の手当や各持場の整理復旧を急いでいたところ、午前九時を少し過ぎた頃、営門付近に負傷者が徒歩や自転車で一〇数人到着し、部隊内に入って治療を受けたいと衛兵に要請した。

その報告を受けた野村清副官は、営門に行つて状況を視察し、すぐ芳村部隊長に報告した。すなわち芳村部隊長の命により、入門を許可し、医務室に衛兵をして誘導させた。

これに引きつづいて入来する負傷者が多くなり、本部要員をこの誘導にあてたが、当初の罹災者はおおむね軽傷のように見受けられた。これは爆心地から比較的離れた市民であった故であろう。身体もそんなにひどく汚れてはいないようである。

時刻がたつにつれて、負傷程度が大きくなり、ついには自力では避難できず、トラックや荷車あるいは人の背中に負われて運びこまれる者が多くなった。午後三時ごろまでには数百人に達した。夜に入ってから收容者は、も



う自力では動けない無残な姿の、重傷者ばかりであった。

電灯の消えた夜の救援作業は、まったく困難をきわめた。少数の懐中電灯とガスランプ・ロウソクなどしかなく、暗闇のなかで重軽傷者を休養室に収容し、応急手当や食糧の支給、毛布の配給、知人縁者への連絡など、部隊長以下将兵が力をあわせて、終夜、救援活動をおこなった。治療は部隊内の医務室兼医療研究部の所属軍人・軍属が中心となっておこなった。

裏門からは舟艇による収容者を誘導し、表門からはトラックによる者、自力で歩いて来た者、その他荷車やリヤカーによって運びこまれた者などを誘導した。

医務室付近は収容者が通路に倒れて通行も困難な状況であった。それに死亡する者が続出し、死体は医務室入口にあった大煙突の底部(本脚内部)が相当な広さなので、一応この中に安置した。

応急手当をしたあと軽傷者は、比較的医務室から遠い部屋へ、重傷者は近い処へ誘導した。

また、練習部に勤務する隊員の家族は、各所属部課へ収容し、家族との面接ができるよう区処するなど繁忙をきわめた。特に軍医以下衛生関係の隊員は、まさに寝食のいとま皆無の活動で、血に染まった白上衣は柿の実のような色となった。これら医務室の人々も、後日、原爆症で死んでいった者が多い。

この陸軍船舶練習部には、八月九日、佐伯司令官の命令により、船舶司令部軍医部長の指揮で、「臨時陸軍野戦病院」が設置された。

負傷者の惨状

皆実町二丁目の自宅内で被爆した高原きよ(主婦)は、血まみれになって、かねてから決められていた避難所の大河国民学校へ逃げたが、十一時ごろ、「これに乗りこめ」と命ぜられて、四〇人余りと一緒にトラックに乗り、船舶練習部へ運ばれたが、「明るく七日はよい天気。暑い日であった。朝早く兵隊さんがエナメル塗りの浅い椀を配って、それにおカユを入れてくださる。ありがたく頂戴する。早い人は、まだ皆へのカユの配給がすまぬのに、もう食べてしまって『兵隊さん、兵隊さん』と呼びつづける。何もかも兵隊さんに頼みこむ。『兵隊さん水をください』『兵隊さん井戸はどこ…』『洗濯場はどこ?』と、引っぱりだこにされる。当の兵隊さんも観音さんのような慈悲深い親切づくめの人ばかりではない。『水を飲んだら死ぬるゾ』と、大きな声でどなられる。瀕死の難儀を全然理解されないのも道理ではあろうが、ただこらえてあきらめるより仕方なかったようである。

朝、怪我の治療をするから集れ、とのかけ声。お医者さんと看護婦さんと、手伝いの兵隊さん。長い行列をつかって診療を受けたが、赤チンを塗るだけの簡単なものが多いせいか、割合に早く進む。私は、顔・額・上唇、右の口の方など数多く傷ぐちがあり、それに口の方は耳の下まで切れていて、肉がさがっていたのを、フロシキでおおって、右手でおさえていたのだから、赤チンを塗るのは早くても、繃帯のグルグル巻きで、目と鼻だけを出して真白い頭になった。また、左手首が骨に及ぶ切り傷で、赤チんに繃帯であった。」

と、手記「被爆追想」の中に書いているが、治療を受けるといっても、患者自身が足を運ばねばならない状況で、動けない人々は、そこに横たわったままであった。

また、八月四日、鳥取第四十七部隊から戦友四三人と共に、広島陸軍教育隊(広島城北側・爆心地から約一、〇〇〇メートル)に入った竹原精一見習士官は、六日朝演習のため舎前に整列(約二〇〇人全員)して被爆し、火傷を受けた。暫時失神のあと、猛火の中を東練兵場に逃がれ、七日教育隊跡に還って露営、ようやく八日正午ごろ、トラックによって船舶練習部(臨時野戦陸軍病院)に収容された。この時の構内の惨状について、同人の手記「不幸な記録」によれば、「八日正午頃と覚ゆ。三台のトラック来り分乗、盛夏炎天の下をガタンガタンゆられて臨時野戦病院一元宇品船舶練習部一に入る。すでに超満員、皆、血と傷と塵芥に汚れ、人の姿にあらず。ここ軍関係のみならず、女あり子供あり泣き叫ぶ声、耳に満つ。昼も夜も、食事はムスピ二つ、漬物二片あるいは味噌を指頭大。顔面の火傷のため食事意の如くならず。不自由なり。背中火傷のため仰臥ならず伏す。胸痛し。昼はハエ、夜は蚊の攻撃。化膿した傷にウジのわくあり。ハエのためなり。生ける体にウジのわくは初めてなり。新聞などの紙にてカミシモの如き上衣やカブトを作り着す。ハエと蚊を防ぐためなり。各方面より来るものそれぞれ『俺の所へ真っ先に落ちた』と主張してゆずらず。後に至り、一発なりしことを知りて、暗然たり。治療は人手少なく隔日。血のため固く張りついたガーゼを除く時など、失神せるものありとかいふ。そのうち発狂するあり、死するものあり、朝になって、はじめて隣の死せるに気づくなど、様々なり。見渡すところ皆バケモノの如き面相、自分の傷の痛みはもとよりのこと、他のうめき声、ハエ・蚊の襲来、傷のため口は開かず、食事意にまかせず、神経、とがる。互いに戒め、自己の抑制につとむ。かかるうち、一旦化膿し後頭部にウジまでわきたる自分の火傷、一週間後より日

ましに回復、カサとなってボロボロはげだす。」という状況であった。

死者続出

七日朝には、すでに三、四〇〇〇人も収容されていたが、明るくなるにしたがって、構内の各所の収容場所で、すでに死亡している人々や死んでいく人が続出した。生存者と同室させておくことはできないため、野村副官は本部の上野少尉に命じて死体処理班を編成した。

死体は表門外の畑の中に集積、また裏門の所に集積した。そして死体の上に薪を置き、松根油を振りかけて火をつけ、茶毘にふしたが、赤い火の手があがるたびに、胸を搔きむしられるような悲憤を覚え、見るに堪えられなかったという。

十二日か十三日ごろ、ついに燃料も欠乏するありさまとなり、死亡者はさらに続出し、その処理に困窮した。そこで、芳村部隊長は教導隊の船によって、似島の軍の防空壕に、一時埋葬するよう命じた。これより教導隊将兵の手により、死体を移乗し、似島へ輸送した。

この船への死体移乗も、全裸に近い死体であったから手の掛けようがなく、また、火傷した皮膚が剥げるのを防ぐため、将兵は裸になって一体ずつ背負って運んだ。

その間にあって、収容者は他に出て行く者、そのまま残る者など、収容人数は常に一定数にとどまらなかった。更に、死体は、構内外で火葬にされたが、燃料の不足などから前述のとおり似島へ輸送して処理するなど種々な処置がとられ、その数も確認する余裕もない状態であった(野村清資料)。

生存者の食事の世話は、主として女子筆生(各部課合わせ約一〇〇人)が行なったが、たくさんのにぎり飯を作ったり、各所に運搬したり、負傷者に直接口にあてがって食べさせたりする作業を連日続けた。皆は何日も入浴できず、着たままで板の上に毛布一枚敷いて仮眠をとりながら活動した。

なお、八月十五日に、飛行機からガリ版刷りのビラが構内に散布された。ビラには「君側の奸臣云々…我等断固米英撃滅云々」と書いてあったが、これがために動揺するなどということは、すでになかった。

船舶練習部の経理課長として活躍した木村経一主計少佐の記録によれば、将兵の兵站支援は勿論のこと、一般市民のための給食・毛布・敷布の貸与など軍の放出した物資は莫大な量にのぼり、毛布だけでも約一五万枚に達したろうという。

(二) 陸軍船舶練習部第十教育隊...256

部隊の概要

江田島の最北端幸の浦基地[こうのうら](爆心地からの距離ほぼ一三キロメートル)には、斉藤義雄少佐を隊長とする第四十一戦隊から第五十三戦隊(一戦隊一五人)までの戦隊からなる陸軍船舶練習部第十教育隊が駐屯していた。隊員は整備隊要員三〇〇人程度を加え総人員一、五〇〇人ほどがいた。

同隊は小豆島陸軍船舶特別幹部候補生の出身者を基幹とし、敵の本土侵攻に備えた決死隊ともいべき精鋭そのものの部隊であった。

教育隊というのは防諜上の呼称であり、実は陸軍水上特別攻撃隊(いわゆる特攻隊)で、本土決戦に備え、敵の艦船を攻撃目標として、二十四ノットの高速艇(ベニヤ板製で二五〇キロ爆雷を装備・**レ**艇という)(デジタル版注:以下「**○レ**艇」は(レ)艇とする)を操縦し、一艇当たり隊員一人が艇を操縦して、ほぼ三〇度から四五度の斜角から突入し、体当たりして爆雷を投下し、急遽退避する猛訓練の明暮れであった。その間、艇の故障に備えて機関の講義を受けたり、夜間には小隊編成で隠密機動訓練を行ない、接近行動および歩兵の散開その他に準ずる舟艇行動を訓練していた。

なお、原子爆弾炸裂当時、この斉藤部隊(第十教育隊)には、三月一日、宮古島へ船舶輸送中、奄美大島において空襲にあい海没し、部隊再編成のため江田島に帰還し、以後、内地防衛の海上挺進第三十一～第六十戦隊の訓練の基幹部隊となった海上挺進第三十戦隊約一〇〇人(隊長・富田稔少佐)、および海上挺進第三十基地大隊所属の整備中隊約一〇〇余人(隊長・富田稔少佐)が配属されていたから、幸の浦基地の極秘部隊は総計約二、〇〇〇人程度であった。

八月五日夜は日曜日であったから、第十教育隊長斉藤少佐は安芸郡中山村(現在・市内中山町)へ月に一回の帰宅休養で帰り、その他の広島在住の将校も帰宅し、幸の浦基地には富田稔少佐が泊って、全体の指揮にあたっていた。

六日朝

六日の朝、木造二階建の兵舎内では、前夜来の警報発令で、早朝の行間演習もとぎれとぎれとなり、七時半の警報解除の合間をぬって、急ぎ朝食をとる兵もあったし、他の内務班では、夜間訓練でヘトヘトになり、朝食後就寝しようとしている兵もいた。また、六日の任務に出るための注意事項などを聞くために舎内に整列していたところもあり、朝食後の暫時の休憩で、雑談をしたり雑誌を読んだりしている者もあった。

また、正午ごろ九州五島へ出戦の内示を受けていた兵らは、午前十時から軍装検査があるので、落度のないようにその仕度をしていた。

小隊長当番の兵は、朝食後の食器のあと片づけのため、兵舎二階の小隊長室に入って行った。

海岸波打ち際に面した週番司令室では、波おだやかな瀬戸の海を眺めながら、命令受領に来た見習士官が、土間に立っていた。

峠島や広島市が一望できる海岸では、舟艇当番が(レ)艇の整備作業をしていたし、すでに訓練中の者もあった。

富田少佐は、海岸に近い兵舎の教育隊本部室で、海(広島方向)を背にし、窓を開け放して事務を執っていた。

閃光と爆発音

その時であった。突然、室内一杯が、目のくらむほどに光った。首すじが熱く、後方の広島方向の上空に大炸裂音がした。

海岸に多数の燃料ドラム罐が集積されていたので、その爆発と直感して多くの者が海岸へとび出したが、何も異状はなかった。

ただ、上空にB29一機が、広島上空から西南方向へ飛ぶのが見え、間もなく広島市に黒煙が昇りはじめた。上空には異様な雲状のものが認められた。

しかし、原子爆弾とは知るよしもなく、宇品にあったアセチレン工場の爆発であると、富田少佐らは話しあった。

内務班によっては閃光に気づかなかったところもあるが、整列してその日の注意事項を受けていた戸嶋上等兵らは、舎内が一瞬、稲妻の何十倍もあろうかと思われるような光に「ピカッ」と輝くのを感じた。「何の光だろうか」と、ささやきあっていると、二、三分後、ドカーンという大音響をきいた。同時に、兵舎の出入口の扉が千切れるほどの爆風に襲われた。ガラス窓も破れて飛散した。

暫時休憩で雑誌を読んでいた西義美上等兵は、閃光と共に頬熱く、とっさに雑誌で顔をかくした。急ぎ海辺に走って出ると、ミカン色の火の玉が水上で燃えている。と、突然強烈な爆風に襲われ戦闘帽が吹き飛ばされ、体がゆれた。戦闘帽を拾って内務班の床下に避難しようとしたとき、兵舎のガラスが破碎して足のところに落下した。それから少しして轟音を聞いた。

演習に出かける準備をしていた佐々木博兵長は、兵舎のすぐ近くで爆弾が炸裂したと直感した。大音響と共に兵舎が地ひびきを立てて揺れたように思ったので、すぐ裏山の防空壕にみんなと一諸に避難した。

二階の小隊長室に食器を片づけに行った川綱重治上等兵は隊長室に入ったとたん、ピカーッ、ドカーンと閃光を浴び、続いて再びドカンと猛烈な爆発音を聞いた。兵舎がやられたかのようにグラグラと揺れた。とっさに眼と耳を両手でおさえ、ベットの中にもぐりこんだ。しばらくして、誰かが宇品の方を見ろというので、二階の窓から見ると、似島と峠島のあいだの宇品方面が白煙でおおわれ、大きなキノコ雲がニョキニョキと中天に拡大していくのが見られた。

海岸近く週番司令室にいた石塚恒蔵大尉は、突如、宇品方向の右側と覚しい方向に、白金色の閃光が走るのを見た。と、朝日の数十倍の大きさの真紅に灼熱した火の玉があがった。同時にパッと身体に感ずる圧力を受けた。その巨大な火の玉を、何事かと見ていると、ドーンという大音響と共に、屋根のトタンの錆と煤がバラバラと頭の上に落ちて来た。

火の玉は三〇秒以上も地上スレスレの処にぶら下がっていたが、それがダイダイ色に色あせる頃から、層の厚いキノコ雲が、火山の大爆発のように、中天高くモクモクと濃く厚く、まるで生物のように、あとからあとから湧いて、一日中それを繰り返しているのが見られた。

基地練兵場の裏山海岸に繫留してある(レ)艇の整備をしていた新保正信兵長は、整備も終るころ、艇内から顔をあげた瞬間、ピカッと鋭い光を受けた。同時に轟音と熱さにより、無意識に両耳をおさえ、「アツイ！」と悲鳴を発して艇内に伏せた。

その閃光は、瞬間的な光で、目がくらみ、顔は針でさされたような痛みを感じた。轟音は耳を突き刺す「ドカー

ン」という爆発音であった。

すぐ顔をあげてみると、爆発地点は広島市と思われた。

爆発と同時に、あたかも消火ホースで全市水平に水をかけたように、スーッと市一面が白い幕を引くように硝煙におおわれていった。

中央からは、傘状に白煙がモクモクと上昇して、次第に黒煙と化し、その中からチラッチラッと、ちょうど水平線に沈みゆく夕陽のようなまっ赤な火の玉が見えた。この黒煙は上昇するにしたがいキノコ状となり、その傘の中に、まっ赤な火の玉がなお見えていた。

富田少佐は、ただちに基地内の状況を調べたが、兵舎はこれというほどの破壊は受けていなかった。ただ若干の板が吹きとばされていたが、兵員の被害はまったく無かった。

幸の浦基地から、宇品の練習部へ連絡しようとしたが、被爆のため有線電話は不通、すぐに無線通信によって情報を聞くと、「広島市は原因不明の爆発により、火災が発生した。」ということであった。

偵察兵を出す

午前九時ごろ、広島市出身の幹部候補生に偵察命令が出て数人が出動、国泰寺の楠が根本三メートルを残して燃えているのを見ながら相生橋・紙屋町・八丁堀辺に進出し、その惨禍の甚大な事を帰投して報告した。

出動命令下る

このとき、練習部から富田少佐あてに命令(電報)が出た。

敵は原子爆弾らしい兵器を使用した。広島は損害甚大にして大混乱に陥っている。第十教育隊は、先ず富田少佐の指揮する第三十戦隊を基幹として、随時、救助作業に出動し得るよう準備せよ。

斉藤部隊長の帰任

月に一回の休暇で、江田島幸の浦基地から安芸郡中山村(現在・市内中山町)に帰っていた船舶練習部第十教育隊長斉藤義雄少佐は、六日午前八時ごろ、帰營の途中、中山村から市内尾長町に出る大内越峠[おおちごだお]を登って行くところで、原子爆弾の炸裂にあった。異様な閃光で反射的に山の横穴に飛び込んで負傷しなかったから、その足でただちに宇品の船舶練習部本部に急いだ。

市内からの、避難者の大群を押し分けるようにして、午後十時少し前ごろ、騒然たる練習部にようやく到着した。幸の浦基地の部隊に連絡すると、留守をあずかっていた富田少佐から、基地は異状なしとの報告を受けた。同時に、船舶部隊司令官佐伯文郎中將から「重要訓練を一時中止して、広島市の救援に立て」という命令が出ていることを知った。

斉藤部隊長は、すぐ宇品市宮棧橋から、船舶司令部が運行している江田島行きの連絡船に乗った。便乗した一人の娘は、肩から片腕、背中にかけて薄い皮膚がペロリと剥げ、大きくブラさがっていた。

海上から振り返って見ると、広島市は東から西にかけて市の上空一面は、火煙の切れ目なくおおわれている。反対に海面は平素と変わりなく、美しく静かに、ガラガラと真夏の太陽を反射していた。

午前十一時少し前、幸の浦基地に到着し、ただちに富田少佐から、隊員一人がガラスの破片で手に軽傷を受けたのみで、人員その他に異状のないこと、広島市に出ていた将校三人が未だ消息不明であること、似ノ島検疫所の要請により、約五〇人の隊員を派遣したことなどの報告を受けた。

そのあとすぐ午前十一時過ぎ、佐伯司令官から、斉藤部隊長に対し直接の電報命令で、訓練を一時中止して広島市救助のために出動せよという命令が出たのであった。

幸の浦基地に高々と各戦隊長集合のラッパが鳴りひびいた。

(船舶司令官佐伯文郎中將の命令)

敵の新型爆弾広島市に投下さる。中国地区各基地の陸軍船舶部隊は、全力を挙げて復旧救援作業に従事すべし。

斉藤部隊長は各戦隊長に状況を説明し、なるべく速やかに広島市に進出して救助に当るよう指示し、細部のことは幕僚に委せて、現地での行動の指示を仰ぐべく、船舶司令部へ先行した。

出動開始

江田島幸の浦基地は、ただちに活動を開始した。正午前、被甲(ガスマスク)・鉄帽を携行の完全軍装で、まず(レ)第三十戦隊第一中隊長面高俊信大尉の指揮により、第一次救援隊が進発した。大発・小発(共に上陸用舟艇)・(レ)(特

攻艇)にそれぞれ分乗し、一斉に宇品へ向って海上を駆った。

一五分で到着した宇品港は、一面夕暮れのようにうす暗い感じにおおわれていた。舟艇を船舶司令部の軍用棧橋に着けて上陸したが、すでに運輸部の岸壁には、血の海から匍いあがってきたような姿の市民が無数に待っていた。頭から顔・手・足、全身血だらけとなり、瀕死の体を横たえていた。悶絶する声、うめく声などみんなギラギラと眼だけを血走らせていた。

上陸すると一応、練習部構内に入った。松本宇八見習士官は、部隊到着の報告を命ぜられ、伝令一人を連れて司令部に行き、指示を仰いだ。その時、すでに練習部にも司令部にも、多数の負傷者が収容されており、上を下への大混乱を呈していた。

入市方法

救援隊の入市方法として陸上からのものと、舟艇により河口から市内各河川に進入したものとあった。

陸上からの救援隊は、トラックおよび乗用車が各々、二、三輛程度で、部隊本部から御幸橋までのものと、比治山橋付近までのものがあった。この付近まで脱出して来た負傷者で、比較的重傷者から先に営内に収容したのであった。

水上救援隊は、各河口から進入して水中生存者を救出し、各収容所に運びこむことを、繰り返して続行したが、逐次、川岸に近く脱出してくる者をも助けだした。

指示を受けた面高大尉指揮の救援隊は、徒歩で宇品から逐次北上して、中央部に前進した。

異様な大爆発であることはわかっているが、まだ惨禍の本当の内容を知らないままの救援隊の兵士たちは、歩を進めるたびに驚倒し、戦慄を覚えた。

市内はまだ猛火に包まれており、踏む地面は焼けつくように熱い。電車は爆風で三〇メートルも飛ばされており、線路もアメのようにヒン曲り、無くなっている箇所もある。

宇品町一帯は、建物もそれほど被害はなかったが、市内に入るとこれまでの町はもう無かった。倒壊飛散物で道路もはっきりしなかったが、そこには無数の死傷者が倒れ重なっていた。その中でボロボロの衣服をまとった半狂乱の女が何か叫んでいる。まるで地獄からの声である。

たまに一つ二つ崩れ残った建物には、負傷者が満員でゴッタ返しており、死んだ人はそのまま放置されていた。

面高大尉らの救援隊は、ヒシヒシと身の危険を感じながら猛火の市中に入っていたが、市内はただ死傷者ばかりで、まだ救援作業にあたっている軍人や民間人の誰一人の影も見あたらなかった。

救援隊本部設置

救援隊は千田町三丁目の広島電鉄本社の建物の一階を借用して指揮所と定め、「斉藤部隊本部」の標識を掲げた。正午前であった。

一階の指揮所は、上から天井が抜けてブラ下がっており、建具は飛び、机は散乱し、ガラスの破片が床やその他のものに一面に散って光っており、柱や壁にも無数のガラス片が突き刺さっていた。

後続救援隊の出動

幸の浦基地では、第一次救援隊が出てからのちも、実戦さながらの、きびしい各訓練が続けられていたが、本部からの命令で訓練を中止して、次々に進発した。

石塚恒蔵大尉指揮下の柴田富雄上等兵は、「午後、連絡艇の運搬訓練に引きつづき、海岸で学課を受けていたとき、週番上等兵が走って来た。石塚隊は作業を即時中止して、直ちに本部前に集合すべしと、小隊長に報告した。一同、素早く隊伍を整え、本部前に集合する。週番司令が広島出動の命令を掲示板に書き、今後の行動につき注意を与える。早速、携帯口糧の受領に出かけた。炊事当番を除き、他の者は内務班に帰り、またたくまに出動準備を完了する。

第一線だけでなく、内地もすでに戦禍の中にある。外地への出動ではないが、異常な闘志が全身にみなぎってくる。

岡田隊が行くぞ！次は草深隊か、石塚隊はまだか、などと話しあっているうちにも、各隊は続々と棧橋に集合しつつある。出動間際の緊張に、皆黙々と歩をいそがせ、速やかに乗艇を完了した。

ザザーッ！、スクリュウの騒音が神経をいらだたせる。ようやく命令下る。

号令一下、幸の浦湾口から、猛然と滑りだした。」と、手記「炸裂」に記述している。

第二次救援隊の進発は午後一時ごろであった。富田少佐も出発し、電鉄会社の斉藤部隊本部に到着、面高大尉か

ら概況を聞いた。

斉藤部隊長到着

午後三時過ぎ、司令部から斉藤部隊長が来着し、全般的な作業計画を行なった。そして、すでに救援作業を開始している戦隊もあったが、逐次到着する各戦隊を計画に従い、それぞれ展開させて作業を進めた。

現地の惨状は予想をはるかに越え、一刻の猶予も許さぬ非常事態であったから、斉藤部隊長は、幸の浦基地に待機する残存戦隊に対し、引続き出動命令を出した。

混乱の宇品港

このころ、宇品港は市中の灼熱地獄から逃げて来た無残な姿の市民や、軍の救援隊が似島や金輪島などへ後送するため、トラックで運んで来た無数の負傷者が雲集して、空前の大混雑に陥っていた。

港内もまた、負傷者を海上輸送する機帆船や舢舨が多く入り乱れていた。負傷して片腕を吊った将校が、兵隊を指揮してこれらの整理にあたっている姿も見られ、まったく戦場そのものであった。

幸の浦基地から出動した後続救援隊のなかには、海に溢れおちそうなほどの人波に押されて、どこからも上陸できず、ついに基地に引きかえさざるを得なかった舟艇もあった。

また中には、辛うじて上陸はしたものの、この世のものとは思われぬ姿の負傷者や死人を見て、顔面蒼白となり、失神して仕事にならず、ふたたび基地へ送りかえされた少年兵も二、三人いた。

市中へ進入

出動した救援隊は、宇品に上陸して入市した戦隊と、各河川から舟艇によって北上し、中央に進入した戦隊とがあった。

幸の浦基地に一早く出動命令が下ったのは、第十教育隊の性格上、多数の舟艇を保有するうえ、部隊の編成も訓練された兵隊も、救援隊として最も適任であったからである。他の部隊の舟は大型で河川に進入できないものであった。上陸した戦隊が、トラックで入市しようとしても、皆実町電車停留所の手前辺りからは、電車の架線や各種電線が落下しており、家屋の倒壊による飛散物のため進行できず、そこからは徒歩で御幸橋を渡っていかねばならなかった。

電鉄会社の部隊本部に到着すると、各戦隊はまず消火班と救護班とに分けられた。

救護班は進出した地域によって作業内容が異なり、爆心地に近い場所では、輸送路確保のための道路啓開や、死体の捜索・収集が行なわれ、爆心地から離れた場所では、臨時収容所を開設して、負傷者を安全な場所へ集結した。同時に道路の啓開や消火活動を行なった。

これらの作業に挺身した兵隊たちは、すべて満一五歳から二〇歳ぐらいまでの少年であったから、被爆者の中には陸軍幼年学校の生徒たちだろうと思った者も多かった。

作業開始

戦隊長藤井昌三大尉指揮下で救援作業に従事した和田功上等兵の手記によれば、入市した六日当日は、指揮所電鉄会社の周辺や広島工業専門学校(現在・広島大学工学部)周辺の負傷者の収容から作業を開始した。はじめは負傷者を背負って一応校庭へ避難させたがはかどらず、戸板を探し出して担架代りに使った。「痛い、痛い」という呻き声を聞きながら、何度も繰返して運んだ。中には痛いあまり「兵隊さん殺してください」という重傷者もいた。

運んでも運んでも運び切れない負傷者の数で、夜遅くまでつづけたが三〇〇人をはるかに超えた。死亡者も続出する校庭で、その夜睡眠をとったが、なかなか寝つかれなかったという。

午後六時ごろ、電鉄会社の斉藤部隊本部に到着した第四十四戦隊(戦隊長・藤井昌三大尉)付の田村繁雄中尉の記録によれば、救援隊の活動状況の概要は次のとおりである。

八月六日一八時ごろ、宇品から徒歩で千田町電鉄本社に到着。先発の戦隊長の指揮に入る。市の中央部から運ばれて来る負傷者を、電鉄会社内外の空地に仮収容して休ませる作業を七日朝まで行なう。

他方面の隊の情報では、夜、赤十字病院方面、南大橋付近に仮収容している負傷者を守るため、火災が西北の方向から延焼して来ているので、消火命令が出て、宇品方面各所の手動ポンプを官民の別なく集結し、重点を南大橋東たもと付近、および赤十字病院付近において、建物の類焼防止にあたっていたようである。八月七日午前二時か三時ごろ、風向き関係もあって消火活動は一段落した。

八月七日早朝、電鉄本社付近に収容されていた負傷者(道路のすみや廊下などに寝ていた)の大部分が、空が白々

と明けるころ、非常に寒さを訴えた。毛布なども手持ちがないので、電停前付近の半壊家屋の中から布団類を探して来て、掛けてやるようにしたが、それも全員までには行届かなかった。

夜が完全に明けたときは、約半数が死亡していた。

七日午前中、戦隊の約半数、小隊長四人か五人と、四、五〇人の兵をつれて、戦隊長とは別隊として、(一) 負傷者を収容車の通行路の要所要所に集結し、(二) 死亡者はでき得る限りの証拠(氏名・性別・年齢)を記録の上火葬にする。この二つの作業をおこなう。

受持区域は、紙屋町－鷹野橋－富士見橋－比治山橋－現在の稲荷橋に囲まれた区域。ただし、紙屋町－鷹野橋の電車道をはさむ両側地域は他隊もいたようで、袋町国民学校・白神社・県立第一中学校・市役所地域は重複していたようである。

電鉄本社から御幸橋西詰に至り、そこから俗に別荘通りと呼ぶ道を京橋川沿いに北上して、比治山橋西詰に到着、ここを中心として各小隊毎に分散、主目的は負傷者(単独歩行不能者)を富士見橋－比治山橋線の道路に集結し、逐次、通行する収容トラックに収容することとし、同時に自力でこの付近まで出て来た負傷者の、トラック乗込みを補助することにした。この付近では、トラックなどの出動できる道路はこの道路が最も良かったようである。

付近はすべて焼けてしまっていた。比治山橋西詰もとに、応接間風のコンクリート建洋館が傾いて残っていたが、使用に堪えないので、その前を指揮連絡地点とした。建物は、焦土の中では各方面から眺められ、目標の役目をした。

この指揮所の北側別荘通りに面して庭園風の所があり、地面が焼けていなかったのも、ここに二泊した。勿論、着たまの野宿である。

八月九日ごろから、おおむねこの地区での負傷者の収容が終って来たので、作業の主目的を死亡者の火葬に移していった。

死亡者の火葬は、焼跡に一〇人から二〇人集った地点で、氏名・性別・年齢などを各小隊長において記録のうえ、周囲の焼けた残材を使って火葬し、終るとその地点に埋葬した。ほとんど氏名確認はできず、性別とだいたいの年齢を推定して記録した。

指揮所を比治山橋袂から移し、被爆前に建物疎開がなされた平田屋川の西側付近の、川沿一帯が空地となり、共同の防空壕が構築されていた所にした。

八月十日・十一日ごろから、一部は現在の稲荷橋から比治山橋間の京橋川の中に浮遊している死亡者の収容を行なう。川の水は、家屋の破壊された材木その他で一杯に埋まり、潮の干満につれて、橋と橋の間を上下に流れたが、死体もこれらにはさまれて上下していた。

八月十二日、幸の浦基地に帰隊したが、七日から十二日引揚げまでに火葬した死亡者の数は二〇〇人から三〇〇人余りであった。火葬者の名簿は幸の浦帰隊後、部隊本部に提出した。

斉藤部隊長報告

斉藤部隊長は、担当地区内(中央部)を巡察して作業の総指揮にあたったが、死傷者の惨状その他について次のように報告している。

「爆心に近い場所の屍体は、眼球が飛び出ていて、皮膚は茶褐色の黒みがかかった色をし、水気はなく、苦悶を示すいろいろな姿勢をして倒れていた。高熱による焼死が先か、爆圧による圧死が先か、いずれにしても想像を絶する一瞬の光と圧力による即死と思われた。

焼けた電車の中の屍体は、死亡したあとに電車と共に焼けたものか、電車の火災によって死亡したものか不明だが、白骨化してはいなかった。河・古井戸・水槽・池など水のある場所には、多数の屍体があったが、即死しなかった人たちが、火災を避けて、水を求めて行き、力尽きたものと思われる。

負傷者は、外郭だけとなったビルなどを臨時救護所として、一定の場所に集めたのち、舟艇とトラックによって似ノ島・金輪島その他の大きな収容所に後送した。赤十字病院にも多数の負傷者を収容したが、収容力に制約されて遠方の収容所に送付せざるを得なかった。

焼け落ちた福屋百貨店の残骸の中に収容された負傷者の惨状は、まったく目をおおうものがあつた。兵隊や電車かバスの車掌と思われる年若い人が多数目についた。

部隊本部を置いた電鉄本社の横にも、収容所への後送を待つ間の負傷者が集められたが、待ちきれなくてそのま

ま息を引取る人が毎日相次ぎ、どうしようもない無力感にさいなまれながら、辛い思いで屍体処理を命じた。

七日の午後であったか、三、四歳の男児と一、二歳の女児と、それに顔が腫れあがって眼のつぶれた年齢不明な母親の三人の負傷家族を収容して来て、私の机の位置から直接見える窓の下に並べて寝かせた。三人とも汚れてはいたが衣服は着けていた。男児は収容されてしばらくすると、呼吸を止めた。

『兵隊さん水ください』と言うのが、重傷者の口にする唯一の言葉であったが、すでにその力も無くなった母親が、自分の右側に横たわっている娘の顔に、時々手を伸ばして呼吸をたしかめていた。その姿は正視することができなかった。

早く早くと、何度も督促したが、後送が待ち切れないで、娘それから母親と、母子三人とも私の眼の前で息を引きとっていった。

日を経るに従って、救援隊の作業の主体は屍体の処理となった。屍体の処理はすべて火葬によった。薪にするものが不足がちであったから、重油・軽油を使用した。

氏名不詳の遺骨は、地区ごとに取りまとめて仮埋葬し、簡単な標識を立てておくよう指示した。

氏名の判明した遺骨は、区分して遺族に渡せるようにしたが、受取人の来ない遺骨もあった。

処理した屍体の中には、半焼の者でも男女の区別すら判別できない者も数あったようである。ほとんどの屍体は全裸であって、氏名の確かめようがなかった。

広島赤十字病院の入口の近くに、急造の火葬場を作り、次々と死亡する人たちの遺体を火葬にしたが、病院と火葬場とが同じ場所にあることも止むを得ないことであった。

出動してから五日目ごろ、川に浮んで潮の干満と共に上下している無数の屍体を処理することになり、吉島刑務所から囚人の作業隊が派遣されて来て手伝った。

舟で河から屍体を収容し、岸までの運搬をこの作業隊が担当し、岸から後の作業を部隊で処理した。数十体の膨脹しきった全裸の屍体が、ズラリと並べられた情景は全く見るに堪えなかった。腐敗した屍体は、その手を持って引きあげようとしても、皮がツルリと剥げて収容は困難をきわめた。

処理した屍体のうち、氏名の判明したものは、部隊本部前に掲示したので、家族や親戚を探しに来る人が、連日多数あった。

五日目ごろであったか、探しに来た人が、求める人も見つからず疲れはてて、しばらく休息していたが、終日食事もしないとのことであった。隊員の差出したにぎりめしを非常に喜んで食べ、礼を述べて二、三步外へ出るや、バツリ倒れそのまま再び立てなかった。外傷も無かったのに、炎天下に連日、焼跡を歩きまわるうち、何かの影響を受けたのであろう。

掲示した氏名を見て『私はこのとおりに生きておりますが…』と申し出た人があった。いろいろ聞いてみると、六日の朝、吉島の工場に出勤して門の付近に上着を脱ぎ捨てたまま、工場内で救助作業をしているうちに、服が無くなったとのことである。誰か全裸の負傷者が避難の途中、落ちていたこの上着を着たあとに息が絶え、これを部隊で処理したものであった。

屍体の処理で、手を焼いたのは馬の屍体であった。しばらくの間は、手が廻らないまま放置してあったから、腐敗して大きく膨脹し、臭気も甚だしくなっていた。火葬することもできないので、空地に穴を掘り、これにひっぱりこんで埋葬した。

当初、道路の啓開作業で困ったのは、クモの巣のように道路一面に拡がって落ちていた電車の架線の除去であった。ワイヤー切断機を入手してやっと作業がはかどった。

電鉄本社付近の家屋は、半壊のものもあったが、倒壊したものも多く、県立広島工業学校や広島工業専門学校には避難者が充満していた。ここらには救援隊員が仮の避難場所として運びこんだ負傷者も多かった。

倒壊した家屋の屋根瓦の下を、火がくぐって半壊の家が燃えはじめた。燃えあがっては更に南の方に延焼拡大することは明瞭であったから、本部にいたわずかの人員が、全員出て、瓦をはいで消火に努めた。数回繰返して完全に延焼を食い止めるまでには、相当の時間を要した。

毎日夜が来ると、昼間の服装のまま、机の上や防空壕の中、椅子の上などでゴロ寝をしたが、蚊の多いのには全く参らされた。毎晩シンから眠ることができなかった。

投下された爆弾が、原子爆弾であることは、八月六日の夜、アメリカからの短波放送を聞いて知った。

水道の修理工事を実施した人たちが、八月六日の一日の作業で、つぎつぎに倒れたので工事を取止めにしたと聞

いたが、われわれは作業を放棄するわけにはいかなかった。

世界の終りを思わせる焼野原の中で、五日目に雑草を見つけたときはうれしかった。

井戸の中に屍体が折り重なっていたこと、河岸で数人の学生が腕を組みあったまま死んでいたこと、倒れた塀の下敷きとなって一列に並んで死んでいた生徒のこと、小さな池に集って死んでいた多数の人たちのことなど、日々聞く報告はすべて悲惨というには言葉の足りない事実ばかりであった。

部隊の軍医であった内田大尉は、連日、夜遅くまで精力的に走り廻って救護作業にあたっていたが、ある晩、報告に来た内田大尉が憤然として言った。

『部隊長殿、戦争には負けられませんよ。今度の爆弾は、実に非人道的なものです。屍体の解剖所見によると、胃袋の内部を、ワイヤーブラシでこさいだようになっていたものや、内臓の小さな管までも、血液で閉塞していたものなど、まったく残忍なものです』

赤痢のような症状で死亡した無数の人々の胃袋は、このようになっていたのであろう。

私をはじめ、出勤者の多数が、二日目ごろから下痢をはじめた。人により程度の差はあったが、その後一ヶ月続いた者や、復員後も下痢を続けた者もあった。

出勤中、全員の食糧は幸の浦基地から運搬した。物資が欠乏していたので、極めて簡素なものであったが、毎日三食を運搬した残留部隊の労苦はなみたいていのものではなかった。

約一週間の救援作業を一応終り、八月十二日から逐次幸の浦に帰投した。処理した屍体のみで一万を越え、収容した負傷者の数は幾万あったのか正確には把握できなかった。」

このように、被爆直後に炎上中の市中に最初に出勤したのは、陸軍船舶部隊が主体であったが、消火活動にも手を取られ、思う存分の救護活動はできなかった。本格的な活動に入ったのは、猛火の鎮まった六日夜遅くから七日、八日にかけてであった。

なお、幸の浦基地からの救援隊は、当日市内だけでなく、似ノ島や巖島(宮島)などへ出勤した者もあった。特別幹部候補生の系沢定雄上等兵らは、巖島へ渡り、兵一人が約五〇人の負傷者を受持って看護にあたった。また、死人の運搬・火葬・埋葬なども行ない、忠海高等女学校生徒の応援が来るまで約一週間ほど活動した。

陸軍船舶砲兵教導聯隊の活動

また、宇品の旧大和紡績工場構内に駐屯していた陸軍船舶砲兵教導聯隊(部隊長・佐々木秀綱陸軍中佐)も同様、被爆後、営内に収容した負傷者の救護にあたり、市内にも出勤して活躍した。

負傷者の救護を急ぎおこなうため、兵員増加が必要となり、佐伯郡五日市町に駐屯していた本橋独立中隊の第一分隊(総員約一〇〇人)に対し、宇品に至急来援するよう命令した。

第一分隊は、分隊長伏見軍治軍曹のほか鈴木健二伍長など、ほとんど関東地方出身者で、三五歳から三八歳くらいまでの、予・後備兵であった。

六日午前十時ごろ、井ノ口海岸から舟艇によって宇品に渡り、教導聯隊の高木大尉の指揮下に入った。午後二時すぎ、宇品から陸路、惨状目をおおむねの市中に進入し、火熱で焼けつく西練兵場に到着した。ただちに負傷者の輸送、救護などの作業にあたり、死体の処理などもおこなって正味七日間、苦闘を続けた。

八月十三日、宇品に引きあげたが、全員、口もきけないほど疲労していた。

陸軍船舶練習部の状況 木村経一

(当時・陸軍船舶練習部経理課長陸軍主計少佐)

一、被爆当日のこと

八月六日朝、己斐町の自宅から宇品の陸軍船舶練習部へ出勤後、公務で広島市役所へ赴く途中、比治山橋畔(爆心地から約一・七キロメートル)で被爆した。

即ち、自転車で比治山橋畔まで来て、「市役所は疎開移転したのではなかったか」と自転車を降りて考えているとき被爆したのであった。

被爆直前、朝日に美しく輝く物体が、B 29 から落下するのを確認したと同時に、目前でフラッシュを焚かれたような閃光を感じ、本能的に地上に伏せた。

その後、爆発音があり、激しい爆風を受けると共に、周囲は深夜のように暗くなった。一時は爆風のために呼吸ができない状態であったが、しばらくして徐々に爆風がおさまり、呼吸したときの空気の清々しさは何とも言えない

い素晴らしい感じであった。

軍服が次第に真っ赤になるので、気がつくやうに頭部に裂傷を負っており、おびただしい出血であった。私は、持っていた風呂敷で頭部の傷口を締めつけ、止血につとめた。

そのうち、出血が弱まり、やや落ち着きを取りもどしたから、乗って来た官物の自転車を捜した。私が着用していた夏軍服は、開襟長袖・短袴長靴であったが、戦闘帽が吹っ飛ばされて不明になったほか異常がなかった。

当時、広島市内は国民義勇隊の勤労奉仕で、建物疎開作業が進められていたが、比治山橋付近も中学生が教師引率のもとに作業をしていたが、一瞬にして、周囲は瓦礫の山と化し、電車通りは通行不能となった。私も瓦や木材などの山積した中から這い出したような状態であった。爆風が鎮まるにしたがい、中学生たちの救いを求める声が、次第に聞えて来た。

電車の停留所に立ったまま被爆した人は、顔が真っ黒になり、皮膚が剥けて垂れさがり、まったく幽霊の姿であった。

周辺の樹木はダンダラ模様焼け、遠くに望む北辺の山々の緑も、焼けて灰色の斑になってしまった。建物は、一部の鉄筋コンクリート造りを残し、まったく見事に粉砕された。

道路は自転車の乗れるような状態ではなく、肩にかついで上流の鶴見橋(比治山橋の次の橋)の方向へ歩いて行った。この時、何故に宇品の所属部隊とは反対の方向へ歩いて行ったのか解らない。

途中、倒壊した郵便局から早くも出火したのを見た。また、腰が立たず動けない将兵が散見されたので、それらを激励しながら進んで行った。そして、まるで百鬼夜行のようなすさまじい行列が、鶴見橋を渡り、比治山公園へ向って、力なく黙々と歩いて来るのに出逢った。ほとんど男女の区別もつかず、全身真っ黒で、加えて壁土と血が一面に付着しており、剥げた皮膚が垂れ下がり、真っ赤に焼けただれた全裸・半裸の人々であった。

これらの人々は、救助を求めてか、動物的本能からか、或いは群衆心理によるものか、比治山南麓の電信第二聯隊の方向へ行こうとしているのであった。私も電信隊の医務室で負傷の手当を受けようと思って、それらの人たちの中に加わって歩いた。私はここで、意識がはっきり平常に戻ったと感じた。

電信隊に着いてみると、私の負傷どころか重傷者がすでに無数に集まっており、それも刻々と増加する一方なので、そこに開設された臨時治療所を横に見て、そのまま御幸橋付近の専売局まで歩いて南下した。

そこから辛うじて自転車の乗れる道路状態にあったので、宇品の所属部隊まで帰りつくことができた。ようやく此処の医務室で、軍医の応急手当を受けたが、頭部の負傷は意外と大きく、傷口に壁土が付着しているのさえ取除くことができず、やむなく傷口の縫合を中止せざるを得なかった。ただ、リパノールを塗布しただけで、他にブドウ糖と化膿止め剤のグリゾンの注射を受けた。

私が船舶練習部に帰着したのは午前十時ごろであったと思うが、その頃はまだ一般市民の負傷者は来ておらず、練習部長の芳村中将をはじめ、ガラスの破片で負傷した将兵や軍属の治療が行なわれているに過ぎなかった。

頭部裂傷の手当を受けたあと、私は食欲が全然なく、体中が熱っぽく、やたらに水が飲みたくてサイダーをいっ気に三本も飲んだ。

二、自宅での状況

広島市内が瓦礫と化し、かつ火災が発生したため、練習部の経理課職員も家族の安否を気遣う者が多く、私は帰宅希望者を惨状偵察の意味も含めて、一応帰宅させた。それから数時間たったころ、帰宅した課員が逐次帰隊して来た。

倒壊家屋の下から家族を救出中、火の手が廻り、そのまま生き別れて来た者、家族全員が圧死したと言う者など、悲惨な報告ばかりを私は受けねばならなかった。八月六日は夕刻まで、このような状況が続いたが、私自身も手当を受けたとは言え、出血多量で疲労が激しく、芳村中将からも一応帰宅するようすすめられ、また産後二週間の妻と二児の安否も気にかかるので、己斐町の自宅へ、様子を見に帰ることに意を決した。

練習部裏の棧橋から大型発動艇に乗り、自転車を積み込み、同一方向へ帰る軍人・軍属と一緒に出発した。

広島湾に出て、海上から市内を遥かに望むと、全市猛火に包まれていた。その中で、生きながらにジリジリと焼け死んでいく人々を考え、身の毛のよだつ思いであった。

私たちの乗った大型発動艇は、広島市と宮島口の間に着岸した。下船して、己斐町方向へ北上する道を進むと、逆に市内の方向から宮島方向へ進む負傷者満載のトラックの群れやトボトボと歩いていく避難者の群れとすれ違った。

トラックが停車すると、すでにこと切れた死者を路上に投げ出し、徒歩の重傷者を交替に乗せては再び走り出すという作業が繰返されていた。その悲惨、非人間的処置も、この場合、息のある者は一人でも救わねばならないギリギリの止むを得ないものと、自分自身を納得させ、すれ違って進んだ。

このような地獄の路上を、私はようやく通り抜けて、己斐町の自宅に帰りついた。家は半倒壊で人の気配はなく、裏山へ登って行ったが、負傷のため体力がひどく消耗しており、あえぎあえぎ山路を辿って、防空壕に行った。ここで初めて家族と出会い、お互いに命のあったことを喜びあった。家族は、長女がガラスの破片で頭部に裂傷を負い、出血した以外は異常がなかった。妻は、ピカッと光ったものを感じて、生後二週間の子を抱きかかえ、外側に面していたガラス張りの部屋から、次の間へ逃げた瞬間、ドーンという爆発のショックを受けたという。もし外側の部屋にそのまま居れば、ガラスの破片で瀕死の重傷を受けていたであろう。裏山の防空壕へ避難する途中、山火事で前後を火に包まれ、進退きわまった時に、黒い豪雨の襲来で火が消され、助かったとのことである。

ともかく私は家族と再会した安心感と、朝からの行動と負傷、発熱のためか、急に虚脱状態に陥り、そのまま山地に横になって、八月六日は過ぎたのであった。

七日、市内は火の海となり、部隊への連絡も取れず、自分自身昨夜からの虚脱状態が続き、体を動かすことさえできず、寝転んでいるままであった。

三、船舶練習部へ出勤

八日、市内の火勢も衰え、練習部から経理課員が連絡に来た。その連絡で、芳村中将は市内中央地区警備担任司令官になられ、戦闘指揮所を紙屋町付近に出す旨を知った。連絡の課員と一緒に山を降りたが、火災はわが家の前までで消えていた。どうやら火を免れた自宅を見て紙屋町の司令部へ向ったが、途中はなお自転車を担いで通らねばならぬほど、倒壊飛散物で埋まっている個所がたくさんあった。

紙屋町の警備司令部は、鉄筋コンクリート造りの外郭だけ残った住友銀行にあった。早速、芳村司令官に挨拶し、家族の無事や途中の状況を報告した。住友銀行跡の司令部は、周囲の残火と真夏の暑さで、居たたまれないような熱気がこもっていた。ここで、芳村司令官から、宇品の練習部に収容中の多数避難民や負傷者に対する経理支援を遺憾なく実施するよう命令を受けたので、私はただちに宇品へ向った。途中、富国生命ビル(元精養軒)に赤十字の旗が掲げてあり、負傷者が収容されている様子なので立ち寄ったところ、旧知の軍医少尉が治療にあたっていた。「兵隊さん、水をください」と、数人の負傷者が抱きついて来た。身動きもままならぬ重傷者が、私の水筒に力一杯すがりつくその力が、体の何処から出るのであろうかと思われた。

軍医と顔を見合わすと、「飲ませてやるように……」と肯くので、負傷者に水筒を渡すと、数人で素早くカラにしてしまった。周囲の水を飲めなかった人々の恨めしそうな顔にいたたまれず、私は激励の言葉もそこそこに、再び自転車で電車通りを急ぎ南下した。

外郭だけの市役所にも救護所が開設されていたが、先を急ぎ立ち寄らなかつた。広島電鉄の千田町車庫前に来ると、付近一帯は、まだ火が消えておらず、その火の中を自転車がパンクしないように念じながら一ツ気に走って御幸橋に到達した。

この付近には、被爆者が水を求めてか、或いは熱い体を河水で冷そうとしてか、どの屍体も川の方へ向って倒れていたが、まるで鮭の燻製のように赤くなっていた。

四、陸軍船舶練習部の活動

己斐の自宅に帰る前に、私は避難民の殺到することを予想して、その給食準備と毛布・敷布などを払い出して負傷者の収容準備を命じておいた。

六日正午ごろから、傷ついた避難民が助けあいながら練習部に到着して、そのまま力つきて倒れ、部隊に収容される者が激増していった。軍人・軍属で動ける者は、軍医から火傷に塗布するチンク油・マーキロー・リパノールなどの医薬品の支給を受け、全員で負傷者の手当にあたったが、負傷者の増加がいちじるしく、とても間にあわない状況であった。

そこで多数の負傷者を一つ時も早く手当できるように、炊事用の蒸気釜にチンク油を融かして治療を進めたが、全身まっ白な雪男のようにチンク油を塗られ、人相の判別もつかないような者も続出した。

八日には、練習部の講堂・教室などが負傷者で一杯になり、更に、市内各所の救護所などから次々と担架で運ばれて来ており、もはや収容不可能という状態に陥ったから、やむを得ず、似島検疫所へ負傷者を発動艇で運ぶ作業が続けられた。

収容所では、悲鳴をあげて苦しむ者、発狂して暴れる者、誰も知らぬまに静かになり死んでいる者など、悲惨な極限状況が繰り返られていた。食事は準備されていたが、大部分の者は食欲なく、ただ水を欲しがった。

このような間に、死亡者が次第に増加し、営庭に積みあげられた屍体は、酷暑のさ中、激しい異臭を発生した。日を追って屍体の数が増加し、焼却作業も連日多忙をきわめた。

私は、被災地域・紙屋町の警備司令部・宇品の練習部など八方を駆けめぐり、経理課長として兵站支援の計画・調整・実施にあたったが、部隊将兵の兵站支援は勿論のこと一般市民の負傷者のための給食・毛布・敷布の貸与などを実施した。このとき放出した軍の物資は莫大な量にのぼり、毛布だけでも一〇万枚くらいにのぼったと思う。負傷者用食糧などの在庫物資を全部支給し終わるころに終戦を迎えたのであった。

なお、終戦後、放出した毛布の回収を命ぜられ、負傷者の血痕・体液・膿などが付着したものすごい悪臭の、毛布の山が営庭にできた。

五、広島市内での活動

陸軍船舶練習部長隷下部隊の一部は、原子爆弾炸裂後、正午ごろには救援活動のため、市内中央部へ向って派遣されたが、爆心地付近は火災が激しく、活動はほとんど不可能の状態であったから、六日当日はその周辺付近においてしか救援活動ができなかったようである。

翌七日になって、火災もようやくおさまりかけてから、本格的な活動が展開できるようになり、八日には警備司令部も紙屋町に進出することができたのであった。

救援活動は、負傷者救助・収容・応急手当・給食・屍体処理、及び道路啓開などが主な作業であったが、現地においてはあらゆる事を手あたり次第に実施した。

陸軍船舶練習部は、被爆直後、すでに隷下の船舶教導聯隊(聯隊長・古元中佐)・船舶下士官候補生隊(隊長・土屋少佐)が救援作業に市内へ出動していたが、同じく隷下の斉藤少佐を隊長とする江田島幸の浦第十教育隊(船舶特攻隊要員)も、江田島から海を渡って宇品港に上陸し、救援に出動していた。

なお、船舶司令官直轄の船舶砲兵聯隊の将兵も、練習部の右側にあった兵舎を出て、救援活動を展開していたようである。

しかし、予想をはるかに超えた惨状であり、瓦礫に埋没した人々の発見も困難を極め、火災発生が意外と早く、初期の救護活動はあまり効果をあげることができなかった。

八日の朝、私が爆心地付近に入ったとき、その付近には重傷者が到る所にいた。ほとんど動くことのできない人々が、どのようにして何処から来たのかと考えた。これらの人達は、被爆直後、一たびは周辺の山へ逃げ、手当を受けられないまま、元の焼跡へ戻って来て、ついに動けなくなった人たちであったと推測された。

被爆時に即死した以外の火傷や放射能による負傷者は、被爆三日目の八月八日ごろに最もたくさんの死者がでたように思われる。八日以降、小町の浅野図書館と富国生命付近の鉄筋コンクリート造りの外郭だけになった建物には、屍体が山と積みあげられ、その屍体は暑さのため腐敗してウジが湧き、黒い液汁が電車通りにまで流れ出して臭気を放ち、何とも形容のしようのない情景を出現していた。

救援活動に出動した船舶部隊の将兵たちは、これらの屍体を逐次焼いて処理していったのである。一時は、焼却した屍体の遺骨を、電車通りに並べ、遺族縁者の引取りを待ち、その引渡しをおこなった。

このように、被爆直後から終戦の八月十四日まで、爆心地から比較的遠く離れていて被害の少なかった陸軍船舶練習部所属の部隊は、主力を挙げて救護活動に挺身したのである。

この間、東京から仁科芳雄博士ら一行が、災害調査のため練習部の収容所に来訪され、調査の結果、原子爆弾である事を確認された。

八月十五日、陸軍船舶練習部所属の部隊全員が営庭に集合して、正午の玉音放送を聴き、終戦を知った。

終戦以降、逐次、復員が開始されたが、主計将校の私は、芳村練習部長と共に十月末まで残り、軍の残務処理と収容負傷者の救護と給食活動に任じた。

この練習部にいた収容負傷者は、終戦後、死亡する者、親類縁故を頼って去る者、他の病院へ移送される者などあり、次第に減少していき、十月三十一日、陸軍船舶練習部の復員業務終了の時には、収容者皆無となった。

仁保町黄金山(爆心地から約四・五キロメートル)の東側に駐屯する教育船舶兵団司令部では、六日は、午前八時に朝礼を終わっていた。

参謀長三吉義隆大佐は、参謀長室に入り、自分の机につこうとしたとき被爆した。

突然、写真のフラッシュのような閃光が、空一面をおおった。瞬間、猛烈な爆風の音響が襲来し、バラック建ての司令部は半壊状態に陥った。

砂塵がモウモウと立ち昇るなかを、三吉参謀は逃がれるようにして、中庭に出た。見ると、司令部内は騒然とし、若干の負傷者も出たようである。早々に軍医部を動員し、司令部員の負傷の手当てにあたった。

一方、司令部横の小丘に登り、何処がどんな爆弾によってやられたのかと、観察していると、市の上空に紫赤色の巨大なキノコ型の雲が、高く高く上昇している。

皆実町のガスタンクに爆弾が命中したためか、さもなくば空中魚雷式の爆弾破裂か、何物か、判断がつかない。その詮索の暇もないまま、司令部内に一般市民の負傷者第一陣がトラックで運びこまれた。

皆、大ヤケドをしており、半裸か全裸の汚れた皮膚は剥がれて、人相も判別しがたい。まるで地獄から這い出て来た姿である。

とりあえず、軍医総動員で簡単な治療をほどこし、倉庫に収容した。これが九時ごろのことであった。

眼前に展開される悲惨きわまりない状況に、いちじ、三吉参謀長はとまどった。が、広島市内は全域灰色になり、街は崩壊して人影もないことが観察されたので、その異様な実態を把握する必要があると、手兵である司令部の者を市内検察に派遣した。

偵察者の報告は、いずれも惨憺たる状況の報告であるばかりか、いずれの部隊も救援隊を出動させている様子なく、緊急を要する状態であることが判明したので、急遽、比治山東麓にある陸軍船舶通信隊(部隊長・日山千里)に救援の出動命令をくださった。

しかし、この通信隊もまたちょうど演習整列時に被爆して、上を下への大混乱に陥っており、被害も相当大きく、大部分の者(約九〇パーセント)が負傷しているというありさまであり、隊内そのものの收拾処置に大わらわであったから、少人数の救援班を編成することしかできなかった。

また、船舶兵団司令部内にも、続々と負傷者が救助を求めて殺到するに至り、これらの救護にあたることで精一杯であった。

収容した負傷者は千数百人に達したが、一週間以内に全員死亡した。

さらに、宇品の船舶司令部佐伯中将から、市内救援の出動命令を受けた三吉参謀長は、被爆を免れた地方散在の隷下諸部隊に対して、広島救援を命じた。参謀長みずからも出動し、市内の秩序維持、負傷者の収容・看護、死体の収容・焼却などにあたったが、数千人の兵員ではなかなか作業もはかどらなかった。

陸軍船舶司令官佐伯中将の直轄部隊で、部隊長中井千万騎少将のもと隊員一、五〇〇人が、比治山の東南斜面に横穴を掘り、その中に駐屯していた。

六日朝、経理事務連絡のため、比治山から宇品の船舶司令部経理部に出向し、経理部長前野大佐と要談中に被爆した松吉佳人主計大尉は、ただちに比治山の本隊に引返したが、数日前に甲子園の船舶情報聯隊から転勤して来たばかりで、地理不案内のうえ、市中が崩壊し猛火に包まれていたため、帰着に約五時間も要した。

横穴兵舎は被害甚大で、中井部隊長や参謀その他の高官は無事であったが、兵隊は約三五人を残すのみで文字どおりの壊滅的状態であった。

松吉主計大尉が帰着したとき、これら僅かな残存兵によって死体の整理がおこなわれていたが、処理作業は、ずっと夜中まで続けられた。皆、ただ茫然としており、命令もなく、壊滅の後片付けに黙々と従事した。

八日ごろ、船舶砲兵団の残存者は、宇品の船舶司令部構内の倉庫に移転し、軍人や一般市民の死体の焼却、負傷者を似島検疫所や宮島向いの大野病院へ船艇で、連日、輸送する作業に従事したが、この輸送作業は、船舶司令部本部の解良中佐が指揮をとった。

(一) 陸軍船舶砲兵団衛生教育隊…285

陸軍船舶砲兵団司令部(部隊長・中井千万騎少将)は比治山山頂(南峯)にあり、被爆により壊滅的打撃を受けた。その隷下部隊の衛生教育隊(隊長・指田吾一軍医大尉)約一五〇人は、司令部からすぐ下の麓、南段原町の広島女子商業学校内に駐屯していた。

女子商業学校は、爆心地から東南約二キロメートル離れており、比治山にさえぎられていたが、強烈な爆風によって、校舎の大部分が全壊(一部小破)したため、衛生教育隊も多大の犠牲者を出したのであった。

六日朝の被爆時の状況について、指田吾一著「原爆の記」に、次のように記述されている。

「広島女子商業学校の校庭にしつらえてあった司令台上で、宣戦詔書を奉読し終った私に、軍紀教官の糸井中尉が、軍の定めに従って刀の敬礼をした。次の瞬間、糸井中尉が青空を引裂くように絶叫した。

『隊長、敵機！』

と、同時に広島市の内外、遠く、近く、いっせいに空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り響きはじめた(原文のまま)。とたんに、異様な無気味さを感じた私は、糸井中尉の指し示す剣尖の方向を仰ぎ見た。

青空の真ただ中に三つの閃光を見た。約二メートル間隔に、二等辺三角形の青白い閃光、恐ろしく侵透するようなその光り、私はそれを確認した。

その直後、言い知れぬ打撃に体が宙に浮いた。ただ浮いたと思った。それは確認ではないが、そのように記憶している。

午前八時に集合して、宣戦の詔書をちょうど奉読し終ったあとのことであり、的確な時間の覚えはない。毎週月曜日の慣習であったので、午前八時十分前後であったことに間違いはない。説明のつかないことである。閃光を見る前に、奉読し終った詔書を持って、部隊本部へ引揚げたはずの中村曹長と、私が立っていたはずの司令台の西南約二〇メートルのところで、二人とも折り重だって倒れていた。

(中略)四、五カ所から煙が出ている。これを見て、何か力はいったように飛び起きた。

『みんな、来い。動けるものは集れ！』

中村曹長・木村軍曹・三谷上等兵・山田上等兵が飛んで来た。午前九時前後であった。

糸井中尉もフラフラとやって来た。みんな顔は真っ黒く焼けていた。

ボソブを持って集合した。二〇リットル石油カン大の手押しポンプである。かって駅のプラットホームの水まきに使っていた型だ。全力をつくして消火に当たったので、私の部隊と女学校だけは、さいわい五台の手押しポンプで、煙っている火を消し止めた。

(中略)私は、夢中で比治山を駆け上がってみて、はじめて驚いた。

広島全市中が、どす黒い煙の中に覆われている。ところどころに炎の舌が伸び始めた。(中略)

どこからともなく、『助けてくれ！』『助けてくれ！』『助けてッ！』『助けてッ！』と、悲鳴に似た声が聞えてく

る。

私は、ショックと、仲間の真っ黒い顔の映像で、何をなすべきかわからなかった。焦点の不明瞭な自分の脳裡に、何かが生き返って来たように感じた。

『助けてくれ!』『助けてッ!』

そうだ、火事を消すのも大事だが、私は軍医だ。医者だ。救いを求めている負傷者たちを助けねばならぬ。焦点がだんだん明瞭になった。

私は比治山を、前よりも早い速度で駆け降りた。

営庭に待機させておいた動ける兵隊が中村曹長・木村軍曹・山田上等兵・三谷上等兵らをはじめ、一五、六人ばかりいる。司令部は吹っ飛んでしまった。衛生隊も、すでに第一小隊まで、全部の隊がバラバラだ。火災は消し止めたが、兵舎はなくなってしまった。

残ったのは営庭と、比治山の防空壕だけ。頼りにしていた広島陸軍病院も全滅してしまった。救いを求めている負傷者たちを、何とかして自力で助ける途を考えるほかに方法はない。

比治山西南側の防空壕の前に、待機させておいた中村曹長以下の一五、六人を集合させた。

『まず脱脂綿、次に油。食用油なら何油でもよし。もちろんオリーブ油があるようだったら持ってこい。衛生材料は何があるか。中村曹長は責任をもって調査しろ。それから鍋・釜・タライ・洗面器、何でもよい、容器があったら持って来い。サラシ・ホウタイ・ガーゼ、あったら出しておけ。あったか。よし。それではすぐに診療開始だ!』

『中村曹長! 防空壕倉庫から食糧を全部出せるよう、ただちに調べよ。』

『木村軍曹は診療の助手だ!ほかのものはまず、二つの天幕を組立てろ。一つは診療用だ。一つは休息用だ。衛生隊の負傷者は防空壕の前に寝かせておけ!』

『木村軍曹は、そこにある洗面器に亜鉛華澱粉を入れろ。脱脂綿も入れておけ。もちろん大きいままで。その上に食用油を入れろ。そしてそれをしぼるんだ。』

これでチンク油ができた。

『チンク油のしみた脱脂綿で、そら、この通り、そつとなでてやる。火傷にはこれが一番だ。動ける者は、全部こい。ほら、気持ちがいいだろう。』

焼けつくように、ヒリヒリ痛みはじめていた兵隊たちは、治療を受けて喜んだ。」とある。

このようにして、校庭に設営された天幕張りの応急救護所には「第六一八〇部隊指出衛生隊」の門柱の標識の所に赤十字旗を掲げた。つぎつぎと負傷者が集って来た。皮膚がボロボロにむけた白い脂肪を冷湿布をするように、そつとチンク油でなでると、負傷者らは一ように気持ち良がった。

時間がたつにつれて重傷者が多くなり、昼ごろになると、醜怪なばかりの姿の負傷者が続いた。

比治山頂上に駐屯していた司令部からは、何の連絡も命令もなく、自分だけの判断で作業を進めるほかなかった。

指田軍医は詔書奉読のときに白い手袋をはめていたため、両手が助かったから、治療作業は自由に両手でおこなわれた。

治療作業を進めると同時に、食糧の準備に取りかかった。比治山寄りの斜面を五〇センチメートルほど縦・横に掘り、中村曹長は敏捷に五つのカマドを作った。燃料は倒壊校舎の破片で充分あった。顔は真っ黒の堀一等兵が、軍衣の背中を汗でグッショリ濡らして飯を炊いた。

指田軍医は、何となく冷たいものが欲しくなり、坐っている場所の日陰の土を、二、三〇センチメートル掘って、腹ばいになり、焼けた頬を土にあてると、気持ちが良い。それにならって、誰いとなしに、負傷者らは、皆、比治山の斜面の日陰を掘って顔をうめた。

昼過ぎ、重傷者は増加する一方であったが、天幕や山の日陰を選んで、土べたに寝かせて収容した。

塩をつけた麦のにぎり飯で腹をつくり、比治山の登山道や、公園に逃げこんで倒れている負傷者の救護にもあたった。

チンク油を塗布するだけの治療。比治山のふもとの斜面に、天幕を二張り、負傷患者用にして、ワラムシロを敷いて作業をする。これが日本陸軍最後の衛生隊診療所の姿であった。

ついに収容しきれなくなった負傷者を、比較的被害程度の少ない宇品へ護送することにし、強硬交渉で宇品線の貨車を出させて乗りこませ、夕方までに約三〇〇人以上の人々を運んだ。

段原国民学校から連絡があり、指田軍医は中村曹長を同伴して行ったが、ここは更にひどい惨状であった。医師

も看護婦も看護兵もいないまま、負傷者が折り重なるようにして、所せましと倒れていた。

続々と来る負傷者は、また次々と死んでいった。多数の死亡者の処理は、溝を掘って材木を渡し、その上に遺体を乗せ、積み重ねて火葬にした。名札をつけている人は、それぞれの遺骨に名札をつけたが、氏名不詳が多く、火葬も、石油もガソリンもなく、焼くのに時間がかかった。

ともかく、周辺の消火・治療・護送・死体処理で日が暮れ、夜の比治山には、激痛におののき震える悲鳴とうなり声が、一晩中、波打っていた。

四日目、比治山の窪地の転覆しかけて残っていた五〇坪程の二階家を、衛生隊本部宿舎とした。診療所は天幕四張り、二張りは炊事用、二張りは傷病患者収容所と、その一部を繻帯所とした。

作業は主として、連日、傷口の清拭で、つまりウジ取りであり、ガラスの破片とりであった。それに死体の収集と輸送が仕事のすべてであったが、治療患者は四、八〇〇人に達した。

八月十五日、戦争は終わった。しかし、指田軍医は、みずからの判断で負傷者の治療を続けた。

九月三日に、八月十五日発信の母危篤の電報を受取り、郷里の宇土市へ発ったが、八月二十五日に母は死亡していた。

九月十日に再び広島に復帰して、負傷者の治療にあたったが、同月二十七日、占領軍が進駐するその前に、広島市の西部の草津の寺にいた家族と共に、東京に引揚げた。

(二) 陸軍船舶砲兵団第一聯隊第一中隊...290

陸軍船舶砲兵団第一聯隊第一中隊(中隊長・鈴木中尉)は、出光石油会社の日南丸(約一万トン)に乗船中、昭和二十年七月二十九日、山口県祝島・小祝島において、アメリカ軍グラマン機の襲撃を受けて擱坐した。兵員一七〇人中、一四、五人が戦死して以来、祝島国民学校に駐屯していた。

八月六日の朝、広島市の宇品港に向って出発したが、途中、宮島付近から市内の火災が望見された。宇品栈橋は破壊されていなかったが、前日、陸路で先発した隊員は、この日、朝礼中に被爆し、爆風で吹き倒されたり、負傷して腕をつっている者などが数人いた。

この第一中隊所属の飯島信一上等兵の手記によれば、宇品上陸後、力士の「安芸ノ海」の生家の付近を通って兵舎に入ったが、大混乱の渦中であつたという。

七日、市内皆実町の広島専売局に進出し、そこに収容された負傷者の救護にあたった。

専売局の正門を入り、すぐ左手の広場に天幕を張り、臨時救護所とした。

近くの広島高等学校は、第一中隊が昭和十九年九月から十一月まで、かつて駐屯していた所であつたが、校舎は倒れ、屋根が波打つような恰好で崩れていた。局の付近の民家も被害が多きかつたが、夜になると、これらの民家から負傷者のうめき声が、痛々しく聴えて来た。

臨時救護所の近くのもので軽傷者は徒歩で治療を受けに来た。重傷者は担架で送迎した。

重傷者は動員学徒の少年が多く、ほとんど火傷であつた。背なかの皮をピンセットではぎ取り、赤チンと油状の白い薬(軟膏)を塗るだけの簡単な治療で、死ぬる者がたくさんいた。

夜になると、天幕の中は収容した負傷者のウミの臭いで寝られないため、やむなく兵隊たちは露天にタバコ用の木箱をならべ、ベッドがわりにしてようやく眠った。

中隊は、宇品の部隊本部からの食事運搬・治療・負傷者の送迎・死体の処理の四班に、各人の希望によって編成し、それぞれの作業が続けられた。

八月十五日、重大放送があるとのことで、手のすいている者は、近くの民家に行き、放送を聴いた。教師出身の飯島上等兵は、放送を記録するよう命ぜられたが、雑音多く、聴き取ることができなかつた。夕方になり、正しい情報を知らされてみんな驚いた。

翌日、ただちに治療活動を中止し、宇品港から部隊本部のある福山市に帰り、九月二日に復員した。

なお飯島上等兵は手記の中に、一〇歳位のかわいい少女が耳のうしろの傷に、ウジをいっぱいだめて治療に来たこと、また、重傷の中学生を二、三日往復して治療したが、あえなく死んでいったことなどが、今でも忘れられないと記している。

豊田郡忠海(現在・竹原市)の海岸近く、忠海高等女学校と国民学校にいた明石隊(船舶工兵特別幹部候補生)の隊員約五〇〇人のうち約半数は、山口県の仙崎港に使役(陣地構築)に出ているため、残留組約二五〇人が広島市の救援に出動した。同時に仙崎港の方へは、直ちに帰投するよう知らされた。

区隊長鏡等中尉指揮下の鈴木庄一上等兵の手記によれば、忠海基地では建物の中にいたためか閃光も音響も知らなかったが、軍命令で七日昼近く基地を出発した。呉線経由の列車で広島に向ったが、途中何回か停車しながら夕方ようやく広島に到着した。ただし広島駅までは行けず、海田市駅で下車、そこから徒歩で市中に入ったが、広島駅の南に一本の半壊の煙突が見えるだけで、廃墟の市街にはまだ火炎が方々に立っていた。

七日はそのまま駅で野営し、八日早朝から死体のゴロゴロと転がっている焼跡の道路の清掃作業、および無残に壊滅した市内の各部隊跡の整理に従事した。

同日午後三時ごろになり、鈴木上等兵らは臨時陸軍野戦病院に收容されている負傷者の看護をするよう命令を受け、安藤少尉の指揮下に入り、広島市近郊の国民学校や寺院などの臨時收容所の被爆者の救護にあたった。

翌九日は、宇品の広島女子専門学校に移動して、同校の女生徒たちと共同で、校内に收容されている負傷者の救護活動や死亡者の処理などを、十四日昼ごろまで行なった。

一方、区隊長前田多稔少尉指揮下の馬場昌上等兵ら約一〇〇人は、七日に仙崎港から忠海基地へ帰投し、八日被爆地広島への出動命令を受け、同日夕刻、広島駅に到着し、その日は駅構内に幕舎を張って野営した。

翌九日、広島駅後方の第二総軍司令部のいる東練兵場わきの国前寺境内に幕舎を移し、死体処理班・救護班・橋梁監視班の三班に分れて、それぞれ従事した。

死体処理班は東練兵場で火葬を行なった。

馬場上等兵らは、橋梁の警備に約一週間つき、八月十四日、宇品港に移動して、その日は野宿し、翌十五日朝、船舶兵団の疎開荷物を大型発動艇(上陸用舟艇)に積みこんで出発、正午に目的地に到着し、そこで終戦の報に接した。そのまま、再び宇品に引返し、十八日まで、主に市周辺の被害調査の任についた。

なお、八月一日、忠海基地から仁保町丹那の船舶教育兵団司令部に着任した矢ノ根和夫上等兵ら特別幹部候補生六人は、教室で教官を待っているとき被爆したが、爆心地から離れており、負傷は軽微であった、六日当日から、兵舎近くの大河国民学校が臨時收容所となり、負傷者が殺到したので、これの警備、收容作業、あるいは似ノ島への転送作業、死亡者の処理などに従事した。

なお、部隊本部は和歌山県から尾道市に移り、一部が忠海に分駐し、舟艇は練習用上陸用舟艇一区隊につき一隻と、実戦用(鉄張)数隻ばかりを備えていただけであった。

概要

陸軍軍需輸送統制部(部長・畑勇三郎少将)は、大本營の直屬部隊(部長以下三三人・雇員一人)で、外地及び内地の各部隊の補給作戦を円滑に遂行する機密的な重要機関として、昭和十八年二月、宇品町の運輸部(船舶司令部)構内に設置された。

業務は、(一)宇品港における軍用物資の舟積み計画をたてる。従って、これに必要なトラック(県貨物・日通など)荷馬車をすべて掌握すると共に、軍・民の各倉庫を統轄する。(二)満州国から、本土決戦上必要な武器・食糧(大豆・コウリャン・岩塩その他)を内地に移送する「特攻(朝)輸送(暗号)」の業務を行なう。このため、朝鮮の羅津に分遣隊(出張所)を設置。(三)南方戦線に対する特殊輸送業務一主としてキニーネ・対戦車砲弾(タ弾と呼ぶ)・衣服、その他を、日本製鋼所広島製作所で特別に建造された魚雷発射管のない(ゆ)潜水艦、または海軍の潜水艦で運送する。(四)連合軍の土佐沖上陸作戦に備えて、緊急の場合、四国への兵員・食糧の増強を行なう輸送路(大型発動艇)の確保。(五)本土空襲に対処して、軍需物資の疎開の指導と援助。(六)前線及び大本營からの暗号電報(乱数表)の解読と組立てを行なう業務。ただし、無電機は陸軍船舶司令部の設備を使用する。以上の六項目を主要業務としたが、戦争末期には、輸送船舶が敵の攻撃により減少したので、業務遂行もはなはだしく困難をきわめた。

統制部の機構は、庶務班(班長・小林吾一大尉)・暗号班(班長・長谷川通雄見習士官)・統制班(班長・田村治郎大尉)からなり、広島市内では、兵器補給廠・糧秣支廠・被服支廠をはじめ、この三廠の出先機関(倉庫)である安芸郡海田市町の、兵器・被服・糧秣・需品・衛生材料・航空(燃料)・獣医材料各廠を管轄下において活動していた。

一、救援隊の活動

大本營情報

八月三日、大本營から輸送統制部に対して、「八月四日から七日にかけて、アメリカ空軍の特殊攻撃がある。充分注意を怠らず、対戦処置をとるべし。」という暗号電報の命令が入った(田村治郎談)。

統制部では、急遽、重要文書などを構内の防空壕内に移し、状況を見ていたが、四日も五日も何事もなく、いつもの敵の謀略宣伝(デマ)かもしれないと考えた。六日は、平常どおりの勤務とし、午前七時三十分から、田村大尉以下、下士官二〇人ばかりが、構内の広場に集合し、敵陣斬込みの訓練を行なった。真夏のことであるし、上半身は裸となり、約三〇分間実施のあと、各将校が登庁しはじめたので解散し、それぞれの居室に入った。

炸裂

田村大尉は上半身裸のまま、小使室に入って、今日の日課を考えるともなく休んでいたところ、突如、異様な閃光を浴びた。パッと反射的にその場に伏せた。一瞬、視力を失ったように思われた。窓のガラスが音をたてて破れ散った。幸い負傷しなかった。近くに爆弾が投下されたと直感し、すぐに衣服をつけ、軍事を持ち、戸外に出て見た。しかし、どこにも投下された弾痕が見あたらなかった。

皆実町のガス・タンクが爆発したのかと考えられるので、車庫のサイド・カー(下士官の連絡用者)を急ぎ引出し、山本留一曹長の運転で、宇品線電車通りを皆実町へ向けて北上した。

電車通りは、大混乱の出現する寸前の、まさに全市が失神状態に陥った瞬間で、異様な静寂が漂っていた。電車通りいっばいに、その軌道もかくれるほど、両側の街路樹(プラタナス)の葉やその他のものが飛び散っている。

皆実町にとつつく広島地方専売局の所まで来ると、一人の老人が吹きとばされていたが、かまっている余裕がない。前方を偵察すると、ガス・タンクの付近は火災もなく、異状が認められない。すぐに進路を西へとり、御幸橋を渡り、同橋の西詰(千田町)の交番所の前まで来た。時刻は八時三十分ごろであつたろう。

ここから北方鷹野橋への大通りは、倒壊した建物や電線などの飛散落下物におおわれていて、サイド・カーで乗りこむことは不可能である。田村大尉と山本曹長は、車を交番所前に置いて、徒歩で前進した。途中、広島文理科大学の校舎の窓から、黒煙が噴出しているのを目撃、鷹野橋に至ると、左角の消防署がやはり黒煙を上げており、紙屋町の方を見やれば、すでに黒煙に包みこまれていて、ただならぬ重大事態であることを突きとめた。

避難者を誘導

立ち昇るその黒煙のなかから、無残な姿の市民が、群れをなしてゾロゾロと歩いて来る。

ひっきりなしに続く避難者の大群を、田村大尉らは、火災のない宇品方面に逃げるよう、大声で誘導しつつ引返

した。

避難者の群れが御幸橋を渡りはじめると、川の中へ次々に転落する。見れば、橋のランカンが全部倒れていて、意識朦朧とした人や視力を失ったような人が、誤って足をふみはずすのであった。

トラックの確保

専売局の交叉点を右に折れると、広島高等学校の前の電車道沿いに、日本通運の事務所があり、爆風を受けて半壊状態であったが、外にある七、八台のトラックは無事なようである。これに目をつけた田村大尉は、負傷者輸送用に、独断でとっさに、大本営命令として、そのトラック全部を朝鮮人(現在・韓国人)の運転手とともに接收した。同時に木炭車をガソリン車に至急改造するよう指示し、爾後の使用命令まで待機させた。

救援隊出動

運輸部入口に到着すると、そこの宇品憲兵隊長に、トラックの確保を連絡し、負傷者輸送に支障ないよう、日本通運事務所へ憲兵の派遣を依頼した。

輸送統制部に入り、部長畑少将に、「焼夷弾・爆弾数百発が投下され、市中の被害は甚大、死傷者多数あり、ただちに救援の手配が必要である。」ということをし、報告進言した。畑少将は、田村大尉に対して、救援の全指揮を執るよう命令した。輸送統制部は、大本営直属の独立機関であったから、その行動は部内のみの判断で実施することができた。

田村大尉は、副官兼庶務班班長小林吾一大尉に、前記のトラックを使い救援作業にあたる兵力の確保を依頼した。小林大尉は、ただちに海田市町の陸軍需品廠その他倉庫で就労している一七、八歳の朝鮮人志願兵約六〇〇人のうちから、ほぼ一〇〇人二個中隊(隊長中塩中尉及び堀中尉)に出動命令を出した。すなわち、救援の中塩隊と堀隊は、サンパンその他の舟艇に分乗して、海田市町から海路により、午前九時には、宇品に上陸した。これら志願兵は、トラック一台につき、下士官一人を長とする五、六人の救援隊を編成して、午前九時過ぎには千田町電鉄株式会社付近から紙屋町電車交叉点までの道路と、広島駅前付近から紙屋町を経て、己斐に至る主要幹線道路に進出し、横たわる重軽傷者の収容作業に従事した。このとき、なお、市中は猛火に包まれており、大通り以外は進入できない状況であった。

なお、二、三日あと、第二総軍司令部からの連絡により、第二総軍司令部及び中国軍管区司令部の仮設庁舎を、天幕や板を使って、その焼跡に急造した。

大本営に報告

一方、田村大尉は、小林大尉に救援隊の編成出動を依頼したあと、部内暗号班に命じ、大本営陸軍部あてに、「八月六日午前八時三十分、目下広島市は特殊な爆弾により攻撃さる。被害甚大なり。広島陸軍軍需輸送統制部」と、船舶司令部から、暗号電報を打った。

施設の被害調査

そのあとすぐに、私物の単車にまたがって、兵器支廠と被服支廠の被害状況の実地調査に向った。途中、専売局の北側の塀の上に、一人の職員が消火ホースを持って、局の方へ迫って来る火炎に立ち向っているのを認めた。「大丈夫か!」と言うと、「大丈夫です。」と、その男は答えた。この勇敢な職員の努力で、専売局は全焼を免れたのかも知れない。

被服廠も兵器廠も、流れこんだ避難者をかかえこんだまま、門をとぎして、周囲の状況を見守っている所へ、田村大尉が到着した。田村大尉は、ただちに門をあけさせ、大本営命令として、被害状況を報告させると共に、救援態勢に入るよう告げた。このとき、午前九時ごろであった。

収容者溢れる

小林大尉の指揮により、朝鮮人志願兵たちの救援隊が、トラックによって燃え盛る市中から救出輸送した負傷者は、当日昼前には、すでに運輸部の建物の内外に敷かれたムシロの上に一ぱいになり、死亡者も続出し、処置ない修羅場と化した。たちまち収容能力が限界を超えたので、これら収容者を船舶司令部に依頼して、繰返し似ノ島の収容所に送った。

一部の死体は、元宇品の海岸(海水浴場)に運んで焼却したが、焼却作業が間にあわず、海岸の横穴に土葬したものもあった。後年(二十三年頃)、その横穴が波に洗われて、白骨が出て来たということがあった。

精子の死滅

この救援作業中に、田村大尉は、輸送統制部所属の藤津房一軍医見習士官から、救援隊として出動した下士官の

精液を採取するよう依頼され、下士官に命じて提供させた。六日の夕がた、藤津軍医から連絡があり、医務室において、顕微鏡をのぞいてみると、軍医が指摘するとおり、精子がみんな死んでいた。藤津軍医は、「今日投下された爆弾には、X光線かガンマー線か、目には見えないものが含まれていたに違いない。被爆者には輸血と栄養補給が必要である。」と、治療方針を説明した。

死体の処理

八日、第二総軍司令部の畑司令官から、輸送統制部に対して、主要道路の死体を収容し、道路の啓開を行なうよう依頼されたので、また、海田市町から朝鮮人志願兵約二〇〇人を出動させて、処理作業を進めた。

死体の焼却に必要なガソリンは、安芸郡府中町の小高い丘に掘られた洞穴の中に、ドラムカンで一〇〇本以上を分散疎開させていたから、これを約一〇本、舟で宇品港に運び、各作業隊に配給した。

遺骨は、死体のあった場所や特徴によって、縁故者が探しに来た場合は、案内して説明し、判明したものは引渡したが、ほとんどは身元不明であった。この作業隊が取扱った死体は、二、三〇〇体に達した。

食糧の調達

これら救援作業隊の野宿に必要な毛布、および食糧、あるいは収容者への炊出しは、統制班の岡良輝准尉が、奔走してまかされた。

岡准尉は、六日の朝、出勤したとたん、裏門の野戦郵便局前で被爆した。気がついたとき、爆風で戦闘帽が吹きとばされ、傍のイチジクの木に引っかかっており、帯革に提げていた図嚢は、約五〇メートル先の国鉄宇品線の軌道上に飛ばされていた。しかし、これという傷もなかったので、ただちに兵站作業を受持つと同時に、畑少将の命令で市内の被害状況の偵察にも出た。

志願兵の送還

被爆直後から終戦まで、負傷者の救援作業や死体の処理に従事した者をはじめ、海田市町の各施設で就労中の朝鮮人志願兵は、大本営から、「朝鮮人反乱の虞れあり、至急送還すべし」という命令があり、八月二十二日、広島駅の停車場司令部から緊急列車を出させて下関に送り、本国へ帰らせた。志願兵のなかには、日本に踏みとどまって働きたいと、希望を申出る者が幾人もあったが、敗戦の大混乱で、社会状況も不安定であったから、その切実な希望をかなえることはできなかった。

解散

なお、終戦になってから、輸送統制部が管理していた軍需物資のうち、被服六、〇〇〇着を県を通じて罹災者に配給するよう手配、また市役所には、机・椅子・戸棚などの庁用器材を譲渡した。

昭和二十年九月二十日、陸軍の作戦に枢要な活動を続けた輸送統制部も、兵籍簿だけを残し、他の重要書類はすべて焼却して、ついに解散した。

第四節 呉海軍鎮守府の活動...301

第一項 呉海軍鎮守府...301

概要

宇品の陸軍船舶部隊について、呉海軍鎮守府からも救援隊が出動した。呉では目撃者が帰って来るまで、原子爆弾の炸裂とは気づかず、広島市内の火薬庫の爆発だろうと思っていた。この日、鎮守府では、通常の所轄長会議が、平静に開かれていた。ちなみに、当時の幹部(一部)は、次のとおりである。

鎮守府司令長官 海軍中将 金沢正夫

参謀長 海軍少将 橋本象造

参謀長副長 海軍少将 岡田為次

参謀長副長 海軍大佐 小山敏明

専任参謀 海軍大佐 寺崎隆治

参謀 海軍中佐 荒木勲

参謀 海軍中佐 西村春芳

参謀 海軍中佐 橋秀雄

参謀 海軍中佐 今井和夫

参謀 海軍少佐 今村正己

参謀 海軍少佐 縮武

参謀 海軍少佐 佐藤裕生

軍需部部长 海軍少将 島田藤治郎

海兵团团长 海軍中将 久保九次

鎮守府軍医長兼呉海軍病院長 海軍軍医中将 福井信立

福井軍医長の判定

福井軍医長だけは、呉病院丘陵を散歩していて、真向いの広島の上空で爆発した瞬間を、初めから終わりまで望見しており、原子爆弾に相違ないと直感した。その瞬間は、太陽のような光りを見て、その周辺から上空へむけて三、四段の爆雲が上がり、その雲がグングン広がっていった。そして、一定時間の後に、地上の土ぼこりや木の葉を吹き上げる大きな風圧衝撃を受けた。光波と音波の時間差でおおよそ広島辺と判定されたのであった。福井軍医長は、所轄長会議の途中の休憩時間に参謀長らと話しあったが信じられなかったの

で、すぐ呉病院に帰り、幹部を集めて広島市救援隊の編成にあたった。

本土防衛会議

これよりさき五日に、大阪以西の陸軍と海軍を統轄する第二総軍司令部(司令官・畑俊六大将)から、八月六日午前八時半から広島市の偕行社で本土防衛に関する陸海軍の作戦打合せ会議開催のため、大阪以西の情報関係の参謀の広島集合が命令された。

集合を命ぜられた海軍諸部隊の通信・情報参謀のほとんどは、呉鎮守府を訪ね、色々打合せをおこなって、五日に出広し、その夜宿舎(羽田別荘)に泊っていて被爆負傷した。

鎮守府参謀荒木勲海軍中佐は、五日から六日の朝まで、防空担当の航空参謀に代って、防空発令官を兼務していたため、他の参謀と同一行動がとれず、その夜は鎮守府で勤務についた。

荒木参謀広島へ

六日朝、荒木参謀は自動車の燃料を節約する意味から、朝一番の列車を利用して出広すれば、集合時刻に充分間にあうので、列車便を利用しようと呉駅に向いたが、予定時刻になっても列車は来ず、二番列車も遅延と聞いて、やむを得ず鎮守府司令部に自動車を廻送するよう連絡して、その到着を呉駅前で待っていた。そのとき、広島方向に異様な光りと爆発音があり、キノコ状の爆煙を見た。

海田市方面の火薬庫の爆発かも知れぬと思いながら、状況不明のまま、まもなく到着した自動車に乗って広島へ向った。海田市町を過ぎるころから、被災者の夢遊病者のような群れに出あうようになり、広島方面は黒煙がますます大きく濛々として、大火災になっていた。市街地に入ってから川岸ぞいに車を走らせ、広島駅へ向ったが、左

手の市中心部は一面火の海で車を乗り入れることもできかねる状況であった。

途中、大きな道の交叉点で、海軍中尉の青年将校が唯一人で避難者の誘導をおこなっているのに出会った。その将校に状況を聞いて更に前進し、広島駅付近まで来たが、行く方向は火炎に包まれていて進めず、まったく想像に絶する被害であることが認められた。荒木参謀は司令部職員として、目撃状況を鎮守府長官に報告し、対策をこぎずる事が緊要と思い、急ぎ引返した。帰路は国鉄の各駅に立寄って駅長を呼び、地元町村長に連絡して続々と逃げて来る避難民の収容を行なうよう、独断で指示を与えた。

広島壊滅の報告

鎮守府では、前述のとおり金沢長官以下の主脳者が全員集って所轄長会議を開いていた。そこへ荒木参謀が、突然現れたので一同は驚き、かつ喜んだ。

荒木参謀は、広島市の惨状を詳細に説明して緊急対策を進言したが、あまりに被害が大きい事から、参謀長らは信用しようとしなかった。金沢長官は一言、「目で確認して帰って来た者は荒木一人である。本人の信ずるように措置させたらよい。」と決断した。

荒木参謀は、ただちに呉海軍病院の福井軍医長を訪ねて救援対策を協議した。

広島市の陸軍の医療部隊は、ほとんど用をなさないとされるし、民間の医療機関は全滅と判断されることから、(一)海軍としては全力を傾注して救援にあたるべしとし、(二)急ぎ救援隊を編成して、海・陸両方から広島へ派遣すること。(三)救援隊には医療関係者のほか作業隊をつけることが必要であり、救援隊はさしあたり三～四隊くらい編成し、(四)医療品は呉鎮守府手持ち数量の半分以上を積み込むこと、(五)作業日数は当面数日間とすることなどを打合わせた。なお、救援隊の細部については軍医長に一任した。

第二総軍と連絡

一方、金沢長官は、午前十時ごろ、第二総軍司令部および中国軍管区司令部へ西村春芳参謀を派遣し、海軍としてさしあたり救援すべき事項について打合わせさせた。西村参謀は午後一時か二時ごろ、二葉山防空壕の第二総軍司令部に到着した。畑司令官から「呉海兵団より陸戦隊一個中隊程度、鉄道輸送の復旧・主要道路の清掃のため、ただちに派遣されたい。」と要請があり、急ぎ作業隊が出動した。

呉海軍病院の出動

海軍病院では、酒井文三軍医少佐が救援隊の作戦命令を立案して作業を進めた。

すなわち、総救援隊長に伊藤実軍医大佐(海軍病院第一部長兼練習部長)が任命され、幹部に中西貞二軍医中佐・安間孝正軍医少佐・同寺崎平・高山象造軍医大尉・宇垣博光軍医中尉を配し、病院の可能出動人員をこれに配属せしめ、数隊に分けて六日ただちに出動した。

なお、救援隊の一部をもって、被害の医学的観察(臨床症状・物体被害)をおこなったが、これには前記幹部のほか、衣川清三郎軍医中佐・重藤俊夫軍医大尉が加わった。

七日には、福井軍医長以下幹部が現地視察を行ない、救護作業の促進をはかった。

また、九州に出張中、広島に被爆を知り急ぎ帰任した下林良政軍医中佐も福井軍医長の補佐として、救援隊の派遣など立案すべき任にあったが、病院に帰ったときは、すでに救援隊が出動していた。そこで、天応町に仮収容所が設置されていて、負傷者の収容・治療がおこなわれていたので、ここで活動した。

岩国海軍病院の出動

岩国海軍病院(院長軍医少将板倉駿・副院長軍医大佐稲田稲水・部員河野義夫など)も出動命令を受け、六日から十八日まで現地救援、負傷者の収容に全力をあげた。

海軍病院関係の救援状況は、次のとおりである。

担当者	活動期間	活動内容	従事者	備考
呉海軍病院	八月六日～八月九日	救護調査(第一回)	前述のとおり	当時、本病院は戦傷患者で満員であったため、呉海仁会病院に負傷者を収容した。
	八月六日～九月三十日	入院者治療(小屋浦臨時病舎にて)	軍医少将 金井 泉 軍医少佐 黒丸征四郎 軍医大尉 水津修三・他	
	九月七日～九月十六日	精密検査(現地滞留者・新米者)	軍医大差 窪田正次 軍医中佐 荒 蕃男 軍医少佐 酒井文三・他	
呉海仁会病院	八月六日～十月十九日	入院者治療	軍医大佐 松見茂雄 医 師 香川宗一・他	本病院は鎮守府所属で、海軍軍人家族専用病院

岩国海軍病院	八月六日～八月十八日	救護 入院者治療	前述のとおり	
--------	------------	-------------	--------	--

海軍が収容した負傷者は、呉海軍病院が満員であったから配下の呉海仁会病院に入院させた。

救援隊のほか、相当量の医薬品を広島市内の諸医療機関に配布すると共に、軍需部が主体となって食糧・衣服などを輸送した。

防空指揮所

以上の救援隊の出動とは別に、防空指揮所はいち早く状況を知り、急ぎ出動した。

八月六日午前八時ごろ、甲山町監視哨・三次監視哨などから、米機三機広島に向うとの報告が、呉鎮守府司令部地下作戦室に直通電話で入り、ただちに警戒警報が発令された。

当時、作戦室は鎮守府司令部の建物の地下にあり、一〇〇トン爆弾に耐える堅牢なものであった。この地下作戦室には、鎮守府関係の防空指揮所があり、主として中国地方五県のみで兵員(通信員)不足のため、昭和二十年四月から女子通信員を採用し、通信事務にあたらせていた。大阪の中部軍司令部関係は同司令部と、福岡の西部軍司令部関係は同司令部から、常に情報交換をおこなっていた。

呉鎮守府関係の防空監視哨は、その数ほぼ四五〇か所で、このうち女子による監視哨が大分県下入津ほか二か所にあった。

また、広島師団司令部と連絡を密にし、鎮守府防空指揮所補佐官山崎増一海軍大尉などが常に連絡していた。

空襲警報発令

前記の防空監視哨からの通報に続いて、中国軍管区司令部参謀部と広島地区司令部から、敵機侵入の情報連絡があり、呉地区に空襲警報を発令した。

その午前八時十五分頃、原子爆弾が広島市に投下されたのであった。

ただちに、監視哨から異様な大爆煙の発生の状況が連絡されてきたが、勿論、その実情については知るよしもなかった。

大爆煙望見

当時、鎮守府司令部は地下の防空作戦室にあったので、航空参謀姫野海軍中佐と山崎大尉が屋上に出て見ると、モクモクと上昇する大爆煙が望見された。

爆発は広島市内か、貨茂郡八本松の火薬庫かと推定したが、広島市内には火薬庫などの大規模な施設はないので、おおかた八本松海軍弾薬庫の爆発かもしれないなどと、異論さまざまであった。

広島を偵察

とにかく、急ぎその実態を調査することに決し、姫野航空参謀の命令によって、山崎大尉が八時四十分ごろ、山口運転手の運転する鎮守府の軽自動車に乗って呉を出発、一路広島に向った。

途中、天応町を通過するとき、二、三人の被爆者らしい者に出合い、不審ながらも、広島の方から避難して来た様子なので、やはり被害地は広島市であろうと直感された。

九時四十分頃、行く道が次第に被爆による破壊の様相をはっきりと目に示しはじめた。

海田市町付近から東洋工業株式会社付近に至ると、家屋その他建物のガラスがすべて破損し、道行く市民は、見ることから無残なボロボロの汚れた薄衣の姿で、いよいよ事態の重大さがわかってきた。

第二総軍と連絡

自動車で、ようやく広島駅に到着したが、駅の姿はなく、無残な被爆者の右往左往する中を、広島師団司令部に向っているとき、たまたま、一人の陸軍中佐に出あい、師団司令部の壊滅を知った。そこで、駅裏に当たる二葉山の第二総軍司令部に行き、呉鎮守府から連絡に来た旨を畑司令官に報告した。総軍司令部は二葉山の防空壕に避難していたが、ここで、陸軍中佐の橋本正勝作戦参謀と、救急対策を協議した。

時間はすでに十一時頃になっていたが、協議の結果、食糧の配給・救援隊の出動など至急実施することになり、すぐに呉鎮守府に引返して、広島の惨状を報告すると共に、陸軍側の要望を報告した。

救援隊出動

鎮守府長官はただちに各部隊長の参集を命じ、部隊長会議を開催し、次のことを実施することにした。

(イ) 呉海兵団長(久保九次中将)は、一、五〇〇人の救援作業隊を編成すること。

内訳、准士官以下七人、ほかは下士官若干人とし、隊員は兵二〇人一組を一個分隊とする。下士官が隊長となり指揮をとる。

(ロ) 呉海軍病院長(福井信立軍医中將)は、一〇隊の救護隊を編成すること。

内訳、一隊は看護尉官一人につき、看護兵一〇人(内看護婦二人)、付属員三人位とする。

(ハ) 呉海軍軍需部長(島田藤治郎少將)は、二万人の食糧を準備すること。

内訳、米若干袋・カンヅメ若干・野菜若干・醤油・味噌・砂糖・その他、二万人分

各救援隊は午後五時までに編成されたが、広島市に出動するにも、汽車不通のため、呉駅長名で海田市駅まで運転を要請した。鎮守府派遣の救援隊の総指揮官として、再び山崎大尉は自動車で、広島駅に直行した。

前回の状況視察のときは、まだ火災も少なかったが、この第二回目は市内一面猛火に包まれており、その熱気のため荒神町でついに車を止め、運転手と話合っ、拾って来た荷造り用のコモを二、三枚、水に浸して自動車の前部を覆い、火熱を防ぎながら、車を走らせた。

東練兵場にて活動

まもなく海軍派遣の救援隊が広島駅に到着し、午後六時ごろ、大破後に焼失した総軍司令部の前の広場に天幕を張って、海軍救護本部を設置した。広い練兵場は足の踏み場もないほど避難者が集っており、海軍の各作業隊は、最も多数負傷者のいる練兵場北辺の二葉山(標高一二五メートル)の谷かげに天幕を張って、救護活動を開始した。この頃、二葉山の洞穴防空壕にいた総軍司令部の高級参謀井本熊男大佐や橋本正勝中佐らの火傷の手当てをした。

午後七時ごろ、陸軍船舶司令部から応急対策協議のため、比治山公園下(比治山神社)に集合するよう連絡があった、すぐに集合した。

陸軍船舶司令官佐伯文郎中將、海軍派遣救護隊長山崎増一大尉、高野源進県知事の三者合同会議で、この時、次のように救護作業区域が決定された。

救護区域の決定

なお、この協議会は、毎日午後五時より、同場所において開催されることになった。

(救護作業区域)

海軍＝広島駅－己斐駅－横川駅を通ずる以北の救援にあたる。

陸軍＝東部・中央部・西部の三地区の救援にあたる。

ただし、陸軍は活動できる部隊が宇品の暁部隊だけであったから、兵力がたらず、後に他地域から応援部隊が到着するまでは、作業も非常に困難な状況であった。

各地の救援隊来る

七日から、県下各地の警察官や警防団の救援隊、医師・看護婦などの治療班が、続々と入市しはじめ、山崎海軍大尉の担当区域では、それぞれ食糧・医薬品を持って次のよう到来した。

イ、東練兵場東側へは福山方面から来援。

ロ、己斐駅付近へは大竹方面から来援。

ハ、横川駅以北へは山県郡方面から来援。

海軍の作業隊もにぎり飯を作って配給したが、火傷のため口が思うように開かない負傷者が多く、一考しておカユにして配給した。おカユ配給係は、一か所に五人の兵隊をおいて作業をしたが、おカユは大いに歓迎された。

山崎救護隊長は、救護本部にいて全般の指揮にあたり、午前午後の各一回、受持ち区域を巡視したが、巡視のたびにどの救護所にも死亡者の数が増加していた。

この七日、午後五時から比治山下において、第二回目の協議会が開催され、席上、市民の災害数について質問があり、山崎大尉は約二五万人であろうと答えた。

また、佐伯船舶司令官から、中国軍管区司令部参謀長松村秀逸少將の治療を依頼されたので、山崎大尉は看護婦二人を連れて、牛田町の仮避難先の家に行き治療をおこなった。毎日通ったが松村少將は相当な負傷で、背中からガラス片四二個を取除いた。

火葬と埋葬

八日、船舶司令部から死亡者の火葬を命ぜられた。火葬はすでに市内の至る所でおこなわれていたが、海軍作業隊はおおむね二葉山付近でおこない、遺骨は山麓に埋葬したのもあった。

中国軍管区司令部は全滅状態で、旧知の佐々木陸軍大尉の消息も杳として不明であったが、八日に山崎大尉のい

る救護隊本部の近くで死亡しているのを発見した。また、参謀部の前田大尉も八方手をつくして探索したが、結局は死体の確認ができないままとなった。

広島駅の応急修理

また、広島駅の応急復旧について、まず、出札・改札・駅長室などを仮設しようと、駅長・助役と協議したが、駅としてはその資材がないため、どうすることもできないので、急遽、呉の海軍建設部に連絡し、復旧資材を運んでようやく仮設した。

海軍引揚げ

九日に至り、ソ連参戦の報により、海軍部隊は引揚げることになったので、山口県から来ていた一般救援隊に対し、海軍救援隊保有の食糧品・医療品・飲料品などを全部引渡し、作業の申継ぎをおこなって、全員引揚げたり。

なお、山崎大尉は救護活動中に、担当地区内の写真(広島駅・横川駅・己斐駅・八丁堀・泉邸など)数十枚を撮っていたので、呉に帰投後、救護状況報告書を提出するとき、一緒に参考写真として添付し、鎮守府に提出したが、現在(昭和四十四年九月)では所在不明である。

なお、江田島の海軍兵学校(校長・栗田健男)は呉鎮守府隷下ではなく、出動命令も受けなかったから、救援隊も出していない。

概要

昭和二十年四月、戦局急迫にともない戦闘要員の増加が必要となり、広島県賀茂郡乃美尾村に戸塚軍医学校(昭和十九年七月創立・神奈川県戸塚市)の分校として、賀茂海軍衛生学校(校長・田辺優海軍軍医中将)が設置された。

約四〇〇余人(歯科二七〇人・薬剤科一五〇人)の学生に、六か月の期間、歯科医科ならびに薬剤科士官としての教育訓練をおこなった。

迫り来る本土決戦に備え、歯科医科士官を軍医科士官の補助者となし、戦傷者の救急医療のできる医療要員として、速成教育を行なうことも主要な任務であった。隣接して賀茂海軍病院(被爆負傷者が多数収容された)があり、平素、衛生学校と密接な連繫をとっていた。衛生学校では士官教育を受けている者を「学生隊」、看護科下士官・看護兵の教育を受けている者を「練習生隊」と呼称して、各々訓練に努めた。

学生隊は歯科分隊五、薬剤科分隊三で編成され、各分隊は学生数五〇ないし五五人で、学生隊長以下軍医科少佐・同大尉、歯科医科大尉、薬剤科の大尉八人が訓育ならびに専門教育にあっていた。

歯科五分隊のうち、四個分隊(第十二・十三・十四・十五分隊)は、当時、大学歯学部または歯科医専在学中の学生で、一個分隊(第十一分隊)五〇人は、すでに卒業後歯科医師の免許を持ち、召集を受けたもので、見習士官を拝命していた。この第十一分隊員五〇人が、第一次救援隊として出動し、第二次は第三期特年兵出身の練習生第三十一分隊七〇人が出動した。

(一) 八月六日の状況

八月六日の状況

イ、炸裂の閃光と音響

午前八時、課業整列後、各分隊は付近の教室に入った。

第十一分隊は、外科実習のため、全員が実習教室に入り、講義を受けていた。

突如、一瞬マグネシウム閃光のような光りを感じ、しばらくして、大音響とかなり強い空気震動を感じた。そのとき、窓越しに広島市方向に巨大なキノコ雲を明確に見た。

キノコ雲は、白から赤―黄―青紫と変色した。某教官は、その時、受持ちの講義が無かったので、グラウンドから教官室方向へ歩いていて、閃光と同時に山陵に落下傘が降下するのを望見し、降下米兵がおればただちに捕虜にするよう学校本部に連絡した。

救援隊出動

ロ、出動命令

六日正午過ぎ、呉鎮守府長官から賀茂海軍衛生学校長にあてて、出動の命令があり、学生隊に出動準備が下命された。

山形学生隊長から、第十一分隊監事森本正紀軍医少佐、第十二分隊監事島筒康夫軍医大尉、ならびに第十一分隊見習士官全員に出動命令が下り、同日午後五時半、救護隊集合が下命され、第一次進発の救護隊の隊長森本正紀軍医少佐・同補佐島筒康夫軍医大尉以下隊員四八人が出動することになった。

ハ、出動の経路とその状況

〇六日午後五時半、衛生学校庁舎前の校庭に集合し、副官から訓示を受け、ただちにトラック三台に分乗して出発した。

〇呉市広町を経て、同日午後六時半頃、呉海軍病院に到着した。

〇呉病院副官は、従来の戦場でまったく経験しない新型爆弾(副官はドイツ語でエトワス ノイエスと言った)の攻撃を受け、広島市に甚大な被害を生じた。現地陸軍衛生部隊もほとんど全滅、再度攻撃を受ける恐れもあり、充分注意して活動するよう訓示した。ただちに呉病院において、約一、〇〇〇人分の治療品の積込みをおこなった。

〇同日午後九時ごろ、呉海軍病院を出発したが、呉市を過ぎるころから、広島上空の赤く映えているのが眺められた。

〇海田市町に入ると、破壊された家屋、倒れかけた電柱、垂れ下がった電線などのため、時々トラックを停車しなければならなかったが、通過不可能な障害物はほとんどなく、トラックは西側の火の海の中の道路を突っ走って行った。

○タイヤが踏む路面は、瓦・壁・ガラス・鉄屑などで埋まっており、ザクザク、バリバリと音をたてた。トラックのヘッドライトの中に、虚脱状態の避難民がつつぎと映し出されては消えていった。建物は、爆心方向に傾いているものが多かった。

○午後十一時ごろ、ようやく目的地東練兵場に到着したが、広島駅や比治山の燃えているのが見られた。東練兵場は夜であったから、勿論、全体の見通しはきかなかつたが、薄明りの中に点々と散乱した死体と、そここの窪みや防空壕などに傷病者が無数におり、足の踏み場もたいほどであった。夏草は焼けて秋草のようであり、羽根が焼けて飛べない小鳥が、その上を歩いていた。

外人の死体もころがっていた。

また、直径一メートルもある巨木が、根こそぎ倒れていた。

(二) 救護活動の状況

イ、東練兵場における活動

東練兵場にて活動

○二葉山よりの一隅に、かなり大きなバラックがあり、この中に約五〇〇人くらい負傷者が横たわっていた。救護隊員の半数は、ただちに三人一組となって、ロウソクの明りをたよりに治療を行なった。残余の半数は練兵場中央寄りに天幕を張り応急治療所を設け、七日早朝、前記バラック内の隊員もこれに合流して治療活動を続けた。

○負傷者はほとんど第二ないし第四度の熱傷・骨折・全身爆傷患者であり、熱傷部はリバノール肝油の塗布、繃帯、リバノール湿布繃帯をほどこし、骨折部は副木固定、重傷者には強心剤注射、さらに苦悶する患者には、モルヒネ注射をおこなうという簡単な処置であった。しかし、想像に絶した多数の負傷者で、治療薬品、ならびに繃帯材料は、七日の夜明けごろにはほとんど無くなった。あとは、練兵場のあちらこちらの負傷者に、バケツで汲み集めた水を、水筒にうつして飲ませ、激励して歩くことが、作業の大きな部分であった。

○助けを呼ぶ負傷者は、われ先きにと足にすがりつく。すがった手の皮が、ズルリと剥げる。

この多数の負傷者に五〇人のわずかな衛生学校の部隊では、それらの中のごく一部の人だけにしか治療はできず、あちらこちらの虫の息の負傷者には、ほとんど手がまわらず、草原の中で、見殺しのような状態であった。

○衣服はボロボロ、露出した膚には水泡ができ、顔面は異常に肥大している。このような無残な負傷者が、夢遊病者のように往き来していた。そして、広島市に何が起ったのかと聞いても、ただボーとして何も答えなかった。

○校名は不明だが女子学生の一団(県立第二高等女学校の生徒か。)が、六日夜、この練兵場で救護活動をおこなっていたが、その他の救護部隊はまだ見受けられなかった。

○東練兵場に面した丘の、石段をやや登ったお寺(国前寺と思われる瑞川寺は被爆直後炎上した。炸裂時、陸軍の兵士が上半身裸体で、国前寺前の草原で体操をしており、ただちに国前寺に收容された)に、負傷者が多数收容されているという報告があり、途中から分隊の一部をその方に派遣した。お寺はあまり破壊されてなく、陸軍の軍人がかなりいた。

司令部関係とおぼしき将官が数人と、高級軍人の一団が、奥まった部屋で蚊帳をつって伏せていた。

その他、見習士官らしい一団もあり、重傷軽傷さまざまであった。総計二、三〇人の軍人であったが、陸軍医官の姿は見られなかった。

○七日午前八時ごろ、陸軍からの要請で第二総軍司令官畑大将の官邸(東照宮と鶴羽根神社との中間の位置)に、治療のため平塚・酒泉・平岡見習医官が派遣され、あまり破壊されていない民家で、夫人と若い娘の二人(上流川町の官邸から避難した大塚総監の妻子と思われる)を治療した。二人とも軽傷であった。八日も隊員を派遣して治療した。

○六日夜から七日午前中にかけて、治療をおこなったのは約二、〇〇〇人であった。

横川方面に移動

ロ、横川方面における活動

○七日正午過ぎ、トラック二台に分乗して東練兵場を出発し、横川へ移動することになったが、途中、障害物のため行きどまり多く、横川に到達するまでに、普通十五分のところを約二時間もかかった。

○横川に行く途中、脱線転覆した機関車、折れた鉄橋が見受けられた。

路上には黒焦げの死体が散乱していたが、死体は半褐色で、まるでブタの丸焼きのようなのが多かった。また、電車・自動車・防空壕の中にも、焼死体が多数見られた。防火用水槽に頭を突っこんでいる死体もたくさんあった。川は死体で埋まっていた。

馬の死体も路上に多く見受けられたが、中には内臓の露出しているのもあった。

焼トタンの屋根の下には、必ず数人の負傷者や死体があった。焼トタンを拾って来てバラック小屋を急造し、はげしい日射をふせいでいたのであろう。

また、焼跡の中に、不思議にも木造建築で倒壊していないものが、所々にポツンと取残されていた。

○七日午後二時すぎ、横川駅前の三篠信用組合ビルに到着し、ここで収容者の治療を開始した。

島筒軍医大尉は、ここで別行動をとり市内視察のあと、状況報告のため、呉鎮守府経由で賀茂海軍衛生学校に帰校した。

三篠信用組合ビルは、窓ガラスが破壊されていたが、建物は健在であった。表に「賀茂海軍衛生学校特設救護隊」の看板をかかげた。

ビル内は、室内も通路もぎっしり負傷者が横たわっており、頭や手足を踏まないように歩かねばならなかった。これら収容負傷者は約一〇〇人で、警察官が受付をし、屋外にも多数の傷病者が、魚をならべたように寝かせてあった。

○衛生学校の隊員は、交替で不寝番に立ち、夜間の患者の管理をすると共に、ビルの二階ホールで、机や椅子をならべて仮眠をとった。

○ここでも熱傷は二度ないし四度の者が多く、露出部は特にひどく、なかでも黒い衣服の下がひどかった。帽子のひさし・洋傘・手袋などの下は割合に軽度であった。

異物(ガラス片・小石・土塊など)が皮下あるいは筋肉内に残入している者が多かった。

なお、強烈な爆発音・爆風にかかわらず耳の鼓膜穿孔は割合に少なかった。

治療した翌日、約一〇分の一は死亡し、生存していても発狂状態となった者が多かった。

○収容者には、握りめしの配給がおこなわれたが、まったく手をつけない重傷者が多く、握りめしは枕もとでハエと埃にまみれていた。

○集められて来たり、治療所で死んだりした人は、ビルの前の広場の屍体置場に運んだが、その数は五、六〇〇人に達し、うず高く積まれて小山のようになった。

死体を運び出して空いた場所には、またすぐ負傷者が運びこまれた。

○外来の軽傷者には、玄関で治療をおこなった。治療薬品は、呉海軍病院から補給されたが、一時は底をつき、リバノール肝油を水でうすめて使用するということがあった。

そのうちに近郊の医師会の救援隊も到着し、医療本部が設置され、医薬品も並べられ、各自必要に応じて使用することができた。しかし、それも万全ではなくて、一時は繃帯が不足し、息を引取った者の繃帯をはずして再使用したこともあった。

負傷者は、しきりに水を欲しがり、一日中、水の運搬をした隊員もいた。

○八日午前中、賀茂海軍衛生学校長川辺中将その他が現地に来訪し、激励した。

○同日午後、賀茂海軍衛生学校第三期特年兵出身の練習生の一団が到着したので、学生隊はこれと交替して引揚げた。

○横川における治療患者数は、約五〇〇人くらいであった。

○学生隊の帰校は、往路と同じコースをとり、二個班に分れてトラックに分乗し、第一班は八日後、第二班は途中でトラックが故障したため、空家に全員一泊し、救援のトラックを待ち、九日午前八時過ぎに帰校した。

第二次救援隊出動

この第一次救援隊(学生隊)の入れかわりとして、七日午後、第二次救援隊(第三期特年兵出身の練習生)の編成命令が下り、八日早朝、第三十一分隊長杉村脩一海軍軍医大尉以下七二人(分隊長一人、兵曹長一人、兵曹三人、兵六八人)は、トラック二台に分乗して衛生学校を出発した。第一次と同じように広・呉街道を通り、海岸沿いに広島市に入った。焼け落ちた市内はまだ余燼がくすぶっており、道ばたや川の中に幾つも死体があった。

最初、東練兵場近くの国前寺に行き、ついで横川の三篠信用組合の建物に入った。室内ではすでに一般救援隊が活動しており、床の上や机の上に負傷者が所狭しと寝かされ、チンク油の塗布だけの治療がおこなわれていた。

杉村大尉指揮下の第二次衛生学校救援隊は、その建物内に治療所を開設し、主にリバノール、イスラピンなどをガーゼにしみこませて創面にあてたり、オリーブ油・ゴマ油の塗布、リングル注射(一人に二〇cc)などの治療をおこなったが、負傷者は一般市民で、次から次へと行列がつづき、一度治療した負傷者は、二度めの治療ができない

ありさまであった。

夜間は、建物内の収容者約二〇〇人余の看護を、徹夜、交替でおこなったが、次々に死亡し、冷たくなっていった。一日に二、三〇〇人の治療をおこなったが、なかには遠方からわざわざ来訪した負傷者も多かった。

九日夕刻、陸軍部隊と交替するよう命令を受け、横川駅から汽車で帰途についた。

賀茂海軍衛生学校練習生隊の活動 西家明男

(当時・賀茂海軍衛生学校第三十一分隊練習生海軍上等衛生兵)

八月七日、杉村脩一分隊長(海軍軍医大尉)から、「我々第三十一分隊は、明八日早朝、広島市に出動するから、今日中に準備を整えるように」と命令された。

ほとんどが火傷ということで、油類を集め、チンク油が少ないのでゴマ油をあるだけ全部準備、また、リバノール液・ヨーチン・赤チンなどの薬品、注射用としてリングル・ブドウ糖注射液など全部、衛生材料として繃帯・三角巾が少ないので色とりどりの布ぎれを用意して箱につめ、八日夜明けに出発した。

われわれ救護隊の編成は、第三十一分隊長杉村脩一軍医大尉を隊長とし、分隊士三輪圭市衛生兵曹長、垂石三郎上等衛生兵曹、沢田一司(現姓盛田)及び金色幸男両一等衛生兵曹の下士官三人と、われわれ練習生(上等衛生兵)六八人で、われわれは雑糞[ごつう](手拭一枚・チリ紙・手帳・鉛筆・乾パン約一日分)・水筒を携帯し、トラック二台に分乗して学校を出発した、トラックは呉から海田市を経て広島に入ったが、海岸ぞいに広島に入る途中、できるだけ清潔な海水を汲みあげ、過マンガン酸加里を加えて湿布代用薬(カメレオン水)に用意した。

八日下前八時過ぎに東練兵場に到着したが、近くの寺院で陸軍救護隊が先着してすでに活動していたから、すぐ引返した。広島駅前に出て電車軌道ぞいに中心部の八丁堀方面に前進し、爆心地の相生橋東詰付近で通行困難に陥った。右往左往ののち、ようやく橋を渡って十日市筋を通り、昼過ぎに横川駅前に到着した。

「医者 came。」と、付近にいた人々が大喜びした。私たちは、先発の賀茂海軍衛生学校学生隊見習尉官とただちに交替し、駅前にただ一戸ポツリと外郭が残って立っている二階建の三篠信用組合跡に救護所を設置した。隊員は、治療班・看護班・整理救護班の三班に分れて活動を開始した。

信用組合周辺は、道路以外は死体の片づけが終っておらず、三〇メートルばかり横では少人数の陸軍兵士がテントを張って、何か油のようなものをかけて死体を焼いており、臭気がひどい。横川駅前帯の死体は黒焦げで、灰の中から焼けた手がのぞいているものもあり、散乱した死体を一つ一つ探している人が五、六人いた。その中で、一人の朝鮮婦人が真黒に焼けた五、六歳くらいのお子を探しあて、「アイゴ、アイゴ」と泣きだした。

婦人はその死体を抱きかかえ、どうして死んだのかというのであろう、死んだ子を平手で叩きながら、一時間以上も泣き叫んでいた。また、これもわが子らしき死体を前にして、怨めしように空を凝視し、棒立ちしている中年の男があり、泣いているが、声が出ないようである。

「声を出していなかったけれど、あれが本当の慟哭というものではなかろうか。」と、後に井上武練習生が私に語った。

警察隊による炊出しがあり、大きなザルに麦ばかりのような握りめしを入れて配給したが、被爆者たちは空腹をこらえていたのか、我も我もと、ドツと押しかけてきた。しかし、重傷者は持って行って与えても、食べる力がなかった。われわれ救護隊にも配給されたが、多くの者は食べる気になれなかったようである。

水も充分でなく、五〇メートルばかり先の井戸まで一升ビンを持って、交替で水汲みに行ったが、治療用と飲料には不足がちであった。救護隊員のなかには、近くの死体の傍に少しずつ出ている水道の蛇口に、口をあててのどをうるおす者もたくさんいた。

(イ) 整理救護班の活動

治療を受けに集った負傷者を混雑しないように縦列に並べさせたが、重傷者は優先的に治療班にまわした。治療班が人手不足になると、交替で治療班にも加わった。また、警防団員が担架で運びこんだり、背負って来たりする重傷者の整理や手当てもおこなった。

八日は一、〇〇〇人近く、九日は一、八〇〇人くらい負傷者が列をつくったが、大半が女性で、顔面火傷の人がもっとも多かった。目から何か汁の出ている人もあり、治癒しても二度と見られない顔となったであろう。腕の火傷も多かったが、素肌の部分がひどく、着衣の部分は比較的軽傷であった。爆風で着衣がボロボロに裂けている人は、それだけ爆心近くにおいて被爆したのであろうか、火傷の程度もひどく、破れた衣類が傷口に付着している人

もかなりあった。火傷の軽い人、あるいは殆んどない人は、ガラスの破片が体に刺さった人が多く、主に背面に受けていた。次は、物の下敷きになったりして、創傷・骨折・ねんざなども多くあった。負傷者は着衣を見ただけで、その被害程度がおおよそわかった。長蛇の列の負傷者に対して、「少しの辛棒ですから待ってください。」と、われわれは励まし、元気をつけるようにつとめたが、無差別に虐殺したアメリカに対する憎しみと怒りの声は激しく、「何時かは、きっとこの復讐はしてやりますぞ。」とか、「兵隊さん、きっとこの仇を取ってください。」などと女も子供も興奮し、敵愾心に満ちて叫ぶのも当然のことに思われた。中には、爆弾の威力に驚愕し、「これで戦争に勝てるのだろうか。」と、不安そうにいう人もあった。「クソッ！アメリカの奴、おぼえておけ。」と、なかばやけっぱちの人、また、「アメリカは無茶をしますのう。」と、憎いがどうにもならんといったような、複雑な表情で話しかける人、「こんなことをされて、一生忘れアせんぞ。」と、負けても忘れないという意味にもとれる言葉など、内心勝利をあきらめたような言葉もあった。

負傷者は、なかんずく若い女性と子供が多かった。「蚊帳の中にいたので、露出部だけの軽い火傷ですんだ。」と話す娘さんがいた。また、一六、七歳の女学生が、火傷はないが家の下敷きになり、足くびを骨折しているらしく、警防団員に背負われてきて、一緒にその場にいた女の先生と学友三人の安否をしきりに心配していた。

瀬戸内海の小島から広島に出て来ていた国民学校三、四年生の男の子と、その姉の二人は、鉄筋コンクリート建ての屋内にいて被爆し、逃げる途中、負傷した姉は弟について走れなくなり、自分の手帳を千切って、「この子を送り届けてくれ。」と、住所を書いて弟に持たせていたのを、星八郎練習生が保護して、警察隊に身柄の護送とはぐれた姉の救出を依頼するということがあった。

(ロ) 治療班の活動

杉村軍医大尉以下、沢田・金色両一等衛生兵曹、及び練習生二〇数人が治療班を編成したが、多忙な時には、整理救護班が交替で応援した。八日に一、〇〇〇人近く、九日に一、八〇〇人位の治療にあたったが、水泡が破れてズルズルになって、汁を垂れ流している人が多く、肌着が付着してとれない人もあり、カメレオン水(過マンガン酸加里)で湿らせてから剥ぎとった。また、出動の途中で汲み取ってきた海水と過マンガン酸加里を調合したカメレオン水は、傷口の洗滌や消毒に使用し、火傷個所にはチンク油とリパノール液の混合液を塗った。しかし、僅かしかなかったから顔面や特にひどい傷にだけに使い、腕・脚・胴部などには食用ゴマ油を使った。またカメレオン水に布を浸して、火傷の上に湿布として覆った。火傷だけで、他に傷のない人には湿布だけした。

顔面をやられた人は、薬を塗ると、その上に目・鼻・口だけ穴をあけた湿布で顔を覆い、四方の角に紐をつけて、後頭部で結ぶと治療終了とした、胸・腹・背なども同じやり方で、足柄山の金時の胴当てのようにして、後で紐を結び、火傷が広い場合には、その上を更に一廻りか二廻り広目に裂いた布を、繃帯代りにして結んだ、ガーゼ・繃帯・三角巾は傷の程度・場所によっては使ったが、手持ちが僅かなためなるべく節約した。

火傷以外の創傷には、赤チン・ヨードチンキ・リパノール液などを使用し、傷口の大きいものはリパノール液にガーゼを浸して傷口を覆い、上を布か繃帯で巻いた。骨折やねんざは湿布の上を布か繃帯でしめるだけである。

火傷の次に多いのは、ガラスの破片が突き刺さった負傷者で、ピンセットで一つずつ抜き取ったが、深く刺さっていて、一苦労することもあった。身体中に何十か所も刺さっている人もあり、これを全部抜いている暇はないので、大きい破片だけ抜き取っておいたこともあった。抜き取ったあとは、ほとんど赤チンを塗っただけである。麻酔もかけず、ナマの体から何か所もガラスの破片を抜きとることは、普通では我慢できないことであったが、歯をくいしばって負傷者たちは、その痛みに耐えていた。

われわれより二、三歳上の娘さんが多かったが、動員女学生らしい一人の少女が背から腰にかけて、一〇数か所にガラスの破片が刺さっていた。それを一つ一つ抜き取ったが、恥ずかしさに赤面しているのが後からでもよくわかり、早く抜いてあげようと、あせればあせるほど思うように抜けず、私は顔にダラダラと汗を流しながら治療したこともあった。

九日の午後になると、携帯薬品も次第にとぼしくなり、ゴマ油も底をつき、カメレオン水の湿布ばかりとなり、ついに気休め程度の治療となった。夕方ごろには、もう医薬品も衛生材料も使いつくしてしまった。

大内佐市練習生のところに来た老婆は、全身火傷で今にも倒れそうなので、腰をかけさせて、まず足の傷をカメレオン水で洗滌していると、ウジ虫が五、六匹出て来て、二、三匹はコロコロと転げ落ちた。生きた人間からウジが出たので、見た者は驚き身震いした。

警防団員の担架で運ばれてくる重傷者は多数にのぼったが、ほとんど重体患者で、担架から降ろすと間もなく死

ぬる人、あるいはリングルやブドウ糖注射の終るか終らぬかで、グッタリとなり再び息をふき返さぬ人などもあった。

治療後は、動けない人は室内に収容したが、その他は屋外にはみ出したため、何処かの病院または収容所に転送された。

(ハ) 看護班の活動

三篠信用糾合の内部には、約二〇〇人(階上一五、六人・階下一三、四〇人屋外二、三〇人)近い重傷者(主として女・子供)が収容され、昼間は三輪分隊長・垂石上等衛生兵曹の指揮のもと、練習生二〇数人が看護にあたった。しかし、夜間はこの看護班のみでなく、各班全員が従事した。

看護は、治療班と同じような方法で、リングルやブドウ糖の注射その他の手当てをしたが、体力の回復が先決であるため、注射が主体であった。

収容された人々は、ただ死を待つだけという重体患者が大部分で、コンクリートの土間にムシロ・コモ・古ゴザなどを敷いて寝かせてあり、屋外にまで溢れた。みんなみじめな姿で、パンツもはいていない丸裸に近い状態の人もあった。女学生らしい姿の人が多く、看護する練習生たちは見るにしのびず、古ゴザやムシロ、あるいは衛生材料の布まで出して来て、体の上に掛けた。楠一保・高橋佐春両練習生も、「なんでもいいから掛けて。」と呼ばれ、コモを探しだしてかけて感謝されたが、こちらが恥ずかしいような気がしたと語っている。軍人とはいえ一五、六歳の少年であるから、当然な感情であった。

大・小便の取扱いには、まったく苦労したが、内田徳練習生は女の人から、「便所にいきたいが行かれない。」と言われ、焼跡から尿瓶代りになるような物を拾って来て、恥ずかしさも忘れて尿を取ってあげたという。

何かの連絡で二階にあがった私は、一瞬、息を止めた。狭い部屋の土間に、死の寸前の負傷者が横たわっていた。その土間には、尿があちこちに流れ出ており、自分の尿も他人の尿も一緒に体について汚れている。一五、六人の負傷者は、強烈な臭気の糞尿の中で、身をくねらせて苦悶し、うめき声は悲痛をきわめていた。入口の一八、九歳の女の子は裸と同様の状態であり、私が近づくと、すごく恥ずかしそうにした。生死の境にありながらも、女としての羞恥を感じたのであろうと、思わず目がしらが熱くなった。

これらの人々は、ほとんど体力が弱り、食欲もなく、ただ喉の渇きを訴えるだけであった。入口の女の人に物を掛けていると、薄暗い奥の方から苦しそうな声で、「兵隊さん、水を…」、「水をください、」とたのまれた。救護隊の注意事項で、火傷患者には水は禁物とされていたが、この場合、わずかの寿命であるから、私は欲しがる人に水を与えた。食欲のない人は、水だけで命をつないでいたのかも知れない。

八日の夜は、救急患者及び重傷患者の受付け以外は、一応治療所を閉じ、全員が収容患者の看病と手当てに従事した。一晩中、交替で死期の迫った人々のために全精力を傾けたが、私は昼間接した二階の患者が気になって行ってみると、暗い中で入口の一八、九歳の女の子はまだ生きており、水筒の水を与えると、喉を鳴らして飲んだ。奥に入ってみると、すでに二、三人の男女が死んでいた。

階下の大勢の患者の中には、暗い中で、「ウウン ウウン…」と苦痛の声をもらす者、「助けてえ、助けてえ。」「えらいよー、えらいよー」と、うなっている女や子供の声などが聴えたが、どうすることもできなかった。

ウウン・ウウンという声が静かになったことに気づき、その付近を暗目に探しだし、「おい、しっかりしろ。」と肩に手をかけたが、すでに返答なく、口を開いたまま死んでいた。

このような状況の中で、杉村分隊長もわれわれが水を与えるのを黙認し、沢田一司一等衛生兵曹とともに、順次廻診して手当てをおこなった。

ガラスの破片が体に刺さったまま残っていて、「痛い、痛い。」と訴える人、「熱い、熱い。」と、体が焼けつくような声を出す人などもあった。

全身火傷の母親が、元気なく泣く二、三歳の幼児をかばっていたが、九日の夜明けごろ母が死んだ。幼児は抱かれたままなお泣きつづけていた。

また、一〇歳くらいの少年が、恐怖にうなされてうわ言をいいつづけ、突然大声で、「お母さん、こわいよ。お母さん！」と叫んだ。

中には発狂した人もいたようである。ガラス窓が爆風に吹きとばされている屋内で、「暑い(熱い?)から窓をあけてくれ。」と騒ぎ立てるので、本間勇練習生が、「よし、開けたぞ。」と言うと、「ああ、いい気持ちだ。」と言って静かになった。

水が飲みたいのに、自力ではよう飲まない少年二、三人に、西博司練習生は、水筒の水を口に流してやったが、中に四、五年生くらいの子が、「日本は戦争に勝ちますか？」と問うた。即答にためらいながら、中島徳治練習生が、「勝つよ、勝つ。」と勇気づけたが、その少年も、しばらくして息を引取った。

建物の前付近に三〇人くらい寝かせていたが、八月というのに、「寒い、寒い。」と訴える。しかし、何も体に掛ける物がなくて困った。

われわれは交替の休み時間も寝る場所がなく、三時間くらいの仮眠を、屋外収容者の傍に転がるか、建物の壁に背をもたせて眠るほかなかった。夜が明けてみると、隣りの人がもう冷たくなっており、甚だしいのは両隣りの死者と寝ていた者もあった。医薬品も底をついて、まったく見殺しの状態の中で、精いっぱい介抱を続けたが、一夜にして屋外の半数以上、屋内階下の約二〇人、階上はほとんど全員が死亡した。私が物を掛けてやった入口の女の子は、まだ生きており、若い生命力の強さを感じた。

これら収容患者の多くは、何処の誰か確認されず死んだ者が多かった。死体は一応身元確認のため、探索者を待って建物の周囲に安置された。

九日早朝、治療活動を再開した。遠方から来た人も多く、全隊員は睡眠不足にもかかわらず志気旺盛である。昨日に増して長蛇の列となったが、われわれと同じ年頃の少年少女がたくさんいた。

何時頃であったか、B29が再び上空に現れると、足の悪い重傷者までも、われわれよりも早く防空壕のような所へ逃げこんだ。

立川良道練習生は、収容所内で肉親をさがしていたのか、肉親が死んでいたのか、狂乱の、三、四年生位の少年を保護し、付近にいた警察隊に引渡したが、このように肉親と別れ別れになり、悲嘆と飢えと疲労が重なって、路頭に迷う子供もいた。われわれの救護所の傍の警察隊の臨時派出所は、机も何もなく、瓦礫の上に腰をおろして仕事をしている。警察官の中には被爆者もあり、頭部に繃帯をまいた姿で罹災証明書を書いたり、市民に指示を与えたりしていた。今日も麦がほとんどのにぎり飯が配給され、大勢の罹災者が押しかけて来た。われわれ救護隊も一人二個ずつの配給を受けた。

少し離れたところで、昨日に続き陸軍が死体を焼却していたが、その火の消えることはなかった。横川駅前一带の死体の取片づけが、本格的に行なわれはじめ、県下各地から出動した警防団員は、長柄の手カギ(トビグチ)を死体に打込み引っかけ、トラックに積みこんでいる。まるで魚同然の扱い方であるが、こうでもしないと、おびただしい死体の整理ははかどらなかつたであろう。トラックは何回も往復して、練兵場らしい場所に運び集めて焼くということであった。この中には三次市から来た警防団もあり、平佐治練習生は、「昨日、福山が空襲によってほとんどやられた。」と聞き、郷里の親を案じていた。後に、この死体整理に出動した警防団員の中には、高熱が続き、頭髮が抜けて一〇日間ぐらいで死亡した人も多いと聞いた。

九日夕方、突如帰校命令が出た。後に救護隊の交代者もなく、残された重傷者たちは、どうなるのであろうかと、後髪をひかれる思いで、全隊員は横川駅から汽車で出発した。

二階の一八、九歳の若い女の子は、出発のとき虫の息であり、今夜はもうダメだろうと思うと、せつない悲しみがこみあげてきた。

汽車の中で、小柄な中年の婦人が、「兵隊さん、戦争に勝つでしょうか。」と問いかけた。私は勝つ見込みはないと内心思ったが、軍人であるという自覚から、「勝ちます。勝たねばなりません。」と励ますように言った、しかし、目の前の広島の惨状を見ながら婦人は、「へえー」と、ため息まじりに一こと言った。この時から一週間たらずで敗戦となり、私はあの婦人に、軍人として嘘を言ったことを当分はずかしく思った。汽車は最徐行で広島市内を通過したが、川にはまだ死体が浮び、暗くたりかけた墓地の中では、墓石と墓石との間を棒切れやトタンで囲み、夜露をしのいでいる何世帯もの人々が見られた。午後九時過ぎて西条駅に到着し、そこから衛生学校まで約一二キロメートルの道程を強行軍で帰った。皆大変疲労し、誰も言葉も出ず、ただ黙々として歩き、ついには居眠りをしながら行軍して、夜半に帰着したが、帰校翌日の十日頃から全員同じような激しい下痢におそわれ、早い者で三日間、長い者は五日間以上も続いた。

十五日に終戦を迎え、軍隊は解散、われわれ練習生は卒業証書も手にできず、八月末に復員した。十月二十二日、練習生として一緒に救護活動を行なった浜田茂君が死亡し、原爆症と認定された。現在(昭和四十六年)でも同期生の中には、白血球二、〇〇〇～四、〇〇〇の人も相当いるようである。最後に、この体験記を書くにあたり、杉村脩一先生をはじめ全国同期生一〇数人から資料の提出を受けたことを書き添えておく。(昭和四十六年三月五日記)

第五節 広島陸軍病院の活動...329

第一項 陸軍病院の概要...329

概要

明治初頭、国軍創設にあたり、「広島鎮台病院」が旧広島城内に設置された。のちに、城外西方の太田川畔、小姓町(現在基町)に移されてから「広島衛戍病院」(日露戦争当時は、広島予備病院と呼称)と改名され、大正を経て、昭和十二年に「広島陸軍病院」と改称された。

業務は、広島衛戍各部隊・陸軍運輸部隷下各部隊、及び通過部隊の患者収療のほか、外地派遣軍の還送患者の収容・転送を特殊任務としていたが、支那事変が勃発したため、基町の旧陸軍幼年学校施設に開設の基町分室・西練兵場および江波・三滝(打越町)の地に病棟が増設された。当初、これらを「分病室」と呼んだが、のちに「分院」と呼称された。

大東亜戦争の勃発後は、還送患者が急増し、毎月約五、〇〇〇人を収容、これを「軍内診療体系(方針)」により、特殊患者(骨折・眼損傷・脳内臓外科・戦争神経症・精神病・肺結核・栄養失調症・航空機乗員患者など)は各地陸軍専門病院および陸軍軍医学校に、一般患者は留守部隊所在地の各陸軍病院に転送していたが、戦況が悪化し、敵の海上封鎖を受けてからは、還送患者も途絶した。

この頃(昭和二十年初頭)の陸軍病院院長は、元吉慶四郎軍医少将で、機構は次表のとおりである

病院名	別途数(床)	在籍職員数(将校)				下士官兵	看護婦	軍属	計(人)	所在地
		軍医	薬剤	主計	衛生					
広島陸軍病院本院	900	28	5	7	14	270	130	80	534	基町一番地
〃 第一分院	1,300	27	1	1	2	86	150	70	337	西練兵場内
〃 第二分院	600	10	1	1	1	57	80	30	180	旧陸軍幼年学校施設
〃 江波分院	800	17	1	1	2	72	90	35	218	江波町
〃 三滝分院	1,100	20	1	1	2	75	110	40	249	打越町
〃 大野分院	500	10	2	1	2	63	102	73	253	佐伯郡大野町
〃 柳井分院	100	2				15		5	22	現・柳井市伊保庄
〃 小串分院(当初・小串転地療養所)	200	3	1			27	25	24	80	現・山口県豊浦郡豊浦町(昭和十九年六月開所)
〃 看護婦生徒教育隊					1		202		203	基町
計	5,500	117	12	12	24	665	889	357	2,076	

(昭和二十年四月末現在)

(註) イ、陸軍病院は、通常時、五、〇〇〇人以上を収容し、非常の場合は八、〇〇〇人以上に及んだ。非常収容は二ベッドに三人を収容し、超非常時には、各院の娯楽室などを利用したから患者が一万人を超えることも多かった。

ロ、収容者には、重症・急性伝染病・精神病・肺結核・将校・女子などあり、別室(病棟)に収容を要したので、ベッド数と入院患者数が一致することはなかった。

ハ、右表の病院職員区分において、歯科医・見習士官・准尉は「将校」に、主計下士官は「衛生下士官兵」に、看護婦長・看護婦生徒は「看護婦」にそれぞれ併合した。「軍属」は事務雇員・公仕(小使)・給仕・栄養士・炊事夫・汽缶手・運転手・打字手・筆生・電話交換手・調剤助手・手人工・洗濯工・縫工・園丁・大工・雑仕婦など。

一、機構の改編

機構の改編

昭和二十年五月、本土要撃作戦に備え、本・分院の隷属ならびに患者収容区分が改編された。すなわち、広島第一陸軍病院・広島第二陸軍病院・大野陸軍病院と三分され、広島第一陸軍病院は中部軍司令部(大阪)の直轄となり、本院を第二分院施設に置き、旧本院と三滝分院・小串分院・大野分院を除く各分院がその所属となり、作戦上の主任務は四国・九州・裏日本の要撃作戦上の総兵站病院となった。そのため山陽・山陰の奥地一帯に、疎開分院以外に、さらに一万床以上の予備収容力確保の内命を受けていた。

広島第二陸軍病院は、広島師団の直轄となり、旧本院に三滝分院を配し、広島各部隊の傷病兵の収容を主任務とした。また、大野分院も結核患者を収容する特殊病院として、第二総軍司令部直轄の大野陸軍病院となった。

改編(昭和二十年五月十日軍令陸甲第七十九号)による各院長は、次のとおりである。

(一) 広島第一陸軍病院

病院長 陸軍軍医少将 元吉慶四郎
 第一分院長 陸軍軍医大佐 中本覚一
 江波分院長 陸軍軍医大佐 下間[しもづま]伸一

(二) 広島第二陸軍病院

病院長 陸軍軍医大佐 木谷祐寛
 三滝分院長 陸軍軍医中佐 肥後研吉

(三) 大野陸軍病院

病院長 陸軍軍医大佐 斯林可児雄[しばやし かにお]

在籍職員数

なお、被爆直前の在籍職員数は、つぎのとおりである。

病院名	将 校				下士官兵	看護婦	軍属	計(人)
	軍医	薬剤	主計	衛生				
第一陸軍病院本院	20(17)	5	7(2)	12(6)	250(194)	120(112)	150(144)	564(475)
〃 第一分院	0	0	0	0	0	0	0	0
〃 江波分院	8	1	1	1	20	8	10	49
〃 看護婦生徒教育隊	-	-	-	1	-	116(6)	-	117(6)
第二陸軍病院本院	12(6)	2(1)	2(1)	4(3)	170(135)	80(63)	60(48)	330(257)
〃 三滝分院	20	1	1	2	75	110	40	249
計	60(23)	9(1)	11(3)	20(9)	515(329)	434(181)	260(192)	1,309(738)

(註)イ、()内の数は、被爆死没者数である。

ロ、第二陸軍病院本院の下士官兵一七〇人は、軍医予備員一〇〇人を含む。

ハ、第一陸軍病院第一分院の在籍職員は、分院の全面疎開で、各疎開分院に分散配属または本院に転属させられた。なお三滝分院を除く各本・分院の職員も疎開分院編成要員として、各地分院に転属した者が多数あるため、その人員は減少していた。

被爆前の患者収容状況

また、被爆直前の患者収容状況は、次のとおりである。

(一) 広島第一陸軍病院

本・分院名	収容数(人)	利用施設	所在地
本院	300	旧第二分院	広島市基町一番地
第一分院	0		
江波分院	50		広島市江波町
柳井分院	200		現・柳井市伊保庄
島根療養所	347	傷痍軍人島根療養所に併設	現・松山市上乃木町
皆生療養所	200	温泉旅館	現・米子市皆生温泉
玉造分院	500	温泉旅館	現・島根県玉湯町
大田分院	1,200	県立大田中学校及び 県立大田高等女学校	大田市大田町
花岡分院	300		下松市末武上
高水分院	400	高水中学校・国民学校・避病舎	現・山口県熊毛町
戸坂分院	100	国民学校	現・広島市戸坂町
可部分院	200	国民学校	安佐郡可部町
亀山分院	200	国民学校	現・安佐郡可部町
三入分院	200	国民学校	現・安佐郡可部町
大林分院	200	国民学校	現・安佐郡可部町
飯室分院	100	国民学校	現・安佐郡可部町
鈴張分院	100	国民学校	現・安佐郡可部町
筒賀分院	100	公民館、隔離病舎	山県郡筒賀村
戸河内分院	100	普通旅館	山県郡戸河内町
庄原分院	100	国民学校	現・庄原市本町
委 託	広島赤十字病院	250	広島市千田町
	庄原赤十字病院	100	庄原市庄原町
計	5,247		

(註) 賀茂郡西条町の傷痍軍人療養所(現・国立広島療養所)は、除役軍人患者の医療施設であって、広島陸軍病院の管轄ではなく別途(第五節)に記述する。

(二) 広島第二陸軍病院

本院	750	旧本院	広島市基町
----	-----	-----	-------

三滝分院	650		広島市打越町
三次分院	220	県立三次中学校	三次市南畑敷町
東城分院	30	県立東城高等女学校	比婆郡東城町
向原分院	300	国民学校	高田郡向原町
小串分院	200		現・山口県豊浦町
計	2,150		

(三) 大野陸軍病院

本院	500		現・佐伯郡大野町
----	-----	--	----------

総計	7,897		
----	-------	--	--

備考

(一) 右の三か所の陸軍病院のうち原子爆弾によって被災したのは、広島第一陸軍病院本院と江波分院、及び広島第二陸軍病院本院・同三滝分院、ならびに広島赤十字病院に入院中の患者合計二、〇〇〇余人であった。

(二) 第一陸軍病院第一分院の患者は、被爆直前の七月三十日に可部地区の国民学校数校に全患者を疎開していた。また、江波分院の患者も山陰地方の大田・玉造各分院などに同年五月ごろに疎開して、軽症の防空要員患者五〇人だけが残留していた。

(三) 第一陸軍病院高水分院(分院長・松原泰軍医中尉以下職員四三人)は、私立高水中学校(現・山陽高等電波学校)と高水国民学校の校舎半数、および村立避病舎を病室として、昭和二十年八月三日、開設準備を完了し、被爆前日の五日夕方、陸軍病院最後の疎開患者約四〇〇人を收容した。

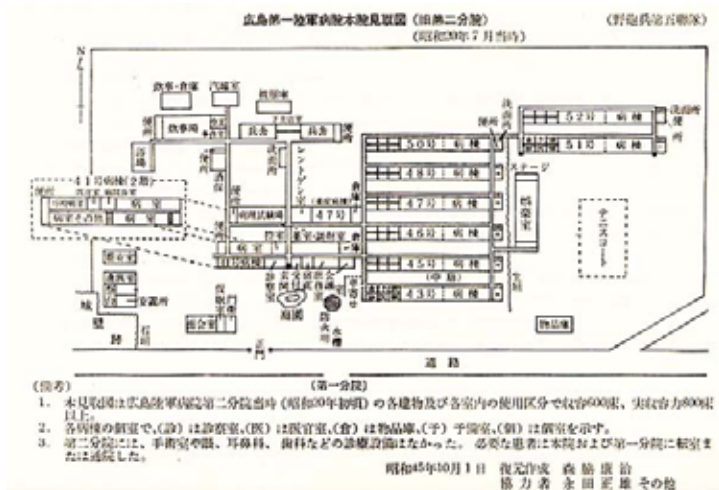
(四) 県立徳山高等女学校に、第一陸軍病院榑ヶ浜分院(分院長・吉田一軍医少佐)が、昭和十九年十一月に開設され、陸軍船舶部隊の患者約一五〇人を收容していたが、昭和二十年七月二十五日の空襲により、学校が全焼(患者五人死亡)したので、ただちに近くの花岡の末武上に新設途上の第一陸軍病院花岡分院に全患者を收容した。なお、榑ヶ浜分院災害時の分院長堀江重雄軍医中佐が花岡分院長に就任したが、広島被爆の直後、現地救援に駆けつけたので、庶務科長浅山吾三軍医大尉が後任分院長に就任した。

各病棟見取図

なお、被爆前(疎開前)の第一陸軍病院本院・同第一分院・同江波分院、及び第二陸軍病院本院・同三滝分院の各病棟見取図は、次表のとおりである。

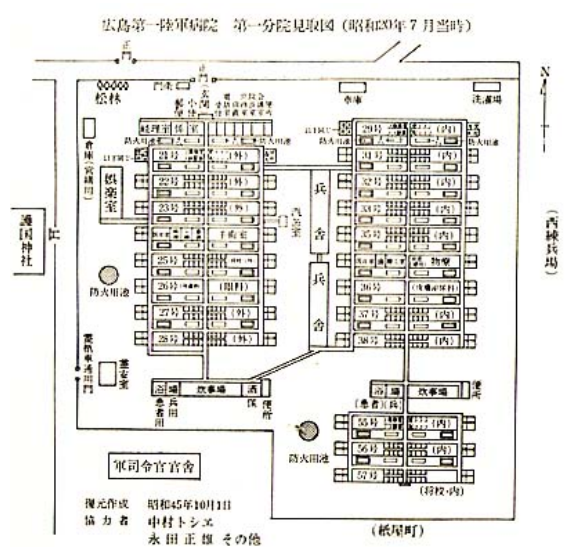
広島第一陸軍病院本院見取図(旧第二分院)

(昭和20年7月当時)



広島第一陸軍病院第一分院見取図

(昭和20年7月当時)



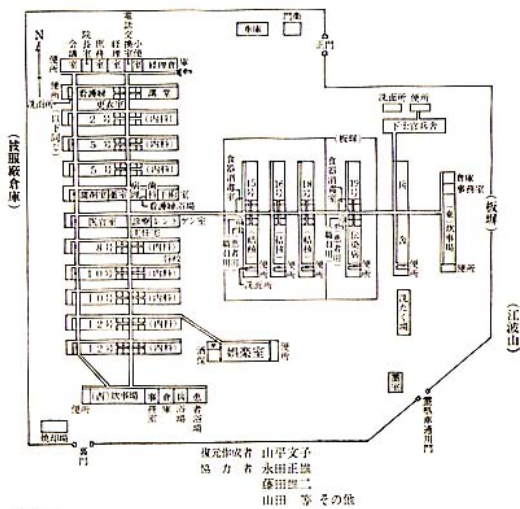
- (備考)
1. 平家、トタン屋根の仮建築で、患者収容力は1,300床(ベッド)となっていたが、軽・重症患者をあわせて、当時2,000人以上を收容していた。
 2. 各病棟(室)番号()内は、内科、外科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚泌尿器科、将校の各患者の收容区分である。
 3. 各診療病棟の(病理)は病理試験室、(線)はレントゲン室、(薬・調)は薬剤科事務室と調剤室、(術)は外科診療室、(物療)は物理療法室、(創)は創傷室、(事)は事務室、(看)は看護婦宿直室、(更)は更衣室、(配)は配膳室、(服)は被服庫、(物庫)は物品庫、(二)は重症患者收容室(干)はポスト設置室である。

広島第一陸軍病院江波分院見取図

(昭和20年2月当時)

(編者)

広島第一陸軍病院江波分院見取図(昭和20年2月当時)

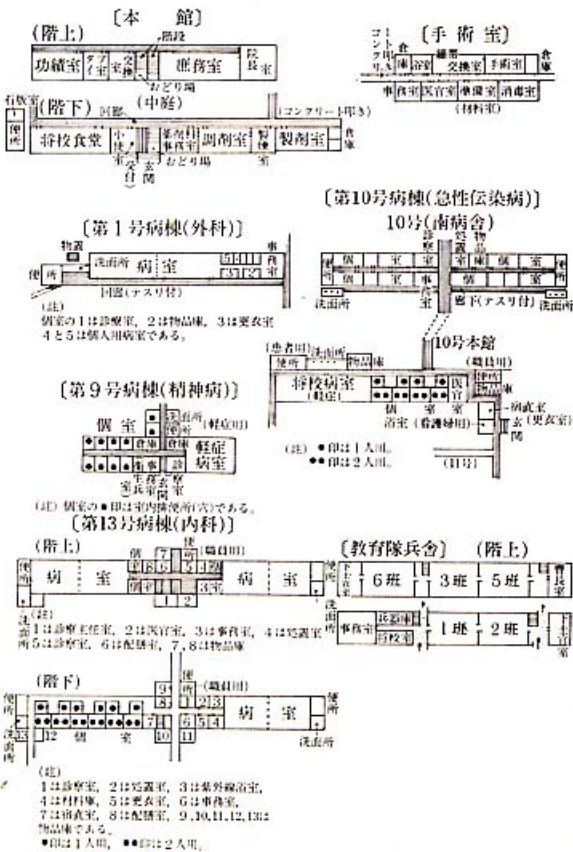


(備考)

1. 平家、仮建築、収容力800床、(其収容力1,000床以上)
2. 各建物の数字は病棟(室)番号で、また、病棟は病理試験室、歯科は歯科診療室である。
3. 各病棟の()内は患者の収容区分である。
4. 各病棟の個室は医官室、診療室、事務室、配膳室、看護婦宿直室、更衣室、物品庫、被服庫、重使用個人病室などに使われた。

広島第二陸軍病院本院(旧本院)の各室説明図

広島第二陸軍病院本院(旧本院)の各室説明図



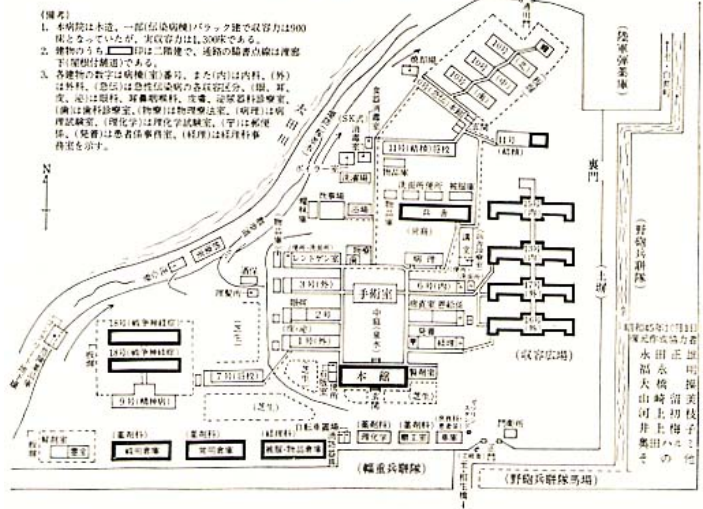
惨禍

原子爆弾の炸裂下、爆心地から南西約三、三キロメートル離れていた第一陸軍病院江波分院のみが被害をまぬがられただけで、他の陸軍病院本院・分院はすべて倒壊・焼失し、多大の犠牲者をだした。ただ、爆心地から北西約三キロメートルへだたっていた第二陸軍病院三滝分院は全病棟が倒壊したが、職員や患者の活動によって火災から免れた。

広島第二陸軍病院本院見取図(旧本院)

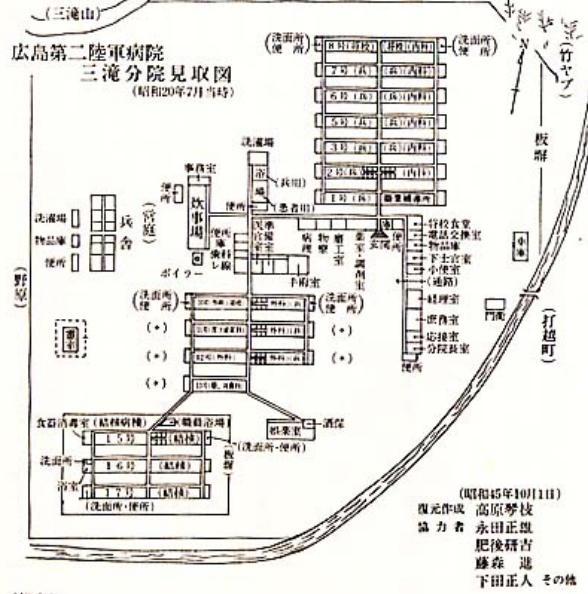
(昭和20年初頭)

広島第二陸軍病院本院見取図(旧本院)(昭和20年初頭)



- (備考)
1. 本病院は木造、一部(石造)煉瓦のタテ建で収容力は900床となっていたが、実収容力は300床である。
 2. 建物のうち、()内は二階建て、通路の幅は廊下(廊下)の幅である。
 3. 各建物の数字は病棟(室)番号、また(内)は内科、(外)は外科、(急)は急性伝染病の収容区分、(脚)は脚、(産)は産科、(小児)は小児科、(皮膚)は皮膚科、(泌尿)は泌尿科、(眼科)は眼科、(耳鼻)は耳鼻科、(歯科)は歯科、(物理)は物理療法室、(病理)は病理試験室、(化学)は化学療法室、(生)は生化学療法室、(薬)は薬学療法室、(理)は理学療法室を示す。

広島第二陸軍病院三滝分院見取図(昭和20年7月当時)



(備考)

1. 平屋建、仮建築、収容力は陸軍第100号(昭和12年陸軍次官通達)で、1,100床(ベッド)となっていたが、1,500床以上の実収容力があつた。
2. 各病棟の数字は、病棟(室)番号で()内は患者の収容区分を示す。
3. (歯科)は歯科診療室、(レント)はレントゲン室、(病理)は病理試験室、(物理)は物理療法室である。
4. 各病棟の中央部に診療室、処置室、事務室、更衣室、宿直室、配膳室、被服庫、物品庫、個人病室などの個室があつた。

また、爆心地近くの第一陸軍病院第一分院は、瞬時に倒壊全焼したが、入院患者をはじめ、職員全員と医療器材・薬品・糧秣・寝具・炊事具など一切を、前記のとおり可部地区へ疎開していたため、危うく被害を免れた。

もっとも惨状をきわめたのは、第一陸軍病院の本院で、「全病棟が、棟から一刀両断された形で、瞬間壊滅、たちまち炎上、灰燼に帰した(第一陸軍病院本院教育隊付加納寿人衛生曹長の目撃談)」という。その焼跡には、建物の大きな土台が杵状に残っているだけで、各室の区画の中には、堆積した屋根瓦のあいだに多数の白骨が散乱していたと言われる。このような中にも、辛うじて脱出した者も幾人かいたが、戸坂分院その他に収容されたあと、あるいは帰郷後に、ほとんど死亡した。病棟の倒壊を目撃した加納衛生曹長も数日後に死亡した。

第二陸軍病院の本院も、炊事場の煙突一本を残して、全病棟が倒壊し、建物の下敷きから脱出した若干の職員が患者と同僚を救出中、各所から出火したので、一同消火にあたったが、力およばず間もなく全焼した。ここでも多数の患者と職員が、圧死または焼死したほか、脱出した患者・職員も、その大半が数日のうちに、あるいは帰郷後に死亡した。特に教育隊は院庭に整列中に被爆し、ほとんどが無残な死を遂げた。

また、三篠橋東詰めの看護婦生徒教育隊の兵舎二棟も全壊し、建物の下敷きから脱出した生徒たちの必死の消火活動にもかかわらず、午後二時過ぎ遂に全焼した。

入院患者の被害状況

入院患者（広島赤十字病院委託患者を除く）の被害状況は、つぎのとおりである。

区別	被害者数(人)	備考
即死者	550	(一)即死者のほとんどは、第一及び第二両陸軍病院(本院)の患者で、ほかに、第二陸軍病院三滝分院に一人即死者があった。 (二)重軽傷者のうち重傷者四〇〇余名は、被爆直後に死亡した。
重・軽傷者	900	
行方不明	0	
計	1,450	

職員の被害状況

陸軍病院職員の被害状況は、つぎのとおりである。

(イ) 死亡者数 七三八人(内訳は次表のとおり)

区分	第一陸軍病院(人)	第二陸軍病院(人)
軍人	219	146
看護婦	118	63
軍属	144	48
計	481	257
合計		738

(広島陸軍病院原爆慰霊会作成の原爆死没者名簿による)

(ロ) 重軽傷者数 約二〇〇人(ただし、重軽傷者のうち、後日死亡した者は死亡者の数に入れた。)

二、救護活動状況

救護活動

被爆直後、ただちに救護活動に入ったのは、爆心地から約三・五キロメートル離れていて、被害も少なかった第一陸軍病院江波分院と、市街地と山でさえぎられた第一陸軍病院戸坂分院(爆心地から約五・一キロメートル)の二か所であった。

また、第二陸軍病院の本院(爆心地から約八〇〇メートル)と、三滝分院(爆心地から約二キロメートル)の被爆生存職員が、現地に踏みとどまって臨時救護所を開設し、軍人をはじめ一般市民の負傷者の治療にあたった。

さらに、第一、第二陸軍病院の各地疎開分院から救護班一二個所が、六日当日から十日ごろまでに出勤し、第一陸軍病院戸坂分院および第二陸軍病院本院の跡、あるいは宇品の陸軍船舶練習部(大和紡績工場施設)において、軍・民の別なく不眠不休の治療活動を展開した。

このほか、佐伯郡の大野陸軍病院が、被爆直後に、救護班を出勤して、負傷者三〇〇余人の応急処置を行ない、同本院と大野西国民学校(臨時救護所)に負傷者一、四〇〇余人を収容、応急治療にあたった。

太田川沿いの可部街道を、倒れそうになりながら歩いて行った被爆者、あるいは軍のトラックで運ばれた負傷者は、可部地区に散在する第一陸軍病院の各分院に約五、二五〇人収容された。また、芸備線の汽車によって運ばれた被爆者は、第二陸軍病院の三田東分院(収容者約四〇〇人)・井原分院(収容者約四五〇人)・市川分院(収容者約一五〇人)・秋越分院(収容者約二〇〇人)・向原分院(収容者一、〇〇〇人)・三次分院(収容者約七六〇人)・東城分院(収容者約三〇〇人)・および第一陸軍病院庄原分院(収容者約五〇〇人)などにそれぞれ収容された。

そのほか、安佐郡の安国民学校と久地国民学校に約一、二〇〇人を收容し、陸軍船舶工兵隊の機動舟艇で運ばれた第一陸軍病院柳井分院收容の六〇余人があり、また、山陰の第一陸軍病院大田分院と玉造分院および山口県下松市の第一陸軍病院花岡分院に転送した一、〇〇〇余人があり、これに第二陸軍病院の本院臨時救護所・東城分院救護班・三滝分院・五日市分院に收容した二、八五〇余人を加えると收容負傷者は合計約四五、六三三人(内訳は次表)に達する。なお、各分院や救護所における收容人員数は、当時の陸軍病院関係職員、及び救護所となった学校職員の記憶や、各学校沿革誌、関係町村の記録資料などに基づいて判定したものである。

これら陸軍病院の救護活動にあたり、(一) 応急食の炊出し、(二) 看護の応援、(三) 死体処理、(四) 民家收容、(五) 物資の提供と調達など、各地の婦人会・消防団・警防団・一般民家・各学校および町村当局などの積極的な協力があつたことは言うまでもない。

被爆負傷者の收容状況

広島陸軍病院として扱った被爆負傷者の收容状況は、次のとおりである。

(一) 広島第一陸軍病院関係

收容所名	收容人員(人)	收容所名	收容人員(人)
戸坂分院	13,000	大林分院	300
江波分院	10,500	飯室分院	200
宇品分院	6,00	柳井分院	60
可部分院	2,300	鈴張分院	150
龜山分院	2,000	花岡分院	250
庄原分院	300	大田分院	600
山内西国民学校	200	玉造分院	195
久地国民学校	200	高水分院	4
安国民学校	1,000	計	37,559
三入分院	300		

(二) 広島第二陸軍病院関係

收容所名	收容人員(人)	收容所名	收容人員(人)
三次分院	530	向原国民学校	1,000
三次国民学校	200	井原国民学校	450
三次高等女学校	30	秋越国民学校	200
東城分院	300	三田東国民学校	400
市川国民学校	150	本院臨時救護所	600
三滝分院	700	五日市分院	250
東城分院救護班	1,300	計	6,110

(三) 大野陸軍病院関係

收容所名	收容人員(人)	收容所名	收容人員(人)
大野陸軍病院	400	救護班臨時救護所	300
大野西国民学校	1,264	計	1,964

備考

(一) 第一、第二陸軍病院所属の隔地分院(救護所)の收容人員は、主として戸坂分院から転送された負傷者である。

(二) 戸坂分院の收容人員一三、〇〇〇人は、隔地分院(民間救護所を含む)に汽車で輸送した約六、五〇〇人と、応急治療ののち更に安佐郡深川方面に避難した約二、〇〇〇人を含む。

(三) 江波分院の收容人員一〇、五〇〇人は、分院收容の延四、五〇〇余人と、江波国民学校および江波町の民家約二〇〇戸に收容した延三、〇〇〇余人に、さらに応急治療を受けたのち、内海の島々に船で運ばれた約三、〇〇〇人の合計である。

(四) 玉造分院收容の一九五人は、可部分院收容の一〇〇人と大田分院收容の九五人が転送されたものである。

(五) 高水分院の收容者四人は、民家に往診治療した市民二人と、八月七日昼ごろ、徒歩で来た歩兵科将校(氏名など不詳)と官吏風の負傷者二人で、将校は間もなく死亡し、他の一人は、治療を受けて立ち去った。

(六) 三滝分院の七〇〇人は、軍人入院患者六五〇人と一般市民五〇人である。

(七) 東城分院救護班の一、三〇〇人は、八月十日から三日間、東練兵場方面に出動して救護した市民・軍人負傷者の延人員である。

(八) 大野陸軍病院の收容者四〇〇人は、外来の被爆負傷者約二五〇人を含む。

なお、第一陸軍病院と大野陸軍病院の負傷者收容(転送)経路、ならびに第二陸軍病院関係を含む收容分院(救護所)の開設位置及び各地分院などから出動した医療救援隊の行動状況は、別図のとおりであるが、近県各地の赤十字

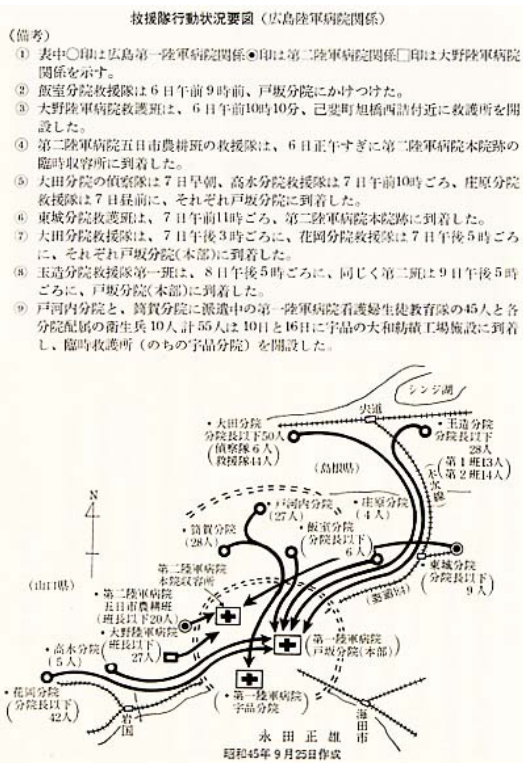
病院(当時・陸軍病院)からも続々と応援救護班が到着して、混乱をきわめる負傷者の治療に大きな役割をはたした。

原爆傷者の収容(転送)状況

原爆傷者収容分院(救護所)位置要図



救護隊行動状況要図(広島陸軍病院関係)



広島第一陸軍病院第一分院の可部地区学校群への緊急疎開を機に、別図のような「防空救護計画」(永田正雄衛生中尉立案進言)が定められた。

この計画において、広島市街地からみれば山の裏側にあたり、鉄道の便も良い戸坂分院を「第一救護所」とし、可部地区疎開分院群とその奥地の各分院を「第一予備病院」に、更に、芸備線沿線や山陰、山口方面の各分院を「第二予備病院」とした。すなわち、敵機の空襲による市内の本院や分院、及び各部隊の戦傷兵(者)は、まず戸坂分院に收容して救急処置をおこない、負傷者発生状況に応じて、逐次これらの予備病院に輸送(後送)するという構想であった。このため、戸坂分院に近接する裏山のふもとに巨大な横穴を掘り、これを「地下手術室」とする計画が進められた。もちろん、野戦病院的なもので完全設備の手術室は、可部地区の亀山分院に設備すること、また、諸物資の疎開も予定を変更し、この「防空救護計画」にしたがい、米麦・缶詰類から粉末鶏卵・クラフトチーズなどの特別食品やタクアン・味噌・醤油・炊事具・薪炭などは、戸坂の民家に分散疎開された。また、薬品・衛生材料などは、可部地区分院群の診療本部があった亀山分院近くの農業会倉庫に大量疎開された。

八月六日、原子爆弾の炸裂にあたり、病院長元吉慶四郎軍医少将は、大阪における中部軍司令部召集の団体長会議に出席中で被爆をまぬがれ、また、河野通之薬剤大佐・芝光太郎主計大佐などの首脳をはじめ、応急物資の疎開を担当した各主任将校も健在であったから、本土要撃作戦に備えての、総兵姑病院の「戦傷兵収療計画」でもあった「防空救護計画」の諸対策が、はからずも「原子爆弾被爆負傷者救護計画」として活用された。すなわち市民・軍人など一三、〇〇〇人に及ぶ被爆者の收容と医療処置、輸送と一連の救護活動に大きな役割を果たしたのであった。

また、病院本部の「防空救護計画」(兵站病院収療計画)の線に沿い、第一陸軍病院教育隊付米田真治衛生少佐の立案進言によって、本土要撃作戦にともなう広島一帯の戦場化を想定し、野戦病院的施設の試作として、戸坂駅の裏山の林間に、軒高二メートル・奥行三メートル・幅八〜一〇メートルの掘立小屋式応急病棟が五棟、段々式に建てられていた。この病棟はなお未完成であったが、被爆者の收容に役立ち、重症者一〇〇余人を收容、治療がおこなわれた。



第一陸軍病院「防空救護計画」要図

(イ) 戸坂分院

戸坂分院の状況

災害時の第一救護所・戸坂[へさか]分院では、原子爆弾の炸裂直後、分院長藤本敦軍医大尉指揮下の軍医(見習士官を含む)四人・衛生下士官一人・衛生兵五人・看護婦長一人・看護婦二〇人計三十一人の職員は、ただちに校庭に学童机数個をならべ、処置材料を置いて待機した。まもなく安佐郡の飯室分院から藤高茂明軍医大尉を長とする軍医一人・下士官兵数人の救援隊が、急ぎ駆けつけて救護態勢を更に強化した。

初めは三々五々と、火傷・外傷の軽傷者が来たが、刻々その数が増加し、ついには、重傷者が長蛇の列を作って村道に溢れた。ほとんど全員が半裸・全裸の焼けただれた無残な姿であった。これら負傷者は、分院にたどりつくと次々に崩れるように倒れ、いちように水を求めた。

こうしてまたたくまに、校舎・校庭といわず付近一帯の島まで、負傷者や死者で埋まり、足の踏み場もないありさまとなった。

準備した医薬品をたちまち費消し、治療活動が危機に直面したため、薬剤科長の河野通之大佐の命により、古前秀松薬剤大尉がトラックで可部の亀山疎開倉庫から、午前十時過ぎに医療資材を送りこんだ。続いて基町三篠橋東

詰めの看護婦生徒教育隊からの避難第一群約三〇人の生徒たちが到着した。

この生徒たちは、倒壊兵舎から脱出した一〇〇余人のうちの第一群で、太田川の長寿園堤防ぞいに、途中、多くの負傷者を救護、誘導しつつ辿りついたのであったが、“私たちの本分はこのときに！”と、自己の負傷はかえりみず救護活動に挺身し、多くの人々に深い感銘を与えた。

しかばねも苦しむ人もみとりめも

山の夜つゆに打たれつつあり

永田正雄

本院付の永田正雄衛生中尉は、五日夜の防空日直を終え、六日未明に大芝町の自宅に帰って遅い朝食をとっているときに被爆した。ただちに軍装を整え、猛火をくぐって本院へ向った。途中、倒壊家屋の中から五人ほど救出し、ようやく三篠橋に出た。そこから長寿園・工兵橋を経て戸坂分院に到着したが、午前九時前、工兵橋の北詰付近から、炎上する市街を見ているとき、背後から「永田中尉！」と呼びかけられた。

振りむくと、無残な姿の庶務科長鈴木時定軍医中佐が、軍刀を杖にして佇っていた。「やられた。残念だ！元吉院長閣下がお帰りまで、この鈴木中佐が指揮をとる。”命令！各分院は、三分の一の人員・材料を残し、戸坂分院救護に至急来院すべし！”永田頼む！」と、命令を口達した。そしてその場に腰をおろし、ややして横になった。折よく市街進入路の偵察から帰って来た数人の兵がそばにいたので、永田中尉は、命令を口達し、各疎開分院あて駆け足出発せしめた。

鈴木中佐は出勤途中、白島の電車終点付近で被爆し、重傷であったが、かねての計画どおり、戸坂分院での救護指揮をとるため、牛田堤防沿いに工兵橋まで辿りつき、ついに力つきて不帰の客となった。永田中尉に与えた命令が、中佐の最後の言葉であった。

永田中尉は、戸坂分院で藤高大尉の治療を受けたあと、ふたたび工兵橋に引返し、鎮火を待って、第一陸軍病院本院跡・師団司令部跡、及びもと勤務していた輜重隊跡・第二陸軍病院本院跡・看護婦生徒教育隊跡などを視察し、収容隊(下士官候補者)の派遣を計画した。

炎上する市中心部から戸坂分院へと避難して来る負傷者の列は、長い牛田堤防から太田川に沿って、蜓々約五キロメートルの県道を間断なく、昼も夜も続いた。

着衣はボロボロに引裂かれ、みんなハダシである。頭髮も焦げ、汚れてあらわな体は焼けただれており、顔面は丸く駆れあがり、両眼は横一線に、みな同じ人相の男女のみさかいかもつかない姿で、トボトボと歩いた。

工兵橋付近の広い草原には、重傷者数百人が倒れており、桜並木の長寿園堤防から三篠橋東詰めに至る一帯は行き倒れた重傷者が死体とならんで横たわっていたが、中に第二陸軍病院本院から脱出した白衣の患者や看護婦三〇数人がいたし、看護婦生徒教育隊兵舎から脱出した重傷の生徒たち二〇数人も避難していた。

さらに、開墾作業などで戸坂にいた衛生下士官候補者数十人は、火災の鎮まるのをまち、急造担架を携行して長寿園から第一陸軍病院本院跡に進出し、防空壕内に避難していた加納寿人衛生曹長・戸田盛夫衛生軍曹ほか衛生兵一〇数人を、戸坂分院の林間病棟に収容した。また、大橋操衛生曹長の指揮する兵数人の一隊は、川舟で工兵橋付近から戸坂の渡舟場まで約四キロメートルの距離を、一日四往復で、六日から八日までに重傷者一〇〇余人を、戸坂分院に水上輸送した。なお、この一隊は、救急材料を亀山倉庫から戸坂へのトラック輸送にも任じ、更に、トラックで一般負傷者の収容にあたる一方、長寿園一帯の陸軍病院関係者を搜索、収容した。

戸坂分院の負傷者は、(イ)太田川沿いの県道筋から約六、〇〇〇人、(ロ)東練兵場及び尾長・矢賀方面から中山峠を越えて来た者約三、五〇〇人、(ハ)大芝・長東方面から渡舟で川をわたり戸坂へ到着した者約一、五〇〇人、(ニ)山口県柳井から来た陸軍船舶工兵隊の機動舟艇(五〇人乗)数隻の反復輸送で太田川から戸坂へ陸揚げされた者約二、〇〇〇人など、計一三、〇〇〇人が収容された。

六日、殺到する負傷者の収容にあたり、戸坂分院長藤本敦軍医大尉が医療活動の総指揮にあたった。この日、米田真治衛生少佐の指揮する下士官兵二〇数人によって、戸坂駅の裏山の林間に、平家建五棟の臨時救護所(林間病棟と呼ぶ)が開設され、重傷者一〇〇余人を収容し、軍医一人・見習士官二人・下士官兵一〇人・看護婦長、看護婦一〇余人が診療看護にあたった。なお、収容患者のうちに、裏の黒帯患者(急性伝染病患者)数人が第二陸軍病院本院から脱出して来ていたので、戸坂分院裏の山小屋に隔離収容し、消毒処置がおこなわれた。

このように徒歩で辿りついた負傷者、あるいはトラックや担架、大八車、または川舟・機動舟艇などによって収容される者は増加する一方で、負傷者の大半は、応急治療のあと、戸坂の七部落三〇〇余戸の民家に次々と収容さ

れたが、なお収容しきれず、のちには主として芸備線の汽車で、各地の第一、第二陸軍病院の分院などに直接輸送した。

七日になると、第一陸軍病院所属の各地分院から、救援隊がつぎつぎに戸坂に到着し、救護態勢が強化された。

この日早朝、山陰の大田分院から日野一男衛生准尉以下六人(偵察隊)が到着した。ついで山口県の高水分院の下士官兵五人が、午前十時ごろに到着。昼前に庄原分院の看護婦四人が、さらに午後三時ごろ、大田分院から分院長熊谷雄二軍医大尉指揮の軍医三人・主計将校一人・下士官兵四〇人、計四四人の救援隊が到着した。なお、この一隊は、九日に負傷者約三〇〇人を汽車で護送し、大田に帰院した。

ついでこの日の午後五時ごろ、下松の花岡分院から分院長堀江重雄軍医中佐指揮の下士官兵一五人・看護婦(寺迫久子・高畦悦子)二人・看護婦生徒二四人、計四二人が到着した。この看護婦と看護婦生徒は、第一陸軍病院看護婦生徒教育隊から花岡分院に派遣中の者であったが、十日に下士官兵一五人と共に負傷者約二五〇人を汽車で花岡分院に護送した。なお、堀江軍医中佐は戸坂にとどまり、元吉病院長の帰院まで、病院長職を代行した。また、米田衛生少佐が庶務科長に任じられ、左眼負傷の山崎留美衛生少尉及び日野衛生准尉が、その職を補佐した。こうして、病院管理体制は一応確立された。なお、広島警備担任船舶司令部・広島戦災救護本部への情報、ならびに命令受領は肥田軍医中尉が担当した。

その間、七日早朝、戸坂分院の校庭にムシロを敷き、さらに携帯天幕を張りつめて、炎天下の負傷者を守った。なお、肥田軍医中尉・林秋子婦長・看護婦生徒数人は、八日から八月末まで戸坂駅付近の民家に収容中の市民重傷者の巡回診療に従事した。また、藤本軍医大尉以下の軍医三人も交替で、看護婦数人を伴い、八月末まで分院付近の民家に収容中の負傷者の巡回診療を行なった。

元吉院長の帰院

八日午後二時ごろ、元吉病院長が出張先から帰院し、ただちに各幹部から状況報告を受けた。元吉病院長は、「軍民負傷者の連日殺到の現状にかんがみ、収容力確保のため、現在の収容者を各地分院に、至急疎開すべし」と、下命するとともに、「広島周辺の各所に、被爆負傷者多数集結しあり」との軍情報により、可部の奥地一帯の各学校(総兵站病院開設計画の学校)に臨時分院の開設を命じた。

負傷者の各地輸送は、六日、七日も行なわれていたが、八日から本格的に実施されることになった。この作業は、米田衛生少佐が担当し、下士官兵二〇数人を指揮して、戸坂駅(当時無人駅)から芸備線沿線および山陰・山口方面の第一、第二陸軍病院所属の各地分院など一〇数か所に約六、五〇〇人(各地民間救護所収容の約二、〇〇〇人を含む)を汽車で輸送した。遠い部落から駅までの担架輸送は困難をきわめたが、多数の村民の協力によって計画どおりに進められていった。

なお、臨時分院開設は、永田衛生中尉が担当し、下士官兵一〇余人を指揮して、奥地へ急行、本土要撃作戦の総兵站病院開設計画の線に沿って、久地・水内両国民学校の手配を終り、安野国民学校と安野中学校に分院開設準備中、終戦の玉音放送を聴き、作業を取りやめて戸坂に帰院した。

これより前、八日午後五時ごろ、第一陸軍病院の玉造分院救援隊第一班、班長田野俊彦軍医少尉以下、軍医一人・衛生将校(山田等衛生少尉)一人・下士官兵一人、計一三人が戸坂に到着、ついで九日午後五時ごろ、玉造分院長飯塚忠治軍医大尉指揮の救援隊第二班、班長広藤英二軍医中尉以下、軍医二人・主計将校(曾田清三主計中尉)一人・下士官兵一人、計一五人が到着した。ちなみに、前記の第一班は、第二班の到着後(九日夕)、ただちに第一陸軍病院可部分院に派遣されたが、翌十日午後二時、その主力はさらに第一陸軍病院庄原分院の山内病棟に急遽派遣された。また、前記の第二班も十五日早朝に戸坂を出発、可部分院に収容の負傷者約一〇〇人を汽車で護送し、玉造に帰院した。

治療方針樹立

その間、飯塚軍医大尉は、元吉病院長の麾下にあって、原因不明の負傷者の病理究明と治療の根本対策樹立に参画した。

飯塚軍医大尉は、被爆者の症状にかんがみ、血液検査に重点を指向し、病理担当の下士官を動員して末梢血液ならびに骨髓血液像検査を行なった結果、被爆負傷者に汎骨髄液様血液像の特異なること、脱水症状の顕著なるを確認し、本症が、強烈なレントゲン様たいしラジウム光線様の光線を発生する新型爆弾による疑い濃厚と考えた。その治療対策としては、移動を禁じ・安静・栄養・補液・少量頻回の輸血・各種ビタミン、及び肝、副腎などの臓器製剤・各種解毒剤・ミノファーゲンCなどのグリチルリチン製剤・広島陸軍病院栄養失調研究班で開発試作中のア

ミノ酸製剤の注射などが適当であると答申した。

戸坂分院(本部)における負傷者の医療は、前記のとおり、「治療方針」が早期に樹立されたが・混乱下、治療資料の払底、入手不能と、負傷者のおびただしい数のため、火傷・外傷の局所処置(赤チンキ・食用油・軟膏塗布・繃帯)と、重症者にリンゲル注射・ビタミン注射のほかは、何もできなかったのが実情である。

給食

給食関係では、被爆前に米麦その他の給食物資が、芝光太郎主計大佐の計画で、大量に戸坂地区に疎開されていたが、六日当日昼食と夕食の炊出しの暇もなかった。ようやく七日昼になって給食を開始した。六日午後十時ごろと、七日朝の炊出しは、地元婦人会の奉仕によって、一人当り二個ずつにぎり飯が配給された。

炊事場は、国民学校の井戸近くに野戦釜(二斗炊き)五個を据え、田原保平主計中尉以下一〇数人の下士官兵と数人の看護婦生徒が従事した。のちには、各地分院救援隊の衛生兵と看護婦など一〇数人がこれを応援した。主食は玄米のにぎり飯二個ずつ、それに梅ぼし一個、コンブ佃煮など少量の副食がつけられた。なお、被服寝具類・事務用品などは、芝主計大佐が八日深夜、祇園町東原の浄玄寺に集積してあるのを確認し、祇園町役場増井駒吉助役と職員数人の協力によって、九日朝、戸坂分院に運びこんだ。

死体処理

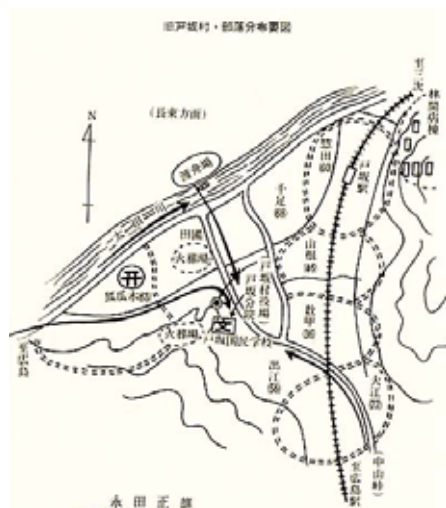
戸坂分院に固定収容した約四、五〇〇人(各地へ汽笛輸送の約六、五〇〇人と処置後退散した約二、〇〇〇人を除く)の負傷者のうち、死亡者は約一、三〇〇人(21%)で、分院の裏山と分院西北の田圃に火葬場を設け、大量の薪やワラを燃料に使い、六日から約一週間、大半は毎日二〇数人の地元民によって茶毘にふされた。また、分院職員の下士官兵一〇数人も死体焼却にあたった。これには丸太材を縦横に約五〇センチメートルの高さに積み重ね、その上に死体を置いて焼いたが、焼け残りがあるので、トタンでそれを覆い、残火の余熱で完全に焼却する方法をとった。これは、米田衛生少佐が、かつて野戦病院において、燃料節約上考案した方法であった。火葬場のある山からは連日、死体を焼く煙が立ち昇り、戸坂地区の民家保有のワラが全部焼きつくされたと言われる。

また、負傷者や死亡者の運搬にあたって、荒ムシロに青竹を轆(ながえ)にした応急担架が多数作られたが、そのため分院付近の竹やぶがみんな裸になった。

戸坂において救護にあたった病院関係職員は、軍医(見習士官を含む)一八人・薬剤将校三人・主計将校五人・衛生将校六人・下士官兵一三〇余人・看護婦(婦長及び生徒を含む)八〇余人・軍属一〇人、計二五〇余人である。このうち約八割が各疎開分院からの救援者、または戸坂地区にいた者で、その他はほとんど自分も負傷しながらも救護に駆けつけた者であって、戸坂における初期の活動は、主として、これら負傷の将兵と看護婦によって行なわれた。全員が食わず眠らず、露天で救護を行ない、伝統ある広島陸軍病院の最後を飾った。

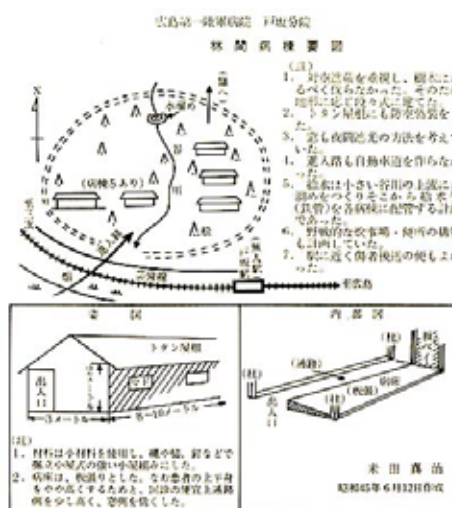
この戸坂分院は、その後、収容者の減少と、各地分院の統轄のため、可部分院施設に八月二十日移転し、ここに広島第一陸軍病院本部が設置された。可部に移転後は、藤本敦軍医大尉以下が戸坂分院と林間病棟に残り、九月中旬ごろまで、一般負傷者約三〇人、軍人軍属負傷者約五〇人、および民家収容の負傷者約五〇人の治療を続けた。

旧戸坂村・部落分布図



永田正雄
昭和45年6月1日作成
(備考) 1. 昭和40年11月1日現在の調査資料である。
2. 戸数約200・世帯数約98
3. 部落名の数字は世帯数である。(広島山陰府戸坂田原所長の提供資料)
(註) 一 原簿傷者収容経路(現駅)は当時無人駅。(現戸坂駅長資料)

広島第一陸軍病院戸坂分院林間病棟要図



(備考) 林間病棟は、本主要集作戦に際し第一陸軍病院本部が設置した「長島病院44棟計画(防空救護計画)」に因襲し建設された。即ち、(主)第一救護→(主)第一救護所→(主)野戦病院→(主)長島病院と戦時体制の一環としての試行施設であった。

(ロ) 可部地区分院群

可部地区分院の状況

可部地区分院群は「防空救護計画」の第一予備病院として計画されたものであったが、広島市の被爆により大混乱に陥った。負傷者の大群が、太田川西岸の可部街道を北へ北へと流れこみ、六日午前十一時ごろ、その第一陣が可部分院にたどりついた。ここに到着するまでの長束・祇園・安・古市・緑井・八木などの各国民学校や民家などに收容された被爆者も無数にいたが、なお、歩くことのできる者は、炎天下の長い街道を更に北上したのであった。

六日から約五日間に、可部付近の疎開分院に收容された軍人と一般市民負傷者は五、二五〇余人に達した。このうち二、三〇〇余人は可部分院へ、二、〇〇〇余人は亀山分院へ、その他の分院へは一五〇人ないし三〇〇人が收容された。このうち各分院とも收容者のほぼ半数、総計二、一四〇余人が死亡した。

これら分院には、すでに軍人疎開患者をそれぞれ二〇〇人程度收容していたから、被爆負傷者を收容しきれず、付近の寺院・神社・民家などを利用した。そして、地元婦人会の献身的な協力によって炊出しや看護応援がおこなわれた。

また、死亡者は消防団などによって処理された。

負傷者の処置は、戸坂分院と同様に火傷・外傷の応急治療がおこなわれ、医療品は第一陸軍病院の亀山疎開倉庫(担当・河野通之薬剤大佐)から補給された。

給食面では、当初はにぎり飯に梅干程度であったが、可部分院に病院本部設置後は、給食材料の交付を受け、重症者には粥食軟菜の患者食が供された。

可部地区收容者数

可部地区各分院に收容された負傷者の状況は、次のとおりである。

分院名	疎開患者收容数(人)	被爆者收容数(人)	被爆者死亡数(人)	摘要
可部分院	200	2,300	850(37%)	学校 800人 三寺院と民家 1,500人
亀山分院	200	2,000	800(40%)	学校 500人 寺院・神社 300人 民家 約1,200人
三入分院	200	300	150(50%)	
大林分院	200	300	160(53%)	
飯室文院	100	200	100(50%)	学校 150人 寺院 50人
鈴張分院	100	150	80(53%)	寺院 150人
計	1,000	5,250	2,140(41%)	

備考

(一) 安佐郡亀山地区には、当時約四、三〇〇人の負傷者が殺到したが、このうち約半数の二〇〇〇余人を亀山分院で応急処置し、重傷者や約五〇〇人を文院に收容し、その他は、寺院・寺社及び民家約八〇湖に收容された。なお、寺院・寺社に收容の重傷者三〇〇余人は、分院職員が往診した。

(二) 右表のほか、久地国民学校に、軍人軽傷者二〇〇余人を收容した。

(三) 安国民学校にも、軍人被爆者一五〇余人、及び市民被爆者一五〇余人、延一、〇〇〇人程度收容し、軍医一人・地方医一人・学校職員・村民が救護に従事した。

亀山分院にて 石井浜子 (当時・看護婦生徒・一八歳)

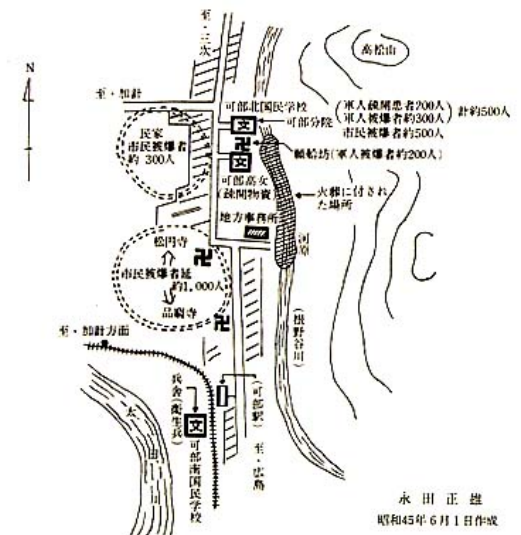
広島市が原子爆弾の攻撃を受けたとき、私たち看護婦生徒一個班二〇人は、広島第一陸軍病院筒賀分院において、胸部疾患の軍患者の看護にあたっていた。

八月六日、いつものように登庁して点呼を終え、八時十五分ごろ、私は病棟の外側周辺の掃除をしていた。そのとき、突然、

可部分院原爆傷者收容状況要図

可部分院原爆傷者收容状況要図

- (備考)
1. 可部国民学校北校舎には、軍人被爆者約300人、市民被爆者約500人、願船坊(寺)に軍人被爆者約200人、松円寺、品崎寺の二院には、市民被爆者約1,000人、民家に市民被爆者約300人、計約2,300人が收容された。
 2. 南校舎には、衛生下士官兵が起居していた。
 3. 可部国民学校北校舎の市民被爆者約500人は、応急治療を受けたあと、亀山地区へ避難した。



永田正雄
昭和45年6月1日作成

すさまじい閃光を感じた。ピカッと異様に光ったのに驚き、箒を投げすてて、病棟に駆けりこんだが、何の異変も起らなかった。しばらくして、ドカンという音響が聴え、かなりの爆風が感じられた。

外に出て、遠くの方を眺めると、モクモクと黒雲が湧き上がっていた。炊事のおばさんが、「あの辺は、佐伯郡ですかね。どうしたのでしょうか。」と私に言った。時がたつにつれ、黒雲は太陽をおおい、空一ぱいに広がり、夕がたのようにうす暗くなった。

病院から伝令が飛ぶ。あれこれするうち、広島に爆弾が落とされた。被爆した者が二、三人村に帰って来たという噂を聞く、しかし、なにぶんにも田舎で、電話もなく、広いので、広島の実情を知ろうにも、ヤレソラとはいかない。近所の警防団の一人が、状況偵察にオートバイで出て行った。

私たち看護婦生徒は、戸河内分院と合併して一個班を編成し、安佐郡亀山分院(亀山国民学校)へ出動し、六日夕方に到着した。

衛生兵がトラックで、次々と被爆負傷者を運んで来ると、一人一人を担架に移して、校舎に收容した。

教室は、一番室—将校病室・二、三番室—一般市民病室・五番室—兵隊病室に分けられ、一室につき五〇人以上の負傷者が、三列か四列に横たえられた。また、廊下にもずらりと毛布が敷かれた。

看護婦生徒の救護班が到着するまでは、すでに地元の国防婦人会が総出で看護にあたっておられたが、その専門の私たちでもたじろくような惨状であった。

私は婦長の命令で、五番室を受持つことになり、負傷者の住所・氏名・部隊名を聴いてメモを取ったが、そのうちにも重症者はつぎつぎ死んで行ったから、そのたびに事務所の方へ死亡時間と氏名を報告するとともに、リングル注射・ブドウ糖注射など栄養剤が行なわれ、一人でも多く生かさねばならぬという努力を続けた。

六日の夜は、教室の板の間に私たちが持参したシーツを敷いて、交替で仮眠をとったが、なかなか寝つかれず、また、眠っても眠りきることはできなかった。

私の受持ちの五番室に、陸軍病院一六号外科病棟勤務の佐録間看護婦が收容され、「お願いします」と、頼まれたが、数日して亡くなられた。また、頭髮が焼けて縮れあがった婦人が收容されたが、子宮出血がかなりあって、看護のいかにも無く死なれた。

負傷者は、高熱と口渇、脳症状があり、口々に「水をくれ、水をくれ」と言い続けたが、主治医の指示により、水を与えてはいけないと言われていて、水をさしひかえたが、中には、一人して立って、ヤカンの口飲みする人も多くあった。合併症の併発で、赤痢も流行し、私たちは隔離病舎へ交替で勤務したが、この頃、第二次原爆症が発生した。頭髮が脱げ、全身に溢血斑が生じ、白血球の増加もしくは減少、貧血、血色素低下などが見られ、還元剤を投与したが、体力の衰えは回復せず、コロッと死ぬるのであった。

私たち看護婦もまた、脱毛・鼻出血、その他自覚症状があらわれはじめたので、寄宿舎に帰って休養をとらねばならなかったが、如何に原子爆弾がこわいかということを体験させられたのである。

負傷者の転入転出はげしい亀山分院であったが、予備役の四〇歳ぐらいの二等兵の方は、両上肢その他を火傷し、自分で食事をすることもできない症状であったが、小さいムスビを作って食べやすくしてあげたり、精神的に励ましてあげたりしたかいがあったか、しばらくして自宅へ帰られた。後日、大変お世話になりました。元気になりましたという意味の礼状をいただいた。格別にその人だけを看護してあげたわけではないのに…と、私はうれしく思った。

ある日、予備役の軍医見習士官が多数收容された。全身の火傷で、その容貌もまったくわからないほどの重傷者ばかりであった。私は、住所・氏名・職名を一人ずつ記録し、治療看護にはげんだが、あいついで死なれた。

これらの死体は、衛生兵の引率で、赤十字救護班と私たちが協力して、担架で高い山の焼却場へ運んでいった。

そのうちに亀山分院も閉鎖されたので、看護婦生徒は、宇品の元大和紡績工場の陸軍病院に移り、また看護活動を続けたのである。

(ハ) 可部第一陸軍病院本部

可部第一陸軍病院本部設置

八月二十日、広島第一陸軍病院本部が、戸坂[戸坂]から可部[かべ]へ移転した。戸坂から各地分院への負傷者輸送が一応終了し、また、民家に收容の市民被爆者も親類縁故などの引取りや、単独帰郷などで減少して、ようやく平静に復し、さらに広島市周辺の負傷者も陸軍船舶部隊(暁部隊)や呉の海軍鎮守府の救援隊、あるいは民間の救援

隊によって処理されたため、各地分院の統轄・診療指導・事務処理などの便宜を考慮して戸坂分院(本部)を閉鎖し、若干の軍人患者をとめない可部に移転したのであった。

このころ可部には、初療者約二、三〇〇人のうち約五〇〇人は処置後奥地へ避難していき、残りの一、八〇〇余人の軍人・市民被爆者が収容されていた。軍人被爆者は可部分院に約三〇〇人、願船坊に約二〇〇人がおり、市民被爆者約一、三〇〇人は、松円寺(約五〇〇人)、品窮寺(約五〇〇人)、及び民家(約三〇〇人)に収容されていた。

これよりさき可部分院には、軍人疎開患者が二〇〇余人収容され、軍医二人・下士官兵・看護婦三〇余人が看護にあっていたが、市中から被爆者が一挙に殺到したため、六日・七日は軍人の軽症患者数十人が救援に協力した。

九日夕、山陰の第一陸軍病院玉造分院の救援隊第一班、班長田野俊彦軍医少尉・山田等衛生少尉・下士官兵一人、計一三人が、戸坂分院から転属されたので、看護力は強化されたが、このうち田野軍医少尉・野津孝男衛生伍長と衛生兵五人、計七人は、翌十日午後二時、戸坂分院の命令により、第一陸軍病院庄原分院の山内分病棟に急遽派遣された。さらに八月十五日早朝、分院(学校)に収容中の軍人負傷者一〇〇人を、玉造分院に転送するよう下命されたので、ただちに下深川駅に誘導、または車送して、護送指揮官飯塚忠治軍医大尉(玉造分院救援隊第二班、及び小倉陸軍病院救援隊約二〇人を指揮)に引渡した。

負傷者の治療も、本部移転後は、重症者にはリンゲル注射・輸血(直接輸血)・栄養剤・栄養食品の給与・各種ビタミン・アミノ酸製剤の注射が施されたが、これは、戸坂分院における負傷者の病理究明により樹立された治療方針に基づいたものである。更に、東京帝国大学の原子爆弾災害調査団などの研究報告も参考にされた。その他、柿の葉の煎剤を使って粘膜出血に奏効したと、言われる。なお、前記の輸血には、町内の青年団員からの血液提供もあった。

給食は、校庭の井戸付近に天幕を張って、野戦釜(二斗釜)八個を備え、杉田鉄之助主計大尉以下主計将校三人・下士官兵、及び軍属二〇数人が担当し、当初は玄米のにぎり飯に梅ぼし・佃煮であったが、のちには重症者には特別食が供された。これら食糧は、広島市の陸軍糧秣支廠から補給され、野菜類は可部農業会から調達された。各分院の食糧も本部から補給した。さらに、各地復員部隊からの食糧の移管もあった。

また、薬品・衛生材料も可部本部(亀山疎開倉庫)から、適宜に各分院に補給され、治療活動の円滑が期された。

被爆当日から約一〇日間、毎日八〇人程度の死亡者があり、分院近くの根野谷川の河原一带に火葬場を設け、付近農家から提供された薪やワラを燃料にして、消防団員がその死体を処理した。

病院本部が可部に移転してから、病院関係の職員や軍人患者の安否をたずねて来る家族や縁故者があとをたたなかった。遺骨は木箱に納め、白布に包んで一室に安置されたが、遺族や所属部隊担当者へ引渡す事務で、山田衛生少尉以下の庶務関係者は、毎日多忙をきわめた。

国立病院創立の準備

一方、国立病院創立準備のため、可部付近の分院群、あるいは奥地分院の要治療患者は、可部本部に転送され、職員も貨物を整理して、可部に集結した。

なお、予・後備役下士官と衛生兵は、十月十日、可部本部において召集解除を行なった。また、江波分院においても同様の処置がとられた。

広島第一陸軍病院は、元吉病院長が陸軍船舶工兵部隊長と直接折衝して、山口県柳井市郊外にあった同部隊の空兵舎を獲得、ここに国立病院の開設が決定された。すなわち十月十九日、病院の主力は、可部から柳井市郊外の伊保庄に向って出発した。現在の国立柳井療養所がこれである。

(二) 江波分院

江波分院の状況

江波分院は広島市の南端の海岸近くにあり、爆心地から約三・五キロメートル離れていたため、施設の被害も軽微で、入院患者も職員も無事であった。ただし、看護婦二人が公用で第一陸軍病院本院へ行く途中で被爆、死亡した。

分院長下間[しもずま]仲一軍医大佐は、六日は午前八時に登院し、院長室において宿直明けの藤田雄二軍医少尉から報告を受領中に被爆した。

また、職員の軍医八人・薬剤将校一人・主計将校一人・衛生准尉一人・下士官兵約二〇人、及び看護婦長・看護婦八人・軍属一〇人計四九人が全員在勤していた。

入院患者は、二十年四、五月ごろに大田・玉造両分院などの山陰地方の各院に疎開しており、前記のとおり在院

患者は軽症者約五〇人ばかりであった。したがって一〇数棟の全病棟は、あき屋にひとしい状態であった。

原子爆弾の炸裂下、負傷者が一挙に殺到したが、薬品・衛生材料・糧秣なども相当量を保管していたから、救護力を遺憾なく発揮することができ、六日当日から九月三十日までに延一〇、五〇〇余人の負傷者を収容した。

下間分院長は、当日、市街の壊滅炎上する状況をまのあたりにして、負傷者の殺到を予測し、分院本部前に救護所を設け、増田豪策軍医少尉以下一五人を救護員として、手術室に救急材料を準備して待機せしめた。また、全病棟の軍医にも負傷者の収容準備を命じ、炊事場にも応急食の炊出しを下命した。

なお、在院中の軽症患者五〇余人は、進んで救護応援を申しいで、殺到する負傷者のために立ち働いた。

炸裂後約三〇分すると、負傷した無残な姿の市民が殺到して門前が混乱に陥った。応急担架で運ばれてくる者もあった。

これらの負傷者は、まず救護所において第一処置を施してから、軽傷と重傷に分けて各病室に逐次収容された。病棟ごとに担任軍医を定め、看護婦・衛生兵を指揮して治療にあたらせた。

救護所の第一処置は、火傷には油剤や赤チンキ塗布、外傷には繃帯をおこなった。病室に収容後、重傷者にはリンゲル注射がおこなわれた。輸血ができなかったのは、分院職員や江波町民のほとんどが、被爆により白血球二、〇〇〇以下と、貧血をきたしていたためである。

薬品・衛生材料は、負傷者の数がはなはだしく多数のため、在庫品をたちまち消費した。その上、本院が壊滅したため、補給を受けられなかったので、江波地区の数戸の薬店や一般民家の手持ち材料の提供を受けた。のちには宇品の陸軍船舶司令部軍医部から補給された。

被爆負傷者はあとをたたず連日入院するので、近接の軍需品集積広場に一〇数個の天幕を張って、被爆軽傷老約五〇〇人をこれに移し、分院収容力の増加を図る一方、江波国民学校の教室・講堂、および江波町の民家約二〇〇戸にも、処置した負傷者延三、〇〇〇余人を収容した。このほか、約三、〇〇〇人を応急処置したが、これらは、軍または民間の救援隊によって、内海の島々などに船で運ばれた。

給食は、負傷者の殺到と同時に、カユ食約三〇〇人分を用意したが、誰も食べようとせず、やっとな水を飲む状態であった。翌七日からは、重傷者にはカユ食軟菜が供されたが、副食は材料不足で粗末なものであった。なお、軽傷者には、にぎり飯二個に梅ぼし・佃煮類が供された。江波国民学校の収容者にも、分院から毎食運ばれた。これらの食糧は、当初は分院在庫品でまかなわれたが、払底後は陸軍糧秣支廠から補給された。

江波分院の収容者は、大半が一般市民であったが、軍人も多数含まれていた。ここには伝染病病棟もあったので、急性原爆症(発熱・吐血・下痢・血便・オウダン)の軍人負傷者が、チフスあるいは赤痢として、市内部隊から相当数送られて来た。

当時は、原爆症ということが、まだ理解されていなかったため、分院の軍医たちが敗血症と思って、白血球を調べたところ、0であったので不審をいただき、種々討論した。京都帝国大学のレントゲン科出身の某軍医は、「白血球が減少する放射線の一種の爆弾ではないか?」と主張し、後日、確認された。

約七、五〇〇人の収容者のうち、六日から約一週間、毎日一五〇人程度の死亡者があり、一、〇〇〇余人に及んだが、職員の衛生下士官兵一〇数人の手により、分院近くの陸軍射撃場の草原で、大量の薪やワラを燃料にして、連日、茶毘にふされた。この作業には、在院の軍人軽症患者全員が協力した。

江波分院に収容された負傷者は、舟入町・住吉町・大手町方面の住民がほとんどで、分院以外に、国民学校や一般民家に収容されたことは前述したが、これらに対しては、藤田軍医少尉が看護婦をともなって巡回診療を行なった。

収容者は回復すると共に、親類や知人を頼って逐次退院し、九月下旬ごろにはほとんどいなくなった。

また、被爆前からの軍人患者五〇余人も、八月下旬には復員開始となったので、軍服と旅費を支給し、所属部隊に連絡して召集を解除した。

昭和二十年九月三十日、江波分院が閉鎖され、下間分院長以下四〇余人の職員は、国立病院創立のため、診療器材その他を整理して、十月十九日、柳井市郊外の伊保庄に集結した。

江波分院が柳井に出発したあと、宇品の第二陸軍病院本部がその施設を引継ぎ、国立広島病院の設備に充当した。

なお、江波分院が閉鎖されたとき、江波国民学校に市民被爆者約三〇人が収容されていたが、舟入川口町の青山巖齒科医師が、これを引継ぎ、看護婦数人と共に、外来患者をあわせ約一〇〇人の負傷者の治療につくした。

(ホ) 庄原分院

庄原分院の状況

庄原分院は、昭和二十年七月三十日に庄原国民学校(現在・庄原小学校)に開設された。

当時、軍医一人・衛生下士官一人・衛生兵五人・看護婦長一人・看護婦一人(うち現地採用者五人)・軍属(炊事夫)三人、計二十七人の職員が軍人疎開患者一〇五人(第二校舎に収容)の診療に従事していた。

これより前(二十年七月中旬)、庄原赤十字病院に広島第一陸軍病院から軍人疎開患者三〇人を委託し、救護員として佐々木正己軍医少尉・現地採用看護婦五人、計六人が診療に従事していたが、庄原分院の開設にともない、全員が同分院に転勤した。なお、看護婦二人を八月六日と七日に現地採用した。

八月七日早朝、戸坂分院から伝令(衛生兵一人)が芸備線の汽車で庄原分院にかけつけ、「負傷者六〇〇人を送るから山内西国民学校に収容所を開設せよ」と、命令を伝達した。また、「戸坂は大混乱だ」と情報したので、看護婦四人を戸坂分院に急ぎ派遣する一方、庄原分院には現地採用の看護婦七人・炊事夫三人、計一〇人が残り、佐々木軍医少尉以下一五人の分院主力職員は、ただちに山内西国民学校に移り、学校と地元民の全面協力によって、昼夜兼行、臨時収容所(山内分病棟と呼称)の開設準備を完了した。なお、軍人疎開患者約一〇〇人も主力職員と同行し、設営に協力した。しかし、寝具・炊事具などは皆無であったから、多数の民家から敷布団・枕・毛布・平釜(二斗炊き)などの提供を受けて、急場をしのいだ。

翌八日午後五時過ぎ、庄原地区に最初の負傷者が到着した。すなわち、山内駅に午後五時十分ごろ約二〇〇人、庄原駅に午後五時三十分ごろ約一二〇人、計約三二〇人が到着したのを皮切りに、その後、続々到着、十日ごろまでに約五〇〇人を分院と分病棟に収容した。

山内駅に下車した約二〇〇人は、大半が重傷者であったから、分病棟の全職員が駅にかけつけて応急処置後、軍人疎開患者約一〇〇人及び村民数十人の応援によって、特別重傷者約六〇人を戸板(応急担架)にのせ、その他の負傷者には肩をかし、眼の見えない者は手をひいて、駅から約五〇〇メートルある村道をとおり、分病棟に誘導したが、負傷者は全員がハダシで、顔面は黒血にまみれ、着衣はボロボロに裂けてるか、または全裸で、全身焼けたされた無残な列が続いた。

庄原駅に下車した約一二〇人も、目をおおう惨状であった。庄原赤十字病院の救護員と、地元民多数の協力によって、庄原分院に収容したが、収容病棟を増設(第三校舎の使用)することになり、庄原赤十字病院の長岡敬作事務長が奔走して、素早く確保した。

分院及び分病棟に収容の約五〇〇人は、大半が軍人負傷者であったが、このうち約五〇人(分院約一〇人・分病棟約四〇人)は、第一陸軍病院看護婦生徒教育隊の看護婦と生徒、および第二陸軍病院本院の看護婦であった。

分院・分病棟とも重傷者が多く、収容したその日に死ぬる者もあった。また、九日ごろから多数の負傷者が下痢をはじめたが、原爆症というものが、まだ理解されていなかったため、赤痢の疑いで隔離・消毒を行なう大騒ぎをした。なお、山内分病棟では、瀕死の負傷者がつぎつぎに発狂状態となり、看護は困難をきわめた。

翌九日の午後、戸坂分院から河野軍医中尉が、戸坂分院に派遣中の看護婦四人と共に、負傷者約一〇〇人を汽車で護送して庄原分院に収容し、ただちに山内病棟主任として着任した。ついで十日昼過ぎ、藤高茂明軍医大尉が戸坂分院から分院長として庄原分院に着任したが、これも重傷者の多い山内病棟に駆けつけ、同時に、佐々木軍医少尉を庄原分院に転勤させた。

この日の午後六時ごろ、可部分院配属の玉造分院派遣救援隊第一班の主力、班長田野俊彦軍医少尉以下、野津孝男衛生伍長と兵五人、計七人が山内に到着し、救援活動に加わり、八月二十二日に玉造に帰院するまで治療にあたった。

山内分病棟では、軍医三人・看護婦長(中村トシエ)・看護婦(大下朝子ら)一人・衛生下士官(湯谷睦三軍曹ら)二人・衛生兵一〇人、計二十七人の職員が救護にあたったが、重傷者多数のため救護力が不足したため、地元婦人会と常会(隣組)から、毎日一〇人程度、約一週間、看護応援を受けた。軍人疎開患者も全面協力した。また、庄原分院でも婦人会など総動員で看護につとめた。

治療は、火傷・外傷の手当てのほか、重症者にはリングル注射を施した。なお、庄原分院では輸血も行なわれたが、岡本弘子(現姓矢部)など看護婦たちは数回も進んで供血した。山内分病棟でも、最初は若干人に輸血したが、クエン酸ソーダの払底と、全身の二度火傷の者が多数のため、実施できなかった。

薬品・衛生材料は、庄原分院では庄原赤十字病院から補給されたが、在庫品僅少のため、処置材料がたちまち不足状態に陥った。山内分病棟では、最初は、庄原分院開設時に交付をうけた保管材料を携行使用したが、払底後は、

可部分院(本部)から補給をうけた。

給食は、重症者には粥汁・スープ・粥食軟菜が供されたが、ほとんどの者が、もはや食べる力も失っていたようである。主食の米・麦や調味料などは、疎開時に交付された保管品でまかなったが、野菜類・魚・肉類は地元商店から調達した。ただし、山内分病棟では、地元農家から毎日多量の野菜が提供され、大いに役立った。

収容者五〇〇余人のうち、庄原分院八〇人・山内分病棟八八人、計一六八人が死亡した。死没者は、庄原分院では、町役場が地元民の協力を得て、上野池奥地の露所(ロンショという)で焼却した。これら死没者の冥福を祈り、昭和二十八年四月、庄原町本町の宝蔵寺の境内に、「原爆犠牲軍人の碑」が建立された。

山内分病棟では、常会の人たちが交替で、学校裏の葛城山において火葬し、遺骨は木箱に納め、遺品を添えて白布で包み、近接の薬師寺に安置その後、所属部隊担当者に引渡した。昭和三十三年三月(十三回忌)に、この裏山に「原爆犠牲者の碑」が建立された。現在、庄原市仏教奉賛会が中心となり、「原爆犠牲軍人弔いの会」が作られており、毎年八月六日には、庄原分院と山内分病棟における死没者の慰霊法要が盛大に営まれている。

昭和二十年十月九日、庄原分院と山内分病棟が閉鎖され、患者は退院帰郷した。

分院・分病棟の職員のうち、軍人は可部第一陸軍病院本部に集合、看護婦と軍属は希望によって、主として宇品の第一陸軍病院宇品分院に、直接集合した。

(へ) 玉造分院

玉造分院の状況

玉造分院は、敵の本土空襲激化にともない、広島陸軍病院の疎開分院第一号として、昭和二十年四月八日、島根県・現在玉湯町の玉造温泉旅館五軒(暢神亭・松の湯・鶴の湯・玉静館・有楽)を徴用して開設され、暢神亭に分院本部を置いた。

四月六日、玉造分院長を拝命した飯塚忠治軍医大尉(本院内科診療主任)は、ただちに軍医・主計・衛生各将校と下士官兵、計一五人の設営隊を指揮して現地に急行、旅館組合と折衝して収容施設を確保した。

五月一日、回復期軍人患者五〇〇人を収容、機能訓練を重視し、診療を開始した。また、緊急事態の発生に備え、奥地の国民学校二校(三沢国民学校・阿井国民学校)を分院疎開先として予備収容力を確保し、五月八日には開院式を挙行した。

開院当時の編成は、分院長飯塚軍医大尉以下、軍医四人・主計将校一人・衛生将校一人・衛生下士官八人・兵三五人・軍属二五人、計七四人であった。

六月初め、軍事保護院所管の傷痕軍人高根療養所(松江市上乃木町)の施設に、広島第一陸軍病院島根結核療養所が開設されたので、飯塚分院長はその療養所長兼任を命ぜられ、六月二十日から軍人結核患者三四七人を収療した。

七月二十八日、宍道湖畔の八勝園(温泉旅館)に駐屯中の海軍航空艇部隊旭部隊が、アメリカ軍艦載機編隊の爆撃を受け、一八人の死傷者が発生したので、この全傷兵を玉造分院に収容した。

八月六日午前十時ごろ、飯塚分院長は公用で岡山陸軍病院に出張し、さらに広島第一陸軍病院本院に向かわんとして、岡山駅に出たとき、駅長から、「新型爆弾の投下によって広島に大変事が発生している」との情報を聴取した。同行の曾田清三主計中尉とともに、ただちに広島入りを図ったが、山陽本線不通の情報(後日誤報とわかる)により、伯備線→芸備線経由で、翌七日正午ごろ、備後落合駅に下車した。

ここで、はからずも広島で被爆し、島根県浜田市の西部第三部隊に帰る無残な姿の負傷兵三人(下士官教育で広島の第二部隊に派遣中)に出会い、広島の惨状を聴いて驚愕、ただちに鉄道電話で玉造分院に連絡後、急ぎ帰院し、飯塚分院長を総指揮官とする救援隊二個班を編成した。

救援隊第一班、班長田野俊彦軍医少尉以下、軍医一人・衛生将校一人・下士官兵一人、計一三人は、八日午前八時十五分出発、同日午後五時ごろ広島の戸坂分院に到着した。ついで第二班も、班長広藤英二軍医中尉以下、軍医二人・主計将校一人・下士官兵一人、計一四人が、飯塚分院長指揮のもと、九日午前八時十五分出発、同日午後五時ごろ、戸坂分院に到着した。第一班は、翌九日夕、可部分院に派遣されたが、その主力は、更に十日午後二時、庄原分院山内分病棟に派遣された。なお、第二班は戸坂分院において活動を続けた。特に飯塚分院長は、病院長元吉軍医少将の麾下にあって、被爆者の病理究明を行ない、治療の根本対策を樹立、進言した。

八月十五日、可部分院の軍人負傷者一〇〇人を玉造分院に転送するよう救援隊第二班は帰院を命ぜられ、同日早朝出発したが、その護送中、飯塚分院長は奇しくも、広島被爆の実情を聴取した備後落合駅で、終戦の玉音放送を聴いたのであった。なお、この負傷兵一〇〇人の汽車輸送にあたり、小倉陸軍病院派遣の広島救援隊橋口軍医見習

士官以下二〇人が協力した。さらにこの救援隊は、負傷兵護送のあと、約一週間、玉造分院の救護活動を応援して可部分院に向った。

十五日の早朝、鉄道電話で負傷者一〇〇人転送の報を受けた玉造分院では、分院長代理勝部箴吾軍医中尉が、ただちに温泉旅館五軒の協力を得、收容準備を行ない、待機した。

同日午後三時ごろ、負傷兵が玉造駅に到着、分院残留の全職員が駅に出迎え、前記温泉旅館に收容した。

この收容作業には、地元青年団員約二〇人の積極的な奉仕があった。また、疎開軍人患者約三〇人も協力し、重傷者は担架または戸板に乗せて運び、歩ける者には肩をかして、駅から約一キロメートル離れた分院に誘導した。

八月二十二日、庄原分院山内分病棟に派遣されていた救援隊第一班の主力、班長田野軍医少尉以下五人が帰院し、救護力が増加した。さらに、二十七日、大田分院の閉鎖にともない、帰郷不能の被爆負傷者九五人と、疎開軍人患者二五人、計一二〇人の転送を受けたので、被爆負傷者の收容数は一九五五人になった。

医療は、火傷・外傷の処置のほか、飯塚分院長が戸坂において究明した「治療方針」と、その後の検査結果に基づき、さらに陸軍省医務局の調査研究報告を参考に、被爆患者を（一）汎骨髄液様血液型（二）再生不能性貧血症（三）白血病型などに分類し、さらに過去多数の「戦争栄養失調症」の治療経験を活用して、安静・補液（リンゲル注射）・少量頻回の輸血（直接輸血）・栄養剤（肝・腎臓などの臓器製剤）・栄養食品（チーズ・バター・牛乳・卵・肉・魚など）の給与、各種ビタミン・各種解毒剤・ミノファーゲンCなどのグリチルリチン製剤・アミノ酸製剤の注射など、治療に万全を期したが、資材不足のため、完全治療は不可能であった。なお、輸血にあたっては、分院職員は勿論、地元の男子青年団員約一五人から、数度におたる輸血奉仕を受けた。また、女子青年団員約一〇人は、終始、看護応援に活躍した。

このほか飯塚分院長は、被爆患者六〇人につき、さきに戸坂分院で着手した血液学的検査を続け、被爆後三週間にして、すでに白血病様血液像を呈する者が少なくない旨を元吉病院長に報告した。

このように全力をあげ治療にあたったが、十月十三日の分院閉鎖までに、一人の死亡者があった。死体は、地元の火葬場において、町役場の協力で分院職員が荼毘にふした。遺骨は、木箱に納め、白布で包み、分院霊安室に安置し、衛兵がこれを守った。

十月十三日、玉造分院は、本部（暢神亭）を残して閉鎖されたが、疎開患者と被爆患者のうち、快方に向った者は逐次退院帰郷させ、召集解除の処置をとった。

なお、重症被爆患者八人は、国立島根療養所に転送、また陸軍結核療養所に收容中の患者も、帰郷可能な者は退所させ、治療を要する者はその郷里の療養所に転送、重症者は国立島根療養所に引継ぎ、全患者の処理を終った。

閉院式を挙行（十月十三日）後、兵は請願休暇を与えて帰郷させ、将校下士官は、十月十七日ごろから三回にわたって、柳井市郊外の伊保庄の第一陸軍病院本部に集合、飯塚分院長以下数人の本部職員は、一切の残務整理を終了後、十一月一日ごろ、第一陸軍病院主力に合流のため、玉造を出発した。なお、遺骨と病床日誌などの重要書類は、現地集合時に病院本部に引渡した。

（ト）大田分院

大田分院の状況

大田分院は、昭和二十年四月十日、島根県大田市の県立大田高等女学校と県立大田中学校の教室・講堂・および女学校の寄宿舎（兵舎に充当）を使用して開院された。

編成は、分院長熊谷雄二軍医大尉以下、軍医（見習士官を含む）七人・薬剤将校一人・主計将校二人・衛生将校一人・下士官兵一二〇人、計一三一人であった。このほか、大田高等女学校から学徒動員の女子学生二五人が、分院開設と同時に配属された。

四月十四日、軍人疎開患者六〇〇人の收容を最初に、第二回四〇〇人、第三回二〇〇人と、七月三十一日までに計一、二〇〇人を收容した。このうち、全快した七〇人が、八月六日早朝、広島着の汽車で第一陸軍病院本院に転送され、これと入れかえに患者七〇人が、同日早朝、広島駅から転送されたが、前者は全員が被爆死し、後者は危うく難をのがれた。

分院収療の間、回復期患者約四〇〇人には、体力増強・機能訓練を目的として、農耕・（開墾・野菜栽培）・漁業（日本海と波根湖）・製塩（塩田作業）・松樹脂と薬草の採集などの作業を実施し、併せて現地自活の資とした。

八月六日朝、空襲警報→警戒警報が解除され、職員は平常勤務についたが、間もなく情報係下士官が、「広島放送突然停止、広島地区に異変発生模様！」と報告した。熊谷分院長は、ただちに山口市の旅団司令部と島根県庁に

連絡したが、「広島市が空襲を受けたらしいが、目下詳細不明」と、回答があった。また、広島との電信不通のため、同日午後、状況偵察のため、日野一男衛生准尉・下士官兵五人を、現地に汽車で急派し、待機した。その日の夜、偵察隊が備後十日市駅(現在三次駅)の電話で、「広島市が大空襲を受けた!」と、報告して来たので、熊谷分院長は、即座に、「偵察隊は、第一陸軍病院本部の移転先を搜索せよ」と下命した。その深夜、「戸坂」の病院本部から救援隊派遣の命令(電報)を受けたので、熊谷分院長は、保科登志夫軍医大尉以下の幹部を非常召集して、急ぎ救援隊を編成し、出動準備を下命する一方、米子鉄道管理局長に七日早朝出発の臨時列車の運行を要請した。

七日早朝、熊谷分院長は、軍医三人・主計将校一人・下士官兵四〇人、計四四人の救援隊を指揮、臨時列車により大田駅から木次経由で広島へ急行した。同日午後三時ごろ、戸坂に到着したが、当時、戸坂分院の教室・校庭・周辺の畑には、重傷者が死体とまじって多数呻吟しており、そこへ更に、続々と負傷者がなだれこんで来るという状況で、熊谷分院長以下の軍医は、負傷者の救急処置を、下士官兵はその助手、または、死体の焼却、各地転送負傷者の担架運搬などに不眠不休の努力をつくした。八日午後、元吉病院長が出張先から帰着し、大田分院救援隊の急派と、負傷者輸送列車の獲得たど、臨機応変の処置をとったことを賞讃した。、

この日の夜、大田分院へ負傷者の転送を下命された熊谷分院長は、ただちに大田分院に電報で受入れ準備を取らせた。翌九日早朝、熊谷分院長指揮のもとに、軍人負傷者約三〇〇人を汽車で護送したが、軍衣はボロボロか、または全裸で、全員がハダシ、血まみれの者、顔面が黒く脹れた者、眼だまが飛び出した者、皮膚がズルリとむげた両腕を前に垂らした者、全身火傷でウミが流れ、それにハエがむらがっている者など、無残な負傷者が駅前広場に出たとき、地元の人々は度肝をぬかれた。

これら負傷者は、大田町の各婦人会員・警防団員、および一般市民多数の協力を得、トラック・担架またに戸板に乗せて、分院に収容した。

十一日、さらに軍人負傷者約三〇〇人が戸坂分院から転送されたが、大半が重傷者で、前回よりも更に多くの地元の人々の協力を得なければならなかった。

医療は、全患者の衰弱が大きかったので、大量のリンゲルおよびビタミン注射を行なった。また輸血(直接輸血)には、分院職員のほか、学徒動員の女子学生および多数の地元の人々の供血があったから、頻回実施ができた。なお、外傷には繃帯交換(リパノールガーゼ)の頻回実施を、火傷には赤チンキ・チンク油・軟膏などの塗布を行なった。これら医薬品・衛生材料は、収容患者一、五〇〇人対象の二か年分を保管していたから、十分に治療することができた。

重傷者多数のため、学徒動員の女子学生二五人のほか、地元婦人会から約一〇〇人ずつが、連日交替で看護応援に奉仕した。また、全国各地から駆けつけた留守家族の人々も、寸暇もなく看護にあたった、この中には、広島第二陸軍病院本院で被爆した重症の軍医予備員(医師)の子息も来ていた。この子は学童疎開で一人生き残り、父親を探して来て、懸命に看病したが、ついに死亡したため、その遺骨を小さな胸にいだいて、一人で広島へ帰っていった。熊谷分院長以下数人の職員が駅までその子を送って行ったが、一同涙にくれた。これらの人々のほか、疎開軍人患者の元気な者約四〇〇人も、終始、看護に協力した。

給食は、大量の白米を保管していたうえ、自活のための栽培野菜や漁獲、さらに地元漁業組合・農家・酪農家から新鮮な品々が円滑に提供されたので、症状に適した患者食を作ることができた。また、炊事は、元気な疎開患者約五〇人が、終始、専従職員に協力した。

八月九日の収容から八月二十七日の分院閉鎖まで、約一二〇人(20%)の死亡者があった。

死体は、町の火葬場付近で分院職員と警防団員の手によって茶毘にふされた。遺骨は、白木の小箱に納め、白布でつつみ、大田市宮島町の大願寺本堂に安置し、将校・下士官兵が交替で守った。その間、大願寺住職が常時読経し慰霊した。この遺骨は分院において、遺族に引渡したが、広島市出身兵の一〇数個の遺骨は、その遺族も被爆死したためか、引受者がなかったので、可部に集合する際、第一陸軍病院本部に引渡した。ちなみに、大田分院収容の被爆負傷者は、汽車で護送中、各人の隊号・官等級・氏名、および留守家族の住所氏名を聴取、記録した荷札や紙片を、全員の胸に取りつけ(又は貼りつけ)ていたから、遺骨はまちがいに遺族に渡すことができた。

八月中旬以降、復員開始にともない、快方に向った患者は、逐次、帰郷退院させたが、退院時、各人に病床日誌を持たせ、帰郷後、病状が悪化した場合、これをもって最寄りの公立病院で受診するよう懇示した。

八月二十七日、大田分院を閉鎖したが、治療を要する被爆者九五人と、軍人疎開患者二五人、計一二〇人を玉造分院に転送した。同時に軍医二人・薬剤将校一人・下士官兵二人、計二四人の職員も玉造分院に移った。その他

の職員は、広島第一陸軍病院可部本部に集合した。

(チ) 宇品分院

宇品分院の状況

原子爆弾の炸裂下、被爆者の大群が火災の発生していない宇品地区へ殺到した。歩ける者は歩いて、歩けない者は救援のトラックで運ばれて来たが、このうち延六、〇〇〇人以上の負傷者は、陸軍船舶練習部の駐屯する元大和紡績工場施設に収容された。

この施設は、そのまま第一陸軍病院宇品分院となり、八月十日、山県郡の戸河内分院の看護婦二人・看護婦生徒二〇人・衛生兵五人、計二七人がトラックで到着、ついで八月十六日ごろ、筒賀分院の中野松枝看護婦長以下、婦長一人(但し、戸河内分院の梶谷君江)・看護婦一人・看護婦生徒二〇人・衛生兵五人、計二七人が到着し、先遣隊と合流した。

大混乱時、これら看護婦・衛生兵たちは、陸軍船舶練習部所属の軍医の指揮下に入ったものと思料される。二十日ごろからは、戸坂分院から軍医(氏名不詳)一人が派遣され、救護活動の総指揮にあたったようである。

救援隊第一陣、戸河内分院の一隊が駆けつけたときには、すでに負傷者約五〇〇人が、諸施設に収容されていた。これらは全身の火傷にウジがたくさんわいており、皮膚深く喰いこんでいたので、クレゾール液で洗い落とすのに苦労した。

なお、八日に理化学研究所の仁科芳雄博士ら一行の調査班が到着し、無傷屍体の解剖が行なわれた結果、公的に「原子爆弾である」ということが確認され、東京へ報告された。

十日以降、殺到する負傷者は、応急処置後、一〇数余の寮舎やその他の建物に逐次収容したが、いずれも全身二度の火傷で、重症者が多く、惨状は言語に絶した。収容者の大半は一般市民であったが、軍人も約三〇〇人含まれていた。これらの軍人は、ほとんど比治山に駐屯していた船舶部隊の通信兵たちであった。

医療は、もっぱら火傷・外傷の手当てであった。当初は奥地の分院から携行したクレゾール溶液で処置したが、払底後は、陸軍船舶司令部軍医部から赤チンキ・チンク油・ガーゼ・脱脂綿・巻軸帯などの交付を受けた。しかし、負傷者が甚だしく多数のため、たちまち欠乏状態に陥った。

なお、十日過ぎから負傷者が次々に発熱・下痢(血便)をはじめたので、赤痢の疑いで大騒ぎとなったが、後に原爆症特有の症状と判明した。

被爆一か月後、アメリカの原子爆弾災害調査団が来広し、宇品分院に宿泊(約一〇人)したが、このとき、アメリカ人医師が負傷者数人にペニシリン注射を行なった。この作業を看護婦生徒上平智恵子(現姓服部)らが補佐したが、ペニシリン注射は初めての経験であった。

給食は、十日と十一日は混乱のため炊事ができなかったから、看護婦らは携行口糧ですごした。十二日になって、衛生兵数人が、工場の炊事施設を使って、にぎり飯の炊出しをはじめた。しかし、衛生兵たちも死体の焼却作業に追われて、炊事はとぎれがちとなり、每日一食しかたべない日が、幾日も続いた。

重傷者のために、オモユ・オカユを用意したが、ほとんどの人が食欲を欠いていた。食糧は、当初は船舶練習部保管の米麦などを使ったが、払底後は陸軍糧秣支廠から交付を受けた。副食は梅ぼし・佃煮などで、粗末なものであった。

八月十日から九月中旬ごろまでに、約三、〇〇〇人の死亡者があったが、その大半は、当初の約二〇日間に死亡した。いずれも全身無残に焼けただけ、そのほとんどは身元の確認ができなかった。

死体は、工場東側の空地に三か所の火葬場を設け、衛生兵一〇人が茶毘に付した。これには看護婦生徒四〇人も協力し、軍保管の担架約五〇個を使って、連日、死体の運搬にあたった。

死亡者が多数のため、火葬は一回に約六〇体、直径約五メートル・高さ約二メートルに及ぶ三つの死体の山をつくり、これにガソリンをぶっかけて焼却した。なお、ガソリンは、船舶部隊から交付を受けた。

この宇品分院には、多くの災害調査研究班が、八月八日から十月末ごろまで、次々に宿泊していたが、その間、これら医師たちによって、死亡確認の約一〇〇体の死体解剖が、分院施設の一室で行なわれた。そして、脳・内臓・骨・皮膚などの可検物は、医師たちが逐次持ち帰った。この解剖にも看護婦生徒全員が協力したが、調査団医師のなかには、単に研究論文を書くための調査だけにとどまり、傍で呻吟する負傷者の治療はおざなりな者もあったという。

この分院において救護活動に従事したのは、ほとんど看護婦と衛生兵であった。ことに、その大半が少女期の看

看護婦生徒たちで、中野看護婦長指揮のもとに、混乱下、一糸乱れぬ活動を展開した。

九月中旬以降、第一陸軍病院・第二陸軍病院所属の各地分院の閉鎖にともない、居残り希望の職員は、逐次、この宇品分院に集合した。さらに、十月二十日、井原第二陸軍病院本部が国立広島病院創設のため、この施設に移転したので、宇品分院は、これに併合された。

(リ) 看護婦生徒教育隊

看護婦生徒の状況

市内三篠橋の東詰め、白島町との境界道路に沿って南側の、陸軍弾薬庫の高い石垣の塀との間にひらけた約二、〇〇〇平方メートルの広場に、広島第一陸軍病院看護婦生徒教育隊の兵舎があった。

堤防ぞいに講堂、道路ぞいに兵舎と、一型[カギガタ]に建てられた兵舎は、事務室・教材庫・休養室・助教居室・生徒内務班(五個)からなり、ここに助教の看護婦長四人・助手看護婦四人・生徒第一期生二〇人・第二期生八八人、計一一六人が当日兵舎にいた。

八月六日の朝、全員朝食をおわり、舎内にいて、学習準備などをしているとき、原子爆弾の炸裂に遭遇した。

教育隊長花房光一衛生大尉は、出勤途上、営庭東側の正門にさしかかったところであった。強烈な爆風によって、講堂近くまで三〇メートルも吹き飛ばされて昏倒した。幸い障害物が無かったため命拾いをした。

兵舎は、突然、一大轟音と黒いガスに包まれ、ガラガラと崩壊した。バラック建て兵舎であったからバラバラに壊れ、逃げやすかった(当時・第二期生山本テルコ談)。しかし、倒壊物の下敷きになって、死亡者六人・重傷者一〇二人・軽症者八人を出し、無傷という者は一人もいなかった。

林秋子総婦長が、倒壊兵舎から這い出したときには、相当数の生徒たちがすでに営庭に脱出していた。生徒たちの白衣は鮮血にまみれ、みんな負傷していた。林総婦長は、顔面に強度の切創を受けていたが、生徒を励まして救出にあたった。救出された生徒もまた、すぐに同僚の救出に働いた。

松田琴枝婦長も失神状態で救出され、意識を回復するやただちに救出作業の指揮をとった。福田シゴコ婦長も下敷きから脱出すると、自分の負傷をかえりみず、救出活動に従事した。外に出た全員、崩れた屋根の上から友の名前を連呼しつづけ、呻吟、応答のあるかぎり、瓦をとっては投げ、板をバリバリはぎ取り、材木を除いて必死の救出作業が展開された。その間特別重傷者数人は、倒れた教材庫からひっぱり出した担架に乗せて、橋のたもとの木陰に移し、付添いの生徒たちが川から汲んで来た水をガーゼに浸して飲ませた。また、外傷は、倒壊建物の中から取出した繃帯材料や繃帯囊数個の材料で応急処置をおこなった。まだ実習の不十分な生徒たちであったが、機敏に勇ましく処置しあった。そして犠牲者六人の死体は、延焼のおそれのないと思われる北方上流の地点に移した。

この日、週番であった千葉フユ婦長は、林総婦長と共に婦長室にいたが、「アッ火事！」と叫んで事務室に飛んで行った。そして、中央廊下で“非常持出”をしっかりと抱いたまま息絶えていた。週番という責任感から、職務に殉じた姿に人々は強く心を打たれた。

花房隊長は、意識回復後、顔が紫色に腫れあがって重症状態であったが、終始、救護の総指揮にあたった。

救出・救護作業が一段落したのは、午前十時ごろであった。林・松田・福田三婦長は、花房隊長の指揮のもとに、軽傷の生徒二〇余人を励まして、動ける者は肩に背に、動けぬ者は二つ折りの毛布に乗せ、四つ角を持って運ぶとか、借りて来た大八車に乗せ、梶棒をとる者、あとを押す者など、協力一致、ひとまず工兵橋までと、何回も輸送を繰り返した。更に、三婦長は、太田川に点在する中洲の葦の茂みにも白衣の軍人患者や看護婦生徒など十数人が避難しているのを発見し、河岸にあった川舟をあやつって、全員を堤防上に救出した。

これら教育隊助教や生徒の一隊は、前述のとおり、その後、戸坂分院にたどりつくや、そこでも全力をあげて救護活動をおこなったが、その途中でも、長寿園堤防一帯に避難していた多数の負傷者を救護、誘導して到着したのであった。

教育隊兵舎は、その後延焼し、残留隊員の必死の消火活動のいかにもなく、ついに灰燼に帰した。

壊滅した陸軍病院 米田真治 (元広島第一陸軍病院付陸軍衛生少佐)

私は、原爆投下の前々日の八月四日(土)には、高熱のため自宅(己斐町、旭山神社西側の中腹)で病床にあった。翌五日(日)に外科の河内美岐雄軍医少尉(原爆戦死)が来診して「下顎[がく]骨炎のおそれがあるが、今日は日曜日なので一応、抑制治療をしておくから明日は是非入院するように」とすすめられていた。その入院予定日の六日の朝(午前八時十五分)、まだ臥[が]床中に原爆が投下された。

従って私は閃光は知らないが、爆音発はそれ以前に広島市役所に投下された爆弾よりは、あまり大きく感じなかったが聞えた。爆風は猛烈で、家屋は七分がた破壊され、屋内は土煙と破壊物とで隣室も見えないくらいとなった。

眼下に眺望される広島市街の各所からは、黒煙が多数立ちのぼっていた。私は原子爆弾だと直感した。「居るか！」と呼んだところ、妻の返事があったので、土煙の中を倒壊物をさけながら炊事場に行き妻の安全を確かめ、又もとの部屋にもどってみると驚くべし、黒煙はすでに火柱となってその数を知らず、全市に至るところ火炎の海と化していた。まさに瞬時の変化であった。そのうちに、隣組の人達が自宅の横にあった避難壕へ続々と登って来た。すでに顔面などに火傷の症状の者が多かった。私はまだ四〇度の高熱であったが、直ちに軍装を整えて第一陸軍病院へと急いだ。己斐町は全・半壊の状態、橋はほとんど落ちていた。電車軌道橋が僅かに残り、レール一本はぶらさがり、もう一本は残ってところどころの枕木が燃えつつあるのを辛うじて渡った。福島町あたりから被災者の群れが救いを求めたが、任務を伝え、心を鬼にして病院へ急いだ。

中心部に近づくにつれ、惨状はその極に達した。生存者は殆んどいなかった。家屋もほとんど焼失しており、まだ燃えているのもあり、その火熱と煙とで前進は困難であった。途中、電車の残骸や、一部燃えている電車の中にも死体があり、吊革にぶらさがったままの者も見た。相生橋の西詰めの広場、電車軌道のある広い道路には無数の死体がよこたわっていた。頭髪は灰をまぶったように汚れ、着ている衣類は焼け、或いは破れていた。乳児が乳房[ちぶさ]を求めながら抱かれて共に死んでいる母子の姿もまじっていたが、その惨状たるや私がかって、激戦場で体験したどの死体群よりも残酷を極めていた。

辛うじて第一陸軍病院本部に到着したが、建物は焼けて全くなくなっており、各室の礎石の区画内には白骨が多数散乱していた。門衛所も同様で数人分の白骨のみが残り、立哨の位置にも一体分あった。当日の門衛司令の氏名を知っていただけに私の悲痛感は一としおだった。

仮建築の第一分院のトタン屋根は、恰もチリ紙を握り潰したような形で西練兵場に散らばっていた。また、広島城の天守閣は勿論、各聯隊の建物は焼失し何一つ見えない。そして人影も見えない。市街地も同様で、産業奨励館(現在の原爆ドーム)のほか、二、三のビルの残骸があるだけで、すべては焼け、崩れ、青い物はなく、瓦礫と石と、焼けた枯木のみで全くの死の広原となっていた。

「どうすべきか」と、私は炎天下(爆雲による夕立後は炎天となった。)に立って考えた。そこへ部下の木戸重一衛生伍長が軍刀を杖にやっけて来た。剣道三段で人一倍元気者の彼も被爆しており、「私はもうやれぬ、死ぬると思う。」と言い、「他の職員も殆んど死んだと思う。生き残った者は戸坂[へさか]へ行った。」との情報を得た。これで私は若干の生存者があることを知った。そこで、まず師団司令部に連絡してから戸坂分院(戦場化の場合の第一救護所)に行こうと思ひ野砲聯隊(留守隊)の正門前まで行くと、負傷兵が救いを求めた。

「苦しい」「寒い」と訴えている。火事のために風がおきていた。しかし、救護材料は何一つない。私は軍装はしていたが、自宅から出たままで処置材料はまだ入手していなかった。トタンの焼屑で風よけをしてやるほかはなかった。私は彼から情報を得たかったが、「全滅したらしい。」というほかは何も得られなかった。

このとき、将校一人が司令部近くの城門から出てきた。彼は「司令部は全滅だ。行ってもだめだ。」といった。またその時、別の兵科将校(たしか中佐級だったと思う)が司令部に向ったので、司令部との連絡(戸坂に救護所開設)を彼に頼み、私は患者の救護、収容を一刻も早くしようと決心して戸坂へ急行の歩を早めた。その途次、城の外縁にあった濠[ほり]の蓮の間から全身泥まみれの者(男女の区別がわからなかった)が立ちあがって救いを求めた。彼女は、当日入隊者の妻で、野砲隊の正門外で別れ、間もなく被爆して濠に飛びこんだが、主人も隊内で死んだと思う。私も助からぬから、家へ連絡して下さい。と訴えた(三原市の人であったと思うが取りあえず手帳に記入し後日可部一陸本部から連絡して、返事と礼状が来た)。

また、もとの病院正門前までもどると、救いを求めるような、かすかな呻くような声があるのでよく見ると、門前の幅約七〇センチメートル、深さ約一メートルの溝の中に傷者が一人いた。それは病院勤務の看護婦らしく、頭髪は焼け、着衣も焼けてほとんど全裸に近かった。励ましたが悪態で死が迫っていた。西練兵場付近で見た生存者は大体以上のとおりであった。西練兵場付近には死体は割合、数は少なかったが、その中でただ一人、当直将校が、防空壕内からまさに飛びださんとする姿勢で、軍刀を持った右手を前に差出したまま、うつぶせに斃れていた。その焼けのこった軍服のカーキ色と赤い週番懸章の色は、広い焦土のなかに一しおきわだって見えた(勿論検視などする暇はなかった)。

私が戸坂分院に到着したときには、軍医以下僅かな職員が傷者の救護に当たっていた。看護婦なども看護に熱中し

ていた。患者は、軍人・市民の別なく、すべて同一に収容されていた。私は、本来教育隊付であったが、ここでは本部にいた。当時、病院長(軍医少将・元吉慶四郎)は団体長会議か何かで大阪方面に出張不在中であり、また他の幹部、殊に庶務科長鈴木時定軍医中佐をはじめ、本部の者はほとんど全滅していたので、下松市の花岡分院から救援に到着の堀口重雄軍医中佐を病院長代理として指示を受け、私は庶務科長の職を代行した。六日、七日は、本部の専任は私のほかに共に教育隊付であった山崎留美衛生少尉(被爆し一眼を損傷)の二人だった。なお、公仕(男子職員の小使)一人が生存していてこれに協力した。病院長は、八日の午後に戸坂に帰着したので堀江中佐が庶務科長となり、私は本部付として全般指揮の補佐に当たった。

当初、患者は連日なだれる如く到着したので校舎は勿論、校庭全面にムシロを敷き、天幕を張ってこれに収容したが、収容しきれぬので、傷者は付近の畑地一帯に溢れた。従って本部は校舎のすぐ裏にあった防空壕(広さ約六平方メートル位か?)に移転し、ロウソクなども利用した。夏季であったため、患者には寝具・衣服をあまり要しなかったことは幸いであった。当初は、通信・運輸機関が麻痺していたので独自の判断で行動し、任務達成に努力した。

死者も毎日多発し、数十体を火葬したこともあり、火葬用の薪材料に困るようになったので、野戦(第六師団)で考案した鉄板被覆による焼却法を採用して燃料の節約を図った。また、患者の転送については、戸坂駅から芸備沿線の学校に開設の各分院や、山陰・山口方面の分院にも輸送した。当時の戸坂駅は小高い所であったので、患者の担架輸送は苦労が多かった。これに従事したのは衛生兵が主となり、後には地方民の協力もあった。そのうち後任の広島師団長(谷中將であったと思う)が来訪せられ、また、通信・運輸もかなり復旧してきた。その間、終戦の玉音放送も聞いた。

当時の患者は、火傷がほとんどであった。戦帽下の頭髮は健在だったが、顔面その他の露出部は剃ったように毛がなく、顔は丸く腫れ、両眼は糸をひいたように横一線になって誰かれの区別がつかない者が多かった。また、種々残酷な容態の患者が多かったが、中には、顔面の皮膚が鼻すじから縦割りに、扉を開いたように両耳の前まで剥がれた赤鬼さながらの面相の者もいた。治療は、火傷の手当のため油を使用することが多かったので油が極度に不足した。そのうち、広島市内の患者収容も呉より海軍の救護班が来援するなど、各方面より増強されて大いに進捗し、通信・運輸も相当回復してきた。しかし広島は今や全く錆色一色の死都、廃墟と化していたので、爾後の指揮や処理の便などを考慮して病院本部は、八月二十日に可部国民学校に開設の分院施設に移転した。可部は広島市北方約二〇キロメートルの地点にあり、地方事務所があってその協力が得られた。その後も多少の患者収容があった。当時、可部の近くには、亀山・三入・大林などの国民学校にそれぞれ分院が開設されていた。

状況が落ち着いてくると、海外にある二〇万の患者を収容するため、国立病院の設置(移管)の準備を命ぜられた。しかし、広島市やその周辺には利用し得る空施設がないので、元吉病院長は、柳井市郊外、伊保庄にあった西部第八部隊(船舶工兵隊で暁部隊所属)の施設を引継ぎ、開設することを決定した。しかし当時は、原爆投下後の交通施設の破壊と自動車類の不足、かてて加えて、九月中の相つぐ豪雨による水害で道路は寸断され、陸上輸送の見込みがたたなかった。しかし、在外患者の収容は急を要するので、当時、太田川を上下していた川舟(一人の水夫が櫓をこいでいく)を利用することにして緊急材料と最少必要限度の人員(約三〇人)を搭載して下航することにした。しかしこれも数度の洪水のため六たび計画を変更したが、遂に(十月中旬と思う)相当増水中を敢行、三隻をもって第一陣が下航し、広島に揚陸して横川からトラックにより(貨物は列車輸送)、難路を輸送した。

かくして伊保庄に到着し、西部第八部隊長より引継ぎをうけて病院を開設した。もっともここには当部隊の患者を収容するため、広島陸軍病院の柳井分院が早くから設置されていた。他の人員材料はその後、逐次輸送され、ここに国立柳井病院が創立されたのであった。

広島第二陸軍病院の状況

広島第二陸軍病院(旧本院)は、爆心地から約八〇〇メートル離れた基町の北西端、三篠橋に近い河畔にあった。院庭は老樹生い茂り、旧城内の深園を偲ばせるものがあった。また、桜並木の長い堤防は美しく、入院患者の魚釣りや散策に絶好の場でもあった。ここには精神病・戦争神経症・急性伝染病・肺結核などの特殊患者や重症者が収容されていた。入院患者は、普通患者を含めて約八〇〇人、職員は約三〇〇人であった。

患者その他の分散疎開

昭和二十年六月ごろ、軍命令により、病院の疎開先や災害時の収容所を、芸備線沿線の学校数か所を予定し、七月には疎開を開始、軽症患者約三三〇人を向原(国民学校約三〇〇人)・東城(県立高等女学校約三〇人)の各分院に疎開したため、これらは原子爆弾からまぬがれた。

なお、六月二十九日、岡山陸軍病院が空襲を受けたときの戦例に鑑み、翌三十日に食糧・衛生材料・被服・寝具・寝台・手箱にいたるまで、院内には、一日分の必要量にとどめ、余分はことごとく太田川土手、及び河川敷地に分散し、一部は防空壕内、一部を野積みとした。この処置は、庶務科長吉田一軍医少佐が木谷祐寛病院長に進言し、即日実行されたものである。

八月五日夜、堤防上の娯楽室で前線出発将兵の送別会を催している最中に、空襲警報が発令されて、一同はそれぞれ防備配置についた。空襲警報解除は深夜十二時過ぎであったから、病院付近の居住者だけ帰宅して、木谷病院長をはじめ、吉田軍医少佐など多くの者は、院内に宿泊した。

八月六日

六日午前八時から、各科・教育隊は院庭に出て、規則どおりの朝礼をおこなっていた。また、病室も一部では朝礼をしていた。

木谷病院長は、南面した院長室において、縮織のシャツとステテコ姿という薄着で、本日予定の民間の講演のための原稿書きに、早朝から精を出していた。

吉田庶務科長は、午前八時から本部裏の中庭で、約一〇分間、新林敬次郎衛生大尉以下一〇余人の庶務科の朝礼をおこない、解散後ゆっくり本館廻廊を東方へ歩いているとき、中程でB29らしい爆音を聞いた。本部東側渡廊下付近でも福神典彦薬剤大尉が朝礼をおこなっていた。

警報解除になっているのと思いながら、ふと空を見あげた。と、中庭に大きな火の玉を見、真昼がマグネシウムをたいように明るく輝いた。瞬間、病院が爆撃されたと思った。何も彼もガラガラと崩れるような、おぼろ気な記憶のうちに気づいたときは、倒壊建物の下敷きになっていた。

周囲は静寂そのもので、軍刀も帽子も靴も何処かに飛んでいる。ウロウロして焼死ではつまらないと思い、這い出した所は中庭であった。見渡すと、病院はもちろん、広島市内はまったく平坦になり、福屋デパートと新聞社の鉄筋コンクリートの建物が残っているだけであった。三月頃、原子破壊に関する本を読んでいた吉田庶務科長は、一瞬の倒壊状況から「原子爆弾」ではないかと考えた。

見ると、中庭の噴水の池の端に木谷病院長が、すっ裸で腰をかけていた。数か所に切創があり、全身の皮膚が薄く剥げたような感じであった。「院長殿、どうしました。」と、声をかけると、「吉田、オレはもうだめだ。」と言う。

木谷病院長死去

吉田庶務科長は、持っていた繻帯包を開いて繻帯をし、「兵を連れて来ますから、気を確かに、しばらくお待ちください。」と言って兵隊を探した。しかし、兵隊はおらず、引返してみると、もう姿がなかった。後日、木谷院長は、生駒看護婦らと一緒に亀山分院へ避難して治療を受けたが、八日遂に死亡したことがわかった。

惨状

倒壊した病棟の方々から「助けてくれ、助けてくれ。」という声がきこえ、看護婦が同僚を引っ張りだしているのが見える。兵衣が燃えながら飛んできたのを叩き消している看護婦がいる。

炊事場の付近から火の手があがった。吉田庶務科長は、急いで防空壕から手押ポンプを引出すため、応援の兵隊を探して歩いた。二、三人いたので、「オレについて来い。」と命じて走り廻り、振りむくと一人もいない。ふたたび五、六人の兵隊を見つけてポンプを引出し、防火用水の所に運んだときには、火炎はすでに病院の半分くらいを覆っていた。

「助けてくれ。」「助けてくれ。」という声がなお続いている。ポンプで放水しようとしたが、誰も扱い方を知らない。日ごろ訓練していても、こんな時に役立たないのが情けなかった。そのうち火勢はすっかり倒壊病棟を包み、「助けてくれ。」という声も次第に無くなっていった。

これ以上、ここにとどまっていたら焼け死ぬる。と考えて、その場を逃げた。まっ黒い顔をした兵たちがフラフラと幽霊のように歩いて、通りすぎて行く。

病院の北側は弾薬庫であったが、ほとんど弾薬はなく心配のないことを吉田庶務科長は知っていたが、患者や職員はそれを知らなかったから、誘爆を恐れて慌てて逃げたようである。

三篠橋を右手にみて太田川の土手に出て、病院の横付近に引返した。前述のとおり、ここには大量の食糧・衛生材料その他が集積してあったから、取りあえずこの場所で、救護にあたらうと決心したのである。しばらくして真っ黒い大粒の雨が降って来たので、近くの防空壕に入って雨を避けた。

竹田ハツユ(現姓・河上)看護婦長の手記によれば、竹田婦長は便所の中で被爆し、ザザザッという音と共に天井が落下したが、とにかく脱出できた。勤務場所の十号病棟全体が潰れており、上等兵の患者が血まみれになって、将校病室前の石段に腰かけ、頭をかかえてかがみこんでいた。「しっかりしなキア！早く逃げなさい。」と、大声で言ったが、その姿は動こうとしなかった。早く本部へ連絡しようと思って走りだしたが、前方の本部へ通ずる道もなければ、本院の建物も跡形なく瓦解していた。一瞬、呆然として立ちすくんだ。

生温かい血が、右耳後の首筋から流れ出て、上衣をまっ赤に染めた。

旧館玄関あたりでは、日野見習士官(十号勤務)が、眼鏡を吹きとばされ、茫然とした姿でうずくまっていた。「士官殿、早く早く逃げてください。」と、せきたてて叫ぶように言った。竹田婦長は、患者の生死を知る唯一の証拠書類である「在室患者名簿」を取りに、事務室へ取って返した。空襲警報時は「病床日誌」を非常持出し箱に入れて防空壕のなかに納めていたが、倒壊物の下になって取り出せない。事務室と思われる個所を、必死で探し、在室患者名簿を取り出そうと一生懸命であった。このとき、全く火の気の無いところ、倒壊した病棟の端の方から、火の手のあがったことに気づいた。竹田婦長の数メートル後方にも火の手のあがった。神に祈りながら名簿を探していると、「婦長殿！婦長殿！危い！火が出ていますよ。早く堤防に上がって下さい。」と、看護婦の一人が呼んだ。

顔をあげてみると、太田川の堤防の上をゾロゾロと白衣の群れが、肩を寄せあい助けあって北方上流へ向って動いて行っていた。

火炎はいよいよ迫って来た。しかし、どうしても探しださなければという一念で、折り重なっている瓦の間を掘り続けた。もうだめかと思った瞬間、手の先に触れるものがあった。名簿であった。竹田婦長は、その二冊の在室患者名簿を抱きかかえ、猛火の中を抜け出して堤防にあがった。

堤防上には、すでに逃げることのできる者は逃げたあとで、重傷の一〇数人の患者がいるだけであった。その中に十号入院中の遠藤見習士官がいた。抱き起してみれば、下腿から多量の出血で、顔面蒼白、冷汗を流し、意識朦朧の状態である。急ぎ止血を施しているとき、吉田庶務科長に出会った。

生駒梅子看護婦(伊原木・現在井上)の手記によれば、生駒看護婦は、外科一号病棟婦長勤務であったが、朝八時の朝礼を終えて事務室に入り、机の抽斗から書類を取り出したとたん被爆した。もの凄いい閃光を見、ハッと椅子の後を持って光の方を見ると同時に、机の下に吹きとばされて気絶した。“自分は生きている”と感じたとき、力を振りしぼって脱出した。他の看護婦も出て来た。柱に頭を挟まれていた一人を引っ張り出し、外まで運んだが、周囲を見まわして驚いた。すべて崩壊しており、全市が一度に何もかも止まって物音一つせず、空は真黒である。

現場から少し離れたところで、生駒看護婦は、手押ポンプを引っぱり出している吉田庶務科長に出あい、他の二、三人の看護婦と一緒にそれを手伝った。

ベシャンコになった病棟へ引返して、同僚を大声で呼んだが、みんな下敷きになったのか返事がなかった。頭を挟まれた看護婦と頸の静脈を切った看護婦二人を、一人ずつ背負って表門のところから、避難者で大混雑の三篠橋近くに脱出した。岩井看護婦が下痢をしはじめているとき、黒い雨が降って来た。三篠橋から工兵隊の鉄舟で大芝町へ渡り、大芝町からトラックで可部の亀山分院へ行った。

臨時救護所の設置

このような状況下、太田川の堤防(病院の横)に出た吉田庶務科長は、竹田婦長と出あったほか、下士官兵・看護婦など一三人ばかりの者と合流し、その場に踏みとどまって負傷者の治療にあたることを決意した。

このとき、野積みの米俵が対岸からの飛火で燃えだしたので、慌てて傍に積んであった醤油樽の鏡を抜いてぶつ

かけた。あとは満潮の太田川の水をリレーで運んで消火した。すでに午後四時ごろであったから、材料を集めて炊事をし、食後点呼を取り、現在地で当分の間負傷者を収容するよう命じ、兵隊も一般市民もなく治療をおこなうこととした。

皆露出部が火傷で腫れあがっており、油脂を塗布し、病衣を切って湿布し、地面に毛布を敷いて次々に休ませた。兵舎の前庭で朝礼をしていて被爆した四〇歳前後の軍医予備員(医師)一〇〇人は全滅状態であったが、このうちの数人が脱出して来た。軍帽を境に裾刈りしたように頭髮がきれいに焼け、顔と手がブクブクに膨れあがっていた。「手当をしていただいたら、私達も手伝いさせていただきます。」と言ったが、とても働ける容体ではなかった。救援隊来る

この臨時収容所へ佐伯郡五日市町に派遣されていた農耕班井街護軍医少尉以下二〇人近くが救援に駆けつけて来て、救護力が大いに増強した。このほか看護婦や兵の無傷の者が若干集った。

次々と負傷者が集り、六日当日だけでも一〇〇人以上の治療をおこなったが、その夜のうちから烈しい嘔吐と苦悶のうちに死亡する者が相ついだ。

七日以後

七日、吉田庶務科長は軍司令部に連絡に行ったり、収容者の後送を命じたり、被爆以前からの予定疎開分院の開設を命じたり、食糧や衛生材料の手配をするなど、もっぱら管理運営の業務を進め、江波分院近くに住む妻子の安否もわからぬまま、堤防での野宿を一週間も続けねばならなかった。

この日、東城分院から分院長増原由一軍医少尉引率のもとに、分院の約半数九人が救援に駆けつけた。負傷者の容体は、一日経過しただけでひどく変った。胴は、ブタのように腫れあがり、目も鼻も区別がつかず、四肢もはちきれんばかりにキンキンに張って、巨大なイモ虫のようになった。真夏の炎天下、のたうつことすらできず、ただひたすら呻くだけである。夜になると川風も冷めたく幾分か楽になるのか比較的静寂になった。竹田婦長の手記はこの間の情景を次のようにありありと伝えている。

投身自殺

真夜中、苦痛に耐えかねて死を急ぐ負傷者の投身がたびたびあった。鈍い水音を聞くたびに、「また、飛びこんだね。」と、あきらめたように無感覚につぶやいた。未明に起きて負傷者を見廻って歩くと、死体、死体、死体である。その死体をソッと引っ張り出すと、「どうして連れていくのか。」と、そばの負傷者が眼れあがった見えない眼であとを追う。冷たい死体をその負傷者は“氷枕”にしていたのである。引出した死体は堤防の通路一杯になり、それを陸軍船舶部隊の救援隊が、毎日、トラックで搬出した。軍の負傷者は次々と疎開分院へ送られ、東城分院からの救援隊も、四、五日後、負傷者を連れて引きあげた。一般市民は一般の収容所へ転送されたが、これも船舶部隊の活躍によっておこなわれた。このほか数一〇体の死体を堤防上で焼却した。

こうして、それぞれの負傷者を区分処理して、堤防に収容した約六〇〇人の負傷者がいなくなったのは、一週間か一〇日あとであった。

なお、被爆四日めに亀山分院から、この堤防の臨時収容所に帰って来た生駒看護婦は、吉田庶務科長の命令で、佐伯郡五日市町の天理教教会と寺院の両収容所(別図参照)の勤務についた。

五日市分院を開設

この頃、五日市町には井街護軍医少尉を長とする分院が開設され、天理教教会と光禅寺の二か所に負傷者約二五〇余人(軍人二〇〇人 市民五〇余人)が九月上旬まで収容されていた。

三篠橋東詰堤防上の臨時収容所の負傷者も少なくなり、やや救護作業が落ち着いたので、吉田庶務科長は、職責上から病院職員及び入院中被爆した患者の消息調査を始めたが、八月十七日、中国軍管区軍医部に転勤を命ぜられた。

なお、堤防収容所の負傷者を転送し終ってから、職員は一般市民の収容所へ救援班として派遣され、竹田婦長などは、横川の三篠国民学校(収容者数十人)において救護活動に従事した。

なお、負傷者の臨時収容所となった堤防上の娯楽室跡において、昭和二十七年から毎年八月六日には、慰霊会会員及び遺族が多数参列して追悼法要が催されていたが、昭和三十一年八月に、広島陸軍病院原爆慰霊会(現会長松村



米吉)によって「広島陸軍病院原爆慰霊碑」が建立された。

(イ) 三滝分院

三滝分院の状況

三滝分院は爆心地から約二キロメートルの地点にあり、炸裂直後、強烈な爆風によって病舎一六棟と付属建物がすべて倒壊し、黒い防空用暗幕が放射熱線によるものか、各所で発火しでしたが、職員や入院患者の活躍によって火災にはならなかった。

病棟倒壊により患者一人が死亡したが、他の職員や患者は無事であった。

分院長肥後研吉軍医中佐は、出勤途上、分院の正門近くで被爆したが負傷せず、ただちに職員と入院中の軽症患者を指揮して、まず重症患者の救出と救護にあたる一方、防火作業に全力を集中した。なお、小島精三・藤森進両准尉が肥後分院長を補佐して混乱を乗りきっていった。

重症患者は、ひとまず三滝山麓一帯に既設の横穴や広大な避難壕に待避させ、倒壊病舎から診療機器・薬品・衛生材料・糧秣・被服と寝具・炊事道具など、病院運営の必需品を取出し、数日間にわたって、これらの応急整備を昼夜兼行でおこなった。

避難壕に収容した重症患者の診療は、一日もかかさず実施すると共に、疎開壕やもとの病舎跡に患者六五〇人及び職員二五七人が、雨露をしのぐため、倒壊した廃材を集めて仮屋根や仮小屋を、全員協力して二、三日間かけて構築した。

また、病院炊事場跡に天幕を張って、応急炊事場を設備した。重症者には粥食軟菜、軽症者や職員には、にぎり飯と梅干・佃煮などが給与された。食事は保管食糧が十分に使用できたし、また、薬品・衛生材料も取出した在庫品が豊富であったから、診療に支障はなかった。

被爆直後、全病棟が倒壊したためか、市民や一般軍人負傷者が殺到するということにはなかった。しかし、来院した負傷者五、六〇人には応急治療をおこなった。まもなく九州地方から医療救護班が到着し、分院近くに臨時救護所を開設、市民被爆者を収容した。

露営的な診療救護体制から約一週間後、芸備線沿線の三田東(三田村村立・現三田小学校)・井原(井原村立・現井原小学校)・市川(市川村立・現高南小学校)・秋越(秋越村立・現高南小学校)の各国民学校に疎開分院が開設され、大半の患者と職員は、横川駅から貨車数輦に分乗し、重症患者を優先的に輸送、また、診療備品・薬品・衛生材料・糧秣・被服寝具・炊事具などは、病院のトラックにより反復輸送し、八月十五日に三滝分院の移転を完了した。なお、移転に先立ち、軽症患者及び希望患者百数十人を退院帰郷せしめた。

各疎開分院の患者の割当ては、三田東分院約二〇〇人・井原分院約一五〇人・市川分院約五〇人・秋越分院約七〇人、計約四七〇人であった。さらに市民負傷者もここに収容されたため、各分院とも満員となった。

なお、分院移転後の八月十七日、井原分院に広島第二陸軍病院本部が設置された。

(ロ) 三次分院

三次分院の状況

三次分院は、昭和二十年七月二十五日に三次町南畑敷の県立三次中学校(現在・三次高等学校)に開設された。分院長柴田健正軍医大尉以下軍医(見習士官を含む)六人・衛生下士官兵五一人・看護婦長三人・看護婦八〇人・軍属二〇人・計一六〇人が従事し、このうち看護婦二〇人と傭人二〇人は、被爆負傷者収容後に現地採用された。

当初、軍人疎開患者二一七人は学校の武道場・寄宿舎などに収容されていたが、被爆者収容後は、職員室以外の**全教室が病室となり、五三〇余人を収容したため、全収容患者は七四七人に達した(当時・三次中学校教諭堀江文人資料)**。

八月六日正午過ぎ、軍人被爆者六人が備後十日市駅(現在・三次駅)に下車したのを最初として、その後続々と到着した。そのため分院は、六日夕方、駅前に救護所を設け、午後十一時ごろまで救護にあたった。

救護班は、軍医一人・衛生下士官二人・衛生兵五人・看護婦一〇人、計一八人の編成であった。六日以後は、駅前に連絡員として下士官兵若干人をおき、到着負傷者の救護と分院への誘導にあたらせた。

三次分院に収容したのは軍人のみで、市民の被爆負傷者は、駅前において応急処置後、三次国民学校へ約二〇〇人、県立三次高等女学校へ約三〇人を収容した。なお、収容後の調査で軍人が両校に三五人まじっていたことがわかり、これを三次分院に引取った。

なお、収容被爆者のなかには、広島第二陸軍病院本院の職員や入院患者が二〇数人いて、黒帯患者(急性伝染病)も数人まじっていたので、隔離病室を急ぎ設けてこれに収容した。

収容した軍人被爆者のうち一八〇人が死亡し、分院職員が南畑敷の駅裏の山において茶毘にふした。

負傷者が多数のため、医療材料が極度に不足したので、下田正人衛生曹長が広島に急行し、広島師団軍医部の指令を受け、安芸郡府中町の陸軍衛生材料廠府中出張所から相当量の補給を受けた。

収容者の給食は、炊事設備を増設して、重症者には粥食軟菜を供したが、八月二十日ごろから野菜類の入手も多量のため困難になり、九月十七日夜の枕崎台風による大洪水で交通が途絶したとき、下田衛生曹長は三次警察署の保管米を八俵借用して急場をしのいだ。その後は広島の陸軍糧秣支廠から補給を受けた。

なお、八月十日から二十日ごろまで、収容負傷者の看護に、近辺数町村の婦人会から、一町村約六〇人程度の応援を受けた。

九月二十七日に三次分院が閉鎖されたが、回復に向った者は帰郷させ、所属部隊に連絡して召集解除をおこなった。残った者のうち、なお治療の要する者四〇余人は、井原の第二陸軍病院本院に転送した。分院職員は、現地採用の看護婦・傭人は解雇し、その他の職員は、井原の本院に集結後、十月十三日ごろ、その大半が召集解除になった。

ちなみに、昭和三十九年夏、三次分院跡において、原子爆弾犠牲者一八〇人の慰霊祭が、旧三次分院の有志職員によって、盛大に挙行された。

(ハ) 東城分院

東城分院の状況

東城分院は、昭和二十年七月一日、比婆郡東城町の県立東城高等女学校に開設された。

編成は、分院長増原由一軍医少尉下、軍医(見習士官)二人・看護婦長一人・看護婦八人・軍属三人、計一四人であったが、のちに、衛生下士官三人・衛生兵六人が配属された。

当初、回復期患者三〇人を収容して診療を行なう一方、第二次疎開患者の収容準備をすすめていた。

八月六日午前九時ごろ、ラジオ(大阪放送)で、「広島市に新型爆弾投下、全市壊滅の様態。」の情報を聴取したので、増原分院長は、負傷者の分院後送を予測して非常収容に備え、町役場をはじめ各種団体長に協力を要請した。一方、軍医一人・下士官一人・衛生兵三人・看護婦四人、計九人の救護班を急ぎ編成し、救急材料・携帯口糧を持って、七日早朝出発、芸備線の汽車で同日午前十一時ごろ、第二陸軍病院本院跡に駆けつけ、庶務科長吉田一軍医少佐の指揮下に入った。即ち七日から九日までの三日間、初日は敵機の哨戒下、堤防上の臨時収容所において、市民・軍人の負傷者約六〇〇人の救護に従事する一方、負傷者を各地の分院にトラックで逐次後送した。

十日になって、混乱もほぼ一段落したので、軍命令により、さらに東練兵場方面(尾長町一帯)に出動し、十日から十二日までの三日間に延一、三〇〇余人(市民約八〇〇人、軍人約五〇〇人)を救護した。なお、治療した負傷者は、陸軍船舶部隊などの救援隊に現場で引渡した。

医療材料と食糧は、前記の本院救護所の備品(堤防上の疎開物資)を携行したが、払底後は現場付近に出動中の他部隊救護班から交付を受けた。

十三日早朝、東城分院へ負傷者を護送するよう下命されたので、増原軍医少尉以下は、戸坂駅から芸備線の汽車で、負傷者約五〇人を護送し、その日の午後一時ごろ、東城駅に到着、分院に収容した。

これより前、七日夕から三日間、負傷者約二五〇人が東城駅につぎつぎ到着したので、学校の全面協力により、講堂と教室に収容したが、大半が第三度の火傷で、顔面・四肢・全身にウミが流れ、ウジがわいて、悪臭甚だしく救護員のなかには卒倒しそうになった者もあった。

駅に到着するごとに、残留の分院職員と疎開患者全員、および地元婦人会・警防団から約一〇〇人が駆けつけ、担架または戸板にのせて、駅から約七〇〇メートルの分院に運んだ。その大半は軍人負傷者であったが、陸軍看護婦の負傷者も数人含まれていた。ほとんどが重傷で、収容当日から、毎日死亡者が続出し、約二週間、町は死体を焼く煙につつまれていた。

医療は、特別重症者にはリンゲル注射や直接輸血が施された。また、火傷には赤チンキ・チンク油・軟膏・食用油などの塗布、外傷には繃帯が行なわれた。

収容負傷者が急増し、看護力が不足になったので、地元婦人会員や高等女学校の生徒たちが、連日、交替で二〇人ずつ、約二〇日間も看護を応援した。また、敷ぶとん・枕・毛布など民家から多数の提供を受けた。

医療材料は、当初は分院保管品を使ったが、払底後は、町内倉庫にあった軍の疎開医療品の使用許可を得て治療を続けたが、のちにはこれも底をつくという状況であった。

給食は、重症者には、おもゆ・スープ・粥食軟菜を用意したが、ほとんどの者が食べようとせず、ようやく水を

飲むくらいであった。炊事場は、学校の井戸付近に天幕を張り、民家提供の平釜(二斗炊き)二個を設け、地元婦人会員および女学校の生徒が、毎日二〇人ずつ交替で、連日、炊事に協力した。給食材料は、主食の白米や調味料は、分院保管のものでまかなったが、副食材料は、地元商工会から調達を受けた。

八月七日から九月二十日の分院閉鎖まで、毎日多数の死亡者があり、二九九人(97%)に及んだが、その大半は、当初の二週間に死亡した。死体は、町の火葬場において、警防団および衛生兵四人が茶毘にふした。遺骨は、木箱に納め、白布でつつみ、分院の一室に安置し、逐次、所属部隊の担当者に引渡した。その間、遺骨安置室には衛兵を配置し、終始、これを守護した。

八月下旬の復員開始にともない、軍人疎開患者は、逐次、帰郷退院させ、その後所属部隊に連絡して召集解除の処置をとった。

九月二十日、東城分院を閉鎖し、増原軍医少尉以下の職員は、なお治療を要する被爆患者七人をともない、宇品の第一陸軍病院宇品分院(大和紡績工場施設)に集合した。十月二十七日、井原第二陸軍病院本部が国立広島病院創設のため、前記の施設に移転したので、これに併合した。

(二) 井原第二陸軍病院本部

吉村病院長着任

八月十七日、福岡の西部軍司令部軍医部から吉村実軍医大佐が、被爆死亡した木谷病院長の後任として、井原分院に着任した。

井原分院には、分院長肥後研吉軍医中佐をはじめ、三滝分院の主力と、手術・病理・レントゲン線などの診療設備のあるところから、向原・秋越・市川・三田東の各分院の統裁上の便などを考慮し、この日、この分院に広島第二陸軍病院本部が設置された。

吉村病院長は着任するや、ただちに井原付近の数分院、及び三次・東城・小串の各分院の収容患者・診療・給与状況などをつぶさに視察したが、この頃の患者収容状況は、井原本院約四五〇人(軍人一五〇人、市民三〇〇人)・三田東分院約四〇〇人(軍人二〇〇、市民二〇〇人)・秋越分院約二〇〇人(軍人七〇人、市民一三〇人)・市川分院約一五〇人(軍人五〇人、市民一〇〇人)(以上軍人被爆者約四七〇人は三滝分院からの疎開患者)・向原分院約一、三〇〇人(軍人三〇〇人・市民一、〇〇〇人)うち第二陸軍病院本院の疎開患者約三〇〇人)・三分院約七五〇人(うち軍人疎開患者約二二〇人、軍人被爆負傷者約五三〇人)・東城分院約三三〇人(うち軍人疎開患者約三〇人、軍人被爆負傷者約三〇〇人)・小串分院約二〇〇人、計三、七八〇余人であった。診療には、東京帝国大学原子爆弾災害調査団の現地調査、研究発表によって重要なサゼクションを得、重傷者には、リングル注射・輸血のほかに、栄養剤・栄養食品の給与による体力回復がはかられた。また、衛生兵のなかに鍼灸師有資格者が一、二人いたので、灸治療法もあわせおこない効を奏した。

各分院への補給糧秣は、広島の高津支廠から交付を受け、薬品・衛生材料は、安芸郡府中町の衛生材料廠府中出張所から交付を受けて、各分院に補給された。

九月上旬以後は、各兵科復員部隊から糧秣・衛生材料・被服など、大量の保管転換を受けたので、これを使用した。

井原本院設置後の事務処理の主なものは、遺骨の遺族への引渡し、本・分院の患者の処理、職員の召集解除、国立病院の創立準備などであった。各本・分院の収容患者のうち、回復に向った者は、各本・分院から直接帰郷せしめて召集解除の手続きをとった。さらに治療を要する患者は、井原本院に収容した。その間、患者のなかには、無断退院する者も相当数あったが、各分院から井原本院に転送された患者は三五〇余人であった。

市民被爆患者も、回復に向った者は各分院から、逐次、帰郷退院し、要治療患者は井原本院に収容した。

各分院の職人も井原本院に集合させ、予・後備役下士官と衛生兵全員を、十月十三日以後、逐次召集解除した。

こうして収容患者と職員の処理を終了し、十月二十七日、国立病院創立のため貨物を整理、井原本院を閉鎖し、広島市宇品の元船舶練習部兵舎に向って第一陣が出発、十一月初旬ごろまでに移転集結を完了した。

国立広島病院の開設

元船舶練習部兵舎は、広大な敷地と兵舎があり、国立病院創立のための施設としては、当時としては格好のものであった。

病院建物は、元船舶練習部の付属病院を中心にして一〇教練の寮舎を病室に充当し、職員は吉村実病院長のもと陸軍病院の居残り希望者ばかりの陣容で、さらに収容患者は軍人関係のみでなく、一般市民の被爆負傷者をも収容した。

昭和二十年十二月一日、国立広島病院と改め、引続き吉村病院長が管理運営にあたったが、同月五日、突如、朝鮮人引揚収容所にするという理由で進駐軍命令により、病院閉鎖となった。八日頃、進駐軍救急車数十台が来院し

て、収容患者全員を元岩国海軍病院へ移送した。吉村病院長は、急ぎ仁保町丹那の元船舶教育隊兵舎に職員と医療材料を十日までに移転した。更に、昭和二十一年三月初旬、元暁部隊司令部の施設に移り、ここに国立病院が創設された。その後、紅余曲折、多くの困難とたたかいつつ、吉村病院長は昭和二十二年三月三十一日まで、国立病院長として勤務した。

大野陸軍病院の状況

大野陸軍病院は、昭和二十年五月、本土決戦態勢の確立にともない、広島陸軍病院大野分院から独立し、第二総単一司令部直轄病院として、佐伯郡大野町の西南端、古跡名勝宮島を望む丘陵に開設され、結核患者を收容した。

爆心地から約二四キロメートルも離れていたが、爆風によって窓ガラスが破砕し、モルタル塗装の天井の一部が、瞬間、崩壊した。しかし、患者や職員には被害がなかった。

病院長ス林可児雄[しばやしかにお]軍医大佐は、病院隣接の宿舎にいて、広島市の突発的な異変を感じ、急ぎ登院した。

当直明けの中島武三軍医大尉(教育科長兼診療科長)は、朝露を踏んで丘陵を散歩中、背後に異様閃光と轟音を感じた。振りかえって広島市の方を望見すると、巨大な爆雲の柱がすさまじい勢いで上昇しており、同時に本館の窓ガラスが破壊される音を聴いた。走って玄関に行くと、そこでス林病院長と出合った。二人はただちに院長室で話しあったが、広島市の異変はまったく予想がつかなかった。しかし、相当数の死傷者が発生している点は間違いないとして、まず、大竹方面から広島市の建物疎開作業に出動している国民義勇隊(主として婦人)のため、一応、五〇人收容の救護所を、近接の大野国民学校分教場に開設することにし、中島軍医大尉が校長の承認を得て、準備を完了したが、使用はしなかった。

その間、病院付将校その他が次々に出勤して、広島の様子がようやく判明するに至ったのであった。

この頃大野陸軍病院には、患者五〇〇人を收容し、ほぼ満員であったから、(イ)負傷者を多数收容できる救護所を近接地点に開設すること、(ロ)救護班を現地に緊急派遣すること、(ハ)病院も收容力の増加をはかること、この三点をス林病院長が下命した。

全職員は、ただちに、それぞれの部署について受入れ準備を進める一方、救護班は軍装検査を受け、応急医療材料を携行し、患者輸送車・トラック三台に乗って、午前九時半前に病院を出発した。その間、森脇康治衛生准尉が庶務科長(水野宗之軍医大尉出張中)の職を代行、ス林病院長を補佐して応急準備全般の総括にあたった。

ス林病院長の敏速適切な救護対策は、大きな成果をあげたが、病院においても、娯楽室・倉庫・図書室・応接室・診療室などを解放して、收容力の増加がはかられ、午後二時ごろからトラックで送りこまれた者、汽車で来た者、徒歩で来た者など介計一五〇余人を直接收容した。この中には、学徒動員の中学生数十人をはじめ、富士井末古陸軍少将その他の高級将校も含まれていた。

医療は、診療科長中島軍医大尉が全病棟の軍医を指揮して、重傷者には大量補液(リングル注射など)と輸血(一〇〇グラム注射器で直接輸血)を行なった。また、毎日、汚れた繃帯を洗濯する雑仕婦一人が、残留放射能による障害か、白血球が減少したのでこれにも輸血した。なお、輸血には連日、多数の地元民の供血があり、病院は謝礼として氷砂糖(10個入り小袋)を全員に贈った。

火傷には、マーキュロクローム液・チンク油・軟膏の塗布や紙灰・木材の灰の撒布吸着、外傷には、つとめて毎日、繃帯交換を行なった。

本院のほか、軍医の半数の五人ずつが毎日交替で、大野西国民学校救護所の診療をも担当したから、連日多忙をきわめたが、その間、休[やすみ]正司衛生准尉(薬剤科付)が中島軍医大尉の診療総括を補佐した。

なお、本院と大野西国民学校救護所に收容した負傷者約一、四〇〇人のうち、咽頭傷害(原爆症の発症)は、ほとんどの者(但し、收容後約五日間の死亡者を除く)にみられ、「咽頭潰瘍」がその半数で、その他は、咽頭の発赤・腫脹など、潰瘍にいたらぬ程度の者であったが、これらの診療は、主として土居清軍医少尉が担当した。また、眼球損傷者もたくさんあり、これらの治療も行なった。本院には、被爆前、本土要撃作戦に備えて、病院自活の必要上、水野宗之軍医大尉の努力により、岩国の陸軍燃料廠から交付を受けた多量の物資が備蓄してあったので、被爆者の收容治療にあたって、大いに役立った。

大野陸軍病院收容の約四〇〇人(外来原爆患者約二五〇人を含む)に、救護所及び救護班が取扱った負傷者を合計すると、一、九〇〇人を突破する。その間、九月十日に陸軍省の委嘱で、京都帝国大学医学部菊池武彦博士ほか約一〇人の調査研究所が来院し、入院負傷者七六人と外来負傷者一四〇人を、軍と共同診療する一方、病理試験室において基礎的研究を開始し、治療面において、種々助言を行なった。

この菊池博士ら一行は、九月十七日の枕崎台風による山津波で、大野陸軍病院が大半壊滅した際、多くの犠牲者

を出し、貴重な研究資料が失われた、病院側においても、入院患者・職員を含めて一五六人が埋没、海上流出などで死亡した。ほかに入院患者の付添者など約二〇人が行方不明となった(大野町史)。

死体の処理は、当初、病院西北方の山林中の村の火葬場を使ったが、山津波被災後は、付近の海岸において、職員の将校や下士官兵の手により焼却された。遺骨は、病院の霊安室に安置していたが、これも多数が山津波のために流され、または埋没し、その確認に苦勞した。

○大野西国民学校救護所

大野西国民学校救護所の状況

被爆当日の午前十時過ぎに、大野西国民学校の講堂と校舎の全面解放をうけて臨時救護所を開設した。

この救護所には、加藤操軍医大尉で総括し、衛生下士官四人(衛生材料・食糧・警備担当)・衛生兵五人(雑役)・看護婦二〇人(毎夜二交替)、計三〇人が従事したが、被爆負傷者を多数収容したため、大野陸軍病院の軍医全員一〇人が、交替で毎日五人ずつ診療にあたり、更に(イ)町役場職員八人(男三人、女五人)が庶務関係の事務をとり、(ロ)婦人会が毎日三〇人ずつ看護の助手をおこない、(ハ)隣組から毎日三〇人ずつ出て炊事や雑役をし、(ニ)警防団が毎日一〇人ずつで死体の処理にあたり、(ホ)看護婦・助産婦が五人程度来て看護応援をおこなった。まさに町ぐるみの救護活動が展開されたのであった。

八月六日から十日までの五日間に、収容した被爆負傷者一、二六四人のうち、ほとんどが一般市民で、軍人被爆者は一八六人(一般軍人一二四人、憲兵六二人)に過ぎなかった。

収容者は六日午後二時ごろ、一五〇人ほどトラックで後送されて来たのを最初とし、翌七日午前九時ごろ、汽車で一八六人、更にその日の午後五時ごろまでに、トラックで五〇〇余人が到着、続いて八日から十日までに四二七人がトラックまたは徒歩で到着した。

治療は、火傷には油剤塗布、外傷には繃帯をし、重傷者にはリンゲル注射が施された。

給食は、学校炊事場の屋外に、隣組共有の二斗炊き平釜四個を設けたほか、学校所有の五升炊釜二個・三升炊釜三個・水槽・炊事具一式を使用し、隣組員三〇数人が一五人ずつ毎日交替で炊事をおこなった。

被爆当日は、全収容者に粥食が配られたが、七日以後は、重傷者のみ粥食軟菜とし、中・軽傷者には、毎食にぎり飯三個に味噌汁・乾燥野菜の煮こみ・牛罐詰・梅干・佃煮・タクアン・雑魚煮・小エビ(地元漁業者寄付)などが副食に供された。

主食の米は、大野陸軍病院が本土要撃作戦に備えて、三か年間分貯蔵していた保管米を使用した。

収容負傷者一、二六四人のうち、四〇〇余人が死亡し、学校南方の沖山地区共有の火葬場で荼毘にふした。死体は、警防団員が毎日一〇人ずつ交替で、毎日、二、三〇体を焼いたが、氏名不詳者が五三体あり、その遺骨は広島市役所に渡した。

九月十五日にこの救護所が閉鎖されたが、なお治療を要する五〇余人は、大野陸軍病院に収容された。

○現地派遣救護班

現地派遣救護班の状況

六日午前九時半前に広島市へ出動した救護班は、加藤操軍医大尉以下軍医二人・衛生下士官二人・衛生兵五人・看護婦一〇人・及び運転手・助手八人の計二七人で、携行材料は、軍医携帯囊二・医療囊二・繃帯囊五で、このほか、(イ)携行衛生材料(火傷・外傷用薬品、小外科器具、及び繃帯材料などの行李)五、(ロ)食糧は各人にぎり飯一食分を携行した。

救護班員は患者輸送車で行動し、負傷者の収容・転送は大野町役場から派遣されたトラック三台を使用した。広島へ向う途中、庚午町付近までは救急処置を要するような重傷者は見受けられなかったが、己斐駅付近は重傷者のたまり場となっており、救護班の救護所に収容して治療をおこなった。

救護班は、午前十時十分、己斐町の旭橋西話付近の空地に救護所を開設し、軍医・看護婦が治療に従事する一方、大下薫衛生曹長(後准尉)以下の下士官兵七人は市内に前進して、福島・観音・舟入町方面を行動し、約三〇〇人の負傷者を救護所に誘導した。この救護班が行動したのは被爆当日だけで、午後三時ごろ、救護所を閉鎖、帰院したが、その間、第一処置を施した負傷者のうち、なお治療の要するもの約一五〇人を、トラック三台で大野西国民学校に反復輸送した。

以上のとおり、国民学校救護所ならびに現地派遣救護班が収容した負傷者は一、五〇〇余人の多数に達したのであった。

広島陸軍病院被爆の記

井街 譲（当時・広島第一陸軍病院本院外科付軍医少尉）

昭和二十年春、本院には除役診断を出してから、許可を待つ患者があふれている事と、戦局に応じて病院から、これらの兵を疎開して、野菜・甘藷などを作って食糧自給を少しでもしようとの考えから、約一〇〇人近くの除役待ちの患者を、五日市町内の天理教会内と、五日市町西端のお寺の本堂を借入れて若干の衛生兵・看護婦・補助婦もつけて合宿させ、荒地のままに残っていた五日市町の広大な造幣局敷地と、農耕隊として掘り返してイモ苗を植え、菜園を作っていた。

私は、この農耕隊の監督将校として、週二、三回ここを見廻っていた。本院は、既に病院船の輸送も少なくなっていて、あまり忙しくなく、私の専門の眼科としての仕事は、暇になって了っていたので、志願の形でこの農耕を楽しんだ。副山出身の福本曹長(死亡)が当日、行を共にして指揮し、苗・種子の手配をした。

八月六日はすでにかなりイモ畑も繁茂し、菜園も青々とし始めていた。

それより前、私は四月二十日少尉任官と共に営外居住を命ぜられ、白島町の橋畔に下宿したが、岩国・呉の爆撃が続き、これらを実際に、救援隊長として応援したあと、横川町の鉄橋の爆撃の際の危険を考えて、七月始め、漸く、五日市町楽々園の海岸に、格好の家を借入れて移り住んだ。

被爆当日、私は八時前まず農耕隊を巡視してから、広島に向出するつもりで、楽々園の海岸の家から田圃道を競馬場の開墾地へ向う途中、突然、猛烈な光芒を右手に感じ、瞬間に田圃道に伏せながら右方を見つめ無意識に秒数を数えた。己斐の山かげに殖えた光芒がギラギラと光った直後、突然、モクモクと薄桃色の茸雲が立ち昇り、モウモウと拡がり、大きく傘をひろげ約三〇秒位して熱い風圧を右頬に感じると共に、田圃の稲が一せいになぎ伏せられた。近くに一人の百姓女が伏せたまま声をかけて来た。

まもなく、茸雲が大きく拡がりきる頃、広島空は一面に黒い煙が立ち昇ってものすごく燃えさかっている事が想像できた。驚きの瞬間をすごしてから、ただちにあと一キロ程にあった農耕地まで行ったが、たくさんの農耕隊の兵隊たちが、その頃すでに風に乗って広島方面から煙と共に吹き上げられた無数の燃えかけの広告の紙切れなどが、あたり一面に散り落ち始めたのを拾い集めて、広島全市に火災が及んでいる事を紙切れの燃えかすの字などから判定した。

早速、天理教会に宿泊している農耕の兵隊の古参に留守のことを言いつけ、衛生兵二人と、中本看護婦・佐藤補助婦ら五人でにぎり飯各三食分と水筒を携帯して、とにかく、病院へ急行した。九時半頃出発したと思う。

古江町・己斐・三滝付近は、避難の人々がボロボロの服装で続々と西へ西へと逃げて来るのと反対に、私共はずすんだ。市中はまだ燃えているので、途中、三滝から橋を渡って鉄道に沿って進むうち、土砂降りの大雨に遭ったが、雨がすぎると太陽と火の熱気で、またたくまに軍服が乾いてしまった。己斐から白島への道路は、一帯が燃えたあとで、とても通れないので熱気をよけて北へ廻り、田圃道を抜け、更に横川町と白島町の鉄橋を渡った。最初、夢中で橋ゲタを歩いていたが、二、三〇メートルの下に太田川の流れが見え、しかも鉄橋のレールを止めてある橋ゲタが、あちこち炎をあげて燃えているのにおびえて、鉄橋の途中で看護婦など二人はガタガタふるえて泣き出すのを、こちらも恐る恐る渡りながら叱りつけてやっと渡りきった。鉄橋の白島町側から川っぶちに無数の兵隊が、火気をよけてやっとここまで退避し、土手の斜面に横たわっていた。

広島第一陸軍病院本院の教育隊長の更井恒夫少佐ら、病院の将校・兵・患者多数が混っていて、更井少佐は現役であるが、京都大学では五年私より後輩であり、さんざん威張っていた人である。それが私を見つけるなり、「井街少尉、水を飲ませてくれ！」とせがまれた。これらの人は、自分で動けないので船で上流の安佐郡緑井の国民学校まで輸送される事になっていた。適当に水を分けてのませて、私どもはすっかり焼けおちた火気のなお激しい病院あとへ、川っぶちを通過して行った。教育隊も何もかもなくなってしまっていたので、途中溝をとび越えながら、本院の炊事場の裏のいつも釣をしたりしていた場所までたどりついた。

白島についた時刻は十二時半位であった。

本院はすでに焼けつくしていたが、患者と衛生兵・軍医・薬剤官など助かった人たちが堤防にかなり集っていた。直径七、八寸もあったクルミの木なども、みな背の高さ位で折れちぎれ、鶴などが入っていた大きなゲージもふき飛ばされてしまっていた。太田川には、無数の材木が浮遊していたし、その間に裸の死体があちこちに混って流れ、これが上げ潮になると川幅一杯に材木が屍骸をまじえて押し上げて来た。

精神病棟や引揚寮のあった当りも何も残らぬ程、また川辺に近くの娯楽場・集会場なども、そのあとが判るだけであった。お昼について数時間を何をして過ごしたか、もはや余りははっきりした覚えがないが、晩に一部の兵たち、船舶兵団からの応援もあったらしく、救急食糧としておにぎりの炊出し、凍らした蜜柑などが与えられた。焼けあとにトタンや、ムシロなどが集められ天幕がはられ、川原に集って来た負傷兵・二部隊兵や幼年学校の生き残った生徒も加わって天幕に收容された。

收容兵の世話は、生き残った事務員や電話交換台の女性まで混って、第二外科病棟の新宅婦長や、第一外科病棟の生駒婦長も、衛生兵とかいがいしく水を飲ませたり、食物の心配をしたりしていた。夕刻まで川向いの街並が、燃えつづけたが、向う川岸の三階建てか四階建ての倉庫の窓という窓全部から火を吹きつづけ(これはメリケン粉の倉庫である由であった)、また、大きな楠の木が胴だけになって芯が煙突の様にもえながら火を吹いていたし、時々龍巻がふき上げて、川から向い側の火勢をあおり、トタンが数枚二、三〇〇メートルもと思われるほどふき上げられていた。先刻、あんなにドシャ降りだったのに熱気と八月の酷暑で身体がバサバサに乾いた感じで、川原では集会場のあとにあった井戸から、汲みあげた水を沸かしたり、暇でボーッとした人たちは無数に死んで浮いている魚をすくいあげて焼いていた。

菓剤大尉の現役の顔見知り、爆風で死んだ鶴を料理して焼いて皆で食べていた。鶴を喰うのなど殿様みたいなどと冗談を言った。

白島の方に近い、教育隊の裏のあたりの広場には、船舶兵が和船を槽ぎ出して材木をわけて、流れている屍体に綱をかけては引きあげ、何体かを乗せては堤防へ運んだ。堤防では散乱した古材を組合せては死体をのせ、また古材を組合せて山のように積み上げ、油をかけて材木と死体を一〇体くらいずつ一挙に燃やす作業をしていた。このような作業は、十四、五日ごろまで続いたようであった。

六日の夜は、連れて行った兵と看護婦も皆、川原の天幕のあたりで野宿した。街中は、まだ熱気に包まれていても、夜風が涼しく、対岸の火や、夜空の星を眺めて何やかや現実の事を考えていた。

翌朝、目覚めると共に、本院の中のあちこちの防空壕の中などに生き残っている人がいないかを、三人位ずつ探して廻った。今は兵庫県の飾磨の沖の家島で暮している村岡曹長など壕の中で半死の状態であったのを、見つけ出して来た。

特に、私がいつもいた外科第二病棟の士官室の北窓の位置に、倒立の状態で焼けてしまった死骸をみつけた。下腹部のあたりが、建物にはさまれたまま燃えたらしく、下腹部はまだ、すっかり炭化してはいなかった。私と同室の小野田士官のものでないかと思った。

あちこち、尋ねまわってみた。娯楽場の前の池には、暑さをよけて飛び込んだ人の死体がすでにフヤけて、ブクブクにふくれ上がっていた。眼球が直径五センチメートル位に膨化して破裂もせず、眼窩から脱臼して飛び出して青ぶくれになっていた。これも一体あて拾いあげて川原で焼いた。

七日の夕刻、ひとまず連れて行った四人を主として生き残って元気な人は、何とか動ける患者を引率して一〇キロメートル余りの道を、己斐を経て、古江の海岸を歩かせて、五日市町へ戻った。その後は連日、除役予定だった作業兵が、陸軍病院の救護作業につくため、二分隊ほど白衣のまま隊を作り、大八車を引いたりして通った。

七日の夜おそく帰りついたら、楽々園の海岸の自宅は、防波堤の傍にあったため、爆風と堤防からの爆風の反射波にはさまれて、一挙にガラスが全部、障子の棧まで飛んで破れてしまっていた。

翌日から、五日市町の救護班を作り、毎日のように、六〇人余りがあと片づけに通った。

八日午後、東上していた元吉院長が帰広された。前後して、仁科先生が東京から来られ、陸軍病院跡でお目にかかり、原子爆弾であることを伺った。

收容されたボロボロの病衣の兵隊に、船舶部隊から軍靴や、下着が若干配給された。

八日の夜、多数收容したとき、四〇人くらい收容している天幕の中の一人の兵が、突然、天皇陛下万歳と叫んで死んだ。苦しいのを我慢し続けて、こう叫ばねばならぬものと思って、息絶えた兵を本当に哀れと思った。

被爆二、三週間前には地方の医師で、いつまでも軍医志願をしなかった四〇歳前後の兵役義務の期限切れ直前の人たち、従って殆んどが、病院では中級以上の院長や大学の講師・助教授連、一二五人程が召集され、衛生兵として教育隊に猛訓練されていた。この中には、京都大学の先輩たちも数人いたが、面会はなかなか許可されず、名簿だけで知った。教育隊長は、二年先輩の西川大尉であったが、被爆時は丁度、朝礼の直後の事であり、殆んど全滅とも、数人生き残ったとも聞いた。

五日市町に居住されていた西川夫人から頼まれて、また夫人自身も、直接見に行かれたが痕跡もなく、私は大尉の居室のあとと思われる処から、血球計算用のメラングジュールの熔解したガラス片を、遺骨の代りに拾って届けた。それにしても一〇〇人余りの人々は、どこへ消えたのであろうか？

散り散りになった各部隊の生き残り兵が、それぞれフラフラしながら、隊伍を組んで移動し、無気力に動き廻っていた。

收容された兵の中でも、八月二十日前後になると、血便を出して衰弱する者や、広島赤十字病院や通信病院の焼ビルに送りこんだ兵たちが、次々と死亡した。

歯をみがくと、歯ぐきから出血が止らず、血餅が出来て、これをひっぱり取ると、また出血するなどが多くの兵にみられた。

広島陸軍病院本院あとに一時は、二〇〇人位もいたと思われる兵も、ようやく川原からトラックなどで、戸河内・向原国民学校などへ、分散輸送されていたので、暇をみて、これらを連絡し、見廻った。

向原には、広病関係の傷病兵・看護婦が、なお相当働いていたが、講堂の壁面には新しい祭壇がつけられ、更井少佐や、木谷大佐の遺骨が上壇に白木の箱に入れて並べられ、一〇〇以上の小箱がぎっしりつまっていた。

被爆直後、西部軍司令部は、吹き飛んだ広島大本営(元広島城内)の地下壕や東練兵場の壕におかれたから、そこに連絡に行き、種々の情報を受けた。十日頃には全滅した軍医部には、駒田閣下ほかに交じって、同級の現役軍医大尉川上・福家両君が転属して来て、まもなく軍医部は、五日市町に移転し粗末なバラックに入った。私どもは仕事も命令系統もはっきりせぬまま、五日市町と陸軍病院跡・軍医部・向原国民学校などを転々と歩いて通った。

十日頃は夜半、焼けあとの電車路を通り、己斐の町をすぎて五日市町へ帰るのに、途中こわれた古材の堆積が、いつまでも燃えくすぶる中を通り、幽霊でも出そうな荒野原を帰ったが、己斐の焼け残った家々は、家が傾き、戸もなくなった家の中に蚊張がつられ、奥の方に灯明と念仏の音が、しずかに聞える間をうす気味わるく思いながら、たびたび帰路についた。

二十日前後から急速に貧血・出血死亡者がふえて来て、軍医部で問題が出て、至急、対策を施すべき事が話され、駒田閣下から川上・福家大尉に相談がかけられ、血液病の大家を広島に招請する事が話され、井街が使者として二十六日、京都大学へ派遣される事になり、天野助教授(病理学)・杉山教授(病理学)に二十七日面談依頼した。

井街が使者として京大へ行き、原爆調査班を京大で結成して貰い派遣された真情は『広島医学』に菊池武彦博士(現大阪赤十字病院院長京大名誉教授)が詳しく書かれたので略す(広島医学二〇卷二・三号一九六七年)。

八月十五日、ラジオで重大発表がある事を知らされたが、陸軍病院の川原ではラジオが無く聞けなかった。しかし午後になり、東練兵場の司令部から帰った者の話や、軍の通達で戦争終結を知った。

この日は、なお川原には多くの天幕ははられ、なおたくさん輸送待ちの各分院からの患者や、レブラの患者まで混じって收容されていたが、終戦のしらせと共に一生懸命働いていた看護婦・衛生兵など、呆然とし、まだかなり興奮している者があった。この頃になると、五日市町からの通院は、時には宮島電車で、時には汽車・貨物車などに満載され、また、ブラ下がって通い、鉄橋などでは必死で汽車のデッキにくらいついていた。余り飯[メシ]らしいものも喰べてないのに体重が少なくなっていたにしろ、腕力だけはかなりあったと思う。

市内電車もところどころ動き始めたのは、二十日位であったろうか？七五年間生物が育たぬといわれたのに到る処に、無数の馬や、人の死骸のあったお陰で、家一つない広島の街中を走る電車の天井・つり革に真っ黒に蠅がへばりついて気味わるく、生物の育たないという事に疑いが生じた。

八月二十五日、それまで川原から見渡す限りの周囲の山や丘は皆、こげ茶色であったのに、何となく青味がみえ始めている事に気づき、また、陸軍病院跡でも気がついてよく見ると、サツマ芋の一度枯れた苗から、青々と新芽がふき出し、たまらなく嬉しかった。

八月二十六日、派遣されて軍医部から京大へのお使いとして、五日間広島を離れた。

私は広島陸軍病院本院を離れて、京都帝国大学原爆調査団の接待将校として、大野陸軍病院を本拠として働く事になり、五日市町の軍医部と大野浦などを、九月二日から九月十六日夜半の、大山崩れまで、更に、大野陸軍病院の全滅後も、再び大野浦の死亡者の跡始末や、あちこちへ連絡を命ぜられた。九月下旬より十一月八日解除命令までの頃には仕事も次第になくなり、暇になるにつれ、深まる秋を生き残った大野の病院長などと大野浦で魚釣り。松茸狩りなどですごし、十一月八日貨車で大野駅より、無事一年十ヶ月の広島生活を終えて京都に帰還した。

概要

昭和二十年六月、千葉県佐倉において、新しく編成された本土防衛部隊である。七月上旬、佐倉から広島県賀茂郡原村(八本松)原廠舎に移駐し、終戦までいた。

広島市の被爆当日は、聯隊長後藤四郎中佐指揮のもと、第三大隊(約一、〇〇〇人)が山陰の大山地区で、敵要撃の陣地構築を進めていた。しかし、聯隊の主力は原村にあった。

原村では、八月六日夕方、各中隊長が本部前に集合を命ぜられ、聯隊副官の命令下達により、ただちに救援隊出動の準備をおこなった。同日午後七時ごろ、前任大隊長木田大尉指揮によって、原村駐屯の兵力の大部分が出発した。

このとき第七中隊長として出動した土橋慶治中尉の手記によれば、その状況は次のとおりである。

(一) 原村廠舎における状況

原村の状況

八月六日午前八時過ぎ、土橋中尉は原村廠舎隊長室において執務中、一瞬、閃光を感じた。しかし、空襲は常時受けていたため、爆弾によるいつもの閃光と考え、そのまま机に向っていたが、室外の騒然とした気配に、どうしたのかと外へ出てみた。

見れば、多数の兵隊が集って、上空を指している。その群れにまじって、ともに天を仰ぐと、そこには腐敗した肉を思わせる無気味な色をまじえた独特の固型雲が立ち昇っており、その中からパラシュートが姿を現わし、静かに漂うのが見られた。

言い知れぬ無気味な感じをいさきながら、じっと見つめていると、キノコ雲の沸き立った脚下から、さらにまた、新しい雲かと思われる灰色の煙がモクモクと出現した。

B29が空中衝突して、その機体が落下し、地上の石油タンクに命中したのだろうと、臆測する者もあったが、その実態は、さっぱりつかめなかった。そのとき、衛生兵がとんで来て、「隊長、あの雲は毒ガスだそうですから、全員防毒面を着用するよう本部で言っております。」と、伝えた。

土橋中尉は、巨大な煙雲が次第に上昇する光景から、空中衝突説も毒ガス説も否定し、やがて解散した。一同は実態のわからないまま、まもなくその日の教練に没入したのである。

(二) 出動の状況

出動命令下る

六日夕方、各中隊長は、本部前に集合との命令があり、全員集合したが、午前中の異様な雲の上昇を遠望していたため、何か特殊な緊張感が漂っていた。まもなく聯隊副官が出て来て、救援隊の出動命令を下達し、はじめて広島市の惨状を知った。しかし、それが原子爆弾によるものであることは、夢想だにしなかった。

「第二大隊は、ただちに救援作業資材を携行、出発すべし。」という命令にしたがい、所要の人員を残留させ、主力をもって大隊長出川大尉の指揮下に入った。時に午後七時ごろであった。

八本松駅まで行軍し、午後八時、暗黒のなかを汽車に乗りこんだ。汽車は速力鈍く、ようやく広島市郊外の向洋駅(?)に到着した。ここから行軍して広島市内に入ったが、すでに七日の夜明けであった。夜のしらじら明けに見る市内の惨状は、想像を絶していた。

(三) 救援活動の状況

救護活動

原村廠舎から急ぎ出動した救援隊は、聯隊本部の一部、及び土橋中尉の所属する第二大隊であった。土橋中尉の指揮する第七中隊は、一部を原隊に残置し、人員おおむね一六〇人程度で、指揮班、及び三小隊の編成で出動した。

広島市に入ると、まず中国軍管区司令部(大本営跡)に行ったが、建物は焼失し、天幕で仮設した敗残姿の司令部があり、負傷した松村参謀長と少人数の将兵がいた。根こそぎ倒れた松の枝に、どこから飛ばされて来たのか、一個の革カバンが引っかかっており、その中から、ま新しい巻タバコの小箱が転がり出て、あたりに散乱していた。

ここで指定された第七中隊の作業位置は、大本営跡西北の陸軍病院の跡である。その作業は、主としてその周辺の重軽傷者を、近くの川土手に仮設された救護所に収容することとなった。

陸軍病院の北側の堤防には、天幕を張って応急救護所が作られていたが、ここで医療活動に活躍している人々は、陸軍病院所属の生き残りの軍医・看護婦、および救援の地方医師であった。

聞くところによると、六日朝、陸軍病院の院庭において、教育隊や軍医予備員(医師)が整列し、朝礼最中に被爆、わずか数人が脱出したが、この脱出した数人が、血のにじむ繃帯にわが身を包みながらも、必死に治療活動を行っていた。

しかし、収容する負傷者は、次々に死んでいき、治療中に息絶える者がほとんどであった。収容－死亡、収容－死亡と、その痛ましい作業が休みなしに繰返され、文字どおり生地獄を現出した。

死体は一か所に集めて安置したが、衣服を着用したままの姿の人、衣服はすっかり焼け果てて、男女の区別も判明しない黒焦げの死体、または、下半身なく上半身のみの人、さらに、内臓部のみ焼け残った残骸などが折り重なっている。

このような屍体を、城の濠のなか、堆積した瓦礫の下、あるいは崩れかけた防空壕のなか、厚く積もった灰の下などから引出して収容、整地した場所に安置した。そして、できる限り多く、収容者の氏名を調べて記帳し、市役所(残存職員受付)の方へ連絡した。また、肉身や知人が探し集れば、案内して、判明した者は引渡した。

この作業の最中に、陸軍病院勤務の一人の看護婦が出張先から焼跡に帰って来たが、変り果てた情景を見て、ただ呆然と立ちつくしていた。土橋中尉は、その看護婦を死体の安置場所に案内して、身元の確認を求めた。看護婦は、その死体を恐れ気もなく調べゆくにつれ、「あっ…さん！」と、抱きつかんばかりに絶叫し、「あっ！あなたも…」と、また泣き崩れた。

ま夏の太陽は、容赦なく地面を灼き、今にも燃えつきそうに思える焼跡を、トボトボと放心状態で、治療を受けようと、ハダシの負傷兵が仮設のこの救護所にやって来たが、生き残った人は、ごく僅かであった。

七日は、収容・救護の作業で一日が終ったが、夜は、川ぞいに約六キロメートルほど南西部に上った山峡の部落の民家に泊った。

その部落へ行く道々、また、部落の周辺にも稲田がかなり多く見られたが、爆心地方向に面した稲田は、ほとんど枯死して灰色となり、家の陰や木の陰など遮蔽物のあった場所は、その遮蔽物の形そのままに青々と残り、はっきりその輪郭を示していた。また、部落の背後にあった山の樹々も、まだ八月というのに十月半ばの枯葉のように、ガサガサに枯れ果てて、放射熱線の凄まじさを示していた。

部落の家の屋根瓦は、爆風のためほとんどが崩れ、完全なものは一つも見受けられなかった。建築してそれほど年数の経っていない家(土橋中尉の宿泊所)も、土台は完全に三寸ほど根石からはずれて、建物全体が爆風によって移動していた。

第七中隊の兵は、毎日、作業に出る前と帰ったときに、崩れた屋根を補修した。ある時は、部落の人の知らせにより、幾つかの身元不明の死体を収容し、部落の高台にある墓地に埋葬した。市中の劫火から逃がれて来た人たちが、精根つきはてて山中に独り倒れていったのである。その中の一人、巻脚腫に身をかためた中学生の姿があり、暗くなりかけた墓地から、しばらく離れられなかったという。

(四) 作業の終了

救援作業に従事中、ソ連が参戦したため、急遽北日本に反転の命令が下り、その準備中、終戦を迎えた。土橋中尉は、玉音放送を、火葬する煙なお消えやらぬ焦土の広島で聞いたが、「如何に語りて兵の前に立つか」と考えながら、原村廠舎に向って行軍を開始したのであった。

第七節 市内各病院の活動...434

第一項 広島赤十字病院...434

一、被爆当時の概要

概要

(一) 所在地広島市千田町一丁目四九〇番地ノ一

建物の構造	建物の面積(延坪)	被爆時の在籍職員数(人)	被爆時の出勤者数
本館 鉄筋コンクリート 三階建	1,489.672	医師 二七、看護婦 三四、 看護婦生徒 四〇八、 薬剤師 六、職員 七九 以上 計 五五四	不明であるが、医師は 出勤途上に被爆した ものが多かったよう である。
中央病棟 右同	614.773		
北病棟 右同	820.817		
隔離病棟 木造二階建	96.703		
その他付属建物 木造	894.266	入院患者 約二五〇人	

(二) 爆心地からの距離約一・六キロメートル

(三) 病院長陸軍軍医少将竹内鋈

(四) 事業の概略

戦時体制により、広島陸軍病院赤十字病院として、外来は一般市民の治療をおこなっていたが、入院は陸軍の患者を収容していた。

二、防衛対策の概要

(一) 医療機・寝具などを安佐郡田口(現在・高陽町)の役場倉庫に、また、看護婦の制服その他附属品を相当量、賀茂郡畑賀に疎開した。

(二) 全職員をもって、救護班・消防班・消毒班(防毒ガス)・庶務班・疎開班(物資)を編成し、それぞれ班長が統率した。また、宿直も庶務宿直・医員宿直・薬局宿直・看護婦を置き、その上に宿直指令(医長が就任)がいて、全体を統轄した。

(三) 本館屋上の一部(講堂の上)に常時水を張っておくと共に、残余の場所に赤十字のマークを大きく描いて病院の表示をした。また、各病棟に水槽を設け、院内の広場の各所に防空壕を設けた。万一の場合の避難対策としては、第一次院内南広場、第二次広島文理科大学運動場を避難場所に指定していた。

(四) 院内の広場を耕し、サツマ芋と薬草を植えた。

三、被爆の惨状と救護活動

五日夜

八月五日の夜は、たびたびの警報発令で防衛当直者はそれぞれの部署を守り、夜を明かした。六日午前四時半ごろから、担送と護送の軍患者約五〇人を比婆郡庄原赤十字病院へ転送する準備をはじめ、七時の汽車で送り出したあと、七時過ぎに警戒警報が発令されたので、防衛隊長山崎晃齒科医長の指揮により、各自部署につき警戒態勢の万全を期していた。

原子爆弾炸裂

竹内院長が、警報解除後の午前八時少し前に登院し、五日夜から防衛当直をした佐々木輝文医師の状況報告を受け、ついで岡田ヒサコ主任看護婦(八月十七日死亡)からの報告を聞いているとき、突如、原子爆弾が炸裂したのであった。

竹内院長は院長室前の廊下で気絶していたところを医学生の大黒康平に助けられ、外に運び出されたが、下顎骨折など七か所の骨折という重傷であった。

惨禍甚大

鉄筋コンクリート建ての病院は、その外郭だけは残ったが、強烈な爆風によって窓ガラスは吹きとばされ、室内も無残に破壊され、惨憺たる状態に陥った。約二五〇人の軍患者をはじめ、医師・看護婦及び看護婦生徒など負傷者が続出、死者も出て大混乱となった。

病院三階西端に入院していた橋本不二夫海軍見習士官(海軍二人入院)は、原子爆弾の炸裂の閃光と異様な空気の振動を感じ、話をしていた益谷陸軍中尉と、とっさにベッドの下にもぐりこんだ。橋本見習士官は、昭和十九年七月、アメリカ第七艦隊のフィリピン奪回作戦において、左前膊貫通銃創を受け、台湾の陸軍病院を経て、広島赤十

字病院に入院中であつたのであるが、戦場の経験から機敏な動作をとることができたのであつた。

軍患者や看護婦たちのただならぬ叫喚に、おそろおそろ室を飛び出し、屋上をかけあがって周囲の様子をみると、広島市街が消え去っていた。地球が消滅する瞬間のような幻覚に襲われ、今にも病院の建物が足もとから崩れ去るのではないかとおもわれた。すぐもとの室に引返し、流血で白衣を染めている益谷中尉を肩にかついで、地下の防空壕へ運び出した。

病院の廊下や階段は、おびただしい壁や窓枠・窓ガラスの残骸で歩くことも困難である。その中を患者や看護婦・看護婦生徒(当時は、看護婦少なく看護婦生徒が多数従事していた。)たちが恐怖におびえて右往左往していた。みんな負傷し、白衣は血まみれである。ある者は、カーテンを引裂いて腕の傷をしぼり、ある者は、シーツを裂いて額の傷をおさえ、何が起きたのかと見きわめようと、わが身を忘れて、今、自分は何をすべきかと、自分の持場を探して駆けまわっていた。

一六、七歳になつたばかりの看護婦生徒たちが、白衣を引裂かれ、頭から壁土をかぶり、血潮を浴びて人相も識別しかねるほどの姿になりながらも、軍患者の安否を気づかい、傷ついた同僚の救出に一生懸命であつた。

生徒寮の倒壊

益谷中尉を肩にかついで、橋本見習士官が地下に降りていくと、破壊された壁や窓枠にさえぎられていて、防空壕に入ることができなかつたから、南側の運動場に連れだした。そこから、構内西隅(病院から約三〇〇メートル離れる)の看護婦生徒寄宿舎(済美寮)が、倒壊しているのが目に入った。済美寮は木造二階建ての建物で谷口オシエ婦長(現姓・絹谷、ナイチンゲール章受章)のもとに分寮を含めて四〇八人の生徒がおり、病院勤務中の者と分寮の者を除く在室者が下敷きになつていた。

橋本見習士官は、益谷中尉をそこに置いて、反射的に起きあがり、駆けつけると、落下した瓦の隙間から人の顔が見え、救助を求める悲痛な泣き声が聞える。瓦をはぐって最初の一人を救い出し、すぐそばのイモ畑のなかにかついで寝かせた。その生徒は、赤痢で別室に隔離されていたので、寝巻姿であり、恐怖で口もきけないありさまであつた(このころ八〇数人の生徒が赤痢にかかり臥床していた)。

次の生徒を救出しようと、押しつぶされた屋根にあがろうとしたとき、谷口婦長が反対側の建物のかげから這い出して来た。その谷口婦長の手記によると、八月五日夜半、空襲警報が発令されて、勤務員はそれぞれの担任場所についた。解除後、各人自室に帰って眠り、六日午前六時起床し、一五分後に院庭において点呼をとった。七時過ぎにまた空襲警報が発令されたが、間もなく、解除になつたので、各自勤務場所の掃除及び診療準備をおこなつた。作業の終了した者は食堂で朝食をしたり、勤務前の小憩などしていて、午前八時十五分を迎えた。谷口婦長は、婦長室で永岡ハヤ子婦長(現姓・木村)と事務を打合せ中、窓外に閃光を見ると同時に、倒壊建物の下敷きとなつたが、運よく衝立が落下物を支えたので、押しつぶされることを免れ、上に這い出る事ができた。

周囲の真暗な中で、ロ々に生徒たちが谷口婦長を呼んでいた。その声でわれに返つた。「助けてあげます。静かに待っていなさい。」と言って、本館へ救助を求めに行った。一方、本館からは、山根書記が状況を見に来て、軍患者や元気な職員を集め、急ぎ救助にあたつた。

看護婦生徒の惨禍

住吉アヤコ(甲種一年生、現姓・栗原)は、寮の机に向つていて被爆した。まっ暗な一ツ時が過ぎたとき、落下物の下の隙間にうずくまっていることに気づいた。大声で助けを求め、力の限りもがき続けていると、物の隙間から血に染まった友人の顔が見つかった。血でヌルヌルしている手と手を引っ張りあいながら、長時間かかってやっと這い出た。

江畑郁恵(甲種二年生、現姓・前島)は、前夜空襲で避難した地下室の掃除を友人たちとしているとき被爆した。青白い閃光を背後から受け、ドーンという音響をきき、平素の訓練どおりにすぐうつ伏せた。しばらくすると階上騒々しくたつたが、周囲はまっ暗であり、どこから落ちたかと思われる程の箱や土が地下室を埋めて、閉じこめられてしまった。暗い中で顔を手でなでてみた。ふと非常階段があることを思いついて、這い出すと、そこに一人誰かさかさまに倒れていた。外は大混乱に陥っており、すぐに自分の予防衣を裂いて、近くにいた二、三人の負傷者の止血をした。

山隅文字(甲種一年生)は、食堂で朝食をとろうとしたとき被爆したが、ピカッと光ると同時に、テーブルとテーブルの間にしゃがんでいた。物の落下する音と悲鳴があがり、地から揺りあげるような、また、横に揺るような激しい動きのなかで、壁土の臭いが鼻をつく。「静かに落ちついて…」と叫んだが、建物の動揺がとまらない。同僚七、

八人のうめき声がきこえる。

頭上の材木を押しあげてみると、すぐに動いた。数本動かして足を立ててみると頭が外に出た。屋根のままで落ちている部分があり、その下に二年生が一人いて、「危い、ひっこめ！」と叫んだので、また、材木の中にかがんだ。誰かの声がするので外に出た。谷口婦長が土煙の中から、髪を振り乱して駆けて来て、「早く出て、助けなさい。」と言った。朝食のテーブルに並んでいた他の二人も無事に出て来た。

安達久子(甲種一年生、現姓・勝田)は、朝食後、済美寮本寮から木村絹子・松村香月など数人の同級生と、分寮玄関に入りかけたとき被爆し、一〇メートルばかり爆風で吹きとばされた。落下してきた屋根や棟木の下敷きとなったが、落下物を押しのけて、靴をひらうと木村絹子と二人で上に出て、病院の方へ急いだ。

徳永芳子(甲種一年生、現姓・橋本)は、分寮(広島女史師範学校附属山中高等女学校舎の一部)から貯金局脇を歩いて病院へ出講する途中で被爆し、帽子を飛ばされた。すぐに寮に引返したが、寮は斜めに押し倒され、全壊に近い状態であった。

廊下と便所が辛うじて建っていたが、自室はその便所によりかかって倒れており、どうにか出入りができるくらい開いていたから、四つん這いになって中に入り救急袋だけを持ち出した。すぐ近くの文理科大学の倒れた建物から煙が上がりはじめており、廊下では女子高等師範学校の生徒や看護婦生徒が右往左往していた。下敷きになってもがいている生徒がいたので助け出したが、二人とも血で白い夏服が染まっていた。

松浦幸子(甲種一年生、現姓・田中)は、食堂の入口で被爆し、閃光を感じたあと気絶した。

朝食が八時からであったから、院内勤務の看護婦と生徒が一〇人たらず、それに食堂勤務の生徒が数人いたが、みんな倒壊建物の下敷きになった。

助けを呼ぶ声の中で気がついたが目があけられず、時間もわからなかった。寮は火災となり、煙にまかれてしまった。意識がようやくはっきりするようになってきて、病院の地下室に収容されていることを知った。そこで骨折箇所その他の負傷箇所に一時的な処置を受け、病院玄関前の広場に運ばれて、そのまま、六日夜を明かした。

木崎俊子(乙種二年生、現姓・川中)は、病院三階の手術室で被爆した。オレンジ色がかった黄色の閃光を感じ、すぐ目と耳をふさぎ、口をあけて伏さった。ドーンという音とガラスの壊れる音が一緒であった。少しして口にゴミが入るので、目をあけたが、まっ暗闇、上田主任の名を大声で呼んでいるうちに明るくなった。上田主任は吹きとばされたドアの下敷きになり、頭から血が流れていた。それを助け、たまたま傍にあったケッテルから消毒ガーゼを取出し応急手当をした。上田主任と一階へ降りるとき、三階会議室に疎開していた生徒のふとんが、前の講堂の方まで一ぱいにはみ出していたのを乗りこえて、一階の正面によりやく脱出した。そこにはすでに、男女の見分けもつかぬ黒く煤けた全裸半裸の人々がたくさん集っており、救助を求めている。

森田千代喜(甲種二年生、現姓・泉)は寮の階下南側(隔離病室)の窓に近いベッドに臥床していた。数日前から下痢症状を伴い、赤痢の疑いで隔離されていたのである。黄色の閃光とドンという炸裂音がしたので、その方へ目をやると、硫黄ガスの臭いが鼻をついて流れて来た。「あっ危険薬品が爆発した」と思った瞬間、上から天井が崩れ落ちた。気がついてみると、大きな梁の下敷きになっていて、腰の自由がきかない。大声で救助を求めた。同室の同僚たちも叫んでいた。自力で抜け出していく者もいたが、自分はどうにもならなかった。ようやく軍患者が救助に駆けつけたらしく、その声が聞えてくるが、自分の必死の声はとどかないらしい。油汗がにじんできて、息がつまりそうになり、死ぬるのではないかと思ったが、ようやく叫び声が上の方へとどいた。頭上にスコップの音がきこえ、引っ張り出された。被爆後、二時間くらい経過していたらしい。担架で中庭の空地に運びだされたが、すでにたくさんの負傷者が炎天のもとに呻き苦しんでいた。

児玉春美(甲種一年生、現姓・木下)は、赤痢患者として隔離病室(娯楽室)で寝ていたが、北側の窓が異様に光ったのでどうしたのかと思って窓へ近づいたとき被爆した。

強烈な爆風で、ガラス窓が破られ、その破片が顔全面に突き刺さったまま、倒壊した建物の下敷きになった。噴き出る血で両眼がつぶれ、意識を失った。何時間かたってから気がつき、「助けてください」と叫んだ。もう夕方であった。呉から来た海軍の兵士がその声で柱をのぞき救出されたが、すでに火が燃え移っている時であった。

負傷しながらも救出作業をしていた栗原タカエ(甲種一年生、現姓・川口)が、盲目の児玉春美の手をひいた。

「電線から火がポトポト落ちているヨ。」

「柱がある。またいで…」

など注意深く言いながら、地下室に連れていった。

「階段だからソロソロと降りてヨ」と、栗原が言いながら降りて行ったが、地下室は、すでに運びこまれた負傷者で一杯であったから、入口のところで横にならざるを得なかった。

ここでまた児玉春美は意識不明になった。翌七日の朝、チカチカと朝日が顔を射して痛く、そのために気がついたが、やはり両眼はつぶれたままであった。

救護班の人であったと思われるが、横になっている児玉春美の衣服につけている名札を見て、看護婦生徒であることを知り、地下室から玄関横の治療所へ運ばれた。そこで初めて応急手当を受けたが、手や頭の負傷個所の出血がとまらず、七針縫合してもらった。両眼は、被爆の日から一週間もつぶれたままであった。

栗原タカエは、必死で下敷きになった同級生の救出作業を続けたあと、殺到した負傷者の救護作業に引続き働いたが、ある日、突然、多量の吐血をした。原子爆弾による障害は、外面的な負傷だけではないということが当時は判らず、元気な者として作業にあたっていたのである。

木下セツ(甲種二年生)は、夜勤明け直後、寮の食堂に行き長椅子に腰かけて食事をしているとき、左側前斜めから黄色の閃光を感じると同時に、四〇度以上の熱度を感じた。そして倒壊物の落下に打たれて気絶したが、人の呼び声で意識を回復した。首から上が崩れ落ちた家の上に出ていた。辰段妙子が来て、顔面三か所の外傷の止血をしようとするが、あわててなかなか適確にいかない。時々耳が遠くなる。そこへ河内調剤員ら数人が救援に来て、上半身を掘り出して引っ張るが、腰と脚が机と椅子にはさまれており脱出できない。周囲は赤褐色の土埃がモウモウと立ちこめ、何かの破片がバラバラと落下する。やっと救出されてから、歩いて中央病棟と南病棟の間の芝生まで行って意識不明となった。「オイ、しっかりしろ。」、「生きているぞ…」の声で意識がもどったが、呉の海軍鎮守府救援隊の人々に助けられたのであった。南病棟に火災が起り、ここも火に包まれれば焼死するところであったが、危く救出され、病院前庭で応急治療を受けた。

堀内真佐子(甲種一年生、現姓・永田)は、八時三十分から始まる授業を待ちながら、寮の自室の机に向っていて被爆した。倒壊建物の下敷きとなったが、文机のわずか三〇センチメートルの空間で死を免れた。手足を動かしてみると動くので、同僚の名を呼んでみると、六人全員が無事であった。大声で救助を求めていると、上の方でドカドカと靴の音がし、男の力強い声がきこえた。必死で「助けて…」と叫ぶと、男は「材木が大きすぎてどうにもならないから、二、三人連れてくる。元気をだして頑張れ。」と、どなった。小さい声で「お願いします。」と、やっと返事した。しばらくして二、三人の人が来て、上で材木をずらしている音がしたが、なかなかはかどらなかった。時間をかけて、やっと一人が這い出られるくらいの穴が開いた。「一人ずつ手を出せ。」と、声がかかり、次々に両腕で四メートルくらい穴の所までいざって行き、両腕を引っ張ってもらって、一メートル位の上に出ることができた。救助者の軍患者に連れられて、熱い・瓦礫の上を裸足で歩き病院にたどりついた。

古賀久子(甲種二年生、現姓・中川)は、二、三日前から微熱があり、勤務を休み、寮の二階の自室で寝ているとき被爆した。一瞬、真黄色な貫くような閃光を受け、思わず「ヤラレタ」と感じ、そのままうつ伏せになった。目と耳を覆ってかまえた直後、バサッと物が崩れかかった。しばらくジッとしていた。ようやく飛び起きて土煙の中で同僚の名を呼んだ。隣室の田淵智子が「逃げようヤ」と叫んだが、階段が潰れており、廊下は傾いている。必死の二人は、屋根から飛びおりた。すぐ寮の入口の近くにあった防空壕に入ったが、一年生が四人くらいと、沖田静江・田淵智子ら(はっきりと記憶していない)と一緒にあった。一年生の一人が額から血を流しており、誰かが「病院へ行こう」と言って歩きだした。このとき、寮の東側の一角に火の手が上がっていた。古賀久子と、沖田静江とが病院に行くとき、貯金局付近は凄惨な火災に包まれていた。先に行った下級生が「もう駄目です。病院でも避難を始めました。」と言う。二人はびっくり仰天して逃げだした。御幸橋近くで軍のトラックに乗せてもらい、宇品の陸軍共済病院へ運ばれたが、負傷者が内外に溢れていた。

前記の橋本見習士官が看護婦生徒を救出中、廊下につつ伏せに倒れていた生徒の一人を、肩をつかんで引起し、顔を見ると、目も鼻もわからぬほどに血まみれになっていた。しかし、呼吸もあり、意識もある。「誰だ」と声をかけると、「小野郁子です。」とかすかにこたえる。大急ぎで近くにいた者呼び、一階の正面入口の外科に面した廊下に仮設した救護所に運んだが、その顔は、額の中央から左目を斜めに上唇に達する裂傷で、顔の皮が一・五センチメートルから二センチメートル位も口を開き、眼球はつぶされていた。

仮設救護所の活躍

この仮設救護所をつくり、負傷者の手当てに活躍していたのは、将校病棟に入院中の大藤重道軍医見習士官であったが、病院からたのまれたのではなく、医師としての使命感から自発的に設置したものであるという。負傷した

看護婦生徒たちも、よくこれに協力した。しかし、救護所も名ばかりで満足な医薬品も医療器具もなく、困難をきわめた。例えば、土屋己佐子(乙種二年生)の場合、ガラスの破片で右顔面から首筋にかけて重傷を負い、頸動脈のわきに大きな傷口が開いて、二、三センチメートルのガラス片が食いこんでおり、へたに動かせば動脈を切るような状態にあった。別の部分から切開して摘出すれば容易だとは思われながら、被爆後では消毒されたメス一本すらなく、放置すれば更に危険と、目をつむり運を天にまかせて、ピンセットで引出したのであった。

倒壊建物の中から救出した失神者には、強心剤を、人工呼吸をと応急処置をおこなって、軍患者が病院の方へ次々と運んだ。

焼死者

この救出作業中、午前十一時ごろ、大手町九丁目の方から火の手が襲って来て、寮が危険になったので、谷口婦長は、炊事の中野某を指揮者とし、救助者の一部を消火にあたらせたが、ついに本寮は火炎に包まれてしまった。その時、北病棟外の第二分寮で救出された青山多恵子(甲種一年生、現姓・徳本)が、今出て来た分寮をふと見ると、亀岡幸子(甲種一年生)が髪を乱して母の名を呼び、助けを求めて必死に叫んでいる姿があった。軍患者らが早く助け出そうと、その声を追って作業を進めたが、火勢は激しく燃えひろがり、救助者の逃げ道すらもふさがれようとした。

太い柱やコンクリートに挟まれた体は、ついに救出できず、叫び声は火炎の中で次第に弱まり、ついに消えていった。すでに夕やみ迫るころ、寮はなお燃え続けており、済美寮と棟続きの娛樂室が盛んに火の手をあげていた。このとき海軍の救援隊が来て、辛うじて病院への類焼を免れたのである。

約一五〇人救出

崩壊した看護婦生徒の寮の救出活動は、五体満足な者のほとんどいない軍患者たちの作業では思うにまかせなかった。それでも約八時間をついやして、死者七人と重傷者三、四人を含めて約一五〇人が救出されたが、済美寮では三人が火炎の中に没した。当日は、全員救出したか否かは不明であったが、翌日焼跡に白骨が三体あったことにより実情が判明した。

人的・物的被害数

病院保管の資料(植木正造事務部長提供)によると、医師その他職員の死傷者は全体の約八五パーセントに達した。その内訳は次のとおりである。

(人的被害)

区別	総員数	死亡数	重軽傷者	行方不明
医師	27	5	250	なし
看護婦	34	3		
看護婦生徒	408	22		
薬剤師	6	3		
職員	79	18		
計	554	51		
入院患者	約 250	5	109	

(註)院外被爆者も含む。

(物的被害)

(一) 本館・第一号館・第二号館は大破。

(二) 隔離病棟・看護婦生徒宿舎・消毒所・汚物焼却所・礼拝堂・解剖室・守衛所・動物舎・車庫・同附属住宅・ポンプ室・洗濯室・作業場・倉庫各一棟・及び渡廊下は全焼。

(三) 院外の看護婦寄宿舍三棟(うち分寮二棟)、同じく院外の職員住宅四棟は全焼。

(四) 前記の(二)以下の木造建物の大半は、半壊あるいは全壊に近い状態であったが、その後、周辺の民家の火災によって類焼した。また、看護婦生徒の二階建木造寄宿舍(本寮)は、爆風により一挙に全壊し、その後、延焼した。

被爆負傷者殺到

一方、市中の負傷者たちが殺到したので、在院の働ける医師・看護婦は少人数であったが、玄関前に総出で応急治療に当たった。

被爆当初の救援活動には、すでに出勤していた医師や薬剤師を中心として、入院中の軍患者・看護婦及び看護婦生徒たちによって献身的な努力がおこなわれた。

病院の玄関前は、殺到した負傷者と、トラックや担架で続々と運びこまれる負傷者で埋まり、歩行可能な負傷者は一列に並んで治療を受けた。向って右側のソテツの木陰では、皮膚科の伊藤医長が患者輸送車の上で治療をしており、古賀婦長が鉢巻をして、自分の受持ち患者の重傷者に治療を受けさせていたから、救出した看護婦養成所の重傷生徒の応急手当をここで受けさせた。

正午ごろ、病院南側の文理科大学付近の家屋が延焼し、その熱さで病院内におられなくなるほどであったが、負傷者は他所へ逃げていく体力も気力もなかったから、北病棟の広場へ一時避難させた。しかも、負傷者は増加する一方で、病室も廊下も、調剤室も地下室も、また階段も埋まってしまった。死亡者が続出し、死体が運び出されるとすぐそのあとに、他の負傷者が横たえられるという状況であった。

夕がた山中高等女学校が延焼し、再び病院が危険になったので、無傷者が集められ、病院の各部屋に一人ずつ分散し、南病棟の方から燃えてくる火の粉を、火叩きで叩き消した。天井が落ち、椅子やベッドが散乱している灯のない暗い部屋で、ただ一人、流れこんで来る火の粉と戦うとき、まだ少女の看護婦生徒は不安と恐怖にひどくおびやかされた。消火作業が終り、ひと息ついたとき、また集合が命ぜられ、徳永芳子ら四、五人の生徒は、比較的被害の少なかった部屋に収容されている竹内院長や火傷して顔のはれた女医、内科の横山医師など数人の介護にあたった。相生橋の上で被爆した竹之内医師は、生徒たちが交替で熱湯につけたタオルで足腰をマッサージし、また注射を打ったりしたが、七日の明方近く傍の院長に挨拶して息をひきとった。

医薬品の欠乏

赤十字病院は、陸軍病院として被爆前にかんりの医薬品を備蓄しており、ガーゼ・繃帯・脱脂綿なども一般の病院以上にあったが、たちまち使いはたしてしまった。大型の洗面器にリバノールを入れて、ガーゼにひたし、負傷者につけて廻ったが、作っても作ってもすぐに無くなっていった。

その夜、水!水!と叫ぶ負傷者に水を与えて走り廻っていた生徒の住吉アヤコに「宇品の運輸部へ行って救急材料を求めて来い」という命令が出された。双三郡の田舎からこの四月に出て来たばかりで、宇品など行ったこともなく、市内の方角さえまだよく判らなかつたが、病院の医薬品も底をつき、一刻の猶予も許されぬ状況であったから、勇気を出して、電車道づたいに宇品へと走っていった。途中、振り返ってみると紙屋町あたりは夜の空が赤く火照っていた。そして、宇品への道も、焼け続ける家々が炎の色をあざやかに空に映していた。生ぬるい死体につまづきつまづき、燃え落ちる電柱に思わず足をすくめながら、滝のように流れる汗をもちとわず、材料受領の証明書の代りにと血まみれの赤十字の帽子を、しっかりと握って走り続けた。ようやく宇品の先端にある陸軍運輸部に着いたが、そこも負傷者たちでいっぱいであった。

門の両側には銃を手にした衛兵が凛々しく突っ立っていた。住吉アヤコは、とっさに右手に握っていた赤十字の帽子を差出して用件を述べ、軍医に取りつぎを頼んだ。

出て来た軍医は用件を聞くと、「何をバカを言うか。」と、どなりつけた。運輸部では内外に溢れた負傷者を、次々と船に乗せ似島の収容所へ送ることでゴッタ返していた。しかし、何も持たずに帰るわけにいかず「少量でも分けてください。」と、必死に頼んだが、軍医は返事をしなかつた。張りつめた力が一度に抜け、すくみがちな足をひきずって、真夜中の道を病院へ引返した。

病院は今にも火が燃え移りそうな気配であった。火炎を噴きあげている周囲の家々の中に、高く聳え立つ病院の塔が見え、塔の上に病院を守る一人の人影があった。負傷者は昼間に増して、続々と詰めかけ、足の踏入れ場もない状況であった。被爆者のうめき声、何かをのしる声、待避命令の声など入り乱れているその中で、住吉アヤコは谷口婦長を見つけ出して、受入れられなかつたことの報告をした。それはもう朝になりかけていた頃であった。疲労のため落ちくぼんだ谷口婦長の目は、使命を貫く何か厳しく美しい光りをたたえていた。

食糧は、僅かながら乾パンの配給があり、またトラックで“にぎりめし”の救援があつたり、院内でも斉藤誠二病理検査技手や林庶務主任、患者の病棟長などが、水の噴出している北側空地で軍患者らの協力により炊出し(オカユ)をしたが、大混乱のさなか、皆に行きわたるといふことはなく、病院関係者のほとんどは飲まず食わずで救護や消火活動に挺身し、七日の朝を迎えたのであった。朝の冷たい空気が流れて、ようやく東の空が白みかけるころ、火炎も鎮まったが、死亡者が病院内外の到るところに悶絶した姿で横たわっていた。

死亡者の片づけ

七日も快晴、真夏の太陽が容赦なく照りつけるなかで、徳永芳子など無傷の生徒は、死亡者の収容作業に取りかかって、赤十字病院前の電車通りに、次々と死体を運んで並べた。このころ、親類縁故者がたくさん尋ねて来て、

玄関前は、更に混雑をきわめるようになった。また、中央病棟一階の土砂を搬出整理して重傷の軍患者を収容し、直射日光のあたらない所で静養できるよう配慮した。

重藤副院長の登院

重藤文夫副院長は、山口赤十字病院から二週間前に広島赤十字病院副院長として来任し、八月五日日曜日を、家族のいる郷里賀茂郡西条町で過ごし、六日朝出広し、広島駅前前で電車を待っているとき被爆した。電車を待つ数百人の列は、最後尾が広島駅構内にまで続いていたが、その後尾にならぼうとしたときであった。閃光を感じてすぐ伏さり、ハンカチで口を覆った。身体がちょうど鉄筋コンクリート建物の陰になっていたため、爆風から免れたが、落下物によって軽い負傷を受けた。

まっ暗な周囲が明るくなってから、電車通りに出て病院へ急ごうとしたが、すでに市中は火災が発生していて前進できず、他の避難者の群れにまじって、駅裏の東練兵場へひとまず待避した。無数の避難者の中で、未知の看護婦に呼びとめられ、血みどろで倒れている原田篤郎医師夫妻の応急治療をおこなったほか、戸持ちの医薬品がなくなるまで負傷者の治療にあたった。

飛行機が来るので、広く隠れ場所のない東練兵場が危険に思われ、周囲の避難者たちはみんな安芸郡の中山へ向かった。重藤医師もその列の中に加わり、尾長町を経て大内越峠へさしかかったが、道路には死者・負傷者が溢れ、異様な状態を出現していたから、思い返して、西条へ少しでも近づいて行こうと引返し、府中町の橋のところまでたどりついた。ようやく安心感がわいたが、警防団員の指揮に従い、避難者と共に橋の下に隠れ、堤防に作られた防空壕に入った。時刻は午後一時か二時ごろであった。

「赤十字病院に行かねばならんが…」と言うと、警防団員の一人が、「町は大火災で入れない。バカなことをするな。」と言って市中の状況を話した。一発の爆弾で全市が倒壊し火災になったことを聞いて直感的に、「これは原子爆弾だろう。」と言ったが、誰もその爆弾のことを知っていなかった。

重藤医師は、ここで警防団員に「水を飲んでも良い。油を塗ると良い…」などと、応急の救護方法を紙に書いて貼らせた。警防団員は、「広島赤十字病院副院長の指示書」と、注意書の末尾に書いた。

午後五時ごろ、重藤医師は防空壕を出て大洲町まで出たが、両側の家屋が倒壊しており、その上、来広したばかりで方角がつかめないまま十字路に立っていると、西条の酒屋から来た救援トラックが市内に入らず引返すところに出あった。知人が乗っていて引っぱりあげられ、二時間かかって西条に帰った。

翌七日、西条町役場から出る二台の救援トラックに便乗して出広し、午前九時ごろ、広島赤十字病院に到着した。病院は大混乱の最中で、竹内院長も重傷で動けない状態であり、他の医師もほとんど負傷しているか消息不明であったから、ただちに応急対策に取り組んだのであった。

救援隊到着

七日、八日に、山口赤十字病院・岡山赤十字病院・鳥取赤十字病院から救護班が到着し、満身創痍で孤軍奮闘中の広島赤十字病院の医療活動を力づけ、大いに感謝された。

しかし、病院自体の人的・物的打撃が甚大であり、医療機能も停止状態であるところへ、一度に数千人の負傷者が殺到したため、残余のわずかな医療機械・医薬品による救護活動しかできなかった。全市の医療機関が壊滅状態にあったから、医薬品の補給もつかず、簡単な応急手当でさえも、こと欠ぐありさまであった。後に、駒田軍医部長から多量の衛生材料の提供を受けて、やっと治療を続行することができたのであった。

臨時収容所

北病棟の一階大部屋は、下病患者の収容所にあてられた。全身打撲と切傷(当時は軽傷の部)で、被爆後一〇日間ほどの自宅療養後に再び出勤した発田泰子(甲種一年生、現姓・藤原)も、早速、収容者の看護を命ぜられた。

収容された負傷者は、体の自由が利かないものがほとんどで、広口の菓の空瓶が小包紐で寝台にくくりつけてあり、毎朝、蚊帳をはずすと、その瓶を何本も手にブラ下げて尿を捨ててに行った。便所も爆風で破壊されて使用できず、庭に穴を掘り、板を渡して、ムシロで囲ったものを使った。

注射器の消毒は、飯盒に入れて、庭に石で作ったカマドに架け、木片を拾って来て煮沸した。

収容者は火傷が多く、患部を清拭し、リパノール・ガーゼをあてたが、患部が乾燥するとマーキュロを塗った。重傷者には、ぶどう糖やビタミンの注射をした。体格の良い兵士が鼻血が出て、止血剤を打っても止まらず、膿盤をかかえて「死にとうない、死にとうない。」と、叫んで廊下を歩きまわり、苦しみがらついに死んだこともあった。また、原子爆弾が炸裂したとき、病院の庭に、フンドシーつで防空壕を掘っていた七、八人の軍患者は、全身

火傷し、繃帯交換のたびに苦痛を訴える患者の声を、聞き流しながらの治療介抱はたいへんな作業であった。

甲種二年生の小野郁子(一年余の療養生活後、郷里の役場に勤めていたが、被爆による左眼失明と左足のビッコを悲観して、昭和三十二年三月に、服毒自殺をした。)と、甲種一年生の松浦幸子の二人は重傷で、傷口が異様に脹れ、ゴム管(ドレン)を傷口に突っこむと、たくさん膿が流れ出てきた。

ハエが多く、固く繃帯しても傷口にウジがわき、頬にウジをつけている者もあった。久保文子婦長心得や高木マサエ・向窪マサ子両看護婦らは、このウジ取り作業に迫られたが、火傷も癒りかけ、もうすぐ退院できるようになってから、死んでいく者が多かった。

死体の処理

被爆当日から無傷の人が次々に死亡した。久保婦長心得・看護婦及び看護婦生徒がその死体を病院空地に並べて、初めごろは、夜襲の目標にならないよう早朝に死体を焼いたが、後は、昼夜の別なく焼いた。池田貴美子(甲種二年生、現姓・升田)ら生徒たちも手伝ったが思うように焼けず、黒焦げになった死体が毎朝ころがっていた。

遺骨は、骨つぼの代りにレントゲン・フィルムを入れる紙袋に氏名を書いて入れ、縁故者に渡した。医師・看護婦・同生徒など職員の死体は、病院南側の空地で焼き、遺骨を会議室に保管しておいた。

従事者の食事

負傷者は一人で食事できない者がほとんどであったから、発田泰子など元気な生徒は順番に食事介助をしたが、それが終わって生徒たちが食事をするときには、モウソウ竹の茶碗に入れた飯の上に、まつ黒くハエがとまっていた。これ位のことに驚くような感覚は、とっくになくなっていたから、皆、黙って食べた。

食事は、主食のほかに朝はキュウリの実が入った味噌汁、昼は牛肉の罐詰(初めは全員ホロセが出たがのち出なくなった。)、夜は乾燥ジャガイモや乾燥サトイモと、ハルサメ・牛肉の罐詰、及び乾燥卵でとじたもので、これが毎日毎日変らない献立で、“日赤料理”と名づけていた。しかし、空腹の連続であった被爆前よりかましであった。時々、瓶入りの水飴が配給になった。主食の米にはモミが多く入っていた。

汚物の処理

病院の窓の下に、うず高く捨てられたままになっている当ガーゼ・繃帯・毛布・ふとん、その他の塵芥を焼く作業がおこなわれた。ガーゼも繃帯も初めは洗う時間がなくて捨てられていたが、その後、洗って使うことになり、瓶の中に濃いめのクレゾールを入れ、膿のついた繃帯を入れて洗うのも看護婦生徒の役目であった。それは、たくさんの鼻じるや啖つぼの中に手を入れたような感じであったが、誰かがしなければならぬ作業であった。

初めて入浴

このような作業に明け暮れて、長い間風呂に入られなかったが、焼跡から五衛門風呂を拾って来て、生徒寄宿舎跡のポンプのそばに据え、ムシロで囲い、ようやく風呂をたてて入った。病院から少し離れていたため、“一年生でも早く入ってもよろしい”と許可が出され、シラミだらけの頭をクレゾール液で洗ったが、卵だけは残るらしく幾らでもふえた。

十月末

十月末には、死ぬる運命にあった者はほとんど死んでいった。軍患者は、全員宇品の国立病院の方へ移され、その後は、南方(フィリピン)引揚げの栄養失調児を収容したが、この子どもたちも次々と死んでいった。

若い医師の自殺

なお、病院に出勤途上、県立第二中学校付近の十字路で被爆し、火傷した眼科医長後藤英男医師が一月間の自宅療養をしていたあいだ、後藤医長に代って若い安田敏夫医員が救護作業に活躍したが、九月下旬、安田医員は焼野原の孤独感に打ち勝つことができず、ノイローゼにかかり、荒廃したままの病院の中で首をつって自殺した。

応急復旧

市内中央部における唯一の残存病院であったから、負傷しながらも働き得る職員はすべて、自分をかえりみることなく、残った僅かの機能を最大限以上に活用し、直接の医療従事者でない軍患者その他、四月に入学したばかりで、まだ注射の扱いも実際には経験していない看護婦生徒などが一致協力し、不眠不休の努力を続けて、一日も病院業務を休むことはなかった。

被爆直後、生存職員のうち一〇数人の帰郷療養者があったが、これも早急に復帰して医療活動に参加し、同年八月末ごろの職員総数は一八二人であった。

建物及び設備の応急復旧のため、日本銀行広島支店の斡旋により、芸備銀行(現在・広島銀行)から復旧資金の融資

を受けたほか、建築資材は中国地方総監府の竹内二郎経済部長及び広島県木材統制株式会社の田中好一社長の厚意を受けた。

また、松本滝蔵代議士を通じてマッカーサー司令官に具申し、凍結されている火災保険金を受領し、復旧事業を進めた。

なお、昭和二十三年十一月、竹内鈿院長が辞任し、重藤文夫副院長が院長に昇任した。

赤十字看護婦生徒の記 長谷川巴

(当時・看護婦生徒甲種一年生)

八月六日午前六時、起床。五五センチメートルにやせた胴まわりに、モンペの紐をきつくしめて、私はすき腹かかえた同級生二人と、病院の玄関の上にあった教室の掃除を終わってから、食堂でジャガイモ入り雑炊を、スープ皿で食べ、寄宿舎の済美寮階下一号室の自室に帰った。二段ベッドの下段が私の寝る場所であった。そこでブラウスとモンペを脱ぎ、シラミ取りをしているときであった。

北側の戸口の方が、何か急に写真のフラッシュのように光った。ベッドから降りて三、四歩か歩いたとき、北側のガラス窓が一面に黄色に見えた。ハッと異様な感じがして、すぐベッドの上に引返し、背を丸めていると、ガラガラと建物が崩れかかって来た。

手でさぐってみると、南側の方に、私が通れるくらいのトンネルが出来ていたのだから、そこを頼りに外へ出てみると、周囲の建物がすべてペシャンコに押しつぶされており、鷹野橋から南大橋にむかっての大通りもひと目にながめられた。そこには、衣服がボロボロに裂けた裸の市民がたくさん歩いている。

ふと気がつくと、寄宿舎のそばの崩れた家から「看護婦さん、助けて！」と呼ぶおばあさんの声がする。おばあさんは、足を大きな柱がおさえつけており、一人の力ではどうにもならないと思われたが、渾身の力をこめて柱を持ちあげると、意外にスーッと抜けて救い出すことができた。

倒壊した寮の下からも、たくさん声が聴えてくる。この四月、一緒に入所した同郷の出口博子(現姓・恵飛須)を助け出そうと崩れた屋根の上によじ登り、「博子ちゃん、博子ちゃん」と呼んだ。やっと場所が判ったが、これはどうにもならない。谷口婦長も必死の形相で、生徒を救出しようとしておられる。そのうち、病棟の将校患者が鋸一つ持って軍患者を引き連れて来た。

「博子ちゃん、歌を唄うとりんさい。兵隊さんが助けてくれてじゃけエ」と言っていて、屋根から降りようとする、積みあがっている材木の山が高く降りられない。軍患者が見つめてサッと腕をのぼし、不安定な柱をグイと握って、「これにまたがって降りろ！」と叫ぶ。すぐ指示されたとおりに跨って滑り降りたが、ハッと一瞬、羞恥を感じた。私はブラウスはつかんで出て来たけれど、モンペを忘れていたから、下半身まる出しであった。

あとで聞いたのであるが、救出作業が進められるあいだ、倒壊物の下から、生徒たちの合唱する歌声がきこえたということである。私が伝令で本館に行く途中、分寮にいた徳永芳子(現姓・橋本)に出あった。彼女は、カバンを持っていた。「横川の人で貯金局に勤めている人が、これを“僕はダメだから家族に渡してくれ”と頼まれたが、どうしよう。」と言う。私はその返事をする心の余裕もなかった。また、女学校時代の同級生の久保さんに出あい、「治療してほしい」と、頼まれたが、急ぐ伝令の使命があったから、これも応えることができなかった。

玄関の方に廻ると、南側の芝生に実験用のウサギがたくさん箱から出て、ピョンピョン跳ねていた。

すでに負傷者が続々と押しかけて来ていたが、なかでも中学生が帽子を被った所だけ火傷せず、カップのような頭で、バラバラと入って来たのが眼についた。みんな直立不動の軍隊調でものを言った。

また、守家キミエ(現姓・幸本)が寄宿舎から救出され、担架の上で、斉藤技手から鎖骨骨折の副木をしてもらっていた。

倒壊した寄宿舎の下敷きとなり、声をあげていた生徒を一応救出したあと、朝から続けられていた防火作業が取りやめられ、夕方から夜にかけて、寄宿舎は焼けていった。

同室であった長井クニと黒木昭子が、夜になると、いつも月を見ては、「宮崎に帰ってエ」と言っていたが、二人とも救出されず、焼けて白骨となった。

私は、防火用水で火叩きを濡らし、腰までズンブリとつかって、北病棟一階西口でただ一人、防火の立ち番をした。そのあと、病院北側の疎開跡の煉瓦のゴロゴロしているところで仮眠をとった。

七日早朝、目覚めると傍に頭を強打した菅清子(現姓・坂本)が、ボーッと突っ立っていた。

病院の屋上に駆けあがってみると、東方はよく見とおしがきき、私の家は山に隠れて見えないが、多分大丈夫だろうと思われた。そして、早く家に帰りたいたいと何時も言っていた友が、ある日コックリさん(箸でする占い)に伺いをたてると、「八月六日の朝、敵の爆撃があり、本館屋上の塔に入っていたら助かる」と言っていたことを思い出し、「本当だったなァ」と、ふと考えた。

七日は更にいそがしく、殺到する負傷者の看護や連絡その他のことで、バタバタ動きまわらねばならなかった。

午後になって、焼けて外郭だけになった市役所の地下室へ、救援のムスビを誰かと三人で受けとりに行った。酷い炎天下で、銀めしのムスビが山ほど積まれていたが、腐っていたので手ぶらで帰るほかなかった。

赤十字病院の前には、死体がゴロゴロしていたが、どの手からも時計ははずされていた。また、弁当箱が幾つも転がっていたが、みた代用食の大豆の入ったご飯であった。

門を入ると、負傷者が折り重なって地面をおおい、一人が「便をとってください。」というので、そこにあった植木鉢をあててあげた。「何か食べたい。」と頼むので、持っていた乾パンをあげようとしたが、口が開かないため、どうしようもなかった。

七日の夜は、院内のイモ畠の畝のなかで眠った。一か月前、入所以来初めての帰省で、私も博子ちゃんの叔母さんから貰って帰ったイモヅルを植え、よくついていたのに、みな吹きとんでしまっていた。

八日の朝、父が来て、雑魚場町の疎開作業で、屋根の瓦をはいでいた学徒の妹が、全身火傷して転げ落ちたのを探し出し、大八車に乗せて帰っているから、早く帰宅するようと言うので、谷口婦長に申し出ると、今晚(八日)の寝る時間だけということで、外出が許可された。

アスファルトの舗道は、真夏の刺すような夕陽と、両側の焼失家屋の余熱で、裸足には痛いほど熱くてたまらなかった。御幸橋を渡って、右側の倒れかかった家に行き、片チンバの下駄をお願いして履いてから、少しは歩きよくなった。

私の家は、半壊程度であった。

連れて帰られた妹は、地下タビの部分と腹部を除くひどい火傷であった。一五歳の少女のからだは、まだうぶ毛のままであったが、九日の勤務につくべく、私が病院に帰ったあと、午前九時十五分に死亡した。親類中から「この子だけは美人だ」と言われていた少女の、哀しい最期であった。一晩中、看護した私には、この妹の死が一生忘れられないものとなった。

九日以後は、もっぱら負傷者の看護に明け暮れたが、チンク油も底をつき、リバノールしかなくなった。リバノールも三分の一以上火傷した者は助からぬものとして使用しなかった。

玄関の車寄せの所に、女学生が倒れており、「的場のカゴタニです。親に伝えてください。」と頼まれたが、私個人の行動は許されず、病院を離れることができなかった。せめてもと、全裸に近い姿であったから私物の代りの服を身体にかけてあげた。

入院患者が逃げたというので乳児を収容した病室に同級生と行ってみると、病室にはちびたロウソクが、ただ一つ残っているだけで、めばしい物は無くなっていたということもあった。

一年生ばかり四、五人が集ったとき、「脱走しよう。」と、一人が言いだしたことがあった。皆、遠い地方から来ているので、広島市内出身の私の言葉に重みがあったのであろうか、私が肯くと、みんな賛成した。たまたま、その夕がた父が訪ねて来たので、「今夜、逃げて帰る」というと、看護婦になるということをあれだけ反対していた父が、憲兵を恐れて「帰ってはならぬ。」と強く言うので、私は逃げないことにした。つぎの日、その四、五人を探したが、もう居なかった。

被爆翌日、山口赤十字病院から救援隊が到着し、私の持場の中病棟一階の廊下に続く北病棟の廊下の負傷者の治療にもあたっていたらしく赤十字病院職員の正しい股装で、キビキビした姿は、まったくたのもしく見えた。

この四月に入所して、学科しか習っていない私であったが、注射をすることになった。あるとき、軍患者に思いきってすると「痛くない、上手だ。」と、ほめられて私はびっくりした。ある若い先生が、中年の婦人負傷者の治療にあたって、優しく症状を説明し、大腿部のブヨブヨに腫れた患部を、麻酔もしないで一〇センチメートル以上もメスで切り、血うみを膿盤に一杯出されたことがあったが、後日、ノイローゼになって自殺された。

廃墟の院庭に、ムシロで囲った便所が作られ、私は日に何度もかよった。便をみて調べようとしたが、他の人も同じらしく血便の上に血便が重なっていて、見分けがつかなかった。歯齦出血もあり、鼻血も少しずつ出た。鼻血は鼻クソと一緒にたまり、取るのが痛いのでそのままにしておくと、鼻の穴が詰って息ができなくなった。

しかたなく口で息をしていたが、おかげで死体を焼くときも、その臭気を感じる事がなかった。

収容負傷者は続々と死んでいった。負傷者の死を、「ステットあ。」と言いながら、大きな死体も二人で担架に乗せて運んだ。途中で落ちると足を引っぱったり、ゴロゴロと転がして担架に乗せなおし、本館南側の空地へ持って行った。そこには焼く係が待っており、空地に水道が開放しにされていた。炎天下にそこで、血うみやウジ虫のついたガーゼ・ホウタイをタライ一杯に入れて洗う。翌朝、再度使用するためにたたんだり、巻いたりしたが、ふと気がつく、それにも白い毛ジラミがウジャウジャとくっついていて、石ケンも無くてどうしようもなかったから、そのまま使った。

八月十五日、私たちはガーゼを洗う手を休めて、病院の塀の所に寄って敗戦の報を聴いた。神風の吹かないのが不思議であった。

病院の塀の所には、軍患者がたむろしていて、岩国の将校が決起するのだと言って頼もしがらせた。また、広島文理科大学では、このような爆弾(原子爆弾)が完成近かったのだと言って、私たちをくやしがらせた。軍患者の一人が、無傷の私を「憎まれっ子、世にはばかる」と言って笑い、宇品から敵兵が上陸して来るといって恐がらせた。

敗戦が決定すると、軍患者がドッと帰郷しはじめたが、その中で、顔が白く、ホクロのある松江から来た軍患者を、いつものように治療していると、「きょう帰るヨ。」と言う。私は、一度巻いた繃帯の上に、当時は貴重であったガーゼを一掴み置き、その上からまた繃帯をしてあげた。「門を出るとほどくヨ。」と言った。いつも優しい物言いをしてくれる人であった。

大野陸軍病院長の斯林可児雄軍医大佐が、将官の服装で視察に来られたのもこの頃であったが、思えば敗戦によって特進されていたのであろうか。

十六日から生徒も負傷している者や市外の者は帰省を許されはじめたが、帰った者は、期日どおりに再び帰院してくる者が、少なかったから、救護要員が減っていき、無傷で市内の私は、退所になるまで帰省の許可が出なかった。

何時の頃からか、外部から兵隊が多数入って来た。北病棟の北側に炊事場が建てられ、その兵隊たちが炊事をした。私たちは食事を“エッセン”と呼んでいたが、兵隊が来てからいつのまにか“めしあげ”というようになった。ある日、牛が二頭紛れこんで来て、中庭につないであつたが、軍患者が殺し、乾物ばかりでいささか参っていた食事を賑わしてくれたこともあった。

母が時々食物を持って来てくれていたが、あるとき、受取ってから病院の玄関まで送って出たところで、死んだ親の乳房を探している乳児を見て、母がまっ青な顔をした。しかし、私には何の感情も湧かなかった。

宇品港から刺青をした毛むくじゃらの外国船員が上陸し、病院にも来た。近づいて来る恐ろしさに、三階から飛び下りようとしたこともあったが、彼らは、物珍しいのか、戦利品と心得てか、箸や竹製の食器をはじめ、屋上に掲げられた赤十字旗などを持ち去った。身を守るため“レッド・クロス・ホスピタル”と英語で書かれた赤十字の、ガッチリした腕章を貰ったが、つけにくくて遂に使用しなかった。それは、敗けても皆殺しにはならないことを知っていたからである。

重傷の松浦幸子(現姓・田中)を見舞いに来た父が、院内のイモ畑の中に、谷口婦長が焼跡から拾って来させた風呂釜を使って、野天風呂を建てたので、重藤副院長や谷口婦長に報告すると、一年生から入浴してよろしいと許可が出た。鉄製の五衛門風呂で、底板が無いので私は下駄を洗って履いて入った。まだ、夏の日は高く明るかったが平気であった。下駄を皆が使うので私はハダシになってしまった。

脇田陽子(現姓・堤)が、頭髪のシラミ退治にクレゾール液で洗髪したところ、シラミは全部死んだが、液が強過ぎて頭の皮が痛いと言った。雨がよく降り、一日一日秋めく頃であった。この頃、レントゲン・フィルムの袋に入れて安置していた生徒の遺骨も、探しに来た親・兄弟に次々と渡されて、その数も少なくなっていた。谷口婦長が、泣いて一つずつ渡された。

ある日、ジープが病院に来た。初めて見る車であった。スマートな軍人が、がっちりしたボール箱を持って車から下りた。後刻、重藤副院長が手振りをして英語を使い、その軍人と並んで廊下を歩いて行かれるのと、私はすれ違ったが、振り返って、立ちどまってその後姿を眺めた。被爆以来、ずっと負傷者の看護やその他の作業で働きづめで、物を考える暇もない日々であったが、世の中は変わりつつあるのだと、その時、一種の恐れのような感情と挫折感を味わった。そのジープは、しばらくして焼野原の中心部の方へ走って行った。

北病棟二階の勤務になったとき、脱毛した一人の兵が、私のことを知っているという。病院では一番下っ端で、

同級生以外、皆命令者の身分がちょっとはずかしかった。湯が欲しいという兵隊に、炊事場にあった平鍋の底の湯をすくって水滴に入れ、口に含ますと「熱い!」と怒鳴った。こんな看護の基本を誤った事は情けなかった。無傷だから元気なはずと、放射能による血液疾患に思い及ぶべくもなく、思考力のボヤけた体をヨタヨタと、この頃、情性的に動かしていたようである。

九月十七日の夜、台風が襲来した。風の音に、誰が呼んだのかと、カンテラを掲げ、便器を持って行くと、また、誰かに怒鳴られた。広口瓶を各自に持たせ、手の利ける人は紐で結んでベッドにつるしておき、上げ下げして小便をさせたが、できない人は、二本の指で尿道をつまんで、ビンの中に入れてあげねばならなかった。ベッドに起きあがることのできる人は、乾燥卵の入っていたリング箱くらいの缶を使って大小便をした。毎朝、血便で一杯になった缶を二人で向き合って持ち、階段を一段ずつ降ろしては注意しながら降りた。南大橋のかみ手で、便を捨て、洗って缶を持ち帰るのが朝一番の仕事であった。雨の日は川がトウトウと激しく流れており、引きずりこまれそうであった。帰路はブラブラと焼跡の誰にも見られていない僅かの時間を楽しんだ。

私たち北二階の看護婦は、階段を上がった左の小部屋で食事をしたが、私たちの食事の量が多いと、外から見た患者が言うので、カーテンをして食べることにした。

二〇〇人もいた一年生が、三人しか居ない夜もあり、四、五人だけの夜が続いた。よく考えてみると、その僅かな人数のなかでも、私を除いてみんな帰省しており、入替りしていた。私はひどく疲労していたし、神経の消耗も激しかった。暴風雨の過ぎ去った朝、目が覚めると臀部の下が冷たい。しまったと思ったとたん、同じふとんで寝ていた下本照子(現姓・西原)が、何かつめたいという。私は黙って横をむいた。洩らしたとは言えなかったのである。

屋上で水溜りを避けながら、ガーゼなど干す仕事も、いつしか寒さを感じずるようになり、病院の中もだいぶ落ちついて来た。帰省していた同級生も、少しずつ登院して来て数も増したが、十月中旬、疲労困憊のすえ、看護婦になる資格なしと、自らを見きわめて退所を申し出た。重藤副院長や谷口婦長から、失業時代が来るからと極力とめられたが、横になって寝たい一心から、黙って押し通し、食費と月謝を支払って退所した。それまでに貰った綿入れと、単衣の病衣の二枚・赤十字の腕章・戦災証明書を入れたリュックサックを背負って、老いた父の押す自転車の荷台にまたがり、瓦礫の道をわが家へ帰っていった。

一、被爆当時の概要

概要

- (一) 所在地広島市基町六番地
- (二) 建物の構造 鉄筋コンクリート二階建・建坪延七四六・五坪
- (三) 施設の概略 入院病室 一二室、病床 三〇床
- (四) 在籍職員数四七人(医師一〇人・看護婦二〇人・その他一五人・応召中二人)
- (五) 被爆時の出勤者数 約四〇人(?)
- (六) 爆心地からの距離 約一・三キロメートル
- (七) 代表者 病院長 蜂谷道彦

二、疎開状況

昭和二十年三月上旬から五月上旬にかけて、郊外(安芸郡戸坂村など)の民有の倉庫を借入れ、薬品・治療材料、及び医療機械器具の一部を、二か所に分散疎開した。また、病院内残留の薬品・治療材料の半分を、広島通信局本館倉庫へ分散保管した。

三、防衛態勢

(一) 病院地下室を整備して、入院患者・職員の待避所にあてる一室を作り、診療台、及び一式の治療器具・材料を設備した。

(二) 患者待合室に大型の防火用水槽を置くとともに、その他の室にも、それぞれ、当時の規定どおりの設備を行なった。

(三) 二十年八月、職員を三班に分け、各班輪番で宿直し、罹災者救護の態勢を整えた。

(四) 四月上旬、院長の創意により、人的資源保持のため、医務職員は事情の許す限り、可及的速やかに郊外に居住するよう勧奨した。

(五) 四月中旬、県から救護病院に指定されたので、県衛生課に対し、火傷者処置用油三罐(約五四リットル)を要求して確保した。

(六) 五月二十日、院長の特命により、七月七日を期限として入院患者全員に対し、退院処置を行なった。

(七) 指定避難先は隣接の通信局及び白島国民学校としていた。

四、被爆の惨状と救護活動

六日朝

広島通信病院(通信局東隣り)の防空要員は、五日夜からの警報続出で、睡眠不足のまま、六日の朝をむかえた。午前七時三十一分に警報解除となって、防空要員の大部分は、疲れた身に鞭打って、当日の診療につこうとしていた。その他の職員二〇人余は、平常どおり病院に出勤、または出勤途上にあった。

盛夏八月の日射は、ジリジリと朝から灼けつくように暑く、長期戦争による体力の消耗と、昨夜の睡眠不足がたまって、この暑さは、殊のほか身にこたえる様に思われた。病院の入口や廊下付近には、すでに数人の外来患者が待合せており、廊下の南側にならぶ各診療室には、看護婦たちが診療開始の準備をしていた。二階の看護婦控室にも数人の看護婦が出勤して来ており、事務室では数人の職員が仕事を始めるところであった。

炸裂

蜂谷道彦院長は、防空計画による救護病院の院長として、五日夜から徹夜勤務をし、六日午前五時ごろ、病院から約三〇〇メートル離れた白島東中町の自宅で、仮眠から覚めたとき、ふたたびB29の爆音を聴いた。空襲警報が発令されたが、これは間もなく解除になり、ひと息ついた。

出勤しようとして、着替えに取りかかったときであった。マグネシウム・フラッシュに似た閃光を見た。真暗な中に斜めにかたむいた柱を見いだすまで、自分がどうしていたか解らなかった。柱の下をくぐって外へ飛び出した。丸裸になっていた。妻と一緒に病院へ歩いていったが、たどりつくや動くことができなくなった。蜂谷院長は、数人の職員に抱えられて、傍の小使室に運ばれたが、全身に大小合わせて一〇〇か所のガラス傷があり、ただちに応急手当を行なった。しかし、全身あたかもバケツで血液をあびせたように、血だるまの姿で出血多量、まったく危険な状態であった。

入院患者は、一か月前に万一の場合に備えて、全部退院させていたため、被爆時は下痢のため入院していた看護婦一人を除き、皆無であったから、入院患者の混乱は無かった。

惨状

病院は爆心地から約一・三キロメートル北東に位置していたが、青白いマグネシウム・フラッシュのような強い閃光で、やや強い熱気を感じた瞬間、すごい爆風に襲われた。室内は黄色な塵埃が充満し、真っ暗になった。と、引裂くような悲鳴が、随所に起り、暗やみの中を、人間と悲鳴があわただしく走り去った。

まったく一瞬の出来事であった。しばらくして、周囲が明るさを取りもどし始めたが、室内が明るくなって見ると、ガラス窓をはじめ、すべての物が吹き飛ばされ、メチャクチャに破壊されていた。床上には、微塵に粉碎されたガラスや書類が散乱堆積し、鉄製の窓枠は数か所折れ曲り、部厚いガラスはほとんど跡型もなく吹き飛ばされていた。

窓に吊してあった防空用の暗幕は、直接、光線の当たったものは引火して、病院の火災の原因となった。

悲鳴をあげながら廊下を右往左往する女子職員、よろめきながら二階から降りて来る看護婦たちは、顔から、手から、あるいは足から血を流している者が多かった。頭髮は塵埃で白髪のように乱れ、顔色は蒼白であった。

笹田金一小児科医長は、小児科の診療室で南向きの窓に面したところにおいて、閃光をあげた。その一瞬、自分の手の表皮が焼けて剥げるのを見た。次の瞬間、爆風ではね飛ばされ、椅子と一緒に室の隅にほうり出されていた。明るくなって見ると、腕が火傷していた。

梶井暁夫薬局局長は、薬局で大倉技術員と話しているとき、閃光を見ると同時に、爆風で飛ばされた。病院の屋上にあがって見ると、家々がペチャンコに崩壊しており、その下から、負傷者や色を失った市民が、続々と匍い出して来るのを見た。広島城も吹き飛ばされていて、すでに無く、市内の各所に火の手があがっていた。

小山綾夫眼科医長は、昨夜の空襲警報中の部署待機から解放され、一睡ののち、事務長と打合せするため、玄関右脇の事務室に入ったとき、被爆した。ガラスの破片により頭・顔・手、その他に一〇数か所も負傷し、ことに左腕肘関節部の創が深く、激しい疼痛で、腕が動かせなくなったが、翌七日、重傷の蜂谷院長から、緊急事態に対処するよう指揮運営を命ぜられた。

世良唯一事務局長も事務室で被爆した。ピカッと光ったのは覚えていたが、気がついてみると、傍で話していた溝口・北尾両事務官の姿が無くなっていた。両事務官は、地下にある薬局倉庫に転落し、手さぐりで外へ出たのであった。

佐伯シヨ雑務手は、病院の外まわりの掃除をしていたとき、玄関で閃光を浴び、吹きとばされた。起きてみると真っ暗で、これが最期だと、念仏をとなえているうちに、明るくなったから、後を見ると、今まで往来を通っていた人たちが、みんな倒れていた。自分は傷もないのに手や腕から血が吹き出していた。すぐ薬局へ行って油を塗り、笹田医師や小山医師らと、東隣の通信局の中庭の水槽のところまで逃げた。

火災発生

午前九時ごろ、通信局一階の西端にある病院の薬品倉庫の窓から、黒煙があがっていたが、少数の職員で消しとめた。また、地下室の防火作業にもあたり、火災から守り抜くことができた。このため、多量の薬剤が焼失をまぬがれ、あとで押し寄せた負傷者の治療に役立った。

このあと、南隣の軍用倉庫が燃えはじめ、火勢は次第につのって来て、この火と防空用暗幕の自然着火とが、病院二階に襲いかかり、ふとん部屋から物凄い火を噴きあげた。しかし、病院職員は負傷者ばかりであったから、小山医長は、消火能力の限界にあると判断して、全員に退避を命じた。

猛火はさらに北方に延焼しはじめたが、すでに退避後で、燃えるに任せるほかなかった。かくて二階は歯科診療室を除き、鉄筋コンクリートの残骸をのこして全焼するに至った。

病院の北方約一五〇メートル先の常葉橋のたもとの、消防署のガソリンに上がった火の手が、見る見るうちに拡がって、次々と民家を焼き、ついに病院の北側と東側の民家に移ったが、建物疎開による若干の空地に支えられて、辛うじて延焼をまぬがれた。

西側は、隣接する陸軍幼年学校が炎上し、盛んに火の粉を降らせたが、通信局裏庭の空地をへだてていたのと、死闘ともいうべき消火活動によって、延焼を喰い止めた。

職員の避難

三七人の職員の大部分は負傷して、通信局裏庭に避難したが、残余の者は、牛田・二葉の里方面へ避難した。重

傷者を看護している者は、一応、通信局の中庭に避難したが、ここもまた危険に陥ったから、さらに通信局玄関、次いで前の家屋疎開跡の空地へ避難したのであった。通信局も白島国民学校も全焼し、避難計画どおりにはいかなかった。

職員の大半を避難させたあとに残留した小山・笹田・藤井各医長、桧井薬局局長・北尾事務次席、賀戸・高尾・佐伯その他の職員一〇人余は、重体の蜂谷院長を担架に乗せて、通信局裏庭に避難した。暫らく待避しているうちに、火勢も幾分弱まり、熱風も緩和したので、残留組一同は病院に引返し、次の救護活動に当るべく準備に取りかかった。

救護活動

午後四時ごろ、勝部玄外科医長が登院して来た。勝部医長は、佐伯郡地御前の自宅から出勤途上、宮島線の楽々園駅で被爆、通りあわせたトラックで己妻の救護所に到着し、応急処置をとったのち、余燼くすぶる通信病院にたどりついた。まず蜂谷院長の治療を行なったが、院長は大きな動脈が切れていなかったので生命が助かった。この頃から、病院前の溝に逃げていた通信局員や市民の負傷者が押し寄せはじめた。火災の最中は、寄りつくことができなかつたからである。重傷の人は、病院の庭・入口・廊下・院内各部屋など、あらゆる場所を埋めつくし、軽傷者は、玄関から往来にわたって長い列をつくった。病院の全職員、上は医長から下は雑務手に至るまで、協力一致して負傷者の救護や治療にあたり、翌七日明け方、ようやく軽傷者約二〇〇人の処置を終えた。

しかし、重傷者については、専門技術が必要で、勝部医長一人ではなかなか捗らず、他の医師も看護婦も夜を徹して、手術や処置にあたった。電灯はともらず、散乱したロウソクを拾い集めて使用したり、通信局井口運転手の配慮で、焼残り自動車のバッテリーを使用して照明にかえたりするという困難のなかで、治療が続けられていった。

衛生材料

衛生材料は、二階の倉庫に保管していたのは全部焼失したが、地下室と旧霊柩室と事務室、並びに通信局倉庫の四か所に分散保管していたのが助かり、大半は病院で使用した。しかし、一部は兵隊が来て軍隊の患者の治療に持ち去ったものもあった。

収容した重傷者は、老若男女合わせて二五、六〇人に達し、その中には軍人も含まれていた。被爆当日の夜は、収容者の呻き声、水を求める声、近親者の名を呼ぶ声、寒さを訴える声、激しく嘔吐する音などが、病院の内外に溢れて凄惨この上もなかつた。

尋ね人混雑する

七日になって、家族の行方を尋ねる人が引きもきらず、人手の無いおりから、救護作業に支障を来たすほどであった。この日、収容者の住所・氏名・年齢・連絡先などの調査記録を作成するとともに、収容者氏名を玄関に掲示して、尋ね人の便宜をはかった。

また、収容者を市当局へ報告し、主食などの受配手続きを行なうと共に、通信局厚生課と打合せて、別途の入手方法も配慮した。

戦争が苛烈となってから、万一の場合に備えて、医薬品や衛生材料の確保に努力したから、治療資材はわりかた豊富であったが、被爆によって、顕微鏡その他の機器を失ったことは大きな痛手であった。

八日、通信局保有(疎開先から取寄せた)のタタミ一〇〇余枚の融通を受け、収容者の敷物に転用するとともに、延焼した二階病室へ、焼けたベッドの鉄枠とタタミを利用してベッドとし、収容者の一部を移した。

下痢患者

また、下痢患者が多数発生した。中には血便を一日数十回下痢し、赤痢の疑い濃厚な者もいたので、宇品の暁部隊に依頼し、病院の南側裏庭に板囲いの簡易便所(約一〇坪)と、隔離病舎を急造して患者を移した。しかし、八月二十日ごろになって、それが赤痢ではなく、原子爆弾の放射能障害による病状であることが判明したので、この隔離病舎を解剖室に変更し、もっぱら原爆症の究明に努めた。

医薬品欠乏

一方、八日、九日と経ると共に、被爆負傷者の来院が増加し、備蓄していた医薬品も衛生材料もついに底をついた。県からの補給もあったが、なお不足で、桧井局長はこれらの入手に努力した。

十日、避難中の部内患者が逐次来院したが、病院は収容の余地なく、通信局一階を整理して収容しなければならなかつた。

応援班到着

この日、大阪通信局から救護応援班の八人が乗岡円了医師(大阪通信病院外科主任)引率のもとに、治療材料・食糧など携帯して来援、以後八日間にわたる献身的努力を得た。

また、山陰医師会や比婆医師会からも数人来援があり、一、二日して引揚げた。

外来患者中、通過患者が多数のため繻帯材料の在庫僅少となったが、疎開先からの取寄せも輸送困難のためできず、八月十五日、小山医師が県衛生課へ強硬に交渉して、相当量の補給ができた。

八月十一日、松山通信局から救護応援班数人が来院し、数日後に帰った。

蜂谷院長は重傷であったにもかかわらず、その創部抜糸後、みずから県庁に出向いて治療材料を確保し、かつ院内を初巡視した。

八月十二日、大阪通信局救護応援班が交替し、前班と同じように治療材料などを多量に携帯来援した。引率医師は内科の佐々木徳太郎医師であった。

八月十八日、祇園高等女学校・吉田高等女学校および向原高等女学校など周辺郡部の女学生各二、三〇人ずつが、勤労奉仕団として数日間にわたり来援した。看護の補助・清掃、患者の身の世の世話などの奉仕のほか、彼女らの手により病院二階(病室)火災跡に堆積していた大量の灰を除去し清掃することができた。

八月二十日、広島県の指令によって、永山研吉郎・板岡廉男両医師が看護婦を同伴して診療の応援に来院、爾後九月二十七日まで継続し、多大の成果をもたらした。

食糧対策

収容者や職員の食糧は、被爆後三、四日間は近郊町村からの救援によるにぎり飯の配給によってまかなわれたが、五日目ごろからは中国五県の通信局管内の従業員から、「一握り米」の米約二〇俵が届けられたので、通信局の玄關脇の監視室に保管し、炊事場で雑炊を作り、茶碗に一ぱいくらいずつ、一日三回、収容患者に配給した。しかし、夏枯れで野菜がなく、食糧担当の井町久次郎事務官は、市の配給所に向けあったり、通信部内からの救援野菜の確保に努力して、急場をしのいだ。しかし、収容者も増加する一方で、なお不足したから、大八車をひいて、近郊の戸坂・八木・伴村などの農産地に出向き、各農家からキュウリなど新鮮な野菜を少しずつ分けてもらった。キュウリは生のままで収容者に配ったところ、新鮮なものに飢えていた人々は大いによろこび感謝した。

衣料対策

病院に備蓄されていた寝具・衣料品は、ほとんど焼失し、残っていたものもちまち使い果たしたため全裸・半裸の負傷者を収容するにあたって、非常に困った。昼は真夏の炎天下であったが、夜になると、収容者たちはたいへん寒がって震えたがどうすることも出来なかった。初めのころ、毛布の行きわたらない者は、やむなくカーテンやシーツの焼け残ったのを分けあって、夜の寒さを防いだ。しかし、死亡者を焼くときは、裸のままでは見るに忍びないので、その少ない毛布で死体を包んで葬った。

衣服は、終戦によって軍が解散したので、溝口奎三事務官らが市役所、あるいは軍の残務機関と折衝して軍服を獲得、収容者に配給したが、焼け出された病院職員の中にも、軍服を着て勤務を続ける者があった。

なお、収容患者は九月中旬まで、病院内と通信局一階に常に約二、三〇〇人いたが、なかには、健康になっても帰る家がなく、住みついている者もあった。

障害の研究

八月十五日までは、まだ戦争中で、応急手当に追われてばかりいたが、八月下旬になって、ようやく真の研究ができるようになった。

破壊されて一台もなかった顕微鏡が苦心の末入手できたのは、八月二十日のことであった。これによって、早速に血球計算をはじめ、蜂谷院長は患者の白血球が激減していることを確めた。

また、幾多の症例を研究し、解剖によって病気の正体をつかむため、八月二十六日外科医長の手によってメスが増えられた結果、はたして予想のとおり原爆放射能による独特の症状であることが確認され、ここに放射能による原爆症の正体が見い出されたのであった。

当初、外傷者の治療は、被爆してから一〇日間くらいが限度でほとんど解決つくため、一般外傷と同じように考え、勝部医師は少数の看護婦と共に、一〇日間のことだと不眠不休で治療にあたったが、一〇日たっても二〇日たっても、次第に悪化して死ぬる者がふえていき、その原因がつかめないうまま、まったく途方にくれた。そのとき血液の検査が必要であると気付いたといわれる。

原子症に関する注意発表

八月二十六日、通信局前に「原子症に関する注意」を、蜂谷院長が立案して掲示した。

原子症に関する注意

(一) 八月六日空襲当日、広島市以外にありたる者にして、その後引続き広島市内へ勤務中の者につき血液検査をなしたる処、異状を認めず。爆撃当日広島電信局地下室において執務中の者にして、爆風・光線を殆んど感ぜざりし者につき同様検査を行ないたるも、これまた何ら異状なし。

以上の状態の者は安んじて業務を継続すべし。

(二) 現在までにおいて、白血球の減少を認むる者は概ね爆撃の中心部に近き電話局・電信局・搬送工事局の従業員である。通信局においては白血球減少は概ね軽度または正常(単位容積中五、〇〇〇～八、〇〇〇)に近し。

(三) 火傷の程度と白血球の減少は無関係のもの如し。

頭髮の脱落は必ずしも重症を意味するものに非ず。

(四) 白血球(食菌細胞)の減少ある者は病毒に対する抵抗力弱きを以て、怪我をせぬよう注意すること。

(五) 外傷あらば化膿せぬよう注意すること。化膿したる者は極力その治療に努め、敗血症を起さぬよう注意すること。

(六) なお、東大権威者来広研究の結果、現在ウラニウム(ウラン)の残射を見ざる趣である。以上

八月十八日、岡山医科大学病院から矢谷道義医師が助手および看護婦同伴で来援した。また、広島医科大学の玉川忠太教授が病理研究のため来院した。裏庭に建設した板囲いの仮隔離病舎を研究室に提供、同教授は十月十三日までに二九例(第一回解剖は長堂歯科医員の妻)の屍体を解剖し、貴重な研究資料を採取した。

このころ、熱心な医師の治療にもかかわらず、重症患者は毎日のように死んでいった。その死体は軍隊の手によって収容されていたが、終戦による軍の解隊後は、病院の職員によって、約一〇体の火葬が行なわれた。

死亡者が減りはじめたのは、九月の終りごろで、十月に入ると患者もめっきり少なくなった。

第三項 三菱重工株式会社構内及び構内診療所...477

一、被爆当時の概要

(一) 建物および職員

施設名	所在地	建物の構造	建物面積	在籍職員数	被爆時出勤者数	代表者
ヒロ八五〇一工場 (観音)構内病院	(本院)南観音町地先	木造二階建	691坪	約50人	約50人	日下部 且三
	(分院)西魚屋町四七	木造二階建	不明			
ヒロ八一〇一工場 (江波)構内診療所	江波町地先	木造二階建	不明	約40人	約40人	玉木 康允
	皆実町三丁目九七五ノ一	木造二階建	不明			

(二) 爆心地からの距離

構内病院(観音)約四・三キロメートル

構内診療所(江波)約四・五キロメートル

(三) 施設の概要

施設名	内容	病室数	ベッド数
(観音)構内病院	(本院)外科・内科・耳鼻咽喉科・眼科・歯科	七室	三三床
	(分院)外科・内科・眼科・耳鼻咽喉科・理学診療科	十六室	二一床
(江波)構内診療所	(江波)外科・内科・耳鼻咽喉科・眼科・歯科	なし	なし
	(皆実)外科・内科・耳鼻咽喉科・X線科	なし	なし

二、疎開状況

観音町の構内病院では、古田町の力田療養院・南観音町の説教所(真宗学寮)、ほか一か所繻帯材料・医薬品など数十梱包を分散疎開し、江波町の診療所は、離れた防空壕の中に医薬品その他を分散した。

三、指定避難場所

(一) 構内病院は、南観音町の真宗学寮、及び古田町古江の古江神社下の集会所。

(二) 構内診療所は、診療所から五〇〇メートル先の江波山下のトンネル。

四、被爆の惨状

観音町の病院も、江波町の診療所も、診療開始前の準備、その他の作業で全員が忙しく立ち働いているとき、被爆した。

建物の被害

構内病院は、爆心地から南約四・三キロメートル離れていたが、病院の屋根及び屋根瓦の三分の一が破壊された。窓はほとんど破碎され、室内の戸棚その他器物が倒れ、薬品などにも被害があった。

西魚屋町の分院は、爆心地に至近距離にあり、炸裂と同時に全壊全焼し、被害甚大であった。病院の指定避難先であった南観音町の真宗学寮はほぼ三分の一破壊された。

江波町の構内診療所は、爆心地から南約四・五キロメートルの距離にあったが、窓ガラスが破れて吹き飛ばされ、室内の戸棚・器材が倒され、医薬品の一部が損害を受けた。皆実町(爆心地から南東約二・五キロメートル)の診療所は全壊全焼した。

しかし、観音町の構内病院も、江波町の構内診療所も、ともに火災が発生しなかったから、病院の機能は、職員の努力によって継続することができた。

人的被害

構内病院(分院を含む)、構内診療所(皆実町診療所を含む)の従業員の被害は、次のとおりである。

病院名	即死者	負傷者	行方不明者	合計
構内病院	四人	約三〇人	三人	約三七人
構内診療所	〇人	三人	一人	四人

即死者四人のうち、医師助手一人は神崎寮で、看護婦長一人は、西魚屋町の分院で、事務長は自宅で、事務職員一人は、構内の社宅で下敷きになり死亡した。行方不明者三人は、西魚屋町の分院で被爆し、死体の確認ができなかった者である。負傷者約三〇人は構内の病院で被爆負傷した。

診療所(江波)の行方不明者一人は、構外の講習会へ行く途中、被爆した者、また、負傷者三人は、所内で被爆した者である。

五、救護活動状況

負傷者殺到

観音町の工場も、江波町の工場も死者・負傷者が続出し、大混乱に陥ったが、工場従業員は次の空襲に備えて、ひとまず所定の防空壕に待避した。壕内では、各職場の救護班が応急手当を行ない、重傷者は構内の病院に送った。自力で歩くことのできる多数の負傷者も、病院に駆けこんだ。

午前九時ごろ、市中から観音・江波両工場に負傷者が到着しはじめた。

猛火をくぐって、周辺部へ周辺部へと逃げて来た者、あるいは、火に追われ、川を泳ぎ渡ってやっとたどり着いた者など、当初は比較的軽傷者ばかりであったが、時間がたつと共に、重傷者になっていった。

みんなほとんど衣服をまともせず、ボロボロに裂けた布切れをたれさがらせていた。頭髪は焼け、顔や手足・背かななども焼けただれ、皮膚はひどくむけて、古ジウキンのように垂れさがっていた。誰が誰か、男か女かの見わけもつかない姿であった。

観音工場の病院職員も、江波工場の診療所職員も、災害時における広島市の救護班員として、かねてから覚悟を決めていたから、負傷した職員も、火傷した職員も、また、自分の家族を失った職員も、一人として病院から離れる者はなかった。

負傷者の群れは、血まみれになって、救助を求めつつ歩き、歩きつつ倒れ、そのまま息を引取る者も、数知れずあった。

これら負傷者は、陸軍高射砲陣地があって、軍医のいる南観音町総合グラウンドや、三菱重工業株式会社社宅一帯に数千人、観音工場と江波工場にそれぞれ約一、〇〇〇人が押し寄せた。観音工場には、主として観音・舟入地区の人々が、江波工場には、主として舟入・吉島地区の人々が逃げて来たのであるが、勿論、市中央部から命からがらたどりついた者も多数いた。

観音工場の病院も、江波工場の診療所も、まだ会社従業員の治療が終わっていない時期であったから、混乱はいよいよその極に達した。

全市が壊滅したことを知らなかったから、当初、かねて災害時には、工場内の怪我人は応急処置だけして、重症の者は市内の大きい病院に送ることになっていたもので、次々に送出したが、そのトラックがみな引返して来て、ようやく全市被爆し、火の海と化していることが判った。しかし、これがただ一発の原子爆弾による災害であるということに気づく者は、一人もいなかった。

市中からの避難者は、炸裂直後から次から次へと底無しに続いて来たが、日下部院長及び玉木所長の指揮のもとに、全職員が一致協力して、ずっと不眠不休の治療活動を展開し、またたく間に数日が過ぎていった。

幸い、繃帯材料も医薬品も多量に保管されていたから、これを存分に使用し、重傷者を優先的に扱ったが、その多くは次々と死んでいった。重傷で手術の必要な者は医師の手で行ない、縫合治療は看護婦が行なった。しかし、一度に多数の負傷者が詰めかけたうえ、原子爆弾による負傷の治療法も不明であったから、現在から見れば、適切な処置のほどこせない面もあった。

会社従業員も一般の負傷者も、快方に向った患者には、薬を与えて帰宅させたが、このとき傷の治療に使用した食用油は、市中の救護所にも供給したが、その量は数百リットルに及んだ。

観音・江波両方とも、負傷者が病院の内外に溢れたので、付近に天幕を張ったり、学校教室数棟など空室は、すべて収容所とした。特に南観音町三菱社宅西部地区には、約一〇〇戸の社宅空家があり、各戸に一〇人から一五人ずつの割当てで収容した。これらの収容者への炊出しや治療などには、社宅居住の従業員やその家族が、全力をあげて奉仕した。

また、南観音町の総合グラウンドには、数千の避難者が殺到し、軍医が治療を行なっていたが、ついに処理しきれず、応援を求めて来たので、医師・看護婦約二〇人が、天満川の土手に数日間野宿して、治療にあたった。また、江波国民学校の救護所からも救援の依頼があり、医薬品や衛生材料を持って行って治療を行なった。江波地区は火災にならなかったため、家屋が残り、市中からたくさんの人が、親類縁故を頼って来たから、負傷者も特に多かった。

死体の処理

初めのあいだ、医療従事者は全員病院に泊ろこみ、夜は診察衣一枚に防空ズキンを頭からかぶって、並べた椅子の上に寝たり、防空壕の中に寝たが、朝起きて見ると、避難者がたくさん死んでいた。盛夏の炎天下、死体はたちまち腐敗し、無数のウジがわいて放置できない状態になったから、従業員は重油を使ってこの死体の火葬も行なわ

なければならず、疲労困憊した。

死体の火葬は、江波工場では構内の広場や射的場で約八〇体、観音工場では社宅西部地区の空地で約一〇体、七日から夜となく昼となく行なって、茶毘の煙の絶えまがなかった。僧侶の役は従業員のうち心得ある者が勤めた。

死体の身元確認は困難をきわめた。大混乱の中で詳しいことは聞けなかったが、応答のできる者には、荷札に名前だけ記して、頭の髪や着衣のはしに付けておいた。しかし、夜の間に苦しくて這いまわるらしく、その名札もはずれ、どこの誰れかさっぱり判らなくなっていた。結局、不明のものは、男女別・推定年齢・着衣の種類や図柄などを、骨箱に記しておき、探ねて来る人の判定にまかせた。

骨つぼは、日下部院長の発案で、災害時に備え、組立式の棺と桐の骨つぼを多数作っていたのが間にあったが、それもすぐに使いはたしたので、江波工場の木工場で相当数を急造したのであった。

死体の解剖

被爆数日後、原子爆弾が投下されたという事で、診療所の真屋一郎内科医長が、放射能障害に気づき、血液を調査したところ、白血球が無いのに驚き、収容者全員の採血を実施し、塗抹標本を作るとともに、患者には輸血を行なって効果をあげた。

また、負傷者の症状が、鼻出血・喀血・吐血などに加え、血性下痢があるところから赤痢ではないかと疑われたが、結局、確かな原因がつかめず、人体解剖を行なって、その究明につとめた。

正岡旭医師は、爆心地から約半キロメートルの場所で被爆し、二二日目に死亡した血縁の女性(二二歳)と爆心地から約二・五キロメートルの屋外で被爆し、二五日目に死亡した会社従業員の妻(三五、六歳)の二体を、それぞれ遺族の諒解を得て解剖した。その胃や腸など臓器の表面には、特有な無数の小出血斑点が認められたので、以後、これに適応した処置を行なうことができた。

なお、この解剖した二体の内臓は、すべて標本瓶の中に入れて、大切に保管されていたが、十二月八日、診療所が火災にあい、貴重な研究資料と共に焼失した。

概要

広島陸軍共済病院は、昭和十七年十一月三日、広島市宇品町十三丁目(現在・県立病院)に、宇品の陸軍船舶司令部の管轄下に開設された病院である。

爆心地から南約三・ニキロメートル離れた位置にあり、原子爆弾の炸裂により、窓ガラスは破碎され、塗壁は落下、室内の器物も飛散転倒するという状態であった。幸い、火災から免れ、在院者の被害も少なかったが、しばらくすると、市中心部から南部へ逃げてきた負傷者が多数押し寄せ、大破した病院がたちまち大混乱に陥ったのであった。設立目的は、基町の広島陸軍病院が、軍人患者のみを対象とするのに対して、軍備拡張により増加一途をたどる軍属、およびその家族約六、七万人を対象とする病院であって、敷地約七、〇〇〇坪、病棟木造モルタル塗り二階建約三、〇〇〇坪、平時収容能力は二五〇床、非常収容能力五〇〇床という規模であった。

被爆当時の職員は、次のとおりである。

院長 軍医中将 小宮山友郎

副院長 軍医少佐 宇都信

庶務課長(兼)衛生材料課長 同右

経理課長 主計少佐 皆崎義顕

職員

軍医 約二〇人(定員 24 人のところ出征により減少)

看護婦 一二〇人

看護婦養成所生徒 八〇人(一年生四〇人、二年生四〇人)

その他 三〇人

合計二五〇余人

病院の防空態勢としては、構内の各所に防空壕を構築し、空襲警報の場合は収容患者を待避させることにしていた。職員は、救護班を二個班編成し、常に活動できる準備をしたほかは、職員自体は待避することなく、持場を死守することになっていた。

一方、空襲の激化に備え、二十年三月、安佐郡戸山村の民家に、医薬品・衛生材料などを分散疎開し、病院には三か月分だけ残っていた。また、佐伯郡の井口分院へ重症患者五〇人を疎開させ、病院には軽症の独歩患者約四〇〇人がいた。

六日の朝

五日の夜から六日の朝にかけて、しばしば警報が発令されたが、動揺するということはなかった。この頃はもう敵機の来襲には馴れていて、別に気にもせず、それぞれの作業を進めていた。

宇都副院長は、翠町の自宅から午前七時三十分ごろ出勤した。そして、この朝、井口分院へ患者送るため、船舶司令部から輸送車の来るのを、二階の副院長室で、タバコをくゆらしながら待っていた。

惨禍

そのとき、窓の向い側の病棟の軒のあたりが、突然ピカッと稲妻のように、実にももの凄く強烈に光った。と、建物全体がドスンと極めて太く短く烈しく震動した。宇都副院長は、椅子から転倒し、書類戸棚の下敷きになっていた。天井から落下した壁土をはねのけ、起ちあがって見ると、ガラスの破片がうず高く一面に散乱している。「地震だ。」と思い、「待避々々！」と、ど鳴りながら、二階から駆け降りた。

そのときはもう、職員も患者も院庭に、みな逃げ出ており、防空壕に入り切れない者が右往左往していた。「落ちつけ、落ちつけ。」と叫び、安否を尋ねると、全員脱出したといったが、責任感から再び院内に帰り一巡して調べたところ、逃げおくれた者は一人もいなかった。みんな軽傷は受けていたが、幸いに在院者に死亡者・重傷者は一人もいなかった。

この頃、市の中心部を望見すると、もの凄い一大怪雲が天に沖して立ち料り、ムクムクと群がり拡がって、空を蔽いつつあった。

負傷者殺到

やがて、何処からともなく裸体に近い負傷者が押し寄せて来た。病院を囲むコンクリート・ブロック塀が、すべて

倒壊したため、負傷者は勝手に病院に入りこんで来た。病院の内外はたちまち立錐の余地も無いほど負傷者で埋まり、焦熱地獄そのものと化した。

救護活動

あらかじめ組織されていた救護班二個班は、ただちに救護活動を開始し、全員各部署についた。

しかし、負傷者は刻々と増加する一方であったから、急速、第一診療部・第二診療部・手術部を編成し、全職員が治療にあたることにした。

負傷者は、重傷者から順次治療するのが原則であるが、「水をくれ。」「助けてくれ。乏叫ぶ断末魔の群衆は、もはや命令も号令も通らず、重傷で力のない者を乗り越え、軽傷の者がわれ先きにと、診療部になだれこんで来た。

しかし、多くの戦場で働いて来た小宮山院長は、手術室において、無残に負傷した群衆に取りかこまれながらも、泰然自若として、次々に手術を進めていった。

宇都副院長は、これら群衆の整理にあたったが、数千人の負傷者が、病院の門前から翠町に至るまでの道路と、丹那方面の道路に長い列をつくった。病院にたどりついたとき、すでに息絶え絶えの人が多かったから、荷札を出して来て、住所・氏名を聞き、全員につけさせるようにしたが、もはやムシの息となり、こちらの問いに返答できない人もたくさんあった。

負傷者の治療に使用された薬剤は、大部分がチンクエールで、当初はこれを正式なやりかたで調製したが、二〇数人の薬局員が総掛りで造っても間に合わない状態になったので、多数のバケツを使用して、掌で練った。基礎薬のオリーブ油・胡麻油・大豆油・椿油・糠油・山茶花油などをコン包から取出すのも待ちかねるといふ忙しさであり、何年分かのチンクもオイルもたちまち使いつくして、ついに赤チンキを使用した。ホウタイ材料は豊富に貯蔵していたから不自由しなかった。医員・看護婦とも構内の隅々まで巡回して、治療所へ寄りつく力のたい負傷者の治療にあたるなど、全力をあげて活動を続けるうちに夕方となった。

このころ、船舶司令部からと思われるが、牛乳と乾パンがとどけられたので、負傷者に配ったが、乾パンは咽喉につかえるので好まれず、次ににぎりめしが配給された。

そのうちに夜となったが電灯がつかず、ロウソク・懐中電灯・カンテラ、あるいは古めかしいガンドウ提灯まで持ち出して、治療を続行したが、夜の更けると共に、懐中電灯は電池が無くなり、ロウソクも短くなり、ついに真の暗闇となったので、一応、治療を休止したのであった。

ちなみに、宇都副院長は居住地翠町の国民義勇隊小隊長であり、この六日は、女子隊員一〇〇人余を引率して・雑魚場町の建物疎開作業に出動することになっていたが、前記のとおり、井口分院へ患者輸送の任務があったため、乙女夫人が小隊長代理を勤めて出動し、被爆した。全員死亡したが、夫人一人は重傷で救援隊のトラックに乗せられ、宇品へ輸送される途中、共済病院に行きたいと、傍の憲兵にたのんだところ、「この混乱に個人のいうとおりににはゆかない。」と、怒鳴られ、トラックから御幸橋の上に蹴り落とされて気を失った。意識を回復してから這うようにして、自力で共済病院にたどりついた。声をきくまで宇都副院長はそれが自分の妻であることが解らなかつたほどで、夫人はまつ黒く汚れ、全裸に近く、身体が腫れあがっていた。

広島県立第一中学校の生徒であった次男桂三も、雑魚場町に出動し、疎開跡の瓦を運んでいるときに被爆した。友人四、五人と一緒に共済病院にたどりつき、治療を受けたが、肩胛骨のあたりに大きき孔があいており、左手はブラブラであった。少しも痛くないと言って元気そうに見えたが、ロウソクの薄暗い病室で、母親の生命を祈りつつ、ついに死亡した。なお宇都夫人は、その後、治療を続けて奇蹟的に健康を回復した。

二日目

七日の朝を迎えると、病院の職員は早朝から、昨日の過労を忘れたように活発に治療を開始した。負傷者は昨日よりも増して、なお病院の前に長蛇の列をつくっていたが、ようやく落ち着きを取りもどしはじめていた。

これら負傷者とは別に、肉親縁者を探しに来院する者が激増し、死体に取りすがって号泣する人、無残な屍相を見て卒倒する人など多くあって混乱した。

死体処理

院内は、すでに屍と化した犠牲者が累々と折り重なり、その死臭が息苦しいほど充満して、治療活動に支障を来たしたから、宇品の警察署と相談して、死体を処理することにした。

この日、郡部から警防団が来援し、病院から東方三〇〇メートルばかり先の丹那駅付近の畑に、担架で搬出した。しかし、死体が多くなかなか進捗しないので、看護婦もこの作業に従事した。

警察官は死者の氏名・人相・年齢・服装などを克明に記録したが、半裸以上の者が多く、しかも顔面も体も四肢も火傷や外傷で腫張変貌しているため、識別も困難であった。身元不明者は、外貌を見てその特徴、あるいはバンドの止め金、地下足袋の半分など、目じるしにして、火葬にふすことにした。

死体の数は、数百に達したが、死体を山積みして点火しかけたところへ駆けて来て、肉親縁者の死体を取り出してくれと泣いて訴える人などもあり、その応接も多忙をきわめた。

死亡者は、当初来院したときにつけておいた荷札により、その氏名を病院前に掲示しておき、探索者の便宜をはかったが、現在火葬中と書いてあるのを見て、現場に駆けつけ、泣きもだえる人も多く見られた。

尋ね人は、一週間くらい続いたが、宇都副院長が面会して、できるだけ力をつくした。

調査団の診療

八月三十日、東京帝国大学調査班都築正男教授ら一行一〇人が来院し、構内の看護婦宿舎に宿泊し、約二〇日間、午前中診療・午後調査という作業を続けた。都築博士はゴム長靴に巻脚絆という簡素な服装で、その人柄がしのばれた。ついで京都帝国大学調査班菊池武彦教授ら一行が来院して宿泊、午前中診療・午後調査をおこなった。これら調査団の世話は土取看護婦が献身的に奉仕し、深く感謝された。

終戦

終戦となり、次々に軍隊が解散したが、共済病院に対しては、何ら通知がないので、そのまま医療活動を続けていたところ、職員のなかには早く帰省したい者もあり、一時騒然とした。敗戦とは言え、命令が無いものをどうすることもできず、作業を続行した。

二十年十月五日、被爆以来の臨時救護所が閉鎖され、日本医療団病院が開設されたので、これに譲り、日本医療団宇品病院として再出発することに決定した。

しかし、病院は原子爆弾によって破壊されたままになっていたため、施設を修理、人員を補充することになり、宇品の陸軍船舶練習部の木村経一主計少佐が再建要員に任命された。木村少佐は、陸軍船舶練習部の残務整理完了時の十一月一日から、日本医療団主事として経理を担当し、以後九か月間、この宇品病院で勤務した。

宇品病院は、十一月に復旧を開始し、翌二十一年一月、一応、病院らしく修理せられると共に陣容を整え、日本医療団宇品病院がここに発足した。病院が再発足し、治療がふたたび開始されると、また、被爆患者が多数来院して多忙をきわめた。

後日、この病院が県立広島病院となったのである。

第五項 県立広島病院...490

一、被爆当時の概要

概要

(一) 所在地広島市水主町

(二) 設置概要

明治十一年四月十五日、広島藩主浅野氏の下屋敷與楽園を接收して、県庁舎と共にその西側に建設された。南に広大な庭園(與楽園)を控え、西側は本川に臨んでいた。庭園は大部分が池で、周囲に磯馴松を配した江戸時代の回遊式名園であった。

(三) 規模の概略

総敷地八、〇〇〇坪、病床二五〇余を備えていた。

建物は木造二階建。中央部は明治六年創立の広島医学校時代の病棟であった。

機構・職員

(四) 機構及び職員

院長 石橋修三	
各部名	部長名
第一内科部	石橋 修三
第二内科部	比企 千代四
外科部	山下 寛三
産婦人科部	松本 操一
耳鼻咽喉科	蔵本 養三
眼科部	高橋 謙
小児科部	小山 祐
皮膚科部	頼 武夫
歯科部	浅野 亀
病理部	(部長囑託) 玉川 忠太
レントゲン科	(技手) 香川 狗吾
薬剤部	福原 義景
庶務部	大上 真一
炊事部	(主任) 橋本 暁
看護婦部長 大坪ワカ	

なお職員は、石橋院長以下総数約二〇〇人ばかりいたが、病棟疎開、患者疎開などにより、被爆時は幾分か減少していた。

(五) 爆心地からの距離 約八〇〇〇メートル

二、防空態勢

昭和二十年七月、当時比較的近代的と考えられていた本館一号館・二号館の二病棟と、最南端の九号館・十号館の二病棟を残して、中央の五館を建物疎開して病床を減じ、その空地に防空壕を構築して避難所を整えた。

同時に機械類・薬品類その他の重要な物品はすべて市の周辺部や郡部へ移した。

また、医師・看護婦・庶務係や炊事係・小使などで態勢を整えて、石橋院長のもとに、連日防空訓練をおこなった。

夜間態勢としては、医師三人・庶務一人・看護婦数人が当直し、みな防空服装のままですべて就寝した。このうち一人が不寝番に立つことが決められており、万一空襲の場合は、先任者が総指揮に当り、他は薬剤その他の材料をできるだけ安全地帯に運ぶこと、看護婦を引率して他へ避難することなど打合わされていた。

七月ごろからは、なるべく入院患者をとらないようにし、外来診療を主として、診療二部長宿直制をしき、常時、救護班の編成可能な態勢を整えた。また、看護婦の三分の一(一三人)ずつを交替で、健民修練として、チチヤス牧場で労力奉仕すると共に、休養と非常時救援の体制をとらせていたので、広島被爆に際し、この看護婦たちが出動して大いに活躍した。

三、被害状況

全壊全焼

午前八時十五分、原子爆弾の炸裂とともに病院の建物は全壊し、またたくまに全焼した。炸裂と同時に、本館(一号館)と二号館八型に倒れかかって、その間にいた者は、この偶然のトンネルを通過して避難することができた。また、看護婦宿舎にいた者の中には、強烈な爆風によって本川の水面に吹き飛ばされた者もあり、人的被害は県庁と同じ

く甚大であった。

病院内で被爆した職員は大多数が即死か、あるいは数日後に死亡した。病院内で被爆し、翌年四月ごろまで生存した者は、石橋院長と他に看護婦一人だけであった。

六日当日

六日当日、石橋院長は、本館(一号館)と、その南にあった二号館(薬局その他)の間に建てられた八畳程度の独立した建物を、書斎兼居室(院長室)として使っていたが、原子爆弾の炸裂時には、この部屋にいて被爆した。

その建物は比較的頑丈であったが、閃光と共に一瞬まっ暗となり、石橋院長は床にたたきつけられて失神した。しばらくして気がついた時には机と本箱の間に狭まれて小さくなっていた。あたりはまっ暗で異様な臭気が立ち込めていた。身体は動かすことができるが、暗闇でどうにもならない。その時、パッと光りがさしこんできた。

その光りをたどり、材木をくぐり抜けてようやく脱出した。外傷はかすり傷程度であった。

そのあと病院の裏庭で、次々と這いだして来る職員と無事をよるこびあい、一緒に下敷きになっている人々の救助に努めた。

この日、病院の宿直部長は石橋院長・山下外科部長・浅野歯科部長であった。山下部長は即死、浅野部長は二階から吹き飛ばされて骨折し、福山に移送後に死亡した。薬局宿直の正田薬剤員・事務宿直宮田職員が即死、炊事関係の人々も即死であった。

その他の本院職員は、ほとんど衝撃と負傷で防空壕に避難したまま呆然としていた。このほか、出勤の途中で即死、あるいは火傷で長期療養の必要な者が多く、被爆後、満足に働ける者は二、三人に過ぎなかった。当日、病院内では第一号館の二階の講堂で、看護婦科の期末試験が、八時から実施されていて、受験生一〇〇余人が被爆した。

このうち、当日の立会講師の眼科部長代理高橋謙博士以下四〇人が、建物の下敷きとなり脱出できず焼死した。

脱出し得た看護婦科受験生たちは互いに呼びあい、励ましあって救い出そうと努力したが、まもなく火災が発生したため散り散りになって逃げのびた。ボロボロになったセーラー服にモンペ姿、それに裸足で、逃げられる者は逃げたが、これらも、後日県衛生課の篠田吾一主事の調査によると、結局八〇人近くの者が死亡していた。

河原町の健康相談所には、看護婦科を終了し、保健婦科に進んだ三〇人がいたが、幸運にも八月一日から一か月の実習のため、県下各保健所に配置されていたから、広島保健所配属の四・五人を除く他の者は被爆から免れることができた。

電車宮島線の西広島駅で被爆した篠田主事は、正午を少し過ぎたころ、県庁の安否を尋ねていく途中、火災の最中の己斐-鷹野橋間の六間道路を、やっと住吉橋の西詰めまで行ったとき、石橋院長にバッタリ出会った。

院長は悲痛な面もちで、「県病院は全滅です。職員も全滅です。今とても県庁には行けませんよ。」と、言った。

石橋院長は全裸で、ただ一枚のカーテンのような布を肩から斜めに袈裟掛けにして、破れた草履をはいていた。汚れて黒く煤けたその顔は、一目ではとても院長とは気づかない程の姿であった。

七日以後

七日早朝、金森芳松医師が、広島病院の状況を視察に行くと、病院はすっかり焼け落ちており、コンクリートの風呂場が残っているほかは、瓦と石ころが雑然と散乱しているだけであった。水主町辺には、死体が点々として散らしていた。県庁の正門と東門の辺に、一〇数人の屈強な男子が、痙攣でも起しているような状態で、身体を屈曲させ、手指などは何かをつかむような格好で死んでいた。

九日、金森医師は再度病院跡を尋ねた。途中、住吉橋の所で、兵隊が長い竿で死体を川から引きあげていた。多くが一四、五歳の少年であったが、おそらく病院上手の建物疎開に来ていた県立第二中学校二年生たちであったろうという。

病院跡には立札がしてあり、「古田国民学校にて診療開始」と、書いてあった。

四、被爆後の活動

古田国民学校で活動

県の防衛計画として、県衛生課及び県立広島病院は、万一の災害に備えて、その第一避難集合場所を皆実町の医学専門学校に、第二を古田国民学校に指定し、それぞれ医療機材・薬品などを疎開していたが、皆実町は使用不能となり、第二の古田国民学校がその避難集合場所となった。

当日、午後四時ごろ、篠田吾一主事が駆けつけたときには、県職員では衛生課の村崎レントゲン技師がただ一人、佐伯郡原村の病院からの看護婦数人の来援を得て、校舎内外にあふれた負傷者の救護にあたっていた。医者は外科

の松尾威佐美医師一人で、保健婦科の生徒山田某もかいがいしく働いていた。

松尾医師は、全裸に近く白いカーテン一枚で下半身を覆ったまま、家族の死亡をもちえりみず、多数負傷者の治療に活躍した。うす暗いロウソクの光りのもとで、一応の治療を終ったのは夜の十時に近かった。

その松尾医師も数日後、原爆症で死亡した。

仮救護本部設置

一方、県衛生課被害甚大で、職員の安否も判らなかつたが、六日午後、川上輝夫技師が軍用トラックで廿日市の自宅から県庁へ向う途中、高須付近で呼吸も苦しそうに負傷した喜多島建麿衛生課長と同僚二、三人に、偶然に出合った。川上技師は入市できないことを知り、課長と行動を共にすることにした。

たまたま高須に水野弘義主任技師の家があつたので、一行はそこに避難し、一応仮りに「県救護本部」とした。

七日早朝、川上技師をはじめ、篠田・中野・川田・森田の各課員が、高須の課長のもとに集合した。

衛生課長は、河原町の官舎で被爆し、肋骨三本を折って重傷であつたが、「生き残った我々は少数ではあるが、力を合わせれば強い。救護に最善を尽そう。ただ今から、古田国民学校を救護本部として第一歩を踏みだそう。」と、職員を激励した。

近所からリヤカーを借りて来て、衛生課長を乗せ、すぐに古田国民学校に出動し、救護作業の準備にとりかかり、課長を中心に数人の職員で、ここにあらためて「県救護本部」を開設した。

救護活動をはじめて二時間ばかり経つたころ、山口町の東警察署内に設けられた臨時県庁(七日、比治山多聞院から移る)から連絡があり、そこに救護本部を移動した。

頼武夫医師は、京橋町の自宅で被爆し、家は全焼、辛うじて脱出した。七日、東警察署内の臨時県庁に行き、喜多島衛生課長と会い、病院の救護体制を編成することと、負傷職員の収容計画と、避難予定地の古田国民学校を借りることなどを決めた。

県病院の防空壕に避難している者は、今日一日、そのまま安静にし、皆が同一行動をとるよう打合わせた。

新救護態勢

八日早朝、呉海軍から来ていた救護トラック二台を借りて、県病院の負傷職員を古田国民学校に収容した。同校に疎開依託してあつた医療器具・薬品を整備し、休暇中で空いていた教室全部を借用、これに疎開していた畳一二〇枚を、一枚一人分のベットとして敷き並べ、次のように救護診療態勢を整えた。

院長 石橋修三

診療主任 頼武夫

内科方面 金森芳松

外科方面 松本操一・世木田務・上田敏子

薬局 福原景・正田善吉

庶務主任 小林雄二

看護婦長 大坪ワカ

(主として救護本部との連絡に当り、毎日徒歩で往復)

看護婦 一三人

(チヤス牧場で健民修練中の看護婦が参加した)

右の態勢のうち、頼・金森・小林・及び全看護婦は連日宿直し、一日八時間休養の態勢とし、他の者は日勤とした。給食については、国民学校の婦人教員の奉仕があり、全部を委任した。

九日から救護病院を開設したが、収容患者は一日で満床となり、その後は、ワラムシロを一人当一枚として増床した。この他に外来患者が一〇〇余入もあり、診療は多忙をきわめた。

患者の病状は、外傷・火傷が主であつたが、消毒も充分でなく、縫合部の化膿した者もあつたり、火傷もリパノール、クロールミン液を以て処理する縄帯交換が主であつた。

そのうちに、下痢患者が続発したが熱はなく、内科方面でも赤痢とは少し異なつた症状であるとして、主として収斂剤を使つたが効果なく、栄養補給に糖・ビタミン注射を行なつていたが、体力消耗による死亡者が続出した。後日、放射線による消化壁のカタルないし潰瘍と考えられたが、それとしても、当時は施すべき手段はなかつたのである。職員も数人倒れ、夜半校庭において涙ながらに茶毘にふした。

十五日、終戦を迎えて一度に全身の力が抜けたが、救護活動はさらに続けられた。生き残つた県病院職員の配置

個所があらためて決められ、それぞれの場所で負傷者の便宜に応ずることになった。

牛田町の自宅で被爆したが怪我がなく、牛田国民学校に殺到した負傷者の救護にあたっていた太田萩枝女医は、上流川町の勸業銀行の焼ビルが勤務場所となった。二十三日に俸給を受取りに古田国民学校に出向いて行ったが、生き残っていた幾人かの顔も既に亡くなっており、こまめに走りまわっていた炊事婦の姿もこの世から消えていた。

九月に入って、国民学校は第二学期を始めることになり、教室が救護所になっている事に対して、父兄の非難が高まり、収容患者の預先もないまま、八方に手をつくした結果、草津国民学校の好意により、そこへ移転することになった。ここには、もともと軍隊が駐屯していたから、軍人の負傷者もたくさん収容されているほか、一般市民も数百人(半数は負傷者で残り半数が家を失った人)に及び、ほとんどの教室や講堂に溢れていた。大山陟医師は、七日午後からすでにここで、他の幾人かの開業医と一緒に治療活動に当たっていた。また、賀茂郡西条町の傷疾軍人広島療養所の医師・看護婦などの一行が、ここへ応援に来て大いに活動した。

新院長就任

この頃、負傷した石橋院長に代って、黒川巖博士が院長に就任した。外科の世木田務医師も軍隊から復員してすぐに参加し、石橋(院長令息)・渡辺・古田・香川などの新医学士が来援して、救護活動は一段と活気をおびて来た。

頼医師と終始一緒に活動した内科担当の金森芳松医師は、連日、草津国民学校に泊りこんで活動していたが、九月の初め、京都帝国大学医学部から教授二人、助手数人が原子爆弾の障害調査で来広し、地御前に宿泊し、毎日、草津救護所に通い多数死亡者の病理解剖を実施したとき、金森医師も助手として、これに加わった。

金森医師の手記によれば、「患者の内臓に出血その他の変化があつて驚かされた。腸粘膜のごときは発赤腫張著しく、血便を出して死んだ原因が判然とした。また友人の、尿が出なくなつて死んだ原因も腎臓の障碍と想像された。次に火傷の問題であるが、皮膚に火傷軽度の時は、放射線が皮膚を素通りして次の組織に、主として内臓に障碍を与え、ために重症あるいは死亡者多く、皮膚火傷著明の人は、放射線が皮膚に作用して障碍が深部に達せず、ために軽傷あるいは死を免れたと想像した。血液では白血球減少が認められ、その減少の程度如何が予後を決定すると思われた。」という。

袋町国民学校に開設

山口町の東警察署内の臨時県庁が、八月二十日に東洋工業株式会社へ移ってから、衛生課は一緒に行かず、外郭だけになった袋町国民学校に移った。九月になってから牛田町の太田萩枝医師も勸業銀行の救護所からこの救護所に変って努力を続けたが、医師の中には郷里の田舎へひっこんで出て来ない者や、一〇日に一度ぐらい、ただ顔を見せに来るだけという者もあった。

しかし、日ごとに外地から若い元気な職員が引揚げて帰りはじめ、二階の衛生課も、衝立をたてた一つ隣の市保健所にも、医師・薬剤師・事務職員などのいきいきした活気が見え、ようやく医療機関の総元締めとしての正常な機能をとりもどしはじめた。

翌二十一年三月三十一日、日本医療団に全員が被爆患者と共に移管せられ、ここに県立広島病院は一応閉鎖した。後にG・H・Qから医療団の解散を命ぜられると共に、県民から県立病院復活の声が高くあがり、新たに県立病院が発足したのであった。

市内医療機関全滅に瀕す

広島市の医療救護態勢は、軍都広島 of 医師会という自覚のもとに、早くから着々と整備され、訓練も重ねていたが、原子爆弾の前にもろくも潰れた。

市内の医師・歯科医師・薬剤師・看護婦などの総数の約九三パーセントが罹災し、被爆直後は何らなすすべもなかった。昭和十九年に県当局が「防空医療救護対策要綱」を発し、医療関係者の市外への疎開を許さないことにしたので、結局、禁足されたまま全員が被爆するという悲劇を生んだ。

負傷しながらも歩行できる市民は、火炎の中を辛うじて脱出し、安芸郡・安佐郡・佐伯郡など広島市の近郊市町村へ、続々と避難して行った。

広島市防空計画において、万一の災害に対し、市内からの避難先があらかじめ、これら近郊町村に指定してあったし、親類縁故者も多かったから、自然にそうだったとはいうものの、その前に、炸裂下の市内には一時間もとどまっていることができなかつたのである。中には昭和町の一部市民のように、例外的に踏みとどまった者もあったが、それは火勢から、運良くその場所が逸れたためである。

近郊に避難して行く途中で、力つきて死ぬる者が続出したし、また、目的地まで行く力なくその場にうずくまる負傷者も無数にあった。

ともあれ、昭和二十一年版広島市勢要覧の記録によれば、県下各郡への避難者総数は一四九、一八八人となっており、安佐郡が最も多く次いで安芸郡・佐伯郡で、この三郡が他の郡よりとび抜けて多く、全体の三分の二以上の一一六、七一六人である。

これら多数の避難者が、一挙に各郡に殺到し、各学校・寺院・神社・農協事務所・役場をはじめ、一般民家にも負傷者が溢れ、その軒下、道ばたにも横たわって救護を求めた。

突然、家の内外に流れこんで来た半裸全裸の負傷者の「水を…水をください。」「苦しい殺してくれ。」と叫ぶ声などの、降って湧いたような修羅場のなかで、ただオロオロしながら、ある農家の老婆は、「どうしてあげることもできません」と泣き声になって言ったが、刻一刻、負傷者は増加するばかりという状態であった。

一方、避難者がさほど来なかつた地区では、警察署からの救護団派遣の要請で、医師・看護婦・薬剤師・歯科医師・助産婦などの医療救護班を急ぎ編成して警防団員らと共に出動した。

ただし、避難者の殺到した近郊地区では、流れこんだ負傷者の治療が精一杯で、広島市内の救援に出動できないところもあった。

傷痕軍人療養所の出勤

六日午前九時ごろ、賀茂郡西条警察署から、傷痕軍人療養所(広島市まで約三二キロメートル)に対して、「広島から負傷者が送られて来るから収容してくれ」との電話連絡があった。同所は結核療養所であるから外傷者は収容できない旨を伝えて、一度は断わつたが、すぐに異常事態の発生したらしいことが判って受入れることにし、藤井実所長は新築した二つの病棟に一五四人を収容した。

正午前に、広島へただちに救護班を派遣するよう警察から電話があり、沢崎博次医師を班長とする六人の第一班が、警察のトラックで出動した。しかし、広島市の東端青崎町付近で、避難する群衆にはばまれて前進できず、その場所を仮救護所として治療にあたった。

沢崎医師は、警察電話で「一班だけではどうにもならぬ、すぐ次も出てくれ」と療養所の藤井実所長に救援を求めた。藤井所長はみずから第二班(一〇人)を引率し、西条町の警防団の救援隊が乗っていくトラックに便乗して、午後二時ごろ出動した。西条から広島市まではトラックで約二時間かかるので、市内の荒神橋の上まで来たときは午後四時ごろであった。荒神橋で、倒れた電柱や電線にさえぎられてトラックは進まず、一同は下車し、医療班は警防団と別行動を取った。

この第二班の出動に際して同乗して来た療養所事務室の鴉田藤太郎事務官は、第二班と荒神橋で別れて、白島町の自宅に行こうとしたが猛火のため行くことができず、諦めて引返蓬中、京橋と稲荷橋(電車鉄橋)間の土手の上で、先きに別れた藤井所長らの救護班にめぐりあった。

「どこか救護所はないか。」という。

「東警察署が焼け残っていたようです。」と鴉田事務官は、引返すときに見た様子を言った。

東警察署には、すでに負傷者がたくさん逃げこんでおり、重傷の松坂義正医師が二、三人の看護婦を指揮して治療を展開していたので、ただちにこれに協力することにした。

初めは西条警察署の指揮下に入ることにして、東練兵場の救護所に行こうとしたが、幟町国民学校の台寿治校長から「これだけの負傷者を見捨てて他へ移るのか、せめて学童をかばって負傷した女の先生の手当てをして行ってくれ。」と懇請され、ついに移動せず、夜半になるまでずっと、ここで治療をおこなった。小笠原義雄医師は、単に警察署内の負傷者のみならず、付近の河岸や道端に倒れている多くの負傷者の治療をおこなった。

負傷者は次々にやって来たが、鴉田事務官は自分の手帳に、ロウソクの灯を頼りに一人一人、カルテ代りに住所・氏名・年齢・負傷の程度(傷病名)を記録した。しかし、あまりにも多数で大混乱のさなかであったから、初めから四人ぐらいまでは、負傷程度まで書いたが、五人めあたりから、住所・氏名・年齢だけを走り書きした。救護開始からほぼ八〇人くらいまで書き続けたが、あとは記録するどころではなくなり、大混雑の中で夜半までに約一五〇人の治療をおこなった。

夜の十一時ごろ、手持ちの医薬品が底をつき、治療できなくなったので、再び荒神橋の上まで帰って、トラックに便乗し、真夜中に西条に帰った。

翌七日から十五日ごろまで、引続き出動して、本川国民学校・草津国民学校、あるいは江田島などの臨時救護所において治療活動をおこなった。なお、鴉田事務官(現在・厚生省中国地方医務局経理課長)は昭和四十四年九月、永く保管していた当時の治療者記入の手帳を、他の資料と共に広島平和記念資料館に、参考資料として寄贈した。

尾道市医師会出動

尾道市医師会(広島市まで約八四キロメートル)は、六日、尾道警察署から連絡を受け、医師・歯科医師・薬剤師・産婆・看護婦など二〇〇人を、当日正午に召集して七、八個班を編成した。

まず三個班が、午後二時ごろトラック二台に分乗して出動した。ほぼ鉄道沿線に沿って進み、午後七時過ぎごろ、比治山公園の多門院に仮設された県防空本部に到着し、付近の負傷者の治療にあたった。当夜は、比治山公園の路傍に野宿し、翌七日、古田国民学校の臨時救護所で数百人の負傷者の治療にあたった。七日の夜、尾道に帰り、その後数回にわたって交替で各班が出動した。

豊田郡医師会出動

豊田郡医師会(広島市まで約四五キロメートル)は、六日午前十一時に大崎上島の木江町警察署から連絡があり、ただちに医療救護班を召集した。第一班は医師三人・歯科医師一人・看護婦四人、第二班は医師二人・看護婦二人で、非常時用衛生材料(繃帯・ガーゼ・マキユロ・リパノール・アルコール・油一升五升その他)を携行し、警防団と共に海を渡って、午後二時竹原に集合した。午後五時に臨時列車で広島へ向った。川尻駅で大崎下島からの救護班と警防団に合流し、午後八時過ぎに安芸郡海田市駅に下車した。そこから徒歩で、なお火災の治まらぬ市内を見ながら、午後十一時過ぎ、大混乱の東練兵場に到着した。しかし、県救護本部との連絡が取れず、当夜はここで露営した。

翌七日、東練兵場の北辺、二葉山の麓の国前寺に救護所を設け、警防団が運びこむ負傷者の治療にあたった。寺の境内に充ちた数百人の負傷者の治療に、医薬品をたちまち消費したが、補給が受けられなかったので、警防団員だけを残し、医療班は、一応帰島し、島内の避難者の治療にあたった。

山県郡医師会出動

山県郡医師会(広島市まで約四五キロメートル)は、六日午前九時ごろ、広島市救援の出動要請を受けて、急ぎ召集し、医師九人・歯科医師二人・薬剤師二人・看護婦六、七人・産婆三人で四個班を編成して出動した。

広島市に入る途中、安佐郡可部町(広島市hまで一四キロメートル)の品窮寺において、トラックを停めて治療をおこなった。

ここには、広島市からの避難者が群がって集り、診ないで通過できる状態ではなかった。一応の治療をしてからようやく広島市の三篠信用組合に到着した。この建物は鉄筋コンクリート造りで、内部は焼けていたが外部を残しており、臨時救護所となって多くの負傷者を収容していた。建物の付近にも数多くの負傷者が横たわっていて、休む暇もない治療活動を展開した。山県郡の医療班は六日の可部の品窮寺をはじめとして、市内では三篠信用組合・被服廠・勸業銀行などの臨時救護所で、十七日まで活動した。

高田郡医師会出動

高田郡医師会(広島市まで約四五キロメートル)は、六日午前九時ごろ、吉田警察署から、広島市が大爆撃を受け

て、負傷者が可部町へ避難しているから、救護班を編成して、すぐに出動するよう命令を受けた。

医師会は、ただちに医師・看護婦・保健婦など三個班を編成して出動した。第一班は医師三人、第二班は医師四人、第三班は医師三人で、それぞれ看護婦・保健婦などが若干人つきそった。

可部町では、警察署の内外や寺院の木堂とその付近に多くの負傷者が集っており、すぐに治療を開始した。負傷者は警察署の内部では、ムシロの上に寝かされていたが、ほとんどの者は地面の上にそのまま倒れており、「水をくれ、水をくれ。」「苦しいから早く殺してください。」などと、口々に叫んでいた。

治療をしている最中に、三次町からの救護班が到着し、協力しあって夜半に至るまで活動を続けた。

翌七日、一個班が外郭だけ焼け残った広島市役所の臨時救護所に出動した。市役所内には、被爆以来、一度も手当てを受けていない負傷者が多数放置されていたが、このときすでに持参した医薬品をほとんど使いはたしていたから、治療らしいこともできず、せめて水をと、水を飲ませて廻るばかりであった。

第二次出動は八月二十三日で、医師二人・看護婦三人が観音国民学校に出動した。このころ、看護婦の仕事といえば、傷口から皮下、筋肉の中にくいこんでいるウジを取ることが仕事のようなものであった。その時の状況の一コマを前重春美看護婦は「先生がたが繃帯交換をして廻られるのについて行ったとき、『おばちゃん、おねえちゃん、ウジが頭をかむから痛いようー』と、泣いている一〇歳くらいの男の子の声が、未だに脳裏を離れません。その子の頭をよく見ましたら、一センチくらいにのびた髪の間を小さいウジと大きいウジがウヨウヨはって、喰いついているんです。それをじっくり取ってやりたいんですが、その時間がないのです。看護婦の手が足りないのと、重い負傷者がたくさん寝ているのですから、『あしたきれいにしてあげるから。』と行って、ざっと取って、また次に行ったのですが、それが心残りでかわいそうでなりませんでした。

もう一人は、六〇歳くらいのおばあさんが、肘から前縛が切断されていて、そこに繃帯をしてあるのですが、繃帯を取ってみると、大きいウジが喰いついているのです。それが、先もわからないようなおばあさんで、『ひじが痛い、ひじが痛い。』と、力のない声で言っていました。ウジをとってあげようにも人手が足りなくて、それができなかったのです。ですから看護について行きましたも、涙を流しながら繃帯交換をして廻ったことが、今でも胸の中に残っております。」と、語っている(広島原爆医療史)。

実に、このような悲惨な苦しみに喘ぎながら、被爆者の多くが死んでいったのである。

九月十三日の枕崎台風のときが、高田郡の最後の出動であった。観音国民学校の救護所は教室中が雨もりはげしく、負傷者の寝床をあちらこちらに移動しながら治療した。

この九月の水害から、出動を一時停止したが、地元吉田町に多数の負傷者が避難して来ていたから、九月末まで地元で治療活動をおこなった。

なお、大徳甲立保健所長は、八月九日、自転車で広島へ出て、県衛生課の指示のもとに、三日間連続して救護にあたり、帰村してからも甲立国民学校で、他の医師らと共に負傷者約五〇〇人くらいの治療にあたった。

双三郡医師会出動

双三郡医師会(広島市まで約八六・六キロメートル)は、吉舎[きさ]町の高橋荘太郎医師のもとへ、六日昼前ごろ三次警察署から広島市に救援出動の連絡があり、ただちに出動準備をおこなった。高橋医師は三次町に連絡すると共に、吉舎班医師・歯科医師・薬剤師・看護婦など計三〇余人を召集し、午後三時にトラックで出発した。これより先、午前十一時に出発した三次班約三〇人(中国新聞社秋山尚久記者の指揮)は、安佐郡可部町で吉舎班と合流することになっていた。可部町でトラックを止め、すでに負傷者の治療にあたった高田郡の医療救護班と協力して、すぐに活動を始めた。そのうちに吉舎班が到着したので、(宇品警察署の指揮を受けることになっていたから)三次班と吉舎班は一緒に可部町を出発したが、市内の横川町が盛んに炎上中で入れないという情報であったから、遠く迂回して東部方面(安芸郡府中町方面)から進み、七日午前二時半に入市することができた。市内比治山多聞院に着いた一行は、石原警察部長から住吉橋で救護に従うよう指示を受けて出発し、炎天下の住吉神社の石灯籠だけ残っている焼跡に進出した。

しかし、限られた人数と医薬品で、一面に横たわっている負傷者のすべてに行きわたる治療はできなかったから、荒瀬秀俊医師が負傷者をより分けて、助かりそうにない重傷者には赤チンだけの簡単な治療をし、助かりそうな者には相応の治療をするというありさまであった。

午後二時ごろ、県庁職員の指示により横川町へ転進したが、負傷者が見当らず不思議に思っていると、どこからともなく両手をあげた中学生が七、八〇人ほど、ゾロゾロと集ってきた。建物疎開作業をしていたようであったと

いう。しかし、すでに医薬品や衛生材料を使い果たしていたし、補給もないので、夕方の六時ごろ、三次に帰ることにした。

三次町では、ここにまた多数の負傷者が汽車で運ばれて来ていた。負傷者は六日午後三時ごろ三次に到着し、駅前の倉庫や駅前広場のムシロの上、あるいは中学校・十日市国民学校・寺院などに收容されたが、大部分の医師が広島市に出勤していたので、西村旭医師など僅かな残留医師だけではどうにもならず、婦人会や西条高等女学校の先生や生徒、医師の家族などが応援出動した。

しかし、ここでも赤チンを塗るだけの申訳的な治療しかできず、收容者のなかから死亡者が続出した。

六日の夜中に負傷者第二陣が到着し、警察も役場も警防団も総出で受け入れたが、空襲警報のため灯火が使えず、輸送作業ができないため、一応駅前広場に野宿させ、手さぐりで手当てをするありさまであった。

七、八両日とも、これら避難者の救護に明暮れ、九日も活動中のところ、第二次出動を要請されたので、諸準備を整えて十二、三両日、広島市内で救護にあたった。

第三次出動は十七日で、医師・看護婦・養護訓導など数人ずつで医療班を組み、各班二日間の予定で交替に出動し、八月末まで続けた。

九月初めは雨が多く、十七日大水害となったので交通不能となり、出動できなくなった。このほか、個人的に高橋医師らは広島に出て治療にあたった。

加茂郡北部医師会出動

加茂郡北部医師会(広島市まで約四一キロメートル)は、六日午前十一時、田村河内警察長から、「目下、広島市は敵の大爆弾投下により大火災中、市民の死傷多数、すみやかに救護のため出動せらるべし。」と、電話で指示を受けた。

同日午後六時、医師三人・看護婦五人が河内警察署に集合、八時過ぎに河内駅から汽車で広島に向った。

その夜十一時、安芸郡海田市駅に到着し、海田市警察署からトラックで広島市に入った。

火炎の猛々と立ち昇るなかを、比治山の多聞院に着いたときは、すでに七日午前一時であったから、同夜はたくさんの方の負傷者とともに路傍に野宿した。

七日早朝、トラックで出発し、途中、時々停車して負傷者の治療を行ないながら東練兵場に到着した。ただちに東照宮下に臨時救護所を開設したところ、負傷者が群れをなして殺到し、われ先にと手当てを受けようとした。

東練兵場の救護所では、賀茂郡北部班のほかに、豊田郡河内班・同本郷班・同忠海班が出動しており、寸暇もない必死の救護作業を展開した。

そのうち、白島の長寿園の砂州地域に負傷者が多数呻吟しているとの情報によって、賀茂郡北部班はその地域に転進し、七、八、九日の三日間ほど野営して救護にあたった。

九日夕がた帰途についたが、八日夜に福山市が大空襲を受けていたのであった。

甲奴郡医師会出動

甲奴郡医師会(広島市まで約七四キロメートル)は、六日午後二時ごろ、上下町警察署が広島被爆の報に接し、ただちに医療班出動を指令した。午後四時にトラックで出発し、同夜九時ごろ可部町に到着した。しかし、広島に入らず、付近で一休みし、翌七日午前三時か四時に矢賀町を廻って比治山に到着した。一方同夜、負傷者五〇数人が上下[じょうげ]町に送られてきたので、三玉医院を開放して收容し、婦人会が協力して徹夜の救護をおこなった。これに引続いて搬送、帰郷する負傷者が多く、警察署の武徳殿に收容したが、十日前後から死亡者が続出した。

八月下旬、広島市の被服廠臨時救護所に三玉正雄医師・妹尾弥生子医師など医療班が出動して、三日間治療にあたったが、この頃はすでに落命する者は落命し、同救護所には二〇数人の重傷者が残存するだけであったが、これらの人々も次々に死んでいった。ハエのすごい発生の中なかで、苦難な救護作業であったが、看護婦も作業になれて手順よく処置の介助をおこなった。衛生材料もおおむねそろえられて、作業もようやく落ち着いてできるようになった。

神石郡医師会出動

神石郡医師会(広島市まで約七八キロメートル)は、六日午後一時、油木警察署から出動の指令を受け、ただちに郡内の各班員を召集し、医師六人・助産婦二人・保健婦四人・看護婦一五人でもって救護班を編成した。

同日午後四時、トラックニ台に分乗して出発したが、途中、トラック事故で少し予定時刻を遅れて、翌七日午前六時に広島市に到着した。

山口町の東警察署に至り、県庁本部の指示によって浅野泉邸(縮景園)に行き、ここに臨時救護所を開いて活動に入った。

泉邸救護所は一週間設置して活動を続けたが、その間に負傷者を各地に収容する作業完了したので解散した。

その後、九月十六日までに二、三日間ずつ、各班が交替(四～六人ずつ)で出動した。

安佐郡医師会出動

安佐郡医師会(広島市まで約一三キロメートル)は、かねて可部警察署管内に可部地区救護班と、祇園地区救護班の二個班を編成していた。

広島市に近い可部町へ、避難者が殺到し、町内はたちまち大混乱に陥ったので、医療班はこれが救護に全力をあげた。

祇園班が祇園青年学校で活動中、山県郡・高田郡、あるいは双三郡などの医療班が到着し、当日夜十一時ごろまで活動を続け、翌七日も終日治療活動をおこたった。

六、七両日だけの救護加療した員数でも数千人に達し、その後も負傷者が続いたが、重傷者は緑井の今井病院へ移送した。

可部班は可部警察署・品窮寺・願仙坊・勝円寺において治療活動を展開した。また、小河内国民学校臨時救護所に収容された四〇数人の負傷者の治療にもあたった。

これら可部地区に集った負傷者の救護に、可部高等女学校の先生や生徒たちも進んで協力した。

可部地区の負傷者の治療に追われ、広島市内へ出動する余裕もなかったが、中には、三菱重工業株式会社第二〇製作所職域救護班に所属する医師などは、六日被災と共に市内に出動し、小網町に臨時救護所を設置して治療にあたった人たちもある。三菱重工の職域義勇隊二三人が、小網町の建物疎開作業に出ており、多数の社員が負傷したためであったが、一般市民の負傷者の救護にもつくし、負傷者は、三菱重工の寮および診療室に収容、その数約一、〇〇〇人に達した。

呉市医師会出動

呉市医師会(広島市まで約二〇キロメートル)は、六日の被爆直後、呉市役所から出動の指令を受けた。医師三人・歯科医師一人・看護婦一六人、および事務長一人で呉市医療救護班を編成し、トラックで海田市町経由広島市に進入した。

出動の際、海軍処方“熊肝”を多量に持参使用して、治療効果をあげたという。

活動地点は、次のとおりである。

第一日…東練兵場付近

第二日…市中心部

第三日…袋町国民学校

第四、五両日…己斐国民学校・南観音町・牛田町救護所

第六日…広島赤十字病院・矢賀国民学校

八月十五日以後は、小屋浦救護所でおこなった。しかし呉市は、七月一日の空襲により市内の大部分を焼失していたから、救護班の編成は困難をきわめた。

三原市医師会出動

三原市医師会(広島市まで約六〇キロメートル)は、六日午前九時、三原警察署から出動するよう通報を受け、ただちに救護班員を召集し、同日午前十一時にトラック二台に分乗して出発した。

第一班は四〇人、ほかに事務担当の市吏員一人が参加して、同日午後遅く炎上中の広島市に入り、東練兵場に臨時救護所を設けて治療にあたり、同夜はその場に野営した。翌七月から八日夕刻まで・饒津神社周辺および白島町に救護所を置いて活動し、八日深更、三原市に帰った。

第二班は、九日午前二時に召集を行ない、広島市へ出動しようとしたが、あたかもその時、福山市が空襲にあい、全市戦災のため、福山市救援に変更された。

九日夜、福山市の救援を終えて帰る途中、福山駅構内に広島市からの避難者が多数集っていて、苦悶呻吟していたので、これの救護にあたった。

第三班は、八月十一日午前九時、東警察署内の仮県庁に到着し、衛生課の指示により広島市第二国民学校(現在・観音中学校)治療にあたった。負傷者はほとんど重傷で、再起不能と思われたが、班員四〇人は必死の努力を続け

た。

第四班は、八月十七日に班員四〇人で出勤し、己斐国民学校・三菱江波造船所病院において十九日まで治療にあたった。

第五班は、八月二十日および二十二日に大河国民学校へ出勤したが、この頃から、外傷も火傷もない被爆者で発熱・皮下出血・咽頭痛その他の徴候を呈する者が、多数発生した。これらの人々は予後がきわめて不良であり、東京から調査に来広した学識者に、種々意見を聴いて治療にあたった。

第六班は、九月十五日から十七日まで大河国民学校において治療をおこなったが、このとき大暴風の来襲があり、大洪水を発生して交通が杜絶したため、宇品港から船便によって仁方港に上陸し、三呉線経由で三原に帰った。以後、救護出勤は中止された。

世羅郡医師会出勤

世羅郡医師会(広島市まで約五七キロメートル)は、医師六人・薬剤師一人・看護婦五人で救護班を編成し、甲山警察署前に七日午前八時に集合し、トラック三台で出発した。警防団も一部便乗して、三次経由で広島に向い、七日正午に三篠信用組合に到着した。ここに臨時救護所を設け、国防衛生協会支部長の長崎五郎医師の指揮のもとに、救護活動をおこない、夜は現地に一泊、医薬品欠乏により八日、矢賀駅から芸備線で帰った。なお、別便で救援米一二〇俵を出荷した。

比婆郡医師会出勤

比婆郡医師会(広島市まで約七〇キロメートル)は、六日当日、医師一六人・保健婦二人・看護婦二人をもって、数班の救護班を編成し、交替で九月十五日まで出勤した。

活動地点は、大芝国民学校・江波国民学校・己斐国民学校・被服廠・通信病院・東洋工業株式会社・戸坂国民学校の各救護所であった。

なお、藤堂茂明医師は陸軍関係で、第一陸軍病院亀山分院・同庄原分院において、九月十一日まで治療にあたった。

以上の医療救護班のことについては、「広島原爆医療史」に詳しく記述されているものであるが、このような医療班の活動にもかかわらず、夢想だにしなかった災害であり、医学的にも初経験の負傷であったうえ、あまりにも甚大な惨禍であったから、医薬品の欠乏と相俟って十分な施療ができなかった。負傷者のなかには、何らの手当ても受けないまま、最期の水の一滴も飲まされずに、死んでいった者が数限りなくあったのである。

医療救護班出勤状況 なお、県内各地からの救護班出勤状況は、次表のとおりである。

県内医療救護班応援状況表(当時、広島県属川田兼三郎資料)

月 日	来援先	医師	歯科医	薬剤師	看護婦	事務補助	計	救護所
八月六日	尾道	6	2	2	10	2	22	御幸橋・堤病院
	三次	10	3	5	8		26	住吉橋
	廿日市	6		1			7	江波国民学校
八月七日	加計	4		1	5		10	被服廠
	加計	3	1		5		9	被服廠
	西条	3	1	2	2		8	日本製鋼所
	竹原	6	1		7		14	東練兵場
	木ノ江	5		1	13		19	東練兵場
	河内	7			11		18	東練兵場
	油木	4					4	泉邸
	府中	10			12		22	府中国民学校
	忠海	8			15		23	府中国民学校
	尾道	6	2	5	5		18	府中国民学校
	上下	2	1		5		8	比治山
	西条療養所	4			36		40	戸坂・中山・温品
	吉田	5			5		10	市役所
三次	10	5	3	8		26	住吉橋	
八月八日	因ノ島	3			8	1	12	県庁跡
	三原	6	2	1	20	6	35	三高(南観音町)
	庄原	5			5		10	大芝
	河内	4			5		9	白島(川岸)
	呉	3					3	勸銀
	尾道	9	3	2	19		33	比治山
	西条	5			10		15	日本製鋼所
	呉保健所				4		4	勸銀
	西条療養所	1			18	1	20	船越
	西条療養所	2			14	6	22	本川

	呉	3			5		8	長寿園
	呉	4			4		8	舟入
	庄原	4			4		8	大芝
	因ノ島	2		1	9		12	西署
八月九日	府中	6	2	1	8		17	府中国民学校
	呉	7			10		17	己斐
	加計	2			6		8	天満橋下
	八重	2			6		8	江波唯信寺
	廿日市	3				3	6	矢賀国民学校
	呉保健所	1			5		6	勸銀
	西条療養所	4			27	6	37	比治山国民学校 ・住友銀行
	甲山	5			5	1	11	東練兵場
	因ノ島	3			8	1	12	牛田国民学校
八月十日	西条療養所	4		1	27	9	41	草津国民学校・ 白島移動班
	呉	8			15		23	己斐橋・ 己斐国民学校
	尾道	2	1	1	4		8	三篠信用組合
八月十一日	安芸	1			2		3	勸銀
	庄原	5			5		10	江波国民学校
	尾道保健所	1			5		6	東照宮
八月十二日	上下	2			3		5	勸銀
	因ノ島	1	1		9		11	勸銀
	三次	6	2	2	10		20	市役所
	呉	5			13	1	19	中山国民学校
	三原	3	1	3	11	2	20	倉敷航空(吉島)
	竹原	1	2		4		7	矢賀国民学校
	西条療養所	5			30		35	二高
八月十三日	呉済世会病院	1			4		5	己斐国民学校
	庄原	3	1	1	5		10	
	尾道保健所	1			4		5	己斐国民学校
	呉	1	2		7	3	13	市役所
八月十四日	安芸	3			7		10	府中国民学校
	豊田	1					1	勸銀
八月十五日	三原	3	2	1	9		15	己斐国民学校
	庄原	1			3		4	東洋工業(向洋)
	三次	2	1	1			4	府中国民学校
八月十六日	三次	1					1	府中国民学校
八月十七日	尾道保健所	1			5	1	7	勸銀
	呉	4			5	2	11	二高
	三原保健所	1		1	3	1	6	
	上下	2			5		7	東洋工業
八月十八日	呉保健所	1		1	4	2	8	矢賀
	竹原保健所	1			3		4	東洋工業
八月十九日	西条	5					5	袋町小学校・被服廠
	尾道保健所	1			6	1	8	被服廠
	福山保健所	1			3	1	5	祇園青年学校
	府中保健所				4	1	5	二高
	三次	5	3	2	6	1	17	本川・神崎
八月二十日	三原	3	2	2	10		17	二高
	忠海	2	1		4		7	己斐
	竹原	3			2		5	江波
	府中	2			4		6	嚴島
	西条	2					2	勸銀
	吉田	3			4		7	被服廠
	加計	2			6		8	本川
	尾道	4	2	1	11		18	本川
	庄原	1			2		3	袋町
	甲山	2			7		9	倉敷航空
八月二十一日	西条	3					3	勸銀
	三次	6	2	1	6		15	被服廠
	竹原	3	1		2		6	江波
	上下	2			1		3	矢賀
八月二十二日	竹原保健所	1			5		6	東洋工業
	尾道保健所	1		1	6	1	9	嚴島
	加計	2			5		7	勸銀
	吉田	3	1		4		8	被服廠

	三原	3	1	1	4	1	10	本川
	尾道	2	2	1	5		10	袋町
	竹原	2	1		8	1	12	江波
八月二十三日	西条	4					4	勸銀
	府中				4		4	草津
八月二十四日	西条	2					2	勸銀
	三原	3	1	1	10		15	本川
	竹原	2	1		1		4	本川
	吉田	4			4		8	袋町
	三次	3	1	2	5		11	倉敷航空
	尾道	2		1	5		8	江波
	福山保健所				3		3	矢賀
八月二十五日	西条	2					2	勸銀
	竹原	2		1	3		6	本川
	三原保健所	1			4	2	7	大河
	甲山保健所	1					1	大河
八月二十六日	尾道	2		1	5		8	廿日市
	三原	3	1	1	10		15	井ノ口
	高田	2	1		2		5	二高
	西条	1					1	二高
	竹原	1	1	1	2		5	中山
	高田	1					1	袋町
	庄原	3			3		6	江波
	府中保健所				5		5	一高(比治山下)
八月二十七日	竹原	2	1				3	中山
	因ノ島	2	1	1	5		9	本川
	河内	2			2		4	勸銀
八月二十八日	吉田	2	1		3		6	二高
	府中	2	1		6	1	10	二高
	尾道	3		1	3		7	廿日市
	尾道	3			5		8	井ノ口
	三原	3		1	5	1	10	大河
	西条	2				2	4	矢賀
	加計	2			2		4	祇園
八月二十九日	三次	2	1	1	3		7	戸坂
	竹原	2	1		2		5	中山
	西条	1					1	袋町
	三次	2	1	1	3		7	本川
	庄原	3			3		6	江波
八月三十日	油木	2			5		7	温品
	高田	2			2		4	二高
	尾道	2			5		7	廿日市
	尾道	2	1	1	4		8	井ノ口
	三原	2	1	1	6	1	11	大河
	西条	2					2	袋町
	三原	2	1	1	6	1	11	大河
	西条	2					2	袋町
	因ノ島	2	1	1	5		9	本川
	松永	3	1	1	2		7	己斐
	府中	3			5		8	矢賀
八月三十一日	西条	1					1	袋町
	福山保健所				3		3	袋町
	三次	1			7		8	本川
	河内	2			2		4	勸銀
九月一日	高田	2			5		7	二高
	尾道	4	2	2	10		18	廿日市・井ノ口
	庄原	1			3		4	戸坂
	三原	2	1	1	6	2	12	大河
	庄原	2					2	袋町・被服廠
九月二日	松永	2			3		5	温品
	因ノ島	1	1	1	5		8	廿日市
	三次	5		1	7	1	14	本川
	竹原	1	1		2		4	己斐
	忠海	3			3		6	江波
	西条	1					1	矢賀
	加計	2			5		7	祇園
九月三日	高田	2			4		6	二高
	三原	2	1	1	6	1	11	大河

吉田	33	65	10	18			33	72	17	38				93	193	
忠海	27	75	10	24	2	4	12	30	34	94	3	8		88	235	
庄原	21	130	3	12	1	50	19	97	13	55			2	71	59	415
木ノ江	7	7	1	1	1	1			12	12			6	6	27	27
松永	7	22	2	6	4	12	1	4	6	18					20	62
海田	6	112													6	112
府中	16	72	4	13	1	3			28	102			1	4	50	194
三原	49	127	21	52	18	43			132	323			10	56	230	601
尾道	75	174	21	49	23	55	17	54	134	319	5	10	13	110	288	771
広	16	31					1	4	8	12	5	27	1	3	31	77
油木	11	80	2	12	1	6	12	142	8	60	3	18	1	20	38	338
因ノ島	12	36	4	12	3	9	3	9	40	120	5				67	201
三次	56	157	20	60	26	74	33	103	43	113		15	2	40	180	547
加計	19	84	2	4	2	8			45	168			4	16	72	280
上下	12	72	2	12					25	132			10	40	49	256
河内	23	69			1	3			27	81					51	153
呉	32	96			1	3			61	183			5	15	99	297
西条	61	146	3	3	9	9			279	328			60	60	412	546
竹原	27	54	11	22	3	6			41	82					82	164
可部	32	992	12	372	13	403			160	4960			40	1242	257	7969
大竹	25	775	8	248	7	217			125	3875			38	1178	203	6293
呉支部	3	43					17	385					8	203	28	631
世羅支部	11	24	1	2	1	2	6	14	6	14	3	8	3	25	31	89
府中支部							13	103					5	43	18	146
尾道支部	4	20					14	63	7	26			8	99	33	208
小島支部	1	7					7	86					2	41	10	134
奥支部					1	7			11	90			3	19	15	116
江田	1	4	1	5					3	13	4	18			9	40
福山	1	6					10	44							11	50
計	588	3480	138	927	118	915	198	1210	1265	11218	28	104	222	3291	2557	21145

救護態勢壊滅

広島市庁舎内に疎開していた広島県警察部も、広島県庁内の広島県防空本部も、原子爆弾の被害甚大でほとんど壊滅の状態に陥った。

六日夕刻、石原警察部長がかねて万一の場合の集合場所と定めてあった比治山の多聞院に、重傷の身をおして到着し、仮の「県防空本部」を設置したときには、警察官も僅か二、三人集っていたに過ぎなかった。

また、管下の東警察署・西警察署・宇品警察署においても、爆心地からわりかた離れていて比較的被害の少なかった宇品警察署を除き、西警察署は全滅し、東警察署は襲い来る火炎のまっただ中で、田辺署長以下七、八人の警察官及び警防団員が死闘的防火作業を続け、ついに火魔からのがれたが、そこへ負傷者が殺到し、これの救護に全力をつくすという状況であった。したがって、管轄区域全般にわたる活動などできる余裕はまったく無かった。

辛うじて宇品警察署のみ、須沢署長以下五、六人の警察官が、警防団と連絡をとりながら、御幸橋東詰(専売局前)に進出し、逃げまどう避難者を安全地帯に誘導し、夜は多聞院の本部と連絡をつけたのち、また御幸橋に引返して罹災証明書の発行などをおこなったのであった。

勿論、市内各所の派出所も壊滅に瀕していた。わずかに残った周辺部の派出所も、命令系統が破壊されて連絡がつかないまま、臨機応変に付近の警備をすることに忙殺され、どうすることもできなかった。

県下からの救援

広島市役所は壊滅に瀕し、救援処置を取るすべもなかった。広島県庁・同警察部は本部は壊滅状態に陥り救援ながらも、県下各地の機関が健全であったから、辛うじて難をのがれた者や負傷しながらも気力のある者など極く僅かな生存者が、被災しなかった市周辺の鉄道の駅や警察署から、緊急電話で救援隊の出動および避難者の収容救護を指令した。

豊田郡地方事務所竹内喜三郎所長(被爆直後、本庁人事課に配転)のメモ(雑記長)によれば、応援職員の派遣、罹災者応急対策につき、次のように記されている。

八月六日

豊田郡 九名(派遣)

衛生課へ三名 杉野 八日―十一日

大迫 八日―十日、十二日→

田中 八日―十日、十二日→

援護課へ五名 佐伯 八日―十二日

西村 八日―十二日

山田 九日→

(林務課) 林 八日―十一日

新

食糧課へ一名 中本→

八月七日

一、新聞…大阪ヨリ一〇万部、門司ヨリ一五万部、松江ヨリ一、二万部 配布方連絡

二、午後二時 部長会議開催

イ、食糧其ノ他ノ物資配給計画

ロ、屍体処理二付、刑務所囚人四〇〇人使用、僧侶ノ動員

三、経済第一部長中心ニ農務課長、地方事務所員等協議

食糧配給対策

イ、罐詰 二〇万人分二五万円

ロ、蔬菜 〃

ハ、砂糖一人宛一斤

配給対象 負傷者、官公衛、防空要員、放送局、新聞社、警防団、消防署、警察署、救護班

二、水産食糧

イリコ 一人当 一五匁、鰯 一人当 三枚、海苔 一人当 五枚、削鯉一人当 一五匁、昆布 一人当 一〇匁
ホ、酒・苧

酒 一人当 三合、煙草 一人当 一〇本

配給対象 砂糖ノ配給対象ニ準ズルコト、但シ負傷者ヲ除ク

へ、配給機構

配給挺身隊ノ組織

西署 一〇ヶ所 安佐郡

東署 〃 安芸郡

宇品署 〃 佐伯郡

ト、食器ノ供出

安佐・佐伯・安芸ニ於テ各家庭二点宛

チ、草履ノ供出

山県・賀茂・豊田・高田・御調・世羅一戸毎二二足宛

四、東地区警備隊長(暁 澤田部隊長)

中 〃 (〃 芳村 〃)

西 〃 (〃 梶 〃)

五、屍体処理箇所

イ、山陽中学北側 ロ、市役所 ハ、紙屋町八丁堀付近 ニ、土橋

六、天幕及蓆ノ配給

七、水道ノ復旧→二日約八万立方米使用ノ所、現在四万立方米

バスノ運行開始・罹災民相談所開設

八、灯油ノ配給

九、罹災証明書ノ発行…警備隊ニ移ス…一応一週間

戦災相談所ノ設置(町内会)

一〇、炊出シハ八日間行ヒ順次通常配給ニ切替ヘ…残存町内会長、部落会長ノ整備

一一、便所ノ建設、収容バラックノ建設

(一二、一三を欠ぐ)

一四、地方人ニ対スル案内所設置

八月九日

一、八月九日”ソ聯ト交戦状態ニアル旨”呉鎮長官ヨリ通報アリ

二、町内会ニ於テ共同湯沸場、共同便所ノ設置ヲ希望

三、縁故無キ者ノ収容方法、修覆用資材ノ配給如何

四、海軍兵学校保管朝鮮白米二、〇〇〇俵(六〇kg入)一時借受

五、海軍潜水学校及大竹海兵団ヨリ各朝鮮米四、〇〇〇俵借受山口県萩ヨリ毎日二〇輦一、六〇〇石廻送(四、〇〇〇俵)

六、警察署ニ於テ給食継続中

八・六～八・九三日間ノ給食状 乾パン 三五五、九八〇 握食 七五七、七一一食

七、非常用食糧配給要綱→警察給食二日間、三日以後ハ平常配給

十一日以後ハ町内組織ノ確立地区ヨリ順次通常配給→目下配給所ノ設置準備中

八、庁員罹災状況

	総数	健在者	負傷者	死者	不明
警察部	二七八人	七五人	七二人	一五人	一一六人
其 他	八二九	一七九	一九五	四二	四一三
計	一、一〇七	二五四	二六七	五七	五二九

救護対策の実施内容

これらの罹災者救護対策にあたっては、県下から県地方事務所・警察署の職員が急速来援して進められたわけであ

るが、避難者が殺到した郡部の各地元では、国防婦人会や学生などが一致協力して、一般罹災者や負傷者の収容と救護、あるいは非常炊出しの準備、実施などに全力をあげて活動したのであった。

昭和二十一年版広島市勢要覧の記録によると、救護活動の中心となった各警察署・各地方事務所、および救護物資の内容は次のとおりである。

(一) 関係警察署および地方事務所など

イ、可部警察署、加計警察署、吉田警察署、三次警察署、庄原警察署、廿日市警察署、海田市警察署、西条警察署
ロ、佐伯地方事務所、安佐地方事務所、山県地方事務所、高田地方事務所、比婆地方事務所、安芸地方事務所、賀茂地方事務所、豊田地方事務所、双三地方事務所、府中地方事務所、芦品郡府中地方事務所

ハ、中央食糧営団広島支所

ニ、広島県食糧営団坂配給所

(二) 救援物資

米 三六六石二斗三升(七九、五五〇円九四)

麦 一石六斗(五八円二九)

カタパン 三、三〇〇コ(六六〇円〇〇)

塩 八三俵(三、五九〇円二五)

醤油 一八七石二斗二升(二三、二〇三円〇〇)

味噌 三、一三二五貫五(五、八三五円四〇)

梅ぼし 七、六四一貫五(二一、八七五円九二)

食用油 七〇貫(二三、二〇三円〇〇)

野菜 二、七一三貫(二、二四三円一五)

罐詰 九、二一四箱(五二五、六七六円六八)

薪 二四、二六〇たば(一三、七三〇円九〇)

その他 六四、八四九円〇〇

外に

食糧費 五七六、〇二八円〇六

被服費 二五、六〇三円〇〇

寝具費 五九、六三三円五〇

生活需品費 一三、五五二円八〇

医療費 三八、二四五円六六

助産費 一六〇円〇〇

埋葬費 五六、五九〇円三八

避難所費 五五、〇〇八円二七

合計 一、五八九、二九八円二〇銭

救護所設置状況

昭和二十年広島市事務報告書並に財産表によれば、市内各国民学校たど三二か所の救護所、および一八か所の救護病院を指定し、医療器材・医薬品などを配備して、それぞれに担当医師・看護婦その他を指名していたが、一挙に全滅状態になったので、あらためて急設臨時救護所を指定しなければならなかった。

六日は大混乱のまま、負傷者が多数集っている場所において、ごく一部に応急手当が行なわれたが、翌七日、自然発生的なものながら、次のような救護所設置の布告(横田健一戦災記録)が出された。

救護所布告

目下ノトコロ左記ニ救護所開設シアリ

東練兵場(逐次移転ノ見込み)泉邸 被服廠 県庁跡 府中国民学校 市役所 比治山 東警察署 住吉橋(逐次移転ノ見込み) 横川 古田国民学校 己斐 中山(臨時)

東警察署内 広島県庁

六日の午後から七日にかけて、県下各市町村から医療救護班をはじめ、警察官・警防団員・地方事務所員などが続々と来援・市内及び近郊に応急仮設された次の五三か所の救護所(広島原爆医療史)で活動した。しかし、出動前の予想と隔絶した未曾有の惨事の前には、多くの事がまにあわなかった。また適切な救護方法を知るよしもなかった。前記布告は、多数の救護班が来援する以前のもので、五三か所は調査によって、更に詳しく指定されたものと考えられる。

仮設救護所(五三か所)

御幸橋 比治山下 住吉橋 江波国民学校 被服廠 日本製鋼所 東練兵場 泉邸 府中国民学校 比治山国民学校 東警察署 戸坂国民学校 温品国民学校 中山国民学校 県庁跡 市役所 第二国民学校 牛田国民学校 中広橋 三篠信用組合 長寿園 三篠橋東 通信病院 大芝公園 大芝国民学校 船越国民学校 舟入電停 東照宮 倉敷航空機吉島工場 矢賀国民学校 江波三菱造船所 天満橋下 江波唯信寺 向西館西側 勸業銀行 己斐国民学校 己斐橋 草津国民学校 東洋工業 福屋 青崎国民学校 仁保国民学校 江波兵器学校 福島橋西 井ノ口国民学校 五日市国民学校 実践女学校 観音村 祇園青年学校 廿日市国民学校 厳島国民学校 平良村 神崎国民学校跡

以上の地点において救護活動を展開すると共に、負傷者を次の場所に軍と協力して収容したという記録(横田健一戦災記録)もある。

収容場所

東練兵場 比治山西側聖橋(比治山橋) 御幸橋東三叉小路 工兵聯隊 泉邸 東警察署 住吉橋 横川駅 土橋 舟入本町 己斐駅 廿日市 似島 宇品船舶練習部 暁六一六七部隊 赤十字病院 坂金輪暁部隊 暁六一八〇部隊

出動人員その他

被爆直後から約一〇日間に亘り、一日平均警察官一五〇人、警防団員約二、〇〇〇人・トラック一三〇台・救護班三三個班(約三〇〇人)、および県外九個班三〇〇余人が広島市に出動し(別表参照)すでに活動中の軍部とこれら応援救護班が協力して、屍体の処理・負傷者の収容救護、あるいは罹災者の輸送と救恤を行なったのであった。

また、親類縁故を探索して市内や周辺地域を徘徊する人々のために、「戦災者相談所」を設けて便宜をはかった。

食糧配給

市内の配給機能が壊滅したので、被爆後六日間にわたって近郊警察署からにぎり飯の非常炊出しを行なった。その間、缶詰・塩・タクアン・梅干・マッチ・ロウソク・ゾウリ・塵紙などを、充分ではなかったが適宜配給した。八月十二日には市内一七か所に食糧営団配給所を、一六か所に食料品組合配給所を開設し、焼跡のバラック居住者や防空壕に仮住いの罹災者に対して通常配給を開始した。これら救援物資の内容は前記の広島市勢要覧記載のとおりである。

しかし、食糧配給が全般的に行きわたったというのではなく、大混乱のさなか、やむを得なかった事情もあったが、江波町と観音町に避難した市民には六日から八日まで全く配給がなかったという。これは途中の道路が啓開されず、郡部からの救援トラックが入って行かれなかったことも一つの原因であった。

救援食糧は、佐伯郡方面から来るものは、主として廿日市町・草津町・己斐町などの西部方面へ行き、安佐郡からのものは、横川町から白島町方面へ入って北部地域へ、安芸郡からのものは、東警察署管内から宇品警察署管内の仁保町・大河方面の東部へ運ばれたため、南部の江波・観音地域が抜けていた。八日の夜近く、宇品へ来た救援トラック一台を南部地域へまわしたが、六日からずっと食べずにいて死んだ者もあったと言われる。

この炊出しは、被爆当日から約一〇日間にわたって五〇万人分のにぎりめしが配給された。

検問所開設

一方、軍と協力して市内周辺部四か所(八か所ともいう)に「検問所」を開設(7日)して、焼跡に出入りする者の警戒にあたり、八日からは管下に指令して、軍公務ならびに救護班以外の者の入市を厳重に禁止した。この処置は、防犯警戒および流言などを取締るというよりも、一般国民が厭戦気分を持つことを怖れて、軍部が惨禍の実態を隠蔽しようとしたためとも言われている。

広島市警防団の状況

被爆時の広島市警防団の役員は、次のとおりである。

東警防団

団長 松坂 義正

副団長 野口 進

西警防団

団長 石川軍二

副団長 沓内一如

宇品警防団

団長 中村藤太郎

副団長 田村才四郎

この三警防団は、それぞれ警察三署に属して、管轄下の各町に分団を設けていた。

東警防団

被爆当日の午後三時ごろ、東警防団長の松坂医師は負傷した体を二、三人の看護婦と夫人に助けられて、東警察署に到り、馳せつけた僅かの団員を指揮して、殺到する負傷者の救護活動にあたった。なお、矢賀分団も、別添の山田隆夫手記のとおり、少人数ながら大いに活躍した。

西警防団

西警防団の原田楽一警備部長は、当日午後二時ごろ三篠町の自宅が焼けたが、他の団員も焼け出されて、まったく連絡がつかなかったので、沓内副団長と二人で、二階建二棟が焼け残った大芝国民学校へ、中心部から運ばれて来る大半は軍人の重傷者約一、二〇〇人を収容した。軽傷者は郊外の安佐郡方面へ避難していき、次々に運びこまれる人はみんな重傷であった。ついには学校に収容しきれなくなり、竹やぶの中へ菰を敷いて収容した。その約三分の一くらいが次々と死んでいくが、死体を搬出する人手がなかった。翌七日から山県郡の警防団が二分団配置されたが、担架を持って来ていたので、死亡者をようやく川向うの河原へ移すことができた。また、因ノ島から医療班が来援して治療にあたり、呉方面からは梅干入りのにぎり飯を運んで来たので、枕もとへ一つずつ配給してまわった。しかし、「水をくれ、水をくれ。」というばかりで、それを食べる者はなく、また水も配ってあるく人手がなかった。夜は電灯がなく、蚊の襲撃になやませられながら、ロウソクを頼りに介護にあたった。

このような状況で二、三日経ったが、川原の向うに運んだ死体にウジがわいたので、死体の処理を急ぐため、後には校庭で何百人も焼き続けたが、団長・副団長・警備部長の三人だけで、団員が全然集らず疲労の極に達した。一週間くらいのち、郡部から、また、警防団の応援があり、死体処理作業は一息つくことができたという。死体は殆んど身元不明であったから、積み重ねて奈毘にふした。

同管下の江波分団では、殺到した負傷者を陸軍病院江波分院へ誘導するとともに、電車道や射撃場の避難者の救護を行うと共に約一、〇〇〇体の死体処理をおこなった。

宇品警防団

宇品警防団の中村団長と田村副団長二人は、異様な大爆発後ただちに市の中心地へ視察に出たが、千田町の貯金局前あたりから火災にはばまれて前進できず、引返して大河国民学校の所から比治山に出ることにし、約二時間かかって比治山橋付近まで行ったところ、口にしていたタオルに青い点々がついており、周囲に霧のようなものが漂っていたという。比治山下まで進んだが、やはり前方は火炎に包まれていて進めなかった。そこで、宇品警察署の須沢署長らが、専売局の電車停留所付近に進出して、避難者の誘導をおこなっていたので、それを手伝い、七日(八日ともいう)は、爆心地へ須沢署長らと一緒に進出して何百体という死体処理をおこなった。

福原一団員は、宇品地区が担当であったから、被爆後すぐに皆実町のガス会社に行き、同会社の職員一人と協力して、爆発しないようガスタンクを処置し、そのあと皆実国民学校に行ったが、友田警視が一人いるだけで医者も看護婦もおらず、二人で逃げて来る者を収容した。医者と呼ばうと話しているところへ憲兵が来て「ガスが爆発するから山の裏へ逃げろ。」と言って被災者をひどい剣幕で追い出したので、抵抗できず陸軍共済病院へ連れて行くことにした。途中、専売局の南側から火災が発生していたので、車庫からポンプを出して付近の人々と一緒に消火に努め、六戸焼いただけで食い止めた。また、博愛病院へ行ったが、医薬品の欠乏で困っていたから、地下に備蓄していた一升ビン(約八分目入り)の湯を掘り出して塗布用に使わせたりした。

その後は共済病院へ誘導中に死亡する者もあり、ガス会社の所に集めて、一三人ほど火葬にした。

一方、宇品警防団海上分団の詰所は、宇品海岸の港務所であったが、久米登分団長は、五日の晩は空襲警報で県庁へ行き、六日午前二時ごろ帰宅し、団員も解散させてひと休みしようとしたときに被爆した。自宅の天井が抜け落ちたが負傷しなかった。浜へ出てみると大きな入道雲が見られたので、詰所へすぐに行った。団員も続々と詰め

かけて来た。そこへ皆実町の説教所から応援に来てくれと連絡があり、団員一〇人ばかりを派遣し、続いて、御幸橋に避難者が大ぜい集っているとの情報が入り、そこを主体に救助作業にあたることにした。食用油を塗るあとから亜鉛華を塗ったが、終りには食用油だけになった。

この日、御幸橋と住吉橋に分団の船が行っていたが、潮が引いていてどうすることもできず、満潮になったら救出にあたることにして、宇品に引きかえし、詰所で負傷者の救護にあたった。

九日ごろから死体の処理作業が忙しくなり、防空壕を作っていた埋立地の丸善港運株式会社の付近に、毎晩トラックで山のように積んでくる死体を、何千体も焼いたのであった。

また、宇品の海岸へ流れて来た無数の死体を、警防団が引きあげて火葬した。

県下警防団の活躍

以上のように広島市の警防団は、被害甚大でほとんど活動できなかったが、この時、別表に示すとおり、県下各地の警防団が続々と入市して、警察署の指示に従い、負傷者の救護、輸送、死体の処理、道路の清掃など全市一円で活躍した。

矢賀警防分団員の活動 山田隆夫(当時・矢賀警防分団本部長)

矢賀分団は東警防団に所属し、尾長・矢賀防空小区(小区長谷口忠夫巡査部長・尾長派出所)の直接指揮下にあった。

担当区域は、矢賀町および矢賀新町で、矢賀国民学校通学区域と同一であった。

分団本部は、矢賀新町三丁目の宍戸製作所事務所をあてていた。

昼間の常置員は昭和二十年六月一日から、本部の隣りで石工をしていた班長宍戸重男、宍戸製作所工員時宗豊をあてていた。団員の生業と警防業務遂行の関係上、昼間の交替勤務は取止めていた。夜間は、午後八時から翌朝午前五時まで二人ずつ、団員が交替で宿直をした。

本部勤務員の任務は、主として本団からの警報を受けた際に、市民へサイレンの吹鳴により伝達することであった。

警報発令時には、全団員が口頭で警報を伝達しながら、夜間は灯火管制実施状況を監視しつつ、本部へ集合し待機していた。

矢賀分団の編成は、分団長一人(宍戸義太郎)・副分団長一人(坂本信太郎)・本部七人(部長・山田隆夫)・消防部二六人(部長・高橋増雄)・警備部二〇人(部長・大田初吉)・防護部一五人(部長・林倉一)以上計七〇人であった。本部を除き、各部には副部長一人・班長数人、警防員を配置していた。しかし、原子爆弾の被爆時は、団員中に応召者多く、また、補充するにも年齢適格者がなく、実人員は五〇人であった。

なお、防護部は、昭和二十年四月に林倉一を部長にし、五月十五日に副部長と班長を任命して、一応体形を整えたばかりで活動のできる部になってはいなかった。

警防員は、各部に所属していたが、非常の際の活動はその部にこだわらなかった。

消防ポンプは、矢賀村消防組当時の腕用ポンプニ台(矢賀町覚法寺門前の車庫と矢賀国民学校へ配備)、および昭和十九年四月、県の消防ポンプ配置転換によって配給された芦品郡国府村第二部の手挽きのガソリンポンプ一台があり、これは分団本部に常置していた。

八月五日の夜は、空襲警報が二回あった。しかし、昼間町の国民義勇隊員として建物疎開作業に出た者もあり、本部への集合も少なかった。六日午前二時二十分ごろ、警戒警報解除の報に、参集していた団員はみんな帰宅し、宿直当番二人は就床した。

午前七時十分ごろ、警戒警報の発令あり、工場・会社勤務の団員は、出勤途上にて団服に着かえず、そのまま本部に詰めかけたが、まもなく解除となったので出勤していった。

建物疎開作業に出動する町内の国民義勇隊員は、跡片づけの廃材を引取るため、大八車を曳いて現場の鶴見町へ急いだ。

そのあとであった。午前八時十五分、原子爆弾が炸裂した。

団員の家は大なり小なり被害を受け、異様な爆発にただ驚くばかりであった。同時に、市中に出て行った家族の安否を気づかった。

団本部に集った僅かの団員も、上空に噴きあがるキノコ雲、続いて火煙を望み、ただ呆然と手をこまねいている

だけであった。

そのうちに矢賀町国民義勇隊長として鶴見町へ出動していた宍戸分団長が、愛用のオートバイで帰って来て、すぐに町内の被害状況を巡視した。

矢賀町中央の矢賀国民学校には、早くも被爆した無残な姿の負傷者が列をなして、受付を待っていた。宍戸分団長は、教師に対して、医師はいなくとも、平素の救護訓練をいかして応急手当を先にするよう指示し、団員には救護所開設を命じて、自分の工場から旋盤用の菜種油を運ばせたあと、さらに町内の状況を視察して防空小区長に報告した。

まもなく防空小区長から、尾長国民学校へ火がついたという連絡が来たので、数人の団員を救護所に残し・消防部長ほか六人が手挽きのガソリンポンプで出動した。

午後三時ごろから午後六時ごろまで、松本商業学校北方の山根地区の消火に独力であたり、延焼を食い止めた。この時すでに付近の住民はおおかた避難していたが、顔面および胸部に火傷を受けながらも、老齢の飯田雅一班長は屈せず活躍した。

宍戸分団長は防火作業の指揮をとったのち帰宅したが、高熱を発して臥床した。

団員の被害は、鶴見町へ出動していた者が多く、死亡者二人(警備部長・国司班長)・重傷者七人(宍戸分団長・副分団長ほか五人)・軽傷者一人(防護部長ほか一〇人)・行方不明一人(秋山警防員)以上で、健在な団員は二七人という状況であった。

市中から東練兵場に逃げて来た被爆者が、更に安全な奥地を求めていく道筋にあった矢賀国民学校は、避難筋最初の救護所となったから、被爆後一五分くらいのちには、負傷者が続々と詰めかけて来たのであった。しかし医師も看護婦もいなかったため、増岡タケヨ訓導(旧姓重田)が、学校の衛生室から赤チンやオキシフルを持ち出して応急手当をおこなった。負傷者は増加するばかりで、たちまち医薬品が底をついたから、警防団員が防空小区へ、宍戸製作所へと走りまわり、油を持って来て、火傷者に塗布した。これも無くなると鉄道の工機部からも油をもらって来て使用した。

そのうち林防護部長が駆けつけた。

午後三時に、広島市健康指導所の徳富ヨシ子保健婦が、大手町の指導所から府中町の自宅へ帰る途中、救護所に立寄り、午後九時ごろ、医薬品のなくなるまで活躍した。また一応騒ぎがおさまったころから、町内の婦人会も手伝った。

負傷者の治療の最中、午前十一時ごろ、B29一機の来襲があった。また、午後九時三十分、空襲警報の発令があった。これは府中町のサイレンで知ったと思う。これら警報の発令時には、警防団員は収容者を学校から一五〇メートル北の方の中組の山に掘った防空壕に誘導した。その後も同様であった。

六日当日、手当てをした負傷者は百数十人であったと、増岡タケヨは語っている。

七日も前日と同様に、ますます増加する負傷者の応急手当で一日が過ぎた。

八日は団員の出勤なく、本部長が増岡訓導と交替して受付をおこない、増岡訓導は収容者の介護にあたった。受付はこの日午後十二時までおこない、負傷者の問合せや罹災証明書の発行などをおこなった。

九日になって、医師二人・看護婦三人が来て治療をおこなったが、十日には来なかった。従って、十日は正午から鉄道へ依頼して、医師一人・看護婦三人の来診を受けた。しかし、医薬品が欠乏して治療は困難をきわめた。収容室はザコ寝の負傷者で埋まり、足の踏み場もなく、臭気は堪えがたいものがあり、悲惨このうえもなかった。

この頃から、消防部長らは東警察署内の県衛生課へ、後は広島市役所へ医療資材を受取りに行った。消防部長や谷川班長は、学校奉安庫前の芝生に連夜宿直して救護作業に努めたが、町内会幹部は誠意の見られない人が多かった。

八月末頃から、大阪府救護班が削置され、数日間滞在して治療にあたった。

収容者の食糧は、婦人会が炊出しをおこなったが、八月二十日過ぎごろ、三原の某高等女学校の先生や生徒が、これの応援に来て数日間滞在した。

収容所での死亡者は、当初は丁重に扱っていたが、被爆二、三日めから続出し、死体の搬出も人手が少なくて思うようにはかどらなかったが、収容所から二〇〇メートル先の覚法寺の鐘つき堂の下へ、ともかくも運んだ。

死体はひどい臭気を発し、ウジがわき、ハエの大群に襲われたので、近所の住民から苦情が出て、十日過ぎごろ、他地区警防団の応援を得て、学校運動場の南隅に運びかえ、校内に集積していた疎開の廃材を使用して焼却した。

初日は三〇数体焼いたが、ここでも近所の苦情が出て、府中川の井領橋を渡った中土手で焼くことにした。この焼却用薪作り、おんぼうは消防部長ら少数団員の日課となった。時には奇篤な町民の参加もあった。遺骨は、幸いにも矢賀町まで逃げて来た人は、まだ気力があっただけに、住所・氏名が確められたので、それぞれ遺族に渡した。

この国民学校以外に、矢賀町内には鉄道の工機部も救護所となって活躍した。これには鉄道病院職員があたった。

また、才蔵峠を尾長町へ降りた処に、陸軍がテントを張って救護所を設置していた。

ここへは矢賀国民学校の医師が出向き、増岡訓導や矢賀婦人会員も応援に出かけたのであった。

県下警防団出動状況表（昭和四十四年十一月三十日戦災誌資料により作成）

市町村名		出動月日	出動延人員(人)	出動場所
1	呉市	八月七日	約 400	住吉橋、県庁前
		八月八日～八月九日	4	己斐国民学校
2	大竹市	八月六日～八月九日	約 300	己斐町、小網町、日赤病院
3	三次市	八月九日～八月十五日	約 120	基町、本川、元安川
4	庄原市	八月六日～八月二十日	140	楠木町、福島町、東練兵場付近
5	因島市	八月八日～八月十五日	140	横川駅付近
6	安芸郡安芸町	なし	なし	なし(地元で活動)
7	瀬野川町	八月六日～八月十二日	176	比治山下、元騎兵隊裏
		八月六日	40	十日市町、東練兵場
8	府中町	なし	なし	なし(地元で活動)
9	船越町	八月七日～八月十五日	約 500	市内各所
10	矢野町	八月六日～八月九日	200	市内各所
11	海田町	八月六日～八月十二日	110	広島駅、宇品付近、東練兵場、八丁堀、市役所、日赤付近
12	坂町	なし	なし	なし(地元で活動)
13	江田島町	八月七日	約 50	八丁堀、白島方面
14	音戸町	八月十日	50	小網町、広島県庁
15	倉橋町	八月六日～八月八日	27	紙屋町付近
		八月七日～八月十日	30	宇品、丹那、似島、日赤付近
		八月八日～八月十日	46	宇品、御幸橋、住吉橋付近
16	熊野町	八月八日～八月二十二日	100	比治山付近
17	熊野跡町	八月七日～八月八日	80	横川付近、三滝竹藪
18	佐伯郡宮島町	なし	なし	なし(地元で活動)
19	大野町	なし	なし	なし(地元で活動)
20	廿日市町	八月六日～八月十三日	311	紙屋町、鷹野橋
		八月七日～八月十三日	1,166	天満町、小網町、土橋、相生橋付近
21	五日市町	八月七日～八月十三日	770	市内西部地区一帯
		八月七日～八月十五日	350	市内西部地区一帯
22	湯来町	八月六日～八月八日	290	市内西部地区一帯
		八月七日～八月十日	840	己斐町、天満町、紙屋町、宇品町
23	沖美町	八月七日～八月十五日	約 300	市内各所で死体処理
24	能美町	八月六日～八月十三日	300	爆心地付近
25	大柿町	八月六日～八月七日	60	袋町、紙屋町
26	安佐郡祇園町	なし	なし	なし(地元で活動)
27	安古市町	八月六日～八月十五日	1,040	上柳町、常葉橋、宇品町、十日市、袋町
28	佐東町	八月八日	30	被服廠、兵器庫、広島市役所
29	可部町	八月八日～八月十三日	305	三篠、十日市、中島、紙屋町、福島、白島
		八月十一日～八月十四日	125	牛田町方面
30	安佐町	八月七日～八月九日	180	相生橋一帯、中広町
		八月七日～八月十日	1,070	相生橋一帯、横川町、十日市一帯
31	沼田町	八月七日～八月二十日	4,760	横川町、八丁堀、大手町、猿猴橋町
32	高陽町	八月六日～八月十五日	500	市内各所
		八月七日～八月九日	230	白島、土橋付近
33	賀茂郡西条町	八月七日～八月二十日	1,815	広島駅前、八丁堀、流川、横川付近
34	八本松町	八月六日～八月八日	960	基町、流川、八丁堀、袋町、水主町、比治山
35	志和町	八月六日～八月十五日	480	市内各所
36	黒瀬町	八月八日	約 70	市内各所、草津国民学校
		八月八日～八月九日	20	己斐国民学校
37	高田郡白木町	八月七日～八月十三日	700	八丁堀付近
38	向原町	八月六日～八月八日	40	基町、東練兵場、西練兵場
39	吉田町	八月六日～八月八日	270	横川町より猿楽町の一帯
40	甲田町	八月七日～八月十五日	約 100	相生橋、横川、三篠付近一帯

		八月八日～八月十五日	192	横川橋付近
41	山県郡加計町	八月六日～八月八日	210	横川、左官町、八丁堀
		八月六日～八月十四日	560	西練兵場一帯
42	戸河内町	八月七日～八月十日	約 300	三篠町、横川、左官町、千田町付近
43	甲奴郡上下町	八月七日～八月二十七日	約 400	市内各所
出動延人員合計			約 21,257	

主な作業内容

一、罹災者の救出救護

二、食糧の配給

三、道路の啓開

四、負傷者の輸送

五、死体の収容・埋葬

六、建物・河川の清掃

七、その他警備など警察活動の補助

(註)一、この出動表は、広島原爆戦災誌資料表の提出された市町村のみによる集計であって実数はこの数以上と考えられる。

二、市町村名は戦後の町村合併による新しい市町村名である。

第十節 県外その他からの救援...549

大阪以西六府県からの救援隊

被爆当夜、比治山の多聞院に設けられた仮県防空本為（県庁）から、県下各機関に救援隊出動を下命すると同様に、近県に対しても、医師・医薬品・食糧その他の全面的応援を要請したが、県外から最初に広島に到着したのは、岡山県医師会派遣の救護班である。さきの六月二十九日、大空襲を受けた岡山は、医師・看護婦などが離散し、連絡も困難をきわめ、医療救護班を派遣できるような状況ではなかったが、連絡がとれる範囲内の医師看護婦（岡山赤十字病院の看護婦数人含む）など集めて急ぎ出動したのであった。当時の出動者西村伊勢松医師の報告（昭和四十五年九月十九日付文書）によれば、次のとおりである。

医療救護班	出動期間	活動場所	出動者	備考
第一班	八月七日～同九日	七日午前中は市内一巡。午後から九日まで広島通信病院	西村伊勢松・山木周・中出捨次郎・東泰一（以上医師）、及び看護婦六人	①救護班員は、全員岡山市及び付近の開業医である。
第二班	八月十四日～同十五日	市内各所	永瀬正太・内藤達雄・岡崎卓一（以上医師）、赤木某・県職員一人、看護婦四、五人	②この二個班以外には、岡山医師会からの救護班は出動しなかった。

八月十五日、終戦となり軍司令部から引揚げるよう申し渡されたので、第二班は岡山に帰った。なお、岡山県医師会史（稿本）の年表には、「昭和二〇年八月六日、広島市に原子爆弾投下、救護班十三班派遣、人員七十六名」とある。

八日には、島根県・山口県両医師会から、九日には、鳥取県医師会から、十日には、兵庫県医師会・二十一日には大阪府医師会からというように、続々と医療救護班が来援した。広島市内の医療機関が壊滅状態に陥り、広島市を取りかこむ県下各市町村の医療機関も、多数の負傷者を抱えこんで、身動きならぬほどの大混乱を呈していたとき、これら県外各地からの医療救護班の来援は、まさに地獄に仏のありがたさであった。

多くの救護班は、その部署に着くと、まったく不眠不休という医療活動をおこない、大いに感謝されたが、中には、被爆の惨状をただ視察に來ただけというような救護班もあったと言われる。しかし、救援警防団の中にも、負傷者の余りに凄惨な状態を見て気を吞まれ、なんらなすところなく引返した者もあり、これらは衝撃で精神の平衡を失い、自信も喪失したのであろう。

四国から救援隊が来なかったのは、瀬戸内海に浮遊機雷が多く、渡航が危険であったためと言われるが、終戦までは、敵の本土上陸（土佐沖）に対処する作戦上から、救援隊出動により防衛力の削減されることを恐れたためでもあったと思われる。

県外救護班の出動状況表

なお、県外各地からの医療救護班の出動状況は、次のとおりである。

県外医療救護班応援状況表（当時、広島県属 川田兼三郎資料）

月 日	来援先	医師	歯科医	薬剤師	看護婦	事務補助	計	救護所
八月七日	岡山	4		1	8		13	東警察署
	岡山	6			15		21	県庁
八月八日	岡山	5			11		16	三篠信用組合
	岡山	5			11		16	通信病院
	島根	3	1		10	3	17	大芝
	島根	5	1	1	8		15	第二国民学校
八月九日	山口	3			11	4	19	東照宮
	鳥取	11	3	4	49	5	72	市役所・中山国民学校・通信病院・倉敷航空（吉島町）
八月十日	山口	2			10	1	13	江波兵器学校
	岡山	7			15	2	24	向西館西側
八月十一日	兵庫	2			2		4	
	島根	2	1	1	4		8	大芝
八月十五日	島根	5		1	10		16	神崎国民学校・舟入本町
八月十七日	鳥取	12	2	6	32	2	54	舟入・江波・己斐・神崎
	岡傷療	2			16		18	府中国民学校（安芸郡）
	岡山	6		1	13	2	22	第二国民学校
八月二十一日	兵庫	41		10	38	2	91	五日市・井ノ口・観音・平良・草津・己斐
	大阪	27			29	6	62	第二国民学校・府中・船越・温品・中山・袋町

八月二十五日	鳥取	1			5	1	7	戸坂
八月二十七日	兵庫	14	11	2	5		32	被服廠・比治山・船越・倉敷航空
八月三十日	兵庫	3	2		5		10	船越
九月一日	兵庫	2			5		7	第一国民学校
九月五日	大阪	15			25	11	51	矢賀・温品・廿日市・青崎・厳島
九月六日	島根	3			5	1	9	地御前教員保養所
十月三日	鳥取	1			5	1	7	仁保

県外救護班出動人員調（延人員）

県名	医師		歯科医		薬剤師		保健婦		看護婦		産婆		事務補助		計	
	実	延	実	延	実	延	実	延	実	延	実	延	実	延	実	延
大阪府	38	389	7	71			54	567					16	117	115	1144
兵庫県	49	305	26	163	12	79	5	20	49	315	2	14	7	56	150	952
鳥取県	27	112	5	20	9	36	11	51	77	320			10	49	139	588
島根県	23	127	5	24	3	25	9	47	45	242			7	35	92	500
山口県	7	41							79	1631			3	21	89	1693
岡山県	35	140			2	8			89	356			4	16	130	520
計	179	1114	43	278	26	148	79	685	339	2864	2	14	47	294	715	5397

山口赤十字病院の出動

県外各地の医師会派遣による医療救護班のほかに、軍の命令によって各地の赤十字病院からも多くの救護班が出動した。これは当時、赤十字病院はすべて陸軍病院分院か海軍病院分院となっていたためであって、広島赤十字病院も、広島陸軍病院赤十字病院となり、戦傷病兵がたくさん入院していたのと同様である。しかし、被爆直後、負傷した一般市民が殺到し、軍民の別なく治療救護がおこなわれたことはいままでのない。

山口赤十字病院には、当時の出動状況について、次のような記録が保存されている。

（記録その一）

前略…、八月六日十六時すぎに上田誠一山口県知事により、広島市に臨時救護班派遣の命令があり、支部は直ちに岩国海軍病院赤十字病院（昭和二十年二月一日より同年八月三十日まで）に連絡、同病院医師・看護婦・看護婦生徒を以って三箇班を組織し、八月七日二箇班を、八月九日に一箇班を派遣した。うち二箇班は破壊赤十字病院（広島赤十字病院）に、一箇班は同市若草町東練兵場に、天幕を張って臨時救護所とする。各班ともに班を二分し、半ケ班を收容中の患者を、半ケ班を以って間断なく搬入される新患者の治療看護にあたった。

昼夜の別なく搬入される患者は、何れも担送で、全身火傷及び骨折・切創などの重症にて死亡者続出し、惨劇を極めたるも医員以下一致協力、挺身治療の実を挙げ、関係各機関より多大の感謝を受くるに至った。

八月十五日、全班引揚げ帰還解散した。此の間救護せる患者数は男二、〇〇〇名、女二、三〇〇名、計四、三〇〇名に達し、男三〇〇名、女五〇〇名計八〇〇名に上る死亡者を出し、未治療のまま帰宅せしめたるもの一、六二〇名、引揚げに際し医療機関に引渡したるもの男八一〇名、女一、〇七〇名、計一、八八〇名であった。

第一班 医員一・書記一・看護婦長一・看護婦一・看護婦生徒五 計九名

第二班 医員一・書記一・看護婦一・看護婦生徒五 計八名

第三班 医員一・看護婦二・看護婦生徒五 計八名（以上氏名略）

（記録その二）

八月六日午前八時十五分、広島市に世界戦史未曾有の原子爆弾による敵機の攻撃あり、一瞬にして多数の人命を奪い、建造物を潰えしむるの悲惨事を惹起し、市内は大混乱に陥り、之が救護に非常処置を必要とするに至り、広島師団長はさきに協定の非常事態による救護班の臨時配属四箇班を、広島第二陸軍病院に派遣方を要求した。よって直ちに在郷の救護看護婦長四名、看護婦三名、及び山口赤十字病院より甲・乙種看護婦生徒二年生三十三名、計四十名を、八月十一日召集して四箇班を編成し、かねて本社の指示せるところに依り、之を山口第一救護班のところ山口第四救護班として、八月十二日、広島第二陸軍病院に派遣した。

右四箇班の大部分は第一陸軍病院宇品分院に、その一部は第二陸軍病院三次分院、あるいは向原分院に配属勤務を命ぜられ、広島戦災地救護員として非常勤務に服した。

更に同月十日、山口陸軍病院に戦災患者の転送予定の下に、同月二十一日同病院に一箇班派遣方、広島師団長の要求により同月二十日郷看護婦長一名及び山口赤十字病院甲・乙種看護婦生徒二年生一〇名を召集し、山口第五救護班を編成して、八月二十一日山口陸軍病院に派遣した。

同班は広島原爆患者転送の予定変更に伴い、同月二十六日広島第二陸軍病院に転属を命ぜられ、同日向原分院に

到着したるも、当時最も救護力を要する広島第一陸軍病院宇品分院に所属を命ぜられ、翌二十七日以降同院に勤務した。かくして二回に派遣せる五箇班は、何れも非常事態の緩和と共に、短期間にして解任せられ、第五班は九月十日、第四班は何れも九月十四日に帰還して各班を解散し、ここに非常時下における陸軍病院配属救護班派遣に関する臨時処置を終了した。(出勤者氏名畧)

鳥取赤十字病院の出勤

また、鳥取赤十字病院の活動状況は、同病院の保管する記録によれば、鳥取県知事から広島市救護のため救護班派遣方の要請があり、急ぎ救護班を編成し八月八日に出発、医員二人・薬剤員一人・書記一人・看護婦長一人・看護婦一〇人・看護婦生徒(二年生)一〇人・小使一人・計二六人が、九日に入市した。

同九日は、広島市庁舎の臨時救護所において医療救護にあたった。患者の特質は爆風による顔面その他の火傷で油薬その他適宜の処置をおこなった。夜間は救護員が交替で不寝番に立ち救護任務の万全を期した。

施療患者は五七九人(男 二五八人、女 三二一人)、死亡者男六人・女四人・他の病院へ転送したものの女一人という状況で十日、十一日は広島赤十字病院を応援し、十日は二五〇人、十一日は午前中約一三〇人の施療をおこなった。広島赤十字病院で鳥取班が独自に施療したものの約七〇人であった。

この救護班の帰還後、中国軍管区井上寿雄軍医部長から救護班三箇班派遣の要請があり、八月二十日に出動、次の記録のとおり活動した。

(記録)

業務総報告

日本赤十字社(鳥取支部)臨時救護班

一、当該団体ノ行動ニ関スル件

昭和二十年八月二十日

鳥取出発、同日広島第二陸軍病院着

昭和二十年八月二十一日

広島第二陸軍病院ヨリ広島第一陸軍病院宇品分院へ派遣、同日着任

昭和二十年九月十六日

広島第一陸軍病院宇品分院編入解除同日宇品出発、広島第二陸軍病院へ復帰

広島第二陸軍病院編入解除同日井原市出発

昭和二十年九月十七日

鳥取駅着、鳥取支部ニテ解散ス

二、患者ニ関スル件

1 患者ノ収容

定時入院、臨時入院ノ予報ニ依リ、収容患者ノ階級、病症、軽重ニ依リ病室ヲ区分ス、殊ニ激シキ火傷患者ハ悪臭ヲハナチ蠅多数参集シ、真ニ非衛生的ナルヲ以テ、一室ニ収容シ昼夜ノ別ナク蚊帳ヲ張り特ニ区分ス

2 看護ノ状況

看護ハ博愛ノ精神ヲ以テ彼我ノ別ナク懇切丁寧ヲ旨トシ、一般看護ハ勿論、患者ノ身辺ノ清潔ニ留意シ、又、大東亜戦争終局ニ鑑ミ、患者ノ精神或ハ沈ミ或ハ興奮シアリ、精神上ノ慰安静和ヲ与ヘ、他面患者ノ指導者トシテ監督シ、夜間ノ巡室ハ特ニ厳ニナス

三、給食及衛生ニ関スル事項

1 給食ニ関スル事項

糧食ハ船舶練習部内炊事所ノ委託賄ニ依リ、給食時節柄、物資潤沢ナラザルモ概ネ佳良、何等不足ヲ感ズル事ナシ

2 衛生ニ関スル件

宿舎ハ採光換気共ニ良好ナレドモ戸障子全部破損、風雨吹キ流シナルヲ以テ、夜間風雨ノ際ハ毛布ヲ張り、感冒、寝冷等ノ予防ニ留意ス、又、保健上ノ見地ヨリ所属陸軍病院指示ノ下ニ、曾定時國民体操ヲ行ヒ、体力増強ニ努ム、宿舎内外ノ清掃、寝具日光乾晒励行ス

四、材料及寄贈名ニ関スル事項

1 材料ニ関スル件

衛生材料ハ陸軍病院ヨリ補給セラレ、之が使用ニ際シテ極度ニ節約、綿製品等ハ数度再製シ其他ハ廃品回収、廃品利用或ハ代用品考案等、各自節約ニ努メタリ

自昭和二十年八月二十日

至昭和二十年九月十五日 鳥取支部ヨリ受領セル救護材料ハ左ノ如シ

品目	員数	補給者	摘要
看護衣	十九枚	鳥取支部	女用 十九
看護帽	十九個	鳥取支部	女用 十九
作業衣	十九枚	鳥取支部	女用 十九
靴	十九足	鳥取支部	女用 十九
靴下	六三組	鳥取支部	女用 六三

なお、岡山赤十字病院は、六月二十九日の岡山市空襲により被災し、岡山県上房郡豊野村国民学校に疎開しており、広島市救援班を派遣できる状況でなかった。

松江聯隊区から来援

島根県の松江聯隊区司令部の野村好光衛生准尉は、広島陸軍病院出身で、広島市が被爆したその日、中国軍管区軍医部(軍医部長井上寿雄軍医大佐)から暗号電報で至急帰広するよう連絡を受け、直ちに出発した。次は、その救護活動状況である。

陸軍幼年学校跡にて 野村好光(談)

(当時松江聯隊区司令部付衛生准尉)

広島陸軍病院から、昭和十八年五月十二日に山口陸軍病院(山口市宮野)へ転属し、昭和二十年五月八日、松江聯隊区司令部付となり、併せて、内地出戦部隊(通称大國部隊)として島根地区司令部兼務を命ぜられ、そのまま私は松江聯隊区司令部に衛生准尉として勤務していた。

松江聯隊区司令部には、私のほかに広島市出身者としては、広島市大手町九丁目に家のある無線通信班班長の某軍曹(失名)がいた。

八月一日から四日まで、私は公用で広島師団司令部に出張した。松江に帰った翌五日、日直司令を勤めたあと営外の自宅に帰っていたが、その夜、軍曹が遊びに来て十二時ごろまで、「広島は大丈夫だよ。」などと話しながら将棋をさして別れた。

六日の朝、九時前であった。

軍曹が目の色をかえてやって来た。

「これ見ンさいや。」という。

それは、三八五二四五…という数字の暗号電報であった。

「わからんじゃないか、何のことだ。」

軍曹はあわてて訳してくれたが、つい二日前に平穏な広島市を見ている私には、全滅したなどとは、まったく本気で受取れなかった。もう一度、訳させてみたが、まだフに落ちなかった。しかし、軍曹の目の色が本気である。

私は軍曹と一緒に、とにかく司令官小川全勝少将の官邸へ出かけることにした。

(電文)

本朝八時過ぎ 広島全滅 患者無数 診療施設ナシ 診療者ナシ 野村准尉ハ 衛生材料ト食糧ヲ携行シ スグ来レ

参謀長

小川司令官に報告して、私はようやく重大事態であることが判ったような気がした。

この緊急電報は、中国軍管区軍医部から発信されたもので、安芸郡海田市駅から松江駅を経て通達されたものであったことが、後日わかった。

私はただちに兵六人を連れて、その班長となり出発することを命ぜられた。

食糧は、米六俵・みそ二樽・しょうゆ二樽・ジャガイモニ袋・佃煮大箱四・塩二俵、その他野菜など。

医薬品は、繻帯・ガーゼ・脱脂綿・アルコール、その他で、私は特に粉末赤チン二、〇〇〇グラム(50倍に溶かす)を加え、軍用トラックに積みこんで出発した。

六日夕がた五時前に、広島市の東端矢賀町に到着したが、途中、国鉄芸備線狩留賀駅、或いはその途中に溢れている負傷者や、大内越峠[おおちごだお]付近で、動けなくなっている無数の負傷者の治療をおこなった。

大内越峠から愛宕町へ入ろうとしたが、火災にさえぎられて前進できず、この峠の上で、路上に群らがる負傷者の手当てをおこなって、ついに一夜を明かした。

七日早朝四時過ぎ、広島駅に出て八丁堀を通り、基町の師団司令部に到着したが、そこには死体や負傷者の横たわっている焼跡だけがあった。

広島城も跡形なく吹っこんでいた。私は赤十字のマークのついたズノウから、矢立てと紙を取出し、紙屋町方面へむかって、ありのままの惨状を書きとどめた。

広島城の北側の陸軍幼年学校跡に行き、そこを治療活動の拠点とした。当時、幼年学校は郡部へ疎開して、そのあとへは軍医部や兵器部・兵務部その他が入っていたが、ここも筆舌につくせない惨状であった。

幼年学校跡には、郊外に逃げきれなかった万を越える重傷者が無数に呻吟していた。その悶え苦しむ声もすでに力なく、コト切れる寸前のところであった。

無数の負傷者のなかに女子の動員学徒が四、五〇〇人くらいいた。これらは、広島城天守閣の各階やその他城内の建物内で通信業務にたずさわっていたと言い、気がついたときには、ここに吹っ飛ばされていたという。その半数はその場で死んでいった。まだ生きていた約二〇〇人の生徒たちは、縁故者が来てそれぞれ連れて帰った。

牛田町の不動院に退避していた軍医部の原田衛生少尉が尋ねて来たので、戦友の幸頭衛生軍曹と一緒に探した。幸頭軍曹の遺骨は、まだ肉がついていたから、夜になって茶毘にふした。

幸頭軍曹が歴戦の思い出を話していた軍刀もヒン曲っていたが、押しつぶされた鉄兜とともに拾っておき、たずねて来た縁故者の婦人に遺骨と一緒に渡した。

原田衛生少尉と出あって、私ははじめて軍医部が市の北端の不動院におり、医薬品もあることを知って、すぐに尋ねて行った。

軍医部長は、出勤途上に被爆し、馬もろとも吹っ飛ばされ、電柱に叩きつけられ、ものも言えない重傷であったから、筆談によらねばならなかった。

私は火傷者に塗布するための食用油ドラム缶一本を、ここでもらった。しかし、輸送する車がないので、ゴロゴロと地面を転がせて、陸軍病院がある三篠川の提防上の臨時救護所まで、炎天下を運ばねばならなかった。ここには陸軍病院関係の負傷者が、四、五〇〇人収容されていたが、勿論一般市民も多数まじっており、郊外から駆けつけた軍医や数人の生き残り衛生兵と、五、六人の看護婦たちが、かいがいしく立ち働いていた。

火傷者に食用油を塗ると、熱い地面に横たわっていて苦しみ転がるため、全身砂まぶれになり、まるでキナ粉餅のようになった。

一応の手当てをした負傷者を、私はドンドン外郭だけ残った福屋の臨時救護所に送りこんだ。ここには、旧知の山口陸軍病院救援隊(隊長・岡田中尉)が一〇人程度いたから好都合であった。

軍医部長は重傷ながらも、その職席上から部下の兵の肩にすがったり、ものに乗せられたりしながら、幼年学校跡の私のところへ出て来て指揮をとった。幾ら治療しても後を絶たず、負傷者がつぎつぎと詰めかけて来たが、その場で死んでいく者が多かった。

それらの死体は、夜間、校庭に穴を掘り火葬することにした。私は連れて来た兵六人に死体の収容を命じたが、兵らはみんな震えてばかりいた。「ブッタ斬るぞッ/」と、私は怒鳴りつけて作業にかからせた。

焼跡からロープを拾って来て、死体に向け、玄ノ子祭の石を引っばるようなことをして、死体を引きずり集めたが、ロープを引っばると、皮膚がズルリとむけて、なかなか作業も進まなかった。

このようにして十三日夜、あらかた処理作業を終え、十四日朝、汽車で松江に帰った。

その後、私は脱毛と下痢・出血でながく苦しんだ。

大国部隊の来援

大国部隊(師団司令部・山口県山口市)は、昭和二十年三月、本土決戦備えて編成された部隊で、主として山口市及びその周辺地区に隷下諸部隊が散在していた。八月六日、広島壊滅の報と共に、救援の出動命令が下り、翌七日から次々に各部隊が入市し、広島市内各地区において救援活動に従事した。

大国第二八三四四部隊小林隊所属の井西隆人二等兵(倉敷市西阿知国民学校に駐屯)の記録によると、六日、広島へ転進命令が出て、ただちに出発準備を行ない、七日午前五時十五分、西阿知駅を出発。福山で同部隊第四中隊と合流し、安芸郡海田市駅に下車した。ここから徒歩で入市し、広島駅に到着したが、ホームの大時計が八時十五分

で停止していた。ただちに同駅及びその付近の整理作業にあたり、夜は、多数負傷者の呻吟する饒津神社付近の警備に立った。

そのむかし桜見に來し思い出の

饒津のやしろ焼けてかげなし 井西隆人

八日午前四時半起床、広島駅の整理作業を続ける。九日も昨日と同じ作業を行ない、十日に整理作業を終了、午後一時半広島駅を立ち、午後六時西阿知に帰着した。なお、八月二十二日に部隊解散式を行なった。

また、大国第二八三四六部隊第二大隊所属の土居源一郎上等兵(長門市正明寺の女学校に駐屯)の報告では、八月十五日、隊長藤原大尉以下約四〇〇人が入市し、市内各地区に分散して、清掃作業、あるいは残存施設の警備など行なった。

土居上等兵が所属した作業隊約一〇〇人は、大手町国民学校跡の校庭に天幕を張り、ここを拠点として、焼跡に堆積する瓦・電線その他の清掃を行なうと共に防空壕の中や倒れた塀の下にたっている死体の処理をおこなった。また、盗難の頻発する陸軍糧秣支廠の警備にもあたるなどしたが、九月十六日に部隊解散となり、各自帰省した。

なお、大国部隊では各大隊から、広島へ兵器受領に来ていて被爆し、行方不明となった兵隊があった。

その他の救護班

また、大阪通信病院から広島通信病院へ、外科主任医師の引率で八人の救護班が、治療材料食など持参で来援し、八日間にわたって応援したが、このように個々にその医療機関が県外から応援を得たものが、他にもあったものと思われるが、詳細は不明である。

八月八日、陸軍省から派遣されてきた救護調査班陸軍軍医学校・臨時東京陸軍病院の島田中佐ら五人も、被爆の実態調査を進めると同時に多数の負傷者の治療にあたった。

マルセル・ジュノー博士の誠意

八月末から九月初めにかけて、後述するごとく、万国赤十字社代表マルセル・ジュノー博士が、連合国側専門家視察団一行と来広して、被爆者救援の医療品その他を多数提供した。

九月十二日は、陸軍省医務局・軍医学校から大橋成一ら軍医・看護婦一四四人の特設救護班が来広し、広島陸軍病院宇品分院や陸軍船舶部隊練習部(旧大和紡績工場)寄宿舎で、救護病院を開設し、同年十月十日まで診療と原子爆弾の障害調査をおこなった。この他、各大学派遣の調査班も、診療活動を併せて行なった。

八月二十九日、中立国利益代表団が来広して、被爆状況を視察し、広島県知事を訪問した。そのとき視察の案内役を勤めた県庁人事課長竹内喜三郎に対し、代表団に加わっていた万国赤十字社マルセル・ジュノー博士が、焼野原一面を埋めるハエの大群を見て、「見るに忍びない、飛行機でDDTを撒布するから、その旨市民に周知されたい。駆除剤DDTは撒布後、数分間は眼や皮膚を刺戟することがあるが、人体には害はない。」と、ハエの駆除を提言した。これはただちに進駐軍の飛行機によって実施され、たちどころに実効をあらわし、罹災者はようやくハエの襲撃から解放されたのであるが、同時に進駐軍の痛快なまでの豊富な科学力を、あらためて感じた者も多かった。

引続き、連合国側専門家視察団一行ファーレル代将ほか一二人が、九月八日朝横浜発空路で同日正午前に山口県岩国飛行場に到着、午後三時バスにより佐伯郡五日市の中国軍管区司令部を訪問し、日本側の軍・官と打合せをおこない、一応、厳島岩惣旅館に引きあげて一泊、九日早朝、数台の自動車・バスに分乗し、雨降りの焦土広島に乗りこみ、原子爆弾の放射の測量、一般被害、被爆患者の状態を調査し、午後一時、岩国に引返し、さらに調査研究のため四人を残し、ファーレル代将など八人は空路横浜へ引きあげた。

調査団一行は、アメリカ陸軍代将ファーレル、同ニューマンの工兵科に関する技術者のほかに、物理学者モリソン博士、万国赤十字社代表マルセル・ジュノー博士らで、写真技師も加わった技術者ばかり、通訳として陸軍軍医学校嘱託の簡原亀之輔薬学博士が随行し、在広軍・官側纏軍少佐吉川参謀・県庁竹内人事課長・喜多島衛生課長のほか、東京帝国大学都築博士と数人の護衛警察官が同行し、護国神社、大本営跡、その他の調査を、三班(放射能測量・市内一般被害・罹災患者訪問)に分れて、それぞれ吉川参謀・喜多島衛生課長から説明を聴取した。このとき都築博士は「原子爆弾には何か毒ガスに類したものが装置されてはいなかったか? 爆発当時の模様を聞くと、白いガス様なものが中心地域にただよっていたという。」と質問した。ファーレル代将とモリソン博士は「それについては、のちほど明らかにする。」と答えた。このとき、七五年間不毛説は、アメリカ側からきっぱり否定された。

ジュノー博士、調査団の引揚げに際し居残り組となって、約八日間滞在したが、同博士は、「戦争の惨禍は、今次大戦世界中到るところで見たが、わずか一発でこの破努力を持つ原子爆弾の恐るべき能力には驚いた。その原子爆弾

を人類として最初に体験した広島市民に対しては、まったくご同情のほかない。われわれは、かかるものを二度とふたたび使用しないですむようつとめなければならない。わが万国赤十字社は、広島惨劇の入報でただちに派遣団を組織し、渡日したが、当面の罹災者に救援の手をのべるとともに、他方世界最初に体験する原子爆弾の性能、被害範囲およびそれによる被害者への医療対策の研究調査をとげ、今後の場合に資することも使命となっている（昭和二十年九月二十日付 中国新聞）。」と語り、一万人の被爆患者を、一か月間施療できる一五トンの医薬品その他を、飛行機で広島市に輸送し、救護活動を援助した。

第一節 焼野原の生活...565

命からがら

ほとんど全市が一瞬に倒壊し、大火災となった。血だるまの市民たちは、襲いかかる火炎・黒煙の中から、命からがら逃げだした。そこには無数の死者・負傷者がいたが、それらをかえりみる余力はなかった。

手を下げると、指先に血がたまり、ズキンズキンと激しく痛むので、火傷して、ボロ布のように皮膚が剥げて垂れた両手を、幽霊のように前に上げ、ぶっ倒れそうになりながらゾロゾロと歩いて逃げた。

安田高等女学校を卒業したばかりの女子挺身隊員巖粉連[げんふれん](旧日本名皆川)は、三篠本町の軍需工場に出勤中、被爆した。社長室へ工場の伝票をもらいに行き帰ったとたんであった。ものすごい爆発音と閃光を背中にいっぱい浴びたと思う一瞬、暗黒に包まれた。倒壊した建物の中で四〇分以上も過ぎたと思われるとき、一条の光線がさしこんで来た。その光を目あてに気違いのように物をかきわけて外へ這い出た。

誰か一人、そのあとについて出て来た者がいたが、外で二、三步あるくとバツリと倒れた。それがどうなったか判らないまま、巖粉連は工場の近くにあった防空壕に入っていたが、一昨日の雨で、壕の中には赤粘土色の水がいっぱいたまっていた。そのうわ水を無意識に飲んでみると、うしろから女の先生(引率教師か)が「水を飲んだら死にます。水を飲まないように…」と言いながら、両方からかかえるようにして、粉連を引起した。

粉連は工場からどんなふうにして逃げたのか覚えていない。途中、たくさんの人が逃げていて、それらはみな真っ裸で、肉が取れ、血に染まっていた。また、兵隊や多くの死体が、ちょうど田舎の稲たばのように転がっていた。それを踏みこえて大芝町(市の北端)の竹やぶへようやくたどりつくことができた。

粉連が大芝町の竹やぶに逃げたのは、万一の場合に備えて、居住地三篠本町の町内会が、あらかじめ避難場所として指定していたからであろう。

何時間かたって父が駆けつけて来たが、父は片方の耳が取れていた。また、叔父と出あったが、叔父は片方の手が折れてブラ下がり、胸には大きな傷口が穴のようにあき、からだ全体血まみれになっていた。しかし、母は見つからなかった。

粉連は、ここからまたずっと奥(北)の安佐郡古市の叔母の家に、安全を求めて父らと一緒に逃げていったのであった(巖粉連手記から)。

郡部への避難

このように、原子爆弾の炸裂下、死の淵から這い上ることのできた人々は、東部の者は比治山公園か泉邸(縮景園)、東練兵場あるいは仁保大河方面(黄金山付近)へひとまずのがれ、そこから更に呉市へ通ずる安芸郡海田市駅方面、或いは府中方面・牛田の工兵作業場や不動院、白島の太田川畔・長寿園、更に少し奥の戸坂村などへ逃げ、多くは安芸郡下へふたたび避難していった。北部の者は、横川・大芝公園を経て、安佐郡可部町付近まで逃げ、まだ気力の続く者は同郡下の各地へ散って行った。中には、近在の三滝寺や長束付近の山の中へ隠れた者も多かった。西部の罹災者の多くは、吉島町の飛行場および南観音町の総合グラウンド、江波町の射撃場・三菱造船所などへ、ひとまず逃げ、そこから落ちなかった橋を渡ったり、緊急避難用に以前からつながれていた舟や筏によって川を渡り、己斐方面あるいは高須・古江の方へのがれた。そして、さらに佐伯郡五日市町・廿日市町など同郡下の各地へ避難していった。もちろん、途中の山林の中にも多数の人々が逃げこんだ。広島市役所付近から南部の者は、ほとんど御幸橋へ出て、そこから火災のおきていない更に南の宇品へむかった。内海の島々に故郷をもつ人々も多く、なんとしてでも便船を見つけようとして、宇品港は一日中、收拾のつかない大混乱に陥ったのであった。ここから似の島・金輪島(宇品町)、あるいは江田島などの島々へ舟で送られた負傷者は万を越えた。もちろん、不思議なほど、とんでもない方向へ逃げていたという人も多い。

安芸・安佐・佐伯三郡下その他へ脱出した人々は、軍のトラックや汽車で送りこまれた負傷者も含めて、その数は約一五万人に達した。汽車やトラックで輸送された負傷者は別として、罹災者の多くは、トボトボと、歩いては休み、休んでは歩き続けて、それぞれの目的地にたどりついたのである。

一方、被爆して廃屋同然になりながらも、辛うじて火災から守りとおした白島町の通信病院、千田町の広島赤十字病院、宇品町の陸軍共済病院、江波町の陸軍病院分院、観音・江波両の三菱重工業株式会社附属病院、および市

周辺部の各医療機関などは、いずこも負傷者が殺到して内外に充ち溢れた。しかし、医師も看護婦も傷つき、あるいは倒れて働ける者は、ごくわずかであった。加えて医薬品もまたたくまに欠乏し、補充はつかず、夜は暗やみの中で苦しい治療活動を続けねばならなかった。

六日は、このような動転狂乱のうちに暮れていき、その夜、市の中心部はすでに火炎も落ちていたが、地表はなお赤々と火を残しており、空は高く明るんでいた。

急設された臨時収容所その他では、負傷者の苦悶の声、あるいは肉親を呼びあう声、救護を求める声が一晩中続いた。そして無数の人々がバタバタと死んでいった。

探す人々

七日八日と日がたつにつれて、焼跡には肉親知己を探す人々が増えた。ことに宇品の陸軍船舶練習部兵舎などの大きな収容所では、いつ時も早く生存か否かを確かめようとする人々が押しかけ、収容者受付簿を奪いあうようにして、殺気立つほどの混雑をきわめた。九日十日さらに十一日と、肉親知己を探しまわって、その遺体すら見いだすことができず、ついに精神錯乱の状態に陥っていく人も少なくなかった。

ただ焼野原

十日ごろになると、さしもの猛火巨煙もようやくおさまり、軍隊や救援警防団などによって主要道路は啓開され、目につく死体はほぼ処理されていったが、被爆者にはその作業もただうつろに眺められるだけであった。

茫洋とした焼跡には、あちらこちらに破裂した水道管から水が噴出し、音もなく弱々しい虹を描いていたが、もちろん一羽の小鳥もとんで来るといふことはなかった。

昨日まで人間の生活を彩っていた数々の焼残り品が、押しつぶされ吹きとばされた無残な姿を晒しており、沸騰してそのまま凝結した屋根瓦の塊の陰には、身元のわからない頭骸骨やその他の骨片が、白々と散乱していた。このような焼跡一面に、倒壊物の下敷きになった死体の、腐る臭いが溢れただよい、歩く者の目や鼻に滲みだした。

朝日新聞社の宮武甫写真班員は、外部から入市した最初の写真家で、貴重な被爆状況を多数記録しているが、このころの焼跡の模様を次のように述べている。

私の写真は、八月十日から十二日の間に写したのですが、当時まだ焼跡にはチョロチョロと残り火が、立ちくすぶっていました。原子爆弾以外の空襲を受けた都市では、各町内の人たちが集って、すぐ復興に立ち上がって、なんとなく賑やかな風景が見られましたが、広島は焼跡は近在から駆けつけた近親者が消息をたずねていて、それも私が滞在した三日間はわずかの人のようでした。したがって焼跡もさみしいものでした。もう一つ印象深いのは、他の戦災都市と異なって木っ端微塵に砕けたといった一望千里の焼跡でした。

到着のその夜は、軍隊が広島駅前に作ったテントで寝て、次の日から広島城天主閣の横の噴水のようなものがあつた広場(註・大本営跡の前)にテントを張り、寝泊りしたわけです。天主閣焼けておらずにグシャッと押しつぶされていました。爆心近くで寝泊りしたせいか、帰阪後一か月くらい体がだるく、下痢気味でした。(以下略)

このような焼跡の中で、被爆当日、逃げ切れなかった人やすぐに舞いもどった人々が、半壊の防空壕の中や焼トタンで囲んだ小屋、あるいは救援の兵隊が建てた応急バラック(泉邸内、鶴羽根神社その他)の中に、虚脱した体を横たえていたが、日がたつとともに、皮膚に紫斑が浮かび、頭髮が束となって抜け、歯ぐきから血を出しながら、次々と死んでいった。

終戦

八月十五日、終戦となり、二十日ごろには、国内各地から焼野原の古里広島へも、復員兵の姿がポツポツ見られはじめたが、眠るに家なく語るに肉親の誰一人もいないという状態の人々が多かった。

ハエの大群発生

この頃、大がらなまっ黒いハエの大群が、焼跡に突然のように発生しはじめ、悪魔の吐瀉物のように地上を蔽った。まるでアブのように被爆者の肌をさし、払っても払っても逃げないしぶといハエであった。

九月八日、米国原子爆弾災害調査団(団長・ファーレル代将)一行一三人と共に来広した万国赤十字社ジュノー博士の提言により、進駐軍が飛行機からDDTを撒布して、ハエは急激に減っていった。

枕崎台風

九月十七日の夜、焼野原の上に大暴風雨が襲来した。これを「枕崎台風」と呼ぶが、最低気圧九六一・九三ミリバルで、中心部幟町付近でも深さ五〇センチメートルを超えるほどの浸水で、全市水びたしになった。

橋梁の流失と復旧の遅延 このため、被爆に損傷しながらも残っていた天満橋・明治橋・庚午橋・大正橋・旭橋・

横川電車専用橋などが流失し、東大橋は橋脚沈下、観音橋は半分落橋して通行不能になるほどの被害が出たほか、復旧しはじめていた鉄道線路・一般道路をはじめ、中国新聞社などの企業体も、その努力が水泡に帰した。

災難の加重

この頃、肉親や縁故者と連絡のついた疎開学童が、教師の引率で焼野原へボツボツ帰って来ていたが、途中、水害で足どめになった学校もあった。

また、防空壕やバラックに細々と住んでいた被爆者は、寝る所を追いだされ、なけなしの持物をも失ってしまい、被災した自宅跡に断乎居住を決めていた生残りの市民や避難先からいち早く復帰していた者も、この水害の痛手によって、住むことを諦め、ふたたび郡部へかえって行った者もかなりあった。

自殺者出る

被爆者のなかには、辛うじて生きてはいるものの、ふた目とは見られないひどい傷痕や苦しい症状のため、みずから命を絶つ者もあった。また、肉親知己を一朝にして失い、まったく天涯孤独の身になったうえ、さらに台風水害の打撃を受けた結果、ひどい空虚感に襲われ、ついに発狂状態に陥っていく人もあった。洪水によって、焼跡の上に夜、こと燃えていた青い燐もなくなり、屍臭もあらかた消えたが、人影も物音もない今は、戦争に敗れたという実感がヒシヒシと身に迫った。

夾雑物を洗い流す

台風が去ったあとの焼野原は、一面に堆積していた夾雑物が、洪水が引くのと一緒に海へ押し流されたから、地面が見違えるほど急に明るくなった。八月末ごろから爆心地一帯を取りまくように生え始めていた鉄道草が、更に青々と茂って焼野原を蔽っていった。この鉄道草は、後に代用食として江波町で売り出され、まずいながら罹災者の空腹をおぎなった。これを“江波だんご”と言い、列をつくって買った。

秋から冬へ

台風のあとは急に秋めき、すぐ冬になった。夜は、潮臭い風が、焦土を広々とまともに吹きわたって来て、バラック小屋の焼トタンを、キッキッキと頻りにきしませた。

罹災者らは、焼残りの木切れを集めて来て焚火をおこし、寒い暗い夜の明かりにすると共に、ほそぼそと体を温めてすごした。

焼野原の中に、点々と焼け残ったビルの残骸が、月光に照らし出されて、暗灰色の無気味な静寂を漂わせており、焼けて主幹だけになった無数の立木や電柱が、反りかえりヘシ折られて、悶え苦しみ助けを求める人間の姿そのままに、黒々と投影していた。

こんな冥界そのものの焼野原の中で、看取る人もなく死んでいった罹災者が、あちらにもこちらにもまっ赤な火炎をあげて、一晩中燃やし続けられ、白っぽい水色のような茶昆の煙が、透徹した寒気の中にたかだかと揺れながら昇っていくのが見られた。

食生活の窮乏

焼野原の冬は、まれな厳しさであった。広島駅前をはじめ、己斐・横川両駅付近に、統制違反の食糧や、放出軍需物資などを商う闇市場ができて、一日中賑わっていたが、罹災者の多くは、それを利用するほどの資力もなく、酷寒に耐えねばならなかった。

被爆後、三、四か月たっても、人間とは思えない生活の日その日であった。働く場所もなく、体調もすぐれず、バラック小屋の周囲の瓦礫を片づけて、自給自足の菜園作りに励むのが精一杯であった。

たまたま進駐軍から放出物資の配給があったが、その罐を開けてみると、料理の色どりに使う「サクランボ」ばかりということもあった。しかし、雑草よりは食べやすく、罹災者たちは、分けあって空腹のおぎないにしたのである。

時どき、密殺の牛肉を売りに来たが、昨日と今日とは倍も値段が違うほどの高騰ぶりであった。ある日、バラック小屋に泥棒が入り、闇でようやく手に入れたサツマ芋のてんぷらを盗って行かれたという話もある。

タケノコ生活

罹災者は、露命をつなぐための最低限の生活必需品を得るため、疎開していた僅かな衣類などを取寄せ、食物と物々交換した。いわゆる「タケノコ生活」で、身は細る一方であった。

被爆直後(八日)から、焼け残った日本銀行支店に、焼け出された市内の各銀行が集って、預金通帳を焼いた被爆者のため、預金の自由払出しがあり、幾らかの現金を得ていたが、これもたちまち使いはたされてしまったのであ

る。

闇市場の商品も、食物は代用食が多く、本物は少々の金や物では、なかなか入手できなかった。しかし誰でも腹さえふくれればよいという状況であったから、多くのまやかしものの食品が高値で売られた。

食糧事情は、はなはだしく悪化の一途をたどり、主食の米の運配・欠配が続き、その代用主食(イモ・カボチャなど)さえも僅少な配給しかなかったから、罹災者は全生活費の八〇パーセント以上、時には全額をあいまいな副食物の入手に投じて、辛うじてその日を過ごすというありさまであった。

金融措置令によって、かえって「円」が信用を失墜したため、物々交換がますます盛んとなっていった。

農家は、供出後の自家保有米を横流しするにあたって、「金」よりも「物」を要求するようになり、罹災者は、数少ない衣料を一枚ずつ、自分の皮膚をはぐように農村へ運んで、米や野菜を得たなければならなかった。しかも、農家はあからさまに若向きの派手な衣装を喜んだから、結婚のために疎開していた衣料などが、罹災家族の手もとから次々になくなっていった。反面、農村では、この物々交換によって自家の娘の結婚衣装を整えたという話も伝えられた。しかし、罹災者のうちでも、このような物々交換ができるのは、まだ良い方で、多くは、それさえできかねるという窮状にあった。

にわか百姓

市役所や焼失を免れた地域の青年団は飢餓突破対策として、焼跡における一坪菜園を奨励し、イモづるやカボチャ・トウモロコシの苗などを配給した。この頃、まだ町内会は活動力という程のものを持っていなかった。

闇市には、タマネギやキュウリ・ナスなどの苗が売られ、罹災者たちは、こぞってこれらの苗を求め、バラック小屋の周囲に植えられるだけ植えつけ、その実りを鶴首して待った。焦土には、働きに行く所もなかったから、みんな「にわか百姓」にはげんだ。

この間にも、つぎつぎと原爆症を発して死んでいく人が絶えないまま、昭和二十年も二十一年も過ぎていったのである。

軍・行政機関その他の壊滅

連合軍の本土上陸を迎え撃つ軍の作戦中枢機関として、西日本全域にわたって陸海軍を掌握する二葉ノ里の第二総軍司令部(爆心地から約二キロメートル)の被害も甚大であった。総軍司令官畑俊六大将(のち元帥)は、二葉山麓の官舎にいて負傷しなかったが、古田町高須の官舎から乗馬で出勤途上、相生橋付近で被爆し、似ノ島の救護所で死去した教育参謀李グウ公殿下をはじめ、各参謀その他将兵を多数失った。

また、軍都広島(爆心地)ともいべき広島城一帯の、伝統を誇る陸軍諸部隊(爆心地に至近距離)も、中国軍管区司令官藤井洋治中将が官舎(西練兵場西南隅)で被爆死亡したのをはじめ、ほとんどの将兵が全滅に近い状態に陥った。

ただ、宇品の陸軍船舶司令部の所属部隊のみが、爆心地から比較的離れていたため、比治山公園付近(爆心地から約一・八キロメートル)に駐屯していた部隊を除き、他は被害軽微で、被爆直後の救援活動に出勤することができたのである。

軍のこのような惨状と同様に、行政機関もまた壊滅に瀕した。

連合軍の攻撃により本土が寸断され、中央との連絡が不可能になった場合、その地方独自の行政を進めるために設置され中国地方総監府(広島文理科大学内・爆心地から約一・五キロメートル)の、大塚惟精総監は上流川町の官舎で被爆倒壊建物の下敷きになったまま、生きながらに焼死したのをはじめ、総監府に出勤していて被爆した服部直彰副総監も重傷を受け、比治山の多聞院[たもんいん]に六日も夕方六時ごろ、ようやくたどりついたという状況で、他の職員も多くは死亡、または負傷して、行政機能を失った。

水主町の広島県庁(爆心地から約九〇〇メートル)は全壊全焼し、ちょうど備後に出張中であった高野源進知事を除き、他の多くの幹部や職員の被害甚大で、これに所属する県警察部も全滅に近く、石原虎好部長が上柳町の官舎で被爆負傷し、六日夕方、多聞院に到着して、折りから帰広した高野知事と出あい、急ぎ県防空本部を設けた

ときには、警察官も二、三人しか集っていなかった。

国泰寺町の広島市役所(爆心地から約一・二キロメートル)もまた、鉄筋コンクリートの外郭だけを残して、全焼した。栗屋仙吉市長が、水主町の官舎にいて被爆死亡したのをはじめ、柴田・森下両助役とも負傷し、他の幹部や職員の被害は、はかり知れずという惨状であった。

また、郊外に疎開することを厳禁し、非常災害の場合に備えていた広島市医師会・同歯科医師会・同薬剤師協会・同看護婦会・同助産婦会に所属する人々をはじめ各医療施設など、市の周辺部を除く大部分が一挙に壊滅状態に陥り、市民の救助作業など思いもおよばぬというありさまであった。

さらに、軍需品の生産に二四時間三交替のぶっとおしで、昼夜の別なく作業していた工場も会社も焼失し、無数の人員を失った。

ここに、明治以後、日本の枢要な軍事基地として発展し続けて来た広島市は、古今未曾有の超高性能を持つ大量虐殺兵器によって、ふたたび起ち直ることができない程に破壊されたのである。

トルーマンの声明

八月六日の夜、陸軍船舶司令部は大混乱のきわみに達していた。同司令部情報部の松島大尉は、七日を迎えたばかりの真夜なか、ラジオの短波のスイッチを入れてみると、アメリカの大統領トルーマンが、次のような声明(田中慎次郎訳による)を発表していた。声明は、最初に英語で、次に日本語で約三〇分間にわたっておこなわれたという。

今より一六時間前にアメリカ航空機一機が日本の重要軍事基地広島に一個の爆弾を投下した。この爆弾はTNT火薬二万トンを凌ぐ威力を持っている。

戦争で今までに使用された最大の爆弾であるイギリスのグランド・スラムの二千倍の爆破威力をこの爆弾は持っているのである。日本は真珠湾空襲をもって、われらに戦をいどんだ。かれらはそれに何倍かする報復を受けたのである。しかしまだこれで終わったのではない。増強されつつあるアメリカ空軍は、この爆弾により全く新しい革命的破壊力を新たに付与された。これら新爆弾は、本日投下されたと同じ型のものが製造されつつあり、これよりもさらに強威力の型もまさに製造されようとしている。

それは原子爆弾である。それは宇宙に潜む根源力を利用するものである。太陽の熱源が極東を戦禍のちまたとした者を絶滅するために解放されたのである。一九三九年以前から原子力を解放することは理論的に可能であるというのが科学者の一致した信念であった。しかしその実現方法については、ひとりとして知る者なかった。一九四二

年になると、われわれは、ドイツが原子力をその軍事力に加えるため必死となってその方法を探求していることを知った。かれらはこれをもって世界を奴隷化しようと望んだのである。しかしかれらは失敗した。ドイツがV-1号ならびにV-2号を発明したのがすでに戦機を逸したのちであったこと、またかれらが原子爆弾をついに製造するにいたらなかったことは、神の摂理として感謝すべきであろう。中略

今やわれわれは、日本都市のすべての生産施設をより急速に、そして完全に除去する準備を整えた。われわれは日本のドックを、工業を、交通機関を破壊するであろう。日本の戦争遂行力は間然するところなきまで破碎されるであろう。

七月二十六日ポツダム宣言が発せられたのは、日本国民を完全な破壊から免れさせたいためであった。日本の戦争指導者はこの最後通告を拒否した。もしかれらが依然として、われわれの降伏条件を拒み続けるならば、この地球上にいまだかつて見られなかったほど惨烈な破壊が、空中から降り注がれることを覚悟すべきである。この空襲に引続き、かれらがかつて見なかった絶大な勢力の海陸軍が、すでに日本が十分に知った卓越した戦闘技術をもって襲いかかるであろう。中略

われわれが原子力を解放するという事実は、人間の宇宙力理解に新しい時代をもたらした。将来、原子力は現在の石炭・石油・水力を補う動力源となるであろうが、当面それは、これらと商業的に競争しうるだけ、豊富低廉に生産されえない。このことが実現されるまでには、長期にわたる熱心な研究が必要である。

科学的知識を秘密に付しておくことは、今までこの国の科学者の習慣でもなく、またアメリカ政府の方針でもなかった。したがって本来ならば原子力に関する一切の研究は公表されるはずのものである。

しかしながら現下の情勢は、生産の最終工程、ないしは一切の軍事的応用について、その機密を明らかにすることを許さない。それはアメリカならびに世界の他の国々を急襲破壊の危険から守る、なんらかの方法が検討されてからのことである。

余はアメリカ国内における原子力生産ならびにその使用を管理するため、適当な委員会の設置を、アメリカ議会がただちに考慮すべきことをここに勧告する。世界平和維持のため、原子力がいかに有力な働きをなしうるようになるかについて、余はさらに意見を述べ、また議会に対して勧告することになる。

大本営は新型爆弾と発表

この声明は、当然、日本の中央政府においても聴取された。七日、ただちに関係閣僚会議が開かれ、東郷茂徳外相は、席上でアメリカ放送を詳細に報告した。しかし、陸軍側は、現地の調査報告をまって必要措置を執ろうと主張し、国民の戦意喪失を怖れて、なるべくその惨禍を軽視しようとしたと言われる。

この間の事情については、当時、國務相兼情報局総裁であった下村海南著「終戦記」に詳述されているが、種々議論のすえ、結局、軍部に押されて、次のように簡単に発表されたのであった。

大本営発表(昭和二十年八月七日十五時三十分)

- 一、昨八月六日広島市は敵B29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり
- 二、敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり

新聞記事

この発表を掲載した昭和二十年八月八日付毎日新聞は、これに続けて「落下傘つき空中で炸裂 軽視許さぬ威力、必ず待避せよ」という見出しで、次の一文を併記している。落下傘つきというのは爆弾ではなく、観測用テレメータ(ラジオ・ゾンデ)であったが、当時はそう思われていた。

(記事)

八月六日午前八時過ぎB29少数機は広島に侵入、少数の爆弾を投下した。

そのため同市の相当数の家屋が倒壊、各所に火災が発生した。敵の投下した新型爆弾は落下傘をつけ空中で破裂したものの如くであり、その詳細については目下調査中であるが、その威力は軽視を許されぬ。敵は引続きこの新型爆弾を使用するものと予想される。これに関する対策については、早急に当局より指示されるが、現在の待避設備はさらに徹底的に強化する必要がある、今後は少数機といへども軽視することなく、慎重な待避が望まれる。敵はこれと同時にトルーマンの声明をはじめ、頻りに誇大な宣伝を開始しているが、その桐鳴に屈することなく対策よろしきを得れば、被害は最小限度に食止め得るであろう。敵はこの挙により一般民衆をも無差別に殺傷する残忍性を遺憾なく発揮したもので、その非人道性は永久に歴史の汚点として残されるであろう。(以上)

戦争遂行を号令

七日になると、市の近郊や隣県から続々と救援隊が乗りこんで来たが、罹災者はバタバタと死んでいき、一発の爆弾による恐怖はさらに深まるばかりであった。しかしなお、日本は降伏したのではなかった。二葉山の防空壕に退避した第二総軍司令部では、この混乱時に本土上陸を執行するかも知れぬ敵と対決する作戦を考えると共に、被爆にあえぐ市民に対して、さらに死力をつくすよう奮起をうながし、戦争遂行を号令したのである。

県知事の告諭

七日には、高野広島県知事が、県民に対して次の告諭を出した。

告諭 昭和二十年八月七日 広島県知事

今次ノ災害ハ惨悪極マル空襲ニヨリ吾国民戦意ノ破碎ヲ図ラントスル敵ノ謀略ニ基クモノナリ、広島県民諸君ヨ、被害ハ大ナリト雖モ之戦争ノ常ナリ、断ジテ怯ムコトナク、救護復旧ノ措置ハ既ニ着々ト講ゼラレツツアリ、軍モ亦絶大ノ援助ヲ提供セラレツツアリ、速ニ各職場ニ復帰セヨ、戦争ハ一日モ休止スルコトナシ

一般県民諸君モ亦暖カキ戦友愛ヲ以テ罹災諸君ヲ勞リ之ヲ鼓舞激励シ其ノ速力ナル戦列復帰ヲ図ラレタシ

今次災害ニ際シ不幸ニモ相当数ノ戦災死者ヲ出セリ、衷心ヨリ哀悼ノ意ヲ表シ、ソノ冥福ヲ祈ルト共ニ其ノ仇敵ニ酬ユル道ハ断乎驕敵ヲ撃砕スルニアルヲ銘記セヨ、吾等ハアクマデモ最後ノ戦勝ヲ信ジ凡ユル難苦ヲ克服シテ大皇戦ニ挺身セム

広島警備担任司令官の布告

また、広島警備担任司令官佐伯文郎も次の布告を、紙に書いて要所に掲示した。

広島市民ニ告ク

米機ハ遂ニ人道上許スヘカラサル特殊爆弾ヲ以テ我力広島ヲ侵セリ痛憤真ニ極リナシ

予ハ広島警備担任司令官ヲ命ゼラレ死カヲ竭シ戦災復旧ヲ完遂セントス

親愛ナル広島市民ヨ

予ト一体トナリ断乎米鬼撃滅ノ闘魂ヲ振起シ戦災復旧ヘノ協力ニ道進セラレムコトヲ望ム

広島警備担任司令官 船舶司令官

広島市民ニ告ク
米機ハ遂ニ人道上許スヘカラサル特殊爆弾ヲ以テ我力
広島ヲ侵セリ痛憤真ニ極リナシ
予ハ広島警備担任司令官ヲ命ゼラレ死カヲ竭シ戦災復旧ヲ
完遂セントス親愛ナル広島市民ヨ
予ト一体トナリ断乎米鬼撃滅ノ闘魂ヲ振起シ戦災復旧ヘノ協力ニ
道進セラレムコトヲ望ム
佐伯文郎
広島警備担任司令官
船舶司令官

広島市民に戦災復旧への協力を呼びかけた公告。

(広島平和記念資料館所蔵)

このような告諭や布告が出されたが、広島市はすでに、その市街も市民も大部分を失っており、もはや被爆前のように敏捷な秩序だった反応は見るべくもなかった。罹災者らは、おしなべて死に直面した不安と恐怖に打ちひしがれ、呆然自失の虚脱のなかに、ただ命を持ちこたえているだけであり、なんの余力もなかったのである。まったく再起不能に近い状態のなかで、「今日」という日さえ見当のつかないありさまであった。

鉄道の復旧

このような廃虚の街も、なお戦時下であったから、軍事基地としての機能の回復が急がれ、まず、交通不能に陥っている市内の主要幹線道路の清掃・啓開が、残存する軍を主体として、救援出動の海軍や警防団などの協力により、被爆直後から開始されて、収容負傷者や救援物資を輸送するトラックが走られるようになった。

同時に、都市の動脈と言われる鉄道は、広島駅の応急復旧をはじめ、横川、己斐両駅の整備など、救援軍隊の協力のもとに、徹宵の努力でもって進められた。

一方、被爆当日は、被害の軽微であった近郊の駅から折返し運転がおこなわれて、奥地への避難者や負傷者の輸送などにつくした。同時に、通信区の電話線の復旧が急がれ、この日、夜のうちに広島・向洋間が一回線開通すると共に、さらに糸崎・岡山との連絡や広島・横川間の架線が進められた。

被爆当日は山陽本線・芸備線は運転を停止していたが、七日、宇品線が平常運転に復し、暁部隊や宇品港を結ぶ救急列車を走らせた。

八日、必死の努力の結果、ついに山陽本線が開通した。ただし、広島・横川間は単線で旅客列車のみ運転した。

九日、芸備線が全面的に開通し、郡部との連絡が円滑になった。

県北に通ずる可部線は、横川駅～長束間が不通となっていたが、十八日ごろ、その間の長束～三滝間が開通して、

ようやく全線運転となった。

電車・バスの復旧

電車・バスの被害も甚大なものがあったが、千田町の電鉄本社建物は半壊のまま延焼を免れたので、一部を応急修理すると共に、車庫内にあった電車を事務所にあてて復旧対策に取組み、九日には、部分的な折返し運転ながら、宮島線から送電して西天満町～己斐の片側運転が行なわれ、バスニ台も、広島駅～比治山～宇品間を運行した。十八日には、電鉄本社前～宇品終点間が開通、これに引続いて、電車・バスの運行は順次回復していったのであるが、全市的に完全な復旧をみるまでには、相当長期間を要したのである。しかし、部分的ながらも電車の早期復旧は萎縮しがちな市民に大きな活力を与えた。

水道の復旧

水道は被爆前の使用量が、一日分約六〇万石(一〇八、〇〇〇キロリットル)であったが、被爆直後は三五万石(六三、〇〇〇キロリットル)に激減した。もっとも水源池(牛田町)が爆心地から約五キロメートルの遠隔の地であったため、比較的被害軽少で送水にあまり支障はなかったが、被爆により各所でパイプが破裂し、相当量の漏水があった。この漏水の防止に努力したが、枕崎台風によって水管橋が破損し、特に西部地域では給水力が落ちた。しかし、それぞれ応急工事をおこない、被爆一か年後には被害全体に対して約七〇パーセントの復旧率を示し、一日の使用量約四五万石(八一、〇〇〇キロリットル)に昇った。すなわち、三篠・庚午・草津方面が二時間給水を行なうほかは、全地域にわたって終日給水を続け、水都広島と呼ばれる天恵の力強さを示した。

電灯・電力電灯の復旧

電灯・電力の復旧はめざましいものがあった。爆心地から半径二キロメートル以内の電気設備は壊滅的打撃を受け、被爆と同時に全市停電したが、翌七日、被害軽微な段原変電所を修理し、ここを基点に復旧作業が進められ、まず、焼け残った宇品方面に送電された。八日は広島駅及びその一帯と、小町の中国配電社屋に電灯がついた。工事は、本店の生残った職員、及び三次・竹原両電業局からの救援隊、これに陸軍船舶部隊の協力によって早急に進められた。宇品への送電が急がれたのは、戦争継続下、被害の軽微であった陸軍船舶部隊の活動を守る必要からであった。

この日七日には、宇品の陸軍共済病院と三菱造船所病院へ、また、主要軍需工場の一部へ、八日は電車線の一部(観音～己斐間)へ、十日には牛田の水源池へ、十一日は温品村に再建をはかる中国新聞社へと、次々復旧が進められ、八月末日までには、焼失を免れた残存家屋の三割へ、十一月末には全戸へ送電し、暗黒生活に生き生きした明かりを与えた。しかし、焼跡に点在する罹災者らは、焼けた裸電線を拾い集め、つなぎ合せて棒で引っぱり、それぞれ素人工事で電灯をつける者が多かった。

郵便の復旧

爆心直下で一瞬に壊滅した広島郵便局は、焼け残った千田町の広島貯金支局で業務を再開することにし、被爆の翌七日、少数の生存職員によって事務室の整備に着手、十一日に県内外の応援職員の到着と同時に窓口を再開し、罹災者に対する郵便貯金や簡易保険の非常払出しをおこなった。郵便の配達事務は、当時は各町内会事務所がこれを行なったが、十一月十五日から順次局員の手にもどし、翌年三月一日によりやく市内全域にわたって町内会配達から離れることができた。

ただ、宇品郵便局は被害少なく、事務は被爆当日も続け、配達も被爆直後からおこなった。皆実町方面は、住民がほとんど避難して空家同然で、配達ができなかったが、他の焼けなかった地区はほとんど配達した。貯金・保険も九日から非常払出しをおこなったが、市内の関係機関が壊滅していたので、罹災者が宇品局へ殺到し繁忙をきわめた。

このような状況下に、着々と復旧対策が進められて十月初旬、ようやく局務が被爆前の状態に近づいたのである。

電話の復旧

下中町の広島中央電話局(中局)は、鉄筋コンクリートの外郭だけを残して壊滅したため、七日、生き残った幹部が、局の前の防空壕の中で通信復旧対策を協議した。八日、火災を免れた北榎町の西分局を視察した結果、とりあえず、ここを拠点にして復旧作業を進めることにした。九日に暁部隊一二〇人の救援を得て、中局の内部を清掃し、死体の収容を手はじめに、業務が執れるよう整えられた。暁部隊は、このあと市内焼残りのケーブル回収をおこなった。

中局の清掃と同時に、周辺地区の焼け残った施設から諸資材を集め、下関・防府などから応援隊の協力を得て、

十日着工、十二日にひとまず装置を完了し、西分局から中局に移った。外線は加入者の移転先を探しながらゴム線を架渉し、一応、一四加入を交換台に收容、十三日から部分的に試験開通をおこない、十五日から正式に交換を開始した。なお、東練兵場に来ていた呉海兵団の救援隊へ、一回線開通した。

電信の復旧

小町の富国ビル内にあった広島電信局が全滅したので、中局内に交換台と共に復旧した。十二日に、音単三座席の装置工事を完了し、十三日に、広島一呉線一回線が收容された。引続き二十日には尾道・山口・宇品、二十四日には岡山が復旧し、逐次復旧された。

被爆直後、軍用通信の緊急復旧が要請され、第二総軍司令部は二葉山へ、中国軍管区司令部は牛田の山その他へ移るべく、巨大な横穴壕を構築していたので、この横穴へ措置局を設けることになった。十日に中部軍の楠一個中隊(奈良)が工事の応援に到着し、ただちに着手したが、終戦により中止となった。このほか軍回線の早急復旧について、種々要請があった。これら軍用通信の復旧対策も含めて、全体的な応急復旧対策も進められたが、被害甚大なため想像もつかない困難な作業であった。更に、九月一日に英濠軍が呉に上陸し、進駐軍関係の電話回線など、次から次へと回線作成工事は息つくまもなかった。しかし、九月の枕崎台風によって、これまで積み重ねた努力が烏有に帰し、復旧対策は再出発になった。しかし、更に努力を重ねて、二十年十二月二十日、市外船越町へ移転するとき、中局で收容していた回線は、市外二一九回線、市内二一九回線に達していた。

放送の復旧

広島中央放送局は、爆心地に近く建物の外郭だけを残して壊滅したため、生き残った数人が安佐郡祇園町の原放送所(予定避難場所)に、六日昼ごろ到着し、中婆よび短波で大阪中央放送局を呼び出すと、岡山放送局から応答があり、広島の被爆状況を連絡することができた。当日午後、ここへ同盟通信社の記者二人も到着し、岡山放送局を呼び出して、広島壊滅の第一報が送られた。引続き無線中継ができるよう努力したが成果がなかった。しかし、放送電波発射は可能であったから、広島局単独で七日午前九時・十時・十一時に、原放送所の予備スタジオから、知事の告諭を放送した。これが放送再開の第一声であった。

この七日、軍用通信線が二葉山から原放送所まで架設され、八日には呉の海軍鎮守府から通信技師が応援に来て、放送所と呉鎮守府との連絡が取れるようになった。以後、軍や官庁からの伝達・公示事項・周知事項などを広島局単独でおこなった。

九月二十日、向洋の東洋工業株式会社の工員食堂を借りて、ここに初めて広島中央放送局の事務所として、現業以外の業務が開始され、復旧の第一歩を踏み出したのであった。

流川町の焼けた放送局は、検討の結果、使用可能ということが判ったので、翌二十一年初め、復旧の具体的設計を進め、ただちに工事に着手し、同年九月末に完成、向洋から流川町の元の局へ復帰した。

行政機関の復旧

総監府も県庁も、また市役所も壊滅状態に陥り、その機能を一度は失ったが、被爆当日の夕がた比治山公園西麓の、半壊した多聞院(予定避難場所)に、服部副総監・高野県知事・石原警察部長らが集合し、ここに臨時の「広島県防空本部」を設置、中央に対する状況報告をおこなうとともに、県下の関係各機関に救援の出動命令を出した。また、隣県に対しても救援の要請がおこなわれ、医療救護・食糧救援など各種の救援隊が続々と入市することになった。七日早朝、職員の決死的な消火活動で火災を免れた山口町の東警察署に移って「仮県庁」を設置し、続々入市しはじめた県下の医療救護隊、あるいは食糧救援隊などの指揮にあたり、各要所に臨時救護所を設置した。

八月二十日、安芸郡府中町の東洋工業株式会社の一部を借りて移り、ようやく本格的な復旧対策に取り組んでいった。

一方、広島市庁舎は、数人の職員の果敢な活動によって守られた地下の三室、及び庁舎東南隅の二室を残して全焼し、無残な外郭だけになった。栗屋市長の死亡をはじめ、助役二人、各幹部・職員ともに被害甚大で、被爆当日は計画立った救援対策を推進するすべもなかった。被爆当日、負傷した森下助役・中原考査役、あるいは野田防衛課長・浜井配給課長、その他生き残った職員の幾人かが登庁したが、既に広島市防衛の中核機関としての行政機能は失われているにひとしかった。

七日、生存幹部が集って当面の問題を協議し、森下助役が市長職務代理者に就任した。また、庁舎前に焼失を免れた机や用紙を持ち出して罹災証明書の発行、救援食糧(にぎりめし・乾パンなど)の配給、あるいは職員安否の連絡など、数人の生き残った職員が事務を執った。この日の午後、呉市役所から溝辺助役ほか約三〇人の職員が応援

に駆けつけて、罹災証明書の発行、尋ね人の相談などの事務を手伝った。

八日から、広島警備担任司令官(船舶部隊佐伯司令官)主催の連絡会議によって定められた応急対策を一つ一つ処理していくことになった。この日、庁舎内部の残火も消え、入室できるようになったので、戸籍課・会計課の二室を臨時救護所とし、次々に訪れる負傷者を収容し、九日、鳥取赤十字病院派遣の医療救護隊によって治療が進められた(ただし、十三日に全収容者を袋町国民学校に移す)。

市庁舎の清掃は、主として軍隊によっておこなわれたが、庁舎周辺の死体は市の職員が処理した。また、比治山国民学校を戦災孤児や迷子の収容所にあて、社会課が管理した。

引続き、罹災見舞金の支給、疎開児童の復帰、飲料水の確保、食糧や衣類その他の配給など応急対策を進めると共に、順次、事務態勢を回復していった。

復旧作業の一時停滞

広島警備司令部は、臨機応変に強力な組織的救援活動を展開して、広島市復旧の端緒を切り開いたのであったが、十五日の終戦以後、軍隊が次々に解散したため、復旧作業を推進する主力が無くなり、作業は一時停滞の止むなきに至った。

そこで、県下および隣県その他の救援隊の出動によって、広島市の活路は少しずつながら開かれていったのである。しかし、この頃はまだ何ごとも暗中模索の状態であった。

戦時機構の改廃

本土決戦態勢下の行政的主軸であった中国地方総監府も、前述のとおり大塚総監の被爆死をはじめ、主要幹部多数が死亡、あるいは重軽傷を負って、その機能を喪失したが、八月二十八日に後任者児玉九一(東京都次官)が着任して、終戦処理にあたった。この総監府は十一月一日に廃止となり、中国地方行政処理部に代り、事務局長に広島県知事が就任した。

八月二十五日には軍需省が廃止せられ、商工省が復活したが、これにともない商工省の地方官庁として、中国地方行政処理部内に中国地方商工処理部が設置された。

また、八丁堀の福屋百貨店ビル二階で、開庁準備中に被爆した西部通信総局は、八月十五日に広島通信局四階に移って開庁式をおこなったが、同月三十日に廃庁となった。

さらに十月十日、高野広島県知事が警視総監に転出し、いちじ児玉総監が知事を兼任していたが、同月二十七日に近畿地方総監府副総監楠瀬常猪が着任し、以後の行政を推進した。

市内警備態勢の改革

人口も建物も激減した廃墟にあっては、警備態勢も必然的に改められた。九月一日、宇品警察署を廃し、東警察署警部補派出所とした。また、再の警察管区は、市の中心を貫流する平田川筋(戦後埋没)を境界として、東部を東警察署(この頃、東白島町に所在)、西部を西警察署(この頃、三篠信用組合に所在)が管轄することになり、東管内に派出所四か所、西管内に派出所九か所が設置された。

自警団の組織

職場のなくなった焼野原には、辻強盗が横行し、ほそぼそと生活する罹災者や市の外から親類縁故の状況を調べに往来する人々をしばしば襲った。

警察官も手うすで、警備がなお行きとどかなかつたから、罹災者のあいだに、自分自身の手によって犯罪を防止しようという気運が高まり、八月下旬に広島市特設自警団が設置され、焼野原も焼け残った周辺部も含めて、要所要所に自警団が配置された。

闇市場の発生

広島市の内外には、軍需物資が多量に収蔵されていたが、軍の解体によって罹災者に放出された。軍需物資は他都市にくらべて実に膨大な数量であったが、これらの放出が広島市の復興に一つの大きな力を与えたことは、否定できない事実である。

放出の軍服など衣類は、厳冬を迎えた罹災者の体を守る役目を果たしたが、一時、焼野原に肩章や襟章のない軍服姿が溢れ、まるで復員軍人ばかりの寄り集りの感を呈したほどである。

軍需物資は、正規のルートを経て民間に払下げられたもの、あるいは隠匿物資で闇ルートにより横流しされたものなどのほか、配給を受けた罹災者が、食糧に替えるために手放したものが、八月下旬ごろから、広島駅前などで売買されるようになった。すなわち闇市場の発生で、ここでは軍需物資のほか、統制品の米や調味料・タバコ・酒

類なども入手することができた。しかし、純正なものは罹災者たちには到底入手できる価格ではなく、また、純正な物資は絶対量がきまっていたから、売られている多くのものは、いかがわしいキワ物の代用食品や、ひどいまぜものであった。高価な醤油が、塩水にそれらしく色づけされたに過ぎなかったり、巻タバコは、捨てられた吸殻を集めて巻きなおしたものなど、その一例である。軍用毛布で仕立てた外套とか、本皮の兵隊靴などは、大いばりの高級品であった。むやみにポケットの多いあずき色のダブダブの航空服を着て、将校用の長靴をはけば、一流の闇師で、雑踏する闇市場のなかを闊歩した。

闇市場は、文字どおり統制経済を無視したもので、初め頃、八月末から九月上旬にかけては地面にムシロを敷いて、三々五々わずかな物資をならべてあきなう露店が出ていたが、それがいつか板張りの屋台店になり、十二月ごろには四〇〇軒余りの集団に発展、おのずから組織だつて来て繁盛した。これら闇商人の多くは、近郊(島も含めて)の住民や復員者或いは第三国人などによって占められていた。

この闇市場は、当初は長期の戦争によって抑圧され沈滞していた人々を精神的に解放し、極度に逼迫していた日常生活の上に、一種のうるおいをもたらせたが、敗戦下の窮乏社会の中で、次第に犯罪の温床的な性格をおびるようになってきた。闇市場は、発生そのものが、法秩序の破壊もしくは無視によって成立った現象であるから、犯罪のからむのが当然の帰結であった。

そこでは、いかがわしい賭博も盛んにおこなわれ、売春婦などもあらわれ、ついには盗品の処分場所のようになり、社会の不安や道義の頹廃を将来した。

これらは、警察力の回復と共に、後にはきびしく取締られたが、平和でゆたかな生活を希求する心情には、闇市場をあながち「悪」ときめつける訳にはいかないものがあつた。また、戦後の新しい社会感の萌芽も、この混沌のなかに生まれつつあつたと言えよう。

広島駅前闇市場は、県下で最初のものと言われるが、横川・天満・己斐・宇品など、往来の激しい要所に次々と出現し、のちに自由市場とも呼ばれるようになり、警察署の取締りも尻目に、ますます発展を続けたのである。

人口の激増

被爆直後、広島市の人口は約八三、〇〇〇人という少なさであつたが、半年後の二十一年二月には一六九、〇〇〇人と激増し、同年七月二十日現在では一八五、八〇五人に達した。

市当局は食糧事情逼迫のおりから、嚴重に市内転入の抑制を実施したが、引揚者・復員者も加わつて、人口は増加の一途をたどつていった。ただし、ほとんどは非焼失地域に集つたのである。

市民の分布状態

市民の分布状態(昭和二十一年八月一日付中国新聞)は、爆心地を中心に距離別にみると、一キロメートル以内に約六、五〇〇人、二キロメートル以内三四、〇〇〇人、三キロメートル以内七万人、三キロメートル以上七五、〇〇〇人となっている。また、人口密度においても爆心地を離れるにしたがい密度が増し、地域的にも焼失を免れた宇品学区(三キロメートル以上の地域)の一六、五〇〇人が最も密度濃く、稀薄なのが一キロメートル以内の地点の六二一人である。

戸籍手続きの混乱

なお、市の戸籍課は、まだ被爆の大混乱のおさまらない八月十五日に、比治山公園の頼山陽文徳殿において、僅か三人の職員で開所したが、死亡届の始末がようやく二十一年六月に完了し、家督相続は四か月分も整理が遅れた。全滅家族やその他の理由で死亡届が提出されず、戸籍上では生存になっている死亡者が無数にあり、反対に生存者でありながら死亡手続きがおこなわれ、あわてて訂正願いを提出する者も少なくなかつた。

罹災直後、県の緊急指令により検視証書で戸籍を抹消することになったところ、当時は法規上死亡届の添付が必要とされたが、遺家族の住所が判明しないため整理できず、約一、〇〇〇人の幽霊が戸籍上ではまだ生きているという実情であつた。

原爆幽霊戸籍

ちなみに、この被爆死亡者でありながら、戸籍上では生きていることにたっている人々(新聞などはこれを原爆幽霊戸籍と呼ぶ)のことについて、その具体的な事実が、一つ一つ明らかになっていったのは、昭和四十一年六月ごろから始つた「被爆地図復元」の作業過程からである。被爆地図復元運動は、もともとNHK広島中央放送局の長屋龍人らが、爆心地である現在の平和公園一帯について、被爆直前直後の実情を調査し、被害実態(個々の死体・遺骨・遺品による確認)をつきとめようとした動機が基であるが、この平和公園関係の町内会だけでも、中島本町三九人・

材木町五〇人・元柳町八人・中島新町八五人など、多数のいわゆる幽霊戸籍が、二十四年後の調査で残っていることが判った。ただし、これらの人々は必ずしも被爆死亡者とは限らないで、事務上の誤りや手続きの不備などによるものも含まれており、約半数くらいが原爆幽霊戸籍に該当するという。岩崎興市の一家(当時中島本町現在・供養塔の位置)五人は調査によって全滅が確認されたが、手続者がいないため、現在(昭和四十五年三月)でも戸籍に生きてままだ残っている。

引揚民事務所の設置

二十年十一月、宇品の凱旋館に広島県引揚民事務所が設置された。翌二十一年六月二十二日には、広島港への引揚者第一陣三、九九〇人が、摂津丸で帰って来た。また同月には、これら引揚者や復員者、および戦災による児童の保護事務をおこなう広島市役所駅前出張所が、広島駅前に開設された。

新市長の決定

被爆死亡した栗屋仙吉広島市長の後任決定のため、広島市議会は、二十年八月二十日に市議会全員協議会を招集し、藤田一郎を市長に選挙することにして、即日満場一致で可決したが、本人が辞退したため、九月二十九日に再び議会を開会し、木原七郎を選出、十月二十二日に確定した。

木原市長は、戦後初代の市長として、戦災復旧の主軸として活動した在広諸部隊の解散後の復旧・救護など諸問題の山積した困難な市政を積極的に推進していった。

七〇年不毛説

二十年八月二十四日付毎日新聞は「残された原子爆弾の恐怖/今後70年は棲めぬ/戦争記念物・広島長崎の廃墟」という見出しで、「(前略)…爆撃後といへども被害地区を歩く者は人体に何らかの故障を生じつつあるという有様で、広島・長崎ともに今後ここにまた市街を建設して復興することは困難で、これについては米国側に於いても、広島・長崎は今後七〇年間は、草木はもちろん一切の生物は棲息不可能であると、恐るべき事実を放送している。

この廃墟と化した両市は、むしろこれを復興せしめず、このままこの残骸を現状のままに止めて、原子爆弾の残忍性を永く全世界人類に公開すべきであり、広島・長崎の廃墟はいまや戦争記念物として、永く保存すべしという声が、各方面から起りつつある」と、記述している。

不毛説の否定

この不毛説は、九月八日に来広したアメリカ原子爆弾災害調査団一行のオターソン、ワーレン両軍医大佐が中国新聞社記者の質問に対して、「根拠のない愚説である…」と、これを否定した。

当初、この不毛説が流布されたとき、廃墟のなかで辛うじて生きのびている罹災者らには、一つの衝撃であったことは否定できなかった。大多数の者は、不毛説をウ呑みに信じはしなかったが、一抹の不安を感じなかったわけではないから、八月末に、赤茶けた焼野原が部分的に青みがかってきて、見る見るうちに一面に生い茂った鉄道草(学名ヒメムカシモギ)をながめたとき、死んだ地上に全く新鮮な酸素が湧きあがって来ているような名状しがたい感動を覚えたのであった。皆は「住むことができる」と、感じた。

枕崎台風

九月十七日の夜、枕崎台風が襲来し、前節に記述のとおり、罹災者は大きな打撃を受けたが、反面、出水によって焼野原が清掃され、被爆以来の惨状に一つの段落をつけたといえよう。この頃から、いちじるしく被占領下の暗迷が、廃墟の生活のうえに、ヒシヒシとおおいかぶさって来て、罹災者たちは二重三重の負担に苦しみあえいだのであった。

真下教授ら遭難

なお、九月五日から原子爆弾の障害調査のため来広していた京都帝国大学医学部の原子爆弾災害調査班臨床部の教授真下俊一・菊池武彦・舟岡省吾・清水三郎ら三〇数人、および医学部各教室員などの一行のうち、真下教授ら九人と理学部関係の調査班員三人は、佐伯郡の大野陸軍病院に宿泊していて遭難した。真下教授らは、この陸軍病院に収容されている被爆者を対象にして、鋭意、医学的研究をおこなっていたのであるが、台風による突然の山津波に遭い、同教授ら一〇人が死亡した。

ちなみに、原子爆弾の災害調査のために来広した調査団は数多いが、これらは「原子爆弾災害調査報告書」(日本学術振興会刊)に詳しく記載されているところで、被爆直後は広島県・市当局・中国軍管区司令部・呉海軍鎮守府が中心となって行なったが、終戦後は米軍原子爆弾災害調査団(九月八日来広)、文部省学術研究会議の原子爆弾災害調査研究特別委員会(九月十四日発足)が調査研究を行なった。

学校の再開

台風前後から、疎開児童が逐次帰広し、九月から十一月にかけて、最寄りの焼残りビルその他を利用して、幟町や千田町などの国民学校が再開された。しかし、いずれの学校も惨禍のあとまなましく、先生も生徒もきわめて少数の、わびしい限りであった。

爆心地近くの本川や袋町両国民学校は、鉄筋造りの外郭だけになった元校舎において、翌二十一年二月末に、やっと授業が再開された。

このように次々と学校は再開されていったが、多くは「青空教室」か、間借り教室であり、教材もほとんど無きに等しく、また、飢餓迫る食生活のなかで、本格的な授業に至るまでには、関係者の教育に対するなみなみならぬ熱情と、献身的な努力が積み重ねられねばならなかった。

青年運動起こる

広島市は、戦前から青年団運動の盛んな土地であったが、廃墟のなかに再びその伝統が芽生え、非常に困難な初期の復旧作業にあたり、大きな貢献をした。

軍需工場が閉鎖になったり、軍隊から帰って来たり、あるいは外地から引き揚げたりした青年たちが、焦土となり果てた古里の復興に立ちあがったのは、九月ごろからであった。

まず焼失を免れた宇品・段原両地域の青年たちが集り、傷ついていない若者の力を結集した。青年たちは純心な郷土愛をもって、逐次その組織を拡大しつつ、多くの職員を失った広島市役所の復旧対策事業に積極的に参加し、力強い推進力となった。

特に飢餓克服のための物資の確保と配給、あるいは焼跡に作られた自給菜園の奨励、薪炭の確保、配給など、広く県下の青年団体に呼びかけて多大の成果を得たのであった。

ちなみに翌二十一年五月五日、比治山国民学校講堂において、全市的な組織として、「広島市青年联合会」を結成するに至ったが、当日、組織下に参加した青年団体は、青崎学区青年同志会(代表橋川勇)ほか四〇団体で、広島市の復興に対して一致団結することを力強く誓った。

深刻な生活不安

二十年の年末から翌年にかけて、全焼を免れた周辺地域に住む人々は、ようやく「生活」を取りもどしはじめた。このわずかな賑わいも、簡易な食堂や一杯飲み屋であって、復興の掛声に便乗したえたいの知れぬ闇商人や、いかわしい利権屋が大手を振って歩き、わが物顔に乱痴気騒ぎを演じていたのであった。

それをよそ目に見ながら、罹災者の多くは、飢餓と貧困のなかで、原子爆弾の障害に耐えつつ、ただ寒風にうち震えているという生活を送った。このような辛酸に堪えねばならなかったのは、日本政府そのものが占領軍の支配下で、深い混迷に追いこまれており「明日」の方針が樹たないという世相のもと、県・市の行政機関も壊滅状態から早急な立ち直りもできず、諸物資の極度の窮乏と相俟って、罹災者の救済対策も行きあたりばったりの、糊塗的な施策しかできないありさまであったからである。

県知事に要求出す

このままで推移すれば、罹災者は死を待つだけであるとして、有志を糾合し、二十年十二月七日、バラック建ての己斐劇場で、各地域の罹災者が「広島戦災者同盟大会」を開催した。執行委員代表仁田教一らは、「戦災者の最低生活を確保せよ」という決議をおこない、広島県知事に対し、強く要請した。

これに対して、同月十二日に知事は次のように回答した。

一、補修用木材の配給

市は手持ち木材を全部仮設住宅用(一戸分三、五〇〇円)にまわし、補修用の配給はしていなかったが、この手持ちのなかから至急配給させる。なお、住宅営団からも幾分か融通させる。

二、釘

市の仮設住宅を買わぬ者に対して、一戸当り七疋を至急配給させる。

三、タタミ

現在、品物が無く、計画もたてられず配給できない。

四、ガラス

住宅営団用の六、一五〇箱から幾分かを融通させる。

五、炭及び電熱器の使用

炭は現在一戸当り一俵ずつ配給中で、来年までには三俵くらい渡る。

電熱器の使用は、本年はとくにメートル制でなくても使用を届け出れば許可する。なお、自家製の認可のない電熱器を使っても良い。

六、戦災孤独者の処遇

備後府中町の靖和寮(社会事業協会が経営)と、市内宇品町国民学校に至急収容する。

七、共同浴場

某部隊の浴場用のボイラーが二個あるから、即時無償で払下げる。

八、共同住宅

佐伯郡井ノ口と兵器支廠の倉庫のうちで、使用計画の無いものは、ただちに戦災者の共同住宅として開放する。

(昭和二十年十二月十四日付中国新聞)

各機関に復帰要望

広島市議会は、十二月二十六日、広島市の復興を促進するため、次のような意見を決議して、郊外に避難している官庁・学校その他の各機関に対し、早急な復帰を呼びかけた(広島市議会議事録)。

意見書

八月六日二於ケル本市ノ原子爆弾ニ依ル戦災以来、各官庁各学校及保険会社各種営団其他統制機関等ハ、殆ド市外ニ避難セラレ既ニ百数十日ニ達スルモ、今尚市内復帰ヲ見ズ。市民県民ノ蒙ル不便、益々尠カラズ。本市会ハ、コレ等機関ノ速カニ市内復帰方ヲ要望シテ止マズ。

市当局ハ速カニ各関係当局ヲ勸奨セラレ、之ガ実現ヲ期セラレ度。

右市制第四十六条ニ依リ、本会ノ決議ヲ以テ意見書提出候也。

昭和二十年十二月二十六日

広島市会議長 山本久雄

広島市長 木原七郎 殿

社会悪はびこる

需要と供給のはなはだしい不均衡から、隠匿退蔵物資をめぐって、汚れた触手が怪しくうごめき、高価な闇物資として盛んに取引きされた。

広島控訴院の正木亮検事長は、十二月十二日、これらの行為は新生日本の前途をはばむものとして、「年内に供出した者に対しては、その不正行為は無罪とされるが、来年になっても供出しない者は、断乎たる処罪をする」と、きびしく取締る旨、中国五県下に対して談話(中国新聞)を発表したが、各種の犯罪や悪業が、その後もあとを絶たなかった。

半年ばかり前まで、皇軍の英雄として敬仰され、神鷲とも呼ばれたある特攻隊員が自暴自棄となり、各地の旧軍用品の保管倉庫破りをやって歩き、豊田郡河内警察署で逮捕されたが、これらを新聞などは、「復員くずれ」と呼び、「町の野獣」とも称した。

この頃、闇市場はいよいよ繁栄をきわめると共に、物価体系の異常な混乱、流通ルートの乱脈、あるいは治外法権的な第三人の跋扈により、従来の商習慣はまったく破壊され、多くの社会悪がはびこっていった。

当時の中国新聞の報道によると、二十一年二月十八日から二十五日までの間に、安芸郡海田市警察署が広島市内へ搬入される闇物資を取締ったところ、大小あわせて一二一件にも達している。

その検挙物資は、米二一俵・麦一二俵・木炭二三四俵・イリコ(煮干し)四七俵・醤油三斗九升・石ケン三三〇個・電球一八〇個・天幕五〇〇枚・シート五〇・雨外套三〇〇着・純綿生地二〇反であるが、この数量の何倍もの物資が警察の目をくぐって運びこまれ、闇市場を賑わせたことはいままでもない。

取締りが厳しくなる反面には、被爆により一家の働き手の夫を失った二児の母が、子供の空腹を見かねてたまたま農家へ行き、米一升を持ち帰ったが、広島駅で検問にかかり、その一升を警察に没収された。その夜、心待ちに待っていた二人の子どもと母親は、何も食べるものがなく空腹をかかえて泣きあかしたという話もある。

犯罪発生状況

危機一髪、炸裂下の地獄から死の手をのがれ得た人々は、「現在、生きている！」という現実が不思議なくらいありがたく思われたのであった。死に直面したとき、名誉とか地位とか財産とかいうもの一切の魅力なく、「いま、息

をしている」ことほど尊いものはなかった。

広島高等・地方検察庁刊行の「原爆の記録」のなかには、この間の社会的心理的考察がおこなわれているが、その記述に「原爆投下後において、広島地方裁判所検事局および同区裁判所検事局が、事件受理をした最初は八月十五日であった。これは事件簿の記載によって明らかとなっている。それまでの一週間は、警察力の壊滅により犯罪の検挙がなされなかったこともあろうが、一面犯罪の発生をみなかったのではなかろうかと思われる。云々」と述べ、「犯罪の発生をみなかった原因について」次の四点をあげている。

(概略)

一、虚無的心理状態と物欲の減退

原子爆弾のあまりに大きな衝撃に虚を衝かれた結果、生に対して虚無的となり、将来の希望を失い、金品に対する価値に疑いをもち、物欲が生じなかったこと。

二、人間的れんびんの情と感謝

被害を免れた人々は、さながら生地獄のごとき惨状を目にして、通常の間人である限り、同情とれんびんの念にかられ、到底他人の物を奪うなどという心理にはなれなかったであろう。また、「我一人残れり」という感激と、これひとえに神仏の加護によるものであるという感謝の気持ちが働いたこと。

三、精神的緊張

このような悲惨な状況下にあっても、国民の大部分は最後の勝利を信じており、悲壮な決意で、ただ救援・救護に懸命の努力を続けていたこと。

四、取締り機関が手薄になったこと

市内の警察署派出所などは、大半が焼失し、当時、広島市内の警察官四九一人のうち、原子爆弾により一四六人が死亡したため、必然的に取締りは弱体化し、たとえ犯罪が発生していたとしても、検挙取締りは困難であったこと。

しかし、八月十五日の終戦を迎えると犯罪が激増した。その原因については、つぎのように考察している。

一、敗戦による国民の精神的虚脱感、どうにもならないという自暴自棄的な気持ちが支配的であったこと。

二、食糧難、物価高、あるいは失業苦、それに敗戦による秩序の紊乱のなかで、国家の将来に対しても、個人の前途についても見通しがつかず、明るい希望をもちえなかったことに起因する道義の頹廢。

これらが、犯罪の大波となって現れたものであろうという。

なお被爆当日から同年末まで、広島地方裁判所検事局(本庁)同区裁判所検事局の受理した事件は次のとおりである。

区分 罪名	地方		区		計	
	件数	人員	件数	人員	件数	人員
公務執行妨害			1	1	1	1
逃走			3	4	3	4
加重逃走			1	1	1	1
戦時放火	1	1			1	1
失火			3	3	3	3
戦時列車往来妨害	1	1			1	1
住居侵入			1	1	1	1
公文書偽造			1	10	1	10
強姦	1	1			1	1
賭博			8	32	8	32
公務員職権濫用	1	5			1	5
贈賄	1	1	1	1	2	2
殺人	4	4			4	4
嬰兒殺	1	1			1	1
尊属殺人	1	1			1	1
傷害			5	5	5	5
業務上過失致死			7	7	7	7
業務上過失致傷			1	1	1	1
窃盗			248	455	248	455
戦時窃盗			8	13	8	13
強盗	2	4			2	4
強盗致死	2	26			2	26
詐欺	2	2	9	14	11	16
恐喝			1	1	1	1

横領			3	6	3	6
遺失物横領			5	5	5	5
赃物故買等			5	17	5	17
その他			34	124	34	124
計	17	47	345	701	362	748

(原爆の記録・広島高等、地方検察庁刊)

金融緊急措置令など公布

昭和二十一年二月二十七日から、金融緊急措置令ならびに日本銀行券預入令(新円切替封鎖預金)が、実施されたため、闇市場もいちじは開店休業の真空状態となり、闇商人に深刻な打撃を与えたが、三月三日の物価統制令が施行されるころには、ふたたび闇物価は息をふき返していた。

すなわち、飢餓大衆に対してはいささかも新円切替の効果は無く、そればかりか貨幣価値の下落は日を追って激しく、悪性インフレーションの昂進はとどまるところを知らない状態に陥ったのである。

広島駅前の闇市場は物価統制令もどこ吹く風という状況で、闇値は旧円時代と少しも変らなかった。四月十六日に闇市場において、警察が統制令違反物資を押収し、警察官立会いのもとに、押収品を現場で自由販売をおこなったが、闇商人の一人は三〇〇円で仕入れたアメが、(公)の五円にしか売れずペソをかいだ(中国新聞)ということもある。

二葉開拓団の発足

これよりさき二十年十一月十二日、日本の再建はまず帰農から始まるとして、広大な東練兵場跡に「二葉開拓団」(団長・元二葉山高射砲隊隊長・藤田守登陸軍中尉)が発足した。当初、約二〇家族が入植したが、年を越した二十一年一月半ばごろには、入植者数約二〇〇戸に達し、本格的な食糧増産に取組み、年々、広島市に対し米麦を供出するまでに成長した。

広島市復興座談会の開催

二十一年二月二十二日、楠瀬県知事は新聞記者・宗教家・教育家・医師・弁護士・文士・美術家など約二〇人を県庁に招いて、「広島市復興座談会」を開催した。参加者はそれぞれの立場から、市の将来について概略つぎのように語った。

○楠瀬知事

復興というより、私は再建という言葉を使いたい。再建には二とおりある。一つは当面の暫定的なもので、電車を通すとか橋をかけるとか、応急住宅を早急に建てるとかいうもので、もう一つは恒久的なもので、これは現下の資材不足で、暫時不可能であるが、じっくりと腰を落着けてやりたい。まず世界の国々に広島再建計画案の懸賞募集でもしたらどうかと思う。

○佐伯好郎(宗教史学者)

大広島建設というのは反対である。小広島でよいから、都市として完全なものを造ることであろう。現在の大東京のありさまは政党政治の失敗であるが、このようなことになってはいけない。大広島というのは自然の成りゆきに任せたほうがよい。

○大田洋子(作家)

広島は川べりは、ずっと緑地帯として公園にすべきである。

また、市の周辺にアパートを造り、被災者のバラック生活を早くやめさせなければいけない。

街には樹木をたくさん植えて、夢と実際の問題を上手に結びつけ、市民の生活をゆたかなものにしたい。

○高良富子(呉市助役)

渺々たる焼跡を、世界平和永久維持のための記念の墓場として、そのまま残して欲しい。多くの人々の死んだ土地のうえに街をつくるのはどうかと思う。

新しい広島は無理にもとの広島に帰る必要はない。市の周辺に新しい場所を求めて、そこに広島市を復活させたらよかるう。

○大塩彦次郎(広島放送局放送部長)

現在、切実に文化のレベルをあげる必要を痛感しているが、バラック建てでもよいから図書館を造りたい。また、映画館・劇場も可及的速やかに造って、文化に飢えている市民の欲求に応じられたい。

○林広島別院副輪番

市の復興が遅れるのは、いまだに都市計画が発表されないからである。幹線道路だけでも早々に決めるよう願う。

また、寺院は戦前のように一地域に集中させず、各町に一つずつ分散させ、公会堂のように町のいろいろな行事に利用させることである。

(昭和二十一年二月二十四日付中国新聞)

広島市議会の希望条件

廃虚となった広島市の復興にあたって、市民のあいだでも種々の声があり、その熱意は次第に高まっていった。

その声を反映して、三月二十五日、広島市議会は昭和二十一年度予算案を可決するにあたって、概略つぎのような復興に関する希望条件をつけた。

一、民主主義にのつとる社会教育の普及徹底方策を速やかに樹立実施する。

二、教職員の待遇改善をはかる。

三、学童集団疎開による学校器材を速やかに疎開地から回収するとともに、戦災および終戦の混乱に乗じ、当事者が不正不当処分をおこなったことを仄聞する。市当局はその調査をおこない、処置を市会に報告せよ。

四、市有財産を活用し、戦災による喪失財源の一助とし、復興の資に供する。

五、本市関係の復員者・引揚邦人などの援護対策を講ずる。

六、市民生活必需物資の獲得に創意工夫を加え、積極性を発揮し、自主的集荷方法を勘案実施するとともに、輸送面の確保をはかり、生産物資の適切なる検査・指導をする。

七、市民の保険衛生に万全を期するため、総合病院を設置する。

(昭和二十一年三月二十七日中国新聞)

メーデー賑わう

五月には昭和十二年以降禁圧されていた労働者の祭典メーデーが、新時代の脚光を浴びて、堂々と開催された。

五月一日、昨夜から降り続けている雨の中を、約三、〇〇〇人の労働者が広島駅前広場を埋めた。あざやかな赤旗と、「誠首絶対反対」とか「腹一杯食はせろ」などのスローガンを大書した垂幟が、数一〇本押し立てられ、多数の女性もまじえて白熱的な盛りあがりを見せた。

参加団体は、広島地区労組協議会総同盟・戦災者同盟・日農・農組・人民聯盟・文化聯盟・日本社会党・日本共産党など三五団体で、大会委員長は東洋工業旋盤部工員中村孝夫のもと、数キロメートルにわたってメーデーの列が続いた。

街路計画成る

ついで同月九日、広島市役所はようやく新生広島の街路計画を発表した。被爆後九か月目であった。幹線街路は幅一〇〇メートルから二〇メートルまでとし、その延長は四五キロメートルにのぼり、すべて街路樹によってかこまれ、平和大通り(幅員一〇〇メートル)の一部は適当に歩道を配した緑地帯となることになった。

ここに初めて再建広島市の将来図の、その輪郭が復興意欲に燃える市民の前に示されたのである。

西練兵場の開拓

東練兵場跡の開拓は、前述のとおり着々進められていたが、西練兵場跡においても、中国北京からの引揚げ者新見正団長を中心に、何人の同市が耕地を作っていた。

西練兵場跡の紙屋町入り口に、事務所兼住宅の板張りの小屋を建て、そこには筆太に「我らの郷土は我らの手で」「自主復興」「正しく明るく健やかに」の三つの大看板をかかげた。焼く六反の耕地には、トマト・ナス・キュウリなどが青々と茂り、サツマ芋植付用地の開墾も約二町歩あまりが次々と耕作されていった。

食糧配給の破局

七月の食糧端境期を迎えて、広島市の食糧事業は極度に悪化し、きょう明日が知れぬという破局に直面した。

市当局は、この真相を発表すれば、市民の動揺を招くことになりはしないかということを考慮し、種々の打開策を講じたがすべて行き詰った。広島市は他都市からの輸送のみに頼っており、市自体の保有米は一日分すらもなかったから、ついに最後の手段として、市民に実情をあかし、全面的な協力を得るよう訴えた。

一八万人(昭和二十一年七月二十日現在人口一八五、八〇五人)におよぶ市民に対する配給米は、七月末までに少なくとも一〇日から二週間の欠配を覚悟しなければならなかったから、この危機を克服するために、市当局は強い対策を打出す必要があった。

すなわち、市は五万人の強制疎開と、米の一握り運動を進めると同時に、広島市青年連合会や町内会などの協力

を得て、農村の人々に呼びかけ、その犠牲的精神により、倉庫米の救援を求めた。農家に対しては、三〇日間にわたって毎日一戸当り約一升五合の救援米供出を要請した。

木原市長はみづから農村をまわって、食糧救援を訴え続け、浜井助役は「新麦がとれるまで頑張ろう」と、市民に呼びかけた。

町会連盟の活躍

市の中心部は焼跡のまま、罹災者のバラック小屋が点在しているという状況であったが、焼け残った周辺部の町々は、家を失った罹災者や引揚者の流入で、すさまじい過密状態を呈しつつあった、しかし、これらに対する食糧事情は前述のとおりで、壊滅的打撃を受けた市当局は、町内会に対して窮状打開の力添えを依頼した。すなわち、二十一年五月三日、各町内会長が市役所に集合して、「広島市町会連盟」を結成、会長に任都栗司が選任された。総括する事務局を民生課内に置き、まず配給食糧の確保に乗り出した、この町会連盟の活動は非常に積極的で、任都栗会長以下有志町内会長らは、中国地方各県は勿論、北は福井・富山・新潟その他各県に、南は佐賀・熊本・福岡各県まで行って、米の供出請願をおこなった。その結果、同胞愛による多量の米がとどけられ、広島市の破局を救った。なお、これらの米は、町会連盟が配給機関となって、それぞれ市民の食卓に届けられた。

ちなみに、昭和二十二年一～二月における全国二八都市の、一世帯当り平均家計現金支出の内容(昭和二十二年版市勢要覧)を見ると、第一位が京都で、ついで大阪・東京・神戸・横浜・広島(福岡市は不明)となっており、その使途の内訳では、広島市の食糧に要した比率が六七・六パーセントで、全国第一位である。この比率が示すとおり、広島市の食糧状況が如何に破局に追いこまれていたかということが判る。

商店街の復興計画

このような世相のなかで、相変らず闇市場は発展していったが、これら不健全な商行為に対して、ずっと沈黙を続けていた戦前からの正統な商人のあいだに、一致協力して起ちあがろうという計画が進められはじめた。

二十一年春ごろ、元本通り会は協同組合的精神によって、健全な明るく正しい商店街を再建する準備を進め、元安橋から八丁堀福屋百貨店に至る元の商店街へ、間口四メートル・奥行き一〇メートルの小さな商店と、それに付随して一坪小店が、同じ色彩で立ちならぶ計画で、第一期二〇戸を八月六日までに、第二期七五戸を九月末までに建設することにした。

しかし、被爆前の繁華街本通りの復興はいちじるしく遅れ、本格的な軌道に乗ったのは昭和二十三年から二十四年にかけてからであった。

ついで七月三十一日には、下流川町のバラック建て瀬戸内海文庫倶楽部に、生き残りの町内有志が集合し、明らかな商店街の建設に努力しようと申しあわせた。さらに流川町には夜店復興同盟が結成され、三〇数戸が参加し、以前の流川通りの夜店がならぶ繁華街を興そうという計画も進められた。

これらの計画はすべて、陰惨な瓦礫の街に一日も早く明るい平和な灯を取りもどそうと願う市民の熱意であり、復興への胎動であったが、前途はなお暗やみというほかなかった。

市民文化の復活

二十年九月十九日、連合国軍総司令部はプレス・コードを指令し、新聞・ラジオの事前検閲を厳重にした。これは二十三年七月まで続けられたが、新聞・ラジオ以外にも私家版的なささやかな印刷物や青年団などの素人劇団の上演脚本に至るまで、すべて事前検閲を受けなければならなかった。特に広島市の惨禍の発表は厳禁された。

このような制約に加えて、用紙その他資材の事情も非常に悪く、自由な文化活動はできなかったが、二十年十二月十六日には早くも栗原唯一・同貞子を中心にして、「中国文化連盟」が安佐郡祇園町の山本国民学校において結成され、翌二十一年三月十日、原子爆弾特輯号と銘打った「中国文化」(四八ページ定価二円)が創刊された。同誌は原子爆弾の惨禍を訴えたもので、栗原貞子は「生まれめん哉」という感動的な詩一篇を発表した。

このころ市内には印刷所も二、三が復帰しているばかりであったから、印刷物の多くは近郊の印刷所が利用され、二十一年四月に創刊された婦人雑誌「新椿」(代表瀬川澄)も、同じく祇園町に本拠を置いた。続いて六月には総合雑誌「郷友」が武田権市・志条みよ子を中心にして安佐郡古市町から創刊された。

なお、二十二年秋ごろ(一説には二十三年ともいう)、被爆者正田篠枝が原子爆弾の非情性をうたった歌集「さんげ」を自費出版した。

舞踊・演劇活動は、その上演場所を失っていたから出版物のような早い立直りは望めなかった。それでも二十一年三月には、早くも葉室潔が己斐国民学校で西洋舞踊の発表会をおこなった。演劇が公演できるようになったのは

少し遅れて同年の半ばを過ぎてからであった。

音楽分野では、まず簡単にできるレコード鑑賞からはじまった。戦前からの広島音楽連盟が復活され、レコード鑑賞会を定期的におこなうようになったのもこの頃である。

映画は、宇品の港劇場を除く市内の全映画館が壊滅していたが、二十一年二月初め、広島駅前に広島劇場が開設され、続いて的場町に国際劇場・太陽館などが、闇市の雑踏をねらって次々と開館された。さらに八丁堀福屋デパートの七階に福屋名画劇場ができ、横川町の旭劇場、己斐町の衆楽劇場などが開館され、娯楽から遠くしりぞけられていた市民の心の飢えをいやした。各館とも連日超満員の盛況で、市民たちの復興意欲をそそった。

なお、昭和十六年以降禁止されていた社交ダンスも復活した。二十一年一月十三日、福屋デパート七階で、戦後始めて若葉楽団が社交ダンス研究会を開催し、これも大入り満員となった。さらに同年七月十日、広島劇場裏に一七人のダンサーを抱えた広島会館が開業、続いて的場町に鯉城園が、土橋に若葉楽団のダンス研究所など、次々にダンスホールも開設された。

周辺からの復興

被爆後一年目(昭和二十一年)の夏、焼失を免れた周辺地区—即ち東部では段原・仁保、南部では宇品・江波、西部では己斐・庚午・草津、北部では三篠本町四丁目・大芝など各町は、避難者や復員者・引揚者を抱えて人口が激増し、各種の商店や娯楽機関も建ちはじめていたが、焼失地域では、広島駅前からの的場付近、あるいは横川付近などの闇市場の盛んな所以外は、爆心地に近い地域ほど焼跡そのままの空地が多く、鉄道草が青々とわがもの顔に生い茂っていた。

昭和二十二年八月六日現在の広島市の調査(次表)でも、爆心地から一キロメートル以内の地域の人口は、被爆前の二六パーセント、一・五キロメートル以内は二七パーセントという淋しさであった。反対に三キロメートル以上の地域(大河・宇品・庚午・大芝北部など)では一六四パーセントという稠密状態となっている。

建物の復興状況も、爆心地から〇・五キロメートル以内では、被爆前の五、六〇八戸に対し、その九パーセントの五二九戸、一キロメートル以内では二四パーセントの四、一八八戸という状況である。反面、三・五キロメートル以内では一三五パーセント、五キロメートル以内では一二四パーセント、五キロメートル以上の地域では一四九パーセントという異状な膨脹を示している。このように広島市の復興は、周辺地区から始まり、順次中央部に向かって進んだのであるが、爆心地に近い地域ほど復興速度が渋滞しがちであった。

昼間流入人口激増

しかし、天然の立地条件に恵まれた広島市は、原子爆弾の徹底的な破壊によって、一度は死んだように思われたが、この頃ようやく、蘇生する底力を、雑然と堆積する瓦礫の下に、忍耐強く培っていたのであった。二十一年八月ごろ、市外から広島市内に流入する昼間人口が激増し、次第に復興を盛り上げていった。即ち、一日に広島駅では約四万人、横川駅約八、〇〇〇人、己斐駅約四、〇〇〇人、西広島駅(電車の宮島線)一三、〇〇〇人に達し、合計六五、〇〇〇人が市内に流れこむという状況であった(二十一年八月一日付中国新聞)。

復興状況一覧

昭和二十二年版市勢要覧(復興第二号)による人口・建物などの復興状況は、次のとおりである。

被爆後の人口復帰状況

爆心地よりの距離別	被爆前		昭和二十年十一月一日		昭和二十一年四月二十六日		同年八月二十日		同年十二月一日		昭和二十二年八月六日	
	人口	%	人口	%	人口	%	人口	%	人口	%	人口	%
一キロ以内	60894	19	1455	2	3259	5	11198	18	13815	23	15907	26
一・五キロ以内	65578	21	5925	9	9503	14	14327	22	16916	26	17603	27
二キロ以内	64954	21	11472	18	16626	26	18752	29	20278	31	24436	38
二・五キロ以内	52150	17	31072	60	41489	80	46928	90	48317	92	48911	94
三キロ以内	27168	9	27458	101	29742	109	31347	115	32584	120	37086	136
三キロ以上	41533	13	59136	142	70585	170	65567	158	68973	166	68310	164
計	312277	100	136518	44	171204	55	188119	61	200883	64	212235	68

付記 一、被爆前の人口は、昭和二十一年八月(罹災一年後)に各町内会長の報告を求め、集計調査したものである。

二、昭和二十二年八月六日の人口は、各町内調査員において調査したものの集計であるが、未報告のもの若干は前年(昭和二十一年八月調)のものを集計した。

二、被爆後の建物復興状況

爆心地よりの距離別	被爆前の建物	半焼・半壊以上の建物	現在建物	復興状況			罹災の%	復興の%
				新築	在来又は修理	バラック		
〇・五キロ以内	5,608	5,608	529	103	1	425	100	9
一キロ以内	14,059	14,059	4,188	822	13	3,353	100	24
一・五キロ以内	14,598	14,595	5,069	1,189	21	3,859	99	35
二キロ以内	10,928	10,627	6,555	1,481	862	4,212	97	60
二・五キロ以内	12,168	11,557	11,037	2,041	6,014	2,982	95	90
三キロ以内	7,383	6,280	7,568	286	6,569	731	85	103
三・五キロ以内	2,433	2,060	3,276	153	2,875	248	84	135
四キロ以内	3,727	3,066	4,191	79	3,948	164	76	112
四・五キロ以内	1,160	874	1,443	3	1,404	36	75	124
五キロ以内	1,577	947	1,949	144	1,753	52	60	124
五キロ以上	2,686	474	3,993	117	3,686	190	17	149
計	76,327	70,147	49,798	6,400	27,146	16,252	91	65

付記 一、被爆前の建物は昭和二十一年八月（罹災一年後）に調査、各町内会長の報告を求め集計したものである。

二、現在建物（昭和二十二年八月六日）は、各町内調査員において調査したものの集計であるが、未報告のもの若干は前年（昭和二十一年八月調）のものを集計した。

三、建物用途別復興状況

建物用途	被爆前		現在（二二、八、六日）		復興の割合	
	建物数	割合	建物数	割合	割合	
住宅	64,511	割8 453	40,975	割8 228	割6 4	
店舗	8,711	1 124	4,775	959	5 5	
料理飲食店	701	091	964	193	13 8	
工場	625	082	893	179	14 3	
銀行会社	348	046	454	091	13 0	
旅館	249	033	264	053	10 6	
組合	140	018	159	032	11 4	
官公庁	87	011	114	023	13 1	
学校	69	009	92	019	13 3	
娯楽場	76	010	79	016	10 4	
その他	799	105	1,029	207	12 9	
計	76,327	10 00	49,798	10 000	割6 5	

四、市内諸団体の状況

内容	団体数	構成員数(人)
政治団体	9	226
青年団体	106	5,865
婦人団体	13	9,352
労働団体	126	37,200
その他の文化団体	50	30,000

広島市平和復興祭の開催

昭和二十一年八月六日、広島市は一周年を迎え、広島市町会連盟（会長・任都栗司）が中心となり、婦人団体・青年団体、その他各種文化団体協賛のもと、広島護国神社の境内において、広島市平和復興祭を大々的に開催した。占領行政下に市民の集合などは強く規制されていたので、この平和復興祭も、東京 GHQ、及び呉の進駐軍司令部の認可を得なければならず、反米的言辞や行動は一切禁止された。

挙行当日、各町内会は、町内会旗を先頭に、おのおの「世界平和は広島から」などのスローガンを書いた横幕や弔旗を捧げて続々と集合し、その数約数千人に達した（任都栗司談）。

来賓には広島市長木原七郎をはじめ、呉の進駐軍から濠州軍サテン少佐（のち中佐）その他が列席し、「二度とこのような惨禍の起きることを避け、広島市を人類平和のメッカとして復興建設したい。」という意味の激励の言葉を述べた。

広島市が、この平和復興祭の主催者にならなかったのは、木原市長が、市役所では許可にならないと判断したためであるといわれるが、式典挙行にあたり、任都栗会長の発声でおこなわれた宣言・決議が、後に広島市平和記念都市法の第一条の基礎となった（任都栗司談）。

荒涼とした廃墟のまっただなかで開催された平和復興祭の状況は、詰めかけた多数の外国通信の記者たちによって、全世界に報道された。

この日、定刻午前八時十五分、全市のサイレンが一斉に吹鳴せられ、「平和への祈り」を伝えた。それを合図に、電車もバスも道行く人々も立ちどまり、また、事務室内ではペンやソロバンを置いて起立し、一分間の黙禱をささげた。

引続き各官庁・会社・工場・あるいは各家庭において、しめやかに被爆犠牲者の追弔会がおこなわれ、全市が沈痛やるかたない祈りの場となった。

また、新装なった慈仙寺鼻の記念礼拝堂においては、広島市・各宗教聯盟県支部・広島市供養会共同主催のもと、戦災死没者一周年追悼法会が催され、数千人の人々が集った。

一周年のこの平和復興祭は、辛酸に打ちひしがれている人々に、平和復興への意欲を、かすかながらも与えることができ、開催の意義は極めて大きいものがあった。

復興の難渋

さきの二十年十一月、市議員全員をもって、「戦災復興対策委員会」が組織せられたが、十二月には、町内会役員を主体とした「戦災復興会」（総裁・浅野長武侯爵）が発足し、復興に対する世論の喚起と市政への協力体制が推し進められた。

二十一年一月、市役所は「復興局」（初代局長長島敏）を新設し、これに併行して学識経験者を網羅した「広島市復興審議会」（会長・藤田若水）を、同年二月に組織して、復興に関する基本計画の樹立をはかった。

このように行政機関にも市民の間にも、広島市を復興しようとする意欲は、非常に強いものがあったが、原子爆弾による打撃は、実に深刻であり、加えて敗戦による被占領下という幾多の障害があつて、復興対策の実施には、計り知れない困難が山積していた。そして、被爆者の大多数の家庭は、徹底的に破壊されたそのままの状態から、容易には脱しきれず、雨露さえしのぎがたいほどの、言語に絶する窮迫の生活を送っていたから、行政の復興対策に参加して活動するという力量は、まだ無かった。

町内会の廃止

二十二年一月、内務省訓令に基づき、町内会制度が廃止されることになり、広島市は、一月二十日に町内会廃止の通牒を各町内会長あてに発送し、町内会で扱っていた事務を、市役所民生課に移した。これ以後、市民は任意の自治組織を作り、生活環境の維持と復興作業など連帯的な仕事を行なうことにした。

浜井広島市長の誕生

二十二年四月十日、戦後初めての民選による新市長に浜井信三が当選し、ここに名実共に新しい広島市が発足した。

広島平和祭の挙行

広島市内は、なお、痛ましい傷痕を露呈したままであったが、焼跡に作られた自給菜園は、イモや南瓜が、ようやくその努力を实らしはじめていた。しかし、爆心地付近はなお、バラック小屋さえ少なく、びっしりと生え茂る鉄道草が、ただいたずらに風に吹かれているという状況下、広島市は被爆二周年を迎えた。二十二年六月十日、市民の声を反映して、「広島平和祭協会」が設立せられ、会長に浜井市長が就任し、広島市を世界平和実現の原点にしようとする願いから、毎年八月六日に「平和祭」を挙行し、市長が「平和宣言」を行なうことなどを決定した。同年八月六日、慈仙寺鼻の平和広場において、新築の平和塔を中心に、多数の市民が集り、一同黙禱ののち、平和の鐘を打ち鳴らすとともに、次のような平和宣言が朗読されたのである。なお、この平和宣言は、広島市役所主事村上敏夫が心をこめて巻紙に浄書した。

第一回平和宣言

平和宣言

本日、歴史的な原子爆弾投下二周年の記念日を迎え、われら広島市民は、いまこの広場に於て、厳肅に平和祭の式典をあげ、われら市民の熱烈なる平和愛好の信念を披瀝し、もって平和確立への決意を新たにしようと思う。

昭和二十年八月六日は、広島市民にとり、まことに忘れることのできない日であった。この朝、投下された世界最初の原子爆弾によって、わが広島市は一瞬にして壊滅に帰し、十数万の同胞はその尊き生命を失い、広島は暗黒の死の都と化した。しかしながら、これが戦争の継続を断念させ、不幸な戦を終結に導く要因となったことは、不幸中の幸いであった。この意味に於て八月六日は、世界平和を招来せしめる機縁を作ったものとして、世界人類に

記憶されなければならない。われらがこの日を記念して無限の苦悩を抱きつつ厳粛な平和祭を執行しようとするのは、このためである。けだし、戦争の惨苦と罪悪とを最も深く体験し、自覚する者のみが、苦悩の極致として、戦争を根本的に否定し、最も熱烈に平和を希求するものであるから…。

又、この恐るべき兵器は、恒久平和の必然性と真実性を確認せしめる「思想革命」を招来せしめた。すなわち、これによって、原子力をもって争う世界戦争は、人類の破滅と文明の終末を意味するという真実を、世界の人々に明白に認識せしめたからである。これこそ絶対平和の創造であり、新しい人生と世界の誕生を物語るものでなくてはならない。われわれは、何か大事にあった場合、深い反省と熟慮を加えることによって、ここから新しい真理と道を発見し、新しい生活を営むことを知っている。然りとすれば、今われわれが為すべきことは、全身全霊をあげて、平和への道を邁進し、以って新しい文明へのさきがけとなることでなければならない。

この地上より、戦争の恐怖と罪悪とを抹殺して、真実の平和を確立しよう。

永遠に戦争を放棄して、世界平和の理想を地上に建設しよう。

ここに平和塔の下、われらかくの如く平和を宣言する

昭和二十二年八月六日 広島平和祭協会会長

広島市長 浜井信三

マッカーサーのメッセージ

この平和宣言に続いて、連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥のメッセージが読みあげられた。

メッセージ

二年前、次第に高まりつつある暴虐の暗影が世界を覆っていた。人々も民族も各大陸も、戦いの結着をつけようと、必死になってもがいていた。

その時、広島の上に今迄にない強力な武器が投下された。かくて戦争は、それが致命的であり破壊的である点に於て、そうしてまた戦争が人間の理性や論理や目的、理想などに対する挑戦である点に於て、新たな意味を持つことになった。

即ち、あの運命の日の諸々の苦悩は、凡ての民族の凡ての人々に対する警告として役立つ。それは、戦争の破壊性を助長する為に、自然力を使用することは益々進歩して、遂には人類を絶滅し、現代世界の物質的構造物を破壊するような手段が、手近に得られるまで発達するだろうという警告である。これが広島への教訓である。この教訓が等閑にふされないう、神よ、みそなわせたまえ

一九四七年八月六日

連合軍最高司令長官

ダグラス・マッカーサー

主要付図・一覧表

- 一、広島新開地干拓図…15
- 二、広島市大避難実施要領…33
- 三、広島市内陸軍諸部隊の概要
 - (一) 在広主要部隊配置図…36
 - (二) 広島市軍用通信網…37
 - (三) 在広部隊一覧表…38
- 四、残留放射能による障害調査概要…136
- 五、原子爆弾による人的被害数(推定)表…165
- 六、重要建物被災状況表…198
- 七、県内医療救護班応援状況表…516
- 八、県下警防団出動状況表…545
- 九、県外医療救護班応援状況表…550
- 十、被爆後の人口復帰状況…621
- 十一、被爆後の建物復興状況…622

広島原爆戦災誌 第一巻 総説

昭和四十六年八月一日 印刷

昭和四十六年八月六日 発行

編集兼発行者 広島市役所

広島市国泰寺町一丁目六番三十四号

印刷者 中本総合印刷株式会社

広島市大州五丁目一番一号

昭和四十六年九月六日発行

広島原爆戦災誌 第二巻 第二編各説

第一章 広島市内各地区の被爆状況

広島市

例言

一、本巻は広島原爆戦災誌全五巻のうち、「第二巻各説第一章 広島市内各地区の被爆状況」である。広島市全地域を三十六地区に分け、各地区ごとに被爆直後の状況を取りまとめて、終局的には広島市全体の惨禍が把握できるようにつとめた。なお、事項によっては、発行の年まで記述したものもある。

一、本巻の記述は、本誌編集に当たって、広島市が委嘱した地区委員八二人が調査して提出した「広島原爆戦災誌資料表(地区用)」を主体とし、被爆体験記・談話、その他関係文献によって行った。ただし、陸軍所部隊の所在地基町地区のみは、前期資料の記入者がなく、軍人被爆者、あるいは被爆直後に乗り込んだ新聞記者・軍人軍属などの手記・談話、その他関係文献によって記述した。

なお、各地区の被爆直前の世帯・人口数、及び炸裂瞬間の被害状況など一覧表については、地区により昭和二十一年八月十日、広島市調査課が各町内会から提出を受けた調査票綴の原簿(広島市保管)を使用した場合もある。

一、本文の叙述は現代かなづかいとし、なるべく平易につとめたが、場合によっては当用外の漢字も使用した。

一、各地区ごとに挿入した地図は、戦前(昭和十五年)の公認地図を基礎として、本誌編集担当者が作成したものであるが、単なる地区の説明図であるから縮尺をはぶいた。なお、広島市では、昭和十六年以降終戦まで一般用地図の作成・発売が禁止されていたようである。

一、各巻の執筆は、小堺吉光が行った。

一、各巻の監修は、今堀誠二・後藤陽一・四電一郎がおこなった。

一、各巻の背文字は、広島市長山田節男の揮毫になる。

一、各巻の編集にあたり、原爆体験記・談話をはじめ、各種文献・写真などの提供・貸与、及び多くの指摘や便宜を与えられた各位に対し、深く感謝の意を表する。

以上

昭和四十六年九月六日

広島原爆戦災誌・第二巻

目次

第2編 各説

第1章 広島市内各地区の被爆状況

第1節 序説 1

第2節 国泰寺地区 29

第3節 中島地区 77

第4節 本川地区 121

第5節 基町地区 155

第6節 白島・二葉の里地区 194

第7節 牛田地区 227

第8節 戸坂地区 249

第9節 幟町地区 260

第10節 荒神地区 308

第11節 大洲地区 334

第12節 尾長地区 349

第13節 矢賀地区 365

第14節 中山地区 373

第15節 段原地区 389

第16節 比治山地区 428

第17節 皆実地区 448

第18節 仁保地区 468

第19節 大河地区 477

第20節 青崎地区 497

第21節 宇品地区 506

第22節 似島地区 526

第23節 竹屋地区 555

第24節 千田地区 590

第25節 吉島地区 630

第26節 神崎地区 643

第27節 舟入地区 662

第28節 江波地区 681

第29節 広瀬地区 709

第30節 天満・中広地区 726

第31節 観音地区 747

第32節 福島・皆実三篠地区 777

第33節 三篠地区 797

第34節 己斐地区 828

第35節 草津・庚午地区 854

第36節 古田地区 876

第37節 井口地区 893

主要一覧表・記録

1、広島市内主要橋梁の被害状況表 12

2、広島市常会議員河口社三メモ帖 19

3、元広島産業奨励館（原爆ドーム）の概要 71

4、広島市本川聯合町内会日誌 145

第二編 各説

第一章 広島市内各地区の被爆状況

第一節 序説 ... 1

軍都

大川のデルタに建設された広島市は、猿猴川〔えんこうがわ〕・京橋川〔きょうばしがわ〕・元安川〔もとやすがわ〕・本川〔ほんかわ〕〔太田川本流〕・天満川〔てんまわがわ〕・福島川〔ふくしまがわ〕(戦後埋立て)・山手川〔やまてがわ〕(戦後拡幅され太田川放水路となる。)の七つの清流が市内を貫流し、環境の美しい城下町として筆を続けてきたが、明治時代以降、中国地方の政治・経済・文化の中心地であるばかりでなく、わが国陸軍の大軍事基地として着々とその機能の強化充実ははかられると共に、軍需工場もいちじるしい発展を遂げた。

日清・日露両戦争から大東亜戦争(第二次世界大戦)に至るまで、広島港(宇品)における出征・帰還の各部隊の数は計り知れず、そのつど市中は昂奮につつまれ、異常な活気を示した。

昭和十六年以降、軍事色が濃厚になるにつれて、市民生活は、あらゆる面にきびしい規制を受け、特に諜報に関しては、たびたび厳重な注意をうながされた。広島市全域が軍事基地であり、軍隊も多数駐屯していたが、これが、原子爆弾攻撃の第一目標として、広島市が選ばれたアメリカの戦略上の一理由となったのである。

防衛態勢

陸軍の大策源地広島市の防衛態勢は、まさに軍・官・民三者一体のもと、他の諸都市に比類を見ないほど完璧なものであった。県・市の防空本部は詳細な防空計画を作成すると共に、常に他都市の被爆実状を参考にし、軍の指導によって、防空要員に対する訓練・演習をおこない、焼夷弾や普通の爆弾攻撃に備えていた。

市内一三二か所(八、二〇〇坪)の建物疎開を実施して火災の延焼防止と避難空地を設けると共に、防空壕は、軍用のものをはじめ、町内会単位・隣組単位・各家庭単位に作り、防火用水槽もまた同じく、油性焼夷弾の消火に砂袋や火叩きなど、規定どおりに配備した。バケツ操法による注水訓練も各種の場面を想定して繰返し行なわれた。

重要建物の屋上には、在郷軍人や警防団員が防空監視に立ち、また河川の要所には緊急避難用の舟・筏などを常備し、被爆により河川の決壊で洪水となった場合や、橋梁破壊に際しての渡河避難用として、竹製の浮袋が市民に配給された。また、敵機空襲にあたって、視界をふさぐ煙幕用に、近郊の山から青松葉を取集めて全市各所で焚く用意をしていた。そして、敵軍上陸に対処して、一人必殺の竹槍訓練、小銃の撃ち方などの訓練も欠かさず実施され、負傷者の担架運び、救護方法、あるいは空爆下の緊急待避法(地面に伏さり両手で両耳をふさぐ)などの訓練がぎびしく行なわれた。

服装も、一般の老幼婦女子は防空頭巾にモンペを着用し、上衣の胸には、住所・氏名・血液型など記入した名刺型の小布を縫いつけていた。また、屋内にあっては、常に身近に医薬品、米、及び貴重品を入れた非常持出し箱を備え、屋外にあっては、それらを入れた布製(皮革は欠乏)の鞆を提げて持ち歩いた。しかし、米は入れておくほど配給がなかった。

大きな建物は塗料を使って迷彩擬装をほどこし、各窓に分厚い板を打ちつけて爆風除けをし、室内の金庫その他重要個所には、土のうを積んでその周囲をかためた。また、爆風による粉砕を防ぐため・窓ガラスには細長い紙を十文字に張りつけた。更に、兵舎をはじめ各学校・倉庫など大きな木造建物は、投下された焼夷弾が引っかかって爆発すると、大火災になるため、天井をすべて剥ぎとった。鉄筋コンクリート建物の屋上は、区切って常に水が溜めてあり、木造建物は、棟に板を渡してその両側に満水した大樽を置いている所もあった。

夜間の空襲に対処しては、窓を黒布で完全に遮蔽し、電灯も一つ一つ黒布で覆った。警報発令時には、マッチ一本の火も戒めて、厳重な灯火管制が実施された。これらを監視し、指導するのは警防団員や町内会役員の重要な役目で、警報が続出するような夜は、まったく一睡もできなかったから、夜が明けるとクタクタになって眠った。したがって、前夜空襲警報の出た場合は、軍需工場など特別な事業所を除き、翌朝の出勤時間が、自動的に一時間遅らせられることなども決められていた。

防衛力の集中

昭和二十三月ごろから、県下各地の防衛力を広島市に集中し、防衛陣の増強はかられた。ただし、「広島市を空襲

する前に、尾道、福山両市を襲撃する」という宣伝ビラ（実際には逆で、八月八日に福山を空襲した）を敵機が撒いたので、この両市の防衛力は削がれなかった。同年七月二十八日、呉市が大空襲を受けて焼けたため、呉市の残存する防衛力 - 警察警備隊・消防自動車などが広島市に配置された。

しかし、国内の都市は、次々と空襲を受けて焼き払われていたが、広島市だけはさしたる空襲もなく、いつまでも取残されていた。それを、市民の一部では、「広島出身の移民がアメリカに多数いるからだろう」などと、ささやく者もあった。しかし、空襲必至とみる空気は濃厚で、戦争末期には、防空要員確保のため、老人や病人以外は疎開禁止となったが、夜間のみ郊外へ避難する者が多く、警防団が要所に立ってこれを取締まった。国民学校(高等科)児童・中等学校生徒もまた、防空補助隊員として、各方面に出動した。

人口の減少

この頃、広島市の人口は、防空計画に基づく建物疎開や人口疎開によって、通常四四万人と言われていた常住人口が三二、三万人に減少していたと推定される。しかし、郊外からの通勤者が多く、昼間人口は大きく増加した。このほか軍人が推定約四万人(九万人ともいう)ほどいたようである。

広島駅をはじめ、己斐・横川両駅とも、次々に満員列車が到着し、駅は雑踏をきわめた。市内電車・バスもまた満員で、「乗ればありがたい。」というほどの混雑で、広島駅前などでは、一台の電車を待つため、五〇〇人くらいの行列ができるのは毎朝のことであった。実際、被爆直後、電車・バスの停留所近辺に最も死体が多かったと、救援隊のある兵士が語っている。

食糧欠乏

配給米をはじめ、他の副食物も極度に欠乏し、市民はみんな空腹をかかえ、ただ、気力で生きているという状態であったが、戦争遂行の歯車は一秒たりとも止まらず、あえぎあえぎの生活であった。

建物疎開作業隊や応召兵

市内は第六次建物疎開の実施中で、近郊市町村の国民義勇隊や会社・工場の職域義勇隊、中学校・高等女学校一、二年生の動員学徒など約二万人が、連日、早朝から作業に従事していた。

建物疎開作業には、予・後備役の軍人で編成された広島地区特設警備隊の各部隊が主として実施し、国民義勇隊や動員学徒は、瓦や材木などを整える跡片づけを行なった。また、市内の各部隊では、本土決戦のための赤穂・鬼城・護路その他独立工兵隊などの新しい部隊を編成中で、これらに入営する応召兵が、続々と指定された場所に集合しており、それを見送る人も多数集っていた。

五日の夜

八月に入ってから、急に警報発令も少なくなっていたが、五日夜は、警戒警報・空襲警報が連発されて、一晩中、市民たちは眠る暇もなかった。空襲は殆んど夜間であったから、翌六日午前七時三十一分に警報が解除になったとき、みんな胸をなでおろして、ほっと安心した。嚴重な防空態勢も一応解かれた。

敵機侵入

このようなとき、呉の海軍鎮守府地下作戦室に、甲山町監視哨・三次監視哨などから、直通電話で「敵機三機広島に向う」と報告があり、呉地区ではただちに警戒警報を発令した。続いて、中国軍管区司令部参謀部と広島地区司令部から、敵機侵入の情報連絡があり、引続き空襲警報を発令した。しかし、広島市の場合はそうではなかった。

炸裂

広島市流川町の広島中央放送局では、中国軍管区司令部からの情報により、古田アナウンサーが急ぎ警報発令を放送中であった。

突如、市の上空約六〇〇メートルの所で、原子爆弾が炸裂した。市民には、まったく寝耳に水の突発事態で、一瞬、地上が暗黒に包まれ、一人一人、自分の所が直撃されたと感じた。爆心地(爆央)の細工町島外科病院付近から比較的遠く離れていた市民は、その異様な閃光と大爆発音に、驚きおののいた。全然、訳がわからなかった。

爆心地から三キロメートル以上離れていた所からは、炸裂の瞬間にできた異様に光る火球(推定直径六十メートル)を見た者もあった。

たちまち、上空数千メートルに達する大爆煙が、虹を溶いたようなあやしく美しい色彩を渦巻きつつ、キノコ状になってモクモクと湧きあがり、市の上空をおおった。これらの光景は、すべて被爆者の体験で語られており、五、六人はその瞬間カメラにとらえた(各巻に所載)。

被害状況

この一発で、市域の大部分 広島城跡一帯の陸軍各部隊と繁華街・商店街・住宅地など旧城下町時代からの全域、及びその近辺が一挙に壊滅し、死者・負傷者・行方不明者などおよそ二〇数万人に達し、未曾有の惨状を出現したのであった。

おおまかに言えば、爆心地から半径五〇〇メートル以内の地域は、一瞬に壊滅し、点々とビルディングの残骸が立つ平地と化した。住民はごく一部、特殊な場所にいた人を除いてはほとんど蒸発的即死に近く、直後に暁部隊の救援隊が入ったとき、地表は、死体も骨片もあまり見当たらないほど焼きつくされており、すべての物は原型をどめず破砕されて白い灰に埋まっていた。また、普通爆弾のように穿かれた弾痕も無く、まったく不思議に思われたという。

半径五〇〇メートル以上一キロメートル以内の地域にいた人々は、五体がバラバラに裂けた。転がっている首は、目玉が飛び出しており、胴体は裂けて内臓がはみ出していた。爆心地から約六〇〇メートルの地点にあった広島県立第一高等女学校の第四学年の生徒の一部約五〇人は、原子爆弾の炸裂時に登校して被爆し、全員死亡したが、その当時、校庭に首も手足も何処かへ千切れ飛んだ胴体だけの死体が、まるで丸太棒のように多数転がっていたという目撃者の報告がある。

半径一・五キロメートル内外では、倒壊した建物の下敷きとなり、火災の発生によって、生きながらにそのまま焼死した人々が実に多い。放射能熱線による自然着火、あるいは炊事の残火によって、たちまち大火災となったが、荒れ狂う猛火の中で、子どもを抱いたある母親は、倒壊物に下半身を取られて動けず、火災が襲うと顔を伏せ、去ると顔をあげて、「助けて...」と叫びながら、ついに火の中にその声を絶った。辛うじて下敷きから脱出し、安全地帯に逃げて行く人々は、それを見ながら救助することができなかった。このような光景は無数に語られていることであるが、ともかく安全地帯へ逃げることができた人々の多くは、この地点以上離れた所にいた人々である。しかし、全裸・半裸の幽鬼のような姿で命からがら一応は脱出した人々も、その大多数は死んでいった、これは事実の証明するところであるが、原子爆弾特有の放射能線による障害で、外見上は無傷の人々も多く死んだのである。

救援隊

被爆当日の正午前後には、被害の比較的軽微であった宇品町の陸軍船舶司令部(暁部隊)隷下の諸部隊が、陸上と河川から救援に出動したが、この救援隊の直接被爆者でない多くの兵士たちも残留放射能によって、白血球減少・嘔吐・下痢・出血・脱毛など、被爆者と同じような症状にかかり、ついには死亡する者も幾人かあった。

市内の救護態勢はほとんど壊滅し、六日当日は、生地獄の修羅場と化したまま暮れていった。比治山の多聞院に、この日の夜、行政機関のわずかな残存者によって開設された県防空本部からの連絡通報により、県下及び隣県その他から救護班が続々入市しはじめたのは翌七日であった。負傷者の多数集合している場所を、とりあえず臨時救護所として治療にあたったが、アカチンか油の塗布だけであって、治療というほどのことはできなかった。救援の医師も、原子爆弾を知らず、また、その障害の治療法など知らず、適切な治療も指導もできなかった。

死体の処理と道路の啓開

七日に陸軍船舶司令官佐伯文郎中将が、広島警備担任司令官に就任して、救援対策も軌道に乗りはじめ、負傷者の収容、死体の収集と処理、道路の清掃など、軍隊が主軸となって積極的に作業が進められ、十日ごろまでには一応目につく死体は処理され、道路もトラックが走られるようになった。

郊外に逃げて行くことができた被爆者は、約一五万人に達したが、逃げきれないで猛火を避けながら、被爆地にずっと留まっていた者もあった。一たん逃げて、すぐ引返した者もあったが、まったく僅かな人数であった。

探索者の混乱

焼跡には親類や縁故者の安否を探ねる人がたくさん市内に入って来て、収容所はいずれも混雑をきわめたが、それもいつ時のことで、発見できずむなしく帰っていく人も多くあった。

人的被害

原子爆弾による人的被害は、現在(昭和四十五年)なお、精確な数字が得られず、広島大学原爆放射能医学研究所が被爆当時の地図復元作業を進め、被害実数の把握に努めているところであるが、昭和二十年十一月三十日現在で広島県警察部が発表した推定数が信頼性高いものとされている。また、広島市調査課が、昭和二十一年八月十日、県下の各市町村長をはじめ、市内の各町内会長を通じて調査した数字を基礎とし、被爆時の状況その他の計数的資料を勘案して、「近接被害推定数」をまとめたものがある。これによると、当時の総人口三二〇、〇八一人として、死亡者一一八、六六一人(38%)・負傷者七九、二二〇人と生死不明者三、六七七人の計八二、八〇七人(25%)で、

以上被害者合計二〇一、四六八人(63%)・無傷者一一八、六一三人(37%)となっている。ただし、約四万人いたといわれる軍隊の被害は含まれていない。

終戦

八月十五日の終戦を迎えるころ、混乱が一応おさまると同時に、焼野原は深い空虚に包まれていった。食糧事情はますます窮迫し、罹災者らは半壊の防空壕の中や焼トタンで囲ったバラック小屋の中で、すさまじい飢餓に耐えねばならなかった。

残忍をきわめた原子爆弾の災害に引続き、敗戦を迎えた市民は、一挙に深い虚脱感に陥り、何らなすところも無かった。多くの罹災者には、戦争に敗けるといことは絶対に無いはずであったのである。

闇市の発生

早くも終戦三日目ごろから、広島駅前付近に、ムシロやトタン板を地面に敷いた闇商人が現れ、日増しに人数が増加した。十二月ごろになると、四〇〇軒余りの集団となり、板囲いの仮店舗ながら、ついに固定化して、統制経済もどこ吹く風という盛況を示した。

台風禍

九月十七日夜半から十八日にかけて、焼跡に枕崎台風が襲来、全市水浸しとなり、焼残りの防空壕やトタン囲いのバラック小屋に住んでいた罹災者は、最後の手持品まで失うという打撃を受けた。このころ、ポツポツ疎開先や避難先から帰りはじめていた市民も、焼跡に住むことを諦めて、再び田舎へ引揚げる者もあったし。しかし焼跡は台風で清掃された。

窮乏生活

七五年間は生物が棲めないと言われた焼野原に、青々と鉄道草が茂ったが、爆心地付近は、なお、茶褐色の焼跡のままで人影もなかった。全焼地域では住む人もまばらで、時折り進駐軍のジープの走るのが見られ、また、死んだ被爆者を焼く煙が、あちこちに眺められた。食糧の配給は乏しく、飢餓状態に陥った罹災者は、バラック小屋の周囲を整理して、自給菜園を作り、役所から配給された芋ヅルやジャガイモ・カボチャ・キビなどをできるだけたくさん植えた。しかし、汗を流してようやく収穫できるようになって、夜のうちに努力の結晶が盗まれるということも多かった。

闇市は広島駅前、己斐・横川両駅付近、その他でますます繁盛していたが、純正なものはおどろくほどの高値で、なかなか入手できなかった。まやかしものの代用品が多かったが、背に腹はかえられず、これを買って空腹のたしにした。雑草が材料の江波ダンゴという代用食が売出されたのもこの頃で、焼野原の中をテクテク歩いて、遠方からも江波まで買いに行った。

郡部の農家へ買出しに行く者も多かったが、農家は金よりも物を欲しがったから、物々交換が盛んになった。罹災者は、疎開していた僅かな衣類を取寄せて、食糧と交換したが、交換する物の無い者もたくさんいた。

町内会の復活

外郭だけになった市役所は、残存職員の努力でようやく起ち直って配給事務も行なわれるようになり、町内会の復活が要請されたが、全焼地域は町内会長や町役員の死亡者が多く、たまたまその町内跡に住んでいた罹災者の中で、比較的元気な者とか、印鑑を持っている者とかが選ばれて、町内会長になった者が多かった。爆心地から一・五キロメートル以内の焼跡の町は、住民もごく少人数であったから、七つも八つもの町をひとまとめにして、会長をつくった所が多かった。

復興の足音

焼跡に帰って来る者が、比較的に多くなりはじめたのは、被爆後一か年たってからであった。転入抑制措置など取られたが、以後、次第に人口は増加していった。しかし、広島市が本格的な復興を見せはじめるまでには、被爆後、なお三、四年の歳月を必要としたのである。

広島市内主要橋梁の被害状況

番号	川の名	橋梁名	爆心との距離(m)	構造	被爆直後の存否	状況説明
1		駅前橋 えきまえばし	1,800	木造	否	被爆により消失。渡れなかった。

2	猿猴川 えんこう がわ	猿猴橋 えんこうばし	1,900	鋼鉄桁橋	存	爆風によりランカンが破壊されたが、避難者の渡ることはできた。
3		荒神橋 こうじんばし	2,000	ゲルバー式 電車併用	存	爆風によりランカンが破壊されたが、渡られた。
4		大正橋 たいしょうばし	2,200	鉄筋コンクリート造	半壊	ランカンが一部は破壊されただけで、渡ることができた。ただし、九月の風水害で四径間(四橋脚間)流失。不通となった。
5		大洲口宇品線鉄橋 おおずぐちうじなせ んてつきょう	2,500	鉄橋	存	支障なし。七日、初列車第四三七列車が通過。
6		東大橋 ひがしおおはし	2,000	木造	存	被爆時、被害僅少で避難者が続々と渡った。九月の風水害で橋脚一部沈下。
7	神田川 かんだが わ	工兵橋 こうへいばし	2,100	木造つり橋	存	被害なし。爆風方向にかかっており、工兵隊裏の大樹もこれをかばった。牛田、戸坂方面への避難者が続々と渡った。なお、反対側からの入市は一時制止された。
8		神田橋 かんだばし	2,100	鉄筋コンクリート造	存	爆風方向にかかっていて、渡橋はできたが、白島よりの部分は陥没して危なかった。風水害で二径間橋脚一基沈下。
9		山陽本線神田川鉄橋 さんようほんせんか んだがわてつきょう	1,800	鉄橋	存	放射能により、杭木が発火してくすぶる。爆風により下り貨物列車四九輛編成(うち八輛落下せず)が脱線転覆して発火、積荷のドラム罐が次々に爆発した。八日、単線で旅客列車上り線十六時四十二分、下り線十五時三十分が初通過。
10		常葉橋 ときわばし (現在常盤橋)	1,700	鉄筋コンクリート造	存	橋床のアスファルトが熱線により自然着火し、一時はその火災のため、渡れなかった時期もあった。石造ランカンは河中に落ちた。
11		栄橋 さかえばし	1,600	鉄筋コンクリート造	存	炸裂時、橋床上を鬼火のように怪火が飛んだ。爆風方向に沿ってかかっていたので、被害が少なく避難者が東練兵場へ向けて続々と渡った。
12	京橋川 きょうば しがわ	京橋 きょうばし	1,500	鋼鉄桁橋	存	被害なし。台風の被害もなかった。避難者が続々と渡った。
13		稲荷町 いなりちょう 電車専用橋	1,400	鉄橋	存	被害なし。台風の被害もなかった。レールが曲がっていたが、これを渡って逃げた人もあった。
14		柳橋 やなぎばし	1,600	木造	否	前年の水害後は仮修理で、南側は通れず、北側の一方通行であった。修理資材(木)が橋の中程と東寄りに積んであったから、それに自然着火して焼落ちた。被爆後一時間くらいは渡って逃げられた。
15		鶴見橋 つるみばし	1,800	木造	存	ランカンなど一部が熱線により、自然着火したが、これを消火。比治山への避難者が続々と渡った。三年後、砂舟が橋脚を折損して一部落橋した。
16		比治山橋 ひじやまばし	1,900	ゲルバー式	存	爆風により南側のランカンが全部川の中へ落ちたが、避難者はどんどん渡って逃げた。死体多数折り重なる。
17	御幸橋 みゆきばし (電車併用)	2,300	石造ゲルバー式	存	石造の勾ランが双方とも爆風によって倒れ、南側の河中に転落。中央部から宇品方面へ避難しようとする罹災者で橋上は大混乱し、凄惨をきわめた。	
18	元安川 もとやす がわ	元安橋 もとやすばし	200	鋼鉄脚ゲルバー式	存	石造勾ランの点灯装置が、爆風によって相反方向に移動。ランカンは両側とも川の中へ左右に分かれて転落。したがって爆源がこの橋の延長の上空であることが立証された。
19		新橋 しんばし	500	木造	否	被爆により半分落橋、渡れなかった。昭和二十七年、ほとんど同位置に平和大橋が架橋された。
20		万代橋 よろずよばし (俗称県庁橋)	900	鋼鉄桁	存	橋床上にランカン・ハシケタ・五人の通行者の影が残っていた。被爆直後は、火が出ていて渡れないときもあったが損傷少なく通行はできた
21		明治橋	1,300	鉄筋コンクリート造	存	石造の点灯装置が爆風によって移動し

		めいじばし		リート造		た。避難者らは続々と渡った。九月台風で流出。
22		南大橋 みなみおおはし	1,800	木造	存	爆風により南側に傾斜し、手すりが焼けていたが、人だけは通ることができた。十月水害で流失した。
23	三篠川 みささがわ	山陽本線(三篠)太田川鉄橋 おたがわてつきょう	1,700	鉄橋	存	支障なし。八日、単線で旅客列車が初通過。
24		三篠橋 みささばし	1,400	鉄筋コンクリート造	存	爆風により勾ランの笠石をはじめ、かなりの部分が破損して川中へ転落し、大破したが一部分が通行できた。十月水害で一部流出した。
25	本川 ほんかわ	相生橋 あいおいばし (電車併用)	100	鋼鉄桁T字部鉄筋	半壊	爆風により勾ラン柱埋込のI型鋼が剪断。また橋床板の嵩上が大きく吹きあげられて移動した。西部あるいは北部へ向かって、多数の人々が渡って逃げた。
26		本川橋 ほんかわばし	250	鉄製	否	橋ケタは爆圧のため移動し、橋台は橋脚をはずれて通行危険であった。また、追加配水管を切断し給水不可能となる。直後に軍により板を渡して修理していたが、九月風水害でさらに被害。十月水害で完全に落橋。
27		新大橋 しんおおはし	500	鉄筋コンクリート造	存	被爆による損害は軽微であった。十月水害で流失し、廃橋。後、至近場所に西平和大橋が架橋された。
28		住吉橋 すみよしばし	1,300	木桁橋	存	被爆時、ランカンが南北に分かれて川中へ落ちただけで人々の通行はできた。十月水害で流失。
29	天満川 てんまがわ	横川橋 よこがわばし	1,200	鉄筋つり橋	存	被爆による支障は小破で、可部海道へ向けての避難民が続々と渡った。
30		横川 よこがわ 電車専用橋	1,200	鉄橋	存	炸裂時、渡っていた電車が川の中に転落したが、橋そのものは無事であった。九月台風の時、出水で流失。
31		北広瀬橋 きたひろせばし	1,000	木造	否	被爆当日、午後二時ごろ消失。それまでは渡ることができた
32		広瀬橋 ひろせばし	900	木造	否	被爆当日午後二時ごろ消失。
33		天満橋 てんまばし	800	木造(仮橋)	存	被爆時、木部が燃えていたが、人々はほとんど渡って逃げた。十月水害で落橋。
34		天満町 てんまちょう 電車専用橋	800	鉄橋	存	被爆により、ヒン曲がったが、これを渡って逃げた者も多かった。十月水害で落橋し、渡舟で通行した。
35		観船橋 みふねばし	1,000	木造	存	被爆により、橋ケタがゆるんだが避難者らが渡ることはできた。九月台風で落橋。
36		観音橋 かんのんばし	1,450	鉄筋コンクリート造	存	十九年の台風でワン曲し、車は通れず辛うじて人が渡っていた。被爆時、避難者らが西部へ向けて渡った。九月台風で半分落橋、十月水害で流出。
37	昭和大橋 しょうわおおはし	2,700	簡易仮木造	存	被爆時、損傷なし。江波から観音地区へ向かって避難民が続々と渡った。	
38	福島川 ふくしまがわ (現在埋立)	中央橋 ちゅうおうばし	1,400	木造	存	被爆直後は渡れたが、二、三時間後に燃えはじめて、夕方までには北側半分ぐらい焼け落ちた。太田川放水路工事により廃橋。
39		小河内橋 おごうちばし	1,500	木造	存	被爆による損傷なく、避難者ら続々と渡り、橋上は混乱をきわめた。九月台風で流失。
40		福島橋 ふくしまばし	1,500	木造	存	被爆時、自然着火によりランカンが燃えたから、渡るものも少なく、避難者はたいがい上流の小河内橋にまわって逃れた。福島川の埋立により廃橋。
41		福島町 ふくしまちょう 電車専用橋	1,500	鉄橋	存	爆風によって大傾斜したが、必死の避難者はこれを渡って逃げた。
42		西大橋 にしおおはし	1,900	鉄筋コンクリート橋	存	被爆時、多少の損傷はあったが、渡るには支障はなかった。九月台風で中央部が陥没した。以後次第に落橋し、西詰部分だけを残した。

43	福島川 (現在太田川放水路)	庚午橋 こうごばし	3,300	木造	存	被爆による損傷はなかった。九月台風で流出。
44	山手川 やまてがわ	山陽本線(打越)山手川鉄橋 やまてがわてつきょう	1,800	木造	存	支障なし。六日、二本の救急列車を運転。七日、己斐・横川間の上り線を折返し運転。十二日ごろ・広島・横川間の上り線開通。
45	山手川 (現在拡幅して太田川放水路)	天神橋 てんじんばし (山手町寄り)	1,600 M	幅二間の仮板橋	否	爆風で吹っとんだ。後、太田川放水路の完成に伴い、山手橋と共になくなり、現在の中広橋となる。
46		山手橋 やまてばし (天神橋に続く中広町寄り)	1,600	幅二間の仮板橋	否	爆風で吹っとんだ。後、太田川放水路の完成に伴い、天神橋と共になくなり、現在の中広橋となる。
47		己斐橋 こいばし	2,100	鉄筋コンクリート造	存	爆風により小破したが、避難民が渡ることに支障はなかった。
48		己斐町 こいまち 電車専用橋	2,100	鉄橋	存	爆風により小破したが、電車の運行には支障はなかった。
49		旭橋 あさひばし	2,200	木造	存	被爆当時、渡橋には支障はなかった。九月台風で流出。

総数 四九橋

イ、被爆直後、存在していたもの 四一橋

このうち、九月台風・十月水害で流出(一部沈下も含む)したもの二〇橋

ロ、被爆により消失・落橋したもの 八橋

(註)右のうち被爆により大破・半焼・半壊したのもので「存在」した橋とした。

被爆当時の市内各橋梁配置図

(註)この配置図の内の数字は、前表の橋梁の該当番号である。

広島市常会議員

河口祉三メモ帖(抜粋)

(昭和十六年二月八日告示の「広島市町内会等設置規程」により設置された「広島市常会」は、市長が委嘱した市常会議員七〇人で構成され、町内会制度の最高機関であった。

この市常会議員であった河口祉三(大河連合町内会長)のメモ帖から原子爆弾被災前後の状況資料として次のとおり抜粋した。)

()内は編集者の補記

(昭和二十年)

五月二〇日市常会

(一) (疎開家屋の)瓦の処置、各町内会へ引取りのこと

(二) 救護所・待避壕設置の件

五月二五日

(一) 国民義勇隊編成の件...軍人軍属及び入学せざる七歳以下の子持及び妊産婦・学徒(を除く)

食糧営団・土建組合・塗装工場・陸上運送=小運送を含む・鉄道・海上輸送・逓信局以上(職域義勇隊)編成
二九日までに連合町内会へ名簿提出、隊員は町籍(簿)に其記入をなすこと

(二) 非常食糧三〇日分保管

(三) 日向西館六月一日開始(火葬業務)

(四) 日用品交換六月一日より市営にて福屋旧館にて開始

(五) 松根採取六月九日(実施)

(六) 横穴式防空壕、(構築)場所を選定し二〇日までに(義勇隊)聯隊長報告

(七) (町内会)防衛部長選定の件

(八) 疎開(跡)地耕作の件(自給菜園)

- (九) 勤労奉仕の件
- (一〇) 隣組改編に関する件
- (一一) 灯火(管制)の件

六月二三日

- (一) 全国(重要施設)一五万戸
広島重要施設、白島通信局・貯金局・芸(備)銀(行)・興(業)銀(行)・横川(の三篠)信用組合・日赤(病院)・文理(科)

大(学)

- (二) 疎開跡整理耕作(自給菜園)
- (三) 瓦処分の件(家屋疎開跡)
- (四) 鯉魚配布(貯水槽蚊発生予防)
- (五) 避難用浮橋。雁木及び橋の個所(に設置)
- (六) 非常用食糧確保の件、配給食糧を郡部に疎開(災害時避難先用)
- (七) 錫金類保存
- (八) 重要食糧保管の件、罐詰・大豆

七月一七日

(避難場所)

- (一) 国泰寺町中心六万坪 雑魚場町全部
- (二) 中島広場 県庁前・上水主町・中島町・元柳町
- (三) 堺町広場三万七千坪 堺町三(丁目)・小網町
- (四) 避難道路 八丁堀・白島西側全部
- (五) 西練兵場三万五千坪 (陸軍病院)第二分院も疎開
- (六) 一二、三万人疎開。八月二〇日まで完了。疎開に要する人員三〇万人、職域・地域学徒隊を以って充つ
- (七) 帝国(銀行)・安田(銀行)・興(業)銀(行)・福屋(デパート)・日本銀行・広島燃料・大正屋 周囲三〇米(疎開)

八月一三日

- (一) 東郷地区臨時野戦病院設置
本部・仁保(国民)学校・女(子)専(門)学校)・大河(国民)学校・楠那(国民)学校
- (二) 患者の看護
婦人の労力奉仕...患者に対する身廻り
- (三) 災害後における伝染病予防(対策)
- (四) 医師・看護婦出勤のこと
- (五) 町内の患者は町内会の手を経て治療を受けしむること
- (六) 人心安定の件
 - 1 安定に関する町内会長の決心
 - 2 通信防諜
 - 3 信号その他
 - 4 窃盗に関する件
 - 5 水道処置(漏水防止など)
 - 6 便所設置の件

八月一三日 聯会(連合町内会長)会同、船舶司令官が警備司令官となる

- (一) 町内会再編成
- (二) 罹災者休養所の設置
宇品(国民)学校)一、〇〇〇人・第三(国民)学校)五〇〇人・江波(国民)学校)一〇〇人
学校収容者は自活出来得る者
- (三) 戦災焼跡地の整理、必需物資の回収八月一八日まで
- (四) 罹災者見舞金贈呈一世帯三〇円

貯金その他金銭なく生活に困窮せる者は援護課へ出頭受領せしむる

(五) 一〇日より普通配給に復す

配給所 草津・古田・己斐・天満・三篠・牛田・尾長・仁保・比治山・大河

副食物は主として国民学校に於て当て、主要食は連合町内会長が一括して引渡し谷町に配分

(六) 戦災処理委員会、己斐・古田・草津の避難者は成るべくその地に落着く様指導すること

1 戦災者に対する着物

タオル三万・モンペイ二万・シャツ二万・ズボン二万・作業(衣)三万 計一二万

一五日より五日間、県庁前・下柳町・罹災証明書持参

2 日用品・草履一五万足決定

マッチ・ロウソク百箱

雨傘、その他はなし

以上戦時災害保護法

3 貧困者には市長及び援護課より各三〇円

町内会長証明

4 孤児比治山国民学校(に収容)

5 災害調査報告八月一四日(までに提出)

八月二一日 連合町内会(長会)議

(一) 八月一六日次官会議(において)軍需品を民需に移す(ことに決定)

激民需に応ずる衣類は類別に廻す

(二) 義勇隊...一〇日に解散(決定)

(三) 輸送も民需に(変更)

(四) 民需生産は自由

(五) 食糧は依然増産、工場労力(を利用?)

(六) 薪炭類 統制通り

(七) 漁業(統制通り)

(八) 応徴士(徴用朝鮮人)は解放

(九) 家屋は制限なし、土地には制限あり

(一〇)入市は制限をなす

(一一)軍人遺家族、統制通り

(一二)学徒動員解除

(一三)学童疎開は追って指示

(一四)金融関係は支払制限は絶対せず

(一五)駐屯軍は六大都市

(一六)戦災者保険、銀行預金通帳ある者は罹災証明書にて支払う なきものは後日対策を行う

(一七)広島市は一五、六万 土地一戸百坪内に三〇坪以内の家屋を建つ

紐帯道路五〇〇米~三〇〇米、河川に沿っては三〇〇~三〇米

(一八)(記載なし)

(一九)恩賜財団、援護課(取扱い)

戦災見舞品 酒・ブドウ酒一人七勺、ブドウ一人二〇勺

食糧配給現在員数により配給

(二〇)福屋を伝染病院(とする)

(二一)ロウソク・マッチ近く配給

砂糖四俵六〇〇斤一斤六〇銭

霞町二三三人・人河北一、一八二人・大河南一、四二〇人・旭町一、三〇〇人・出汐町六九五五人・楠那一、六二

〇人、丹那一、二一〇人

八月二三日

(焼跡整理事業)

八月二四日午前七時 出汐町十字路へ集合

旭(町)二〇(人) (大河)北二〇(人) (大河)南二二(人) 霞(町)七(人) 出汐(町)
霞・出汐(両町はトラック)二台

八月二五日午前六時半発

二三日 (大河)南 二四日(大河)北 二五日旭(町) 二六日出汐(町)
出汐町三(人) 霞町二(人) 午前八時より(午後)四時(まで)

八月二八日

砂糖二七俵六四八メ(配給)

八月二九日

(一) (町内会)事務所建設の件

(二) (町内会)事務員増加の件

(三) 配給に関する件

丹那 一、一〇〇 楠那 一、四〇〇 北 一、一八二 南 一、四二〇 旭 一、三〇〇
霞 四二三 学校 一九〇 計 七、七一五人

九月三日

下駄九〇〇足・ロウソク・マッチ大箱一〇〇個(配給)

九月八日

第一区 牛田・白島、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、大芝・三篠(戦災見舞金支払い分?)

鶴見町、昭和町、宝町、富士見町一部、比治山本町一部、雑魚場場町全部、国泰寺町一部、中島新町、木挽町全部、上水主町、天神町、元柳町一部、小細町、西大工町、堺町三、四丁目全部、西小網町、榎町一部、以上県に於て(戦災見舞金)支払い

応急建物の復旧

修理可能なるもの、小修理で済むもの、可能の家二万五千の勘定

平均二月当り修理費五人(役とする)

(内訳)大工三人、屋根屋一人、左官一人(総体では)一二万九千人を要し、資材は(全壊・半壊の)残留家屋の材料を利用

(イ) 戸当り三石の木材を見積り、七七、五八〇石

(ロ) 瓦一戸当り五坪 一二九万四千枚

(ハ) 釘一坪当り三〇〇匁を要す 二月当り二(貫)匁

(ニ) セメント二月当り一袋

大工左官一〇(日)間、五、六千人を県内外より傭人 宿舎は町内会に配分するにより斡旋 資材・労力の調査 食糧は本人持ち込み(および)別に市に於て特配の予定、副食物は市に於て配給

賃金一日二〇日(支払い)

小修理の結果、資材労力等一〇月までに報告

材料配給は一五日より一〇日間の見込

大工左官の賃金は前納

(損壊)八割以上の家屋、全壊と認め、その材料を使用す

戦災保(険)に付せざる家屋は坪一〇円乃至三〇円にて市に於て引取り

八月六日出動の義勇隊の数、当日死者と行方不明者の数を一三日までに報告のこと

供出のミシン返還につき交渉中電灯を付ける希望者は調査課?

一〇月六日 連長会議(連合町内会長会議)

戦災資金支払い一〇月より開始

一〇月三〇日

旭町 一、四〇〇人 三四三戸
大河北 一、三一二人 三〇五戸
大河南 一、五九〇人 三九五戸
霞町 四八〇人 一一五戸
出汐町 八三八人 一九六戸
計 五、六二〇人 一、三五四戸（住民現在数）

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

大手町 一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、立町、紙屋町 一丁目 二丁目、本通、袋町、中町、小町、国泰寺町 一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区は、猿楽町[さるがくちょう]・立町[たてまち]・細工町[さいくまち]・横町[よこまち]・鳥屋町[とりやちょう]・塩屋町[しおやちょう]・尾道町[おのみちちょう]・播磨屋町[はりまやちょう]・平田屋町[ひらたやちょう]・革屋町[かわやちょう]・研屋町[とぎやちょう]・東魚屋町[ひがしうおやちょう]・袋町[ふくろまち]・新川場町[しんせんばちょう]・下中町[しもなかんちょう]・中町[なかんちょう]・国泰寺町[こくたいじちょう]・西魚屋町[にしうおやちょう]・雑魚場町[ざこばちょう]・小町[こまち]・紙屋町[かみやちょう]・鉄砲屋町[てっぽうちょう]・大手町[おおてまち]一丁目～七丁目の範囲である。

この地区の細工町島病院付近の上空五七七メートル(20±)が原子爆弾の爆源であり、爆源直下の爆央から地区内でもっとも遠い距離は、国泰寺町の現鷹野橋[たかのばし]郵便局で、約一・四キロメートルである。

地区一帯は、旧藩時代からの商業地域で、大手町筋は銀行のビルも多く、南北を貫くビジネス・センターとして栄え、紙屋町・尾道町なども、大小の商店が軒をならべていた。

また電車軌道をはさんで、研屋町・革屋町・立町・播磨屋町・平田屋町・中町などは、ショッピングセンターとして常時賑わい、袋町・中町・小町・新川場町・雑魚場町は、国泰寺をはじめ、由緒深い名刹古寺も多く薨をならべ、明るい日ざしのなかに奥まった住宅が建ちならんでいて、城下町としてのおだやかな雰囲気を保つ、風格のある町筋であった。

国泰寺町には広島市役所があり、中町の広島県立高等女学校、雑魚場町の広島県立第一中学校など、市内有数の教育機関があった。

また、龐大な和漢の古書・郷土資料を所蔵していた広島市立浅野図書館(小町)があり、市役所北隣りには、旧藩士今中相親の下屋敷であった広島市公会堂があって、その庭園は、春和園と称する名園であった。

原子爆弾に際して、細工町はもりろん、まわりの猿楽町・鳥屋町も爆圧で一挙に壊滅した。

なお、この地区全体(被爆直後)の世帯数は六、四〇八世帯、人口約二三、〇〇〇人と推定されるが、被爆直前の町内会別に見ると、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
国泰寺町	661	1,200	5,800	(北)土井田仁平 (中)勝原平三郎 (南)村上清二
雑魚場町	520			田中勇
小町	398	240	969	香川三之助
立町	183	170	683	熊谷幸兵衛
猿楽町		260	1,055	岩崎永助
細工町		130	524	坂井典夫
横町		18	76	財満芳太郎
鳥屋町		80	325	中村静彦
塩屋町	70	70	300	佐々木昇
尾道町		300	1,225	柴田康一
播磨町		250	1,009	佐久間勇
平田屋町		260	1,055	杵木勝吉
革屋町		200	819	米山松次郎
研屋町		280	1,128	吉田幸一
新川場町	595	580	2,341	林栄太郎
紙屋町		220	901	高橋四郎
大手町一丁目		280	1,045	山本宥太郎
大手町二丁目		260	1,055	藤井徳兵衛
大手町三丁目		220		山田幸之助
大手町四丁目		230	432	渡部数太郎
大手町五丁目				島田省吾
大手町六丁目		280	797	倉本周誓

大手町七丁目		450		(東)野村寿仁 (西)林乙次郎
袋町		280	1,127	藤重彦一
鉄砲町	136	150	650	東三平
中町				

地区における主要建物・事業所は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広島市役所	国泰寺町	白神社	小町
市立浅野図書館	小町	玉昭院	小町
広島市公会堂	国泰寺町	戎禪寺	新川場町
控訴院	小町	妙慶院	新川場町
西警察署	大手町一丁目	正清院	新川場町
中電話局	下中町	等覚院	新川場町
広島郵便局本局	細工町	延命院	新川場町
産業奨励館	猿楽町	本照寺	新川場町
日本赤十字社広島支部	猿楽町	海雲寺	新川場町
県立第一中学	雑魚場町	源勝院	新川場町
県立高等女学校	中町	聖光寺	新川場町
大手町国民学校	大手町七丁目	金龍寺	新川場町
袋町国民学校	袋町	禪林寺	新川場町
安田銀行	平田屋町	広島日本基督教会	国泰寺町
日本銀行	袋町	崇徳教社	立町
芸備銀行	紙屋町	頼山陽記念館	袋町
住友銀行	紙屋町	中国配電株式会社	小町
三井銀行	革屋町	大林組	国泰寺町
帝国銀行	革屋町	千代田生命ビル	大手町一丁目
三和銀行	大手町	富国生命ビル	袋町
国泰寺	小町		

二、疎開状況

人員疎開

本通り商店街地域は、被害激甚で、不明の個所が多いが現存者の一人中山良一(中山楽器店主)の資料によれば、人員疎開は、各町とも総人口の約半数が疎開し、疎開前は各町一〇〇戸から二〇〇戸あったのが、疎開後は各町とも五〇戸ぐらいになっていたという。

大手町筋、及びその周囲の各町は、商店経営者が多かった関係上、店舗を空家同然にしておくことは事実上できなかったから、家族が交替で疎開先に帰るという方法をとっていた。すなわち、一応、当局の指示どおりの疎開態勢を整えていたとはいうものの、一家あげての完全疎開ではなく、自発的に行なう交替制疎開が実状であった。

研屋町・革屋町から下[しも]の新川場町へかけての地域一帯では、別に疎開先は指定せず、各家とも、親戚縁故をたよって、ほとんど田舎へ疎開した。

小町・国泰寺町・雑魚場町地域の、当時の町内会長が全員が被爆死したため判然としないが、生き残った人々の推定によると、初めの強制疎開実施のときには誰一人として、応ずる者がなかったという。昭和二十年四月、小型爆弾一〇個のうち二個が町内に投下されたが、このとき、国民義勇隊袋町大隊本部の中山良一計画部長は、ただちに被爆状況を師団司令部の参謀長に電話で報告し、憲兵の出動を求め、要所要所を通行止めにして、被爆者の処置にあたった。死者三〇数人は兵隊の手によって、袋町国民学校講堂に収容し、死体をムシロでおおった。これらの遺体は、一般市民の目につかぬよう夜になって、軍用トラックで、天満町の向西館(火葬場)に送られて茶毘に付せられた。負傷者のことについては不明であるが、広島市民に与えら衝撃は実に深いものがあつた。このときから疎開もはかどるようになり、急に、任意疎開のかたちで、まず老人を疎開させた家が多かった。

こうして、各町内南部方面では一二〇人・中部方面では約七〇人の疎開者を出した。昭和二十年五月ごろから、各町内会の約三分の一程度の疎開があり、被爆直後ごろは、約半数の疎開者があつたと推定される。

物資疎開

物資疎開は自発的に行なわれたようである。猿楽町にあつた食糧配給所では、朝、疎開地から荷車で運んできて販売し、夕方閉店すると、残品を荷車に積んで疎開地まで帰るという方法を毎日繰り返した。

町民は、親族や知己を求めて人員疎開はともかく、運送の不便になやみながらも物資疎開だけは大半の家庭が、大なり小なり実施した。

しかし、原子爆弾による家の中心人物の死亡などの理由で、戦後、これら疎開物品を引取ることについて、人間の誠実性をうたがうような悲惨なできごとが多く発生した。中には、広島には爆弾は落さないだろうという風説を信じ、疎開しなくて、全部焼失した家庭も相当あった。

医師の疎開禁止

医師は防衛要員として、地区外に疎開することはできなかった。ただし、県衛生部からの通達により、医師は薬品・医療機器などを、宮島～西条間の各町村に疎開させていた。

また、薬局の薬品は、軍の命令により、高田郡向原町に疎開させた。

さらに、各商店の食料品や衣料品なども、命令により町内会が責任をもって倉庫に保管し、空襲のあったつど、軍に対して在庫数を報告できるようにしていた。

学童疎開

大手町国民学校の生徒は、集団で、比婆郡山内北村、及び同高村方面へ疎開し、袋町国民学校は、双三郡田幸村その他の村へ疎開した。

また、生徒のなかには、親戚・知己のところへ縁故疎開した者も相当人数あった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年ごろ、市の指導によって警防団が結成され、各町内に、警防分団を設け、隣組組長を班長にして、指導員を設け、男は警備・防火および竹槍訓練を行ない、女は、バケツ送法の消火訓練や避難・救護の訓練を受けた。また、毎週訓練として、灯火管制が行なわれた。水槽の設置も強制されたが、いずれも気休め程度であった。

昭和二十年四月、国泰寺町六八番地の日本キリスト教団広島教会が、鷹野橋における交通の要路にあって便利なため、この場所が警防団本部となり、警防団員や警察官が常駐していた。

また袋町国民学校に、広島市国民義勇隊袋町大隊本部が設置された。

防空訓練

竹槍の訓練は、時代逆行として実施しない町もあった。これについて、師団司令部で問題になったことがあったが、そのかわり婦人会は、実際的な担架輸送訓練に励み、救護方法を習得し、さらに一層防火訓練に精を出した。

西部軍司令官の査察がおこなわれた際、義勇隊関係者をはじめ町内会役員一同、竹槍訓練不実行について、叱言があるものと覚悟していたが、実戦さながらの訓練ぶりに、司令官自身ビショ濡れになり、一同は賞讃の言葉を受けた。中でも本通りは、「この実状をフィルムに撮って各地区に観せよ。」とまで言われたという。

家屋疎開作業

家屋疎開作業については、本通り商店街を中心とする各町は、六日当日は動員指令がなかったので、他地区へ作業に出ていたものはなかった。むしろ町内の作業に、他地区からたくさんの人が勤労奉仕でやって来ていた。

猿楽町の家屋疎開は早く、十九年には全部完了した。電車通りから大手町通りまでの北側で約一〇〇戸であった。横町・細工町方面は、七月二十四日までに建物疎開を行なうよう指令があり、町の北側西警察署から島病院まで実施していた。国泰寺町では、公会堂が実施中で、学徒約五〇〇人が出動していた。小町（県立高等女学校南側）は、三〇〇メートルに亘って実施済みであったが、戸数は不明である。その他の町も計画どおり実施していたが、当時の責任者が死亡しているので、六日朝の状況は知ることができない。

家屋の取壊しには、たいてい軍隊があたり、その跡片づけは、隣組や学徒隊が交替でおこなった。

また、解体家屋の木材で、町内特定の場所のほか、各家庭の屋敷内や家屋内の地下に、少なくとも一か所は防空壕をつくった。

家庭用防空壕には、警報発令にあたって、老幼者を優先的に待避させ、当座の食糧・衣服なども保管していた。

四、避難経路及び避難先

避難計画

本通り商店街付近各町の避難先は、第一次避難所として西練兵場を指定した。袋町付近は、袋町国民学校と決めていた。

第二次避難先は、安佐郡可部町と指定し、ここの民家の倉庫を借用して、常に二〇〇人分の食糧品・薪炭・塩な

ど調味料、それに薬品と町籍簿の写本・文具などを保管して万に備えていた。

国泰寺町方面の各町は、最初に吉島方面へ避難し、そこから似ノ島へ行くよう指定されていた。しかし、町によっては、己斐を経由して、佐伯郡観音村へ行く計画もあったし、比治山へまず行くよう考えていた町もあった。

だが、実際原子爆弾にあったときは、各町で指定されていた避難経路を取ることができず、各自バラバラになり、郊外の実家とか、親戚・知人をたよって避難した。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種名称不明の陸軍が、崇徳教社に一〇〇人ぐらいた。なお、学校内にも軍隊が駐屯していたようである。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日の夜は、しばしばの警報発令で、警防団員や町内会の役員は、ほとんど眠らず、防衛態勢の万全につとめた。町民もまた、防空壕に入ったり出たりして、あわただしいひと夜をあかしたのであった。

六日朝

六日午前七時九分に警戒警報が発令され、三十一分に解除された。多くの者は、「B29の定期便」と呼んでいて、差し迫った感情はなく、町内は活気を取戻していた。職場に急ぐ人々、疎開作業に動員されて市内・近郊から現場に向う人々も多く、その中には中学校の動員学徒も続々と集結しつつあった。また、建物の中では事務をはじめた人もいた。家庭にあっては、主人や子供たちを送り出した主婦たちが、後かたづけをしている時でもあった。

敵機襲来 炸裂

東方の西条・呉方面から三二機の来襲が目撃されたし三回ぐらい旋回し、うち二機は西方海上方面へ、うち一機は落下傘ようの物を投下し、そのまま出雲方面へ遁走した。まもなく空中で異様な光が閃き、爆発した。それは、マグネシウムを焚いたような光とも、また、焼夷弾の爆発を大きくした光とも思われた。青白い光で、空が大変美しく感じられ、ものすごく大きい火の玉であり、まったく特殊な閃光であった。

七、被爆の惨状

一時の惨事

閃光を感じた一瞬、人々は爆風によって、瞬間的に吹きとばされていた。中には、赤ちゃんを抱いて戸外に立っていて、爆風で赤ちゃんだけが何処かへ吹き飛ばされた婦人もいた。

木造家屋は、一瞬にして全壊すると同時に火災を生じた。

鉄筋建ては、外郭を残して、窓ガラス・窓枠が吹飛び、壁も剥がれてメチャクチャとなり、内部は熱のためたちまち火災を起した。

阿鼻叫喚

爆風によ家屋の倒壊する騒音、高い煙突の倒壊する轟音、舞い上がる砂塵、コンクリート壁の落下する大きな音、これらの轟音をぬって、聞えてくる重傷者のうめき声、下敷きになって救助求める声、家族の名を尋ねあう叫び声などが一度に交錯してあがった。

熱線により、着衣が焼け、皮膚は火傷し、爆風で飛んできた木片や瓦などにより、血を流している兵隊や男たち、それに、若い女性も、子供を抱いた家庭の主婦も、全裸またはそれに近かった。なかには発狂した人もあり、大声で何かをわめきながら右往左往している。

人々は、大なり小なり、それぞれ火傷したり負傷したりして、迫りくる火災から逃がれるのに必死であった。したがって、避難する途中の路上で、家屋の下敷きになった人から助けを求められても、自分自身が手足をひきずっているため、助けようと思ってもどうにもならなかった。

なかには一度は助け出された人もいたが、そのまま放置され、ついには炎に吞まれ、後日、焼死体で運び出された人も多数あった。動き得た被爆者は皆トボトボと歩いて郊外へ避難していったが、満足な治療も受けられず、むきだしの血まみれ、埃まみれの姿であった。

各所に起った火災のため、逃げ場を失った被災者の群れが、火熱からのがれるため、川まで避難してきたものの、力尽きて、その場で死ぬる負傷者や、川の中に頭を突っこんだままの死体、あるいは川面に浮いて流れてゆく死体などで、川の水も見えないほどであった。殊に相生橋付近は、惨状をきわめており、水面は死体でおおわれた。

猿楽町・細工町付近各町から大手町四丁目あたりへかけては、炸裂中心地の至近範囲で、その当時、在住していた町民は全滅した。まったく徹底的な破壊であった。

吉村浩明(大手町七丁目)の資料によれば、閃光を感じ、異様に思うまもなく、大炸裂の音響と同時に、爆風によって、周辺一帯の家屋が倒壊した。屋外にいた者は高熱の直射を受け、爆風により吹きとばされて、大手や壁土の倒壊によって下敷きとなり、屋内の者も、家の下敷きとなり、救いを求める声で耳をふさがれたという。

ようやく脱出できた者も、各所からの火災の発生で、下敷きとなり救いを求める声にも、助ける暇がなく避難した。避難先は、とっさのことで何処とも知れず、とにかく安全な方へと、われ先をあらそって逃げた。途中、倒れた者も多かったが、それらの人々をも見捨てて避難するありさまであった。県立第一中学校のプールに避難した者は、火炎と、時々起きる竜巻のため、電柱や樹木が吹きあげられる光景に、生きた心地は全くなく、水中にもぐって、やっと難をのがれた。しかし、こうして一時はのがれた者も、多くは助からなかった。

市役所・中国配電株式会社(現在の中国電力株式会社)のビルが倒壊せずに残っただけで、木造可燃性の建物は、全部倒壊全焼した。人々は呆然自失、何らなすところを知らぬありさまであった。

建物の下敷きになった者は、ほとんど即死。かろうじて生き残った者も、負傷と、閃光のための火傷で、町内の約半数近くの者が、その日のうちに死亡したものとみられる。

火災は、時を移さず燃えひろがり、その日午後三時ごろまでに、ほとんどの木造建物は火炎につつまれ、夕方までには焼失した。

中には、市役所隣りの公会堂の庭園の池、県立第一中学校のグラウンドなどに一時的に避難した者もあったが、午後三時以降は、地区内で歩いている人間の姿は、その影さえも見るのが稀であった。

公会堂周辺

空地になっていた公会堂の池辺には、負傷しながらも、じっと翌朝まで、そこで過ごした被爆者が六、七〇人ばかりいたが、そのうち半数は死んでいた。池の中には幾つも死体があったが、中には自転車をかかえている死体や、財布が落ちたといつて必死に探していた人の死体、また一晚中いたわりあっていた市役所前の理髪店の夫婦などの死体があった(喜多輝子談)。

あとでわかったことであるが、本通りと大手町の交差点角の第一銀行・三和銀行建物内に、炸裂直下でありながら通行人が何人か逃げこんで死んでいた。そこまで逃げて来た人たちであつたらうか。

脱出

国泰寺町付近の者のうち、脱出できた者は、風向きを考えて、西の吉島町・南の千田町方面へ避難する者が多かった。また、一部の人たちは、ただ体一つで、人波のあとについて東の比治山方面か、または安全な郊外をめざしてのがれた者もあった。

顔面や肢体に閃光を受けた者は、たいてい皮膚がただれて、皮が剥げ、着衣は焼けていた、これら避難者は、道端に倒れて動けなくなったり、坐りこむ者も多かった。それを救うすべもなく、自分自身が、親戚の家かどこかにたどりつくのが精いっぱいであった。元安・本川などの川にのがれて火炎を避ける人もあった。川に逃げた人は、溺死者も多く、水面を蔽うて流れた。また、干潮になったとき、河原に横たわったまま、動けなくなっている人が多数あった。また、引火して木造部が燃えあがっている天満橋の上を、続々と避難者が渡っていった。

救護隊員の目撃

被爆後二日目、救援隊として市中に乗りこんで来た賀茂海軍衛生学校の生徒の一人西家明男海軍上等衛生兵は、爆心地付近の惨状について、次のように報告している。

「広島駅前に出て、電車軌道沿いに中心部の八丁堀方面に前進したが、死体の悪臭がはげしく、手拭を取り出して鼻に巻き、マスク代りにした。トラックで進む道々には、黒焦げの死体が放置され、防火用水槽に頭から突込んで死んでいる婦人、防空壕入口に重なっている黒焦げ死体、狭い溝の中に体を無理に入れて苦悶のはて死んだ人など、さまざまな死体が目につく。また脱線炎上した電車の乗降口には、白骨が折り重なっており、後の方には、腰が少し曲っただけで前の骨にもたれかかっているのか、頭まで立ったままの姿勢の白骨もある。

一面廃墟の中では、外郭だけになりながらも高く建っている福屋百貨店が、なんとなく力強く思われた。銀行が何かの大きな金庫がくすぶり続けており、『中に紙幣が焼けているのだが...』と思う。

護国神社付近に行けば、鳥居だけが黒くくすぶって残っており、境内の大本はほとんど跡かたもなく吹き飛ばされ、根もとから幹が一〇数メートルだけ残り、それがまっ二つに裂かれている。

歩いている人は放心状態で、何を求めているのやら、身内を探しているようでもあるし、暗い表情をしている。

小高くなった物陰のような所には、被爆者が数人ずつ身を寄せあって、じっとしている。

基町・大手町・猿楽町・細工町付近はもっともひどく、その悲惨さは目をおおうものばかりで、みんな即死である。口・鼻・耳から出血した黒焦げ死体は、一瞬に死んだものであろう。

護国神社付近の道ばたの家では、一家枕をならべて死んでいる家族が多く、中には、五、六歳くらいと二、三歳くらいの子供を間に、夫婦が寝たまま黒焦げになっているもの、あるいは両親と共に一糸まとわず、豚のように脹れあがり、口・鼻・耳から出血して黒焦げになっている十歳くらいの子供など、涙をさそうものばかりである。

相生橋東側一帯は、路上に豚か何かの丸焼きをころがしてあるように、人間の黒焦げがたたくさん倒れており、通行中の人が即死したものと思われる。道路やその周辺とあわせて、一面が死体の散乱で、まったくこの世のものとは考えられない状況である。

『これが広島市とは思われない。どうしても何処か外地の戦場に来ているようだ。』と、隊員の誰かがいう。

トラックの通行は困難で、相生橋も渡れそうもなく、右往左往する。」

六日当日、江田島幸の浦基地から急ぎ出動した陸軍船舶練習部第十教育部隊の柴田富雄上等兵は、爆心地から約八〇〇メートル付近(国泰寺町・大手町一帯)の惨状について、次のように記している。

「...昨日(六日)に引続き道路整理にとりかかる。昨日も随分整理したようだが、今こうして、あたりを見まわすと整理した範囲は僅かなものだ、飯をくったあとだけに、作業にも自然気合いがはいる。散乱する電柱・トタン・壁板・瓦などを道路の両側に運ぶ。道路の整理は急を要するし一同黙々と作業に従事する。午後は付近の死体を次々と一か所に集める。水道の水が流れて水溜りを作っている所には、いたいけなオカッパ頭の少女の死体が半分水にぬれながら横たわっている。直接熱線にあたらなかったのだろう比較的きれいだし幼い犠牲者を目にするたびに烈しい怒りを覚える、次々と片づけているうちに思わず愕然とするような死体にぶつかった。仰向けに倒れている妊婦の腹が人きく裂けて、露出した大小の腸がそこら一面に散らばり、然もその先には胎児が転がっているのだ。何というむごたらしい死体だろう。思わず釘づけされたように一同その場につつ立ったまま動こうともしない。この死体を収容し、黙々と、だが元気一杯に作業を進め、ある大きな建物の向う側に出た我々の目前に、実に驚くべき光景が展開された。烈しい爆風に吹っ飛ばされたのだろう。建物の一方に数百あるいはそれ以上もあるか...ユデ蛸のような裸体の死者が見上げるような高さに累々と折り重なっているのだ。その殆んどが満足な格好をしておらず硬直した体にふくれあがった唇は、南洋の土人を彷彿させるものがある。両手を広げた者、エビのように体を折り曲げた者、両足の間から頭がのぞき、人の頭をふみつけて逆立ちしたり、仰向けにあるいはうつ伏せになっている。これは現実の姿なのかと思わず頬をつねりたくなる、ホーッ！と、ため息のような声が一同の唇をついて出る。何ともすさまじい光景である。

この時、身内の者でも探すのか、そこそこに転がる死体をあらためていた三人連れの男が近づいて来た。山のような死体の前に立ち、何事が話しあっていたが、やがて端の方から次々と調べはじめた。しばらくすると、どうもこれらしいと言って道端に運び出したのは、年齢はおるか、男女の別さえつかないような全身赤黒く焼け爛れた死体である。まったく火傷の程度から格好から酷似したこの死体の群れの中に、求める死体があったとしても、見つけるのは不可能だと思っていた我々の予想は見事にくつがえされてしまった...。同時にたとえようなない感動の湧きあがるのを覚える...。元気がない足どりで担架をかついで行くその人達の後姿を見つめる一同の表情は複雑だ。作業を続けるうちに、ふと物陰にうごめく人の姿が見えた。行って見ると、髪をボウボウと振り乱し、ほんの申し訳程度のボロ布を身にまとった一人の女が坐っている。我々が近づくと、急に空を仰いで、空襲！！空襲だ！！空襲！！と叫ぶ。突然襲いかかった原子爆弾の炸裂に発狂したのであろうか？ 戦慄を覚えるような恐怖に怯えた顔が痛ましい。近くには手足をちじめ、頭からつつ込むような格好をした幼児の死体が黒焦げになって転がっている。

今しも電車軌道を横断しようとする、急にむせび泣くような呻き声が聞えてきた。半焼のまま立往生している電車の中をのぞいてみると、車掌服をつけた若い女性がうつ伏せに倒れている。車内は乱脈をきわめ、あたりには綿のようなものが散乱していて、負傷者が苦しみ反転するからであろう、その首に一樣にからみついている。ウーン、ウーンと蒼変し、苦痛にゆがむ顔！通りかかった一般の救護班に後事を託して再び作業を続ける。」とある。

また、八月八日に豊田郡木ノ江町(大崎上島)から、救援のため入市した在郷軍人編成の大崎部隊(隊長・佐々木秋夫予備少尉)約一〇〇人は、九日から二班に別れて死体の収容・焼却などをおこなったが、一班は広島県立第一中学校の校庭に一週間野宿して、約五〇体を収容し、校庭に穴を掘って焼却した。この一班の隊員横本数満の語るところによると、倒れたコンクリート塀の下から発見された死体は、冷凍のイカのように白っぽく、蒸し焼きになっていた。見れば、若い母親と赤ん坊で、赤ん坊は母親の乳房をくわえたままの姿で、まだ生きてるように思われた。

死体の焼却は、全隊員が代わるがわる従事したが、その臭気は続けて三体も焼けないほど鼻を突き、一体ずつ交替して焼いたという。

この大崎部隊の作業は、終戦の日まで続けられたが、この間、校庭に耕作されていた畑の跡に、青い芋の芽が出ているのを発見し、满目焦土の中で、人々は驚き以上の複雑な感じを受けたのであった。

爆心地付近の生存者

爆心地から半径五〇〇メートル前後の範囲内の地域は、原子爆弾の直撃によって、まったく一瞬に潰滅したが、それは人間の想像を絶する惨劇で、火災が終息すると、地上は粉雪のような白い灰で深く覆われていた。

この範囲内における被爆生存者はほとんど無いと思われていたが、その後の調査で、堅牢なビルの陰や地下室その他特殊な条件にいて奇蹟的に命拾いをした人が、現在(昭和四十五年)まで約六〇人ばかり確認されており、このうち二人が路上の被爆者である(広島大学原爆放射能医学研究所)というが、なお精査の余地があろう。

楠木の終焉

袋町の日本銀行広島支店の三階は、当時、財務局が使用していたが、六日午前八時前に登庁した同局の赤井了介経理統制課長は、自席について執務姿勢をとったとき被爆した。何が起きたのかと言っているうちに、南窓から物凄い爆風が入り出したので、急ぎ窓のシャッターを下した。しかし、自席の後部のシャッターは、その時に限り閉鎖不能、窓ガラスは壊れて強烈な爆風が入り、執務机の上を四歩ばかり跳ね飛ばされて、腰部をしたたか打った。瞬間、大きなガラスの破片が左ひじに突き刺さり、左手が機能を失った。スリッパをはいていたので、これではいけないと思い、靴を履こうと自席に向きなおったとき、爆風激しく二進も三進も動けず、窓際にしゃがんで市内の動静はどうかと、屋外を見守っていたところ、隣りの国泰寺境内にある天然記念物の有名な大楠木の一本が、根こそぎにされ、宙に飛び上ったのを目撃した。そのうち随所に火災が発生し、みるみるうちに火の海と化した。しばらくして残りの一本の楠の木に火焰が移り、折からの強風で三階にその火焰が移り、居たたまれなくなったという(原爆の記・発行責任者 伊達宗彰)。

人的・物的被害

地区の人的・物的被害状況は、爆心地に近いほど調査困難で、後日の調査にまたねばならないが、概略は五四ページに記載する一覧表のとおりである。

火災発生状況

爆心地近辺は瞬間的に炎上したと推量され、他の地域は随所から発火し、ほぼ北から南(市役所方面)へかけて延焼したように思われる。

国泰寺町付近の火災発生は、放射熱線による発火は少なく、多くは倒壊建物の炊事場の残火が原因であったという。雑魚場町付近もまた、炊事の残火によるものがほとんどである。

小町付近では、放射熱線によって電柱が燃えた。また、板塀が爆風に倒されたままで燃えはじめた。

木造家屋が爆心地に向いている側から発火したという証言がある。

更に西練兵場の防空壕が焼失したが、その状況から、放射熱線によって発火したものと判定されている、放射熱線が人間の肌に触れたとき、痛いという感覚ではなくて、何か鋭利な刃物で瞬間的に、斬られた感じであった。火災が発生すると、火炎が渦巻き状になって立ち、ついに旋風のようなすさまじい黒煙を空に噴きあげたと、目撃者が語っている。

町名	最初に発火した		延焼の状況	終息の時刻
	場所	時刻		
国泰寺町	不明 二〇か所位から発火したという。	八時三十分頃	四方から発火し、延焼した。	九日午前中まで。
雑魚場町	不明	八時二、三十分頃	発火により延焼による火災のほうが多いようであるが、詳細不明。	九日早朝まで。
小町	詳細不明	倒壊と同時頃	一部、熱線による自然発火もあったようである。延焼状況は不明。	八日夜中、ある所では九日朝まで。

降雨

地区の北部寄りと川筋以外では、ほとんど雨が降らなかったようである。しかし、火災中に降雨があって、火災が一層強くなったと語る被爆者もいて、細部にわたっては判然としない。

その夜

地区に比較的近い場所に避難した人が語るところによると、その夜、全地区が火の海で、各所に火炎が高く昇って、赤々と上空を焦がしていた。そして一晩中、パンパンと物の爆発する音が聴え、夜遅くなくても鎮火しそうな気配は無かった、

諸現象

放射能熱線を受けた部分と、受けなかった部分との区別が、はっきりと見分けられた。真上から熱線を受けた屋根瓦は溶解し、また、建物に使用された花崗岩をはじめ、石垣・庭石などが、皮をむくような状態で焼けているのが多数見受けられた。

屋内屋外を問わず、金属製・ガラス製のもの、例えば、硬貨・鉄骨・自転車・灰皿、その他一升瓶・花瓶などが溶解したり、著しく変形していた。

陶器類は原形のままのものもあったが、使用できないほど非常に脆くなっていた。

鉄製の電柱(物理的に組立てられたもので四角形をなす)は、一本残らず土台から倒されていたが、木製丸形の電柱の中には、一部分を除いて、そのまま立っているのが見られた。爆心付近の震柱で、完全なものは一本もなく、あるいは倒れ、あるいは傾き、あるいは中央部から折れ、燃焼して奇形を呈していた。また、爆心地至近の場所で、立ち続けている煙突があった。

国泰寺の樹齢四〇〇年という大楠木は、一本は根こそぎに倒れ、隣りの一本は上部が折れて落ち、下部は着火してその空洞から煙を噴いていた。また、高さ三メートル近い五輪塔の墓石の、中央円形部の下部に、煉瓦の破片が食いこんでいた、爆風で塔の上部が傾いた刹那、その隙間に、吹き飛ばされて来た煉瓦が挟まったものと思われる、後日、その不思議さのあまり、いたずらする者がいて、被爆現象としての価値を失った。

自動車・電車は吹き飛ばされて焼け、その残骸には、深く余熱がこもっていた。袋町のところで、脱線した電車が、炎上しているのを目撃した人(後かめよ)がいる。

また、相生橋の歩道が、約二メートルほど吹きあげられた、その瞬間を目撃した人もある。

鎮火後の地区内は、所々に鉄筋コンクリート建のビルディングが、外郭だけになってむなしく立っているだけで、地面は、焼け落ちた電線が、クモの巣のようにもつれ絡んでおり、死体や重傷者が到る所に横たわっていた。

島病院(細工町)付近の爆心直下では、焼けた電柱が鉛筆のシンのように尖って立っており、四角な防火用水槽(大手町一丁目・千代田生命北側)は、四方にはじけたように破壊され、その底もこなごなに砕けて抜けており、炸裂時の衝撃波の強烈な直撃を物語っていた。

助かった人々

助かるという事は奇蹟であったが、大手町通りも七丁目あたりでは、家屋内にいた人で、倒壊時に、タンスのそばにいたために、落下してきた木材や柱などが、タンスに支えられて負傷をせず命びろいした者、屋外にいた者でも、大きな材木や石垣などの陰になって、熱線も受けず、倒壊家屋も支えられて、下敷きにならなかった人がある。

新川場町の金龍寺山門だけが、風圧に堪え、火災をまぬがれ、厳然として立っており、不思議に思われた。

そのほか、次のような事実があった。

黒須さかみ - 屋内にいたが、そのまま畳に、伏せの姿勢をとった。物が落ちてきたが、それが支えとなって圧死をのがれた。

戸谷しげの - 屋内にいたが、タンスの横にいて、下敷きにならなかった。

後かめよ - 銀行の扉わきにおって、建物が頑丈なため、支えられ助かった。

白木ふさの - 裏の平家の家において、家は傾いたが、食卓の下にはいった。下敷きになったが、はい出ることができた。

福地弘 - 二階の安楽椅子にかけていて吹き飛ばされたが、唐紙(フスマ)に支えられて、火傷もなく助かった。ただし、ガラス傷が、多数体内に残った。

山村城造 - 家屋の倒壊とともに、吹きとばされたが、無傷で助かった。

炸裂時の被害

なお、炸裂時の被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
国泰寺町	70	30	-	-	50	43	7
雑魚場町	70	30	-	-	86	14	-

小町	78	22	-	-	72	23	5
立町	90	10	-	-	94	6	-
猿楽町	100	-	-	-	96	4	-
平田屋町	100	-	-	-	79	18	3
細工町	100	-	-	-	100	-	-
横町	100	-	-	-	100	-	-
鳥屋町	100	-	-	-	100	-	-
塩屋町	100	-	-	-	100	-	-
尾道町	100	-	-	-	100	-	-
播磨屋町	100	-	-	-	100	-	-
革屋町	100	-	-	-	87	13	-
研屋町	100	-	-	-	87	12	1
新川場町	76	24	-	-	75	10	15
大手町三丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町四丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町五丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町六丁目	100	-	-	-	100	-	-
紙屋町	100	-	-	-	90	10	-
大手町一丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町二丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町七丁目	90	10	-	-	81	19	-
袋町	100	-	-	-	90	10	-
鉄砲町	90	10	-	-	70	14	6
中町	90	10	-	-	70	20	10

元安川に避難して 藤田琴子(元広島市長・藤田若水婦人)

被爆したのは、大手町八丁目の川筋の妹の家(立川夫婦と八歳の女兒の三人家族)で、私は満六一歳でした。

五日の夜、弟加藤俊夫の嫁と一緒に、この立川の家に泊りました。翌朝六日、朝食をすませ、食卓をかこみ、しばらく雑談していましたが、妹が「八時です。モンペをつけましょう。」と、言い終るや否やおどろいたように「あれ、なんでしょう。」と、見つめるようにして言います。不思議に思いながら座敷の方を見ると、四斗樽ぐらいの高さ丸さに、赤青黄紫の火が恐ろしく燃えているのでした。

直撃弾を受けたと思い、ただちに伏しました。そのまま失心していました。その間の町間は不明です。日が覚めたときは真暗闇、体を起そうとしても自由ならず、身動きできません。「誰かおらないか。」と呼んでも答えがありません。「誰か来てくれ、来てくれ。」と呼びつづけていると、弟嫁が来て「起してあげましょう。」と、言って起こそうとするのですが、どうにもなりません。妹婿が「私が起しましょう。」と、申して、やっと起してくれました。

私にも、私の周囲にも大きなものが落ちかかっていた。私は、爆風で吹き飛ばされて、炊事場の方へたおれていたのです。

婿と弟嫁の肩にすがり、死人同様、亡霊の姿でやっと部屋にもどりました。

弟嫁も「私は姉さんの側にいましたのに、どこへ飛んでいたのでしょうか。」と、申します。幼い子ども、どこからか出て来ましたが「おまえはどこにいたのか。」と、皆にたずねられるありさまです。

伏せた私だけ、食卓の側をはなれていませんでしたが、食卓もどこかへ飛んでしまって、もうそこにはありませんでした。

浴衣に細紐をしめて、何一つもたず、立川の家族三人と、私と弟嫁五人で門を出て見ると、男や女、子どももまじってたくさん人間が右往左往して、親を呼び、子を探しもとめる狂乱の巷でした。

町内の世話をしている元気な若い大の男が気が狂い、大騒ぎしていました。どこかで、子どもの泣き声がすとか言うので、探しますと、土手の上の一軒家で、ただ一人の子どもが、何かの下敷きになっていました。町内の五、六人の者が、ともかく助け出しましたが、親たちは見つかりませんでした。

川のそばに、私達が避難していると、黒い雨が降り出しました。上空を偵察機が飛ぶやらして、生きた心地はしませんでした。

川向うの水主町の方は、どこもかしこも火の海でした。明治橋は、逃げてゆく人々でいっぱいでしたが、私たちは、逃れようもないとあきらめた気持ちで、崖下の川にうずくまっていたところ、颯風が起り、トタン板などがビュービュー飛んで来るのです。

そのとき、崖の上の方から「立川さん、このふとんをかぶっていなされ。」と、誰かが二枚なげてくれましたので、頭からそれをかぶって難をのがれることができました。

川水がひいて来たとき、私が川下の方へ流されますので、弟嫁が「流されてはいけません。」と、力の限り私を引きもどしました。しかし、私は、自分が流されていることに気づいていませんでした。

嫁の頭髮が燃えていたので、川水で消してやりました。

夕方になり、皆で明治橋のたもとで休んでいると、誰かが「立川さん、壕へおいでなさい。」と、案内してくれ、皆一緒に行きましたが、そこにいた多くの人々は皆苦悶していました。妹もいつ息が絶えるかと思うほど苦しみました。

翌朝、暗いうちから、防空壕の上に出ていると、高須の郵便局長が「藤田さん、ここにおいででしたか。外山の奥さんが負傷で危篤です。」と知らせてくれました。外山淑子は私の妹です。すぐ壕の中へ降りて行って、このことを話し、炎天下、ハダシで幾つかの橋をわたり、明治橋から高須まで一休みもせずに帰りました。

淑子は高須町の人々と一緒に、勤労奉仕に出ていたのですが、そこで被爆したのです。重傷で、私は二時間ばかり介抱をしましたが、どうすることもできず、ついに死去しました。かわいそうなことをしました。

町の人々と一緒に野原で茶毘にふしました。この時の薪は、私方旧宅の強制疎開のおり、高須へ運んでいたのを使ったのです。このようなことに解体材を使おうとは夢にも思わなかったことでした。愁傷胸に迫ります。淑子が死亡しましたとき、草津海蔵寺の英巖和尚(現在国泰寺方丈)が、早速来てくださってお経をあげ、お弔いくださいました。

その後二日ばかりしたころ、私も微熱が出て、気分がすぐれませんので、息子や孫、久保三郎の嫁など、皆一緒に朝鮮の人の荷馬車をやとって、佐伯郡砂谷村へ行きました。早速、砂谷村の診療所へ入院すると、死斑が出ているということでした。すぐO型の血液を輸血しましたが口中が痛く、歯が痛み難儀しました。歯科で三本も抜いたのです。次に、インフルエンザにかかり、注射したのですが、吸収せず、二日目に破れて膿がたくさん出ました。あとヘガーズをまいて、毎日取替え治療をしたのですが、容易になおりません。四か月ぐらい入院していましたが、退院後一か月ばかり医者にかかったようなことです。

二十年十二月末まで、入院していたわけですが、もう絶望的な容体だったのでしょうか、私が生きて退院するなど考えている者は一人もいず、私の死骸を乗せる担架を、村の人が造り備えていました。

幸い、私は全快して退院し、親類で二十一年元旦を迎えました。

三月に入り、市内の高須に家をもとめて帰りましたが、半月ばかり過ぎたころ、ある夜、九時ごろ、床につき電灯を消して眠りにつくと、突然ガッと咽喉へたくさん何かを充滿したのです。両手に受け、電灯をつきさせて見ると、血膿がいっぱい出ていました。

夜の明けるのを待って、広島赤十字病院へ行き診察を受けると、ガンだということでした。

しかし、当時の広島赤十字病院では、それを取りはからうことができず、岡山へ紹介するということでした。

帰ってから、庚午の高橋百太郎先生に、再診察していただいたところ、先生は胃を洗滌され、ガンではないとのことでありましたから、三か月ばかり通院して、やっと全快しました。ところが、私を診察されてから一年もたたぬうち、先生の方がガンで亡くなったのです。先生も原爆を受けておられました。

その後、九年ばかりは何ごこともなく過しましたが、また、鼻汁が咽喉にくんだり、気持ち悪く、市民病院や広島赤十字病院へ通いました。老身には大変なことですので、古江の医者へ二か月あまり毎日通いましたが、このままではガンになる。手術しましょうかと云われるのです。

そのとき股野先生の診察を受けるようすすめる人があって診察を受けると、手術の必要はない。ガンにはならぬと申され、やっと安堵したようなことです。

原爆症はいろいろな病気にあらわれるようで、今でも歯が悪く通院治療をしています。さいわい内臓が丈夫で、現在、数え年八二歳です。

娘婿久保三郎は、八丁堀の砂原格郎から出て十分ぐらい歩いて被爆し、死去したのですが、行方不明のまま遺骨も拾うことができませんでした。

娘・孫・弟・妹・弟嫁など、近親者のうち一〇余人が、次々と原爆症で亡くなりました。

息子夫婦も、私をたずねて、立川の家に来ていましたが、九死に一生を得て、現在も達者でいます。 合掌

八、被爆後の混乱と応急処置

救援作業

爆心地付近の救援状況は不明であるが、救援する何ものも無かったと思われる。

国泰寺町一帯は全焼し、負傷者は、市役所や、三階以外が焼失をまぬがれた日本銀行広島支店に避難したり、収容されたりした。

しかし、市役所も、外郭だけで、内部はガランドウに焼け落ちており、物の残骸と灰が、うず高く散乱堆積しているありさまで、手当ての薬剤もなく、収容とは名のみであった。食事の炊出しも全般には行きわたらなかった。中には芸備線・呉線の沿線地域や五日市町方面に、たよりを求めて、さらに避難していく者があり、逆に、郊外にいて被災をまぬがれた家族の者や親戚の者、または知人などが探索に来て、臨時収容所は混乱をきわめた。

救援隊来る

なお、広島赤十字病院前、広島文理科大学前には、宇品から暁部隊が来援して救護活動をおこなった。ここに逃げこんだ者も多く、歩行不能の被爆者を更に電鉄本社まで運び、引続き宇品の収容所へ運んだ。多くの負傷者は、宇品からさらに似島の収容所へ送られた。

賀茂郡内(河内町など)から、食糧をもって救援隊が来た。この救援隊は、特に棺を作って持ってきていた。

二日目、郡部から看護婦を派遣して来たところ(町不明)があり、脱脂綿とムスビを、広島赤十字病院と市役所にとどけた。市役所前や赤十字病院前では、被爆当日から乾パンの配給がおこなわれた。

応急救護所

爆心地付近には、暁部隊の一時的な負傷者集結場所を除いては、応急救護所も、おそらく設置されなかったであろう。

市役所の救護所には、九日に、鳥取赤十字病院の救護班が来て、ようやく治療らしい治療がはじめられた。

このように、本格的救援は九日の正午ごろからで、県外や郡部から自動車やトラックで、腕章をつけた救護員が多数来援し、治療を行ったり、にぎりめしや乾パンを配給した。

市立浅野図書館(現在は解体されて中電新館建設)は、死体収容所であるとともに避難者が多数おり、にぎりめしなどの配給所として、係員が数人いたが、死体から出たリンパ液が、ヌルヌルして歩きにくいほど床に流れていた。

また、比治山公園方面へ避難した人は、公園の救護所で赤チンの手当てを受けた。

道路啓開

爆心地付近の道路啓開作業については、詳細は不明であるが、暁部隊などの軍隊と来援警防団の手によっておこなわれたようである。

その他の各町でも判然としないのであるが、電車線路や主要道路は、十日ごろには、だいたい啓開せられ、トラックなども通ることができるようになった。

死体の収容・火葬・埋葬

爆心地付近の死亡者は、すべて軍隊や警防団によって収容され、火葬にされた。しかし、ほとんど焼きつくされていたから、火葬する死体もあまり無かった。完全に焼けて白骨だけになったものも、その白骨が掌に乗るぐらいしか残っていなかったと、暁部隊の救援隊員やその他の者が語っている。

市役所や広島赤十字病院に収容された負傷者には、各人に住所氏名をたずねて掲示し、死者は氏名が判明しているのは明記した。氏名不詳の者には、性別・年令・着衣などを書きあらわして掲示し、探索者のために便宜をはかるようにしたが、多人数のため処理に困難をきわめた。腐敗した死体を所々にあつめて火葬にし、遺骨は市役所などに、とりあえず保管した。火葬は七日ごろから十日ごろまで続けて行なわれ、小町一番地国泰寺の墓地内に仮埋葬したのも多い。

広島赤十字病院に収容中の者で、血便が出て瀕死の者があったが、伝染病患者として扱い、夕方までに処理(隔離)した。後になって、伝染病でなく、被爆による障害だということがわかった。死体の処理をした者の中には、一体につき十円で請負った者もあった。

目撃者の話によれば、トラックで運んだ死体(二〇体くらい)を、ひとまとめにして、安佐郡緑井の河原で火葬にし、其処に穴を掘って埋葬したということである。

県立第一中学校グラウンド内で、親戚の者の骨拾いをした人もあるが、ここでも火葬がおこなわれた。

爆心地付近の各町は、人間も焼きつくされ、死体があまり見当らなかつたといわれるが、本通り付近の死体は、平田屋町と播磨屋町との境の道路上に、暁部隊が集めて焼いた。

本通り商店街の焼跡片づけ(火葬後一年)の際、火葬場所を掘りかえしたところ、完全に焼けていない死体がい

つかあり、まだ骨に肉片がついていたのもあった。堆積した瓦礫をはぐっては、遺骨をかき集め、近くの寺に安置して供養した。

大手町七丁目あたりでは、火葬のため、トタン板を下に敷き、焼跡の残材を積み、その上に死体をならべ、石油をかけて焼いたが、読経するようなことはまれであったし、その臭気が身に迫った。遺骨は、市役所や比治山多聞院などに安置したが、生存者が慰霊祭をするような余裕はまだ持てなかった。

被爆の後、数日間は、死体が所々方々に散乱しており、臭気が激しかった。

市の中央部の電車・電柱は焼けてしまい交通機関は途絶し、停電のため、夜は暗黒の廃墟であった。焼跡の整理は進まず、橋梁の破壊も多く、生存者は呻きたがらほそぼそと焼残りの防空壕で命をつないだ。

一望千里というか、ぎっしりと建ちならんでいた家々は、すべて焼失し、広島市をかこむ三方の山々が赤茶色に焦げた姿で見えていた。

町内会の機能

爆心地付近は、各町内会とも壊滅していたため、機能はなく、対策もできなかった。

猿楽町町内会は、町内会長死亡のあと、川本福一が就任し、相生橋東詰めでずっと事務をとった。

小町・雑魚場町は、全壊全焼のため、罹災後、防空壕などにいた者が話しあいの上、小町の新田行太を世話役に決定し、配給物資など対外交渉を依頼した。初め住民は二、三人であったが、年末には二、三〇人になった。また、雑魚場町の田村勇町内会長が即死したので、新田行太が小町と兼ねて町内会の世話をした。

国泰寺町身内会長が即死したので、福地弘(歯科医)が町内の世話をおこない、死亡診断所作成のための証明書、貯金局から貯金の払戻し、身分証明書など、市役所の代理事務をとった。後には物資配給の世話もおこなうようになった。播磨屋町の佐久間勇町内会長も死亡したので、被爆時に牛田方面に出ている負傷しながらも助かった中山良一副会長が、全身血みどろのまま、三日目(八日)に帰りつき、産業奨励館(現在原爆ドーム)横に外郭だけ残っていた鉄筋コンクリート建の一室(日本赤十字社広島支所事務所)に入って罹災者の世話をした。罹災証明書や死体検案書の作成をはじめ、呉海軍がトラック一台に積んで来た救恤品の自由配布などをした。救恤品は、乾パン・肉と野菜の缶詰・ゾウリ・チリ紙であったが、罹災者のほとんどは、まずチリ紙を取り、つぎに、乾パン・缶詰の順で、最後がゾウリを取った。また、死体をさがす縁故者の道案内や、焼残った多数の金庫の保護、死体や負傷者の処置をおこなった。

なお、播磨屋町の町内会名簿は疎開してあって、戦火からまぬがれたので、中山良一が各自の疎開先に集合をかけ、二十年九月十五日、生存していた人々が安佐郡八木村に疎開中の林正夫宅に集り、第一回播磨屋町町内会を開いた。

九、被爆後の生活状況

復帰の状況

爆心地付近一帯では、二十年十月ごろまで、猿楽町の川本福一の仮設小屋が一戸あるだけで、満目荒涼たる焦土であった。これも木造の瓦葺(材木も瓦もみな拾い集めたもの)のバラック建てで、大工の手もなく、自力で建てたのであった。しかも、相生橋付近では、郡部からの探索者などを目当てに追ハギが出没したりして治安は乱れ、不安な日々であった。夜、暴漢におそわれた通行人を助けて連れかえり、泊めて帰らせたこともたびたびであったという。

国泰寺町付近では、六日当日から引続き定住している者もいたが、半壊の床の低い防空壕に非衛生的な雑居生活をしてきた。十月末ごろ、焼トタン板を拾い集めて三坪半ぐらいのバラックを建てた者もあった。

昭和二十一年初めごろから、住宅営団の組立式バラック(三、五〇〇円四畳半二間)が数か所に建てられた。バラック居住者は、給料取り・大工・日雇など、それぞれの生活を持っていたが、配給物だけでは生きてゆけず、闇物資の買出しに苦心した。また、焼跡を整理してわずかながら、野菜や麦・芋などの作物をつくって、ようやく飢えをしのをいだ。各町とも、この一帯の居住者は四人ないし五人程度であった。バラック小屋には電灯がたく、ロウソクの明りで板の間にゴロリと寝た。

本通り筋の復興はごく遅く、何とか住居らしい少数の家が建てられたのは、翌年になってからで、勿論、バラック建てであった。のちに、住宅金融公庫から、その当時規格になかった店舗住宅の特別設計建築により、六畳二間、店舗一間の住宅を二〇戸建てることができた。これが本通り筋の復興の基礎となった。

衛生環境

焦土にはハエがたくさん発生した。焼死者の残りが、各所に土や石をかぶったままで放置されていたため、その死体にハエがわき、ゴマをまいたようにたかってなめ荒らした。人間が近寄るとブーンと、うたって飛び立つが、また、すぐ寄ってきた。ハエは、八月末頃から発生し、九月中ごろまでが最も多く、歩行中の顔にあたり、電車の天井裏やガラス窓に一面にいた。口にとびこむので食事もろくろくできないありさまであった。

当時、駆除する薬もなく、ただ一刻も早く死体や汚物を取除く方法しかなかったが、九月ごろ進駐軍がきて、空中からDDTを散布してからようやく少なくなった。

生活物資

田舎に避難した人々は、行方不明となった家族を探して、毎日焼跡のあちらこちらを尋ねあてをたずねた。また、自宅の焼跡にきては、防空壕の中に貯蔵していた物資を探して掘り出したりする人もいた。

八月中は、どこへ行くにもほとんど徒歩で行かねばならなかった。電車が走り出したのは、九月の十四日か十五日ごろからであったから、罹災証明書や通帳など、戸籍関係に関して、仮設の市役所(比治山公園の頼山陽文徳殿)へ、たびたび歩いて往復した。

ロウソク生活

十月ごろから、配給のロウソクとカンテラによって夜を過したが、その配給も少なかった。一本のロウソクを大切に使い、必要な時だけ使うと、あとは暗やみ生活をした。どこからかパラピンろうを求めてきて、芯を作り、自家用ロウソクで不足をおぎなう者もいた。

電灯がついたのは、十月末か十一月ごろであった。裸電線を拾ってきて、つなぎあわせ、竹を柱にして点灯したものであるが、それでも目にしむように明るかった。

疎開世帯・疎開児童の復帰

徹底的な壊滅状態であったから、各町とも、疎開世帯が復帰するにも悪条件ばかりで、見通しもたたず、随分遅れた。

詳しい事は不明だが、早かったのは、二十年十月に新田行太、同年十二月に後かめよ、二十一年二月に田中稔純、同年三月に戸谷しげの、同年七月に福地弘、二十三年八月に四竈一郎、同年十二月に田辺きぬ子などがあげられる。

疎開児童のことは、第四巻第三章に記述してあるが、各自の避難先と連絡をとって、当分の間、田舎の学校に仮在学としたものが多かった。

闇市場の出現

商業の中心地区を抱えていたこの地区も、被災後はただ荒涼たる焦土で、人影もまれとなってしまった。物資集散の闇市場が、広島駅前と己斐と二か所にできて、多数の人々を集めていたが、本通り筋の生き残った人々は、正常な商業ができる日は、いつになるであろうかと思うにつけても、日本の将来さえどうなるか判らない生活で、心は重く沈むばかりであった。

続いて、鷹野橋・宇品町十五丁目・住吉橋にも自由市場ができて、日用品・マッチ・地下足袋・手袋・作業着など売っていたが、罹災者はそれらを買うこともできず、不自由に堪え我慢した者も多い。タケノコ生活で、終りには交換物資の手持ちもなくなり、ただジツとして飢餓を凌いだ。配給の手巻煙草は、作り方を各人それぞれが研究した。闇の手巻煙草も入手困難で、一本を三分の一ぐらいに切って吸ったが、それも無い日のほうが多かった。

進駐軍

このようなみじめな敗戦下の焼野原の中へ、時折り、占領軍がジープで入って来た。ある場所に来るとジープを停め、四、五人の兵隊が降りて来たが、焼跡にひそかに暮らしている被災者には全く無関心で、我が家の庭園を散歩するような姿で、何かをあさっているのが見られた。ある時は、日本進駐の土産(記念)にするのか、瓦礫の下から一個の頭骸骨を見つけたして持ち帰った。これを遠くから見ながら、被爆者らは腹が煮えるようにくやしがあったが、どうする手だても無かった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨と、十月八日の大豪雨によって残っていた市内の橋梁が、更に流失、破壊され、どうにか動きのとれていた交通が再び途絶し、軌道にのりかけていた復興作業は全く中断された。

大手町七丁目付近では、地上三〇センチメートル以上の浸水で、防空壕生活者たちが水浸しとなって、市外へと移っていった。

国泰寺町付近や、雑魚場町方面は少し浸水した程度で、それほどの水害ではなかったが、台風で焼トタン屋根は吹きとばされ、掘立小屋は倒れかけてしまい、精神的な不安打撃は大きいものがあった。中には、生き残ったことを悔やむ人さえあった。

経済活動

経済活動は、金融統制令前後から幾分活発になった。日用品・衣料品・八百屋などが、乏しいながらも店を設けるようにたった。

住宅の状況

国泰寺町地区では、二十年十月下旬ごろから、拾い集めの焼トタンでバラックが建てられた。新しい建築資材は郊外から求めるほかなかったが、材料費は高く、その上入手困難であり、大工もいないという状況であったから、資金や手づるのある者は市外で材料を切込み、大工と共に運送して建築した。

二十一年二月以降になって、組立式家屋(四、五～六畳)の配給に当籤して、自分で組立てて使用する者もいた。この頃、大手町の普門寺が建築されたが、正式の土壁を使用した建物は、復興へのたくましい息吹きが感じられた。

罹災後、約一か年たって、市役所は内部の応急修理をして使用されるようになったが、まだ住宅は、国泰寺町に五戸から七戸ぐらい、雑魚場町に六戸から八戸、小町に約三戸ぐらいしかなかった。国泰寺町付近は全滅家庭が一〇数戸もあるという甚大な被災地区で、復興も他の町よりは日数を要した。

ある罹災者は、建築中に金融措置令が出て、資金を制限されたため、生命保険加入によって第二封鎖預金の支払いを受け、これを建築資金にあてた。

なお、中国配電株式会社は、焼けた内部を一応修理して、僅かな人数ながら業務を再開した。

十一、その他

爆心地

この地区は、その西北端部に爆心地細工町をも包含する徹底的な被災地区である。

当時の放射熱線による焼痕が、住友銀行広島支店の入口階段に、人影をつけて残っており、西向寺その他幾多の寺院の墓石にも残っている。元安河畔の産業奨励館は煉瓦建てであったが、爆源直下、無残な姿となり果て、原子爆弾の威力を如実に物語っている。後に「原爆ドーム」と呼ばれ、平和祈念の象徴となった。

相生橋は、橋床が吹きあげられ、欄干が全部、横倒しになった。

主要建物

爆心直下地域の主要建物としては、島病院を中心にして、東隣りに西警察署があった。島病院の前を南北に通じている細工町通りをはさんで、西側に広島郵便局、その北隣りに西向寺・西蓮寺・産業奨励館が並立し、また、相生橋東詰南側の元商工会議所跡に、日本赤十字社広島支部があったが、いずれも壊滅した。

爆心地の東方にあたる電車線路(紙屋町交差点から宇品に通ずる線)の東側には、芸備銀行(現在の広島銀行)、住友銀行広島支店・明治生命ビル・富国生命ビル・日本銀行広島支店(三階のみ焼ける)・中国配電株式会社などの鉄筋コンクリート建築物がならんでいたが、いずれも大破全焼し外郭だけが残り、屋内は飛散物と灰で埋まった。相生橋東詰北側に商工会議所が半壊(内部全焼)のまま残っていた。

このビルに、二十年十二月、中国人集団がきて、青天白日旗を掲げていたが、約四か月後に引きあげ、次いで、二十一年四月ごろ、朝鮮人集団がきて、朝鮮の国旗を掲げ、同年末ごろまで占拠していた。双方とも、戦勝国を誇り、占領軍的感覚を持った集団であった。

頼山陽記念館

袋町の史蹟・頼山陽記念館は、(昭和十年十二月竣工)山陽の旧住居のほか、遺物陳列室・図書室・講堂などあって、戦前は各種団体の集会に利用され、市民に親しまれていたが、これも全壊全焼した。昭和三十二年に復旧したが、昔からの遺物としては、井ゲタが御影石造の井戸がある。なお、庭内にあった古いクロガネモチの大木(直径約五〇センチメートル)は、被爆により根株だけを残して焼けたが、五年目の昭和二十五年に、不思議にもその株が芽を吹き、現在、約四メートルの高さに茂っている(藤井五平談)。

アメリカ兵の捕虜

また、被爆直後、死体処理前に、相生橋東詰め北側の電柱の下に、アメリカ兵の捕虜が死んでいたが、焦土に復帰した川本福一が、本人が着ていた青いシャツと、片方だけの靴を拾い、そのアメリカ兵の遺骨と一緒に、元日本赤十字社広島支部跡に、他の爆死者の遺骨とともに埋め、土盛りして墓標建てた。その後二か年間、川本福一が線

香を供えて慰霊していたが、本願寺別院からの要請で、遺骨を掘り出し、他の遺骨と共にドラム缶二本に収納して、平和公園内の戦災者供養塔に納骨した。

元広島県産業奨励館「原爆ドーム」の概要

原爆ドーム

戦後、俗に原爆ドームと呼ばれて、昭和四十二年八月五日、世界に訴える平和祈念の象徴として、永久保存工事が完了した元広島県産業奨励館は、大正初頭、広島市猿楽町を建設場所に定め、県内各地の物産陳列館として開館した。概要は次のとおりである。

概要

一、設計・工事監督

ヤソ・レツル建築事務所

ヤソ・レツル(Jan LEtzEl)は、チェコ人(一八八〇年四月九日チェコ東北部の町ナホトに生まる・藤田文子調査)で、日本で幾多の優秀な建築物を遺した建築家である。

二、様式 セセッション様式

三、構造 鉄骨入り煉瓦および石造り

四、起工 大正三年一月初旬

竣工 大正四年四月五日

開館 大正四年八月五日

被爆前日が、満三十年目であった。

事業

五、事業館内には、県下の物産を展示して、即売もおこなった。

大正五年、広島県美術協会が設立されてから、例年、広島県美術展覧会が此所で開催され、その他の文化的催し物もあいついで開かれた。

広島市主催の博覧会・共進会においては、多くここが第二会場などにあてられた。

改称

六、大正十年一月広島県商品陳列所と改称。

七、昭和八年十一月広島県産業奨励館と改称。

時局の進展につれて、日満貿易の特別展なども開催され、産業奨励館の色彩を深めたが、戦時体制がきびしくなっからは館内の展示も縮小され、中国四国土木出張所や広島県木材統制株式会社など、官公庁や統制組合の事務所かなりの部分が使用されるようになった。

被爆

八、昭和二十年八月六日原子爆弾炸裂の、ほとんど直下で被爆し、大破全焼、本屋中心部だけの残骸をとどめるばかりとなった。

当時、館内にいて被爆した者はすべて即死した。その数三〇人ばかりと伝えている。

保存決議

九、昭和四十一年七月十一日広島市議会が原爆ドーム保存を決議した。

募金達成

広島市長浜井信三は、「ひとりでも多くの人々の協力によって残すことにしたほうが、より大きな意義がある。」と考えて、全国募金に踏切り、みずから東京都数寄屋橋公園に立ち、街頭募金を呼びかけて多大な反響を全国に与えた。

募金額は、六、八三〇万七、二一二円(昭和四十三年六月二十五日締切当時)に達した。この使途内訳(原爆ドーム保存募金収支報告書)は

件名	金額	備考
原爆ドーム補強工事費	五一、五〇〇、〇〇〇円	当初 四〇、五〇〇、〇〇〇円 追加 一一、〇〇〇、〇〇〇円
原爆ドーム周辺整備工事費	一三、〇〇〇、〇〇〇円	

となっており、寄金残額の使途については、原爆ドーム保存協議会と市が協議のうえ決定することになった。

原爆ドーム保存に対しては、日本国内のみならず、アメリカ(主として広島県人会)ソ連・(各平和委員会)フランス・インド・イギリスなどの団体や個人から、多くの熱烈な至情が寄せられ、当初の募金目標額を超えるほどになった。

(その他の寄附行為)

件名	件数	数量	備考
工事特許権	一件		コンクリート部材または構造物の亀裂補強法
樹脂	三件	三・ートン	工食用接着液

技術委員会

補強工事は清水建設株式会社が請負って進めたが、広島市と原爆ドーム保存技術委員会・施工業者の三者による強力な体制によっておこなわれた。同技術委員会は工事技術の指導的役割をはたした組織であって、メンバーは次のとおりである。

イ 広島大学工学部

佐藤重夫・椋代仁朗・柴晴夫の三教授

ロ 建設省建築研究所

藤井正一第二研究部長・今泉勝吉主任研究員

ハ 建設業界

(株)大林組青山幹主任研究員・鹿島建設(株)仁平久信第二研究室長・大成建設(株)鶴田康彦第八研究室長

・(株)竹中工務店入江謙二主任研究員・戸田建設(株)渡辺敬三技術部長・(株)藤田組辺見義男材料試験室主任

ニ 接着剤製造業者

シェル化学製品販売(株)館川裕合成樹脂部長・チバ製品(株)古川等プラスチック部技術第一課長

ホ 広島市

西村敏男助役・長松太郎建設局長・松本正夫営繕課長

以上一六人

賛助の詩

募金協力者からの手紙や感想文が多数寄せられたなかに、次のような少年の詩もあった。

平和の灯[あかり]

呉市立和庄中学校 三年 浅沼辰男

ぼくは立つ

ドームの前に

そして聞かされる

あの悲しい出来事を

ドームが写る

川の水面に

ドームははっきりと写っている

当時を物語るかのように

ドームは流れる

戦争なんて流れ去れ

と言うかのように

ドームはゆれる

平和を叫ぶように

ドームは雨にぬれる

そして泣く

死んで行った人を思い出して

ドームに光がさしこむ

平和の手がさし出されたように

ドームは嵐と戦う
そしてドームはくずれようとしている
世界に危機が迫っていると言うかのように
ドームは訴える
ドームに早く平和の灯をと

ぼくは欲する
平和の灯を
そして約束する
ドームに
永久に平和の灯を消さぬように

第三節 中島地区...77

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

中島町、加古町、住吉町、羽衣町（吉島町の一部を含む）

町内会別要目

この地区の範囲は、天神町[てんじんまち]・材木町[ざいもくちょう]・木挽町[こびきちょう]・元柳町[もとやなぎちょう]・中島本町[なかじまほんまち]・中島新町[なかじましんまち]・水主町[かこまち]・吉島羽衣町[よしじまはごろもちょう]・吉島町[よしじまちょう]とし、爆心地からの至近距離は、中島本町河畔(平和公園北詰で、相生橋の南たもと)で約一〇〇メートル、もっとも遠い距離は、吉島町の刑務所南側で約二・四キロメートルである。

本川と元安川にはさまれた地区でデルタの面であり、現在、中島本町・材木町・元柳町、および天神町・中島新町の一部は、原爆慰霊碑(正式には、広島都市記念碑という)・原爆犠牲者供養塔などがある平和記念公園として生まれかわり、平和記念施設として広島平和記念館・広島平和記念資料館(俗に原爆資料館とも呼ぶ)・広島市公会堂がある。

中島本町は、幕末から明治・大正初期へかけて、市内繁華街・歓楽街の中心で、中島本町通り商店街には、大きな店舗がならんでいた。北側に勤商場、南側に集産場があり、本通り裏から慈仙寺の鼻へかけての一带は、寺院・料亭・呉服店・医院・薬局・会社などをはじめ、東京浅草の仲店のような商店がぎっしりと軒をならべ、活動写真(映画)の常設館もあって非常に賑わった。しかし、大正の中ごろから、繁華街の中心が、市の東部へ移りはじめたので、往年の盛り場の雰囲気はなくなったが、町筋にどことなく、かつて最も栄えた地域としての面影をとどめており、遠くなった明治・大正時代を懐しく思い出さすものがあった。

材木町・木挽町は、往時は川沿いに、材木の集散が行なわれたところで、材木を積んだ船や筏が、太田川を下ってきて、ここに荷をおろした。大正以後、陸上交通が急速にひらけてさびれたが、中島本町に続く住宅街として天神町・元柳町・中島新町などと共に愛着を禁じ得ない住宅街であった。ゆったりとした住宅の間に、鳩の多い誓願寺をはじめとして、歴史の古い寺が建ちまじっていたが、木挽町西福院の境内の淡島大明神(アワシマさん)や天神町の天満宮(天神さん)、持明院内の金比羅さん、材木町の妙法寺内のかさもりさん、安楽院の子安観音、慶蔵院の楠公さんなど、民間信仰を集めて、平和な下町情緒を町のすみずみに漂わせていた。

水主町は、旧藩時代からの由緒のある町で、県庁を中心として、一種の風格をもった屋敷町を形成していた。同町の広島県病院の後庭、与楽園は旧藩時代の御船屋敷で雅趣にとんだ園池であった。

被爆前の建物総数は二、五一〇戸、人口は八、九八二人と推定される。内訳は次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
中島本町	1,300	1,330	4,370	向井直助
天神町(北)				天城慶一
天神町(南)				津田享平
材木町				藤井順一
木挽町				光本半次郎
元柳町				成宮惣五郎
中島新町	500	500	2,130	田村源一
水主町上				長谷彦一
水主町中				赤羽光夫
水主町下	294	347	1,302	(兼連合町内会長)伊藤順一
吉島羽衣町				(一丁目)日下藤稔
吉島町				(二丁目)富海元治
吉島町	386	418	1,180	村田太郎一

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
簡易保険局	中島本町	持明院	木挽町
浄宝寺	材木町	森永製菓支店	元柳町
慈仙寺	材木町	瀬川倉庫	中島新町
中島勤商場	材木町	西応寺	中島新町
中島集産場	材木町	善福寺	中島新町

米田物産(元大正屋呉服店)	材木町	広島市農業協同組合	中島新町
水上警察 中島派出所	材木町	広島県庁	水主町上
西警察署 中島派出所	材木町	広島県警察官講習所	水主町上
教念寺	天神町	広島県病院	水主町上
清岸寺	天神町	(与楽園)	水主町上
天満宮	天神町	武徳殿	水主町上
公設市場	天神町	帝国兵器	吉島羽衣町二丁目
伝福寺	材木町	東亜産業株式会社	吉島町
妙法寺	材木町	呉陽鉄工所	吉島羽衣町
浄円寺	材木町	市立中島国民学校	水主町中
誓願寺	材木町	住吉神社	水主町中
慶蔵院	材木町	巢守鑑札工場	水主町中
安楽院	材木町	地藏堂	水主町下
西福院	木挽町	仏教説教所	水主町下
福寿院	木挽町		

二、疎開状況

人員疎開

昭和二十年三月ごろから、にわかには疎開する者が多くなった。

ことに、天神町・木挽町は約七〇戸、中島新町は約二五〇戸、水主町上組は六月から七月初旬の第六次建物強制疎開によって立退き、同町下組は、約三分の一から半数ぐらいは疎開を実施した。市内の非疎開区域へ移動した者もあったが、これは郡部に縁故がなかったり、事情があって利用できなかったため、約一か月間の猶予期間内に、疎開先が定まらず、やむなく市内にとどまったものである。交通難・輸送難も大きく原因して、遠距離の疎開計画がはばまれたからでもある。

なお、強制疎開区域でない者の中には、毎日夕方、市の周辺部の民家に宿泊し、朝になって自宅へ帰ってくるようにしていた者もあった。これは一時的に待避をする形式ではあるが、被爆直前ごろが最も盛んであった。

中島本町・材木町は、建物の強制疎開がなかった。

物資疎開

各家庭では貴重品・商品などの疎開をおこない、中島新町の瀬川倉庫内の物資も大部分が疎開されていた。

しかし、馬車・貨物自動車の配車がはかどらず、家財道具などは自力で運搬しなければならなかった。これがため、郡部への運搬は望まれず、やむなく付近の非疎開区域へ、ただ移動さすという状況であった。

学童疎開

中島国民学校の学童は、双三郡三良坂村および吉舎村へ集団疎開を実施し、国民学校や出雲大社教道場をはじめ、寺院や農家に泊まった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年、中島警防団を結成した。戦争が本格化するにつれて、当局の指示により他の地区と同様に組織を強化して、防空・防火訓練を行なった。

家庭防衛隊

昭和十七年、家庭防衛隊を結成し、隣組の整備・地区民の避難救護・防空防火訓練(演習)の強化をはかった。

また、昭和十九年に家屋疎開を決行して道路を拡張した。

国民義勇隊

昭和二十年、広島市国民義勇隊が創設されたので、中島大隊を結成し、伊藤順一連合町内会長が大隊長に就任、各町内会長が中隊長となり、建物疎開作業などに参加した。

自費で各戸に一か所の防空壕を作った。

防火備品

防火備品は次のとおりである。

ハシゴ 三〇丁

トビグチ 三〇丁

担架 一〇個

消防ポンプ(四人押)車付 二台
 消防ポンプ(四人押)車なし 一台
 消防ホンプ(二人押) 二台
 消防ポンプ(市からあっせんのもの二人押) 六台
 消防頭巾 一〇〇枚
 バケツ 六〇個

四、避難経路及び避難先

地区では、佐伯郡平良村及び原村を避難予定地とし、経路としては舟入町 己斐町 廿日市町 平良村に至るようにしていた。

このほか、応急の場合は、近くの広島県庁敷地内(水主町)、及び吉島飛行場も予定されていた。

五、所在した陸軍部隊集団

木挽町持明院に部隊がいたようであるが、現在では兵種・名称・兵力など不明である。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

中島地区は、全滅に近い災害を受けたので、生存者も少なく状況がつまびらかでないが、他の地区と同じように警備や灯火管制などは、五日の夜も嚴重におこなわれたことであろう。

吉島町・同羽衣町では八月五日午後九時二十七分、警戒ならびに空襲警報が発令され、同時に家庭防衛隊長の命により、町内会ならびに隣組は、直ちに防衛・避難態勢に入り、解除と共に平常態勢にかえった。明けて六日夜半の警戒ならびに空襲警報発令のときも同じで、各家庭の防空壕や隣組防空壕に老人や子供を待避させ、防空要員はそれぞれの部署についた。

上空侵入の敵機の見撃者、爆音の聴取有無などについては、現在では何も判らない。

建物疎開

また、当日朝の疎開作業、および地区内建物疎開についても生存者は極めてわずかで不明なところが多く、次表のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
材木町	24	不明	なし			
元柳町	不明	不明	なし			
天神町上	6	不明	なし			約1,800人以上
天神町下	不明	不明	(全世帯立退していた)	不明	実施中 戸数不明	
木挽町	20	県庁付近	なし			
中島新町	不明	不明	全戸	不明	全戸で壊す予定で実施中	
水主町上	不明	不明	全戸	不明	不明	
水主町中	25	県庁	なし			
水主町下	26	県庁	不明	40	不明	
吉島町内会	10	県庁付近	30	30		
羽衣町一丁目	不明	不明				
羽衣町二丁目	不明	不明				

七、被爆の惨状

直後の実相

被爆当時、この中島地区内にいた者は、全滅状態と言ってよいほど死亡しており、生き残った者がいたとしてもすでに現存者もなく、炸裂直下の状況を知ることは困難である。

周辺部の事業所へ勤務していた者とか、たまたま出張していたか、または私用で郊外へ出ていた者が難をまぬがれ、心配のあまり、帰宅しようとしたが、火災にさえぎられてどうすることもできなかった。

被爆直後、ある住民が比治山へ登ってみると、中島地区は猛煙をあげており、地上一面が破壊された屋根だけのおおわれているように見えた。

同人が急いで帰ろうとして、相生橋まで来たのが午後十二時過ぎであったが、すでに地区は火の海に吞まれている。夕方六時ごろ、無理をして天神町へ火災をかき分けるようにして踏み入ったとき、元安川の川岸に勤労働員の女生徒たちが、互いに抱きあうようにして群がり、横たわっていた。ほとんど焼死していて、顔などでは、誰が見分けがつかなかった。中には、かすかに息をしていて、死亡寸前の生徒もいたが、すでに、助かるような姿ではなかった。

この地区で、木挽町は中島新町より北寄り爆心地にも近く、はからずも生き残ったという者は奇蹟といつてもいいが、生き残ったとしても、おそらく後日死亡したであろうし、文字どおり全滅であった。

伊藤順一連合町内会長の語る所によれば、「住吉橋北側の工場へ調査するために行ったとき被爆し、工場の下敷きとなったが、足だけが空に向かって出て、上半身が下敷きになった形であった。まもなく、周囲の燃えている音が聞えた。そのとき警防団員が助け出してくれた。あと一分くらい遅れていたら焼死していただろう。助け出されて運ばれて行く途中、万象園(吉島羽衣町)の大きな樹木が盛んに炎上しているのを見た。」という。

伊藤順一の妻は、吉島羽衣町の町界に近い自宅(水主町南組)で被爆して、「家の下敷きになったが、どうやら外へ這い出すことができた。隣家と思われる箇所から火災が発生したのを見たが、押し潰された屋根の上を歩いて、ようやく万象園に逃げのびた。」と語っている。この付近は爆心地より南南西約一・四キロメートル離れていたため、助かった者がかなりあった。

吉島町・吉島羽衣町付近では、閃光を感受し、少し間をおき、地ひびきと同時に建物が全戸倒壊か半壊した。地煙りが立上って視界は、しばらくゼロとなった。全壊家屋がわずかだったので、路上に飛び出した隣組員が協力して、全・半壊家屋の下敷きになって助けを求めている者約二〇人を救出した。

避難実況

中島地区北部住民の、炸裂直後の状況は不明である。

吉島町・同羽衣町一丁目では、ほとんど全員が、広島刑務所の土手ならびに吉島本町二丁目、および、吉島飛行場へ避難した。また、川の中に避難した者も若干あった。

瞬間的被害

中島地区は壊滅したが、南下して吉島地区となると、被害もいくらか少なかった。

各町の被害状況は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
中島本町	100	-	-	-	100	-	- (一人健在)	本川橋 損傷した。 相生橋 床板が浮き上がったが通行には支障なかった。 元安橋 欄干落ち橋灯の石ずれる。
天神町	100	-	-	-	100	-	-	新橋 被爆落橋。
材木町	100	-	-	-	100	-	-	
木挽町	100	-	-	-	100	-	-	
元柳町	100	-	-	-	100	-	-	
中島新町	100	-	-	-	98	2	-	新大橋 損害軽少
水主町	100	-	-	-	40	50	10	住吉橋 欄干が南北に分れて落ちただけで通行には支障なし。 万代橋 損害軽少
吉島町	10	90	-	-	0.5	30	69.5	
吉島羽衣町一丁目	10	90	-	-	0.3	30	69.7	
吉島羽衣町二丁目	10	90	-	-	-	-	- (不明)	南大橋 欄干が焼け橋半分傾く。

火災発生

水主町より北部の爆心地に近い地域は、炸裂後、いっせいに火災が発生したようである。

天神町では、夕方六時ごろでも、なお火が盛んに燃えあがっており、探索者も町内に入れそうにたかった。三、四日後でもくすぶっており、焼ける物を焼きつくして自然鎮火した。

六日午後一時ごろ、吉島町・同羽衣町一丁目付近は、飛行場前の避難先から眺めると、一望火の海であり、また、吉島羽衣町二丁目付近も、ただ煙と火炎だけが見えていた。

なお、火災発生炎上の状況は次のとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時刻		
吉島町	数か所より発生	八時二十分頃	西風にあおられ火勢強く、たちまち全町に拡がる。	十六時
吉島羽衣町一丁目	数か所より発生	八時二十分頃	西風にあおられ火勢強く、たちまち全町に拡がる。	十六時

降雨の状況

中島地区には、重油かと思うほどの黒い雨が降り、誰れも彼れも、顔など真黒になったが、同地区の北部は不明である。吉島町・同羽衣町一丁目付近は降雨がなかった。なお、吉島羽衣町二丁目付近は、時間はわからないが、僅かの雨が降った。

六日夜

吉島羽衣町二丁目では、その夜は、防空壕の中や野っ原、それに畑などに蓆などを敷いて避難したが、何ごともしにつかず、みんな、呆然自失していた。

爆心に生き残る

野村英三(当時四七歳 爆心真下の元安橋南、建物地下室)

広島市中島本町、ちょうど元安橋南詰に現在燃料会館がある。当時広島県燃料配給統制組合の本部であった。この建物は地上三階・地下一階で、鉄骨鉄筋コンクリート建ての丈夫なもので、爆心点から西南約一〇〇メートルに位置している。

組合は当時毎朝八時に全員を二階に集めて、国民儀礼をするのが例であった。その朝も河合業務部長の音頭ですまし、全出勤者三七人は各階各自の机にかえって仕事前の一服をやっていた。さて仕事だと自分は机上を見たところ、いつもの書類がまだ置いてない。いつも課長が地下室から持ってくるのを今朝に限って忘れていたのだった。そこで自分の隣の広瀬女事務員に取りにってもらおうつもりで、その方を見たら、何か忙がしそうにしていたので、自分は二階を下りて地下室へ行った。

下りる前に、自分はメガネをはずし、財布をズボンのポケットから出し、そしてズボンのバンドに巻いてある鎖を解いて懐中時計を出し、机上にこの三点を揃えて地下室へ下りて行った。この品はもちろんみな焼いてしまったが、何故そんなことをしたのかは五年後の今日もどうしてもわからない。

地下室は建物の三分の一の広さで、一〇坪余りの狭いもので、いつも電灯がついている。書類が見当たらないので、あちこち探して階段下の金庫のところへ来た。その時だった。ドーンというかなり大きな音が聞えた。とたんにパッと電灯が消え、真暗になった。同時に頭に二、三カ所、硬い小石のようなものが当たった。

痛い！と、手を頭にやってみたら、ねっとりしたものが流れている。血だ！なんだろう、何事が起ったのだ。しばらくしてわからないまま頭のほかにどこか傷をしてはいないかと上半身、両腕、両足その他を調べてみたが、別に異状はないらしい。室内は真っ暗がりでも何も見えぬ。

自分は階段の直ぐ下に立っていた。上ろうかと思って足を階段にかけた。そして二、三步上りかけたが、どうも変な具合だ。階段の状態が無い。板切れや、瓦や、砂や、ごちゃごちゃに湿った坂になっている感じだ。

柔らかな俵のようなものが足の下にある。おかしい。両手でそっとさわってみた。半分位砂の中に埋もれている。あっ人間だ！抱え起して、声をかけたりいろいろしてみたが、がっくりしていて、もはやこと切れているようだ。とたんからだがふるえてきたようだ。

奥の方から闇をついて、助けてくれーと男の声だ。その声がつづいて聞えてくる。そして直ぐ泣き声にかわった。オオーン、オオーン、と。自分は急いで登りつめたとたんに、頭をゴツンと打った。手でさわってみるとコンクリートの壁らしい。両手で押してみたが、ビクともしない。出られない！

あっ、しまった、直撃弾だ！この建物に当たったんだ。地上の建物が崩壊して、この地下室だけがわずかに残ったんだ、と感じると、たまらない気持ちになった。出られねばここでこのまま埋もれてしまうのか、そのときゴーという水の音が聞えてきた。この地下室には八インチ位の水道管が元安橋の裏側を通過して入ってきている。そうだ、水道管の破裂だ！どうしよう。死は時間の問題だ。ああ駄目か、と思ったら四人の子供達の顔がすうっと目の前を走馬灯のように通り過ぎた。それから後は分らない。どこをどうして出たのか、気がついたときは一階に立っていた。

一階の窓の一つに人が止まっているのが、影絵のように黒く目にうつった。一階の様子は、薄暗くてはっきりわ

からないが、戸棚や椅子などがひっくりかえって、ごちゃごちゃになっているように感じられた。それらをかき分けるようにして窓下に行って「誰か？」といったら「広瀬です。」とこたえる。「おお広瀬か、外は？」と聞くと「道路です。」という。「よし飛べるか。」「はい飛べます。」との返事。「飛べ、僕も行く。」とあって、二人は外の道路に立った。

外は真黒い煙で暗い。半月[ハンゲツ]位の明るさだ。よくみると、広瀬の顔や手から血が流れている。急いで元安橋のところへ来た。ふと橋の上をみると、中央手前のあたりに、まる裸の男が仰向けに倒れて、両手両足を空に伸ばして震えている。そして左腋下のところに何か円い物が燃えている。橋の向い側は黒煙で覆われて、炎がチラチラ燃え立ちはじめに見える。橋を渡らずに現在の平和塔の方へ走っていった。ここは家屋疎開の跡で、広場と一部菜園になっている。川に下りる石段のところについて、二人は腰を下した。

腰を下ろすまで自分は半分夢中であった。四囲を見渡すと、地上も空も真黒い煙だ。その煙の中に今やっと逃れ出た組合の建物がぼーっと建っている。正面、川向うの産業奨励館も立っている。左向うには商工会議所も見える。煙の下の方から、燃えている炎はだんだん大きくなってきた。しかしまだ前記三つの建物は火はない。しばらくすると、組合の窓枠が燃えはじめた。どの窓も火がついた。そして火は内部へはいった。それから少し間を置いて、奨励館も同じようになった。間もなく商工会議所も窓から内部へと燃えだした。この辺りで最後に燃えたのが会議所で、郵便局が一番最初に燃え出したように思う。この間に組合を逃れて来たものが、自分とともに男四人女四人計八人となった。そしてみな石段に腰を下ろして、一ところにかたまっている。片方の目がだんだん見えぬようになったという女、気分が悪くなったという男、頭が痛むと訴えるもの、みなそれぞれに外部の負傷と内部の故障をもっている。

しかし、苦しんで声を立てるものはいない。ほとんど皆だまっている。火勢は次第に拡がり大きくなって、からだは熱くなってきた。川の水は満潮からだんだん引潮になるので、一段一段とわれわれは石段を下りる。すじ向いの郵便局の黒煙は、竜巻ようになって空中高く上る。ときどきその煙の竜巻は倒れかかってわれわれの頭上に来る。その中からトタンの焼けたのや、板切れの焦げたのなどが身近に降って来て危い。落下物を見て身をかわさねばならぬ。かわすためには上方を見ねばならぬ。その目の中に煙がはいると、痛さと涙でたまらないし、一度吸うと咽喉がむせてかなわぬ。自分は、腰の中古タオルを外し一重にして、顔に当ててみたら、目も楽にまた呼吸もいくらか凌ぎよくなった。降って来た焼トタンを拾って、それぞれに渡したので、一同はそれでからだを覆い、熱気と降下物の危険から大分たすかった。

元安川の水の一部が盛り上ったと思ったらクルクルと円柱となって空高く舞い昇った。水の竜巻だ！。その中から風下に水が落ちている。火勢は熾烈だ。川向いの煙が火の粉とともにわれわれに襲いかかった。ウワーと一同石段を上って広場に逃げると、とたんに火の粉がまた襲いかかってくる。止むなくもとの石段の石垣の隅に、一同小さく固まってしまった。からだを覆うトタンを川水に浸しては覆い、浸しては覆いして凌いだ。先ほどから遠くや近くで石油缶が爆発したような音を一〇数発聞いた。時限爆弾ではないかと、ひやひやした。そのうちにポツリポツリと大粒の雨が落ち始めて、次第に烈しくなり、ついにドシャ降りになった。一同われがちに雨宿りの場所を求めてそれぞれに身をかくした。しかしほとんど皆がズブ濡れになってしまった。

雨が止んだ頃には、寒さのためにふるえだして歯の根も合わない。で、そこでまた火の方へ近づいてからだを温め、二、三〇分もしたらやっと心地がついた。八月の盛夏、大火事の原因にいて寒さのために火に近寄るなどとは何ということだろう。それほどあのときの雨は身にこたえたのである。

そうこうするうちに中心部は大分火勢が衰えてきた。相生橋にしてみると、周囲は猛烈な煙と火だ。紙屋町以東は煙で見えない。二部隊の方も煙だし、西南方も同じく煙と煙だ。

脱出して救援隊に知らせてくれないか、と会計の宍戸君がいった。行手の模様が全然分らないこの火の中をくぐることは死を意味する。出るからには再びここへは帰られないことを覚悟しなければ、とあって、大型の焼トタン板を一枚手にして、再び相生橋上に立って、どの方面に救援を求めに行こうかと見渡した。そうだ、己斐[こい]の方面に行ってみよう。

左官町・十日市・土橋まで来る間に、何度となく地上やら、倒れた電柱の間やらに身を伏せた。市電の鉄橋の枕木があちこち燃えている中をよけて飛び渡り、やっと福島町に出た。ここはまだ煙もなければ火事もない。空は青天だ。振りかえって見ると、火と煙の地獄だ。よく出て来たものだと思った。己斐に着いた。ここは負傷者ばかりで、どこにも救援隊はおらぬ。それから草津に来たら、はじめて罹災者の手当をしている兵士五、六人に会った。

なんとか同僚を救ってくれと頼んだが、求める方が無理だとは幾千人とも知れぬ負傷者を見ただけでわかった。残った者のうち、宍戸君、安芸支部長の二人は、ほとんど大きな負傷はしていないので、心を残して自分は廿日市へ向った。廿日市に着いたのは午後二時半頃であった。

九月一日の夜、急に悪寒を感じ四〇度前後の発熱はその後七、八日間つづいた。この間廿日市町では、毎日毎日何人ともなく自分のような状態のものが死んでいった。咽喉は痛んでくるし、出血斑紋は五、六カ所も出る。歯茎がくさり、悪性下痢は一〇日以上もつづいて、からだはクタクタに衰弱していった。薬は無し、医師は手当ての方法が分らぬらしく、親戚も家族も諦めていたという。

しかしとに角、時が経つにつれて、元気が回復し、今日健康になっているが、近ごろまた爆弾症による盲目がはじめていると聞く。

あの朝、国民儀礼に参加した三七人中の三六人の霊よ、安らかに眠れ。ああ！

元安川の惨禍(流燈抄)

山崎益太郎(故山崎仁子の父)

(前略)私が元安川畔の広島市立高等女学校生徒遭難現場にたどりついたのは、あの日(六日)の昼すぎであった。

あの朝私は、小町中国配電会社で被爆し、頭に負傷して脱出。電車道を南へ走り、市庁舎を経て、広島文理科大学の広場まで逃れて、正午ごろまでやすんでいた。あちらからも、こちらからも、傷ついた人。血みどろとなって瀕死の人を背に、肩に、続々と逃れ来る人々。思えば阿鼻叫喚の地獄の様相とは正に、この時と思われる。昼前となって、火勢がやや衰えて来た。私は子供が気にかかり、友だちと別れて、再び引返した。

私の家は当時中島の天神町にあった。当時広島市立高等女学校の二年生であった仁子が、その朝、学徒動員で水主町へ県庁～新橋間の疎開跡の整理に出っていたので、その安否を気づかい、その方へ足を向けた。

元安川にかけられていた仮新橋は、その時既に半分落ちていた。ちょうど腰の辺まで水があったが、歩いて渡った。ああ、何たる悲惨、河原一面砂洲よりも、無残にも何十何百の少女らが、あるいは傷つき、あるいは既に事切れたのか、倒れており、あちこちで、わずかに動き、かすかにウメキ声が聞える。

驚くことには、どれもこれも素っばだかである。シュミーズもスカートも焼け、身体はゆでダコのようにあか黒くなっている。ちょうど、海水浴場で裸ん坊の子供らが横たわり、あるいは寝ころび、たわむれて居るのを想像してみよう。焦熱地獄をさながら目前に見る。

私はあの時、会社の二階の一室で、夢からさめた時はあたりは暗闇であった。それこそ咫尺も弁せず、一寸先も見えなかった。被爆後何分かたっていた。一瞬気を失っていたのである。それで私が後に思い出したのであるが、彼女らもあの瞬間は、恐らく何一つしゃへい物のない露天で爆発音と共に、大部分は失神状態に陥り、倒れていた事であろう。

その間に黒煙の猛火がおおいかかり、生きながらジリジリと身を焼かれ、気がついた時は火だるまとなって、泣き叫び、河原でころげ廻ったのであろうか。またはそのまま猛火と共に昇天したのもあったらうか。

ああ、残忍非道鬼畜も目をそむけ、言語に絶する光景をあらわしたであらう。かくして無幸の天使、可憐なる乙女らは罪なくして戦禍の犠牲となり、永遠にこの世を去っていったのである。返す返すも、暴虐、悲惨の極。

私はようやく仁子を見出した。もちろん身体は焼けただけ、わずかに腰のあたりに手ぬぐいの切れ端と、名札と腰下げが残っている膚は黄色となり、顔はうずばれていた。「おとうさん、のどが痛い。」私は早速川の水を手のひらで、すくって飲ませた。今にして思えば当然放射能入りである。私の家もこの土手の上にあった。もちろん既に焼け落ちている。牛田の親戚に長女孝子を預けてあり、その安否も気にかかり、仁子を背負い牛田へ行くこととした。子供を負うて、水の中に入って行ったものの、水が腰のあたりまであり、私自身も相当弱っているとみえて、ともすると倒れそうになる。一寸困っていた。

幸いこの時川下から、船舶隊の兵隊さんが、舟で救援に来てくれたので、大手町側の岸に渡してもらおう。こうして、やがて西練兵場の紙屋町入口まで来た。西練兵場では多勢の人が休んでいた。会社の人も四、五人見当った。

ここでしばらく休憩し、再び子供を背負って立つ。急に重くなったので、会社の人、竹本君に少し上げてもらう。すると竹本君が「チョットおろして見なさい。」というので、何か異状を予感して思わずハッとする。その時わが子は、こときれていたのである。何ともたとえようのない思いであった。(後略)

水主町の惨状

黒瀬重吉妻(被爆地・水主町下の自宅)

私はご飯も炊きあがり、馬鈴薯も煮えたので食卓を準備して再び炊事場の流台に来たところ、ピカッと強い閃光、運命の八時十五分(その時は時刻の観念はなかった)。

一瞬の裡に倒壊した家屋の下敷きになり、真暗く光は全然見えない。どうしたことなのだろう。家屋の下敷きになったまま、心を静めるように努めた。その時は咄嗟に、我が家に集中爆弾が投下されたと思ったので、一刻も早く脱出せねばと、手や足を動かしてみたら動くので、かぶさった梁木や板を取除き、壊れた屋根瓦の破片を取除いていたら、小さな隙間ができ、そこから太陽の僅かな光が差し込んだので、なお、けん命の力を出して屋根裏を破って、やっと脱出した。

幸い庭に面した炊事場に居たため助かったが、一分間後だったら中の居間に坐っていたので到底脱出もできず、一家全滅したことと思う。

脱出して周囲を見れば、近所、町内は勿論、川向うの遠くまで、一面倒壊していて、諸所から火災が発生していたので驚愕、これは大変なことになったと思った。

主人と四人の子供はまだ脱出してない。この辺りに寝ていたと思う個所の屋根瓦を除き、漸く入れる穴を作り、梁の木や板を引出し、中へ潜り込み、主人が見つかったので引っ張り出したが、頭から顔一面に血が流れていた。このとき、主人に「早く子供を出すのを手伝ってください。」と言ったが、主人は何も言わずにボンヤリとして立っていた。

私は倒壊した中に、何度も何度も潜り、次々と子供を引出した。三女は胸から頭に壁土が覆いかぶさり、土を取除きやっと引出した。二男は誕生と三ヶ月で到底生きてはいないだろうと思ったので、長女に話したら、長女の足の辺りで動いたように思うと言ったので、また潜り込んで探した。畳が跳ね返り、板と木片の中を探しているうち、着物のようなものが手に当たったので引っ張ったところ二男であったので引出した。よくもこの小さな幼児の生命が保たれていたと思うと不思議であった。

私はみんなを家屋の下敷きから引出したので、さァーみんなで早く逃げましょう、と言った。その時、隣の松本圭一さんが茫然として倒壊した家の前に立っておられた。

その内、町内の各所から煙も昇りだしていたが、到底、四圍の状況を見まわすことよりも、この混乱と危険の状態から如何にして安全な場所に逃げ得られるかということが先決で、無論、町内の役員も警防団員の姿も見ることにはなかった。私たち親子六人は倒壊した家の瓦礫を踏み越えて、漸く川岸の通りへ出て見てまた驚いた。

殆ど全市は倒壊して、遠近各所が炎上していた。特に市の中心部は紅蓮の炎に包まれていた。

川岸は、南へ向って逃げる多数の人の大声と叫喚で大混雑、私は二男を抱えて、三女の手を引き、避難の行列に加わったが、主人は頭に負傷していて出血のため顔も背中も血に染まり、痴呆状態になったのかトボトボと歩いていた。

私は気が気でなかった。今、主人が倒れたらどうしようか、と思った。

私の後から自宅の筋向いの伊達の奥さんと小迫の奥さんが来られた。伊達の奥さんが、「黒瀬の奥さん早く逃げましょう。」と言われ、先に逃げますから、と言って南大橋の方へ向って二人急いで行かれた。

避難の行列は、益々、多くなって続いた。半焼けのシャツを着て、腕に火傷をしている男、上半身をまる出しにして焼けたモンペイを着ている女、その中には、両腕の皮膚が焼け爛れて、胸の前にダラリと垂れ下がり、さながら化物の行列であった。

また、元安川には多くの人が川中にいたのを見た。爆風のため吹き飛ばされて多数の人が川中で死んだと、後日に聞いた。

羽衣町の川岸の小原製菓所が盛んに焼けていた。従業員がバケツリレーで川の水を汲んで、消火につとめていたが火勢が猛烈で階下から二階まで焼けていた。

いったいどうしてこんなことになったのだろうか？と訝しく思った。

何か訳のわからないことを喚いて駈けだしている者、焼けた頭髪の女、焼き剥がれた皮膚、めくられた唇、血だるまとなって父母の名を叫んでいる少年、全くこの世の生地獄であった。

市の中心部は炎の海に包まれていた。

やっとみんな南大橋まできて橋を渡ったが、主人と長女、四女を見失い、橋の途中で待って探し求めたが、見当

らず当惑していた。そのうち誰か「早く逃げないと逃げられんようになるよ。」と、怒鳴りながら東に向かって逃げて行ったので、私も仕方なく続いた。橋の中程を過ぎた時、後から馬車屋さんが、全身各所を焼いた馬を曳いてきて「みんな早く千田町の電車通りに逃げないと危いよ。」と言ったので、橋を渡り、倒壊家屋の狭い路を一行となって、二男を抱き、三女の手を引いてやっとの思いで電鉄本社前に出ることができた。電車通りは架線が垂れ下がったり、切れて地上に落ちていた。

鷹の橋方面は火災が発生していた。ここも多勢の人が南に向かって逃げていたので、私も御幸橋に向かって逃げ、橋を渡って専売局前に辿りついて、暫く主人や子供のことを案じ、後から来るだろうと待っていたが来ない。

避難者の群れは、益々多く、宇品方面へ行っていたが、主人子供は見当たらなかった。(後略)

諸現象

吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目では、被爆後復帰した者は、何か原因不明の病気になる人が多く、中でも腹くだしは全員といってもよいほど罹ったが、手当での仕様がなかった。現場に停住した人の中には、頭髪や歯の抜ける人、斑点の出る人などたくさんあった。斑点は現在(昭和四十一年)でも出る人が多い。

吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目では、何ら火の気のない屋根などから火が出た。また火のつきやすいものが、あちらこちらで焦げ

たり焼けたりしたが放射熱線による自然発火と思われる。

金属・硝子製品は溶解した。瓦は変形して素焼よりもガサガサした感じであった。家の土台石や庭石などが、踏むとすぐ崩れるほど脆くなった。

また、植木の上部だけが焼けたり、電柱の爆心地に向く北側だけが半分焼けたりした。相生橋・元安橋の二橋とも、左右の欄干が開くようにして、両側の川へ向って落ちた。これは爆心直下の現象であって、爆心地点から南西約一・三キロメートルのところにある住吉橋も、前述の二橋と同様に、左右の欄干が相反した方向にむかって落ちていた。

また、電柱がほとんど六〇度、はすかいに傾き、中には、中間から折れたものもあった。電線は散々に切断されて落下し、歩きにくいほどであった。

吉島本町一丁目では、家屋倒壊で直接死んだ者は少ないが、汚染された空気を吸ったため死んだ者がある。

中島地区生存者座談会(要約)

日時 昭和三十九年十一月十日

場所 広島市中島町 浄円寺

出席者

藤堂イワ(材木町) 尾崎芳夫(中島本町)

坂田寿章(材木町) 福原亮輔(中島本町)

栗栖薫(木挽町) 木村律(中島新町)

坂本潔(天神町) 上園志水(材木町)

土井積(中島本町)

建物疎開

木村 中島新町は全部建物疎開しました。

坂田 材木町はまだでした。

栗栖 木挽町は三月に半分強制疎開しました。郵政の通りの角から、ウチ(栗栖)までと、同じ側の果物屋までが第一次強制疎開で、空地になっていました。

木村 六月の疎開が最後の疎開で、ウチ(木村)の倉庫の裏が誓願寺でしたが、そこが全部疎開でした。ずらっと新大橋までで、瀬川倉庫がぐるっと入って、みなです。細塵も本川旅館もみな…。

川土手をまっすぐ結んだ線でした。

新橋をまっすぐのばした線で、ずーっと現在の平和大橋よりの方です。

炎上

坂田 私は六日の昼前、観音町の三菱から総合グラウンドへ出たが、飛行機が偵察に来たので、西大橋を渡って福

島町の方へ逃げました。福島町の屠殺場のところあたりで、黒い雨が降って来て痛かった。

とにかく痛いので、兵隊帽をかぶり、前の小屋に入りました。しばらくして、雨もやんだので、中島町の方へ引返すことにして天満町へ出ました。天満橋は火がついていて、たいへんくすぶっていたので渡ることができず、電車鉄橋をわたって、そこからずっと電車道づたいに十日市に出ましたが、その道も燻っていて、十日市へ出るのもたいへんでした。煙がワツワツと湧くので、息が苦しくなり、濡れたタオルを口にあてて歩いた。前に行っていた女の子がバタッと倒れた。「しっかりせい。ここで寝たら死ぬぞ。」と言ってやった。それが相生橋(T字型橋)へ出て、Tの字からこっち(材木町)まで帰った。Tの字のたもとに旅館があったが、ふッと見ると無い。ありゃと思って眼鏡を擦って見てもやっぱり無かった。

十二時半ごろ、産業奨励館の丸いドームが音を立てて燃えていた。護国神社も炎上していたよ。

坂本 舟入本町の住吉橋の四ッ角でしたがね。ちょうど土橋あたりで、光ったのです。私は江波へ逃げて、荷物を取りに家(天神町)に帰ろうと思って、江波から舟入本町まで、江波の射撃場のところから半分戻ったとき、逃げる人に、「今から家に帰ろうと思う。」という、「坂本さんの家は今焼けている。」という。ですから九時半ごろには火がついたことになります。

坂田 十一時ごろ、もとの二中(県立第二中学校の畧)の下が燃えていました。住吉橋付近は十時ごろが火災の最中だった。材木町や中島本町には板塀がずっとありましたが、それにみな火がついていました。その小路にもパァッと火がついていたが、倒れたと同時に、いや倒れるまでに火がついていたのです。父もそうですが、妻や妻のおふるくなども、その時は朝食の仕度で、まだ台所にいたままでした。

尾崎 今中さんが一番に中島へかけつけたと言っていました。負傷者が多勢むらがっていたと...

坂田 その日は絶対に中島には入れなかった。

藤堂 絶対に入れなかった。

坂田 私がそこまで入って見たら、元安の方から見て右側です。本川寄りに、埋立てしてから砂場がありました。そこを、ヨボヨボと男の人が - 年令はわかりませんが、五十歳位の年輩の人が、トボトボ歩いて来る。

尾崎 今中さんではなかったかね。

坂田 それで「おじさん！」とよんだ。ですが全然聞えるふうがない。その距離がほぼ七〇メートル位です。

坂本 六日午後六時に天神町へ来たときは火の海で、とてもとても...。私が市女(市立第一高等女学校の略)の生徒を探しに来たときも、地面が熱く焼けていたが、野球のスバイクをはいていたから入られたんです。

福原 六日朝十時半に比治山へのぼって向う側(段原側)に降りましたが、こんどは、どうでも中島へ一度行かにはいけないというので、比治山橋から鶴見橋を通り鷹野橋へ出て来たのですが、ちょうど赤十字病院のところがドン燃けていました。そこから中心部へは入ってこられませんでした。

坂田 私は兵隊で臨時帰休兵だったんですが、その日に限って軍隊の靴をはいていました。相生橋のTの字のところへ出て旅館がありましたね。三階建の...。その瓦がみな道路へずり落ちているんです。私は入ろうと思ったんです。そしたら足からパァッと煙が出るんです。足の裏から...おかしいなあと思って、よくみると瓦が焼けていたんです。二、三步あるいているうち、煙がパァパァ出るんです。それで後へさがり、川へ入ろうと思ったが満潮で、これはどうにもならんと考え、高須まで無我夢中で帰りました。足の裏が痛いので見ましたら、両方の底がずっと焼けていました。皮がきれいに焼けていて、足袋も黄色になっていました。

だからとても、町に入るどころではありませんでした。材木町で、たった一人、女の人が助かって逃げ出たそうです。

尾崎 私は六日は動けなくて、明るる朝早く来ましたが、はいていた軍隊靴が焼けてしまいました。

藤堂 六日の夕方まで焼け続けました。

死体の収容と火葬

坂本 中島一帯の道路が、倒れた電柱と家屋で焼けているので、とにかく火を避け、わかるようにして火の中に入って来たんです。

市女の父兄が、私について来たのが二〇人ぐらいでしたが、両方へ分けて、あっちを探せ、こっちを探せとさがしたんです。ウチの子は、ちょうどお宮の前のところで...見つけました。

生徒たちの死体の収容は、どうだったんでしょう。

尾崎 明るる日(七日)早く来たのですが、死体はそうありませんでした。火は三日も四日もありました。

向井さんの死体を私は掘り出しましたよ。

木村 火はあっても、道路を自転車で私は通ったから...、明るる日の夕方三菱から帰るときに通ったが、だいたい道路は通れるようになっていました。

坂田 火葬は二日目ぐらい...からでしょう。

藤堂 八日からですよ。

坂田 死体がね。今言う新大橋、あそこが疎開をずっとしていたでしょう、そこにずらりと並んでいました。三日目の朝のとき、死体の腹が破裂して、腸が風船のようにふくれて出ているのを、鉄棒を拾って来て叩いたんです。ボンボンというだけで破れなかったよ。それまで転がしてあった。

木村 場所によると、十日過ぎても死体がまだありました。

坂本 死体の収容は兵隊が行ない、囚人も使われていました。

尾崎 七日に、私は本川橋の下流の橋(新大橋)を渡りましたが、橋の上にはずらっと死体がありました、女の子が一人生きておりましたよ。

弁当箱にね、米と麦と大豆を入れてあったのが、カラになっていて、まだ生きていました。女の子はおおかた伏さっていましたが、みんな死んでいました。男の子の顔は目が見えないように脹れていても、まだ生きていました。下手の石段があったでしょう、そこに石段が見えないほど死体がありました。それから中島に入りましたが、角の歯医者さんの二階に星野さんという人がおりましたが、土手に吸いついたようにして、まっ裸で、よく見るとその人でした。寝ていて被爆したのかも知れません。橋のもとに老人の将校も死んでいました。

福原 中島町・木挽町・天神町も一緒と思いますが、三次地方の方々が来て清掃されたんです。私の知人が、その中に一人いて、兄が三次中学の先生だもんですからね。先生のご両親ですかというようなことで、そこらの残材を集めてきて火葬にふし、遺骨をとりました。

それは八日の午後でした。

藤堂 八日の朝、材木町へ戻ったとき、広島郵便局のところに娘がいたんです。戸口に死体が二つ転がっていたので、どちらかではないかと調べていましたら、警防団の人が「おばさん、もし自分の身寄りだったら引取っていきなさいよ。今から収容するからね。」と言いました。

「そうですが。それでは、これじゃと思って持って帰りましょう。」と二人の頭骸骨の皿の部分を紙に包んで帰りました。

福原 あとから聞いたのですが、この作業に出動された三次の警防団の人が、随分死なれたそうです。

坂本 警防団の人々は、おそらく三次とか高田郡から出てこられたのでしょうか。十五日に三次へ行ったとき、知人の医者が、今広島へ行くよう召集がかかったと言っていました。市の周辺から医者や看護婦さんが出動されました。

木村 だがね、八、九日でなくて、この区域は別として全般的には随分死体の収容は遅れております。大手町九丁目あたりには、十日過ぎても通路のほとりに死体がありました。

尾崎 私は被爆後、簡易保険の建物跡で町内の連絡事務を取っていたんですが、雨が降ると、湯気のようなものが、とても上がるんです。まだ下に火があるのかと思うほどです。それが燐だったんです。吉岡さんの下[しも]には、まだ死体が幾らでもありました。あと、骨を拾い集めましたかね。

木村 死体収容は目貫通りだけは早かったんです。

坂田 電車道が早かった。

坂本 死体の火葬は、みな所々で積み重ねて焼きました。しかし警官の立会いというようなものはありませんでした。

福原 どこでも焼いていたが、慈仙寺あとでも焼いたでしょう。

尾崎 女の人で何歳ぐらいとか、男の人で何歳ぐらいとか書いて並べてありました。

藤堂 まだそれはていねいな方です。ひと山にかためて焼いていました。

栗栖 中島は、まるで煮干魚[いりこ]を乾したように無数に死体がありましたし、誰が誰ともわからないし、町内会の証明などありませんよ。

尾崎 軍隊が来て、トラックにドンドン死体を積んでは、似島へ持って行ったそうですね。

坂田 似島へ持って行ったのもあるが、まず川へ投げて一杯にしたんです。

福原 川へ投げると満潮のときは浮いて流れるんです。それを住吉橋と明治橋へ流して行き、材木を橋げたへ持って行って棒をわたしといて、流れて来た死体を、それに掛けるんです。それを、ドンドン引揚げたわけです。住吉橋のところなどは、うず高く死体を積みあげ、ガソリンをかけて焼きました。死体の確認とか何とかいうことはできません。

尾崎 塵芥と死体とで、川の流は見えませんでしたよ。

坂本 疎開作業の学徒隊は川にいました。六日午後六時ごろ、私がきたときは、川岸に皆降りて、石垣にずっとたむろしていました。市女の生徒がいましたが、女の先生は学校に残り、男の先生が此所にきていたのです。ウチのむら子は市女の二年生で来ていましたが、六時前でした、父兄が一人来て、天神町のところに子供がみな倒れているから行けというのです。集った父兄が県庁前で二班に分れて、名前をよびながら探しました。私が万代橋のところに来ますと、ちょうどお宮の前のところで、石垣に一〇人ぐらいかたまっていました。

「ここよ」と言ったので私は降りて行ったんです。そしたら女の子が、顔がはれていて目は全くの一筋、頭の髪はほとんど無い。皮膚は剥げて全部たれさがっているのです。負うことができません。私の子で築山家へ養女にやっていたんです。「むら子ちゃん、いいね、お父さんがこられて…」と誰れかが言ったのが、今も私の耳に残っています。通りかかった女の人に帯をもらって、背中に負わせてもらい、住吉へ出たのです。住吉のたもとに人が一ぱい板の上に並べてありました。そのおり、一五、六歳の特攻隊員のような青年が江田島からきて、死体の収容作業をやっていました。キビキビした人でしたが、隊長の名を聞きもらしました。これが夕方七時ごろでした。私は、それから市女へゆき、生徒がたくさん転がっているから行ってくださいと連絡しました。

赤十字病院も収容者で満員だということで、天神町付近の人々を私が指揮して江波の陸軍病院へ連れていきました。住吉橋船着場のところに荷馬車があったので使い、各自、板を担架にして、皆を引っぱって行きました。もう、十一時になっていました。ずうっと土手の畑中を通りましたが、寒くて寒くて女の子は震えていました。ところがこの病院も一ぱいでした。それから江波の学校へ行って全部運動場へ入れました。みんなが痛がった様子は忘れられません。江波の病院も八時ごろには軒下まで溢れて一ぱいだったそうです。

江波で死亡した人々は、翌日、運動場で火葬にされましたが、「どうもお気の毒です。あなたのお子さんは、皆と一緒に焼きますから、遺骨はわかりませんが、承知しておいて下さい。」と、言われました。確認のしょうがありませんでした。

坂田 材木町の場合は、死んだ人間の誰も顔かたちがありませんでした。それで私が知っているのはアワシマさん(西福院)の家のところで学徒が死んでいましたが、黒い服に白い名札をつけている。これが残るんです。中に身分証明書があるのが焼けているんです。それが一部出てくると「あら、あんたがたの弟は、あそこに死んでいた。」というようなことでした。それが緑さんの子供でした。名前がわかる程度なんです。で、私はあくる朝六時に町に入りましたが、もう全然確認するしるしは一つもありませんでした。ただ、ここでこれは靴をはいてバンドがこうだから竹田清さんだ、あるいは緑さんのお母さんだとか、肉屋のおじさんだとかいうぐらいのことでした。

初めの居住者

坂本 被爆者で、この地区に最初に住んだ人では、上蘭さんが最初ではなかったのですか。

尾崎 綿貫さん・土井さん・古川さんらも早く住まれましたね。それから吉田のおじさんも。八月末には、まだ誰も住んでいなかったのです。私が疎開の子供を連れて帰ったのが九月十五日でした。そのときもまだいなかったのです。

坂本 それは、戻りたくとも、ここへ戻ったら...草も木も生えないという恐怖があったし、まだ飛行機が来ることが頭にあったし...

坂田 八月末、本通りの山口銀行の金庫の中に、子供と女が住んでいたが、目撃してから一週間ぐらいたったとき、それが死んでいた。火傷でやられていたから、放射能が原因だったと思う。だから住んでいたとは言えないね。

尾崎 浄宝寺の息子さんが、九月の十五、六日ごろ疎開先の三良坂から帰ったと言っていました。

藤堂 うちの子を連れに行っただのは十日ごろでした。親のない子は五日市の収容所に収容されました。

木村 一番早く、ここへ帰ってきたのは、飯田さんだっと思いたがね。

坂本 私が夏に神社の地上物件を調べに戻ったときは、天神町に誰もいませんでした。これは、あくる年だったか、どうでしたか...ちょっと忘れちゃった。

上蘭 材木町では、二十年十月です。風呂屋の福原さんが帰っていて、もう一人誰れだったか...いました。

坂田 いや、材木町では私が一番早かった。年が明けて二月三日です。ロウソク生活でね、こころ細かいがぎりでした。

福原 翌年二月、電車が通るようになっても中島には家がなかったのです。

坂田 相生橋のT字型のところで電車に乗り、天満町までかよっていました。

福原 物資の配給開始は、九月十四、五日ごろでしたよ。ロウソクの配給は一回きりでした。

上蘭 電灯がついたのは二十一年冬で、中島本町が一番早かったね。材木町は十か月遅れました。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊

炸裂直後、吉島方面には避難者が殺到して、その混乱状態はこの世のものでなく、救援隊すら入れそうになかった。

六町午後六時ごろであったが、水主町住吉橋付近で、江田島から来た暁部隊の一五、六歳くらいの若い兵士が、負傷者の救援作業に活躍していた。板で作った担架で運び、住吉橋のところにあった舟着場(東詰下流)にとまっている馬車に乗せて、隊員が引っ張り、陸軍病院江波分院まで輸送していった。これら特攻隊員の活躍はめざましく、多くの負傷者からたのもしく思われた。

吉島羽衣町二丁目では、当日十二時ごろ、船舶部隊から五人来援し、外部から避難して来た多くの負傷者を、担架で千田町方面を経由して似島へ向けて輸送した。

吉島町・同羽衣町一丁目一帯では、七日朝からムスピの配給および救急品の配給があった。

八日から、ムスピを朝三箱(一箱八〇個)・昼三箱・夜三箱ずつ受取って吉島一帯の避難者に配給した。

救護所設置

県の「戦災記録」によると、八月七日には県庁跡と水主町住吉神社境内に応急救護所を開設していたと記録されているが、負傷者が多くたむろしている場所が則ち救護所となったのである。

なお、道路の清掃作業は、この地区では、特別には行なわれなかった。

死体の収容と火葬・仮埋葬

八日ごろから、三次方面からと思われる警防団、刑務所の囚人、そして陸海軍兵士の活躍によって、死体の収容が行なわれた。

この時の収容状態から察すると、人名確認をするとか、身元不明者に対する処置(遺品を取っておくこと、性別・推定年齢を記すこと)などを行なうような余裕のある収容動作ではなかった。しかし、場所によっては、収容作業隊が検視を行ない、身元不明者に対する措置などを行なっていたようであるが、これは一部のことに過ぎないと言われる。結局、焼死体が多く、誰やらわからないほど容姿が変わっているため、やむをえないことであったと考えられる。

この地区内には、当日、建物疎開作業を行なうために、各地から国民義勇隊や学徒動員隊(判明している人員約一、八〇〇人)が多数集合していて全滅したので、死者は膨大な数であった。

死体の収容場所は、現在の西平和大橋のところ、慈仙寺跡・住吉橋のたもとなどで、各所から集めた死体は、うず高く積み重ねられ、ガソリンをかけて火葬にふした。

これらの死体収容には、暁部隊の斉藤義雄少佐が、若い特攻隊員を指揮して行なった。

吉島一帯では、七日ごろから死体収容を始めた。収容数は、現在では不明であるが、収容場所は吉島町の川土手その他という。収容にあたったのは同じく暁部隊で、兵隊がそれぞれの死体についている名札のようなものによって確認したが、不明者は年令・性別・服装などの特長をメモしていた。現在(昭和四十三年)、身元不明者の遺骨が三個ある。

火葬は、壊れた家屋の廃材と、兵隊が持参した松根油を使って、元中国製紙会社跡(現在・吉島公園)でおこなった。

墓標

当時、この埋葬場所に標識柱が立てられていたが、昭和三十五年ごろ不明になった。

材木町では、浄円寺境内跡に、町内に散乱していた人骨を集め、防火用貯水槽を埋め、その上に誓願寺の池の玉垣を積み重ねて墓標を立てた。この遺骨は、後年、当局の指示により平和公園の供養塔に納骨した。

なお、地区に町有地があったので、戦後、この土地を売却し、それを資金として法要を行なっている。

遺骨の収拾

二十一年五月ごろ、市役所から、水主町より上[かみ](北部)の地区の遺体や遺骨の収容に協力してくれと、全町に対して通達があった。この頃でも、遺骨はむろんのこと、物に埋まった死体は、そのまま放置されていた。このとき、マンホールの中や防空壕とか土中に埋もれている死体を探し出した。集めた遺骨は、現在の平和公園内の供養塔に納め、白骨化した遺体は天満町の向西館火葬場へ運んだりした。このときは、かなりの死体を処理したが、材木町にあった防空壕に、四人くらいの男女生徒がかたまって白骨ともならず、服を着たまの姿で発見されて、作業する者に衝撃を与えた。

町内会の機能

被爆直後は全町内会が壊滅状態になったので、対策とか処置については施しようもなかった。町内会長・幹事は大部分死亡し、各町民も全滅的な状態で、町内会の機能はまったく失われた。従って、各種の証明なども、生き残った人が誰彼なしに臨時町内会長となって証明した。

吉島町・同羽衣町一丁目は、当日から町内会を復活したが、住民は十分の一ばかりに減少していた。しかし、吉島羽衣町二丁目は、町内会役員が、一部のけが人はあったが、ほとんど無事であったから、幸い機能は停まらなかった。

九、被爆後の生活状況

復帰居住者の状況

中島地区では、八月下旬ごろ、焼跡の慈仙寺のところに、焼け残った廃材を利用してバラック小屋を作り、住んだ人(失名)があったが、これが最初の復帰者のようであるという。

材木町は、十月ごろ、人が居住しはじめたが、天神町などは、翌年の夏ごろでも家は建っていなかった。とにかく二十年十月ごろは、水主町から上[かみ](北部)で、五、六戸ぐらいしか見あたらなかった。そして、一戸の小屋に五世帯くらいが集って雑魚寝の生活をするという状態であった。そのときの暮しの状態は、八月下旬ごろは、配給品なども無かったので、知人とか親戚関係のところへ廻っては物資を分けてもらった。当初、非常用配給のあるころは、この地区には一人もいなかったの、こうした恩典も知ることなく、九月に入ってから、ようやく配給を受けるようにたった。

吉島町・同羽衣町一丁目では、被爆後一週間くらいして人が居住しはじめた。知人同志が協力して、飛行場跡や地区内外の焼残り木材・トタンなどを拾いあつめて来てバラックを建てた。生活は言葉にあらわせないほど惨めであった。

吉島羽衣町二丁目では、住民たちの身心がやや落ち着くと同時に、雨が漏らない程度の住居造りをはじめた。材料はなく、壊れた家を元にして、使用出来る最少限の一室程度のものでやっと生活した。働くところもなく、また、健康もすぐれず約一か月くらいは、虚脱してブラブラしていた。

八月末ごろの居住世帯

八月末ごろの居住世帯状況は、吉島町約一〇〇世帯、吉島羽衣町一丁目約五〇世帯、その他の各町については不明である。

衛生環境

八工が多数発生した。バラックのトタン屋根の内側にびっしりととまっているのを、夜、古い新聞紙などを丸めて火をつけ、その炎で焼き殺したが、幾ら捕ってもすぐに一面をおおうほど群れとまっていた。

九月に入ったころ、進駐軍が飛行機からDDTを撒布してから、ようやく減少したが、それでも、死体がまだ埋まったまま残っていたためか、まったくいなくなるということはなかった。

なお、ノミやシラミはいなかったようである。

生活物資の入手

生活物資は、十月末ごろまで、市から無償で配給を受けたが、これらの配給は、中島本町の富士火災支店跡の町内会事務所(付近の格町も含む)でおこなわれ、区域内の者が当番制で受け取りに行った。

主食は、吉島配給所とか千田町配給所および水主町下配給所まで行き、薪炭などは、大手町七丁目の森田配給所というように遠方まで行かねばならなかった。翌二十一年三月ごろになって、衣料品など放出品の配給は、地区町内会事務所まで配達してもらった。それまでは衣料品の配給はなかったが、五月になって、綿貫衣料品配給登録店

が中島本町で開業して以来、これらの配給がたびたびあるようになった。

この頃の地区内には、家のごくまばらに散在していたので、配給するときは、空罐利用の鳴子を作り、ガラランと鳴らして知らすようにした。それが鳴ると「何か配給があるぞ。」と言いながら出ていったものであるが、間の抜けたおどけたような音であった。

電灯つく

二十年十二月ごろ、中島本町には一〇世帯ぐらい復帰者がいたので、早く電灯をつけるよう、向洋町にある中国電力営業所へ日参して交渉した結果、電線さえあれば工事をするというので、水主町方面の焼跡にある電線を拾い集め、これを継ぎ足したもので工事をしてもらった。しかし、配電回路線に接続するためには、川を隔った向岸の革屋町の本線に接続しなければならなかったから、拾い集めた三メートルか四メートルの裸線を繋ぎ合せた。架線するときは舟を利用し、電線が切れないよう注意しながら渡して、本線につなぐという難工事であった。こうして、二十一年一月中旬ごろに電灯がついた。これまで付近にある焼残りの木を燃やして、明りをとっていたが、ようやく原始生活から一歩進んだのであった。これから逐次、地区全般にわたって電灯がついた。材木町あたりも、やはり拾い集めの裸電線をつないで、二十一年六月に電灯がついた。このときは電柱だけ各人が費用を負担した。

ロウソク生活

吉島町・同羽衣町一丁目あたりは、九月末ごろに電灯がつくまで、ロウソクの配給がほとんどないため、木ろうのようなものを闇で買い、これに手製の芯を置き、溶かして使用していた。電灯をつけるときは広島刑務所を電源にした。

吉島羽衣町二丁目は、市からロウソクの配給を受けて各戸に支給した。電灯がついたのは、十月十七日であった。

疎開世帯の復帰

中島地区一帯は、徹底的に焼けたばかりでなく、住民もほとんど死亡している関係上、疎開世帯の復帰を待つほかなかったが、七十五年間は不毛の地であると流布されていたので、疎開者も恐怖のあまり復帰する意欲もおこらず、ポツリポツリの状況であった。

吉島町・同羽衣町一丁目も散漫なものであった。

吉島羽衣町二丁目は、空家が多かったが、八月末ごろから、家主とか他町からの入居者が多く、わりに早く町民が増えた。

疎開児童の復帰

徹底的に破壊された中島地区は、住む所も無く、疎開児童を家族の避難先とか疎開先へ連れて帰る以外に方法がなかった。全滅した家庭の児童は、その縁故者に引きとられた。引取人のない児童は、五日市町の戦災孤児収容所に収容された。すなわち、中島地区へは帰ってくる者がなかったと言ってよい。

タケノコ生活

主食の配給が乏しく、配給された放出物資や疎開していたわずかな衣類などを持って闇市や農家へ行き、物々交換のタケノコ生活を営んだ。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

中島町一帯は、地盤が高かったから、九月十七日の暴風雨や十月八日の大豪雨にも、浸水するようなことはなかったが、軍が修理した本川橋も、原子爆弾では落ちなかった新大橋も、この豪雨による出水で落ち、しばらく交通が不便になった。

ただし、吉島町・同羽衣町一丁目付近は、床下浸水五〇%、床上浸水五〇%の被害を受けた。

吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目は、九月十七日の大雨で床下浸水となり、十月八日の大雨では、水が膝までつかる床上浸水の洪水となり、半壊家屋の大部分が崩れ、精神的な打撃は実に大きなものがあつた。

住宅の状況

焦土もようやく寒くなってきた十月ごろから、少数の人が周辺部の町村から木材を買って来てバラックを建てた。バラック建てといっても、掘立小屋式よりも、多少良くなった程度であった。二十年十一月ごろには、すでにこの地域を公園にする計画が話されていたが、具体的な設計とか方針とかは、まだ無かった。実施するか否かの確定を待つこともできず、土地所有者はこの地に住宅営団のパネル式住宅(一戸三、五〇〇円)を建てた。

吉島羽衣町二丁目では被爆後、四、五日して、焼残りの材木で何とか家を修理した。特別に資材はなかったのに、

有合わせの物をかき集めたのであった。

経済活動

二十二年ごろから、食糧品店が主体となって復興し、経済活動といえるものも見られはじめたが、商品も少なく活発なものではなかった。

学校再開

中島国民学校が廃校になり、舟入国民学校に編入されることになっていたが、中島地区町内会関係者が吉島本町一丁目川口宅に集まり、協議した結果、吉島本町一丁目に二戸、同町二丁目に二戸の民家を借りて、中島国民学校仮教室を作り、二十年十二月一日から授業を始め、廃校から免れた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

本川町一丁目 二丁目 三丁目、十日市町一丁目 二丁目、猫屋町、榎町、堺町一丁目 二丁目、土橋町（一部）

町内会別要目

この地区の範囲は、空鞆町東[そらざやちょうひがし]・同西[西]・鷹匠町表町[たかじょうまもおもてまち]・同中町[なかまち]・同裏町土井之内[うらまちどのうち]・鍛冶屋町[かじやちょう] 左官町[さかんちょう] 塚本町[つかもとちょう]・十日市町[とうかいちまち]・榎町[えのまち]・猫屋町[ねこやちょう]・油屋町[あぶらやちょう]・西大工町[にしだいくまち]・堺町一丁目～四丁目[さかいまち]・北榎町[きたえのまち]である。

爆心地点からの至近距離は鍛冶屋町の太田川畔で約三〇〇メートル、もっとも遠い地点は、空鞆町北端の西寺町と接するところで約九〇〇メートルである。

地区は、相生橋を西へ向って渡る電車軌道を中心にして南北に形成されていて、その町名があらわしているように藩政時代は、職人が多く居住していた。鷹匠町は、往昔藩侯遊獵のとき、鷹を放つ鷹匠の居住していたところであり、榎町は、昔、榎樹が水路に沿ってたくさんあったので町名とし、十日市町は、昔、毎月十日に市場が開かれたのが町名となった。また、猫屋町・堺町は、猫屋とか堺屋とか称する豪商が居住していて隆盛をきわめ、そのまま町名となったと旧史にある。

このように町人の町として古くから発展し、地域的な伝統も深い。明治以後、ずっと現代まで商工業地帯として栄え、人口の密度もきわめて高率である。

原子爆弾による被害は甚大で、家屋は全域にわたって全壊全焼した。人的被害も死傷者一〇〇%に近く、二十一年八月十日現在で、市役所が調査した資料によると、一か年間(四日間のズレがある)に死亡した数と、当日の即死者、および行方不明者を含めた数が、地区総人口の八五%におよんでいる。

まさに壊滅の廢墟になったといえよう。

被爆前の戸数・人口

当時の建物総数は、次表のとおりである。ただし、推定数。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
空鞆町東	1,917	1,930	7,720	榎本嘉八
空鞆町西				三上丹次
鷹匠町表町				平田倉吉
鷹匠町中町				後田寿
鷹匠町裏町				戸田弘
土井之内				戸田弘
鍛冶屋町				桧山薫三
左官町				三戸謙一
塚本町				楠原常吉
十日市町				井上春美
北榎町				高橋剛
榎町				正岡旭
猫屋町				山崎吾一
油屋町				佐伯朋一郎
西大工町				西林繁雄
堺町	西林繁雄			

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
本川国民学校	鍛冶屋町	妙教寺	油屋町
本覚寺	左官町	空鞆神社	空鞆町
光道国民学校	猫屋町	清住寺	左官町

二、疎開状況

人員疎開

十九年末ごろから、日本への敵機の襲来がはげしくなり、戦局は悪化の一途をたどったので、病弱者や老人が少

しばかり疎開した。そのあと軍から「病人や幼児のほかは絶対に疎開してはならん。市民はあくまで踏みとどまって、市の防護にあたる義務がある。」と、布告が出たため、あらわに家族を疎開させるものは少なかった。

ただ、夜になると必ず空襲が警戒警報が出るので、夜だけ近郊の知人の家に待避するか、または夜具をかかえて、周辺の山で仮眠し、朝になると自宅へ帰ってくるという生活を、ほとんどの者が繰り返していた。

しかし、どの家も青、壮年者は動員を受けて家にいず、老人と女、子どもが家を守って、それぞれの家業に従事していたから、完全な疎開生活は事実上できなかった。

物資疎開

物資の疎開も、二十年に入ってから、輸送機関がほとんど軍部に動員され、運送も思うようにいかないありさまとなり、ほとんど諦めざるを得ない状態で、計画的な疎開はできなかったものが多い。

学童疎開

本川国民学校では、昭和二十年四月十五日に、三年生以上の学童(高等科生徒を除く)二〇〇人あまりを、双三郡十日市町・同八次村(共に現在、三次市)へ集団疎開を実施した。

なお、この疎開以前にも、縁故のあるものは任意に疎開させたが、これら縁故疎开学童は約五〇〇人ほどであった。また、猫屋町の私立光道国民学校も、山県郡都谷村及び同郡原村へ約一〇〇人ほど集団疎開を行ない、縁故疎開は約六〇人ほどであった。

三、防衛態勢

地区内各町の警防団が、連繋して組織的に防空・防火訓練を実施した。

青壮年層が動員で家にいなくなったので、主として婦人ばかりが隣保班を組織し、パケツリレーの消火訓練や避難・救護などの演習をおこなった。

各家庭は、強制的に防火用貯水槽を設備し、防空壕を作っていた。また、各隣保班ごとに共同の防空壕を作った。なお、主要建物の周囲、倉庫の付近などに防火対策として空地を作るため、家屋の疎開も順次実施されていた。

四、避難経路及び避難先

災害時に水ける避難先、および避難経路をあらかじめ、次のように決めていた。

空鞆町方面 = 横川橋を経て、安佐郡川内村(現在・佐東町)

鷹匠町方面 = 横川橋を経て、安佐郡古市町中調子(現在・佐東町)

鍛冶屋町方面 = 中広町を経て、市内山手町天神山裏

五、所在した陸軍部隊集団

広島憲兵分隊

光道国民学校内に広島憲兵分隊が設けられ、藤井貞利憲兵大尉以下、憲兵七五人・補助憲兵一三五人、特別機動隊三五〇人計五六〇人が駐屯していて被爆、ほとんど全員死傷し、七、八人が生き残った(柳田元憲兵准尉談)。

六、五日夜から炸裂まで

戦局が逼迫し、連日連夜、警報が発令されたり、解除されたりする中で、町民は日ごろの訓練どおり、警防団や町内会役員の指揮に従い、防空壕へ待避したりしたが、終りには馴れっこになって、さほどの緊迫感も感じないような状態であった。

五日夜

防空・防火対策も決められたことを、ただ繰り返すだけであったが、特に五日の夜は、空襲警報が二回も発令されて寝不足であるうえ、これまでの疲労が重なって、暑苦しさが一層からだにこたえていた。

空襲警報のときも、灯火管制は怠ることなくおこなったが、もうたびたびのことではあるし、警報だけで爆撃はないものと、いささか高をくくって防空壕へ待避しなかった者も多かったようである。

六日朝

原子爆弾炸裂の直前六日の朝にしても、警戒警報解除後であったし、防空壕へ待避している者は一人もいなかった。たとえ待避していたにせよ、原子爆弾に役立つような構造の壕ではなかった。

炸裂に際してはなおさら、壕へ待避する余裕などまったく無かったし、壕もまた瞬時に破壊されていたから使用することはできなかった。

六日の朝は、寝不足の目を刺すように太陽が輝き、よく晴れていた。警戒警報が解除になったので、みな一安心して平常どおり、おのおのの仕事に取りかかっていた。

空鞘神社では、本川国民学校の一・二年生学童四、五〇人が、先生に引率され、戦勝祈願のため参拝していた。

また、空鞘町の町民は、土手筋にある家屋の疎開作業に出ている者もあった。疎開作業には、他の町の住民もかなり出動していたようであるが、現在生存者も少なく調査できないので詳細がつかめない。従って、本川地区における建物疎開計画とか、当日の実施地区有無や、その他の状況も不明である。断片的ながら、調べられた部分については、つぎのとおりである。

疎開作業への出動と建物疎開実施概況

町内会名	動員令による町内会より疎開作業への出動について		疎開状況			
	出動人員概数(人)	出動人員概数	建物疎開計画予定概数(戸数)	被爆前日までの実施概数(戸数)	当日朝実施中の概数(戸数)	他地区からの応援人員概数(人)
空鞘町 東、西	出動予定人員四〇	空鞘町	5	2	1	不明
鷹匠町 表、中町、裏町	不明		10	3		
鍛冶屋町	不明		5	4		

右表以外の町内会で、左官町・塚本町・十日市町・堺町一、二丁目・猫屋町・油屋町・西大工町の谷町は全面的に不明である。

七、被爆の惨状

火災発生

地区全体にわたって、炸裂と同時に強烈な爆風により、建物はすべて倒壊した。また、放射熱線を受けて着火し、炸裂後五分間ぐらいで随所に煙が立ちはじめ、約二〇分後には、全地域が火炎のるつぼと化していた。風が南から北へむかって吹き、各町ほとんど同時に火災を発生し、午前中にほとんど全地区を舐めつくしたのであった。

そして、多くの人々は、その時間にそこにいたままで死んだ。

火災地獄の出現

人々は爆風の衝撃で失神し、倒れたなりに焼死するか圧死した。辛うじて倒壊家屋の下敷きから脱出した者もひどい火傷、大きな打撲傷を受けて、まともに歩行できなかった。

救出を求める声が、黒煙のなかに聴えても、襲いかかる劫火に追われ、ただわが身一つを守って逃げるのがようやくのことであった。

逃げ出した人々のほとんどは、近くの太田川(本川)の川べりへ向ったが、川までたどりつく途中で倒れたまま焼死した。一部は中広町や己斐方面へ逃げ出そうとした者もあったが、これも大部分が途中で動けなくなって焼死したり、重傷のため死んだ。

せつかく川まで来た者でも、向う岸へ渡ろうとして、数すくない筏や川舟に群がりついたため、それらともろともに水中にくつがえされ、浮きつ沈みつつ流れて、ついに溺死した。

全域が焼きつくされたのは午後三時ごろであったが、本川の岸へには、息も絶え絶えになった避難者が、ずらっとメジロ押しに石にしがみついで喘いでいた。この人たちも次第に力つきて、つぎつぎに川に流されて消えて行った。

郊外に通じる鷹匠町から空鞘町にわたる土手筋の道路上には、全身血だるまになった負傷者や、ゆでダコのような火傷者、顔面の皮膚が剥けて腫れあがった者などが、折り重なって倒れていた。

また、火炎をくぐって逃げて来た馬が一頭、土手の道路をふさぐように四肢を張り、目をひらいてジッと立っていたが、急にドサッと倒れて死んだ。

夜間になっても、まだ、所々に残り火があって、煙をあげていた。特に倉庫などは永く燃えていた。砂糖や穀物が貯蔵してあった所は、青い炎が無気味にあがっていた。六日以後も二、三日燃えつづけていた。

相生橋 - 左官町 - 土橋へかけての電車軌道筋の道路にも、すでに息絶えた者や、死にかけている重傷者が両側をずらりと埋めていた。橋のたもとに、軍馬が横になって倒れ、そのそばには全裸で革の長靴だけをはいている兵士が死んでいた。また、一二、三人の兵士(一分隊か)が、折敷し葵勢のまま並んで死んでいた。帽子を吹きとばされている者、あまり傷のない者など、瞬間的に硬直したように思われた(中畑佐一談)。

そのすぐ近くには、四〇歳ぐらいの男が膝をかかえてかがみ、茫然と通る人々をながめていた。その左足の膝から下は、骨だけになっていた。何かに挟まれて左足が抜きとれないまま火に焼かれ、肉が焼けたとき抜けて、逃げるのができたようであった。

川へ避難した者は、燃えあがる火災の熱気をさけるため、首だけ水面に出して、川床の石にかじりついていたが、力つきた者からつぎつぎ水流におされて溺死した。

僅かの人々が、やっと向う岸の基町の堤防にたどりついたけれども、まもなく死んでしまった。

炸裂時の瞬間的被害

全壊全焼のこの地区は、その物的・人的被害が実に大きなものであった。各町の炸裂時の被爆状況は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
空鞆町	90	10	-	-	89	5	6
鷹匠町	97	3	-	-	89	4	7
鍛冶屋町	92	8	-	-	81	9	10
左官町	99	1	-	-	91	4	5
塚本町	100	-	-	-	96	4	-
十日市町	98	2	-	-	86	10	4
北榎町	94	6	-	-	52	43	5
榎町	99	1	-	-	79	20	1
猫屋町	98	2	-	-	85	10	5
油屋町	93	7	-	-	84	8	8
西大工町	98	2	-	-	88	10	2
堺町	96	4	-	-	87	4	9

橋梁被害状況

相生橋(永久橋)のらんかんは両側とも破壊され、橋床も浮きあがっていたが、通行は可能であった。本川橋は橋ケタが爆圧のため移動し、橋台は橋脚をはずれて落橋し、通行できなかったようである。

黒い雨降る

午前十時前後であったが、三、四〇分間にわたって夕立ちのように激しく黒い雨が降った。地区内で雨の降っているところは、もう火災が下火になっていたらしく、焼けるものはほとんど焼きつくされているところであった。

まだ息のある老は、灼けつくような炎天下ながら、防空頭巾やふとん・トタン・板など手当たり次第に拾ってかぶり、「寒い、寒い。」と、震えていた。そこへドシャ降りの雨が降ってきたのであった。

諸現象

翌日の朝、焼跡に帰ってみると大きな鯉が一〇匹ばかり飼ってあった池の水がカラカラに乾いており、鯉は影も形もなく消えていた。骨さえも見つからなかった。

また、焼跡に残っている黒焦げの死体は、いずれも首をもたげ、両手を胸の前に出し、その手先を幽霊のように下にたらしめていた(横田侃目撃談)。

また、縁故者を探しながら相生橋の上を渡るとき、裸の死体がすべて男なので不思議に思い注意してみると、女は陰部から腹わたがはみ出していて、ちょうど男の性器のように見えていたのであった。どの死体も赤くただれて腫れあがっていたから、顔面はもちろん、からだの形では性別の判断がつかず、陰部だけを男女の別の根拠にしなければならなかった(藤田松雄談)。

自然着火

熱線による自然着火が火災の大きな原因となったが、放射能線は爆心地から遠ざかるにしたがって、放射線状の筋となって拡がり、線上は強く、線と線のあいだは弱く、その強度が違っていたようである。

この地区は、爆心に近かったため、全域にわたってほとんど均等に熱線の放射をうけ、可燃性の物質は、炸裂後、反射的に火を発したと思われる。当時の居住者で、この着火状態を目撃した者はほとんど現存していない。

たとえ生存者があっても、炸裂にあってしばらく気絶状態におちいついて、気がついたときは、もう周囲が燃えていたであろう。

物質の変化

強度の火熱によって、金属類は溶解したり、いちじるしく変形したりして、原型を保った物は皆無であった。溶解した金属製品は、焼けた瓦や石をつつむようにして凝結していた。ガラス類も原型なく溶け、陶器類とともに置かれていたものなどは、その陶器に付着して流れたまま固まっていた。

このような状態のなかで、左官町原田浴場の煙突は、かなり高いのに形もくずれず完全に残存し、空鞆神社の石造の鳥居も、倒れないで以前のとおりに立っていたのが不思議であった。

八、被爆後の混乱と応急処置

一瞬にして全滅したこの地区には、救援隊もまにあわないで、当日はおそらく来援しなかったのであろう。

ただ、相生橋 - 左官町 - 土橋間の電車軌道に瀕死の重傷で倒れていた者、及び鷹匠町 - 空鞆町間の川沿い土手筋に逃げ切れないで横たわっていた負傷者たちは、六日当夜から七日にかけて暁部隊の兵士が出動し、最寄りの外郭だけ残った建物(本川国民学校)や、その他の臨時救護所に収容した。

李グウ公殿下

宇品の暁部隊内で被爆した竹中泰軍属が、鷹匠町の自宅の安否をたずねて帰り、途中、憲兵にとがめられながらも、午後十二時四十分、相生橋西詰に到着した際、同西諸北側で、被爆してうずくまっている李グウ公殿下(第二総軍教育参謀)を発見した。「君は軍の者か、町の者か？」と、殿下に問われた。「町の者です。家を見に帰るところです。」と、竹中軍属は答えた。「よう生きて帰ったね。俺は、今朝、やられたんだ。李グウ公という者だが、どうか憲兵隊に連絡を取ってくれないか...」と、頼まれた。

李グウ公殿下は、顔から胸に火傷し、上衣は吹き飛ばされて、力なさそうであった。竹中軍属は、ともかく此処ではいけないと考え、殿下を背負い、本川国民学校東側の川沿いの道に面した防空壕(二畳敷位)に運んだ。殿下は一六、七貫の巨体であるうえ、手は火傷してズルズルになっていたから、壕内に運びこむのも一苦勞であった。

竹中軍属は、連絡しようにも誰もいなくて困ったが、三時半ごろ、十日市派出所の負傷した巡査が歩いて来たので、これに連絡方をたのんだ。巡査は引返して、派出所が埋蔵していた油を持って来て、応急手当をした。そのうち四時半ごろ、軍人が通りかかったので、これに連絡することができた。

この連絡により、宇品の暁部隊の舟艇が川をのぼって来て、殿下を収容した。

宇品の凱旋館に収容され、軍医の診察を受けたときの状況については、佐伯司令官の記録(外傷みられずとある。)にあるが、そこから似ノ島の収容所に転送後、翌七日午後四時過ぎに逝去された。

李グウ公殿下は、朝鮮王最後の王世子李ギン殿下の甥にあたり、当時、古田町高須の前田別荘に約三か月滞在中・第二総軍司令部へ出勤途上において被爆したのであるが、このとき、猫屋町の憲兵分隊(光道国民学校内)勤務の柳田博憲兵准尉は、李グウ公殿下の護衛憲兵を勤めていた田辺憲兵軍曹が、馬に跨がったままで、相生橋から約五〇〇メートル先の十日市町電車停留所付近の倒壊民家の前で死んでいる現場を、七日に確認し、その死体を収容した。

李グウ公殿下の死去にあたり、お付武官吉成弘中佐はその責任を感じ、殿下の病室の前の芝生に正座して、ピストルで殉死したと言われる。殿下の遺骸は総軍の飛行機で、京城の自邸朴賛珠妃殿下のもとに届けられた。ちなみに、昭和三十八年十一月七日、朴賛珠夫人が来広せられ、相生橋上から、川に花束を投げて、故殿下の冥福を祈られた。

応急救護所の設置

本川国民学校は、爆心地に近かったけれども、鉄筋コンクリート三階建校舎で、外郭だけ焼け残っていた。ここが応急救護所にあてられ、翌七日から負傷者を収容し、軍の衛生班が治療をおこなった。

十五日、終戦になってからは、三滝の山小屋で治療活動を続けていた長崎五郎医師が、本川国民学校臨時救護所の所長に就任、医員には、大芝国民学校で活躍していた沓内一知医師をはじめ、長谷・後藤・大内各医師、及び大川・堀部・佐伯各歯科医師、田辺薬剤師、事務長には県立三次保健所事務長が任命された。看護婦は、壊滅的打撃を受けた県立広島病院の残存者その他から集められたが、祇園高等女学校の生徒も看護補助に活躍した。また、双三郡医師会など郡部から多数の応援医療班が到着して、救護が進められた。

更に、鳥取・島根両県からも応援医療班四、五人が、連日来て治療にあたった。大混乱もようやく静まったころ、米・砂糖・粉乳などの配給があり、負傷者や医療従事者に対して、古い軍服も配給されたが、火傷者に塗る油もすぐ無くなるというような医薬品の欠乏状態のなかで、長崎所長以下全従事者の涙ぐましい奮闘が続けられた。

道路の啓開

倒壊した家屋や飛散物で、いずれの道路もふさがれていたが、電車軌道だけは路面に障害物が少なく、わりあいふさがれていなかったため、避難者の道筋となったぐらいで、誰が整理するともなく路面が片づいていった。

また空鞆町の土手筋も同じように通行がはげしかったので、道は自然に整理されていったようであった。しかし、これらの道路は七日から八日にかけて軍隊が死体の収容をおこなったので、同時に路面の清掃がおこなわれたことになったのもあった。

元安橋 - 本川橋 - 堺町通りの国道筋も、軍隊や救援隊の手によってだいたい整理された。その他の道路は、郡部

や周辺地区から縁故者の行方を探しに出て来た人々が往来することによって、そのまま復旧された形となった。

また、復帰者が多くなるにつれて、これらの人々が、自分の住居の付近をかたづけたので、次第に細い道路も復元していった。

死体の収容・火葬

火災が一応終息した七日から、電車線路、あるいは川沿いの土手筋をはじめ、全地区にわたって累積し、散乱しているたくさんの死体の収容がはじまった。救援の軍隊が一、二分隊ほどきて、電車線路筋の広場とか、各寺院の庭などを収容場所として処理した。

これらの死体のうち、縁故者によって探し出され確認できたものは、各自がその場で茶碁にふし、遺骨を持ち帰った。確認のできない身元不明の死体は、軍隊が任意にとりどころへ集めて火葬し、遺骨はそのままそこに置いてあった。

死体は、かなりの日数を経て、瓦礫の下などから発見されたものもあったが、そのつど発見した人の手によって火葬にふし、遺骨はそまつにならないよう適宜に処理された。

火葬のおこなわれた主な場所は、清住寺・本覚寺・妙教寺の焼跡、および本川国民学校校庭などであったが、縁故者が探したものは、その死者の家のあとなどで焼かれたのも多い。

遺骨の安置と慰霊

死体収容後、六日の火災で焼死した人々の白骨が、風雨に晒されるまま、あちらこちらにたくさん散在していたので、空鞆神社境内に復帰してバラック小屋を作り、準世帯を構成していた一四、五人の人々が、九月上、中旬にかけてたんねんに收拾してまわった。その遺骨は、空鞆町の川土手にあったコンクリート製防空壕(家庭用の一坪ぐらいの穴)を利用して埋葬し、その上に小さな御堂を建てた。そして、その年の秋の彼岸に四十九日の法要を営んだ。

本川法要会

以後、毎年八月六日、本川法要会の有志が集って、法要を続けていたが、月日がたつにしたがい、また町の復興が進むにつれて、当時の痛ましい記憶もうすらいだのか、法要に関心を持つ者が少なくなって来た。十三回忌の三十二年八月の法要の際、学区内有志の寄附金を募り、それを基金にして慰霊碑に改築し、本川法要会としての最後の法要を執りおこなった。そして本川法要会は解散したのであった。

現在では、八月の盆と正月には、有志が花を供えている。しかし、心ある人々の参拝も絶えず、供花が置かれ、いまでも犠牲者の霊は慰められている。

この慰霊碑に納められた約一、〇〇〇柱の遺骨は、市の復興が進んで来たので平和記念公園の供養塔と、寺町の西本願寺別院の納骨堂に分骨して納めた。

町内会の機能

なにもかも一瞬の壊滅で、町内会も全面的に機能を喪失した。

当時の町内会役員は、会長をはじめ各役員とも、国土防衛の責任上疎開することもできず、町内に踏みとどまって日夜活動していたから、町の壊滅と生命を一緒にした。

空鞆町西町内会三上丹次会長の一家六人は、河岸から舟で上流に脱出、六人揃って奇蹟的に無傷であったのに、一か月以内に六人とも全員死亡した(竹野兵一郎談)。

人々の往来

空鞆神社のある土手筋は、安佐郡・山県郡方面から出てくる人々の通り道となる要路であった。ちなみに当時広島市内に入る経路は、西部方面からは、己斐町 天満町 十日市町 紙屋町の道順であり、東部方面からは、広島駅 稲荷町 山口町 紙屋町であり、北部方面からは、横川町 空鞆町・鷹匠町の川土手沿い 相生橋 紙屋町と出るのが主な経路であった。

したがって、空鞆町の川土手を通る人たちは、ほとんどがバラック小屋に立ち寄り、縁故者の消息をたずねたり、用件を依頼したりした。

町内会再建

八月十五日、終戦になってまもなく、罹災者に対して市から見舞金が交付されることになったが、これには警察か町内会長の証明が必要であった。その必要に迫られて、とりあえず空鞆神社境内に居住するバラックに本川連合町内会事務所を設け、元空鞆町内会副会長高本光信が会長に就任し、ただちに地区内罹災者の証明書の取扱い業務を開始した。

この以後、地区内に復帰する者は必ずこの事務所を訪れ、いろいろの相談や依頼をしたのであって、あたかも市役所の出張所のような役割をはたした。

また、このころは、諸官庁・銀行・会社などの施設も焼失し、従業員の犠牲者も多かったため、復興初期は内部的建直しに全力が傾注されていたから、一般の窓口事務をつぎつぎ町内会事務所に依頼するようになり、事務所はますます多忙に追われることになった。

当時、郵便関係も大きな打撃を受けて、郵便物などの配達事務にはもっとも不自由を感じていた。

郵便局は市内の各局とも全滅に近く、局員も多くの犠牲者を出し、被爆当日が非番で被災圏外にいた者が僅かに生き残っただけの状態であったから、配達事務は渋滞するばかりであった。加えて、配達先の家が焼失して行方すらも判らない者が実に多く、配達しようにもできないのが実情でもあった。

それで、本川連合町内会事務所では、これら郵便物を預かり、区分箱を作って分類し、受取人が来るとか、あらわれるのを待っていた。また、郵便物を発送するときも、罹災者は事務所へ依頼したりしたから、局は事務所に郵便切手販売所を委託し、ポストも設け、現在の三等郵便局の役割もつとめた。

さらに、学校・寺院・神社の復興をはじめ、地区内の環境整備(焼跡清掃など)や、横行するならず者の警備なども活発におこなった。

翌二十一年の初めごろから各官庁・会社などの機能が一応ととのえられるとともに、郡部からの復帰者も急増し、各町に四戸か五戸のバラックが建った。それが次第に増加してきて、連合町内会事務所だけでは運営できなくなったので、それぞれの町を単位とする組を組織し、各組に組長をおき、その町の事務をとりおこなうことにした。二十一年末、この組織を発展的に解消し、あたらしく各町に町内会を設置した。こうしてようやく町内会機能が正常に復したのであった。

九、被爆後の状況

最初の復帰者

荒涼とした廃墟の八月十一日、空鞘神社境内に、焼け残った約四メートル高さの松の幹をそのまま柱に利用し、周囲に転がっている残材や板を拾い集めて、焼トタンぶきのバラック約一二平方メートルばかりのものを三戸建て、空鞘町内会副会長高本光信ほか三人が入居した。この四人が被爆後に復帰した最初の人々であった。

このように早く復帰したのは、十一日午前十時ごろ、偶然、高本ほか三人(このうち二人は親子)が、空鞘神社の前の川土手の上で出会って、お互い生きていたことを喜びあったのが、きっかけであったという。

三人は、物資欠乏のとき、親類や知人をたよって行くのも迷惑がかかるし、また行ったとしても長期間いるわけにもいかないのであるから、いっそこへ留まって、何とか更生するようにお互い力をあわせてやろうということになり、定住することにしたのである。

十五日の終戦日には、復帰者が一四、五人になり、バラック小屋も二、三戸増加して、少しは賑やかになった。

このころから物資の配給もはじまったので、いよいよ力を得て、準世帯を構成し、共同生活をはじめたのであった。

八月末日の居住世帯数

八月末ごろの地区内居住世帯数は、空鞘町一三世帯・鷹匠町二世帯・鍛冶屋町二世帯・左官町二世帯・堺町二世帯で、このほかの町には一人も住んでいなかった。

八工の発生

被爆後二週間もたったころから、八工がものすごい勢いで、焦土をおおうように発生した。

バラック内で食事をするとき、その茶わんにまっ黒くなるほどむらがってきて、追えども追えども逃げず、口のなかへ食物と一緒にはいったりしたほどであった。

夜は、トタンの屋根裏一面に、すきまのないほど止まっていたから、ありあわせの紙を細長く巻いて火をつけ、これで焼きおとすと雨が降るように床に落ちた。掃きあつめると死がい山をつくった。

外を歩く人の体には、必ず何百とも知れぬ八工が、どこということなくさばりついていたり、ようやく走りだした電車の中でも、天井といわず窓といわず、つり革にまでも止まっていて人を刺した。九月上旬ごろ、占領軍の飛行機が二回ほど、空から駆除剤を散布したので、それ以後はばったりいなくなった。

生活物資

八月十一日の復帰後、最初のあいだは警察が置いてくれた乾パンや、近郊から縁故者などを捜しに出てきた人々

が恵んでくれる物でほそぼそとすごした。八月十五日ごろから配給機構が整いだしたので、準世帯として配給を受けるようになったが、主食の配給のときは、当初は千田町の御幸橋のところにある配給所まで行かねばならなかった。炎天下、人影もあまりない瓦礫の荒野を、壊れかかってキキイと軋み鳴る小さな荷車をひいて、汗をふきふき、回りまわって取りに行くのは、空腹をかかえての、一日がかりの仕事であった。

十一月ごろ、本川地区内に、主食配給所の出張所的なものが開店したので、以後はここで配給を受けるようになり、重労働から解放された喜びを感じた。

十月中旬ごろ、被服の配給があった。ほとんど軍隊の払下げ品で、軍服・軍靴・生地などで、罹災者全員に行きわたるほどはなかったけれど、その後の二、三回の配給でやっとゆきわたり、その年の厳しい冬をしのぐことができた。

電灯

夜の明りは、とぼしいロウソクや、残材をかき集めて焚火をしたりして過していたが、二十一年はじめごろ電灯がついて、一種の安らぎを取りもどした。

人口増加

疎開世帯と避難者の区別はできないが、地区内への復帰状況は、実に緩慢であった。

その実情は、別添の「広島市本川聯合町内会日誌」に見るとおりである。

十、荒廃と復興

枕崎台風と阿久根台風

九月十七日の暴風雨(枕崎台風)に続く、十月の洪水で、地区の西方に隣接して西側を流れる天満川へ、堺町通りに架設された天満橋が落ち、さらに天満橋の下流にかかっていた電車専用鉄橋も壊れた。そのため己斐町方面から市中に通じる要路が、完全に断たれてしまい、市中に行くには、中広町を迂回して北へ行き、横川橋まで遠まわりしなければならないことになった。

復旧するまで、天満橋の北側に仮設したロープ伝いの渡し舟を利用した。また、地区は水害はまぬがれたけれども、郡部に疎開していた最後の家財を、疎開地の水害によって水につかったり、流失したりして無一物となり、落胆した人も多かった。

住む人

なお、地区全体が焦土のままに住む人も少なく、社会的な不安な事故も発生する余地すらなかった。住宅の復旧状態も前述のとおりであって、しばらくのあいだ、ただ空漠とした荒野の生活があるに過ぎなかったのである。

地区は全滅で、昭和四十二年現在まで生き残っている者は、八月六日当日、勤務先の関係や偶然の私用などで運よく被爆圏外にいた者がほとんどである。従って、戦後復帰して町を形成した人々の多くはそうした人が多く、それに少数の復員軍人と海外引揚者たちである。しかし、緩慢とは言いながら、市の中心地よりは比較的早く復帰者があり、復興も早かった。

特に学校や神社などの復旧はそのさきがけと言えるようである。

広島市本川聯合町内会日誌(抜粋)

広島市本川聯合町内会日誌(昭和二十年十二月吉日起・高本光信記録)は、昭和二十年十二月一日から昭和二十二年五月三十一日までの記録で、内容は主として、住民の転出入が個人個人について、そのつど記入されており、ところどころに、世帯数・人口数などの記入がある。

また、婚礼や妊産婦などの物資特配事項及び復員者・引揚者の世帯・人口などが記入されていて、当時の復興状況を知ることができる。

町会日誌による転出入人口の一覧表で見れば、原子爆弾炸裂から、その年の十二月十一日現在まででは、全地域内に三六世帯八五人が復帰していたことが判る。翌二十一年になると、ようやく復帰者も本格的なものとなりはじめ、一月二十六日現在で、五二世帯一二六人となっている。

五月、六月には福岡から集団転入があり、七月には相当数の復員者や引揚者の復帰、十一月には、また県下や県外からの集団転入があって、ようやく復興のきざしが見えはじめた。

二十二年になると、いよいよ順調にのびてきているが、転入のほか転出人口も相当あり、当時の生活状況が如

何に不安定なものであったかが判る。

次に掲げるものは、町内会日誌の転出入を除く抜粋であるが、婚礼や出産などが、焦土の中でも次々におこなわれ、新生広島の、たくましいうぶ声を示している。

本川聯合町内会日誌(抜粋)

昭和二十年 十二月一日現在

世帯数 三五世帯

人口数 八四人(男 五八人、女 二六人)

十二月十一日現在

三才~五才 二人、二才~一五才 五人、

一六才~六〇才 七六人、六一才以上 三人

合計 三六世帯 八六人

十二月十三日

米穀 十二月二十八日まで配給済

三八世帯 九一人

十二月十四日

醤油一人当 〇・五四リットル、

エビつくだ煮一人当一五〇グラム、

食肉一人当 三七・五グラム

昭和二十一年 一月六日現在

世帯数 四八世帯

人口数 一二九人

一月十九日 イリコつくだ煮 一人当 九〇グラム、油 〇・〇九リットル

一月二十六日現在

世帯数 五二世帯

人口数 一四七人

二月三日現在

世帯数 五九世帯

人口数 一五八人

二月二十二日勤労署厚生月報に関する件

記

復員軍人 前月まで 外地 陸軍二九人

外地 海軍三人

本月分 内地 陸軍三人 失業二人

外地 陸軍一人 失業一人 海軍一人 失業一人

合計 三七人

失業 外地 陸 二人 海 一人

内地 陸 六人

就職不能 女 一人

失業者

前月分 事務者 女二人 小商業者 男三人

工場労務者 男五人 労務者 男一人

本月分 事務者女 一人 小商業者 男一人

工場労務者 男二人 その他 女一人

計 前月分 男九人 女二人

本月分 男三人 女二人

三月十日

塩人口

九月 一三五人、十月 一五四人、十一月 一七四人、一月 一八三人、三月 二一五人、三月九日 二三五人
三月二十九日現在

世帯数 八九世帯

人口数 二八一人

四月一日現在

世帯数 八八世帯

人口数 二八一人

四月八日

婚礼用物資配給交付(吉 昇分)

六月七日

妊婦に付増量す(竹 サ 分)

七月二二日

妊婦に付増量す(穰 孝 妻ヨ 子分)

七月十六日

戦災者給与金の件(萩 英 分)

七月十九日現在

復員軍人 三九人 世帯数 一〇

引揚邦人 二人 世帯数 四

八月十六日

妊婦増量(中 直 妻分)

八月二十二日

婚礼の為物資配給交付す(山 花 分)

九月十日

砂糖の件(商工課扱)

老令者(六〇才以上)二五人

乳幼児(一才~六才迄)六九人

計九四人

九月十三日

妊婦に付き増量す(百 政 妻文 分)

九月三十日

結婚物資配給交付す(徳 茂分)

十月一日

妊産婦米穀増量す(桐 松 分)

十月四日

妊産婦に付き米穀増量す(岡 正 妻チ 子分)

結婚に付き物資特配す(伊 政 利兄分)

十月十八日

妊産婦に付き米穀増量す(吉 利 妻貞 分)

十一月五日

妊産婦に付き米穀増量す(占 山 郎方妻三〇子分)

十一月七日

妊産婦に付き米穀増量す(丸 昇 の妻豊 分)

十一月十八日

引揚者数 一〇世帯 六〇人

復員者数 二五世帯 二九人

10	39	9	8	1	1		4		7						6	1
11	26	16	19	32		1				79						
12	32	7	10	5					4	2					3	
S22. 1	77	10	21	6		1			10							
2	24	12	17	30	1	2	2	1					8			
3	60	3	9	6			4		6							
4	10		9	1		5		1	4							
5	21			1					6							

	市部から転入			県外から転入			不明	復員	引揚	転出	転入合計	
	呉市	福山市	尾道市	山口県	岡山県	その他県外						
S20. 10. 26											1	12.25 現在 68 人
11. 2											1	
4											1	
9											1	
10											1	
13											1	
15											1	
23											3	
25								1			1	
26											2	
29				2							2	
30											1	
合計				2				1			16	12.1 現在 84 名(35 世帯)
12 月						4		2	1	4	31	12.11 現在 85 名(36 世帯)
S21. 1	1							3	1	4	25	1.6 現在 129 人(48 世帯) 1.6~1.26 15 人増 1.26 現在 147 人(52 世帯) 1.27~31 13 人増
2										9	35	2.3 現在 158 人(69 世帯) 2.1~2.3 増減なし
3	3					1		2	8	3	82	3.29 現在 281 人(89 世帯) 2.4~3.29 105 人増
4				11		3		1	7	3	82	4.1 現在 281 人(38 世帯) 43 人増 4.1 現在
5				7		29	1	1	1	4	84	福岡より集団転入 27 人
6	1					54		3			112	福岡より集団転入 54 人
7						1		6	3	12	43	7.19 復員 39 人(10 世帯) 現在 引揚 21 人(4 世帯)
8						3		2	5	21	29	
9	1			4		9			5	15	102	
10	1	4		2		10			2	15	95	他に出生 2 人
11			1			30		1	5	40	210	他に出生 1 人 集団転入(御調 79 人、安芸 32 人 23 人) 集団転出 246 人
12	3			1		9			1	16	77	他に出生 1 人 在籍簿抹消 80 人
S22. 1	4		1	9		59	長崎集団(1)		1	22	119	他に出生 4 人 集団転入 42 人
2				11		3			12	36	123	他に出生 1 人 (集団転出 29 人)
3	4			3		12	36		8	31	151	他に出生 5 人 死亡 1 人 在籍簿抹消 3 人
4				7	3	13				32	53	他に出生 2 人
5				5		4				29	37	他に出生 5 人 死亡 2 人

一、地区の概要

基町(もとまち)地区は、広島城内の中国軍管区司令部を中心にして、地区の全域が軍用地であった。

爆心地からの距離は、西南端電車線路に沿う広島商工会議所付近(相生橋東詰)が〇・二五キロメートル、もっとも離れている地点は、北端の三篠橋東詰めで約一・四キロメートルである。

基町の起源は、毛利氏以来の広島城城廓の旧址を、広島の開基地ともいべき意にちなんで、明治二十年に新しく旧城廓内の地の総称としてつけられたと言われる。

城跡の天守閣は、ほとんど市中のどの方向からも眺められ、日夜市民の目にながく親しまれていた。それをめぐる内濠の蓮は、紅白の花を点々とつづり、セミ取りやトンボ釣りの子供が歓声をあげて、さわやかな初夏の風物詩があった。冬には、枯れた蓮の葉かげや石垣の投影を乱してカモやオシドリなどが遊び、真鯉が急に水面を叩いて跳ねた。黒ガネの大きな城門をくぐると、老松古杉が聳え立っており、厳しい冷気が迫ってきた。なお、日清戦争従軍記者として広島に来た正岡子規は次の一句をのこしている。

春暁や城あらはるる松の上

陸軍の概略

明治四年八月二十日、全国に新兵制がしかれ、広島城内に鎮西鎮台の第一分営が設置された。翌五年十二月二十八日、初めて徴兵令が公布され、六年一月九日の全国の鎮台配置改定により、第五軍曹広島鎮台となり、歩兵二個聯隊(歩兵第一一聯隊・広島及び歩兵第一二聯隊・丸亀)・砲兵一個大隊・工兵一個小隊・輜重兵一個小隊・海岸砲兵一個小隊(下関)を統轄した。

明治十九年一月、広島鎮台を第五師団と改称し、広島鎮台司令官陸軍中将野津道貫は第五師団長に任ぜられ、ここに新制度による軍部広島の基礎が確立した。

第五師団は、軍港宇品港の竣工と共に、次々とその機構を拡充し、明治四十年頃には、歩兵第九旅団(広島)・歩兵第十一聯隊(広島)・歩兵第二十一聯隊(浜田)・歩兵第二十一旅団(山口)・歩兵第四十二聯隊(山口)・歩兵第七十一聯隊(広島)・騎兵第五聯隊(広島)・野戦砲兵第五聯隊(広島)・工兵第葵隊(広島)・輜重兵第五大隊(広島)・重砲兵第四聯隊(広島忠海)を統轄し、以後、大正・昭和両時代を経てますます陣容を整えていった。

昭和十二年七月昔、日華事変(後・支那事変と改む)の勃発による第五師団(師団長・板垣征四郎陸軍中将)の出勤後は、留守第五師団および各聯隊補充隊が設けられ、第三十九師団をはじめ多くの師団・旅団を送り出した。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争への突入により、近衛師団・第十八師団と共に第二十五軍の基幹師団として、マレー作戦に参加し、翌十七年二月のシンガポール陥落まで終始勇戦奮闘し、その精鋭を謳われた。なお、昭和二十年四月に中国憲兵隊司令部(司令官・細川寛憲兵大佐)が設けられ、本部を基町の西練兵場南端に置いた。

被爆時の地区内所部隊

なお、原子爆弾被災時、基町地区内に所在した陸軍所部隊は、次のとおりである。

部隊名	通称号	部隊長名	所在地
中国軍管区司令部		中将 藤井祥治	旧留守第五師団司令部
中国軍管区 歩兵第一補充隊	(西部) 中国第一〇四部隊	中佐 須藤重夫	通称二部隊旧歩兵第二聯隊
中国軍管区 砲兵補充隊	(西部) 中国第一一一部隊	中佐 川副源吉	通称六部隊旧野砲兵第五聯隊
中国軍管区 輜重兵補充隊	(西部) 中国第一三九部隊	少佐 田島権平	通称一〇部隊旧輜重兵第五聯隊
中国軍管区 通信補充隊	(西部) 中国第一二一部隊	大尉 富岡善蔵	中国第一〇四部隊内
中国軍管区 教育隊		少佐 柳生峯登	広島城北側
広島聯隊区司令部		少将 富士井末吉	京口御門
広島地区司令部		少将 富司末吉	京口御門
特設警備 第二五一大隊	中国第七一六一部隊	少将 世良孝熊	偕行社内
広島地区 第二四特設警備隊	(甲神部隊) 中国第三二〇六〇部隊	中尉 三原清雄	中国第一〇四部隊内
広島第一陸軍病院		軍医少将 元吉慶四郎	西練兵場北側
広島第二陸軍病院		軍医大佐 木谷裕寛	太田川左岸三篠橋下

広島陸軍病院看護婦生徒教育隊		衛生大尉 花房光一	三篠橋東詰
第五九軍司令部	山陽三二二〇〇部隊	中将 藤井祥治	広島城跡
第五九軍 第二二四師団司令部	赤穂第二八三二九部隊	中将 河村参郎	基町
第五九軍 歩兵第三四〇聯隊	赤穂第二八三三〇部隊	中佐 友沢兼夫	中国第一〇四部隊内
第二二四師団通信隊	赤穂第二八三一二五部隊	大尉 吉光保夫	中国第一二一部隊内
第二二四師団輜重隊	赤穂第二八三三六部隊	中将 河村参郎	中国第一三九部隊内
独立混成第一二四旅団砲兵隊	鬼城第二八三六八部隊	大尉 山本信夫	中国第一〇四部隊内
独立混成第一二四旅団通信隊	鬼城第二八三七〇部隊	中尉 戸井功	中国第一二一部隊内
第一五四師団通信隊	護路第二二七〇八部隊	大尉 富依英男	中国第一二一部隊内
第一五四師団輜重隊	護路第二二七〇七部隊	少佐 萩原国雄	中国第一三九部隊内
第一五四師団砲兵隊	護路第二八三五六部隊		中国第一一部隊内
中国憲兵隊司令部		憲兵大佐 瀬川寛	基町(電車通り北側)

二、被爆前の概況

防空・防火態勢

広島空襲必至という緊迫した空気の中で、各部隊では本土決戦準備が着々と整えられていた。

市内では、地区司令部の小谷少将や県当局の指導によって、広い避難用地確保のための家屋疎開作業が次々と進められていたが、陸軍諸部隊においても、兵舎その他建物の天井をすべてはぎ取り、焼夷弾が引っかからないようにした。営内には幾つもの防空壕が構築され、部隊の兵船や重要書類その他を保管した。兵舎の内外に大きな防火用水槽を設置し、バケツを備え、当番兵が常に満水状態にしていた。聯隊区司令部などでは、二階の屋根(棟)に、厚板で通路を作り、要所に満水の四斗樽を置いていた。空襲警報の発令時には、兵隊がそこに上って待機した。

また、各部隊とも兵舎の周囲にタコツボ式防空壕や機銃座壕を掘り、空襲下の防衛に備えていた。

中国軍管区司令部

中国軍司令部は、城内の南端、内濠の石垣ぞいに、上空から見えないように土盛りした半地下式の鉄筋コンクリート造の大きな防空壕を構築し、空襲下の作戦本部・情報本部に使用した。また、重要書類の保管庫にもあてられていた。この壕内の指揮連絡室には、比治山高等女学校の三年生のうち約九〇人が動員され、三〇人ずつで班を編成し、三交替の昼夜兼行で、中国地方の監視哨・飛行場・高射砲隊などへの警報の連絡・気象の通報・その他各地部隊との暗号通信の送受などの任務についていた。

作戦本部室は、各師団の将校など多数がならんで見る電光板式の警報一覧用全国地図があり、この室の隣りが薄板で区切られただけの放送室で、夜になると、広島中央放送局から放送部員一人、アナウンサー一人・技術員一人計三人が不寝番で常駐していた。

疎開の実施

軍用物資は各地へ分散疎開して、万一の場合の戦力確保に努める一方、高級将校の多くも市の周辺か郊外に疎開居住していたと云われるが、中国軍管区司令部参謀長松村秀逸少将のように、あえて市中心部(上流川町の疎開空家)に居住し、不安に浮足だつ市民の心を少しでも落着けようと考えた軍人もあった。

聯隊区司令部の一部は、安佐郡可部町の願仙坊に疎開し、陸軍幼年学校(一年(四九期)約二〇〇人・二年(四八期)二三五人・三年(四七期)一七八人)は高田郡吉田町へ、また、広島陸軍借行社附属済美国民学校は双三郡君田村・同郡河田村へ疎開していた。

格部隊の状況

八月六日午前七時三十一分に警戒警報が解除になり、警戒配置についていた在広各部隊は、一斉にその配置を解き、八時ごろから次々とその日の作業に取りかかっていた。

各兵種補充隊にあつては、臨時動員部隊を編成中であり、第二二四師団(赤穂部隊)の各隊、独立混成第一二四旅団(鬼城部隊)の各隊、独立工兵第一一六大隊及び同一一七大隊、ならびに第一五四師団砲兵隊(護路部隊)などの要員を収容中で、各部隊とも多数の兵員を擁していた。

原子爆弾炸裂時、広島市内には約四万人近い兵隊がいた(昭和二十八年七月三十一日付中国新聞)と言われるが、当日朝の、陸軍諸部隊の状況は、概略次のとおりである。

(一)歩兵第一補充隊(中国第一〇四部隊)

八月一日ごろ入隊した応召兵が、午前八時ごろから兵隊教育や家屋疎開作業に行くため、一部が営庭に集合しつあった。まだ、屋内に多数の兵隊がいたが、陣地構築要員と陸軍戸山学校から体操の講習に来ていた将校及び下

士官たちは、半裸になってすでに集合していた。

また、この時刻ごろ、防衛召集兵(建物疎開作業要員甲神部隊)や新師団編成要員が続々と入隊していた。

(二)砲兵補充隊(中国第一一一部隊)

内地兵備のための第一五四師団の砲兵隊要員が、七月二十七、八日ごろから、引続き入隊中であった。

営庭には、演習作業のため逐次兵隊が集合中であったが、多くはまだ兵舎の中にいた。

(三)輜重兵補充隊(中国第一三九部隊)

五日の作業の関係で、六日は起床時間が約二時間延期され、八時から朝食となったので、ほとんど全員が兵舎内にいた。ただし、自動車隊は作業に出動のため、すでに営庭に集合中であった。

(四)中国軍管区教育隊

八月四日、集合教育のため、中国地方各部隊から集った見習士官約二〇〇人が、初演習で全員兵舎前に整列していた。

(五)広島陸軍病院

第一陸軍病院には、本院に職員五六五人・入院患者三〇〇人(第一分院は疎開済み)、第二陸軍病院には職員三三〇人・入院患者三〇〇人が、病院の特質上、ほとんど屋内にいた。なお、三篠橋東詰めの陸軍看護婦生徒教育隊にも、職員一七人・生徒一六人がいた。

三、被爆の惨状

天守閣崩壊の音

爆心地から約一キロメートルの範囲内に、広島城天主閣を取りかこむように並列していた各部隊の木造二階建兵舎その他すべての建物は、原子爆弾が炸裂した一瞬、フワッと宙に浮きあがったかと思うと、逆に地面に叩きつけられて、木端微塵に崩壊した。

この朝、いつものように兵二人を連れて、本隊(歩兵補充隊)から城の北側の陸軍幼年学校(疎開済み)内に分室していた軍医部に出向していた増本春男衛生上等兵は、公用で大八車を曳いて、朝日に光る天守閣を仰ぎ見ながら、幼年学校の校門を出たとたん、強烈な青白い閃光を浴びた。

体が宙に浮いた。「アッ！」と思うと、同時に三〇メートルばかり吹きとばされていた。

モウモウと舞いあがる砂塵のなかで、息のつまるような一瞬、聳え立つ五層の天守閣の崩れ落ちるもの凄い音が聞えてきた。それはちょうど、山頂から無数の木材が、一度に転げ落ちて来るように、ドドドドー、ドドーと不気味に地面に響き伝わった。

このようにして、戦国時代の勇将毛利輝元が築城以来三五〇余年、広島歴史をつぶさに刻んで来た国宝広島城は、あえなく崩壊したのであった。

各城門、櫓なども一挙に吹きとばされて火を發した。城門の中には、軍の重要文書がいっぱい積みこまれていたが、たちまち火炎に包まれていった。

松や杉・榎の大木もなぎ払われたように吹き倒され、あるいは引き千切られた。実に、強烈な爆風で、種々雑多な塵芥が舞いあがり、しばらくのあいだ暗黒にとざされた世界が、そこにあった。

濠のなか一面に、紅白の花をつづっていた蓮は、刃物で剃り取られたようにその葉を一枚もとどめず吹き払われ、倒壊した建物が廃材の塊となって付近に散乱し、到るところに兵隊や軍馬が軽々と投げつけられていた。天守閣は崩壊しても火災から免れていて、あとにただ廃材を積んだ石垣だけを残していた。城門や司令部・各兵舎その他の建物は火炎に包まれ、全くの灰燼に帰した。

ただ辛うじて、半地下式の中国軍管区司令部のみ、何とか残っていた。この地下の指揮連絡室には、前述のとおり、比治山高等女学校の三年生が通信員として出動して被爆した。

被爆第一報

この学徒の一人恵美敏枝(旧姓西田)の手記「通信室・終戦まで」(旧比治山高女第五期生の会出版・炎のなかに)によると「...六日、午前四時頃、一応警報がとかれ、師団長閣下以下皆自宅や兵舎にひきあげられた。そして七時過ぎ、また敵機が広島の上空へ近づき、警報が出され、その後日本海へ脱出し、旋回中ということで警報もとかれた。私達も交替で朝食をとり、帰宅の準備を始めていたが、その頃また『先の敵機が反転して広島県へ侵入しつつあり。』との情報でまた警報が電光板に出された。『八時十三分、広島県警戒警報発令』。私は宇品高射砲隊と吉島飛

行場への二つの電話に電送を開始した。その時が八時十五分。運命の時だった。私は受話機を耳にあてたまま、机の下に入っていた。一瞬、鈍い音がして電灯が消え、気味悪い静けさが続いた。それは長いような短いような時間だった。誰かの声をたよりに手さぐりで外に出て、友を探し求め、その姿に驚嘆した。

すぐ前にあった木も建物も皆こわされ、勿論、広島城も見えなかった。そしてなぜか息苦しく、ハンカチで口をおさえて、大本営跡の前へ急いだ。そこには私達と交替する人々が、朝礼の後で、ワラ人形を相手に竹槍の練習をしていたらしく、(倒壊した建物の)下敷きになっていた人は、手に竹槍を固くにぎっていた。その姿は本当に痛々しかった。誰もかれもすぐには名前を思い出せないような変りようで、ただあっ気にとられていた。そのうちに二部隊(歩兵補充隊)方面から火の手が上がって、みな城の裏の方へ逃げだした。」という状況で、もう一人の学徒岡ヨシエ(旧姓大倉)は、「...板村さんより一歩おくれて外に出た私は、一瞬呆然となった。今までであった司令部も、あっちこっちの建物も、ないではないか。ただの木屑と壁土が山になっているだけ。私は思わず濠の土手の上にかけるぼった。広島の街は...。その目に映ったのは、あまりにも残酷な瓦礫の町と化した広島であった。赤茶けた想像することもできないむごい光景を目にやきつけながら、私は、その時初めて、『大変だ。』と血のさがる思いをしたのである。下の方で、兵隊さんが『新型爆弾にやられたぞう。』と、どなっているのが聞える。私は元の部屋にかけ込んだ。そうだ、そうだ、まだ通話の出来る所へ早く連絡を、そう思いながら電話機を持った。九州と連絡がとれた。そして福山の司令部へ、受話機に兵隊さんの声が聞えるのももどかしく

『もしもし大変です。広島が新型爆弾にやられました。』

『なに新型爆弾！師団の中だけですか。』

『いいえ、広島が全滅に近い状態です。』

『それはほんとうか。』大きく割れるようにひびく声。その内に火の手があがったのであろうか。濠の上の草がパチパチ燃える音が耳に入った。

『もしもし火の手がまわり出しました。私はここを出ます。』

『どうかがんばって下さいよ。』と、兵隊さんの声を後に受話機をおく。再び外に出ると、炊事場のあたりでは、もう火がまわり、パチパチと木のはぜる音がする。その音にまじり建物の底から、女の人の助けを求める声が耳に入った。」という。わずか一五歳の少女ながら、炸裂下、沈着勇敢に自己の使命を貫いたのであった。まさに広島被災の第一報であって、室外に出ると、倒壊物の下敷きになり、もがいている兵士を助けだし、倒壊した大本営跡周辺の草につきはじめた火を叩き消そうと努めるうち、火が自身の周囲を包んでしまった。その熱気に耐えられず、大本営前の泥池に身を浸した。「パシパシに乾燥した髪、あつくなっている服、頭から泥水をかけても、一寸の間にカラカラにかわいてしまう。」という凄絶な光景の中で、突然、大粒の黒い豪雨を全身にあびた。一〇分か一五分かたって豪雨が止むと、また、逃げまどっている学友はいないかと探して歩いた。そして「...時間も何時間かすぎ、木も草も焼け切れて、日もくれかかった頃、一緒の班だった古池さんや、宮川さん森田さん達が帰って来た。再会を喜びながら、他県から救援に来られた兵隊さん達と一緒ににおにぎりを作った。そして負傷されても割合元気な方達に配る。私はおいしいと思って食べた。そういえば朝から何も食べていなかった。仮の収容所が幼年学校にできて、大本営跡の芝生に居られた兵隊さんもそちらへ移られた。背中に二〇センチ程の棒切れが突きささった青木参謀は、青ざめた顔で、看護兵の手当てを受けて居られる。

大の男の兵隊さんが脱脂綿を大き目に背中に当てて、力一杯棒を抜きとられた。見るまに脱脂綿が血に染まって少々では足りない。

色々な傷を見た。脳天に穴のあいた兵隊さん。脈打つたびに中の肉と一緒にヒクヒク動く。全身黒焦げで死んでいる兵隊さん。空をにらんだまま、目をむいて死んでいる兵隊さん。負傷した兵隊さんが、地の底からうめくような声で『おかあさん』と叫んでいるのが、暗い夜空に尾をひいて、まるで地獄にいるような思いだった。」と述べている。

松村秀逸参謀長重傷

松村秀逸参謀長の手記「原爆下の広島軍司令部」によると、松村参謀長は上流川町の官舎で被爆した。倒壊家屋の下敷きとなったが危うく脱出し得た。着物はズタズタに破れ、フソドシーつの裸であった。全身が血に染まる負傷であったが、まだ気づかないでいた。

襦一つのまま、倒壊飛散物で狭くなった道に出たが、全く変りはてた町に立って、西も東も見当がつかないありさま。運よく放送局の方から来た古田アナウンサーに出会い、案内を請うて、司令部へ急いだ。

地面に叩きつけられた幾つかの屋根をよじ登っては降り、降りてはよじ登りして、やっと電車通りに出た。緑色の電車が幾台も転がっていた。

各兵舎の炎上

西練兵場の東南角の土手(旧広島城外濠石垣)に登りついたころは、火の手が練兵場の周囲の建物からあがっていた。

西南の一角にある司令官官舎も火炎の中にあっし、歩兵営も砲兵営も陸軍病院も、黒い煙におおわれていた。偕行社は倒壊し、五層の天守閣は消えて見えなかった。

松村参謀長は、土手から練兵場へ飛びおりて、城門へと急いだ。

練兵場の中は惨憺たる光景である。演習中であつた兵隊たちは、爆風で吹き倒されて、圧死した者も多くいた。中には上衣をぬいで両袖をまくりあげ、体操をしていた部隊もあつたが、露出部分をまつ赤に火傷していた。あつちにもこつちにも重傷者が転がっていた。ほとんど立っている者はいたかつた。塹壕の中からは呻き声がきこえてきた。その中を禪一つの松村参謀長は、なおも軍司令部の方へ急いだ。

地区司令部の前に来たとき、建物はちょうど燃え落ちつつあつた。その前を、濠に沿って城門の方へ曲がつた。歩兵営からも、砲兵営からも、軍司令部からも、兵隊が、赤く焼けた両手を、幽霊のように胸の前に高く差しあげたがら、続々と飛びだして来た。

「中国軍管区司令部」と、肉太に書いた標札のかかつた城門は、今、黒煙を吐いて燃えていたし、司令部もまた、赤い炎を吐いていたという。

この地域は爆心地に近かつたので、閃光を感受すると同時に、みんな倒壊物の下敷きとなるか、または吹き飛ばされていた。気がついたときは体が物の残骸に埋まっております、爆発音や衝撃を感ずる余裕すらなかつた。

鳥取第四十七部隊から、広島城の北裏の中国軍管区教育隊に派遣されていた竹原精一見習士官も、当時の日記に次のようにその状況を記している。

「六日。前夜中警報下なりしも、〇八・〇〇解除、初演習のため、約二百名の全員舎前に整列す。〇八・一五乃至〇八・二〇の間と覚ゆ。二、三の者『BだBだ』と叫ぶ。上空に白くB 29 三機と認めし瞬間なり。パツと閃光あり、グワツと生温き(?)風に吹かれたる心地す。黒煙見たるものの如く、また見ざるものの如し。暫時、失神。我に返ればうつぶせに倒れいたり。砂塵濛々として咫尺を弁ぜず、失明せるやと疑う。『畜生!』と心に叫ぶ。瓦・材木等頭上に降り危険。顔面、妙にひきつる。砂塵、徐々に収まり、視界を得。互いに呼び合い三々伍々集まる。戦友の一人吾が背に火ありと言う。彼もなり。衣・襦袢を脱げば背部、焼け崩れ、皮膚の如をももの付着す。背の火傷を知る。自然と皆プール付近に集まる。この頃、顔の火傷に気付く。顔面・後頸部・火傷、ただれ居るものの如し。左手首より先、火傷のため水ぶくれしたるがつぶれ、皮膚だらりとはげ、砂塵など付着、血もにじめり。顔・後頸部・背・殆ど同じ状況ならんと思う。帽・眼鏡・刀・飛散せるも、帽の下、無傷の如し。左大腿部に火あり、自らもみ消す。ここも火傷。小浜・林田と遇う。共に相当の火傷なり。顔面の如きほとんど判別不能。背、謂い難く痛し。火の手方々より上がる。『大型油脂焼夷弾の直撃を受けたるものの如し』などと語る。うめき声、倒壊せる建物の下より聞ゆれど、我等また、両手自由を失い、軍靴にて蹴る位の事しか出来ず、それにて三名を救出す。この頃、火迫り背は殆ど激痛、立つ能わざる程なり。とに角火を避くべく、小浜・林田と共に退避す。市中、建物という建物すべて倒れ、避難の人々何処へ行くともなく一つの流れとなり、ぞろりぞろりと続く。いずれも百鬼妖怪の如し。(以下略)」と、その惨状をつぶさに伝えている。

また、歩兵第一補充隊(二部隊)四中隊の真田盛重二等兵は、朝食後、ほとんどの兵隊が建物疎開作業その他で出て行き、班内には僅かの病院下番がいたとき、野戦帰りの准尉が来て、野戦の様話を話している最中に被爆した。

パツと一瞬光って暗くなつた。爆発音は聴かなかつた。気づいて見ると小さい光線があり、「助けてくれ、助けてくれ。」という声がきこえた。「火がつく、火がつく。」という声がつた。「お前の肩には神さんがついている。」と言つた母親の言葉を思いだした。材木をのけ、光線を頼りに這つて外に出た。兵舎は完全に押しつぶされていた。タオルが一枚落ちていたのを拾い、腰にまいた。浅野泉邸に近い裏営門の方へ歩いて行き、半裸になつた軍医に出あつた。呼びとめて、裂傷で血の噴き出ている顔を、タオルでくくつてもらつた。この裏営門めがけて、市民がなだれこんで来たので、北方の工兵橋の方へ逃げるように言つた。吹きとばされた裏営門の衛兵が、また元の位置へもどつて来て、鉄兜を被り直し、銃をとつて、その部署を守つた。真田二等兵が裏営門を出るときは、まだ火災になつていなかつた。兵営が火災に包まれたのは、少し時間が経つてからであつた。

このように建物の下敷きになったり、吹き飛ばされた兵士たちは、どうした理由かわからないまま、それぞれ一番近い脱出口を求めて待避した。各部隊ともあらかじめ緊急避難先が定めてあったから、おおむねその方向へ逃げて行った。牛田の工兵作業場には、工兵と野砲兵が比較的によくいた。

被爆直後、相生橋東詰から三篠橋東詰に至る太田川沿いの堤防上は、血だるまになった半裸・全裸の兵士たちで埋まった。もう命令も出ることなく、ただ北方(上流)の安全地帯を求めて、押しあいへしあい蜿々とその列が続いた。力つきて倒れる兵士が続出、最後の声をふり絞って「天皇陛下万歳」と叫びながら死んでいくものも幾人かいた。

また、三篠橋東詰の兵舎で被爆した広島陸軍病院看護婦生徒一六人も建物の下敷きとなったり、吹きとばされて、即死六人、他は全員重軽傷を受けたが、お互い励ましあって、多くは戸坂分院へむかって兵士たちと逃げた。

佐伯郡五日市町の自宅で、中国新聞社へ入社しようとしていて被爆した大下春男記者は、あわてて戸外に飛び出し、広島上空に高く昇る一条の黒煙を見た。折りよく来た廿日市警察署の救援トラックに便乗して、途中沼田・鎌倉両記者と同行し、己斐付近まで来たが、入市不可能で、三人は徒歩で猛火をくぐりながら新聞社へ行こうとした。その途中、陸軍兵舎の焼跡を通ったが、手記「歴史の終焉」のなかで、「三篠橋を渡って土手を南下する。この辺は陸軍の要地で、平素は地方人の通行を許さなかった所だけに、一般の罹災者は見受けられなかったが、兵舎はいずれもペチャンコになって燃えている。その間を負傷を免れた数名の兵士が忙しそうに立ち働いている。傷ついた者や死体の収容である。収容といっても入れる家も何もない。照りつける炎天下の道路端に、魚でも並べたように寄せ集めている。

衣類はまとっていない。真赤にふくれあがった身体、肱を張り足を曲げたさまは赤不動さんの彫刻のようだ。中には、まだ死にきれずかすかに息をしながら、わずかに目をしばたくだけの者もいる。

それが幾十となく転がっていて、痛ましさに目を覆って駆け抜ける。

兵舎をめぐるて聳えていた榎・楠・柳などの大木が到る処にひっくり返っている。真中からポッキリ折れたもの、真二つに引裂けたもの、根こそぎ引抜かれたように倒れたものなどさまざまである。煉瓦造りの兵舎もガラガラにやられている。

昨日まで威容を誇っていた広島城の五層楼、かつて天皇陛下が東宮殿下の砌り、全市を眺望されたあの広島城は跡形もなく、ただ高台に木材を投げ重ねたようにたっている。広島城を取巻いていた、樹齢数百年の老杉も全滅である。広島城一帯にあった師団司令部、明治天皇縁りの大本営跡も木端微塵となっている。

実に物凄い破壊力である。爆弾が落ちたというのが、狙われた中心地と思われる衛戍地にさえ、弾痕一つ見当らない。これはひょっとすると原子爆弾のようなものかも知れないぞ、と話しあった。

野砲隊のあった付近に来ると、馬まで丸ぶくれになって死んでいる。いかつい野砲も打ち壊されて残骸をさらしている。完全なものは一つもない。(後略)」という状況であった。

広島陸軍の壊滅

更に、重傷ながら生き残った松村参謀長の手記(前同書)には、広島陸軍の壊滅について、概略次のような事も記されている。

藤井司令官死亡

中国軍管区司令官藤井祥治陸軍中將は、官舎(西練兵場西南隅)の居室で、軍服に着かえて、刀を片手に部屋を出ようとしたときに被爆したと言われる。居室跡と思われるあたりに黒焦げになった遺骨が発見され、そのそばに金の総入歯と、焼けた軍刀が残っていた。夫人は庭の池をまわって、堀の下で半焼けのまま倒れていた。燃え残った帯の切れはしと、そばに落ちていた財布で、やっと判定された。

遠藤参謀被爆

遠藤参謀は、ちょうど城門脇の濠にそって、馬を走らせているとき、炸裂に遭遇した。馬もろともに、濠の中に投げこまれ、鎖骨を折ったが、重傷に屈せず、泳いで濠から上がり、砲兵隊の兵士に助けられて、東練兵場に避難した。

松村参謀長避難

また、司令部の焼け落ちるのを目撃した松村参謀長は、いったん近くの浅野泉邸へ逃れ、そこから川を渡って牛田の工兵作業場へ避難した。二〇〇人近くの職員がいた軍管区司令部は、今やわずかに四人。裸の松村参謀長を中心に、まったく敗残兵以上の姿でトボトボと歩いていったという。

須藤部隊長死亡

歩兵第一補充隊の部隊長須藤重夫中佐は、白島町の自宅から乗馬で部隊へ出勤する途上、電車白島線の終点付近(爆心地から約一・五キロメートル)で被爆し、馬もろとも強く吹き飛ばされた。放射線によって顔面と両手に火傷したうえに骨折という重傷であったが、屈せず歩いて部隊に駆けつけた。そして、雑然と倒壊している部隊本部の建物の下から、急ぎ御真影を探し出し、ひとまず近くの浅野泉邸(縮景園)に待避した。しかし、泉邸もまた劫火の襲うところとなったから、泉邸に沿って流れる京橋川の水のなかに立って、他の多数の避難者とともに難を避け、火災のおさまるのを待った。午後四時頃、火災も鎮まったので、焼け落ちた中国軍管区司令部(松村秀逸参謀長)に行き、守り通した御真影を渡すと、気力も体力もつきてその場に倒れた。須藤隊長は、救援兵によってただちに大野陸軍病院に運ばれたが、数日後に死亡した。

各兵舎・将兵壊滅

この日、旧広島城内の司令部を中心に、歩兵・砲兵・工兵(白島北端)・輜重兵の各兵舎は約一万人(死者・負傷者の推定)の兵員とともに壊滅したのである。また、これに隣接する広島第一陸軍病院・第二陸軍病院も倒壊炎上し、入院中の軍人患者が即死者五五〇人、重軽傷者九〇〇人あり、病院職員も七三八人の死亡者と、約二〇〇人の重軽傷者を出した。

最初の取材記者

六日、中国新聞社の大佐古一郎記者は、市外府中町の自宅で、異様な衝撃を受け、ただ事ならじと、急ぎ市内に向い、軍管区司令部に足を運んだ。到着時刻は午後三時か四時頃であったが、司令部の焼跡で、負傷した松村参謀長に出会い、そこで、最初の中国軍管区司令部の「正式発表」取材したが、持ち帰った流川町の本社も壊滅しており、ついに公表されなかった。

爪跡(抜粹)

松尾公三(当時・広島鉄道病院医師、被爆地、広島城跡)

「頭中(カシラナカ)A候補生以下七名ただいまより、幹部候補生集合教育に出発します。頭中」

この瞬間である。左斜後方より、略帽から衿首までと両手背に焼けつくような火傷感。

それだけしか覚えはない。原子爆弾投下である。西部第二部隊九中隊舎前。投下地点よりわずか一キロの距離で、原子爆弾を受けたのである。

...幹部候補生の集合教育出発のため、中隊舎前中央の前方一〇メートルの所に、私を含めた中隊幹部候補生七名が、一列横隊に整列していた。ちょうど東北方の向い左斜後方、すなわち南西方向から被爆したことになる。その時の服装は略帽・執銃・巻脚絆、背中に鉄帽を背負っていた。冒頭の号令及び報告は当番のA候補生の入隊後八か月の訓練に鍛えられた声である。八か月間のきびしい内務班生活の象徴の張り切った声、いや張り切らざるを得ない声である。

...五月にはいってからは広島にも、警戒警報、空襲警報がひんびんと加わり、数日に一回くらいは必ず警報がなり、そのつど、ただちに武装の上、かけ足でそれぞれの部所につかなければならなかった。一キロ離れたB国民学校では二、三回敵機の鋭い爆音と共に機銃掃射を受けたことがある。

徳山が空襲にあい、呉がやられ、ことに呉の空襲の時は東南方にかすかに延焼する煙が見られ、徳山の時は、その上空で撃墜された米軍機からの落下傘で脱出した米兵二人が広島へ護送され、部隊の重営倉に収容されたのを、戦意昂揚と見せに連れて行かれたことがある。

...首と手の灼熱感。それから全く覚えがない。爆風で数間とばされていた。数分後に気がついたらしいが、あたりは光一つない暗黒の世界に変わっていた。気がついて起き上がったも何も見えない。

それこそ、キツネにつまされたような気で立っているうちに、だんだんと明るさが帰ってきた。一面の煙が天をおおい、地をはっている。いっさいを暗黒にした煙は、爆風で一挙にくずれ落ちた建物の土煙りであった。

土煙りが沈んで行くにつれ、周囲はだんだんと前の営内に返って行くが、すべての建物は全くなくなっている。

正面に立っていたはずの中隊二階建ての兵舎はペシャンコにつぶれ、あたりの他中隊の兵舎はもちろん、堀越しに見えていた民家も、「およそ建物という建物は全く消え去っている。薄暗く土煙りの立ちこめる中を、黒い人影が夢遊病者のようにウロウロしていた。背中焼けつくような熱感。手をやってみると、何とカーキ色の上衣が焼けて、きなくさい煙を出している。あわてて上衣をぬぎ、くすぶっている火を消す。二〇センチ大のやけどり

が三か所もある。痛いので背中に手をやると、ツルリとうすい皮がはげた。火傷だ。

首も両手もひどい火傷、略帽の下から衣衿までの間が髪がちぢれ、首は一面に第二度の火傷でズルズルと皮がはげる。両手も同じ。

左手の時計のガラスがとび、八時十五分で止まっている。あの原子爆弾爆発の一瞬、その爆風はわれわれを二、三間吹き飛ばして気を失わせたのである。右手でささえていたはずの三八式小銃は一メートルほど向うに飛び、整列直前に堅く巻いた脚絆は半分とけ、略帽もとび、背中の鉄帽も背中からなくなっている。「いったいこれは何だ。」もちろん、原子爆弾とはわかっていない。

「火薬庫の爆発？」

うす暗い中を兵隊が同じ思いだろう。皆、右往左往していた。「おい。どうだ、おれはもうダメだ。」

とびついて来たのは、隣の中隊の衛生幹部候補生のEである。真っ黒な顔、わずかに見える顔のりんかくと声からEだとわかるが、声を出さないとちょっとわからない。焼けただれた中に目玉だけギョロギョロのひどい姿だ。

「うん、おれはけがはないが、大火傷だ。これはいったい何事だ？」

「しっかりな、衛生部へ行こう。」

E候補生と一緒に歩きながら、これから一体どうするか考える。悲しいかな兵隊だから、こんな場合とて行動の自由ばない。自由行動をして、あとで重営倉入りはおもしろくない。まあ、衛生部まで行けば何とかなるだろう。背中の火傷も手当てができるかも知れない。建物という建物はいっさいがくずれているのだから...また、衛生部のほうが中隊より火薬庫に近いのだから。

そうこうするうちに、E候補生とははぐれてしまった。

「M候補生！助けてくれ、背中をやられた、痛い、どうなっているか見てくれ。」すがりついてきたのはF上等兵である。いつもかみつくような口のきき方をし、しゃべるときには「ツバ」を口中いっぱいにとってダミ声を出す精悍な古参上等兵が、あわれな声を出した。

顔もからだも真っ黒であるが、特長のある鼻と声で彼とわかった。

うしろを見ると、背中首から腰まで一面の大火傷、背中全体のヒフがペロリとはげて腰に下っている。真っ赤というより、赤黒い表皮の色。これはひどい。目が当てられない。

「しっかりしろ。」と、から元気をつける声をかけてみたけれども、相当なものだ。これだけの火傷を受ければ生命の危険もあろう。(昭和二十年も春ごろになると、いよいよ軍隊も物資欠乏したと見え、倉庫の中から、いろいろの古物が出てきた。もっとも、それまでにすでに、軍人の魂である小銃は数少なくなっており、弾丸をこめる所をおおっている遊底おおい姿を消し、小銃を肩にかつぐときに右手でささえる鉄の床尾板も木製に変わり、ごぼう剣の鉄製のサヤは木か竹のサヤに姿を変え、水筒は竹筒になっていた。むろん新しく編成される新部隊には、新品が支給されていたが、われわれが使用する武器には、省略できる所はできるだけ、はぶかれていた。

武装器具がすでにそうであったから、服装はさらに簡略化されていた。新しく支給された軍服は、日清日露戦争時代のものではないだろうが、相当古いものに相違ない。軍服の色も赤味がかったカーキ色、開襟えりでなく詰めえりの上衣を着せられた。昭和時代でなくおそらく、大正末期のしろものだろう。

五月ごろになると、営内にてじゅばんなしの裸でよし、営内靴なしのハダシ通行よし、ということになった。あるときは、今まで支給されていた軍服・肌着の中の程度のよいものが回収されたこともある。服装にやかましい軍隊としては、ちょっと、想像もつかぬ事態であった。原子爆弾投下は八月盛夏である。多くの兵隊は上半身裸、靴なしで営内を通行していた。)

一閃の光が私の上衣を焼き、その下の背中に火傷をおこさすような原子爆弾の熱線が、まともに裸のヒフにあたればどうなるか。背中一面の大火傷、その表皮がはがれるのも当然である。

まわりの兵隊はゾロゾロと営門を出て行く。もちろん、衛兵もやられたらしく立哨していない。旧浅野泉邸前にある裏営門である。

そうだ、あの集団について行くに限る。

多人数ならあとで何の罰則があっても何とかだろう。皆について営門を抜け、電車通りに出て左へ曲がる。右に行くと広島市の中心地に出、左へ曲がると白島を経て郊外へ向う。

電車通りの左側は兵営、右側は人家のはずであるが、すでに家という家は完全に倒壊、関東大震災の写真と全く同じでいっさいが倒壊、ところどころから火煙が出ている。私のカーキ色の軍服さえ発火しているのだから、黒い

ものにはすぐ火が出るに相違ない。倒れた屋根の上で数人の人が右往左往して何か叫んでいる。多分家の下に人がつぶされているのであろう。

しかし、こんなことにかまっている者はいない。私を含めて広島市民全部が一種の虚脱状態に落ち入っていて、思考力というものが全く消え去っていたのであろう。

私が医師であるという証明書も兵隊であるという証明書も、いや人間であるという証明書すら、こんな場合には何の役にも立たぬ。

...虚脱者、異常人となった集団は、白島の電車の終点を通り、G橋に出、橋を渡らず左に折れて土手を川上に向かって歩く。(以下略)

中国軍管区司令部発表

大佐古一郎(当時・中国新聞社政経部記者)

原爆が炸裂した直後、私は爆心地から約五キロメートル離れた市外府中町の自宅を飛び出したが、西練兵場にたどり着いたのは、何時ごろであったろうか。

市街地の劫火は、ようやく下火になり、電柱や大樹がブスブスとくすぶっているころ - おそらく三時か四時であったろうか。

私は、ひたすら師団司令部へ向かって歩いて行った。

朝からトマト二、三個のほか、水道水以外は口に入れていなかったの、だだっ広い西練兵場へ着くと、ホッと空腹を覚えた。歩兵第一補充隊(一般には二部隊と呼んでいた)前の芋畑で、小さな芋でも掘り出して、腹につめておこうかと畑を見わたしていると、傍らに倒れている男が、「ヘイタイさーん...ヘイタイさーん」と、私を呼んでいる。

近くにある防空壕の入口には、虫の息のような生存者や死体らしいものが見られたが、傍らのこの男は、壕へいく気力もないほど重体のようである。顔や両腕は火傷で糜爛し、上半身は焼け残ったポロポロのシャツで、脇腹と腹部がおおわれている。下半身を包んでいる国民服のズボンや巻脚絆・短靴がやっと被爆前の市民姿を想像させ、この老人らしい男は、おそらく、今朝二部隊へ入営兵を送ってきた地方の人だろうと思われた。

私の服装が、かすかに開かれた老人の目に兵隊のように映ったのであろう。

「何ですか？」

「すみませんが、顔へ陽除けをして下さいや...、熱うて熱うて...火の中におるようなけエ...」

なるほど焼けただけた上半身へ、灼熱の陽光がさんさんと降り注ぎ、めくれ上がった顔や手の皮膚は、すでに妙り上げられたようにカラカラになっている。

私は"これはひどい、暑いことだろうなア..."と思って、付近に板かトタンは無いものかと探してみたが、吹き飛ばされてきたものもない。壕をのぞいていると、「ヘイタイさーん...私のカバンの中に日の丸の旗がはいっとるけエ、あれを顔へかけて下さいや...」という。

私は木切れを二本ほど拾って、老人の頭と胸の横に立て、その日の丸を結びつけて遮光した。

「ありがとうございました。ついでに水を下さいよ。」

「水を飲むと死にますで。元気を出していなさいよ。あんたどこから来たんでしゃア。」

私は老人に水筒の水を一口飲ませながら聞くと、五日市の海老塩浜だという。

「そりゃー近いけえ、まもなく助けにこられますよ、頑張るとるんですゾ...。」

「何とお礼をいってええやら、お名前を教えてつかアさいや。」

私は社名と名前を告げ、激励のことばを残して、そこを離れた。

十日ほど経って、五日市に住む同僚の大下記者が「近所の牧野という人が、被爆二日後に息を引きとったが"中国新聞の大佐古さん"を繰返していたから、家人からよろしく伝えてくれといわれた。」そうである。「あのような場合は些少の親切も"地獄に仏"ほどの尊いものであろうか。」と、そのとき大下記者は語った。

被爆直前までは銃剣をかまえた衛兵と、衛兵司令のいた師団司令部の表営門はすでに無人となり、楼門も焼け落ちている。私はここに入ったとたん、前方の芝生の上に変った人がいるのを見た。

血色のよい身体に傷ひとつない大男が、パンツ一枚で横たわっているのである。

近寄って見ると、外国人である。アメリカ人がイギリス人の捕虜のようである。針金でうしろ手にしばられ、右脇腹を下にうつ伏せ気味のこの捕虜は、眼を閉じているが、呼吸はしているようである。美しい胸毛ががすかに動

いている。

「ハロー アー ユー アヤンキー？」

かすかに目を開いた。

「ホエアー アー ユー フロム？」

何も答えない。内臓でもやられている重傷者かな、それとも私が兵隊のような服装だから、殺す以外は何もしてくれぬとも思っているのであろうか。

それにしても町中の人々が、一人残らず負傷しているか死亡しているのに、この素裸の捕虜はまったく無傷とはどうしたことであろう。

司令部の中に重営倉があるということは聞いていたが、その地下壕にでも収容されていたのが、衛兵が死亡したり負傷したりしたので、ここまで逃げて、誰れかに捕えられてほうり出されたのであろうか。私はこの捕虜はアメリカ兵であろうと思った。

六月末であったか、B29が一機、広島上空で撃墜され、そのときの捕虜二人が師団司令部に拘引されたという話を聞いていたが、その一人かも知れないと、思われた。

そのとき、西練兵場の方から、お城の橋を渡ってくるカーキ色の軍服が見えたので、私は司令部の方へ足を運ぶことにした。

後日、相生橋の上で、しばりあげられた捕虜の死体に「叩け」という意味のことを書いた紙ぎれと棒が添えられていたのを見たという話を聞いた。しかし、この捕虜は私の見た表営門の捕虜とは別人のように思われる。

完全に灰となった木造の司令部前の石に、見慣れた顔の松村参謀長は、腰を下ろしていた。三角巾で首に吊るした右腕は、繻帯に巻かれ、はだかの上半身にはガラスの破片で受けたような傷あとが点々とあり、短袴と長靴だけが少将の姿をとどめていた。参謀長は案外元気に答えてくれた。

「西部軍も中国軍管区も、えらい人はみな戦死らしい。動けるのは俺一人のようだ。大本営の指示があるまで、わしがこちらの責任者になってしもうた。...上流川の官舎で家の下敷きになって、このざまだよ、とにかく動けるよ。...ときに何か情報ははいつらんかね。」

「私の社も全滅の模様で、軍事記者も殉職したかも知れません。とにかく、この広島の模様を広島師団の正式発表として報道させて下さい。」

「そうだね。この状況は国民に知らせる必要がある。」

と言って、しばらく考えていたが、ポツリポツリと口伝をはじめた。

「"中国軍管区司令部発表"だね。"六日午前八時ごろ敵B29二機は"、この二機は重要なところだな。"広島市を攻撃、落下傘により新型爆弾を投下..."、そうだな、どの程度というべきかな...」

「"広島市は全滅"ですか。」

「ばかなことをいえ。"市内に相当の被害を生じたり"だ。」

私はメモを復唱し「お元気で...」と、参謀長に敬礼して、先ほどの道を引返した。

表営門の捕虜は、前と同じ姿勢で横たわっていた。西練兵場の防空壕の横には、荒廃した周囲の風景や雰囲気とまったくそぐわない、あの日の丸の旗が、陽光に赫々とあざやかな色を浮きあがらせていた。

司令部発表のメモを持って本社に到着すると、無人の社内は什器や紙類がまだ燃えており、熱気がビル内に充満していた。社の正面にあった社員寮跡を誰かの消息でもと思って、火炎をさけながら掘っていると、電車の線路の上に横たわっていた死体らしい一つが、かぼそい女の声で私の名を呼んだ。

近づいて見ると、顔面を目・鼻・口とガラスで縦に裂かれた若い女の子で、さきほど、私は社に関係のない人だと思って見過ごしていた人物であった。

「私はタイピストの磯崎です。編集局でやられ、腰を折っているので、ここまで這いだし、十字路のまん中で、火の消えるのを待っていました。」

断末魔の形相は、いまにも消え入りそうな声で話す。駅の方は安全だから逃げようと言ったが、すでに体力も気力もなかった。

私が伝えた司令部発表の第一報は、磯崎芳子さんの冥途のみやげになり、この世ではついに発表されなかった。

四、被爆後の状況

ただ廃墟

いかめしく建っていた軍管区司令部も、朝晩気合いの入った声に溢れていた各兵舎も、兵士がむっつりと銃をかかえて動哨していた弾薬庫も、樹齢数百年を経て、ご神木のようにメ縄が巻いてあった菅庭の楠の大木も、すべて消しとんでしまっていた。赤黒くただれた石垣と建物の土台石だけが残り、へちゃげた鉄兜や、曲がった帯剣、金属部分だけになった黒焦げの銃、車輪だけが半分焼け残っている砲などが、無秩序に崩れ落ちている瓦礫と共に散在し、そのなかに点々と兵士や軍馬の死体が転がっていた。その上を真夏の烈日が容赦なくカンカン照りつけた。

臨時救護所

火災の中から脱出しきれなかった重傷者も多く、西練兵場をはじめ、陸軍幼年学校跡や陸軍病院跡、三篠川堤防、あるいは大本営跡付近に、救援兵による天幕張りの或いは焼トタンで囲んだ急造の臨時救護所が設けられて、つぎつぎに収容されていった。しかし、少数のこれら救援隊の手にあまり、治療を受けないまま、死んでいく者も多かった。また、治療といっても、その言葉をはばかりほどの単純なものであり、それも外来の救援隊の手持医薬品であったから十分な活動はできなかった。

死体の処理

松村参謀長は、七日朝、一泊した牛田の山を降りて軍管区司令部跡に再び行った。司令部の本館は、玄関口のコンクリート造りの残骸があるだけで、完全に焼失していた。

その他、講堂・食堂・宿舍・倉庫など幾棟もの木造建物は跡形もなくなり、その焼跡には黒焦げの骨が点々と転がっていた。生き残った三〇数人の証言により、それが誰の遺骨か、ほぼ見当をつけた。無残な姿に変わり果てた死体は、司令部の裏庭に穴を掘り、腐材を積み重ねて茶毘にふした。それらは一つ一つ応急の骨箱に入れて名札をつけた。

建物としては、比治山高等女学校の動員学徒が、「広島全滅」の第一報を通信した地下作戦室と防空壕だけが健全であったから、これらの遺骨を防空壕に安置した。

緊急処置

一方、壊滅的な打撃を受けながらも、なお戦争遂行中であったから、軍事基地としての広島の都市機能の、早急な回復をはかる必要があった。そこで、まず倒壊物や雑多な飛散物で通行不能に陥っている主要道路の啓開を実施することになり、急遽来援した宇品の暁部隊を主体に、西条、八本松から来た軍管下の部隊などによって、その作業を

おこなうことにした。

同盟通信社の中村敏記者が、司令部を訪れたとき、松村参謀長以下一五、六人の重傷将兵らは、どこからか古ばけた机二つ、椅子三つを集めて、その上に携帯用のテントを五、六枚つなぎあわせて、地下作戦室の前に、軍管区司令部を設けており、「もうすぐ、青い目の人形がきて、日本を荒すかもしれん。日本の婦女子だけは、お互いに守ってやらにゃならん。」と、参謀長が言ったという。敗れ果てた司令部であったが、生き残った将兵は、重体ながら頑張っていた。

軍の再建はかる

また、壊滅した陸軍諸部隊の再建も緊要な問題であった。

八月九日、天幕の軍管区司令部に経理部の軍属守木豊一業務手(動員関係担当)など、生き残った職員一〇人ばかりが集合して、暁部隊を除く在広諸部隊の生存兵員を調査したところ、各部隊からの報告を合計してわずかに七〇〇人という状況であったから、兵員補充のため、山口・鳥取・岡山から応援部隊の派遣を求めた。

守木業務手は、また県下各地に疎開していた軍需品の種目・数量などを、連日、トラックで調査してまわり、軍の再建に備えた。比較的被害の少なかった被服廠・兵器廠・糧秣廠などや、たまたま出張していて助かった将兵が、次第に集って来たが、敗戦の憂色は濃く、暗然とした空気がみなぎっていた。

ロシア参戦の報

八月十日、東京から原子爆弾の災害視察団が来広し、軍司令部の天幕のなかで、松村参謀長らと話しているとき、ロシアが昨暁参戦したという新聞電報が来た。

広島へ来任する前、大本営の報道部長であった松村参謀長は、すでに戦局の見とおしについては、何もかも知っていたと云われるが、ロシア参戦の報に、一層暗い複雑な心境に陥ったという。

混乱続く

十二日、陸軍次官から軍司令官あての親展電報を受取った。

軍司令官代理を勤める松村参謀長が開封してみると、「大勢は再び抗戦に決しそうだから、そのつもりで」というような意味のことが書いてあったが、「これは東京がゴタゴタしているな、いよいよ終戦」ということを直感したそうである。

終戦

八月十五日、軍の本土決戦の決意もむなしく、ついに終戦となった。この頃、松村参謀長は被爆の傷が化膿して動けなくなり、半壊のまま焼け残った千田町の吉村宅の二階を借りて療養していたが、同盟通信社からの情報を得ていたから、慎重にその成行きを見守っていた。また、この日は被爆死した軍管区司令官の後任として、谷寿夫中將が着任する日でもあった。

松村参謀長は、その手記(前同書)に、「案の通り、東京からはいろんな指令が来た。書類を焼いてしまえというかと思えば、絶対に焼いてはいけない、よく整理しておけと言ってくる。兵器は焼却してしまえと言ってくるかと思うと、そろえて出せと言ってくるという具合だった。とにかく、終戦の混乱を理性の制御のもとにおくことは、なかなかムツカシイことだった。だが、焼けた広島は、ほとんどこの指令の圏外にあった。」

と記している。

重要文書焼却

このような状況の中で、守木業務手らは、残存する師団の重要な文書を集めて、連合軍が進駐する前に、すべて焼却した。

軍の解散

翌十六日、停戦命令が発せられ、引きつづき復員命令が出されたが、原子爆弾の一撃によって在広主要部隊は、すでに解散したのも同然であった。

しかし、公式には、九月二十六日に砲兵補充隊、及び輜重補充隊。十一月一日に歩兵第一補充隊、及び通信補充隊が復員したのである。なお、その他の残存部隊では、中国軍管区隷下の工兵補充隊は十月四日、広島地区第二特設警備隊は十月九日に、それぞれ復員解体された。

中国軍管区司令部は、九月一日に広島城内の焼跡から、佐伯郡五日市町の岩国燃料廠五日市出張所跡に移ったが、十一月末、一たん廃止されて、新たに第一復員省中国復員監理部として、業務を開始した。

広島聯隊区司令部は、十一月二十一日に安佐郡可部町の可部高等女学校で解散式をおこなった。

ちなみに、陸軍船舶司令部隷下の諸部隊は、少数の終戦処理要員を残して、そのほとんどが九月中に復員した。また、第二総軍司令部は、九月十七日に市外船越町の日本製鋼所広島製作所に移り、続いて大阪に移動した。また、全国の軍隊に対して降伏と武装解除を命じた大本営も、十一月三十日に廃止された。

開拓団の用地となる

広大な軍用地、基町地区は、ただいたずらに寒風の吹くにまかせる廃墟の上に、寂莫として昭和二十一年を迎えた。

この頃、外地からの引揚者が、連日、帰って来ていたが、住むに家なく、また働く会社も工場もなかった。

春ころになって、中国北京からの引揚者新見正団長を中心に、八人の同志が、西練兵場の紙屋町入口付近に、バラック小屋を建てて、西練兵場の開拓をはじめた。その努力が、またたく間に約六反の耕地となり、夏には、ナス・トマト・キュウリなどが、みずみずしく実った。更に一年たつと、約二町歩の広さになり、貴重な食糧としてのサツマ芋が美しく植えつけられた。食糧事情がいよいよ窮迫し、広い軍用地のあちこちにバラック居住者の開墾した自給菜園が、青々と茂るようになった。

復興進む

こうして昭和二十三年を迎えると、広島市の復興計画も進んでいき、市営住宅が次々に建設され、かつて砲車や馬蹄の音に明け暮れていた基町界隈は、平和な市民の町として生まれかわったのである。

三月初めごろ、すでに営団・市営の住宅一、二〇〇戸が建ち、一、四五〇人余りが居住しており、食糧品店や医者・理髪店などが繁盛して、更に七〇〇戸が建設されつつあり、市は五か年計画で、この一郭に八、一六〇戸の建設を発表した。ちなみに、川ぞいに不法住宅(バラック街)がひしめくほど建ちはじめたのは、少し遅く、昭和二十四年頃からであった。

また、西練兵場跡から広島城跡にかけての平坦な広場には、幅員一五メートル、四〇メートルの大道が縦横につ

くられた。これを幹線道路として、この地区は県庁その他の官庁街に指定され、その他の広大な城跡は緑地帯となり、西北部には、高等・地方裁判所、検察庁が建てられることになった。

さらに、元陸軍病院跡近くには、広島児童文化振興会その他の文化、教育の諸団体、有力者の協賛で、平和都市広島の未来をえがくシンボルのように「広島児童文化会館」の建設が進められた。

中国新聞(昭和二十三年五月四日付)は、その模様を次のように報道している。

「伸びゆく平和の子たちへ、ゆたかであたたかな心の泉をあたえようと、昨秋着工してこのかた、世界の注視をあびつつ五ヶ月余、装飾も鮮かにデビューする児童の樂園、広島児童文化会館の晴れの開館式は、三日午前十時から同会館大ホールで、C I E 顧問ハワード・ベル博士ら来賓多数を迎え、児童の胸躍らすなかを盛大に挙行された。管絃楽"ローエソグリン"の調べがたかまると、まず児童代表草津小学校神重正君の開式の辞にはじまり、佐伯館長の式辞、祝賀メッセージの披露があり、皇太子殿下御守贈品が和久田副知事から川本修三君(袋町小学校)ら児童代表四名へ伝達され、高師付小六熊野英一君らの"感謝とよろこびの言葉"があり、寺地委員長から建設経過の報告、女児童代表から感謝胸飾贈呈の後、ベル博士・クロワード広島軍政部長代理ベネット大尉・文部大臣代理坂本事務官・知事代理和久田副知事・浜井市長・寺田市会議長らの門出におくる祝辞があり、児童代表矢賀小学校山田正広君の開式の辞をもって"広島復興の歌"の奏楽に、正午意義深い式を終えた。午後はひきつづき同大ホールで記念講演・記念音楽会・舞踊をはじめ・赤十字デーの各種行事など開館を祝う"文化まつり"が多彩なプログラムをくりひろげた。」

なお、数年ののち、基町市営住宅街では、夜な夜な、進軍ラッパを吹いて行く兵隊の靴音が聴えるという怪談が生まれた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

白島九軒町、白島中町、白島北町、東白島町、西白島町、二葉の里、二葉の里一丁目 二丁目 三丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、白島北町[はこしまきたまち]・白島西中町[はこしまにしなかまち]・白島中町[はこしまなかまち]・白島東中町[はこしまひがしなかまち]・白島九軒町[はこしまくげんちょう]・東白島町[ひがしはこしまちょう]・西白島町[にしはこしまちょう]・二葉の里[ふたばのさと]とし、爆心地からの至近距離は、広島城北側の濠付近で約一・三キロメートル、もっとも遠い地点は、工兵橋西詰付近で約二・五キロメートルである。

白島地区は、広島デルタの北部に位置し、太田川本流(三篠川)と、その分流神田川とに東西から囲まれている。二葉の里地区は、標高一二三メートルの二葉山南麓一帯の地域で、神田川を隔てて白島の東対岸にあたり、常葉橋が、白島と二葉の里を結んでいる。また、北方牛田方面へは工兵橋・神田橋により、西方三篠方面へは三篠橋によって通じている。

国鉄山陽本線は、広島駅から二葉の里を経て西へ向い、神田川鉄橋をわたって白島の中央部を横断し、三篠川鉄橋に出て、横川駅に達している。

市内電車白島線は、中央部八丁堀から発して白島に至る路線で、白島終点は戦前は、現在の場所よりも南方約二五〇メートルの所にあった。

白島地区は、広島の市域形成の上で大きな役割を果たした歴史的にも古い地区で「白島は往古箱島と書せり、五箇荘の一なり」と、旧史にもある。封建時代は広島城の北側をかためる要衝の地にあたり、一帯が士卒の屋敷町であった。その地域性は明治から大正・昭和と、被爆時まで受継がれていて、メジロやウグイスの鳴く閑寂な住宅地区を形成していた。なお、常葉橋・神田橋・三篠橋付近には多少商店街があったし、白島地区の北端には、中国軍管区工兵補充隊(旧工兵第五聯隊)があり、二葉の里には、東部に第二総軍司令部(旧騎兵第五聯隊)があった。

白島・二葉の里両地区とも、古い神社仏閣が多く、もの静かなたたずまいの中に、おくゆかしい伝統を保っていた。

饒津[にぎつ]神社の西側の神田川沿いの土手は、昼なお暗いほど杉や椎やクルミの木が茂っていた。土手道から川面までの斜面には、シノ笹がびっしりと生えており、川水が笹の根をヒタヒタと洗っていた。昔、この付近は、「椎ノ木の森」と、呼ばれた。夜、一人で歩いていると送りオオカミが出て来て、その人を呼び止める。が、振りむいてはいけない。振りむくと命が無かったと、ある古老の書き残した伝説がある。刀のためし斬りをしたか、追いはぎが出たかであろう。被爆前まで、まだ伝説のおもかげを多分に残していた所であるが、ここは川がゆるく曲っている場所で、土手下は水も深く、海の潮が上がって来るとき、小鯛やコチ・シス・カレイなどがよく釣れ、水面を走るように泳ぐサヨリなどは、棒で叩いてとるほどたくさん上がって来た。被爆する前までの、広島の川は、ここだけではなかったが、この付近は特に釣人が足を運んで楽しんだ(紺野耕一談)。

被爆により、白島地区は工兵橋付近を残して全焼し、二葉の里地区も山麓沿いを残して、ほとんど焼失した。

被爆直前の世帯・人口

被爆時の白島・二葉の里両地区内の総建物数は二、三九一戸、人口約八、七五五人で、各町内会の内訳は次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
西白島町	402	420	1,840	佐々木重九郎
白島西中町	183	203	726	山根芳太郎
白島北町	64	65	223	金山富介
白島中町	285	298	1,190	木村松次郎
白島東中町	233	234	736	小田亮
東白島町	544	200	2,000	大横田義雄
白島九軒町	500	375	1,390	小野峯蔵
二葉の里	180	180	650	清代吉五郎

また、地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
白島国民学校	東白島町	禿翁寺	東白島町
県立広島工業試験場	東白島町	万行寺	東白島町
安田高等女学校	西白島町	円光寺	東白島町
工兵補充隊 (旧工兵第五聯隊)	白島北町	光明院	東白島町
広島通信局	(基町)東白島町	心行寺	白島九軒町
逓信病院	(基町)東白島町	正観寺	白島九軒町
妙風寺	(基町)東白島町	宝生院	白島九軒町
饒津神社	二葉の里	薬師院	白島九軒町
鶴羽根神社	二葉の里	碓神社	白島九軒町
明星院	二葉の里	白島信用組合	東白島町
東照宮	二葉の里	第二総軍司令官畑大将宅	二葉の里松本勝太郎方
洞門寺	西白島町		

二、疎開状況

(白島地区)人員疎開

白島地区は各町とも集団的な人員疎開はしなかったが、郡部方面に親類縁故を持つ家庭では、昭和二十年春ごろから、随時に疎開していた。しかし、疎開先での生活処遇が思わしくなく、再び地区へ帰って来る者もかなりあった。

白島には、予・後備、退役の陸海軍将校や高級官吏の退職者が家屋敷を持って多く居住していたが、これを処分して郷里に引きあげた人もかなりいて、これらが人員疎開のはじまりであった。続いて、老幼者が、郡部の縁故先へ若干移っていったが、一方では、市の中心部から逆にこの地区へ移り住む者もあった。

物資疎開

物資疎開については、日常生活に必要な道具や衣類などを田舎の縁故先へかわすことがかなり行なわれたが、戦局の熾烈化に伴い、トラックも馬車も自由に使えず、輸送は困難となり、小さな荷車に積んで家族が近郊へ少しずつ、運ぶ程度であった。

学童疎開の際に、一人当たり三〇キログラムの荷物の携行を認められたから、少量ながらその便に運んだ者も多かった。

これらの疎開物資をめぐって終戦後、紛争を起したり、あるいは大水で流されたりした者も多くあった。

(二葉の里地区)疎開状況

二葉の里地区では、十九年末頃、大須賀町踏切りから神田川鉄橋まで、山陽本線上下線路に面した建物と、下り線側は、常葉橋東詰から大須賀踏切りまでの道路沿いの建物の強制疎開を行なった。これらは鉄道線路を中心として、二五メートル幅を疎開したのであるが、居住者もそれぞれ立退いていった。

物資疎開は、この地区でも学童疎開に際して一人当たり三〇キログラムまでの疎開が認められたので、学童の必需品、家族の衣類などを疎開することができた。

学童疎開

学童疎開については、白島国民学校の児童三年生以上は、安佐郡大林村・三入村・亀山村・飯室村・鈴張村の寺院や学校分校へ集団疎開した。四月に、約二〇〇人が、一二人の教職員に引率されて出発したが、児童の列の両側に父母がつき添って、別れを惜しむ光景は、涙をさそうものがあった。ある親は、疎開先へ面会にゆき、連れもどしたということもあった。

残留した低学年学童たちは、地区内で、自宅に近い各寺院へ、分散通学した。東白島町では禿翁寺が、これら児童の勉強場になっていた。

二葉の里の学童は、約一〇〇人が鈴張村の三か寺に、五二人・二七人・一七人と分散して疎開した。五、六年生の残留者と、高等科の生徒たちは、白島国民学校正面校舎の二階の一部で授業をおこなっていた。

三、防衛態勢

警防団

広島市警防団白島分団が編成されて東白島町の常葉橋西詰に本部を置いた。ここには古くから火の見櫓があり、半鐘が設置されていた。白島七か町と、二葉の里(白島学区)をその区域とし、人員は分団長一人・副分団長一人・部長三人・班長六人・団員六〇人で構成した。設備は、手動ポンプ一台・消火用とびぐち・火たたき・バケツ・医

薬品など若干を常備し、また管内各家庭の前には、必ず防火用水槽を設置し、火たたき・バケツなどを備えた。また町内各所に適当な間隔で、大型防火用水槽や汲み上げポンプを設置して、万全を期していた。

各町内会は、隣組の組織で防衛態勢をかため、警防団と警察の指導のもと、昼夜別なく演習や訓練を実施した。

屋根の上の火を消すため、梯子をかけてバケツリレーをおこなったり、「鳥の巣注水」と称して、高さ五メートル以上の竹ざお上に、巣箱型の箱を取りつけ、それをめがけての集中注水を訓練した。また、長さ約二メートルの竹槍で「突っ込め」訓練や火傷・骨折患者の応急手当・避難救護訓練など徹底的に繰返した。

これら訓練の参加をためらったり、のがれようとしたりすると「非国民的行為」として指弾された。

夜間の灯火管制や空襲警報時における各家庭の防空壕への待避励行も厳重に実施した。

国民義勇隊

昭和二十年六月からは、国民義勇隊が編成され、町内会単位に中隊、隣組単位に小隊を組織し、空襲警報発令と同時に、各部署につくことになっていた。

四、避難経路及び避難先

避難対策

非常の場合は、安芸郡戸坂(へさか)村の国民学校、安佐郡口田(くちた)村の国民学校、あるいは安佐郡祇園(ぎおん)町字西原の神社に避難するよう指定されていた。

(避難経路)

東白島町	常葉橋・牛田土手経由、または神田橋経由。
白島九軒町	
白島東中町	工兵橋経由。
白島中町	
白島北町	長寿園土手・工兵橋経由。
白島西中町	
西白島町	

二葉の里 = 各人が決めて町内会に報告し連絡表を作っていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
工兵補充隊(旧工兵第五聯隊)	白島北町北端
赤穂部隊(第二二四師団工兵隊)	東白島町白島国民学校校内
第二総軍司令部	二葉の里元騎兵第五聯隊内
高射砲陣地	二葉山頂上
陸軍通信隊(部隊名不明)	二葉の里、東照宮内

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

八月五日夜九時半発令の空襲警報は、まもなく解除されたが、夜半〇時過ぎの空襲警報発令で、常葉橋西詰の消防分団本部の警鐘が乱打され、老幼婦女子が河原にたくさん避難した。鉄砲町や八丁堀方面からの避難者も多く、幼児を乳母車に乗せたり、背負ったりして、数百人の市民が常葉橋を渡った。

分団本部では、家庭防空要員以外のこれら多数避難者の誘導や指導に繁忙をきわめた。空襲必至という状況下で、道路上や避難場所での喫煙は、敵機の目標になるといって厳しく禁ぜられるほど緊迫した空気であった。午前二時十分ごろ、空襲警報が解除され、警戒態勢に入ったので、各家庭では仮眠をとり、他町からの避難者もぼつぼつ家庭に帰りはじめていた。

河岸に近い家の人たちは、光明院河原、工兵隊東側河原などに避難することになっていたの、夜中に空襲警報が発令されたときは、熟睡中の子どもを揺り起して、河原に連れて行ったが、深夜ながらも、幼い子が二時間でも三時間でも無心に砂遊びなどしている姿は、かわいそうであった。この幼児たちが、夜が明けると原子爆弾で、一瞬に生命を落とすということは、夢想だにできないことであった。

なお、前夜九時過ぎの空襲警報発令中に敵機が撒布したのか、油脂性臭気を感じた所が、白島の中心地域にあって、何かを撒いた形跡があると語り伝えられている。

六日朝

六日の朝は快晴で、七時過ぎに警戒警報が解除されてからは、住民はそれぞれの職場に出勤するか、家庭の雑事に取りかかる人もあり、中には遅くなった朝食の卓を囲んでいる家庭もあった。このような状況の中で、上空に侵入して来たB29を目撃した人は、きわめて少ない。しかし、警報がもう解除になっているのに、B29らしい爆音が

かすかに聞えたので、ふと不審感を持ったという人はかなりあった。

白島東中町のある住民は、朝食につこうとしていた時、その部屋の高いガラス窓越しに、相当な高度をもって、B29が二機、東の方から市の中心部へ向って、侵入するのを目撃している。

おかしいなと、思ったとたん、大爆発に襲われ、身体がクルクルッと廻って飛ばされたという。

無警報下の爆音については、「友軍機だろう。」と思っていた人も多かった。上からのきびしい統制と命令に従って動く日常生活が、もはや習慣化していて、個人的判断による自主的行動などはあり得なかったからである。

白島九軒町のある人は出勤しようとして、一度玄関から外に出たとき、南方上空に高度約八、五〇〇メートルで飛行しているB29らしい一機を見た。そして、自転車に空気をつごうと、再び玄関に入り、空気つぎを終わったとたん被爆したという。

二葉の里でも、侵入する敵機を見ていた人があり、負傷して国前寺に収容されたが、数日後に眼球が自然に抜出して死亡した。その人は犬を連れていたが、犬は元気で、主人の死を見たあと何処かへ去っていったという。

当日朝、二葉の里から田中町方面の建物疎開作業に町民一三人が出動していたが、他の町内会は出動していなかった。

七、被爆の惨状

(白島方面)

その朝、九軒町から東白島交番所に至る約三〇〇メートルのあいだを、広島電気通信工事局の工事応援の兵隊が七〇人来ていて、電話のケーブルを取りつける作業で、道路を掘っていたから、原子爆弾の炸裂によるマグネシウムのフラッシュのような青白い光線を見たとき、付近の人々は、兵隊がガス管にトビグチをあてて、引火爆発したものと思った。その二、三秒後に、ドガンと地軸もさける轟音と共に、一瞬家が倒壊したのであった。

また、西白島町では、閃光をはっきり見て、「やられた！」と叫んで、立つと同時に爆風が襲って来て吹き飛ばされ、同時に大部分の家屋が倒壊したといわれる。

見渡すかぎり、ほとんどの建物が、なぎ倒されており、格別堅固な建築で、部分的に破壊された住宅でも、屋根瓦はすべて吹きとばされ、窓ガラスは完全に破碎された。室内も天井が抜け落ち、床も吹き上げられていた。花火のような青い一条の火が、ヘビのように匍って、チョロチョロと走ったのが見られた。これは放射熱線による自然発火と思われるが、炊事の残火による発火もあって、地区内の各所から火の手が上がった。

避難状況

白島地区内の西寄り地域では、通りかかった兵士に、下敷きになっている人々を助け出してもらったりして、いよいよ火勢の激しくなって来る中を、最も近い川沿いの桜の名所「長寿園」に、まず逃げた者が多かった。

いったん長寿園に出たから、さらに工兵橋を渡り、さらに北の牛田の山のなか、あるいは町内会がかねてから指定していた安佐郡西原へ向って、水源池の前を通り、歩いて逃げていった者もたくさんいた。

北へ北へと太田川上流地帯に逃げていく人々で、饒津神社横の川土手や、無事であった工兵橋付近は、フラフラになった負傷者で混雑をきわめた。

なかでも戸坂村の陸軍病院戸坂分院を目ざす人々が特に多く、工兵橋を渡った牛田町側では、重傷者は堤防に寝転び、軽傷者は水につかったりして、無数の人がたむろしていた。川では水を飲んでいる人々もたくさんいたが、ここまで来て死ぬる人もずいぶんあり、まったくの修羅場を出現した。避難者の中には兵隊も多く、工兵はもとより、基町の砲兵・輜重兵、あるいは陸軍病院の兵士や看護婦・患者も多数まじっていた。

一方、鉄橋上の光明院河原、あるいは下の三樹園(さんじゅえん)河原も、対岸から逃れて来た半死半生の避難民や兵士で、かがむ場所もないほど埋まり、皆、水を求めながら、次々に死んでいった。

白島に続く川沿いの泉邸には、中心部の人々が多数逃げ込んでいたが、庭園の森に火がついたため、裏川を泳いで二葉の里方面へ渡るものが多勢あった。神田川鉄橋の上には、貨物列車四九輛が脱線転覆しており、枕木と共に燃え上がっていた。

饒津神社裏が火炎を上げはじめ、火勢が盛んになるに従い、もの凄い竜巻が起こり、川水は高い棒しぶきとなって狂い立ち、トタン板が一〇〇メートル以上も吹きあげられた。饒津にあがった火炎は、たちまち近くの火炎と手を結んで、ついに三樹園を襲った。

三樹園付近にいた群衆は、猛然と襲い来る火炎の中を、必死になって走り、常葉橋下の河原にのがれていった。そのうちに、沛然と大粒の黒い雨が降り始め、傷だらけでうずくまっている人々を激しく叩きつけた。

二葉の里方面では、広島駅の四番踏切の遮断機が降りて列車が通り過ぎ、その最後尾の一輛が踏切りの所を切れ、遮断機が上げられはじめたその一瞬、轟音とともに衝撃波が襲い、一切は不明となった。遮断機の前にいた人は、背後から、突如大きな物体で打撃され、気づいたときには、線路を越えた反対側に打ちのめされていた。まっ暗な周囲が、ようやく明るんで来たので、恐る恐る起き上がって見ると、建物はすべて倒壊し、助けを求める声で騒然としていた。

近くに血を吐いて即死している人がいたが、通りかかった人が、その死体を急ぎかついで何処かへ去って行った。

この付近の人々は、東練兵場や二葉山、あるいは饒津神社付近に避難したが、東練兵場一帯は、他の各町の人々も殺到して来て、立錫の余地もなくなった。

安佐郡戸坂村・口田・矢口に通ずる道路は、避難者の流れの幹線となり、東白島町・大須賀町・荒神町・幟町方面、または流川町の避難者も二葉の里方面の山へ、ドッと押し寄せて来た。

常葉橋は、床板が燃えたり、欄干が落ちたりしたが、ほぼ完全であったから、みなこの橋を渡った。ただし、橋の西諸の消防署のガソリンが炎上し、付近の民家に延焼したため、その猛火で渡れない時もあった。

なお、地区内の炸裂時における瞬間的被害は、次のとおりである。

炸裂時の被害

町名	家屋被害（約 %）				人的被害（約 %）			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
西白島町	100	-	-	-	30	60	10	三篠橋一部破壊・通行に差事えなし
白島西中町	100	-	-	-	15	75	10	
白島北町	80	20	-	-	5	65	30	
白島中町	100	-	-	-	15	75	10	
白島東中町	100	-	-	-	15	75	10	
東白島町	100	-	-	-	30	60	10	常葉橋欄干落下・床板が燃えたが、渡ることができた。
白島九軒町	100	-	-	-	10	70	20	神田橋欄干被害
二葉の里	80	20	-	-	10	80	10	

神田川鉄橋の列車被害

常葉橋上手にかかる山陽本線の鉄橋上には、貨物列車が転覆脱線、発火して、積荷のドラムが次々に爆発し、避難者を不安がらせたが、この事について、当時の広島鉄道局荒井誠一専務課長は、次のように語っている。

「当日朝は、月二回しかない休日で己斐の官舎にいた。炸裂後、六日中に何とかして広島駅や広鉄局へ行こうと試みたが、警戒が厳重で近づけない。七日の午前三時、山陽本線の線路沿いに広島駅に向った。己斐・横川両駅ともホームの上屋が線路上に倒れていた。

三篠川・神田川両鉄橋の杭木はくすぶりつづけていた。

饒津神社から神田川鉄橋にかけて停車した四九輛編成の第三七七貨物列車のうち、八輛が鉄橋上に乗っかったまま、四〇度傾いて盛んに燃えている。

駅に着いたが、広鉄局長や各部課長の所在はつかめない。とりあえず分担（荒井車務課長は鉄橋・篠原総務課長は駅ホーム）して整理復旧することに決めた。

鉄橋上の列車の取片づけ作業には、三原・十日市両保線区からの救援隊、検車区の残存職員、岡山の鉄道部隊一個小隊が従事した。

決死隊を出して燃え上がる貨車にロープをまきつけ、岸からヨイトマケで川の中へひっぱり落とした。

死骸が累々と浮んでいる川面に、火のついた貨車を引き落とす。それは凄惨な光景だった（昭和三十九年三月二十一日付中国新聞）。」という。

大須賀踏切の列車

午前九時ごろ、放射熱線により鉄道路線の保強資材であるマクラ木が発火した。大須賀踏切の西土手四番目の踏切で、マクラ木の火が列車について、番小屋の処で停車したが、二時間後に炎上した。

なお、地区内の炸裂後の火災発生炎上の状況については、次のとおりである。

火災発生炎上の状況

町名	最初に発火炎上しはじめた		火災状況	火災終息時刻
	場所	時刻		
西白島町			町内全域全戸全焼	
白島西中町			町内全域全戸全焼	

白島北町			町内北端部(工兵隊のカラタチ生け垣際)の数軒が午後三時ごろ南からの風が北からに変わり、焼け残った。	
白島中町			町内北端部に一、二軒焼け残った以外全焼。	
白島東中町	神田橋の南詰あたりから先ず火の手があがった		町内北端、川土手の川側の家屋数軒だけが中破で焼残った以外は、町内全家屋全焼。	
東白島町	常葉橋東詰禿翁寺裏その他数か所	午後八時四十分頃	連日の暑さで乾燥し切っていたため、次々と変わる風向きにあおられて炎上、町内全域全戸全焼。	午後十時ごろ
白島九軒町	神田橋南詰あたりから、まず火の手が上がった	午前九時ごろ	川土手の川側の家一、二軒が焼け残った以外、町内全域全焼。	
二葉の里	第二総軍の炊事場より発火を見る	午後九時過ぎごろ	二、三時間後に、にわか雨がふり同時に風が強くなり吹出して、火勢はこれより南に向かう。第二総軍司令部付近一帯焼失。	夜間九時ごろまで。塀や立木などの火、三日位燃える

工兵補充隊

白島地区最北端の工兵補充隊は、本土決戦要員としての、新部隊を編成中で、八月一日から続々とその兵員が応召しつつあった。六日当日も午前八時ごろから、下士官要員約一〇〇人が入隊していた。また、在隊者は、同じく八時ごろから作業演習のため、逐次営庭に集合して被爆、多数の死者・負傷者を出した。

第二総軍司令部炎上

また、二葉の里の第二総軍司令部の状況について、当時、司令部勤務の久都内智子筆生(現姓賀川)の体験によれば、「第二総軍司令部は倒壊または大破し、副官室のみ残っていた。そのうち総軍の建物の屋根にも火が移り、烈風の吹くたびに五か所の火災が一かたまりにもつれ、モウモウと燃え上がり、火の粉は飛び、凄じい音をたててドラム缶類爆発、松並木も炎の中に包まれ、松脂の臭を放って火龍の如く燃えた。

司令部内兵器部に引返すと書類戸棚が不思議に無事だったので、書類を小脇に脱出した。司令部の門の処まで辿りついて歩行不能となった。永田軍曹が探しに来てくれた。その時腕時計が動いていた。そこへ敵機が上空に来て悠々と偵察しているのを見て怨憎の涙をしばった。

戸坂に運ばれ、着いた時には日は暮れていた。民家で手当を受け、翌日深川に帰宅した。」という。

黒い雨

白島地区では正午前から約二〇分ばかり、大粒の荒々しい黒い雨が降って来た。

難をのがれた神田川鉄橋下で、まっさらな夜具を見つけて頭にかぶり、雨をさけたある避難者は、呉から来て八丁堀福屋前で、鼻の先端をまっ二つに切った海軍将校二人と共に、戦況などをいろいろ話しているうちに、黒い雨が地面を叩きつけるように降って来たのでみんなで、その夜具を頭にかぶって避けたという。

長寿園付近でも、やはり正午ごろになって、裸には痛いほどの雨が、一回降って、少し小降りとなり、また降り、三〇分ぐらいも降りつづいた。そして、長寿園から眺められる横川・己斐方面は相当に降っているようにながめられた。

しかし、この雨も、火災を消すほどのことはなかった。二葉の里方面では、昼前ごろ、雨が降りだし、約四〇分間ぐらい降ったようである。雲が出て、にわかには空が暗くなったと思うと、パラパラと雨が降りはじめた。同時に風が起きた。風速は約一〇メートルくらいと思われる強い突風で、第二総軍司令部の炊事場付近にあがった火の手が旋風を起して、空高く舞いあがるのが見られた。

延焼する兵舎の火の手は、一層大きくあおられて拡がり、桜の馬場の大きな松もまたたくまに焼け、大火災となった。

(白島方面)六日夜

東白島の鎌谷薬局主人は、六日夕刻、焼け出された隣組の人達と相談の上、妙風寺墓地内に仮寝の場所を定め、防空壕から米・梅干などの非常食を出して来て炊出しをした。

鉄道線路の土手に登ってみれば、市の中心部をはじめ四方には、まだ数十か所猛炎が狂い立っていた。墓石を枕に寝ていると、半狂乱の父親の子供をさがすかすれた声が夜通しきこえていた。

光明院河原から見ると、牛田ふたまた土手付近の穀物倉庫が、夜になっても燃えつづけているのがよく見えた。また牛田の山腹でも二か所ぐらいが燃えているのが望見された。

光明院河原では、軍の公用で白島九軒町の自宅に島根県浜田市から帰っていた酒井薫兵長が、自宅も全壊全焼し

たため、家族の者と一緒に避難していたところ、火災のため河原も危険になったので状況判断の上、戸坂方面が安全と思いつき、避難民に、川伝いに北上して逃げるよう呼びかけ、誘導すると共に、負傷者の救出をおこなった。

諸現象

火災の原因としては、黒いものはほとんど自然着火したようである。

シュロの木は、全部といってよいほど着火したし、鉄道の枕木さえも熱線で着火した。

白島九軒町では、干してあった色物の洗濯物が、燃えくすぶりながら落ちていたのを拾って、すぐ防火水槽の中へ投げ入れたという人もある。

また、縁側の防空暗幕から発火したのも多かった。

壁の厚い土蔵は、爆風で屋根瓦が全部飛び散り、屋根下の赤土は落下、屋根板が露出し、窓も抜けた。そこへ火災が燃え移り、内部の貯蔵品が燃えたため、ついに四方の厚い壁も崩れ落ちた。

ある婦人は、ちょうど屋外にゴミを捨てに出たところ、爆風で何処かに飛ばされ、その後行方不明、死体も判らないままである。

また、ある婦人は、離れ座敷の東北のガラス戸に面したところで、髪の手入れ中、炸裂にあったが、傷一つしなかった。ただ目の前のガラス戸が、西南からの爆風を受け、一瞬どこかへ飛んで行ったのでびっくりしたという。

三篠橋東詰で、荷馬車もろともに馬が欄干にぶっつけられたまま死んでいた。橋の欄干は、爆風の方向に、一方は橋上に横倒れとなり、一方は川中に落ちていた。

(二葉の里方面)

二葉の里方面では、六日夜、町内の焼け残った家は、山の手西の鶴羽根神社から東照宮までの住宅であったが、これらもただ焼け残ったというだけで、棟の完全なのは一戸もなく、まっ暗な中で蚊の襲来になやまされながら、不安な中で夜の明けのを待った。二葉の里へは、他の地区からの避難者が数限りなく押し寄せて、神社・寺院の境内に充満した。東照宮の石段横に湧く清水を求めて、ここにも避難者がたくさん集っていた。

東照宮下は、地区の避難所として定められ、救護その他の事務を執っていた。また、東練兵場広場に警防団が集合し、避難者の救護活動をおこなうと共に、地区内の状況を連絡しながら、食糧・衣料など配った。

饒津神社から南方を見ると、ただ第二総軍司令部の兵営の土塀と高いコンクリートの煙突が残っているだけという一望の焼野原が遠く続いていた。電柱は、爆心に面した片方半分だけが焦げていた。

二葉の里ガード付近は、鉄道線路の枕木の自然着火から民家に延焼した。炸裂と同時に着火したのは、鉄道枕木のほか、饒津神社の檜皮葺の本殿や神社うしろの二葉山などがあり、一帯が火の海と化し、次々と火勢が広がっていった。山のふもとの家屋の軒先も自然着火したが、付近の人々が消しとめた。

火災によって延焼した物の中で、ガラス製品が一種不思議な色彩を持って変形していたのがあった。陶器も、釉薬が溶解したり、形が変わったりしていたが、中でも黒い色が黄色に変じ、ねばりがなく割れ易いものとなっていた。二葉の里第四踏切のところの、二〇メートルぐらいの高さの大木が、道路上に横倒しとなっていて、人間がかろうじて通れるだけで、車馬は通れなかった。この道は、牛田町や大須賀町・広島駅前へ通ずる道であったから、交通に大きな支障をまねいた。

八、被爆後の混乱と応急処置

(自島東部地区)

救急作業

白島地区東部では、四日目の九日ごろ、安佐郡・山県郡・高田郡方面から、にぎりめしがとどいて、初めて配給された。特に丹比村からきた米のうまさは腹に泌みた。しかし、配給機関が不備であったためか、せっかくのにぎりめしが腐敗していて、全部川に流したこともあった。

救護所の設置

救護本部を光明院前に仮設し、東中町の小田亮医師などが治療に奮闘する一方、警防団幹部の一人は、一日に三、四回鉄道線路ぞいに長寿園まで往復して、罹災者用の配給にぎりめしを運んだ。

八月十三日ごろ、二人の巡査が東署から派遣された。一番ガード南側に仮派出所を設置し、治安や罹災証明書、転出証明書などの事務を執った。両巡査とも被爆者で、ひどく衰弱していた。

八月十五日ごろ、呉海軍の救護隊が約二〇人ぐらい到着し、一番ガード北側に救護所を作り、町民の治療にあたった。

死体の収容と火葬

罹災者の死体は、九日ごろから収容しはじめられ、火葬・仮埋葬は二十五日ごろまで続けられた。ほとんどが光線に焼かれた半裸体であり、ひどい火傷のため人相はまったく違っていたし、その数も三〇〇体を越える状態であったから、人名の確認も身元調査もできないまま、東白島町の万行寺や一番ガードと二番ガードの中間の鉄道土手の下あたりで火葬し、仮埋葬した。

死体は焼けたトタンで担架を作って運び、五、六体から一〇体ぐらいを一組にして石油をかけ火葬したが、鉄道線路の上から四方を見ると、数一〇カ所で死体を火葬しており、その炎と煙が空にたちこめていた。

白島東中町(現在国鉄アパートの位置)に「船舶練習隊処理 柱」と木の柱に墨書された標識柱が麦畑の中に立てられていた。二十四、五年ごろ、国鉄アパートの建設がはじまることになり、市役所衛生課へ連絡して、香華を供え、遺骨を拾って市が平和公園供養塔に合祀した。

また、焼跡を掘り返しているうちに下敷きとなって死んだ人で、氏名の判明しない遺骨が、そこここから出て来た。これらはいちじ、最寄りのバラックの寺にあずけていたが、後に全部慈仙寺に合祀した。

(白島西部地区)

白島西部においては、六日夜、工兵橋の牛田町側、あるいは工兵作業場で、多くの人々がゴロ寝して仮眠をとった。翌朝、工兵補充隊の兵士が炊出しをおこない、避難者ににぎりめしをくばった。

六日の夕方ごろ、学徒動員で作業していた中学生や工兵補充隊の火傷した負傷兵たちが、「母さん、母さん。」と叫び、苦しんだ末、川の中へ飛び込んで体を冷やしたり、水を飲んだりしたが、あくる朝、目ざめて見ると、ほとんど死んでいた。

救護活動

救護活動がはじめられたのは、六日午後からで、工兵隊の作業場の東北、牛田山に応急救護所が設けられた。しかし人手が少なく、たんなる応急治療だけであって、戸坂国民学校の陸軍病院分院にトラックで負傷者を送った。ここも軽傷者が主で、重傷者は、付近に横になったままというありさまであった。人心も転倒していて、すべてがちぐはぐなことばかりであった。

白島地区の町内会の機能

白島地区各町内会は全滅したが、白島九軒町小野峯蔵会長が健在であったから、自宅あとにバラックを建てて町内会仮事務所を設置し、献身的に町民の世話をおこない、辛うじて町内会の機能を保つことができた。

(二葉の里地区)

救護活動

二葉の里方面では、六日、東練兵場(海軍救援隊)や東照宮石段下に救護所が設けられ、町内の比較的元気な者が総出で救援作業をおこなった。夕方、郊外から来たにぎりめしを配給した。また、警防団荒神分団も来援し、救護活動を行なった。

七日、医師(加茂郡北部医師会)と医薬品が到着したので、軽傷者は東照宮下へ運び、重傷者は尾長町国前寺に運んで応急の処置をとった。

死体の収容・火葬・埋葬

二葉の里一帯に逃げて来た罹災者も、次々に死んでいったが、これらの死体を収容して、七日ごろから火葬・仮埋葬を始め、八月も末ごろようやく終了したのであった。

軍人の遺体は、軍隊に報告して整理したが、一般市民の遺体は、警防団員など残存者が集って、寺の墓地を利用して火葬をおこない、氏名のわかっているのは縁故者が引取り、不明者は東練兵場で火葬し、明星院墓地に仮埋葬した。

しかし、いまだ敵機の飛来があったりして、火葬中に警戒警報が出たので七日・八日には火の見えないように、いちじ火葬を中止したこともあった。

十四、五日ごろでも、まだ道路上に放置された死体はかなりあり、悪臭を放っていた。

二葉地区における死亡者のため、東照宮下に慰霊塔を立てて弔ったが、遺骨は納められていない。

二葉の里町内会の機能

二葉の里町内会の機能は、清代吉五郎町内会長・その他役員・生存者・警防団員などが協力して事にあたった。また、福岡方面から来援した軍の工作隊が、饒津神社境内にテントを張り、三か月ぐらい駐屯していて、町内会の

対策に協力した。

警防団員は、警察と連絡し、食糧の配給や治安の確保をおこなったが、白島方面、その他町内会の壊滅した地区の町民の救助や連絡のため、不眠不休のありさまであった。

学生・勤労奉仕隊などの死亡者は、各自の持物とか、着物に住所氏名の記入があったのでこれによって関係者を見つけだして連絡したが、一週間ぐらいこれらの作業が続けられた。

日がたつにつれて、二葉山の中などの奥まったところからも、数々の死体が発見され、判明者は縁故先に連絡した。不明者は東練兵場に集めて火葬した。

二葉の里各所に、軍人の死骸がもっとも永く放置してあったが、明星院から饒津へかけての道路上の死骸には、八工が集り、悪臭が鼻を突くありさまであった。軍の機能がまったく失われたため、早急な処理がされなかったからであろう。

主要道路の啓開

町内会の道路は、まっ先に啓開して交通に支障のないよう取りはからい、牛田や大須賀に通ずる交通の要路として、その安全を確保した。しかし、橋梁やその付近以外はそのままで、人の通れる程度の幅だけの整理が徐々にこなわれていった。瓦の破片その他が高く堆積していたが、復帰した住民の手によってだんだんと宅地の境界の塀がわりに、これらの瓦が拾われたり、積み重ねられたりして、自然に整頓されていった。また、町内の焼けた家屋も、十日ごろになってはじめて各自が整理した。それまでは自分の事さえ考える余裕がまったく無かったのである。

九、被爆後の生活状況

(白島地区)

八月末ごろの白島地区各町の居住世帯概数は、次のとおりである。

町名	世帯概数
東白島町	30
白島西中町	20
白島九軒町	40
西白島町	20
白島東中町	15
白島北町	30
白島中町	

八工の発生

被爆後四、五日を経過したころ、八工の発生が目立って多くなった。鼻をつく負傷者の悪臭・腐敗臭に、八工が集って産卵し、ウジが無数に匍匐した。八工は、遂に焼跡を占領するほどにもの凄く発生し、道行く人の背には、八工がまっ黒くとまった。自転車に乗って走るものにも同様にとまりついていった。追っても追っても人間を怖れず、平手で叩くと一度に数一〇匹はころされた。死んだ人にはもちろん、全身に八工がとまって舐めていた。また、入浴もせず、着替えの着物もなかったから、ノミ・シラミがわいた。手の指には疥癬ができる者も多かった。

八月末ごろ急に八工がいなくなった。アメリカ軍が飛行機から殺虫剤をまいたということであったが、こんなに効く薬があるだろうかと思われなかった。

窮乏生活

八月十日ごろまで、郡部から救援のにぎりめしの配給をうけていたが、このころ、警察経由で、豆・肉・昆布の入った罐詰(軍放出品)の配給が数回あった。また、十五日目ごろから、軍隊の衣類(服・下着・シャツなど)や毛布の配給が僅かながら配給された。

九月初めごろ、郡部の縁故者をたよって、野菜・米・牛肉・馬肉・くだものなど、なんでも手あたりしだいに、食べられる物をあさって歩いた。仕事もなければ金もなく、ただただ食物の確保にだけ専念した。

灯火

焦土と化した焼野原の数日間の夜はロウソクも何もなかったから、焼け残りの木ぎれを拾って来て夜どおし燃やして過ごした。そのうち誰かが軍用の保革油を一罐手に入れて来たので、罐詰のあき罐に入れ、布ぎれを細長くたらしめて灯芯とし、はじめて灯火を得た。焼トタンでかこんだ仮住いながら、何か文明を取りもどしたような気がした。

(二葉の里方面)

二葉の里方面では、火災終息後、一部焼け残った木材やトタン類を集めて罹災者は雨露をしのいだ。

三家族・四家族と罹災者同志が集って共同生活をしたが、そのうちに縁故がたよられる者や独りで生活できるめどがついた者から散っていった。

中には、夜は防空壕で雑居寝し、昼は外へ出て、ムシロなどを陰にして、一日を暮らすものもあったが、ともかく皆が皆、食物を得るのに夢中になっていた。引揚者や軍人が、ときたま、持ち帰った珍しい物をくれるとうれしかった。

ハエの発生

ここでも八月二十日ごろ、ハエが発生しはじめた。死体は放置されていたし、家は焼けて便所がなく、塵芥はたまりっぱなしであり、駆除する薬品も方法もなく、ハエの大襲来は昼夜の別なく、その上、蚊が発生してなやまされた。

二葉の里は、山や木立が多く、ハエや蚊がいちだんと発生密度が高かったが、ただ茫然としているほかなすすべもなかった。シラミも発生した。

生活物資

食糧は、配給に頼るはかなかった。六日夕ぐれ、東照宮下で警防団が、にぎりめしを配給した。また夜になって、郊外からトラックがにぎりめしを積んで、饒津神社境内に来着した。これら救援食糧も三日後には来なくなり、軍がカンパン一袋ずつ配給したので、罹災者の一同はやっと飢えをしのをいだ。

十日ごろ、第二総軍司令部から食糧が配給されたこともあった。終戦後、広島駅前に南北に細長く屋台車や箱台で、闇市場が出現したので、これを利用する者も多かった。

暗い夜

六日以後、十四日ごろまで、流浪の民のような暗やみ生活が続いた。ロウソクの配給が、しばらくしてあったが、もちろん慰め程度で、ほとんど焚火で夜をすごしていた。

電灯は中国配電会社では工事ができなかった。資材不足・人手不足など多く理由があったが、五、六か月ばかりたったころ、焼あとから、裸電線を拾い集めて来て、各自が配電し、やっと点灯したのであった。

復帰者

二十年末までに、郡部へ疎開していた家族が一〇戸ばかり帰って来た。

学童は、安佐郡鈴張村の寺院に集団疎開していたが、二十年十月末、全滅した家の学童だけ残して、その他の学童が復帰した。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨禍

白島方面では、九月十七日の暴風雨によって、罹災者がせっかく建てたバラックの焼トタン屋根も無残に剥がれ、着ていた衣類まで、ずぶ濡れになった。また十月八日の大豪雨によって太田川が氾濫し、東側の山から、西側の山すそにかけて洪水となったため、白島全町は、高く盛土された山陽線鉄道線路だけを残して全部水没した。水深は一メートルから三メートルに達して被害甚大、泣くに泣けなかった。

白島北町の一部の、半壊家屋を残して、他は全壊全焼の地区であったから、これら二度にわたる災害によって、生活は徹底的に困窮のどん底につき落とされ、各町とも僅少な世帯数がさらに減ってしまった。

砂糖湯

二十年九月上旬市立浅野図書館(現在・中国電力株式会社)館内に、中国復興財団(理事長平野馨)が設立され、各種軍需物資を取扱ったが、馬場熊太郎は、ここから砂糖二、三俵を入手し、以前の真砂商店のところにテントを張り、甘味にかついていた町民に熱い純砂糖湯を作って販売したところ、永い間、糖分をとらなかつた人々が行列をつくって買い求めた。

経済活動

二十年十月中旬、焦土の中から、起ちあがろうとするきざしが出はじめた。元の白島終点到薬局(鏝谷信男)と自転車店(伊桐博士)が開業し、ようやく生氣らしきものを得た。これが地区内における経済活動の嚆矢であったと言えるか。

二葉の里方面では、二十年十一月中旬頃、東練兵場跡に「二葉開拓団」が組織され、農作物の生産をはじめた。また、同年末ごろ、土手筋に飲食店が三戸ばかりできた。

住宅の状況

なお、饒津神社境内を中心に、バラック建住宅が三〇戸ばかり建った。だいたい商店より住宅が多かったが、その実状は、次のとおりである。

地 域	状 況
三樹園・常葉橋付近	三樹園、常葉橋の付近からガード下にバラック建つ。昭和二十一年ごろ一五戸。
饒津神社境内	古資材で山の手の一部に建つ。戸数不明。軍隊によって一〇戸建つ。
東照宮から西山の手側	焼け残り家屋を修理。昭和二十年十月ごろ七〇か所。

白島付近を通過して

尾木正己

当時、私は呉海軍工廠に勤務し、爆心地から二〇キロメートル離れた呉市吉浦町の火工部設計係において、火工兵器の設計に余念がなかった。勿論、室内で作業していたが、鉛筆を持った手が浮き上がるような衝動を受けた。状況から判断して、普通の爆弾ではなく、広島市近郊で、火薬の誘爆だろうというのが、ほとんどの者の見方であった。

私は、数分後にモクモクと上昇するきらびやかなキノコ雲に、数枚のシャッターをきった。

吉浦の近くではないことは事実であったし、作業に追いまくられていたため、私は別に意に介せず仕事を進めていたが、午後五時ごろになって、負傷者が続々と町に帰って来はじめた。吉浦駅で、衣服の引き裂けた血まみれの人、気の失せた人々が、何を考えともなくホームを歩いている姿を見て、ただ事ではないと直感した。しかし、まだ原子爆弾ということは判らなかつた。

自宅のある海田市町まで帰って、広島市内が大変だということを知ったが、どうする術もなく、翌七日朝、出勤してから、火工兵器の経験者として救援隊を出すこととなり、私もその一員に加えてもらった。

今思えば、的場町で単身トラックから降りたと思う。ガラス工場か？瓶の破片が溶岩のように溶けて、夏の陽光にかがやいていたのが印象的であった。

それから焼けくすぶる市内を、広島駅の方に歩いて、大須賀踏切から二葉の里に出た。東照宮の石造の鳥居が跡かたもなく吹き飛ばされており、大きな松の木も焼けはてて幹のみを残している。

常葉橋にさしかかったとき、川遊びをしていた裸の子どもらが、泉邸の裏の川辺に散在して斃れており、此处からは、被爆したそのままの姿が、まだ片づけてなかつた。

常葉橋西詰(白島)付近は、炸裂下の凄惨な生地獄の最も典型的な状況を示していた。焼野ケ原の路上には、死体と、まだ命のある人間とが折重なって散乱し、中でも兵士であろう軍服が引き裂かれ、赤黒く焼けただれた背中の皮膚に、夏の強い日光が照りつけ、熱さと苦痛に耐えかねてか、隣の同僚の措けているトタンの切端を、おぼつかない手つきで引き寄せて、自分の体にかかけようとし、また、取られまいとして引きもどし、おそらくは、直射日光で熱くなっているであろう鉄板の切端を、遮光のために奪いあう姿。しばし、立ちどまって見ていたが、どうすることもできず、死体をまたぐようにして歩き過ぎた。

その時の自分は、それは救援活動ではなかつた。行方不明の妹の捜索も目的であつたけれども、今考えて、惨禍の予想外の大きさに心をうばわれ、ただ焼跡を無意識に歩いたに過ぎなかつた。しかし、直接の被爆者でなかつたためか、比較的冷静に観察したと思う。道端に数多く設備された防火水槽の中には、火傷の激痛に耐えかねてか、先を争って飛びこんだ様子が見られ、一個の水槽に折り重なって入り、水面に頭や顔を出している。赤く血に染まった水槽の水が、小刻みに震えて、断末魔の鼓動を漂わせている。時折り、大きく息吹く呼吸が、人間の死に到達する一里塚のように思われた。

同じ路地に、焼け果てた並木がある。それに直立不動の兵士が立ちかかっている。何か警備についているのだろうかと思ひながら、前を通り過ぎて、振り返って見ると、視線が動かない。立ったままの姿で被爆し、そのまま硬直して木に寄りかかり、倒れないままに息を引取っている。あたかも男のマネキン人形の顔のような、目は開いて、呼べば答えるような容相である。戸外で、火傷もせず、放射能線で死んだのであろうか。

また、爆発と同時に、家から飛出したと思われる一五、六歳の裸の少年は、戸口でうつ伏せに倒れ、火傷一つしていない。時計が八時十五分で止まっている。

つぶさに見ているうちに、白島の電車停留所(終点)付近に来ていた。そこには、バスに乗った人が、そのまま被爆し、火災にあつたためか、皆前向きに坐つたままの姿で黒焦げになっている。勿論、男女の判別もできない。反対側には、電車が満員であつたのであろうか、折重なって黒焦げになっている。バスも電車も焼け果てて骨格のみ

となっている。

それから八丁堀方面へ出て行ったが、このあたりから、わりかた死体も片づけられていたが、キリンピヤホール
の前の道路に、胴がはち切れそうにふくれ上がった馬の死体があった。本通りの惨状もものすごかった。(中略)

一日中、歩き疲れて、探し求める妹の姿も見あらず、心の動揺をおさえながら、徒歩で一〇キロメートルの道
のりを、海田町に向って帰途についた。その後、学徒動員で京橋町のミシン縫作業場にて被爆した妹は、ミシン
の下から這い出して、学友と一緒に、にわか雨の中を牛田方面に逃げて、幸い一命だけは助かり、八日に帰って来
た。頭に負傷していたが現在も元気である。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

牛田新町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、牛田本町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目、牛田中町一丁目 二丁目、牛田南町一丁目 二丁目、牛田東町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、牛田町早稲田一丁目 二丁目、牛田町旭一丁目 二丁目、牛田山

町内会別要目

この地区の範囲は、牛田町新町区[うしたまちしんまちく]・同丹土区[たんどく]・同神田区[かんだく]・同本町・同旭町区[あさひまちく]・同早稲田区[わせだく]・同南町区[みなみまちく]とし爆心地からの至近距離は、二葉の里饒津神社裏山の太田川畔で約一・八キロメートル、もっとも遠い地点は、戸坂町に接する太田川畔で約四・六キロメートルである。

牛田地区は、広島市を形成する太田川デルタ地帯の創成前は、河口部に位置したところで「市域周辺の丘陵地帯では、そのふもと近く波が押し寄せ、牛田・中山・矢野などの縄文遺跡付近は海辺に形成された小集落をなしていた」し、「奈良末期に太田川河口左岸に牛田荘が成立して奈良西大寺領の荘園となっている(新修広島市史)。」と、往古からひらけていたが、太田川の流砂によるデルタの発達にともない、城下町築営ごろには、中心部からすでに離れていた。昭和四年、広島市へ編入合併されるまでは安芸郡牛田村であり、戦前までは、新しい文化住宅(当時流行の軽便洋風住宅)があちろちらに点在しながらも、なお田園的なおもかげを多分に残していた。戦後、市の発展にともない、ベット・タウン的住宅地区として急激に発展をとげ、都市計画路線の整備とともにますます変貌しつつある。

原子爆弾の被害はかなり大きく、家屋の倒壊、破砕などと同時に、他町からの避難者が続々と詰めかけて来て大混乱をひきおこした。なお、地区の被災当時の建物総戸数は一、七七八戸、世帯数は一、八九六世帯、人口は七、四五四人で、町内会別の内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
牛田町新町区	200	200	840	牛尾孟
牛田町丹土区	132	132	525	石田房五郎
牛田町神田区	218	230	849	香川正平
牛田町本町区	326	332	1,269	武田悟
牛田町旭町区	205	208	835	芝田寿
牛田町早稲田区	247	269	950	任都栗司
牛田町南町区	450	525	2,186	小越

また、地区内に所在した主要建物(または事業所)は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
牛田国民学校	牛田町旭町区	日通寺	牛田町新町区
安楽寺	牛田町本町区	早稲田神社	牛田町早稲田区
牛田説教所	牛田町神田区	市水源池	牛田町新町区
不動院	牛田町新町区		

二、疎開状況

人員疎開・物資疎開

市の中心部からはずれており、田畑も多かったから、人員の疎開も、物資の疎開も実施していなかった。

むしろ、市内から疎開して来る人や物資を受入れる立場であった。

学童疎開

しかし、牛田国民学校の学童疎開だけは、広島市の計画どおりにおこなった。

昭和二十年五月十二日、六月二十二日、七月十八日と三回にわけて、高田郡船佐村(現在・高宮町)へ児童三八三人、教師二人が集団疎開をおこなった。

疎開児童は、芸備線十日市駅で下車し、あとは徒歩で疎開先の船佐村へむかったのであった。

なお、二年生以下の児童、および高等科生徒は疎開せず残留した。

このほか、郡部の縁故をたよって個人的に疎開した児童が約二〇人いた。

三、防衛態勢

町内会ごとに消防班が組織され、警防団が厳しく指導・訓練をおこなった。防火訓練もバケツ操法などしばしば実施し、焼夷弾などの災害に対処した。

各町に防空壕を構築し、手押しポンプを備え、各家庭には貯水槽を置いていた。

なお、各家庭で、リュックサックに救急品(薬品など)を入れて、万一の場合、ただちに持ち出せるよう常時身辺において用意していた。

四、避難経路及び避難先

地区は山林地帯に接しており、恰好の避難先にめぐまれていたので、わざわざ地区外に指定する必要がなかった。しかし、一応牛田国民学校・早稲田神社の裏山・不動院などを避難先として決めていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
陸軍部隊名称不明	旭区牛田国民学校内	兵数僅少・救急品保管の関係部隊
工兵隊作業場		当日、動員部隊が召集され、入隊式を行った直後、原子爆弾に遭遇した。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日の夜から、ぶつつづけに六日の朝まで警報が発令せられ、警防団牛田分団長西本義見以下団員一同は、本部事務所(本町区)に詰めかけ、平常の訓練どおり灯火管制を厳重に取締り、万一に備えていた。

防空壕への待避命令は出さなかったが、みんな神経過敏になり、睡眠不足でもあり、極度の疲労感におおわれていた。

午前七時三十一分、警報解除になったので、警防団も一応解散し、それぞれの家に帰っていった。

この日、牛田地区は、各町内会とも建物疎開作業はなく、また、動員令による他地区の作業も、四、五日前に胡町の作業に出動して、任務をはたしていたので、出動していなかった。

警防団員を解散させてから、西本義見分団長は、牛田地区でも北部にあたる太田川沿いの新町区の自宅へ、自転車に乗って帰る途中、白島の工兵隊に通じる工兵橋の南約一〇〇メートルの土手筋の道(幅員六メートル)にさしかかったとき、北方(可部福王寺付近)に、落下傘が一つ空中に浮いているのを見た。

炸裂

その瞬間、自転車もろとも道路上に投げつけられていた。爆発音にも、閃光にも気づかなかった。突然降って湧いた瞬間的な事態であった。もちろん、広島市に侵入して来た敵機の爆音など聞いてはいたかった。

また、新町区の浄水場に近い自宅で被爆した山下寛治の日記「歌心帖」によれば、「...朝の食卓におもゆ一杯をのんだときであった。

私は敵機の爆音を聞いた。土間に久仁雄を背負った妻に対して『あれはBの音ではないか、行くのを一寸待て。』と言いながら、目をあげて、裏の窓から空を見たとき、つんざくような爆発音と、ものの吹っ飛ぶのと同時であった。障子の紙に火がさらさらとのぼった。

『やられた。』と立ち上がって、そばの柱へだきついた。家は崩れなかった。背中にするどい声をかけて妻が抱きついて来た。

それからの行動は夢中であった。

『村田が焼ける。』と、妻が言った。私は身仕度をして飛び出した。六〇間先の藁屋根はすでに燃え落ちていた。』と、その瞬間を記録している。

七、被爆の惨状

一大事を直感

西本分団長は、気がつくやうに倒れかけた家の下に投げ出されており、路上には黄色なものが漂っていた。

防空訓練で常に、黄色は毒、赤色は爆弾として指導していたので、「これは危険だ。」と感じ、すぐ川土手の下に逃げた。

ちょうど工兵隊の召集日であって、みんな国民服を軍服に着かえているところであったが、その入営兵が逆に牛田の作業地へむかって来たのを見て、一大事が発生したことを直感し、自宅へ帰るのを思いとどまった。

早稲田神社に救護所設置

安楽寺の指定救護所に行くと、すでに負傷者が四、五人来ていたが、火災の危険を感じたので、救護所を早稲田神社に変更した。ただちに白鳥町の鉄道第一ガードの所の軍医に連絡を取るべく走ったが、すでに神田橋の下の四、五戸が火災の最中で、下側も通れたいため引きかえし、現在の信用金庫(早稲田区)の傍の知人宅に、乗れもしない自転車をあずけるため立ち寄ると、「顔が血でまっ赤になっている。どうしたか。」という。防空頭巾をぬいで、知人宅にいた女医に診てもらうと、馬蹄型に頭骸骨が露出していて、剥げた皮膚がひたいに垂れさがっていた。応急処置をして、バスの終点まで行ったが、気分が悪くなったので、町内対策を桑本・今田兩人に引きついで、やっと水源池を横切って、不動院の傍の自在坂神社(新町区・不動院の守護神)の竹やぶの中へ、他の避難者と一緒に逃げたという。以上は一つの実例であるが、全般的にみると、原子爆弾の炸裂の瞬間、家屋の天井や戸・障子などが爆風によって破壊された。ほとんどの町民が、自分の家がやられたと直感したが、外へ出てみて被害が全町内に及んでいるのに気づき、事の重大さを知ったのであった。

ガラスはこっぴ微塵に砕け、畳は吹きあげられ、屋根瓦は一方に吹き寄せられていた。

着火炎上

神田橋たもとから上流・下流に沿って建っている家々は、ワラ屋根の農家風の家が多かったが、次々に屋根から火を噴きあげ、熱風が道路を吹きつけていた。

警察の牛田派出所の土間に、火のついたこれらのワラが飛びこんで来た。やがて川ぞい一帯は火炎につつまれて全焼した。

防火活動

すぐに工兵隊が出動して、ポンプを持ち出し、延焼を防ぐために全力をあげるとともに、町民もこぞって防火に、救出に活躍し、郊外に逃げる者は余りいなかったが、中には世帯道具を背負ったり、老人や子どもを連れしたりして、他人のことはおかまもなく戸坂方面へ慌てて避難する者もあった。即死者や重軽傷者が地区全体の約半数に達した。

避難者殺到

また一方では、市中心部から工兵橋や神田橋を渡ったり、あるいは饒津神社西側の川沿いの土手道伝いに、白鳥や二葉の里方面から、ドッと避難者が殺到し、午後二時ごろになると、牛田を経て、戸坂方面へ避難者の行列が続いていった。いずれも重傷者で、見るも無残な幽鬼のような姿であった。雨も降らずカンカン照りの道で、中には歩けなくなって倒れる者、あるいは息絶える者などたくさんいた。

地区の被害状況

この炸裂時の瞬間的な被害は、つぎのとおりである。

町名	家屋被害(約%)			人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破・無事	即死者	負傷者	無事
牛田町	30	66	4	4	44	52

また、火災状況については、つぎのとおりであった。

町名	最初に発火した		延焼状況	終息時刻
	場所	時刻		
牛田町本町		炸裂と同時	西部地区全焼。	十二時頃
神田区	神田橋東詰の家から	炸裂と同時	西部地区全焼。三分の一位残る	十二時頃
丹土区		十時頃	西部方面全焼	
新町区		十時頃	西部の一部全焼	
南町区		九時頃	西部方面全焼	

川土手の惨状

避難者の数は、時々刻々と増加し、太田川沿いの川べりや、幅員六メートルの土手筋の道には、死人や半死人が無数に転がり、道路はやっと自転車が通れるぐらいの幅しかなかった。

惨状まなこを覆うこのなかを、負傷者の無秩序な列が、ソロソロと川土手の道を、北へ向って続いて行った。そのとき、雷鳴と共に、雨がパラパラと降った。

六日の夜

夜になるころには、町にも、町を囲む山にも、断末魔に喘ぐ無数の避難者が所狭いほどたむろしていた。

町内の家々は、みな避難者を抱えこみ、夜になっても家人の眠る場所がなかった。中には、再び空襲があれば、家が崩れるのは必定だと考えて、付近の山や畑に出て、蚊帳をつるし、一夜を明かす町民も多かった。

地獄なるこの闇夜につける火の

タバコ火赤しわれ生きてあり

山下寛治

工兵作業地の仮設糧秣倉庫には、衣服や食糧が貯蔵してあったが、夜目にも明るく燃えあがり、いつ終息するかも知れなかった。この火災は、ずっと一週間ぐらい燃えつづけた。

市内を望見すると、まだ燃え続けていて、上空が不気味な明るさでいろどられていた。

不安におののく避難者や、重傷で息絶え絶えに呻吟しつづける負傷者などの救護作業、あるいは夜食のムスピの炊出しをして、六日の夜は大混乱を続け、町民の多くは、ついに眠ることができなかった。

七日朝

七日朝になると、町内に避難して来た人々は、潮がひくように、それぞれの方向へ散っていった。牛田に残ったものは町内に縁故者のある人とか、歩こうにも歩けない重傷者であった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

被爆当日、この地区には救援隊は来たかったが、町内の太田萩枝医師(県病院医師)が、早稲田神社前をはじめ、負傷者の集っている町内各所を巡って、手持ちの医薬品により応急治療に活躍した。

半壊の牛田国民学校の校庭に、七日、呉海兵団派遣の医療救援隊が到着し、天幕を張って臨時救護所を開設した。また、白島の自宅で被爆負傷し、血染めのシャツのまま、神田橋で治療活動にあっていた国友国氏医師も来援するなど、不眠不休の活動が続けられた。これらの救護班の活動と相まって、町内の警防団・婦人会・町内会役員その他の人々の協力もめざましいものがあつた。

幸い、牛田国民学校には、陸軍の医薬品が多量に疎開されていたから、これを自由に使用することができた。

七日にはまた、西本警防分団長ほか七、八人の団員が集って、町内の避難者に対し、食糧の配給を行なった。

牛田地区に逃げて来た避難者のうち、なお余力のある者は、さらに奥地の戸坂その他の方面に逃げて行ったが、牛田に到着しただけで、動くことのできなくなった重傷者が、路上にたくさん呻吟していた。

警防団は、これら重傷者の救護にあたることにし、肥車(大八車)に麦ワラを敷いて、これに乗せ、戸坂の陸軍病院分院(戸坂国民学校)に何度も何度も繰返して運びこんだ。途中、車の上で死亡する者もあつたが、最後に五体ほどの死体が残った。

死体の処理

九日、東警察署から巡查部長が来町し、死体を火葬に付すよう指示した。警防団ではさっそく死体の収容と処理にかかった。しかし火葬する燃料がないので、警察の了解を得て、公園に土葬したが、軍人以外の死体が約五〇体に達した。

死体の中には、工兵隊が近いのか軍人の死体も多かった。これらは、工兵作業地(水源地の山)の記念塔の下の、大きな防空壕の中で、工兵隊長が指揮を執り、兵隊が処理した。

浮流死体

奥地の竹原方面の村から、来援した警防団の協力を得て、四、五日かかって死体の収容作業をおこなったが、太田川に無数に浮いて流れ寄って来る死体は、満潮時に一体ずつ引きあげ、早稲田区任都栗司宅の裏側の公園に収容して火葬にしたり、土葬にしたりした。

死体引揚げにたずさわった早稲田区の高井一夫は「上げ潮によって、神田橋あたりに流れつく死体は数を知らず、ただもう無我夢中でドンドン引きあげたが、死体をつかむと、その手の皮がズルリと剥げた。その感触は今日までも忘れられない。

そしておびただしい腕時計が、それらの仏の腕からはずされた。これはひとまとめにして、東警察署へ引渡したものである。」と、述懐している。

これらの死体の氏名は、確認できなかったけれども、任都栗司の記録によれば七〇〇体以上に及んだという。

供養塔

昭和二十一年五月二十七日、多くの死体を火葬したり、土葬した公園に供養塔を建て、毎年、慰霊祭を執行している。

このほか、土手筋など、その死体があつた場所でそのまま火葬にふした死体もあり、これらの遺骨は、後に平和公園の納骨堂へ納めたのもあつた。

町内会の機能

牛田地区の各町内会の機能は、被爆によって停止するという事はなかった。各町とも町内会長や役員が無事であったし、火災も一部分にとどまったから、従前どおりの町内会運営ができたし、立上がりも早かった。

食糧配給は警防団がおこなったが、その他の配給はすべて町内会が執りおこない、混迷と不安の交錯する被爆後の町民の生活を、ともかく守りとおした。

地区内に殺到した避難者への炊出しは、町内会としては米がなくておこなわなかったが、各戸においてそれぞれ救助の手がさしのべられた。

九、被爆後の生活状況

人口増加

八月末ごろの人口は、被爆前の人口に比較して約二割方増加した。

農家があったとは言え、すでに都市化が進んでいた地区であったから、食糧事情の悪化は、他の地区と同じで、人口の九割以上が配給に頼らねばならなかった。

ハエの発生

市内中心部のような荒廃はなかったにもかかわらず、後にはやはりハエが多数発生し、家の中はもちろん、歩く人の背にもクログロと止まっていた。

町内会としても駆除薬品の入手ができず、また他の駆除方法もないまま、発生するに任せる状態であったが、進駐軍の飛行機による薬剤の散布によって急激にいなくなった。なお、ノミやシラミはいなかった。

生活物資

当局の配給物資だけでは、到底、飢餓を克服することはできなかったから、生活物資の入手のため、広島駅前あたりの闇市を利用する者がほとんどであった。

食糧配給は、麦の時は麦ばかりであり、大豆のときは大豆ばかりが配給されて、配給機構そのものが混乱していた。

暗い夜

夜は電灯がつかず、暗やみ生活がながくつづいた。ロウソクも乏しく、とにかく夜になると早く寝るほかなかった。電灯がついたのは、山下寛治日記によると九月二十九日であったという。

疎開児童の復帰

牛田国民学校は、窓ガラス・天井など爆風で飛散し、使用不能たまでの半壊状態であったが、負傷しなかった教職員が協力して、校舎の修理や整備をおこない、ただちに疎開児童の引揚げ準備にかかった。

九月一日、授業開始の準備を完了。同三日、入学の受付をおこない、同十二日、高田郡船佐村の集団疎開児童の引揚げをおこなったが、授業開始当時の児童数は、約六五三人程度であった。

暴風雨禍

九月十七日の暴風雨によって、牛田地区の平地部一面は浸水した。新町区あたりでは、水源池の北から不動院の北まで深さ約二メートルの浸水があり、床上一五センチメートル以上の水びたしとなった。

本来、牛田は、昔、沼地のようなところであったから水に浸りやすいと言われているが、太田川の堤防が切れなかったのは幸いであった。

経済活動

壊滅的被害からまぬがれた牛田地区は、混迷虚脱の状態から脱出するのも早かったようである。経済活動も徐々に復旧し、日一日と正常化への道を歩んでいった。

いちじ殺到して来た避難者も、二十一年春ごろから、ぼつぼつ牛田を引揚げて行くようになってから、平穏なもとの田園住宅地にかえていった。

十、その他

不動院の柱

国宝不動院の、本堂の南の角から二本目の柱(ケヤキ材、直径約三五センチメートル、高さ約二メートル)が、爆風によって「まん中から折れた。後日、本堂修理の際、その柱は取替えられた。

牛田の山麓にて

小野勝(被爆地・牛田町早稲田区五九九)

ズボンのひだにあいていた小さな穴をつくろわせていたために、予定の出勤時刻が遅れたいらだたしさを、しいて押し静めながら、玄関先にひき出した自転車の荷台に、風呂敷包みの書類を結びつけた。

トタンに、首すじがチカリッ！

熱ッ！焼夷弾か？

そばの防空用貯水槽の四斗樽から、戦闘帽で水を汲み、頭からかぶり、体を伏せた。

フワッ...体が浮いた。

爆風！？

右手の防空壕の入口めがけてころがりこんだ。

「空襲！空襲！待避！待避！」

私は声をかぎりに叫んだ。耳をすませたが、あたりは静まりかえっている。

隣組全滅...？家族も...？

不安が全身をおののかせる。たまりかねて防空壕を飛び出し、すぐ前面の小高い丘にかけのぼった。

眼前に展開する牛田の町の家並みは、ほこりをかぶった古い油絵のように、変に白っぽく、くすんでいる。川を隔てた五〇〇メートル余り向うの市街地は、夕立雲につつまれたようにうす暗く、見通しがきかない。

何処かにぶい、しかし腹の底まで響くような、何かの爆発音が断続する。

何事が起ったのだろうか？

割り切れぬ気持ちのままに、ふと見あげた空に、例のあのキノコ雲！

火薬庫の爆発か、ガスタンクの爆発か。

飛行機の飛ばぬ空襲なんてありはしない。

市街から遠くへだたったここらまで、危険が及ぶ心配はまずないとみてよかろう。かりに、火災が延焼して来ても、だいぶん後の問題で、それまでには打つ手があるというものだ。

そんなとりとめのないことを考えていると、わが家の方から、子どもの泣き声と、妻の狂気じみた叫び声が聞こえてきた。文字で綴ると相当長い時間のようなのだが、実際は、せいぜい二分か三分...、それよりもっと短かったかもしれない。

「どうしたんだッ。そこにいたらダメだ。早く裏山へ逃げなさい！」

声のする方角にむかって、姿の見えない家族に、そう呼びかけて私は丘を駆けおりた。

すぐ傍らの橋本の家から、私の勤務先(産業設備営団広島支所)の野中支所長が飛び出して来た。素ッ裸である。

「何でしょう？」

「わかりませんネ。」

「家のなかにはムチャクチャですよ。」

- 私はまだ自分の家の中のことは知らなかった。

見れば、彼の背中からまっ赤な血が流れている。五〇歳とは思えぬ若々しい艶のよい女のように白い膚が、あやしく美しくさえ見える。

「その傷は...」

「床の間の壁が、倒れかかって来たのですよ。」

「とにかく、消毒しておきましょう。」

私は野中支所長を、私の家の台所につれていった。水道の蛇口をひねったが、水は、チョロチョロとこぼれ出て、すぐ止った。

それでも洗面器の底に、わずかながら水がたまった。肩にかけていた救急カバンから、私はクレゾール液を出して、その水に溶かした。傷口を洗い、オキシフルで消毒したが、背中の中の傷をつつむだけの三角巾も繃帯もあるはずはなく、いち応、このままにしておいて、後で繃帯材料を探すことにした。

台所から座敷の方をのぞいて、あッと私は驚きあわてた。

畳は、そこここにはね返り、障子・ふすま・天井板がバラバラにこわれて散乱し、タンス・机・ミシンなどがバタバタとよこたわり、ガラス・食器・衣類・壁土などが見わけもつかぬ有様で積み重なり、足の踏み入れようもない。ただ呆然と見つめるばかり...

子どもの頃から大掃除の手伝さえ拒んできた無精者の私に、この乱雑の限りをつくした状況は取りつくしまもな

かった。やけくその舌打ちをしながら私は戸外に出た。被爆後、一五、六分後であったろうか。

家の前の細い坂道は、相変わらず無気味に森閑としている。

ただ、市街地の方で爆発音が続いており、それにかすかながら物の焼けはじける音が聞えてくる。

私は、忘れ物を思い出したような気持ちで、空を見あげた。

それは、何という美しい情景であったことか。あのキノコ雲の上部は、大きなシャボン玉の群れのように、虹色にかがやき、静かにうごめいている。

「やっぱり、ガスタンクの爆発だったのだナ。その蒸気に太陽がさして、スペクトルな色彩を映したのだナ。」

ふとそんなことが頭に浮んだ。

一〇メートルほど下手の曲り角の生垣のあたりから、人声がきこえてきた。目をやると、軍刀を杖にした将校と、その肩にすがった夫人らしい女…。

将校の頭には、グルグルと布切れが巻かれ、顔面にはタラタラと血が流れている。右腕も、軍服の上から布でしばられ、ダラリと垂れた手くびに血が伝わっている。夫人の顔面は蒼白で、歩行も息苦しいようすである。

「どうだったのですか…」

私は声をかけた。

「自宅に直撃弾ですよ。白島方面は全滅です。それにもう火災が起きて、神田橋を渡るのが精一杯でした。」

やっぱり爆弾だったのか…。敵機のいない空襲…。

「まア、そのままではいけますまい、繻帯をかえてあげましょう。」

私は二人を上隣りの家の中にある井戸端に連れこんだ。足の踏み場もない台所口から声をかけたが、人の気配は感じられない。仕方なく、勝手に知っている台所の、あちこちを物色して、洗面器を探しあて、井戸のポンプを押した。冷い水は勢いよく吐き出されてきた。

洗面器一杯に、クレゾール液をつくり、将校の頭の布を解いた。どこからか血がふき出してくる。

「しまった。大きな傷だったら、血の止めようもないかも知れぬ。」

しかし、そんなことは考えていられなかった。顔を洗面器につきこますようにして、掌で頭じゅうのほこりや血痕を洗い流した。

「薬がしみますか。」

「イヤ、大丈夫です。手数をかけてすみません。」

傷口は、右上頭部にみつかった。一寸余りの裂傷である。ガーゼで傷口をおさえ、血を拭きとると、白いものが見える。骨かなと思う。手ばやく傷口にガーゼを重ね、防空演習で習得した要領で三角巾をしぼりつけた。

どうにか血は止ったようだ。何となく気が落ちつき、度胸がすわった。

「腕の方も手当てをしましょう。上衣をぬいでください。」と、医者のような口をきいていた。

(中略)

いつのまにか、私たちの側には数人の見知らぬ負傷者が、あたかも指示された順番を待っているかのごとく立ちならんでいた。

しかも、下の坂道には、三々五々、それこそ老幼男女の別なき負傷者が、裏山をめざして避難して行くのを見かけた。

「ケガのある人はここへ来てください。消毒してあげますから…」

私は、時々、そう呼びかけた。しかし、それに応じて来る人は半分もなかった。その他の人たちは、血走ったおびえたまなざし、何かに追いかけているような足どりで、後を振り向くのもこわいかのように、石ころの道を踏みしめて、坂を登って行くのであった。

衛生材料の乏しくなった私は、それでも、医者気取りで

「すみませんが繻帯材料を持っている人は出して下さい。何でもよい、布切れをもっている方は、あのバケツの消毒液で、よく洗濯して、固くしぼって下さい。」と、呼びかけた。

次々に、傷口の消毒をし、仮繻帯をしていった。その間にも、言葉少なに、この避難者たちの語るところは、言いつつに、自分の家が直撃弾を受け、町は火の海で、家族はバラバラになっている、ということであった。

何人の手当てをしたであろうか。今、何時ごろであろうか。腕時計を持ったことのない私は、どの家の時計もこわれ、止っているだろうから、時間を知るよすがもない。避難者の姿が途絶えて、井戸端に私一人となったとき、

いい知れぬ孤独感と疲労におそわれた。同時に、忘れていた家族の安否が気がかりとなり、裏山へ登って行った。

山上から眺める市街は、ただ濛々たる砂塵と煙に蔽い包みかくされていた。時折り、その暗黒の切れ間に、火炎の点滅しているのが瞥見される。

それまで全く気がつかなかったのだが、眼下の畑中の一軒家がほとんど燃え落ちて、家財や柱がくずぶっていた。藁屋根の農家であった。消す人もなく燃えるにまかせて、燃えきったのだろう。

山に向って、妻や子どもの名を呼んだ。

隣組の人々も呼んでみた。けれども焼けつくような真夏の太陽の照りつける山には、コダマも返って来ない静けさが、たちこめているだけである。皆、山奥に隠れているのだろう。

まあ、それもよかろうと、諦めて山をくだり、家に帰り、とにかく腰をすえ、体を横たえるぐらいの場所を造るべく、飛散物の取片づけをすることにした。

(中略)

夕方近くたってから、家族や近所の女・子どもが帰って来はじめた。昼飯も食べずに、裏山のどこかにおびえながら待避を続けていたのだった。

女・子どもには、幸いに大した負傷者はなかったが、それでも、頭や手足の露出部に軽い火傷や、何かの小さな破片での傷を受けていたものは数人あり、それらは、各自の持ち合わせの油や赤チンで、取りあえず手当てを施してやった。

八月六日の夜は、家の中の片づけもできなかつた近所の数家族が、次の空襲の恐怖も手伝って、そこらの畑の空地に野宿するのが精一杯のようだった。

身の週りの大切な物だけをまとめて持ち出し、手近かなムシロ・ゴザ・フトンなどを敷いて、思い思いに横になつたり、あぐらをかいたりして時を過ごした。

昼のあいだは、全然気がつかなかったが、遥かに見渡す西の方己斐方面では、数か所山火事が発生し、燃えるにまかせた火の手は、煙をも赤く染めて、勢いよくのたうっている。

ふと耳をすませば、裏山のあたりでパチパチと焼けはじける音がする。

小高い所にのぼって見返ると、尾根一つ越えたあたりの山から、うすら明るい炎が散見され、「やがて近くまで延焼するのではないか。」と、氣遣われる情景である。女・子どももそれに気づいて「大丈夫だろうか。」と、おびえていう。「山一つ越えた向うだから心配するな。」と言ったものの、夜の火の手は近くに見えるもので、手放して安心もし得ない心地であった。

当時、広島市周辺の山林には、焼夷弾攻撃の場合の延焼防止の目的で、大規模な立木伐採をおこない、防火帯が設けられていたが、そんなものが役立つかどうか。強力な熱線は真夏の乾き切った山々に火災を起こさせ、消す人もないままに、あの瞬間から燃え続けているのであった。

夜露が降り、夏とはいえ夜の風は、おびえ切って、一日中食物もまともに食べていない人々に、肌寒さを感じさせた。

二〇〇メートル余り離れた山麓の第三国人が住みついていた部落のあたりからは、時折り「空襲警報発令！」という声が放たれて来る。

爆音も聞えぬ、誰の指令ともわからぬ号令である。間歇的なその号令に「あいつらの謀略だよ。意地悪をするんだよ。」と、あとでは気にとめる者もいなくなった。

「牛田だけしか焼け残っていないのに、空襲もクソもあるものか。」と強いて元気づける者もいた。

見はるかす市の中心部は、依然として、濃い煙に包まれ、そのかいまのところどころに、小さな炎が、何一つとして残すものかと言わんばかりに、最後の力をふるっているように見える。

「この上、空襲でもあるまいではないか。」

ふと誰かが「蚊がいないじゃないか。」と、言い出した。そう云えば、なる程、昼間でもヤブ蚊やブトの襲撃を受けるこのあたりなのに、この畑の中に一匹の蚊もあらわれないのである。蚊も爆撃されて全滅したのであろう。

夜がふけて、山火事延焼の危険も感ぜられず、空襲など思いもよらぬことと確認してから「夜露で寝冷えをさせは...」と、子どもたちは、とにかく壊れた家のなかに寝かすことになった。

「ロウソクでよく足もとを照らして、ケガをしないように...」と、注意する私に、子どもを背負い、手をひく女たちは「あかりをつけて大丈夫だろうか。」と、敵機の攻撃目標になることを懸念する。

「バカな心配はよせ。それより、この上ケガをせぬことの方が大事だ。」と叱るようにいったが、やはり同じ心配が私の頭のなかをかすめるのであった。

異常なショックや、帰り来ぬ肉親や、安否の判らぬ親族・知己たどのが話題となって、大人たちはまどろむこともできず、話し明かした。

私はふと何時だったか、東京から来た電通の何とか部長の、時局講演会での話を思い起した。

「マッチ箱ぐらいの量で、大きな戦艦でも破壊することができる爆薬が発明されている。」

たしか原子破壊爆弾と言ったと思うという話を、野中支所長や近所の人に話した。

午後、牛田から出て市街の状況をまのあたりにして帰った支所長は「きっと、そんなものだろう。でなければ、あんなに全市がやられることは考えられない。」と、うなづいた。(後略)

一、地区の概要

町内会別要目

戸坂〔へさか〕地区は、昭和三十年四月十日、広島市に編入されて、安芸郡戸坂村〔あきぐんへさかむら〕から広島市戸坂町となった。

この地区の範囲は、狐爪木〔くるめぎ〕・千足〔せんぞく〕・惣田〔そうだ〕・山根〔やまね〕・数甲〔かずこう〕・大上〔おおあげ〕・出江〔いずえ〕各町内会とし、爆心地からの至近距離は、牛田町に接する狐爪木の山地で約三・九キロメートルであり、最も遠い地点は北端の山地で約六・七キロメートルである。

地区は、市の中心部から東寄り北端に位置し、太田川の上流に沿い、山林にかこまれた平地は、米・野菜の生産地として、穏かな田園風景を展開していた。

戦後、市部の発展とともに、市営住宅団地とかわり、広島市のベット・タウンとして著しく変貌している。

当時の建物総戸数は、三〇七戸、世帯数三七七世帯、人口は一、四四〇人で、村内各部落会の内訳は次表のとおりである。

常会名	被爆直前の概数			常会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
狐爪木	40	50	200	木村八千穂
千足	55	68	240	高野増一
惣内	40	52	210	山本群三
山根	45	50	200	清水政一郎
数甲	32	40	150	福本幸次郎
大上	50	62	230	向井唯三
出江	45	55	210	向井田岸太郎

地区内に所在した主要建物は、戸坂国民学校・呉市水源池である。

二、疎開状況

ここから他地区へ疎開した者はいなかったが、市部からの疎開者・疎開物資は多くあった。昭和十九年ごろから疎開者が来はじめ、そのまま定住する者がたくさんいた。

三、防衛態勢

昭和十三年、従来の戸坂村愛国婦人会を、国防婦人会に改組した。

昭和十四年、戸坂村公設消防組を廃し、戸坂村警防団を結成した。

昭和十五年十一月、広島県訓令によって、市町村常会(部落会・隣保班)に関する整備要領が発せられて戸坂常会が発足した。

昭和十七年七月、大政翼賛会広島県支部規程が発せられ、いよいよ銃後の諸態勢が強化されるようになった。

昭和十九年から二十年にかけては、本土決戦のため、竹槍訓練が強制された。

昭和二十年七月、戸坂村国民義勇隊を結成し、八月六日午前六時、これが編成(前衛・本隊・大行李・牛車・後衛)をおこない、直ちに総人員約五〇〇人が予行演習を実施した。

四、避難対策

この地区が当時郡部であったため、各家庭に防空壕を作ったほかは、別に行なっていなかった。それよりも、広島市被災時の救援並びに受入れについての対策が立てられていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
広島陸軍病院戸坂分院	戸坂国民学校	隊長・藤本軍医大尉
砲兵陣地(未駐留で終戦迎う)	戸坂村字中島	現在・市営住宅地

六、五日夜から炸裂まで

八月五日、警戒警報発令があったが空襲はなく平穏であった。

八月六日、午前六時から戸坂村国民義勇隊の編成と訓練があった。これがため当地区内住民の広島市内での被爆者は、学徒以外は僅少であった。

広島市遠望

原子爆弾の炸裂のときは、不安を感じながらも遠望しているという状況であった。しかし、爆風のため、地区によって程度の差はあるが、天井板・ガラス窓・屋根瓦などが破損した。

狐爪木地区から望見した者によれば、敵機が北の可部方面から南下し、横川上空あたりで爆弾を投下したように見え、投下と同時に、落下傘の物体が、ユラユラと北方に吹き飛んだという。

なお、当日の朝、この地区からは、広島市内の疎開作業に出動していた者はなかった。

七、被爆の惨状

キノコ雲見える

白銀光というかピカッと光って、ブルッと身を絞めるような震動と、ドンと陰気な音がした。その瞬間、絵にも口にも表現しがたい毒々しい雑多の色をつつんだ古綿をかぶったようなキノコ雲がのぼった。

刻一刻と、白・黒・赤の流れ雲とたって新庄山の稜線にたなびいた。これが午前九時ごろであった。

炸裂の衝撃は、さほどでもなかったが、ガラスが飛散したり、天井板が吹きあげられたりして、不安感と焦燥かられた。

被爆者なだれ込む

午前十時ごろから、裸体で焼けただれた被爆者が崩れるように、「水、水…」といいながら、足を引きずって当村へ流れ込み、さらに上流地域へえんえんと続いていった。

なお、炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

部落名	家屋被害（約 %）				人的被害（約 %）		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
狐爪木		1	60	39	5	10	85
千足			40	60	5	12	不明
惣内			20	80	不明	不明	不明
山根			20	80	3	7	不明
数甲			20	80	3	5	不明
大上			20	80	4	8	不明
出江			20	80	6	11	不明

火災なし

この地区では、原子爆弾の炸裂により火災が発生するということとはなかった。また、雨も降らなかった。

くるめぎ神社

熱線の影響による諸現象として特記するほどのことはなかったが、爆風の被害で、狐爪木神社の拝殿(三五坪)の西側の根太柱が、一〇センチメートルばかり内側に一本めりこみ、西側の土壁が破れ、東の間の天井と、その屋根が突き抜けた。また、西隅にあった太鼓(直径二尺二寸)が吹きとばされ、東隅の柱で支えられていた。絵馬額面(三〇面)が飛散し、稲荷社(五坪)が三〇度傾いた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護作業

市中から殺到した被災者の救護作業には、村の警防団員をはじめ、婦人会その他村民がこぞって活躍したが、医療救護については、戸坂国民学校にあった広島第一陸軍病院戸坂分院の軍医・看護婦が主体となって活躍した。被爆負傷者は、六日その日からひっきりなしに到着し、一挙に大混乱となった。

陸軍病院分院は、もともと軍人軍属だけを扱っていたが、六日以降は、なだれこんで来た一般市民も収容した。

各教室はもちろん、その廊下にも校庭にも収容し、混乱はそのきわみに達した。

そのうち学校には収容しきれなくなったので、民家を使うことにし、その家の畳数に応じて、収容者(一人ないし一〇人)を割りあてたが、たちまち超満員とたった。やむなく、農家であるから普通よりは広い炊事場の横や道ばたの隅にも収容しなければならなくなった。

みにくく火傷し、剥げた皮膚の、たれさがっている負傷者が、炎天下の地面に、長時間息もたえだえの姿でうずくまったり、転んだりしていた。

中には、すでに死んだ人を枕にして横たわっている重傷者もいた。

陸軍病院の治療だけでは間にあわず、医薬品もなかったのも、中には、気やすめのような民間療法しか受けられない負傷者も多くあった。

死体の収容と火葬・埋葬

負傷軍人は、八月十三日ごろまでに県下各地の分院に転送されたが、残った一般負傷者は、収容直後から死ぬる者が続出し、戸坂村尾岳のふもと(当時・土砂留、現在・桜丘住宅団地)で、七日ごろから十日ごろまで、死体の火葬をおこなった。

避難者の受けは、村役場の職員がおこない、氏名・年齢・性別などを記録し、罹災証明書約二〇〇枚を交付し、探しに来た親兄弟などその縁故者のために役立てた。

探し出した縁故者は、看護をしたり、死ねば火葬して遺骨を持ち帰ったりしたが、ただ、重傷者のなかには、すでにものの言えない人やモグモグと口をうごかすだけで、その言葉が聞き取りにくく、ついに死後、無縁仏になった人も多くあった。

死亡者は、約六〇〇人であったが、軍民の区別なく、軍の衛生兵と警防団が協力して、軍用トラックで火葬場に運び、一度に三〇人ぐらいの遺体を、二段にならべて、供出用の松根の残りや、各部落から供出した割木で茶毘にふした。

供養塔

これらの遺骨は、昭和二十年十月、尾長山に仮埋葬をし、そこへ標識として供養塔を建てた。

慰霊祭

毎年八月六日、戸坂村と婦人会の共同主催のもと、供養塔前で慰霊祭を施行していたが、昭和三十四年四月、遺骨を平和公園内の納骨堂に納めた。

現在でも八月六日には、尾長山桜ヶ丘墓地の供養塔で、広島市戸坂出張所の職員などが、盆灯籠を献じて犠牲者の冥福を祈っている。

九、被爆後の生活状況

人口急増

戸坂村自体の被害は、それほどのもではなかったが、市中からの疎開者や避難者が、そのまま定住したから、人口が急増した。農家は納屋などを応急的に改造して、居住できるように取りはかった。

昭和二十年八月末ごろの居住世帯数は、次のとおりである。

部落名	世帯数
狐爪木	110
千足	120
惣内	100
山根	100
数甲	70
大上	120
出江	110
合計	730

八工の発生

終戦後、八工が異常に多く発生し、ゴマ塩を撒いたように、あらゆる物にたかっていた。

被爆者の火傷が、ひどい臭気を発散したので、屋内にも無数に集って来て、不衛生この上もなかったが、駆除とか予防とかの環境衛生施策は、なんら施すすべもなかった。また、ノミの発生も多かった。シラミはあまりいなかったようである。

食糧状況

在来の保有米農家は、調味料や日用品の不足になやむことはあっても、主食に困ることはなく、むしろその余剰米を闇に流す者もあったほどであるが、疎開者や避難者などの非農家は困窮した。被爆当座は、玄米配給ながらまず順調であったが長く続かず、物々交換のタケノコ生活というその日ぐらしのありさまであった。野のヨモギ・ヨメナ・セリ・イモの葉など、およそ毒草でないかぎりの草を摘み取り、これをゆでて、少量の米をつなぎに入れ、ダンゴにこねて食べた。

諸物資

被爆後、灯火用として常会からロウソクが二、三本配給され、終戦になってから軍放出の石油が、一戸当り一合ぐらい特配された。主食以外の配給品もきわめて少なく、酒は大部分の農家が、いわゆる自家用と称するものを密造しておぎなっていた。ただ、田植などの農繁期には、増産用の清酒が特配されて、大いに氣勢をあげた。増産用の特配は終戦前からおこなわれていたことであるが、戦後は、三次方面からドブ酒、横川方面から朝鮮酒の密搬入も盛んにおこなわれるようになり、昭和二十五、六年ごろまで続いた。

煙草は密造できず、配給の煙草にヨモギやゴボウなどの枯葉を加えて喫ったりした。

もっとも困ったのは調味料や日用品で、広島駅前や己斐駅付近の闇市へ出向いて入手した。

終戦前の昭和十九年ごろ、市内から運搬した下肥のなかにまじっている脱脂綿を拾い集めて、これを再生する業

者がいたが、戦後は軍用物資の放出などがあるためか姿を消した。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月十七日の暴風雨で、太田川筋の県道が二五〇メートル、村内の県道が一六〇メートル(三か所)損壊した。このため、田畑の流失六町歩(五九、四〇〇平方メートル)、田畑冠水四五町歩(四四五、五〇〇平方メートル)、家屋の流失一四戸、浸水家屋五〇戸におよんだ。家屋浸水では、床上浸水が役場付近(国民学校東側)で七五センチメートルに達した。

また、十月八日の豪雨で、田畑冠水が三五町歩(三四六、五〇〇平方メートル)、浸水家屋が四〇戸あり、農家も非農家も大きな被害を出し、物心両面にわたる打撃を受けた。

戸坂には、軍需用の米や小豆、その他調味品がたくさん疎開されていたから、この暴風雨の災害に際して、濡れ米や小豆などが、軍靴や軍衣袴などの衣料品と共に特別に配給され、急場を一時的にでもしのぐことができた。

再建の道

地区内七部落の常会組織は、終戦と同時にその機能を失い、自然的に消滅したが、村民の団結精神は変ることなく、戦後の新体制に沿って再建の道を歩んだ。年を追うごとに民心も落ち着いてきて、教育の振興、児童福祉の増進など、特に青少年対策として母親学級などを設け、家族制度崩壊による諸問題の打開につとめた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

橋本町、幟町、上幟町、鉄砲町、八丁堀、上八丁堀、銀山町、胡町、弥生町、堀川町、新天地

町内会別要目

この地区は、八丁堀[はっちょうぼり]・鉄砲町[てっぽうちょう]・上流川町[かみながれかわちょう]・幟町[のぼりちょう]・上柳町[かみやなぎちょう]・山口町[やまぐちちょう]・橋本町[はしもとちょう]・石見屋町[いしみやちょう]・銀山町[かなやまちょう]・東胡町[ひがしえびすちょう]・斜屋町[ちぎやちょう]・堀川町[ほりかわちょう]・弥生町[やよいちょう]・新天地[しんてんち]・金座街[きんざがい]の範囲とし、広島市の心臓ともいうべき中核的な、地区である。

原子爆弾の炸裂点からの至近距離は堀川町で、東南東約七〇〇メートル、もっとも遠く離れていたのは上柳町栄橋西詰で、約一・四キロメートルである。

この地区には文化・経済両面にわたって、重要な諸機関、諸施設などが集中しており、城下町のおおらかな伝統と、いきいきした近代的な色彩との、独特な調和の上に、常時、繁栄していた。

東辺は、清流京橋川に沿う清潔な住宅街の上柳町から、西は、かつて広島城の外濠を埋立ててできたという繁華街八丁堀であり、南はまた、多くの老舗・有名商店・娯楽施設が軒をつらねて、市内随一の殷賑を誇る胡町・堀川町の商店街がひかえている。北は、京口御門から京橋町へ抜ける旧国道を境に、前栽の樹木も美しい閑静な高級住宅街がひらけ、旧藩主の所有であった室町時代風の回遊式名園泉邸(縮景園・お泉水とも呼ぶ)がある。なお当時、園内の浅野侯爵邸の一部に、第二総軍司令部付情報参謀大屋角造中佐指揮下の海外通信傍受所が設置されていて、アメリカ移民二世の婦人二〇人ほどが、海外放送をキャッチしていた。

泉邸は、戦後整備されて、縮景園と呼ばれ、ようやく原型に復しつつあるが、八月六日当日は、おびたしい避難者で埋まり、襲いくる火炎の轟音の中で、園池はたちまち死出の血沼と化した。

このほか、地区内には、各官公庁・官公舎・学校をはじめ、各銀行・デパート・映画館及び新聞社・放送局などの報道機関、または、のれんを誇る多くの老舗・専門店が建ちたらび、市内の第一級地という名をほしいままにしていた。

被爆直前の、地区内の建物総数は二、八九七戸で、人口は一〇、五六八人で、その内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
上柳町	247	244	808	佐藤繁司
下柳町	350	350	1,200	三戸孝作
幟町上組	150	150	250	今西貞夫
幟町下組	253	250	1,000	内海了海
石見屋町	92	92	400	桧垣新兵衛
橋本町	48	45	120	蔵田新兵衛
山口町	350	350	1,200	大浜己三郎
銀山町				桑原謙吾
東胡町	40	80	240	高野又一
弥生町	130	120	680	増田卓一
上流川町上組	235	250	830	三佐尾貴一
上流川町中組				山田二三次
上流川町下組				土岡喜代一
鉄砲町上組	401	240	1,360	今田寿盛
鉄砲町中組甲				下村哲
鉄砲町中組乙				中尾蔵三
鉄砲町下組				川瀬建吉
八丁堀上組	226	220	840	田坂戒三
八丁堀中組				砂原格
八丁堀下組				島村譲一
胡町	93	95	380	武永三太郎
斜屋町	41	45	200	久保田豊造
新天地	120	不明	500	小林敏雄
堀川町	121	135	560	丸岡才吉

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
中国地方総監府総監官舎	上流川町	第百生命保険株式会社	八丁堀上
控訴院長官舎	上柳町二九	営林署	八丁堀上
検事正官舎	上柳町一八	広島無尽株式会社	八丁堀下
予審判事官舎	上柳町一八	広島県酒造組合	斜屋町
東警察署	山口町	幟町国民学校	幟町下組
広島証券取引所	銀山町	広島女学院	上流川町
広島銀行山口町支店	山口町	広島中央放送局	上流川町
太陽館(映画館)	下鉄砲町	中国新聞社	上流川町
東洋座(映画館)	下鉄砲町	勸業銀行広島支店	上流川町
帝国座(映画館)	新天地	胡子神社	胡町
新天座(劇場)	新天地	天主公会	幟町中組
花月(寄席)	新天地	流川メソジスト教会	上流川町
歌舞伎座(劇場)	八丁堀下町	中国管区防衛司令部	上流川町
広島税務監督局	八丁堀上	浅野観古館(のち郷土館)	上流川町
広島税務署	八丁堀上	泉邸(浅野侯爵邸)	幟町上組
福屋百貨店	八丁堀下		

二、疎開状況

人員疎開

十九年ごろから、老人子供の疎開をすすめ、二十年初めごろには、町内会・隣組を通じていよいよ強力な推進をはかった。大部分が縁故疎開で、下柳町の場合は、縁故疎開と学童疎開を併せて全体の約三分の一の三二〇人が疎開した。流川町・胡町などでは全体の約五分の一ぐらいが疎開した。

建物疎開

二十年六月ごろから建物疎開が始まり、堀川町(現在の金座街)西側、八丁堀西側(当時練兵場に接した)、鉄砲町上(当時陸軍倉庫に接した側)、電車通西側全部を陸軍の手で強制的に疎開を命ぜられ、またたくまに取りこわされた。

物資疎開

八丁堀・鉄砲町・堀川町などをはじめ各町とも、二十年初めごろから、物資疎開が強力に推進されたが、疎開先との関係や輸送の関係から、なかなか予定どおりに進捗しなかった。大方は市内の縁故先や知人の家の納屋・蔵を借りて行なったが、思うようにはかどらないまま、被爆時まで続いていた。

疎開は、家具や商品を主としたが、中には家屋の建具や畳までも疎開した人もあった。また、日常さしあたり必要な食糧や食器などは、地下室や防空壕の中に入れていた。

二十年四月ごろまでは、まだ順調に疎開できたが、その後急激に戦況が悪化し、運搬車のほとんどが軍の徴発にあい、荷造りしたままで、被爆した物資も随分多い。運搬できないので庭に穴を掘り、重要な品物を埋めていたが、大丈夫かどうか心配になって再び掘りあげて見たとき、被爆して失ったという人もあった。

学童疎開

幟町国民学校の児童三年生以上は、山県郡八重町、および同郡壬生町へ集団疎開し、縁故者のある者は個々に疎開して、そこの学校を利用した。集団疎開児童は民家へ分宿した。数人ずつの分散疎開ではあるが、でき得るかぎり町を単位に、同村同校を選んであてた。

また、双三郡方面に疎開し、至極簡単な収容施設にはいった者もあった。

しかし、たまたま五日が日曜日であったところから、荷物を取りに広島に帰ってきていて被爆死亡した者が相当多かった。

残留した低学年児童一、二年生は、地区内の各寺院で分散授業を続けた。幟町カトリック教会もその一つであったが、六日当日は、ほとんどの児童が、まだ登校中か、自宅で食事中であった。

三、防衛態勢

昭和十六年ごろ、各町内では隣組班(約八戸～一五戸編成)を組織して、毎月防火訓練を実施した。

昭和十九年二月、針屋町では酒造組合裏の空地に、町内合同避難防空壕を町民の総出動で、二か月間ばかりの日数をかけ、収容人員一五〇人ほどの防空壕を造った。

また、各隣組では、家庭防空隊を結成して防空防火の訓練を励行した。防火用水と砂袋を各家に備え、特に、夜間の灯火管制は嚴重に実施し、毎夜、二回交替で警防団と警察が巡視を行なった。

警防団本部(警防団長・田中品太郎)を幟町国民学校に置き、各町ごとに分団を設置、各分団は、町民に任務の分担を決め、警報の伝達から送水・消火・避難・救護・灯火管制に対する措置など、予想され得る万一の災害を、最少限にいとめるよう、その訓練を重ねた。

二十年六月、国民義勇隊が創設されたが、大隊長丸岡才吉、中隊長砂原格、小隊長には各町内会長が就任して、男女を問わぬ訓練を半強制的に実施した。

なお、国民義勇隊防衛総監稲葉実は、八丁堀上組に居住していた。

四、避難経路及び避難先

八丁堀・堀川町・鉄砲町・新天地方面の町民は、第一避難先を浅野泉邸・幟町国民学校・広島女学院。第二避難先を饒津公園・大芝公園。第三避難先を安佐郡祇園町と予定していた。

被害の少ない時は、第一・第二へ、被害の多い時は第三の場所へとしていたが、八月六日当日は、予定の命令どおりにはいかず、第一・第二の場所へ集合し、翌日ごろから各自の縁故先へ分散していった。

上流川町・斜屋町・胡町では、その避難先をまず町内防空壕または幟町国民学校とし、状況によっては京橋川上流か二葉山・牛田山と定め、このほか、泉邸・西練兵場・長寿園・東練兵場も予定していた。ただし、八月六日、被爆したながらも歩ける者のほとんどは、泉邸や西練兵場へ避難し、そこから常葉橋付近の河原にのがれ、逐次、牛田・東練兵場へと、避難していった。

また、上柳町は検事正官舎の竹やぶへ、橋本町は牛田方面へ、下柳町は東練兵場方面へ避難した。なかにはバケツやシャベルを持って避難する者もあった。

幟町の町民は泉邸の奥の川土手に定めていたから、そこに避難したが、その後は、各自それぞれの行動をとり、まとまった行動などはできなかった。

五、所在した陸軍部隊集団

広島地区第一特設警備隊(六〇〇人)が、幟町国民学校内にいたが、原子爆弾で全滅した。

また、上流川町の松田重次郎邸には、中国管区防衛司令部が設置されていた。なお、空襲警報時には、泉邸前の松原の中に、たくさん軍馬をつれて来て、木陰につないでいた。

六、五日夜から炸裂まで

五日午後九時すぎの警報発令後は、各自各担当部署に待機した。一般の町民は各家庭において、次の警報に注意をおこたらず、終夜、老人子供および病人を除いて、一睡もとらないでいた。夜明け前、少し仮眠して、七時ごろ、また警報発令で警戒体制についた。町内会長はメガホンで、全町くまなく指令してまわった。

胡町・流川町方面の町民の二割ぐらいが、防空壕へ避難し、約八割程度は役員の指揮に従って、銀山町・山口町・京橋町を経て京橋川に避難した。

各家庭によって違うが、集団待避できる大防空壕には行かず、家庭内の防空壕に避難した者もいる。また、防空壕やその他の避難場所へいかず、家の中で用事をしていた者も多かった。

七時三十分ごろ、警戒警報が解除となり、八時に家屋疎開作業を行なう予定であったため、役員は早めに朝食をとり、町内会長宅に集合しつつあった。

また、一般町民は、解体家屋の跡かたづけに出たが、途中でやめて、各自家庭に帰り食事をしたり、出勤したりする準備をしていた者が多い。

屋外では、平時とかわらず電車も走り、人々も、それぞれの用事で歩いていた。家庭で食事を早くすませた者は、疎開現場に出て、倒壊した材木を薪木に作っている者もあった。

目撃者の一人は、初め飛行機の通ったあと、西の方で電光のようにピカッと光るものを見た。その瞬間、何か見られなくなり、顔に熱いものを感じたという。この人は、そのため顔に火傷した。

またある人は、敵機だと思って見た直後、閃光が走り、轟音がきこえたが、瞬間、一メートル先は、やや黄色を帯びてしまって、何も見えなかったという。

家のうちにいた人は、青い光を見たが、敵機は、もちろん見なかった。しかし、機影を見たという者でも、敵機は一機であって、他の僚機を見たという者はいなかった。

建物疎開実施概況

動員令による出勤人員は不明である。中学生以上は、ほとんど動員され、他の地区に作業のため出勤していたが、これも、その人員はわからない。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先地名	建物疎開計画予定数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区から実施のため集合した人員概数
上柳町	不明	不明	4	なし	市吏員未着につき実施せず	なし
下柳町	不明	不明	5	不明	不明	なし
橋本町	なし	なし	3	5	不明	不明
石見屋町	不明	不明	なし	なし	なし	不明
山口町	不明	不明		5	なし	不明
銀山町	不明	不明	10	なし	なし	不明
弥生町	なし	なし	10	なし	なし	なし
東胡町	不明	不明	1	不明	不明	不明
上流川町下組	80	不明	50	50	不明	主として学童がこれに当る
鉄砲町上組	不明	不明		約 20	不明	なし
八丁堀	不明	不明		約 50	不明	なし
胡町	不明	不明	50	20	不明	近郊から応援隊があったが詳細不明
堀川町	不明	不明		30	不明	なし
幟町	不明	不明	不明	不明	不明	なし

七、被爆の惨状

上柳町付近

そのとき、上柳町町内会長は、自宅の町内会事務所の玄関口で、町民の一人から「今日の家屋疎開計画の、私の家(長屋式)は中止してもらいたい。」と、言って来たので、話し合っていたところであった。

突如、顔を強打された感じがし、同時に眼鏡が飛び、わからなくなった。外を見れば、一メートル先も見えず、急に周囲が騒然となった。「会長さん、会長さん。」と、続けざまに呼ぶ鋭い声が四方八方から、聞えるだけであった。

事態の重大さを直感し、まず声のする近いところからと、隣家の主婦の声をさがしあてて救い出そうとしたが、倒れた家の下敷きになっていて、なかなかできなかった。

次に、予審判事夫人を救い出したが、すでに顔全体が焼けただれていた。判事夫人を抱きかかえるようにして、検事正官舎の防空壕に引きずりこんでから、そのあと、声をするのを手あたり次第に助け出したが、その人数は多くて覚えていないという。

八丁堀鉄砲町付近

八丁堀・鉄砲町付近も同じようであった。

その瞬間、何がどうして、こうなったか考える暇はなかった。ある人は、目前に爆弾が破裂して、その硝煙が大きく横にひろがり、襲いかかって来たので、とっさに体を地上に伏せたという。たちまち、火災が発生した。ある一人は、火元から通路に出て、体を低くし、這いつくばいながら、水槽を求めて五メートルほど行った。その水槽で体に水をかけ続けた。水をかけているうちに、爆風が運んでくる砂塵が周囲に立ちこめ、一寸先も見えなくなってしまった。

四、五人の者が、その水槽で、やはり水を頭からかぶっていたが無残にやられていて、誰が誰か見分けることもできなかった。

このとき、赤煉瓦造りの陸軍倉庫が火を噴くと同時に破裂して倒れた。「あっ、倉庫に爆弾が落とされた。」と思った。時間的なことはわからないが、爆風が止むと、カラッと晴れて熱い太陽が照りつけはじめた。あたりをながめると、見渡すかぎり家が倒れていた。周囲に居合わせた者は一様に、火傷や切傷それに打撲傷を負い、血と埃にまみれていた。また、数人の子供が、あちこちの路上に坐ったり、伏せたり、転がったりして、すでに虫の息になっていた。

水を求める者、親を呼んで泣く者など数限りない負傷者である。家の下敷きとなった呼び声が、あちこちから上がり、下敷きになっているのが、外から見えていながら、倒れた家の大きな材木や壁土の下に敷きふせられている

ので、施す術がなかった。そのうち、火が廻ってきたので、力をあわせて、救い出される者はできるだけ急いで助けだしたが、ひっぱり出されなかった者は見殺しにするほかなかった。各町を通じて、見殺しになった者の数は多く、鉄砲町だけでも何百人もあったという。

胡町流川町付近

炸裂直後、全町の家屋が殆んど倒壊した。一〇分後、各所に火災発生。三〇分後には全町火の海となり、下敷きになった者や重傷者などを、救助する方法もなく、歩ける者は涙をのんで避難しなければならなかった。

屋外にいた者は、全部死んだ。屋内にいた者は、硝子窓が破れると同時に、マグネシウムの発火に類似した閃光を見たが、轟音は気づかなかった者が多かったようである。

家屋の下敷きとなって救いを叫ぶ声と、脱出した人の出火を告げる声が交錯して、一瞬に狂乱の巷と化した。下敷きになっていたところを、やっと救出された人も、その後、原爆症に侵されて大部分死んでいった。

避難状況

胡町は、武永町内会長が指揮して、約一〇人ばかりが、泉邸の川土手へ集団避難したが、その他は各自が思い思いの行動をとったので、計画的な集団避難はできなかった。

泉邸裏の河岸沿いに避難中、物凄い竜巻が起り、対岸の河原に避難している人々の、逃げまどうありさまが目あたりで見られた。

恐怖におびえた避難者は、それを見ると、つぎつぎ水中に飛びこんで数時間を過ごしたが、水の中につかっているまま盛んに下痢嘔吐をした者も多い。傷つき疲れはてた無気力な身体で、常葉橋の下の河原や神田橋の上で、数日そのままで過ごした者も数人いた。

上柳町・下柳町・弥生町・橋本町・石見屋町・銀山町・山口町・東胡町付近は、地区によっては助かった人もあったが、殆んどは死亡した。家屋が倒壊し、道路がふさがれてしまったため、逃げおくれた者は、火炎につつまれて焼け死んだのである。

栄橋の上は、イワシをならべたように死人や重傷者が倒れていた。泉邸の東側では、太田川につかる人や、舟で避難する人もあったが、川に入った人は、ほとんど死んだ。

その日、九時過ぎごろには、泉邸の裏は避難者でうずまだったが、すでに動けなくなって、倒れて助けを求める虫の息の者や、死んでいる者が何百人もいた。歩くにも、転んでいる人と人とのあいだをさがして足を入れるほどの、すきまもない状態であった。また、兵隊が数十頭の馬を避難させて来ていた。

八丁堀・鉄砲町・堀川町・幟町付近も、一瞬に倒壊、火災が発生した。

町役員が、歩ける者は、市外地の指定場所に行くよう勧めたが、そこまで行かず途中で、各自、思い思いの方向へ避難したようである。市の中央方面から牛田・祇園方面へ向けて逃げる人の数は、実に多くひきもきらず続いた。男女を問わず、ほとんど半裸体で、中には全裸の人も少なくなく、恥も外聞もかえりみる余裕はなかった。

血の流れるまま、頭の髪は火炎で焼けちぢれており、衣服はシャツ・パンツのままで、それが皆、ヨレヨレに裂けていた。そんな姿の人間が無数にフラフラぼつぼつと歩き続けていったのである。

橋梁付近・河岸付近には、生き残った者が、熱気からのがれようとして集り、たくさん水中に沈んだり、浮いたりしていた。河岸の足のとどくところには、びっしりと避難者が立っていて、入りこむ余地もないほどであった。流川教会の谷本牧師は、小舟をこいで泉邸裏から対岸へ、負傷者を何回も運んだ。

瞬間的被害

この地区内は、全体的に家屋倒壊・火災発生のため、各町ともつぎのとおり全滅状態である。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
上柳町	100				17	60	23
下柳町	100				20	58	22
橋本町	100				40	44	16
石見屋町	80	20			24	49	27
山口町	100				40	53	7
銀山町	100				31	54	15
弥生町	100				39	44	17
東胡町	100				30	65	5
鉄砲町	100				50	29	21
上流川町下組	100				47	43	10
上流川町上組	100				46	48	6

八丁堀	100			69	30	1
斜屋町	100			66	34	
胡町	100			81	19	
堀川町	100			86	14	
幟町	100			39	50	11

火災発生炎上

各町とも、各所から発火したので、最初どこから発火したということを記憶している者がいない。それぞれの体験が、まちまちであるのはいたしかたないが、たちまちにして、全町、見わたすかぎり火の海となったのは事実である。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時刻		
下柳町	四方から火の手があがる	九時頃	不明	不明
橋本町	西方から	八時二十分頃	不明	
石見屋町	西方から	八時十七分頃	不明	二日余り後
银山町	西方から	八時二十分頃	不明	
弥生町	四方から火の手があがる	八時二十五分頃	不明	二日位
鉄砲町	不明	八時二十分頃	各所から火の手が上がったというだけで、そのときの状況を記憶しているものはいない	夕暮れ近くになって
八丁堀	不明			
堀川町	不明			
胡町	不明	十時頃	十二時頃は全町火の海となる	午後三時頃
斜屋町	不明			
上流川町	不明			
幟町	不明	八時三十分頃	各所から発火	午後三時頃か

降雨の状況

地区内の広範囲にわたって、降雨があったが、場所によって、時間差がある。この降雨のため、火力がかえって増大したように、感じられたところもあったという。

泉邸付近では、午前十時ごろ降雨があった。長い時間ではなかったが、どしゃ降りの雨で、雨というよりヒョウと言ったほうが、適当なような大粒(駄大豆ぐらい)のものが降ってきた。

場所によっては、降雨のころは、もう焼きつくさされていて、雨が降ったことによって、火の燃えようが変わったという現象は、特別に見られなかった。

六日夜

六日夜は、避難した場所で、それぞれ仮眠し、翌日になって、ともかく歩ける者は、自分の家の焼跡を点検するのが、やっとであった。

到る所に死体がゴロゴロし、無数の大木が幹だけになったり、折れたりして、黒焦げになっていた。夜の静寂のなか、月光にすかして見ると、黒焦げの立木が、あたかも火にあぶられて立ちあがり、体をよじって呻吟する断末魔の人影のように眺められた。

諸現象

家屋は瞬間的に倒壊した。比治山や元宇品の山などが、眼前に眺められ、地区のいたるところから火を噴いた。

午後二時ごろ、避難者でござたがえす泉邸の中の森が燃えはじめ、木から木へと燃え移る音がすごかった。それと同時に竜巻がおこり、地上の木切れ・板切れ・トタンなどが高く、一〇〇メートルぐらい吹き上げられ、泉邸向こうの河原(大須賀町付近)の方へ落下した。火災がおさまって、夕方焼跡に帰ってみると、使用に堪えたであろうという物は、大混乱のさ中にかかわらず、誰かに持ち去られていた。

防空壕に保管していた物をはじめ、地下に埋没していた物品さえも、あらかた掘り出されて、無くなっていたという。

泉邸前の広い松原(戦後、警察官舎建つ)では、二抱えも三抱えもある大木をはじめ、一〇〇本以上もあった松の木が、あるものは根こそぎ倒れ、あるものは中途から折れ、東の方になぎ倒されたようになっていた。

熱線による自然着火は、衣類・ふとんなどの黒色部分から発火した。

また、木の電柱の中途から、ポロポロと炎を発しているのを見たが、その付近は、まだ家屋の火災はなかった。炊事などの残り火から、発火したものもあるであろうが、屋内に火の気がない場所の柱の下あたりから出火したという報告がある。

硝子や陶器類は焼けて変形したり、溶けて一塊りになったりした。

爆風の中心が通過したのか、鉄砲町中央あたりの地上にいたと思われる人が、相当はなれた家の屋根の上に吹き

とばされて死んでいた。

電柱・電車は、そのまま立っていたが、電車は、全部黒く焼けて、鉄骨ばかり残り、車内には幾人も死んでいた。また、道路上に、腹部の破裂した馬が倒れていた。猛烈な爆風によって、最初、家が浮きあがったと感じた直後、倒壊した。トタン・木片など、すべての物が天空に高く舞いあげられた。

助かった者

自宅の庭園に構築した防空壕に待避したため、全く負傷しなかった人も数人いる。

家屋倒壊の際、すばやく机の下にもぐり込んだため、また、爆風に吹き飛ばされたが、落下物がハシゴ段に支えられたため、圧死や焼死から、まぬがれた者がある。

鉄砲町・京橋通り町内会では、酒の配給があったのを機会に、八月六日、町内の懇親会を催す予定で、当日、早朝それぞれ手分けして、郊外へ野菜・魚の買出しに出かけていて、命拾いをした婦人が数人いる。懇親会は、空襲が日増しに激しくなり、お互いに、何時別離となるやも知れぬ折りから、お別れパーティの意味を含んでいた。

福屋前、電車内にて

有木重雄

(被爆場所・八丁堀福屋の前、電車内 当時・市立中学校動員学徒、三年生)

列車が中山のトンネルを出た頃だったと思う。警戒警報の長いサイレンが耳に入った。

その頃、警戒警報は日常茶飯事で、別に気にする人も一人も居ない。

やがて矢賀駅で、鉄道関係の人々を大量に吐き出した列車は、終着駅広島のホームにすべり込んだ。午前八時頃だったと思う。毎日の事ではあるが、市内電車への乗替えが行列で一苦労するので、ホームから客は駅前の乗場まで駆け足である。私も例によって、前の乗車口の列に並んだ。己斐駅で宮島線への乗替えが早くできるからである。

電車が入った。小さな市内電車なので、やがて満員となる。運転手が"次にしてください"というのを、むりやり、若さで乗りこむ。節電のため、電車のコントローラーに小さな鉄棒が打ち込んであって、一定速度以上走れないようになっていたから、ノロノロと、強制疎開のために壊しかけた民家の町を走り、痩せこけた鉄橋を渡って、中心部に入っていった。

車内はスシ詰め、汗の熱気でムンムンである。電車が、広島を中心街八丁堀に停車すべく、カラカラとブレーキを掛けはじめた。

人の頭越しに映画館街を見て過ぎた。先刻のものだろうと思われる警戒警報の白旗を、屋内に引揚げているおじいさんの姿が、はっきり見えた。

その瞬間である！

ちょうど電車のパンタグラフと架線がショートした時の、スパークを大規模にしたような青白い光を全身に感じた。幾千メートルの地下に、音もなく突き落とされる感じで、何とも表現しようのない気持ち良さであった。

自分では数分もたったと思われたが、フと心配そうな母の顔が、暗闇の中に浮んだのである。"そうだ私には母が居たのだ"と思考力が蘇生したとたん、私はまた、惨状の中に現実を取りもどしたのである。

"どうした事だ"と、車外に目をやると、先刻の、白旗を持って屋内に消えた何気ないおじいさんの姿の一コマとは、打ってかわって、まるで夕立でも来るよううす暗い世界であった。

車内はさっきの瞬間まで、まばたきをして動きのあった人々の顔が、ほこりをかぶった人形のように黒い顔で、突っ立っている。

自分の胸に目をやると血である。瞬間ドキッとした。

電車の後部の屋根に火が燃えている。乗客が動かないのが不思議である。とにかく外へ出たくてはと、隣の人にゴメンナサイと声をかけたが、応答はない。身の毛のよだつ思いで、無中で人をかき分けた。私が動く隙間ができる。その隙間に、人がのめりかかる。

私の声が大きくなる。"ゴメン""ゴメン"と、運転台まで出た。運転手がブレーキの鉄輪を持ったまま倒れている。勿論、血だらけの黒ん坊である。

運転台の窓をとび降りた。

驚いた。車内だけだと思った修羅場が、見渡す限り全面である。

電柱は倒れ、線はたれ下り、ガレキが散乱し、車には火である。まだうす暗い。火だけが無気味に赤い。

目の前は広島唯一の福屋デパートである。アチコチで動くものが見える。悲鳴が聞える。ウメキ声が聞える。グニャグニャになった自転車がある。

半裸の死人が転がっている。

全体に火勢が強くなった。

ふと気がつくと、横に人が立っている。身内のような気易さで声をかける。

"どうしたんですか""さあ"

"どっちへ逃げたらいいのですか""さあ"

何だかたよりない。高田郡向原町に疎開する前の私の家が皆実町にある。無意識に、本通りの入口から南を見る。通りは、まるっきりない。火と倒れた家・電柱・線である。

熱い風が顔をなでる。

"練兵場だ"と直感して、夢中で逃げる。

なかたか走れない。そのうち何処からともなく、破れた服のクロン坊が、一つの集団となって練兵場へと足を運ぶ。

みんな気力だけで歩いている。

"助けてくれ"という強い声、弱い声、何ともわからぬウメキ声、パチパチという火の音。

自転車を握ったまま死んでいる人。尻を高くして死んでいる人。エビのように曲ったまま動かない人。

仲間らしい二人が"殺人光線だろう"と、当時はやりの新兵器の名が出ている。

石垣をよじのぼって練兵場へ出る。やはり見渡す限り、全面火の海である。

うす暗い煙の中を、右往左往人影が動く。黒コゲの死体が散らばっている。

タズナを持った兵隊が、馬を枕に倒れている。

腹這いになった死人の服の、背中部分が焼けて無い。

熱い。"逃げられないかもしれない"という不安が私をかすめる。北へと向かう。二部隊の前まで来た。

ハス畑(広島城の濠か)の中に、頭だけ出した黒ん坊が念仏を唱えている。熱さから逃避しているのだろう。横のふくらんだズボンをはいて、上半身裸の兵隊がたくさんいる。何をしようとしているとも見えない。不思議なことに、頭の毛が帽子のあった部分だけ黒い。ベレー帽をかぶっている感じだ。

動く人を見て、大分勇気が出た。

"死んでたまるか"

そう自分に言い聞かせながら、白島線へ出た。

部隊の裏営門にボロボロの正装をした衛兵が、ささげつつのまま、上官らしい軍人と何か大きい声で応答している。思いのほか白島線は火が少ない。道路は何処も同じ状態で、とても下を見ないと歩かれない。二、三人の困りが布ぎれを体につけて線路に添って北へ歩いていく。泉邸の森が見える。所々火のついた立木も見える。

その時、崩壊した家の屋根瓦に上がっていた女の人が走り寄ってとびついて来た。"助けて下さい"。一瞬ピクツとした。頭髪を振りみだし、カスリのモンペはさけ、防空ズキンを肩から下げ、顔は血とほこりである。目鼻の凹みが特に黒い。"私も逃げてるんです"と私は叫んだ。

その人のいうには、壊れた家の中に子供が居るという。むりやり私を引っ張って行った。屋根瓦をまたぎながら、引連れられるままに行ってみると瓦の下で"おかあちゃん、いたいよ"という男とも女とも解らぬ子供の声である。何とかしたいと思ってでもどうしようもない。瓦を二、三枚はいで見える。でもどうしようもない。"誰か呼んで来る"といって電車道まで帰って見た。兵隊が三人いた。公用という腕章をつけた兵隊を両脇からかかえるようにして歩いている。まともな者は一人もいない。でも声をかけて見る。"子供が"といっても目もくれない。空虚な人間である。

避難民がふえて来る。重傷者が多い。火勢がいつの間にか増して来た。霧のように青い煙が地上をはってくる。叫びながら一人の兵隊が寄って来る、憲兵という腕章と軍刀が目についた。あとはどんな恰好だったか覚えていない。押しつけるような目と言葉で"学生か！逃げないで市内に残れ！警備にあたれ！"という。反射的に"ハイ！"とはいったものの、"冗談じゃない"。憲兵は煙と避難民の中へ小走りで行って行った。

"逃げろ"、と自分に指令した。ボヤボヤしているとどんな事になるか判らない。

しかしチョッピリさっきの母親も気に掛かる。申し訳ない気持でふり返って見る。瓦の上にうずくまって子供の名を呼んでいたはずの女の人がいな。くすぶっていた材木に火が燃えている。"もうだめだな"と自分にいった。再び北へ向って避難の歩を早める。煙の向うから動きの早い人影がこちらへ来る。さっきの子の母である。泣きながら、わめきながら、まるで狂乱状態である。胸の中で手

を合わせる。誰彼となく助けを求めて歩いているのだろう。我身を忘れた母性愛の執念である。目頭があつくなる。

また我身に返る。白鳥線の終点の電停が見える。風が強い。火災のためだろう。左手に通信病院のビルが見える。入口に横になった負傷者が少しずつ動いている。君護婦らしい女の人がいそいそと入口を往復している。

常葉橋に向ってあるべき道がない。警防団と思われる人が、盛んに"ダメダ"と手を振っている。

そこから人の流れが東へ向う。私も泉邸の北はずれに向って歩いて行った。幅二メートル程の低い石垣の小路である。少し上り坂になっている。上がると泉邸の北端であった。

川が見える。驚いた事に老樹の並木の下は横たわった人でうずまっている。どこから集って来たのか判らない。川へ下りる所は、二重三重の重傷者の人垣である。"痛い！水！助けてくれ！"の合唱である。恐らく水を求めて集って来たものと思われる。みんな目の前に水を見ながら精魂つきたものだろう。名前を呼びながら人を探している者もいる。目の前がクラッとした。坐り込みたい気持で一杯である。

"ここではまだ駄目だ"と自分をむち打ち、川向うはまだ火が少ない。渡河を決心した。川への下り段の方へ行く。もう人の上を歩かねば通れない。

"チョットゴメン！"と人の背中を遠慮して歩く。死んでいると思っていた人が、"痛い！"と反射的に動く。真黒い背中の皮がヌルッとはげる。なんぼなんでもこれ以上人の上を歩く事は、良心が許さない。少し下手へ下る。土手の石垣が高い。軽傷の人が石垣づたいに川へ下りていく。そのままとびこむ人もいる。下は深いらしい。下流へ向って人が流れている。死んでいる人も居る。

とにかく向岸へ行けば安心だ。私も石垣をつたって下り始めた。無気味に動く石がある。私の上からまた一人下り始めた。半分程下りた処でうしろ向きのままとび込んだ。水が冷たい。流れが思ったより速い。泳ぎには自信があったが、なかなか思う様に進まない。一生懸命に足をかく。たるんでいたゲートルが解けて巻きつく。浮身で流れながら、靴とゲートルを脱ぎすてる。上流から人が流れて来る。私の肩に抱きつく。追い払うのに一苦労だ。水をガブガブのんでしまった。流れて来る人を避けながら、足の届く処までたどりついた。目標の場所より相当下流である。よろけながらやっとの思いで、州に上陸した。(後略)

泉邸にて

桑原房枝(被爆地・広島市幟町上組一〇一番地 主婦・当時満四二歳)

眠るといっても、モンペ姿のまま横になるだけであった。

警報続きであった夜があげると、形だけの大豆のご飯をたべて仕事につく。主人は屋上の納屋に、下の荷物を入れ、私は下の納屋の整理にかかる。

「警戒警報発令！」

またかと思ひながら、続いて空襲警報になるかも知れぬと緊張しているうちに、解除になった。

八時ごろ、主人がパンを食べたいというので、母屋に帰り支度をしていると。耳の近くに飛行機の爆音をきいた。

「アラ、今、警報が解除になったのに…」

と言ひながら、庭の築山に出た。

何かピカッと光り、ドンと音がした。

「ヤラレタ」と直感して、思わずそこに伏せた。そして、こわごわ顔をあげた。

と、見ると、母屋は倒れており、人々の泣き叫ぶ声がする。

「組長さん！」「桑原さん！」と、叫ぶ声。

「皆さん、泉邸へ逃げてください。早く早く、火の始末をしてにげてください。」と、大声で叫ぶ声。

道路に出てみると、広島女学院専門部の生徒さんたちが、血みどろになって、あちこち駆けまわっている。

屋上にいた主人はどうしているかと、あわてて崩れおちた屋根瓦を、ザクザク踏んで裏に行ってみる。

主人は、屋根にたてかけてあった梯子の一番上に腰かけて、私のパンを待っていたのだが、梯子と一緒に吹きと

ばされている。

貸家の便所のところに、たくさんの壁土にうもれ、手だけ出して「ウンウン…」と吟心っている。私は、覆いかぶさっている壁土やタル木などを、満身の力をこめて払いのけ、引っ張りだそうとしたが、足の先が引っかかっているらしく、どうしても動かない。

「助けて下さい。誰か助けて！」

声をかぎりに叫んだ。しかし、周囲はすでに裏も表もなく崩壊しており、人々はただ右往左往するばかり。

折りよくそこへ、私の家の離屋におられた石田さんが通られたので、手伝ってもらい、ようやく引っ張り出すことができた。

石田さんが頭の方を、私が足の方を提げて逃げようとする、西隣りの家あたりから火が出はじめた。

「桑原さん、すみません。私も家内を連れて逃げなければいけません。」

火が出たのにびっくりした石田さんは、そう言って走って行かれた。

私は一人で、頭の方をかかえ、主人を曳きずるようにして、泉邸の方へ逃げはじめた。

そこへ町内会幹事の三木力先生が通りかかられた。

「お宅には四人も子供さんがおられるのに、ここで奥さんが亡くなられたら、どうします。ご主人はもう意識もない状態ですから、あなただけは逃げなさい。子供さんのために生きなければいけません。」と言われる。

私は、しかし、かすかながらも呼吸だけはしている主人を、一人残して逃げるわけにはゆかなかった。

「お父ちゃんお父ちゃん、しっかりして！早く逃げなければ、二人とも焼け死んでしまいますよ。」

私は泣いていう。だが返事はしない。ただ息をしているだけ…。

頭の方を持って、少しずつ引っ張ってゆく。

私も力つきた。誰かにすがりたいと思っても、だれもかれもソワソワと逃げまどっているばかり。途方にくれた。

折りよく五組の山根さんと出逢った。

「よしきた。お手伝いしましょう。」と、山根さんは、私の助けを引受けてくださり、ドンドン泉邸の方へ連れて行ってくださったが、「身内にケガ人がいるから…」と、言って、山根さんもまた去られた。

泉邸内の東裏の兵(迎軍峯)の中腹で、また私と主人だけになった。しかたなく主人だけを中腹において、丘の頂上まで助けを求めに行った。

とたんに、丘の裏の川に沿った深い竹やぶが、ボンボンバリバリと燃えはじめた。

丘の上には谷本牧師がおられた。すぐお願いして、主人を頂上まで連れて来てもらい、草の上に横にした。

私はグツタリした。しかし、ここも安全かどうかわからない。ともかく、しばらく様子を見ることにして、一緒になった隣組の人々と一か所に集っていた。

「桑原さん、私はあわてて子供二人を家においたまま逃げて来ました。一緒に連れにいてください。」と、五組の沖本さんが言われる。

私は沖本さんと二人で、町内の見える所まで行って見れば、町内は一面に火の海、ものすごい勢いである。狂人ようになって、助けを請う沖本の奥さんを、皆でなだめて泉邸の裏に落ちつく。

主人は相変わらず息をしているだけ。頭の方をよくみると、屋根から落ちたとき頭を打ったらしく、両側に深いキズがあった。手当てのしようがない。私たちは六組の人と一緒に、拾って来たテーブル掛けを、ならんで横たわっている負傷者の頭の上にかけて、転がっていた幟町国民学校のバケツで、川の水を運んで来ては、頭にかけて熱さを防ぐ。

川向うの大須賀町が炎上中で、息がつまりそうである。

川の水は渦をまいて、高く巻きあがる。

向う岸の家が燃えはじめたとき、一年生ぐらいの男の子が、ワーワー泣きながら逃げまわっている姿が、はっきりと見えた。

迫り来る火炎に、熱さのあまり、前の川へ飛びこむ人もたくさんいる。

私たちは、最後までこの泉邸にとどまることを約束する。避難者は増える一方である。

時折り飛行機が空を飛ぶ。いつ敵機がおそって来るかも知れない。

だんだん泉邸に避難して来る人が多くなる。

しかも、火勢は強くなるばかりで、川に飛びこんでそのまま死んでいく人も数多い。

主人はやはりかすかな呼吸をしているだけである。熱が出たようなので、泉邸の池の水を汲んで来たが、生ぬるい水である。タオルを持っている人から借りて冷やす。

時刻は、ずっとお昼を過ぎたころであったと思う。

「松の根が燃えだしたから、元気な人は消火につとめてください。」

町内幹事の中島さんが叫ぶ。皆、手に手に水の入りそうな物を持って、松の根にかけるが、一杯の水をパシャッとかけると、シュッと行ってまた、パーッと燃えあがる。

このただ一つの逃げ場所を火の海にはいけない。それは皆の心であった。バケツリレーで必死に消火につとめたいがあって、大事に至らずホッとした。

川には、兵隊さんが、あちらこちらに腫れあがったまま浮いている。

泉邸の囲りも、苦しんでいる兵隊さん、また死んでいる兵隊さん、また二部隊に動員で来ていた女子商の生徒さんたちが、みんな大きく腫れあがって苦しそう。

時は、もう夕方の六時ごろ。

男子の元気な方が、焼けなかった防空壕から米を、家庭菜園からまだあまり熟していないカボチャを取って来られた。

防空壕の中から、また五升炊きの釜を探して来て、壊れた水道管のチョロチョロ水を使い、にわか造りのクドでご飯をたいた。五升ばかりの米で二百個ほどのおにぎりを作るのは骨が折れた。

不安のうちに、日はトッブリ暮れる。

「空襲警報発令！」「警戒警報解除！」という声を、人ごとのようにきく。

丘のひと所では、動員で二部隊に出ていて、朝礼をしていたという女学生二〇人ぐらいが集っていたが、ブクブクに上半身が腫れて、とても苦しそうである。

「おばさん、水をください。」「水をください。」という。

「水がのみたい。家に帰ったら、杓に五杯ほどガブガブのみたい。」

「コップに何杯も何杯ものみたい。」

火傷には水をやってはいけないと言われていたので、なだめるのに一苦労。

「おばさんはうそつき、今あげると言っておいてまだくれない。」とダダをこねる。また、「明日は休むことを二部隊にとどけねばならない。」と、うわごとのようにいう生徒もいる。胸をえぐられる思いで聴く。肉親の方に連絡をする方法もない。

県女三年生の私の娘次子(よしこ)も、どうしているやら、まったく不明である。今朝元気よく動員で、南観音町の広島印刷に行ったばかりである。

夜もようやく十二時を過ぎるらしい。真夏とは言え、夜霧が降りるためかとても寒い。

屋根もなく、敷物もない。木の枝を集めて来て焚火をする。

市中はまだ、あちらこちら燃えている。

時折り、生きていたのか、木立の中でフクロウがホーホーと鳴く。何とも言えぬものさびしさ...

横になったままの主人は、相変わらずかすかな呼吸を続けているだけ、オムスビも食わず昏睡状態。

時々、女学生さんたちを見舞って、ほとんど一睡もしない夜があけた。

七日である。

女学生さんたちは相変わらず苦しんでいる。

ようやく二人の女学生の氏名を聴くことができた。一人は楠木町の近藤さん、もう一人は安佐郡可部町の林さん。紙ぎれに住所氏名を書いて腰につけておく。

朝九時ごろ見廻ったときは、もうこの二人の息は切れていた。丘の下の香菜園のほとりの茶の株から一枝を手折り、胸もとに供えた。

川をみても、丘をみても、ブクブクに腫れあがって横たわっている兵隊さんたち、帽子をかぶっていたそこから下が、キチンとソリをあてたようにはげている。

昼前であったろうか、おにぎりの配給があった。ようやく連絡がついたらしく、はじめての配給である。麦の入った大きなおにぎりである。昨夜、小さなおにぎりを一個食べただけにまったく食欲がない。

娘の次子の安否が気にかかるが、重体の主人を残して探しに出ることもできない。

お昼過ぎであった。七組の板屋の娘さんが私たちを尋ねて来られた。お話をきくと、娘は生きていて「幟町の両親の生死がわからない。」と言って泣いていたそうである。

娘にこの場所がわかるか知らん？と、気になるので泉邸の外に出て見る。

被爆後、はじめて見る町の様子、一昨日までの建物は何一つない。幟町から八丁堀の福屋は勿論、遠く宇品の方まで見通しである。

私の家の蔵も、六日のドカンときた時には、家は倒れたが蔵は立派に立っていた。それが跡形もなく焼けていた。仏間の押入れにあった金庫が、焼けただれてポツンと立っている。貸家も全部焼けて、ただ風呂釜が残っているだけである。

真夏の暑さと、焼残りの灰の熱さで、とても一か所にながくは立ってられない。

水道管はねじれて、ポツリポツリと水が出ている。電線が道路一ばいに這いまわって何処が道やらわからなくなっている。

庭の松も、大きな幹だけねじれて残り、蘇鉄も黒焦げの幹だけになっている。

家の石門もこわれている。炭になった木切れを拾って、石門のところに「次子に告ぐ両親無事泉邸の丘に来れ」と書きしるし、再び、私は泉邸に行く。

泉邸では、他市から応援に来られたらしい兵隊さんが、死骸や重傷者を運んでおられる。私の家の前の大きな水槽に、体格のよい男の人がうつ伏せになって死んでいたが、逃げ遅れて、焼けただれて死んでいる人も数えきれない。

主人は相変わらず、かすかな呼吸を続けているばかり。今西町内会長は、腰を痛められて歩けない。

主人に飲ませる薬も、火傷につける薬もない。おにぎりや乾パンの配給があったが、お腹がすいているのに、ちっとも欲しくない。

七日も夜を迎えた。ものすごく冷える。丘から市中を見渡せば、あちらこちらに、まだ火炎が見える。

主人も寒かろうと思うが、掛ける物がないままで、また一夜明ける。

町内の世話をする人も谷本牧師と中島さんと、私だけである。

朝早く、宇品八丁目から高畑のおじいさんが、かけぶとんと敷ぶとんをかついで、見舞いに来てくださる。

泉邸に避難している事がようやく伝わって、市外から知人や肉親が探しに来られ、一緒に帰っていく人もある。

「幟町上組はどちらでしょうか？」

高畑のおじいさんと話しているとき、若い人の声、ふと視線をあげると、娘の次子が立っていた。「ここよー」と呼ぶと、娘はころぶようにして寄って来た。

かたわらの主人をみて「お父ちゃん、元気だして...」と、泣きくずれる。娘が呼ぶと、「ウン」と、はじめて返事をした。

娘は、安佐郡川西村から徒歩で帰る途中、軍のトラックに乗せてもらって帰って来たという。(中略)

元気な人たちは、縁故を頼ってポツリポツリ去っていくが、私と娘は昏睡状態の主人を連れて何処へも行けない。

八日の晩も、ホーホーとフクロウが鳴く。

前の川に浮いていた兵隊さんたちも、応援の兵隊さんによって葬られたので、姿が見えない。

寒い寒いとふるえながら、九日の朝を迎えた。一人去り二人去りして、この丘に避難していた二百人ばかりの人も、今は二〇人ばかりとなった。

町内会がなくなったので、現場の証人として、後に残った私が死亡証明書なんかを書いてあげた。

応援の兵隊さんたちは、まだ死体を集めては焼いておられる。

私と娘は、主人の看病。看病といっても、ただ側にいるだけで、どうしてやることもできない。

昼過ぎ、主人の様子がおかしいので、急いで脈をみる。急に乱れて来た。ますます乱れるばかり、呼吸もとぎれとぎれになった。

ちょうど一時、主人は五十七歳の生涯をとじた。河合さんに頂いた晒布を顔にかけ、高畑さんにもらったシーツを体にかけて、娘と丘をくだり、兵隊さんに主人の死を告げた。

夕方、泉邸に逃げておられた前町内会長の田中品太郎さんも亡くなられた。

日はとっぴりと暮れて、まわりには誰一人いない。時折り、フクロウがホーホーと鳴くばかり、冷たくなった主人の側に横になったが、さみしくて歯があわない。娘もガクガクとふるえている。

「お父ちゃん、すみません。今晩は丘の途中の安藤さんの所で休みます。」と、言って私と娘は少しはなれた安藤さんの所へ行った。

十日の朝早く、兵隊さんが来て、主人と田中さんの死体を一緒に焼いた。一〇人ばかりの兵隊さんが整列して、お別れの敬礼をしてくださった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救急作業

山口町の東警察署(現在・広島銀行銀山町支店)に、郡部から警防団が到着し、死体処理や炊出しをした。

また、各地区の警察官も出動し、ここで罹災者の救出、および罹災証明の事務をとった。

幟町地区の町民がたくさん避難した東練兵場の東照宮の麓では、尾道から数人の医師が救援隊として到着、負傷者の診療に従事していた。また、そこに近郊からの救急で、ムスビがたくさん運ばれ、罹災者に配られた。

また、八丁堀方面は死者が多く、救護施設もなかったのので、各自が薬を求めて治療しなければならなかった。

八月六日から数日間、東警察署で、ムスビ・野菜の煮つけなどの配給があったが、その後は、中国新聞社の焼跡で、警察署が乾パンの配給をした。まもなく、福屋デパート・勧業銀行などに臨時救護所が設置された。

道路啓開作業

八月十日ごろから、軍隊や警防団の救援隊がきて、道路の啓開作業に従事し、主要道路は、同月二十日ごろに完了した。

死体の収容と火葬・埋葬

上流川町上組町内会の三佐尾会長は、中国管区防衛司令部(松田重次郎邸内)焼跡の、完備した防空壕に引き続き残留して、各家庭の焼跡から骨を拾い集め、焼残りのバケツ・洗面器などに、それらの骨を収め、各世帯主の名を、それに記して安置していた。この三佐尾会長は、九月中旬、原爆症のため死亡した。

火葬は七日ごろからはじめ、十日ごろに終わった。火葬した場所は、八丁堀福屋の北側の空地と、上流川町勧業銀行の南側及び北側の空地、それに泉邸内である。

下柳町方面では、被爆後三日あとに軍の警備兵がきて、死体を処理した。

鉄砲町方面でも、軍隊が来て死体を火葬とし、氏名不詳の者は集めて焼いた。その数何百か不明である。氏名の判明した者は、一人一人墓標を作り、死んでいたその場所に仮埋葬した。

死体が、焦土の中から、幾ら收拾しても、あとからあとから出てきたので、八日ごろ火葬しはじめて、何日に終わったかはっきりしない。泉邸の裏土手で火葬にふした者も多かった。

火葬方法は全部、そのまま、着衣していれば着衣のまま、木を集めて、その上で焼いた。

町内会の機能

各町内会は、全く機能が停止状態となったので、幟町学区内の町内会連合会が、泉邸の中の、軍隊が作ったトタン張りのバラックのなかにでき、ここで各町をとりまとめて事務をとった。

胡町では十日ごろ、町内の生存者一五、六人が相談して、胡子神社跡にバラックを建てて、町内会事務所をおき、復興に努力することを申しあわせた。

各町とも、九月ごろ、生存者が集って、僅かの人数ながら、それぞれの町内会事務所を設けたようであるが閑散としたものであった。上流川町は、幟町国民学校の焼跡に、町内会の標識だけをかかっていた。

九、被爆後の生活状況

復帰状況

当初は、焼残りの防空壕生活ではじまった。一週間ぐらいして、焼トタンで屋根をつくり、家の形をなしたが、床はなく、地面にそのまま拾って来たゴザやトタンなどを敷いて住んだ。

一か月ほどして、焼木や柱を拾い、瓦のなるべく焼けていないのを集めて屋根をふき、床も張った。バラックは、焼跡の中で水道の破壊されていない場所を探して建てた。

食糧の配給はごく僅かで、不足分は闇で入手した。当初は、焼け残りの食物や防空壕の中に貯えていた物を、堀り出して飢餓に堪えたが、すぐに無くなった。

八月末ごろの居住者は、各町とも明細は不明だが、下柳町に七世帯、上流川町に二世帯というふうに、荒涼たるものであった。

泉邸の中には、軍の建造したバラックに五、六世帯、泉邸前の松原跡のバラックに四、五世帯が雑居していたが、幟町町内会の居住者であった者は少なく、他の地区から逃げてきて、そのまま住んでいる者がほとんどであった。

八工の発生

被爆後、八工が一面に発生した。死体にウジがわき、たちまち焦土をおおうばかりになった。駆除の方法は全然なく、八月二十日ごろには、歩いていても、坐っていても、八工が密集してきて、眼もあけられなかった。また、シラミが多かったが、ノミは少なかった。

生活物資

十二月ごろから配給制度が復活した。市役所から食糧の配給を受けたが、少量の米だけで、野菜や調味料は全然なかったから、市外へ車で、近くは徒歩で買い集めに行って不足を補った。

ロウソク生活

ロウソクの配給は無かった。知人より分けてもらったり、闇市で入手したが、なるべく灯をつけないようにして、たいがいの用事は、日の暮れるまでに、終らせるよう努力した。

二十一年になって各自勝手に、焼け落ちている電線を拾い集めて、本線につなぎ点灯した。一般に点灯できるようになったのは、二十二年であった。

復帰状況

二十一年から二十二年にかけて、バラックを建てて復帰する者があったが、至って僅少であった。それは、各家庭の中心である主人が死亡したためと、資材も手間もなく建築が容易でなかったからである。また、他人に土地を借してバラックを建てさせたため、借地権が生じて、土地の返還を求めても要求が入れられず、遂に借地人に、法外の安値で土地を手放した者も多く、被爆前の居住者が復帰したのは、極めて少なかった。

疎開児童は、受入れ家族のある児童だけ、約一か月後に復帰した。家族と共に縁故疎開していた児童は、何月ごろ復帰したか不明である。その人数もつかみ得ない。

闇市場

八月末ごろから、広島駅前に闇市場というものができはじめ、日増しに賑やかになっていった。初めは地面に戸板を敷き、衣類・ロウソク・マッチなど日用品を売っていたが、後には放出軍需品も、たくさん売られて、無いものは無いという盛況を呈した。

二十一年の夏、駅前闇市場にアイスクャンデー(氷のかたまり)が売り出され、そのめずらしさに人々が群がり集った。なかなか買えないほどの人だかりであった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨禍

九月十七日暴風雨に見まわれた。風速五〇メートルぐらいで、各町内のバラックは倒れ、生埋めとなった老婆もいたが、幸い助かった。下柳町付近の者は、焼け残っていた東警察署へ避難した。また、幟町上組の泉邸の石垣(高さ約二メートル)に、暴風雨をさけて、へばりついていたら、まるで石垣が揺れているように思えた。風で身体がたえずゆらいでいたので、錯覚したのであろうという。

全滅に近い胡町・鉄砲町方面は、風雨のための被害といっても、住民が少なく浸水に任したままという状況であった。

経済活動

二十一年、八丁堀歌舞伎座跡に闇市ができ、二十二年、中央百貨店(現天満屋百貨店の所)という闇市場ができて、種々の品物を売った。店の数約五、六〇軒。続いて福屋百貨店が小間貸をして、売上げの歩合制で開店し、各種の店ができた。中央百貨店は、後日二階建となった。

住宅の状況

各町とも、ごくわずかではあったが、二十年十月ごろから、点々とバラックを建てはじめた。二十一年ごろから、少し家の型をしたものが建ち、二十二年へかけて、住宅営団のセットの家が建てられた。二十一年一月、下柳町の的場弘が、その第一号を建てた。二十三年には、だいが良い家が建ち始め、二十四年ごろ、やっと本建築の家を見るようになった。

十一、その他

(イ)某夫人が、家屋の下敷きから、ようやく脱出して、泉邸方面へ逃げようとするとき、隣組の若夫人から、「今、

主人と姑を助け出すところですから、子供二人だけ、先に連れて逃げて下さい。」と、二歳と五歳の子を託された。泉邸裏の川の中に数時間、火をのがれて過ごした後、白島の河原に避難して、熱い砂で身体を暖めた際、多数の避難者の中の、幼児を連れた婦人達に、もらい乳をして歩いたが、誰一人として、乳の出る人がいなかった。翌日、二人の子供を母親に手渡しするまで、ただ一度も、その子らは泣かなかった。

(ロ)八月六日朝、上流川町で出火後、某夫人が家の下敷きとなった主人を、助け出そうとしてもおよばない。主人は、「自分はもう絶望で覚悟しているから、お前だけは早く、安全地帯へ逃げのびてくれ。」と、悲痛な声で叫び続けた。

しかし、夫人は、その言葉に耳をかさず、遂に主人と共に、その場所で焼死した。焼跡を点検したとき、その夫婦は頭部をあわせ、堅く握手したままの姿で骨となっていた。

(ハ)八月七日朝、上流川町の放送局前の路上に、男女不明の焼死体が腹這いとなって横たわり、炭のようにまっ黒焦げになっていたが、その腹の下に、赤ん坊の焼死体が隠されていた。

(ニ)八月七日朝、流川教会のかたわらの家の、焼残り材木の下から、一人の人間が、突如として起きあがり、道路に向かって走り出したが、五、六歩いくと、パツパツ倒れて死んだ。

(ホ)幟町上組泉邸前の松原に沿った隣組の組長小堺マキ(当時六〇歳)が、回覧板を持って廻っていて、ちょうど、小路にある石地蔵の祠の前に来たとき、炸裂にあった。すぐ路上に伏さったところへ、家屋が倒れかかって来て、下敷きになったが、運よく隣家の三木力(当時・山陽中学教諭)に救出されて泉郷に避難した。しかし、全然負傷も火傷もせず、後遺症もなく達者。後日、現場に行ってみると、石地蔵の方はこなごなに砕けて、そこらに散らばっていた。瞬間的な紙一重の差で生命が助かったのである。

(ハ)東警察署の田辺至六署長が、三日後、管内を視察したとき、泉邸(縮景園)の池には長さ一メートルもある多数の鯉がいたが、背がまっ二つに裂けて水面に浮き、死んでいた。おそらく爆風によって引裂かれたものであろうという。

(ト)七日、可部町から肉親を捜索に来た神田貢は、本通りのキリンピヤホール前の水槽内で焼死体となっている青年を見た。また、京口御門付近で異様な蛙の鳴声を耳にし、その方向の水槽を見れば、瀕死の重傷者の呼吸が水面にひびいていたのであった。

移動演劇

さくら隊原爆殉難記(要約)

乃木年雄(俳優・当時珊瑚座長)

本土決戦が目前にせまって、米軍の上陸が必至と予想され、国鉄は寸断、移動演劇の行動が困難となる場合にそなえて、情報局の直接管轄下にあった劇団は、地方に分散されることになった。二十年六月二十二日、桜隊(隊長・丸山定夫以下九人)と珊瑚座(隊長・乃木年雄以下九人)が中国地区を志望して、広島市堀川町の高野一步宅(新天地商店会事務所)である移動演劇中国支部の寮に落ちついた。この両劇団員のほかに、日本移動演劇聯盟派遣の広島駐在員赤星勝美、三浦察長、食事係の婦人三人、及び非公式の演出家八田元夫氏、以上計二四人がこの寮に起居することになった。

両劇団は、中国地方全域と四国全域の公演を、東京本部からの指令でおこない、主として産業戦士と農村、及び陸海軍部隊を慰問した。

そのうちに戦局は苛烈の度を加え、広島もいつ空襲されるかわからないという切迫感に、郊外へ疎開する市民が多くなった。

劇団もいよいよ疎開することになり、珊瑚座の女優沢道子さんが、厳島(宮島)の実家から通勤していたので、彼女から宮島の梅林義一町長に頼み、島内の存光寺(住職・梶谷寛禅師)の庫裏十畳と六畳二間を借りることになった。

七月三十一日に、桜隊も珊瑚座も全員が厳島に疎開する予定で、荷造りも終わっていたが、桜隊の女優が「厳島の寺は狭くて芝居の勉強もできないうえ、食糧事情も大変よくない。米や野菜の買出しも、船で中国筋へ渡らねばならないから不便、親戚が広島市の近くにいるからそこにあたってみよう。」と言ってゆずらないため、丸山定夫隊長も困って、「とにかく珊瑚座さんだけ一応、厳島へ疎開して下さい。私の方は郊外を今一度探して、もしなかったら厳島へ行きますから...」という。八月一日、やむなく珊瑚座だけが赤星駐在員と食事係の若い婦人と計一人、存光寺に移った。

これよりさき、七月二十日ごろ、中国地区各地を移動公演していた丸山さんが、軽い肺炎を患い、舞台上で倒れた

ため、桜隊全員が公演を中止して寮に帰って来たので、その公演の残りを珊瑚座が受けもつ事になっていた。

八月二日、芸備線志和口着、「聯隊旗の町」公演。三日、吉田町にて公演。四日は東城町の劇場で公演。五日、車中で朝食をとり、岡山県久世町着、公演中に警報が発令され中止となった。

六日、昨夜の舞台をかたづけ、荷造りをしているとき、今度の主催者広島通信局の担当職員である梶川富雄さんが、私たちの後を追って来て、楽屋に着く早々、「広島に何かあったのではないのでしょうか。私の車がトンネルを出て、私が何気なく広島の方を見ると、もうもうとした雲のような白煙が立ち昇っていました。」と言ったが、気にとめなかった。梶川さんと別れ、島取県米子市に出て、山陰本線に乗りかえ、島根県仁方に夕方着く。公演中に警報が出て中止。

八日、三刀屋町に向かう。また、公演中に警報があり中止。ここで広島の被害を聞いたが大変らしいという程度でよく判らない。九日朝、広島に向ったが、汽車が広島県安芸郡の矢口駅までしか行かず、私たちは下車した。広島から来る列車は、矢口に停車せず、いずれも急ぐように通過する。その客車の中を、チラリと見た私は胸が急にしめつけられた。まるで屠殺場から皮をはがれた牛が詰めこまれているように、まっ赤な肉のかたまりのような人間がたくさん乗っていた。次に来る列車も、貨車も、何百人か何千人かもわからぬ負傷者が輸送されて来るのであった。漸く重大な事態だと判ったが、広島へ帰る手段もなく困った。考えたすえ通信局の梶川さんの家が、矢口から一里ほど離れた戸坂であったのを思いつき、トボトボ歩いて行き、泊めて頂いた。その夜、梶川さんが聞いてきた所によると、八月六日朝、広島市に新型爆弾が落とされ、想像以上に被害甚大とのことで、桜隊が心配になった。

九日朝早くから、珊瑚座全員が宮島口まで約二十里を歩く覚悟をきめて、広島への道を急いだ。一時間ばかり歩いたころ、軍用トラックが後から来て、慰問公演で顔見知りの少尉さんが乗っていたので、訳を話して乗せてもらった。

トラックが広島市に入ると、一望千里の焼野原の中に真っ黒く焼けただれた福屋デパートの残骸が見え、あちこちから黒煙が立ちのぼっている。福屋デパートのすぐ裏側にあった桜隊の寮は跡形もない。トラックはそれらに目もくれず宮島口へ突っ走り、正午過ぎに到着し、連絡船で厳島(宮島)に渡った。

存光寺に残っていた赤星さんに、市内の惨状を話し、桜隊の模様をたずねると、「六日朝、大きな鏡で太陽の光を当てられたような光がして、寺の裏側の色ガラスが全部こわれて飛んだほか、厳島は平穩そのものだが、広島へは電話も通じないし、交通機関も動かぬので、桜隊の人たちが、どうなっているか一切不明です。」と言う。

十日昼ごろから、広島行きの電車(宮島線)が開通したので、私たち男五人で捜査に出かけた。己斐駅で下車し、そこから徒歩で市内電車の軌道の上を伝って中心部へ入っていった。道行く人影は一人もない。

堀川町の寮の焼跡は、あたり一面真っ白な灰で、コナ雪が積ったようになっている。門と玄関の間に立っていた大きな松の木の幹が、地上二間ほどの所で折れている。その残った松の幹があるだけで、ほかには何も地上に立っているものはない。上部の幹や枝は何処に飛んだのか、その片鱗も見あたらない。私たちは屋敷跡を歩きまわったが、死臭は勿論、人間が焼けたような形跡もない。白い灰が地上一尺ほど平面に拡がって、瓦のカケラー一つ見つからない。

「ここに遺体はないよ。寮の人たちは何処かへ避難したんだよ。きっと...」

焼野原の東部に、近々と比治山公園が横たわっているのが見えた。

「あの山の下に陸軍の防空壕がある。あそこへ逃げたのかも知れない。」

私たちが歩き出したとき、頭にホウタイを巻き、杖をついた負傷者が近づいて来た。見ると、顔の皮膚はペロリと垂れ下がり、白い半袖のシャツから出た手の皮も肉が露出している。顔は真っ赤である。市内に入って初めて逢う人である。先方から声をかけられて、ギクツとした。

「あ、乃木さん？あなたたちは牝怪我は？」

私はじっとその人の顔を見たが判らなかった。

「散髪屋ですよ。私...」

「あ、三軒隣の...」

散髪屋の主人は、あの朝、裏庭で体操していたとき被爆し、町の人たちと比治山へ逃げた。そこで救援隊に赤チンを塗ってもらったので、こんなに赤いのだと話した。

「じゃ、移動隊の人を見かけませんでしたか？」

「私と一緒に一度は広島駅の方へ逃げました。名前は知りませんが、女の人と若い男の人が、肩を抱きあうようにして逃げるのを見ましたが...」

「その女の方は？」

「阪妻さんの無法松の写真に出ていた人です。」

「あ、園井さんだ。」

「若い男の方は、高山さんだよ。きっと」

と誰かが言った。

「今、私は比治山にいますが。家がどうなっているか気になって帰って来ましたが、私の家は何処でしょう？」と、散髪屋が言う。

「私たちの寮が其処ですから、お宅は其処ですよ。三軒目だったから...」

その散髪屋の跡も何一つ残っていない。

私たちは散髪屋の主人と一緒に比治山まで歩いて行き、たくさんの負傷者が横たわっている防空壕を一つ一つ探してまわった。

「桜隊の人はいませんか！」

大声で呼びながら、壕の奥の方まで行ったが、返事がない。探し疲れて、私たちはその日は帰った。

翌十一日も比治山へ出かけた。散髪屋の姿が見えないので聞くと、傍の人が「あの人は死にましたよ。」と教えてくれた。この日、存光寺に帰ったのは、夜も暗くなってからであったが、寺の住職梶谷寛禅さんから、小さな紙片を渡された。

「丸山さんからだ！」と、私はすっとんきょうな大声を出した。紙片には、丸山さんの字で、海軍の病院にいるから迎えに来てほしいという意味のことが書いてあった。

隣組の奥さんの息子が学徒動員で出勤中に被爆し、収容された所から連絡があって迎えに行き、敵島のことを話していると、五、六人先に寝かされていた人が、「敵島の方ですか？」と言って、存光寺の珊瑚座の人にこれを渡してくれと頼まれたと、お礼をかねて訪ねて行ったら話してくれた。また、「収容所の名前は知りませんが、宇品へ行って海軍さんに聞けば、連れていってくれます。」とも教えてくれた。

この夜遅く、仕事のことで上京していた八田元夫さん(演出家)と、榎村浩吉さん(桜隊事務局長)が帰って来たので、丸山さんの紙片を見せ、早速打ち合わせをした。明日、八田さんと榎村さんが丸山さんを迎えに行き、珊瑚座の男五人は、ほかの桜隊の人々を探すことになった。

十二日の朝早く敵島を出発した。私たちは広島市郊外の病院や学校など、多数の負傷者が収容されている所を、次々と探しまわったが、今日も徒労に終わった。

八田さんと榎村さんは、夜遅くなって帰って来たが、丸山さんが小屋浦国民学校に転送されていることが確かめられただけであった。

十三日、八田さんと榎村さんは丸山さんを迎えに行き、私たちは他の収容所を幾つも探して廻ったが、やはり手掛りはつかめなかった。この夜、丸山さんが八田さんと榎村さんの肩にすがって帰って来たが、案外元気そうな姿なので一安心した。

散髪屋の主人に聞いた園井恵子さん、高山象三さんの話をし、その他の人はまだ不明だと言うと、丸山さんは、「たぶんみんなダメでしょう。一人僕だけ助かって家族の方に申訴が立たない。」と、深く首をたれて泣いているようであった。そのうしろ首筋が紫色にはれて、一筋の傷があるので、「その傷は...」と聞くと、首筋に手をやりながら、「もう大丈夫、痛くありません。あの朝、園井君が二階の私の部屋に食事を運んでくれたので、僕は寝床の中で、腹ばいになって食事をしていました。病気がまだ完全でないので、大事を取って暇時には床から起きなかった。窓外から強烈な光が射したと同時に、落下した天井の材木で押しつぶされた。首筋が重い梁のような物に圧されて、その傷あとです。これは」と言って、また首筋をなでた。

「どうして上に出たのか、とにかく夢中で、屋根と思う所へ出たと思ったが、それは地上だった。土煙がモウモウとして、一寸先も見えないが、女の悲鳴や助けてエ！という声が聞えて来たが、足の踏み場もない。材木の破片で足が動かない。勿論、方角もわからない中を這っていた。

そのうち大きな広い道に出たが、道にも木材や瓦などが飛び散っていて歩けない。どのくらいの時間歩いたか見当はつかないが、僕の横にトラックが止ったと思うと、上に引き上げられた。水兵の陸戦隊とわかったので、海軍

の救助隊だと気がついた。そのトラックで海軍病院に運ばれたが、勿論、それが何処か、今もってわからない。」と、ながながと当時の模様を話した。

そのとき、島内に実家のある女優の沢道子君が、「兄さんのユカタですが着て下さい。」と言って、家から持って来た浴衣を丸山さんの後から着せかけた。丸山さんは、寝床の上に立って、帯を結んでもらって、一寸ふらついた。便所に行くと言って二、三步、歩くとまたフラフラとした。沢君が手を取ろうとすると、「大丈夫、大丈夫。」と言って、廊下を一人で歩いて行った。

十四日も探しに出かけたが。まったくむなしかった。赤星さんが、桜隊の人は一応東京へ引揚げたら...と言うと、丸山さんは、「いや、隊員の話がわからない以上、私たちだけで東京へ帰るわけには行かぬ。」と、断乎はねつけた。そして榎村さんに向って、「もう一度、寮の焼跡を探して見てくれ。僕が天井から出たとき、助けて助けてと言った声は、たしかにうちの女優の声だ。あの下で、きっとみんな死んでいるに相違ない。すまぬが明日最後の捜索をしてくれないか。」と言う。

「よろしい。では明日、草の根をわけても寮のあとを探しましょう。珊瑚座の方たちも頼みます。」と、榎村さんが応えた。

十五日、八田さんが寺に残り、他の六人が再び寮の跡へ行った。午前十時半ごろであった。六人は散り散りになって、指先で白い灰を掻きわける。私は大広間のあった所をかきわけた。四、五寸も掘ると地面が現れる。私の指先に瀬戸物がコナゴナになったような白いものが出て来た。よく見ると人骨である。そして、女の髪にさすピンが二、三本、人骨の中にあつた。「おーい、あつたぞ!」。みんな集まってきた。人骨にしては余りにも少ない量である。私の両方の掌一ぱいほどしかない。

「よくもこれだけきれいに焼けたものだ。」

最初から無いと思っていた白骨が出たので、みんな勇気百倍して探しはじめた。先刻から同じ所ばかり掘っていた榎村さんが、「あつた!」と大声を出した。みんなまた駈け寄った。そこは榎村浩吉夫妻の部屋の跡で、「女房の骨だ。これはきっと...」と言う。榎村さんの掌には、先刻私が見つけた白骨と同量ぐらいで、ピンも見える。榎村さんは、丸山さんが倒れたので、奥さんを寮に残し、東京へ藤原鶏太(釜足)さんと呼ばに帰っていたのである。

玄関の跡を掘っていた大矢君が、「此処にも...」と言って、その周囲を掘って見ると、ちょうど車座に坐つたような形で、四個の白骨が出て来た。都合六人の遺骨が発見されたわけである。みんなピンがあるところから判断して、女子だとわかつた。ほかにも庭の隅々まで探したが、もう見つからなかつた。

ここらで昼食にしようと言って、木陰も何もない炎天下で、食事をしていたとき、広島駅の方から老夫婦が歩いて来た。

「このあたりに移動劇団の宿舎のあったのをご存じありませんか?」

「はあ、私たち移動劇団の者ですが...」

「私は羽原京子の母親ですが、娘がこちらにお世話になっていまして...」

見ると、老夫婦はモンペの上に、縞の紋付の羽織を着ており、焼跡の中では異様な姿に思えた。

「私たち、福山から、今朝広島へ着きましたが、駅に降りても尋ねる人影もないので、あちらこちらとさ迷つていまして、あなた方の姿が遠くから見えましたので...」

「私、榎村です。今やっと此処から遺骨が見つかりまして。でもあなたの娘さんの遺骨がどれかわかりませんが...」

「ばあさんが、今日どうしても娘が呼んでいるからと言って、来てよかつたです。」と老人が言った。

「皆さんの遺骨を少しずつ頂いて、一緒に供養させて頂きます。娘もその中にいるでしょうから...」と、老婦人が言い、五つの白骨を少しずつ紙に包んで袋の中へ入れ、何度も何度も礼をして、老夫婦は帰って行った。二人とも涙一滴もこぼさず、古武士のような風格があつた。そのときB32の編隊機が爆音高く銀色に光りながら上空を飛んでいった。私たちはもう逃げも隠れもしなかつた。

藤堂君がどこからか探して来た小さな壺のなかへ、五つの骨を入れた。榎村さんは、妻の分だけ別にハンケチに包んだ。

帰りがけに上原君が裏庭の方へ行き、灰の下からトタン板を上げて、「ここにまだあるよ。」という。そのナマコ形のトタンの下には、人間の形のままの黒い人骨が横たわっている。トタン板を、ふとんを被るように自分でかぶつたのかも知れない。火が廻って来たので、逃げようともがいたが、足が何かにはさまって逃げられなかつたよう

な形である。

完全に焼けきっていないので、持って帰ることもできない。手分けして薪になるようなものを探したが、焼けボックイさえもない。

皆がかなり遠くまで行き、燃えそうな木切れを集めて遺体の上に重ね、火をつけた。明日、白骨を取りに来ることにして、私たちは帰路を急いだ。

存光寺で待っていた丸山さんは、壺を抱くようにして、「すまん、すまん。」と言いながら床の上にくずれた。

「あの時、無理にも僕が疎開を説得すべきだった。僕の責任だ。みんなをこんな姿にして…僕だけ助かって」みんな丸山さんを慰める言葉がなかった。

その夜、女たちが、私に「丸山先生は、昨日からオカユにしていますが、今朝からそのオカユも食べられません。お茶を持って行っても、のどに通らないからって呑まないです。」という。卵でもと思ったが島には無かった。

十五日、私と最上君と二人で、芸備線で一夜お世話になった梶川さんの家に行き、卵一〇個と野菜を分けてもらい、正午にその家を出て矢口駅へ急いだ。駅の方から国民学校の児童が七、八人駆けて来る。「日本負けた、日本負けた、アメリカに…」と、長くのばして節をつけた歌を唄いながら通り過ぎた。

駅では、乗客みんな黙りこくなって、沈痛な情景であった。「日本が負けたのですか。」と、私は問う勇気がなかった。宮島口までの汽車の中でも大声で話している人はいなかった。私は妙に気にかかった。

連絡船で巖島に上がると、そこで海軍士官五、六人が、町民に演説のような声で怒鳴っている。「我々は、明日沖縄へ進撃します。皆さん！先程のラジオは敵のデマ放送ですから信じないで下さい！」

終りには泣くような声で、船から上がって来る人々に言い続けている。

存光寺に着くと、丸山さんは暑そうにパンツ一枚で、床の上に寝ていた。

「丸山さん、何か放送があったんですか。」「ラジオで天皇陛下の詔勅が放送されました。日本は無条件降伏ということですよ。」「でも、今、船着場で海軍の士官達が"デマ放送にまどわされるな"と書いていましたよ。」

住職が傍から、「先刻、町役場から、今夜から、灯火管制は解かれたから、電灯の黒いおおいは取って下さいと言って来ましたよ。」と、私に言った。「本当だ！」と思うと、私はがっかりした。

丸山さんは、昨日に変わる明るい顔をして、「大丈夫ですよ、乃木さん。これで日本は良くなりますよ。われわれのやりたい芝居が、これからやれますよ。いい芝居をやりましょう。」と、平然としている。昨日までの弱々しかった顔が、今は明るく希望に燃え、血色も良いように私には思われた。買って来た卵を出すと、「今どきよく手に入りましたねえ。」と言ったが、「今日は欲しくない。」と、ついに食べなかった。

八月十六日、灯火管制のない夜の家々は明るく、私たちの寺も電灯が久しぶりに座敷を照らした。戦争は終わったんだという嬉しさと不安が半々であった。十時ごろ、疲れはてて私たちはみんな床についた。それから少しして丸山さんは死んだのであった。十一時半ごろであった。みんな起きて来た。赤星さんと住職さんが医者之家に走った。すぐ尼子敏子医師(現姓渡辺)が来られたが、事務的に、「ご臨終です。死亡診断書を取りに来て下さい。」と、言ってさっさと帰った。医師も島に避難して来たたくさんの負傷者をかかえていたから、多忙をきわめていたのである。

住職が仏具を整え、読経するあいだ、次々にみんなが死水を取った。女優の一人が、「先生、水が呑みたかったんでしょう。」と、言って、葉っぱの水を泣きながらそそぐと、その声でみんな泣き声をたてた。

八月六日の死亡隊員は、島木つや子・森下彰子・羽原京子・笠綱子・小室喜代の五人で、八月十六日に丸山定夫、八月二十日には神戸まで園井恵子と逃げた高山象三、八月二十一日に園井恵子、そして、東京まで逃げて帰り、東京帝国大学付属病院都築外科に入院した仲みどり(被爆直後、京橋河畔に脱出、船舶司令部・凱旋館に収容され、八日汽車で広島発、九日夜半東京着。)が八月二十四日に死亡したのであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

上大須賀町、大須賀町、松原町、猿猴橋町、西荒神町、東荒神町、西蟹屋町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目
町内会別要目

この地区の範囲は、上大須賀町[かみおおすがちょう]・大須賀町[おおすがちょう]・松原町[まつばらちょう]・猿猴橋町[えんこうばしちょう]・荒神町東組[こうじんまぢひがしぐみ]・同西組・西蟹屋町上組[にしかにやちょうかみぐみ]・同中組・同本通りとし、爆心地からの至近距離は、大須賀町栄橋西詰で約一・四キロメートル、もっとも遠い地点は、西蟹屋町東端で約三キロメートルである。

明治二十七年、鉄道開設当時から松原ステーションと言われた松原町の国鉄山陽本線広島駅は、広島市の表玄関であり、海の広島港と相俟って、陸上交通の要衝をなし、戦争勃発のたびごとに重要性を高めた。大東亜戦争においても、大きな役割をはたし、幾多動員軍団の出入りや軍需物資をはじめ諸物資の集散にあたって、重要な役割をはたした。

特に広島市は、動員軍団の輸送基地であったから、出征兵士を送る歓呼の声、また、帰還兵士を迎える日の丸の旗、あるいは第一線から帰って来た白衣の勇士、白木の箱に入った遺骨の出迎えなど、戦局の進展と共に、駅頭は多彩な人間模様を織りなした。

猿猴川岸に沿って東側の駅前地区松原町・猿猴橋町・荒神町は駅を中心にして、商店街・旅館街がひらけ、活発な経済活動を行ない、連日連夜賑わった。これに接する大須賀・西蟹屋両町は表通りがおおむね商店、裏通り一帯は住宅の密集地帯で、歴史的にも古く町家的面影を、その軒々に伝えていた。

戦争中、地区住民のすべては、広島市が空襲される場合は必ず攻撃の目標になる地区として自覚すると同時に、来る日来る日を戦々恐々としてすごしていた。

原子爆弾の炸裂にあたっては、その爆央からはずれたとはいうものの、地区のほとんどが爆砕焼失し、一挙に瓦礫の荒野と化した。辛うじて西蟹屋町のみが僅かの焼失で難をのがれたが、火災をまぬがれた家屋でも半壊程度以上のひどい損害を蒙った。幸いにも広島駅(爆央から約二キロメートル)はやっと残った軌道と車輛で、わずかながら輸送の命脈を保ち、空前の危機を超克していった。

被爆後、広島駅を中心として復興の第一歩が踏み出され、加速度的に市民の出入りが増加した。終戦となつてから、しばらくすると、駅前の焼跡に闇市ができ、市民の深い虚脱感をぬぐうように、物資面での刺激をあたえ、経済気力の回復にめざましい役割をはたした。

なお、被爆前の地区内建物総戸数は二、二五〇戸、世帯数二、三五三世帯、人口六、一〇〇人で、これを各町内会別にみると次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
上大須賀町	235	227	697	工藤繁舟
大須賀町	352	365	565	象面軍蔵
松原町	216	256	679	原田唯美
猿猴橋町	203	207	612	寺川勝三
荒神町東組	211	250	678	隠岐麻人
荒神町西組	237	255	595	榎田作蔵
西蟹屋町上通	258	293	773	須郷勘一
西蟹屋町中通	286	295	723	山田万吉
西蟹屋町本通	252	205	795	保田静吉

地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
荒神町国民学校	荒神町上通	広島総合信用組合	猿猴橋町
鉄道病院	大須賀町	住友銀行松原支店	猿猴橋町
国鉄広島駅	松原町	広島駅前郵便局	松原町
広島合同運送店	西蟹屋町中	瀬川倉庫	松原町
運輸省鉄道管理部	松原町		

二、疎開状況

人員疎開

敵機の空襲が日増しに激烈になるにつれ、日々恐怖はつのるばかりであったが、それでも住み馴れた土地への愛着は強く、また環境の変化が惹起する数々の不安もあったりして、人員疎開も、当局の指令どおりにはなかなか運ばなかった。

やっと第四次疎開計画の強制実施になって、鉄道線路をはさむ両側五〇メートル以内の家屋疎開実施のときから、ようやく人員疎開も活発になってきた。戦局は今や一刻の猶余も許されない緊迫した事態に突入したということが、他都市の被災実情を見たり、聞いたりするにつけても、住民にはっきりと感受されたからである。

特に、昭和十九年十一月ごろ、地区内西蟹屋町に、敵機(グラマン機)が一五キロ爆弾二発を落してから覚悟ができ、本格的に疎開するようになった。

各町内会へ届け出た疎開者数一、二七五人におよんだ。

物資疎開

物資疎開についても、第一次疎開計画のときから、各家庭へ幾度となく呼びかけていたが、親類とか知人とかへの保管交渉も意外に手まどり、また、運送関係業者との折衝もはかばかしく進まなかった。社会全般がひどい動脈硬化症にかかっている、何事もまともにはかどることはなく、疎開したくてもできないのが実情であった。

やっと馬車を見つけて来て運んだり、手押し車や大八車を自分が引っぱって運んだようなことであった。

もちろん手に持てるものは、もてるだけ持って疎開を行なったが、なお多くの大切な物品が取りのこされていた。

しかし、どうなりこうなり昭和二十年六月ごろまでには一応疎開済みということになったが、これも大須賀町の川筋三か所に、敵機が爆弾をおとしたことから、急速に進んだのであった。

学童疎開

荒神町国民学校では、三年生以上一八二人が、六月までに疎開することになり安佐郡小河内村へ一か所、同郡久地村へ四か所の、寺院や説教所へ集団疎開をおこなった。

このほか、四月ごろから、親戚や知人をたよって三八九人の生徒が縁故疎開をおこなった。

三、防衛態勢

自衛組織

地区住民の防衛意識は非常に強く、町民全員で、いち早く自治防衛隊を組織していた。町内に災害が発生した場合、加勢援助をすることを目的とし、連合町内会長が本部大隊長となり、各町内会長が大隊長、各副会長が中隊長、各隣組長は小隊長になって、指導運営した。

警察署・消防署、ならびに警防団が、その組織の指導と指揮にあたって訓練をおこなった。

国民義勇隊

昭和十九年四月、広島市国民義勇隊が創設され、荒神地区も荒神学区国民義勇隊を組織し、国民学校前で、市長列席のもとに結成式をおこなった。

この式に、各町の国民義勇隊が参加し、手車に紙旗(義勇隊旗)をたて、炊出し釜・炊出し用具一切・ハシゴ・綱・担架などを積みこみ、地区内一円をまわって士気を高揚した。

四、避難経路及び避難先

災害時の避難先としては、安佐郡狩留家村(現高陽町)を指定し、平素から連合町内会長が「避難先には食糧を確保してあるから安心するように」と、町民に知らせていた。

避難経路は、猿猴川上流へ向い、饒津神社横を北上、あるいは白島経由神田橋・工兵橋を渡り、牛田町を経て、戸坂から千足と、太田川筋をつたって、小田村から矢口村・落合村を過ぎて狩留家村に避難することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

大須賀町に、動員部隊一時集結所(瀬川倉庫)があったが、そのほかは不明である。

六、五日夜から炸裂まで

猿猴橋町の総合信用組合の屋上に、警鐘場が設けてあって、五日夜から六日早朝にかけての空襲警報・警戒警報発令および解除に際して、鐘をならし通報につとめた。その鐘の音を合図に、老人や婦人子どもは防空壕へ待避した。

防衛隊員・警防団員・ならびに警察署員は、警戒警報発令中は、所定の配置につき、空襲警報発令と同時に、全員防空壕に待避した。

六日午前七時三十分ごろ、警戒警報解除になったが、前夜半の空襲警報発令で心身ともに疲労していたから、原子爆弾の炸裂のときは、ほっとした安堵感で多くの家庭は、代用食やぞうすいの朝食をとっていた。

なお、建物疎開に、毎日出勤することになっており、各町内会においても町内の建物疎開もしなければならなかったから、地区内は順番で、三か町で約五〇人が出勤することに決められていた。

原子爆弾炸裂のとき、すでに各町で建物疎開作業が、その町内会員の手によって実施されていた。

六日朝、疎開作業の出勤と地区内建物疎開の実施状況は次のとおりである。

町内会名	動員司令によって町内会より疎開作業への出勤		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先地名	建物疎開計画予定概数	被爆前日までの実施済み概数	当日朝実施中の概数	他地区から実施のため集めた人員
上大須賀町	17	鷹野橋方面	戸数不明	約 60 戸	実施中	約 20 人
大須賀町	-	-				
松原町	15	鷹野橋方面	戸数不明	不明	実施中	不明
猿猴橋町	18	鷹野橋方面				
荒神町東組	-	-				
荒神町西組	-	-				
西蟹屋町上通	-	-				
西蟹屋町中通	-	-	戸数不明	約 70 戸	実施中	約 10 人
西蟹屋町本通	-	-				

七、被爆の惨状

炸裂直後

閃光の直後、周囲がまっ暗くなり、炸裂音と同時に、家屋が倒壊し、多くの人々が下敷きになった。

家屋はその場所場所によって横ざまに吹き倒されたのと、上から爆圧によって潰されたようになったのと、下方から吹きあげられるように浮びあがって倒れたのと様々であった。とにかく、アッという瞬間、町も人も一挙にたたきつぶされていた。暗やみの中を、ようやく脱出してみると、周囲は目もあてられぬ惨状を呈していた。

救助作業など思いもおよばず、長いあいだ訓練に訓練を積んで鍛えた防空防火の組織も設備も、また行動能力も瞬時に崩壊していたのであった。

負傷者があまりにも多く、指定された安佐郡狩留家村へ避難する前に、暫定的に東練兵場にいったん集合した。ここから狩留家村やその他、近郊の知人・親戚を頼って個々に避難した。

郊外に通ずる道路上は、市中から逃げて来て、力つきはたたボロボロの姿の避難者でうずまっていた。

原子爆弾炸裂のとき、橋を渡っていて、川の中へ吹きとばされた者、橋の欄干に叩きつけられて即死した者、あるいは、負傷してそこに倒れ、虫の息になっている者などたくさんあったが、殺到して来た避難群衆の誰一人も、これらにかかわりあっている余裕すらなく、茫然と自分自身さえどうすれば良いか判らぬままだ逃げ去っていった。

また、時の経過とともに引潮となり、川の水位が次第に下がっていくと、猛火に追われて逃げ場を失った者が、たくさん川のなかへ逃げ去っていった。午後三時ごろ、川水を巻きあげて竜巻が発生した。その荒れ狂う波に吞まれて、ここでも避難者の多くが死んでいった。これも瞬間的なできごとであった。

広島駅もまた、壊滅的な打撃を受け、またたくまに猛火につつまれた。しかし、職員一同、堅忍不拔の精神力をもって動脈鉄路の惨禍を克服し、よくその使命をつらぬいたのであった。

瞬間的被害

瞬間的な炸裂による物的・人的被害は大きかった。即死者・負傷者など続出し、堅固であった社会的秩序も、親密であった人間関係も、一瞬のうちに葬り去られてしまった。

各町の被害内訳は、つぎのとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
大須賀町	80	20			13	36	51	栄橋 - 欄かんが破壊した 駅前橋 - 木造のため焼け落ち不通
松原町	82	18			15	50	35	猿猴橋 - 欄かんが破壊した
猿猴橋町	90	10			10	20	70	
荒神町	70	30			9	58	33	荒神橋 - 欄かんが破壊
西蟹屋町	29	71			4	40	56	大正橋 - 欄かん一部破壊したが九明の大雨にて中部が落ち不通となる

火災発生炎上の状況

また、炸裂後まもなく松原町・大須賀町・荒神町内から火災が発生し、午後三時ごろまで燃え続け、地区の約七〇パーセントが焼失した。ただ西蟹屋町が一部の焼失にとどまっただけであった。

各町別の火災状況は、つぎのとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況(方向、火勢、炎、煙)	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時間		
大須賀町	(上大須賀町) 飛石的に発火 (大須賀町) 広鉄印刷所方面	午前十一時三十分頃 午前九時頃	飛火にて火勢一面におよび全町が焼失した。	午後二時三十分頃
松原町	広島駅前方面	午前八時十分頃	二、三か所より発火、四方に延焼し、町が全焼した。	午前十二時頃
猿猴橋町	電車通り中央部	午前十時頃	ところどころより発火しているので飛火と思うが、それから、全面におよび全町が全焼した。	午後一時頃
荒神町	(東組) 中央部二か所より (西部) 鉄道線路筋と中央部三か所より	午前九時三十分頃 午後十時頃	残火の不始末と飛火と思われるが、約五戸を残して他は全部焼けた。	午前十二時頃
西蟹屋町	一部に火災発生	午前八時三十分頃	不明	不明

降雨

火災がおさまった午後三時ごろから、竜巻が起った。川水もあらあらしく波立ち、大つぶの黒味がかった雨が、三分間ぐらいずつ二回降って来た。

しかし、場所によっては、雨が降らなかったというところもある。

六日夜

その夜は、敵機が襲来するかも知れぬという不安と恐怖にかられ、歩ける者も歩けない者も、助けたり、助けられたりして、安全と思われる最寄りの場所、あるいは、避難者がたくさん集っている広場へ逃げていった。

敵襲がなくなったら、食糧の配給を練兵場で行なうということで、ほとんどの者が練兵場へ逃げたが、練兵場の北側の山中に火薬庫があり、敵機の再度空襲の場合、危険であるから、避難替えするよう軍から指示があつて、一度集っていた避難者らは、また他の場所へ逃げていった。中にはもう動けず練兵場のイモ畑のうねの低い所へ、身を伏せて夜をあかした者もあった。

家屋が破壊されなかった地区では、家財道具を守り、道路や防空壕のなかで眠れない一夜を明かした者もたくさんいた。

避難した東練兵場から市中を見渡せば、次から次へと火炎が立ち続けており、夜ながの東練兵場とはいえ、さながら昼のように明るかった。

燃え狂うまがつ火の、不気味な明るさのなかで、家屋の下から這い出た負傷者らは、多量の出血をしているうえ、顔は白い粉をふき、焼魚のような皮膚をさらしていた。また、衣服は裂け、ボロボロの布切れを体にたらしめているに過ぎなかった。帽子をかぶっていた者は、帽子からはみ出していた髪が剥ぎとられたように焼けていた。

諸現象

被爆者は発熱して下痢症状をおこした。赤痢ではないかと思われるほどの症状で苦しみながら死んだ者も多かった。

また、歯ぐきから出血し、一種異様な臭気のある唾液や粘液を吐いて死亡する者もあった。この症状は、被爆以来、かなり続いたが、なかには、被爆時から元気であった者が、急に貧血を起し、髪が一本もなくなるまで抜け落ちて死ぬる者も多くあった。そして、火傷の軽い部分は、治癒後、そこの部分がケロイド状に引きつって醜い傷痕を残した。

炸裂時の爆圧・爆風の威力は、常識では考えられない多くの現象を示していた。

電柱はなぎ倒され、電線はむちゃくちゃに纏れて路上に散乱し、歩くこともできないほどであった。倒れた電柱のなかには、その中間からまっ二つに折れたのもあった。また大きな石の門柱の、上部の半分がもぎとられたように吹き飛ばされていた。

栄橋のたもとにあった電話ボックスや橋の欄干も吹き飛び、はいていた下駄やかぶっていた帽子は無論のこと、人間も一〇メートル以上、瞬間的に吹き飛ばされていた。

しかし、中には建物疎開の作業中に被爆してほとんどが火傷したにもかかわらず、ただ一人無傷で逃げ帰り、生命に何ら別条のなかったという動員学徒もいた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊の作業

地区内住民の人たちが傷が浅く元気な者は、ほとんど狩留家村へ避難をしたが、重傷者その他肉親を探さなければならぬ者などは、東練兵場へひとまず避難していった。

六日昼過ぎごろ、避難者の中の元気な中学生三人に連絡をたのみ、中山村・戸坂村・府中町の三か町村へ急速救援を依頼したところ、午後三時ごろ、オート三輪車とトラックで医師とムスビを積みこんで来援した。医師はただちに負傷者の応急処置をおこない、ムスビを罹災者に配給した。ついで陸軍および海軍の医療班が来援して、簡単な治療が進められた。

翌七日、負傷者で歩行のかなう者は、自力で、また歩行ができない者は、歩ける人や知人に助けられながら、尾長国前寺とか尾長国民学校、または国鉄矢賀工機部まで行って、それぞれ応急の治療を受けた。

道路啓開

地区内はほとんどの人々が他へ避難して、ただ広漠とした死の町と化したままであったから、瓦礫で埋まった道路が、いつごろ人が通れるように啓開されたかということさえ知っている者はなかった。たぶん、暁部隊など軍隊によって、主幹道路の清掃が行なわれたと思われる。

死体の収容と火葬

東練兵場へ逃げた人々も、つぎつぎに死んでいき、八月八日ごろから十日ごろにかけて、その死体の収容がおこなわれた。

場所は、東練兵場東口(現在二葉中学校の約一八〇メートル手前)に仮設された収容所に収容した。

火葬は、八月十一日から十二日ごろまで、軍隊と協力して、焼跡の残材を集め、石油をかけておこなった。

町内会の機能

町内会長も、町幹部も、全員避難して、町内会の機能が壊滅したため、一人一人が負傷者や罹災者の手当てや相互の力づけをおこなって、突発した非常事態に対処したのであった。

九、被爆後の生活状況

復帰居住者

秋風が吹きはじめた九月ごろから、防空壕とか、バラックに居住する者がいた。しかしごく僅かで、各町とも四、五人程度であった。本格的に焼跡に住む気になって、バラック建てながら人が住みはじめたのは、翌年一月ごろからで、ポツンポツンと低いトタンの小屋が焦土化した瓦礫の中に散見されるようになった。

二十年八月末ごろの居住状況は、次表のとおりである。ただし、この世帯概数は食糧配給世帯数である。地区内に当時住んでいなくても、町籍だけそのままにしておいて、食糧配給日には避難先から帰って来て配給を受けるといった状態のものも含まれている。実際に、現地に住んでいた者はごく僅少であった。

町名	世帯数
上大須賀町	120
大須賀町	27
松原町	45
猿猴橋町	17
荒神町	54
西蟹屋町	460

衛生環境

廃墟の衛生環境は非常に悪く、八月九日ごろからハエが地上をおおって、まっ黒に発生した。眼をつぶったまま、いきなり掌をたたきあわせると苦もなく一〇数匹のハエがつぶれていた。ハエは起居の間、どこにでもついてまわり、アブのように人を刺すので痛かった。

しかし、駆除剤なども入手することはできず、放任のありさまであったから、夜など、焼トタンに群集しているハエを、拾って来た茶わんに水を入れて採取すると、〇・五リットルから〇・七リットルに及ぶハエをたちどころに捕ることができた。

九月になって、アメリカ軍が飛行機で駆除薬を撒布したので、急激に少なくなって来た。

ノミ・シラミの発生はあまりなかったようである。これは、焼失家屋跡で、セメント塗の風呂場だけが辛うじて

残っていたのを利用して、露天ながら入浴だけは続け、身体の清潔を心がけていたからと、ある罹災者が語っている。また、水道栓が壊れたままになっていて、上水道の水が一日中出っぱなしであったから、それで洗濯も充分にでき、洗濯物も夏のことですぐに乾いたし、しょっちゅう洗うことができた。

生活物資

焼跡生活の上での食糧の欠乏は言語に絶した。被爆後五日間ぐらいにわたって、安芸郡府中町・中山村・戸坂村(両村とも現在広島市に合併)、及び軍関係から炊出しがあって露命をつないだ。その後は一般の配給に切替えられ、時には、軍隊の放出品で、衣類・かん詰・すきのり・毛布・軍靴などの特別配給もあったが、まったく僅かなもので、煙草などは路傍に捨てられた吸殻もなかなか見あたらないで、一服か二服すうだけの短いものでも、恥も外聞も考える余裕なく拾いあった。

ロウソク生活

夜は夜で灯がなく、まっ暗な生活であった。僅かのロウソクが九月末ごろ、やっと配給されたが、それを成るべく使わないように大切に大切に、早く眠るようにした。

電灯がついたのは、十月ごろであったが、初めて文明の光線を取りもどし、みんなほっとした。ただ、西蟹屋町の家屋の倒れなかった地域は、旧設備があったから、もっと早く電灯がついたようである。

闇市の発生

八月十五日、終戦となり、これまで社会を支えていた権力や機構が一朝にして瓦解し、人々は深い虚脱感に陥った。二日、三日はただ荘然として過ぎ去ったが、早くも広島駅前に商人があらわれた。ムシロを地べたに敷き、その上に商品をならべた。最初は一、二か所であったのが、十日もたたいたうちに二、三〇か所に及ぶ露天ができて、これまで目に触れることのなかった物や、統制で自由に入手できなかった物が、ドッとあらわれた。食糧品を主体としたあやしげな加工食品・日用雑貨品・軍用物資など、なんでも自由に売られ、日増しに盛大になっていった。

飢餓線上を彷徨していた罹災者らは、見るもの見るものがすべて垂涎のまどであって、人々はこれを「闇市」と呼び、昼夜をわかない雑踏の巷が出現した。

吸いがらを再製した手製のタバコや乾燥したタバコの葉そのまま、あるいは、占領軍から入手した洋モク(外国製煙草)。あるいは銀めし(白米)のムスビなどの立売りもいた。あくの強いザラメや黒砂糖は貴重品で、サッカリンやズルチン錠がもっぱら甘味の王様のように取扱われたし、酒もたくさん取引きされた。清酒よりも、ほとんどが密造酒で、軍放出の局用アルコールに色と味をつけたもの、またはマッカリと称するいかわしい濁酒と、その上澄み、なかには、工業用メチルアルコールもあって目がつぶれたり、死んだりした者も多かった。むし芋などは、金に糸目をつけぬというほどの売れ方で、闇屋でむし芋成金と言われるほどの財をなした者もあった。

闇市には、順当な品物もたくさん売られたが、その一方、まやかし物も実に多く、それとは知りながら、飢餓に迫られていた罹災者は買って来て食べた。

名の知れぬ海藻に塩水と人造甘味を入れて煮つめたものが、ノリの佃煮としておっぴらに売られたし、タクアンも、葉っぱのついたままの大根を黄色に染めてあるだけで、塩気のアまりないもの、あるいは色だけ似ていて、ただ塩からいだけの醤油・味噌、それから、桐油などで作ったあやしい食用油などが飛ぶように売れた。

これまで牛や豚の内臓(モツ)は、あまり一般家庭の食卓には、のぼらなかつたものであるが、ホルモン料理と称し、闇市を通じて、一般家庭に伝わった。それも殆んど密殺のものであった。ともかく食糧品関係はなんであれ、その形さえして、のどを通れば良かった。

衣類はまた、軍隊の放出品や復員兵の持ち帰った物品を主体として市場に溢れていた。

南方用の白いヘルメット帽から、半ズボン・半袖シャツ・ブカブカしたごつい航空服、さては佐官級以上が着用した立派なカーキ色の陸軍軍服、その他水兵服や歩兵の軍服・軍帽・軍手・軍靴・毛布・カヤ・水筒にいたるまで店先を飾っていた。

これらの物品は、配給品や隠退蔵物資の横流しか、それとも罹災者が、わずかな配給品を食糧にかえるために、やむなく手ばなした品物であった。ナベ・釜・フライパンなど台所用品も、あきらかに即製品と判る粗末たうすべらな品物が、堂々とその商品価値を誇っていた。

物々交換

罹災者が、疎開していた幾らかの物資を食糧にかえるため、このごろから物々交換ということがはじまった。農家へ行って頭を下げ下げ、気げんをとりながら僅かの食糧と、辛うじて残った疎開衣類とを交換した。

闇市にも、物々交換された物資がたくさん出まわっていたが、中には、著名な人の出版物・署名入りの図書・ヒスイのつまみのついた美しい銀びん・古色蒼然とした由緒ありげな甲冑・抹茶茶碗・書画・その他戦前の持ち主の生活をしのばせる高級な芸術品、伝家の宝物なども、天日に晒されながら、雑然とならべられていた。

社会悪はびこる

駅前闇市場は、警察力の萎縮につけこんで、ムシロー一枚・戸板一枚のにわか商人や戦勝国という特権意識の第三国人が思うままにのさばり、従来の商道德も慣習もなく、ただ思いどおりの掛値をつけて売りまくる商人が、入れかわり立ちかわり店を開いたが、特に第三国人は巨利をむさぼった。

闇市には、飢餓からどうにかして脱出しようとする罹災者らのひたむきな熱気と、平和な生活を一日も早く取りもどそうとする性急な意欲とが入りまざって、粗暴で無秩序な空気がムンムンと渦まいていた。

この異様な活気を持つ雑踏をぬって、リンゴ箱を立ちかけた上でおこなう煙草の空き箱をあやつる単純なインチキ賭博や、素人くさいパンパン(売春婦)たちが、おっぴらに横行するようになった。

焼跡では、ジープで来た占領軍の兵隊が、焼け残ってポツンと立っている金庫をハンマーで打ち破っている風景が見られたが、駅では貨物列車が発着するたびに暴力的荷抜きが盛んにおこなわれたり、物資の格納してある倉庫がたびたび襲撃され、守衛が殺されたこともあったりして、世相はまさに無政府状態の混沌たるありさまであった。実際、昭和二十二、三年ごろまでは、湯呑み茶碗に賽ころを伏せるイカサマ賭博のダミ声に群がる民衆の中に立入る警官も、まったく命がけのことであった。

罹災者たちの多くは、こんな世相のなかで、焼跡の防空壕やバラック小屋に起き伏し、いわゆるタケノコ生活で痩せ細りながら、その日その日をやっと過ごしていった。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月十二日ごろから雨が降り続き、十七日は、ついに台風が来て川が氾濫した。地区内のほとんどの道路にそって、川のように濁水が流れた。

半壊以上の損傷を受けた家屋や、焼残りの防空壕は雨がもり、浸水も激しく、危険になったので、みな尾長町の高地へ避難しなければならなかった。

家屋の建築資材はもちろん、補修材料さえも欠乏していて、釘一本すら思うように入手できず、原子爆弾を受けたままの状態であったから、九月の暴風にも、十月の豪雨にも荒らされるままになった。

十一月ごろ、全壊家屋に対して、一戸につき金壹千円也の交付金が支給されたので、この金で僅かながら応急資材を得ることができ、幾分か心の落ち着きを得た。二十一年一月ごろになって、ぼつぼつ疎開者や避難者が帰って来るようになり、各町ではトタンのバラックなどが建ち始め、また修復も進められた。その状況は、次のとおりである。

町名	概略
上大須賀町	全焼区域。二十年十月に入り焼トタンでバラックが建ちはじめた。昭和二十一年一月頃から住宅営団の組立住宅が、建ちはじめた。
大須賀町	全焼区域。二十年十月頃より焼トタンのバラックが四～五戸建ったとき建坪六四平方メートル余の家を建築した者もあった。二十一年頃、住宅営団の組立住宅が六戸建った。
松原町	全焼区域。広島駅のある地区なので、昭和二十一年四月頃から第三国人が豪華な建物を建てはじめてから、バラック建てが次から次へと建ちだした。
猿猴橋町	住友銀行駅前支店、広島信用組合駅前支所両建物は残ったが他は全部焼失した。昭和二十一年一月頃から住宅営団住宅が建ちはじめた。
荒神町	この町内では一部が全焼し、他は半壊以上の損害を受けた。翌年七月ごろから、本格的な修理をしいはじめた。
西蟹屋町	この町内では一部焼失したが、残った建物も半壊以上の損害であった。被爆後翌日から次々と修理をしていた模様である。

経済活動の伸展

二十一年三月、通貨金融非常措置令が実施されたが、インフレは上昇するばかりであった。新円切替で、それまで流通していた紙幣に新円証紙をはって使用したが、地区内では一人あたり一四〇円分が二月二十五日に町内会を通じて各家庭へ手渡された。

商人は現金取引上から新円の必要に迫られ、新円証紙は、いちじ別箇の価値を生んで、商売の掛引きに大きな魅力を持った。

商店・旅館ができる

二十一年になって、駅前の露店や立売り屋が一段と活気を呈し、漸次、松原町から猿猴橋町・荒神町方面へかけてソギ葺き、板張りの商店や旅館住宅がならびはじめ、焦土はようやく復興の緒についたのである。

十一、その他

水泡に帰した訓練と施設

地区内では、広島駅及び近くの二葉の里に騎兵第五聯隊(当時・第二総軍司令部)が所在していたから、特に防空壕は他地区よりも多く築造し、荒神町国民学校校庭には医療品を備えた応急手当用防空壕を造っていた。そして、たびたびの防空・防火、および避難訓

練を行ない、防衛態勢を整えていた。被爆時には、これら防衛対策も役立たず、また、医師もいなく、負傷者があまりにも多くて、混乱状態に陥り、執るべき処置も頭に浮ばなかった。鍛えた訓練も、原子爆弾という恐るべき兵器の前には、まったく水泡に帰した。

各戸に備えた防火用貯水槽も、バケツも使用不能となった。それに家の下敷きになった人を助けようとしても、救助用具もなく、まもなく火災が発生し、それらの人を助け出す余裕もなく、焼死するのを見ながら放置せざるを得なかった。

宮島の遠望

この地区から、日本三景の一つである宮島が見えることなどなかったが、被爆直後のこと、栄橋東詰の北側にあった道路補修用砂利置場の上に立ったとき、ふと宮島(この地点より南西にあたる)が、ハッキリと見えたのには驚かされた。

広島駅前の混雑

陸上交通の広島の正面玄関口というこの地区の位置づけは、このような苛烈な大災害後においても、余燼くすぶるときから、すでに人々の集散を見る特性を有し、そこに原始的な形ではあっても、たちまち経済流動の火花が散るといった場面が展開されて、起ちあがる新生広島のバイタリティーをつぶさに眺めることができた。

忘れえぬ親切

橋本くに恵(被爆地・大須賀町)

被爆の日まで、私は母と二人広島駅にほど近い台屋町駅前橋のすぐ傍にすみ、県地方木材吉島営業所に勤めていた。あの朝出かけようとした途端、警戒警報に入り、しばらく待避していたが、間もなく解除になったので非常袋を肩に、ツバの広い麦わら帽子をかぶって家を出た。

玄関を出てから、ふと何気なく振り返るといつになく母が格子越しにぼんやり見送っているのが眼についたが、それが母との今生の別れになろうとは、夢にも思わなかった。ちょうど大須賀町の鉄道管理部横にさしかかったとき、突然パツ！と真白い光にクラクラと眼がくらみ、あっ…爆弾だ！と思った瞬間、いきなり脳天を叩かれるような爆音と一緒に暗黒の中に投げ出された。同時に鼻から口からムツとする熱気と布の焼けるような異臭が、呼吸を止めてしまうのではないかと思う程、モウモウと入って来た。自分でも眼を開けているのか閉じているのかわからなかったが、ただ真暗で呼吸のますます困難になっていくのだけが感じられた。もう駄目だと思うと、母の事、兄の事、ただ肉親の事のみが鮮かな火花のように頭の中を飛び散っていった。

それはほんの僅かの間で、やがて次第にあたりが夜明け前のように明るくなった時、眼にとび込んで来た光景は、いまがいま迄信じられない凄絶なものであった。一面灰色の海の中からムクムクと起ち上がり、やがて何ともたえようのない叫び声をあげながら、海藻のアラメのようなボ口布を身体じゅうぶら下げ、右往左往しはじめたもの、それは人の姿とは思えない想像を絶した人間の姿であった。

私はからだじゅう石でも結え付けられているように動きにくいので、ゴソゴソと四つ這いになって、一生懸命、何か大きなコンクリート様の物体へ這い寄った。そのうちにも人々の騒ぎは大きくなり、押しあい、ひしめきあいしている様は、左右に揺れながら、地鳴りを伴っていて、まるで地震のように思われた。ウォン、ウォンと奇怪なこだまのような叫び声は、口々に痛いとか逃げようとか喚いているらしかった。息苦しいばかりで起つことができないのである。そのうち近くの鉄道教習所の倒壊した建物から、メラメラと煙と一緒に炎の上るのが見えた。すると不思議な力が湧いてすっと体が立った。立って見廻せば、さき程迄歩いていた管理部の左側から、五、六間斜の人道と車道の境目にいる自分を発見した。二、三步踏み出して非常袋に気がつき周囲を見廻したが、どこへ吹き飛んだのかわからないので、灰もぶれの人波にもまれて丁字型の道まで戻

った。そこは大須賀町の方から押し寄せて来る群衆と、松原町方面からの逃げ惑う人群とでごった返していた。無意識に足が駅前橋の方へ向いたが、走って来る人々の喚き声で橋の落ちたことを知り、教習所の火勢の烈しさに圧倒されて、やむなく東練兵場へ避難した。

その頃になって、やっと自分の身辺に気がついた。モンペは上も下も右側は殆んど焼け切れ、下駄は片一方、麦わら帽子は、ツバとあご紐が残り、あらわになった肩から、ひじ、手の甲へかけて皮膚がすっかりまくれ、その端はぶらんと垂れ下がっていた。かゆいのか、痛いのかわからない。それよりも打撲らしい右肩の痛みが激しくて、知らず知らず呻き声が出た。やっと練兵場の権現下まで辿りつき余り苦しいので、どこかに腰を下ろして背中をもたせかけたいと思い、あたりを物色したが寄りかかれる所、坐られそうな恰好の場所は全部先に避難して来た人達に占められ、それらの人は、恐怖と不安の交錯した表情で、茫然と広島駅方面の燃えさかっている火炎を眺めていた。その大半の人の衣服は焼け千切れ、僅かに布端を身にまとっているに過ぎず、至るところ火傷を負い、或いは傷をうけ、むごたらしくむくみ、皮膚は垂れ下がり、物凄い出血は埃にどす黒くなり、めいめい打ち倒れたり、うつ伏したり、呻き声は地の底から湧いて来るように、不気味に響き、それはさながら、さき程の阿鼻叫喚の巷から初まる一連の地獄絵であった。詳細に見れば更に眼を覆うべき痛ましい人々に気がついたに違いないが、私は自分自身が苦しくて、人どころではなかった。いまにも呼吸が止まりそうで、権現下から、やや右寄りに記念碑がある横手を少し奥まった方へ行ったら小高い山裾の笹の茂みの中に倒れ伏すと、そのまま動けず、三日二晩、そこで虫の息をしていた。苦しい息をしながら母はどうしたろう、兄は無事であろうかなど思うと、独り野草の中で死んで行く事は、堪えられない淋しい気がした。それで大きな声を出して幾度となく母を呼んだり、隣組の人の名を呼んだりしてみたが、それは空しいこだまとなってはね返り、日が暮れると淋しさは、よけい加わった。昼頃から私の近くにいたらしい女の人が何くれと世話を焼いてくれ、かげ茶わんやビール瓶に水を汲んで来ては飲ませてくれたり、炊出しのムスビをもらってくれたりした。その若い女の人の親切はたまらなく嬉しかったが、握り飯を食べる気にはなれなかった。

また尾道船舶会社の名刺と旅行鞆の中から糊のきいたちぢみのシャツをくれ、何か困ることがあったら訪ねて来るようにと懇切に言い残して去った旅の老人、さえぎるもののない炎熱に喘ぐのを気の毒がって、笹の葉や松の小枝を折り日陰を作ってくれた兵隊、二日目の夜明け方に、己斐の山から来たと言って、夜露に濡れ苦悶している私の肩に自分の白いタオルをかけてくれた兵隊もあった。しかし、いずれの人もながく留まってはいられなかったであろう。来ては去り、来ては去りして、いつの間にか、一人減り二人減りして人はまばらになっていった。握り飯も干パンも全然手をつななかったので、便意は催さなかったが、水ばかり飲んだのと、山土の隙間から湧く清水が胸から腹を冷やし、夜になると歯の根が合わない程悪感がし、頻繁に尿意を催したが、手足が動かないので非常に気味悪さを感じながらもそのまま用を足した。

こうして三日目の夕方と言っても未だ陽はかんかん高く、恨めしいほどの熱さの頃、通りすがりらしい一四、五歳の少年が、ひょいとかけ寄って来て私をのぞき「権現サンとこ、キュウゴシヨができとるよ。行くか。」言葉のなまりのたどたどしさからすぐ半島の子供と知れた。罪のない民族の偏見を越えた真心にすがりつくような想いでうなずくと、少年は殆んど私を負うようにして、権現下の救護所へ連れて行ってくれ、名も告げず所も言わず、いつの間にか風のように人混みにまぎれてしまった。礼を言う暇もなかった。ここで初めて右腕の火傷に手当てをもらったが、まるでしびれたように感覚がなく、両脚の火傷には気が付かなかった。足の踏み場もないほど負傷者が地面に転がっていて、中には既に死んでいる者も多かったに違いない。未だ少女らしい俄看護婦が寄って来て、握り飯をすすめてくれるのであるけれど、どうしてもものを通らない。しばらくして警防団の制服をつけた五十がらみの男の人が来て住所、連絡者の有無などを尋ねて廻り、余り私があつがるので、何処からか藎を拾って来て残陽への陰を造ってくれたが、藎にも甚だしい腐臭がこびりついていて。母の住所、その住居などを絶え絶えに答えると、間もなく「日通の人、日通の人」と声高く叫びながら件の警防団員は二人連れの人を連れて来て、「この人ですよ。」と言った。「わたしは宇品の日通のもんですがのう。え？橋本さん？知っとる、知っとる。兄さんはまめ(元気)で大洲の方は焼残っとりますけん、すぐ連れてって上げますよ。」

こうして私は三日目の日没頃、夢ではないかと喜びにうちふるえながら、苦痛もしばらくは消し飛んでしまった。宇品日通の木下氏に助けられ、トラックの覆布の上へ戸板で静かに抱え上げてもらい、兄の家に運ばれて行った。(後文略)

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

大洲町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目、南蟹屋町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、大洲町東組[おおずちょうひがしぐみ]、同西組、同南組、南蟹屋町[みなみかにやちょう]とし、爆心地点からの至近距離は、南蟹屋町西端の猿猴川(えんこうがわ)河岸で約二・八キロメートル、もっとも遠い地点は、新大洲橋西詰で約四・〇キロメートルである。

大洲は、往昔、文字通りの洲浜であったが、一七世紀中葉ごろから、つぎつぎと大がかりな干拓事業がおこなわれて大洲新開(一六六〇年)となり、矢賀沖と呼ばれた今日の蟹屋町・大洲町一帯の地が開かれた。

これらの新開は、藩政時代には、「御国第一の品」として重視された綿花の栽培が盛んであったが、繰綿生産の増大と共に、新開人口も漸増して今日の発展の基礎となった。

大洲町を南北に貫通して呉市へ通ずる現在の国道第二号線を挟んだ地帯は、戦争前も、現在と同じような各種の中小生産工場地帯であった。

被爆当時の戸数と人口

なお、被爆当時の地区内の建物総戸数は約八八八戸で、世帯数は八〇四世帯・人口約三、〇五五人で、各町内会の内訳は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
大洲町東	69	66	222	児玉義徳
大洲町西	293	267	972	天野悦胡
大洲町南	200	175	750	井上主衛
南蟹屋町	326	296	1,111	亀田多吉

また、地区内に所在した主要建物および主要事業所は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
大洲食料品配給所	大洲町	児玉鉄工所	大洲町
亀田砥石工場	南蟹屋町	大原ゴム工場	大洲町
藤川鋳物工場	大洲町	加藤製材所	大洲町
中島鋳物所	大洲町	難波鉄工所	大洲町

二、疎開状況

人員および物資疎開

大洲地区一帯では、五〇戸約二〇〇人が縁故を頼り、それぞれの関係へ疎開した。

南蟹屋町では、県食糧事務所付近の約二〇戸が、建物疎開をおこなった。

物資の疎開は、それぞれ行なっていたようであるが、詳細は、わからない。

学童疎開

学童疎開は、大洲町では昭和二十年四月十二日、佐伯郡津田村へ児童七〇人、教職員五人。同年四月十五日、同郡浅原村へ児童五〇人、教職員四人。同年七月十三日、同郡友和村(児童二人、教職員二人)および同郡栗谷村(児童三〇人)、教職員二人で以上第一次疎開。引続き同年七月十四日、佐伯郡津田村へ児童八人・および同郡浅原村へ児童五人が第二次疎開を行なった。

南蟹屋町では年月不明であるが、だいたい大洲町と同じごろ、佐伯郡浅原村へ児童五〇人が疎開し、九月十七日の台風の日復帰して来た。

三、防衛態勢

大洲地区の警防態勢は、比治山学区一四か町の組織にふくまれていた。

大洲町の東・西・南各町内会長および南蟹屋町内会長は、国民義勇隊小隊長となり、各隣組長が班長となっていた。

この義勇隊は、各小隊長が班長を指揮し、町民を動員して、防空防火および避難救護の訓練(演習)を実施し毎夜、灯火管制の訓練を午後十時ごろまで行なっていた。

この地域は、中・小工場の多い地域で、それぞれの工場は、防空防火の訓練を特に厳重に実施した。

四、避難経路及び避難先

災害時の避難場所として、大洲町東組は安芸郡温品村、同町西組は矢賀方面、同町南組及び南蟹屋町は安芸郡戸坂村方面へ避難するよう指定していた。

なお、地区内に所在した陸軍部隊集団はなかった。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜から朝まで

八月五日午後九時三十分ごろ、空襲警報発令があり、まもなく解除になったので、役員は灯火管制に注意して町内を一巡し、午後十一時ごろ就寝した。

六日朝の炸裂は突然のことで、炸裂と同時に、みな防空壕へ避難した。

上空侵入敵機の目撃者はいなかったようであるが、爆音を聴取した者は、かなりあった。

六日朝、疎開作業へ出動した人員、建物疎開実施状況は次のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数	出動先地名	疎開予定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
大洲町	5	南竹屋町	なし	なし		なし
大洲町西	10	南竹屋町	20	なし		なし
大洲町南	8	南竹屋町	30	10		なし
南蟹屋町	8	南竹屋町	30	20		なし

六、被爆の惨状

青い閃光

大洲町西組町内会天野悦胡会長の体験によれば、八時十分ごろ、家の前に出ると同時に、異様な青い光線が眼を射たので、パッと地面に伏せた。数分後、目をあけると、周囲に自宅の高さ二メートルのブロック塀が倒れていたが、かろうじて助かっていた。すぐ一〇〇メートルほど北の高見櫓に登って見ると、全市がもうもうたる黒煙におおわれていた。火柱が立ちあがり、見える限りの家屋がなぎ倒されていた。どうしたことかと一時呆然自失したが、気を取直して、早速大洲交番所へ行った。しかし、警察も本署と電話が通せず、連絡の警官を本署へ派遣したところであった。

避難者殺到

午前十時ごろ、避難者が比治山を越えて東側へ下り、宇品線の鉄橋を渡って大洲地区になだれ込んで来た。警察官・警防団が出て、路上に溢れた負傷者の手当をしたが、皆皮膚がむげてボロのように垂れさがっていた。死者も続出し、路上に重なりあった。死の行列が海田市町方面へ向けて、ひっきりなくゾロゾロと続いた。

十一時、師団司令部から「比治山橋へ集合せよ。」という命令が出たので、各町内会長・義勇隊長・警防団長が行った。司令部は「新型爆弾の投下で全市壊滅、被爆者の救護にあたれ。」と発表した。

このころ、大洲町東組のブドウ畑(約二七、〇〇〇平方メートル)および同町南組のブドウ畑(約一九、〇〇〇平方メートル)に約一万人が避難して来た。

地区の被害状況

なお、炸裂時の瞬間的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)			
	全壊	半壊	小破	計
大洲町東組	3	97		100
大洲町西組	4	96		100
大洲町南組	20	80		100
南蟹屋町	4	96		100

(人的被害実数はよく解っていない。)

また、この地区では各町とも火災発生はなかった。黒い雨は降らたかったが、普通の雨がバラバラと降った。

当日の夜、町民のほとんどは大洲町東組中央部にあった競馬場に、再び空襲があるかも知れぬという不安におびえながら集って、そのまま夜をあかした。

諸現象

原子爆弾の熱線とか光とかによる特別の現象はあまりなかった。

しかし、爆風の被害は、相当にあった。ほとんどの家屋の壁が亀裂を生じたり、剥落したりした。天井も抜け、場所によってはガラス窓が散々にこわれた。

天野町内会長宅(木造平屋建三七坪)では、家屋は東向きの家で、爆心にむく西側のガラス戸(巾一メートル、長さ二メートル)五枚は一枚もこわれずそのまま立っていたが、東側の同じガラス戸七枚は全部粉碎された。

爆弾炸裂地点から考えれば、西側がこわれるはずであるにかかわらず、反対側がこわれたのは不思議な現象であった。その他の扉も全部、とばされ、天井が吹きあげられた。

七、被爆後の混乱と応急処置

死体の処理

被爆後、地区内に救護所は設置されなかった。ただし、避難者が多くいたので、救急品の配給があった。

大洲地区に来て死亡した身元不明者は、薪がないので、倒れた家の古材を利用し、現在の大洲消防署のある場所で茶毘にふした。

仮埋葬は、各町とも、それぞれ適宜の場所でおこなったが、大洲町西組は主として競馬場跡でおこなった。

町内会の機能

地区内の町内会の機能と町内対策については、次のとおりである。

町内会名	状 況
大洲町東組	町内会が立直ったのは一年後、当時は衛生組合として発足した。
大洲町西組	町内会長健在、引続き事務を行なう。
大洲町南組	町内会長健在、引続き事務を行なう。
南蟹屋町	町内会長健在、引続き事務を行なう。

八、被爆後の生活状況

この地区は、火災が発生しなかったので破損家屋を応急修理して、どうにか過ごした。

八月末ごろの居住世帯数

八月末ごろの居住世帯数は、大洲町東組五〇世帯・同町西組約二五〇世帯・同町南組二〇〇世帯・南蟹屋町二七〇世帯であった。

ハ工は多数発生したが、特別のことはなかった。

生活物資は無く、広島駅前の闇市場を利用する者も多かったが、軍需品の放出で、やっと衣類や日用品を補った。食糧の買出しは大変はげしかったが、殆んどタケノコ生活で、その日暮しであった。

九、終戦後の荒廃と復興

台風

九月十七日の暴風雨、および十月八日の豪雨により、どの家庭もいたんだ家屋の大雨漏りに困り果てたこと以外には、別に記すほどの被害はなかった。

ただ、十月八日の大豪雨のときは、猿猴川土手(亀田工場の前の土手)の切れる危険が迫ったので、大洲地区、および蟹屋地区の住民に避難命令が出て、みな矢賀方面へ避難したが別に被害はなくおさまった。

虚脱状態

住民は深い虚脱感におそわれていた。しかし、中には、このような世情を尻目にして、無神経な行為や悪徳を働いた者もあったようである。

何の災害も受けなかったある一家は、毎日市中に大八車で通い、家を一軒新築できるほどの木材や瓦を、無人の半壊家屋などから持ち帰り、自宅にうず高く積みあげて、人々から白眼視された者もあったと言われるが、このようなことは、比較的被害の軽かった地区においては、他にもたくさんあったようである。

府中に避難して

山本伊留満(被爆地・大洲町一丁目当時一八歳女学生)

空襲警報解除...表の方でそんな声が出て、しばらくたってからB29の爆音がする。

母と二人でつくろいものをしていた私は「変だな。」と思って外に出て見ると、丁度、西方の空からヒラヒラと真赤な玉が糸に釣られて落ちてくる。思わず「お母さん早く早く赤い玉が落ちて行くよ。」と呼ぶと、母も「エエ」といいながら外に出た。同時にパッと光って、何とも言えない妙な音がして、一瞬真暗やみになる。夢中で私は隣り

の玄関の中に逃げ込んだ。ソーツと頭を上げてみる。ゴーツというような音とも言えない音がする。五分位たったか、いやどれだけたったかわからない。ようやく明るくなった。前の家も隣りも私の家もみるかげもなくいためつけられて、あたり一面足の踏み場もない惨たんたる情景となっている。母も驚いた。不思議な顔をして出てくる。「何だろうか、どこに落ちたのかね？」

二人は同時に同じことをいっている。表の方が急にザワザワしだした。二、三軒先の夫婦が二人とも、顔から手から血だらけになって、何やら叫びながら走ってゆく。わが家も天井は吹き飛び、屋根の合掌は折れ、座敷も台所もメチャクチャ、建具も何処に吹きとんでしまったのか、硝子は柱につき立ち、畳の上も下駄ばきでないととても歩けない。何処に何が落ちたのか、皆目誰にも解らない。B 29 はそれでもまだ時々飛んでいる。人々は右往左往し、不安は刻一刻とせまる。とにかく表通りに出てみる。

市内の建物疎開の手伝いに行っていた人が、けがをして帰ってくる。駅の方にいたという人も、顔を光線にやられたとか言って、ちょうど卵のカラの内がわにある薄皮のような物を、目の下から頬にぶら下げて帰ってくる。「駅は全滅よ、汽車も電車も自動車も皆燃えているよ。馬も立ったまま死んだよ。」といいながら何処かへ行く。町の役員をしている母は、事務所にすぐに出かけていったが、帰ってきて「とにかく一度逃げなさい。荷車にできるだけふとんを積んでゆきなさい。野宿をするから」と、そう言って、また出かける。国道まで出てみた。皆真剣な顔をしてドンドン逃げて行く。リヤカーに一杯荷物を積んだ人、風呂敷包を背負っている人、ちいさな子供をたくさん連れている人はまあまあとしても、大方裸の人が多し。フラフラと何処に行くというあてもなく、とにかく市内から逃げないと、町はもう火の海なので市外へ出てゆく。ちょうど道路

の傍に水道管が破裂して、水を噴き出している処に来ると、先ずひと息入れて、水を飲み、そして市外へ脱けだすために必要な罹災証明をもらっている。母はその証明書を一生懸命書いてあげている。私は母のいうとおりに安芸郡府中町の埃宮に逃げてゆく準備をする。重い荷車を引いて府中に行き、山のふもとにありつたけのふとんを敷き、大きなカヤをつつて漸く一息入れる。しかし休んでいる暇はない。次から次へと、けが人が運びこまれる。府中国民学校の校舎には、もう一杯で収容できない。仕方がないので校庭にそのままおかれる。それでも引っぱりなしにトラックが積んでくる。髪もマユゲも焼かれている全裸の人が、ほとんど言葉も出ないのか、誰もだまって目ばかりギョロギョロと光らせている、老婆がフラフラと私の前にやって来た。腰巻一つで意識もうろうとしている。「わしの家は何処や。」と尋ねる。

医者処に連れて行きたくても、どのけが人もひどく、医者も手一杯。何処から手をつけてよいのかわからない。軍人もたくさん送られてくる。軍刀を杖に自分も傷つきながら、部下を心配して兵隊をしかったりなぐさめたりしている将校もいる。

B 29 の爆音しきり。警戒警報のサイレンが鳴りひびくたびに生きた気持ちはしない。「機銃掃射をされるから用心なさい。」と警防団がメカホンで叫んで廻る。その内に山のふもとは被災者で一杯になった。

(中略)七日は、朝からもう死人を焼くために、警防団や町の人たちは大変だった。道路でも畑でも薪を積み上げて、次から次に運びこまれるのを焼いている。勿論名前のわからない人もいる。府中の役場でも、罹災者たちにおにぎり、また証明書、死んだ人の名前を書いておくことなどと、それはそれは大変な混雑だ。おにぎりをもろう人たちは、国民学校に長い列を作って待っている。

トラックは朝から引切りなしにけが人を運んでくる。私たちの傍に逃げていた人たちも、七日昼頃になっても、帰って来ない家族たちを気にかけて、大洲の方の家に帰ってみる人、また、大洲にも帰っていないために、町の方に探しに行く人たちも出てくる。

たいてい一軒の家に一人くらいは帰って来ない。こうした人たちは、一カ月もそれ以上も探し、そして自分も原因のわからない病気で死んで行った人もある。また毛が抜けたりした人もあった。しかし、毎日毎日町の方へ行っては何かを拾って来たりした人もあったが、現在でもピンピンと働いている人もある。

大洲では四キロ離れているというのに、顔半分真黒になって片方の目がしばらく見えなかった人もあり、顔や手、肩などに硝子がたって傷を受けた人もあった。私と母はすぐに伏せたのと、家の外に出たので傷を受けなかった。もしあのまま家の中にいたら、ちょうど硝子戸の傍にいたので、全身傷だらけになるところだったと思う。

父は産業奨励館(現在原爆ドーム)がその時の事務所だったので、出勤していたら到底助からなかった。けれども六日の朝は岡山で講演することになっていたのだから、家を七時前に出た。駅で一時間近くも待ったが、前夜の空襲のため、汽車の線路が破壊されているとかでなかなか汽車が来ない。仕方がないから、事務所へ行こうとしたら、ち

ようど軍用列車が入って来たので、それに乗り、西条に到着したとき、赤い光をみたとのこと。しかし別に気にせずそのまま乗って行ったとか。その夜、宿で「広島が全滅だ。」と聞いたので、翌朝早速下りに乗ったところ、海田まで来たら、それから先は汽車が進まず、仕方がないので、大洲まで歩いて帰り、帰ってみたらもう誰もいなかった。「どうしたのかしら」と、心配していると、隣の朝鮮の人が「皆、府中に逃げているよ。隣組みんな逃げているよ。」と教えてくれたそうである。父は七日の、夜七時頃、私たちを尋ねあてた。父だけはまた家に帰って行き、その翌日、奨励館の方へ行ってみたとか。工学部の学生さんにたくさん来てもらっていたのに、どうなったか心配して、その翌日もまたその翌日も、町へ行った。

五日目、家に帰って来ると何だか気分が悪くなって倒れたそうで、その後は、暫くもう町には出ないようにしたとか。私たち母と弟は、七日間を府中の山で過ごし、もう大丈夫だろうというので大洲の家に帰った。

父があらかじめ掃除をしていたけれども、住める部屋は、八畳の間一つだけ。それでも住むことが出来るのでありがたいことだ。ところが大洲は焼け残ったために、それからは人口が増えるばかり。電灯もつかず水道も出ない。しかし幸いなことに、あちらこちらと水道の鉄管が破壊されているので、水は流れ放だい。バケツを持って皆汲みに行く。これで水のなやみはなくなった。夜はとにかく早く休むことにして、あかりの儉約をする。こんな月日は何日続いたかしら。私もまだ子供だったので、よく覚えていないが、こんなこともあった。暗い夜、知っている朝鮮の人が「奥さん肉いらんか。」と言って来た。母が「まあどうしたの。」というと、「田舎から連れて来たの、川の方でたくさんの人で殺したよ。皆でわけたよ。」とのこと。そして少しだけどと言って置いて行った。真暗ななかで何とも気味が悪かったのを覚えている。

配給配給で何でも皆配給だ。戦争中から慣れているようだったのに、戦後は何だか皆の気が荒くなったようだ。小さなことにすぐ腹を立ててけんかをしている。母はいつもなだめ役である。

学校もボツボツ授業を始めた。私は女学院なので、牛田山に学校があってその方へ行くことにたる。大洲から牛田山まで約三キロぐらいか三キロ半ぐらいある。毎日広島駅前を通過して歩いてゆく。駅前には早くも闇市が立つ。何とも皆が皆、殺気だっているように見える。軍人さんの復員、また元日本領の外地から引揚げなどで帰った人、列車は入口から出入りする人もなく、皆窓から出入りしている。

(中略)九月になって、ひどく雨が降った日があった。大野の方が流れたとか。私の家でも大変だった。八畳の部屋一つしか、満足な室はないのに、坐れるタタミー畳もない程の雨もり。とうとう皆起きて、ありったけのカサをさして、一晩中おきていた。この夜、お隣りの家は二階建てで家は風にゆれ、雨は内か外かわからない雨もりのため、親子五人が私の家へ来て一夜をすごされた。

雨と風が止むと、早速大工さん呼んで、家の修理をしてもらう。大工さんも仕事がないので困るとこぼしていた。「屋根がどんどんもる筈ですよ。満足な瓦は三分の一もない。」と申される。私の家の近くに、セメント瓦を作る処があるので、そこに行って買うことにしたけれども、運んでくれる人は一人もいないので、私と母と弟と三人で、乳母車に積んで運ぶ。「あらかじめの修理しか出来ませんよ。」との大工さんの言葉。何しろ材料がない、天井の板も皆吹きとんでどうなったかもわからない。「段原の方に六畳分ぐらい持っている人がある。」とのことで、母と二人でそこまで買いに行く。建具も売っている処もないので、古いのをわけてもらう。それを大工さんが、どうか間に合せて、やっと家の修理が出来る。こうして冬を何とか一応迎えることが出来た者は、本当に幸福な人たちで、鼠の中にトタンをひろい集めて、一畳ぐらいの雨露をしのぐ所を作って住んでいる人もあり、寝る所のない人たちがたくさんいた。

大洲は焼け残ったので、たいいてい一軒の家に二世帯か三世帯はいる。食糧難はますますひどくて、大洲など運根を買いにくる人が多くいた。田の泥をたくさんぬりつけ目方を重くした。それでも買いたいために、泥運根と知りつつ、高いお金で買って行く人もいた。貨車から、毎夜砂糖、大豆などを盗んで帰り、それを闇市に持ってゆき、米や魚や肉などとかえたり、或いは衣類を持って行って、かえる人などもいるとかいうことであった。

それから、だいたい一軒の家で一人ぐらいは原爆で帰って来ない人があるために、「お宅では如何ですか。」と聞かれた場合、「皆元気ですと、お答えするのが何だかお気の毒でたまらない。」と母などは言っていた。近所で、一軒の家など、親類縁者二人を一度になくしたご老人などは、「もう何処にも行く所もなくなった。」と、嘆息しておられた。

私の隣り、左の方の家には、朝鮮の方が五家族皆で二三人子供も合せて住んでおられたが、本当に良い人たちは

かりで、働きに出ては珍しいものがあると、私の家に持って来てくれた。野菜も肉も魚も、母は一度も買出しに行かなくて済んだのは、この人たちのおかげだったと、今でも感謝して言っている。この人たちが朝鮮に引揚げるときは悲しかった。永いあいだ日本で硝子工場に働き、良い生活をしていたのに、急にこんなことで引揚げなければならないのに、本国にどうやって帰るか、あてもなく不安がっていたけれども「引揚げ船に乗って帰ることが出来るから帰ることにした。」と言って、一夜自分たちの手製のドブクロでお別れ会をした。そして持てるだけの荷物を持って、「お世話になって有りがとう。」と言いながら、なごり惜しげに帰っていった。炭や薪や煉炭など、皆が皆全部、私の家にあげますと言って、庭に山のように積んで、雨にぬれないように上からトタンをかぶせて、小さな家みたいにかこって、チャンとしてくれた。親切なあの人たち、今はどうしているかしらと、よく母と二人で話す。「どうぞ幸福になってくれますように。」と祈るのである。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

東蟹屋町、愛宕町、若草町、尾長町、山根町、曙町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目、光町一丁目 二丁目、光が丘

町内会別要目

この地区の範囲は、曙町[あけぼのちょう]・東蟹屋町[ひがしかにやちょう]西部・同東部・西愛宕町[にしあたごまち]・東愛宕町[ひがしあたごまち]・若草町[わかくさちょう]・尾長町三本松[おながちょうさんぼんまつ]・同東山根[ひがしやまね]・同西山根[にしやまね]・同丸山[まるやま]・同片河[かたこう]・同尾長[おなが]・同岩鼻[いわはな]とし、爆心地からの至近距離は、大須賀町に接する広島駅裏の地点で約二キロメートル、もっとも遠い距離は、矢賀町に接する岩鼻の地点で約三・八キロメートルである。

尾長地区は、毛利氏の広島城築城とも因縁深く、広島市の各町のなかでも古い地区で、「尾長山麓に在り、依りて此名を得たり。福島氏が在城の時、矢賀村より分ちて一村とし、広島に属せしむ云々...」と広島市史(大正十四年刊)にあるが、藩政時代は、隣接の安芸郡矢賀村との境、尾長町が国道山陽道の東方の基点であって、そこから愛宕町を経て城下に入っていたから、この路線をはさんで町家が栄えた。

戦前までは、なお田畑も多く、半農半商の居宅がならんでいた。

被爆の当日、地区内の東練兵場や山林地帯には市中心部からの罹災者が多数殺到して酸鼻をきわめた。また、多くの罹災者は、国道沿いに矢賀方面へ、または東練兵場から大内越峠[おおちごだお]を経て中山村[なかやまむら]・温品村[ぬくしなむら]方面へむけ、陸続と歩いて避難して行った。

当時、この地区の建物総戸数は約二、二八七戸で、世帯数二、三六五世帯・人口約九、二五二人で、各町の内訳は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
尾長町東山根	265	265	1,058	水野敬二
尾長町西山根	115	120	490	中山佐吉
尾長町丸山	115	127	455	林登
尾長町片河	439	416	1,673	村上源次郎
尾長町尾長	220	288	1,231	秋月茂一
尾長町岩鼻	58	61	256	能崎乙吉
尾長町三本松	157	157	720	上田兼一
曙町	78	76	275	寺尾月水
東蟹屋町西	211	211	875	信川義雄
東蟹屋町東	110	117	430	平林亀吉
愛宕町西	126	122	554	和田実
愛宕町東	210	210	520	大原良宅
若草町	183	195	715	大橋馨

なお、地区内に所在した主要建物(または事業所)は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
尾長国民学校	尾長町	天満宮	東山根
松本工業学校	尾長町	瑞川寺	東山根
尾長鉄道寮	尾長町	荒神社	曙町一丁目
県立盲学校	尾長町	愛宕神社	愛宕町
市立東隣保館	尾長町	湯沢綿業株式会社	愛宕町
国前寺	東山根		

二、疎開状況

人員および物資の疎開

地区内の疎開作業として、鉄道線路側の家屋の疎開があり、西愛宕町が一八戸、若草町で二〇戸ばかりが軍隊によって取りこわされたため、その該当者が立退いた。

六〇歳以上の老人ならびに病人子供は、縁故疎開することになっていたが、ただ一部だけ疎開したのが実状である。物資の疎開は郊外の縁故先に疎開させたものが多かった。中には蔵があるからと考えて疎開せずにいたが、爆

風によって破壊され、火が内部に入ったため、結局焼失したのもあった。

学童疎開

学童疎開については、尾長国民学校は、全学年を通じて昭和十九年十二月ごろから二十年三月ごろまでに、極力縁故疎開をすすめた。

同年四月ごろまで約五〇〇人を減じて残留児童約八五〇人となった。そのうち三年以上の者で適当な疎開先がなく疎開を希望する二五〇人が比婆郡小奴可村・八銚村の二か村に集団疎開した。職員九人が引率し、村内五校に分れて勉強した。一、二年生と三年生以上の疎開しない残留児童約六〇〇人は、学区内で適当な数箇所をさだめて、寺子屋式授業をおこなった。

三、防衛態勢

警防団を結成し、隣保組織の整備充実をおこなった。防空壕資材の充実・竹槍訓練・防火訓練・避難と救護訓練・灯火管制訓練などを繰返して態勢の強化をはかった。

昭和二十年六月、国家総動員法により広島市国民義勇隊が創設されたので、尾長国民義勇大隊(隊長村上源次郎、副隊長和田実・上田兼一)を編成し、東練兵場において閲兵式を行なった。

四、避難経路及び避難先

曙町・蟹屋町東、西・愛宕町東、西・若草町・尾長町三本松の各町内会は、避難先として一応、安佐郡中深川村方面を指定していたが、被爆当日は家屋の全壊焼失のため混乱状態に陥り、それぞれが、親類知己をたよって避難した。また、尾長町山根東、西・丸山・片河・尾長・岩鼻の各町内会は、安芸郡府中町・中山村・戸坂村・温品村所在の寺院や国民学校に定めていた。

避難経路としては、矢賀町経由で、府中町または温品村、あるいは、尾長町大内越峠経由で中山村・戸坂村へ避難することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

地区内に所在した陸軍部隊集団は、次のとおりである。

兵種・名称	所在地	兵種・名称	所在地
高射砲部隊	尾長町二葉山頂	築城部隊	尾長国民学校内
防空隊	尾長山頂	不明(多数)	尾長町天満宮境内
暁部隊通信隊	松本工業学校内	不明(多数)	瑞川寺境内

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

尾長町東山根町内会では、国民義勇隊尾長分隊として、六日に鶴見町の家屋疎開作業に出動の命令を受け、五日の夜は、準備が終了していた。これは、尾長学区が、八月四日から出動命令を受けたので、学区一三か町の町内会長は、八月一日、分隊詰所に集合し、抽せんによって各町の出動日を決定し、六日は東山根町内会が当番にあたったためである。

五日夜から六日朝にかけての空襲警報発令の時は、平素の訓練どおり防空壕に待避した。

町内会は隣組単位に不寝番を定め、一定の場所を屯所として交替で詰め、警戒警報が発令されるや夜は灯火管制を厳重に取締って廻った。

六日朝

尾長分隊(東山根地区)二二〇人は、六日午前六時集合、点呼後六時三十分に出発して、鶴見町の家屋疎開作業に出動中、猿猴橋で警戒警報の発令があったが、まもなく解除され、七時四十五分目的地に到着し、県庁職員の指示を受けて作業順序の打合せ中に被爆した。

この他の各町町民は、警戒警報解除となったので、それぞれ平常どおりの活動を開始し、出勤する者、用事で外出する者などあり、人員の被害は大きかった。

ほとんどの者が、敵機が侵入するとも思わなかったが、南方から北方に高度を保ってゆく敵機を目撃した者(尾長)もあり、西山根でも敵機を相当人数の者が認めている。しかし、爆音は聞えなかったともいう。

愛宕町では、B 29 が相当に高い高度を保ち、市外温品・馬木方面に行くのが見られたが、瞬間、閃光があり、爆風が襲い、屋根瓦やノジ板が破壊され、埃が舞いあがって、たちまち周囲が真っ暗になった。

七、被爆の惨状

至近弾と錯覚

炸裂のとき、誰もが一瞬、大型至近弾を受けたものと思ったが、まもなく全市広範な被害であることが判明した。

負傷者殺到

市中至るところに黒煙があがり、義勇隊員として疎開作業に出ていた尾長東山根分団の隊員は、形相全く変り果て、軽傷者は重傷者をいたわりながら、部分集団で帰って来た。

このように東山根は、働き手が疎開作業に出ていたのので、留守番の老人子供、または一人前の働きのできない婦女子ばかりであった。しかし、多数の負傷者があとからあとから押しかけて来て、水を求める者、負傷手当てを求める者など多く、これらの救済に町民は全力をつくした。

愛宕町方面では、爆風で倒された家屋はほとんどなかったが、全部の家が東へ傾き、屋根が抜け、障子・襖類も全部バラバラになった。最初閃光がして黄色い霧のようなものが降ったかと思うと同時に、野菜の広葉や樹木の葉がジリッと焼ける音を聞いた。たちまち塵芥が周囲を包んで、一寸先も見えない状態になった。

ガラスの破片で顔や手を切り、全身血だるまとなって素足で逃げる者、ヤケドをして顔や手が腫れあがり、しかもそれに屋根裏の煤がおっかぶさり、まっ黒になった者、子供を背負って逃げる途中、子供が死んでいることに気づき気狂いのように泣き叫ぶ者、水、水と叫びながら路上に倒れている者など、この世にあらぬ修羅場が出現した。

出火

正午ごろ(確かな時間不明)、愛宕町の湯沢綿業工場の原棉が、放射能熱線により着火した。これが火元となって四方に延焼し、尾長町の松本工業学校・尾長国民学校へと燃え続け、ついに東山根に火の手が迫って来た。しかし、この頃には、町民はすでに、敵機の波状攻撃を怖れて、子供や負傷者を連れ、それぞれ避難したあとであったから、町内にとどまっていた七、八人の者や隣町の者が、バケツ操法で決死の注水をおこなって防火につとめた。幸い日暮れになって風向きが変わり、辛うじて延焼をくい止めることができた。火災が終息したのは午後六時四十分ごろであったが、町内残留者の防火活動と共に、東消防署矢賀出張所の出動、あるいは夜になってからの呉消防署の来援などが防火の大きな力となった。

約七五戸を焼いたが、一応延焼をくい止めたので、残留していた者も山林地帯に避難したが、この付近では、炊事の残火による出火が無かったから、全焼という災害を免れたと言える。

なお、尾長町西山根の瑞川寺(爆心地から約二・七キロメートル)のワラ葺屋根が、放射熱線によって自然着火し、たちまち全焼した。

避難状況

町民のほとんどは、被爆直後、事の異常さと、緊迫した危機感に襲われて、近くの山林地帯や東練兵場に避難した。中には、中山村・温品村、あるいは矢賀町・府中町などへ、さらに奥地の知人を頼って逃げる者もあった。ここらは、市中心部からの避難者も多くて、中山・温品両村に通ずる大内越峠(おおちごだお)(幅員五・五メートルの県道)は、幽鬼のような負傷者が道路一杯に溢れており、バタバタと倒れる者が続出した。また尾長の岩鼻・矢賀町を経て更に奥の府中町方面へ避難する罹災者もえんえんとつづいた。

瞬間的被害

炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
尾長町	-	90	10	-	16	26	58
尾長町岩鼻	-	30	70	-	30	70	-
曙町	10	80	10	-	2	31	67
東蟹屋町	16	72	12	-	3	31	66
愛宕町	90	10	-	-	3	42	55
若草町	80	20	-	-	3	42	55

火災発生炎上の状況

また炸裂後、火災発生・炎上については、次のとおりである。

町名	最初に発火した炎上		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
尾長町東山根	尾長国民学校	午後三時頃	西側尾長国民学校校舎より順次延焼 東側松本工業学校校舎より順次延焼民家 約四〇%	午後六時四十分
尾長町西山根	瑞川寺	被爆直後	瑞川寺は草屋根であり、自然着火により 焼失した	
尾長町丸山	松本工業学校	午後二時頃		

尾長町片河	なし			
愛宕町	愛宕神社 湯沢綿業工場	午後十二時頃	焼失	
曙町	荒神社	午後七時頃	焼失	
尾長町尾長	なし			
尾長町岩鼻	なし			

諸現象

炸裂後、この地区には、降雨はなかった。

鉄道線路ぞいの電柱が一本、自然着火で焼けはじめ、ちょうど線香をたくように、四、五日間燃えつづけた。火災終息後、愛宕町の鉄道踏切りから、市の西方町跡が一望に見渡され、己斐の町まで眺めることができた。

八、被爆後の状況

道路啓開

八月七日ごろ、郡部から警防団員が多数来援して、道路の瓦礫や残材などを整理したが、地区の道路通行に支障をきたすようなことはなかった。

救護所設置

国前寺の救護所では、呉海軍鎮守府派遣の医療班、賀茂海軍衛生学枝隊、及び豊田郡医師会などが出動して活躍した。なお、東練兵場では呉・三原両市医師会の医療救護班も設営して治療活動を行なった。

死体の収容と火葬

他地区からの避難者のうち、重傷者は、次々と死亡し、死体の焼却には難渋した。後日、東練兵場跡開拓地で、農耕者が白骨を発掘したことがあるが、焼却した死体の人名・身元などの確認状態は不明である。また、死体収容・焼却者も不明であるが、その家族や縁故者が処理したのもかなりあったようである。なお、死亡者は、大内越峠の私営火葬場紫雲館においてもたくさん焼いた。

遺骨の安置、慰霊については別に記す資料がない。

町内会の機能

各町内会の機能は、被害軽微の地区は支障なかったが、その他の被災地区では、各自が自活の道をひらいた。町によっては被爆前の町内会組織で町内会長を作り、物資の配給その他の業務を行なうことができた。

応急住居

破壊家屋は、降雨をしのぐ程度の応急修理をおこなったが、資材不足で思うように出来なかった。

家屋を焼失した者の中には、焼残りの古トタンや古材で、仮小屋を造って住んだ者も一部あったが、当分、縁故者の家に仮入居する者が多かった。

二十一年四月、尾長町三本松の上田町内会長が家屋を最初に新築した。このごろはまだ、屋根を応急修理してどうやら雨露をしのいでいる者が多かった。

地区外へ避難した者のなかには、当分の間、帰って来ない者も多くいた。

八月末居住者状況

なお、八月末ごろの居住世帯概数は次のとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数	町名	世帯数
尾長町東山根	130	尾長町尾長	250	西愛宕町	75
尾長町西山根	160	尾長町岩鼻	60	東蟹屋町東	33
尾長町丸山	100	若草町	98	東蟹屋西	135
尾長町片河	400	東愛宕町	68	曙町	105

生活環境

被爆後、この地区内でも八工が多数発生した。死体の始末が不完全であったからと思われるが、駆除薬もなく、不衛生きわまりなかった。九月初め、占領軍の飛行機が薬剤を撒いてから減少した。

電灯がともらないので、相当期間、夜は「くらやみ生活」が続いた。電灯がついた時期は、素人工事が多く個々別々の点灯ではっきり判らない。

住民復帰

一般町民の復帰は散漫であったが、尾長国民学校は東隣保館幼稚園部、および高天原の旧通信部隊バラック兵舎七棟(一二〇坪)を利用して、十月一日から授業を開始した。当時、児童数約三〇〇人、職員二四人であったが、日増しに復帰する児童や転入する児童がふえていった。

九、終戦後の荒廃と復興

九月十七日の暴風雨と十月八日の豪雨禍はひどく、破壊された家屋は、資材不足・経済条件または労働力不足などから、完全に復旧されていなかったものでひどく雨もりして困難した。

山崩れのため、土砂が流出し、河川が氾濫し、各家屋とも床下浸水した。

三日月型の傷

原田守行(談)

当時私は、曙町三丁目三九九番地の二階建の家に住んでいた。

六日は、八時ごろ起床した。真夏だったので、パンツ一枚のまま、屋外の共同水道で歯を磨いていたら、B29のぶい爆音が聞えた。「おかしいなあ、警戒警報も、空襲警報も鳴らんのに、B29が飛んでいるぞ。」と、家族の者に言いながら、二葉山の方を見ると、ちょうど山頂の上から姿を現わすところだった。見てみると市の中心部の方向に飛んでゆく。と、マをおかず、ピカッと、それは、ちょうどマグネシウムを燃やしたような強烈な閃光であった。

びっくりして伏せた瞬間、グワッと爆風がきて、グラグラ家が左右に揺れた。床下に潜ろうとしたが、このように家が揺れたのでは、倒壊して下敷きになるぞと、瞬間的に思ったので、近所の防空壕目ざして走りこんだ。そしてひと息つく間もなく、女房や子供のことが心配になり、これはひょっとすると、やられたかもしれんと、壕の外に飛び出し、無我夢中で女房や子の名前を呼んだ。

あとで知ったのだが、女房は、そのとき朝めしの準備ができたので、屋外に出て、遊んでいる子どもを探しながら、五、六軒先の長屋の小路の角に立っていた。

ちょうど向いあっている長屋と長屋との、幅三尺の通路に子どもがいたので、近寄ろうとして歩きかけたたん、爆風のため、二階がガラガラと頭上に倒れかかって来たが、幸いだ事に、筋向いの平屋建の家に、二階が倒れて、もたれかかったため、母子がいた所が空間になり、奇蹟的にカスリ傷一つなく助かった。もし、この平屋がなかったら、倒壊した家屋の下敷きになっていたに違いない。

防空壕に逃げこむときは、自分一人だけだった。壕には人がいたが、飛びこんで来た私の頭をみて「大変な出血だ。」と言う。それで初めて気づいたのだが、頭部に三日月型の、ちょうど「く」の字を逆にしたような裂け目から、血がタラタラ流れていた。当初伏せたときは、痛みも何も感じなかった。しばらくして、家内と子どもが防空壕に入ってきたので、互いにその無事をよろこびあった。これは聞いた話だが、建物の陰や木陰にいた人は、爆風で飛んできた板切れなどで少々けがをした程度だが、日光があたっているところにいた人は、熱線の直射を受けなくても火傷をした。被爆距離にもよろうが、太陽の光線と、この熱線とが何らかの形で作用したのであろう。

従って原爆投下のとき曇天ではダメで、快晴のときに投下しないと効果があがらないのではないかと考えられる。米軍が、投下直前に、観測機を飛ばして気象状況を調査しているのを見てもまちがいない。

防空壕には一四、五人ぐらい入っていたが、衣類や医薬品などは全然なかった。

しばらくして、段原の店が気にかかるので頭部に繻帯の代りにタオルをまき、国民服にゲートルをまいて身仕度を整え、家を出た。大正橋まで歩いて来ると、医院があったので診てもらったら「ここでは手当てできない。」と簡単に薬をつけ、繻帯を巻いてくれただけだった。他に娘さんが一人治療を受けていたが、ズロース一枚のまる裸に素足、全身火傷とけがである。聞いてみると、女子商業の一年生で、鶴見橋方面に、建物疎開作業に動員されて、現場で点呼を受けていたとき被爆したという。手当てをする薬もなく、油だけ塗ってもらっていた。

外に出てみると、ゾロゾロとおびたらしい避難者が歩いてしたが、ほとんどの者が着衣はボロボロ、中にはまる裸、そして裸足。それはひどい光景であった。

道端には死体がいくつかがっていた。

避難者の中に知人がいて「おーい、そこにおるのは守さんか、原田の守さんじゃないか。」と、声をかけてくれたが、こちらは相手が誰か判らん。キョトンとしていると「わしじゃが...」と名乗られてはじめてわかったくらい顔面がヤケドしてふくれあがっていた。「あんたはどうして火傷したんじゃ。」と、問うと「わしも、どうして火傷したのかわからんのじゃ。」と答える。まさか原子爆弾で、こんな姿になろうとは、誰も思わなかった。原子爆弾は未知の兵器であったからである。

それから、向うから来る避難者が、ボロをさげてくるので、「バカな奴じゃのう、そのきたないボロなんか脱げば

ええのに...」と思いながら近寄って見ると、なんと、これが、皮膚が剥げて、ぶら下がっているんだから脱ぎようがない。まったくおどろいた。

段原の店に来てみると誰もいない。しばらく居って、また曙町のわが家へ帰ってみようと思い、大正橋まで来ると、着剣した兵隊がずらりと並んでいて、通行止めにしていたし、附近の家々は火炎に包まれ、その火勢がひどく、道をふさぐように燃えあがっていた。

それで、川土堤を引きかえして大洲へ渡る橋を渡り、大洲町一丁目に出て、そこのガードをくぐり、岩鼻をまわり、曙町に帰った。それが正午ごろだった。

曙町の家はどうだろうかと思えば、幸いなことに火災はなく、ただ傾斜しているだけであったが、屋根瓦はずり落ち、壁も落ちて、柱がやっと支えているという感じだった。

家の中に一歩足を踏み入れると、中は、何かで掻きまぜたように、物が散乱して足の踏み場もない。それでも、当日の晩は、家の中で寝る事もできないので、ゴザと蚊帳と毛布をもって、近所の畠の中に寝ころんだ。だが何とも小虫が多くて、じっと寝ておれないので真夜中に家にもどり、玄関脇の二畳の間を片づけ、そこに親子が寝た。

なお、先のB 29は、一機の爆音を聞き、一機の姿を目撃したのであって、他機のことには知らない。

一、地区の概要

この地区は、矢賀町[やがちょう]の一町で、爆心地からの至近距離は、尾長町と接する地点で約三・二キロメートル、もっとも遠い地点は、安芸郡温品村と接する地点で約四・五キロメートルである。

地区中央を南北に、国鉄芸備線が貫通し、北側はなだらかな丘陵地帯をひかえ、平地部は、当時、静かな田園がひらけていた。

往古は海辺の一集落であったが、矢賀村集落の東に、入海を作っていた矢賀浦はしだいに陸地化し、矢賀沖と呼ばれた今日の蟹屋町・大洲町一帯の地がつぎつぎに開かれていったのであって、昭和四年四月一日、隣接七か町村合併の際、広島市に編入され、つぎの広島市の成長の出発点となったのである(新修広島市史)。戦後、さらに市の復興と共に面目を一新して、田園地帯から一躍住宅地帯として急速に市街化が進んでいるが、なお、空気も澄み、小鳥もさえずる静かな良い環境を保っている。

被爆当時の総連物数は四二三戸で、四二六世帯、人口は一、七二二人、矢賀町内会長は穴戸義太郎であった。

原子爆弾炸裂による家屋の倒壊はなかったが、衝撃を受けた損害はかなりあった。人畜の被害はなく、火災も発生しなかった。

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
矢賀国民学校	矢賀町八四四	国鉄広島工機部	矢賀町
覚法寺	矢賀町		

二、疎開状況

農業地帯であるから、食糧増産に追われて、現住居を放棄するようなことは、まったく考えられない実情にあった。従って人員の疎開はなかったが、物資の疎開は、米や平生着用することのない晴着などを、郡部へ疎開している人も多かった。また、逆に市中心部からこの町内へ疎開して来る人もかなりあった。なお、学童たちは、郡部に縁故者のあるものは縁故先へ、ないものは佐伯郡玖島村(現在佐伯町)へ集団疎開をした。

三、防衛態勢

地区のほとんどが山林・田畑であって、街道に沿って家がたちならんでいた。戸数が少なかったから、以前は隣接の尾長町と合同で、防空・防火訓練を実施していたが、警防団を組織してから一町内会一警防団で独立して防空・防火の訓練を行なった。ただ、防空小区は尾長町と同一の小区であった。

防空壕も町としては設けなかった。しかし各家では、最寄りの山腹か、または家の内外の適宜な場所に、それぞれ小型防空壕を設けていた。

なお、軍隊関係は国鉄広島工機部の建物の一部(字向崎)に一、二人鉄道隊が駐屯していた。

四、避難経路及び避難先

地区の立地条件から、被災率が低いと考えられて、避難経路とか避難場所とかを特に決めておくということはしなかった。市内とはいえ、多分に郊外の村落的な性格の町であったから、むしろ、八月六日被爆当日は、逆に市中心部から避難者が殺到した。

この日、矢賀町は挙げて、これら避難者群の受入れのために活躍し、矢賀国民学校は、当日から救護所(後に日本医療団体の臨時治療所)となった。

五、五日夜から炸裂まで

警報が発令されるたびに、警防団は勿論、隣組の当番は、所定の防空態勢に入ったけれども、空襲時以外は防空壕へ入って待避する者はいなかった。

六日午前七時三十一分からは、警戒警報が解除になったし、町は静穏そのもので、建物疎開作業に出動する者(鶴見町・約一三〇人)は、出かける仕度をし、炸裂時には、全員整列し、義勇隊長指揮のもとに、作業の分担を受けていたところであった。

六、被爆の惨状

爆風襲来

原子爆弾による家屋の倒壊とか、火災の発生はなかったが、閃光を感じた瞬間、天井は吹きあげられ、壁は剥落し、建具なども吹きとばされたり、こわれたりした。ただ、山の陰にあった一戸だけが、まったく被害がなかった。

しかし、稲田で耕作していた者の中には、熱線で火傷した者があって、尋常でない衝撃を直感し、一応は防空壕へ避難した者も多かった。

しばらくすると、市民や兵隊が続々と避難して来はじめ、ようやく事の重大さを知った。

炸裂による被害

地区内の原子爆弾炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

町名	家屋被害 (%)					人的被害 (%)			
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無傷の者	計
矢賀町	-	-	99.9	0.1	100	-	5 (通勤先で負傷した のも含まれる)	95	100

飛来物を拾う

矢賀には、雨は降らなかったが、屋根の鉄板や燃え残りの板が、地区内のそこここから降って来た。子供が面白がって、飛来物を追っかけて拾ったりしたが、それがためか発熱した子もいたという。

稲の葉焦げる

時節はちょうど稲の穂が出る前であったが、田の全面をおおって茂っている稲の葉の上を、閃光が放射線状に走って、扇型に葉のおもてが焦げているのが見られた。

七、被爆後の混乱と応急処置

避難者殺到

矢賀は被害僅少で救援隊は来なかった。しかし、避難者がドッと押し寄せてきたので、町民総出で、救急態勢をととのえ、受入作業に専心立ちはたらいた。矢賀を通して、中山村や府中町に行こうとする避難者が、道路に溢れて大混乱を起した。しかし、行く途中で死ぬる者もたくさんあった。

応急救護所の開設

六日は、負傷者をつぎつぎに矢賀国民学校に収容し、主として警防団の手によって看護をおこなった。

負傷者は後を絶たず、救護所だけではまにあわないほどであったから、学校の教職員や町内会役員及び町民が医師の手伝いをして働いた。

この矢賀国民学校の救護所は、二十年十一月から負傷者の治療だけをおこなったが、それから二、三年後まで存続していた。

また負傷者を、そのまま学校に収容しておくことが困難になったので、二十年十一月、宍戸町内会長の出資(一、五六〇万円)によって病院が建てられることになった。

死亡者続出

応急救護所に収容した負傷者たちは、六日から三日目頃までに続々と死亡していった。しかし、被爆後一週間ぐらいまでは、生きていた負傷者の救護に全力を傾注するほかなかった。幸いにして、救護所で扱った死亡者は、市中から少なくともここまで逃げて来ることができた人々であったから、住所・氏名が確かめられていたため、身元不明の死体は出なかった。

火葬と埋葬

火葬は、十日頃から郡部(瀬野など)から来援した警防団の応援を得て、約一か月半位はつづけられた。火葬場所は、初めは矢賀国民学校運動場で毎日四、五体ずつおこなわれたが、後には府中町の川土手において、学校教職員や町内会役員・警防団員・その他町民が協力しておこなった。

慰霊祭

二、三年後、国民学校校庭の、火葬場所にした一隅で慰霊祭を執行した。この火葬場は、そのままにしておけないので、ねんごろに死者の霊をとむらい、土砂を埋めて整地した。

町内会の機能

予想もしなかった市中からの多数の避難者で、町内は急に騒然となったが、町自体の機能は健全であったから、避難者対策について、食糧の確保・炊出しなども、町内役員の努力と相俟って円滑におし進めることができた。

八、被爆後の生活状況

人口急増

この地区へ避難して来た人たちの中には、被害の少なかった矢賀に、そのまま住みついた人が多かった。それがため世帯数が急増し、八月末ごろの居住世帯は一、二〇〇世帯(被爆直前四二六世帯)にふくれ上がった。

しかし環境衛生は、きわだって悪化することもなく、八工の発生もごく僅かにとどまった。

電灯も、四、五日後には、各家庭につくようになった。

復興進む

人的にも物的にも被害軽微であった矢賀町は、避難者の処置が一段落すると、居住者が急増したとはいいながらも、再び本然の農産地帯の平穏さを回復し、自給自足のできる食糧事情の強みもあって、足早やに平常状態に復興していったのである。

一、地区の概要

中山[なかやま]は、昭和三十一年四月一日、安芸郡中山村[あきぐんなかやまむら]から市部に編入された地区である。

爆心地からの至近距離は、尾長地区に接する山地で約三・〇キロメートル、もっとも遠い地点は、戸坂地区に接する山地で約五・四キロメートルである。

この地区は、東部と西部の山にはさまれた山間地帯で、耕地面積も、他の田園地帯にくらべると僅少である。従って、以前は戸坂・井ノ口とならんで海外移民・出かせぎ者が多かった。

明治三十年ごろから昭和七、八年にかけて、ハワイ・アメリカ・ブラジルなどに渡航した者が多く、農業特に、果樹園(ブドウ園)の労働に従事したという。

被爆当時の村の建物総戸数は二四六戸、世帯数は二九三世帯、人口一、八一二人であった。

地区内の主要建物(または事務所)は、次のとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
中山村役場	中山村一八三三の二	稻生神社	中山村二〇九四
中山国民学校	中山村八二五	万休寺	中山村二二〇五
中山村農業会	中山村一八三四の一		

二、疎開状況

疎開状況

当時、郡部であったため、地区内から他へ疎開した者はなかった。逆に、縁故先をたよって、市内からこの地区に疎開して来た者が五三世帯、三〇八人いた。

物資疎開については、村民同志で、土蔵のある家にあずけた者がたくさんあった。また、ほとんどの家が市内から疎開物資をあずかっていた。土蔵のある家はもちろん、納屋から座敷まで積みこんで、寝る部屋があるだけという家もあった。

軍隊の物資も、七月下旬ごろから持ちこまれ、師団司令部の陣営具は万休寺へ、工兵隊の陣営具は東会館へ、また民家へは暁部隊の乾パン、歩兵補充隊(二部隊)の日用品、憲兵隊の事務用品などが疎開された。

この地区では学童疎開はなかった。

三、防衛態勢

警防団

村内の防衛・防空・防火態勢は、主として警防団長の指揮によって行なわれた。

村内八部落にそれぞれ部落長を置き、その下に八戸ないし一〇戸ぐらいの隣保班を設けて、防空・防火の訓練をおこなって、態勢をかためていた。

また各戸は、防空壕を作って待避に備え、国民学校は避難訓練を怠らなかった。

国民義勇隊

昭和二十年六月一日、中山村国民義勇隊結成式を挙行政した。

牛田町と中山村との境界に、西山の国有林防火線が作られた。

なお、郡部であったため、避難経路とか、避難先については別に決めていなかった。

四、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
暁一九〇四部隊功績霧本部	万休寺	七月初め・疎開駐在九月十二日・引揚げ
憲兵隊(残務整理)	中組自治会館	九月二十四日から駐屯十月十二日・解散

五、五日夜から炸裂まで

五日夜

警防団員が村内を巡視し、隣組の班長は班内の灯火管制状況を調べたが、各家とも、夜間は消灯して寝るのがほとんどであった。

家が密集していないので、消火態勢は警防団だけがとっていた。

中山村は、三方を山にかこまれ、軍需工場や重要建物もないので、空襲のおそれが少なかった。五日の夜、空襲

警報が発令されても防空壕へ待避する者は少なかった。

六日朝

六日朝も、田畑の仕事や勤務に出たり、児童は、登校していたので、家にいる者は老人と幼児だけであり、警戒警報は日常茶飯のことで、あまり関心を持たなかった。

村内への爆弾投下など皆考えていなかったから、それぞれ平素のとおりに行動して平穏であった。

敵機を目撃

当時の中村忠実村長の語るところによれば、「午前八時十二、三分ごろ、まっ白いあたかも真綿のかたまりのような飛行雲を引いた一機が、爆音をたてて東北から頭上を少し北寄りに西南に向かって行った。同時刻ごろ、西方から一機来るのが見えた。両機が出合ったころ、落下傘のような白い物が投下されたと思ったら、シューシューと音をたてて落ちた。

瞬間、もの凄い閃光が目射たので思わず身を伏せた。」という。

敵機が東方から一機と、西方から一機来たのを見た者は多い。投下後二時間ぐらい後にも爆音を聴取したし、午後二時ごろにも聴取した者がいる。

当日、市内へ疎開作業に出動していた者はいなかった。しかし松根油をとる窯築造用の煉瓦を持ち帰ろうと、市内の的場町へ、この地区から約四〇人が隊を組んで出かけていたため、これらの人々が被爆して、死んだり負傷したりした。

六、被爆の惨状

閃光

炸裂の閃光は、マグネシウムをたいたような光り方で、その強度は闇夜に流れ星が落下して発する強い光のようであった。見た瞬間、身を伏せずにはいられないほどの異様さであった。

炸裂

炸裂音は、伏せて身を押えていても、なお鼓膜をズンと強く打ち、破れたのではないかと思われた。しばらくのあいだ耳がツーンと鳴っていた。

爆風の威力

爆風は伏せている体を、一瞬浮きあがらせる感じがした。

爆風と同時に、建具や障子はメチャメチャになり、ガラスの破片は座敷中に砂を撒いたように散乱し、ふすまにも無数に突き刺さっていた。天井は吹き上がり、足を踏み入れる場所もなく、まったく処置のない家が大半であった。

柱の折れた家も少しあったが、倒壊には至らなかった。

どこの家でも突然の破壊にびっくりして、自分の家が爆弾の直撃を受けたものと錯覚した。

国民学校へ作業(ゾウリ作り)に行っていた児童は、幸いに運動場にいたため負傷者が少なかったが、驚きあわて、ある者は叫び、ある者は母の名を呼んで、山間部へ先生と共に避難した。また学校付近の、ある児童はころがるようにして川伝いにわが家へ逃げ帰った。

このような異常事態の発生にも、地区の住民で他町村へ避難した者はいなかった。

また村内では、炸裂による火災の発生はなかった。午後一時半ごろ、五分間ぐらい雨が激しく降った。

村内被害状況

炸裂時の村内被害は、つぎのとおりである。

常会名	家屋被害(約%)					人的被害(約%)				
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	行方不明	無傷の者	計
中山村	なし	85	14	1	100	なし	30	なし	70	100

(但し市内に出ていた人的被害は含まない)

諸現象

原子爆弾の炸裂で、光線の通った筋の稲の葉が三分の一ぐらい赤く焼けていた。赤く焼けた稲の葉は、九月初旬から稲の発育につれて判らなくなった。このほかのことでは別段に変わった現象は起らなかった。

爆風による家屋の被害は甚大であったが、ガラスの破片によって傷をうけた者以外に、人畜の被害はなかった。また、電線その他の物にも異状はなかった。また、松根油窯を作るため、的場町へ煉瓦を取りに行った者の中で、物のかけにいた者、また煉瓦を取るためかがんでいた者は、火傷を受けなかった。煉瓦を積んだ車を引いて帰る者

のうち、黒衣の者は重傷を受け、遂に死亡するに至ったが、白衣の者の傷は軽微であった。

七、被爆後の混乱と応急処置

避難者の殺到

当日、午前八時四十分ごろ、広島駅から自転車で、県土木出張所の職員が避難して来たのを皮切りに、九時ごろから十一時過ぎまでは、長い列をつくって避難者が殺到して来た。

市中からひとまず東練兵場や尾長町一帯に脱出して来た大勢の避難者は、各所に火災が発生し、尾長国民学校もついに危険になったとき、そのなかの一人が「大内越峠(オオチゴトウゲまたはオオチゴダオという)を越して中山へ逃げよう。」と叫んで、行動を起したところ、数千人の人々が、続々とこれについて流れたという。

救護活動

村内に殺到した避難者の収容や受け付け、炊出しなどで、役場吏員は多忙をきわめた。

役場では、夕方までに約六七〇枚の罹災証明書を発行したが、吏員も市内で三人も被爆し、残り僅か三人で、暑い最中に昼食もどることができぬほど必死で作業をすすめた。役場では、村内の義勇隊の出動を求めて、救護活動をおこない、午後三時ごろから炊出しをはじめた。

逃げて来た避難者のなかには、すでに午後一時ごろから嘔吐しはじめる者がたくさんいた。

各家庭でも、壊れた家の始末やら、避難者の接待に忙殺された。恐怖のドン底におびえきっている避難者たちは、民家の温情こもった夕食を受け、再度の空襲におののきながらも、無事に一夜を過ごすことができた。

学校には、主として負傷者を収容し、食事を求める者には炊出しを、水を求める者には水を与えて、できる限りの看護をおこなった。

夕方には、罹災者とその縁故者との連絡をとるために、一人一人に住所・氏名・連絡先など聞いてまわり、これを記入した紙を手渡しておいた。

夜間、敵機の爆音がすると、避難者たちは皆、恐怖のため神経をとがらせ、小さな口ウソクの火にも怒声を張り「消せ、消せ！」と叱りつけるありさまであった。

非常米は一俵も受けていなかったから、平素からかかる事態に備えて配給を減らし、貯蔵していた玄米があったのを倉庫から出し、村民から緊急に、ジャガイモ・カボチャなどの供出を求め、これを切り込んでにぎりめしを作った。一日に、にぎりめし二個ずつ二回配給として、十日まで続けた。十一日から負傷者の食事だけとした。

当時中山は無医村で、負傷の治療ができないため、重傷者の処置に困った。幸い、隣村の戸坂国民学校の臨時救護所に「陸軍病院が来ていることを知り、治療の必要な者は戸坂へ行くようにすすめた。カンカン照りの暑い道を、トボトボと歩いて戸坂へ行く者もあったが、重傷者は、もう動けなかった。たまたま午後二時過ぎ、徴用トラックが通りかかったので、これに頼んでこれらの人々を戸坂へ送った。そのトラックは三回も引きかえして運んだ。

戸坂へいかなかった罹災者の大部分は民家へ避難させ、負傷者約二五〇人を臨時救護所の国民学校に収容したが、次第に増加して、民家への収容者約二、五〇〇人、国民学校への収容者は約一、〇〇〇人に達した。

学校に収容した負傷者も、翌日の朝までに七人死亡し、夕方までには一五人が死亡した。

七日、中山へ沢田医師(猿猴橋町)が一人来着した。しかし、苦しむ患者に与える薬品とてなく、治療を施すすべもなかった。ただ、水や食事を与えるだけのありさまの中で、沢田医師は油を塗ったりして、火傷の手当てなどできるだけの治療をした。

八日漸く西祭療養所から、医師と看護婦が薬品を持って到着し、ともかく治療ができるようになった。

さらにその後各地から医師・看護婦などの来援を受けたが、その状況は次のとおりである。

九日から十日まで... 忠海町・竹原町方面の医師三人、看護婦二人来援

九日から十二日まで... 鳥取県から医師三人、看護婦三人来援

十二日... 呉市から医師(人員不明)来援

十四日... 倉橋島から医師二人来援

十五日... 蒲刈島・江田島・庄原町から医師(人員不明)来援

十六日から二十日までの間は、医師の来援をみなかった。

二十一日から二十五日まで... 大阪市から医師四人来援

なお、救護所開設から閉鎖まで、役場吏員と婦人会員が協力して患者の介抱をおこなった。収容をした人のなかでも負傷の軽微な人は、縁故者をたずねて出てゆく者もあって、はじめ各教室にいた患者もだいぶ減ったので、十

日からは三教室を一間にして全員を収容した。その後患者は連絡がついて引きとられる者、元気になって帰る者、あるいは落命する者などによって、毎日減少し、八月二十一日には一三人、三十日には五人となった。

九月二日、県衛生課が残りの患者を引取って、矢賀救護所へ収容したので、三日に大掃除をして救護所を閉鎖した。

当初、医師から町に対して薬品収集の希望があり、これを集めるのに東奔西走したが、思うにまかせず困難をきわめた。

死体の収容・火葬・埋葬

死亡者の収容は、七日からはじめて、十八日ごろまで続いた。死体は一日分をまとめ、中山村字八反田堤防で、その日の夕方に火葬した。

収容した罹災者は、六日夕方、それぞれの身元調査をしていたので、最後まで身元不明の者は三人だけであった。火葬にした遺骨は、着衣・頭髪などと共に、箱におさめて万休寺の納骨堂に安置した。最初は一四柱であったが、二か年間のうちに、ほとんど引取られ、現在残っているのは三柱である。

火葬の状況は、八反田堤防に穴を掘り、一体ずつ並べ、頭部にそれぞれ名札を立てて火葬し、翌朝、箱に骨を納めて万休寺に安置し、和尚が読経をあげた。

民家で死亡した者のうちには、村内の火葬場で、火葬した者も多かったが、埋葬した者はなかった。

合同葬儀

村内での死亡者は約一二七人で、九月二十二日午後二時から、村内死亡者全員の合同葬儀を万休寺において執行した。

食糧対策

被爆による村の機能の障害はなかったが、食糧の不足ははなはだしく、農家に対し、野菜の供出を強く訴えて一般に配給した。米は、被爆当時は困ったが、後に非常米を受けて急場を切抜けることができた。

八、被爆後の生活状況

生活環境

被爆後の中山村は三五〇世帯であったが、避難者の殺到などで、伝染病発生のおそれがあり、七日に安芸地方事務所へ石灰の交付を申請していたところ、まもなく、蒲刈島から送付して来たので、週一回、各戸の便所へ撒布してまわった。また時節がら、食物に特に気をつけるよう常会を通じて注意を促した。幸いに、伝染病も発生せず、ハエも少なかった。ノミ・シラミの害も特別になかった。

当初、非常米を受けていないところへ、十日まで炊出しをし、また個人家庭では、保有米を炊いて避難者に提供した家が多かったから、食糧が極度に欠乏した。炊出しにあたっては、麦・馬鈴薯・カボチャなども加えた。トマト・茄子・胡瓜などの供出は少なかった。しかし、応援医師に対して供給するぐらいはあった。

九月になって、ようやく非常米を渡すという指示があり、村民の奉仕で府中町鹿籠の食糧営団へ受取りに行くと安堵することができた。塩の不足ははなはだしく、入手困難であった。

調味料・乾物などは、村の農業会に若干の手持ちがあるだけであった。

交通は、自転車か徒歩で、広島駅まで出るよりほかなかった。

夜間の生活は、各家庭に非常用口ウソクを備えていたので、どうにかしのげたが、夕食も暗くならないうちに食べるようにして、口ウソクを節約する家庭が多かった。

電灯は九月初旬についた。府中変電所付近は、早くから電灯がついていたので、中山から眺めて、その明るさをうらやましく思った。

中山に疎開していた者は、十一月ごろから、ぼつぼつ旧居住地へ復帰した。尾長・愛宕町方面からの避難者も多かったが、家が火災にかからなかった者は四、五日いてほとんど帰った。

食生活の状況

村民の食生活では、戦時中、荒廃した田畑を開墾して主要食糧・野菜などを作付したので、専業農家は勿論、兼業農家も買出しをする者は少なかった。

ただ、砂糖の配給が全然なかったから、砂糖代りにタマネギ・カボチャなどが珍重されたが、タマネギのような特殊なものは、買出しにゆかねば得られなかった。しかし、非農家の食糧不足は甚だしかったので、安佐郡方面へ買出しに行く者が多かった。

手巻タバコも不足なので、闇市場で洋モクや吸がらの再生品などを買った。老人などは、木の葉や松葉などを取って吸う者もあり、闇でタバコの種子を手に入れ、これを作って吸う者まで出るようになった。

酒は、ドブ酒を買って飲む者がほとんどで、ドブ酒を密造して飲む者も幾人があった。

清酒の配給も少しずつあったが、割当ての酒は、帰還軍人に心ばかりの慰安の意味で五合ずつ配給し、残りは冠婚用とした。

葬祭用の酒は、村常会の申合せで全廃していたから不用であった。

村内には、鮮魚商がないため、魚と牛肉の配給はきわめて稀であった。安芸地方事務所、あるいは市内の魚商人に依頼して配給を受けたのは、年間二、三回であった。しかし、物々交換により、少量の魚を売り歩く者が二、三人出入りしていた。

また、薬が思うように買えないので、強壯剤だといって、松のミドリや葉を一升ビンにつめて、水をそそぎ、これを醗酵させて飲む者や、ヨモギの汁を飲む者もあり、なかには、ゲンノショウコや、その他の薬草などを採り歩く者も多かった。

九、終戦後の荒廃と復興

暴風雨の被害

九月十七日の暴風雨で、温品川の堤防が決壊した。温品村字間所(間所一三町歩のうち、一〇町歩余を中山村民所有)、および本村字地免、庵りなど一五町歩が冠水し、その水深最大二メートル以上で被害甚大であった。

十月八日の大雨で、前記の個所が再び決壊し、九月同様の被害を受けて収穫は皆無となった。

被爆と暴風雨などによって、傾斜のはなはだしかった万休寺の屋根(棟)が、十月十一日、少量の降雨であったにもかかわらず、午前四時ごろ、大音響とともに倒壊した。幸いに屋根だけですんだ。この屋根を、二十二年五月、古トタンを門徒から集めて仮修繕した。

稻生神社の社殿も倒壊に瀕したので、二十四年秋、神殿と幣殿を改築した。

半壊家屋は、暴風雨でも倒壊するものはなかったが、瓦が吹き飛び、その補充は困難であった。

当時の民心は、虚無状態で、物質的には全然慾がなく、ただ生きていればよいと思っている者が大部分であった。

また、若い人が次々に死亡しても、切実な同情心も起きなかったし、水稻の被害も、家屋の被害も人間の力ではどうにもならないという諦めの観念におおわれ、あまり身にこたえないありさまであった。しかし、冬期のすきま風だけは身に泌みてこたえた。

被爆による建物の修理では、国民学校の柱の折れたものや、万休寺の棟に用いる資材は、万休寺にいた暁部隊所有の松材を譲り受けて修理した。しかし、各家庭の建具・天井などの修理は、資材の割当てがないため急速に修理することができなかつたので、数年間、放置している者も多かった。ガラス・紙・金物など、配給によって手に入れたものだけによって、部分的に修理するに過ぎない状況で、昭和二十七、八年ごろに至って、ようやく修理が終わったようである。

十、その他

松根油採集

敗戦前、油の補給路を断たれた軍部は血眼となって、補給源を探求し、ついにこれを松根によって求めることになった。農山村に半強制的に松根窯を設置させ、町村民を動員して松根を掘り集めさせ、これから僅かの油を得る原始的な採集方法をはじめた。

中山村の民有林三八町歩余りのものから取り得る松根油は知れたものだし、その労力と費用を考えると、松根窯の設置について躊躇せざるを得なかった。しかし、かねて県から勸奨があるのに加えて、六月二十五日には、温品駐屯の海軍将校の督励があったため、急速に工事を進めることになった。村民一致の努力で小屋もできあがり、釜を据付けることになった。八月六日平原部落の報国隊を動員して、約四〇人の者がこの釜据付の煉瓦を運ぶために、車をひいて的場町まで行った。現場へ行く途中の者、現場にいた者、車を引いて帰る者など、全員が被爆して、ついに四人死亡者(平田謙作・三宅ツタ・高田フサヨ・佐々木ミツコ)を出すに至った。

人体にウジがわく

また、中山救護所で、次のようなことがあった。

生きている人体にウジがわくということは、戦場では時々あるときいていたが、半信半疑であった。八月十六日から二十日まで、医師の来援がなく、役場吏員・婦人会員の者で、着物をきかえさせたり、油を塗ったりしていた

が、一人ほど婦人の患者が、膿が付着して痛いと言って、どうしても更衣をしないでした。二十一日、大阪から来援した医師が、無理やり着物をぬがしたところ、ウジが〇・三リットルぐらい取れた。「このウジが膿を食うたので、なおりが早い。」と医師が言った。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

京橋町、的場町一丁目 二丁目、段原大畑町、稲荷町、金屋町、松川町、比治山町、段原町、段原東浦町、段原新町(一部)、段原末広町、比治山公園

町内会別要目

この地区の範囲は、台屋町[だいやちょう]・京橋町[きょうばしちょう]・稲荷町[いなりまち]・比治山町[ひじやまちょう]・金屋町[かなやちょう]・的場町[まとばちょう]・桐木町[きりのきちょう]・土手町[どてちょう]・段原大畑町[だんばらおおはたちょう]・松川町[まつかわちょう]・段原町[だんばらちょう]・段原東浦町[だんばらひがしうらちょう]・段原新町[だんばらしんまち]・段原中町[だんばらなかまち]・段原末広町[だんばらすえひろちょう]・および比治山公園[ひじやまこうえん]とし、爆心地点からの至近距離は、稲荷町の京橋川河岸で約一・三キロメートル、もっとも遠い地点は、比治山公園東裏にあたる段原末広町猿猴川河岸付近で約二・五キロメートルである。

地区の被爆状況は、比治山公園によって対照的に二分され、公園の北及び、西側一帯にかけては被害が大きく、ほとんど全壊全焼し犠牲者も多く出たが、東裏側一帯は比治山によって爆風や熱線の影響も少なく、火災炎上の壊滅から免れた。

しかも東裏一帯は戦後の復興にあたって、都市計画区域から除外されたため、往年の家のなみそのまま、狭い道路をはさんで密集し、人口密度もすこぶる高い。道路に面した商店街は改造されてさほどでもないが、一步横路にはいると、軒の深い格子窓のついた赤ベンガラ塗りの昔どおりの家宅が、現在もたくさんあって、古い広島の面影をとどめている。

北部一帯は旧藩時代の国道筋であった京橋町を中心にして商業が栄え、風格のある町を形成していた。

明治三十年、公園として許可された比治山は、往昔は、海中に浮ぶ島の一つであったが、太田川口から流出する土砂の堆積によって陸繋したものである。

山の南麓傾斜面には、縄文時代の主要な遺跡である比治山貝塚があり、縄文土器も発掘され、古代は狩猟・漁撈を中心とした原住民が住んでいたことを物語っている。現在では自然公園として四季を通じて市民に親しまれ、憩いの場所となっている。新修広島市史にも比治山に関する記述は詳しく、「比治山は、小断層をとともなうつり橋付近の鞍部によって二分される。最高点は南嶺にあり六九・六メートル、この南西は北西南東方向の著しく直線的な急崖に終る。五〇余メートルの北嶺は、御便殿跡が平坦であるが、両部とも原山形は大幅な変更を受けている。」と全容を説明している。

大正六年、山頂に正午の時報(俗にドンと呼ぶ)が置かれ、昭和三年市庁舎が現在の国泰寺町に新築されてサイレンになるまで午砲を放ち、市民の標準時としてなつかしい数々の思い出をきざんだ。また御便殿跡・陸軍墓地・頼家一族の墓など古蹟も多い。

戦時中は、山腹を利用して軍隊や市民が防空壕を各所に構築していたが、被爆の時は多くの避難者で山全体がうずまり、阿鼻叫喚の修羅場と化した。

戦後はまた公園の整備がすすみ、桜の名所として復活し、観光バスは、常時旅行者を送って市街の展望や広島湾の眺望をほしいままにしている。なお、南嶺には昭和二十四年陸軍墓地を整理して、広島A・B・C・Cが開所し、現在まで原爆症に関する医療研究活動を続けている。原子爆弾による被害の甚大であった比治山公園と、商店街京橋町付近は、戦後の都市計画事業によって、まったくその全貌を一変し、広島駅前商店街に続く商業地帯として新しい繁栄をきざきつつある。

地区の被爆直前の総建物数・世帯数・人口の内訳について判明している所は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
京橋町	144	148	650	保田喬蔵
稲荷町	215	215	670	荒谷加一
比治山町	137	158	590	平賀若次
台屋町	280	280	780	角藤浅一
的場町	197	196	696	三木福太郎

桐木町	174	178	763	児玉助人
土手町	150	160	580	野尻松太郎
段原大畑町	303	303	1,085	久保万助
金屋町上組	185	265	785	松原笹一
金屋町下組				山中吾一
松川町	176	220	820	池上亀太郎
段原町	129	129	398	亀尾宥賢
段原東浦町上	269	268	864	沖永善次郎
段原新町上	306	312	932	原田哲三郎
段原中町上	73	90	315	吉田清
段原末広町	303	302	1,132	鈴木貢
比治山公園	9			

なお、地区内に所在した学校、および主要建物、または事業所は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
三和銀行	京橋町	多聞院	段原町
三菱銀行	京橋町	芸備銀行	京橋町
段原国民学校	段原大畑町	縄屋邸宅	京橋町
比治山神社	桐木町	比治山食糧倉庫	桐木町
旧御便殿	比治山公園	専売局段原支所	段原大畑町

二、疎開状況

人員疎開

昭和十九年第一次疎開の命令が出て、各町とも極力、当局の指示に従うよう町民に勧奨してまわった。京橋町では、まず京橋東詰の、左右の両土手側の一二戸の建物疎開を実施したが、これと並行して、自発的に各家庭において老人・子供などの縁故疎開がおこなわれた。

桐木町もおなじく、建物疎開実施にともない一五世帯五〇人が郡部へ縁故疎開をおこなった。すなわち台屋町が約三〇人、土手町が一五人、段原大畑町が高齢者四〇人ばかり、その他二〇人ばかりが郡部へ縁故疎開をおこなった。その他、他の町内へ単に移転しただけの者もあった。

松川町・段原町および比治山東裏にあたる各町は、県指定の安芸郡奥海田や同郡中野村へ老人・幼児・病人などを疎開させた。また、縁故を頼って自発的に他へ疎開した者もかなりあった。各町内会の勧奨が徹底して疎開者が多く、このため、町の人口が約五分の一に減少したが、内訳は現在でははっきりした資料がないので判明しない。

物資疎開

物資疎開は、各町とも個々の住民が縁故先や知人を頼って、日用品以外の重要な物資を郡部へ疎開した。疎開したものは衣類が主で、ついで家具調度品類が多かった。家によって疎開する質量の差があるのは当然であったが、なかには家伝来の古文書・美術品・系図など、歴史的にかけがえのないものを主として疎開した家もあった。

昭和十九年の末ごろから、運搬するトラックその他の車輛の確保がむつかしくなったが、それまでに、この地区では疎開をすませていた家が多かったようである。比治山東裏の各町は、人員疎開ほど物資の疎開はおこなわなかった。手押車程度の運搬具も入手がむつかしかったから、手に持てるぐらいのものや、貴重品ぐらいを疎開していた。

学童疎開

段原国民学校の学童疎開は、第一次・昭和二十年四月十二日に比婆郡山ノ内西村へ教職員六人、児童一五〇人が実施、ついで第二次・四月十四日に比婆郡山ノ内東村へ教職員八人、児童二〇〇人が集団疎開を実施した。

このほか縁故疎開をした児童もあったが人数ははっきりしていない。

疎開しないで残留した病弱児童や、一、二年生の児童は、地区内の寺院に分散して勉強を続けていたため、これらが被爆によって多数死亡した。

三、防衛態勢

伝統的組織の改編

消防組織は、各町とも伝統的な組織をもっていて、急にあらたまることはなかったが、国が戦時体制を強化するにつれて、従来の組織も改編し充実させた。京橋町では、昭和十年ごろすでに山県百太郎町総代を代表者として町内隣保班を中心に、町内自衛消防隊が編成されており、手押ポンプ一台・梯子・バケツなどを常備し、町民全員がこれに協力するよう決められていた。

段原警防団

昭和十四年四月、当局の指示により改めて段原警防団が結成された。段原学区一五か町で編成し、初代団長に中井万造が就任、輩下に各町内から団員を選出し、約一五、六〇人で結成された。さしあたり段原小竹槍訓練

学校(昭和十六年から国民学校と呼ぶ)を屯所として防火訓練に努めていたが、昭和十五年八月、桐木町の一角に消防屯所(建坪二〇坪)を新築し、ポンプ自動車二台・手押ポンプ二台その他備品として梯子・バケツ・救急箱・担架などすべてを完備し、いよいよ本格的防火・防空・救護などの訓練に邁進した。また当局の命により竹槍操法と称し、長さ約二メートルばかりの青竹で、その先端をとがらせた手製の武器を常備した。第一は、敵が宇品に上陸、または落下傘降下するとき、これに立ち向う訓練である。むかし、武家時代の剣士のように姿勢を正しくし、槍先を正眼にかまえ、三步前に突っこみ、二歩後退し、そのころ全国民の唱える「打ちてし止まん」の掛け声もいさましく猛訓練が繰り返された。この竹槍訓練は徐々に個々の家庭にまで及んだ。

昭和十六年春ごろから、防空・防火訓練はますます激化され、学区内の家庭消防が編成された。各町内会長を自衛消防の指揮者とし、隣保班長を先頭に立て、老若男女の別なく、足腰立つ者は全員をもって参加した。防空・防火は無論のこと、梯子登り・バケツ操法・人命救助・救急法・繃帯使用法などの訓練は、毎週東警察署ならびに消防幹部が、各町の巡回指導を実施した。

なお、このころの家庭消防の服装は軽装であって、男は茶褐色の服に巻脚絆、女はありあわせの古着で作ったモンペに地下たび姿であった。モンペは手製であるから、その色や柄がみなまちまちであった。

松葉の煙幕

戦局がいちじるしく急迫した原子爆弾炸裂の一二、三日ごろ、京橋町内会消防組は、命により敵機が市の上空に襲来した場合、上空に張る煙幕の代用として青松葉を積み重ね、これをいぶし焼く目的で、町内三カ所に青松葉を積んでおくことになった。その松葉の採取は何びとの山に入って取っても差しつかえなしということで、町民は、三日の奉仕で牛田方面の山に立ち入り、これを採取し、町内三カ所に堆積した。松葉は指揮者の「第一、いぶせ」「第二、いぶせ」の命令によって点火することになっていたが、六日当日は逆に火災発生・炎上のもととなった。

比治山東裏の各町では、松葉などの採取はしなかったが、防空壕や消火設備などについては、町内会はじめ、各家庭とも完璧を期していた。訓練も厳重に、各町において実施していた。

四、避難経路及び避難先

避難先はあらかじめ市役所から指定され、京橋町は安佐郡落合村、的場町は安佐郡甲田村、段原大畑町は安芸郡中山村・戸坂村の各国民学校というふうに各町とも決められていた。

避難経路は京橋町の場合、まず牛田町へ出て、そこから戸坂・矢口村を経て落合村に至るよう町民に周知していたし、的場町は、東練兵場に出て、大内越峠から中山を経て甲田村に至る。また段原大畑町は、尾長町を通過して中山村に至る。また戸坂村へは牛田町を通過して行くことになっていた。

松川町・段原町および比治山東裏の各町は、安芸郡奥海田・同中野村に避難するよう指示されていた。

被爆に際しては、各町とも幾人かの罹災者(京橋町では町民二四、五人)が、この予定の避難先へ脱出して一夜をあかした。

五、所在した陸軍部隊集団

比治山公園東南斜面に陸軍船舶砲兵団(隊員約一、五〇〇人)が、横穴の兵舎に駐屯し、同山頂(南峯)には同兵団司令部(部隊長中井千万騎少将)があった。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日夜九時二十分、警戒警報が発令され、同二十七分、空襲警報が発令されてまもなく解除になった。その間、比治山町・稲荷町などでは防空壕へ待避せず室内で電灯を消したまま、いざというときは何時でも飛び出せる準備をして、じっとしていた者が多かった。台屋町・土手町などでは、指示どおり多くの人々は防空壕に待避した。また、京橋町では六〇人用の防空壕が三カ所あって、留守番だけ一人は室内に残しておいて、そのつど待避した。段原大畑町では、警防団員は国民学校に集合し、特に医師・薬剤師・歯科医師など救護班も国民学校に集合した。

六日の朝

六日午前〇時と、七時の警報発令のときも同じような行動を繰り返したが、全体的に自暴自棄的な空気が強くおおうていて、待避行動も積極性が失われがちであった。連日連夜のことであるから疲労もはなはだしく、かつは精神の消耗もあって、自己の生業もろくろく手につかぬありさまで、末期的な様相は隠しようもなかった。

戦争が深刻化するにつれ、身の危険をひしひしと感ずるようになってから、女子や子供はおおかた一夜疎開をしていた。夕方になると郊外や東練兵場などの広場か、あるいは、比較的中心部から離れて安全と思われる知人の家に行って泊り、夜明けと共にわが家に帰って来るということの日課にしていたが、六日朝、不幸にも疎開先からみんな家に帰って来ていた七時過ぎ、警戒警報が発令されてとまどった。まもなく「広島上空に敵機なし」というラジオの放送があり、やっと朝食にとりかかる者、徴用その他の職場に出勤する者など、それぞれの生活が始まろうとする矢先であった。一部の人々には、なんとなく上空で爆音のようなものを感じたので、上空を見あげて見たり、不思議に思ったりした。

落下傘目撃

京橋町の赤井喜市は、ちょうど屋上の干棚にいて落下傘を目撃した。敵機の爆音は聴かなかったが、上空をふと見あげると、高度はよく判らなかつたけれども、落下傘が手に取るように見えるとともに、空中で炸裂し、稲妻のような閃光を受けた。一瞬、爆風で吹き飛ばされ、地上の敷石の上に落ち、両足とも歩行不能となった。

台屋町では、南の方向に敵機が見え、爆音も聞き、落下傘のようなものが落ちたのを目撃した者があった。十五分ぐらいたって周囲がまっ暗になり、約十分ぐらいして、もとの明るさになったという。

比治山公園東裏一帯では、各町とも町役員は、建物疎開計画の打合せを、各町内会事務所に集っておこなっていた。その他の人々も敵機の爆音をきいて不審に思っていたところ、閃光を感じたのであった。

疎開作業への出勤と建物疎開実施

なお、六日朝の疎開作業出勤、および区内建物疎開実施状況は、鶴見町の建物疎開作業に台屋町から六五人、桐木町から五人出勤していたというほか、各町の出勤状況は判然としない。

区内の建物疎開実施状況は、京橋町一二戸、稲荷町二〇戸、台屋町二〇戸、桐木町一〇〇戸(計画一二〇戸のうち)などのほか、その他の町のことは資料がなく不明である。また当日、桐木町の建物疎開作業に他地区から三〇人ばかり勤労奉仕に来ていた。

松川町・段原町・段原東浦町上・段原新町上・段原中町上・段原末広町では、当日午前七時、国民義勇隊鈴木貞大隊長が、各町から出た一七人を引率し、雑魚場町の家屋疎開作業に出動していた。鈴木大隊長は奉仕隊員を送っての帰路、比治山町で被爆し、重傷を受けた。その他の作業中の隊員はほとんど現場で死亡した。

七、被爆の惨状

凄惨を極む

比治山公園の陰にならない地域(北及び西側)一帯は、炸裂の閃光をまともに受けた。

青白い光線が閃いた瞬間、まっ暗になり、二、三分間ののち少しずつ夜が明けようにあかるくなった。

周囲の建物は全壊したり、半壊したりしていたし、見るも無惨な光景が出現していた。

京橋町筋の街路上は、古くからのなつかしい家なみが無残に倒れ、屋根瓦は散乱し、電線はクモの巣のように乱れ落ちていた。それらの下敷きとなり、焼けただれた頭だけ出して救いを求める者、中でも目だまが飛び出てまだ生きている若い女、また通勤途上にある男女、または勤労奉仕に行く途中の人などは、全裸、半裸体で両手を胸の前に幽霊のように挙げて、黒い血みどろ姿で助けを求めている。その声もとぎれとぎれの泣き声で、夢遊病者がさ迷うように右往左往していた。

九時ごろであった。黒い血にまみれた人が助けを呼んでいた。「この木を抜いてくれ、ほかに怪我はない。」と言う。見れば、その人は氏名不詳だが、生きながらの人間の串ざしであった。左手の肘から手前のあいだをタル木の削げ折れが突きささり、その先端は下あごから顔の左頬骨に立ちこんでいた。「これを抜きとってくれ。」と言うのであるが、「少しかごめ。」という、かがめばタル木の折れ端が地につくので抜かれない状態となった。そのとき、誰かが「市内の中央部は火の手が挙がり、大火事だから早く逃げよ。」と叫んだのでどうする暇もなかった。道ばたに倒れている重傷者、即死者には、目玉が飛び出し、股のさけている人が多く目についた。また、ある者は、倒壊家屋のモルタル塗の壁から、頭だけを出して即死している妻の、その頭に、せめてもと思って、そこに転がっていた釜をかぶせて逃げたという。

段原大畑町電車通り南方地域の家屋は倒れなかったが、ひどく破壊された。しかし、段原国民学校と専売局倉庫

などは全部倒れており、学校では疎開しなかった児童が大声で助けを求めている。また、台屋町の専光寺で分散授業を受けていた児童数十人が倒壊した家の下から呼び叫ぶのを、親が狂気のようになって助け出そうとしていたが、ついに火の手が迫って救助できなかった。

消火活動

比治山公園東裏一帯の各町では、火災はなかったが、八時半ごろ大正橋西詰手前(段原末広町)の唐須の煮豆屋の暖簾に火がついたのを、鈴木町内会長が見つけた消防団と協力し、これを鎮火した。また、段原末広町の変電所北の電柱の上部にも火がついて煙が出ていたのを消防団員が発見し、大事に到らぬまでに消した。しかし爆風は相当強くあたり、家屋全体がゆるぎ、傾斜し、屋根瓦は飛散した。またガラス窓が破壊されて、その破片の突き刺さった負傷者がたくさん出た。

比治山公園は、爆風で松や桜の大木などが折れて根っこから倒れたが、公園一帯は一部を除いて焼けなかったので、避難者が殺到した。公園が焼けなかったのは幸運であった。このため、東裏一帯の延焼もなかったと言えようが、比治山町の西岡歯科医師らが老人ながら、みな逃げ去ったあと踏みとどまって、山の西側の善教寺から多聞院までのあいだの消火に努めて、断乎、守りとおしたことも大きな原因であったろう。

避難状況

炸裂後、錯乱した町民は、必ずしも計画どおりの避難をしなかった。まったくその余裕がなかったのである。

京橋町では、辛うじて生き残った者は、生き残ったとは云え、大小にかかわらずすべて負傷をしていたが、大部分が東練兵場へ逃げた。そこで一息して、夜になってからそれぞれ思い思いに避難して行った。既定計画どおり落合村に行く者や向洋の学校、あるいは府中の埃宮などをさして行った者も多かった。

桐木町の者は、主として最も近い比治山公園へ逃げた。中には、災害が少なかった尾長町や向洋方面に避難した者もいた。

稲荷町は、わりかた統制がとれて、かねての計画どおり安佐郡部街道付近まで、歩ける者はみな避難した。一部には親戚をたよって個人行動をした者もあったが、負傷者だけはひとまず府中国民学校に集められた。

比治山町は即死者数人を出し、家の下敷きになって救いを呼ぶ声、それを助け出そうとする人などごったがえずなか、われ勝ちにと東へ北へ、無我夢中で家族を呼びあいながら、辛うじて避難した者が多かった。

台屋町は、東練兵場へ町民の約半数が避難した。その他は京橋川畔や橋の下に逃げたり、郊外へ脱出したりした。

段原大畑町の町民のほとんどは郊外へ避難した。しかし、電車通り南部地域の者は避難しないでとどまった者が多く、防火に努めて、火災を免れた。電車通りは道はばが広く、障害物も少なかったから、郊外へ逃げる者はみな、ここを通った。道路上には、火傷者や負傷者がえんえんと続き、あちらこちらに動けなくなって倒れている者がたくさんいた。

比治山東裏一帯は、家屋の倒壊も少なく、火災の発生もなかったため、遠くへ避難する者は少なかった。ほとんど東雲町方面のブドウ畑へ一時的な避難をした。火災が発生しなかったため、恐る恐るそこから家を見に戻ったりした。しかし、中には、また敵機が襲来するかも知れぬという不安にかられて、早々に郡部へ疎開する者もあった。時間が経つと共に、この東裏一帯に、罹災者が流れこんで来た。路傍でたくさんの人々が倒れたので、町内の者は協力し、負傷者もろとも霞町の兵器支廠(臨時救護所)にどんどん運んだ。

京橋の橋下にいちじ避難した者は、流木で筏を作り、川しもへ逃げた者もあったが、稲荷町の町民は、四方から火にかこまれ、逃げ場がなくなり京橋川にとびこんだ者が約四〇人ばかりいた。台屋町の駅前橋は木橋であったから焼け落ちて寄りつかれなかったし、土手町の柳橋も焼失した。段原大畑町の大正橋・荒神橋の欄干が爆風で落ちたが、その欄干と一緒に川の中へ吹きおとされた人が幾人もいた。幸い、川はちょうど満潮で泳げる人は命を拾ったという。また、京橋川の水につかたままま、どうすることもできず、六日の夜を明かした人々もたくさんあった。

炸裂直後、この地域一帯にも、また、比治山公園東裏一帯にも降雨はなかった。

六日夜

当日の夜、京橋町はじめ付近一帯は、全焼したため、逃げられる者はすべて逃げてしまったし、段原大畑町など一部半壊のまま焼け残った地区でも、電灯はなくまっ暗ななかで心細く夜を過ごした。

東練兵場の北辺に立つ二葉山へ避難した罹災者は、その夜一睡もできなかったが、山上からわが家の方を望見すると、夜半も火は燃え続けており、どうなることかと不安やるかたなかった。

土蔵などは、内部にこもっていた火が、夜の明け方ごろになって窓から火炎を噴き出し、幾刻かのちついに燃え

落ちるのが見られた。

比治山東裏一帯の各町は焼けなかったので、いったん、付近の畑へ逃げた人も夜は帰って来た。しかし、まっ暗でどうすることもできず、恐怖にかられて、周囲の様子に気をくばりながら、逃げて来た多くの負傷者の救護で夜を明かした。

その他諸現象

原子爆弾の熱線や爆風・爆圧などによって、次のような常識では考えられない種々の現象があった。

京橋町付近の被爆者で炸裂の閃光が眼中に入ったのか、二週間ぐらい、遠方は無論のこと、近くでも近眼のように大明かりだけ見えて、細く小さい物が見えなかった人がいた。

また、白い腕章をつけていた人は、腕章だけが焼け残って、他の身につけていたすべての物が焼けていた。

土手町の被爆者はみなゆでダコのような色をして、裸身はふくれあがり、人相が変っていた。色物を着た人は焼けて裸身となり、白物を着た人は焼けなかった。

ともあれ放射能熱線を受けた人々のほとんどは、時間が経過するにしたがい、傷の有無を問わず、つぎつぎと死んでいった。

段原大畑町では、放射閃光を直視して網膜が剥がれ、失明した者がいた。

一瞬、灼熱的な痛さを皮膚に感じて火傷した人も多い。

焦土と化した京橋町の家跡に帰って来て、土に深く埋もれた防空壕を掘りおこし、その中から、そのころのランキョウ瓶という、瓶詰の酒を一本取出してみると、その首がねじれ、曲っていた。中味はそのままなので呑もうとすると、煙くさくて全く呑めなかった。

また、陶器類は重なったまま、一塊りとなったり、トロトロに焼け流れた形で凝固している物もあった。ガラス類は勿論溶解していた。桐木町では硬貨約一〇個が半溶解して固まっている事例も見られた。

段原大畑町でも同じような現象が見られ、石も脆く、触っただけで崩れたりした。瓦も焼けているし、ガラス類は形をとどめていなかった。

比治山公園の御便殿は吹っ飛ばされたが焼けなかった。千本松原はまったく焼失した。

火災は、八時半頃、稲荷町の土手筋あたりから発生したように見えたが、放射熱線の方向によって、電柱上の横木が燃えているのが見られた。生の木も瞬間的に熱線が浸透して発火した。

草屋根の発火がもっとも早く、比治山神社の社殿の桧皮葺き屋根が炸裂直後に火を噴いた。この他、火の気の全くなかったところから、火が出た例は多く、段原大畑町でも、町内会長宅の倉庫の窓から煙が出ていた。また、長谷川医院の薬局からも発火した。国民学校の火災も、原子爆弾の熱線による着火のように考えられた。また、ひちりんなどの火が散乱して発生した火もあったであろう。ともかく火災はすごい勢いとなって八方に延焼したので手がつけられなかった。

爆風は強烈そのものであった。稲荷町付近では、家の中のあらゆる道具が飛び、ガラス窓は木っ端微塵に粉碎され、戸・障子などの建具も破壊された。

比治山町は、家屋が瞬時に倒壊したし、台屋町付近では、屋内にいた人間が三メートルも吹きとばされ、家屋は三分の一破壊し、土蔵はまっ二つに割れた。倒壊家屋の下敷きになって生きながらに焼き殺された人もおびただしかった。土手町も同じく炸裂の大音響と共に、建具・壁・屋根が吹きとんだ。桐木町では爆死者が多数出たし、避難者は全裸になった者がほとんどで、半裸体の者でもボロボロの衣装をくっつけているだけであった。

段原大畑町では、電柱がほとんど傾き、電線は切断され、北側の家なみは、窓が全部破壊されてしまった。

これら各町の状況は、それぞれの事態が各町とも重層していたわけで、位置とか距離の差による被害の大小はあったにせよ、おおむね炸裂の瞬間、一挙に惹起した災害現象であった。

原子爆弾の光線は八方十方に、一定の線をもって放射したと思われ、京橋町は東西に横たわる町であるが、その日九九人の死者を出した。その死者の出た家を詳しく調べると、町全域をま横に、三筋になって多数の死者が出ていた。その放射線からはずれた者は、単なる負傷か、運よく命拾いしたのであった(別図参照)。

また、台屋町には、家屋の倒壊したとき、偶然できた物の陰(空間)にいて圧死から免れた者も幾人かいた。

桐木町の比治山食糧倉庫に近接した場所に、高さ一メートルの石造延命地蔵が立っていたが、爆風により吹きとばされたのにもかかわらず、まったく損傷を受けなかった。戦後、それが伝説化して信仰を広めたといわれる。

段原大畑町のある医師は、避難するとき、医療機械を風呂の中に浸けこみ、水を出し放しておいて、破損から免

れた。また、物陰にいた者は火傷もせず助かった者が多いという。

炸裂時の瞬間的被害

なお、炸裂による瞬間的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害（約 %）				人的被害（約 %）			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
京橋町	100	-	-	-	43	38	19	京橋...被害なし 駅前橋...被爆により落橋 猿猴橋...被害軽微
稲荷町	100	-	-	-	37	43	20	電車鉄橋...損傷したが渡って逃げた者もある。
比治山町	100	-	-	-	48	34	18	
台屋町	100	-	-	-	30	49	21	
的場町	100	-	-	-	34	30	36	荒神橋...ランカンが破壊される。
桐木町	99.2	0.8	-	-	45	30	25	
土手町	100	-	-	-	35	40	25	
段原大畑町	65	25	10	-	25	36	39	
金屋町	100	-	-	-	22	37	41	
松川町	100	-	-	-	39	43	18	柳橋...被爆により焼失
段原町 段原東浦町 段原新町 段原中町 段原末広町	55	35	10	-	20	32	48	大正橋...ランカン一部破壊

全焼は全壊を含む

八、被爆後の混乱と応急処置

被爆者の往来

突発的な原子爆弾の炸裂によって、地区は凄惨な修羅場を現出した。

段原町九六九番地の自宅で被爆した広島文理科大学の杉本直治郎教授の体験記「原爆に遭った日」によれば、「警戒警報も解除されて、やれやれとくつろいでいた朝の一瞬、あまりの不意打ちをくらったこととて、恐ろしいと感じる余裕もないまま、後から考えてみると、不思議なくらい平気な心で、『やっぱり直撃弾かな。なぜこのあたりへ落したのだろうか。そうだ、比治山に軍隊がいるので、そこを狙ったはずのが少し西へそれて、ここへ落ちたのだろう。それにしても、爆弾による死亡率は、比較的少ないと聞いていたが、はたしてその通りだな。わたしも、まだ生きていぞ。』と、頭の中で、こんなことを思いながら、あたりを見廻してみると、天井は落ちて、タンスに支えられているので、やっと下敷きになるのを免れたけれど、ガラスというガラスはその瞬間に破れ落ち、壁という壁は、たちどころに崩壊して、畳の上にごっちゃになって、うず高く積みれ、一面にたちこめた土煙は、この光景に拍車をかけて、さながらこの世の終末を思わせるような、暗澹たる様相を呈していた。」と、その瞬間を記し、続いて金輪島の暁部隊の修理工場に動員されている学生の派遣隊長としての責任感から、その日は佐藤助教授の当番であったが、学生の安否が気になり、まだ焼けはじめていなかったのも、家財や書物もそのままにして出発した。「下駄はもちろん、靴もなければ地下足袋も見当らず、やむを得ずハダシのまま、軒下に崩れ落ちた瓦の山を踏み越え、比治山下廻りの電車線路に出て、宇品を指して急いだ。するとゾロゾロと、どこから出て来たのか、この世の人とも思われない人々の群れが『救護所はどこですか、救護所はどこですか。』と、口々に尋ねながらこちらに向かって来るのに遭う。と見れば、ほとんどの人も完全に衣を纏っている者はなく、中には全裸体の腰にかるうじて敷ゴザを巻きつけて、よちよちと歩いて来る者も、ひとりやふたりではなかった。そして大抵の人たちは、黒く焦げた皮膚の破れ目から赤い血潮が流れていた。もちろん足は申しあわせたようにハダシであった。

実のところ、救護所がどこにできているのか、わたしも知らなかったが、とっさに思いついて、『そこに堤医院があるし、さらに向うへ行くと、段原国民学校があるから、そこらへ行ってみられたらどうです。』と、小走りに走りながら答えつつ進むほかなかった。

と、どの家もこの家も、直撃弾を受けたように、めっちゃめっちゃに倒れている。そのここかしこから、すでに火の手が上がり出した。けれども、だれも顧みようとするものはなく、燃えるがままにまかせていた。」という。杉本教授は、宇品の旧運輸部構内で、動員学徒の山田という学生にあってから、自分も医務室で頭や手の指の傷、深い手の甲の傷の治療を受け、その足で金輪島に渡った。市内から金輪島へ渡った最初のものであったから、実情をみんなに話した。

学生をすぐ帰宅させることにして、再び市内に引返し、死体のたくさん横たわっている大学にいき、暁部隊派遣生徒は全員無事であったことを報告した。そして、「学校への連絡もすんだので、わが家へ帰ってみると、すでにまったく焼けていて、階上の書斎から落ちた書物が、小山のようにつもったまま、まだまっ赤に燃えている。わたしは茫然として、足が釘づけになったようにその前に立っていた。いっかは爆弾に遭うであろうと、もとより覚悟はしていたが、その時期がいつになるか予知することができないままに、その間研究を放棄していることもできず、さし当って必要でないものは、少しは疎開したにせよ、必要なものは学校と家とに分散して、一方が焼けても他方は残るであろうと、たかをくくっていたのであるが、このようなひどい目に遭っては、そうした心尽しも所詮むだであった。

あたりには犬の子一匹もない。妻は、どこへ避難したのであろうか。もしやと思って、近くの比治山神社に行ってみると、そこも焼けていたが、自転車をもってぼんやりと立っている人がいたので『この辺のものは、どこへ避難したか、ご存じですか。』と聞いてみると『いや、わたしは近村のものでがんすがノ。わしの村から、たくさんのもものが、けさ市内の家屋疎開の跡がたづけを手伝いに来たところ、日没になっても、ひとりも帰って来ないので、探しに来たのでがんす。ひどいことでがんすノ。』

夕暮れに、ほの白く浮んだその腕章には、『何々村長』とかすかに読まれた。

比治山下の交番所に引きかえすと、ここも破壊がひどくて、だれ一人いないので、山の方へ登ってみた。すると間もなく、屋根の壊れた多聞院の上手の左側に、交番所の出張所が、野天に机一つ置いてできていた。『段原町のものは、どこに避難しているのでしょうか。』『この辺にいるはずだから、探してごらんさい。』とのことで、やっと妻が、近所の人たちと、路傍の芝生に一緒にいるのがわかった。

日はとっぷりと暮れて、凄惨な火の海と化した市内を、比治山下に立って眺めていると、父兄の方であろう、『ここへ何々校の生徒は避難していませんか。』と、憂色にくれながら、しきりに尋ねてこられる。これら市内の中等学校の一、二年生は、この日、家屋疎開の跡片づけに動員されたが、付添教官もほとんど死んでしまったことは、後になってわかった。

夜目にもかすかな光で、戸板に載せた、見るも痛々しく焼けただれた人や、大八車で運んで来た男か女かも分らないぐらいに、頭髮の焦げた人など、つぎつぎと運ばれて来る。比治山の上には、臨時に救護所が設けられたからである。妻はいった。

『もしも泰子が、あんなふうだったら、死んでくれているのが、ましですわ。泰子は、どうしているでしょう。』

ひとり子の長女は、女専(県立女子専門学校)からわたしと同じく宇品の暁部隊へ出動していたので、けさわたしはその前を通ったとき、一言、尋ねていたらよかったのであったが、実をいうと、わたしの頭の中は、ただ大切な教え子の安否如何で一ぱいで、実子のそれごときも、妻から尋ねられるまですっかり忘れていたのであった。すでに教師として、教え子の無事であったのを目撃して安堵したわたしは、子の父として、その子の安否が気になり出した。

明朝、また宇品へ行くので、そのときこそは、かならず尋ねてみるからと、妻をなだめてみたものの、気がかりな一夜を比治山登山口の舗装した堅い路傍で、着のみ着のまま、明かさざるを得なかった。ただ幸いなことには、近村から運ばれて来た心づくしの握り飯で飢えを感じることもなく、いつもならば、こうした夏の夜の野宿では、蚊軍の襲来に悩まされがちであるのに、今夜という今夜は、それもほとんど感ぜられないぐらいであった。おそらく蚊もまた、わたしたちとともに爆撃の被害者であったのであろう。」と述べており、また、土手町の自宅で被爆し失明した沖土居春子(電話交換手)は「...パッと光った。太陽のそばへ近づいた心地、アラッと立ち上がり、裏へ逃げようとしたとき、ガチャガチャと爆風と共に私の全身は叩きつけられ、目はつぶれ、ガラスの破片で傷だらけとなった。意識ははっきりしている。手さぐりでやっとのことで人声のする表へ出た。

『まあ、春子さんが...』と変な声を出してお隣りのおば様。しっかりなさい、とお念仏をとなえながら水槽のそばへつれて行き、ぬるぬるした血を洗い流して下さった。

『ここで待っていなさい。』とおば様は家へ入られた様子。その頃私の家には、当時七七歳になる老祖母と、八歳になる女の子との三人の淋しい暮しであった。子供は学校へ出て行き、祖母が一人家に残っている。心配していると、間もなく『助けて下さい。』と微かながら祖母の声がした。

『ああ、おばあさん、ここです。』と一声呼んだ。間もなく『やれ、やれ』と出して来られ、私の姿を見るなり、『お前!』といったきり、『早く早く、病院へ行こう。』と、いらだたしい声、取るものも取りあえずそのまま病

院へと急いだのである。

お隣りのおば様から繻帯らしい布を頂き、血のふき出る手足にまき、草履をはかせていただき、祖母の肩にすがって、やっと小路を通り抜け、大通りの比治山下の道に出た。

両眼を失い血だるまになった自分、もう駄目、と諦めたような気持ちであったが、気分はとてもしっかりしていた。あの大通りはまるでお祭りさわぎのような人の波、みんな走って逃げている。

『みんな怪我人ばかりだよ、大変な一大事だったもんだよ、あちこちから煙が出て、火の手が上がるよ、山崎の病院も駄目らしいね、痛むかい。』

祖母はさも心配そうにいわれる。

『いいえ、済みません、おばあさん。』

と何だかお気の毒になって、祖母こそ怪我はないかと尋ねると、

『いや、お陰でのう、心配せんでもよい。しっかり肩にすがって元気を出して歩いてくれよ。』

とやさしい言葉。一時も早く安全な場所へ逃げるよりほかない。次々と火災はふえていくらしい。あたりの空気が乾燥して、暑さは一層増す。皆について逃げて行く途中、的場近くで救助隊の方らしい人に、油薬をぬっていただく。全部火傷と思われたらしい。少し安心した気持ちになって、また祖母の肩にすがり歩いた。」という。

比治山公園の東裏側地帯は、爆風による被害が多少はあったが、火災が発生せず、他町の避難者で混雑をきわめ、道という道はたくさんの死傷者で陰惨そのものであった。

当時一五歳の学徒で、宇品造船所に動員で行っていて被爆した門田武の体験記「重傷の婦人を負う」によると、宇品から御幸通を経て専売局に出て、惨状目をおおう御幸橋上に立つと、上手の比治山橋方面は火の海であった。馬の死んでいる電鉄横を通ると、鷹野橋は黒煙でまっ暗。避難者の大群にぶちあたり、広島赤十字病院の横を元安川に向かって倒壊家屋の上を踏みわたる。山中高等女学校は避難者でいっぱい、川岸には炎の竜巻が天に向かってたけり狂っていた。引きかえして再び御幸橋に立つ。以前より増した火傷の群れを後にして、十二時すぎ広陵中学校横で食事をとると、友人の〇君とここから比治山東裏を抜けて広島駅へ出ようと考えた。

歩いていくと、

「女子商前付近からだんだんと惨状はひどくなっている。血と赤土で密着し、顔の輪郭が無いまでに傷ついている婦人。背中一面火傷した少女の肩に老いた母がしっかりとつかまり、右足だけゾウリをひっかけ、あぶなかしい足どりで避難している。

『広島駅を抜け饒津 - 三篠川 - 横川』、こんな道順が浮ぶ。熱さも怖さも忘れ、焼けている電車道を走った。駅のビルディングは猛火に包まれており、黒煙で広場は覆われて死者はおろか怪我人も見当らない。ただ白黒の犬が防空壕の辺に寝そべっていた。ふたたび荒神橋に立つ。この時刻(二時過ぎ位だったろう)ほんのちょっとした不注意で〇君と離れた(〇君は大洲のブドウ畑で一夜を明かしたとか)。家に帰りた一念に、前後の見境もなく、濡タオルを口にくわえ、稲荷橋に向かって走った。

稲荷神社前で初の死人に会う。今まで見なれた火傷と異なり、真黒に焼け、両手を肩の上に置き仰向きに死んでいる。男か女かわからない。 - 京橋上には一〇数人の瀕死の人々にまじって早や息絶えている人。断末魔のうめき声も聞える。橋の西詰には七、八歳ぐらいの女の子を菰で巻き、真青な足が見えるのみの我が娘の足を幾度もさすっている父親。東警察署では無傷な人四人が火傷者にメリケン粉を思わせる白い薬を塗っている。」という実情であった。

以上のように、炸裂後、地区は極度の混乱状態に陥り、逃げまどう避難民の救急活動も非常に粗略なことしかでき得なかった。

道路整備

道路は各町とも惨憺たるありさまで、歩行は困難なほどであったが、四日後、海田市町に駐屯している部隊が出勤して、京橋町中心に主要道路を整理した。

県の通達

八月二十日過ぎ、全市の町内会代表が、市役所に集合し、玄関の土間で、「九月六日までに道路を整備し、進駐軍の来広に備えよ。整備に際して、道路上に飛散している材木・家財など一切のものを町内会長の手で自由に処分してよい。」という県からの通達を言いわたされた。この条件に従って実施し、九月末までにはどの道も通行に支障な

いようになつたが、家財などの処分について、後日、復帰者が問題にし、裁判沙汰になつた一件もあつたが、罪に問われることはなかつた。

死体の収容と火葬

遺体の収容は、海田市駐屯の部隊その他の部隊の兵士らによって、六日の当日から始まつた。京橋筋の路傍の遺体は、七日正午ごろから海田市の部隊と来援した地方消防団員とが協力して、二葉山方面に収容し、火葬されたようである。

台屋町は比治山本町沿いの山手、現在市営墓地の下に、また土手町と桐木町とは食糧公団の焼跡などで火葬にふし、段原大畑町は、国民学校外側の通路で火葬をおこなつた。いずれも氏名はほとんど確認できなかった。

また稲荷町は、人的被害が少なかつたし、通行人の死者不明もなかつた。その僅かな死体は、国民学校で火葬し、仮埋葬はしなかつた。

これらの死体の火葬が終つたのは、だいたい十月末ごろであつた。

空前の混乱状態のもと、死体の火葬認可を受けることなど、正式な手続きはとれず、警察の検視も死体のすべてに受けたのではなかつた。

火葬をおこなつたのは、主として軍隊であつて、幾人もまとめて処理し、遺骨は、引取人のあるものは渡し、ないものは台屋町の源光院の慰霊安置所に納めた。比治山東裏の各町においては死体の収容や焼却はしなかつたが、町から市中心部へ出ていて死んだ疎開作業奉仕者やその他の犠牲者のため、大正橋西詰巡査派出所のところに昭和三十四年八月六日慰霊碑を建立し、毎年、灯籠流しをしている。

慰霊碑

町内会の機能

なお、各町内会の機能と対策処置は、つぎのとおりである。

町内会名	説 明
京橋町	その年の十月末頃からバラックが建ち始めたので、十一月中頃から海軍の解除兵赤井喜市が、毎日牛田から出張し、町内会としての事務に当り、十二月中頃からバラックの一角を借用して町内の事務をとる。
稲荷町	町内会長は死亡し、副会長は負傷、その他の人々も親戚縁者をたより疎開したため、町内の機能は一時止まる。
台屋町	残留町民が食糧および衣料の配給を行なつた。
的場町	約半年ぐらいあと、段原大畑町と合併運営した。
土手町	隣組単位に処理
桐木町	一七組あつた隣組が家屋疎開と、原子爆弾などにより世帯が減少したので、残存世帯を六組に吸収し、六組編成で町内会としての機能を整え、従来どおり月番制度を採り配給、その他の町内事務を処理した。
比治山町	
金屋町上	
金屋町下	
段原大畑町 段原町 段原東浦町 段原新町 段原中町 段原末広町 松川町	各町とも、焼失しなかつた地域では、従前どおり運営されたようである。

九、被爆後の生活状況

復帰居住者の状況

比治山公園の東裏や段原大畑町南部など火災の発生しなかつた地域を除き、全焼した各町は、居住者も少なく、疎開先からの復帰者も直後はきわめて僅かであつた。

京橋町での最初の居住者は三家族五人(福永ヨシ子・安原昇一・内藤玉喜の各家族)である。この三家族は、死んだ肉親の遺骨探しのために一夜をあかした向洋国民学校を出て、市内の焼跡に帰ってみたが残火なお熱く、寄りつくことさえできなかったので、その夜は東練兵場で野宿した。つぎの日、さらに焼跡に帰り、三人はそれぞれの遺骨を収集したが、すぐ日暮れがたとなつた。別に行くところもなく、近くにあつた京橋町内会の防空壕に、遺骨をかかえて入つたのが居住するところとなつた。

京橋町の防空壕は、間口約三メートル(一間半)、奥行約九メートル(五間)、深さ約一メートル半で、収容能力は六〇人であつた。地面を掘つた上に疎開作業で取りこわした家屋の平角材、柱類などを並べ、その上に掘りあげた

土を全部覆いかけて構築した堅固な防空壕で、被爆後も残っていたのである。

土手町でも町内防空壕を住居に利用している者がいたし、バラック小屋を建てていたものもあった。段原大畑町では、まず医院が木造で建てられた。医師不足であったから、残存者のたつての要望でもあったが、その他の人は焼跡の残材や古トタンを利用してバラック小屋を建てていた。

生活状況

荒涼とした焦土の生活は苦しく、物資の欠乏で極度の飢餓状態が続いた。

京橋町付近では、煉瓦建の芸備銀行の残骸で炊出しがあり、それで一日二日と露命をつなぐうち、近々物資の配給があるということになったとき、それを炊く道具も入れ物もなかった。これら売る店もないので、焼跡を掘り探し、使えそうな鍋・釜・茶碗など、みんな変形したり、黒ずんで汚れていたりしているままの器物を集めて来て、配給物の煮炊きをはじめた。こうして壕内生活とかバラック小屋生活が始まったのであった。

八月末の居住者数

八月末ごろ焼跡の居住者数は、だいたい次のとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数
京橋町	2	土手町	約 13
稲荷町	2~4	金屋町	不明
比治山町	(十月上旬) 2	桐木町	75
台屋町	30	消失地域	2
的場町	5	段原大畑町	非消失地域 250

焼けなかった比治山東裏各町の人口は、その後つぎつぎ避難者を受入れたので、莫大に増加し、そのまま定住するようになった。

八工の発生

八工の発生は言語に絶した。白い蚊帳がま黒い蚊帳に見えるほど八工が密集していたし、一步あるけば、その足あとだけの八工は逃げるが、足をあげると忽ち、逃げた以上の八工が、そのあとをたちまち黒く埋めた。焼跡を歩く人は、八工を追いながら歩いたが、背中といわず肩といわず、もぶれついてなかなか逃げなかった。

駆除の方法手段がなく、発生するにまかせているありさまで、バラック小屋のトタン屋根の裏側など、あたかも墨を塗ったように黒くとまっていた。夜昼となく、木ぎれなど残材を利用して、松明のようなものを作り、八工を焼きはらったりしたが、到底追いつかなかった。

この状況も九月初めごろ、アメリカ軍飛行機による殺虫剤の散布によって、やっと全滅した。

ロウソク生活

焦土の中の生活は、生活という形態をしていなかったが、殊に夜間照明がなく、残材を拾って来て焚いたり、乏しい配給のロウソクをともしたりして、心細い日々であった。

京橋町で壕生活をしていた前述の三家族は、九月十七日の豪雨で木材や廃材の流出したのを拾い集めて、小さなバラックを建てた。屋根は焼けたトタンを集めて葺き、同月二十四日、壕生活から脱した。このとき、電線の落ちていたのを拾い、つなぎあわせて、二十七日、バラックに電灯をともした。これがこの地区一帯の最初の明かりであった。三家族は、やっと人間らしさを取りもどしたような感じがして、よろこびあった。

バラックを建て、電灯をつけたものの、食生活は辛酸をきわめ、全くの飢餓状態が続いた。年末ごろから、闇市が駅前や愛宕町あたりに出るようになって、配給の不足を幾分かずつおぎなえるようになって来た。またバラックの周囲を片づけて簡素な菜園を作って、どうにか生き続けたのであった。

比治山公園東裏の地域は、焼けなかったのが大いに幸いして、苦しいながらも生活の平衡を取りもどすのが早かった。電灯も変電所から引いて二、三日後には各家庭に点灯することができた。

十、終戦後の荒廃と復興

台風被害

九月十七日の枕崎台風により、住居に使っていた防空壕がすべて浸水した。

京橋川は堤防を越すほど川水が増量し、付近一帯が危険に晒された。台屋町は特にひどい被害であった。

点々と散在していたトタンのバラックは傾き、ほとんど屋根を剥ぎとられて、細い古材の骨組を無残に露出してしまった。

猿猴川の増水も甚だしく、焼けなかった大正橋がついに流された。比治山公園東裏一帯は床上すれすれの浸水状

態になった。

バラックの建ちはじめ

なお、バラックなどが建ち、次第に復興しはじめた当初の、各町の状況は、次のとおりである。

町名	状況
京橋町	二十年末までに応急のバラックが一四、五戸できた。二十一年三月初め、組立式木造家屋(一セット・一〇坪、ラス葺、六畳用たたみ表付コモ六枚分。三、二〇〇円)が一二戸払下げあり、やっと板張りの家らしいバラックが建ったこの時、他所の割当分のうち不用のセットを一〇戸分ゆずり受けて、計二二戸が建った。
稲荷町	二十年十二月から二十一年一月ごろにかけて、市の払下げ組立式家屋もあり、ボツボツ家が建ちはじめた。この払下げ分より他に、トタンのバラックが二、三戸建った。
比治山町	二十年十月末から二戸が定住した。川に流れて来た材木を集め、トタンの破片をふいて屋根とした。
台屋町	九月十七日の台風で防空壕に住めなくなり、二、三日後から、木やトタンを拾い集めて、バラックを建てはじめた。
的場町	罹災後一週間ぐらいして、焼トタンのバラックを建てて少数の人が住んだ。二十一年になって、組立式の家を申込み、家らしいものが建ちはじめた。
金屋町	
土手町	被爆直後、すでに焼トタンバラックを建てて住んだ。十月ごろ、少し増えたが、自己保有の木材を他から運んで建てた者もあった。
桐木町	八月末まで、ほとんど壕生活をした。九月初めごろから、焼トタン小屋程度のものが建ちはじめ、二十一年三月ごろから、市の組立式木造家が二戸建った。同年六、七月ごろから本建築が一部に行なわれた。資材は、海田市町や安佐郡方面から入手した。
段原大畑町	十月ごろまでに、焼跡では残材利用の小屋を建てて少数ながら住んでいた。

京橋町商店街復興

昭和二十一年四月、市当局は、都市計画により、戦後、市内に復帰し、家屋や店舗など新築する者は、旧道路から約九メートル後方に退いて建築するよう通達をした。

京橋町内会は、その約九メートルを、地主にいちじ無償で借用することを申し出て快く承諾を得た。そこで町内会は復興対策として、一般人または広島駅前のムシロ敷きの闇市で、古着や日用品を売っている者などに利用するよう呼びかけた。条件は京橋町筋道路の左右を(一)一人当約一四平方メートル(四坪)を限度としてバラック建ての商店を開設すること。(二)土地は区画整理が施行されるまで無償で貸与するというので、一般に呼びかけたところ、昭和二十一年の九、十月ごろまでには一二〇軒ばかりのバラックが、店舗開設希望者と復帰した町民によって建設された。これはおそらく、市内全焼地区中で、最初に復興した正統的な商店街であって、深い伝統に根ざす町民の底力を、不死鳥のように示したものであるといえよう。

昭和二十年八月六日午前八時十七分原子爆弾炸裂直前までの京橋町住居者戸主氏名と被爆即死者氏名・年齢を記す。
あの日、あの時

前原静枝

昭和二十年八月六日、当時稲荷町京橋付近に在住。年齢四五歳。長男、次男共に出征、娘端枝二〇歳は向洋製鋼所へ挺身隊として勤務。戦たけなわとなり田舎へ疎開をと思いつつも、娘は「わたしは職場で倒れる覚悟だからお母さんだけ田舎へ。」と言うので、自分だけ安全地帯に入るに忍びず延引しているうちに親子共に被爆した。前夜来、警報の連続で殆ど眠ることも出来ず、隣組一同、屋外で夜を明かしたのであったが、そのとき、隣組の若い挺身隊の娘さんいわく「あすは広島を空襲するというピラを撒かれた。」と、誰かが「デマヨ、デマヨ。」と…。

六日朝、漸く警戒解除になりホットして、モンペも取り、身軽な簡単服で台所におり、朝食の準備、大豆御飯でもとコンロに火をおこしているところへ、二階の縁側から娘が首を出し、「お母さん、警戒警報解除になってもBの爆音が聞えているよ。」という。私も勝手口に出て空を見上げてみると、突然、ピカッと稲妻の如き閃光で、一瞬四・五メートル吹き飛ばされ、何かガラッという音がした様に思う。後は人の声もなく音もなく、ただシーンとしていた。

階下の座敷を貸していた女学院の英語の先生が、顔中血を流しながら出て来て「早く逃げましょう。」と言われる。「でも先生、私は眼が腫れ、つぶれて見えません。」手を引いて頂いて道路に出た。その時は何時のまにやら履物はぬげてハダシ、道はまるでガラスの粉の道、それが足にも立たず、ただ焼けつく様な熱さであった。

坊主頭をした地獄の亡霊の姿の様な人が、右往左往していて、誰も物言うものもなかった。フト見ると、彼方に福屋のビルが高くそびえていた。

京橋の中程まで歩いて来て、フト思い出したのは娘端枝のこと。先生は祇園の姉の家へ行きましょうと言って下

さったけれど、強いて拒否して、我家に引っかえす。腫れあがった眼を手で引っ張りあげる様にして、庭木を目標に倒れた家の木材の上を通る時、下の方でウンウンなる声をした。ようやく我家へ、そして二階にいたので、倒壊物の上へ上へとシャニム二上がって、娘の名をさけび続けていると、奥の六畳の窓際で、両足を膝から下のみ出してバタバタと合図をしている。からだの上には壁・フスマなどたくさん重なり、その上に大きな棟木が背中あたりに、上から斜になっていた。こんな時には、案外力の出るものだと思います、その上に大きな棟木が背中のあたりに、上から斜になっていた。こんな時には、案外力の出るものだと思います、一生懸命に木に抱きついて見たが、一寸も動かぬ。大きな声で助けを求めていたところ、前の家の御主人が「待って下さい。今うちの者を出したら、行ってあげます。」という。的場の方から火炎が見えた。気が気でない。そのうち漸く娘を出して頂いた。一命が助かり、ホッとして何の欲気もなく、避難袋も横目で眺めるだけであった。ただ何気なく戸棚の中の洗濯物の中から、浴衣を一枚引きぬき道へ出た。もう逃げる勇気もなく、満潮であった京橋川へ飛び込み、筏につかまりついていた。隣組の逃げおくれた人達と「死ぬる時は一緒に死にましょう。」などと言う。みな観念してのことである。消防団の人達がとんで来る火の粉を防ぐため、時々頭から水をかけて下さる。私は顔がピリピリするので潮水をしきりにかけた。川上の方から死体が時々流れて来る。橋の上から自転車を投げて行った人もあった。

潮の引いた後は暑いので、日陰になった橋の下に皆たむろする。今度は橋を落すだろうと言う人がある。みな橋から体を出さぬ様注意を受ける。

何処も火の海。胸がムカムカして来る。下痢をする。紙一枚あるでなし、持って出た浴衣を破いて代用にする。ほかの方々にもあげる。夕方握り飯の配給がある。これも入れ物がない。また浴衣を破いて、みなでそれに配給をうける。

近所の娘さんで、女子商卒業で銀行勤めの志奈ちゃんは胡町で被爆。下敷きになっていて助け出され、川岸まで帰ってきた時には、全身ヤケドで、誰か見分けがつかず、声を聞いて初めて解った。一緒に川に飛び込んだけど、上がってから、とても苦しみ出した。どこかのおじいさんが見かねて「小便をかけるとよいと聞いてるが、みなさんかけて上げてよいでしょうか。」という。とんだ漢方薬。しかし夜明けもまた息が切れた。朝出勤の時に、ほんとうにかわいい、きれいな娘さんになられたと思って見たのに...

今一人の娘さんは、家で寝ていて下敷きになり、州の土手まで這い出して来た時には、誰とも見分けもつかぬ。「藤田千代子です。お願いします。」の声で、初めて解る。鼻から口の方にかけて裂け、ちょうどイチジクが口を開いた様である。二日と見られなかった。朝誰かが千代ちゃん死んでいるが、腕時計していたのになくなっていてと言う声がする。

晩には川の堤にサバ(魚)を並べた様に、みな土の上に寝ころんで夜を明かした。寝たまま道路の方に眼をむけると、トラックが山のように積んだ荷物ならぬ亡きがらを積みあげて、幾台も幾台も通っていく。これはどこかの島に運び焼いたとかいう。

あさ四時頃、東警察署に知人を尋ねた。

途中、「おばさん、水が欲しい！」と全身腫れ上がっている人、肩から皮膚がぶら下って垂れ、赤身の出た人、生後五か月位の赤ん坊が木のようにかたくなって死んでいる姿を見た。また軍人が靴ばきのまま、馬の足もとに木のようにになって空に向ってはね上げたまま死んでいた。

道の西側、また東警察署にも足の踏入れ場もない位横たわって水を要求している人ばかり。全身だるくて身うごきも出来ぬ。日陰はなし、上から焼けつくような太陽。ころんだままで動かぬ娘を促して、東警察署まで歩かせ、郷里からムスビを運んで来たトラックに乗せてもらって、夜九時頃、佐伯郡佐伯町の我家についたのであった。

ちょうど、被爆当時は、モンペもぬぎアッパッパでくつろぎ姿でいたのが、川へ飛びこみ、ぬれたまま土の上に寝ころび、ボロボロの服が汚れてコジキよりもまだあさましい姿であつたらしく、田舎の近所の人達も、誰か見分けがつかず、お母さんですかと娘に尋ねていた人があった。

私も我家へ帰ってから、初めて自分もヤケドしていることが解った。

さすがに田舎は高原ではあるし、一日中、青田から来る涼しい風が気持ちよく、それでも家の上空を徳山方面に向う米機が群れをなして飛ぶ時にはジッとしている事が出来ぬ位恐怖におののいていた。(以下略)

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

南段原町、段原中町、段原山崎町、上東雲町、東雲町一丁目 二丁目 三丁目、東雲本町一丁目 二丁目、段原新町(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、東雲町[しのめちょう]・段原日出町[だんばらひのでちょう]・段原山崎町[だんばらやまさきちょう]・段原中町[だんばらなかまち]・段原新町[だんばらしんまち]・段原東浦町[だんばらひがしうらちょう]・南段原町[みなみだんばらちょう]とし、爆心地からの至近距離は、南段原町の現広島女子商業学校付近で、約二キロメートル、もっとも遠い地点は、現在の広島大学東雲分校付近で約四・四キロメートルである。

比治山公園は、地区分割上、段原地区に入って、この地区に含まないが、標高約七〇メートルの小丘比治山が、爆心地からの衝撃や火災発生の防壁となって、この地区の焦土化をふせぎ、北西部の人家密集地帯も、ただ家屋の大破程度であったことは、広島市の初期復興に大きな影響をあたえた。

地区は市の東部に位置し、比治山の東側部分で、猿猴川に扼されている。北部は、従前から人家の密集した住宅地域であり、東南方面一帯は、戦前は一面の田畑、ハス田、ブドウ園などが広がっていた半農地域であった。国鉄宇品線は、地区の北西部寄りを南北に走っており、猿猴川をまたぐ東大橋が対岸の南蟹屋町・大洲町に通じている。

地区内の当時の建物総戸数は約二、二一二戸で、人口は約七、五五〇人で、各町内会の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
段原東浦町下	120	118	365	田中孟
段原新町下	248	240	720	小早川盛登
段原中町中	290	315	1,260	中井仙太郎
段原中町下	188	215	850	桜井明
段原山崎町	168	118	427	香川士太
段原日出町	342	320	932	服部徳太郎
南段原町一丁目	154	145	497	高津幸一
南段原町二丁目	200	215	782	内富寛
東雲町上	320	310	1,050	藤本鶴一
東雲町南	183	178	667	中川到

地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
比治山国民学校	東雲町上	広島女子商業学校	南段原町一丁目
第一国民学校	段原山崎町	県立師範学校附属国民学校	東雲町南

二、疎開状況

人員疎開

当時地区内一般家庭では、老人や子供を、市外へ縁故疎開させていた。昭和二十年七月二十四日の呉市空襲以来、段原東浦町・段原中町・段原新町などの人家密集地帯では、約三〇%が空家という状況となり、残留世帯では主食以外の魚・野菜類の配給量がかえって良くなるという現象をまねいた。

物資疎開

各家庭では、縁故を頼って重要ものを小さな荷車(註・大八車は当時貴重品扱いされていたやすく使えなかった。)に積み、市外も五里以内程度の所に疎開していたものが、ほとんどといってよいほど多かった。

しかし、疎開した荷物が終戦後、完全に持ち帰られた者は少なく、たいがい品物が全部悪くなったり、著しく減ったりして物議をかもし事もあった。

学童疎開

比治山国民学校は、三年生以上の児童が、昭和二十年四月と七月に、佐伯郡津田町・浅原村・栗谷村の寺院などに疎開した。その数約二〇〇人、父兄側からも炊事婦としての同行者が二、三人あった。

別に、縁故疎開した児童数は約七〇〇人にのぼった。

三、防衛態勢

各町内会ごとに繰返し防空訓練を実施した。また、昭和二十年六月ごろから各町内会で国民義勇隊を編成したが、老人と婦女子ばかりで、名目だけの状況であった。

翼賛壮年団が盛んに各町内会を叱咤激励し、啓蒙にあたったが、成果はあまり現われず、警防団も五〇歳以上の団員が多く、概して気概に乏しかった。なお、比治山東麓には、一〇人から二〇人ぐらい収容可能の防空壕がいくつか作られていて、いざというとき、それを利用することになっていた。

四、避難経路及び避難先

東大橋を渡り尾長町を通り、矢賀町を経て安芸郡府中町に至る路線が、この地区の避難経路として指定されていた。また、地区内の緊急避難場所としては、比治山国民学校、及び第一国民学校が決められていた。これに中国配電株式会社大洲製作所があとから追加された。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍船舶砲兵団衛生教育隊	広島女子商業学校内
鉄道建設隊(部隊名不詳)	比治山国民学校内
兵器支廠の兵器貯蔵庫	比治山国民学校内

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

警報の発令と解除は、サイレンとラジオ放送のほかに、町内隣保班で当番制による監視員が配置につき、警報は振鈴、または大声で一般世帯に伝達する方法をとっていた。

五日夜から、たびたび出される警戒・空襲警報にも、たびたびの事で馴れているので、人々は動揺するようなことは、ほとんど無かった。

六日朝

六日午前七時、各隣組から男女の別なく、一人ずつ国民義勇隊として、鶴見橋付近の建物疎開作業に出動した。

地区内には前記の比治山東麓の防空壕のほか、各戸それぞれ待避場所を選定、簡単な防空壕を築造しており、本土空襲初期には、警報ごとに、これに待避していたが、のちには毎日のことなので次第になれて、六日朝の警報にも防空壕に待避する者は、きわめて少数であった。

被爆直前

朝七時三十一分、警戒警報も解除され、地区内はなんら変りなく、平常どおりの営みに入っていた。

家屋疎開作業の国民義勇隊はすでに出発しており、会社・工場の出勤者もほとんど出かけており、後には婦女子が掃除や跡片づけで、ほとんどの者が屋内にいた。しかし、警報解除後であるにもかかわらず、飛行機の爆音の聞こえることを、不審がっていた人はかなりあった。

目撃談

侵入敵機を目撃者は、ほとんどいない。段原中町の一婦人の体験では、西北の空にパラシュートのようなものを見た。マグネシウムをたいた時のように、ピカッと光った瞬間、ダイダイ色のような液体が流れるように見受けられ、同時に熱さを感じたけれども火傷はしなかったという。

なお、当日朝の疎開作業への出動と、建物疎開実施概況は、つぎのとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
段原東浦町下	12	鶴見町				
段原新町下	25	鶴見町	2	2		
段原中町中	25	鶴見町				
段原中町下	19	鶴見町	3	3		
段原山崎町	15	鶴見町	19	19		
段原日ノ出町	30	鶴見町				
南段原町一丁目	15	鶴見町	10	10		
南段原町二丁目	20	鶴見町				
東雲町上	35	鶴見町				
東雲町南	23	鶴見町				

七、被爆の惨状

炸裂の瞬間

強烈な閃光に一瞬目がくらみ、二、三秒でグワーという轟音。その後、約二、三分間は真暗で何も見えなかった。ほとんどの人が自分のすぐ近くに爆弾が炸裂したと感じた。

建物の倒壊は、段原中町中組と段原新町下組が最もひどかったが、全壊は余りなく、七割損壊というのが多かった。

瓦が飛散し、壁土は脱落、ガラスが粉碎された。家具や建具の下敷きになった人が、多数いたが、建物の下敷きになった人は、あまり見られなかった。

炸裂と同時に、所々方々から叫び声が上がったが、負傷者が屋外に逃げ出したのは、約二〇分ぐらい経過してからが多かった。三〇分も過ぎたころから、市外(東方)へ避難する大勢の負傷者が、行列をなして通り、同時に地区内から勤労作業に出動していた人々が、半死半生で帰ってきて右往左往し、各町ともにわかに騒然となった。

トタン板の塀などは、空中に舞い上がったままどこかへ消え失せた。なお、地区内ではガラスの破片による負傷者が多かった。

なお、広島女子商業学校は全校舎が、第一国民学校は北校舎がそれぞれ全壊した。

避難状況

原子爆弾炸裂後、幾人かの住民は、どこにも避難せずにふみとどまったが、大多数の人たちは東雲町のブドウ畑に避難した。一部は東練兵場、さらに遠く郊外へも逃げていった。

避難したブドウ畑からはもう逃げず、終戦まで野宿した人が多かった。

東大橋

東大橋は被害僅少で、これから大洲街道に通ずる道路上は、火傷した避難者や運搬される重傷者でごった返していた。路面は瓦などが飛散している程度で、通行にはさして支障はなかった。

当日正午ごろまでは、憲兵が東大橋に立ち、市内に入る者を制止していた。

被害状況

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
東雲町上組 南組	10	10	70	10		30	70	東大橋被害僅少
段原日出町		10	80	10		25	75	
段原山崎町		30	60	10		35	65	
段原中町中組 下組		60	30	10		70	30	
段原新町		60	30	10		70	30	
段原東浦町	10	70		20		70	30	
南段原町一丁目		70	20	10		70	30	
南段原町二丁目		70	20	10		70	30	

地区内が原子爆弾炸裂時、火災の発生を免れたことは幸いで、中心部のように、河川に避難するというような事態までには至らなかった。

なお、この地区では降雨はなかった。

その夜

当日の夜、地区内の住民のほとんどは、東雲町のブドウ畑、あるいは東練兵場などに避難して夜を明かしたから、各町の破壊された家屋内は、たいがい無人の状態であったが、比治山東側の壕に入っていた人たちもいる。多くの負傷者が半壊の家屋内にあり、路上にも転がっていたが、その中には、屍体も数体まじっていた。

そして、中心部の火災により、地区内は夜どおし明るかった。

諸現象

原子爆弾の炸裂にともなう、熱線と光の威力で、地区内随所に、張りめぐらされた電線の被覆が、各所で焼けて裸線となっていた。

段原中町の婦人が、黒いコウモリ傘をさして、的場町を歩いていたが、炸裂後、家に帰ってみて初めて傘が骨組だけになっているのに気づいたという。

しかし、その婦人は火傷もせず、現在、元気に生活している。

比治山山上の樹木は、ヘシ折れるか、折れないのはほとんど立枯木となった。また、羽のない雀が、屋根でピョンピョン跳ねていた。

一週間ほど経過してから、ハエが大変多くなり、そのハエが蚊同様に血を吸った。

地区内には、細い小路が多く、その小路の向きによって火傷を受けた人と受けなかった人とがあった。

熱線による自然着火現象としては、家屋には無く、段原中町女子商業学校前の通りで電柱一本着火、段原東浦町側の比治山の古い松の大木が、一週間もくすぶっていた。

段原中町中組で、町内の電柱のうち二本が、被爆一分後ごろ発火し、夕方までくすぶり燃えていた。また、段原東浦町下組では、民家の日除けのすだれが、炸裂直後に燃えたが、すぐ消し止めた。

燃焼により物質が変化し、瓦などが変色、変形していた。

爆圧・爆風の威力については、地区には爆風が西北から来たが、電柱のような物は場所により一五度以上傾いたため、電線はズタズタに切断された。トタンで造られた壁・塀・看板などは、そのほとんどが爆風のため飛散して、跡形もなくなっていた。

しかし、段原東浦町の比治山直下の家は、屋根瓦二、三枚吹き飛び、窓ガラスを少々壊されただけで、ほとんど無事であった。これは一〇メートル東前方寄りの家々が、約七割破壊の損害を受けているのと対比的で、山陰であったばかりに無事であったものである。

このように、段原東浦町と、南段原町一・二丁目は被害が軽く、ただ広島女子商業学校のような長く大きな木造建物が、倒壊しただけである。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援活動

地区内町内会その他の団体では、救援、炊出しなどを行なわなかった。

夕方になって海田市以東の郡部から、救援物資として握り飯が、大正橋巡査派出所前に輸送され、七、八、九日の三日間にわたって各町の罹災者に配給された。また、東雲町のブドウ畑・猿猴川土手・東練兵場などの避難老に対しても配給された。

東雲町のブドウ畑にいる避難者に「市役所の者です。」と連呼しながら、この握り飯が配られたのは、六日夜の九時から十時ごろで、十日ごろまで続けられた。

負傷者の中には、そのムスビをひと口食べ、「純綿のムスビだ。」とよろこびながら、息を引取った者が多数あった。そのなかには勤労働員で出勤し、被爆した若い女生徒もたくさんいた。

このブドウ畑では、畑の持主が棒をさげて来て、避難者がブドウを盗んで食べると言って、どなって廻るので、ゴタゴタが起きたという。中には畑から出て行けという地主もあったが、避難者は別に取りあわず畑に頑張っていた。多数の人が半死半生という状況で、もはやどうにもならないことであった。

救護所

広島女子商業学校に駐屯していた陸軍船舶砲兵団衛生教育隊(隊長・指田吾一軍医大尉)約一五〇人は、校庭で朝礼を終った直後に被爆し、倒壊校舎の下敷きになった者、爆風で強く吹き飛ばされた者などで負傷者が多数だが、動ける者一五、六人が集り、煙っている火を消すと共に、比治山東南側の防空壕の前に、天幕二つを組立て、赤十字の旗を立てて応急救護所(第六一八〇部隊指田衛生隊)を開設し、次々と集って来る負傷者の治療(チンク油塗布)にあたった。指田隊長の手記(原爆の記録)には、「半数ほどの患者は、薄れた記憶をたどっているのであろうか、どこかへ去って行く。残りの患者は、くずれ落ちるように倒れ込んでしまう。

時間がたつにしたがって、重症者がふえてきた。昼ごろになると、症状はだんだん醜くなってきた。悲鳴にも似たうなり声は、恐怖と憎悪に変わり、やがて無気味な沈黙に変わってきた。」とある。夕方までに患者約三〇〇人を宇品線の貨車で被害の少ない宇品へ送った。「...これで生きている負傷者はいちおう始末がつく。あとは死んだ人だ。特に名札をつけている人はいい。骨壺に名前を書き込むことができる。だが受取人のわからない、無名無縁の死体が無数に多い。

猿猴川の堤に運ぶか、その場で火葬にするか...。火葬に付すのが親切だが、全部というには手が回りかねる。溝を掘って材木を渡し、その上に遺体を乗せる。積み重ねて火葬にする。分担で、火葬にした遺骨に、それぞれ名札をつける。火葬するにも、石油もガソリンもないので、時間が随分かかる。

到底、少人数では始末におえぬ。わずかでも骨が見えたら、それをとって遺骨にする。

診療・後送・死体集積...だが《死体》、《死体》、《死体》、どこまでも、どこまでも死体の山である(同手記)。という状況であった。

また、指田衛生隊長らは、救援依頼の連絡を受けて、段原山崎町の第一国民学校に行った。ここは、女子商業学校よりもさらにひどい惨状であった。医師も、看護兵も、看護婦もいないのに、折り重なるように、ところせましと、負傷者が倒れ伏していた。

チンク油処置以外には方法がなかった。五本ばかり用意してきた繻帯も、たちまち使い果たし、負傷者自身の持っているタオルや手ぬぐいでしばった。

さらに、東雲町の比治山国民学校にも救護所が設けられた。ここもまた、前記救護所と同じ状況で、負傷者が溢れた。

これら学校の救護所は、負傷者がなだれこんだため、応急的に救護所となったのであった。当初は治療設備なく、その惨状は言語に絶した。

道路の清掃

道路清掃作業については、道路上に若干の飛散物があったが、警防団員によって片づけられ、八月十日ごろには、交通の支障を生じないまでに整理された。

死体収容と火葬

死亡者は六日昼ごろから翌朝にかけて続出したが、これら死体の収容と火葬・仮埋葬は、八月七日から収容が始められ、九月十日ごろまでに終了した。

救護所でもあった第一国民学校が死体収容場となり、警防団と遺家族とが処理に当たった。火葬は、校庭で行なったほか、東大橋下手の猿猴川堤防でも行なわれたが、これらの死体のほとんどが、区内内居住者であったため、人名確認は比較的容易であった。

他に、現在の広島大学東雲分校そばの川土手でも、連日多数の死体を火葬したが、一番多く取扱ったのは、第一国民学校の死体収容所であった。それに加えて、比治山山上でも、暁部隊の兵士たちによって、死体の焼却処理が行なわれた。

仮埋葬が行なわれたのは、火葬開始時期と同一で、終戦直後まで行なわれていた。場所は東雲町で、現在の市役所出張所のある処から下流土手下(東大橋の下流約一〇〇メートルのところ)であったが、埋葬場所を示す標識柱は別に建てなかった。

遺骨の安置と慰霊

比治山地区警防団詰所(現市役所出張所の位置)に身元不明者の遺骨が、昭和二十七、八年ごろまで安置され、最後にこれを市役所内の安置所へ移した。

町内会の機能

各町内会とも、役員や幹部が死亡したり、重傷を受けたため、活動は一時困難となった。

段原東浦町下組など会長が死亡したため、隣接町内会長が食糧配給などに当たった。

連合町内会の指令による配給は、七日から実施されたが、物資も末端までは行き渡らないのみか、かなり私腹を肥した人もあった。しかし逐次避難者も復帰するようになり、人が多く監視するようになってからは、次第に物資も公正に配給されるようになった。

九、被爆後の生活状況

八月八、九日ごろから、他へ避難していた人々がぼつぼつ復帰して来て、破損家屋の応急修理に当たった。また焼失地域からの避難者の来泊などで、終戦時ごろには、一軒に平均二世帯が住むという状態となった。

生活物資

八月七日夕方から九日まで握り飯の配給があり、十日からは一人一合程度の玄米が、町内会単位で配給された。

各世帯とも乏しい配給と、手持ち食糧で暮していたが、終戦後は、急に郡部の知人・縁故者などからの食糧入手が激しくなった。いわゆるタケノコ生活が始って、ほとんどの者が、日々窮乏の一途をたどっていった。

人口急増

被爆から終戦までの間、地区北部の人家密集地帯は、第二の空襲を恐れて人口は常時の半数以下となっていたが、他の地域は、避難者の流入などで逆に激増していた。

終戦時における各町人口は、次のとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数	町名	世帯数
段原東浦町下組	70	段原中町中組	220	段原中町下組	195

段原新町下組	160	南段原町一丁目	110	東雲町南組	280
段原日出町	290	南段原二丁目	170		
段原山崎町	220	東雲町上組	300		

八工の多数発生

八月中旬ごろから八工の発生おびただしく、駆除の薬品など思いもよらず、全く手もつけられないという非衛生的な状況であった。ノミやシラミの発生も激しく、夜も眠れないほどであった。

九月上旬になって、米軍が空からDDT薬剤散布を行なったが、生活環境の非衛生ぶりは翌年に持ち越した。昭和二十一年四月になって、町衛生組合が発足し、それから次第に改善されていった。

ロウソク生活

ロウソクの配給があったのは、被爆後数日過ぎてからである。それまでは名称もはっきりしない油を、ビンやカンに入れ、紐を浸してそれに火をつけ、明かりをとる生活であったから、夜はなるべく早く眠るようにして不便を凌いだ。

なお、東雲町のブドウ畑に避難したある被爆者の一人は、夜は市中心部の火災の反映で、被爆後三日間ぐらいは電灯をつけたよりも明るかったと語っている。

宇品線北側地区では、八月末ごろ電灯がついたが、罹災者が切断された複電線をつないで点灯した応急的なものであった。

疎開世帯・疎開児童の復帰

破損したわが家の応急修理を、自力のできる人々が、八月中旬からぼつぼつ復帰しはじめたが、多くは、転入抑制措置解除後に復帰したのであった。被爆以来、無人の家屋が多かったのにつけこみ、夜々、屋内の物資をぬすみまわり、川づたいに船で持ち去った者がいたという。

なお、比治山国民学校の疎開児童約二〇〇人が、復帰して来たのは、八月二十三、四日の両日であった。また、別に一般疎開者と一緒に帰って来た児童もかなりいた。

このようにして、地区内が従前の状態に戻ったのは十一月ごろである。

闇市場の利用

闇市場の利用も盛んであったが、軍関係の業務に従事していた者は、多数の軍需品を持ち帰り、物物交換で一般より楽な生活をしたと言われる。その反面、給料生活者は、交換する物資もなく、闇市の豊富な品物、高価な品物入手することもできず、わずかな手持ち物資を手放した後の生活の悲惨さは言語に絶し、一家餓死の一步手前という月日であった。

狡猾な者は、放出された軍需物資を闇ルートで大量に入手し、これを闇市の露店で高価に売り捌くなど、軍服姿のわか商人が大言壮語して横行する有様で、一般の者は、仕事らしい仕事もないまま、わずかな食糧の買出しなどに追われるだけであった。

昭和二十一年三月の新円切替のあとの頃から、被爆者らはどうやら仕事に就きはじめていたのである。

十、終戦後の荒廃と復興

台風襲来

この地区は、九月十七日の暴風雨で全面的に床下浸水し、宇品線北側では一七、八戸が倒壊した。応急修理の家屋ばかりであったから、貴重な物資を水浸しにした者が多く、惨たんたる有様であった。

ある所では、暴風雨により倒壊する家屋から、多数のネズミが飛び出して行くのが目撃された。倒壊する家の状態は、あたかもグラッと坐りこむような具合であった。

悪徳

比治山地区の家屋は、従前からその八〇%までは貸家であった。家主たちの中には被爆に続く風水害で、一層損傷した家屋を全壊家屋に認定して保険金を取得、二〇〇円の新円紙幣を見せびらかしたりして、羨望と侮蔑の入りまじった複雑な反発をかった者もいたという。また、大半破損した家屋を借家人に売りつけ、更に年の暮ごろには、その地代を以前より高く取立てた。この悪習が、その後ずっと残って借地借家人は生活をおびやかされ続けたという所もあった。

経済活動の伸展

この地区は、焼失を免れたので、被爆前からあった商店は、八月半ばから逐次開店していた。業種としては食糧

品関係の店が早く、古着などの衣料品関係がこれについて、営業収入をいちじるしくあげていた。

地区内の商店は住宅の間に散在していたが、段原東浦町の郵便局前通りがもっとも繁昌していたようである。比治山西側辺りの焼けた商店が、この通りに入りこみ、従来のペンガラ格子作りの家もつぎつぎと商店に建てかえられ、懐しい風土色がまたたくまに失われていった。

住居の修復状況

地域的に見て段原山崎町や東雲町方面の家屋が比較的早目に修復しており、宇品線北側の住家密集地帯は、昭和二十四、五年ごろになっても修復率は二〇%程度しかなかった。

建築資材の極度の入手難で、一般の家では容易に修理も行なうことができず、被爆当時の損傷を残したまま相当な期間、生活しなければならなかった。

十一、その他

この地区は既述のとおり、被爆によりかなりの破壊を受けたけれども、焼失を免れたという根本的な特質があり、被爆前の町並みがそのまま地区内全域に残った。

北部寄りに商工業的地域を若干存する以外は、今日においても南東部にかけての農業地域をのぞいて、他は住宅地域である。

戦災後の都市計画区画整理も施行区域外となって現在にいたっているので、昔どおりの細い道路が入りこみ、災害時が憂慮されている。しかし、広島市の近代化とともに、美しい住宅地として、ころもがえする日も遠いことではあるまい。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

比治山本町、皆実町一丁目 二丁目 三丁目、翠町

町内会別要目

この地区の範囲は、比治山本町[ひじやまほんまち]・皆実町[みなみまち]一丁目・同町二丁目東組・同町二丁目西組・同町三丁目東部・同町三丁目西部・翠町[みどりまち]の各町内会とし、爆心地からの至近距離は比治山本町の鶴見橋東詰で約一・六キロメートル、もっとも遠い地点は、翠町の丹那橋西詰で約三・六キロメートルである。

皆実地区は、往古、海中の島であった比治山を中心として、藩政時代、その南西麓に広大な皆実新開が開かれたのが街衢形成の初源である。そのころすでに亀島新開[かめじましんがい](比治山本町)・大黒新開[だいこくしんがい](皆実町)の一部ができていたが、さらに進んで東では仁保島が陸続きとなり、南地先では、宇品となり、太田川デルタの発達と干拓の進行に伴う市域拡大の典型的な現象として歴史的にも意義が深い一つの地域である。

戦前は、勤め人の多い閑静な住宅地で、ところどころにハス田・稲田・野菜畑が展開しているという環境のあかい地域であった。

当時の地区内の建物総数は約二、八三二戸、人口は約一一、四二四人であった。

この地区では被爆によって、皆実町三丁目西部電車道路から西側京橋川の間、および広島専売局からガス会社までの約一〇〇戸が焼失した。また、比治山本町、皆実町一丁目が大破全焼した。そのほかには部分的な火災はあったが、だいたい全壊・大破または半壊・中破の被害であった。

なお、当時の各町内会別の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
比治山本町	340	380	640	坂本政之助
皆実町一丁目	312	312	924	福原一
皆実町二丁目東組	373	370	1,700	西谷徳右衛門
皆実町二丁目西組	383	383	1,700	吉永三代吉
皆実町三丁目東部	469	562	2,650	畑石兼吉
皆実町三丁目西部	425	447	1,310	豊島豊
翠町	530	510	2,500	中村勝一
註・国民義勇隊皆実大隊長は畑石兼吉				

地区に所在した主要建物および事業所は、次表のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広島地方専売局	皆実町二丁目	広島ガス株式会社本社	皆実町一丁目
皆実国民学校	皆実町二丁目	県立第一中学校寄宿舎	翠町
広島高等学校	皆実町三丁目	県立広島商業学校	翠町
第三国民学校	翠町	広島県師範学校予科寄宿舎	翠町
市立皆実保育所	皆実町	山陽文徳殿	比治山本町

二、疎開状況

人員疎開

市内各地区とおなじように、人員疎開をおこなった。老人・子供を優先し、郊外の縁故者をたよって疎開を進めた。

戦況が緊迫するに従って、疎開者は町内会に籍を残したままで、疎開地と往復の生活をする者も多かった。

物資疎開

家財道具・衣類とかの疎開は、地区内住民の九〇パーセントが行なった。最初はオート三輪で運搬していたが、ガソリンなどの不足で、馬車がこれにかわり、終りには馬車も引っぱりだことなって、自分が大八車やりヤカーで運搬しなければならなくなった。

運搬道具不足で、ついに自家の防空壕の中に入れておく者もあったが、次第に食糧難に陥り、近郊農家へ買出しに行くようになったが、そのついでに僅かずつでも手に持てるだけ持って疎開した者も多かった。

学童疎開

学童は、縁故疎開をした者もたくさんあったが、それができない学童は安佐郡伴村および戸山村、それに高田郡丹比村のそれぞれの寺院に、集団疎開した。

こうして原子爆弾の被爆時には、地区の住民のうち、三分の一程度が市外へ疎開していた。

三、防衛態勢

防衛隊

他地区と同じく防衛隊を組織し、各町内会ごとにバケツ操法・竹槍などの訓練をおこなった。

貯水槽を町内会と各家庭に備え、防火用具なども取り揃えた。防空壕も町内会用と各家庭用とにそれぞれ設けた。一般家庭では床下や縁の下に僅か三、四〇センチメートルぐらいの深さに掘った簡易なものが多かった。その理由は皆実地区は地下水線が浅く、三〇センチメートルぐらい掘ると水が湧くため、防空壕も深くは掘りさげることができなかった。

なお、翠町は空地が多かったので二、三戸ずつ共用の防空壕を作っていた。防火用水槽は各所にたくさん設けられていた。

警防団・消防団の指導のもと、学校の校庭や道路の広い所で、焼夷弾が落下した場合の訓練を、発煙筒をたいておこなった。この演習訓練には、各戸から一人ずつ、国民服に巻脚絆、あるいはモンペでかならず参加しなければならなかった。

ことに皆実町一丁目には、広島ガス株式会社があり、ガスタンクもあったので、防衛隊本部では、格別に警戒し、万一の場合に備え、同社従業員の防火隊を組織して、訓練を繰り返して行っていた。

四、避難経路及び避難先

この地区の避難先としては、皆実国民学校が指定されていた。皆実国民学校が爆撃を受けたときは丹那方面、または仁保黄金山に避難することにしていた。翠町の住民は、黄金山の火葬場麓が定められていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
船舶通信聯隊及び補充隊(陸軍第一・第二電信隊)	皆実町一丁目
陸軍安芸部隊(通信連絡班 約二〇人)	皆実町三丁目 広島高等学校(本隊高知県)
暁部隊(通信隊約七〇人) 及び幹部候補生隊(兵種不明約三〇人)	皆実町二丁目皆実国民学校
暁部隊(兵種不明)	翠町第三国民学校

六、五日夜から炸裂まで

五日夜は市内各地区と同様な状況ですごし、六日午前七時の警報解除後も特別に変ったことはなかった。

六日朝、各町内会から約二七人ずつ計約二〇〇人の国民義勇隊員が、雑魚場・国泰寺町方面の建物疎開作業に動員されて出ているが、原子爆弾の炸裂に遭遇し、即死か、助かっても重傷で帰って来て、まもなく全員死亡した。

なお、地区内の建物疎開計画については、皆実町二丁目ガス会社横を実施するような計画があったが、被爆時には、まだ実施していなかった。また翠町では、八月三日朝、取りこわし予定家屋に、一週間以内に立退くよう貼札がしてあったが、実施されたかどうかははっきりしない。

七、被爆の惨状

大方の人は炸裂の音を聞かなかった模様で、気づいたときはメチャクチャに家屋が壊れていたし、屋外に出て見ると、広島高等学校校舎(一部)がペチャンコになって、倒れていたという。

しばらくして、助けを求める声がきこえるので、つぎつぎに倒壊家屋の下敷きになっている人を助け出した。全身負傷の人たちを、皆実国民学校まで連れて行ったりしているうちに、周囲がにわかに騒然となった。そこではじめて被害の甚大さに驚いた。町内を走り回って専売局の処へ出た時、御幸橋方面は真暗で、被災者たちが殺到しはじめていた。皆実町三丁目の光徳寺(説教場)が、当時皆実国民学校の分教場にあてられ、当日も学童が二、三〇人ぐらい、出席していたが、寺院が倒壊し、下敷きになった学童がわめいているの

で、ただちに救助にかかった。どうした作用か、幸いにも学童は畳と畳の間にいるのを次々と引っ張り出し全員救助できた。

比治山本町・皆実町一丁目と、西部電車通り西側を除いて他の各町は火災の発生がごく少なく、倒壊家屋の下敷きになっていても、ほとんど救助できて、犠牲者をあまり出さなかった。

翠町でも、屋根瓦は飛び散り、ガラスはみな破壊され、壁は落ち、家がまるでギース(バツタ)籠のようになってしまったのが多い。塀の煉瓦がはがれて住宅の二階に飛び込んで来た所もあった。周囲に真暗な闇が立ちこめたが、

地上約一メートルぐらいの高さまでは見通すことができた。

町民は被害状況に愕然とし、不安にかられ、全家族が家財道具などそのままにして、一人も残らず、東南東にあたる丹那・楠那・黄金山方面へ避難した。その夜も家に帰る者は僅かで、山の中で一夜を明かした者が多かった。おそらく、その夜自家にとどまった者は一か町で四、五人ぐらいと思われる。

炸裂時の瞬間的被害は、次のとおりである。

瞬間的被害

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
比治山本町	90	5	5		8	78	14
皆実町一丁目	50	50			5	56	39
皆実町二丁目	40	60			3	52	45
皆実町三丁目	26	52	22		3	44	53
翠町	10		90		3	42	55

火災発生状況

地区内の火災発生炎上の状況は、次のとおりである。

町名	最初に発火炎上はじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
皆実町二丁目	専売局	午前十一時半頃	煙草の葉を包装したワラに火がついて燃えひろがった。これが比治山本町へかけて燃えつづけた。消火にあたる。	二～三日間延焼
	中野工業付近	午前八時十五分		
比治山本町		不明	電車線路の西側のみが、専売局方面から北上して延焼した。	不明

右以外の町内でも飛び火的に発火したが、直ちに消火することができて大事に至らなかった。

炸裂後、この地区には降雨はなかった。

その夜

当日夜、避難した黄金山から、地区内を見わたすと翠町方面はまっ暗で、皆実町二丁目・三丁目では、夜になっても炎上しているほか、他地区の火災が反映して、焼け残った家並みも、さながら火災のようにまっ赤に見えた。まったく人気のない死の町で、ただ破壊された家屋が並んでいるだけであった。

ガスタンク

原子爆弾炸裂にともなう放射熱線により、ガス会社の円筒型のガスタンクに取付けてある鉄梯子の影が、くっきりと明瞭に黒く印されているのが、後日、発見された(第一巻写真参照)。

炸裂の閃光・轟音を、このガスタンクの爆発かと思った市民が多かった。しかし、ガスタンクには、ガスが充滿していたが、被爆と同時に、タンクの天井がメチャクチャに破壊されて、ガスは空中に放散燃焼しただけのことであった(久永三郎談)。

また、専売局付近の電柱が、頂部から燃えながら下方へと火災がさがってゆくのが気味悪く目撃された。すずかけの街路樹(西側の列)の幹の、爆心地に面した側だけが焦げていた。

翠町では、爆心地点から三キロメートルもはなれているにもかかわらず、熱線により火傷した者が多かった。

放射状熱線・爆風

熱線について、皆実地区内であった事象であるが、熱線は太陽光線のように全般におよぶものではなく、光線がものの隙間から射し込むような状態であって屋外にいる者が全部、一様に火傷するのではなく、放射線が通ったと思われるところにいた人が火傷し、それから外れているところの人は火傷しなかった。爆風も全般に均等にはおよばず、幾本かの風筋をなして通過したようである。室内に敷いてある畳でも、吹きあげられて立ちあがったところもあり、そこと離れていない家の畳でも、そのまま異状がなかった事例がある。

八、被爆後の混乱と応急処置

遠くへ避難

被爆直後、町民は遠くへ避難したままで、町内に人がいないため、何もできなかった。二、三日後に、西条からにぎり飯を運んで来たが、配給する人がいなくて余らせたほどであった。

医療班来援

また、皆実町三丁目の「タカの記念碑広場」に、某大学医療班が来て、被爆者の治療をおこなった。

死体の収容と火葬・埋葬

出汐町の被服支廠と霞町の兵器支廠には、一階二階ともに負傷者がいっばいに収容せられ、つぎつぎと死亡した

が、氏名の判名したのは荷札をつけておいて、付近の広場で火葬にした。翠町にあった陸軍のバラック建ても負傷者でいっぱいになった。

地区内の空地には、重傷者が並べられ、死亡した者は、みなその付近で火葬した。なお、専売局構内でも死亡した者は、暁部隊が来て焼いた。

このように死体収容場所は、別に定められてなかったから死体はそれぞれの場所で茶毘にふした。陸軍共済病院前(現在の県立病院)の桜土手でも、多数の人を火葬した。火葬は、油をかけて焼くようにしたが、燃料不足で思うように焼けず、半焼けのものもあった。仮埋葬はおこなわなかった。

町内会の機能

町内会の機能は辛うじて保たれていたから、各町内会長宅に事務所を置き、ただちに罹災証明書・食糧配給の転出証明書などの事務をおこなった。そのうえ、尋ね人の応待も引きもきらずあって、町内会長は自分のことは何もできないのみか、一睡もできないこともあった。

ともかく、全焼地帯でなかったから、町内の対策処置がどうかこうにかはかどっていった。

九、被爆後の生活状況

ロウソク生活

被爆後、夜間は暗く、どこからか手に入れたカーバイト・ロウソク・灯油などでしばらくの間辛抱していた。

皆実町では八月十日過ぎ頃から、個人個人が勝手に裸電線を引込んで電灯をつけはじめた。翠町あたりでは、早くから電灯がついていたようだが、たびたび停電した。

住民の復帰

住民の復帰は、終戦の詔勅放送があったとき若干あった。しかし八月末ごろまでは、まだ各町ともほとんど住人はいなかった。家が倒壊しなかった家族は、避難したままであったが、むしろ家の焼けたところの人が帰って来ていた。

九月十七日の大豪雨後、十月ごろからぼつぼつ避難していた町民が帰りはじめて、本格的に復帰したのは翌年になってからで、だいたい七〇パーセントぐらい帰って来た。

なお、疎開児童は九月になってから帰って来た。

ハエの発生

ハエが多数発生した。その原因は、被爆者の死体からだと思われるが、雨が降るたびに多くなっていったようである。米軍飛行機が薬剤を散布してから減少したが、そのため、野菜類、ことにカボチャとかナスなどは稔らなくなった。

困窮生活

生活物資については、配給物を大ざっぱに分配することから始めたが、配給食糧だけでは栄養不足になるので、どうしても補充分を闇買いしなければならなかった。イモ類や代用のダンゴなど、食べられるものは何でも買い求めた。交通杜絶で郊外に買出しに行くのも、徒歩で往復し、あえぐような生活であった。

被爆後の市内は荒野のようになっていたので、皆実地区から、はるか遠くの相生橋(西北三キロメートルぐらい)や、横川橋のアーチ(三・八キロメートルぐらい)なども、間近に見えるほど見とおしができて、距離感覚にもしばしば錯覚を起した。

闇市の利用

地区内には、闇市場的なものは一切なかったもので、広島駅前方面の闇市を利用する者が多かった。近郊農家へ、みな徒歩でリュックサックを背負い、物資買入れに出向いたが、焼野原の見通したので、案外近かったように感じたものである。何分にもひどい荒廃なので、町内会が新しいトタンの一枚、釘の少々でも配給しようと努力を試みたが、到底出来なかった。

十、終戦後の荒廃と復興

経済活動

九月十七日の暴風雨と、十月八日の洪水によって、この地区も壊滅的な打撃を受け、翌二十一年になってから、やっと本格的な経済活動が始まった。

主として、食糧品・衣料・雑貨の類が中心で、皆実町の映画館南座・広陵中学校前商店街・被服廠通りなどに店がならびはじめた。これが今では立派な商店街として、成長しているわけである。

このほか、広島駅前・宇品・己斐などの闇市場が拠点となって発達していたので、皆実地区でも、道路計画を構想し、その実現に努力したが、計画倒れとなって実現しなかった。

各町とも復旧資材が入手困難で、家屋の補修もできないありさまであった。後に県知事命令で、倒壊家屋とか、大破していて補修不可能な家屋を処分した時、それらの古材の自由利用が許されたので、これらで修理したものが多かった。

この地区は、前述のとおり一部の地区が全焼しただけで、他はほとんど焼失していなかったため、比較的復旧が早かった。

人口急増

それと空地が多かったため、他地区から新しく人々が入って来て、盛んに家を建てたので急激に人口が増大した。これにより、下水道・上水道の整備が間に合わず、多くの混乱を招いた。

なお、他の地区にくらべて、社会環境が、正常状態に早く回復して秩序を保ったことは特記されることであった。

皆実町三丁目の自宅にて

新田美登里(被爆地・皆実町三丁目自宅内)

当時私たちは皆実町三丁目の電車通りに於いて歯科医院を開業していた。一人娘の恵美が市立高等女子学校の二年生。息子の栄は附属国民学校の五年生で、これは比婆郡の西城町のお寺に学童疎開をしていた。

朝食が済むと娘の恵美は材木町方面に疎開作業のあとかたづけのため動員学徒として元気よく友人と連れ立って家を出た。家のかたづけをすませて二階のベランダの手すりにふとんを干し終ってから、無沙汰勝ちになっている親類に手紙を書いて、近況を知らせようと思い階下の食堂でペンを走らせていた。そこへ飛行機の爆音が聞えてきたが、警戒警報のサイレンもならないので、味方の飛行機だろうと思っていた。少し時間が過ぎた頃、突然、西の空のあたりに、見たこともない形をした雲が現れたので、何か知らんと思って、立ち上がった瞬間、轟音と共に家がグラグラと揺れてきた。私は反射的に両手で顔を押さえて家の中心部にあたる廊下の上に身体をふせた。震動がやんだので顔を上げてみると、私の頭部の方から血がタラタラと流れるように出ていた。そばにいた主人も胸部や手や足から血が出ている。誰れかに助けを求めようと思って立ち上がると家の窓という窓も硝子の戸も全部メチャメチャに破れ飛んでいた。救急袋の中からガーゼと繃帯を取り出して、傷のところをおさえて家の外へ飛び出た。あたりを見廻すと、どの家もどの家もみんな半壊の状態である。私の家だけかと思っていた私は、何が何だか分らず、ただ急いで救護所を探して、傷の手当てをして貰おうと電車通りまで行くとそこに一台の貨物自動車止っていて、その中に私の家の二階のベランダに干しておいたふとんが敷いてあり、近所の人達が血だらけになって、何人もころがっているのではないかと。私たち夫婦もその中に入れてもらって、近くの陸軍病院まで連れて行ってもらった。その時、ふと見返ると、私の家の庭の棕櫚の木からチロリチロリと火が燃えていたので、大声で「誰れか火を消して下さい。」と頼むと、知らない男の人が「よし火は消すから心配すな。」と言って、バケツに水を入れて二階の窓から火を消してくれた。

陸軍病院に行ってみたら、広い病院の空地には、傷ついた人々が山のように集っていて、とても手当てなど受けられそうにもなかった。博愛病院に行ってみようと思って引返して行く途中、目のとどく限りの街並は、みんな半壊の家ばかりで、その中を傷ついた人々が「政府は何をしているのか。」という怒号を飛ばしながら歩いている人がいた。どこの救護所も、とても寄りつけそうもなかった。家に帰って傷の手当てをして、ガラスの破片が一っばい散らばっている部屋の一隅に、ふとんを敷き体を横たえ、安静にしていた。少し心の落ち着きをとりもどしてきた時、勤労奉仕で出かけた子供がどうしていることか気にかかって、たまらなくなってきた。そうした折に知らない人たちが水道の水を使わせてくれと言って、風呂場にはいって身体を洗っていた。ひどくよごれた姿をしているので「何処から来られましたか。」と尋ねてみたら「千田町から来た。」と言う。「千田町の方へも爆弾が落ちたのですか。」と尋ねたところ「御幸橋から向う側は大変です。建物は全部こわれて全市が火にやかれて居りますので、私たちはこちらの方面にのがれて来ているんです。」と言って水に喉をうるおして出て行った。急に不安になって、家の外に出て見ると、着ている着物はボロボロに千切れて皮膚も頭髪もチリチリに焼けた人たちが、うつろな目をして焼けていない町の方へと多勢歩いて行っていた。パンツもズロースも焼けてなくなった男や女がノロノロと歩いている。そのうちだんだんと時がたって夕暮れ近くなってきたが、娘の子が帰って来ないので、近所に居られた学校の先生の家に消息を聞きに出かけた。途中で誰れかが「あれは特殊兵器でとても恐ろしいものらしい。」と言って話

しているのを聞いたが、その時はこんなに恐ろしい原子爆弾などとは、まったく思いもかけないことであった。

夜になったが娘は帰って来ない。御幸橋より向う側は夜になっても火が燃えつづけているので、いつ自分達の方へ延焼するかという恐怖のため、その夜は眠らないで過ごした。人間の焼ける臭いがなま温かい風に送られて来て、生きた心地もなかった。不安の一夜が明けた。どこかへ避難しているのであろうと思っていた子供が、翌日になっても帰って来ないので、町のゆききの人々に「市女の生徒を見かけませんでしたか。」と問うて歩いたが、だれも知らないという返事だった。交通機関も電信も電灯も全く絶えてしまった中にいて、人々はどこからともなく流れてくる話によって、想像したり判断するよりほかなかった。

八日の朝、子供が疎開作業の跡片づけをしていたという材木町の誓願寺の辺に、子供のなきがらを探しに主人が出かけた。沢山の死骸が、まるで畜生の死骸のように、地の上にいるいと並んでいたそうである。原爆ドームの広場には赤ん坊が数百人も並んで死んでいた。親は川に飛び込んでのがれるつもりだったのか、川の中にも無数の人が死んでいた。翌日の九日ごろには、軍隊の人や地方からの勤労奉仕の方々の手によって、死んだ人達のかたづけが始った。川の中に浮いている死骸はトビロを打ち込んで引寄せ、トラックに山のように積み込み、空地に集めて焼かれた。そのするどい異臭が八月のぬくい風に混じって長く続いた。

その頃から遠い地方の親類や知人達が安否をきづかって尋ねてきてくれ始めた。一人娘の恵美は全く消息がわからず、手分けして方々の収容場所を探しつづけたが、遂にわからなかった。町のところどころに負傷者の収容場所や姓名などが掲示され始めた。その中に娘の名を見つけて大よろこびした。坂の鯛尾に収容してあると書いてあった。宇品の船着場まで歩いて行くのに、まるで夢中であった。全身火傷なのだろうか、それとも行きつくまでに生命がなくなりはしないかなどと思い続けて、舟の速度が堪らなく遅い気がした。島に上がって行くと、患者は治療するでもなく、無数の雑居寝の有様だった。私の尋ねあてた娘は何と同姓同名の見知らぬ娘さんであった。急にはりつめていた心がゆるんで、クタクタとそこに坐りこんだ。そして全身火傷にあえいでいるその娘さんに「両親の方が尋ねて来られましたか。」と聞いてみると、かすかな声で「誰れも来ません。」「みんなどうなっているのかわからないのです。」と言っただけであった。

私は持って行ったミカンのかん詰を与えて「そのうち誰れか探して来られましょうから、それまでがんばっていらっしゃいね。」と涙ながらに別れを告げて帰った。

市立高女の生徒は一人も生存者がいないという知らせを聞いたのは、原爆の日から六日ぐらいたってからであった。張りつめていたそれまでの感情が、せきを切って流れるように地に伏して号泣した。もう何の欲望もなく痴呆状態の内に、広島市の町を逃がれて郷里に帰ろうと、広島駅まで歩いた。焼け崩れた広島市の中に一つ、福屋百貨店の高層鉄筋の残骸が家の形を残して立っているのが見えるだけの広島であった。広島駅とは名ばかりで建物もなく、切符も買わず汽車も夕方まで待つようやく乗り込むことができた。夜の十時頃尾道駅に下車した。空襲警報発令中の知らない町に来て全く困った。ようやく一軒の旅館に行き、夜の明けまでリュックサックに身を寄せて過ごした。東の空が明るくなりかけたころ、始発の電車に乗って両親の待っている郷里の帰途についた。

八月とはいえ田舎の朝の風は涼しく肌に泌みた。昨日までの惨劇など思いも寄らないような静かな田園風景であった。子供を亡くした親の悲しみが灼けつくような思いで胸に迫って来た。私の生きて来た四十年間のうちでこれ程悲しい思いをした事はなかった。

家に帰りつくと年老いた両親は、私達の生存を喜んで泣いた。田舎の生活は平穩そのものであった。私たちは身体に硝子の破片を受けた多くの傷と、時々おそってくる猛烈な下痢に悩まされたが、それも日毎に軽くなっていった。それから数日たった八月十五日に、玉音放送があり、停戦となった。広島の地には、七十五年間草木も育たないという新聞記事も読んだ。あの地獄絵図さたがらの広島に再び住もうなどとは思っても見なかった。

しかしあれから二十年の歳月が流れた。原爆以来、とかく健康のすぐれなくなった主人は四年後に亡くなった。被爆以来の悲しみは生涯忘れることはできない。

市立皆実保育所被爆記

河元きくの(当時・広島市保母)

警戒警報が解除になって、一度帰宅させていた子どもたちが、保育所(皆実町三丁目)に来はじめて間もなくであった。

警報は解除にたっているのに、B29の爆音がきこえる。思わず空を見あげた一瞬、青白いマグネシウムを焚いた

ような光が、空一面にひろがっていた。

そのとき、そこにいた園児は五人、保母は三人であった。

「オカァチャン！」と、子どもたちが私の体に抱きついて来た。

その瞬間、ものすごい爆発音！崩壊音！

私はしばらく気を失ったらしい。気がついてみると園舎の下敷きになっている。体中、傷だらけになりながら、やっと這い出すことができた。

園舎の屋根は飛び、壁は落ちて周囲には誰の姿も見えない。

「修ちゃん！」「健ちゃん！」

大声で、一人一人の子どもの名前を呼び続けると、崩れ落ちた壁土の下から泣き声が聞えてくる。

やっと這い出してきた他の二人の保母さんと、協力して必死で子どもを救いだした。

掘り出したと言ったほうが適切かもしれない。

一人...二人...三人...四人...、一番小さい隆坊が見あたらない。

「隆坊！隆坊ッ！」と、呼べども呼べども返事がない。

重い壁土は動かない。折りよく通りかかった憲兵さんに頼んで、大きな壁土をかかえ起した。

ああ、その下に、かわいそうにグッタリとなっている隆坊、壁の横板でノドを押しつけられている隆坊！

夢中で抱きあげて、狂気のようになって、病院をさがして歩いた。

血みどろになった人、まっ黒くやけどした人々、みんな慌てふためき、通路はまともに歩けないほど混雑している。

ふだんならすぐ行ける隣の陸軍共済病院(現在県病院)を、やっと探しあてて手当てをしてもらったが、ついに生きかえってはいくれなかった。隆坊の死骸を抱いて、気がついてみたら、裸足のまま歩きまわっていた。

宇品線の電車通りまで来たころ、隆坊のお母さんとバッタリ出会った。大切なお子さんをこんな姿にしてすみませんと、言ったきり二人とも泣きくずれてしまった。

園舎に帰ってみると、子どもを探しに来たお母さん、隣組の人々、通りがかりの人など、一人残らず大けがをした人ばかりである。

薬品や衛生材料のありったけを、ひっぱり出して応急手当てをしてさしあげた。

ガラスの破片で、首から肩にかけて深い傷を受けた子どもの母親が、わが子の名を呼びながら幽霊のような姿で入って来た。

「お宅のお子さんは大丈夫ですよ。」という、そのままそこへペタリと坐ってしまって、「先生、どうにかしてください。」という。首から肩にかけて二〇センチぐらいの大きな傷を、おむつで押えて、子どもを探しに来たのである。

原爆が投下された八時過ぎから十二時過ぎまで、預っている子どもを、母親の手に渡しおわるまで、私たちは職場を離れなかった。

最後の子どもを引渡したあと、重要書類をバケツ二つを合せた中に入れ、防空壕の中に埋めた。

西の方面ほど被害が大きいと、避難する人たちの言葉を聴いて、わが家とは反対の方向である東へ東へと歩いていき、黄金山の山中へ入った。途中から一度引返して、市の中央へ出る比治山橋まで来たが、道路の西側から火が火を呼んで、火炎のトンネルのようにになっている。その火炎の中を、燃えている車をひっぱった馬が眼の前に走って来て、力つきてドサッと倒れた。私は、とても歩ききれないと諦めて、また引っかえし、仁保の遊園地のなかにあった同僚の保母さんの家までたどりついた。

その晩はそのまま泊めてもらい、翌朝、もう一人の保母さんと保育園まで行ってみた。

幸い保育園は火災をまぬがれていた。

こどもたちと一緒に作ったトマト畑から、まだ熟れていない青いのまでもぎ取ってバケツに入れた。そしてやかに水を入れて、わが家の方向である己斐に向った。

御幸橋の上では、ケガをした人がズラリとならんで寝ている。みんなのうめき声が今も耳に残っている。

天満橋まで来ると、堤防にたくさんの負傷者が避難していて、「水をください。」「水、水」、と虫の泣くような声で求める。私たちは、やかんの水を蓋に汲んで、最後の一滴まで給仕した。

「もう水がないのですが、トマトをあげましょうか。」

「ください。」「ください。」

私たちはトマトをくばって歩いた。一人のおばあさんにトマトを渡すと、口に持っていきかけて、ポロッと落してしまった。

「手がダメになってしまいました...」

見ると、ひどい火傷である。トマトをちいさくち切って食べさせてあげると、不自由な両手をあわせて合掌された。

からになったバケツとやかんを提げて、己斐町までたどりついたが、わが家はすっかり焼けて、何一つ残っていなかった。

一夜を防空壕ですごして、故郷の島へ帰るべく、焼跡の道を宇品へ向けて歩いた。途中、昨日の場所でトマトを半分かじったままの死骸があり、私は涙で合掌した。

私自身は、辛うじて大きな負傷はなく、生き残った数少ない保母の一人として、その後ずっと、市の保育行政にたずさわった。昭和三十八年十月三十一日、厚生大臣から表彰状をいただき、身に余る光栄に浴すことができた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

仁保町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、仁保新町一丁目 二丁目、東本浦町、西本浦町、本浦町、仁保沖町、東雲本町三丁目(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、仁保町[にほまち]・同町本浦[ほんうら]・同町淵崎[ふちざき]・同町柞木[ほうそぎ]・東雲町[しのめちょう]の一部とし、爆心地からの至近距離は、霞町と本浦との境界付近で約三・二キロメートル、もっとも遠い地点は、柞木の渡場付近で約五・二キロメートルである。

仁保山(黄金山)は、もと広島湾に浮ぶ一島嶼であったのが、新開の発達によって陸繋し、現在では、東部が猿喉川河口に、南部は広島湾に面した一地区を形成している。

藩政時代の仁保島の漁民の活発な稼動状態については、新修広島市史も特記しているところであるが、この伝統的な活動性は現代まで強く引継がれ、「出かせぎや移民の点で仁保地区の占める比重は重い。明治時代になってからも明治十三年(一八八〇)ごろ、北海道松前地方の漁業(ニシン・イカ・イワシなど)におよそ一六、七隻が出かせぎしているし、仁保村時代村内に含まれていた向洋(むかいなだ)の人々は江戸時代からの伝統に従って対馬に渡る漁夫が多く、明治初年でも、堀越・淵崎の人々をも交えて、二〇〇隻余の、主としてイカ漁の漁船、一、〇〇〇人余の漁師が往来していた。」と言われ、また、ハワイへの移民も第一回官約移民以来の伝統をもっているという特色の上に、今日まで発展を続けて来た。

農業も地区の大きな収入源で、海にのぞむ爽快な田園地帯から、鮮魚とともに多くの野菜を毎朝市民に供給してきた。

戦後は農地の宅地転用が急増し、多分に都市的な住宅地区が急速に開けつつある。

原子爆弾の被害は、周辺部であったから、火災の発生もなく、損害も軽微であった。

被爆直前の建物は約一、〇八四戸・世帯数は約一、一八〇世帯および人口は約四、八二四人で、この各町別の内訳は、つぎのとおりである。ただし、東雲町の一部は、比治山地区に記載する。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
仁保町本浦	416	497	1,972	濃村 謙一
仁保町淵崎	354	352	1,502	板付 信一
仁保町柞木	323	331	1,350	金森 一男

(注)戸数・世帯の概数は、昭和二十一年市調査課資料により、人口数は津付数一資料による。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
仁保国民学校	東雲町下組	遷保姫神社	仁保町本浦
市立第一工業学校	仁保町本浦	胡子神社	仁保町単田
竈神社	仁保町淵崎	西福寺	仁保町淵崎
本隆寺	仁保町本浦	本浦観音堂	仁保町本浦

二、疎開状況

市の中心部から比較的に離れているので、戦時態勢下とはいいいながらも、比較的緊迫感が薄く、人員疎開も物資疎開もともにおこなわれなかった。物資については、逆に市中心部から疎開されてくるぐらいで、一般的にも安全地帯のように思われていた。

学童疎開

したがって建物の強制疎開もなかったが、仁保国民学校児童の疎開だけは実施された。すなわち、佐伯郡玖島村(現在佐伯町)へ二〇人、また同郡上水内村(現在湯来町)へ二二〇人、計三四〇人の集団疎開をおこなった。

三、防衛態勢

広島市警防団仁保分団員を、各町内に配属して防衛態勢をととのえ、他地区と同様な訓練と警備をおこなった。

防空・防火用の施設とか、資材の充実なども、当局の指導どおりに実行して、万全を期した。

また、広島市消防団仁保支部の消防団員三〇人を、三か町へおのおの一〇人ずつ配置し、それぞれ町内の青年団

員・婦人会員を補助員として、警備をかためていた。なお、被爆時の避難先とか避難経路などについては、特別には決めていなかった。

四、所在した陸軍部隊集団

暁部隊通信隊が、仁保町本浦の金井別宅、および本隆寺と、淵崎の西福寺、そして東雲町の仁保国民学校に駐屯していた。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜から

五日の夜、警報発令のたびに、めいめい決められた部署についた。

灯火管制を厳重におこない、住民は万一の場合、ただちに避難できるように非常服装をして備えていたが、空襲警報以外には、防空壕へ、待避する者はなかった。

六日の朝、原子爆弾の炸裂直前も、平常どおりで変わったこともなく、人々は生業についていた。

警報解除となって、しばらくして、上空の飛行機からパラシュート三箇が落下しているのを目撃した者がたくさんいた。

疎開作業隊

この朝、動員令による疎開作業のため、各町内会とも、つぎのように指定された現場に、出勤していた。

町内会名	出勤人員概数	出勤先
仁保町本浦	48	南竹屋町、宝町
仁保町淵崎	30	富士見町、宝町
仁保町柞木	45	竹屋町、鶴見町

六、被爆の惨状

避難状況

異常な炸裂の衝撃で、住民は、慌てて自宅の防空壕や、黄金山登山口に設けられた共用防空壕に待避したが、その後何事もなく、平静にかえったようなのでおそろおそろ壕内から皆出て来た。

淵崎・柞木方面は、山の陰になっていて、被害は軽かったが、本浦方面だけは、倒壊家屋はないにしても、各家とも半壊に近い被害をこうむった。

しかし、火災は発生せず、各町内にいた住民には一人もの死傷者が出なかったのは幸いであった。

市中心部への通勤者・通学生、あるいは行商人とか、建物疎開のための出勤者らは、大部分が死亡し、残余の人々も重傷をうけた。

犠牲町民

次の内訳の人的被害は、こうした町外に出ていた人々の犠牲者だけの数である(津村数一資料)。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(人)			
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	行方不明
仁保町本浦			80	20	126	169	1,677	
仁保町淵崎				100	65	150	1,285	2
仁保町柞木				100	45	123	1,182	

被爆者殺到

炸裂後、普通の雨が少し降った。そのうち、ここにも多数の避難者が殺到して来た。

山林地帯へいちじ難をのがれる者や、民家へたどりつく者などで、地区内は急に騒然となり、これらの救護活動で住民は多忙をきわめた。

当日の夜

夜になって、ますます避難者が増加する一方、町内から出ていた肉身の安否不明者も多く、收拾つかないほどの混乱状態に陥った。

七、被爆後の混乱と応急処置

応急救護所

避難者の殺到と、市中に出ていた家族の安否不明など、地区は混沌たる渦中に投げこまれたが、救援隊の派遣は受けなかった。住民の献身的な努力でもって、山林や民家に避難者を収容した。また、仁保国民学校に臨時救護所が開設され、暁部隊の軍医・看護兵などが治療にあたり、町民も連日三〇人ないし五〇人が出て、看護に協力した。

この臨時救護所について、津村数一(仁保町本浦)の資料によれば、被爆当日の午前十時ごろから治療活動が始め

られ、閉鎖になった十月末までのあいだに、収容者は四〇〇人未滿に達したという。市の中心部からたどりついた負傷者のなかには、到着したばかりでパツタリ倒れ、そのまま死んでいく人も多かった。治療中にも次々と死んでゆき、死亡者は推定六〇人以上に及んだ。

死体の処理

こうした死亡者は、氏名の判明のものはその関係者に遺体を引渡したこともあったが、ほとんどは火葬にして、遺骨を家族や縁故者に引渡した。

火葬は、被爆当日からすぐに仁保町東山(現在・本浦火葬場)と、東雲町猿猴川堤防上で実施した。火葬数は確実に三四体で、大部分が堤防上で行なわれた。後日、各宗派僧侶団が堤防一帯で読経供養をおこない、犠牲者の冥福を祈った。

町内会の機能

なお、各町内会の機能は支障なく、重大事態に直面して、大いに活躍したので、民心の動揺もなく、つぎつぎと緊急対策を打ち出し、円滑に進めることができた。

八、被爆後の生活状況

市の中心部は死の町と化し、生きる手だてもない廃墟であったから、周辺部の仁保地区へ、そのまま住みつく避難民や、あたらしく転入して来る者が多かった。被爆の日から八月末日までの一か月たらずのあいだに、一四九世帯も人口が増加した。

ちなみに、八月末ごろの、各町内会別世帯数は、つぎのとおりである。

仁保町本浦 五一二世帯

仁保町淵崎 四二八世帯

仁保町柞木 三七九世帯

ロウソク生活

突発事態で混乱をきわめている上に、電灯がつかなくなったので困難が倍加した。

灯油とか、ロウソクの光にたよって辛うじて、夜々をすごしていた。二週間ぐらいして、やっと電灯がついたときは、みんなよろこんだ。

また、仁保地区は、田園地帯で食糧だけは自給自足できる恵まれた生活を送られたのは力強い限りであった。このときばかりは周辺地区のありがたさが身にしみ、復興への生産活動にいち早く立ちあがることができた。

九、終戦後の荒廃と復興

被爆による被害は、淵崎・柞木両地区にはなく、ただ本浦地区が受けただけであった。そして、本浦の復旧は、他地区と同じように資材も乏しくはかばかしくは進まなかった。建物の被害も、応急的補修でいちじをしのいだ程度であって、復旧資材の入手が困難なため、ながいあいだ苦勞した。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

出汐町一丁目 二丁目 三丁目、旭町一丁目 二丁目 三丁目、霞町一丁目、東霞町、西霞町、山城町、北大河町、南大河町、丹那町、丹那新町、楠那町、本浦町(一部)、日宇那町、黄金山町、西本浦町(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、仁保町[にほまち]・同丹那[たんな]・同楠那[くすな]・同日宇那[ひうな]・同大河[おおこう]・旭町[あさひまち]・出汐町[でしおちょう]・霞町[かすみちょう]とし、爆心地からの至近距離は、出汐町西端の進徳学園寄り約二・四キロメートル、もっとも遠い地点は、仁保町日宇那の東南で約五・二キロメートルである。

市の南東、黄金山の南側のふもと、広島湾に面して西寄りに位置している丹那・楠那・日宇那などには古い漁業集落があり、山の西側の大河、東側の本浦は「すでにデルタの中に閉じ込められてしまったが、ともに船だまりがあって機能を失ってはいない(新修広島市史)」ところである。早朝、まだうす暗いころから、新鮮な魚貝を市中に売りに出て、露地から露地へ「ナンマンエー」と呼び歩く声は、むかしからのなつかしい風物詩であった。「ナンマンエー」は「生魚よ」の転訛だといわれている。

霞町や出汐町には陸軍広島兵器支廠・陸軍広島被服支廠があったから、戦時中は特に軍人・軍属の出入りが多く、また、市民の勤労奉仕隊も集ったので戦時色はいやが上にも盛りあがり、緊迫した空気が町の隅々にまで漲っていた。

住民は、男女をとわず、これら施設への勤労者が多かった。なお被爆当時の地区内総建物数は約一、八八八戸、世帯数一、九一八世帯、人口七、四六八人で、各町の内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
旭町	324	395	1,254	奥本徳一
霞町	96	116	483	内藤彰
大河南町	378	375	1,650	小泊清一
大河北町	285	285	1,150	浜西健一
出汐町	205	189	688	河口祉三
丹那	245	258	1,092	谷口稔
日宇那(楠那を含む)	285	300	1,151	田野中房夫

地区内の主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
大河国民学校	旭町	有限会社杉原縫製工業	出汐町
楠那国民学校	仁保町楠那	株式会社小川広島工場	出汐町上
陸軍広島兵器支廠	霞町	網本食品工場	旭町
陸軍広島被服支廠	出汐町	清信缶詰工場	霞町

二、疎開状況

人員疎開

昭和十九年十一月の内務省告示による人員疎開はおこなわれなかった。

しかし、建物疎開計画の強制実施によって、出汐町八九戸三九二人・霞町三六戸九〇人・旭町一戸四人・丹那八戸二九人が立退いた。

物資疎開

物資の疎開は、個々に郡部の親類縁故の家に、貴重品などを、万一の場合を考えて疎開したが、大がかりなものではなかった。

ただし、軍関係は高田郡・双三郡その他に、大量の物資を疎開した。

学童疎開

学童疎開は、当局の指示どおり実施した。

大河国民学校では、昭和二十年四月十二日に比婆郡本田村(現在・庄原市)へ、三年生以上の学童一一五人が小田校長ほか訓導五人、寮母三人の引率のもとに第一次疎開を実施。また同年七月十六日に同村へ、学童六〇人が訓導四人、寮母三人の引率のもとに第二次疎開を実施した。

同じく楠那国民学校でも、昭和二十年七月十八日に学童七九人が、校長ほか訓導三人の引率によって、比婆郡帝釈村(現在・東城町)へ第一次疎開を実施、引続き学童二五人が訓導二人と共に同村へ第二次疎開を実施した。

学童を見送る父兄や教職員と、見送られて出ていく子どもたちは、いつ終るかわからない戦争であるだけに悲壮感に打ちひしがれ、痛ましきのおおいかくせぬ惜別風景であった。

三、防衛態勢

防空・防火訓練は、警防団の指導により、確実に実施された。

昭和二十年六月九日、当局のかねてからの指示に従って、各町内会は、それぞれ山麓に、横穴式またはトンネル式防空壕を築造した。また各家庭も自家用の防空壕を掘り、消火用器具の備付けなども、それぞれ実施した。

また、各町内会は、住民を指導して非常用食糧の確保(罐詰・穀類の備蓄)、灯火の用意など万全の対策をたてていた。

救護所

同時に、大河国民学校を救護所に指定し、待避壕を築造し、しばしば避難訓練もおこなった。

国民義勇隊

また、同年五月二十九日の通達により、国民義勇隊を組織し、六日当日は、各町から市中心部各町の建物疎開作業に出動していた。

また、地区内における建物疎開は六日までに一応終わっていたが、壊した家屋の屋根瓦を、各町へ配分して保管することになっていたため、疎開跡片づけに、この日も現場へ出動していた。

四、避難経路及び避難先

災害時における避難対策としては、別に定めていなかったが、一応、大河・楠那両国民学校を避難先としていた。

市の中心部から幾分それている地域であったから、郡部への避難は考えていなかった。

しかし、被爆当日、爆風によって家屋が破壊されたものや、敵機の再襲撃を怖れる者が、郡部の親類知己を頼って百数十人が避難した。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
暁部隊の一部(四〇人位)	仁保町大河説教場
暁部隊兵舎	仁保町町楠那
暁部隊(約五〇〇人)	大河国民学校

六、五日夜から炸裂まで

五日から六日の朝にかけて、空襲警報発令のたびに、各防空壕に数人ないし数十人が一団となり、敏活な行動をとって待避した。

警報解除後は、町全般が平常どおりの状態に復し、会社・工場へ出勤するものや、建物疎開現場へ出動したりなどして、事態の発生は夢想だにしなかった。地区外へ出動した国民義勇隊員の詳細は不明であるが、負傷した者も死亡した者もかなりあった。

建物疎開作業

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先地名	建物疎開計画予定概数	被爆前日までの実施済概数	当日朝実施中の概数	他地区から実施のため集合した人員
霞町	13	水主町	36	36	-	-
旭町	3	不詳	1	1	-	-
大河南町	25	比治山本町川筋				
大河北町	25	比治山本町川筋				
出汐町	3	基町	89	89	-	-
丹那	不明	不明	8	8	-	-
日宇那	20	不明	-	-	-	-

午前八時すぎごろ、建物疎開のため比治山本町に出動していた小泊大河南町内会長が、国籍不明の飛行機が低空で飛んでいるのを望見した。と同時に閃光を感受、爆発音を聴取した。たちまち周囲一面が暗黒となった。数分後、顔面・手足から血が流れ出て、自分が負傷していることに気がついたという。このような負傷者が、地区から数十人出た。

七、被爆の惨状

炸裂直後

炸裂後、しばらくして二、三か所に火災が発生した。

午前八時半ごろ、旭町では、藁屋根の家屋が全焼し、隣家の網本工場倉庫に延焼したけれども、警防団の活動によってただちに消し止められた。大河南町では、閃光と同時に、藁屋根が発火したが、隣組の活動により半焼程度で消した。霞町でも熱線によって草藁屋根が燃えはじめたが、発見と同時に、隣組が協力して消火にあたり、延焼を防いだ。

このほかに発火したところはなく、三戸焼失、三戸ボヤの程度で、大火になるところを食いとめることができた。

しかし、爆風によって、一〇数戸の家屋が倒壊し、倒壊しないまでも、ガラスが破壊されたり、瓦が飛んだりして、大なり小なりの損傷を受けた。

死亡者はなかったが、ガラスの破片による負傷者が相当あった。

被害状況

なお、地区内の炸裂瞬間の被害は次の通りである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			備考
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者	
旭町	1.2	70	28.8	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
霞町	-	70	30	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
仁保町大河(南・北)	1.5	60	38.5	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
出汐町	4	70	26	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
丹那	-	-	95	5	-	0.1	99.9	
日宇那(楠那を含む)	-	-	95	5	-	0.1	99.9	

避難者の殺到

突然の事態発生で、住民は恐怖にかられ、不安がつよって来て、地区は混乱状態におちいってしまった。他地区のように雨は降らなかったが、まもなく地区外から、あられもない姿の避難者群が流れこんで来た。中心部の状況が知れわたると、住民はわが身の騒ぎどころではなくなった。

押し寄せた避難者は、誰れも彼もみた赤剥げ、黒焦げのばけものであった。

衣服は形なくボロボロに裂け、皮膚ははがれて垂れさがり、男女の別も判然としなかった。

ヨロヨロと喘ぎながら、歩くだけが力いっぱいありさまであった。力つきてその場に倒れる者、「水を…」と求める声も息絶え絶えの者、取りすがるようにして救護所へ案内を請う者など、大河地区の住民は、身辺のことを放り出して、これら避難者の救護に乗り出したのであった。

軍の被服支廠・兵器支廠も自由に、その門扉を開放し、続々と増加する負傷者の収容と治療に応急処置を講じた。また、大河国民学校も救護所として医療活動をおこなったが、治療中に倒れる者が続出した。

六日夜

避難者は、ずっと夜まで続き、夕食をとるひまもない救護作業であった。

市内中央部の、燃えあがっている炎が身の毛もよだつほどの、巨大な魔もののように赤々と映じ、いつ大河方面へ延焼してくるかも知れぬ心配にかられながらも、住民は不眠不休で事態処理にあたった。

兵器支廠にて

溝口悦子(当時一六歳、県立第一高女三年生、学徒動員で兵器廠にて作業中被爆)

千代ちゃん、お便りなつかしく拝見いたしました。本当に嬉しかったわ。

こちらこそすっかりご無沙汰してしまって...毎日元気で...といっても何をするともなくブラブラ日を送って居ります。

八月六日、思い出すさえゾツとしそうです。あの原子爆弾のために多くの人命がうばわれ、また、私たちにとって思い出多い広島市を、一瞬の間に焦土と化してしまったのでしたね。

貴女も弟さんを失われたとのこと、どんなにか淋しくまたくやしい事でしょう。お察しいたしますわ。

あの母校のなつかしい校舎も、もう見ようにも見られなくなったのね。"必勝の決戦""決死の御奉公""撃ちてし止

まん"これらの言葉も空しくなって終わりました。残念で残念でたまりません。

あの日、私たちがいつものようにトラックで兵器廠につき事務室に入り、書類を出して仕事を始めようと腰を下ろしたと思うと、ピカッ！と光ったでしょう。何だろうとびっくりして隣の岩村さんと顔を見合して、"何かね""おかしいね"と言ったかと思うと、今度はドカン、ガラガラ、ゴウツと、建物がグラグラゆれたので思わず床に伏せました。

右側の窓で光ったのだからと思って、破れた硝子がバラバラふってくる中を夢中で左の方へ這って行きました。そうして見習士官の机の下にもぐり込みましたのよ。爆風のために書類やいろいろのものが散るし、ガスの臭いで鼻や喉がツーンとして気分が遠くなりそうでした。このまま死ぬのかと思いました。しばらくして待避の命令で起き上がり、防空頭巾をかぶって外に出ました。そうして前の待避壕の中に飛び込み、そのうち解除が出ましたが、一寸外を見た時思わず倒れそうでした。

向うの方から顔や手足そして服を血で真赤に染めた人が何十人という程走ってこられますの。兵器廠の工員で下敷きになったか、何かによって怪我をした人でしょうけど頭のわれた人や、手のもげた人などが、走る元気もなくなって私達の前にバタバタ倒れるのよ。係の人がきて「怪我のない元気の方は出て手伝え。」とおっしゃるので、私たちは決心して負傷者を担架で運んだり、血をふいてあげたりしました。

それらの人がひとまず済んでホッとしたかと思うと、廠外の負傷者も収容しはじめて、火傷で全身皮がむけて桃色になったのやら、足の皮を三〇センチメートルぐらいひこじった人が、来るわ来るわ続々と行列の様に入ってくるのよ。ゾーッとしたわ。ポカンとして見ていると「オイ、あんたらもこいッ」と直属官に呼ばれて行って見れば、ガーゼに油をつけて、火傷している人に塗ってやれッと言われるのよ。最初は気味が悪くて、その部屋に入るとブーンと変な臭いがするし、顔がふくれて三倍ぐらいになったのやら...本当に泣きたくなりそうだったけれど、患者の大部分が女学校の一、二年生で「お姉ちゃん、すみませんけどつけて下さい。」「お姉さん、わたしにも。」「わたしも。」と寄ってくると可愛想になり、さきほどのいやな気分も何ともなくなって、一生懸命つけてやりました。でもその時の臭いが鼻について、一週間ぐらい御飯がおいしくなかったわ。

その晩は「全作業員は廠内に詰めきり勤務を命ず。」という命令が出て、待避壕の上で一夜を明かしました。七日も朝から患者を、きれいに掃除された倉庫の床に毛布が敷かれて、そこへ移すのに大変でした。一人で歩ける人はよいけれど、かかえたり抱いたりしていく時は困りました。体にさわれば痛がるし、痛みにかまわずかかえればズルッと皮膚がむけるし、そのころすでに二〇人ぐらい死んでいきましたが、その死体も抱いたりしたのよ。千代ちゃんだったらきっと出来ないでしょう。冷めたくて固くなっているんですもの。

七日の夕方、ほんとうは帰れないのを、見習士官殿のお情けでこっそり帰していただきました。八日の朝、トラックに乗り遅れたので、支廠まで三時間半もかかって歩いて行ってみると、もうお食事がすんでいて私達のがないので炊事に頼んで、また炊いてもらうやら大騒動をさせました。- 支廠に戻るとき、谷さんはいらっしやらないし、私と岩村さんの二人が、テクテクと路上にころんでいる死体をまたぎながら歩いていたのよ。-

それから五日ばかり全然家に帰らなかったのよ。岩村さんはお父さんとお母さんが亡くなったのよ。中島さんはね、あの方はちょうど六日にお休みになって、広島の家に行らっしゃったためお母さんと一緒に亡くたられましたのよ。県女に行っておられた妹さんも死なれ、伴へ逃げてこられたお父さんも亡くなられ、そのため病気で寝ておられたおじいさんも気を落として亡くなられました。

あとにはおばあさんと小さい弟さんと妹さんの三人が残られただけです。本当にお気の毒ですね。私と谷さんの家は何事でもありませんでした。

私の家では父も弟も私も広島市に居りながら一人も怪我がなかったのは不思議ですわ。

八月十五日以後は工員の退職金の支払いや、いろいろな片付けで徹夜を二晩も三晩も続けたり、ほんとうに目が回るほど忙しかったわ。

川内村に行って居られた方の事は、少しもわかりません。水野さんはお元気との事です。

私が知っているのは井槌さんが亡くなった事、山下さんのお母さんが死亡されたこと、それに二組(クラス)の中村さん・村尾さん・金行さん達が亡くなられたこと、これ以外のことはよく知りません。また、耳に入ったら知らせますわ。貴女もね。みんなの様子が知りたいのよ。今日はカラリとした秋日和...思い出すわ、恒ちゃんと一緒に貴女の家へ行ったことを。

では今日はこの辺で。乱筆をおゆるしいただきたくお元気でね。

おなつかしき千代ちゃんへ えっちゃん拝

被服支廠にて(抄)

金行満子

(平野町の自宅で被爆し、重傷の身で、出汐町の被服工廠までたどりついたときの状況を、「原爆体験記」所載"思い出のケロイド"に次のように述べている。

少し行くと、もうどうにもならぬ程フラフラになって私は立ち止まった。左手にある道のつき当りに大きな門がみえる。私は是が非でもあそこまで行かねばと思い、足を引きずるようにしてやっと辿りついた。何処かと思きわめる元気もなく、受付で住所氏名をつけ、「重傷」と書いた荷札がつけられるうちに、私は意識を失ってしまった。

まるで一昼夜して私は意識を取り戻した。そして私は目がみえなくなっていた。手をあげようとしたが、右手は重くて自由にならなかった。左手先でソツと顔に触れた。額・頬・口まるで豆腐とコンニャクをつきませたような感じで鼻もないように、ブクブクに膨れ上がっていた。私はフトあの石堀の下の化物のような姿を思い浮かべ戦りつした。

そして耳にポタポタ流れ入る涙もかまわず泣きながら、一心に神仏の御加護を祈った。

咽喉は猛烈に渴く。あちこちから水...水と叫んでいる声が耳に入る。火傷には水は禁物であることを思い浮かべ私は歯をくいしばって我慢するのだった。どうにも耐えられぬ時でも一〇滴とは飲まぬようにした。二、三日して少しあたりが白んで見えた。私は狂喜した。眼球はやられていないのだ。時を経るにつれ、次第に物の影がはっきり映り始めた。私はそこが被服廠であることを知った。そしてある大きい建物の板敷きの上に、大勢の怪我人と同じように、毛布一枚を敷き、その上に横たわっていた。

その日初めて、井に入った水のようなお粥を、女工員の人にスプーンで、開かない口に無理に流しこんでもらった。午後から治療が始った。火傷の顔はどこよりも気になった。ガーゼは毎日のようにとりかえられる。そのたびに薄桃色の肉のようなものや、皮などが相ついでにはがれ、下から少しずつ血が流れるのを見ると、痛いのと、心配で私はオロオロしながら泣いた。数えきれないような怪我人相手なので、一々ていねいな手当てはしてもらえない。腕は同じように腫れ上がり、その上にクリーム色の膿が底からジワジワと毎日浮かび、膿をふくために脱脂綿がスースーとあたるだけなのに、それはまるでメスで切りさかれるような痛みを感じ、私は声をあげた。

背中のはそれにも劣らなかつた。縦横無数である。短いのも、長いのも、浅いのもとりどりである。

ガラスを出す度に、チャリというメスの響き、殊に後頭部の傷はピンセットで破片がつまみ出される度に、息の根も止まる思いがするのだった。(以下略)

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

大河地区は、全焼からまぬがれ、家屋の倒壊も僅少であったから、救護隊の来る必要がなかつた。

逆に、各町内会と、暁部隊・兵器支廠・被服支廠関係の軍人・軍属とが協力して、大ぜいの避難者の救護活動を展開した。

地区の国民義勇隊は、被爆後は隊員の集合が悪く、組織的な活動がおこなえず、機能も停止状態となったから、主として、町内会役員と警防団とが中心となって活動したのであった。

応急救護所の活動

大河国民学校・楠那国民学校が、かねてから避難所および救護所として指定されていたため、それを目指して避難者が殺到した。

幸いにして、地区に設営していた暁部隊が、部隊所属の軍医を派遣して来て、応急手当を実施することができた。

これに加えて、負傷した地区担当医師にかわり、佐伯医師が来援し、迅速な治療活動をおこなったが、何百という多数の負傷者であったから、医薬品も乏しいうえ、治療に追われどおして、処置は思うようにはかどらなかつた。そして、連日、多数の死亡老が続出した。

八月十二日から、東部救護所として大河・楠那両国民学校が新しく指定され、主に軍関係が治療にあたった。

緊急食糧の配給

緊急食糧の配給は、河口連合町内会長が主体となり、警防団と協力して、緊急食糧の確保をおこない、臨時炊出

し場を設置して、にぎりめしを被爆者へ供給した。

この炊出しにあたっては、各町内会の婦人会に呼びかけて、毎日、隣組単位の交代制で出勤するようにした。

収容者数

救護所は十月五日限りで閉鎖されたが、取扱った収容者数は、記録がないけれども、河口社三・浜根肇両人の資料によれば千数百人に及んだようである。

後日、学校が救護所を解除されたとき、四年生以上の児童が総がかりで、校舎の大消毒、大整理をおこなわねばならなかった。

死体の収容と火葬

大河・楠那両国民学校に収容された避難者は、連日、一〇人ないし、三〇人位ずつ死んでいった。

収容する際、氏名などを聴取していたので、死亡者を火葬後、遺骨の引取人があれば、渡すことができた。しかし、重傷者や身寄りの者がつきそっていない者で、氏名の聴取も確認もすることができなかった死亡者も多くあったから、これらは身元不明のまま処理するほかなかった。

死体は、八月七日から大河・日宇那の火葬場に運んで火葬していたが、日々にその数が多くなり、やむを得ず校庭に穴を掘り、隔日ではあったが、一度に五体から三〇体ぐらいを積み重ねて、コールトールをそそぎ、少量の薪を使って茶毘にふした。

また、中心地で死亡した遺体を、軍隊が大河国民学校へ運んできて火葬したが、累計約五〇〇体にもおよんだという。応急救護所を閉鎖した十月五日からは、火葬の作業もおこなわれなくなった。

合同慰霊祭

なお、大河・楠那両国民学校に安置していて、まだ引き取り人の出て来ない遺骨については、後に合同慰霊祭(日時不明)を執行し、冥福を祈った。標柱などは別に建てなかった。

道路の開発作業

また、地区内の道路は、落下飛散した瓦や壁土で路面がふさがっていたが、各自が自発的に処理して啓開清掃した。

町内会の機能

被害度が比較的に軽かった関係上、各町内会の機能は支障なく運営された。

町内に対する事務的処理は、町内会幹部や、元気な隣組長とか、町有志の奉仕によって円滑におこなうことができた。

救護所用のふとん、身廻品の供出とか、被爆負傷者の看護などはもとより、被爆後における伝染病予防処置のための医師・看護婦の手配など、実に寧日なく地区住民の努力と奉仕がつづけられた。

九、被爆後の生活状況

八月末の居住世帯数

全壊全焼からまぬがれた大河地区は、避難者の殺到で混乱をきわめたとはいうものの、その後はいち早く平静に立ちかえた。

八月末ごろの居住世帯概数は、次のとおりである。

旭町 四四三世帯

霞町 一四一世帯

仁保町大河 七〇〇世帯

仁保町丹那 四〇三世帯

出汐町 二三二世帯

衛生環境

河口連合町内会長は、昭和二十年八月十二日、広島市常会に委員として出席し、災害後における伝染病予防、上水道の修理、便所の設置などにつき指示を受けた。

各町内会は、その指示に基づいて予防処置に努めたが、殺虫剤その他の薬品が欠乏していたので、指示どおりに万全を期することは不可能であった。

幸いにして、大河地区は、ハエ・蚊・ノミ・シラミなどの発生が少なく、環境衛生は災害前とあまり変らなかつたから、伝染病も発生せず、住民は安定した生活をおくることができた。

生活物資

生活物資は、八月十日から食糧営団が普通配給を開始したので、大河地区も配給を受けることができた。また、衣類・副食物なども配給されたし、恩賜財団援護会から罹災者見舞品としてブドウ酒一二六cc、ブドウ五グラムの配給もあった。

砂糖も一人当り四五グラムずつの配給がおこなわれたが、永く砂糖の甘味に飢えていた人々は、ほんの僅かながらも純糖の味に触れて感激した。

復旧活動

九月十五日以降、町内に復旧資材の配給があったので、急いで家屋の修理にとりかかった。

当時としては、統制経済の厳重な体制下にあったから、復旧資材の入手も不十分であったし、また幾ほどかの資材を得たにしても、大工や左官などの技術者が不足で、本式の建築工事などは望むすべもなかった。みな、バラックの仮工事でやっとまにあわせた程度であった。

しかし、軍需生産が、民需に切りかえられてから、経済的な動きもようやく活発となり、戦時損害保険金の支払いなどと相俟って、物資は、いよいよ本格的に生活をうるおわしはじめた。全焼しなかったので、商店はいち早く営業を再開し、主として白米・副食品・調味料・衣類・日用雑貨などが、物々交換や闇取引きによって盛んに流動しはじめて、占領下、なお混迷する世相ながら、生活は徐々に明るさを取りもどして来たのであった。

一方、地区に避難して来た人々の中には、なお防空壕に住んだり、焼トタンのバラックに露命をつないでいる人もあって、被爆の傷痕はここかしこに深くえぐりつけられていた。

県庁来る

なお、昭和二十一年六月二十二日、陸軍兵器支廠に広島県庁が移って来た。

十、その他

皆実町一丁目に駐屯していた暁部隊正門の〇・ハメートル角の石柱が、爆風のため正反対に方向転換して立っていて、見る人々は、爆風の威力に驚いたり、不思議に思ったりした。

一、地区の概要

住居表示実施後の新名

青崎町一丁目 二丁目、東青崎町、堀越町一丁目 二丁目 三丁目、小磯町、月見町、向洋本町、向洋中町、向洋大原町

町内会別要目

この地区の範囲は、向洋大原町[むかいなだおおはらちょう]・向洋中町[むかいなだなかまち]・向洋本町[むかいなだほんまち]・向洋小磯[むかいなだこいそ]・青崎町[あおさきちょう]・東青崎町[ひがしあおさきちょう]・堀越町[ほりこしちょう]とし、爆心地からの至近距離は、東洋工業株式会社内の現在の仁保橋東詰で約五キロメートル、もっとも遠い地点は仁保町字山之神の海岸べりの地点で約五・五キロメートルである。

向洋・堀越・青崎各町とも、もともと農家が多く田園地帯であったが、日本製鋼所・東洋工業株式会社などの工業の発展にともない、会社社宅が建ちたらび、田園は次第に宅地化した。戦後は更に発展して、商店街もひらけ、急激に田園は減少し、鄙びた往年の海岸線特有の情緒はうしなわれて来ている。

被爆当時、この地区の総建物数は約一、六八四戸で、世帯数一、六五五世帯、総人口は約六、三五四人で、各町の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
東青崎町	205	224	893	水田正信
堀越町	311	304	1,253	橋本長之助
青崎町	379	392	1,269	松本勘太郎
向洋本町	150	170	790	児玉群一
向洋中町	144	142	503	三太田勝吉
向洋大原	297	225	994	児玉倉太郎
向洋小磯	198	198	652	松原近夫

地区内に所在した学校および主要建物(または事業所)は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地
青崎国民学校(高等科併設)	青崎町
東洋工業株式会社	広島市青崎町・安芸郡府中町
日本製鋼所	広島市堀越町・安芸郡船越町

二、疎開状況

疎開者僅少

市の中心部から、かなり離れていたため、地区外への疎開は、学童を含めて約二〇〇人程度で、一般住民はほとんど疎開しなかった。また、物資の疎開をした者もなかった。

学童疎開は、向洋大原町二〇人、向洋本町一五人、東青崎町五〇人、堀越町五〇人で、比婆郡庄原町の寺院・学校・民家などへ疎開した。

三、防衛態勢

昭和十六年から警防団を結成し、青崎地区全般にわたって、隣保組織を整備し、毎日、訓練演習をおこない、避難・救護態勢を確立していた。

被爆当日、この地区の国民義勇隊は出動していなかったが、女子挺身隊員として向洋大原町二人、向洋本町一人、青崎町二人が、市内水主町付近の家屋疎開作業に出動していて、全員被爆死した。

なお、防火対策については、隣組二組に一台の手動ポンプを設置し、また各家に水槽を設置して防火態勢をととのえていた。

四、避難経路及び避難先

地区内に山を利用して、隣組が二組から五組程度入れる防空壕を作って避難することにしていた。

防空壕はいずれも、避難命令発令後、最大時間一〇分間以内に避難し得るところに作ってあった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
暁部隊(金輪島)	向洋大原町裏海岸

六、五日夜から炸裂まで

八月五日日曜の夜から六日の朝にかけて、しばしば警報が発令されたが、地区としては別に異常はなかった。

八月六日午前七時十分ごろ、警報発令により老人子供は、防空壕へ待避した者もあったが、その他の者は平常どおり、それぞれの仕事についていた。また農・漁業従事者も平常どおり作業に出ていた。

午前八時十分ごろ、向洋大原町の高い山地にのぼって、農作業していた沢井シゲノの目撃によれば、突然B29の爆音がきこえたので、広島市上空を見た。白い玉を三個おとし、約一分後、まっ黒の雲が湧き立ったと同時に、市内の一部に火の手のあがるのが見られたという。

なお、被爆前日までに向洋本町二戸、青崎町三戸の地区内建物疎開を行っていた。

七、被爆の惨状

惨状

鶴見橋付近の家屋疎開作業に出動していた東洋工業株式会社の社員二〇〇人が被爆し、その日の午後一時ごろまでに、車を利用したり、歩いたりして約一五〇人が会社にたどりついたが、ほとんどの者が火傷や負傷を受けていた。

また、同じ場所に学徒動員で出動していた町内の学生が午後三時ごろまでに約二〇人帰宅したが、この中の半数以上がつぎつぎに死亡していった。

このほか官公庁・会社・商店などへ通勤のため、この地区から中心部へ出ていた者約七〇人が死亡した。

地区住民は炸裂後、それぞれ避難したが、場所によっては気づけなかったのか、一〇分も遅れた者もいた。避難するとき、郊外へゆく者はトラックや三輪車に乗った。川は小舟を使用してわたった。

炸裂時の被害

炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

なおこの地区内では、火災は発生しなかったし、降雨もなかった。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
向洋大原町	-	-	60	40	5	30	65
向洋中町	-	-	50	50	5	20	75
向洋本町	-	-	70	30	3	20	77
向洋小磯	-	-	-	100	-	10	90
青崎町	-	-	80	20	10	30	60
東青崎町	-	-	100	-	10	10	80
堀越町	-	-	100	-	10	30	60

諸現象

原子爆弾によって生じた諸現象は全町内とも、相当激しい爆風の被害を蒙った以外、特別の事象として生じたものはなかった。

爆風や爆圧により、猛烈に塵埃が舞いあがる中で、全町三分の一程度の家屋が傾斜して、瓦が落ち、壁がずり落ち、樋や看板が飛んだりした。

また、屋内の天井は吹きあげられ、ガラスはほとんど破壊され、フスマ・障子は折れて使用不能の状態になった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援作業

六日午後二時ごろから、青崎国民学校で、地元の医師や、消防団・町内会役員が出て、市中から避難して来たおびただしい罹災者の救援作業にあたった。救援作業は十一月末まで続き、約一、二〇〇人を扱った。

死体の収容と火葬

収容者のうち約三八〇人が死亡したが、死亡者は、国民学校運動場および堀越火葬場で火葬にし、住所氏名の判っている者は、連絡のつき次第それぞれの縁故者に渡した。住所氏名のわからない遺骨は、一応、地元教専寺に安置し、十一月末ごろ、市役所に引渡した。

堀越火葬場は、連続的に大量の火葬をおこなったため、ついには火葬場の屋根が焼失してしまった。

町内会の機能は、原子爆弾の影響なく、従来どおり執りおこなった。

九、被爆後の生活状況

この地区でも八工が非常に多く発生したため、各町とも衛生組合を組織して、環境衛生に充分注意をはらい、悪

疫の発生流行をふせいだ。

電灯は、翌七日には、もう点灯されて、疎開していた者も八月二十日ごろから、九月二十日ごろにかけて全員復帰した。

学童も疎開先から、疎開世帯が復帰して一〇%、疎開家族とともに九〇%が帰って来た。

しかし、生活状態は困窮していて、特に食生活の欠乏は苦悩大きく、近辺はもちろん、遠くは向島方面まで、毎日買出しに行った。特に調味料・乾物・かん詰・日用品はほとんどなかった。

九月十七日の暴風のため、高潮で、地区内の家屋約四〇〇戸が浸水した。また、屋根の破損によるはげしい雨もりには、みんなが困った。

経済活動ともいふべきものが見られはじめたのは、九月末ごろからであったが、食糧品が中心で異様な活気であった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

宇品東一丁目～七丁目、宇品神田一丁目～五丁目、宇品御幸一丁目～五丁目、宇品西一丁目～四丁目、宇品海岸一丁目～三丁目、元宇品町、出島町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、元宇品町[もとうじなまち]・宇品町[うじなまち]一区・同二区・同三区・同四区・同五区・同六区・同七区・同八区・同九区・同一〇区・同一一区・同一二区・同一三区、および宇品水上隣保会[うじなすいじょうりんぼかい]の各地区とし、爆心地からの至近距離は、御幸橋東詰で約二・四キロメートル、もっとも遠い地点は元宇品町の南端海辺で約五・七キロメートル離れている。

広島市の海の玄関口宇品港は、明治十三年(一八八〇)、千田貞暁が県令として着任するとともに、築港計画が具体化し、皆実新開地先の宇品新開の造成と共に明治二十三年に完成した。

戦前までは、わが国有数の重要な陸軍の港湾として、史上に大きな足跡を残した。

この軍港を基幹として、全地域は発展を続け、各種の商店や住宅が集り、田園の散在する明るい新開地的な活気に溢れていた。

戦後、宇品港は広島市の繁栄に寄与する開港本来の目的にたちかえり、海陸交通の結接点としての機能を発揮しつつある。

原子爆弾の被害は、爆心地からかなり離れた位置であったため、比較的軽少で、戦後、広島市復興の大きな原動力となった。

被爆当時の地区内総建物数は約三、〇三七戸で、総人口は一三、〇〇六人であった。

戸数・人口の各町内会別内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
元宇品町	262	278	1,220	坂木四郎(道光)
宇品町一区(海岸通・中通・北通)	205	175	687	西丸理一
宇品町二区(御幸通一・二・三丁目)	193	177	626	安井清春
宇品町三区(鴨池・昭通通二・三丁目)	225	200	950	久米勝市
宇品町四区(西通三・四・五丁目、昭通通四・五丁目)	199	199	714	光宗笹一
宇品町五区(御幸通四・五丁目)	232	232	786	佐々木利一
宇品町六区(御幸通六・七丁目)	232	231	964	松本次郎
宇品町七区(御幸通八・九・一〇丁目)	154	198	722	山新繁人
宇品町八区(御幸通一一・一二・一三丁目)	266	275	1,130	松本安正
宇品町九区(御幸通一四・一五・一六丁目)	189	189	654	高田熊太郎
宇品町一〇区(神田通四・五・六・七丁目)	252	252	921	畠山庄一
宇品町一二区(神田通八・九・一〇丁目)	198	215	876	斉藤勲
宇品町一三区(神田通一一・一二丁目)	239	256	850	斉藤勲
宇品町一四区(神田通一三・一四・一五丁目)	189	213	636	窪谷守人
宇品水上隣保会	2	680	1,360	久米登

なお、地区内に所在した学校、および主要事業所は次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
宇品国民学校	元宇品町	県立第二高等女学校	宇品一三丁目
元宇品分教場	宇品七丁目	広陵中学校	宇品一五丁目
宇品学園	宇品八丁目	市役所宇品出張所	宇品七丁目
県立女子専門学校	宇品三丁目	宇品警察署	宇品一丁目
宇品郵便局	宇品一丁目	神田神社	宇品七丁目
神戸税関広島支所	宇品一丁目	中国配電株式会社宇品変電所	宇品八丁目
宇品造船所	元宇品町	法雲寺	宇品九丁目
逓信局研修所	宇品八丁目	千暁寺	宇品三丁目
大和紡績株式会社	宇品七丁目		

二、所在した陸軍部隊集団

部隊名	所在地	部隊名	所在地

陸軍船舶司令部 (三次支部含む)	運輸部構内	海上駆逐第一大隊	宇品町海岸
宇品憲兵分隊	船舶司令部正門前	第一船舶輸送司令部	船舶司令部内
陸軍船舶練習部	大和紡績(株)内	軍需輸送統制部広島支所	船舶司令部内
陸軍砲兵教導聯隊	大和紡績(株)内	広島陸軍糧秣支廠	宇品町御幸通 七区・八区・九区
野戦船舶本廠	運輸部及び金輪島	独立高射砲第二十二大隊	元宇品町

三、疎開状況

人員疎開と物資疎開

昭和十九年ごろ、宇品町八丁目と九丁目との境になっていた道路(幅員三メートル・本通り電車通りと、神田通りの間)北側の数戸を家屋疎開させることになり、該当居住者がそれぞれ転居し、また、昭和二十年四月ごろ、元宇品町の造船所付近の住宅二、三〇戸を強制疎開した。

また、陸軍糧秣支廠が佐伯郡五日市町、および廿日市町方面に諸物資を疎開した。

この糧秣支廠があるとの理由で、同廠に沿った御幸通り(七区・八区・九区)の家屋約四五〇戸(約六〇〇世帯)が、昭和二十年四月三十日の期限で、曉部隊により強制疎開させられた。しかし、同廠内はすでに物資を疎開し、空家同然であったから、家屋疎開もまったく無意味なことのようと思われた。被爆のとき、この空家の糧秣支廠に大勢の負傷者が収容され、臨時収容所となった。

その他、船舶司令部ができる限りの軍用資材を、近郊の府中・中山・向洋・海田市・坂・似ノ島方面の防空壕その他へ分散疎開して、万一の災害に備えていた。

一般の地区民は、全体の二、三パーセント程度が縁故疎開したにとどまり、家庭用物資を疎開した者もごく僅かであった。

学童疎開

宇品国民学校の児童は、昭和二十年四月十三日(七月二日、八月三日に追加疎開を行なう。)、双三郡三次町の三か寺、布野村の三か寺、作木村の四か寺へ疎開した。

(集団疎開児童約四二〇人・引率教師約二五人、縁故疎開児童約九〇〇人、残留孤児二八〇人。なお疎開後の校舎は大部分軍隊の宿舎に使用された。)

四、防衛態勢

各町内会とも隣保組織を整備し、警察および警防団の指導により、各町内会ごとに防火訓練の強化、避難および救護組織の確立をおこなった。

町内会ごとに防空壕を構築し、パケツ送水などの消火防空訓練をおこなった。

また、国民義勇隊を組織し、竹槍訓練などを強制的に実施した。

五、避難経路及び避難先

災害時の避難先や避難経路について、各町とも当局の指導により、それぞれあらかじめ指定していたようであるが、現在では、はっきりと判っていない。

ほぼ判っているのでは、三区は、千田町の広島文理科大学グラウンド(現在・千田小学校前電鉄車庫)へ、御幸橋を経て避難することになっていた。また、西部の五区～九区までの町内会では、宇品国民学校・千田公園から丹那に至る道路(桜土手)・仁保町黄金山などが決められており、東部の各町内会は、大和紡績工場近くの錦華園を含めて、橋が爆撃されたときを想定して、新大橋の北辺を船で渡り、大野村へ避難するよう指示されていた。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜半からのたびたびの警報発令で、各町内会の防空要員はそれぞれの部署について、万一の場合に備えていたが、六日午前七時過ぎの警戒警報解除で、各自の家に帰ってひと息つくか、早い者は出勤途中の者もあった。みんな寝不足の目をし、ひどく疲れていたが、気分だけは張り切っているようであった。

西埋立地に特設された防空壕に避難していた者も、その六〇パーセント程度がすでに自宅に帰っていた。また、自家の防空壕にいた者も出て来て、暑い朝の食卓についたり、仮眠をとったりしていた。

しかし、八時十五分の異様な炸裂音によって、ふたたび特設防空壕や自家用防空壕、あるいは公共用防空壕、その周辺にあわてて待避した。

町の人々の中には、侵入したB29の爆音をきいた人があったが、その目撃者はいなかったようである。

建物疎開に出勤

この朝、動員令によって、雑魚場町の建物疎開作業に、第五区町内会から第九区町内会までの住民約二〇〇人と、第一区町内会(八・九・十丁目町内会合併区)の四〇人が出動して被爆した。

七、被爆の惨状

閃光と轟音

原子爆弾の炸裂の瞬間、地区の人々はその閃光を感受し、数秒後に轟音を聴いた。

海岸方面にいた通勤途中のある人は、北方から背中などに閃光を受け、少し熱く感じたとき、爆風に吹き飛ばされ、帽子も遠くにとんだという。

この海岸方面では、倒壊家屋はなかったが、窓ガラスはほとんど破損し、屋根瓦や棟・桁などふきあげられた。また、雨どいがたいてい吹き飛ばされてしまった。

地区内では、爆心地に最も近い一七丁目の田村才四郎宅では、図書のぎっしり詰った本棚(三尺×四尺)が、本と一緒に約一〇メートルばかり隣室へ飛ばされ、本はそのままで正反対の向きになって立っていたという。

また、ある家では、その瞬間、ミシンが直角に移動した。

轟音がした北方(市の中心部)方面には、黒煙が高々と湧きのぼっているのが望見されたが、そのときは一体何が勃発したのか、被害がどの程度なのかまったくわからなかった。

町民は驚きあわてて不安にかられるまま、も寄りの防空壕へ急いで待避した。中には、いち早く船便を見つけ、近くの島嶼部の親類縁者のもとに避難する者もいた。

炸裂時の被害

炸裂による瞬間的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
元宇品町	-	-	90	10	0.1	0.5	99.4
宇品町一区(海岸通・中通・北通)	-	80	20	-	0.3	1	98.7
宇品町二区(御幸通一・二・三丁目)	0.1	89.9	10	-	0.8	13.2	86
宇品町三区(鴨池・昭南通二・三丁目)	-	35	60	5	0.5	12.5	87
宇品町四区(西通三・四・五丁目、昭南通四・五丁目)	0.2	63.8	36	-	0.1	19.9	80
宇品町五区(御幸通四・五丁目)	0.3	90.7	9	-	0.4	13.6	86
宇品町六区(御幸通六・七丁目)	0.2	90.7	9.1	-	-	27	73
宇品町七区(御幸通八・九・一〇丁目)	-	92	8	-	-	30	70
宇品町八区(御幸通一一・一二・一三丁目)	-	94	6	-	-	10	90
宇品町九区(御幸通一四・一五・一六丁目)	-	97	3	-	-	21	79
宇品町一〇区(神田通四・五・六・七丁目)	-	100	-	-	0.2	10.8	89
宇品町一一区(神田通八・九・一〇丁目)	-	100	-	-	0.6	11	88.4
宇品町一二区(神田通一一・一二丁目)	-	100	-	-	0.4	12	87.6
宇品町一三区(神田通一三・一四・一五丁目)	0.6	99.4	-	-	0.5	20	79.5
宇品水上隣保会	-	100	-	-	0.3	16	83.7

なお、地区は火災にあわなかったが、当初専売局付近の住宅が火災を発生したとき、警防団員が駆けつけて消火し、大事に至らなかったのである。

避難者殺到

炸裂後一時間くらい経ってから、宇品へむかって続々と避難者が歩いて来た。みんな大火傷で、見るも無残な様相であり、人別も困難なほどに皮膚をむかれ、血まみれの裸形であった。

この地区には降雨現象はなかったが避難者らはみんな重油でも被ったように、ドス黒く汚れていた。

六日の夜

六日の夜、町民の多くは不安におののきながら、特設防空壕や家庭用の防空壕などに待避して、ひと夜を過ごした。中には、丹那堤防や町内の空地などで野宿した者もあり、とにかくほとんど屋内に寝る者はいなかった。

出動の義勇隊全滅

なお、この朝、雑魚場町の建物疎開作業に出動した国民義勇隊は、多くの即死者を出した。生きて帰った者もほとんど重軽傷を受けており、これらは数日のうちに全員死亡した。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

被災程度が他の地区より比較的になかったから、救援隊は来なかったが、負傷者はたくさんおり、また、市の

中心部からの避難者が町内にあふれていたため、救急品が僅かながら配給された。

市の中心部の病院が壊滅し、辛うじて焼け残った広島赤十字病院や陸軍共済病院も、また個人の医院も殺到した負傷者で収容しきれなくなったため、救援に出動した陸軍船舶部隊の兵士たちは、トラックで繰返し繰返しこれら重軽傷者を、宇品の船舶司令部(運輸部)や船舶練習部(元大和紡績工場)、あるいは糧秣支廠畜に収容したが、ここもたちまち満員になったので、宇品港から各種の船舶を使って、似ノ島・金輪島、あるいは江田島などの臨時収容所へ運んだ。

また、財団法人宇品学園(託児所)・宇品国里子校・広島女子専門学校・各社寺、各医院なども市中からの負傷者が溢れるほど収容されたが、薬品がなく治療活動というほどのことは、当日はできなかった。

なお、逃げて来る罹災者に対して電車通り九丁目の巡查派出所で、罹災証明書の発行をおこなった。

屋根や窓ガラスなどを破損した宇品警察署は、須沢署長など数人の署員がただちに出勤し、御幸橋東詰の専売局前に救護本部を置き、逃げまどう避難者を、宇品の陸軍共済病院へ行くよう指示したり、応急的な救護作業をおこなった。

宇品港の惨状

被爆の直後、市内救援命令を受けた江田島幸の浦基地(爆心からの距離約一二キロメートル)に駐屯する陸軍船舶練習部第十教育隊は、ただちに出勤したが、このとき同隊の第五十海上挺進戦隊に所属していた柴田富雄上等兵(当時一八歳)は、その手記「炸裂」のなかで宇品港の状況を次のように記録している。

「...すでに宇品まで幾往復した操舵手の、声高に語る市内の被害状況に耳を傾けながら、前方を睨む一同の面上には、何ものにも屈せぬ気魂がみなぎっている。宇品港が近まるにつれて、爆風の跡も生々しく、瓦が吹きとんだり、トタンがめくれた屋根、ガラスのなくなった窓が視界に飛びこんで来た。今しも負傷者を満載した一隻の大発(大型発動艇)が、似ノ島めがけて矢のように走って行く。目的の棧橋は負傷者・避難者を運ぶ大小の船が入り乱れ、舟艇の割り込む余地もない。負傷でもしたか片腕を首に吊った一将校は、これらの整理に躍起になっている。

やむなく別の棧橋から上陸する。陸軍船舶練習部本部前には先発した他中隊も待機中だ。此处で次の命令を待つ。ふとわれわれは、そこここにうずくまる異様な人たちの姿に思わず目を見張った。煤をはいたように黒く汚れた顔...、ポーポーと振り乱した髪には黄色く見えるくらいの埃をかむり、ポロポロの衣類を身につけた素足の婦人...、半分ちぎれたようなシャツを身にまとい、じつとうなだれたままの男...、今にも何か叫ばんとするように口をあけ、カッと目をむき、われわれの方に視線をむけている一婦人の表情には、たとえようなない恐怖を抱いていることがうかがわれる。われわれの通行に対しても、ドンヨリとしたうつろな目を向けるだけで、何の反応も示さない人達...。

ちょうど鋭利な刃物で切って、無理にこじあけたかのように思われる大きく裂けた凄じい火傷を負った人もある。長さ二、三〇センチにも達するぐらいの火傷を、手といわず足といわず無数に受けているのだ。そこからは割れたザク口を連想させる赤黒い肉がのぞいている。おりしも負傷者を満載したトラックが入って来た。トラックの上に軍刀を手にして立つ一将校の唇が、ドス黒く変色し、ひきつるようにして異様にふくれあがっている。この人たちもまた烈しい苦痛に顔をゆがめ、車から降されるや、たちまち崩れるようにその場にうずくまってしまった。

そこら中に、地に引きずりこまされるような呻吟の声が満ちあふれ、それにまじり一層強く胸にひびく、血をしぼるような子供の叫び、死に直面しつつもなお愛着忘れがたい肉親を泣き求める負傷者の姿...

本部付近では、素足の女子職員達がコマネズミのように走りまわっている。土間には無帽の兵士が一人倒れている。外傷は無いようだが、此处まで逃げて来て力つきたものが...

命令受領に行った将校の帰りがおそい。いよいよ事態のただならぬものが察せられる。こうして待機しているあいだにも市内の惨状がしのばれて、どうしようもない焦燥感を覚える。

ようやく命令がでる。石塚隊の目的地は八丁堀だ。ここは被害の中心地と聞く。あたりの空気をふるわせて、惻々と胸を衝く悲痛なる負傷者の慟哭に、必死の努力を誓いつつ、号令一下、長蛇の前進が開始された。」とある。

以上の手記のとおり、六日の宇品港の惨状はまったくこの世のものではなかった。そこへ続々と暁部隊の救援隊が上陸すると同時に、負傷者の輸送が港内狭しとばかり、無数の舟艇によって島嶼部の臨時収容所へ、続々と運ばれたのであった。

死体処理

陸軍船舶司令部や練習部や糧秣支廠その他に市中から逃げて来たり、運ばれて来た負傷者は、そのまま死亡する

者が続出した。しかし、六日はその夜にかけて、ただ収容だけの作業に追われどおしであったから、死体処理が始まったのは翌七日からであった。

死体処理は、ほとんど船舶部隊の手によっておこなわれ、それが、おびたしい数にのぼったことは確実である。

火葬場所は、宇品埋立地(現在島津木材会社の付近)や通信局研修所の庭などをはじめ、付近の空地を利用しておこなわれた。

死体多数漂着

宇品西海岸に漂着した多数の死体は、消防海上分団の手によって引きあげられ、警察官立会いのもと、その付近で火葬にしたが、氏名の確認できないものは、火葬した付近に、その遺骨を木箱に入れて埋葬した。木箱はありあわせのもので作った。

慰霊碑

なお後のことであるが、埋立地の魚岩別館の敷地内に、個人が慰霊碑を立てて、被爆死没者の供養をおこなっているが、遺骨は埋葬されていない。

町内会の機能

爆心地から離れていたため、地区自体は中心部のような人的損傷はあまり無く、各町内会の機能も、宇品町第一区から第四区までと、元宇品町では支障なく、緊急物資の配給など円滑におこなわれた。

ただし、第五区から第九区までの町内会では、町内会役員が雑魚場町の家屋疎開作業に隊員二二九人を引率して出動していたため、ほとんど負傷あるいは死亡したので、町内会の機能が一時停止状態に陥った。しかし、山田助松連合町内会長の指示によって、急ぎ町内会新役員を選出し、再編成をおこなって、被爆の応急対策にあたった。

なお、第一区地域は別段変わったことはなかった。

九、被爆後の生活状況

住民の復帰

被爆直後、一般的にはまだ本土決戦の構えであり、日本人としてなお闘う気持ちだけはあったが、反面ソクソクとして胸に迫る敗北感をどうすることもできなかった。

被爆の恐怖からひとたびは郊外に避難した者も、九月中ごろから次第に復帰しはじめた。

しかし、爆風で破損した家屋は、補修する資材もなく、またその気力もなく、ただ当面の雨もりを防ぐ程度にとりつくりつたままであった。食糧事情もますます悪化し、あすの日も知れず心身共にその打撃は計りしれないものがあつた。

終戦以後

八月十五日の終戦の詔勅以後は、一度に緊張感がとれ、茫然自失の状態でその日その日が過ぎていった。

八月末ごろの、宇品各町内会の居住人口は、第三区二二〇人・第五区一五〇人・第一区一三〇人で、その他の各町内会は不明である。不明というのは、調査時点がすでに戦後二十数年を経ていることもあるが、当時の住民の移動が激しかったことと、敗戦による人心の混迷と荒廃により、確実な記録が伝えられなかったためである。

ハエなどの発生

焦土と化した他の地区と同じように、ハエが無数に発生した。また、赤色の蚊も多く発生したが、駆除薬品もなく、ただ発生するにまかせるほかなかった。

生活物資の欠乏

生活物資はいよいよ窮迫し、飢餓状態に陥った。この頃、宇品警察署から一世帯ごとにコンブと大豆の煮た缶詰が配給されたが、まったく貴重なものであつた。このような状況のなかで、住民の頼るものは、僅かながらのこれら配給品のほかには何も無かつた。

ただ、地区によっては、比較的畑が多くあつたから、幾分か空腹をおぎなうことができた。

闇市

広島駅前や己斐方面に「闇市」ができて、日ごとに賑わい、宇品地区からも食糧の不足をおぎなおうとして、出かけて行った。まもなく、宇品電車終点付近(現在の県営棧橋前の終点から三〇〇メートル東寄り)に、闇市がたつたので、後にはここを利用した。

電灯

被爆の翌七日、軍関係と一部には電灯がついたが、一般には、二、三日間は、ロウソクですごした家が多くあつ

た。

疎開児童帰る

宇品国民学校は、窓ガラスが飛散し屋根瓦が一部吹きとばされた程度であったから、九月一日には一応、第二学期を開校した。

九月十二日に集団疎開児童二七九人がまず帰って来て、これについて次々と児童が帰って来たが、校舎の不備や食糧の欠乏で思うように授業はできなかった。縁故疎開した児童の復帰はバラバラであって、一部は不明である。

再開された学校の管理運営は、香川軍二校長が自宅で被爆し、火傷のため出勤できず、軽傷の堀池良雄教頭が校長代理として、これにあたった。

暴風・洪水

九月十七日の暴風雨と、十月八日の大豪雨の被害は、宇品地区でも相当なものであった。

場所によっては停電し、断水も一三日間ばかり続いた。

浸水家屋が多く、水深約五〇センチメートル以上に達したところもあり、被爆災害の上に、さらに水害が加わって生活は惨憺たるありさまであった。

経済活動のきざし

昭和二十年の末ごろ、前記のように闇市ができはじめ、深い虚脱状態のなかながらも、宇品海岸通りや四丁目にも闇市が賑わって、ようやく経済活動のきざしが見えはじめた。

十、その他

(イ)陸軍船舶練習部のいた大和紡績工場は、負傷者を多数収容し、臨時陸軍野戦病院となり、被害調査に来広した仁科博士一行が、九日にここで無傷の死亡者を解剖した結果、正式に「原子爆弾」であることが確認され、十日に、東京の大本営に報告された。

(ロ)宇品造船株式会社は、元宇品町にある社員寮が臨時収容所となり、約三〇〇人くらい避難者を収容し、同社の労務者用の米約二〇石を放出した。なお、同社造機部職員約一〇〇人が、六日早朝から天神町の家屋疎開作業に出動して全滅した。

(ハ)中村藤太郎警防団長と田村才四郎副団長が、六日午前十時ごろ、状況視察のため比治山橋東詰付近を通りかかったとき、霧に似たものが空一面に降って来た。中村団長のハンカチ、田村副団長の口にあてていたタオルに、その霧が青い点々となって付着したので、毒ガスを撒いたと思った。青い斑点はすぐ水洗いしたが落ちなかった。

(ニ)元宇品に駐屯していた独立高射砲第二十二大隊本部の隊長内山恒太少佐は、高度五十五度で敵機侵入という監視兵からの報告(ブザーが鳴る)で、指揮所に入るか入らないかの瞬間、被爆し、六キロートル離れた広島の上空に立ち昇る巨大なキノコ雲を望見した。キノコ雲の高さ九、五〇〇メートルと報告を聴く。脱出するB29二機と、キノコ雲を背景にした三個の白いパラシュートが黒い物体をぶら下げて、空中を漂流するのを目撃した。軍司令部(広島城内五十九軍)へ連絡しようとしたが電話不通、すぐに宇品の船舶司令部を呼ぶと通じた。

このあと、ふと見ると、陣地の板囲いの板に一定の角度でキツネ色に焦げた跡があった。強烈な爆弾が空中で炸裂したことを直感し、江波・打越の高射砲陣地に電話連絡して、焼けて焦げた跡があるかどうか、あれば斜角は何度かを調べるよう命令した。まもなく集って来た報告を総合して、部下に計算を命じたら、高度は約五〇〇メートルという結果が出た。すなわち、地上約五〇〇メートル上空で爆弾が炸裂したことが判明した。

八月八日、空路入市した有末調査団の仁科芳雄博士ら一行は、翌九日早朝、元宇品をおとずれ、内山大隊長の報告を聴取したが、内山大隊長が調査していた爆弾炸裂の方向と高度により、仁科博士はいち早く爆心点の概略をつかむことができ、以後の調査に大いに役立ったと言われる。

愛子(抄)

木村玉二(白島北町にて被爆。当時・広島中央電話局交換課長)

暁六一四〇部隊にて

明けると八月十二日。相変らずの快晴だ。あの日から一週間目だ。道路も大分片付けられて幾らか秩序立って来た。リュックを背負って救護所を次々と廻って歩く人が多い。

私はピッコを引きながら牛田へ向って歩いた。いつまでも左の向う脛の傷がなおらない。神田橋を渡って二股土手の小さい橋まで行くと、南からトラックが来て奥へ入るので乗せてもらった。しかし、トラックは五百メートル

余り行くともう先へは行かなかった。

車を下りて更に五百メートル余り歩くと、向うから来る学校の先生らしい四、五人の男女の一行に出会った。

「女学院の修練道場はどちらでしょうか。」と尋ねると、やはり女学院の人たちであった。

「道場はずっと山の上にありますますが何のご用でしょうか。」

「勤労奉仕に出ていた娘の消息がききたいのです。」

「それでは一町あまり行くと道場の入口に出ますから、上に登りたいで左に曲がって、元吉先生のお宅を訪ねてごらん下さい。」

親切に教えられて、聴かれるままに愛子の事を話すと、「女学院の行っていた一中の運動場の東南の隅に爆弾がおちたということですから...」と言われた。まだ広島の人たちはただ一発の原子爆弾でやられたとは誰も思っていなかった。自分も十四日になって、はじめて白島の電車の終点で焼けた電車の横腹に張られた新聞の号外で、強度の特殊爆弾だということとソ連の参戦とを知った。

元吉先生の家は直ぐわかった。そこは牛田もずっと奥であるが家は相当壊れていた。玄関に立つと半白の上品な婦人が出て来られた。愛子たちの消息を聴くと

「お話いたします。その前にこれをごらんになりよってください。」

といって、大学ノートを一冊私に渡しておいて奥へ何かとりに入られた様子である。私はノートを初めから一枚一枚めくって行った。

あった。八月十一日という日付けの所に、暁六一四〇部隊収容、重傷、木村愛子、家族、安佐郡戸山村戸山郵便局気付、木村玉二

と書いてあった。おお愛子が生きていた。

「ありました。ありました！先生/子供が生きていました。...」

と自分は大声で奥に向かって叫んだ。すると先生は直ぐ出て来て

「それはよござんした。それはよござんした。昨日校長先生が救護所を廻って聞いて帰られたのです。」

と言われた。戸山郵便局というのは六月に局へ頼んで荷物を疎開したので、私たちは戸山へ避難したものと思って校長先生に話したものに違いない。よく覚えていたものだ。

「有難うございました。有難うございました...。」

と自分は口早に礼をいって、挨拶もそこそこに門を走って出た。

「愛子が生きていた！愛子が生きていた！」

私はそう言いながら走った。

「観音様のお蔭だ。」

涙が止めどなく頬を流れる。

二股土手の近くまで出ると、溝を距てた左側の家の前に、もと局に勤めていた星出さんが立っていた。この辺は山の陰になっていて、家が殆んど壊れていない。私は星出さんに、走りながら

「子供が生きていました。」

といった。星出さんが何と答えたか耳には入らなかった。

早く帰って妻に知らせてやらなければ、...。そして迎えに行つてやらねば...。

気分のみあせって足がはかどらない。走ったり歩いたりして神田橋を渡って家へ急いだ。家の近くまで来ると秋山さんの小屋が見える。

「秋山さん、愛子が生きていました。」

と私はいった。自分たちの小屋に帰ると、ねている妻に

「愛ちゃんが生きていた。宇品の暁部隊じゃ。」

というと

「そうですが、愛ちゃんがー」

といって妻は、布団の上で起き上がった。私は傍に坐っている礼子に

「礼子ちゃん、一緒に行こう。」

といった。礼子はすぐ身仕度にかかった。

妻もいざりながら愛子のために自分の浴衣を出したり、帰りが暑いからといって、白い木綿の帽子もそろえた。

そして「愛ちゃんは、乾パンが好きじゃからー」といって戦災者に昨日配給された乾麺の一袋と、これも配給の牛肉とウズラ豆の罐詰一つとを救急袋へ入れた。

「行って来るよ。」

と地下足袋で踏む足も軽く前の小径に出た。

「用心しておいでなさい。」

と妻は布団の上に半身を起こして見送った。

「宇品なら広島駅から汽車があるはずだ。とにかく広島駅へ行こう。」

と常葉橋に出た。橋は欄干が落ちていた。

ガードをくぐると、駅へ通じる土手の道は両側の家が焼けて、福屋も中国ビルも、遠く厳島、似島まで一望の中に見渡された。

河向うの泉邸の松が焼けていた。

駅のホームで宇品行きの列車を暫く待ったが、時間が不規則で何時に出るのかははっきり判らない。まわりの人に聞いて見ると、駅前から宇品行きのバスが開通しているという。表に出てあっちこっち捜していると、百メートルあまり向うにバスが一台停まっている。行ってみると、丁度いい工合にそれが宇品行きで、今出るところであった。戦災者は無料で乗せてくれた。

バスは的場に出て、比治山の北側を廻って山の西側を真直ぐに南へ向って走った。周囲が焼けて広々としているので、どこか知らぬ土地へ来たようだ。乗客は私たちのほかに一人きりで、ガラ空きだ。それが全速力で走るのでとても涼しい。

「愛子が待っているに違いない。もう三〇分もすれば逢えるのだ。」

二人はほがらかだった。

比治山を離れると、空襲警報が出た。私はすぐ鉄甲を、礼子は防空ズキンをかぶった。しかしバスはそのまま両側にプラタナスの茂った電車道を全速力で走った。この付近の家は多少壊れてはいるが焼けてはいない。

鉄道局の前で下車して運輸部の門の近くまで行くと、宇品駅の方へ曲がる角の広場の板塀に一面に大きく名前を書きつらねた紙が貼ってあった。沢山の人が立って見ている。

私たちも愛子の名前を一生懸命捜したが見つからなかった。人に聞くと暁部隊はずっと東の丹那に近い方面らしい。

駅の横を曲がって鉄道線路に沿って広い道を東に向って歩いた。錦華人絹のカモフラージュした灰色の煙突が魔物のように数本立っているのが目立って見えた。

暁六一四〇部隊の衛門前の橋の手前に受付があった。そこにはやはり罹災者を捜す人たちが十数名詰めかけていて、収容者の名前が細かく罫紙数十枚に書いて貼り出してあった。

その掲示は坂の小学校へ送られた者と、岩国へ送られた者とに分類されてあった。とても沢山の人の人である。

愛子の名前を礼子と二人でシラミつぶしに捜したが見当らない。受付できくと「それではこれを見てください。」と書いて同じような罫紙を十枚余り綴ったのを見せてくれた。はじめからくって行くと…。あった。

白島北町一六三木村周二方、木村愛子、学徒、一四歳、重傷

とある。「周二」とあるのは明らかに書き誤りだ。受付の人にいうと、すぐ衛門まで連れて行ってくれた。

歩哨に断って衛兵の詰所に行くと、そこにも面会者が詰めかけていて暫く待たされた。待っている間がとても長い。前の人をせき立てたいような気がする。

やがて当番兵が愛子の収容されている兵舎へ連れて行ってってくれた。兵舎といっても掘立てのバラックで、中央を通路にして廊下も何も無く、両側が板敷きでその上に藎が敷いてあった。

そこに残っている人は重傷者ばかりで、歩行のできる程度の人はいない。みな坂と岩国とへ船で送られたのであった。

ずっと奥の端の通路の両側に、二〇名あまりの人が藁ぶとんの上に寝ていた。

「木村愛子さんのお父さんが来られました。」

と当番兵が告げると、そこに腰かけていた一人の兵士が立ってこちらに出て来た。丁度その時、外からロープを手にして入って来た別の兵士があった。奥から出て来た兵隊さんはその人に

「木村愛子さんのお父さんだ。」

と告げた。ロープを掲げた兵隊さんは立ち止まって、黙って私の顔を見た。

「愛子の父ですが...」

と私がいうと、その人は矢張り黙って私の顔をじっと見つめていたが、暫くして

「遅かったー」といった。

「ええ、それでは坂へ送られましたか。」

と、つめよって聞くと、兵隊さんは静かに

「よくなかったです...」

といて下を向いた。

「ええ...死にましたか。」

「はい、おそかったです。今朝亡くなられました。私は今、金輪島へ遺骸を送って行って帰って来たところです。」

ああ、何としたことか。あまりのことに声も出ない。

「愛ちゃんが、お父さん、お母さん、お父さん、お母さんというので、お父さんお母さんや、家族の方が来られるのを随分待ちました。遅かったです。」

ああ！...おそかった...

「それでは死骸に違わせて戴けませんか。」という兵隊さんは

「よがす。」

と言って、直ぐわれわれを外へ連れて出て、途中、中隊本部へよって許可をとると、私たちを岸壁に繋留してあったダンベイ船に乗せてくれた。この兵士は納家さんという方で上等兵であった。もう一人兵士が乗ってきて、エンジンを動かした。

納家さんは、船の中央に蕙を敷いて

「どうかお掛けなさい。」

といて、われわれを坐らせて

「この船でさっき愛ちゃんを他の人たちと一緒に連れて行ったのです。」

といわれた。納家さんは四〇歳前後の人であった。関東の方らしかった。

「私たちがこうして無事でいて、沢山の非戦闘員を殺して誠に申し訳ないことです。」

と言っておられた。

金輪島の棧橋を上がると、納家さんはまた週番士官の許可を受けに行ってきて、一丁余りある右側の山の麓へ私たちを連れて行った。

倉庫のような建物の前までくると、入口の所に三四、五歳の兵士が二名着剣して歩哨に立っていた。

納家さんはその一人にことわって、中に私たちを連れて入った。歩哨も一緒に入ってきた。

蕙をかぶせた死体が六つコンクリートの床の上にねかせてあった。見廻わすと、左側に三つ並べてある一番奥の分の蕙の裾から細い足が二本のぞいている。自分は愛子だと直感した。

納家さんは近づいて蕙をめくった。

愛子だ、愛子だ。

パンツをはいて空色の上衣を着ている。両手は胸の上で組み合わせてあった。モンペははいていなかった。

「愛子よ！愛子よ！」

私は坐って愛子を抱いて頬ずりした。涙がとめどなく流れる。礼子も傍に坐ってむせび泣いた。

「愛ちゃん、必ずこの仇は...」

と私はいった。納家さんは手を目にあてて

「すまんです、すまんです。」

といわれた。銃剣を持った兵士は無言で傍に立っていた。

私は愛子の上衣をぬがせた。上衣は焼けて破れていた。そして白い油薬がべっとり全体にしみ込んでいた。礼子は持って行った妻の浴衣を出して着かえさせた。着物の前を合わせて、私の皮のバンドをはずして締めてやった。

手を胸の上で組み合わせた。そしてその手に、袋から乾麺麴を出して持たせた。罐詰をナイフであけて枕元へ置いてやった。

「髪の毛を切らせてください。」

という、納家さんは直ぐ鋏を借りて来てくださった。髪は後頭部が少しこげていた。

愛ちゃんは安らかに眠っていた。顔面と上衣の前の開いた処だけが皮膚が少し赤くなっている。背後から光線を浴びて背中をやられ、鋭い光に振り返った瞬間、顔をやられたらしい。軽い火傷なのにどうして死んだのであろうか。

右側の一番奥の愛ちゃんと向い合った位置に、愛子の同級生がいた。掛けてある蕙をめぐると敷ぶとんの上にねかせてあった。そして冷凍らしい小さいミカンが三つ枕元に置いてあった。

この人は愛子と同時に収容されたが、お母さんが直ぐ訪ねて来て、三日ほど介抱されたのであった。そのお母さんには後で学校の一週年の追悼式の時に、妻が逢って詳しい話を聞いたことである。

「船に子供がのせられて金輪島へ連れて行かれるのを岸壁で見送ってやりました。」

とその方は妻に話されたそうである。そして

「どうかして木村さんのお母さんにお逢いして、愛ちゃんの最後のようすをお話してあげたいと思っております。」

と妻に逢ったことを大変喜んで色々愛子のようすを聴かせてくださったそうである。その方は藤本さんといって御幸橋付近にお家がある由で、是非一度お逢いしたいとおもう。

遺髪をもらって、後髪を引かれる思いで再び宇品へ帰ると、一時をとうに過ぎていた。納家さんたちはまだ昼食も済んでいなかったのだ。何度もお礼をいって別れた。

帰り道は寂しかった。愛ちゃんの遺髪を胸に抱いて、二人はトボトボと歩いた。

「帰って妻に話したら、何というであろう。」

バスで広島駅まで帰ると、そのまま私たちは菩提所である台屋町の源光院の焼跡へよって、お墓に詣でた。墓石が沢山焼けたり、倒れたりしていたが、幸い私たちの墓標は倒れもせず無事だった。僅かに台石の左側が火のために欠けていた。

寺の焼跡には

「当分山口県へ避難する...」

という意味のことが書いてあった。お上人は無事であつたらしい。

家へ帰ると五時近かった。妻はどんな気持ちで待っていたのか、二人が小屋に帰ると

「お帰んなさい。」

といって起き上がった。一部始終を詳しく話すと、妻は目に涙をためて黙って聞いていたが「愛ちゃんに一目逢いたい。これから宇品へ連れて行ってください。」という。もう時間も遅いし、今から行って金輪島へ渡れるかどうか、それもわからない。

しかし、どうしても妻は逢いたいという。

「もし逢えなければ、せめて最後の様子なりと、介抱してくださった方に逢って聞きたい。」

という。色々慰めて

「それでは明日の朝早く行くことにしよう。」といってやっと納得させた。

紙に包んだ愛子の遺髪と油薬のしみた上衣とを、焼け残った妻のタンスの抽出しの中へ、観音さんのお像と先祖の位牌と一緒に祀って、夜おそくまで拝んだ。

明けると八月十三日だ。

礼子を留守番させておいて、昼までの涼しい間に宇品へ行って来ようと早速準備した。

日中は暑い朝の間は涼しい。広い焼跡を渡って吹いて来る風には、何となく秋を感じられる。

妻はモンペに運動靴をはいて竹を杖にして表に立った。この体で駅まで歩けるかどうか心配だ。

私は俊ちゃんを帯で十文字に背負って、妻を後からかかえるようにして、ゆっくりゆっくり歩いた。駅までは相当時間がかかった。妻は気が立っているせいか、一言も苦しいとも何も言わずに歩いた。

暁部隊に着くと十一時近かった。

事情を話すと兵士が小隊長の石井見習士官の処へ案内してくださった。小隊長に頼んだが、「お気の毒ですが、金輪島へはもうお渡しすることはできない。死骸はすでに似の島へ運んだかも知れぬ。」という話であった。

「それでは誠に済まないが、死んだ現場を妻に見せてやってください。そして最後にそばにおられた方々に逢わせていただいて、色々その時の様子を聞かせてもらいたい。」

とお願いすると、こころよく収容所へ案内してくださった。そして「愛ちゃんの様子は私もよく知っていますよ。」

と石井さんは歩きながら言われた。昨日の兵舎に入ると、ずっと奥の左側へ連れて行って奥から二番目の藁ぶとんを指して、「愛ちゃんはここにねていました。あのベットです。暫く待ってください。」とって石井さんは出て行かれた。ベットにはそれぞれ負傷者が寝ていたが、そのベットは空いていた。

暫くすると二〇歳あまりの元気のいい娘さんが二、三人と兵士が二人、石井見習士官と一緒に来て来た。娘さんたちは女子専門学校の生徒であった。この方たちが最後まで愛子を見てくださったのである。

女子専門学校の方は、堀本さん・久米さんたちで兵隊さんは山崎軍曹と高塚軍曹とであった。

「愛ちゃんはとても元気でした。よく起きてここに腰かけて、こうして足を動かしていました。『愛ちゃん起きてもいいの...』』という、直ぐ自分のベットに行ってねころびました。」

と女子専門学校の方は話して下さった。堀本さんは、

「大変元気だったので、愛ちゃんだけは助かるだろうと皆さん言っていましたのに、お気の毒なことをしました。十一日のお昼御飯のとき『愛ちゃん今日はお昼はお豆腐のお汁よ、何かほしいものない。』ときくと、『らんぎょうが食べたい。』といいますので、向宇品の私の親戚へ取りに行き食べさせました。」といわれた。堀本さんは江田島の人ということだった。また石井さんは「十一日の晩、淋しいからここにいて、いっしょにねてくれというので、傍で一緒にねむりました。」と言われた。久米さんは、愛ちゃんが亡くなる時に「お母さん、お母さん」というので「お母さんですよ...」とって愛子の手を握ってやってく下さったそうである。そして臨終の時に「早う行かんといけんから、のいて、のいて...」とって、手で前の人をかき分ける様にしたそうである。愛子の最後の様子を次々と親切に話して下さった。高塚軍曹は広島の実業町の方で、愛子の係であったので特にお世話になつたらしい。

「愛ちゃんがあまりにお父さん、お母さんと言うので、家族の人に知らせてあげたいと思って八日に二人連れて、電話局へ尋ねて行きました。門の処でワイシャツとパンツ一つの局の人に逢いました。」

と言われた。ああそれは赤木君であったに違いない。あの時自分は門の内側にいたのだった。高塚さんは門前で赤木君と広島君に逢ったのだ。その時広島君は手帳に「木村愛子、一四歳・学徒・重傷・暁六一四〇部隊収容」と書きとめていたのであった。それは後でわかったことである。広島君は庶務課長であった。一週間前に転任してきたばかりだったので、私の家族のこともよく知らないし、当時進徳女学校の生徒が一五〇名程挺身隊で局へ手伝いに来ていたので、それと思ってただ手帳に書きとめておいたらしい。門の内と外とで、僅か三、四間しか離れていなかったのにぜんぜん知らなかったのだ。

高塚さんは話を続けて

「白島へも行きました。色々尋ね廻って木村という人にも逢いましたが、人違いで愛ちゃんの家のことをきいても、ケンもホロホロの挨拶でした。長寿園まで行こうかとも思ったのですが、すっかり疲れて、自転車はもっているし、歩行は困難であるし、とうとう引返しました。」と話された。そこへ中隊長という品のいい人が来て、愛子の悔みをいって下さった。

愛子は皆さんに親切にしていたのであった。愛ちゃん愛ちゃんといって可愛がっていただいたのだ。有難いことである。

皆さんに厚くお礼をのべてお別れした。別れる時に下士官が封筒をもってきて、「愛ちゃんの遺髪です。」とって渡された。封筒の表には

八月十二日午前二時四十分逝去

木村愛子の遺髪

暁六一四〇部隊

と楷書で丁寧に書いてあった。中隊本部に保存してあったものらしい。頂いて拝み、胸のポケットにしまった。

二人は振り返りして、来た道を宇品のバスの停留所まで歩いた。正午近い夏の陽はあかるい。しかし、なんと寂しいことか。

お蔭で皆さんにも親切にいただいたのに、早く捜しに行きやらなかったために、とうとう死に目に会えなかった。親としての誠意が足りなかったのだ。妻にも済まない。腸を断つ思いだ。妻はただ黙々として竹にすがって歩いた。

駅前下車すると、松山通信局から応援に来たという一橋君に逢った。私は妻を後からかかえるように歩かせて白島の小屋へ帰った。

一、地区の概要

この地区の範囲は、似島[にのしま]全域である。広島港南部(港域内)に位置する島で、元安川河口の南方沖約四キロメートル離れたところにある。周囲約一四キロメートル、面積三・八平方キロメートルの広さである。

爆心地からの至近距離は、島の北端で約八・三キロメートル、もっとも遠い地点は、島の南端で約一一・五キロメートルであって、原子爆弾による直接的な被害は軽微であった。

似ノ島は古来、安芸の小富士と呼ばれる山が聳え、南に江田島、これと陸続きの西能美島、東に峠島、西に小弁天島・弁天島など、大小の島々が周囲に点在し、瀬戸内海特有の美しい風光につつまれている。

島の西側に集落をなす町民の生計は、半農半漁で成立っているが、平坦地が少ないので、山を開墾し、だんだん畑の縞模様を描いている。だんだん畑は、標高二七八メートルの"安芸の小富士"の中腹までも耕されているが、広島市街地から四季の折々に濃く淡く望見される。

似島陸軍検疫所

明治二十八年六月に似島陸軍検疫所が設置され、日清・日露または大東亜戦争に出征した多数の帰還軍人が、上陸するとき、必ず一度は立ち寄った島でもあった。そのため島内は経済的にかなりうるおったとも言われている。また夏季には、海水浴場が開かれ、市民には親しい島でもある。

被爆当時、建物総数は三九五戸、世帯数四〇九世帯、人口一、七五一人で、町内会長は浜本寿夫であった。

似島国民学校

なお、同島字家下に似島国民学校がある。

二、疎開状況

市の中心部から、はるかに離れた島であって、人員疎開・物資疎開・学童疎開など戦時的な緊急態勢をととのえる必要性があまりなかった。

逆に、市街地からの疎開を受入れる立場にあって、それがヒシヒシと戦局の緊迫感を島内に盛りあげていた。

三、防衛態勢

住民のほとんどが、軍の作業や広島市中への出稼ぎ、または、農耕や、漁業のために家を留守にすることが多く、防空・防火訓練も、組織的に集団行動を取って実施できなかった。

出稼ぎの内容も、一般勤労でなく、軍事的労務作業の従事者が多く、一家こぞって作業に従事する状況であった。軍用輸送船が、海上せましとばかり多数出入りしたが、そのつど碇泊地に近い似島住民は、労役を提供し、時間的余裕もまったくないような日常であった。

地区がこのような特殊な立場を占めていたので、町内会・隣組はあったが、せいぜい各家庭で作った防空壕に待避することが唯一の防衛手段であった。

わずかに隣組単位で、防空・防火訓練を数度行なった程度である。

四、避難経路及び避難先

町の特殊性から、防空・防火訓練すら満足にできない町であったから、避難経路や避難先など、前もって指定しておくというようなこともなかった。

ただ、家庭防空壕だけが頼りであった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍運輸部似島検疫所	似島町字長谷
陸軍運輸部馬匹検疫所	似島町大黃
暁部隊上陸用舟艇船庫	似島町深浦
広島兵器廠似島弾薬庫	似島町東岸
廃部隊船舶貯油所	似島町字長浜
高射砲基地	似島町字中原

六、五日夜から炸裂まで

島の西側に所在する居住地域では警報発令のときなどに、特別な伝達方法はなかったようであるが、隣組によっては、鐘を鳴らして伝達していた。

ほとんどは、宇品方面とか、隣接の島から聞えてくるサイレンによって、それぞれの家庭が単独に対処していたようである。

空襲の気配が濃厚に感知されるときは、自家および合同の防空壕へ待避するとか、夜間は灯火管制を行なうなど個々に独断で決めていた。

五日夜

市中から離れた海上の島のことでもあり、特殊な軍用施設はあっても、直接的な攻撃目標になるという意識が少なかったから、五日深夜から六日朝にかけての警戒・空襲警報発令のときも、従来とおなじような受取り方であって、別段これといった表情はなかった。

これまでに空襲警報の発令があっても、広島市には大規模な空襲がなかったし、無論、島内がどうということもなかったので、情性的に楽観していた。

六日朝

六日朝も、警報解除後ではあるし、無頓着に海へ、畑へ、または軍用労務作業へと、それぞれの持ち場へ出ていく人たちが多かった。

なお、似島では、動員令による疎開作業出動はなかったし、島内の建物疎開もまったく実施されなかった。

七、被爆の惨状

被害軽微

似島町は炸裂時の爆風圧によって、家屋が破壊倒壊するということはほとんどなかったが、島内総戸数の大半の家で、建物の窓ガラスなどが、強い震動と爆風によって破壊された。

しいて被害状況を言えば、半壊一％、小破五〇％、無傷四九％、計一〇〇％となろう。また、火災の発生もなく、市中の処々で見られた降雨もなかった。

その時、屋外にいた者は、露出部分に、熱風のような異様な熱さを感じたが、これによる火傷の症状にまでなった者はなかった。また、ガラスの破片などで負傷した者もなかった。

しかし、通勤者とか通学生、または私用などで市中に行っていた者のうちには、即死者や負傷者がかなりあった。これら町民の負傷者は、被爆一か月後の集計では一〇八人が死亡し、それ以後も死亡者が出ているが正確な人数は不明である。

市中の被災者を収容

島内では別に避難などする必要はなかったが、午前十時ごろから、市中の負傷者が、続々と船で似島へ運ばれて来はじめた。これら負傷者は検疫所と寺院へ収容し、町民こぞって救護活動に従事したが、はっきりなしに運ばれて来て、ついには島全体が、異様な興奮に陥った。殊に検疫所では、軍隊の活動がめざましく、収容、看護になみだぐましい作業が続けられた。

六日、寺院(似島説教場)にいったん収容された者も、検疫所まで運んで治療をうけさせた。

収容作業は八月六日から二十五日まで続いたが、全収容者数は約一万におよんだ。

市中遠望と島内の惨状

六日夜、島から海上はるかに市中を眺めると地上は、血の色に染まった強烈な火炎が立ち狂っており、その上をどす黒い雲が、火葬炉のふたのようにずっしりと重く覆っていた。一方、島内では、人間断末魔の絶叫や呻吟・悲鳴・号泣が充満し、冷酷無残な死の暗影が、ドロドロと渦巻いていた。その渦中であって、町内の主婦たちは、全力を傾け、一人の生命もおろそかにせぬよう献身的に立ち働いた。

死亡者の処理

なにぶんにも、市中から運ばれて来たおびたしい収容者であったから、当初は、縁故者たちが探しに来て、とても容易には判明し難かった点もあったが、二、三日後には住所氏名を聞きただして名簿を整えると共に、名札を作り、死亡した場合、その名札を死体の上に置くようにした。しかし、重傷のため死亡前にききぬすことができなかった者や、すでに死亡していた者の身元不明者がずいぶんたくさんあった。

火葬は、八月十日ご三から八月末日ごろまで、主として、似島町字東大谷二八七の一番地(現在・似島火葬場)において、ほとんど軍隊が、不眠不休の治療活動のかたわら根気強く行なった。

最初は、一体ずつ丁重に焼いていたが、またたくまに死体の山ができ、似島町字大黃の陸軍馬匹検疫所構内広場(現在の似島中学校)で数体ずつまとめて火葬しなければ処理できない事態となった。

千人塚

検疫所は、ここに千人塚を建てて遺骨を納め、慰霊祭を行なっていたが、後に平和記念公園内にある供養塔へ納骨した。なお、町内会の機能は支障なく、従来どおり活動を続けた。

似ノ島にて

義之栄光（当時・一八歳船舶練習部斉藤部隊津留隊）

(一) 出動命令を受けた場所

江田島北岸 幸の浦 戦隊兵舎内

イ、部隊員の様子

当日午前十時から軍装検査、正午頃広島を経て九州五島へ、出戦の内示を受け、最高に戦意が昂まっていた折であったから全員切齒した。まもなく軍装検査は一時中止、舎内待機の指示が出たように思う。しかし広島の被害を推定して、早期に偵察員を出し、また救援隊を組織して繰り出す必要ありというのが兵舎での話題であった。

ロ、閃光と音響

小生はちょうど舟艇当番で海上にあり、(レ)艇の整備作業をしていたが、北方上空仰角五〇～五五度位のところに、突然、強いマグネシウム花火のような光りがあり、それがユラユラとおりて来て、約四五度位の高さの場所で、白が金色にかわり、ダイダイ色のような丸い火の玉になった。「熱い!」と思った。暫時の後、強烈な爆風の熱い風に叩かれ、つづいて間もなく、ズ・ズーンと鈍重な爆発音がひびき渡った。あらゆるものがビリビリと震え、ゴツゴツと小突かれたような感じであった。

(二)、出動の経路と周囲の状況

時刻ははっきりしないが、記憶の断片をつないでみたところから、当日午後、(レ)艇 K-12号に四人便乗して宇品栈橋に向う。栈橋は大変な混雑で、上陸困難のため東に向う。上陸できそうな場所がなく、あまりの混乱と海岸に殺到する人波に上陸をあきらめ、金輪島・峠島を経て帰投する。報告は「広島は何しろ大変な被害で状況の正確な把握は不能、上陸も困難、海岸には被災者が雲集、市内の救護収容施設は殆ど壊滅または使用不能のため、海上輸送によって周辺の収容可能施設に極力輸送中。」ぐらいな事しか出来なかった。建造物などの被害よりも、人間の被害の大きさと悲惨さに気をとられて、この頃あいまいになる。その夜、広島は盛んに燃えつづけ、北の空は真っ赤。翌朝食後、五十三戦隊を二つまたは三つに分けて小生の編入された分隊は、大発動艇に乗り北上。服装は体操衣袴。似ノ島の検疫栈橋につき、構内にはいってすぐ左手の建物に拠点をおき、向い側(栈橋から上がって右側にあたる)の舎内に収容されている患者の看護と、次々に栈橋に着く船や舢舨からの患者を担送、また誘導する。これが作業のはじまり。被災者の輸送には機帆船や舢舨が多かったが、中に一隻りっぱな客船が混っていた。

「フクセイ」という船名であった。

(三)、活動場所とその状況

八月七日、患者の看護と担送、そして生者の氏名・住所などを聴き取り、荷札に書いて身体のどこかに結びつける。内服薬はなく、外用薬としてはマーキ口液と亜鉛華胡麻油ぐらいしかない。食器とコップは孟宗竹の輪切り。ハエがすこぶる多い。患者も飯を食い、水を呑み(おおむね死水になる)、ハエを追い払う。目玉の動き、目の光りが止った時が「死」を迎えたときらしい。死体は次第にふえて置場がなくなる。栈橋から海岸伝いに南へ三、四〇〇メートル行ったところにある厩舎へはこぶ。作業止めがかかったのは、夜八時頃であった。ロウソクをつけて部隊から運ばれた握り飯を喰う。汚れた被服の代りはない。手を洗う水も不便な島だった。

八月八日、朝から死体運搬。死体からは身元の荷札と何か遺品になりそうなもの(毛髪が多かった)を封筒に入れて、それに氏名を書き、本部(?)へとどける。また、一〇体かそこらは同じ穴の中へ材木を入れ、死体を並べて、その上に麦ワラやタタミ、材木をつみ上げて火を放って茶毘に付し、その骨灰をとりあつめた。死体そのものは、最初の一、二体は火葬窯で焼いたが、そのあとは防空待避壕を少し掘りひろげて、一穴当り六〇～八〇体程を入れ、上に土をかけて土饅頭とした。それでも間に合わなくなると、最後には筏で運ばれて来た死体を南側の崖に穿った横穴待避壕の中へ直接担ぎ込んだりした。穴の中には死体を狙って小さな赤い陸蟹が沢山いた。夕方、離家のようなところで死んだ吉成弘陸軍中佐の死体を棺に入れて運び出した。何でも朝鮮の李王家の中のどなたかの侍従武官だったとかで、拳銃で頭部を撃たれたと言う話であった(人に撃たれたのではなく自決)。その頃、火葬窯の中では、

鍋島大尉と某下士官(伍長あるいは軍曹)の二体が煙になっていた。この夜もロウソクとランタンの灯でおそくまでかかった。

八月九日、午前十時頃迄作業をすると、皆のびてしまった。昼前、部隊から迎いの大型発動艇が来て、一旦幸の浦へ引揚げた。交替が出向いたかどうかについては不詳。その夕方から小生は高熱を發し寝こんでしまう。翌夜だったと思うが、軍医の診察を受けると「破傷風」の疑いありという事で、夜中、青森県北津軽郡鶴田町出身奥瀬勇一候補生殿の付添いで、広島市の赤十字病院へかけこむ。そのまま入院という事で、小生の救護・死体処理作業はそれまでとなる。この間、日時不詳なるも広島市へ行き、御幸橋付近で救護活動・焼跡整理などを半日位やり、過労で倒れたことがあった。

(四)、その後

赤十字病院は建物が糸巻型に変型し、窓はちぎれとび、階下は一般患者と八工の渦巻きで、気分の悪くなるような環境。小生は軍人の故をもってか階上に収容される。二階は八工も少なく、悪臭も薄く、重症患者も少ない。破傷風ではあるまい、という事で二日程で

退院、奥瀬氏と共に帰隊。しかし熱はあり、下痢は続き、全身から力が抜けて、何か重い病気がかかったらしい感じが濃厚で、起きられるようになったのは十三日頃であったと思う。復員後、ひどい視力障害。毛穴からの出血、殆ど一年を周期とする発熱・発疹・下痢

症状などが昭和三十二年頃までつづく。それが原爆症状であったか否かは不詳。昭和四十三年春、申請して被爆者手帳をうけた。

八、被爆後の生活状況

生活状況

被爆程度が軽微であったし、地理的に離れた島であったから、疎開の必要もなかったほどで、家屋・家財に不自由はしなかった。しかし、生活必需物資は、終戦後もあいかわらず、ずっと欠乏していたが、市街地生活者のようなことはなく、半農半漁の生計者が多かったため、ある程度の自給自足で飢餓を切抜けていった。

被爆直後の市中のようなおびただしい八工の発生といったような現象もなく、被爆による環境衛生の悪化ということは別になかった。ただ、特殊なケースとして、宇品から送電している海底電線が故障したためか電灯がつかず、しばらくロウソク生活を余儀なくさせられた。

電灯がついたのは、それから一、二か月後であった。

九、終戦後の状況

九月の暴風雨、十月の大豪雨にもそれほどの被害はなかった。

似島町としては、幸いに戦災からも火災からもまぬがれて、市中のような特別な復興作業を考える必要はなかった。

十、その他

島内の陸軍運輸部似島検疫所、および地区外の金輪島ドックでは、被爆負傷者を多数収容したが、治療には軍医だけでまにあわず、手術を要するほどの重傷者は軍医の手で、その他は医療に経験のない将兵・軍属全員が、戦場における臨機応変の処置と同じようにテキパキと治療にあたった。

将兵・軍属は、平素の軍事訓練の中で、止血とか、繃帯の扱い方、薬品の取扱い方ぐらいのことは、だいたい修得していたので、この非常の場合、大いに役立ち、その活躍は実にめざましく、また、たのもしかった。

この時の状況について、昭和三十九年二月六日、当時似島検疫所勤務であった堀田福美・山本治郎助・奥本カヤノ・黒木マツエの四人、および当時金輪島ドック勤務であった高田治などの談話をまとめると、次のとおりである。

その一 陸軍運輸部似島検疫所

陸軍運輸部似島馬匹検疫所

(文中、右二検疫所を総称して通称の「似島検疫所」とする。)

陸軍運輸部似島検疫所・同似島馬匹検疫所

1 概要

所在地 似島町長谷一番地(但し、馬匹検疫所は似島町大黃)

被爆当時の勤務将兵軍属数 約七〇人前後(他に船舶司令部の病院船所属部隊八〇人前後)

主要建物

伝染病等 二棟(病床合計一〇〇床位、一棟当り建坪三八四平方メートル)

普通病棟 一棟(病床合計一〇〇床位、一棟当り建坪三八四平方メートル)

停留舎 五棟(一棟当り建坪約四六〇平方メートル)

宿舎 一棟(二階建延坪約九三〇平方メートル)

兵舎 二棟(一棟当り建坪約四三〇平方メートル)

馬房 一二棟(但し概数、一棟当り建坪約五〇〇平方メートル～五六〇平方メートル)

上家 六棟(概数)

その他 事務所・治療室・炊事場・消毒室・倉庫・休憩所・検査場など。

敷地面積 一三二、〇〇〇平方メートル(約四万坪)

収容期間 被爆当日から八月二十五日まで。

2 当時の概況

似島検疫所は、かの日清戦争以来、各戦役・事変・出兵のたびに、戦場からの帰還将兵は、まずここに上陸して検疫を受けた所である。将兵たちは、祖国の第一歩を、この島に踏みしめ、感慨をあらたにしたのであって、実に印象深い思い出の地として、全国の出征経験者たちは、皆永く胸底にとどめたものである。

大東亜戦争に際しても、検疫所は大いに利用されていたが、戦局ようやく危く、急迫を告げた半ばごろから、殊に昭和十九年四月以降になると、戦線の膠着からであろうか、検疫業務が少なくなり、機能も弱体化していった。

そのとき、検疫所内で陸軍船舶防疫班四箇班が編成されたが、三箇班は外地に出動してしまい、残り一箇班が所内にとどまっているという状態であった。

また、このころ、病院船部隊が所内にある停留舎二棟に駐屯していたが、その部隊が検疫所の事務所も使用したので、検疫事務を馬匹検疫所の事務所内に移して執りおこなった。

日ごとにさびれゆく検疫所を見て、勤務する者たちは、戦局のただならぬ事態を、そくそくと肌に感ぜざるを得なかった。

3 炸裂の時

六日朝は、所内に停留兵や入院兵もなく、また、帰還部隊を検疫する予定もなく、平常どおりの静かな朝であった。

海上すらも、うそのように平穏そのものであった。広島港沖に、堂々たる船団が投錨し、海上を圧していた風景も今はなく、一隻も影をとどめぬ気の抜けた海面が、ただ寂莫と眼前にひろがっていた。

その時刻、ピカッとあやしく空中が光った。瞬間、空の千切れ雲が拭うように消えていった。ズシんとこたえる衝撃と爆風が来た。同時に異様なもの音をきいた。見ると、屋根瓦が飛び、ガラスがこわれ、煙突が折れていた。「すわッ」と、一同は退避した。悪い予感が脳裡を走った。

待避壕で、じっと体をすくませ、注意深く推移をうかがっていたが、敵機襲来の様子がない。そろっと出て、不安な気で所内や近くにある弾薬庫などを見まわって、付近に爆弾投下されたところがたいことをたしかめた。

4 救護活動

何が光り、どうしてこうなったのか皆目原因不明で、イライラする気持ちをおさえながら、でもやはり何とも気がかりで重苦しい不安がつるばかりであった。

そのとき、はるか宇品方面から機帆船・さんばん(動力付小船)・団平船などが、続々と検疫所の棧橋へ向って来るのが見えた。どの船も人間があふれていて、全速力で近づいて来る。

たった今、平穏だった海面が、急転直下一変して極度の緊迫感におおわれ、あわただしさがみなぎって来た。

午前十一時ごろであった。棧橋に最初の船がついた。宇品港からの所要時間は約四〇分である。

船上に満載された人間は、全く人間の姿ではなかった。着物はボロボロ、または裸、そして血だるま、火傷して苦悶している者など、見ればだれもかれも目もあてられぬ負傷者ばかりであった。

なんとも云えぬ悪い予感があったが、予感のあいだはまだしも、このように的中し、如実に生地獄を見せつけられては、救いのないショックに、前途がすべて絶望的に思われた。「戦況は、こうまで破局におちいていたのか。」と、負傷者の上陸援助を急ぎながら、一同はただ愕然とするばかりであった。

「急ぎ収容せよ。」との命令一下、総員が出動した。重傷者は担架で運び、歩行できる者は肩によりかからせ、できない者は背負い、一人で歩ける者は歩かせて、すべての建物をいっせいに解放し、収容を開始した。

負傷者満載の船は、次から次へとひっきりなしに棧橋に着く。休むひまはない。無我夢中で収容作業を続けた。

金輪島部隊約二〇〇人、他島から来援した部隊一〇〇人ぐらい、これに病院船部隊の応援も加わって、必死の活動をつづけるうちについに夜となった。夜になっても続々と船で負傷者が運ばれてきた。

負傷者は、棧橋にあげたとき直ちに死亡する者や、運ぶ担架のなかで息を引きとる者もあり、運ばれるのを待つあいだに死んだ者も多くあった。

収容者の治療は軍医をはじめ、将兵・軍属など協力一致して次々に進められていった。

父親と六歳ぐらいの女の子が、一緒に収容され、コンクリート床の上にすわらされていたが、女の子は、父親のそばで無心に遊んでいた。父親は、その子を見守るでもない様子、そして動くことなく、じっと坐っている。通りかかった堀田福美軍属は、チラと見て「変だな。」と直感した。近寄って、肩を押すと父親は棒切れのように抵抗もなく、そのままそこへ転がった。死んでいたのである。女の子は父の死を知らないで遊んでいたのであった。

また、この日収容した負傷者のうちには妊婦が数人ばかりいたが、収容当日に二、三人の赤ん坊がうぶ声をあげた。よるこびより痛ましさの方が強く先にたつ生命の誕生ではあった。

5 火葬と埋葬

収容者は、このように上陸途端に、あるいはその当日から続々と死亡していった。しかし、間断なく運ばれて来る負傷者の収容作業に追われ放しで、死体を処理することまでは到底できなかった。

遺体は一か所に山積みされたままであったが、救援部隊の到着があって、やっと手がつけられ始めた。

死体を馬匹検疫所の方にある上家まで運んで、そこで遺品などを調べ、氏名を確認した。構内のタコ壺式防空壕を仮火葬場に急転用し、マキを集めて死体を積み重ね、それに重油を浴びせかけて茶毘にふした。

次から次にと、まったくの強硬作業で死体を積みあげて何回もくりかえして焼いたが、ついに間にあわなくなった。その結果、横穴壕に死体を運び入れ、とりあえず土をかけておいたのもたくさんあったから、壕の入口には毎夜、燐が燃えていた。

八月六日から一週間ぐらいのあいだは、死亡者あいつぎ、火葬も当日が翌日に開始して八月二十五日ごろまで続けたが、鼻を突く火葬の臭気にももはや無感覚になるほど、連日連夜の重労働であった。

これらの遺骨は、病院船部隊保管の遺骨箱 - 小さい木箱に納め、慰霊室にいったん安置し、引取者が名のり出ると、そのつど、確認してそれぞれ引渡した。

東海岸の南端(字南泊 = まどまわり)に遺骨を供養する意味で、「千人塚」と墨書した盲目さ約二間の標柱を島の住民らが立て、次々と火葬するたびに遺骨を納めた。標柱の白い木肌が眼に泌みるようで、深く哀感をそそった。

横穴に仮埋葬した遺体については、四、五年後に市役所が構内の一隅に集めかえて、供養塔を設け、おごそかに葬った。

のちに、平和記念公園内に供養塔が設置されたので、千人塚および供養塔に納めた遺骨をすべて移管した。

6 収容者数と来訪者

八月六日から二十五日まで、検疫所で扱った収容者数は、約一万人と推量される。

各収容建物ごとに収容者名簿を作成していたので、縁故者が探しに来たとき、この名簿によって、どの建物に収容されていると、一人一人に教えていたが、次第に来島する人々が増加し、係員がいちいち調べるのもまにあわなくなった。ついには名簿が引っ張りダコになるほどに、来訪者たちは殺気立ち、われ先にとあらしめて、少しでも早く探しあてようとした。

その二 陸軍運輸部金輪島ドック

陸軍運輸部金輪島ドック

1 概要

所在地 金輪島(似島東方約四キロメートル、宇品より南東約二キロメートル)

被爆当時将兵軍属数 約一、〇〇〇人

2 そのとき

光った一瞬、市内を遠望すると、見える限りの市街地全面、地上わずかの高さで、平行線のように区切られた地

面との空間が、あやしく黄色に染ったと思ったら、ところどころから黒煙が立ち昇った。

上空の雲状の煙が、その黒煙を吸いとるような状態になって、大きくふくれあがった雲と、地上とのあいだにさまざまの色が立っていた。

3 爆風

船に乗っていた作業員が二、三人、突然海中に落された。爆風に吹きとばされたのであろう。金輪島の施設は、ガラスの破損だけでなく、建物もかなりひどく破損した。

4 負傷者の収容

金輪島ドック構内には五〇〇人ぐらい収容された。

昭和二十二年ごろ、雨のために構内で山崩れがあったとき、その場所に、畳の上に寝たままの死体が数体あらわれて、当時を思い出させたことがある。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

竹屋町、南竹屋町(一部)、昭和町、鶴見町、富士見町、三川町、田中町、薬研堀町、宝町、流川町、東平塚町、西平塚町

町内会別要目

この地区の範囲は、竹屋町[たけやちょう]・平塚町[ひらつかちょう]・薬研堀町[やげんぼりちょう]・田中町[たなかまち]・富士見町[ふじみちょう]・昭和町[しょうわまち]・宝町[たからまち]・鶴見町[つるみちょう]・下流川町[しもながれかわちょう]・三川町[みかわちょう]とし、爆心地からの至近距離は、雑魚場町[ざこばちょう]と境界を接する富士見町北端で約八〇〇メートル、もっとも遠い地点は、昭和町の京橋川畔で約一・七キロメートルである。

歴史的由緒の深い地区で、福島氏時代に、今日の竹屋町・富士見町地域がキリシタン新開の名で開かれたのが、この地区の基であって、広島城の正面を形成する地域として急速に繁栄した。

平塚町は、往時五箇荘の一つであった平塚荘の遺名、薬研堀町は、その名の濠(城を守るV型のほりという)があったのが、後に町名となり、田中町には、石川丈山が屋敷を構えていて、そのころ田の中にあっただので田中屋敷と呼ばれたのが公称となったもの、また、流川町は、街側に沿うて一帯の水路があったので名づけられたが、水路は今川とも称され、泉邸の園池疏水のために開かれたもので、清い水が絶えず流下したから流川と唱えられ、三川町は、明治十五年一月新たに置かれた町で、その地が一面は下流川に、一面は竹屋川に沿い、北は堀川町に接していた故に三川町となったと、それぞれ由来正しく旧史に記されている。

城下町となってからは、当初は侍屋敷が置かれたが、後に町家の居住地区とせられ、以後、住宅地区を含む商店街として発展した。

戦後は一段と飛躍して、特に下流川町・薬研堀町境界は、商店街・歓楽街として発展し、昼夜雑踏するところとなった。

また、三川町円隆寺のとうか祭(さん)は、広島地方の浴衣着初めの夏まつりとして、今も名高く、当日は人波で広い三川町通りが埋まる。

なお、被爆直前の建物総数は約四、九七八戸、世帯数約四、〇九〇世帯、人口約一一、六七三人で、各町内会別内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
東平塚町	1,070	1,500	2,289	香川菊三
西平塚町				安田寿夫一
平塚元町				木村潤一
北平塚町				吉本芳太郎
薬研堀町	159	207	783	楠原徳太郎
田中町	204	260	1,200	田村操雄
竹屋町	250	300	1,500	平岡卯三郎
昭和町東	526	536	1,726	脇本弥一
昭和町南				横山喜一
昭和町西				西亀正夫
富士見町上組	871	265	870	鎌田良吉
富士見町本通				門田幾次郎
富士見町下組				渡辺高一
宝町	685	685	2,055	近藤逸八
鶴見町	805	不明	不明	石原満槌
下流川町	176	125	400	宮下文造
三川町	187	212	850	三宅萬次郎
東新天地	(下流川町に含む)			池田軍次郎
西新天地	不明	不明	不明	小林敏雄

また、地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
山陽中学校	富士見町	円隆寺	三川町

山陽商業学校	富士見町	興禅寺	平塚町
竹屋国民学校	鶴見町	順教寺	西平塚町
区裁判所・同検事局	三川町	禅昌寺	薬研堀町
地方裁判所・同検事局	三川町	常林寺	三川町
金子製麦所	東平塚町	興徳寺	田中町
第一信用組合	下流川町	正隆寺	昭和町西部
広島通送株式会社	昭和町	万徳寺	竹屋町
大正煉炭	三川町	琴平神社	東平塚町
逓信局倉庫	三川町	玉守稻荷神社	富士見町下組
永進堂缶詰会社	鶴見町	夜泣き地蔵(竹屋地蔵)	竹屋町
己斐病院	田中町	天使館(映画館)	東新天地
母子寮(早速チヨ)	鶴見町	花月(映画館)	西新天地
ワカバ幼稚園	東平塚町	東券番	薬研堀町
修道会館幼稚園	富士見町上組		

二、疎開状況

建物疎開

二十年三月二十一日、段原国民学校において、軍当局から二十四時間以内に家を明け渡すよう指示があり、翌二十二日に軍隊が来て、鶴見町上土孝作宅(母屋二六四・〇平方メートル、土蔵一・製材工場九九・〇平方メートル)を取りこわしたのが、この地区における最初の建物疎開の実施であった。

このとき一緒に、鶴見通り平塚側を、下流川町の角のところまで約五、六〇戸を壊したが、急なことであったので、家財道具はおのおのが自家の物を運び出し、親類や知人宅へ一応疎開した。以後、積極的に指示どおり進行し、鶴見町は、竹屋国民学校付近を僅かに残すだけという大がかりな建物疎開をおこなった。

この疎開跡地が、戦後の都市計画に際して、幅員一〇〇メートル道路(平和大通り)を開通させる一つのポイントになったといわれる。

人員疎開

戦局が日々急迫して来て、住民もじっとしてられない焦燥感にあおられたから、人員疎開も円滑に行なわれた。

老人子供・妊婦・病人をはじめ、生産や防衛にたずさわらない者に対して、町内会が勧奨し、推進した結果、各町内会とも約半分の世帯人口に減少した。

生活必需品以外の家財道具など諸物資の疎開も、どしどしおこなったので、家のなかにはガラン洞になった。ほとんど郡部へ疎開したのであるが、運搬方法にはみんな辛苦した。疎開先と連絡し、話しあいがつくと、町内会長の証明をもらい、西警察署長の証明を得てトラックを使用した。トラックは統制されていて民間人が、自由に使用できなかった。警察署長の証明なしで、トラックを使用していたのが露見し、積んでいる家財道具を三川町の道路ばたに、全部引きおろされた者もあった。そこで、警察の証明を得た人のトラックに便乗させてもらって、やっと運んだりしたが、その証明書もなかなかもらえなかった。たとえ貰えても、そのトラックを使用する順番が待てどもこず、気があせるばかりであった。待ちきれず大八車を探して借りてきて、積めるだけ積みあげた。馴れない手もとは痛み、朝からのオカコ腹で力の抜けた脚を、一步一步引きずりながら、一家中の者がエッサエッサと押したり、引っぱったりして、ともかく疎開するだけはしたのであった。

学童疎開

竹屋国民学校の学童疎開は、当局の指示どおり行なわれたが、児童を引率する教師も、児童を送る親たちも、事故の起きないようにと心をくいだいた。

昭和二十年四月十三日・十四日の二回にわたって、三年以上約三〇〇人の学童が一五人の教師に引率されて、太田川沼津沼いの山県郡加計町・安野村・戸河内町・筒賀村・殿賀村の各寺院、集会所に集団疎開をおこなった。

三、防衛態勢

警防団・国民義勇隊

警防団・国民義勇隊などの防衛組織は、広島市全地域の統一的な機構として、竹屋地区においても、町内会・隣組の強化、再編成などによって、その態勢を確立していた。

なお、警防団には、各戸が月十銭ずつ寄付をして、運営基金に繰り入れた。

防空壕と警備・訓練

各町内会とも共用防空壕を築造し、隣組単位あるいは家庭単位の防空壕を設けた。隣組用防空壕は二、三〇人ば

かり収容できる広さのもので、地区内の建物疎開跡地などを利用し、市当局の設計書に従い、疎開後の廃材を使って、町民の勤労奉仕で構築された。

各家庭の防空壕は、特別なものを除いてほとんどが二、三人はいれるぐらいの簡易な壕であった。

防火用水槽も、隣組用として水量五石五斗(九九〇リットル)入りのもの、各家庭では五斗五升(九九リットル)入りのものを設置した。隣組用水槽は、コンクリート製の他に、醸造用の桶(ホソ)を地中に埋めて利用した。家庭用は、竹の網を芯にしたコンクリート製の市販物であった。

消火器材としては、主として焼夷弾の被害時を想定し、竹ざおの先端に三〇センチメートルの縄を一五、六本結びつけた打払いや、一升(一・ハリットル)入りの砂袋、袋は紙でもよかったが、それを一〇個ばかり各家庭に備えた。また、木箱(ミカン箱など)に砂を入れて置いていた。

しかし、防火方法や器材は、他都市が空襲されるたびにそれを見ならって変更され、訓練も変わった。

演習は、婦人もかり出されて竹槍の使い方をならったが、目標は常に「自分が死んでも敵一人必ず殺すこと」であった。竹はまとめて、町内会が郡部から買いつけ、各家庭で竹の先端を削いでとがらせた。

敵機来襲の際、市の上空に張る煙幕用として、青松葉を牛田の水源池の山に採りに行き、銭湯の湯舟を利用し、直ちに着火出来る様に積んでおいた。

二十年七月ごろ、太田川のダムが破壊された場合、四〇分後に、市内が洪水になるという流言があったが、町内会の指示で、竹筒の浮袋を、各家庭の人数ずつ作った。輸送船がつぎつぎ撃沈されるので救命道具がなくなったとも言われたが、竹のフシとフシの空洞を縦に、シュロ縄で、自分の胴にまわるだけの長さにつないだものであった。

この竹筒製浮袋は海軍に供出したのもあったが、海軍が全滅して不要になったため、後に市民にくばられた。水主町(現加古町)の川端にあった大き倉庫に、その浮袋の配給を受けに、炎天下、大八車を引っぱって行ったが、成るべく良く浮きそうな竹筒の大きいのを選び、汗水たらしながら苦心して持ち帰った。

東券番

また、必勝の拳国一致体制下で、歓楽街は火の消えたようなさびれかたであった。石川ミサヨの談話によれば、栗研堀町の東券番(芸者置屋二二軒の持株)は、頭取、木村潤一・楠原徳太郎、監査役、石川ミサヨ・木村フサコほか、箱屋のおとし・おなごして運営し、当時、芸者一九〇人、舞妓一〇人ばかりいたが、戦争になってから、芸者の監札をみな警察へ返上して、軍需工場に出勤した。券番は、ミシン機械を入れて、軍需下請工場になり、お国のために、兵隊さんのためにと、日夜働きつづけていた。

四、避難経路及び避難先

避難方針

市当局の伝達によって、竹屋地区は、万一の場合、安佐郡可部方面へ避難するよう指定されていた。しかし、比治山公園は比較的距離が近いうえ、頑丈な防空壕があり、高地で浸水のおそれもなく、樹木などの遮蔽物が多いので、とにかく比治山へまず避難するようほとんどの人が考えていた。もし鶴見橋が落ちて通れなくなった場合は、山陽中学校のグラウンドということにしていて、避難経路は別に決めていなかった。

避難するときは必ず救急袋を各自持つことも決めていた。これは廃物利用の手製の布袋で、中にまず貴重品(貯金帳その他)、三角布・繻帯・骨折した場合の添え板(カマボコ板など)、それに一食分の食糧が入れてあった。ただし食糧は、その日その日が欠乏状態であったから、袋に入れようにも入れるほどなかった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
部隊名不明 通信技術練習生(約五〇人)	山陽中学校の一部
部隊名不明(駐屯予定)	竹屋国民学校

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日夜は、警報が発令されるたびに、灯火管制を厳重にしたり、モンペの非常服装で防空壕へ待避したりして、決められた通りに行動したが、なかには、馴れっこになり、疲労もしていて、発令されても防空壕へ待避しないままで、じっと解除を待っているという者も多かった。

町の役員のなかには、工場など勤め先が郊外へ疎開したため、仕事がなくなったので昼は昼寝ですごし、夜は町内会の不寝番をするという人もあった。

六日朝

六日朝、地区内では、建物疎開作業の出動について広範囲に指令が出る日であり、警防分団長は幟町国民学校の分団長会議に出席した。

建物疎開に該当する家屋を、警察がきて、標示の紙をいちいち貼って歩いたが、出勤者は、暑中ではあるし、九時集合のところを涼しいうちに片づけようとして朝早く出て来ていた。そのほかの人々は、ちょうど食事中であった。

このとき、東平塚町の石井某は、相当上空で、比治山の方から西練兵場の方へ、一機飛んでいくのを目撃した。

「今のはBの音だ。」と、傍の人にいうと、「解除になっているから、日本のだろう。」という。その飛行機は銀色に光り、音をたてながら旋回していた。

また、ある人は、B29の爆音を聴取したので、学徒報国隊として市役所前の野村生命株式会社(女子商業学校生徒一〇人がいた)に出勤しようとするわが子に「B29が通ったから、今日は休みなさい。」とすすめた。野村生命は現在の東京生命で、第一回空襲のとき直撃を受けた会社でもあった。しかし、その子は「警報が出ても、この会社は大丈夫だから出てこい、と言われていた。」と行って出勤し、そこで死んだ。同社の職員も椅子に腰かけたままの姿勢で、黒焦げになって死んでいた。

建物疎開作業状況

なお、六日朝、動員指令によって、各町から一二、三人ずつ、計一、七八〇人の国民義勇隊員(隊長・門田幾次郎)が、雑魚場町(地区外)と、鶴見町(地区内)とへ出動していた。なお昭和町西部の西亀正夫町内会長は、雑魚場町の疎開作業隊に付添って出勤し被爆、大河国民学校に収容されたが、七日午前三時に死亡した。

出勤者は、作業量の多い雑魚場町の方に多数が行き、疎開跡片づけ程度の鶴見町へは、老人や身体の虚弱な人々が行った。

鶴見町の現場には学徒義勇隊として、県立商業学校二五〇人・広陵中学校四九〇人・第一工業学校一〇〇人・進徳高等女学校四三九人・比治山高等女学校三九二人・女子商業学校四五〇人・第一国民学校二五〇人・白島国民学校六七人・楠那国民学校五九人・牛田国民学校二一人・以上合計二、五一八人の生徒達が参集していた。

なお、竹屋地区内で実施された建物疎開は、つぎのとおりである。

第一次・二十年三月二十二日 東平塚町・田中町・下流川町・鶴見町

第二次・二十年三月末日 三川町・竹屋町

第三次・二十年四月五日 東、西平塚町・田中町・三川町

第四次・二十年五月ごろ 東、西平塚町

第五次・二十年七月初め 鶴見町

第六次・二十年八月六日 堀川町・下流川町・薬研堀町・弥生町・東平塚町(以上各町とも計画で終わる)

七、被爆の惨状

六日午前七時三十一分、警戒警報が解除になったので、平塚元町柴田シゲコは、屋内の廊下でモンペをぬいでいると、飛行機の爆音がきこえてきた。その爆音がどこかへ去っていったと思ったあと、パッと周囲が明るんだ。丸い火の光りで、瞬間、目をおおった。気がつく座敷のまん中に転げており、屋根の棟木の下敷きになっていた。

「ドン」という音は聴いていなかった。必死で脱出して、周囲がまっ暗ななかで、病床にあった娘をタル木の下から救い出した。ふと見ると弥生町の方から火が出ていた。そのうちにグルリが火となった。

旋風起る

広中静は、閃光と同時におどろいて屋外に飛び出した。見ると、もう竹屋国民学校の講堂が火炎につつまれていた。その火炎は強い勢いで燃え立ち、校庭の塵芥が、空に吸いあげられるように、小さく渦巻きながら移動していた。その渦巻きに爆風で飛散した屋根のソギ板や紙屑が、吸い寄せられた。渦は右廻りに次第に大きくなっていった。ついに、その渦に芯棒が立ち旋風化すると、空中を三川町の方まで移って行って見えなくなった。

周囲の家々はほとんど押し潰されたように倒れていたが、なかに新築したばかりの家が一戸だけ建っているのを見た。また、傾斜しただけの家屋もたくさんあった。京橋川の川べりの家は川の中へ倒れこんでいた。

自然着火

屋根の角っこや物干竿をかけるツイマチの先端に、ポッと火がついた。これは熱線による自然発火であったことが、後日ははっきり判ったが、当座は実に不思議であった。そのポッと出た火が四方に燃えひろがるのが、また早い

速度であった。

石井ヨシ(現姓・赤木)は、逃げるとき、町内会の重要文書を入れて、扉や窓は赤土で厚く塗りつぶしていた土蔵の屋根が、棟木が中ほどで凹んで折れたところから、タバコの煙みたいな煙が出ているのを見た。土蔵は、こうして焼け落ち、重要文書も灰になった。

東平塚町の笹栗弥は、家屋の下敷きとなったが、三〇分ぐらいしてやっと抜け出た。出て見るとまだ一〇メートル先の人の顔が見えないほど周囲が暗かった。あちらこちらから「助けてくれ」と叫んでいる声があがっていて、手あたり次第に助けようと努力したが、壁のコマイ竹などが材木にからんでいたりして、なかなかはかどらなかった。そのうち煙がまわって来て、どうすることもできず、自分自身が危険になったので逃げ出すほかなかった。このころ、東寄りの南風が吹いていたが、燃えひろがるのも早かった。

平塚の土手にあがり、鶴見橋の方へ逃げる途中、東平塚町土手の建物疎開跡の避難道路のところ市土木課の管理する白壁の倉庫二棟(二、五間×三間及び二間×一、五間)があったが、木炭と土木器材の入っている書庫は、火が北側東角に燃えあがっており、他のドラムカンの積みである倉庫は四五度傾いたままになっていた。

木炭などの倉庫の方は十時ごろ焼けおちたが、もう一つの方は、笹栗弥が周囲の人々に呼びかけて、疎開あとの壁土をかけて、延焼をくいとめた。倉庫のかげには重傷者がたくさん横たわっていたが、その一メートルたらず前で火を消したのであった。建物は軒端から火の出たのが多かった。平素の防火訓練が活用されていたならば、火の海にならなかったかも知れないが、みんな自分のそばに爆弾が落ちたと思って逃げたのであった。

避難道路

避難道路というのは、現在の幅員一〇〇メートル道路設置のもとになった疎開跡地で、東平塚町川土手近くの棕櫚の木小路(しゅろのきしょうじ)から田中町を経て、裁判所倉庫南側、県立高等女学校の南側塀ぞいに電車道までの道路を言い、幅が八〇メートルから一〇〇メートルあり、道路のまん中には二〇メートル幅ほど真砂が敷いてあった。昭和二十年三月二十二日に着手し、六月ごろ真砂を敷いて完成した。この避難道路と、廃材が堆積している鶴見町疎開跡地は焼けていなかったため、多くの人々が避難して来た。

避難者

鶴見町の疎開あとの傍に立っている倉庫から、老人が一人で、ふとんや座ぶとんをかたぎ出していたので、町の世話役が避難して来た人々に、それを投げてやると、老人が「これは預り物だからこらえてくれ。」と制止した。「何を言うか、みな日本の物じゃ。」と言いかえして、裸に近い姿の避難者に配ったという。

大手町の方の人々も、避難道路へたくさん逃げて来ていた。中に、全裸の髪をふり乱した女が大火傷していたので、防火用水槽(深さ一メートル)に入れ、首から上だけ出させて休ませておくということもあった。

弥生町の方からは遊廓の女が半裸になって逃げて来た。左手を右手で持っている持ち方がおかしいので、見ると皮だけでくっついて手が折れていた。「もう、折れている。」と、何事でもないようにその女が言った。

また、ちょうど鉢巻きをし、円匙をかついだ電信隊の兵士が一〇人ばかり通りかかったため、下敷きになった人々の救助を頼み、火がくるまでに幾人かが救出された。

午前九時に少し前ごろ、鶴見橋畔南側の市の排水ポンプ所が、川の方へ四五度傾いたまま瓦が落ちかけており、火がついていたので、付近に逃げて来ていた人々が、崩れた壁の赤土をかけて消しとめた。

鶴見橋付近の状況

鶴見橋は落ちておらず、どんどん避難者が比治山へむかって渡っていったが、橋床のへりから火が出ているのを見つけたので、逃げて来ていた者が協力し、砂をかけて消しとめ、危く焼失するところを防いだ。

鶴見橋の西詰のたもとの、向って右側のコンクリート敷きの上に、中学校の一年生ばかりの死体が三〇体ほどならんでいた。鶴見町の疎開作業隊らしく、ここまで逃げてきて死んだのであった。山陽中学の生徒らしかったが、砂が全裸体にまぶれていて、まるでキナ粉餅のようになっていた。中にはまだ呼吸のある子どももいた。死んでいるのがみな男の子どもばかりで、女の子はおらず、しかも大人が一人もいないのが更に痛ましく思われた。

その反対側の向って左では、平塚町内会の山崎副会長が、自分の工場からソーダ水二箱を持ち出して来ていて、誰れ彼れとなく避難者に飲ませて元気づけていた。また、橋のそばの雁木(がんぎ)のところ、駐在所の小池巡査部長夫妻が、じっとうずくまって乾メンボを喰べていたが、ひどく疲れていた。

柳橋が自然着火して、一時間余り後に焼け落ちたため、比治山橋・鶴見橋の方へ避難者がたくさん押し寄せ、死者も続出して凄惨をきわめたのであった。

鶴見橋を渡った比治山側の河岸にも、疎開作業の学徒が三〇人ばかり、死んだ者、重傷している者などが、ずらっと横たわって苦悶していた。笹栗弥に水をくれと言うので、拾ったビール瓶二本に入れて持ってゆく途中、近親者を探しにきたらしい若い男がいたので、引きかえして、また、次の水を持ってこようと思い、その若い男にビール瓶を渡し、学生に飲ますよう依頼したところ、自分が飲んでしまった。それを橋畔に立っていた憲兵がみていて憤激し、抜刀して「ブツ斬ってやろうか。」と大声でどなったという。

地区全焼

このような大混乱のうちに、竹屋地区はついに全焼したのである。火炎は、だいたい炸裂直後から九時ごろにかけて地区全体を呑みつくしてしまい、十時頃から十一時頃にかけて一切が燃え落ちてしまった。

不思議であったのは、鶴見町疎開跡に積んであった廃材が、周囲はみな火が消えてしまった午後四時ごろ急に燃え出したことであった。また、火が消えたあとの昼前ごろ、あちらこちらからドーン・ドーンと、ドラムカンの爆発するような音が、夕方まで続いた。正午ごろ、南の方角にあたる専売局の塩の倉庫の炎上するのが見られた。

雨

炸裂直後に雨は降らなかったが、夜八時ごろ、五分か一〇分間くらい、パラパラと降って来た。

食糧

夕がた、比治山西側登山口の多聞院に「仮総監府」が設置され、避難民の救済活動をはじめた。午後六時ごろ炊出しをするというので、鶴見橋畔の避難者を代表して笹栗弥が出向いた。仮総監府には軍人はおらず、警察官が数人いて、にぎりめしを配給していた。どこから来たのかトラックが積んで来たもので、鶴見橋西側として一五三人分の配給を受けた。その後、避難者が多くなったので、数回かよったが、終りには、にぎりめしがなくなり、乾パンだけになった。

なかには鶴見町の栄進堂(敷地一、〇〇〇坪)の築山の木に、建物疎開に出動した学徒が、持参の弁当をたくさん吊っていたのが、そのまま残っていたので、それを取って食べる者もいた。また、台所の流し台の下のバケツの中へ、戸棚の卵が飛んで落ちていたが、ちょうど良いゆで卵になっていたので食べた者もいた。

夕がた、二五、六歳の若い巡査が通りかかり橋畔で休んだ。その巡査が、「六人で山口町の東警察署の焼失を辛うじて防止したが、何十回か三階へ防火用水を運びあげた。」と言った。巡査はまったく疲れきった顔をしていたが、しばらく休んで宇品の方へ帰っていった。

諸現象

路傍の死体は、いずれも一様に両手を広げられるだけ広げて上にあげ、どちらか一方の脚を、膝で曲げたまま上げて硬直していた。男も女も仰向けになって死んでいた。また、焼け残った電柱の高いところに、女の頭髮が一束ぶらさがっていた。

川土手の舗装道路は燃えなかったが、裸足の足裏が熱くて、歩かれないほどであった。アルミニウム製の物やガラス類は溶解し、庭石や墓石はポロポロになっていた。なお、衣類などは、木綿は焼けにくく、人絹のシミーズなどはたやすく焼けた。黒いものは特に焼けた。

熱線によって、右手首が火傷した罹災者の一人は傷口が(く)の字型になっていた。こんな一寸した負傷だけで助かった人もわりかたいたが、その後、たいがいの人々が死んでいった。

なお、各町別の被害状況は、次のとおりである。

炸裂瞬間の被害

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
竹屋町	100	-	-	-	48	32	20
平塚町	100	-	-	-	49	28	23
葉研堀町	100	-	-	-	63	22	15
田中町	100	-	-	-	74	19	7
富士見町	100	-	-	-	63	22	15
昭和町	100	-	-	-	42	35	23
宝町	100	-	-	-	43	33	24
下流川町	100	-	-	-	77	10	13
三川町	100	-	-	-	89	8	3

踏みとどまった昭和町二五人

栗栖勉(談) (被爆地・昭和町六二九番地 当時三四歳・警防分団班長及び在郷軍人会参事)

空襲警報が発令されたので、六日午前一時ごろ、被服廠警備員であった私は、ただちに警防団の服装をして出勤したが、まもなく解除になったため、五時半ごろ帰宅して、「起こしてはいけないゾ。」と、家人に言って仮眠をとった。

八時ごろ、やっと目覚めて、茶の間にいき配給タバコをすった。半分くらいすったときであった。急に、青いような光線が眼に入ってきた。音はきかなかつたが「あらッ」と、疑心のおもむくまま裏の物置小屋に行ってみると、平素から火の気は何一つないのに、ぼーッと煙がのぼっていた。私はすぐ消しとめた。

「おかしいゾ」と、思いながら外の様子を見ようと、家の前をのぞいた。家の前は、鶴見町から平塚町へかけて実施された建物疎開作業の最終地点で、まだ倒された家そのまま地上に重なって広場になっていた。鶴見町付近には学徒報国隊や国民義勇隊などが、その跡片づけに来ていたが、昭和町一帯には六日の朝はまだ来ていなかった。ただ、タキギ拾いの人が幾人か散見されただけであったが、ふと見ると、その四、五人の婦人たちの一人が倒れていた。それが三戸のおばあさんで意識不明、その近くに三戸の娘さんが地べたに坐りこんでいて、「腰がたたない。」という。

私は傍にちょうどあった水槽の水を手にとり、おばあさんの口にそそぐと、すっと息をふきかえした。娘に叱りつけるように「しゃんとせんかッ。」と、私がいうと、反射的に娘さんがすっと立ちあがった。

私は町内をまわってみようと思い、一〇メートルばかり先の三村さんの家のところに来ると、玄関のなかの障子に火がついていて、三村のおばあさんが消していた。すぐ手伝って消しとめた。

そこから比治山橋の下手、現在の昭和町市営アパートの前の河岸緑地にあたる所に出て、付近の状況を見ると広島市街は見えるかぎり倒壊しており、あちらこちらに、ポッポッと煙が立っていた。

その帰り、兼吉さんの二歳の子供が、一尺ぐらいの縁のところ、壁土の下敷きになって泣いているのを見つけた。救い出そうとして、重い壁土に手こずっているところへ、父親が来て、一緒に力をあわせてやっと助け出した。そこへ、町内の娘さんが来て、「母が下敷きになっているから出してください。」と、頼んだが、私は、自分の隣組がみなやられていて行けず「近所の人にたのみなさい。」と言って帰らせた。あとで聞くとところによると、その母親は、結局救出されず、下敷きになったまま焼け死んだということである。

昭和町では、下敷きになったまま焼け死んだという人は四、五人ぐらいであったが、ある老夫婦の家では、老妻が下敷きになって助けてくれと叫ぶ声に、「出してやるゾ。」と、老人は言いながら逃げ出したまま帰って来ず、残された老妻は生きながら焼死したということである。

町民は、すごい突発事態にあわてふためいて、何らなすところなく、ただ倒壊した自家のまわりをウロウロしており、もう正常な意識を失っていた。不安のどん底に叩きおとされ、混乱状態にある人々にむかって、私は大声を出して、川土手の上に集よう指示した。

もう十一時ごろにたっていた。土手に集って来たのは二五人で、比較的軽傷者かあるいは奇跡的に無傷の元気な人々であった。重傷した者は、それぞれの家族に背負われたり、手をひかれたりして四散したのである。

それでも二五人のなかには、かなりの傷の人や火傷した人や、発狂状態になった人もあったので、元気な男が協力して、疎開跡の廃材を拾い集め、土手の上に二間×一間半のバラックを急造して収容した。

市中心部はすでに猛火につつまれていたが、調べてみると、風が南から西北へむかって吹いており、昭和町一帯はいわば風下にあたるから、延焼からまぬがれるだろうと考えられたので、私は土手に集った人々に対して、どこへも逃げないように指示した。

川は、ちょうど潮がひいていくところであったが、敵機が来襲するので、婦女子はそこにあった舟に乗せて、比治山橋の下へ隠れさせた。比治山橋は、南側の手すり全部川の中へ落ちただけで、通行には不自由しなかったから、市中から比治山公園へむけて逃げる避難者が、続々と渡っていった。みんな裸同然で、血まみれ埃まみれになっており、なかには力なくその場に行き倒れて絶命する人もたくさんいた。橋上にはいつ果てるともない死の行列が続いていたが、川べりには、わりと避難した人がいなかった。

そんなとき、私たちが建てた土手の急造バラックに憲兵が一人やって来て、「みんなただちに比治山へ逃げろ。」と命令した。だが私は頑としてはねつけた。「比治山の周囲は家が密集しているのではないが、そこが焼けはじめたらどうするのだ。われわれは、ここに火が燃えて来たら川に入る。なまじっか動かないほうが安全だ。」と反駁した。憲兵はすごい権幕で私にくっついてかかって来たが、市中全体の一大事のさなか、私にばかりかかわっておれないので、

ついにどこかへ去っていった。

しかし、午後二時ごろになって、ますますつのる火勢はついに昭和町一帯にも迫って来た。火はみるみるうちに広がったが、土手の付近一帯は疎開作業ですでに家屋が壊されていた関係からか、火災の熱さをさほどに感じなかったのも、逃げないですんだ。昭和町付近の倒壊家屋が完全に焼けてしまったのは、午後六時ごろであった。

このようだ状態のなかで、夕がた午後五時ごろ、呉市から救援の食糧が到着し、大正橋の交番所のところで配給があるということをきいた。私は元気な男子を五人ほど指名して、配給を受けに行かせようとしたが、町内会長の印鑑が必要だというので、ハタと困った。町内会長は、二五人が土手に集ったときには、すでに姿が見えなかったし、どこへ避難しているかということもわからなかったからである。二五人の町民は腹をたてたが、あとでいろいろ聞くとところによると、広島がこうなる前、指導的な地位にあって、厳格な命令を出していた責任者が、かえって我先きにと安全地帯へ逃げ出していたという事例はたくさんあったようである。

そうこうしているとき、比治山橋の西詩で、竹屋連合町内会副会長の門田さんが、血まみれになって通っているのに出あった。もしやと思い聞くと、印鑑を持っておられるとのこと、さっそく借りて、配給を受けとりに行かせた。申請人数は、二五人を倍にし、二ギリめし五〇箇余りをもらって来た。

私は、火が迫って来る前、自宅の倉庫から白木綿の反物を取り出して来ていたから、裸同然の避難者に三尺ずつに切ってくばっていたが、そのとき、学徒動員で観音町の三菱工場に出動していたという女生徒が、裸すがたで四、五人通りかかったので、さっそく木綿でからだを巻いてやり、残っていたにぎりめしをやって帰らせたこともあった。

その夜は、土手の小屋にみな泊った。意識不明のところを救出した三戸のおばあさんたちや幾人かの婦人は、橋下に舟をつなぎ、その中へ寝かせた。

男子は五、六人が交替で、不寝番に立ち、バラック小屋を守った。

翌七日の朝、食糧を確保するために、婦女子六、七人を指名して、広島文理科大学のグラウンドの畑に、サツマ芋を掘りにゆかせた。何度も運んで相当確保したあと、監視員に見つかってしかられたと云って婦人たちが帰って来た。

比治山橋の上には、死体をあまり見かけなかったが、川のなかには、青ぶくれした死体がたくさん浮いていた。それを、工兵隊の舟が来て、一隻に一〇体ぐらい結びつけて、川上の本隊の方へ持って帰った。その作業を一日中、何度も繰り返していた。

被爆後、三日目に矢賀町に避難していたという町内会長が、町内に帰って来た。昭和町の町民がずっと踏みとどまっているということを知ったのか知らないが、町民のなかには立腹して責任をただすような言葉も出たのであった。しかし、万事やむを得ないことであった。驚天動地の思いがけない大惨事の中でのことであり、一応むかえ入れた。

町内会長は、皆に「行くところがある人は、ここから出て行くよう。」にと、状況を説明して話したので、二五人のほとんどの者が、それぞれ縁故をたどって別れて行った。ただ、そのうちの幾人かが町内会長とともに、その後も踏みとどまって、倒れなかった大浜さんの洋館応接間に藁を敷き、罹災証明書の発行など町内の事務をとったのであった。

八、被爆後の混乱と応急処置

鶴見橋付近には、軍人も警防団も来ていなかったのも、比較的傷の浅いものが周囲の避難者の世話をした。

橋のたもとに逃げているとき、敵の戦闘機が四機か五機ぐらいの編隊で夕方までに四、五回来襲した。来るときはいつも宇品の方から飛来し、上空を旋回し、東北の方へ去っていった。そのたびに「隠れる、耳をふさげ。」と、大声で言ったが、もう逃げたり隠れたりする者はいなかった。幸い機銃掃射もなかった。

重傷者の収容

救援隊も医療班も、六日には来なかったようである。また、応急救護所も地区には設置されなかった。ただ午前十時ごろ、暁部隊が来て、トラックで重傷者をつぎつぎに運んでいった。宇品の広陵中学校へ運ぶということであったが、あとで行ってみると運んでいなかった。トラックは何度もかよって来たが、鶴見橋畔の学徒の死体も運んでいった。

負傷者で歩ける者は、ほとんど比治山へ行って軍隊の治療を受けたが、少々の傷は水道の水をさがして、自分で

傷ぐちを洗ってすませた。

焼野原

地区内で、内部は全焼したが、外郭だけでも焼け残った建物は、信用組合金庫・裁判所書庫・赤煉瓦建ての山陽商業学校校舎だけであって、その他は一望の焼野原と化し、鶴見橋のところから、西は己斐、南は宇品までひと目で見渡せた。

六日の夜

六日、夜になると、三川町・竹屋町・下流川町あたりには人影見えず、ところどころにまだ余燼がくすぶり、赤い火炎があがっていた。殊に、栄進堂のところの電柱の大きなトランスが、夜通し燃え続けているのが不気味であった。

なお、別れ別れになった肉親の安否や負傷した家族が気がかりなので、避難道路の焼けなかった防空壕に四、五〇人が寄りあつまって仮泊したが、ほとんど平塚町付近の住民であった。

仮町内会事務所開設

一方、郡部へ避難する者も多くいて、これの処理を行なうため、六日の夜、鶴見橋の西詰に仮町内会事務所を笹栗弥が設置した。疎開あとから焼け残りの畳を拾って来て、地べたに敷き、たる木を結びあわせて柱にし、唐紙を屋根にして、川土手の約一・五メートルある段落ちを利用し、応急にまにあわせた。

罹災証明書を書くにも一枚の紙すらないので、拾って来た唐紙を破り取って使用した。むろん鉛筆もペンもないので、堅いような消し炭を拾ってきて書いたが、すぐに無くなった。

比治山橋を渡って東側の、元師範学校事務所(現在・ピガー製菓会社のところ)に暁部隊将校が詰めていたが、その炊事班から五、六人の兵隊が、飯盒にぜんざいを入れて、仮設事務所に見舞いに来た。

その後、空襲で災害のあった場合に、仮事務所の設置場所として予定していた東平塚町の法華宗事務所本門仏立講の炊事場あとに、水道も出ていたので、ここへ仮事務所を移し、また、唐紙を拾って来て、消し炭で「東平塚町内会仮事務所」と書いた看板を立てた。

早速、多聞院の仮総監府へ、用紙と鉛筆を貰いに行くと、四、五人の新聞記者と服部副総監がおり、状況発表がおこなわれて、「大塚長官戦死、粟屋市長戦死云々」など一〇分ぐらいかかった。

用紙と鉛筆をたのんで、総監府用箋を三〇枚もらい、そこにいた巡査から削って小さくなった鉛筆を二、三本わけてもらった。

すぐ仮事務所で事務を再開すると、罹災者がわれもわれもと押しかけて来た。八日、九日になると、けんか腰になるほど書き続け、とうとう十日ごろに紙も鉛筆も使いはたしてしまった。この仮事務所で十二日の夕方まで、ともかく証明書の発行や救援物資の配給などを取扱ったのである。

最後の国民儀礼

八日午前七時ごろ、仮事務所の前の旧道路上に、平塚区域に残存して生活していた者が集った。毎日、町内会が琴平神社の境内で行なっていた「国民儀礼」をするためである。

四〇人ぐらいの人数が、あちこちの防空壕や残骸の陰から出て来たが、ほとんどが年長者で、若い者の顔は見えず、しかも女性が三分の二ぐらいであった。

どの顔もどの顔も疲労困憊しはてた顔で、着ている物もヨレヨレだし、からだ全体がひどく汚れていた。眼はくぼみ、蒼黒く乾いた皮膚は、全く異様であった。

世話役の笹栗弥が音頭をとり、一同は皇居にむかって遥拝した。

「ここに集っている人は、疎開先のない人や肉親の死骸の判らない人などで、やむを得ず踏みとどまっていると思う。」と、激励するつもりで挨拶をすると、一人が突然大声で泣きだした。それを合図のように、全部の者が、ワッと泣いた。司会者も続く言葉が出ず「思いきり泣きましょう。」と言っただけで泣いた。しばらくして、「みなさん。泣いていたのでは戦争に勝てません。敗けたら、これよりもっとみじめな姿になります。親や子の死にあっても、今日、これきりで、今後は泣きませぬ。」と、やっとしめくくりを言って別れた。

なお、ここに集った四〇人は、ほとんど原爆症で死に、現在(昭和四十一年)笹栗弥と広中静の二人が生きているだけである。

防空本部設置

多聞院の仮総監府は、九日までで閉鎖された。十日から山口町の東警察署に設置された「防空本部」で、にぎり

めしや、乾パン・ワラ草履などの配給を受けた。十三日以降は市役所で配給を受けることになった。

死体の収容・焼却

死体の収容は、七日昼ごろ、すでに暁部隊が来て、氏名不詳者のみを、避難道路の中心より南側の地域で約三〇体ほど担架で集め、八日は、同道路の中心より北側を処理し、比治山の鶴見橋突き当りの谷間で焼いた。その遺骨がどう処理されたかは判っていない。また、栄進堂の大きな築山の南側の陰でも、死体を焼いていた。兵隊は割木をどこからか持って来て、それに石油をかけ、一度に二、三〇体ずつ重ねて、何度も焼いたが、だいたい九月初め頃まで茶毘にふす煙が絶えなかった。

死体の中には、半焼のもあり、氏名の解るのは、年齢や名前を書いた荷札を頭の繻帯などに兵隊がいちいちつけたが、みな服がボロボロになっていたのので衣類に縫いつけていた標示書きは読み取れないのが多かった。

肉親や縁故者のある死体は、個々に収容されて、その住居跡で焼却をおこなったから、夜遅くまで野火が焦土の中の、そこらじゅうに上がっていた。

町内会再開

八月十三日から平塚町では、正式な町内会長を決めることになり、ただ一人、印鑑を持っていた広中達省が役所の手続きなどにちょうど良いということで決定した。下流川町は、十二日ごろから常林寺前の交番所跡で、警防団消防部長の宮本行雄が会長になって事務を執った。この頃はまだ、三川町も薬研堀町も鶴見町も町内会はなかった。

二十一年四月ごろ、地区全体の連合町内会長として安田寿夫を選出し、事務所を西平塚町の自宅バラック小屋に置いた。五、六月ごろになって、三川町・薬研堀町・田中町を併せて末広霞が町内会長に就任し、少し遅れて竹屋町は山崎理髪店主、鶴見町は門重才助が就任し、昭和町は戦前からの町内会長横山喜一が再任され、それぞれ町内会を再開した。

九、被爆後の生活状況

炸裂後、郡部へ避難した者も多かったが、現地にとどまって焼け残りの防空壕暮らしを続けた者もかなりあった。炊出しのにぎり飯や配給物資のあるときに、あちらこちらの防空壕から出てきて顔をあわせ、「あっ、生きていたのか。」と、幸運をよるこびあったりした。

六日から九日までは、軍隊放出の乾パンがおもで、時々のにぎり飯の配給があった。

市役所が配給を扱うようになって、乾パン・米・野菜・魚など少量ずつながら配給されるようになったが、とてもそれだけではならず、生きていけるものではなかった。

食糧係をおく

そこで町(このごろは漠然とした周囲の居住者の集合体)の食糧係を決めて買出しをおこなったところもあった。しかし、米や麦の入手はむづかしく、食べにくい可部のヌカだんごを買って来て食べた。買出しの食糧係が、統制違反で警察につかまり、せっかくの食糧を没収されたので、待っていた者みんな空腹をかかえて過ごさねばならなかったこともあり、没収した食糧は警察官らが分けて食うのだと、憤憑をぶちまける者もいた。

八月末ごろの居住者

八月末ごろの居住者状況は、平塚町が一番多く六〇世帯ぐらいで、つぎに昭和町が一五世帯ぐらい、三川町・下流川町・薬研堀町・田中町を併せて約一〇世帯ばかりで、その他の鶴見町・富士見町・宝町あたりは、人がほとんど住んでいないようであった。

復帰者は、焼け残りの柱やたるき、焼トタンの使えそうなのを拾ってきて、焼け釘を叩きつけ、小さなバラックを建てた。

その建てる場所は、思い思いにしないで、公有の疎開跡地に建てるよう町の世話役が指導した町内もあった。理由は、焼跡の瓦の上にはまだ放射能が残存している怖れが多分にあると思ったからである。

被害のあまりなかった地区の某市会議員が、市役所から新品の釘樽をたくさん車に積んで持ち帰ったのを罹災者の一人が見たので、早速、市役所配給課にいき、「焼跡の居住者にこそ配給されたい。」と、強硬に談判したが、そんな釘はないと言ってことわられたというようなこともあった。

ハエ・シラミの発生

被爆後、しばらくすると、ハエがむらがって発生した。皮膚を刺すハエで刺されると痛かった。その大群が間がな隙がなまつわりついて離れず、食事のとき、食べるものと一緒に口中にはいるという状態であった。駆除する方法もなく、てんでに追っばらったが、追われて逃げるようなハエではなかった。

しかし、暗いところにはいなくて、防空壕内には入ってこなかった。バラックをよう建てない老人や病人を壕にいられたが、これらはハエに刺されることはなかった。また、シラミも多数発生した。特に女性で頭髮にシラミをわかしていない者はなかった。

食糧の入手

食糧は市役所からの配給だけでは不足なので、郡部へ買出しに行ったが、建物疎開跡地に耕作されていた芋やカボチャが焼け残っていて、それをてんで取って食べた。カボチャはまだ早く、握りこぶしぐらいの未熟なままを炊き、米の代用にした。炊くときに、水道が出ない場所では、満潮時に川水を汲んできて、それで炊くと塩気がついた。芋もまだ太ってはいなくて、細い筋ばかりのようなイモを、取ってきて食べた。地面の葉っぱは焼けていたが、土を掘ると、芋は焼けていないで出てきた。焼けていない葉っぱは、茎の皮をむいて一緒に炊いた。また、防空壕に貯蔵してある食物をさがし求めて、焼跡をほつつき歩く者も多くいた。

近郊から大八車をひいてきて、焼跡に転がっている鉄の風呂釜や瓦その他目ぼしい物を掻き集めて、たくさん持って帰って行ったが、罹災者らはみんな食べることで精いっぱいであったから、ただ傍観していた。

平塚町から罹災者の代表者が野菜を買いに大河へ行ったとき、女が畑で野菜を採っていたので、事情を言って分けてもらおうとしたが、「金をもろうても、爆弾が落ちてこうなるとは、金があっても何になる？」と言って大根の一本もくれなかった。代表者はみんなが待っている町へ、から車で帰りながら泣いたという。物々交換なら入手できるという人もあったが、その物品が罹災者にはなかった。罹災者が持っているものといえば、傷つきながらも、辛うじて助かった一つの生命と、僅かな金だけであった。

暗い夜

防空壕やバラック生活で困ったのは、夜の明かりがないことであった。傾いたままで焼けなかった鶴見橋畔の六〇馬力のポンプ所に二個のトランスがあったので、その中の油をヤカンに汲み取り、ヤカンの口にボロ布をつきさして芯代りとして、灯をつけた。このトランスの油を、平塚町付近の罹災者はみんな翌年まで使って夜をしのいだ。ロウソクが、市役所から二、三回配給されたが到底足りもどうもしなかった。二十一年四、五月ごろ、焼跡の裸線を拾い集めて、個々に電灯をつけた。

終戦

八月十四日、天皇陛下のラジオ放送があるらしいと、焼跡に伝わってきたので、罹災者のある者は、十五日に広島駅まで歩いてラジオを聞きに行った。それは、「忍び難きを忍び、堪え難きを堪え云々」と、日本が無条件降伏をした放送であった。その玉音放送は泣いておられるような声であったが、聴いている者も泣いた。「戦争は終わった。負けたんだ。ソ連が寝返ったんだ。」と、口々に言い、張り切っていた全身の力が、一度に抜けた。がっかりしてその場を去ると、深い空虚におそわれた。

暴風雨の襲来

九月十七日の夕がたから風をともなった土砂降りの雨となった。暴風雨は夜中の十二時まで焦土一帯をおそって吹きに吹き、降りに降りまくった。十二時過ぎると雨がパツタリと止んで、風速三、四〇メートルの暴風が襲ってきた。風は西から東に変わって更に烈しくなった。バラックのトタン屋根が、鋭い悲鳴のように、キキキキと叫び続けた。トタンが煽られて剥げそうになったので、風の吹きまくる中を屋板にあがり、重石でおさえたが危険きわまりない。浸水はますます深くなってきて、平塚の川土手の石垣の下段を利用して一〇世帯のバラックにまで水が上がって、水深四〇センチメートルぐらいにもなった。浸水と暴風で、罹災者らは身動きできず、石垣やコンクリート壁にヤモリのようにへばりついたまま朝をむかえた。朝方、風が一回転して西風になった。そして、パツタリと吹き止んだ。

夜が明けてみると、焦土が一面水没していた。川土手から見えたのは、栄進堂の築山跡と、山陽商業学校の校舎・第一信用組合の倉庫・裁判所書庫・富国ビル・小町の中国配電会社ビルの残骸だけであった。

仮住居にしていた防空壕はみな潰れた。それに引きかえ、バラックの掘立小屋が、風の中で倒れないよう材木で突っ張ったり、電線で結んだりして守ったとはいうものの、不思議なくらい倒れないで立っていた。

十月八日の阿久根台風の時も、平塚の川土手の下の段が一〇センチぐらい浸水したが、前の枕崎台風ほどではなかった。しかし流川町方面まで水没した。川は増水し、濁流が逆巻き流れ、上流から太い材木や樹木がどんどん押し流されてきて、鶴見橋があやうくなった。原子爆弾にも守りとおした橋を落すまいと、付近の者が協力して、橋げたに引っかかりそうになる浮流物を必死で取りのぞき、流失からまぬがれることができた。

この暴風雨によって、焦土一面に堆積していた汚物が、まるで洗滌したように一掃された。そして、急激に青みがかり、雑草が丈高く繁茂した。殊に鉄道草がたくましく、秋晴れのもと、ひろびろと風に靡いていた。その中をトボトボと、復員兵がわが家のあとを探すのか、往きつ戻りつしている風景が、日増しに多くなった。破壊された駅に降り立った復員兵の一人が、荒廃した焦土を眺めて落胆のあまり、短刀で自決したという話を聞いたのもこの頃であった。また、復員くずれといわれる若い男が、夜昼なく出沒した。ものを尋ねるふうをして近づき、いきなり目つぶしをし、持っている物品を奪う辻強盗が、鶴見橋の上や平塚町の大ガンキの土手などで発生した。

あるいは、人のいないバラックに侵入し、置いてあった古服を盗っていった泥棒もいた。警察力は無く治安は乱れる一方であった。

秋十一月ごろ、県庁あとが県病院あとへ復員兵収容所をつくる計画があったが、どうしたわけか、これも実現しないで終わった。

闇市利用

広島駅前のできた闇市では、色々な物が売買されていたので、これを利用する者も多かった。丸裸の罹災者ながら、妙なもので現金はみんな幾らかずつ持ってあり、代用食のダンゴの闇買いに銭がないという人はいなかった。

復帰者

昭和二十一年の二、三月ごろから、郡部へ疎開していた人々が、ポツリポツリ復帰しはじめた。

これらの人は、かつて住んでいた家の跡を片づけて、バラックを建てたが、瓦礫の中から永く使っていた家具の端くれや、失ってはならなかった調度品などが、焼けただれ変形して出てくるたびに、拾いあげてはそっと、片隅にならべた。その一つ一つは、もはや取返すことのできないものであったが、被爆者らは何時までも諦め切れないもののように、拾う指先をふるわせた。人々は、にわとり小屋のようなバラックの周囲にたどたどしい手つきで菜園をつくった。市役所や青年団が配給したキビやトウモロコシ・カボチャの苗・イモづるなどを植えて、食糧の補給をはかり、どうしても生き抜こうとした。

経済活動

二十二年ごろになって、復帰者もようやくふえて来て、バラックの店舗もできるようになった。竹屋地区では最初に酒を売る店ができた。それに続いて調味料をあきなう店ができ、米・肉の闇売り人も横行した。やっと店らしい店ができたのは、二十二年も半ばを過ぎてからであった。しかし、衣類などの店はまだなく、これはもっぱら駅前の闇市を利用した。

竹屋地区の復興は、隣接の幟町地区よりも幾らか遅れていたが、経済活動も次第に伸長して、このごろからやっと復興路線を歩みはじめたのであった。

復興の家第一号

原熊太郎(北陽)(談) (当時・中国軍管区司令部常勤報道員・愛国少年団副団長)

親もとを離れて県下各地の農村に、集団疎開をしている国民学校児童の、激励と慰安をおこなう放送時間を設定することになり、当時、中国軍管区司令部報道員であった私は、八月六日の朝、午前六時四十五分の汽車で小月飛行場に向うことにしていた。

小月飛行場には、少年航空兵出身の「荒鷲」が多数入隊していたし、隊長樫出大尉そのものが同じく少年航空兵第一期の出身で、私と個人的に以前から親しくしていたから、小月に行けば何か得られて、立派な原稿ができるに違いないと思われたからである。

七日までに原稿を仕上げ、八日に検閲をおこない、九日にテストして、十日に放送をするという計画を、軍管区司令部の報道部主任山本中尉(中国新聞社の長男)が私に参謀長からの命令として伝えた。

私は、国民服に軍靴・巻脚絆、それに鉄兜を背にかけ、陸軍報道班員の腕章をつけ、カメラを持って六日の早朝、富士見町の自宅(修道会館幼稚園建物)を出た。

広島駅では切符制限をしていて、六時四十五分発のは無いから、九時の汽車に乗るように言ったが、私は陸軍報道班員としての公用であると主張して、改札口を突破、強引に発車まぎわのその汽車に飛びのった。

汽車が大竹駅近くになったとき、何か窓外にピカリと光った。音は聞えなかった。

大竹駅では、駅長が不安げな蒼白な顔色をして、広島市の方を仰ぎみながら、ホームに立っていた。

原子爆弾の炸裂など思いつく者はなく、汽車は出発した。

小月に着いた私は、すぐ樫出隊長の自宅を訪ねたが、すでに出ていたあと、電話で隊に連絡すると、明日がちょうど三か月に一度の休暇の日だから、夜まで待つようにとの事で、私は一泊することにした。

放送原稿は「墜ちる。墜ちる。B29、火ダルマになって墜ちる。」という題で、徹夜の作業を続け、終わったのは三時ごろであった。

翌朝六時ごろ、物音に目がさめると、樫出隊長が台所で湯を沸かしており、赤ン坊が生まれるという。産婆も来てめでたく女児誕生である。日の出の頃生まれたので日出子と名づけられた。

原稿を持って小月駅に出てみると、「広島は全滅です。汽車もありません。」と、駅長がいう。

私は、広島の師団司令部で、米軍では近くすばらしい威力の新兵器ができるのだということをきいたのを思い出した。それが来たのだなと直感された。

午後四時ごろ、下関駅から小月に電話があり、軍用の救援列車が通過するというので、陸軍報道班員の私を、ここで乗せるようすぐ交渉して成功した。

夕方七時ごろ、広島市を目前にする佐伯郡五日市駅まで乗り入れた。ここからは徒歩で市内に向かわねばならなかった。

一步一步、歩いていく程に惨禍は大きくなった。

この頃、庚午に一戸の家を借りて、家族や家財の疎開に備えていたので、そこへ立ち寄ったが、妻も娘も来ていなかった。

不安が急につのって来た。富士見町の家でやられたかと思うと、いたたまれなかった。

庚午橋を渡り、死骸の累々と横たわる相生橋に出て、まず師団司令部へ向ったが、そこには何もなかった。広島城も吹っこんでいた。ただまっ赤な火明りが夜のとばりを透かして見えるだけであった。

足もとに見る死骸のなかには、まだ生きていて、ピクピク動いている者もあった。

残火や残骸をさけながら歩かれるところを歩いて富士見町まで行ったが、そこも吹っこんでいた。私はやむなく庚午の家に引返した。

翌八日の朝、再び司令部跡に行き、全滅を確認してから、富士見町の自宅跡をたずねた。

私は修道会館幼稚園跡の防空壕のなかから、焼失をまぬがれた愛国少年団の天幕三張りを引き出して、現在百メートル道路になっている建物疎開跡地に建て、近辺の負傷者を八人ほど収容した。

周辺にたくさん死骸が転っていたので、焼トタンをかぶせ、人目につかないようにしておいた。軍隊が来て、やたらに持っていかれると、後日縁故者が歎くことになると思ったからである。

天幕に収容した八人は、一か月のうちに全員死亡したが、生きているうちにその縁故者をきいておいたので、すべて連絡が取れて引渡すことができた。

八人のうち一人は、「このご恩は忘れません。私はもう助かりません。」という遺書を残して、天幕の中で首つり自殺した。

私は、隣近所の死体をつぎつぎに焼いたが、遺骨は三川町の円隆寺の防空壕内に、新しい骨つぼが二〇数個あったのを拾って来て納骨した。

一家八人が全滅した知合いもあって、私は戦争の残忍性をそくそくと胸にかみしめた。

なお、妻と娘は、倒壊した家屋から這い出して、宇品の熊本さん(香川軍二さんの娘むこの家)の家に避難し、助かっていたが、同僚の報道班員二七人のうち、子ども番組を作るために外出した私一人が生き残っただけであった。まったく子どもに救われたと言えよう。

妻や娘が天幕に帰って来てからは、周囲の瓦礫を片づけて、イモや小麦をうえ、市役所の指導に従って菜園を開墾した。「沙漠の豪農」と、ある新聞記者が記事にしたのは、この頃のことである。

十二月十七日、観音三菱工場の防空壕を壊すことになりその廃材を利用し、生き残っていた大工さんの手を借りて、原子沙漠では最初の本建築の家を建てた。

七十何年間は不毛の地だと言われたが、私はどうしても、ここから復興しなければならないと固く信じていた。

荒涼とした厳冬の焼野原のまっただ中に、赤く焼けた瓦をふいた復興第一歩の、その家を仰ぎながら、私はじつと明日へ伸びる希望に充たされていたのであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

大手町五丁目、千田町一丁目 二丁目 三丁目、東千田町一丁目 二丁目、南千田東町、南千田西町、南竹屋町、平野町

町内会別要目

この地区の範囲は、大手町[おおてまち]八丁目・同九丁目・千田町[せんだまち]一丁目・同二丁目・同三丁目・東千田町[ひがしせんだまち]・南千田町[みなみせんだまち]・南竹屋町[みなみたけやちょう]・平野町[ひらのまち]とし、爆心地からの至近距離は、大手町八丁目万代橋東詰で約一キロメートル、もっとも遠い地点は、南千田町南端で約二・七キロメートルである。

千田の地名は、明治年代宇品築港を幾多の苦難を乗り越えて実施した県令千田貞暁の姓に由来し、西側を元安川、東側を京橋川にはさまれた市域の南端一帯を占める地区である。

市の中心繁華街から離れていて、経済的活気というものはあまり見られない。地区のほぼ中央を通る電車道路に面した両側に、種々の商店がなっているほかは、ほとんど閑静な住宅街を形成し、なかんずく学生専用の下宿屋が多くあったが、まさに、広島市における文教地区ともいべき地区であった。

市の重要な教育施設の多くが、ここに集中的に設置され、広島文理科大学・広島高等師範学校・広島工業専門学校(いずれも現在は国立広島大学に改称または併合されている)をはじめ、古い伝統を誇る中学校・高等女学校・国民学校など合計一五校もあった。

また、市内電車およびバスを運営する広島電鉄株式会社・広島地方貯金局・日本赤十字社広島病院(広島赤十字病院)などの主要施設もあった関係上、防衛態勢もきびしく、防空・防火には神経過敏なほど種々の対策を実施していた。

しかし、原子爆弾により、千田町三丁目と南千田町が一部分の焼失にとどまったほか、他は全焼という大きな被害を受けた。

被爆直前の地区内建物総数は約三、〇〇〇戸から三、三〇〇戸、世帯数三、〇〇〇から三、四〇〇世帯、人口一〇、〇〇〇人から一一、〇〇〇人ぐらいであって、各町別に見れば、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
南千田町	318	308	1,112	中川亀三
東千田町	290	286	940	加登鎮男
千田町一丁目	451	500	1,600	西田齊
千田町二丁目	387	392	1,397	花咲信一
千田町三丁目北組	91	103	315	宮本福松
千田町三丁目西組	158	160	500	藤田理平
千田町三丁目南組	180	185	783	池田善雄
平野町	265	265	965	鶴田常吉
南竹屋町上	365	365	1,220	松本新蔵
南竹屋町下	220	200	900	近藤春和
大手町八丁目	150	170	630	(東)藤田哲二、(北)瀬川鉄丸、(南)三原彦三郎
大手町九丁目東	80	80	300	大沼亀太郎
大手町九丁目南	112	148	415	岡本好兵衛
大手町九丁目西	271	280	890	青木梅太郎

地区内に所在した主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広島文理科大学	東千田町	藤本木工所	南千田町
広島高等師範学校	東千田町(広島文理科大学内)	広島電気株式会社	南千田町
広島高等師範附属中学校	東千田町(広島文理科大学内)	火力発電所(休業中)	南千田町
広島高等師範附属国民学校	東千田町(広島文理科大学内)	火力発電所変電所	南千田町

市立千田国民学校	東千田町(広島文理科大学内)	合資会社 津石製作所	南千田町
市立千田青年学校	東千田町(千田国民学校内)	株式会社 藤田組	千田町三丁目
市立大手町国民学校	大手町八丁目	竜文製氷株式会社	千田町三丁目
市立大手町青年学校	東千田町(大手町国民学校内)	旭製材株式会社	千田町三丁目
広島工業専門学校	千田町三丁目	広島電鉄株式会社	千田町三丁目
県立広島工業学校	千田町三丁目	広島電鉄株式会社車庫	千田町三丁目
県立広島工業修学校	千田町三丁目(県立広島工業学校内)	トヨタ自動車株式会社	千田町二丁目
市立工業専修学校	千田町三丁目(広島高等工業学校内)	朝日陶器株式会社(休業中)	千田町二丁目
広島女子高等師範学校 附属山中高等女学校	千田町二丁目	広島地方貯金局	千田町二丁目
私立修道中学校	南千田町	徴用工宿舎	千田町二丁目
私立進徳高等女学校	南竹屋町	宇品警防団 千田分団詰所	千田町三丁目
広島文理科大学 尚志館	東千田町	日本赤十字社広島病院	千田町二丁目
広島文理科大学 専心寮 (高等師範学を含む)	平野町	広島市設 公共市場	大手町八丁目
広島高等学校寄宿舎	千田町三丁目	大手町 公共市場	大手町九丁目
広島工業専門学校寄宿舎	東千田町	株式会社 広島魚市	大手町九丁目
修道中学校寄宿舎	南千田町	関西病院	東千田町
帝国人造絹糸株式会社広島工場	南千田町	広鉄用品工業株式会社	平野町
		中国ゴム工業	平野町

二、疎開状況

人員疎開

人員疎開は確実な数を知ることはできないが、町内会などの勧奨によって、婦人子どもは相当疎開していたようである。仕事のつごうや配給関係から、町籍簿には家族全員が記載されていて、夜間だけは家の留守番的な役目で家族のうち一人か二人が残り、他は近郊の縁故先に行って寝泊りする者が多かった。従って、夜間は人の住んでいない町ようになり、ガランとして寂しく、暗いばかりであった。

物資疎開

物資の疎開も、運送の不自由な中をいろいろと考えて、それぞれが大部分を疎開していた。不燃物は、地中に埋没したり、完備した防空壕のある者は、そこへ収納した者もいた。

学童疎開

学童疎開は、千田国民学校の三年生以上が集団疎開した。疎開先は、山県郡大朝町大朝・大塚・田原で、教師六人と学童一三四人、同郡新庄村(現在大朝町に合併)へ教師四人と学童一一人、同郡河迫村(現在千代田町に合併)へ教師二人と学童四〇人、また同郡蔵迫村(現在千代田町に合併)に教師二人と学童五二人、以上合計教師一四人、学童三四五人が、二十年四月に疎開を実施し、疎開先の寺院とか民家へ分散して収容された。

このほか、縁故疎開した学童が約五〇〇人いた。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年、千田学区警防団を結成し、終戦時には団員一六〇人がいた。団員は、防空・防火・救護などの訓練にはげみ、進んで各町内の防火資材設備の指導にあたった。

また、警防団幹部が防空学校(被爆前県庁の南側にあった武徳殿の裏)に召集され、精神教育・軍事教練・命令伝達・灯火管制・救護法などの訓練を受け、各隣組単位に、その訓練演習をおこなった。

国民義勇隊

昭和二十年六月、国民義勇隊を創設し、千田学区を大隊に、各町内会を中隊に、各隣組を小隊に組織し、各世帯員が隊員となった。

防衛態勢

防空対策としては、各町内会隣組単位に当番を置き、一日を四交替制にして、その任についた。当番は警備とか、警報の伝達をおこない、警防団員は、灯火管制用具の適否、員数の調査点検をおこなって万全を期した。

防火態勢については、各家庭・各隣組・各町が、それぞれの単位ごとに、当局の指示どおりの設備をおこなった。

なお、水源池が破壊される憂いありとの情報があったので、避難用竹製胴巻を各戸に配給した。このためか、炸

裂による火災発生の際、各所から竹のはじける音がきこえた。

四、避難経路及び避難先

非常事態の発生に対処して、千田地区は佐伯郡五日市町・廿日市町方面に避難するようあらかじめ指定していた。

現在の鷹野橋 - 明治橋 - 観音橋を渡って、ここから二筋に分かれ、一方は西大橋 - 旭橋(現在は廃橋、約二八〇メートル下流に新旭橋を架設)を経るのと、もう一方は、庚午大橋を経て国道二号線(通称観光道路)に出て、廿日市町方面に至る。ただし、橋梁が破損して渡れないときは、干潮時になれば川を横断し、さもなければ遠廻りをしてでも避難するよう指示されていた。なお、舟の便のある者は舟を利用することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
憲兵隊屯所	千田町三丁目	現在・林興一郎宅
兵種不明	平野町	
第二〇五特設警備工兵隊本部	平野町	山本中国新聞社社長宅
暁部隊通信隊	千田国民学校	約四〇〇人位の兵がいた。
第二〇五特設警備工兵隊兵舎	東千田町	高等師範学校内

(註・広島文理科大学内に、呉の海軍工廠砲煩実験部理化学班の一部が疎開していた。)

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

各町内会は、警防団との連絡を密にする必要上、防空屯所を事務所にしていたので、警報発令と同時に各々の受持ち当番詰所に集合し、それぞれの区域の灯火管制状況を巡視し、少しでも光線の洩れる家は大声で注意をうながした。

警防団は、常々地区内を巡察し、防衛施設や備品などの点検監視をおこたらなかった。

五日夜の防空壕への待避も、これまでかってなかった長時間にわたる警報発令であったし、これまで、呉市がひどく爆撃されていたので、引続き広島市が空襲されるという情報があって、みんな神経をとがらせて、平素の訓練どおり確実に待避していた。中には乳児と共に壕内で一夜を明かした者もあった。

六日朝

警報が解除になると、みんなはまず一安心したが、睡眠不足と精神的疲労がはなはだしく、それに過労が加わってクタクタになっていた。七時九分の警報発令、ついで解除も知らず、ラジオが「敵機が浜田方面から日本海方面へ行った。」というので「何のことだろう。」といぶかりながら朝食をとっていた者もあった。

また、平野町では早くも、食糧配給があって、配給所の前に多くの町民が長い行列をつくっていたし、南竹屋町では、下組は町内の建物疎開作業中であり、上組もおなじように町内の建物疎開家屋の解体作業について打合せをしている最中であった。これらの人々が炸裂によって集団的に被爆し、多くの犠牲者が出たのであった。

侵入の敵機

南竹屋町下組の建物疎開出動は、町内の間引き疎開作業で、朝の涼しいうちに済ませようという計画で、香川軍二・土岡喜代一などが町民三〇人ばかりを指揮して、現在竹屋町の中国電力東営業所の東側にあった理髪店の解体に取りかかっていた。前日壁をおとしていたので、柱に縄をかけてみんなが、エソヤコラと引っ張っているときに、突然炸裂した。敵機の来襲には誰も気づかなかったという。

しかし、ある被爆者は、市の東方上空から三機侵入、一機が急降下し、何かを落して急上昇しながら、西方に飛び去るのを目撃した。

また、他の目撃者は、市の東南上空から、銀色に見える一機が、市の上空に飛来し、北の安佐郡方面へ飛び去ったというのもあり、もう一人は、午前八時十分ごろ、市の西方上空(佐伯郡八幡村西方、極楽寺山あたり)の高度から銀色に輝く大型機一機が、機首を下げ、東北に向かって急降下し、西練兵場上空を経て、牛田町神田山方面に去ったのを見、引続き同型機二機が、同様に西方上空にあらわれ、同じコースで牛田町神田山方面に姿を没したが、西練兵場上空あたりで、青・黄・赤を混ぜた異様な閃光があり、その一瞬暗黒になったという。さらにある人は、市の西方の上空高く、銀翼の大型機が、後尾に長くて白い飛行雲をつけ、市の中央上空に侵入して東北に去ったのを目撃したともいう。

千田地区内では、大手町八丁目・同九丁目・千田町二丁目・同三丁目北の各町内会においても建物疎開を実施中であったが、関係者が死亡しているため、資料もなく詳細は不明である。前記町内会以外では、各自の町内での建

物疎開現場に出動していた。

建物疎開状況

なお、当日動員指令による出動と、地区内での建物疎開実施概況は、つぎのとおりである。

町内会名	動員指令によって町内会より疎開作業への出動について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数(人)	出勤先地名	建物疎開計画予定概数(戸)	被爆前日までの実施済み概数(戸)	当日朝、実施中の概数(戸)	他地区から実施のため集合した人員概数(戸)
南千田町	60	同町内二か所	8	上記戸数を前日までに解体していた	前日までに解体した残りを解体中	なし
東千田町	20	同町内	20	なし	なし	なし
千田町一丁目	80	同町日赤病院南	12	6	6	不明
千田町二丁目	不明		不明	不明	(実施中)不明	
千田町三丁目北	不明		不明	不明	(実施中)不明	
千田町三丁目西	60	同町内	11	7	4	不明
千田町三丁目南	70	同町内元関西病院院長宅北側	10	6	4	不明
平野町	なし		なし	なし	なし	不明
富士見町南部	50	同町内	不明	3	5	なし
南竹屋町	60	南竹屋町	不明	不明	不明	不明
大手町八丁目	不明		不明	不明	不明	(実施中)不明
大手町九丁目東	不明	同町内	不明	不明	不明	不明
大手町南	不明		不明	不明	不明	(実施中)不明
大手町西	不明		不明	不明	不明	(実施中)不明

七、被爆の惨状

凄い衝撃

千田町付近では、炸裂の閃光と同時に、建物が浮動し、地震とは違った揺れかたであった。急に何か胸を圧迫するような重苦しい感じに襲われた瞬間、暗黒になった。このような衝撃感、爆心地点より離れていた者が、却って明瞭に感受できたのではないかと、宮本一男(南千田町)が提出資料に記している。

炸裂のときの轟音は、この地区の被爆者の言によれば、ほとんど聞かなかったというが、数万戸の家が一瞬にして、破壊、倒壊したので、その音響が、炸裂音と交錯して、はっきり聴くことができなかつたともいう。

炸裂後、暗黒から次第に明るさを取りもどした頃から、助けを求める声や肉親をさがして相呼ぶ声、下敷きになった悲鳴のような声が四方八方からあがった。

また、南竹屋町で、町内の間引き疎開作業に出動していた土岡喜代一の体験によれば、ちょうど作業中、稲妻のような閃光をうけた瞬間、フットボールを強くぶっつけられたような感じの強い爆風で、身体が一〇メートルあまり先へ吹きとばされていた。道路上であったが、また異様な、はじめと同じ閃光だが、やや弱い二度目の光線を受感した。痛さも痒さも感じない光線であった。飛ばされた体を、まるで夕だちのときのような暗さがつつんだが、煙の暗さではなかつたという。閃光について、ある人は豆つぶぐらいの白光が無数に飛んで来たともいう。

たちまち火災が発生したが、当時、疎開作業で解体した家屋の天井や土壁のコマ工竹などを、各自がその場で焼いて処分していたので、その上に家が倒れて、火元になったのも多い。

炸裂下の避難

炸裂下、屋内にいた軽傷者とか無傷の者は、一応屋外に出て川の中の砂洲とか、堤防上や堤防のノリ下などに避難した。しかし、屋内にいた者でも、窓や障子、フスマなど開放していた者は、閃光を受けてほとんど火傷した。

重傷者は救護所をたずねて行く者もあり、また、家族らと郊外の縁故先へ脱出する者もたくさんいた。

田中隆雄の体験によれば、平野町広鉄用品工業会社事務所で、炸裂にあったが、黄燐焼夷弾のようなものが、御幸橋と角倉家との中間ぐらいのところ落ちて炎と化したように思った。同時にまっ暗になり、気がついたときには、靴がなくなり、事務机の下にはまりこんでいた。見ると足に直径一センチメートルぐらいの穴があいていたが、血も出ていなかった。

閃光は直接には見なかつたが、黄燐弾の炎上と思ったときも音はなかつた。しばらくして音がした。一瞬気を失った。二時間ぐらいあと、現場を去るとき目撃したことであるが、目の玉の飛びだした人が「助けてくれ」と言い

ながら、手さぐりするようにして路上にたたずんでいた。また、裸で倒れた婦人の腹から嬰兒が飛び出していた。さらに五歳ぐらいの子どもが、全身火ぶくれとなり、親をさがしていたし、聞き覚えのある声で、倒壊家屋の下から助けを求めていたが、火に包囲されてどうすることもできなかったという。

これら多くの被爆者は、皆助からなかったと思われるが、下敷きになりながら体をどうにか動かして脱出できた者や、少しでも歩くことのできる者などは、ほとんど裸で、とにかく火の気の少ない方向をたどって逃げたのである。

千田国民学校内に駐屯していた暁部隊(暁第一六八一〇部隊)特別幹部候補生通信隊約四〇〇人のうち、どうにか動ける者は、隊伍を組み、互いにもちつもたれつして、平野町を経て比治山の方へ避難していったが、みな瀕死の重傷であった。

東側と西側を川にはさまれている千田地区では、東方には比治山橋・御幸橋、西方には明治橋・南大橋を渡って避難すること以外に方法はなかった。南は海に面し、北(市中心部)は、猛烈な火災が発生していたから、逃げまどう避難民が道路上に溢れて混乱をひきおこした。道路はまた、火災にあぶられて灼けつくように熱く、その上、倒壊・飛散した物の残骸で通行もままならなかった。また、即死者や重傷者が多数倒れており、地区一帯は酸臭をきわめた。

明治橋・南大橋・御幸橋・比治山橋などの橋梁付近では、火傷したり、怪我をしたりした重傷者が水を求めて雲集していた。比治山橋の上にたくさん集っている負傷者を、暁部隊の兵がトラックで来て、どこかの救護場所へ運んでいった。

また、猛火に追われて川の中へ避難した者も多かったが、京橋川筋がもっとも多く、元安川筋がこれについて多かった。舟をもって向う岸へ渡る人もあったが、川へ逃げてきたまま、どこへも行かず、干潮時には川原の砂の上に、満潮時には筏の上や、水のあがらない石の上などにかがんでいる者も多かった。このように、やっと川までたどりついた人々も、その多くは、そのまま息を引取ったのである。

十時過ぎごろ、比治山方面が火の海に包まれているのが眺められ、千田町電鉄会社の横には息たえた馬がころがっていた。大学の尚志会には、小さい炎があがっており、風にあふられて次第に火勢を増していた。

鷹野橋付近は黒煙でまったく不明。罹災した群衆がどんどん逃げていたが、みな今にもぶつ倒れそうな姿であった。

山中高等女学校の校庭は、避難者で充満し、川岸は、火炎の竜巻が天に向かって猛り狂っていた。

十二時ごろ、御幸橋上は、死者・負傷者で混乱の絶頂に達した。

炸裂時の瞬間被害

地区内での瞬間的被害については、不明の点もあるがだいたい次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者	
南千田町	50	50	-	-	2	90	8	
東千田町	60	40	-	-	20	80	-	
千田一丁目	全焼のため不明				不明			
千田二丁目	全焼のため不明				不明			
千田三丁目	64	36	-	-	不明			御幸橋 = 欄干は御影石造りであったが、全部倒壊し、南側は河中に、北側は人道上に横倒しとなる。 南大橋 = 木造で欄干は全部破壊し、橋桁も三カ所破損し、橋の両ともと側は焼けた。
平野町	30	10	60	-	5	85	10	
富士見町	70	30	-	-	15	85	-	
南竹屋町	56	44	-	-	15	85	-	
大手町八丁目	全焼のため不明				不明			
大手町九丁目	全焼のため不明				不明			

火災発生炎上の状況

この地区で火災の発生がなかったのは、南千田町、および千田町三丁目南組町内会区域だけである。千田町三丁目西組、北組の両町内会が七〇%、平野町は九九%が全焼し、他の町は全域にわたって全焼している。

各町別の火災発生炎上の詳細は、次のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた	延焼の状況	火災終息

	場 所	およその時刻		のおよその時刻
南千田町	藤本木工所および中国電力株式会社変電所より	午前九時頃	藤本木工所および中国電力の変圧器より発火し、油槽の油が燃え上がり、南西の風で火勢が強くなったが、軍隊の応援もあり必死の消火によって鎮火する。	当日午後二時頃
東千田町	電鉄車庫付近より	午前一〇時頃	発火の原因は変圧器からと思う。南西の風、火勢強く千田国民学校・平野町・南竹屋町と次々に延焼していった。	当日午後四時頃
千田町一丁目	赤十字病院西側付近	午前九時半頃	南大橋、魚市場の飛火で民家にうつり、おりから南西の風で大手町八丁目、九丁目の火災とで火勢が加わり全町におよぶ。	当日午後三時頃
千田町二丁目	中山高等女学校北側	午後六時頃より	無風状態であったが、山中高女校舎に延焼すると同時に、北西方向より風が起り、南東と北東に向い電車道へ延び次々と延焼して行く。	七日午前五時頃
千田町三丁目	山中高女校炎上したため、民家にうつり延焼した。	八月七日午前九時頃より	北西の風で火勢は強かったが、幸いに微風程度だったので、道路境で南側に延焼するのを食い止めた。	八日午前四時頃
平野町	大学専心寮、八幡氏宅台所付近より発生。また東千田町、南竹屋町から延焼する。	炸裂直後より煙を出していた。	別荘通りは、向こう岸の皆実町の炎上している煙が正午頃円筒形で水上を走るようにして渡ってきて着火した。南瀬の風により川下から延焼してくるとの合いし、市の中心部に向け火勢は進んだ。	当日午後七時頃
富士見町	東千田町の広島文理大裏にある民家が広島電鉄車庫炎上のため延焼したのがそのまま延びて火災となる。	午前九時頃	南西の風、火勢も強く、飛び火で、炎上した箇所が多い。	当日午後三時頃
南竹屋町	東千田町の広島文理大裏にある民家が広島電鉄車庫炎上のため延焼したのがそのまま延びて火災となる。	午前九時頃	南西の風、火勢も強く、飛び火で、炎上した箇所が多い。	当日午後三時頃
大手町八丁目	元土谷病院裏および公設市場ならびに明治橋付近	午前八時五〇分頃	西南の風、北東に向い延焼し、火勢強く炎が風で飛び散り、これにより再び火災を起した。発火の原因は、いずれも電柱の変圧器より発生したことを認める。	当日午後三時頃
大手町九丁目	南大橋東詰の魚市場および明治橋東詰付近	午前八時五〇分頃	西南の風、北東に向い延焼し、火勢強く炎が風で飛び散り、これにより再び火災を起した。発火の原因は、いずれも電柱の変圧器より発生したことを認める。	当日午後二時頃

なお、この地区では全域にわたって当日雨は降らなかった。ただし、午前十時ごろ、火災に基づく上昇気流によるらしい小雨が降ったとも言われている。

六日夜

六日夜、地区の南部方面では、焼失を免れた家族や、火災から焼け出された者が、道路上や、堤防上、またはその下に避難して仮泊した。それまでに、午後四時ごろ市外から救援のにぎり飯などが運ばれて配給された。

その夜、宇品警察署からの下達情報によって、今夜また、敵機が来襲するという知らせがあり、残留避難者に警戒するように伝達して廻った。避難者は、それがために緊張し、前夜からの疲労が重なり眠れなかったが、仮眠すらできない不安と恐怖のうちに夜を明かした。また、平野町の広島文理科大学グラウンドの東南部は焼失しなかったから、逃げ場を失った避難者が多数集っていた。中には焼けなかった家から畳を持ち出してきて仮泊した者もあった。

七日となった午前二時ごろでも、千田町二丁目方面は、いまだに盛んに燃えていた。その火炎の明かりで見ると、焼けあとには風呂釜・ポンプ・庭石などが見えるだけで、そのほかは何も無いという目を疑う廃墟が出現していた。

また、南千田町からは、東の国鉄広島駅、西の己斐駅、北辺の横川駅まで見とおすことができた。そして見える限りの中に、土蔵の焼け残りや、鉄筋コンクリート建てのビルが黒々として立っていた。

れんが造りの建物の残骸は、まさに崩壊という言葉がふさわしい状態で、地面に粉々になって散乱していた。

炎上した電車の残骸、中途からぶつ千切られたように折れた大木たど、凄惨という以外に言葉もなかった。

諸現象

(イ)原子爆弾の熱線や光線を直接受けて、思わぬところから発火した現象は多いが、平野町では、厚い桜の板材

が、その木肌についていた表皮の、黒い部分から火がついたし、屋外にいた女性の頭髪が白くなったという事例がある。また、衣服も焼けてボロボロになったが、普通の火災と違って、焼けた色が総じて赤味がかっていた。

(ロ)橋梁の材木部分(橋板や欄干)が焼けたり焦げたりし、川の中の小魚(イダ)が、赤白く火傷してたくさん浮流していた。

(ハ)爆圧や爆風によって、爆心地から南にあたるこの地区では、焼失を免れた家屋が、一様に南東方向に、そのまま三センチメートルから八センチメートルばかり移動していた。土台から一度、家屋が吹きあげられた現象で、半壊程度の家屋内で、置いてあった陶製火鉢が無傷のまま、はりの上に吹きあげられていた。

(ニ)疎開あとの菜園から採ってきたカボチャが、表皮は焼けておらず新鮮な色をしていたのに、包丁で切ろうとすると、自然にグチャグチャになってくずれた。

生命の回復

(ホ)戦時中、軍の勲奨によって、家庭菜園にヒマを植え、その実を供出したが、そのヒマが焼野が原となった瓦礫の中から一本芽をふいた。被爆後四日目であったが、一週間ばかりで三〇センチメートルぐらいに伸びたのを見て、人々は、不死のたくましい生命力に感動し、勇気づけられた。また二週間ばかりたつと、ヨモギなどの雑草が芽を出しはじめているのを見つけて、「これなら、ここで生きていける。」と、何か明るい希望のようなものを強く感じたのであった。

放射能熱線

(ヘ)放射能熱線による現象は、これまでの常識をはるかに超えたものであった。防空用の暗幕に熱線を受けた家屋が、もっとも早く火を発生し、道路に面した家の二階からとか、電柱が中間どころから燃えだしたのも目撃された。電柱に取りつけてある変圧器のほとんどが、中の油が火をふいて、火災の一つの原因ともなった。

(ト)中には、原子爆弾炸裂のとき、二階にいた人が、瞬間的に屋外にほうり出された。そして家は倒壊したが、その人は、今が今まで二階にいたことしか記憶になく、どんなにして放り出されたかは、少しも知らないし、しかも、まったく無傷のままであったという事例もある。

助かった人々

(チ)奇蹟的なことではないが、被爆後、足を痛めたりして、あまり動けなかった人とか、早く田舎へ行って新鮮な空気を吸い、水を飲み、野菜などをたくさん食べた人、家全体のガラス戸を取りのぞいていた人などが、生命が助かったり、負傷が少なかったりした。

南竹屋町の惨状

近松幸一

昭和二十年八月五日晚、堀原様の宅にて、南竹屋町内会の役員会が召集され、会長松本新造ほか一四、五人が集った。

その晩、役員はそれぞれ仕事の責任を割当てられたが、私は家屋疎開作業隊第二班の責任者を言いつけられた。

その晩は十二時に解散した。明けて六日、晴天。この日は全市民・全学童は家屋疎開作業に総動員されていたが、午前七時九分に警戒警報発令、みんないそいで防空壕に避難した。七時三十一分、警戒警報が解除になり、ただちに出動した。

南竹屋町の作業隊は、甲斐という理髪屋の所に集合し、八時に人員点呼を終り、まず最初に屋根瓦を降すことからはじめた。男子は屋根に上がり、女子は一列になり、リレー式で降ろされた瓦を他の場所にするのである。

私は、集められた廃材を焚いていたが、そこへ山県郡中野村字川小田の上田市太郎氏が来られ、「近松君は、作業隊の責任者であるそうだが、良い材料があればくれたまえ。」と言う。「何に使うのか。」と、私はたずねた。彼は、文理科大学の防空壕を作るために動員され、その材料が必要なのだと言う。私は彼を案内して、裏の小路にある須門さんの家の材料が最も良いと思ったから、その家の前に行った。ちょうどそこに、軍人の河野准尉と小さい子どもさんが居られ、四人で立ち話をしていたとき、かすかに飛行機の音が聴えてきた。

空を見あげると、小さな飛行機が飛んでおり、銀色の小さな玉を落した。「また、宣伝ビラを落した。」と、私は言った。それは四、五日前に飛行機が、ちょうど銀色の丸い玉を落とし、上空で爆発して、いろいろの宣伝ビラが撒かれたから、それに相違ないと思ったからである。

こんなことを話しながら、河野准尉と子どもさんは北の方の家に入り、私と上田君は、一緒に須門の家の庭に入

り、私が空家となっている座敷の中にあがったとたん、突然、地上に叩きつけるような音と光がした。その光は、黄色光の中に、金の粉のようなものがキラキラと光っていた。

「やられた。」と、私は言った。「上田君、残念だ！」と、叫んだきり何もわからない。それから幾刻してか判らないが、ふと気がついて見れば、周囲はまっ暗であった。

私は起き上がり、手さぐりで、あたりをさぐってみると、土壁が倒れて、その上にケタが落下していた。家が倒れていることに気づいた私は、朝の集合場所に早く出なければと思い、そのケタの上にあがって、上田君を呼ぶと「足をやられた。」と叫ぶ。「少しくらい痛くても、早く出ないといけない。手を上げなさい。」と、言う手をあげた。「痛い、痛い。」と言うのを、無理に引上げて出そうとしたが、どのように倒れているのか判らなくて困っているとき、先程私が集合場所の廃材につけておいた火が、かすかにまっ赤なトウガラシのように見えたので、それを目標に、倒壊物の上を上り下りして外に出た。出るとき、河野准尉ほか多数の人々が助けを求めた。「すぐ助けにくる。」と言いおき、私は上田君と手を取りあったまま、苦心して集合場所まで出たのであった。ようやく周囲が少し明るくなったので、「早く大学に帰ってみなさい。」と、上田君を帰らせた。

作業隊の人々は全員やられ、即死した者、黒焼になって着衣はボロボロになり、裸同様。頭髪もバラバラで、誰が誰やらまったく判らない姿になっていた。ただだ、「助けて、助けて！」という悲鳴の声より他になにものもない。

私の姿を見て、「助けてくれ。どこに逃げればよいか？」と、人々が言う。「御幸橋に避難しなさい。」と、その人たちに答えた。

私は、妻がどうなっているか心配になり、早く帰ろうとしたが、帰る途中、倒壊家屋の下敷きになって、助けを求めていた人々を四人ほど助け出した。わが家に帰ってみると、家は完全に倒れており、戸口のところに宇都宮の長女すみ子さんが即死していた。もはや妻もだめだと思ったが、倒れた家の上に立ち、大声で呼んでまわった。返事がない。やはり死んだものと思われたが、もしやと思いなおして、また飛びまわって呼んでみると、かすかに「ここにいる。」という声があった。私は必死で二度三度続けて呼び、居場所をつきとめた。そこには、壁が三重になって倒れかぶさっていて、それを掘る道具がない。傍の木切れを持ち、壁土を除き、コマイ竹を取ったが、その下には天井板があった。それを打ち破ってみると、小さな隙間のある所に、妻が丸くなっていた。手を引っぱって、曳き出そうとすると、「痛い、痛い！」と言う。それを無理に引っぱり出した。

その時、すでに一四、五間向うの新田さんの家は火事になっていた。妻は足をやられ、出血するので、防空壕に入れてあった布切れで応急手当をし、一緒に御幸橋の方に逃げようとしたとき、隣家の奥さんと娘さんが、「お父さんを助けて...」と、大声で呼んでおられた。私は、妻を一人で御幸橋に行かせ、岡本さんを助けに行った。行ってみれば、二階のハシゴ段で、足を押えられて抜くことができない。どうにもならない状況であったが、「足は折れてもよいから助けてくれ。」と言われるので、無理に引っぱり出したら、足の肉が全部取れ、骨ばかりになった。そこへ今井という炭屋さんが、小さな車を持って来たので、その車に乗せて御幸橋に出るよう指示して別れた。後日聞くとところによると、出血多量で死なれたとのことである。このときすでに、デルタ薬局の裏は、大火災となっていた。

その前ごろ、霧雨がすこし降った。

こうして私もやっと御幸橋に出ていき、千田国民学校の所で妻と一緒にになった。途中、最もなげなげなと思ったのは、千田国民学校に駐屯していた兵隊が、全部やられているのを見たときで、もはや日本は負けたと感じた。

御幸橋の下の川ばたに、私と妻は避難して、各方面に収容せられるのを待っていたとき、二〇間くらい向うの馬小屋の所にある電柱から、火が燃えあがったので、すぐに消しとめ、火事になるところを防いだ。

負傷者たちは、ただ水が飲みたいという人ばかりである。そのうち次から次へと自動車で収容されていくので、私も妻を自動車に乗せて収容所に送った。私自身は、再び南竹屋町に帰ったが、大火災で到底町内に入ることはできず、御幸橋に引返して火災のおさまるのを待った。

午後三時半ごろ、町内に帰ってみると、さしもの大火もほとんど燃え落ちていた。そこには町内会の防空壕の中で苦しんでいる負傷者、大声で親は子を、子は親を呼ぶ人々、また助けてくれと叫びながら死んでいく人など、まさに生地獄が出現していた。

町内会長の松本さんは、負傷して行方不明である。町内会長役員で大怪我をせず町内に残ったのは、瓜・坂本・近松・堀原で、夕暮れ、怪我をしなかった町内の方と、残留人員を調べて、食糧と火傷につける油を御幸橋の所ま

で受取りに行って、それぞれに分配した。

日が暮れて、その夜の広島市は、見渡すかぎり大海にとうろうを流したようで、まったく変りはてた夜であった。生き残った人々は、全部あちこちらの防空壕に入った。ロウソクの明かりで配給された夕食の握りめしを御幸橋の所から受取って来て、壕内の人々に配給したが、食べる人はほとんどいなかった。みんな食欲さえも失っていたのである。一晩中、肉親を探して呼びあう声がきこえるとともに、次から次へと人が死んでいく。そのうえ、飛行機の爆音がして、何んとも言いつくせない恐ろしさと淋しい一夜であった。

明けて七日は、各方面から縁故者が尋ねて来られ、その応答に私は一生懸命つとめた。

警察からは、河浜部長が町内の被害状況を調査に来られたので、それに答えた。それから、南竹屋町の進徳女学校に行ってみると、校庭には、何百人という女学生が行列縦隊になって、白骨となっていた。これは、ちょうど朝会で、校庭に行列縦隊にならないうち被爆したのである。当時は、何時空襲があるかも知れないから、自分の手持品はいつも持っていたが、その白骨の一体々々のところに、学用品・弁当箱などが焼け残っていた。

尋ねて来た肉親や縁故者は、これが家の子の持っていたものではないかと調べて、ただ泣くばかり…。学校の先生も四、五人が火傷して、防空壕の中に飛びこんだまま死んでおられた。

六日の朝、話をして別れた河野准尉は半身焼けて死なれ、子どもさんは白骨になっておられた。

七日の夜から、私は進徳女学校の防空壕に移った。夜、暑いから外に出ると、飛行機が来て、また急いで壕に入った。この夜、町内会役員の堀原夫婦は気違いのようになられた。それは、父上とただ一人の娘さんが、家の下敷きになられたのを掘り出そうと、一生懸命になっているうちに大火となったので、堀原夫婦は、自分らも娘と一緒に焼け死のうとしたとき、娘さんが、「私とおじさいんは、最早やこのまま死んでいくから、お父様お母様早く他へ逃げてください。」と叫ぶので、他へ逃げては、また飛んで行きするうちに、父と娘が焼け死んだと話されていたが、このため、夫婦とも狂人のようになられたのである。

明けて八日、私の飼っていたヌートリヤを見に行ったが、一二匹くらい居たうち、三匹くらいは生きてどこかへ逃げたようであった。また、体全面に火傷した馬が、どこから来たのか、フラリフラリと竹屋町に来て倒れて死んだ。水槽の中に飛びこんで死んでいる人もあり、哀れをきわめる。

日がたつにつれて、各方面から警防団が来られ、焼跡の整理が進められたから、町内整理も進んだので、九日に妻の居所を探したが行先不明。いろいろ尋ねるうち、森の主人が、「近松のおば様は似ノ島におられる。」と言われた。私はすぐに宇品に行き、南竹屋町の患者を調べに行くのだからと言って、警察の許可を取り、船で似ノ島の棧橋に着いた。

棧橋では、大きな船に死体を山ほど積んで、どこかの焼場に運んでいた。上陸して検疫所に行く途中、いまだに一度も治療を受けていない人が、たくさん苦しんでいた。検疫所の入口では、死んでいく人が次から次へと投げ出されている。死体はほとんど「大」の字型である。

検疫所の中に入ってみると、立錐の余地もないほどの患者と、大きな叫び声が渦巻いていた。その中を、南竹屋町の患者を尋ねてまわった。ようやく妻を発見したとき、ちょうど昼食で、一四、五人がおカユを食べていたが、ほとんど裸で、着物を持って来てくれと、みんなから頼まれた。

負傷者の大部分は「水をくれ。」と叫んでおり、助かる見込みのない者には水を与えると、次から次へと死んでいく。

私が南竹屋町の負傷者に別れを言うと、連れて帰ってくれという人、着物を持って来てくれという人もあり、涙ながらに妻を連れて退出した。宇品から電車で南竹屋町の焼跡に帰り、九日から十一日までの三日間、町内の整理にあたり、十一日の夜、坂本・花本ほか二名の方に後の事を申し送って、瓜勇様一家と私ども二人は、田舎に行くことにした。瓜様の兄上が車をもって迎えに来られたが、私は妻が足を負傷しているので、乳母車を拾って来て妻を乗せ、瓦礫の中を難渋しながら出発した。途中、到る所で死体を自動車に積みこんでは運んでいるのが見られた。死体の焼場で、もっとも多く積み重ねて焼いていたのは、横川橋の所であった。それから夜通し歩き、八木の民家で頼んで朝食をよばれ、ようやく可部町にたどりついた。可部で瓜様と別れ、夕方、来合わせた自動車に乗り、戸谷に着いた。

ここで市場という宿屋に泊まることにして、二階に上がっていたとき、中原の二反田様の自動車が中野村に行くから、それで帰らないかと言われたので、宿を断って帰ることにした。山県郡芸北町字細見に着いたのは、十二日

午前二時であった。

その自動車には一〇人くらい(本田モモヨ様・坂井様など)が乗っていたが、はっきりしたことは覚えていない。

生きていたわが子

瀬川博(談) (被爆場所・広島文理科大学事務室、当時・三四歳、警備隊応召中)

私は、当時、千田町の広島文理科大学(兵舎・高等師範学校)に駐屯していた第二七八四部隊(隊長・陰山稔大尉)に警備召集を受けていました。

六日は、朝七時半ごろ、新川場町付近の建物疎開作業のため、隊員七、八〇人が出て行ったあと、本部詰(指揮班)であった私は、事務室の黒板にむかって、来る八月十日はいよいよ満期除隊になるが、軍隊手帳にこんなふうに入るのでと、その要領を書きかけていたとき、突然、ピカッと光ったのです。ドンという音はききませんでした。

光った瞬間に、落下物の下敷きになっていました。夏のことで、みな上半身は素裸でした。私は右の目の下が骨折したうえ、ガラスの破片などで血が流れでました。意識はあり、失明したなど思いながら、もがいてみましたがどうすることもできませんでした。

そこへ、建物疎開作業に出ていた兵隊が逃げかえって来て、片手だけ落下物の上ののぞいていたのを発見し、ひっぱり出してくれたのです。

大混乱の最中のことではっきりしませんが、後日聞くとところによると、私をひっぱり出したのは同室にいた田原正人二等兵であったかも知れません。

広商時代に野球選手で有名であった天満町出身の竹岡曹長も、同じく下敷きになっていましたから、助け出そうとしましたが、落下物が多く、その上腰の長い指揮刀が何かにひっかかかって出ることができぬまま、火が迫って来て、ついに焼け死なれました。

私はヨロヨロと這うようにして、大学の前の広島赤十字病院へ行きましたが、もう負傷者がたくさん集っていて、長蛇の列を組み、アカチンを塗ってもらっていました。私は他の人々よりも軽傷であったし、なかなか順番がなかったのも、足のむくまま御幸橋の方へむかって逃げました。

御幸橋の西詰の交番所のところで、ボンヤリ立っていましたら、海の方から川をのぼって船が一隻近づいて来ました。兵隊や負傷者が二〇人くらい乗っていましたが、「もう一人乗れるから乗れ。」と、兵隊が呼ぶからそれに乗り、似ノ島へ運ばれました。これが正午ごろでした。

舟で運ばれる途中、すごくノドが乾いたので海水をすくって飲みましたが、びっくりするほど辛かった。しかし、実にうまかったのが忘れられません。

似ノ島には三日いました。似ノ島の収容所では、多くの負傷者はただ運ばれて来て、ムシロの上に寝ているだけで、治療というものはありませんでした。薬品もすぐなくなっただけでしょうが、負傷者の収容作業だけが精一杯というありさまでした。その上、負傷者がバタバタと死んでいきますので、夜は火葬の火があがり続け、異臭がするどく鼻を衝いてきました。

私も次第に身体が弱ってきましたが、配給のにぎりめしを食べるより、部隊のことが気にかかりました。原隊へ連絡したいから帰してくれと頼んで、三日目の八日午後二時ごろ宇品の棧橋まで舟で送ってもらい、そこから電車道伝いに歩いて大学へ帰りました。

立札に、二七八四部隊は草津国民学校にいるから、そこへ来い、と書いてありましたので、鷹野橋 福島町 己斐駅と道をたどっていき、午後六時前に国民学校につきました。

皆が私が死んだものと思っていたので、びっくりしました。氏名をかいた貼紙をみると、私の名の上に斜線がひいてあったほどで、緑色の三角巾で片目をおそっている姿の私を、「瀬川だ。」と言っても、はじめは信用してくれませんでした。判ると小原中隊長らみんな非常によるこんでくれました。

草津国民学校には、終戦になる十五日までいました。

一方、私の家族の妻菊江、長女祐子、次女富美子、長男泰司らは、東観音町二丁目の妻の両親の家の二階を借りて疎開していて被爆しました。

家屋は一瞬に倒壊し、辛うじて妻と妻の母、長女、妻の妹と次女は助かりましたが、妻の父と三歳の長男泰司の二人が見つからないまま、猛火が迫って来て逃げるほかないことになりました。火炎がグングンまわって来るので、火の中をぬうようにして、西(己斐)へむかってとにかく脱出しました。

観音町は、万一の場合の避難先として、あらかじめ地御前方面が決められていたのでもありますが、地御前には私の親類もいましたので、そこへ逃げのびていきました。

それから毎日、父と長男を探しに焼跡へかよいました。父の骨はすぐ見つかりましたのに、長男はまったく影も形もありませんでした。八月の末ごろでしたか、ある日、ラジオの尋ね人を探す時間に「戦災孤児は五日市町の収容所にいる」ということが放送されたので、すぐ尋ねて行ったのですが、それらしい姿が見つからなかったのです。孤児は五日市に来る前は、比治山国民学校に収容されていましたが、私と叔母が尋ねて行ったときには、その半数しかまだ来ていなかったことを知らなかったのです。

妻は、毎日のように孤児収容所へ出かけていき、洗濯物などの勤労奉仕を続けながら、長男を探しておりましたが、とうとう見つからず死んだものとあきらめて、お寺にたのみ戒名を作ったのです。

三年の法事、七年の法事をやり、十三年の法事をしようという時でした。朝日新聞が全国の孤児の親さがし運動をやりました。長く読んでいた新聞をやめ、朝日にかえてから一週間もたっていない昭和三十五年十月六日のことでした。妻は働きに出ていて疲れるためあまり新聞を読まなかったのですが、その日に限って紙面をひろげたのです。そこに「中村勝己」という名で出ている子どもを見つけて、アラッと感じたのです。

本籍不詳、少しどもる。生年月日は十月らしいと、書いてある。

十月七日、朝日新聞社の車で尋ねて行くと、私を見るなり、そのの先生が「中村勝己に似ている。」と言われた。すぐ個人別のアルバム帳を見せてもらおうと、長男と同年令の子の写真があった。それが戦後生まれた三女とそっくりの顔でびっくりしました。まったく性別が違うだけでした。私は見るなり、長男が生きていたという実感が湧きました。

「中村勝己」という名は、山下義信所長がつけられた名前ですが、九月末日限りで満一七歳になったから、収容所を出て、八丁堀の会社に勤めており、皆実町にある会社の寮に住んでいると聞かされました。

その晩、朝日新聞社で十五年ぶりに泰司と逢いました。泰司はすでに一八歳の立派な青年に成長していて、童顔だけ覚えている私には、急には判りませんでした。どことなく似ていました。

現在は、死亡で抹消してあった戸籍も旧に復し、完全に長男になっております。何も彼もそっくりになり、酒をのむことまで父親と同じです。

八、被爆後の混乱と応急処置

負傷者の収容

被爆直後は、茫然自失の状態、みんな何事も手につかず、ただ混乱に混乱を重ね、疲労困ぱいの極に達したまま午後をむかえ、やっと応急処置の手がつけられた。

負傷者や避難者でごったがえす比治山橋のところへ、午後になって宇品から陸軍船舶司令部のトラックが来て、負傷者を片っぴしから収容し、司令部までどんどん運んだ。その時、生きている者は氏名をただして荷札を身体につけたが、死亡して不明な者は、死体を海に捨てたのもあったという。

七日、軍隊が舟をもって来て、京橋川と元安川に浮く多数の死体を集め、これを陸揚げしてトラックで、どこかへ運び去った。

にぎりめしの配給

大手町方面・千田町一丁目付近では、六日午後二時ごろ、はじめて軍隊からにぎり飯が配給された。また南千田町方面では、午後四時ごろ、呉市方面から救援のにぎり飯が運ばれてきた。御幸橋一帯では乾パンの配給があり、夜になってにぎり飯の配給があった。

応急救護所

六日午後、広島赤十字病院と御幸橋西詰に応急救護所が設置された。ここへ軍から救急薬品が届けられ治療をはじめたので、負傷者がたくさん集った。

七日、対岸の広島専売局内に、暁部隊の応急救護所が設けられ、一〇日間ばかり治療にあたりと同時に、トラックで重傷者を次々と宇品方面に運んでいった。宇品港から島嶼部へ送ったという。

ある負傷者は、会社の従業員によって、荷車にのせられて、宇品の運輸部に行き治療を受けた。それから鯛尾の収容所にまわされ、しばらくして、小屋浦の収容所に収容され、治療を二十日まで受けた。小屋浦には軍人が八月二十日ごろまでいた。

終戦となり、軍隊が解散することに決まると、救護所の軍人は、比治山に集合し、最後の乾盃をおこなって引揚げたという。その後は段原山崎町の第一国民学校で治療活動がおこなわれたが、リパノールをひたしたガーゼを取りかえるだけの簡単なものであった。

道路の啓開

道路は倒壊飛散した障害物で足のふみ場もないほどであったが、軍隊が出動して八月十日ごろまでに、主要道路の大体の啓開をおこなった。

御幸橋の上は、欄干が倒れただけで、どうにか通行できたから十二日ごろまでそのままにしてあった。

焼失をまぬがれた地域でも、道路は障害物で通行できない状態であったが、六日からずっと地区外へ避難しないでいた残留者が力をあわせて、八月末ごろまでには歩けるように整理した。

死体収容・火葬など

死体は、川の中に浮くもの、道路上に目もむけられない姿で転んでいるものなど、七日からすでに軍隊によって収容された。収容場所は、広島赤十字病院と山中高等女学校の北側であった。

死体の氏名確認は困難な作業であった。殊に半焼の死体は、その性別すら判断に困ったような惨状であったし、従来からの居住者も三、四人ぐらいしか居らず、身元などの確認は不可能であった。

これらは、広島赤十字病院裏の仮焼却場に運んで火葬にされたが、一週間後からの死亡者四、五人は、町内の防空壕あとを利用して焼却し、それぞれの縁故者に遺骨を渡した。

また、南千田町の現在の下水処理場南端でも火葬が行なわれ、千田町一丁目と二丁目の境(広島赤十字病院・山中高等女学校北側付近)に仮埋葬をおこなった。

火葬方法は、土地を掘り下げ、横木を渡して、その上に死体をのせて木片・ムシロなどをかけ火葬に付した。燃料がなかったので、倒壊家屋の残材を集めて焼いたが、なかなか完全に焼ききることができなかった。

夕方に火をつけて、朝行ってみると半焼けのまま火が消えていたりしたので、また、その上に木片を積みあげて焼きなおした。なお、仮埋葬したところには、墓標を立てておいた。

平野町では、焼け残った石灯籠の中に遺骨を入れておき、遺族がたずねてくると引渡したこともあった。千田町方面の遺骨処理については、確実な資料がないから、不明である。

合同慰霊祭

十月十六日ごろであったか、市役所が、現在の市立浅野図書館西側にあった空地で、広島市合同慰霊祭を執行したので、千田町方面も加わって、地区内の死没者の冥福を祈った。

平野町方面は、二十一年八月六日、広島文理科大学グラウンドで、宇品町の千暁寺住職を招き、合同慰霊祭を執行した。

町内会の機能

なお、被爆後の地区内における町内会の機能、および被災対策の状況はつぎのとおりである。

町内会名	記 入 欄
南千田町	会長は全身火傷し活動不能のため、副会長および理事など割合健在な者を督励し、なお会長の令嬢が健在であったので、ともに罹災証明・交通証明などの交付事務を行ない、当局からの指示とか伝達事項などのことも扱った。これらの事務の遂行において紙類の不足と食糧の入手手続きなどで大変困ったが、幸いにして、よき協力を得ることが出来たので不自由ながら町内の運営は進められた。
千田町三丁目南組 西組	町内会長はかなりの負傷をしていたが、歩行することが出来るので焼跡に残った者とか倒壊家屋に残った町民を督励して、町内事務を手伝わせる。なお、他町との連絡を密に取るようにしたので、かろうじて町内運営ができた。
千田町三丁目北組 千田町一丁目 千田町二丁目 大手町八丁目 大手町九丁目 東千田町 南竹屋町上組 南竹屋町下組	各町内会長は避難とか被爆死などで、町内会機能は壊滅した。それがため残存者などの罹災証明書は警察署まで行って証明をとるようにしていた。九月に入り、おいおいと復帰しバラック建てなどで仮住いをする者が増してきたので話し合った結果、町内会事務を当番制にして交替でしばらくの間事務を遂行した。
平野町	当時の町内会長・副会長とも、避難していたので、翌日からの配給その他の事務とか物資の配給が出来ないため残留している市民で町内会役員を定めた。中山村へ避難している前副会長を訪れ、町籍簿を持帰り、バラック建ての事務所古紙を使用して、証明書発行事務からはじめた。八月七日には、バラック建て事務所が出来たのであるが、この事務所を目標にして人々が来るようになった。

九、被爆後の生活状況

最初の居住者たち

七日、平野町では、田中隆雄と木谷龍吉夫妻が協力して、焼け残りの防空壕から木材を取出しバラック小屋を建てた。そのバラック小屋の壁を利用して裏側に、六日夜、大学のグラウンドで仮眠した人たちも五、六戸のバラック小屋を建てた。これが最初の居住者で、引きつづき十日ごろ、グラウンド内に六戸のバラック小屋が建った。それから、被爆直後、一時、郊外へ逃げていた人々、つまり破壊されただけで、全焼はまぬがれたという人々が戻ってきた。

バラック小屋の材料はみな同じで、防空壕の使用材、倒壊家屋の木材などを使用し、屋根は焼けたトタンを引延ばして葺き、床は土間のままの掘立小屋であった。

郊外へ避難したものの、知人も縁故もないところへ行っても生活もできず、仕方なく早く復歸した者が多かったが、着のみ着のまま、風呂もないという原始的な状態であった。行先がなくて六日の夜から、ずっと区内にとどまっていた人々の多くは死んだのであるが、バラック小屋を建てたときは、何かホッとした気持ちになったという。

どん底生活

しかし生活は困難そのもので、夜とて電灯はなく、ロウソクもなかったし、水すらなく、また、食糧も欠乏のどん底生活をすごさねばならなかった。その上、新聞も、ラジオもなく、何がどうなっているのか全然わからないトンボ同然の毎日で、日づけすら忘れることがある程、みんな深い虚脱に陥っていた。

しばらくして、軍の放出物資が配給されるようになり、生活は幾らかよくなったが、依然として原始人のような状態であった。夜は、焼け残りの材木を拾ってきて焚き、灯明のかわりにしたが、生きているということだけが、ただ一つの救いであった。

なお、八月末ごろの、各町別の居住者の状況はつぎのとおりである。

八月末ごろの居住者数

町名	世帯概数	町名	世帯概数
南千田町	60	千田町三丁目	120
平野町	25	富士見町	10
東千田町	10	南竹屋町	10
千田町一丁目	15	大手町八丁目	5
千田町二丁目	20	大手町九丁目	5

八工の発生

地区一面に八工が多数発生した原因は、焼跡の腐敗した人畜の死体とか、衣類や畳などがむし焼きになった所へ水が浸透し、それによって悪臭を放つようになった汚水を、排水出来ぬままに放置されたためという。

被爆後三、四日して八工を多く見るようになり、一週間ぐらい後には手におえないほど発生し、食事の際は片手に打ち払いを持って追いながら、食べなければならない状態であった。防空壕の中などでは、八工が飛び回るとき、まるで雨が降るような音がした。また、道を歩いている人の背中には八工がとまって黒く見え、からだに黒い毛がいっぱい生えているように見えた。

このような状態が続き、ノミ・シラミとともに日ごとに増加し、八月中ごろから、最も多くなったが、駆除剤がなかったためどうする方法もとれなかった。

九月上旬ごろ、進駐軍の飛行機がDDT(駆除剤)を撒布してからは、急に少なくなった。

生活物資

食糧は、被爆当日午後一回と翌日一回、軍からにぎり飯の配給を受けた。八月八日ごろから、肉および豆の缶詰と乾パンの配給があったが、乾パンの中に小さな金平糖も混っていて、その甘味が実になつかしくおもわれた。

平野町方面では、主食米の配給があり、被爆後一か月ぐらいは困らなかったといわれる。なお、醤油は田中隆雄の所有する貯蔵品を近所の者が分けあって使った。九月中旬ごろ、京橋町方面に醤油かすの焼け残りのあるのを知り、多くの人が探しに行き、持ち帰って利用したこともあった。

しかし、食糧品は絶対量が不足であったから、買出しは市外に依存し、町内会とか警察署の罹災証明書及び交通証をもって、主として安佐郡方面へ買出しに出かける者が多かった。

また、焼け残った町内会では市と交渉し、主食米の現品交付証を受取り、佐伯郡八幡村農業協同組合へ受けとり

に行き、一時をしのいだこともある。十月末ごろから、本格的に市から配給を受けるようになったが、それ以外の食糧物資は各々が郡部へ買出しに行かねばならなかった。市内電車が運行し始めたのは九月初旬ごろであったが、全線運転でなかったため、買出しにはずっと遠くまで歩いて行った。

電灯

ロウソク生活は、総じて十一月ごろまで続いた。市からロウソクの配給が一回あっただけで、ロウソクも闇買いするよりほかなかった。後には「カンテラ」、「ランプ」などが、闇市場で売られていたので、それを使った者もあった。

電灯がつくようになったのは、平野町付近では三三日目の九月七日、千田町方面では十一月ごろであった。配線工事は電力会社によるものでなく、すべて町内に住んでいる者が勝手に行なった。平野町では、千田町三丁目広島電鉄株式会社の方から裸線を引っ張り、支柱を同会社から角材を三〇本ほど提供してもらって配線を行なった。ソケットは皆実町方面の空家になっている家から取寄せ、電球も盗んで取りつけ、やっと光を得ることができたという。

電灯がつくと復帰する者が増加し、南竹屋町上組・東千田町方面にもバラック小屋が建ち、電線が引込まれるようになった。それがため次第に電圧が低くなり、照明が暗く十二月二十日ごろには電圧なく、ついに用を達することが出来なくなったので、町内の者が総出で、比治山橋方面から電線を引きこみ一応復元させた。いずれも焼跡のはだか線を使用し、素人の手で配線工事を行なったのであった。ようやく翌年一月末ごろから、中国電力会社が本格的復旧工事として、配線工事を実施しはじめた。

疎開者の復帰

疎開世帯の復帰は、早い者では八月十日ごろにはかえっているが、十月ごろまで緩慢であった。復帰の増加が目立つようになったのは、十月の暴風雨後であるが十一月ごろから急激に増加した。

復帰が遅れたのは、バラック小屋を建てる資材の不足と、食糧事情の悪化が原因し、そのうえ、被爆後七五年間は人も住めぬとの流説により、精神的な不安が強くはたらいたからであろう。

しかし、この流説に反して、焼跡に密生した雑草の繁茂ぶりに、今までの不安が取除かれたのか、十一月ごろから復帰する者が急増した。

学童の復帰

千田町国民学校は全焼したので、十月二十五日、外郭の残った貯金局四階を借りて開校式を行ない、残留生徒の授業を始めた。疎開児童の受入れについては、十一月はじめに千田国民学校の教員が集団疎開先から帰ってきて、「疎开学童が帰っても、学校が全焼していて受入れられたいので、なんとか対策できないものか」と、町内会に申し入れたので、十一月の下旬、池田・森信・花咲・加登・田中・中川、その他、約一二、三人が池田会長宅に集り、学校の復興対策について協議した。

とりあえず、警防団から金一万円、各町内会より金一、〇〇〇円ぐらいと定めて、二万円の資金を集めた。これによって校舎一棟を藤田組が建設した。工事費一九、〇〇〇円で十二月末日、現在千田小学校の給食室のところに竣工し、疎開児童の受入れ対策を講じた。

闇市場の利用

軍需品の放出があっても、高価のため罹災者には入手困難であった。逆に、原子爆弾から免れて残った貴重な衣類なども、食糧品入手のため農家に行って、物々交換をするのに使わねばならなかった。広島駅前にできた闇市場も、皆が皆大いに利用して助かったというわけのものではなく、ただ見たり聞いたりするだけで困窮生活を送る者が多かった。

また、せっかく貯蓄していた金が封鎖になり、戦災者には息の根をとめられるほどの大きな痛手であった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日、台風の襲来で、せっかく建てたバラック小屋も吹き飛ばされた。そのうえに、戦時中疎開していた所から持ち帰った衣類なども、全部水浸しになって泣くに泣けないありさまであった。

この被害を克服して住居を修築したやさき、またもや十月八日の大豪雨に見舞われ、京橋川・元安川の水位が増し、堤防を約三〇センチメートルも高く越して、地区全域が浸水した。南千田町方面は約三日間、平野町方面では約二日間も減水しなかった。それがため、修築したバラック建てでも倒れ、防空壕にも浸水し貯蔵していたほとんど

の物資を失ってしまった。雨は以前から降り続いていた上の大豪雨であったから増水は甚だしく、殊に平野町では、半日ぐらい一面湖のようであった。仮住居の窮乏生活をしているところへ、二度の災害を受け、やむなく一面あきらめた気持ちで、田舎に引返す者もあった。また、倒壊や全焼をまぬがれた半壊家屋などもやっと修理して住めるようにしたところへ災害を二度までも受け、復旧出来ない者もあった。なお、原子爆弾では命拾いしたが、この暴風雨で家が倒壊し、下敷きになって死亡した者もあり、また、失神状態になった者もあった。

経済活動

被爆してから九月になるまでは金の使いみちもなく、九月中旬ごろより闇売りの行商人がくるようになってはじめて、金の必要を感じた。二十一年四月ごろになって、ようやく生活が活気づいてきたようである。

復興するにつれて、食糧品・日用雑貨品の商店が最初に、衣料品商・古物商・自転車商・喫茶店の順に店舗ができた。

それらは、鷹野橋を中心にして、大手町八丁目～九丁目に商店街ができ、また、千田町一丁目付近にも店舗ができて、順次全地区に及んでいったのである。

住宅の修復状況

南千田町は、全焼したのは僅かであったが、倒壊家屋が多かったので、二十年十一月上旬、市役所の求めで瀬戸内海の各島の大工職人が、応援に来広したうち、五〇人の割当てを受け、二十年末頃までに半数以上の家を補修することができた。

千田町三丁目は、二十年九月上旬ごろから、バラック小屋が建ちはじめ、焼け残った破損家屋は、前記応援隊により修理工事を施したので、同じく二十年末ごろまでには、約半数の補修ができた。

全焼地域の千田町一～二丁目・東千田町・大手町八～九丁目・平野町・南竹屋町の七か町では、すでに八月七日(平野町)ごろから、バラック小屋建てられたが、一般に多くなったのは、二十一年四月ごろからであった。

建築資材は物資統制令で入手困難のため、大部分は闇買いをするとか、田舎の縁故をたどって買うとかしなければならなかった。釘類は、市が町内会へ配給を委託している配給品があった。

十一、その他

地区南部の千田町方面では、全焼をまぬがれ焼け残った区域があったことによって、当日、避難していた者が早く復帰し復興が早かった。

電灯についても、広島電鉄株式会社の電力が緊急復旧したため、早急に電線を各戸に引込むことができて、住民は明るさを取戻し、電灯の光を見ることによって虫が集るように、次第に居住場所を求める人が集って来たという。

そして、いち早く連合町内会を結成して、物資配給および発展の対策につき申合せができたこと、警防団に保管金があったこと、これらが復興意欲を強くする根源となった。

現在の広島大学グラウンド(平野町)が地区内にあったことは、非常に利用価値高く、多くの便利をあたえ、これが復興を促進する一つの力となった。しかも、グラウンドが貯木場となっていたので、ここにある木材が復興資材として活用され、バラック建築を促進した。

また、当時の混乱状態の際、市長の命令で、建物が全壊している地域の各町内会へ、全壊家屋の払下げを一任して、入札を行なわしめた処置は、また復興を早めた基となった。

平野町では、田中隆雄が田舎に貯木していた材料を使ってバラックを早く建てたが、これが罹災者の心を引き立たせたともいえよう。また、鉄道局から資材を得て、二十一年三月に自営の工場を復旧し、広島文理科大学内から動力線を引込んで製造を開始したことで、これがまた、町の復興を進める原動力にもなった。また、二十二年に、電柱を二〇本ほど電話局に寄贈して、電話架設工事を行なった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

吉島町(一部)、吉島西一丁目 二丁目 三丁目、吉島東一丁目 二丁目 三丁目、吉島新町一丁目 二丁目、光南町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目、南吉島町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、吉島本町[よしじまほんまち]一丁目・同二丁目・同三丁目・吉島町[よしじまちょう]の一部(刑務所)とし、爆心地からの至近距離は、吉島羽衣町[よしじまはごろもちょう]と本町一丁目の境界で約二・三キロメートル、もっとも遠い距離は本町の最南端(旧陸軍飛行場跡)の海寄り約四キロメートルである。

中島地区に隣接し、本川と元安川とはさまれたデルタ地区で、南端は広島湾に接している。

地区一帯は野菜畑が多く、戦前はまた、花々と葎の生え茂る低湿帯が広がっていて、ヒバリやヨシキリなど小鳥がたくさん棲んでいた。また、戦争中は陸軍飛行場があり、市民はあまり近づけなかった。

吉島町にある広島刑務所の外壁(高さ七メートル、幅六〇センチメートル~二メートル、外周一、七〇〇メートルで、その材料は泥と石を使用し、これを煉りあわせたもので、明治十九年に完成)は、原子爆弾の爆風圧にもビクとしなかった。

戦後、広島市の膨脹にともない、太田川改修工事や都市区画整理事業などの換地用地、市営住宅団地などに利用され、急激な発展をなし、稠密な新市街を形成している。

被爆前の建物数・世帯数・人口数は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
吉島本町一丁目	293	321	1,049	川口覚一
吉島本町二丁目 吉島本町三丁目	250	255	1,232	竹内武一

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
中国塗料株式会社	吉島本町一丁目	倉敷航空機株式会社	吉島本町二丁目
広島刑務所	吉島町	陸軍飛行場	吉島本町二丁目
県立聾学校	吉島本町二丁目		

二、疎開状況

人員疎開、学童疎開

吉島本町一丁目は、あまり疎開することも無かったが、吉島本町二丁目町内会では、倉敷航空機株式会社付近の住宅一〇戸の建物疎開をすると共に、老人・国民学校児童などが縁故先へ五〇人ほど疎開した。集団疎開児童は四二人が昭和二十年四月十三日、双三郡三良坂村および同郡吉舎村の寺院や農家に分宿した。

三、防衛態勢

吉島本町一丁目には、県が大型防空壕を九か所構築した。しかし、この地域は、市の中心部から離れていたし、田畑や草地が多い地帯であったため、警防団員が二、三人いただけであった。防衛対策としては時折り、婦人会の防火訓練を実施した程度である。

四、避難経路及び避難先

避難先は佐伯郡平良村を予定し、舟入町を通り、己斐町に出て、それより廿日市町に行き、平良村に至るコースを予定していた。

五、所在した陸軍部隊集団

吉島本町二丁目の陸軍飛行場内に、暁部隊航空隊(練習隊)が駐屯していた。

六、五日夜から炸裂まで

この地区では、農村的色彩強く、家屋が少ないため、町内会としての警報に対する命令的な行動は行わず、個人個人が適当に待避した。

侵入の敵機は見えなかったが、警戒警報解除後、北方の上空(西練兵場付近)に、白く光る物体が三個見えて、三

機の編隊飛行のようであった。それも、ほんの瞬間的なことで、見た直後に落下しはじめ、青い光を放った。敵機の爆音は、ほとんどの者が聴いていない。なお、被爆当日、この地区からは建物疎開作業に出動していなかった。

七、被爆の惨状

炸裂直後

炸裂の閃光が、電気スパークのように青く光った。感受後二秒くらいのち、強い衝撃を受けて建物が倒壊した。しかし、家の下敷きになった者が二、三人程度いたぐらいで、たいしたことは無かった。

飛行場では、敵の電波探知機から逃がれるためとかいわれる木製の赤い翼の練習機が着火して、兵隊がシャツが服を振りまわして消火につとめていた(紫色の閃光・守宗寿人手記)。

避難者の殺到

地区では避難する者はなかったが、地区外からおびたしい避難者が続々と入ってきた。

まず、吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目のうち、一部の人が吉島本町二丁目の飛行場へ避難した。また、中島地区・水主町・大手町方面の負傷した避難者も、飛行場やその付近の畑及び空地に逃げてきてごったがえし、酸鼻をきわめた。

家屋の倒壊で、一部通れない道もあったが、町民が片づけて通れるようにした。南大橋は川下に傾斜し、手すりも焼けていたが、人だけは通行できた。この辺りでは川の中へ逃げた者はない。

瞬間的被害

地区内の被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(%)				人的被害(%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
吉島本町一丁目	58	32	10	-	19	46	35
吉島本町二丁目	10	83	7	-			
吉島本町三丁目							

全焼は全壊を含む

六日夜

しかし、六日夜は、地区外からの避難者で、ほとんどの家が満員となり、負傷者の看病で時間のたつのも知らず働いた。

熱線現象

吉島本町一丁目では、午前十時ごろ中心部南側から火が出て、北へ向け拡がり、ついに一丁目は焼失した。なお、時間は不明であるが、ごく僅かの雨が降ったという。

その他の地域においては、熱線による火災も、その他の原因による火災も発生しなかったが、屋外にいた人は、全員火傷を受けた。また、衣類など綿物は焼けなかったが、スフなどの人造繊維は、光を受けると同時に焼失した。なお、この付近には雨が降らなかった。

爆圧爆風の威力

電柱が三〇度ばかり、南に向いて傾き、電線は全部切断された。人間は少し後にさがる程度であったが、三人ほど、吹き飛ばされて負傷をした者がいた。

吉島飛行場にて

黒瀬重吉(水主町下の自宅で被爆)

頭の負傷のため、水主町の自宅から吉島飛行場までの記憶は全然ない。妻と南大橋までは一緒だったそうだが、どこで離ればなれになったのか、それも判らない。一応は橋を渡ったが、途中でまた引返したので、長女は四女の手をひき私に付添っていた。多くの人々は急いで逃げているのに、私は相変わらずトボトボと歩いていった。やっと飛行場の営門を入ると同時に倒れた。

兵隊が担架で運んで兵舎に入れてくれた。頭の裂傷、右眼・腰部の負傷のため、敷いてもらった毛布、兵隊の外着も、出血のため血まみれとなった。これは数日後に長女から聞いて知ったことである。

そのうち、別の兵舎の兵隊を他に移して、その兵舎に罹災者を収容した。私は二、三日は意識が朦朧として昏睡の状態を続けた。

ある朝、私の枕元で「この人も、もう駄目かもわからない。」と言っている話声を夢うつつで聞いた時、その話声

で気がついたのか、眼を開いたところ「あー良かった。」と話しておられた。話しておられたのは、週番肩章を肩から掛けられた四〇歳ぐらいの口髭をはやした将校と三人の下士官であった。

将校は、「気がつきましたか、気分はどうですか。」と話しかけられたが、私はまだ夢心地で思うように話ができなかった。

どうしても歯の根が合わなくて、顔が引っ張られるような痛みで、口を動かすことも苦痛であった。

将校は重ねて、「元気を出しなさい。あとから缶詰と乾パンを持ってこさせますから。」と言って他の兵舎に行かれた。兵隊が密柑の缶詰と乾パンを持ってこられた。

私の枕元の前方に、この部屋の看視の兵隊が椅子に腰をかけていた。その兵隊がたべてみなさいと言ったので、長女が密柑の缶詰をたべさせてくれた。大変おいしかったが歯にしみた。また、乾パンを口中に入れてくれたが、顔面と歯が痛んで咀嚼することができない。

家屋の下敷きになった時、顔面を何かによって打ちつけられて顔が曲がったのであろう。乾パンを噛むことができないので、空缶に水を入れて湿して口中に流しこんだ。

意識がいくらか恢復にむかうと、頭・顔・右眼から右耳にかけた裂傷・腰の傷がとてひどく日夜疼痛に苦しんだ。

毎日、週番将校の見舞いをうけた。缶詰と乾パンのお礼を言った。

「少しは気分が良くなりましたか。」とたずねられた。「大分よくなりました。」とお礼を言った。「煙草を喫いますか。」、私も煙草の味を思い出し、「喫います。」と言った。

「マァ少しだけ喫ってみなさい。」と言われて、軍隊の「ほまれ」を煙草ケースから六、七本抜き出して貰った。一本喫ったら少し目まいがしたが、久しぶりで旨かった。

食事も一個の握り飯がうまくなった。

一日二、三回空襲警報が発令され、無気味なサイレンを聴いたが、爆弾の投下される様子はない。

長女は、私に「此処に避難した夜、市中はまだ紅蓮の炎で空も真っ赤になって燃えていた。また、ここへ来て死んだ人が沢山あって、死人を兵隊さんが運んで行って、積み重ねて火葬にした。」と話していた。

午後、担架で運ばれて野天で軍医に傷の治療を受けた。ある日、私が治療の順番を待っている時に、朝鮮人が荷車を挽いて、その母親が荷車の横に付添って、子供を乗せて治療を受けに来た。荷車には一、二歳位の子供が全身を焼かれて眼を掩う悲惨な姿で、裸のまま仰向きに寝かされていた。全く形容のできない痛々しい姿であった。一体どうしてこのように体を焼いたのだろうか、と訝しく思った。

ここの部屋でも隣の部屋でも、また、あちらの部屋でも何か判らぬ大声で喚いたり、喧嘩をしているような声を聞いた。発狂しているのだそうだ。

ある日、ボロボロのモンペを着ていたが、ほとんど上半身は全裸の若い娘さんが、何か咳きながらブラブラと歩いていた。夜になって、この部屋で若い娘さんが二、三人で喚き合い喧嘩をしているのだと思ったら、この娘さんたちもみんな気が変になっていたのだ。あまりにも喧しいので、兵隊さんが取り静めようとしても、なかなか静まらない。夜半頃、やっと静かになった。疲れはてて寝たのであろう。翌朝、兵舎の床下で一七、八歳の娘さんが死んでいたそうだ。

また、ある日発狂した娘さんが、満潮の川へ飛び込んだのを看視兵が発見して、川から引揚げて来たと話していた。私はどうしてこんな訳の判らない状態になったのだろうかと思った。

私の寝ている横に、一〇日余り前、両親と妹と朝鮮から引揚げて帰って来たと話していた一四、五歳ぐらいの男の子が寝ていた。私の意識がいくらか回復した頃、その子供が話しかけた。「私は大手町九丁目の魚市場の近くの土手を歩いていた時、ピカーッと光ったので、川へ飛び込んで、それから此処へ逃げて来た。」と言っていた(多分爆風で川の中へ吹き飛ばされたのだろう)。

それから一両日経って、急に容体が悪くなり、食欲もなく気が変になったのが、夜も昼もうわ言を言いだした。

その頃、その子供の父が探しに来た。子供の枕元には朝の一個の握り飯に蠅が沢山たかっていた。父親は頻りと子供の名を呼んでいたが返書をせず、うつろなまなざしで父を見ていた。父は重箱と水筒を持っていたが、重箱をあけて子供に「喰べ。」と言っていたが、子供は喰べないで、水を欲しがり、「吞ましてくれ。」と言った。そのことを看視の兵隊さんが聞いて「水を吞ましたら駄目ですよ。」と言ったが、子供が頻りと水を欲しがるので、父親は水筒の水を吞まして、「明日は車を借りて来て連れて帰ってやる。」と言って帰ったまま翌日こなかった。その子供は

昼も夜も夢うつつで「子ちゃん」と妹の名を言っはうわ言を繰り返していた。

私はこの子供も近いうちに死ぬるのではないかと思ひ可愛想になった。

私の意識もおいおいと良くなつた或る朝、夜明けのでき事であった。

私の足元に寝ていた婦人が、突然「キヤッ」と叫んだと思つたら、婦人の横に置いてあつた自転車が倒れた。その時、その婦人は私の両足をしっかりと握りしめたので驚いた。その手の冷たさで、足を引きこもうとしたが、私も足の自由がきかず婦人の手は離れなかつた。兵隊が自転車を起こしに来たとき、頼んで手を離してもらつた。婦人はその時刻頃息を引きとられたものと思つた。朝になってその婦人が死んだと兵隊が言つてゐた。朝十時頃、その婦人の主人がこられた。「これは私の家内です。」と、兵隊に言つて何か話してゐた。

その人は官庁か会社勤めの人品のある人であつた。

私が重傷を受けているので、子供二人は兵隊さんに可愛がられて風呂に入れてもらつたり、兵隊さんの慰問品や食物を買つたり、下駄を作つてもらつたりして、大変喜んでゐた。

週番将校は毎朝来て見舞つて話された。

「大分良くなりましたね。頑張りなさい。」と親切な言葉を受けた。

三、四日経つた或る日、自宅の前の坂本さんが探してこられた。妻や他の子供のことも尋ねられたので、妻とは南大橋の辺で別れ別れになつたことを話した。「今何処にいるかは判りません。」「それでは奥さんも多分焼跡へ見へ帰つてこられるでしょうから、お宅の焼跡へ吉島飛行場におられると立札をしておきましょう。見られたらきつと此処へこられます。私方も家財の大部分は灰となりましたが、家内も子供も五日市に避難してあります。元氣を出しな

い。帰りに立札を立てておきます。」と言つて歸られた。

何か判らない特殊爆弾で全市を焼かれても、未だ戦争中なので、敵機はたびたび上空を飛んでいる。偵察だけなのか投弾はしない。しかし、その都度、不気味な空襲警報のサイレンが鳴り、兵隊の誘導で軽傷者や歩ける人々は防空壕に避難した。

私のような歩けない重傷者は、兵舎にそのままにしておかれた。私はもう此処で死んでも仕方はないと諦めてゐた。(後略)

飛行機で脱出、更に救援に飛来(要約)

安沢松夫 (当時・小付第一飛行師団司令部参謀部付飛行班)

広島第五航空司令部における軍管区通信参謀会議に出席する高山少佐を乗せて、八月六日午前七時に、私は99式高等練習機を操縦し小月飛行場を出発、七時四十分に、広島吉島飛行場に着陸した。地上勤務者の誘導により、掩体壕に飛行機を格納してから、司令部に到着報告をするため数百メートル先の防空壕内のピストに行った。そこで電話器を握つたとき、強烈な閃光があり、大音響がした。そして急に周囲が暗い静かさとどざされた。もう死んだかと思つたが、ようやく明るさを取戻すと、私は机の下に伏せていた。壕から出て見ると、実に悠大な雲が天高くムクムクと上昇している。B29四機編隊が高度七〇〇〇メートルで進航している。私の飛行機が戦闘機でないのが残念！この頃、我々は飛行機の消耗をおそれ、奇数日は例え一機でも全力攻撃、偶数日は退避と決めていたが、敵にそれが洩れてゐたのか、今日はまさしく六日、偶数日である。

町の方ではすでに火が見える。会議に出席のために来た飛行機数機やガソリン補給車からも火が出ていたが、皆が必死で消しとめた。私の飛行機は火は出ていなかったが、風防ガラスが全部破れ、胴体は中央後方が一〇度位曲り、方向舵を操作する索がたるんでゐた。避難者が殺到しはじめたころ、私は惨状報告のため飛び立つ決心をした。祈る心で操縦席に入り、整備兵に始動車を頼んだ。心が通じたのかエンジンが廻つた。皆、歓声をあげた。高山参謀が走つて来て乗りこむと、一〇年のキャリヤに賭けて私は慎重に離陸した。時に十時頃で、噴きあげる火煙をくぐつて飛び、幾度も旋回しながら高度八〇〇メートル上昇、運を天に任せて十時五十分頃、小月に帰投した。機を取巻く将兵は大胆さに驚歎した。私の報告は至急電で大本営に打電された。折返し大本営から真相報告に出頭せよと下命された。

一方広島への救援を進言し、十二時三十分、神尾准尉と共に各種救援物資を積み、輸送機(一〇人乗一式双発機)で出発、午後一時過ぎ吉島に着いた。物資を降すと、参謀達を兵庫県の加古川に送ることになり、二時過ぎに離陸した。上空からみる市街は、すでに七〇%火に包まれていた。加古川では着陸してもエンジンを止めず、すぐに広島に

引返した。炎上中の広島上空で徐々に高度を下げる時、引火するのではないかと思われた。僅かに着陸できる幅員を残して避難者が溢れる飛行場に接地したが、まさに生地獄のまっただ中に降り立ったのであった。この仇を打つまでは決して負けないぞと、青年将校の私は歯をくいしばった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救急作業

地区には、救援隊は来ず、救急品などの配給も、被害軽微のため全くなかった。六日、吉島本町一丁目町内会事務所跡に応急救護所を設置し、地区住民で負傷していない者が救護にあたった。なお、一部の負傷者は、聾学校の寄宿舎や吉島飛行場へ避難していった。飛行場内の軍隊の救護所には相当数の避難者が収容され、兵隊によって治療活動が展開された。

死体の収容と火葬・仮埋葬

暁部隊によって、八日から九日へかけて死体の収容が行なわれ、身元不明者は全員、火葬にふされた。火葬した場所は、吉島本町八〇一番地(現在の貯木場)である。遺骨は一緒にして、軍隊がどこかへ持って行った。

なお、道路の啓開作業などということは別にしなかった。

町内会の機能

吉島本町一丁目は、町内会役員が、一部のけが人はあったが、ほとんど無事であったから、幸い機能は停まらなかった。吉島本町二丁目では、竹内町内会長宅に町内会事務所を設け、生き残った事務員によって諸事を行なうようにし、急場をしのいだ。

九、被爆後の生活状況

復旧居住者状況

吉島本町一丁目を除き他地域は火災がなかったので、被爆後三日目ごろから、住居の修理にとりかかった。これらの家は被災地区からの縁故者をそれぞれ多数かかえていた。生活は、主食には困ったが、この地区には農家が多かったため、他町にくらべて、苦しいうちにもわりに恵まれていた。

衛生環境

八工が多数発生した。九月中旬ごろ、アメリカ軍の飛行機が、空から薬剤散布を行なったため、少なくともはしたものの、なお、八工は残っていた。しかし、別に不衛生的なことも起らなかった。

ロウソク生活

夜はまっ暗な生活が続き、ようやく九月に入ってから、ロウソクの配給を受けた。電灯は十月十日ごろ、草津方面から電線をひいてつけた。これは大部分の家が補修程度で点灯できたので、町内の電気工事人によって工事が進められたものである。

疎開世帯・疎開児童の復帰

吉島本町一丁目は、空家が多かったが、八月末ごろから、家主とか他町からの入居者が多く、わりに早く町民が増えた。その他の地域では、被爆前から疎開世帯が無かったため、復帰ということはない。児童については、各自の家が焼けなかったので、九月十七日、学校の先生と一緒に帰町し、各自の家に戻った。

闇市場の出現

広島駅前の闇市場や、己斐・天満橋付近の闇市場へ買出と通ったが、他地区の人ほどの苦境は見られなかった。

十、終戦後の荒廃と復興

九月十七日の暴風雨までには、ほとんどの家が応急修理を完了していたので別段、たいした被害はなかった。

この地区は、幸いに暁部隊航空隊から、住宅補修資財を受けたため、被爆直後から補修にかかり、八月末日頃までには、全家屋の補修が終わっていた。なお、他町からの避難者の中には、そのままとどまって、地区内にバラック盾の仮住宅を建てた者もあった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

土橋町、小網町、舟入町、河原町、舟入中町、舟入本町

町内会別要目

この地区の範囲は、西新町[にしんまち]・西地方町[にしちがたまち]・小網町[こあみちょう]・河原町[かわらまち]・舟入町[ふないりちょう]・舟入仲町[ふないりなかまち]・舟入本町[ふないりほんまち]とし、爆心地からの至近距離は、西地方町で約〇・七五キロメートル、最も遠い距離は、舟入本町で約一・六キロメートルである。

この地区は東側を太田川(本川)、西側を天満川によってはさまれており、明治・大正期に栄えた中島町本通り商店街に隣接して、歴史的にも古い由緒を持つ職人町や、商業地であるとともに、広島市西部の大きな花街もあった。

旧史によれば、西地方町は「もと広瀬村に属し、豊屋町とも称せり。また、この町を豊屋町と称せしは、開府の時、豊工多く住居せしに由る。」、河原町は「昔時瓦工に宅地を賜ひ、子孫永く住して其業を継ぎけるより、瓦焼の名遂に地名となりしといふ。」とあるが、この付近は、小粋な待合や商店が密集し、むかしながらの広島ツ子的な明るい温和な気風をつちかっていた。

西新町・小網町が、これに隣接し、西新町は西地方町と共に、明治十五年に貸座敷業区域として指定され、小網町は明治二十四年に貸座敷営業免許地に指定されて、はなやかに栄えたところである。ことに小網町は、紅灯緑酒の伝統を永く引きついで、歓楽地帯の俗称西遊廓があった。

舟入町は、往古は湾口で、「船舶入津の地」であったと言われ、江戸時代には、刑場のあったところでもある。いわゆるデルタの地先が舟入仲町・舟入本町・舟入幸町となり、そして舟入沖新開、すなわち現在の江波町となった。

被爆直前の各町の内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
西新町上	163	183	907	山崎吾一
西新町下	不明			福原一穂
西地方町	不明			富士谷盛夫
小網町東	不明			田熊一郎
小網町西	不明			福永信蔵
小網町南	不明			梶野
小網町新町	不明			玉本
河原町東上	不明			八木常吉
河原町西	703	750	2,800	二宮貞光
河原町上	不明			松島正
河原町下	不明			藤井完一
舟入町	400	400	1,000	福井照吉
舟入仲町東	400	400	1,300	三上豪介
舟入仲町西				山本政一
舟入本町東	420	420	1,200	岡崎主税
舟入本町西				前宇一
舟入小舟区	不明			新納賢吉

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
神崎国民学校	舟入仲町	羽田別荘 (西部軍司令官官舎)	舟入町
永光寺	舟入本町	劇場寿座	小網町
三光寺	小網町		

二、疎開状況

建物疎開・人員疎開

昭和二十年三月末から、四月五日ごろまでの間に、新大橋西詰から、江波線[えばせん]電車道路まで、道路の南北両側(西地方町・西新町)に面した建物約七〇戸を強制疎開して、道路の幅員を拡大した。その地域の町民の大部分は、郊外あるいは市内各所に縁故を求めて疎開した。

また、昭和二十年七月三日限りの家屋強制疎開で、住吉橋西詰から、観音橋東詰まで(河原町下組・舟入本町東組・舟入本町西組)各町の五間道路を、南北両側建物約九〇戸ほど強制疎開して道路をひろげた。そのためこの地域住民も大部分が縁故疎開をした。

さらに、昭和二十年七月二十八日限りの建物強制疎開で町内(小網町東・同西・同南の各組・新明の四組)全戸の建物約四八五戸、人員約一、八〇〇人が疎開したので、この疎開で消滅した各町の町内会は解散した。

物資疎開

また市外の縁故先に物資を疎開した家庭もあったが、また全く物資疎開をしなかった家庭も相当多数あった。

学童疎開

二十年四月三日、神崎国民学校の第一回集団疎開学童約一六〇人が、山県郡吉坂村の葉王寺・公会堂・阿坂の安養寺・吉木の明覚寺へ疎開した。

同じく四月五日は、第二回、学童約八〇人が、山県郡本地村の専教寺・浄楽寺へ疎開した。

引きつづき、四月七日、第三回、学童約八〇人が山県郡南方村の光雲寺・浄徳寺へ、それぞれ疎開をおこなった。

また、縁故疎開をした学童は一、〇七〇人で、学校残留者は四二〇人であった。

疎开学童の復帰は、十月十九日ごろであった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年四月、神崎警防分団を結成した。

本部員として、分団長西村幸蔵・副分団長高木吾一・高義一の二人および伝令の五人がいた。

消防部には、消防自動車一台・消防手引車一台・トビロ二五本・鋸一〇丁・斧一〇丁を設備し、部長藤井完一のほか、班長五人、班員五〇人がいた。

救護部は、担架四台・救急箱六個を設備し、部長紙田末男のほか、班長二人・班員二〇人がいた。

防毒部は、防毒マスク二三個を設備し、部長綿平孝一ほか、班長二人・班員二〇人がいた。

配給部は、班長一人のほか、班員一〇人で、配給物の仕事にたずさわった。

国民義勇隊

昭和二十年六月、国民義勇隊神崎大隊を創設した。大隊長に西村幸蔵・副隊長福永信蔵が就任し、隊員約三五〇人で、十日市町から江波に通ずる電車道路を中心として、東西両支隊を設置した。

八月六日当日は、東支隊約一七〇人が小網町付近の疎開地のあと片づけのため出動して被爆し、全員死亡した。

四、避難経路及び避難先

避難状況

避難先としては、己斐町・山手町方面、または、佐伯郡五日市町役場方面を指定していた。

避難経路は江波線(電車道路)を南に下るか、川土手をくだって、江波山方面へ避難する。

また、天満橋・福島橋を渡って、己斐方面に避難する経路、および、橋が渡れなければ小舟を利用して南大橋から旭橋に出て、陸路草津・井口を経て五日市町方面へ避難する経路を決めていた。

五、所在した陸軍部隊集団

舟入町羽田別荘が、西部軍司令官官舎及び軍人の集会所・宿泊所になっていた。

なお、二十年六月ごろ、陸軍部隊(大国部隊一〇〇人)が、約三週間ほど神崎国民学校に駐屯したことがあった。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

八月五日夜、隣組の集会を開いていたところもあったが、午後九時ごろ、警戒警報が発令されて解散し、各町内会は、老人と婦女子を防空壕に待避させた。中には、江波方面にいち早く避難した者もいた。男は防空服を着用し、終夜各町内の見廻りをして警戒体制に入り、一応解除されたが、十二時過ぎに空襲警報発令、翌六日二時過ぎに解除になった。

六日朝

六日午前七時九分から同七時三十一分までは警戒警報発令中であったから、各町内とも、各隣組が警戒体制につき、部署のない者は、防空壕に待避した。

七時三十一分には「中国軍管区内上空に敵機なし」と報ぜられ、警戒警報が解除されたので一安心した。

みな防空壕から出て、涼風を入れようと肌着をぬいだ者もあり、また肌身はなさず持っていた現金を、たまたま家において外出し被爆した者、そのまま避難して家の全焼した者、作業につくため急いで出勤したところで被爆した者など、いろいろな事態が発生した。

炸裂

午前八時十五分、一大爆発音と共に物凄い地揺ぎがし、一瞬のうちに家屋は倒壊、または半壊して、突然、町の姿が変貌した。

屋内にいた者は、家屋の下敷きとなり、木切れやガラス片で無数の傷を負った。屋外にいた者は、原子爆弾の光線によって大火傷し、付近の川に飛び込んだ人も多い。そこへ火災が発生して、たちまち地域は修羅場と化した。

はじめ、一機二機と相当の高度で侵入する小影を認めた。南方から飛来したが、空襲警報・警戒警報解除後なので、はじめは友軍機だろうと思っていたところ、すぐに空襲と感づき、おどろきあわてて右往左往した者もあった。

また、住民の中には、市の上空に、白い玉が二つあるのを認めたとたん、大音響と共に炸裂したという者もいる。

小網町付近は、二十年七月二十八日までに建物疎開が完了していたので、被爆当日その後片づけのため、県立第一中学校をはじめ市内の各学校生徒・大竹市・小方町・横川町一、二、三丁目・油谷重工業株式会社・三菱精機株式会社・高密機械株式会社および女子挺身隊などが大勢作業に来ていた。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数(戸)	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数(人)
小網町西				485		369
小網町東						
小網町南						
小網町新明						
西地方町				45		
西新町 南・北	5	小網町付近		25		
河原町下	40	小網町付近		30		
舟入本町東	30	小網町付近		30		
舟入本町西				30		
舟入仲町東	45	小網町付近				
河原町北	20	小網町付近				
河原町東	15	小網町付近				
河原町西	15	小網町付近				

七、被爆の惨状

疎開作業隊の全滅

六日八時十五分、警戒警報の発令もなく、上空を注意している者はほとんどいなかった。

小網町付近の疎開のあと片づけに出勤中の人々は、これから作業を始めようと準備中の者、シャツなど脱いで、すでに作業をはじめていた者、学徒たちは、弁当を一か所に置いて整列していた者などいろいろであった。全員、炸裂と同時に、その爆風にあおられ、大量の解体材木にしたたか打ちのめされた。立っていた者は熱湯をあびせかけられたように感じて倒れ、坐っていた者は、地面に叩きつけられたように倒れた。

この突発事態の中で、ともかく立ちあがり、本川や天満川へ走って飛びこんだ人もたくさんいたが、そのまま死んだ。その他の重傷者・行方不明者も結局は全部死亡したようである。

辛うじて生き残った者は、かねて決められた避難先へ逃げようとしても、路上や橋上は焼けて思うように通れないありさまであり、ほとんどの者が裸体の無残な姿と化したまま、迷い迷い素足で歩いて行ったが、郊外に通ずる道路上には、爆風で吹きとばされた雑多な物が山をたしていた。ある者は防空壕から這い出して見ると、周囲は暗黒の世界であって、倒壊建物がすでに燃えあがっていたという。避難者は、その中を這うように潜って脱出しようとした。どの橋も避難者でものすごく混雑した。天満川の電車鉄橋は、ヒン曲がっていた。

観音橋は、己斐方面へ向って避難する人で重なりあい、押すようにして渡った。ある者は、小舟をあやつって観音町へ、やっと渡った。

橋梁の状況

関係橋梁については、天満橋・観船橋・観音橋・住吉橋など橋桁がゆるんでいたが、いずれも通行には差しつかえなかった。本川橋は破損がひどく、通行危険であった。

羽田別荘

暁部隊漁撈班下関出張所的那須秀雄所長(軍属)は、五日夕方から羽田別荘に会社員の原田某と宿泊して被爆した。別荘は毎夜のように軍関係の会食や懇談で、多数の人が泊り眠っていたが、炸裂下、一瞬に建物が倒壊して、全員が下敷きとなった。

那須所長は、遮二無二、材木や壁を突き退けて脱出、続いて会社員の原田も出て来たが、二人とも全身負傷して血まみれである。既に別荘本館は火を吐き、西遊廓一帯の豪壮な建物が猛火に包まれていて、危機が迫っていた。

その中で、叫び声をあげる女中二人を救出し、庭の防空壕へ運んだが、ここも火に包まれた。瞬時を争う危急の場合で、二人の女中を叱咤して川の方へ逃げさせた。庭の小高い山に、那須所長と原田某が登り、状況を観察すると、周囲一面が火の海で、もはや逃げ道が無い。築山の人造滝の石畳と石畳の間にもぐり込んだ。そこには調理人の老爺が一人、濡れたふとんを被って待避していた。頬被りした手拭が血で染まっている。猛火は築山にも延び、松や芝生が燃え始めた。那須所長ほか二人は、下の池の中に飛びこみ、脛までの浅い水を浴びながら火と闘う。そこへ、三〇歳位の婦人が駆けこんで来た。

「私の子供が、家の下敷きとなって、今焼き殺されている。あの声を聞いて下さい！お願いします。助けてやって下さい！」と、泣きわめく。耳をすましてみると、バリバリ焼ける雑音の中から、「母ちゃん、母ちゃん！」という金切声が、かすかに聞えて来る。しかし、どうすることもできない。婦人をなだめるほかなかった。

四人一塊とたって、三時間余り、池の中にかがみこんでいたが、その間に、逃げだして来た別荘の建物は、すっかり焼きつくされてしまった。

「深い創です。口が開いている。早く手当を…」と、婦人が心配そうに言ったが、那須所長は、どうにでもなれと、もう精魂つきはてた姿であった。

やがて火炎が下火となったので、池から這い上がり、待避壕に行った。しかし、調理人の老爺と婦人は、思い思いに何処へ行っただのか、もう姿が見えなかった。

この羽田別荘の焼跡から、後日、八七体の屍体が発掘されたということである(那須秀雄著「原爆を浴びて」)。
火災発生状況

午前八時四十分ごろ、地区内の各町から発火し、猛烈な勢いで炎上した。風は南方から吹き、火炎は天を衝き、白いような黒いような煙がもうもうとあがった。午後の七時ごろから八時ごろまでに、だいたい焼けるものは焼けつくし、火災も終息したが、翌七日午前中もなお、ところどころに煙があがっていた。

黒い雨

炸裂後、二、三〇分たった八時四十五分ごろから、神崎方面に黒い雨が降りはじめた。だんだん激しくなり、午前九時二十分ごろまで降り続いた。ところによっては、泥雨が降った。しかし、場所によっては、少しばかりしか降らなかったところもあるという。

黒い雨が降り始めて、いちじ火勢がおとろえたように思われたが、晴天になって、再び炎上した。

焼跡の惨状

避難直前、民家から吹きとばされた着物や衣類を入れるコウリ・瓦・板戸などが、空高く飛ぶのを見た者もいる。子供の泣き声・大人のうめき声の交錯するなかを、着のみ着のままに逃げる群衆は、鮮血と泥にまみれており、男女の区別もつかない姿で、今にも倒れそうに歩いていった。

翌七日、ある避難者が一望の焼野原になった町あとに帰ってみると、東部の方は、比治山までが一眼に見通され、その中に市役所や、富国ビルなどの残骸がポツンポツンと黒く立ち、南には江波山が眼前に見わたされた。

足もとには、無数の死体が転がっており、負傷者が日除けの焼トタンを立てて、その陰に並んで寝ていた。

天満川や本川の死体は、みな水ぶくれして、さながら材木を流したように浮きつ沈みつしていた。焼け落ちた町跡は平坦になって、鼻をつく死臭だけが漂っていた。

電柱や樹木は、その中ほどから発火して燃えた。爆風で倒れたのは、倒れたまま燃え、電線はクモの巣のように切断されて落ちていた。

水道栓は破裂して、流れ出るままであった。電車道路は通れたが、電車は、木の部分が全部焼けて、鉄の部分が変形して、路上にその残骸をなげ出していた。電車鉄橋は曲がって自然着火により、枕木が部分的に焼けていた。

朝食前後のことであったから、炊事の残火による発火もあったろうが、熱線のため全く火の気のないところからでも火が燃えだした。特に黒いものがよく焼けた。

黒い瓦が茶褐色に変色したり、曲がって変形したりした。石は茶色に変色してもろくなった。ガラス類は飴のように溶解し、他の物とまじりあって種々の形に変化した。

陶器類の中には、こわれなくて黒くくすぶり、もとの形だけはとどめていたものもあり、土中に埋めていた物はそのまま変らなかったが、防空壕内の物はみな焼けた。

鉄類は焼けて変色し、場所によっては変形して原形をとどめていなかった。町内にある土蔵はすべて倒壊焼失して残影もなかった。

爆風によって電柱は五五度ばかり傾いたり、中程から折れていた。その折れた個所は鋸のようになって裂けていた。

自動車は、窓ガラスを吹き飛ばされ、内部は燃えていた。家の上に吹き飛ばされていた車もあった。

神崎地区では、奇跡的な事象は見あたらない。ただ、被爆して逃げ、血便が出たり、皮膚に斑点が出たりした人でも、現在は至極元気である人もある。

炸裂時の被害

炸裂時の各町被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
西新町上	100	-	-	-	81	11	8
河原町西	100	-	-	-	78	13	11
舟入町	100	-	-	-	62	34	4
舟入仲町東、西	100	-	-	-	44	43	13
舟入本町東、西	100	-	-	-	42	38	20

西新町下・西地方町・小網町東・小網町西・小網町南・小網町新明・河原町東上・河原町上・河原町下・舟入小舟区、以上は不明。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊

翌七日から十五日まで、岡山部隊一小隊が、観音町の県立第二中学校(現在・観音小学校)に本部を置き、救護活動や治安の任についていたが、全壊全焼した神崎国民学校跡内にその支隊を設けて、小網町・西地方町・西新町・河原町方面の救援を行なった。また、小網町天満川土手にも軍の救援隊がいた。

食糧配給

食糧は、神崎国民学校跡の臨時救援部隊が配給した。この部隊は死体の処理にも当たっていた。

街路交通も徐々に整理されたが、なかなか進歩しなかった。

治療所

八月十日ごろ、神崎国民学校跡に軍隊用の簡単なテントを張り、簡単な治療所ができて、連日、負傷者の手当を行なったが、消毒の赤チン塗布程度で、薬品らしいものはあまりなく、治療する医師の中には、自分自身はかなりひどく負傷している人もあった。治療所の付近は探索者で連日混雑した。

道路の啓開

舟入町一帯は全焼し、当時の町内会役員が、ほとんど死亡しているので道路の啓開については不詳である。

小網町・西地方町・西新町・河原町付近では、特別に作業隊来援の様子はなかったが、必要に応じて、生き残った住民の手により、少しずつ片づけられていった。

火葬状況

死体の火葬は、舟入町付近では八月七日ごろから始めた。終了したのは判らない。舟入本町に死亡者の名前が書き出されてあったが、確実なものとは言えなかったようである。

神崎南方(舟入幸・川口町付近)の負傷者は、舟入川口町の唯信寺に集ったが、毎日つぎつぎと死んでゆき、身もとの判る死体は、それぞれ関係者に引取られた。

火葬と埋葬

火葬場所は、唯信寺・江波山麓・射撃場・天満橋の東詰・小網町電車停留所の川端などであった。

小網町・西地方町方面では、八月十日ごろから八月二十日ごろまで、住民四、五人の手をかり、小網町の三光寺・

西地方町の浄国寺などをはじめ、各町のところどころに死体を収容し、火葬にした。これらの遺骨は、神崎国民学校の運動場の一か所に仮埋葬し、慰霊塔を立てていたが、後に西地方町浄国寺の墓地に埋葬した。

火葬をするときは、地上に古木などの燃料をならべ、その上に死体をならべて、火をつけた。死体の上に古トタン板を置いて火のまわりを良くしたこともあった。

人を焼いたこともない者が焼くので、焼けたかと思って翌日骨をあげにゆけば、くすぶっただけで焼けておらず、また木を集めて焼き、二日ぐらいかかったのもあった。

火葬・仮埋葬するとき、付近の人は皆あつまり、線香があればたてて合掌し、念仏をとなえた。だが線香を持っている者は、ほとんどいなかった。

慰霊

現在、小網町三光寺境内に建物疎開作業に出動して被爆死亡した人々三六九人のため、木製と石の慰霊塔が建っている。

遺骨は親戚縁故者が処理して、それぞれ引取ったが、無縁仏も多かった。小網町三光寺では、毎年八月六日、同寺が追甲法会を厳修し、天満川でとうろう流しを行なっている。

町内会の復活

各町とも壊滅、町内会長もほとんど死亡し、町内会の機能は、まったく停止した。辛うじて生き残った人々が集り、さしむき神崎聯合町内会会長に舟入仲町の風早謙が就任、幹部に舟入本町東組中田文一・舟入町谷口寅吉・小網町松垣渉・三光俊水らがなり、早速食糧その他の物資配給に尽力した。

食糧対策

食糧といっても「江波だんご」であった。事務所は舟入本町東組中田文一宅の近くにバラックを建てて設置した。そのうち、復帰町民が増加して、東部・西部・北部へ聯合町内会支部を設置し、転出などの事務を取扱った。二十一年六月ごろ神崎消費組合を設立し、配給物資を取扱った。後に、食料品業者が取扱うようになり、次第に常態に復していった。

九、被爆後の生活状況

復帰状況

翌七日に帰って来た者もあるが、だいたい九日、十日ごろから、ごくわずかの人たちが、ぼつぼつ帰って来はじめた。八月末ごろはまだ、各町内とも、五、六世帯から多くて一〇世帯ばかりが復帰していた程度である。

復帰者は、郡部に親戚知人のない人で、焼跡からトタンを集めて、焼け残りの木切れを拾い、バラックを建てて住んだ。

食糧

食糧は毎日のように「江波だんご」で、時おり、さつま芋が配給された。

たまたま「米」の配給があると、みな大喜びした。

ハエの発生

八月十日ごろから死体にウジがわき、ハエが多数発生した。人体の負傷個所にたかって、ゴマを撒いたように集って来た。駆除のための特別の薬はなかった。九月初め、占領軍が飛行機で駆除剤を撒布してから急にいなくなった。

原爆症

このころから原爆症の様子があらわれだして、下痢などをもちやす者が多くなった。

生活物資

生活物資は、ひどく欠乏していたが、どこかで仕入れて来た者がお互いに分けあった。特に米は、申訳程度の配給のほかは、入手困難であったから、鉄道草や芋づるを食べて足したり、僅かに残った疎開品を持ちかえて農家へゆき、米と交換してもらったり、あるいは、手みやげにして気嫌をとり、やっとならって買ったりした。それも乗物が不便で、遠くまで徒歩で買出しに行った。

ロウソク生活

ロウソクの配給も少なく、夜間必要に迫られた用事のあるときだけ使い、あとは常時暗やみ生活をした。郡部につながりのある者は、そこから、ロウソクなどを入手した。

電灯のついたのはハッキリとはわからないが、二十年十二月ごろ、舟入本町小池電気店の応急工事によって点灯

したところもある。

疎開世帯・疎開児童の復帰

復帰したい者も、住む場所がないので帰れず、さし迫った者がポツリポツリ小屋を建てて帰って来るという状況であった。

疎開児童は、父兄が勝手に連れて帰った児童もあるが、神崎国民学校の記録では八月二十日ごろからとなっている。しかし、帰って来ようにも帰る家がなく、親戚縁故の家に世話になった者が多かった。

闇市場

終戦になってから軍需品の放出で、毛布・外被などの配給があったが、なかなか手に入らなかった。多くは、広島駅前付近の闇市場へ買出しに出かけた。土橋地区で、市場的なものが計画されたが、人の集まりが悪かった。天満橋のほとりで十一月初めごろから軍の放出物資が売られていた。

家財は全焼し、着のみ着のままの者が大部分で、交換する品物もなく、住民は食生活に日々苦しみあえいだ。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨で、天満川と本川が増水し、観音橋は通行不能になった。

十月八日の大豪雨のため、天満川と本川がまたもや増水して、天満川では天満橋・観音橋が落ち、本川では本川橋・新大橋・住吉橋が落ちて、市の東部方面へゆく時は、相生橋を渡ってゆかねばならず、西部己斐方面に行くには、横川橋を渡って山手町に出て、己斐町に行かねばならないことになってしまった。苦心して建てたバラックが、浸水倒壊し、ようやく入手していた少量の物資も腐敗した。盗難事件は頻々としておこり、今後どうして生きていこうかと途方にくれた家族もたくさんあった。

経済活動

経済活動といえるものは、二十一年の四月から六月ごろにかけてようやく始まった。

土橋付近(現在の土橋マーケットがあるところ)に食糧品を扱う人々の店ができ、土橋電車停留所付近から江波線の電車道の両側から舟入本町五間道路付近にかけて逐次発展していった。

バラック小屋建つ

舟入仲町西(土手付近)に、八月七、八日ごろからバラックが三戸ばかり建ち、続いて電車道にもぼつぼつ建ち、河原町にも建っていた。しかし、各町とも、だいたい九月初めごろから焼トタンのバラック建てがごく少数ながら建ちはじめていた。

その後、住宅公園からバラック建てのセットが抽せんによって売り出されて、幾人かが建てた。

中には、市外で建築資材を求めて来て建てた人もあるが、しばらく後のことであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

舟入幸町、西川口町、舟入川口町、舟入南町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、舟入幸町[ふないりさいわいちょう]、舟入川口町[ふないりかわぐちちょう]とし、爆心地からの至近距離は、舟入幸町(住吉橋から少し南へ下る地点)で、約一・六キロメートル、もっとも遠い距離は、舟入川口町(現・県立広島商業高等学校前)で、約二・八キロメートルである。

本川と天満川にはさまれた舟入幸町および舟入川口町は、もともと舟入本町から続く地先で、往古、まだ江波山が、海中の独立した小島であった頃には、竹やぶの繁茂する海辺であり、藩用の船舶も、材木を積んで出入りしたところであると旧史に記すが、戦前、舟入川口町も南部あたりは、なお、畑が多く散在していて、往年の田園地帯のおもかげをあちらこちらに残していた。現在は、商店を含む静かな住宅地区として飛躍的な発展を示している。

被爆の当日、この畑の多い付近に避難者が殺到し、収容所に指定されていた舟入川口町の唯信寺は凄惨をきわめた。

なお、被爆直前、この地区の建物数は約一、六一一戸、約一、六三世帯、人口は約六、六二六人と推定されるが、これを町内会別に見ると次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
舟入川口下	168	168	705	司原光一
舟入川口東	162	162	750	高橋績
舟入川口中	235	233	871	中山直人
舟入川口公園組	105	110	390	吉川秀夫
舟入川口西	130	136	540	(兼連合町内会長)大内義直
舟入川口南	189	189	745	
舟入幸町東	216	206	872	伊藤一三
舟入幸町中	195	195	913	佐々木強平
舟入幸町西	211	232	840	脇田長市

地区内に所在した主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
舟入国民学校	舟入川口町	舟入地鎮神社	舟入川口町
市立広島高等女学校	舟入川口町	隠居ゴム会社	舟入川口町東
唯信寺	舟入川口町	日本理化学工業広島工場	舟入川口町東
称専寺	舟入幸町		

二、疎開状況

人員疎開

舟入川口町は、一帯が住宅地であり、南部は家がポツンポツンと建っていたような田園地帯であったから、住民も疎開する意志があまりなかった。

舟入幸町でも、あまり疎開しなかったが、両町とも老人や子供の中には、郡部へ疎開していた者もあった。

物資疎開

住民の疎開がなかったので、必然的に物資の疎開も考えていなかった。むしろ安全地帯と思われていたから、仏壇や貴重品を唯信寺[ゆいしんじ]に寄託した者が多く、それらの物品で寺の本堂は埋まった。その上、重傷患者の収容所として指定されていたから、薬品類や医療器具がたくさん積みこまれていた。

学童疎開

学童疎開は、市当局の方針に従って実施された。

疎開先は、安佐郡狩小川村・福木村の寺院であった。このほか縁故疎開した児童もいた。

三、防衛態勢

防空防火対策

防空防火については、他地区と同様に平素から訓練をおこなった。各家庭に貯水槽・防空防火器具を備え、それ

ぞれ防空壕を造っていた。特に防火訓練では、地区内を南北にかけて貫流している大きな下水溝があったので、この水を利用して訓練を実施した。戦争末期には、家庭の主婦を中心に、舟入国民学校校庭で竹槍訓練(佐伯栄指導)を実施した。

当時、舟入学区連合町内会事務所が舟入川口町唯信寺に、また、警防団本部が舟入幸町食糧配給所に設置されていて、防衛態勢の充実につとめた。

避難対策

地区の避難先としては、舟入川口町は江波港町の元県立広島商業学校と定め、負傷者は応急治療所として指定された唯信寺にいくよう決めていた。

舟入幸町は江波射撃場、または、佐伯郡八幡村(現在五日市町)に避難する計画であった。

なお、地区内に所在した陸軍部隊・集団はたかったようである。

四、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日深夜からの警戒警報とか空襲警報に対しては、これまでと同様な態勢をとって備え、特に変わった活動は行なわなかった。

その夜は、各町内会義勇隊幹部全員が、大内大隊長の召集により、舟入警防団分団本部の二階に集合して、翌六日の雑魚場町の建物疎開作業現場へ出動することについて協議した。協議内容は、出動人員の割当てを各町内会から二〇人、大隊長代理として吉川町内会長が引率すること、集合場所は警防団本部から南寄り、電車道東側、集合時間は午前七時三十分とすることなど決定した。

六日朝

六日朝は、建物疎開作業の動員で、約二〇〇人が舟入幸町の電車道に集合し、大内大隊長の訓辞があって出動した。これら動員で出動する者のほか、通学生・勤労者なども平常どおりの服装支度で、なんの不安もなく出ていった。

浜岡辰夫(舟入幸町)の談によれば、「朝出勤途上で、建物疎開作業に出動のため集合していた人々を見たが、大部分が舟入幸町の婦人だったので『家を壊す作業だから気をつけなさいよ。』と注意して別れた。被爆後に聞くと、これら婦人は雑魚場町の疎開現場で被爆し、即死した者や行方不明になった者もあり、重軽傷者は、着衣がボロボロに焼け、皮膚はむごくだれた姿で、唯信寺の庭に命からがらたどりついた。」という。

なお、この地区は平常から、空襲のときは直ちに避難できる態勢の服装でいることに決めていたので、家にも、とっさの場合に、すぐ外に逃げ出られるよう訓練していた。

六日の朝の警戒警報解除後も、そのままの非常服で大部分が屋外にいて被爆したのであった。

六日朝の疎開作業への出動状況は、次表のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について	
	出動人員概数	出勤先
舟入川口町川西	20	雑魚場町
舟入川口町公園	20	雑魚場町
舟入川口町川中	20	雑魚場町
舟入川口町川東	20	雑魚場町
舟入川口町川南	20	雑魚場町
舟入幸町東	20	雑魚場町
舟入幸町中	20	雑魚場町
舟入幸町西	20	雑魚場町
合計 160人		

五、被爆の惨状

炸裂下の状況

原子爆弾の炸裂で、家は波を打つように上下に震動して、屋外へ出ることすらできなかった。二階の床が階下に抜け落ち、家財道具は飛散し、ふた目と見られぬ惨状を現出した。

倒壊した家屋もあり、たとえ倒壊しない家屋でも、柱と梁の取付けのホソが折れたりして、崩れるのも時間の問題ではないかと思われるほどの被害であった。

このような状態であるから、家屋の下敷きとなって圧死する者もあったし、生きている者もほとんどが負傷していた。しばらくして爆心地に近い北部の舟入幸町から火災が発生し、舟入幸町に接している舟入川口町の北部(広島

市立高等女学校付近)まで燃えひろがって止まった。この一帯の住民は川下の江波町へ避難する者が多かったが、市中心部からの避難者と合流して、おびたしい人の波がつづいた。その大部分は重傷者が多く、電車線路には、避難途中で倒れた負傷者が、そのままたくさん転っていた。

舟入幸町の罹災者の体験では、炸裂後、家屋が倒壊して下敷きになった者が、やっと這い出して見ると、付近の家は全部倒壊しており、方角もつかめないほど町内の様子が一変していた。しばらくして火災になったが、どうして出たのかわからない、という状況であった。

一方、本川河岸の舟入幸町山陽木材防腐株式会社付近の住民の中には、筏にのって江波方面へ逃げた者が相当数あった。

また、舟入川口町齊藤好の話によれば、舟入川口町北部は全焼したが、南部は火の手が所々に上がったのを、みんなで消しとめて、ついに延焼から免れた。そして、地区内の者はほとんど郡部や市の周辺部へ避難して、地区内にふみとどまった者は少なかったという。

また、高橋績(舟入川口町東組)の談によれば、住民の大部分が、警報解除後も非常服装で屋外にいたので、炸裂したときも直ちに避難することができた。これがため熱線によって火傷する者、負傷する者が多かったけれども、家屋の下敷きにならずにすんだので、その犠牲者が比較的になかったともいう。

なお、舟入川口町一帯の残留老は、六日夜、倒れかかった家の中で仮眠をとったが、他地区からの避難者は、電車線路や畑のなかなどにそのまま寝た。

被害状況

炸裂時の瞬間的な家屋被害・人的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)		人的被害(約%)		
	全壊	半壊	即死者	負傷者	無傷の者
舟入川口町	50	50	10	60	30
舟入幸町	90	10	15	60	25

火災発生炎上の状況

炸裂後、地区内の火災発生炎上の状況については、次のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
舟入幸町	立市住吉橋病院	午前九時ごろ	町内全焼	正午
舟入川口町	北部にあたる舟入幸町に近いところ	早い地域は午前九時ごろ、遅い地域は午後三時ごろ	北部は全焼。電車線路より、東側は午後三時頃から燃える。南風であったので北から延焼してくるのがおそかった。南部は板塀が炸裂直後燃えていたが消し止めた。	夕方

雨

被爆当日、雨は降らなかった。だが翌月になって、油性の含まれた雨と思われるのが降って、この雨のために、また家が燃え出したので不思議に思った者も多い。

放射熱線

原子爆弾の熱線により、唯信寺境内にある墓碑には、爆心地に対して北東側に面した部分にアワ状のザラザラしたような傷痕がついた。

放射熱線によって、舟入川口町南部の板塀が燃えはじめたので、すぐに消した。また、同町の日本理化学工業会社の酸素タンクに立てかけてあったボンベ三本が、タンクの表面にその影を焼きつけていたが、タンクは爆発しなかった。

爆風爆圧

唯信寺と舟入国民学校を結ぶ線路が爆風の被害ではもっとも強かった。

舟入川口町(当時・公園組町内会区域)について、齊藤好の談によれば「私は熊野製缶工場に勤めていたが、出勤して会社で被爆した。まもなく自宅が心配になり、早速帰宅してみると、自宅の階上は後へびっくりにかえって飛んでいた。階下だけが残っていたので入ったら、敷いてあった畳が天井へ吹きあげられてブラ下がっていた。戸・障子はこわれて、室内にあった家財道具は散乱していた。」という。

また、高橋績の語るところによれば、「舟入川口町北部ではあるが、縦貫している市内電車江波線より東側の地域においては、炸裂してから倒壊するまでには若干の余裕があった。時間にして三分から五分ぐらいして倒壊したようで屋内にいた者も、外に出ることができたのは、これが幸いした。」という。

舟入川口町で被爆

亀田富子(広島市舟入南町二丁目四七)

警報が解除になったので、私はすぐ近くの畑に出て草取りをしていた。すると飛行機の音がする。しかも敵機の音らしく聞えたが、機影は全然見えなかった。しかし、何か横長の銀色の物体が三個ほど天に浮いているのが見えた。

私は不審に思って、太陽のまぶしさに両手をかざし、天空を仰いでいたところ、突然、「ピカーッ」と来たので、「やられたーっ」と思ったと同時に、大地に伏したのである。暫らく目を閉じてジットしていた。それは万雷も消えたかと思われるような静寂な感じであった。

この「ピカーッ」と来た閃光の色はよく覚えませんが、とにかくきつい光であった。しかも突然の閃光で、自分一人が狙われたかのような感じがした。そして閃光に当たった所の皮膚はすぐに焦げて、火傷の痛みを感じた。

また、閃光で失明した人もあった。しかし私は非常に機敏に目を閉じたものか、まぶたも眼球も焼けなかったが、その代りに、目以外の顔面やのどくびや両腕などは火傷したのである。

其後しばらくひれ伏していた私は、何事もなさそうなので起き上がって見ると、着ていた上の服が焼けて小さい孔が一杯あいていた。また黒味がかかった綿のモンペをはいていたが、その上部の前面が大きく焦げて、孔だらけになっていた。でもその焼け焦げる臭いも煙も熱さも、私には何の感じもなく全然判らなかつた。それから畑に打ち込まれた杭なども、割れ目から炎が出ていたから、土をかぶせたり、ぶつつけたりして消した。私には原子爆弾の炸裂音が聞えなかつたから、何事かわからなかつた。

そして、閃光や轟音に次いで爆風があつて、知らぬ間にかぶっていた私の麦ワラ帽も、吹っ飛んでなくなっていたし、私たちの寮も家屋の中央部が倒壊していた。そして、この線上に当たった近所の家屋も、みんな倒壊していた。

なお付近の家も、みんな一旦浮き上がって傾いたり倒壊したりしていて、人間も尻が浮き上がったり、吹き飛ばされたりした者が多かつた。

以上の光線や熱線、爆風などのその線上に当たっていたものは、みんな大小の被害を受けた。

畑から帰った私は近所の人にすすめられて、火傷の手当てを受けに舟入国民学校に行くことにしたが、途中でそれは駄目であることが分つたので断念し、今度は江波二本松にある陸軍病院に行って手当てを受けた。翌日は江波国民学校に行って、医師の手当てを受けた。

私が病院に行く途中、電車道に出るまでに一二、三歳位の尻からげしたような娘さんが一人、吹き飛ばされたものか倒れて死んでいた。また閃光が来た時道を歩いていた人は、北側の上半身が焦げていた。露出部は火傷して黒褐色になっていたし、また焦げた皮膚が剥げてブラ下がっていたり、衣服を着ていた者は、衣服が焦げて孔だらけになっていた。負傷者の中では火傷者が一番多く、そして誰とも分らぬような怪我をして、腫れて血だらけの者も多かつた。

なお被爆者たちはみんな電車道を、南へ南へ小走りで逃げて行った。また負傷者は、江波二本松に在る陸軍病院をさして行くのであつた。私が電車道に出る途中で見たのであるが、電車道の歩道の並木(プラタナス)が「ザーッ」という音を立てて行くような感じで、北から南へ黒い風が流れて行くのであつた。

次に爆弾が落ちてから、暫くすると町の中から煙が上がり始めて、だんだん天が暗くなり、遂に全市が大火となつて来た。

私が陸軍病院で手当てを受けて外に出て見ると、もはや被爆者が一杯で、中には声をあげて苦しんでいる人たちもあつた。そして負傷者ばかりではなく、死者もいたのである。

それからわが寮に帰る途中、被爆による火災の煙や、ときどき爆弾の炸裂するような音が聞え、町の空は一面に曇つて来て、無気味な火煙におおわれ、何だか広島の天地が、異様に感じられた。

私が病院からやっと寮に帰りつてからのこと、火傷に水は禁物と聞かされていながら、非常に喉が乾くのでついに堪え切れず、ウドン茶碗に一杯水を汲んでもらって飲み干したのである。その水の甘きことは何ともたえようがなく、これほどの甘いものが他にあるだろうかと思つた。しかも火傷に少しの害もなかつたことは幸いであつた。また夕方ごろであつたか、炊出しの握り飯の配給をいただき、みんなと感謝しておいしく食べた。

いよいよ夕方も迫つて来たので、主人たちが野宿の仕度をした。私が被爆した畑の端に、古板を並べ、破れた畳を敷き、蚊帳をつるして寝ることにしたのであるが、市中の大火災の音と、天を焦がす明るさに、終夜一睡も出来

なかった。それから後もこの野宿を続けたのである。

とにかく医者も薬も間に合わなかったのが実状であるから、致し方なく民間療法を試みた者が多かった。実は私も、目が腫れ、潰れて歩くことも出来ず、医師の手当てだけでは、なかなか直らないので、三日目から民間療法を試みた。それは油に塩を混ぜて患部に塗りつける方法を行なったのである。その結果は冷えて気持ちがよく、直りも早くて成績がよく、十八日ぶりにいよいよ全癒したのであった。

六、被爆後の混乱と応急処置

この地区には救援隊は来なかったようであるが、全焼をまぬがれた地域では、住民一同が協力して、下敷きになっている者を助けだしたり、また火災の延焼を防ぐために活躍した。

にぎり飯の配給は、当日、農村から送られて来たところもあり、翌日昼から搬入されて配給されたところもある。

唯信寺の混乱

この地区では、いわゆる仮設の応急救護所は設置されなかった。しかし、戦争末期に唯信寺が負傷者救護所に指定されていたから、この地区内から出動していた建物疎開作業隊員の生き残った負傷者が、放心状態の中にも隊列を作って、唯信寺めがけて帰って来た。それに市中央部、殊に土橋以南の多勢の負傷者が、この作業隊員と合流して、なだれ込むように殺到して来た。引率責任者吉川大隊長代理は、舟入川口町の自宅近くの畑まで、瀕死の重傷をかえりみず隊員を誘導して来て、ついに倒れ、まもなく死亡した。

これらの中には、県立第二中学校の生徒を中心に、多数の女学生が避難して来ていたりして、唯信寺の境内は一杯となり、ついには本堂・庫裡までも解放して収容した。ついに唯信寺に収容しきれなくなり、元県立広島商業学校へ向うようにと教えて行かせたのも相当あった。

唯信寺の収容者に対する治療は、医師が一人もいないので、同寺の家族の者や町内会事務所の職員などが行なった。そのうち死亡者が続出しはじめたが、翌七日からの火葬もこれらの者で処理した。凄惨な戦場そのままの光景が約一か月間にわたって繰りひろげられたが、唯信寺のこの間における収容者数は七六二人で、そのうち死亡した者が三五〇人内外であった。

収容した負傷者はみんな非常に悪寒を訴えたので、寺が所有する客用のふとんや家族のふとん・敷布・座ぶとんをはじめ、終りには、日の丸の旗・洋服・着物など、寺物全部を提供した。

なお、収容者のうちに妊産婦が二人いて、境内でそれぞれ男子を分娩し、大内住職が名づけ親となった。

道路啓開

地区内の主要道路は、町内の者で応急的に整理をおこなった。そのうち他へ避難していた者が次第に復帰して来たので、各自の家の周辺を整理するようになって、自然に復旧した。

死体収容

六日当日、すでに軍隊が出動して来て、死体の収容を行ない、江波線電車軌道に運んで来ては、ずらりと並べた。また、川には、たくさんの死体が流れて来たのでこれを引きあげていた。なお、軍隊は曙部隊と思われる。

しかし、軍隊が処理していた死体の確認は、どのようにしていたか不明である。

唯信寺へ避難して来た負傷者は、被爆後一か月半ばかりのあいだ、毎日一〇人から二〇人が死んでいったが、その姓名や年齢をはじめ、いろいろな記録は、現在なお、唯信寺に保存されている。

しかし、人名確認がどうにかできたのは、地区内の関係者だけであった。死亡者のうち、身元不明者については死亡したとき、推定年齢を書いた紙と遺品とを遺骨のかたわらに置いて安置したので、遺族や知人が探しに来たとき、遺品と年齢がまちがいなしと認められて持ち帰ったのが多い。このようにして、最後まで引取り者もなく残った遺骨は僅かであった。

火葬・埋葬

火葬、仮埋葬は、八月七日ごろから十月中旬ごろまで行なった。場所は、唯信寺の境内および唯信寺の西北西の畑の中であった。

地区外の者の死体の火葬は、唯信寺が行ない、地区内の者の死亡者は、各自の家族によって行なわれたが、死亡前でも負傷者の患部は腐ったようになっているので、死亡したときは腐乱するのも早かった。それで検視などを行なわれることなく、できるだけ早く火葬にふした。火葬に用いる焚木がなかったので付近の倒壊家屋の木材などを集めて来て使った。

遺骨の安置と慰霊

唯信寺境内に慰霊碑を建て、無名の遺骨を安置した。ここには、唯信寺収容所で死亡した者だけでなく、地区内の各所で死亡した者の無名の遺骨も納められた。

町内会の機能

地区内の各町内会の機能は全く停止状態となった。郊外にほとんどの者が避難したので、住民の数は少なかったが、被爆後一、二日してから、舟入連合町内会事務主任一色匠および加藤の息女某が、唯信寺境内へテントを張って事務を再開した。そして、大内連合町内会長を中心に生き残った二、三人の町内会長が漸次集まり、民心の安定と町内会事務などの対策について協議した。

当地区は、市の南端であったためか、食糧の配給が遅れたため、空腹をかかえて、畑の中に蚊帳をはって不安におののく幾日かが続いた。罹災者らはさながら餓鬼道の様相を呈するに至り、大内会長は英断をもって生き残りの全町民に指令を発し、「畑に作ってある物は、生き延びるために何物にかかわらず取って食うべし。」と伝達し、辛うじて飢餓をしのぐことができた。

これを伝え聞いた某農区長が、大内会長に怒鳴りこんで来たが、この際は、やむをえないことであった。

神崎連合町内会の高会長が、被爆死し、また他の多くの町内会長も同様の運命となったので、大内連合町内会長が、これを兼務することになった。後に配給品などの事務や、江波地区の連合町内会事務も、唯信寺の事務所で取扱うようになったが、当時、大内会長は、広島市町内会連盟事務局長も兼ねていたから、事務所は繁忙をきわめた。

七、被爆後の生活状況

早期の復帰居住者

舟入幸町は全壊全焼したので、しばらくのあいだは誰れもいなかった。殊に、放射能が残っているというので、郊外へ避難した者も、帰りたいが帰れなかった。それでも、勇敢な者は、焦土の隅っこの方に、二、三か所住んでいたようである。

舟入川口町南部(市立高等女学校から下)の方は、全壊か半壊家屋で、そのまま焼けない家屋も多かったから、飛散してはがれた屋根や柱を補修したりして、ともかく使用できる部屋を作り、そこに入居した者が多い。

被爆直後は、大工も左官もおらず、建築資材も入手できなかった。家らしいものが建ちはじめたのは、バラックにしる、二十一年初めごろからではなかったかと思われる。中には、四国の伊予から大工を呼んで建てたという者もあった。

困窮生活

バラックの生活状態は非常に悪く、配給品は少なく、また、闇物資は高値を呼んだので、生活が極度に窮迫した。このような状況が、いつまで続くのか判らないため、ようやく避難先から復帰しても、焼跡に住みつけず、田舎へ再びかえった者もあった。

焼跡には、泥棒もたくさん横行し、無警察状態であったから、バラック生活は、常に不安と危険におびやかされ続けた。

八月末ごろの居住世帯数ははっきりしない。舟入幸町には全く無かったように思われる。

八工のの多数発生

八月末ごろから九月へかけて八工が一せいに発生した。体の前面は追っ払うが、背筋は追えないので、まっ黒になるほどとまっていた。被爆直後、地区に入った亀田正士の談によると、「焼跡に残っている死体に、大きなウジがわき、腐肉を喰っていた。一見、形は人間だが、その形でウジが一面に取りついていた。腐肉を食い終ると、また次の死体へウジが群をなして移動していた。」という。

しばらくして、飛行機からDDTが撒布されて、ウジも八工もいなくなった。なお、ノミ・シラミはいなかったという。

生活物資

六日当日の夜、にぎりめしが配給された。

舟入幸町や舟入川口町の北部の家屋で、全壊全焼して、郊外へ避難した者以外、南部方面は、家が傾いた程度で、大部分、農家であったから、その後の特別な配給はなかった。しかし、衣料品・日用品には極度に不自由した。

暗い夜

ロウソクの配給もなかったし、代用の他の油もなくなり、行き詰って、倒れたり折れたりした電柱のトランスの

油を抜きとり、布地に浸して灯火に使ってすごした。やっと、九月末ごろに、応急的配線で電灯がついた。

復帰状況

六日当日、郊外へ避難した者の多くは、全焼地区へは一年も二年も本格的な復帰をしなかった。疎開児童も、縁故先へそのままとどまっているのが多かったようである。

食生活

罹災者のほとんどが筍生活で、農家へ行き、米と物々交換をした。ただ、地区南部の農家は、他の被災者より幾分か食糧の面では助かったようである。

そのうち広島駅前や天満町に闇市場ができて、金で欲しいものが買えるようになったが、新円の切替えで思うように買えず、苦しい生活が永くつづいた。

八、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の台風で、半壊家屋の倒れたのが多かった。この台風と十月八日の豪雨による浸水は幸いにしてなかったが、爆風による屋根や壁の破損がひどく、物々交換生活でもこれだけとは、残っていた数少ない着物や、保存していた書籍などが、たくさんぬれたり腐ったりした。

また、強盗も多く、灯のない暗やみ生活の中で、罹災者は不安にかられながら、深い虚脱におそわれたまま、ただ生きているだけであった。

なお、唯信寺収容所では、時日の経過とともに死没する者、小康を保って疎開先を求めて立ち去る者など、一応、混乱もおさまったころ、この台風で本堂も庫裡も全部倒壊し、一切のものを無くした。寺も被爆者と同様の運命をたどったと言えよう。

この頃でも、唯信寺の墓地の隅の天幕のなかに、どこへも行くところのない負傷者が一四、五人いたが、台風による被害はなかった。

経済活動

舟入地区では、十月ごろ以降、露店式の闇市が天満町や横川付近にできたので利用者もいたが、もっとも多く利用されたのは、広島駅前の闇市場であった。なお、露店市場が、バラックでも家らしい構えになったのは一、二年後のことであった。

売っている品物は、食べものをはじめとして、日用品・医療品・古着などが主で、古着は、復員者がかついで帰郷した旧軍隊の物資や放出された毛布・シャツ・袴下・軍服・靴・手袋などさまざまであった。プカプカの航空服などもたくさん売られた。

バラックの建ち始め

十月ごろからバラックの家が建ちはじめた。当時は、大工職人が不足していたので、大部分のものは自力で、どうなりこうなり建てた。

倒壊しなかった建物の補修には、屋根にもっとも困った。何とかソギや杉皮で葺いたが、すぐ雨漏りして弱った。補修するにも、材料の入手が困難なため、土壁の落ちたところは板囲いをしたり、戸障子などは、倒壊した家屋の使えるようなのを拾って持ちかえり間にあわせた。

翌年一月か二月ごろに、半壊家屋はこわすことになり、そのこわした古材を補修材料に使用した。

九、その他

家屋が倒壊して、火炎があがるまで、まず火炎も煙も下を這ったので、その煙にむせて死んだ人も多い。煙は、壁土や埃のまじった濃密なものであったから視界はまったく利かず、煙にさえぎられて中に入れず見殺しになった者が数知れずいた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

江波東町一丁目 二丁目、江波本町、江波南町一丁目 二丁目 三丁目、江波栄町、江波沖町、江波西町一丁目 二丁目、江波二本松町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、江波港町[えばみなとまち]・江波東町[えばひがしまち]・江波本町[えばほんまち]・江波南町[えばみなみまち]とし、爆心地からの至近距離は、江波口の舟入変電所付近で約二・六キロメートル、もっとも遠い地点は三菱重工株式会社広島造船所の進水台で約四・八キロメートルである。

江波はもと広島湾の孤島の一つであって、旧史にも「江波島、船舶輻湊之所、芸洲四通之要津也(芸備国郡誌)」とある。すなわち、大小の船舶が泊まる「天造の要害」であったし、また海の幸を誇る漁民の集落地区でもあった。

太田川デルタの発展に伴い、ついに陸繋して、大正五年七月から江波町として新発足した。

現在では、本川と天満川にはさまれたデルタの南端に位置を占め、伝統的な漁業でさかえている。殊に浅海養殖が根幹となり、ノリやカキの生産は、広島名産として全国に名高い。

地区内には、これら水産業のほか、戦時中は、陸軍軍需品支廠江波集積場・第一陸軍病院江波分院があった。また、県立広島商業学校(被爆時、同校は陸軍兵器学校となっており、皆実町広島県立師範学校々舎に移転していた。)が江波町に、広島管区气象台が江波山にあり、海面埋立地には、三菱重工株式会社広島造船所の大工場が活況を呈しており、戦後もまた、瀬戸を眺める平穏な姿のなかに、広島市発展の重要な役割を受けもっている。

被爆による被害は全域に及び、建物はほとんどが半壊以上で、飛石的に三か所から火災が発生したけれども延焼せず、被害が僅少にとどまったことは、この上もない幸せであった。

被爆直前の地区内総建物数は約一、一二五戸で、世帯数一、二六九世帯、人口五、七七三人であった。なお、町別内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
江波港町	330	359	1,129	桐原富次郎
江波東町	214	226	964	丸本京一
江波本町	350	423	2,473	野間源一
江波南町	231	261	1,207	野間真一

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
市立江波国民学校	江波町	陸軍軍需品支廠江波集積場	江波町
広島管区气象台	江波町	三菱重工株式会社広島造船所	江波町埋立地

元県立広島商業学校は陸軍兵器学校分教所となり、擬装塗装されていた。また、一部教室は、出征部隊の宿泊所にも使用されたようである。

二、疎開状況

人員・物資の疎開

楽観していたわけではないが、市の中心から少し離れているということと、漁業中心の生業のため、人員疎開はおこなわれなかった。

ただ、妊産婦は、安静の必要上、郡部の親類あたりへ疎開した者があった。

また、物資の疎開も、積極的にはしなかった。

学童疎開

しかし、学童疎開だけは、当局の方針に従って、江波国民学校学童が、縁故疎開と、三年生以上の集団疎開を実施した。

縁故疎開は約五〇人、集団疎開は、昭和二十年四月十三日及び十五日の二回に、約一七〇人が、双三郡吉舎町・八幡村へ疎開したが、両親や住みなれた家と別れて出てゆく学童の姿はいたまじかった。

先生に引率されて、町を出て行くとき、子どもながらも時局の重大さを感じていて、行く先の不安や淋しさを、じっと小さな胸に堪えながら手を振る姿に、親たちは熱くなってくる両の頬をおさえて見送った。中には、意外に

元氣そうに、遠足でもゆくかのようにしゃいでいる子もいて、更に、そのいじらしさをそそったという。

三、防衛態勢

他の地区と同様に、防空・防火訓練を実施した。警防分団も、義勇隊も結成されて、本部との連絡を密にした。

町内会および隣組の態勢を強固にととのえて、組織的に、常時きびしく訓練演習をおこなった。

四、避難経路及び避難先

事態発生の場合は、舟入町を抜けて己斐橋を渡り、南下するように避難経路を指定していた。

避難先は、状況に応じて己斐町の山林地帯か、佐伯郡井口村(現在広島市井口町)方面としていた。また近くでは江波公園南側と丸子山北側とに待避する計画であった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍兵器学校広島分教所	江波町元県立広島商業学校内
陸軍軍需品支廠江波集積場	江波町元県立広島商業学校内
第一陸軍病院江波分院	江波町二本松埋立地
高射砲陣地(部隊名不明)	江波町江波公園
照空隊陣地(部隊名不明)	江波町皿山および江波公園

六、五日夜から炸裂まで

五日の夜から六日の朝にかけて、空襲・警戒警報の発令ごとに、灯火管制を厳重に実施し、各家庭では、非常待避服装に身なりをととのえ、救急袋も、常に手のとどくところに用意していた。

六日午前七時三十一分の警戒警報解除後、ラジオも「...中国軍管区内上空に敵機なし」と放送したので、町民は各人の部署から静かに自宅に帰り、自分の生活をおのがじしはじめていた。

また、この朝、江波町では、富士見町方面の建物疎開作業に出動することにたっていて、町民二五人が集合するところであった。

なお、地区内では建物疎開をしなかった。

七、被爆の惨状

直後の状況

爆風による被害が相当あった。家が傾いたり、窓がこわれたり、天井が落下するなど、その衝撃は大きかった。

天井や家財道具の下敷きになって、救助を求め、悲鳴をあげている者もあり、熱線着火あるいは家庭内の火から火災を発生している家もあって、一挙に恐怖の巷と化した。

下敷きになっている声を頼りに、一人一人救出し、火災を起している家の消火に追われて、町内は混乱のきわみに達した。

火災の発生

火災は三か所から発生したが、住宅七戸・倉庫二か所にとどまって鎮火した。

火災は、幸いにして早く消火することができ、救出にも成功したので、恐るべき灰燼からまぬがれた。

このようにして、ともかく町民のほとんどは避難しないで、町内に踏みとどまり、事態のなりゆきを注意深く見守っていたが、精神的な動揺はかくしおせなかった。中には再度の空襲をおそれて、防空壕や付近の山へ避難する者もいた。

避難者の殺到

町は辛うじて助かったけれども、しばらくすると、他地区から幽鬼のような避難者の群れが殺到して来はじめた。

火傷した負傷者が、血まみれになって、第一陸軍病院江波分院へ、次から次へとひっきりなしに送られて来て、酸鼻をきわめた。

瞬間的被害

地区内には江波山・皿山の二つの小山があり、この山の北側に密集している民家は、爆圧の影響を直接受けた。瞬間的に瓦が一方に吹き寄せられ、屋根に穴があいて、雨天には雨漏りが激しく、相当な被害であった。

町内においての即死者はなかったが、他地区に出て行っていた町民が不幸にも死亡した。

次表は、各町別の瞬間的被害内訳である。

町名	家屋被害(約%)					人的被害(約%)			
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無傷の者	計
江波港町	20	40	40	-	100	5	16	79	100

江波東町	10	30	60	-	100	5	-	95	100
江波本町	5	25	70	-	100	10	10	80	100
江波南町	10	10	60	20	100	5	10	85	100

火災発生炎上の状況

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時刻		
江波港町	住宅七戸および倉庫一戸			午前十時頃
江波東町	発生箇所なし			
江波本町	元傷害者補導所倉庫二戸	炸裂後、数分後	倉庫の一戸には可燃物を入れてあったのへ引火した	午前九時半頃
江波南町	発生箇所なし			

降雨の状況

なお、午後二時から一時間ぐらい雨が降ったという被爆者もいるが、広島気象台記録によると、江波では降らなかったとされている。

炸裂後三〇分もすると、避難者が続々とやって来たが、昼過ぎから、ますます避難者が増加し、国民学校も、病院も、また一般民家にも、江波山一帯にも避難者があふれた。

六日夜

そして、警防団はもとより、一般町民も、また朝鮮の人々も、全町こぞって避難者の整理と負傷者の救護作業にあたり、大混乱のうちに六日の夜は過ぎていった。

江波の海

海岸にいて、炸裂瞬間の閃光が海面を突っ走るのを目撃した松下八マノ(江波南町)が、広島湾にそそぐ本川の河口付近の岸壁に、ひと夜明けて出てみると、避難用につないであった筏の上に、多数の死人が仰向けに大の字になった乗っていた。また、赤茶けて焼けたような色になって、水面すれすれにノタノタと泳いでいたイダ(魚)が、みな死んで真っ白になって浮いていた。八日には、暁部隊が来て、海面に浮遊するたくさんの死体を、大きな網を使って収集するのが見られた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

第一陸軍病院江波分院は、被爆前(四、五月ごろ)にほとんどの軍人患者を山陰地方の各分院に疎開させていたので、一〇数棟の全病棟は空家同然であったから、市中心部から殺到した負傷者やトラックで運びこまれた多数の負傷者を収容して、軍医・看護婦・入院中の軽症軍患者などが治療や看護に活躍した。この江波分院では、わりかた治療の点は行きとどいていたようであるが、九日ごろから、続々と死亡者が出たのであった。

なお、陸軍病院に収容し切れなくなった負傷者は、一応治療したあと江波国民学校や一般民家約二〇〇戸に収容したが、その治療した負傷者の総計は一万人を超えた。

死体の収容と火葬

死亡者の火葬に際しては、馬車に死体を積んで火葬場へどんどん運んだ。陸軍病院や国民学校、あるいは民家に収容している負傷者が、つぎつぎと死んでいくので、陸軍江波射撃場を主にし、数か所に応急火葬場を設けて、ようやく茶毘にふすことができた。火葬は、翌七日から開始したが、九月の中旬ごろまでも続けられ、江波分院の扱った死体だけでも約一、〇〇〇体に達した。

町内会の機能

避難者の収容作業や火葬処理など、臨機応変の処置を執りつつ、一時は混乱の渦中にまきこまれた町内会であったが、幸い町役員などには死亡者がなく、従前どおり運営機能に支障がなかったので、種々の対策が異状なく遂行できた。

陸軍病院閉鎖

九月三十日、陸軍病院江波分院が閉鎖されたとき、江波国民学校に約三〇人がなお収容されていたので、舟入川口町の青山巖齒科医師がこれを引継いで治療にあたり、外来患者を含めると約一〇〇人の負傷者の救護を続けた。

九、被爆後の生活状況

町自体は、被害が少なかったもので、他地区のように地区外へ避難するという必要はなかった。

この地区でも八工が多数発生して、手のほどこしようがなく、放任状態であった。

ロウソク生活

夜は、電灯が消えて九月末ごろまで、か細いロウソクの明かりを頼らなければならなかった。それも配給があるわけではなく、どこかで手に入れて来た蠟燭を、化粧用クリームびんなどを利用して中に詰め、燭台代りにした。

電灯のついたのは、九月末か十月初めであったが、それまでは不自由な暗い夜々であった。

国民学校開校

江波国民学校は、七、八〇〇人の負傷者の収容所となり、全校舎のほとんどが使用され、二十年十月下旬になり、ようやく一部教室を使って授業を開始したが、この頃、疎開児童も帰って来たのであった。

敗戦とはいいいながら、親も子もはればれとした笑顔で、僥倖とも言える復帰をよろこびあった。

食生活

食生活においては、漁業・農業にたずさわっている家庭が多かったので、比較的にめぐまれた自給自足生活であった。中には、己斐や天満町などの闇市場へ逆に出荷したものもあったようである。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月の暴風雨や十月の豪雨にも、さしたる被害はなかったが、爆風によって屋根がこわれたままになっていたため、雨漏りにたいへんなやまされた。さしむき応急的に、破れた箇所にはテントをおおうて過ごすようなありさまであった。

十一、その他

(イ)江波二本松民間共有地一四八、五〇〇平方メートル(四万五千坪)、工業港埋立地六六、〇〇〇平方メートル(二万坪)が戦時施設所として、昭和十三年に借上げられたが、合計二一四、五〇〇平方メートルの使用区分は次のとおりであった。

一、陸軍病院江波分院 六六、〇〇〇平方メートル(二万坪)

(この病院は主として結核患者収容施設であった。)

二、木炭貯蔵所 三三、〇〇〇平方メートル(一万坪)

三、木材置場 六六、〇〇〇平方メートル(二万坪)

四、被服倉庫 四九、五〇〇平方メートル(一万五千坪)

計 二一四、五〇〇平方メートル(六万五千坪)

(ロ)皿山および江波山の中腹に防空壕(横穴式)が作られたが、完全に工事が完成しないうちに終戦になった。そのまま作りかけで放置状態にしてあったため、しばらくして陥没しはじめ、山の姿が変わったといわれている。

(ハ)七月二十六日、米軍コンソリデーテッド機四機編隊が、佐伯郡八幡村付近に来襲し、最後の機が江波高射砲隊によって撃墜された。編隊は菱形でその真中に砲弾が炸裂し、その中へ後尾機が突っこんだのであった。その一機はゆるく曲線を描きながら、鈴ヶ峯の上空で火を噴き大爆発した。その間、三人の飛行士がパラシュートで脱出したが、一人は海中に落ちて死亡し、二人は八幡村山中に降下した。これを地元の警防団が逮捕して、五日市警察署に引渡したと言われる。この墜落の状況を見ていた市民はかなり多かった。

城子(むらこ)の最期(抜粋)

坂本潔、坂本文子

ようやくにして江波射撃場に来た。空は黒雲に覆われ雨は降り出し、傷ついた人々は所々方々から集って来て全市の被害を受けたことが正午頃にして解った。爆弾でなくて殺人光線だと言う程度のことが口伝えとなってひろまった。その後敵一機が偵察に来たのみで不安のうちに半日は過ぎた。避難者は続々と増して斃れてそのまま死ぬる人あり、血まみれになって水を求める人などこの世の生地獄かと思われた。幸い自分は非常用の救急薬を持ち合わせていたので皆に与えたが一向に効果なくただ吐気症状を呈して苦しむばかりであった。これが今日の原爆症と記憶される。午後二時頃になって漸く気も落ち着いてきたので一先ず長男(当時・広島高等学校在学)長女の動静も気がかりなので先ず市女に尋ねに行ったところ女先生ばかり残って居られて今のところ現地との連絡もつかず、十分に判明し難いから今暫く待ってくれとのことであった。学校も北側校舎は倒壊して瓦も柱も折重なって想像以上の被害を蒙っていた。五時頃再び学校を尋ねたが現地からの連絡もなく、男子の先生が多数引率して居られるので心配はないとは思っているが、こちらからも行って見るとの話合いの折も折、あわただしく大声で父兄の一人が「市

女の生徒は全滅だ、早く行って何んとか救い出さないと可愛想だ。」という。私は、一瞬不吉の予感に打たれた。私はまた大声で「さあ現場へ行こう。あの方面は委しく知ったところですから道案内します。父兄はついて来て下さい。」と言って裏門から走り出た。電車道を北上して舟入本町交叉点から住吉橋を渡り、火災燃え盛る中をまっしぐらに万代橋西詰に来た。此の周辺は第六次疎開で殆んど家屋は取壊されて後始末に動員された一般人も多数作業していたらしく、死体は累々と折重なっていた。さあ皆さんこの辺りから手分けして我が子の名を呼びつつ行きましよう、と、河岸沿いに「城子(むらこ)ちゃん…」と我が子の名を連呼して探した。火炎の中に斃れ、息も絶え絶えに両親の名を呼んで救いを求める女生徒もあった。また和服に袴をはいた女の先生の傍に同じく他の学校の父兄らしい人が「この辺りの生徒は安田高女の生徒です。」と言って立ち去った。川の中岸辺には、生徒が三々五々折重なって肌着は破れ、髪は乱れて裸となって殆んど絶命の状態、誰とも見分けがつかない。時に午後六時半頃。夕闇はいまより迫り冷気は加わり気はいらだつばかり。名を呼び続けて行くうちかすかな声で「ここよ。」と叫ぶわが子の声と、「築山さんはお父さんが来られていいね。」と、どこからともなく聞えた友達の叫びが、今なお耳底深く残って誰であったか判然としなかったことが、今更ながら残念である。多分仲のよかった友達同志は一緒になって、この川岸まで逃れて来て遂に斃れたのであろう。城子は川の石に腰掛けていた。朝からこの時刻まで、どんな気持ちで我々の来るのを待っていたか、よく苦しみをおさえこらえて生きていてくれた。多分他の皆さんも同じ思いであったであろう。苦しい中からも父母兄弟に救いを求めつつ、これが戦争だ、天皇陛下万歳と絶叫して散った少女の尊い犠牲は永久に忘れられぬ。直ちに川に飛び込んで行き、城子ちゃんのと、たずねる程顔は腫れ、目は糸筋の如く、頭髮は焼けぢぢれ、口唇は脹れて見る影も無い容貌に、思わず城子ちゃんかと念をおせば、かすかにうなずく。モンペに名前を書いた白布がついている。父母に会えた安心か「もう死ぬるよ。」と云ってぐったりとなるのを励ましながら身体を抱き上げるとモンペは膝から下はなく、火傷して皮膚がズルッと下がって居た。余り痛みを訴えるのでそっと岸まで運んだとき、一夫人が「お嬢ちゃんが見つかったのですね。私の子供はどうしても見つからないのですよ。一人でも助かって下さい。よろしかったら私の帯で背負って一刻も早くお帰りになっては。」と親切に言葉をかけて下さったので帯を載き、辛うじて場所を去ることが出来た。お名前は千田町の蔵内さんとおっしゃった。現場を去るに際し声高らかに「帰って先生やお父さんやお母さんに早く救いに来て貰うから暫く元気を出して待って居るのですよ。」と言い残して火のように熱い土地を転ばないように注意しながら、住吉橋まで辿り着いた。此処にも多数の負傷者が一箇所に収容され、病院に運ばれる手配中であつたので、傷の軽い女の人に城子を頼んで、学校に現地の救出方を知らせに帰った。

また自分は妻と共に蚊帳と水をさげて子供の所に引返した時は、午後九時頃冷気は一層加わり、川風は身に沁みて、負傷者は呻き苦しむばかりで、なかなか病院に運んでくれる様子もない。こんな状態では、みんな死んでしまうと思ったので、たまたま救援に来た一七、八歳の年若い特攻隊に頼み、陸軍江波分院に収容するよう手配を依頼し、道中は自分が案内することにし、病人を運ぶ車や戸板で仮の担架を作って貰った。途中到るところに焼けくすばった電柱、家屋のある中を通して病院に向った。時に零時頃。

途中、担架に蚊帳を敷いて寝ていながら無意識に畳の上に寝たいよ。横にしてねえ。水がのみたいとか、坐らしてなど言いつづけて苦しむのを見て、特攻隊の方々に「此の仇はきっと僕らが取ってあげますよ、しっかりして下さい。」と励まされ、一緒にただ泣くばかりでした。江波分院は既に満員で収容の室もないので、急に江波国民学校教室が充てられる事になった。

負傷者は校庭に運び置いて、爆風で木端微塵に散乱した硝子などを、真っ黒闇の中で整理し収容した。幸いにして城子は、医師の診察を受けて注射して貰ったが、身体が大変に冷いので直ぐ全身摩擦をする様に注意を受け、二人で一生懸命に体温が移る様、腕の中に抱きこんで介抱したが、再び診察の結果死亡の旨言い渡された。時に午前一時。

死体を校舎の一部に移し、夜の明けるのを待った。周囲の負傷者は苦しさ泣き叫び、近くに居た七、八歳位の男の子は死の直前「お母さんは何処ね、お母さん。」と大声で呼び、何か見ようとして両手を振り廻して、何も無いのに「蚊帳をのけて、早うのけて。」と云いながら一人で息を引取った。私達も一緒に気がくるいそうになる。

また隣りの方でしきりに「英子ちゃん、英子ちゃん。」と、体をゆり動かして名を呼び、叫んでおられたおばあさんとお母さんがあつたが、同校の一年生田村英子さんと、同時刻になくられた。後に偶然にも古田町古江の知人だと分った。

私達はそれぞれ死体のそばで、悲しみと不安のうちに一夜を明かした。前日から食事を摂っていないので空腹

を感じていたが、昼頃炊出しがあって、大きな握り飯が二つずつ配給された。この日も朝から上天気で、暑さは一層きびしかった。

死体は一応校庭に運び、誰れ彼れとなく一緒に火葬にするようにと、私たちにもその知らせがあった。とっさの措置とは言え、後で骨が判り難い心配が胸一杯で、できれば両親の手で火葬にしたいと、あれこれ悩んでいたら、幸いにも田村さんの好意により、英子さんと一緒に、迎えの車で一先ず家に運んで貰うことになった。私たちは再び江波避難所に引返し、僅かながら手荷物を纏めて、一緒にいた方々とお別れをして、徒歩で観音新開から庚午町に渡り、田村家を訪れた。時に三時頃。既に同家においては、近隣の方々が集って、英子さんとわが子の為に読経を済ませて、私たちの着くのを待って居られた。

城子は綺麗なふとんに寝かせて貰っていた。死んだとは言え、これで身体も楽になったのではないかと思われた。皆さんによって山の焼場に運んで貰ったが、古江にも多くの死者が出ているので、一人ずつ土地を細長く掘って、下に薪を積み重ね、死体をのせて、上から水に浸した藁を覆って、皆さんと一緒に静かに火入れをした。白煙が山を縫って天を覆い、ただただ、わが子の安らかな永眠を祈り続けた。

江波の「山文」に逃げる

平川義明(筆名・林木) (当時・広島県警察練習生)

昭和二十年六月二十日、広島県巡査を拝命した五二九回生(当時一八歳)は、卒業をあと二週間にひかえて、くる日もくる日も空襲に備えての建物倒壊作業に出動し、夜ともなれば、警戒警備の連続で眠るひまさえなかった。

そして、警察官本来の教育はなされず、酷使と空腹に疲れ果て、一日でも早く、その部署から逃れ去りたいばかりであった。

前夜(五日)の空襲で、朝の三時までそれぞれの警備(私は市役所屋上)についていた警察練習生は、六日の朝異例に、点呼が省略された。雲ひとつないのどかな朝であった。

前日の五日の朝、県北の農村から切符のとれにくい芸備線で、母が面会にきてくれた。

母は、一週間まえに行なわれた警察練習所長福中奏任警部の訓示のあと、私のしたためた手紙によって思ったものである。

訓示の内容は、「諸君は、現下の状況では、いつ一身を天皇陛下に捧げる日がくるやも知れぬ。後顧の憂いなきよう、遺書をしたため、遺髪を切り取って、父母の許に送っておくように。」というものであった。

面会室に、練習所の中食を持参した私と、二ヵ月目に会った母は、すっかり目の落ち窪んだ私の顔と、手にしている碗を見くらべて、急に暗い顔になった。「これだけしか食べさせてくれんのかい...」

涙声になりながら、手造りのにぎりめしを出してくれ、あたりに気をつかいながら、しきりに食べることをすすめた。

久しぶりに食う銀めしであった。私は、そのにぎりめしとおかずをガツガツ食べた。

母は、その日すぐ帰郷した。そのあと私は、強い下痢に見舞われたが、どこかに体力の余韻がのこされたような朝でもあった。

点呼がなく、朝食の終わった午前八時、私たちの第五班は、警防会館二階で、久しぶりに新任巡査の講習を受けた。サーベルを外ずし、上着を脱いで席に着いた。

教官は、経済警察担当の岩井警部補で、

「きょうは君たち警察官が、戦時下の第一線に出た場合の、いちばん大事な仕事について講義をする。」とあって、岩井教官は後ろ向きになってチョークをとり、黒板に向かって、

食糧管理法

と大きく書いて向き直った。

私はその朝、偶然にもいい席についた。東側の開放された窓から射し込む太陽は、前列にいる同僚たちに容赦なく照りつけた。私は最東部にいたが、机を区切りに右側が土壁となっていて、ちょうど陰になっていた。

「諸君は数日ののち、任地に着いたら、早速、警察官としての職務を遂行していかなくてはならないが、主食、とりわけ米や麦を、政府以外に売り渡すこと、運ぶことを、徹底的に取締まって貰いたい...」

岩井教官がそこまで言って、机上の法令集に目をやった。

その瞬間であった。青紫の光線、ちょうど電気溶接の強度の光りが反射するときの光色であった。

げげんな顔をあげた岩井教官の眼鏡が、異様に光った。光った時間は、ほんの半秒足らずであったろう。

教壇にいる岩井教官があたかも廻り舞台に乗って、ふり廻されるように、左斜め下に向かって急に傾き、私たちは右上に移動した。まったく無言の一瞬であった。同時に建物が倒れかかってきた。

倒壊する喧燥の中で、その間人声らしいものは何ひとつあがらなかった。前後左右からこづかれ、圧倒されながら、頭の上に落ちてくる瓦のカケラが、火の玉のように熱かった。一寸先も見えない暗闇の中に、全員下敷きになっていながら、声を出すものがいない。

喧燥が止んだとき、私ははじめて声をあげた。

「助けてくれッー」

「助けてくれ！」「助けてくれえ...」と、私の声が堰を切ったように、周囲と下の方からつぎつぎと叫び声があがった。強い声もあれば、ひ弱い声もあり、断末魔の悲痛な声であった。いくつかのうめきも聞えた。

周囲がいくらか見えるようになり、土煙がうすらいでいくと、空のあることがわかった。

"逃げられる！"

はじめて自意識をとり戻した。私はしゃがんだような格好で、建物の間にうずくまっていた。

倒壊した建物の間から見ると、あちこちから、一人、二人と這い上がってくる人影が見える。そのとき、パチパチと火の手が上がりはじめた。

"だれも助けにきてはくれない - "

私は身体をうごかした。左足がうごかない。見ると、編上靴を履いた私の左足先は、大きな角材とタルキの間にはさまれている。

燃えさかる焔の音が、急につよくなった気がした。四、五回思い切って左足を引いたが動かない。両手の動く私は、次に右手で身体を支え、左手で靴のヒモを解きはじめていた。

半分紐を解いたところで、左足に力を入れると、意外にも簡単に足が抜けた。とにかく、外へ早く出ようと、二、三歩歩いたが、脱ぎ捨てた靴が気になった。どうして靴を気にしたのでだろう。

ふと、左足に、柔かく暖いものが触れた。人間である。同僚のうなじのところである。顔を下向きにして、すでにこときれていた。面識はあったが、名まえを憶えていない巡査であった。

ころがっている編上靴は、木材の間からこともなく拾われた。私はその靴を履くと、元安川寄りに逃げて行った。

すでに多くの人々が群がっていた。走るもの、ゆっくり歩むもの、ビッコをひいてかろうじて身体を支えて進むもの。四ツ這いになりながら、気力だけで逃げようとしているもの。みんな半裸か全裸である。一人一人が自分自身をまもるために精いっぱいであった。他に力をかす余裕はなかった。

「タスケテ...」

元安川畔の道路に出ようとしたとき、私に声をかけた少女があった。

「オカアチャンがコノ下にいる。タスケテチヨウダイ！」

四歳ぐらいの少女は、すぎるような目つきで倒れた家を指さした。

目をやると、下の方でうめき声が聞えており、もうその端は火が廻わっている。

「おい、生きていたか？」

同僚の菅田剛吉がそのとき後から声をかけてきた。

「早ういこう、逃げ遅れたら死んでしまうぞッ！」

菅田がそう言っているうち、少女はいつのまにか、私のズボンをつよく握っていた。

「うん、よし待っとれよ。」と言って、足を引くと、力を入れている少女の手はもろくも放され、よろめきながら私の顔を見た。そして「ウワッー」と、はちきれんような声をあげて泣いた。明らかに少女は、私の嘘言を、私の顔の中に見たのである。

少女は中腰になって、泣きわめきながら私を見送った。避難者はつぎつぎと後を追ってくる。その人混みで、よろめきながら逃げてくる大男につまずかれ、少女は転んだが、意外にもそれは、岩井教官のようであった。私は後をふり向かないようにして、その場を去った。

菅田と私は、どこというあてもなく、ただ、人の群れにしたがって元安川に沿って、南へ南へと小走りに歩いていった。

途中、元安川には、水面にたくさんの屍体が浮んでいる。追い越し、追い越されながら逃げて行く人たちは、ひ

どいやけどで、皮膚が垂れ下がっているもの、顔の形がわからないほど外傷をうけているもの、すでに力つきて、虫の息で、通りすがりの者に何かを訴えようとするものなど多くいたが、だれひとり、耳をかそうとする者はいない。

「早う歩けや。」と菅田に叱咤されながら、二人で吉島飛行場に着いたのは、九時に近かったであろうか。

「お前足の骨は大丈夫か？」と、菅田に聞かれて、自分がピッコをひいていることにはじめて気づいた。そして、シャツの袖で顔を拭いた白地に、多量の乾いた血がこびりついていて、頭部に傷のあったことも知った。

数千人の群衆であったが、飛行場はさすがに広がった。逃げてきた方をふりかえって見ると、私たちの被爆した地点は、赤い焰の上にどす黒い煙が渦巻いており、その上層部は、まっ白いきのこ型の傘ができたように望見され、その雲が、飛行場上空まで迫っていた。

「生きられたぞ。」

菅田はそう言って深いため息をついた。

いささかの安堵をおぼえ、私は急に水が欲しくなった。菅田もそうだった。二人は人影のあまりない、飛行場南端にある建物の方へ向かった。

人気のない建物の外に、防火用のガランを見つけ、菅田が狂喜して蛇口をひねったが、水は二滴ばかり落ちてきたきりであった。

私は急に疲れを感じた。菅田の目にも極度の疲労の色が見えた。二人は周囲をさまよったが、水らしいものは、防火水槽にたまって、ポウフラのわいている汚水だけであった。

「海の水をのもう...。」

菅田にうながされ、岸壁まで歩いたが、海水もはるか下の方に水面があり、その石垣を下りて行く気力も、体力もなかった。

「お願いいたします。」

岩壁の端に坐っている一人の老婆が、ひよわい声をかけてきた。老婆の半裸になった背中は、まっ赤ななま身をむき出して、皮膚がボロきれのように、腰あたりまで垂れ下がっている。

「おにいさん、助けると思うてわたしの背中にショウベンをしてくださらんか。ヤケドにはショウベンがいちばんいいんじゃないんです。」

虫のように小さな声だった。ふりかえると菅田が見えない。私はどうしたことか、かろうじて立っただけで、さきほど裏切った幼女のことが思いだされてならなかった。

それだけがその日の良心であった。私はうなずいて、坐っている老婆の後ろに廻り、まっ赤な背中に向って、ようやくかまえた。

老婆は、やっとうごかせる両手を、不器用に胸あたりに組んで合掌した。老婆はしきりに念仏をとんでいた。

私は、かまえたけれど、体がよろめくようで、どうしても果たせないのであった。

「おばあさん、ダメです。ごめん。」

と、ことわると、

「いいえ、ありがとうございます。」

感謝のこもった涙声で、かなりはっきりした声で言った。老婆は勢いよく私に背を向けたまま合掌して、深く頭を垂れると、次の瞬間、反対に私の股間に向って、上向きに倒れてきた。私の恥部を老婆の髪で押され、私もそのまま一緒に倒れた。老婆はそれっきり、息をひきとった。引きつった目だけが、空を見つめていた。

菅田が、どこからか長い竿をもってきた。菅田は、その竿を低い海面に向けると、先で海水を撫でて、竿をたぐりながら、先についている海水をなめた。そして何回もその動作をくりかえしたのち、私に竿を渡しながらか言った。

「お前はダメだ、自分の生きることも考えんで、人にかかわりを持ちよーる。」

たしかに水が欲しかったが、海水は、自分の飲みたい水ではなかった。いま、コップに一杯の水をくれる人があったら、私は死んでもよいと思った。

私はまた菅田にしたがった。菅田はもとの建物の傍に行き、さきほど見たコンクリートの防火用水槽に近づいた。彼はその水に口をつけると、ガムシャラに汚水を呑んだ。

防火用水を呑み終えた菅田は、大きな息をふきだすと、そのまま横のめりになって、吐気をもよおした。私は菅田の背中を撫でてやろうとしたが、すでにその力もなかった。そして、どうしたことか、私も嘔吐しはじめた。

二人は、朝の食事を全部吐き出した。汚水を呑んだ菅田の方が、量としてははるかに多い感じがした。

それから数時間、真夏の太陽に照らされて、二人がどれだけその場で眠っていたかは明らかでない。

大粒の雨にうたれて、菅田に起こされたとき、キノコ型の雲は、いつのまにか、そのきわが、大きくうすらいでいた。二人はしばらく軒下に入って、雨の止むのを待った。底力はなかったが、いくらか疲れを忘れていた。私は雨の中に出て上を向き、大きく口を開いて雨を呑んだ。

西の方に焼けていない町があるように感じたのは、雨が止んでからであった。死んだ人、生きている人の群れが、飛行場のあちこちに見えた。菅田と私は、長い時間をかけてその町に向かい、滑走路を横断していったが、その端まで来たとき、またガックリした。町と飛行場の間には大きな川があって、橋もなく、水面いっぱい覆った木屑の中に、無数の屍体が浮んでいる。

少し経ってから、菅田の指さす上手を見た。一艘の小船に、鈴なりにたった被災者を乗せて、対岸に向っている。その川岸には、数百人の人たちが順番を待っていた。

船の着く川岸には、二人の憲兵が立っていた。周囲には十人あまりの、青い服の囚人たちが、憲兵の指示にしたがっていた。

「お前らは、傷が浅いから渡せん。」

憲兵は二べもなく、私たちにいう。

「いいえ、公用です。」

突然、菅田が言った。

「自分たちは、警察部警備隊の者ですが、電話不通のため、これから廿日市警察署に連絡に行くところであります。」

とっさで口から出まかせの菅田に、私は気力のないままたじろいだが、菅田は平然としていた。

憲兵は、私たちの顔を見くらべていたが、

「何か証明になるものをもっているか。」

と、糺した。

「いいえ、口頭伝達です。警備隊長殿から、廿日市署長殿への救助依頼です。書類は何ひとつありません。」

菅田はそう言って、腰につけている帯剣用バンドの朝日影を押さえた。

憲兵は、菅田と私の帯剣バンドを見ると、何の疑いももたず、二人の名まえも聞かないまま、

「よしッ、行け！」

と言って、私たちを優先して舟に乗せた。

舟が沈むほど多くの重傷者を乗せて、船頭は、群がる屍体をかき分けるように、竿をつかった。

どうしたことか、私は、舟の上で、子供の頃教わった「いなばの白兔」の童話を思い出した。そして、菅田も私も、おなじ昭和二年の卯年生まれであることを、どうしてそんな時に思いうかべたのかわからない。

それは、大きなたたずまいの家であった。

「水を吞ませてください。」

岸を踏んだ瞬間、急に水がほしくなった。その家のおかみさんは、気持よとりなしで、私たちを大きな炊事場に入れ、井戸ポンプを押してくださった。

私たちは交互にドンブリ六杯ばかりの水を呑み、そのまま、また吐気をもよおした。吐いたまま倒れてしまった私たちを、おかみさんと若い女中さんは、表の八畳の間に入れて、柔かい絹布団を敷いてくださった。タオルと水を用意して、私たちの汚れた身体を拭い、私の頭の傷の手当をして、包帯までしてくださった。何だか、人並みな世界に連れ戻されたという気がした。

その家では、三人の娘さんが勤労働員に狩り出され、その朝、七時半頃家を出て、行方不明のため、主人はいま探しに出かけているということであった。

(あとからわかったことであるが、その家は山本文蔵という門札がかかっており、商号「山文」という料理屋であった。

同地がまだ江波村であった頃、寛政年間に創業された料亭であるといわれ、当時、浅野藩のご法度により、広島城下では、料理屋営業が許されず、遊女はもちろん、芸妓も置かせないという儉約令下で、江波では華やかな三味の音が聞かれ、酔客たちのたわむれる声があがるなど、治外法権の土地柄であったと伝えられる。

袋町の仁室にこもって、「日本外史」の編さんにあたっていた頼山陽は、よく町を脱け出して、「山文」に遊び、

山陽の酔筆を振るった大看板「白魚阿里 山文」の書は、「山文」の家宝として、現在なお秘蔵されている。

その後、維新を経て明治、大正、昭和と栄え、由緒や格式とともに、白魚料理を名物とした「山文」も、原爆で三人の娘を失って同家の血脈は断え、併せて太田川が汚染されて白魚も棲まなくなり、昭和四十年頃から、老舗「山文」の行燈は、江波の町からその灯りを消すこととなった。)

ガラス窓のひどく壊れている八畳で、たそがれてきた庭に、またしても強い雨が降った。菅田も私も放心状態になったまま、絹布団に横たわり、燃えつづける対岸の火を見ていた。

夜半、主人が帰ってこられ、「娘さんは、何らの手掛りもなかった。」と、おかみさんと女中さんに言ったらしく、三人のすすり泣く声が、隣室から聞えてきた。

おかみさんは、私たちにおかゆを作ってすすめてくださったが、二人とも、まったく食欲をうしなっていた。

その夜の何時であったか、また空襲があった。おかみさんたちにうながされ、菅田は起きあがったが、私はもう、立ちあがる気力がなかった。離れ屋敷の裏山にある防空壕に、執拗に連れて行こうとする女中さんに、「いいですから、私にかまわず行ってください。私は、このまま布団の上で死ねたら満足です。立ちあがるのが苦しいのです。」

と言って、私は仰向けになったまま、両手を合わせた。

幸い、数分後に空襲警報は解かれた。無難な一夜が過ぎたが、私の体力は、小用に立ちあがることもできないほど衰えていた。布団を汚してはと、明け方、隣の部屋にいる女中さんに声をかけ、肩を貸して貰って便所まで行き、支えられながら、長い時間をかけて用を足した。

七日朝、主人は、再び三人の娘さんを探しに出て行かれた。菅田はどこへ行ったのか、昼すぎになって戻ってきた。私は彼の体力が羨しかった。菅田は、手にした紙一枚を私にくれた。

西警察署 江波巡査駐在所

巡査 何某印

と、罫紙の後尾に記された、私の罹災証明書であった。

その夕方、私はどうにかおかゆがのどを通った。しかし、またしても、三人の娘さんの行方をつかめないで帰ってこられた主人の失望ぶりをみて、私は再びやり切れない気持ちになった。

翌八日の朝、菅田と私は、「まだ無理だ。」と引きとめてくださる「山文」をあとにした。

二人は、江波の町から、廃墟となっている舟入町を北上した。まだ多くの屍体が道路の脇に転がっていた。焼けたトタンが立てかけてあり、家族の消息や居所を記したチョークの字があちこちに見られた。再び、人間の世界から遠ざかっていく気がした。

それぞれの安否を尋ねて、往来する人の影が多かった。十人あまりの兵隊が作業をしている。それは、数十におよぶ屍体を積み重ね、石油をかけて荼毘をしている一隊であった。火葬作業をしている煙は、他の所にもたくさん眺められた。

住吉橋の手前に、母子と思われる二人があった。横たわったまま、顔と上半身ともに焼けただれた半裸の母があり、その胸あたりに顔をうずめている、二歳ばかりの幼女がいた。幼女は、泣き疲れていて、放心した目を私に向けた。私は、またしても二日前の幼女のことが思いかえされた。

「オカアチャン、マダ寝トルンヨ。」

そう言って、私に語りかけてきた幼女の顔はあどけなかった。母の体からは、すでに屍臭が漂い、多くの八工が、目や口もとにむらがっていた。

道ばたに寝転んだまま、虫の息で、水をくれと、通りすがりの人に乞う何人があったが、だれひとり相手にするものはなかった。

菅田と私が、住吉神社の境内にある、警察練習所連絡所に戻ったのは、その日の昼頃であった。

福中所長、特高の松本警部補、私たちの講義をしていた岩井警部補のほか、三人あまりの教官がいた。被爆時、教官二十名、練習生約二百名の警察官は、そのほとんどが、即死が行方不明とのことであり、他に十二、三名の練習生がいて、焼野原となった練習場跡から、乾パンの空箱に、骨をかき集めては戻ってきた。

菅田と私は、不機嫌な教官連中から、かろうじて帰郷を許され、その日のうちに郷里に向った。

かくて、終戦と郷里(双三郡君田村)の盆を同日に迎えた頃、私の体調は小康を得ていた。頭部の裂傷と、背中のかすり傷二か所も完全に癒えており、足の打撲も、ほとんど痛まなかった。被爆時、右側が土壁となっていて、直

接殺人光線をうけなかったのが、何よりの幸運であったと思われた。

敗戦を知るとともに、どうにか職場に戻りたいと思っていた私を、母はどうしても行かせようとはしなかった。五月に直腸癌の父を失い、妹と私の二人の子しかもたない母としては当然であったろう。

八月二十八日頃から、急に頭髪が脱げはじめ、強度の熱に見舞われだした。

私は、九月下旬まで、べったり床に就いた。わけても、九月はじめからの一週間は、人事不省となった。その間、何度か生死の間をさまよい親族が寄り集った。

頭髪が脱げ、歯ぐきがはげしく痛んで、多量のよだれが流れ出た。四十度を超す熱が、連日のように出た。無医村であった私の村で、宍戸忠義という海軍衛生特務少尉が復員してきて、私は毎日治療を受けたが、私の症状についての完璧な療法はわからないとのことであった。わずかに、ビタミンを補給することがよい、という宍戸さんの意見をたよりに、母はやたらに南瓜とサツマイモの茎を煮ては、私に食べさせた。

母の執念ともいえる食事療法によって、私は九月中旬をすぎると、にわかには体調が回復し、食欲がでてきた。それからの毎日、私はガキのように南瓜とイモツルを食べつづけた。

十月十四日、戦後初めての村まつりを迎えた頃、私は奇蹟的にも、ほとんど完全に健康をとりもどしていた。私は十月下旬に入り、反対する母や親族たちの止めるのも聞かず、禿げた頭に戦闘帽を冠り、向洋町、東洋工業内に仮設された広島県警察練習所に戻っていった。

教官の顔ぶれは大幅に変わっており、被爆当時の教官は三人しかいなかった。百数十人の新しい練習生はすべてが復員してきた兵隊たちであった。

わずかに生き残っていた四人の同期生と、私は、その部屋に一緒になった。

岩井警部補も、私と一緒に逃げていった菅田も、すでに他界したとのことであった。即死者を除いて、郷里に帰って療養中のものが、ほとんど亡くなっていくといわれ、私たち二百名近い五二九回生も、生きのびたものはわずかに三十名ばかりだろうと伝えられた。

同期生五人は、ほとんど講義もうけず、連日、教官室の使役にあてられた。再び空腹をおぼえる生活に戻された。

ある日私は教官室裏の、書庫の整理を命じられた。腹の空いていた私は、その片隅に積重ねられてある、乾パンのボール箱を見て、その蓋を開いた。その中には、あの日かき集められた多くの同胞たちの骨があった。そして、その上部には、名まえの書いてない茶色の封筒があり、少量ずつ区分された骨が入れてあった。

卒業を二日後にひかえた日、ある同僚の父母らしい人が、教官室を訪ねてきた。新しい教官で、係りのその巡查部長は、謙虚にその二人と語り合っていたが、前日、私の整理した書庫に入って行き、しばらくして茶色の封筒をもって出てきた。

巡查部長と、二人の会話の内容は聞きとれなかったが、二人は涙しながら、その封筒をおしいただくようにして、帰っていった。

二日後に卒業式を終え、それから十年、私は巡查としての生活を送った。

十月三十一日附で呉警察署勤務となった私は、その年の暮、休暇をとって、制服にサーベル姿のまま、母の用意してくれた餅米二升を鞆につめて、あの日お世話になった「山文」を訪ねた。

おかみさん一人がいて、人なつっこげに私を迎えてくださった。やはり三人の娘は行方さえわからないと、話された。おかみさんは、しきりに私の家の状況など訊ね、できたら、この家の子になってくれと私にせがまれた。私は、どういってよいものか返答に窮した。

それから十数年が過ぎた。私はすでに警察を退めていた。そして、妻と一男二女があった。

昭和三十九年、第十九回目の八月六日、私はひとり平和祈念式典に参加した。式を終わった慰霊碑の後側に、つぼんだ蓮の花束と、線香を売っている露店があった。

その店で、蓮一束と線香を買っている、二十四、五歳の娘に、なぜか私は気をとられてしまった。
"これがもし、あの日、母を助けてくれと、私のズボンをつかんだ幼女であったらどうしよう..."

私はにわかには胸が詰まって、涙がおしあげてきた。私はその娘が去ったあと、おなじ蓮と線香を買って火をつけ、逃れるようにその場を後にした。

元安橋の上まで来たとき、持っている線香の火は、すでに手元まできていた。その間、どこをどうさまよったか、いまだに記憶がない。おそらくその間、私は現実をはなれた、十九年まえの世界にいたと思う。

私は、元安橋の上から、ことばにならない大きな声をあげて花束と線香を川の中へ投げた。

その夕方、心ばかりの果物籠を買って、私はひとり江波の「山文」を訪ねた。

うらぶれた「山文」の屋内であった。居合わせた女中さんは、おかみさんは一昨年、胃癌で亡くなったといい、ガックリした私が、ようやくわけを話すと、女中さんは、私たちが、あの日、水を吞ませてもらった炊事場の片隅で、独りビールを吞んでいる主人に引き合わせてくれた。

「それは、よう来てくださった。」

と、ポツリ、とひとこといわれた、主人の顔には覇気がなかった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

広瀬北町、広瀬町、寺町、十日市町一丁目(一部)、同二丁目(一部)、西十日市町、榎町(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、寺町[てらまち]・広瀬北町[ひろせきたまち]・広瀬元町[ひろせもとまち]・錦町[にしきまち]・西九軒町[にしくけんちょう]・西引御堂町[にしひきみどうちょう]・新市町[しんいちまち]・横堀町[よこぼりちょう]とし、爆心地からの至近距離は新市町南部で約〇・七キロメートル、もっとも遠い地点は寺町の横川橋南詰で、約一・二キロメートルである。

戦前、寺町一帯は西本願寺広島別院をはじめ、由緒ある古寺名刹が、その荘厳な薨を並べていた。また、広島の高瀬五箇荘の一つとして 広瀬荘 の名を起源に持つ広瀬元町・広瀬北町付近は、軒の深いしっとりとした家なみが連らなり、伝統的な下町らしい情緒を、表筋にも裏筋にもなおとどめていた。

新市町は、魚貝類をあつかった北榎町の川沿いの旧市[きゅういち]に対してできた青果物市場が大いに繁栄したことに由来して、その町名となったといわれるが、この新市町から西九軒町へかけての付近一帯は、市場の発展とともに佃煮・トウフ・カマボコ・アメ玉などの食品加工をおこなう家内工業が盛んで、これらの商店がびっしり軒をならべていた。また、西九軒町の広瀬神社は境内も広く、昔からの巨木が昼も暗いほどうっそうと茂っていたが、原子爆弾により社殿も大樹もすべて全焼した。戦後都市計画により境内は三分の一の狭さになったが、社殿は再建され、植樹もされた。

この地区の被爆直前の建物総戸数は約二、八三三戸、人口約一一、六一一人と推定されるが、詳しくは次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
広瀬北町一丁目	554	554	2,461	由井善次郎
広瀬町北町二丁目				田部行雄
広瀬北町三丁目				西村仁津夫
広瀬元町	748	748	2,994	辻本真吉
錦町				小宇羅賛一
西九軒町				西脇澤登
寺町	429	423	1,796	岩本伝衛門
西引御堂町西				市川章
西引御堂町東				内村光次郎
横堀町	1,102	1,180	4,360	木村寛一
新市町				小田盛蔵

なお、地区内に所在した主要建物および事業所は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広瀬国民学校	広瀬北町	超専寺	寺町
広瀬託児所	広瀬元町	教順寺	寺町
西本願寺広島別院	寺町	光円寺	寺町
円龍寺	寺町	光福寺	寺町
元成寺	寺町	実相寺	寺町
浄満寺	寺町	浄専寺	寺町
常光寺	寺町	徳応寺	寺町
真行寺	寺町	報専寺	寺町
善正寺	寺町	品竜寺	寺町

二、疎開状況

人員疎開

当時、自家に住む者の疎開は禁じられ、空襲に際しては戸を開き、各自が家を守るよう市から通達されていたが、老人や病人は疎開した。なお、間借人や同居人は親類や知人を頼って疎開させた。

物資疎開

物資疎開は家具類が主で、各人が郡部の親類知人の家に運搬していた。家具類以外のものは疎開できなかった。

運搬には、トラックや馬車を使ったが、なかなか都合がつかず困難をきわめたので、疎開できなかった人も多かった。なお、宇品の陸軍糧秣支廠から広瀬元町辻本昆布工場倉庫に、軍用罐詰を大量疎開していた。

学童疎開

昭和二十年四月二十一日、広瀬国民学校の児童三年生以上約二〇〇人が、教職員八人に引率されて、双三郡酒河村・同川地村・同板木村の寺院や民家に集団疎開をおこなった。このほか、約一五〇人の児童が各自で縁故疎開をした。残留した三年生以上の児童は、学校内で引き続き授業を受けていたが、一、二年生は、広島別院と広瀬神社の二か所に分散して授業を受けた。

三、防衛態勢

各隣組の単位で防衛態勢を組織し、隣組長が班長となって、気迫のこもった真剣な訓練が日常繰返された。ハシゴを屋根にかけて登り、焼夷弾攻撃に備えたバケツ・リレーなどの訓練がおもで、警防団の指導はきびしいものであった。

電車通りに面して、大型の防火水槽を五か所ばかりに設置していたし、各自も家庭用防火水槽をそれぞれ備えていた。寺町では、大型(横一・八メートル、縦一・三メートル、深さ一・二メートル)の防火水槽を一〇か所設置していた。また、各家庭は庭すみや縁がわ近くに防空壕を作って、万一の場合に備えていた。

四、避難経路及び避難先

非常の場合には、安佐郡古市町へ避難するように、市当局から通達を受けていた。市当局から古市町役場へも、その連絡がしてあった。

避難経路は、まず横川町へ出て、横川本通りの裏側を通過して、古市町方面へ避難することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

広瀬国民学校の南側校舎に、広島地区第二特設警備隊(中国第三二〇三八部隊)が駐屯しており、常時六〇人くらいいた。そのほかの所在軍隊については不明である。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜九時ごろから警戒警報が発令され、続いて深夜、空襲警報となったが、平日と別に変ったところはなく、日ごろの訓練どおりの防衛態勢をおこなった。

六日朝、警戒警報が発令されたので空襲・防火に対処するため、寺町の野地兼松ら役員は再び広島別院に集合して待機したが、解除になったので、それぞれの自宅に帰った。

ある者は、平常着に着かえて一服していたし、ある者は朝食の仕度にかかっていた。またある者は食べ終って一息入れていたところであったし、出勤の用意をしていた者もあった。

その時突然、異様に強烈な光線を感じた。そのまま何をするまもなく、すぐまた大きな音を聴いた。ピクッとしたときには、もう家屋もろとも倒されていた。防空壕へ待避するひまはなかった。

家屋疎開への出動

なお、この六日朝、西引御堂町と西九軒町から、土橋方面の建物疎開作業に出動することになっていた。疎開対象戸数は一〇戸で、前日までに三戸の疎開を終わっていた。

このほか、六日当日個人の自由意志で、疎開家屋の廃材を薪用にするため、土橋方面へ取りに行っていて、災難にあった者も幾人かいた。

地区内の家屋疎開状況

地区内の建物疎開は、被爆前に北広瀬橋付近、広瀬北町三丁目電車通りより北広瀬橋まで。また西引御堂町中央道路を空鞘町筋に広瀬北町二丁目黒住教の家付近までの、主として人口密集地帯の間引き疎開を完了していた。

炸裂

寺町の熊本善導(仏壇商)の談話によれば、別院の本堂の廊下にいるうさん臭いルンペン二人が、広庭に降りて北門の方へ行ったので、注意しながらあとをつけて大門の前から四、五歩、北へ向って歩きかけた時であった。横川橋の上の方に、朝日ぐらいの大きさの、目のくらむ青白いマグネシウムをたいたような光る物体を見た。

一瞬、爆弾だと直感して北に向かって伏さるや否や、その光る物体は、パチンという音をたてて破裂した。そして、横まくれに傍の家に逃げこむまでの二、三秒のあいだに、朝日も黄赤くなるような煙をみた。

伏さるとき、後首筋を刀で斬られたような感じがした。屋内にころがりこむと同時に、百雷一時に落ちるような

轟音がして、目さきはまっ暗になった。

倒壊店舗の中から出てみると、紙屋町・八丁堀まで見え、別院本堂の大屋根は飛んで無くなっていった。しかし、不思議にも大門はそのまま残っていたという。

七、被爆の惨状

川原に避難

閃光を感受したと同時に、すべてがペチャンコとなり、凄い煤煙が立った。

飛び出して助かった者、下敷きになったが這い出られた者、辛うじて救出された者など、町民の多くは地区西側を流れる天満川の川原に集った。

死者続出

地区内全域の倒壊家屋からたちまち火の手があがった。下敷き状態から救出されたときは、すでに周囲が火の海であった者も多く、その火炎の中から、呻く声、救出を求める声々が、断末魔の悲鳴そのまま、あわれに悲しく無数に聞えた。

しかし、その声々を助け出す余裕はもうなかった。運よく自力で這い出した者もあったが、ほとんどは生きながらに焼け死んだのであった。

脱出した人々の大多数は川原に逃げのびて行き、川に飛びこんだ。もうこの時、川には被爆死体が一ぱい浮いていた。死体は松の皮を剥いだような色になって脹れあがり、人相は無かった。この川原に逃げて来た者は、広瀬地区の住民が多かった。しかし脱出できた者は一部分であって、怪我人や火傷者など多く、命からがらの姿であった。救急箱も薬品もなく、ただそこにあった手拭を拾ったり、フンドシを破ったりして繃帯をするだけのことであった。また、川までは逃げのびられたが、力つきて死ぬる人々もたくさんあった。

川原以外の状況

川原以外には、横川町の本通り裏側の道路をとおって、安佐郡古市町の国民学校などを目ざして避難したが、倒壊した家屋が一面に燃えあがっていて、逃げる道も判然とし難いほどであった。横川駅前道路は、すでに焼け死んだ人間と、歩行できない重傷者らでいっぱいであった。

電車の車掌が、切符鉢を持ったまま大の字なりに倒れて死んでいたし、新市町の市場へ野菜などを運んで来て、市内の家庭の肥料を汲み取り、田舎へ帰る途中であったらしい馬や牛が幾頭も倒れていた。

なお、炸裂時に横川橋鉄橋上を進行中だった電車の運転手が運転台から河中に吹き飛ばされたのを目撃した人もいる。

道路は猛り狂う火炎と、爆風による飛散物などの障碍物で通行できず、やむなく天満川を渡って己斐方面へ脱出する者も多かった。己斐へ出た者は、軍のトラックによって佐伯郡廿日市町方面に送られた。

学徒の死

野地兼松が己斐へ向って避難する途中、学徒動員の子ともであろう。どこの学校の生徒やら判明しないが、一〇人ほどの声で「助けてくれ。」と叫ぶのをきいた。すぐその場所へ行ってみると、家の下敷きになって身動きできなくなって苦しんでいた。場所は、広島別院の電車停留所前で、電車が来るのを待つのに、暑いから日をさけて家の陰に入っていて被爆したものらしかった。

学徒三人を家の下敷きからひっぱり出したが、三人は飛ぶように逃げて行った。そのうちに火災がおこり、倒壊物が燃えだしたので、残りの生徒は助け出そうにもどうにもできなかった。

家の下敷きになったまま、残された学徒たちは、火勢のつる中で「君が代」を合唱しながら死んでいった。さきに救出した三人が逃げたので、学校の名も姓名もきくことができなかったという。

倒壊家屋

爆風圧の筋道がはっきりと判るように、家屋が、その位置のまま、マッチ箱を押しつぶしたように倒壊していて、各家の所在ごとに、その区切りをつけているところもあった。

別院は、大屋根だけとんで、内陣・外陣の大柱は立っていた。なお、一般の家では、寺町上組のケヤキの大柱を使った岩本伝右衛門宅だけが残っていた(熊本善導談)。

火の海

広瀬地区は全域にわたって壊滅し、各所から発火した。寺町では広島別院が最初に発火したという目撃者もあるが、時間的な差はあまりなく、ガソリンや油の罐がパンパン爆発する音が生きて、たちまち全体が火の海と化したの

であった。

被爆者は男女ともほとんど丸はだかで血まみれとなり、大小の火傷でなま皮が剥げているまま、気ちがいのよう
にわめき叫びながら逃げていった。

倒壊した家屋や飛散物のみでなく、山の手の松の木も、鉄道沿いの柵の杭頭も自然着火で燃えていた。

黒い雨

炸裂後約一時間くらいたったころ、まっ黒い油のような雨が、逃げまどう避難者の上に降って来て、人相がわか
らなくなるまでに、みんなの顔は黒く汚れた。ついで大粒の雨が降り、体にあたると痛いので、なんでも手あたり
しだいに拾って頭にかぶり、雨のやむのを待った。二時間くらいして雨もやんだので、まだ歩く力の残っている者
は歩いて、それぞれ安全な方向へ逃げた。

この降雨のなかでも、燃えさかる火炎はいっこうに衰えなかった。

橋焼失

橋梁は、木の部分が自然に燃えあがった。午後二時ごろまでに広瀬橋・北広瀬橋などがついに焼け落ちた。

海軍来援

逃げるに逃げられず迷っていた負傷者らは、午後四時ごろ、横川町の三篠信用組合本店へ行けということをし、人
づてに聞いて、そこに集った。海軍の衛生隊が来援して、負傷者の治療をおこなった。

六日の夜

こうして、死ぬる者は死に、逃げられる者は安全地域へ逃げ、辛うじて息をしている重傷者はその場所から動か
れぬまま、六日の夜を迎えたのであるが、なお残りの火が燃えており、広瀬地区一帯、立っている家屋は一軒も見
えない死の街であった。

諸現象

避難先からしばらくして復帰したときは、黒焦げになった電柱や柱が、ただポツンポツンと立っているに過ぎな
かった。瓦礫の堆積した地面には、焼けた機械類の赤茶けた残骸、衣類やふとんなどの布ぎれ、もつれあった電線
などが雑然と散乱していた。

焼けた瓦、焼けた石が歩いて行くどこまでも続いており、中には硬貨類が溶けてくっつきあったまま凝固してい
たし、瓦も溶解したガラスと共に固っていた。

寺町一帯の各寺院墓地は、墓石の散乱がひどく、また多くの墓石は焦熱のため欠損が甚だしかった。

諸所に焼けただれた脱線電車・自動車の残骸があり、傍に運転手が乗客かの死体が転っているのも見られた。

広瀬地区は爆風・爆圧の直撃を受けたらしく、倒壊家屋その他がほとんど一斉に発火した。ドガンという音と共に
丸味のある光が落下したとたん、地獄と化した。

こんな状況の中で、広瀬元町のある家では、二階に寝ていた母親と二児が、約二〇〇メートル北の広瀬橋の東側
まで、二階と共に吹き飛ばされたが、三人ともかすり傷一つもしないで助かった。その二階は瞬間的に一階から
はずれて飛んだという。

また、寺町の報専寺内にある高さ一メートル半ばかりの築石台の上の鐘つき堂は、その瓦が飛んだだけで、その
まま残っていた。この鐘つき堂とイチヨウの木などの樹木は、付近の民家四戸とともに奇蹟的に焼けず、戦後まで
残った。

なお、炸裂瞬間の被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
広瀬北町	100	-	-	-	54	36	10
広瀬元町	100	-	-	-	58	35	7
錦町	100	-	-	-	78	14	8
西九軒町	100	-	-	-	81	7	12
寺町	100	-	-	-	53	33	14
西引御堂町	100	-	-	-	80	14	6
横堀町	100	-	-	-	70	22	8
新市町	100	-	-	-	80	15	5

全焼は全壊を含む

八、被爆後の混乱と応急処置

救護状況

焼野原になった地区一帯には人影一つなく、住民もいなかったから、その後の混乱ということもなく、応急処置も不必要であった。

兵隊が三、四人来たが、何も救援しなかったし、もちろん救護所も設立されなかった。一週間ぐらいして、現在の商工会議所付近に天幕を張り、乾パンを誰彼なしに配給したから、受取りにいった者もある。

死体の収容と焼却・埋葬

死体の収容と火葬は、八月十日ごろ天満川の岸で、兵隊がおびたしい数の死体を集めて来ては焼いた。

死んでいるその場所で処理された死体もあったが、これも残材を集めて兵隊たちが焼いた。死体はどれもこれも裸同然なので氏名の確認などしようにもできないことであった。

火葬は、兵隊が油をかけておこなったが、これらの遺骨の処置についてはいまだに不明である。

焼跡整理

被爆直後、焼野原の中にポツンと一軒だけ、焼トタンで囲った小屋が建っており、人が住んでいたが、またどこかへ逃げていった。

こんな状況であったから焼跡の整理作業など思いもよらぬことで、進捗しなかった。地区一帯が無人の焦土と化し、各町の町内会も壊滅し、対策を立てるといふ余地もなかったし、当分の間は全く不用でもあった。

九、被爆後の生活状況

八月末の状況

全地区、ただ一望の焼野原となったまま、八月末になっても、誰一人として帰って来る者はなかった。両側を川に囲まれたこの地区内で、目標となるのは、ただ寺町のおびたしい墓石群の散乱荒廃した無言のたたずまいだけであった。

八工の発生

避難した人や以前に疎開して助かった人が、ときどき様子を見に帰って来たが、八工がまっ黒く発生している焦土を見るだけであった。

道路のあちこちに牛や馬がたおれ、死んだままになっていて、八工の格好の餌になっていた。ここに人間の生活というものは、まったくなかった。しかし、九月十七日と十月八日の暴風雨と大出水が、このような不潔な焼跡を洗い流した。

なお、九月十七日の暴風雨の時は浸水はひどくはなかったが、横川町の電車鉄橋はその際流失した。

バラック建つ

秋風吹く十月末ごろになって、やっと各町のあとに一、二戸ずつ、焼トタンを使ったバラックが建ちはじめた。

建築資材としては何もなく、焼残りの材木や板切れ、焼トタンなどを拾い集めて、これも拾って来た焼け金槌・焼け釘・弾力なくすぐ折れる焼け針金などを使って、自力で、ただ寝るだけのちっぽけなみすばらしい小屋を建てた。入口の扉には、はしの方の少し焦げた藁などを拾って来て、風よけに吊りさげているバラックもあった。焦土は、これらのバラックを中心にして、散乱した焼け瓦を垣代りに積み重ねながら、少しずつ整理され、清掃されていった。

電灯つく

焼跡には灯がなく、バラックはそれぞれ残材を焚いたり、何かの油をともしたりして、暗黒の夜をすごしていたが、十月中ごろ、バラック生活をしている二、三人が勤労奉仕で、中国配電株式会社の大洲工場まで歩いて電柱を取りに行き、穴を掘って電線の架けられるのを待った。そして翌年三月ごろになって、ようやく電灯がつけられた。また、市当局から、組立式の簡易住宅のあっせんがあり、抽籤に当たった者は自分が資材を運び、自分で建て、ようやく人間らしい生活を取りもどした者もあったが、ごく少数であった。

生活物資

生活物資の配給が極度に少なく、ほとんど闇売りのもので都合をつけた。衣類を疎開していた者は持ち帰って、それを米や野菜などと交換して食いつないだ。

この地区には田舎からも、時々闇商人が食糧を持って来たので、罹災者はみんなそれを買ったのであった。

ノミ・シラミ

昭和二十一年初めごろ、ノミやシラミが多数発生したので、当時の進駐軍が浮浪者などはもとより、一般の人々にも薬品DDTを散布して駆除した。

電車通る

昭和二十二年、横川線の電車が復旧した。しかし、鉄橋が流失していたので、広島別院前までしか電車が来ず、横川駅へ行くにはそこから歩かねばならなかった。二十三年十二月になって、横川橋から横川駅前の終点までの電車が開通した。

闇市の発生

電車が通るようになって、広島別院から横川橋のたもとまで闇市ができて日々隆盛になっていった。闇市では、食糧品はもとより、軍用品その他の衣類をはじめ、手巻タバコ・砂糖などの調味料・その他戦時中ながく目にも見られなかった生活に必要な品々がたくさん売買されていた。

経済活動

昭和二十三年ごろから経済活動も活発となり、ようやく罹災者らは活気を取りもどしたのであった。ことに、電話の復旧で、電話関係の業種は異状なほど多忙をきわめたが、これが経済活動復活に大きな影響をあたえた。

昭和二十四年ごろから、市民生活は本格的な復興軌道に乗り、ソギ葺・板ばりのバラック建築ながら、横川橋のふもとを中心にして、どしどし建てられだした。

しかし、以前の町の形はまったく姿を消した。住んでいる町民も、以前からの人はほんとに少なく、他から新しく入ってきた人たちがばかりで占められた。また、このころになって、寺町の各寺院も、広い境内に小さなバラックのお堂が建てられていったのであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

中広町一丁目 二丁目 三丁目、上天満町、天満町

町内会別要目

この地区は、太田川の分流が横川橋から西流して更に二本に岐れる天満川と福島川の両河川に挟まれていた地区で、地区の範囲は、天満本町[てんまほんまち]・天満南町[てんまみなみまち]・天満中町[てんまなかまち]・西天満町[にしてんまちょう]・西天満上組[にしてんまかみくみ]・上天満本町[かみてんまほんまち]・上天満町[かみてんまちょう]・上天満町東通り[かみてんまちょうひがしどおり]・および中広町[なかひろちょう]・中広北町[なかひろきたまち]・中広町[なかひろちょう]一丁目・中広本町[なかひろほんまち]・上天満北町[かみてんまきたまち]とし、爆心地からの至近距離は天満町の天満橋西詰めで、約一キロメートルであり、もっとも遠い地点は、中広町北部で約一・六五キロメートルである。

天満地区各町は、旧史によれば、往古、小屋新開と呼称されたところから、勤勉な職人の町として発達した地域である。

天明八年、町奉行の許可を受けて、町民が町内の天満宮にちなみ、天満町と命名したのが、この町名の起源であるという。その歴史的な伝統を引継いで、被爆直前まで、大きな工場や商店は少なく、町全体が誠実な職人や勤労者の居住地帯であった。

中広地区には、食品工場その他の工場が少しあったが、ほとんどの家は昔ながらの農家で、広島市に野菜を供給する田園地帯を形成していたところである。

なお、被爆直前の建物戸数は、概算二、〇五四戸、人口数は七、八一二人と推定される。

地区の各町別の内容は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
中広町	253	236	986	中尾三郎
中広町一丁目	121	110	390	飯村資郎
中広本町	269	269	1,084	山中悦蔵
中広北町	230	230	897	永井一夫
上天満北町	220	205	850	野村修一
上天満町東	107	104	541	岩住善次
上天満本町	235	235	1,053	大田喜一
上天満町	116	110	400	山中寿一
天満中町	37	37	142	中西多次郎
天満本町	150	150	462	小畑寿吉
西天満町	97	105	407	藤川達朗
西天満上	155	152	497	西尾雄三郎
天満南町	64	62	193	武内半之助

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
天満国民学校	天満町	西警察署中広派出所	上天満東通り
天満宮	天満町	東洋製罐株式会社	西天満町
三宅製針所	西天満町	楠原罐詰工場	中広町一丁目
広島畜産株式会社工場	上天満町	玉造機株式会社	中広町
西警察署天満南町派出所	天満南町	岩見木工所	中広町
飯村鉄工所	中広町一丁目	松尾鉄工所	中広町
清和鋳工所	中広本町	高見製材所	中広町
瀬川食品工業株式会社	中広町一丁目	向西館	中広本町
三宅食品工業株式会社	中広町一丁目	広島市立中学校	中広町

二、疎開状況

(天満地区)

天満地区では婦女子・児童を優先的に疎開させるようにしていたが、種々の理由から、疎開することなくそのま

ま居住する者が多かった。

昭和二十年四月ごろ、建物疎開が実施されたときも、立退者で市外へ転出する者は少なく、隣接地の観音町へほとんどが転出したようである。建物強制疎開による立退者でも、このような状態なので、その他の者で市外へ疎開する者はあまりいなかった。

物資の疎開も、建物疎開にともなって引越したくらいのことで、それ以外は、あまり見受けなかった。

学童疎開は、天満国民学校児童が佐伯郡砂谷村・水内村の寺院や民家へ分散して集団疎開を行なった。

(中広地区)

中広地区では、川向こうにあたる山手町の上の山中に仮設住宅を作り、約二〇戸ぐらい一〇〇人程度が疎開していた。その他町民の二〇パーセント程度が、田舎へ疎開していた。

物資疎開は、人員疎開と同じように僅かな荷物と食糧を疎開したにすぎなかった。

中には、畳・建具・衣類などを田舎に疎開した人もあるが、それはごく一部のことであった。

三、防衛態勢

(天満地区)

天満地区では、防空防火用施設として、貯水槽・防空壕を町内会ごとに、警防団が指導して設置した。

防空訓練も頻繁に実施された。警防団員は、中広町を含めて一四〇人ばかりいたので、訓練にあたっては、十分に指導できた。

町内会長はじめ幹事は、防空防火訓練を熱心の実施したが、原子爆弾の災害に際しては、何ら役に立たなかった。

(中広地区)

中広地区では、各町内会ごとに防衛隊を組織し、町内会長が隊長となり、五〇戸ぐらいの単位で班長をつくり、警防団ならびに警察の指導のもと、日夜、防空防火・避難・救護などの訓練をおこない、二十年六月ごろ、国民義勇隊ができて、ほとんど家族ぐるみが参加し、非常時に備えた。男(老人が多い)は竹槍の訓練、女は炊出しの準備訓練をおこなった。

四、避難経路及び避難先

(天満地区)

天満地区では、佐伯郡宮内村および平良村その他付近の町村へ避難することにしていて、避難経路は別段に定めていなかった。汽車・電車の利用と鉄道線路沿いと、国道を西方に向うようにきめていた。

(中広地区)

中広地区は、地区自体が、広瀬・本川方面からの避難先になっており、空襲警報発令のたびごとに、当地区内に逃げて来た市民が解除を待って復歸した。地区内住民は、各戸または集団利用の防空壕が設置されていたので、そこへ避難した。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
大國部隊	天満町・天満国民学校
陸軍(部隊名不明)一個中隊	中広北町・市立広島中学校

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

天満地区では空襲警報発令中は、警防団員が数人ずつ各町内を巡視した。その復命報告は、各町内とも異状なく防空態勢をとっているということであった。それほど、各町内会とも灯火管制を厳重にし、直ちに避難できるような服装と携帯品をそのまま持ち出せるように構えていた。

なお、防空壕への待避はさせていなかった。

炸裂まで

警報解除後は、職場への出勤など、それぞれの仕事についていた。

炸裂前、警防団の警備を解こうとするときに、飛行機の爆音が聞えているようなので、吉川益三本部長が団員に「監視檣にあがって様子を見たら…」と言ったところ「暑くなっているうえに、警戒警報も解除されているし、万一敵機としたら、直ちに空襲警報のサイレンが鳴らなければならないのに、そのようなこともないのだから檣に上がるのはやめよう。」と言うので、警戒要員四人を残し、他は全員帰宅した。

中広地区でも、六日の朝、警報解除になったので、皆安心して、それぞれの家業や、通勤をはじめたところであった。八時ごろ、東北の方面から、ブルンブルンという音が聞えてきたが、あまり気にかけず、町内も隣組もなら活動しなかった。防空壕へもほとんどの人が待避しないうでいた。

疎開作業への出動

天満地区の建物疎開実施概況は次のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数	出動先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
天満本町	出動していなかった		10			
天満本町南町			90	90		
天満本町中町			160	160		
西天満町			10	10		
西天満町上組						
上天満本町						
上天満町						
上天満町東通						

中広地区では、当日各町とも疎開作業への出動はなかった。また建物疎開を実施していた町もなかった。

七、被爆の惨状

(天満地区)

天満地区では、原子爆弾炸裂と同時に、屋内にいた者は、崩壊した家の下敷きとなり、屋外にいた者は、熱線で火傷した。突然降って湧いた生地獄で、親は子を、子は親を探す声、助けを求める声が喧しく交錯した。

約一時間後には、各所から火の手が上がり、ますます混乱状態となり、人々は右往左往して逃げまどった。

避難状況

満潮の川が引きはじめていたから、ある人は、川へ逃げて流木につかまっておれば、下流へ流されて行く。その下流には兵隊がいるだろうから、きっと助けてくれるだろうと、川へ逃げるようにすすめたりした。

どうにか逃げられる者は、川を渡るか、電車線路伝いに、または橋を渡って西方に向って無我夢中で逃げた。逃げるときは、道とか橋とかを考える余裕などなく、通れるところをどんどん進んで、己斐の川岸へと向った。

電車線路には、電車が進行中のまま破壊され、車内の乗客が苦しんでいるのを見受けたけれども手の施しようがなかった。

欄干が燃えていた福島橋は、市内で一番長い橋であったが、別名耳切り橋(寒い時、橋が長いので渡る時間がかかり、耳が切れるように痛むことからいう。)とも言い、この橋を渡って逃げる者は少なく、上流の方の小河内橋を渡る者が多かった。

しかし、橋上が混雑していたので、小河内橋のかみしもで水面を泳ぐようにして渡る者もたくさんいた。

また、天満橋東詰の橋上に二列にならんで、三〇人ばかり坐りこんでいたが、その顔はまっ黒で誰が誰だか判別できなかった。

橋の左岸下側に筏があったが、そこにも三〇人ほどの重傷者が、うなってかじりついていた。

川下の電車専用鉄橋の下側に舟があったが、その舟と岸とのあいだには、学生(建物疎開に出動していた者)二〇人ばかりが苦しんでいた。

電車道と疎開跡には、東部から逃げて来た市民が多くいて、あちらにもこちらにも倒れて死んでいく者がたくさんあった。

(中広地区)

一方、中広地区では、閃光と炸裂・轟音に黒煙り、建物の倒壊が一瞬のうちに起こり、まっ暗な中で方角もわからず、方々から「助けてくれ」という叫び声があがった。それをどうすることもできず、軽傷者でも、ただ呆然としているだけであった。しばらくして気がついて、下敷きになっている者を助け出し、また助け出そうとしたが、その時は、もう火災が発生していた。消火どころの騒ぎではなく、むろん水も容器も、また体力もなく、家族の存在すら判らず、必死になって、探す名前を泣きながら呼びつづけるだけであった。

火の廻りは、意外に早く、逃げ道もなくなり、遠まわりして避難した。

一瞬の惨事発生で、千人千様、下敷きになった家族をそのままにして逃げる者もあったし、火炎の中へ救出に入

ったまま、一緒に焼死した者もあった。

避難者の中には、子供の死体を背中に負ってゆく者もあったし、軽い荷物を手に持ち、肩には重傷者をついで逃げる者もあった。

死体が列をなして路上によこたわっていたが、山手町を経て長束(ながつか)・祇園(ぎおん)方面へ通ずる山添いの道と、福島町を経て己斐の山へ通ずる道に、半死半生の人や死体が最も多く転っていた。また、三滝の山の方へも一〇〇人以上も逃げて行った。

中央橋は炸裂時には現存していたが、二、三時間後に、中央北寄りに、約三〇センチメートル焼け始めて、夕方までに北側半分ぐらいが焼け落ちた。

ちょうど避難の最中、安佐郡方面から敵機五、六機が上空にあらわれたので、山手川の浅瀬にあわてて隠れた者がたくさんいた。なお、炸裂時の瞬間的被害は、次のとおりである。

(天満地区)

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
天満本町	100				50	50		
天満南町	100				10	90		
天満中町	100				10	90		
西天満町	100				5	95		福島橋の欄干が燃えた。
上天満町 (上天満本町、 上天満町、上 天満東通)	100				2	98		

(中広地区)

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
中広町	90	10			53	30	16	
中広北町	90	10			40	35	25	中央橋半焼
中広町一丁目	100				50	35	15	
中広本町	100				40	30	30	
上天満北町	100				45	35	20	(天神橋)中広橋半焼

火災発生

炸裂後、天満地区の各町とも、飛石的に火災が発生した。午前九時ごろ発火したが、雨が降ったのちも燃えつづけ、およそ午後九時ごろ終息した。

中広地区では、中広北町西寄りの家屋は火災が発生しなかったが、他は同じ状況で、最初の火災発生は、前夜、敵機が油をまいたという人もあり、町ごとに二、三か所から点々と発火したようである。午前八時半ごろ発火したが、東風によって火勢があふられ、ものすごく延焼の速度を早めた。また、山手町の山林が自然着火で火災を起していた。

黒い雨

天満地区では、雨が午後二時ごろから五時ごろまで土砂降りに降った。そのあいだ、焚火にあたりたいほどの寒気がした。雨は激しい降り方であったが、火災は鎮火しなかった。

中広地区では、炸裂三〇分後に雨が降りはじめたが小雨程度で、一時間あまり降りつづいた。黒い雨は、爆風による地上のゴミが吹き上げられ、これに雨が降って来たので、黒い雨になったと思われた。雨量も少なく、火災には影響を与えるほどでなかった。

六日夜

六日夜の状況は、天満地区は全壊全焼であったから、逃げられる者は、他へ逃げてしまっていて、その状況は、余燼くすぶる焦熱の巷であったこと以外は、はっきりしない。

避難したところから眺めると、夕方は火災で明るいようであったが、八時ごろには暗くなっていた。

中広地区でも、天満地区とほとんど同じであって、地区内で住宅の残ったのは、中広北町の一部だけで甚だ少なく、もちろんそれら残った家々の電灯も消えていて、地区全体がただ空漠としていた。

焼跡を見ると、河原のようにひらく物の残骸が横たわり、コンクリート建物だけが、ところどころに崩れた形をわずかに残しているだけであった。

諸現象

(イ)屋外にいて火傷した人体のある部分は、鉛色のような黒色をしていた。裸体にいて火傷した者は、皮膚がむけて、あたかもボロをきたようになっていた。

家屋の倒れ方を見ると、動力線の電柱を中心に、右と左というような倒れ方をしており、爆風の方向を知ることができた。

(ロ)天満地区では、瓦の表面が溶解して重なり、他のものと密着していたし、ガラスも飴のように溶けてドロドロになり、凝結していた。

中広地区では、瓦が赤土色になり、弱くて使用に堪えなくなった。金属は火熱で曲がったり、熔けあい、赤くなって原型はとどめず、ガラスは溶けてサンゴ礁のようになっていた。石材は軽石のように小穴があき、割れてボロボロになった。

(ハ)天満地区では広島電鉄市内線の天満町停留所付近に、電車二台が、そのままの状態でも爆炎上り、その残骸をさらしていた。

電車の窓ガラスは、夏であった関係か、開放していたのでその破碎は案外になかったように思われる。もっとも後日見たのであって、あるいはガラスが全部破壊されているのをそのように見たのかも知れない。

電車内には多くの負傷者がいたが、それは車内での負傷者ばかりでなく、避難途中、苦しさのあまり車内へ入ったと思われるのもあった。

中広地区では、爆風で電柱が裂けて折れた。電線はズタズタに切れて落下し、クモの巣のように絡みあっていた。

爆風は家の天井を吹きとばし、壁も落ち、地区内の家屋はほとんど倒れた。

横川橋電車鉄橋から、電車が川の中に落ちて横倒しになった。これが九月の洪水のとき、約一〇〇メートルばかり下流の天満川に流されて、その後一か月ぐらい、川の中に放置してあった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊来る

天満地区には、炸裂後一時間ぐらいしたころ、宇品の暁部隊(少尉指揮)が三〇人ぐらい救援に来た。命令で天満町方面の救援に来たのだと言っていたが、スコップ・ツルハシなどを狩り集めて、当地区内の救援を行ない、夕方には、引揚げていった。

翌七日の朝、にぎり飯が一人に二個から三個ずつ配給があったが、空腹であったからひどくうまかった。

約一週間後に、また、兵隊が一〇人ぐらい来て、焼跡の遺骨を集めていった。

中広地区に救援隊(双三郡方面の警防団)が来たのは、八月十日ごろで、中央橋仮設がおこなわれた。なお、この地区には救急品の配給はなかった。

応急救護所

天満地区では、六日当日、西は福島町まで、東は小網町までは入ることができたが、火災のため地区内には入れなかった関係上、応急救護所の設置などは全くできなかったようである。

中広地区でも、救護所はなかった。しかし、八月十日ごろ、三篠地区の打越町中央橋渡り詰めに救護所ができて、軍の看護兵が施療にあたったが、薬がないので十分な治療はできなかった。そのうち移動式になって、他の町内へ移って行った。

道路の啓開

天満地区では、一か月後ぐらいであったか、町内会長四人と残存の町民で作業のできるものが集って道路開きをおこなった。当時、罹災者は職もなく遊んでいる状態であったから、日当をもらって作業を行なった。この地区内が済むと、他地区へも延ばして、道路開きの労務作業をつづけた。なお、中広地区では労務作業は行なわれなかった。

死体の処理

天満地区では惨事後、死体はそのまま放置してあった。

それは遺体を探している人の便宜をはかるためであって、判明したのは縁故者が持ち帰った。残った遺体は、氏名の確認もできない程むごい姿を曝していた。しかしその中の幾体かは、辛うじて確認できた者もあった。

火葬

天満地区における火葬は、八月十三日ごろ、天満町の電車停留所北側で、道路をはさんで東側と西側で行なった。しかし、火葬するにも薪がなかった。一週間ぐらいして薪が届いたので、やっと火葬にふした。火葬がひととおり

終わったのは八月二十三日ごろであった。

読経することもなく、穴を掘って火葬にし、野天に遺骨をそのまま置いていた。しばらくして遺骨を一か所に集めて置いたが、後に市の供養塔へ納骨した。

中広地区の死体は、軍人を除き、地区内の人が多く、氏名も判名していたので、八月七日から、最寄りの人の手で焼き、遺骨は家族親族知人などが引取った。従って仮埋葬はしなかった。

火葬場所は、各町とも、その死体の近くで土を少し掘って、壊れた板切れを集めて焼いた。

軍人の遺骨は、板の上に永らく並べてあったが、市の役人が納骨堂に持って行って納めた。

火葬の終わったのは八月十日ごろであった。

法要を営む

地区内の僧侶が健在だったので、八月末ごろ、町内ごとに法要をいとなんだ。

被爆後の各町内会の機能は、次のとおりである。

各町内会の機能

町内会名	状 況
天満本町	全町が全焼したので、町民もほとんどが避難していたことではあるし、機能は全滅と言ってもよいほどであった。
天満南町	
天満中町	
西天満町	
上天満本町	
上天満町	
上天満町東組	
中広町	町内会長負傷のため、副会長(四方盛一)が代行したので、機能はまひしなかった。
中広北町	町内会長が陣頭指揮をとった。
中広一丁目町	町内会長が陣頭指揮をとった。
中広本町	町内会長死亡のため、副会長が代行した。
上天満北町	町内会長健在にて町民の世話をする。

九、被爆後の生活状況

両地区の生活状況

天満地区では、被爆後、若干の世帯が焼け残りの防空壕とか、掘立小屋に住んでいた程度で、にぎり飯の配給が一〇日間ぐらいあった後に、一般配給がおこなわれた。しかし、食糧難のため、焼跡で目ぼしいところが多かった。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

天満地区では、昔から大水のとき、上天満町から福島川へ抜けるように築堤し、下流の水害を防ぐ場所(水入りと呼ぶ)があった程で、大水のたびに浸水したが、九月の台風のときは、西天満町が浸水した。この台風で筏にいた死体も、鉄橋下の死体も流された。十月八日の洪水では、天満橋・電車鉄橋が落ち、交通が杜絶し、渡舟で往来した。

中広地区では、九月の暴風雨も、十月の豪雨も、それほど被害を受けることもなかった。ただ、バラック小屋の屋根が雨漏りして寝るところがなく困ったが、罹災者はすでにこれ位の苦難は、たいしたことに思わなかった。

十一、その他

中広地区では、市から巻タバコの配給があったとき、農家に対し、食糧を都合してもらう感謝の意味で、配給の三分の一を差引き、農家におくった。しかし、何ら原子爆弾の被害もない農家に、被爆者がタバコを提供するのは間違っているという不満の声が出るには出た。

また、この地区内には畑が多く、野菜を作っていたが、警報発令になって避難して来る人の中に、野菜を盗んで帰る人が多くて、どの農家も困ったという。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

観音町、東観音町、西観音町、観音本町一丁目 二丁目、南観音町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目 七丁目 八丁目、観音新町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、東観音町一丁目[ひがしかんのんちょう]・東観音町二丁目東区・同西区・同南区・同北区・観音本町[かんのんほんまち]一丁目・西観音町[にしかんのんまち]一丁目・西観音町二丁目・南観音町[みなみかんのんまち]一丁目北部・同南部・南観音町二丁目北区・同南区・南観音町三丁目・および三菱造船[みつびしぞうせん]・三菱造機[みつびしぞうき]・昭和新開[しょうわしんがい]・三菱寮[みつびしりょう]とし、爆心地からの至近距離は、東観音町一丁目の現在の緑大橋西詰めで、約一・一キロメートル、もっとも遠い地点は、南観音町の現在の広島空港西南端で約五キロメートルである。

観音地区は、南部の田園地帯、および三菱重工株式会社社宅街を除いて、閑静な住宅街であった。古名を新蔵新開と称し、慶長の初年開発してから、ずっと新開の造成が続けられて、天満川と福島川に挟まれる大きな地区となった。戦後、福島川の廃川埋立てによって、地区の北部は福島地区と陸繋した。

地区内各町についての要目は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
東観音町一丁目	430	450	1,550	吉村直樹
東観音町二丁目東	795	740	2,960	田頭新太郎
東観音町二丁目西				島津市造
東観音町二丁目北				島津芳雄
東観音町二丁目南	163	155	533	田中保太郎
観音本町一丁目	281	320	1,200	上野円蔵
西観音町一丁目	610	630	2,700	岩崎泰二
西観音町二丁目北	265	258	923	松原正治
南観音町一丁目北	226	226	820	長尾京一
南観音町一丁目南	152	185	834	住村礼三
南観音町二丁目北	247	247	971	久保八二
南観音町二丁目南	175	175	864	川村祖吉
南観音町三丁目	201	199	998	城廣四
観音本町二丁目	140	180	280	小畠光俊
西観音町三丁目南	179	170	830	不明
西観音町三丁目西	186	186	788	不明
南観音町三菱新開西部	160	251	1,446	小浦健吾
南観音町三菱東部	1,200	700	2,810	高橋好雄

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
観音国民学校	東観音町一丁目	第二国民学校	南観音町
観音院	東観音町二丁目	広島市立造船工業学校	南観音町
南正坊	東観音町二丁目	三菱重工株式会社機械製作所	南観音町昭和新開
畜産缶詰工場	西観音町一丁目	三菱青年学校	南観音町昭和新開
栗林缶詰工場	東観音町二丁目	真宗学寮	南観音町
山口缶詰工場	東観音町一丁目	土地区画整理事務所	南観音町
県立第二中学校	西観音町二丁目	広島放送局分局	南観音町(造船工業学校内)
私立西高等女学校	東観音町二丁目		

二、疎開状況

人員疎開

観音地区では、他地区のような集団疎開はなかったが、少数ながら縁故疎開をした者があった。むしろ、他町からこの地区へ疎開して来る転入者が相当あった。南観音町一帯でも、被爆前まで八三〇世帯ぐらいの転入世帯があった。

三菱重工株式会社機械製作所は軍需工場とその社宅ばかりで疎開しなかったが、ただ、同社事務系統は、草津の

海蔵寺や己斐の山の中に疎開していた。また、家族の一部は、各自の郷里へ疎開していた。

物資疎開

物資の疎開は、衣類の疎開が約七〇パーセント、家具の疎開が約一〇パーセントぐらいと推定される。

学童疎開

観音国民学校は、比婆郡八幡村・久代村・田森村および同郡東城町の各寺院へ疎開した。三菱重工株式会社関係の学童は、現在の三次市十日市町へ二か所、田森村へ一か所、八幡村へ一か所ほか一か所、および三菱青年学校に一、二年生の六学級が疎開し、その他は観音国民学校の疎開先に行った。

三、防衛態勢

警防団

観音警防団を結成し、団員は八九人であった。各町とも、隣組組織で、消火ポンプや水槽の整備を充分におこない、週一回の演習訓練を実施し、一〜二か月に一度は連合訓練をおこなった。

国民義勇隊

また、昭和二十年六月に国民義勇隊を創設すると共に、各町内会は防空壕を作った。防衛上・煙霧用として使用するため己斐町や牛田町の山へ松の枝(青松葉)を切りにいき、貯えて準備したが使用しないままで終わった。

三菱重工株式会社社宅街では、会社の指令で男は全員工場で働き、婦女子だけで町内を守れということになって隣組を整備した。各隣組ごとに係員を置き、防衛・防空の訓練演習を厳に実施した。また、避難・救護演習をおこない、各要所に防火用水池を掘り、各隣組ごとに手押しポンプを備えていた。

なお、広島市国民義勇隊には、町内の係員を隊員として参加させた。

四、避難経路及び避難先

非常の場合の避難先は、東観音町・西観音町地区では、第一次草津町海蔵寺として、此所で一夜をあかして集結後、第二次として、佐伯郡地御前に避難することにしていた。

南観音町地区では、佐伯郡平良村(現在の廿日市町)に避難することにしていた。

五、所在した陸軍部隊集団

南観音町総合グラウンドに陸軍高射砲隊があり、また、同町市立造船工業学校には、出征兵士約一〇〇人が宇品港から出陣するまでの間、常時、校舎に宿泊していた。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日午後九時二十分から翌六日午前二時十五分まで警戒態勢をとり、灯火管制をしていたが、解除になって態勢をといた。

六日朝

六日午前七時九分、再び警戒態勢に入り、七時三十一分解除、防空壕へ避難していた者も出て来た。各町とも四〇パーセントは屋外、その他は屋内にいて、平常とかわらなかった。

侵入敵機

上空侵入の敵機を見た者は少なく、爆音もあまり気づかなかったようである。

三菱造船社宅街では、原子爆弾炸裂まで隣組の活動は別になかったが、三、四日前から敵機が呉から岩国へ、岩国から広島三菱の上空を通過して呉へと一〇〇機、二〇〇機が来襲し、猛爆撃をし、八月五日には、明六日広島を大爆撃するという敵機からのピラがあったともいわれて、非常に不安な空気がみなぎっていた。

各隣組ごとに造った防空壕に、老人・病人・子供はなるべく警戒警報のときから待避し、空襲警報のときは全員待避することになっていたが、当日朝、解除になったので活用できなかった。しかし、解除後も、敵機のピラのこともあって、社宅街全体が緊張した空気に包まれて、なんとなく無気味な気持ちでいた。

上空侵入の敵機について、広島周辺を高度を高くかすかに見える程度で旋回していたのを目撃した者があったが、爆音は聞かなかったという。

疎開作業への出動

疎開作業の出動について、当日、西観音町二丁目町内会二七〇人が、水主町の県庁付近の作業に出動していた(松原正治隊長は無傷であったが、戸板に乗って、午後三時ごろ帰宅して、三日目ごろに死亡した。)

また、南観音町二丁目北町内会は、土橋方面に出動し、久保八二中隊長は、市役所に連絡に行く途中、日本銀行

前で被爆、自宅に帰って死亡した。その他の各町および三菱重工社宅からは出勤していなかった。

三菱造船・三菱造機の両町内会は、被爆前日までに各一〇〇戸ずつ、また三菱寮は約一〇棟、建物疎開作業動員を済ませていた。

七、被爆の惨状

(観音地区)

東・西両観音町・観音本町地区では、住民のほとんどが閃光を感じた。閃光は矢のように、洋傘のホネの形で庭面に一斉に突きささった(西観音町二丁目・高田靖一(談))。家の外にいた者の大半は吹き飛ばされ、屋内にいた者もすべて衝撃を受けた。家屋も天満川向き(東向き)の家屋は倒壊した。轟音と同時に眼もあてられぬ惨状を呈し、家の下敷きになった者は、大多数の者が、突発事態にあわてていたし、道具もなかったから、ほとんど救出できなかった。

避難者は大部分、西へ西へと倒壊家屋のあいだを遮二無二逃げた。経路は己斐観光道路(国道)を通り草津方面へ出たのであるが、西大橋も旭橋も避難者で一ぱいであった。なかには欄干にもたれて動けなくたった人もあったし、川へ逃げた者の中には重傷者が多く、ほとんどの者が死亡した。

南観音町地区では、瞬間、黄色の光がして、パツというような音が聞えた。焼夷弾かと思われたが、昼間に落とすようなことはあるまいに、不思議なことだと思った者もあった。

鶏舎のような簡易な建物は倒壊したが、その他の建物は倒壊しなかった。しかし、戸障子はこわれ、窓のガラスが粉微塵となり、天井が落ちかかっているという状況であった。壁なども、壁土がはがされて、土が床上に撒いたように飛散した。そのうえ、燃えているところもあったが、消火に努めて大事に至らなかった。

この騒ぎに、いったんは防空壕の中に逃げたが、家が損壊しているのが気になって出て行き、あと片づけを一生懸命おこなった者もある。

(三菱地区)

三菱重工株式会社関係地区では、下川正一の体験を聞くと、「ピカッと光った時、瞬間的に土間に伏せた。日頃の訓練のたまものであった。二つ三つ呼吸したころ、ドーンと大音響がした。百雷が一時に落ちたかと思われた。窓は飛び、壁はくずれ、天井は落ちる、家財は破壊するなどの音が、一時にした。

音の静まったころ、飛び起きたが、一〇人ばかりいた事務員が天井の下敷きになっていた。すぐに救出したが、全員窓ガラスの破片で血まみれだった。そのうちの一人は腹部にガラスが入りこんでいた。

自分自身は無事で、外に出てみると、脱出できた人は血まみれになっており、壁土や天井の煤が付着して誰れが誰れやら見きわめがつかない。

『どこへ避難したら良いのですか。』と、付近の人々は、たださまよっている。私は町内を一廻りしてみようと、ちょうどあった自転車が出かけたが、屋根の瓦やこわれた家の残骸でなかなか通れなかった。

あらまし町内の様子を見たが、どこもここも同じ状況である。

峯避難場所を定めねばと、県営グラウンドの軍隊(暁部隊)に頼んだところ、『この場合仕方がないから此処にしよう。』と言った。それで、負傷者はグラウンドへ収容せよと命じた。すると、ほぼ、十時ごろと思うころ、その部隊から、『はたはだ気の毒だが、薬品も残り少なくなり、また第二の戦闘準備にかからねばらぬから、これでひとまず収容を打切って、患者を引取ってくれぬか。今約三、〇〇〇人いる。』と、言われて当惑した。

社宅の者は社宅へ引取ったが、外来者は、一部社宅の空家があったので半壊家屋ではあるが、そこに引取ることにした。

外部からの避難者は、なお続々とつめかけてくる。その姿は、よくもここまで来られたものだと思われるほどの重傷であった。裸の大腿部が半分ぐらい抉り取られている者もあったし、また一二、三歳の少女が三、四歳の子供を背負っているのが、二人とも全裸体で、皮膚がバラバラに裂けており、ミノかヨロイを着たようなかっこうで、歩けばその皮膚がバラバラとあおぐように揺れた。少女が、『おじさん、どこへ行ったら良いのですか。』と聞くのであるが、その時は部隊からも締め出されていたので、『よし、今助けてやるぞ。』と言ったものの困ってしまった。

その後、なお続々と避難者は詰めかけて来るのであった。南観音町の真宗学寮を避難所にしたと聞いていたので『そこへ行け。』と命じた。

あと、真宗学寮へ様子を見に行ったが、手当てをする者は誰れもいない。が、そこにも、また付近の路上にも、

避難者が一ぱい寝ころんでいて、道もふさがってしまい、通れないほどのありさまであった。

その時は、もう全市一円、煙につつまれて見通しもできなかった。」という。

天満川

七日朝九時ごろ、天満川には水面一ぱいに、死体が浮び、それをかき分けて舟をつけ、その肉親や知人を探し出して運んだ者もいた。

なお、炸裂時の瞬間的被害は、次表のとおりである。

各町の被害

町名	家屋被害（約 %）				人的被害（約 %）			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者	
東観音町一丁目	70	30			25	55	20	天満橋 十月の水害で落橋
東観音町二丁目東	70	30			24	57	19	観音橋 九月台風で半分落橋
東観音町二丁目西	70	30			22	54	24	
東観音町二丁目北	70	30			24	55	21	
東観音町二丁目南	70	30			22	56	22	
観音本町一丁目	60	40			16	54	30	観音橋 九月台風で半分落橋
西観音町一丁目	60	40			15	52	33	
西観音町二丁目	57	43			13	65	22	西大橋 九月の台風で半壊
南観音町一丁目	50	20	30		10	67	23	
南観音町二丁目	20	80			9	65	26	
南観音町三丁目	20	70	10		9	64	27	
三菱造機町内会	1	99			1	96	3	庚午橋 九月の台風で落橋
三菱造船町内会	2	98			1	96	3	
昭和新開町内会	2	98			1	96	3	昭和橋 全壊

火災状況

なお、地区内における火災発生状況については、次のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
南観音町一丁目		午前八時三十分頃	町内五〇%は全焼した。	
南観音町二丁目		午前八時三十分頃	ボヤ程度でただちに消し止めた。	
南観音町三丁目				
東観音町一丁目	天満川川上堤付近	午前八時二十分	町内一円に延焼して全焼	午後四時頃
東観音町二丁目	天満川川上堤付近及び町内各所より	午前八時二十分	四方に延焼して全焼	午後四時頃
観音本町一丁目	東観音方面方面からと町内中央部	午前八時三十分頃	南西に向かって延焼し全焼	午後四時頃
西観音町一丁目	東観音町二丁目方面と町内中央部	午前八時三十分頃	南西に向かって延焼し全焼（但し、六戸残る）	午後四時頃
西観音町二丁目	東観音町二丁目と西観音町一丁目寄りからと町内各所	午前八時三十分頃	西南に向かって延焼し全焼（但し、一部残る）	午後四時頃

このような火災状況のなかで、倒壊物の下敷きになっている人々の、助けを呼ぶ声に、二、三人は助け出したが、迫って来る猛火に堪えきれず、まだ中で必死に呼ぶ声を聞きながら、「すまぬ許してくれ。」と、合掌して逃げたと、生存者の一人は語っている。

降雨

東・西両観音町地区では、午前九時前後二〇～四〇分間くらい、大粒の黒い雨が降ったが、火勢には何らの影響もなかった。雨は異様な臭気を持っていたという。

南観音町地区でも、昼すぎ午後二時ごろ、夕立程度で約三〇分間降りつづいた（一説には午後は降らなかったともいう）。

三菱一帯では、パラパラの雨で、爆発後一時間ぐらいと思うころ、約二〇分ぐらい降った。雨滴は眼に入ると非常にしみるものであった。

六日夜

焼失した観音地区では、避難できる者はすべて避難し、あとには重傷者だけが残って、夜をあかした。

三菱地区では、荒れはてた屋内を片づけて、破れた屋根にのぞく星空を見ながら戦々恐々と一夜をあかした。町内役員その他元気な者は、負傷者の看護や見廻りで徹夜をした。

負傷者は焼けただけ、白い葉をぬりつけているのでバケモノのような悲惨な姿であった。それらが、そばを通る人の足音を聞くたびに、「水くれ、水くれー」と叫んでいた。

諸現象

(イ)翌七日、朝九時ごろ、天満川へ出る者が観音本町を通ると、溶けたアスファルトが足にくっついて歩きにくいほどであった。その道には、焼けただれた死骸や牛馬が大きくふくれて死んでいた。

熱線を受けた側だけ焼けただれた木があった。人間は肌につけた布地の色、特に、黒と白で対照的なほど、被害が違っていた。

(ロ)三菱地区から眺めると、全市一面、焦土と化し、広島駅方面まで一目に見えるようであった。その中で、ところどころ鉄筋コンクリート建物や大きな樹木・電柱などの残骸が、なお燻っていた。また、あちらこちらで、死体を収容して焼く煙がなまぐさく鼻を衝いた。これら死体焼却の悪臭は、七里沖の那沙美(なさみ)の瀬戸まで広がって行った。

(ハ)当時、各町の隣組および学校には、防空用の松葉を相当量蓄積していたが、それが夏で、よく乾燥していたし、板壁の家がたくさんあったのが着火を容易にしたと言われる。また、朝食後の残火が、家屋の倒壊によって火元となったのも相当数あったであろう。

(ニ)瓦・ガラス類は、熱によって変形しダンゴようになっていた。川の砂や土が、ねばりを失いボロボロになっていた。上水道用鉛管も熔解していた。

(ホ)爆風によって電柱は傾き、あるいは折れていて、電線も切断された。ところどころで、立樹が根こそぎ抜けていたり、土蔵の屋根が吹き飛ばされていた。また庭の敷石が浮いていた。

(ヘ)観音地区では、風呂場で洗濯中、炸裂にあったが、周囲の練瓦壁に、倒壊した家の梁がかかり、下敷きにならず無傷で助かった者もいた。また、日陰で遊んでいた子供が、爆風のため吹き飛ばされたが助かったというものもあった。

(ト)三菱地区では、人間も牛馬も屋外にいた者は、全員火傷した。また爆風に吹き飛ばされて一時人事不省の状態となった者が多かった。

東観音町にて被爆の記

原田文子

あの朝、私が南側に面した窓の側で父と弟を送り出したやさきでした。突然ピカッと鋭い閃光が窓一ぱいにまるでダイダイ色をした巨大な日輪のように、ギラギラと右に左に大きく揺れ動きながら落ちてきました。私(東観音町・爆心地から一・一キロメートル)は、とっさに、先刻のB29がいたずらに照明弾を落として逃げたのだと思いました。

突如、ズドンと地底から噴きあげるような地響きと同時に周辺が暗闇になりました。そして気がついた時は、八畳間から三畳の玄関まで吹っとばされていました。「このままでは死ぬる。至近弾の煙で窒息する。台所の流し場でタオルを濡らそう。」私は手探りで立ち上がり、歩きました。この時、眼に映ったものは、天井はぶら下がり、梁までも落ち、入口は立ち塞がり、足許にあるはずの畳がない、という光景でした。なにもかも壊されたのでした。

しかし、自分の生命は助かっていました。私はタンスの引出しを元通りにしながら、残りの衣料は急いで疎開しておこうと思いました。そして、この時、「命あってのもの種だ。」と、強く自分に言い聞かせました。 - 苦労知らずの私は、まさか父が爆死しているとは夢にも思っていなかったから、このことばは終戦になってからも、日を追えば追うほど強く身にしみます。生きて行くことの厳しさを、混乱した時代の中で、二〇歳の私が受けとめねばならなかったのです。そのあと、これから先一七歳の弟と一〇歳と八歳の妹たちのことを考えると心痛のあまり、なぜ私が残って父さんが死んだのだらうと、不安や腹立たしさを毎夜畠に行っては先立った両親を恨んで泣いたものです。 -

そのとき、縁側の向こうから先隣の羊雄ちゃん(当時一八歳くらい)が「文ちゃん、膝からすごい血が！止血してあげよう。」と言ってはいってきて、ハンカチでしっかりとくくってくれました。それではじめて下半身が血だらけになっているのに気がついて、急いで下着を全部取り換え、私の一番着着だったモンペ(銘仙で当時の衣料切符大半を使い、四二円で手に入れたもの)に着替え表に出ました。すると、どうでしょう。お隣りの木内も松浦も高橋も俵谷も全部ペチャンコにつぶれ、瓦だけしか見えません。

「あっ、木内のおばさん！」

瓦の下から目だけを出したおばさんが、悲痛な叫び声をあげて…。私は夢中で瓦やタル木を取り除いたのです。

「救援隊を呼んできて。」

といら立たしげに言われるのです。

表通りに出ると、缶詰工場の若い二人連れの女工さんが、泣きながら両手を前に、顔中血だらけにして裸足で走って行きました。

つぎは、東側隣りのおばさんと出逢いました。髪は総立ち、額は割れ、下唇が顎の先までぶら下がり、血が吹き出しています。

「お医者さんは何処が良いかしら。」

「外科医は土橋の樽谷が一番よ。」

- 私はまさか広島中が壊滅しているなんて夢にも思っていなかったものですから、爆心地に近い方の医者をお教えしたのでした。その後、一六年ぶりに出会った時には、おばさんの肩にとびかかって、「おばさんのことが気にかかってかかって」と責任を感じていたことを話しました。 -

そのうちあっちこちから炎が見えてきました。私は、父・姉・弟・妹など肉親が無性に気にかかってきました。郊外の姉の家に行けば、誰かが集結するだろうと思うと、身の危険を感じていた気持ちが急に恐怖感となってきました。家の前まで引返すと「おばさん、ごめんなさい、こらえてください。」とだけ言って、私は夢中で、後も見ないで逃げ出したのです。観音橋は燃えて渡ることができないので、できかかりの庚午橋を渡って草津町にたどりつきました。

そこでは、姉と姑とが電灯の傘やガラスの破片を取り除きながら、かたづけていました。昼過ぎても、父も弟も来ない。女の私でさえも逃げて来たのに。傷がひどくて何処かで治療しているのだろうか、それとも道端で虫ケラのように苦しんでいるのであろうか？

姉と私は、防空頭巾とタオルを持って姑の止めるのもきかないで、焼ける町に出かけて行きました。すべての家は跡かたもなくブスブスくすぶり燃えていました。倒れた電柱をまたいで舟入町まで行きましたが、あまりの悲惨さに、二人とも貧血が起きて引返しました。翌日は鷹野橋から日赤病院へと歩きましたが、なんの手がかりもつかめませんでした。

ついで三日め、姉も私も諦めざるをえませんでした。父の焼死体があったのです。壊れた県会議事堂の壁の近くに。父は、厚い壁にはばまれて這い出ることできないでブスブス焼かれたのか、それとも即死だったのか、そのなきがらは何も語ってくれません。きっと苦しめないで即死したのであろう。「ねえ、お父さん、そうよね。苦しまなかったね。」県会議事堂の壁は無残にたたき潰され、まぎれもない父の弁当箱、朝入れた配給のたけのこの煮つけがちゃんとはいつている。弁当箱の底はぬけないで直径五センチくらいの穴があき、鹿の柄のナイフも側にありました。

私たちは唾のように、白い骨を小さな弁当箱に一ぱい入れると、声をあげてうずくまりました。「お姉さん、父も弟も全滅かね。これから先どうしよう。疎開先の妹も連れもどさにゃあ。」

それから一週間後、頭じゅう繃帯だらけの弟が憔悴しきって帰ってきました。その弟に「お父さんは死んだ。」と告げただけで、私たちは声をあげて泣きじゃくりました。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

六日午後から、生き残り警防団員を召集(約二六人)し、県立第二中学校(現在・観音中学校)に救援本部を設置し、三菱重工株式会社から薬品の提供を受け、笠坊医師の指導を受けて負傷者の救護活動を開始した。

翌七日朝、近郊から警防団員が救援に来着した。救急品は、食糧その他で、にぎり飯は七日の未明に到着した。(東・西両観音町地区)

八月九日、東・西両観音町地区では、各町内会長会議を召集したが、大多数が死亡したり、避難中の二人は、集らず、復帰住民中から、各町代表一人ずつを召集し、田頭新太郎が連合町内会長に選出され、ただちに復帰家族の調査や諸物資の配給体系が確立された。さらに死体処理にあわせて道路の啓開、その他復旧に関する会議を開催して諸対策を決定し、実施にうつした。主要幹線道路は、十一日には大部分の啓開が済んだ。

死体の処理

死体の収容は、八月八日午後が第一回で、十五日ごろまで続け、火葬は、九日ごろから十七日までかかった。

死体収容場所は、県立第二中学校のグラウンドで、処理は、当初は二、三日のあいだ生存者の高田靖一ほか二人で火葬した。死体はグラウンドに一杯あったし、次々に運んで来たので焼ききれないほどであったから、観音国民学校の方へも移したりした。そののち暁部隊および応援警防団が来て行なった。薪は、倒壊家屋の材木を使い、グラウンドに穴を掘って、仮の火葬場とした。

確認できる死体は、当時の警察署派遣の小隊長(警部補)の手続きを受けたが、大多数の者は確認できず、そのまま火葬にふした。遺骨は全部まとめて、その後、平和公園の供養塔に安置した。なお、十一月に連合町内会主催で慰霊法要をおこなった。

(南観音町地区)

南観音町地区では、第二国民学校を救護所として設け、約一か月間存続した。この間、収容者の炊出しや死亡者の火葬について、地区内の警防団が活躍した。火葬は県立第二中学校の仮設火葬場でおこなった。

(三菱地区)

三菱地区では、被爆直後、県営総合グラウンドの暁部隊に収容されていた負傷者約三、〇〇〇人を、その日午前十時ごろ、三菱社宅に引取ることになり、応急救護所を社宅内(太田川沿いの丙住宅)に設置した。負傷者のうち、地区内の者はそれぞれの自宅に引取らせ、外来の者ばかりを、総合グラウンド西側の空屋数十戸の社宅に収容したが、負傷者がその後も詰めかけて来たので、いちじは四、〇〇〇人以上も収容して混乱をきわめた。

これらの治療には、翌七日に三菱構内病院から派遣された医師・看護婦があたったが、看護その他一切の世話は町の役員が協力しておこなった。

また、負傷者や避難者への炊出しや救急品の配給は、すべて三菱の寮からおこなわれたが、三原市からの救援隊が、トラック二台で乾パン・缶詰・ノリ、その他の救援物資を運んで来たこともあった。

二日目ごろから、負傷者の焼けただれた部分に、ウジがウヨウヨするほど湧いて、救護所は凄惨そのものの情景を現出した。そのうち身元のわかった者は、関係者に引取られていったが、身元不明の者はそのまま死んでいった。

死体処理

死体は、八日ごろから十二日ごろにかけて、三菱地区内で火葬にふした。死体の処理にあたった者は、当地区三菱重工機械部造機町内会防衛部長田村喜十郎その他、および暁部隊の兵士であった。

火葬は、倒壊家屋の残材に油をかけて三〇体ずつ、つぎつぎに死亡者をならべて火葬にふした。そのとき、暁部隊の羽根軍曹が寺の住職であったから、仏式でとむらいをし、兵士は捧げ銃によって冥福を祈った。

当時は、地区が三菱の社宅内のことであり、またその後のことを考えるゆとりもなかったため、標識柱を建てたり、遺骨を特定場所へ安置することもしなかった。

慰霊祭

火葬した中で無名の死体は約四五体ぐらいであったが、二十二年から二十九年まで、毎年八月六日には当地区内死亡者のために慰霊祭を執行し、現在に及んでいる。

町内会廃止

町内会の機能は、支障もなく継続したが、終戦後、マッカーサー命令によって、町内会および衛生組合を廃止した。しかし、三菱地区内居住者の便宜をはかるため、三菱造船および三菱造機と二つの地域を合わせて 互助会 と改称し、引きつづき社宅地域の事務を執った。また市役所出張所分室を社宅事務所内に置いて、その事務にあたった。

観音新町

昭和三十一年から、当地区が観音新町と町名をかえたので、三菱互助会と昭和新開町内会をあわせて、観音新町町内会と改称し、現在に及んでいる。

南観音町にて

金河東伯(談) (南観音町で被爆当時満三七歳)

当時、私は市役所の土木技師で、南観音町の真宗学寮東側にあった土地区画整理事務所(木造平家建約一三坪)に勤めていた。

六日の朝、少し早く事務所に出勤し、あれこれ仕事にかかる準備をしていた。その準備中、ふと神のお告げともいうか、「早く外へ出る。」という声なき声を、三度も聴いた。すぐ屋外へ出て、松のあいだから三〇〇メートル先の工事現場を何気たしに眺めた。

その時、頭上で稲妻のような閃光がした。パッと反射的に、頭をかかえるなり、事務所の壁の陰に伏せた。ガラガラッと物が崩れる音が一度にした。

私は助かっていた。やっと脱出してみると天井が飛び、壁土が落ち、窓ガラスが破れていた。見ると、事務所隣接する斉藤さんのワラ屋根(物置小屋)が、火気はないのに発火していた。

私は事務所のバケツ二箇を持ち出して、傍の水道の水を汲んでは二〇回ばかりかけて火を消した。

斉藤春三さんが来て手伝ったが「金河さん、肩から血が流れている。」といったので、左肩が、ガラスの破片でやられていることに、はじめて気がついた。

幸い事務所も物置小屋も、畑中にポツンと建っていたので類焼をまぬがれたのだが、私は事務所の中のトランシット(四インチ半)などの測量機械が気にかかった。

半崩れの事務所にはいっていき、機械置場からトランシットや、その他の重要な測量の諸機械を持ち出し、すぐそばの斉藤さんの防空壕の中へ移した。機械の確保を斉藤さんに頼んで、私は国泰寺町の本庁へ行くことにした。(この測量機械の確保は、その後、焼跡の整備に大きく役立った。当時、県庁へも借したことがあるが、昭和二十五年まで使用された。土地区画整理事務所は、この他草津町や荒神町にもあって焼けなかったのに、諸機械は紛失していたから、私のところだけでも、確保できたのはさいわいであった。)

本庁へ行く途中、南観音町の通りで電柱に登って作業していた電気工夫が、真夏のこととて半裸で作業中をやられ、熱射を受けた片側半身の皮膚が、ボロをぶらさげのように焼けただれて、苦しんでいるのを何人も何人も見た。

この付近は当時一面の畑であったが、その畑の中へ、脚の折れた人や、皮膚の剥げた人や火傷した人などが多数、逃げる時持ち出した毛布やふとんを敷いて坐ったり、臥せたりしていたが、ほとんど泣き叫んでいた。

中には素っ裸になった人が、ぞうきんのように剥げた皮膚をたれさがらしたまま、今にも倒れそうになって歩いていたりした。

真宗学寮の上手東の海べりの民家が、約二〇戸ばかり炎上していたが、これらの人々が畑の中へ逃げて来ていたのであろう。

同時に他町の被災者が続々と、この畑へ逃げて来はじめた。どのあたりまでやられたのかしらと思いながら行くと見ると、観音橋付近の竹屋に火がつき、竹がはじけて、まるで機関銃で撃つように、音をたてつづけていた。

この橋の西詰めで、役所のトラックの運転手の上原君に出あった。

「今、本庁は火の海だ。消火につとめたが体がもてないので己斐へ逃げるところだ。」

と、私の顔を見ながら涙をポロポロ流して言った。この上原君はその後死んだ。

被災者の群れが、みんな新鮮な空気のある方向を求めて、市の周辺地区に避難するなかを、私は逆に本庁へ本庁へと歩きつづけた。

明治橋西詰めから東(本庁の方)へ渡る途中、十二時四十分ごろであったが、橋上に二〇歳代の男一人と同年齢の女一人が、素っ裸でエビのように体をねじ曲げ、苦悶した姿のままで死んでいた。女の雪のようなまつ白い尻がむき出しになっていた。昼過ぎ一時ごろ、本庁へ到着した。

西観音町一丁目にて

井上美史 (当時・無職五六歳、被爆地・広島市西観音町一丁目)

閃光は見た。屋内にいたため火傷は受けなかった。ただし、強い爆発音があったので、近くに爆弾が落ちたのだと思った。

血が頭部より大分流れたので、大きな傷を受けたと思ったが、あまり痛みは感じなかった。近所の娘さん(二〇歳位)が、木材にはさまれて助けを呼ぶので、これを助け出すことにして、妻を古江方面の知人目あてに逃げさせた。

火災が、だんだん広がり、私の家も類焼して来たので、近くの消防分所の人と共に、全力をつくして娘さんを助け出した。其の時は、まだ西方の第二中学校方面が焼けていなかったから、人に託して娘さんを草津方面へ行かせた。私は息子が気にかかり、中広町へ行こうとしたが、火災のため行く事はできなかった。

消防分団の火の見やぐらに登って見ると、広島市内一面が、火災と煙のため見通すことはできなかった。私は不

思議であった。爆発音はただ一つであったにもかかわらず、広島全市が火の海になっているではないか。

強雨が降って来たので消防署の防空壕へ避難した。壕の中へも、だんだん避難者が集り、七、八人位となって来た。数時間の後、雨のためか、火災の火も、大分消滅したので壕を出て、中広町方面へ行くべく、北方へ向った所が、路上には死人や傷ついた人々がたくさんいた。衣服が焼けて身体が縞模様の人、また頭の上部の毛髪が残り、下部の毛髪が焼けて「おけし」の様な人もいた。

焼跡は一面、木材や瓦などのため、行く道が無いので、天満町電車道を西へ向い、福島川に出て、川添いに、中広町へ行こうと進んだ。電車道を西へ行った。ここは福島川の土手になっていて少し広場があるので、避難者の人々も川に向かって逃げて来たのであろう。その時は、おそらく満潮時であったのであろう。川に下りる事もできず、そのまま死んで行った人々は、およそ三〇人位いたと思う。

中には、まだ生きている人々もあって、「おじさん助けて。」「水を下さい。」と呼んで私に抱きつく婦人もいた。見れば、どの人もほとんど頭髪が逆立っていた。私は、水をあたえる事もできず、そのまま死んで行く人も見た。

ようやく川伝いに、中広町へ行く事ができた。中広町には焼けた家もあり、焼けていない家もあった。息子のいた家は、焼けてはいなかったが、半倒れとなっていた。息子・孫たちを捜し求めたところ、西方土手上に見つけた。私は、無事でいた息子や孫らと共に西側の畑中に避難した。そこには、すでに二〇人位の避難者が集っていた。避難者の中には、火傷を受けている人も、半死半生の人も交っていた。避難者も、おいおい集り、およそ五〇人となった。人々はみな木切れを拾い集め仮小屋を造った。

息子の近所の人で、ひどい傷で大腸が露出した人があった。倒れたまま、ただ水だけで二日も生きていた。食物をあたえても食べる事もせず、ただ水を要求するだけであった。私は時々水を与え、日よけのため拾って来た傘を立ててあたえた。

避難者もだんだん多く集り、中には来るとそのまま死んでいく人もあり、また数日後、死んだ人もいたようである。

夜が来たが光がないので、暗闇の中に寝た。寝たというよりも、ただころんだという方が正しいと思う。どこを見ても暗黒で所々にわずかに火がもえているくらいであった。

夜が明けた。周囲の人々を見たが、皆も眠っていないかと思え、ただ坐ったまま、ボンヤリとして動く事もせず、恐怖の事、爆弾の話などを語り合うだけであった。しかし、食事の件があるので人々は近くの井戸水をもらって食事の支度をした。

さて周囲を見れば、何時死んだかわからぬ死体が二体あったので、人々と協力して、川向うの草原に運び、木ぎれを集めて焼いた。後にここが死体を焼く場所となった。

私は足部に傷を受けていたため、あまり遠方へは行けなかったが、やむを得ず行かねばならぬ事があって、天満国民学校の東土手まで行った。沢山の死体のある中に、一〇歳位の子供が四ツンパイになっているので、私は思わず声をかけた。ところが返事はおろか、動きもしないので、近寄って見たところ、死んでいるので驚いた。どういわずみで四ツンパイのまま死んだのか不思議であった。

現在の平和公園内に緑地課公園出張所がある。あの建築物はあまり堅固ではないと思うが、しかも原爆の中心地に接近しているにもかかわらず不思議に残っている。また、あの建物の中には、私の近所の娘(一七、八歳位)が勤めていたが、原子爆弾炸裂直後、あの火災の中をくぐり抜けて逃げて帰ったのであった。(その頃はまだ娘の家は焼けていなかった)しかし、一週間後に死亡したという事であった。

だれがどうするという事もなく皆で死体は川向うの焼場に運び、夜となく昼となく、毎日毎夜焼いた。また市内の何処を見ても死体を焼く煙と臭気であった。夜ともなれば、青い鬼火が方々にチロチロと燃えている。私が子供のころ見た地獄絵を、そのまま見るような凄惨な光景であった。

九、被爆後の生活状況

(観音地区)

一朝にして焦土となり、人々はしばらく茫然としていた。焼け残りの防空壕や、半壊の家屋は、一部屋だけをまず片づけたり、焼トタンを拾って雨露をしのぐだけの小屋を建てて生活がはじまったが、虚脱状態のままであった。

九月中旬ごろから共同生活ではあるが、やっと生活をするという人間的な気持ちになった。

生活は、タケノコ生活が、そのすべてであった。しかし少額ながら、戦争中の強制貯金のおかげで四、五か月は

助かったという者も多い。

八工の発生

八工が多数発生したが、駆除薬もなく、焼跡一面にわいた。この地区は、平素から八工・蚊・ノミが多かったが、被爆後の発生は猛烈なものであった。

暗い夜

電灯がつかなくて、夜は真暗であったが、十日ごろ、市からロウソクの配給があり、大切に使用した。十月末に、住民の奉仕で電柱を運んで来て要所に建て、ようやく電灯をともすことができた。

食生活

被爆直後、避難者への炊出しは、市の西部寄りの補給路線が、観音国道を通過して運搬されるという地の利があり、他地区より比較的的良好であった。

しかし、その後の食糧配給は、乾パン・大豆かす・コウリヤンなどが少しずつあるだけであったから、江波町で売られる草だんごを買ったり、ドングリなどの木の実や雑草のだんごを作ったり、あるいはサツマ芋の茎をゆでて食べるなどして、飢餓をしのいだ。その上、水道が止まり、飲料水がないので、防火用の赤サビの水や塩分を含んだ濁りのある井戸水を汲んで、それを濾過しながら使うところもあった。

しばらくして、己斐・天満地区に闇市場ができたので、日用品などはそこで求めるようになったが、被爆の衝撃や生活苦から病気になる者も幾人があった。

疎開児童の復帰

疎開児童は、二十年九月四日、団体で八〇パーセントが帰って来た。一家全員死亡した世帯の児童が二〇パーセントあり、一たん帰って来て後、それぞれの縁故先に落ちついた。

暴風雨

九月の暴風雨と十月の豪雨によって、天満橋・観船橋・観音橋が流失したため、市の中央部への連絡は、三篠町を廻って中央橋を渡って行く道しかなく、たいへん困った。また、暴風雨で南観音地区では、焼け残っていた家が四、五戸倒壊した。

経済活動

経済活動は、二十一年二月ごろから始った。まず東観音町二丁目から起ちあがり、主として衣料品・食糧品店が繁盛した。

観音地区では、早期に町内会が新発足し、機能を充実させたので、他地区に比較して復興が早かった。また、八月末の世帯数は、被爆直前と比較して、南部はあまり差がなかった。

(三菱地区)

三菱関係地区では、工場全体の破損がひどく、復興に必要な人手も物資もなかったため、応急処置として、拾い集めた瓦を、屋根にならべ、周囲はありあわせの物でかこって雨露をしのいだ。

生活物資

生活物資は、八月九日、三次からトラック二台で運んで来た。同十日から食糧の通常配給となったが、配給物資はおおよそ人間の食べるようなものではなかった。市役所からの配給物資は、町内会を通じて配給されたが、二十一年四月ごろから当地区会社経営の総合配給所として、野菜漬物・調味料、その他の配給も少しずつあった。

配給の不足分は、前述のように江波だんご、または海そうめんなどが江波にあったので買い求めておぎなった。

なお、八月十日ごろ電灯がついたので、ロウソク生活だけはあまりしなかった。

八月末頃の居住世帯数

八月末ごろの居住世帯数は、三菱造機町内会約四〇〇・三菱造船町内会約三二〇・昭和新開町内会約一〇〇であった。

疎開世帯の復帰

疎開世帯が二十年十一月ごろから復帰しはじめた。ただし、家族の一部が疎開していたのであって、世帯の移動は、あまりなかった。

疎開児童は、他の観音地区の児童と同じ状況であった。

闇市も天満町や己斐方面へ行って大いに利用したりして、生活にはみな死にもの狂いであった。

三菱寮の半壊建物や総合配給所の建物が、台風で倒壊した。豪雨の時は、太田川堤防寄りに浸水があったが、あ

まり被害はなかった。社宅は全部半壊家屋であり、疎開家屋の古材木・板・アンペラなどを釘づけして補修していたので室内はすごく暗かった。しかし、これが当たり前という気持ちで、精神的にも、何ら奇異を感じなかった。

経済活動

経済活動は、二十年十一月ごろからぼつぼつ会社の整理作業が始り、疎開していた者も帰って来たり、これまで社宅にいなかった社員も、新しく入居したりして従業員も出勤しだしたので、伸展しはじめた。

二十一年八月ごろまでには、古材を使って家屋の修理がほとんど終わった。しかし、天井や窓ガラスはなく、暗いアバラ屋でしかなかった。

その後、三菱造船・造機両工場が賠償工場となり、廃止されようとした。会社としてもこれが防止をはかり署名を取る運動を展開したが、民間の署名集めは下川正一・田頭新太郎両人が、観音・江波・舟入・吉島・本川・天満・中広・福島の各方面に働きかけて、おびたしい署名を集め、撤去防止に成功したのであった。

復興

会社も本格的に復興に踏み切り、従業員募集をはじめた。採用者には、寮あり、社宅ありと発表したところ、全市焼野原となっている折柄、家欲しさに申込者がぞくぞくと押し寄せた。しかし、そのとき空いている社宅は、被爆のため屋根は雨漏りし、壁は落ち、床板さえもなくなっているというありさまであった。

その修理資材もなく、わずかでもあれば会社の工場修理の方へまわしたし、また予算もなかったので、社宅とはまったく名ばかりであった。

ムシロ・コモ・アンペラを破れた壁や窓の建具代りとし、タタミも寄せ集めの古ダタミというひどい社宅であったが、それでもたちまちのうちに満員となった。

その後の申込者も必死で、昼夜押しかけて来た。なかには語気荒くおどしつけ、社宅を与えろとわめき立てる者もいたし、反対に泣きおとしで来る者もいた。

親類に同居(疎開)していたある夫婦は、配給のことでその親類の家族に妻がいじめられるので口論となり、そこを飛び出したものの、今夜から寝るところがない。どんな小屋でも良いから頼みますと泣きついたが、このような例は何十組となくあった。このように、罹災者が自分の家を求める必死のありさまは言いつくせないほど、すさまじい様相を呈した。

ともかく急速度に住人が増加したため、この地に児童保育所が必要となってきた。しかし、会社としても町内会としてもどうすることもできなかった。そうした時、西念寺の藤内遊修住職から任せてほしい旨申し出があった。

このころ、マッカーサー指令により、町内会及び衛生組合の廃止がおこなわれ、当地区では「互助会」に切替えしたが、その互助会の総会で、藤内住職に幼稚園の設立を一任することに決定した。物資なく、資金もない状況のなかを東奔西走の苦心の結果、窓は古新聞を貼った一棟の園舎が建った。昭和二十一年十二月二日、ようやく開園式を挙行了した。

なお、観音国民学校(二十二年四月一日小学校と改称)は、昭和二十年十月五日、三菱青年学校において授業を開始し、二十三年一月二十三日に南観音小学校PTAが発足した。

同二十三年九月十四日、第一期工事が完成、二十四年四月三十日に広島市立南観音小学校と校名を変更、同年五月十四日、三菱青年学校から引きあげた。さらに同年同月十七日に、広島市立観音小学校新設により分離し、同年六月十八日、第二期工事が落成して、ここに完全に復興した。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

福島町一丁目 二丁目、小河内町一丁目 二丁目、都町

町内会別要目

この地区の範囲は、福島北町[ふくしまきたまち]・福島中町[ふくしまなかまち]・福島本町[ふくしあほんまち]・福島南町[ふくしまみなみまち]・福島沖町[ふくしまおきまち]・南三篠町[みなみみささちょう]一區・同二區・同三區とし、爆心地からの至近距離は、福島橋西詰めで約一・五キロメートル、もっとも遠い地点は、南端(旧旭橋の川下)で約二・七キロメートルである。

福島地区は、歴史的に古い土地で、藩政時代には、城下町を東西に貫く国道の西の基点(関門)として、重要な位置を占めていた。

戦前から、地区の南部に市営屠場(食肉中央市場)があり、種々の関連産業が盛んであったが、戦後は国道沿いの福島本通り商店街を除くほかは、ほとんど一般住宅地として整備されつつある。

南三篠地区は、農家が多く、田畑がひらけていたが、戦後は急速に住宅地としてひらけた。

被爆当時、福島・南三篠地区は、山手川と福島川に囲まれ、南北に長いデルタであったが、戦後、太田川放水路(昭和七年着工)の完成により、山手川沿いの地域が河床となり、福島川は埋立てられて、小河内町(元の南三篠町)の一部と都町を生み、全体の地形が大きく変貌した。

原子爆弾の被害は全域に及んでおり、当時の市内電車線路(福島中町と同南町の境を通る。現在は南方平和大通りに移設。)から北側が火災で大部分焼失した。被爆直前の地区内総建物数は約一、五五八戸、世帯数一、五五八世帯、人口六、〇三七人で、各町ごとの内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
南三篠町一區	165	165	670	山肩健一
南三篠町二區	152	152	537	矢野福一
南三篠町三區	130	130	420	吉永裁助
福島北町	156	156	560	岩井常吉
福島本町	115	115	450	角田善之助
福島中町	260	260	1,030	高橋直行
福島南町	350	350	1,420	菊崎正行
福島沖町	230	230	950	高間秀光
計	1,558	1,558	6,037	

地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
福島町民一致協会会堂	福島南町	光照寺	南三篠町
広島市西隣保館	福島南町	広島市屠場	福島沖町
キリスト教愛光園	福島南町	広島市家畜市場	福島沖町
妙蓮寺	福島南町		

二、疎開状況

人員疎開

人員疎開は、老人や幼児が市外の縁故者をたよって疎開したほか、他はほとんど実施せず、働くことができる者は、すべて町内にとどまって、それぞれの生業に励んでいた。

昭和二十年七月になって、比較的到家屋・人口の密集している福島北町、および南三篠町三区の一部を合わせた約五〇戸に、建物疎開命令が出たので、各町内会長が、建物疎開の立退き問題について、該当者のおのの折衝したうえ、移転先の世話などもして、すでに実施する運びにまでなっていた。ただし、立退き先は、市外へではなく、地区内の縁故者にたより、同居の形で入居する方法で、移転を取り決めていたようであったが、原子爆弾によってご破算になった。

物資疎開

物資疎開についても、大々的なものはなく、ただ縁故疎開に準じて、身廻り品だけの疎開にとどまった。ただ、

軍需品の毛皮なめし製造工場が二か所、陸軍被服支廠の命令によって、郡部に疎開したようである。

学童疎開

国民学校児童は、佐伯郡水内村一松寺と同郡砂谷村(いずれも現在の湯来町)へ集団疎開をおこなった。

三、防衛態勢

国民義勇隊

国民義勇隊福島・南三篠地区

分隊長 菊崎正行

副隊長 大川武夫

後援会長 高橋直行

以上三人を中心として、地区内八か町内会より精鋭のものを分隊員として選び、国民義勇隊分隊を編成した。防衛上必要な器具を整備し、防空・防火訓練に努めた。また、警防団、消防団も防衛に任じ、訓練を重ねた。

四、避難経路及び避難先

非常の場合には地区全域が佐伯郡八幡村および観音村(現在・五日市町)に避難するよう指定されていたが、避難経路については定めてなかった。

ところが、被爆に際しては、一部は五日市町へ逃げた者もあったが、多くは太田川放水路の川原か、またはその堤防などに待避し、火災がおさまるとともにそのまま元の住宅あとへ復帰した。

五、所在した陸軍部隊集団

この地区内には、陸軍部隊は所在していなかった。

六、五日夜から炸裂まで

前夜から空襲警報が発令されるたびに、防空壕への待避を行っていたが、空襲警報ではなく警戒警報の解除後であったから、敵機が上空高く飛んでいるのさえ、不審も抱かずに見あげていた者が多数いた。

原子爆弾の炸裂から爆風が来るまでの短時間に、防空壕へ避難することは不可能であり、避難した者はおそらくなかったと思われる。従って炸裂時には、屋外で無防備のまま熱閃光にさらされたか、さもなければ屋内で被爆負傷した。

なお、この地区の建物疎開作業出動は、前日の八月五日まで天神町方面に出動していて、一応この作業の出動任務は終わっていて、その被害は免れた。

七、被爆の惨状

閃光

住民の多数の者が敵機を見上げており、ちょうど写真に使うマグネシウムを一度に大量たいような青白い強烈な閃光を浴びた。また物蔭にいた者でも、あたかも摺りガラスをとうして物を見るような視力障害を受け、一〇日以上も視力が、回復しなかったと訴える者もあった。

惨状

まもなく火災が発生し、逃げまどう人々や救助を求める声など上がり、地区は混乱のきわみに達した。南三篠町の畑中に爆風で胴から千切れ飛んだ首が幾つも転がっていた。作業していた兵隊らしく、その首は鉄カブトをかぶり、あごひもをしめたままであった。

地区の凄惨な状況が、当時、動員学徒(工業学校二年生)であった益信之の手記「黒雨について」の中に、次のように記録されている。

「古江まで帰ると家が焼けているのがはっきりとわかり始め、地獄の列はますます増して来る。『お願いします。福島町に子供が沢山生理めになっていますから助けて下さい。』合掌した老婆が私達を拜む。救護隊と間違えたのか。トラックはやっと己斐へついた。トラックをとめて罹災者に尋ねたところ、とても街には入れそうにないとの返事なので、仕方なしに降りる。

『焼けていたら工場に帰って来なさい。』との運転手の声を後に、私達は歩き始める。団結した行動を取ることにして、上級生と一緒に己斐橋の方へ歩く。私達が福島町電車停留所の角の隣保館前に差しかけた時、警防団員の腕章をつけた人がやって来た。

『君達は救護係りの人だね。』

『いいえ。』

『それは困ったな、実は子供が沢山生理めになって泣き声は聞えるのだが、助け出すことができないのだ。手伝ってくれないかね。』

私達は一刻も早く家に帰りたく、そのため断ろうとしたが、倒れた館内からかすかに聞えるうめき声に心を打たれて、援助することにする。いたいけない子供達が建物の下敷きになって救いを求めている。ピカッと光った直後、ものすごい爆風が襲って来て、瞬間にして全壊したようだ。雲は大空いっぱいには拡がって曇天となり、僅か南の江波山の上空に青空がのぞいている。

館内に入ったとたん、門の所に全身火傷してその上に何がついたのか、異様に汚れた皮膚をあらわにしながら、ふるえている親子がいる。寒いのか、子供の両眼からどす黒いウミに似たものが流れ出し、警防団員が『目が見えるか。』とたずねると『見えないのです。』と手をふるわした。一瞬にして健全な肉体が無残なまでに切り裂かれてしまったのだ。『水を飲ましてくれ。』と手探りで哀願する。

建物のどこから片付けて良いのか、さっぱり見当がつかない。下の方で身を刻むような泣き声が、聞えて来るのだが - あわれにも死の叫び声か。五〇メートルばかり離れた小さな倒壊家屋の所を二人の女がうろついている。私はその方へかけつけた。幼稚園の分室らしい。

『利男、利男！』と泣き叫ぶ母親が、大きな柱を動かそうとしたがビクともしない。私達も手伝った。柱が少し動く。しかし子供の姿は無く、カバンが一つ押しつぶされているだけだ。先に来ていた一人の兵隊が向うの方で、五歳位の子供を抱き上げた。『これは違いますか。』と、その女に尋ねたが、顔をのぞき込んで頭を横に振りながら、なお我が子を求めて、瓦を一枚ずつ除け始める。子供の顔は？ 目から毒々しい赤い血が一筋流れている。すでに息はない。兵隊はソッと草原に死体を降ろして合掌した。私は呆然としてまた

も肉親を思い出し、気の毒ではあるが今さら柱を動かすことが出来ない。またそれだけの力が出て来ないのだ。うなだれながら友人のKが門の方へ歩み始めたので、私も弁当箱を持ってつづいた。上級生も無言で帰り始める。悲惨な状況を目のあたりに見た私達は、全身の血が無くなったように青ざめ、歩むだけが最後の努力である。

福島町の鉄橋に出て見ると、対岸は燃えさかっており、とても渡れそうにない。枕木が二、三本黒い煙を出している。仕方なく己斐駅に引返し、街中へ入るただ一つの望みとして横川駅に出ることとする(以下略)。」

炸裂時の被害

この地区は、爆心地点より一・五キロメートル以上～二・五キロメートル内にあり、家屋の瞬間的被害は全域に及んでいる。

次表によれば、だいたい南方に下がるほど全壊家屋が多くなっているようで、少ない町で七〇%(南三篠町一区)、多い町で九〇%(福島沖町)の全壊があった。人的被害にしても、前記益信之の手記のとおり、福島南町の福島町民一致協会会堂にあった天満国民学校分教場(昭和十八年六月二十四日・福島国民学校を天満国民学校に合併した。)にいた未疎開学童(約二〇人)が、会堂が全壊したために下敷きになって、大部分が即死したことの事例もあるので、かなりの即死者と重軽傷者があったものと推察される。なお、西隣保館敷地内にあった一致協会会堂は、間口一二間・奥行七間の総二階建延一六四坪の木造建物で、広島市役所が、現在地に移転するとき、その市会議事堂を同協会が譲り受けて建設されたものである。

被害状況表

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
南三篠町一区	70	30	-	-	10	80	10	小河内橋 - 異状なし (渡橋には支障なし)
南三篠町二区	80	20	-	-	10	83	0.7	
南三篠町三区	90	10	-	-	10	80	10	己斐橋 - 小破(渡橋には支障なし)
福島北町	80	20	-	-	0.7	88	0.5	
福島本町	90	0.7	0.3	-	10	60	30	福島橋 - 小破(渡橋には支障なし)
福島中町	90	10	-	-	10	60	30	
福島南町	80	20	-	-	0.5	83	12	広島電鉄KK市内電車線 福島鉄橋 - 己斐鉄橋 - 小破 (電車運行支障なし)
福島沖町	90	10	-	-	15	75	10	西大橋 - 小破、旭橋 - 小破 (いずれも渡橋に支障なし)

火災発生の状況

東地域の中央部にある福島本町と福島中町は、家屋が、密集していたところであるが、両町とも九五パーセントが倒壊全焼した。この両町を中心に南北に次第に全焼家屋が少なくなっている。

福島中町および福島南町は遅くから火災が発生した関係か、夜間にかけて燃え続けていた。この両町以外の他の町は、炸裂直後には、すでに、火災が発生していたのであった。

各町別の火災発生状況は次表のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況(方向・火勢・炎・煙)	終息の時刻
	場所	およその時刻		
南三篠町	福島本町よりの延焼が一時間位後であるが本町内には既に三〇分後には飛石的に火災が発生してした	午前八時三十五分	当町は田園地帯で家屋が散在していたので、飛石的に火災が発生した。なお、福島本町に近いところ家も密集していたが、福島本町よりの延焼で大部分焼失した。当時の全戸数の約四四%が全焼した。	夕刻頃まで
福島北町	南に隣接している福島本町から延焼して来た。	午前八時三十五分	当町は家屋密集していたため、全戸数の六〇%が全焼した。	午後四時頃
福島本町	藤本仕立屋(本町西寄りにあった)	被爆直後	火勢の方向は、はじめ西より東に向い、後に南より北へ進み、更に北より南へ向かって延焼していったようである。火力強く、全戸数の九五%が全焼した。	正午頃
福島中町	福島本町から延焼	午前十時過ぎ	約九五%にわたり家屋が全焼した。	夜間
福島南町	福島中町から延焼	正午過ぎより	全戸数の約三〇%が全焼した	夜間
福島沖町	中野化製工場 河寅化製工場	被爆直後	全戸数の約三〇%が全焼した。上記工場より直接炎上、周囲に及んだ。	午後三時頃

降雨

降雨については、はっきり判っていないが、被爆直後に豪雨が降ったと言う者と、大した雨ではなかったと話す者もあって二説に分れている。だが軽い雨であったという説が強いようである。大体において被爆後一、二時間後に降りはじめ、午後も断続的に降ったと思われる。ある人が、行方不明となった家族を探するとき、雨傘をさしかけて出かけたが、この地区一帯で傘を閉じたり開けたりしたと語っている。このような降雨のうちにも、いっこうに火勢は衰えず、ますます燃え続けたのであった。

六日夜

火災からのがれた者が、建設途上にあった太田川放水路の堤防や、放水路の河床や、あるいは畑の中に、三々五々と相寄って、炎上する町内を望見しながら夜を迎えたが、みんな重軽傷者でどうすることもできなかった。

放射熱線

福島沖町では積み上げてあった箱の仕組板の切り口が、熱線によって、ところどころ黒焦げとなり、市内電車の枕木も同様、熱線の放射方向に焦げていた。

なお、南三篠町の畑にあった農作物は、大部分が熱線を受けて葉はちぢれ、カボチャ・ナスなどは落ちて地上に散乱した。

電車脱線

市内電車一輛が、天満町方面より終点己斐駅に向って西進して、己斐鉄橋にかかろうとする五〇メートル手前(爆心地から西方二キロメートルの地点)で、被爆するとともに、脱線して二〇度ぐらい傾斜し、逃げ残った乗客三人が腰掛けていたまま死んでいた。

老松焼失

福島本町の旧国道の両側に、むかし並列して植えられたと伝えられる樹令数百年におよぶ松並木があった。伝説によれば、毛利輝元が広島城を築いたとき、福島町の宗家伍家八右衛門が記念として植えたものであると言われ、被爆当時には、なお数本残存していたが、これらの松も熱線により焼けた。

その中の一本(直径一メートル余)だけが、火の消えることなく、約半年間、毎日煙を吐き続け(炎は見えないままで)、遂に高さ一メートル半のところまでを残し、上部を焼きつくした。

八、被爆後の混乱と応急処置

医療救護

被爆直後、福島中町の照山宅(元妙蓮寺跡)において、東京から疎開して帰っていた天本毅医師が、多数負傷者の治療にあたった。また、県の防空業務命令書によって、福島町の救護所(西隣保館)を預っていた天満町の児玉克己医師も、自身の負傷をかえりみず、馳せつけて医療救護にあたった。

連合町内会事務所の設置

福島南町の妙蓮寺は、被爆当日の夜出火したが、風がなかったためか、庫裡が延焼をまぬがれたから、ここを福島・南三篠地区連合町内会の事務所に定めて、食糧の配給その他の救護対策を行なった。

にぎり飯配給

八日ごろから、救急品、とくににぎり飯の配給が開始されたが、近郊からの持ち込みではなく、毎日、炎天下の焼跡を通り、広島市役所まで町民が受取りにかよったのである。持ち帰ったにぎり飯は連合町内会を通じて、五、六日間配給された。

救護所

部隊名不明の陸軍部隊が、八月七日、太田川放水路堤防上の、福島沖町側へムシロ張りの仮救護所を設けて、負傷者の治療にあたっていたが、翌日には急にこれを撤去し、南観音町にある第二国民学校(現在・観音中学校)に設けられた救護所へ移動併合した。

また、大竹海兵団所属の救護班が、八月七日より二～三日間ほど、大破した市営屠場内に来援し、一般負傷者の治療を行なった。

道路の啓開

この地区内を東西に貫通している旧国道と、旭橋と西大橋間の観光道路につながる道路は、暁部隊らしい陸軍兵士により、三日間くらい、啓開作業が行なわれた。その他の道路の啓開は、復帰した住民の手によって、逐次、進められた。

死体の収容と火葬

被災地から周辺部へ避難するため、この地区を横断して己斐町方面へと避難する火傷・負傷の重傷者は、氣息えんえんのありさまであったが、力つきて倒れ、そのままになった死体が、日光にさらされ、ゆでたエビのように赤茶けて、到るところに転っていた。ほとんど男女の識別さえつかない身元不明者であった。これらの遺体を己斐橋東詰めとか、太田川放水路上の草原や焼け果てた畑中などに集めて、町内有志の手により火葬にふした。

なお身元が判明した者のうち、自身で連絡出来ない者のために、町民がわが家の災害をにおいて、献身的にその縁故者を探し出し、連絡した例もすくなくなかった。

身元不明者の遺骨は、町内の妙蓮寺に安置していたが、後に広島別院へまとめることになって同院へ引渡した。

家庭の破壊

なお、炸裂時に、福島地区の住民で、市の中央部に出ていて死亡した者も多い。益田与一(福島南町)の資料によれば、その隣組約一〇世帯の中においても、益田宅の北隣り柿原清人の家族は、四男信男(一三歳・市立第二国民学校)・四女和枝(一〇歳・未疎開児童)の二人を亡くし、三軒ほど北の菊崎正行の家族は、三女智子(一五歳・市立高等女学校)を亡くし、南端の岡本忠雄の家族は、戸主忠雄(四一歳・自宅倒壊し負傷)をはじめ、長女栄子(一六歳・市内で所用中)・二男忠光(一四歳・市立第二国民学校)・四男充(一一歳・未疎開児童)の四人を亡くしている。

また、益田宅に預っていた山県郡筒賀村順正寺の伊藤佳子(安芸高等女学校)も学徒動員で出勤中に被爆し、ついに帰って来なかった。さらに益田宅南隣りの岡本高市の長女雛子(市立高等女学校二年生)も中島町付近の疎開作業に出勤中に被爆し、両親の一か月余にわたる探索の結果、天神町の防空壕内で死んでいるのが発見された。このように原子爆弾による家庭破壊の惨禍は、地区住民の立ち直りにいつまでも大きな障害を与えた。

なお、被爆後の各町内会の機能は、次のとおりであった。

町内会の機能

町内会名	状 況
南三篠町一区	町内会長・副会長とも健在で、異状なく活躍した。
南三篠町二区	町内会長は勤務先で被爆死したから、副会長満田周平が指揮をとって活躍した。
南三篠町三区	町内会長・副会長とも健在であったから、町内会の運営に支障が少なかった。
福島北町	町内会長以下町の幹部は全部無事であったから、異状なく運営が出来た。
福島本町	町内会長が被爆により火傷したため第一線を退き、副会長斉藤貫一が指揮をとったが、一カ月後被爆症状が出て退いたそのあとは、高原正人が引き継ぎ異状なく運営した。
福島中町	町内会長及び副会長木原正春が被爆により火傷したので、療養のため退き、高橋義正が指揮にあたった。

福島南町	町内会長(連合町内会長兼務)が被爆により火傷したので、療養のため引退し、実弟菊崎明が副会長川野義諦・菊岡明の二人を補佐して町内会および連合町内会の事務を円滑に運営した。
福島沖町	町内会長が被爆後死亡したが、後任藤原勇により支障なく運営が出来た。

九、被爆後の生活状況

仮小屋

徹底的に破壊された焼跡を、応急的に整地して仮小屋を建てたのは、一週間くらいあとであった。

ノミの発生

ハエより蚊・ノミがおびただしく発生した。夜具の下にノミが行列して這い廻っている状態で、無慮何百何千というほどのノミが、一つの仮小屋の中に人間と同居していた。

蚊も、昼でも蚊帳を用いねばならないほど発生したが、当時は駆除することもできず、そのまま日夜苦しんだ。

生活物資

主食の米はもとより、副食物も配給がごく僅かであったから、窮余の策として、焼跡を駆けまわって、地下の貯蔵庫にあった醤油を見つけて持ち帰るとか、漬物・梅干・缶詰などを掘り出して来て食べたりした。

また、水道が出ず飲料水にたいへん困り、蛙のいる井戸の水をも使用するという状態であった。そこで、東側に川を隔てて隣接する観音町の水道鉄管の破損口から水があふれていたのので、川を渡って行き、バケツとか、その他の器に入れて、持ち帰るといった苦勞が続いた。

ロウソク生活

己斐町に近い地区にあっては、工面して得た長い電線を更に継ぎ足し、己斐地区に電源を求め、ホタル火のような心ぼそい電灯で過ごしたのは、まだましな方であった。電灯のないところは、倒壊したロウ工場から、パラピン油を探し出し、これを皿にとかして布地などでシンを作って使ったり、牛のヘットをとかして、同様のシンを用いてロウソク代用に使い、暗夜をしのいだ。これらの地域に電灯がついたのは、不完全ながら翌二十一年二、三月ごろになってからであった。

公設市場

広島市が、広島電鉄己斐駅東側の観光道路上に、昭和二十一年五月から六月初めにかけて仮建築で公設市場二〇戸を建て、日用品とか食料品などの販売を開始したのが人気を集め、遠く宇品町方面からも買物客が来る有様であった。地区内の町民はほとんどがこの市場を唯一の頼りとし、必需物資の買い求めに利用した。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨と、十月八日の大豪雨で橋梁が落ち、市の中心部との交通が困難になり、生活の回復をさまたげた。蚊の発生がおびただしく、掘立小屋の中へ蚊帳をつり、風雨の荒れるにまかせたのが実状であった。ハタハタとはためいている蚊帳のすそを石などで押さえ、昼夜傷病者の看護にあたりながら、しばらくの間、虚脱状態が続いた。

経済活動

この地区の主要産業である食肉卸売業は、市営屠場の大破と市役所の機能が一時的に麻痺したことにより、営業ができず休業状態となった。二十二年四月になって応急修理されてから食肉卸売業が、ようやく正常に復し、経済活動はおいおい活発になっていった。

住宅の状況

本格的に家屋が建ちはじめたのは、三、四年後であるが、地区内の都市計画事業が進行するまで、バラックのまま、いつまでも居住していた者が多く、日常生活に多くの支障を招いた。

また、焼失を免れた建物も、大なり小なりの破損を受けていたが、本格的修理とか改築をなし得ないで、一時的補修だけで長いあいだ住んでいた者も少なくなかった。

十一、その他

(広島市営屠場の概略)

福島沖町の市営屠場は、もと広島屠畜株式会社の経営であったが、明治四十二年(一九〇九)七月、広島市が建物・機械器具などの一切の設備を譲り受け、若干の増築を施し、経営にあたったのが、その発足である。

市勢の発展とともに施設の改善が必要となり、大正二年(一九一三)四月に着工、翌三年三月の竣工により、面目

を一新し、市の主要産業施設として、原子爆弾被災時に至った。

主要建物は、上質の煉瓦造りであり、設備の高架軌条・機械器具は、すべてドイツのベッグ・ウンド・ヘッケル社製という最新式のものであった。

総工費 九八、六〇〇円

その他経費 八、五〇〇円

当時としては、外観の宏壮・設備の整頓・内部の清潔など、全国屈指と称せられた。

食肉の普及とともに、屠殺数も年ごとに増加の一途をたどり、牛のみで年間二万頭を越える数量に達したが、日華事変に続く大東亜戦争と、戦局の進むにつれて経済統制がきびしくなり、食肉も他の主要食糧と同じように配給制となった。

その上、輸送の困難・牛豚の急減も加わり、被爆前には、日々わずかに二頭、三頭をおとす程度になっていた。

原子爆弾炸裂の当日朝、作業開始の時間となり、二頭の牛の処理に着手したところを被爆した。爆心地から二・五キロメートル離れていたため、即死者はなかったが、重傷して帰宅後死亡した従業員があった。

なお、屠殺場は屋根が吹っ飛び、煉瓦造りの壁面には幾筋も大きな亀裂を生じたが、倒壊はまぬがれた木造の事務所・肉捌場・倉庫・繫留場などの付属建物は、見るかげもなく全壊あるいは半壊した。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

楠木町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、横川町一丁目 二丁目 三丁目、三篠町一丁目 二丁目 三丁目、三篠北町、三滝町、打越町、横川新町、大芝町一丁目 二丁目、大宮町一丁目 二丁目、新庄町、山手町
町内会別要目

この地区の範囲は、横川町[よこがわちょう]一丁目・同二丁目・同三丁目・三篠本町[みささほんまち]一丁目・同二丁目西組東組・同三丁目南組北組・同四丁目・楠木町[くすのきちょう]一丁目・同二丁目・同三丁目・同四丁目・打越町[うちこしちょう]・山手町[やまてちょう]・新庄町[しんじょうちょう]・大芝町[おおしばちょう]・三滝町[みたきちょう]とし、爆心地からの至近距離は、横川橋南詰めで約一・二キロメートル、またもっとも遠い地点は、新庄町北端で約四キロメートルである。

横川駅は、市の北の玄関として、車輛の交通量も多く、駅周辺には商店街が栄え、三篠町筋にかけては、鋳物・ゴム・針・紙などの工場や農家、勤め人などの住宅が建てこんでいた。その他の地域は、山林や田園地帯であって、広島市の有力な蔬菜供給地帯でもあった。

戦後、地区の中ほど、山側に沿って幅三〇〇メートルの太田川放水路工事が進捗し、画期的な変貌をとげた。すなわち、太田川本流の北岸に沿って、中国山脈系の裾に形成された一区画であった地域が、現在は、山沿いの山手町・三滝町地区と、市街地の横川町・楠木町・三篠町・大芝町地区とに二分された。

被爆直前の、地区内の建物総数は四、八八六戸・人口は一八、九八七人で、この内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
横川町一丁目	265	265	1,000	山本豊松一
横川町二丁目	345	481	1,830	岡村清一
横川町三丁目	150	150	450	橘高甚助
三篠本町一丁目	290	290	1,200	森井賢雄
三篠本町二丁目西組	207	215	870	谷川亀太郎
三篠本町二丁目東組	368	355	1,350	福島喜代槌
三篠本町三丁目南組	250	250	990	土井午吉
三篠本町三丁目北組	169	183	795	田村友太郎
三篠本町四丁目	184	197	838	須沢秀三
楠木町一丁目	390	362	1,285	辻国一
楠木町二丁目	336	280	860	赤木繁三郎
楠木町三丁目	290	289	1,001	阿甲順太郎
楠木町四丁目	345	348	1,740	加土広次
打越町	571	571	1,895	安田新七
山手町	62	49	217	坪田島太郎
新庄町	55	68	267	吉本寿一
大芝町	247	247	1,014	岡本与茂一
三滝町	362	362	1,385	野村範一

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
横川駅	横川町二丁目	芸備銀行横川支店	横川町三丁目
横川巡査派出所	三篠本町一丁目	三篠神社	三篠本町一丁目
広島・三篠信用組合	横川町三丁目	光隆寺	三篠本町一丁目
三篠国民学校	三篠本町一丁目	陸軍病院三滝分院	打越町
崇徳中学校	楠木町四丁目	大橋製靴工場	三篠本町三丁目北組
大芝国民学校	大芝町	三好製紙工場	楠木町三丁目
安芸高等女学校	打越町	明星ゴム工場	楠木町三丁目
広島電話局西分局横川従局	三篠本町一丁目	田付製針工場	楠木町三丁目
農産連倉庫	横川町三丁目		

二、疎開状況

(南部地区)人員疎開

横川・打越・山手各町など、地区の南部では、各町内会が市内に雇用関係のない人、郷里に生活の根拠を持つこ

とができる人、そのほか、郡部に縁故のある人々に対して、極力疎開を勧奨し、相当の成果を得た。

ことに、終戦に間近いころは、各都市の焼夷弾による波状攻撃状況を聞いて、防衛要員は疎開禁止になっていたが、その他は自発的に疎開する者が多かった。

物資疎開

物資の疎開については、日常必需品を除いて、世帯道具・家具・衣類などを郡部に疎開させた。しかし焼夷弾のことだけを考え、家具を市内の各所に分散疎開していた者が多く、これは皆、全焼した。

打越町の一部と山手町は、家屋の焼失をまぬがれたが、全壊または半壊して、家具も損害を受けた。

学童疎開

学童は、三篠国民学校三年生以上は、高田郡本村ほか、四か村に疎開し、寺院や公民館に収容された。これについて、三篠国民学校教育後援会幹部の、長崎五郎・住野重太郎・岡村清一など三人が、昭和二十一年三月、現地に行って、村当局および関係教師に対し感謝の意を表した。

(北部地区)人員疎開

地区の北部・三篠本町・三滝・新庄・大芝などの各町では、老幼不具者など少数の者が、市外の縁故先へ疎開した。

物資疎開

物資は、郡部の親類・縁故に疎開した者もあったが、ごく僅かであった。むしろ、市内の中心部から多量の疎開品をあずかっている家が多かった。

学童疎開

学童は、三篠国民学校高学年が高田郡本村および同郡横田村へ疎開し、大芝国民学校が比婆郡口北村に集団疎開をおこなった。

(東部地区)

東部、川沿いの楠木・大芝両町では、極力、縁故疎開を実施し、両町とも相当成果があった。物資についても、できる限り大部分が疎開をおこない、万一の場合に備えていた。

三、防衛態勢

隣組強化

各町とも、市の防空計画に基づく態勢を整え、各家庭に防火水槽を置き、防空壕を作らせていた。また町内会は監視隊を巡回させて灯火管制を厳重にし、また警防団を組織して、隣組を強化した。

焼夷弾や爆弾に対する防火訓練も厳しくおこなった。

国民義勇隊

国民義勇隊は、隣組を基礎として、男女とも一八歳以上六〇歳までで組織し、身体障害者・乳児をもつ婦女子は除く、全町民を編入し、市の建物疎開作業にも出動した。

この地区では、国民義勇隊三篠大隊(大隊長・岡本清一)、及び大芝大隊(大隊長・佐々木亮)が結成され、本土防衛に備えての竹槍訓練には、女子も参加した。

防衛・防空・防火態勢の一例として、楠木町では、各家庭に一石(一八〇リットル)入りの防火水槽ならびに防空壕を一個ずつ造り、町内防火水槽を一〇個から二〇個ぐらいも併設し、手押しポンプ三台から四台、場所によっては一〇台も設置、防火ポンプの大型も備えた。この様に各町とも楠木町に準じて、それぞれ万全の態勢をかためていた。

四、避難経路及び避難先

地区全体として、避難先を、安佐郡安村の安国民学校および正伝寺とし、近隣では、太田川付近の寄洲・打越山・三滝山・新庄山に指定していた。また、長束の竹やぶも考えられていた。

経路は、安方面へは、可部街道(出雲街道ともいう)を北上し、古市橋から左に入る。また、楠木通りを北進して右に入り、安村に至ることにしていた。

山林地帯へは、可部街道から西へ入る道路を西進することにしていた。

五、所在した陸軍部隊集団

当時、地区内に所在した陸軍諸部隊は、つぎのとおりである。

兵種・名称	所在地	兵種・名称	所在地
-------	-----	-------	-----

広島陸軍病院三滝分院	打越町	高射砲隊	安芸女学校 南西
独立鉄道第二大隊 (線第一三五二部隊)	崇徳中学校	第一八独立鉄道作業隊	大芝国民学校内
高射砲隊	新庄町	第一一四部隊二個中隊	三篠国民学校内

六、五日夜から炸裂まで

炸裂前

前夜から各町内会は、当番四、五人が二時間交替制で、町内を巡視し、警報の発令解除を知らせ、灯火管制を厳重に励行させていた。町民は六日朝になって警報解除になったので、みな安心してその日の業務に就いたのであった。

警報解除のあとで、平常とかわるところなく、朝食が終って、商店街は店をひらき、屋外には、牛馬車をひいた肥料の糞尿汲取りの百姓や、家屋疎開の残材を積んで持ち帰る運搬車などが見受けられ、また、学童は登校中のもいたし、低学年児童は、各町の公民館や青年館で、勉強をしていた。

敵機目撃

敵機は二機、B 29 が牛田の水源池方面から来襲し、東方に向っていた。高度は七、〇〇〇乃至八、〇〇〇メートルと思われた。

パラシュートのような物に三個何か下がっていて、可部方面に落下したのを目撃した者がいる。侵入敵機の爆音は、聞いたという者も、聞かなかったという者もある。

なお、当日朝、疎開作業への出動と建物疎開実施の概況は次表のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数	出勤先地名	疎開定概数	被爆前日までの実施概数(戸)	当日朝実施中の概数(戸)	他地区からの応援人員概数
横川町一丁目	100	小網町		21	21	安佐郡祇園町
横川町二丁目	223	小網町				
横川町三丁目				約 20	約 20	
三篠本町一丁目	70	小網町				
三篠本町二丁目西	18	小網町				
三篠本町三丁目南	16	小網町				
三篠本町四丁目	20	小網町				
楠木町一丁目	95	小網町				
楠木町二丁目	11	小網町				
楠木町三丁目	28	小網町				
楠木町四丁目	25	小網町				
打越町						
山手町						
新庄町	8	小網町				
大芝町	35	小網町				
三滝町	48	小網町				
三篠本町二丁目東		小網町				
三篠本町三丁目北		小網町				

七、被爆の惨状

不意の炸裂

突然、地区の南東上空に、稲光りのような閃光が発ち、同時に轟然たる音響が耳朵をつんざいた。

家屋やその他の建物は、すべて吹きあげられて倒壊し、一帯はたちまち天地晦冥、もうもうと立つ土煙におおわれてしまった。

人々の多くは家屋の下敷きとなり、助けを求める血まみれの声々が、その暗やみの中に入り乱れた。

中には、炸裂の音を聞かぬや防空壕に待避した者もあったが、寸時にして火災が発生したため、あわてて着のみ着のまま、防空壕から出て、山林地帯に向って避難した。火災は地区全体から発生し、防空壕も焼けだしたので避難場所にならなかったのもあるが、少数は逃げ遅れて、ついに焼け死んだ。

自然発火

被爆直後、一五分ぐらいして、ワラ葺の家が自然発火し、各所から白煙があがった。その煙と煙が、見る見るうちに連らなって、一大火災となった。消火する人手もなく、また余裕もなかったから、下敷きになったまま生きな

がらに、焼け死んだ人々は数えきれない。

避難行

辛うじて歩くことができる者は、襲い来る火炎をくぐって脱出したが、それらは、国民学校前を通り、打越土手を行き、北口の新庄橋を渡って、安佐郡方面へ避難した。

重傷者をかかえた人々は、遠くへ逃げられず、近くの三滝町の竹やぶの中や倒れた陸軍病院三滝分院の応急治療所、あるいは山手川兩岸の雑木の陰に隠れた。

また、橋の下にも約一〇〇世帯ほどの人々が避難した。

逃げる途中、瓦礫その他で埋まった道に、馬が四、五頭たおれて死んでいるのが見られた。

郊外に通ずる横川町本通り - 三篠本町 - 新庄橋間の道路は、倒壊物で埋まっていて交通不能であったから、避難者は主に、太田川堤防を通って大芝町方面に抜けるか、あるいは打越 - 三滝の土手を経て、新庄橋に出るかの、この二本の道しかなかった。しかし、この道も、電柱が折れ、電線が随所にもつれて垂れさがり、地面に散乱し、屋根瓦やコンクリート片などが雑然と堆積していたから、車などは無論のこと、歩いて行くことさえ困難をきわめたのであった。

同じ地区内の山に近い大芝町や新庄町でも、家屋は倒壊するか、あるいはそれに近い被害が発生した。寸時にして、ワラ屋根・ソギ萱屋根・瓦屋根が吹き飛ばされ、全面的に着火して炎上した。

避難者の衣服は半焼となって血に染まり、顔や手足は火傷して、ヨレヨレの皮膚がブラ下がったまま、誰ともわからぬ程のまっ黒く汚れた姿で、付近の竹やぶや河川の堤防に、あるいは山林にと息たえだえで逃げて行った。

しかし、猛りくる火勢と煙のため逃げ道を失い、方向もつかめず、とまどっているまま火炎に呑みこまれていった人々も多い。

この突発事態の発生にあっては、平素の訓練も忘れ、われ先にと一物も持たないで、命からがら人々は逃げたのであったが、その途中で力がつき、動けなくなると、多くの人々が死んでいった。

また、河川の水中に火を避けて逃げていた人々も多数いたが、その多くも死んでしまった。

このような猛火の中で、楠木町三丁目赤木町内会長・同町三丁目阿甲町内会長及び四丁目松島副会長らは、いずれも全町の焼け落ちるまで踏みとどまり、最後を見とどけてはじめて避難した。

奥地への道奥

地へ向う国道はもとより、その他の狭い道も、可部線の線路上も、ヨロヨロと今にもブツ倒れそうな、全裸半裸の人々が、後から後からひっきりなしに続いて行った。途中、板塀などにあり合わせの物で、「安村に行く後から来い 何某」などと、あちらこちらにたくさん書き残されていた。

このように書き残した人々も含めて、新庄橋付近まで来ると、安全圏内に到達したという安心感からか、ヘナヘナとかがみこんだり横になったりして、ひとまず休息する者がたくさんいた。しかし、休息したまま、二度と動けなくなった人も多かった。これら路傍に苦しむ負傷者の呻き声を聞きながらも、歩ける者は歩いて去った。誰も彼も負傷者で、他人を助ける余力はなかった。無論、傷の手当など思いもよらぬことであった。

黒い雨

午前十時ごろから、黒い雨が激しい夕立のように降りはじめ、一五分間から二〇分間ぐらいでやんだ。このため三滝山の谷川の水はまっ黒になった。

しかし、この降雨状況も被爆者によって体験がまちまちで、楠木町三、四丁目付近では午前十時ごろから無色の雨が降りはじめ、午後三時ごろから黒い雨が降ったと言ひ、大芝町では午後になって普通の雨が降りはじめ、市内の中心へ向って、渦となって降って行ったと語っている。

降雨は、建物の火災に対しては影響なかったが、山林の火災に対しては消火の役目をはたした。

川の死体

河川にのがれた人々も無数にあったが、横川橋や三篠橋付近には、三、四時間後すでに多数の死体が川面に浮いていた。

午後四時ごろ、山手川の水辺に、まっ黒い顔をして、皮膚のブラ下がった手をつき、水を飲む姿勢のまま絶命している死体があった。そのほわりには、頭を手拭で繃帯し、手に竹槍を持った人が坐っていたが、その手拭はまっ赤に血で染まり、顔にドス黒い血のりが流れていた。その付近にいる罹災者たちは、みんな死んだような顔をしており、「水をくれ、水をくれ」と、泣き叫んでいた。

その中に、死んでいる幼児をしっかりと抱いた母親が、ムシの息になって倒れていた。

翌七日の満潮時には、横川橋下に打ち寄せられた死体が、無数によこたわっていたが、二、三日後になると、更にその数を増した。死体はみな、張り裂けんばかりの腫れかたをしていた。

国民義勇隊全滅

なお、六日の早朝、小網町の建物疎開作業に出動した横川地区の、国民義勇隊三二三人は、生存者四人を残して、他は全員死亡した。残った四人も十日前後のうちに死んでいった。

児童の死

また、三滝青年会館で分散授業を受けていた大芝国民学校の低学年児童十数人がへ爆風によって倒壊した建物の下敷きとなった。付近の人々によって救出された児童たちは、ガラスなどで負傷していたが、幸い大きな傷はなかった。まもなく建物は類焼し、その跡から三人の児童の死体が発見された。

六日の夜

六日の夜は、まったく暗黒の死んだ世界であった。

川べりや竹やぶ、山林内に逃げこんだ避難者たちは、その場にゴロ寝するほかなかった。治療を受けるということもなく、終夜呻き苦しんで、ただ夜の明けるのを待った。救援隊の来ない所では、一日二日は水を飲んで辛うじて命をたもっていたが、助ける人もなく遂に死んでいく負傷者も数知れないというありさまであった。

山地に近い打越町や山手町などの、炎上をまぬがれた地域では、屋根瓦が飛んだ位で、何の損傷も受けなかった家もあり、市中の避難者が各家に流れこんで来ていたから、ありたけのものを出して救護にあたった。

どの家も多くの負傷者がいて、一晩中、泣き声や呻き声が絶えなかった。

それに灯火なく、ラジオなく、暗闇の中で、恐怖におびえつつ過ごした。

山べりの小高い所から町々を眺めやると、コンクリート建物の残骸と、樹木の焼け残りが見えるだけで、あとは広々と遠くまで残火の明かりに見とおされ、燃え残った炎が鬼火のように、赤くゆらいでいた。その中に時々思い出したように人影が見えた。焼死者でも探していたのであろうか。

炸裂時の被害状況

地区内の原子爆弾炸裂時の被害状況は次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			摘要
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
横川町一丁目	焼失				15	65	20	横川橋は小破 横川線(電車)無事
横川町二丁目	焼失				15	65	20	
横川町三丁目	焼失				15	65	20	
打越町	60	20	20		9	51	40	中央橋は半焼 三滝橋残る
山手町	60	20	20		14	44	42	山手橋全壊
三滝町	40	50	10		4	58	38	被爆による死者八〇人
三篠本町一丁目	焼失				7	54	39	
三篠本町二丁目東	80	20			1	60	39	36被爆による死者六〇人
三篠本町二丁目西	80	20			1	60	36	被爆による死者三九人
三篠本町三丁目南	75	25			1	50	49	被爆による死者三三人
三篠本町三丁目北	75	25			1	50	49	被爆による死者三九人
楠木町一丁目	焼失				15	65	20	三篠橋は大破せしも一部 通行可能
楠木町二丁目	80	20			1	50	49	被爆による死者二〇人
楠木町三丁目	80	20			1	50	49	被爆による死者四〇人
楠木町四丁目	75	25			1	40	59	被爆による死者三五人
大芝町	40	60			1	40	60	被爆による死者四四人

火災状況

原子爆弾炸裂後、地区内の火災発生炎上の状況は次のとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
三滝町	南部 藁屋根 西部 上山手 藁屋根 北部 中原藁屋根 山林数ヶ所	八時二十分	最初、藁屋根一面に着火炎上する。風強くなり飛火する。瓦はがれて居るので、火の粉が、ソギなどに炎上する。火勢の強くなるにつれて、旋風様となる。	午後五時
三篠本町二丁目東	製材所の木造ソギ葺 屋根などに町内数ヶ 所から発火する。	八時二十分	旋風の風強くて見る見る拡大していく。防火するものなし。延焼は速い。	午後五時

三篠本町二丁目西	町内数か所	八時二十分	旋風の風強くて見る見る拡大していく。防火するものなし。延焼は速い。	午後五時
三篠本町三丁目南	町内数か所	八時二十分	旋風の風強くて見る見る拡大していく。防火するものなし。延焼は速い。	午後五時
三篠本町三丁目北	町内数か所	八時二十分	火勢の上昇とともに、強風となり、見る間に延焼して行った。	午後五時
三篠本町四丁目	南部、飯田製材所立材付近、藁屋根数か所炎上す	八時二十分	この地区は隣家との間も開き、被害の程度も少しは軽く、よく防火につとめたので一部焼失で止む。	午後五時
大芝町	お宮近くのワラ葺家から一番に出火	八時二十分	ワラ屋根の家、数戸焼失する。	午後五時
楠木町二丁目	興亜ゴム、鉄道の枕木	炸裂と同時に自然発火	狩野宅が、一番おそく出火、他が焼けるのにあふられて出火したらしい。	一番おそく夜まで別院がもえていた。
楠木町三丁目	現在の登宅の家の付近が出火	炸裂同時に自然発火		午後十二時ころまで
楠木町四丁目	大芝国民学校付近の原家が一番に出火	炸裂と同時に自然発火		大部分が焼け終わったのは、午後十一時頃

諸現象

原子爆弾による災害は、町民のこれまでの常識では考えられないような、まったく不思議な現象が多くあって、火災終息後、避難先から帰って来た者の目をおどろかせた。

(イ)炸裂の光線を受けた稲の葉先が、約三センチメートルほどそろって枯れたように黄色に変わっていた。また、平素橋上からは見えなかった横川橋下のコイ・イダなどの魚が、熱線を受けたためか背すじが白く剥げており、泳いでいるのがよく見えた。

(ロ)白布地に黒で「憲兵」と書いてあった腕章の、黒い字の部分だけがくりぬかれたように焼き取られ、白い部分だけが残っていた(横川町)。

(ハ)鉄骨が鉛のように曲がっており、ガラスは液体となって溶け、地上の凹みに溜まった。岩石類も焼けただけで脆くなっていた。屋根瓦はほとんど変色変形して破損し、あか土色となった。

また、金庫の中へ保管してあった眼鏡も、セルロイドの縁がまがり、レンズがはみだしていた(横川町)。

(ニ)爆央から約三キロメートル離れたところのノコギリの刃が、火にあっていないのに、ポロポロとむしることができた。この辺りでは、鉄材などに変化はなかったが、鋏などの製品になっていた物は変化した。

アルミニウム類はすべて溶解した(大芝町)。

(ホ)黒い衣服は、炸裂の熱線を受けた部分が、その強弱によって縞のガラの焦げ目ができ、あとでポロポロになった(楠木町)。

(ヘ)鉄道線路の枕木に自然着火し、部分的に焼けた(横川町)。

(ト)将校が乗馬のまま、人馬共に横倒しになって死んでいた。また、牛が街路樹につながれたままで死んでいた(横川町)。

(チ)小網町の疎開作業に出動していた国民義勇隊員の一人は、炸裂時にたまたま土蔵の中において、屋根や壁の下敷きとなったが、生命に別条なく奇跡的に脱出することができた。

(リ)火災に包みこまれた女性二人が逃げ場を失い、何度も水槽で身体を冷やしては防空壕にかくれ、数時間頑張っているうち、老婦人は倒れたが、若い方は生き残って脱出に成功した(横川町)。

(ヌ)三滝山・新庄山・打越山一帯の松の葉が赤くなって枯れた。

(ル)三滝や大芝あたりの竹やぶの竹は、爆央に向いている側の表皮が、全部焦げ、後日、そのところだけ晒したように白っぽくなった。

(オ)三滝町では、ワラ屋根の家が全部焼けたが、中にただ一戸だけ佐々木玉吉宅が焼けなかった。

(ワ)三滝橋を渡っていた婦人が、爆風で一〇メートルも吹きとばされたが、そこから余り離れていない竹やぶのかげで仕事をしていた人で、火傷も受けず、爆風も知らなかった者があった。

紅蓮の炎の中を

末田実吾 (被爆地・楠木町三丁目)

当時私は、県食糧査察員として、毎日の市民の食糧が円滑に配給されるように、そのルートを誤らないように見

守ってきた。

しかし、あの最後の日が近づく頃には、横流しする品もなくなり、甚だしきは、市内とその郊外一帯には、およそ食べ得る野草(オバコ・セリ・ヨメナ・クサギナ・スイバ)は全く見うけられないように食べつくされていた。

実に重大なことなので、早速、憲兵隊特高課に報告したが、軍部でもどうするすべもなく、係の方も「苦しかろうが最後まで、やって下さい。お互いに頑張りましょう。」と、顔を見合わずに過ぎなかった。

長い間、ゲートル姿でやすみ、モンペ姿で床にはいり、ラジオの放送に耳と全神経をとがらせながら熟睡することもできない。僅かの米麦の配給に空腹ながらも、満足して戦ってきた。(中略)原爆投下の前夜も同じような不安と重苦しい一夜だった。

警戒警報解除の報に、ホッとした瞬間の出来事が、あの恐ろしい大惨劇だった。子は親を呼び、親は子を探し、未だかつて見たこともない、聞いたこともない地獄の絵巻が、今、目の前に展開されているのだ。いや、その地獄の中に、今、自分が投げ込まれているのだ。「お母さん、お母さん」と血のほとばしるような悲鳴…。

どこからともなく紅蓮の炎が上がってくる…来る…くる…自分の方に…。大火は物凄い勢いで、近々と燃え広がってくる。先き隣の家にも…隣の家にも…私の家にも。

焼けただれて、まるでボロ布のさがったような顔、手、足。

着ている物は、その瞬間に焼けてしまい、一糸もなく丸裸の避難者が、幾千幾万と、ゾロゾロ、ゾロゾロと続いて後をたたない。

しかも、その行列の中から、まるで子どもが、お母さん、お母さんと叫ぶと同じように「天皇陛下…天皇陛下…」と叫びつづけて避難する人も実に多かった(以下略)。

北へ向けて脱出

岡村アヤ子 (被爆地・横川町一丁目四ノ三九)

夫がちょうど、家で市役所の指示事項などの書類を整理している最中でした。

突然、強い光りと、地をゆすぶる大爆音が起り、アッと思うまに家屋はもの凄く揺れて倒れました。泣き叫ぶ声、悲鳴！一瞬に地獄が出現したのです。

夫は家の下敷きとなりましたが、辛うじて脱出しました。見れば左手の動脈が切れ、顔や手足も負傷し、白シャツは出血でまっ赤に染まっています。

夫は右往左往する付近の人々を、安全地帯にのがれるよう誘導しながら、私と共に約五〇メートル東方の太田川三篠橋付近にのがれ出て、川土手を北にむけて進みました。しかし、夫は出血多量で顔は蒼白になり、倒れては起き、倒れては起き、休み休み歩かねばなりませんでした。

夕方、安佐郡祇園町の神社までやっとたどり着きましたが、その頃は、顔面にドス黒い血が流れ、皮膚は破れてボロ布が下がったような負傷者が、続々とのがれて来ました。

歩くことができなくなり、水をくれ水をくれと、息も絶え絶えに叫びつつ倒れ死んでいく人もたくさんでした。

このような事態の中で、私ら夫婦は励ましあって、簡単に傷の手当てをして、しばらく休息しましたが、被爆時、広島市中にいた息子のことが気にかかりだしました。

一夜その場で過ごしてから、横川の元の家跡にもどりました。家は焼け落ちて燻る火気と異臭で、呼吸も苦しいほどでしたが、一日中探し歩いたのち、牛田町の親類を頼って行ったところ、顔や手などを負傷しながらも息子が生きていましたので、抱きあって泣きながら喜びあいました。しかし、息子は二日後に死にました。全く生きる気力もなくなってしまいました。

八、被爆後の混乱と応急処置

北へ脱出

六日のその日、横川付近には救護所がなかったから、安佐郡の祇園町や安村方面に向って、逃げていくほかなかった。血だるまになった人や足が千切れてビッコをひいていく人など、無数の重軽傷者が、四散した家族と連絡をとるため、電柱やセメント塀や水槽など、ところ嫌わず、家族の名を書いたり、貼紙をしったりして安全地帯へトボトボと歩を運んだ。

衛生隊

同地区内でも大芝町には同日午後六時ごろ、比婆郡の衛生隊が到着して、申しわけ程度の手当てをおこなった。

三滝付近

また、第二陸軍病院三滝分院は木造平家建ての病舎一六棟が全壊したが、火災にならなかったのも、診療機器や医薬品その他を拾い出して、三滝山麓一帯の避難壕などに収容した患者の治療を行なうと共に、分院跡近くに臨時救護所を開設して、一般負傷者の治療を行なった。

三滝寺は、三滝町など周辺地区の避難先に指定されていたためもあるが、寺の中に、避難者が殺到し、身動きできない状態となった。寺では炊出しを行なうと共に、衣類などもすべて提供して救護にあたった。しばらくして、山したの三滝橋付近に臨時救護所が設置された。

また、長崎五郎医師は三滝分院の入口の竹やぶで、約八〇〇人余の負傷者の治療にあたった。その後、三滝山の自分の山小屋に移り、終戦まで毎日数百人の治療を行ない、更に、大芝国民学校に移って多数の負傷者の診療にあたった。この長崎医師も、後日、原爆症で死亡した。

救護所の設置

翌七日早朝、外郭だけ残った横川駅前の三篠信用組合の二階建物に、賀茂海軍衛生学校の救援隊約七〇人が到着し、救護所を開設した。また、山県郡の医療救護班八人も同建物に入り、救護活動を行なった。

同建物には重傷者ばかり約二〇〇人が収容されたが、このうち二、三〇人は屋外にはみ出て、ムシロやゴザの上に寝かされた。いずれも全裸に近く、若い女性や少年が多数見受けられた。

警察隊の指揮する警防団が、トラックで負傷者を郊外へ次々と運んだ。

握りめし配給

警察隊は、信用組合の建物近くの焼跡に派出所を設けた。机も何もなく瓦礫に腰をおろして、罹災証明書の発行や郡部から運んできた麦の多い握りめしの配給をおこなった。真夏の炎天下の輸送で、握りめしはすでに腐りかけていたものが多かったから、一度焼いて食べなければならなかった。

しかし、収容された重傷者たちは食欲がなく、いつまでも頭のそばにそのまま置いていた。この食糧配給もまったく当てずっぽうなやり方であったから、楠木町三丁目のように十日頃から配給された所もあるし、十五、六日頃から二週間ばかり弁当が配給された所(楠木町二丁目)もあった。

死体の処理

このような状況下で、陸軍船舶部隊の兵士や郡部から出動した警防団の手によって、残骸で埋まった道路の啓開や無数に散乱する死体の収容・処理がはじめられた。焼跡の中で焼く死体は異臭を放ち、ひどく鼻を衝いた。

死体の収容・処理作業は、おおむね七日ごろから始まり、十二日ごろに終了した。横川駅東プラットホームも死体収容所と化し、身元不明の数十体が置かれてあった。

信用組合に収容した負傷者も大多数が死んでいったが、身元不明が多く、一日間焼かないで探索者を待った。

救援隊の携帯医薬品はたちまち底をつき、多くは治療らしい治療も受けないまま、苦悶のはてに死んだ。

八日ごろから、三滝町の現在火葬場のところや、三篠国民学校のグラウンド、山手川の河原、大芝公園の東河原などでも火葬がおこなわれた。

このほか、焼跡のあちこちの空地や鉄道沿線の両わき、あるいは三滝山や打越町の山ふもとなど、到る所でおこなわれた。

死体は来援した警防団員によって、最寄りの場所に運ばれたが、身元の確認ができた者はわずかであった。身元不明の死体は、数体を一まとめにして焼いたが、取扱った数は非常に多く、確実な数はつかめていない。

ただ、楠木町二丁目付近の死体は身元不明者がなく、それぞれの縁故者が処置したから、集団的に火葬がおこなわれるということはなかった。同町三、四丁目付近の死体は、川土手で若干火葬した者があった。

大芝町では、町自体の者でなく、他から逃げて来た兵隊や市民の死体が多く、河原や川土手で火葬した。

三篠信用組合の建物から約三〇メートル離れた焼跡では、陸軍の兵士が簡単なテントを張って、横川駅前一帯の死体を集めて焼いており、モウモウたる煙の絶えまがたかった。

幽鬼の世界

八日ごろになると、焼跡の夜は暗く、もの音なく、余燼の煙が力なくただよっていた。そして、遠く近く一面にうす紫の燐の燃えるのが眺められた。

救護班として出動した賀茂海軍衛生学校の生徒野呂昭夫練習生は、この陰微な夜の光景を、生きてふたたび見ら

れない幽鬼の世界であったと報告している。

このような夜、死体を焼きつづけている火が、時々、パッと赤く燃えあがり、それと共にジリジリと焼ける脂の音が、無気味にきこえた。そして、鼻をはげしくつく異様な臭気が暗やみの底を這うように流れてきた。

慰霊祭

九月一日、三篠信用組合内に西警察署が設けられたが、その裏の広場で、十五日に三篠連合町内会主催の慰霊祭が執行され、多くの遺骨を、広島別院の供養塔に安置した。

各町内会の機能

被爆後の各町内会の機能その他の状況は、次のとおりである。

町内会名	説明
横川町一丁目	山本豊松会長は、佐伯郡宮内村に疎開していたが、被爆後二、三日目から、連日町に帰って来て、とどこおりなく事務を執った。
横川町二丁目	岡村清一会長は負傷して安佐郡祇園町に疎開したが、被爆一週間後、疎開先から通って、三篠連合町内会の会務と、同町内会の運営にあたった。
横川町三丁目	橘高甚助会長は、一家が故郷に避難して復帰しなかったから、被爆後の事務は矢野一徹が処理した。
楠木町一丁目	辻国一会長は、安佐郡祇園町に隠退したので、戦後は住田稔が町内会事務をおこなった。
楠木町二・三・四丁目	被爆後・町内会としての機能は停止した。町民全員が多かれ少なかれ負傷したため、町としての対策もたてられなかった。
三篠本町一丁目	森井賢雄会長は・自宅(寺町)で爆死したから、代って大塚十次郎が町内会の事務を行なった。
三篠本町二丁目東	被爆時、当初は福島喜代槌会長と一〇戸ばかりの町民が共同炊事をしていた。買出しに行く者を当番できめて、配給物の不足を補った。
三篠本町二丁目西及び三丁目南・北	町民心大部分は避難先にとどまり、バラック小屋の建築材料が入手できた者が帰って来て、隣組を作った。復帰者が増すにつれ隣組も増して町内会が復活した。
三篠本町四丁目	一部焼失なので、町民は他に避難しなかった。したがって町内会の機能もあまり支障を生じなかった。配給物資も少量ながら順調に配給された。
三滝町	一部焼失なので、町民は他に避難しなかった。したがって町内会の機能もあまり支障を生じなかった。配給物資も少量ながら順調に配給された。
山手町	一部焼失なので、町民は他に避難しなかった。したがって町内会の機能もあまり支障を生じなかった。配給物資も少量ながら順調に配給された。
打越町	安田新七会長が引退したので、被爆後は岡部伝一が町内会の事務を代行した。
大芝町	町民は自分自身の事だけで、手一杯であったから、町内会としての活動というものはあまりしなかった。
新庄町	町民は自分自身の事だけで、手一杯であったから、町内会としての活動というものはあまりしなかった。

九、被爆後の生活状況

(南部地域)

地区南部の全焼地帯は、一時無人の焦土と化した。火災がおさまると、わが家の跡に帰って来た人が、わずかながらあった。

焼け残った材木やトタン板を拾いあつめて来て、コジキ小屋のようなバラックを建てて入ったが、床にはムシロや菰など捜して来て敷き、食器も拾って来た空かんなどを使った。その日々は、まったくただ露命をつないでいるというだけの状況であった。

焼跡には、雑然とした物の残骸の下敷きになっている多数の死体をはじめ、斃死した馬などもそのままになっており、異臭紛々、たちまち八工の大群が発生した。九月初めごろ、進駐軍が飛行機で全市にわたってDDTを散布してから、ようやく減少した。

食糧は、前述のとおり安佐郡や高田郡からにぎりめしが運びこまれ、それによって、被爆後の五、六日間をすごした。十二日から三篠信用組合内に駐在する西警察署において、一世帯二日分ずつの主食と少量の野菜の配給がおこなわれた。

しかし、配給とは名ばかりで、それだけでは餓死を待つばかりであったから、焼跡や近くの山地や川べりに生えている雑草や、農家に行って分けてもらったカボチャや芋づるなどを、配給米にまぜて食べた。米の粒の方が少ないご飯であった。

のちには、江波町で売り出された雑穀と雑草をつきあわせた「江波だんご」を買って食べ、空腹のたしにした者も多かった。

このだんごも、長い行列をつくって待たなければ買えなかった。

被爆前に防空壕や地下に埋めておいた米や醤油などは、実に貴重な物資で、少しずつたしなんで使った。

終戦になってから、軍用物資が僅かながら配給された。透けて見えるような木綿の薄い布地や、軍服・袴下・ジユバンなどであったが、何人かに一つの割当てであった。

夜は灯火がなく、まっ暗であった。

焼け落ちている裸電線を使い、遠くの電源につないで、点灯しているバラックもあるにはあったが、一般的に点灯されたのは、八月十五日ごろからであった。それまでは、配給された一本の口ウソクを頼りに、細々とたしなみたしなみ使い、無くなると焚火をして明かりを取るか、なるべく早く眠るようにした。普通の神経ならば、一ツ時も過ごすことのできない死の世界であったが、原子爆弾の惨禍に打ちのめされた罹災者たちには、焦土の荒涼とした夜の暗黒など、もの数ではなく、漠とした虚脱状態のなかに、不安感も緊張感も忘失していた。

六日当日、安全地帯に避難した人々は、なかなか焼跡に復帰してこなかった。住むに家なく、近親者もなく、また収入の道もなく、身体も回復せず、生活条件のすべてが、徹底的に破壊されてしまったのが、その原因であった。

郡部へ疎開していた学童たちは、両親や縁故者の避難先が判明し、連絡のついた者だけが、そのもとへ引揚げていった。しかし、少数の学童は、家族が焼跡に復帰してから、戻って来た。

中には、家族や縁故者の方から疎開先に連れに行ったのもあったが、疎開先で待っていた子どもは、迎えを見ると、抱きあってよろこび、ともどもに泣いた。そして連れ帰られた焼野原のバラック小屋は、僅か三畳敷きの広さに、七人もが寝るといふみじめな生活であった。

八月下旬から九月初めにかけて、横川町三丁目の信用組合の周辺に、主として食べ物の闇市ができた。福島町あたりから牛の臓物などが売り出されたのも、この頃のことである。

横川には、戦前からキリンビールの出張所があったが、そこで午前午後の各一時間ぐらいずつ、ビールの立飲みがはじまり、進駐軍の兵士も罹災者も一緒になってならんだ。

(東・西部地域)

焼野原となった楠木町跡に、被爆二日目に井出口某が、重傷の家族をかかえて帰って来た。やはり焼残りのトタンなどでバラック小屋を建てて住んだが、食糧はなく困窮をきわめた。空腹に堪えられず、死んで池に浮いているコイを焼いて食べたりしたという。

十日ごろから、崩れかけの防空壕や焼トタンバラックを建てて、ぼつぼつ復帰しはじめたが、復帰者の多くは、先祖代々からの土地所有者で、借家人はほとんどいずれかへ転居した。

ここもまた八エが大発生し、まるで黒豆をまいたように群がって困った。

生活物資 - 特に主食は、配給米が唯一の頼りであったが、最少限度の量もなく、疎開して辛うじて助かった衣類などを米と交換したり、高価な闇米を買ったりしなければならなかった。夜は灯火なく、早く寝てしまうよりほかなかった。バラックにやっと電灯がついたのは十月末から十一月へかけてであった。

その間、疎開していた学童を迎えに行き、焼跡に連れて帰ったが、学校の再開もおぼつかないことであった。

三滝町・大芝町・新庄町、および三篠本町四丁目一帯は、焼失をまぬがれたうえ、農家が多かったから、きびしい経済状況ながらも、食生活は比較的恵まれていた方である。

この地区の八月末の各町世帯数は、つぎのとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数	町名	世帯数
横川町一丁目	103	三篠本町三丁目南	55	楠木町四丁目	115
横川町二丁目	100	三篠本町三丁目北	60	大芝町	280
横川町三丁目	85	三篠本町四丁目	150	三滝町	320
三篠本町一丁目	100	楠木町一丁目	107	打越町	325
三篠本町二丁目東	40	楠木町二丁目	115	山手町	142
三篠本町二丁目西	38	楠木町三丁目	106	新庄町	60

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月の暴風雨と十月の豪雨によって、罹災者はまた大きな打撃をうけた。

九月十七日の台風のととき、大芝堤防が決壊して、三篠地区は打越町・山手町を除く一円が浸水し、思わぬ悲劇を生じた。

浸水家屋は九五%で、横川・打越・三篠本町一、二丁目付近は、水深一メートルから一・五メートルに及び、完全な床上浸水であった。焼失をまぬがれた家も、屋根の損傷がひどかったから、雨もりはげしく坐っている所もないありさまであった。素人造りのトタンバラックは、トタンが吹きとばされたり、小屋そのものが倒壊したのもたくさんあった。防空壕の中やバラックの片隅に収めていたとときの家財・衣類・ふとんなどが、汚水につかってベトベトになり、使用できなくなった。

楠木町四丁目の国民学校分教場(今の順覚寺)に、疎開先から復帰した学童が四人ばかりいたが、台風のため建物が倒壊して死亡した子がいた。

また大芝町でも、疎開しなかった二、三〇人の学童がいた分教場の被害が大きく、二、三人負傷者を出した。

十月の豪雨のとき、戦災につぐ天災に打ちひしがれた罹災者たちは、被爆してひどく破碎されながらも、幾つかの教室が残った大芝国民学校へ避難して、ひと夜をあかした。

しかし、この洪水が不衛生な焼野原の汚物を、あらかじめ瀬戸内海へ運び出したから、一見さわやかな秋が急に訪れたように思われた。

学校再開

このころ、疎開から帰った児童や残留組で生き残った児童を集め、三篠国民学校は九月半ばに、大芝国民学校は十月に、それぞれ青空教室で授業が再開された。

商店建つ

二十年十二月ごろから、衣料品店・飲食店・日用雑貨店・八百屋などの小さなバラック店舗が建ちはじめた。

これらの商店は、当初、横川駅を中心にしてできたが、二十一年になると更に発展し、被爆後、半年から一か年のあいだに、順次、横川町一円、楠木町・三篠本町一帯へと経済活動をひろげていった。

復帰者増す

復帰者も次第に多くなり、焼跡に点在するバラック小屋の数もふえて、二十一年五月、市役所の復興局建築課から鉄板一、〇〇〇枚余の配給があった。被爆直後の台風のとき、夜どおし必死で、吹きとばされないように押さええていた焼トタンも、これでようやく張りかえることができた。

一、地区の概要

町内会別要目

この地区は、己斐東本町[こいひがしほんまち]・同中本町[なかほんまち]・同西本町[にしほんまち]・同東中町[ひがしなかまち]・同西中町[にしなかまち]・同上町[うえまち]の範囲とし、爆心地点からの至近距離は、己斐橋西詰めで約二キロメートル、もっとも遠い地点は、己斐上町三区字国宥で約五・二キロメートルである。

己斐地区は国道沿いと、山間部のひらけた地区を除いて、ほとんどが山地である。この山間部は、戦時中、市内の工場や市民が、疎開先として多く利用した。

己斐は、茶臼山城跡をはじめ、昔から市の西の玄関として重要な位置を占め、旧国道に沿って栄えた。戦後、山地一帯に閑静園・緑ヶ丘・ふじハイツなど大規模な住宅団地が造成されつつある。

新修広島市史に「己斐の花卉・盆栽・植木の歴史は古く、造園の技術とともに、家中屋敷や町家の需用にこたえて発展している。」とあるが、戦争になるまでは、花売りが「ホウ、ホウ」と呼びながら町筋に毎日出て親しまれた。従来、この伝統的な産業を中心にして、人口が密集していたが、原子爆弾による焼失からは辛うじてまぬがれた。被爆直前の建物総数は、一、七六七戸、人口は七、九四七人で、各町内会の要目は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
己斐東本町	203	226	1,289	和田満苗
己斐中本町	186	184	850	井上忠一
己斐西本町	248	250	900	井上陸松
己斐東中町	745	745	3,458	(兼連合町内会長)川本精一 藤田儀三郎
己斐西中町				
己斐上町	385	385	1,450	土井卯一

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
己斐駅	己斐中本町	己斐信用組合	己斐東本町
日本通運(株)己斐支店	己斐中本町	芸備銀行己斐支店	己斐中本町
己斐郵便局	己斐東本町	NHK広島放送局疎開倉庫	己斐字百花園
三菱造船疎開工場	己斐柚ノ木谷	蓮照寺	己斐西中町
三菱造船訓育課	己斐東本町花市場内	善法寺	西本町
東洋製缶疎開工場	三谷	光西寺	上町区
己斐国民学校	己斐上町	旭山神社	己斐西中町
広島花市場	己斐東本町	広島己斐園芸農業協同組合	己斐東中町
広島印刷株式会社	己斐上町区		

二、疎開状況

人員疎開

この地区は、市の中心部からはずれていたもので、人員疎開も特別な事情のある人を除いて、大部分が実施せず、町内にとどまっていた。

物資疎開

物資の疎開についても、地区内から他へ疎開する者はなく、市の中心部からこの地区へ物資を疎開して来る者が多かった。

また、地区内の山林地帯には、軍需工場や軍部が諸物資・諸施設などの疎開をおこなっていた。

学童疎開

学童疎開では、昭和二十年五月十二日、広島駅前広場において、己斐国民学校集団疎開児童九六人の壮行式が、市主催で挙行され、午前八時三十分発の列車で出発した。

疎開先は、世羅郡東村国民学校(現甲山町)および同郡大見村国民学校(現世羅町)であった。この入村式と入学式に、己斐連合町内会長川本精一が現地に出向いて参列した。

三、防衛態勢

防空訓練

市中心部や、その他の地区と同様の訓練を実施し、戦争末期になると三日にあげず行なった。待避壕造りを奨励し、バケツ操法・竹槍訓練などで決戦態勢に備えた。また、貯水槽・防火用器具の充実に意をもちいた。

特に、山林地帯には、三谷(字名)に横穴式防空壕を、町内会費で二か所築造した。いずれも馬蹄形式で、一か所に約三〇〇人収容できる大規模のものであった。

国民義勇隊

昭和二十年五月二十二日、国民義勇隊の編成に着手し、五月二十七日には編成届を提出、五月三十一日、己斐国民学校において結成式を挙行した。結成式には、市長代理谷山振興課長が列席し、約一、〇〇〇人が参列した。

四、避難経路及び避難先

この地区では、特に避難を想定せず、むしろ、市中心部方面の被災町の受入れの準備として、己斐国民学校を整備した。

五、所在した陸軍部隊集団

茶臼山に高射砲陣地(部隊名不明)があった。また、己斐西中町蓮照寺及び旭山神社に部隊が駐屯していたが名称・人員は不明である。

このほか、己斐国民学校内に陸軍糧秣支廠が疎開駐屯していた。

六、五日夜から炸裂まで

前夜

五日午後九時二十七分、空襲警報が発令されたので、町内会幹部や警防団員は、灯火管制、防空壕待避などの指揮をとり、警備につとめた。

六日早朝、解除になったので、警備員六、七人を残して、他は帰宅した。町は平常と同じような状態に復し、前夜来からの緊張から解放されていたところへ、原子爆弾が炸裂したのであった。

敵機目撃

上空侵入の敵機が目撃者もあり、原爆搭載機の僚機の爆音を聴取したという町民もいるが、はっきりした状況は判らない。

疎開作業への出動

建物疎開計画について、かねてより陸軍糧秣支廠の依頼で、源左衛門橋から八幡川橋までの道路を拡張して、国民学校の下(現在・市立己斐保育園)の県道に接続する計画の解決が迫っていた。

それで拡張にともなう立退きとか、土地提供の問題を、八月三日己斐国民学校において、土地家屋の所有者藤田儀三郎ほか三三人と、慎重協議の結果、これら該当者の意見がまとまり、すべて軍部および市当局に一任することにして解決した。

そこで引続き調査をおこない完了したときに、原子爆弾に遭遇して中止された。

市中の家屋疎開作業への出動については、己斐地区は八月一日から毎日三〇〇人ずつ、出動人員延べ二、〇〇〇人を、中島地区へ出動するよう当局から要請を受けていた。

これに应付するためには、出動人員の割当名簿の作成をして、手配しなければならなかったが、時間的に一日から出動できるような態勢を整えることができなかった。それは、四日に戦没者の己斐町葬を営む準備に追われていたことと、引続く空襲で、町内会幹部も疲労して執務が渋滞していたからである。

ところが、四日の朝、このことについて軍部側が、己斐連合町内会長宅を訪れ、強硬な態度で非協力だと責めたので、六日から必ず出動するよう手配すると契って、会長は軍部の了解を得た。

そして六日をむかえたが、この手配もすることができず、作業出動は中止となったのであった。

七、被爆の惨状

廃屋と化す

この地区は市内中心部ほどのことはなかった。しかし、倒壊した家屋が一〇数戸あり、たとえ倒壊しなくても爆風圧による損傷は大きく、廃家同様の被害をこうむった。

炸裂後、まもなく火災が発生し、山林も燃えだした。省線から東側の市街地の火災が全面的にひろがっていった。全焼家屋は八〇数戸に及んだが、地区警防団員七、八人の必死の消火活動で火災の拡大が防止できたことは、大きな功績であった。

原子爆弾炸裂の衝撃で、いちじ山間部へ避難していた者もあったが、すぐに帰ってきた。

己斐は、市の西方郊外(佐伯郡方面)へ通ずる主幹道路があるので、市中から避難者が殺到して混雑をきわめた。なお、地区内の全般的な被害は、次のとおりである。

町名	家屋被害(約%)					人的被害(約%)				橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無事	計	
己斐町	10	40	50		100	3.2	1.2	95.6	100	己斐橋・損傷はあったが通行に支障なかった

火災発生炎上の状況

また、炸裂後の火災発生炎上の状況については、和田満苗の体験によれば「このとき一番先に燃えだしたのは、東本町のマスミ屋で、倒壊している二階のひさしから燃え出した。その家の下には、子供が下敷きになっている。ところが、子供を助け出そうと思っても一人ではどうにもならぬ。己斐消防署員の応援を求めため、署まで行ったが署員は一人もいない。警防団詰所にいた六、七人の応援をたのみ、手押しポンプを持ち出し、最初の場所へ帰った。そのときマスミ屋の東方も盛んに燃えていたので、それどころではなく、無我夢中で消火にあたった。そのかいあってか、午後二時ごろにはだいたい鎮火したが、なお残火がくすぶり続けていた。完全に消火作業を終ったのは午後六時ごろであった。」という。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	終息の時刻
	場所	時刻		
己斐町	己斐東本町(マスミ屋)	およそ午前八時三十分ごろから	各所に点々として火災が発生。東本町は集中的に燃え、中本町、中町、上町(山間部が多い)などにも全焼家屋がある。	およそ午後二時ごろ

黒い雨

炸裂後まもなく黒い油よりの雨がバラバラと降っているうちに、まれにみる集中豪雨と化し、午前十二時まで降り続き、山林の火災が消えた。この雨は、安佐郡祇園町山本から、山手町・己斐町・古田町・井ノ口町の山の手一帯にかけて降った。

諸現象

(イ)放射能熱線によって、屋外にいた者は火傷した。また、西北にあたる山間部(己斐上町)の己斐国民学校は、爆心地から約三キロメートルはなれているが、その校庭にいた者も熱線によって火傷した。

(ロ)自然着火現象としては、爆心地から西方約二・五キロメートルはなれ、周辺を山にかこまれ、南北にむかった谷で、東方は山でさえざらされている家屋(川本精一宅)で、炸裂後・窓のカーテンが燃えだした。己斐東本町の火災現場から約三〇〇メートル離れた場所であり、熱線による自然着火であったが、ただちに消しとめて大火に至らなかった。

(ハ)また、山の高所に登ってみると、山林が所々で燃えているのが見られた。

(ニ)己斐地区は爆心地から西方約二キロメートルから五・二キロメートルの圏内にあるが、爆風による影響は大きかった。爆心地から約三キロメートルまでの地帯は、家屋のほとんどが大破した。または、それに近い損傷を受け、中には倒壊したものもあって、被害はかなり大きかった。

被爆後、市および専門家、銀行などによる家屋の被害程度を合同調査したが、調査結果では、己斐国民学校から下手一円の各家屋は約七〇%の被害程度であって、地区内全体としては平均約五〇%の被害であった。

軍人谷にて

安部アヤ子

一九四五年八月六日、その日も朝から良く晴れたお天気でした。空襲警報解除になったのは午前七時過ぎ頃ではなかったかと思います。当時、夫と私と子供三人は夫の実家の己斐におりました。姑と弟嫁英子さんとの七人暮らし、夫の兄と同じく第二人は出征していました。

己斐軍人谷と言われるこの谷は、昔から軍人が多く住み、そのために地名になったと姑からよく聞かされてきました。山の緑の樹々に囲まれた細い道に点々と家があり、姑の部屋の庭に立つと左は広島市内、右は遠く瀬戸内海の景色が美しく見えました。四季の変化をはっきりとしめし、特に冬の雪景色は名画を見るようでした。

警戒警報解除を聞いて、今のうちにと虫のついた配給米を仏間(仏だんのある部屋)に広げて陰干しをしたのでした。夫は私に「今日は少し早い用事があるから」と、職場に出かけました。何時もよりわずか一分早いだけでしたのに、そのために命拾いしたのでした。長男重雄(一一歳)は己斐国民学校に登校、長女マチ子(七歳)は学校を休ませていました(低学年はほとんど授業になりませんでした)。水道はついておりましたが、その頃には水も出な

くなり、夜中にときどき思い出したように、チョロチョロ音がするばかりでした。私はマチ子に、

「良坊の(生後五二日)お守りをしていてね。」一言言ってバケツを持ち、英子さんと隣に水を汲みに出ました。

「お早うあります。」

声は、山の奥の岩田のおじさんでした。肥桶をかついでいましたがふと立ち止まり、手をかざして空を眺めている姿を目にとめながら英子さんと私は隣との境のくぐり戸を開けました。「奥さん恐れ入ります。またお水を分けて下さい。」と声をかけると、窓から顔を出した奥さんは、「お日より続きで井戸に水があるでしょうか。スイッチを入れてみます。水がないとモーターがから廻りしますから、水がないようでしたら三時間程待てば湧いてきますし、遠慮なくどうぞどうぞ。」と言ってくれました。私は礼を言い、妹がバケツに汲みそれを私が受け取った時でした。パチッと音がしました。青い光が眼を射しました。

「あら、ヒューズが飛んだ。」

妹と顔を見合わせた瞬間、ゴオーと物凄い地響き。続いて頭の上に落ちる屋根瓦と板切れ。私は吹きとばされ、下駄のはなおが切れて、横倒しにころげたのでした。爆発かしら、そんな筈はないと思ったりもしました。周囲が黄色く霧のようなホコリで眼を開けていられません。人声もなく静かな瞬間でした。(後でわかったのですが隣の奥さんは、額と首からのどにかけて大けがをしたのでした。二メートルぐらい離れていた英子さんは無傷でした。) 私が地面を這いながらくぐり戸をぬけ、家に引返そうとした時、家の土蔵の壁が崩れおちてきたのでした。壁にたたきつけられながら下敷になったら生命がないと、とっさにそばの柿の木につかまり、ヨロヨロと立ち上がりました。近所に爆弾が落とされ爆風かもしれないと思いながら、我が家を見たのでした。そして自分の目を疑いました。廻り廊下のガラス戸がはずれ、目茶目茶になって外に飛び出ているのです。その辺一面にガラスの破片と屋根瓦が飛び散り、天井の板ははがれ、釘をつけたまま一枚一枚部屋一杯にブラ下がっていて、畳ははね上がっているのです。ハダシのままの姑が、顔から血を流して恐怖のため荘然自失して立っている姿。その時、シミーズ一枚の長女マチ子もハダシで

「おばあちゃん、おばあちゃん。」

としがみついたのでした。恐怖で夢中の姑は、孫のその手を突き離して、よろめきながら防空壕に這入ったのでした。時間にして五秒か一〇秒のできごとだと思いますが、強烈な印象として私には忘れられません。突き離された娘はひざをついて泣き出しました。私は怒りがこみあげてきました。けれど、それは悲しみとなり絶望と変わったのでした。(その後、人間不信は、長い年月私を苦しめたのです。姑をおいつめたものが、戦争という状況にあったと気がつき、それは戦争へのにくしみと変わりました。)' マチ子おいで、泣きなさんな。ズキンとモンペはどうしたの。早くするのよ。良坊は何処においたの。」おびえた娘は頭をふるだけでした。

「足が痛い。ガラスがささったの。」

よく見ると足をくじいているらしく、「痛い痛い。」と言うばかりです。

その時、

「裏に火がついたようー、早く来て、誰か早く消して！」

英子さんの声がします。私は狂ったようになりました。

「赤ん坊はどこ、良坊はどこに寝かしたの。奥のカヤの中、茶の間なの、早く、はやく、マチ子言ってちょうだい。」

家の中に入りたくとも、天井からブラ下った釘のついた板をのけなければ、入口がないのです。一枚一枚ほうり出しながら、良坊はどこかと必死でした。とばされ、投げ出された物の中に、柱時計が八時十五分で止まっているのが目に止まりました。壁とガラスをのけて探している私に、遠くで赤ん坊の泣く声が聞えます。

「お母ちゃん、茶の間にねかしたの。」

マチ子声です。茶の間のテーブルに落ちている土とガラス、そして板をのけたのでした。テーブルの横にいつも寝かしておくのですが、そこには大人の頭より大きな石が一つ落ちていました。もし赤ん坊がここに寝ていたらこの石でつぶされていたでしょう。

「いないのよ。」

私は叫びました。また、声がして

「粉ひきうすのそばに寝かしたの。」

部屋のすみの壁土とガラスの落ちている天井板をのけました。赤ん坊の泣き声がします。ゴザをそっと取りまし

た。良坊でした。顔はススと壁土で真黒になり、おでこに大きなコブが一つ。大きく口をあけて泣いていました。口だけがとても赤く、私の目にうつりました。「泣いているのは生きているからだ。ほんとうに生きている。」私は抱きあげました。どのくらいの時間が経ったのでしょうか。私は赤ん坊をおんぶして、娘には防空用具をつけ、痛む足に小布を巻きつけしっかり手をつないで庭に立ちました。夫と長男はどうなったかと思いながら、次第に暗くなる空に眼をやった時、真黒なかたまりの不気味な形をしたキノコ雲をみたのでした。山の小道には、岩田のおじさんのかついでいた肥桶がころがっていました。

話し声がしてきました。

「山は大丈夫だろう。」

一二、三人が山を登って来たのです。白くなった髪、恐怖と疲労の顔、顔。

「休ましてつかあさい。」

と廊下に身を投げるように、腰をおろすのでした。話をする人もなく、誰れかが「今何時かのう。」と言うのですが、返事をする人もいません。けがのない英子さんは姑のそばについていたのでした。配給の大豆が炊いてあったのを思い出し、「英子さん、大豆でも食べて元気をつけましょうよ。」と私は台所のカマド(カマドはこわれずに、仕かけてあった大豆のお鍋は、ふたもとれないで安全でした)から大豆を少しずつ分けたのでした。

「有難う有ります。」

一粒一粒を口に入れてかみしめていると、みんなは、少し落ち着いたようでした。ボソボソ話をしているのを聞いていると、ほとんどの人が福島町方面から逃げて来たのでした。これから先、どうしていいか解らないのでみんな不安なのでした。

そのうち目まいがする、頭が痛い、と言いだす人がでてきました。

「それでは己斐国民学校に行ってください。非常用の薬があるはずですよ。こんな時ですから、お医者もいるでしょう。食べるもの、配給もするでしょう。」隣組長をしていましたので非常の場合は、己斐国民学校に行くことを私は思いだしたのでした。

「では、そうしょうか。」

と三人四人と腕を組んだりして助け合いながら、礼を言って山を下り、去って行きました。「こうしていても、また空襲になるとどうしようもないから、山の奥の岩田の防空壕に行きたい。」と姑は言うのでした。私もそれを気にしていたので、

「英子さん、岩田へ逃げて。」

としようと

「お姉さんはどうするの。お姉さんも行って下さい。」

と言うのでした。英子さんは、当時二〇歳位でキビキビとよく働くお嫁さんでした。

「あたしはここに残るわ。お父ちゃんや重雄も、この山の家を日当てに帰って来るでしょう。ここまで火がきたら、その時はなんとかするつもり(自信はなかったのでした)私だけでも、ここにいてやりたいの。」

姑は大切な物を入れた袋を持ち、杖をつき、足をひきずるようにして歩き始めました。英子さんは振り返りながら、「それでは、マチ子ちゃんだけでも連れて行きましょう。」

と言ってくれました。私は首を振りました。

「この子は歩けないし、ここにいる方がいいの。」娘の頭をなでながら、孫の手を払いのけた姑を思い出し、涙が出たのでした。そうして、同時に死を覚悟したのでした。

(壁が崩れ落ちた時の腕の傷が痛み、紫色になり、手が動きませんし、疲れで限界にきていました。)

その時、小道を急いで帰る夫の姿が見えました。後には一七、八人の人たちが一緒に登ってきます。

「お父ちゃんが帰った。ああ、矢張り帰った。」娘と私は夢中で手を振りました。姑は、夫に気がついたのでしょう。家にひき返してきます。夫が連れて来た会社の人たちは、手足に負傷したり、やけどしていました。その中の女子学生七、八人は顔のやけどだったように覚えています。

夫は、

「うちにある薬を全部出しなさい。」と言い、やけどの手当て、傷の手当て、おばあちゃんには注射(ビタミン)をしたのでした。会社の人たちが三人、四人と組になって帰りました。その後、一息ついて夫は横になりました。

「ああ苦しかった。がまんをしていたがもう起きていられない。医者をつたのむ。」

それから長い病床生活がつづいたのでした。

話は前後しますが、夫がけが人の手当てをしている時に、激しく雨が降りました。黒い雨です。屋根は穴だらけなので、家の中も外と変わりなく降りました。姑の部屋はどうやら雨もりのする程度なので、姑と娘を寝かしました。ほかの所はけが人で坐る所もないので、私は赤ん坊をおんぶして英子さんと、台所の戸棚に肩を寄せ合い、雨をよけながら、

「何故生き残ったのかしら。もうどうなってもいいわね。」と語りあいました。

「重雄ちゃんを探してみましょ。」

と英子さんは山を下りたのですが、やがて帰ってきて、

「どうしても見付からないので、人に聞いたら、どこかよその防空壕にいるらしい。お姉さん、とてもひどいけが人が...。」

と後は口ごもり、泣くのでした。

今度は私が長男を探しに山を下りました。途中、石がきが崩れて通れない所や、家がつぶれていました。道ばたに坐ったり、また寝ている人、山の中腹に小屋を建てようと丸木を組立てている人を見ました。山を降りきって通りに出て、あらためてその凄惨さに目をおおいたくなりました。福島町方面から己斐国民学校に向かう人々の群れ。一糸もまとわない裸の行列でした。髪の毛は焼けちぢれ、皮ふはただれ...。皮がたれ下がり、ヨロヨロしながら、一生懸命に、目的の国民学校へ行くために、黙々と歩くのでした。焼けただれて真赤になった素裸の大きな男の人が、カヤを頭からかぶったのとすれちがいました。また、戸板に負傷した人を乗せて来た人たちが、戸板を道ばたにおいて倒れてしまうのです。それがみんな裸なのでした。私はモンペを身につけている自分を申し訳ないような気になったのでした。

青い顔をした長男の姿を発見した時は夢中で、ただ無事でいてくれたと思うのが精一杯で、言葉もなく涙さえ出ませんでした。

隣組一四世帯でしたが、どの世帯にも行方不明、亡くなった人、けがをしている人が二人や三人はありました。私の家では、動けるのは、英子さんと私と一歳の長男だけなのでした。

近所の越智医院長が駆けつけてくださったのが夕方でした。

「けが人が多くて廻り切れません。」

と疲れきった先生の様子でした。姑と夫の胸にしっぶをしたり、頭を冷やしたりして下さいました。注射が効いたのでしょうか。夫は、

「赤ん坊は大丈夫か。」

「子供になにか食べさせたのか。」

とか心配して聞くのでした。今朝陰干しにしたお米は、壁土とガラスの破片で駄目になり食べられないので、大豆と米びつにわずかに残っていたお米をおかゆにして食べたのは、暗くなってからでした。

この軍人谷は、幸いに火を消すことができましたが、夜になっても赤々と燃え続ける広島市の街でした。何時まで戦争が続くのかしら、病人と三人の子供を考えながら、星の見える天井を見つめ、空襲になっても防空壕には、もう入るまいと思いました。

この山に避難した人たちの話し声と、けが人の苦しむ声、アイゴーアイゴーと歎き悲しむのは朝鮮の人でしょう。深夜の山にこだましています。歎き、悲しみ、怒りが叫びとなっていつまでも続きました。死体の焼ける臭気。恐怖心もなく、私は吐気と腕の痛みにときどき全身にけいれんがおきていました。

良坊が激しく泣きました。やっと身体を起こし、抱きかかえて乳房を口にふくませたのでした。お腹がすいていたのでしょうか。勢いよく吸いしましたが、乳房を離して泣くのでした。お乳は出ないのでした。一滴も出ないので。首をふりながら乳房を探して、吸っては離して泣く赤ん坊。良坊は泣き続けるのでした。母親として大切なこと、乳を飲ませることに一日中気づかなかったのでした。私は心から詫びました。この子のために私はどんなにしても食べよう、草でも木の根でもいいから食べて乳にしなればと心に決めました。良坊の体を軽くたたきながらゆすり、絶望の闇の中で意識がはっきりしてきたのでした。

終戦となり、そして二十年の歳月が経ちました。けれど、私は実感として終戦のけじめがなく今も続いているような気がするのです。

妹のこと

森本英子

八月六日は、朝から太陽がキラキラと輝き、暑い日中を思わせていました。その日は家中そろって屋根なおしをする日だったのです。そのため挺身隊で工場に行っていた私と姉は休みました。妹だけは、母があれほど止めるのも聞かず、また私たちもいらぬ口をはさみ、「喜和子があんなに行きたがっているのだから行かせてやりんさい。」と言ったのが仇になろうとは... (妹は当時女学校一年生)。妹だけが小網町の建物疎開のあとかたづけに出かけて行ったのです。

朝御飯をすませ、父と叔父と屋根屋さん二人は屋根に上がり、私たちは家の中の物をみんな外に出していました。私が祖父から何やら用事をたのまれ、近所の米屋に行き、店の人に用件を言おうとした時です。凄じい閃光が広がりました。私はとっさに奥の米俵が沢山積み重ねてある所にしゃがみこみました。私の下に朝鮮のおばさんがしゃがんでいたのです、その背の上に私もしゃがんだのです。

それからどれだけ時間がたったのでしょうか。真っ暗な中からポーと明かりがさしてきました。この家はずい分大きな家でして、メチャクチャにこわれていましたが、私の体には何一つ落ちてはきませんでした。私は裏口があったことを思い出し、そこからどうにか這い出すことができました。埋もれた米屋のおばさんが、必死になっておじさんに助けを乞うておりました。私の下になっている朝鮮のおばさんをよく見ると、額から真赤な血が太く流れていました。私は無傷でした。ようやくにして明かりをたどり、外に出ることができたのです。

と... .. どうでしょう。外に出たら驚くほかないのです。広い道一ぱいに二重にも三重にも、グチャグチャに家が倒れていました。あちこちから子供を呼ぶ声、泣きわめく声、そして頭の先からつま先まで、真赤な血まみれの子、それでなければ煙突から抜け出したように真黒になった人たちばかり、私も全身真黒でした。ただ印象に残っているのは、私の足だけは白かったと思います。その足でピ

ョンピョン兔のようにはねて走って家に帰りました。家に帰ると、父が目の色を変えて私の名を呼んでおりました。

きちょうめんな父は、日頃から肌身離さず警防団の服を身の近くにおいておりました。その時、いつどうして着たのでしょうか、帽子までかぶっていました。それから姉が出て来て「母は先に逃げたから早く逃げよう。」と言って、祖父と父と私たち四人で己斐方面に向かって逃げたのです。逃げる途中、父は警防団の服を着ていたばかりに、あっちからもこっちからも助けを求められ、とうとうはぐれてしまいました。

空も地上も、灰色一色にぬりつぶされた世界、他に色があると言えば、全身血まみれの赤ばかり、お尻にポッカーリと穴があき、中の臓物の見えている女の人の、鼻のプランとたれ下がった人、さもなければ、全身焼けただれ、ジャガ芋の皮がむけてたれ下がっているようなボロボロの皮ふになり、顔も体も腫れるだけはれ上がり、誰の顔だかわからない人々。この生地獄を何と説明してよいやらわかりません。

父をのぞいて、母にも会えない私たち三人は、己斐橋から国民学校の方へあてもなく歩きました。空はすごく暗く、黒い雨が強く体をたたきつけました。道ばたには、市の中心部の方から逃がれて来た大ぜいの人々がいました。全身やけただれた人たちばかりです。中にも疎開あとの片づけをしていた中学一、二年の男の子や女の子の多いこと。もう歩く力もなく、出ず声もなく、軒といわず家の中といわず、ぎっしりと一寸のすきまもなくうずくまり、雨にたたかれようと、声をかけられようと感覚がないのか身動き一つしないのです。姉はいたたまれなくなって、軒からはみ出している中学生たちに、押入れやらタンスから衣類を出して着せてやりました。(家の中といっても屋根がふっとび外とかわりたく雨がふり、家の人たちはみな逃げて、押入れやタンスはこわれ、中のものはグチャグチャになっていた。)

妹はどうしたのだろう。可愛そうにこの中に居るのではなからうか。そしてこの子たちと同じような姿になっているのだろうか。いや妹にかぎりそんなことはないだろう。いいやこの中に居る。こんなことを思いつめながら、私たちは必死になって、みんなの顔を調べましたが、眼は焼けつぶれ、風船のような顔や体は、みた同じように見えました。

そのうちに父母に会うことが出来ました。母は妹が己斐国民学校に居ることを聞いて、父と母が学校へ探しに行きました。学校にはやけどの中学生が大勢いたそうです。その中の一人が、

「おばさん、水を一杯ちょうだい。」

と言ったそうです。母が何か水槽のようなものの中に水が一ぱいあったので、手ですくって与えたら、あちからもこちらからもかすれ声で、また声もよう出さず、手をノロノロとさしのべて、

「水をくれ」と言ったそうです。母はそこいらにころげていた洗面器のようなものに、水を一ぱいくんでは与えたそうです。水を飲んだ子供たちは安心したようにぐったり横になっていたそうです。そのうちに、妹らしい子を見つけたので名前を呼ぶと「そうだ」と言ったそうです。父母はどんな思いだったのでしょうか。私たち一家は、己斐国民学校からずっと登った小川のほとりのたきもの小屋を、仮りの宿としました。ガラスはこなごなに破れ、小屋一ぱいに飛び散り、かろうじて雨を防げる程度でした。

ずい分と時間が流れたと思います。どこで拾ったのか、父母が妹を戸板にのせて帰って来ました。私は急いで走って行き顔をのぞき込み、「きわこちゃん、わかる。」と大声で言いました。

「うん。」

と首を振ったので妹に間違いないとわかり、急に悲しさがこみあげ、小屋の隅でワアワア泣いてしまいました。それから藁を積み重ね、妹をねかせ、そのそばへずっとつききりでいました。ときどき「水を」と言うのですが、水を一べんに沢山飲ませると死ぬと思い、少しずつ口の中へ流してやりました。(今思うと、あの時言う通りに水を飲ませてやらなかったことが悔やまれてなりません。)祖父は背中と足に大火傷をしていました。母は頭、腕、首などに打撲傷を負い、みんなそれぞれ大けがをしていました。私と父だけが無傷でした。

だんだん周辺が暗くなり、夜になりました。市中の空が真赤に燃え、一晩中燃え続けていました。

真夜中に、急に妹が

「呼吸が苦しい。呼吸が苦しい。」

と言ったかと思うとグッタリとなり息をしなくなりました。私たちは大声で名を呼びました。みんなが大きな声で泣いて泣いて、その声は、夜のしじまを破り、谷間にこだまし、他の避難した人たちは、みな気の毒そうな目でこちらを見ていました。その中で母が一番苦しみ悲しんだことは、言葉に言い現すことはできません。

まんじりともしなかつたみんなは、あくる朝、妹をかかえて裏山の焼場まで行きました。帰りに学校の近くまで下ってみましたら、なんと、どうでしょう。家々の中や軒先に、昨日と同じようにぎっしりと詰まった大勢の人が一人残らず、みんな死んでいました。

十日ほど過ぎ、私たち一家は自分の家のあった焼跡へ帰りました。そこには焼けただけたタイル張りの風呂と台所が残っていました。そこへ父が木切れや焼トタンを拾って来て、なんとか座を張り、屋根をかき、どうにか住めるようにしました。(以下略)

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊

被爆当日、市西方の玄関口己斐地区は、多数の避難民と救援隊の出入りでゴッタ返した。

被爆当日、夕がたになって、非常用食糧の手配をしようとしたとき、郡部から炊出しされたムスビが、次から次へと運ばれてきた。西玄関としての取りつきに、己斐巡査派出所があったが全壊していたので、堅固建物で藁を敷かれた芸備銀行己斐支店(現在広島銀行と改称)へ搬入した。川本連合町内会長と和田町内会長が警官とともに、これを割当てして、地区内各町責任者を集めて配給した。

また、市中の被災地へも配給するため、川本連合会長が荷車をひいて運んだ。

市中の避難者が、地区内へ多数なだれこんだため、人口が急激に増加したので、配分が複雑化して二、三日間は大混乱に陥った。

応急救護所の設置

当日、炸裂の直後から避難者の行列が、続々と山地にある己斐国民学校へ流れるように押しかけて来た。敵機が絶えまなく来るので、皆、この山間部を目指して避難したのであった。かねてから、この学校を負傷者の収容所として定め、医師八人で応急処置ができるように防衛計画が立てられていたが、避難者のほとんどが負傷者であったから、校舎全部を解放して収容した。

軍医ら来援

この日正午前に、大竹陸軍病院から上方頼巳軍医以下衛生下士官二人、看護婦五人の医療救護隊が到着し、万を越える収容者の治療にあたった。市内の医師は被爆して死亡したり、負傷したりしたため、救援活動ができなかった。

死体の収容と火葬

六日当日から死亡する者が続出したので、その日から死体の収容をおこない、翌七日から火葬をはじめた。火葬は運動場に五〇メートルの釜を三筋掘って火葬場とし、毎日、火葬をおこなった。そのほか川土手や空地など数か所でもおこなわれたが、かねて遺体安置所に指定されていた善法寺(己斐西本町)へ運ぶよう段取りしたが、運搬者がなく、川本連合会長が一人で、遺骨を荷車にのせ、数回にわたって寺へ運んだ。夜になるとますます死亡者が増加して、寺への運搬もできなくなったので、やむなく学校に安置することにした。

火葬の薪には、校舎の天井板をはずしたが、これは焼夷弾が落ちたとき、天井にとどまって火災の発見が遅れてはいけないという理由で、かねて取除くことを指示されていたから、それをこの際にと、取除いて使用した。

死者の氏名

死体の人名確認は、死体の着衣についている名札によるほかなかった。不明者については、性別・推定年齢・遺品などを状袋に入れて遺骨のそばに置いた。ただし、火傷で死亡している者は、顔面が変形していて、年齢の推定もできないのがあった。また、避難者の収容でテンテコ舞いであったから、当日は氏名など聞いて受付けるだけの余裕がなかったのである。だから当初死亡した者で、着衣のない者は不明のまま処理した。やや混乱がおさまってから、氏名を聞いて名札を作り、患者の体につけるようにした。しかし、死期の迫っている患者などは、氏名を聞きとることも出来なかったのがほとんどであった。

己斐地区で扱った死体は、避難してきて死亡した者が約二、〇〇〇人と、応急救護所(己斐国民学校)で死亡した者が約一、〇〇〇人はあったと思われる。後日、学校の再開にあたり、運動場にサツマ芋畑を耕作することになり、教職員や児童が掘り返したところ、焼け残りの人骨や、頭髮、衣服の切れ端などが、多数地中から出て来て、その整理にも一仕事あった。

また、死体の焼却処分をおこなった川土手・空地(主として旭橋西詰の広場 - 某会社の鉄骨など露天集積場)などに広い面積の大きな穴を掘り、一度に数体をまとめて火葬した。各所とも手分けして、逐次火葬したが、後に警防団の援助があって、どうにか片づいた。火葬するときは、木を下に敷き、遺体をならべて油をかけ、火をつけた。そのとき各遺体ごとに名札を竹の先につけたのを立てて区別できるようにした。川土手や空地での火葬においても氏名不詳の者は、遺品と性別・推定年齢などを記したものを同様に立てた。

これらの遺体は、生前から皮膚がくさったような状態であったから、死亡後腐乱するのが早く、ズルズルすべって、手で丁重に処理できないため、担架にのせるときや、穴へ落すときなど、粗末な扱いになりがちであった。

遺骨は、学校の教室の机の上に、名札とか遺品を入れた状袋と一緒にして安置し、尋ねて来る人のため、識別しやすいように取りはかった。

町内会の機能

地区町内会の機能には支障がなく、被爆前と同様に、対策や処置をおこなうことができた。各町の復旧とか、避難者の救護、及び罹災証明書の発行などで、連日多忙をきわめた。

九、終戦後の荒廃と復興

出入り混雑

地区は罹災程度が比較的軽かったので、特に変わったことはなかったが、全焼地帯に電灯がついたのは約一か月後であった。

復興するのも他地区より早かった。西玄関として省線己斐駅・広島電鉄郊外線西広島駅、及び市内電車の終着点であったから、地方からの乗降客で混雑した。

闇市

これら駅付近の広場にできた露天の闇市場は、連日、利用者で活気を呈した。露天式闇市場は、この地区に出現したのが広島駅前よりも早く、市内で一番最初ではなかったかと言われる。利用者は市内からばかりでなく、郡部からもたくさん集った。

己斐の闇市場は、最初は闇タバコの立売りからはじまり、それが物々交換品(主として軍の放出品)の売買となって、市場的なものに発展移行した。すなわちまず闇市場の出現であり、これが自由市場と称されるようになり、これまで露天であったのが前進して、バラック建ての店舗となって常設化するに至った。

公設市場

常設化の先駆となったのは、昭和二十一年六月二十日、市が公設市場を建設したことによる。その場所は広島電鉄西広島駅の近くで、宮島線の線路東隣の国道沿い西側であった。七戸建二棟・六戸建一棟計三棟が、延長約七

〇メートルに及ぶ細長い鉄板葺平家建で奥行は五・五メートル、間口は五メートルと一〇メートルの二種類が、各棟に混合し、公設市場として発足した。

この計画について、市商工課の記録によれば「戦後経済の混乱期に、市民生活の安定策として、昭和二十一年六月生活必需品市場の目的で施設した。その後、経済状況の推移により、公設市場としての機能を失い、一般店舗住宅と性格を一にした。」とある。

商店街

この公設市場が開設されると、この施設を中心にして、道路の両側に、不法建築の店舗が五〇戸以上も建ち、一躍商店街が生まれた。まもなく映画館・劇場も建築され、にぎやかさが更に加わり、西玄關の役割をもつ繁華街として脚光を浴びるようになった。こうして、広島駅前・横川駅前とともに、急造繁華街が、初期復興の先駆者となったのである。

十、その他

(イ)己斐町は、観賞用盆栽・庭木および植林用苗木の特産地であるが、終戦後、若干の落ちつきを取戻したころから、これらの需用が次第に増加し、戦前よりも活気を呈するようになった。当初は特に生花類が主であったが、これを仕入れた業者は、列車内へ持ち込んで帰る者が多かった。省線己斐駅では、これがため乗降客の混雑が増すばかりなので、花類取扱い業者専用の改札日を特別に設置した。この改札口は、下り線ホーム北側のところに近接している花市場へ直接通じていた。この改札は、良心的に花市場の責任者が当たったが、時宜を得た処置であった。己斐駅が、まだバラック時代の期間であったが、市民の復興意欲を大いに力づけた。

(ロ)被爆後、省線が復旧したと言っても、列車運行が円滑に行なわれず、特に貨物列車は数日間停車したままで、己斐駅構内に滞留していることが多かった。しかも、この貨物列車は、己斐駅構内の北東にある踏切りを遮断して通行ができないままであった。それがため、列車に積みこんである貨物を、夜間に抜取る事件が続出した。当時はまだ防止対策すらできないほど治安が乱れ、市民も不安な状態にさらされたままであった。

そうしたすきに暴力団がはびこるようになり、抜取り事件は絶えることなく増加するばかりであった。ついに、鉄道・警察・民間で防止対策を取ることに、「交通親和会」を設立した。それ以来、三者合同で取締まったかいあって根絶することができ、治安も回復した。

(ハ)昭和二十年七月二日、呉市が焼夷弾による大空襲を受けたが、呉市罹災者のために、にぎりめしの炊出しをするよう己斐連合町内会に当局から命令があった。第一回に米一八〇リットル(一石)、第二回に米三六〇リットル(二石)の割当てを受け、七月三日には、己斐巡査派出所の警官とともに己斐国民学校へにぎりめしを集めて呉市に送った。

供出した各町内訳は、東本町一八〇、中本町一八〇、西本町二三〇、中町七三一、上町三六〇、計一、六八一個で、この炊出し作業は、銃後奉公会・婦人団体の奉仕によっておこなわれた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

草津本町、草津南町、草津東町、庚午南町一丁目 二丁目、庚午町、庚午中町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、
庚午北町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、草津東町[くさつひがしまち]・同本町[ほんまち]・同南町[みなみまち]・同浜町[はままち]・庚午本町[こうごほんまち]・同北町[きたまち]とし、爆心地からの至近距離は庚午北町の己斐川畔(現在・太田川放水路堤防)で約二・五キロメートル、もっとも遠い地点は草津南町の隣町井ノ口に接する観光道路付近で約四・六キロメートルである。

草津町は、昭和四年広島市に編入されてから、市の産業面において、海産物の重要な集荷場として発展し、現在、民営の「広島中央魚市場」がある。

カキは特産で、牡蠣養殖は歴史的にも古く、「延宝年中(一六七五前後)、小林五郎八のたまたま発見した筏立養殖法に始るといわれる。」また、「直接大阪と取引関係を開き、宝永以降(一七〇五ごろ)、大阪の川筋に牡蠣船を出すことを大阪町奉行から特許されて広島牡蠣の名声を高くしていった(新修広島市史)。」という。

地勢的には、やはり藩政時代からの新開によって拡張されたところで、明治三年(一八七〇)に佐伯郡己斐・古江・草津の沖合の干潟に、全国的な凶作による窮民の救恤のため、富商有志が協力して、新田開拓の事業を起して造成された。明治三年の干支によって庚午新開と呼んだのが、「庚午町」の発祥由来であるが、ここは現在、市のベット・タウン的な住宅地区として開けている。

なお、草津沖は、さらに埋立てて拡張されることになり、現在、広島市西部開発事務所が設置されているが、近き将来、大きな飛躍が期待されると共に、むかしからの町の性格も変貌しつつある。

被爆直前の総建物数は約一、六五三戸、世帯数は一、六九五世帯、人口七、三三五人で、各町別の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
草津東町	326	335	1,535	柳坪東一
草津本町	281	297	1,134	吉本文右衛門
草津南町	345	379	1,577	万谷孫八
草津浜町	340	325	1,495	橋本唯士
庚午本町	182	134	733	安光歳丸
庚午北町	179	225	861	栗栖百太郎

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
草津国民学校	草津東町二五六の二	慈光寺	草津東町
草津保育園	草津東町	芸備銀行支店	草津浜町
魚市場	草津南町	広島信用組合支店	草津東町
豊野神社	庚午北町十丁目	倉本酒造	草津本町
教専寺	草津本町六八九	小泉酒造	草津東町
浄教寺	草津本町六八〇	望月醤油	草津浜町
西楽寺	草津本町五六八ノ一		

二、疎開状況

地区は、中心部から離れた臨海地帯であるし、漁業など海産物関係従事者は、仕事の性質上、地元を離れるわけにできなかったから、人員疎開も物資疎開も、きわめて僅かの人が郊外の縁故をたどって、個々に疎開しただけであった。

しかし、学童疎開は他の学校と同じように実施し、草津国民学校は、昭和二十年七月世羅郡小国村・上山村・吉川村の寺院などへ集団疎開した。一部には個人的な縁故疎開をおこなった学童もいるが、集団・縁故を合計して約四〇〇人余が郡部へ疎開した。残留学童は、地区内の寺や会館に分散して勉学した。

三、防衛態勢

警防団

草津・庚午地区警防団を組織し、川本豊人団長のもとに臨戦態勢をととのえた。諸資材を充実し、訓練演習がきびしく実施された。

戦争末期は一段と演習が強化され、町内会・婦人会・青年団が加わって、総合的な拳町一致の訓練がおこなわれた。

国民義勇隊

昭和二十年六月、警防団以外の諸団体が発展的解散をし、全国的に国民義勇隊が組織されたとき、この地区でも国民義勇隊草津大隊を結成し、大隊長に小川早苗(連合町内会長)、中隊長に各町内会長が就任した。

この新組織によって、各隣組は結束し、防衛・防空・防火態勢を整備、ここに本土決戦態勢を確立した。後、隣接地区の田方町内会が編入された。

四、避難経路及び避難先

市の周辺地区で、危険性は少ないと思われてはいたが、避難場所や経路を、町内会ごとにあらかじめ田方地区が草津南町方面の山林地帯に、避難するように定めていた。家によっては、郡部の親戚や縁故と連絡をとって、万一の場合の避難先に備えていた者もある。

五、所在した陸軍部隊集団

(一) 砲部隊(兵科不明)

草津東町 草津国民学校内に駐屯

隊員一〇〇余人

(二) 高射砲隊幹部候補生教育隊(隊長・長島千訓大尉)

草津海蔵寺の山に設営

(庚午地区内にあったが、昭和十七年の水害後移動した。)

六、五日夜から炸裂まで

空襲・警戒警報については、各機関に依存することよりも、ラジオ、または爆音の直接聴取で、町内会長が判断をし、警報を発令することが多くなった。

こうした状況下で五日夜から、空襲警報発令があり、引きつづき警戒警報発令もあり、それぞれ待機、灯火管制の徹底をはかっていた。

また、各自の家庭用防空壕か、山地部に掘られた防空壕へ待避したりした。中には古田町田方の山地部へ待避した家庭もあった。

午前七時半ごろ、警戒警報が解除され、家に残っていた者も、避難していた者も一様に平常に復帰し、朝の仕事準備にかかろうとしていた。市中への通勤者は、もう出て行ったあとであった。

草津国民学校の分散授業場になっていた地区内の寺院・神社・会館などには、それぞれ学童が数十人集合していた。そして朝の早い農家は、すでに畑仕事に精を出していた。

建物疎開作業

この朝、草津南町から、小網町へ建物疎開作業隊一五六人が出動した。これは、広島市国民義勇隊草津大隊に対し、延べ八〇〇人出動の指令があり、庚午北町が四日、草津東町が五日に出動し、続いて六日に草津南町が出動したものであった。

なお、この地区内における建物疎開は、おこなわれなかった。

七、被爆の惨状

炸裂

八時を過ぎたころ、ある人は敵機か友軍機がよく判らないまま爆音を聞いた。

一瞬、家の隅々まで奇怪な光線が閃いた。同時に、家全体が震動し、ガラスは飛散、戸障子などは吹き飛ばされていた。

道路にいた人は、もの凄い爆風を受け、あわてて路面に伏せたり、防空壕にとび込んだりした。

火の玉

地区の東部の体験者によれば、炸裂のとき、これまでの経験にはなかった異色の、火の玉のようなものが数個、線を曳くようにして眼前を過ぎ去ったという。そして、すさまじい炸裂音を聞いた直後、爆風が襲来し、引きつづ

き二度目の音がきこえ、爆風が再び襲って来た。

草津本町では、東の空を見た人が、大きな真っ赤な火の玉のような雲を目撃した。また畑仕事をしていた人々は、熱線を感じ、火傷をした者もあった。

町内騒然

町内は騒然となった。家から飛び出したほとんどの者が、ガラスの破片で傷を受けており、薄衣に鮮血をにじませ顔面に血を流したりしていた。

家屋の天井は吹きあげられ、屋根瓦は吹き飛ばされ、塀は倒れた。柱と梁との取り付け箇所(ホソ)が離れて倒壊寸前になっている家もあって、爆風が上から覆いかぶさるようにして来たのと、路面から逆に吹きあげたように来たのとあったという。

多くの家々で、ガラス戸の破片が二メートルから四メートル離れたカモイや柱の上方部に深く突き刺さっていたりした。

健難民の殺到

炸裂後三〇分ほどすると、海岸線に沿ってずっと南の、名勝宮島口へ通ずる広い観光道路の上に、罹災した群衆が道路いっぱい溢れるように避難して来た。トボトボと歩いて来る者、トラックで急がしく運ばれる者など、佐伯郡方面へ向って流れ続いた。

髪は焼け、皮膚はむげて無気味に垂れ下がり、全身がただれて赤く腫れあがった半裸・全裸の人々が終日ひっきりなしに通った。

しかし、みんな悲惨な姿、苦悶の相をしながら、それは気味悪いぐらいもの静かな、死の行進であった。

不安高まる

一方、町内の住民の一部では、しばらくのあいだ、山林地帯へ避難した者もあったが、ほとんどが動かず「どうなることか、つぎに何が発生するのか。」と、不安のままじっとしていた。

しかし、市中から逃げ帰って来た人の情報が伝わって、縁故者の安否がまた気にかかって来るのであった。

避難者に状況をきけば、「燃えている。入れない。」との一言のみで、それ以外は語る気力も失っていた。

それでも、市中へたくさん町民が親類知己を探しに出かけていった。探しに出かけるには出かけたが、大半はただ事態の推移に任すほかになく、どうするすべもなかった。

郊外へ通ずる道路という道路は、ついに避難者でうずまった。午後になると更に激しく、旧国道をトラックが、負傷者を満載して、幾台も幾台も西方へ運ばれて行った。その中を逆に東の方へむかって自転車を飛ばす者などが入りまじって、異様な興奮状態が地区一帯に高まっていった。

救護活動

警防団員や町内会役員は、交替で観光道路筋の要所要所に出て、罹災証明書を交付したり、避難者の誘導をおこなって、救護活動を続けた。

己斐川下流(山手川・福島川合流の川筋)には、数々の死体が漂着してくるのが見られたが、夕刻・死体の流れ浮く川を泳ぎわたって帰って来た人々が、草津の町内に詳しい様子を知らせ、一段と恐怖心をそそった。

被害状況

地区は炸裂地点から三キロメートル以上も離れていたが、家屋の被害は全域に及び、草津町でさえ、爆風の被害によって危険な状態になった家屋があった。もっとも炸裂地点に近寄っている庚午本町・同北町などは、草津町にくらべて被害がより大きく、全壊家屋があり、ほとんどの家屋が半壊程度の損害を蒙った。

人的被害も、庚午本町で〇・三%の則死者を出し、負傷者も草津町より多かった。火災の発生は、庚午北町三丁目と同六丁目において、それぞれ一戸が全焼したに過ぎなかったのは幸いであった。

しかし、野積みにしてあったワラとか、下刈した木の束、屋内に吊ってあった蚊帳などに着火したが、すぐ消しとめたため、大事に至らなかったのである。

犠牲者の内訳

草津南町町内会の一般住民と、地区内に居住している学徒・徴用工員など、動員令で中心部の建物疎開作業に出動していた人々、および通勤者・通学生がともどもに、市中で被爆したため地区としての犠牲者数は大きかった。

国民義勇隊草津大隊が、八月十四日正午までの死傷者数を調査した記録によれば、町内居住者死傷者数は総計七九一人、また八月六日炸裂時一時滞在者の死傷者数は総計六四四人、総合計一、四三五人に及んでいる。この内訳

は、次のとおりである。

町名	町内居住者死傷者数(人)					八月六日炸裂時一時滞在死傷者数(人)					総計
	死亡者	重傷者	軽傷者	行方不明	計	死亡者	重傷者	軽傷者	行方不明	計	
草津浜	26	32	41	16	115	14	27	41	-	82	197
草津南	157	30	50	48	285	13	25	45	-	83	368
草津本	16	16	23	14	69	16	38	190	-	244	313
草津東	44	39	24	34	141	14	40	46	-	100	241
庚午・庚午北町一円	20	29	114	18	181	29	36	49	21	135	316
合計	263	146	252	130	791	86	166	371	21	644	1,435
備考	(イ)死亡者とは八月十四日正午までに死亡した人と即死者を含めた総称である。 (ロ)町内居住者とは町内で世帯を構成、生計を維持していた者(八月五日現在)。 (ハ)一時滞滞在者死傷者数とは八月五日までに、親戚・知人を訪れて宿泊し、八月六日に炸裂時まで要務のため市中へ出て死亡、または負傷した者。										

この調査の範囲は、草津連合町内会の区域内の居住者とか一時滞滞在者が、建物疎開作業に出動するか、または通勤・通学生および用務のために市中に出ていて原子爆弾に遭遇し、即死とか重軽傷を負った人のみを調査したものである。

すなわち、常住人口の一〇・八パーセントの町内居住者が死亡または負傷し、一時滞滞在者も常住人口の八・八パーセントに相当する死傷者があったことを知ることができる。

この調査後も、つぎつぎ死亡者が出た。原爆症と言われる病気によって、現在でも犠牲者が出ているが、当時、縁故者の死体捜索などで市中へ出たために、第二次放射能によって原爆症にかかり、死亡する者も少なくなかった。昭和二十年十二月、合同慰霊祭を執行したとき、草津・庚午地区内の町民だけで、約七〇〇体の霊があったが、調査後にいかに死亡者が相ついただかがわかる。

このほか、被爆以後、原因不明の病気にかかり、一進一退の異状を訴えつづけている者も多いが、被災中心部でない地区においても、このように大きな災害を蒙ったのである。

最初の火災

古田町古江～田方間を通ずる道路上から、市中を望見した人によれば、炸裂後五分ぐらい経ったころ、大手町四丁目か五丁目あたりで、まっ黒い煙ようの中に、へびの舌のような赤い炎が立っているのが見られた。その場所が最初の火災発生地点のようで、その後数分経過してから、各所に火炎があがったという。

降雨

炸裂後の降雨については、草津方面では、バラバラッと降ったという人もあるし、降らなかったという人もある。

庚午本町以東では、炸裂後約一時間を経過してから、雨がバラつき、雨滴の黒いのに気がついた。敵機が油類を散布したのかと思うまもなく、約二、三〇分間、黒い雨が降り出して、溝川には黒い水が流れていた。

爆風

畑をたがやしていた人、路上に立っていた牛が、爆風で、瞬間的に約二メートル先へ吹きとばされていた。地上に置いてあった長さ一メートルぐらいの丸太棒が約一〇数メートルも吹きとばされていた。また、屋内(庚午北町七丁目)にいた者が、突然吹き転がされたりした。

六日夜

六日の夜は、暗く不安な夜であった。昂った空気と、不安にかられた空気の入りまじった何ともいえぬ無気味なものがみなぎっていた。

混乱きわむ

草津では、市中へ肉親を捜索に出た者が、そのまま帰って来ないので、また、それを捜しに出た。その二度目の捜索に出た者が、またまた帰って来ないので、不安はつもの一方という人、その隣りは、待っていた家族が、やっと帰って来たが、声を出さなかったら見分けがつかないほどの負傷をしていて、その看護につとめている人など、どの家々も尋常一様のありさまでなかった。

このような混乱の渦中ではあったが市中から避難者が、ここへやっとのことで辿りつくと、縁故知人を問わず、何人でも家に立ち寄れば看護にあたり、にぎり飯を出したりした。

庚午では、いつどんな大事態が再発するかわからないので、屋内で寝るのが不安なため、ほとんどの人が屋外で仮眠をとることにしたが、町の混乱状態を、さらに煽るように、さまざまな流言飛語が伝わって来て、仮眠も妨げ

られるばかりであった。

八、被爆後の混乱と応急処置

この地区は全壊全焼しなかったが、地区内に殺到した避難者の救急作業に、全町挙げて活動した。

一方、市中へ出勤していた者、建物疎開作業に出動していた者、あるいは学徒などの、身の上を案じた家族が、つぎつぎ探しに出て行くようなことも、その日だけで終らず、被災後一週間も一〇日も続いた。灰燼に帰した市中のここかしこ、また死体の転んでいる河原や、負傷者が送られたときく郡部や島々へも、毎日のように、名を呼びつつ探し歩いた。

応急救護所の活動

こうした状況のなかで、地区の国民義勇隊や警防団海上班の救護活動は、特にめざましかった。

六日、炸裂後まもなく救護活動が開始され、草津国民学校に応急救護所を設置、医師でもある佐藤救護隊長をはじめ、隊員がただちに馳せつけた。

加えて、陸軍の長島隊の応援と、岩国燃料支廠の軍医も来援して、積極的な救護活動が展開されたのであった。

火傷・裂傷・打撲・出血・骨折などの負傷者がなだれのように押し寄せ、息つくひまもなかった。

草津地区国民義勇隊日誌によれば、応急救護所で取扱った人数は、六日の治療者数約二、〇〇〇人、収容患者数五四五人、七日の治療者数一、五〇〇人、収容患者数五二二人と記録されている。

このほか、地区内のほとんどの家に罹災者が泊っており、その人数を加えれば実に莫大なものとなるであろう。

大野町のチヤス牧場から牛乳を、地元のかまぼこ組合から代用食・食用油などの寄贈があったほか、国民義勇隊婦人部が炊出しを行ない、救護の万全を期した。

古田国民学校救護所から県立広島病院治療班が、草津の救護所へ急遽来援して、ずっと作業にあたっていたが、十月になって、県立広島病院が草津に移転して来たので、はじめて救護作業を病院に任せることになった。

道路清掃

このほか、草津町海蔵寺の山に駐屯していた陸軍の長島隊(高射砲隊)が来援し、避難者の流入のためと、爆風によって散乱した破損物で、不潔になっていた道路の清掃作業をおこなった。

死体の収容と火葬

負傷者は、収容当日から、次々と死亡しはじめ、その中で引取人のない遺体を学校の体操用具倉庫へ安置した。

火葬をするために、校庭にある防空壕を利用したり、または穴を掘って、地元寺院浄土宗西楽寺住職嶋良雄師の読経のもとに、義勇隊・警防団・学校側とが協力して、死体を荼毘にふした。

遺骨は、紙袋に納め、番号をつけ、氏名を記入して、国民学校作法室に安置した。

身元不明者の遺骨は、男女別・推定年齢・特徴などを記録し、それぞれに番号をつけて安置した。このうち引取人のなかった遺骨は、のちに市当局へ引渡した。

九月末日まで死体焼却をおこなったが、草津地区以外の人だけでも、処理数は約二〇〇体以上に及んだといわれる。だがもっと多数であったかも知れない。

収容者以外では、己斐川の河口に近い岸に漂着した中学二年生くらいの身元不明の死体を、八月十一日ごろ、堤防において火葬し、その遺骨を、庚午本町安光家の墓に納骨した。

火葬場所	期間	現在ある目標物	備考
草津東町二五六五 草津国民学校	自八月七日 至九月末日	草津国民学校プールわきの柳の木のある所	
庚午北町十二丁目	自八月八日 至八月十日ごろ	埋立地となっている所	古田町・古江町町内会が使用した
庚午北町五丁目	自八月八日 至八月十日	児童公園内	庚午本町・庚午北町・高須町の各町内会

慰霊碑

なお、庚午北町・高須町町内会の人々によって、庚午北町五丁目の児童公園内に慰霊碑を建て、両町内会区域内で死亡した引取人のない死者の霊をとむらった。

町葬と合同慰霊祭

庚午本町町内会では、九月二十三日、町主催によって、草津町内三か寺の導師の読経により四五柱の霊を慰める町葬をおこなった。

また十二月ごろ、草津・庚午地区町民犠牲者約七〇〇体の合同慰霊祭を教専寺において盛大に執行した。後日警

防団の慰霊祭もおこなわれた。

町内会の機能

幸い地区内は被害軽微で、町内会の機能には支障なかった。町籍簿の整備、食糧配給所との連絡も密接にとれて、救護対策を次々と実施していった。

町籍簿

八月二十日ごろ、市当局から町籍簿を整理するようにと、被爆後はじめて連絡があったが、新規に作る必要はなかった。

九、被爆後の生活状況

人口激増

草津・庚午の各町の家庭には、被災地から、親類知己、その他縁故者などが避難して来ていて、人口が被爆直前にくらべると約二倍にも増加した。

食糧その他生活必需品が極度に窮乏しているとき、家族だけ生きていくのにも精一杯のなかで、必ずしも感情的なトラブルがなかったとは言えないが、それぞれが堪え得るだけ堪えながら、混迷の日々を送った。

なお、八月末ごろの居住世帯数は、次のとおりである。

町名	世帯概数	町名	世帯概数
草津東町	390	庚午本町町内会 (庚午本町一～二丁目、庚午北町一〇 ～一丁目、庚午南町一～二丁目)	240
草津本町	330		
草津南町	470	庚午北町町内会 (庚午北町一～九丁目)	270
草津浜町	420		

衛生環境の悪化

生活環境は、ますます悪条件を積みかさねたが、同時に、衛生環境もひどく悪化した。

ハエやノミが驚くほどたくさん発生して、追えども追えどもからだに一日中取りついてた。シラミも多く、ほとんどの人にわいていた。

町内会は、駆除薬品が入手できず、何らほどこすすべもなく、発生にまかせるというありさまであった。

また、腹中に寄生虫がはびこり、口から飛び出すほどで、駆虫剤一服の服用で四、五〇匹の回虫が、ウドン玉のような形になって排出したという人もあったし、当時「かいかい(痒い痒い)」と呼ばれた皮膚病が蔓延して、痛痒を訴える人が多くいた。

そして、病床で呻吟している罹災者の傷口とか、腐敗した死体に、ウジが無数に発生して、流れ出る膿や、ただれた腐肉を低めまわしていたが、消毒する手だてもおよばなかった。

こんな状況下の日々がしばらく続いた。食物も食品衛生になかったものを食べるような余地などなく、食べられるものはなんでも口に入れて、だれもかれも、ただ飢餓から脱出しようとはばかり考えていた。

救急品の配給

炊出し、救急品の配給は、地元民にはなく、応急救護所に収容されている患者だけにおこなわれた。

地元へは食糧、その他の配給品も少なく、ほとんど闇買いで入手するか、物物交換をするはかなかった。

ある時は、草津の望月醤油会社の倉庫に砂糖(軍用分)が山と積みこんであったが、終戦になって倉庫を誰かがあけ放したので、いちじ取り放題という状態であった。中には、馬車を曳いて来て取って行った者もあった。

イモだんご

草津授産場で製造する黒い「イモだんご」は、イモの粉(芋のアルコール醗酵粕)とヌカが主材料で、雑草材料のパフン紙のような「江波だんご」よりも、少しは食べやすく人気があった。

これを入手しようとする人々が、市内の各方面から集って来て、長時間、長い長い列が店先に続いた。みんなすき腹をかかえて、自分の順が来るまで、炎天下、黙々と辛棒強く待った。

飢餓生活に彷徨する罹災者は、みな栄養失調独特の、蒼白くツヤの抜けた顔色をし、その日その日を辛うじて生きていた。このような状態であったから、草津・庚午の農家の多くは、畑の農作物をしばしば盗んでいかれたが、それを防ぎ切ることはできなかった。

野菜の配給

八月十日ごろから、広島西部地区の野菜類を、庚午本町町内会事務所前の広場に集荷した。警察の了解を得て、公定価格より四キログラムにつき十銭高くして、古田町以西の罹災者に配給した。この配給開始によって、畑の盗

難が少なくなり、罹災者にもよろこばれた。

消費組合結成

また、生活危機打開策として、庚午本町町内会全員が、十月、消費組合を結成した。一世帯につき二〇円ずつの出資で、食糧その他の生活必需品を共同購入し、多くの便宜をはかった。

電灯つく

電灯についても、小川連合町内会長の折衝によって、廿日市町から送電されることになり、八月十日には、もう明るい灯がつけられたが、その後電力不足から時間制送電で停電が続き、ロウソク生活が長く続いた。

疎開学童の復帰

九月二十三日、世羅郡に疎開していた学童が、全員そろって無事に集団疎開先から帰って来た。学童は三か月ぶりに親のもとに帰って来たわけであるが、焼けていない家、道路もそのままだし、夜は明るい灯のもとに坐って、戦災からまぬがれた幸福を小さい胸にしみじみとあじわった。

僅かの人々であったが、郡部に疎開していた人もポツリポツリと復帰しはじめ、町は徐々に常態を取りもどしはじめた。

闇市場

闇市場が市中のあちこちに発生し、軍靴・軍服・軍用毛布など...毛布は戦争中に、民間から供出したものもたくさんまじっていたが、飛ぶように売買された。闇市場は日ごとに活況を呈したが、軍放出の毛布などは特に、応急救護所の患者には、最高の必需品として、貴重に取扱われた。中には毛布を冬服に仕立てて着る人もあったが、それを笑う人はなく、むしろ羨望されるというありさまであった。

この地区内には、闇市場がなかったが、個々の物々交換は盛んで、郡部の親類や知人などをたよって足繁く往来する人が多かった。

地区からもっとも近い己斐駅前の闇市場は、そうした人々にとって、すこぶる貴重な存在であった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨で、庚午地区の修復中の家が、約一〇戸倒壊した。

北から雨に降りつけられて、損壊家屋は、すべて雨漏りが激しく、屋外にいるのと変らなかった。

生産の再開

しかし、被災軽微で、戦前どおり水産物集散施設があり、加工業施設も残り、一方、田畑も安泰で、稼働人口も確保できた草津地区の立直りは早く、目ざましいほどの活気であった。

カマボコ・ハンペンなどの製造は、生産がまにあわないほどの忙しさで、その形さえしていれば、投げたおいても売り捌けた。

統制経済下の魚貝類も、需要と供給のひどいアンバランスから、闇屋の言い値でたちまち売り切れた。またバケツで隠しながら横流しされる魚貝類も相当な量にのぼった。

米の絶対量の不足は戦争中からであったが、被爆直後の悲惨さなか、甘藷は貴重な主食品で、どんな零細農家でも闇売りするのに忙しかった。

これらは単に草津地区に限った現象ではなかった。被災地区周辺の、いわゆる近郊農漁業従事者は同じ状態であって、統制経済が保てなくなった社会的要求による必然の現象であったが、特に水産物製品は空前の売行きを示し、現金収入源として大きくクローズ・アップされた。関係従業員も、これが直接的な利潤追求の魅力に取りつかれ、つぎつぎと自営業者に転ずる者が続出した。

また、鮮魚関係でも、同様の傾向をたどって、広島駅前地区や宇品地区などをはじめ、ほとんど全市にわたって、バラック建店舗を急造し、どんどん進出していった。

家屋修復

一方、爆風によって損傷した家屋は、物資統制がなおきびしく、修理資材を容易に入手することができなかった。修理費は多額を要し、資材も僅少であったから、ほとんど一時的な補修にとどまり、本格的な家屋修理は、相当の年月が経って、おもむろに行なわれた。

家屋の補修材として、草津の荒手(現在・中央魚市場)から井ノ口の停留所付近までの海岸に、船で運んで来てあった軍用木材(丸太・角材)や、電車道の下側の原っぱに積んであった材木が、つぎつぎに盗まれていたが、占領軍

が来てしばらくして、材木の搬出を止められたということもあった。

十一、その他

婦女子の避難指示

八月七日ごろ、老人・婦人・子供は安全地区に避難せよとの、出所不明の指令があり、その状況を調査報告することになって、町内会が調査したとき、町民の恐怖をさらにあふるような結果となって、たいへん動揺を招来し、収拾に困ったことがある。

また、月日不明であるが、進駐軍が宇品港上陸前のことである。警察から、若い婦女子は進駐軍が行かない安全地区に避難すること、路傍にて小便しないこと、婦女子は胸部を露出しないことなどを、全町内会常会において普及徹底をはかるようにとの指示書が届いた。その指示書は、用済み後焼却するようにと注意してあった。この指示書に基づいて、庚午本町町内会常会では、急いで避難させないこと、状況に応じて町内会長が、そのつど指示することなど決定した。これによってある二戸は家屋を売却して故郷に引きあげて

ゆき、またある家では、娘を佐伯郡の奥地に避難させたという実例がある。しかし、ほとんどの人々は被爆体験以上に残酷なものはないことを知っていて、もはや、動揺することはなかった。

治安対策

被爆・敗戦による精神的な打撃も、実に大きかった。世相は混迷の状態で暗中模索、道徳は日々破壊されていった。町内の人間関係もはかばかしくなくなり、融和をはかることも困難であった。昭和二十一年三月、防犯灯の設置と、高さ六メートルのやぐらを組んだ見張り台を四か所に設け、夜間だけ交替で不寝番をつとめ、犯罪の頻発に対処した。十月に入り、自警団を壮年層ばかりで組織し、われわれの事は自らの手で守る運動を推進した。

一方では、青年会を組織し、青少年の不良化防止に努力したが、町内会の解散を命ぜられ、廃止されてからはますます治安が乱れていった。

社会的連帯感・責任感は、急激に薄れていき、自己中心主義の目的のために手段を選ばないような悪徳が、無政府・無警察状態ともいえる原子爆弾の焦土に日ごとにはびこって、この風潮がこの地区にも激しく流入していたのである。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

高須町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、古江東町、古江西町、古江新町、古江上町一丁目 二丁目、田方町一丁目 二丁目 三丁目、山田町

町内会別要目

この地区の範囲は、高須町内会[たかすちょうないかい]・古江町内会[ふるえちょうないかい]・田方組町内会[たがたくみちょうないかい](字山田[あざやまだ]を含む)とし、爆心地からの至近距離は、現在の新旭橋に通ずる観光道路付近で約二・六キロメートル、もっとも遠い地点は、西北の山林地帯、佐伯郡に接する付近で約六・二キロメートルである。

古田地区は、市の西方山林地帯に沿って一街衢を形成し、北は己斐、西は草津・庚午地区に接している。地区のほとんどが山林で占められ、国鉄山陽本線沿いの僅かな平坦地が、住宅地となっている。市のベット・タウン的な性格を持っていて、瀟洒な高級住宅がならんでいる。

地形的に、山林地帯から海岸へむけて大半が東南に傾斜していて、前面に何の障害もないので、原子爆弾の閃光を直接に受け、被害も近隣地区より比較的に大きかったが、農業生産には格好の地形であって、山ふもと一帯は、特に果樹の栽培が盛んである。果樹の種類は幾つもあるが、古江のイチジクと云えば、広島っ子なら誰れでもなつかしく忘れがたい季節の賜ものである。

また、高須を中心とする水蜜桃栽培も、古田全域・井ノ口町・己斐地域にも及び、たいへん盛んであった。

炸裂による家屋の倒壊とか、火災の発生はまぬがれたが、大部分の家屋が大なり小なりの、部分的損傷を受けた。

なお、当時の、地区内建物総戸数は八三一戸、世帯数九九五世帯、人口四、〇五五人で、各町内会別の内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
高須町	264	320	1,343	幸田末一
古江町	397	425	1,812	田川静夫
田方組町(字山田を含む)	170	250	900	力田周一

学校および主要建物

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

名称	所在地	名称	所在地
広島市立古田国民学校	古田町字古江	西警察署古田巡查駐在所	古田町高須
古江会館	古田町字古江	大歳神社	古田町高須
古江説教場	古田町字古江	八幡神社	古田町田方
古江新宮神社	古田町字古江	海蔵寺	古田町田方
永田病院	古田町字古江	高須郵便局	古田町高須
広島興産株式会社	古田町字高須	福蔵寺	古田町古江
高須会館	古田町字高須	力田療養院	古田町田方
前田別荘	古田町字高須		

二、疎開状況

人員疎開

市役所から、人員疎開を実施するよう通達があり、町内会が再三再四町内の人に呼びかけたが、実行する者がほとんどいなかった。むしろ市中から、古田地区へ逆に疎開して来るほどであった。山林園地帯であり、市の中心を外れているという立地条件の安心感があつたことはいなめない。

物資疎開

物資疎開についても同じようであって、地区外から公民館や大きな防空壕へ、軍需工場などからの疎開物資がたくさん搬入されていたほどである。

学童疎開

学童の疎開もまた、国民学校が山の中腹に建ててあるため、その必要性を感じず、万一の場合に備えて、大きな防空壕を設けていただけであった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年四月、田方・古江・高須のそれぞれが、警防団を結成した。

警防団は、防空監視所を設置し、消防自動車・水管車・手押ポンプを置いた。その他、警報の受領・伝達などをおこなった。

防衛班

また、町内会は、隣組単位の防衛誓編成した。各隣保班ごとに七石五斗(一・三五立方メートル)以上の水槽を設置し、消火用バケツ・梯・ロープ・鋸・鳶口・斧などを常備した。なお、各家ごとにも一石(〇・一八立方メートル)以上の水槽と防火用器具を設置した。

隣保班

隣保班は、警防団長・町内会長の指揮のもとに、日程を定めて訓練をおこなった。

さらに、各隣保班、また各家にそれぞれ防空壕を設置したし、永田病院・古田国民学校を一般救護所にあてて、万全を期した。

国民義勇隊

昭和二十年六月、町内会・隣組を基盤として国民義勇隊を編成することとなり、古田学区内町内会を統合し、各町内会長が中隊長の任につき、地区大隊を編成発足した。しかし、何ら武器を持たない形骸だけの義勇隊であったから、隊員一同、何となく物足らなさを感じていた。

高須町内会は、防衛上、道路が狭少なので、焼夷弾攻撃に備えて、その拡幅が必須条件となり、昭和十九年の末から市当局と交渉中のところ、二十年七月になって交渉がまとまった。従って道路拡張とこれにともなう家屋の立退きを実施する運びとなっていたのだが、原子爆弾のため実現しなかった。

四、避難経路及び避難先

地区は、町の背景が山地となっているので、山腹の適当な場所を選んで横穴を掘り、防空壕をつくった。この防空壕へ、一組あるいは二、三組単位の隣組が避難場所として決めていた。

山地は、道路の幅員が一、二メートルなので、避難時の混雑に支障がないように、それぞれ避難経路をきめていた。

このほか、古江町内会では、古江会館・新宮神社および説教場を、一般避難所として当てていた。

高須町内会は、一般避難所として高須会館・大歳神社・大歳神社裏の大防空壕をあてていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍部隊倉庫および防空壕	古田町甲の久保
陸軍部隊防空壕	古田町鳥越
第二総軍関係宿舎	古田町大字高須 前田別荘

六、五日夜から炸裂まで

警報連続

連日連夜の警戒・空襲警報の発令で、いささか慣性化していたのか、六日朝の原子爆弾炸裂まで、特別に注意を払うということはなかった。

六日早朝も、警報が発令されると、警防団長および町内会長の指揮のもと、ただ決められたとおりに、誘導されるまま所定の場所に、おのおのが、その処置をとったままであった。

警戒警報解除とともに、ひと安心で解散し、みんな平常の生活にかえった。

八月は、文字どおりの猛暑、朝七時ごろまではちょっと曇っていたが、すぐに土用らしい晴天となり、七時半ごろから、チカチカするような太陽の直射で、じっとしていても汗が噴き出た。

敵機目撃

八時を少し過ぎたころ、南西と東北の二方面から広島上空へ、大型機B29が二、三機、空に飛行雲を描くように流して侵入して来た。

そのB29のうちの一機が、市の中心部あたりへ来たと思ったとたん、炸裂の強烈な閃光を放った。閃光の目撃者幾人かは、放射能障害によりその後死亡した。

なお、この日、国民義勇隊動員令によって、古田町高須町内会から、堺町二丁目における建物疎開作業のため、

五一人が出動していた。

なお、この地区内でおこなわれた建物疎開はなかった。

七、被爆の惨状

炸裂

炸裂の轟音は、爆発音というよりか、地球が壊滅したのではないかと思われるほどの強烈な衝撃であった。超大型爆弾が頭上で炸裂したと直感し、思わずその場に伏さった者が多かった。

しばらくして、やっと我れにかえった人々は、何事かと右往左往した。ほとんどの人が、わが家に爆弾が落ちたものと錯覚した。

慌てふためいて屋外に飛び出し、その事を叫びながら駆けまわっている人も多かった。

激烈な戦闘が続き、事態は日増しに悪化して、空襲警報も連日連夜という極限的状态に追いこまれていて、鋭く緊張感のみなぎった日常であったから、すべての者が、その覚悟はしていたはずであるが、この炸裂は、まったく突然で異様であった。

避難せず

炸裂後、反射的に防空壕へ避難した人も多い。高須町内会では、老人や子どもは、そのまま防空壕に残し、活動できる者は町内会事務所へ集合した。すぐに家々の火災発生の有無を確認したが、幸いにして発火のおそれがあったので、避難する必要のないものと認め、それぞれ地区内にとどまることにした。

旧国道の混乱

山のふもとを東西に貫通している旧国道上には、西方へ向って歩いて行く避難者群と、逆に縁故者の安否を気づかって市中心部へ尋ね行く人、あるいは救援のために市中へ向う人々が入りまじって、その混乱は、直前の静穏を一挙に掻き消してしまった。

避難者群は時々刻々と増加したが、南北に抜ける新国道よりか、さらに空襲された場合、安全率が高いと考えてか、一木一草の陰も頼りにして、本能的に、その足を山沿いの旧国道の方に選んで歩く人も多かった。

倒れそうな体をやっと支えた血だるまの群衆が、炎上する市街から一歩でも遠ざかろうと、その国道筋をゾロゾロと歩いていった。

ある者は、力つきて路傍にしゃがみ、ある者は、歩きつつ死んで、バツリ倒れたまま動かなくなった。まだ息ある者は、水を求め、母を呼んだ。もう力つきた者は、火ぶくれの体をエビのように折りまげ、ただ眼だけはガッと開き、何かを睨みつけたまま息たえていた。

それを救助する力は、避難する誰一人にもなかった。

黒い雨

死ぬる者や、倒れる者をそのままにして、涎々と、見る影もない襤褸の群衆が、喘ぎ喘ぎ歩いて行く上に、午前九時ごろから、十時ごろまでの約四〇分間ばかり、汚れた黒い雨がはげしく降りそそいだ。

古江地区では、雷鳴をともなった雨で、降り方は均衡して降り続き、道路やグラウンドなどにも水たまりができるほどであった。何という意味の雨か、「聖戦」終焉の合図にしても、痛いほど大粒の非情な雨であった。

瞬間的被害

地区内の瞬間的被害は、次のとおりである。

町名	家屋被害(%)					人的被害(%)			
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無傷の者	計
古田町大字古江(高須町内会)	-	65	25	10	100	9	10	81	100
古田町大字古江(古江町内会)	-	50	50	-	100	8	-	92	100
古田町大字古江(田方町内会大字山田を含む)	-	40	50	10	100	0.5	10	89.5	100

六日夜

当日の夜は、学徒動員とか疎開作業で出動した人や、通勤者・通学生が帰って来ないため、町の人々は市中へ捜索に出ていった。まさか死にはしないだろうと、奇蹟を目当てに、安否不明の肉親や縁故者を探しに、焦熱の灰土を必死になって、あちらこちらと踏みわけたのであった。

避難者溢れる

古江町内会では、警防団長、および町内会長の指揮のもとに、永田病院や古田国民学校に収容した多くの避難者の救護に、全町あげて力をつくした。

田方町内会では、周囲の山に避難者や負傷者が一、〇〇〇人以上も押し寄せた。夜どおし呻き声や、肉親を探し呼ぶ声などが、騒然として山に溢れていた。町民は、これらに炊出しをおこない、水を運び、まったく休む時間はなかった。

高須町内会では、家屋の倒壊もなく、火災の発生もなかったが、天井が抜け、屋根が破れ、そこから空が見えた。それに黒い雨が降りこんで足の踏み場もないくらいに被害を受けたので、夜は、ほとんどの人が家を放棄して防空壕で夜明かしをした。

諸現象

これらの地区では、被爆によって、特異な現象が見られた。

(イ)古江付近は、閃光と同時に、直接光線を受けた者は、かなりの高熱を感じた。この熱線のため、鉄道線路の黒い枕木が燻りはじめていた。樹木の葉も枯れた。

爆風によって、屋外にいた人は、二メートルくらい吹き飛ばされた人もあった。電柱は傾斜し、電線は切断された。木々の枝も折れて飛んだ。

(ロ)高須付近は、樹木や農作物の、熱線の作用による影響の受け方が、山すそになるほど大きかった。樫の木や雑木の葉が黒焦げとなっていたが、松のような針葉樹は、その割合に焦げていなかった。

ちょうど桃の採れる季節であったが、桃の葉も熱に弱かった。紙袋をかぶせていた桃の実には、洗えば落ちる程度の黒い斑点がついていた。食べる時、どうも感じが悪かったという。

農作物でも、稲の葉は熱線に強く、サツマ芋・里芋など葉の広い形種のもは、まっ黒くなっていた。

地区は山林でほとんどを占められているためか、サアッと爆風が通り抜けるような所にある建物には、被害がわりあいに少なかった。

(ハ)田方付近は、山林の樹木の枝が、引き裂かれたようになって折れていて、瞬間的に爆風が突っ走っていった形跡が、所々に見られた。それも潤葉樹の類に多く、その被害が見られた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救急作業

古田地区には救援隊は来なかった。したがって各町内会が、自主的に臨機応変の措置を取り、町民の一致協力をもって、多数の負傷者・避難者の救護作業にあたった。

古江では、救護作業と共に、負傷者の輸送もおこない、収容所で死亡した者の処理もした。

疎開作業隊の惨禍

高須では、五一人ばかり、市中の疎開作業に出動して被爆し、隊員はバラバラになって、一人ずつ辛うじて歩ける者が帰って来た。町は、これら帰って来る者の救護に全力をあげた。一人歩きもほとんどできない重傷者が多く、探しにいった義勇隊員などに助けられながら、やっと自宅に帰りついた。しかし早いのは帰った翌日、遅い者でも帰ってから十日目ぐらいの間に、つぎつぎと死んでいった。

これら重傷者を、どうにかして命だけは助けようと、日夜看護にあたったが、何しろ突発事態だし、一度に多数の重傷者の出現であったから、町内会は、上を下への大混乱で明け暮れた。

炊出し

配給事務は、町民がお互いに助けあって、急場をやっと切り抜けることができた。

田方では、町内に避難して来た罹災者の炊出しを町民一致しておこなった。はじめ食糧配給所と交渉したが、火急の事態にまにあわないことがわかり、農業会倉庫にある米を強引に提出させて、一個一〇〇グラム(八勺)ぐらいのにぎり飯を作って配給した。

田方地域は、通勤者・通学生が多かった関係上、ほとんどの家庭が、肉親をさがして市中に出て行ったため、この炊出し作業も人員がそろわず、要員を集めるのにたいへんな苦心をしなければならなかった。

応急救護所の活動

被爆者が続々と避難してくるので、各町内会ともこれが収容にあたって、町ぐるみの活動を展開した。

古江では、警防団長・町内会長の指揮によって、重傷者を永田病院・古田国民学校へ送りこみ、一般避難者を古江会館・説教場・神社に続々収容、一般家庭にも収容できるだけ収容をおこなって緊急事態の收拾をはかった。

高須では、町内から出動した疎開作業隊の重傷者の救護を一応やって、その日夕がたごろから、義勇隊・警防団・一般町民などが積極的に救護活動をおこなった。西方へ避難していく力もつき、フラフラになって途方にくれてい

る多数の罹災者を、町内会長の指導によって、高須会館をはじめ、町内の大きな住宅に泊めて救護にあたった。

田方では、周囲の山にかこまれた小さな谷あい、奥深く喰い込んだような地形なので、好適の避難所となり、この地域へ避難して来た罹災者たちのほとんどが、山にこもって仮泊した。その数は一、〇〇〇人以上に及んだと思われる。

このうち重傷者は、力田病院に収容した。病院に収容しきれない患者は、庭にテントを張って極力収容し、カルシウムと油の練りあわせた薬で手当をつくした。

なお、応急救護所として、古田国民学校に多数収容していたが、八月十日ごろから、収容を病院に切替え、当局から医師の配置があるまで、地元の永田医師が治療にあたり、医師の補助員として、古田町内会の多くの町民が、献身的になみなみならぬ活動をおこなった。

死体の収容と火葬

収容者は、つぎつぎに死亡していったが、八月八日ごろから、十一月二十日まで、これらの死体の処理をおこなった。あるとき、高須へ、重傷の身でたどりつき、軒下で苦しみもだえて倒れ、さらに体をひきずって残った体力をふりしぼり、防空壕へ逃げたまま死亡した者が発見された。このような無残な死は、枚挙にいとまがないほどであったが、市当局も警察組織も壊滅的な打撃から、全然立ち直っていないという混乱時のため、当分のあいだ町内会長の検視によって火葬をおこなった。もちろん身元不明者もたくさんいた。

古江では、死体の人名を確認し得た者は、引取人があるとき、ただちに引渡した。氏名不詳とか、引取人のない死体には、身長・人相・特徴などを記入した札を作成し、火葬した遺骨は消防車庫内に安置したが、その数は二八六柱に達した。後に、おのおのの遺骨を、記名札と一緒に袋に納め、警察署に送った。

田方では、避難途中で死亡した遺体や、病院とか山の中の避難者集団地での死亡者が数百人に達したが、すべて遺品を残し、火葬した遺骨と別々にして保管した。

力田病院へ連日、縁故を探してたくさんの人が来たが、氏名を書いて張り出した紙や、遺留品などを調べて、つぎつぎと判明したものは引取らせた。

火葬場所は、それぞれ高須火葬場・庚午北町公園・古田国民学校校庭・田方火葬場・古田火葬場・田方町内の山地・川岸などであった。

火葬するとき、高須火葬場・庚午北町公園では、多い時は一回に一〇体以上、日に四回ぐらいおこなったが、そのたびに僧侶をよんで読経した。

古田国民学校においては、死亡者が出るたびに、古田地区三か町内会が交代制で火葬した。読経はしなかった。

慰霊碑

なお、庚午北町・高須両町内会では、両町内で死亡した無名の遺骨をまとめて、児童公園内の慰霊碑に納め、毎年八月六日、両町合同の慰霊祭を執行している。田方で死亡した者のうち引取人のないままになっていた最後の四遺骨の霊を慰めるため、力田病院で慰霊祭をおこなったが、後に引取人が出て、自宅へ持ちかえった。

九、被爆後の生活状況

居住者状況

古田地区は、焼失地区でなかったことと、原子爆弾による被害も市中に比して軽く、全町民が避難することもなかった。

八月末頃の居住世帯概数

古田町(高須) 四二〇世帯

古田町(古江) 四二六世帯

古田町(田方) 三七〇世帯(山田を含む)

衛生環境

高須では、八月下旬から九月中旬ごろ、ハエが多数発生した。死亡者の処理がながびいたので、火葬をするとき死体はウジ虫に取りまかれていた。また、ある時は町内へ配給した馬肉・鯨肉の中にウジ虫が発生していた例もあった。死亡した人の遺体だけでなく、爆心地から三キロメートルまでは、あらゆる動物の死体に、見るからに気持ちの悪いほど発生したうえに、その腐臭がブンブンして鼻を衝いた。それらを処理することなく放置されたままであったし、下水道や水溜りなどの衛生管理が行届きになっていたのが原因したといわれる。

古江でも、古江衛生組合が衛生思想の徹底をはかるとともに、ハエの撲滅に努力した。

生活物資

主食を主とした生活物資の入手方法については、九月中旬頃まで、時には市当局の主食の配給が遅れたので、その時は町内でとれる農産物でカボチャを二回、サツマイモを二回、計四回ほど町内会で応急措置的に配給して補ったことがあった。被爆直後から町内会で取扱った配給期間中は、市当局の食糧対策によって、一食たりとも欠がしたことがなかったという。

交通手段としては、古田町から市役所へ行くにしても、一応横川方面へ廻り道をして行かねばならなかった。そのころ、市役所の通勤者のために、市の自動車が朝と夕方だけ運行されていたが、他に利用する交通機関もなかったため、町民もそれに便乗して不便をしのごうができた。

電灯

当時、夜は暗やみ生活であって、松根油用の肥え松を割って、灯火代りに使った心電灯がついた時期は、八月十日ごろ(古江)とも、また、八月二十日ごろ(高須)ともいう。

闇市場の出現

二十一年一月ごろから自由市場の商店数が多くなり、己斐商店街でも五〇店ばかりが、主として衣料品を扱っていた。農家への主食買出しは、日ましに激しくなった。軍需品の放出と思われるが、時々食用油の配給があった。軍服が一度配給され、砂糖が一度と、煙草が何度かの配給があった程度である。

このような時の闇市場の存在は、ありがたい救いであった。みんな、これを利用し生活の危機を乗り越えていった。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月十七日の暴風雨と、十月八日の豪雨により甚大な被害を蒙った。田畑は浸水し、家屋は雨漏りで損害を大きくした。

家屋の損傷も、本格的修理をはじめたのは、翌年一月ころからで、それも手なおし程度にしかできなかった。しかし、町民一同不自由ながら一日一日と、困苦欠乏にたえて復興に立ちあがっていった。

一、地区の概要

町内会別要目

井口[いのくち]は、昭和三十一年十一月一日、広島市への編入合併実施までは、佐伯郡井口村[さいきぐんいのくちむら]であった地区である。

地区を、第一区から第七区までに区分し、それぞれの代表者をおいていた。爆心地からの至近距離は、草津町に接する鉄道路線で約五・九キロメートルであり、最も遠い地点は、佐伯郡五日市町に接する鉄道路線で約七・九キロメートルである。

井口は、名勝地宮島へ通ずる海岸線に沿った町で、背後に中国山脈の支脈連山が迫っており、半農半漁の家なみが静かに衆落を形成し、海岸沿いに若干の別荘風住宅が建ち並んでいた。

戦後、市部に編入されてから、鈴ヶ峯女子学園(戦前は実践高等女学校)、電波高等学校(現在・広島工業大学付属高等学校)が新しくで

き、また市営住宅団地などの開発が進捗し、大きな変貌をとげつつある。

被爆当時の地区内の建物総戸数は、二〇六戸、世帯数は二六〇世帯、人口は一、八二〇人で、内訳は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
第一区	38	47	329	酒井哲三郎
第二区	28	35	245	新庄勉
第三区	24	30	210	酒井真佐男
第四区	37	46	322	東穰
第五区	27	37	259	中西繁太郎
第六区	24	30	210	橋本徳一
第七区	28	35	245	杉広快蔵

学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
井口国民学校	井口村	浜部会館	井口村
実践高等女学校	井口村	阿瀬波会館	井口村
井口村役場	井口村	揚部会館	井口村
井口農業協同組合	井口村	正順寺	井口村

二、疎開状況

疎開の受入れ

この地区は、当時は広島市ではなかったから、郡部として、むしろ市部からの疎開者や疎開物資を受入れただけであった。

従って学童疎開もおこなわれていなかった。

三、防衛態勢

昭和十四年四月、井口警防団を結成し、施設や資材の充実をはかった。隣組組織の整備をおこない、各隣組を単位として訓練・演習の強化をはかるとともに、避難救護組織を確立した。

昭和十五年五月、井口村防衛隊を、隣組組織を基盤として創設した。

四、避難経路及び避難先

非常の場合の避難先としては、井口国民学校・大歳神社(古田町)・正順寺・実践高等女学校を指定していた。

内訳は、村内三部落と浜部落は、井口国民学校・正順寺とし、揚部落は、大歳神社、また阿瀬波部落は、実践高等女学校としていた。

五、所在した陸軍部隊集団

暁部隊(陸上勤務第二二〇中隊)が、山手の段々畑に兵舎を作り駐屯していた。

なお、場所不明であるが、陸軍被服支廠が一部の物資を疎開して来ていたともいう。

また、実機高等女学校には、船舶司令部副官部所属の人事関係留守業務を行なう軍人が、七月初めから泊っていた。

六、五日夜から炸裂まで

普通の状態、別に特記する事項はない。

また、上空侵入敵機の見撃者もなく、原子爆弾搭載機や僚機の爆音を聴取した者もなかったようである。

疎開作業

疎開作業の出動については、八月四日、市内広瀬町方面の建物疎開に行き、任務をはたしていたので、当日この地区からの出動はなく、住民は集団的な被爆死からまぬがれた。

七、被爆の惨状

瞬間的被害

爆風によって、ほとんど全戸の窓ガラス・天井・建具などが大なり小なり破壊された。

当時、畑仕事に行っていた者の中には、炸裂の青白い閃光を見た者、また、爆風で畑に倒された者もあった。なお、橋梁の損壊はなかった。

当日、井口村から、市内に行っていた者のうち、死者二二人、負傷者五八人があった。また、この地区では炸裂による火災の発生はなかった。

降雨

被爆直後、八時四十分ごろ、パラパラと俄雨が降ったが、黒い雨とは思われなかった。

一部の人の中には、少し変わった雨であったように思われるという者もある。

八、被爆後の混乱と応急処置

応急救護所の活動

当日午前九時ごろから、市内の被爆者が観光道路上を続々と歩いて来た。これら被爆者を井口電車停留所前において、暁部隊軍医の応急手当を受けさせた。井口村役場・農業協同組合が、当日の夜から詰めかけて来た避難者の救援作業に従事し、炊出しや救急品の配給などをおこなった。

多くの避難者のため応急救護所を、井口国民学校・正順寺・実践高等女学校に開設、暁部隊の応援によって約三〇〇人から五〇〇人位を取扱った。また、村内の民家にも多数収容して救護をおこなった。

死体の収容と火葬

救護所で死亡した者は、生存中に住所氏名をさいていたので、それによって処理したが、重傷者で最後まで氏名の確認できなかった者が六人いた。

火葬は翌七日ごろから始め、同月三十日ごろまで続き、約一五〇体以上に及んだ。

各収容所で死亡した死体を、警防団員が担架で運搬し、井口火葬場および明神ヶ浜の松林において茶毘にふした。遺骨は、身元が確認されて引取人のある者は、順次引きとられた。引取人のない老は、井口村役場および正順寺に安置した。その後、共同墓地に改葬した。

警防団出動

一方、七日には、井口警防団が、廿日市警察署の命令によって、広島市に出動し、八丁堀福屋付近に他の団と共に集合、分担区域の指示を受けて、横川町方面の死体処理に従事した。また、八日は広島駅の貨車から米を降ろす作業をした。

追弔会

毎年、平和祈念日を前後として、井口婦人会主催のもとに追弔会がおこなわれている。

九、被爆後の生活状況

八月末ごろ、井口村の世帯は三二〇世帯(被爆前より六〇世帯増)であった。

原子爆弾の被害は、きわめて少なかったため、日常生活にさして変化はなかった。

生活物資は、一時、井口食糧配給所を利用したが、ほとんど自給自足で生活した。従って闇市場の利用はあまりしなかった。

主要一覧表・記録

- 一、広島市内主要橋梁の被害状況表...3
- 二、広島市常会議員河口祉三メモ帖...19
- 三、元広島県産業奨励館(原爆ドーム)の概要...71
- 四、広島市本川聯合町内会日誌...145

広島原爆戦災誌 第二巻 第二編 各説

第一章 広島市内各地区の被爆状況

昭和四十六年九月一日 印刷

昭和四十六年九月六日 発行

編集兼発行者 広島市役所

広島市国泰寺町一丁目六番三十四号

印刷者 中本総合印刷株式会社

広島市大州五丁目一番一号

第三卷

目次

第2編 各説

第2章 広島市内主要官公庁・事業所の被爆状況 1

第1節 序説 1

第2節 官公庁 10

第1項 中国地方総監府 10

第2項 広島県庁 20

第3項 広島県警察部 71

(1) 広島県警察部(広島県防空本部) 71

(2) 東警察署・西警察署・宇品警察署・及び東・西両消防署 101

第4項 広島市役所 121

第5項 広島鉄道局 184

第6項 広島逓信局関係各機関 215

第7項 広島管区气象台 273

第8項 広島地方専売局 285

第9項 広島財務局及び広島税務署 291

第10項 広島控訴院 310

第11項 広島控訴院検事局 315

第12項 広島地方裁判所・広島区裁判所 319

第13項 広島地方裁判所検事局及び広島区裁判所検事局 325

第14項 広島刑務所 342

第3節 銀行・会社・その他団体 348

(銀行)

第1項 日本銀行広島支店 348

第2項 株式会社 芸備銀行 356

第3項 株式会社 日本勸業銀行広島支店 366

第4項 株式会社 日本貯蓄銀行広島支店 377

第5項 株式会社 帝国銀行広島支店 379

第6項 株式会社 安田銀行広島支店 384

第7項 株式会社 三菱銀行広島支店 388

第8項 株式会社 住友銀行広島支店 392

第9項 株式会社 三和銀行広島支店 399

(会社・その他団体)

第10項 広島中央放送局 405

第11項 合名会社 中国新聞社 428

第12項 広島県食糧営団 459

第13項 広島電鉄株式会社 461

第14項 広島瓦斯株式会社 475

第15項 中国配電株式会社 484

第16項 株式会社 福屋百貨店 515

第17項 三菱重工業株式会社広島機械製作所及び広島造船所 504

第18項 東洋工業株式会社 564

第19項 株式会社 日本製鋼所広島製作所 579

第20項 中国塗料株式会社 584

第21項 藤野綿業株式会社 596

第22項 株式会社 熊平製作所 604

主要一覧表・記録

1、広島市役所関係各施設被害状況表 130

2、8月6日の気象状況（広島地方気象台記録） 278

第二章 広島市内主要官公庁・事業所の被爆状況...1

第一節 序説...1

軍都広島

広島市は、中国・四国両地方の雄都として、明治維新以後、軍事都市・経済都市・教育都市という多様な発展を続けた。なかんずく日清・日露両戦争以後は、わが国陸軍の枢要な基地として、その大役を果し、経済活動も飛躍的な隆盛を示した。都市の発展とともに、中央の各種行政機関や大企業の出先機関が広島に集中し、同時に、軍の重要な諸機関も次々に設置せられ、大東亜戦争勃発前後には、広島全市が一大軍事基地になっていたと言っても過言ではない。

防衛対策

すなわち、広島市の防衛対策は他都市に比類ないほどの鉄壁の陣が敷かれ、軍の指導により、県・市両防空本部(昭和十六年開設)は、各種防空組織の育成強化を積極的に推進した。昭和十八年の夏、広島市基町の陸軍偕行社の講堂において、二日間にわたり、広島師団司令部が開催した防空研究会は、その間の模様を如実に示すもので、当時の東消防署署長矢吹静男は自著「無限水槽」において、次のように語っている。

「街にはジリジリと初夏の太陽が照りつけ、葉桜の裏では油蝉が鳴いている。

玄関の正面には菊花御紋章が燦然と輝いているが、窓は高く薄暗い旧式の建物、然もその中には扇風機一つあるでなし、此処に居る人々は扇子一本使うことすら許されない。

広い板の間の真ん中には、直径一〇メートルに近い広島市街の略図が掲げてあり、白髪を交えてはいるが身長五尺八寸位精悍そうな顔をした一人の中佐(星野防空参謀)参謀肩章もいかめしく、長さ二間もある様な青竹の鞭を携えて、地図を跨ぎ睥睨している。これを二重三重に取巻いて、赤青黒黄とりどりの襟章を付けた部隊長組、幅広の肩章を付けた警察・消防署長等の金ピカ組、市役所・鉄道・通信・県庁等の官公庁組、警防分団長・町内会長・会社・工場等およそ肩書らしい肩書を持った者は殆んど全部顔を揃えている。参加者は皆それぞれに戦闘帽と巻脚絆で身を固め、鉄兜を斜に背負って物々しい形をしているが、いずれも自信を失った様な顔に不安の面を湛えて居る。手に持った書類は、それぞれ部下の人が夜を徹して作成してくれた各自の防空計画とその資料である。背後の一段と高い統監席には、師団長と参謀長を中心に県知事・鉄道局長・通信局長・市長等の最高首脳部が、各自の指揮系統に属する者共が、どんな計画と秘策を以って参謀の問いをさばくかを監視している。(以下略)」とある。まさに軍・官・民三者一体の防空態勢であって、官庁や会社・工場の各団体から一市民にいたるまで、厳重な防空訓練を重ねたのである。

戦力増強

防空対策の進捗と共に、戦力増強が計られ、各会社・工場がすべて軍の指揮下に置かれた。さきに日本製鋼所広島工場が広島製作所と改称(昭和二十年)され、全国有数の大兵器工場になると共に、増加一途の戦傷病兵受入れのため、広島赤十字病院が拡張改築(昭和十四年)し、つづいて東洋工業株式会社、三菱重工業株式会社広島造船所・同広島機械製作所など、各種の会社・工場がほとんど軍需工場となった。

軍においても、兵器廠・糧秣廠・被服廠、及び運輸部などの拡大強化がはかられ、昭和十八年には中国地方軍需監理部(のち中国地方総監府外局)が置かれて、軍需産業の躍進がはかられた。これらの軍需工場や軍の諸機関には、昭和十七年四月に実施された徴用工・女子挺身隊・動員学徒などが、多数、滅死奉公の精神でその作業に従事したのである。

本土決戦態勢の充実

昭和十七年、陸軍運輸部に作戦部隊としての陸軍船舶司令部が併設せられ、十八年には福岡の西部軍司令部の下に

中国軍管区司令部が広島に置かれ、続いて二十年四月、本土決戦に備えて東京と広島に総軍司令部が置かれることになり、第二総軍司令部が広島市に設置された。

行政機関の状況

このような軍の本土決戦態勢に応じて、中国五県を統轄する中国地方総監府が広島市に置かれた。この総監府は中央政府から広汎な権限を委譲され、敵の攻撃により本土が分断された場合、自立自戦を行なうための最高行政機関として設けられたものである。

二十年七月、広島県庁も本土決戦態勢に沿う機構の大改革を実施し、各課の統廃合が行なわれた。また、各課とも、被爆による全滅ということの無いよう各所に分散(分室)疎開を行なった。ただし、その性格上、遠方疎開はできず、おおむね市内の建物を利用していたため、原子爆弾の投下により、壊滅状態に陥ったのである。被爆直後、罹災者の救援対策、負傷者の医療救護その他の行政推進には、県下各地方事務所の職員や近県からの応援職員が出向してこれに当るという状況であった。

広島県警察部は、二十年三月ごろから、県下の防衛力を広島市に集中して万全を期し、県防空本部(本部長は知事)は緻密な防空計画を作成して組織的訓練に励んだが、原子爆弾の前には何らなすところなく壊滅した。

被爆当日の夕方、中国地方総監府服部副総監・石原警察部長、及び備後の出張先から急ぎ帰任した高野県知事らが、比治山の多聞院に集合して、取りあえずここに仮県防空本部を開設し、救援対策を打合せた。同日夜、内務省へ状況報告を行なうと共に、県下の各警察署・地方事務所を通じて、救援隊の出動を下命した。また、近県に対しても応援を要請した。これらの連絡は、安芸郡海田市町警察署・安佐郡可部町警察署・佐伯郡廿日市警察署、遠隔地へは安佐郡祇園町原にあった原放送所及び、宇品の船舶司令部の通信班などから行なわれた。

この救援隊出動命令によって、かねて防空計画に基づき組織されていた県下各地の救援隊が、六日夜半から七日、八日へかけて続々と入市し、焼跡の各所において罹災者の救護に活躍したのである。

広島市役所の被害も甚大なものであった。幾らかの簿冊や器物、あるいは戸籍簿、救急薬品などを分散疎開させていて被爆から免れたが、他のものはすべて焼失した。庁舎も一階東南隅の二室と地下の三室のみが、職員の果敢な活動によって焼けなかつただけで、他の各室は鉄筋コンクリートの外壁だけを残して全焼した。

粟屋市長は自宅で被爆死亡し、その他の幹部・一般吏員も死傷者が続出、行政機能も一時停止した。しかし、少人数ながら生き残った職員は、全力をあげて、罹災者の救護にあたった。翌七日の午後、呉市役所の職員三〇人余りが来援し、罹災証明書の発行や尋ね人の相談などを手伝った。

牛田の浄水場は、比較的被害が軽微であったから、一部地区を除いて断水するということがなかった。飲料水が豊富であったことは、その後の復興に大きな影響を与えたと言えよう。

八日、ようやく火勢のおさまった市庁舎の一部を臨時救護所として、負傷者を収容、九日に鳥取赤十字病院から医療救護班が来て、十三日、袋町国民学校の収容所に移送するまでの間、治療にあたった。

また、焼けなかつた比治山国民学校を、被爆による迷子収容所とし、社会課が管理したが、このような行政的措置も職員と資材の不足のため極度に困難をきわめた。

罹災者の生活を守るため、食糧・衣料、その他の生活必需物資の配給は、解体した軍の物資を確保することに努力し、襲い来る厳冬に備えたが、なかでも食糧不足は甚だしく、広島市役所の苦悩は深まるばかりであった。

翌二十一年一月、広島市は復興局を設け、同年四月に「広島復興都市計画」を発表したが、このころから漸く行政も軌道に乗りはじめたのである。

報道機関の状況

上流川町の広島中央放送局は、外郭だけを残して全焼し、死傷者も多数出た。かねてから災害時に放送機能を確保する目的で、安佐郡祇園町に原放送所が設置されていたが、六日昼前から夕方にかけて生き残った職員が一四、五人集った。昼前に到着した数人は、ただちに大阪局を呼び出したところ、岡山局から応答があり、広島の惨状を伝えることができた。なお、六日午後、同盟通信広島支社の記者三人も放送所に到着し、広島市壊滅の第一報を送った。

七日、午前九時・十時・十一時に、広島局単独で、県知事の論告を放送したが、これが放送再開の第一声であった。この日、警報発令に必要なため、軍用通信線を二葉山(第二総軍司令部)から原放送所まで架設し、八日には呉の海軍鎮守府とも連絡がとれるようになった。以後、軍や官庁からの伝達・公示事項・周知事項など、広島局単独で放送した。

九月二十日、東洋工業株式会社内の工員食堂を借り、現業以外の業務が開始され、ここに復旧の第一歩を踏み出し

た。翌二十一年初め、流川局を修理して復帰し、ようやく本来の放送活動に入っていくことができたのである。

中国新聞社も絶望的な惨禍であった。被爆四日前に、市外温品村へ輸転機一基その他の施設を疎開したのが、辛うじて災害をまぬがれたが、幹部・中堅社員を一挙に失い、残存社員のことごとくが重軽傷を負い、社屋は外郭をとどめるのみの廃墟と化した。その上、最大の読者層である広島市民の大部分も亡くなったのであった。

しかし、被爆から免れた山本社長以下の生存社員らは、翌七日から新聞社の復興に立ちあがり、まず、焼けた本社ビル内に連絡所を設け、社員の消息をつかむことに努めた。

新聞の発行は、宇品の陸軍船舶司令部から無線電話連絡により、島根・朝日・毎日各新聞社に代行印刷を依頼したが、ついに七日付と八日付の新聞は休刊のやむなきに至った。

温品疎開工場も、爆風によって土壁が落ち、窓ガラスが破碎されていたが、ここで再起をはからねばならなかった。生存社員の総努力の結果、八月三十日に三十一日付中国新聞温品版を自力で発行した。しかし、九月十七日の台風により、再び代行印刷を依頼した。窮地に立った新聞社は、合議のすえ、これを機に焼跡の本社ビルに復帰することに決し、諸機材を整備、十一月三日、再び自力で新聞の発行を行なった。

この頃、各会社・工場はすべて焼跡を離れて郊外に疎開していたが、これらに先きがけた焼跡復帰であって、広島市復興の先鞭をつけたものと言えよう。

交通機関の状況

原子爆弾で廃墟になったとはいえ、なお戦争中で、軍事基地広島の都市機能の回復は、緊急要件であったから、市内主要道路 - 主として鉄道の開通と電車・バス路線の復旧整備が、宇品の暁部隊や呉の海軍救援隊の協力によって急ぎ行なわれた。電車・バスの残骸は軍の戦車で引っ張って片づけた。

鉄道は、被爆の翌七日には宇品線が開通して負傷者を運び、八日には山陽本線が開通、ただし、広島 - 横川間は単線運転という状況であった。

市内電車は、架線と電源の関係から、九日になって西天満町 - 己斐間を片側運転しはじめ、同日バスも広島駅 - 比治山 - 宇品間を二台通させた。

電灯・電力施設の状況

爆心地から半径二キロメートル以内の電気設備は壊滅的打撃を受け、被爆当日は全市停電という惨状であったが、比較的被害軽微であった段原変電所の応急修理を行ない、ここを拠点として復旧作業が進められた。七日、焼け残った宇品地区に送電が開始され、八日には、広島駅及び付近一帯と、小町の中国配電株式会社本社に電灯がつけられ、八月二十日には、市内の残存家屋の三割に、十一月末には一〇割に対して配電機能が復旧した。しかし、焼跡に点在する罹災者のバラック小屋の電灯は、罹災者各自が焼けた裸線をつなぎ合わせて点灯するという状況であった。

電信・電話の状況

電信・電話施設も壊滅状態に陥ったが、軍用通信の緊急復旧が要請され、九日、暁部隊により中央電話局が清掃されると共に、焼残りのケーブルを回収するなど、諸資材の確保につとめ、十日に着工、十二日に竣工した。

外線は加入者の移転先を探しながらゴム線を架渉し、まず一四加入を交換台に収容、十三日から部分的に試験開通、十五日から正式に交換を開始した。

電信は、中央電話局内に交換台と共に復旧され、十三日に広島 - 呉線一回線が収容された。続いて二十日に尾道・山口・宇品。二十四日には岡山と復旧し、座席は逐次増加されていった。

金融機関の状況

袋町の日本銀行広島支店は、財務局が使用していた三階は延焼したが、一、二階は窓が破壊されただけで焼失を免れた。被爆当日と翌七日に店内の取片づけを終了し、八日から支払い業務を開始した。市内の各銀行はすべて焼失し、使用不能に陥ったため、日本銀行の窓口を一二に区分し、それぞれ各銀行が入って、罹災者の応急生活費としての自由払出しを行なった。

各銀行は、逐次、焼跡にバラック店舗の建設にかかり、早い者は八月末から九月ごろにかけて、遅い者は翌年春ごろまでに、それぞれ自店の焼跡に復帰していった。

その他の会社・工場の状況

市内の各会社・工場は、周辺部所在のものを除くほか、すべて灰燼に帰した。施設も人員も一挙に失って、そのまま廃業するか、さもなくば、郊外に仮事務所を置いて、職員の消息の把握をおこない、細々と復旧に備えたのである。

原子爆弾の災害に続く、日本の敗戦、そして占領軍の軍政という未経験の社会環境のなかで、会社や工場の操業開

始は、まったく不安であり、見通しのたたないことであった。

昨日まで、航空機の部品や弾丸、あるいは兵隊の装備・糧秣などの軍需産業を謳歌していた各会社・工場に対して、二十年九月末、占領軍の対日管理政策が示され、従来の平和産業の続行と軍需産業を民需産業に転換することになった。これにより転換計画をたて、呉軍政部の認可を得た会社は、ようやく生産活動を再開したのであった。

なお、市外に所在し比較的被害の軽微であった日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)、および東洋工業株式会社(安芸郡府中町)などには、建物を焼失した軍や官庁が、しばらくのあいだ間借りして、終戦の処理や広島市の復旧対策を進めていったのである。

第二節 官公庁...10

第一項 中国地方総監府...10

一、当時の概要

概要

(一)所在地 広島市東千田町 広島文理科大学内

註・発足当初は水主町の県庁舎を仮庁舎(軍需監理局は八丁堀の福屋)とし、ついで広島文理科大学校舎に移った。

(二)爆心地からの距離 約一・五キロメートル

(三)開設年月日 昭和二十年六月十日

(四)開設目的

戦局の急迫にあたり、軍部の本土決戦作戦に沿い、敵政略による本土分断の事態発生に即応する自立自戦の行政機構として、勅令第三五〇号により、地力総監府官制が公布施行され、次のとおり全国八地区に設置された。

北海地方総監府 札幌市におかれ、樺太・北海道を管轄

東北地方総監府 仙台市におかれ、東北地方六県を管轄

関東信越地方総監府 東京都におかれ、関東地方七都県、および甲信越三県を管轄

東海北陸地方総監府 名古屋市におかれ、東海四県および北陸三県を管轄

近畿地方総監府 大阪市におかれ、近畿六府県および福井県を管轄

中国地方総監府 広島市におかれ、中国地方五県を管轄

四国地方総監府 高松市におかれ、四国地方四県を管轄

九州地方総監府 福岡市におかれ、九州七県および沖縄県を管轄

各総監府は、中央政府から広汎な権限を委譲され、地方長官および各省の地方出先官庁の首長を指揮して、陸軍軍管区司令部および海軍鎮守府と協力し、三者で地方連絡会議を構成、その地方における作戦と行政を、強力かつ一体的に統轄する「地方政府」的機能を持ち、情勢の推移に応じて、迅速果敢な臨機の措置をこつこつとすることを目的として設置され、しばしば管下各県の知事を召集して会議を開いた。

中国地方総監府では、「ほとんど連日のように開かれた在広各官衙の連絡会議をリードしたのは軍人であった。出席者の半数は軍人であり、そこでの話題は、南方における戦況報告、輸送の問題、軍需品生産の問題が主なるもので、満州から運び出した大豆やトウモロコシが、山陰方面に山積しているのを、どうして山陽方面に運ぶかとか、九州炭を運びたいのだが、貨車が不足しているので、どうするかとか、松根油の生産を如何にすれば、能率的にやれるかとか、今になって考えると、まさに戦争の末期的症状をあらわすような問題ばかりであった(当時広島財務局関税部長・庭山慶一郎手記)。」という。

地力総監(親任官)のもとに、副総監(勅任)および軍需監理局長(勅任)がおかれ、副総監のもとに総監官房主幹(勅任参事官)と第一部長(勅任参事官)・第二部長(勅任参事官)・第三部長(勅任参事官)が設けられ、地方総監の補助機関として参与がおかれた。

このうち、軍需監理局は、八月、軍需省の廃止に伴い、地方軍需監理部(全国八か所)も廃止されたため、新たに総

監府の外局として、「監理局」が設けられたもので、通信局・財務局・専売局・営林署・木炭事務所・食糧事務所・燃料局・海運局・県庁などを指揮する権限を持つ機関である。

総監 大塚惟精(前広島県知事)

副総監 服部直彰(前陸軍司政長官)

総監官房・官房主幹 参事官 川本邦雄(前内務書記官)

業務 = (一)庶務 (二)地方連絡会同 (三)企画調整 (四)財務

(五)物価 (六)その他各部局に属さない事項

第一部・部長 参事官 青木重臣(前広島県警察部長)

業務 = (一)情報・宣伝 (二)治安 (三)防空・防衛 (四)通信に関する事項

第二部・部長 参事官 並木龍男(前農商務書記官)

業務 = (一)食糧生産 (二)林産物生産 (三)配給に関する事項

第三部・部長 参事官 藪谷虎芳(前鉄道監)

業務 = (一)国民義勇隊 (二)戦時教育 (三)勤労・保健 (四)輸送 (五)建設に関する事項

外局

中国地方軍需監理局

長官 陸軍中将 原乙未生(前中国軍需監理部次長)

(六)被爆時の在籍者数 約五〇〇人

ただし、本省関係一七、八人、県庁の出向職員および軍需監理局を合わせた人数である。

(七)被爆時の出勤者数

確実な数は不明。大学の庁舎内に約二〇人ばかり出勤していたと言われる。

二、被爆の惨状

惨禍

被爆当日、事務部局の出勤時間は、前夜来、空襲警報が発令されたので、一時間遅れて午前九時であったが、八時ごろには、すでに各課とも五、六人ずつの職員が登庁していた。

総監室は、学長室を使用していたが、大塚総監はまだ登庁していなかった。

原子爆弾の炸裂により、大学の庁舎は全焼したが、官房および第一部の各課は、爆心とは反対側の南向きであったから、爆風による負傷者はあったが、即死者はなかった。しかし、北向きの第二部・第三部、および八丁堀の福屋百貨店内の軍需監理局各課では、多数の死傷者を出した。軍需監理局を除く死傷者の人数は、八月六日の死亡者が本省関係一〇人・県出向職員八人、負傷者が本省関係七人・県出向職員一七人である(原田貢調査)。

大塚総監の焼死

大塚総監は、上流川町の官舎(松田重次郎邸を借上げて使用)で、原田貢総監秘書が自動車で登庁の迎えに来るのを待っているとき、炸裂に遭遇し、倒壊した建物の下敷きとなり、外から呼ぶ妻子らに、「早く逃げよ。」と言いつつ、火災に包まれて焼死した。

辛うじて下敷きから脱出した大塚夫人と長女は、総監を救出しようとしたが、その力におえぬばかりか、常駐していた兵士の姿も消えていた。約七、八メートルばかり下手の広島中央放送局にいた兵士に、救助を頼みにいったが、そこも破壊されて、人影なく、やむなく引返してくると、すでに火災が発生していて、近寄ることができなかった。周囲がにわかに騒然とするなかで、妻子は別れ別れとなり、夫人はその夜、東練兵場にのがれて野宿した。翌七日、畑俊六総軍司令官の命令を受けた兵士に迎えられて、その官邸に避難し、しばらく滞留して負傷の治療を受けた。九日ごろ、被爆前日に、中国地方五県下を巡視して帰広した総監と、相談して決めた佐伯郡廿日市町(速谷神社付近の農家)の疎開先に避難した。そこへ長女も避難して来た。一週間後、呉鎮守府長官の招きで、呉の海軍病院に移り、治療を続けたが、四、五年後に死亡した。

この大塚総監の死亡状況は、原田総監秘書が後日聞いた話であるが、六日は、原田秘書自身も、総監を迎えに行く途中、舟入本町の十字路(爆心地から約一・五キロメートル)において被爆し、顔面と両手両足に火傷を受けた。辛うじて自宅(舟入川口町)に辿りついて倒れた。翌七日家族の疎開先である安芸郡奥海田村へ大八車で運ばれ、以後療養につとめ、九死に一生を得た。

各職員の被災

また、本省から来任していた川本邦雄官房主幹・並木龍男第二部長の両参事官及び花水英二・若槻克彦・鶴田文基・藤井重雄・杉田三朗・井手浩の各副参事官も登庁準備中、官舎で被爆死亡した。更に広島県庁その他から出向していた山際党一・竹内一市・竹本庄助・桑原勇各事務官、及び広沢衛警部・瀬川舜一・堀田礼三両属・岩見・河田両雇など総監以下一九人が、当日即死あるいは旬日のうちに死亡した。武藤文雄・岡部史郎副参事官らも官舎で被爆負傷したが、脱出して助かった。

服部副総監脱出

服部副総監は、大学の副総監室で被爆負傷したが、辛うじて脱出した。午後二時頃(推定)、二葉山の防空壕に設けられた第二総軍司令部に到着し、「総監の大塚惟精さんが亡くなられた。県庁も市役所も警察も全滅した。われわれにはもう行政能力がないから、事態の収拾は一切軍におまかせする。とりあえず避難民に食糧を出していただきたい。」と、負傷しながらも事態の応急処置にあっている井本熊男高級参謀や橋本正勝主任参謀に語った(読売新聞刊・昭和史の天皇 4)。

仮総監府設置

災害に備えて、第一避難集合場所に決められていた比治山の多聞院は、爆風により相当破壊されていたが、焼失からまぬがれたので、午後五時ごろ、服部副総監がたどりつき、ひとまず「仮総監府」を設け、白紙に書いた表札を門前に貼りだした。

また、県警察部の石原虎好部長も猛火をくぐって到着、続いて午後六時半ごろ、備後に出張中で被爆しなかった高野源進県知事も馳せつけ、「広島県防空本部」の立札をたてて開庁したのである。

しかし、総監府は大塚総監をはじめ、多数の職員が全面的打撃を受け、その機能を失ったため、服部副総監は高野県知事に対し、事態の収拾その他について、今後は県知事がおこなうよう指示した。

午後八時過ぎに、備後松永に分註していた警備隊一個小隊(小隊長・池田勉)が帰来し、防空本部に入ったが、陣容はなお総勢五、六〇人に過ぎなかった。

また、この頃、広島市役所から浜井信三配給課長他一人が状況報告に来て、ようやく広島市役所と連絡がついた。

宇品警察署の須沢良隆署長も連絡に来て、状況報告をおこなったのち、再び御幸橋たもとにもどり、罹災証明書の発行、その他の救護活動をおこなった。

救援対策の協議

夜になって、ロウソクの灯をかこみ、服部副総監・高野知事・石原警察部長などが、救護復旧対策を協議し、近郊市町村その他に救護班出動の命令を出した。

なお、県庁が東警察署へ移ってからは、広島文理科大学校庭に天幕を張って、服部副総監以下青木・藪谷両参事官及び、武藤副参事官など生残りの四、五人が集り、中央への報告、状況調査及び各県との連絡にあたった。

三、総監府の廃庁

廃庁

被爆後、なお本土決戦態勢下の総監府は、市外府中町の東洋工業株式会社本館内に移り、その後、市の北部の三滝山に疎開を準備中に、八月十五日の終戦を迎えた。八月二十八日、被爆死した大塚総監の後任に、東京都次長児玉九一(宿舍・海田市町の民家)が発令されて着任し、参事官青木重臣・藪谷虎芳・和田太郎及び副参事官岡部史郎・武藤文雄・本村浩・安田巖その他が、終戦処理にあたったが、十一月六日、地方総監府ならびに軍需管理局が廃庁となった。かわって広島市に中国地方行政事務局(初代長官に広島県知事楠瀬常猪が就任、昭和二十二年四月に廃止)、および中国地方商工処理部(昭和二十一年一月に中国地方商工局に改編)が設置された。

炸裂下の服部副総監

高本達寿(談)(当時・副総監付運転手)

服部副総監は、昭和二十年六月十日の総監府設置にともない単身赴任された。平野町の川べりの大きな民家を借りあげて官舎とし、炊事の老婆一人との生活であった。

総監府は、広島文理科大学の三階を使用しており、時計台のある下の部屋に、総監室と副総監室がならんでいた。

八月五日の晩、私は当直で、一階の西端の化学実験室の一隅の当直室に泊った。当直者は私と平田事務官と二人だ

けであった。

夜半からしばしば警報が発令され、あわただしい当直であったが、六日となり、その午前 時二十五分、二度目の空襲警報が発令され、二時十分に解除、続いて警戒警報も解除された。このとき、服部副総監は登庁して来て、副総監室で平田事務官と何か話をしていた。私は一階に降りて、自動車を点検したあと、当直室で軍隊時代の思い出の写真を出して整理した。

七時九分、また警戒警報が発令されたが、三十分ばかりして解除になったので、朝食のため大洲町四丁目の自宅へ帰った。急ぎ朝食をとって登庁したのは、八時に少し前ごろであった。

副総監室に挨拶にいき、副総監の上衣をとって洋服掛にかけた。これはいつも私がする習慣であった。そこへ秘書の女の子が冷たいタオルを持って来て、副総監に渡そうとしたとき、B29の爆音が聞こえた。

「窓からのぞいて見よ。また B29 が来とるじゃないか……。」と、副総監が言った。

私と秘書は、教室の腰高の窓から空を仰いだ。その瞬間、閃光を感じた。

私はとっさに窓の下の壁のところに伏さった。何秒かして、奇妙な音響がし、体が宙に浮いて吹っとばされた。

この頃、校庭にバラックを建てて、防衛召集の兵隊がたくさんいたが、それが使用していたらしい鉄製ベットが、どうしたわけか、三階の窓から中へ飛びこんで来て、転っている私の体の上に落下した。そこへ壁の煉瓦がガラガラと崩れおちて来た。私はベットを被っていて奇跡的に助かった。まったく一瞬の出来事であった。

私は脱出しようともがいた。しかし、出ることができない。そのうちに油のようなものが体中に粘っこく付着した。それが頭から噴き出した血であったことは、後で知った。

秘書の女の子は、閃光を見ても伏さらなかったに違いない。爆風で吹きとばされ、階段のところで死んでいるのを後日発見した。

徴用のがれに勤めていた良家の子女であったが、原子爆弾は避けられず非業な最期であった。

私は、どうにか脱出できた。どうして出られたか、まったく覚えていない。

ようやく起きあがり、服部副総監を呼んだが、返事はなかった。

火炎が階下からドンドン噴きあげて来た。そして、私をも包みこもうとした。私は必死で火炎をくぐりながら、真ん中の階段を降りて校庭の出口のところに出た。そこで隅垣内事務官と出あった。隅垣内事務官は全身血だるまで、そこからすぐ校庭の防空壕に入っていった。

私は大洲の自宅へ急いだ。倒壊物で道路の見分けもつかぬ富士見町から、比治山橋を渡り、兵器廠の横に山川で、さらに東大橋を渡った。そこで力尽き、ついに倒れた。

気がついてみると、自分の家で寝ていた。妻に聞くと、近所の人を通りかかり、胸につけていた名前を見て、リヤカーに乗せて運んでくれたのであった。そこから、再び妻の実家の西蟹屋町を経て、安芸郡の府中町に逃げていった。

その途中、一晚、矢賀町のキリンピール工場の前で野宿したが、このとき、私の目の前でフラフラと歩いていた人が倒れた。その人は県庁の秋吉内政部長(国泰寺裏の知事公舎と並ぶ公舎に居住)の実妹であった。私の所へ連れて来て、介護してあげた。翌朝は元気そうになり、汽車に乗るといって私と別れ、向洋駅の方へ歩いて行ったまま、今日までその消息を知らない。

私は、頭部その他に負傷していたし、ガラス片がたくさん突き刺さっていた。大洲で気がついたのも、妻がガラスの破片を抜き取る痛さからであったが、二、三日治療したあと、動くことができたので、十日、平野町の副総監の官舎(疎開あとの民家借上げ)へ行ってみた。官舎は半壊状態で誰もいなかった。

そこから大学の総監府へ行った。大学では校庭にうす汚れた天幕が張ってあり、その中に頭に繻帯を巻いた副総監と、広木副参事官や竹内副参事官・平田事務官などの四、五人の人々が集っていた。

「腹がへった。何か食うものはないか。」

と、副総監が言った。私は校庭の芋畑に行き、まだよく実っていない芋を掘り、焼けた釜を拾って来てふかして皆で食べた。

県庁が東洋工業株式会社内に移ったとき、総監府も移ったが、払下げの軍需物資の配分をおこなったのは総監府であった。

一、当時の概要

概要

所在地 広島市水主町

敷地・建物の概要

敷地面積 約七、 坪

建物概要 ルネッサンス式木造二階建

建坪 本庁舎並びに付属建物 約五七六坪

竣工年月日 明治十一年四月十五日

二、開庁の経過概要

明治二年四月の版籍奉還により、同年六月十七日、旧藩主浅野長勲が藩知事に任命され、藩庁を広島城本丸に置いた。

明治四年七月十四日の廃藩置県により、藩知事を廃し、本格的な県政が施行されることになり、初代の地方長官広島県大参事に河野敏謙が任命され、同年十月十二日に、県庁を本丸から三の丸浅野藩屋敷へ移し、人心の刷新を行なった。

明治六年三月二十日、広島城内に第五軍管鎮台が置かれたため、県庁を国泰寺内に移した。

明治九年十二月二十六日、国泰寺の庁舎が失火で全焼し、多くの貴重な資料や文書を焼失、寺町の仏護寺に仮県庁を設けて事務を執った。

明治十一年四月十五日、水主町に庁舎を新築して移転、その後、増改築をおこない、昭和二十年八月六日の原子爆弾被災の日まで、県行政の中心となった。

三、被爆時の在籍職員数 本庁関係 約一、五〇〇人

四、被爆時の出勤者数 推定約七〇〇人程度

五、被爆時の代表者 県知事 高野源進

六、爆心地からの距離 約九〇〇メートル

七、機構と疎開(分室)先

中国地方行政協議会

内政部 部長 秋吉威郎

文書課・人事課・内政課、財政課、地方課 * 本庁内

学務課 * 一部が尾長町の盲学校に疎開

兵事教学課、援護課、拓務課 * 各課の一部が県庁前の元日本銀行支店跡に分室

衛生課 * 一部が袋町国民学校に疎開

調査課 * 一部が打越町の安芸高等女学校に疎開

会計課 * 一部が広島商工会議所に疎開

経済第一部 部長 永野芳辰

農務課 * 畜産係のみが打越町の安芸高等女学校に疎開

食糧課、水産課 * 本庁内

耕地課 * 一部が打越町の安芸高等女学校に分室

経済第二部 部長 大森通孝

軍需課、商政課、林務課、生活物資課 * 本庁内

警察部 部長 石原虎好

情報課、特別高等課、警務課、輸送課、経済保安課、警防課、刑事課 * 市役所内

労政課、保険課 * 一部が県立第二中学校に疎開

国民動員課 * 一部が県庁前元日本銀行支店跡及び尾長町盲学校へ疎開

土木部 部長中島時雄

道路課、河港課、建築課、砂防課、都市計画課、経理課 * 本川国民学校に疎開

(註・各課の統廃合及び疎開・分室が被爆直前に実施されたため、その行先が判然としない課が多い。)

被爆の少し前、県庁は本土決戦態勢に沿う機構の大改革を行ない、経済第一・第二両部を中心に各課の統廃合が実施された。経済第一部は、農政・農産・畜産の三課が統合されて「農務課」と改称され、このうち畜産係が打越町の安芸高等女学校へ分室した。また、経済第二部は、造船・金属回収両課が廃され、軍需課がその業務を引きつぎ、新たに生活物資課が設けられた。

なお、参考として、昭和十九年広島県庁職員録による機構と人員を示すと、次表のとおりである。二十年職員録は、作成途中で被爆したため、そのままになり出版されなかった。

(昭和十九年職員録による機構と人員)

課名 * 職員数

中国地方行政協議会 * 一一

内政部 * 四二一

文書課 * 二五

人事課 * 一七

庶務課 * 二三

地方課 * 三九

教育課 * 三七

社寺兵事課 * 二〇

社会課 * 二三

拓務課 * 九

衛生課 * 一五〇

調査課 * 二五

会計課 * 五三

経済第一部 * 三六五

農政課 * 五四

食糧課 * 三一

農産課 * 二七

水産課 * 一一二

耕地課 * 一四一

経済第二部 * 二一九

軍需課 * 四八

商政課 * 四二

林務課 * 一〇六

造船課 * 一六

金属回収課 * 七

警察部 * 三八四

情報課 * 八

特別高等課 * 三三

警務課 * 五六

輸送課 * 三一

経済保安課 * 三〇

警防課 * 三〇

刑事課 * 二四

労政課 * 四七

保険課 * 五四

福山保険出張所 * 三七

国民動員課 * 三四

土木部 * 三四二

土木課 * 二九四

建築課 * 二二

都市計画課 * 二六

(昭和十九年広島県職員録)* 合計一、七四二人

八、疎開状況

県全般を統轄する県庁は、一般の会社・工場とはおのずからその立場を異にするため、当初は厳然として不動の姿勢を保ち、もっぱら一般の疎開作業や動員など、あらゆる防衛対策を指揮し、推進する母体となったが、昭和二十年に入り、日本の主要都市が次々と空襲を受け、その被害も日ごとに増大するという事態に直面したため、同年二月ごろ、市内各官公庁が一か所にあつては、空襲で全滅するという最悪事態を考慮し、四月に入ってから、各課の一部や重要文書、備蓄すべき物品など最少限の分散疎開をおこなった。

当時、援護課勤務三谷昇事務官の手記「原爆当時の広島県庁」によれば、「昭和二十年のはじめ頃から、広島市もいつ空襲を受けるかわからないという気分が打おわれてきた。ことに四月末、大手町を中心にして十発程度の爆弾が落とされてから、建物疎開が急速に進められるようになった。水主町にあった県庁の周辺も、ほとんどの民家や寺を取りはらった。その作業に庁員も毎日従事させられた。

私(三谷)は内政部援護課の事務官で、空襲罹災者の保護を担当していた。この仕事は、戦時災害保護法による応急援護・遺族援護・住宅援護などが中心になっていたが、その前提として、空襲罹災者であることを確認するため『罹災証明書』を用意しておく必要があった。そこで春頃から、約二〇万枚印刷して『広島県』の印も捺したものを、市内の国民学校の砂場の東南の隅などに分散して埋めた。」とある。

また、御真影を双三郡・比婆郡の地方事務所や国民学校に疎開した。また、人事課の文書(職員名簿)は、県庁構内の奉安庫の横に穴を掘り、埋めていて損傷を受けず、戦後大いに役立った(黒田益夫談)。

また、県警察部が、広島市役所内に移ったのをはじめ、各課では、調査課及び農務課が打越町の安芸高等女学校に分室したように、前記のとおり本川国民学校(土木部全課)や袋町国民学校(衛生課)、広島商工会議所(会計課の一部)その他、疎開して空いている市内の学校(鉄筋コンクリート建)などに、それぞれ分室した。

九、防衛態勢

防衛当直

激化する空襲に備えて、県庁職員は三日に一回の防衛宿直(最高責任者として知事または部長が宿直)があり、それぞれの部署についた。すなわち、常に全庁員の三分の一が防衛要員として日夜勤務していたが、八月五日の夜は二回の空襲警報発令により、ほとんどの庁員が出勤していた。六日朝、警報解除になってからも、郡部から通勤していた職員は、そのまま平常勤務につき、また一般職員も午前八時に出勤し、ほとんどの職員が庁内において被爆したため、全滅にひとしい犠牲者を出す結果となった。

なお、六日当日の宿直最高責任者永野経済第一部長は、警報解除後、白島の自宅へ帰っていて被爆した。

避難対策

災害に備えて「県庁罹災の場合の移転先」という小冊子には、第一候補に比治山の多聞院が書いてあった。

このほか、非常避難先としては、市役所・本川国民学校・福屋・商工経済会(商工会議所)・及び打越町の安芸高等女学校などが指定されていたが、すべて焼失(安芸高女は倒壊)したため、被爆に際しては、比治山の多聞院のみが辛うじて使用できたのである。

また、県庁構内に防空壕を構築し、隣接の県病院の庭園(與楽園)の築山にも、一五、六人くらい収容可能な防空壕を三か所作っていた。

また、会計課書類もこの防空壕に格納していて難を免れた。

十、被爆の惨状

惨禍

県庁舎は明治時代に建てられた木造の古い建造物であつたうえ、爆心地にも至近の場所にあつたから、原子爆弾の炸裂にあつてはひとたまりもなかった。建物は瞬時に倒壊し、全焼した。

庁員の惨禍は実に大きく、多くは即死か倒壊物の下敷きとなつたまま焼死した。戦後出版された県庁関係の諸文書 - 広島県職員組合発行「ねんりん」15号、あるいは広島県健康相談所勤務であつた嘉屋文子医師の著書「きのこぐも」その他にも書かれているが、庁内における被爆者の手記としては、ねんりん 15号所載の県印刷所勤務であつた筏敏行

所員ただ一人を見いだすにとどまるのである。辛うじて脱出し、自宅にたどりついた幾人かの庁員も、被爆後一、二か月のあいだにほとんど死んでいった。

前記篠敏行の手記によると、「当日の朝出勤(印刷所に)していたのは、所内では一二、三人くらいだと思う。議会議事堂の南側にあった印刷所に入り、作業服に着替え、さて仕事を始めようかと思った瞬間、ピカッ・ドーン。数メートルはねとばされて、気がついたときは、瓦解した家の下敷きになっていた。

みんなハリの下敷きになったり、活字の下敷きになったりして、助けを求めていた。それぞれ自力で逃げ出したが、他人のことはどうすることもできなかった。

私も気がついたときは、火が近く迫っていたので、必死になって逃げた。一人ほど『助けてくれ!』と、救いを求めていたがどうすることもできなかった。私は幸いにも顔に二か所ほど傷をうけただけで、瓦礫から這い出ることができた。

その晩は、防空壕の中にあつたふとんをひっぱり出し、中島国民学校の裏の、防空壕の上で寝た。

結局、生き残ったのは四人くらいだと思う。翌日、火がおさまって焼跡に行ってみたが、ハリの大きな材木の下敷きになって焼け死んでいる人が多かった。なかには鉛のドロドロに溶けた下で、白骨で死んでいた職員もいた。」とある。

死の脱出

また、佐伯郡五日市町の家に警防団員が知らせに来たことで、父の生存を知り救助に行った大道博昭の手記(ねんりん 15号)によっても炸裂下の惨状をうかがうことができる。

「八月七日の午前九時ごろ、警防団員が、父が県庁の正門のところで、けがをして寝ていると知らせてきてくれた。急いでかけつけてみると、はだかに近い格好で寝ていた。顔に火傷はない。しかし、左足が折れ、背の大部分は火傷、頭に大きな裂傷がある。頭の骨の部分が見える。かなりの傷であったが、口はきける。気力のせいか案外元気そうである。

父の寝ている付近にも、黒こげになった死体が、むごたらしく横たわっていた。付近の水槽にも、風船のように、おなかのふくれた死体が浮いている。父のみが生きのびていたのが不思議であった。

事情を聞くと、父は『二階の衛生課から地上にはねとばされ気を失った。気がついてみると、付近は火の海。逃げようと思って立とうとしたが、立つことができない。見ると、左足が折れている。とにかく生きなければと、這いながら、やっとの思いで県庁正門のところまでたどりつき、その横の水槽に飛びこんだ。一日中、この水槽の中で、火の粉が降りかかってくるため、顔を沈めたり、上げたりしてすごした。

翌七日の朝、通りがかりの人に、この水槽から出してもらった。』と答えた。

水主町の住吉神社の境内に、応急救護所が設けられていると聞き、警防団員の手を借りて、そこへ父を運んだ。応急手当を受けてホッとするひまもなく、兵隊がやってきて、似ノ島検疫所へ負傷者を収容すると命令してきた。

午後二時ごろ、住吉神社の横へ上陸用舟艇が横づけされ、父は運ばれた。そして似ノ島の臨時収容所で、「八月十四日午後三時ごろ、息をひきとった。ひとことも言わず、口から多量の血を吐きながら死んでいった。」のである。

凄惨な県庁跡

七日に、岡山県医師会の第一回救護班として入市した西村伊勢松医師の手記(昭和三十七年八月二十五日付 岡山県医師会報)の中

に、凄惨きわまりない県庁の焼跡の状況について、「...それは丁度お昼頃だったかと思いますが、県庁の焼跡と思われる所に入って、家の土台の敷石をまたいで、何の気なしに床下であったと思われる地面を見ますと、土台石に沿って四、五尺ぐらいの間隔に、直径二尺ぐらいの楕円形の黒いシミがありました。

顔を近づけて見ると、シミの真ん中に、更に黒い部分があって、みな頭蓋骨の形をしているのが、判然と見られました。黒いシミは、人の焼けたときの脂でできたシミだったわけです。

被爆の際、机の前に腰かけて並んでいた人々が、一様に同じ姿で、一瞬に真上から屋根と天井で、押し潰されてきた人形だったわけでありませぬ。

これは妙だと気づいたので、更に、直角の位置にある土台石の方に、歩いて見ますと、何と今度は、仰臥の姿勢で、人が立ったまま棒倒しになったと思われる人影が、一間おきに並んでいました。足はみな窓に向いて、まったく寝たような形をして、長々とした形で、脚・胴体・頭・手とはっきりしていましたが、いずれも骨としては一片も残っていませんでした。恐らくアツというまに、同じ姿で押し潰されたと想像される姿でした。

しかもチョッピリと推理らしきものを働かせますと、長々と倒された並列の一群は、閃光を見て、一斉に立ちあがったところを、爆風で壁もろともに押し潰されたもので、楕円形の一群は、閃光の見えなかった側の壁に近く腰かけたままの人々の姿だったと思われます。

この事情が分かった時に、私は寒気がしました。頭や腕の骨の境が判然と見えたときは、ギョッとしました。原爆と頭蓋骨とでも申しましょうか。今でも思い出すと鳥肌になります。

私はその周囲で、築山の上や池の中に浮んでいる数限りない死体を見たり、水を求めて無言のまま庭園だったと思われる土地の起伏のある面を、ノソリノソリと四ッん這いになって歩いていた半黒焦げの人々を見た時よりも、更に悲惨な感じを受けました。」と、記述されている。

與楽園付近

佐伯郡五日市町の自宅から登庁する途上で、炸裂に遭遇したが、幸い怪我のなかった農務課の柿本四三事務官、あるいは六日が夜勤にあたっていたため、旭町の家で休んでいて被爆し、左足に負傷した援護課の三谷昇事務官が、県庁の焼跡に行ったとき、その庭園(與楽園)を見ると、大きな池の中には、まるでカエルが腹をかえしたような姿で、無数の死体が水面をうずめていた。また、池の周囲に掘られた三か所の防空壕にも、無残な死体が幾つも折り重なっていた。

この池の付近は、県庁のなかでも特に死体が多く見られ、池の淵にのめりこむようにして死んでいる者、吹きとばされて松の木の中途にブラ下って死んでいる者などが目撃された。

ただ不思議にも、大火災であったにもかかわらず、築山の松やその他の樹木が、まだ幾本も青々と立っていた。

柿本四三手記によれば、「與楽園は、藩主浅野重晟の別邸であったとか。とにかく県病院裏の公園は、われわれ職員には憩いの場であった。春先ともなれば、昼食後の一ときを日向ぼっこで寛ぐのであった。園の中央に池があり、浮御堂もあった。ボラがたくさんいた。池の周囲は、芝生のマンジュウ山があり、恰好良い松が風情を添え、川岸には、楠の木などの老樹が生い茂っていた。

私が復職した四月には、そのマンジュウ山には防空壕が掘られていた。幾度かこの防空壕が役に立つだろうかと、中を覗きみたものだった。與楽園に足を入れて、まず目に入ったのは池であった。岸边にしがみついた多くの死体だった。私は一人一人のぞき見て歩いた。或いは同僚ではないか、知人ではないか、と探し求めたけれど誰一人として誰人であるかを示す容相をした者はなかった。

一様に腰の辺までは水中に、胸を岸に手をついた人、仰向いて両手で空をかきちぎっている人達で、皆、裸の姿であった。中には、水中に沈んだ人はいないと、よく見たが体がふるえて浮御堂まではゆけなかった。防空壕の中には、それぞれ四、五人の死体が、苦しみに耐え抜いた姿で、皆昇天していた。」という。

余燼くすぶる中に

七日朝になると、さしもの火災もようやく自然鎮火したが、まだ、所々に煙があがってくすぶっており、その中を歩くのさえ熱さがこたえた。そして死体はいずれも黒焦げになっており、誰彼の分別もつかないありさまであった。

双三郡に出張中で被爆をまぬがれた涌島秀行農務課長が急ぎ帰広して、県庁跡に立ったとき、瓦や石が黒く煙っている所には、必ず焼けた人の死体があったという。それらを、腕時計・バンド・眼鏡の縁などで誰であるかを判断しながら骨を拾い、紙に包んで名前を書いておいた。余った骨は、議事堂前の焼跡に埋めて埋葬した印をつけておいた。

また、本川国民学校(学童疎開あと)に土木部の全課が疎開していたが、ここも爆心地に一層近く、学校は鉄筋コンクリートの外郭だけを残して全焼するという惨状で、出勤していた職員は全滅的な打撃を受けた。

死体の処理

県庁跡付近の負傷者の救護や死体の処理などをおこなったのは、江田島から出勤した若い特攻隊の兵士らであったが、その隊員山村重定特別幹部候補生の報告によると、死体の散乱している県庁の広場には、黒塗りの乗用車が一台、鉄屑になって転がっており、谷のような大きな穴が地面にあいていたので、これを埋めたという。

県庁員の被害

県庁職員の被害状況は、次のとおりである(竹内喜三郎日記)。

高野源進県知事は、福山地方に出張中であつたため難をのがれたが、出勤時間厳守の秋吉内政部長は、内政部長室で被爆死亡、大森経済第二部長・中島土木部長らは重傷を受けた。

職員は、総数一、一〇七人のうち

死亡者 五七人

負傷者 二六七人

行方不明者 五二九人

健在者 二五四人

となっている。しかし、行方不明者は死体の確認ができなかったものであって、死亡者にほかならない。また、負傷者も次々と死んでいったことであるから、県庁はまさに全滅に近い惨禍を受けたということが出来る。このため、県政はまったくの麻痺状態に陥ったのであった。

部課長の被災状況

昭和二十年八月十三日、高野知事から内務・厚生・農商・軍需・文部各省次官にあてた報告書には、部課長の被災状況が、次のように掲げてある。

県庁部課長中、死亡又八負傷シタルモノ

一、死亡者

内政部長 秋吉威郎

内政部援護課長 岩畦輝一

内政部人事課長 宇田俊平

警察部警務課長 津渡肇

警察部情報課長 本田徳一

警察部警防課長 寺岡盛人

土木部経理課長 中本静夫

土木部建築課長 砂本清

二、全治一週間乃至二週間、一ヶ月以内ノ負傷者

警察部長 石原虎好

経済第一部長 永野芳辰

経済第二部長 大森通孝

内政部衛生課長 喜多島健磨

経済第一部水産課長 上村忠彦

経済第一部耕地課長 鈴木寿

警察部労政課長 斉藤逸徳

警察部特高課長 大宰博邦

警察部輸送課長 穴戸繁雄

土木部都市計画課長 竹重貞蔵

土木部河港課長 山口徳兵衛

三、全治一ヶ月以上ノ重傷者

土木部長 中島時雄

内政部兵事教学課長 松浦萬年

経済第一部食糧課長 小野政男

経済第二部軍需課長 奥村孝

警察部経済保安課長 麻生茂

警察部国民動員課長 永岡退蔵

なお、昭和二十年九月初め、県庁の移転先の東洋工業株式会社内で慰霊祭を行なったときには、死亡者数は七〇〇人ばかりであった(竹内メモ)。

犠牲者の数

昭和四十一年八月六日、広島県職員原爆犠牲者慰霊碑(元水主町県庁舎跡に昭和三十三年八月六日建立)前において慰霊祭が執行された際、その石碑に新しく奉納庫が作られ、九五二人の犠牲者の名前がおさめられた。この人数は、前記竹内人事課長の日記の数字より相当増加しているが、六日朝、登庁途中や市内の自宅において被爆死亡した者がかなりあって、後日判明した結果であろう。また、昭和四十四年八月六日(二十五回忌)の慰霊祭にあたって、同石碑の隣りに原爆犠牲者の氏名を刻んだ碑を建立することになったが、犠牲者数はついに一、一七二人に達した。

見解議員の被害

県議会議員の被害は次のとおりである(広島県議会史第五巻)。

死亡者 三人(小畑良助・福永友吉・吉田寛一)

重傷者 二人(柴田重暉・内田信夫)

家屋焼失者 四人(井口正男・中田収蔵・山本久雄・林興一郎)

十一、被爆後の混乱と復興状況

罹災証明書の発行

被爆当日は、庁舎・職員とも全滅に近く、行政機能は停止の状態に陥った。

爆心地から三キロメートル離れた旭町の家で被爆した援護課三谷昇事務官は、市中から続々と逃げて来る避難者を見て、罹災証明書を発行しなければならないと考え、爆心地からかなり離れていて焼けなかった大河国民学校に行った。既述のように、万一の災害に備えて二〇万枚の証明用紙を、市内の各学校の砂場に埋めていたのが役立ったのである。

三谷事務官は大河国民学校に駐屯していた暁部隊の指揮者に会って、罹災証明書の発行を依頼した。校庭の砂場から、壺に入った用紙を掘り出し、校庭に机を並べて兵隊たちが証明書を書いた。

校庭には死傷者がすでに充満していたが、そこへ更にトラックで運ばれて来る。それを降ろすのを三谷事務官は、一生懸命に手伝った。この頃まだ医師も看護婦も来ていなかった。

高野知事帰着

備後福山地方に出張していた高野知事は、黒田増夫秘書を帯同して急ぎ帰広し、まず安芸郡海田市町の警察置入った。そこで胸に繃帯をした警務課桐原次席(市役所内で被爆)から被爆の状況報告を受け、トラックで第一避難所である比治山の多聞院に、午後六時半ごろ到着した。

多聞院には、すでに負傷した服部副總監と石原警察部長が入っており、近郊の炊出しのにぎりめしや梅干の配給が、二、三人の警察官によっておこなわれていた。

県防空本部(県庁)の設置

総監府は大塚總監が被爆死亡したほか、他の職員も多数犠牲者を出し、その機能がまったく停止したので服部副總監は高野知事に対して、今後の一切の業務を県が指揮するよう指示した。

石原部長は、多聞院に県防空本部(県庁)を設置することにし、立札に書いて門前に立てた。

市中は猛火に包まれ、死者・負傷者などがあふれ、電信電話はまったく杜絶、交通機関も破壊され、事態を收拾すべき行政機関もまた壊滅に瀕した。その上、敵機が一機二機と偵察に来て、またも空襲かと、怖れおののいて市民らは逃げまどった。しかも警報を告げるサイレンもなく、各自が口々に伝えて避難するありさまであった。

服部副總監・高野知事・石原警察部長は、事態の收拾に鳩首協議を重ねるうち、幾人かの生き残った者や出張先から急ぎ駆けつけた者などが集り、午後八時から九時ごろにかけてようやく警察官を主体にした六〇人程度の陣容となった。

各方面に救援依頼

高野知事は協議の結果、内務省へ災害の概況を報告すると共に、近県に応援を要請し、また、県下各警察署及び地方事務所に対し、医療・食糧その他の救援隊出動を指令することにした。しかし、通信杜絶、交通機関壊滅という状態であったから、その通達も災害から免れた市周辺地域(海田市署など)の機関まで、伝令が徒歩で急がねばならなかった。

本部の移動

山口町の東警察署が、署員らの必死の防衛により火災から免れたので、県防空本部(県庁)は、そこへ移動することにきめた。このことについて、市内各所に貼紙をもって告示し、在広各官衙長ならびに各種団体長会議を県本部において開催する旨を知らせた。しかし、夜九時ごろ、七日午前十時に第二総軍司令部で、各軍官衙長会議を開催するという通知を受けたので、県主催の会議はこれに合流した。

石原警察部長の手記(新編広島警察史)に、「八月七日午前五時、本部ヲ多聞院ヨリ東警察署二階ニ移シ、救護関係ヲ主トシ全能力ヲ拵ゲテ万端ノ手配ヲ実施ス」とあり、続いて幹部の被害状況を記したあと、「斯ル情況ナルモ重軽傷ノ身ヲ以テ本部ニ参ズル者続出シ、県全般ノ事ニ付テハ高野知事、永野経済第一部長、及ビ小官ニテ総合的ニ指導シ、警察事項ニ付テハ大宰特高課長ヲ頭ニ田辺東警察署長、須沢宇品署長、各課次席警部諸君が共ニ当タルコトトセリ」

とある。

双三郡十日市町の出張先で、広島被爆の報に接した涌島秀行農務課長は、十日市町の救護班がトラック二台で出勤するのに便乗して、六日夜八時過ぎに二葉の里の饒津神社まで入ったが、避難者の大群に押されて前進できず、戸坂町に引返したのが、同夜の十二時であった。翌七日朝五時、またトラックで呉街道を迂回して入市し、負傷者のたくさんいる多聞院に到着したのは、すでに十一時になっていた。県庁はすでに東警察署に移ったと聞いて、そこへただちに駆けつけた。このとき、「署長室で高野知事にお会いした。そこには黒田秘書と田辺署長のほか、けがをしている石原警察部長と小笠原会計課長がいた。これに私と岩崎・鶴田の三人が加わって八人、とにかくこわれた物を片づけて臨時県庁を開設することになった。」とあり、また「種々な情報が来る。県庁員は秋吉内政部長夫妻はじめ殆んど全滅、市役所も粟屋市長死亡、その他もほとんどやられている。大塚総監は官舎で焼死、奥さんと娘さんは助かっている。副総監は怪我、永野県経済部長も怪我等々、この相つぐ情報に知事はまことに悲痛な面持ちである。そのうち『知事さん、申上げにくい事ですが、あなたの奥様も官舎(下中町)でお亡くなりになりました。』と、小笠原優会会計課長が報告した。ところが知事は、『ああ、そうですが。』のただ一言。

あとは市民救済の指揮。この簡単な一言、私は側で聞いていて、ああこれが長たり責任者たる者の心構えかと、感涙と共に思わず頭が下がった。それから高野知事の県庁における寝食を忘れた涙ぐましい活躍が始った(涌島秀行手記)。」という。

県下から続々来援

七日朝になると、県内各地から医療救護班や警防団、及び炊出しの食糧などが続々と到着しはじめ、仮県庁で、それぞれ出勤場所の指示を行ない、戦場そのものの救援活動に入ったのであった。

県救護本部設置

一方、災害時における救護指揮の元締めである県衛生課は、喜多島健磨課長が爆心地から一キロメートル余り離れた河原町の官舎で被爆し、肋骨を三本折って重傷、辛うじて高須の同僚、水野弘義医師宅に避難したが、他の一四〇人余の課員の消息はさっぱりわからず、ただ、避難途中に偶然群衆の中で出逢った四、五人のみがいるだけであった。

とりあえず、六日はその避難先水野弘義医師の宅を、「県救護本部」とした。

一方、六日午後四時ごろには、同課の村崎レントゲン技手がただ一人、衛生課の避難集会所の一つ古田国民学校(他の一つは皆実町の広島医学専門学校)において、松尾威佐美医師と佐伯郡原村の病院から来援した看護婦数人と共に、必死の救護活動を展開していた。

もうそれぞれ、個人個人が独自の判断で、その持場で臨機応変に活動するしかなかった。他の上司や同僚との連絡を取るという時間などまったくないのであった。負傷者はみるみる増加していき、バタバタと死ぬ。苦しみ喘ぐ声、悶え叫ぶ声の中で、寸暇もない活動であった。

翌七日朝、喜多島課長は、近所から借りて来た三輪車に乗せられて、古田国民学校に出勤し、あらためて「県救護本部」を設置した。

また、県病院跡に、「古田国民学校に県救護本部を設置した。」旨を書いた立札をたて、職員との連絡につとめた。

しばらくして、山口町の東警察署から連絡があり、その仮県庁に県救護本部を移した。喜多島課長は、ここで県病院の救護体制を整えると共に、次第に集って来た職員(二、三日のうちに四、五〇人集る)を指揮したが、職員もまた負傷者多く救護活動ははかどらなかった。ただ、宇品の陸軍船舶部隊の果敢な活動を得て、負傷者の収容や死体の処理などを行なうはかなかった。

また、薬品や衛生資材も市内に備蓄していたものはほとんど焼失したので、県下市町村や隣県にまで手配して、その収集に努めた。

この頃、出張先から次第に庁員が帰って来はじめ、ようやく県庁としての体制の立直しが考えられるようになった。

第二総軍と協議

七日午前十時、二葉山の防空壕にある第二総軍司令部の会議に高野知事と涌島農務課長が出席し、非常事態の収拾対策について協議した結果、空襲により指揮系統が破壊されたので、総軍が全般の指揮にあたり、応急措置を講ずること、各官庁は事務所の位置を決定することなど、その他当面の緊要な措置が決定されたのである。

知事諭告

この日、高野知事は人心の収攬をはかるため、次のような「諭告」を出した。布告文は六〇枚ずつ各所に配布されて掲示された。

知事諭告

今次ノ災害ハ惨悪極マル空襲ニヨリ我國民戦意ノ破碎ヲ謀ラントスル敵ノ暴略ニ基クモノナリ 広島県市民諸君ヨ 被害ハ大ナリト雖モ之戦争ノ常ナリ 断ジテ怯ムコトナク救護復旧ノ措置ハ既ニ着々講ゼラレツツアリ 軍モ亦絶大ノ援助ヲ提供セラレツ、アリ 速ニ各職場ニ復歸セヨ、戦争ハ一日モ休止スルコトナシ 一般県民諸君モ亦温キ战友愛ヲ以テ罹災者諸君ヲ労ハリ之ヲ鼓舞激励シ其速ナル戦列復歸ヲ図ラレ度シ

今次災害ニ際シ不幸ニシテ相当数ノ戦災死者ヲ出セリ 衷心ヨリ哀悼ノ意ヲ表シ其ノ冥福ヲ祈ルト共ニ其ノ仇敵ニ酬ユル道ハ断乎驕敵ヲ撃碎スルニアルヲ銘記セヨ 我等ハ飽迄モ最後ノ戦勝ヲ信ジアラユル艱苦ヲ克服シテ大皇戦ニ挺身セム

昭和二十年八月七日 知事高野源進

救援隊逐次到着

昨六日夜、指令した可部警察署を通じ、加計・吉田・三次・庄原・上下各署から、また海田市警察署を通じて呉・広島・忠海・西条の各署から応援警察官、各署半数で編成した救護班、道路啓開のための警防団、あるいは食糧の搬入者などが、逐次到着しはじめ、それらをそれぞれの部署に配した。

また、県下の地方事務所一か所から、一か所につき一〇人ずつ、かつて県庁に勤務していた経験者を出向させるように手配した。また、岡山・山口・鳥取・島根各県から五人ずつ、中堅職員の緊急応援を求めた。これらの応援職員で、県庁は幾らか業務が動くようになった。

柿本四三手記(原爆地獄)に、「八谷万一比婆地方事務所長から、君は家が五日市にあるのだから地方事務所に帰らずに、このまま県庁に出勤するよう命ぜられた私は、朝早くから夜遅くまで働いた。地方事務所から応援に駆けつけた連中は、机の上に仮眠する程度で徹夜の勤務であった。毎日のように階下の警察署には避難の人々の列が続き、つぎつぎに亡くなって行った。職員の方で来る途中で倒れ、机の上で亡くなった方もあった。涌島課長さんは奥さんを亡くされたにもかかわらず陣頭指揮に当たられ、庶務主任の藤巻小作官は、妻と長男を亡くされたのにひるまず、日毎の出勤だった。

毎日暑い中を荷車を引いて水主町(現在・加古町)の県庁の焼跡に遺骨を掘りに出掛ける係もあった。彼らの手でつぎつぎに白木の小箱がつくられ、祭壇を設け、英霊を安置した。私は食糧の配給を手伝った。

比婆地方事務所からは、所長を始め、加藤総務・鈴木経済の各課長、僧侶の田原宝一・坪倉孟・清水・一力の各氏らが応援にやって来た。その他、一緒に働いた連中に、黒川浩造・三原儀一・高谷高美・井上源憲・平岡憲市らの先輩、同僚の諸氏、病身の田原儀三氏、文書の整理に郵袋をかつぎ廻っていた児玉秀一氏などの面影が思い出される。」とある。

金融措置

この七日午前八時、日本銀行広島支店および芸備銀行へ知事の使者として小笠原会計課長が出頭し、罹災者に便宜を計る金融対策を早急に講ずるよう要請した。これによって、焼け残った袋町の日本銀行内に市内各銀行が集合して「自由払戻し」をおこない、罹災者の当面の必要経費に役立てた。

初の部長会議

同日午後二時には、初の部長会議を開催し、次のような事項を決定した。

イ、食糧其他ノ物資配給計画決定

ロ、屍体処理ニツキ刑務所の囚人四〇〇名ヲ使用スルコトト決定

ハ、僧侶ヲ動員シテ死者ニ対シ懇ニ誂経セシムルコトトシ、安佐郡・安芸郡・佐伯郡内僧侶十数名、八日午前八時迄ニ弁当持参集合セシムルコト

食糧配給対策

また、永野経済第部長を中心に涌島農務課長および地方事務所職員などが、次のような当面の問題を協議した。

(協議内容)

食糧配給対策

(一)缶詰 二十万人分 二十五万個

(二)蔬菜

(三)砂糖 一人宛 一斤

配給対象 負傷者・官公衛・防空要員・放送局・新聞社・警防団・消防署・警察署・救護班

(四)水産食糧

イリコ 一人当 十五匁 スルメ 一人当 三枚 ノリ 一人当 五匁
削鯉 一人当 十五匁 コンブ 一人 当十匁

(五)酒・煙草

酒 一人当 三合
煙草 一人当 十本

配給対象 砂糖ノ配給対象ニ準ズルコト 但シ、負傷者ヲ除ク

(六)配給機構

配給挺身隊ノ組織

西署 十ヶ所 安佐郡
東署 十ヶ所 安芸郡
宇品署 十ヶ所 佐伯郡

(七)食器の供出

安佐郡・佐伯郡・安芸郡ニ於テ各家庭ニ点宛

(八)草履

山県郡・賀茂郡・豊田郡・高田郡・御調郡・世羅郡各一戸毎ニ足宛

食糧その他の給与については、既定計画に基づいて、警察署が六日の午後三時までに、第一回の配給として、乾パン二万食を配給した。これに引続いて、九日までに給食した数量(竹内喜三郎資料)は、乾パン三五五、九八 食・握飯七五七、七一食・塩一、六〇〇匁・佃煮二八打・塩コンブ八 貫・梅干二五樽・粉乳六打・タクアン四四樽・ノリー九〇、 枚・野菜四五〇貫・缶詰一、二〇四打・塵紙四八 、 枚・マッチ一、四〇〇打・ロウソク五、八 本、ゾウリ二、 足である。

非常用食糧配給要綱によれば、警察が給食するのは二日間ということになっており、三日以後すなわち八月八日以後は、広島市役所が配給の責任を持つことになっていたが、市役所はじめその配給機関が壊滅して、まったく機能停止の状態に陥ったため、警察がずっと給食業務を続けねばならなかった。

ようやく、十一日以後から、生存市民のあいだで適当に町内会組織をつくらせ、順次通常配給にするよう指導し、配給所も設けることになった。

軍の広警備命令

七日午後六時に陸軍船舶司令部(宇品町)において罹災対策協議が開催され、県から出席、「広島警備命令」を受けた。これは、畑総軍司令官から佐伯文郎司令官が、広島警備担当司令官に任命されたため、広島警備命令「広警船作命第一号」に基づく参謀長の指示により、戦災処理を行なうことになった。このようにして、軍・官・民三者一体の戦災処理対策が、ここによりやく本格的な軌道に乗って来たのである。

知事の視察

八月十一日午前八時半から、高野知事は市内および安佐郡可部線沿線の罹災者収容状況を視察した。その時の記録(横田健一戦災記録)に、「安芸高等女学校校舍倒壊シ、調査ノ結果、其ノ下敷トナリタル県庁員十二名(耕地課六名、調査課五名、畜産係一名)軍隊六十名、学校側一名ナリ。内死亡者県庁員一名、軍側十六名、学校側一名ニシテ未発掘ノモノ県庁員一名、軍側三名ナリ」とある。

この日、次のような措置もとられた。

(一)広島市内主要神社ノ復旧ヲ早急ニナシ一般市民ノ参拝が出来ル様ニ取運ブコトニ手配ス - 加藤警部

(一)戦災保護法ニヨリ死者一人当り金五十円ノ見舞金ヲ支出スルタメ金二百五十万円の臨時借入ヲナスコトノ手配ヲナス - 援護課

(一)本日午後四時ヨリ船舶司令部ニ於テ防衛会議開催、宍戸輸送課長及ビ小山事務官出席

義勇隊本部長の告知

八月十三日、広島県国民義勇隊本部長かち、次のような「告知」が出された。

告知

今度ノ広島市空襲ニ際シ偶々当日県下各方面ヨリ広島市ニ出勤セル国民義勇隊員中ニ相当数ノ犠牲者ヲ出シマシタコ

ト八洵ニ遺憾ノ極ミデアリマス。茲ニ不幸戦災死セラレタ各位ニ対シ衷心ヨリ哀悼ノ意ヲ表スル次第デアリマス。

惟フニ今次義勇隊諸子ノ死ハ正ニ"戦死"デアリマス。

立派ニ県ノ本分ニ殉ゼラレ皇国護持ノ礎石トナラレタモノデアリマス。

遺家族父兄ノ方々ヨ!!今ヤ戦局ハ本土ニ迫リマシタ。然シ神州ハ不滅、御心中ハ察スルニ余リアル次第デアリマスガ何卒徒ラニ悲歎ニ暮ルルコトナク凡ユル困苦欠乏ニ耐ヘ拔キ生産ニ防衛ニ挺身シオ互ニ助け合ヒ、イタハリ合ッテ最後ノ勝利ノ日迄頑張ッテ下サイ。是コソ皆サンノ夫ヤ子弟ノ仇ヲ討ツ唯一ノ途デス。

昭和二十年八月十三日 広島県国民義勇隊本部長

終戦

八月十五日、終戦。県庁本部(東警察署二階)に勤務している全員が集合し、正午にラジオで、終戦の詔勅を聞いた。横田健一(当時学務課勤務)の「戦災記録」に、次のとおり記述されている。

十二時ラジオ放送ニヨリ聖旨アリ。米・英・ソ・支ニ対シ ソノ要求受諾セリ万事休ス - 万感交々至リ熱涙滂沱タルヲ如何セン。

吾等皇国ニ生ヲ享ケ茲ニ多年幾度カ死線ヲ彷徨シテ死スルヲ得ス。八月六日又九死ニ一を生ヲ得、天未タ借スニ余命ヲ以テスルヲ感謝シ更ニ決死奉公ヲ熱願シアリシトコロ、コトココニ至ル。死所ヲ得サリシヲ亦如何セソ。嗚呼!!

東洋工業株式会社内へ移転

東警察署内の仮県庁は、八月十七、八日ごろから準備をはじめて二十日に、安芸郡府中町の東洋工業株式会社の三階へ移転した。県庁の移転に続いて、中国地方総監府をはじめ、農業会などの団体や裁判所・検事局など各種の機関が、この会社の中に移って来たので、相互連絡なども便利になり、ここが被爆後の行政の中心となった。

連合軍の進駐

八月三十日に、連合国軍最高司令部マッカーサー元帥が厚木から横浜に入ったが、これと前後してアメリカ軍が続々と、横浜、東京方面に進駐して来た。そして、九月十日、本土各地への進駐日程を発表したが、青森・北海道・佐世保・長崎・和歌山・四日市と共に呉市も指定され、呉市への進駐開始は十月三日予定と発表された。

連合国軍進駐対策本部設置

九月十三日、中国地方総監府が第二総軍・中国軍管区司令部・呉鎮守府・中国憲兵隊・陸軍船舶司令部・中国地方各県庁・その他通信局・鉄道局・海運局・財務局・食糧事務所などの代表を集めて、「連合国軍交渉連絡委員会」を設置したが、ついで広島県庁でも、九月十八日に「連合国軍進駐対策本部」を設置し、その受入れ体制を整えた。

広島県連合国軍進駐対策本部の機構(新編広島県警察史)

本部長 * 総務部 * 部長 * 分掌事務 * 主任 * 副主任

知事 * 総務部 * 内政部長 * 宿泊施設ニ関スル事項 * 内政課長 * 保安課長

知事 * 総務部 * 内政部長 * 接待ニ関スル事項 * 人事課長 *

知事 * 部 * 内政部長 * 経理ニ関スル事項 * 会計課長 *

知事 * 総務部 * 内政部長 * 庶務ニ関スル事項 * 人事課長 * 内政課長

知事 * 総務部 * 内政部長 * 県民指導ニ関スル事項 * 内政課長 * 特高課長

知事 * 保安部 * 警察部長 * 警備ニ関スル事項 * 警務課長 * 特高課長

知事 * 保安部 * 警察部長 * 紛争防止ニ関スル事項 * 特高課長 * 刑事課長

知事 * 保安部 * 警察部長 * 慰安施設ニ関スル事項 * 保安課長 *

知事 * 衛生部 * 内政部長 * 防疫ニ関スル事項 * 衛生課長 *

知事 * 衛生部 * 内政部長 * 病院ニ関スル事項 * 衛生課長 *

知事 * 食糧部 * 経済第一部長 * 食糧ニ関スル事項 * 食糧課長 * 農務課長、水産課長

知事 * 食糧部 * 経済第二部長 * 資材及生活物資ニ関スル事項 * 生活物資課長 * 林務課長

知事 * 輸送部 * 警察部長 * 自動車ニ関スル事項 * 輸送課長 *

知事 * 輸送部 * 警察部長 * 船舶ニ関スル事項 * 輸送課長 *

知事 * 輸送部 * 警察部長 * 輸送用燃料ニ関スル事項 * 輸送課長 *

知事 * 工作部 * 土木部長 * 建築ニ関スル事項 * 建築課長 * 都市計画課長

知事 * 工作部 * 土木部長 * 道路二関スル事項 * 道路課長 * 都市計画課長

知事 * 工作部 * 土木部長 * 電気・水道・瓦斯二関スル事項 * 保安課長 *

知事 * 工作部 * 土木部長 * 労務二関スル事項 * 国民動員課長 * 労務課長

こうして広島県は東京・横浜進駐の先例を参考に、急ぎ受入れ準備を進めたが、呉市の空襲被害、広島市の原子爆弾による壊滅により軍事施設はほとんど烏有に帰しており、また九月十七日の枕崎台風の大風水害により道路その他の交通機関が大きな被害を出している折から、受入れ対策を進めることが一層困難をきわめた。

進駐軍先遣隊と会談

九月二十七日午後二時から、呉鎮守府長官官邸において、進駐軍の第十軍団先遣隊レイノア中佐ほか黒人の大尉二人と、中国地方総監府山口参事官・広島県石橋経済部長以下関係各課長二〇人が会談し、進駐にともなう土地・建物その他の供与を得たいという要求を聴取した。会談のあいだ中、レイノア中佐の態度は、まことに謙虚であって、戦勝におごる様子はまったく無く、日本側の出席者の、心を打つものがあった。

十月一日午後三時、先遣視察団の乗ったホビー号が呉市広に入港した。本隊のヒル海軍中將坐乗のオーバン号は、九月十七日の台風により、呉市の被害が甚大であったから、広島県知事の要請により、十月二日以前に呉に入港しないということになった。

連合軍の進駐によって、原子爆弾により壊滅的打撃を受け、いまだ陣容も整っていない県庁であったが、一方では被爆後の救済対策と復旧対策を進め、一方では未経験な進駐軍対策を急ぎ進めねばならず、生き残った職員も各地から応援に来た職員も、まるでコマネズミのように昼夜の別なく立ち働いたのであった。連日、会議が続き、会議で申しあわされたことは、すべて不馴れで、しかも緊急実施の必要な問題ばかりであったから"疲れた"という言葉をはばかりほどの強行激務ぶりであった。

進駐軍対策

この時の会議の内容について、人事課長竹内喜三郎の覚書(雑記帖)によれば、次のとおりである。

(一)中国地方総監府の連合軍進駐対策連絡会議

九月三十日午前八時五十分から

1、本日正午迄に食糧課員一・会計課員一・都市計画課長及び課員一・建築課員(技術者)一・動員課員二・労政課員二を出頭させよ。

2、事務用品相当数手配せよ。

3、九月三十日現在で、呉・広地区伝染病発生の過去一年間の統計を十月二日までに提出せよ。

4、労政関係の機関とその責任者を報告せよ。

5、労務者一、 人を確保せよ。

(本件二については海軍側労務者六、 人を流用することに山口参事官から海軍側に折衝済)

6、昨日来、呉地区関係の建物接収について続々要求あり、現地職員更に充実の要あり、改めて要員要求をする。

(二)十月一日、山口参事官発、青木第一部長あて書簡

貴部主管武器保管引継に関する警察部課長会議は十月五日午後二時呉市役所において開催することに決定。呉鎮守府管下関係者召集せらるるにつき、各県に至急連絡召集願いたし。

(註)これは最初の武器保管引継打合せ会の召集についての連絡文書である。

(三)広島県庁の連合軍進駐連絡会議十月二日午後五時から

1、乗用車・貨物自動車の供出数を明確ならしめること。(輸送課関係)

2、道路標識を至急手配すること。(道路課関係)

3、呉港の航行禁止が十月四日午前 時から行われる。

4、自動車車輛及び運転手の手配。

(四)中国地方総監府の連合軍進駐連絡対策会議

十月三日午後二時から

1、労務者一、 人分の宿舎を手配せよ。

(海軍施設部のものを利用することに決定。寝具・食器など用意あり。)

2、労務者特配手続のため建築課員を派遣せよ。

3、通訳二〇人、十月六日までに呉に集結せしめ労務者使用の際の通訳に当らしめよ。

- 4、洗濯設備は海軍施設部に一度に一、 人分の洗濯をなし得る施設あり。
- 5、食糧としてフリカケ食・のり・罐詰・味噌・醤油・馬齢薯・塩を至急手配すること。
乾パソー、 人分二日間の用意あり。

(註)これは進駐に備え労務者確保のために行われた当面緊急措置である。

(五)広島県庁の連合国進駐連絡対策会議

十月八日午後二時から

- 1、進駐軍に対する事故の申入れ。
- 2、軍需物資受入課の設置(転用課設置に決定)
- 3、陸軍との打合せ状況の連絡。
- 4、海軍関係食糧中現に腐敗の虞のあるものの所在場所・品目・数量を海軍と連絡の上至急内政課宛報告のこと。

(六)広島県庁の連合国進駐連絡対策会議

十月十八日

- 1、道路課長十月十九日午後一時までに総監府へ出頭のこと。
- 2、進駐軍経費支払の件写を総監府に送付のこと。
- 3、R・マスター中佐の通告文(進駐に関するもの)を隣組に配布すること。
- 4、通訳の待遇問題、日当五円五〇銭を一〇円に引上げることに決定。
- 5、呉市長に糞尿汲取り、清掃等について警告を要す。
- 6、慰安婦の活動状況(保安課報告)

場所*期間*慰安婦延数*客数*水揚金額

吉浦*自 十月十一日・至 十月十五日、五日間*四四六八*七、四九三人*一五七、四二九円

白石*自 十月七日・至 十月十四日、七日間*三六四八*六、七四五人*一六五・六七〇円

つばさ*自 十月九日・至 十月十三日、五日間*八四八*三四六八*一九、三〇六円

計* *八九四八*一四、五八四八*三四二、四〇五円

なお、慰安所開設に当り、慰安婦を阪神方面から三〇人(身代金一人一万円)募集したほか、県下の貸座敷免許地、因島・府中・三原・木江・松永などから集め、十一月末では七二〇人に達した。しかし、同年十二月十六日に進駐軍将兵の立入禁止命令が出されたため、放免された売春婦が、広島駅前や的場町付近の闇市場中心に集り、これに暴力団が介入してゆゆしい社会問題が起きた。なお、進駐軍は、食糧も日本側の提供をことわり、すべて本国のものを使用した。

戦後初の県議会

十二月に入って昭和二十一年度予算を作成することになったが、内政部の財政担当官もほとんど死亡し、他にも適当な職員が見つからなかったから、予算編成事務は全く困難を極めた。まず、各部課から予算要求の資料を提出させたが、その課の予算係員のたどたどしい記憶に頼るほかないという状況であった。

十二月十日、通常県議会の召集に先立って、県政協力会(県会議員代表五人・市町村代表・翼賛会関係代表など三〇人)が召集され、県は終戦による一大転換予算の編成方針と予算額を内示して了解を求めた。引続いて十二日午後一時から一日間、戦後初めての県議会を召集し、新年度予算を上程した。

議場は、東洋工業株式会社の社員寮を「臨時県会議事堂」にあてて使用した。ひどく粗末な建物であったが、疎開先から持ち帰った演壇・議席・椅子などは周囲に似合わず立派で、この急場に役立った。

新年度予算の編成

新年度(昭和二十一年度)予算額は、総額四、七四〇余万円で、前年度(昭和二十年度)当初予算額より四二〇余万円の減であった。

予算内容は、戦後の社会治安維持・県民生活の安定・治水対策・教育再建の経費が大半を占め、戦後処理の就職斡旋・戦災者・引揚者の援護費なども計上された。

行政の平時化進む

一方、十二月十八日、県は、進駐軍との折衝のため、「呉渉外事務所」を設置、続いて二十八日には、物々交換取締規則をつくって、進駐軍将兵との物々交換を取締った。しかし、完全な取締りは望むべくもなく、広島駅前その他の闇市場には、進駐軍の持って来た食糧・タバコその他の物資が、自由に売買されて、本物の味覚から遠ざけられてい

た市民を魅了した。

進駐軍はまた民主化政策を強力に進め、婦人問題・労働者問題・あるいは教育制度・官尊民卑制度の打破、経済機構の改革などおこない、従来の地方官官制は大幅に改廃されたが、広島県行政もまた戦時機構の平時化が図られ、更に民主化が進められ、次々と抜本的な機構改革が実施された。

公選知事誕生

被爆直後から戦災者の救護・復興対策に、或いは終戦処理対策に没頭した高野知事は、十月十一日、警視總監となって転任した。高野知事のあと、十月十一日に児玉九一知事が就任したが、在任わずか一六日、同月二十七日に知事を辞任し、中国地方行政事務局長に転出した。ついで、近畿地方総監府副総監楠瀬常猪が、同年十月二十七日に広島県知事に就任したが、新しい地方制度による知事選挙に立候補するため、昭和二十二年三月十四日に現職を辞任した。後任に近畿地方行政事務局長次長武若時一郎知事が任命された。しかし、単なる選挙管理知事に過ぎず、一か月後に退任し、経済調査庁長官に転じた。

昭和二十二年四月五日、初めての民主選挙で楠瀬常猪が当選し、ここに初代公選知事が誕生し、新時代の県政が幕を開いたのである。

原爆当時の広島県庁

三谷昇(当時・援護課勤務)

一、八月六日

前日は日曜日であったが、当時は休日は全然なかったので、出勤して、疎開作業に疲れ果てて帰って来た。

そのため、六日は夜宿直で出勤しなければならないが、それまで休むことにして、旭町の自宅で妹と遅い朝食をとっていた。八時過ぎ、人の騒ぐ声が聴こえるので、西の方の窓に行き、空を見ると、B29 が三機、相当な上空を飛んでいた。その一機から、落下傘のようなものが落ちて来た。何だろうかな、と思いながら座敷の方に引返しかけたたん、外の真夏の日の光よりもさらに強い白い光にあたりが包まれた。

次の瞬間に、ガラガラと家全体が崩れ落ちて来た。私は妹の手を引いて、玄関から飛び出しかけたが、瓦が雨のように落ちて来るので、出ることができず、しばらく玄関に立停っていた。気がついて見ると左足に負傷していた。

家はほとんど全壊に近く、座敷も折れた柱や壁土が山のようになって、歩くこともできない。近くの親戚などに行くと、みな同じような状況で、茫然としている。被爆直後から、市の中心部には、ものすごい黒い煙が立ち上がっているのが見え、火ものぼっている。出汐町の方から、続々と負傷者が大河の方へ向って歩いてきた。衣服はボロボロで、やけどした皮膚をブラ下げている。

私は、これは市中も大変なようだと思いき、出勤しようと考えた。出汐町から比治山橋のたもとまで来ると、兵隊が橋を渡ることを止めていた。

京橋川の向うは、一面に火勢が強く、道路は瓦や死傷者で埋まっている。私は旭町に引返した。

まず罹災証明書を発行しなければならないと考え、近くの大河国民学校へ行った。ここには暁部隊が校舎に住んでいたのので、指揮者に会って発行を依頼した。校庭の砂場から壺に入った用紙を掘り出し、校庭に机を並べて、兵隊たちが罹災証明書を書いてくれた。

校庭には、死傷者が充満しているが、そこへさらにトラックで運ばれて来る。私もそれをおろすのを手伝った。家からなけなしの食用油を持ち出して、やけどに塗って廻る人も多かった。医者や看護婦はほとんど見られなかった。

宇品線の列車が、負傷者を一ぱいのせて宇品町の方へ時々走って行った。

夕方になると、校庭の隅に穴を掘って、死体を焼いた。その臭いは、旭町の通りの方まで立ちこめた。その夜は、庭に畳を敷き、カヤを木につけて寝た。市中は二晩中燃え続けた。

二、八月七日

まず県庁に出勤しなければならないと考えた。昨日の様子では、水主町の庁舎は焼失しているとみなければならない。前から渡されていた「県庁罹災の場合の移転先」という小さな印刷物には比治山の多聞院が書いてあった。

いつまた空襲があるか分からないので、嚴重に身ごしらえをして、鉄カブトをかぶって出かけた。

比治山の西側の登り口まで来て見ると、立札に、「県庁は山口町の芸備銀行(当時・東警察署)に移転」とあった。

西に向って歩いて行ったが、どこも瓦礫の山で、その間に死傷者が横たわっている。橋の上も死者がゴロゴロしており、下を見ると、上流から流れてきた死体が、橋げたにせき止められて、見渡す限り川に浮んでいる。

気がついて見ると、生きて動いている人よりも、死者の方が多いのだ。私はいつか死の世界に入っていた - 私もまもなくその中に入って行く。そういう思いであった。

ところどころで、兵隊が焼けた家の下から、死体を掘り出ししていた。山口町の芸備銀行に着いてみると、ここは、警察官や救援物資などでゴッタ返していた。長く見たことのなかった握り飯のつみ上げられているところで、聞いてみると、県庁は三階だという。上って行く途中、中二階に小部屋があり、高野知事の顔が見えた。三階の大広間に上ってみると、細長い椅子に、あちこち数人ずつ腰かけている。同じ援護課の宮田事務官や河野主事の顔が見え、なつかしい思いがした。お互いの無事を喜び合うまもなく、岩畔課長や同僚のことが気になった。千数百人もいた県庁職員は、この広間にいる数十人に減ってしまったのだ。

とりあえず水主町の県庁跡へ行ってみることにして、一同で出かけた。電車通りを紙屋町の方へ歩いて行くと、焼けただれた電車の中にも死者が黒く重なっている。

県庁跡に着いてみると、全部焼け落ちて、援護課のあった場所も、焼けた死体があちこちにある。机の位置で見当をつけて、拾った骨を封筒に入れて、名前を書いた。

県庁の中庭にあった大きな池の付近には、とくに死体が多く、池のふちにのめりこむようにして死んでいる者、松の木の中途にぶら下って死んでいる者もあった。

池の側のカラの貯水槽に、罹災証明書用紙を五万枚ほど入れておいたのを思い出して、トタン板のふたをあけて見ると、これは焼けずに残っていた。これを持って山口町の仮庁舎に帰って来た。

生き残った数人の援護課員で、罹災者の対策を協議した。「戦災保護法」の法規類も焼けてしまったので、記憶でやるよりほかない。応急援護については、衣食住の実物、または実費を支給することになっているが、県内や近県から続々と救援物資が来ているので、市に配給を一任して問題はない。住宅援護(一戸五百円)や遺族援護(一人五百円)については、被害の規模が分らないので、とりあえず、本省に三千万円の予算要求をすることにして、知事の決裁を得て打電した。

次に、市役所に行って、矢吹社会課長に会い、罹災証明書を、市内のできるだけ多くの場所で発行するよう打合せした。浜井配給課長が物資を配給して廻っているトラックに便乗して、また山口町の仮庁舎に帰った。

夕方、配給の握り飯を食べていると、暁部隊の兵士が、「県庁の藤井事務官を比治山に収容していますから、家族に連絡してください。」と、言って来た。

早速、庁員で藤井事務官の家族の疎開先の近くに住んでいる者に家族に連絡するために帰らせた。私も自宅への帰途、比治山に寄って藤井氏を見舞った。

三、その後

広島県庁は、山口町の仮庁舎から、数日後に、市外府中町の東洋工業の事務所に移った。

本省から、援護金の資金が来たので、市および芸備銀行と配布方法を協議した。市役所内に県庁の出張所を設け、ここで罹災証明書を持って、援護金の申請に来た者に交付の指図書を渡し、これと引換えに芸備銀行の窓口で、現金を渡した。

一方、広島市外に避難した被災者も多かったため、これに対する援護金は、地方事務所・市町村を通じて配布した。

東洋工業に仮庁舎をおいていた間の援護課長は駒田仁郎氏・中村博氏であったが、戦災者・引揚者の援護業務は多忙をきわめた。五日市の戦災児育成所・似ノ島学園・宇品の引揚民寮・広島駅前の引揚者相談所その他各地の授産施設などの設置と運営に、県が直接間接に援助を与える必要が多かった。

悲しき確認

藤原一美(当時・農務課藤原生熊の妻)

...一美は、五日目頃から確信のくずれてゆくのを知らねばならなかった。生きていたならばどのようにしても、一美の前に姿を現わす生熊(夫)なのだ。一美は、生熊は県庁に眠っていると悟った。

死者を焼く火がアカアカと燃える。その火を遠く望みつつ、一美は焼跡に向った。庁舎前の一角をしめて、ここにもズラリと並ぶ死体の列。

それは大半燃えて白骨となりつつあった。人影もまばらな夕暮れである。一美は一人の兵隊に尋ねた。

「あなた方はどこから来ましたの...」

「東京から」と答えた。

「この死者は、どの区域を集められたのでしょうか?」

「この一角……」と、兵隊は指した。この列の中に、よもや生熊が居るのではあるまい。

一美は庁舎跡に足をふみ入れた。ここに眠っているのだと直感された。

「あれほど一緒にと言ったのに……一緒にと言ったのに……苦しかったでしょうね!!」と叫び歩いた。その足許には、白骨がゴロゴロとあった。

火は燃えさかるし、夕闇の中に一美は動くことができなかった。

焼瓦一枚一枚めくるとも、生熊のなきがらを求めん、と決心した一美は、「気確かにして」と送られて出かけた。あの日から六日目である。道は取り片付けられているが、屍臭いよいよ立ちこめて、機能のすべてを失った廃都は、シラジラとむなししい。

一美は、庁舎跡に辿りつき、気構えを双の瞳に漲らし、ここらあたりと目する場所の瓦を、文字通り一枚一枚めくりはじめた。

焼瓦を一面に掩う純白の灰に埋もったさまざまな事務用品・湯呑・鉄カブト、役所らしいそれらの焼けただれた品が、ガラガラと音をたてて邪魔をする。そして、その下から真白な骨が現われた。一美は涙と共に合掌しつつ、慎重な扱いでそれを検べた。しかしピンと胸にひびくものがない。生熊の確認も得られない。また次を静かにめくっていく。

一美は、頭上を低くゆく米機のうなりも怖れず、一心に検べていった。続々とあらわれる白骨は、むしろ余りに多きに過ぎた。

舎屋の外側にあたる場所にも、白骨はそこかしこにたむろをなしていた。一美は立ち上って想いにくれた。

「貴き人様の遺骨を荒らしてはならぬ。生熊の最期の瞬間を見た人に、生きて残る人があろうかも知れぬ。今一度その人を訪ねゆき、状況聴取の上、的確な判定の下に探そう。」と思い直し、それら生存者の避難先を尋ねるべく再び仮庁舎に向った。鷹野橋にかかる時「広島県農業会」と記された石門の前を通る。建物は残りなく燃え失せて、石門だけ残るその場所には、その日も天幕が張りめぐらされ、出入りする人のはげしさは、今日の盛んな活動を思わせた。そこには、生熊の同郷にして盟友、因縁も浅からぬ農務課長涌島氏がいるはずだ。運命はこの中心的な涌島氏を爆弾の災禍から外した。強大なその組織の力に物言わせ、県下同志の参集を計り、職責に傷つき、あるいは倒れたる幾多職員の救護に捜査に、汗みどろな奮闘がなされているのだ。仁侠の士涌島氏にして、よくなせるその大活躍である。

一美は郷里との連絡の便を借りるべくその門をくぐった。涌島氏はすぐ見えたが、その面に熱汗はしたたり、声をかけることも出来ぬめまぐるしさであった。氏にも似ノ島救護所に容態危急を告げる愛弟がある。しかし、職責は一步もこの場を去らないのだ。しばし時を経て、一美は涌島氏に近づき、わがことの次第を語った。氏は一美への同情に堪えず、「お見かけのとおりにて、今、手が引けません。午後四時をすぎれば、多少の暇も出来ますほどに、御一緒に焼跡に赴き、平素の配置を知る私が見当をつけて見ましょう。」と、言った。

一美は、その言葉を百千の救援にもまさる感謝のうちに聞き、時を待った。

やがてそこはかとなき夕の色のおとずれる頃、涌島氏を先頭に、郡より救援の二、三人は一美を促して、県庁焼跡に赴いた。

「何か確証になるものがありますか。」と涌島氏。

「所持品はたくさんありますけれども、とてもわからないと思います。ただ入歯に特徴があります。」と、答えた。

「藤原君の机はここでした。爆心地はあの丸屋根上空。爆風はこの方向に来たはずです。椅子がこの様に飛んでいます。この推定よりすれば、藤原君は確かにこの辺におりますよ。」

てきぱきした判断である。そこは舎屋の外の軒下にあたる位置。すぐそばに排水溝が見られる。その時一人が、「ここにお骨がありますよ。」という。それは涌島氏の推定の場所なのだ。ただちに人たちは、その瓦礫をかき分けはじめた。真白い骨を集めかけたかと思う間もなく、出て来たのはバンドの止め金であった。

「これに見覚えはありませんか。」と、一美に差し出した。一美は手に取って見た。確かに見られた形であるが、焼けこげて模様の印象が錯乱する。すると続いて「歯が出ました。」という。「主人は歯がよくありませんでした。」と一美。「これはあまりよい歯ではありません。」獣医の一人は、その知識をとっさに表明した。

次の瞬間、大きな義歯を金でつないだ四枚続きの歯が、コロリと出て来た。

一美はアッと声をあげた。

「これです。これです。間違いありません。」と、その特徴のある一連の歯を手を受けた一美は、茫然となりゆく思いであった。

「まことに何ともお気の毒でした。ほんとお気の毒でした。」

人たちは、肺腑をつく響きをもって、この悲しき確認への辞をのべた。

一美は用意して来た蚊取線香の空罐に白紙を敷いて、そのなきがらを納めながら「それでは主人はもう何処からも帰って来ませんね。」と、血を吐くように叫んで落涙した。

人々の心づくしにより、小石が積まれ、水も捧げられた。

涌島氏は瓦の一枚を取り「農務課藤原君殉難の場 八月十二日遺族友人一同」と記し、碑銘の如く立てかけた。

生熊と接して、今一つの遺骨があった。それは席を同じくし、宿直を共にした僚友のそれと思われた。人たちは手厚くそれを掻き集め「農務課員のもの」と認めらる。遺品により調査ありたし」と、瓦に記した。

命を拾う

水野知文(当時・広島保健所勤務)

広島市役所の自動車の主任柴義彦さんのすすめで、今日から疎開まかりならぬという広島市から脱出、同氏夫人の故郷である佐伯郡宮内村字畑口という部落の、林サツさんの家におちつく。

鉄砲町の千日前あたりに住んでいたの、そのまま居れば当然死んでいたと思う。

毎日、疎開先の家から宮島電車の宮内停留所まで、二キロメートルくらいの距離を、自転車を出て、電車に乗り、己斐で宇品行き市内電車に乗りかえ、新川場町にある広島保健所に通うのである。

八月六日の朝、いつものとおりに広島市に向って出勤しようと、靴の紐をむすんでいるとき、宮内村でもずいぶん奥の力の黒折という部落から、知らない老婆が、五、六歳くらいの女児を背負って来て診察を乞う。(小生が医師であることを伝え聞いたのであろう。)

悪性の腸炎らしいので、いろいろ注意を与え、開業医につくことをすすめて出発。田舎家の表の入口には、小便所がよくあるものだが、この家もその例外ではない。ちょっと出がけにのぞいて見ると、女児にさせた血便らしいものがある。悪い予感のようなものが、胸元を走り抜けた。

このため二二分間隔の電車を二つおくれたことになった。この時間のズレのために命を拾うことになったのだ。

電車が楽々園を過ぎたあたりを進行中、ピカドンの閃光と爆音に見舞われたのである。

いつもなら、この時間頃は相生橋のあたりを市内電車で東進中のはずである。

楽々園あたりで電車はエンコ、下車して陸軍のトラックに乗せてもらい、高須の弟弘義の家に行く。同家に小生の母も同居していたが、幸い一同元気。爆風で東側の窓ガラスが吹きとび、その破片が鋭利な刃物のように、書棚の堅い板に突きささっていた。

弟は、広島県衛生課の主任技師(医師)だったが、当時は肋膜炎で病臥の身であった。責任感旺盛な彼は、早速、「広島県臨時救護所」を、この家の一室に準備していた。

おりもおり、弟の家へ、当の衛生課長喜多島氏が夫婦づれで、被災の身をいとわず、これも県の責任者の地位にある一人として、この急場での打つ手を相談にやって来た。かねての計画に従って、弟の家を「緊急広島県戦災救護本部」として、活動が開始された。

喜多島夫妻はかなりの重傷で、夜間は相当の発熱があった。

その日、己斐神社に上って、広島市が一大火柱をあげて焼け落ちる情景をつぶさに眺めて感無量であった。

救護態勢が次第に整って来た頃、自分は己斐国民学校に設置された救護所の所長を命ぜられた。

九月中旬頃までに一、五〇〇人くらいの患者を扱った。九〇〇人くらいは死んでいった。医者もやり、運搬人夫もやり、おんぼうの手伝いもした。

原爆症などということは少しもわからないままの治療には困りはてた。

その後、廿日市保健所勤務になり、昭和二十六年岡山に転じ、現在、岡山県立短期大学教授を勤めている。

付記・あの日の悪性腸炎の女児が、自分の生命を救ってくれたことになったのだが、八月の末、小生の息子三歳の宏澄が赤痢にて死去。女児の病気が恐らく感染したものであろう。あの血便の罪かもしれない。

八月七日に、広島保健所の焼け落ちた跡まで行って見たが、凄惨な光景は地獄絵図そのままであった。

私の原爆記

田中圭二(当時・竹原動員署署長)

青白い閃光が、列車の窓辺に二、三秒、文字通り天地に轟く大音響と共に、私の頭は硝子の破片をかぶり呆然。気がつくと、額から滝の様な流血で、白い靴を染めていた。

昭和二十年八月六日午前八時十五分、原爆が広島に投下され、阿鼻叫喚に陥った瞬間の一コマである。列車の便所の扉を靴で破って、車内に出ると四散した荷物で、通路は一杯で、人間は一人もいない。駅に爆弾が落ちたのだろうと、皆考えたのだ。挺身隊用鉢巻の布を拾って、負傷箇所の手当と繃帯をして地下道に降りて見て驚いた。道を埋めた乗客たちが殆んど負傷している。混雑をかきわけて改札口に出た。改札係はいない。駅前広場に出て見ると、これはまた大変な事態だ。

立体的大広島が、平面的ペシャンコ都市に変わり、ホコリのためか、天日為に暗しといった空模様になっている。火はまだ出ていない。顔見知りの広島駅の内田首席助役が、救護施設の指揮に当たっている。金筋入りの赤帽子が、極めて印象的に見える程、右往左往している。大部分の人が殆んど半裸状態であり、只事でないことを物語っていた。

「田中署長」と声をかけるものがある。広島駅の首席助役から三原駅長に、この間転勤したばかりの石田幾太氏だ。頭を負傷してごさる。鉄道病院に連れて行けという。四囲の状況上、不可能の旨を述べ、すげなく断ったが、この人は一命をとりとめて、今なお健在の由だ。(数年後のこと)

動かない電車の停っている電車道を、猿猴橋に出た。京橋町に出る道は、左右の家が倒れていて、山の尾根を行くアルピニストの様に屋根の上を行く。

一二、三歳位の少女が、「この下に、お母さんがいるから助けて下さい。」と、掌を合わせて縋りつかれたが、とても通常の術では不可能である。泣きすぎる手を邪険に払って行くことは、普通の場合の心理状態では、できることではない。肩の重いリュックも感じない程、昂奮と驚愕に包まれた。

私の目に今なお、マザマザと焼きつけられているのは、肥車を挽いた朝鮮牛が、主人を失って橋の上に、たたずんでいたトボケづらである。

医師と想像される、かっぱくの良い男の人を「先生、どうかして下さい。」と、火傷や負傷の男女が後を追いかけている。

「わしゃー何んにも持つとらんけー駄目だ。」と、苦しそうなこの禪一つの医師さんの臀部が、大きく割れているのをすれ違いに見た。

的場町あたりの電柱の変圧器が、火を噴いている。京橋通りは、既に火事で通過不可能だ。時々大砲の様な音がする。無意識に此处まで来たのだが、我にかえって見ると、三篠本町(みささほんまち)の留守宅の安否に気付いた。本能的に、此处まで来たのだろう。しかし京橋町は、火を発しているので行けそうにない。断念して再び元の道?屋根伝いに広島駅に引返した。駅構内にモグリ込み、元の騎兵隊寄り山手に出る考えだ。駅の裏手に積んである枕木が、独りで燃えているのが不審であったが、閃光と共に火を発した事が、後で判った。

途中、畑の所で横になって、駅の方角を見ると、駅舎もすでに火に包まれている様に見えた。市の上空は黒煙で覆われている。畑では、鈴なりのトマトを手当たり次第もいで、大きな袋に入れている女がいる。盗んでいる風だ。こんなのを火事場泥棒と言うのだろう。このトマトが、原爆負傷者にとって良い食べ物であった事も、後で知った。

二葉山麓では、池の金魚が皆死んで浮いていた。首をかしげながら、山の手道の道を饒津神社の方へ歩いていると、向うから大竹海軍潜水学校の生悦(きえつ)大佐がやって来る。

「署長、常葉橋の向うには火事で行けないよ。自分はこれから陸軍運輸部から、ランチを出して貰って大竹へ帰る。便乗し給え。」という。私が、大竹の動員署から、とっくに竹原の署長に転勤していることを、この大佐殿は忘れてごさる。この時その大佐殿が、原子爆弾のことを、獣脂爆弾と教えてくれた。(動物の脂が熱せられており、やけどをし火を呼んだとのこと。)

これも原爆の影響だったのか。「有難う。私はどうしても三篠の家に辿りついて、家族二人の安否を確かめたいから、失礼する。」と言って別れた。

しかし、常葉橋は渡れなかった。

路傍の石に腰かけて、行き交う罹災者の群をながめながら、方策を樹てた。急がば廻れだと、また元の道を引返し、今度は県庁の動員課の一部が疎開していた尾長の盲啞学校へ立ち寄って見た。今の広島職安所長の三宅卓三さんが、頭に裂傷を負っている。でも極めて元気そうだ。二、三の女子職員もいる。昨日の日付でやめた女子職員が、県動員

課に挨拶に来たが、硝子で額を負傷していた。結婚するのだと言う。気の毒だがまあ生きているから良いではないかと慰めた。

広島動員署の職員も避難して来たが、どうもここにいても危い。市内は、間断ない爆発音だ。飛行機の音もする。爆発はドラム罐であり、飛行機は、敵の被爆探査機であったことも、後で判った。

動員課の一行十人位が、此処を出て山を登り、どこかの防空壕に入った。そこで持参の弁当を食べた訳だが、この日十時には、任地竹原動員署に帰る予定で家を出た私は、弁当を持っていない、芋の茎の煮付けた惣菜の弁当を二箸たべさせてくれた誰かがいた。

一時間程して外に出て、なお山を登ると、陸軍の救護所が設けられている。女学生らしい女の子が五、六人、丸太棒の様に並んで寝かされ、「兵隊さん!水、兵隊さん!水、」と叫んでいる。ヤカンからほんの少しずつ飲ます水を、豚の顔のように腫れ上がり、唇だけ太くなった口が、ビシャビシャと舌鼓を打って吸っている。あの際、大量の水を与えた方が毒を早く排出してよかったのだとは、これも後で判った事だ。

この女学生らは、恐らく若き生命を、惜しくも散らせた事だったろう。

ここで繃帯をして貰い負傷箇所の手当をした。今や、日本は、のるかそるかの大戦争をしているのだ。が、本土に戦争を感じたのははじめてだ。

救護所を出て山越しに芸備線に出る事とした。一行は、前尾道動員署長、中田芳男さん(四十一年一月五日変死)・現在県職安課の奥くんと県の女子職員一人だ。途中、負傷者や頻繁に行きこう罹災者に会う。水を求めて入った家に、背中の皮のクルッと剥けた人がウナリながら、横になっていた。

また驚く。頭の毛が腕をかぶった様に、やけてなくなった人に行き会う。

逃げている人で、女の人のあられもない姿が目にも痛く感じる。金髪の外人の二〇歳位の娘が、身に一糸もまとわず、胸のあたりを両手で覆って、裸足で歩いて出て来ているのに出会ったが、双方共平気なのはどうした訳か。私らが芸備線にそって北上しているのと反対に、私の長男(市中二年生)が、線路づたいに広島に入って来たのだが会わなかった。

県動員課の酒井事務官一家の疎開されている藁葺屋根の農家の側を通ると、誰かが、奥さんが、ついこの間お産をされたばかりだと言う。酒井事務官は、あの日家屋疎開に動員されて出たまま、一片の遺骨も帰らない故人となられた。夫人は今、三児の養育につくされつつ、広島職安に務められている。

汽車の通らぬ芸備線を線路ぞいに深川に出て、対岸に辿りついたのは、午後七時ごろであった。可部街道は、広島市内から引揚げて来る負傷者と、歩けない重傷者でゴッタ返している。

一行は私ほか前記、中田・奥の両氏三人で、八木村の国民学校の女教師に、当時可部の署長であった藤本英三さんの宅を知らせて貰い、一夜の宿を乞うた。このあたりの家は、被害を受けていない。恵みの風呂で頭の中の硝子を洗い落とし、お互いの無事を祝った。私のリュックの中に、酒(家納喜)が一本入っていたのを出して飲んだが、酒のない時分ではあるし、とても酔った。

これもあとで判った事だが、酒を飲んだ人は、原爆症に罹るのを予防できたとか。

八木村から広島市の上空を眺めると、真昼の様に明るく、山火事も起きている様だ。人口四〇万の全市の七割方が焼けたとあっては、大きい方ではヒケをとらない火事であった訳だ。ジャガ芋の並べてある座敷に蚊帳なしで寝たが、酒の匂いと蚊にやられるのと両方で閉口した。

あくる日、可部線の電車が新庄橋まで通いはじめたので、乗せて貰った。(当時は乗物に乗ることは、非常に困難であった。)新庄橋で下車して徒歩で竹林を通り抜けると、私の家が見えるので心中、焼けているか否か、どうぞ無事であります様にと念じつつ歩いた。しかし、私の家の姿はなく、目標の煙突のみ焼跡の指標の如く、立っているばかりだ。

焼跡に辿りついて見ると、哀れ一握りの灰と化した我家に、甲の線香の煙にも似た余燼が立ち昇っている。妻がかねての緊急退避先から帰って来て、また、長男がどこからか出て来て、学童疎開の長女を除いては、三人皆無事を確認した。それに数羽の鶏も爆風で吹き飛ばされ、また焼跡にかえたのを、隣の方が、囲のなかに容れていて下さっていた。兎の二、三匹も生垣の隅で無事で、焼け残った財産としては、以上と長男が産湯を使った木のタライと、辞書一冊、他はことごとく本来空に帰した。

妻と長男は今一夜退避先に預け、任地竹原に帰ることにして焼跡を後にした。

高田・山県両郡の消防団の手で、市内の幹線道路上のみの倒壊家屋の片付けと、清掃がされていたが、枝路は手がつけられていなかった。

七日午後一時頃のこと、西警察署が横川電停付近の三篠信用細合の鉄筋建てを一時借入れて、市外に出る証明をしていたが、待合所は一杯の負傷者である。死んだ人、半死の人たどもいる。組合の倉庫の横に積んである死体を数えてみたら、約五十体あった。南無阿弥陀仏の称名も口に出ない。

横川橋から左折して、旧別院裏を相生橋に出るコースをとったが、まだ片づけがすんでいない。約二十体位の遺体に、今度は念仏を称えて相生橋に出た。別に気味悪くもなく、恐ろしいとも思わず平気であった。

相生橋の上で大きな軍馬が斃れて死んでいた。

商工会議所の前まで来ると、人ばかりである。のぞいて見ると、アメリカの軍人が、電信柱にくくられて皆から叩かれて死んでいた。可哀相な気がした。跡始末はどうなった事か、一向にきかない。

護国神社の前まで来ると、姉さんかぶりをした婦人に声をかけられて、よく見ると西の本券番の古顔芸者の一葉さんである。互いに無事を祝って別れた。このご婦人に今年の二月一日、偶然な処で面会したが、高校一年の子供があると言っていた。芸者という言葉で原爆に関し、思い出した事がなお沢山あるが、その話は後日に譲る。

山口町で任地竹原の消防団員に会って、地獄で仏とはホントにこんな事かと嬉しかった。(これは八日十二日頃の話である)一面の焼野原の方方で人を焼いていたり、馬が転っている間を、一本の木なく日影のない広島町の町を、部下を探して歩き廻ったのは、それから数日過ぎた日であった。放射線にもやられたかったのは、矢張り酒のお陰であったかどうか。

呉線矢野駅から漸く汽車に乗り、八時頃竹原駅に着くと、町長始め警察署長などが、堤灯を持って引揚げて来る人々を出迎えていた。警察署長森川隆一氏が、「お前は、悪運の強い男だ。」と評されたが、その後、幾年月を経過した今日、尚元気でいる私である。(註 私が二日ばかりで探した部下の、竹原動員署柿井事務官は、呉線狩留賀海岸の対岸の小島に埋もれていた。)

第三項 広島県警察部...71

(その一)広島県警察部(広島県防空本部)...71

一、当時の概要

概要

(イ)所在地

広島県警察部.....国泰寺町市役所内

(庁舎の北端、四階から地下室までを使用)

広島県防空本部...水主町県庁舎内

(ロ)建物の概要

(県庁、および市役所の項を参照)

(ハ)機構

(警察部)

警務課・情報課・特別高等課・輸送課・経済保安課・刑事課・警防課・労政課・保険課・国民動員課

(防空本部)

警備部・救護部・資材部・工作部・庶務部

(ニ)在籍者数

(一)警察官...定員約一、七四八人(ただし、警部以上を除く推定数)

しかし、被爆直前の実人員は、約九〇〇人程度であったと推定されている。このほか、昭和二十年五月、および七月の二回にわたって警察官吏の大募集(消防官も行なう)をおこない、巡査三五〇人程度を採用し、被爆直前には巡査二〇〇人の養成を行っていた。

(二)防空本部職員は、本部長は知事、各部長には県の関係各部長がこれにあたり、部員は各部職員を充てたから、県庁職員数と重複している。警察部長は、防空本部警備部長として部員をひきい、警務および治安の各業務を担当した。

(ホ)代表者

警察部 部長・石原虎好

防空本部 高野源進(県知事)

(へ)爆心地からの距離

警察部 約一・二キロメートル

防空本部 約九〇〇メートル

二、警防状況

防衛態勢の充実

昭和二十年三月ごろから、県下の防衛力の主力を広島市に集中して、大空襲掌の状況下に、その防備の万全を期していた。

県防空本部は県庁内にあったが、警察部は緊急事態発生に対処して、全員ただちに行動できるよう耐火建物の市役所内に移っていた。また、京橋町の川辺にあった東警察署(木造二階建)も災害の発生に備えて、被爆数日前に、耐火建物の山口町の芸備銀行支店に移った。

広島市内には、東・西・宇品の三警察署および警察警備隊(昭和十九年五月十二日発足)をはじめ、東・西両消防署、東・西・宇品の三警防団を配備していた。

これらの陣容は、警察部に警察官約一〇〇人、警備隊に警察官一三〇人(うち三〇人は松永町に分駐)、市内三署に警察官約二〇〇人、東・西両消防署に消防官約四〇〇人と自動車脚筒五六台をそれぞれ配置していた。

当時、警察部は各課とも常時三分の一の要員を宿直させて空襲に備え、警報発令の場合は全員即時登庁して、警戒配備につくことになっていた。従って、五日夜も、警察部警察官全員の三分の一約三〇人が宿直していたが、同夜の警報発令とともに、ほとんど全員が登庁し、それぞれの部署を守った。

六日午前二時過ぎに警報解除が発令されてから、宿直員以外の者は大半が退庁し、あとは宿直員だけで徹宵の警備をおこなっていた。同日午前七時九分の警報は、約二二分後に解除となったから、この時の登庁者は少なかったが、八時ごろになると、前夜来の不眠の活動にもかかわらず大部分の者が出勤して来ていた。特に警察警備隊は常駐であったから、松永町に分駐していた三〇人を除く全員が被爆した。

当時、警察部警防課勤務であった久城革目警部の手記「地獄を往く」によれば、「...中国軍管区司令部より警戒警報解除が発令されたのが、丁度午前七時四十分頃であったろう。室内のラジオは県内に米機四機が上空を飛んでいたがみんな脱去して一機もないと放送していたが、当時警防課長寺岡警視より警察電話で『警戒警報は解除されたが広島上空に米機の爆音を聞くから警戒を十分にしよう』連絡があり(これが寺岡課長最後の言葉になるうとは誰が知っていたことか)、その直前に、ラジオが『広島県に侵入した米機は広島湾上空を南下しつつある』と報じたので、南下途中にある米機の爆音と思料されるので注意警戒中であった。午前八時十五分頃であったろう。突然目の前に青い閃光がピカッと光ったと思った瞬間、かって経験したことのない轟音を感じた。」という。

当時警防課は、市庁舎北端地下一階の部屋にあり、情報課とならんでいた。

三、被爆の惨状

惨禍

建物の被害は、県庁舎内の県防空本部、市庁舎内の警察部をはじめ、警察・消防両練習所・警防会館・西警察署・同署派出所八か所・広島県警備隊本部・東消防署・同署出張所三か所・西消防署・同所出張所四か所・東警察署派出所六か所が全壊全焼した。

また、東警察署派出所一か所・宇品警察署派出所三か所・東消防署出張所三か所・西消防署出張所七か所が、半壊あるいはそれ以上の損傷を受けた。

人的被害については、後述するように壊滅的だ大打撃であった。

この結果、被爆直後に警察活動に従事し得る者は、全県下でわずかに警察官五〇〇人・消防官二〇〇人程度であった。

市庁舎内警察部の惨状は、市役所一階北端の一室(警察部輸送課)で被爆した妹島正巡查部長の手記(いづみ・昭和四十二年八月号)によれば、「...爆風の強さは、表現し難いのですが、課内の人も、机も、椅子も、勿論書類なども、一方の壁際まで吹きつけられてしまった状態で、私も嵐に木の葉が吹きとばされたように、一〇メートル位飛んで、吹きだまりのゴミのような状態になってしまいました。

体が痛くて立つことができなくなりましたが、腰を抜かしたのではないのに、腰の筋肉が大きく切られると、腰に

力が入らず立ちにくいのだということが体験でよくわかりました。

立つことができないのに乗じてでもないのですが、私を踏台にして外に逃げた人がありましたが、後で聞いたところでは、その人は外まで出たが、その付近で死んでいたそうですから、断末魔のあがきだったのでしょうか。倒れたからだを起こそうと思っても、手をつこうにも多くの傷が痛くてつくこともできず、従って、起きることができない。外は吹き上げられた木片などであろう、雪でも降るように、バラバラ大きな音をたてて落下しており、雨も降ったかもわかりません。」という状況であった。

また久城警部は、「……体を机の下より起こし、爆風によって私の体の上に後方の鉄の窓枠が覆いかぶさっている。木材・壁土その他の破片を払い除け、転げながら出口と思われる方向に走った。

地下室出口に行く途中、誰かが判らないが誰かが倒れているのにつまずいたので、声を出してその人を呼んだが、何らの答も得られないので、先程の爆弾投下によって爆死したものと思料し、そのままに出口の方向へ足を運びながら、大声で『みんな元気か、どうしている。』と、互いに暗黒の中に声を頼って、各々が近づいて見ると、出勤していた雇員坂本千恵子以外今田・島田の各雇員の姿は見えず、ただ声だけでその人を知るのみであった。

(中略)他の雇員の避難路を明示したのち、更に引返し、他の警防課員の消息を知るべく警防課に当てられていた地下室内に入ると、人の呻き声がするので、その呻き声を頼りに近づいてみると、当時警防課勤務中の消防士補秋山光二氏であることが、やや四辺が視界に開かれていたので判り、警防課勤務武道教師であった岡本此平・山田金光両氏などに竹梯子にのせて救助を託して室内に入ったが、同氏の形相は実に凄惨眼を覆うものがあつた。

その後、経済保安課長麻生警視・警務課桐原警部の両氏と会い、協議の上、私(久城)が県防空本部(県庁)に連絡に行くこととなった。その時、麻生課長の顔の皮は剥がれ、緊張を失った花びらのように赤く大きく開いて、白く煮えた顔の形相は物凄く、頭髪は頭皮と共に焼け剥がれているにもかかわらず、同課長は『僕も一緒に県防空本部に連絡に行く。』と負傷をおして出発された。(中略)県庁は倒壊後既に火災となっていたので連絡不能の状況にあつた。」という。

この久城警部自身も全身血染めの負傷をしていたが、市役所に帰って警防課松永警部補に応急手当を受けると、ただちに、被害対策について麻生警視・桐原警部・中川警部などと協議し、かねての計画どおり比治山多聞院に防空本部を移すことにした。しかし、すでに比治山方向では火災が発生していて、それもできなかった。通信も社絶しているもので、廿日市・大竹・祇園・可部・海田市各署にそれぞれ手分けして徒歩で連絡することにした。

久城警部が、廿日市署へ己斐消防派出所を通じて救援出動の連絡を依頼し、市役所に帰って来たのは、午後一時半頃であったが、市庁舎はすでに猛火に包まれていた。他の本部員らと北隣の公会堂の池畔に退避し、しばらく動かず火勢のおさまるのを待って、比治山多聞院にたどりついたのは、午後八時半頃であった。

また、悲惨を極めたのは、警察・消防両練習所で、約三〇〇人の警察・消防練習生と職員二〇数人が、集団的にそのほとんどが死亡したことである。練習所(水主町)が狭いため、中島国民学校の一部を借りて授業していたが、六日朝、校庭に整列して点呼をとっている最中に被爆した。校長福中定雄奏任警部は重傷の身を押して、住吉神社のところを学校の本拠として戦災対策に努めた。

また、これより以前に敵機の撒いた宣伝ビラによると「広島市を空襲する前に尾道・福山の両市を襲撃する。」というような内容が書かれてあり、石原警察部長はこれらの状況を判断して、尾道・福山両市の警備力増強のため、七月末ごろ、警察警備隊第二中隊のうち一個小隊約三〇人を、両市の中間にあたる松永町に分駐させていた。

従って被爆前の警備隊は、水主町に本部及び一個中隊(七〇人)、比治山多聞院に一個小隊(三五人)、沼隈郡松永町に一個小隊という配備であった。

被爆により、水主町駐屯の警備隊第一中隊は、中隊長竹田岩男以下全隊員が重傷を負い、多聞院の第二中隊残存小隊もほとんど傷つき、全隊員一〇〇余人中死傷者は実に九九人(うち一六人は即死)に達し、全滅に近い惨状であった。

人的被害状況

昭和二十年八月二十日付けで、警察部がおこなった警察職員の被害状況調査によると、警察部所管の一切の機関を含めて、次のとおりである。

(人的被害状況)

部署名 * 死亡 * 重傷 * 軽傷 * 行方不明 * 計

警務課 * 四人 * 一人 * 一人 * 一人 * 一人 * 五人

情報課 * 一人 * 一人 * 一人 * 一人 * 五人

特高課 * 五人 * 四人 * 一人 * 一人 * 一人 * 一人

経済保安課 * 六 * 三 * 八 * 四 * 二 * 一
 刑事課 * 〇 * 三 * 三 * 二 * 八
 輸送課 * 五 * 八 * 九 * 七 * 二 * 九
 労政課 * 三 * 五 * 二 * 三 * 三 * 四 * 三
 警防課 * 五 * 四 * 八 * 一 * 一 * 八
 東署 * 三 * 一 * 三 * 二 * 〇 * 七 * 四 * 三
 西署 * 三 * 五 * 八 * 三 * 一 * 五 * 六 * 一
 宇品署 * 〇 * 五 * 一 * 四 * 二 * 二 * 一
 警察練習所 * 四 * 四 * 八 * 一 * 四 * 二 * 六 * 七 * 二 * 六 * 一
 警備隊 * 二 * 二 * 二 * 六 * 八 * 七 * 九 * 九
 国民動員課 * 二 * 三 * 七 * 一 * 三 * 二 * 五
 広島国民勤労動員署 * 五 * 一 * 二 * 一 * 〇 * 八 * 三 * 五
 東消防署 * 一 * 五 * 二 * 〇 * 四 * 〇 * 一 * 九 * 九 * 四
 西消防署 * 二 * 一 * 二 * 四 * 五 * 九 * 二 * 七 * 一 * 三 * 一
 消防練習所 * 三 * 四 * 〇 * 一 * 八 * 二 * 五
 合計 * 一 * 一 * 九 * 人 * 一 * 九 * 八 * 人 * 四 * 一 * 九 * 人 * 二 * 五 * 五 * 人 * 九 * 九 * 一 * 人

この調査から一か年後(二十一年八月)の調査によると、死亡者のみでも、即死が警察官一五五人・警察職員七六人、消防官六四人・消防職員二人、計二九七人で、八月七日以降死亡したものは警察官一〇一人・警察職員一七人、消防官六二人、計一八 人で、合計四七七人に達した。まさに、壊滅に近い打撃であった。

なお、当時の課・署(所)別の実人員と比較すると次のとおりである。

課(所)別 * 職員別 * 被爆当時実人員 * 被爆による死亡者数(即死 * その後の死亡 * 計)

警務課(中国総監府を含む) * 警察官 * 一 * 〇 * 四 * 四 * 八
 警務課(中国総監府を含む) * 其他職員 * 五 * 八 * 一 * 四 * 八 * 二 * 二
 警務課(中国総監府を含む) * 計 * 六 * 八 * 十 * 八 * 一 * 二 * 三 * 〇
 情報課 * 警察官 * 三 * 一 * 〇 * 一
 情報課 * 其他職員 * 二 * 〇 * 〇 * 〇
 情報課 * 計 * 五 * 一 * 〇 * 一
 特高課 * 警察官 * 一 * 五 * 七 * 一 * 八
 特高課 * 其他職員 * 四 * 一 * 〇 * 一
 特高課 * 計 * 一 * 九 * 八 * 一 * 九
 輸送課 * 警察官 * 一 * 四 * 六 * 一 * 七
 輸送課 * 其他職員 * 一 * 五 * 四 * 一 * 五
 輸送課 * 計 * 二 * 九 * 一 * 〇 * 二 * 一 * 二
 経済保安課 * 警察官 * 一 * 六 * 三 * 五 * 八
 経済保安課 * 其他職員 * 五 * 〇 * 一 * 一
 経済保安課 * 計 * 二 * 一 * 三 * 六 * 九
 刑事課 * 警察官 * 一 * 三 * 二 * 一 * 三
 刑事課 * 其他職員 * 三 * 二 * 〇 * 二
 刑事課 * 計 * 一 * 六 * 四 * 一 * 五
 警防課 * 警察官 * 一 * 六 * 三 * 三 * 六
 警防課 * 其他職員 * 一 * 〇 * 二 * 二 * 四
 警防課 * 計 * 二 * 六 * 五 * 五 * 一 * 〇
 労政課 * 警察官 * 一 * 五 * 一 * 四 * 一 * 一 * 五
 労政課 * 其他職員 * 二 * 〇 * 七 * 二 * 九
 労政課 * 計 * 三 * 五 * 二 * 一 * 三 * 二 * 四
 保険課 * 警察官 * 〇 * 〇 * 〇 * 〇

保険課 * 其他職員 * 三五 * 九 * 〇 * 九
 保険課 * 計 * 三五 * 九 * 〇 * 九
 国民動員課 * 警察官 * 二 * 一 * 〇 * 一
 国民動員課 * 其他職員 * 二五 * 一 * 二 * 一四
 国民動員課 * 計 * 二七 * 一 * 三 * 二 * 一五
 警察練習所 * 警察官 * 二〇 * 七 * 四 * 一一
 警察練習所 * 其他職員 * 四 * 二 * 〇 * 二
 警察練習所 * 練習生 * 二〇〇 * 五六 * 五四 * 一一〇
 警察練習所 * 計 * 二二四 * 六五 * 五八 * 一二三
 警備課 * 警察官 * 一三〇 * 一〇 * 一三 * 二三
 警備課 * 其他職員 * 〇 * 〇 * 〇 * 〇
 警備課 * 計 * 一三〇 * 一〇 * 一三 * 二三
 合計 * 警察官 * 四五四 (内二〇〇人練習生) * 四五四 * 一一四 * 八七 * 二〇一
 合計 * 其他職員 * 一八一 * 五三 * 一六 * 六九
 合計 * 計 * 六三五 * 一六七 * 一〇三 * 二七〇

このほか市内の東・西・宇品三警察署、および大竹警察署の警察補助員の被害内訳は、次のとおりである。

署別 * 職員別 * 被害当時実人員 * 被爆による死亡者数 (即死 * その後の死亡 * 計)

東警察署 * 警察官 * 八五 * 二 * 七 * 九
 東警察署 * 其他職員 * 一〇 * 三 * 〇 * 三
 東警察署 * 計 * 九五 * 五 * 七 * 一二
 西警察署 * 警察官 * 一〇〇 * 三七 * 七 * 四四
 西警察署 * 其他職員 * 二五 * 一八 * 一 * 一九
 西警察署 * 計 * 一二五 * 五五 * 八 * 六三
 宇品警察署 * 警察官 * 五〇 * 二 * 〇 * 二
 宇品警察署 * 其他職員 * 五 * 〇 * 〇 * 〇
 宇品警察署 * 計 * 五五 * 二 * 〇 * 二
 大竹警察署 * 警察補助員 * 〇 * 二 * 〇 * 二
 小計 * 警察官 * 二三五 * 四一 * 一四 * 五五
 小計 * 其他職員 * 四〇 * 二三 * 一 * 二四
 小計 * 計 * 二七五 * 六四 * 一五 * 七九

(右表の警察補助員は警防団員から採用されたものである。)

なお、西警察署の被害は、昭和二十七年八月号「警友ひろしま」によれば、「戦時警察として署の定員一七三人が多数応召して、実員は九七人位で、欠員は警察補助員を充てていたが、署長以下の中核幹部は勿論総員四七人の警察官と、一般職員二〇人計六七人が庁舎と共に一瞬に犠牲となった。」と記述されていて、右表とやや数字が違っている。

また、消防署関係の被害については、次のとおりである。

部署別 * 職員別 * 被害当時実人員 * 被爆による死亡者数 (即死 * その後の死亡 * 計)

警防課 * 消防官 * 四 * 二 * 一 * 三
 消防練習所 * 消防官 * 一一〇 (練習生含む) * 八 * 一〇 * 一八
 消防練習所 * 其他職員 * 二 * 〇 * 〇 * 〇
 消防練習所 * 計 * 一一二 * 八 * 一〇 * 一八
 東消防署 * 消防官 * 一四八 * 二三 * 一五 * 三八
 東消防署 * 其他職員 * 四 * 二 * 〇 * 二
 東消防署 * 計 * 一五二 * 二五 * 一五 * 四〇
 西消防署 * 消防官 * 二〇三 * 二四 * 三四 * 五八
 西消防署 * 其他職員 * 五 * 〇 * 〇 * 〇
 西消防署 * 計 * 二〇八 * 二四 * 三四 * 五八

呉消防署 * 消防官 * 四八八 * 七 * 二 * 九
小計 * 消防官 * 五一三 * 六四 * 六二 * 一 * 二六
小計 * 其他職員 * 一 * 二 * 〇 * 二
小計 * 計 * 五二四 * 六六 * 六二 * 一 * 二八

呉消防署の応援隊四八人は、昭和二十年七月二日、呉市が B29 の大空襲により焼失したのち、県は広島市の防衛に主力を注ぐことにし、七月末に消防自動車八台と共に来広していた消防官である。

以下の各表を総計すると、次表のとおりとなる。

職員別 * 被爆当時実人員(広島市のみ) * 被爆による死亡者数(即死 * その後の死亡 * 計)
警察官 * 現職警察官 * 四九一 * 九九 * 四七 * 一 * 四六
警察官 * 練習生 * 二〇〇 * 五六 * 五四 * 一 * 一〇
警察官 * 計 * 六九一 * 一五五 * 一〇一 * 二五六
消防官 * (現職消防官)四一三、(練習生)一〇〇 * 六四 * 六二 * 一 * 二六
消防官 * 計 * 五一三 * 六四 * 六二 * 一 * 二六
一般職員 * 二三二 * 七八 * 一七 * 九五
合計 * 一、四三六 * 二九七 * 一八〇 * 四七七

四、被爆後の応急対策

応急対策の実施

石原警察部長は、上柳町の官舎で被爆し、家屋の下敷きとなった。左足を負傷したが辛うじて脱出し、居合せた情報課員と一緒に官省付近の人々の救出に努めたあと、登庁しようとしたが行かぬ、迂迴して市庁舎や総監府に行ったが、すでに焼け落ちていたため、比治山に引返さざるを得なかった。かねて災害時の集合場所と決めていた比治山多聞院にたどりついて、崩壊に瀕した同院前に「広島県防空本部」の立札を立てて臨時に開庁したのは、六日も午後五時ごろであった。このとき、本部の警察官は、石原部長と負傷した警察官との二人だけであった。

続いて服部副総監が到着し、六時半ごろに出張先から高野知事が帰任、七時半ごろ、須沢宇品警察署長と宇品警防団の中村藤太郎団長と二人が来た。須沢署長は、粟屋市長・吉田喜三太代議士・秋吉県内政部長が被爆死亡したようであると報告した。また、八時過ぎに備後松永に分駐していた警察警備隊一個小隊が帰広して、防空本部の陣容は、ようやく六〇人程度になった。

また、この夜、広島市役所の浜井配給課長と田窪主事が連絡に来て、状況を報告したが、これでようやく市役所との連絡がついた。

六日夜、多聞院に集った者だけが、暗い二、三本のロウソクの明りをかこみながら、戦災処理対策について協議を行なった。県防空本部はただちに、内務省をはじめ、隣接府県および管下警察署に状況報告(通報)し、近県に対しては、医師・医薬品などの応援を要請し、各警察署に対しては、食糧・救護班・警察官吏・警防団の緊急応援を下命した。

市内の通信施設が壊滅しているため、これらの連絡は非常に困難をきわめ、内務省に対しては、安佐郡原村の広島中央放送局中継所から無線電話を利用しておこない、その他の方面へは、安芸郡海田市町の警察署から電報や電話によっておこなった。

石原警察部長の手記「広島市原爆罹災下ノ警察二付テ」によれば、内務省へ報告の際、「当日比治山多聞院ノ防空本部ニテ、原子爆弾ナリト断定セルモ、当時、種々ノ影響ヲ考慮ノ上、特殊爆弾ヲ投下セラレタル旨、内務省ニ電報ス」とある。

(イ)内務省及び近県に対する報告(通報)

「広島市は、今朝特殊爆弾により殆ど全滅、市民の死傷多数、各庁各寮民間機関幹部の大部分を失う。医師・医薬・食糧其の他全面的の応援を求む。」

(ロ)警察署へ対する指令(警察部長から各署長あて)

八月六日午後八時三十分

- (一)広島市空襲被害は予想外に大なり、速かに食糧・救護班を出来るだけ多数送れ。
- (二)警察官・警防団員の応援を派遣すべし。
- (三)貨物自動車を出来る限り多数送れ。

(四)ロウソク・燐寸・給水用具例えば四斗樽の如きもの送れ。

(五)県庁員多数死傷ある見込み、指揮連絡に支障あり。各署は応援後自署同様献身的努力を払うべし。

尚地方事務所に連絡すべし。

部長は比治山多聞院、長官は安芸高女において指揮中。

(八)防衛本部長より各警察署長あて通報

八月七日、午前一時五分

(一)八月六日午前八時二十分頃特殊爆弾により広島市は殆ど全壊又は全焼し、死傷者九万人に及ぶものと推定せらる。県庁舎其の他官公署施設は殆ど全壊又は全焼す。

(二)県庁本部は取敢えず広島市山口町東警察署庁内（元合同銀行）に置き死傷者救護に努力中なり。

(三)大塚総監戦死、其の他各官庁首脳者の戦死傷者相当数の見込みなり。残存職員は高野知事以下士気旺盛にして敢闘中なり。

当時、芸備銀行山口町支店

救援活動

このような大混乱の状況のうちに、六日の夜は更けていき、翌七日朝、広島県庁および県防空本部は山口町の東警察署に移った。東警察署は後述のとおり、署員の果敢な消火活動によって、焼失を免れたのであった。しかし、ここに移ったときも、総勢はまだ僅か一〇〇人余りであった。その他はすべて死亡したか、負傷あるいは行方不明という惨禍で、市内の警察機能は壊滅に近いありさまであったが、七日午後から近郊市町村の応援警察官や警防団が到着して、それぞれ救護活動にあたったし、同日夕刻からは、可部(かべ)・祇園(ぎおん)・廿日市(はつかいち)・海田市(かいたいち)方面から警察署や地方事務所の指揮により、握り飯の炊出しがおこなわれた。また、県内各地から救護班が続々と広島市に向って出発し、不眠不休の救護活動が展開された。

この日、警察部は調査班を編成し、部内の罹災者調査にあたった。

その結果、水主町県庁内の労政課と猿楽町産業奨励館内の保険課は全滅、国泰寺町市役所内の警察部主力・水主町および比治山多聞院の警察警備隊・水主町の警察、消防両練習所・大手町の西警察署および同町の西消防署の職員はその大半が死傷し、東警察署と宇品警察署および東消防署員については、比較的被害が少なかったが、なお負傷者が相当あるということが判明した。しかも、津渡警務課長・寺岡警防課長・本田情報課長・松本西警察署長など上級幹部はなお行方不明(いずれも即死したことが後に判明した。)という状況であり、詳細なことはまったく不明であった。

こうしたなかにも、焼跡の治安対策は急務を要したから、警察部が警防活動の総合的対策樹立をはかり、現地における実質的活動は、田辺至六東警察署長、および七日付で西警察署長代理を命ぜられた警務課中津警部、および須沢良隆宇品警察署長の三人が、それぞれの管下地域で指揮をとり、各地から来援した警察官や警防団、その他医療救護班に対する指示、及び食糧(にぎり飯)の配布など、途方もない惨禍の応急対策に、軍隊と協力して着手したのである。しかし、夢想だにしなかった突発事態の前には、警察部の必死の努力にもかかわらず、救援対策も到底すべての地域、罹災者に行きわたることができず、悲惨限りない修羅場が各所で見られた。

前出の石原警察部長の手記の中の「比治山多聞院及び東警察署二於ケル県本部ノ活動」の項を見れば、当時の実状がよく判る。

一、比治山多聞院及び東警察署二於ケル県本部ノ活動

八月六日比治山多聞院二本部開設以来、警察官及び県庁員ノ召集ニ努メ、夕方ニ至リ漸ク高野知事・服部副総監ヲ初メ小官・県会議員一名・太宰特高課長・須沢宇品警察署長・宇品警防団長・警察官・県庁員等ニテ総計約三十名ノ召集ヲ見ルニ至リタルノミナリ。

(イ)其ノ間高橋海田市警察署長ニ伝令ヲ派遣シ、内務省・岡山県其他隣県・管下警察署等ニ電報ニヨリ状況報告、応援派遣方ノ通報ヲ為ス。

「広島市ハ今朝特殊爆弾ニヨリ、殆ド全滅、市民ノ死傷多数、各庁各府民間機関幹部ノ大部分ヲ失フ。医師・医薬・食糧、其他全面的ノ応援ヲ求ム」

大要以上ノ如キ第一報ヲ送ルト共ニ、幸ヒ岡山県小泉知事ハ、去ル六月十日岡山県知事ニ発令セラルル前迄、広島県所在中国行政協議会ノ参事官ヲ勤メ、広島市内ノ情勢ニ付テハヨク精通セラルルノミナラズ、高野広島県知事トモ極ク親シキ間柄ナルヲ為メ、其後八岡山県ヲ通ジ、内務省其他トノ連絡出来タルハ幸ヒナリ。

(ロ)尚広島市爆撃ノ際、予メ計画セル応援範囲ヲ拡大シ、県下西部全警察署・地方事務所(東部ハ未ダ爆撃ヲ受ケザル

三原則市・福山市・其他重要地点アル為メ除ク)ニ対シ、全面的ノ応援ヲ広島市ニ集中方命令ヲ出スト共ニ、中国総監府名ニテ近畿・九州・四国総監府及ビ中国各県ニ応援方ヲ依頼ス(医師・医薬品ヲ主トス)。

二、前述の如ク大災害ノ為、軍及ビ各官衙・民間・各団体トノ連絡モツカザル状態ナルヲ以テ、速ニ連絡ノ必要ヲ痛感シ

(イ)先ヅ本部ヲ明八月七日早朝ヨリ、唯一ノ焼ケ残り建物東警察署ニ決定シ

(ロ)明七早前十一時警察署ニ各軍・各幕・各廠・民間団体ノ代表者(代表者殉職セル場合ハ其の代理人)集合方ピラヲ作り、警察官・警防団員ヲシテ、広島市内外電柱其他ニ貼り、総合的ノ対策ヲ樹テントセリ。

(ハ)警察官・警防団員ヲシテ被害状況調査ヲ、夜中ナサシム。

三、八月七日午前五時、本部ヲ多聞院ヨリ東警察署ニ階ニ移シ、救護関係ヲ主トシ全能力ヲ拵ゲテ、万端ノ手配ヲ実施ス。

四、当時、幹部トシテハ高野県知事・服部副総監・小官・太宰特高課長・田辺東署長・須沢宇品署長、其他数氏ノミ。昨夜中ニ調査セル結果ニヨリ、大塚総監・秋吉内政部長、殉職セラレタルコト判明、其ノ他ノ幹部ニ付テハ状況不明、前記集合セル幹部ト雖モ皆重軽傷ヲ受ケタルモノニシテ、集合セザル幹部中大部分ハ、殉職又ハ重傷セルモノト認定セルモ、幹部ノ状況調査班ヲ数班出動セシム。其ノ結果、経済第一部長重傷、第二部長軽傷、警察部本田情報課長・津渡警務課長・寺岡警防課長・松本西警察署長・西消防署長・酒井技師(動員課?)・中元警部ノ諸氏殉職、斉藤労政課長・麻生経済保安課長重傷(斉藤課長ハ一〇数日後殉職)、其ノ他総監府川本参事官・花水・若槻・藤井ノ各副参事官殉職ヲ初メ、県幹部庁員ノ殉職重傷多数ニシテ、生き残りタル者ト雖モ、何レモ軽傷ヲ受ケ、尚ウラニューム症状ヲ呈スルモノ殆ド全部ナリ。

五、斯ル状況ナルモ重軽傷ノ身ヲ以テ、本部ニ参ズル者続出シ、県全般ノ事ニ付テハ高野知事・水野経済第一部長、及ビ小官ニテ総合的ニ指導シ、警察事項ニ付テハ太宰特高課長ヲ頭ニ、田辺東警察署長・須沢宇品署長、各課次席警部諸君ガ共ニ当ルコトトセリ。

(イ)県本部ニ広島市周辺及ビ県西部ノ凡ユル機関ヲ動員シタル外、医師看護婦等ノ全員応援ハ勿論、毎日三千名ノ町村民ノ動員ヲ願ヒ、死体処理、重軽傷者ノ医療救護(焼失ヲ免レタル赤十字病院ヲ初メ、市内各学校、高層建物ノ焼跡及ビ広島市周辺ノ学校、其他建物ニ収容)、罹災者ニ対スル食糧・衣料等ノ配給、焼跡ノ清掃ヲ行ヒタルト共ニ、東京・大阪・京都・兵庫・岡山・山口・鳥取・島根・四国・九州其他各県ヨリ救護班、医薬其他救護物資、人員ノ応援ヲ得、不眠不休ノ努力ヲ続行ス。

警備方面ニ於ケル権威者高野知事ノ指揮下ニ、全員必死ノ努力ハ、数日ヲ出デズシテ「広島市ガアノ被爆直後ノ惨状カラヨクモココ迄整理出来タモノ」ト、新聞記者ノ讃辞ヲ受ケタル程ナリ。只原爆重傷者ノ数余リニ多キト、原爆負傷者ニ対スル治療方法研究ナキ為メ、又収容建物ノ粗末ナリシハ、真ニ見ルニ堪エザル状況ニシテ、寔ニ遺憾ニ堪エザル所ナリ。

(ロ)尚警察部ノ殉職セラレタル課長・署長等ノ幹部ヲ初メ課署員ノ補充ヲ行フコトトシ、直チニ口頭辞令ヲ以テ発令ヲナシ、補充ヲ行フトモニ、他署ヨリ応援警察官ヲ夫々派遣セシメ、警察力ノ拡充ヲ行フ(尚警備ノ必要上西警察署ヲ横川駅付近ノ信用組合ノ建物ニ移ス)。内政部・経済第一、第二土木部ノ補充ニ付テハ、之レヨリ先七月中旬、地方事務所拡充ノ為メ各部ヨリ地方事務所ニ所長及ビ所員ヲ異動転出セシメタル直後ノ事トテ、其者全部ヲ復帰セシメ、補充ヲ行ヒタル為メ執行上便益ヲ得タルハ真ニ幸ヒナリキ。

(ハ)広島市内外ニ於ケル治安対策トシテハ、重傷者ノ医療救護ヲ主トスルハ勿論、避難民ノ収容救護ヲ次トシ、市内外周辺ニ於ケル治安維持、流言蜚語ノ取締リ、死体処理(夜間焼却)、道路ノ清掃整備ノ指導ノ外、県内外ノ応援者ニ対スル宿泊所、其他ノ斡旋、救護物資ノ処理等ナリ。

六、軍部及ビ各官庁トノ関係

(イ)曩ニ記述セル如ク、原爆当夜貼りタルピラニヨリ、之ヲ見タル総軍ヨリ、八月七日午前十一時ノ官庁・民間団体ノ代表者会議ヲ総軍ニテ行ヒ度旨申込ミアリタルニヨリ之ヲ譲リ、高野知事・服部副総監出席、軍・県・各官庁・民間団体ハ連絡ヲ密ニシ、全能力ヲ拵ゲテ救護及ビ治安維持復旧等ニ当ルコトヲ決定シ、毎日時間ヲ決メテ連絡会議ヲ行フコトニ決定ス。

(ロ)広島師団長・参謀・広島憲兵司令官及ビ高級幹部全員殉職ノ為メ、其ノ補充ヲ行ヒ、其後ハ広島師団長会議ヲ主催シ、呉ヨリ海軍モ出席、緊密ナル連絡ノ下ニ各種ノ対策ヲ樹テ直チニ実行ス。

(以下略)(新編広島県警察史)

なお、混乱の收拾にもっとも必要な通信機関がすべて破壊され、使用不能に陥ったが、六日当日の夕刻、いち早く警務課通信係によって応急対策が樹てられ、翌七日、岡山県から末友技師ほか八人の応援もあって、工事に着手し、八日には、県庁(鯨器)・三原警察署間、及び県庁・上下警察署間にそれぞれ一回線、九日には県庁・加計・五日市警察署間及び県庁・可部・西警察署(三篠信用組合)間にそれぞれ一回線、十日には県庁・呉警察署間の開通を見るなど、被爆後わずが一週間のうちに主要回線はすべて開通した。八月二十日頃までには、一応すべての回線が完了した。

五、復旧状況

復旧状況

被爆によって諸施設も人員も壊滅状態に陥った警察機関は、僅少な残存者と市外からの応援警察官の到着によって、一応の応急対策を推進したが、一日も早く本格的な陣容の立直しに迫られた。

被爆直後、焼け残った山口町の東警察署に陣取った県警察本部は、八月二十日に、県庁と共に向洋町の東洋工業株式会社に移転した。

これより先の八月十二日ごろ、向洋町の日本製鋼所の一角に本拠を移していた警察警備隊も、同時に東洋工業株式会社に移転した。

また、警察練習所は、八月十三日に賀茂郡西条町協和会事務所に移り、西条農学校を借り受け、生き残った練習生二、三〇人で教習を復活した。

そうこうするうち広島にも占領軍が進駐することになり、民心の動揺をおさえ、治安の維持を任務とする警察官の緊急な補充が要請されたので、九月十二日、練習所を東洋工業株式会社青年学校に移し、解体される軍隊(大竹・呉・安浦の各海兵団、呉の飛行予科練習生)から、復員前の軍人約三〇〇人余を、除隊を条件に隊からそのまま、半強制的に入所させた。

まったくその場かぎりの緊急措置であったが、当時の練習所教官松本進警部補の手記によると「...教養のなんのと言ってはおられない。また教科書もなければ、着せる服も剣もない有様で、一週間ないし二週間練習所に置き、まあ警備の心得といったような事を話して、ようやく警察手帳だけを渡して、服はカーキ色の軍服のまま、また剣は兵器廠からゆずり受けた軍刀を吊し、戦闘帽という姿で一線に送りだした(主に呉地方)。このような一週間ないし二週間組が四、五回位続いたが、この間練習所は全くテンヤワンヤの有様で、だいたい本人の希望もなにもきかず半強制的に入所させた連中であるから、気に入らねば無断で出て行く。ある時は、一室全部四〇人余が集団で夜逃げをしたという例もある。前の日の夕方は大勢いたが、朝食の卓についたとき、食事の余分が多すぎるといので調べてみると逃走しているという始末、遂に逃走防止の警備をつけたり、逃走日誌など備えて、いろいろ手を打ってみたが、この俄か採用の練習生には大して効き目はなかった。結局こんな練習生が前後四、五回計七〇〇人ばかり入所したが、出ていったのは四、五〇〇人程度で、一線に到着するまでに逃走する者もあったので、実数はそれ以下であったろう。とにかく当時、実数をつかむことは困難であった。」という状況であった。

また、教官も被爆により大打撃を受けており、当時の校長福中定雄警部も重傷で登校できず、どうにか動ける教官は、岩井・田川・松本の三警部補と、二宮・佐藤の二部長の五人だけであった。しかも、田川・岩井の両警部補もついに原爆症で倒れ、残るは三人の教官だけとなった。

このような状況下ながら、同年十月末ごろまでに、ともかく約七〇〇人ほどの警察官が採用された。これに加えて、復員した警察官や被爆負傷者の治癒などによって、ようやく一、七四八人の定員を確保することができたのであった。

なお、南方占領地における軍政の施行にあたり、昭和十七年六月から十八年十月頃までの間に、広島県警察官が二五人ほど転出していたが、終戦後、二十三年頃までには大半帰国し、二十七年頃までには、戦死した小松一夫を除く全員が帰還して本務についた。

壊滅した陣容の立直しを進める一方、過去の軍国主義戦時体制から、民主主義の平時体制への警察として、多くの改革が矢つぎ早に断行された。

県警察部も、これら中央の諸改革に応じて機構の改革をたびたび行ない、昭和二十二年末における広島県警察部の機構は、書記室・警務課・教養課・保安課・公安課・刑事第一課・刑事第二課・経済防犯課・通信課の以上一室八課であった。

特別高等警察の廃止

警察制度の中で、最も大きな変革は、占領軍最高司令部の要求(覚書)による一切の秘密警察機関または特別高等警

察(略して特高という)機関の廃止と、内務大臣以下特高警察職員の罷免(追放)であった。

広島県では、昭和二十年十月六日、警察部特別高等課および各警察署の特別高等係を廃止し、特高警察に従事していた警察官をすべて警務課勤務に切替え、昭和三年に創設された特高警察の歴史は、ここに幕を閉じた。

特高警察官の処遇について内務省は苦慮したが占領軍の至上命令により、同年十月十四日付で全国の特高警察官を休職処分に付し、翌二十一年三月、依願免の形式でもって一斉に退職させた。その人員は全国で五千数百人にのぼり、広島県では九五人に及んだ。

改革の混乱

まったく未曾有の大改革の前に、警察官吏の動揺も激しく、内部的混乱に陥った結果、警察官の執務態度もはなはだしく弛緩し、綱紀も崩れ、威信を失墜する者も多くあった。

このような悪い現象は、占領下という特殊な社会環境と、生活の窮乏と相まって容易におさまらず、教養の充実とか監察制度の強化など種々の肅正対策が講ぜられたにもかかわらず、昭和二十三年の警察制度改革のころまで続いた。

新しい発足

昭和二十三年一月十日、広島県では中央の改革方針に従い、警察再建を期して、新制度訓練の実施に入った。すなわち同日付でもって、県下五四か市町村に公安委員会が仮発足し、また、従前の地方官官制に基づく暫定処置として、警察署の区域ならびに位置、名称及び管轄区域、派出所の管轄区域を定めると共に、県下全警察官の異動を発令した。

新制度の訓練実施期間中に、各般の事務調整をおこない、同年三月七日、警察法施行と同時に、同法に基づいて県及び市町村公安委員会の正式発足、ならびにそれぞれの警察官吏の正式任命を実施し、県下一せい、名実共に新制度の警察が発足し、ここによろやく威信を持つ民主警察としての第一歩を踏み出したのであるが、しかし、占領下のことでもあったし、非常に複雑で困難な問題を、多くかかえていた。

生きることができた

菅田四郎(当時、警察練習所生徒)

昭和二十年六月二十日、一九歳の私は、深安郡神辺町の片田舎から、四角なトランク一つと雨がさ一本を持って、水主町(現在・加古町)の広島県警察学校(練習所)に入校した。

広島はさすがに中国地方随一の都会でいろいろな建物があり、道行く人の波も多く、兵隊の動きもはげしく、私の目を見張らせた。

当時、私の町からの警察官は三、四人くらいしかいなかった。それは、若い者のほとんどが戦争に勝たなければと、次々に応召していったからである。女子も戦争にそなえて、竹槍の訓練をしていた時代であった。

学校の教養二か月間のうち、一か月半はたちまち過ぎ去り、八月一日付でまた約一〇〇人の新人警察官が入校した。このころ、本土危しという声を耳にするようになり、県内にも敵機が来襲しはじめ、私たちは警官の指示によって、比治山に避難したことも、幾たびもあった。市民も防空壕にわれ先きにと飛びこみ、うらめしそうに空を見守っていた。

八月六日は、午前六時三十分起床した。七時過ぎ、警戒警報のサイレンが鳴ったが、まもなく解除になった。市内はふたたびあわただしく人が動きはじめた。

私たちの班は、作業に行くための準備をしており、私は班員の弁当を受け取りに、炊事場に行き、入口に立って時計を見ると、八時十五分である。そのとき雷光がひらめいた。「こんな良い日本晴にどうしたことが。」と、思っていると、ドガンと地鳴りがし、もの凄い音がした。とたんに意識不明になっていた。数分たって、周囲が熱くなり、意識を取りもどしてその場に起きあがった。

このときすでに、建物は火の海となっており、黒々と煙があがっていた。その火のなかを、男か女か判別できない人間が、走りまわっているのが見える。その後を追うように一、二歩進んだが、何ぶん周囲は火の海、そのうえ相当な負傷をしていて、またその場に倒れた。

誰に助けだされたのであろうか。気がついたとき、住吉橋の上に寝かされていた。上半身は裸で、どこで焼けたのか、焼け残ったボロボロの半袖シャツを着ていた。

右手と右半身は火傷し、負傷して額が裂けている。血が流れ落ちる。自分で見える範囲内の火傷部分の皮膚が、ちぢれて長く垂れさがっている。額も背中もおそらくこのようになっているものと想像される。

住吉橋には、数百人の市民が、負傷して虫の息で倒れている。橋の上には、私と同じように、いやまだひどく負傷

して、人間ではないような姿になった市民がたくさんおり、中には死んでいる人もいる。負傷しない市民や消防車が出勤して、救護や消火にあたっているが、救助はしても看護する人がいない。まるで戦場で玉砕でもしたかのような放置状態である。

坐っていても、痛いやら熱いやらで体の置場がない。いっそ死んだ方がましなような気がする。そうしているうちに、大八車で負傷者を運んでいる人が来て、私をその車に乗せた。広島赤十字病院入口まで来て降ろされた。そこに水道管が破裂して、水が噴き出していた。のどがひどく乾くので飲もうとしたが、看護婦が走って来て、水を飲むと死ぬと言って、飲ましてくれなかった。この病院で治療をしてくれるのかと思っていたが、病院にも火が迫って来ているとのことで、近くにいたトラックに乗せられ、宇品町の凱旋館(陸軍船舶司令部)にはこぼれた。そこにはすでに数多くの被爆者が右往左往して、悲鳴をあげていた。

軍医の手当によって、額の傷を一二針、右腕八針縫われた。「君は元気だなア。」と、軍医が励ましてくれた。

手術後、額から右腕にかけて、上半身ホウタイで強くしめつけられた。身体の自由がきかず、やっと歩行ができる程度である。手当の終わったのが夕方近く、夕日は西に傾いていた。私は途方にくれた。午後七時ごろであったか、「君はカナワ島へ行って療養してくれ。」と言う。テンマ船で療養所についてみれば、三〇人余の負傷者が手当を受けていた。ここで二日くらいのうちに、二、三人の死亡者があった。診療を受けても、一向に回復の見とおしがない。療養所で一生を終るのかと思うと気が気ではない。こんなときに思いたすのが父母兄弟のことである。被爆後は通信杜絶で連絡がとれず、故郷の者は、私のことを思って心配しているに違いない。ただ一人、島流しにあったような私は、そんなことをつくづく感じた。もう死んでいるだろうと思っていることはまちがいないと思うのであった。

療養中も、空襲警報のサイレンが鳴った。カナワ島の療養は四日間で、四日目の朝と思う。兵隊が一人やって来て、明朝午前三時起きと言った。何処に行くのか、自由にならないこの身体で……と思うが、兵隊まかせである。それが気がかりで、ウトウトしているうちに午前三時が過ぎた。兵隊の合図で暗やみの海岸へ出た。みんな棧橋に集った。島とは言え、早朝で肌寒く、毛布一枚で身をつつみ、波にゆれる棧橋に坐った。周囲は電灯一つ見えず、暗やみの海岸にさざ波の打ち寄せる音ばかりである。

全員集ったのであろう。ランチが浮き棧橋を引いて走りはじめた。柵のない棧橋に乗せられ、動けば落ちるといった、まるであなたまかせの棧橋の人となった。その棧橋に兵隊が二人、護衛として乗った。こうして送られる途中で死ぬる者もあり、死んだ者は、兵隊が腕時計など金目のある物は体からはずして取ったあと、死体を海に投げこんだ。乗っているあいだにも二、三回敵機が来襲したが、別に異常はなかった。

しかし、負傷者が、深夜と寒さのためか、体力がなくなったのか、毛布をかけたまま死んだり、あるいは負傷者自身が苦しみのあまり、体を動かして海に落ちたのか、大竹に着いたときには、数も少なくなっていた。

大竹では、トラックがわれわれを待っていて、それに乗せられ、大竹国民学校に運ばれた。学校は救護所になっていて、看護婦さんが担架で負傷者を一人一人教室に運んだ。

私ともう一人の警察官、それに刑務所の人と三人は、校舎入口の二室目に収容された。警察官は警部補であったが、その人の名前は現在記憶にない。

診療室に行ってみると、動員された医師がいて、右手と額のガーゼを取ると、そこから血と膿が流れ出た。医師が、ガーゼで拭き取ると、筋肉が赤くただれており、右手の穴の中にはまだ膿がかたまっている。医師は平気な顔で、その穴の中をピンセットで拭いてくれたが、腕はしびれるほど痛む。診療が終って室に帰ったが、腕は吊っているし、額は繃帯をしているし、体の自由がきかない。その上、暑苦しく、八エが傷の臭気集って来て、体を這いまわる。ついに傷口にウジがわいた。体中がむずがゆくなる。手が届かぬ。まったく死んだ方がましだと思った。

看護婦さんが時々診察に来て、ピンセットでウジを取ってくれる。こうした日が数日続いたころ、大竹の海軍施設が空襲を受け、われわれの所にもその爆弾の破片が飛んで来た。

「広島でも死ななかったのに、この大竹で死んでたまるものか。」と考えているうちに空襲は終わった。

八月十五日、治療を終って病室に帰って寝ていると、誰かが、「日本は負けた。」という。「今、天皇陛下が敗戦をラジオで放送された。」と、話しあっている。

終戦後、数日たったころ大竹警察署の竹下重一署長ともう一人(失名)の警察官が面会に来られた。このとき、上下の服と下駄一足をもらった。それまでは、捕縄と財布が偶然ながらポケットに残っていた焼ズボンをはいたままであったから、まったく感謝した。

身体もようやく回復し、食欲も出てきた。八月の末か九月の初めであったろうか。医師の許可を得て、ひとまず故

郷神辺に帰ることにした。帰るときには、誰でも散髪をし風呂に入って帰るのが普通であるが、私はまだ全快しているわけではなかったから、散髪も入浴も考えられなかった。

頭髪はボウボウ、体中が臭く、グルグルと繻帯を巻いた姿のまま帰ることにした。署長さんからいただいた服と下駄と、炊事係からもらった握りめしを左手に、一本の杖をついて救護所を後にした。午前十時ごろ、大竹駅から汽車に乗ったが、一か月も離れていた広島市の焦土を車窓から眺めてつくづくと敗戦を感じた。

車内で、傷が乾燥し動くたびに痛む。駅に着くたびに傷口に水を掛けて痛みをこらえながら、糸崎駅に着いた。ここで乗換えである。上り列車に乗りかえると、乗客は軍人ばかりの復員列車で、私のような身体障害者は、とても乗れそうにない。仕方なく駅長に頼んで郵便車に乗せてもらった。

福山駅に下車し、福塩線ホームに立っていると、さすがに私の故郷とあって、知人が多く目についたが、みんな私をこじきかのように、横目に見て通り過ぎる。誰一人として話しかけてくる者はいない。

乗った電車も通勤者が多く、私はまた頼んで車掌席に乗せてもらい、やっと神辺駅につくことができた。ホームに出ると、突然、開札口に、姉が福山に帰るため立っていた。

「四郎さん。生きていたのか。」と、姉は目をうるませて言った。姉と別れてから、疲れた足と体の痛みを杖にささえて、トボトボと歩いて帰る途中、どこから聞いたのか、「四郎さんが帰って来た。」と、人々が騒いでいた。佐藤工場まで帰ったとき、佐藤さんと子どもさんがリヤカーを引っぱって来て、乗せてくださった。私は何とも言えぬほど感激した。

自宅の家にたどりつくと、自分ながら、「よう帰ったなァ、よく生きていたものだ。」と感じた。家には、私の知らない人が多くいた。福山や長崎の親類の者が、空襲にあって逃げて来ているのであった。

私は涙にくれて一言も出なかった。痛む傷口を母に手当してもらい、床についた。母が言うには、「わたしが、八月六日に芸備線で、広島に面会に行く途中、なんという駅であったか忘れたが、広島に爆弾が落されたから、ここから歩いてくれと言われ、歩いて広島に行ってみると大火災で、そのまま二、三日探し歩いたが見つからず、おまえは死んだものと思って、帰ってから仏様に白木の箱をまつり、毎日、念仏をあげていた。」とのことである。

帰宅後、一週間くらいたったころ、気がゆるんだのであろうか、発熱しはじめた。意識がもうろうとし、頭髪が脱げだし、歯ぐきから出血し、うわごとまで言うようになった。

地方の医師はみんな広島市の救援に引き出されており、田舎では治療が受けられなかったが、家族の温い看護によって、一週間くらいしてから熱が下りはじめ、元気をとりもどすことができた。

私が神辺に帰って来てからも、次々と多くの人々が帰って来たが、負傷もしていない人まで死亡したということである。とにかく奇跡的に回復した私は、同年十月三十一日、ふたたび警察官として呉市広警察署に赴任したのであった。

(その二)東警察署・西警察署・宇品警察署および東・西両消防署... 101

一、当時の概要

概要

(イ)所在地

東警察署 広島市山口町(芸備銀行山口町支店建物を借上げ)
もと猿猴橋西詰(京橋町)にあったが、被爆直前、ここに移転した。

西警察署 広島市大手町一丁目

宇品警察署 広島市宇品町

(ロ)建物の構造

東警察署 鉄筋コンクリート造四階(うち地下一階)

西警察署 木造二階建

宇品警察署 右同

(ハ)在籍者数

(三署とも、県警察部の項参照)

(ニ)代表者

東警察署 署長・田辺至六

西警察署 署長・松本佐四郎

宇品警察署 署長・須沢良隆

(ホ)爆心地からの距離

東警察署 約一・三キロメートル

西警察署 約一五〇メートル

宇品警察署 約五キロメートル

二、被爆の惨状

惨禍

県警察部の全焼と共に、その管下機関も、大手町の西警察署・西消防署、八丁堀の東消防署、水主町の警察、消防両練習所・警察警備隊、および市内の大半の派出所などが全壊全焼し、人員の犠牲も多数におよんだ。

宇品警察署だけは一部破損にとどまり、須沢署長以下が、被爆直後、専売局前まで進出して避難者の誘導・罹災証明の発行などの救援活動をおこなった。

東警察署

また、東警察署内には炸裂時、一〇人ほどいたが、駆けつけた田辺署長や小田敏之警防主任などが決死の防火活動を展開し、ついに死守した。

田辺至六著「原爆回顧録」によれば、当時の東警察署の状況は、次のとおりである。

「(前略)台屋町の官舎から山口町の警察署に向う途中、付近の数ヶ所では既に火災が起きていたが、如何ともすることは出来ない。そのとき筆者の脳裡に浮んだものは、『このままにして置けばきっと大火災になるのだが、今のうちに消し止める方法はないものか。』ということであった。しかし折り重なって倒れている家屋を踏み越えて、発火現場に到着することは到底容易の業ではなく、仮りに現場に到着しても、果して消火器や消火用水が何処にあるものか見当さえつく筈もなく、それがあらぬか誰一人として消火に立ち向うものはなく、唯一途に避難するばかりであった。(中略)その中にあって我々の籠城する鉄筋コンクリート造り四階建(地下一階共)の庁舎も、遂に猛火に包まれ文字どおり孤立無援となった。

するとおびただしい火の粉と紅蓮の炎は、ぶっこわされた窓という窓から、遠慮えしゃくもなく吹きこんで来る。その上強烈な熱気のため、あの厚いコンクリート壁が何ものをも焼きつくさんばかりの熱を帯びている。このため二階といわず三階といわず、さては地下室までも至る処で飛散した紙切れや、机・椅子など調度品の破片が燃えはじめ、随所に火災が起る。さあ、こうなるとさすがに我々警察官だ。たとえ身を犠牲にしてもこの庁舎だけは死守しなければならぬという強い責任感にかりたてられ、僅か数人の者ではあったが、生残りのしかも無傷の者が、お互いに堅い決意をもって消火にあたることを誓いあった。

最初のうちは各階に取付けてあった消火用のホースを利用してしたが、水圧が次第に低下して後にはその用をなさなくなった。そこでやむなく裏庭に設置してある貯水槽の水を使用することにしたが、その頃ともなれば庁舎の南隣に堆積してあった石炭や、その隣に山積された中国新聞社所有の新聞紙用の巻取紙が盛んに燃え始めたから、周囲の火勢は益々強くなって来る。そのため室内の空気は極度に乾燥して呼吸が困難となるばかりでなく、被っている防空頭巾も着衣も僅かばかりの火の粉で燃え出す有様である。そこで消火に立ち向うつど防空頭巾の上から全身にバケツ一杯の水をぶっかけて、或いは三階へ或いは地下室へと、火災の起っている個所を追って駆け上り、駆け降りるのだが、ゴムの長靴を履いていることと、頭からかぶった水が靴の中に流れこんで一杯となり、活動に大きな制肘を受ける。しかしその水を出すだけの余裕がないほど危険が押し迫っている。この一事を以ってしても当時如何に急迫した情勢下に置かれていたかが理解できると思う。

靴の中に水のはいったまま数十回、いや数百回階段を上下するので疲労に一層の拍車をかける。三階の窓ぎわで消火作業に夢中になっていた筆者が、ふと目を窓外に転じた瞬間異様に感じたことは、数日前重要書類を保管するため民間から借受けた土蔵が盛んに燃えているのであった。

一般常識として土蔵はどんな火災でも焼けないとされているにもかかわらず、今眼前に展開する土蔵の炎上を見て不思議に思ったのは一応無理からぬことである。しかし冷静に判断すれば、これは当然のことである。それは強烈な爆風によって土蔵の壁に亀裂を生じ、その隙間を通じて内部の木材に点火し、遂に炎上するに至ったものであろう。

一方庁舎前の電車道には、逃げ場を求めて避難する負傷者があとからあとからやって来るが、その大部分は重傷を負ったもので、しかも、もうもうと立ちこめる煙と強烈な熱風にあおられて息もたえだえとなっているので、路上に

バタバタと倒れる。

これら氣息奄々の避難者にはその場で一たん水をぶっかけてやる。すると息を吹き返し、さもうれしそうに我々を拝む恰好をする。これを見ては彼らがここまで辿りつくのにどんなに苦しかったかが窺われて同情に堪えない。これらの人々は水をかけてやったことによって一時小康を得たといえども、そのままにしておけば、猛烈な熱風と渦巻く猛煙のため、窒息してその場で死亡することは火を見るよりも明らかなので、手を触れられないまでに焼けただれた者、または骨折や重傷を負った体ではあるが、いたわりながら庁舎の内庭、事務室などに次々と引き入れてやる。

怒濤の一時に押寄せられるような物凄い騒音の中、しかも庁舎全体が猛火に包まれた中で、こうした消火と救護に死闘を続けること果して何時間であったろうか。空腹と疲労で、ともすればぶっ倒れそうになる。かてて加えて長時間猛烈な熱気に触れたため、両眼は盲膜を侵されたらしく極度にかすんで視力を失い、数メートル先も見えなくなって来た。(熱気のため視力を失うなどといっても信用されぬ方もあるかも知れぬが、筆者が身を以って体験したことなので一応書いて置く。)

それでもお互いは最後まで頑張りとおすことを誓って励まし合いながら死闘を続けた。我々の熱意と努力は遂に酬いられたが、全市(一部の町を除く)廃墟と化した焼野ヶ原の中にあつて、コンクリート造りや煉瓦造りなどの不燃質建物がここかしこに散見されるが、これらの建物は何れも外形を止めたに過ぎず、その内部はことごとく焼失していたにもかかわらず、我らの庁舎のみが内部の焼失を食い止め、直ちに負傷者を収容して応急手当をすることができ、また不完全ながら警察庁舎としての機能を果すことが出来たのである。

さしもの猛威をふるった大火災も午後四時頃ともなれば下火となり、わが庁舎も火災の危険から脱却することができ、我々もほっと安堵の胸をなでおろした(後略)。」

この必死の活動の中で、黒焦げ覆った日本刀のことについて、次のような手記も発表(いづみ・昭和三十一年九月号田辺至六記)している。

「全市火の海と化し、愈々わが庁舎も猛火に包囲され、孤立無援の状態となったとき、数人の同僚諸君と共に、庁舎を火災から守り抜くことを誓い合つて愈々活動に移つたが、そのとき同僚の一人が筆者に向い、『署長、あなたの佩剣(当時は指揮刀の代りに日本刀に外装を施して佩用することが一種の流行であつた。)]が、署長室に置いてありますが、あそこでは焼失するおそれがありますから、向い側の貯水槽の中に入れて置きましょう。』と云つて、その日本刀のほか二、三点の重要品を庁舎前の電車軌道をへだてた向い側にある貯水槽の中に入れてくれた。

コンクリート造りの貯水槽の中にほうり込んだのであるから、よもや火災のため焼けるような事はまんまんあるまいと、安心して消火や救護作業にあつたのである。

ところが、夕方になって貯水槽をのぞいて見ると、これはどうしたことであろうか。安全だと思つた貯水槽は終日のあの猛烈な火災の熱気で黒焦げとなり、しかも余りにも熱気が強烈であつたためであらうか、焼け細つて半分位に減つていた。」

このように獅子奮迅の活躍中にも、田辺署長は石原部長の安否が気遣われるので、署員二人を近くの部長官舎に派遣したが、時すでに遅く、官舎方面は猛火に包まれていて現場に到達することができず、使者の二人は帰つて来た。そのまま、当面の消火活動を続け、石原部長がたいした負傷もせず健在であることがわかつたのは、翌七日になつてからであつた。従つて、田辺署長は、六日に石原部長が比治山の多聞院にたどりつき、県防空本部を設けたことなどは知る由もなかつた。

また、自宅で来客と用談中被爆し、右足を骨折した東警防団団長松坂義正医師は、猛火迫るなかを家族に掘り出されて脱出、東警察署の前で、看護婦三人その他との協力で油・赤チンキを使い負傷者の救護作業にあたり、精神的な激励もするなど多大の活躍をした。午後九時頃、西条国立療養所の救護班(藤井所長以下八、九人)が来援し、松坂医師も治療を受け、六日夜は署内に泊つた。翌朝早く、署内の収容者をトラックで全員、安芸郡府中国民学校の救護所に送つた。

七日の早朝、高野知事や石原部長その他一部生残つた幹部職員が、この東警察署へ多聞院から移つて来て、「ここを臨時県庁にする。」ということになつた。

なお、同日午前十一時、石原部長は、軍・官公庁・民間団体の代表者会議を東警察署で開き、被爆対策を進める計画をたて、市内外の各所にピラを貼り出し、その集合を呼びかけたが、二葉山防空壕の第二総軍司令部から、同防空壕において開催したいという申入れがあつたので、これに同意し、東警察署で行なうことは取りやめた。

西警察署

爆心地に至近距離の大手町一丁目西警察署は、原子爆弾の直撃下であり、炸裂と共に壊滅全焼し、署内にいた職員も誰一人として助かった者はいなかった。

松本佐四郎署長をはじめ、寺川次席警部など中堅幹部・在庁全署員が死亡し、警察の機能はまったく停止したため、当時の警察部刑事課飯田久都次席警部の手記(いづみ・昭和四十二年八月号)によれば、七日午後二時ごろ、西警察署長代理に警察部警務課中津警部が任命せられた。そして、中津署長代理が相生橋から十日市電車停留所より己斐町に通ずる道路より以北の区域を受持ち、飯田次席警部がその道路から以南、元安川以西の区域を受持ち、須沢宇品署長が元安川(川中は除く)以東を受持って処理にあたることになった。飯田次席警部は、田中広署次席警部や被爆して負傷している刑事課の寺岡警部・同村上鑑識技手らわずか四人で、鉄筋建てで外郭だけ残った本川国民学校に本拠を置き、区域内の観音・福島・己斐・高須方面を西署久保警部補・小松部長以下署員二〇数人ばかりで、また、江波・舟入・吉島方面は西署員一〇人内外で、罹災者の収容救護・食糧の配給・死体の焼却・主要道路の整理清掃・罹災証明書の交付、その他の職務にあたったという。

また、当時小網町派出所詰めであった小椋惣三郎巡査は、五日夜からの当直で、六日の朝、食事に舟入仲町の自宅へ帰り、前夜捕えた窃盗現行犯人の関係書類を作りかけたときに被爆したが、辛うじて助かった。

七日に、本川国民学校にあって指揮をとる飯田警部の命令で、神崎国民学校跡に仮派出所を作り、救護作業にあたったが、その小椋巡査の手記(いづみ・昭和四十二年八月号)によると、仮設派出所には畳一枚が配られた。その上にただ一人坐って、野外派出所を開設した。体の具合が次第に悪くなったので、ついに畳の上に寝ながら罹災証明書の発行や各種配給品の証明をおこなった。

夜になると、焼残りの物資が盗まれるという届け出があるので、毎晩一人で傷ついた体をムチ打って巡回したけれども、盗難は少しも減らなかった。しかし、これも生き伸びようとする被災者の悲しい手段とあれば、またやむを得ないものであったろう、と小椋巡査は書いている。

毎日昼は、多数の人が人探しに出て来るのに、夜になると、みんな何処かへ帰って行き、焦土の中に孤立したまったく寂しい派出所であった。

このような活動を続ける西署は、被爆直後、鉄筋建の外形のみ残す商工会議所や本川国民学校に陣取ったが、のち、焼残った横川町三丁目の三篠信用組合に移り、県下各署からの応援警察官や警防団・医療班などを受け入れ、十三日までに一応の警務を終えた。

即死の松本署長は、被災時における食糧配給計画を樹てた人で、被爆後、罹災者へのにぎり飯配給が近郊市町村から、いち早く届けられたのも、この計画が実行されたからである。

浜井信三著「原爆市長」のなかに、「空襲をうけた場合の食糧は、はじめ市内の焼残った国民学校などで炊出しをして、被災市民へ配る計画であった。ところが、ある日、松本西警察署長から私(浜井)へ電話がかかって、

『東京など被災都市の経験だと、市内の学校などで炊出しするのは机上論で、とうてい実行できることではない。そこで計画を変更しよう。上司に伺いを立てていたのでは簡単にゆかぬから、これはひとつ二人でやってしまおう。』という。西署長は、言葉をついで

『私が海田市・可部・廿日市の三署長に話して、広島市がやられたら、この三署管内の町村でにぎり飯をつくって広島へ運んでもらう。使った米はあとで市が支払うことにする。これでどうだろう。』

というのだ。私は名案だと思って飛びついた。この案には久保防衛部長も賛成するし、のちにそれを知った県も協力することになって、安芸・安佐・佐伯三郡の地方事務所がこの計画に参加した。この"にぎり飯計画"のおかげで、被災後十日間は、市民の主食に関するかぎり、全く心配せずにすんだのである。」と、そのいきさつを述べている。

なお、七日朝から西署管内警備のため、外形のみ残る商工会議所に進出した須沢宇品署長・田村才四郎警防団副団長その他五、六人の警察官・警防団員らが、西署の焼跡を視察したが、焼跡は徹底的な壊滅状態でただ灰燼の一語につきるものであった。深く瓦礫の堆積している焼跡を掘り、死体を取り出していると、署長室跡から松本署長の帯剣であろうと思われる物が出て来たので、商工会議所(西署)へ持ち帰った。

宇品警察署

宇品警察署は、陸軍運輸部入口前の海側にあり、爆心から約五キロメートル離れていたから、建物の屋根瓦が飛び、窓ガラスが破壊された程度で、古い建物でも傾きはしなかった。

須沢良隆署長は官舎で寝ていて被爆し、閃光と異常な爆発音によって飛び起きた。足を負傷していたが、すぐ服を持って警察署の裏へ出たところ、白いカッター・シャツを血でまっ赤に染めた数人の署員に出あった。

須沢署長が「広島原爆医療史」の警察および警防団関係の座談会において語っているところによれば、これら数人の署員の応急手当をし、ふと見ると、モクモクと巨大な雲が上昇していた。宇品町五丁目の鉄道局付近へ爆弾が投下されたのだらうと思い、千田町の土谷剛二医師のところに負傷した署員を送ろうと、すぐ自動車を出させた。八時二十分か二十五分ごろ出発し、鉄道局の前まで行くと、キノコ雲は、まだはるか北の方にあった。では同町十四丁目の広陵中学校の方だろうと、自動車を進めて行ったが、そこも校舎が一棟倒壊しているだけで、雲はさらに北にあった。そこから御幸橋を渡って西側に出ると、市の中央部から脱出して来た無数の避難者に出あった。そのまま千田町の広島赤十字病院の前まで来ると、道路は落下した電車の架線をはじめ、壊れた物で雑然とおおわれており、自動車もパンクして進めず、そこから徒歩で鷹野橋まで進出した。時間は八時四十分ごろであったが、鷹野橋付近はもう所々火災を発生しており、そこから向う中央部へかけては、一面火の海になりつつあったから、御幸橋西詰めの千田町交番所まで、後退せざるを得なかった。

中央部から無残な様相の負傷者が続々と殺到して来るので、以前、東・西・宇品三署で地下に埋めて備蓄していた救急用の食用油(西が六〇罐・東が四〇罐・宇品が二五罐)を自動車で取りに行き、千田町の交番所に持って来させ、負傷者の応急手当をおこなった。これが九時か十時ごろのことであった。

避難者らは何処へ逃げて行けばよいか、全然わからず迷っていたから、須沢署長は、宇品の陸軍共済病院へ行くよう指示した。しかし、共済病院も相当の被害を受けていたうえ、無数の負傷者でたちまち収容しきれなくなったから、避難者らはさらに宇品の海岸の方へ向って歩いて行った。

十時半ごろ宇品警察署の本部とでもいうべきものを、一応専売局の前(現在のガソリン・スタンドの所)に決めて、避難者の救護活動をおこない、午後三時ごろになって市中へ出て来た。しかし、通れる道といえば鷹野橋から比治山へ通ずる道路だけで、大手町の方は火の海、その熱さにとうてい入って行くことはできず、比治山付近までくらいしか出られなかった。

六日夜九時ごろ、高野知事と石原警察部長が比治山の多聞院にいるということがようやく判ったので、中村藤太郎警防団長と一緒にすぐ行った。高野知事ら一〇人ばかりが暗い口ウソクを困んで協議中であった。須沢署長はそこでだいたいの状況報告をして帰り、六日の夜は進出場所を御幸橋西詰(千田町交番署前)に移した。

この頃ようやく広島全市が被爆したということが見当ついたので、塚前巡査に対して可部が海田市か、とにかく最寄りの警察署へ救援を頼みに行くよう命じた。オートバイで可部警察署に連絡した塚前巡査は、途中まともに前進できず、連絡をつけて帰って来た時は、もう夜の九時であった。

なお、前述の皆実町の専売局の前に引きあげたとき、宇品の方からの情報で、潮は満ち潮になっていて、市内各河川に被災者が多数集っているということなので、宇品の憲兵隊の高橋隊長と相談し、暁部隊の舟艇を出して救援することにした。

七日は、鷹野橋の消防署前にテントをはって、一日中救援活動をおこなった。この夕方ごろから、ようやく火熱のほとぼりもおさまり、中心部の紙屋町の方面にも行けるようになった。

八日の朝、宇品署の救護本部を相生橋東詰の商工会議所前に進めた。八日はすでに郡部から警防団その他が来援していて、道路の啓開をおこない、交通を確保することに努めていた。ここに十一日までいて、一応宇品へ引揚げたのであった。

以上、須沢署長の体験のとおり、警察三署のなかで辛うじて被災をまぬがれた宇品署は、原子爆弾炸裂直後から昼夜の別なく、少人数ながら全力をあげて救護作業にあたったのであった。

東・西両消防署

東消防署(署長・矢吹静雄)の本署は、八丁堀福屋百貨店旧館一階にあったから、爆心地に近く、たちまち火災に包まれて全焼した。

西消防署(署長・山名行雄)の本署は、大手町八丁目(現在の広島市消防局及び中消防署)にあったが、木造二階建の庁舎は、原子爆弾の炸裂と同時に倒壊し、全焼した。

消防署関係の建物被害は、次のとおりである。

署・所名*所在地*構造*被害状況

(東消防署関係)

本署*八丁堀旧福屋ビル一階*鉄筋四階建*外郭のみ残し内部全焼

下流川出張所*下流川町*木造二階建*全焼

白島出張所 * 白島官有地 * 木造二階建 * 全焼
京橋出張所 * 京橋町 * 木造二階建 * 全焼
段原日の出出張所 * 段原日の出町 * 木造二階建 * 半焼
矢賀出張所 * 矢賀町 * 木造平家建 * 小破
仁保出張所 * 仁保町青崎 * 木造二階建 * 小破
(西消防署関係)
本署 * 大手町八丁目 * 木造二階建 * 全焼
十日市出張所 * 新市町 * 準耐火二階建 * 全焼
舟入出張所 * 舟入本町 * 準耐火二階建 * 全焼
観音出張所 * 東観音町二丁目 * 木造平家建 * 全壊
三篠出張所 * 三篠本町一丁目 * 木造二階建 * 全焼
吉島出張所 * 吉島本町 * 木造平家建 * 全壊
皆実出張所 * 皆実町 * 木造二階建 * 全壊
己斐出張所 * 己斐本町 * 準耐火二階建 * 半壊
中島出張所 * 中島本町 * 木造二階建 * 全焼
南観音出張所 * 南観音町昭和新開 * 木造平家建 * 小破
江波出張所 * 江波町三菱造船所内 * 木造平家建 * 小破
宇品出張所 * 宇品町海岸通宇品警察署構内 * 準耐火二階建 * 小破
草津出張所 * 草津浜町 * 木造二階建 * 小破

東・西両消防署の本署隊は、庁舎全焼し署員も多数の犠牲者が出たため、消防活動はまったくできなかった。

しかし、本署以外の災害軽微な出張所では、ただちに火災現場に出動して消火活動にあたった。

(イ)仁保出張所の二階事務室で被爆した橋本義雄第三方面東部地区隊長は、ガラスの破片で首に軽傷を受けたが、一隊をひきいてただちに出動、段原国民学校をはじめ、広島駅付近の被災者救助、および消火活動をおこなった。広島駅前方面では、鉄道病院・荒神国民学校などの消火作業に努力し、学校から以東の延焼を食い止めることができた。

翌七日は東消防署職員死亡者の収容を行なうと共に、市民死傷者の収容救助にあたり、八日は芸備銀行本店の消火作業、広島県食糧事務所の食糧搬出作業などに従事した。

(ロ)矢賀出張所で被爆し、ガラスの破片で左足首に軽傷を受けた高田弘美消防官らは炸裂直後、愛宕町へ出動し、炎上中の湯沢綿業株式会社の消火にあたった。途中でポンプが故障したため、矢賀町の国鉄工機部で応急修理をして再出動した。このときすでに尾長町三本松の商店街は全焼し、村田木工所の表に火勢が迫っていたが、全力をつくして奮闘し、ついに延焼を食い止めた。

七日は署員の負傷者の救護にあたるほか、八丁堀の西消防署本署の焼跡の整理に従事した。八日の夜はじめて尾長町の自宅に帰ったところ、家屋が焼失していたので、温品村の知人宅に泊った。そして、十日から引続き消火作業や焼跡の整理などをおこなった。

(ハ)西消防署本署の寺岡俊一消防曹長は、講堂で、曹長任命式を待っているときに、山名行雄署長以下同僚と共に被爆し、建物の下敷きとなった。腰と足とに打撲傷を受けたが辛うじて脱出し、隊員の救出にあたった。まもなく近くの映画館別天座の方から襲って来た火炎に、庁舎が燃えはじめた。庁舎前の五〇石入りの貯水槽から、バケツ操法で消火に努めたが、水はまたたくまに無くなり、火勢はおさまらず、署員の救出作業もできなくなった。猛火は拡大し、周囲の建物がいっせいに燃え上がり、道路はすべて遮断された。山名行雄署長は「どこへも行くな、全員ここで戦死するのだ。」と、悲壮な決意で言った。署員たちは、庁舎南側にあった地下消火水栓の水を放出し、互いに身体にかけあいながら火炎の襲撃からまぬがれることが出来たのであった。

(ニ)己斐出張所の警備室で執務中に被爆した宮崎直治消防官らは外傷なく隊員四人とただちに出動し、福島町の中野化成工場と付近住宅の消火作業を七日の昼まで続けた。その後、市中から避難して来た数百人の負傷者を、廿日市町から救援に来たトラックに乗車させる作業を行なうと共に、己斐出張所に避難した負傷者の看護に活躍した。

(ホ)江波出張所での大川豊消防官らは幸い負傷しなかった。直ちに江波・舟入地域に出動して、消火作業にあたっ

た。九日からは西消防署本署勤務となり、焼跡の整理に従った。

以上の数例(広島市役所原爆誌その他)のとおり、壊滅的な打撃を受けた消防陣営ながら、動き得る消防隊は次表のように、それぞれ出来る限りの活動を展開した。

東消防署関係

隊名 * 隊員 * 出動日時 * 活動方面

仁保出張所(第三方面小隊第一分隊) * 橋本消防士補以下八人 * 八月六日・七日 * 段原大畑町・桐木町・東蟹屋町・愛宕町・若草町

仁保出張所(第三方面小隊第二分隊) * * 八月六日・七日 * 芸備銀行地階倉庫

仁保出張所(第三方面小隊第四分隊) * 中谷消防曹長以下一四人 * 八月六日・七日 * 段原大畑町・桐木町・荒神町・西蟹屋町

計四コ分隊 * 二八人 * * 八か町

西消防署関係

江波出張所(舟入小隊第一分隊) * 山口消防曹長以下八人 * 八月六日・日 * 江波本町・舟入本町・千田町・福島町・広島赤十字病院・工場

江波出張所(舟入小隊第二分隊) * 日野消防士補以下七人 * 八月七日 * 千田町

己斐出張所(己斐小隊第一分隊) * 白井消防士補以下七人 * 八月六日・七日・八日・九日 * 福島町・中野化成工場

己斐出張所(己斐小隊第二分隊) * 沖本機関員外 未詳 * 八月六日・七日・八日 * 己斐本町・福島町・天満町

草津出張所(己斐小隊草津分隊) * 丸川消防曹長以下六人 * 八月六日・七日・八日・九日 * 福島町・中野化成工場

観音出張所(観音小隊観音分隊) * 長以下 七人 * 八月七日 * 千田町・鷹野橋・広島赤十字病院

南観音出張所(観音小隊南観音分隊) * 橋本消防曹長以下六人 * 八月六日 * 観音本町

宇品出張所(皆実小隊宇品分隊) * 沖増消防曹長以下六人 * 八月六日 * 千田町・広島赤十字病院

計 八コ分隊 * 四七人 * * 七か町

(山沢亀三郎著・原爆と消防より)

なお、東・西・宇品三警察署、東・西両消防署の人的被害については、前項広島県警察部に記述するとおりであるが、鉄壁の防衛体制を誇った広島市も、原子爆弾の前にはまったく壊滅的な打撃を蒙り、重軽傷者のほとんどは治療援護も受けず、生きながらに焼死したり、倒れたまま悶絶した者が数限りなくあった。

行政改革

終戦後、行政の諸改革が実施されたとき、一面焦土と化して人口の激減した広島市では、市内に三警察署を存置する必要がなくなったので、昭和二十年九月一日、宇品警察署を廃止し、市内平田屋川を境に、東・西の二警察署の管轄として、両署の派出所の整理をおこなった。この処置により宇品警察署は、東警察署宇品警部補派出所として発足した。

また、東・西両消防署を併合して、広島消防署と改め、消防官吏の定員も縮減した。

原子爆弾投下時前後の状況

矢吹静男(当時・広島市特設消防署長)

一、被爆の位置

広島市の場町電車停留所

荒神橋西詰より約二メートルの橋上

二、状況

(被爆前正確な時刻不詳)、警戒警報の発令により広島市東部方面の警戒に出動し、警報解除により、電車に乗車するため行列の最後部(五〇人位行列)に従って橋上南側欄干にもたれて上空を眺めていると、一点の雲もない上空を北進する四発の飛行機を認め、"警報解除中だから味方機であろうか"と不審を抱いて注視していると落下傘が白くフワリフワリと漂っていた。すでに機影は安佐郡戸山方面に去ったと思うころ、(この間相当の時間があり、行列の乗客があれはなんだろう、と話し合う余裕があったから、当時の印象としては最少限一五～二〇秒の間あったと思う。)急にマグネシウムを焚いたような光と、地球が一時に爆発したようなしゃく熱を感じたので、無意識に橋上に伏した処、同時にコンクリート路面で無数の白煙が炸裂した。この炸裂状況は、あたかも無数の花火を一時に点火したように、個々

の炸裂体はそれぞれ別の炸裂を起こしたように感じられ、一個一個が皆路面に落すと炸裂したように感じられた。

私は至近弾と直感し、反射的に橋の欄干を踏み越えて、満潮の川に身を投じた。(その間ほんの二、三秒と思う)

私は爆風が来た時は既に水中にあったのか、光線は感じたが、爆風の音は聞かなかった。水中で軍刀を外し、素早く短靴を脱し、水面に浮上した時は真暗で何も見えず、しばらく橋げたにへばり付いて霧のようなものが晴れるのを待ったが、この間少くとも一〇分以上を要し、爆発原因が投下弾による霞町の火薬庫の爆発であろうと自己判断を下すだけの余裕があった。

霧が晴れて見ると電車待合せ中であつたと思われる動員学徒らしい四、五〇人の人は殆んど水面に浮上して助けを求めていたので、荒神町側に繋留された舟が見えたので泳ぎ付き、これを操って西側に引返し、約一〇人位を舟で救助して護岸に引揚げたが、その時気の付いた事は荒神橋コンクリート欄干南側が全部河に吹き飛んで無くなっていた。

すなわち私の飛び込んだ後に爆風が来たのだ。光線との時差で私ははるか沖に飛んだが一緒に吹き飛ばされた人、数人は河底の欄干の下敷きになって死んでいた。

被爆後火災の火の手が一番早く上つたのは、福屋旧館(八丁堀)であつた。

福屋旧館は当時一階は殆んど東消防署となつていたので、少量のガソリンが貯蔵されていたが、それ以外に一階北側に映画協会のフィルム約三、〇〇〇巻が貯蔵されていた。当時これは郡部に移す予定であつたらしいが、輸送の関係上そのままになっていたから、被爆と同時に発火したらしい。

東消防署仮庁舎として職員約四〇人、消防自動車四台が有つたが、職員は半数以上死亡し、消防自動車は一台も出動し得なかつた。

第四項 広島市役所...121

一、当時の概要

概要

所在地 広島市国泰寺町三九番地

建物の構造

敷地面積 二、九〇三坪一八

竣工 昭和三年三月二十八日

建築様式 耐震耐火の鉄筋コンクリート造

本館建坪 六一五坪八

延坪 二、六八九坪一〇

階数 地下一階・地上四階

室数 一一一室

工事費 七四万九、二二七円五〇銭

なお、外部はリシン塗仕上げとし、その腰部は広島産の花崗石張り、および人造石仕上げとし、屋上は議場の部分をアーチ型とし、その他はすべて陸屋根であつた。

爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、開庁の経過概要

明治二十二年四月一日、広島市は市制町村制施行に伴い、全国最初の市の一つとして誕生した。地方都市として新しく成立した広島市は、明治二十二年六月、市制事務取扱栗原幹元広島区長の管理のもとに、最初の市会議員三十六人が選出され、この市会で市会議長・市長の選任がおこなわれ、同年九月二十一日、広島市役所の開庁式が行なわれた。市庁舎は、中島新町の旧浅野藩米蔵跡の区役所がそのまま用いられ、以後三九年間市政の中心となつたが、市の発展と共に庁舎の狭隘をまねいたので、大正十五年、国泰寺町の元広島市立高等女学校の敷地を庁舎敷地としてえらび、昭和三年三月二十八日に鉄筋五階ビルの新庁舎が落成し、四月九日移転して現在の庁舎の基礎となつた。

三、被爆時の在籍者

職員名簿の被爆焼失により、確実な数は不明であるが、昭和二十一年版市勢要覧によれば、昭和二十年八月一日現在、史員三五八人、雇・傭人推定一、八七人で計一、四四五人となっている。

四、当時の機構

市長 粟屋仙吉
助役 森下重格
助役 柴田重暉
収入役 黒瀬斉
考査役 中原英一

事務局

秘書課
出張所
公会堂

会計課
考査課

市会事務局

総務部 部長 平井憲太郎

財務課

税務課

用度課

戸籍選挙課

戸籍選挙課分室(文徳殿)

教育部 部長 島田修三

学務課

浅野図書館

学校関係

練成課

兵事部 部長 森下重格(兼)

兵事課

軍事援護課

戦事生活部 部長 谷山源睦

配給課

生産課

振興課

日用品交換斡旋所

援護課

東公益質屋

西公益質屋

東隣保館

西隣保館

保育所

西診療所

統計課

工業指導所

屠場

保養院

火葬場

防衛部 部長 久保三郎

防衛課

疎開指導所
義勇隊本部
施設課
保健課
舟入病院
衛生試験所
健康指導所
住吉橋療院
土木部 部長 荒川龍雄
庶務課
土木課
都市計画課
営繕課
水道部 部長 三上昭
経理課
給水課
拡張課

広島市役所付近略図(被爆前)

本庁舎各課配置図(昭和20年8月6日当時)

広島市水道部庁舎略図(昭和15.6年当時)

五、被害状況(昭和二十一年版・市勢要覧その他の資料による。)

被害状況

種別*所在地*建物面積(m²)*被害状況

本庁舎*国泰寺町*一〇、四四四*防衛課・保健課。援護課を残し内部全焼。附属建物全焼

旧御便殿及び付属建物*比治山公園*四八二*全壊

御即位太礼記念館*比治山公園*一一一*全壊

公会堂*国泰寺町*一、三三五*疎開取こわし

山陽文徳殿(戸籍分室)*比治山公園*一三二*一部破壊・戸籍箱は爆風で室内に散乱したが、原簿などは焼失をまぬがれた。

旧御便殿防火水道御筒室*比治山本町*六*全焼

東出張所*猿猴橋町* *全焼

西出張所*己斐町*一三九*一部破壊

南出張所*皆実町* *一部破壊

城北出張所*東白島町* *全焼

三篠出張所*三篠本町三丁目*九九*全焼

元職業紹介所*千田町三丁目*六六四*全焼

牛田国民学校*牛田町*二、五三二*全壊及び一部半壊

荒神国民学校*西蟹屋町*三、七五八*全壊

尾長国民学校*尾長町*四、二七九*全焼

楠那国民学校*仁保町*一、七三四*一部破壊

矢賀国民学校*矢賀町*八五九*一部破壊

青崎国民学校*仁保町*三、六六四*一部破壊

段原国民学校*段原大畑町*四、七三四*全焼

比治山国民学校*東雲町*四、九二五*半壊

皆実国民学校*皆実町一丁目*四、四四六*半壊

仁保国民学校 * 東雲町 * 三、八三八 * 一部破壊
大河国民学校 * 旭町 * 三、八〇 * 一部破壊
宇品国民学校 * 宇品町 * 五、七四四 * 一部破壊
白島国民学校 * 東白島町 * 四、一九八 * 全焼
織町国民学校 * 織町 * 四、三五三 * 全焼
袋町国民学校 * 袋町 * 四、四七三 * 鉄筋建、内部 * 全焼
竹屋国民学校 * 田中町・宝町 * 五、五三六 * 全焼
大手町国民学校 * 大手町八丁目 * 三、六一九 * 全焼
千田国民学校 * 東千田町 * 五、〇三四 * 全焼
宇品分教場 * 元宇品町 * 二六一 * 一部破壊
中島国民学校 * 水主町 * 四、五四三 * 全焼
広瀬国民学校 * 広瀬北町 * 三、七三三 * 全焼
本川国民学校 * 鍛冶屋町 * 四、九七五 * 鉄筋建、内部全焼
神崎国民学校 * 舟入仲町 * 五、三五四 * 全焼
舟入国民学校 * 舟入川口町 * 四、〇七五 * 全壊及び一部半壊
江波国民学校 * 江波町 * 二、六〇八 * 半壊
天満国民学校 * 西天満町 * 五、六四五 * 全焼
観音国民学校 * 東観音町一丁目、西観音町二丁目 * 三、五二八 * 全焼
大芝国民学校 * 大芝町 * 四、一二〇 * 一部破壊
三篠国民学校 * 打越町 * 五、八〇一 * 全焼
古田国民学校 * 古田町 * 一、五七五 * 一部破壊
己斐国民学校 * 己斐町 * 四、二五九 * 半壊
草津国民学校 * 草津東町 * 四、〇四九 * 一部破壊
第一国民学校 * 段原山崎町 * 五、〇一五 * 一部破壊
第二国民学校 * 南観音町 * 五、六二三 * 半壊
第三国民学校 * 翠町 * 五、二八七 * 一部破壊・窓枠は全部飛び散り、戸棚は倒れたが校舎は到壊しなかった。当時、校舎のほとんどを軍が占有し、糧秣倉庫に使用していた。
似島国民学校 * 似島町 * 九一九 * 一部破壊
造船工業学校 * 南観音町 * 五、九九八 * 全焼
第一高等女学校 * 舟入川口町 * 五、七五一 * 半壊
第二工業学校 * 千田町三丁目 * 六〇三 * 全焼
市立中学校 * 中広町 * * 全焼
市立工業専門学校 * 東雲町 * * 半壊・校舎が傾斜した。
浅野図書館 * 小町 * 一、四一四 * 鉄筋建、内部全焼
公設市場 * 大手町九丁目 * 三五〇 * 全焼
公設市場 * 天神町 * 二八一 * 全焼
屠場 * 福島町 * 三、八 * 半壊。赤レンガ建ての屠室が僅かに原型をとどめた程度で、あとは全壊。
家畜市場 * 福島町 * 六、七六六 * 全壊
機械工養成所 * 東雲町 * 一、〇七七 * 半壊
工業指導所 * 東雲町 * 一、五七七 * 半壊。屋根・天井とも一部落下し、機械設備は雨ざらしとなった。
日用品交換幹施所 * 八丁堀(旧福屋二階) * 鉄筋建、内部全焼
舟入病院(衛生試験所) * 舟入幸町 * 七、三一九 * 本館、薬局、病室一一棟、食堂、消毒所、看護婦宿舎、倉庫の全部が折りたたんだように倒れ、午後四時過ぎ類焼し、全焼した。
住吉橋療院 * 河原町 * 五一二 * 全焼
清掃事務所 * 段原大畑町 * 一五 * 全焼
清掃事務所 * 鉄砲町 * 一五 * 全焼

清掃事務所 * 南千田町 * 六九二 * 半壊
塵芥仮溜所 * 打越町 * 九二 * 半壊
備品修理工場 * 打越町 * 二一一 * 全焼
公設便所 * 小綱町 * 六六 * 全焼
向西館 * 上天満町 * 一、四六五 * 全焼
火葬場 * 己斐町 * 一〇六 * 半壊
火葬場 * 草津南町 * 一一一 * 半壊
市営住宅 * 舟入川口町 * 五三五 * 半壊
市営住宅 * 皆実町一丁目 * 九〇一 * 半壊
市営住宅 * 段原新町 * 八一二 * 半壊
市営住宅 * 西観音町一丁目 * 六三八 * 全壊
市営住宅 * 白島北町 * 六二八 * 全壊
市営住宅 * 千田町三丁目 * 五四五 * 半壊
東公益質屋 * 稲荷町 * 二〇四 * 全焼
西公益質屋 * 天満町 * 二〇三 * 倉庫を除き全焼。保管中の質入物件は異状なかった。
健康指導所 * 大手町七丁目 * * 全焼(木造、赤裸々会館二階借りあげ)
公営住宅 * 尾長町 * 一、〇二四 * 七分壊
公営住宅 * 福島町 * 三、〇九八 * 全壊
保養院 * 宇品町 * 六三四 * 一部破壊
東隣保館 * 尾長町 * 二九二 * 一部破壊
西隣保館 * 福島町 * 三〇五 * 全壊
青崎保育所 * 仁保町青崎 * * 一部破壊
淵崎保育所 * 仁保町淵崎 * * 一部破壊
楠那保育所 * 仁保町楠那 * * 一部破壊
大河保育所 * 仁保町大河 * * 半壊
東蟹屋保育所 * 東蟹屋町 * * 一部破壊
荒神保育所 * 荒神町 * * 全焼
皆実町保育所 * 皆実町三丁目 * 一一六 * 全壊
海上保育所 * 元宇品町 * * 一部破壊
白島保育所 * 東白島町 * * 全焼
三篠保育所 * 三篠町 * * 全焼
南三篠保育所 * 南三篠町 * * 全壊
広瀬保育所 * 広瀬町 * * 全焼
吉島保育所 * 吉島羽衣町 * * 全焼
舟入保育所 * 舟入仲町(神崎国民学校内) * * 全焼
江波保育所 * 江波町 * * 半壊
観音保育所 * 観音本町 * * 全壊
南観音保育所 * 南観音町 * * 全壊
己斐保育所 * 己斐町 * * 一部破壊
草津保育所 * 草津東町 * * 一部破壊
似島保育所 * 似島町 * * 一部破壊
抽水所 * 大洲町 * 二〇二 * 全壊
抽水所 * 東雲町 * 一二五 * 半壊
抽水所 * 南観音町 * 四五 * 全壊
抽水所 * 広瀬元町 * 三五 * 全壊
抽水所 * 旭町 * 二一二 * 半壊

抽水所 * 北榎町 * 三九 * 全壊
抽水所 * 東白島町 * 三九 * 全壊
抽水所 * 鶴見町 * 三七 * 全壊
抽水所 * 千田町一丁目 * 一六四 * 全焼
抽水所 * 千田町三丁目 * 二〇〇 * 半壊
抽水所 * 宇品町 * 二二九 * 一部破壊
灌漑所 * 段原大畑町 * 八四 * 全壊
抽水所 * 猿猴橋町 * 七四 * 全焼
抽水所 * 比治山本町 * 七六 * 全焼
抽水所 * 空鞆町 * 八〇 * 全焼
抽水所 * 河原町 * 二一 * 全焼
抽水所 * 吉島羽衣町 * 一七 * 全焼
樋寺家 * 南観音町 * 五三 * 一部破壊
樋寺家 * 南千田町 * 五一 * 半壊
樋寺家 * 東雲町 * 一〇〇 * 一部破壊
樋寺家 * 宇品町 * 一五五 * 一部破壊
樋寺家 * 大洲町 * 八一 * 一部破壊
樋寺家 * 江波町 * 二三 * 一部破壊
樋寺家 * 旭町 * 九五 * 一部破壊
樋寺家 * 吉島本町 * 八四 * 一部破壊
水防倉庫 * 舟入川口町 * 一三 * 全焼
下水道材料置場 * 平野町 * 四〇 * 全壊
倉庫 * 中島新町堤塘 * 二四八 * 全壊
倉庫 * 中島新町 * 五〇 * 全壊
水道部基町庁舎 * 基町 * 九九七 * 全焼
浄水場 * 牛田町 * 一、二二五 * 半壊
送水唧箇所 * 比治山本町 * 七九 * 全焼
調整場 * 己斐町 * 一三六 * 半壊。窓ガラス附属品など散乱。ポンプ室機械助かる。
千田廟社 * 宇品町 * 一〇 * 一部破壊

六、防衛態勢

分散疎開の実施

一般市民の物資疎開実施と同時に、市役所も簿冊・器物などの疎開を実施した。

戸籍簿の大部分を比治山の頼山陽文徳殿へ疎開し、文徳殿は戸籍選挙課分室となり、職員もここに出向して執務した。

戸籍簿の一部と、印鑑登録簿・土地家屋台帳など事務上しばしば必要な簿冊は、市庁舎前にあった藤田ビルの疎開あとの地下室に疎開した。この地下室には、藤田ビル疎開前に「夢の地下」と称するカフェがあり、同ビル疎開と共に空屋になっていた。

戸籍簿を疎開することについては、市民が不便になることを理由に反対意見が強かったが、柴田助役の決断で実行された。各課の保存文書は、三階北側の文書係書庫に一括して保管した。その後、佐伯郡古田町田方の青年会館へ疎開する予定で、一時的に大手町国民学校に移っていて、数か月後に被爆した。

その他の各課の重要文書を、疎開あとに残っている市内各所の土蔵などを利用して納めていたが、これも焼失した。

また、浅野図書館は、当時約九万冊を所蔵していたが、そのうち漢籍など貴重図書八、四一一冊、および絵図類約九、
点を、安佐郡安村光明寺・同郡伴村専念寺・同願行寺・佐伯郡石内村浄土寺に分散疎開した。第二次の疎開にあたり、前記貴重図書につぐ特別図書五十梱包約一万冊は、疎開すべく準備はしたがトラックの配車が悪く、図書館玄関に積みあげたまま、原子爆弾にあった。このとき郷土史資料として重要な浅野藩政史料もほとんど焼失した。

なお、郡部に疎開した図書も、九月の水害で多数流失、損傷した。

市庁舎内庭にあった奉安庫の御真影をはじめ、明治天皇ご使用の椅子・机・テーブル掛・敷物などは、佐伯郡砂谷村国民学校へ疎開して焼失をまぬがれた。

このほか、救急薬品・衛生材料を市の周辺山地部の横穴などに疎開した。この疎開先については、担当職員だった保健課島津書記が登庁途中被爆死亡し、台帳も焼失して不明になった。おそらく、疎開先の住民が自由に使用したものである。

なお、舟入病院(伝染病院)の入院患者は、佐伯郡廿日市町・平良村両共同隔離病舎、および同郡五日市町・観音村両共同隔離病舎・八幡村隔離病舎の三か所へ、それぞれ移動可能な患者約五〇人を分散して疎開させた。

自衛体制

設備

庁舎西側の、半地下の電気室、南側二階の電話室、その他倉庫などの窓全面に厚板を打ちつけて、外部からの被害(爆風)を防止するようにした。

会計課は、金庫を守るために、ドンゴロスの砂糖袋に砂を詰めて、高さ約二メートルの土嚢を築いた。

各課入口には、市民の家庭と同じように貯水槽を置き、焼夷弾攻撃に備えて消火用砂袋や火叩き、注水用バケツなどを常時備えつけていた。

また、庁舎前の西南側芝生緑地(現在慰霊碑の場所)の下に、防火用貯水槽(一〇石入り)を設置した。

さらに、中庭東沿いにあった土木関係の倉庫を取除くことにし、また御真影奉安庫前に中型貯水槽(コンクリート製)を一個設備した。

自衛組織

自衛組織としては、市役所自衛団(団長・志波黎二)があり、団員は防空本部要員と、現地隊関係職員を除く職員全部約五、六〇人であった。勤務時間中、空襲警報が発せられると、発令と同時に、平常事務を放棄して、それぞれ所定の部署についた。

昭和二十年、広島市役所職域国民義勇隊が編成された。全職員をもって一連隊とし、連隊長には市長が就任した。その下部組織として、三個大隊を編成、大隊長は部長級で、一個大隊を更に三個中隊に分け、中隊長は課長級とし、さらに、一個中隊を三個分隊に分けて分隊長には係長級を配した。

日夜わかたぬ戦局の緊迫した状況下、毎夜交替制で一個大隊約六〇人が、勤務終了の午後五時、市庁舎正面玄関前に整列して、点呼を受け、各課に分散、宿泊し、空襲の災害に備えた。

臨時事務所

また、防空計画として、非常の場合を想定し、市行政の遂行を期するため、市役所の臨時事務所として、本川国民学校が指定されていた。また、職員の集合場所としては、市周辺部の主な社寺が指定してあった。例えば己斐の旭山神社・比治山御便殿・饒津神社・東照宮・あるいは清掃事務所・大芝・三篠・古田・草津などの周辺国民学校や公民館である。

更に死体火葬場も、宇品・己斐・三滝・草津・井の口などを指定し、有事の際の職員配置も決められていた。

戦時行政機構

戦時行政機構としては、第二次世界大戦の勃発後、昭和十七年と十八年の二度にわたって大改正をおこなった。

十七年の改正では、市政事務機構に新たに防衛・錬成両課が新設せられ、さらに十八年には、戦局の急速な進展に伴う政府の行政簡素化の方針に従って、防空関係と市民生活関係の事業担当部門の強化拡充をはかった。その他の部門でも行政事務の整理簡素化を目的として全面的改正がおこなわれ、戦時体制下特有の行政事務が実施された。

防空監視哨

なお、屋上には、二か所に防空監視哨があった。一つは警察本部の設置で、南側庁舎の東端にあり、地域の警察官が二、三人ずつ交替で、常時勤務していた。もう一つは、市役所自衛団のもので、西表側に位置し職員が交替で勤務していた。

防空小区現地隊

また、防空本部要員や分散配置体制として、地区現地隊員に任命されていた者は、警報発令のつど、その部署に出動し、市民の避難地への指示・誘導、および現地と市役所との連絡などにあたる任務を持っていた。

広島市防空小区現地隊

現地隊名 * 隊長名 * 人員

青崎 * 塩見清 * 2

矢賀・尾長 * 天野秀吉 * 7

荒神 * 南登次郎 * 6

牛田 * 伴谷勇 * 4

白島・幟町 * 日原範一 * 5

竹屋 * 石井博 * 5

段原 * 浜室佳行 * 5

比治山・仁保 * 坂本隆男 * 6

袋町 * 矢吹憲道 * 6

大手町 * 志波黎二 * 5

中島 * 酒井淳三 * 3

広瀬・本川 * 辻岡義雄 * 5

神崎 * 坪島積 * 5

舟入・江波 * 河原稔 * 5

天満 * 尾森唯男 * 5

観音 * 藤井博治 * 3

福島 * 真野真平 * 5

横川 * 内山正一 * 5

西部 * 水谷信三 * 3

千田 * 原田好登 * 6

皆実 * 山根力男 * 3

大河・楠那 * 竹内多一 * 4

宇品 * 田窪真吾 * 4

宇品海上 * 宇品現地隊長兼務 *

(昭和二十年六月一日・現在)

非常服装

なお、職員は登庁にあたって、男子は国民服に戦闘帽・巻ゲートルをし、女子はモンペをはき、防空ズキンを持った非常服装で、男女ともに肩からそれぞれ手製の非常袋(ズダ袋)をさげていた。非常袋の中には簡単な薬品・繻帯・貯金通帳など貴重品を入れていた。

待避場所

焼夷弾によって庁舎が攻撃された場合を想定して、一般職員は地下室に待避するよう決められていた。一般市民(防空要因を除く老人・幼児など)のように郊外へ避難する指示はなく、空襲警報最発令時には、もっぱら地下室に待避する訓練がおこなわれた。しかし、原子爆弾の炸裂時には、警戒警報すら出ていなかったから、地下室へ避難していた者はなかった。被爆に際してたまたま逃げこんだ者があったにしても重傷で動けず、火災発生でそのまま焼け死んだであろう。

防空訓練

防空訓練は、主として男子職員だけによっておこなわれたが、市民の指導などが重点で、庁舎自体に対する職員の訓練はあまり実施されなかった。

七、被爆の惨状

惨禍

本庁舎・爆心地から約一・二キロメートル

本庁舎

市庁舎は重要建物に指定され、周囲二〇〇メートル以内の建物は、公私ともにすべて疎開実施中であった。被爆時にはほぼ九〇パーセントほど作業は進捗していたが、残っていたのは主として東側部分で、当時は陸軍運輸部設営隊(隊長・伊藤大尉)が使用していた県教育会館の本館があり、あたかも八月六日にこれを取りこわすことになっていた。

五日の夜

八月五日の夜は、警戒警報と空襲警報が繰り返され、六日の朝まで続いた。

警備担当の職域国民義勇隊の職員約六〇人は、この晩も交替で各課に当直し、屋上の防空監視哨から拡声機で流す敵機の行動状況を聞きながら、その部署を守っていた。また、防空本部要員や、分散配置体制として地区現地隊員に任命されていた者は、空襲警報発令のつど、めいめいの部署に出動していった。

六日の朝

六日午前二時十分、空襲警報解除後、これら防空活動に従事していた職員は、一部を除いて午前三時ごろから、多くは帰宅して睡眠をとった。しかし独身者は、隣の公会堂で仮眠することになっていて、堂萱公会堂館長の息女、美恵子(秘書課職員)が、コーリャンめしを炊いて支給した。

午前七時九分、警戒警報が発令されたが、空襲警報にならず、二二分後の七時三十一分には解除になり、登庁しないで済み、帰宅中の職員もひと安心した。

なお、午前零時を過ぎて夜間防空警備についた職員は、翌日正午まで休養してから、出勤してよいことになっていたため、午前八時の庁内中庭における朝礼に集合した職員五、六〇人は、その三分の二が女子職員であった。

また、この朝の幹部会議には、谷山戦時生活部長・島田教育部長・および司会をつとめた滝沢捨雄秘書課長のほか、市の幹部はほとんど出席していなかった。

朝礼

朝礼は、中庭北側にあった奉安庫の前の壇上に、島田教育部長が立ち、まず、東方遥拝を行なった。そして、広島市職員の信念五ヶ条を唱えて解散した。

各課の状況

各課にかえった職員は、それぞれの持場についたが、統計課などでは、課内に神棚が祀ってあり、神棚にむかい拍手を打って拝んだあと、執務する前のお茶をのんでいた。兵事課では、四日に可部の願仙坊に疎開していた聯隊区司令部から持ち帰った召集令状を、岩原和一・影山豊両書記などが地区別に発送する仕事を急いでいた。また、秘書課では、四日のボーナス支給日が土曜日の関係で支給もれの職員があり、西平笑子書記補が現金と給料袋を机上にならべて、支給準備に取りかかっていた。

炸裂下の本庁舎

突如、何の前ぶれも、予告もなしに目もくらむ強烈な閃光が走った。窓の外がパッと白く光が、シュツというような音がした。瞬間、体がギュッと締めあげられたような、何とも言えぬ異変が出現した。時をおかず、ゴーツという物凄い地響きが鉄筋の建物も崩れよとばかりにとどろきわたってきた。誰もが無意識のうちに机の下に身を隠そうとした。が、その時すでに爆風は襲いかかっていた。

窓ガラスや扉や本箱や、机などの壊れるはげしい音と共に、机もろともはね飛ばされてしまった。それきり意識を失った者もいた。

あるいは、物の破片で負傷し、血を流す者もいた。

何秒か何分か打ち伏したままでいた。立ち上ろうとしたが、足腰が思うようにいうことをきかない。しかし、死んではいけない。部屋の中は真暗闇である。お互いに名を呼びかわし励ましあいながら、手さぐりで机や本箱のこわれた中を這いまわって、ようやく廊下まで出ることができた者もいた。

二階の秘書課で、閃光も轟音も知らず、突然に被爆した迫田周作文書係長は、いったん表に出たが、ただ事ではないと直感し、引返して屋上にかけて上って市内を見た。そこには、全滅した市街の中を悠々と光って流れている川の姿だけがかった。再び自室にかえって救急袋を取り出し、急ぎ出血を手当すると、倒れている二、三人の同僚を助けた。

部屋はますます暗くなっていき、一種のガス体が充満して来た。やがて、あちこちから火の手があがったので、迫田係長は他の職員を公会堂へ逃げるよう指揮しつつ退避した。

庁舎内の至る所で鮮血を浴び、悲鳴をあげながら、そこ、ここにうずくまりもたえる人、頭髪を乱し、夢遊病者のように右往左往する人があり、逆に庁外から逃れてきた人の群れで庁内は大混乱に陥った。

炸裂時間の公表

役所に近い、千田町の自宅で、出勤しがけに被爆した野田益防衛課長は、八時四十分ごろ市庁舎に着き、防衛課をのぞくと、人影はなかった。少しして、迫田係長や中村正忠市長秘書などが来て、九人の人員になった。野田課長は、壁にかかっていた時計がはずれて、ぶら下がっており、ちょうど八時十五分を示して止まっていたのを見て、炸裂時

間を知り、「六日午前八時十五分に炸裂した。」と公に報告した。これが炸裂時間の決定となった。

庁舎炎上

市庁舎の周囲は、総計約一万坪に近い空地が疎開によってつくられていたから、直撃弾を受けないかぎり、他からの類焼はないものと思われていた。

しかし、原子爆弾の熱線は、この予想を裏切り、炸裂と同時に、庁舎前広場の北出入口の前にあった消防車車庫と、正面地下室と一階の県警本部の室、また内庭東南隅にあったバラック建ての重油倉庫(約一〇平方メートル)と、解体中であった土木用品倉庫の支柱が発火し、三〇分ぐらいのうちに焼失した。これは庁舎に影響しなかったが、午前十時過ぎごろ、周囲の火災によって、ついに本庁舎も類焼し、午後三時ごろまで燃え続けたのである。消防自動車は焼損し、ついに役立たなかった。

発火状況

野田益防衛課長の語るところによると、大手町九丁目付近が、炸裂とほとんど同時に発火し、民家が炎上した。その飛火が庁舎炎上の原因であったという。

庁舎南部は、すでに鷹野橋教会まで、建物の疎開が完了していたが、千田町一帯が猛火に包まれると、風速約四〇メートル近い南風が発生し、その火災現場あたりから、大は頭大の火の玉が庁舎へ烈しく吹きつけられて来た。

庁舎は爆風によって、窓ガラスは一枚残さず破砕され、書類や机・戸棚などが無茶苦茶に散乱した。そこへ、外側へむかって押しひらかれた窓から、火の粉が雨の降るように飛びこんで来て、ついに燃えあがった。

まず、一階南西角の会計課と、南側の二階の電話室から火の手があがった。中村秘書は隣室の市長公室に負傷した職員三、四人を収容していたが、電話室から火がまわって来たので、収容者を一時的に玄関まで大急ぎでひきずり出した。

また、課内の壁にさえぎられて負傷しなかった矢吹憲道統計課長は、負傷者の救出に努めながら、現在の藤田ビルのところにあった県農業会(前広島県農業経済会・木造二階建)や広島搬送電気通信工事局(現在の南庁舎)の仮設バラックが炎上し、その火の粉が南風にあふられて庁舎へ飛んで来、三階が燃えあがったのを見た。十一時過ぎであった。三階の火は廊下に積んであった書類に引火し、階段の木製の手摺りを伝って二階まで下って来たという。

さらに、外部から火の粉が、地下の施設課にあった油類に引火して爆発し、また、同じく地下にあった電気室が爆発するなどして、一階・二階に引火した。その上、大手町国民学校の大講堂が炎上し、その熱風が正面玄関側を巻きこみ、庁内の火勢を一層あおりたてたのであった。

炸裂直後、一階の廊下や地下室には、市の職員や男女の見分けもつかぬ重傷の避難民がたくさん逃げこんで来た。すでに死んでいる者もあり、足のふみ場もない程であったが、火災となったとき、歩ける者だけは、ようやく隣の公会堂跡へ脱出していった。

鎮火

市庁舎東南隅一階の二室(保健課・援護課)、および地下の三室(防衛課・防衛部長室・およびボイラー室)を残し、午後三時ごろまでに、焼けるものは残らず焼きつくして自然鎮火した。焼けなかった各室は、野田防衛課長ほか七、八人の職員の果敢な活動による成果であった。

このため、若干でも机・椅子・書棚など、備品類や書類用紙が残り、被爆直後の応急事務処理にあたって非常に役立った。

特に、「広島市防衛課長」という公印・一台の謄写板・裏紙の使用できる書類などは、七日からただちに、罹災証明書の謄写印刷や交付に活用された。この公印は、野田課長が保管していたが、新修広島市史編修(昭和三十七年、全七巻刊行終了)のとき、同編集係へ提出した。

なお、一階の焼け残った二室のほか、税務課分室(家屋係)一室も確保していたが、午後三時過ぎ、おおむね他が鎮火したのちに出火した。すでに断水状態になっていたため消火活動もできなかった。

しかし、風もようやく衰え、火勢も強まらなかったから、コンクリート壁にさえぎられて隣室への延焼は、幸いにしてまぬがれた。

水道庁舎・爆心地から約六〇〇メートル

水道庁舎

水道部庁舎は基町にあり、正門前が借行社、西側裏が憲兵隊で、八丁堀電車線路に沿っていた。

当時職員は、一五五人(ほかに応召中の職員三人)であったが、爆心地から約六〇〇メートルばかりの近距離のた

め、庁内で被爆した職員は全滅した。

従って六日朝の炸裂下の状況は知るすべもないが、翌七日の庁舎跡は、木造の庁舎・倉庫がまったく灰燼に帰していた。作業場の鉄骨の残骸が飴のように曲って地を這い、そこに焼けただれた死体が散乱していた。

この死体は、浜角喜久一経理課運転手によって確認され、二一一体(男一七体、女四体)のうち二〇体が水道部職員であることがわかった。

浜角運転手は、五日夜、空襲警報発令で基町水道部庁舎の警備につき、六日解除後の午前五時ごろ、仁保町日宇那の自宅へ帰っていて被爆したが、七日庁舎跡に来て死体を確認し、十日ごろまでに六、七体を火葬して遺族に渡した。残りの遺体は、軍隊の応援を得て火葬をおこない、その遺骨をそれぞれ袋に入れて氏名を記入の上、市長室に安置した。

なお、水道部全職員のうち、被爆による死没者は、八三人であった。

市防衛本部を設置

野田防衛課長は、当日、午後三時過ぎ、かけつけて来た学務課の滝谷書記に、中国軍管区司令部軍医部に対し、至急、市中心部へ軍医部救護班を出動されたい旨、要請するよう派遣した。

しかし、司令部も全滅状態であった。そこで、宇品方面は無事らしく思われたから、宇品警察署から郡部方面へ至急医療救護班の派遣方を依頼することに決心し、たまたま防衛課に自転車があったので、それに乗って宇品署へ野田課長自身が向った。

宇品署は、全員、専売局の東南角にあたるガソリン・スタンドの所に出張していて、避難者の誘導や、乾パンの配給をしていたから、そこへ行くと、香川薫警部補から、森下助役と中原考査役が南出張所(皆実町)にいることを教えられた。すぐに訪ねて行き、助役と考査役に会った。これが午後四時頃であった。

野田課長は、幹部職員がすべて行方不明であるから、至急本庁に帰り、「市防空本部」を開設するよう進言し、防空本部室その他二部屋が類焼を免れていることを併せて報告した。

すぐに、自転車を持っていた考査役と野田課長が先に本庁に帰り、助役は徒歩であとから登庁した。森下助役は千田町の下宿二階で被爆し、数時間の失神後、浴衣の寝巻姿のまま脱出、南出張所へ避難した。中原考査役は、建物疎開作業実施のため、仁保町の町内会長宅に行っていて被爆、同じく南出張所に来ていたのであった。

粟屋市長も柴田助役も消息不明であったから、地下の防衛課で、平井総務部長・野田課長・徳永会計課長ほか二人の六人で相談し、市の防空本部を名ばかりながら、一応焼け残った千田町の職業紹介所内に設置することにした。本部は午後遅く、庁舎前庭に移って活動をつづけた。六日当日はもち論、七日にたっても地下室では、まだ紙の倉庫や配給課の物資の倉庫など、くすぶっている所があり、庁舎内は火災の余熱で入ることはできなかったからである。

食糧の配給

仁保町の自宅で被爆した浜井配給課長(防衛本部配給班長)は、歩いてただちに家を出たが、市役所に近づけなかった。防空計画で空襲を受けた場合の配給用には、宇品の機甲訓練所のトラックを動員することが、かねてから打合せしてあったので、宇品へ直行した。

訓練所も破壊されていたが、数人残っていた職員に強硬に申し入れてトラック一台を借上げ、これに乗って府中の食糧営団の倉庫へ行った。倉庫へは呉市から応援トラックが一台来ていたので、これと二台に、菰につめた乾パンを満載して帰り、夕方近くなったころ、広島赤十字病院前におろした。そしてすぐに、集って来た数人の市職員と共に、手車その他で罹災者に配給する処置をとった(なお、機甲訓練所からずっと、トラックに乗って来た二、三人の学生らしい若者は、その後数日間、市民配給のために献身的に奉仕した。)

それから、浜井課長は、余燼くすぶる本庁の配給課へ行った。真白い灰が約三〇センチメートルくらいの高さにつきもり、女性らしい骸骨二体が転っていた。ここで疎開先の佐伯郡田方に用紙を取りに行っていて助かった田窪真吾配給課主事に出あった。

粟屋市長の焼死

粟屋市長は、五日、第二総軍畑司令官の招待を受け、参謀長の着任披露会に円山和正秘書係長を帯同して、午後六時ごろ軍司令部におもむき、午後九時ごろ水主町の市長公舎に帰ったが、夜半の空襲警報でまた登庁し、六日午前二時ごろ、警報解除になってから、仮眠をとるため公舎に帰っていて被爆、倒壊した建物の下敷きとなり焼死した。行年五一歳であった。

柴田助役の負傷

柴田助役は、五日夜半の空襲警報の発令で登庁し、解除後、県警察部長と防空対策など協議し、六日午前四時すぎ、中広町の自宅に帰っていて被爆した。家屋の下敷きとなったが幸い脱出した。ひどい打撲傷のため、歩行も困難で、六日夜は近くの防空壕ですごした。

黒瀬収入役負傷

黒瀬収入役は、野田課長が市役所へかけつけたとき、会計課入口にへたり込み、「野田さん、やられましたよ。」と言って負傷した腕を見せた。ガラスの破片によるかなりの傷で、出血多量であった。野田課長は、登庁途中広島赤十字病院が無事であったことを知っていたので、「赤十字病院へ行きなさい。」と言って別れた。

浜井信三著「原爆市長」では、当日、電鉄本社前で浜井課長と血だらけの黒瀬収入役が出会い、またそこへ、自転車を引きずって中原考査役が来た。しばらくすると杖をついた浴衣姿の森下助役も来たと記述されている。

収入役は、当日夜からずっと庁舎をはなれず治療を受けたが、その後、郷里に帰って静養し一命を取りとめた。

平井総務部長の登庁

平井総務部長は、高須の自宅で被爆し、夕方七時ごろ登庁して状況を視察、地下の防衛室で生き残った者六人と対策を協議し、七日から毎日出勤して、柴田助役の補佐をした。

公会堂の池辺

被爆した職員の多くは、猛火を避けて、庁舎北側の疎開解体した公会堂あとの庭園内池辺に集った。

統計課雇員の秋山アサコもそのうちの一人で、庁内に火が廻り逃げ場を失い、公会堂の池の中に避難した。しかし、火の粉は容赦なくふりかかるので、夏ぶとんを頭にかぶっていた娘にたのんで、もう一人の同僚と一緒に、ふとんの下に入れてもらった。そのとき、雨が降ったり、止んだりした。

池の周囲には、数日前から職員が交替で家屋の取りこわしや、後片づけにあたっていたが、残っていた柱などが燃えていた。

また、援護課の喜多輝子は、廊下に落ちていた防空頭巾を拾ってかぶると、「公会堂の池にはいれ。」という誰かの声にヒョロヒョロと足を運んだ。

池はドロ沼のようであった。もうたくさんの人が、その中に入っていた。自転車を持ち込んでいる人もいた。その池にズルズルと入りこんだ。ホッと安心するまもなく、大きな旋風が巻き起って来た。物凄い力で避難者をクルクルともみくちやにすると、泥水の中に叩きこんで去った。

旋風は二度までも襲った。みんな泥ンコになり、もう死ぬると思われた。ついには、泥水の中に浸っていることが耐えられなくなり、池の端に這いあがったが、そこに横たわったまま動けなくなったという。

その夜

炸裂直後、市役所周辺で、建物疎開作業をしていた県立第一中学校や修道中学校などの学徒や国民義勇隊の人々が、市庁舎内になだれこんで来たが、庁舎が火炎につつまれると、歩ける者はみな逃げだしていった。猛火終息後、庁舎の地下室の焼け残った南側の通路の壁には、だれだれ生存とか、だれそれ死亡とか、どこへ避難するとか、避難者が棒切れや消炭で書きつけられた伝言が、ただむなしく残っていた。これらの書おきは、本人も書いたが、市の伊藤勇清掃係長らが、重傷者から聞き取って書きつけたものもあった。

公会堂の池辺に逃げだして来た職員も、一人去り二人去って行ったが、なおたくさんの方々が残っていた。みな動きのとれない負傷者で、苦痛にたえかねて救いを求め、泣き叫んでいた。

また、庁舎南側沿いに弁当を置いていた県立第一中学校の生徒二、三〇人が、作業に移る前の点呼中に被爆、火傷し、「お母さん、お母さん」と、声を限りに親を呼びたがら、芝生の上で一夜をあかした。

夜が来ても、池の周囲に集っている、おそらく百数十にのぼる負傷者は、みな傷の痛みでうなっていた。静かだと思えば、すでに死んでいるのであった。

全市はなお赤々と燃えつづけ、空はま昼のように明るかった。熱風が時折り負傷者たちの頬を打って来た。

県防空本部と連絡

その夜、浜井課長は、県の商工課と経済保安課に連絡をつけねばならないと考え、田窪主事を同伴して、人づてに聞いた比治山の多聞院(仮県庁)へ歩いて行った。

その時の模様が「原爆市長(昭和四十二年刊 浜井信三著)」に次のように記されている。

「崩れかかった広い本堂のまん中に、頭に繻帯を巻いた服部副総監が坐っていた。そのまわりを、四、五人の人がとり巻き、暗闇の中で何やらヒソヒソと話していた。私がさがしていた県の職員は、誰もいなかった。

麻生経済保安課長は、重傷を負って青崎国民学校に収容されたということだけがわかった。麻生君は私の高等学校の後輩で、公私ともに特に懇意にしていた。さっそく見舞ってやりたいと思ったが、私の方も朝から駆けまわって非常に疲れていたし、乗物もないのであきらめた。

せっかく来たのに、そのまま帰るのも能がないと思ったので、私は正面の踏石の上に立って、本堂に向い

『市の配給課長です。連絡にきました。』と、大声でいった。

『おお、市はどうだ、市長は無事が……』、服部副総監の声が返って来た。

『市長は朝から姿が見えません。森下助役が指揮をとっています。』

『そうか、よろしくいってくれ。』

それだけで、仕事のことは何の手掛りもつかめぬまま、私たちは多聞院を出た。」

という。

こうして、市と県との連絡がようやくとれたのであったが、市役所は壊滅していて具体的な対策など樹てられようはずもなかった。

八、被爆後の混乱

罹災証明書の発行

七日は晴天であった。昨夜、表庭の芝生の上で仮眠した迫田周作係長は、逃げ遅れた人々とともに目をさました。ふと見ると、隣りに寝ていた人が、もう冷たくなっていた。

このように、治療など受けることもなく、ただ逃げただけで、ひと夜のうちに死んだ人が多く目についた。

罹災者らが、死の街のどこから出てくるのか、一夜あけると、続々と詰めかけて来た。集っているだけの職員の手で、正面北側入口の前(車庫跡)に焼け残った防衛本部室(防衛課)から机や椅子を引きずり出し、防衛課長印を使って、職員安否の連絡や罹災証明書の発行などの事務を始めた。

庁舎は昨日に変わるみじめなビルの残骸となり果て、おびたしい灰と種々雑多な物が廊下一面に堆積しており、各所から異様な叫び声やうめき声が、まだきこえていた。

にぎり飯の配給

六日の夜、田窪主事と一緒に、大河の姉の家に泊った浜井課長は、翌七日七時過ぎに目がさめた。すぐ登庁すると、もう救援のにぎり飯が到着していて、谷山部長が一人でテンテコ舞いの最中であった。直ちに、にぎり飯の配給に取りかかり、町内会や職場の関係で、代表者を立てて取りに来る者には、一応必要数を調べてそれぞれ渡した。

路傍に倒れて救援の手を待っている市民には、トラックでいちいち配って歩いた。

軍官民の三者初会合

七日午後一時ごろ、第二総軍司令部から諸官庁の首脳に対し、二葉山の0号防空壕に集合するようとの布令が来た。

市から中原考査役と浜井課長及び佐々木英雄主事・伊藤勇清掃係長が出席した。

この会議で市民に奮起するよう張りビラで布告することが定められた。

再び市役所に帰ったとき、浜井課長は義父が全身火傷したという伝文を受け取ったが帰らず、配給活動に日暮れまで従事し、ついに死に目にもあえなかった。

救急作業

これより先、自宅で被爆した保健課の伊藤勇清掃係長は、防空本部の救護班長もかねていた責任感から、重傷の老母と妻を千田町清掃事務所に連れていっておいて、被爆当日の午後五時ごろ登庁したが、職員は四、五人しかおらず、救急作業をすることもできなかった。

翌七日、再び登庁して焼け残った保健課から救急薬品を持ち出して、庁舎内のあちこちに寝ころんで唸っている一般市民や職員の負傷者の応急手当をしてまわった。前記のとおり、中原考査役らと第二総軍司令部の会議に出席したあと帰庁してからは、統計課の川上事務員が、「負傷者は眠らずと死ぬる」というので、二人で、棒切れで眠らせないように、一夜中その背を叩いて廻ることで八日の朝を迎えたのであった。

柴田助役登庁

中村秘書が安否不明の柴田助役を探しに行ったのは、七日午前八時過ぎであった。市長の安否不明や職員の死傷者や庁舎の炎上などについて実情を説明し、歩行困難な助役を、助役の子息と二人で、支えるようにして登庁したのが昼前であった。このごろ、すでに二〇人ばかりの吏員が集っていたが、柴田助役の顔を見ると、大いに元気づけられ、

士気があがった。

市長の遺体を焼く

登庁した柴田助役は、まず粟屋市長を探すことにし、六日夜、庁舎前庭で野宿した黒瀬収入役を公舎へ向かわせて調査した結果、死亡したことがわかった。

午後二時ごろ、伊藤清掃係長と同課福岡素人衛生巡視と、もう一人の職員三人が公舎あとに行き、市長の遺体の確認と収容をおこなった。

本庁に運ばれた市長の遺体を柴田助役も確認し、現在の市庁舎の東裏の児童公園のところで、伊藤係長ほか衛生課員の手によって、他の市民とは別個にして、茶毘にふしたのであった。

また、庁舎玄関や廊下の一部に避難していた一般の負傷者五、六〇人は、七日中にほとんど、暁部隊が担架で広島赤十字病院へ運んだ。

市長執務代理者

粟屋市長の被爆死により、六日当日午後四時過ぎに登庁し、その夜は、庁舎前庭で野宿した森下助役が、七日、市長執務代理者に就任した。

呉市役所の来援

七日午後になり、呉市役所から溝辺速雄助役をはじめ、三〇人余りの職員が応援にかけつけて来て、罹災証明書の交付や尋ね人の相談などを手伝った。

被爆後最初の会議

同日午後三時ごろ、宇品町の陸軍船舶司令部の司令官佐伯文郎中将が、広島地区警備司令官に任命されて、市庁舎前で救援を指揮していた森下助役に連絡に来た。

森下助役は、柴田助役ら生き残った幹部とともに、役所の前庭に坐り込んで協議をした。佐伯中将から「今晚から明朝にかけて、島根県部隊と、暁部隊の一部が広島に到着する。」との話があり、ようやく災害対策の糸口が見つかった。

協議の結果

一、食糧は郡部町村から三日間は送ってくれることに、かねてから協定ができているから、一応成り行きにまかすこと。

一、来援の軍隊は、一隊は負傷者と死体の収容に当り、一隊は交通に支障のない程度に街路上の散乱物を整理啓開して貰うこと。死体の収容・焼却に当っては、各班毎に男女別・大人小人別・推定年齢・死体のあった場所などを記した古新聞紙の紙袋に、遺骨を納めて、市役所に安置すること。

一、船舶司令部の戦闘指揮所は、市役所南側の広場に幕舎を建てて駐屯すること。

など申合せができ、被爆後最初の会議は終わった。

各機関の連絡会議

翌八日から佐伯司令官の名で、毎日午後一時から軍・県・鉄道・通信・その他各官庁・中国配電・広島電鉄・その他の生き残った首脳部の連絡会議を開き、一つ一つの事を処理していくようになった。なお、森下助役は二、三日後から原爆症を発して登庁できなくなった。

自転車ひっかかる

庁内で被爆負傷しながらも野田防衛課長らと消火に活動した池内邦政同課計画係長は、庁舎正面玄関のひさしの上に、どこからか自転車が飛ばされてきて、乗っかかっているのを見て、どうしてこうなったのかと、しばらく考えたが判らなかった。

水道の応急復旧

基町の水道部庁舎は前述のように灰燼に帰したが、当時一日最高一〇万六〇〇〇立方メートルの給水能力を持っていた牛田の浄水場は、幸い火災をまぬがれ、致命的な損害は受けなかった。

しかし、被爆と同時に停電し、また送水ポンプ施設などが破損して、送水できない状態になった。浄水場の裏山中腹にある配水池は、常時満水状態にあって、貯水量約一万四五〇〇立方メートルを保有して配水していたが、正午近くにはほとんどなくなった。したがって、配水池に炉過池から揚水しなければ、市内への給水が停止する状態となった。そこで、直ちに予備としていた内燃機送水ポンプ(燃料は重油)を応急修理して、一台は午後二時ごろから運転を開始し、続いて残り二台も夕方には運転ができ、一日四万二〇〇〇立方メートルの配水をすることができるようになった。

た。

九、救護・復旧活動

市地方からの救援や軍の援助があるにしても、市はそれのみに頼るわけにはいかず、柴田助役は、当時の市金庫勸業銀行広島支店に交渉して、八月八日ごろ、五万円を借入れ、迫田係長に保管させ、行政活動の資金とした。

浜井配給課長は三日目(八日)の晩から、市役所へ泊りこむことにした。辛うじて焼け残った部屋が、戦災後の市の活動の大きな基盤となり、相当の期間、吏員の宿直室にもなった。

食糧配給

食糧配給は、周辺町村の婦人会の人々によって炊出されるにぎり飯を、罹災者に配るのが、当面の仕事であった。市の防空その他災害対策では、万一の場合、佐伯・安佐・安芸・高田の各郡から救援を受ける協定があり、三日間、毎日必要数量のにぎり飯やタマネギ・カボチャなど野菜類を広島市へ配給し、後で精算支払いをすることになっていたが、三日間をはるかにこえ、十日間に及んだ。

市が直接配給を開始したのは、軍の備蓄していた食糧・備品・消耗品などを確保した八月十五日以降であった。主食配給業務は食糧営団の職員が役所へ出向しておこなった。

医療救護

災害直後、緊急処理を要する問題として食糧配給同等に重要な問題は、傷患者の医療救護であったが、市内の医療施設は広島赤十字病院および通信病院・三菱造船所の病院・陸軍共済病院の四つと、第一陸軍病院江波分院および似島の暁部隊の病院を除いてはほとんど壊滅していた。また、市内の開業医も大半は死亡ないし活動不能に陥ったし、医療資材も薬品も、ほとんど焼失した上、一瞬の大量な患者には、手のほどこしようもなく、各地の医療救護班の出動を待つほかなかった。

市役所内にも救護所設置

八日、火災のほとぼりもさめて来て、庁舎内に入れるようになったので、次々に訪れる負傷者を、焼けて床がデコボコになった戸籍課と会計課を救護所として使用し、床に荒ムシロを敷いて三〇人ばかり収容した。毎日、四、五人ずつ死んでいったが、また四、五人ずつ新しく収容されるので、その数はいっこうに減らなかった。

九日頃、鳥取の赤十字病院から医師・看護婦が各々数人ずつ来援して、負傷者も職員も大いに力づけられた。この時、広島赤十字病院に収容されていた市の職員二、三人をこちらへ移した。鳥取の医療班は、四日間いて引揚げたので、十三日頃、収容患者全員を袋町国民学校の校舎を清掃して、そこの収容所に移した。

道路啓開

二日目以後は、主として軍隊によって主要値路の啓開がおこなわれ、自動車その他諸車の交通が可能になった。

公共物の清掃

市役所その他公共建物の内部の清掃も、すべて軍隊がおこなった。

死体の焼却

当初二、三日間は、夜間の再度の空襲を考慮して、市中での死体焼却は禁ぜられた。しかし暑い季節であったから長く放置できず、また全部を他へ運び出すこともできないので、三日目以後方針を変更し、市庁舎周辺は市職員一〇人ぐらいが中心で作業をやり、他の市内各所では、暁部隊や近郊から来援した警防団などによって、死体の処理がおこなわれた。

急設救護所

九日頃には、各地の医師や看護婦の救援が次第に多くなったので、市は被服廠・兵器廠などの軍の施設をはじめ、焼け残った国民学校など、およそ雨露をしのぎ得る公共建物は、すべて急設救護所にあて、ようやく本格的に負傷者の治療を開始した。

孤児の収容

特に戦災孤児や迷子のために、比治山国民学校を収容所にあて、社会課が管理した。

ほぼ五、六〇人程度がいつもおり、収容児の公示は、新聞やラジオで知らせたほか、市役所・県庁・福屋百貨店・広島駅前にも名簿をおいて縦覧に供した。なお、この収容所は、二十一年二月十日で閉鎖し、引取人があられず最後まで残った一七人の孤児は、佐伯郡五日市町に開設した広島戦災孤児収容所に移した。

伝染病院の開設

八月九日の定例連絡会議(軍・官公庁などの会合)で、陸軍軍部から安佐郡可部町付近に赤痢患者が発生したので、

広島市で、伝染病院を開設するよう要請があり、保健課が開設準備に着手し、福屋ビルを仮病院にあてた。寝台やワラぶとんは、工兵隊から運び、薬品や衛生材料は、暁部隊から支給を受けた。八月十七日から患者の収容をおこない、舟入病院長天野勲博士が自宅で焼死したため、診療には吉田寛一市医師会長があたったが、同医師も原爆症で途中で倒れた。九月十六日、収容所を古田国民学校に移し、さらに二十一年七月十四日、舟入幸町の現在地に応急病舎を建てて復歸した。

罹災見舞金の支給

八月十三日、県援護課から見舞金二〇〇万円が届けられた。県からの見舞金として、罹災者一人当り三〇円、市から同様に三〇円を支給することに決定し、一人につき合計六〇円を支給した。

その後、また県・市折半で原爆死没者一人につき五〇円の弔慰金を遺族に支給することになり、この支給事務を二十年十二月十日ごろまで行なった。

この給与金は、住宅・家財・遺族・障害の四種類があり、件数四四、五六九件・総支給額約二、二九〇万円であった。

疎開学童の措置

昭和二十年春から、市内公私立の国民学校学童三年以上は、できるだけ縁故疎開(約一五五、〇〇〇人実施)を勧め、その他は、県と軍の協力によって、市が集団疎開をおこなった。当時の学童三万二、〇〇〇人のうち、集団疎開児童は、約八、五〇〇人で、各学校単位として、佐伯・安佐・山県・高田・双三・世羅・比婆の七郡下に疎開していたが、広島市が原子爆弾で壊滅すると、学童は保護者や縁故者に引取られたり、教師に引率されて引揚げたりしたが、父兄の安否不明の学童は、一応双三郡三次町と三良坂村とに収容した。時日の経過に伴い、親族や縁故者が出て来て漸減し、最後に残った三〇数人は、佐伯郡五日市町の戦災孤児収容所に移した。

飲料水の確保

爆心から北方約二・五キロメートル離れていた広島市の浄水場は、前述したように職員の努力で損傷箇所を補い、六日当日も断水したかったが、その後、次第に職員も増加し、また船舶部隊の応援もあって、配電施設・送水ポンプの応急修理がおこなわれ、八月十日の午後から一日約五万六、〇〇〇立方メートル、その後さらに七万五、〇〇〇立方メートルを配水するにいたった。しかし、九月十七日夜半からの大風雨(枕崎台風)において、水道施設はふたたび大きな被害を受け、断水状態が何日か続いた。人員も資材も、また資金も不足という悪条件と闘いながら、職員は昼夜応急復旧につとめた。

当時、配水量の八五パーセントは漏水していたが、これも、職員の昼夜ない活動によって封じられた結果、二十一年四月はじめ、ついに全市の周辺末端まで水が出はじめたのである。

軍服の配給

罹災者は、まったく身一つで、家財一切を焼いてしまい、衣料や寝具に困っていた。ようやく秋めいて、日夜冷気をおびるようになって、市としても放任できない問題であった。

しかし、当時は正規ルートの入手は不可能に近い状態であったから、当初は窮余の一策として軍隊(工兵隊)と交渉し、古い軍服と軍毛布の配給をすることができた。終戦後は、西条に疎開してあった被服廠の、軍用のあたらしい被服(軍服・下着・軍靴など)一万コウリー〇万人分の払下げを受け、最初はトラックで昼夜通い、後は貨車三〇輦に積みこんで、進駐軍が来るまでに行なうという期限付きで、九月早々、広島駅に運び、市役所の裏庭に集積した。

これらはすべて町内会を通じて市民に配給したが、占領軍の進駐により、結局一万コウリーの半分も引取れなかった。しかし、市民は一〇万人余しかいなかったから、成人男子用被服としては充分にいきわたった。

綿布の配給

軍服などの配給によって、一応おとなの男子の被服はまにあったが、婦人・子供用がなかった。

そこで、海軍が、南方占領地区の宣撫用の綿布を相当量、安芸郡府中国民学校に貯蔵していたので、呉鎮守府へ行って、実情を話し、払下げを受けることができた。

運搬は、生残りの職員が、昼夜兼行で市役所にトラックで運びこみ、これを婦人・子供用として一般に配給した。

夜具

夜具は、軍用毛布と三畳づりのカヤが、軍から払い下げられた。十分な数量でなかったから、人口割で各町内会に分配し、必要やむを得ない罹災者のみに配給した。

無償払下げ

これら軍用物資の代金については、婦女子用の綿布は無償払下げであったが、軍用被服は、のちになって代金の請求を受けた。しかし、当時の状況から、市にも市民にも支払う能力が全くないことを陳情して、ついに免除になった。

工兵隊の物資払下げ
八月十五日、工兵補充隊長谷川熊彦少佐から、工兵隊内にある軍用物資を払下げるという連絡があり、十七日ごろから数日かかって市役所に搬入した。

払下げ物資の数量は判然としないが、軍服・軍靴・下着類・毛布・飯ごう・水筒・トラック・サイドカー・舟艇などであった。中でも数台のトラックは非常に役立ったが、ただ馬の払下げの申出だけは願ひ下げにした。

県からの配給品

八月二十一日、県からゾウリ二万五、足・げた一、足・毛布五〇コン包、茶わん一、人分、ハシ若干が届けられたので、市は町内会を通じて配給した。

海兵団の物資払下げ

九月になって、大竹の海兵団物資部から被災者救護物資として、おもに家庭用品雑貨(ナベ・カマ・ハンガー・文房具など)を三万円で払下げるといふ話があり、中村正忠秘書を責任者として上川・金村・宮原以上四人の職員が、金を持って出張し、何十箱という梱包を、海軍の船で宇品棧橋にあげた。

その直後、台風が襲来し、監視できず、その夜相当数量の盗難にあたりして、残品を庁舎に持ち帰ったが、海軍大佐がくれた目録どおりには物資がなかった。また三万円の払下げ代金について、その場にいた某少尉が、金を払わなくてもよいと云ったが、大佐は承知しなかった。

バラック生活

郊外へ脱出しなかった市民や、すぐに帰って来た市民は、焼け残りの木材や焼けたトタン・焼瓦などを拾い集めてバラックを建てたり、あるいは焼け残った防空壕に細々と住んでいた。半壊家屋は自ら修理し、辛うじて雨露だけは凌いでいた。

応急市営住宅の建設

そこへ九月十七日の暴風雨の襲来で、さらに災害を受けた。半壊家屋は倒れ、バラック小屋は潰れ、防空壕は水びたしになって住むに耐えなくなった。市としては、周辺地域で余分の部屋を持つ家を調査し、これら罹災者に貸与するよう斡旋したが効果がなかった。

当時住宅建設は、住宅営団がすべて行なっていたが、とても間に合わなかった。この営団が組立て住宅一セット三、五〇〇円で売り出したが、罹災者の多くは資金の持合せがなかったのか、あまり売れなかった。

市は、このような状況から、純市費で最少限の応急市営住宅の建設を決定し、基町に十軒長屋二〇〇戸のバラックを建てることにした。完成したのは二十一年九月であった。

市庁舎内の家

平井総務部長の発案で、家族の負傷や、家屋焼失で、郊外へ疎開した職員のために、焼けただれたままの市庁舎内の一部を住宅にして職員を確保することにした。焼け残った僅かな机を寝台に代用したり、コンクリートの床の上にムシロを敷いて泊った。ほぼ二〇人ぐらいがいつも寝泊りしていたが、のちには廃材を利用した田舎芝居のかき割りのような部屋がけが、四階の一室に設けられ、子連れのやもめ職員を交えた十幾組の家族生活がおこなわれた。

この準世帯の責任者に中村秘書がなり、泊り込み職員に対しては、炊出しをして食糧(雑炊)の特配をした。特に死体処理をする職員には、可部に疎開していた税務署に申請して酒を配給した。こんな状態が二年近くもつづいた。

十、復興への歩み

市議会の召集

八月九日、山本久雄市議会議長が、負傷姿で登庁し、柴田助役らと市議会の召集について相談した。

当時、議員定数四八人中、応召その他で八人の欠員があり、実人員は四〇人であった。

このうち、長島秀吉副議長ほか一〇人が被爆死し、生存議員も郡部へ避難しており、市内には大横田義雄議員ほか四人ばかりがいたにすぎなかった。

早急に市会を召集することに決定して、安佐郡原村の放送所に、市会議員召集の旨の放送を依頼し、八月二十日、出席者僅か二〇人ばかりで、被爆後最初の市議会全員協議会を開会した。

新市長の決定

この全員協議会で、お互いの無事を喜びあってのち、新市長に藤田一郎を交渉することに決定した。

結局は、藤田一郎との交渉は成立せず、その後の風水害などのため遅れ、九月二十七日、ようやく木原七郎を市会で正式に議決した。

十月二十二日、この市会の推薦によって内務大臣が裁定し、勅許を仰いで決定され、木原七郎が戦後初代の市長に就任した。続いて、助役に山本久雄・浜井信三が選任された。

臨時行政機構の決定

八月中頃から、市の職員は、約八 人ぐらい出勤していたが、八月二十三日、市は臨時行政機構を定め、課長・主任などの幹部の異動をおこなった。当面、必要な最少限度の事務を処理するための簡素化された機構で、原子爆弾で多大の犠牲者を出した市役所は、一応新発足することになった。

臨時行政機構

文書課

会計課

考査課

市会事務局

総務部

財務課

税務課

戸籍課

学務部

学務課

市民部

町政課

物資課

社会課

保健課

工営部

庶務課

土木課

建築課

水道課

(麻)

健康指導所 - 学務課所属

屠場 - 物資課所属

家畜市場 - 物資課所属

工業指導所 - 物資課所属

機械工養成所 - 社会課所属

市民病院 - 保健課所属

伝染病院 - 保健課所属

市営火葬場 - 保健課所属

復旧の努力

出勤する職員は家族的な団結のもと、みんな個人的な家庭事情はかえりみず、日々の仕事につくした。その間にも、昨日まで元気であった職員が、突然原爆症を発して、翌日は不帰の客となるという悲劇もたくさん起きた。

八月十五日ごろから机・椅子などの器具類や紙・鉛筆などの事務用品も、軍の援助でひとつとおり整った。

事務といっても、初めは罹災証明書・食糧配給・尋ね人相談・焼跡の取片付け・遺骨の整理などが主であったが、終戦後は、軍の放出物資の輸送・保管・配給・傷病者の救援・療養・白血球の検査などが加わって、ますます多忙になった。

八月の終わりから、九月の初めごろになると、身に全然傷も受けず、火傷もしなかった職員が次々と倒れていった。災害直後、役所に出て来て、盛んに活動した柴田助役や砂原格市会議員も、やがて病床について出て来れなくなった。

終戦

八月十五日終戦となり、軍隊が解散したため、復旧作業の主力が削がれたが、瓦礫の下や防空壕や井戸の中に数多く残存している死体の収容や処理など、引続き市がおこなった。

この作業は保健課が担当し、作業員を募集、班を組織し、衛生巡視が作業員四人くらいをつれて、大八車にマキや壊れた家の廃材を積んで市内を歩きまわった。

防空壕や井戸の中に落ちている死体を引きあげては、学校の校庭などを利用して火葬した。死体は腐爛しており、実に困難な処理作業であったが、これが十一月末ごろまで続けられた。

慰霊式

遺骨は市役所内に安置していたが、まだ発掘収容されない多くの遺骨が市中の各所にあった。

市では、これら犠牲者のため、八月六日から四十九日に相当する九月二十三日、市役所南側の空地に簡素ながら祭壇を設け、広島別院輪番の導師で慰霊行事をおこなった。

食糧対策委員会の設置

昭和二十年秋ごろから主食の遅配・欠配が次第に激しくなってきた。

市会では、昭和二十一年春、非常食糧対策委員会(委員長・横山周一)を設置し、委員全議員は、市職員と共に県下の農村を行脚し、食糧の供出を懇請してまわった。

一方、市民に対しては、焼跡の空地に、自分の土地、他人の土地をとわず、すべて耕作して、サツマ芋・ナンキン・キビなどその他の食糧を作るよう指導し、辛うじて飢餓線上を剋えていったのである。

市役所は、鉄筋の骨組みを無残にさらけ出したままで、どの部屋もドアや窓はすっかりなくなっていた。寒風の身を切るような吹きざらしであったが、庁舎を応急修理する財源も資材もなかった。

行方不明相談係設置

原子爆弾の炸裂という突発事態で、家を出たまま何日たっても帰って来ない行方不明者がたくさんあり、それを探し出そうとする肉親や縁故者が、連日、探しあぐねて広島市役所に問合せに来たので、九月六日に「行方不明相談係」を設けて対処した。

渉外課設置

また、被爆後、アメリカの災害調査団をはじめ、外国新聞記者などが多数来広し、続いて進駐軍や外国情報官その他の外人が市役所を訪れるようになったので、十一月に機構改革を行なったとき、新たに「渉外課」を設け、これに対処した。

酷寒下の庁内

九月ごろから年末にかけて、市の職員も次第に増加して来て、ようやく諸事務が軌道に乗りはじめたが、早々と到来した冬將軍は、遠慮会釈もなく破れたままの窓から飛びこんで来た。この頃の状況について、「原爆市長」に、「おそらく、広島市歴代の市長で、木原市長ほど苦労した市長はなかったであろう。市長はしばらく、いまの第一助役室で執務していたが、私(浜井)が助役に就任して、市長室に移った。どの部屋も例外なく、ドアもなければ窓枠もなく、焼けただれたままの部屋であった。でこぼこのコンクリートの床、その部屋のまん中に、ありあわせの小さな机と椅子をおいて、市長は腰かけていた。

あの年の冬は、庁舎を修理する財源も、資材もなかった。文字通りの吹きっさらしで、市長室にも助役室にも、吹雪がまっ白に吹きだまった。まして他の各課の事務室にいたっては、役所などというようなものではなかった。

暖をとる木炭もなかった。焼跡から拾い集めた木切れを燃やすので、庁内はどこも煙でいぶり、まっ黒になった。けむたくて涙腺をやられ、目ただれのようなになった吏員がふえた。

助役室の窓からは、大手町あたりの焼跡に、点々と小屋が見えた。どの小屋も焼トタンで囲った、人間の住まいとは思えない小屋であった。私は毎日、その小屋を見ながら、ああ、あそこにも悲惨な生活があると、ややもすれば挫けそうになる自分の心にムチを打った。

乗用車など、市役所には一台もなかった。市長が、自動車が要るときは、トラックを出して、その助手台に乗って出かけて行った。」とある。

文書散逸

戦後の秘書課の記録を、毎日、中村秘書が書いて箱に入れ、部屋すみに置いていたが、九月の台風のと看、窓がないので風が筒抜けに入り、散乱して紛失した。従って、被爆直後の軍・官・民にわたる多くの具体的な事柄が不明になった。

復興局設置

寒風吹きすさぶ荒涼たる焼野ガ原に、広島市役所は昭和二十一年を迎え、一月八日、復興局を設置した。局長には内務省の国土局長であった岩沢忠恭の推薦により、有能な土木技師長島敏が任命され、ここに新生広島の基礎がようやく設けられた。

広島市復興審議会設置

復興計画の樹立にあたり、「でき得る限り市民の意志を反映させよう」、という木原市長の意向から、二月十五日に「広島市復興審議会」が設けられた。

同委員には、財界・政界の代表者、各種団体の代表者、市議員など約三〇人が委嘱され、二月二十五日、第一回審議会(委員長・藤田若水)を開催し、都市計画案を発表した。

都市計画決定

続いて四月六日に、「広島復興都市計画」を決定し、復興五か年計画の作成に着手した。

復興顧問を迎う

これら復興計画を更に充実し、促進するため、進駐軍および軍政部との連絡を密にする必要上、軍政部から、広島県法律行政科長のモンゴメリー中尉を、進駐軍関係から英連邦軍の軍医サテン少佐(のち中佐)を、復興顧問に迎えた。

これら両顧問は、おのおのの専門的立場から、市政に種々の助言をしたが、市の復興計画についても入念に検討して、その基本計画を立派なものと認めた。

原爆犠牲者の供養

このように復興路線は、財源に苦しみながらも着々と進められていったが、市民はまだ起ちあがるほどの力もなく、バラック小屋生活や防空壕生活を続けており、一周年が迫るにつれ、また涙あたらしく、五月二十二日、広島市・市戦災供養会・広島仏教連合会・広島市町会連盟共催で、二十七日まで、原爆犠牲者供養週間を実施した。

戦災復興費の計上

六月一日、広島市議会は特別会計追加予算として、戦災復興費五、三三八万円を議決した。

復興顧問帰国

前記の広島市復興顧問モンゴメリー中尉が帰国することになり、六月十四日、「市長の意向としては戦災者の供養塔を建てる計画をすすめているが、私はこれを供養塔でなく、世界永遠の平和のシンボル国際平和記念塔としてほしい。国際平和会議は進駐軍が占領しているあいだは夢物語りにひとしい。」と、語った。なお、モンゴメリー顧問が帰国後、その後任は任命されなかった。

ジャービー少佐任命

サテン中佐もまもなく帰国し、その後任には江田島や安芸郡虹村の濠州軍宿舎の設計にあたった建築技師のジャービー少佐が任命された。

平和復興祭

八月五日、町会連盟主催の平和復興祭が始まり、広島市平和復興市民大会が開催されたが、この日に広島市復興事業起工式がおごそかに執りおこなわれた。

八月六日、一周年

八月六日、一周年を迎え、午前八時十五分、全市民が黙祷をささげて、犠牲者の冥福を祈った。

木原市長は、「本市がこうむりたるこの犠牲こそ、全世界にあまねく平和をもたらした一大動機を作りたることを想起すれば、わが民族の永遠の保持のため、はたまた世界人類恒久平和の人柱と化した十萬市民諸君の霊に向かって、熱き涙をそそぎつつも、ただ感謝感激をもってその日を迎えるのほかないと存じます。」

と、一周年のメッセージを発表した。

粟屋市長の死去

園山和正(当時・秘書係長)

八月五日は日曜日であったが、市長は、第二総軍畑司令官の招待を受け、参謀長の着任披露宴に出席のため、私も随行して午後六時ごろ軍司令部におもむいた。その会が終って、水主町の公舎へ帰られたのが午後九時ごろであった。市長は私に「ご苦労でした。」と言われ、「明朝、お迎えにまいります。」と、お答えしたが、これが最後のお別れになるうとはつゆ思わなかった。

当時、私は舟入川口町に居住していたから、出勤の途中、市長公舎へ寄ることを常としていたが、六日の朝、出勤の途上、自宅付近で被爆し、倒壊した家屋の下敷きとなって、一時気絶した。頭部その他を負傷し、大破した自宅で横にならざるをえなかった。

一方、市長公舎では、粟屋市長(五一歳)と、三男忍さん、孫女坂間絢子さんの三人が即死されたのであった。

翌七日正午過ぎ、市長の死を知らない私は安否を気づかいながら登庁して、はじめてそれを知り、愕然とした。

森下助役の命によって、大混乱の広島赤十字病院に駆けつけ、数知れぬ負傷者の中からようやく玄関隅のベットのの上に、横たわっておられる幸代夫人を見いだした。夫人は歩行不能で身体のいたるところを負傷されており、唇は横に頬まで裂け、正視できない状態であった。声をおかけすると、無言のまま、しっかりと私の手を握って落涙された。一瞬私も涙が溢れ出て、夫人の手にとめどもなく落ちた。

私は助役から口止めされていたので、お知らせすまいと思っていたが、夫人から「主人はだめだったのでしょうか。」とたずねられ、わずかにうなずいて、それに答えた。

それから、夫人に頼まれごともあって、公舎の焼跡へ行った。付近一帯焼野原の中で、見覚えのある大きな庭石によって、公舎跡を確認し、あたりを捜した。

ちょうど書斎のあった位置で、上身と下身は白骨となり、五〇センチぐらいの焼け残った胴体を見だし、市長の遺体であることを確認した。

すぐそばに三男忍さん(一三歳)の屍体があり、また少し離れて小さな白骨があった。これはお孫さん(坂間絢子三歳)のものと思われた。

周囲の余燼はいまだ熱く、やけどをするほどであったが、私は、ただ茫然と立って涙にぬれ、合掌するばかりであった。そのとき、保健課の職員数人が来られたので、一緒にお骨を拾い、それぞれ三つの壺にお収めし、胴体は柩に入れて庁舎に持ち帰った。そして、庁舎裏の空地に運び、火葬にし、遺骨を庁内の仮安置所に安置した。

重傷の夫人は、その朝、家屋の一方のはずれにおられたが、家の下敷きとなり、無我夢中で這い出し、付近の神社の境内まで辛うじて避難された。再び家に引返そうとしたが、すでに家は猛火につつまれていた。万代橋(俗称県庁橋)の上から、茫然と、火災を眺めていたところを、知人の黒川夫人に助けられ、広島赤十字病院に収容されたのであったが、二日目に近親者によって、高須の親類の家に運ばれて看護を受けられた。しかし被爆一か月後の九月七日に他界された。

粟屋市長は、津上毅一著「粟屋仙吉の人と信仰」によれば、昭和十七年三月農林省を辞してから一年半ほど職につかないでおられた。この時期は一見失意の時代のようなのであるが、学生時代から敬仰してやまなかった内村鑑三の影響により「グッド・クリスチャン」と言われた彼にとっては、心ゆくまで聖書に親しむことのできた最も恵まれた時代であった。そのころ広島市長就任の依頼があったのである。

当初は市長就任には気が進まなかったが、ある知人から「市長はおこつてはいけない。」と聞かされ、自分をためしてみようと決心がついて受諾されたという。また、先輩たる当時の大蔵大臣賀屋興宣氏からも熱心に勧められたからでもあった。

市長就任は、昭和十八年七月で、時あたかも開戦後三年めで、日本の敗色がようやく色濃くなりつつあるときであった。

東京の家に、教育の都合から夫人と子女を残して単身赴任されたが、その際「自分は広島市民と運命を共にする覚悟である。」という言葉を残して発たれたそうである。

在京中の彼をはぐくんだ丸の内聖書研究会で、赴任の挨拶をされたが、当日のことを師の塚本虎二は次のように記している。

「長本三千蔵君の司会でいつもの如く日曜集会。使徒行伝の著者問題。今日は新広島市長粟屋仙吉氏に憾話をしてもらった。大胆に信仰を告白し、主張し、禁酒禁煙を守って二十幾年の官吏生活を戦い抜いた氏の信仰の経験談は、力を以て聴衆に追った。特に青年たちは多大の感動を受け、奨励と安心を得たように見受けた。斯かる立派な市長を戴く広島市は幸福である。」

栗屋市長は、権謀術策入り乱れて複雑このうえない市会との関係で、しばしば苦杯を飲まされたが、部屋の額に掲げた「忍」の字を見つめてがんばり続けられた。

市長の座右にいつもあった書物は、聖書のほかにヒルティ「眠られぬ夜のために」「ビスマルク自伝」などドイツ語原書であった。空襲が激しくなり、防空壕にしばしば避難するようになっても、これらの本を携えていったといわれる。度量が広く、反面細い心使いを持たれた方であったが、複雑な人間関係の渦の中で、栗屋市長の魂はさぞ苦闘したことであろう。

なお、幸代夫人は昭和二十年四月に広島に移られ、三男忍さんは、同年六月に疎開して来られたのであった。

死線を越えて

川本軍次郎(当時・戸籍選挙課書記四四歳 庁舎内で被爆)

戦局が緊迫し、広島市も危険になったので、市民の最も大切な戸籍簿を、昭和十九年十月ごろ、比治山の文徳殿へ疎開した。

戸籍簿は、国の委任事務であり、法規上一定の場所から勝手に移動することはできないことであったから、疎開について市の部内で強い反対論があったが、志波課長(大手町八丁目の自宅で被爆死亡)が遂に押し切って実行したため、被爆から免れたのである。

職員一同も、一日休んで家庭内の重要物資を整理しておけとのことで、私も原爆投下より三日前に一日休暇をとった。八月六日は月曜日であったから、平日八時始業より約二十分早く出勤した。すでに四、五人の同僚が来ていて、挨拶をすると私はすぐ事務の用意をととのえ、中庭に出て朝礼に参加した。

室にもどり、まず一ぷくとタバコの火をつけ、さア仕事だと思った瞬間であった。

右側中庭の北にあった倉庫の近くへ、ドシーンと青白い閃光と共に、もの凄い勢いで何かが落下した。

わずか三、四〇分前に警報解除があったのに、もう敵機が来ていたのかと思うと同時に、爆風で左側に倒された。私は失神した。時間にして二、三〇分ぐらいであったろう。何かゴトゴトと音のするような感じがした。首のあたりが何か温かい。右耳の後方にガラスの破片が突きたったらしく血が流れている。

また、爆風で倒れたとき、左手の肘関節部に釘のようなものが突き刺ったようである。

アズキ大の穴があき、血が流れ出ている。

伏せたまま、中腰になって四方をみると四、五人いた同僚はおらず、室内は白い煙が充満している。すぐ手を口にあてて防いだ。

おもむろに起きあがってみると、窓ぎわにあった書類などが私に倒れかかっており、壁ぎわにあった書類箱はみな倒れ、ガラス窓も全部破れていた。

廊下へ出てみると、そこには負傷して倒れている者もあり、多数の男女職員が頭から手から血を流し、衣服をまっ赤に染め、無言で本館の南の出入口へと歩んでいる。

中庭の方を見れば、見渡すかぎり一面の白煙で、建物はすべておおわれ、あちらこちらに火炎が見える。

「決死隊を作れ。階上からも火だ。地下からも火だ。今のうちに決死隊を作って、前の広場へ逃げる。女子供はそれに続け!」と、誰かが叫んだ。

私も逃げようと思った。しかし、この負傷では二、三日は家へ帰れまいと考え、空腹が心配だと思って再び室内へもどり、弁当カバンを机の下から引出した。それから、廊下に置いていた自転車を、万一の場合の安全をと、西側の便所の中に置いた。西側出入口近くまで来ると、階上からモウモウと火炎が下へ、地下からは上へと昇降階段づたいに舞いくだり舞いのぼっている。

そのとき、市の防火班らしい人々が出勤するのを見た。

西の広場へ出てみると、数百人の負傷者が横たわっていた。私も空間をみつけて弁当カバンを枕に横になる。

重傷者のうめき声が聴こえ、全く悲惨な光景である。真夏の太陽は、一面の白い煙のためにおぼろ月のようにかすんで見えるが、熱いことおびたしい。

寝ながら庁舎を見れば、今や全面的に猛火に包まれて燃え盛っており、近くの電信柱ではその中央部から火を発している。いったいこれはどうした事であろう。

僅か二、三メートル先も、白煙でまったく判らず、ここに天地も終るかと思われた。

時は、午前十一時ごろであった。

「ここではまた危険だ。電車通りの西側へ避難せよ!」

と叫ぶ声があった。みんなゾロゾロとそこへ避難して横になる。

市庁舎や四方の建物が、次から次へと焼ける。午後三時ごろであろう、高熱に熱せられた空気が、ついに旋風となり、大小の石や瓦の破片が避難者の群れへ、無数に飛んで来た。また、一同避難。私はすぐ近くにあった石段を盾に身を避けた。

「もう最後だ。」と、私は感じた。私の後方に三〇歳ぐらいの婦人が、二、三歳の男の子にヘルメット帽を被らせ、おんぶしてかがんでいるのを見て、「最後ですよ。最後ですよ。」と言った。

私は後に残る妻や子どもらのことを思いながら「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」と、心の中で繰り返し唱えた。約二、三〇分ぐらいして旋風はおだやかになって来た。再びもとの広場にもどって横になると、他の人々ももどって来た。

そのうちにパラッと雨のようなものが降った。

しばらくたって、市の使丁さんが重傷の人から順々に、ジュースを配布したが、私には廻らなかった。

午後五時ごろから救護班が出動し、重傷者から次々に担架で赤十字病院の玄関前広場へ運んだ。歩いて行ける者は歩いて行けとのことで、私は起き上がったがヨロヨロして歩けない。弁当は持っていたても食欲なく、また空腹も感じない。

私が軍人さんに頼んで、担架に乗せられ赤十字病院玄関前に運んでもらったのは、もう午後十一時ごろであった。広場には約三百人ぐらいの重傷者で埋まり、次々に治療を受けていた。暗夜の中で、一七、八歳の青年が「兵隊さん助けて...」と、悲痛な叫び声をあげたが、恐らく死んだことであろう。

六日の夜はこうして、みんな青天井のもとで過ごした。

被爆後二日目の午前十時ごろ、私は初めて傷の治療を受けることができた。午後一時ごろ、ムスビの配給があり、長い行列を作ってそれをいただき、被爆後はじめての食事をしたのであった。

三時ごろ、起き上って帰宅しようとしたが、やはりフラフラして歩けないまま、また寝ころんでいると、西南方の空が赤くなり、ボンボンと破裂する物音を聴いた。大火災の余燼と思われるが、所々に煙も立ちのぼっていた。一羽の鶏が、私たち負傷者の寝転んでいる中を右往左往していたが、その無事な姿が不思議にさえ感じられた。

三日目の九日朝十時ごろ、二個の配給ムスビを食べてまた休んだが、午後三時ごろ起き上がってみると、幾らか元気も出て、少しは歩けるようになった。

帰宅を決心して、ゆっくりと市庁舎にもどり、事務室を覗いてみると、室内は全部焼失し、天井は黒焦げとなっていた。便所に置いていた私の自転車は少し焼けたまま残っていたので、それに弁当カバンを乗せて押すようにして、本庁舎北の出入口前まで来ると、各方面から出動した救援隊で大混雑、ムスビの配給があり、一個貰って食べ、いよいよ元気づいて帰途についた。

電車道に沿って紙屋町まで歩いたが、交差点付近で、基町経由三篠橋は、障害物で渡れないという話。そこで西へ相生橋を渡り、右折して寺町裏へ出、横川橋を渡って帰ったが、帰ってみるとわが家は全焼していた。幸い楠木町四丁目に姉がおり、家も半壊のまま残っていたのでそこへ落ちついた。時は夕方五時ごろであった。生きていた私をみて、妻や子は泣いてよろこんだ。

市庁舎からの帰途、電車が約十台残骸を晒していた。人道には消防車が五台ほど焼け残っていた。日本銀行支店前では、男女不明のどくろが落ちていたが、これらのことが今もって忘れられない。

一人生きのびる

岡村直一

(被爆場所・広島市役所内 当時・守衛長 四七歳)

昭和二十年八月六日。

あの日、私は死んでいた。

ほんの瞬間であったか、それとも長い間であったかも知れない。フと、自身にもどったときは深い深い谷底にいた。そして、高い上の方で、誰かが私を呼んでいるような気がした。

私は何が何やら不明ではあるが、命のある事だけはたしかである。

何か背中の上にかぶさっていて、起きあがることができない。オーイと、呼んでみたが誰も返事をしてくれる者も

ない。

私は腹這いながら、背中中の物を一つ一つ取り除いた。ようやく起き上がることができた。

何か眼に泌みる。水をかけられたようなので、手で顔を撫でてみると、それは自分の血であることに気づいた。それが、どこから出てどこに傷があるのかわからない。不思議なことに痛いと思うところがない。でも、血が出てくるのは頭らしい。

平素から私は救急袋をわが身離さず肩にかけていたので、その中から繃帯を取り出して、クルクルと頭に巻きつけた。

ようやく自分にかえり、近辺を見渡すと、人が死んでいるようである。

これはまた、どうしたことだろう。扉という扉、窓という窓がみんな飛び散っているではないか。

心が落ち着くと同時に、今のは庁舎のどこかに爆弾が落ちたのであろうと、直感した。

それはそれとして、今まで一緒にいた同僚たちはどうしたであろうか。あたりはうす暗く、まるで日暮れのように、先方が見とおせない。とにかく勝手知った庁舎内のことだ、歩いてみよう、二、三間飛び散った扉をまたぎ、よく見ると、机の横側に放心したようにまっ黒くなって坐っている人がある。動いているから生きているに間違いはない。オイと、声をかけると、オーイと答えた。

それは今しがたまで話しあっていた市長付自動車の運転手の下市君であった。下市君は先月、北支方面に出征して帰ったばかりの千軍万馬の勇士であったから、急に私は力が湧いて来た。私と下市君とは気の合った仲の良い友でもあった。

オイ大丈夫かと、声をかけると、大丈夫だ、お前は?という。私も、大丈夫だ。下市君、爆弾と思うが何処に落としたのか?庁舎の上か、または外部か?どちらにしても近い処であろうが、俺の体験ではかならず二度三度と、繰返し爆撃するに相違ないと思うから、この次が大ごとだぞと言う。

そうかも知れんぞ、ともかく二人は行動を共にして離れまいと、話しあった。

今までどこにいたのか、庁舎内が明るくなるにつれ、女の泣く声や誰かを呼ぶ声、ガヤガヤガタガタ走りまわる音がして、誰が誰やら気も顛倒している。倒れる者もいる。

誰もがつつらな眼を見開いて、合う人ごとに上づつた声を張りあげながら、右往左往、走り廻るばかりである。

そのうち南側会計課あたりから出火しはじめた。

見る見るあいだに書類に火が燃え移り、火の手は次第に拡がりだした。消火にあたらうにも皆が負傷している上に、水がピツタリ止まっていてどうしようもない。

火勢はつもの一方で、やむなく私たちは庁舎をすてて避難しなくてはならぬ時が来た。

幸い、先月庁舎北隣の公会堂が、疎開のため、取り壊されていたので、その場所が安全ということに気づいた。私と下市君は、公会堂跡に逃げる!と、一階から二階方面をどなって廻った。

その頃は、近辺の町民まで、庁舎が安全と思ったのか、多くの人々が逃げこんで来ていたので、さなきだに庁舎内はゴツタ返していた。

私たちは出来る限り庁舎内に踏みとどまっていたが、早や猛炎が二階から三階へと拡がりはじめ、危険にさらされる事となった。

やむなく公会堂跡に避難してみると、二〇〇人ばかりの人が、そこここに寄り集って、二度来るであろう敵機の襲撃に恐れおのきながら、燃え盛る庁舎の火勢を無言で見守っているばかりであった。

同じ庁舎に勤務しながらも、課が違えば、朝出合っても言葉もかけたことのない者までが、単に顔見知りなるが故に、誰もがなつかしくみえ、たのもしくすがりたい気持ちになっていたのは、どうしたものであろうか。

市内の情報が一つもつかめないのと、家族の安否が気にかかり、不安と焦燥がつもののに、どうすることもできない。

そのうち、あちらこちらに死ぬる人が出はじめた。それが誰であるのか、自分の場所を離れて見に行く人としてない。みんな身心共に疲れ切っていた。

時間は、次第に流れて行った。でも、誰も時間を聞くものとしてなかった。

庁舎はなお燃え続けている……。そのうち外傷のない人たちが、一人立ち二人立ち、どこかへ姿を消しはじめた。

私も心が落ち着くにしがたい、家族の事が頭に浮びはじめた。

「下市君、ここに何時までいたとて、仕方がないよ。君は祇園町のことだから、私の家まで来給え。それから考え

てみることにしよう。」と、下市君をうながして、表通りに出て、また驚いたのであった。

電車は歩道に乗りあげ、架線はクモの網のように落ちて千切れ、所々にスパークして火を噴いている。到底、紙屋町の方面へは行けそうにない。そこで、反対の鷹野橋通りを西へ抜けて、己斐駅廻りで帰ることにした。

途中、二、三か所で家が燃えていたが、走り抜けて己斐駅にやっと辿りついた。

己斐町方面では、多くの人々が右往左往していたが、火災は一軒も見あたらなかった。

ようやく中広北町のが家に帰りついたけれど、家は全壊し、母は下敷きとなって即死(七〇歳)、長女(二五歳)は全身火傷、長男(一二歳)も顔や手足を火傷、妻(四〇歳)も首や手足など火傷していた。三女拳子は、広島駅前郵便局勤務のまま生死不明であった。

私は私自身が生きているのか、あるいは死んで夢でも見ているのか、自分で自分がわからなくなった。

翌日から帰らぬ三女を探して、何回も駅前に足を運んだが、二週間後、白島の通信病院に収容されている事が判明した。しかし、重傷で父の私の顔も見えないありさまであった。こうして、あの時すでに死んでいた私だけが、今日まで生きのびているのは、どうしたことであろうか。

第五項 広島鉄道局...184

(現在・日本国有鉄道広島鉄道管理局)

一、当時の概要

概要 建物及び職員の概略

所在 建物の構造 建物面積 在籍者数 被爆時の出勤者数 代表者

(一) 本局

広島市宇品四丁目 (管理部のみ大須賀町) 木造二階建 約三、九五五坪 不明 不明 局長満尾君亮

(二) 広島駅広島市松原町 本駅 木造一部鉄筋 三三五 二四〇 駅長木村英雄

本構 木造建 二九〇 二三一 主任岩崎茂一

広操 木造建 四〇五 三四五 主任藤井春二

貨物 木造建 一六〇 一一〇 主任斉藤寅一

(三) 横川駅広島市横川三丁目二ノ三〇 本駅木造モルタル 約一二七坪 約七〇 約四八 駅長大橋範吾

北口木造二階建 約一 坪

(四) 己斐駅広島市己斐本町三四三ノ一 木造平屋建一部ストレ・ト葺 約八 坪 七 ~ 八 七 駅長柳田幸助

(五) 宇品駅広島市宇品町官有無番地 木造建 九九坪 三 一 駅長塚本一夫

(六) 広島車掌区広島市松原町広島駅階上 鉄筋コンクリ・ト建 八 坪 四八一 二四 区長福田敏之

(七) 広島保線区

イ、保線区 広島市松原町 木造モルタル塗二階建 一 坪 五 八 (学徒含む) 区長山田清次郎

ロ、分区 広島市大須賀町 木造二階建 一〇坪 二二 分区長車地朝実

広島市大須賀町

ハ、材修 広島市大須賀町 木造平屋建 三 坪 一八(学徒含む) 尾崎多一

(八) 広島電力区

イ、電力区 広島市東蟹屋町 木造二階建 六七六坪 二 二 区長黒崎寿雄

ロ、分区 広島市若草町 木造平屋建 一五九坪 一五 分区長古家尉七

(九) 広島第一機関区鉄筋コンクリ・ト建一、三三六坪約一、 不明区長高野精夫

広島市西蟹屋町 木造建 二二九坪

(十) 広島鉄道病院 本屋木造二階建 二、一五八坪 約二 約一三 院長近璋太郎

広島市大須賀町一 七五ノ二 付属屋木造平屋建 一、三二二坪

施設の概略

施設名＊概略＊

- (一) 本局＊総務部・業務部・施設部・資材部・船舶部及び管理部など。
(爆心地から約四キロメートル)
- (二) 広島駅＊本駅舎・本構・操車場・貨物倉庫・東、西信号所その他。
(爆心地から約二キロメートル)
- (三) 横川駅＊本駅舎・貨物倉庫・帶上家・物書庫・跨驚・ホム上家・北口駅舎(二階建)およびホム上家その他。
(爆心地から約一・八キロメートル)
- (四) 己斐駅＊本駅舎・乗降場・貨物線ホム・跨線橋・踏切施設・遷車台・渡線車・橋 など。
(爆心地から約二・四キロメートル)
- (五) 宇品駅＊本駅舎・ホム・倉庫その他軍用施設。
(爆心地から約五キロメートル)
- (六) 広島車掌区＊乗務員控室・事務室・教養室・寢室など。
- (七) 広島保線区＊事務所・倉庫及び付属建物など広島建築区と共同使用、分区は事務所・倉庫・材働は鍛冶溶接・製材などの職場。
- (八) 広島電力区＊配電室その他電圧機など電気設備。
- (九) 広島第一機関区＊車庫・橋型ガンドリーグレーン・給炭槽・給水柱など。
- (十) 広島鉄道病院＊診療棟三棟病棟・病棟三棟・ベット数一八〇、その他食堂・汽罐室・車庫・守衛室など。

二、疎開状況

戦局が激しくなるにともなって、昭和二十年四月二十五日、本局の審査課は宇品町の庁舎から、市内の中心部にあたる上流川町の広島女学院校舎に疎開した。その他各課とも廿日市町をはじめとして、郊外にそれぞれ疎開を実施したが、山内の各駅や現場の諸機関は、輸送業務遂行のために、一般の会社や工場のような疎開はできなかった。

ただ、各機関の重要書類や移動可能な諸資材・備品などは、完全な防空壕や市外の各駅などに分散疎開をおこなって万一の場合に備えた。

広島用品庫では、昭和十九年十一月に貯蔵品の疎開に着手し、芸備線の中二田駅・向原駅の日本通運倉庫を借りて、これに線路、車輛用品を分散貯蔵し、道後山駅と四国地区へは燃料油関係を分散した。

さらに同年十二月、需給課の業務の一部を広島工場に、広島用品庫の出納事務を向原駅に、翌二十年四月には、広島用品庫被服修繕場を佐伯郡大野国民学校に、時計修繕工場を賀茂郡八本松に、それぞれ疎開した。

広島工場では、昭和十九年秋ごろから一部重要資材・精密機械などの疎開をおこなった。

広島駅その他の各駅も、それぞれ疎開できるものは疎開したが、一部は近くの駅構内の防空壕を利用するとか、駅職員の自宅、あるいは郊外の家を借りたりした。横川駅では、重要物資・重要書類を貨車一輛に収納し、電車区の疎開貨車と共に、電車でけん引して、安佐郡古市橋駅に夜間のみ疎開した。毎日二十三時三十分ごろ発車し、翌朝五時ごろに到着するという夜間のみ疎開を行ない、これを上り貨物一番線に留置することにしていた。しかし、被爆当日は、ちょうど貨物線に留置中であつたため、全部焼失してしまった。

広島第一機関区では、重要書類の一部を防空壕に収容していたが、施設のすべては運転に必要な機器であつたため、いっさい疎開しなかった。資材も極度に欠乏し、機関車部品も故障車の部品を流用して間にあわせるという状況であつた。

広島鉄道病院は、昭和二十年四月一日に、佐伯郡廿日市病院(中国サナトリウム)を借りあげて疎開に着手した。また六月には、湯原保健指導所に、公傷患者の一部を疎開し、安芸郡瀬野村の民家を借りて、派出診療ができるようにした。つづいて七月五日、廿日市病院を分院として、入院患者全員の疎開を終了した。

薬品・衛生材料・診療機器などは、湯原・湯野・湯田などの保健指導所、および瀬野村の民家に疎開した。

三、防衛態勢

日華事変の拡大と、第二次世界大戦の勃発によって、多数の職員が大陸や南方へ派遣された。そのために鉄道内部でも各部課に欠員が生じ、事務に支障をきたした。昭和十七年九月十一日、機構改革がおこなわれ、定員の削減が断行された。

昭和十八年、戦局の緊迫と、国民皆労の主旨から勤労報国隊や青年挺身隊などが次々と結成され、昭和二十年には、国鉄の軍隊化が政府の指令で強行された。広島鉄道局では二月二十日、管内の全職場を鉄道隊組織に編成し、職場の軍隊化をはかった。

広島鉄道統監部のもとに、岡山・広島・下関・高松の各管理部隊があり、その隊の下に職場単位の中隊・小隊・分隊・班を編成し、隊長・隊付・副長・班長を任命した。

日常作業や用語も「規律範」を制定し、査察官を設けて監視し、欠礼その他の規律範の不励行者には罰則を適要するなど、厳しい指導が行なわれた。業務面でも鉄道局報が「鉄道統監部報」と改められ、示達類その他の命令が部隊長名で発せられた。

昭和二十年五月、鉄道国民義勇隊が結成され、同年七月には、鉄道義勇戦闘隊が編成されて、義勇隊召集の規定がつくられた。すなわち、隊員は「隊長の指揮下にあつて、大元帥陛下の股肱たる帝国軍人としての榮譽の責任をもつて、告白の分担の鉄道業務に服する。」というものであつて、まさに召集による将兵と同じように業務をおこない、文字どおりの決戦体制をとつたのであつた。このように国有鉄道奉公運動から必勝運営体制の強化、そして義勇戦闘隊の編成へと、国鉄の戦時体制は戦局の推移と共に、急速に改革された。

なお、昭和十七年ごろから、応召出征者の代替要員として女子職員が採用されたが、昭和十八年度では全体の一二パーセントを占め、全国で六、〇〇〇人を越えた。女子職員は、採用と同時に男子職員と同様、厳格な精神教育と作業の講習を受け、戦時要員として、出札・改札・電信から、操車・車掌・信号・転轍・炭水手の各掛まで、最後には線路工事という特殊な職域にわたつて働くにいたつた。広島駅をはじめ横川・己斐両駅その他の諸機関は、空襲警報発令の時はただちに集合して、その職場を死守することにして、防空・防火訓練をしばしば実施して万全を期することにした。防空壕・防火水槽などを主要の場所に設置し、待避訓練などを随時おこなつた。

鉄道義勇隊は、運転・旅客・貨物・庶務の各班に分かれ、また別な体制として指揮・防火・警備・救護などの各班が編成された。機関の職務内容によっては、広島車掌区などのように、内勤者(事務室と当直勤務者)で消火・搬出・破壊という名称の班を設け、それぞれ班長・副班長を指定し、また一日ごとに、当直隊長・副隊長を定め、常にその責任体制を明らかにしていた。

広島鉄道病院では防空班が編成され、交替で宿直し防衛にあつた。市内在住者は、空襲警報の発令と共に、直ちに勤務場所に出動し、防空班長の指揮のもとに防備についた。危険物は万が一に備えてコンクリートしゃへいで遮蔽した地下室に保管していた。

このように国鉄諸機関の内部的防衛体制の充実が進められると同時に、鉄道の根本的な任務である保線対策も、戦力確保の方針にのっとり、着々と準備が進められていった。

さきの昭和十六年五月、戦争準備体制の一環として、山陽線強化委員会が設けられた。「どうすれば山陽線を五年間もたせることができるか。」「現状では何年間もてるか。」などについていろいろ検討された結果、「五年間もたせるには、マクラギの増加、道床の厚みの増加、レールの五〇キロ重量化などで、約五億円の金がかかる。」また、このままでは第一次世界大戦のドイツの国鉄の例からみて、「速度制限、保守限度緩和を条件に三年間」という結論が出された。

昭和十七年には、作業投入力の不足に対応して、保守許容限度の緩和措置がとられた。

その後、戦争が激烈となると、いよいよ男手は不足し、資材は全く欠乏した。それに反して、山陽本線の軍事輸送量が増大したため、線路や車両の劣弱化が急に目立ってきた。

昭和十八年ごろから、列車の途中脱線などの事故が続発し、輸送が阻害される事態に直面した。

ついに、昭和二十年には閣議決定による山陽本線のレール取替え一万トンが実施された。

マクラギは関釜連絡船によって、北海道からの補給措置がとられ、レールは、八幡製鉄所から貨車送りされた。

このころ、保線作業は、老齢者や動員学徒・女子などで幸うじて行なわれていたが、実に過酷な重労働であつた。

なお、戦時中に軍事輸送専用線を駅の裏側(北側)の雑草茂る東練兵場内に敷設するとともに、ホームを仮設し、出征・帰還などの兵員輸送に使用された。

四、避難計画

戦時体制推進の動脈的使命を持つ鉄道は、全機関にわたつて、職員はその職場を死守するという気概で精励していた。広島第一機関区などは特にきびしく、如何なる事態発生にも絶対死守の方針で、平素からその訓練がおこなわれ、いっさい避難は許されなかつた。ただ、他の諸機関と同じように構内やその付近に一応の待避壕がつくられ、一時的な

利用が考えられるという程度であった。

広島駅では、小荷物室前の地ド道や駅前防空壕の利用、各詰所は近くにつくった防空壕の一時的待避などが、わずかに配慮されていた。

広島車掌区・広島保線区なども広島駅と同様の待避方針であった。空襲を受けた場合は、駅裏の東練兵場に脱出し、二葉山の東照宮前を第一溜り場とすることにしていた。車掌区は、この第一溜り場から、さらに第二溜り場として安芸郡戸坂町(現在、広島市内)の橋本宅を予定していた。

横川駅は、三篠国民学校校庭を指定場所とし、そこから三滝山麓に出て、安佐郡古市橋駅・古市町原田宅に至り、さらに同郡安村の正伝寺に避難する計画であった。

己斐駅は、己斐国民学校を指定していた。宇品駅は、市の中心部からかなり離れてもいたし、特定の場所は指定していなかったが、駅周辺の広場に万一の場合は避難する計画をたてていた。

広島鉄道病院では、空襲警報発令の場合、職員はもちろんのこと、外来患者はその科の責任者があらかじめ指定された防空壕に誘導し、待機することになっていた。防空壕は定員三〇人のものが五か所構築されていたが、爆撃および火災に備えては、点呼時にあらゆる方向の避難先を想定して、日々訓練を重ねた。

五、被爆の惨状

惨禍宇品の鉄道局

八月五日の夜には二回も空襲警報が発令され、そのつど、鉄道局防空要員は臨時の宇品線気動車で鉄道に出勤した。帰路には気動車が出ないので、いつも徒歩で帰宅した。

そうした不眠の夜が明けた八月六日、宇品行き通勤列車は、午前七時九分に発令された警戒警報が三十一分に解除されたので、いつもより十五分ばかり遅れて広島駅を発車した。

その列車が宇品駅に着いて、通勤者のほとんどが駅から鉄道局に向かって列をつくって歩いていたとき、原子爆弾が広島の上空で炸裂したのであった。

通勤者は突然、目の前にフラッシュを浴びたような一閃を受けて、急に目がくらみ、一瞬何も見えなくなってしまい、そのあと、かすかにドンという音を聞いたという。

宇品地区が危険地帯であると、通勤者が自意識をとりもどしたとき、市の中心部には、まっ赤な大きい火炎の玉がドッカーリととどまっていた。

空の青さと楕円型の炎のコントラストが強烈な印象を一同に与えた。その火の玉のま下からはすばらしい白煙の柱が、モクモクと湧きあがって、しだいにくれないの火の玉を包んでいった。

鉄道局付近にあった日通の倉庫は無残にも破壊された。

当時は八時三十分が始業時間であったから、ほとんどの者が出勤途上であり、鉄道局には各室ともまだ職員が出そろっていなかった。

実に突発的重態であった。爆風によって、バラック建ての庁舎の屋根は破壊され、テックス張りの壁は飛び、窓ガラスは粉微塵になって吹っとんだ。そして室内にはあらゆる物品が散乱した。

一瞬の出来事のため逃げるひまもなく、室内にいた職員はほとんどの者が重軽傷を負った。

しかし、不幸中の幸いというか、火災の発生がなかったので、被害は最少限度に食い止められた。

爆心地に対向する木造庁舎(二階)は爆風の影響も大きく、柱が<<>の字型に中央が折れ曲った。この建物の二階には厚生課・人事課の二室があったが、窓ガラスは、あとかたもないまでに破壊され、床にはこなごなになった破片が足の踏場もないくらいであった。

室内にいた職員は、身体にガラスの破片が刺さり、その出血によってシャツを真紅に染め、みんな悲愴なまでに顔を蒼白にしていた。

また、業務部総務課と旅客課の仕切りになっていたテックス張りの壁が倒れ、並んでいた戸棚が、その上にかぶさっていた。ガラスの破片が一ぱい飛散していたのは、ここも同様であった。これが勤務時間中であつたら、その人的被害はさらに甚大であつたらう。

電話不通となったため、広島駅方面の様子は全く不明で、大混乱になっているとはつゆ知らず負傷者を自動車で鉄道病院へ送った。

被爆直後の一時的混乱は、次の空襲らしきののことが判明すると共に、各人は室の清掃と整頓に取りかかった。

しかし、精神的なシ、ックが大きかっただけに、だれも仕事をするという気持ちにはなり得なかった。

広島駅の救授

広島駅火災の情報が入ったのは午前十時ごろであった。すぐ救助のための班が編成され、広島駅へ出発した。

このころ、やはり爆風と共に全員退避した安芸郡向洋の鉄道教習所では、立ちのぼる巨大な噴煙や、火災の猛煙を望見して、偵察隊を広島市内に派遣した。その報告によって、時を移さず救援隊を組織し、海田市自動車区のトラックで広島駅へ向った。

広島駅の惨状

同盟通信社の前原記者は、出張先から列車で広島駅へすべりこんだとたんに被爆し、車内に打ちのめされた。列車の中のほとんどの乗客が、窓ガラスや椅子に体を叩きつけて即死、生きている客も裂傷を負って、鮮血に染まった。グチャグチャになった列車から、やっと這いだししてみると、駅構内の屋根はすべて吹きとばされており、改札口から、駅前の広場へかけて、二～三、人の人が全身に火傷言い、裂傷を負って倒れていたという(秘録大東亜戦史・中村敏記「曼珠沙華」)。

原子爆弾炸裂下の広島駅一帯の状況について、広島鉄道機関誌「ひろしま34号」所載の記録やその他の資料によれば、次のとおりである。

頑丈な木造二階建であった広島管理部も一ぺんに押しつぶされ、全員その下敷きとなった。管理部員は血まみれになって這い出し、動けない者を引っ張り出したり、棟木や柱に挟まれた者を助け出したり、火災が身近に迫るまで必死に救助作業をおこなった。

重傷者は棟練兵場へ避難させ、残った者は重要書類の搬出や、付近民家からの延焼の防止に、バケツ送水の消火に努めた。管理部が遂に猛火に包まれたころ、すでに尾長町に管理部仮本部、広島駅構内に臨時輸送本部設置の体制がとられつつあった。

広島駅は、本館の前の張りボテの出札室がつぶれ、多数の旅客が下敷きとなった。駅長室のある別館は半壊し、二階の車掌区はつぶれた。ホ - ムにいた者は二線路へだてた向い側ホ - ムまで爆風で吹き飛ばされた。各ホ - ムの上家はほとんど柱が折れ、ねじまげられたり、路線上に倒れたりしていた。

管理部の裏手にあった電務区は半壊し、交換機・電源室が破壊されて、通信は一時不能となった。近くにあった通信区・電力区も同様であった。西側の印刷場は潰れると同時に火の手をあげた。

広島駅の東側にあった保線区・建築区は無残に破壊され、隣接の民家の火が追って来た。

第一・第二機関区および貨物扱所も徹底的な打撃を受けた。

広島・横川間の神田川鉄橋(常葉橋北側)上では、折から進行中の、ドリ貨物列車が爆風によって脱線転覆し、火がついたので、積んでいたドラム罐がつぎつぎに爆発して、市民をおびえさせた。その前方、白鳥付近の線路は、爆風の震動によって、一〇〇メートルにわたり亀裂を生じ、築堤の側面が沈下した。

宇品の本局や向洋の教習所から、救援隊が、広島駅に到着したときには、すでに駅前はもの凄い火災が渦巻き、二台の消防自動車では手もつけられない大火となっていた。救援隊は、駅の待合室で動けないでいるたくさんの重傷者をトラックで救出した。

十時十五分、廻りの早い火の手は駅舎に迫って来た。

駅長室東南の保線区二階建(旧鉄道診療所)に、カドヤ旅館から火が燃え移り、なお西側は、印刷場から発火した火災が、西信号所方面と物資部・管理部方面、さらに郵便局へと燃え移り、その裏の電力区を襲い、見る見るうちに西と東から、駅の本屋に猛火は迫り、各窓から吐き出す炎と旋風が、もの凄い光景を呈した。燃える丈余の木片が中天高く巻きあげられ、東練兵場方面にたくさん飛散した。この方面の機関車待避壕や倉庫などにも飛火し、その一つが生ゴム堆積中の倉庫に引火したと思うと、耳をつんざく大音響と共に黒煙がモウモウと舞い上がった。

この付近から本館一帯にかけて、ついに火災のるつぼと化し、紅蓮の炎はほしいままに荒れ狂った。

第一ホ - ムの西端にある西運転室は、爆風によって押し潰されたまま、九時五十分ごろ焼失した。東運転室は上り運転室と共に倒壊し、十一時ごろ焼失した。

芸備運転室は横倒しとなり、十一時ごろ焼失した。西信号所は、路線側に倒壊し、二階の座板が地上に落下して、信号係二人が下敷きとなり、負傷者三人を出した。また印刷場方面から迫ってきた火の手により、ついに九時五十五分に焼失した。

西操車室は、東北に向けて倒壊し、十時三十分には焼失、本構点呼場は一瞬にして倒壊、当時点呼中の一二〇人は下

敷きとなり、死者一人、重軽傷者七〇人を出した。

四番ホ - ムの東北にある本構運転室と東操車室は、原形をとどめない状態で倒壊したが、焼失はまぬがれた。

貨物事務室は、屋根瓦が飛散し、階上階下共に、西側の柱・窓枠その他が折損した。貨物第一ホ - ムは屋根の一部が破損、貨物荒荷ホーム・貨物第二ホ - ム・貨物第三ホームは屋根が全部破損した。

広操運転事務室は、西南外側が中破、屋根瓦が脱落し、柱は折れ、窓枠は飛び散った。ちょうど点呼中であったから、負傷者四〇人を出した。

なお、宇品口信号所・一中信号所、上り挺子扱所は窓を破損、上り運転室・芸備挺子扱所・東部挺子扱所は外側が中破した。

また、宇品線ホ - ムは、その東側のスレート屋根だけが僅かに破損し、ホ - ムとしての残骸をとどめていた。レール利用の柱であったから折れなかったのである。

このような状況下にも、車輛の退避は着実におこなわれた。当時一番線に下り旅客列車、五番線に上り旅客列車が停車しており、洗滌線に多数の客車が停留していた。これらを管理部員が指揮をとり、負傷した構内従業員が退避作業に奮闘した。

電気挺子の機能喪失のため、転轍器は一つ手廻しハンドルで転換した。その上、列車は、単にそのまま退避しただけでなく、軍用線に回行しては、東練兵場に集った多数の負傷者を積みこんで、西条町や海田市町方面へ輸送した。その間にも鉄道局への状況報告の伝令は次々と派遣されていたのである。

広島操車場では、独自の立場で、火薬積車の離散や、その他の貨車の疎開をして、飛火からこれを守った。二つの機関区でも適切な機関車の退避を実施していた。

東信号所に火の手が迫ったとき、負傷した従業員たちと、教習所の救援隊とが協力し、バケツ・リレーで消火に努めた。そして、その必死の作業は、ついに火災からまぬがれさせたのである。このため所内の機器は大破していたけれども、早急に修理して、その後の復旧に大いに役立つことになった。

なお、広島市街は一日中燃え続けており、広島女学院に疎開していた本局の審査課や、市中に散在する寄宿寮などの状況は、全く知るすべもなかった。

この時、佐伯郡五日市駅から管理部への伝令が、途中市内の火災をくぐり、河を泳ぎ渡って到着し、下り方面の状況を詳細に報告したため、これがその後の計画に非常に役立つことになった。

昼過ぎには、矢賀町の広島工機部からの伝令も鉄道局へ到着し、その後徐々に各機関の連絡がつきはじめた。問題は線路の一刻も早い開通ということと、罹災者の輸送であった。

鉄道局員や管理部員が、運転整理や輸送手配などのため、上り方面は安芸郡海田市駅、下り方面は己斐と佐伯郡宮島口・山口県岩国駅などへ派遣された。そして、尾長町に職員の救護所が設置され、多数の負傷者を送りこんだ。

広島駅長の第一報

木村広島駅長は、血のにじんだ繻帯を頭に巻いて、沈着冷静に部下を指揮し、刻々と集って来る情報をとりまとめた。

午前十時、半壊した貴賓室において、鉄道便箋に、鉛筆で情報を書きとどめ、部隊長(広島鉄道統監部)にあてた第一報を送った。

この報告書は、木村駅長から管理部の江尻唯一施設課長に手交されたが、時に午後一時であった。内容は混乱時のものとは思えぬほど実に詳細なもので、「中国支社30年史」に収録されている。また同駅長の指令により、列車の疎開や車輛の転線などが完遂された。

孤立無援の横川駅方面では、火の荒れ狂うに任された。被爆後、ただちに、三篠本町一丁目の可部線場内信号機の付近から煙が上がり、火の手が四方にひろがった。その時、横川駅付近にはまだ煙は見えなかったが、五、六分後構内にあった古枕木の堆積の山や、可部線ホ - ム・上りホ - ム西端の古枕下の部分が熱線によって自然発火したようである。また同時に構内の各所から煙が立ちはじめた火災となり、構内の横川電車区が焼け、数時間後には横川駅も焼失した。鎮火したのは翌七日の朝であった。しかし、石炭置場の石炭は一週間近くも燃え続けたのであった。

駅の待合室建物の倒壊で、一人近くの人々が生き埋めとなり、助けを呼ぶ声をたどって四人が救出されたが残りの者は救出の道具がなく、そのまま駅舎の全焼と共に運命を共にした。

駅員は、書類や貴重品の持出し、停留中の車輛の防護、自動車の搬出など、でき得る限りの手段をつくしたのち、線路伝いに三滝山や三篠国民学校に退避した。

なお、軽傷者や女子職員は、古市橋駅・古市町原田宅および安村の正伝寺に避難した。重傷者は午後二時ごろの臨時列車で大野病院に収容した。

己斐駅では、非番者が引継準備を終え、出務者の点呼終了を待っていた。出務者は八時前の上・下列車で出勤し、ただちに点呼に集合した。その直後に被爆した。

そのころ駅には、八時前の上・下列車(通勤通学列車)が出た後のため、待合室で列車を待つ客も少数であった。また構内に停車中あるいは通過中の列車もなかった。

点呼終了直後、狭い事務室にはまだ二、三〇人の駅員が集っていた。

突然、駅前の樹木付近に、赤い閃光が落下したように思われた瞬間、なま温かい爆風と同時に大音響をたてて、東南に面した駅本屋の大部分が、一瞬にして完全に倒壊した。室内にいた者は、事務室西側の僅かなすき間から先を争って線路上に脱出した。

柳田駅長・主席助役など、顔面をまつ赤に血で染めながら、少ない職員を指揮したが、職員のほとんどがガラスの破片などで負傷していた。

しかし、爆心地から三キロメートルの距離があったことが幸いして、人的被害も少なく、火災も最少限にいとめられたのであった。殊に火災は、被爆後のすごい降雨(黒い雨)で消火したとも言えよう。

出務者・非番者とも大半の職員が、駅北方の己斐国民学校とか旭山神社裏山へ避難した模様で、正午ごろまでには、これらの人もほとんど駅に復帰し、非番者は一部の人を除き、それぞれ力気にかかる自宅に帰った。

己斐駅は広島市の西玄関口であるから、市内から何千人もの罹災者が殺到し、駅構内を通過して西へ、あるいは北へ逃れていった。婦女子は特に悲惨のきわみで、爆風で被服を剥ぎ取られて全裸に近く、頭髮は焼けて丸ぼうずになり、引き裂かれた皮膚はボロのように全身に垂れさがっていた。正視できないその姿のまま、半狂乱のように急ぎ行く人、フラフラと夢遊病者のように漂っている人、目がつぶれて見えぬ線路にうづくまる人など数知れず、酸鼻のかぎりをつくした。

応急手当をする医師も薬品もなく、ただ水を求める者に水を与え、火傷者には、とりあえず松根油をふとん綿に浸して塗ったりするぐらいであった。

構内には、相当数のただれた死体かころがっていたので、これらを大八車にのせて、何回も何回も同町内の善法寺へ収容した。

広島鉄道病院

広島鉄道病院は、猿猴川に面した診療棟および病棟は全壊に近かったが、二葉山に面した建物は一部半壊にとどまった。内部は爆風で階段が吹きとび、床のリノリューム張りは剥げ上り、天井は落ち、二階から一階がつぶさに見られるありさまであった。

昭和十九年三月に新築され、関西随一の偉容を誇った病院は、耐火構造であったから、自然着火はまぬがれたが、十時三十分ごろ、三方からの火の手で類焼、気罐室の煙突のみ残して全焼した。

猛煙のあがっている中を負傷者は右往左往した。天井の梁や柱に足をはさまれて身動きがたえず、悲鳴をあげている者、階段の下敷きになって意識を失っている者、即死している者、放射熱線によって火傷している者、ガラスの破片をあびて刺傷し、切創した者など、誰一人として無傷の者はいなかった。

そこへ、市内の負傷者がどっと押し寄せて来て、言語に絶する悲惨な光景が展開された。しかし、診療器などの機器類が飛散しており、全く手のほどこしようがなかった。

十時過ぎ、負傷者を誘導して、病院の職員は全員が東練兵場へ避難した。そこから意識不明の重傷者は、汽車で直接、安芸郡の瀬野(鉄道診療所)や賀茂郡の国立西条療養所へ担送した。また、入院患者の中には、戦争の激化とともに、学徒動員などの未経験者の就業による負傷者も多くいたが、これらの生徒は、芸備線の狩留家(かるが)国民学校に収容した。

軽傷の職員は踏みとどまって、市内の一般被爆者が殺到して混乱をきわめている尾長町の鉄道職員寮や、矢賀の鉄道工機部(臨時収容所)に出むいて、救護作業に全力をつくしたのである。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

鉄道機関誌「ひろしま」の記録によれば、人物・物的被害は次のとおりである。何と云っても人間の受けた打撃が

一番大きく、痛ましいものであった。ある者は職場で、ある者は通勤途上で即死し、ある者は負傷ののち数日で倒れた。誰にもその死を知られない行方不明者もあった。また負傷者の数もおびただしいものであった。

業務機関別職員死傷数

機関別	死亡	行方不明	重傷	軽傷	計	現在員
本局	七〇人	八人	五三人	一六四人	二九五	一、〇一八人
印刷場	三	二	一一	一四	三〇	九六
電修場	一	〇	三	四二	四六	一四七
工事区	一	二	八	一三	二四	一二〇
電気工事区	〇	一	一	四	六	五二
用品庫	五	一	三	九	一八	一三七
用品試験場						一二
病院	八	一	三九	九六	一四四	二四四
広管本部	一〇	五	六四	八三	一六二	五六九
広島駅	六	〇	八九	一三九	二三四	一、三一
車掌区	七	一〇	五九	二五	一〇一	八五〇
電務区	三	三	一五	二二	四三	一九四
一機	六	二六	一二	一一九	一六三	九五六
二機	八	一九	一六	五〇	九三	五一八
検車区	四	〇	三八	三八	八	二七五
保線区	一	〇	四〇	七四	一一五	四四〇
通信区	二	五	二五	三九	七一	三五〇
電力区	二	〇	五	一〇	一七	二〇二
車電区	三	一	四八	〇	五二	一四三
建築区	三	三	二二	二一	四九	一一四
横川駅		〇	一四	二〇	三四	五四
横川自動車区	二	〇	九		一一	一六四
横川電車区		〇	一七	四〇	五七	一〇九
己斐駅	一	一	一	二三	二六	五六
宇品駅		〇	一	一	二	二七
向洋駅		〇	一	五	六	三六
海田市自動車	二			一	三	二二六
長束駅		〇	一	〇	一	一
下祇園駅	一	〇	〇	二	三	二〇
工機部	三	〇	七	五一	六一	一、〇七一
教習所		〇	二	〇	二	三九二
計	一五二人	八八人	六 四人	一、一 五人	一、九四九人	九、六二四人

この数字からみると、被害人員は総人員の二〇%に過ぎないが、実際は、本局・病院・管理部・駅・電務区・車電区などのように固定した勤務個所のものを除いて、他の業務機関は職場が地方に散在していたり、また車掌区・機関区などはその大半を占める乗務員が遠くに乗務中であつたのと、工機部・教習所のように爆心より比較的遠いものを考慮すれば、当時の在広人員ははるかに少なくなり、被害数はその五〇%以上になるものと思われる。

本局の死傷者の中では、広島女学院に疎開執務していた審査課勤務の者がその大半を占めており、広島女学院局等女学校の動員学徒十数人の死亡者も含まれている。

死亡者を日別にみると、

六日	一〇九人
七日	一二人
八日	五人

九日 八人

以下ぼつぼつと死亡したのであり、何といっても被爆当日の即死者が断然多く、行方不明の八八人も当日死亡とみるべきであろう。

職員家族の死傷者は職員の死傷に劣らない。広島に家を持っていた者で、家族全部を失った者もあり、全員無事という距離的に遠いところに住んでいた者に限られる。郡部から市内に通学していた職員の子弟の被害も多かった。

職員家族死傷数

死亡者 三三九人
行方不明 二一人
重傷者 四七四人
軽傷者 六二九人
計 一、四六三人

地方出身者が多い関係で、職員の家族は相当疎開していたのであるが、その住居を失った者も多かった。

職員家屋罹災数

全焼 一、五三五戸
半焼 一九戸
大破 四三二戸
中破 七三四戸
小破 一四〇戸
計 二、八六〇戸

施設方面の主な被害をみると、

車輛関係

客車	貨車
全焼 五輛	全焼 三九輛
半焼 "	半焼 三 "
大破一六 "	大破四 "
中破二八 "	中破八 "
小破三六 "	小破九 "
計 八五 "	計 六三 "
電車	自動車
全焼 六輛	全焼 五輛
半焼 "	半焼 一
大破 二 "	大破 一
中破 二 "	中破 一
小破 二 "	小破 一
計一二 "	計五 "

神田川鉄橋上の列車被害

このうち、神田川鉄橋上で脱線転覆した第三七七貨物列車の損害は、次のとおりである。

全焼 二六輛
半焼 二 "
大破 四 "
中破 七 "
小破 六 "
無損害 四 "
計 四九 "

建物関係

全焼 一 九戸

半焼	一 "
大破	四 "
中破	七八 "
小破	四 "
計	一九六 "

前記の家屋被害のうち、広島駅付近の全焼区域が一番大きく、その周辺の官舎群、白島の官舎群、横川方面が含まれている。広島東部の用品庫・電修場などは中破、鉄道局も中破のうちには入っている。その他、通信・電力・機械関係・資材関係も相当甚大な被害を受けた。

七、復旧状況

復旧状況

宇品町の本局、木造平家建の仮庁舎(延五。 平方メ - トル)については、元来、広島駅西側に本庁舎を建設するよう計画が進められていて、これは昭和十二年七月の日華事変によって、くい打ち工事をしたまま中止となっていたので、その後定員(六 人)の増加にともなう増築を重ねて、昭和十六年九月ごろ、一部を二階建に改築し、別棟に会議室を建築した。

それが被爆によって、相当の被害を受けながらも火災を免れたので、何とか使用にたえ得ることができた。しかし、雨天の日などは雨洩りがはげしく、執務に支障をきたすありさまで、幾度か応急修理がほどこされた。

終戦後、職員数の増加によって、再び庁舎の改築が要求されるようになり、昭和二十六年四月、広島駅裏 (元東練兵場内・現在の中国支社)に鉄筋コンクリ - ト造四階建の工事に着手した。この建設中、同年十二月十五日、宇口仮庁舎が火災によって全焼した。そのため戦時関係の重要文献をすべて失うとともに、本局および資材部が広島駅の周辺に分散して執務した。これによって駅裏の新庁舎の建設が急がれ、昭和二十七年九月に設立の運びとなった。

全焼した広島駅は、灼熱の炎に焼けただけ、金燼いまだ消えない翌々日の八日、陸海軍工作隊の出動によって、水を注ぎながら後片づけに着手した。

そして、十日から二日間で、急造のバラックが六棟 (駅長、助役室一棟、庶務一棟、会計一棟、物品倉庫) 建てられ、さっそく疎開中の机・書棚を取寄せて事務をとった。しかし、一夜造りの小屋であったから、雨は漏り、雪は吹きこんでどうにもならず、翌二十一年一月、資材難を克服して再建に着手し、三月二十八日、木造ながら他の復興にさきがけて、これが竣工をみた。プラットホームは屋根なしのまま、支柱基礎の鉄柱だけがホーム上に凸出していた。

小荷物倉庫は、本館の西側に、昭和二十一年九月二十八日、日通荷捌所とともに竣工した。

出札は、被爆の翌々日八日から、上・下線開通と同時に、戦災者に対し、空襲罹災者乗車票を交付するため、焼トタンぶきの小屋で執務した。二十日ごろ、建築区の手によって、出札室一棟を建て、翌二十一年一月一日、本館の応急修築ができたとき、これに移ったが、同年九月十五日ごろ、本館前に一棟を建てて移った。

広操関係では、屋根瓦が脱落し、柱・壁などに被害を受けた運転事務室を、昭和二十二年四月十四日修理完了した。貨物事務室は、傾斜して半壊であったが、昭和二十一年六月に、その修理を完了した。

被爆直後の列車運転状況

(一) 広島駅

(一) ちなみに、被爆直後の列車運転状況をみると、六日当日は既述のとおり、東練兵場の軍用線で避難者を運んだほか、被爆の災害の少なかった周辺の駅から、折返し運転を行なった。同時に、通信区の電話線の復旧が急がれ、その夜のうちに広島・向洋間が一回線開通した。

さらに、糸崎・岡山との連絡や、広島・横川間の架線を急いだ。

七日には、宇品線が第四三七列車を初列車として平常運転に復した。しかし、本線・芸備線は広島駅 からはなお運転できなかった。

八日、ついに本線が開通した。上り線十六時四十二分第二二二列車、下り線十五時三十分第三三三列車を初列車として、広島・横川間は単線で旅客列車のみ運転した。

九日、芸備線が第八〇一列車を初列車として、全面的に運転を開始した。

(二) 横川駅

(二) 全焼した横川駅では、上り線ホームの枕木が燃えている中に、列車を入れ、重傷者を輸送したが、己斐・横川間の線路に異状がなかったため、六日当日、二本の救出列車を運転することができた。天幕一張を使用し、応急出札口とし、空貨車を木部とし、空電車を寝室にした。さらに客車二輛の配車を受け、事務室と寝室に就いて作業を進めた。

七日、己斐・横川間の上り線を折るかえし運転した。続いて十二日ごろ、広島駅・横川駅間の上り線が開通した。可部線は、六日は横川駅・長束駅間が不通であった。十八日ごろ、長束・三滝間が開通した。原子爆弾炸裂の日から一、二か月あと、横川駅・三滝駅間が開通した。

職員の数是非常に少なく、殊に女子職員や動員学徒の出勤率がひどく低下したため、男子職員だけで、一日も休まず復旧に努力した。

(三) 己斐駅

(三) 己斐駅では、己斐地区に駐留していた軍隊に、他の区域からの応援の兵隊も加わり、下り本線上に倒壊した駅舎の取除き作業をおこない、六日夕がたごろまでに構内の本線は一応使用可能となった。

これは軍事輸送の確保のためであったが、広島・横川両駅の全壊全焼、神田川橋梁上の列車転覆炎上などのため、相当の期間全線開通しなかった。

十日ごろ、倒壊した駅舎は事務室の一部を残して撤去し、残った一部に貨車用シートを張り足して雨露をしのぐ程度の仮事務室とした。

まず最初に小さいバラック建の出札室が建てられ、その他の各室は残った建物をそれぞれ利用して執務した。運転関係者は、上り貨物置場にあった継電室の前にテントを張って詰所にした。

七日には、下り五日市方面と通信ができたようであるが、上り横川方面と通信できるようになったのは、そのあとのことであった。

幸い人的被害が僅少(一人死亡・一人重傷)であったから、職員の状況は被爆前と変わらなかった。しかし、動員学徒(高等科生徒)約一〇人は、もう七日から出て来なかった。

八月十四日に岩国駅が空襲を受けて壊滅し、ついで九月になって豪雨禍のため、上り方面で瀬野付近、下り方面で大野国立病院の池の堤防決壊により玖波・大野浦間が、それぞれ不通となったため、永いあいだ海田市・大野浦間で折返し運転がおこなわれた。この頃は一日五往復で、夕がた六時ごろから朝の五時過ぎまでの夜間は汽車が走らなかった。己斐の駅舎が再建されたのは昭和二十一年五月であった。

(四) 宇品駅

(四) 宇品駅は、職員の損害はなかったが、被爆当日は広島駅方面との連絡ができず、広島駅に操車掛りを派遣した。また段原地区には中央部から逃げて来た負傷者が多かったため、軍と協力して南段原・宇品間に、臨時列車三往復を運転し、三、四人の負傷者を、宇品町凱旋館(船舶部隊)に収容した。

通信線故障のため、電話機が全部使用不能となり、水道設備が破壊されたが、幸い火災の発生がなく復旧は早かった。

広島鉄道病院の再開

広島鉄道病院は、七日、尾長職員練成所に臨時の病院本部を開設した。ついで八日、広島工機部を本拠として、鉄道職員、一般市民の別なく救護活動をおこなった。

看護婦生徒全員と職員の負傷者から帰省の希望者を募り、命令のあるまで、故郷に疎開して療養させた。二十日、郊外の廿日市分院を、病院および救護本部の定位置とし、最少限度の設備と人員でもって診療活動を続けた。

十一月三日、大須賀町の焼跡にバラック建(面積三二坪)の仮病院を急造し、廿日市分院から移転復帰し、外来患者のみの診療を開始した。入院患者はそのまま廿日市分院におき、手術などもおこなった。

十二月一日、光市(山口県)の共済病院を買収して光分院とし、故郷に帰省させていた生徒を呼びもどし、看護婦養成所の教育を再開した。

なお、各地に分散していた看護婦宿舎を廿日市町に集約し、外来勤務者は廿日市町から通勤させるようにした。

二十一年三月二十日、元地に焼失病院の基礎を利用し、仮病院を仮設、病床二床をもって新発足をした。

このように輸送の使命達成に懸命の努力が続けられて、日一日と鉄道は復興していったのであった。

終戦処理輸送

また八月十五日に終戦となり、山領軍が進駐すると、主要駅にRTOが設置され、占領軍の輸送がはじまった。

同時に外地からの日本人帰還引揚げの輸送、反対に第三国国人の送還輸送、疎開者の復帰輸送、就職者の輸送など、計画的な最終処理輸送が次々と開始された。そのほか通勤通学、一般旅行者に対する輸送などもおこなわれたが、板を打ちつけた窓や座席の客車、あるいは貨車を代用としたスシ詰め満員の列車で、「乗れたら幸い」式な危険きわまりない輸送が、かなり長い間続けられた。

公安状況の悪化

一方、敗戦による無秩序と道義の頹廃に加えて、食糧その他生活物資の極度の窮乏などから、鉄道の公安状態は未曾有の混乱を招いた。

飢えた市民の買出しや、暴利をむさぼるかつぎ屋、闇商人の群れ、浮浪者・売春婦などが、無警察状態にひとしい廃墟の停車場や、板張りの暗いガタガタの列車の中でひしめきあい、スリ・置引き・暴行・傷害などあらゆる悪事犯が当然のようにおこなわれた。また国鉄の輸送する食糧や衣類などの主要物資は、窃盗団の絶好の獲物となり、日夜その襲撃を受けた。貨物列車からの投げおちし・保管庫荒し・抜き取り・車票のすり替え・貨物通知書の偽造による荷物代金詐取など、今では全く信じられないような事件が続発した。

鉄道復興運動

昭和二十年十一月、「業務印新運動」、翌二十一年三月には、「鉄道復興運動」が実施され、その中で「営業事故の防止」「悪性事故の絶滅」がとり上げられて、ここに一連の具体的な施策や制度が進められることになった。

このような状況が、一応の安定をみた昭和二十五年八月、機構の改革によって、岡山管理部が分離して、岡山鉄道管理局となり、広島鉄道局の所管理区域が縮小されると同時に、その名も広島鉄道管理局と改められた。

この年、朝鮮戦争がはじまり、山陽本線には、アメリカの兵員や軍需品を戦線に送る列車が、日に幾本となく続いた。

R T Oが廃止されたのは昭和二十七年四月であったが、このときから推駐軍専用列車もなくなって、やっと日本の鉄道という日が来たのである。

第六項 広島通信局関係各機関...215

(現在・広島郵便局 日本電信電話公社)

一、当時の概要

概要(一) 建物の構造・代表者氏名

機関名称	建物の構造	建物面積(延坪)	爆心地からの距離	代表者
広島郵便局	木造瓦葺一 地上三階・地下一階	一八五坪	爆心(Km)	伴正雄
広島駅前郵便局	木造三階建	七八坪	約一・六	水野喜代松
広島鉄道郵便局	木造三階建 (三階は一部使用)	九三坪	約一・六	阿曾沼利雄
宇品郵便局	木造二階建	二一四坪	約三・四	前田周一
特定郵便局(三七局)	(別掲)			
広島通信局	鉄筋四階建	二、二三	約一・四	吉田正
広島貯金支局	鉄筋地上四階建 地下一階	一、七五四坪	約二・	箕輪栄一郎
広島通信病院	一部三階 鉄筋地上二階 地下室あり	四九二坪	約一・四	蜂谷道彦
広島通信講習所	木造瓦葺二階建 鉄筋地上七階建 地下一階	一、五坪	約三・一	西名義美
広島電信局(富国ビル内・五階まで使用)		七二五坪	約	・三 岩田実

広島中央電話局 鉄筋三階建 九五坪 約一・ 赤木優
 広島電気工事局 木造二階建 (不明) 約・九 桑原菊一
 通信

広島搬送電気工事局 木造 六五坪 約一・ 中井秀基
 通信

広島無線電気工事局 (通信局内) (略) 約一・四 楠城敏美
 通信

電気試験所

(二) 関係機関の被害一覧表

人的被災状況

機関名称	被災状況	死亡者	負傷者	被爆時の出勤者数	在籍者数	所在地
広島郵便局	全焼	二七八	一	二七九	四一〇	市内細工町
広島駅前郵便局	同右	二五	一五	三	四一 (うち学徒 約四人)	市内松原町
広島鉄道郵便局	同右	六	二四	五六	四八六	同右、駅前郵便局の三階の一部を使用 (本局のみ)

宇品郵便局 半壊 二 二四 六五 一七 市内宇品町
 特定郵便局 焼失 二六 八 四 (別掲)

(二一七局)

広島通信局	半焼	七九	三六三	四三二	九五	市内基町五
広島貯金支局	同右	八七	四八八	八七一	九四七	市内千田町
広島通信病院	同右	五	三四	三八	四八	市内基町五
広島通信講習所	半壊	五	(本所七	三四四 (学徒三	二)	三五六 (学徒三
			尾長分室二)			市内宇品町七二五
広島電信局	全焼	一四三	一四	一一七	二九七	市内袋富国生命ビル内
広島中央電話局	同右	二一六	二四三	四五	六一	市内下中町五
広島電気信工事局	同右	九四	七五	四	二	一九三 市内大手町八丁目

広島搬送電気通信工事局 *全焼* 五二 * 八三 * 七五 * 一一七 * 市内国泰寺町市役所南側 (電信系は富国生命ビル内電信局)

広島無線電気通信工事局 *半焼* 一 * 二六 * 一三 * 一六 * 広島通信局内
 電気試験所 *全焼* 三 * 四二 * * 四五 *

(三) 特定郵便局被害状況

< 東部 >

局名 * 爆心地からの距離 * 職員死亡者数 * 建物被害状況 * 廃局在置の別

広島向洋 * 約五・一 (km) * (人) * 小破 *

尾長 * 三・四 * * 半壊 *

愛宕町 * 三・六 * * 倒壊焼失 * 廃局二十一年再開

蟹屋 * 二・二 * 一 * 半壊 * "

大州 * 二・二 * * " * *

金屋町 * 一・六 * 一 * 倒壊焼失 * 廃局二十四年再開

京橋 * 一・六 * * " * 廃局 *

段原東浦 * 二・一 * 一 * 半壊 * *

南段原 * 二・四 * * " * *

比治山本町 * 一・七 * * 倒壊焼失 * 廃局二十一年再開

銀山町 * 〃 一・一 * 一 * 〃 * 廢局
上流川 * 〃 一・一 * 一 * 〃 * 〃
鉄砲町 * 〃 〃 八 * 三 * 〃 * 〃
平塚 * 一・四 * 一 * 〃 * 〃 *
宝町 * 一・五 * 〃 * 〃 * 廢局二十五年再開
竹屋町 * 〃 八 * 二 * 〃 * 廢局
富士見橋 * 〃 一・一 * 一 * 〃 * 〃
平田屋町 * 〃 〃 五 * 一 * 〃 * 廢局二十三年再開
小町 * 〃 〇・六 * 〃 * 〃 * 廢局二十年再開
千田町 * 〃 一・二 * 一 * 〃 * 廢局二十三年再開
御幸橋 * 〃 二・一 * 〃 * 半壊 *
大手町 * 〃 〇・四 * 倒壊焼失 * 廢局
大手町七 * 〃 〃 八 * 〃 * 〃 * 〃

< 西部 >

材木町 * 約 〃 二 (km) * 一 (人) * 倒壊焼失 * 廢局
水主町 * 〃 〃 七 * 一 * 〃 * 〃
住吉町 * 〃 一・三 * 〃 * 〃 * 〃

吉島 * 約 一・八 (km) * 〃 (人) * 倒壊焼失 * 廢局二十一年再開

三篠 * 〃 三・〃 * 〃 * 半壊 *
三篠二 * 〃 二・五 * 〃 * 倒壊焼失 * 廢局二十一年再開
楠木 * 〃 一・六 * 〃 * 〃 * 廢局
横川 * 〃 一・五 * 〃 * 〃 * 廢局二十一年再開
横川三 * 一・七 * 一 * 〃 * 廢局
西引御堂 * 〃 〇・九 * 〃 * 〃 * 〃
北榎町 * 〃 一・〇 * 三 * 〃 * 〃
鍛冶屋町 * 〃 〃 四 * 〃 * 〃 * 〃
堺町 * 〃 〃 七 * 二 * 〃 * 〃
西地方 * 〃 〇・七 * 二 * 〃 * 〃
舟入本町 * 〃 一・五 * 〃 * 〃 *
舟入川口 * 〃 一・五 * 一 * 〃 *
江波 * 〃 三・一 * 〃 * 半壊 *
天満町 * 〃 一・三 * 一 * 〃 * 廢局二十一年再開
東観音町 * 〃 一・三 * 〃 * 〃 * 廢局
観音町 * 〃 一・九 * 〃 * 〃 * 廢局二十一年再開
南観音 * 〃 二・一 (km) * (人) * 〃 * 〃
己斐 * 〃 二・三 * 〃 * 〃 *
高須 * 〃 三・五 * 〃 * 〃 *
草津 * 〃 四・七 * 〃 * 〃 *

< 南部 >

湊崎 * 約 五・〃 (km) * (人) * 小破 *
東雲 * 〃 三・一 * 〃 * 〃 *
大河 * 〃 三・三 * 〃 * 〃 *
皆実町 * 〃 二・一 * 〃 * 〃 *
皆実町三 * 〃 二・六 * 〃 * 〃 *
通信講習所前 * 〃 三・七 * 〃 * 〃 *

御幸通 * " 三・六 * * " *

向宇品 * " 五・一 * * " "

似島 * " 八・九 * * * "

< 北部 >

牛田 * 約二・一 (km) * (人) 倒壊焼失 * 廃局二十一年再開

東白島 * " 一・五 * * " * 廃局

白島中町 * " 二・ * * " * 昭和四十年に再設置

二、疎開状況

広島通信局をはじめ各機関とも、人事関係・業務関係の原簿、その他重要文書や備品の一部を、郡部へ疎開した。

また、一部は市内の学校その他施設を借りあげて分散していたものもあるし、分散の実施直前に被爆(広島 鉄道郵便局など)したところもあった。

なお、日々使用する帳簿やその他書類は、事務終了後、付属の防空壕や地下道などに格納保管(広島駅前郵便局など)して、夜間の空襲に備えていた。

広島電信電話工事局では、鉛皮ケーブル類やトラックなど郊外へ分散する措置がおこなわれたが、局舎もまた疎開の目的を以って、市の北端に横川従局を設置するなど、種々な対策がとられた。広島搬送電信電話工事局も、非常被害措置用として、呉電話中継所へ搬端四組を、また美ノ郷電話中継所へ音端一組(三回線分)を、真空管・予備機類は構内の防空壕と小町の富国生命ビル地下室へ疎開した。

広島通信病院は、昭和二十年三月から五月にかけて、佐伯郡地御前付と安佐郡矢口付の民家の倉庫を借入れ、薬品・治療材料および医療機械器具の大部分を疎開し、院内に残した薬品・医療材料の大部分も、病院地下室ならびに通信局内の倉庫に分散保管していた。

また、戦局逼迫し各都市がつぎつぎに空襲を受けはじめたので、同年五月中旬から、入院患者をそれぞれ退院させる措置をとった。もし、この措置がおこなわれなかったら、おそらく被爆の際、病院内から多数の死亡者・犠牲者を出していたであろう。

三、防衛態勢

広島通信局

広島通信局は、昭和十六年八月に制定された通信省防空実施計画規程に従い、局舎防衛のため、局内各部 課より選出の要員をもって、広島通信局防護団を編成し、本部・警備・防火・救護・配給・避難・工作の七 班をもって構成した。

空襲警報発令と共に勤務時間の内外をとわず、ただちに活動し得る態勢をとると共に、防護団本部と屋上 対空監視所間、その他の所要区間に電話連絡施設を設けるほか、必要な器具物品の整備を図った。また構内 に防爆壁・防空壕を設備して、防火・救護・避難などの訓練を実施した。

また、管内防衛関係事務を総括するため、通信局に防衛室を設け、かつ設備防護のための情報を蒐集し、迅速な処置をとるために工務統括室を設置した。

郵便関係

郵便関係の諸機関は、爆心直下に位置していて全滅した細工町の広島郵便局をはじめ、各局とも自己防護 団によって、防衛・防空・防火の各班を編成し、日夜訓練を重ねる一方、職員の輪番による防空当番を置き、昼夜をわかつたず待機していた。

また警報を発令と同じに、市内居住の男子職員は出局して、それぞれの所定の部署についた。防護用具その他機材を完備し、防空壕も多数構築して、万一の場合に対処した。

広島中央電話局

広島中央電話局は、防空計画により局の周囲約三〇メートル以内の家屋は強制疎開されると共に、局員用の防空壕を南側家屋疎開跡地に五か所構築中であったが、二か所完成したとき被爆した。

局舎のすべての窓に暗幕を張って、灯火管制に対処し、重要部分の防護のため、中庭・機械室前・電力室前に防爆壁を、道路側および二階交換室各窓に、厚板をもって観音開きの扉を設置した。警報が発令されると昼間は暴爆のた

め、夜間は灯火管制と暴爆のため、交換室の窓はよろい戸を降し、解除になると換気のためこれを上げていた。

また、警報発令と同時に、歩兵第一補充隊から対空警備隊一個分隊（一四、五人）が派遣され、屋上で対空警備にあっていた。

大手町八丁目の広島電気通信工事局も同じような防衛態勢をしていたが、空襲警報時には全員参集し、非常処置をとり得る態勢であった。国泰寺町の広島搬送電気通信工事局は昭和二十年二月、長距離通信施設の一元的管理と、長距離回線保守の統制を強力に推進するため、広島電信試験所をも併合して、国泰寺町の広島電話中継所と同一構内で新発足した機関であるが、戦時下の重要通信を確保するため、中継所の周辺三〇メートル幅くらいの民家を、同年六月中旬までに強制疎開させていた。同時に、事務庁舎および渡り廊下を取払い、機械庁舎の燃え易いものは全部片づけ、天井板までも取りのけてしまった。

また、中継所の周囲に防爆装置をおこない、六月下旬に完成したが、それでもまだ危険なので、機械庁舎の上に、金網を張って焼夷弾を防ぐ計画であった。しかし工事着手の前日に被爆した。

この中継所では、日常の保守要員のほかに、焼夷弾の防禦に重点をおいた防衛要員とで運行することになっており、特に夜間勤務を強化していた。また、警報発令と同時に、約二〇人の軍隊が急ぎかけて警備にあたった。

広島通信病院

広島通信病院は、通信局の防空態勢に準じて、職員救護演習・防火訓練・暗幕・防火設備など一般的措置を行なうほか、病院自体の措置講じていた。医薬品・患者などの疎開対策は前述のとおりであるが、昭和二十年四月初旬、院長の創意により、人的資源保持のため医務職員は事情の許すかぎり、できるだけ郊外から通勤するよう勧奨した。

また、同年一月以来、職員を三班に分かち、各班輪番で宿直して、罹災者救護の態勢を整えていた。四月中旬、県から救護病院に指定せられたのを機会に、県衛生課に火傷者用油三罐（約五四リットル）を要求し、これを確保した。

なお、患者待合室の大型防火用水槽には、リマオン液を満たし、同時多数の負傷者に対する応急用に備えていた。

四、対戦措置

女子職員採用

戦争の進展にともない、通信官署臨時在勤のまま、通信関係に従事のため、多数の男子職員が各地の戦場に派遣されたし、応召者も多数出るに及んで、局内事務はもとより、外勤に至るまで女子職員をもって代替した。

学徒・挺身隊の受入れ

しかし、なお運営上不足なので、多数の学徒や挺身隊員の派遣を受けた。臨時の工事などには、人夫雇傭ができなかったから、軍に要請して兵隊の出動を得ていた。

傷害保険採用

国内の空襲激化によって、職員中戦災を蒙る者も少なくないので、職員に対する傷害保険が採用され、広島通信局管内では、呉・広島・広島について下関・岩国・下松・光・連島・玉野・江津・安来その他軍需施設のある地域が適用された。この制度は指定地域内における職員を傷害保険に加入させるもので、保険料は官費をもって負担した。

電話新規加入中止

電話の一般市民の新規加入は中止せられ、既設の遊休設備の回収および一般加入電話設備を動員して、軍関係方面へ転用した。また一般の加入譲渡は任意のものは認められず、譲渡あるいは譲渡希望者は通信院公認の電話業者を通じて、申請しなければならなかった。

重要通信の確保

電気通信設備の拡張はおこなわれず、軍への供出、供用は増加するばかりで、通信疎通の状態は悪化するばかりであったが、重要通信の確保は必要であり、一般の通信利用は極度に制限された。

電報もまた、不急不用と認められるものは受け付けを拒否されたし、市外通話も輻輳時には用件内容によって受け付けないこともあった。

また、加入電話を重要度によって類別し、警報発令時その他電力供給状況などにより、必要にはその程度により一次・二次・三次と段階別に通話停止する加入者を決定し、それが迅速に処理できるよう局内機器を配線替えし、また切替装置を施工した。

軍の防衛通信網拡張

軍の防衛通信網に転用するため、小対ケーブルを撤去し、撤去区間の重要加入者は別に裸線・ゴム線を以って復旧

した。軍関係・各統制機関・軍需産業・食糧増産関係業者以外のもの、すなわち旅館・料理飲食業者・住宅用電話などは不急不用の遊休電話設備として供出の対象となり、対価を払って買上げ、または加入権を保留して、任意供出せしめた。

家屋疎開による一時撤去数も相当あった。このほか、PBXの磁石式交換機、及び電蓄・マッサ・ジ用器具の真空管なども回収対象となった。

電気通信の確保

電気通信の工事は、もっぱら軍専用回線と、防空回線網の拡充にあてられたが、その資材の確保には既設のケーブルを撤去したり、一般の公衆回線を転用したりした。既存設備の防護に関する対策、および空襲による被害時の対策は、次々の空襲による教訓を取入れては修正したのであった。

昭和十九年度に施行した広島・小郡間、および広島・呉間の無装荷ケ・ブル布設工事は、心線の五〇%くらいは海軍が使用することにたっていて、予算は海軍の設備負担金によったが、地下ケーブルは鉄線鎧装のかわりにフェルコ鎧装であった。この新ケ・ブル布設は予定通り完成したが、旧装荷ケ・ブル撤去が思うようにはかどらず、荷造材料の不足もあって、終戦時にまだ相当の残工程があった。

一般的に資材が次第に乏しくなって来て、多くの代用品が登場したが、要するところ勝つまでに、とにかく二、三年使用できさえすればよいといった、資材も工法も実にも間にあわせのなものであった。

電信施設の防護対策

敵機空襲に対する電信施設の防護対策として、広島郵便局電信課として、木造三階建の同局二階に設備の電信施設を、堅牢な建物内に移すよう軍部から強い要請もあり、小町の鉄筋コンクリート七階建富国生命ビルに移転を決定、昭和二十年五月一日から移転に着手し、同月三十一日に突貫工事で完了した。六月一日、この新局舎で広島郵便局電信課分室として、電信業務を運営し、八月一日から広島電信局として独立した。

食糧難対策

戦争はいよいよ苛烈となり、食糧事情の窮迫は日を追ってつるばかりであったから、各機関では、構内やあらゆる空地に自給用の作物を植えた。中には水田を持ち、耕牛を養っていた所もあった。

通信局でも、鳥取県大山の中腹に土地を確保して農場を設け、麦・豆・いも・野菜などを作り、家畜まで飼育した。

また宮島口に製塩場を運営していたが、その燃料にこまりはてて、トラックで製材鋸屑などゆずり受けるため奔走した。

その他、特配陳情をして労務加配米を確保したり、代用食あるいは魚類・野菜類・海草類などの副食物や調味料などを獲得配給し、酒類・煙草などの特配を受けて士気を昂揚した。

職員は労務用のビール券をもらって、ピヤホールの前の道路に長蛇の列を作って順番を待ったりした。

このようにして、各機関とも必勝の対戦処置を種々講じていた。

五、被爆の惨状

広島郵便局の惨禍

広島通信局管下で、最も甚大な惨禍を受けたのは、爆心直下にあった細工町の広島郵便局であった。

五日夜、夜勤者が約一人ほど局内にいて、六日朝までのたびたびの警報発令に、それぞれの任務についていた。

日勤者は、定刻朝八時には、全員出勤し、いつものように各職場ごと、主席者の指揮により朝礼をおこない、すでに仕事を始めていたのであろう。

祇園高等女学校の四八人（引率教官一人）と本川国民学校高等科一七人の学徒は、日の丸の鉢巻姿もりりしく、局の裏庭に全員集合して、学徒出陣の歌をうたったあと、点呼を受けるのであったが、これら少年少女はすべて純心そのもの、一点の疑いもなく滅私奉公の信念のもと、与えられた仕事に真剣に取り組み、少しの怠なかつた。

8時15分、突如として、頭上に原子爆弾が炸裂した。同時に局舎は倒壊し、ただちに火を発したに違いない。在局者全員死亡のため、その状況について説明し得る者は一人もいない。ただ一人、翌七日の朝まで生存していた職員がただけである。それは、たまたま郵便局の建物外にいて、爆風のため防空壕内に吹き飛ばされ、壕内で、そのまま九時間近くも人事不省になって倒れていたのである。しかし、そこで救出されてから、自宅の方向へ帰って行ったまま、それっきり永遠に消息不明となった。

この職員は、同局職員で救護班長であった広藤正人が、同日夕方、廿日市の自宅から細工町の郵便局の焼跡に来た

とき、発見した小使の山本清次郎と同人物ではなかろうかと思われる。

「ああ広島原爆・亀田正士著」に寄稿した広藤正人の体験記によれば、「(前略)、来てみると局舎は既に破壊されて焼け落ちていたのである。しかも、爆弾の力で爆心一帯の土地が、一度持ち上げられたのであろうか、局舎の裏庭などは足クビが埋まるくらいで、まるで綿の上を歩くようにふんわりとしていた。そればかりではなく、ベトン製の防空壕も完全に破壊されていたのである。(中略)

さてここで私は、本局敷地内の黒焦げ死体二六体を確認して号泣した。そして冥福を祈りながら紙に見取図を書いていたところ、ふとベトン製防空壕の破損口から私を呼ぶ声がするので行ってみると、それはこの郵便局の小使で山本清次郎という人で大負傷をしていた。

この人の話では、八時十五分頃、防空壕の入口付近の塵芥捨場に、反故その他を捨てに行った途端に被爆して、爆風で防空壕へ吹きとばされたのである。

この防空壕もまたベトン製で一部屋根が残されたのであった。そして気がついたのはお昼頃であったという。なお、負傷箇所は、左側の手足と頭部で相当血を出していた。そこで私は、早速、負傷箇所の手当を行ない、食事をさせて、中取敢えず防空壕にいるよう指示して別れたのである。(中略)、翌七日早朝、広島郵便局跡に出て、前述の小使山本清次郎氏に朝食を与えて別れた。(後略)」と記述されている。

炸裂下の局舎は、たちまち全焼し、同日午後四時ごろ焼跡におもむいた者によると、だいたい燃え尽して自然鎮火しており、局舎の焼跡には、おびたしい数の白骨と黒焦げの死体だけが、瓦礫と共に残っていた。

局内にいたと思われる人々はすべて、焼けた灰に埋って白骨となっていたし、屋外にいたと思われる二人は、黒焦げの死体となっていた。そしてして周辺は、何一つ物音もなく、一人の人影もなく、鬼気迫る深い沈黙の世界であった。

万一の場合に備えて、西練兵場・本川国民学校が避難場所として指定されていたようであるが、これらの犠牲者はそこへ逃げる余裕が全くなかったのである。

広島駅前郵便局・広島鉄道郵便局

広島駅前郵便局と、その三階の一部を使用していた広島鉄道郵便局は、共に全焼した。

五日夜からの防空当番の者は、六日早朝自宅に帰り、一般職員は平常どおり出勤して事務をはじめたばかりであった。

炸裂後、局舎の倒壊はまぬがれたが、二、三分たったころ、三階鉄道郵便局の宿直室にあった一枚の掛ぶとんが、熱線によって発火しているのを発見し、すぐ消し止めた。その後、また三階から煙が出ているのを認めたが、発煙箇所が、モルタル塗の壁の中であった。しかし、これも消火に成功した。

この頃、すでに市内各所で火災が発生していたが、局舎付近はまだ火災になる気配はなかった。

九時半ごろになって、猿猴橋東詰めあたりの火災が、松原町通りにならぶ旅館・商店街を焼き、漸次局舎方面にむかって延焼しはじめ、火災が西方一〇〇メートルの所に及んだとき、局舎西側に隣接し、爆風で倒壊していた木造二階建の鉄道運輸事務所に飛火し、午前十一時ごろ、ついに局舎附属建物、本館へと劫火は燃え移って来た。

職員は落下した天井や壁の下に、あるいは倒れた戸棚・書類箱その他の器具に打ちつけられ、相当数の重傷者を出して、消火活動をする余力はなく、迫り来る猛炎のなかで、ただ避難するのが精一杯であった。午後一時すぎ、ついに局舎は全焼したのである。

炸裂時に局員はいずれも、直撃弾を受けたものと思いこんでいた。次の攻撃を予想して、幹部は負傷者全員を一応避難させることにした。軽傷者は負傷者を救出し、あらかじめ指定されていた二葉の里の東照宮方面に避難した。幸い局舎が倒壊しなかったため負傷者全員が脱出できた。その一方、健在な者は局内にとどまって、重要書類の持出しに活躍し、軽傷者も避難先から引返して来て協力した者もあったが、所詮猛火に抗することはできなかった。

宇品郵便局

宇品郵便局は、遠距離に位置していたため、火災も発生せず、即死・重傷というような被害はなかったが、炸裂の閃光を感じると同時に、局舎は強烈な爆風におそわれた。窓口にいた者や電車通りの窓ぎわにいた者は、ガラスの破片で負傷した。屋根瓦の一部が吹っ飛び、二階の桁がはずれて浮き上り、被服箱や書類箱の幾つかが倒れた。

窓口で保管していた現金(貨幣、少額貨幣数百円)が吹きとばされ、把束していた郵便物は窓を越して電車通りまで散乱した。

被爆と同時に一部の警備員と負傷者、これに付添って応急手当をする者を除き全員防空壕に退避した。

数分後、退避命令が解かれ、職場に帰ったが、負傷者の中で、女子職員だけは自宅が安全と考えられる者のみ、付添人をつけて帰宅させた。そのころ、市内の炎上が望見されたので、市内居住者で家族の安否が気づかれる者や女子挺身隊員を帰宅させた。その他は局内に踏みとどまり、散乱した局内の整備をしながら職場を守った。いったん帰宅した者も、自宅を整理して午後再び出勤した者もあって、六日夜は全員局内に泊り、警備にあたった。

特定郵便局

市内の各特定郵便局は、電報配達事務を取扱う郵便局を除き、ほとんどの局が夜間事務をおこなわないのと、局舎が局長自宅の一部が隣接しているため、宿直員の配置はなく、職員は日勤者のみであったから、六日朝もいつもどおり、八時に出勤し、窓口の受付事務をはじめようとしていた時であった。

局舎の被害は設置場所によってまちまちで、前掲の表のとおりであるが、負傷者らは一般罹災者と同じく、その町内会の避難場所へ逃げて火災をさけた。

広島通信局

広島通信局では、五日午後九時の警報発令によって、責任的地位にある役員と当番の防空担当職員は、非常出局して、それぞれの部署についた。引続き六日午前零時二十五分からの警報が午前二時十分に解除されたが、大部分の者が帰宅しないうちに、また午前七時九分の警報が発令され、三十一分に解除されてから、やっと解放されたように自宅に帰った。

その他の職員は午前八時に出局し、それぞれ仕事をはじめていた。

八時十五分、敵機の爆音がきこえたけれども、別に警報の発令もなく、防空壕に待避する者はなかった。

突如、異様なシューという音響がきこえ、同時に猛烈な爆風にたたきつけられて、強い熱線の照射を浴びた。

室内の諸器具の倒れる音、女子職員の悲痛な叫び声が、一斉にあがった。

しばらくして周囲はまっ暗となり、それが徐々に晴れていくと、どの職員も頭から顔・手と鮮血にまみれていた。動ける者は階段の手すりを伝って、ドッと階下に逃げていった。そのあとの室内には負傷して倒れ、身動きもできない人々がごろがっていた。また、吹きとばされ、裂傷を負って、死んでいる人もあった。

負傷しなかった者は、いち早く担架を出して重傷者を階下に何回も運び、病院内へ送っていった。

防空監視で屋上にいた人たちは、ひどい火傷で倒れ、身体の半分以上が火傷しており、病院へ運んで行ったがついに助からなかった。

窓ぎわ近くにいた人は、例外なく火傷し、またガラス片が肉に刺しこんで血みどろになっていた。

午前九時過ぎ、局の南側軍用倉庫が焼けはじめ、その火災が猛烈な勢いで、庁舎の二階と三階に吹きこみ、たちまち内部に引火、ついに四階にも火の手は延びて来た。

救助・防火活動のでき得る職員約二〇人は、庁舎内にとどまって決死的努力をはらった結果、二、三、四階の南側内部にあった可燃物を焼いただけで、北部への延焼を防ぎとめることができた。

そうこうするうち、白島町の常葉橋方面の民家から炎上しはじめた火が、局の方に迫って来て、ますます猛烈な火勢となった。一方、西隣りの陸軍幼年学校も燃えあがって、庁舎は両面から火災の狭み打ちとなった。燃えあがる部屋の窓からは、糾い火炎と黒煙がすさまじく噴出し、庁舎の周囲や空地に、火となった木片を雨のように降らせた。火の粉は空をおおうて降り注ぎ、ついに危険状態に突入した。

庁舎は焦熱のルツボの中に投げこまれ、踏みとどまっていた者は、庁舎構内を東に逃がれ、西に走り、辛うじて難をのがれた。

この火災が一応終息したのは午後三時ごろである。しかし、部厚い西洋紙の束などは、水をかけて消しても、暫くするとまた燃えだしたりして、これらをすべて完全に消しとめたのは、午後十時ごろである。

これまでの空襲事例から考えて、局では焼夷弾攻撃と爆弾攻撃に対処することに重点を置き、第一次において消火に努力することと、爆撃被害をできるだけ回避することとし、これに必要としない者は安全地帯に待避することにしてあった。第二次として、被害甚大であって、とうてい現場を守り得ないという場合は、適当な箇所に移って、持久的に事を計ることとし、それぞれの場所を決めていたが、この予想しなかった惨禍のもとでは、避難先も、個々別々に、逃げられるところへただ逃げるのみが精一杯であった。

ある者は、庁舎前面の火災をさけながら泉邸へ避難し、さらに京橋川を泳いで渡ったり、あるいは川岸づたいに牛田方面へ逃げたりした。西の方向へ避難した者は、三篠橋以西がすでに猛火に包まれていたため、白島北端の工兵橋に進路をかえて牛田方面へ出た。九時ごろ、庁舎の周囲が火の海となり、もはや脱出も不可能となった人々は、お互

いに近くの濁水をかけあいながら、火を避けて庁舎の周囲を常に移動して焼死すまいとした。

重傷者は、同僚の活動によって通信病院付近の広場に退避させたが、火炎が迫って来たので庁舎裏庭へ移した。しかし、さらに裏庭にも火が襲って来たので、またもとの広場へと、そのつど担架に乗せて移動した。

このため負傷者の処置が正午ごろになったが、午後になると、通信病院に部内外の罹災者が殺到し、混乱はきわまった。そのため病院に収容しきれなくなって、庁舎前の広場に、局保管のタタミを敷き、ここに収容し、応急手当をほどこした。

六日夜はここで一夜を明かした職員もあったが、職員のほとんどは自宅を焼失、住む所なくて焼け残った庁舎内に、着のみ着のまま寝泊りすることとなった。疲労困憊して庁舎の外庭に身を横たえる者もあった。

広島貯金支局

千田町の広島貯金支局では、この日の朝も職員はいつものように出勤し、執務態勢に入っていた。なかには物資調達のために市内へ出向いた職員もいた。

五日夜からの防空当番は、朝、警報解除になったので、八時に交替して休憩をとる者や、あるいは帰途についた者もいた。

そのとき、瞬間的に庁舎の周囲が青白い閃光に取りまかれた。同時に窓ガラスはもとより、書棚や机・椅子が吹きとばされた。強烈な爆風であった。女子事務員らのかん高い悲痛な叫び声があがった。そしてまっ暗やみになり、まもなく明るさをとりもどしたが、今の今まで電車の軋る響きとソロバンの音がきこえるほかは、まったく静かだった室内が、一瞬、粉微塵に破壊されていた。

椅子に坐っていた人たちはみんな吹きとばされて転っており、重い書庫に押し潰されている者もあった。

だれもかれも頭から顔から、手からと血を流していた。エレベーターは壊れて動かず、そこにも鮮血に染った人が倒れていた。

みな慌てて階段を降りたが、たちまち階段の手すりや壁が、血で真赤に色どられてしまった。

庁外に出るには、広い玄関口があったけれども、最初の人々が、どうしたわけか狭い北出入口から出ると、人はみな盲目的に我れ先にと、その狭い出口に押し寄せて、ますます混乱をまねいた。

女子職員は皆、頭髪が一本立ちに立っているように見えた。服は引き裂かれ、顔は汚れて誰が誰だか見分けもつかなかった。

庁外に出た人たちは、逃げていく市民の群にまじって宇品方面へ避難していったが、元気な者や軽傷の者は庁内に踏みとどまって、重傷者の手当をしながら、次に起るかも知れない事態に備えていた。

正午近くなり、電車道をはさんだ向い側の広島文理科大学や同記念館などから発火し、付近一帯の民家の火災と重なって、貯金局はその猛火に包囲され、あたかも火の海の中に孤立する島ようになった。局舎上空には火炎旋風が起り、火の粉が容赦なく庁舎内に飛びこんで来て、遂に二階と四階の破壊された椅子や机などに引火して燃えはじめた。

外の電車道には、避難者の大群が、煙の渦巻く火炎を潜りながら宇品の方へ、はっきりなしになだれて行っていたが、庁舎内に踏みとどまった三〇数人の職員は、火災の危険に身をさらしながら、必死で消火活動を続け、完全に消しとめたのである。

貯金支局分室

一方、八丁堀の福屋百貨店にあった分室は、向いの旧福屋建物内にあった消防署保管のガソリンがまっ先に着火して、大火となり、それが福屋百貨店の方へ燃え移って来た。七階にいた分室の振替貯金課の職員は大部分脱出することができたが、逃げ遅れて二人の学徒は火と煙につつまれて焼死し、また一人の職員は扉の吹きとばされていたエレベーター口から落ちて即死した。

万一の場合にそなえて、局では広島文理科大学と山中高等女学校を避難先に指定していたが、ものの役に立たず、ただ群衆の向う方へ無我夢中で避難していった。この避難の途中においても職員の多数が死んでいったが、この中には女子動員学徒二〇人が含まれていた。

電信局

袋町の富国生命ビル内の電信局は、爆心に近かったから、惨禍も甚大であった。

このころ、従業員中、海外派遣一三人、応召者一二〇人を出すほか、六分局および西部軍司令部への通信要員派遣などにより、要員事情はきわめて逼迫し、自動通信有技者は毎日二人ないし四人を配置し得るにすぎず、また印刷通

信・検査要員は無技者を応急訓練して充当するという状況であった。この窮状を打開するため、動員学徒として本川国民学校高等科男子学童一三人（一人は外勤要員、三人は運信要員）および安佐郡祇園高等女学校生徒二〇人（電話通信・運信および電話託送受付要員に充当）の計三三人のほか、逓信官史練習所実習生六人の応援を受けて、辛うじて通信疎通の確保をはかっていた。

五日は、午後九時二十七分の空襲警報発令に伴い、在局者中から尾上の対空監視要員を出したほか、全員が電報疎通にあたった。

空襲警報発令と同時に、多田受配課長・小川通信課長・高専寺庶務課長・大谷主幹・宮本主幹・森山他二人の主事が非常出勤したほか、夜勤者五人（局内に臨宿し、空襲警報解除まで警備にあたる）、宿直者五人がいた。

六日朝、平常どおり輪番勤務者は午前七時および午前八時に、されぞれ出勤した。日勤者はいずれも午前八時出勤、宿直勤務者は午前八時に交替退局することとなっていたが、午前八時までに出勤していた職員は一七人で（通信課七人・受配課二七人・庶務課一人）でこのほか午前八時に交替して、更衣あるいは休息などで局内にいた宿直明けの者九人があった。なお、学徒引率教官一人も出局していた。

八時十五分、一瞬の閃光と大爆音・爆風が突然に襲った。

その数秒前まで活発に活動をつづけていた職場は、死の暗黒に急変し、窓とおぼしいあたりから僅かに口ウソク的光ほどの光線が、ほのかに闇を射すだけであった。

暫時の沈黙ののち、あちらこちらから「電気をつける」「窓を開けろ」と叫ぶ声が起こった。

室内がやや明るさを取りもどしたところから、壊れた器物や倒れた壁のあたりから、呻く声、助けを求める声が聞こえて来た。

室内が完全に明るくなると、鮮血に染まった重傷者の呻く姿、倒壊物の下から僅かにそれと知れる無言の手・脚。救助を求める断末魔の必死の声、何事か大声でわめきながら散乱したガラクタの中を駆けまわる人など、夢想だになかった残忍な地獄が出現していた。

放心状態から我にかえった人々のうちで、活動能力の残った人たちによって、重傷者の救出が約二時間にわたっておこなわれた。

局舎は鉄筋コンクリート七階建ての堅牢な建物であったから、倒壊は免れたが、猛烈な爆風によって屋上は亀裂を生じて下方にめり込み、バルコニーは落ち、鉄の窓枠は吹き飛ばされ、通信室入口の鉄扉は無残に曲り、天井と壁の上塗りは全部脱落し、モルタル間仕切りはすべて倒壊し、通信機器は飛散し、監視員室や受配課室の床は地下室に落ち込み、地下室の水道パイプは破損漏水するなど、おおよそ形ある物はことごとく破壊された。

爆心地からわずかに三八メートル南方のこのビルでも、火災になったのは、炸裂後約二時間くらいしてからであった。

市内の各所から発生した火の手が、時とともに拡大し、やがて局舎周辺の建物に延焼して来た。猛火による龍巻が局舎近くで三度にわたって起り、ついに三階機械室に引火し、つづいて地下室の明かり取り窓の破損箇所から、電力室にも火がはいった。もう何ら施すすべもなく、ただ燃えひろがるにまかせた。激しく狂う火勢は、たちまち建物内のあらゆる可燃物を焼きつくした。

なお岩田電信局長は、局長官舎から徒歩出勤の途中、県庁橋（万代橋）の中間で被爆し、人事不省に陥ったところを、数刻後救護班によって救助され、陸軍病院江波分院に収容されたが、八月十二日死亡した。局長夫人も六日当日、自宅で被爆死亡した。

電信局は万一の場合の避難先として、近くの西練兵場が指定されていたものと推量されるが、広範囲な壊滅的災害では役立たなかった。富国生命ビル内から脱出後、紙屋町から西練兵場を横切り、泉邸の裏へ出て川を渡って帰宅した者（学徒・小吹清子）、負傷した女子事務員を誘導して皆実町方面へ待機した者（小島正雄）、南の御幸橋方面へのがれ、宇品砲部隊に収容された者（上野津曹）、比治山に避難した者（大佐古幸雄）、己斐国民学校まで避難して収容された者（熊野絹子）、西練兵場を経て牛田藩 祇園 自宅と脱出した者（出口キミ子）ビルに近い元安川に飛び込んで渡り、途中どう行ったか不明だが、東練兵場を経て中山町の自宅に帰りついた者（中川智都子）、泉邸方面へ脱出した者（丸川八重子）など、思い思いの方向へ、それぞれ必死になって脱出したのであった。

この日午後二時ごろ、高橋書記補を逓信局に派遣し、被害状況を石丸経理部長に報告したが、途中猛火のため、逓信局に到達するまでに二時間もかかった。

電話局

広島中央電話局は、下中町の本局のほかには北榎町に西分局と三篠本町一丁目に横川従局を、また、八丁堀福屋ビル地下室に電話処置局を設置していたが、家屋疎開や応召などで要員が減少し、挺身隊の二四人、進徳高等女学校の生徒一七〇人(引率教師二人)の派遣を得て業務を運行していた。

本局

五日夜は、九時過ぎから空襲警報があり出局した宿直者が約六五人いた。六日早朝解除になってから帰宅した者も一部いたが、六日朝の炸裂までの出勤者は約四四三人であった。

庶務・監査・加入各課では出勤早々で、いずれもその担当の仕事にとりかかろうとしていた。交換課では、市外台に七〇人、市内台に五七人、記録台に一〇人、案内台に一〇人、中継台に八人が配置され、別に各担当部長二人、経理係員一人、検査係員五人が交換室内で勤務中であり、宿直明けの者約五〇人は、中のバルコニーに集合して退庁挨拶をしていた。

西分局

西分局では、教官および事務の者は全部出勤して、各自の机に向い仕事の準備をしていた。三階の養成室の生徒は、授業開始が八時半からであったから、約半数程度しか出勤していなかった。

午前八時十五分、青白い閃光と無気味な音響と同時に、一瞬暗黒となった。

金網入りの部厚い窓ガラスが吹きとばされ、天井のコンクリートは落下し、器物は叩きつけられて散乱し、救助を求める悲鳴があがった。皆は急いで安全な場所に避難しようとしたが、暗黒と悪い足場のため動くことができず、多くの負傷者が至るところにうごめいていた。

全身焼けただれて床の上のたうちまわる者、あるいは顔面が二倍くらいにも腫れあがり、頭髪は赤く縮れ、誰れであるか判別できない程になった者、ガラスの破片が皮膚に突き刺さり、全身血だらけの様相を呈している者など、まことにこの世ならぬ惨状が展開された。

昨夜来の空襲警報が解除された直後のことで、鉄扉は上げられ、換気のため窓も開放して、一同ちょっと安堵の息を入れていたような状態で被爆し、ほとんど全員が重傷または大火傷を受けた。

ようやく一〇〇人ばかり中庭まで逃がれ出て来たが、すでに局内のところどころに火災が発生しているし、周辺の町々も火炎につつまれていた。まもなく局も猛火に包まれるという危険を感じたので、取りあえずこの一〇〇人ばかりが一隊となり、正木主事指導の下に田中町の疎開道路を通り、比治山へ向って避難していった。

広島庶務課長・永浦庶務課員などは、比較的負傷も軽く元気であったから、その後、局舎内の重傷者や倒れている人々を激励して、局の南側空地に集合させた。広島庶務課長は最後に局長室にかかっていた陛下の御尊影を奉持して、一隊とともに比治山へ避難した。

避難途中で力つきて倒れる者が相当あり、逃げ遅れて苦しんでいる者もあったが、何ら手当を加えるすべもなく、グズグズしていると火に包まれるから、やむなくそのままにして比治山にたどりついた。時はすでに正午近いころであった。

局員で比治山に避難した者は二〇〇人余りいたが、此処でも治療する施設もなく、病人を収容する場所もないので、それからあとは自宅へ帰る者、倒れたままでどこかの収容所へ運ばれた者など、各人がちりぢりになった。

三階の監査課は西北向きにあったから、最も激しい爆圧を受けて完膚ないまでに破壊され、全員が死亡したほか、その他の各課とも調度品・窓ガラス・扉・交換台など破壊された。そしてその直後の火災によって、局舎はその外郭だけを残して焼失した。

惨禍の実録

木村玉二交換課長は白島北町の自宅で被爆し、家族と長寿園へ避難したあと、ただち電話局へ馳せつけようとしたが、猛火にさえぎられて、なかなか市中に入れなかった。正午をだいぶ過ぎたころ、やっと外郭だけ残った電話局にたどりついて見とどけた内部の状況を、自著の原爆悲記「愛子」に詳しく次のように記録している。

(一) ...自転車を傍においたまま、知事官舎の処から局の南の非常口に向った。知事官舎はまだ燃えていた。その燃える火の傍に、体格のいい大柄の二十歳あまりの娘さんが、パンツ一つで仰向けに倒れて、「お母さん、お母さん」と大声で泣き叫んでいた。非常口の扉は、外から引っ張るとすぐ開いた。中を見ると、扉の際から約三間向うの階段の処まで、女の死体が一間幅の通路に折り重なっている。髪がザンバラに乱れている。自分はゾッとした。

しかし、次の瞬間にはもう平気だった。私は死体を踏まぬように、左側のモーターの空箱の上を伝って壁際を通り、階段のところまでやっと辿りついた。二階に上って交換室をのぞいたが、中は燃えた直後の熱気で一步も入れなかつ

た。

(二) ...自分は横田君を誘って再び非常口から局内へ入った。今度は一階二階三階とくまなく廻って見た。二階の休憩室に入ると、黒こげの死体が二つ、一号室にも真っ黒な死体が四つころがっていた。どれも魚の燻製のようになって、まるで誰か判別がつかない。一号室は西側と南側が窓で、西側が爆心地に面していたから、衝撃が大きく、爆撃と同時に、即死でなければ身体を失って、そのまま焼死したものらしい。四人の死体の中の二人は、休憩室取締りの岡田さんと進徳高等女学校から生徒を引率して来ていた女教師の野口さんということがあとでわかった。四号室にも同じような死体が一つあった。

二階を一巡して北側の通用門の方へ降りると、階段の下に、同じような死体が、また一つころがっていた。

修繕場の前を通って小使室に入ると、小さい子供の死体が四つあった。これは小使室が袋町国民学校に隣接していたから、学校の裏門がちょうど登校時刻で開放されていて、児童がここまで逃げて来て焼死したのではないかと思われる。電力室にも大人の同様な死体が二つ横たわっていた。

(三) ...(屋上の)南側に出ると、巻ゲートルを付けて茶の背広を着た男が一人うつ伏して倒れていた。相貌が変わっていて誰か判別がつかぬ。二人とも無言で屋上から降りて通用門を出た。

すると、通用門の横のコンクリートの大きな防空用水槽に、大人が二人と子供が一人首だけ出してつかっている。一人は四十四、五歳の肥った人で、もう一人の小さい男は局の村田君だ。「村田君、村田君、どうしたー。」と声をかけると、村田君は私の顔を見てニッコリ笑った。「私は三階におったのですが、気がついたら下に落ちておりました。」という。何時水槽へ入ったかと聞いてもはっきりしない。村田君はまた「わたしや、靴を片一方しかはいておりませんから、どこかその辺に半分落ちとったら持ってきてください。」という。少し変だ。「水へつかっては毒じゃから、とにかく出たらどうか。」「いや腰が痛いけん出られません。このままにしといてください。」というのを、横田君と二人で両側から手をかけて、無理に引っ張り出す。「痛い、痛い。」「辛抱せい、男じゃないか。」この村田君は翌日東署の救護班に収容されたが、三、四日して亡くなったそうである。

(四) ...「ポンプの所に岡上君が死んでいますよ。」と横田君がいう。行って見ると、局の前の路上に裸の男が仰向けに倒れている。靴下の先を僅かに残して、衣類はみな焼けたらしい。人相が変わっているのではっきり判らないが、頭のかっこうや目のくぼんだところ、身体つきなど確かに岡上君に違いない。その時、局の南角の方で「横田主事さん。」と叫ぶ声がする。見ると、医師会館の前を、竹を杖にして和服の女が、トボドボと歩いて来る。中田さんだ。近づくと「妹が死んでいます。妹が...。」と泣き出した。「あんたどこにおったの。」「袋町国民学校の防空壕へ逃げておりました。」

今、壕から出て来たのだ。来る途中で非常口をのぞいて、あの死骸を見たらしい。ひと先ず通用門の水槽の傍へ連れて行って坐らせ、一防空壕には、もう誰もいなかった?」ときくと「もう一人おります。」という。

自分はすぐ裏門から学校の運動場へ行って見た。壕が二つあった。北側の壕をのぞいて見ると、水が経までたまっている中で、腰掛の上に女の子が一人伏さっている。声をかけると起きあがった。顔面が血みどろだ。庶務課の給仕さんだ。「永井さんじゃないか!」「はい、あたは誰ですか。」「僕だ。木村だよ。」「課長さんですか。目が見えんのです。」「私が負うてあげよう。局まで行こう。皆あそこにいるから。」

自分は永井さんを背負って歩き出した。すると、それまでどこにいたのか気がつかなかったが、十一、二歳の少年が一人、あとをフラフラとついて来た。

「ここはどこですか。」と、学校の裏門を出るとき、永井さんが背中からきいた。私は永井さんを通用門まで背負って行った。そして、横田君と二人で、付近に倒れている局の人達をさがして、一応ここに集めることにした。横田君は「裁判所の処に誰か二人、局員がいるらしいから行って来ます。」と走って行った。自分はその間に知事官舎の処へ倉本さんを連れに行った。「倉本さん。局へ一緒に行こう。」と抱き上げたが立ち上がれない。坐らせて、やっと背負って医師会館の処まで歩いたが、体格がいいので、重くてそこからはもう歩けない。肩にすがらせて歩かせようとしたが、足がきかない。てこずっていると横田君が「人違いだった。」と泣いて帰って来た。二人で倉本さんを両方からかかえて、通用門まで連れて行った。付近を捜したが、他には誰も見当らなかった。この人達の手当をしようといっただって、手の施しようがない。このまま救護の人がくるまで、待つよりほか仕方がない。この人達は、翌朝救護所へ運ばれたのだった。中田さんは数日後に亡くなったようだ。

永井さんはあとで田舎へ帰ったということであるが、その後の消息は全然きかない。大手町四丁目の自転車屋さんの娘であるが、家が爆心地に近いから、両親も無事であったかどうかわからない。国民学校からあとをついてきた少

年は、翌朝、水槽の傍に冷たくなっていた。倉本さんの消息はその後皆目わからない(以下略)。

電気通信工事局

大手町八丁目の電気通信工事局の主要業務は、戦争遂行にともなう軍要請の通信線の新規架設、およびこれが完全保守と軍都広島を守る都市疎開にともなう通信線の移装復旧であった。しかし、支那事変が勃発し、続いて第二次世界大戦が始まるに及んで、応召される者、軍属で派遣される者が続出、線路建設、機械移装などの重量能力と知能、および技術を要する態勢が、はなはだしく欠如した、そしてその補充は未熟練者、未成年者、または動員学徒をもってされ、遂には女性をもって埋めていたが、僅かに残っていた技術者の負担は実に大きかった。幸いに軍の協力により、連日多量の応援部隊を得、時には一日三〇〇人を超える兵隊が工事に従事し、業務を遂行していったのである。

五日夜、空襲警報が発令され、午後九時ごろから、市内居住の全員が出局して、庁舎の警戒にあたり、翌朝午前四時に至り、解除と共にそれぞれ自宅に帰った。

六日はケーブル回収、広島～宇品間復旧工事、その他緊急工事のため、八時前すでに全員登庁し、ただちに工事の打合せをおこない、毎朝の例である朝礼もおこなわず、工事に出発準備中か、或いは出発の途上にあった。

工事応援の兵隊一四〇人がすでに来局し、うち七〇人は土木班三人と共に、すでに東白島町で作業中であり、残り三〇人は市外班五人と共に、宇品方面へ出発の直前であった。他の四〇人はケーブル回収のため、市内班五人と共に出発、大手町電車通り付近にさしかかっていた。

なお、他の市内二班は公会堂付近および電鉄前付近にさしかかっており、土木の他の班はマンホール修理のため観音町にあり、その他はそれぞれ庁舎内で打合せ中か、または準備中であった。

事務はすでに始められ、桑原菊市局長は、線路課で工事の打合せが終了したとき、被爆した。

八時十五分、ダイダイ色の閃光後、まもなく木造二階建の本庁舎は、付属庁舎と共に投げつけられるように倒壊した。

一瞬、庁舎内の職員は瓦礫や棟木の下敷きとなり、中庭にいた者は爆風に吹きとばされ、熱線で火傷して倒れた。

幸いに這い出る気力のある者は、つぎつぎとそこから脱出、または人に助けられて這い出た者など、それぞれ避難しようとしたが、すでに周辺には火災が起っていて、逃げ道をさがすのに右往左往した。

やがて火災は三方から迫って来て、庁舎を焼きつくしたのであるが、ついに脱出できなくて、庁舎と共に焼死した者が三〇人にのぼった。そのうち一〇人は工事の応援に来た兵隊の死体であった。

中局勤務(中央電話局機械室)の機械課所属の者は、五日夜、防衛宿直者一〇人が出局し、防衛態勢のまま翌六日朝四時に至り、警報解除のあと、約半数は帰宅したが、他はそのまま局に残っていた。

八時前、平日どおり勤務者は出局し、中庭で中本技手を中心に朝礼をおこない、ラジオ体操をしているとき被爆した。

放射線の直射を浴び、全身に火傷を受けたり、爆風で強烈に吹きとばされ、大けがをした者や、即死をした者が多かった。

局内にいた者も、窓を透しての猛烈な爆風を受け、機械と共に投げ出された。

西北側から受けた爆圧のためか、階下各室は、もうもうたる砂塵のため暗黒に包まれ、一時は、誰がどこにいるのやら、さっぱりわからなかった。

やがて明るくたってみると、窓はことごとく鉄枠もろとも飛散し、機械室に据え付けられていた五〇連の本配線盤は、東側窓辺に倒れかかり、鉄架・局内ケーブル類はメチャクチャにもつれていた。

電力室の配電盤はどうしたのか、黒々と焦げ、その中に横倒しとなった即死者の死体がころがっていた。

本広技手は重傷であったが、それでも防空通信線により、中国軍管区の通信隊や、宇品陣地通信室と弾器盤の端子から連絡をとった。幸い相手が地下室であったためか、不思議にも通話ができしたが、救援を得ることができない事が判り、かつ、市内の被害のただ事でないことをも知ったのであった。

やがて付近の民家群から、火災が発生し、その火災に包まれた庁舎は、局内の一物も残さず焼きつくされたのである。

桑原局長は、竹内昌線路課長などと共に、倒壊家屋の下敷きとなり、重傷を負ったので、相当時間が経過してからやっと脱出できた。香川信子事務員に助けられて約一〇〇メートル余り逃げかけたが、ついに体力も気力もつきて、大手町国民学校付近の電柱に、倒れかかったまま、動けなくなった。「もう駄目だから、君一人で逃げてくれ。」と香川事務員に言って、意識不明となり、そこでそのまま焼死した。

竹内線路課長は、辛うじて脱出し、宇品の暁部隊に避難した。ここで応急手当を受けてから、段原町の親類で静養の上、十二日牛田町の自宅に帰った。その後一時、小康を得て再び出勤し、復旧工事を指揮していたが、再度発熱したため、妻の郷里豊田郡幸崎に行って静養中、遂に死亡した。

その他の職員では、吉島飛行場へ避難した者が比較的多く、ついで比治山へ避難した者も多かった。

電話局の中庭で体操しているとき被爆した中本淳六技手は、上半身火傷を受けていたから、本広勇技手が比治山へ避難するようにすすめたが、聞き入れず、死傷者の処理をしたあと、袋町国民学校の防空壕に入っていた。午後二時ごろ、再び本広技手と出会い、避難するべく比治山の麓まで、もう一人岡本盛夫技手と同行して別れたが、そのときは元気であった。しかし、その後、自宅で療養中死亡したことが判明した。

搬送電気通信工事局

市役所南隣の広島搬送電気通信工事局(中継所と同一構内)では、五日夜、空襲警報が発令されると同時に、軍隊が約二〇人警護のためにかけた。また自宅で待機中の職員も女子を除いてほとんどの者が出局し、宿直組と合流して警戒にあたった。

中井局長も出局して指揮にあたり、木村課長・毛利課長は、中継所に毎日泊りこみで保全と警戒に専念していた。

六日午前二時十分、空襲警報が解除されて、木村・毛利両課長および宿直員は仮眠をとり、他の職員はそれぞれ自宅に帰った。中井局長も帰宅し、軍隊も引きあげた。それ以後の中継所の勤務者は二四人程度であった。

六日朝八時には、日勤者が出て来て、庁舎内にいた職員は、中継所四七人、電信局一七人、中央電話局六人の計七〇人であったと推定される。

日勤者は、八時からの朝礼を終り「各自の持場についていた者もあり、持場に行く途中の者もあった。

共通関係職員は執務の準備をしているか、すでに執務していた者もあったようである。

炸裂の一瞬、強い光とともに、もの凄い音がして、次の瞬間には屋根が落ち、屋内にいた者はみんな下敷きになっていた。

もうもうたる土埃であった。事務庁舎は疎開したので、中継所のすぐ隣の官舎で、庶務課が執務していたが、それもベシャンコになってしまった。つぶれた屋根の下から、ソロソロと這い出してくる者は、皆ひどい負傷をしていた。

木村回線課長は目をひどく負傷し、臀部に大きな裂傷を負って、歩行も困難であった。小島班長は上半身火傷して、顔の皮が剥げて首の所へかたまり、肩から腕の皮も取れて、手首の所でかたまっていた。桑田庶務課長以下庶務の職員は、みな顔色が土色をしていた。一同、相当ひどい火傷であったが、その時はそんなにひどいとは思わなかった。

中継所や官舎へは、まだ火はついていなかったが、市中は方々に火の手があがっていた。鷹野橋消防署の自動車に火がついて、ガソリンが破裂し、凄い音がして大変な火勢であった。

小藪係長以下七、八人の職員が盛んに活躍して負傷者の救出・手当・死体の搬出をやった。その中に毛利工事課長がいた。外傷は何もなかったが、意識はなく、脈もなかった。一同が交替で三〇分くらいも人工呼吸をしたが、遂によみがえらなかった。そこへ中継所付近で疎開作業をしていて被爆した婦人たちが、全裸になって数人ずつかたまり、ゾロゾロ構内に入って来た。皆、恐怖におののき、逃げるのに必死であった。

この中継所の周囲は強制疎開で民家は取除かれていたが、県農業会の建物が残っていた。これも取除けるよう軍が交渉していたが、なかなか面倒で手こずっていた建物である。午前十時ごろ、その県農業会に火が移り、中継所中庭のケーブルリールに火がついた。数人が頭から水をかぶっては、バケツで一所懸命に水をかけたが、火は見る見るうちに倒壊した官舎へ、それから中継所へと燃え移ったのである。

その熱気に堪えられなくなり、外にいた一団の人々は市役所へ急ぎ避難した。

市役所の中庭には負傷した動員学徒や勤労奉仕隊などが一ぱいごめいていた。

まもなく市役所にも火が延びて来て、危険になったから、中継所東側の疎開跡へ避難した。これらすべての指揮は木村回線課長がとり、小藪係長が補佐した。

みんなは疎開跡の石コロや瓦の中に臥せていたが、周囲が火の海となって、もう駄目だと思っているうちに、やっと下火になってきて、胸をなでた。

通信局へ連絡のため、二人の職員が出発したが、市内は一面火の海で、行き切れず、途中から引返して来た。そこでまた、二回目の連絡員二人を出した。この二人は電話局前を通り、西練丘場へ出て、通信局へ到着したが、このとき、通信局は全く焼け落ちていて、誰れとも連絡する方法がないと言って帰って来た。その時刻に、呉中継所の椿連

絡員が、呉鎮守府の寺川軍医と一緒に来た。寺川軍医は、職員の死体や負傷者を見て、不通になった通信回線の復旧要員がいなくなるのではないかと行って、広島赤十字病院へ手当を依頼しに行った。しかし行ったままそのあと何の様子もなかった。広島赤十字病院は押し寄せた負傷者の治療で手一ぱいであったのである。

椿連絡員は通信局に寄って、たまたま居合せた職員に中継所の状況を連絡して、夕方呉へ帰った。負傷者は広島赤十字病院へ手当をして貰いに行ったが、なかなか順番が廻って来なかった。戸板に乗せられた重傷者が、後から後から運ばれて来る。仕方なく軽傷者はパノールを塗って貰っただけで帰った。

家に帰れる者は全部帰し、残った者五、六人は、その晩、木ぎれを集めて来て風除けを作り、被爆後の第一夜を明かした。

広島無線電気通信工事局

通信局内にあった広島無線電気通信工事局は、六日朝、工務員三人が出張中のほか、全員出勤して朝の行事(朝礼)をすませ、それぞれの仕事にとりかかろうとしていたときであった。

南側の西練兵場方面上空で、稲妻のような閃光が起り、火薬庫の爆発かと思われた瞬間、爆音と大爆風が襲来し、一瞬にして室内のあらゆる物が吹き飛ばされて破壊し、窓ガラスの破れた粉が、雪のように飛散した。たちまち真暗になり通路も判然としないまま、しばらく周囲の落着くのを待って通信局前庭へ避難した。殆んどのが、負傷して血を流していたが、楠城敏美局長は全然負傷もなく、すこぶる元気で、行方不明の局員の氏名を連呼しながら捜し回った。

そのうちに付近は猛火に包囲され、全員が避難したことを確認したので、残っていた局長・城田係長・小田係長・鳥井原技手の四人は、辛うじて退路を見つけ、浅野泉邸へ向けて避難した。しかし、途中、別れ別れとなり、楠城局長と鳥井原技手の二人が常葉橋下手、川添い西側の土手に至ったときには、すでにそこら一帯は市民と軍人の避難者で混雑をきわめていた。

楠城局長は、柱の切れ端を集め、重傷で地面に臥している鳥井原技手にも渡し、危険のときはただちに川に飛び込むよう注意した。

その時、突然対岸でウォーという唸りと共に、火の粉が空へ飛び上り、あれよあれよと思うまもなく、大旋風が起って、呼吸困難となり、目もあけておられない状態となった。

避難者は我先にと川の中に飛び込み、あるいは押されて、ただれを打って水中に落下した。しばらくして後、水中には僅か数の人々が、放心した姿で棒杭などにつかまっているだけであった。そして、大ぜいたた人々と共に楠城局長の姿も見ることができなかった。その僅かに残っている者の中に、重傷した鳥井原技手と工務部の高橋書記がいた。

六、被爆後の混乱と復旧状況

広島郵便局

爆心直下で一瞬に全滅した広島郵便局は、六日の当日夜十時ごろ、広島通信局裏庭に、被災した広島駅前郵便局・広島鉄道郵便局の主脳者らが集り、通信局と協議した結果、広島郵便局としては、焼け残っていた千田町の広島貯金支局(現在の広島地方貯金局)内の広島郵便局分室を利用して、ただちに郵便局業務を再開することとした。

非常払出し

広島郵便局は、在局の全職員を失い、機材設備も一切焼失したが、決戦遂行のためには一日として業務の休止を許されず、また罹災者に対して直ちに郵便貯金や簡易保険の非常払出しの緊急処置をとり、市民を救助しなければならぬと決したのであった。

翌朝早くも、少数ながら生き残った職員の糾合を計る手配をすると共に、内部が破壊された貯金局内分室の清掃整理に着手し、机・椅子をはじめ事務用必需品を取寄せるべく努力した。

八月十一日、県内外の主要局からの応援と、駆けつけた生き残りの自局員とによって、窓口事務を早くも再開した。

駆けつけ職員の中には、家族を失い、葬儀を営むこともなく出局して働く人、父通機関途絶のため、徒歩で片道五時間かかるのもいとわず、毎日通勤する人などもあり、事務再開のために、献身的な努力をばらって惜しまなかった。

被災者らは毎朝、局の前に長蛇の列をつくって、非常払い金を受取り、それによって食糧を求め、また縁故をたどって避難することができた。

郵便配達事務

郵便配達事務は、救急措置として町内会事務所の協力を得ておこなった。焦土の中のバラック小屋で、配給物資を受ける関係から、罹災者らが応急的な町内会をつくっていたから、町内会の協力は実にありがたいことであった。

そのうち局員が復員して来たり、新規に採用されたりして、次第に人員も充実していき、昭和二十年十一月十五日から順次配達係員の手にもどして、翌年三月一日には、市内全域にわたり、みずからの組織で配達ができるようになった。続いて、昭和二十一年九月、西練兵場跡地に用地を入手することができ、木造ながら新局舎が落成し、ここに本格的な業務の運営体制がとられるようになった。

貯金の非常支払い事務は、昭和二十一年二月の金融緊急措置令が出るまで続けられた。簡易保険については、基本となる契約原簿を焼失したので、安佐郡三入村に疎開していた原簿写しによって処理したが、その整理と後始末には多大な努力を費したのであった。

広島駅前郵便局

広島駅前郵便局は、六日当日、避難先で負傷職員の応急手当をしたが、その後は大部分が市外の医療機関を利用した。

広島赤十字病院も通信病院も一般罹災者が殺到して利用できなかったからである。

局舎が焼失したため、六日は二葉の里の東照宮下の南広場に天幕を張って仮局舎とし、事務開始の準備ををはかった。事務用品も他から借り集めねばならず、死亡した職員、負傷した職員が多く、人員もとのわなし最悪状態であったが、市内壊滅で利用者もまた僅少であった。

八月八日、さらに局舎の焼失跡にも天幕を張り、郵便の普通の引受けと、切手類の売りさばきを開始した。

また、罹災者がもっとも緊急に渴望した貯金・保険の払出しについては、特定局から受入れた過超金一五、円を支払い準備金として充当することとし、従業員八人を担当者として、東照宮下の仮局舎の運営をおこなった。

この非常払いは日を追って増加したので、通信局と協議の結果、八月十一日、通信局内分室を局舎としたほかに、局舎焼跡と東警察署構内(現在・広島銀行銀山町支店)に約二週間ほど臨時出張所を開設して、広く罹災者の便宜をはかった。取扱い時間は午前十時から午後二時までとした。

支払いに必要な資金は、広島郵便局(広島貯金支局内)または日本銀行広島支店から受けたが、払出しは次第に増加し、貯金は昭和二十一年三月には一日平均一八〇件に達し、保険の払出しは昭和二十年十月において一日平均一〇〇件となった。

この災害非常払いは、貯金では一人一口五〇円で、無通帳による確認払いであり、また保険証書・領収帳のないまま、市または町村長の被災死亡証明書だけを基とし、疎開していた契約簿写しによって該当する契約を見い出しては支払った。

郵便関係については、郵便車の到着が不確実で、着いたり着かなかったり、また延着時間二〇〇分というようなことも稀ではなかった。しかも到着郵便物は僅少で、受渡郵便袋も少なく、逋送も各自が肩に背負って運搬する程度のものであった。

郵便関係の職員数も被爆前の二四八人が、被爆死亡一人、罹災後出勤しない者七人で、出勤した職員は一六〇～一七〇人であった。

逋送

逋送は、八月十五日から日本逋送会社の自動車が動きはじめ、ローカル線全部と市内伝送便も運行するようになった。

市内配達は、食糧配給をおこなう町内会長が、居住者の変動を掌握していたので、郵便物を町内会長宅まで配達して協力を受けた。

そのうち局員も復員して来て幾らか多くなり、ぼつぼつバラック小屋も建ちはじめたので、この町内会配達を十月から本来の各戸配達にもどした。

しかし、被害のなかった地区、または少なかった地区の、段原一円・大洲町・尾長町・矢賀町・牛田町・向洋町・府中町・温品村・中山村・戸坂村は、ずっと各戸配達をおこなって来た。

集配度数は、被爆前の収集め四回を一回に、配達は通常二回、小包一回を双方あわせて一回としていたが、まもなく従前どおりに復活させた。

貯金関係については、被爆前の従業員の内勤一〇人・外勤九人が、被爆後は内外勤あわせて八人くらいであったから、貯金の非常払い業務開始には、保険部から応援を受けておこなった。

そのうちに局員も増加し、内勤事務も軌道に乗ったので、十月十一日から、年金恩給も支払いを開始した。

外務事務は、郵便貯金の預入確認申告や貯金通帳の記号番号調査の申出に対する窓口事務が増加して、それに相当

の人員を要したのと、更には、二十一年二月に施行された金融緊急措置令による取扱いに忙殺されて、まったく手の出ない状況が続いた。

昭和二十一年四月になって、これらの事務も一応落ち着きを見せはじめたので、奨励募集の外野活動をはじめた。

保険関係については、従業員七一人の構成が、被爆後は、四、五人から十数人くらいの少数となり、死亡者一〇人を除いて、負傷者全員が立ちなあって出勤するようになるまには二か月近くを要したのであった。

集金事務は、徴収原簿を焼失したため、十月まで集金不能であったが、十一月一日に至って二五件の集金を皮切りに、毎日数十件を集金し、十一月分は合計二、二八四件、十二月以降は日々漸増し、翌年三月分一、五〇四件となり常態に復した。しかし集金者用の自転車は少なく、遠距離の市外区のほかはすべて徒歩でおこなった。

契約原簿も焼失したが、高田郡向原町に疎開していた写しを基として十一月初めから契約者を訪ねて、保険証書・領収帳などによって徴収原簿を作成しながら集金する方法をとって整備し、二十一年一月中旬に保険の非常払いは、二葉の里の仮局舎から通信局内に移って本格的となり、二十一年になってもなお続い昭和二十一年三月、局舎焼跡に木造新局舎ができたので、これに移り、更に二十二年五月、木造二階建ての別館を新築して一応完備した。昭和二十三年六月、付属舎平家建てを二階建てにし、それまで通信局内に残って執務していた保険部も復帰できて、ようやく被爆前の態勢にかえることができたのであった。

広島鉄道郵便局

広島鉄道郵便局は、駅前郵便局と同じように東照宮下に避難した。三階にあったので、通路の階段が破壊脱落していたため、重傷者の搬出に困難を極めた。

当初通信病院へ重傷者を運ぼうとしたが、一〇〇メートル先の満景寺付近はすでに火の海と化し、前進不可能であったから、遠く市外戸坂村の陸軍病院へ送った。無傷の者や軽傷者は踏みとどまって、物品や書類の持出しに努力し、ありあわせの荷車と自転車で満載して東照宮へ行ったが、東照宮もすでに炎上しはじめていた。再び局舎に引返して、できる限りの器物を郵袋に入れたが、火が迫って来たので、急いで東練兵場へ向う途中、引返線に顛覆していた客車を見つけ、これに郵袋を入れることにして、数回局舎へ行って搬出した。

午後三時ごろ、通信局へ連絡職員を派遣しようとしたが、四面火の海であり、死傷者も多数あったのでできなかった。

夕方になって、搬出物の保管にあたる最少限の職員を残し、他は翌朝東照宮前の空地に出向することを約し、一応帰宅させた。

翌七日早々、東照宮下に仮事務所を設営した。また、局舎焼跡にも仮事務所開設の表示板を立てて、ひたすら局員の連絡集合につとめた。

八日、広島駅には遠いが、天幕張りの事務所では管理も不便なので、通信局内の自動車運転手詰所跡を仮局舎とした。

列車乗務員の詰所も必要なので、局舎焼跡に焼トタンでバラック小屋を建て、これを仮詰所とした。机や椅子もなく土間に坐って休息するほかなかったが、軍から机・椅子の譲渡を受けてから、やっと事務所らしくなった。この仮詰所は、乗務関係の仕事に好都合であったし、局員家族のための連絡場所にもなった。

乗務員宿舎も焼失したので、通信局内を利用し、当座をしのいだ。

国鉄の列車が九日から、広島駅以東で不定期に動きはじめたが、以西は同時開通に至らず、下り方面郵便物の滞貨がおびただしい数量となって、焼けただれた駅のホームに山積し、保管監視員を増加して保全につとめなければならなかった。このため、八月十三日、八方手をつくし、国鉄所有の焼残りの油庫を借受け、ここを乗務課の服務関係と乗務準備、ならびに休憩所にあてることとなって移転した。

夜間の乗務は、僅かな口ウソクもなくなったあとは、焼残りの木や紙を焚いて、この光を頼りにした。

山陽線中断

山陽本線は広島で中断されたため、郵便車は広島以西は五日市駅、広島以東は海田市駅、芸備線は矢賀駅で待機していた。列車が本格的に復旧したのは八月十四日であったが、開通当日に岩国が爆撃を受けて再び不通となった。

八月十八日、やっと山陽線全線が開通したが、運転休止が多く、一日上下四便程度も出なかった。

次第に正常運行に近づき、増便されていったが、依然として正常な郵便車の運行は少なく、客車の一部か小荷物車の半分を代用した。殊に夜間は電灯設備で不十分なため、郵便物や選記の文字の判読に苦しみ、口ウソクによって書留郵便物の記録扱いと車中業務全般の処理を辛うじておこなった。

八月十五日、終戦となって復員者や引揚者が出局して来て、多少服務は緩和したが、列車は超満員となり、郵便車にも侵入し執務に大きな支障となった。一方この日から日本通送会社の車が動くに至って、通信局内の駅前郵便局へ本格的な運送ができるようになり、ホームに山積していた郵袋がようやく減少した。

しかし、九月十六、七日の大水害などによって、幾たびか混乱状態を繰返し、郵便物輸送が被爆前の状態に復旧したのは二十年末である。

昭和二十二年六月、旧局舎隣地に新しく局舎が建設され、仮住いから復歸した。

宇品郵便局

宇品郵便局は、直接大きな被害はなかったが、市中の広島局・駅前局などの機関が壊滅的被害を受けたため、市内伝送便は上下四便、速達運送便二便が、市内伝送便上り一号便の到着があっただけで、それ以後の各便は運行停止となった。

郵便車も運行せず、電信四回線も全部不通となった。

六日午前十時、通信局へ連絡員を派遣したが、御幸橋以北が炎上中で通行できず引返した。午後三時、再び派遣し、二時間を要して通信局に到着し、被害状況報告と善後策について協議した。

事務は停止せず、郵便配達も被爆直後出発した。皆実町方面は、ほとんど空家同然で皆避難しており、配達できず持ち帰ったが、その他の焼けなかった地区はほとんど配達できた。

被爆後、一、二日間は窓口利用者もなかったが、郵便配達は受持区域のうち、皆実町方面のみ町内会配達をおこない、他の地区では、各戸配達を続行した。しかし郵便物が激減したので、取集め配達は一日一回にした。市内伝送便は、十五日から復活させて運行した。また列車による郵便物の輸送が打撃を受けたので、船舶輸送に切替えた。

貯金保険は、九月から非常払出しをおこなったが、市内の機関が壊滅していたので、市民が宇品局に殺到し繁忙をきわめた。一方、広島郵便局の事務開始に窓口担当の職員を派遣して応援した。

募集・募金は八月下旬からおこなったが、被害の少ない地区は郵便局に協力的であって、復旧を早める大きな力となった。

職員は被爆当日から、負傷した女子職員と女子挺身隊の約半数が出勤できず、実働人員六五人となった。

女子挺身隊は、終戦と共に自然解散となったが、中には原子爆弾で親兄弟を失い孤児となった数人の者があり、職員に採用されて、その後永く精励した。

こうして、局務が被爆前の状態に復歸したのは十月初旬であった。

特定郵便局

市内の特定郵便局は、利用区域が焼失し、局舎も局長宅も、また職員も死亡したり、負傷したりして、三八局が廃局となった。存置したのは半数に満たない二一局に過ぎなかったが、存置局は、被爆当日から局舎・事務用器具などの整備にかかり、再開準備をおこない、八月十五日ごろには、ほとんどの局が事務を開始した。

事務開始と同時に、罹災者らは長蛇の列を作って非常払出しを受けた。

一方、家屋の焼失をまぬがれた地域では、親戚知人を頼って罹災者が住みこんで、人口が激増し、ために利用者が窓口に殺到して繁忙をきわめた。

十月初めごろから、資金・葉書・切手・各種用紙の請求が軌道に乗りはじめ、昭和二十一年になって漸く被爆前に復した。なお、廃局となった郵便局も、焼跡に人家が建ち、増加したので、二十一年中に一〇局が復活、事務を再開した。

広島通信局

島通信局は、八月七日になって、通信局内に戦災対策本部を設置し、職員の罹災状況の調査、非常用加配米の受給処理、非常炊出しなどを当面の活動として発足した。

告示

(一) 各課部は至急仮事務室を設け、事務開始に着手すること。

出局者は所属課部仮事務室に出頭報告の上指揮を受くること。

(二) 左記事項は各課部仮事務室に出頭報告の上指揮を受くること。

(イ) 課部員の登庁状況及び罹災状況

(ロ) 事務室の準備

なお、事務室は従前階の北側(罹災せざる部分)を在来使用の課部と協調協同にて使用するものとす。

(八) 従前階の南側(罹災せざる部分)内部は罹災局員の応急居住に充当する目的を以て(口)に併せて当該北側事務室使用課部に於いて整理すること。

以上の告示によって活動を開始することになったが、被害甚大で出勤者はわずかであった。

出勤者全員でただちに庁舎を清掃整理し、八日には芸北特定局長会からの応援を得た。また暁部隊からも調査を軍において使用する目的で清掃がおこなわれた。

罹災職員の調査は、通信局をはじめ職員および女子挺身隊の消息不明者が多く、極力捜査を続けた。

従って、二、三日間は、罹災職員と家族との連絡が主な仕事であったが、これと併行して全壊した広島郵便局、及び多数の死傷者を出した通信局などの再建のために人事発令をすることにした。幸い人事関係書類が焼失しなかったため、幹部の補充など緊急人事を処理した。局長の死亡により、石丸豊経理部長が局長心得兼務となり、八月十七日、磯野直孝が局長に任命されて、爾後の指揮にあたった。

一方、隣接の通信病院に殺到した罹災者が収容しきれず、庁舎の一部を応急病室として手当をすると共に、非常炊出しもおこなった。

八月中旬に至ると、自宅治療をしていた局員もぼつぼつ出勤しはじめ、また復員する者もあって、出勤者が増加、当面の緊急用務を逐次処理していった。

九月に入り、負者や罹災家族の世話などで、出勤できない職員の退職が続出したが、新規採用者や復員者で補充した。

庁舎の復旧は、修理の見込みもたたず、内部清掃だけで窓ガラスもないまま、吹きさらしの冬を迎えた。

風雪は容赦なく舞いこみ、インキの文字がにじんで、どうしようもなかった。木の枠を取付け、紙や板を使って窓を覆い、うす暗く火の気のない寒い部屋で、仕事を進めねばならなかった。しかし、翌二十一年末には不十分ながら復旧事務は一段落した。

広島貯金支局

広島貯金支局では、住宅や下宿先を焼け出された職員の救済として、応急的に庁舎内に仮泊することを認めた。

貴重な貯金原簿カ - ド約三五〇枚が、爆風によって吹き飛ばされ、室内外をとわず散乱して、收拾に非常な苦心をした。負傷者までも協力して、付近一帯を探しまわったが、二〇〇メートルも離れた鷹野橋付近で貯金通帳と出納計算書が発見されたりした。

このように、四階建庁舎のすべての窓ガラスが破壊されており、風雨の吹きこむのにまかせた室内では、まともに事務も執れないありさまであった。

罹災市民がもっとも強く要望したのは、焼失した貯金通帳の再発行であったから、これに応えるために全力を傾注し、昭和二十年十月には四、五〇〇冊、十一月には二一、七〇〇冊、十二月には二三、
冊と、漸次再発行事務を進めていき、翌二十一年夏ごろまでには、だいたい完了することができた。

振替貯金については、福屋七階分室にあって、一切の書類・用紙を焼失し、まったく新規まき直しの出発であった。

振替口座票は、疎開していたその副本を基に、二八、七〇〇余の口座票を作成して、各口座の現在高を確認する方法をとったが、全員一致して種々の困難を克服し、被爆後二年目に、ようやくこれを完了して、平常状態にもどすことができた。

証券事務

証券事務については、幸い証券原簿が焼失しなかったから、昭和二十年十二月末には現在高通算を終えた。

これに次いで、昭和二十一年五月から証券当籤調査票の作成をおこなったが、数量が龐大なため職員七五人が専心これにあたり、九月までに約五〇、
枚を終了、引続き昭和二十二年六月に、これが審査を完了して、同年十二月には、当籤記号番号順整理も成しとげた。引続いて、当籤調査をはじめ、昭和二十三年五月には一三三万三、
件の調査を完了した。

中央電話局

広島中央電話局では、翌七日、赤木優局長・広島辰雄庶務課長ほか四人が出局した。午前九時すぎに、通信局から樋木崎書記が来局し、局の前の防空壕内で通信復旧対策を協議した。

措置局急設

まず、その根拠を福屋ビル内の措置局に置くか、あるいは西分局に置くかということになり、すぐ福屋を視察したが、福屋は内部全焼し、階下からはまだ煙が出ている状態であった。

八日朝、引続き北榎町の西分局を視察した。局舎内の機器類は、相当破壊されていたが、火災を免れていたため、拠点をごここに置くことにして、工具詰所を片づけた。

九日、暁部隊一二〇人が来援したので、中局清掃を依頼し、死体の収容を手はじめに、中局内の残骸整理をおこなった。

そのあと部隊は市内の焼残りのケーブル回収にも活躍した。

清掃と同時に通信局菅沼技手および応援の浅尾(岡山)、弘中(下関)両技手は、岡山工務局のトラックを使って、局内装置用機器や材料調達のため、工作工場(試験弾器・交換機・電話機)、三滝倉庫(乾電池・錫鑑)、当時従業員の訓練場としていた盲啞学校(局内ケ-ブル・ジャンパ-線)などを走り回って資材を集めた。また、配線盤の鉄枠は三川町の倉庫焼跡から拾い、下関・防府からの応援隊の協力を得て、十日着工、十二日にひとまず竣工し、西分局から復旧の根拠を中局に変更した。

外線は加入者の移転先を探しながらゴム線を架渉し、局の窓から束にして入れ、本配線盤に接続して、ひとまず一四加入を交換台に収容、十三日から部分的に試験開通、十五日から正式に交換を開始した。当時の設備数は、交換台(特一〇〇...二台・小市外三台)と、一六〇回線試験分線盤(二基)で、収容加入者は第二総軍司令部ほか一三回線であった。なお、このほかに臨時電話として、東練兵場へ来ていた呉海兵団救援隊へ一回線開通していた。

被爆後、十日あまりのあいだ、出局者の昼食は、市役所のムスビなどの配給を受けた。また、来援した暁部隊が、大豆七、八俵と麦五俵ばかりを置いて他へ移動したので、これを半月ばかり食べて復旧活動を続けた。

用紙類は、被服廠から陸軍用紙を相当量配給を受けて事務に使った。

富国生命ビル内の広島電信局は全滅、電信は中局内に交換台と共に復旧することに決め、祇園局から電鍵・集音函を集めて、交換台復旧に従事した応援隊員により、並行的に施行された。

八月十二日、音単三座席の装置工事を完了し、十三日に広島-呉線一回線が収容された。

八月二十日...尾道・山口・宇品

八月二十四日...岡山

が復旧し、座席は逐次増加されていった。

回線復旧にあたって、市内に張ったゴム線は、原子沙漠に最初の息吹きを与えたものであったが、各所で盗難にかかった。障害は回線数の三分の一ないし二分の一であり、苦心して張ったものだけに落胆もした。

しかし、各地の局からの来援が、食糧はじめ多くの救助物資持参で相つぎ、復旧作業は着々と進められた。

広島電気通信工務局は、職員も設備もともに壊滅的な打撃を受けたが、生き残った者は、翌日から三滝材料倉庫を拠点として、回線の復旧に努力した。

しかし、岡本盛夫技師は、火傷も負傷もなく回線の復旧に従事していたが、八月下旬、遂に床について死去したし、富成国二庶務課長は、頭部裂傷の身ながら出局して、復旧工食用食糧の確保に奔走し、その運搬中に倒れ、八月末死亡した。

羽入田春登書記補も腰部を打撲したが、復旧作業の材料事務に毎日従事中のところ、八月中旬ごろ発熱し、下痢を催したので、安佐郡鈴張村の実兄宅で療養していたが死亡した。また、竹内昌線路課長(土木課長兼務)も、全身打撲傷の身で、一時小康を得、出勤して復旧工事指揮していたが、九月上旬、再度発熱し、妻の郷里で死亡した。

このように次々と死亡者があいついで出て、復旧は思うとおりに進捗しなかった。

西分局

西分局は、松材の五寸丸太による爆風除けをした窓も、防爆壁を施した窓も、みな爆風によって鉄枠もろとも破壊されており、機械室のボードは傾き、各部屋は物の破片で埋められていた。負傷者も出たが、幸いにして類焼をまぬがれ、ラインファインダーボード、セレクターボードの三列、およびこれに布線の鉛被線を焼失、かつ工具詰所を焼いたにとどまったが、自動機械、電力関係、および電池に相当の被害があった。

横川従局

横川従局は、被爆と共に二階建全局は一瞬にして倒壊、在局職員のほとんどが下敷きとなったが、幸いにして即死者一人にとどまり、他の者はひとまずその場から脱出することができた。しかし、その後周辺からの火災のため局舎もろとも、全機烏有に帰した。

三滝材料倉庫

三滝材料倉庫は、爆心地から約二・五キロメートルも離れていたが、老朽建物であったから一部倒壊し、一部は傾

斜して、壁は落ち、瓦は吹きとび、在庫品が飛散した。

在勤者三人は、打撲や負傷をもちえりみず、力・テンを破り、応急手当をほどこし、励ましあいながら五か所からあがった火の手を、つぎつぎと死力を尽して消しとめたが、警戒中の憲兵から退去を命ぜられ、一応退避した。そのとき付近民家から火の手が上っているのを見て、再び帰り防火につとめた。

この時、三滝町民の神田某は、電柱置場のクレオソート注入柱に、隣家の火の粉が飛散して来るのを、負傷の身をもって防火に協力した。

このように局員、町民の奮闘によって火災からまぬがれ、重要な資料を守り得ることができ、翌日からの復旧作業に大いに役立ったのであった。

後日、この半壊の事務室を工事局本部とし、復旧作業の拠点とした。

搬送電気通信工事局

広島搬送電気通信工事局は、あらかじめ広島が被災した場合の移転先として、通信局の四階を指定していた。

また、広島電話中継所被災の場合にそなえて、呉と岩国電話中継所間でクワッド(何クワッドか不明)を指定して、広島電気通信工事局の桑原局長が被爆死亡したため、中井搬送工事局長が両局長を兼任し、宗像工務部長を総指揮者として、中井局長・木村回線課長が通信局四階で、爾後の応急復旧の計画や指揮にあたった。

広島被爆により、岩国電話中継所太田所長が急ぎ駆けつけ、中井局長の命により、広島電気通信局の重森光造主任技手と共に、広島電話中継所前のマンホールにおいてケ・ブルを切り開き、呉方面を指定打線で接続し、住吉・福岡間クワッドが、七日夕方復旧し、東京と九州・朝鮮・満州方面の回線が開通した。

広島無線電気通信工事局は、通信局内にあって、猛火の包囲の中を辛うじて脱出した小田係長が、賀茂郡の西条農学校に受信機を設置し、八月十日ごろ、大阪と通信を開始した。

電報は西条まで汽車便を利用し、通信士は広島から派遣したが、旅費・食糧難から終戦後は運用を中止した。

その後しばらくして通信局へ通信所を置き、各地と国内無線を開設し、復旧の第一歩を踏み出したのであった。

軍用通信線

被爆直後、大混乱のさ中、軍用通信施設の緊急復旧が要求された。

第二総軍司令部は二葉山へ、中国軍管区司令部は牛田の山へ、また尾長の山へも膨大な横穴を構築中であったが、この際、この横穴を本拠とする工事を急ぐことになったらしく、八月九日、第二総軍司令部から横穴式措置局の計画が提示された。

八月十日、中部軍、楠一か中隊(奈良)は、この工事の応援に到着、宿舎は中局の一部を供与、工事に必要な掘鑿用ツルハシ・スコップ各一〇〇挺を要求して工事に着手した。

しかし、終戦により工事は中止され、措置局も計画と準備にのみ終り、楠部隊はいっとなく立ち去っていた。

なお、軍回線の早急復旧に、新設に、たびたび連絡員を派遣して来て督促したが、記録に残っているものは次のとおりである。

軍の復旧要請

八月八日午後二時三十分、中国軍管区司令部の渡部少尉が来訪し、中国軍管区一県庁、市庁、総監府間電話回線を至急復旧方要請した。

八月十日、中国軍管区 - 向洋駅前防空監視所間電話線(末端工事は軍にて施工)および中局 - 通信局間軍用裸線一回線架設方を楠部隊から要請した。

八月十二日、航空情報隊の大西中尉が中国軍管区司令部 - 敵島情報線を、暁部隊の高田見習士官が同部隊へ一回線(工事は暁部隊が施工)など、おのおの作成方を要請した。

なお、八月十三日、西部防衛通信施設部から線路工員七人、機械工員七人が来広し、軍通信施設の復旧に奔走した。

これら軍用通信の復旧対策も含めて、全体的な応急復旧対策、およびその処置は次第に整いつつあったが、直通のままになっている中継所の復旧作業や、仮復旧した中居たも、ただだ沙漠の中に交換台を置いているようなもので、運用の困難は想像もつかないものであった。加えて、出勤者もつぎつぎに倒れて減り、ある時は交換手一人しかおらず、電報の男手を借りたりしたのである。

船越町へ移転

八月二十九日、宗像勝太郎工務部長の努力によって、船越町の日本製鋼所第二精心寮を借入れ、ここに中継所・電信局および電話局を移転させることが決められ、準備に着手することになった。

一方、九月一日に英濠軍が呉に上陸し、まもなく終戦連絡委員会から、進駐軍関係電話回線を、九月二十三日までに作成するよう要求された。

また、占領軍進駐にともない、第二総軍司令部が大阪へ移動することになり、九月十三日、移動に伴う有線通信回線の作成を要求した。また、中国軍管区司令部も終戦処理のために必要な回線作成を要求して来た。

このように、次から次へと回線作成の工事は連続して息つくまもなく、これに従事する人々の辛苦は言語に絶した。
暴風雨禍

その上、九月十七日に大暴風雨が襲来し、通信線は日本の東西を結ぶ無装荷ケーブルが、熊野町から玖珂町に至る約八〇キロメートルの間、ケーブル亘長四四キロメートルにわたって点々と流出。市外裸線・市内線も無数の被害を受けた。

九月十七日(台風襲来)までに復旧した回線数は、市外・市内共三二回線であったが、一夜明けた十八日には生きた回線は全然なかったという打撃を受けた。

電気通信復旧委員会の発足

積み重ねた血と汗の結晶は一瞬にして崩壊し、再び零から出なおさなければならなかった。このとき、戦災と風水害の復旧推進のため「電気通信復旧委員会」が発足した。委員長に黒岩浩一広島逓信局長が就任、不足していた労務者・食糧・主要資材の獲得や困難をきわめる輸送関係の打開に活動し、復旧作業の推進を強力におこなった。内部機構も、九月八日、工務部のほかに復興部を設置、局において直接復興部隊を動かし得る態勢がとられ、重大な役割を果たすことになった。応急復旧で張ったゴム線も、復興隊により漸次ケーブルに切替えられ、障害の少ない安定した回線ができはじめた。

九月十七日の水害で再出発した復旧工事も、十二月二十日、船越町へ移転するとき、中局で収容していた回線は、市外三九回線、市内一二九回線に達していた。

第七項 広島管区気象台...273

(現在・広島地方気象台)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市江波町下山六〇

建物の構造

敷地面積 九一四坪九五

建物面積 一七三坪(庁舎のみ)

庁舎 鉄筋コンクリ - ト一部三階建・一棟延一七三坪七

附属舎 木造コンクリ - ト平家建・一棟一五坪

倉庫 木造平家建・一棟九坪

所長官舎 木造平家建・一棟三三坪七

所員官舎 木造平家建・一棟二二坪二

在籍従業者数 三三人

被爆時の出勤者数 二五人

代表者 台長・平野烈介

爆心地からの距離 約三・七キロメートル

二、疎開状況

(一) 戦況苛烈を加えるに及んで、被爆破壊の場合を想定し、左の器材・書類などを、安佐郡可部町役場の了解を得て、同町友貞神社(当時の役場から北西約五〇〇メートル)の建物内に疎開した。

一、気象観測器械一式

一、無線電信受信機一式

一、観測用紙・帳簿・天気図用紙・規程類一式

一、当座に必要とする事務用紙・切手類

(二)重要書類・気象原簿・記録は、気象台東側の横穴式防空壕に移し、爆撃や火災に対処した。

三、防衛態勢

全職員で防火班・持出班・救護班を編成し、昼間・夜間の各態勢を定め、毎月一回訓練をおこなった。

四、避難計画

気象台が爆破された場合の応急作業場として、前記物資疎開先の友貞神社に予定していた。

五、被爆の惨状

惨禍

五日夜、警報の発令が続いたが、特にどうということはなく、規則どおりの防備をおこなった。

六日朝、いつものように事務室で朝礼を行なっているとき被爆した。ただし、当番の職員は各持場で、無線受信や観測作業に従事していた。なお、広島市内の建物疎開作業に出動している者はなかった。

気象台は、江波山(高さ三〇〇メートル)の上にある鉄筋コンクリート建の丈夫建物であったが、強烈な爆風によって、すべての窓は鉄サッシが鉛のように曲り、ガラスはほとんど飛散した。

室内は、ドアの半数以上が吹とび、窓ガラスの破片がコンクリート壁にも突き刺さった。また、衝立や戸棚などの倒れるものもあった。

庁内にいた者は、飛散物によって頭部をはじめ、手足などの露出部はとくにひどい外傷を受け、血だらけになって右往左往し、軽傷者は重傷者の応急手当をした。全員が負傷者であって、気象台員の中には、衝立が飛んで来て大腿骨を骨折した者がいたし、室外で熱線を受けて、全身大火傷を受けた者などがいた。

また、庁内に駐留していた江波山高射砲隊の兵士の中には、吹きとばされたガラスで手首を切断された者がいた。

施設器械のうち、地震計は大破したが、測風塔および観測露場の百葉箱などには損傷なく、記録は引続きとることができた。

幸い火災が発生しなかったので、庁舎内に救護室を設けて、負傷者の応急処置をしたが、その後、重傷者は近くの陸軍病院江波分院に運んだ。

この江波分院には、一般住民も江波山を越えて、ゾロゾロと列をなして手当を受けに集った。

職員の中には、自宅の家族を案じて帰って行った者もあったが、市の中部以北は大火災で道をさえぎられ、大半の者は目的を果たさず、引き返して来た。

(人的被害)

即死者*負傷者行方不明者*計

〇人*二五人*一人*二六人

六、施設の機能障害程度と対策

(一)電気

停電のため、電池・ロウソクを使用した。八月十三日午後復旧した。

(二)電話・電信

被爆後不通となり、気象電報は職員持参で、郊外の郵便局(電信局)を探して打ったが、到着予想については確答が得られなかった。

(三)気象観測

測器の破壊をまぬがれたので、欠測することなく続行した。

(四)天気図作業

最少限度必要なものとどめて続行した。

(五)地震観測

測器が破壊されて作業できなかった。

(六) 事務関係

通信・交通の途絶と人員の損傷が大きく、一週間ばかり休止の状態であった。

七、復旧状況

復旧状況

八月十五日、終戦の詔勅で職員は一時虚脱状態に陥ったが、気象観測だけは平常どおり続行した。

八月十八日ごろから庁舎の取り片づけ、建物の応急復旧を行なうと共に、技術面での立直しも日を追って進捗し、一か月後には、混乱中ながらも一応の気象業務が行なえる状態となった。

なお、昭和二十年八月十一日に「広島地方気象台」と名称が変更され、同年九月十八日、新台長菅原芳生が着任した。

八、その他

八月六日の気象状況

昭和二十年八月六日の気象状況(広島気象台資料)は、次のとおりである。

(一) 日の出 午前五時二十四分

日の入 午後七時 八分

(二) 月の出 午前三時十四分

月の入 午後五時五十八分

(三) 月齢 二七・六(旧暦六月二十九日)

(四) 満潮 午前八時五分

潮位 三一〇センチメートル

満潮 午後九時十五分

潮位 三三〇センチメートル

(五) 干潮 午前二時二十五分

潮位 一五〇センチメートル

干潮 午後二時三十分

潮位 五〇センチメートル

(六) 風向き

時間 * 方向

0 時 ~ 7 時 * 北北東

8 時 * 北

8 時 1 5 分 * 西

8 時 1 8 分 * 西・爆風来る

9 時 * 南西

9 時 3 0 分 * 南南西

1 0 時 * 南 西

1 0 時 3 0 分 ~ 1 2 時 * 西南西

1 3 時 ~ 1 8 時 * 南西

1 9 時 * 南南西

2 0 時 * 南南東

2 1 時 ~ 2 2 時 * 南

2 3 時 * 南西

2 4 時 * 西南西

(七) 気温

時間 * 温度(摂氏)

0 時 * 2 5 . 6

1時 * 25.0
2時 * 24.7
3時 * 24.2
4時 * 23.9
5時 * 23.7
6時 * 23.6
7時 * 24.7
8時 * 26.7
8時15分 * 26.8
8時18分 * 26.9 (爆風来る)
8時30分 * 27.0
9時 * 27.3
9時30分 * 28.4
10時 * 29.3
10時30分 * 29.6
11時 * 30.0
11時30分 * 30.4
12時 * 30.7
13時 * 30.7
14時 * 31.0
15時 * 30.0
16時 * 30.7
17時 * 29.7
18時 * 28.3
19時 * 28.2
20時 * 27.5
21時 * 26.9
22時 * 26.7
23時 * 26.6
24時 * 26.5

原爆は広島市の気象をどう変えたか

北 勲

(当時・広島管区気象台主任技師)

八月六日、広島市街は前日来の油照りの青空を迎えた。

一般市民が、この日の活動を始めたばかりの午後八時十五分、運命の原子爆弾が市の中央部上空六〇〇メートルで、轟然と火を噴いた。

一瞬にして、この世の地獄と化した広島市の南部(爆心から南々西へ三・七キロメートル)に位置した気象台にも、恐ろしい閃光と、その後を追った爆風が襲ってきた。

灼熱の光を浴びてから、五秒後に、ものすごい爆風が襲ってきた。この爆風の速度は、毎秒七〇〇メートル以上に達し、音速の二倍に当たる。

気象台の内部、および付近でも、熱傷・ガラス傷・骨折などの重軽傷者多数を出した。

大混乱がやや静まったところで、建物・器械などの損傷を点検してまわったところ、鉄筋コンクリート三階建の堅牢な建物の窓ガラスは、鉄の窓枠が無残にヘシ曲り、飛散したガラス破片が壁などに突っ立っていた。

一部の扉は吹き抜けた跡を示していた。

気象の測器は意外に損傷が少なく、露場の百葉箱内のガラス製温度計なども破壊せず、もとの位置にあった。

風力観測塔の器械も無事で、椀型風速計は爆風によって、急激に回転したらしく、二〇〇メートルの走行距離を記録していた。秒速七〇〇メートル以上という風速は、記録できないまでも、爆風の通り過ぎる間に、おくれせながら風速計の頭部の椀は、二〇〇メートルぶん回転していた。

二階屋上に設置してあったロビッチ日射計は大破して、使用不能となった。気圧・気温・湿度の自記器械は、その性能上。ごく短時間の変化は記録できなくて、ショックの跡を示していた。

気象器械は、いずれも強い風雨に耐え得るように作られているのと、極めて短時間の爆風通過であったゆえ、何とか持ちこたえたのであろう。

地震計室は二重構造の部屋であったが、爆風の突入によってガラス窓が破損し、機械にぶつかり、地震計は大破してしまった。

幸い気象観測は欠測することなく、平常通り続けることができた。

気象技術者が多く負傷し、住家を焼かれ、肉親を亡くしたため、毎日気象台に出勤して業務を続けることが困難となり、欠勤者が多くなった。加えて食糧事情が一段と悪くなり、勤務中にもその方の心配がつきまとった。

重傷の職員二人は動かせないで、そのまま庁舎の一室に収容して、家族友人の看護で一ヵ月以上過ごしたと記憶している。

このような悪条件の中で、極く少数の職員で昼夜連続の毎時観測を続けることは、至難の業であったが、一刻も欠測してはいけないという使命感に徹して完遂した。

敗戦と共に敵国軍が進駐してきて、観測施設・記録を接収されるという不安はあったが、その時限までは決して観測を放置しないという測候精神を堅持して、これに生きがいを感じていた。

九月十七日、枕崎台風が襲来し、中国地方は稀に見る手痛い被害を受けた。広島県内だけの死者・行方不明者合せて二、〇二人というのは、古今未曾有の被害であった。

この時は、広島の気象台をはじめ、各防災機関の活動がまだ復活していない折のことで、一般人は台風警戒の声もきかないうちに、暴風雨に席卷された。原子爆弾につづく猛台風と広島は苛酷な鉄槌に打ちひしがれたわけである。

ここで八月六日の広島に戻って、当時の状況について更に記述を続けよう。

閃光・爆風が過ぎて直後の大混乱がややおさまった頃、江波山(高さ三〇メートル)から見た市内は、死の砂漠のように茶褐色で、上空は一面黒灰色のものにおおわれていた。

八時三十分頃には、もう市内各所から火の手があがり、九時頃には、市の中央部一帯は黒煙に包まれ、舟入町方面・観音町方面の火の手がはっきり見えるほかは一面、まっ黒な煙に包まれてしまった。

黒煙の上部は、天をつく雄大な積乱雲に発達し、その頂きは目測で十数キロメートルにも達した。

火災は十時から十四時頃が最盛期で、夕刻には次第に衰えたが、夜に入ってもなお、あちこちの火災が指呼できた。

江波山(気象台)では、終日南よりの風が吹いたため、こちらからの視界は良好で、市街の火災のもようは手にとるように観察できた。

火災から昇る煙や雲は、ほとんど北たいし北西の方向に流れていた。市の南部江波山では終日日照りがあり、青空が見えて、北部の暗黒と強烈な対照をなしていた。

当日の気象台記録の日照時間一一・三〇時間は、四日の一一・六四、五日の一〇・二五、七日の一〇・五〇、八日の一一・四七に比較して少しも減じていない。

雲量については、火災雲の拡がりのため、六日の平均雲量は六三パーセントと、その前後の日に比べて多くなっている。

風については、後日の調査結果を合せ考えると、大火災の発生後、市内の火災地域に流れこむ気流が終日続き、江波山の気象台では平常日の風の流れ方を差引いて約四米/秒の風が、火災現場に吸引されていたことが判明した。

市の北部、山陽本線付近に沿って、南からと北からの両気流が集る収れん線が発生し、盛んな上昇気流を生じ、竜巻が起っている。

つぎに黒い雨について述べると、江波山の気象台では、当日一滴の雨も降らなかったが、後日気象台の行なった調査によると、市の北西部を中心に二時間以上に及ぶ土砂降りの雨が降っている。

この原因として考えられるものは、原爆大火災に伴う強い上昇気流によって、上空に多量の雨粒が作られ、雷雨性の雨が降ったと見られる。多量に舞上った灰その他が、雨にまじって、黒い雨になったと考えられる。

大火災の際には、雷雨が発生することがあるが、広島原爆の場合は、格段にスケールが大きかった。そして、午前十

時〇二分から十一時〇九分にかけて雷鳴をきき、十時五二分には北北西の方向に雷光を見た。

爆風による建造物の破壊の状況を後日調査して廻ったが、爆心に近いところほど、真上あるいは斜め上から押しつぶされた形が見られ、二キロメートル以上もはなれると、斜上からの直達波はなくなり、いったん地面にぶつかり、地表に沿って水平に広がった拡散波によると思われる破壊が見られた。

地表波は遠くに広がるにつれ、速度が落ちたが、爆心から三キロメートルないし一〇キロメートルの間での速度は、約七〇〇米/秒を示し、爆風の通過に要した時間は、ゴ-ッという約一秒強の間であったが、ものすごい破壊力であった。

途中に丘など堅固な障碍があると、それをのり越えて行った。ある地点の爆風層の厚さなど、量的にはわからないが、江波山での体験から推して数一〇メートルの厚さはあったようである。入口のあいていた家屋の中に押し入り、天井を押し上げて、屋根に吹き抜けている形などから、爆風の通路と屋根背面の負圧の働きが察せられる。

焼失区域は、爆心から半径約二キロメートルの区域内で、東西にやや長い。建物の倒壊した区域も、焼失区域にほぼ平行しているが、これよりもやや広い。

屋根瓦をも溶かす灼熱爆発により、いたる所に発火点ができ、燃えあがった火災である。閃光に伴う熱線の強烈さは、想像以上のもので、三キロメートル離れた場所でも、閃光を感じたとき、顔面近くでパチッという音のようなものを膚で感じた。これは顔面近くの空気が、熱線による急激な膨脹を起したための、圧迫感ではないかと考える。それと、熱線の放射が、線状に強弱の分布があったようで、地上の物が一様に焼かれるのではなく、筋状に着火した物体が見られた。

かくて広島市は、熱線で焼き熔かされ、その直後、爆風でたたきつけ、吹きとばされ、更に、火災で焼きつくされたのである。

この中から生き残った人は、よほど不死身な運のよかったというほかない。(一九六九年九月)

第八項広島地方専売局...285

(現年・日本専売公社広島地方局)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市皆実町二丁目

建物の構造

鉄筋コンクリ-ト建・延五、六四八坪

木造建・延三、九〇三坪

敷地一五、八一三坪内に、地方局事務所・たばこ製造工場。医務室・休憩所・倉庫があった。

事業種目

- (一) 両切紙巻たばこ製造
- (二) たばこ販売
- (三) たばこ耕作
- (四) 塩の製造・販売
- (五) くす苗木養生・配付、粗製しょう脳・しょう脳油収納

在籍従業者数 約七〇〇人

被爆時の出勤者数 約一、 人

女学校生徒及び女子挺身隊が三〇〇人余出勤し、就業していた。ただし当時の従業者台帳が焼失のため、いずれも推定人数である。

代表者 局長・小林末夫

爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、疎開状況

空襲の被害を避けると同時に、戦時体制を確立する目的をもって、塩は段原大畑町の専売局倉庫ならびに郊外や郡部の国民学校へ疎開し、保管していた。

三、防衛態勢

局の自衛防備班を編成するとともに、当局工場の近隣居住者による自衛防備班が設置されていて、夜間などの緊急事態に備えていた。

灯火管制や防火の備えも万全を期して整備していた。

四、避難計画

防空訓練を繰返し実施して、万一の場合に迅速適切な処置がとれるよう備えていた。

避難先としては、別に指定された場所はなかった。

広い構内敷地の空地を利用して築造された防空壕があり、これが当局従業員のただ一つの避難場所であった。

五、五日夜から炸裂まで

当直員ならびに自衛防備班によって、前夜からの空襲・警戒警報下の防備態勢が固められていた。

六日朝になってから、前夜来の空襲警報がとけ、約二〇分間の警戒警報があったが、こともなく解除となり、工場は、七時三十分過ぎたころから平常どおり運転された。従業員ならびに女学校生徒及び女子挺身隊員三〇〇人余は、それぞれの部署について作業を開始していた。

なお、市内の建物疎開作業現場への出動はしていなかった。それは、戦時下における専売局の業務の重要性から、他への労働力を借すことなどできなかつたからである。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

即死者 一人

負傷者 推定八〇〇人(うち女子学徒及び女子挺身隊員二〇〇人)

計 八〇一人

午前八時十五分、強烈な閃光を見た直後、爆風により、ほとんどの窓ガラス・扉が飛び散り、屋根瓦が破壊されて落下し、誰もが、至近に、大型爆弾が落下炸裂したものと直感した。

おびただしい負傷者が、いっせいに右往左往した。負傷者は、爆風で飛散したガラスの破片による負傷がもっとも多かった。医務室での治療が不可能な状態となったので、事務所一階を救護所とし、また、たばこ工場の一部を収容所として、医務室勤務者の全員および無傷で健在な職員が協力一致して、終日治療にあたった。

市街中心部から宇品方面をみざして、続々と避難する被爆者のなかには、水を求めて専売局に立寄り、水を飲むと同時に力つきて、その場で死んでいった者も相当にあった。

従業員は、炸裂時に屋内の作業にあっていた者がほとんどであったから、特別な重傷者は比較的になく、医務室救護所の治療を受けて、帰宅できる者は急ぎ帰っていった。中には、市内中心部が猛火に包まれていてどうにもできぬため、宇品方面へ出て、金輪島へ避難した者もあった。

午後四時ごろ、局の女医二人は、広島財務局長の緊急要請により、日本銀行広島支店内の同局にかけつけて、負傷者を手当し、またトラックで重傷者を専売局の病室に搬送した。

(二) 物的被害

建物は、爆心地から二・二キロメートルほど離れていたから、全壊はしなかった。ただ、構内の木造倉庫のうち一棟(製品ならびにたばこ味付用砂糖格納)が、熱線の直射によって、爆弾炸裂後、一〇分もたたぬうちに自然発火、原料葉たばこの倉庫数棟にも延焼し、三日間燃えつづけて全焼した。

ただ、これらの木造倉庫が、かなりはなれた場所にあったため、事務所や工場の類焼はまぬがれた。

なにぶん従業員のほとんどが負傷したため、この木造倉庫の炎上に対し、消火作業に立ち向つた職員の数も少なく、消し止め得ないまま、燃えつくして自然鎮火するのにかかせるほかなかつた。

七、被爆後の混乱

医務室救護所は、多数の負傷者に対して、ただ応急の治療をほどこすだけが精一杯のことであり、他に特別な措置の講じようもなかった。

また、炸裂と同時に、送電線が切断されたため、工場の製造機能はすべて停止してしまった。被爆後、月余の間は、少数の健在職員が出勤して、破壊された工場内の取片づけをする程度のことであった。

八、復旧状況

復旧状況

被爆に続く終戦、戦後の混乱というひどい動揺のなかにおいて、広島地方専売局は、その位置がはなれていて焼失しなかったのは幸いであった。すぐ業務再開の方針が立てられ、復旧へ向って動きだした。

当時、復旧資材は軍の転用物資が大部分であったようであるが、具体的な復旧活動の様子は、その時健闘した人たちが退職して、二十年後の現在ではつまびらかでない。

昭和二十年十月半ばごろから、工場のうちの一部を復元して、ともかく製造作業が開始されたが、そのころの出勤者数は推定三〇〇人程度のものであった。

被爆後、はじめて作業を再開し、当局工場で製造されたたばこは、消費者が手巻きにして喫う「のぞみ」と「光」、「バット」の三品種であった。

闇市には、のぞみを巻く簡単な木製の道具が売られ、どんどん売れていったものである。

当局工場たらびに本館の配置は、その後もだいたい被爆前の状況のままであるが、本館には、四階が増築せられた。また、木造であった倉庫が、鉄筋コンクリート建てに改築された。

第九項 広島財務局及び広島税務署... 291

(現在・広島国税局・中国財務局)

一、当時の概要

概要

(一) 事業所名 * 所在地 * 建物面積 * 在籍従業者数 * 被爆時出勤者数 * 代表者

広島財務局 * 本館 市内八丁堀 * 木造二階建延一〇〇坪 * 約一六〇人 * 約一〇〇人 * 伊達宗彰

疎開先 市内袋町五三ノ一 * 鉄筋コンクリート建三二一・七五坪

日本銀行広島支店の三階及び附属家屋 * 別館 約一〇坪

広島税務署 * 財務局(八丁堀)の同敷地内 * 木造平家建約八〇坪 * 八八人(うち応召者二五人位) * 約六〇人 * 橋本多久二

(二) 爆心地からの距離約八メートル

二、疎開状況

(一) 昭和二十年六月下旬から七月中旬にかけて、職員の協力によって、非常執務態勢の整備と強化をはかり、主として、安佐郡可部町可部税務署の鉄筋建倉庫と民間酒造家の倉庫を借用し、印刷機械・裁断機その他の諸器具、ならびに重要書類・用紙類(約三か年分の使用量)の疎開をおこなった。

(二) 重要古文書類(慶長元年以降江戸時代を経て、明治初年に亘る中国地方全般の検地水帳類、その他、租税改正関係古文書類五、〇〇〇点など)は安芸郡中野村の大師堂・畑賀病院をはじめ、各寺院や倉庫に全部疎開した。なお、これらの古文書は、戦後、広島大学に寄贈された。

(三) 広島市内在住の財務局および広島税務署職員の所有財産についても、右と同方面に適宜疎開をおこなった。

三、防衛態勢

(一) 日本銀行広島支店(三階)の疎開先では、次のような態勢をとった。

1、屋上に約一メートルの土砂盛りを行なう。

- 2、北隣の三和信託銀行広島支店(木造建物)を取りこわして撤去。
- 3、退避壕を設置。
- 4、警報発令にともない、日本銀行の男子職員は常に非常出勤することになっていたから、財務局員も当番制により、これに協力出勤。

(二) 財務局においては、当番制による当直員を一〇人に増加するとともに、警報発令の際は、男子職員が常時非常出勤することとした。なお、職域義勇隊は編成されなかった。

四、避難計画

日本銀行広島支店は堅牢な鉄筋コンクリート建てであり、周囲の木造建築物も撤去して防火態勢を整えていたし、軍からも格別の指示がなかったから、その行内の三階を使用していた財務局も、別に避難先とか経路などを決めていなかった。

ただし、八丁堀の財務局本館では、庁舎の周囲に防空壕を構築し、万一の場合の避難先としては、近くの浅野泉邸(現在・縮景園)を指定し、数回の退避訓練をおこなった。

庁舎前に電車停留所「税務署前」があり、この白島線電車通り(現在・バス通り)を、少し北へ上り右折すれば泉邸であった。

五、五日夜から炸裂まで

(一) 日本銀行広島支店では、銀行の宿直員と財務局宿直員とが協力して、深夜からの警報発令に際して、それぞれの警備態勢をとった。

八丁堀の本館では、五日夜の二回にわたる空襲警報発令により、当直者と、駆けつけた男子職員が協力して警備態勢をとったが、午前四時過ぎに一応出勤者の帰宅が命ぜられた。この非常出勤者は、六日は午前九時(通常八時)までに出勤すればよいことになっていた。

ただ、日本銀行広島支店と同行内財務局の宿直員は、眠っておらず疲労していたが、平常どおりに勤務していた。

六、被爆の惨状

惨禍

日本銀行広島支店の建物は、大破、一部(三階のみ)全焼で、他のビルのような惨禍はなく、天井も抜けなかったが、中央ガラス屋根はシャッター覆いと共に、飴のように曲り大破した。

一、二階は、まだシャッターを閉じていたが、爆風圧により、鉄製窓枠ごと吹き飛ばされ、内部は大破散乱したが炎上はまぬがれた。

財務局がいた三階事務室は、窓のシャッターが開いていたから、火が入って内部を全焼した。

この三階事務室が全焼したのは、狭隘な事務室に各種の書類や庁用器具をたくさん詰めこんでいたうえ、すでに登庁していた職員が、執務のため各窓のシャッターを開いていたところへ近距離の強度な放射熱線と猛烈な爆風圧を受けたためであった。これに加えて、日本銀行広島支店の南側に隣接する国泰寺の樹齢四〇〇年という老楠の大木が燃えあがり、その火炎が三階南側の窓から入ったことも、一因と思われる。

ともかく被爆してから数時間後には、三階は全焼していた。火災の完全終息時間は不明であるが、この三階で職員九人が重傷のため避難することができず、無残な焼死をとげた。

また同行庁舎から、約三〇メートル離れた東北側隣接の頼山陽記念館の焼けおちた屋根の上で、九日の夕刻、財務局の女子事務員三人の死体が発見された。これは、原子爆弾炸裂時に庁舎の屋上にいて被爆したもので、爆風で吹きとばされた瞬間、そのうちの一人は何かの障害物で、片足の膝関節から、鋭利な刃物で切断されたように切りとられており、足の方は同記念館の便所に、身体の方は北側窓下に落ちていた。

一階および二階はシャッターをおろしていたし、火災からも免れたので、負傷者も含めて全員が建物の外へ避難することはせず、応急に労務員室・食堂、その他二階の一部を病室として救護をおこなった。

しかし、午後三時過ぎごろには、南通用門入口に、重傷者が鮮血に染って幾人も倒れていた。枕をならべたこれら重傷者らは、爆圧や爆風によるガラスの破片その他の飛散物のため負傷し者で、あたかも鋭い刃物で断ち切ったような裂傷を受けていた。

なお、日本銀行広島支店の玄関前では、爆風によって電車が脱線していたが、それも、真東にむかって半回転したまま、炎上していた。

一方、八丁堀の財務局本館の状況は、本館および付属家屋とともに全壊全焼した。ただ、鉄筋コンクリート建ての鑑定薬品倉庫だけが崩れないで残った。

木造の本館や付属家屋(別館。一階建)は、当日午後三時ごろにはすでに全焼しつくしており、会計課東側に積んであった石炭が盛んに燃えていた。

ここには広島女学院の動員学徒(引率教師一人学徒二十九人)が出動中で、約一〇人の学徒が死んだのであるが、生き残った学徒、武永舜子の話によれば、炸裂のとき一瞬にして財務局も税務局も壊し、一階で執務中の経理部職員の大半が下敷きとなった。落下した二階の床や屋根の重圧で自力の脱出もできず、また外から救出しようにも思うようにならないまま、火災が発生し、ついに二十数人が生命をうばわれた。本館一階に経理部が、別館に鑑定部が事務を執っていたが、辛うじて脱出した職員の多くは、かねて指示されていた近くの泉邸へ避難した。そこから泉邸裏の神田川を渡り、安全地帯と思われる二葉の里・東練兵場などへ避難していった者もたくさんいた。

現在、広島平和記念資料館に、同庁舎の金庫収納物であった職域郵便貯金通帳などが展示されているが、それらは焦損寸前の高熱を受け、わずかに形をとどめているにすぎない。

なお、被爆時の人的被害を取りまとめると、次のとおりである。区別 * 即死者 * 負傷者 * 行方不明者 * 計

広島財務局 * 三四人 * 四四人 * 一五人 * 九三人(全員死亡)

広島税務署 * 約三五人 * 約一六人 * * 約五一(全員死亡)

七、被爆後の混乱

日本銀行広島支店三階の火災正が一応おさまった午後三時過ぎごろ、余燼がくすぶり、熱気のこもっている中を、救援に駆けつけた財務局の職員は、宿直室の薬品類や宿直用のふとん・窓掛・椅子覆いなどを使って、応急処置をほどこした。

午後四時ごろ、伊達局長みずからの連絡要請によって、広島専売局の女医と二人の看護婦が来援し、治療がおこなわれると共に、重傷者をトラックで専売局の病室へ運搬するなどの適切な措置とられた。

また一方では、日本銀行の金融機関としての重要性にかんがみ、警備の必要と医薬品など救援物資の補給を得るため、午後六時ごろ、市内牛川町二重堤防に駐屯する軍隊に要請した結果、警備の丘士六人の派遣を得ると共に、医薬品や食糧の補給を受けることができた。

電信・電話はまったく不通となり、水道は、やっと南門人口の一か所だけが給水可能という状態であり、昇降機も無論動かなかった。

この惨状を中央へ報告しなければならなかったが、電話連絡できず、宇品の陸軍船舶司令部から、本省その他関係機関に連絡を依頼した。しかしこれも結果的には連絡不能であったから、県下の通話可能な税務署からリレ - 式方法でもって、ようやく通報した。

翌七日には、県下の各税務署から救援者が続々と到着し、医薬品や食糧の補給も幾分か順調にはこばれた。

また市内牛田町の財務局寮は、幸い火災をまぬがれたので、ここに負傷者を収容し、同町内の医師や来援署員の協力により救恤看護などをおこなった。

被爆せし日に(国泰寺の墓地)

辛うじて逃れ来し身を墓石のかげに横たへばわがうつつなし

橋本敏子

(当時・理財部融資課勤務)

八、復旧状況

復旧状況

日本銀行広島支店は辛うじて一、二階が焼失をまぬがれたとはいうものの、爆風圧によって諸器具類が無残に散乱し、まっ黒く焦げていたが、派遣されて来た軍隊と義勇隊員などの協力で、六日七日の両日中に、応急的な室内の清掃や取片づけが終了し、財務局の事務所も二階の一室に設けられた。

八日には、近郊の税務署員の応援を得て、可部町に疎開していた器具や用紙類など必要品を取寄せて執務の準備をおこなった。

同月二十日ごろ、財務局は必要物件を集中的に疎開していた可部税務署の二階に移り、さらに同町の大和重工業株式会社青年学校の全校舎を借用して、ここに移転すると共に、人員の補充強化をはかり、ようやく執務態勢が復旧するところとなった。

しかし可部町移転は一時的な復旧対策であり、中国五県を管掌する財務執行機関としては、交通や通信その他において不便であったから、昭和二十一年五月、広島市霞町の旧陸軍兵器廠跡に移転して、安定した執務態勢を確立した。

財務局の惨状

相原勝雄

(当時・財務局戦時施設課長

被爆場所・台屋町六二番地自宅)

六日の朝は晴天で無風、昨夜来断続した空襲警報の解除に、一息ついた時であった。

父は便所にいたが微傷だに負わず、裸のままで飛び出していた。また、台所にいた妻と次女も傷を受けていなかった。母は、下敷きになっていたが、私が救い出した。だが、表玄関にいた八歳になる三男の姿が見えない。乱雑に積み重なって倒れている材木をはねのけて、やっと探しだしたが、すでに死んでいた。私は死んだ三男の体を父にあずけた。あまりにも突然の出来事で、みんな呆然自失し、無残な三男の死体を見ながらも、涙もせず、ただあわて騒ぎまどうのであった。

そこへ、一二歳になる次男が、顔面と左半身を火傷して、灰を頭からかぶったように白く埃にまみれ、素足のままで駆けもどって来た。皮膚は千切れてポロ布のように垂れさがり、着ていた白シャツはチリチリに破れていた。てっきり焼夷弾でやけどしたものだと思った。頻りに「背中が熱い!水をかけてくれ。」と、苦しんで叫ぶ。

私は次男を背負った。そして、家族の者に「京橋を渡って、東練兵場へ逃げよ。そこで落合おう。」と言うや、京橋突然!まことに突然、マグネシウムをたいたような青白い光線が、屋外一ぱいに満ちた瞬間、もの凄い音響と共に家屋が倒壊した。

私はとっさに「バクダン!」と叫んだ、そして無意識に右手を頭上にしたままで伏さった。幸い周囲にあった家具類が落下物を支えたので、僅かに右手と右肩に軽い傷を受けただけであった。後日、下顎骨左半分にヒビが入っていて痛みだしたので切開手術をした。

町の三戸油店へ駆けこんだ。京橋町もまた、ほとんど家屋が倒壊していたが、三戸はまだ傾斜したままで、店員が二、三人あちこちしていた。すぐ次男の全身に油を塗ってもらい、東練兵場さして逃げていった。

一時は、自宅が直撃弾を受けただけと感じたが、そうではなくて、全裸半裸の無数の人々が京橋を渡って逃げているのであった。

そのうちに火災が発生したらしく、家族の者は猛火に巻かれて渡橋できず、京橋の下で幾十人もの避難者と一緒に水に浸っていた。

私は東練兵場へ逃げていきながらも、八丁堀の財務局のことが心配でならなかった。ちょうど大須賀町の練兵場に入る鉄道大踏切を渡ったところで、同町内の小松氏の母堂に出逢ったので、北口負っている重傷の次男をあずかってもらい、すぐに財務局へ向った。

白島町の方から八丁堀へ出ようとして、常葉橋まで来たが、逆に白島方面からの避難者が、東練兵場をめざして続々と渡って来るのであった。そして、川向うの白島一帯には、黒煙がモウモウと立昇り、殊に浅野泉邸の東川岸には満潮時の川を懸命に泳ぎ渡って来る者数知れぬありさまである。そして、大須賀町寄りの河原に逃げている者もおびただしく、その惨状は言語に絶するものであった。

八丁堀の本庁舎の職員のこと、また疎開していた袋町の日本銀行広島支店三階にいる伊達宗影局長や職員の安否が気づかわれたが、血みどろのルツボの中では、なんともする術がなかった。私は残念ながら混雑をきわめる避難者の大群にまじって、また東練兵場へ引返すほかなかった。

このとき、二葉山麓の東照宮が火炎につつまれているのが見られた。

東練兵場の射的場付近や軍馬繋留場内には、負傷者を連れた避難者が溢れており、みんな半ば失神状態で、何らなすところなくあちらこちらとさまよっていた。自分もまたその一人であった。

夢想だにしなかった惨劇であり、精神的にも深甚な衝撃であったが、あの炸裂の一瞬から私の行なって来たことに、大きな錯覚があり、まったく思慮を誤った行動が多かったように、ヒシヒシと感ぜられた。

是非とも助けねばならない老いた父母や妻子を、倒壊した家のその場に置き去りにし、しかも瀕死の重傷で、今にも息をひきとりそうな次男を、知人とは言え、他人にあずけて立去り、八丁堀の財務局へも行けないうで引返し、東練兵場に来ておりながらも、その行方を別に探し求める気持にもならないで、ただ猛火につつまれて、盛んに炎上してい

る市街を、ポーッと眺めていた気持ちが、いまだに不可解でならない。

この異常事態の中に投げ出された私の気持ちとか、あるいは決意とか、死に対する恐怖も生に対する執着も共にうすれていたのではないかと思われる。

ともかく、惨死した三男も、重傷で死にかかっている次男も、老齢の両親も、また妻や次女も私のそばにいなかったことが、公吏としての私の責任の一端をはたし得る端緒となったとも言えるであろう。

時折り、亡き二人のかわいい子供のことが思われ、「すまなかった。」という気持ちがわくのである。幸い現場に残して来た両親や妻や娘たちが、火炎を避けて京橋川に入っていて助かったことが、せめてもの慰めである。

水都広島を中心部は、被爆後たちまちにして猛火になめつくされ、数時間後にはまったく焼野原となってしまった。

紅蓮の炎は、方向をかえてだんだん東へと移っていった。

ちょうど午後三時過ぎと思われるころであった。尾長町の国前寺の前で敷ふとんを拾った。これを水に浸し、頭からかぶって、人通りのやや少なくなった常葉橋を渡り、白島の電車終点を経て、電車を歩いて歩き、泉邸前停留所を横切り、やっと八丁堀の財務局前に到着することができた。

玄関両側の石門は、強烈な爆風によって中間から折れ、自動車ナッシュ号の残骸が転倒していた。広島市内に一本しかないと言われた珍木「サイプレス」も焼きつくされて、まるで古ボウキのように悄然と立っていた。ただ一つ鉄筋造りの鑑定倉庫が崩れないで残っていた。

この庁舎の中でわれわれの同僚二十幾人の尊い犠牲を生じていたことは、まったく夢にも知らなかったことである。殊に経理部員の大半(金鋼会計課長・村上用度係・田中俊郎技手その他)が庁舎の下敷きとなり、屋上へ、二重におおわれたので、救い出すことも這い出ることできないまま、ついに生きながらに葬り去られたということを、後日、生き残った広島女学院の学徒、堀川町武永三太郎氏の息女から聴いて非涙のほとばしるのを禁じ得なかった。

二十幾星霜の長い年月勤務した思い出多いわれわれの職場も、一瞬にして壊滅炎上し、昨日に変わる庁舎終焉の惨状を、しかと見守りつつ私は立ち去り、日銀支店に向った。

西練兵場東人口の、聯隊区司令部前の防空壕内には、死屍累々。付近には瀕死の重傷者が横たわっており、水を求める最期の悲痛きわまりない声が聴かれた。

西練兵場は、猛烈な熱風のため、まるで津浪に薙ぎ佛われたように平らにたっていた。

紙屋町の電車停留所を過ぎ、ようやく袋町の日本銀行に着いた。南通用門入口には、重傷を負った多くの職員と、全身焼けただれて苦しんでいる女車掌や乳呑子を抱いてうずくまっている婦人などで、足を踏み入れることもできないありさまであった。

私は破れた窓から飛びこんだ。見れば小使室と廊下には重傷者と死人とがたくさん枕をならべて打ち倒れている。

重傷者たちは、全身に無数の傷を受けており、水を求める声、断末魔の叫び、苦悶の呻き声など、実に陰惨をきわめていた。私はこれが救急処置を、どうすればよいかとまったく途方にくれた。だが、そこをなんとかしたければならない。私は宿直室に行って常備用の薬品類をさがしだした。それに宿直用のふとん・窓かけ・椅子カバーなどを裂いて、応急の仮繃帯を作り、できるだけの処置をとったが、出血多量による瀕死の重傷者の治療は到底わたしにかなうことではなかった。

この時、安否を気づかっていた伊達局長が、突然、南側の窓から飛びこんで来て、激励されたので夢かとするのであった。

伊達局長(元宇和島藩主・侯爵)と、佐竹秘書係長(現在・福山税務署長)の両氏は、燃えさかる市中の火炎の中を駈せつけ、この惨状を確認すると、ただちに広島地方専売局へ赴いて、救護隊の派遣を要請された。

伊達局長は五日夜、岩国の吉川邸(夫人の実家)に泊り、六日朝、出勤の途中己斐駅付近で被爆され、猛火の中を皆実町の専売局まで来られた。そして、同じく五日夜は庄原の実家に泊り、出勤途中、中山付近で被爆し、専売局に来ていた佐竹秘書係長と出あわれ、一緒に日銀に来られたのであった。専売局は財務局と同じく大蔵省管下であったから、常に親しく往来していたのである。

半時間後に、専売局から女医を先頭に二名の看護婦が来援して、救急処置がとられると共に、負傷者の一部を専売局の病室へ運ぶなど、適切な処置がおこなわれた。

伊達局長もまた、目をまっ赤にして必死で、刻々と死の迫る人々の介護をされた。

一方、京橋の下で火炎を避けていた両親や妻子たちは、火がおさまってから、東練兵場に逃げて来た。そして、練兵場の防空壕の中に避難していた小松氏の母堂と偶然に出あい、私があずけていた次男を受取るすることができた。

その頃、私は万一の場合の避難先とも考えて、牛田町の早稲田神社の下の八木氏別宅を借りていたが、そこへ、次男を受けとった家族たちは避難していったのであった。幸い八木氏別宅は、あまり損傷なく一同はそこで次男の容体を案じつつ、私の帰りを待った。

私は、日銀から離れることはできなかった。多くの同僚の無残な死と重傷者の看護もしなければならなかったし、日銀広島支店を世情不安な焼野原の中で守らなければならなかったからである。

いつか日も暮れ、夜の九時か十時ごろであった。私は基町の憲兵隊本部を尋ねていった。そこもすでに灰燼に帰していたが、歩哨の兵士が二、三人立っていた。私は聯隊区司令部や憲兵隊の剣道指南をしていたから歩哨兵も知っていたくれた。軍は、牛田町の二重提防の所に応急設営しているというので、私はまたそこへ行き、日銀の警備を依頼すると、快諾されて兵士六人が派遣された。夜中の一時過ぎ、牛田に帰って家族に逢い、すぐ日銀へ引返し、それからずっと伊達局長や佐竹秘書係長とともに、日銀広島支店内に泊りこんで諸種の処理にあった。伊達局長みずからも死体を運搬されると共に、火葬の手伝いまでされた。

八日夜、牛田から次男が死んだと言ってきた。

さて、日銀広島支店の一、二階及び地下室が奇跡的に災害を免れたのは全く不思議であった。

南方は、楠木の大樹茂る国泰寺の墓地で、自然的な空地にめぐまれ、西北の家屋は、強制疎開によって取除かれており、加うるに銀行の建物が防火対策に万全の考慮を払って設営されていたこと、また被爆当時に一階二階の各事務室内に、各種庁用物件が比較的に僅少であったことなどが、災害を少なくしたものと考えられる。

一面財務局が使っていた三階が焼失した大きな原因は、事務室が狭隘であるうえに、建物が堅牢であるところから、書類箱その他の庁用物件を多量に持ちこみ、各室とも可燃性物件が充満していたのと、爆心近くの強度な放射熱線と猛烈な爆風圧を、比較的高所に受けた結果であろう。

またこの時、日銀ならびに財務局の職員が、ほとんど即死かあるいは重傷して避難したことによって、まったく三階に対する防火能力を喪失してしまった点も考えられる。特に三階事務室で、われわれの同僚九人が重傷のため避難さえできず、無残な焼死をとげたことは断腸の思いがする。

被爆当時の財務局職員数は、約一六〇人で、そのうち九三人(六割二歩)が不慮の死をとげた。犠牲者の内訳は、つぎのとおりである。

内訳

- 一 庁舎の下敷きなどによって即死した者、または、重傷のため脱出できぬまま火災により焼死した者 * 三四人
- 一 重傷後、死亡した者 * 一二人
- 一 負傷後、原爆症で死亡した者 * 一人
- 一 火傷後、原爆症で死亡した者 * 二人
- 一 行方不明の者 * 五人
- 一 無傷であったが、原爆症が出て死亡した者 * 七人
- 一 無傷であったが国泰寺境内の池中に飛びこんだまま窒息死亡した者 * 一人

計 * 九三人

なお、この被爆に際して、私は当然しなければならぬ職責の一端を、しかも十分に果し得なかったことを残念に思っているにもかかわらず、二十年八月二十日、日本銀行総裁(当時・渋沢敬三子爵)から、真筆の礼状をいただいたが、まったく恐縮であった。その信書は現在も私のもとに在る。

広島税務署にて

宮本忠親

(当時・広島税務署間税課勤務

被爆場所・同署玄関)

被爆の前日、昭和二十年八月五日は日曜日であった。

その頃は、税務署の各課(直税・間税・庶務の三課制)が交替で、三日に一度は防空当番となり、課長以下全員といっても女子職員と遠方からの通勤者は免除され、若い男子職員はほとんど軍に召集されており、当番としての実人員は五、六人に過ぎなかった。

ちょうど五日の日曜日が間税課の当番であったから、この夜、私は役所に宿直した。宿直といっても軍隊の歩哨と同

じょうに、寝るときは靴をはいて巻脚絆をつけた仮眠するのである。

当時、広島財務局と広島税務署は、八丁堀の同敷地内にあり、隣接した木造の古い建物であった。位置は、現在合同庁舎の東二〇〇メートルぐらいに亀の家旅館があるその裏側にあたる場所にあった。財務局は日銀広島支店の三階に疎開していた。もっとも経理部の一部と印刷の方は本庁舎に残留していた。

税務署としても適当な疎開先をさがしていたが、鉄筋の建物は市内に僅かしかない当時のことで、移転先がなかった。わずかに机や書箱の一部を、勤業銀行広島支店の二階を借りて預けていたのみで、執務は本来の庁舎で全員仕事をしていた。私も疎開先を探す命令を受けた一人であって、たまたま牛田の浄水池の少し先にある不動院を訪ね、住職さんに本堂を貸して貰うよう交渉したところ、お役所のことだから役立てようと話が決まり、帰って報告したが、木造建築は不適当ということであった。しかし、せっかく借りられるのなら職員の衣類など私物を疎開することにしようということになって、かなりの数量をあずけた。

この不動院は、原爆の被害を受けなかったから、預けた物ば焼失をまぬがれたが、預主が被爆死亡して、荷物の引取りが長いあいだなかったよしである。

防空当番については、財務局の方も各部が三日に一度本庁舎に集って、夜間勤務についていたが、当日は間税部の方が当番であった。

五日夜、夜半に二回空襲警報が発令され、そのつどバケツや手押ポンプ・梯子など分担の消火用具を携行して、局の玄関前に集合し、指揮者の入江さんが点呼をとり、それぞれ警備の配置についた。

敵機は数多く来たが、結局素通りして警報解除になった。こんな状況で六日の朝を迎え、いささか寝不足の体調であった。朝七時半ごろ、警戒警報のサイレンを聞いた。

空襲警報にさえ慣れっ子になっていたから、私は上空を見向きもしたかった。そして、まもなく解除のサイレンが鳴り、一応防空当番の任務が終了と安心して、玄関前の庭に出て深呼吸をした。

この時、上空は雲一つない青空で、まぶしいほどの晴天であった。

八谷肇間税課長が出て来て「朝ごはんを食べに帰ろうじゃないか。」と言われた。

当番は午後五時から翌朝八時までの勤務であって、それから朝食をとり十時までに出勤する定めになっていたのである。私は住所が海田市町で、自転車通勤をしていたからわざわざ朝食のために帰ることは、往復時間ももったいないため、駅前の簡易食堂で朝食をとることにしていた。

当時、家庭の食糧事情も逼迫していて、雑穀入りの弁当は、夏季は腐りやすく、なるたけ簡易食堂で雑炊を喰べるようにしていたのである。それで八谷課長に「市内の食堂に行きますので今日は家に帰りません。」と返事をした。

「それではお先に...」と、八谷課長が祇園の下宿先に帰られたあと、私は自転車置場に自分の愛車(ケンネット号の中古品)をとりに行ったところ、前も後も空気が抜けていた。こうやくだらけのチューブゆえパンク修理の材料と空気ポンプは、常に車にとりつけていた。

早速、局の玄関前セメントの広場に愛車を持出して、パンクの修理をやり、洗面器の水にタイヤをくぐらせてテストした。

この時、間税課の同僚天野敬君が寄って来て、チューブを手にしながらか「上手にたくさん貼っているな。自転車屋顔負けじゃな。」とほめてくれた。

私は急いで洗面器の水を、その場に撒き捨てて、流し台の所へ洗面器をかえそうと、局の玄関内へ二足か三足はいった。

その瞬間であった。うしろからピカッ!と、稲妻のような青く鋭い閃光を感じ、続いてドンというもの凄い爆発音を耳にした。同時に、グラグラッと建物が崩れ落ちて、アッと思うまもなく建物の下敷きとなり、打ちのめされた。

前頭部を強く打って倒れたらしく、一時は気を失っていたようである。気がついてみると周囲は暗やみである。体を少しこねてみると動ける。力を入れて足をちぢかめると、物にはさまれていた左足が抜けた。続いて右足もぬけた。前に少しうす明りが感じられたので、ジリジリと僅かずつもがいて、這い出した。靴はぬげて巻脚絆も破れ、血がにじんんでいた。前頭部から血が垂れ落ちるので、指先でさすると四本の指先がはまる浅い裂傷のくぼみを感じられた。起とうとしたら、足クビをくじいたのが痛くて、へたばってしまった。呆然としてへたりこんでいると、何処かから助けを求めるようなうめき声が聞えてきた。

建物はすべてペチャンコになった崩れ方である。声はすれども姿が見えぬという状況である。自分の身が傷ついて思うように動きもできない。出血のためか目がくらむ。そして、遠くに離れているはずの福屋百貨店が近くに見える。

途中にあった木造家屋が、二階建も平屋建も全部潰れているからである。

確かに自分の至近に爆弾が落下したと思うのに、周囲に穴が見当らない。支那事変に従軍して、爆弾投下の現場を知っているだけに一層不思議に思われた。

先程の天野君が近づいてきた。黄色の灰を頭から振りかけられたような姿である。手に少しかすり傷を受けていたが割に元気であった。

私の頭の傷を見て「ひどい傷だな。しばらく動かない方がよかろう。」と言って、私が腰にさげていた日本手拭をとって、頭をおおうように結んでくれた。

彼が言うには、私の自転車のチューブを持っていた手を離れた瞬間、局の車庫へ体が吹きとばされたが、別にどこもけがはしていないとのことである。

「今から常葉橋の方へ避難するから、気分がしっかりしたら後から来るように...」と告げて立ち去った。「敬ちゃん、早く連れてにげて...」と、泣き声でいう女子職員二人を伴って行った。一人の女子は乳房の下を深く切っていたらしく、血だらけであったのを記憶しているが、乱れ髪で灰をかぶっている姿で、しかも少し離れていたから、誰であったかもわからなかった。

ふと見ると、自動車の手入れに使用したボロ布が散乱して、燃えているのを見たので、這い寄って叩き消した。

そこへ、一四、五歳の少年が、「おじさん、目が見えなくなってきたから連れて逃げて...」と言いながら近づいて来た。

爆風で目の神経をやられたらしいが、見たところたいして傷は受けていない様子であった。

「おじさんは足をけがしているから、肩をかしてくれたら一緒に逃げよう。」と言って、私は少年の肩にすがって、ヨチヨチと歩きはじめた。

メクラとピッコの助け合いで、常葉橋の方向へ辛うじて移動していった。

この頃、時刻は九時ごろであったと思うが、まだ燃えている家は少なかった。誰もが負傷しているため、消火活動をする者がなかったから、次から次へと燃えひろがった。

続々と八丁堀方面からの負傷者が、常葉橋へ向けて歩いていく。途中で倒れて、息を引取る人、大やけどでズルズルの人、血まみれの破れ衣服で、うめきながら歩く人、まことにあの世の地獄である。

かねて避難先は近隣の泉邸と指定されていたが、泉邸入口前(浅野観古館前)の二階建木造家屋が倒れて、炎上していたため、入っていくことができなかった。

ようやくのことで常葉橋の上流五、六〇メートルの川土手に辿りついた。常葉橋と並んでかかっていた山陽本線の鉄橋の枕木が、チラホラ燃えているのを見た。橋の手前の所の土手まで出る小道を、広い河原に降りていくと、火傷者や負傷者の群れが呻吟していた。私も目のみえない少年と共に砂場に腰をおろして、一応の安全地帯に落ちついたのである。

そこで少年の身の上を聴くと、建物疎開の勤労奉仕に参加するため、集合待ちしていた中学生で、住居は的場町と言った。

カンカンと真夏の強い日ざしが照りつけてくるが、木陰の場所がまったくなかった。

敵機が時折り上空を一、二機飛んでいたが、もうどこでもなれと、投げやりの気持で目をつぶるのみであった。

昼ごろ、私に声をかけて来た人があった。

市内堀川町の化粧品(ピンツケ)製造業者で、物品税の大口納税者中央化粧品店の弟主人である。熊谷という姓である。熊谷さんは五、六歳のわが子を抱えていたが、すでに死んでいた。その男の子を見せながら「この首の傷が命取りでした。」と、私にいった。

そのうちに兵隊が二はいの渡し舟を出して避難者を向う岸に渡しはじめたので、乗せてよいと頼んだが、断られた。手を横に振るのである。頭の傷が手拭の血で派手に見られて、運ぶのが危険と思われたらしい。私としては海田市町の家族がどうなっているか心配たらず、何とか川を渡って海田市へ帰りたいばかりであった。痛さをこらえ、元気を出して、一人が川の中に歩いてはいった。深い所は胸までであったが、上流に向かって斜めにヨチヨチと歩いた。そして私に続いて川を歩き渡ろうとする者が次から次にあった。私に追いついた人が、肩にすがらせてくれたので無事に対岸にたどりつけたのであった。

岸にあがると親切な男の方が、こちらへ来なさいと言って、大きな樋門の内側に誘導してくれた。樋門の中は水が少なく、安全な防空壕に入ったような格好で、ふとんが持ちこんであり、五、六人の人がいた。すぐそばの家の人が、火災になったので隣家同士と一緒に避難している様子であった。私の前頭部の負傷がその人たちの同情をひき、ふと

んを二、三枚積み重ねた上に腰かけさせてもらった。

そして、カボチャの半焼を拾って来た人が、これを割って少しずつ分け、私にも一こげ与えてくれた。

私は見ず知らずの人の親切にいたく感謝した。しばらく休んで、家族が気になるから海田市に帰りたいというと、誰かが竹を探してきて、杖にとってさし出された。

この竹を杖にして、提防上を東に向かってポツポツ歩いていたら、幸運にも八谷間税課長に出逢った。八谷課長は、下宿先で朝食をはじめたとき爆音を聞いたよしで、その後、常葉橋周辺に出れば、誰か署員に逢えるだろうと思って、探し歩いていたと言われる。どうしても背負ってやると云われるので、とうとう背負われて東練兵場まで行った。東練兵場では、軍医が三人ならんで、負傷者の応急手当をしていた。治療を受ける順番の列も長かったが、その列の中で倒れて死んでいく人がかなりあった。

私は応急処置を受けて、八谷課長に別れを告げ、府中町のキリンビール工場近くまで、一人が杖を頼りに歩いた。疲れて草の上に横になっていたら、消防車が私を拾ってくれた。そして東洋工業前まで運ばれ、ここで救援バスに乗り移って、海田市まで帰ることができた。家に着いたのはもう夕方日没まえであった。

幸いにも家の方は、窓ガラスが割れた程度で、妻子ともに無事であった。間税課の右近ことみという女子職員のお母さんが、顔や手足に大やけどを受けて、広島から私の家まで逃げて来ておられた。この人は一週間ほどして、三原市の親類へ移り、そこで治療されたが死なれたそうである。

私も前頭部の裂傷が化膿したり、後に原爆症が出て高熱が続き、毛髪は全部抜けて、体中に斑点が生じ、海田市の為野病院に入院して治療を受けていたが、一時は危篤状態になり、自分でも諦めていたが、不思議に十月下旬ごろから快復に向い、十二月下旬には治癒退院した。

同僚の天野敬君は、被爆後一か月ぐらいたって可部町の自宅で死亡した。彼は外傷が軽かったので、他の被災者援助などに奔走活躍したのがもとで、抵抗力も体力も消耗したためと思われる。

第十項 広島控訴院... 310

(現在・広島高等裁判所)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市小町一三八番

建物の構造 木造二階建

建物面積延六六七坪

在籍職員数 四二人

被爆時の出勤者数 一二人(但し推定)

代表者 広島控訴院長・細野長良

爆心地からの距離 約七〇〇メートル

二、疎開状況

広島控訴院では、当時進行中の訴訟記録は広島区裁判所井原出張所(現在の高田郡白木町に所在)へ、判決原本(永久保存)は 庄原区裁判所(現在の庄原市内に所在)へ、書籍・用紙などの若干は広島区裁判所可部出張所(現在の安佐郡可部町に所在)へ、それぞれ疎開していた。

三、防衛態勢

全職員によって防空班を組織し、初期防火に耐え得る態勢をととのえていたほか、建物中、渡り廊下などの付属物を撤去して、焼夷弾攻撃から守る措置を講じていた。

当庁の位置的特質として、周囲が空地(東側は県立第一高等女学校の運動場・西側は国泰寺の庭園・南側は道路を隔てて墓地・北側は浅野侯の墓地)のため、直撃弾を受けた場合のほか、他からの延焼は一応考えられない環境にあった。

四、避難計画

当庁としてあらゆる角度から検討を遂げて、防空・防火の万全を期していたが、万一庁舎焼失の場合は、第一次的には幟町の控訴院長官舎、次には市外府中町の当時町長石田繁司宅、および三次・庄原各区裁判所に分散執務することになっていた。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜から職員数人が防衛勤務について、空襲に備えていたが、六日早朝、警戒警報も解除になったため、宿直員を除きそれぞれ退庁した。

この前夜からの警戒にあたった職員のうち一人は、登庁時刻も近いので、己斐町の自宅に朝食のため帰りついたら同時に、原子爆弾の炸裂にあった。この一人が五日夜から六日朝にかけての状況を知る唯一の生存者であったが、その後死亡した。

従って、六日朝の警戒警報解除後の庁内の状況は、在庁者全員が死亡したため、まったく不明である。

なお、控訴院としては、職域義勇隊を編成して疎開作業に出動するなどのことはなかった。

六、被爆の惨状

惨禍

人的被害

即死者 一六人

負傷者 八人

計二四人(登庁途中の者を含む)

建物は全壊全焼して、正門石柱と庁舎の基礎石を残すのみとなった。構内の老松その他の樹木もことごとく焼けてしまった。

当庁の位置が爆心地から約七〇〇メートルの至近距離にあったことでもあり、また、古風な木造の大建物であったため、崩壊と同時に熱線で発火し、たちまち炎上という状況であったものと思料せられる。

何分にも炸裂時の在庁職員が全員死亡しているため、詳細は不明であるが、とにかく猛火の狂うにまかせて一切が焼きつくされ、自然鎮火するのを待つほかなかったといえよう。

翌七日の朝七時、控訴院の現場に行ってみた状況は、花崗岩の門柱四本が佇立するのみで、他は全く灰燼に帰したことを確認するにとどまっただけであった。

後日、庁舎の焼跡を掘り分けて調査したところ、瓦礫の下に、全く灰燼化した屍骸が数体発見された。しかし、どれが誰かということは判別できなかった。炸裂時に避難する余地もなく、全員死亡した当庁の職員たちであることはまちがいがなかった。

七、被爆後の混乱

既述のとおり、一切が壊滅したため、職員に対する救急処置をほどこすということもなく、また広島控訴院自体の機能も、数日間は完全停止のほかなかった。

八、復旧状況

復旧状況

当庁としての第一次避難予定先であった幟町の控訴院長官舎もまた全く焼失したため、第二次避難先である市外府中町石田繁司町長宅の一部を借受けて、とりあえず、ここに庁名を表示して開庁した。

そして生存職員で、出勤可能な者数人でもって、まず職員個々の安否・動静の調査から、執務は開始された。什器・事務用品などは、管内の山口・松江・鳥取の各裁判所から送付を受け、また松江地方裁判所からは職員の応援も受けた。

こうして約三か月後に、府中町国民学校の校舎の一部を借り、ここに移転した。さらに翌二十一年になって、市外船越町の日本製鋼所広島製作所の本館の一部貸与を受け、相当の内部改造を施して引越したのであったが、その直後、

占領軍から明渡し命令を受けた。やむなく、急遽、向洋町の東洋工業株式会社付属の青年学校跡を補修して移転し、ここで執務を続けた。

昭和二十二年三月になって、市内基町に木造本建築の庁舎(当時是一部分のみ)が建てられて、ここに移った。

このように、被爆後二年たらずのあいだに、当庁の移転は合計五回に及んだのであった。しかし、現在地に庁舎建設をおこなうべく踏み切った点では、他の諸機関より司法関係機関が最も早かった。

昭和二十一年になったころ、市内主要官庁をすべて、霞町の陸軍兵器廠跡に収容することが企画され、裁判所関係もその一部に入ることとされていたが、法廷その他の設備を考えると、当時としては甚だしく困難な情勢ではあったが、別個に仮庁舎を建設した方がよいとの結論に達した。そこで建設資材などの入手は、裁判所が努力するなどの条件を出して、むしろ請負人に懇請して引受けさせ、昭和二十一年八月二十日、現在地の基町一番地(元陸軍歩兵第二部隊跡)に、建設に着手し、翌二十二年三月末、第一期工事を完了した。直ちに向洋町の東洋工業株式会社構内から移転し、職員も漸次補充、ようやく執務が軌道に乗ってきた。

第十一項 広島控訴院検事局...315

(現在・広島高等検察庁)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市小町一三八番地(広島控訴院内)

建物の構造 木造二階建

広島控訴院管理の建物内に付置

在籍職員数 一六人

被爆時の出勤者数 三人(推定)

代表者 広島控訴院検事長正木亮

爆心地からの距離 約七〇〇メートル

二、疎開状況

重要書類は、県北部の三次区裁判所検事局に疎開していた。

三、防衛態勢

当庁の職員をもって防火班を組織し、控訴院防火班と協力して、初期防火に備える態勢をかためていた。

また、当庁建物のうち、渡り廊下などの付属的構造物を解体撤去して、延焼時の火勢防止を図っていた。

四、避難計画

防空・防火の態勢は十分に固めていたが、明治十四年建造の古い木造庁舎であるから、被爆の場合、炎上の公算が大きく、庁舎焼失の際は、市外府中町の石田繁司町長宅に避難して執務することになっていた。

五、五日夜から炸裂まで

在庁職員が全員死亡したため不明。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

即死者 * 四人

重傷者(治療一か月以上) * 三人

軽傷者(治療一か月未満) * 二人

計*九人(登庁途中の者を含む)

なお、正木検事長は出勤直前、上職町の官舎内玄関で被爆、倒壊建物の下敷きになったが、辛うじて脱出し、女中を救出して二人で猛火の中を屋敷裏の太田川に避難し、水の中にいて助かった。

(二) 物的被害

爆心地からわずか七〇〇メートルの近距離に位置していたので全壊全焼、古い木造建物であったため、瞬時に崩壊し、熱線によって発火炎上したものと推定され、自然鎮火後には、花崗岩の門柱と建物の礎石を残すのみであった。

七、被爆後の混乱

生存した職員は、管内各庁からの応援を得て、翌七日から市内上柳町所在の旧検事正官舎焼跡において庁務を開始した。当初は天幕により、ついで広島刑務所受刑者を動員して、同所に応急的バラック仮庁舎を建築して執務した。しかし、連日の疲労がかさなり、健康をそこねて倒れる職員が相つぎ、その他の者も原爆症状の現われる者が続出したため、しばらく市内離脱を余儀なくすることとなった。

八、復旧状況

復旧状況

(一) 昭和二十年九月、安芸郡船越町に所在した広島刑務所海田市構外の泊込作業場の一部を借受けて移転し、仮庁舎として執務態勢をととのえた。

(二) 昭和二十一年五月、同じ船越町の日本製鋼所広島製作所の一棟を借受けて移転し、ようやく交通・通信の便を得て、本格的に事務を取扱うこととなった。

(三) 同年十月、広島市仁保町所在の東洋工業株式会社の一角を借受けて移転し、人的強化も図って執務態勢を整備充実した。

(四) 昭和二十二年五月三日検察庁法施行とともに、広島高等検察庁と改称され、同年六月、広島市基町一番地の元陸軍歩兵第二部隊跡に新築された広島高等裁判所庁舎内に移転した。

(五) 昭和二十四年四月十一日に、右裁判所庁舎に隣接して新築された同番地の、広島高等・地方・区検察庁合同庁舎(木造二階建)に移転して、はじめて安定した執務態勢をとることができた。

(六) 昭和四十年十月十四日に、右木造の検察庁合同庁舎を撤去したあとに新築された広島地方法務合同庁舎(鉄筋コンクリート・地下一階地上六階建・町名変更により所在地広島市上八丁堀二番十五号)へ入居して現在に及んでいる。

九、慰霊祭

慰霊祭執行

(一) 第一回

昭和二十一年十一月二十一日、安芸郡府中町の龍仙寺において、裁判所・検事局・弁護士会など広島司法部関係職員の合同慰霊祭が厳執された。

その案内状に「追て乍遺憾昼食は準備致難く候間予め御了承被下度候」とあり、不自由な当時の社会情勢をしのばせるものがある。

(二) 第二回(七回忌)

昭和二十六年八月一日、広島高等検察庁会議室において、検察庁関係職員の追悼会がおごそかにおこなわれた。

(三) 第三回(十三回忌)

昭和三十三年七月二十七日、広島高等検察庁会議室において、裁判所・検察庁・弁護士会物故者合同追悼会がおごそかに執行された。

第十二項 広島地方裁判所・広島区裁判所... 319

(現在・広島地方裁判所)

一、当時の概要

所在地 広島市三川町一番地

建物の構造 木造二階建その他

建物面積 延一、二三八・二五坪

三川町一番地の敷地内に、広島地方裁判所・広島区裁判所のほか、両裁判所検事局ならびに弁護士控所・広島法曹会館などが所在していた。

在籍職員数 * 八二人

被爆時の出勤者数 * 三五人(推定)

代表者 * 所長・吉田肇

爆心地からの距離 * 約七五〇メートル

二、疎開状況

当庁の重要書類は、戦局の熾烈化に対応して、次のようにそれぞれ疎開をおこなってその保全を期していた。

(一) 戸籍関係書類 - 広島市役所の戸籍および除籍簿は、市内比治山公園内の市役所分室横穴へ疎開。

(二) 登記関係書類 - 不動産および船舶登記簿ならびに登記申請書の一部は、比婆郡庄原町の庄原区裁判所(現在・広島地方裁判所庄原支部)へ、その他は市外祇園町所在の広島区裁判所祇園出張所(現在・広島法務局祇園出張所)へ疎開。

(三) 重要図書中の大審院判例 - 市内幟町所在の広島地方裁判所所長官舎の倉庫へ疎開。

三、防衛態勢

両裁判所庁内では、検事局をも含めての全庁員を、六個班に分けて、一昼夜交替で防空警備にあたった。

空襲警報が発令されると、主として焼夷弾による火災発生防止を目標に、表門・裏門その他の定められた部署について、それぞれ警備した。庁舎が木造であるうえ、市内中心部の人家密集地帯に所在していたから、防衛・防火対策は特に厳重に態勢をととのえていた。

構内には三か所の防空壕を構築して待避に備えていた。

四、避難計画

空襲による非常事態発生の場合の避難先として、次の場所をあらかじめ指定していた。

(一) 安芸郡府中町 龍仙寺

(二) 同 石田町長宅

五、五日夜から炸裂まで

五日から、第五警備当番約一五人ばかりが警備にあたり、六日未明にかけての空襲警報下には、警備員一同が厳しく部署についていた。

朝七時過ぎ、警戒警報も解除されて任務を終了し、次の警備当番者との交替時間のころ、轟音一閃、原子爆弾が炸裂した。

警備任務を解かれた者は、一部を残して朝食などのため、自宅へ一応帰る者もいたが、一般庁員は逆に、ぼつぼつ登庁して来て、すでに執務準備や清掃などに取りかかっていた。たお、市内の建物疎開作業などに職域義勇隊として、当庁職員が出動するというはなかつたから、この面における犠牲はなかつた。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

即死者 * 一五人

負傷者 * 二五人

行方不明者 * 四人

計 * 四四人(登庁途中の者を含む)

在庁の職員は、あるいは即死、あるいは重傷を負い、倒壊建物の下敷きとなって、猛火のたけるにまかせた。

構内の防空壕三か所のうち、二か所までが崩壊し、壕内であえなく押しつぶされて死亡した者もあり、火災終息の

あとも一面に屍息が漂っていた。そして、余燼の熱気はなかなかさめやらず、焼跡に立ち入ることさえできなかった。

当庁東側の裏門を出たところの稲荷神社近くにあった三川町町内会防空壕において、生き残った職員二人が一夜を明かし、翌七日、警察のトラックで府中国民学校に収容され、翌八日、指定避難場所の同町龍仙寺に辛うじてたどり着いた。

(二) 物的被害

全く突然、閃光・熱線を感じると同時に、校内の建物はすべて轟音をあげて倒壊した。

ただ、御真影と登記簿格納していた南東隅の鉄筋コンクリート建て倉庫一棟だけが残った。

ほぼ一時間ぐらいのち、庁舎北東側に隣接していた広島通信局倉庫からまず発火し、その火の粉が、北寄りに所在した陪審法廷の倒壊材に飛散して来たため、ついに猛火となり、続いて本館倒壊材に燃え、移ってことごとく全焼、灰燼に帰した。

一方、庁内においても、東側奥の延丁室(小使室)に続く湯沸し場から発火、炎上した。その火の粉が広島区裁判所の倒壊建物にすぐ飛火して、この庁舎もまた猛火に包まれてしまった。

防火、消火など思いもおよばず、すべてを焼きつくして自然鎮火した。

七、被爆後の混乱

応急処置

当庁舎の壊滅直後、次のような応急処置がとられた。

(一) 八月六日、地方裁判所田中書記長(現在・事務局長)は、広島市の被害状況の呉警察署司法主任に託して、司法局に対し、次のように打電、報告した。

(二) 八月七日、市内職町所在の地方裁判所所長官舎の焼跡に、応急的な裁判所本部を設置して、職員との連絡や死傷者調査にあたった。しかし、この日此処に集合し得た者は、吉田肇所長・吉田正之判事・塚田孫三郎判事・田中書記長の四人ばかりであった。

(三) 八月十日ごろ、三川町の地方裁判所焼跡に、広島刑務所人の手で裏やぶの焼け残った竹を使って柱を立て、焼け残りの板で屋根を取りつけた仮小屋を造り、ここに裁判所本部をおいた。

(四) 八月十六、七日ごろから、死没職員たちの遺族が、遺骨を受け取りに来たので、それまでそのままにして、置いてあった遺骨を拾って、それぞれに引き渡したが、通信局倉庫と塀との協会近くに誰の者とも判断できない遺骨が一人分あった。

このような状況下で、裁判所の機能は人的面においても、物的面においても、全く壊滅的打撃にあったが、一応前述のとおりのお急処置を講じたのち、次のような手順で、ともかく事務を再開したのである。

(イ) 昭和二十年九月二十一日から、広島地方裁判所の事務のうち、公判を除く民事・刑事事務および予審事務を、広島市宇品町広島保護観察所内においておこない、また庶務・供託の事務を安芸郡府中町の石田町長宅、および同町龍仙寺においておこない、更に、公判事務を双三郡三次町の三次区裁判所(現在・広島地裁三次支部)において、それぞれ臨時執務した。

また、広島区裁判所の事務執行は、民事・刑事・非訟・庶務事務を宇品町の広島保護観察所内でおこない、登記事務を比婆郡庄原町の庄原区裁判所(現在・広島地裁庄原支部)においておこない、公判事務は前記三次区裁判所において臨時的に執行した。

(ロ) そうして約三か月後になって、安芸郡府中町国民学校校舎の一部を借受け、広島地方・区両裁判所の事務全部をここに移した。

(ハ) 昭和二十一年春、向洋町の東洋工業株式会社付属青年学校跡を補修して、ここに移転した。

(ニ) 昭和二十二年三月、市内基町一番地に木造の新庁舎が竣工し、これに移転した。

八、復旧状況

復旧状況

被爆により転々と庁舎を移りながらも、庁用品や執務の面などの困難を、一步一步克服していった。

二十二年三月、基町に本庁舎が建設されて、やっと本格的な復旧に達し得たのであるが、その間、多くの難局を切抜けるため、いろいろと苦心の操作が必要であった。

例えば、庁用備品は、管内の非戦災地区の裁判所から供出を受け、用紙・書類・帳簿類は同じく管内の非戦災裁判所から、約一か年分の所要量の供出を受けたりした。また、訓令・通牒などは、これらの戦災を免がれた裁判所に分担して、その写しを作成させ提出してもらった。

従事職員については、当庁の生存職員のほかに、管内出張所(登記所)書記の人たちや、山口・松江・鳥取の各裁判所からの判事の応援をうけて、人的大被害を生じた当庁の任務の完遂を期した。

第十三項 広島地方裁判所検事局 広島区裁判所検事局 ...325

(現在・広島地方検察庁 広島区検察庁)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市三川町一番地

広島地方裁判所内

建物の構造木造二階建

施設の状況

敷地約一、八 坪内に、広島地方裁判所および広島区裁判所(本屋各木造二階建)を主軸として、付属建物(倉庫などを含む)一五があり、検事局は各裁判所本屋内に置かれていた。

各建物は廻廊をもって結び、ほぼ東西に向い、表門は西側に、裏門は東側でそれぞれ道路に面し、南北は民家に隣接し、北東の一角は逓信局倉庫に隣接していた。

在籍職員数三三人(うち七人応召中)

被爆時の出勤者数七人

代表者広島地方裁判所検事正・榎田忠美

広島区裁判所上席検事・武井辰磨

爆心地からの距離約七五〇メートル

二、疎開状況

昭和十九年末、広島地方裁判所検事局・広島区裁判所検事局の保存記録のうち、判決原本および刑事事件簿など(昭和十七年末までに完結したもの)の重要書類は、比婆郡庄原町の庄原区裁判所倉庫に疎開移動したが、その他の帳簿・事件記録は煉瓦造りの倉庫に、捜査中の記録は、庁内の防空用地下室に格納していた。

三、防衛態勢

勤務時間中は、全職員が所長・検事正の指揮により防衛態勢をとり、地方裁判所・区裁判所・同検事局職員一一四人(当時・応召中の者二〇人を含む)を五隊に分かち、各隊長には部長判事・監督判事・次席検事・上席検事をもって充てた。退庁後は、各隊長の指揮のもとに、翌日登庁時までの防火・防衛に関する応急処置をとった。また警報発令とともに、全職員登庁して、共にその任につくことになっていた。

四、避難計画

非常事態により、職員ならびに重要書類などを避難させることになったときには、次のとおり指定されていた。

- (一) 安芸郡府中町 龍仙寺
- (二) 同 府中国民学校
- (三) 同 石田町長宅

五、五日夜から炸裂まで

八月五日午後五時以後の警備は、塚田監督判事を隊長とする一八人が、終夜警戒にあたり、警報発令ごとに各部署配置につき、防備にあたったが、この間、何ら異状なく、翌六日朝八時にいたった。そこで同隊は、一応任務を終了

し、職員の出勤を待つため、一部を残し、他は朝食のために自宅へ帰ったから、一時的に警備が手薄となっていた。

八月六日の朝八時には、前夜来の一部警備員をふくめ、裁判所職員・検事局職員をあわせて約三一人が構内にいた。検事局職員はこのうち七人で、執務準備のため、ある者は防空壕に格納中の書類を取り出しに、ある者は掃除にとそれぞれの業務に従事していた。

また、地方裁判所と区裁判所とを結ぶ廻廊のほぼ中間部に、廷丁室・炊事場があり、湯沸しのためカマドに火を入れていた。しかし、ここは竈・土間・煙突ともに煉瓦をもって築かれていて、容易に飛火などによる延焼の起らない構造であり、その他の個所は、火気なく、火災発生のおそれはまったくなかった。

当時、当庁職員は、市中の建物疎開作業などには出勤していたため、もっぱら庁舎や重要書類の防衛に従事していた。ただし、その家族は、居住地ごとの義勇隊奉仕作業に出勤していたため、六日も翠町居住の検事の家族は、新川場町の家屋疎開現場に出勤していて、被爆死亡した。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

死者* 八人

重傷者(治療一か月以上)* 五人

軽傷者(治療一か月未満)* 三人

計* 一六人(登庁途中の者を含む)

在庁中の職員は、倒壊建物の下敷きとなり、たちまち火炎につつまれた。

同日午後二時頃、自然鎮火した現場は、焼けおちた余燼の熱気が立ちこめ、足を踏み入れることもできず、黒焦げの死体があちらこちらに散乱していた。勿論、これらを収容することも、氏名を判別することも不可能であった、ただ、死体の転っている場所から判断して、誰れそれであろうと推察するにとどまっただけで、その死体に対して合掌を捧げるほか、するすべもなかった。

当日朝、すでに登庁して勤務についていた検事局職員七人のうち即死者が五人である。重傷者二人は脱出して各自宅にたどりつき療養したが、一人は旬日にして死亡した。

登庁途中で被爆即死したと認められる者や、負傷した者などもあって、職員のほとんど全部が惨禍にさらされた。負傷しなかった者は僅か一、二人に過ぎなかった。

なお、櫻田検事正は当日、市外の貴船原道場へ行くことになっており、国民服に着かえ、ゲートルを巻き、八時二十分に官舎(上柳町)を出る用意をしているとき被爆した。倒壊物の下敷きとなり、三〇分程失神していた。気がついて必死で裏庭に脱出し、血まみれの夫人と浅野泉邸へ避難したが、猛火に追われて太田川に出、干潮でできた川の中洲に逃げ、九死に一生を得た。

また、武井上席検事は、六日朝七時三十分頃、広島刑務所に用件があって、家を出たまま被害し、行方不明(死亡)となった。このような状況下で、あらかじめ予定してあった避難先に、六日のその日中に集合した者は皆無であった。

翌七日にいたり、検事正以下職員五人が、上柳町の検事正官舎焼跡に集合して、協議の結果、とりあえず官舎焼跡を仮庁舎とすることにし、各職員の起居する場所は、それぞれ任意とした。行き先の無い者は、あらかじめ予定されていた第一避難先の安芸郡府中町龍仙寺において、雨露しのぐことにしたが、その中で歩行可能な者だけが仮庁舎に通勤した。

(二) 物的被害

地方裁判所・区裁判所の本館建物をはじめ、陪審員宿舎(当時・経済係検事室ならびにその事務室として使用中)・法曹会館の各二階建て建物のほか、陪審法廷(刑事部判事室・同書記課・検事局思想係検事室などを含む)・刑務所留置場・警察官詰所・弁護士控室・門衛室・公衆控所・自動車運転者住宅・車庫・倉庫七棟など、合計一五棟のうち、コンクリート建ての倉庫一棟を残して、他は原子爆弾の炸裂と同時に、崩壊ないし大破半壊した。火災は、庁舎北側に隣接する通信局倉庫付近から発火したのが飛火して延焼しはじめた。

一方、地方裁判所本庁舎の正門側、西南端近くに立っていた電柱が、熱光線をうけて自然発火した。

これが庁舎に燃え移り、西北からの猛風にあふられて、パッと燃えあがり、ついにすべてを焼きつくしたのであった。従って格納中の事件記録およびその他の書類は、区裁判所コンクリート倉庫に格納してあったもの、および疎開

中の判決原本を除き、すべて烏有に帰した。

七、被爆後の混乱

六日または翌七日、重傷の職員は、軍隊・警察・消防などの救援により、あるいは自力で、市外に避難・収容され、応急的治療を受けた。比較的軽傷の職員は、市内の元居住地の焼跡などに居残っていたが、家族の死亡、家屋家財の全焼で呆然自失のありさまであり、結局は各自各所に四散して、その消息も的確ににぎることができなかった。また、これらの職員や家族を、一か所に収容救助する施設もないばかりか、給食・配給についても、生存者が当初、申出た町内会で給付されることになっていたため、その町を離れることは困難であり、庁としての自主的な救急措置を執ることはどうにもできないという実情にあった。

僅かに、被災後、若干の乾パン・砂糖の配給があったから、上柳町の検事正官舎あとの仮庁舎に、日々集合する職員に一握りずつ分配したぐらいのことであった。

検察の職務は、犯罪の防遏により、社会の安寧秩序を維持することにあり、一日もこれをおろそかにすることを許されないが、被爆の惨禍甚大をきわめたため、当庁の機能はまったくとざされた。

前記のとおり翌七日になって、検事正官舎焼跡に集合した検事正以下検事三人、書記一人によって仮庁舎を開設し、当面の事務処理をおこなうことにしたが、器材用具何一つないため、翌々日の八日、官庁連絡会議で、軍用天幕一張りを借受けることになり、その中にゴザ二枚敷き、ここで各方面の情報を集めた。一方、犯罪者の取調べは、各警察署へ出張しておこなった。

しかし、書記の大部分が死亡したり、重傷で動けなくなっていたので、事務遂行は至難であったから、呉・尾道在勤の検事や書記を応援出張させて、急場の措置をとった。

八、復旧状況

復旧状況

(一) 被爆・終戦の荒廃した中であって、庁舎焼跡の完全整理や新築などのことは、全く不可能なことであった。

(二) 昭和二十年九月に、広島控訴院検事局と共に、安芸郡船越町の日本製鋼所広島製作所に所在した広島刑務所海田市構外泊込作業場に移転して庁務を執った。一方、事件の取調べは、広島市宇品町所在の元広島保護観察所庁舎内においておこなった。

(三) 同年十一月十九日に、広島地方裁判所検事局のみ、安芸郡府中町府中国民学校内の青年学校校舎へ移転し、広島区裁判所検事局は引き続き、前記観察所内で執務した。その当時、執務可能な当庁職員は、地検で検事四人・書記二人・雇一人であり、区検で検事三人・書記七人に過ぎなかった。

(四) 昭和二十一年六月二十五日、安芸郡府中町の地方裁判所検事局、市内宇品町の区裁判所検事局は、共に広島県警察部のいた向洋町の東洋工業株式会社内に移転して、本格的な執務態勢に入った。

(五) 昭和二十二年五月三日、検察庁法施行により、広島地方検察庁・広島区検察庁と改称し、同年六月、広島市基町一番地の元陸軍歩兵第二部隊跡に新築された広島高等裁判所庁舎内へ移転した。

(六) 昭和二十四年四月十一日、右裁判所庁舎に隣接して新築された同番地の広島高等・地方・区検察庁合同庁舎に移転して、初めて安定した執務態勢をとるにいたった。

(七) 昭和四十年十月十四日に、右木造の検察庁高庁舎(鉄骨鉄筋コンクリート地下一階、地上六階建。所在地が町名変更により広島市上八丁堀二番一五号)へ入居し、快適な環境のもとに執務するにいたっている。

七、被爆後の混乱

六日または翌七日、重傷の職員は、軍隊・警察・消防などの救援により、あるいは自力で、市外に避難・収容され、応急的治療を受けた。比較的軽傷の職員は、市内の元居住地の焼跡などに居残っていたが、家族の死亡、家屋家財の全焼で呆然自失のありさまであり、結局は各自各所に四散して、その消息も的確ににぎることができなかった。また、これらの職員や家族を、一か所に収容救助する施設もないばかりか、給食・配給についても、生存者が当初、申出た町内会で給付されることになっていたため、その町を離れることは困難であり、庁としての自主的な救急措置を執ることはどうにもできないという実情にあった。

僅かに、被災後、若干の乾パン・砂糖の配給があったから、上柳町の検事正官舎あとの仮庁舎に、日々集合する職員に一握りずつ分配したぐらいのことであった。

検察の職務は、犯罪の防遏により、社会の安寧秩序を維持することにあり、一日もこれをおろそかにすることを許されないが、被爆の惨禍甚大をきわめたため、当庁の機能はまったくとざされた。

前記のとおり翌七日になって、検事正官舎焼跡に集合した検事正以下検事三人、書記一人によって仮庁舎を開設し、当面の事務処理をおこなうことにしたが、器材用具何一つないため、翌々日の八日、官庁連絡会で、軍用天幕一張りを借受けることになり、その中にゴザ二枚敷き、ここで各方面の情報を集めた。一方、犯罪者の取調べは、各警察署へ出張しておこなった。

しかし、書記の大部分が死亡したり、重傷で動けなくなっていたので、事務遂行は至難であったから、呉・尾道在勤の検事や書記を応援出張させて、急場の措置をとった。

八、復旧状況

復旧状況

(一) 被爆・終戦の荒廃した中であって、庁舎焼跡の完全整理や新築などのことは、全く不可能なことであった。

(二) 昭和二十年九月に、広島控訴院検事局と共に、安芸郡船越町の日本製鋼所広島製作所に所在した広島刑務所海田市構外泊込作業場に移転して庁務を執った。一方、事件の取調べは、広島市宇品町所在の元広島保護観察所庁舎内においておこなった。

(三) 同年十一月十九日に、広島地方裁判所検事局のみ、安芸郡府中町府中国民学校内の青年学校校舎へ移転し、広島区裁判所検事局は引続き、前記観察所内で執務した。その当時、執務可能な当庁職員は、地検で検事四人・書記二人・雇一人であり、区検で検事三人・書記七人に過ぎなかった。

(四) 昭和二十一年六月二十五日、安芸郡府中町の地方裁判所検事局、市内宇品町の区裁判所検事局は、共に広島県警察部のいた向洋町の東洋工業株式会社内に移転して、本格的な執務態勢に入った。

(五) 昭和二十二年五月三日、検察庁法施行により、広島地方検察庁・広島区検察庁と改称し、同年六月、広島市基町一番地の元陸軍歩兵第二部隊跡に新築された広島高等裁判所庁舎内へ移転した。

(六) 昭和二十四年四月十一日、右裁判所庁舎に隣接して新築された同番地の広島高等・地方・区検察庁合同庁舎に移転して、初めて安定した執務態勢をとるにいたった。

(七) 昭和四十年十月十四日に、右木造の検察庁高庁舎(鉄骨鉄筋コンクリート地下一階、地上六階建。所在地が町名変更により広島市上八丁堀二番一五号)へ入居し、快適な環境のもとに執務するにいたっている。

被爆日誌

角田俊次郎

(当時・広島地方裁判所次席検事)

昭和二十年八月六日は、むし暑い日であった。私は当時広島地方裁判所次席検事の職にあったが、その前日、櫻田検事正から同月一日焼夷弾攻撃を受け大きな被害を蒙った呉検事局の被害状況の調査を命ぜられたので、六日朝広島駅に行った。

七時三十分頃警戒警報が解除されたので、呉行き列車は発車した。およそ三十分経過し小屋浦駅に近づいたとき、突然、強烈な恰も照明弾の光に似た尖光に眼を射られ、その直後パアーンと爆弾の炸裂に似た音響がし、白いガス体が恰も入道雲(後でキノコ雲と言われた)のように立ち昇るのを、列車の窓から見たが、その時は何処に爆弾が落ちたものか不明であり、列車に体をまかせて呉駅に到着した。

呉市内は一日の焼夷弾攻撃により殆ど焼野原と化していたので、駅から呉検事局の庁舎に徒歩でゆく途中、目に見えるのは上空に、白いガス体が入道雲のようにムクリムクリと拡っていくもののみであった。どうもいつもの爆弾とは違うので、呉検事局から呉海軍鎮守府に問合せ貰ったところ、広島市に新型爆弾が投下されたが被害状況は不明である、ということであったので、私は呉検事局の帳簿証拠品などの被害状況を調査し、さて帰る段になって呉駅に問合せると、列車は坂駅までゆくが、その先は不通になっていることが判明した。それで呉警察署の近藤署長に頼み、警防自動車を出して貰い、これに次席警部と同乗し、新聞記者数名を乗せ広島市に帰ったのであった。

車が海岸に出ると広島市の宇品方面が盛んに燃えている状況が目に入り初めてこれは大事だ、と感じ市を急がせるうちに、前方から避難の人達が、或いはトボトボと或いは小車に荷物を乗せてゾロゾロと列をなして来るのに出会い、漸く車を段原東巡查派出所につけることができた。

広島市中は殆ど燃えつくして余燼が熱い。派出所の巡査に聞くと本署との連絡は切れ、また誰も交替に来ないので、市中の状況は、皆目不明ですとのこと、山手には呉署から派遣された警官の一隊が、市中に入れず屯ろしている有様であった。私は車で行ける所まで行くことにし、持ち合せた手拭を水に浸たして頬冠りをし、余燼盛んな市中に乗入れ、比治山下を通り比治山橋を渡り鷹野橋まで行ったが、焼釘などがタイヤに刺さり、これ以上は運転が危険なりというので、鷹野橋から呉署次席警部を車で帰すことにした。

その時私は次席警部に、内務大臣には知事名で司法大臣には検事正名にて、「今朝広島市に新型爆弾投下一瞬にして全市灰燼に帰す。」と電報を打つこと、また県下の警察署長に対し警察部長名にて広島市の被害状況を報知し、できるだけ多数の応援を派遣することと、にぎり飯を送り医師を手配することを署長に進言して、緊急手配することを依頼した。これが司法大臣に対する第一報である。

鷹野橋には西消防署があり、山名消防署長は、負傷して署の焼跡に茫然としていたが、私が声を掛けると「次席さん申訳ありません、消防車は全部破壊され目の前で日赤病院が焼けているのに消火ができません。」と憤懣と不甲斐なさを訴えた。私が署長に「君の手落ちではないのだから」と慰留しているところえ、区裁判所の山内監督書記が来合せたので、二人で歩いて先ず控訴院庁舎に行ったが、既に庁舎は焼失し余燼が立ち昇るのみである。地方裁判所及び検事局の庁舎に到れば、庁舎は全く焼失したが、幸いに御真影奉安庫のみは厳として立っているのを見て、御真影の安泰なるに歓喜したものである。裏門に廻ると防空壕の付近に地方裁判所の沢書記が負傷して蹲っているのを見つけ、来合せた本間検事と三人で、沢君を防空壕に運び入れると、壕内にはもう一人重傷を負った地方裁判所の福原書記が避難していたので、両君の飲料として水道の水を置き、「必ず助けに来るから元気でいなさい。」と激励し、検事正官舎にゆく途中日本勧業銀行広島支店付近で、検事正が区裁判所検事局の西丸監督書記を随えて来られるに逢い、検事長官舎・検事正官舎は共に焼失し、検事長は何処に避難されたか未だ判明しない由を聴き、私は呉検事局の調査の概要を報告した。段々と夕刻が迫り、暗黒なれば歩くのも困難になるので、本間・山内両君とは明朝十時、地方裁判所庁舎裏門にて逢うことを約束して別れ、私は検事正と共に、その避難先の牛田町に到るべく、検事正官舎跡まで行ったが、そこで初めて自分の家族の安否が気になり出し、急に検事正に別れて、自宅に行ってみたが家は焼失し、勿論誰も居らず、比治山橋畔、鶴見橋畔には焼け出された者や怪我した者が多数避難して居たので、或いは家族もそこに居らぬかと捜して見たが、誰も見当たらないので、その夜の宿を東警察署と定め、余燼でボウと赤い光が立つ暗中の道をさぐり乍ら漸く東署に辿りついた。

同署は、臨時救護所となり、負傷者が多数運び込まれている。署長と警防主任に市中の状況を聴くうち、区裁判所の塚田監督判事が東練兵場に避難しておられたと聞き、早速人を派して本署に連れて来ること、また地方裁判所裏門の防空壕に二人の書記さんが重傷を受け避難しているので、担架を持ってゆき救護されたいと頼む。塚田監督判事はどこに行ったか見付からなかったが、防空壕の書記さんは二人共救護所に運びました、という報告を聞いた。後日譚だが、沢書記はその後救護所で死亡したが、福原書記は奇跡的に命拾いをされた。私はその夜から、その後海田町に住いするまで東警察署に泊っていた。

- 八月七日 -

七日夜明けと共に東警察署から地方裁判所庁舎にゆく。

裁判所前の川の土手(この川は終戦後大土管の中を流れるようにされ、その上はキリンビヤホール西側の道路になった)に、塚田監督判事が腰掛けているのを見て、よくもまあ無事だったものと喜びの声を掛けた。同判事は前夜東練兵場で夜を明したということであった。日が昇ってから同判事は家族の安否も気に掛るので家に帰ってくるといい、多分祇園町長束辺りであったと思うが一人家路についた。

私は誰か一緒に行つて貰おうと勧めたが、何、一人で大丈夫だと何処で拾ったのか竹の杖をついて、トボトボと歩いて行ったが、それが塚田判事の見納めとなった。

私は斯ういう混乱時に裁判所の焼跡に、裁判所の関係者と検事局の者が雑居するより寧ろ検事局は別の場所で、執務するのが能率的であると思い、検事局は検事正官舎跡に移ることにし、東警察署で見付けた板に広島地方裁判所検事局と墨書きして看板を作り、これを検事正官舎跡に掲示し、本間検事や呉検事局から応援に来た勝部検事、地方裁判所検事局庶務係の川野書記らと共に、焼トタンを見付けて焼残りの立木を利用して屋根を作り、その日陰げに坐って仕事したものである。

正木検事長は無事にて、その官舎の防空壕で指揮をされ、検事正は牛田の避難先におられ、検事正官舎焼跡の新庁舎に出勤した者は、私の外、本間・勝部それに尾道検事局から応援にきた中垣検事・川野書記の五人であった。この日

岡山から丸検事正が逸早く慰問に駆付けられた。

終戦の詔勅がなされる迄は、なお未だ軍の威力は大で、この日午前九時官庁主脳者連絡会議が総軍主催の下に行なわれ、これに検事長と検事正が出席され、午後六時には比治山神社境内にて、広島警備隊司令官主催の官庁連絡会議が開催され、これに私が出席した。

- 八月八日 -

本間検事は警備隊司令官主催の連絡会議に出席する。松江の中根検事、同検事局を代表し慰問に来庁。

控検の枇杷田次席はなお消息不明、楠野検事は陪審宿舎に宿泊していたので、死亡の蓋算大、立石検事は負傷して段原町提病院に収容され、渡辺検事は上京中にて無事。

地検の高木検事・佐藤検事、区検の武井上席検事は無事であろうと思われるが出勤せず消息不明、相川検事は異常無き由、岡谷検事は出勤の途中顔面に負傷し自宅にて臥床療養中、千頭検事は戸坂国民学校に収容されておる由仄聞する。書記課の村井書記長・井木・岡村・谷垣書記の消息不明、稲垣書記は無事なるも子供の捜索に奔走中。

- 八月九日 -

相川検事が出勤したので、早速市役所跡に開催の官庁連絡会議に出席して貰う。一方藤原県警刑事課長を呼び、市内十数ヶ所に左の掲示を出させる。即ち「戦災に乘じ他人の金品を盗み取る如き者は厳罰に処せられる。検事局、警察部」今思うと兇戯に類しておるようであるが、その時は市内の治安維持に熱意を傾注していたものである。

この日福山市は、B29五八機により焼夷弾攻撃をされ、午前五時現在旧市内の殆ど全部約四万四千人罹災する。

山口地方裁判所を代表して、岩国裁判所の鶴崎判事、山口検事局を代表して次席検事が慰問に来られる。

- 八月十日 -

この日武井上席検事の二男広政君が来庁し、父は六日午前七時三十分頃刑務所に用があるので、刑務所に廻ってゆく、と言うて出勤した儘、今以て帰宅しません、消息を知りませんかと聞かれ、私は七日朝裁判所庁舎の焼残りの鉄門のところ、確かに武井君の自筆と思われる置手紙があったのを見ておるので、武井君は生きておるものとばかり思っていたのに、今令息から右のようなしらせを受け、全く意外であり吃驚したのであるが、その後家族の人も出来るだけ、手を尽して捜したが六日以来の消息は、杳として判明しないという結果になった。

武井君は広島区裁判所検事局上席検事として着任して間が無かったので、被爆前夜の五日夜に、検事正以下検事全員及び書記課幹部を招待して披露宴を催した。私も勿論出席し、殊に武井君とは試験が一緒であり、私が横浜地検に勤務当時武井君は小田原区検におり、広島に来てから特に親しくしていたので、大いにメートルをあげたのであった。

それが一夜あければ、生死を異にするのであるから運命は全くわからないものである。本日、鳥取検事局から横川検事慰問に来る。

- 八月十一日 -

検事正官舎跡の仮庁舎は、広島地方並びに区裁判所検事局のみであったが、検事長から控訴院検事局も一緒にし且つ「問注所」を設置する事にしようと言われ、本日から看板を、「広島控訴・地方・区検事局」と書き替え、別に「問注所」という標札も出した。なお検事長と検事正は、宇品の暁部隊(陸軍)法務部を訪問し、同部に広島控訴・地方・区検事局並びに問注所の分室を設置することの交渉をされ、法務部長の了承を受けた。

また、検事正は被爆による検事局の被害状況報告を認め、本日区検木下検事に之を携行上京させる。本省から神保事務官が慰問のため来庁する。

- 八月十二日 -

本日安芸郡落合村(広島市に編入)の金光氏が来て、佐藤検事夫妻は金光方に下宿しているが、同検事は六日朝出勤したまま未だ帰宅しないが、消息が判らないかと聞かれるので、こちらも同検事のことを知れたのだが、佐藤検事が帰宅しないとすれば、同君は早朝出勤者であるから、或いは検事局内で死体となっているやもしれない、明日裁判所と検事局の死体の調査検視をする予定だから、佐藤夫人に来て貰うてくれと依頼する。その節金光氏から、昨日もしやと思い、戸坂国民学校の臨時救護室に調べに行ったところ、千頭検事さんが収容されていました、と知らせくれたので、千頭検事は己斐町に居住していたので、羽山書記に帰宅の途中、千頭夫人に右の事を伝達し、戸坂国民学校に迎いに行かれるように言伝てを依頼する。

千頭検事は検事正に随行し、貴船原少女苑に行くため、六日朝地検の村井書記長と共に、福屋前停留所で電車を待合せていた際被爆し、何処をどうしたのか、戸坂国民学校の救護所に収容されていたのであった。同検事は前夜庁舎の警備に当たったので、福屋前から電車に乗ることにしたのである。千頭夫人は羽山書記の言伝てにより、翌十三日戸坂

国民学校に主人を迎いに行ったが、その時同検事の容態は重篤となったので、松林の風通しの好い個所に移され、金光氏が教えてくれた場所に居らなかったそうで、夫人は、気が弱く遂に同検事を捜し当てずに帰宅したので、不幸同検事は右学校で死亡されたということの後日に至り知った。

本日、藤原刑事課長より、広島刑務所の看守が市中焼残りの金庫から金品を窃取せんとした戦時窃盗の報告に接す。

- 八月十三日 -

今日は地方裁判所同検事局並びに陪審宿舎の死体の検視をする。陪審宿舎の死体は昨日までに四体発見したが、完全に焼け、骨のみとなっているので、誰の死体が見分けることができない。控訴院検事局の楠野検事は、家族をその郷里大分県に疎開させ独り陪審宿舎に宿泊していたので、この四体の内の一体は、楠野検事と思わねばならない。本日午前九時広島刑務所からの既決一五人を使用し作業を開始する。見分者は私一人。廷丁部屋の炊事場に死体三体、部屋の外側に一体あり、炊事場の死体の遺留品に旭光を葉にて抱えた帽章一個あり、廷丁の帽章と思われる。この死体を掘り起すと、その下になお一個の死体があった、死体が重なっていたので下の分は着衣が焼け残り、そのポケットに「森雇殿」と記載した俸給袋があったので、この死体は裁判所雇森類一君と推測された。廷丁部屋の外側の一体は乱杭歯で上顎左に金入歯がある、乱杭歯から米藤廷丁と推測したが、米藤廷丁の奥さんが見て主人に相違ないと証言した。

検事局洗面所に一死体がある、完全に燃えて骨ばかりになっているが、バンドの金具・腕時計・ナイフ・ニュームの弁当箱各一個が焼け残っていて、バンドの金具には一高のマークがあるので佐藤検事と推測する。後刻佐藤夫人が来たので、遺留品を見せると何れも主人の物に相違ないと言うので、この死体は佐藤検事と確認し、遺骨を夫人に引渡した。

佐藤検事は精励恪勤毎日早朝に出勤し、出勤するや直ちに洗面所にゆき顔を洗うことにしていたので、六日も恰度洗面にゆき被爆したものと思われる。この他裁判所中央部その外に死体があって結局裁判所検事局構内において発見した死体は合計十三体である。その内確認できたのは佐藤検事・森雇・米藤廷丁、推測できたのは、楠野検事と上野廷丁である。死体の内には着衣などから見て、全く外部の人と思われる者もあった。

本日、宇品警察署司法主任より宇品共済病院内において、避難者を装い二百六十五円を窃取した事件の報告があり、明日勝部検事らを出張させ、曩の看守の窃盗事件と共に取調べることにする。

また山口検事局から西山検事が、毛布二十枚を携行寄贈される。本省の神保事務官は、本日帰京し、呉検事局の上席検事来庁する。

- 八月十四日 -

勝部・渡辺両検事は宇品分室に出張し、昨日迄に報告された戦時窃盗二件の取調べに当る。控検の渡辺検事は、上京中であつたが本月十一日家族を連れて帰任し、十二日から出勤した。私は裁判所構内で発見した死体中、半焼けの七体を検事長官舎裏手の土手で焼き、翌日懇ろに納骨読経を上げた。

山口から裁判所長と藍立検事正が慰問に来られ、その他伊達広島財務局長、少年院の野口氏、津田福山区裁判所監督判事など慰問者が多かった。

- 八月十五日 -

本日十二時、世紀の御詔勅が下り四国会議の提議を受諾されることになった。

十二時半、地方裁判所構内における死体十三体及び控訴院構内で発見した死体一体を納骨し、刑務所教誨師を招き懇ろな読経を上げる。参列者検事長と検事正、裁判所側吉田・内藤・戸田各判事及び山内監督書記。

渡辺・勝部両検事は河野書記を伴い、宇品分室に出張前日に引続き取調べをする。

- 八月十六日 -

曩に検事正の報告書を携行上京した木下検事、本日使命を果して帰庁する。

検事長・検事正は午後二時より、中国総監府(戦時中各県知事の上に総監が置かれた)における連絡会議に出席する。

勝部検事は岡田書記を伴い、宇品分室にゆき、取調べ中の戦時窃盗二件に付き公判請求をする。一方本間検事は、刑務所にゆき勾留更新決定書を交付し、且つ末決勾留者の数及び人名を調査して帰る。

本日、鈴木内閣総辞職、後継内閣首班に東久邇宮殿下に大命降下さる。

本日の出勤者検事長・検事正・角田次席・渡辺・本間・勝部・相川・中垣各検事・西丸監督書記(本日より出勤)・末永・河野・川野・岡田各書記。

- 八月十七日 -

昨日公判を請求した戦時窃盗二件は、吉田判事審理の結果求刑どおり懲役十年に処せらる。私は曩に刑事課長をして、一般に対する警告の掲示をさせたが、本日の裁判を契機に更に広報することにし、東警察署において板三枚(漸く三枚見付けた)に「警告」と前書し、「戦災に乘じ窃盗を働いた者が、本日の裁判で懲役十年に処せられた。」と墨書きにし、これを人の集る個所を選び、三か所に掲示させたが、幸いこの後この種の事件は無かった。

本日、控検次席の枇杷田検事初めて出勤する。同検事は負傷し、豊田郡安浦町に避難していたようで、まだ頭に繻帯をしている。

また本日は書記課の出勤者が多く、末永・川野・岡田・山根・黒瀬・谷本それに控検の泉雇まで出る。

本日、東久邇宮内閣成立、司法大臣には岩田宙造氏となる。

- 八月十八日 -

廿日市警察署管内に尊属殺人事件発生し、勝部検事出張する。本省から勝田事務官来広。本間検事は昨日に引続き刑務所に赴き、未決勾留者の処置をなす。楠野検事夫人その実弟と共に楠野検事の遺骨を拾いに来広する。

- 八月十九日 -

私は上司の命を承け、日本製鋼所広島製作所に赴き、松田所長上京不在中なるにより、武田次長に会見し、検事局に同製作所の建物の一部を貸与され度く交渉し快諾を得る。

勝田事務官は福岡に向け出張。同事務官の伝達した使命達成のため、佐々木検事を岡山に、本位田検事を鳥取及び松江に、中垣検事を尾道及び福山に、木島検事を呉に出張させる。

- 八月二十日 -

御真影を庄原区裁判所に奉遷することになり、検事長・検事正・裁判所から居城判事が捧持し、末永及び川野書記が随行する。

曉部隊法務部に設置してあった検事局分室を、観察所に移転することとし、木下・勝部・本間三検事これが処置に当る。渡辺検事は中国総監府における連絡会議に出席する。

配給についてはこれまでも随時交渉して来たが、本日木下検事は控訴院、並びに地方区裁判所及び検事局全員分として、砂糖二袋を受領し、また専売局に煙草の特配申請をし、キンシ二千本の特配を受ける。その代価金七十円なり。

本日雇梅木登美子初めて出て来る。同人は被爆したが身体の調子が好くなったというて、雇の身であるのに今日から二十二日まで出勤し、二十三日から出て来なくなったので、調査すると、その時までは病名不明であったが所謂原爆症で死亡したのであった。炎天下に被爆者の身で出てきたのが無理であったのである。この事があってから頭髪が抜け初めると気を付けるようになったように思う。

現に私の四男で当時旧制中学一年生であったのが、急に頭髪が抜け出したので県衛生課長に相談すると、それは大変だ、原爆の気のない岡山の病院にでも入院させなさい、といふことであったが、手掛りがないので、賀茂郡西条町の陸軍病院に入院させた。四男は完全な原爆症になり、長い間苦しんだが手当の甲斐があって一命を取止めた。

- 八月二十一日 -

本省刑政局の中尾書記官来庁する。

勝部検事は保護観察所に赴き、検事局分室の整備のことに当る。控検の山本書記長初めて出勤す。本日の出勤者は木下・本位田・本間・勝部・相川・中垣の各検事、山本書記長・西丸・岡田・黒瀬・山根・羽山・泉・梅木それに私である。

- 八月二十二日 -

勝部検事は宇品分室(観察所内)に出張。

検事局仮庁舎は今日まで、検事正官舎焼跡に最初は焼トタン張り、中途から天幕張りで我慢して来たが、格別暑い炎天下に職員の疲労が甚だしいので、検事長の発議で刑務所に交渉し、バラック建の庁舎を建てることになり、今日はその準備として、官舎焼跡の清掃をする。これには検事長以下手空きの職員総動員で従事した。御苦労なことでした。

その日の職員は検事長・検事正・角田・渡辺・本位田・本間・勝部・山本書記長・西丸・末永・川野・岡田・河野・山根・黒瀬・梅木・泉の十八人である。

- 八月二十三日 -

渡辺検事は宇品分室にゆく。本間検事及び西丸書記は裁判所中央部の金庫を開扉し、内容品を調査する作業に立会する。私は裁判所の吉田判事に対し裁判所に公判繫属中であつた刑事記録の有無並びに調査促進方を交渉する。これで

みるとまだその時までは、被爆前から裁判所に繋属中の刑事事件の公判は、開始されていなかったらしい。

この日から稲垣書記が出勤する。

- 八月二十四日から一十六日まで -

私は二十四日に西丸監督書記と共に庄原区裁判所に出張し、二十五日には三次検事局の武井書記も庄原に出向き、庄原区裁判所に疎開させてあった既決の刑事記録の調査をし、二十六日に帰庁している。検事正官舎跡の仮庁舎バラック建造作業は二十五日から開始、翌二十六日にはでき上がった。これには出勤の職員全部が相共に作業に従事した。

そのため非常な速度で完成し、これで天幕張りから漸く板張りの建物に入ることができた。それで出勤簿や事件簿なども、整ったものとみえ、私の原爆のメモは二十六日で終わっている。

第十四項 広島刑務所...342

一、当時の概要

概要

所在地 広島市吉島町五〇番地

建物の構造 木造

建物面積一四、六五〇平方メートル

舎房建八、六一四平方メートル

工場建六、〇三六平方メートル

この他、公務員宿舎があった。なお、敷地は七四、三四四メートル

事業内容 受刑者の刑の執行と、未決拘禁者の身柄確保を目的とした収容施設

在籍者数 二七〇人

被爆時の出勤者数 二五〇人

被爆時の収容者数 一、一五四人

代表者 所長・古橋浦四郎

爆心地からの距離 約二キロメートル

二、疎開状況

事業内容の特質上、疎開はしなかったが、重要書類は庁舎前に地下倉庫(防空壕)を作って保管した。

なお、受刑者は、次の作業場において就業した。

第七造船奉公隊*広島市*三〇(人)* ** * 光作業場*山口県光市*二〇〇(人)

広島駅*広島市*三〇* ** * 小松製塩作業*山口県大島郡*六〇

造兵挺身隊*安芸郡海田町*二五〇* ** * 柳井作業場*山口県柳井市*五〇

大竹作業場*佐伯郡大野町*一四〇

三、防衛態勢

職員三〇人と、受刑者の一部をもって、防衛隊を組織し、空襲にそなえていた。

四、避難計画

中国地方ブロックを統轄する権限を有する者(当時・広島刑務所長兼任)が、安全と思われる刑務所へ収容者を移し、そのいとまのないときは、監獄法第二十二条により収容者を施設から開放することとされていた。

五、五日夜から炸裂まで

五日午後九時二十分、警戒警報が発令され、職員は非常登庁し、救護班・連絡係・消火班などの各班に別れて待機したが、しばらくして解除になったので解散した。

六日午前零時三十分ごろ、再び空襲警報が発令されたので、収容者は舎房から防空壕に退避し、職員は各自の部署につき、情報連絡や食糧の移動をおこなった。午前二時ごろ、警戒警報が解除になった。この様に再三再四の警報発

令があったが、警報解除後、午前七時四十分から、収容者一、一五四人は平常どおり、工場内で就業した。また、防衛隊の職員三〇人は教誨堂で訓練中であり、事務室は、給仕や早出の職員が掃除していて、平日とかわらなかった。

なお、当日朝、職域義勇隊の建物疎開作業の出動はなかった。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

(職員)

即死者 二人

負傷者 約一〇〇人

計 一〇二人

(収容者)

即死者 一四人

負傷者 約五〇〇人

計 五一四人

原子爆弾の炸裂と同時に、窓ガラスは飛散、建物が倒壊した。その下敷きとなった職員や収容者が、あちこちで助けを求める悲鳴をあげ、負傷者が続出した。

胸部を爆風によって三分の一くらい抉り取られて即死している者、頭部を六分の一ばかり扶られて真赤な鮮血が湧き出て意識不明になっている者、風船のように腫れあがった顔をした者、工場から死体を運び出す者など、どの人も衣服はボロボロに破れ、身体はまっ黒く汚れ、ために血の色も茶色に見え、皮膚は剥げてぶら下り、凄惨な修羅場が一瞬の間に現出した。

(二) 物的被害

爆風によって工場・庁舎(事務所)・舎房の大半が全壊した。また北側外塀に亀裂を生じた。

そして、しばらくして所内十数か所から発火した。しかし熱線による自然着火ではなく、隣接民家の火災による飛火や、火鉢あるいは炉の火の上に家屋が倒壊し、着火したものと思われる。

しかし、この火災は、収容者や職員がバケツリレーで送水し鎮火させた。従って火災被害は軽微であった。バケツリレーのほか、一部建物をこわすことによって延焼を防止したことも効果があって、発火後約三〇分にして鎮火した。

七、被爆後の混乱

職員や収容者の機敏な消火活動によって、幸い火災の被害が軽微であったから、ただちにこの突発事態の收拾にあたった。

職員および職員家族の負傷者や家屋を焼失した者が避難して来たので、収容者区域外の空地に、臨時収容所を急設して、負傷者には治療をおこなった。

また収容者は、運動場に集めて給食し、いわゆる野営生活を続けたが、兇悪者、および重病者は監房四棟が半壊程度であったから、その中に拘禁した。

その他の収容者の負傷者は、仮設のバラック病舎で治療したが、多人数なので、耕作地に仮設病舎を作り収容、治療した。男子患者は、収容者から選出された看病夫が、また、女子患者は、職員が看病に従事した。

健康な者は倒壊家屋の整理にあたる一方、行方不明の職員および家族を捜査するため、二個班編成して、毎日捜査を続行し、発見された負傷者は担架で病舎に収容した。

この様な状態で刑務所としての機能は全く失われたので、職員の帰宅を許さず、衆情の安定につとめた。

被爆後二、三日してから倒壊建物のかたづけを始め、使用可能な材料を集めて復旧資材にあてた。

八、復旧状況

復旧状況

被爆後、約三か月経過して印刷・木工作业が少しずつ、就業できるようになった。

建物は、倒壊家屋の中から使用できるものを集めて建て、辛うじて風雨を凌いだ。衣料は廃品を再生活用した。

収容者の移送については、焼失した岡山刑務所を除き、中国管区内の各施設に移送したが、なお当所に約六〇〇人拘禁せざるを得なかった。

昭和二十一年六月ごろ、事務所および工場などが、縮小された応急的なものであったが、一応再開された。

昭和二十二年ごろから本格的な復興に着手した。八本松の元軍用建物・軍需部被服支廠などの復旧資材を入手し、漸次整備されていった。

九、その他

昭和二十年八月九日から十一日まで、職員六人(うち教誨師一人)と収容者二〇人が、元安川に浮流している死体収容作業に従事した。

木材で急造した筏に乗り、死体を川岸に引寄せて、担架で陸上に揚げ、警察官が検死をおこない、二〇体くらい積み重ねては石油をかけて荼毘にふした。

死体処理は、火葬の際、教誨師が読経してそのつど供養をしたので、一般市民から感謝された。

死体引揚げ総数は約二〇〇体くらいであった。

また、倒壊建物の整理、道路の障害物を除却する啓開作業にも就労したのであった。

第三節 銀行・会社・その他団体... 348

(銀行)

第一項 日本銀行広島支店

一、当時の概要

所在地 広島市袋町五三の一

建物の構造

本館 - 鉄骨鉄筋コンクリート造石積・

三階建・地下一階・屋階付

建物面積 六四九坪九一

付属家屋 - 鉄筋コンクリート三階建・地下

一階・中三階付

建物面積 延三二一坪七五

倉庫及び

変電室 - 鉄筋コンクリート造・二階建

建物面積 九坪九四

事業種目 中央銀行

在籍従業者数 九五人

被爆時の出勤者数 一二人

代表者 支店長・吉川智慧丸

爆心地からの距離 約五〇〇メートル

二、疎開状況

昭和二十年七月二十日非常執務態勢整備のため、県下双三郡三次町の芸備銀行三次中町支店内に日本銀行三次分室を設け、主として国庫事務の被害分散を図った。

三、防衛態勢

屋上に約一メートル程度の土砂盛りを行なって爆撃に備えた。

また、北隣りの木造建築物三和信託銀行広島支店を取壊して空地をつくと共に、防空退避壕を設けた。

警報発令に際しては、男子行員は常時非常出勤することとした。

次長・調査役が交替で一日おきに宿直主任となり、外に六、七人臨時宿直をおこない、戦時態勢の増員措置をとった。

四、避難計画

当店は建物が堅牢であるため、軍当局から格別の指示なく、また、銀行としても避難経路・避難先の指定を行なわなかった。

五、五日夜から炸裂まで

戦時措置として宿直増員を実施。警戒・空襲警報時、その他に対応して勤務も平常通り行っており、特に異状は認められなかった模様である。八月六日朝になっても同様であった。

なお、職域義勇隊の編成なく、当日朝、建物疎開作業への出勤もなかった。

六、人的・物的被害

人的・物的・被害

(一) 人的被害

即死者 二九人(応召者五人を含む)

負傷者 二一人

負傷の有無に関係なく

その後の死亡者 一三人

炸裂時に店内にいた者一二人のうち、死亡五人・重傷五人、軽傷は二人であった。

(二) 物的被害

イ、屋上に相当量の土砂を敷きつめていたことと、建物施設が堅牢であったことにより、天井は落ちなかったが、中央ガラス屋根はシャッター覆いと共に鉛のように曲って大破した。

ロ、三階は財務局が事務所として使用していたが、窓のシャッターを閉じていなかったため、火災となった。

ハ、一階・二階はシャッターを閉じていたが、爆風により窓枠ごと破壊された。しかし内部は大破を免れた。

ニ、建物南側の国泰寺の墓地に茂っていた楠の大樹三珠(天然記念物)が原子爆弾の熱線で燃え上り、この炎により三階に火が入った模様であるが、正確な状況はあきらかでない。このようにして三階は火災が発生したけれども、一階・二階は火災を免れることができた。

三階の火災終息状況については、詳細不明であるが、一階・二階・地下室などが焼失をまぬがれたから、行内管理の必要上、格別に建物外へ避難することはしなかった。

七、被爆後の混乱

六日、店内の労務員室・食堂などを臨時病室として負傷者を収容し、広島地方専売局から女医一人及び看護婦二人の来診を受けた。

電気も電話も全く不通となり、上水道は辛うじて一個所だけ給水可能であった。無論店内の昇降機も全然運転不能となった。

電話連絡不能のため、宇品の陸軍船舶司令部に依頼して東京の本店ならびに大阪・岡山・松江・松山・門司の各店に連絡をつける方途を図ったが、結果的には連絡がとれていなかった。

八月七日、岡山支店員が来広し、同支店経由で始めて東京の本店に連絡がとれた。こうして、漸く他店からの応援員派遣を受けることができた。八日、岡山支店長が医師を連れて来援した。

八、復旧状況

復旧状況

猛烈な爆圧・爆風により、店内は什器諸器具類の散乱甚だしいものがあったが、六日夜半、警備に当たった兵士やその他の軍の救援隊、来援した近郊の警防団の手により、八月六日と七日の両日のうちに、店内の一応の取片づけを終了した。破壊された各窓には、応急的にヌキ板を打ちつけて戸締りとし、八日から支払業務を開始した。

市内の各金融機関の建物は、本行以外ほとんどすべてが焼失し、全く使用不能となったため、本行の窓口を十二区分に間仕切りして、それぞれに各銀行が入り、支払業務を行なうように措置した。当初は各行とも一人ないし二人の出勤者によって事務が開始されたが、徐々に各銀行とも人数が増加した。このように当行内で被災後一望焦土と化し

た広島での銀行業務は発足したのであるが、各銀行とも逐次自店焼跡に、応急バラック店舗などの建設に取りかかり、早いものは八月末から九月ごろ、おそいもので翌二十一年春ごろには、それぞれ自店敷地または自店の焼ビルに復帰していった。その後、当行は順次店舗内外の補修を施工して、再び従前の姿を取戻し今日に至っている。

日本銀行支店三階の惨状

平岩好道

(当時・広島財務局理財部経理統制課勤務)

八月六日の朝、警報も解除されたので、一応防空用具一式を持って、定刻(午前八時)までに日本銀行内(三階)の役所(財務局)に出た。ちょうど、前の週に三次で西日本の理財部長会議があって、赤井課長と山田さんが帰って来られたところなので、留守中の報告をしていた。赤井課長は汗かきでワイシャツの着替え中であつた。そのとき全く夢想だにできなかったあの爆撃を受けたのである。ピカもドンもない近距離であつたから、とたんにカラガラという崩れる音をきいた。一寸、窓の方をふり向いたが、梁の白いのを見たように思う。私はまっ暗な中を廊下に出た。無意識のうちに、手に触れた防空カバンらしいものをつかんで、負傷した頭にあてていた。

直税部前の廊下に向ったとき、廊下に崩れ落ちた仕切りの間に、足をとられて動けなくなった。誰か女の人が、僕の名前を呼びながら室から出て来た。「僕も頭をやられた。」と言った。動けなくなって、真暗な中に立ちつくしていると、顔から胸に、もの凄く生暖かい血が流れて来る。

腰にはさんでいた手拭で鉢巻をしたが、負傷個所がわからない。無理に足を抜いたら靴がとれた。逃げる人は、ドヤドヤと階段を駆け降りて行ってしまった。こんなことをしているうちに、はっきりと自分を自覚した。

しばらくして、周囲の暗がりも次第に明るくなって来た。その時は、直税部の電車通りに面した窓を通して、細工町の広島郵便局(爆心地)では、点々と三メートルから五メートルもある火炎が上っていた。日本銀行支店の建物には、火が廻っている様子もない。逃げるなら逃げる用意をしてと思って、自分の室にとって返し、先ず眼鏡が飛ばされているので、カバンの中に用意していた替え眼鏡をと思って、カバンを探したら、運よく見つかった。眼鏡をかけ、書箱の中に用意していた靴に履きかえ、外の状態を見て驚いた。

道一つへだてた隣りながら、今まで見えなかった国泰寺の池が見えた。青々としていた木々も竹やぶも裸になっている。これは一トン爆弾の至近弾で、ひどくやられたのだと思った。その時は、大手町から県庁方面にも二〇メートルおき位に、火の手が一面に上っていた。これは大変だと思って、鎧戸を下げようと一通り廻ってみたが、爆風にこわされてどれもこれも駄目だった。局長の机も、総務部長の机も窓ぎわの方はよいが、前の足は押しつぶされていた。局長・総務部長が席におられたら、一撃で即死であつたらう。直税部の室は、大部分の物が廊下の方に吹き寄せられていた様に思う。佐久間事務官の椅子と思われるが、背の部分が窓枠の高いところに引っかかっていた。どうしてそんなことになったのか、まったく訳がわからない。直税部長席前には、高田さんが仰向けに倒れていた。抱き起して呼んでみたが、眼を白黒させているのみで、一向に通じない。駄目らしい。秘書の室に行ったら女の人が二人うつぶせになっていたが、顔を知らないで誰だかわからなかった。官印をと思って、宿直引継ぎのカバンを探したが、机の上のものは皆吹き飛ばされていた。机も重なりあうほどになっていて、何処にあるのか、探すこともできない。もう一度、机の上を渡って帰る気もしないので、間税部のところから陸屋根に出た。そこには山崎さん、笹原さんがいて、比治山方面の焼けるのを見ていた。

理財部の室では、赤井課長が腕が折れたと言つてうなっている。森田さんが顔と肩に大きな負傷をし、机の下でのたうっている。金森さんも顔や頭や腕に相当負傷して、白島へ一緒に連れて帰ってくれと言っている。自分も頭・両手・腕などを相当やられているが、幸いに出血が止まったので、金森さんの腕と、赤井課長の腕を、部長や局長の椅子カバーを引き裂いてそれぞれに繃帯した。僕の防空カバンには繃帯も薬も入っているのだが、どこに飛んだか見つからない。上衣には大切なものが入っているのに、室中探したがどうしても見つからない。水筒も鉄帽も見つからない。仕方がないので、貯金通帳・ハガキ・非常食の米と煎豆と、着替えのシャツなどを、カバンに詰めて持ち、赤井課長・金森・森田・山崎・笹原さんなどを誘導して、階段を降りた。

ガラスはかなり細く割れ、机の上の板ガラスもそのまま細かく割れていた。戸棚は窓のところで引き裂かれ、背だけが残っていたように思う。文書の分類棚も、壊れてどこかへ飛んでいて見えなかった。自分の背のところに掛けていた上衣・水筒などは、ついに見つからなかったのだが後に焼跡を見たら五、六メートルも飛んで焼けていた。山田さんの秘蔵の刀剣長船も、戸棚の中で焼けていた。こんなときには妙なものが見つかるもので、窓に冷やしておい

た弁当箱が蓋がとれてつぶれていた。

途中、階段に倒れていたのが、山田泰貞さんであったとか。一階に降りて、机の山を越えて通用門に出て、地下室に入る考えであったが、真暗なのと、火が入った時のことを考えて、通用門付近に休ませていた。そのうちに火が迫り、山陽記念館の潰れた事務所が燃えはじめ、一人銀行の元気な人が、井戸水をかけているので、これに協力したり、水を求める負傷者に、潰れたヤカンや掃除バケツなどで、井戸水を汲んで来て飲ませたり、出血の多い森田さんなどには、うがいをさせて吐き出させたりした。飲みたいのをよく我慢してくれた。

火は迫り、電車道に停まった電車に火がついて、もの凄い炎をあげて燃え、三階の窓の高さも越えていた。そのうちに、三階の室に火が入った。秘書係の方から火が入ったという人もあったが、自分は電車の火から、火の粉が直税部の飛散した紙についたものと思う。働ける人が二、三人室に残っていたら、三階は焼かずにすんだらと思うが、あの場合仕方がない。ともかく建物の外に出なければならないので、持って来た上衣を赤井・金森・光永さんに一枚ずつ分けて着せ、自分でも一枚着た。井戸水で濡らした上衣を被っていたが、とても熱い風が吹いて来た。国泰寺の墓地の中に避難して、三階の火災を見ていた。あの火の中に残して来た人たちのことを思わないでもなかったが、頭がマヒしたようで、ただ、うつろな気持で眺めていた。正直なところ、あの場合、死人を見ても別に感情を動かされるようなこともなかった。

そのとき、世にも珍しいお湯の雨を体験した。相当の夕立であった。墓石を枕に寝ていたが、三階の火も、二階の一部で止まったようだし、雨があまり降るので、また通用口に帰った。正保さんのドロコノ姿も見た。金森さんも森田さんも帰って来た。やっと安心したら、動くのも嫌になり、通用口の階段付近に寝ころんでいた。机の中から持ち出した眼薬も膏薬も、ピンがこわれて駄目になっていた。その間にも、森田さんや金森さんをはじめ、ゴタゴタイた負傷者は皆水を要求した。動ける者が水を汲んで来て、みんなで廻し飲みしていた。

どのくらい時間が経ったかわからない。時計はカバ-が傷ついて、中のガラスが割れ、止まっていた。このとき戦時施設課長の相原勝雄さんが心配して来て、銀行の人と一緒に、黄色い布で重傷者の繃帯をされた。次に伊達宗彰局長が来られて、「すぐに医者連れて来るから安心しろ。」と言われ、ほっとした。

夕方近くだったろうか、専売局の女医さんと看護婦さんを連れて来られて、森田さんの傷の手当をし、注射をせられたが、まもなく息を引取った。笹原さんはうずくまったまま、こと切れていた。恐らく自分たちが外に出ている間に死んだのだろう。光永さんには直税部の室の入口で遇ったような気もするし、そうでないような気もするが、顔が半分むけ、アゴがとれたと言っていたので、これは無理かと思ったけれど、よく生き残られた。

その晩は、動ける者は金庫の前に寝ろということなので、金庫の前で寝て、翌日午後、初めて衛生兵の手当を受けた。そのころまで食欲もほとんど起らなかった。その後、宿直室で寝ておられた赤井課長の看護にあたった。

八月八日、吉田の警察署長さんが見舞いに来て、代筆で自分が危急の際持出した血染めの八ガキを書いて、妻あてに出してくださった。この八ガキがなんと一カ月余りして、東京の妻のもとに配達された。(以下略)

第二項 株式会社芸備銀行...348

(現在・株式会社広島銀行)

一、当時の概要

概要

所在地 本店広島市紙屋町一七番地

建物の構造 ルネッサンス式

鉄筋コンクリ - ト五階建

建物面積 延一、六六六坪六

事業種目 銀行法による普通銀行業務

在籍従業者数 二四五人

代表者 取締役頭取・橋本龍一

本店営業部長委嘱・新沢憲造

爆心地からの距離 約二五〇メートル

市内各支店

支店名 * 所在地 * 被爆時の在籍従業者数

塚本町支店 * 広島市塚本町 * 二五人

平田屋町支店 * // 平田屋町四二 * 一八

銀山町支店 * // 銀山町 * 二八

京橋支店 * // 京橋町六一ノ四 * 一九

宇品支店 * 広島市宇品町御幸通り二丁目三二八 * 一七人

大手町支店 * // 大手町九丁目八八 * 一四

舟入支店 * // 舟入本町二二一 * 一五

榎町支店 * // 榎町三二ノ一 * 一八

横川支店 * // 横川二丁目六二八 * 二三

己斐支店 * // 己斐町三二七 * 一〇

大河支店 * // 旭町一三四四ノ九 * 三

向洋支店 * // 仁保町字青崎一〇〇ノ一 * 七

仁保支店 * // 仁保町字西一ノ割一 * 五

皆実町支店 * // 皆実町三丁目九四九ノ一 * 八

計二一〇人 (本店共合計四五五人)

二、疎開状況

非常事態の発生に備えて、重要書類は県下双三郡三次町の当行三次支店へ疎開していた。

また、日常取引の出入り、および残高は各口ごとにいちいち日報を作成して、即日これを三次支店へ送付する方法を実施した。

三、防衛態勢

芸備銀行職域義勇隊を編成して、市内の建物疎開作業に出動した。

銀行自体の防衛組織としては、義勇隊を編成し、一〇数人が昼夜交替の勤務をおこなって防空に備えた。

また、消防隊を設置して、消防ポンプを常備し訓練もしばしばおこなって非常の場合に備えた。

四、避難計画

万一の場合の避難については、本店至近の西練兵場、ならびに本店の地下室に避難することに定められていた。

五、五日夜から炸裂まで

銀行内の防空義勇隊が、五日夜がた交替して、同夜頻発される警告ごとに、それぞれ部署について警戒にあたった。

六日夜明け前の午前七時九分に発令された警戒警報が、同三十一分後に解除されたあとも、全員店内にいたものようであり、その全員が殉職している。

芸備銀行職域義勇隊は、当日朝、午前七時三十分、六〇余人が隊をととのえて市内水主町の建物疎開作業に出動したが、これもまた全員死亡した。この頃、県庁を中心とした水主町・天神町一帯にかけて、各地各所から勇義隊が出動して、どしどし疎開作業をおこなっていたが、当行義勇隊も出動命令を受けたのであった。

本店では、毎週月曜日の午前八時半、内玄関の中庭に全行員集合して、重役の訓示、金融人としての誓詞を斉読して士気を鼓舞していたが、この日も月曜日であったから、これに参集の途次、被爆罹災した行員が多かった。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

(一) 人的被害

被災死亡者 一四四人

(このうち職域義勇隊で出動し、死亡した者六〇余人)

本店で、建物の下敷きとなって死んだ行員は、猛火に焼かれて半ば白骨となり、鎮火後の収容に際しても、男女の

区別すら判らないようなありさまであった。その死体は日常勤務していた位置から推定して、当人の遺体と認定するほかに方途もなかった。戦慄の極みながら出勤者のほとんどが、避難する余裕もなく一瞬のうちに、それぞれの持場において殉職したのである。

(二) 物的被害

警報発令のつど、本店全館の窓のシャッターを閉めることになっていたが、閉めていたのか、開けていたのか不明である。ただ現場にはシャッターも、その鉄枠も共に、すべて爆風によって室内に飛散していた。

そうして内外から一せいに起った猛火によって、鉄骨コンクリートの外郭だけが残り、内部装飾や備品・家具・什器など一切のものが灰燼に帰ってしまった。鉄装窓枠や金具類もアメのようにゆがんだり、折れたり、つぶれたり、へちゃげたりして足の踏場もなかった。その中で行員はみな半焼けの状態で死亡していた。火災の発生原因は、強烈な放射熱線によるもので、可燃性のものは到るところで自然発火し、燃えあがった。

本店は、鉄骨コンクリートのみを残して全焼したが、堅固な金庫は、外扉の鉄板(厚さ五〇センチメートル)の表面が熱気で小波を生じた程度にとどまり、扉の開閉も故障なく、金庫内の収容物はすべて異常なかった。

突然の原子爆弾炸裂、一瞬の破壊と発火炎上で、手のほどこすすべなく、本館が何もかも焼けて完全に自然鎮火したのは、八月十日ごろであった。

焼失した各支店の鎮火も、ほとんど全焼による自然終息で、だいたい六日夜から七日にかけて焼け尽くした。

炸裂後の本店内状況は惨々たるものであった。コンクリート建ての内部の白壁はすべて剥落して荒肌むき出しとなり、天井の飾りつけは全焼し、各所に鉄筋や鉄板が黒く焼けくすばって露出してした。いろいろな所に多量の大理石が貼りめぐらせてあったが、それらもほとんど焼けて剥げてしまった。

各室の窓枠・金具は、爆風で室内に飛散し、ガラスは残らず粉碎された。

七、被爆後の混乱

一瞬、市内が炎のつぼと化し、当行の行員も百数十人を失ったさなか、負傷した行員を救う応急的な手当も、まったくほどこすすべがなかった。

わずかに疎開作業出動中の隊長玖島憲二秘書課長と女子行員一人が、全身火傷の身で帰行途上、たまたま健在だった行員に出あい、事情を報告したあと、広島赤十字病院へ行き、治療をはかったが、ついに死亡した。

被爆の六日と、翌七日は壊滅の混乱で事務は全然執れなかった。八日になってはじめて、焼け残った日本銀行広島支店内の一面を借受け、預金者のために応急の開店をおこない、無通帳のまま、客の要求する金額をそのとおり払い出したのである。

以後、約五十余日を経て、当行本店に復帰し、荒廃の店舗窓に荒板を打ちつけて形を整え、逐次銀行業務の正常化を進めていった。

戦時中に、当行の広島地区諸店舗は、すべて日々の諸取引きの出入りと、その残高とを三次支店内の監査部へ日報して、万一に備えていたため、三次支店からその資料によるカードを持参して、辛うじて業務を遂行した。

ともかく、被爆後一、二年間は市内一帯さえぎるものもない焦土のなかでは、西方己斐方面から真正面に当行本店の石柱の並んだ建物が目近く望見された。

八、復旧状況

復旧状況

被爆後の、当行施設と業務の復元経過は、概略つぎのとおりである。

- (一) 昭和二十年八月八日日本銀行広島支店営業室で開店
- (二) 同年九月二十日本店焼跡を片づけて、三階で本店部執務開始
- (三) 同年十月九日営業部が日本銀行広島支店から本店へ復帰
- (四) 昭和二十三年二月七日仮営業所の建築工事に着手
- (五) 同年五月十五日右の仮営業所が落成
- (六) 同年七月五日本館修理のため、仮営業所に移転して営業
- (七) 昭和二十四年四月一日本店改修工事に着工
- (八) 昭和二十五年七月右第一期工事完成

(九) 昭和二十六年六月三十日右第二期工事完成

被爆翌日の七日、市内に居住している行員に対して出勤命令が出された。

そして、八日から日本銀行広島支店営業室を借りて預金払出しが開始されたが、そのときの出勤行員は僅か一三人であった。

一三人が、破損した機の配分を受け、本店のほか、焼失・大破した市内七か店分とともに、北側二列分を使って業務をおこなった。

本店金庫室は、扉の加熱を考慮してすぐには開かず、八月二十三日になって、ようやく慎重に開扉した。

日本銀行広島支店での払出し第一日は、日本銀行借入金五万円で発足し、八月十五日までに借入合計一九〇万円となった。もとより預金元帳カードもなく、無証憑の支払は容易ではなかった。

連日、客が殺到して預金引出し一本の業務の処理と、これに続く新旧円の交換・財産申告・金融緊急措置令の発動など、つぎつぎによく難関を切抜けたが、爾来、一〇余年間預金の不当支払など一件の訴訟ざたもないことは幸いであった。

十一月十三日、はじめて本店に電話が一本(広島Ⓜ一七一番)架設開通したが、まだ本店内に私設電話交換台はできなかった。

なお、昭和二十一年二月二十五日から同三月七日までのあいだ、日本銀行預入令に基づく旧券の預入れ、ならびに新券引替えのため、臨時に次の店舗を増設した。

記

(一) 芸備銀行段原臨時出張所 広島市段原中町四〇一

(二) "牛田" "牛田町二五八

(三) "広島駅前" "松原町一〇四九ノ二

(四) "尾長" "尾長町片河五九九

(五) "新庄" "三篠本町四丁目二一五〇

(六) "横川" "横川町三丁目二一

(七) "高須" "庚午町二八

(八) "観音" "南観音町二一

(九) "舟入" "舟入本町三一

(十) "大手町" "大手町八丁目一五

(以上、市内設置分のみ)

その他戦時中の接收、ならびに原子爆弾の被災によって一時閉鎖した各支店の店舗の状況は、つぎのとおりである。

塚本町支店 * 昭和二十二年四月三十日、猫屋町支店(現在の本川支店)として開設。

銀山町支店 * 昭和二十年七月十六日、警察署に接收され、事務は本店に集中していたが、昭和二十五年十二月十一日に再び開設。

京橋支店 * 被爆後閉鎖し、事務は本店に集中していたが、昭和二十二年三月一日に再び開設。現在の広島駅前支店。

大手町支店 * 被爆後閉鎖、事務は本店に集中していたが、昭和二十六年八月八日に再び開設。

舟入支店 * 昭和二十一年十一月十五日に再び開設。

横川支店 * 被爆後閉鎖、事務は本店に集中していたが、昭和二十一年十一月十五日再び開設。

己斐支店 * 被爆後すぐの昭和二十年八月二十五日に復興開店。

大河支店 * 被爆で破損したが、一部営業を継続。

向洋支店 * 被爆の損傷軽微、営業はずっと継続。

仁保支店 * 被爆の損傷軽微、営業はずっと継続。

皆実町支店 * 建物の一部が被爆罹災したが、昭和二十年八月二十日早くも復興開店。

概要

所在地 広島市上流川町八五の一

建物の構造 鉄筋コンクリート建・地上三階・

地下一階

一階 - 営業室・支店長室・会議室

・金庫室・宿直室・便所

二階 - 図書室・宿直室・便所

三階 - 空室(三部屋)

地階 - 食堂・倉庫・汽罐室・女子更衣室・便所

建物面積延七七八坪

事業種目 銀行業務

在籍従業者数 九九人(そのうち、応召者一四人)

被爆時の出勤者数 約三〇人

代表者 支店長・緒方東道

爆心地からの距離 約一キロメートル

二、疎開状況

店舗が堅牢な鉄筋コンクリート建てであり、無論原子爆弾などということは夢想だにしなかったため、当行では疎開をおこなわなかった。ただし、現金・帳簿・重要書類などは、すべてこれを金庫室に保管して万全を期していた。

三、防衛態勢

当行行員八五人、および勤業証券広島支店員一人、計九六人をもって、日本勤業銀行広島支店国民義勇隊を編成し、防衛にたずさわる諸態勢をととのえていた。

警戒警報の発令と同時に、重要書類などは金庫へ格納し、来店者はただちに地下室へ誘導避難させ、隊員は敏速にそれぞれの部署について警備をかためた。

また、夜間に警報の発令があった場合は、営業所に、比較的近いところに居住している行員が駆けつけ、警備要員として、営業所へ参集し、これが防備にあたった。

四、避難計画

当行職域義勇隊が、非常事態に備えて防備をかためると共に、市中の建物疎開作業現地へも出動していた。

非常の際の避難場所としては、地理上の関係、および建物構造の関係から、店舗内の地下室に避難することにきめられていた。

五、五日夜から炸裂まで

五日日曜日の午後九時二十分、警戒警報発令と同時に、支店長以下警備要員一二、三人が駆けつけ、宿直員三人とともに営業所の警戒にあたった。

午後九時二十七分、空襲警報発令。さらに深夜また空襲警報が発令された。しかし、これが解除になったのが、まだ夜中過ぎであったから、駆けつけた要員の大部分は、そのまま銀行に泊り、夜明けを待って、それぞれ帰宅した。

六日午前七時九分、またもや警戒警報が発令されたので、宿直員はただちに警備についたが、まもなく解除になった。

そして、早い出勤者がチラホラと顔を見せはじめていた。

すなわち、被爆直前の営業所内には、宿直の男子行員三人と、すでに出勤して来た女子行員四、五人が、机上の清掃などをおこなっていた。

午前八時十五分、青い閃光と異常な衝撃を感じてから、しばらくのあいだ、五分か一〇分間ぐらいであったが、みんな失神状態となった。ふと気がついて見ると、視界はまっ暗やみで、そのままじっとして、状況の推移を見守った。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

(一) 人的被害

在籍行員総数九九人のうち、一四人が応召していて、実人員八五人の被害状況は次のとおりである。

即死者八人

負傷者一五人

行方不明者一二人

計三五人

しかし、行方不明の全員と、負傷者のうち一二人の計三二人が、後日、死亡している。

特に悲惨であったのは、六日朝、市内水主町の広島県庁北側の建物疎開作業に出動していた当行職域義勇隊約二四人で、このうち八人は即死、一二人は行方不明となり、いずれも遺骸はわからないままとなった。

その他の負傷者四人も数日後につぎつぎと死んでいった。

また、店内にいた八、九人の行員は、失神状態から漸く正気づき、薄暗がりの営業所内を辛うじて見わたしたときには、もの凄く散乱した器物が累積し、容易ならざる事態の発生が直感されたという。その朝早く出勤していた女子行員四、五人は、すみやかにそれぞれ安全地域にむかって脱出避難し、無事であった。

市金庫(広島市庁舎内の営業所)に出向のため、早朝、上流川町の当店に立寄り、現金その他必要書類入りの手提カバンを携えて出た市金庫主任は、山口町電車停留所で電車を待合せ中のとき被爆し、顔の左半面に大火傷を負い、重態の身をもってそのまま郊外府中町の親戚へたどりついた。以後六か月間臥床の後、山口県俵山温泉での転地療養約一か年を経て体力を回復、ようやく復職することができた。

五日夜以来、宿直在店していた男子行員三人のうち一人は、午前十時ごろまで店内に踏みとどまり、出勤途上、負傷して辛うじて銀行にたどりついた三人の重傷男子行員を引連れて、流川町筋を多勢の避難者に押しまくられながら、北を指して逃げた。途上一人は落伍し、また一人は自由行動をとって離れたので、残りの一人を連れて泉邸(縮景園)の裏河岸に出た。そこから渡河して牛田にのがれ、同人を仮設陸軍治療所にあずけ、みずからは北郊戸坂の知人宅に避難したのであった。

この行員が、火災の猛り狂う店内に踏みとどまって活躍した最後の一人であった。

(二) 物的被害

建物の被害は、営業所が堅牢な石造鉄筋コンクリート建てであったから、その外郭は異状なかったが門扉・窓枠・シャッターなどはすべて破壊され、階段の昇降も困難なほどであった。

備品類は、地下室にあった机・椅子の一部を除き、他のすべての物は一瞬に叩きつけられたように破壊されていた。ただ、金庫室だけは完全で、異状なかった。

火災は、最初に流川通りに面した二階窓口(爆心側)から火災が噴きだした。これは、熱線によって窓ぎわに近いカーテン・机・椅子などの可燃性物質が、自然発火したものであったが、漸次燃えひろがり、建物内全面におよんだ。そして火災は、地下室の一部と金属部分を残して他の一切のものを焼きつくした。なお、金庫室は火災をまぬがれ、収容物件すべてが、完全に無事であった。幸い開扉前であったから助かったのである。

火勢は猛烈をきわめ、宿直員と早朝出勤者が安全地帯へ脱出避難したあと、激しく燃え続けて、同日午後四時ごろ、男子行員二人が決死で駆けつけたときには、まったく手のほどこしようもない状況であった。火は翌七日の夕方まで燃え続けて何もかも焼きつくしたうえ、ようやく自然鎮火した。

炸裂後、熱線による発火で、ついに店内を焼きつくした火災は、一般の火災とは全く趣を異にし、まさに地球最後の日を思わせるものがあったという。

七、被爆後の混乱

あやうく死からまぬがれた生存行員は、総力をあげて能うかぎり行方不明者や重傷者の捜索にあたった。

手分けして似島、府中・海田などの各収容所へ出むき、懸命に安否の掌握をはかった。

ことに支店長の捜索には、当時市内幟町にあった支店長宅跡の発掘を、当行三次支店からの応援を求め、十日間にわたっておこなった。結局、同社宅跡に男女の見分けもつかない屍体を掘り出し、医師の判定を求め勇子(支店長)と認定した。警察署の死亡確認書を貰い受けて、その屍体を火葬に付し、遺骨は郷里へ送りとどけた。

このように支店長以下三五人にのぼる行員の被爆死や負傷、あるいは後日死亡の大打撃を受け、建物も破壊焼失したため銀行業務は機能を一時まったく停止せざるを得なかった。

八、復旧状況

復旧状況

鉄筋の建物は外郭だけ、そのまま残っていたが、木部はすべて灰になり、鉄部も飛散、折損、焼損していた。内からも外からもまる見えとなり、風は吹きとおしであった。しかし、罹災市民の当面の必要経費に便宜をはかる必要があり、各銀行とも袋町の日本銀行広島支店内を借りて、応急営業所をひらいたが、当行も八月八日からいち早く同所で業務を開始した。

従業行員は、死亡者・行方不明者・負傷者・出務不能者を除けば、勤務できる者は僅か一〇人あまりであったが、預金払戻し業務の再開とにかく取りかかり、約一か月間、日本銀行広島支店内での営業を続けた。大混乱のうちに、夏が過ぎ、秋が過ぎ、たちまち寒い冬が向って来たので、とりあえず窓や入口に防風装置を施さねばならなかった。そこで佐伯郡廿日市町にあった木材配給所から、必要最少限度の木材の配給を受け、大工をやとって一時しのぎの応急修理をおこなった。こうして、ようやく上流川町の原地建物に帰り、自店での営業を再開した。このころの従業行員は、男子七～八人、女子六～七人の計一四人前後という僅かな人数であった。

また、その当時の店内営業室は、被爆者の看護所、および屍体収容所となっていたため、現在の南会議室、および支店長室を営業室に充てて執務した。

その後、清水建設株式会社の請負で、建物全部にわたる補修工事をおこなったが、被爆による亀裂が諸所にあり、地下浸水と雨漏りがはなはだしく、これが完全復旧までには数年を要した。

第四項 株式会社日本貯蓄銀行広島支店...377

(現在・株式会社協和銀行広島支店)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市大手町四丁目一三～一五

建物の構造 石・煉瓦造・三階建

建物面積延一九八坪二五

一階 - 営業室・倉庫室・応接室・

宿直室・庶務員室・便所

二階 - 外務員室・応接室

三階 - 会議室・ホ・ル・重役室・書庫

事業種目 貯蓄銀行業務

在籍従業者数 四〇人

被爆時の出勤者数 四人(支店長含む)

代表者 支店長・小牧定

爆心地からの距離 約五〇〇メートル

二、疎開状況

当行の金庫室は、当時、非常に堅牢な安全度の高い構造であったから、重要書類すべて金庫内に格納していた。被爆に際しても、金庫室だけは無事に残り、内部の保管物件は全部完全であった。

預貯金および貸出金関係の帳簿類は、随時、写しを作成して呉支店に保管せしめ、非常の際に対して備えた。また、美術的価値のある保護預りの絵画類は、適宜遠隔地へ疎開していた。

三、防衛態勢

全行員により職域防火班の編成をおこない、緊急時の対策についても、各自の分担を定めて訓練し、万全の態勢をととのえていた。

四、避難計画

このことについては、当時の資料が焼失しているため不明である。

五、五日夜から炸裂まで

五日は日曜日であったから、その夜、店内にいた者は宿直勤務にあたっていた行員清宗弘之、および住込みの行員川口熊吉の二人だけであった。

また、店舗西側に隣接の銀行社宅に、支店長小牧定夫妻が在宅中であった。

深夜午前〇時二十五分、空襲警報が発令され、店内にいた清宗・川口二人の行員は、ただちに建物内部、および周囲を巡視し、灯火の遮蔽・防火器材の点検など、平素から定められていた処置をとって待機した。

格別の異状もなく時間は経過して夜が明け、午前七時すぎ、再度の警戒警報が発令されたが、これは短時間で解除された。

前夜来、再三の警報発令で緊張につつまれた重苦しい一夜が明けて、快晴の朝を迎えた。上空には真夏の太陽が輝き、地上の気温は次第に上昇を続けていた。

午前八時ごろ、店内では平常どおり、住込み行員が清掃を終えて、宿直員とともに、宿直室の付近で休憩していた。

女子行員が一人(氏名不詳)、すでに出勤して、営業室内の整理をおこなっているようすであった。炸裂の八時十五分までに出勤していた者は、この女子行員が一人だけで、他の行員はいずれも出勤の途上にあつたものと思われる。

なお、六日の朝は、市内の建物疎開作業に、この銀行から職域義勇隊としての出勤はなかった。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

(一) 人的被害

即死者一九人(支店長・小牧定以下、男子行員一〇人・女子行員九人)

負傷者一六人

計三五人

炸裂直後、一瞬にして崩壊炎上した店舗内、および隣接社宅内にいた者五人は即死した。後日、焼跡の整理をおこなった際、遺体は、白色の粉灰状に化した状態で確認することができた。

すなわち、小牧支店長夫妻・行員清宗弘之・川口熊吉、これに氏名不詳の女子行員一人の計五人である。

(二) 物的被害

店舗の位置が、爆心地から僅か五〇〇メートルの場所であり、原子爆弾の炸裂で強烈な爆風爆圧の直撃をうけた。

爆風に直接面し建物の、二階以上の部分は、上空からの大衝撃により、ほとんど一瞬のうちに崩壊した。

建物の構成材料である石材・煉瓦・コンクリートなどは、大小無数に破壊され、建物敷地内は勿論、東正面道路上、あるいは南隣家の敷地内など一面に落下散乱し、まったく惨*たる光景を出現した。

爆心点に近かったため、爆風による破壊と、熱線による発火とは同時であった。核爆発によって発生する強烈な熱線は、放射線状に、周囲にひろがったが、上方からの爆風で建物が崩壊するとき、同時に内部の木製調度類など可燃物が、いっせいに発火し、たちまち炎上、猛烈な火炎となった。

猛炎は、建物内のすべてを焼きつくしたが、幸いにして金庫室内だけは完全に残存したのであった。

防火機能も壊滅し、消火活動など思いもよらぬことで、何ら手のほどこすすべもなく、ただ自然鎮火を待つばかりであった。火災はほぼ二日間にわたって燃え、すべての物を焼きつくして終息するに至った。

七、被爆後の混乱

日本貯蓄銀行本店から、行員が派遣され、また、緊急物資の送致などの救援措置がとられた。しかし、極度の物資不足は全国的な現象であったから、救急活動も十分におこなうことができず、きわめて困難な状態であった。

行員四〇人中、即死一九人・負傷一六人、また、行方不明となった行員も多数あって、非常支払開始当初に集合した者は、僅か数人程度であったから、全くの大混乱に陥った。

死を免がれた行員も、大部分が縁故先などへ四散したから、これらの人員補充にあたって、広島地方出身行員の、当地復帰を計るとともに、現地での行員の採用に努めることとした。

建築物が灰燼に帰したため、応急的にバラック建て仮店舗の建設を計画することになったが、とりあえず、日本銀行広島支店内の一隅を借用して、臨時店舗とした。しかし什器備品類も一切が焼失していたので、さしあたり最少限度必要なものを、苦心の末やっと準備した。

金庫室だけが残存したが、鋼鉄製の外扉、およびマンホール扉は、ともに高熱によって変形し、開扉不能になっていたから、被爆の数日後、熊平金庫店にたのみ、応急補修をほどこし、ようやく開閉可能となったが、金庫内の格納物は無事であった。

八、復旧状況

復旧状況

被爆十日後の八月十六日から、当時の市内各銀行とともに、日本銀行広島支店内でそれぞれの区画を設け、僅か数人の行員で、非常支払業務をおこなった。店舗は焼失したが、金庫室が残ったことは、この非常支払いに際してきわめて好都合であり、事務もおおむね円滑に推進された。しかし、この日本銀行広島支店も、屋上部の破損がいちじるしく、降雨の場合は店内で雨ガサを使用することさえあった。

支払開始後、一、二か月間は、連日払戻し請求客が多ぜい押しかけ、時には数百人の客が、延々と列をつくることがあった。

一方、元地建物の焼跡を整理し、石造部の残骸を利用して仮店舗の建設に着手することにした。しかし世情はまったく混迷のさなかで、復旧建設資材の入手も困難をきわめ、仮店舗といえどなかなか思うように進捗しなかった。ようやく中国配電株式会社の真田広島支店長の斡旋を受け、共立組によって建設をおこなうことができた。

昭和二十一年四月、待望の平家建て板張り、ソギ葺のバラック(約二〇坪)が建設され、日本銀行広島支店内の臨時店舗から、これに移転した。

被爆直後数人であった行員も、その後逐次増加し、このバラック建てに移転したときには、十数人の行員がいた。

当時の役職行員は、住宅事情などの関係で当地出身者をもって充当することとなった。すなわち、山下愛次支店長は、被爆時には横須賀支店長であったが、広島出身であることから、昭和二十年八月発令を受けて、急遽赴任してきた。

また、絹谷正雄次長は、東京の池袋支店代理であったが、たまたま広島に帰省中であったところから、広島支店の復旧に協力を続け、そのまま当店次長に就任するなど、この地出身者を極力任命し、その他の新行員も地採用で補充し、男子七人、女子二人を採用した。

第五項 株式会社帝国銀行広島支店...379

(現在・株式会社三井銀行広島支店

同 第一銀行広島支店)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市革屋町三二番地(現在本通り)

建物の構造 鉄筋コンクリート二階建

建物面積三五三坪二五

事業種目 普通銀行業務

在籍従業者数 六六人

被爆時の出勤者数 八人

代表者 支店長・沓掛真

爆心地からの距離 約五五〇メートル

沿革概要

昭和十七年十二月、日本銀行総裁を仲介とする三井銀行からの、再度の合併交渉に応ずる決意をなし、同月二十八日に合併覚書の調印を了し、昭和十八年三月二十七日、新立合併の方法により公称資本金二億円、預金残高五七億円の株式会社帝国銀行を設立し、同年四月一日に開業した。

帝国銀行広島支店は、革屋町三二番地三井銀行広島支店で業務を取扱った。

なお、帝国銀行大手町支店(元第一銀行広島支店)は、昭和十九年四月八日、その業務を広島支店に移管して廃止となった。このあとを農林中央金庫広島支所が借用し、原子爆弾の被爆当日まで営業していた。

昭和十九年八月、帝国銀行はさらに一五銀行を合併し、日本最大の銀行となった。

昭和二十年八月六日の状況については後述のとおり、爆心地に近くて被害ははなはだしく、大金庫のみ辛うじて助かっただけという惨禍をこうむった。

被爆の翌々日八日、焼け残った日本銀行広島支店において、生き残った行員によって業務を再開した。

昭和二十三年十月、再建第一銀行と新帝国銀行(現在の三井銀行)に分離した。

第一銀行広島支店は、原地大手町一丁目十八番地に復帰、さらに昭和二十九年四月十二日、八丁堀七十五番地に移転した。

二、疎開状況

日本製鋼所が安芸郡中野村に疎開していたので、そこへ一緒に伝票の写し、顧客名簿などを疎開していた。通常事務に必要な重要な文書は下関支店へも疎開していた。

三、防衛態勢

建物の窓は、すべてシャッターを降ろし、ガソリン・ポンプを常備していた。また防火用水として、構内に大きな井戸(直径約三メートル位)を掘った。井戸水は、消防ポンプが四、五〇分間は使用に堪える豊富な水量であった。

四、避難計画

被災した場合は、近くの袋町国民学校へ避難するようあらかじめ指定していた。また、銀行内の営業場の地下に防空壕を構築(収容能力三〇人ぐらい)して椅子をならべていた。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜、六人の行員が当番制によって宿直し、警戒警備をしていた。

六日朝の警報解除後も引続き当番が在留していた。

この他、すでに小使い四人、女子行員三、四人が出勤しており、全部で銀行内には一二、三人の行員がいた。

六、人的・物的被害

人物・物的被害

(一) 人的被害

出勤途上被爆即死者 一八人(男五・女一三)

在店被爆、帰宅後死亡者 三人(男二・女一)

在店被爆、店外へ脱出後死亡者 九人(男五・女四)

応召中被爆死亡者 二人(男二)

計 三二人

炸裂当時、構内にいた一二、三人は辛うじて一応脱出したが、その後みんな死んでいったので、当時の状況や、炎上した有様は知るよしもない。

(二) 物的被害

爆心地から五五〇メートルの近距離にあったから被害は甚大であった。玄関入口の鉄製の重い扉は、爆風によって店内側へ、また東側入口の両開き扉の片方は同じく店内側へ、片方は街路側へ向ってわん曲していた。

窓のシャッターはすべてねじれ、天井は無残にも落下した。外郭も西北側上部がひどく破壊された。

店内からの直接火災は発生しなかったが、寸時にして近隣からの延焼により炎上、ビルディングは大破した鉄筋コ

ンクリートの外郭のみを残して、全焼のうえ自然鎮火した。

建物は大破全焼であったが、アメリカのモスラー金庫会社製の現金、及び帳簿格納用大金庫は、完全に残り、重要文書保護預り、その他の確保ができたため、被災後の営業再開が辛うじて円滑に進められた。

当時、大金庫の責任者であった沢正義出納係長が、被爆前日、たまたま大金庫内に備えられた水瓶（直径一メートル深さ一・五メートル）に満水していたのであるが、被爆後の十月十七日、金庫を開扉してみると、この水瓶の水が半分に減っていた。これは内臓物が安全であったとはいえ、金庫内部も相当の高熱に熱せられたことを物語るものである。

七、被爆後の混乱

被爆後・東京本店や大阪支店から救急用薬品や水をろ過する薬品などを送って来たが、使用するすべがなかった。

銀行はその機能を失ったが、生き残った行員や他の各地支店からの応援を得て、被爆の翌々日の八日から罹災者のために、焼け残った日本銀行広島支店内を借りて、他の銀行と共に営業を再開した。主として預金の応急払出し、火災保険金の支払い、国庫債券・勸業債券の買入れをおこなった。中には逆に預金に来る人もあった。

八、復旧状況

復旧状況

- (1) 昭和二十年八月革屋町営業所被爆罹災により日本銀行広島支店内に仮営業所を設置。
- (2) 昭和二十年十月大手町一丁目の三井物産株式会社跡（現保証協会）を改装の上、仮店舗として営業。
- (3) 昭和二十二年二月同町の元帝国銀行大手町支店跡に移転。
- (4) 昭和二十三年十月播磨屋町に仮店舗を設置移転。
- (5) 昭和二十五年五月革屋町三番地の原地の店舗修築なり復帰。
- (6) 昭和三十七年七月紙屋町の現在地に新築移転。

第六項 株式会社安田銀行広島支店...384

(現在・株式会社富士銀行広島支店)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市平田屋町四番地
建物の構造 鉄骨煉瓦建・本建築三階
建物面積延約六〇坪
事業種目 普通銀行業務全般
在籍従業者数 詳細不明
被爆時の出勤者数 二四人
代表者 支店長・吉川良作
爆心地からの距離 約六〇〇メートル

二、疎開状況

万一の場合に備えて、山口県柳井市にある安田銀行柳井支店へ、伝票その他の重要書類の写しを疎開していた。

三、防衛態勢

市内の中心繁華街に店舗があり、周囲は家屋密集地帯であったから、防火の点には特に力を入れて、常時防火態勢に完備を期していた。

四、避難計画 詳細不明

五、五日夜から炸裂まで

五日（日曜）夜の宿直警備員として、支店次長一人、宿直行員一人、準行員一人が警備にあっていた。

夜間、警備発令のつど、部署について警戒した。翌六日夜明け後に警戒警報が発令されたが、すぐ解除になり、早い出勤者を迎えていた。

被爆直前の営業所内には、次長一人、支店長代理一人、および男子行員五人程度、女子行員五人程度と準行員一人とがいて、七時半すぎに警報が解除されたので、平常と別段変わったこともなく開店の準備をそれぞれがおこなっていた。

なお、当行では職域義勇隊の建物疎開作業出勤などのことはおこなっていなかった。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

（一）人的被害

即死者 一〇人

当行行員のほとんどの者が、その出勤途上において被爆したが、これら被爆行員の遺体の発見は不可能であった。

炸裂時に店内にいた行員のうち、宿直行員一人、準行員一人および女子行員一人の計三人だけは、営業所内で爆死しておりその遺体を確認した。その他、出勤してすでに店内にいた行員は、生存した者を除いて、その被爆状態は不明であった。生存者の方は、役職者二人、男子行員一人、女子行員二人の計五人だけという惨状であった。

（二）物的被害

鉄骨煉瓦建ての営業所は猛烈な爆風を受けて、一階と二階の境あたりに一五、六センチメートル幅程度の大きな亀裂を生じた。

また西側に施工してあった鉄扉は、閉じられていたのであるが、これが全部東側へ吹きとばされてしまった。

建物は一応半壊に属するように思えたが、外部の形態を残すだけで、実質的にはほとんど全壊の状態となった。

火災の発生は、西側の破壊された窓からの引火によるもので、営業所の内部全体を焼き払い、さらに和風建物の付属建物もすべて焼きつくし、到底使用に耐えない甚大な被害をこうむったのである。

火勢はものすごく、もちろん炎上中なんらの処置も施すことができず、ただ焼けるだけ焼けて自然鎮火を待つ以外になかった。

しかし、金庫内の重要物件、および諸帳簿だけは安全であったから四・五日後に現金・担保品その他一部重要書類を他へ移転した。

七、被爆後の混乱

店舗は、鉄骨煉瓦建ての外郭だけを残して全焼し、即死者一〇を数えるという惨禍で、当店の機能は徹底的な打撃を受けたけれども、かねてより万一の場合を考慮して疎開していた重要書類の写しを、山口県の安田銀行柳井支店から取り寄せていち早く再起をはかった。

写しによって、諸帳簿類および元帳類の作成に取りかかり、僚店の応援行員の加勢もあって、これを完遂し、やっと営業を開始した。

八月十日から、こうして袋町の日本銀行広島支店の焼け残った営業室の一部を借用し、罹災市民預金者に対して応急払出し業務をおこなった。

八、復旧状況

復旧状況

日本銀行広島支店内での営業は、九月上旬いっぱいまで打切り、広島駅前猿猴橋町の広陵信用金庫組合二階を借用して移転、九月十一日から同所で営業した。また、帳簿類の整備のため、安佐郡祇園町で執務室を借用して体制の立直しをすすめた。

当行の東京・大阪その他各店から、応援行員を得て、一時期その悪条件に対処したが、その後、復員帰還者や転勤による増員で、昭和二十年末ごろにはようやく人員が常態に復し、広島支店の陣容が起ちなおって来たのであった。

こうして昭和二十一年十一月十八日、広島市胡町の現在地に、木造の仮店舗が竣工し、営業も本格的な軌道にのっ

て来た。

昭和二十三年、株式会社安田銀行は、新しく株式会社富士銀行と社名を変更、昭和二十六年十二月、現在の富士銀行広島支店の本建築の店舗が完成し、現在に至っている。

第七項 株式会社三菱銀行広島支店...388

一、当時の概要

概要

所在地 広島市革屋町一ノ二

建物の構造 木骨モルタル塗二階建

建物面積約二〇〇坪

事業種目 銀行法による一般銀行業務

在籍従業者数 四四人

被爆時の出勤者数 約八人

代表者 支店長・笹垣弥三郎

爆心地からの距離 約五〇〇メ - トル

ちなみに、当行広島支店は、昭和十八年四月、第百銀行広島支店を吸収合併して三菱銀行広島支店として開設されたものである。

二、疎開状況

当行においては、諸帳簿・伝票などは非常事態に備えて、その副本を作成し、他地に所在の当行支店に分散保管した。無論これは、広島支店ではなく、各地支店相互に実施していた方法である。

三、防衛態勢

職域義勇隊は編成されていなかった。しかし、木造建物のことでもあり、防空・防火には十分に意をもちいて、消火用水・砂・消防器具などを常に整備し、訓練も再三行っていた。

四、避難計画

特に指定された対戦処置といったものはなかった。

避難先としては、焼夷弾攻撃を受けた場合の脱出先として、電車通りを北上して、西練兵場に至ることになっていた。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜からの状況は、在店生存者もなく、記録にも残っていないので確実なことは判明しがたい。数次にわたり、空襲警報の発令があったから、男子行員三、四人が警備宿直員として、警戒にあたっていた模様である。

六日の朝七時過ぎ、警戒警報が解除されたころには、すでに若干人の行員も出勤していて、整頓や清掃に取りかかっていた。しかし、金庫はまだ開扉されていなかった。

なお、当行から市中の建物疎開作業に出動するなどのことはなかった。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

(一) 人的被害

在籍行員四四人のうち、被爆による被害は次のとおり甚大なものであった。

即死者 二二人

負傷者 一六人
行方不明者 なし
計 三八人

当時、銀行の開店時間は午前九時であったが、行員はだいたい八時四十五分ごろまでには出そろっていた。従って、出勤の途上、あるいはまだ自宅にあって被爆した者が多く、支店建物の崩壊・焼失を見とどけた者はいない。

また、店内に在った人たちは、焼けあとの死体がすべて支店の建物内において発見されたことから、炸裂時に倒壊した建物の下敷きとなり、即死したか、あるいは脱出できないまま焼け死んだ模様である。

(二) 物的被害

爆心地に距離も近く、建物が木造であったから、原子爆弾の炸裂と同時に建物施設は全壊し、続いて発生した各所からの火災によって、全焼したものと見られる。

しかし、全く壊滅したとはいいながら、金庫室だけは、開扉前だったので、辛うじて完全に残った。

支店所在地一帯は、手をほどこすすべもない猛炎につつまれて、ただ燃えるにまかせる状況であったから、すべてが灰燼に帰して自然鎮火するのを待つだけであったと思われる。

七、被爆後の混乱

人的にも物的にも全く壊滅的な打撃を受けた当店は、いちじは收拾もつかぬありさまで、生き残った支店員との連絡も至難をきわめ、そのほとんどが住居も焼かれて、ただ途方にくれるのみであった。

広島のような惨状が東京本店に伝えられ、とりあえず東京・岡山・福山の各店から男子行員若干人が、広島支店の救援と業務再開の応援に差しむけられた。

八、復旧状況

復旧状況

一朝にして見渡す限りの焦土と化し、焼けた鉄筋コンクリート建てのビルの残骸が、あちらこちらにみにくい姿をさらしているのみとなった廃墟のなかで、ただ袋町の日本銀行広島支店だけが、三階を除いて焼失をまぬがれていた。

この日本銀行広島支店の一階に、市内各銀行が区画割りして応急的に営業を再開することとなり、当行も八月九日から、そこに仮営業所を開き、罹災者に対する預貯金の払戻しにあたった。

日本銀行広島支店の一、二階は焼失を免れたとはいえ、破損はなはだしく、応急的に板材で窓をふさぐなどの処置がとられ、最初は男子行員四人のみで業務を再開した。これが後に男子行員五～七人、女子行員六人程度となり、この仮営業所での事務が進められた。

しかも市内一円、交通機関も麻痺状態であり、荒廃の極みに達した社会不安も考慮されて、その営業時間は、しばらくのあいだ一日に二時間から三時間というありさまであった。

二十年の末まで、焦土広島を中心部一帯は、日ぐれになるとただ寂莫、人影さえ見られなかったが、日本銀行広島支店内で営業を続けたのは、二十年の晩秋ごろまでであった。それから近接の明治生命ビル一階を借りて営業することとなり、昭和二十二年、現在の位置(被爆前の元場所)に木造一階建ての仮営業所が建設されるまで、明治生命ビル内で営業を続けたのである。

現在の支店ビルが竣工したのは、昭和二十六年十一月で、これが建設工事中は、紙屋町の一角で営業をおこなった。

第八項 [株式会社住友銀行広島支店](#)... 392

同東松原支店

一、当時の概要

概要

所在地 広島支店広島市紙屋町二四番地
東松原支店広島市猿猴橋町七番地

建物の構造

広島支店 鉄筋コンクリート五階建(地上四階地下一階)

一階 - 営業場・応接室・金庫室

二階 - 通し天井・中二階

三階 - 右に同じ

四階 - 貸室・食堂・会議室

地階 - ボイラ - 室など

附属家屋 - 鉄筋コンクリート・一階建

建物面積延八八六坪

東松原支店煉瓦造・二階建

事業種目

銀行法による普通銀行業務

在籍従業者数

広島支店約五八人

東松原支店一八人

代表者

広島支店支店長・岩田岩雄

東松原支店同・本城武松

爆心地からの距離

広島支店約二七〇メートル

東松原支店約一・八キロメートル

二、疎開状況

主要帳簿は複製して、他支店に相互保管し、非常の場合に対処した。

また一方では、当行行員の貴重家財などを希望により、堅牢な広島支店ビル内の四階に預かることもやっていた。

三、防衛態勢

職域義勇隊の編成はおこなっていなかった。店舗自体の防空・防火に関しては、諸機材の配備、訓練の実施など十分に態勢を整えて万全を期していた。

平日の夜間は、当直者が二人置かれていたが、主管者の見込みにより、必要と認められるときには、臨機増員していたようである。

四、避難計画

非常の場合の待避所としては、広島支店では地下室を利用することに決めてあって、営業時間中に警報の発令などあった場合は、来店中の客も誘導避難させることになっていた。

東松原支店では、もっとも近い広場である東練兵場が予定避難先に決められていた。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜からの当直、ならびに警備にあたった在勤者が現存しないので、炸裂までのくわしい状況は知るよしもないが、平常と特に変わったこともなく、規定どおりサービスしていたと考えられる。

夜間の警戒警報・空襲警報発令のつど警備態勢をきびしくかため、六日の朝を迎えたに違いない。

職域義勇隊への出動ということもなく、六日朝七時過ぎの警戒警報も。解除されてからは、早めの出勤者がつぎつぎと到着して開店の準備を、平常どおりおこなっていた。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

(一) 人的被害

即死者 二九人

負傷者 約四〇人(確実数は不明)

行方不明者 なし

計 六九人

右の数は、広島支店と東松原支店との合計数である。また、即死者のうちには出勤後店内で死亡した者と、出勤の途上で被爆死亡した者とが含まれている。

炸裂後の店内状況についても、やはりくわしくは判らないが、当行行員の一部はすでに出勤していたというものの、大半は出勤途上にあったことは確かである。

火災終息後の検証によれば、広島支店の出納係長林原直一が営業場中央の自席で殉職、また通用門の内側のところで、警備員二、三人が仰向けとなって殉職していた。

被爆時に当店ビル内にいた者のうち、田村清枝はほとんど負傷していなかったから、負傷した三宅孝・林定二人を助けて、暗やみと化したビル内を手さぐりで脱出し、市内牛田町の自宅へ帰りついた。しかし、助け出した田村清枝は、炸裂時の放射能線のためか、数日後に死亡し、助け出された三宅孝は、昭和三十四年まで生きのび、林定は、定年退職するまで勤めることができた。

昭和二十二年、当店ビルの復旧工事中に、地下室から一体、昭和二十七年同じく第二期工事中に四階のコンクリート壁の下から一体、それぞれ白骨となった遺体が発見されて収容した。後者は、着衣により、ビル四階貸与先の女子事務員であることが判定され、身元がわかった。

なお、炸裂下の混乱時に、街路通行者やその他から、多数の部外者が店内に避難して入りこんだらしく、軍人などの屍体が相当多数、店内から収容されたという。

(二) 物的被害

広島支店は、鉄筋コンクリートの外壁を残すのみで、内部は全面的に破壊するという惨状を呈した。

ただ金庫室だけは、全く被害なく、収納されていた現金・諸預り品・諸帳簿など、いずれも安全であった。

炸裂時の猛烈な爆風圧によって、店舗のすべての窓や天井は打ち砕かれ、強烈な熱線をあびて可燃物はいっせいに発火し、たちまち炎上、店舗内のすべては焼きつくされ、自然鎮火したものと推察される。

なお、机上にあった当銀行名入りの印刷諸用紙類が、安佐郡沼田町伴方面に落下していたが、爆風で舞いあがり、立ち昇る火炎が惹きおこした気流に乗って、このような遠方へ運ばれたといえよう。同町内で、電車通りを隔てた筋向いの絹谷商店の伝票類も、同じように伴方面で拾得されているが、その瞬間の噴出気流がいかに凄絶なものであったかを示す事例である。

一方、東松原支店も大破全焼したが、距離の関係から、被害程度は広島支店よりも多少軽かった。

七、被爆後の混乱

一挙に多数の行員を失い、また負傷者を出し、店舗・什器は全壊全焼し、收拾つかない事態に陥った。

急薬品類は、かねての手配どおり本店および近接店舗から急送されたが、被害程度が予想をこえて甚大なのと、諸物資の窮乏という事情から、十分な施療はまったく困難なことであった。

業務を再開しようにも、人員不足は覆いがたく途方にくれた。しかし、他店からの応援と、負傷の身をおして出務した生存行員の、旺盛な責任感と果敢な士気によって業務は再開された。この業績は尊く、今もって語り伝えられている。

また本店の指示により、当座の用度品類を隣接店舗などに相互疎開していたことが、再建に大きく役立った。

八月八日、焼け残った唯一の日本銀行広島支店内の一区画を借りて営業を再開したが、比較的被害の少なかった東松原支店を応急修理し、八月二十五日から同所に移転、広島支店と東松原支店との二か店合同営業を開始した。業務再開にあたり、何よりも力強かったことは、壊滅した紙屋町の広島支店内の金庫室だけが無事に残り、現金・諸預り品・帳簿などが完全に確保されていたことである。

八、復旧状況

復旧状況

昭和二十年八月八日、すなわち被爆した翌々日、各銀行と共同で、日本銀行広島支店内の一区画を借り、払戻し業務を再開したことは前述のとおりであるが、僅かな人数の行員に加えて、通帳証書・印章の焼失や紛失、預金者の死亡による相続人の確認など、事務上の困難と繁雑さは想像にあまりあるものがあった。

東松原支店に集結してからも、開店前から払戻し請求者がながながと列を作り、事務処理は寸暇も惜しんで働かねばならなかった。

やむなく行員の一部の者は、営業場内に宿泊して、山積した事務の処理をおこなった。このような状態は、相当期間続いたが、十月ごろになっても、営業時間は午前十時から午後二時までといった変則的な限られたあいだのみであった。

また、寒さきびしく、食糧事情もますます窮迫する冬となっても、東松原支店の営業場は、窓ガラスは皆無で雪が吹きこむに任せ、何ら暖房もないまま、夜遅くまで勤務し、悪戦苦闘の日々であった。

昭和二十二年九月一日、建築資材も極度にとぼしく制限されながらも、紙屋町店舗の補修第一期工事として一階と二階が完了し、はじめて本拠地の紙屋町二四番地に復帰することができた。昭和二十七年十月、第二期工事として三階と四階が完成し、さらに昭和三十五年三月、ビル外壁の補修明装工事を行なった。なお、占領下時代 - 講和条約発効(昭和二十七年)まで、大阪銀行広島支店と称した。

死の人影

なお、当行正面入口の石段の右はしには、原子爆弾の熱線によって生じた人の影(男女不明)が遺っている。この死の人影は、炸裂時、銀行の開店を待つためにか、石段に腰掛けていて被爆したものと言われているが、一説には、石段を上ろうとして右足をあげている立姿の影ではないかとも推量されている。爆源からの熾烈な熱線により、石段の表面が溶解して白くなったが、人体によってさえぎられた部分のみが黒く残ったものである。被爆直後、暁部隊の兵士の手によって、そこにあった黒焦げの遺体は取片づけられたが、爆心地に近い場所であるから、強烈な爆風によって、その本人は一瞬どこかへ吹きとばされたものに違いなく、取片づけられた遺体は、他所から、ちょうどその場所へ吹きとばされて来たもので、死の影を残したその人ではなかろうという見解もある。

昭和四十六年二月、銀行の改築にあたり、その部分を切りとって、広島平和記念資料館に寄贈された。

第九項 株式会社三和銀行広島支店... 399

同	広島第二支店
同	広島京橋支店

一、当時の概要

概要

所在地

広島支店 広島市大手町二丁目

広島第二支店 同

広島京橋支店 広島市京橋町二一番地

建物の構造

広島支店及び広島第二支店

鉄筋コンクリート・三階建

一階 - 営業場・応接室

二階 - 食堂・倉庫・宿直室

三階 - 市内袋町日本銀行広島支店北隣りにあった第二支店が建物疎開により三階に入っていた。

建物面積延二八三坪

広島京橋支店 木造瓦葺・二階建(借家)

一階 - 営業場

二階 - 倉庫

建物面積延三〇坪

事業種目 銀行法による普通銀行業務

在籍従業者数

広島支店約五〇人

広島第二支店約一四人

広島京橋支店約一五人

被爆時の出勤者数

広島支店約一六人

広島第二支店約三人

広島京橋支店約五人

代表者

広島支店支店長・藤田良

広島第二支店同・松本清太郎

広島京橋支店同・林清一

爆心地からの距離

広島支店約二〇〇メートル

広島第二支店同

広島京橋支店約一・五キロメートル

二、疎開状況

当行は、重要書類・日々の取引きの移動・残高表などの写しを作成し、徳島県三好郡池田町にあった三和銀行池田支店に送付して、これを倉庫に保管して安全をはかっていた。

三、防衛態勢

職域義勇隊は編成していなかった。しかし、緊急対策として、全従業員にそれぞれの部署を定めて防空・防火に備え、他都市での罹災店舗の経験を参考にして、営業所内に、各店とも消火用水・消防器具を整備していた。

四、避難計画

避難計画については、広島支店と広島第二支店は、電車通りを北上して西練兵場へ避難する。広島京橋支店は、京橋通りから広島駅に出て、大須賀踏切をわたり東練兵場へ避難することにしていた。

五、五日夜から炸裂まで広島支店と広島第二支店は、八月五日午後五時から翌六日午前九時まで、役付者一人、行員五人、計六人が警備態勢をとっていたが、原子爆弾に遭遇して全員死亡したため、その状況を知るすべもない。京橋支店もはっきりとは判っていない。

六、人的・物的被害

人的・物的被害

(一) 人的被害

即死者 三五人

負傷者 二人

行方不明者 一人

計 五七人

しない三店の在籍者総数七五人のうち、このように五七人も人的被害を生じたのは、広島支店及び同第二支店の両店が位置的に爆心直下ともいえる至近さにあったためと、炸裂時刻が出勤まじかの時間であったからである。

炸裂直後の店内状況も生存者皆無のため詳細は不明であるが、当店の宿直警備員(役付者一人・行員五人・計六人)および出勤者のみでなく、外来者や通行中の人々も店内に避難して入りこんだ模様で、屋内の猛火に折り重なって焼死した人々の遺体が多数あった。

炸裂後、瞬時にして、当店を含む付近一帯が猛火にのまれたことは推察できるが、炸裂と同時に即死した者と、即死には至らなかったが、すぐに襲いかかった火炎によって焼き殺された者と二種類あるものと思われる。

広島京橋支店では、炸裂と同時に店舗が全壊したため、その時の在店者五人のうち、倒壊と同時に即死した者二人、家屋の下敷きとなりながら危うく脱出して避難した者二人、および焼け死んだ者一人であった。

(二) 物的被害

広島支店では、三階はほとんど破壊され、二階・一階は爆風と爆圧により、窓や鉄扉はすべて破壊、屋内は全部焼失して、ただコンクリート壁を残すだけとなった。

広島京橋支店は、木造建物であったから炸裂と同時に全壊し、続いて猛炎につつまれ、すべてが焼失、金庫だけ残った。

火災の発生は、爆心至近の広島支店においては、付近一帯とほとんど同時的な発火で、原子爆弾の異常な高熱のもとに、ひとたまりもなかったと考えられる。

京橋支店は、諸所から起った火の手が延焼して来て、倒壊した店を焼きつくしたのである。

火災の終息については、三店ともまったくの全焼で、自然鎮火を待つほかなかったと推断できるが、目撃者もおらず、鎮火時刻なども判然としない。

七、被爆後の混乱

危うくも難をまぬがれた支店長や行員も、ほとんどその住居を焼失し、收拾つかぬ状態におちいった。

負傷した行員に対する処置も、相互連絡さえ取れぬ者が多く、あまっさえ無事な生存者が僅少で、どうすることもできなかった。また、金融機関としての公共性から一日も早く、業務の再開を進める必要に迫られて、自店の従業員に対する救助処置を講ずる余裕のなかったということが実情である。

社屋は、広島支店と広島第二支店とがコンクリートの外壁を残すのみで、営業用の什器・備品・事務用品など残らず全焼。事業所としての機能は完全に喪失してしてしまった。

広島京橋支店も、全くの灰燼に帰してしまい、銀行としての機能をまったく失った。

八、復旧状況

復旧状況

広島市街は一望の焼野原となり、交通も杜絶した。治安の警備もなく、人心は極度に不安定であったから同業者が相謀り、一斉に業務再開の方策を進めた。その結果、焼失をまぬがれた唯一の店舗である日本銀行広島支店一階の事務室に、市内の銀行全部を収容し、預金の支払いと、火災保険金(政府保証支払限度金五千元)の代払業務を再開した。

しかし、広島市には七十五年間草木も育たず、とうてい人間の居住はできないとのうわさが流布されたため生存者は、市内での勤務を懸念し、出勤を回避する傾向があり、負傷者も原爆症のため倒れる者があいつぎ営業に支障をきたすありさまであった。

そこで、本店に連絡折衝して、大阪在勤者で、広島近郊に実家のある行員五人の来広応援を得て急場をしのいだ。また、他支店の行員で、広島に復員した者も、当地勤務に充当したりして、漸次人員を整備していった。

昭和二十年十二月の最終日をもって、日本銀行広島支店を離れ、翌二十一年初頭から、大手町の広島銀行協会建物に営業所を移した。昭和二十二年九月になって、もとの広島支店営業所の復旧工事が、一応の応急的なものながら完了したので、ここに復帰した。

なお、昭和三十三年十二月、広島支店は基町一番地の朝日会館一階に移転して現在に至っている。

広島京橋支店は、昭和二十一年十月七日、京橋町五六番地に店舗をひらき、営業をはじめた。これが、昭和三十年七月十八日、京橋町四七番地に三和銀行広島駅前支店として開業するに至り、現在に及んでいる。

(会社・その他団体)

[第十項 広島中央放送局...405](#)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市上流川町乙六五番地

建物の構造

- (一) 本館 - 鉄筋コンクリート・二階建・
地下一階・屋上木造増築
建坪延約二四一、六二五坪
- (二) 別館 - 木造二階建
建坪 不明

施設の概略

(演奏所)

- 一階 - 局長室・庶務課・電話交換室・技術工作室・受信機相談室・小使室・宿直室・浴場・電池室
- 二階 - 放送部第一スタジオ・第二スタジオ・技術調整室・第一休憩室・第二休憩室
- 三階 - 技術部現業課・試験課

(別館)

- 一階 - 総務部総務部長室・経理課
- 二階 - 技術部長室・事業課

(加入課分室・広島市上流川町中国新聞社ビル)

- 五階 - 加入課直集係
- 六階 - 加入課委託集金係・契約係・管理係

(原放送所・安佐郡祇園町字原)

局舎の屋上および側面は防空色に塗装し、周囲に高さ三・五メートル、厚さ上部 一・五メートル、下部一メートル程度の外側板囲いの土塀を築いた。防空壕は、事務室の下に約二坪の板囲いのものを造り、廊下のマンホールから出入りできるようにしていた。

このほか、被災時用の予備放送所(防*放送所)として、広島市観音町広島市立商業学校(現観音高校)の校庭一隅の銃器庫の一部を借用し、敵の宣伝放送を妨害する放送をお開戦当初から、一般国民は短波の受信を禁止されており、短波による敵の放送は聴取できなかったが、昭和十九年夏、サイパンが敵軍に占領され、中波による宣伝放送が開始されると、国内でも一般受信機で聴かれるようになった。続いて昭和二十年春、沖縄が陥落してからは、その方向から相当強力な電波で、しかも国内放送とほとんど同じ周波数で、宣伝放送をはじめたから、この対策として、国民にその声を聴かせないよう、妨害放送なるものを、この観音町でおこなった。

また、観音町は、被爆の怖れがあるので、広島市己斐東中町の山間に横穴を掘り、その中に送信機を入れる計画を進めていた。すでに鉄塔を組むまでになっており、送信機は宇部から貨車積みにして移送途中、軍部より呉海軍作戦本部に移設するようにとの要請があり、その手配中に被爆、貨車もろとも広島駅付近で焼失した。

さらに、安佐郡安村(現安古市町)の山中に穴を掘り一〇キロワット放送機と自家発電機を避難させる計画で、測量とだいたいの設計が終り、着工の段階に入る寸前であった。

事業内容 全国中継放送番組(略して全中という)の中継放送、およびローカル番組の放送。

- 在籍職員数 約二六〇人
- 被爆時の出勤者数 不明
- 代表者 局長・中村寅市
- 爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、疎開状況

昭和二十年六月ごろ、安佐郡祇園町の原放送所へ、放送部では開局以来の放送番組表綴(製本したもの二十数冊。現在FK資料室に保存。)・レコード約三〇〇枚・楽器(ティンパニ・クラリネット)・その他、事務用品・用紙類若干を疎開した。

加入原簿。受信機・消耗品類を安佐郡可部町の民家へ疎開。集金カードの一部は高田郡白木町井原市、安佐郡深川、佐伯郡五日市町八幡の各民家へ、職員やその縁故をたよって、それぞれ分散疎開した。

三、防衛態勢

- (一) 格別重要な報道中枢機関であるから、防衛の万全を期し、広島中央放送局警防団を組織した。
- (二) 局舎の周囲の家屋疎開を、津村組の応援を得て、毎日職員がおこなった。
- (三) 局舎用地内に防空壕を造築した。
- (四) 局舎の出入口やスタジオの窓は、皆爆風除け防禦板を打ちつけて、土のうを要所に置いた。

四、避難計画

上流川町の局舎が空襲を受けた場合、放送機能を確保するための予備放送所として、観音町その他郡部に放送所の設置を進めていた。また重要機器・文書その他も分散疎開をおこなって任務遂行の万全を期した。

また、空襲を受けて上流川町演奏所スタジオが焼失した場合、放送従業員は、安佐郡祇園町の前放送所へ集合し、放送事業を継続するようあらかじめ指定されていた。

五、五日夜から炸裂まで

炸裂まで

被爆前夜から原子爆弾が炸裂した直前直後の状況について、広島中央放送局放送部資料室作成の「広島原爆戦災誌資料表」、およびNHK原爆の碑完成記念として同局が出版した「原爆被災誌」によると、報道機関としての重大な使命感のもと、各局員が凄惨な事態発生に対し、如何に努力したかが判る。

(一) 五日の夜

八月五日(日曜)午後九時二十分、警戒警報発令。午後九時二十七分、空襲警報発令。この警報発令の放送は、上流川演奏所の第二スタジオから放送された。

放送部では、これよりさき、毎日夕方になると流川局舎の中庭の防空壕の中へ、楽器類・レコードを楽団の人々と共に運びこんでいた。これらは被爆して全部焼失したのであるが、当時は、局舎周辺の建物疎開跡に残された民家の土蔵や倉庫を借りて、日常必要な機器や書類などを分散して疎開しておき、必要なとき取出して来て使用したのである。

広島町の暮色迫るころ、市民が夜間に多い空襲を避けて、郊外へ郊外へと疎開していく姿が、F K 広島中央放送局)の屋上からよく眺められた。このころ、広島城内本丸の中国軍管区司令部から警報発令準備のため、司令部へ出勤するよう電話で要請があった。

当直の倉田三郎放送部員と、古田正信アナウンサーおよび寺川政雄技術員の三人が一緒に赴き、中国軍管区司令部の南側に特設された地下壕スタジオに入った。

当時、地下に造られていた中国軍管区司令部の防空作戦室の隣りに、頑丈な作戦室にひきかえ、おざなりな薄板の壁で区切られただけのスタジオがあったが、夜になると、放送部員一人・アナウンサー一人・技術員一人計三人が常駐することになっていた。

作戦室には、師団将校など多数がならんで見る電光板式の警報一覧の全国地図があり、ここから隣りの放送室へ警報発令の伝票が渡された。

一方、上流川放送局では安田アナウンサー・尾崎・森川定美両放送部員は、スタジオ脇の警報連絡事務室にはいり、田中保男現業課長・梶山卓二技術員・村上(女子)課員も調整室にはいって、警報放送に従事する態勢についた。

八月六日(月曜)午前零時二十五分、空襲警報発令。午前二時十分空襲警報解除。

この日は、米軍機B29の大編隊が、南方海上から本土をめがけて侵入中との情報を、日本軍の海上電波探知器が捕えて、早くから特設警報放送室にも知らされていた。

今晚こそ危いということで、常よりも緊張して待機していた。そして、午前零時二十五分から午前二時十分までのあいだ、警報が実に矢つぎ早に発令・解除された。ところがこのB29の大編隊は紀伊水道より本土へ侵入して、真夜中には西宮市を空襲して、海上に離脱していたのである。

これらの警報発令は、半紙半分大のザラ紙の伝票で手渡されていたが、警報が解除となり午前三時すぎに仕事が終了したときには、警報伝票が重ねて厚さ五センチメートル以上もあった。

ここで解除になったので、古田・倉田及び寺川の三人は、帰局したい旨を述べたが、「第二波がやって来る気配があるので待機してほしい。」という。三人は帰れず放送室隣の三段ベットに横たわり、疲労の回復をはかった。

三時三十分になっても警報が出ない。四時になっても、何らの伝達もない。この間、数回交替で司令部の電光板地

図のある作戦室まで出かけたが、「しばらく待ってくれ。」と、将校たちは言って湯茶をねぎらった。

明け方の五時ごろまで、三人は三段ベットで寝もやらず待機したが、警報は出そうにもなかった。そこで、八月六日には管内放送局長会議もあるので、ひとまず帰局したい旨述べると、「今日は君たちに苦勞をかけたから朝食を食べてゆけ。」という。「それより眠い方が先きですから、局に帰ってしばらく眠りたい。」とあって帰局の許可を得たのであった。

(二)六日の朝 中国軍管区司令部の地下室から、古田・倉田・寺川の三人が外に出たのは、朝六時四十分ごろであった。

この日、朝空には雲一つたく晴れわたり、真昼の暑さが思いやられた。広島城の城郭をめぐる濠には白いハスの花が点々と浮び、流川町の静かな住宅地帯にある放送局に帰るまでの半キロメートルほどの道はひっそりとして、連日の睡眠不足の頭に、清々しい朝の気分をあたえた。局につくと、三人はすぐそれぞれ第二スタジオ前に設けられた棚ベットに転んでしばらくまどろんだ。

午前七時九分警戒警報発令

午前七時三十一分警戒警報解除

中断後、初めて警報が発令された。またもや司令部の防空作戦室から新たな敵機侵入の情報が矢つぎ早にはいりはじめた。

この放送は第二スタジオから、古田アナウンサーによって放送された。たいしたことなく、まもなく解除され、古田アナウンサーは、一息入れにスタジオから、同じ二階の放送部の室に入った。

(三)被爆直前

当時の現業勤務は二班に分れて、各班とも毎日午前八時三十分交替の、二四時間勤務であった。現業課・放送部・守衛の出番、および各部課から交替で徹夜防空に従事した警防団の職員は、警戒警報が午前七時三十一分に解除されて、ようやくホッとして勤務交替の時間にも間があるので、各自、洗顔や朝食の仕度をはじめていた。

放送部の室では、倉田・森川(定)の二人が炊飯の仕度にとりかかっていたが、その飯の炊ける間をぬって、倉田部員は中庭に下り、自転車のパンクしたタイヤの修理をはじめた。

長尾(女子)・井沢・安田の各アナウンサーと尾崎部員は、勤務交替のため警報放送業務に就いたばかりで、スタジオの近くで待機していた。

田中現業課長と梶山卓二技術員は、屋上三階で洗面して身体を拭いていた。

二階の調整室には、軍管区司令部から帰って来た寺川技術員と、出勤して来た矢野技術員が放送準備にとりかかっていた。

庶務課には、田中(修)・福本六一・穴戸・村上(光)各課員が、また別館一階の経理課には、住本(朝)課員がおり、二階の事業課には、光岡課員が出勤していた。

流川町筋に面した局の玄関受付前には、すでにラジオ受信機の修理を依頼する人が、十数人、それぞれ受信機を持参して一列にならんでいた。

加入課分室にある流川電車通りの中国新聞社ビル六階のしつでは、山崎ミトコ・望月智恵子・山田澄江の各課員が出勤して室内掃除に取りかかっていた。五階の直集係の室では、川本清・若林寿子両課員が集金票を整理しながら、執務準備をしていた。

一方、観音町臨時放送所では、岡光部員が前夜から宿直勤務をしていたのであるが、ここではニュースは宇部大空襲を報じていた。また、米軍の宣伝放送が、盛んに日本軍の降伏することを呼びかけていた。

六日早朝、岡光部員はいつものように妨害放送を終了して、自宅に帰る仕度をしてしたが、警戒警報が発令されたので、しばらくその場で待避した。警報解除になったので、午前八時十分ごろ、自転車で祇園町の自宅へ帰るため、観音橋にさしかかっていた。この時刻ごろはまだ、その他の局員はほとんど出勤途上であった。

六、被爆の惨状

惨禍

(一)放送部

警報解除の放送を終えた古田アナウンサーは放送部の室へはいった。その時ふと、ご飯の焦げる匂いがした。さっき、軍管区司令部から倉田部員・寺川技術員と一緒に放送局へ帰ってから、倉田部員が放送部の室のヒーターに飯盒

をかけていたことに気づいた。中庭で自転車のパンクを修理している倉田部員に、古田アナウンサーは二階の窓から声をかけた。「飯ができたぞ!」「ありがとう!すぐ行くよう!」。倉田部員が顔をあげた。途端にスタジオ脇の警報連絡室から、警報発令合図のベルが鳴った。軍管区司令部から情報のはいった時に、アナウンサーに知らせるためのベルである。スワ!とばかり、古田アナウンサーは第二スタジオ脇の警報事務室にかけこんだ。

「午前八時十三分、中国軍管区情報、敵大型機三機が西条上空を西進しつつあり、嚴重な警戒を要す。」

古田アナウンサーは廊下を足ばやに歩きながら、ざっと原稿に目を通し、スタジオへ入るなりブザーを押した。時に八時十五分!

「中国軍管区情報、敵大型機三機西条上空を」と、ここまで読みあげた瞬間、メリメリッとすさまじい音、鉄筋の建物がグラッと傾くのを感じ、フワァーッと、体が宙に浮上った。いけない!直撃弾だ!爆風のため息もつけないほどの恐ろしい瞬間は、どのくらい続いたのであろうか……。まっ暗な底で「自分はまだ生きている。」と、気がついたとき、こなごなの建物の破片を頭から浴びて倒れていた。そして、ぼう然と立ちあがって、目を凝らして見ると、もうもうとたちこめた塵埃をとおして、銀色に輝く一条の光線が、むき出しのスタジオ内を一瞬照らし出した。見ると、目の前にあったマイクrophon、ストップウォッチをはじめ、これらを乗せたテーブルまで、影も形もない。

スタジオの厚い鉄筋の壁は、爆風の来た方向からくずれ落ちて、スタジオの中程までセリ出していた。扉が吹き飛ばされていたため、容易に廊下に出ることができた。

あまりにもすさまじい破壊力に、古田アナウンサーは放送局の機能はすべて停止したと判断して、とっさに、軍管区司令部の放送室へ行くことに決心して、局の前へ出た。

局の中庭で、自転車の修理をしていた倉田部員は、「メシができたぞ!」と呼びかけられた古田アナウンサーの一言で命拾いをした。

修理をやめて、すぐに屋内に入り、放送部の室に駆けあがった。その時、轟音と共に建物がぐらついた。

「やられた!」と思った時、目の前がまっ暗になった。森川(定)、尾崎両部員の姿が見えたので、三人連れだって、夢中で階段を降りた。局内にいたため、火傷はしたが、建物や器物の破片で、身体中けがをしたまま、局の玄関までのがれ出た。

(二) 技術部

放送局本館の屋上には、木造増築の試験課と現業課の二室があった。宿直明けの田中現業課長は屋上で洗面をすませて、勤務交替のため出勤して来た梶山技術員と一緒に、敵機が上空に見えるので、室外に出て上を仰いだ瞬間に被爆した。熱線をあびて全身火傷の重傷である。

試験課室のカ-テンに火がついたから、二人は全身血にまみれながら、屋上の防水用水を汲み、必死で消火に努めた。カ-テンの火が消えると、二人は助けあいながら階段を這うようにして、二階に降、調整室にはいった。

出勤してきた森川(寛)部員は、本局の玄関にはいった二階にあがろうと、階段のおどり場にさしかかったとき、轟音とともに足もとがぐらついた。と、下から爆風によって吹き倒された。一瞬、まっ暗やみの中に落ちたようであった。このとき、二階からころげ落ちるように、森川部員にぶつかった者がいた。

「誰か?」

「間島だ!」

「どうした?」

「やられた!全身をやられた!」

瞬時の応答で、敵機の空襲であることがわかった。

森川部員は、間島副部長の身体を後から羽交い締めを抱いて、まっ暗になった階段を降りていった。

ふと見ると、タイプライター室の戸口で、女子職員が開かない扉を、助けを呼びながら押しあっている。副部長を床において、森川部員が扉をこじあけると、数人の者がひとかたまりとなって駆け出た。

逃げ出る人影を目で追ったときに気がついたが、本館裏の木造別館は崩壊している。その上を踏越えて道路の方へ逃げて行く女子職員はみんな血だるまでである。森川部員も、間島副部長の血で、全身血にまみれている。力尽きた副部長を引きずるようにして、やっとの思いで外に出た森川部員は、しばらくどうしてよいか判断がつかなかった。

ふと、義兄の神田外科医院が局の近所にあることが頭にうかび、そこへ連れて行こうと思って、あたりを見まわしたとき、崩壊した家々の向うに、約四キロメートル先の江波山が手に取れるように近く見えた。ここで、初めて、広島全市が崩壊していることを知った。

このとき、放送部の倉田・森川(定)・尾崎各部員が、重傷の井沢アナウンサーと共に局から出て来た。森川部員は、この三人に重傷の間島副部長を託して、すぐに局舎に引返し、再び屋上に上がった。

屋上にまつってあった皇太神宮の社は跡形もなく吹き飛ばされており、屋上から見る広島全市の、言語に絶する惨たんたる変貌に、ただ目を見張るばかりであった。

ふと気がつくと、倒壊した家屋のあちこちから火の手があがり、くれないの炎を吐いている。これでは、到底、局舎も三〇分もたたぬ間に火に囲まれてしまうと判断して、すぐに二階の調整室へはいった。

一方、調整室で執務中であった寺川・矢野両技術員は、中庭からB29が低く飛んでいるとの叫び声をきいて、すぐに軍管区司令部へ通報した。間もなく警報が発令されて、古田アナウンサーが第二スタジオに入り、予告音(ブザー)を一〜二秒送出して、警報発令の放送にかかったかと思った瞬間、もの凄い爆音と共に局舎が数回大きく揺れて、拡声器や、その他の器具類が飛散し、二人ともまっ暗いなやみに投げつけられた。

寺川技術員は、明りをとるため、爆風によって閉ざされた防禦板を開こうとして手探りで移動をはじめた。そのとき、グッと人を踏んだので、矢野技術員がやられていると直感して、急いで防禦板を押しあげた。

幸い、矢野技術員は失神しただけで気がつき、大きな傷もないようであった。寺川技術員は矢野技術員に、すぐ避難するようにすすめて、大阪・小倉・松山・松江などの隣接局を呼び出した。

しかし、連絡電話の増幅器のメーターは異常なく振れているのに、連絡はとれなかった。ただ、直通の、演奏所原放送所間の連絡線だけが生きていたので、放送所を呼出した。

「演奏所の上に爆弾が落ちたからすぐに救援を頼む!」

「爆弾は放送所の上に落ちたので、演奏所からすぐに救援に来るように!」

佐藤部員からは正反対の応答である。ここで初めて、被爆範囲が広くて強烈なものであることが判った。みんな自分たちのいる上に落ちたものとはばかり思っていたのである。

そのうち二、三人の技術員が調整室へ集ったが、みんな傷のためじっとして、その苦痛をかみしめ我慢をしている。

そこへ重傷の田中現業課長が現れた。しばらくして足に負傷をした森川(寛)部員が室に入って来た。

田中課長と森川(寛)部員との相談の結果、「自分たちが火災を見張るから、最後まで隣接局と連絡をとるように...」との指示があり、寺川技術員は引続き隣接局を呼び続けたが、やはり何処からも全然応答がなく、連絡はとれなかった。三〇分も経過したであろうか、局の周囲に火災が迫って危険に陥ったため、やむを得ず一同は、全員そろって退避することとなり、外へのがれ出た。

(三) 庶務・経理課

流川本局の中庭あたりで、「B29が一機低く飛んでいる!」と、叫ぶ声がしたので、村上(光)課員は、その時、ちょうど出局して南門を入った守屋(鈴)課員と上空を見あげた。その瞬間、フラッシュをたくような青白い光と轟音!

村上課員は投げ飛ばされたところまでは覚えているが、その後は失神して何もわからない。ふと気がついてあたりを見廻すと、二人とも経理課入口の所まで、爆風により吹き飛ばされており、新館の崩れた木材の下敷きとなって身動きができない。耳もきこえなかったが、力をつくしてようやく木材の下から抜け出ることができた。幸い火傷はしていなかったが、挟まれていた腕が痛む。守屋課員も同じように下敷きになっていた。すぐに救出したが、彼女は閃光のために顔や手足を火傷している。

そのとき、村上課員は、経理課に穴戸・住本両課員がいたことに気がついた。倒壊した経理課に近寄って見ると、穴戸課員は崩れた壁に身体を突っこんだまま動かない。引っ張り出して幾度も背中を叩いたが、遂に、息を吹きかえさなかった。即死である。崩れた室の隅に住本課員の姿が見えた。全身血にまみれ、眼をやられたのか、つむったままで身動きしない。その時、外に逃げようとしている福本(六)課員が見えたから、呼びとめて、守屋課員と三人で、住本課員を救い出し、かつぐようにして泉邸方面にのがれた。庶務の室では、大倉課員が即死、田中(修)課員は重傷で倒れていた。

(四) 加入課分室

一閃!轟音と共に七階建ての中国新聞社ビルは大きく揺らぎ、爆風で吹き飛ばされた山崎課員は失神した。ふと気がつくと、六階の室の南側窓辺に、身体半分が乗りだすようになっていた。身体に力が全然でない。ようやく、立ち上って室内に目を見張った。一緒に室の掃除をしていた望月・山田両課員の姿が見えない。そこに見たものは事務机や椅子・窓ガラスなどが砕けて、あたりに散らばっている惨憺たる光景であった。爆弾がこのビルに落ちたのだと思ひこみ、とっさに非常階段を降りようとしたが、階下の新聞社が保管している新聞用紙に火がついたものか、赤い炎が

メラメラと吹きあげて来た。

引返して六階北側の窓から飛ぼうとしたが、目がくらんでそれもできなかった。無意識のうちに出入口の階段を這うようにして、下に降り、外に出ることができた。

熱風の荒れ狂う電車通りを、東へ東へと、逃げまどう人々の渦に巻きこまれて、京橋方面へ向っていった。

五階にいた川本課員は腕に重傷している若林課員を救い出して、表の電車通りに出た。また、高橋(日)課員は、上衣を脱いでいたため全身に熱線を浴びて大火傷をうけたが、必死になって戸外にのがれた。

しかし、流川町の日本勧業銀行広島支店あたりへ来たとき、力尽きてその場に倒れてしまった。

七、人的・物的被害

人的・物的被害

(一) 人的被害

即死者 三四人

負傷者 多数

行方不明者 不明

炸裂後、本館の窓ガラスは全部飛散、什器類は破壊されて飛び、歩くすきまもないありさまとなった。

出勤者は、ガラスその他の飛散物により、全員大小の負傷をして流血した。即死者あるいは瀕死の重傷者は、見るかげもなく顔が変形して、それが誰か判別できかねる者もいた。また、爆風でたたきつけられて、全身に打撲を受け、気を失った者もいた。

玄関脇の相談所の前には、既述のとおり一般聴取者が故障ラジオ修理のため、早朝の七時半ごろから受信機を持って来て、一列に並んで待っていたが、炸裂と同時に数人即死、残りは全員負傷したり火傷したりした。重傷者は逃げるのができず、その場で火災により焼死した。

別館は木造二階建てであったから一たまりもなかった。炸裂と同時に倒壊し、分解してしまった。そこにいた職員は木材の下敷きとなって重傷を負い、圧死した者もあった。

一方、森川(寛)部員から重傷の間島副部長を託された放送部の倉田・森川(定)・尾崎各部員は、折りよく出あった間島夫人と一緒に、拾った乳母車に戸板を敷き、副部長をのせて逃げたが、上職町の広島控訴院長官舎あたりまで来たとき、副部長は息をひきとった。

また川本課員は、重傷の若林課員を助けて京橋川河畔まで来たが、ここで若林課員は動けなくなった。しかたなく京橋を渡り、猿猴橋を渡って東練兵場に出、福田村(現安芸町)馬木の自宅にたどりついたが床に倒れたままで、ついに若い命を絶った。

また、田中現業課長は寺川技術員に背負われて、原放送所に辿りついたのであるが、八月九日息をひきとった。頼尚子課員は、心せくままに郷里竹原町へ帰ろうとして、六日夕方、原放送所を一人で出発したまま行方不明となり、ついに竹原町に到着しなかった。

観音町臨時放送部勤務の岡本課員は、宿直明けでわが家へ帰る途中、観音橋の中ほどで被爆し、顔面と身体の左半身に大火傷を受けた。彼は市内各所に火災が発生して、中心部に入ることはとてもできなかったから、己斐方面へのがれ、己斐中町の山村技術員宅にたどりついた。それから己斐川に沿って打越町・横川町と迂回して、やっと原村の自宅へたどりついたのであった。

その他の職員も、重傷の身を命からがら脱出したのである。

(二) 物的被害

流川演奏所 本館・別館ともに大破全焼して全滅、放送機能は完全に停止。

加入課分室(中国新聞社ビル五、六階) 被爆後、ビル炎上のため全滅。

観音町臨時放送所 崩壊。ただし全焼を免れた。放送機器・真空管など安全であった。

原放送所 建物の被害僅少。流川演奏所との連絡線は全滅した。全中ネットワーク故障。ただし放送電波発射機能は可能な状態にあった。

炸裂後の火災発生については、まず本館(鉄筋コンクリート建)二階屋上の増築物(木造建)が、熱線によって着火炎上しはじめたが、現業課職員が防火用水で消しとめた。しかし、後で周囲の倒壊家屋の火災に包まれて全焼した。

別館(木造二階建)は被爆と同時に倒壊し、やはり周囲の炎上で類焼した。

すなわち本館・別館ともに全焼したのであるが、本館二階から、中国新聞社ビル三階あたりが炎上しはじめているのを見た職員(倉田部員など)があり、少くとも炸裂後三〇分から四〇分くらい経っていたころと思われる。この頃には中国新聞社ビルの二階、三階は、もうまっ赤な炎が渦巻いていたのである。

火災は、その日の夕方まで続き、全焼したあと自然鎮火した。人的・物的被害は甚大で、消火作業など思いもよらぬことであり、ただ魔の炎の燃え狂うのに任せたのであった。

八、被爆後の混乱

一瞬にして壊滅し、猛火空を焦がす街から、半死半生の血だるまになったおびたしい市民が、放送局前の流川町通りに溢れ、安全地帯を求めて北へ北へと、泉邸方面にのがれて行った。

警報発令のアナウンス中に被爆した古田アナウンサーは、流川町通りに出た時、重傷を負い、禪一つの素はだかの中国軍管区司令部参謀長松村秀逸少将(前陸軍省報道部長)に出あった。少将が「電波は出ているか。」と、きく。「この状態では放送局はだめなので司令部へ行こうとしたところです。」と、答えて、二人は軍管区司令部へむけて歩いた。倒壊家屋や電柱その他の飛散物を踏み越え、白島線電車通りまで出ると、薄暗いまでに立ちこめた土ぼこりの中に、遠く近く火災が昇っていた。二人が西練兵場東端の土手に登ったとき、練兵場の周囲の崩壊した建物からドッと火の手があがった。司令部の門(門城)も火を噴いている。

広島城の濠に沿って歩いたが、司令部の防空作戦室にはとても近づくことはできなくて、二人はあきらめて、泉邸にのがれて行った。

また、放送部の倉田・森川(定)・尾崎各部員は、逃げる途中で息を引取った間島副部長の遺体を、泉邸前で夫人に渡して別れを告げ、一行は常葉橋に出たが、火災のため渡れないので、泉邸の竹やぶに引返し、川に降りて対岸の饒津神社側へ泳ぎ渡り、大須賀町の騎兵隊横を通過して、東練兵場に出て、さらに大内越峠を越えて戸坂・矢口にのがれ、ここから渡し舟で太田川を渡り、やっと原放送所についた。

このようにして、重傷の田中現業課長・森川(寛)・寺川・矢野その他女子交換手など、それぞれがその任務を果すべく、原放送所をめざして流川局をあとにしたのである。出発の際、全身の皮膚が完全にむげて、鮮血にまみれた二歳くらいの赤ん坊が泣きながら手探りで、局の玄関を這いあがろうとしていたし、あたりには、故障受信機を持って来て列を作っていた人々らしい十数人の死体が折り重なっているのが見られた。

後日、寺川技術員は、この赤ん坊を、火の熱さから守るように抱いて伏せたまま、焼死している母親と、他の二人の遺骸を見つけたという。

中国新聞社ビルを出た山崎課員は、逃げまどう人々で渦まいている道路に出た。火傷の者、半裸の者、何か叫びながらみんな電車を東へ東へと逃げている。山崎課員はとにかく、これらの人々についてのがれて行った。京橋を渡り、猿猴橋をとおり、広島駅前に出た。途中失神して、幾度か倒れかかったが、人々に助けられて、大須賀町の列車踏切を渡り、ようやく東練兵場にたどりついた。そこには、二葉山、大内越峠方面へ逃げて行く人、動けなくなってその場にうずくまっている人、火傷で身体が変色し腫れあがっている人、皮膚がツルリと剥げて倒れている人々など、広い東練兵場一面に焦熱地獄が出現していた。その中で一息ついていっていると、行きずりの人から、火傷で顔がふくれあがり、全身血まみれになっているから、早く手当を受けるようにすすめられて、初めて自分の姿を知り、また失神してしまった。ここで、軍隊の救護班の応急治療を受けて、気を持ちなおし、大内越峠にたどりつき、運よく陸軍のトラックに拾われて、戸坂の臨時陸軍病院(戸坂国民学校)に送られた。

なお、八月六日夕方までに、原放送所に集合した職員は、中村局長をはじめ、次のとおりである。

(放送部)武田俊雄・藻塩一海・森川定実・安田一夫・尾崎篤敬(技術部)田中保夫・玉川四良平・森川寛・寺家政雄・矢野文夫・頼尚子・堤嵩・佐藤某・勝田良人被爆した職員に対する応急処置は、その日は何らほどこす手段もなかった。ただ当日、原放送所に集合できた者に対して、負傷個所を赤チンで消毒しただけである。

翌七日、村上(光)課員宅に近い尾長町国前寺に、臨時海軍野戦病院が開設されて、治療を開始した。片腕を負傷した村上課員は、火傷した三歳の子供をつれてそこに通い、八日、この野戦病院で菅江鳥取放送局長、庶務課の岩崎イズミ・住野両課員に出あった。

やがてそのうちに、原放送所に大阪放送局から玉沢捷一(薬剤師)・成沢きみ(看護婦)・上中孝(技術)の三人が応援に来て一同傷の手当を受けた。なお、放送部の倉田部員は、持参のリュクサックに注射液一〇〇アンブル位と、リバノール二 ccを確保していたので、これを提供した。

次に非常米を使って炊出しをおこなった。六日当日は、祇園町の非常炊出しを受けた者も相当あったが、七日からは局側の炊出しを受け、四日目くらいから、放送部員は全員合同して共同炊飯をおこなったが、米の量が少ないので、祇園農協から南瓜を大量に購入してカボチャ飯を作って食べた。

夜は放送所構内スタジオに雑魚寝していたが、十日頃から付近の農家の二階などを借りて、それぞれ個人生活に移っていった。

九、復旧状況

復旧状況

六日昼前ごろ、森川(寛)技術員ほか数人が原放送所に到着し、ただちに中波および短波で大阪中央放送局を呼び出すと共に大阪打合線でも呼んだ。当時は大阪・広島・小倉打合線は原放送所を通り、流川演奏所、電話局にはループ引込みになっていたからである。

幸いに、岡山放送局から応答があり、早速だいたいめ広島の様子を連絡した。そして大阪から短波放送をするように依頼して、各局に各種指令を出せるようにすると共に、救援方を依頼した。

「広島は大変なことになった。特殊な爆弾で全市が駄目だ。中国軍管区もおそらく全滅だろうから、今後、警報は中部軍管区から出すように。また、各時間の冒頭五分間は打合せに使いたい。同盟の人と替るから放送部の人を呼んでくれ。」と言った。

被災第一報

六日午後、同盟通信広島支社の前原忠重記者・安原善次速記者の二人が、全身負傷して原放送所に避難して来た。続いて中村敏同社編集部長も来ていたから、同盟の前原記者に受話器を渡し、中村編集部長のペソになる「広島市は今日、六日早朝B29省数機(一ないし、二機)による特殊爆弾のため、瞬時にして壊滅した。」の第一報が出された。

また、全中ネットをとって放送が出せるようにと、無線中継を実施することに努力したが、成果は得られなかった。旧幹線の山陽・山の手廻り回線も障害が多くて、数日間はほとんど使用不能であった。

放送再開第一声

しかし、放送電波発射は可能であったから、広島局単独で、八月七日(火)午前九時・十時・十一時に、原放送所の予備スタジオから、県庁から使送された原稿によって、知事の告諭を放送した。これが放送再開の第一声である。

軍用通信線架設

同じく七日、陸軍船舶司令部の佐伯司令官の名で、軍・官・民各団体首脳部の連絡会議が召集され、広島市役所横の急造テント張りの会場で開かれた。この七日以後、毎日午後一時から会議が開かれることになったが、放送局は警報放送の必要から、早急に軍用通信線が二葉山から原放送所まで架設された。

八日、呉海軍鎮守府から若い通信係の技術中尉が来所し、軍用通信線を分割したので、放送所と呉鎮守府との連絡がとれるようになった。以後、軍や官庁からの伝達・公示事項・周知事項など、広島局単独で放送を実施した。

観音町臨時放送所は崩壊したが全焼を免れたので、その放送機器・真空管などを己斐の山の穴壕の予備放送所へ運ぶこととし、神崎国民学校跡の西地区警備隊の協力を得、十一日午前五時半からかかって移設を完了した。

復旧第一歩

九月中旬ごろから、大塩放送部長以下放送部員が、復旧不能な流川局のかわりのスタジオを探して、焼跡のビルを歩きまわった。九月二十日、結局、向洋の東洋工業株式会社の工員食堂の二階を借りたが、ここで初めて広島中央放送局の事務所として現業以外の業務が開始され、復旧の第一歩を踏み出したのである。

一方、流川局の局舎は、いろいろ検討された結果、復旧可能という結論がだされた。昭和二十一年はじめその復旧方針が決まり、具体的な設計を進め、同年夏の猛暑中復旧工事を強行して、十月になる少し前に完成したので、向洋から流川局へ復帰した。

人跡もまれな焼野原のまん中に、ポツンと孤立する放送局は、窓も扉もほとんどないさびしいものであったが、ともかく元の局舎に復活したのである。それまでの一か年余りの間は、原放送所の予備スタジオからローカル放送を送出していたのであるが、以後放送活動は日増しに伸展していった。

(現在・株式会社中国新聞社)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市上流川町二番ノ一
建物の構造 鉄筋コンクリート十階建、地
上七階および塔屋三階
建物坪数約一、 坪
内訳新聞社使用部分
約六〇〇坪
貸ビル部分約四三〇坪
諸施設の概略 輪転機五台・鋳造機
一二、三台・通信諸機材
(電送写真機・無線通信機など)四、五台・その他諸機材
在籍従業者数 約三七〇人
内訳本社三〇〇人
支局七〇人
(この内、応召中の者
約二〇人)
被爆時の出勤者数 約五四、五人
内訳警備要員五〇人
早朝出社の者四、五人
代表者 社長・山本実一
爆心地からの距離 約九〇〇メートル

二、疎開状況

本社内の防衛対策は、昭和二十年になって急速に組織の強化と充実がはかれると共に、疎開問題も併行してすすめられた。

新聞用資材については、巻取紙は広島市研屋町立石呉服店倉庫・矢賀町山本家倉庫・山口町倉庫・京橋町の保田酒店倉庫・草津町の倉本家倉庫・大手町八丁目の佐野昆布店倉庫・市外府中国民学校・海田市需品廠などに疎開した。

また、写真用資材は、府中町難波家倉庫・矢口山本家倉庫・東海田市成成家倉庫のほか、山県郡本地村福本家の総二階離家を買収して、カメラ・スクリーン・アルコールその他薬品類多数を疎開した。

また、地金類は、海田市町成成家倉庫に運び、本社図書館所蔵の図書は各社員に委嘱して、各自の疎開先に預けた。

社内の机・椅子類など可燃性物品は、最少限度の保有にとどめ、多数の什器を府中町の龍仙寺に預けた。

このように一応、徹底した分散疎開を実施していたが、山本社長は各方面からの進言により、本土決戦に備えて、万一の場合を考え、輪転機の疎開をも実施することにした。

昭型二十年七月一日、呉新聞社(昭和二十年十一月十五日新設株式会社中国新聞社に併合)が、呉駅前を疎開立退きとなり、呉市役所前に移転し、同社所有の印刷諸機械を軍部の斡旋で、広島(中国新聞社)へ移動した。その夜、B29八機の大編隊が焼夷弾の波状攻撃を加え、呉市は焦土と化したのであった。

中国新聞本社では事態急迫のため、早急に郊外疎開を実施することになり、種々討議の結果、宇品の陸軍軍需輸送統制部の田村治郎大尉の斡旋により、候補他数か所の中から市外温品村の川手牧場が廃業するので、ここを適地と定めて借用した。

疎開輪転機は、電光超高速度の第三号機(昭和十一年五月据付)と決定したが、その分解・搬送・組立について技術的に本社技術員だけで可能かどうか問題であった。しかし、事態は切迫しており、東京から専門技師を招く余裕もなく、山本社長はついに、石川久人・喜田俊雄・岩本尋義の三社員にすべてを委ねる決断をした。

炎天酷暑のさ中、牛糞にまみれて、まず牧場の清掃をやり、バラスとセメントを運んで約一週間、輪転機据付けの

基礎工事を完了した。続いて七月二日から十五日まで解体作業に取りかかり、温品村へ順次輸送した。解体した輪転機を荷馬車で運んだが、馬もまた栄養不足で馬力がなく、運搬途中、キリンビール工場の裏通りで、ついに倒れるということもあった。この運搬経費は五〇〇円であった。

これらの疎開作業には、七月二十日から十日間にわたり、歩兵第一補充隊の兵士一〇人が使役要員として派遣されていたが、主として全社員が交替で従事した。

困難を極めた疎開も、社員の奮闘で、予定より僅か二日遅れた八月二日にすべて完了した。

温品疎開工場には、輪転機をはじめ、活字一切・コッピ - 一台・円板鑄造機一台・活字鑄造機四台、その他新聞発行に必要な資材もそろえられた。

三、防衛態勢

昭和十九年夏ごろから、本土に対する空襲が頻繁となり、全国各新聞社は爆撃の危険に曝された。通信・報道が寸断社絶する場合も憂慮され、緊急に防衛処置を講じなければならない事態となった。

そこで政府は、昭和二十年三月十三日の閣議で「戦局に対処する新聞非常態勢に関する暫定措置要綱」を決定した。この要綱によって、中国新聞社は同年四月二十一日付の紙面で、広島県下における朝日新聞社・毎日新聞社との持分合同を社告し、即日実施した。ただし、呉新聞社は、海軍の基地をひかえていた特殊条件から合同しなかったが、中国新聞の発行部数は一躍三八万部に跳ねあがった。この非常措置は終戦直後の十月に解除された。

中国行政協議会記者会・広島県政記者会報道挺身隊の結成

この頃、在広新聞社によって組織された中国行政協議会記者会ならびに広島県政記者会報道挺身隊は次のとおりである。

同盟通信社太田巧・東岸敏丸

中国新聞社(幹事)広実正・大佐古一郎・増岡貞五郎・福永人司

毎日新聞社(幹事)重富義郎・八幡孟・有沢和夫

大阪新聞社石井麗雲

関門日報社石川武久

読売新聞社前河内春徳

呉新聞社大佐古一郎(兼)

合同新聞社高取久雄・杉田利男

朝日新聞社福田正二・鈴木喜一郎

西日本新聞社真鍋礼三

相互援助契約

これよりさき、一方では昭和十八年四月、中国・四国地区内の各新聞社は、空襲その他非常事態に対処して、「非常事態対策委員会」を設置し、五月一日、各社間に相互援助契約を締結していた。この契約に基づき、昭和二十年六月二十九日、岡山市空襲のため社屋施設を失った合同新聞社の依頼で、七月一日から同社の自力復刊にいたる一か月間、二頁紙八万部を代行印刷した。

このように新聞発行の防衛対策を進めると共に、社内自体の防衛対策も着々と固められていった。

中国連絡隣組の結成

昭和十八年九月、国民学校区域を単位として、同一地区内の通勤社員で隣組を編成し、非常の場合、ただちにその要員が召集できるように中国連絡隣組(特設防護団)を結成した。

防衛隊の結成

特設防護団について、昭和十九年五月五日、在郷軍人会中国新聞社分会(名誉顧問山本社長・分会長山本利企画局長)の結成に続き、十一月には防衛隊(自衛隊・隊長山本利、隊員一二二人)が組織された。この防衛隊員は、交替で毎日五〇人ずつ宿直勤務についた。また、昭和二十年五月八日、各社在広支局全員を含む次表のような中国新聞社国民義勇隊を結成した。

この間、社員多数が応召し、防衛陣営が手薄になったため、地方の各支社局員を交替に動員して、防空態勢を整備した。

夜間は防護当直(司令以下一四人)を配置して警備にあたったが、宿舎は音楽喫茶店ムシカを買収して第一中国寮と

し、幟町池田弁護士宅を第二中国寮と定めた。

社内の防衛施設としては、要所に防火幕を張り、爆風除けを施し、防火水槽を各所に置いた。新館八階屋上の昇り口をせき止め、バルコニー - 全域に満水して、自然落下による消火用と、写真部の水洗作業などにも利用した。

国民義勇隊の編成

(本参照)

昭和二十年四月、重要建物に指定された本社の周辺約一〇〇メートル、数十戸の疎開跡地には、各局編成防空分会の手で、防空壕が構築され、東側に酒造用の大樽を埋めて水槽代用とした。

四、避難計画

非常事態の発生に備えて、かねてから社員の避難場所が定めてあり、東部地区では矢賀町片河の田中群太郎宅とし、西部地区では草津町の倉本保吉宅に避難することになっていた。

五、五日夜から炸裂まで

中小都市への空爆が激化し、中国路の枢要都市も相ついで空襲をうけたが、広島市には三月十八日と十九日・四月三十日にグラマン機編隊と小数爆撃機による来襲があったのみで、比較的平穏ま日々が続いていたが、八月五日の夜はしばしば警報が発令されたので、本社の防空当番石川・岩本両社員をはじめ、約五〇人の防空要員は警報の出るたびに、平素からの訓練どおりの措置をとって、万一の場合にそなえた。

六日午前七時過ぎ、警戒警報解除になって、防空要員は、はじめてそれぞれの部署から離れることができた。そして、八時ごろになると、すでに四、五人の社員が出社していた。

疎開作業隊の出動

この日、新聞報道関係にも、水主町県庁一帯の疎開作業に八 人の出動割り当てがあった。八月四日から八の日までに完了せよということであったが、残り少ない社員で新聞報道の任務にあたっている中国新聞社にとって、八 人の出動はたとえ五日間でも不可能であったから、広島赤十字病院内にあった義勇隊本部と、強硬に折衝した結果、本社員四〇人、同盟通信社、その他在広新聞支局六人で義勇隊を編成することになった。

この義勇隊の隊長は、業務局北山一男次長で、社員も交替で出動したが、六日当日も炸裂までに、すでに現場に到着して作業に取りかかっていた。

六、被爆の惨状

惨禍

五日夜から防空当番にあっていた石川・岩本ら社員の体験によれば、閃光と同時に窓ガラスという窓ガラスは、一瞬にして吹き飛び、建物は崩れるかと思われるほどに激動し、新館の外装タイルがはげて、バラバラと落下する音がしきりにきこえた。ある鑄造部員は、爆風にあおられて二階から吹き落とされた。

視界は塵埃などの飛散物で、しばらくのあいだ、まっ暗となったが、まもなく四階倉庫にあった薬品類が発火したものとみえ、燃えながら流れしたたるのが、妖しく美しく見られたという。

新聞社のビルが発火炎上したのは、それからすぐのことであったようである。上流川町の放送局の職員が、局舎から脱出しようとしたとき、ふと新聞社の方を見ると、新聞社の三階の窓から、ドッと猛炎が噴き出していたというから、炸裂の熱線による自然着火であったろうか。社内にいた者も、脱出することだけが精一ぱいであり、大多数が重傷を負っていたが、互いに助け合い、焦熱地獄の中を命からがら避難した。

正午ごろには、すでに社屋は、ただ外郭を残すだけになって、焼け落ちていたが、なお、盛んに余燼がくすぶっていた。そこへ、社外にいた社員が安否を気づかって馳せつけて来たが、その社員らも負傷している者が多かった。山本副社長もまた、草津の疎開先から十二時三十分ごろ馳せつけ、一瞬にして廃墟と化した社屋を見ながら、ただ黙々と立ちつくしていた。

前記のとおり、あらかじめ矢賀・草津に避難先が決めてあったが、辛うじて脱出した社員も、また馳せつけて来た社員も、期せずして一様に、安芸郡府中町の山本社長邸に集った。府中町の鹿籠で被災した編集局大佐吉記者は炸裂一五分後の八時三十分、近くの社長宅に馳せつけた。そして、社長の指示で、本社社屋の状況調査と、山本利局長(応招中、師団司令部勤務)との連絡をとるため、路傍の防火用水を頭からかぶりながら、炎上中の広島市中へ入り、つ

ぶさに実情を調査して帰り、その惨禍を社長に報告したが、すでに夕刻であった。

六日午前十時半、呉支社長の命令で林水月海軍報道班員が、海軍の自動車に便乗して本社へ、また、秋山尚之三次支局長は救護班を編成して、広島へ向ったが、前進不能のため、中山村で露営して翌朝本社へ、このほか社長邸に、笠井明士呉支社長・後藤証留尾道支局長・加藤新一岡山支局長・熊野英坤山口支局長らが、急を聞いて続々と集った。

このような空前の惨劇に遭うと、なおさら、集った社員たちは、報道関係者としての使命感が、湧然としてみなぎるのであった。

山本社長は、六日その日、新聞相互援助協定によって、中国新聞の代行印刷を、朝日・毎日・島根の各新聞社に依頼するため、社長邸に集合した生残り社員のうち、元気な内田一郎編集局次長、および吉岡豊撮影課長の二人を無電連絡に軍司令部あて派遣した。

吉岡課長は日の丸の手拭で向う鉢巻、腰には日本刀をぶちこんだ。また内田次長も連絡に行く途上、軍刀を拾って腰についた。この頃、すでに広島市中から、幽鬼のような姿をした避難者が、ゾロゾロと歩いて府中町へなだれこんで来ており、すでに到着した者も軒下・道路端といわず苦悶しながら横たわっていた。

すでに死んでいる者もあったし、呻吟の声をあげる者、肉親をさがして叫ぶ者など、不安と恐怖におののく人々が溢れ、物情騒然、この世とは思われない光景が展開していた。

二人は、無電連絡をとるため、東練兵場横の第二総軍司令部に行ったが、炎上していて通信を依頼するどころではなかった。全市がやられたとは知らないから、更に足を早めて広島城内の中国軍管区司令部に向った。その途中、常葉橋の袂で糸川成辰調査部長と偶然に出合い、三人で白鳥町側の石垣をよじ登って、城内の司令部に入った。威容を誇っていた天守閣も吹っ飛んでおり、城跡内は、市街地と同じような惨状であった。散乱した瓦礫や燃え残りの材木の破片のあいだに、生残った将兵たちが、まるでイワシでもならべるようにして、多数の惨死体を処理していた。

再度の応招をした山本利編集局長(山本社長の長男)は、第五師団司令部報道班中尉であったから、同中尉に無線連絡を依頼するために八方探したが、遂に見出されなかった。結局、被爆死亡したもので、その死体も発見できないままとなった。後日、司令部跡から軍服のボタンと遺骨が発見された。

一行三人が、まだ炎上している表門を立去ろうとすると、重傷を負った若い参謀将校が呼びとめ、「表門が燃えているから火を消してくれ。消防隊に早く連絡してくれ。」と、たのんだ。将校は、一般市民と同じように、自分の周囲だけがやられたと思っているようであった。誰しも、一瞬にして全市が灰燼に帰したとは、思い及ばなかったのである。

一行は、焼け落ちた陸軍幼年学校跡を預り抜けて、上流川町の本社に立寄ったが、ここで沼田利平地方部長と出合い、吉岡課長は社の状況報告に社長邸へ引返し、内田・糸川・沼田の三人が宇品の曙部隊へ向った。電信電話が全滅し、軍部の無線以外は他へ連絡の方法なく、曙部隊のみがこれを占有していたからであるが、宇品に着いたのは、六日もすでに午後八時であった。折しも灯火管制中で、情報中尉の話によると、第二総軍司令部配属の李*公殿下の消息が不明で、東京からさかんに無電連絡があるうえ、幹部将校は秘密会議中で、直ちに手配はできがたいというのを、懇請してようやく打電することができた。

被災状況第一報

二人はこうして責任を果たしたが、この宇品からの無電連絡により、中国新聞の第一報が、近畿・九州両地方総監府を通じて朝日・毎日両新聞社の大阪・西部各本社へ飛んだのであった。

灯火管制の暗やみにまぎれて、糸川部長と別れ別れになった内田次長と沼田部長は、帰路、比治山下の多聞院で太宰府警察部特高課長と会い、夕方のムスビを食べながら「一体、何をしたらよいだろうか。」と、相談をうけた。「何より、人心安定のための布告を出したらよかるう。」と、答えた。これが県知事の諭告となった。ともかく府中町の社長邸に帰り着いたのは午前一時十五分であった。こうして八月六日、被爆第一日の夜は更けていったのである。

義勇隊全滅

一方、水主町の建物疎開に出動していた中国新聞社国民義勇隊の四〇人は、まったく悲惨そのものであった。

疎開作業中の義勇隊社員は、ある者は重傷を受け、ある者は家屋の下敷きとなったが、各所に燃えあがった火炎の迫るにつれて、息のある者は、お互いに手をさしのべて握りあい、「君が代」を斉唱、「天皇陛下万歳」、「中国新聞万歳」を繰返し叫びながら、猛炎につつまれて死んでいった。

この状況を伝えたのは、北山一男隊長と水原智識記者である。二人は倒壊物の下敷きとなっていたが、胸部を押しつけていた材木が燃えるに従い、奇蹟的に材木が浮上ったために、ようやく這い出ることができた。肋骨骨折の重傷ながら、水原記者は本社に糸川部長を訪ね、「中国新聞社義勇隊の最後は立派でした。」と報告した。しかし、脱出した北

山・水原兩人とも結局は死亡した。なお水原記者は、当日出勤の予定であった大佐古記者が、本土決戦要員として、近く大國部隊に二回目の応召をするため、出られないので、その疎開作業要員の欠員補充を申しでて大佐古記者に代り、率先出勤したのであった。

このように中国新聞社の受けた打撃は、まったく絶望的な惨禍であった。幹部・中堅社員一〇四人(うち、建物疎開作業隊四〇人)を一挙に失い、残存社員のことごとくが重軽傷を負っていた。また社屋は、外郭だけをとどめるのみとなり、設備機材のすべてが烏有に帰した。ただ、温品村に疎開した輪転機一台と、その付属資材を残すばかりとなった。

そのうえ、中国新聞最大の読者層である広島市民の大部分も今は亡く、市の復興もまたおぼつかないというありさまであった。

七、復旧状況

復旧状況

焦土のまっただ中に外郭だけ残った中国新聞社の姿は、誰の目からみてもまったく再起不能と思われたほどで、その復旧は悪条件ばかりの堆積であった。

山本社長・山本副社長らは心痛やるかたなかつたが、社長を中心として社員らの結束はかたく、翌七日には、早くも復興の第一歩を踏み出したのである。

すなわち、社長命令で、七日から本社焼ビル内に連絡所を設け、本部(社長邸)との連絡、社員ならびに家族の消息を受けつけ、名簿の作成に着手した。伊佐木弘・山本武夫・藤川幸吉がその作業にあたったが、机や椅子は、新館九階の一室に奇蹟的に焼け残っていたのを、糸川調査部長が発見し、これを使った。そのうちに社員と家族の消息が少しずつ判明し、連絡もつくようになった。

六日夜、比治山の多聞院のところで、太宰特高課長から、「県民に対する諭告」の相談を受けていた内田次長は、ト部清隆記者と共に、七日は臨時県庁をおとずれた。稲荷橋西詰めの東警察署が、署員の奮闘で焼失を免れたため、多聞院から、臨時県庁はここへ移っていた。

太宰課長にあって、中国新聞社から、疎開していた巻取紙を提供するほか、印刷可能と思われる心当りの印刷所を紹介したりした。折から中国軍管区参謀長松村秀逸少将から、「中国新聞の編集陣で口伝隊を編成し、大本営発表をやってくれ。」と、使者の憲兵が伝えて来た。口伝隊は、新聞・放送などの報道機関が機能を失ったとき、ニュースを拡声器やメガホンで伝えるため、ラジオ技術者(主として器具商)などと連絡し、陸軍報道班で編成を予定していたものである。

ペンと紙ならぬメガホンを片手に、声をからし、トラック上からニュースを流した口伝隊員は、内田一郎・佐伯敏夫・尾山博・八島ナツエの四人であった。

伊佐木弘経理部次長は、市内西観音町の自宅が焼失して、保管中の金庫の合鍵を失い、残火のある熱灰を掘返してさがし、三日目によく発見した。しかし、本社一階の大金庫正面扉は焼けただれて、弓のようにゆがんで、どうすることもできなかつた。やむなく金庫室横の非常口に、はしごをかけ、ロウソクの炎でガスの有無を確かめながら金庫内に入り、内側金庫の無事を確認した。この金庫は被爆二日目の七日、高木利三忠海支局長らが、金庫から煙が出ているのを見つけ、非常口から内部へ注水して難を免れたものである。伊佐木次長は、この中の金を胴巻に入れ、本社・温品村疎開工場・東洋工業株式会社内仮事務所の間を往き来して経理にあたった。金庫内に社員の報国貯金の控が保存されていたので、日本銀行広島支店と折衝して払戻しを受け、無一物になっていた社員を力づけた。

代行印刷の依頼

六日当日、船舶司令部(暁部隊)からの無電連絡による代行印刷の依頼について、八日には島根新聞へ吉永龍次通送課員を、九日には、朝日・毎日両新聞西部本社および福岡日日新聞へ松浦寛次副主筆を急派、これと時を同じくして、朝日毎日両新聞大阪本社へ村上哲夫主筆と、後藤証留尾道支局長を急行させ、それぞれ中国新聞の代行印刷を依頼した。

しかし、これらの努力もむなしく、七日付および八日付中国新聞は、ついに休刊のやむなきにいたった。

中国新聞の題字を冠した代行印刷紙が配達されたのは、九日付からである。

再建の努力

相互援助契約による代行印刷は、原則として一か月の期間であったが、中国新聞を一日も早く、自分自身の手で発

行きたいということは、社長以下全社員の切々たる悲願であった。

しかし、焼跡の本社へ復帰してやるか、温品疎開工場で発行するかは、賛否両論に別れて、たやすく決まらなかった。この頃、広島へ投下された新型爆弾について、世上色々噂が流れていたし、アメリカからの放送によれば、特殊爆弾の正体は原子爆弾であり、被爆地は七五年間不毛の地と化すなど言われ、全国の新聞もこれを報道した。そこで、山本社長も壊滅した本社を放棄して、温品村で中国新聞を再建することに決意した。

温品村疎開工場長には、内田一郎をあて、編集・工務関係の作業を一括して取扱うこととし、補佐に山本安男、のち沼田利平を任じて、最悪の食糧事情を乗り越えるため、炊事・住居・寝具などの補給や管理に努力した。また、輸送統制部を特設して、松浦寛次が部長に就任し、物資調達係に佐伯敏夫・三井好雄・吉岡豊らの協力を得て資材確保を進めた。しかし、いずれも混乱最中の臨時的たものであり、人手不足のときであったから、明確な職名が決められたわけではなかった。

社員の住居として、物資調達係が入手した天幕三張を使用し、ほとんどの社員が、この天幕内で生活したり、または輪転機の横とか、巻取紙のあいだで雑魚寝しながら、ひたすら再建に取り組んだ。

本社から東北方五キロメートル余離れているこの疎開工場も、土壁が落ちガラスの破片などが散乱していた。

輪転機は、中国電力株式会社に依頼して、漸く動力線をひくことができたが、電柱などは、社員が穴掘りを手伝って立てた。

一方、配線その他の電気工事は、繻帯姿も痛ましい石川久人・岩本尋義両人が行ない、のちに毎日新聞西部本社から電気技師一人の応援を得て完成した。

文選・植字・大組などの工場建築には、ちょうど尾長町某工場の解体材を買い取っていたので、これを材料に使った。

大工は、後藤尾道支局長の努力で、備後地区からの大工の挺身隊二〇人が来援した。このバラック工場は突貫工事で完工したが、その日は月のよい晩で、一同月光を浴びながら、朝鮮スリ(朝鮮人の密造酒)で祝盃をあげたのであった。

昭和二十年八月十五日の正午、終戦の玉音放送があり、山本社長の示達で、居合せた社員二〇人が集合して聴いた。情報は入っていたものの、みんな熱涙を流した。前途は暗黒であった。だが、中国新聞は一日も早く出さねばならぬという一念にかられて、全社員の苦闘の日が更に続いた。

八月十五日、新編集局長に内田一郎が就任し、代替事務所として、東洋工業株式会社の医務室を借受けることになり、八月二十五日から総務・業務および編集の一部が移った。この方面の最高責任者は村上哲夫で、ほかに佐伯敏夫・三井好雄・大佐古一郎・広瀬実枝子・岩崎一太・伊佐木弘・三吉源次郎・藤田忠一・野田薫平・山本武夫・森永与作らが所属した。

新聞が印刷されるに至るまでの期間、カベ新聞を発行することになり、県政担当の大佐古記者が中心となって取材し、謄写印刷、もしくは筆書きしたニュー・スのピラを、市内外の要所に貼り出した。なお、東洋工業株式会社の松田社長は輸送に困っていた新聞社に対して、マツダ三輪トラック二台を好意的に提供した。

しかし、この車にはバッテリーが無かったので岩崎一太・山本武夫らが宇品の暁部隊に行って、「九九か年の借用証」をいれて入手した。

このような全社員挙げての労苦が報いられて、八月末いよいよ待望の自社印刷に取りかかった。広告欄の極度に圧縮されたペラ新聞でも、温品村の不完全な疎開設備では思うにまかせなかった。当時、同盟通信広島支社は、放送局などと市外祇園町に疎開していたので、温品村から内田一郎・山田精三が久保河内南殊の運転する側車でニュースを受けに行き、地元ニュースの取材には加藤新一・大佐古一郎・佐伯敏夫・三井好雄ほか新採用の記者があたった。編集部員には内田一郎・大下春男・岡田逸郎・三島利秋・尾山博・川西恒夫・八島ナツエ・山田精三・大野陽徳らがあり、写真部には吉岡豊・松重美人・小林晃・吉川仁作・小玉誠・下住忠・灰谷正夫・森川義信らがいた。写真の暗室は横穴防空壕を利用し、製版は天日のもとで試みたから、出来上りはまっ黒に近いものであった。雨天の日は写真の掲載ができないというありさまであったし、紙型は水に濡らして、竹切れで叩き、薪炭であぶって乾燥するという有様であった。

また、工場関係のうち、文選・植字・大組作業には村上幸松・八木護・佐倉輝三・川本芳夫・茶野木峰夫・玉木薫・谷口音一・丸山勇・大橋恒三郎・吉川美枝子らがあり、印刷には喜田俊雄・岩本尋義・石川久人・三宅義三・三上藤平・武田勝久らがいた。そのほか庶務関係には、沼田利平のもとに炊事住田キミ子・大工奥中甚輔が所属していた。

これらの人々は報道機関の立場から、焦土の広島再興をになった人々であるが、作業の合間に治療所を馳せめぐ

者、家族の行方を求めて瓦礫の巷をさまよう者、洗顔のたびに、爆風で食いこんでいたガラスの破片がのぞいて困るという者、衰弱のため幾度か昏倒しかける者などばかりで、明日の生命をも知れぬ重症者の集団であった。

自力の発行

一日も休まない努力の結果、ついに自力で八月三十日、三十一日付中国新聞の温品版を発行することになった。

編集兼発行印刷人は、工務局長小迫周蔵が被爆死したので、内田編集長がこれにかわった。

当時、空にはアメリカ軍の飛行機が休みなく飛び、進駐間近いことを思わせていた。この頃、新聞社が占領軍によって、どのような処遇を受けるかということが、関係者の大きな関心事であったし、また、市民たちも、初めて迎える占領軍に、大きな不安を感じていたから、人心を静めるという配慮もあって、村上主筆は糸川部長に命じ、アメリカ軍が軍紀厳正であり、将兵がきわめて紳士であることを強調する記事を、特に書かせた。

なお、八月二十九日、原崎通送課長が敗残の中国軍管区司令部に行き、新聞輸送に使う軍用トラック一台これを九月十七日の水害まで使用した。

当時、原稿の締切時間は真夜中の零時、刷出しが翌二時であったが、輪転機の故障で五〇部ずつしか出ず、山本副社長も社員と一緒に数調を手伝い、トラックで積出すのが午前七時になった。そして解版作業にかかると、鑄造機が用をなさず、活字を一本ずつ選りわけてケースにもどした。午前中の解版作業が終ると、新たに文選がはじまるという状態で、まさに不眠不休の努力を続けたのである。

台風の被害甚大

こんな苦闘の最中、九月十七日に台風が襲来した。そして印刷所から県道へ通じる唯一の橋が流失し、道路も決壊した。その上、工場も浸水し、取っておきの巻取紙七、八本も汚水につかり、海田市需品廠からの搬入も不可能となった。ついに新聞発行はできず、社員が手分けして、台風情報を書いた壁新聞を要所に貼って歩いた。一方、朝日・毎日両社に再び代行印刷を依頼したので、辛うじて休刊することはなかった。また、この水害で、被爆直後からの貴重な写真や記録多数を失うという打撃を受けた。

再建会議開く

豪雨禍で窮地に立った中国新聞本社は、再建会議を府中町の社長邸で開いた。出席者は、山本社長・山本副社長・山本朗・内田一郎・藤田忠一・村上哲夫で、社長夫人も同席した。

温品村へ半永久的な設備をしてとどまるか、あるいは沙漠のような焼野原のまつただ中に立つ本社ビルの残骸において、復興を強行するか二途である。

市中へ復帰

折柄、来広中の都築博士の意見や広島文理科大学理学部の建物強度検査の結果、残骸のビルは修理すれば、充分使用に耐え得るとの結論を得たので、山本社長は熟慮の末、市内へ復帰するという決断にふみきった。このことは、当時、市の郊外に疎開していた各方面の商社にさきがけた行動であり、広島市復帰の先鞭をつけたものであったが、中国新聞社の社員一同は精気を取戻し、にわかに活況を呈するようになった。

社長・副社長ら首脳陣は、東洋工業株式会社の医務室にあって、これを臨時本社とし、第一次の社員募集をはじめ、幹部の補充も行なわれ、九月十五日付で暫定人事が発令された。同月二十九日、人夫一二〇人を雇い、本社新館を僅か一日で清掃し、新館四、五階を社員寮として罹災社員に解放すると共に、社内で焼けた輪転機は、日本製鋼所に依頼して整備に着手した。社員たちは全力をあげて、本社へ本社へと温品村から諸資材を運んだ。

兵器補給廠の所有するニッサントラック一台、続いて電気自動車二台、マツダ三輪トラック一台を、吉岡豊が折衝して払下げを受け、各所に分散疎開してあった資材運搬を急いでおこなった。新聞発行の心臓ともいべき輪転機は、温品工場の一台中が使用可能であったから、これを苦心惨憺して運んだ。

本社にあった鑄造機八台は使用不能であったから、温品村の四台を使うことにし、呉市の広島瓦斯株式会社阿賀工場内に敷地四坪を借受けて活字鑄造を行なった。この臨時鑄造場には岩本尋義・武田尚二・小西静夫・中司一郎・広田力らがいって努力した。ちなみに広島瓦斯会社広島工場が、二十一年四月に操業をはじめたとき、同構内に鑄造工場(十二坪)を建て、阿賀から移転し、ついで二十四年四月にようやく本社に復帰した。

広島県政記者クラブの結成

なお二十一年二月には、次のように広島県政記者クラブが結成されたが、ほとんどの者は、被爆しながら生き残った記者であった。

西日本新聞社 真銅礼三

日本産業経済新聞社 財部長盛
中国新聞社 大佐古一郎 福永一司 山根博
中川一頼 佐伯敏夫 村井茂
大阪新聞社 石井麗雲
読売新聞社 岡静夫
毎日新聞社 重富義郎 豊福誠也
合同新聞社 木元真作 杉田利男
朝日新聞社 吉田君三 須川常春
産業経済新聞社 松本清
共同通信社 前原忠重 歌橋叔郎
時事通信社 太田巧

(社名イロ八順、 印幹事)

機構改革の実施

ちなみに、GHQ は、昭和二十年九月十日、「虚偽の報道取締りに関する件」の覚書を発表した。ついで、九月十九日、日本の新聞に対する編集規準、同月二十四日、「政府より新聞の分離」、同月二十七日「新聞言論の自由に関する追加措置」、同月二十九日、「新聞並びに言論の制限法令撤廃」を通告した。戦争責任を痛感した新聞界では、率先して首脳部が退陣し、機構の改革と人事を刷新して、真に平和民主国家の言論報道機関としての使命達成に、努力をすることになった。

昭和二十年十一月一日、内田一郎にかわって村上哲夫が編集局長に就任し、再建作業は着々と進行した。

同年十一月三日、ついに自力で中国新聞がふたたび発行されることになった。

昭和二十年九月二十七日に日本新聞連盟が設立され、十一月一日には同盟通信社が解散して、共同通信社と時事通信社が発足した。

大佐古一郎記者の手記(昭和二十六年文芸春秋)で、「九月十五日」の項に、「同盟通信社が十四日午後五時から一切の業務を停止する。理由が判らぬ。きょうの本紙一面に四段抜き見出しで、「米軍の不法行為、郵便局に侵入」の同盟通信ニュースが出ているが、恐らくこの影響か。大下整理部長社内人事で罷免となる。この話を聞いた太宰特高課長は腹をかかえて笑う。」と、その間の状況を記している。戦後、新聞界はめまぐるしく変転したが、中国新聞社もまた山本社長が第一線を退いて社主となり、山本正房が代表者となった。同時にこれまでの職制をあらため、新人事を発令し、新生日本の自由な新聞として再出発したのである。

昭和二十一年六月一日、夕刊「ひろしま」が発行され、村上哲夫・内田一郎・佐伯敏夫らが、幹部社員として出向することになったので、本社の編集局長に糸川成辰が就任、同年十一月一日に尾道支局を支社に昇格させ、新時代の要請に応ずる中国新聞として、復興一路、着々とその内容を充実させていった。

ヒロシマの、そのとき

大佐古一郎

(被爆地・安芸郡府中町の自宅)

八月六日

朝のしじまを破って、突如キーンという高速度で飛ぶ飛行機の爆音がした。私は反射的に庭へ飛び出して空を見上げた。と、フラッシュ・カンから出た閃光のようなものが眼をくらし、視野は真っ白になった。

「机の下へ逃げろ！」

私はとっさに病床にある妻へこう叫ぶと、傍らの櫛の根元に身を伏せた。二、三秒経つか経たぬうちに、地軸を揺がすような音響とともに爆風が来た。座ぶとんのようなもので、強く背後から叩かれたようなショックを受け、しばらく耳と眼は無感覚の状態が続いた。

その後の爆発音が無いので、頭をもたげて座敷を見ると、妻は薄い夏ぶとんを顔にかぶっている。壁や障子は外れ、窓ガラスの破片が散乱、土ほこりが舞い上っている。

私も妻も負傷はしていない。道路上へ飛び出て、付近を見ると、どの家でも大声でわめきあっている。北の空へ直径一〇〇メートルもある真赤に燃えた雲が、モクモクと湧き上り、その横に落下傘が一つ東へむかって流れているの

が見えられた。

隣家の主人が、顔を血みどろにして出てきて、「ガソリンをまいて爆発させたいだろう。」という。

私は巻脚絆をつけ、防毒面・防空頭巾・鉄兜を肩に、自転車に乗って家を飛び出した。約一キロ先の社長邸に行ってみると、山本社長は背中にガラスの破片が刺さり、負傷していた。「本社あたりがやられたらしい。」と、社長は、社屋と社員のことをしきりに心配する。私は本社へ急行することにした。

大須賀町の両側の民家や工場はいずれも半倒壊、市中から南へ逃げてくる人は、皆一様に火傷と裂傷を受けている。破れた衣服にドス黒い血がにじみ出ている。

市内へ入るにつれて、負傷者はますますむごたしくなってくる。頭から足の先まで満足な形をした人は一人もいない。大正橋までくるとその様相は一変してきた。

髪は焼け、糜爛した顔は丸く腫れ、頬から下の皮膚は一皮めくれて垂れ、男女の区別さえつかぬ。焼けただけ両手を胸のあたりにダラリと下げて、夢遊病者のようにヨロヨロと歩いてくる。各所に発生した火災を避けて逃げてきたのだろう。

負傷者の横たわっている比治山の山道を登りつめて、新聞社の所在する方向を眺めると、一面の炎と黒煙で見とおしがきかぬ。北方から行かぬとだめだ。自動車を置いたところへ降りていくと、「大佐古君、大佐古君。」と、呼びかける声がある。前から登ってくるお化けだ。

「君は誰だ。」

「唐津だよ。産経の……」

顔はまっ黒になって腫れあがり、細い眼がかすかに開いている。

「ひどいことになったな。痛むか?」

「うん。たいしたことはない。比治山の救護所へ行って治療を受けてくる。」

元気者の彼らしく答えた。

「どこでやられた?」

「紙屋町で電車もろとも投げ飛ばされた。カメラをやられたのが惜しい。」

見ると、火傷した手にひしゃげたライカ判のカメラがぶら下がっていた。社の者の安否を訊ねると、誰にもあわなかったといいながら、ヨロヨロと坂を登って行った。

広島駅前付近も火災が迫っていた。電車の終点まで行くと、重傷のため虫の息になっている女の傍に、無傷の幼児がしがみつき泣いている。私は幼児を抱き上げた。

「子供は助かったぞ!」と、女の耳もとへ叫ぶと、駅の構内から線路を越えて、一〇数名の負傷者が転んでいる中へ、子供を投げ出し、「たのむ。」と一言言って駅前へ引き返した。先刻の女はもう動かなかった。

大須賀町はもう火の海である。私はパンクした自転車を空地へ乗りすると、防毒面と頭巾をかぶり、鉄兜で水槽の水を汲み、頭から何杯も浴びせかけ、饒津神社前までの道を突破することにした。二、三〇メートルも進むと、全身は焼けつくようだ。息が苦しい。

空は闇夜のようにドス黒く、四辺はまっ赤な火災がバリバリと音を立てて狂い廻っている。馬が一匹、立ったままジリジリと焼けている。首に電線が巻きついている。私の姿をみとめると、ヒヒーンといかないで首を振った。

突然足にやわらかいものが抱きついた。振り切って見返ると、老婆のような人がうめきながら手を伸ばしている。

「兵隊さん」と呼んだようにも思う。私は路上に散乱した倒壊家屋や電柱、点々と横たわる死体に足をとられながら逃げるように突走った。

饒津神社の境内は、どの樹木も八つ裂きになっている。

路上と境内は負傷者で埋まり、うめき声と一緒に、「水を下さい。おかあさ - ん。痛いよ - 。」の声が充満している。

常葉橋たもとのガ - ド上に、貨物列車が横倒しになって石炭車が燃え上っている。

橋上へ出て白島を見ると一面の煙と炎、とうてい社へは近づけぬことを知った。

牛田へ出て実家へ行ってみると、店はメチャクチャに壊され、薬品は散乱している。隣りの主人が、皆無事に不動産へ避難しておられますと教えてくれる。

竹やぶの中から、甥が私を見つけ、「叔父さん、ここ。……ここ。」と呼びかけた。

ワッと、母が泣き出す。社で死んだとばかり思っていたそうだ。朝早く勤めに出た芳枝だけが生死不明とのこと。

母と義姉も小さい子も微傷程度でホッとす。

戸坂村・祇園町の収容所を廻り、下火になった市中へ引返す。

午後四時ごろ、旧城内の師団司令部へ着く。

松村参謀長が左手を三角巾で首に吊り、半裸体のまま、石へ腰掛けて、負傷者の収容にあたる暁部隊の兵隊を指揮していた。

「師団長閣下や二部隊長はどうでした?」

「動けるのは俺一人らしい。情報は入らんかね?」

「本社は壊滅の様です。師団司令部の発表をしてください。」

しばらく考えていた参謀長は、ポツリポツリと次のように語った。

「広島師団司令部発表。六日午前八時ごろ敵 B2 9 二機は広島市を攻撃、落下傘により新型爆弾を投下、市内に相当の被害を生じたり。」

本社へ行く。

私はまだ燃えている社屋を見ると、師団の発表も何も活字にならぬことに初めて気づいた。

八月七、八日広実編集局長・小迫印刷局長・山本企画局長・北山営業局長以下、本社の死亡者は百余名にのぼるらしい。

あの日、私は義勇隊員として建物疎開へ行くことになっていたが、召集令状が来たため、水原智識記者が私の代りに出動してくれて死亡した。まことに済まぬことであるが、応召が生命拾いになるとは思わなかった。

八月十五日

明後十七日の応召に備えて、病妻を大八車に乗せ実家へ行く。途中、焼跡に四、五人の男女が立ち止まって何かに耳を傾けている。一人に何ですかと聞くと、「天皇陛下の御放送ですよ。」と答えた。二キロメートルほど離れた広島駅の屋上あたりから、ラジオの音が響き、何万人もの白骨が埋まっている焼野原の上を流れてくる。

初めて耳にする澄んだ声と、アクセントである。

「……朕……なんじ臣民……朕が……体せよ……」

「いったい何の放送ですか。」

「一億玉碎せよとおっしゃっているのでしょうか。」

婦人は顔をこわばらせていう。

「そうじゃない。降参ですよ。どうもそうらしい。」

農夫らしい男が口を添える。国民服の中年の男がそれを受けて

「ソ連が参戦したから、とうとう日本は降伏したんですよ。この詔勅が今の御放送です。」と説明してくれた。

数部屋が焼け残った通信局へ立寄り総務課で真相を糺す。終戦の詔勅が下ったことに間違いのないことを確認。局内の各部屋に枕をならべている負傷者たちは、敗戦を知っているのかどうか。口から洩れるのはうめき声だけ……夜、火傷の芳枝と妻の寢床の側で、牛田の家族とともに出征中の兄のことなどを語りあう。口ウソクを三本ともしているせいか、心も明るい。私は甥に古新聞を持って来させ、その中から抜き出した一枚の一面一段記事"敵ポツダム宣言を発す"を、何度も繰返して読んだ。

前の家は、死んだ孫娘のお通夜で、派手なお経を詠む声がすでに一時間以上も続いている。二、三軒先隣りの家では、流行歌のレコードが鳴っている。

八月十七日

午前八時。召集令状を持ち西部第二部隊の焼跡へ行く。

日本の最後の兵力かと思われる二四、五歳から四〇歳位までの既教育ばかり約二、
名ほど集っている。

中には顔や手を繻帯で巻いた原子爆弾の負傷者が数名見受けられる。野天で簡単な身体検査が行なわれたが、負傷者の一人は軍医に何をいったのか「バカッ!銃剣術をやったら飯も食えるようになる!何だッ、火傷ぐらい。」と大声で怒鳴られている。まもなく大尉が石油箱の上から叫んだ。

「戦争はまだ終わったんじゃない。お前たちは、これから山口県の大国部隊へ入隊することになった。引率には自分が当る。」

入隊どころか、即刻放免されるものとばかり思いこんでいた応召者たちは動揺した。中には逃げ出そうかと、ヒソヒソ話している者もある。

しかし、午後一時には全員広島駅裏の広場へ集結して輸送貨車が配車されるのを待っていた。

三〇分も経ったころ、忙しそうに走り廻っていた将校の一人が携帯口糧の箱へ上った。

「大本営からの連絡によると、今日の応召者は全員即日除隊することになった。御苦労であった。解散!」

ワーッと喚声が上り、兵隊たちは一目散に走り去った。

帰途、東警察署に立寄り、十一日から十三日までの新聞を読む。朝日の代替発行になる「中国新聞」の題字が目にしみた。

八月二十日

東洋工業株式会社へ新聞社の編集・総務関係の間借を申込む。病院の二階があいているので、使用の内諾を得る。

すでに県庁も仮の宿東警察署からここへ移転している。自宅から約二、三分で出社できることはありがたいことだ。

社長が私に「君は東洋工業の近所で危険なところへ疎開すると思っていたが、さすがに先見の明があった。」と冗談をいう。そうじゃない。神戸・岡山・呉の焼夷弾攻撃を見て、爆弾より恐かったただけだ。記事にも「疎開はいくらしても行過ぎということはない。劫火の犠牲になるのは騎虎の勢というものだ。」と書き、特高の検閲もぜひ通してくれと押切って紙面に載せたぐらいだ。

十行にも充たぬ「中国新聞特報」を毎日がり版で刷り、焼跡へ貼って歩く。新聞を持たぬ記者の悲哀。

八月二十四日

県会開会。警察部長と県会議員との間に、敵軍進駐について激論の応酬がある。東方遥拝・黙禱・拍手・無修正可決の状態にあった翼賛議員のどこから、あのおしゃべりと闘志が生れてくるのだろう。火の粉がわが身に降りかかってくるからか。かれらは真の正義派か個人主義者か。オポチュニストか。そういう新聞人は何だ……日本新聞会の登録記者証を破る。

八月二十五日

台風は中国地方をそれたらしい。台風のため敵の本土進駐が四八時間遅れる。敵はまず報道機関を接収・管理するという。山本社長は「皆で田舎へ行き中国村でも建設するか。」という。

社の復興遅々として、未だに朝毎の代理発行に甘んじていることと、接収説とが社員を滅入らせている。写真部の一課長曰く「武器を取上げたあげくに奴らは何をしでかすか判らん。シナ人が饑餓に陥って日本人が飽食できるわけではない。日本民族の滅亡を企んでいるかも知れん。」

松浦教学課長が頭髪を指先でポロポロ抜きながら「僕も役目が済んだから、近々あの世へ行くよ。」と、淋しそうにいう。事実、この症状の人が私の知っている範囲でも、毎日二、三人は死んでいる。アメリカ放送は、広島は七五年間人類ならびに生物の棲息は不可能だと伝えているそうだ。

八月二十七日

温品村へ疎開していた輪転機が廻りはじめる。活字にせねばならぬことが多過ぎる。

八月三十日

京橋町の路上で五十歳近い婦人が焼跡に向って、「けんいち - ヅ。けんいちよ - う。」と叫びながら号泣している痛々しい姿を見る。

「おばさん。しっかりしなさいよ。」と肩を叩くと、またひとときわ高く泣き出した。

比治山下を通っていると、食糧営団の焼跡で怒号、罵声の一〇人ばかりが揉みあっている。焼け残った粟の袋を出し、奪いあっているのだ。朝鮮人が自転車へ一俵積んでヨタヨタと運んで行くが、袋の焼けた破れ目から粟が水のように*れ、路上に黄色い跡を鮮かに残していた。各地に疎開してあった軍需物資も盗難に遭ったり、地方事務所や町村役場で勝手に処分しているという。永野経済部長は、「そいつはいかん。しかしだね。国内で交流するんだったら、少々の闇は見逃してやれと、いった昔が思い出されるよ。のしをつけて敵さんへ進呈する今となってはねえ。」という。

高野知事はいつ会っても心は別世界に遊んでいる印象を受ける。かつての覇気も饒舌もなく、憂愁と虚脱とが彼の身体を取巻いている。夫人をうしない、多数の県民を殺傷した痛手に心がさいなまれているのだろうか。それとも戦争犯罪を追及される来るべき日のことを考えているのだろうか。(以下略)

一、当時の概要

所在地 * 建物の構造 * 建物面積 * 在籍職員 * 被爆時出勤者数 * 代表者

広島市八丁堀二八 * 木造（一部鉄筋） * 延五〇〇坪 * 一五〇人 * 一二〇人 * 広島県食糧営団
モルタル塗二階建

理事長佐々木鹿蔵

右同 * 木造平家建 * 一〇〇 * 二〇 * 一三 * 広島県食糧営団広島支部

支部長景山静人

右同 * 木造平家建 * 四〇 * 六 * 五 * 広島県食糧営団八丁堀配給所

主任山本末一

施設としては、敷地一、五〇〇坪に食糧営団本部・食糧研究所・広島支部八丁堀配給所・倉庫・土蔵などがあり、裏の空地に『型』の防空壕があった。

爆心地からの距離約九〇〇メートル

二、疎開状況

机・椅子・書類棚・用紙などの事務用品を、広島市近郊の倉庫に疎開した。また、非常用食糧として米穀・乾パン・小麦粉などを、焼夷弾や爆弾に対して、比較的に安全と思われる鉄筋コンクリート建ての、広島市役所・日本銀行広島支店・貯金局・専売局など主要建造物と、広島市近郊の倉庫に分散貯蔵した。

三、防衛態勢

食糧営団本部・同広島支部・八丁堀配給所の役職員で、食糧国防団を組織し、各種の事態を想定のうえ、常時訓練をおこなっていた。

防空壕の構築、水槽の設置あるいは消火器材の備えつけなどは、各事業所と同じようにととのえていた。

四、避難計画

近くの西練兵場と市外府中町千代の、食糧営団府中倉庫を、有事の場合の避難先として、あらかじめ指定していた。

五、五日夜から炸裂まで

男子職員三分の一ずつが、三日ごとに、交替で宿直することになっていたが、五日の夜はたびたび警報が発令されたので、ほとんど全員が出勤して、それぞれの部署につき、不寝番の警戒態勢をとった。

六日午前七時半ごろ、警報解除になり、一応警戒態勢を解いた。朝から炎暑はげしく、各自が防空頭巾・上着・手袋・地下足袋など、みな脱いで身軽になり、八時から、平常どおり朝礼を約五分間おこなったあと、それぞれの仕事についたとき、被爆した。

六、被爆の惨状

一瞬の強烈な爆風圧で、本部二階の屋根が押しつぶされ、そこにいた職員はみんな圧死した。階下の職員も、落下物やガラスの破片などで、重軽傷を受けたが、約一〇人ばかりの者は、お互いに助けあいながら、辛うじて戸外に脱出することができた。しかし、この一〇人も、次々と、原爆症をおこして、ほとんど死んでいった。

脱出した者の一人山口松造が避難するときは、まだ火災になっていなかったが、事務所から一丁ばかり上手の税務署付近から出火しているのが見られた。

事務所の火災については、ていた。それらの氏名は見分けがつかないありさまであった。

七、被爆後の混乱

脱出した山口松造は、「事務所の下敷きになり、相当負傷したため、六日夕方、牛田町の早稲田神社横の友人宅にたどりついた。

八日に現在の府中市栗栖町の親類に汽車で行き、夜着いた。」と、記している。他の生存職員も、それぞれ避難先を求めて、散り散りに逃げて行き、そこで治療を受けたようである。

八、食糧配給状況

食糧在庫状況

八月七日から、広島市外や呉・備後方面から、営団支部あるいは配給所職員の来援を受け、出張先などから帰広した職員、及び市内の生存職員と共に、市外府中町食糧営団府中倉庫(大洲橋南)内に、営団本部の仮事務所を設けて、食糧(主として朝鮮白米)の配給事務を継続し、二十二年に、桐木町(現在・松川町)に事務所が新築されるまでここで事務を執った。

なお、食糧営団広島支所は、八月二十二日ごろ、外郭を残した市役所内に仮事務所を設けて、事務を開始した。事務用品は、疎開先から持ち帰って使用した。

当時の事業再開時の状況は、被爆当日、営団府中倉庫に玄米六、
俵と乾パン四五万食が在庫していたが、玄米では食べにくいので、七日に呉海軍軍需部に懇請し、海軍の所有白米一万俵の貸与を受けることになり、九日には、江田島海軍兵学校の協力により、宇品港に白米二、
俵の輸送を受けた。残りの八、〇〇〇俵は、陸軍船舶司令部から輸送を受けることとなった。

また、山口県萩市および仙崎港に、白米三万五、
俵と大豆その他の雑穀一〇万俵の在庫があったから、鉄道局に緊急輸送を依頼し、十日から毎日二〇車~三〇車(一車二〇〇俵)の輸送を受けた。このようにして、罹災者の食糧確保に、残存の職員は日夜をわかない努力を続けたが、焼石に水で極度の欠乏状態が打開されるということはなかった。

第一三項 広島電鉄株式会社

一、当時の概要

概要

所在地 広島市千田町三丁目八二八

建物の構造

社屋 木造二階建 二棟 延 七〇四坪

煉瓦造二階建 二棟 延二〇二坪

木造平家建 五棟 延四二〇坪

(電車関係)

車庫四・変電所 三

輸送施設 車輛数 一二三

電柱 八四二

架線 一〇二、四〇〇メートル

(自動車関係)

車庫三

車輛数六三

事業種目 電車および自動車による旅客運輸

在籍従業者数 一、二四一人

被爆時の出勤者数 約九五〇人

代表者 取締役社長・多山恒次郎

爆心地からの距離 約二キロメートル

二、疎開状況

会社の各種予備機械および不急物資などは、その一部を県下奥地の当社営業所に、一部を市外五日市町の楽々園に疎開した。

三、防衛態勢

会社近辺に居住する社員を中心に広島電鉄防衛隊を編成し、これが主力となって防火・防空にあっていた。

またこれとは別に、運輸省からの指示により、広島電鉄義勇隊を編成していた。この義勇隊員は、各自の胸に(義)のマ - クをつけ、軍当局の査閲も受けたことがある。

四、避難計画

本社の屋上に防空監視哨を置き、構内には数か所の防空壕を設置し、万一の場合はここに退避することにしていた。

運転中の車輛に関しては、電車・自動車とも空襲警報の発令時には、その場に停車し、乗客は最寄りの防空壕へ待避させた。

五、五日夜から炸裂まで

会社幹部および事務系・技術系職員は当番制のもとに、毎夜約二〇人が近接の宿舎で待機し、専任の本社警備員と緊密な連携を保ちながら非常事態に備えた。八月五日夜から、この態勢にあって、同夜九時過ぎの警戒警報からはじまって、再三にわたり警報が発令されたが、一応非常事態も発生せず、翌六日朝七時過ぎに発令された警戒警報も、二十分間あまりで解除になったので、職員や従業員も平常どおりに、午前八時には、会社に出勤していた。

一方、電車・自動車の運転現業部門はともに早朝から運行を開始し、ちょうどラッシュ・アワーの混雑する乗客を輸送していた。

本社では、恒例どおり朝会があり、社内の中庭で伊藤信之常務の訓話があって、体操をおこない、終って上衣を着ようとするとき、原子爆弾が炸裂したのであった。

なお、電車・自動車の現業部門も、それぞれの配置において勤務中であり、各車輛(六五、六台)は、市内全域にわたって運転されていた。

ちなみに、会社は市民輸送の重責を負っていたから、職域義勇隊として市中の建物疎開作業に出動することはなかった。

六、被爆の惨状

(一) 人的被害

即死者 一八五人

負傷者 二六六人

計 四五一人

本社事務所においては、強烈な閃光と同時に叫喚の声があがった。しかし、吹き飛ぶ屋根・窓・扉、あるいは崩れ落ちる壁などの轟音に、その声も掻き消されてしまった。それに舞いあがった黒い埃のために、数分間は全くの暗黒と化した。

ようやく静まる埃の中から、上司を呼び、部下を気づかい、同僚をさがす必死の声があがった。

折りしも中庭では、朝会後の体操があったときで、事務系・技術系の職員約五〇人ばかりが、上衣をとり、シャツ姿であったため、多数負傷し、シャツやズボンに血に染めて、続々と這い出して来るありさまであった。

修理工場や電車車庫などの場所では、机や台・書棚などの遮蔽物がない関係で、直接、梁や柱・壁などに押しつぶされた者が多く、せつかく救出してもすでに絶命している者、病院に運ぶ途中、息たえる者などあって、悲惨をきわめた。

このような状況で、生存者もほとんど全員が切傷や打撲傷を受けて、無我夢中で防空壕へ逃げたり、また屋外へと急ぎ這い出した。ある者は潰れた社屋を見て茫然自失していた。

防空壕の上に立った多山社長が「多山は健在である。これくらいのことでヘコたれてはならん。みんな会社再建のために頑張ろう!」と絶叫している声がきこえ、ようやく我にかえった従業員もあった。

負傷の軽い者たちは、落ちた壁や木材の下から聞える声を頼りに、つぎつぎ一人一人を引っぱり出し、重傷者や歩行困難者は担架で、歩ける者は自力で、それぞれが指定されていた広島赤十字病院へむかった。やがて何処からともなく、「広島市は全滅だ!」という声の流れ、遠く近く諸所に立ち昇る炎や煙を見て、はじめてわが家を気遣う心が生じた。折りから、負傷をまぬがれた非番の社員や警備員がかけつけて来たので、延焼防止や従業員の安否連絡の任務を託して、傷ついた身を急ぎ帰宅していった。

市内各所を運転中の電車・バスが多数破損炎上したが、爆心近く走っていた車輛は即死者も多く出た。

(二) 物的被害

全寒 櫓下変電所(爆心地ともいうべき、相生橋東畔にあった煉瓦造)

半壊 本社事務所・講堂・食堂

小破 本社構内の千田町変電所・倉庫

(電車関係)

車輛の全焼及び大破 四九輛

” 中破及び小破 五九輛

計 一〇八輛

電柱の焼失倒壊 三九三本

架線の被害 九四、三五〇メートル

市内一円に運転中の電車・自動車は業界にも例を見ない壊滅的な惨禍を現出した。原子爆弾災害調査報告集第一分冊二〇〇頁に爆央付近(紙屋町)での、運転中の電車被害状況について図示説明されているのによれば、「運転中の市街電車は爆央付近において、いずれも脱線して数メートルだけ軌道外に押し出されている。而して、その中多くは、進行方向において脱線距離が大で、甚だしい場合には軌道に直角に位置している云々。」とある。

(自動車関係)

車輛の全焼・大破及び使用不能 六八輛

<本社社屋>

半壊状態になった本社社屋は、今にも火を發しそうな状況であったが、電鉄防衛隊ならびに一般従業員の活躍により、火災発生からまぬがれるることかできた。

近辺では、山中高等女学校あたりから、最初の火の手のあがるのが望見され、まもなく近隣の民家からも相ついで出火し、本社社屋も一時はまったく火の海にかこまれた形になった。

しかし、電鉄防衛消防隊の必死の消火作業によって、延焼を食い止めるとともに、付近民家の火災をも鎮火せしめたのである。

<櫓下変電所>

産業奨励館(現在・原爆ドーム)に近接した川べり煉瓦建て「櫓下変電所」は、市内電車の電源を操作していた。ここには九州・福岡両電気課員と五人の男子動員学徒がいた。この本屋に接して、木造二階建ての電話交換室があり、小早川・伊山両課員と女子挺身隊三人が詰めており、主として現業部門間の電話連絡にあたっていた。

爆心直下、変電所にいた七人は全員圧死したが、木造家屋にいた五人は、一瞬、空に高く吹きあげられ、続いて裏手の太田川の中に叩きつけられた。

しかし、この五人は、不思議に外傷一つなく、川岸の砂地に集って、お互いに無事を喜びながらも、一変した周囲の状況に、しばらくは、なすところを知らなかった。

小早川課員が語ったところによると、一瞬、空に吸い上げられた感じてあった。その時、チラッと下が見えて、構内にあった電柱の頂が小さく目に映ったという。かなり高く吹き飛ばされたことがわかる。

六日の夕刻ごろ、伊山課員(当時一七歳位)が若い力を振りしぼって、やっとのことで、全壊に近い千田町の本社まで帰って来た。しかし、これら五人も、それから二、三日のうちに、体に赤い斑点が出て、つぎつぎに死んでいった。

<広島電鉄家政女学校>

皆実町にあった広島電鉄家政女学校は、車掌のための学校で、校長宗藤中・生徒は約三〇〇人がいた。この生徒のうち三〇人が被爆により死亡した(当時教師山崎与三郎談)。

七、被爆後の混乱

辛うじて倒壊炎上をまぬがれた本社内の乗務員詰所に応急対策本部を設けた。ここへ歩行可能の従業員を集め、負傷者の治療を行なった。治療は赤チンとガーゼ程度の処置をして帰宅させた。また、重傷者は構内新館に収容し、後に広島赤十字病院に運んだが、病院もまた類焼の危険があるので、当日夕がた、宇品の陸軍共済病院(現在・県立病院)へ運びこんだ。

市内の西部ならびに宮島線関係者で、罹災負傷した者は、市外五日市町の実践高等女学校(現在の鈴ヶ峰学園)に収容した。

会社の主業務である旅客輸送は、電車・バスの焼失・損壊および架線・電柱の欠損・道路の障害などで完全に停止

してしまった。

しかし、何はともあれ、市民の足としての使命感から、直ちに修理可能な車を選び出して応急修理する一方、架線のかげ替え、軌条の整備に着手し、全力をあげて復旧に努めた。この復旧作業には、電線路技術員が全滅したため、東京から全国派遣の電信兵三、四〇人と、当社の技術員五、六人があたった。

なお、当日昼前ごろ、大混乱の最中、江田島幸之浦基地からいち早く出動した陸軍船舶練習部第十教育隊(部隊長・斉藤義雄少佐)が、電鉄本社を救援隊本部として、負傷者の収容、輸送道路の啓開などを行なった。

八、復旧状況

復旧状況

本社防衛隊の活躍によって出火延焼を免れた建物の一階の一部を応急修理し、また、車庫内の破損した電車を利用、事務所にあてて急場をしのご、順次事務態勢をととのえ、電車・バスの復旧整備に全力を傾注したため、本社建物自体の復旧は著しく遅れ、被爆後満二年たった昭和二十二年九月に、ようやく復旧を完了したのであった。

会社の被害があまりにも甚大であったため、従業員の中には社業の再起をあやぶみ、かつは七五年間不毛の地となるだろうといった流説から、会社への復帰が遅れた者もあった。しかし、いち早く復旧していく電車運輸の状況をみて、被爆後一か月たったころは、生存従業員の大半が復帰して勤務につくようになった。

事業の再開

なお、運輸事業再開状況のうち、市内電車の復旧は、宮島線から送電して、つぎのとおり開通した。

昭和二十年八月九日 西天満町～己斐間片側運転

同 八月十八日 広電本社前～宇品終点まで片側運転

同 八月二十三日 左官町～己斐終点

同 九月七日 八丁堀～左官町

同 九月十二日 紙屋町～広電本社前

同 十月十一日 八丁堀～広島駅

同 十二月二十六日 十日市十日市～別院裏

昭和二十二年十一月一日 江波線全線

昭和二十三年七月一日 皆実町線(的場～r 専売局前)

同 十二月十八日 横川橋～横川終点

なお白島線は、被爆時まで八丁堀筋を通っていたが、復興都市計画による鉄砲町筋の街路完成をまって、これに移設したため開通が遅れ、その開通は昭和二十七年六月十日(八丁堀～白島終点)であった。

また市内バスの運行復活については、次の路線がもっとも早かった。

昭和二十年八月九日 広島駅 比治山 宇品(二輛)

同 八月十二日 横川 江波・鷹野橋 観音 己斐

同 八月二十日 新庄 江波・広島駅 己斐・広島駅 宇品

被害と復旧

大嶺詮義

(当時・車輛課荒手車庫係長)

爆心地を中心に、市内一円に燃え広がった火災も、当日夕方にはほとんど鎮火したが、千田町三丁目が燃え始めたのは、七日の夕刻ごろからで、本社付近では、電車車庫出入口の向う側まで燃えました。

消防車もなく、消火に当る者もいなく、火からのがれる人々が右往左往するばかりで、私たちも全く茫然自失で見守っていました。

しかし本社北側の山陽モ・タ・の燃えている火を見て、稲荷神社横からホースを引き、表門のガソリンポンプで北側通路を境に消したのは、八日の明け方だったことを記憶しています。

< 電車被害調査 >

まず、あのころの市内電車営業状態から紹介しますと、二十年の初めごろまでは、電車内の灯火管制をして夜間営業をしていましたが、その年の四月ごろからは、電車の夜間営業は、トロリ・線のスパークで、都市攻撃の目標とな

るからと、軍の命令で中止され、午後八時ごろまでには、宮島線の高須と、江波終点到に電車を分散留置するようになっていました。

被爆後は、軍の方が、本土決戦に備えて、広島駅から宇品終点までの路線にある全焼または大破した電車を、戦車が出動して、線路外の焼けくすぶっている中へ突っこんでしまったような状態でした。

私は食堂で食う大豆入りニギリメシを腰にぶらさげ、テストハンマー一丁持ってくすぶる熱気と死臭の町へ出かけました。

鷹野橋まで来ると、市役所前と白神社の中間の路線上に爆風で六五〇号車が脱線し、線路と直角となり、あの当時の通り幅いっぱい、ふさがっていました。日本銀行広島支店前には、型が全焼しており、車の中には手足は焼け、胴体だけになった死体が引っかかっています。私は死体をおろし、台車に刻印してある車号を確認しました。

中電別館(当時浅野図書館)の中には、死体が薪を積み重ねたように積み上げてありましたが、環境に慣れてしまって、人が死んでいても何とも思わなくなっていました。

焼野原の中には、赤く焼けた電車がポツンポツンと見えます。当時の営業車輛数一二三輛のうち、一〇八輛の電車が被害を受けましたが、それを全焼・半焼・大破・中破・小破と区別して調査しました。広島駅終点・土橋・十日市・別院前・市役所までの範囲を運行中の電車が全焼でした(当時における車輛運行表参照)。原子爆弾投下直前まで線路上の、運行車輛数をみますと、紙屋町～広島駅間八輛・紙屋町～宇品間三輛・江波～横川間二〇輛・土橋～己斐間六輛・白島線二輛・比治山線一輛(千田・己斐車庫および桜上手引込線留置所を除く)となっています。

これらの東輛を担当して殉職された乗務員の方々のことをご想像下さい。爆心地付近を運行していた方々は、一瞬にして何千度の灼熱に煙となって消えていったでしょう。

当時監督だった私の知人西村君は、八丁堀白島交差点で巡視中被爆し、制服は焼けちぎれ、ほとんど裸の姿で、本社へ本社へと帰って来たところ、貯金局前で力つき果て、家族や同僚たちにユカタを持って迎えられ、収容されたと、六日当日聞きました。

<壊滅した路線復旧>

被害調査が済むと、私たち車輛課の者で小網町～十日市間の電線路復旧作業をしました。当時電気課電線路係が全滅したので、私たちがこの仕事をするようになりました。

この時は東京電信隊から電信兵が三、四〇人、復旧に派遣され、電信兵たちは、千田町資材倉庫に駐屯し、私たちと共同作業で着手したが、兵たちは小網町～十日市間のトロリー線新設、私たちは小網町～西天満間トロリー線を整備しました。若く日に焼けて真黒い体の兵隊たちが、キビキビと作業する姿はたのもしく、みるみるうちにあの焼跡に電柱が立ち並ぶのを見た時は、力強いエネルギーが感じられました。この兵隊たちも終戦当日限りで解散となりました。

被爆後の線路復旧は、己斐～天満町間が八月九日復旧して、営業を始めてから二十三年七月、比治山線を最後に、やっと戦前の営業までできるようになりました。

その間人的にも物的にも、ナイナイづくしの中で、壊滅した路線・施設を復旧するためには、まったく血の出るような苦心がありました。そしてこの従業員の苦勞もさることながら、当初路線復旧作業に従事された兵隊たちの努力も忘れてはならないと思います。

<八月十五日終戦>

あの日は私と巻線工場主任だった吉野仁一君(故人)がリーダーで、作業員四、五人が小網町鉄橋東側にある折れた鉄柱の上で終戦を知りました。仕事を始めた九時ごろから、己斐山手方面から低空飛行のB29が遠く回りながら飛んでいても警戒警報発令もなく、私は不審に思いながら作業を続けました。昼食後作業をしていると、下から降りてこいということです。戦争が終ったんだ。兵隊たちに「君たちは終戦を知っているか。」と言うと、「自分達には命令がない。このまま作業を続ける。」といいました。

あの時は、本当に何ともいいようのない複雑な気持ちでした。

現在、私たち技術部に勤務しているもので、当時被爆して生き残った者は五、六人しかいません。あれから一八年ふりかえると何だか夢のような気がします。

一、当時の概要

概要

所在地

本社 広島市大手町三丁目二四番地
広島工場 広島市皆実町一丁目一九三六番地
(軍需工場指定番号・ヒロ一、二五〇工場)

建物の構造

本社 コンクリート建及び煉瓦造・地上
三階・地下一階・屋上バルコニ -
建物面積不明
事務所 木造・倉庫木造モルタル塗二階建
広島工場 煉瓦造・建物面積不明

在籍従業者数

本社 約八 人
広島工場 四〇人

被爆時の出勤者数

本社 六九人
広島工場 三〇人

代表者 本社長・山口吾一

広島工場工場長・折戸豊

爆心地からの距離

本社 約二五〇メートル
広島工場 約二・二キロメートル
(最も近い貯炭場は二キロメートル)

施設の概要

本社関係 役員・営業・販売・購買・技術・供給・工事・当直など各課、及び一部の室を他会社に貸与
広島工場関係 ガス炉・精製装置・ホルダー・貯炭場・倉庫・事務所その他

事業の概要

都市ガスの製造・供給、コ - クスの製造・販売、副産物(タ - ル・硫安・ナフタリン・アントラセン・ベンゾ - ル類)の製造・販売、ガス器具販売

二、疎開状況

本社 人事関係・庶務関係・供給関係の重要文書及び工務課の工場・製造設備・図面、及び図面目録を広島実践高等女学校(現在・鈴ヶ峯女子短期大学)に疎開した。

広島工場 重要書類を構内の耐火ポールド(倉庫)に保管した(当日焼失をまぬがれた)。

なお、工場(倉庫)貯蔵品の疎開は、倉庫在庫品(広島支店貯蔵品)の一部を矢賀町元仮倉庫を借用して六日ごろから数度にわたり移動する。

三、防衛態勢

本社 広島市防空計画に基づき、広島瓦斯株式会社特設自衛団(団長・山口社長)を編成し、貯水槽・バケツ・梯子・シャベルなど防火器材を整備し、それぞれ各社員の防衛部署を決め、しばしば訓練を行なった。

また、職域義勇隊も組織して建物疎開作業に出動した。

広島工場 本社と同じく、社内防火組織を編成した。警戒警報・空襲警報の発令に際しては、本社従業員、及び勤務外の近隣居住の従業員は、広島工場に出動して、万一の場合に待機した。

なお、災害が発生した場合、本社では地下室に避難することにして

広島工場では、ガス発生炉(鉄骨鉄板葺二階建一〇門一門の広さ約六米四方)の中に待避することにして、焼夷弾被爆に対処した。

呉の阿賀工場では防空壕を構築したが、広島工場では造らなかったようである(当時、呉阿賀工場生産者 担当 久永三郎工場長談)。

四、五日夜から炸裂まで

八月五日(日曜)には、軍の要請によって、中国五県下(広島・岡山・水島・下関・米子・鳥取以上六社)のガス会社合併にともなう談合の会議が、当社社員寮(当時中町県知事官舎前)で開催されていたが、午後九時二十分警報発令で中止となり、各社役員の大部分は、大手町三丁目虎屋旅館に宿泊した。

広島工場では、警戒警報の発令と同時に、本社から防衛要員が派遣されて来ると共に、工場近辺の居住職員約一〇人も出動して、厳重な警戒体制をとった。

特にガス炉の明りが洩れないよう十分に注意した。

六日の朝を迎えて、遅くとも午前八時までは、本社義勇隊員三四人が、建物疎開作業現場の天神町・木挽町方面に出動していたようである。一方本社社内には、すでに約三五人の職員が出動していた。

また、広島工場では、ふだんは朝八時に、夜勤者との交替が行なわれたが、前夜来の警報続出のため、一部の交替がおくっていた。

五、被爆の惨状

惨禍

山口吾一社長が、五日夜、中国五県下のガス会社役員との会合のあと、寺町の親類宅に泊り、翌朝、そこから自動車

車で本社に出勤し、二階社長室の机についたとき、突如、原子爆弾の直撃に遭遇、即死であった。

社内にはいた約三五人の職員も、数人を除くほかは即死した。

本社の建物は一撃のもと、西南部の角一部を残して、すべて崩壊し、全焼した。

崩壊全焼の状況については知るすべもないが、火災は二日間くらい続いていたという。

火災終息後、本社建物は三階から地下室天井まで、床と天井がそれぞれ重なって一枚となり、地上まで落下、圧砕していた。そのあいだから、女子事務員の花模様ワンピースの焼残りが見え、また、すでに白骨と化した頭・足・手などがあつた。半焼死体には、ウジ虫が発生しており、異様な臭気が鼻を突いた。

地下室にも二、三人の死体があるが、コンクリートの梁で足などをはさまれ、逃げることもできず焼け死んでいた。また、本社入口の前には、六尺豊かな男が、目を見開いたまま、仰向けになって死んでいた。

山口社長が乗って来た自動車も、入口に無残な残骸をさらしていた。

被爆直後、数人は本社裏の元安川岸まで避難した様子である。そのうち一人は数時間後に絶命し、川に流れていった。

二人の女子職員は、辛うじて自宅にたどりついたが、やはり死んだ。男子職員三人は、広島赤十字病院前と広島電鉄本社のところまで逃げ、一人は自宅に帰って死亡し、一人は行方不明となった。推察するところでは、軍隊の死体収容所に積みこまれたか、あるいは川に水を飲みに行つて死に、そのまま流されてしまったのではないかと思われる。このようにして結局、出勤していた者は全滅したのである。

山口社長の遺体は無く、ただ、黒焦げになった一部分の歯が、辛うじて発見されただけであった。歯は遺族に届けられた。

なお、会議のため来広し、虎屋旅館に宿泊していた中国五県下の各ガス会社役員も、全員被爆して死亡した。

(死亡者名)

広島ガス関係

社長 山口吾一

常務取締役 荒川正太郎

同 加藤紘

岡山ガス関係

社長 服部重蔵

専務取締役 山田音次郎

水島ガス関係

社長 藤本憲治

支配人所長 高尾染

経理課長 平野義一

下関ガス関係

専務取締役 菊谷茂吉

常務取締役 松田静治

支配人代理 平野順任

鳥取ガス関係

専務取締役 雲井知

米子ガス関係

技術兼供給主任 海野広吉

一方、皆実町の広島工場は、爆心地から幾分離れていた関係から、全般的に見れば半壊程度の被害であった。

それでもガス製造設備(貫通式ガス炉)の上屋が全壊、石炭揚炭機は爆風によって、使用不能なまでに曲った。また、煉瓦造りのガス炉(本体)もヒビが入ったし、木造の建物は全壊した。その上、午後になって、南方面から火災が襲って来て、ついに工場に着火し、全焼してしまった。

爆風で工作工場が倒壊したとき、従業員一人が下敷きとなり、即死した。また、朝の装炭準備にとりかかっていたガス炉作業員のほとんどは、スレートの破片で負傷し、屋外貯炭場で作業していた者は火傷を負った。事務所および現場控室などにいた者は、ガラスの破片で負傷し、二、三人はかなりの重傷を負った。

火傷の者たちには、すぐ塗布薬で応急処置をした。重傷者は、救援に来た軍隊のトラックに乗せ避難させようとしたが、大火災と、避難する市民の混乱のなかで、どちらの方面が安全なのか、見当がたたなかった。しばらくして、南部宇品方面が良いということが判り、宇品へ向って出発し、そこから似島へ避難していったようである。軽傷者は、宇品の陸軍共済病院で応急手当を受けた。

なお、同工場のガスタンクの表面は、強烈な放射熱線によって焼けたが、その胴体に取りつけてあった鉄製螺線階段の、影になった部分が焼けず、模様を作った(第一巻に、この写真を収録。)

六、被爆後の混乱

本社は爆心地至近で、建物・人員とも壊滅状態であったから、なんとも手のほどこしようがなかった。

広島工場では、数日後、焼跡に仮小屋を造り、生存職員が集って、行方不明者の搜索に、連日全力をつくした。

事業体としての本社の機能は完全に停止し、広島工場もまた、ガス製造・供給などの工場機能を完全に失った。

七、復旧状況

復旧状況

大手町の本社は、復旧が不可能となったので、皆実町の広島工場内に、昭和二十年八月中旬ごろ、バラックの仮事務所を設置して、ここを本拠とした。また、広島工場も仮事務所を設けて、応急対策にあたった。

同年九月、藤野綿業株式会社の藤野七蔵社長が、被爆死亡した山口社長のあとをついで、新社長に就任した。藤野社長もまた被爆者で、まだ頭に白い繻帯をまいたまま、ガス会社復興の最高責任者として就任したのである。

広島におけるガス施設の被害は約九〇パーセントで、一万四千戸分が烏有に帰っていた(故藤野七蔵氏追悼録)。全く白紙の状態から事業を再興しなければならなかったから、多くの難問題が山積しており、悪戦苦闘の連続であった。

資材は、呉の阿賀工場および疎開先の矢賀から運んで来て、製造設備などを整備した。パイプなどは、市中の建物疎開による撤去分を再使用した。

外地から、社員もつぎつぎと復員して来はじめ、ようやく復興事業は、新社長のもとに、その第一歩を踏みだした。

昭和二十一年四月十一日、相当な被害があったとはいえ、焼失からまぬがれた宇品地区二六〇戸に、最初のガス供給が開始され、引続き皆実町・翠町付近、次には、段原地区から広島駅前へと、工事を実施し、さらに京橋町通りを

へて、本通りを通じ元安橋まで、幹線道路に沿って復興し、環状の輸送ルートで、千田町方面から大手町へ抜け、中央部へ配管工事を進め、さらに十日市・横川から己斐・高須方面に延びていき、都市復興の重要な推進力となった。

昭和二十三年十二月二十五日、基町の紙屋町電車通りに面した一角に、待望の新社屋を建設することに決定し、二十四年十一月一日に竣工した。新装のガスビルは、被爆の傷痕なお深くうずく広島市に、力強い精気をあたえた。

第十五項 中国配電株式会社...484

(現在・中国電力株式会社)

一、当時の概要

概要

(一) 本店

所在地 広島市小町三三番地

建物の構造 鉄筋コンクリート五階建一棟

(ほかに地下一階)

建物面積 一、五一三坪

在籍従業者数 三二六人

被爆時の出勤者数 二七二人

代表者 社長鈴木貫一

爆心地からの距離 約 八キロメートル

(二) 支店および広島電業局

所在地 広島市研屋町四番地(支店・電業局とも)

建物の構造 木造モルタル塗二階建

建物面積 三四三・五九坪

在籍従業者数 支店 一九人

電業局 一〇四人

被爆時の出勤者数 支店 七人

電業局 五九人

代表者 広島支店長兼・平櫛匡克

広島電業局長

爆心地からの距離 約 五キロメートル

二、事業の概要

(一) 業務

昭和十七年四月一日、配電統制令に基づいて設立された国策会社で、広島県・鳥取県・島根県・岡山県・山口県、ならびに香川県・愛媛県の一部を配電区域とし、日本発送電株式会社からの受電により、また、一部みずから発電を行ない、広く一般の需要に応じ、電気を供給する業務である。また、付帯事業として、電気機器の修理製造を目的とした製作所(別項参照)を持っていた。

(二) 資本金その他

資本金は一億三、〇〇〇万円で、総従業員数七、一三八人(昭和二十年三月末・退職者を含む)、保有する資産の総額は二億四、七〇〇万円(昭和二十年三月末)であった。なお、本店は広島支店のほか、各県にある四支店を統轄し、広島支店は広島県下の広島電業局ほか六電業の統轄業務を行なった。また、広島電業局は広島市および佐伯郡・安芸郡の島嶼部を除く地域を営業区域とし、直接配電業務にあたった。

三、疎開状況

(一) 本店

イ、昭和二十年四月三十日午前七時ごろ、B29一機の爆撃により、小町本店構内の三階建木造大倉庫その他を焼失し、貯蔵中の資材を灰燼に帰してから、資材の分散疎開を急ぎ実施することになり、同年五月、一般資材を安芸郡中野村・奥海田村・矢野町および安佐郡福木村方面の農家の納屋を借用して疎開した。

ロ、電線類は、安佐郡亀山村(現在・可部町)の亀山発電所の空社宅・旧可部電業局跡の倉庫・可部電業局管内祇園町ほかの借倉庫や、市内己斐町旭橋付近の河川敷などへ分散貯蔵した。また、ケーブル類は市内千田町発電所構内へ埋蔵した。

ハ、重要書類のうち、会計帳簿および諸表などは、昭和二十年六月ごろ、昭和十九年下期末までのものを亀山発電所倉庫へ疎開した。

二、株式業務は疎開できず、株式名簿の写しを作成し、副印鑑簿とともに、双三郡の三次電業局へ疎開した。

(二) 広島支店・広島電業局

イ、昭和十九年一月、機構の簡素化をはかり広島支店を廃止(昭和二十年六月一日復活)し、広島東・西両営業所を統合して、広島電業局と改称した。

ロ、また、市内の流川出張所と舟入・宇品・牛田の各散宿所を統合廃止し、東部・西部・南部・北部散宿所とした。

ハ、昭和二十年五月ごろ、業務課のうち電気料金調定業務を、市内分は廿日市派出所へ、海田市派出所管内分は海田市派出所へ疎開することとなり、これに従事していた女子職員と調定カ-ドを移した。

四、防衛態勢

昭和十七年七月八日、中国配電防衛団を結成した。この防衛団は、建物や主要事務所を対象とする自衛部隊(特設防護団に該当)と、電気施設を対象とする電気防衛部隊とからなり、電気施設の関係者と資材の配給関係者は、電気防衛部隊に属し、これ以外の者はすべて自衛部隊に属した。結成時に本店自衛部隊員は二〇〇余人であり、このほか各支店にそれぞれ防衛支部、あるいは防衛分団をおいて随時訓練をおこなった。

昭和二十年五月一日、中国軍需監理部の指導により、電気防衛部隊は日本発送電株式会社中国支店と一体化し、中国地方電力総合運営本部が組織された。

なお、自衛部隊は昭和十九年三月に改組され、本店では本店特設防護団と改称して新発足した。

また、電気施設の防護の必要性から、従来の所管課工務部防衛課を更に発展強化し、昭和二十年六月十五日に戦時施設部を新設、第一・第二・第三各課をおいた。

昭和二十年三月十四日から防衛当直(昭和十八年八月一日、防空当直規程制度)が実施され、本店では、主任以下一〇人が、屋上の防空監視所詰・社内巡視・灯火管制・各種の防衛器材の整備・爆弾投下の場合の処置と連絡などの任務にあたった。

四月の被爆以後は、防衛当直に社長以下重役も交替で当直にあたり、宿直状況は軍に報告された。

その他の防衛措置としては、本店では窓ガラスを鉄板に取替え、窓際から一メートル以内には可燃物を置くことを禁止し、廊下にはコンクリ-ト・ブロックを築いて土嚢を置いた。また各階に防火用水槽(大型酒造用の樽)を置いた。

本店防空本部を、本館地下室に置き、空襲時の避難場所は各階ごとに指定した。二階は地下室が指定されていたが、地下室は僅かな明りがあるのみで、その窓際には角材を重ねていたため、原子爆弾の被災に際し、ここのみが焼失をまぬがれた。

なお、本店の災害に際しては、指定避難先として、比治山本町の鈴川貫一社長宅・段原変電所・大洲町五丁目の製作所が指定されていた。

広島支店・広島電業局も本店の防衛態勢に準じていたが、現場の広島電業局工務課の職員は、夜間または休日などに空襲警報発令の場合は自動的に出勤することになっていた。

電気工作物防護施設は、昭和十六年九月の電気施設非常時対策要綱に基づいて、それぞれ防護対策を施した。

なお、段原変電所は広島市中への電力供給の東の窓口であり、防空計画で警備対象施設となっていたから、昭和二十年六月ごろから比治山山頂に駐屯していた陸軍部隊(船舶砲兵団か)から、昼間は一〇人程度、夜間二人程度の兵士が警備に来ていた。これは八月十五日の終戦まで続いた。

また、職域義勇隊が組織され、連日、雑魚場町(広島県立第一中学校グランド付近)の建物疎開作業に出動していたが、八月六日は出勤していなかった。

五、被爆の惨状

惨禍

八月五日の防衛当直は、大久保副社長ほか十数人であったが、このほか、夜半の空襲警報発令で馳せつけた者もいた。防衛当直主任は真田企画課長と杉中秘書課長であった。

一般当直者は、真夏の夜のこごととて、警戒警報下では、通用門脇の守衛所に、長い板の腰掛けを出して警戒にしていたが、空襲が発令されると本館地下室へ退避し、警報が解除になると所定の鴻南寮(国泰寺町)へ帰って仮眠をとる者もあった。

八月六日、午前七時三十分の始業には、すでに多くの職員が出社していたが、警報解除後、当直者は朝食のため帰宅した者もいた。また、当時は前夜空襲警報があった場合は、入社時間の遅刻を認めていたから、まだ出勤途上の者もあった。

広島支店・広島電業局においても、本店と同様な状況であったが、電業局工務課の一部の職員は、すでに現場へ出向いていた者もあった。

広島電業局へ学徒動員で出勤していた第三国民学校高等科二年生の生徒二〇人ばかりは、野崎由太郎訓導引率のもとに、小町の本社構内の空地で、建物疎開によって回収された電線などの整理に着手していた。

また、国泰寺町の土井田洋裁学校を借りていた中国配電青年学校に教職員八人と生徒(工務雇・工手見習組)四九人が集合していた。

このような状況下で、八時十五分の炸裂に遭遇したのであるが、本店では、熱線によって、鉄製の窓枠に打ちつけてあった木ずり(棧)や遮光幕をはじめ、窓ぎわから一メートル以上も離れていた戸棚など、一瞬のうちに着火し、事務所内の書類・机などの可燃物に燃え移った。火災は二、三時間燃え続けたあと、鉄筋コンクリートの外郭だけを残して、自然鎮火した。ただ地下室は、爆風で建具や什器など大破したが、火災から免れた。

広島支店、広島電業局は爆風により倒壊し、自然着火で焼失した。

七日、焼けてガラン洞になった本店の玄関に、死亡者と重軽傷者・行方不明者の氏名を書いた紙を戸板に貼って掲げ、縁故者に知らせた。

一階の表の室には、近所の負傷者が数人収容されており、奥の室には、社内で即死した一七、八人の屍体(後日調査のとき二六体あったともいう)がならべられていた。

ある死体は、窓のスチール・サッシュの槍のようにとがった破片が頭に突き刺さり、もう一人は裂けたサッシュが背中をつらぬいて、そのまま吹きとばされ、壁面にハリツケになっていた。

戦時施設部の山本第一課長は、爆風によって、机もろとも壁に叩きつけられた姿のまま、室の隅で死体が発見された。動くことのできる者は、周囲のまっ暗な中を、手さぐりで脱出したため、階段の壁には無数の血痕がついていた。

生き残った職員は、中央の階段が非常階段から中庭に出た。火が廻ったため、中には二階から南側の雨樋に沿って降りた者や、二階から窓越しに飛び降りて、助けられた女子職員もいた。これらの人は、おおかた通用門から電車道へ出たが、折りから爆心の方へ向って、強い風が吹きはじめていた。熱気をおびた風が砂を巻いて吹き、眼をあけていられなかった。このような中を、大方の者は、宇品または比治山方面にむかって思い思いに避難していった。

そして、陸軍共済病院や臨時に設けられた救護所に収容されたり、夕方近いころ、近郊の自宅や縁故者の家にたどりついた。重傷者は県立第一中学校の校庭に避難したが、たちまち猛火に周囲をつつまれて、脱出できなくなり、そのまま恐怖の一夜を明かした。翌朝、見ると、幾人かが息絶えていた。

これら避難した者は、当日出勤者二七二人(即死四〇人・青年学校在籍者を除く)のうち二三二人であったが、四五人はその後死亡した。

広島支店・広島電業局は全滅のため、当時の状況を知るよしもない。当日の出勤者六六人のうち、わずか一〇人がそれぞれ避難したが、これも一、二週間のうちに全員死亡したのであった。

被爆後一年以内における人的被害は、次のとおりである。逃げられる者はみな逃げたあとであったから、誰もその状況を見ていないが、その焼跡はまったく灰燼に帰しており、犠牲者の白骨がたくさん散乱し 所属場所*死亡者*備考

本店*一六三*一、学徒動第三国民学校生徒九人の死亡は含まれていない。

広島支店*九*

広島電業局 * 八八 * 二、死亡者は社内勤務中がほとんどで、出退途上
その他社外の被爆死亡者を少数含む。

尾道電業局 * 一 *

呉電業局 * 一 * 三、尾道・呉両電業局の各一人は、当日広島に出
張中であつた者である。

製作所 * 一二 *

計 * 二七四 *

本店のうちには、中国配電青年学校の教職員八人、生徒五〇人(うち一人は本店試験室に配属)が含まれている。

六、被爆後の混乱

被爆後、猛火の余燼いまだおさまっていない夕方六時ごろ、業務課の熊野一夫副長が、本店の焼けた残骸のなかに、初めて入った。各階とも内部はまったく焼失し、今朝まで元気でいた同僚のなきがらを見るだけであつた。

翌朝早く熊野副長は、また本店を訪れ、玄関に連絡所を設けた。午前九時すぎに、三次電業局から救援隊第一陣が、トラックで到着した。続いて、つぎつぎと各地から、救援隊が到着すると同時に、危く死を免れた在広社員もぼつぼつ出社し、応急復旧作業に着手した。

可部電業局は、六日当日、直ちに三人の偵察員を派遣したが、入市できず、七日、救援隊を派遣し、本店内外の重軽傷者を、次々と可部電業局に収容した。この中には一般市民も含まれていた。しかし、看護婦一人がいるだけのうえ、医薬品もとぼしく、治療も赤チンを塗る程度のことしかできなかった。

七日午後になって、比治山西麓の自宅で被爆負傷した鈴川社長が出社し、多数の遺骸の一つ一つに合掌し、冥福を祈った。

遺骸は本店内をはじめ、その付近に数十体あつた。

八日、焼けたままの本店二階の一室に、鈴川社長・大久保副社長(会社で頭部を負傷)・新持総務部長(自宅で全身負傷)・富田業務部長(会社にいたが無傷)・および森脇工務部長(会社で頭部負傷)が集り、応急措置を決めた。

まず、罹災社員の宿舍の手配・同じく名簿の作成・行方不明者の捜索・犠牲者の火葬・遺骨の整理・遺族との連絡応待・負傷者の手当・食糧品その他救援物資の獲得・本、支店間の連絡・対外関係事務・屑物の回収・配電線の復旧などを実施することにした。

このように焦眉の急を要する問題が山積していたが、毎日の出勤者はわずかに一〇人ないし一四人であり、不眠不休の努力が重ねられた。

焼けて廃屋同然となつた一階の隅に室を作り、破れ机を置いて事務をとつた。九日になって、現在の一号館の西側付近に、壕を三筋堀って、社の内外の死体を整然とならべ、火葬にふした。その時、鈴川社長はみずからの手で火をつけ、骨上げもした。

変りてた遺骸の見分けは、非常に困難で、この作業にあつた熊野副長は、遺族と一緒に一つ一つ見てまわつたが、義歯の金冠・腕時計・バンドのバックルなどを手がかりにするほかなかつたという。

広島支店・広島電業局は爆心地にも近く、木造家屋であつたから、死体もおおむね白骨と化していた。これらの遺骨は、可部電業局の職員が作った白木の箱に納められ、総務部長室であつた場所に安置した。二十三年八月、引取手のない一〇柱余の遺骨を、西本願寺広島別院内に建立した当社弔魂塔の中へ葬った。

七、会社の復興状況

復旧状況

本店社屋の鉄筋コンクリートの残骸の中に、壊滅した広島支店・広島電業局が入っていたが、九月二十四日、本店が大洲町の中国配電製作所に移つたので、広島支店・広島電業局のみとなり、建物の修理にかかつた。二十一年六月十二日に、一応の修理が完了して、また本店が帰つて来た。

市の中心部が廃墟と化し、送電は周辺の町だけという状況であり、従業員も激減したため、広島支店・広島電業局は研屋町の元地に再建せず、本店社屋を使用した。

電業局は、二十一年三月十六日、暫時合併していた可部電業局を元どおり分離して、可部町へかえし、広島営業所と改称した。

以後次第に市中も復興して来たため、二十三年六月十二日、的場(的場町)・小網(小網町)・横川(三篠本町一丁目)の三出張所を開設した。

また、同年七月一日、市内を、本川を境に東・西両営業所に分割、同年十一月二十二日には、宇品出張所(宇品町十二丁目)を設けた。こうしてようやく事業も本格的な軌道にのったのであった。

電気設備については、次のようにその復興対策が進められた。

イ、千田町発電所

火力発電設備は廃止し、二十二年三月十四日から許可出力四、五〇〇KVA(キロボルトアンペア-)の千田町変電所として再出発した。

ロ、大手町変電所

廃止。その跡地へ十四年五月、中配病院を建設した。

ハ、三篠変電所

応急修理のうえ、二十年八月末から運転を再開した。

二、段原変電所

被爆の翌七日から応急修理にかかり、八日から運転を再開した。

ホ、南部・江波・庚午変電所

これらは運転には支障なかったが、配電線故障のため、一時運転を中止した。しかし、七日に南部と江波、八日に庚午の各変電所が運転を再開した。

ヘ、三篠送電線

二か所断線したが、八月十日午後には牛田町の水源池変電所、および同付属電気施設が修復されると、ただちに送電を開始した。

配電設備の復興については、市中の各工作物のほとんどを失ったが、市民生活に影響が大きいのので復旧に努め、被爆後三か年にして、その根幹をなす配電線路延長は、戦前の八七パーセントまで復旧した。

これらの復旧にあたっては、莫大な資材が必要であった。十八年初頭、政府の命令で銅八五〇トンを非常供出しており、銅線をはじめほとんどの資材が欠乏していた。しかし、中国配電管内各地からの復旧救援隊が、それぞれ応分の手持資材をもって駆けつけたから、それによって応急修理をおこなうことができた。

終戦後、陸海軍の解散にともない、軍の電気関係資材を、一括して指定配給を受けることになり、東洋工業株式会社内の県庁へ日参して、資材の確保につとめたが、保管場所で相当量のもので盗まれるということもあった。

電球は、軍のものを一五万個ばかり払下げを受けた。

二十年末、ついに当社直営の緑井工場で電球が初生産され、翌年三月ごろ、旧広島被服支廠の一部へ移転してから、生産も増加した。

柱上変圧器は中国配電製作所で、損傷柱上変圧器をはじめ電力用変圧器の修理に努め、復興の一つの基盤となった。

なお、広島電業局では、二十年十月ごろ、佐伯郡廿日市派出所に疎開していた調定事務(電気料金の算定)を、女子職員数人と共に小町にかえした。しかし、需要家の把握が困難をきわめたので、調定発行にあたっては、各町内会長に使用状況を照会し、これに基づいて調定するという非常の処置をとり、十二月ごろ、ようやく戦後第一回の発行を行なった。

八、市内の電灯電力復旧状況

爆心地から半径二キロメートル以内の電気設備は壊滅的打撃を受けた。

被爆と同時に停電し、六日はまったく暗黒の一夜であった。

翌七日、比較的被害軽微な段原変電所の応急修理をおこない、ここを基点に復旧作業を進めた。まず、焼け残った宇品方面に送電を開始した。

八日、広島駅及び駅一帯と、小町の本社に電灯をつけた。前者は生き残った本店および電業局の職員によって、後者(大手幹線)は段原変電所から比治山の北を廻り、鶴見橋までは三次電業局の救援隊・鶴見橋から小町本店までは竹原電業局の救援隊によって復旧したのである。

竹原隊は、焦土と化した約一・三キロメートルの道路沿いに、暁部隊(陸軍船舶部隊)の三、四〇人の兵士の協力によって、半焼けの傾いた電柱を起し、焼けた電線を張って配電線を仮設した。

八月二十日には、残存家屋の三割に、十一月末には一〇割に対して、配電設備の復旧を完了した。

(一) 軍関係への送電

広島市は焦土と化した、なお戦争継続中であつた。従つて軍に対する電力復旧は第一順位で要請された。とくに宇品の陸軍船舶司令部は被爆から免れた部隊であり、無線通信は、市内でただ一つの健全なものであつた。

これへ充電用の直流発電機の電源として、緊急を要したから、七日、最初に送電された。

その他、市内各所に残存する部隊に対しても、西山忠治郎技師が自宅に持ち帰っていた市内の配電系統図(三、V以上)一枚を頼りに、早期復旧に努力した。

(二) 水源池への送電

被爆と同時に水源池変電所への三篠送電線が二か所断絶し、一時停電した。

一方、水源池構内の施設の被害も相当大きく、配電施設・電動ポンプの応急修理が必要であつたから、十日午後二時になつて、ようやく送電できるようになり、四台の送水ポンプが運転を開始したため、一日当り約五万六、立方メートルの配水が可能となつた。

(三) 病院への送電

市内のほとんどの病院は壊滅したが、広島赤十字病院(当時・第一陸軍病院赤十字分院)・通信病院・陸軍共済病院・三菱造船所構内病院は焼失から免れて、ただちに救護活動を展開したが、六日の夜は停電のなかで、手さぐりの治療をおこなつた。

通信病院は自動車のバッテリーで処置し、三菱造船所構内病院は暗やみに包まれて、やむなく治療を中止するに至つた。

七日になつて、共済病院と三菱造船所構内病院が送電を受けた。焼野原に孤立した広島赤十字病院は、被爆後一か月くらい後になつて、やっと送電を受け、レントゲンが使用できるようになつた。

(四) 電車への送電

八日、広島電鉄株式会社は、同社の工作隊、軍隊および広島高等師範学校の生徒の努力で、観音 己斐間の片側運転を開始した。引続き復旧作業をおこなつて同月十八日には、応急復旧をおおむね完了し、電鉄本社 向宇品間の運転を開始した。

(五) 中国新聞社への送電

上流川町の本社の設備資材一切を焼失した中国新聞社は、疎開先の温品村に再建する計画を樹て、動力線を引くよう要請してきた。

報道機関の重要性に鑑み、ただちに高圧配電線の新設に着手し、二、三日の後、すなわち十一日ごろには完成した。しかし、各工場の建築や配線工事など資材難が重なつて、戦後最初の自力による中国新聞(温品版)を発行したのは八月三十一日付であつた。

(六) 広島瓦斯株式会社への送電

皆実町の瓦斯工場は壊滅的な打撃を受け、類焼したが、九月には送電工事を完了した。しかし、諸施設の被害甚大で、戦後はじめてガスを供給したのは、二十一年四月十一日宇品地区二六〇戸であつた。

(七) その他主要工場への送電

被爆により全焼・半焼したもの、東洋製罐・東洋軽金属・大橋工業ほか六、〇二八工場、全壊・半壊したもの、旭兵器・倉敷航空機・中国塗料・三菱重工業・日本理化工業・東洋工業ほか一五六工場で、早いものは七日から送電を開始して復旧につとめた。

(付)中国配電株式会社製作所

(現在・中国電機製造株式会社)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市大洲町五丁目三二八番地

建物の構造 工場 木造スレート葺(モルタル塗) 一、八三〇坪

倉庫 木造瓦葺(モルタル塗) 四三八坪

福利施設 木造瓦葺二階建 二四四坪

事務所その他 木造瓦葺平家建 九二〇坪

事業種目

電力用の大型・中型変圧器の製作・修理、および低圧・高圧進相用蓄電器の製作を主製品とし、計器用変成器・発電機線輪の製作・修理などを、本来の事業としていたが、昭和十九年五月八日、呉海軍工廠の管理工場(防諜符号・ヒロ三二六三工場)に指定され、海軍関係の電気機器の製作を行なうようになり電波兵器・特殊潜航艇用の部品などを製作、また、工廠関係の電動機の修理をおこなった。

被爆時の在籍従業者数、及び出勤者数

在籍従業者数 * 作業内容 * (推定) 出勤者数

中国配電関係

中国配電職員(休職者除く) * 三〇六人 * 事務所 工場 * 二〇九人

動員学徒

比治山高等女学校 * 教師三 生徒一八三 * 進相用蓄電器、ボールド製作 * 一七六

広島市立第一工業学校 * 教師二 生徒五〇 * 電動機修理 * 五〇

広島工業専門学校 * 教師 生徒約八〇 * 午前中授業 午後工場 * 七五

広島電気学校 * 教師 生徒約二〇 * * 一九

安芸郡府中青年学校 * 女生徒 約一四 * 各部門に * 一三

計 * 三五二 * * 三三三

呉海軍工廠派遣

男子

電気部職員 * 一五 *

機械工作 * 四六

徴用工 * 一二三 (半島出身一三を含む) * 電動機修理 *

女子

島根県立益田高等女学校 * 教師二 生徒五三 * 電動機捲線 * 五一

大竹勤労動員署女子勤労挺身隊 * 三六 * 機械工作 * 一二

計 * 二二九 * * 一〇九

総計 * 八八七 * * 六五一

代表者 所長・織田史郎

爆心地からの距離 約三・六キロメートル

二、疎開状況

昭和二十年初めごろから材料の疎開をはじめた。

六月四日、蓄電器の主要材料、錫箔・コンデンサ - 紙・クラフト紙などを、構内の南方の社宅内へ、翌五日から、変圧器用油のドラム罐数十本を、馬車一〇台で、牛田町の不動院金堂裏の林中へ運んだ。アルコ - ルやシンナーなど常時必要とする補助材料は、工場の構内にあった麦畑の中に疎開した。

七日から会計帳簿・設計図面などの重要書類を、廃棄した大型変圧器タンクやドラム罐に入れ、鉄板の蓋をして工場構内の空地に埋めていた。朝出勤すると取出し、退社時や空襲時には納めた。

工場の疎開は、黄金山のふもとなど候補にあげ、横穴を掘って疎開しようかと話しあわれていた。

三、防衛態勢

昭和十九年八月二十三日、工場内各所に防空壕を構築した。続いて九月七日に、従来の防衛団を改組し、特設防護団を結成した。二十年初頭から、防衛当直を実施することになり、課長以下宿直して夜間の空襲に備えた。同年四月十三日、防空壕を増設して万全をはかった。

昭和二十年六月二十日、職域義勇隊を結成し、七月二十七日から三日間、県立第一中学校運動場南側の建物疎開に出動した。

四、避難計画

工場の内外に空地が多く、本店の避難先に指定されていたほどであったから、避難先など指定されていなかった。

五、被爆の惨状

惨禍

五日の夜、防衛当直の当番がいつものように勤務についていた。

海軍工廠派遣の工員を主体とした機械工場は、三交替で、空襲警報発令のとき防空壕に待避した。そのほかは防空遮蔽幕をした工場内で生産に励んでいた。このうちには大竹女子挺身隊の一〇余人も含まれていた。

構内の大和寮の寮生は、空襲警報発令中を除いては就寝し、明日の作業に備えていた。

なお、社宅居住者(工場西方二〇〇メ - トル)や自宅の一般工員は、空襲警報発令の時でも、工場へ出勤することは指示されていなかった。

六日、始業時刻は午前七時三十分で、ちょうど警戒警報発令中を、各職員はそれぞれの工場へ入っていた。

益田高等女学校の生徒も、白鉢巻にモンペで隊伍を組み、宿舍の広島女子商業学校を出て工場に入った。

比治山高等女学校の生徒は、門外に集合して点呼ののち入門し、大部分は各工場に、一部は事務所に入った。

広島工業専門学校一年生のみは、更衣室を教室として、午前中だけの授業を受けていた。

工場の各課では、課長を中心に朝礼をしたあと、それぞれの持場についた。

そのとき、突如、青光一閃、轟音を発し、猛烈な爆風が襲った。一瞬、まっ暗になり、みんな直撃弾にやられたと思ひ、床に身を伏せた。負傷した叫び声が聞えるが、身動きできない。

二、三分たったころ、ようやく明るんで来た。戸外に出てみると、ほとんどの者が顔や肩や、手に足にケガをしていた。

工場には軍関係者・動員学徒らを含めて約六五〇人いたが、幸い即死者はなかった。

工場の窓ガラスはすべて吹っ飛び、屋根も吹き落とされ、もとの形はまったく無い。

構内の診療所は、詰めかけた一般の負傷者で一ぱいになっていたが、手のほどこしようもない。

動員学徒の国田少年は、落下した屋根の合掌の、締付けボルトが頭に打ちこんでおり、ドクドクとその傷穴から、鮮血が噴き出している。午後三時ごろ、呉海軍工廠から駆けつけた軍用車で、海軍病院へ運びこんだが、「おかあさん、痛いよう。痛いよう。」と、母親を呼び続けながら、翌七日、ついに死んだ。

重傷者は構内の診療所で応急手当を受けたが、その他の動員学徒は、その日のうちに帰宅させた。また、海軍派遣工員のうち通勤者は、早々と帰宅した。

会社職員はそのまま待機して状況を見ていたが、不安がつるばかりで、午後四時ごろから次々と退社した。

一方、海軍派遣工員の宿舍である宝町の山陽中学校は全焼、益田高等女学校および大竹勤労動員署の女子挺身隊の宿舍である南段原町の広島女子商業学校は全壊したから、双方とも、三交替のため宿舍にいた者は負傷した。

これらの負傷者は、とりあえず製作所に收容して、治療するとともに、海軍関係者は、伝令をもって「従業員中、歩行可能な者を含めて約五〇パーセントの負傷者あり。直ちに救援されたい。」と、呉の海軍工廠に要請した。

伝令は、昼食時に工廠に到着したが、工廠では初めての報告に驚き、病院車一台とトラック一台に医薬品・食糧などを積み込み、午後三時ごろ、製作所に来援し、重傷者七人ばかりを呉海軍病院に收容した。

製作所診療所長京極一久医師のメモによると、呉海軍病院へ送ったあと、この診療所へ收容した負傷者は三〇二人で、そのうち工場関係者五七人、外から逃げこんで来た一般市民二四五人であった。また、三〇二人のうちで火傷者八二人、外傷者二二〇人であった。しかし、一般市民の一部は製作所に收容しきれず、治療したあと、青崎国民学校の仮救護所へ馬車で送った。

海軍管理工場であった当工場には、米もたくさん備蓄されており、砂糖・食用油などもあった。アルコールは盗んで飲む者が多いので危険印の色をつけていたが、実際はエチルアルコールで、これも相当量あった。

夜具は人絹ながらも新品が積み重ねてあったから、それらをすぐに活用した。

薬品もある程度保管されていたが、負傷者の数が多く、その日のうちに使いはたした。しかし、硼酸末がずいぶんあったので、後には硼酸水一点ばりの手当をした。布も工場の材料としてか、多量にあったから、これを十分に使用した。

幸いにして製作所は火災の発生がなかったが、大手町工場は、隣接の大手町変電所とともに焼失した。工場の留守番の守衛一人が同居の本店試験室職員・南隣の変電所職員と共に全員死亡した。

六、被爆後の混乱

製作所診療所に収容した負傷者は、だいたい九月末ごろまでいた。その間、死亡者がたくさん出たので、そのつど僧籍を持つ職員の読経や神官の職員のお払いで荼毘にふした。

当日とその翌七日にかけて、手伝いの職員も散り散りになり、二人の看護婦も九日以後は一人だけになり四、五日のうちに診療所はたくさんの負傷者をかかえたまま、医師一人・看護婦一人・手伝いの職員三人というありさまとなった。

死亡者の大半は、一般市民の負傷者であったが、住所氏名をただしていたので、死体や遺骨の措置は割合に円滑に進められた。

工場の建物は大破したが、倒壊・焼失からまぬがれ、従業員も動員学徒が一人死亡しただけであった。ただ、工場外にいた者や、欠勤中の者約二〇人(職員二人・益田高等女学校教師一人・大竹女子挺身隊員二人・比治山高等女学校一人など)が死亡した。

このように、会社も職員も比較的被害は少なかったが、従業員のなかには家族を失ったり、負傷者をかかえたり、家を焼失したりした者が多く、海軍関係者を除き、被爆後は出勤者が僅かになった。

海軍派遣工員の宿舎は、ひとまず製作所構内に移したが、青天井で野宿などを続けているうちに終戦となり、軍の徴用工も動員学徒も解除されて帰っていったから、工場は人影も見られなくなり、事務所も索漠として、人影まばらという状態になった。

七、復旧状況

復旧状況

海軍の要請によって、技術者三人を帯同、極秘兵器(〇作業・特技飛行機「秋水」の燃料研究)の試作研究のため、関東地区大船へ長期出張していた織田所長が、八月十二日に帰広し、中国配電本社と製作所の再建に取組んだ。同月二十五日、再建方針を職員に発表し、続いて二十八日に戦災見舞金として六十円ずつ支給した。

この頃、工員も事務員も、連日工場内の整備、疎開資材および軍の転用物資の受入れの作業に追われ、生産の再開にはまだ程遠い状況であった。

九月十一日、中国新聞紙上で「職員は九月二十五日午前九時までに出頭、または連絡せよ、連絡なき者は解雇する。」と、広告して、新体制の確立に踏みだした。また、海軍派遣工員のうち入社希望者は、受入れることにした。

九月十七日、本店の業務機構簡素化により、製作所は本店所属の製造課と大洲工場とに分れ、織田所長は本店理事として専任し、工場長に新しく岸本正が就任した。

このように機構改革を行なうとともに、従業員も八月末ごろ一〇〇人たらずの出勤者であったのが、次第に応召者の復員があり、十一月には新規採用も行なって充実してきた。

人員の充実に従って、生産もようやくはじまり、戦時中酷使したり、戦災によって損傷した柱上変圧器などの修理をおこなった。

また、進相蓄電器の生産にも努力し、二十一年春ごろから六〇〇W小型電気七輪を大量に製作して市販した。続いて家庭用水揚ポンプも製作販売した。これらの資材は海軍の残したもの、あるいは軍の転用物資を使用した。

(付)日本発送電株式会社中国支店

(現在・中国電力株式会社)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市大手町七丁目八九番地の六

建物の構造 木造モルタル塗二階建一棟

建坪(竣工時)延一、二一九坪九八

在籍従業者数 二二四人(昭和十九年十二月現在)

被爆時の出勤者数 一一七人

代表者 支店長・関龍一

爆心地からの距離 約 九キロメートル

二、事業の概要

昭和十四年四月一日、日本発送電株式会社法に基づいて設立された国策会社で、日本全国各地に電力設備およびその付属設備をもち、政府の管理に属する発電と送電を行なう会社で、中国支店は中国五県下の各発電所・送電線の運転保守、およびこれらの建設業務を統轄していた。

三、疎開状況

中国支店各課は、疎開準備中に被爆した。ただ、火力課(休職者を含む二三人)のみが、安芸郡矢野町の農業会事務所に疎開を完了していた。

市内および近郊の電気施設(変電所)の防空対策として、広島変電所は建物を黒色で塗装迷彩し、機械の防護施設を行なうほか、予備変圧器・単相一〇、一〇〇KVA三台を一〇〇余メートル先の安芸郡温品村字鶴江(現在安芸町)に疎開した。なお、温品村字磯合へも山を崩して準備中のところ、終戦となった。

資材の疎開は、昭和二十年四月から着手し、七月中にはすべて完了した。もっとも労力を費したのは広島倉庫の疎開で、同倉庫の建物一部を広島港変電所へ移築し、貯蔵資材を格納した。

そのほか、安佐郡の間野平発電所・布倉庫・飯室村榎原借倉庫、および佐伯郡の廿日市倉庫・地御前借倉庫・井口借倉庫、または、安芸郡熊野町の散宿所付近へも疎開をおこなった。

重要書類は、間野平発電所へ疎開した。またこの間野平発電所その他へ、希望職員の家財道具を一括して疎開した。

四、防衛態勢

昭和十九年五月十五日、本店に防衛部、支店に防衛課が設置され、社屋および電気施設の防衛にあたることになった。

各事業場には、特設防護団が組織され、防空当直を実施し、防空壕を構築した。

市近郊の坂火力発電所・広島変電所は、呉海軍基地・広島陸軍基地への電力供給の拠点で、その重要性に鑑み、十八年初頭、各々本館屋上に機関銃座が設けられた。坂発電所は一週間交替で数人の兵士が詰めており、広島変電所は警戒警報発令時に兵士が派遣された。しかし、昭和十九年十月に特設警備隊(在郷軍人)が設けられてから、両所とも警報発令時には、三〇人程度の特設警備隊員が配置された。

日常必要な重要書類は、空ドラム罐を利用し、構内の松並木の下に各課順に埋設、必要なときに取出した。警報が発令されると、われ先にと一尺ほどの土を掘りおこして、書類をドラム罐に納めた。

なお、職域義勇隊が編成され、市内の建物疎開作業に出動した。

五、避難計画

広島変電所・坂火力発電所を避難先としていたが、詳細は不明である。

六、被爆の惨状

惨禍

五日の夜は、防衛当直の者一五人ばかりが、続出する警報に緊張して警戒にあたり、六日の朝を迎えた。

始業時刻は午前八時で、大部分の者は机についており、発変電課では、もう会議をはじめていた。しかし、前夜空襲警報が出たので、一時間遅れで出勤途上の者もあった。このとき原子爆弾が投下された。

出社して洗面所で顔を洗っていた守衛の益誠一は、気づいたときには、自分の体が壁や瓦や木材の中に埋まっていた。

助けてくれという声が、方々から聞える。しかし、体が動かない。やっと片足が抜けたが、もう一方の足が、カスガイのような材木にはさまれてどうすることもできない。

見れば、燐のような青い火が、チラチラのぼっている。電源がやられたのかと思う。、心があせる。靴から足を抜いたらと気づき、素足になると這い出ることができた。

立上って周囲をみると、一面原っぱとなっており、市役所の窓から火炎の出ているのが見られた。

女子職員が二、三人寄って来る。その中の一人は額が裂けている。

「わたしは助からないから、お母さんによるしく...」伝えてくれと、益守衛にその子がいう。

「なにが、これくらい。」と、励まして、近くの万代橋の下へみんなで脱出した。

すでに会社の者や動員学徒など多数の人々が集っていたが、そのうち、上流から二回、下流から一回、紅蓮の炎が川面いっぱい、突風に乘って迫って来た。その火炎で火傷した人々も多い。

益守衛の腰の上に、火のついた材木が落下して来た。ふとみると左腕が裂けている。

二、三人の女子職員と、会社の近所の理髪屋に行っていて被爆した庶務課の向井康彦ら男子職員一〇人ばかりは、安全地帯を求めて、それぞれ下流をさして、更にのがれた。

午後二時ごろ、益守衛は、安佐郡川内村の妻の実家へ避難しようと思い、万代橋を渡り、天満町付近から北へ北へと歩き、夜の八時ごろたどりついた。その後、脱毛・高熱、耳・鼻・尿道からの出血が続き、三か月後によろやく歩けるようになったが、万代橋の所でバラバラになった他の職員は、ほとんど死亡したのであった。

関中国支店長は、爆心地から二キロメートル離れた白島町の宿舎で被爆したが、危く難をのがれ、総務・工務・土木各部長は出張中であつたから無事であつたが、出勤途上で被爆した佐藤秘書課長をはじめ、多数の職員が死亡した。

出勤途上で被爆し、死亡した職員は二〇人いたが、うち一三人は女子職員であつた。

支店在籍者二二四人のうち、当日の出勤者は一七人で、被爆による即死者七〇人、その後、一か年以内に死亡した者四五人、生存者はわずかに二人(向井・益)となつた。

出勤途上や自宅での死亡者を加えると、一四一人という多数の犠牲者であつた。

木造二階建ての社屋は、真上から押し潰されたように、折れ重なって崩壊し、発火した。火災はたちまち広がり、欲しいままに焼きつくして自然鎮火した。

一方、市内舟入本町の中国技能者養成所は、木造平家建ての教室一棟と木造モルタル塗二階建二棟の寄宿舎からなっていたが、被爆により倒壊し、のち焼失した。ここには舎監以下九七人がいたが、ここで二五人が建物の下敷きとなり焼死した。他の生徒の大部分は佐伯郡五日市町楽々園方面へ逃れて助かったが、一人のみ八月十三日に、ここで死亡した。

ほかに広島倉庫勤務の一人が出勤途中で、行方不明となり、松江火力発電所の一人が支店へ出張中で即死した。

これら合せて中国支店では一六九人の犠牲者を出した。

七、被爆後の混乱

七日の朝、ほとんど焼きつくされた社屋のあとには、金庫だけがただ一つ、よろやく原形をとどめて、ポツンと立っていた。

被爆しなかつた秘書課の西郷二郎人事係長は、つぎつぎと集る職員たちと協力して、まず遺体の収容に着手した。

焼跡から収容した遺体は、四七体ばかりであつたが、おおかたは白骨と化していた。焼残った遺体は、その場で茶毘にふした。

なお、これら遺体のうち身元不明であつた八人については、二十二年三月に至って、よろやく全部判明し、それぞれ縁故者に遺骨を渡した。

この七日に、坂火力発電所と安野水力発電所建設所から、トラックに食糧と救急物資を積んで来て、おおいにカづけられた。ただちに社屋の焼跡の一隅を整理し、テントを立てて臨時中国支店受付とした。

被爆職員の縁故者がつぎつぎと来て、照会を求めたが、はっきりした返答のできるのは、ほとんど無かつた。お互いに明日の自分に確信がもてないままに、ただなんとなく寄り集って、連帯感をたしかめあうような日が続いた。その後、安芸郡府中町の広島地区電力所を救護本部とした。

終戦後、二〇日だつてよろやく混乱状態を脱し、一応の整理が終つたので、各地に分散していた業務を常態に復す作業を進めた。

しかし、生存者の多くは家屋を焼失し、遠距離の地から通勤しなければならず、また、家族を失つたり、負傷者をかかえていたりして、業務はほとんど手につかない状態であつた。

八、復旧状況

復旧状況

全壊全焼した支店の業務は、一時まったく中止状態に陥ったが、管下の各電気施設は比較的到大した被害もなく、運転を休止することはなかった。

七五年間不毛の地と言われた広島市への赴任をためらう職員を説得し、全国から職員が集められると同時に、復員者がぼつぼつ姿をあらわすようになり、次第に業務が進んでいった。

そこでまず職員住宅の確保をはかることとし、罹災家屋の修理と、一部新築を行なった。続いて、市内宇品町に一、五〇〇坪を買収し、各建設所の仮住宅を移築して、職員住宅・合宿所の建設を計画、二十一年十二月二十三日に竣工した。その後、皆実町と大手町に社宅を建てて人員の充実を進めた。

また、被爆職員に対しては、県・市に陳情して、米や調味料をはじめ、軍用袴下・カヤなど特配をおこなった。なお、寝具五〇流・食器など相当量を戦災に備えてたくわえていたので、一部焼失したが、これを配

給して便宜をはかった。さらに、見舞金や弔慰金など現金を給与した。

九月の初め、広島変電所内の広島電力所に中国支店の仮事務所を開設し、二十一年六月には広島港変電所に疎開していた広島倉庫の建物を、広島変電所本館側に移築し、バラック二階建一〇一坪の仮社屋とした。

この頃から各所に分散していた事務所を、仮社屋に集め、ようやく本格的な業務を開始することができるようになった。

昭和二十三年五月十七日、市内南竹屋町に木造二階建延八三六・五坪の社屋を新築し、続いて同年二月三十一日、木造二階建延一四九・六四坪の中国給電指令所を同所に建設し、ここによりやく中国支店が完成したのであった。

第十六項 株式会社福屋百貨店... 515

一、当時の概要

概要

所在地 広島市八丁堀六三の一

建物の構造 鉄骨・鉄筋コンクリート建

地上八階(一部九階)、地下二階

電気・機械の諸設備。冷暖房設備

(被爆当時は、冷凍器供出のため、冷房は不能であった。)

客用エレベーター一基(他の一基は供出)

店用エレベーター一基・食堂用リフト一台

建物面積 延三、三二二坪

事業種目 百貨店法による百貨店業、及びこれに付随する製造・加工、ならびに卸売営業、保険代理業・その他中古品売買。建物または室の賃貸業。

在籍従業者数七五人

被爆時の出勤者数 三人

代表者 取締役社長・金田栄太郎

爆心地からの距離 約六八メートル

二、疎開状況

堅牢な鉄筋コンクリート建ての建物であったから、当時としては物資・施設とも疎開の必要を感じず、疎開は実施していなかった。重要書類などは建物内の大金庫に収納していた。

三、防衛態勢

福屋としての職域義勇隊を編成し、状況に応じて適宜適切な態勢をとっていた。

昼間の開店時間以外の時刻で、緊急の場合は、当日の宿直員、および店舗付近居住の隊員(職員)が、急ぎ駆けつけて警備にあたった。

クリーム色の社屋は、被爆約六か月前ごろから、外面全体に黒褐色の塗料を塗りたくって、一種の迷彩をほどこし、敵機の目標にならないようにしていた。

四、避難計画

建物が堅固な高層ビルであったから、事業所として特に指定された対戦処置・避難方針といったものはなかった。ただ、地下二階の一隅に通信施設が陣取り、係官が待機し、非常の場合の種々な措置にあたった。

五、五日夜から炸裂まで

夜間から六日早朝にかけての詳細な状況は不明であるが、宿直員と少数の近接地在住義勇隊員により、終夜警戒の態勢がとられていたものと推察される。

当時、福屋の建物の大部分は、軍・官関係および時局がら重要業務に関係した職場に供出していた。現在の広島通産局にあたる中国地方軍需管理局もこの一階にあった。

福屋自体は地下一、二階(大部分が電気・機械設備)と、狭少な中二階および七階の一小部分の場所において営業を継続していた状態であったから、前夜来の警報時のような場合は、これら供出職場それぞれの責任において、灯火管制その他の警戒処置がとられていた。

八月六日朝七時半過ぎ、警戒警報解除後は、どの職場も平常どおりの執務状態に入った。

しかし、炸裂の直前においては当社ではまだ若干の出勤者があっただけであり、市中の建物疎開作業への福屋職域義勇隊の出動などもなかった。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

死亡者三人

右の数は、福屋全体の犠牲者数であって、被爆時になお自宅にいた者、出勤途中の者などを含む。また、出勤して店内で被爆した三人のうち一人は死体の確認ができなかった。

店内は、原子爆弾の炸裂と同時に襲来した強烈な爆風と震動により、各階の諸施設・諸器具類は破壊粉碎され、四方に飛散した。このため多数の即死者・重軽傷者を出し、軽傷者のみ辛うじて脱出した。

それ以外は、人も物もすべて焼かれ、各階、各職場を通じて、随所に異様な焼死体が散乱していた。負傷しながらも、何とか脱出できた被爆者たちは、火炎の立ちのぼる中を、思い思いの方向へ逃げていったが、氣息奄々、途中で倒れたまま焼け死んだ者も多数いた模様である。

(二) 物的被害

地下二階から地上八階屋上に至るまでの各階は、骨組みと外郭を残しただけで、他は電気・機械・冷暖房設備・エレベーターなどを含み、完全に焼失した。

ただ、社内の大型金庫二個だけが、外面に損傷を受けたが、内部収納物はすべて無事であった。

原子爆弾災害調査報告集第一分冊一六六頁の記述によると、福屋屋上の金網支柱の屈曲状況について、明瞭に一度は爆心反対に屈曲し、再度の逆屈曲のため、その部分が折れている、とある。

建物の火災発生状況については、詳細不明である。しかし、建物の窓が破碎せられ、窓ぎわや階段廻りに置かれていた可燃物が、いっせいに発火燃焼し、次第に全館に延焼したものと思われる。また一説には、当時、東消防署となっていた電車道をへだてた北側の福屋旧館が、その貯蔵ガソリンに引火爆発し、同様貯蔵されていたフィルム三、

巻が引火して、福屋ビルに燃え移ったともいう。こうして全館内にわたって火の海と化し、自然鎮火を待つ以外にほどこすすべもなかった。

七、被爆後の混乱

会社役員は、まず福屋従業員に対して、市の西郊高須の北川宅(当時・常務取締役)に参集するよう掲示して、連絡の取れる従業員に対しては、適宜連絡方法を講じた。参集者のうち若干人を残し、他の従業員は全員、将来店舗再開の場合は優先的に再採用することを約束して、一応退職してもらうことにし、それぞれの退職慰労金を手交した。

外郭だけ残った福屋の機能は、完全にストップし、策のほどこしようもなくそのまま放置しておくような状態であった。被爆後およそ一か月あまりのあいだ、建物は伝染病病舎として、二、三階を使用されていた。

九月十七日の暴風雨襲来によって、八丁堀の道路面に溢れた雨水が、すごい勢いで地下一、二階に流入し、電気・機械など、すべてが水浸しとなった。十月半ばごろになって、動力ポンプをようやく入手して排水したが、この雨水による損害は甚大なものがあった。

八、復旧状況

復旧状況

壊滅的打撃を受けた福屋は、ようやくその年の十月に入って、高須の北川常務宅に、福屋復興事務所を設置し、幹部相集って前後処置にあたりはじめた。

店舗はとりあえず一階を整理補修、その一部を賃貸し、十二月末ごろ、配給酒につまみ物を添えて、立飲み配給を実施した。荒涼たる焦土のまっただ中で、一人につきわずか五勺の酒ながら、心身ともに疲れ果てていた市民生活を元気づけることにたいへん役立った。

昭和二十一年一月になって、一階全部を、業者に区画割りして賃貸した。業者はそれぞれ小間物雑貨・荒物・古物・塩乾魚・仏具・家具などの商品を陳列販売し、戦後特有の雑然とした市場の様相を呈した。

また各商社などの要請にこたえて、二階以上の各階を順次賃貸したが、焼け焦げたコンクリート建物内に板で間仕切りした異様な事務所の集団であった。

その後まもなく、前記の一階フロアを福屋本来の直営売場に切替え、また二階以上の各商社の仮事務所も、逐次賃貸しを解消してゆき、つぎつぎに修理・改装を施して福屋自体の売場に転換した。

このように一歩一歩、復興に努力して、昭和二十八年ごろに至り、ようやく全館が一応の復興完成を見るに至ったのである。

福屋七階から脱出

河内貞子(旧姓石原)(談)

(被爆地・福屋七階事務室

当時・動員学徒・満十五歳)

戦時下のきびしい統制経済と配給制度で、福屋百貨店は商売どころではなく、ビルディングの各階とも、軍需関係機関や官公庁の一部局が入って、事務室に使っていた。

地下室は雑炊食堂で、連日開店の前から、空腹をかかえた市民が長い行列をつくっていた。三階と五階にどこが入っていたかは忘れたが、一、二階には燃料庁など軍関係機関があって、いつもいかめしい軍服姿の人々が入り出していた。六階は海運局、七階は、私が女子商業学校三年生の学徒動員で出ているところで、千田町の貯金局の振替貯金課が使っていた。八階は福屋自体の事務室があった。

振替貯金課には、課長以下四、五〇人の職員がいたが、ほとんど女子職員で、それも動員学徒が多く、女子商業学校生徒一二、三人と進徳高等女学校の生徒七、八人が出勤していた。私たちの室はちょうど建物の中央部に位置していて、日の丸の鉢巻もりりしく、こまかい計算事務に追われる明け暮れであった。

その日八月六日も、午前八時に朝礼がはじまるので、七時過ぎの警報解除のあと、私は急いで横町六番地の自宅から、歩いて出勤した。警報の出たすぐあとであったにもかかわらず、みんな出そろっていた。

室内で例のとおり朝礼がおこなわれて後、私は机によってソロバンを手にとった。

そのとたん、ドシーンと頭から圧しつけるように、重い異様な音があった。

私は幾刻か意識を失っていた。

気がついてみると、周囲はまっ暗で、ヘンな臭気が鼻を突いてきた。「空襲されたんだな。これは毒ガスかも知れない。」と、私は感じた。

その暗やみのあちらこちらから「お母さん」と呼ぶ声や断末魔の泣き声が入り乱れて、聴えて来た。

私は渾身の力をこめて、押しつけられた暗黒から脱出しようとしたが、どうにもならなかった。毒ガスではもう助からないと、私は半ば諦めてその場に坐りこんだ。

そのとき、指一本ほどの明りが、ふと眼に入った。

どうやって脱出したのかわからないが、その明りを頼りに、暗やみから、とにかく私は出ることができた。

モンペはボロボロに裂けていたが、制服の上衣だけは着ていた。鉢巻はどこかへとんでしまっていた。

事務室の出入口は工しベ-タ-の手前であったが、そこに年輩の守衛が一人、ポ-ツとして突っ立っていた。そして私の友人もそこにいた。私は「逃げよう。」と友人を誘った。

守衛のそばに、ふとんが置いてあったので、「このふとんを借してください。」と、私は守衛に言った。守衛は返事もせず、やはり同じような姿勢で、表情のないデクの棒のように、ただ呆然と立っているだけであった。

エレベ-タ-の入口は、大きくパツと開いており、中の昇降機は口-ブが切れて、暗い底に墜落していた。

私と友人の二人は、ふとんを頭からかぶるようにして、明るくなってきた階段を降りていった。階段のふちに留めである細長い金属が、みな跳ねあがっていて、いちいちそれをよけながら降りねばならなかった。降りる途中ではあまり人に出あわなかったが、降りてみると大勢の人々がむらがっていた。みんな、このわけのわからない突発事態にあわてふためき、我先きにと電車道の方へ逃げ出そうとしていた。

私達の出入りは、表でなく東側の通用門を使っていたが、門の中ほどまでの高さに、折り重なってたくさんの人が倒れていた。すでに死んでいた人もあったし、ムシの息で呻吟している人もいた。その人の山を踏みこえて動ける者は必死で外へ出ていった。

友人は「水がのみたい。」と言って、地下室へ降りて行ったが、すぐ帰って来た。地下室は、すでに水浸しになっていて、入ることができなかったという。

私と友人はともかく外へ出ることができたが、どこへ行けば安全なのか、それもわからなかった。

福屋の前には、電車が横倒しになっており、運転手が、車体のそばの地面に吹きとばされたような恰好で、仰向けになって死んでいた。

どちらへ逃げようかと考えた。「風かみに逃げよう。」と直感した。そして、中国新聞社のビルを見ると、四、五階のところから大きな煙が噴き出していた。また、私達の居る前の東宝劇場(旧福屋隣)からは、小さな煙があがっていた。

私たち二人は、ふとんをかぶったまま、ヨロヨロと上流川町通りに出て、泉邸の方へ逃げていった。

上流川町の NHK の前の水槽には、子供が一人、頭を突っこんで死んでいたし、その玄関のところには、蚊帳をまとった四歳ぐらいの女の子が泣いていた。私は、とっさにその女の子の手をひいてやり、どれぐらい一緒に逃げたであろうか。

泉邸の横を過ぎ、白島町まで逃げて来たころ、私たちの道は、もうもうたる火炎につつまれてしまっていた。

道の両側の家々が、大きな火の手をあげて、ドドツと道に倒れ、私の頭上におおいかがさって来た。

そこへ二頭の軍馬が逃げてきて、私の前に立ちはだかった。私はその馬の腹の下をくぐって前に出た。ふだんならできない事であった。

やっと白島の電車終点のところまで脱出したが、福屋から一緒に脱出した友人も、連れて来た女の子も、そして頭にかぶっていたふとんも失っていた。

常葉橋は、欄干が半分落ちており、床上が燃えていて渡ることができなかった。これと併行してかかっている鉄橋も、途中で貨車が脱線転覆しており、枕木が燃えていて、これも渡れなかった。

やむなく下の河原に出た。河原には無残な姿の避難者が、たくさん集っていた。

皮膚が大きくズルリとむげ、黒く汚れた素ッ裸の女学院の生徒たちや中学生たち、それに兵隊もたくさん逃げてきていた。兵隊はみな服がなく、革ベルトと靴だけという姿であった。

何時ごろであったか、河原の上に小石のような雹が激しく降って来た。その雹がすっ裸の避難者の傷口をひどく叩きつけた。

私は、この河原に三日間もうずくまっていた。

私が命拾いしたのは、福屋の事務室が建物の中央にあり、閃光をみず、ガラスの破片による傷程度の負傷者であったからであり、河原に逃げたまま三日間、あまり動かず体力をむやみに消耗しなかったからであろうか。

第十七項 三菱重工業株式会社広島機械製作所...504

同 広島造船所
(現在・三菱重工業株式会社広島造船所)

一、当時の概要

概要

所在地 広島機械製作所...広島市南観音町地先

広島造船所...広島市江波町地先

建物の構造(昭和二十五年一月現在)

事業所*敷地面積*建物面積(延)*主要工場施設

広島機械製作所*三六七、九四〇坪*二九、九六一坪*事務所・鋳鋼工場・鋳鉄工場・製缶工場・

南観音町地先 産業設備営団から

主機工場・器具工場・調質工場・合金工場

借用

・その他

広島造船所

江波町地先*二二〇、五九八坪*二五、四五三坪*事務所・鉄機工場・船殻工場・艦装工場・

産業設備営団から

鍛冶工場・木工場・製材工場・銅工場・酸

借用

素工場・その他

福利厚生用地 *一七〇、〇一八坪*二一、四九五坪*独立家屋一、二五六戸

南観音町及び庚

家族アパ - ト一八三世帯

午町

寮 八棟(六五二人収容)

合計*七五八、五五六坪*七六、九〇九坪*

備考(一)建物面積及び社宅戸数、坪数は、昭和二十年時点の把握が困難につき、二十五年一月現在とする。(殆んど変更なし)

(二)工場建物は鉄骨及び木構造・スレート葺。事務所・倉庫・厚生社宅・寮は木造。

従業員数及び生産設備の概要(昭和二十年八月一日現在)

事業所*従業員数*機械設備*船台*繁船岸壁*船舶

広島機械製作所*三、五九一人(兵役五七四を含む)*三、〇二七台*

*三一隻

広島造船所*五、〇八一(兵役八六八を含む)*

*三基

一五〇米×九・八米

*A 八二米×九米

学徒*三、一六一

(各七、〇〇〇総トン) B

八二米×八米(各一万二、〇〇〇総トン)

合計*一万一、八三三

(兵役一、四四三をふくむ)

備考(一)従業員数には、徴用工・女子挺身隊・半島応徴士を含む。

(二)学徒出身校

広島高等師範学校・広島工業専門学校・県立第二中学校・県立工業学校・県立広島商業学

校・市立造船工業学校・松本工業学校・修道中学校・崇徳中学校・山陽中学校・市立中学

校・市立工業学校・山中高等女学校

(三)八月六日当日の出勤者は、兵役・長欠・休暇・疎開関係者を除き、両工場出勤者は在籍人員の約三分の二程度と推定される。

事業種目 広島機械製作所...タービン・船用鋳鋼品・特攻兵器・航空機関係諸機関などの製造

広島造船所...造船・特殊潜航艇の製造

代表者 広島機械製作所所長・丹羽周夫

広島造船所同・間崎龍夫

爆心地からの距離 広島機械製作所(南観音町)約三・七キロメートル

広島造船所(江波町)約四・三キロメートル

二、工場の沿革

昭和十五年、広島県は広島湾一帯に臨海工業地帯の造成を計画し、工場誘致を計った。昭和十六年、天満川をはさむ南観音町と江波町の両地先埋立地に、三菱重工業株式会社の誘致が決定し、長崎・神戸両造船所から、主としてボイラー・タービン部門を分離して、陸上機械専門の工場建設が進められた。

第二次世界大戦勃発にともない、軍の要請もあって計画は変更され、昭和十七年八月、江波町地先埋立地に戦時標準船の大量建造を目的とする造船工場を、また、南観音町地先埋立地にそのボイラー・タービン専門の造機工場を建設することとなった。

昭和十八年四月、起工式をおこない、埋立てと工場建設の突貫作業が進められ、同年十二月、両工場は一部操業を開始したが、翌十九年三月十五日、開所式をあげ、観音側を広島機械製作所、江波側を広島造船所と呼び、ともに三菱重工業株式会社の独立事業所として新発足した。

両工場の建設は、戦局の推移に応じて計画変更を余儀なくされたが、十九年末には第一期工事をおおむね完了し、終戦までに戦時標準船七隻・船舶用ボイラー二二缶・タービン六基などを完成した。

終戦後、平和産業への転換・賠償問題・財閥解体など、幾多の困難に直面したが、よくこれを克服し、広島市の主要産業として発展した。その間、二十年十一月、広島機械製作所と広島造船所を合併して、新たに三菱重工業株式会社広島造船所として新生の第一歩を踏み出した。

昭和二十五年一月、三菱重工業株式会社は過度経済力集中排除法の適用をうけて、東日本重工業(のちの三菱日本重工業)・中日本重工業(のちの新三菱重工業)・西日本重工業の三社に分割され、広島造船所は西日本重工業の傘下工場となったが、二十七年五月には西日本重工業が社名を三菱造船株式会社と改め、さらに三十九年六月には新三菱重工業・三菱日本重工業と共に、旧三菱三社が合併し、三菱重工業株式会社となった。

三、戦時生産体制

広島機械製作所と広島造船所の両所創業から約一年、昭和二十年を迎えて、戦局はいよいよ悪化し、三月の東京大空襲以後、国内の主要都市は、連日敵機の激しい空襲を受けるようになった。軍需生産も工場の被爆や従業員の罹災、さらに資材の欠乏で急激に低下していった。

このような状況下、二十年四月一日、広島機械製作所と広島造船所は、国務大臣藤原銀次郎の行政査察を受けた。その結果、戦時標準船やそのボイラー・タービンの新規工事をとりやめて、特攻兵器と航空機の機器を生産せよという命令を受けた。

江波側では、特殊潜航艇の建造を、観音側では航空機関係部品などをはじめ、製缶工場では木製飛行機をつくる計画をたてたが、工場疎開作業にも追われ、急激な生産機種の変換が、かえって生産低下を来し、結局、製品らしいものはできずじまいで、終戦をむかえた。

このころ政府は、軍需生産の機密保持のため、全国の工場に戦時秘匿名をつけたが、二十年四月二十七日から、広島機械製作所を「ヒロ八五〇一工場」、広島造船所を「ヒロ八一〇一工場」と呼ぶことになった。

四、疎開状況

昭和二十年四月から、観音・江波両工場の疎開作業に着手した。当初は、工場の山間部への疎開、建物の間引き、これと併行して、地下工場の建設などの総合計画たてられたが、急迫した時局下に、もはや長期大規模工事は許されなかった。

そこでまず、山間にバラック工場を建て、そこに機械を移して生産を進める一方、付近の山に横穴を掘り、主要設備をそのなかへ疎開させることになった。

この方針に基づいて、広島機械製作所の部品・製缶・鋳鍛各工場の大々的疎開を計画し、バラック建設と設備運搬の作業が進められたが、一般市民の疎開と時期が重なり、労務者は集らず、そのうえ馬車やトラックの調達が思うにまかせず、作業は遅々として進まなかった。

それでも最初に、己斐上町に疎開した部品工場は、五月中旬には一部操業を開始した。その他の工場についても、疎開建設作業が進められ、終戦前には一部の完成を見たものの、いずれも操業にいたらず、疎開作業に徒労に終わった。

南観音町の機械製作所は、比較的疎開生産が容易であったため、疎開の重点は観音側におかれて作業が進められた。一方、江波の造船所は製品設備とともに、疎開の困難性もあり、近くの江波山・皿山にトンネル式横穴を掘って、僅かな疎開を実施しただけであった。そのほか、古田町の山や能美島、及び吉島町や可部町など市内外各地に諸機械類や物資などを分散疎開し、消耗品などは約半月分を工場に残し、油脂や地金は地下に埋匿し、空襲による被害防止につとめたが、両工場の莫大な量の諸資材の疎開は、約三か月かかって、四月の末におおむね完了した。

疎開先 * 疎開工場または施設の概要 * 備考

工場名・施設名 * 従業員数 * 敷地面積 * 設備機械 *

市内己斐上町 * 小物機械工場(第一分工場) * 八〇〇人 * 地上工場四、四三〇坪、地下工場七二〇坪 * 工作機械三二七台、設備機械一〇台 * 二十年四月十一日地鎮祭、建物は六月、地下十月完成予定で、完成工場から順次操業。五月一部操業開始。

佐伯郡平良村 * 大物機械工場(第二分工場) * 八〇〇 * 四、〇〇〇坪 * 工作機械一一八台、設備機械二八台 * 二十年八月末完成予定、七月末一部操業開始

右同 * 製缶工場(第三分工場) * 六〇〇 * 三、六〇〇坪 * 工作機械四〇台、設備機械一六七台 * 二十年八月末完成予定

佐伯郡宮内村 * 鋳鋼工場(第四分工場) * 四〇〇 * 六、三七〇坪 * 設備機械 *

市内己斐上町 * 倉庫 * * 建坪四七一坪 *

市内古田町高須 * 倉庫 * * 建坪一五七坪 *

備考 右表以外の疎開先

佐伯郡廿日市町・地御前村・宮内村・安芸郡倉橋島など、市内外併せて一九か所へ、食糧・諸機械・工具・金物・用度品・油類・原材料・医療品・重要書類などを分散疎開した。事務部門疎開先は草津海蔵寺(勤労)・古江青年会館(会計課)・己斐善法寺及び花市場(教育課)・中峰商店(厚生)その他に疎開した。

五、防衛態勢

二十年六月、広島機械製作所と広島造船所にそれぞれ防衛本部を設け、各部課工場を単位とする職域義勇隊を編成し、防衛・防空訓練を実施した。

また観音・江波の病院をもって救護班を編成し、敵機の空襲と本土決戦にそなえた。

防空施設としては、両所の本部用として掩蓋式鉄筋コンクリート造りの防空壕を、また各職場ごとに掩蓋式木造防空壕やタコツボ式を主とする退避壕を構築し、しばしば防空退避訓練を実施した。また、主として河川、海岸の岸壁には約五〇〇メートル間隔にポスト機銃壕を設け、連合軍の上陸にそなえた。その他、防火用水槽などの設備・用具を完備し、工場・社宅ともに延焼防止のための分散をはかり、間引き疎開の措置も講ぜられた。防衛・防空・救護の各訓練も盛んにおこなわれたが、特に観音・江波ともそれぞれ従業員をもって、十九年六月、在郷軍人会を組織し、それを中核として、全従業員・徴用工・学徒を含めて軍事訓練をおこない、竹槍・手榴弾投擲などの訓練も実施された。

また、職域義勇隊は二十年七月下旬以降、動員令による市内の建物疎開作業に連日出動した。

空襲などの非常事態に対応するため、毎夜、防空防火当直をおき、防空監視哨を諸所に設け、主食は約一年分を確保して万一の場合にそなえた。

六、避難計画

対戦処置としては、空襲による被害を最少限にいとめ、生産が続行できることを主眼として、疎開と訓練がおこなわれた。従って訓練も職域義勇隊をもってする消極的防衛訓練に限定され、主として、空襲退避訓練が実施された。この訓練では、警戒警報の発令と共に、対空監視員を若干人ずつ所定の監視哨に配置し、空襲警報とともに、全従業員は、各課工場ごとに所定の防空退避壕に避難することとした。

また、万一の場合にそなえて、連合軍の上陸作戦の対応訓練もおこなわれたが、最悪の場合は己斐上町など、疎開

工場のある山の中や、江波山へ避難することになっていた。

七、五日夜から炸裂まで

八月五日は、観音・江波の両事業所とも、終業後、交替勤務の作業員と防衛要員のみが当直していた。当夜はたいへんむし暑く、夜半にはしばしば空襲警報が発令され、まんじりともしないうちに夜明けをむかえた。

当時は午前七時半(江波工場は七時)が始業時刻であったが、六日当日は、ちょうど始業時に警戒警報が解除され各職場では恒例の朝礼をおこない、「決戦綱領」を斉唱して、作業にとりかかっていた。

江波工場では、五月に起工した大阪商船の第二大雲丸(二、二五に総トン)が、船台上で建造中であり、特殊潜航艇・航空機燃料用の松根釜などの製作が進められ、観音工場では、ボイラ・タ・ピンなどに加えて軽快艇エンジン・航空機関係部品・松根釜などが製作されていた。

また、職域義勇隊は、一隊五〇人前後の編成で、観音・江波からおのおの三、四日ずつ交替で、観音側は市内小網町へ、江波側は雑魚場町へ建物疎開の作業に出動していた。六日は江波側の最終日にあたり、雑魚場町に出動中で、六〇人編成のうち、すでに現場に到着していた先発隊二〇人と、諸連絡事務のため、市内に出ている四〇人、および所内で三人が原子爆弾の犠牲となった。観音側の小網町地区作業は、四日までで終わっていたから、被害をまぬがれた。

炸裂時の状況は、三菱広島造船所史の記録によれば、「市内中心部上空に、突如、マグネシウム状の閃光がひらめいたと思うと、次の瞬間、なま暖い風を感じ、地鳴りについて、一大音響とともに猛烈な爆風の波が、すさまじい勢いで、窓ガラスや建物の壁板を吹き飛ばし、屋根を押しつぶし、柱をへし折って、屋内へなだれこんだ。

屋内の書類や小道具類はすべて吹き飛ばされ、工場内はモウモウと煙り、騒音は瞬時にして止った。

泣き叫ぶ者、下敷きになって助けを求める者、血だらけになって屋外に走り出す者などで、目をおおう惨状を呈した。」という。

また、当時の広島機械製作所の丹羽周夫所長の座談会記録によれば、「朝、七時半には、私は佐藤祐金部長とともに観音本館二階の所長室にいた。八時半頃からはじめる生産会議の原稿を書いていたが、突然、空がピカッと光った。空も周囲もこの世の中の総てが、真青になったように感じた。

うちの電気工場の電気がショートして火花を出したのかなァと思いながら、窓から顔を出してみたが、空一面が青すぎるので、陸軍か海軍が朝っぱらから照明弾の実験でもやったのかも知れないと思いながら・南側の窓から見ていると、北の方で大変にぶいズンという大きな音がした。

その瞬間考えたことは、これは観音工場の最北端にある製缶工場にでも、爆弾を落としたのかも知れない、二発目はわれわれの頭上に落ちる。もうダメだと思いながら、あわてて耳と目をおさえて机の下に伏せた。

その瞬間、猛烈な勢いで窓ガラスが飛散し、天井が崩れ落ちてくる。窓ガラスはこなごなになって部屋一面に飛び散った。その一つの大きな破片が、私の頭のすぐそばの床に突きささっていた。私が伏せないで坐ったままでいたら、ガラスの破片が無数に体に突き刺さって死んでいたかもしれない。このときのたとえようもない気持は、今もありありと思い出される。

伏せたまま、暫く二発目の爆弾を待ったが、なかなか次の爆発音は聞えない。これはおかしい。爆弾の破裂であんなに青い光が出るものだろうか。何かわからないままに、自分の一生もこれでおしまいだと観念した。

しばらくたって、何事もないので、やおら立ちあがったが、どうも様子がおかしい。佐藤君が『ともかく屋外へ出ましょう。』というので、崩れた天井や梁などをかきわけて、ようやく階段をおりて本館の玄関正面へ出た。あちこちの工場から、血まみれの従業員が、ある者は徒歩で、ある者は担架でかつぎこまれて、病院へ向っていた。

半壊状態の病院へ行ってみると、患者は続々とつめかけていたが、満員で治療ははかどらなかつた。私は病院長に『手術室でなくては手術しないということではいけない。廊下でもどこでも、手術をやってやれ。』

と、命じておいた。

病院を出て、北の方を見ると、銀色をしたいわゆる原子雲が見えた。それが空高く突き立って、上部は次第に広がっていた。これは師団の火薬庫の爆発によるものではないかと思った。

そのうち、正門の方から今田工場長が自転車でやって来るのに出会った。

今田君は『所長、ただ今、変なものを見ました。』といって、次のように語った。

『自転車で出勤して来る途中、市内上空に、少し上下が平たく、左右が長い金色の物体の落ちるのが見えました。これに見とれていると、パーンと爆発し、少したって私は爆風で二メートルくらい吹き飛ばされました。それでいま

出勤したところ。』と、報告した。

その報告で、爆弾が空中で破裂したことを知り、新型爆弾とわかった。」

以上は、丹羽所長の体験であるが、多くの従業員の談話を総合してみても、ほぼおなじような状況であった。

八、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

当社の被害のなかで、最も凄惨であったのは、雑魚場町付近の建物疎開作業に出勤していた職域義勇隊の人々であった。義勇隊は六〇人編成であったが、先発の約二〇人は、被爆時すでに現場に到着していたため、大半は即死した。残りの四〇人は出勤途中で無事であった。

この義勇隊の二〇人の即死者と、市内出張中の者が、観音・江波両所あわせて四〇人(うち二人は学徒)が、即死あるいは直後に死亡している。

工場内の死亡者は三人であったが、そのうち一人は製缶工場内で定盤の下に伏せた瞬間、爆風で腸が破裂し、二時間後に死亡、他の二人は倉庫および食堂で、落下した梁の下敷きとなって圧死した。

これら死亡者のほか、重軽傷を受けた従業員は数えきれないほどに多かった。

建物の倒壊やガラスの破片などによって、打撲や切創をうけた者は、両所あわせて、重傷の者が約二〇〇人を超え、入院患者も約一〇〇人以上に達した。

九月十三日、江波の造船所でおこなわれた合同葬儀・追悼会では、江波側の戦災殉職・死亡従業員および家族死亡者五〇四人(うち従業員九二人)と記録されている。観音側の機械製作所は、記録が現在すでに散逸し、調査の方法もないが、おおむね江波側と同程度の被害であったと伝えられている。

警報の発令もなく、まったく突然の被爆で、工場内は大混乱を呈したが、従業員は次の空襲にそなえ、ひとまず所定の防空壕に退避した。中でも若い女子挺身隊員や学徒たちは、恐怖におののき、血の気も失せた顔で逃げこんだ。

壕内では、各職場の救護班が負傷者の手当をおこない、重傷者は病院にかつぎこんだ。また、みずから病院に駆けつける者も多数あった。

(二) 物的被害

おもな工場は鉄骨構造であったが、側壁は板張りであり、屋根はスレート葺であった。その他の建物もすべて戦時急造の木造建物で、スレートか瓦葺であったため、爆風による被害も大きかった。

倉庫など両工場あわせて、全壊約一〇棟、ほとんどの建物は半壊状態で、天井は落ち、骨組みだけになった。

当社の記録によれば、建物被害約六〇パーセント、二、〇五〇万円と報告されている。各建物の壁板や、屋根のスレート、瓦は無残にはぎ取られ、煉瓦造りの建物にはヒビが入り、窓ガラスや枠はこなごなに飛散して、みるかげもない廃屋と化した。

機械設備については、幸いにもほとんど損傷なく、多少の補修で生産は可能であった。しかし、肝心な送電が停止し、水道も止まった。このとき工場・社宅とも火災の発生をみなかったことは不幸中の幸いであったと言える。

市中の状況は、工場の連絡員によって逐次、所内の従業員に伝達せられ、必要な指令が発せられたが観音側では、家族の安否をきづかって、午前十一時ごろまでには半数を帰宅させた。江波側では、市中が炎上中で通行危険と判断し、夕刻まで退場を許さず、午後五時になってようやく帰宅を許可した。この間、食堂は半壊状態にもかかわらず、両工場従業員ににぎりめしを二個ずつ供給した。

九、被爆後の混乱

観音・江波両工場の在籍従業員は合計約八、七〇〇人(徴用工・女子挺身隊・半島応徴士を含む)、学徒約三、二〇〇人を数えたが、そのうち軍関係応召者は約二〇パーセントにも達し、実際の出勤率は七〇パーセント前後の約六、八〇〇人であった。半島応徴士(約二、〇〇〇人位)は逃亡者続出して、被爆時にはすでに半減していた。

被爆翌日の七日は、己斐・古江その他の疎開先で作業することになっていたが、当工場出勤者と、疎開先出勤者とをあわせても数百人にすぎず、廃屋同然の工場の中で、従業員は茫然自失、生産はまったく手づかずであった。

被爆当日の午後、被害対策本部が古田町古江の古江青年会館(会計課の疎開)に設けられ、従業員の救済・復旧対策が検討されたが、当工場のみならず、全市的な徹底した破壊状況下では、全く手のほどこしようもなかった。

まず当面の対策として、前項のとおり、罹災従業員救援の捜索隊を市中に派遣し、まだ帰らぬ肉親・縁者の生存を信じて、十日まで涙ぐましい捜索が続けられた。

従業員の被害は、市中心部に比較すれば軽微であったが、家族の被害は甚大であった。観音・江波両工場を併せて推定約一、人が死亡し、家屋の全壊全焼は、約一、戸を越えるものと推定された。負傷者の数は、想像も及ばない程多数で、その後の就業に大きな影響を与えた。

また、従業員罹災者対策として、七日から十三日までの一週間、臨時休暇が与えられた。

一方、工場の復旧作業もおこなわれ、出勤可能者、特に社宅居住者・寮生など、被害を受けなかった者に対し、救護要員や工場保全要員としての出勤が要請された。

八月十五日、無条件降伏の終戦とたった。だが、広島市民にとっては、あまりにも遅すぎたその日であって、広島機械製作所・広島造船所の両工場もまた多くの苦難と、けわしい試練に打ちかっけていかなければならなかった。

従業員は、八月十八日から三日間、再度、罹災特別休暇が与えられ、自宅の住居整備をすすめると共に、生活の安定がはかられた。

学徒は終戦をもって、学校に復帰することになったが、半島応徴士は、八月二十五日徴用を解除し、九月上旬には本国へ送還された。また、八月二十八日と三十一日には、女子挺身隊のうちから希望者をつのり、大部分が解除された。

このように被爆と敗戦にともなう諸対策が進められつつあった九月初めの在籍人員は、両工場あわせて四、六〇〇人(うち未復員者一、二〇〇人)となり、出勤者ははなはだしく減少して約二、人となった。

従業員は八月二十日ごろから次第に職場に復帰しはじめたが、それでも被爆前にくらべて半数にも満たなかった。

なお、同じ三菱重工業株式会社の長崎造船所と長崎兵器製作所は、八月九日に原子爆弾第二号の攻撃を受け、両所とも甚大な被害を出した。とくに長崎兵器製作所は壊滅的な打撃を蒙った。

一〇、復旧状況

復旧状況

観音・江波両工場は、建物には相当の被害があったが、生産設備機械の損害は僅少であった。屋根の雨漏りさえ早急に修理すれば、生産は続行可能であった。

江波工場の電源は、変電所が無事であったから、七日には送電を受けたが、観音工場は変電所大破のため、送電できなかった。そして、工場・社宅地区とも、水は地下水に頼るほかなかったので、飲料水は宇品から水船によって、両工場と社宅地区へ運搬された。しかし食糧は、主食の白米・麦・大豆・粟・小麦粉・干麺などが、食糧不足の時代にもかかわらず、約一年分が確保されていたから、大いに助かった。

そこで、両工場は被爆直後、生産再興を決意し、爾後の空襲にそなえて生産体制の確立をはかった。工場の分散疎開・疎開工場の建設促進と拡張によって、戦時標準船の継続工事と、特攻兵器・航空機部品の生産など、全力をあげて決戦兵器生産への急転換の方針をたて、まず、建物の復旧に着手したが、それもつかのま、十五日の終戦をむかえたのである。

八月二十八日、連合軍の日本進駐が開始されて、一切の軍需生産の停止が指令され、事業再開の望みが絶たれた。

そこで両工場は、生産の見とおしもたたないままに、工場建設と社宅・寮の復旧作業に専念する一方、ナベ・カマなどの日用品やスキ・クワなどの農器具・大八車などの生産をおこなった。

工場の大規模な本格的復旧工事は、十月からはじめられたが、事業再興の熱意をもって、いち早く工場を修復したことは、その後の生産再開に有利な影響をもたらした。

この復旧作業のあいだ、八月二十五日から九月末にかけて降雨が続き、作業は思うようにはかどらなかった。とくに、九月十七日と十月八日の二回にわたり、中国地方五〇年来の大風水害があり、甚大な被害を受け、もはや再起不能かと思われたが、従業員の不屈の闘志によって、強力に復旧が押し進められた。

九月にはいって、生産再開の目途もたたないところから、退職者が続出し、十月下旬の在籍者は、両工場あわせて約三、六〇〇人(未復員者約一、〇〇〇人)となった。

しかし、生産も停止状態の当時として、この人員でも過剰であった。そこで両事業所は、十月から年末にかけて退職者を募り、第一次人員整理を断行した。その一方、十一月十五日の生産再開許可を目標に、十一月には現場技術者数百人の採用をおこなって、それに備えた。

こうして、昭和二十年十一月十五日の生産再開許可を機会に、広島機械製作所と広島造船所は合併し、ここに現在の「三菱重工業株式会社広島造船所」が新発足したのである。

(付)三菱重工業株式会社第20製作所

(現在・三菱重工業株式会社広島精機製作所)

一、当時の概要

概要

所在地 広島県安佐郡祇園町大字南下安五四〇番地

建物の構造 鉄骨スレート葺

建物面積一七、 坪

施設の概略 (次頁の図参照)

事業種目 航空発動機製作修理、及び工作機械製作修理

在籍従業員数 約四、五〇〇人

被爆時の出勤者数 不明

代表者 所長瀬田稲生

爆心地からの距離 約六キロメートル

二、疎開状況

資材や設備機械はほとんど可部地区及び祇園北地区の山すそへ防空壕を構築して疎開をおこなった。

なお、重要書類は疎開せず、手提箱で常に持出せることができるように準備していた。

三、防衛態勢

事業所防護団を編成し、万一の場合に備えていた。

また、事業所として指定された対戦処置とか避難計画というものは特別にはなかった。これは当所が広島市中心地からかなり離れた北方郊外に所在したためと思われる。

四、五日夜から炸裂まで

空襲警報がしばしば発令されたが、平常どおりの防衛態勢をとっただけで、別に変ったことはなかった。

六日午前七時三十一分警戒警報が解除されたあとも、平常どおり各人の担任業務に就いていた。

なお、この朝、職域義勇隊二三人が日下部春一を指揮者として、市内土橋・小網町方面の家屋疎開作業に出動していた。

五、被爆の惨状

(一) 人的被害

即死者 五三人(職域義勇隊出勤者)

負傷者 三〇八人(うち、一八三人は職域義勇隊出勤者)

行方不明者 不詳

計 三六一人

(二) 物的被害

木造事務所一棟・木造工場二棟が倒壊し、その他は半壊程度で、屋根(ストレート)・壁・建具・ガラスが破損した。幸いに火災は発生しなかったため、軽傷者が出た程度で、炸裂による直接的惨禍というものはなかった。

しかし、炸裂の数時間後、市内の建物疎開作業へ出動していた負傷者が帰所するとともに、一般の被爆者が続々と詰めかけて来たので、負傷者の収容や死体の処理などのため、数日間は相当の混乱を呈した。

中心部から来た一般被爆者は、事業所構内の青年学校講堂に収容した。

六、復旧状況

復旧状況

当事業所では、職域義勇隊員の犠牲者はあったが、施設そのものの被害が軽微であり、生産機能の障害もなく、翌日からただちに戦時生産作業を再開した。

(二重被爆の記録)

ヒロシマ・ナガサキ

山口 彊

死と灰の町

日本人の原爆被爆体験は、広島、長崎、第五福竜丸と三度あるが、この中二度までも非運というのか 世界中何処にもいないダブル被爆者としての記録を、私は綴らねばならない。

彼の日

昭和二十年八月六日

そして九日

“ひろしま” “ながさき”

私の命日がまためぐって来る

夏雲は私の墓標であり

赤い夾竹桃の花は

私への

供華である

昭和二十年四月、白昼単機堂々と長崎へなぐり込んだ B29 があった。大波止から長崎駅へかけての爆弾投下である。昭和閣前あたりの水面にすさまじい水柱が騰り物凄い轟音が起った。長崎駅方面にかけて陸上にも黄煙が吹き起り、不意を打たれた長崎市民はその時実感として身近かに、そこに戦場を見た。

赤ん坊を背に、それとも気付かず夢中で逃げ回って、他人から注意されてはじめて吾が児の首のないのに仰天した母親があったのもその時の事である。

戦局は日々に非に迫り込まれ、物資の欠乏や人的資源の枯渇により急速に戦力が下降しはじめた。

戦時標準船タンカ - が TL 一万屯型から TM 五千屯型へ、更に油や鉄の不足、作戦の変更などから我々の作る船も小型の輸送船になって来た。とに角、船は運航できればよい、少い物資で最大の効果をとるので、タービンも単気筒 H・P・タービンだけ、L・O・ポンプも主機減速装置に連結されたギャ - ドポンプ、配管も極端に切りつめられ最低限の設計に変わった。窮すれば通ずるとか、戦局は我々設計屋の毎日の仕事にもはっきりと現れて来た。十隻のタンカーのうち三隻無事油を満載して帰還できれば上々の成果であった。艦装員仲間でも、三度くらい太平洋で泳がされた経験者は稀ではなかった。

敵潜水艦は我が物顔に近海や瀬戸内海方面にまで出沒しはじめたのである。

その頃、私は造機設計部艦装設計課商船係に所属していた。ある日私は野付(喜代治)課長から呼ばれ、三か月の予定で広島造船所へ戦時標準船建造の設計応援のため若手二人を同伴し出張するよう命ぜられた。長崎にいても、広島にいても、すでに本土決戦の日は刻々近づいており、来るべき時はただ時間の問題であった。生後三か月の長男と妻を長崎に残して、若手二人と私は五月初旬広島へ発った。海軍の製油基地徳山市は既に文字通り全滅していた。

焼野が原の中に取り残されたように、駅のバラックだけがボツンとあるのを見るにつけ、私は前途に由々しいものを感じた。

広島は水の都らしい五月の緑に包まれ、戦時下らしからぬ平和な町に見えた。

江波寮に落ち着くと直ぐその日から広船の職場である造機設計課へ入社した。

課員は殆んど長崎出身で占めていたが、地元の女子事務員達の『お、ほうね』(ああそうですかの意)の広島弁にもやがて馴染んだ。新設間もない広船は広島市の一角江波の地先に建てられていた。兵舎のようなバラックの事務所と、お定りの鉄骨トタン葺の工場と、修繕トックのような小さなドックと、工場を包む広大な砂地から成り立ち、埋立地のはずれには、サンドポンプが大口径のパイプから大量の砂を吐き出していた。

何事もなく毎日毎日が平凡に過ぎて、仕事の暇な時には各自がスコップを握って、観音工場寄りの広い砂地に思い

思いに自分が入るタコ壺防空壕掘りに精を出した。

六月の或る朝、出社後間もなく突然空襲警報のサイレンがけたたましく構内に鳴り渡った。私達は取るものも取りあえず、何事かと例のタコ壺に身を沈めた。首から上は丸出しの深さである。

爆音の気配がするとやがて前方海上の水平線に朝の陽にキラキラ光る豆粒のような敵機の大編隊が現れ、見る見るトンボ位の大きさになった。一群百機位の数段の大編隊の遠い爆音はやがて轟音となって、海と空を押しはじめた。

侵入コースは広船方向である。胸がドキドキして来た。このタコ壺の中で何の抵抗もできず、一巻の終りになるかも知れぬ私自身の数十分後の運命を考えるとくやしかった。

『どうにでもなれ。』と度胸を決めた時、不思議な現象が起った。突然敵の大編隊は一斉に方向転換をはじめた。『呉軍港だ。』期せずして一同がそう思った時、先頭の一団の敵機目がけて在港艦艇の対空砲火が火蓋を切った。焼鉄のように見える曳光弾幕が蛇の舌の様に弧を描いて交錯した。

続いて編隊から一列縦隊の鮮やかな敵艦載機のダイビングの連続。山影に急角度に降下して、そのまま撃墜されたかに思えたが、敵機はつぎつぎに再上昇して現れ、大激戦が展開された。先刻の恐怖心も薄れ、戦記映画の空中戦そのままの、息づまる彼我の熱戦に吾を忘れていた。

地上砲火も狂気の熱戦であった。

さすがの編隊もやがて乱戦状態となり、弾幕の中を横切り、突込み、数百機の銀翼がキラキラ閃めくにつれ、もくもく盛り上がる爆撃の土けむりは、呉軍港上空全体を掩ってしまった。

全機突撃を終わった敵機群は、つぎつぎに何処ともなく退避して行ったが、対空砲火や艦砲射撃も力なく散發状態になって、二時間余りの死闘は夢の様に過ぎ去ってしまった。私は放心したように、警報解除の後も砂浜の上に立ち尽していた。人々も三三五五肩を落したまま、それぞれの職場へ帰って行った。

広船でのショッキングな体験である。呉は殆ど全滅に近いとの報がもたらされたのは、その日の午後であった。

この頃から制空権を握った敵空母の本土接近が相次ぎ、関西方面の白昼攻撃が行なわれ、ラジオではただならぬアナウンサーの声が、芦屋・須磨・明石方面の悲惨な状況を報道していた。

仕事は敵の妨害にも関わらず順調に進んでいたが、食糧情況は悪く、寮での空腹しのぎに、何処で聞いたのか、佐藤君は遠いところまで草もち買いに出かけていた。

七月になると、広島も忙しくなった。町の疎開がはじまり、中学生や女子学生達が、毎朝先生に引率されて行くのに出会った。

私達も江波寮から、泉邸に近い川の畔の寮に移り、そこも疎開になるので、会社から差回しの電動車の荷物の上に乗ってノロノロと広島の町を通り、千田町にある新しい寮に移った。そこは専売局に近い御幸橋のほとり、広島工業専門学校の裏手に当たる場所であった。

不思議なことに広島や長崎は爆撃を免がれ、未だ健在であった。広島を避けるようにして、福山や、岡山が空襲された。そのたびに B29 の爆音が定期便のように我々の頭上を通過した。

市内でも東から西へ、西から東へ、灯火管制の闇の中から、荷物をはこぶらしい遠い荷車の音が、夜の白むまで続いていた。

日本全国いたるところで、空襲の恐怖におののきながらこの様な右往左往が繰り返されていた。

ゲートルをつけたままの仮寝の幾夜を、爆撃の恐怖にうなされながら、暑い夜の白むのを待ったことであった。

私はよくこんな夢を見た。本土へ上陸した敵の戦車の前に竹槍を持ったまま伏せていた。

機銃弾が身の廻りを包んだ。私は夢の中で幾晩とたく無抵抗に殺戮された。だが覚めて思った。妻や児の始末をどうつけるか、一瓶の青酸加里でもあったらと。私達は死よりも死に到るまでの死の方法を恐れた。ラジオも新聞も巷にも、たやすく一億玉砕、本土決戦の壮語が語られていた。

三か月間の予定の仕事も終わった八月のはじめ、広島の私達の寮に、出張で泊り合せた銅工場の森川技師(良重)から、七月二十九日長船の製缶場や鑄造工場、向島社宅の一部が爆撃されたことを聞いた。

三人とも飛んで帰りたい気持であったが、いっこうに帰還命令が出ず、イライラするばかりであった。

係長の茨木技師がこんな状態の私達を慰めるため、係の人達と一緒に自宅で送別の前祝いの宴を張って下さった。

物資のない時、自宅の鶏を締めてスキ焼のご馳走にあづかった。私達の長崎帰任は八月七日に決っていた。

八月六日の朝であった。明日は長崎へ帰れるというので、私達三人は張切って何時もより早目に起床した。

快晴であった。

乏しいながら誠意の籠った寮の朝食が整えられていた。帰崎の挨拶廻りをする出張最後の通勤であった。

何時ものように、私達は鷹野橋のバス停留所の長い列に並んで江波行きのバスを待っていた。

私達三人はこのまま会社へ行くか、広島駅で切符を買ってからにするか、しばらく話し合ったが、切符は帰る時購入することにして、そのままバスに乗る事に決まった。

バスが来て私達の列は先頭から一人ずつ、乗降口へ吞まればじめた。そのとき私は会社の届に必要な印鑑を寮の机の引出に入れたまま忘れていたのに気がついた。

私はすぐに寮へ引返して印鑑を取って来るから、二人はそのまま出勤する様に伝え、急いで寮に引返した。

寮監の中場老人は朝の庭掃除を終って、一人つくねんと玄関の門前に立っていた。私は印鑑をポケットに入れると、二階から階下へ降りて来た。中場さんは今から急いで鷹野橋へ行っても、通勤バスは発った後の祭りでは仕方ないし、折角引返して来たのだから、お茶でも一杯呑んで行きなさいと、しきりに引留めるので、二人は応接間に入って熱いお茶を呑んだ。

中場さんは『私も今朝は市役所へ行く用事があるが、何んだか気が進まないので、あなた達を送り出してからしばらくボンやりしていたんですよ。』と言った。虫の知らせとでもいうのか、不吉な予感を二人とも感じていた。

寮のおばさんは台所で片付物をしている様子であった。

急いで寮を出てもバスはいないし、さりとてこの儘ここに坐っていても予定の挨拶廻りが済む訳でもない、電車で江波へ出ようと、思い切って寮を出た。

江波行きの市電の車中の人となった私は、明日知れぬ身で、再び広島へ出張してくることもなかりと、ここで過した三か月の中に、かって歩いた窓外の風景を見ていた。

舟入町を過ぎてやがて電車は終点江波に着いた。坐っているまばらな乗客の前を通過してまっ先に私は降りた。

小川の板橋を渡ると、ここらあたりは五メートル位の道を挟んで、右手は陸軍射撃場、左手に舟入町が見える一面の芋畑であった。

時計は午前八時を一寸廻った通勤のラッシュ後の、ひっそりとした真直ぐな道であった。

芋の葉の上には、未だ乾き切らない朝露が、キラキラ光っていた。

平凡な夏の朝の広島の周辺地区の一風景であった。空には雲ひとつなく、太陽が眩しく輝いていた。

私の視野の中に、ただ一人近づいて来るモンペ姿の婦人があった。遠く幽かではあったが B29 の爆音らしい音が聞えたような気がした。その時二十メートル位の距離に近づいていた婦人は急に空を見上げて狼狽した。私もそれにつられて空を見上げた。

敵の機影は見えないが確かに急にエンジンを吹かせるような音がした。かなり高空の感じであった。その時私は見た 小さな白い落下傘が二つ、相当の距離を保ちながら、次第に落下して来るのを ちょうど打上げ花火の時に見える白い二つの傘である。

私は急に身の危険を感じた。瞬間、中空に炸裂する大火球を見た。青より白色に近いマグネシウム色の大爆発であった。

私は思わず路上に伏せた 同時に爆風と轟音が身体を通り抜けた。が意識の中で妻や児の顔が、回転するフィルムのようにカラカラと音を立てていたが、そのまま気が遠くなって何も分からなくなってしまった。瞬時の事であった。

素肌を焼きゴテで焼かれるような疼痛で吾にかえった。私は眼を開けて見た。濛々たる砂塵や爆煙で、海底の暗い視野のように総てがボンヤリリしていた。

私の頭脳自体がショックで壊れかけたのかも知れない。

頭髮も肌も熱線の放射でジリジリ焼けていた。私は生きていることをはっきり感じた。空中を飛ぶ瓦の触れ合う音や物の落下する音、雑多の破壊音が近く遠く身を巡って聞えた。

フィルムのカラカラ廻る音はこの瓦の音であった。それらの夾雑音も、爆煙もおさまった時、私は見た、高空にまで立ち昇った茸状の巨大な火柱を 竜巻のような火柱はその位置を移動するでもなく、その原点を踏まえたまま、頂点では更に高く、更に横に大きく拡がりながら、火山の噴煙のように盛り上り、湧き、巻き返った。

太陽の光線の反射を受けて、虹色のプリズム光が複雑なりズムで万華鏡のように変化した。

高度二千メートルに達するこの火柱は、生き物の様に変化を繰り返しながら、徐々にその領域を拡げていた。

私はこの人工雲は毒ガスだと思った。

この雲が次第に降下して広島全部を包んだ時、生きて呼吸をしている生物は忽ち斃死するのだと思った。天空は次

第に暗くなって来た。

ここでボンやりしている時ではなかった。私は畑の中に残った灌木の繁みの中に、ひとまず身をひそませて横たわることにした。

日蝕時の太陽のようにその輪郭だけが、今は空一面を覆った不吉な雲の中にクッキリと見えた。

ここから見渡すことのできる町 舟入町一帯は倒壊をまねがれた家屋の軒先から、火の舌がメラメラと燃え上っていた。遠い線路の電車も、線路の上で立往生したままの位置で炎上していた。

十七、八才位の少年工の一隊も私の回りに避難して来た。油のしみ込んだズボンから、ブスブス煙を出している少年は、友達に指摘されると、驚いて煙の出るそのズボンを慌てて脱ぎ捨てた。胸にガラスの小さな破片が何箇所も突きささった少年は、血と汗を流しながら、まだ苦しそうに肩で呼吸をしていた。

この周辺地区には町工場が多く、仕事を初めた少年達は不意を打たれて、何が何やら分らず、無我夢中で期せずしてここまで逃げて来たのだと言った。

ある少年は工場の近所のタンクが爆発したのだと言い、又ある少年は百キロ位の爆弾が近くに落ちたと思ったとも言った。それぞれの少年達は、互に手負いの傷をいたわり合ったが、ここには手当をする一枚のガゼーも一巻の包帯もなかった。

全部が半裸で油と、血と、汗にまみれ、少年の一人は不安と動揺と驚愕に疲れ果てたまま、シクシク泣いていた。

その頃急に黒い俄か雨が降って来て、私の腕まくりしたシャツに点々と黒いシミを作った。赤く焼けた私の顔面や腕の傷にも黒い雨は容赦なく滲みだした。倒れて苦しんでいる少年達はシクシク水を求めた、歩く力の残っている少年が二、三人クリークの水を空罐にくんで来て、苦しがる爛れた唇に油の浮いた水をそそぎこんだ。

その時かすかに爆音がした。偵察機らしい。私はここも安全でないと思ったので、ここから約二百メートルばかり離れた陸軍の射撃場に逃げることにした。かって通勤の途中、私はこの射撃場の土手の陰に、看的壕があることを知っていたからである。私はヨロヨロと立ち上ると、その壕をめざして歩きはじめた。

私は畑中の道でひとりの異様な風体の男と出合った。向うもフラフラ私に近づいて来た。身長二メートルに近い仁王の様な大男である。半島人だと直感した。このあたりは半島人のバラック集団が多かった。

男は首から鍋と釜を振分けに縄でブラさげ、腰には数珠つなぎの南瓜を巻き付け、両手にはしっかりとガラリとした鶏の首を握り締めながら近づいて来た。顔面は熱線に焦げて朱く、両眼は物憑きのように光っていた。

パイタリティ - のひとつの典型を、まざまざと目の前に見て、私は威圧されてしまった。

私はやっとの思いで目的の看的壕の中に辿りつくことができた。奥から哀号哀号と泣き声が聞える。全裸の婦人が全身赤エビ色に焦げて、泣きながらのたうち廻っていた。

私はどうすることもできず、入口から五メートル位の「型にまがった頑丈な木のベンチに腰を掛けていた。黒い雨は止んでいた。

その時勤労働員の学生が二人私の側に来て坐った。一人の学生が私の顔をシゲシゲと見て、『大分ひどいですよ、あなたの顔』と言った。雑囊からクリーム瓶を取り出すと、油のような薬を私の顔面に塗ってくれた。

『痛いでしょう、ひどい火傷ですよ。』と学生達は交々に言いながら、私の顔をみはった。私は再びその時私自身の左顔面と左腕全体にしびれるような疼痛を感じた。

ハリツメていたものが急にガックリ崩れて、私は自分の負傷が尋常のものでないことに更めて気づいた。

あの時、熱線がジ - と私の身体を照射するのは知っていた。私は事前に完全伏臥の姿勢を執った心算であったが、正中線より左側、熱線を受けた左半面は、掌で覆った跡もなく完全に焦げていた。勿論頭髪もボロボロで、頭皮まで焦げていた。

私は熱線の照射を浴び、直後の爆風で芋畠の中に吹飛ばされていたのだ。

完全伏臥の姿勢となったのは第二次動作に過ぎなかった。

学生達は広島工業専門学校の生徒で、観音工場から避難して来たのだと言った。

例のクリーム瓶の薬は椰子の油で、何時も雑囊に入れて携帯しているようにとの彼の母の心使いが、今ここで私を救援する応急薬となったのであった。私は彼の母と、彼の親切に心から頭を下げ、その厚意に何遍もお礼を言った。

広島町空は黒煙に掩われていた。太陽を失った町では時刻も計りかねた。

先行している同僚二人や会社の人達が心配しているだろうと思うと、今ここにじっと坐っている気にはなれなかった。私はほどけたゲートルを不自由な手で巻き直すと、学生に訣れ、すぐ壕を登って造船所へ向った。

途中の半島人部落は、竜巻が通り過ぎた後のように、バラックはただ材木の乱雑な集積の山に変わっていた。

過ぐる日、活躍した江波山高射砲陣地もシーンと静まり返って、衛兵達の姿もなかった。

造船所のバラックも梁が落ちたり、床が落ちて、みんな浜地の木陰を求めて避難していた。私を見つけた防護団の一人が、すぐ松林の小屋で応急手当を受ける様に教えてくれた。小屋の中には白い塗り薬を入れた石油罐が幾罐も蓋を切ってあった。自分で勝手に薬を塗ってくれと言うので私は負傷した左手を罐の中に突込み、掌に薬を掴むと、そのままパタパタと顔面からトロケた首にそっと分厚く塗りつけた。私は半身白だるまのようになって小屋を出た。

外は蒸し暑い砂浜である。油を塗らない右半身から全身分の汗が容赦もなく吹き出た。

時刻は正午に近かった。私を心配して、岩永君と佐藤君は街の方に救援に行ったまま、なかなか帰って来なかった。

広島は街は次々に燃え拡って、昼ながら暗い空に煙とドス黒い炎を中天高く立ち昇らせていた。無風の正午であった。

一袋の乾パンを昼食の配給に買ったが、苦痛と疲労とで全然食欲がなく、松の木陰にうづくまってウトウト眠っていた。

間もなく私は起された。救援に行った二人が帰って来た。白だるまの私を見つけて、一瞬とまどった二人も、私が無事にここにいるのを見つけると走り寄って来た。

三人抱くようにして喜んだ。

二人の報告によると、町々の橋は落ち、累々たる屍の街の何処にあてがあるともなく、失望して帰って来たところで私に逢えたことは、言葉通り地獄に仏の気持であった。

橋が落ちたので町へは行けないという報告が伝わると、そこらに屯ろしていた女子事務員達が家族の事を思っ、一度にどっところえかねた泣き声をあげた。

設計室の床の一部が傾き、階下の診療所には大きな梁が落ちかかっていた。

本部では従業員の退場についての対策が講ぜられた。午後五時ごろ、造船所のランチを集めて、海路から退場する様に指令が出された。

私達の寮は宇品港の方に近いので、宇品行のランチに乗ることにした。

太陽を失った広島は空は、夏の午後五時だというのに、冬のように暗かった。

ランチから見た広島湾は、折からの夕風で波ひとつなく、海面に幾条もの三角州ごとに区分けされた火竜が音を上げて真直ぐに凄絶に映っていた。

死の町広島市は惨劇の跡をかくすように、火中に自らを投じて燃え続けていた。

宇品の波止場に着いたのは既に黄昏の時刻であった。不安と焦燥で黙然とした従業員達は、誰一人ものを言う者もなく、力なくぞろぞろと上陸した。

宇品の波止場から広島町の町に近づくにつれて、この街の家屋の破壊状態も惨状の度合を強めた。

川岸の筏の上では、被爆した船頭達がボンヤリ放心した様に、川面に映る広島は街空の炎を見つめていた。

半裸の小学生らしい。一群が、声もなく黙々として、近づいて来る。

眼も唇も爛れたる児を背に来る

少女も髪は半ば焦げたり

今は泣く声もなく、半裸の少女とも見分け難いこの一群の列は、黄昏の道をさながら幽鬼のようにぞろぞろ歩いて来た。幼い乳の前に幽霊のように力なくそろえて上げた双手の先には、婦人の長手袋のように黒く焦げた二の腕から先の皮膚をガラリとぶら下げたまま。

完全な髪が残った子は殆どなかった。ニグロの髪のように燃えちぢれて性別さえ殆ど分らず、年上の子の少しふくれた乳首だけが女の徴しとして判別されるだけであった。

私達は暮れゆく橋のたもとに呆と立って、この幽鬼の列を励ましてやることさえ忘れ、この朝突然降って湧いた様な地上の惨劇に生き残ったこれらの幼い証人達を、息を呑んだまま見送っていた。

広島町の炎の影は次第に鮮烈に大川の水面を埋めた。

御幸橋に近づくと専売局の倉庫が燃えるらしい夥しい煙に映えて、火勢がひときわ盛んであった。寮はもう近い、どうなっていることか、寮監夫妻は、そして彼等の子供達は、私達にも不安がいよいよ濃くいつしか足早になった。

橋を渡ると千田町である。この辺一帯は周辺地区であるにも拘らず、屋敷町の堀も家も、殆ど大破に近い惨状である。人影は一人もいなかった。

私達三人は寮の前に立った。今朝出勤の時とは何という変わり様であろう。二階建のこの邸の二階の部分は殆ど落ちかかっていた。

人の気配がして寮監の奥さんが、応接間の暗がりから出て来て、三人とも無事であることを知ると、抱きつかんばかりにして喜んだ。

悲劇の時間に死の中に向って行った私は、恐らく即死か行方不明であろうと夫婦で話し合っていた、と言った。

その夫の中場老人も市役所に行くのをしづっている中にあの時間が近づいて、玄関を出て十メートルもいかぬところで被爆したと言った。

広島工業専門学校の寮監の長男の消息は、依然今朝出たまま連絡がなく、生死不明であった。

一抹の不安はあったが、私達は次第に押し迫って来る炎の中で、今夜をどう過すのか話し合った。邸内の庭水道の蛇口が折れて、間断なく水が出ていた。初めて呑む十時間ぶりの水道の水が、甘露のようにうまかった。

私達は息もつかず飲めるだけの水を呑んだ。

一夜を過す次の方針が決まった。

一、食べ物等大事なものは邸内築山に掘った防空壕に入れること

一、寮母や子供達は壕の中で眠ること

一、男達は交代で火災を見張ること

一、最後の時は附近の川にある舟を確保して海に逃れること

以上の四つであった。私達は庭に立ったまま炊出しの貴重な握飯で腹を満たし、来るべき夜の火災との戦いに備えた。

夜になって火勢は猛威をきわめた。防火など受付ける余地は全然なかった。広大な広島全体が燃える火の海であった。

どの様にして逃れるか、ただそれだけのことであった。

寮の裏手は広島工業専門学校のグラウンドで、ここひとつが吾々を守る最後の防火地点であった。私達は交代で眠りを執った。

夜の白むころ、炎は運動場のクリークを隔ててやっと止った。

八月七日の朝が明けた。大破、中破の家が多い屋敷町の小路は、倒れた家や塀で足の踏み場もなかった。町内会事務所で配給があるというので、非常用の缶詰を貰いに行った。そこで造船所の幹部の方に逢った。長崎の出張者だと覚えて居られ、今日中に帰らぬと長崎には一か月位帰れぬかも知れんよ。避難列車が出るはずだからと教えてもらった。会社へは連絡できないのでこのまま、長崎に帰りますからと、後事をお願いして別れた。

寮に帰るとおばさんにその旨伝えた。おばさんは此のまま別れると永の訣れのような気がするかと心配しながらも、なけなしの米をはたいて三人分の握り飯を作って呉れた。

私達はグッとこみ上げて来るものを押えながら、とに角歩けるだけ歩いて列車の出る駅から長崎へ帰る決心をした。一步でも二歩でも長崎の方へ踏み出したい気持を、どうともすることもできなかった。後ろ髪を引かれながら三か月間同じ釜の飯を食った。飯と言っても大半は大豆であったが。寮の家族達と訣れて、何時帰りつくとも予想し難い旅立ちは、内心自信のない出発であった。

私達はやっと解放された者のように、第一歩を瓦礫の上に踏み出した。

途中敵機の爆音がして、焼跡の地藏さんの陰にかくれたりした。

此処から見る広島は、一望千里瓦礫と廃墟の砂漠で、遠くにただ一本の煙突が見える無惨な姿で、全市のいたるところで余燼がくすぶっていた。

文理科大学前の電車通りでは、ボロ切れのように爛れた被爆者が横たわったまま、僅かにうごめいていた。

道路の区別が分らないので、とに角焼野が原の街をできるだけ真直ぐに踏み越えて行くことにつとめた。

私は左手を首から吊った風呂敷の中に入れていたのでバランスが取り憎く、障害物の残骸に何度も足を取られて倒れそうになった。その時ふと目をやった足もとに、最初の半焼死体を見て思わずゾッと足がすくんだ。

脚から腰にかけて完全に燃えた白骨であった。胸からは半焼であった。焼け残った胸腔から、肺や胃や心臓や腸の一部がゴツチャになって、ドロリと流れ出していた。男女の性別も年齢も判別できない。勿論頭部は半焼である。私と佐藤君は二人とも立ち竦んだまま顔を見合わせた。私達が広島で見た焼死者第一号の強烈な印象であった。そこを出ると到る処に累々たる焼死体が折り重なったまま黒焦げになっていた。慣れるということは恐ろしいことであった。

神経が太くなって少々のことではもう驚かなくなっていた川に突き当たると、そのまま死体の山を越えて水辺に下る階段を捜し求めた。石段も折重なった死体の山であった。

川面は死体で堰止められていた。途中食糧営団の人からカンパンを一袋貰ったのを手に持っていたが、全然食慾がなかった。死体をよけて石の上に腰を下しながら、この川を渡る算段をした。勿論私の左手は完全な火傷三度位で、泳ぐことは不可能であった。

私は浅瀬を求めて下流の方に歩いた。上流の橋までは相当の距離があり、通行不能の状態に破壊されていた。

私は浅いところに浮いた仏達の上を這い渡ろうと試みたが、ズブズブと水に沈んで私の上体は水没する。これでは左手が化膿して腐ってしまうと判断したので、渡河可能な地点まで遡上することにした。

こうして苦勞に苦勞を重ねた失敗の繰り返しで、いくつかの三角州地帯の焼跡へと移動を続けた。

広い道路へ出ると、ここは避難の人達が一杯で、黙々と歩いていた。宮島方面や郡部から救援のトラック隊が、砂煙を上げながら、幾台も幾台も、元気な消防団員や在郷軍人達を満載して来た。この街では消防署も警察署も全滅であった。

トラックを降りた一行の救援隊は、長い鳶口を死体の脊中に打ち込んで、ズルズル引きずりながら、死体の小山を築いては、道路の啓開をしていた。

焼け残ったコンクリートの橋では、真中にポッカリ口をあけてそこから川の水が見えた。

橋の欄干には、仁王立ちのまま万才の姿勢で、頑丈な鉄かぶとの男が死んでいる。

爆弾の起爆装置と称する落下物の器物の周囲には、俄か作りのロープがはり巡らされ、放心した人達はそれでも其処を遠廻りにして歩いた。

救援隊の人達に比べ罹災者達は、ノロノロと少しずつ郊外へ郊外へと思い思いの方角を指して歩いた。

八月七日の陽はジリジリとうなだれて歩く人々の首筋を焼いた。ここでは夥しい死者の動かぬ影と、虚脱した生者のノロノロ動く影と、救援隊のキビキビ活動する人影の著しい対比が見られた。

私達は皆大川の向うの己斐を目指して歩いた。救援避難列車が唯一ひとつの目当てであった。

陽はかなり高くなっていた。難民達は急に混雑しはじめて、私達三人の距離は疲労や体力や気力の差につれてまちまちになってしまった。

己斐が対岸に見える大川の鉄橋が私の前に来た。普通の千メートル位の距離である。

迂回する時間も体力もなかった。私は恐る恐る体のバランスに細心の注意を払いながら、一本一本枕木の上を渡った。橋の下の水を見ると目が眩みそうで、努めて前方ばかり見て渡った。橋の途中からは這うようにして渡った。私は漸く鉄橋を渡ることに成功した。

長い長い長過ぎる鉄橋であった。

己斐の駅は長蛇の列であった。私は岩永君を見つけると荷物を頼んで、佐藤君を捜すことにした。彼は途中から私達二人にはぐれてしまったのである。私は長い列を一人一人たしかめた。

列にはいないのである。近所に屯する避難者の群れの中も丹念に見て廻った。必死の思いである。私の頭の中は彼を同行する義務と責任感とで一杯であった。

一本の西下する列車が午後一時頃この駅を出発する予定であった。時間は迫った。私は責任感とあせりで次第にもどかしくいら立って来た。罹災証を見せて一人一人改札口を通過して行った。私は待ちに待った。だがとうとう彼はこの駅に姿を見せなかった。生きていることは確実だし、鉄橋の手前までは一緒だった。私は自分に言い聞かせて断念することにした。私達を乗せた避難列車第一号はやがてノロノロ動きはじめた。私はやっと窓際に席を占めることができた。目の前のホームの水道からは、止らない水がほとぼしり出ている。私は席に坐ったまま恨めしげに横目で見過ごすほか、どうすることもできなかった。

国鉄の制服を着た人が握り飯を一つ私の掌の上に載せてくれた。食慾は全然なかった。この人には明日までの大事な食物であるから私は丁重に断った。その人は、門司で降りるから、自分は大丈夫だ、君は長崎まで腹が保たぬだろうから遠慮せずに無理にでも食べるようにと、しきりに奨めた。私はこの異常事態の時にも失われないこの人の人間愛に深く打たれた。

自分ではそうまで感じていなかったが、第三者には私は可成りの重傷者に見えたらしい。疲労し切った私の体力は既に限界に来ていた。四十度以上の熱が出初めて悪感に身体が震えはじめていたのである。このまま黙って坐っていれば、終点長崎へ着くことができる、そう思った安心感に被爆以来の疲労が一度にドッと来たのであった。私は震え

がおさまると、そのまま椅子の背にもたれた姿勢で、昏々と深い睡りに落ちた。

八月八日、昼近く、己斐駅を発った避難列車はようやく長崎へ着いた。

風呂敷で首から吊した左腕はブヨブヨにふくれ、黒い表皮の下には今にも破れそうな粟漿液が一杯たまっていた。

長崎は空襲警報中で、小型の艦載機らしい爆音が上空を巡っていた。一刻も早く治療を受けぬと傷は悪化するばかりであった。

私は大胆にも空襲下の町の軒下を通過して、船津町の三菱病院支局へ行った。

空襲警報下の院内にはだれもいなかった。

眼科の佐藤先生の白衣を見かけたので、ためらわず治療を乞うた。佐藤先生は私の先輩であり、彼の弟とはクラスメートであった。

私達は二人眼科の治療室へ行った。先生が鉄で薄い表皮を切開すると、膿盆に一杯になるまで溜りに溜った水はザーッと流れ落ちた。

顔半分の表皮も丁寧に切り取られた。治療が終ると、私の顔は目と口と鼻だけを残し、我ながら、我を怪むる貌となった。

私は病院を出ると、桶屋町の両親の家に行った。私の家は出張中に疎開して番地はわかっているが、場所が分からなかったからである。

空襲警報で避難した無人の実家に上り込んだまま、一人で長いあいだ警報の解除を待った。

警報解除のサイレンが鳴って家人達が帰って来た。異様な風態の白坊主が、一人勝手に家に上り込んでいるので驚かれた。

その日の朝刊は広島に新型爆弾らしきものが投下され、一発の爆弾で広島全市は殆ど全滅との大本営発表が報ぜられていた。

私は広島の何処かで、すでに骸となっていると思われる。両親も諦めていたのである。仏壇の前にドッカと胡座して、白坊主の幽霊である私は帰っていたのであった。

妻にはあらかじめ葉書で帰崎する旨連絡してあった。

迎えに来た妻子と、その日の夕方水ノ浦町の高台にある自宅に帰った。

自宅は水ノ浦町二〇四番地の高台であった。すぐ隣組の人達が見舞いに来てくれたので、広島の惨状を話した。

特に白い着物は熱線を反射し、黒い着物は燃え易いこと。

ガラスの破片がどうにも手のつけようのない外傷となること。「ピカッ」と来たら頑丈な物陰に伏せることを強調した。

話は人から人に伝わっていった。

その夜、私達は親子三人、三か月ぶりと同じ屋根の下で話した。生後五か月の長男は見違えるように大きく成長していた。私は四十度近い高熱と吐き気で苦しみ、何遍も下痢をした。血便であった。赤痢ではないかと思った。

工場近くの五〇メートル以内の人達は、強制疎開で浦上方面に移転していた。逆に私の家は私の出張中に、稲佐公園の高見の家から、最も造船所に近い危険な水ノ浦に移っていた。

八月一日の爆撃で、製罐場のポイラドラムの白のように大きな破片が防空壕の上に落ちていた。爆弾の中の一発は直ぐ上の変電所の近くの畠に落下し、直径二十メートル位の穴を穿ったこと、近所の中学生在が避難の途中機銃掃射に斃れたまま、何時間も検視に来ず放置されていたこと、壕の土がくずれ続けて生きた気はしなかったことなどを知った。

漸くの思いで長崎に帰って来たが、この地帯の人達も既に冷厳な死の洗礼を体験していた。

八月九日、高熱の寝汗で悪感を感じながら目を覚ました。事務所は目の先であった。

その朝、私は無理をして少し早目に出社した。第二事務所六階別館である職場では、私の異様な包帯姿が注目的となり、広島から生きて帰った証人として、質問の矢が浴びせられた。

特に私は、皆さんらのために、窓ガラスを全開して、できるだけ爆風が吹き抜けるようにして貰った。

今までは逆に窓を閉めていた。私は本館に行って野村課長に広島から帰ったことを報告した。

岩永君は同じ避難列車で来て、諫早で無事下車したこと、佐藤君は無事であるが途中ではぐれ、どうしても一緒に連れて来られなかった事情を述べた。

広島の被害について、ただ一発の爆弾で全滅などとは信じられないと言っている時であった。

「ピカッ」と閃光がした。私は、本能的に広島のあるたと、そのまま机の下に飛び込んだ。

轟音がして爆風が直ぐ室内を吹き巡った。十センチメートル先も見えない程のゴミと図面や事務書類が乱舞した。

爆煙が薄れると散乱した椅子や図面などを掻き分けて、別館の窓から飛び出すと、後の岩山の崖をよじ登った。無我夢中であった。岩山の上のコンクリートの防空監視塔では、双眼鏡をブツ飛ばされた若い監視員が、真赤に焼けて倒れていた。

我に帰ってみると、私の上半身や顔面を固く包んでいた包帯は跡形もなく、鯨の赤味のような傷口は、すべて粉をまぶしたようにゴミで覆われていた。

浦上方面の上空には広島で見た茸状の雲が、広島からここまで遙々逃れて来た私を冷笑するかの様に、不敵に立ち昇っていた。

巨大な悪魔の火柱は、この時すでに祖国の明日の運命を予言していた。

その後、大造船所も鍋やフライパンの製作で細々と命脈を保っていたが、企業整備の人員整理で、私も犠牲者の一人となった。

その後の私は進駐車の労務者や、小さな会社の請負いなどで混乱した時代を送ったが、旧中学卒業後に受かった検定試験の教員免許状が役に立って、昭和二十三年新設された新制中学の教師となり、福田、西泊を振り出しに長崎港外の離れ島高島炭鉱の中学で、ヤマの中学生たちと毎日海を見ながら、少しずつ敗戦の虚脱の中から立ち上ろうとしていた。

昭和三十年一月、十年の放浪の旅路から、再び古巣の造船所へ戻って来た。十年の空白は物人共に響き大きい、とに角ドッコイ私は生きて来た。

今となっては十年の空白も掛け替えのない貴重な人生の一部で、切り離して考えることはできない。

教え子達も立派な社会人となり母親となって、間違いなく人生を歩いている。

その後私は明けても暮れてもタンカーを作ることに専念して来た。来年は私も五十四才になる、停年も目前である。

被爆者特有の症状が出て幾年も苦しんだが、私は生きて来た。

顔の傷も腕や手の傷も少しずつ元に戻った。

生後五か月で被爆した時「アイタ、アイタ」と、初めてものを言った長男も、今年二十四歳となった。この秋は少し早い結婚式を挙げる予定である。

今年の、あの日あの時、かつての三人は平和の泉の前で再会した。

水欲りし彼の日の乾きせつなかり

今日の前に嘔き止まぬ水

岩永章(長崎市清掃部管理課長)、佐藤邦義(本渡市市役所水道課長)、そして私の三人である。

長崎の被爆犠牲者七万余、新たに一万二千余の御霊が安置された。

広島犠牲者の公式数字八万余人、一般には二十数万余と言われているが、正確な基本的データに乏しいので、いづれも推定の域を越えないのである。

今から二十年後、三十年後広島は、長崎は、日本は何によって原爆のおそろしさを世界の人々に訴えるのか。証人達が一人残らずこの地上から消え去る日は遠くない。

我々は人類の警鐘となる尊い証言を銘記する義務と責任を痛感する。

被爆より四半世紀を生き来しが

人類月に立つを今日見つ

後日談

「愛妻の生首を抱いて」

昭和四十四年八月九日私達三人は、長崎被爆者慰霊祭場の近くに新しくできた平和の泉の畔りで、二十四年ぶりの再会をした。ウィークエンドショウに出演したからである。

テレビの放送が済んだ後で、私達三人は久しぶりの懐旧談にしばし時の経つのを忘れた。

その時の佐藤君の話である。あの時私達とはぐれた佐藤君は茨木係長の宅を訪ね、一汽車後れて避難列車に乗った。昭和二十年八月八日のことである。

彼と差し向いに乗った五十歳位の男があった。しきりに網棚の上に乗せた荷物を気にしている様子であった。

その人もやはり長崎の人で広島に来て被爆したのである。

そのうち、室内のそのあたりになんとも言えない異臭が漂いはじめたのである。

キョロキョロ周囲を見廻して、その異臭の原因を探ろうとする佐藤君に気付いたのか、くだんの人は大事そうに、棚の上から包を膝の上に置いて風呂敷を解きはじめたのである。

男は「これは私の妻です。」と言った。

包の中には、鉄かぶとの様な容器の中に切り取られた彼の妻の生首が暑さで腐敗していた。それは異様な慄然たる光景であった。

その人は螢茶屋方面の人で長崎駅で別れた。

佐藤君は大波止棧橋で例のピカドンに会い、海に飛び込んで難を逃れた。その人もきっと何処かでピカドンに遭ったでしょうと言った。名前も住所も分らぬ人である。年頃はちょうど現在の私達の年令五十歳ぐらいと言った。

第十八項 東洋工業株式会社... 564

一、当時の概要

概要

所在地 広島県安芸郡府中町向洋六〇四七番地

建物の構造 事務所鉄筋コンクリート建
工場大部分・鉄骨スレート葺
敷地約一〇万坪
建物坪数(約二〇〇棟)
延約四五、 坪

事業種目 昭和十九年一月「軍需会社法」に基づき、軍需会社として「第一次指定」を受け、続いて同年四月「生産機器(さく岩機)・発動機部分品・自動車」が軍需事業として追加指定された。

陸海軍兵器 小銃一七、 挺ほか 六三%

工作機械 四〇台 二一%

工具 自家用工具 四〇、〇〇〇個 } 九%

ゲ - ジブロック四、〇〇〇個 } "

さく岩機 二四〇組 五%

三輪トラック 一三台 二%

(昭和十九年九月資料)

在籍従業者数 約八、 人

被爆時の出勤者数 不明

代表者 生産責任者 社長・松田重次郎

生産担当者 専務・松田恒次

爆心地からの距離 約五・三キロメートル

二、疎開状況

昭和十九年、当社工場全体の大規模な工場疎開を計画した。近傍の安芸郡府中町の鹿籠・上縄・鶴崎・青崎外新開・鹿籠山の一帯約二〇万坪の山林地帯に、横穴式地下工場を建設することにたった。工事費約一、八 万円で、二十年四月、工場疎開工事を開始したが、五月末、工場疎開工事用セメント船が、機雷に接触して沈没、ために工事は進

まなくなった。

同年六月、府中町御衣尾に分工場を建設した。また疎開の工作機械の一部は府中町内の埃宮境内などに野積みしたこともあった。

また、広第十一空廠地下工場に移転させたピストン製作工場は、同地空襲の際の山崩れで埋没してしまった。

三、防衛態勢

工場疎開工事の着手に先だって、約四～五、人収容できる横穴式防空壕を構築した。

昭和二十年五月、空襲罹災対策要項を決定し、防空施設の、より一層の拡充を図った。工場近傍の山に機関銃座を設置。四月以降、社名を「ヒロ三二五一工場」と暗号化した。

社長以下全員が、防空服装で生産に従事すると共に、職域義勇隊も結成して、防衛態勢を強化、六月には「戦闘隊」としての性格を帯びるようになった。

四、避難計画

工作機工場・寄宿舎などの在員は、向洋の地下防空壕、本館以北は千代山地下防空壕、他の大半の人員は鹿籠山一帯の地下防空壕を待避所として指定していた。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜のしばしばの警報発令には、平素の訓練どおり、部署担当職員がそれぞれの任務をつとめた。

六日午前七時三十一分の警報解除後は、平常状態に復して就業した。なお、当日は東洋工業職域義勇隊が約二〇〇人ほど、広島市内鶴見町一帯の民家の疎開作業に出動していた。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

即死者 一一九人

負傷者 三三五人

行方不明者 不明

計 約四五四人

(二) 物的被害

本社工場は、爆心地から約五・三キロメートルの遠隔地にあったため、建物自体の直接的被爆を免れたが、強烈な爆風で工場の屋根は吹きあげられ、窓ガラスはほとんど破損、窓枠は曲り、建物若干が倒壊した。総体的な被害率は小破で約三〇%程度であった。なお、火災の発生もなく、急いで避難するという事態も発生しなかった。

当時、会社には相当数の動員学徒と、卒業生をもって編成された女子挺身隊が作業に従事していた。

動員学徒は、県立第一中学校・広島女学院専門部・山陽中学校の各生徒たち。女子挺身隊は、広島市立高等女学校・山中高等女学校・進徳高等女学校・広島女子商業学校卒業の少女たちであった。

女子挺身隊員の一人、天野カオル(当時十九歳)は、会計課工費係の仕事を受持っていた。毎朝のことで、当日も第一工場入口にあるタイム・レコーダーの出勤カードを取りに出向き、カードを集めているとき、突然、遠くの方でドーンという異様な重圧音をきいた。瞬間的にその場にかがみこんだ。しばらくして顔をあげてみると、周囲はうす暗いとばりに閉ざされていた。恐る恐る立ち上って、ふと西方を見ると、どす黒いキノコ型の雲塊が、モクモクと中天に湧きあがっているのが見えた。その方向は皆実町のガス・タンクのあたりとも思え、タンクが爆発したのかしらと思ひながら、事務室に急いで引返した。夏で窓を開けはなしていた事務室の内部は、無数の書類が吹きとばされており、職員はみな立ち上って、突発した事態が何であるかわからないまま、ただウロウロしているばかりであった。「どうしたんか?どうしたんか?」と、口々に言うばかりで、もう仕事も手につかず、不安におおわれて右往左往した。

九時に近いころであったと思えるが、血みどろの負傷者やボロボロに剥げた皮膚をたれさがらせた半裸・全裸の市民が、会社の中へ逃げこんで来はじめた。その数は時々刻々に増加し、はじめは病院に収容していたが、すぐ超満員になり、遂に事務所の廊下などにも収容して寝かせた。

「広島市内がやられて炎上中で危険であるから、職員は会社外に出てはいけない。踏みとどまって、収容者の救助にあたれ。」という命令が会社から出た。

救助作業中、挺身隊員の親が、安否を気づかって連れに来たのもあったが、守衛が双方の状況を連絡してくれるだけで、個人的な行動は許されず、動員学徒も女子挺身隊員も夕方五時まで救助作業にあたった。夕方帰宅を許されるまでのあいだ、無我夢中の活動で、どんなにして時間が過ぎたのかもさえ思い出せないほどであったという。

七、被爆後の混乱

爆風によるガラスの破片などで負傷した従業員を、付属病院に収容した。

炸裂後、一五分ぐらいたった頃、鶴見町一帯へ出動中に被爆した当社職域義勇隊の一番手が帰社して、救援を求めた。さっそく救援隊を組織して、トラックにタオル・石けん・医薬品などを積んで出動しようとしたが、道路に倒れた電柱や続々と来る市中からの避難者のために動きがとれなくなった。そこへ負傷した市民が、また殺到した。負傷者の大多数は火傷で、衣類は焼失し、わずかにポロをまとっているという姿であった。その身体にはガラスなどの破片による無数の切傷があり、中には顔形もさだかでなく、男女の見分けもつかぬほどの人もいた。

さっそく付属病院を開放し、さらに当社玄関受付にゴザを敷いて休ませ、応急処置をおこなった。出血のひどい負傷者は取敢えず止血し、大きな裂傷は縫合し、火傷には油を塗った。しかし、治療の能力にも限界があって、十分な処置もとれず、おおくは油罐にガーゼをひたして、塗るだけであった。応急処置を終えた人は、食堂などに収容したが、引き続き急ぎ寄宿舍を整理して、そこに収容した。

付属病院では、絶えまなく増加する負傷者に、医師・看護婦約五〇人が四、五日間、昼夜の別なく治療にあたった。

五日目ごろから一応落ち着き、繃帯なども疎開先から取寄せ、寄宿舍収容の負傷者の回診治療をおこなった。

寄宿舍で死亡した避難者は、当社南端のグラウンドで火葬した。

一方、当社救援隊は、六日当日は猛火に妨げられて市中に入ることができなかったが、二日目から約四日間、一組約一〇人、四組が救護物資を持って、市内各所に出動し、従業員および家族の救援に努力した。

八、復旧状況

復旧状況

終戦後の虚脱感と放心状態がしばらく続き、また社会的経済的混乱から事業界の見透しが、まったく立たないままに会社機能は完全に停滞した。会社の仕事としては、被爆罹災家族の救済、家庭生活の維持などの、身近な問題に終始するだけであった。

終戦後の昭和二十年八月末、当社建物の一部を広島県庁に貸与した。九月になって軍需工業の民需転換許可の方針が次第に明らかになり、当社は会社再建の根本方針を決定した。まず、社内整備、とりわけ人員の削減整理から着手し、終戦当時約九、六七〇人の従業員は、七八六人に縮減した。またこれと併行して、戦争終結と共に打切りとなった工場疎開工事、工場拡張工事などの清算事務、原爆死没者・罹災者・応招戦死者などに対する弔慰金・見舞金の支出事務が続けられた。

一方、工場現場では、清掃作業、機械設備の手入作業、原子爆弾の被害を受けた主要工場の修理作業が進められた。大きな復旧工事としては、十月第二鑄造工場の屋根修理、鋳金工場の側壁修理などが着手された。

九、事業再開状況

昭和二十年九月末、アメリカの日本管理案正文において、対日管理政策の基本方針が示され、経済については、従来の平和産業の生産続行と軍需工業の民需産業への転換が許可された。

これに基づき、転換準備のための社内整備を進めると共に、十月、県当局の指示に従って具体的な転換計画を立て、その許可申請書を呉軍政部に提出、十一月にその認可を得て生産活動を再開した。十二月、自動三輪車一〇台を製作したのが再開の先陣であった。

大阪事務所も十一月には再開されたが、東京事務所は同月社屋を占領軍に接収された。

さらに今後の方針として三輪トラック(一般にバタンコと呼んだ。)の大量製造計画を立て、それにあわせ残留人員約七九〇人に縮減された生産機構の拡充を図るため、人員の大量募集をおこなった。しかし、敗戦による混乱と不安定な社会状況のため応募成績は悪かった。

一方、従業員の待遇については、年末ごろから次第に改善を進めると共に、工場設備の復旧も二十一年一月、原料倉庫の修理、二月出荷倉庫、鍛造工場側壁の修理、工場内防空壕の解体撤去を行ない、引続き三月第一鑄造工場の壁修理、第二工場復旧工事と進め、疎開機械の引取り・遊休、不要工場から機械設備の移動・集中が着々と実施された。

しかし、二十一年中頃からは原料資材の入手困難で、三輪トラック完成車の生産は、なお僅少なものであった。このような悪条件下に悪戦苦闘を繰返しながら、敗戦の虚脱感がうすらぎはじめ、社会も安定を取戻し、広島市の復興が軌道に乗ってくるに従い、ようやく生産活動も本格的なものに立ち直っていったのであった。

炸裂の瞬光を望見する

栗田要(談)

(当時・東洋工業勤務・三七歳)

八月六日、広島市上空で原子爆弾が炸裂した一瞬の光景を、つぶさに私は見た。

当時、東洋工業の運輸課に勤務していた私は、運輸課所管の乗用車・ボタンコ計八台の疎開先である府中町鹿籠の、いわば監視小舎に寝泊りしていた。家族は、市内仁保町青崎の小磯というところの社宅に住んでいたから、監視小舎では私一人の生活であった。

六日の朝、七時半ごろ警報が解除になってから、早くも出勤して来た二人の若い社員と一緒に、小舎の前で木炭車(当時はガソリンなく木炭を使っていた)の火をおこしているときであった。

海の方から B29 が侵入したらしい爆音を聞いたようでもあったが、中天に高く浮ぶ白い物体(後で落下傘と知った)を二個認めたときには、飛行機の音はきこえていなかったように思える。

若い二人は落下傘が三個であったというが、私には二個だけしかみとめられなかった。

ほんのちょっとマがあって、今度はすごいエンジンの音が耳にひびいて来た。

広島市上空の、西方をながめていると、B29 が、三日月のように翼をかがやかせ、急上昇しながら北の方へ飛び去っていくのであった。その四基のプロペラまでよく見えた。

と同時にピカッと光った。まるで大規模なマグネシウム発火と同じ光がひろがった。その光の上はかなり大きな白煙が立ちあがった。

若い二人が「カメラを撮った。」という。

「そんなことはないよ。こんなに明るいのに……」と、私は言った。

こんな言葉をかわす時間があったが、そのあとに、日ごろ眺める太陽くらいの大きさの光体が空中にうまれた。入り日のようにまっ赤な、いやもう少し淡い感じの物であった。

そのときには、最初に発火したとき、上部に昇った白煙は、もうなかった。

太陽のような光体をみていると、それが波紋状になって空中にひろがりはじめた。

光線の波紋は、多少の濃淡をもって青空の中にひろがるにつれ、この世のものではないくらい美しくなった。壮麗且つ華麗と言えるであろう。

私の眺めている場所から、ちょうど広島市の中心と思われるような角度の上空の現象であったが、ひろがった光線の波紋が自分の頭の上までとどくかのようであった。

この光波のひろがる時間は、四秒前後であったが、私の頭上のあたりまでとどいた時、何か知れない透明な、気流のような風圧が、一瞬音もなく突っ走った。それが私のうしろの山に当たってはね返り、いま来た方向へ吸い寄せられるように逆転した。

そのとき、私も若い二人も無意識に地面に伏せていたが、逆転した風圧は、小舎のガラス窓を粉碎して通過した。小舎の中の棚に積んでいたカボチャに、無数のガラス片が突き刺さっていたが、その直前に伏せた私たちはまったくの無傷であった。

手や足を伸ばせるだけ伸ばして、硬直したように伏せていたが、風圧が去ったとき、近くに爆弾が落ちたような音が、ドーンとひびいて来た。

見ると、鹿籠の食糧営団の大きな倉庫が、モウモウと立ち昇る土埃におおわれていた。てっきりそこに爆弾が落ちたものと思いながら見ていると、その土埃が薄れていくと共に、倉庫が原型のまま壊れもせず建っているのであった。

これはおかしいと思い、国道の方の側の小山にあがってみると、中間にある比治山の向うの地点に、まっ黒い太い

煙が、ムクムクと天を衝くほどに高くのぼっていた。

何だろうか?と、眺めていると、すぐ眼下の広島駅付近がパチパチとはじけて燃えはじめた。しかし、まだ私たちに、どこまでがどうなっているのか、さっぱり判らなかったのである。

しかし、状況から考えて、地上に落とされた爆弾ではないと思われた。

とにかく、私は会社へ行こうと、車を運転して行った。

会社の中は、まだ騒ぎになる前であったから、私はその日の作業の準備に取りかかったが、表の方から異様なざわめきがきこえて来た。

私は仕事を放って表に出てみた。すると、広島の方から国道沿いに、ボロボロになった姿の人々がゾロゾロ歩いて来るのであった。それが近づいて来たのをみると、みんな半裸か全裸で、むけた皮膚が縮れて垂れさがっている。背中中の皮がクルリと全部むけている人もいる。茶褐色に焦げ血まみれの人もいる。

私は、胸がつまるような激怒を感じ、拳骨で地面の上を叩きながら、のたうちまわった。

負傷者の大群は東洋工業の中へ、助けをもとめて入って来たが、会社は被爆と同時に断水していた。

私はバタンコに四斗樽を十本積みこんで、海田市町の明神橋の近くにあった日本製鋼所の水源池にかよい、必死になって水をはこんだ。

そのあと、五師団司令部の焼跡に行ったとき、衣類はそのまま着ており、頭髪も焼けておらず、一見無傷の人が死んでいたが、露出している部分の皮膚が一様に、まるで備前どっくりのような色に焦げていた。

また、広島駅から東洋工業の方へ通ずる大洲街道の左手の蓮田の葉には、これも備前焼のような色合いをしたほぼ直径五センチメートルくらいの斑点が、一枚の葉に一つか二つずつできていた。このような斑点は、宇品町御幸通りのスズカケの並木の葉にも見られたが、いずれも穴はあいていない焦げあとであった。

炸裂瞬間の目撃状況

山本稔

(現在・瀬野中学校木工講師)

当時、私は東洋工業兵器部に小銃組立工として勤めていて、原子爆弾の炸裂の瞬間をこの目ではっきりと見た。

巨大な火柱が地上から空中へむかって、猛烈な勢いで立ち昇ったが、爆風が襲ったとき、実に間一髪、そばの防空壕に同行者二人と共に退避して微傷だにしなかったのは幸いであった。

以下は、炸裂瞬間の目撃状況である。

(一) 目撃場所

安芸郡府中町東洋工業二門付近で、女子工員二人と歩いていた。爆心地からの距離は、中間に比治山公園御便殿をおいて、約五・三キロメートルである。

(二) 炸裂の瞬間の状況

当時、兵器部組立工場が、府中町広島静養院横に疎開作業中であったから、毎日徒歩で現場へかよっていた。

その日の朝、伍長の指図で女子工員二人を連れて、作業現場へ行く途中であった。

突然、ピカッと強烈に光った。ふりむくと広島市の上空に、ちょうど満月くらいの大きさと、キラキラと光りがかやいている物体があった。

それはあたかも円い鏡を太陽に反射させているようで、濃いオレンジ色で、異様にキラキラと光っていた。

まもなくその物体の周囲に、同じオレンジ色の鮮明な光線の輪ができた。その線の幅はほぼ三〇センチメートルくらいに見えた。

できたその輪もキラキラと輝き、キューンとにぶい金属音をたてながら、つぎつぎと新しく大きな輪を広げていった。

光線の輪は大きくなるほどその間隔がひろがって、輪の数が八つ以上になったと思われた。それぞれの輪と輪の間は淡いオレンジ色であった。

最後の光りの輪が地上に接してできた瞬間、最初に光った反射鏡のような物体にむかって、ものすごく大きな火柱が立ちのぼった。

間髪を入れず、その火柱を中心にして、火炎が横に超速度でひろがっていった。

火炎の高さは、比治山の約一・五倍であった。

火柱が立つまで、最初の物体も、また輪も鮮明に光りかがやいていたが、火炎が横に広がると同時に、光る物体は全部、一瞬のうちに消え去った。

広島市上空一帯が、オレンジ色に円く光りかがやく光景は、まったく異様な美しさで史上空前の大惨劇が惹起されていることも知らず、私は眺めていたのである。

「どうしたことだろう?」

ばじめて言葉をかわしていると、ズドーンと腹わたをえぐるような爆発音がした。

ガスタンクの爆発にしては方向が違ふし、はて何ごとだろうかと考えめぐねていると、突然、ゴオーッと、すさまじい音をたてて、まっ黒い熱風が襲った。露出している顔や手が、火炎で焼かれるような熱さを感じた。

「オジサン!」

女子工員が私に抱きついた。とっさにその手を取り、そばの防空壕に駆けこんだ。

周囲がまっ暗になり、熱さを感じたとき、付近で別の事態が発生したと思った。

やがてあたりが明るくなったので、壕から出て広島方面を見ると、すでに火柱は、巨大な原子雲となってモクモクと渦巻きながら、天空高く上昇していた。

さらに驚いたことには、私たちが炸裂の瞬間を見ていた付近一帯、割れ散ったガラスの破片で、足の踏場もないほどになっていた。

建物の中から顔面血だらけの男女事務員が飛び出してきたが、みんな半ば放心状態であった。「すぐ医務室へ行け」と、私は大声で指示した。

私と一緒に退避して助かった女子工員に、「強く抱きついてくれたなア」と言ったら、口をそろえて「そんなことはしない。」と答えた。

それはまさに恐怖の一瞬であった。

(昭和四十三年十二月八日記・五二歳)

動員学徒の被爆記

角田光永(談)

(当時・県立第一中学校の生徒・一五歳)

八月六日、県立第一中学校の生徒約八人が、動員学徒として、東洋工業株式会社に出動した。学徒は飛行機用のピストンや銃の部分品の製造にたずさわっていたが、この日は会社から鶴見橋付近の建物強制疎開に出動するよう指示を受けた。

連絡係であった私は、本館(事務所)から工場へ連絡に行ったが、すでに作業に取りかかっていた者は、すぐやめて手を洗いはじめていた。私は連絡事務を終えると、すぐ本館へもどった。その瞬間に被爆した。

引率の教官岸本渉・岡本清両先生をはじめ一同は、突然、ピカッと光ったので、どうしたのか?と総立ちになって、窓の方を見た。

その時、ドーンという爆発音と同時に、ものすごい爆風がやって来た。

私はとっさに机と机のあいだにしゃがみこんだ。東洋工業が爆撃にあったなと思った。

しかし、一発しか爆発しなかったの、ヘンだなアと思った。

部屋の中は、ものすごい埃でうす暗くなっていた。

工場が危いと言うので、正門前の道路へ走って出た。みんな広島の方を指差したりして見ていたが、立ち昇るキノコ雲が太陽の光線を反射して、モモ色または赤色に染まり、なんとも言えぬ光景である。

一体、何が落ちたのであろうか?不安な気持ちで、ひょっとすると火薬庫の爆発ではないかなどと話しあう。

そのあと、敵機の爆撃もないので、私たちは本館にもどった。事務所の窓ガラスは木っ端微塵に砕け、窓枠は内側へ曲り、書類は散乱し、机は埃におおわれていた。窓ぎわにいた人は、ガラスの破片で顔や腕を負傷している。負傷者はすぐ医務室に行き、治療を受け繻帯を巻いて帰って来た。

事務所の中の負傷者は五人ほどであったが、工場にいた者も、屋根のストロが落下して数人の負傷者が出た。

九時ごろ、工場前の道路をひどい火傷者や負傷者がゾロゾロと通りはじめた。市中から、これら避難者たちの、いつ果てるとも知れない長い行列が続く。

もう仕事を手につかなかった。一同集合してそれぞれ帰宅することになったが、私はまだ襲撃があるような気がし

て、防空壕に逃げた。一緒に壕内にいた誰かが、なんとなく酸素爆弾かもわからないから、壕から出ようと言いだした。

酸素爆弾なら、低い所にいれば空気が薄くなるから危いと言って、壕を出た。

私ら生徒五人は岸本先生に引率されて帰ることにしたが、もう市内には入れず、矢賀町に出て、牛田方面へ出る予定で歩いた。矢賀町もすでに多くの避難者で混雑しており、私はいつかグループと離れてしまった。

第十九項 株式会社日本製鋼所広島製作所... 579

一、当時の概要

概要

所在地 広島県安芸郡船越町字入川

二、一八六番地

建物の構造

工場名	* 構造	* 面積	* 在籍人数	* 製作内容
第一機械工場	* 鉄骨造	* 二・七六二平方メ - トル	* 一、一七九	* 砲身機械加工
第二 "	* "	* 二・五七二	* 一、一八〇	* "
第三 "	* "	* 一・一一三	* 三五七	* 砲弾製造
第四 "	* "	* 七〇五	* 四五九	* 薬莢製造
第五 "	* 木造	* 一・五二七	* 九三九	* 高射砲々架製造
第六 "	* 鉄骨造	* 一・六七四	* 四九〇	* 砲弾製造
第七 "	* 鉄筋コンクリート	* 一・七四一	* 七一六	* 野戦重砲製
第九 "	* 鉄骨造	* 一・八六七	* 七五五	* 高射砲専門工場
第十二 "	* "	* 一・一四二	* 六三一	*
第一組立工場	* "	* 二六六	* 二五六	*
第二 "	* "	* 二九四	* 一三七	* 砲塔組立
第三 "	* "	* 五〇〇	* 一五七	* 火薬製造
第四 "	* "	* 不明	* 三七八	*
鑄造工場	* "	* 三・七八八	* 一、〇二九	* 鑄物
第一鍛冶工場	* "	* 一・二〇三	* 三三九	* 鍛造
第二 "	* "	* 七六五	* } 一〇八	* "
第三 "	* "	* 九七七	* } "	* "
発条工場	*	*	* 六九	* パネ製造
製缶工場	* 鉄骨造	* 一・二九三	* 四八九	* 切断溶接
火工工場	*	* 一・一三一	* 二三二	* 火薬製造
その他	*	*	*	*

従業員数

社員関係

現在人員

社員 * 勤労報国隊

* 不在人員 * 計

徴用	* 非徴用	* 小計	* 学徒	* 女子挺身隊	* 小計 *		
男 * 七六五	* 七	* 七七二	* 二	*	* 二	* 二七六	* 一、〇五〇
女 * 二三一	* 一八八	* 四一九	*	*	*	*	* 四一九
計 * 九九六	* 一九五	* 一、一九一	* 二	*	* 二	* 二七六	* 一、四六九

(昭和十九年十一月末)

工員関係

現在人員

常用工員 * 勤労報国隊 *

新規徴用 * 現員徴用 * 非徴用 * 小計 * 学徒 * 女子挺身隊 * その他 * 小計 *

所外からの派遣 * 不在人員 * 計 * 合計

男 * 一、九〇〇 * 七、五七七 * 一一五 * 九、五九二 * 八四四 * 二八七 * 一、一三一 * 二八四 * 二、一二九 * 一三、一三六 * 一四、一八六

女 * * * 三三七 * 三三七 * 八三一 * 四四一 * * * 一、二七二 * * * 一、六〇九 * 二、〇二八

計 * 一、九〇〇 * 七、五七七 * 四五二 * 九、九二九 * 一、六七五 * 四四一 * 二八七 * 二、四〇三 * 二八四 * 二、一二九 * 一四、七四五 * 一六、二一四

(註)動員された学校名

広島高等学校・第六高等学校・その他不明

(男子学生は主として高射砲弾生産に、女子学生は主として高射機銃弾生産の主力作業員として成績をあげた。)

代表者 所長・松田武四郎

爆心地からの距離 約六・二一四キロメートル

二、疎開状況

(一) 防空法に基づく分散疎開命令(昭和二十年四月一日)

高角砲及び弾丸製造設備の四〇%

高角砲砲架製造設備の二〇%

機銃銃架及び照準機製造設備の二〇%

疎開先 県内一五か所(詳細不明)

(二) 自主疎開

上記命令による分散疎開のほか、当所は任意に金属材料工具・事務用品及び厚生物資などを安芸郡内の中野村・畑賀村・奥海田村・府中町及び坂村などに分散疎開した。借上げ民家約六〇〇坪、疎開物資の総額約五〇〇万円に達した。このほか、広島市内外、県下各地にわたって機械類を疎開した。

三、被爆の惨状

惨禍

当所は、幸いにして地理の関係上、一部建物に軽微な損害(窓ガラスの破損)を被り、その破片が多少機械に挟まれた程度であった。

しかし、当日は休電日に当り、従業員の多くは家族らとともに、一般市民に交じり、家屋疎開の勤労奉仕などに出動中であったため、その大多数が、本人または家族や親族を失い、また負傷者をだすにいたった。

被害地区から呉方面に向い、続々とのがれる一般負傷者に対し、当所は付属病院を解放して治療活動を行なった。翌七日は出勤従業員(約二割弱)中から救援隊を組織して、従業員・動員学徒・挺身隊・徴用工員及びその家族の負傷者を探して収容し、さらに一般市民のために、西蟹屋町の第十一機械工場を中間治療及び収容施設にあて、また各寮舎を解放するなど、応急救助に主力を注いだ。ために工場作業はしばらくのあいだ全く麻痺状態に陥った。

第二十項 中国塗料株式会社... 584

(ヒロセ二五〇工場)

一、当時の概要

概要

所在地 広島市吉島本町四一六番地

建物の構造 鉄骨平家建スレート葺(一棟)

一〇〇坪

木造平家建瓦葺(四棟)

一六六・五坪

木造二階建スレート葺(一棟)一四五坪

木造平家建スレート葺(一〇棟)一九八・二五坪

木造平家建トタン葺(四八棟)三、〇九八・七五坪

木造一部二階建トタン葺(一棟)一九二坪

木造二階建トタン葺(二棟)三二二・五坪

計 六七棟四、二二三坪

在籍従業者数 九〇人

被爆時の出勤者数 六八人

代表者 社長・鈴木武秀

爆心地からの距離 約二・三キロメートル

このほか、資材部・勤労部が次のとおり市内疎開を実施していた。

(資材部)

広島市竹屋町 田中製針社長邸の二階

木造モルタル塗一棟 二一坪

在籍従業者数 三〇人

被爆時の出勤者数 二六人

爆心地からの距離 約一・二キロメートル

(勤労部)

広島市南竹屋町二六四 上田常務取締役邸

木造二階建瓦葺一棟 三二坪

在籍従業者数 二九人

被爆時の出勤者数 二五人

爆心地からの距離 約一・七キロメートル

なお、このほかに昭和二十年八月六日現在、本社工場在籍従業者で、軍関係応募中の者九三人、関係官庁派遣中の者三人がいた。

施設の概要

(一) 本社工場

変電設備 一〇〇KVA(五〇×二)

ボイラー(ランカシャ・コルニッシュ) 二基

電解設備 一式

半製品製造反応釜 四基

生松脂蒸溜装置 一式

ボールミル 三基

ボイル油釜 五個

塗料用タンク大型 二個

(二) 市内疎開事務所

書類棚・机・椅子など備品

事業種目

(一) 海軍関係

船底塗料・呼吸器用酸素発生缶の製造

(二) 陸海軍関係

航空機用酸素発生剤・潜水艦用空気清浄剤の製造
その他、軍需省関係の塗料の製造

二、疎開状況

物資疎開については、補給部長を中心に各部課協議の上、次のとおり最も安全で、かつ便利な場所を選び、所期の目的を達した。

(一) 勤労部厚生課関係

高田郡向原村農家数戸に分散

(二) 技術部関係

佐伯郡五日市町農事試験場温室
広島工場外東側広場に埋設

(三) 施設部関係

佐伯郡五日市町農事試験場温室
同郡砂谷村疎開作業所
賀茂郡豊栄村疎開作業所

(四) 資材部関係

安佐郡三入村・同郡戸坂村
佐伯郡五日市町八幡神社付近・同郡五日市工場倉庫(壕)
市内向宇品町倉庫・大手町瀬川倉庫・広島工場倉庫及び広場・東、西、宇品三警察署広場
岩国工場倉庫

(五) 製造部関係

佐伯郡地御前村・同郡五日市町海老山麓
広島工場

施設疎開については、昭和二十年一月十三日付警防第二八号で指令された防空対策を待つまでもなく、航空機用酸素発生剤製造施設は、すでに約七〇パーセントを岩国市錦見の疎開工場(ヤマ七五〇一工場)に移して作業していた。

三月九日付警防第九〇五号による工場疎開命令には、佐伯郡五日市町字皆賀の山中に、神洲七二八工場を建設し、当局の指示どおりに対処した。

昭和二十年五月三日付第一四七号の軍需大臣命令による残存施設と使用可能資材などの分散疎開は、きわめて困難な輸送事情を克服しながら被爆当日まで続けた。

重要書類の疎開については、次のとおりである。

(一) 総務部関係

最重要書類は、極秘に五日市疎開工場内某山中地区の安全地帯に保管。

(二) 勤労部関係

重要書類は、五日市疎開工場に、職員名簿その他日常業務に必要竈なものは(写)をとり、市内南竹屋町疎開事務所に保管した。

(三) 会計課関係

佐伯郡五日市町海老山麓社長邸に疎開。

(四) 原価計算課関係

佐伯郡五日市町観光道路木原邸事務所に疎開。

三、防衛態勢

(一) 防衛については、昭和十九年一月十五日、社長を団長とする中国塗料株式会社特設自衛団を組織し、編成表に基づいて、防衛計画および装備をなし、特に訓練は週一回重点的に実施した。

週番制度の活用と宿直制により、工場防衛と安全を期した。

昼夜の別なく場内三か所に分散取付けの非常サイレン吹鳴あれば、あらかじめ指名された団員三、四人がただちに

本部に集合し、諸般の行動に臨機対処し得るよう配備した。

社長以下全従業員の上衣左胸部に、所属部別および姓を標示した名札を佩用して事故時の識別とした。

(二) 防空については、正門守衛所屋上に対空監視所を設置した。

本部(玄関口・有線放送装置設置)正門外・工場外東側広場・工場内運動場西側広場・隣接の女子寄宿舎裏広場などに、それぞれ二〇ないし三〇人収容の防空壕を構築して、空襲爆撃に備えた。

(三) 防火については、工場内各所に消火器・バケツ・砂袋・火叩き・濡れムシロ・貯水槽(コンクリート製とドラム缶代替品)などを備えた。

工場中心部に、耐爆車庫と詰所を新設の上、専任の部員を常備した。

消防車二台(ホースは場内に行渡るよう配慮)および、初期防火用の大型手押ポンプ二台、小型手押ポンプ二台を有し、大型貯水池三か所・掘抜き井戸二か所を造り、水源の確保にも万全を期した。

夜間防火および消火には、非常召集規定(昭和十八年七月十五日付改訂)による逡伝式召集方法も採用し、ときどき夜間非常召集の訓練を実施した。

四、避難計画

昭和十九年三月十日、総務部長を分会長とする帝国在郷軍人会中国塗料株式会社分会を組織し、編成表による装備・訓練計画に着手した。

同年五月十五日、教育隊を編成し、観閲点呼の予習および既教育・未教育兵の軍事訓練を開始した。

七月末の呉市における夜間大空襲以来、灯火管制方法の再検討をおこない、守衛および宿直員の夜間警戒態勢を一段と強化した。市内の疎開事務所も宿直員を増員して、万一の場合に備えた。

避難計画は、全従業員の避難先名簿を調製し、居住地有事の際の連絡方法を準備した。

本社工場および市内に分散した疎開事務所罹災の場合は、全従業員を五日市工場に収容することにした。

五日市工場は山中の谷間を利用して設置されていたから避難場所としても適しており、収容施設も併せ整えていた。五日市吉見園の当社練成道場も、避難者収容に転用可能のように配備した。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜は、たびたび空襲警報が出たが、幸い変わったこともなく朝をむかえた。六日朝、快晴。午前七時三十一分、警戒警報解除のサイレンによって、当番監視員も対空監視所から降りた。ラジオ放送のとおり敵機は認められなかった。

従業員は盛夏の候でもあり、朝の涼しいあいだに受持ちの作業を進捗させるよう、それぞれ平静に定位置に復した。

なお、この日は建物疎開作業の出動命令を受けておらず、幸い、中国塗料株式会社職域義勇隊は市内に出動していなかった。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

即死者 八人

負傷者 三十八人

行方不明者 一人

計 四七人

本社工場では、炸裂の瞬間、突如閃光とともに異常に強烈な爆風を感じた。グラグラと建造物の倒壊が起り、窓ガラス・屋根・天井・門扉などが一瞬、音をたてて飛散した。

たちまち工場内は足の踏入れ場もないほど乱雑をきわめ、鮮血に染まった即死者や負傷者が続出し、搬出が急がれた。

救援隊の活動開始、特設自衛団の火災防止の態勢強化、罹災者の避難など、まったく上を下への大混乱となった。

更に電話は不通となり、各部との連絡は杜絶した。

重傷者は僅かに倒壊を免れた工場内東北隅の社宅に収容した。即死者の遺体と、歩行できる負傷者らは、軍隊およ

び応援警防団によって通路の障害物が取りのぞかれたあと、自宅や五日市疎開工場の収容施設にそれぞれ引揚げた。

男女動員学徒(山陽商業・山陽中学・広島女子商業各校)は、すでにそのほとんどを五日市疎開工場に配置替え済みであったから、当日の欠勤者以外は運よく災難をまぬがれることができた。却って当日欠勤中の学徒や広島勤労働員署の徴用令による再転用者中、未出勤の者に罹災死傷者が多数あった。

一方、市内の両疎開事務所は、いずれも爆心地に近い民家であったから、炸裂下ひとたまりもなく倒壊した。従業員は全員、家屋の下敷きとなり、這い出るのが精一杯であった。

逃げ遅れた者は、延焼による惨死をとげた。脱出し得た六人は、自宅や五日市疎開工場へ避難したが旬日をまたないでみんな死亡した。

本社工場では夕方から炊出し救護をおこなうと共に、負傷者の治療に従事した。

五日市疎開工場では、急ぎ受付所を設置し、名簿により従業員の罹災状況を、本人はじめ家族・家財に至るまで調査し、連絡および実状把握に遺漏ないように努力したが、炸裂後数日間の混雑は言語に絶した。

収容人員約七〇人、負傷者約四〇人、死者二人であった。

常時、万一の場合に対処して応急処置可能の態勢を整え、衛生担当者(陸軍衛生下士官)と専任の保健婦を置いていたから、本社工場内の負傷者は、ただちに治療することができた。

従業員およびその家族で、家屋倒壊・焼失などにより住居を失った者、または負傷による被災者は、いずれもあらかじめ予定しておいたとおり、佐伯郡五日市町大字皆賀の疎開工場に収容した。

この疎開工場にも救護所の設備があつて、専任の保健婦によって負傷者は引続き治療を受けた。なお化膿止め・強心剤などの薬品類、および繃帯などの衛生材料は、特に多量に準備してあつたから、医師のいない当時として、その救護に大きな貢献をなした。

(二) 物的被害

全壊	七五%
半壊	二〇%
小破	五%
計	一〇〇%

本社工場の場合、建造物は倒壊したが、延焼を防止できたので、諸施設の被害は比較的の小範囲にとどまった。

市内両疎開事務所は、前述のとおり炸裂とともに倒壊し、延焼により焼失した。

元安川に面した本社工場外東側広場の雑品倉庫(梱包材料保管)の一部から出火し、全焼したが、この出火と同時に、広島工場特設自衛団員が出動した。放水活動による消火につとめると共に、他の建造物への延焼防止には特に意をそそぎ、午前九時ごろには、本社工場への飛び火を完全に防ぎとめたのであつた。

この機宜を得た処置により延焼を食い止めたが、出火原因が、炸裂による自然着火かどうかについては不明である。

七、復旧状況

復旧状況

工場外東側広場にあつた雑品倉庫一か所が発火し、倉庫の約七五%が焼け、他は屋根が全部吹きとんで半壊し、大きな打撃であつた。しかし、残余の製造工業は、すでにほとんどを、五日市町大字皆賀の疎開工場に移転していたため助かった。

本社事務は、五日市疎開工場内に移して急場をしのいだ。また、広島工場は、施設を中心としてその保全にあたり、もっぱら守衛および宿直者と、臨時編成の警備員による監視・警備・保管に終始した。

市内疎開事務所の資材部・勤労部が焼失したので、生存従業員は五日市疎開工場内に移して仮事務所を設け、執務を続けた。

このように各所で復旧に着手したが、全般の統率運営は、本社事務所を五日市町吉見園の練成道場広場に仮設しておこなつた。

その後、広島工場は保全のため、九月一日付で保管主任を定めて専任者をおいたが、十月には、本社事務長を広島工場復興副委員長兼務とし、委員会を組織、それぞれ部署を定め、創業以来の本業たる塗料製造に着手すべく復興作業を進めた。

その他、屋根や窓ガラス・扉など飛散していたが、火災や倒壊を免れた塗料製造関係工場および変電室・倉庫・従

業員詰所などを、緊急復興対象とした。

また、施設は、破壊されなかった残存製造設備の手入れ、疎開先からの製造機械・機器・電動機・タンクなどを引揚げて取りつけ、配管・配線・原材料倉庫の修築・給排水関係・便所浴室など一連の所要施設を重点的に取扱い、生産開始をいそいだ。社宅の復旧修理もまた併行的に実施した。

これら復旧資材は、火災をまぬがれた倒壊建造物の再製使用と、残存資材の活用および疎開物資の引揚げなどにより充足した。

この復旧作業には、罹災をまぬがれた者、疎開工場に収容中の者で働ける者や軍隊から復員した者などに、それぞれ出社を命じて当らせた。

会社としての事業が再開されたのは、五日市疎開工場は九月からで、破壊を免れた設備や、保有資材を活用して、洗濯の素(粗製セッケン)・ハミガキ・靴ズミ・板金製品などの新しい製造作業を開始した。

なお、五日市町五天場寄宿舎裏の海浜を利用した製塩業は、終戦後も継続して、製品を従業員に配給した。

広島工場は、復興第一期工事である塗料製造の関係工場が、二十年未までに、かなりの進捗を見せたので、翌二十一年を迎えると共に機構を建て直して、従業員の交流、配置転換をおこなって、甘味ズルチンの製造も同時に実施した。

再開時の従業者数は、動員学徒の引揚げ、兵役復員者を含めた徴用者の解除・帰郷・希望退職者などを勘案し、事業の転換と将来の見通しなどから、第一次(八月三十一日付)と、第二次(九月三十日付)の二回にわたり人員整理を断行した。

再開時の従業者数

性別 / 工場別	* 本社	* 広島工場	* 五日市工場	* 計
男	* 一七人	* 二三人	* 三六人	* 七六人
女	* 四	* 三	* 五	* 一二
計	* 二一	* 二六	* 四一	* 八八

事業再開と併行的に、市内疎開事務所二か所の処理を急ぎ、市内に分散疎開していた資材・物資を逐次撤収した。

また、協力工場(下請工場)との関係を解消、整理するとともに、在庫物資利用の新規事業考案委員会を組織して、廃品活用と併せ、工場運営を推進した。こうして、着々と新しい時代に相応する経営に立直し、復興に向かっていった。

第二十一項 藤野綿業株式会社... 596

一、当時の概要

概要

所在地 広島市東蟹屋町一三〇番地

建物の構造

製綿工場

事務所 木造モルタル塗 七五・五坪
二階建

荷造工場 右同 四八坪

製品倉庫 煉瓦造二階建 五六坪

食堂 木造モルタル塗 四〇坪

平家建

原料倉庫 煉瓦造平家建 四四坪

右同 土蔵平家建 三〇坪

右同 木造モルタル塗 一四四坪

二階建

廻切工場 煉瓦造平家建 七七坪

両面機工場 右同 }一〇五坪
混綿工場 右同 }一〇五坪
第一梳棉機工場 右同 二九〇坪
第二梳棉機工場 右同 一五九坪
原料倉庫 土蔵二階建 九六坪
製品倉庫 木造モルタル塗三階建 六三坪
製品倉庫 木造モルタル塗二階建 五四坪
貯蔵倉庫 木造二階建 二五・八坪
守衛所 木造平家建 四坪
計 一、四二六・三坪

衛生材料工場

守衛所 木造平家建 三坪
包装工場(試験室) 木造モルタル塗二階建 二〇〇坪
第一精練工場 木造モルタル塗平家建 八四・五坪
第二精練工場 右同 六〇坪
乾燥工場 木造モルタル塗二階建 一四四坪
アンプル工場 右同 一六〇坪
托児所及び倉庫 木造二階建 一一三・五坪
計 七六五坪

総計 二、一九一・三坪

主な施設としては、梳棉機六七台・両面機八台・廻切機一〇台・混打綿機三台・ボイラ - 二基・煮沸釜六基・乾燥機二基・アンプル製造設備一式

在籍従業者数 四八人

被爆時の出勤者数 四三人

代表者 取締役社長・藤野七蔵

爆心地からの距離 約二・七キロメートル

二、疎開状況

物資疎開として、製品の脱脂綿は脱脂綿統制会社の指示により、また、ふとん綿は全国製綿工業組合の指示により、それぞれ双三郡三次町(現在・三次市)、および芦品郡府中町(現在・府中市)に疎開した。脱脂綿には海軍関係の製品も一部あった。その他、民家の倉庫を借受けて疎開したのもあった。

なお、重要書類などは、会社内の倉庫や防空壕に保管していた。

三、防衛態勢

昭和十八年四月一日、藤野綿業株式会社自衛団(団長・藤野社長)を組織し、編成表に基づき、防衛計画をおこなった。地元警防団と協力して、防空訓練をしばしば実施すると共に、守衛の宿直のほか、防衛責任者が交替で宿直した。

防火については、工場内の要所に消火器・バケツ・砂袋・火叩き・濡れムシロ・貯水槽を置いた。また、消防車一台と手押しポンプなどを備え、大型貯水池二か所、および門前に、町内会と協力して自然湧水式貯水池を設けた。

四、避難計画

万一の場合に備えて、尾長町の社宅二棟四戸と、東練兵場を避難場所として、あらかじめ指定していた。

五、五日夜から炸裂まで

五日は、通常作業終了後、守衛二人と宿直者二人により、警備にあたっていた。夜中の警報発令には、それぞれ任務に従い、防衛態勢をとり、異状なかった。

六日午前七時、宿直者が交替したが、警報解除まで異状なく、従業員も順次出勤して来はじめた。従業員は、これまでの例により、空襲警報が出た場合は、その解除後に家を出るため、六日の朝、工場に到着するのが、定時の八時を少し過ぎていた。

事務所の社員は、朝礼のため、工場内にある富士神社前に、一部がすでに集合していた。また一部遅れた者が、集合の途中か、事務所内にいた。その他、建物修理のため、外部から二、三人来場し、すでにその仕事にかかっていた。

この日、市内の建物疎開作業の出動はしていなかった。

六、被爆の惨状

惨禍

(一) 人的被害

八時十五分、突然、強い爆風が西から東へ吹き抜けた。

市の中心部から比較的離れていたため、幸い即死者はなく、重傷者は藤野社長ほか二、三人に過ぎなかった。行方不明者もなく、ほとんどが軽傷のため、引続き工場の防備と整理にあたった。ただ、従業員以外の者で、外部から建物の修理作業に来ていた者が、爆風による煉瓦の落下で重傷を受け、避難後に死亡した。

重傷の藤野社長を大八車に乗せて、桧山武秘書課長が、炎天下の道を安佐郡矢口町の丸本静雄宅へ曳いてのがれたが、その他の重傷者も、それぞれ郊外の実家や縁故者の宅へ避難した。軽傷の社員の一部は曙町社宅が災害をまぬがれていたから、そこに収容した。

なお、藤野社長の家族は、宮島の別荘に避難した。

(二) 物的被害

建物および施設の被害では、建物が全壊一〇パーセント・半壊八パーセント・小破一〇パーセント程度であった。

諸施設の被害は極小にとどまったが、建物の屋根が破壊されていたため、その後の雨つづきで、全施設が濡損し、使用不能となった。

炸裂時の状況として、煉瓦造の製綿工場(一棟二〇〇坪余)は腰煉瓦一枚半と、上部の一枚積みの部分が約五〇メートルばかり、南から北へむけて一筋に亀裂し、工場入口の部分は約一五センチメートル以上も食い違った。のこぎり型屋根(煉瓦造)は、のこぎりの根元に亀裂ができて落下した。屋根は合掌・梁などが裂け、屋根板は折れて飛散、窓ガラスは全部破壊され、微塵となって床の上一面に飛散した。

木造三階建倉庫は柱が折れ、毒キノコを折ったようにペシャンコとなった。土蔵倉庫は最もひどく破壊された。

衛生材料工場は木造が多く、包装工場(二階建延二〇〇〇坪)は西北市道に面する柱が、全部折損して、市道の方へ傾き、第一精練工場(八四・五坪)は、建物が古かったため、屋根ごと吹き飛ばされて、隣家の屋根までほぼ四メートル移動した。また他の工場も屋根が吹き飛ばされ、隣地の畑のなかへ倒れかかった。

この惨状のなかで、富士神社だけは、神殿の千木二本の一部と、屋根の銅張りが一、二枚はがれた程度で、扉の狂いもなく、不思議に損壊しなかった。

正午ごろ、東愛宕町のガラガラ橋付近から出火し、順次延焼、午後七時ごろ、同町三丁目および東蟹屋町に移り、猛威をふるったので、会社も類焼の危険にさらされたが、幸いにして難を免がれた。

従業員は町内警防団と協力して、防火にあたった。水がほとんど涸れはてていて、消火など思いもおよばない状態であったが、工場が火災を免れたのは、一般民家と、僅かながらも隔離していたためである。

愛宕町は東から西へ延焼していったが、午後九時ごろ、途中で鎮火した。

七、復旧状況

復旧状況

被爆直後は、損壊はなほだしい建物を、修繕する人手も能力もなかった。

機械もまた、木部はすべて破損、鉄部も精密を要するものは、全部使用不能であった。そのうち、毎日のように雨続きで、機械が水びたしとなり、手のほどこしようとしてなく、錆びるに任せるのほかなかった。その上、保管資材が衛生材料であったため、当局から罹災者用に緊急配給の指示もあり、その処理のため、工場の整備には手がまわらなかったのが実状でもあった。

一段落したのは、年明けのころで、このころから機械の分解にかかり、徐々に復旧に取りかかった。

建物も要所のみを優先的に修理する程度で、予定どおりに進捗しなかったのは、ひどい資材入手困難と必要な資金の調達が困難したためである。

資材の主なものは、木材・セメント・ガラスのようなものであるが、セメントとガラスは通産局に申請し一定の数量の入手以上は困難であった。しかし、木材は正統なルート以外に、田舎から出ている社員の故郷へ、手を延ばして入手したのもあった。

会社の製造品目が寝具であり、衛生材料であるため、国内需要に迫られて、中央部からの圧力が強く、一日も早く生産するようにと攻められた関係で、急遽、機械の一台一台を修復し、完了次第ただちに運転するというように、初歩から出直したのと、同じありさまであった。そして昭和二十一年一月ごろ、被爆後最初の製品を生産することができた。

このごろは、被爆者もだいたい傷が癒えて、仕事に従事することができるようになったし、復員者も順次加わって、終戦当時よりも充実して来た。

職員は、復員者のほか、傍系会社が朝鮮と満州にあったため、続々集って来たが、仕事量の関係で全員を採用することができず、一部は社長の関係している他会社の方へ斡旋入社させたり、本人の意志によって、独立経営する者もあった。しかし、半年後には製品の製造も可能となり、職員も安心して作業できるように復旧した。

全国的にも被爆工場が多かったため、再開当時は原料の供給も順調であったが、一、二年後になってから深刻な原材不足に直面したのであった。

第二十二項 株式会社熊平製作所...604

一、当時の概要

概要

所在地 広島市宇品町一、一四六番地

建物の構造 木造スレート葺七〇〇坪

敷地面積 一、二〇〇坪

事業種目 手押大型消火ポンプ、自動車ポンプ

家庭用ポンプ

施設の概要

在籍従業者数 四二人

被爆時の出勤者数 四二人(ただし、建物疎開作業に二人出勤)

代表者 社長・熊平清一

爆心地からの距離 約三・五キロメートル

二、疎開状況

工場北側の空地一、坪を借りあげ、その一部に防空壕を構築し、材料・重要書類の疎開場所にした。ことに塗料などの危険物は別に格納した。

三、防衛態勢

防火用大水槽や防火用井戸を構内の数か所に設け、断水時の防火に備えた。その他、防火用バケツ・火叩き・砂、および避難梯子を整備した。

また、焼夷弾が天井に留まるのを防ぐため、事務室の天井はすべて撤去した。

四、避難計画

工場の隣接地に多くの空地があり、そのうえ近くに山もあるので、別に避難先は指定していなかった。

五、被爆の惨状

惨禍

当時、工場では事務所二階に常駐の防空要員を置き、作業時間外でも、常に警戒態勢をとっていた。

八月六日、午前七時には全員出勤し、警報解除後は就業した。被爆時には全員作業中であった。

(一) 人的被害

放射能熱線による火傷者は無かったが、爆風に吹きとばされたスレートで、顔や頭や手を怪我した者が三〇人いた。

ただ一人、上半身裸で作業していた者が、全身にガラスの破片が突き刺さり、陸軍共済病院で治療を受けたが、その他の者は応急処置をして、午前九時ごろに帰宅させた。しかし、従業員は大多数が市内の者で、自宅が焼失または倒壊に見まわれ、数日のあいだは野宿するか、最寄りの防空壕や土手下などで過ごした。食糧は市役所や軍が運ぶ配給のムスビで露命をつないだようであった。中には田舎の縁故者をたよって避難した者もあった。

職域義勇隊で雑魚場町の建物疎開作業に出勤した満石益義と木本力男の二人は、重傷を負いながら会社に帰って来て、事務所の二階で、軍の衛生兵の手当を受けたが、数日後に二人とも死亡した。

なお、従業員の家族や知人三人が火傷や重傷で収容、看護したが、そのうち女性一人はついに死亡した。

(二) 物的被害

工場は、爆心地からかなり離れていたが、強烈な爆風によって、建物は相当な被害を受けた。

イ、食堂および事務所...爆風で傾斜

ロ、プレスおよび組立工場...スレート屋根は全部吹きとび、建物は傾く

ハ、材料倉庫 } トタン葺屋根の各所がはぐれ、建物は傾く

機械工場 }

製罐工場 } 木造スレ - ト葺の建物で、完全に倒壊

自動ポンプ工場 }

なお、これらの建物の窓枠および窓ガラスはほとんど破損した。また、建物の一部に、熱線による自然着火が二、三か所あったが、発見が早く、消しとめたため、火災に至らなかった。

六、復旧状況

復旧状況

建物は崩壊、あるいは傾斜し、屋根は吹きとび、従業員もまた出勤できない状態であったから、当分のあいだ操業不能になった。

九月初めごろ、残留職員六人と、応召から帰って来た復員者を含め、合計一三人で、倒れかかった建物や屋根を復旧するとともに、機械・モーターの整備につとめ、被爆当時、幸いに在庫していた多量の鉄板で、事業再開に着手した。

しかし、従来の主製品であった消防用ポンプの販売の見込みもたたぬ状況下、ちょうど生活必需品の不足時であったから、短期間であったが、フライパンの製造をおこなった。

また、金庫の修理もおこなったが、翌二十一年初めから、従来の消防用ポンプの製造を本格的に始め、続いて、戦後禁制の解けた書類保管庫・金庫の製造を再開した。

(付)株式会社熊平商店

一、当時の概要

概要

所在地 広島市革屋町二十一番地

建物の構造 社屋木造二階建 約一二〇坪

内訳 店舗一棟 約六〇坪

住宅一棟 約五〇坪

土蔵 約一〇坪

事業種目 金庫その他の製造販売

在籍従業者数 約一五人

被爆時の出勤者数 六人
代表者 代表取締役・熊平原蔵
爆心地からの距離 約二〇〇メートル

二、疎開状況

重要書類や帳票は、店内の大金庫に保管していたが、その他の物資・施設などは疎開しなかった。

三、防衛態勢

他の各会社と同じように、当局の指示に基づいて、防衛態勢をととのえていたと思われる。

四、被爆の惨状

惨禍

爆心地区であったために、社屋は一瞬に爆圧で倒壊し、たちまち全焼したに違いない。当日朝出勤していた六人は全員即死し、炸裂時の状況などまったく判らない。

火災は、自然鎮火と史料されるが、まったく灰燼に帰した。

出勤していなくて、被爆から免れた者は、宇品町の熊平製作所に集合したが、事業所としての機能は完全に停止した。

ただ、大型金庫に保管していた帳票類は焼失をまぬがれたから、生き残った社員が、四、五日後にこれを取り出して、事後処置を講じた。

五、復旧状況

復旧状況

生存者および除隊復員者が、会社に復帰し、宇品町の熊平製作所内において、事務整理をおこない、九月初めごろ、軍関係・地方官公庁・会社などの集金業務を始めた。

十月ごろから、熊平製作所の製品の販売を始め、逐次通常営業に復していった。

昭和二十一年、皆実町に仮社屋を借用して移ったが、昭和二十四年、もとの場所(革屋町)に新社屋を建てて営業をすすめていった。

広島原爆戦災誌 第三巻 第二編 各説
第二章 広島市内主要官公庁・事務所の被爆状況
昭和四十六年十月一日 印刷
昭和四十六年十月六日 発行
編集兼発行者 広島市役所
広島市国泰寺町一丁目六番三十四号
印刷者 中本総合印刷株式会社
広島市大州五丁目一番一号

第四卷

目次

第2編 各説

第3章 広島市内各学校の被爆状況 1

第1節 序説 1

第2節 各国民学校 5 3

第1項 広島市本川国民学校 5 3

第2項 広島市袋町国民学校 5 8

第3項 広島市幟町国民学校 6 7

第4項 広島市中島国民学校 7 7

第5項 広島市大手町国民学校 8 4

第6項 広島市広瀬国民学校 9 8

第7項 広島市神崎国民学校 1 0 5

第8項 広島市天満国民学校 1 1 2

第9項 広島市観音国民学校 1 1 8

第10項 広島市竹屋国民学校 1 2 4

第11項 広島市白島国民学校 1 3 0

第12項 広島市千田国民学校 1 4 9

第13項 広島市段原国民学校 1 5 9

第14項 広島市三篠国民学校 1 6 5

第15項 広島市舟入国民学校 1 7 2

第16項 広島市皆実国民学校 1 7 9

第17項 広島市荒神国民学校 1 8 5

第18項 広島市大芝国民学校 1 9 3

第19項 広島市牛田国民学校 1 9 9

第20項 広島市尾長国民学校 2 0 7

第21項 広島市比治山国民学校 2 2 1

第22項 広島市己斐国民学校 2 2 1

第23項 広島市大河国民学校 2 3 1

第24項 広島市矢賀国民学校 2 3 8

第25項 広島市江波国民学校 2 4 3

第26項 広島市宇品国民学校 2 4 8

第27項 広島市古田国民学校 2 5 4

第28項 広島市仁保国民学校 2 5 9

第29項 広島市楠那国民学校 2 6 5

第30項 広島市草津国民学校 2 7 0

第31項 広島市青崎国民学校 2 7 6

第32項 広島市似島国民学校 2 8 1

第33項 広島市立第一国民学校 2 8 4

第34項 広島市立第二国民学校 2 9 2

第35項 広島市立第三国民学校 2 9 8

第36項 県立広島師範学校男子部附属国民学校 3 0 4

第37項 広島陸軍偕行社附属済美国民学校 3 1 0

第38項 光道国民学校 3 2 1

第3節	各中学校	3 2 6
第1項	広島県立広島第一中学校	3 2 6
第2項	広島県立広島第二中学校	3 3 7
第3項	県立広島師範学校	3 4 3
第4項	広島県立広島工業学校	3 4 9
第5項	広島県立広島商業学校	3 5 8
第6項	広島県立広島第一高等女学校	3 6 3
第7項	広島県立広島第二高等女学校	3 6 9
第8項	広島県聾学校	3 7 5
第9項	広島県盲学校	3 8 2
第10項	広島市立中学校	3 8 7
第11項	広島市立第一工業学校	3 9 3
第12項	広島市立第二工業学校	4 0 0
第13項	広島市立造船工業学校	4 0 5
第14項	広島市立第二商業学校	4 1 3
第15項	広島市立第一高等女学校	4 1 7
第16項	広島市立第二高等女学校	4 2 9
第17項	修道中学校・修道第二中学校・修道学校	4 3 5
第18項	山陽中学校・山陽商業学校・山陽工業学校・山陽中学校附設広島中学校	4 4 6
第19項	崇徳中学校	4 5 4
第20項	広陵中学校	4 6 2
第21項	松本工業学校	4 6 8
第22項	安田高等女学校	4 7 4
第23項	進徳高等女学校	4 8 1
第24項	広島女学院高等女学校	4 8 8
第25項	比治山高等女学校	4 9 6
第26項	広島女子商業学校	5 0 5
第27項	安芸高等女学校	5 1 1
第27項	西高等女学校	5 1 7
第4節	専門学校・高等学校・大学	5 2 5
第1項	広島女学院専門学校	5 2 5
第2項	広島女子専門学校	5 3 4
第3項	広島工業専門学校	5 4 7
第4項	広島医学専門学校	5 5 4
第5項	広島女子高等師範学校・附属山中高等女学校	5 5 8
第6項	広島高等学校	5 8 2
第7項	広島文理科大学・広島高等師範学校・附属中学校・附属国民学校	5 8 8
第4章	広島市内主要神社・寺院・教会の被爆状況	6 1 2
第1節	序説	6 1 2
第2節	神社（広島護国神社ほか15社）	6 1 7
第3節	寺院（慈仙寺ほか15寺）	6 3 6
第4節	教会（日本基督教団広島流川教会ほか2教会）	6 6 2
第5章	関連市町村の状況	6 8 2
第1説	序説	6 8 2
第2説	各市町村	6 9 0
第1項	呉市	6 9 0

第 2 項	大竹市	6 9 7
第 3 項	三次市	7 1 0
第 4 項	庄原市	7 1 6
第 5 項	因島市	7 2 1
第 6 項	佐伯郡五日市町	7 4 2
第 7 項	佐伯郡廿日市町	7 3 5
第 8 項	佐伯郡沖美町	7 4 2
第 9 項	佐伯郡宮島町	7 4 6
第 1 0 項	佐伯郡大野町	7 5 0
第 1 1 項	佐伯郡湯来町	7 5 3
第 1 2 項	佐伯郡能美町	7 5 8
第 1 3 項	佐伯郡大柿町	7 6 0
第 1 4 項	安佐郡祇園町	7 6 2
第 1 5 項	安佐郡安古市町	7 6 7
第 1 6 項	佐郡佐東町	7 7 1
第 1 7 項	安佐郡安佐町	7 7 4
第 1 8 項	安佐郡沼田町	7 7 9
第 1 9 項	安佐郡可部町	7 8 3
第 2 0 項	安佐郡高陽町	7 8 8
第 2 1 項	安芸郡府中町	7 9 3
第 2 2 項	安芸郡船越町	7 9 6
第 2 3 項	安芸郡安芸町	7 9 9
第 2 4 項	安芸郡海田町	8 0 1
第 2 5 項	安芸郡坂町	8 0 9
第 2 6 項	安芸郡瀬野川町	8 1 2
第 2 7 項	安芸郡矢野町	8 1 6
第 2 8 項	安芸郡熊野町	8 2 0
第 2 9 項	安芸郡熊野跡村	8 2 2
第 3 0 項	安芸郡江田島町	8 2 5
第 3 1 項	安芸郡音戸町	8 2 8
第 3 2 項	安芸郡倉橋町	8 2 9
第 3 3 項	高田郡白木町	8 3 2
第 3 4 項	高田郡向原町	8 3 6
第 3 5 項	高田郡吉田町	8 3 8
第 3 6 項	高田郡甲田町	8 4 3
第 3 7 項	賀茂郡志和町	8 4 7
第 3 8 項	賀茂郡黒瀬町	8 4 9
第 3 9 項	賀茂郡八本松町	8 5 3
第 4 0 項	賀茂郡西条町	8 5 9
第 4 1 項	山県郡戸河内町	8 6 5
第 4 2 項	山県郡加計町	8 6 8
第 4 3 項	甲奴郡上下町	8 7 5

主要付図・一覧表

1、広島市学童疎開実施表	1 2
2、集団疎開児童の記	1 5
3、広島市内各学校の建物疎開作業出動状況	3 3

4、広島市内各学校被災状況表（動員学徒を含む）	37
5、建物疎開作業に出動した地域国民義勇隊の被爆状況表	685
6、避難者郡町村別内訳表	689
資料提供者氏名表	888
参考図書一覧表	900

第三章広島市内各学校の被爆状況...1

第一節序説...1

教育都市

明治三十五年（一九〇二年）に広島高等師範学校が設置せられてから、広島市は西日本における教育の中心地となった。

以後、広島文理科大学をはじめ、高等学校・専門学校・中等学校・小学校など各種の教育機関が充実し、教育都市としての大きな役割をはたしてきた。

戦時教育

しかし、日本の軍国化が進むにつれて、教育方針、教育制度なども変えられ、昭和十四年四月、これまで自由制であった青年学校（昭和十年創設）を義務制度として、軍事教練を強化した。続いて昭和十六年四月には、国民学校令の制定により、小学校を国民学校（昭和二十三年、再び小学校となる）と改称した。同時に、義務教育を八か年（戦時中の延期措置）に改めた。

また、同年十二月には、大学・専門学校などの在学年限、または修業年限の臨時短縮に関する勅令が発せられ、明年度卒業の見込みの者に対して、卒業期限の短縮措置が講ぜられ、国内の総動員態勢に備えられた。

この頃、国民学校の運営要綱が改訂され、戦力増強の根基をつちかうことになり、次の二つが教育の実践目標（広島県教育八十年史）となった。

第一 勤勞の強化

教育実践の一環として勤勞を強化し、国民学校高学年においては、毎学年六〇日を作業に振りかえ得る期間とし、その間に食糧増産その他国家緊要の勞務に挺身させた。農村にあつては、校庭はもちろん、原野・山林・河原の開墾により、食糧増産を行ない、高学年は農家に動員して、その耕作を助け、校庭に炭がまを築いて製炭をし、あるいは未利用資源の収集に努力し、廃品更生のため、その収集にあたった。

また、都市の児童は、軍需工場に動員されて生産に従事した。

第二 教科および教科外指導

教育全般にわたり、行学一体、戦力増強の根基をつちかうため、精神訓練・国防訓練・生産増強・職業指導に重点をおいた。すなわち各学校には忠霊室を設け、殉国の卒業生の写真を掲げ、戦地・病院、あるいは軍人遺族への慰問を続けた。興亜奉公日・大詔奉戴日などには、神社参拝などによる戦意昂揚の行事がおとなわれ、各都市ごとに高学年児童をまとめて伊勢神宮参詣をおこなった。

空襲の激化にともない、各学校にそれぞれ防空壕、防火用水槽を設け、焼夷弾の延焼を防ぐ火叩きなどを備えた。万一の災害に備えて、防空頭巾・モンペを通学の服装とし、集団登下校が励行された。

団体訓練は、体力錬磨と共に重視され、歩行訓練・防空待避訓練・乾布磨擦・水泳指導・耐寒訓練などが、強力に実施された。そのため、昭和十八年には高等科担任教師の現職教育として、少年兵学校入隊がおこなわれると共に、陸海軍少年兵が校門から送り出された。

満蒙開拓を目ざす興亜教育が唱えられ、昭和十七年に県立広島師範学校附属国民学校において、興亜大会が催された。そして逐年、青少年義勇隊は内地の訓練を経て、満蒙の奥地開拓に赴いたのであった。

学徒動員令

昭和十九年八月、ついに学徒動員令が発せられ、中等学校以上の学生・生徒に対して、軍需産業部門に対する勤勞奉仕が強制されることになった。さらに同年十一月、被爆による火災の拡大を防ぐ目的から、内務省の告示により消防道路・防空小空地を造ることになり、広島市内では一三三か所（八、二〇〇）の建物疎開を実施したが、この建物疎開作業の跡片づけ（瓦や材木の整理）に国民学校高等科・中等学校・高等女学校の生徒約八、三八七人が出動して被爆し、約六、二九五人が無残な最期をとげた。もっとも被害の大きかったのは、八丁堀付近に出動していた崇徳中

学校で、出勤生徒の九九パーセントが死亡した。ついで水主町県庁付近が九八パーセント、市役所裏の雑魚場町付近が八パーセント、土橋・小網町付近が七九パーセント、鶴見橋付近が四九パーセントの死亡者を出した。また、市内各事業所に出動していた学徒も多くの犠牲者を出した(別表・建物疎開作業出勤状況表を参照)。

学童疎開

昭和十九年七月、学童疎開実施要綱が発表せられ、昭和二十年四月から七月末にかけて、市内の各国民学校は、佐伯・安佐・山県・高田・双三・世羅・比婆の七郡下の寺院や集会所に集団疎開を行なった。当時(昭和二十年五月一日現在)、児童総数四一、六三八人のうち、集団疎開児童数八、三六五人、個々の縁故疎開児童一七、四七一人、病気その他の理由で学校残留児童一五、八〇二人であった(新修広島市史)。

低学年の一、二年生は疎開せず、学区内の寺院や集会所に分散して授業を続けていたため、多数の犠牲者を出した。すなわち、爆心直下の本川国民学校の低学年児童をはじめ、至近距離の袋町・中島・済美、および本川などの各国民学校児童は、ほとんど全滅という惨状であった。この頃、夏休みは、八月十日から二十日までという戦時態勢をとっていたと言われる。

被害状況

この戦災誌に集録した学校数は、国民学校三九校、中等学校三〇校、大学・高等専門学校九校、合計七八校であるが、その被害状況をみると、国民学校では、全壊全焼一五校、全壊一校、全焼二校(半壊後に全焼したものを含む。)

半壊一〇校、使用可能一校である。中等学校では、全壊全焼一三校、全壊四校、全焼二校(半壊後に全焼したものを二校を含む。)

半壊九校、半焼一校、使用可能一校である。また、大学・高等専門学校では、全壊全焼六校、全壊二校、半壊一校となっている(別表・広島市各学校被害状況表を参照)。

臨時救護所

被爆直後、本川・袋町両国民学校のように鉄筋コンクリート建ての外郭だけでも残った学校や、周辺部で焼けなかった学校は、いずれも負傷者が収容され、臨時救護所となったが、一か月ばかりのあいだに、元気を取り戻して出て行く者、肉親や縁故者に発見されて連れ帰られる者、あるいは死亡する者などあって、収容患者は減少していったが、終戦直後まともに授業の再開できる学校は、ほとんど無かったと言ってよい。

授業再開

八月二十一日に、国民学校校長会が開催され、学校の復旧対策・授業再開などについて協議されたが、行政機関も壊滅的な打撃からなかなか立ち直れず、復旧資材も資金も乏しかったから、まったく前途は暗いとばりに包まれていた。

しかし、教育に対する情熱は強く、各学校の責任者は、それぞれ復旧計画を進め、軍の解散後の施設や文房具などの獲得に努力したが、持ち帰った建築用材が、家のない市民に一夜のうちに盗まれたりして、辛苦を重ねた。

九月十五日から学校を再開するよう県当局から指示があり、家族や縁故者に連絡のついた疎開児童が復帰しはじめたから、ある学校では焼失しなかった学校へ一時通学させたり、ある学校では焼跡で青空教室を開いたりして、授業の再開をはかったが、教科書も文房具も無いにひとしい状況であり、まともな授業らしい授業はできなかった。食糧の不足も甚だしく、授業よりも焼跡を整理して、野菜作りに励むようなありさまであった。

焼跡の学校は、開校したといっても、多数の教師が死亡したり、負傷加療中で出勤する者が少なく、また出席児童もごく少数数であって、まったく心細いものであった。

なお、集団疎開児童のうち、被爆により帰るべき家もなく、肉親も縁故者も失い、いわゆる原爆孤児になった者五九人は、佐伯郡五日市町の広島市戦災児育成所(昭和二十年十二月一日開設)に収容された。

学校の再開と復旧について、全壊全焼した学校はなみたいていのことではなく、爆心地から約九〇〇メートルの地点にあった幟町国民学校の場合にみると、まず九月初めごろ、学校再開を決定して、生残り教師など関係者が再開対策を協議し、浅野泉邸内に、臨時収容所として軍が建てたトタンぶきバラック小屋で授業を開始した。そこへ集団疎開児童が復帰することになったので、受入れ態勢を整える必要に迫られ、東洋工業株式会社内の県庁をたびたび訪れて、外郭だけ残っている流川町の中央放送局を借用することに成功した。机・腰かけなどは旧軍隊の払下げ品で、十月五日からここで授業をはじめた。一方、校舎再建をはかり、三滝ほか二か所の兵舎の解体材を譲り受けることになり、用材は生存教員全員が一本ずつ運搬したが、積み重ねるはしから次々と盗まれ、校舎再建の用をなさなかった。

そのうち、放送局が避難先から帰って来ることになり、急ぎ立退対策を協議した。翌二十一年一月、中町の中央電

話局の借用に成功し、寒風の中を皆で器物を運びこんで移転した。とうとう幟町学区から隣の袋町学区へ入ってしまったのである。引続き当局と交渉を重ね、同年五月、焼野原の学校跡に帰って青空教室を続けながら、バラック建ての校舎再建に着手し、同年七月十五日に一〇教室が竣工、ここによくジブシー教室から脱することができたのであった。

この幟町国民学校のように、他の全焼学校も再建に苦労を重ねたが、本格的な校舎が建設されるようになるには、なお、二、三年の月日を要したのである。

中等学校もまた同じく、被爆後一か月余りたった九月十五日に学校を再開したが、多くは間借り教室で、例を広島県立第一中学校の場合にみると、翠町の第三国民学校(教職員七人・生徒約一〇〇人)・佐伯郡廿日市国民学校(教職員四人・生徒約五〇人)・安芸郡船越国民学校(教職員四人・生徒約五〇人)の三か所で授業が再開されている。勿論、教科書も学用品も焼失した者が多く、正常な授業はできなかった。

広島文理科大学は、鉄筋コンクリート建ての外郭が残ったから、被爆二か月後の十月ごろから早くも理科の一部は、被災校舎を整理して、実験再開をはかる研究室もあったが、翌二十一年一月に、江田島の津久茂国民学校において、大学三年生の授業が開始され、続いて一、二年生もこの地に集めて授業再開となったのである。まもなく化学部門は倉敷市(倉敷レーヨン)に移動して授業を再開した。続いて同年四月に、理科が東千田町に復帰した。こうしてようやく授業が軌道に乗りはじめたが、本格的な復旧をおこない、各室がまともに使用できるようになったのは、実に被爆十五年後の昭和三十五年であった。

このように国民学校から大学に至るまで、被爆による惨禍は計り知れないものがあり、現在の復興を見るまでには、言うに言われぬ苦心と多大な努力を必要とした。

上掲の写真は、被爆後七年目の夏、元安川における児童たちの遊泳風景であるが、この「平和」が、どのようにしてよみがえったかということ、忘れてはならないであろう。

広島市学童疎開実施表

学校名	疎開先	疎開児童	
		集団	縁故
一 本川国民学校	双三郡十日市 " 八次	(8) 一四〇 (2) 六五	五〇〇
二 袋町国民学校	双三郡田幸村 " 神杉村 " 和田村 " 川西村	(6) 四五〇 (3) 九六 (4) 五〇 (3) 八〇	不明
三 中島国民学校	双三郡三良坂町 " 吉舎町	(15) 二一〇 (4) 五〇	約一、五四〇
四 幟町国民学校	山県郡八重町 " 壬生町	(10) 二二〇 (6) 一三〇	七五八
五 竹屋国民学校	山県郡加計町 " 安野村 " 戸河内町 " 筒賀村 " 殿賀村	四〇 四〇 (15) 一三〇 四五 四五	三五〇
六 白島国民学校	安佐郡龜山村 " 大林村 " 飯室村 " 鈴張村	(12) 二九〇	
七 三篠国民学校	高田郡本村 " 横田村 " 北村 " 生桑村 " 川根村	(10) 約二〇〇	約三〇〇
八 千田国民学校	山県郡大朝町 " 新庄村 " 川迫村 " 蔵迫村	(6) 一三四 (4) 一一九 (2) 四〇 (2) 五二	約五五〇
九 天満国民学校	佐伯郡砂谷村 " 水内村	(6) 一八〇 (5) 一五〇	約五〇〇
一〇 広瀬国民学校	双三郡酒河村 " 川地村 " 板木村	約 (8) 二〇〇	約一五〇
一一 段原国民学校	比婆郡山内西村		

		" 山内東村 " 口南村	(14) 三五九	不明
一二	神崎国民学校	山県郡吉坂村 " 本地村 " 南方村	(8) 一八〇 (4) 八〇 (4) 八〇	一、〇八〇
一三	観音国民学校	比婆郡東城町 " 八幡村 " 久代村 " 田森村	(16) 三七二	六五〇
一四	荒神町国民学校	安佐郡小河内村 " 久地村	(7) 九〇 (7) 九二	三八九
一五	比治山国民学校	佐伯郡津田村 " 浅原村 " 友和村 " 栗谷村	(5) 八六 (4) 六〇 (2) 二一 (2) 三〇	約七〇〇
一六	皆実国民学校	安佐郡伴村 " 戸山村	(5) 一五〇 (5) 一五〇	一、一三〇
一七	江波国民学校	双三郡吉舎町 " 八幡村	(12) 一七〇	二四八
一八	尾長国民学校	比婆郡小奴可村 " 八銚村	(9) 二四〇	約五〇〇
一九	矢賀国民学校	佐伯郡河内村	(4) 一二〇	殆んど無し
二〇	牛田国民学校	高田郡船佐村 " 粟屋村	(12) 三八三	二〇
二一	草津国民学校	世羅郡吉川村 " 上山村 " 小国村	(16) 一七六	二四九
二二	己斐国民学校	世羅郡大見村 " 東村	(1) 五〇 (1) 五〇	殆んど無し
二三	舟入国民学校	安佐郡狩小川村 " 福木村	(10) 一八三	四〇〇
二四	古田国民学校	なし	〇	〇
二五	宇品国民学校	双三郡三次町 " 布野村 " 作木村	(25) 約四二〇	約九〇〇
二六	仁保国民学校	佐伯郡玖島村 " 上水内村	(5) 一二〇 (8) 二二〇	殆んど無し
二七	大河国民学校	比婆郡本田村	(9) 二五〇	殆んど無し
二八	青崎国民学校	比婆郡庄原町	(13) 三五六	三七七
二九	楠那国民学校	比婆郡八幡村	(6) 一〇四	殆んど無し
三〇	大芝国民学校	双三郡三次町 比婆郡口北町	(6) 七三 (3) 四四	役二〇〇
三一	似島国民学校	なし	〇	〇
三二	大手町国民学校	比婆郡山内川北村 " 高村	(4) 八八 (5) 一一四	三七八
三三	第一国民学校	なし	〇	〇
三四	第二国民学校	なし	〇	〇
三五	第三国民学校	なし	〇	約八〇〇
三六	光道国民学校	山県郡都谷村 " 原村	(4) 役一〇〇	約六〇
三七	師範学校男子部附属国民学校	比婆郡敷信村	(29) 一五〇	一五五
三八	文理大学附属国民学校	比婆郡西城町	(26) 二七〇	一六〇
三九	陸軍偕行社附属済美学校	双三郡君田村 " 河内村	(12) 三〇〇	一〇〇
四〇	県立盲学校	双三郡田幸	(26) 一〇六	
四一	県立ろう学校	高田郡吉田町	(18) 九八	
	合 計		(478) 九、〇九一	一三、二四一

(註)

この表は、学校側から提供された資料による集計である。なお()印内の数字は、引率教師の人数である。市周辺部の国民学校(己斐・草津・大河・仁保・矢賀・楠那など)では、縁故疎開児童は殆んど無かった。

集団疎開児童の記

竹屋国民学校の場合

本土決戦態勢に備えて、県北の各地に集団疎開を実施した市内国民学校の三年生以上の児童は、原子爆弾により、

その家族を失って孤児になった者も多数あったが、ともかく本人だけは被爆の惨禍から免れることができた。ここに竹屋国民学校の場合を例にとり、当時、学童疎開を担当した同校高井正文・児玉勘吾(現姓相良)両訓導の回想談と保管資料によって記録し、広島市学童疎開の諸状況をしのぶよすがとしたい。

疎開準備

昭和二十年三月三十一日、市学務課へ召集された校長から、電話で、「男子職員は全員残って待て。」という連絡があった。「人事異動にしては男子全員というのがおかしいなあ。」と、話しながら待っていると、午後遅く帰校した校長が、人事異動ならぬ学童疎開の実施について発表した。

それは、縁故疎開を含めての学童疎開要領の説明と、集団疎開先の発表であった。「明日ただちに現地の視察をせよ。」ということで、その出向先を担当訓導に指示した。

翌四月一日、指定疎開先の山県郡加計町・安野村・戸河内町・筒賀村・殿賀村以上五か町村へ、訓導五人がそれぞれ派遣された。高井訓導は加計町、児玉訓導は戸河内町へ出向した。

高井訓導は、加計に到着すると、すぐ町役場と県地方事務所を訪ね、種々打合せをおこなったあと、生活環境その他の調査をした。翌二日に帰広し、「現地は食糧事情は悪いが、受入れ態勢は良好で、地元の協力も得られる。児童の収容所・施設・収容能力・収容場所から加計国民学校までの距離・道路状況。それに、炊事婦・雑役夫とも現地採用が可能である。」ということ、詳しく校長に報告した。それぞれ担当者の視察報告が終ると、学校はあわただしく疎開準備に取りかかった。

集団疎開希望児童については、家庭の事情や身体状況(夜尿症なども含めて)を調査して編成され、夜尿症その他病弱な児童は残留組となった。こうして、疎開児童約三〇〇人、引率教職員一五人の出発準備が完了したのは、四月十日ごろであった。なお、集団疎開編成は次表のとおりである。

竹屋国民学校山県郡集団疎開編成表

(高井正文資料)

各班編成

番号	疎開地名	疎開学校名	宿泊の寮	担任者・その他	学童数
一	安野村本郷	修道国民学校	正覚寺	竹本正人 後 平田ミツ子 佐々木輝子 寮母三人 作業員二人	平均四〇人
二	加計町香草	加計国民学校	正念寺	高井正文 寮母一人 作業員一人	四〇人
			礼安寺 (鶴群寮)	京田光恵 寮母一人 作業員一人	
三	殿賀村堀	殿賀国民学校	西円寺	大目木保一 戦後 吉川静枝 寮母一人 作業員一人	四五人
			明願寺	保田初子 後 加藤純子 寮母一人 作業員一人	
四	筒賀村	筒賀国民学校	報正寺	岸本節夫 寮母一人 作業員一人	四五人
			西方寺	山河正人 寮母一人 作業員一人	
五	戸河内町本郷	戸河内国民学校	道教寺	吉本フサエ 寮母一人 作業員一人	一三〇人
			専正寺	児玉勘吾 寮母一人 作業員一人	
	同町柴木	四合国民学校	西善寺	荒川修一 後 養護婦 山根小静 寮母二人 作業員二人	
	同町松原	松原国民学校	松原集会町	片山鎮之 守山瑛子 寮母二人 作業員二人	
計	担任訓導 一六人 養護婦 一人	寮母五人 作業員一四人	学童平均三〇〇人		

疎開学童月別員数

月別	生徒数	教職員その他	計	摘要
----	-----	--------	---	----

四	三一三(人)	四四(人)	三五七(人)	(九月) 寮母一五人 作業員一四人 計二十九人 (一〇月) 寮母四人 作業員四人 計八人
五	三〇九	四四	三五三	
六	三〇二	四五	三四七	
七	二九五	四七	三四二	
八	二七九	四八	三二七	
九	二三五	四八	二八三	
一〇	六五	二四	八九	
(参考) 引揚運賃 人件輸送 五五八円 物件輸送 四、九一八円				

残留児童

身体障害者などの残留組は、ずっと被爆のときまで学校で勉強した。一、二年生は、学区内を東西南北の四ブロックに分け、そのブロック内の寺院などを教室にあてて、分散授業をおこなうことになった。これらの担当教師は、毎朝一度、学校に集ってから、それぞれの担当場所へ出むくようにした。

出発

四月十三日、安野付・筒賀付・殿賀村各班が出発し、続いて十四日に加計町・戸河内町両班が出発した。

距離は広島市から約四〇キロメートルである。

学用品・衣類・寝具など児童の荷物はひとまとめにして、トラックで広島駅に送り、そこで貨車積みして、出発駅横川駅に送った。そして横川駅で待つ児童の疎開列車に連結され、安佐郡飯室駅まで運ばれた。

これらの出発準備・手配万端にあたっては、間賀田校長・光成教頭はじめ残留教職員・集団疎開児童父兄会、及び引率教師などが、それぞれ分担しておこなった。

出発の朝八時、児童は親に連れられて学校に集合し、引率教師の先導により、徒歩で横川駅まで行った。

静かに列を組んで歩く児童たちは、リュックサックを背負い、戦争のための避難とはみえず、まるで遠足にゆくようであった。引率教師は、この別離の道行きを心配していたが、乗った汽車がいよいよ動きはじめても、思ったより、見送る親も送られる児童も冷静であった。学校側も親たちに、子供が未練を残さないよう注意させ、「欲しがりません、勝つまでは」の覚悟を、どこまでも実行するようと、強く励ましてきたからであろう。親と子は、汽車が見えなくなるまで手を振った。児童たちは、内心は、親と離れて遠くへ行くことが、淋しかったに違いなかったが、別れたあとの車中でも、わりあい明るくおとなしかった。

午前十一時ごろ、可部線飯室駅に到着した。児童たちは下車し、荷物も降ろしたが、連絡のバスが故障して、なかなか来ないため、近くの河原に出て弁当をひらくことにした。時あたかも春たけなわである。レンゲやツツジが溢れるように咲いている中を、児童たちは歓声をあげながら、走って、われ先きにと河原に出た。しばらくすると迎いの木炭バスが来たので、急いでみんな乗りこんだ。荷物も乗せた。バスに揺られて行く道々レンゲ田が山峡の道をはさんで、あちらにもこちらにも、じゅうたんのよう美しく咲いているのが、都会から来た目には、すごく印象的であった。高井訓導は一句をものした。

児らを率(る)てとぼしき峡(かい)のげんげ田を行く

高井正文

現地につく

こうして現地加計町に着いたのは、永い春の一日も、もう薄暗い夕ぐれであった。到着を待ちかまえていた地元の人々は、児童たちを拍手で迎え、すぐに用意の歓迎会が開かれた。高井正文班の泊る正念寺の場合はポタ餅であった。ひどい空腹の児童たちは、「いくらでも食べなさい。」と、やさしくもてなされて、疲労も忘れたようであった。新しい生活に入る緊張感から、一瞬解放され、やがて満腹すると共に、その場に眠りこみそうになる者もいた。たくさん作ってあったポタ餅は、その翌日の一食分にも足りるほど残っていた。

同じく加計町に来たもう一つの京田光恵班は、礼安寺を寮とした。この寮は、のちに土地の人が「鶴群寮」と名づけたが、ここの歓迎会も、正念寺とほぼ同様な状況であった。

その夜は、みんな早く眠り、翌朝になって、初めて自分の寮の全貌や、周囲の景色をはっきりと見た。そして今さらのように、これからの生活に対する緊張が湧いた。

加計国民学校

寺の本堂の前庭で、朝の体操をしてから、新しく編入する加計国民学校に登校した。学校では、疎開児童の受入式

と同時に、高井・京田両訓導の就任式がおこなわれた。校庭には、サクラが今を盛りと咲いていて、のどかなそして静かな山里らしい日和であった。

地元の人々

正念寺の疎開児童の世話は、所在地の香草部落と遅越・辻の川原両部落となっていたから、児童全員そろって、この三部落に行き、挨拶まわりをした。「何かとご迷惑をかけます。今後とも、どうかよろしくお願いします。」と、先生が言うと、子どもたちも一様に頭をさげた。もっとも遠い所は、辻の川原部落であった。篤農家として名高い富樫山次部落長は、子どもたちを見ると、涙を流して迎えられた。「よく来られた。なんでもお困りのときは、何時でも遠慮せず相談に来なさい。」と、一同を励まされ、白い粉のふいたツルシ柿を一つずつくださった。甘味に飢えていた子どもたちは、大よろこびで食べた。また夏になってからは、児童が一〇人も一緒に寝られる大きな蚊帳を提供されるなど、いろいろの温かいもてなしを受けた。

寒さこたえる

加計町は、広島にくらべるとかなり気温が低かった。しかも、今年は何時までも寒いということで、疎開生活も半月余りたった五月三日、八幡高原には雪が降り、イモの苗が、みな枯れるという騒ぎがあったほどで、加計でも霜が降ったのには驚かされた。なるべく荷物を軽くして来ており、もちろん冬支度のない児童たちに、この寒さはかなりこたえた。緊張感と衛生注意により、風邪をひく児童はいなかったが、他村の寮では肺炎性の感冒に罹る者もでるといって、引率教師として、いわば最初の難関に突きあたったのであった。夜尿症の子は残留組にして、連れて来なかったはずであるが、夜の寒気と夏用の薄いふとんでは、どの寮も、寝小便にまったく困らされた。

正念寺では、寮母が夜十時まで起きていて、十時に児童全員を起し、小便をさせてから就寝させた。その後は、広島との連絡や他の仕事で起きている高井訓導が、小便の世話をした。このため就寝午前二時というのが日課になった。

三度の食事

山県郡の中でも加計地区は、もっとも米の生産の少ないところであったから、食糧事情は良くなく、洪水でもあって、三日も輸送が絶えると、もう米が底をつくといわれるほどであった。こんな土地であるから、田舎とはいえ、朝食はジャガイモの浮いたおカユを、おわんに二杯だけである。昼食は白米であったが、鞆の中で横になると、弁当箱の一方に片寄って隙間ができるというほどの少量であった。これも寮によっては、飯の中にワラビやゼンマイをはじめ、乾したヨモギがまじっているのもあった。ヨモギまじりの飯は、喉につかえ食べにくかった。時にはまた、幕末の飢饉の時に農民が食べたと伝えられるジョーボ(令布)と称する木の芽がまじっていた。イモがまじっているのは上の部であった。夕食は、朝と同じくおカユで、おわんについでもらって手に持つと、タツタツと揺れた。

戸内町の専正寺を寮とする児玉勘吾班は、わりと食糧事情がよかった。本郷部落にある高等科一、二年生が、自給農園の収穫物を、しばしば寄贈してくれたので、大いに助かった。その思いやりに頭がさがった。おカユはやむを得なかったが、他にくらべると恵まれたものであった。それでもタンパク質の不足はひどく、山に行ってマムシやシャカモを捕えて食べる子がいるというようなこともあった。

親の訪問

疎開児童の心を、動揺させないようにとの配慮から、親の訪問を禁止していたが、その申合せを破って、面会にくる者があった。個人的な連絡は、なるべく取らさないようにするため、後援会の「集団疎開児童父兄会」が、学校単位で組織され、それを抑えるようにしたが、親子の情は画一的におさまるようなものではなかった。手紙のやりとりは、最少限に許されていたが、やはり親も子も、現実に顔を合わさないと、気がすまなかったのであろう。そのため、親の来ない子どもが、一層さびしかった。

脱走

五月も中ごろを過ぎて、子どもたちもようやく疎開生活に馴れてきた。ある日、全員が地元の児童と一緒に弁当を持って、教師の引率のもと、みんなはしゃぎながら山へワラビ採りに出かけていった。

高井訓導は、ワラビ採りを他の先生にまかせて、学校の幹部会議に出席していた。そのとき、一二キロメートルほど下流の安野村の澄合国民学校から、電話がかかってきた。「疎開児童らしい女の子が二人、いま澄合部落を通り、広島へむかった。本校の職員が追っている。」という。高井訓導はびっくりして、同僚の自転車を借りて飛び乗った。心はあせり、ペダルを力いっぱい踏んだ。澄合部落から二キロメートルほど下ったところに、河岸道路が崩れたため、汽車のトンネルを道路に利用しているところがあり、そのトンネルの入口は、急な坂道から直角に曲って入っていた。速度を出しきった自転車で、急ブレーキをかけて、曲ろうとしたとたん、高井訓導は自転車ごと投げだ

され、しばらく人事不省で倒れていた。やっと気がつき、あわてて自転車にまたがった。必死でペダルを踏み、飯室村の布がもうすぐというところ、久地付宇賀の対岸近くの道で、やっと追いつくことができた。

広島市はもうすぐそこであった。

先きに追いついていた澄合国民学校の先生は、女の子が頑として、加計に引返すことを拒むので、ほとほと手こずっているところであった。

この子たちは五年生と六年生で、六年生の子の父親は、硫黄島で玉砕していて、母親だけの家庭、内攻性の強い子であった。帰りたい一念からとはいえ、よくもこの長道を歩きとおしたものである。

「どうしたんだ。これから広島までは、ずっと遠い。今まで来た道の二倍も、まだ歩かないと帰れないんだぞ。」

高井訓導は、心のうちとは違ったことを、つい女の子に言った。

女の子の一人は、足を痛がり、つかまると、もう気がくじけて、歩けなくなった。それを自転車の荷台に乗せ、もう一人の子の手を引いて、今来た道を、また、トボトボと歩いて引返した。澄合部落まで歩き、そこからバスに乗せて、加計に帰らせた。この一度で、正念寺では何事も起らなかったが、半月ほどたって、殿賀村の寮から、電話で、「四年生の男の子が逃げたので、通ったらつかまえてくれ。」と、連絡があった。

それから間もなく、加計の町の手で見つかり、なだめて送り返したことがあった。

フクロウ鳴く

正念寺の庭すみには、松の大木があった。そこで夜々フクロウが鳴いた。その声は、子どもたちをひどくさびしからせたが、月の美しい夜、その姿をはっきり見ることができてからは、かえってフクロウが親しみの対象となった。子どもたちは、自分たちの寮には、フクロウがいると言って、自慢するようになった。

お手伝い

麦刈や田植、麻の収穫などの手伝いをしたが、実際には、むしろ邪魔であったに違いない。それでもあちらこちらの部落から、よく迎えられた。それを機会にして、児童たちに腹いっぱいおムスビを食べさせてやろうという、農家の人々の温かい思いやりであった。

海兵隊来る

七月初め、海軍の設営隊(海兵隊)が二〇〇人ばかり、戸河内町本郷の国民学校へ来た。一教室二〇人で、一〇教室を使ったから、勉強できなくなり、疎開児童は寮で勉強することになった。設営隊は、松根を掘ったり、木炭を焼いたり、発電所の仕事だという河原砂揚げをしたりしていたが、軍隊は十分な食糧・衣類その他、軍務遂行上に必要なすべての物資を、教室に積みあげていて、その生活内容は、民間人とくらべて格段の差であった。しかし、何事も軍優先の時代であったから、誰も何もいうことはなく、そのはかばかしくない作業ぶりにも、ただ傍観しているばかりであった。

チフス発生

八月初め、戸河内町松原の班で、集団チフスが発生した。児童約四〇人のうち、師範学校を出たばかりの若い守山瑛子訓導と、児童六人がわずらった。病院は一四キロメートルも離れた本郷部落にしかなく、そこへ七人が入院した。原因は、面会にきた父兄のおみやげのピワということであったが、ふだんは元気そうに見えても、一度病気に罹ると、身体に抵抗力がなかった。たちまち栄養失調の障害があらわれて、急激に症状が悪化した。その上、医薬品もひどく欠乏していた。

守山訓導の父親は連絡を受けて、すぐ見舞いにきたが、医薬品を買いに広島へ引返した日に、原子爆弾にあって死亡した。そんなこととはつゆ知らぬ守山訓導は、心細い病床で、父のくるのが遅いことを恨みながら、八月十一日ついに死んでいった。守山訓導の葬儀がやっと終わったところへ、父の遺骨を持った母親がたずねて来た。児玉訓導は、その母親にあうと、ぐっと胸がこみあげてきて、しばらく絶句したまま、っっ立っていた。

六人の児童は、どうにかこうにか元気を回復した。これがせめてもの救いであった。また、この松原部落の寮では、三年生の男の子が、腸捻転をおこして死亡した。連絡した父の来るのも間にあわず、医師の手当も効なく、苦悶のうちに死んだのである。

広島被爆

八月六日の朝、児玉訓導は五年生以上の児童を引率して、広島ではめずらしいリンゴとジャガイモを採りに、山の畑にあがって行く途中、ピカッと異様な光線を感じた。「おかしいぞ……」と思いながら、山の高い所から広島市の方を遠望していると、一五分ぐらいして、黒煙がもうもうと広島市内を包むように、立ちのぼっているのが見られた。

そのうち、ヒラヒラと紙切れがたくさん空から降ってきた。足もとに落ちたのを拾ってみると、紙ぎれは火に焦げており、あきらかに経文の断片であった。「寺町の方が空襲されたんだろう。そのうちに広島から連絡があるだろう。」と、子どもたちに言った。みんなはリンゴやジャガイモを採って、午後三時ごろ、山を降りた。

五時ごろ、定期の電鉄バスが着いた。そのバスに、父兄三人が乗って来たが、いずれもひどく負傷しており、衣服はボロボロに裂け、裸足のままという無残な姿であったから、子どもに逢わせないようにして、そこからすぐに他の寺へ案内し、治療その他のことを手配した。父兄には一週間ばかり子どもをあわせなかった。

高井訓導は、たまたま被爆前日の五日に、児童たちの冬物の引取りやその他の用務のため帰広し、その夜は、佐伯郡廿日市町の家族の疎開先に泊り、六日の朝、家を出るところで原子爆弾の炸裂に遭遇した。午後二時、学校のことが気になり、急ぎ出て行ったが、観音橋まで来たとき、校医の松林医師に逢い、市中は大火災の最中であることはできないと知らされた。また、橋のたもとの家が炎上中で、道路をはばんでおり、どうすることもできなかったから引返さざるをえなかった。翌七日昼ごろ、まだ余燼のくすぶる中を、学校跡にたどりついた。見渡す限り焼野原となり、コンクリート建ての学校の玄関だけが、ポツンと建っているだけであった。その壁に、焼けぼっくいか何かで、「八月 日、職員はここに集まれ。」と、連絡事項が書いてあったが、全市一面、焦土と化したいま父兄の状況調査もできないまま、九日に加計町へ引返した。

加計の寮では、高井訓導もおそらく死亡したものと、予想していた。そこへ帰って来たから、児童たちは、寺の石段を飛ぶようにして下りて来て、歓声をあげた。

十一日には、戸河内班の児玉訓導が状況調査に広島市へ帰って来たが、学校はもちろん焼失しており、どうすることもできない。何とか判らないものかと、郊外の長束に住む吉本フサエ、江波の本田和佳子両訓導を訪ねて、ようやく概略を知ることができた。三日ほど滞在して歩きまわったが、父兄に逢おうにも逢えず、とりあえず戸河内町に引返した。待っていた子どもたちには、広島市内が焼野原になったとは言わず、「だいぶんやられているが、父や母は生きている。きっと皆を連れにくるから、その日までおとなしく待っていよう。」と説明し、動揺しないようにつとめた。各寮の引率教師の中には、市内に家庭のある者が少なくないので、広島の実情を聞くと、みんな気が気ではなかった。加計町の京田訓導も、学校と児童の家族調査をかねて、高井訓導と入れかわりに広島へむかった。京田訓導の家は、市の中心部にあったから、家族にも親類にも多数の死亡者があったが、充分にとむらういとまもなく、児童の家族について、できるだけの調査をして帰って来た。

児童の引取り

十日過ぎごろから、父兄の方から直接連絡があり、児童の引取りを希望する者もあったが、さらに八月十五日の終戦以後は、各寮ともぼつぼつ引取りがはじまった。八月下旬ごろからは、寮の方から進んで引取らせるよう調査を進めて、連絡の手配をとったが、引取りに来たのは、被爆しながらも、どうにか来られるという僅かの父兄だけであった。引取人の中には、その児童の縁故者という場合も少なくなかった。

児玉訓導のもとでは、家族全員が被爆死して孤児になった三年生の男の子を、その叔父が引取りに来た。

叔父は一晩泊ったが、その時、男の子の持物を調べた。その子は、父親から万一の場合にそなえての配慮からか、二〇数通の貯金通帳と、そのほか財産一切のことを書いた紙を持っていた。「どんなものが書いてあるのか見せると、叔父さんに言われて、今、見せているよ。」と、何となく不安を感じたらしい学友が、そっと児玉訓導に知らせて来たが、気がかりながらも、どうすることもできないことであった。後日、児玉訓導はその子が全部の財産を取られたうえ、いまだに行方が判らないということを知った。

ゆたかな食卓

終戦の日から、九日ばかりたったころ、本郷国民学校にいた海軍の設営隊が引揚げていった。そのあと、設営隊が確保していた軍用食糧が、どっと民間に放出されると共に、きびしく統制されていた物資が、自由に出まわるようになり、戸河内町の食糧事情が一変した。米や乾パンや、かん詰・衣類などが、疎開児童にもどっさり配給された。それに密殺の牛肉や鶏肉なども、金さえあれば欲しいだけ買えるようになった。

急に春が来たように、生活が解放され、食卓は夢のように豊かになった。子どもたちはわれを忘れて食べあった。「よう肥えて広島に帰るんだぞ。」と、児玉訓導は幾度も大声で言った。育ち盛りの子どもたちが、永い忍従の生活に、よくも堪えてきたことだと思いかえし、そのいじらしさに、こみあげてくる熱い涙をぬぐった。

引揚げ準備

子ども引取りの父兄も、来るだけは来たようだし、残っている子どもの家族の、その避難先や縁故者の有無なども、

ほぼ判明したので、各班とも、いよいよ広島へ引揚げる準備をはじめた。児玉訓導が先ず広島に帰り、学務課と連絡して、竹屋国民学校の児童三五〇人、及び寮母その他使用人の手当など、集団疎開経費八、九月分の一〇万円(二百円札五〇〇枚)を受取り、九月二十日ごろ、疎開現地へ帰って来て、それぞれの後始末をおこなった。

集団疎開 8・9月前渡金使用明細書

摘 要	収 入	支 出	残 高
高井先生より預かる	5,200.00		
8月分賄費 23円×48人		1,104.00	4,096.00
8月分諸費 9円15×41人		375.15	3,720.85
9月分賄費 23円×41人		943.00	2,777.85
9月分諸費 9円15×34人		311.10	2,466.75
児童冬物運送代		161.94	2,304.81
机、腰掛6月ノ運送代		228.67	2,076.14
市ヨリ役場ヘノ謝礼		100.00	1,976.14
職員俸給及手当		823.90	1,152.24
寮務手当 30円×6月		180.00	972.24
医務手当 15円×6月		90.00	882.24

(高井正文資料)

引揚げ実施

九月十七日から十八日にかけて、枕崎台風が中国地方を襲って、太田川は氾濫し、堤防が各所で欠壊した。このため太田川沿岸の交通が寸断され、加計町では配給食糧の確保もおぼつかない状況に陥り、引揚げが急がれることになった。高井・京田両班は、九月二十五日に遠まわりの道を通って、第一次引揚げを実施することにし、これまでに引取り先のはっきりした児童だけ二〇数人で、朝早く寮を出発した。児童たちは、寮から帝国製鉄加計工場の木炭輸送トラックに便乗し、現在の豊平町まで行き、村のまん中で下車、そこから歩いて可部へ抜けたのである。その途中の道路も、河川氾濫の傷あとはひどく、子どもには相当な難行軍であった。山の中の木こりの通る細い路などを、登ったり下ったりして、ともかくも歩いた。子どもたちはまだ夏の服装のまま、手廻り品と弁当を詰めこんだリュックサックを肩に負い、手にもたくさんの荷物を持っていた。「広島に帰るんだ。さあ、歩け歩け。」と、お互いに励まし励ましして山を越えた。山越えの途中、雨が沛然と降って来たが、びしょ濡れになるのもいとわず、親のもとに帰りたい一心から、疲れたとも言わないで、赤土のぬかるみに足をとられながら、一步一步、前進した。しかし、やはり一日では可部まで出られなかった。鈴張で日が暮れかけたので、その旅館に一泊した。旅館では、みんないっせいに服やその他の雨に濡れた物をならべて乾すと、体力を消耗しないように早く眠った。

広島に到着

夜が明けると、身仕度をととのえて早々と出発した。帰る道々の町や村に、その子の肉身や縁故者が避難していれば、そこにそれぞれ引渡ししながら歩きつづけて、正午ごろ、広島市内に入った。引揚げる前に、各児童の肉親や縁故者と連絡を取り、横川駅で引渡すことにしていたから、迎えに来た人々には児童を渡したが、迎えに来なかった児童には、一人一人にその肉親や縁故者のいる郊外の避難場所をよく教えて帰らせた。しょんぼりと一人で別れて行く子どもの、うしろ姿を見送りながら、その無事を心に祈った。このようにして、子どもたちを家庭に送ってしまうと、いつか夜になっていた。

戸河内町の児玉班でも、引取りに来ない児童が約半数ほど残ったが、引続き調査の手をのばして、父兄の居場所がだいたい判った順に、七、八人ずつ三回に分けて引揚げを完了した。児玉・吉本両訓導は、児童の荷物を自転車の荷台に積みあげ、歩け歩けと、高井班と同じような強行軍で復帰した。寮を出るとき、役場から児童の一人一人が、白木綿(ヤール幅)三メートルと、特に両親の亡くなった者は毛布一枚ずつもらった。

ふとんや蚊帳など大きい物は、トラックで己斐国民学校(広島市)まで送り出し、それぞれの家族が個々に受取るように連絡をしておいた。

戸河内町を朝出発して、広島市には午後三時ごろに到着し、各家庭に一人ずつ送りとどけた。それが終わると児玉訓導は、楽々園(佐伯郡)の自宅で一泊し、翌日また引返すという方法をとった。

引揚げ完了

引揚げの実施中、行方不明で存否のわからなかった家族が連れに来ることもあったし、連れに来なくても、避難場所が判明して連絡がついたりして、結局、引揚げ作業の完了したのは、高井班が十一月十五日、児玉班が十二月五日であった。その他の班も、だいたいこの頃には終了した。

児童の送届け

連れて帰った児童を家庭に送りどけるにあたって、高井班では、単に広島市内や近郊だけでなく、相当遠いところもあった。十月二十五日のときは、四年生の女の子一人を福山市まで汽車で連れていったし、四年生の男の子一人は、父親から加計町に連絡があり、父は被爆で重傷のため動けず、母は妊娠中で外出できないとのことで、父母のいる島根県邑智郡出羽村岩屋の避難先へ連れていった。十一月六日、自転車で荷台に子どもの荷物を積み、膝に子どもを乗せて三坂峠を越した。朝早く出て、豊平町鳥越まで帝国製鉄のトラックに便乗したが、途中下車して道に迷い、「ガンバレ、ガンバレ。」と自分に言いかけながら、自転車を押して山越えをした。新庄を經由して三坂峠へ出たのであるが、峠で自転車がパンクした。トボトボと田所まで歩いて行き、パンクをなおして、またペダルを踏み続け、夕方四時ごろであったか、ようやく着いた。

草餅をよばれて、その晩はそこに一泊した。

児童の復帰について、母親関係の内輪的なもつれから、その処置に困ったものも多くあった。ある六年生と三年生の姉妹は、妾腹であった。当時は私生児といって、世間から冷遇されたものであったが、姉妹の生みの親が、流川町の家で、姉妹の弟(一年生)と一緒に被爆して死亡した。姉妹は、いわゆる主人のかくし子であったから、義母は引取することを拒絶した。その義母は横浜市に居住していたため、折衝も困難をきわめたが、幸い叔母が呉市にいたので、これを説得し、叔母がいちじ預かることになって結着がついた。十月ごろ、姉妹二人は叔母のもとに頼っていった。

また、両親が被爆死亡し、肉親といえば、山口市在住の祖父母だけになった子どもがいた。祖父母は、「年寄りで、今さら子どもをようみない。」と言って、引取ろうとしなかった。この子が最後まで残ったが、説得を続けたすえ、結局、祖父母が引取ったが、いちじは途方にくれた。

安野村の寮(寺)にい四年生の男の子は、賢い子であったが、被爆により家族が行方不明となり、これも引取人のない子の一人であった。これは、寺の方から請われて、そこの小僧になった。三か月ぐらい寺にいたところ、縁故者があらわれて、ようやく落着いた。

慰霊祭

十一月十日、学校の焼跡に間賀田校長以下教職員一〇数人が集合し、玄関前の焼残りのコンクリート壁のある所で、校内の遺骨を集めて慰霊祭を執行した。僧侶出身の寺沢篤雄訓導が読経し、原子爆弾被爆犠牲者の冥福を祈った。子どもたちの父兄は、ほとんど出席しなかった。父兄たちは、それぞれ被爆後の無残な生活に、その日その日をあえいでいたからであろう。

広島市内各学校の建物疎開作業出動状況

雑魚場町付近(市役所裏)

学 校 名	出勤者数		死亡者数	
	引率者	生 徒	引率者	生 徒
袋町国民学校	一	七〇		約六八
千田国民学校	一	五〇	一	五〇
大手町国民学校	二	四五	二	約四〇
第三国民学校	八	二〇九	七	一五二
広島県立第一中学校	四	約三〇〇	四	約三〇〇
広島県立第二高等女学校	三	四一	三	四〇
広島県立商業学校	約一三	四四〇	三	九〇
修道中学校	一〇	一八三	一〇	一八三
山陽中学校 山陽工業学校 山陽商業学校	七	四一〇 (天神町を含む)	一一	約四一〇
広島女学院高等女学校	一二	三五〇	一六	二八一
附属山中高等女学校	三	約三六〇	三	約三六〇 (一人生存)
合 計	約六四	約二、四五八	六〇	約一、九七四 約八〇%

土橋付近(小網町・西新町・堺町)

学 校 名	出勤者数		死亡者数	
	引率者	生 徒	引率者	生 徒
本川国民学校	一	約七二	一	七二
三篠国民学校	五	二五〇		一〇二
天満国民学校	三	九〇	三	九〇

国民学校											
1	本川 国民学校					広島郵便局(細工町) 建物疎開作業(小網町)	1 1	17 約 72	2		89
2	袋町 "					建物疎開作業(雑魚場町)	1	70			約 65
3	織町 "					なし					
4	中島 "					なし					
5	大手町 "					建物疎開作業(雑魚場町)	2	45	2		約 40
6	広瀬 "					大橋製靴工場(三篠町)	2	40			8
7	神崎 "					なし					
8	天満 "					建物疎開作業(土橋付近)	3	90	3		90
9	観音 "					なし					
10	竹屋 "					なし					
11	白島 "					建物疎開作業(鶴見町)	1	67			約 67
12	千田 "					建物疎開作業(雑魚場町)	1	50	1		50
13	段原 "					なし					
14	三篠 "					大芝兵器工場(大芝町)	1	40			102
						油谷重工業(安佐郡祇園町)	1	40			
						中広航空(中広町)	1	50			
						日産自動車(三篠町)	1	50			
						日本針工業(楠木町)	1	50			
建物疎開作業(土橋)	5	250									
15	舟入 "					なし					
16	皆実 "					なし					
17	荒神町 "					なし					
18	大芝 "					なし					
19	牛田 "					建物疎開作業(富士見町)	1	26			16
20	尾長 "					なし					
21	比治山 "					なし					
22	己斐 "					広島鋳工所(打越町)	1	50			2
23	大河 "					自研自動車修理工場(千田町)	1	50	1		
						網本食品工場(旭町)	1	50			
24	矢賀 "					なし					
25	江波 "					なし					
26	宇品 "					なし					
27	古田 "					なし					
28	仁保 "					軍用テント工場(霞町)	2	150			
						鉄道電修場(蟹屋町)	1	50			
29	楠那 "					建物疎開作業(鶴見町)	1	14	1		
30	草津 "					建物疎開作業(土橋)	4	167			
31	青崎 "					東洋工場(安芸郡府中町)	2	161			
32	似島 "					陸軍兵器補給廠似島弾薬庫(似島町)	1	5	なし		
						高射砲陣地(似島)	1	51			
33	第一 "					駅前郵便局(松原町)	1	55	1		46
						杉原縫製(出汐町)	1	15			
						専売局(皆実町)	4	約 110			
						昭和金属(大洲町)	2	約 60			
						児玉工業(大洲町)	2	約 60			
						東洋工業(安芸郡府中町)	2	約 50			
						三星製菓(西蟹屋町)	3	約 80			
						建物疎開作業(鶴見町)	5	約 150			
34	第二 "					大和重工業(南観音町)	2	約 100	6		約 250
						昭和金属(観音本町)	1	約 50			
						広島印刷(南観音町)	4	約 250			
						帝国兵器(吉島羽衣町)	1	50			
						電鉄(千田町)	1	50			
						大木印刷(古田町)	1	50			
						熊野製罐(舟入南町)	2	50			
						小原製菓(水主町)	3	155			
						通信局(白島町)	1	50			
						建物疎開作業(県庁北側)	5	約 250			
35	第三 "					中国配電(立町)	1	20	7		152
						東洋製罐(天満町)	3	約 70			
						熊平金庫(宇品町)					
						広島瓦斯(皆実町)					
建物疎開作業(雑魚場町)	8	209									
36	県立広島師 範学校男子					なし					

	部 附属 国民 学校												
37	広島陸軍 偕行社 附属 済美 国民 学校						なし						
38	光道 国民 学校						なし						
39	広島高等 師範 学校 附属 国民 学校						松根掘り作業(比婆郡西城町)	1	18	なし			
合計		16	17	11	0	11		92	3,657	24	980		
中等学校													
1	広島県立 第一 中学校						呉海軍工廠(呉市)	2	約 100	11	約 220		
							東洋工業(安芸郡府中町)	6	約 280				
							旭製作所(江波町)	1	50				
							同 地御前工場	10	約 520				
							広島航空(古田町)	4	約 209				
							建物疎開作業(雑魚場町)	4	約 300				
							同 (土橋)		50				
2	広島県立 第二 中学校						三菱造船所(南観音町)	10	約 500	8	350		
							食糧増産作業(東練兵場)	6	約 250				
							建物疎開作業(中島本町)	8	343				
3	県立広島 師範 学校						暁部隊補給部(金輪島)本科一年生 呉海軍工廠(呉市)本科二、三年生 農業実習(安芸郡奥海田)予科二年	不明	不明	1	3		
4	広島県立 広島 工業 学校						呉海軍工廠(呉市)	2	75	3	189		
							呉海軍施設部(呉市)	3	146				
							日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)	4	207				
							同 蟹屋町文所	1	57				
							三菱造船所造機部(南観音町)	3	145				
							電気試験所(横川町)	1	8				
							第十一海軍航空廠(岩国市)	2	58				
							帝国兵器(吉島町)	1	20				
							陸軍暁六一四〇部隊修理部(金輪島)	1	6				
							丸二木工(佐伯郡廿日市町)	1	52				
							倉敷航空機製作所						
							広島県広島工業学校工場(千田町)	1	13				
							日本製鋼所広島製作所						
							広島工場学校(千田町)	2	47				
							倉敷航空製作所吉島製作所(吉島町)	3	約 40				
							中国配電大洲製作所(大洲町)		10				
							萩野鉄工(大洲町)	1	20				
旭兵器(吉島町)	1	20											
建物疎開作業(県庁附近)	3	187											
5	広島県立 広島 商業 学校						三菱造船所(江波町)	1		3	90		
							石田兵器所(中広町)	1	約 45				
							亀田製砥所(大洲町)	1	約 45				
							建物疎開作業(雑魚場町附近)	13	440				
6	広島県立 広島 第一 高等 女 学校						広航空廠(呉市)	6	約 300	6	約 220		
							東洋工業(安芸郡府中町)	6	約 300				
							被服支廠分所(安佐郡河内国民学校内)	2	約 100				
							広島印刷(南観音町)	6	約 300				
							広島航空(古田町)	6	約 300				
							第一県女救護班(県女内)	11	約 50				
建物疎開作業(土橋)	6	220											
7	広島県立 第二 高等 女 学校 (広島 女子 専門 学校 内)						第二総軍作業場(東練兵場)	17	約 250	3	43		
							陸軍作業場(金輪島)						
							広島地方専売局(皆実町)						
							建物疎開作業(雑魚場町)	3	41				
8	広島県 豊 学校						なし						
9	広島県 盲 学校						なし						
10	広島市立 中 学校						三菱重工(南観音町)	7	300	4	365		
							建物疎開作業(小綱町)	7	353				

11	第一工業学校					東洋工業(安芸郡府中町)	4	144	3	50
		呉海軍工廠(呉市)	4	99						
		広島市役所(国泰寺町)	1	5						
		富田製油(舟入町)	2	50						
		中国配電大洲製作所(大洲町)	2	50						
		本校機械科工場(東雲本校舎)	2	30						
		建物疎開作業(水主町)	1	14						
		油谷重工(安佐郡祇園町)		20						
		同(鶴見橋)	1	12						
同(皆実町)	4	200								
12	広島市立第二工業学校(広島工業専門学校内)					なし				
13	広島市立造船工業学校					三菱観音工場(観音町)	13	約400	8	246
		三菱江波工場(江波町)	7	約300						
		呉海軍工廠(呉市)	7	200						
		広瀬国民学校防空要員(広瀬町)		30						
						建物疎開作業(材木町)	5	195		
14	広島市立第二商業学校(本川国民学校内)					なし				
15	広島市立第一高等女学校					大東亜食料興業(西観音町)	1	45	7	544
		関西工作所(舟入川口町)		数人						
		日本製鋼所広島工場(西蟹屋町)								
						建物疎開作業(材木町)	8	544		
16	広島市立第二高等女学校					単森金属工業(水主町)	1	49		7
17	修道中学校					合同製鋼所(三篠町)	1	33	10	183
		日本製鋼広島製作所(安芸郡船越町)	3	180						
		兵器補給廠(霞町)	5	306						
		三菱広島造船所(南観音町)	4	235						
		呉海軍工廠(呉市)	2	12						
		建物疎開作業(雑魚場町)	10	183						
18	山陽中学校 山陽工業学校 山陽商業学校					東洋製缶(天満町)	1	約100	11	475
		桐原容器工場(舟入本町)	2	約120						
		宮本航機工場(皆実町)	1	約50						
		三菱重工広島製作所(南観音町)	3	約200						
		呉海軍工廠	3	約200						
		旭兵器工場(佐伯郡地御前)	1	約100						
		日本製鋼広島製作所(安芸郡船越町)	1	約150						
		太東兵器(中広町)	2	約90						
		大竹三菱化成工場(大竹市)	2	約70						
		中国塗料(吉島本町)	1	約60						
		中本鉄鋼所(大洲町)	2	約50						
		宇品造船所(宇品町)	2	約50						
		建物疎開作業(雑魚場町、天神町)	7	約410						
19	崇徳中学校					水田金網砥石工場(楠木町)	1	40	7	514
		三菱重工業機械製作所(江波町)	2	211						
		兵器支廠(出汐町)	1	60						
		呉海軍工廠(呉市)	1	45						
		学徒防衛隊(楠木町)	3	44						
		建物疎開作業(八丁掘)	7	514						
		同(小網町)	2	197						
同(水主町)	1	62								
20	広陵中学校					広島陸軍糧秣支廠(宇品町)	2	150	2	38
		広島鉄道保線区(大須賀町)	1	50						
		広島鉄道第一機関区(西蟹屋町)	1	107						
		呉海軍工廠(呉市)	2	90						
		広島吉島航空機械工場(吉島町)	2	120						
						建物疎開作業(鶴見橋)	4	400		
21	松本工業学校					広島駅電気工事区(大須賀町)	1	20	1	54
		陸軍暁部隊(金輪島)	1	50						
		佐伯鋼業(舟入幸町)	4	115						
		三菱造船(江波町)	4	115						

						三菱重工(南観音町)	3	100		
						東洋製缶(天満町)	4	100		
						建物疎開作業(皆実町・水主町)	4	70		
22	安田高等女学校					誉航空工場(楠木町)	3	165	7	308
						大橋製靴工場(三篠本町)	2	164		
						興亜ミシン(横川町)	3	95		
						広島軽金属(三篠本町)	2	129		
						建物疎開作業(中島町)	5	256		
23	進徳高等女学校					電話局(下中町)	2	170	10	約 398
						貯金局(千田町)	3	175		
						東洋製缶(天満町)	3	80		
						中国塗料(吉島本町)	1	80		
						日本製鋼所(安芸郡船越町)	8	317		
						小川工業(出汐町)	1	60		
						市役所事務(本校内)	1	83		
						建物疎開作業(鶴見町)	10	339		
24	広島女学院高等女学校					東洋工業(安芸郡府中町)	5	280	16	281
						第十一航空(呉市)	1	50		
						第二総軍司令部(二葉の里)	1	40		
						広島鉄道局関係(上流川町・西蟹屋町・松原町)	1	72		
						師団司令部(基町)		5		
						財務局税務所(八丁掘)	1	29		
						建物疎開作業(雑魚場町)	12	350		
25	比治山高等女学校					第十一航空廠(呉市)	2	110	2	73
						中国軍管区司令部(基町)	2	90		
						陸軍需品廠(江波町)		3		
						同(小姓町)		1		
						同(安芸郡海田市町)	1	39		
						第二総軍司令部(二葉の里)	1	40		
						広島鉄道管理部(大須賀町)	1	40		
						中国配電(大洲町)	3	183		
26	広島女子商業学校					通信局電気工作所(宇品町)	1	55	9	329
						広島県木材(猿楽町)	1	55		
						野村生命広島支店(横町)	1	20		
						広島貯金支局分室(八丁掘)	1	10		
						貯金支局(千田町)	2	110		
						中国塗料(吉島町)	2	110		
						広瀬軍需品(霞町)	1	55		
						綱本食品(旭町)	1	55		
						東洋工業(安芸郡府中町)	2	110		
						連合紙器(大洲町)	1	55		
						広島税務署(雑魚場町)	1	10		
						建物疎開作業(鶴見町)	10	500		
27	安芸高等女学校					山陽工業(天満町)三年生	1	約 80	4	263
						東洋製缶(天満町)四年生	2	80		
						日本工業(広瀬町)補習科	1	約 40		
						海軍の工場(佐伯郡五日市町)	1	数人		
						建物疎開作業(小網町)一、二年生	4	237		
28	西高等女学校					昭和金属工業(西観音町)	2	100	3	217
						帝国兵器(吉島町)	2	約 100		
						旭兵器製作所(南観音町)	1	62		
						建物疎開作業(土橋)	不明	約 150		
29	広島女子高等師範学校附属山中等女学校					第二総軍司令部(本校校庭)	約 15	約 100	4	378
						日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)		約 100		
						三菱重工業広島工場(南観音町)		不明		
						三宅製針(天満町)	1	約 15		
						倉敷航空機吉島工場(吉島町)		約 210		
						山陽工作所(皆実町)		約 50		
						陸軍糧秣支廠(宇品町)		約 220		
						建物疎開作業(雑魚場町)	3	360		
30	広島文理科大学附属中学校					三菱精機(安佐郡祇園町)	5	110	6	15
						被服廠(旭町)	3	120		
						農村動員(加茂郡原村・豊田郡戸野村)	7	240		
合計		17	15	11	1	1	487	21,475	148	5,853
大学高専諸学校										

1	広島女学院 専門学校					東洋工業(安芸郡府中町)	4	278	4	63	
						広島財務局広島税務署(八丁堀)	1	25			
						師団司令部及び聯隊区司令部(基町)		10			
2	臨時教員養 成所					航空機工場(愛媛県)全員		250		5	
3	広島女子専 門学校					陸軍運輸部(宇品町)	5	115		6	
						水島航空機製作工場(倉敷市)	5	95			
						広島郵便局(細工町)		5			
						広島聯隊区司令部(基町)		1			
4	広島女子高 等師範学校					(附属山中高等女学校に含む)					
5	広島医学専 門学校					なし					
6	広島工業専 門学校					海運監督所(大手町) 東洋工業(安芸郡府中町) 三菱機械工場(安佐郡祇園町) 日本製鋼所(安芸郡船越町) 中国配電大洲製作所(大洲町) 坂発電所(安芸郡坂町) 三菱化成工場(大竹市) 帝人三原工場(三原市) 帝染福山工場(福山市) 三菱電気工場(福山市) 三菱車輛工場(三原市) ソノ田工場(徳山市) 新居浜化学工業(愛媛県新居浜) 日本酒類門司工場(福岡県大里市) 日東門司工場(福岡県大里市) 東芝余部工場(兵庫県余部) 東芝電気工場(兵庫県網手) 川西機械大久保工場(兵庫県大久保)		729		0	
7	広島高等師 範学校					三菱造船所(江波町) 三菱機械製作所(観音町) 二、三、四年生の大部分	10		10	14	
						東洋工業(安芸郡府中町)一年生					
						運輸部(宇品町)文科系の学生一部					
						被服支廠(旭町)	4	14			
						軍需管理部(皆実町・旧広高内)	5	31			
						機甲訓練所(宇品町)		4			
糧秣廠(宇品町)		1									
8	広島高等学 校					日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)	10	約210	4	約40	
						東洋鋼板下松工場(山口県下松市)	1	約280			
						呉海軍工廠(呉市)	1	約130			
9	広島文理科 大学					日本製鋼所(安芸郡船越町)	10	150	17	20	
						海軍煩研究部(大学内)		数人			
						学内動員(高師を含む)	80	130			
合計		8	6	1	0	0		136	2,478	35	148
総合計		41	38	23	1	12		717	27,610	207	6,981

(注)一、「全壊」は、一部に倒壊をまぬがれ、大破・半壊程度のあるものを含む。

二、鉄筋建の外郭が残り、内部が大破焼失したものは「全壊・全焼」とした。

三、「半壊」は、一部倒壊した部分のある建物も含む。

四、夜間学校は、校舎が他校と重複するが、独立一校として扱った。

五、動員学徒の死亡数は、現時点(四十三年六月)で判明している「即死者+行方不明者」の数である。

六、この集計表は各学校提出の資料に基づくもので、総合計数以外に不明分がある。

第二節各国民学校...53

第一項広島市本川国民学校(現在・広島市立本川小学校)...53

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市鍛冶屋町三九番地
 校長 川崎政信
 教職員 二六人
 児童 概数約一、 人
 校舎 鉄筋三階建・二七教室(坪数不明)
 敷地面積 不明
 爆心地からの距離 約三五〇メートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十五日	双三郡十日市 双三郡八次	八人 二	一四人 六五 (男三六 女二九)	五〇人	
合計		一人	二五人	五〇人	

広島市本川国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
広島郵便局	細工町	一人	一七人	郵便事務	
建物疎開作業	小網町	一	約七二	疎開跡片づけ	原簿焼失のため出勤人数は正確にはわからない。
合計		二人	約八九人		

四、指定避難先と経路

低学年の残留児童は、分散授業のため、分散先において、それぞれ避難させることにしていた。

五、校舎の使用状況

当時、県庁土木部、その他会社関係が二階の各教室を使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
平日授業	一人	二一八人	三人	六日朝、原子爆弾炸裂前に登校して、空鞘神社に祈願に行った教員一人と児童二人は全員即死したといわれる。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊全焼(外郭のみ残る)

当校は爆心地から西北西約三五〇メートル離れたほとんど爆心直下というべき至近距離の所に位置しており、その被害は言語に絶し、凄惨をきわめた。

校舎は、すべて鉄筋コンクリート建てであり、焼夷弾や普通爆弾では比較的安全に思われていたが、校舎以外の付属物は飛び散り、寸時にして強力な熱線のために着火したものが多く、外郭のみを残して完全に焼失してしまった。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	六人(二)	二一八人(八九)	()内は学校外(動員先)での被爆者数
重軽傷者	(三)	不明	
行方不明者	五	不明	
計	一一(六)	二一八人(八九) ただし、判明分のみ	

川崎政信校長は、運動場で被爆即死し、堀部克子助訓導(現姓堀江)・越智美智子事務員・白川慶子給仕の三人は職員室前の廊下で被爆し、顔面その他にガラスの破片が突き刺さって負傷、血に染まりながら、学校東側の元安川の河岸に避難し、石垣にしがみついていた。そのうち、白川慶子は水に流されて行方不明となり、越智事務員と連れて来

た四、五人の児童は、河岸に避難した数百人の中で散り散りになった。

小網町の建物疎開作業に引率教師として出勤していた宮地和藤次訓導は、負傷児童を避難させてから帰校し、河岸で見つけた堀部訓導をかかえて二人で己斐方面まで避難した。しかし、堀部訓導の負傷がひどく動けないので、草津町の同訓導の両親のもとまで、事の次第を伝えに行ったが、宮地訓導もまたその場で倒れ、一週間ばかりのち堀部訓導宅で死去した。逆に堀部訓導は一命を拾い、現在(昭和四十五年五月八日)、広島市古田保育園園長を勤めている。

八、被爆後の混乱

学校は鉄筋コンクリートの残骸のみとなり、教職員も児童も多数死亡し、校庭には屍体の山が築かれるという惨状で、学校の機能はまったく停止した。

建物疎開作業、あるいは広島郵便局などに出勤していた児童も全滅状態で、手の施しようもなかったが、集団疎開地から藤原寛訓導が帰校し、教職員および児童の被爆状況を調査し、あわせて疎開児童の縁故者を探すとともに、疎開児童の縁故者のない者の措置をとった。また動員中に死亡した生徒の縁故者についても調査をおこなった。

全焼して、外郭だけになった校舎は、被爆翌日から陸軍衛生隊が来て、西校舎一階に臨時救護所を開設した。終戦以後は、長崎五郎医師らが引継ぎ、大芝国民学校臨時救護所に移るまで、治療活動をおこなった。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年八月二十一日の臨時校長会によって、本校児童は暫定的に己斐国民学校に通学させたが、その数は全く不明である。しかし、昭和二十一年二月二十三日に学区内有志の協力によって、本川および広瀬の両学区を併せ、本川校舎内に復帰して授業を再開した時、教員は四人、児童数は約六〇人程度であった。

第二項広島市袋町国民学校...58

(現在・広島市立袋町小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市袋町二三の一
番地
校長 小林哲一
教職員 三四人
児童 八八六人
校舎 鉄筋コンクリート
三階建・二一教室
建坪・延七三六坪
木造建・延二三二坪
敷地面積 三、二一〇坪
爆心地からの距離
約六〇〇メートル

広島市袋町国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数		縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員		
昭和二十年四月十五日	双三郡田幸村	六人	四五人	集団疎開は町別に編成した。 (学年別ではない)
昭和二十年四月十五日	双三郡神杉村	三	九六	
昭和二十年四月十五日	双三郡和田村	三	五	
合計		一二人	五九六人	不明

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内雑魚場町	一人	七人	疎開跡片づけ	高等科の女生徒は大手町国民学校の女生徒と合同作業班二班を編成して作業にあたる。
合計		一人	七人		

四、指定避難先と経路

- (一) 白神社境内 = 正門・東門の二か所から分散して学校前の道路を南進して神社に至る。
- (二) 比治山御便殿前 = 東門から東進し、鶴見橋を渡って比治山に至る。

五、校舎の使用状況

消防団および医療団の詰所として講堂の一部を貸与。

鉄筋コンクリートの校舎の地下室は、学童および町民・消防団・医療団の避難場所として使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
残留児童・職員で朝礼後疎開校舎の整理作業	一六人	一四人		集団疎開・縁故疎開のため残留児童は少なかった。

七、被爆の惨状

被害状況

- (一) 校舎の被害状況...全壊全焼(鉄筋コンクリート造の校舎は、外郭のみ残る)

当校は爆心地の東南約六〇〇メートルの地点にあって、市内の学校では本川国民学校について、爆心地に接近していた。鉄筋コンクリート建校舎であるから、校舎は外形を保つことができたが、造作や付属の可燃物はすべて灰燼に帰した。他の木造建物はすべて倒壊し全焼した。

- (二) 人的被害

前夜来の空襲警報が解除になったので残留児童・教職員全員で朝礼を行なったあと、在校児童は建物疎開をした校舎の跡片づけにとりかかっていた。そのとき、原子爆弾が投下され、瞬時にして様相は一変した。

作業中の児童・教職員は全員熱線と爆風にさらされ、ある者は即死し、ある者はひん死の重傷を負った。作業中、被爆した者の中で、一人として生存者がいないから、当時の状況ははっきりしないが、後日の調査によって、全員の死体が校内で発見されていないことから、動ける重傷者はそれぞれ一応は避難したようである。たまたま地下室にいた児童三人(四年生嵐貞夫・友田典弘 二年生太田晴)が命拾いをした。これは奇蹟的な現象であるが、爆心側に高い富国生命ビルが建っていて、幾分か爆風をさえぎったからではあるまいかと思われる。

伝えるところによると、炸裂と同時に、学校も付近の民家も熱線によって自然着火し、皆はたちまち猛火に包まれた。約二〇分たったころ、三川町の裁判所の方向の火勢が弱いようなので、その方向に、辛うじて逃げ道を見いだしたという。

坪田省三教頭は、疎開児童を訪問する父兄のために、証明書を発行するべく職員室で執務していたが、その場所は壁がさえぎり、爆源からは死角になっていて直接熱線を受けなかった。しかし、爆風によって室内の器物が反対側の壁に吹きたまる中に投げ出され、倒れかかる背後の戸棚にたたきつけられた上、ガラス戸の破片が全身にわたって突き刺さり、しばらく、気を失ってしまっていたが、幸いにも意識をとりもどし、脱出することができた。このとき、無残な即死体が横たわっている周囲のなかで、校長室で執務していた小林校長が重傷を負って倒れているのを発見し、これを背負って比治山へと避難した。その途中、三川町の裁判所のあたりまで来たとき、雨が降ってきたので、また別の何か投下されたのではないかと思い、二人は平屋川(現在埋設)にかかるコンクリートの橋の下に身をかくした。ともすれば崩れかかる気力を鞭打ちながら、やっとの思いで比治山に辿りついた。比治山について教職員・児童の安否を確かめるべく所々方々を探し廻ったが、一人として見あたらなかった。おそらく、避難の途中、火炎につつまれて焼け死んだものと思われた。小林校長はそこから自宅に帰り、坪田教頭は火勢の衰えるのを待って、市役所に状況報告に行ったが、市役所もまた被害甚大で報告することができなかった。やむを得ず自宅へ帰る途中、草津国民学校に立寄り、同校の山下校長に一切の事情を伝え、市に報告されるよう依頼したあと、重傷のため床に倒れたが、治療を続けて、健康を回復した。

教職員・児童の被害は次のとおりである。

区 別	教職員	児 童
即死者	一 人	六五人
重軽傷者	五	不明
行方不明者	二	不明
計	一七	六五（判明分） （不明者は二一人ともいう）

八、被爆後の混乱

校舎は使用不能、学区内の児童とその家族はほとんどが死亡、教職員は坪田教頭と、雑魚場町の建物疎開に動員学徒七〇人を引率して出勤していた加藤訓導の二人の生存者を除いては、全員死亡した。すなわち、疎開児童とその引率職員だけが、残された当校の構成員となったが、それら引揚児童も、縁故者に引取られ、各地へ分散するといったようなことで、学校はしばらくの間、廃墟と化したままになっていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

疎開児童たちは、広島市内の各家庭が破壊されたままであったから、帰広させる訳にもゆかず、その目安もつかないままに、疎開先で日を過した。しかし、こうしているうちに縁故者が疎開地を訪れ、ほとんどの児童を引取っていた。

九月も終るころ、引取手のない児童を内田常吉訓導が引率して帰広することになった。しかし、この引揚げも容易ではなくて、芸備線は水害のために寸断され、徒歩連絡するところが多く、朝、三次駅を出発して、広島駅に到着したのは、夕方電灯のともるころであった。

焼跡に立った児童は、変貌を極めた廃墟の街に、自分の家の跡の見当さえつかず、不安と恐怖が胸にせまる表情でたたずむのみであった。

内田訓導は、児童から縁故者の住所を聞き出し、自分で送り届ける積りでいたが、たちまちどうすることもできず、帰ったその日は焼残った東警察署に泊った。翌日から早速活動を開始し、遠くは矢野町・祇園町まで縁故者を尋ねて、やっと児童の引渡しを終った。

父兄や縁故者全部を失った三年生男子児童一人は、川西村の疎開先の善立寺に養子として引受けられ、僧侶の修業をすることになった。

疎開地主任小丸訓導が、疎開地から帰広してきて、はじめて諸事務に当ることになったが、荒廃した校舎やその環境は、連絡にも適当でないと判断し、大手町国民学校・竹屋国民学校とともに連絡事務所を、第三国民学校(現翠町中学校)においた。

十一月に入って、坪田教頭が出勤できるようになって、事務所を当校の三階おどり場に移し、校長代理として開校の準備に着手した。

しかしながら、一階は県医療団が事務所をおき、また治療所も併置しており、二階は薬品統制組合と県衛生課が全部を使用し、三階の一部は薬品倉庫として使われていた。これら諸団体へは、その後、再三立退き交渉をしたが、当時としては容易に目的が達せられなかったのも無理からぬことであった。

その上、学区内には居住する市民もなく、極端な食糧不足、建築材料並びに資金の枯渇、真実味をもった七五年間は居住できないという風評など流れ、居住者を寄せつけない問題ばかり山積していた。このような中で、昭和二十一年六月になり、やっと開校の運びとなった。当日登校した児童は三七人、教職員は三人である。開校を知らせる方法は、教職員が自宅から持参した紙に開校する旨を書き、弁当の一部を糊の替りにして、焼け石や塀に貼りつけて連絡方法とした。登校児童が少ないのは、学区内に居住者がごく僅少のためであるが、後には、市周辺部に寄寓している児童も開校を知って、遠くから通学するようになり、次第にその数を増した。教職員が少ない理由は、生存者の少ないことは無論ながら、市内に教職員が居住しようにも住む家がないのと、教職員各自の事情によっては、勤務する学校を何処に選んでもよいという内諾を、当局から得ていたため、市内の学校に奉職するものが少なかったためである。

いざ開校はしたものの、教室は荒れ放題で、教具・教材は一物もなく、その日から教職員の努力で、すべてを造り出さなければならなかった。各自が硯・墨・筆を持ち寄り、板を探してきて墨を塗り、焼釘を石で打つなどして黒板を作り、ムシロを敷きつめ、その上に石炭箱を並べて、机の代用とするといった急造教室を造り上げた。

教科書や学用品についても、到底意の如くならず、縁故者や疎開先から教科書を借用したり、教職員が知人や教え

子を尋ね廻って寄贈を受けたりして、一冊の本をグループを作って共用した。裏の使っていない紙があれば、それを綴ってノートの代用とし、時には教職員が学用品を買歩き、それを児童に分けて、学習の助けとしたこともあった。このような状況下では、まともな授業など、到底できないことであった。

第三項広島市幟町国民学校...67

(現在・広島市立幟町小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市幟町四二番地
校長 * 寿治
教職員 三人
児童 一、三〇〇人(推定)
校舎 木造二階建・四一教室・建坪延一、四一九・五坪
敷地面積 四、三二三・〇五坪
爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十一日	山県郡八重町	一人	二二人	七四五人	
	" 壬生町	六	一三人		
合計		一六人	三五人	七四五人	

三、学徒動員状況

被爆当日は動員令による出勤はなかった。

四、指定避難先

泉邸・西練兵場などと思われる。

五、校舎の使用状況

西寄りの校舎上下二〇教室に、広島地区第一特設警備隊(中国第三二 三七部隊・部隊長山内二男磨大佐・隊員約三人)が駐屯していた。

また、八月六日朝八時ごろ、建物疎開作業隊の第二特設警備隊(中国第三二 五七部隊・部隊長大原静雄中尉・通称世羅部隊)が、この学校で編成されることになっていて、駐屯地世羅郡東大田村から予備の召集兵三〇五人が出て来たが、集合場所を大手町国民学校に変更した旨の貼紙を見て、また、その方へむけて歩いて行った。

なお、この日、建物の強制疎開に関して、市職員・町内会長の会議が開催される予定になっていた。

六、当日朝の学校行事予定

この日、校内の作業をおこなうため、一部の児童を集めることにしていたが、前夜から警報がたびたび発令されたため、集合時間を午前八時半に延ばした。従って、原子爆弾炸裂時の在校者は、教職員二人・児童二〇人で、ほとんどの者は、まだ自宅で食事中か、登校中であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

学校は爆心地から約一・一キロメートルの所にあり、校舎は全壊全焼した。

原子爆弾炸裂の一瞬、爆心に面して横長く建てられていた校舎は、強烈な爆風に吹きとばされて崩れ落ちた。崩壊した校舎はたちまち発火し、数時間後には焼けつくした。その余燼は、八日にたってもまだくすぶっており、駐屯していた兵隊はほとんど全滅した。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人	不明	登校中、または自宅で食事中の児童が多数死亡したが、その実数は不明である。
重軽傷者	—	二人	
計	—二	二人	児童即死者数含まず。

校庭にいて被爆し、火傷した者は、学校から北方約四〇〇メートル先の浅野泉邸(縮景園)や約三〇〇メートル先の西練兵場方面に避難したようである。

泉邸内に避難したことは、児童の遺品が落ちていたり、生存者の話などによって知ることができるが、その後、どうしたかについては判らない。

校舎内において倒壊建物の下敷きとなり、重傷を負いながらも脱出した者の中には、下柳町の電車鉄橋付近や京橋川に避難した者もあり、夕方救出されて、近くの東警察署に収容された者もあった。

また、安芸郡府中国民学校の臨時収容所に送られた者もあったが、意識を取戻してから、自宅の方向へ帰っていった。しかし、応急手当のいかなく、家にたどりつくまでに絶命した者も少なくなかった。

八、被爆後の混乱

前夜来の警報続出で、いつもより少し遅い時刻に、臺寿治校長は牛田町の自宅から歩いて出勤途上、大須賀町を通り上柳町へ至る栄橋を渡ったとき、原子爆弾の炸裂に遭遇した。強烈な爆風に吹きとばされ、飛来物を全身に受けながら、そばの川に避難したが、学校のことが心配で川からあがった。しかし、そのときすでに周囲は火炎に包まれていて、前進できず、やむなく市中からの避難者と共に、何が何やらわからないまま東練兵場にたどりついた。ここから尾長町西山根の松本道樹訓導の家に行ったが、ここではじめて自分が頭部から背筋にかけて、まっ赤に血を浴びていることを知らされ、応急手当を受けた。衣服もボロボロに裂けていたが、たまたま来合わせた加藤夫妻から服を借りて着かえた。

臺校長は、なお、教職員や児童の身の上が案じられ、じっとしていることができず、正午ごろ、皆の制止をきかず松本宅を出た。途中の橋の所で、警備員に「死に行くようなものだ。」と、とがめられたが、校長のバッチを見せ、「わしは死ににゆくのだ。」と言ってゆずらなかつた。警備員は臺校長の頭から水をブツかけ、鉄兜に水を入れて持たせ、通過を許可した。鉄兜の水を頭にかけて、火炎おさまらぬ中を、まるで言うようにして進んでいった。

川ばた伝いに橋本町の明神さんの付近に来たとき、川の中から「校長先生ッ!」と、呼ばれた。その声は、幟町校の女子訓導であった。一人ではどうにもならず、また、逃げて行く人が手を貸してくれるはずもない。「すぐ来る。」と待たしておいて、東警察署に行った。東警察署も大混乱の最中であったが、ようやく担架を借りて川岸へいき、力いっぱい引っぱりあげ、片方誰も上げる者のない担架を引きずって、ようやく警察署へたどりついたが、もう午後四時になっていた。

この頃、西条町から傷痍軍人療養所の救護班が同署に来援していて、負傷者の治療にあたっていたので、救出した女子訓導の応急手当をすることができた。署員の努力で焼けなかった東警察署内には、たくさんの負傷者が収容されていて、六日夜、臺校長は、ここにいて寝ずの看護にあたった。

七日早朝、比治山多聞院にいた飯俣庁が、ここに移ることになり、女子訓導をはじめ他の収容者は、おおむね安芸郡の府中国民学校臨時救護所に送られた。

午後五時ごろ、臺校長は学校の状況を知りたく、その焼跡に行ったが、目前には灰燼に帰した跡だけがあった。ちょうど有事に備えて以前から、味噌・醤油・塩・茶わんなど校庭に埋めていたので、罹災者に掘り出して配ろうと思い、棒を拾って掘りかけたとき、ポーツと意識を失って倒れた。誰が助けてくれたか、かかえられて我れに帰った。夜、牛田の自宅にたどりついたが、家は焼失していた。同町ながら山に近く、焼けなかった知人の別荘に行って、その夜はとまった。

これより前、臺校長は尾長町西山根の松本訓導宅を、幟町国民学校の臨時連絡所に定め、教職員や児童の状況調査にあたることにしていたが、七日には、疎開先から急報に接して今田親人・浅井茂生両訓導が連絡に帰って来た。

被爆から数日後、一応混乱もおさまりはじめた頃、牛田町二丁目宮田宅に、幟町国民学校仮事務所を設けて、積極的に状況探査を開始した。疎開先からの連絡もしげくなり、便宜を考えて、元の学校に近い浅野泉邸内に移った。泉邸内には、多数の避難者が残っており、軍の建てた応急タンバラックの一部を使用した。

ここに、比較的軽傷の教職員が集合し、死傷児童の調査や疎開児童の保護者の探査・連絡をおこない、防空壕その他に分散疎開していた焼残りの帳簿・備品などの回収・整理をして、早くも、学校再建の準備に着手した。回収した

疎開荷物は一応日光にあてて乾したが、校門に立てる大きな日の丸の旗を、散乱した廃材の上にひろげると、そこだけが取残されたように新鮮で、ひどく目に沁みだした。

八月十五日、終戦になると、集団疎開児童の引揚げ問題がおきた。その保護者が直接疎開先に出むいて引取って行った者もあったが、大部分の児童は、九月三十日に教師の引率で引揚げた。途中、児童たちは可部町大林国民学校で一泊しただけで、ずっと徒歩で励ましあいながら帰って来た。

帰って来た児童は、あらかじめ教職員が保護者や縁故者などに連絡をつけておいた者だけであって、引取人のない児童は、疎開先の八重町(現在・山県郡千代田町)に集めておき、教職員が連日縁故者を探して歩いた。

その間、縁故者の方から連絡があつて、引取られていった児童もあったが、たいへんな辛苦のすえ、ともかく十月中には残らず引渡すことができたのであった。

なお、被爆二日目に設置された比治山国民学校(大破)の迷子収容所が、十二月二十三日、佐伯郡の五日市戦災孤児育成所に移ることになったが、育成所は、まず幟町国民学校の分校として発足し、同校から斗栴正主任・同良江、藤原各訓導が出向して、収容児三〇人の教育を担当し、涙ぐましい努力を続けた。

比治山国民学校迷子収容所および五日市戦災孤児育成所の当時の状況に関する斗栴良江の記録(第五巻参照)は、「頬に穴のあいた子」、「ひし型のよもぎ餅」など、人間愛のあふれた感銘深い追想が、数多く記されている。

ちなみに、昭和二十一年四月現在の育成所収容児数は、次のとおりである。

幼児の部																育成所 卒業生
年齢	四	五	六	七	計	学年 年齢	初一 八	二 九	三 一〇	四 一一	五 一二	六 一三	高一 一四	高二 一五	計	
男	一人		二	三	七人	男	三人	五	五	六	五	四	五	三	三五年	一人
女	一人	二		一	五人	女	二人	二	四	四	四	五	六	一	二八人	一人
計	二人	二	二	四	一二人	計	五人	五	九	一〇	九	九	一一	四	六三人	二人

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆の大混乱もややおさまった九月初め頃、学校を再開することに決し、罹災者の中から選ばれた世話役・教職員・児童の父兄などが集って、再開対策を協議した。

その結果、前述のとおり浅野泉邸内に軍が建てた応急バラックを使って、さしあたり授業を開始することになった。授業は青空教室であったが、バラックには罹災者らが生活していたし、集団疎開児童も引揚げて来ることになったので、至急に受入れ態勢を整える必要に迫られた。

臺校長は、東洋工業株式会社に仮住いの県庁に汗を流してたびたび通い、学校跡に近い上流川町の広島中央放送局を借用することになった。鉄筋コンクリート建の放送局も外郭だけの残骸であったが、青空教室よりは幾分かましであった。みんなで局内の大清掃をし、机・腰かけ・黒板などは、旧軍隊の払下げ品で、牛田国民学校にあった物を運搬し、十月五日からここで授業をはじめた。

この時の児童数は次のとおりである。

学年	初一	二	三	四	五	六	計
男子	五人	二人	五人	一人	四人	一人	三六人
女子		一	九	七	三	七	一四人
計	五	三	一四	一七	七	一四	六〇人

このように仮教室で授業を続ける一方、学校の再建を考え、校舎復興資材として、三滝ほか二か所の旧軍隊兵舎の解体材を譲り受けることになったが、運搬は一つ一つ自力でやるほかになく、まったく骨の折れる作業であった。しかし、折角運んで帰った資材は、見張りをしていても次々に盗まれていき、校舎の再建に至らなかった。

このような苦労を重ねるうち、こんどは放送局が避難先から帰ってくることになったので、急ぎ対策を練り、年のあける早々、二十一年一月、袋町学区内である中町の中央電話局を借りることに成功し、寒風の中をみんなで器材をせせと運びこみ、ここに移転した。

この間、当局に対して交渉を重ね、同年五月、焼野原の学校跡に帰って青空教室を続けながら、バラック建ての校舎建設に着手することができた。

七月十五日、待望のわが校、一〇教室(うち二教室は事務室・宿直室・物置などに使用。)と便所一棟の計二五九坪の竣工をみ、ようやくジブシー教室から脱したのであった。

昭和二十三年二月、広島市立幟町小学校復興促進委員会が結成され、同年五月に復興資金三〇〇万円の募金を開始し、同年七月に移転新校地が決定された。続いて同年十月、第一期工事起工式を挙行し、いよいよ本格的な復興にか

かった。

なお、職町校は全壊全焼一五校のうちの一校で、全焼を免れた他校のように昭和二十年九月三日の開校はできなかったが、その後の急激な都市復興にともない、児童も比例して増加の一途をたどり、常に教室不足になやまされ続けた。

時 点	児童数	増築年月	増築概略
昭和二十一年四月	二六一人	昭和二十一年七月	バラック建八教室 ほか二室
二十二年四月	六三〇		
二十三年四月	九七〇	昭和二十三年九月	バラック建二教室増
二十四年四月	一、三〇五	昭和二十四年二月	新校地に木造二階建一三教室新築
同 年十月	一、六二三	同 年十月	一五教室増築し、全児童新校舎に移る

被爆直後の授業では、疎開中の教科書を使用し、不足の本や文具は教職員や父兄がそれぞれに集めて来て使用した。

第四項広島市中島国民学校...77

(現在・広島市立中島小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市水主町一二〇番地
校長 伊藤一義
教職員 約二〇人
児童 概数八 人
校舎 木造二階建・七四教室
敷地面積 約二、五〇〇坪
爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集 団 疎 開 概 数			縁故疎開者概数	備 考
	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十三日	双三郡三良坂町(六か所) 双三郡吉舎町(二か所)	一五人 四	二一〇人 五	約五四 人	
合 計		一九人	二六 人	約五四 人	

広島市中島国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先

緊急の場合の避難先につき、学区内の住民避難先に指定されていた佐伯郡原村方面(当校の西約一五キロメートル)を、学校児童の避難先とし、保護者と共に行動することを指導していた。

五、校舎の使用状況

学校付近には、県庁・武徳殿・日本銀行宿舍・県立広島病院などの建物が並び、これらの建物保護の目的からも周囲の民家および学校は家屋疎開の対象となった。そのため、被爆前の校舎は、講堂・宿直室だけを残して他の全校舎を疎開解体中であった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業 (職員朝会で当日の打合せ中)	一 人	少数		午前七時九分、警戒警報が発令されて、一旦解除になったが、児童の登校者は少なく、また登校していた児童の中には、家にかえった者、親が引取りにきた児童もあって、被爆時

に在校児童は少数であった。

当時の学区内分散授業所(四か所)と、児童の通学区別は次の通りである。

- (一) 学校の講堂 = 四・五・六年生児童の残留組
- (二) 住吉神社 = 水主町・吉島町の三年生以下
- (三) 慈光説教所 = 吉島羽衣町一・二丁目、吉島本町の三年生以下
- (四) 誓願寺 = 中島・天神町付近の三年生以下

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から南南西約一・一キロメートルで、校舎のほとんど大部分(講堂と宿直室は残る)は、家屋疎開の対象となり、解体工事が進められて、その材木が運動場、ならびに空地に、山と積み重ねられていた。取残されていた講堂と宿直室は倒壊して、三、四〇分後には猛火に包まれ、集積した材木および倒壊建物が大火災となったが、消火のすべもなく、全焼してしまった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	三人	一人	
重軽傷者	五	不明	
行方不明者	二	不明	
計	一〇	一 (即死者のみ)	

炸裂と共に講堂(職員室及び教室に使用)が倒壊したため、教職員と登校していた高学年児童は、下敷きとなり負傷したが、警戒警報まもないことで児童も少なく、ほとんどの者が倒壊講堂からはい出ることができたと思われる。猛火の中で親を求めて泣く者、先生・友だちをおたがいに呼びあう者、親が子供を探し求める声などで大混乱となり、手のほどこしようもなかったが、児童は親に渡したり、近所の人に保護をたのんだりして、残留者のないことを確認してから、負傷した教職員は西へ西へと避難し、ある者は本川土手を南に下って飛行場方面に、またある者は住吉橋を渡って、江波方面や己斐方面へと、それぞれ避難した。

八、被爆後の混乱

当日の在校児童はわずかに高学年児童のみであり、そのほとんどの者が倒壊校舎からはい出してきた。負傷者は住吉神社の当校分散授業所に収容して、応急手当をしてから家庭に帰した。ともかく、校内にいた児童に対する緊急措置は、惨状の中にも、どうにかはたすことができた。負傷教職員は、猛火に包まれた倒壊校舎に残留児童のいないことを確認したのちに避難したが、そのとき即死した者についての確認まではできなかった。

被爆後の校地跡や周囲には、建物の土台・防火壁などの残がいが、あちらこちらに残っているだけで、疎開させてあった防空壕内の重要書類も完全に焼けて、灰しか残っていない状態であった。また、負傷教員も原爆症にかかって床についたきりなので、学校機能は完全に停止した。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、爆心地から南南西約二キロメートル離れた吉島刑務所の南側(吉島本町一・二丁目)の一部焼跡に、仮小屋を建てて居住する人がぼつぼつ現れはじめたのみで、学区内の大部分は焼野原と化し、人影もなく対策の施しようがなかった。そのうえ、焼失した中島国民学校は廃校同然であったから、児童は舟入国民学校に通学することになった。また教員は校長宅(市内古田町高須)で、学校復興対策について会議を重ねたが、原爆症で倒れる者がつぎつぎに現れはじめて軌道にのらなかった。しかし、その後、十月十五日に疎開先から職員および児童の引揚げがあり、また出征職員の復員もあって、漸次健康な職員が増加するにおよび、機能の充実がはかられて、ようやく授業開始の準備が進められるに至った。

すなわち、学区内で焼失を免がれた吉島本町二丁目の土井正一宅、岡金吾宅ならびに吉島一丁目の永尾いさお宅、土井準一宅の協力を得て、納屋の二階などを借用して、これを仮校舎にした。ムシロ・古ゴザなどを敷き、長台を机の代用として準備ができたから、児童数約七五人くらいを三学級に編成し、職員は原爆症で治療中の者(五人程度)を除く五人ぐらいで、十二月一日から、授業を開始することができた。その後、児童もぼつぼつ増加したが、雨が降る日や、寒い日には休校することも多かった。また学用品や教科書などについては、焼失を免れたごく一部の地区およ

び疎開先から帰ってきた児童が所持していたものを共同で使用したが、授業の内容も充実したものはできず、教科書を中心に読み書きや計算練習を進める程度のものであった。

戦いのころと中島小学校

北川まち子

「次は中島小学校前でございます。」市内に住みついて六年、ここを通るたびに窓外に目をやるのが習慣になった私である。暮色せまる校庭に長い影を落としている校舎、フツと涙を覚えてくる。それは二十年前のちょうど今ごろ、太平洋戦争も末期で一億総玉砕とまで追いつめられたころである。私たちの小学校(双三郡吉舎町敷地国民学校)にこの中島小学校児童の一部が学童集団疎開をしてきたのである。第二宿舎となったお寺は私の家と近く、何かにつけて接する機会が多かった。当時、私たちもわけもわからぬ緊迫感にヒシヒシとしめつけられて運動場や野山の開墾作業に精出していた。

都会の子供たちにできるはずがない。私たち土地っ子と疎開っ子はときおり子供らしい対抗意識がつき上って衝突した。しかしすぐ仲直りをしては広島のこと、彼らの家族のことをきかせてもらっていた。私は〇さんと特別親しくなり家によんできたかったが寄宿舎で禁じられていた。当然のことである。母が野菜入りむしパンを作ったときこっそりあげようと学校に持っていったが、先生や他の友だちに知れたときのことを思うと恐ろしくて渡せなかった。

数カ月たって広島に原爆が落とされた。全滅だということだった。本川と中島がもっともひどいときいた。私は子供心にも何を話していいのかわからず、以前のようにはしゃぐことができなくなった。児童の引率者だった寺田・松田両先生の胸中はどんな思いであったろうか。秋風が立ちそめるころ、皆市内に帰っていったが、松田先生だけはそのまま残って、いなかで何年か教べんをとられた。それ以後文通した友だちもなく、消息は絶えてしまった。帰った友だちの中で、はたして何人が家族と手を取り合えたことだろう。またそれからの長い年月がどんなに苦しくかわしかったか。中島小学校の前を通るとき、また PTA でもないのに学校行事に参加したとき、疎開してきた六〇人の友だちを思い浮べては胸がうずくのである。

(昭和四十年六月四日付 中国新聞所載)

[第五項 広島市大手町国民学校... 84](#)

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市大手町八丁目
校長 伊藤 幸
教職員 三九人(うち事務員二人・看護婦二人)
児童 一、 八二人(男五三六人 女五四六人)
校舎 木造二階建四棟・三〇教室・延八四〇坪
木造講堂一棟・一三五坪
木造附属建物・四〇坪
敷地面積 二、七五一坪
爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、校史概要

校史概要

(一) 明治四十四年三月、大手町八丁目に以前からある中島尋常小学校分教場(大手町七丁目・八丁目・九丁目・小町・国泰寺村共有)の隣接地一、四六〇坪九五七を買収し、これに五か町村の共有地三六九坪一四を合併して学校敷地とし、同年四月に校舎の起工をおこない、同六月に竣工した。

広島市大手町国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

敷地総坪数 一、八三〇坪九七
 校舎坪数 二階建三一〇坪
 平家建一五一坪七五
 土地買収費 二六、九四〇円八二
 土地埋立費 一、二九五円一三
 校舎建築費 二〇、二〇七円五四
 合計 四八、四四三円四九

竣工した六月、中島尋常小学校訓導植木愨太郎が、本校の訓導兼校長に任ぜられた。

引続き七月十二日、開校式を挙行した。

職員数 校長ほか二〇人
 児童数 男六三五人
 女五七一人
 計 一、二〇六人
 学級数 二二

(二) 歴代校長と在任期間

代	校長名	年限	在職期間
一	植木愨太郎	九年	明治四十四年三月から大正九年四月まで
二	梅田金平	二年一月	大正九年五月から大正十一年六月まで
三	三宅高二	六年一月	大正十一年七月から昭和四年五月まで
四	神田省二	五年一月	昭和四年五月から昭和十年三月まで
五	入沢満喜恵	三年一月	昭和十年四月から昭和十三年四月まで
六	伊藤一義	三年	昭和十三年四月から昭和十六年三月まで
七	伊藤 幸	五年二月	昭和十六年四月から昭和二十一年五月まで

(三) 最後の終了式

昭和二十年三月二十五日、初等科三六回(一九五人)高等科二一回(三五人)の修了式を挙式、これが最後の終了式となった。

本校創立以来の卒業児童数六、七五四人、最後の本校児童在籍者数は、男五三六人、女五四六人計一、八二人である。

三、学童疎開状況

学童疎開

昭和二十年三月十六日、閣議決定に基づいて発せられた通牒(広島市・呉市学童疎開強化要項)により、広島市内各校とも学童疎開が実施されることになった。

本校は父兄会と協議のうえ、広島市から指定された比婆郡山内川北村、および同高村の二か村へ、昭和二十年四月三日から集団疎開をおこなったが、その状況は次のとおりである。

(一) 学年別学童疎開状況

類別	学年性別	初	二	三	四	五	六	高一	高二	計	合計
		一	三	五	七	九	一	三	五	七	
残留児童数	男	五一	三七	二〇	二五	四〇	三八			二一一	四六八人
	女	五七	二三	二七	三三	三〇	三六	三三	一八	二五七	
集団疎開児童数	男			二二	三一	三〇	四七			一三〇	二〇二人
	女			一〇	一九	一六	二七			七二	
縁故疎開児童数		三八	八四	九六	四三	七〇	四七			三七八	三七八人
合計		146	144	175	151	186	195	33	18		1,048人

(二) 学童疎開実施状況

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月三日	比婆郡山内川北村	四人	八八人	三七八人	
同 四月十二日	" 高村	五人	一一四		
合計		九人	二二人	三七八人	

右表の明細は、つぎのとおりである。

(山内川北村への疎開状況)

- 一、川北寮(公会堂)...付添教員 宮原幸一
児童、三年四人・四年三人・五年六人・六年一人 計二四人
 - 二、勝光寮(勝光寺)...付添教員 樋口量子
児童、三年一人・四年七人・五年八人・六年六人 計二二人
 - 三、田川寮.....付添教員 渡辺富美
児童、三年四人・四年九人・五年六人・六年七人 計二六人
 - 四、瑞泉寮(瑞泉寺)...付添教員 長尾正一
児童、三年三人・四年四人・五年四人・六年一〇人 計二一人
- 以上合計 付添教員四人
児童九三人

(高村への疎開状況)

- 一、世尊寮(世尊寺)...付添教員 溝岡芳人・柴崎君江
児童、三年五人・四年一三人・五年九人・六年一九人 計四六人
 - 二、黎明寮.....付添教員 香島キヨコ
児童、三年九人・四年三人・五年二人・六年七人 計二一人
 - 三、西念寮(西念寺)...付添教員 織居義枝
児童、四年六人・五年四人・六年一三人 計二三人
 - 四、龍福寮(龍福寺)...付添教員 柿本泰生
児童、三年五人・四年五人・五年一〇人・六年四人 計二四人
- 以上合計 付添教員五人
児童一一四人

なお、寮作業員として、山内川北村には大久保芳枝・桑原芳枝を、高村には溝岡美代子・柿本栄子を常置した。

四、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内雑魚場町	二人	四五人 (高一・二年生女子)	疎開跡片づけ	

五、指定避難先と経路

空襲の際には、校内の防空壕(昭和十九年九月築造・収容人員一 人位)に待避するか、状況によっては自宅に帰らせることにしていた。

六、校舎の使用状況

第二一特設警備隊(世羅部隊)の編成にあたり、幟町国民学校から大手町国民学校に、その集合場所が変更になり、八月六日朝、その隊員約三〇〇人が、続々と集合しつつあった。但し、被爆時には、まだ到着していなかったかとも思われる。

七、当日朝の学校行事予定

授業を予定していたが、前夜空襲があったので、午前十時に開始することになっていた。なお、建物疎開作業に出動する学童は、早朝から集合することになっていた。

八、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

原子爆弾の炸裂と同時に、全校舎は倒壊し、周囲からの火災によって、すべて跡形もなく焼きつくされた。

なお、学校備品のうち、理科機械など高価な品ものは、特別に防空壕に入れて保管してあったが、防空壕の上部が爆風によって吹きとばされ、内部の物は微塵にこわれてしまった。

(二)人的被害

学校には、六日当日、学徒報国隊を引率する教師が、五日夜から宿直しており、早朝から出動のために登校していた児童一四、五人と共に校内で被爆した。

他の教職員や児童は、まだ登校していなかったから、そのほとんどは家庭内か、あるいは登校途中で被爆したの
と思われる。

伊藤校長は、学童疎開地を数日視察し、八月五日に田部正夫教頭と交代、夜行列車で広島に帰って来た。

その旅装を解くまもなく警戒警報が発令されたので、ただちに学校にかけつけて警備の任にあたった。他の職員も
登校し、それぞれの部署を守ったが、六日明け方になって警報解除となり、一応自宅に帰っていた。

当時は、前夜中に警報発令があった場合、翌朝の登校時刻(通常八時)を十時にしていたが、勤労作業に出るものは、
職員・児童ともに別行動であったから、六日も早朝から登校していて被爆した。

被爆状況については、建物疎開作業に出動のため、五日夜から宿直していた山崎満寿子訓導が、負傷の身にペンを
執って伊藤校長に報告した手紙が唯一のものであって、次にその手紙(伊藤幸所持)をかかげて被爆状況の記録とする。

(手紙)

校長先生には、その後お身体のご様子は如何でございますか。学校の様子諸先生のご様子を心にかげながらも失礼
ばかりして居ります。私も丁度宿直(八月五日)でございましたし、それに受持ちの子供の事もございまして、一度く
わしくご様子申し上げねばと思っておりますが、別にどこという大した事もございませぬのに、身体がはっきりしませ
ず、食欲もすすまず困って居ります。昨日も、四、五日前も登校するつもりで、横川までは参りましたものの、沢山
のひと暑さのために目まいが致しまして、学校へ行く事もならず帰って参りました。

本当に今頃のこと、校長先生を初め、諸先生方みなお身体がお悪いのに、おしてご登校の事と思ひ相済まなく存じ
て居ります。もう二、三日、明日にでも身体さえはっきり致しませば、登校致しまして教育の道につとめさせていた
だくつもりで居ります。何とぞよろしく願ひ申し上げます。

手紙を持たせませす子供は、災害の日、私と共に逃げた子供で、未だ肉親の者がみつからず、私の家に居る者でござ
います。今一人の石丸初美と申す高一の子供は、八月十六日仁方の親類へ送りました。この子供(木田キタヨ)も二、
三日の中には、親類と連絡がとれるようになって居ります。

災害の日の様子は、お会い致しまして申し上げさせていただき、簡単に書かせていただきます。

作業に七時半頃つれて出るつもりで、子供の数を数へましたところ、一四、五人でございましたので、今少しと待
って居りました。子供の全部は、運動場の樟の木陰で遊んでいましたが、木付・小林・山本(全部高一)の三人は水の
み場の方に離れて居たとか申して居ります。私は大下先生と共に炊事場に居りました。私は頭からうづもりまして、
はねのけて出るまでには、かなりの時間をとりました。あちらこちらに火が燃えていたと思ひます。子供はと思ひま
したがる、校舎は倒れ、だれも見えませぬので、炊事場より外に出て、門の所まで行き、市役所前に行きました。高一
子供(木田・石丸・井上・天野)の四人が、先生と言って寄って来ました。他の人はと聞きますと、高二の子供や他の
人は最早や逃げたと申しますので、私は四人の子供と共に飛行場に逃げました。大分行きまして前(註・水呑み場の子
たち)の三人の子供の事を聞きますと、あの人達の顔は市役所の前では見なかつたと申しましたが、今更火の海、如何
ともすることが出来ず、心にかげながら逃げました。

七日朝、井上・天野はそれぞれ母親が親類の者に渡し、学校まで帰って見ましたところ、三人の子供らしき死体が
ありますので、本当に親達にも校長先生にも申訳なく思ひ、自分の助かった事はずかしくさえ思ひました。

それにしても他の子供はよく逃げてくれたと思ひます。

私の家に来た子供を思ひ出すだけでも、高二久保・尾川・上川・松原・松浦・辰重・広島など皆何のけがもなかつ
た様です。

重要書類は、解除になりましたので校務室まで持ち帰っておりまして、全部焼けたことと存じます。

早々に報告すべきでありましたが、父の葬儀にとりまざれ延引致しました。(以下略)

この手紙を書いた山崎訓導は再起ならず、十数日後に、原爆症状を起してついに死亡した。また、六日当日、疎開
作業出動のため、登校途中で被爆した柳田静子訓導は即死であったが、その後の調査で本人の自宅も全焼し、父・母・
姉も死去していたことが判った。

死亡した三人の児童のうち、一人は父兄が確認した。それは、ワンピースのバンドのところだけが焼残っていたの
で、それをほどいて、服の柄で判明した。他の二人の児童の遺骨は、田部教頭が自宅に持ち帰って安置していたが、
昭和二十六年、父兄が学徒動員の証明を受けた田部教頭宅を訪ねて来たとき発見して持ち帰った。なお、大下訓導は、

下敷きから脱出でき、負傷はしたが助かった。

この日、講堂に集まっていた消防団員数人が、下敷きになったまま、全員死亡し、その遺骨が円形になったまま発見された。講堂の前には、数台の自転車がねじまがり、折りかさなって焼けていた。

児童被害状況（被爆当時の調べ）

学年		一	二	三	四	五	六	高一	高二	計	総計
死亡	男	三人	二	五	一	四	三			一八人	三五人
	女	二人	一	一	三	二	三	三	二	一七人	
行方不明	男	二人	一		二	〇	一			六人	一六人
	女	一人	一	一	〇	二	一	二	二	一〇人	
連絡不能	男	一一人	二八		七	一〇	五			六一人	一六五人
	女	一八人	一八	一〇	二〇	八	三	一七	一〇	一〇四人	

右表のうち、六日朝、建物疎開作業に出動のため、学校に集合していた者、あるいは集合の途上で被爆した者、その他在校中被爆した者の状況は、次のとおりである。

区別	教職員	児童	備考
即死者	一人（三）	校内（四）人 登校中（一）	教師は柳田静子、登校中に被爆死亡。
重軽傷者	四（二）	校内（一二、三） 登校中（二）	教師山崎満寿子、十数日後に死亡。
行方不明者	〇	四	被爆後、連絡後、連絡不能で生死未確認児童一七一人。
計	五（三）	四（約四）	

（ ）内は動員関係である。

九、被爆後の混乱

大手町国民学校区域の惨害は、あまりにもひどかった。区域内は一軒の例外もなく、建物はすべて焼きつくされた。それだけに、人的被害も徹底的なものであった。生残った人ひとりとして、区域内にいるものはなく、みんな市外に逃げていった。

そのころ、焼跡には肉親や縁故者が、人探しや屍体探し、遺骨掘りなどのため多く出て米っていたが、そのような幾日かが過ぎてても学校を訪ねる人がなかったことは、惨禍の甚大さを物語るもので、他地域にはない現象であった。

それだけに取残された疎開の子どもに与えた影響は大きく、そのあと始末に教員の苦労はなまいたいていのものでなかった。

戦災による孤児と引取り困難な家の児童一二、三人は、十二月十九日に疎開先（川北寮へ集まっていた児童）から、市当局の指示により、佐伯郡五日市町の戦災孤児育成所に、松原貴美子訓導が引率して行き、収容された。なお、松原訓導は、引続き、育成所の職員になってとどまった。

疎開児童視察先から急遽帰広した田部教頭は、八日、学校焼跡に「大手町国民学校仮事務所」と紙に書いた看板を掲げた。そして、父兄との連絡を取ることに全力をあげると同時に、被害の状況調査をおこなった。しかし、九月になっても、依然として区域内に帰住するもの續はほとんど無く、容易に開校のメドはたたなかつた。

一時閉鎖

市当局は、諸般の状況を考えて、当校を一時閉鎖し、事情好転にともない復校するという方針をたてた。

九月末および十月末には、教員の希望により、市内または郡部転任の措置をとるとの指示があり、ここに一応の仕切りをつけて、校長および教頭がその残務整理をすることになった。

「残務整理」

- 一 校具に関するもの
- 二 簿冊に関するもの
- 三 疎開地に関すること
- 四 保護者会会計に関すること
- 五 学校関係諸団体会計に関すること
- 六 職員転勤に伴う慰労金に関すること

以上の六項目にわたって、調査と整理をおこない、学校関係については市当局へ、その他のことについては、生残った少数の保護者役員と接渉して、学校閉鎖の結末をつけたのである。

保護者会およびその他各団体会計

収入金合計 四、〇一六円六五銭

(内訳省略)

支出の主なるもの

職員慰労会の補助 五四四円

職員児童戦災追弔会費 八〇六円

疎開地の整理費 二九〇円

保護者理事会費 五〇〇円

残務整理雑費 三三二円六〇銭

職員転退職慰労金 一、五四四円〇五銭

なお、焼残り簿冊類は千田国民学校に保管した。

第六項 広島市広瀬国民学校...98

(現在・広島市立広瀬小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市広瀬北町一丁目

校長 妻沢 襄

教職員 二五人

児童 概数三六〇人

校舎 木造二階建・二八教室

敷地面積 不明

爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月二十一日	双三郡酒河村(三か所)	四人	約二〇〇人	約一五人	
	双三郡川地村(一か所)	一			
	双三郡板木村(三か所)	三			
合	計	八人	約二人	約一五人	

広島市広瀬国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
大橋製靴工場	市内 三篠町四丁目	二人	約四人	軍靴のこんぼう 運搬 材料の整理	当時、出動した生徒 は高等科の生徒

四、指定避難先と経路

(一) 学校から北広瀬橋を渡り、中広町を通過して山手方面に避難する。

(二) 学校から横川橋を渡り、打越方面に避難する。

五、校舎の使用状況

南側校舎(二階建)一棟は、第二特設警備隊(通称三二三八部隊・隊長は陸軍中佐諏訪他一郎)に貸与されており、その他、給食室も炊事に使用された。兵隊は約六〇人くらいが交替で駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
授業実施予定 八時二十分に朝礼を始め、 八時三十分から授業を開始 して、午後二時五分に終 了予定、十二時から午後一 時まで休暇	一五人	約五 人	第二特設 警備隊約 六 人	当校高等科の生徒は学徒動員により出勤中。 当日授業予定は疎開しなかった三年以上の残 留組であった。 また、一・二年生の低学年児童は学区内の広 島別院・広瀬神社での分散授業を実施してい た。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況……全壊全焼

当校は爆心地から北西約一・一キロメートル離れており、原子爆弾炸裂と同時に、一瞬にして校舎は壊滅したが、二階校舎は外側にむかって倒壊したため、登校中の児童で、外で遊んでいた者の大半が下敷きとなり、多数の犠牲者を出した。その後、火災は瞬時にして、南側隣接民家に発生したが、消火の手もないままに大火災となって、次から次へと延焼し、ついには当校も、この猛火につつまれて灰燼に帰した。しかし、校舎の炎上から全焼するまでには、相当の長い時間を費した模様である。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	七人 八 〇	約三七人 不明 約一〇〇	被害者の中には登校中の児童、家庭にあ った児童、動員に出ていた生徒全員を含 む。ただし、動員学徒については女生徒 八人が死亡したことははっきりしてい るが残りの学徒のことは全く不明である。 なお、広島市立造船工業学校専攻科の生 徒一五人が、広瀬国民学校の防空要員と して応召して被爆死亡した。
計	一五	約一三七 (判明分)	

始業時刻は、午前八時二十分であったが、朝礼が一〇分間ほどあり、授業開始は八時三十分からであった。また当日の授業は、集団疎開しなかった三年生以上の残留組児童が中心であり、その他、疎開のない低学年(一・二年生)児童は、当時、分散授業(学区内の広島別院と広瀬神社)を実施中であった。

職員室にいた教員は、炸裂と同時に、その爆風で校舎西裏の天満川土手に吹き飛ばされたり、崩壊校舎の下敷きとなって即死した者もあった。また階上裁縫室で、大火鉢の下敷きになり、助けを求めながら焼死した女子教員もあった。

家庭で遊んでいた児童は、放射熱線で火傷したうえ、爆風に吹き飛ばされて死亡した者、また二階校舎が外側にむかって倒壊したため、その下敷きになって即死した者もあったが、負傷しながらもどうにか逃げのびた者も何人かあり、その児童は天満川を渡り、中広町から山手町方面に、または横川橋を渡って祇園町方面に逃げて、その後、安佐郡古祇園の嚶鳴国民学校に収容された者もいた。

炸裂の一瞬、倒壊校舎の下敷きになって、即死した者や焼死した者以外で、火傷姿のまま、逃げだした者は、その大半が西裏の天満川に入り、また土手の陰に身をよせて、火災の静まるのを待っていたが、ほとんどがその場で死亡した。その後の死体調査では、大半の死体が、強力な熱線で焼かれたうえに、あの大火災にあいながらも、各々負傷者は、猛火をさけながら避難していた関係か、半焼け状態の者が多く、氏名の判別できない者がほとんどであった。家族の引取りのない死体については、警備隊兵士の生存者と、教員生存者の話を聞いて、児童の性別や氏名をできるだけ判断してから火葬にしたが、黒こげ胴体だけの死体の判別は、ほとんどできなかった。火葬にした遺骨は、一時的に己斐町の寺院に保管を依頼した。

なお、南側校舎に駐屯中の兵士の中にも多数の即死者や焼死者を出し、校舎焼跡には、半焼け死体が転がり、その周りには銃・鉄かぶとが積み重なって、凄絶な光景であった。兵士の死体も児童と同様に、引取り手のないまま火葬にした。

八、被爆後の混乱

校舎は一瞬にして倒壊し、また完全に焼失してしまい、教職員七人は即死、その他八人が重傷を受けるなどの大被害であったため、機能も指揮系統も完全に停止の状態に陥った。当日、授業実施のため、登校した児童も全滅状態と

なり、また低学年(一・二年生)児童は広島別院・広瀬神社で分散授業を実施中であったが、大惨事のさなか連絡はとれず、その被害も調査できず、何もかも全く死の世界をさまよっている状態にあった。そのため、原子爆弾炸裂後に、集団疎開地から教師一人が被爆者の状況把握と、一応の連絡に帰広したが、何処に連絡してよいものやらわからず、とりあえず、校庭内にあった警備隊の地下防空壕に連絡員を置き、児童や教職員の連絡にあたることをきめた(連絡所開設は八月十日ごろ)。しかし、焼跡では仕事が不自由であり、調査も困難であるため、八月二十日ごろから市内己斐国民学校の教室一隅を借りて、広瀬国民学校の事務所を開設した。調査事務は、生存教員と疎開地引揚げ教員とであたり、主に被爆児童の状況調査と、疎開児童の引渡しなどの仕事に当たった。なお、集団疎開の引揚げ事務などに関しては、被爆負傷した校長及び教頭も旬日後に死亡したため、疎開地の上席教員がこの仕事を完了したのであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

一面の焼野が原にも、月日の経過と共に生存者が復帰しはじめ、バラックの住居が建ちはじめた。十一月ごろから何よりもまず第一に教育機関の設立をという声があり、広瀬国民学校の復興運動の声も町内会有志の間で協議されるようになったが、同じような協議が隣接の本川学区内でも起っていた。そのため、同じやるなら二学区が協力して復興しようということになり、さしあたって、外郭だけでも焼残った本川国民学校の内部を整理し、昭和二十一年二月二十三日に広瀬・本川両国民学校として再開された。両校は合同し、被爆後はじめて授業を開始したのであるが、児童数は約六三人(一年生から高等科二年生の全員)程度で、教員は両校の生存教員数人で授業にあたった。当分は焼跡の整理や、疎開していた机・腰かけなどを持ちかえったりすることだけに追われた。そして、窓もない校舎での授業が始まったのである。なお、教科書はほとんど疎開先で入手したのものを使った。

第七項広島市神崎国民学校... 105

(現在・広島市立神崎小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市河原町
 校長 小松百合男
 教職員 五〇人
 児童 概数四二〇人
 校舎 木造二階建・三三教室延一、一〇八・五坪
 敷地面積 二、二九二・五坪
 爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月三日	山県郡吉坂村	八人	一八〇人	一、八〇人	楽王寺・公会堂 安養寺・明覚寺
昭和二十年四月五日	山県郡本地村	四	八〇		専教寺 浄楽寺
昭和二十年四月七日	山県郡南方村	四	八〇		光雲時 浄徳寺
合計		一六人	三四〇人	二、八人	

三、学徒動員状況

出勤なし

四、指定避難先と経路

当時、学校内には数か所の防空壕が作られて、警戒警報・空襲警報発令の場合は、学校長指揮のもとに避難誘導をおこなうように日ごろから訓練していた。

五、校舎の使用状況

昭和二十年六月ごろから陸軍部隊(名称不明)が外地出動に備えるため、当校に集結し、約三週間位駐屯した後に、宇品港へ出発していたが、一回の駐屯兵数は大体一〇〇人程度であった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	七人	約二五人	-	学区内には、当時、学校の外に三か所の分散授業所があり、ここでいう在校教職員数は授業所全体の人数である。児童数は学校一か所の登校人数である。

なお、学区内分散所(四か所)についての児童通学区域は次の通りである。

場 所	分散授業所名	児童の通学区域
舟入町 小網町 学校 舟入本町	みはらし湯の二階 三光寺 学校 称専寺か永光寺	上河原町・舟入町・舟入仲町の東・西 小網町の南・北・西新町・西地方町 下河原町・舟入仲町東・舟入本町東 舟入仲町西の一部・舟入本町西

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から南西約一・二キロメートル離れており、原子爆弾の炸裂時には一瞬にして、二階建校舎は倒壊してしまい、炸裂時までに登校していた児童(約二五人)の大半が下敷きとなって、即死する者、ある者は重傷を負ったままの姿で脱出することもできず、焼死した者もあって、物的にも人的にも多大の被害を受けた。倒壊校舎や学校周囲の全壊民家からは、炸裂後、瞬時にして火災が発生したが、消火のすべもなく猛火はすべてをなめつくし、正午ごろまでには校舎も民家も完全に焼きつくされた。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	三人(一)	一七人(不明)	()内は、学校外での被爆者数
重軽傷者	四	一〇	
行方不明者		不明	
計	七 (一)	二七 (判明分のみ)	

原子爆弾炸裂時前に登校していた児童約二五人は、宿直室に近い校舎の西南階段(おどり場付近)でほとんどの者が被爆し、倒壊校舎の下敷きとなって幼い命を断ったものと思われる。

炸裂当日の学校には、宿直員三人と現業員一人が校舎内にあり、その中の教員一人は、炸裂の一瞬に職員室で圧死し、また一人の教員(秋山訓導)は倒壊校舎の下敷きとなっていたところを、校長によって助け出され、付近の鈴木別邸内に運びこまれて、命はとりとめた。その時の話によれば、校舎倒壊の一瞬、腰部を強く打ち、一時は気絶していたが、気づいた時には、既にカーテンが燃えていたとのことである。炸裂下、混乱と恐怖ばかりで、救援隊などによる救出作業が全く無くて、下敷きとなった登校児童の、大部分についての状況もはっきりしないが、倒壊校舎や周囲の民家からの出火が早く、その上、消火活動のないままに、猛火は急速に広まっていったから、ほとんどの児童が焼死したのではないかとと思われる。しかし、倒壊校舎から這い出した数人の児童は、現業員(既に病死)の手によって助けられ、鈴木別邸の庭まで誘導されて、応急手当をうけた。

当時、広島市内の各国民学校では人的被害を最少限度におさえるためにも、集団疎開の実施や、学校以外に学区内の数か所に分散授業所を設け、集団疎開をしない残留児童(ほとんどの残留児童は二年生以下の低学年児童)を分けて授業をしていた。当校も学校の他に三か所の分散授業所があり、各々分散所には二、三人の担任教員と、平均約六、七〇人ぐらいの児童が区分されて、学習が進められていた。被爆当日、各分散所に出席していた児童は約三、四〇人程度であった模様である。しかし、各分散所も爆心地に比較的近く、炸裂時には大惨事をまきおこした様子で、全壊建物の下敷きとなった児童には、多大の死傷者が出た。

八月十二日ごろになって、生残った父兄らが、消息不明の子供をたずねて訪れて来るようになり、遺骨の引取りや、生死についての捜索がはじまったが、保護者たちは子供の通学分散所は知っているが、学校側では、誰が何処へ当日出席していたかについては皆目不明であり、捜索にも非常に困難した。

八、被爆後の混乱

学校は全焼し、人的にも多数の教員及び児童を失ったため、学校機能は完全に停止の状態となり、疎開先から連絡に帰校した教員も、ただ学校長と話合う程度で、対策措置などについては、何ら具体的な計画もなく、市当局(学務課)の指示で再度疎開地に帰って行くといった有様であった。

終戦と同時に、保護者の中には勝手に疎開地に出向き、児童を連れ帰る者もあり、また被爆保護者で、疎開地へ児童を引取りに行き、その地で治療を受ける者もあった。身寄りを失った疎開さきの児童は、最後に山県郡本地村の専教寺を集結場所としていたが、十月十九日、全員で帰校してきた。

十一月一日、全職員は、事務所に当てられた第二国民学校(現在・観音中学校)に集合して、学校対策について協議した(その後、小松校長は十二月に家庭の都合で退職したので、山王璋首席訓導が中心になり、対策協議が進められた)。こうした結果、昭和二十一年一月はじめに、学校焼跡内の東側空地を整理したうえ、廃材によるバラックが建てられたが、校舎として使用されず、被爆者の治療所として、また学校の運営などに関する連絡場所に使用された(後には、連合町内会の配給品受け渡し場、または町内会連絡所として使用された)。

そこで、校舎のない状態の当校は、同じく全焼した広瀬国民学校・本川国民学校の授業体と一緒に、本川国民学校校舎で授業をはじめることになったが、児童数は約六〇人程度であったから、山王璋首席訓導・山崎斌訓導・秋山ミチ子訓導の三人が本校職員として残り、他の職員は配置転換や集団疎開先であった田舎の学校で、そのまま奉職することになった。

なお、被爆によって校舎は全焼したが、校庭の一部が緊急整理されて、応急救護所が設けられたので、被爆者は約一か月間、電車江波線の路上にもムシロなどを敷いて、治療と生活を共にしていたが、後に本川国民学校内に設けられた救護所内に集結された。

九、学校再開の状況

学校の再開

原子爆弾炸裂後の二学期開始ごろ(九月の初頭)は、学区内には住民もごく少なかった。八月の終りごろから二、三戸のバラックが建ちはじめ、九月には、七、八戸ぐらいで、十月から十一月にかけて、約二五戸ばかりが、焼野が原の中に散在していたにすぎず、教育も放任状態であった。ようやく、第三学期にたつて本川国民学校で授業が開始されるといった状況であったが、その後、広島市に都市計画が生まれるにつけ、復興対策委員会の構成がなされ、委員長(当学区内居住者海部恵一郎)を中心として学校復興に力がそそがれた結果、校地拡張と移転変更が実現した。しかし、校地が決定しても、校舎の建設や学校機能についての問題が定まらない状態で、なかなか軌道に乗らなかった。

昭和二十五年四月一日、ようやく、広島市立神崎小学校として再発足し、校長以下職員一二人が就任した。しかし、未だ校舎もなく、学区内の児童も本川小学校及び舟入小学校に通学している状態であったから、新しい一年生の受付は、本川小学校と舟入小学校の両校でおこなった。その後、昭和二十五年九月八日に新校舎(現在の河原町二一三番地)が完成したので、はじめて自分たちの学校で授業を開始することができたのであった。

[第八項広島市天満国民学校... 112](#)

(現在、広島市立天満小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市天満町五三六番地
校長 堀川一真
教職員 四六人
児童 概数六七〇人(疎開児童は含まない)
校舎 木造二階建・四三教室・延一、三一五坪
敷地面積 三、 坪
爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十八日	佐伯郡砂谷村	六人	一八 人	約五 人	
	佐伯郡水内村	五	一五		
合 計		一一人	三三 人	約五 人	

広島市天満国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
建物疎開作業	小網町	三人	九 人	建物疎開の跡片 付け	高等科一・二年生全 員

四、指定避難先

- (一) 小網町土手広場
- (二) 北榎町電話局前広場など

五、校舎の使用状況

当時、陸軍大国部隊約三〇〇人が駐屯しており、この部隊に貸与されていた校舎は、講堂と南側の校舎(階下四教室及び階上五教室)の計九教室であった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
分散授業 本校 隣保館 中広町の寺 小河内町の寺 横堀町説教所	八人 一 三 三 三	約一五人 約一〇 約一〇 約一〇 約一〇	大国部隊 約三〇〇 人	(一)始業前のため正確な数は判明しがたい。 (二)大国部隊の被爆状況は不明。
計	二一人	約五五人	約三 人	

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から西北西約一・二キロメートル離れており、原子爆弾炸裂の一瞬、校舎は全壊したが、学校からは火の手はあがらなかった。しかし、学校の南側民家から、炸裂後瞬時にして火災が発生し、消火する者もないまま、火災は急速に広まっていき、午前九時過ぎ、当校南側校舎に燃え移った。学校は一日中燃え続け、午後九時ごろになっても北側校舎の一部には、まだ燃えている所もあったが、ともかく全校舎は完全に焼失、灰燼に帰ってしまった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	一二人(三)	二八 人(九〇)	()内は学校外(動員先)での被爆者数
重軽傷者	二	三九〇	
行方不明者			
計	三二 (三)	六七〇(九〇)	

炸裂直後は、一体何が起きたのかもさっぱりわからず、その上、一時、真暗となって一寸先も見えなかった。しかし次第に明るさをとりもどすにつれて、建っていた校舎はなく、下敷きになって助けを求める声、火傷を受けて校庭に倒れている者などが識別できるようになった。倒壊校舎の下敷きから自力で脱出した職員数人は、事の重大さに気づき、急ぎ児童の救出にかかったが、教員ら自身が皆負傷し、身体の自由がきかず、材木の下から救いを求める声をたよりに、一本一本の板切れや材木を取去るような救出方法しかできなかった。苦心のすえに、ようやく七人ばかりの児童が助け出され、動ける者には一刻も早く家に帰ることを指示した。そのうち、火災は広がり、方々に火の手が上って学校も延焼しはじめたので、互いに助けあって避難したが、校庭には数人の子供が動けなくなっているのが見られた。その後、校舎の焼跡からは教員および児童の遺骨六体が発見された。早く避難した児童は、己斐町や草津方面の郊外に逃げていったが、逃げ遅れた者は、川に飛び込み、岸や流木にとりすがって死んでいった者が多かった。

なお、駐屯部隊の被害状況は判っていないが、甚大な打撃を受けたであろうことは察せられる。

八、被爆後の混乱

被爆により、校長・教頭および教員のほとんどが死亡または重傷を負って、勤務できる教職員は四人にすぎなかった。また、学区内には、家屋らしいものはほとんどなく、生残った児童たちも、現在、何処に住んでいるのか、皆目わからなかった。学校としては、市内各所に立札を立てて、児童父兄との連絡をつけることに努めるのが、主な任務となった。また、集団疎開児童を引揚げ、学校再開の見通しを立てることも必要であったから、疎開児童の生存父兄を探しだして、児童引取り方を願った。その結果、漸次児童も引揚げ、十一月の引揚げを最後に、疎開も終わったが、引揚げた児童の中には、家族が全滅し、引取人がなく、原爆孤児となった者が一人あった。これら児童は、比治山国民学校の迷子収容所へ送った。学校は完全にその機能を停止した。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆の惨禍により、各所に避難した児童やその父兄との連絡が容易にとれず、開校の運びにはなかなか至らなかったが、焼跡、その他各所に立札をして、「天満国民学校は九月十五日より己斐国民学校において授業を開始する。なお、学校登校が不便な者は最寄りの学校に行け。」と、指示した。

九月十五日、己斐国民学校の講堂を借りて、授業を開始したが、当日出席した職員は四人、児童は約三〇人程度であった。その後、疎開児童の引揚げや、児童数の増加により、間借授業の不便さから、昭和二十一年六月、焼跡にバラックではあるが校舎が建築されて、新しい出発をしたのである。

被爆による全壊全焼から、学校の再建まで、次のように苦難の道程を経た。

昭和二十年九月十五日、市内己斐国民学校を借りて授業開始。職員四人・児童三〇人程度

昭和二十年十月 市内高須町真宗光明団を借りて授業

昭和二十一年三月 天満国民学校の焼跡にて青空教室

昭和二十一年五月 本川小学校の教室を借りて授業

昭和二十一年六月 バラック校舎二教室を東側校舎跡に建築して本校に帰る。

昭和二十一年九月 バラック校舎五教室を北側校舎跡に建築

なお、学用品・教科書の入手などについては、教職員、児童および保護者の相互扶助・創意工夫によって、困難を乗り越えることができた。

[第九項広島市観音国民学校...118](#)

(現在 { 広島市立南観音小学校
{ 広島市立観音小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東観音町一丁目
校長 玉木 知
教職員 三三人
児童 一、六一七人
校舎 木造二階建四三教室延七三六坪
敷地面積 三、四八二坪
爆心地からの距離 約一・四キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十三日	比婆郡東城町五か寮 八幡村一か寮	教員一六人 寮母二	三七二人	六五人	

	久代村一か寮 田森村一か寮	作業員一五			
合 計		五一人	三七二人	六五 人	

広島市観音国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

該当なし

四、指定避難先

家屋の密集度が少ないため、いつも警戒警報発令と同時に家庭に帰宅させていたので、特に避難先は指定していませんでした。

五、校舎の使用状況

該当なし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	一六人	約三五 人	-	分散授業をおこなっていたので、本校への登校者は限られていた。

分散授業がおこなわれていた収容区分は、次のとおりである。

- (一) 在校児童 = 東観音町一丁目区域の低学年及び五・六年児童全員
 - (二) イ 西高等女学校
 ロ 大師堂
 ハ 練成所会館
- } その他の区域の低学年児童

七、被爆の惨状

被害状況

- (一) 校舎の被害状況...全壊全焼
当校は爆心地から約一・四キロメートル離れた地点にあり、爆発と同時に校舎は倒壊し、全焼した。
- (二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	一二人	七四人	
重軽傷者	不明	不明	
行方不明者	不明	不明	
計	一二 (判明分)	七四 (判明分)	

児童が朝礼を終え、教員の指導が始まったばかりのとき被爆した。玉木校長は、午前八時、二階の校長室に入り、来客と対談中、ピカッと光った。「やりおったな」と、校長が言ったとたん、大爆発が起き校舎が倒壊し、その下敷きとなった。「私にかまわず、児童を、児童を……、天皇陛下万歳」と唱えながら玉木校長は死んだ(下川正一談)。

校舎内にいた一部の児童は、崩れ落ちる校舎の下敷きとなった。太い木材が幾重にも折れ重なり、身動きできなかった。

これを救出するにも、多数の人力と、機械力が必要であった。その上、時間的余裕もなかった。児童は口々に、父や母を呼び、先生に助けを求めて泣き叫びながら、まもなく、猛火に包まれてしまった。

また、校舎の外にいた者にとっても、異常な爆発、倒壊する校舎、下敷きとなる児童を眼前に見て、驚天動地の衝撃であった。無傷の者、または負傷者のうち比較的軽傷の児童はただちに下校させ、そのほかの者は、たずねて来た家族に引取られて帰宅した。

八、被爆後の混乱

下敷きをまぬがれた児童の中にも負傷者が大勢いたが、校舎が倒壊して、医薬品を取出すことができないし、手当をすることもできなかった。まずは火の手が町中に廻らないうちに帰宅させることが、先決であると考え、自力で帰ることのできる者は帰宅させ、帰ることのできない者は父兄の引取りを待つことにした。

校舎は全焼し、学校長以下教員一〇人のほか事務員・使丁を失い、町内の民家もほとんど焼失し、生存児童も家族

と共に各地に避難して連絡がとれず、学校の機能は完全に停止した。

疎開児童もまた帰るに家なく、家族や親戚などの引取りがあるまで、引続いて疎開生活を続行した。

九、学校再開の状況

学校の再開

南観音町南端(現在・観音新町)の三菱青年学校は、爆心地から約三・六キロメートル離れていたため、建物の被害程度も比較的軽く、応急の修理をすれば使用可能であることが判明した。ただちに三菱青年学校に交渉して快諾を得、九月十五日応急修理に着手した。

ところが、肝心の生存児童の大半は四散し、疎開児童も大部分が疎開先に残留している有様であった。そこで残存児童の実体を把握すべく、九月二十日、第二国民学校(現在の観音中学校)に集合を命じたところ、約四五〇人が集ったから、学校再開に対する見通しをたてることができた。そして十月に入るや学校の存続が決定され、第二国民学校(現在の観音中学校)を借りて開校式を実施した。

昭和二十年十月五日授業再開

学校長.....職務代理 木村孝一

児童数.....約五〇〇人(月末七七一)

学級数.....二二学級

元三菱青年学校校舎を本校とし、第二国民学校(現在の観音中学校)の一部を間借りして分校とした。

児童の教科書や教材はまったく乏しく、文部省発行のパンフレット型の教科書を、数人に一冊の割で使用したり、使用済用紙を各方面から寄贈してもらい、裏面に前記教科書を騰写して代用した。

第十項広島市竹屋国民学校...124

(現在・広島市立竹屋小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市竹屋町字二の割

校長 間賀田琢爾

教職員 二五人

児童 約六〇〇人

校舎 木造二階建・四一教室

敷地面積 四、三九五坪

爆心地からの距離 約一・五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十二日 より 昭和二十年十一月十五日 日まで	山県郡加計町 安野村 戸河内町 筒賀村 殿賀村	一五人	四〇人 四〇 一三 四五 四五	三五人	
合計		一五人	三人	三五人	

広島市竹屋国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

- (一) 爆撃の際.....防空壕
- (二) 校舎火災の際.....運動場
- (三) 状況に応じて.....学校の東方約八メートルの比治山公園に避難する。

五、校舎の使用状況

陸軍部隊が駐屯する予定になっていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
平日授業	一人	八〇人	一人	集団疎開しない低学年か、残留児童で、学校まで遠距離の地区の者については、近くの寺・説教所を分教場として授業をおこなっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

- (一) 校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地の東南約一・五キロメートルの地点にあり、原子爆弾炸裂により、校舎は倒壊し、その直後ヨの字型に建っている校舎の、爆心に直面する西側(校舎配置図～の部分)から発火した。この部分は火気の全くない所であるから、熱線による自然着火と思われるが、奉安庫および玄関車寄せを残して全焼した。竹屋地区で最も早く火の手が上ったのは当校であるといわれている。

- (二) 人的被害

校舎外にいた児童は全員即死、または重傷を負った。

職員室とその東隣り校長室・衛生室とは、煉瓦造りの防火壁で隔てられていたが、その倒壊によって衛生室にいた光成選造教頭は圧焼死した。職員室・使丁室にいた職員のうち四人は圧焼死し、他の職員は延焼前に脱出した。このとき築地訓導らが全壊の北側校舎から児童二〇数人を救出した。しかしその後は、校舎のすぐ北側の道路は比治山への通路で、多くの避難者がこの道を東へ向って走っていたから、在校被爆者もこれに合流するなど、生存者は四散し、その実態は把握できないことになった。

後日の検分によれば、前記衛生室前で圧焼死した光成教頭の遺骨の傍には、明らかに、その側に走り寄って、共に圧焼死したと思われる児童の折り重なった遺骨が発見された。築地訓導らによって救出された児童以外の、多くの児童が脱出不能のまま、焼死したものと思われるが、詳細は不明である。

分散授業所の一つであった円隆寺(とうかさん)焼跡には、登校児童のものと思われる遺骨数体が点在していた。

区別	教職員	児童	備考
即死者	五人(五)	五人(一五)	()内は、学校外での被害者数
重軽傷者	六(八)	三〇(一三〇)	
計	一一(一三)	八(二八)	

八、被爆後の混乱

学区・校舎ともに壊滅し、学区内居住者もなく、職員も大部分被災者であったから、学校の機能はほとんど失われた。焼残った玄関車寄せの壁に、焼炭で来校者氏名や伝言を書いて連絡方法とする措置がとられたほか、特別な措置はとり得たい状態であった。

被爆の前月、すでに退職願を提出していた賀賀田琢爾校長は、当日朝、警報解除後、いったん吉島町の自宅に帰っていたから被爆死を免れたが、教頭以下の死亡その他負傷などにより、職員組織のほとんどが破壊されたため、退職命令が発令されぬままに、郷里の賀茂郡志和村の自宅から、週二回程度出勤して、引続き校務を担当することになり、玄関車寄せの壁を利用して、連絡所をつくり執務した。

職員のうち、自宅が市内にあって、家も半壊程度ですんだ石富訓導が、だいたい隔日に、この連絡所に出勤していた。また連絡のため、月一同程度の全員会議を開いたほか、随時、連絡・情報交換のため立寄る程度であった。こうしたうちにも、生残りの職員によって校地内の遺骨を拾集して遺族に渡し、十一月に、連絡のつく限りの関係者が参集して、形ばかりの慰霊祭をおこなった。

集団疎開の児童も、ほとんど孤立の状態となっていた。疎開地主任の高井訓導は引続き児童を疎開地に残留せしめ、まず帰広して引取人の存在を確かめ、引取人があれば、そのつど引取人のある児童を、疎開地から広島へ引率して帰る

という方法で、疎開児童の帰広を計った。こうして、児童の引渡しは、確実におこなわれたのであるが、最後に残された児童に至っては、遠く東は福山市、西は山口市までおもむいて、引渡しをしなければならない有様で、引揚げの完了したのは、十一月十五日であった。

十一月、車寄せの連絡所を取払い、第三国民学校(現翠町中学校)に事務所を移した。

十二月、間賀田校長の退官発令が確定した。その後、職員も逐時転勤・退職して、僅かな職員がますます減員してゆき、わびしい職員構成になった。翌二十一年四月以降、事務室を大手町国民学校などとともに、袋町国民学校の一隅に移し、高井訓導が校務取扱者として校務・残務に当たった。

その年十月以降は、高井訓導も袋町国民学校への転勤が決まり、しかもなお竹屋国民学校の校務取扱者として兼務するなど、竹屋国民学校には学校活動はなく、昭和二十五年四月に再興されるまで、完全に学校は閉鎖されたままであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

前記のとおり学校は閉鎖されていたが、昭和二十五年に至ってやっと開校の運びとなった。昭和二十三年、竹屋小学校復興促進委員会が結成され、初代会長に任都栗司を推し、まもなく安田寿夫が第二代会長となり、復興促進運動が活発に展開された。

昭和二十五年に至って、学校再開が本決りとなり、四月一日、現在地において鍬入式が挙行され、校舎建設工事に着手したが、これは学区を挙げての喜びであった。こうして事務所を袋町小学校から竹屋保育園に移し、教職員三十五人が配置され、一年生は寺院・竹屋保育園・柔道場を臨時教室として授業を受け、二、六年生は千田小学校に、三、四、五年生は幟町小学校に、それぞれ間借りして授業を受けた。

同年五月、四教室が完成するや、これを一、二年生の教室に決めて、二部授業をおこなった。同年七月第一期工事完成と同時に、全員竹屋小学校校舎において授業を受けるようになった。

第十一項 広島市白島国民学校... 130

(現在・広島市立白島小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東白島町
校長 小林宇一
教職員 四四人
児童 八七一人
校舎 木造二階建・三三教室・建坪五〇四坪
敷地面積 延坪二、六一一坪八五
爆心地からの距離 約一・五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十四日	安佐郡 亀山・大林・飯室・鈴張四 か村及び亀山西分校 (一説に三入村を含む)	一二人	二九人 (一説に約五人ともいう)	不明	
合	計				

広島市白島国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	鶴見町	一人	男・女 六七人	疎開跡片づけ	八月五日に男子三六 人出動済み

四、指定避難先

白島地区内の広場

連絡先は市役所または県庁

五、校舎の使用状況

昭和二十年一月から被爆まで軍隊がいたが、部隊名は判らない。

当時、白島校では、学童疎開残留組の五年六年および高等科の生徒が、本校正面校舎の二階の一部で授業をおこなっていた。一、二年、および三、四年はそれぞれ町内の寺院に分散授業がおこなわれ、学童の大部分は安佐郡の諸所に疎開していた。空室になった教室は、戦時体制に切替られ、外地出征の軍隊が寄宿していた。

これら軍隊の出入りを見ていると、まるで広島が戦場であるような感さえした。一部隊が出征したあと、山のように積まれた塵、その片づけに教室に入った者は、黒くなるほど足にしがみついて来るノミを恐れたものである(土田訓導手記)。

なお、専売局用の塩二〇俵が、ご真影を疎開したあとの奉安殿に保管してあった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
授業	不明(五人以上)	約三人ぐ らいか?	不明	一、低学年は分散授業で、登校中か、家庭にいた 二、高等科二年は、建物疎開に出動。

七、被爆の惨状

被害状況

校舎は、原子爆弾の炸裂と共に崩壊し、熱線による自然発火で全焼した。

学校内では、土田康(旧姓三角)著・「げんばく記」によると、炸裂下、教室にいた兵隊たちが、飛び散った廊下から下の土台に寄りかかりながら、地面に坐ったそのままの姿勢で、ほとんど即死に近い状態で、「逃げないと火が来ますよ。」と言っても、なんの応答もなく最後のわずかな生命を苦しんでいた。また、一方では、屋根がとび摺鉢状に地面に叩きつけられた教室の中で、二〇数人の男子児童が、口々に「お母さん」と叫びながら、両手を挙げて、四方の壁ぞいに一列になりながら、グルグル駆け回っていた。その瞬間からすべての思考力と判断力を奪われた子らは、イワシがたらいの中を游泳するように、ただ同じ個所をグルグル走り回っていたところを、土田訓導が倒れた柱をハシゴにして登るようと、声をかけて、やっと柱づたいに這いあがって来て、逃げだすことができた。急に元気を取りもどした子どもらは、すぐさま風の中の灰のように散っていった。子どものいなくなった教室からは、無気味な臭いのするガスが立ち昇っていた。

この日午前八時、鶴見町の建物疎開作業に高等科二年生の男女六七人(引率者田崎アキ工)が出動した。田崎訓導が竹屋国民学校に到着したことを連絡に行く途中で被爆、現場に引返してみると児童の姿は一人もなく、被服廠方面に逃げた者、また比治山下を流れている川に難をのがれた児童も何人かいたようであるが、六七人が全員死亡したものである。なお、田崎訓導は一命を拾った。

人的被害としては、全体で、校長小林宇一、および現業員一人、児童は約一〇〇人が即死。教職員二人、および生徒一人が負傷した。このほか児童の行方不明が多く、総人員はつまびらかにしない。

八、被爆後の状況

学校で被爆した人々で逃れる力のある者は、白島東中町通りを北上、あるいは長寿園土手から川上に向い、工兵橋を渡って祇園町・原村へと指して行った。

七日朝、大芝町の自宅で被爆したが被害のなかった山本訓導が、校舎の焼跡を訪ねて待機していたが、誰も来るものがなかった。

十日ごろ、重傷で安芸郡府中町に避難していた土田訓導が校舎をおとずれたとき、校内の奉安殿の前に、関係者連絡簿が石で押さえて置いてあった。移動先の欄には、各人の寄寓先の住所氏名が書かれてあり、死亡者の欄に小林校長の名があった。確認という字が一きわ大きく目に見えた。以下同文で死籍に名を連ねている知人の中に、土田訓導

自身の名があり、びっくりして抹消、「生存」と大書した。

奉安殿の横の壁には、瞬間的な熱閃光により、垣根の鉄柵の影がくっきりと焼きつけられており、ペンペン草の影を写した屋根瓦、人影を残したコンクリート壁など、奇妙な映像が見られた。

土田訓導が被爆した正面校舎の、左側半分の焼跡には、無数の白骨が、誰のものとも区別もつかず、貝がらのように白く砕けてあたりを埋めていた。校庭の中央に涼しい日陰をつくっていた大柳も、枝をみな焼きはらわれていた。その下に構築されていた防空壕から、死体がはみ出しており、腰には一振の軍刀が、生前を誇示するようにさがっていた。

校舎の土台石には、地蔵尊を浮彫りにしたように、人の影がならんで焼付けられていたが、炸裂直後すでに死線にうめいていた兵士たちの、変りはてた姿であったようである。

いうまでもなく学校の機能は停止し、対策措置とてなく、まったくの壊滅であって、防衛計画で指定されていた応急救護所にも使われなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月末、焼跡もようやく秋づいて来たが、校舎再建の手がかりは、何もなかった。資材もなく、人手もなく、また頼るべきものもなかった。

九月上旬、牛田国民学校に生存児童を集合させて授業を再開した。そして、学童疎開で難をまぬがれた児童たちも帰って来て、これに合流した。再開当時、教員は四二人、七教室を使用した。児童数は牛田国民学校児童と混合していたため不明である。学用品や教科書は児童各自が探して、他から借り集めて来た。

この間、市の学務課や市議会では、白島校を廃校にするという意向に傾いていたが、教職員はもとより、大横田義雄など地元有識者らの何としても再建したい熱意と努力によって、翌二十一年二月に旧校舎跡地の一部に板張りの仮校舎を建設し、ここに復帰した。この再建に際しては、児童たちも地区内の焼跡から、煉瓦を一つ一つ運んで来るなど、涙ぐましい協力を示した。

建築資材は、学校関係者の努力によって、解体した白島北端の工兵隊兵舎の建材をはじめ、宇品曙部隊・キ隊のバラック兵舎・三滝の陸軍病院などから無償払下げを受けたもので、工兵隊の残務整理隊長は、材料を運ぶための軍用トラックを寄贈した。市もこの努力に動かされ、一九万円の建築予算を計上し、板張りのバラック建てながら教室六、宿直室一棟、小講堂一棟が完成し、四月十八日、校舎落成式を挙行了したのであった。

その後、この東白島町の校地は、電通局にゆずり、広島城天主閣と堀を隔てる現在地に、一部が昭和二十四年十月五日に移転し、昭和二十五年九月五日に、全部の移転を完了した。

きのこぐも(抜粋)

土田 康

(当時・白島国民学校勤務、校内で被爆、旧姓三角)

一、八月六日

八月六日朝、夜来の空襲からやっと解放された私は、食事を済ますと勤務先である直ぐ前の、白島国民学校へと家を出た。

肩から救急袋と防空頭巾を掛け、手に皮のカバンを下げている私。市民の誰もがこんな服装をしていたのである。

校門に入る。警報解除で登校して来た子供たちが四〇人程学校にいた。当時白島校では、学童疎開残留組の五、六年と高等科の生徒が本校正面校舎の二階の一部で授業を行っていた。一、二年・三、四年は、それぞれ町内の寺院に分散授業が行なわれ、学童の大部分は、安佐郡の諸所に疎開していたのである。空室になった教室は戦時体制に切替えられ、外地出征の軍隊が寄宿していた。これら軍隊の出入りを見ていると、まるで広島が戦場であるような感さえた。一部隊が出征したあと、山のように積まれた塵、その片づけに教室に入った者は、黒くなる程、足にしがみついて来るノミを恐れたものである。私はこんな状態を見て、いつか戦争の末期的症状を感じていた。

この朝、学校内には前夜からの宿直教員(男)と使丁二人しかいなかった。私は二階の教員室で出勤簿に捺印し、自分の教室に戻ろうと廊下を歩いて来たその時である。微かに B29 の爆音を聞いたように思ったが、警報解除後の安堵感から、友軍機だろうと気にもとめなかったが、次の瞬間ピカッとものすごい光が目射た。それは燈々色の火の玉が落ちた様にも思え、雷鳴時の稲妻のようにも感じられた。日もくらむようなけわしい金属性の閃光は、何時も

訓練で見せられているエレクトロン弾の大型のものの炸裂のように思えた。ハッとして、思わず窓越しに校庭の角力場の幕が燃え落ちるのを見ると、私は夢中で目のコンクリートの水槽へ走り寄った。そして、そばのパケツを取ろうとした時である。地軸を揺るがすような爆発音と共に、全身を棍棒で打ちのめされたように、その場に叩きつけられた。体内の腸わたを吐き出すような苦しい圧迫感の中で、遠く校舎の崩れる破壊音を聞いていた。

もうろうとした意識のなかで、「死んでは大変だ、なにこれ位のことで死ぬものか。」と、気強く考え続けていた。

しかし、それも極く僅かな時間だったに違いない。そのうち頭の芯が、ジーンとしびれて来て、ついに意識がなくなってしまった。

何が動機でこうなったのか、また、どれ程の時間がたったのか解らない。私はふと不思議に気がついたのである。

目を明けてみるともうもうと立ち込める黄塵の煙で何も見えないし、息をする事もできなかった。締めつけられる様な苦しさの中で、自分の手や足が何処にあるのかさえ感覚的にはっきりしない。そのうち目が馴れて来たのだろう。

薄暗い光線を通して直ぐ下の手の届きそうなところに、階下にいた兵隊たちが枕を並べて倒れているのが見えた。「死んでたまるものか。」、私は定かならぬ自分にそう言い聞かせながら、その場を脱出しようと、全身に重くのしかかっている壁土を引っ掻きながら、やっと片手を抜いた。しかし起き上ろうとしても身動きが出来ない。何か大きな物体が私の上にあるのだ。コンクリートの水槽のようだった。その角が私の左の肩胛骨の上にある。わずかに自由のきくようになった右手を、胸の下にあてがい、満身の力といっしょに体をねじってみた。ドスン!鈍い響きを立てて背中の上の水槽が下に転落した。まだ何か胸に引っかかっているようである。丸太から出た五寸釘が、左乳の中央を突き通して、私を釘付けにしていたのである。そっと抜きとるように上体を起す。よく見ると、私が歩いていた廊下の踏板は一枚もなく、踏板の下にあった横木の丸太と丸太の間に胸と太股をかけて宙づりになっていたのだ。二階にいた私の位置は、地面から一、二メートル程の高さのところであって、一階にいた兵隊たちは、飛び散った廊下から下の土台石に寄りかかりながら地面に坐っている。

幸いに、私は足だけは傷つかず満足のように思ったので、必死に逃げることばかり考えた。やっと滑り降りると、下の兵隊たちを揺り起しながら言った。

「逃げないと火が来ますよ。」しかし彼らはなんの応答もしなかった。微かに呻きながら、断末魔の苦しみにあえいでいたのである。このおびただしい兵隊たちは、みな即死に近い状態で、最後のわずかな生命を苦しんでいる。外見からは大した怪我も見当らず、その表情さえ眠っているとしか思えない不思議な状態で、しかしもう反応さえ見せない程、切迫した死を迎えようとしていたのである。「逃げなければならぬ。」再びそう思い直すと、自由のきかない体を動かしながら、折れ重なった材木の隙間からさし込む光線を頼りに、やっと表に出ることができた。

その瞬間不思議な光景にあ然とした。晴天であった筈の空が、夕暮れのように鉛色に曇っている。見馴れた広島城もなければ、天守閣も消えている。見渡す限り建ち並んだ家がつぶれて瓦礫と化した街、私は事の重大さをその時初めて知ったのである。原子爆弾というものについて一片の知識も持たない私は、それが空襲の結果とは考えられなかった。恐ろしい天災地変がおきて、この世の終りが来たように恐れおののいた。

屋根がなく摺鉢状に地面に叩きつけられた教室の中で、二〇数人の男の子が、口々に「お母さん」と叫びながら、両手を上に挙げて、四方の壁ぞいに一列になりながら、グルグル駆け廻っていたのである。見たところ怪我をしている様子もない。一瞬の、想像もつかない恐ろしい力の一撃で破壊された教室、その瞬間からすべての思考力と判断力を奪われた子らは、鰯がタライの中を遊泳するように、ただ同じ個所をグルグル走り廻っているのだ。「その倒れた柱をハシゴにこちらへ出なさい。」そう叫ぶと、中の一人が声を聞きつけたのだろう。斜めに倒れている柱にまたがり、四つ這いに登り始めた。そのあとに続くように、先頭の子と同じ動作でゾロゾロ登ってくる。登りつめて四方の視野が開けると、急に元気を取戻した。そしてすぐさま、風の中の灰のように散っていた。子供のいなくなった教室からは、無気味な臭いのするガスが立ちのぼっていた。

二、脱出

このあたり(白島国民学校旧位置付近)の木造建築は、斜め上からの爆風で北側(爆心地より反対方面)に一間ぐらい、敷地よりはみ出して押しつぶされていた。屋根瓦が爆風でめくられて、その下のトントン葺きのソギ板が、路上一面に隙間なく散乱して、歩行を困難にした。はだしの足裏に、ソギ板についていた二センチ程の細い釘がささり、それが次々と重なり合って、足駄にたまる雪のように厚くなってゆく。

泣き叫び、必死に肉親の名を呼び求める阿鼻叫喚のなかを、私は夢中で我が家へ向った。

火事がおきたのだろう。あちらこちらの地面から煙がかげろうのように立昇りはじめ、炎がチロチロ舌を出してい

た。その中を何処へ逃げようとするのか、難民の群れが津波のように押寄せて来る。両腕が肩から一五センチ位のところで、もぎ取られた男が、滝のように流れる血潮をもともせず、それどころか、残された上部の腕を前後に振りながら大股で歩いている。髪の毛はベトリ血で前額にへばりつき、ギラギラ光る目と、口をカッとあけている姿は、仁王像そのままだった。私は人波にもまれ、押し倒されそうになりながら、一足ずつ引ずるように歩いた。

「先生！！助けて」という声が足元から聞えた。誰だか解らなかつたけれど、私を知っている人にちがいない。つぶされた家に五、六人の人がおさえられている。両肩からさきを出している婦人が手でさし招いていた。私は歩み寄ってカーぱいその手を引っ張った。簡単にスルスルと抜け出てくる。次に隣りの婦人を、そしてまた隣りをというふうに、何人かの人を引っぱり出したとき、私の力はすでに尽きていた。その時、もう一人両足を出してばたつかせている人に気がついた。最後の力を振りしぼって懸命に手を添えたが、どうしても出ない。手伝ってもらおうとあたりを見ると、今たすけたばかりの人が、もう何処にも見当らなかつた。

学校正門前まで来た時、私は昨日奉安殿に疎開の塩を入れて置いたのを思い出した。

爆風でこわれたらしい、半開きの扉のなかをソツとのぞくと、幸い袋の塩はそのままだった。手を入れるとむさばるようにその塩を掴み出して、首筋の傷口にぬりつけた。

止血剤のつもりである。そして、シミーズをさいてこしらえた繻帯に塩を包んで、それを首にあてがった。滲みも痛みも感じなかった。夢中で行なったこの応急処置が大変効を奏したらしいことを、後になって医師から聞かされた。

頸動脈近くからの出血がこの手当で、ぐんぐん減って楽になった。

正門前の自分の家へ来て見ると、潰された家の中に二、三人の家族が閉じ込められているようだった。呼んでみると応答があった。微かな光の奥に、白いシャツとパンツが見えた。助けなければならない。とっさにそう思って見たが、非力で、重傷を負うた体は、折れ重なった柱や建具を取除いて、助け出すことなど思いもよらなかつた。

ちょうどその時、大本営(広島城)の中から防護団と軍人の一団が出て来た。「助けて！」私はその中の一人にしがみついて頼んだ。「よし。」力強く返事してくれたその人たちは協力して、たった一押しで屋根の合掌をとり除いてくれた。「ありがとうございました。」そう言った途端に安心感から全身の力が抜け、失心状態で通信局の一メートルほどのどぶの中へ転落してしまった。

三、下水溝より

どれぐらいの時が過ぎてからだろうか。ドシンと重いものにぶっつけられて、フッと気がついた。私と同じように苦痛に失心した人が、道路から私の上に落ちてきたのである。すでに何人かの人が同じ形で落ち込んでいた。

下水に冷やされた頭は、今までの記憶を呼びさますのに、案外時間がかからなかつた。私に折り重なるようにもたれかかっているその人は、全身火傷で一皮むけ、真赤な肉の塊りと化していて、すでに呼吸困難にあえいでいた。

身体の表面からは黄色の液が吹き出して、汗の玉のようになっている。頭髮はチリチリに、顔は全面焼けただれて蜂の巣の如く、年齢も定かでない。私は恐る恐る下水溝の淵の石垣につかまって、首だけ地上に出して見た。

白島一円はすでに火が廻り、私の家も玄関のあたりから煙が吹き出て燃え始めていた。破壊された家屋から飛び散って、空を覆っていた土ぼこりが静まったのか、再び顔を出した太陽がガンガン照りつけるのと、火災の熱気で、地上は溶鉱炉のように、灼熱の地獄の様相を呈していた。その路上を直射熱光線にあてられたのであろう、一糸まとわぬ裸の行列が続いていた。光線を受けた片半面が焼けただれて、理科室の標本の体でも見るような人もいた。正面から焼かれて、顔全体がズルむけになり、その顔の皮がアゴや鼻先にぶら下がっている人、そのアゴの下に、皮のたれ下った両手を幽霊のように重く垂らしている人、浴衣を肌脱ぎしたように、背中一面を焼かれて、その皮膚が腰のバンドから、シャツの様にブラリと下がっている人。全身茶褐色にはれ上り、髪はつつ立ち泥とほこりにまみれてヨモギのようになった全裸の婦人など、この世の人とも思えない重傷者が、大本営方面から次々と出てくる。

いずれも、アゴを幾分前に突出し、無性にカッと見開いた目は、死魚のように鈍く淀み、空間の一点に釘づけされて、まばたき一つしない。その頭や瞳は、前後左右に動かない。放心状態で、鑄型にはめられたように、同じ格好をしながら、延々と一列になって通りすぎて行く。腰のバンドにゴボウ劔の下っているのが兵隊なのだ。足にはいている軍靴と共に、唯一の見分けとなっている。脚に巻いていたゲートルなどは、熱波のあたった方だけが燃え、残りは一〇センチ程に寸断されて、バラバラと落ちてしまった、ということである。

目に見えぬ死神の手に操られているこれらの人の中には、発狂したのか、燃え盛る火の中へ急に走り込んで、倒れた己が生身を、火葬にふす者もいる。

四、白島周辺の惨状

一メートル程の深さのどぶを、私は芋虫が這い上るような格好で路上へ出た。直ぐ前のわが家へとって返すと、さきに家族が下敷きになっていた所はすっぽりと大きな穴になり、どうにか逃げ出した様子が、はっきり解る。

立ち昇る炎を仰いで、無事に逃げ終らせてくれることを、神に祈った。自分だけが逃げ遅れた淋しさも、恐ろしさも、その時は夢中で解らなかった。目の前の学校もすっかり火が廻って、何メートルもの炎が天を焦している。今のさきまでひしめいていた多数の避難民は、何処へ逃げ落ちたのか、一人も見出せない。ただあるのは、私達重傷者がウロウロ徘徊する姿だけである。

私は日頃懇意にしていた通信病院がまだ無事なのを見ると、仏の導きのように飛び込んでいった。...外科部長先生に「無事だったか。」と声をかけられたときは、涙がこぼれた。

...逃げ仕度の先生が、ハリネズミのように、突立った左首のガラスの破片を二、三とって下さった。「や、これは動脈へ半分食い込んでいる。大変な出血だ。下手をすると三時間位だぞ。」と教えられた。それでも出血多量で死が近づいているということがよそ事のように、何とも感じなかった。

...白島一円は、燃え上る火がうず巻いていた。病院前の広い道路を、白島終点へと出た。ここでは、市電が一台横倒しになって燃えていた。即死した乗客が焼けるのだろう。車内から、火葬場と同じ悪臭がムッと鼻をついた。電線はズタズタに切れて、クモの巣のように地上にたれ下がっている。路上には、爆風で踏みつぶされたようになった人々が、血を吐いて死んでいる。

「お母さん！！お母さん！！」はげしい泣き声がすぐ後です。振りかえると、すでに火のついた屋根の上に、中学一年になる男の子が上って、狂ったように叫んでいる。「お母さんはもう駄目なの、捨てて逃げて下さい。火が来るから逃げて、貴方はしっかり勉強して、立派になるんですよ。」呉服商であった　　さん一家の、母と子の最後の別離の言葉である。断腸の思いとは、このことであろう。

「お母さん！！お母さん！！」と言う声の、次第に遠ざかりゆくのを聞きながら、私は戦争というものに対する、はげしい憤りで全身がガタガタとふるえた。この母子に何の罪がある。

...常葉橋際にもすでに一段と大火が猛威をふるっていた。土手の官有地だけがまだ火がついていない。京橋川を渡って逃げるより方法がない。土手沿いの民家のわずかなすきまを抜けて、私は川縁へと出た。しかし意地悪く川は満潮時で、川幅一ぱいに水が流れていた。この体で、水かさの増したこの流れを泳ぎ切れるだろうか。泉邸の土手には真黒に難民がひしめき合っている。重傷を負った人だろう。身を支え切れず川へ落ち、力尽きて、のろいテンポで水の上を浮いたり沈んだりしながら、川下へ運ばれてゆく。そしてその淀んだ流の中に、表皮をとられて真赤になったおびたしい屍が、漂流している。この世に血の池地獄の再現をみた思いだった。

飛び込んで泳ぐ元気などあろうはずがなく、どうしたらよいのか、ジッと水面を見つめて考え込む。しかし私のあとへも次々と人が集ってきた。仕方がなかった。私は砂防用の一メートル程の丸太を必死に引抜くと左脇にはさんだ。首の傷を水につけない為である。河水は気味悪いほど生暖かった。右手と足で、私は懸命に泳ごうとした。息がきれてゼイゼイ言う。水につけたためか、胸の刺し傷から、また血が吹き出してくる。心臓があつく感ずる。重い重い。こんな筈はない程重いのである。川の中央で、私はフッと振返った。なんと小脇にはさんだその丸太に、小学三年の針尾君がつかまって居るのだ。「先生！」と泣きそうな顔で一言いって、私の顔をジッと見つめている。重い原因の彼、けれどそれを振落す力も、叱る声も出ない。だまってそのまま、引きずるように泳いだ。平素は、子供を背負って平気で往復できた川を、幾つかの屍を掻き分けながら、私はやっとの事で対岸まで泳ぎついた。河原に這い上った時は、もうどうする事もできず、うつぶせになったまま、しばらく死んだ様に転っていた。

五、旋風

...この頃より急に空が曇り出した。火が雲を呼んだのであろう。私は常盤楼(料亭)の石垣の下にベッタリと坐ってボンヤリ河原の騒ぎを見詰めていた。後頭部に大穴のあいている人が、ありたけの声をふりしぼって、なぜか腹痛を訴えながら、のたうち廻る。二、三歳の幼児が、母を求めて泣き泣き徘徊する。何の幻にとりつかれたのか、抜刀して河の流れに突撃する兵士、天皇陛下万歳を三唱して息を引きとる軍人。そういう人達の間隙をぬって、「水！！水！！」と叫んでうごめく乙女の群。挺身隊の鉢巻が、この人々の姿をより一層悲壮なものにしている。突如として、雷鳴とともに沛然とした小石大の俄雨が降ってきた。焼けただれた人々の体を、容赦なく叩きつける。

針にさされるような痛さである。砂原の上を転がり苦しむ人々は、みるみる砂ダンゴのようになってゆく。私は急激な気温低下のためか、悪感戦慄が全身を襲ってきた。ガタガタと歯の根が合わない。全身鳥肌がたって息はずむ。雷鳴を敵機襲来と間違っ、逃げ廻る人々のさわぎも、遠い潮騒の響きのように、かすんだ耳に伝わるだけである。

私は横たえた体に、あたりの砂を両手でできるだけ厚くかけた。

降りしきる雨ではあるが、炎々たる火事には何の役にも立たないらしい。相変わらず、真赤に天空を焦して炎を吹き上げている。その時である。突然旋風が起きた。京橋川の上を川上から川下へ、ものすごい勢いで吹き抜ける。そしてその風がつむじ風となって、川の水も、砂も、またその辺に徘徊していた幼児も、空へ巻き上げていったかと思うと、今度は頭上へ、市街より運んできた燃えかけの木片や、火の粉、消し炭の類をバラバラと叩きつけてくる。再び焦熱地獄が、河原の罹災者の上におそってきた。砂をかぶっている私はむし焼きにされるような苦しさである。こまかい砂と火の粉の風に呼吸もできない。立って物陰に逃げる事もできない強風である。

「もう駄目だ。」心の中で何度そう叫んだであろう。しかし幸いなことに、しばらくの後にそのつむじ風は、ピタリと止んだ。恐る恐る目をあけると、今まで前にいた幼児達は吹き飛ばされて、影も形もなくなっている。

そして川中一ぱいに風に吹き飛ばされたと思える人々がうごめいていた。対岸の火の見やぐらの上には、大八車がひっかかって燃えていた。

私は、身体を休めていたここにも危険を感じ出したので、勝手に知った細道づたいに、常盤楼の庭へと出た。そしてふと見えた松の木の根元に、崩れかけた防空壕を見つけ、その中へ上半身を突込んで横になった。四十度近いと思われる高熱を発して、体中やけるように熱い。こみ上げてくる胸の苦しさは吐気を伴い、私は朝食をそのまま戻してしまった。そのうちに限りなく襲ってくる睡魔、私はこの恐ろしい状況の中で、苦しみながら、いつの間にか眠ってしまった。

六、饒津公園

どこまでが死への昏睡であり、どこからが生への目覚めであったか、その間の記憶は皆無である。身体中が高熱で火の玉でも抱いているように熱い。顔ははれ上り、目も口も開かない。私はその重いまぶたをやっと開けて周囲を見た。無数の大きな山蟻が真黒にたかっているのである。払い除ける力もない私は、彼らのなすままに、ジッとそれを見つめていた。ところかまわず嘔みつく。出血している傷口にダンゴになってたかる。髪の中から鼻のなかまではいってくる。ふてぶてしい生命力、彼らはこれほどの惨害に、何の傷つくところもなく生きている。

...何時間が昏睡状態にあった私は、気がついたときその深い眠りのためか、かなり疲労から回復し、起ち直らせる力を与えてくれていた。静かに上体を起してみた。しかし起ち上れない。腰に力が入らない、左足がしびれているようである。後日調べてみたら腰椎にひびが入り、肩胛骨と肋骨三本が折れていた。

私は肩よりつった左手を軸に、右手で徐々に後ずざりをしながら壕を出た。陽が西に傾きかけていた。五時に近いようである。

対岸はすっかり焼け落ちて、火の手が低くなっていた。

あたりには動く人影一つ見えない。あるのは全部死に果てた累々たる屍だけである。頭上の松の枝に、どうして生残ったのか、ジイジイと鳴く油蟬の声が此の世の唯一のたよりのように聞える。

...私はあきらめてじりじり這い始めた。真夏の太陽と火災の熱気で、焼トタンのようにあつくっている大地を、裸に近い姿で這うことは、たえられない苦痛だった。一寸刻みに歩行を続けていた私は、それでもどうにか山陽線の線路に辿りつくことができた。ガードの東詰めに貨車が脱線して燃えていた。

鉄道の枕木もすっかり燃えて炭になり、線路のレールだけが白銀色に光り輝やっていた。そして線路づたいに、逃げ遅れた人々が、真黒の炭の塊となって、点々と転っていた。

火災はまだ、遙か横川方面まで一望につづいていた。三篠橋際の工場の煙突が、手が届くほどの近くに見えた。私は饒津公園の方へ斜めに土手を這い降りた。遠く牛田の山が火を吹いていた。

公園の入口の茶店であったと思う。半焼の家の厨の水道から、水が溢れ出ている。私はそのの流しに掴まり起ち上った。手を洗い足も洗った。顔ははれ上りがひどく怖くて触れられなかった。ふと、そばに飯鉢のあるのに気がついた。ふたを取ると、高粱飯が半分程入っている。瞬間急に空腹を覚え、手づかみで食べ始めた。充分に開かない口へねじ込むようにむさぼった。他人のものを盗んでいる気持も意識の外だった。生きるものの当然の仕草のように夢中で食べた。この辺りにすむ人達はかなり余裕があったのか、境内わきのどぶのふちに、柳行李が二つ持出されていた。ふたが開いている一つの中に入れられているタオルと手拭を一本ずつ下駄を一足取出すと、再びゾロリゾロリと東練兵場の方へ歩いた。そのうち松木立の下に人影が見えた。一部火災を免れた家の人達が、野天で夕餉の仕度らしきことが始っていた。

東練兵場の入口へさしかかる頃、私は非常に心臓の苦しさを感じ、立ってられないようになった。やむを得ずま

た、道端の草むらの上に横になった。脈の結滞がおこっている。はっきりとそれが自覚できたけれど、どうする術もない。練兵場の中ごろに、天幕張りの救護所が設けられ、赤十字の旗がへんぼんとひるがえっていた。近郷にあった軍の医務室が移動したのだろう。救急車を押して歩いている兵に「ブドウ酒を下さい。」と頼んでみた。「そんなぜいたくなものはない。」と頭から叱られた。「カンフルは？」再び聞いた。「ない」「ではアルコール綿を下さい。」必死に頼む私に、兵士は胸のポケットから消毒用の綿の入った容器を投げてくれた。うれしかった。合掌してその兵士を見送った。ありがたさに、口がきけなかったのである。

私は急いでその容器からアルコール綿を取出すと口に含んで目を閉じた。

.....

人の気配を感じて、私はふと目を開けた。そばに女の人が立って、ジッと私を見ている。私はやっと住所氏名・職業を書きとめてもらって、その紙を頭の繻帯にはさんでもらった。そしてここで死んだと伝言をたのんだ。

七、東練兵場の夜

幽幻の境地をさ迷いながら、昏々として死んでいるような、眠っているような状態の中で、再び意識を取戻した。

肌に吹きつける夕風の寒さが肉体を通して私の生気を呼び覚ましてくれたのかも知れない。日はトツブリと暮れて、夕闇に沈んでいる練兵場の空に、黒い煙が立ちこめていた。私はまだ死なずにいたのだ。

山一つ越した府中町や温品村に救急薬を沢山疎開してあったことが、ぼんやり頭に浮んだ。そこまで行きたい。行けば何とかなる、そんな想念が頭を去来する。はかない望みも、生死の境にある今の私には、生きるための重要な命綱となった。最後の力を振りしぼり、芋虫が這うように現場から離れていった。丘陵に林立する木陰の下は、避難民で埋っていた。途中、自分より大きい息子を、背負って、息も絶えだえに歩いている婦人に会った。背中の人はずでにこと切れている様子である。母の愛情、その偉大さに涙がこぼれた。私と同じように逃れのがれて、この辺りまで辿りついた人達の中からも、遂に力つきて倒れた死体が、草むらや、路上のあちこちに散見された。切迫した死を前にしての故か、微かに息ある人も、死体の顔と同じようにすべて表情を失って、動きの止った目を闇空の一点に向けたままの悲壮な姿も何人か見た。近郷から救出に来た人達だろうか、せわしげに大八車を引廻し、親類や家族をたずねる声が、死の夜空に響き聞える。救護所は手当てを受ける人の黒山だ。トラックで運んできた食糧や水をもらう人の行列が、闇の中に続いている。一糸まとわぬ身体を、どこかで拾ったらしい一枚のゴザで覆った少女の姿が印象的で、この情景を一層深刻なものにしていた。

練兵場を横切ったところまで出て、私は、はたと困った。僅かな距離ではあったが、切通しの上り坂を登る自信がなかったからである。これ以上の負担を、この弱り果てた心臓にかけられそうもない。私は関東大震災の時、上野で野宿したのを思い出した。あの時は家族一緒だったけれど、いまは自分一人である。炎々と燃える火災から私達家族を守ってくれた山の松林、その同じような条件の、やはり松の木の上に私はいる。私は一切の運命をこの松の大木にかけて、一夜の宿をこつた。生え茂る雑草をふとんに、静かに身体を横たえた。長い夏の日もすでに暮れて、なお燃え続ける近くの火が、真赤にあたりを照らしていた。墨絵のように浮き上って見える人、人。しかし誰一人知った顔が見えない。いや解らなかつたのかも知れない。自他共に満足な顔形を保っている者がいないからである。

軽傷者や幸いに元気な人は遠く避難し、残るは生死をさまよう重傷者ばかりで、夜が更けるに従い、死の静寂があたりを立ち込める。こんな中で介抱を受ける身寄りの人と一緒にいる人は、どんなに幸せだったろう。その殆んど人は、誰一人看取らぬこの夏草の上を、墓場として絶命していった。妻の名を、そして母の名を呼び続けながら、つぶやく声が切れたとき、その人は死の転機をとっていたのだ。

...練兵場の廻りを取巻く一本の道を、大型トラックが次々と怪我人や、病人を収容していく。救護の手を待っている重傷者が、急造の担架の上で、手を合せている。これで助かった、と思っているのだろう。涙なしに見られる情景ではない。他の一台は、すでに亡き人達を拾い集めていく。「あの車に拾われると、みんな焼かれるんだそうだ。」

誰かがそんなことをふれ歩いた。私はびっくりすると同時に、道端にいる危険を感じて、山の中へ七、八メートルほどすべり込む。そしてちょうどそこに、死んだように寝ていた兵士の隣へ横になると、その辺りの草をむしり取り、それを身体へふりかけて、身をかくすように眠った。

...翌朝、東の空が白みかける頃目覚めた私は、思い切って山越えをする決心をした。力の抜け落ちた身体を気力だけで一メートル、二メートルと這い歩いた。平素わずか一時間足らずで行ける府中までの行程を、生きるも死ぬも一切を運命に託して、ただ這った。途中、道端に投げ出されていた自転車のバックミラーに自分の顔が映ったとき、私は驚きあきれた。余りにも変わり果てた形相に、それが自分であることを納得しかねた。

...生ある者の執念とでも言おうか、神の御慈悲か、疲れ果てては眠り、休養から覚めてはまた前進を続けていた私、昼を迎え、夜を送り、それでも二〇数時間を費したころ、やっと市内を脱出することができた。

第十二項 広島市千田国民学校...149

(現在・広島市立千田小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東千田町字八一六番地の四
 校長 伊達 高道
 教職員 一五人
 児童 概数三〇四人
 校舎 木造二階建五〇教室・一、二五〇・五坪
 鉄骨木造一、一五七・五坪
 敷地面積 三、三〇〇坪

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十八日	山県郡大朝町大朝	四人	八九人	約五五人	山県郡大朝町、川迫村、新庄村に寺院に分宿して、村内の各学校に通学してた。
	大塚	一	二六		
	田原	一	一九		
昭和二十年四月二十日	山県郡新庄村	四	一九		
昭和二十年四月二十二日	川迫村	二	四		
	蔵迫村	二	五二		
合計		一四人	三四五人	約五五人	

広島市千田国民学校 学校敷地・後者配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	雑魚場町	一人	高等科五人	疎開家屋跡片付け	

四、指定避難先と経路

第一避難場所としては学校正門前から広島文理科大学グラウンド(現広島電鉄車庫)に避難する。第二避難場所としては南竹屋町の進徳女学校から平田屋川添いに避難する。

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部は軍隊に貸与されており、その状況については次の通りである。

部隊名 暁部隊(本隊は比治山電信隊)
 人員 約三五〇人で、その他に教官・世話兵約五〇人
 構成 中等学校三年生の卒業生を特別幹部生として養成
 用務 戦艦「大和」の要員として待機させていた。

教室貸与については、当校南校舎全部と西校舎中央より南側の教室を使用していたが、物資などの集積品はなかった。しかし、教材として電信機材・日用品の毛布・食糧などが保管されており、これらの物資は被爆当日、当校正門前の平田屋川に兵隊が投げこんで逃れた。後に、これら投げこまれた物資が比治山の本隊に集結された事実はない。

なお、六日の朝、兵隊は朝礼のため運動場に出ていたから、直接被爆して全身火傷を負った者が多くいた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	

授業	七人	約一人	約四人 (軍隊)	当日は、残留児童の授業を行なうの予定で、平常は八時三十分開始であったが、当時、前夜空襲があったので、その時の申合せにより、始業を三十分遅らせたので、投下の際は、十人ぐらいの児童と教員四、五人だけであった。
----	----	-----	-------------	--

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊(一部半壊)全焼

当校は爆心地から南々東約一・七五キロメートル離れており、原子爆弾炸裂と同時に木造校舎はすべて全壊し、講堂は南側に傾き、宿直室および小使室のみは倒れず現状を保っていた。しかし、しばらくして南校舎西側の角より自然発火して棟伝いに両方面に燃え広がった。火勢は強く、棟続きの校舎は勿論全焼し、離れて建っていた講堂にまで及び、全焼してしまった。火災の終息は六日午後 時三〇分から一時頃の間であったが、この火災で全校舎はすべて灰燼となった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人(一)	*一三人(四〇)	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	三	〇	
行方不明者		(一)	
計	五(一)	一三(五)	

被爆当日は、残留組児童の授業を行なう予定であったが、前夜の空襲で、当時の申合せにしたがって九時始業となったので、十数人の児童しか登校していなかった。炸裂の一瞬、これら登校児童のうち三人は即死したが、残り七、八人は教師の目にふれることなく各家庭に帰って行ったものと思われる。教師も四、五人のうち一人は死体となって発見されたが、他の教師は校舎の下敷きになりながら互いに顔を見合せ、いない同僚を探し、自力で脱出してから御幸橋方面へ避難した。また小使は、門前の平田屋川の舟にのがれた。

雑魚場町の疎開地跡片づけに出動中の、当校高等科生徒五〇人は全員被爆し、ほとんどの者は死亡した模様であり、引率教員も全身火傷を負っているのを、本校職員が発見し、救援トラックで運んだが、二、三日後に死亡した。

また、当校駐屯の兵隊は、炸裂時がちょうど朝礼の最中であったため、火傷した者が多く、水を求めつつ、それぞれ各方面に逃れた。比治山の方へ逃げた一隊もあると言われる。

なお、六日午後三時ごろ、軍隊が遺体を収容に来校し、軍人の死体四、五体を探し出して持ち帰ったが、その時児童の死体も三体収容した。

八、被爆後の混乱

児童はほとんどの者が家庭で被爆し、それぞれの家庭から避難したもようで、その後の状況は明らかでなく、また児童も登校しなかったから、緊急措置のとりようもなかった。わずかに市内南千田町一帯の被爆をまぬがれた家庭の児童十数人が、後日登校してきたので、残留教員によって仮授業を行なう程度であった。

校舎は全焼し、児童も避難して状況がつかめず、教育機能は全く停止状態に陥った。しかし、その後焼残った家庭の児童も少数ではあるが登校するし、生存教員もだんだん学校に集結しはじめたので、教材はなかったが、ともかく仮授業を始めた。

被爆当夜から教頭と小使が学校跡に残り、二、三日後からは、学校長をはじめ数人の教員も加わり、校庭にテントを張って善後策を協議した。その後も、市内に居住する教員などで交互に宿泊して、学校教育機能が再開されるよう努力した。

なお、学籍関係書類及びその他重要書類は、被爆当日、教頭の手によって運び出されていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

(一) 学校の復旧対策

被爆後、学校は全く教育機能を停止していたので、廃校になりそうであった。しかし、児童も漸次登校して来たし、教員も集って来たので、残留教員で協議し、まず児童がどのくらい集るか、集団疎開から帰校する児童を調べ、それら児童を青空の下で授業させることが、可能であるか否かも協議した結果、見通しがついたので、九月に入って、広島県学務課へ学校存続を願い出た。十月二十五日、県・市から正式に学校存続について許可を受け、開校の運びとな

った。十月二十五日、貯金局四階を借受け、仮校舎として開校式をあげ、屋内での授業を開始した。

(二) 第二学期授業開始の状況

貯金局四階の仮校舎で授業を開始したが、当時は集団疎開から帰広した教員及び残留教員は、合せて一二、三人程度で、児童数は当初一〇〇～一二〇人くらいであった。しかし、児童も漸次増加してきたので、校庭にテントを張り、それを中心にして青空教室を開設したり、また学区内の焼残りの寺院・民家をも借りて授業を行なった。この間町内会の斡旋により、工事費一九、〇〇〇円の醸金を得て、校舎一棟が竣工されたのは十二月末日であった。

なお、昭和二十年十一月末の調査によると、教職員数は二〇人、児童数は三四人程度となっている。

(三) 学用品・教科書の入手と対策

仮授業開始期においては、土の上や瓦などに消しずみで書いていたが、貯金局に仮校舎を開いてからは、印刷用紙をもらって裏紙を使った。筆記用具は各児童が入手したものを使用していた。その後、不十分ながら救援物資が配給になったりしたので、不自由ながら授業は続けられた。疎開児童が帰って来てからは、それらの児童が持ち帰った教科書を、共同で使用したり、謄写板を入手して、教師の手で印刷配付したりしておぎなった。

千田国民学校にて被爆

円崎 正二

(当時・船舶通信補充隊五中隊三区隊)

梅雨明けと共に、毎日ガラガラする太陽の下で、激しい訓練が続けられた。八月初旬、宇品の対空射撃で敵機が一機撃墜され、飛び上って喜んだのもつかの間、やがて運命の八月六日の朝がやって来た。週番の私は三期・四期の朝礼を廊下でジッと見乍ら、或感傷にふけていた。親兄弟の事だったろうか、それとも故郷の山河であったろうか、とに角「忙中の閑」といったところであったろう。八時過ぎ、定期便の敵機が飛来した。いつもの事なので、別に気にもとめずにいた瞬間、閃光一閃。写真のフラッシュが一度に何千何万と発火したように感じられた。そして猛烈な爆風で、千田国民学校は、あたかも積木がくずれるようにペシャンコになって、その下に完全に下敷きにされてしまった。略帽と眼鏡は吹き飛ばされ、左下腿部にはハリがのっていた。これは大変なことになったぞと思い、手さぐりで眼鏡をみつけ、砂塵治ってきた庭をみると、怒号が入り乱れて、傷の浅い者達であろう右往左往している様子が材木の隙間から何とか見える。先ず自分の所在を知らさなければならない。運良く中隊長の通るのが見えたので、大声をあげると、気がついて私の下敷きになっているのを確認してくれたようである。あとになってわかったのであるが、火の手があがってきて、消火作業に必死になっていたのだ。完全に下敷きになったのは、私と同期の加納君であった。私の足にのったハリは、容赦無くいためつけて、とうとう失神してしまった。どの位時間が経過したであろうか、Y兵長にぶんなぐられて気がついた。「大丈夫だ、足を出せ。」しかし左の下腿部は何の感じも無くなっていた。抱きかかえられて、外に出されて驚いてしまった。もうもうとあがってくる炎、煙。そしてその中に加納君が包まれて、誰もがなす術を知らず、遂に尊い犠牲となってしまったのだ。さて、外に出された私は、勿論、立つ事が出来ない。気がついてみると、頭から出血している、ころがっていた巻脚絆があったので、グルグル巻きにして止血した。あちこちから火の手があがって来ている。最後まで消火作業をしていた人達も、比治山へ退避するという。親切な一人が私を背負ってくれた。狭い道は火の手で歩けない。迂回し乍ら比治山を目指したが、途中助けを求める女の声が倒れた家の下から聞えてきた。誰も助けようとはしない。どうせ不可能事なのだ。二十三年たった今、忘れることが出来ない声だ。忘れようと思えば思うほど...

比治山は民間人も混じってごった返していた。私の中隊の者も主に四期生が既に到着していた。歩行不能な私は、担架に乗せられて覚悟の眼を閉じた。水を求める者、泣きわめく者等々。まさに生地獄とはこのことだろうか。夜になって敵の飛行機が低空で偵察にやってくる。毛布をかぶって覚悟をきめるが矢張り恐ろしい。助かりたい。冷静さを取戻したのか、空腹を感じて乾麺を噛む。金平糖をより出して一粒かむ。両親兄弟の事が思い出される。もう駄目か、一思いに殺してくれ。あちらでグループ、こちらでグループとなって、軽傷者たちが「ピカドン」という言葉で勝手な事をしゃべっている。「ピカドン」なる用語はその日の中に出て来たと思う。翌朝はまたも暑い暑い日であった。歩行できない者を重傷者、以外の者を軽傷者に分けた。重傷者はトラックで宇品の船舶練習部へ収容されることになった。部隊の一台だけではどうにもならない。

長い間待たされたので、外傷のある者は、直射日光で色が違って黒くなって悪臭がし出した。順番が来たので、人手を借りて乗せて貰う。相当な重傷者が一緒に気の毒に思う。中には気の狂っていた人もいたようである。窓硝子も

無い部屋に収容されたが、中隊ではただ一人であった。

二、三日たって誰かが一室に集めてくれたので、やっと話相手が出来た。広島出身(福山)の同期の松岡候補生、彼は火傷をしていたので、そこに蛆虫が湧いて痛がったのを、私がとってやった。いくらとってでもすぐ湧いてくるものである。三期と四期で火傷のひどいのがいたが、元気が無くなったと思うと、何時間もしない中に死んでいった。

死に対する感覚が薄らいで、死人を見ても別に気にしなくなってしまった。板の間に毛布を敷いてのゴ口寝、夜分ともなると蚊の大軍に攻められる。日中は猛暑と、そして蠅と蛆虫。

やがて八月十五日の終戦。勿論ラジオなどはないが、人の口を通して敗戦を知った。空襲警報も無い。もう死と対決しなくてもよくなったのだ。しかし火傷を負った四期は一人、二人と死んでいった。童顔の山本候補生(静岡出身)、芦川候補生等々、私の傍で死んでいった。

もう一人筒井候補生がいた。この三人は私のすぐ隣で死んだのではっきり覚えている。

その頃、私も原因不明の発熱をした。頭痛が激しい。薬などはない。下痢も止まらない約一週間が続いた。この次は自分の番だと覚悟した。妙に冷静であった。死んだら毛布にくるまれて、階下の庭で火葬されるのだ。仕方がないと思った。ありがたいことに同期の大野候補生(東京出身)が、歩けない私を看てくれた。或る時にはブドウ酒をもって来てくれた。悪運強く、八月の末になると、頭痛は残ったが熱は下ってきた。気持のせいかも知れない。もう死なないぞと思った。十月初旬、迎えにきた父親の肩にすがって復員した。数多くの犠牲者を出したが、私は何とか生きて、故郷の山河を見ることができた。

二十何年か経た今日、平和に対して心から感謝し、その礎となられた先輩戦友に対して、折を見ては護国神社に参詣、永遠に安らげくあれと祈っている。

[第十三項 広島市段原国民学校... 159](#)

(現在・広島市立段原小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市金屋町六六の二
校長 松田 常一
教職員 一三人
児童 概数四〇〇人
校舎 木造二階建・四三教室・延八八 坪
敷地面積 不詳
爆心地からの距離 約一・八キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十四日	比婆郡山内西村 比婆郡山内東村全口南口北	六人 八	三五九人	不明	

広島市段原国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

出勤なし

四、指定避難先

不明

五、校舎の使用状況

別になし

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
授業予定	五人	高等科一学年約三〇人	若干	

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から東南東約一・八キロメートル離れており、原子爆弾の炸裂と同時に、校舎は一瞬にして全壊した。その後、しばらくして理科室付近から火が出た。また学校付近の民家からも次々と火の手が上り、またたくまに大火災となったので、全校舎の焼失が自然発火によるものか、付近からの延焼によるものかは分明でないが、消火のすべもなく付近の民家もろともすべてが灰燼と化した。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	二人	約二人	
重軽傷者	二	不明	
行方不明者		不明	
計	四	約二 (半明分)	

当時、低学年の児童は学区内の寺などに分散して授業を行っていたから、これらの惨状について明らかでない。しかし、地区的に爆心地から近距離にあった関係で、校舎の全壊全焼と同じく、各家庭も、その大部分が大きな被害を受けたから、集団疎開をしなかった児童の中には、多数の被害者が出たものと思われる。

また、被爆当日、ちょうど、登校していた高等科一学年の生徒約三〇人は、倒壊校舎の下敷きとなり、ほとんどの者が脱出できなかった。当時、校舎は防空の意味からも、火災を防ぐために、現在のモルタル建築の如く、金網を張った上にセメント壁をつけていたので、倒壊校舎の下敷きになると、この金網セメント壁のために脱出できなかった生徒が大部分であった。「助けてくれ」「出してくれ」と叫ぶ生徒の声が聞えながらも、降ってわいたような惨禍の中で、救助の手もなく、二、三人自力で脱出した教員も、みずから重傷を受けており、如何ともすることもできなかった。そのうち、理科室付近からの火災発生と、民家方面から上った火の手は、ますます広がり、大火災となってきたため、生存教員も生徒の叫び声を聞きながら避難するほかはなかった。

八、被爆後の混乱

荒狂う猛火に、全校舎は焼失してしまったうえ、教員も児童も被害者が多くて、学校の機能は完全に停止した。被爆直後に、軽傷または無傷の教員二、三人が、焼残った父兄の家に集って、児童の被爆状況調査について相談を重ねたが、何分にも被害が大きく、ほとんどの家庭が焼失して何処へ行ったか、誰れが生きて、誰れが死亡したのやら、皆目わからなかった。教員の中にも、自分の住居の焼失や家族の被害などで、その後も集合できるものは二、三人にすぎなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月一日、第一国民学校において、開校準備を進めるため、児童の受付を開始したが、約八人ばかりしか届出がなかった。

校舎を焼失したので、九月十三日に比治山国民学校に編入されることになった。比治山国民学校では、比治山・段原・荒神の三校が一緒になって、授業を開始した。

しかし、十月十三日、当校の集団疎開児童三五九人が帰校してから、父兄のあいだによやく学校の復興計画の声が強くなりはじめ、ついに教職員と父兄が一体となって学校復興運動を起したのである。

その学校復興対策と経過は、次のとおりである。

年月日	対策処置
昭和二十年九月一日	第一国民学校(段原中学校)に於て、開校準備のため、児童受付を開始した結果、約八人程度の児童届出があった。
昭和二十年九月十三日	比治山国民学校に、当校も編入される。比治山国民学校は、比治山・段原・荒神及び尾長の四校が一緒となって、開校された。
昭和二十年十月十三日	当校の集団疎開児童が、帰校するにおよび、授業の不便さから、学校復興の声が強くなった。
昭和二十年十月二十二日	学校復興計画を起す。

昭和二十年十一月二十日	父兄の勤労奉仕により、建築資材の一部を、市内大河より運搬し始めた。
昭和二十一年一月十日	牛田町旧工兵隊作業場からも資材を運搬する
昭和二十一年二月十五日	移動製材機を取付けて、四日間製材をした。
昭和二十一年三月二日	旧校地跡を整理して、四教室分の工事を始め、三月二十日に竣工した。
昭和二十一年三月二十三日	四教室の完成により、比治山国民学校から教職員二人、児童四二人が復帰して、新校舎で授業を開始した。
昭和二十一年三月二十六日	第四八回卒業式を挙げる。

なお、市内の焼失国民学校で、昭和二十一年三月末日までに復興して、卒業式を挙げることのできた学校は、この段原国民学校と白島国民学校の二校だけであった。

第十四項 広島市三篠国民学校...165

(現在・広島市立三篠小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市三篠本町一丁目
 校長 種田 光登
 教職員 六四人
 児童 概数二、五〇〇人
 校舎 木造二階建・五四教室・延一、四〇〇坪
 敷地面積 六、 坪
 爆心地からの距離 約一・八キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年五月二十日	高田郡本村 " 横田村 " 北村 " 生桑村 " 川根村	一人	約二人	約三人	

広島市三篠国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
大芝兵器工場	大芝町	一人	四人	兵器の部分品製作	
油谷重工業株式会社	安佐郡祇園町	一	四	船舶の部分品製作	
中広航空株式会社	中広町	一	五	航空機部分品製作	
日産自動車株式会社	三篠本町三丁目	一	五	自動車部分品製作	
日本針工業株式会社	楠木町二丁目	一	五	針、軍需品製造	
建物疎開作業	土橋付近	五	二五	家屋疎開	
合計		一	四八		

四、指定避難先と経路

一、学校から西口の山手川(現在・放水路)を渡って、山手をめざして進み、三滝山方面に避難する。

一、学校から北に、可部街道を進み、安芸郡山本村(祇園町)方面に避難する。

五、校舎の使用状況

校舎の二階東側及び南側教室は、陸軍部隊に貸与されており、当時、編成中の独立工兵第一一六大隊、及び同第一一七大隊の応召兵が約二〇〇人ほど集結していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	

平日授業 (学徒動員、疎開児童を除いた残留児童)	二人	約五人	召集兵約二人	当時は残留児童も、学区内で分散授業をしていた関係で、六日朝の朝礼参加児童は少数であった。
-----------------------------	----	-----	--------	--

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から北北西約一・八キロメートル離れており、原子爆弾の炸裂と同時に校舎は、一瞬にして倒壊した。また、北側校舎に沿って、東西に連絡する幅約三メートルの道路沿いに立ちならぶ民家もすべて倒壊し、原子爆弾炸裂後、寸時にして、まず、その倒壊民家から発火した。猛火は、たちまち付近一帯の建物をなめつくし、その炎は三メートル幅の道路を這うようにして、大混乱に陥っている学校に延焼し、見る見るうちに大火となった。

全焼したのは、午後三時ごろと推定されるが、余燼は数日にわたってくすぶり続けていた。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	三人	三〇人	()内は学校外(動員先)での被爆者数
重軽傷者	一二	六 (一 二)	
行方不明者			
計	一五	九 (一 二)	

疎開もせず、勤労作業にも出勤しない残留組の児童と教職員は、校庭に集合して、教頭の指示のもと、いつものように朝礼を実施中、原子爆弾が炸裂した。一瞬、全員が吹き飛ばされ、一部の者は校舎玄関まで約一〇メートルも吹き飛ばされていた。何がどうしたのか、さっぱり解らず、いつ時呆然としていた。数分後になって、ことの重大さを感じたが、周囲には、熱線と熱風で着衣をボロボロに焼かれ、引裂かれた者や、顔・手足などの皮膚はツルリと剥げ、頭髮は焼けただれて、面貌が変形した者など、一見して誰が誰だか識別できなくなった児童たちの泣き叫ぶ声が交差していた。

このような中で、けなげにも倒壊した校舎に入って教科書を運び出そうとし、かえって死亡した児童もあり、また体調が悪く教室に残っていて、下敷きとなり、焼け死んだ児童もあった。迫る猛火の熱さに堪えられず、貯水槽に飛び込んで水死する児童もあった。

人心は転倒し、冷静を欠き、混乱をきわめ、なすべきすべもなかった。猛火の荒れ狂う中を救助の応援にかけつける人もなく、ただ歩行に堪える数人の教職員と駐屯兵の手をかりて、逃げ迷う児童を取りまとめて、三滝山方面に誘導避難したのが精いっぱいであった。

避難して行きながらも、幼い児童たちは恐怖におののいて、教職員の指示も耳に入らず、号泣するばかりであった。これら児童を、なだめたり、すかしたり、叱ったりして、ようやく三滝山に避難することができた。しばらくして保護者が引取りに来はじめたので、それぞれ連れ帰らせ、来ない者は家庭を訪ねて渡した。

八、被爆後の混乱

被爆したその夜、赤々と余燼くすぶる中で、種田校長・三光教諭の二人は警備をかねて校庭に野宿したが、余りの惨状に涙も出さず、語るべき言葉もなかった。翌七日朝、校舎の焼失状況を校長と三光教諭が、ありあわせの紙に記述して、外郭だけになった市役所に持参し、黒瀬収入役に手渡した。しかし、市役所も壊滅状態に陥っており、ただ報告をしたというだけのことであった。

再び、学校に引返し、各所からの連絡を待ったが、分教場として使用していた学区内光隆寺・南三篠会館及び打越会館なども、全壊か全焼したという報告ばかりであった。このように、物的にも人的にも大きな被害を受けた当校は、完全にその機能を失い、対策措置のとりようもなかった。

当校は、広島市の防空計画に基づき、災害の場合の学区内救護所として指定されていたが、負傷者を収容する教室も焼失し、受持ちの医師も被爆死亡し、計画は烏有に帰した。

被爆後一〇日ばかりして、学校の跡地に仮設救護所が設けられたが、医薬品が少なく、治療というほどの治療はおこなわれなかった。しかし、この地域には比較的負傷者が多く集結しており、いわば三篠・横川両地区の救護所として、できる限りの治療活動がおこなわれた。

九、学校再開の状況

学校の再開

学区内ほとんど全域の住宅が焼失し、残っているのも全壊・半壊の状態であった。その中に点々と仮居住している児童を、たんねんに探し歩き、父兄との連絡を保ちながら、児童の安否調査に努力した。その結果、九月十五日に、形式的ながら第二学期の授業を開始することができた。当日、集合することのできた教職員は一五人、児童は約五〇〇人であった。

しかし、校舎の無い授業で、集った者が一致協力して、焼跡の整理をおこない、地ふく石を掘り出して、焼失前の各教室の区分をつけ、その中で、校舎があった日のようならび、ともかく授業を開始した。したがって、教授用具は一物もなく、ただ教職員の手による荒削りの板に墨を塗った代用黒板を使用し、児童にはかき集めた旧教科書などを支給して、いわゆる、青空教室が続けられたのである。

二十年十二月ごろ、教職員と父兄の間で話し続けられてきた校舎復興の熱望が実を結び、大和工業株式会社の請負で、バラック教室一〇教室が完成し、青空教室から解放され、児童の喜びには非常に大きなものがあった。でき上がったバラック教室には、一教室平均約五〇人を収容して授業を始めたが、以後、逐時バラック建てを増築し、本建築のはじまるまで、この仮校舎で授業をした。

なお、学用品・教科書などについての対策としては、教職員・児童及び父兄が一体となって収集につとめたが、一冊しか手に入らない教科書は、教師の手引きとして学習し、また数冊の場合は、児童の中にグループを組み、共有して使用するなど、多くの苦心を要した。市の放出物資も、極力使用を節約して困難をしのぎ、授業を進めたが、勉強よりも焼跡整理に多くの時間をついやさねばならぬというありさまであった。

第十五項 広島市舟入国民学校...172

(現在・広島市立舟入小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市舟入川口町九六六の二
 校長 伊藤 康彦
 教職員 二七人
 児童 三一八人
 校舎 木造二階建・二七教室・延一、〇七五坪
 敷地面積 四、〇一五坪
 爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月末日	安佐郡狩小川村正現寺	三人	一八三人	四人	残留児童 三一八人 疎開先児童は町別に編成された。
	順正寺	三			
	安佐郡福木村安楽寺	二			
	西善寺	二			
合計	一人	一八三人	四人		

広島市舟入国民学校 学校敷地・校舎配置図(略語)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先

町内会が決定している佐伯郡観音村(現在・五日市町)の観音国民学校へ、避難することに決定していた。

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
職員朝礼 児童朝礼	一人	三一八人		運動場の使用は八時十分に終了

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...小破

本校は、爆心地から南南西約二・二キロメートル離れていた。爆風により北側校舎が傾き、南側校舎の屋根が持ち上げられ、その一部は落下した。東側校舎も被害を受けたが、爆風におおむね併行していたため、部分的に窓の建具が無傷のまま残されているものがあった。校具・机・腰かけなどの大部分は、火災にあわなかったため、そのまま使用できるものが多く、他校からうらやましがられた、講堂・宿直室・倉庫・便所は被害が少なく、当時の建物に修繕を加えて、現在も使用している。

なお、運動場の南側空地に、建物疎開作業による廃材が、給食用の燃料としてたくさん積みあげられており、この廃材が放射熱線により自然着火したので、直ちに消火した。当時、その発火の原因が理解できなかったから、ただ不思議な飛火だと思っていた。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	一人	二人	
重軽傷者	二	一	
計	二	三	

運動場に集合した児童は、八時十分ごろ、朝礼を終った。そのあと、笹村教頭から飲食物についての訓話を聞いたため、男女別々になって、柳の大木の陰に集ったときに、原子爆弾が炸裂した。このときの様子を笹村教頭は、次のように語っている。

「私は大きい声で話をするので、飛行機の爆音は、全く耳に入らなかつたが、児童にはそれが聞えたのか、あるいは予感があったのか、なんとなくざわめきが出て、頭を廻らせ、空を見上げて、心配そうな様子であった。そこで私が、先生の話の聞くときには、まっすぐ先生を見て聞くものです、と注意を与えようとしたとき、マグネシウムを燃焼させるような青白い閃光がした。」という。

児童が訓話を聞いていた場所は、南校舎と校庭のイモ畑との中間にある僅かな空間で、児童は柳の木をとりまいてならび、先生は、校舎を背にして、児童に対して一列にならんでいた。したがって、南校舎が閃光や爆風を遮蔽して、直接曝されることもなく、校舎の破片も、柳の木があらかじめ防いでくれて、被害は少なかった。児童たちは、ただちにその場に伏せた。この中の二年生の女児二人は、おそらくは、自分の先生の立っている方へ、走り寄ったものと推察されるが、爆風によって持ち上げられたそのとき、落下してきた何物かに直撃されて、即死した。

危く難を免れた児童を、その場に坐らせて、父兄が引取りに来るのを待った。少しして、安否を気づかう父兄が尋ねて来て、それぞれ引取って帰ったが、数人の児童はついに誰も迎えに来なかった。

三年の女児一人は重傷で、防空壕に収容されたが、三日三晩は仮死の状態で、到底助からないものに思われていた。しかし、その後回復し、一週間ばかり看病して、縁故者に引渡すことができた。この女児は、一年後全く元気を取り戻し、再び登校するようになり、皆から祝福された。

最後まで引取者のなかつた数人の児童は、この日から戦災孤児となり、当時迷子収容所に指定されていた比治山国民学校へ、迷子として収容されていった。

八、被爆後の混乱

比治山国民学校に迷子収容所が開設されるまで、孤児となった数人の児童たちは、学校に引取っておいて、面倒を見たのであるが、昭和十九年から始められた学校給食用の食糧があつて、大いに役立った。

給食といっても、隔日か、あるときは三日おきを実施するという貧弱なものであつた。しかし、調味料の味噌をはじめ、しょう油・イリコ・塩など、当時としては貴重な食糧が、僅かながらも倉庫に保管されていたから、この急場にあたって、まったく天恵のように思われた。

そのうえ、六日の夜遅く、市外の町村からの炊出しもあつて、握り飯がトラックで配給された。孤児となった児童

たちは思いがけない握り飯を手にして、はしゃいで食べた。家族を失って、不安と淋しさに打ちひしがれていた顔が、はじめてうれしそうに笑った。

孤児たちは、三度三度握り飯で満腹して、ついに握り飯を食べなくなったから、その握り飯を雑炊にして食べさせたりしたが、これら孤児たちの前途を思うと、心ふさがれるばかりであった。

この大惨事で学校の機能は停止した。伊藤校長は自宅で重傷を負い、転地療養することになり、校務は笹村教頭が代行した。しかし、校務だけにとどまらず、罹災証明の発行や被爆者の収容などを行ない、連日多忙をきわめた。

罹災証明の発行は、早朝から日没まで行ない、連日の如く江波地区・観音地区・その他の地区から発給を求める数千人の罹災者たちが長蛇の列をなしておしかけた。

火災をまぬがれた当校は、応急救護所に指定されていたから、八月六日夕刻、たくさんの避難者が逃れてきた。これら避難者の食糧は、当初は郡部からの炊出しによってまかなわれたが、後には、笹村教頭らが各方面に交渉して、確保しなければならなかった。

また、水道が出なくなって、町民は水不足に悩んだが、学校の防火用水栓を開放して、便宜を与えた。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年九月一日、開校命令が出され、町内各所に張紙をしたり、口伝えに連絡したりして開校を知らせた。舟入学区は、舟入川口町地区以南の川下・川南・川西などは火災を免れていたため、住民も児童も居住しているように思われたが、大部分が疎開していた。当時の緊迫した食糧事情が、その理由でもあるが、それにデマがデマを呼んだ進駐軍来広の脅威も理由の一つであった。したがって、登校してきた児童は数人に過ぎなかった。

加えて九月の風水害で、南側校舎の屋根が崩れ落ちた。残る北側校舎・東側校舎といえども爆風による被害が大きく、修理しなくては使用不能の状態であった。東京や大阪の空襲の経験から防空体制は常に変更され、被爆前に天井板の取除き命令が出されていた。それは焼夷弾が投下された場合に、天井板に止まって火災が起ると処置に困る、というところから出された命令であった。この作業は教職員の作業とされ、原子爆弾炸裂時には、廊下だけの取除き作業が終っていた。いざ開校となれば、取除いた天井も惜まれてならなかった。登校児童や校舎がこのような状態であったから、開校したとはいえ、授業は事実上不可能で、顔合せ程度であった。雨天には休校した。教職員は雨もりを避けて、机を移動させながら執務する有様であった。

十月末、集団疎開児童が帰広するに至って、登校児童も増加し、漸く学校らしい息吹きをみせ始めた。

しかし教科書については、終戦となるや、ただちにGHQから修身・地理・歴史は破棄するよう命令が出され、一度は学校に係官が調査に来たりして、これらの教科書は焼却した。これにかわる教科書は支給されるべくもなく、当時の児童は教科書の面からも恵まれていなかった。学用品は学校が火災を受けなかったお蔭で、従前のものが幾分なりとも使用できた。

[第十六項 広島市皆実国民学校...179](#)

(現在・広島市立皆実小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市皆実町二丁目二一―二番地
校長 佐々木 哲
教職員 三十六人
児童 概数一、五五一人(男八 五人 女七四六人)
校舎 木造二階建・三九教室
敷地面積 三、七五三坪
爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
第一回昭和二十年四月二十日	安佐郡伴村・戸山村	五人	一五人	一、一三人	
第二回昭和二十年七月一日	安佐郡伴村・戸山村	五	一五		
合 計		一 人	三 人	一、一三人	

広島市皆実国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

爆撃を受けた場合は、運動場中央および県立広島商業学校(元県師範学校)校庭の待避壕に避難する。また、校舎火災の場合は本部を第三国民学校に移す。

五、校舎の使用状況

当校の西側校舎階下三教室には、通信(鳩)部隊約七〇人の兵隊が駐屯していた。また東側新校舎階下二教室は、陸軍暁部隊に貸与しており、常時約三〇人の幹部候補生が講習を受けていた。

なお、当時、空いている教室には机・腰掛などを保管し、また硝子窓は、すべてはずして集めていた。また一部の机・腰掛などは、安芸郡温品国民学校に疎開した。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	一三人	五 人	七〇人	当時、残留児童のうちで、低学年は、町内の説教所の分教場に行く。 当日の登校児童は、市内皆実町二丁目の低学年児童と高学年児童

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...半壊、一部全壊

当校は爆心地から南々東約二・ニキロメートル離れており、原子爆弾の炸裂によって、当校の西南校舎は一瞬にして全壊したが、東校舎は小破、その他は半壊した。しかし、爆心方向の一面を、北北東から南々西に京橋川が流れており、中心からの延焼はまぬがれた。直接熱線による火災は発生しなかったが、校庭の樹木は変色し、枯草は熱線によって、くすぶっていた。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人	一四人	
重軽傷者	八	二〇	
行方不明者			
計	一〇	三四	

始業前で、早く登校した上級生は、それぞれ分担の掃除区域の清掃にとりかかっており、下級生は運動場で遊んでいた。また登校途中にある児童も多数あった。

そこへ突然の炸裂に、校舎の一部は全壊し、一部は半壊程度の被害を受け、登校児童は急ぎ帰宅させたが全壊した教室にいて下敷きとなった児童は、当校駐屯中の兵隊によって、天井および屋根板をはぎ取って救出された。

なお、被爆直後、皆実町一丁目電車停留所通りから京橋川より、火災が発生して、その火は北に延焼して行ったほかは、一般家屋は半壊または小破程度の被害であったため、家庭にいた児童は、無事保護されたようである。

しかし、運動場で遊んでいた児童の内約二三人は炸裂の一瞬、熱線による火傷を負い、その上、爆風に吹きとばされた。結局救護のかいもなく死亡した者もあった。また全壊校舎にいた児童の一人は、強く押しつけられていたため、救出にも手間どったが、まもなく死亡した。

なお、教職員の中で、養護婦は保健室で即死、給食婦は階下家事室で即死した。また一教員は家事室にいて、頭を壁と机の間にはさまれ、重傷を負って救出され、被服廠に運びこみ治療したが、片眼は失明となった。

八、被爆後の混乱

翌七日、疎開先から代表教員が帰広してきたので、ただちに家庭の状況を調査した。その結果、辛い学区が被害程度も軽く、二、三人の死亡者があったほか、大した異状もなかったが、学校はただちに閉鎖して、八月二十日までとりあえず休校とした。

終戦となり、集団疎開児童も、縁故疎開児童も帰ってきたが、学校再開の見通しは全然つかなかった。

校舎の被害は全壊が一部で、他は半壊程度の被害であったが、半壊校舎も天井は落ち、柱は折れ、風が吹くたびにゆれ動くので、片づけも思うにまかせない状態であった。わずかに小破(小破といっても、瓦類はほとんど飛び散り、天井はたれさがり、窓枠一つない状態)の四教室を掃除して、仮りの職員室を作った。なお物資の置場に困ったので、校庭の防空壕と新たに廃材を集めて仮小屋を作って格納した。しかし、全壊校舎などの瓦類が日々に減って行き、体育倉庫・便所・校舎などの材料もつぎつぎに姿を消していった。これは町内や他地区の人々が、バラック建築のため盗んで行ったものであるが、給食調理場にあった薪までも、一夜のうちに大半が姿を消すといった具合であった。

九、学校再開の状況

学校の再開

二学期開始時期は不明であるが、被爆後、当分の間は再開の見通しがたたなかった。しかし、世間の混乱も一段落し、倒壊校舎の一部整備もなし、児童も集団疎開先から帰ってきたので、学校としても、一日も早く授業を再開するため努力した。授業再開当時は、校舎の跡片付けを登校児童全員でやるのが日課であった。そのうち、建築業者の手により、一〇教室程度の校舎が使用可能な状態になりはじめたので、自然に作業を授業にきりかえていった。その頃の使用可能な校舎は、東校舎の一〇教室であり、教員数は校長・教頭のほかに教員がわずか六、七人程度および養護教員一人であった。

[第十七項 広島市荒神町国民学校... 185](#)

(現在・広島市立荒神町小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市西蟹屋町三二〇番地
校長 寺田 栄
教職員 二九人
児童 概数八五〇人
校舎 木造二階建三二教室延七二〇坪
鉄骨講堂 一 延一五〇坪
敷地面積 二、八四〇坪
爆心地からの距離 約二、三キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十六日	安佐郡小内村 安佐郡久地村	七人 七	九人 九二	三八九人	小内村(安楽寺・万福寺) 久地村(西正寺・正法寺・ 甲賀説教所)
合計		一四人	一八二人	三八九人	

広島市荒神町国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

警戒警報と同時に、校内に設置した防空壕に、緊急避難を行なう。戦争末期に至っては、警戒警報と同時に、緊急

帰宅させた。

五、校舎の使用状況

校庭ならびに校舎は、当時、軍隊関係の施設としては貸与していなかったが、焼夷弾攻撃に備えて廊下の天井を全部はずしていた。したがって教室は空家となっている所が多かった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
五、六年の児童を登校させて、農耕作業を行なう予定であった。(校庭のさつまいも手入れ)	一 人	四五人 (六年二五人 五年二 人)	なし	原爆炸裂時はちょうど、職員集合をしようとしたときであった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...全壊

当校は爆心地から東南東約二・三キロメートル離れており、爆心方角には比治山があり、原子爆弾の炸裂による衝撃を緩和する地形であったが、校舎は、鉄筋コンクリート建講堂を除き、他の建物はすべて倒壊し、全壊した。しかし、放射熱線による火災の発生はなかった。また、学校周辺地域にも火災はなかった。

猿猴橋方面から発生した火災が、次第に東方へ移動したが、荒神町付近で消火されたようである。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童
即死者	人	人
重軽傷者	四	〇
行方不明者	〇	〇
計	四人	人

在校の教員四人が、校舎の倒壊で負傷したが、いずれも軽傷であり、応急手当でまにあった。

児童たちは、講堂の渡り廊下の屋根下で、暑さを避けて腰を下ろし、作業開始の合図を待っていたとき、炸裂に遭遇したが、幸いに講堂は倒壊せず、ただの一人も火傷しなかった。また、けが人も出なかった。

このとき、木造校舎の二階に、二人の児童がおり、倒壊物の下敷きになったが、その場所がよく、わずかの隙間から飛びだした。両人ともに奇跡的に無傷で助かった。

学校では、異常な事態が発生したので、登校児童全員を調べたあと、ただちに帰宅させた。

八、被爆後の混乱

帰宅させた児童たちに対しては、父兄を通じて、学校から何らかの知らせがあるまで、登校しないよう指示した。

疎開先の教師が連絡して来たが、広島市には帰らず、疎開地の児童を掌握するとともに、今後、本校の児童が避難のため疎開地へ行くような状態になるかも知れないから待機するよう指示した。被爆後も引続き、敵の偵察機が飛来していたから、なるべく郊外へ避難するようすすめた。

被爆直後、緊急に職員集合をして人員点呼をしたところ、女教員三人の姿が見えなかったので、倒壊物の下敷きになったのではないかと、急ぎ探索にかかった。

幸い三人とも倒壊校舎の下敷きになりながらも、その隙間に、軽傷程度でうずくまっていたので、急ぎ救出した。それから吉田教頭が市役所に連絡に行ったが、市役所は全滅し、市長も死亡、ちょうど玄関にいた助役に、被災状況を報告して帰った。負傷した教員は、直ちに帰宅して手当をするように命じ、その他の教員は、追って指示するまでは帰宅して、待機するようにした。

このように、被爆後の人的被害については、教員が数人軽傷を負った程度で、その他の教員及び児童は無事であったから、指揮系統には支障なかった。しかし、校舎が倒壊したので、一時対策の立てようがなかった。

校庭の防空壕は、災害の場合の救護所として、施設や薬品の準備がしてあったが、余りにも突然の大惨事のため、これを担当する救護班の組織も破壊されて、計画どおりの態勢が取られず、被爆者は勝手に防空壕に入り、中にあった薬品を持ち出して、勝手に治療をするというありさまであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、校舎に火災は発生しなかったが、倒壊して使用できず、校庭の中につくられた防空壕や、校庭の隅で、風の

あたらない場所を選び、授業を始めた。いわゆる青空教室である。この青空教室は九月中旬ごろから始まったが、その後、町内有志の者が相寄って、取りあえず講堂を復旧し、倒壊した資材で仮校舎を建てる運動を展開した。しかし、倒壊した一般校舎の整理に追われ、バラックの建築さえ遅れて計画は進まず、翌二十一年二月末になっても遂に仮校舎はできなかった。

被爆により負傷した四人の教員は自宅療養中で、当時職員は学校長以下一〇人であった。児童は比治山校に通学し、本校から数人の教員がつき添っていき、比治山校の児童と一緒に学習をさせていた。当時、比治山国民学校では、比治山・段原・荒神の三校の児童が三校の先生のもとに授業を受けていたのである。その時の荒神町国民学校児童は約五〇〇人であった。このような状態のもとに、被爆後の授業は開始されたのであるが、比治山校での、寄合い世帯の学校生活では統制がとれず、授業にも身が入らず、児童にも、また教師にも学習意欲があがらなかった。いろいろ検討のすえ、九月中旬になって、比治山校から当校の児童を引取り、荒神町国民学校の校庭において、青空教室の授業を開始した。寒くなって雪の降る日などには、校庭の防空壕の中で学習を続けた。

教科書や文房具は、各自持っている教科書により学習をすすめて、失ったものは、親類や隣り近所の友達から古いものをゆずり受けたりして、融通しあって使用した、そのころは、まだ進駐軍の教科書に対する統制がないころで、教科書は古いものでもおおびらに使用した。鉛筆・ノートなどはどうにか間にあっていし、用紙はあらゆる使用済みの裏紙を使ったので、不自由ではあるが学習はできた。

あの時

吉田達雄

(当時・荒神町国民学校教頭)

あの町、私は荒神町国民学校一階の職員室で電話をかけていた。安佐郡の学童疎開先へ、畳などを送るトラックの手配についてであった。

一瞬、背後から黄色い光線を浴びたと感じると同時に、バリ・バリッという落雷の音におそわれ、思わず、そばの戸口に出た。上から大きなものが落ちかかる気配を感じたが、戸口の外にしゃがんだ時、背中をひどく打たれた。校舎のハリが落ちたのだが、幸いハリが何かに引かかったかっこうになったので、大したことはなかった。

“空襲”頭にそうひらめいたので、しばらくジッとしていたが、あたりは全く静寂そのものであった。何分たったのか分からないが、そこから出て校庭を見渡して驚いた。全体が薄暗く、ほこりが一ぱい立ちこめている。校舎はない。

完全に倒壊している。すぐ前の講堂は屋根をはがれ、窓は飛び、裸のまま立っている。私の頭上の二階図画教室はこわれて、階下の職員室におおいかぶさり、半倒壊の形である(この上下四室だけ増築したもので、辛うじて、そういう形で残っていたが、八月下旬、風のため完全に倒壊した。)

私は職員室にはいった。誰もいない。机・椅子・戸棚・窓わくなど折り重なって手のつけようがない。やっと必要な整理をすませて外に出た。そうだ、子供がいたはずだと急に思い立って小使室の方へ出かけると、「先生！先生」という悲鳴が聞える。職員室に続く教室のあたりである。

私ひとりではどうにもならない。外を通りかかった人に呼びかけたが、みなだまって通って行く。その町、髪の毛をさかさにした給食婦のAさんが、放心したようにヨロヨロ歩いているのが、妙に印象的であった。

私は子供たちに声をかけながら、救出にかかった。そこへ付近の住宅にいた職員のB君が来てくれたので勢いを得た。そのうち近所の人たちも応援してくれたので、女子職員二人、子供一人を救出することができたのである。

ホットー息ついていたら、近くの段原校赤川教頭が単身やって来て、「段原は全焼だ、犠牲者も出た、僕も人事不省だったが、やっとここまで逃れた。」と行って立去った。

私はこれは大事になったものだとほそをかんだ。

その頃から往来は人通りが多くなり、学校救護所(校庭の中央地下壕)に負傷者をつぎ込んだり、医者を探してわめいたり、子供の行方を聞きに来たり、騒々しくなった。

私はふと母のことが気になった。母は朝、宿直の私に弁当を持って来てくれたが、大須賀町の家に帰ったはずである。広島駅の方を見ると大へんな煙だ。火の手も見える。人の話によれば大須賀町あたりは全滅だという。母は駄目かも知れない。そう観念した私は、学校の災害報告のため市役所へ行こうと決心した。時計を見るひまもなかったが、その頃は十二時少し前であったと思う。

大正橋を渡り、盛んに燃えている中を比治山神社の近くまで行ったが、先は行けそうにない。止むを得ずわき道を

登って比治山に上った私は、声をのんで立ちどまった。

市内の大きな建物は盛んに火を噴き、全市火煙の海といってよい。

私は市役所行きをあきらめ、比治山の東側から帰ることにした。あと形もなく倒れた旧御便殿前の広場を通って行ったが、そこで私は、世にも悲惨な光景を目にした。多勢の女の子 殆んど全裸に近い女の子たちが倒れている。然も続々と西側からはい上って来る。来てはくずれるように倒れる。「兵隊さん、水」の悲しい叫びは今でも私の耳底をはなれない。暁部隊が看護に忙しく立働いている間を私は女子商業学校の方へ下りて行った。

人ひとりいない、ひっそりした街をふみわけながら学校へ帰った。

その日から十一日まで、私は母や縁者を探して毎日市内をかけずり廻った。

第十八項 広島市大芝国民学校...193

(現在・広島市立大芝小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市大芝町江川一、四四七

校長 渡辺徹

教職員 三三人

児童 七〇三人

校舎 木造二階建・二八教室・坪数不明

敷地面積 四、三二〇坪

爆心地からの距離 約二・四キロメートル

広島市大芝国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十日	双三郡三次町 鳳源寺	二人	二五人	約二〇〇人	
	双三郡三次町 妙栄寺	—	—三		
	双三郡三次町 専法寺	—	—五		
	双三郡三次町 浄伝寺	二	二〇		
	比婆郡口北村 浄蓮寺	二	二—		
	比婆郡口北村 正専寺	—	—二三		
合計		九人	一一七人	約二〇〇人	

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先

校庭の防空壕

五、校舎の使用状況

第一八独立鉄道作業隊および独立鉄道第二大隊約六〇〇人が、講堂や校舎に宿営し、運動場では、常時、教練が行われていた。被爆時には、数人を残して野外演習に出ていた。

また、繊維会社が統制品の衣類を集積し、教室を一つ使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
朝会、教育会議、授業	二四人	三一人	兵士 数人 保護者会長 一人	教育会議で教育計画をたて、学校でまたは町別の分散学習所で、授業を行なう予定

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…半壊、一部全壊

当校は爆心地から約二・四キロメートルの所にあったが、被爆と同時に、二階建北校舎二棟・宿直室・給食調理場・講堂などは全壊。二階建新校舎の爆心地に面している方は半倒壊となり、爆心地に対して縦に長く建っている部分は倒壊を免れた。西南隅の二階建倉庫は、体操器具・ピアノ・その他の教具を格納していたが、倒壊後、付近の民家から延焼し焼失した。また、新校舎の西端校長室付近は、熱線により着火して燃えはじめたが、当時宿営していた残留兵士と学校職員が、協力して消火ポンプを操り、消し止めた。

(二) 人的被害

当時、残留児童のうち、四年生以下の児童を数区域に分け、寺院や民家を借りて分散授業を行っていた。学校には五・六年の残留児童が約五〇人通学することになっていた。当日登校していた五・六年児童は三一人、まだ授業開始前で、運動場で遊んでいたとき被爆した。

児童の被害状況は、学校内での即死者はなかった。頭部その他に打撲傷を受けた児童が約五、六人、ガラスなどの破片によって負傷した児童が約五、六人いた。その他、かすり傷を受けた児童が約一〇人いた。

分教場に登校していた児童の負傷者は、約五〇人と推定された。後になって判明したところによれば、登校していた児童と、まだ家庭にいた児童の負傷者の合計は、残留児童二八六人のうち、三五五人であった。

また、職員の被害状況は、保護者会長と要談中の校長が、顔面に裂傷を受け、治療を受けるべくただちに避難したのを初めとして、一般職員の被害は甚だしく、一人は頭部打撲傷のため死亡し、他の職員も火傷・裂傷のため治療を必要とするので、自宅または医療所へ避難したの一六人、負傷にもかかわらず学校に踏みとどまることのできた者は、わずかに六人であった。

八、被爆後の混乱

学校に踏みとどまった職員は、ただちに児童を防空壕内に退避させ、備えつけの医療品をもって応急手当をしたのち、大芝町北端の竹やぶへ誘導した。歩行困難な児童は職員が背負い、あるいは手を引きつつ、児童たちは助けあって避難した。その後、市内の猛烈な火災を見て、避難場所を新庄町の竹やぶに移し、さらに、祇園町の神社へ移した。こうしてようやく落ち着きを取戻し、重傷児童を付近の民家に預けて休養させ、他の児童を掌握しながら父兄の引取りを待った。正午ごろになって、やっと父兄が探し求めてきたので、全児童を引渡すことができた。

学校には、学区内の罹災老や他地区からの避難者が一ぱいに詰めかけた。そのうえ校舎はほとんど倒壊の憂き目をみていた。翌日十数人の児童が登校してきたが、到底授業はできないありさまで解散させた。その後、職員の一部は、運動場に受付を設けて、区域内居住者に罹災証明書を交付した。こうした状況を市当局へ報告しようとしたが、市役所も被爆全焼していて、連絡がつかなかった。

しかし学校にとどまり得た六人の職員は、協議の結果、毎日定刻に集合することを約し、校舎の被害の調査、および残った校舎の応急措置を講ずることにした。

なお、残存校舎の一部に三篠・大芝両学区の救護所(責任者・長崎五郎)が開設され、外来患者の救護医療に当たったので、一部職員はこれを手伝った。

また残りの教室には、数百人の被災者が収容され宿泊していた。

九、学校再開の状況

学校の再開

十月になって、ようやく人心も落ち着いたので、青空教室で授業を再開した。

十一月中ごろになって、破碎された校舎を応急整備し、そこで授業を続けたが、寒気きびしく、父兄から暖房用の木炭の提供を受けた。

学校の被害を当局に申請して資材を得ると共に保護者会の援助も受けて、屋根の修繕・天井の張替え・渡廊下の修復などをした。しかし教室の不足はいかんともし難く、二部授業を行なった。加えて学用品や教科書の補充はできず、学校内や家庭に残っていたわずかな学用品で間に合せ、教科書はグループで見せあうような有様で、満足な教育はできなかった。

(現在・広島市立牛田小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市牛田町旭区一、一八五
 校長 橋坂弘吉
 教職員 二二人
 児童概数 九一四人
 校舎 木造二階建・二一教室・延六七〇坪
 敷地面積 四、一一六坪
 爆心地からの距離 約二・四五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年五月十二日	高田郡船佐村	一二人	三八三人	二〇人	三年以上の児童高年科を除く
昭和二十年六月二十二日	高田郡粟屋村				
昭和二十年七月十七日	高田郡粟屋村				

広島市牛田国民学校 学校敷地・学校配置図(概略)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内富士見町	一人	二六人	疎開跡片づけ	高等科生徒

四、指定避難先と経路

当校は広島市の周辺部にあり、学校としては別に避難先を指定しなかった。

五、校舎の使用状況

- (一) 広島市内における建物疎開した家屋のタタミ・フスマなどが、三つの教室に保管されていた。
- (二) 陸軍関係の救急薬品・ガーゼ・脱脂綿などが三教室に保管されていた。また食糧として馬鈴薯・甘藷の保管で六教室が使用されていた。
- (三) 校庭は食糧増産のため、甘藷・トマトなどを栽培するのに使用した。
- (四) 地中に食器類を埋めて保管した。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
職員朝会	一〇人	三七二人		

七、被爆の惨状

被害状況

- (一) 校舎の被害状況...半壊
 当校は爆心地から北東約二・四五キロメートル離れており、広島市の周辺部にあるから、物的にはあまり大きな被害はなかったが、それでも校舎の窓ガラス・天井板・屋根瓦などは吹き飛ばされ、柱は傾き、ほとんどが使用不能な状態にまでの被害をうけた(全壊一棟)。
- (二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	〇人	〇人(一六)	()内 外での被爆者数
重軽傷者	一〇 (一)	一〇	
行方不明者	〇	一	
計	一〇 (一)	一一 (一六)	

被爆時、すでに学校に来ていた児童は約三七二人余りと推定されるが、富士見町の建物疎開に出ていた高等科を除く四年生以上の児童は、集団疎開をしており、炸裂時は三年以下の残留児童がちょうど、登校中であった。早く登校した児童は、炎暑のため日陰にあり、ほとんど被害を受けなかったが、児童一人は下駄箱の下敷きとなって重傷を受けた。

被爆後、すぐ児童を集め、各担任教師がそれぞれの児童を引率して、各家庭にとどけた。

建物疎開に出動した生徒の記

山下鉄夫

(当町・牛田国民学校教頭)

被爆当日、学校長は学童疎開先、高田郡粟屋付(現在・三次市)に出張中、当局より急に高等科生徒の出動を要請されたので、担任であった女子職員にかわり、二人(私の記憶)を引率して学校を出た。途中、白島の常葉橋西詰にさしかかった頃、ラジオの警戒警報を聞きながら現地に向った。

午前八時、竹屋国民学校前で指示を受け、鶴見橋西詰付近の建物疎開の跡片付け現場に到着、直ちに作業にとりかかった。国民義勇隊の人も続々と来て、作業を開始したころ、突然、「シューッ」というものすごい爆風、それにまるで火の中に落ち込んだような激痛、辺りは何も見えない闇の中に倒されていた。その暗闇の中をしばらく、はいまわっているうちに、京橋川の堤防にたどりつき、そこではじめて視野がひらけた。

折柄、満潮の水面には、ちょうど水泳をやっているように一ぱい人が浮んでいた。

自分をみると、両手の皮はむけてたれさがり、身体中がとても痛むので、急いで川に入った。すると、そこに引率して行った男の子が一人、ひどくむごたらしい顔をしているので、「いたむだろう。」と言ったら、「僕より先生の方がひどい。」と言う。

ともかく一応学校へ帰ろうと、川からあがって、鶴見橋を渡り、比治山の下、的場町のあたりにさしかかると、母をさがして泣き叫ぶ子、水をほしがる老人、ほとんど裸体に近い傷だらけのからだに、しっかりとわが子を抱く母親、とても想像できない地獄絵図以上の情景がくりひろげられていた。どこまで行っても家は倒れ、くすぶり、燃えている。

駅前から饒津神社横を通りかかると、宏大な社殿はもの凄いい火をふき出し、焼けくずれ落ちていた。

牛田町へ入ってみても、町のいたるところから火が出て、町内会の役員や、警防団の人たちが活動していた。

学校へ帰ってみると校舎はねじれ、柱は裂けており、どうにか立っているだけである「学校には、小使さんだけ残り、あとは裏山に行っているとのことで、裏山に行ってみると、疎開作業につれて行った男生徒は、もう皆帰っていたのに驚いた。しかし、女生徒はまだ数人帰っていないので、帰った者にたずねたが、わからないとのこと、それもまったく無理のないことだった。

このころ、黒い雨が二、三〇分間、夕立のように激しく降った。

自分も傷の手当をしてもらい、校舎の方へ引返してみると、理科室の方から煙が出ているので、近づいてよくみたところ、地下室に置いてあった薬品からの煙とわかった。すぐこれを処置し、ついで重要書類を裏山の安全地帯に運んだ。

学校長が学童疎開先から帰るまで、町内会・警察・警防団・市などとの連絡に当たっていたが、翌七日、学校長に引継いだ後は意識もハッキリせず、運動場内に設けられた防空壕にねて、先生方から手当を受けた。

なお六日夜、自宅に帰らなかった女生徒たちは、あまりの恐ろしさに東練兵場で一夜を過して、あくる日にわが家に帰ったとのことだった。しかし、ただ一人江村さんだけはとうとう帰らなかったのも、即死したものと思われ、まことにかわいそうであり、残念でならない。

自分は八月十二日、意識のしっかりしないまま、家族に連れられ、郷里の高田郡甲立町の自宅に帰って静養した。三か月後、十一月十二日、広島に出て牛田国民学校に出動した。そして聞いたところ、出動した子供のうち、帰ってからもつぎつぎに原爆症状でたおれ、二人中(二六人?)一人が死亡したのである。本当に痛ましく、憶い起すたびに断腸の思いがし、ただただ静かに冥福を祈るのみである。

八、被爆後の混乱

校舎は半壊とは、言いながらも、使用不能の危険状態であり、大混乱のなかで、児童の安否も不明のため、学校の

運営は約一五日間停止せざるを得なかった。

しかし、一〇人命の負傷者を除く全教員は、毎日出勤して、校舎の整備や児童の安否調査を行ない、授業再開の準備を進めた。また、校内に保管されている多量の軍用物資の盗難予防にあたった。

被爆直後、町内在住の太田萩枝医師が医薬品を持ってかけつけたときには、負傷者はまだ一人か二人しか来ていなかったが、しばらくすると、続々と負傷者が到着しはじめ、六日の夜は、まったくの修羅場と化し、兵庫県から急ぎ来援した医師二、三人と同校所属の寺岡頼之看護婦は不眠不休の活動を続けた。

七日、臨時救護所に指定され、白島町の自宅で被爆した国友国氏医師が来校するとともに、呉の海兵団派遣の医療救護班が到着し、運動場にテントを張って救護活動を展開した。

当校には、陸軍の救急薬品が多量に保管されていたから、負傷者の治療に大いに役立った。

負傷者は、次々に死んでいき、その屍体は七六〇余に達し、町内の警防団・役員その他の人々の協力を得て、牛田公園(現在)に運び茶毘にふした。このうち三〇〇余柱は身元のわからない人であった。

九、学校再開の状況

学校の再開

負傷教員を除く全教員が出勤して、連日、校舎の修理と整備を行ない、第二学期開始の準備を進めると共に、疎開児童に対する指導と引揚げの準備に着手した。

昭和二十年九月一日、授業再開の準備ができ、三日から、あらためて入学受付を行なった。十二日、高田郡船佐村に集団疎開していた児童を引揚げさせたが、これを含めて、授業再開時の児童数は約六五三人であった。

被爆後、校舎を焼失した白島国民学校と広島女学院に、当校校舎の一部を貸与したので、当校児童の授業を午前中とし、白島校と女学院が午後使用するという二部授業で開校した。

しかし、教室は天井が落ち、ガラス窓は吹き飛ばされたままという状態で、雨天の日は激しい雨もりとなり、まったく授業にならなかった。

牛田学区は、大部分の家屋が火災から免れた関係で、児童の教科書や学用品などについては、焼失した他の学区ほど困難を感じなかった。

第二十項 広島市尾長国民学校...207

(現在・広島市立尾長小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市尾長町一九一

校長 伊藤四郎

教職員 二五人

児童概数 六〇〇人

校舎 木造二階建・三七教室・延一、一六九・二五坪

鉄骨講堂一・延一三九坪

敷地面積 三、一九四・九五坪

爆心地からの距離約 二・八五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年五月十二日	比婆群小奴可村 比婆群八鉾村	九人	二四〇人	約五〇〇人	小奴可村 三校 八鉾村 二校 寮母・炊事婦を囑託する

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

(一) 第一の指定避難先.....当校の北西約四〇〇メートル離れた地点の、尾長天満宮。

(二) 第二の指定避難先.....当校の南東約六五〇メートル離れた地点の、広島市東隣保館。

五、校舎の使用状況

当校の講堂および校舎約一〇教室(約四一〇坪)に、築城部隊の軍人軍属(線第一三三七七部隊及び師第七四三七部隊)が駐屯していたが、人数は不明である。

なお、軍用の電線・ガラスが集積してあった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
被爆当日は、登校日になっており、児童は授業となっていた。	一四人	人	築城部隊が若干人いた。	警戒警報発令で登校していた児童を全部、自宅に帰した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...小破(延焼により全焼)

昼過ぎ、東愛宕町の一角(当校より南約二〇〇メートルの地点)から火の手があがった。当校駐屯中の築城部隊の軍人軍属全員が消火にあたったが、消火ホンプ一台もなかった。また、一般町民も働き盛りの者は疎開作業に出動し、半死半生の重傷で逃げ帰ってきたので、家族は敵機の波状攻撃を恐れ、その重傷者をつれて郊外に避難する者、また、多数の負傷者の看護に当たっていたりして、消火活動に人手がなかった。築城部隊の兵隊も消火には全力を尽したのであるが、その能力は微々たるもので、火はますます広がり、そのうち力つき、延焼をただただ傍観する外なき有様となった。これに先立ち当校構内も次第に危険と思われるに至ったころ、多数の収容患者を、高天原方面に転送した。夕刻に松本工業学校(現在・松本商業学校)からの火の手が、当校に延焼して来たときには、みんな疲労の極に達していて、消火作業にあたる者がまったく無く、重要書類・設備品の搬出もできず、わずかに書類のごく一部を、安全と思われる場所に移しかえただけであった。

学校は火の海と化し、ついに焼失してしまった。そして更に火は、学校の裏手の民家へと移っていった。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童
即死者	人	人
重軽傷者	七	
行方不明者		二
計	七	二

六日当日、授業予定となっていた五、六年児童のうち、朝早くから登校していた児童がいたが、五日夜から警報発令が続き、六日午前七時過ぎにようやく解除となったような事態であったから、児童をすべて帰宅させた。したがって、原子爆弾の炸裂時には、校内には一人の児童もいなかった。また、学区内数か所にある寺子屋式分散授業所で、授業を受けていた三年以下の児童は、被爆時に二、三人ほど集合していたが、集合途上の者や、未だ家庭にあった者が大部分で、全員無事であった。しかし、教職員は、職員室で当日の行事打合せ中であったため、炸裂により、大部分の職員はガラスなどの破片で軽傷を負った。そのうちに、一般市民の被爆者が、続々と学校へ避難してきたので、これら被爆者の収容に忙しく、教職員全員が学校を守りつつ、患者の看護にあたり、夕刻近く学校が炎上するまで避難しないで頑張っていた。

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂後、各担任教員は、ただちに学区内数か所にある分散授業所に行き、児童の安否を調べたところ、児童は一人も残っていなかった。さらに、付近の町内を一巡して、児童がほとんど無事であることを調べた。

当校は被害僅少で、学校の機能には支障なかったが、市中から多数の負傷者が逃げこんで来て大混乱に陥った。引続き負傷者は増すばかりで収容しきれない状態となり、繁忙を極めた。しかし、当校舎も安全ではなくなり、やがて学区内(東愛宕町方面)からも火災が発生し、火の手は消火活動のいかにもなく、広がるばかりであったから、校舎に収容されていた多数の被爆者を、安全な高天原(当校より北北東約五〇〇メートル)方面に全力をあげて転送した。学校

は午後三時過ぎから五時頃までの約二時間で、完全に焼け落ちたので、それ以後は応急救護所としての機能を全く失った。翌七日から、学校プールの東側に仮本部を設けて、教職員が交替で詰め、諸般の連絡にあたった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、旧陸軍が使用していた近くの東練兵場北山腹の軍用兵舎(バラック建)を借りて、仮校舎とする計画を進めている間に、このバラック兵舎は、一夜か二夜の間に、ほとんどぬすまれてしまった。そこで高天原の旧通信隊バラック兵舎七棟(一二〇坪)を譲り受ける交渉を続けた結果、兵舎の使用を許可されたので、学区内の寺子屋式授業場に分散していた児童用の机・腰掛などを集め、また荒神町国民学校の倒壊した校舎の下敷きとなり、破損している机・腰掛も借用することにした。これら机や腰掛は、教職員と児童が倒壊物の中から掘り出して運び、苦心して修理をほどこし、やっと十月一日から授業を開始することができた。

また、東隣保館幼稚園部の建物を借受け、応急修理をして二学級の授業を開始したが、いずれも二部授業であった。

すなわち、一年生 - 一学級・二年生 - 一学級・三年生 - 一学級・四年生 - 一学級・五年生 - 一学級・六年生 - 二学級の計七学級で、児童総数約三〇〇人、教職員二四人であった。

その後、日を追って疎開先や避難先から復帰する者、転入して来る者などが増加して、教室の不足が深刻な問題となったので、昭和二十一年六月から八月にかけて、譲渡された高天原の兵舎を、旧校地内に移築して、九教室を建て、本格的な再出発を踏み出したのである。

なお、学校は焼失したが、学区内の民家は、その大部分が残った関係で、旧教科書を中心に、家庭から持ち寄って来た学用品で授業を進めていった。

第二十一項 広島市比治山国民学校... 221

(現在・広島市立比治山小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町字七の割五五八の二
 校長 石田正己
 教職員 二八人
 児童概数 一、三〇〇人
 校舎 木造二階建・四一教室・延、一、四八三坪
 敷地面積 三、八七七坪
 爆心地からの距離 約二・八キロメートル

広島市比治山国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十二日	佐伯郡津田町教覚寺	五人	七八人	約七〇〇人	集団疎開した児童はこれら町村の寺院、あるいは国民学校の作法室、青年会館などに宿泊、居住して勉学を続けた。
昭和二十年四月十五日	佐伯郡浅原村(三光寺、青年会館、浅原国民学校)	四	五五		
昭和二十年七月十三日	佐伯郡友和村	二	二一		
昭和二十年七月十三日	佐伯郡栗谷村(小栗青年会館、大栗青年会館)	二	三〇		
昭和二十年七月十四日	佐伯郡津田町教覚寺		八		
昭和二十年七月十四日	佐伯郡浅原村		五b		
合 計		一三人	一九七人		

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

学校正門および裏門を出て、田んぼ道を通り、学校東方(東雲町)のブドウ園に、避難することになっていた。

ここは広い面積を持ち、かつブドウ棚の下は、敵機の視界から遮蔽される恰好の避難場所であった。

五、校舎の使用状況

北校舎の階下七教室は、兵器支廠の兵器貯蔵庫として使用していた。

また、東校舎六教室を使用して、鉄道建設隊が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
一、朝会 午前九時開始予定 二、疎開荷物の運搬 午前七時四十分出発観音町で被爆	一〇人	三〇〇人	鉄道建設隊	前夜来の空襲のため、当日の朝会を一時間遅らす。 教員四人付添い 疎開荷物の運搬

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況.....半壊

この学校では総体的に見て、半壊の損傷程度であった。すなわち屋根瓦は飛散し、校舎内の天井は、その半分ぐらいが破壊された。また各室の窓ガラスは全部破壊され、支柱一三本が折損した。校舎は爆心地から東方へ約二・八キロメートル離れており、その間に京橋川や比治山があって、火災発生には至らなかった。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	三人	人	
重軽傷者	三	五〇	
行方不明者			
計	六	五〇	

教職員引率のもとに、かねてから定められていたとおり、東雲町のブドウ園に避難し、各児童の家庭の被害状況を視察の上、異状のない児童はすぐに帰宅させ、他の児童は正午頃帰宅させた。炸裂時に室内にいた児童のうち五〇人は、ガラス破片により顔や手足などに負傷し、泣きわめきながら校舎外へ避難した。それらの児童を、一応構内の待避壕内で手当してから、避難場所に誘導した。

八、被爆後の混乱

当日は、負傷児童に対する応急手当の実施、避難場所への誘導、正午ごろまでに全児童を帰宅させるなどの措置をとった。また、校舎の破損が甚だしいので、登校停止の措置をした。この登校停止は、結局、十月上旬まで続けられた。一方、被爆後まもなくのころから、罹災負傷者が続々とこの学校にも殺到し、二〇〇人にも及んだ。

学校では、講堂にジウタンや暗幕を敷きひろげて、これら罹災者を收容した。歯科医師・薬剤師各一人が急ぎ来校し、救急薬品を使用して学校長の指揮のもと、学校職員と共に手当に従事した。その夜は乾めんぼう、翌日は粥をこれら罹災者に支給し、二日後に青崎国民学校へ送ったのであるが、その間に七人が死亡した。

孤児の世話

また、八月合から戦災孤児(当時迷子)の收容所としても活動し、二〇〇人程度に達した。この子たちを寮母八人と女子職員が、翌年二月十日に佐伯郡五日市町の戦災孤児育成所に移すまで、献身的な世話を続けた。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎・教室に応急的修理を施して、十月上旬に至り、はじめて開校した。

この時の教職員・児童数は左記のとおりである。

教職員 二四人

本校児童 九〇〇人余

段原国民学校、荒神町国民学校児童 約四〇〇人

こうして昭和二十年度第二学期の授業は開始せられ、幸いにも地区ならびに学校が火災炎上を免れたため、教科書や学用品にも大した支障はなく、勉学に就かせることができた。なお、校舎の復旧費として十一月には、比治山学区から約十万円を集めて復旧工事に着手、屋根・建具・壁・折損柱などを補修し、昭和二十一年はじめごろ第一期工事

を完了した。

比治山孤児収容所の記

河元きくの

(当時・広島市保母)

焦土と化した広島をあとにして、故郷に帰り静養していた私は、終戦を聞いた翌十六日に市役所に出向いた。

市役所は外郭だけを残してマル焼けになっていたが、生残りの職員の幾人かの顔があった。

私の顔を見ると、被爆以来負傷しながらも庁舎に泊って、救援活動をしておられた谷山源睦部長が、「保母の出勤第一号だ。」と言って褒めてくださった。

そして、比治山国民学校に孤児が六〇人ばかり収容されているが世話をする者がいない、すぐに行ってくれと言われる。

私は矢吹憲道社会課長にともなわれて、トラックに医療品・食糧品・毛布などを積みこんで行った。

学校についたとたん、驚いた。

子どもたちの下痢を始末したポロおむつが、山のように廊下の隅に積んであり、すき間のないほど八エが黒だかりしている。

こどもの全員が血便の下痢である。

まず門の外にあった防火用水槽にクレゾール液を三本流しこんで、ポロおむつの消毒からはじめた。

水道もない、電灯もつかない。窓ガラスは一枚も残っていない教室である。

私は子どもと一緒に泊りこんでいたが、空襲の恐怖で、暗い便所によろ行かない子どもたちを、一人一人連れて行っているあいだに、夜の明けたことも幾日かあった。

子どもたちの食事も大変なことであった。

食糧不足で、麦と米とサツマ芋の茎を混ぜ、味噌でグダグダと煮たものを、菊の花のようにササラにふちの欠けた茶碗で食べた。

またシラミの発生にも困った。着物のえりにジユズつなぎにくっついているシラミ。着がえ一枚持たない着たきり雀ばかりで、どうすることもできない。

暖い日を選んで、すっ裸にして、日なたぼっこをさせているあいだに、給食用の大きな釜で煮沸消毒して、木切れでまぜては、運動場の柵にかけて、乾いたものから着せた。

最後に釜の底をみると、ゆでイカのようなシラミの死骸が、両手に一杯ぐらいあった。

ある日、黒瀬収入役が乳児を背負って来られた。その子は口が耳まで切れており、乳を吸収することができなかったから、スプーンで一滴ずつ吸わせ、何とかして救ってやりたいと努力してみたが、とうとう生き残ることができなかった。胸をケガしている子どもの手当をしていると、その傷口から麦粒のようなものが、ポロポロとこぼれ落ちるので、よく見るとウジ虫であった。

日がたつにつれて、子どもが高熱にうなされる。背中にブドウ色の斑点が出てくる。頭の毛がまん中からプスプスと抜ける。毎日毎日少しずつ抜けて、しまいにはマル坊主になって、次から次へと死んでいく。

子どもの死体を、誰も処理に来てくれないので、一つの教室に安置しておいたが、夜になると、飼主を失った軍用犬が野良犬化して、狼のように兇暴になって、その死体を狙いに来た。私は積木を投げては、それを幾度か追っばらった。幾日たっても死体処理ができないので、保母の手で葬ることにした。

学校の運動場の片すみを掘って、焼残りの材木を集め、火葬にしたときは、悲しさを通りこして涙さえも出なかった。ただ黙禱して煙を見あげるだけであった。

名前も思い出せないが、三歳ぐらいの女の子が、両親の名前も住所もわからないのに、ただ「田舎へ連れて行って...」とせがむ。「マンマ食べたらね...」と時間をかせぐ。食事がすむとまた「田舎へ連れて行って...」とせがむ。「ネンネして起きてからね...」という、朝起ると「田舎へ連れて行って」と、またせがまれる。何処へ連れて行けばいいのかわからない毎日の会話が続いた。

二か月半の勤務で、十一月の初めから宇品七丁目の軍隊の兵舎跡で、引揚げ孤児の収容がはじまり、職員が二班に分れて、私はその方に出向することになった。十二月になって比治山校の子どもは、佐伯郡五日市町に戦災孤児育成所が開設され、引移って行った。しかし、被爆当時の子どもはほとんどが死んでいき、そこには家族を失った疎開児

童が収容されたようであった。引揚げ孤児収容所は、その翌年基町に新生学園が開設され、そこに移った。

第二十二項 広島市己斐国民学校...221

(現在・広島市立己斐小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市己斐町二、一一七番地
 校長 真木賢三
 教職員 一七人
 児童概数 七〇〇人
 校舎 木造二階建・二四教室・延一、一九一坪
 敷地面積 三、七九一坪
 爆心地からの距離約 二・九キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年五月	世羅郡大見村	一人	五〇人	不明	
	世羅郡東村	一	五〇		
合計		二	一〇〇	不明	

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
広島鑄工所	打越町	一人	五人	手榴弾製造	生徒二人が被爆のため死亡、引率教員一人は火傷する。

四、指定避難先

警戒警報発令と同時に、児童は各自の家庭に帰宅させていたため、別に避難先は指定しなかった。

五、校舎の使用状況

当時、講堂は陸軍糧秣支廠に貸与されて、常時約二五〇人程度の作業員が仕事をしていた。その後、講堂に接続している教室も貸与された。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
平日授業	一五人	四〇〇人	糧秣支廠職員約二五〇人	低学年(三年以下)の児童は授業で、被爆当日朝は登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況.....小破

当校は爆心地から、西北西約二・九キロメートル離れた山地の一部にあったが、爆心地方向には何の障壁もなかった関係で、爆風によって、屋根瓦・窓ガラス及び窓枠などはほとんど飛散し、壁も大部分落ちた所があった。また一部校舎には柱が折れるなどの被害はあったが倒壊箇所はなく、総体的には小破程度の被害であった。

なお、原子爆弾の炸裂後、まもなく講堂が火災を起したが、教職員一同が消火につとめ、全焼をまぬがれた。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	一人	(二)人	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者		(二)	
行方不明者			
計	一	(四)	

校舎の被害は少なかったが、次に来る危険を考慮して、児童たちをただちに家庭に帰らせ、教職員だけで学校を守

ることとした。

八、被爆後の混乱

被爆によって、校舎は小破程度の損害を受け、教職員一人及び生徒二人(動員出勤中の者)が死亡したが、校長以下、他の教職員及び児童は健在であったため、学校機能には何らの支障はなかった。また学区内の家庭も小破程度の被害はあったが、居住には別に支障はなく、児童各自には家庭で待機するよう指示した。

(一) 応急救護所の開設

原子爆弾炸裂後、時間の経過するにつれて、市中から多数の被爆者が当校に殺到し、教室も廊下も避難負傷者で、たちまち一ぱいになった。そこで、講堂と二階の教室を除き、他の教室は全部、仮救護所として解放した。救護は、当時の救護法の規定に基づき、六〇日間の十月五日をもって一応打切られたが、原子爆弾という予期せぬ大惨禍のできごとのため、十分な救護もできず、氏名も住所も判らないまま、死亡した者が多数あった。このような、被爆下の状況について、己斐国民学校収容所を中心に、救護活動に従事した当時の真木賢三校長ほか二人の体験談(広島原爆医療史所載)を次に記載する。

真木賢三

わたしは、あのとき、己斐国民学校に奉職しておりましたが、己斐・古田・草津などの西部の国民学校も救護所になっていましたから、わたしの学校にも救急薬品がたくさんおいてありました。ところが戦局が急迫して参りまして、陸軍の糧秣支廠がわたしの学校に疎開して来ましたから、空襲を予期して薬品類全部を草津国民学校に移しました。ところが、あとで話しますように結果的には移さないほうがよかったです、そのために被爆後非常に困りました。

原子爆弾が落ちまして後、まもなく講堂が火災をおこしましたので、みんなその防火にかかりまして、やっと火を消しとめたころ気がついたのですが、教室という教室には全部、また、廊下や路面にも避難者がいっぱいころげているではありませんか。救護所では受付であらしてこうしてと、学務課からいろいろ手順などを指示されていたのですが、とてもそれどころではなかったわけです。

空襲を受けて救護を必要とする際は、学区内の津田先生が救護所の主任医師として来てくださることになっていたのですが、とても来てはもらえませんでした。なぜかと言いますと、学校へ来る途中で道ばたにたおれた患者につかまって、そのほうに手を取られて救護所までこれなかったんです。ですから六日はほとんど医療が受けられず、七日も午前中は医者なしで、結局七日午後になってやっと津田先生に来ていただいたような始末でしたが、薬品は草津へ全部移してしまっている、患者は約一、二〇〇人くらいもいるのに、医師はたった一人という状態ですからどうしようもありません。

そうこうしているうちに、呉から救護班が九日か十日に来てくれ、救護はどうか始まったんですが、死体の処置には困りました。なにしろ、八日ごろから死体にウジがわきだしまして、死体だけでなく生きている患者にもウジがわいていました。臭くもあるし非衛生でもあるので、教師を宇品の曙部隊へ走らせて、死体の処理を計画してもらうことにしました。そこへおりよく世羅郡甲山町から警防団が約三〇人、応援に来てくれました。甲山警察署長が己斐の出身だったのと、己斐国民学校の児童があの方面へ疎開していた関係からだろうと思うんですが、その人たちが一間幅に二五メートルくらいの壕を七筋掘りました。この壕で死体を焼いたんですが、タキギは、学校給食のために子どもを己斐の山に行かせて作っていたタキギが約一万把ありましたから、それを使うことにしたんです。

ところが、皆さんご承知のように死体を焼くには警察の検視が必要ですから、そのことを連絡しましたら、警察は、今はとてもそこまで手が廻らない、というんです。運動場で死体を焼くこともかれこれいっておられません。その責任は自分が持つから検視だけは警察で責任を持ってくれるように話し合い、それではと、廿日市署が五日市署から応援に来ていた巡査さんが検視してくれました。

しかし、死体はほとんど裸体で、顔はふくれあがっていて、年齢もほとんどわからない、氏名はもちろん不明です。受付をして収容したのでないから、どこのだれやらわかりません。もっとも、逃げて来た晩にはそういうことがあってはならんからというので、ものの言える人はみな住所氏名を言わせて紙に書き、それをからだにつけたのです。しかし、これがめい土への鑑札のような気がしたのかどうかは知りませんが、死んだときには、あがいたりして取って捨てていましたから、住所氏名の不明のものが非常に多かったのです。だから、わかっているものはかわらにチョークでそれを書いて、焼くときに頭のところに置きました。

こうしていよいよ焼くために死体を運ぶ段になりましたが、実にはやなにおいがするので、警防団の人たちは口や

鼻をタオルでおおって、遠くからトビ口で担架へ乗せるんです。これでは時間がかかってしょうがないというので、暁部隊へ、死体処理に至急、剛の者を一中隊派遣してくれと使いを出したところ、すぐ中隊長を先頭に一箇中隊来てくれました。それからのはかどりました。タキギを壕の底にずっと並べ、その上に死体を頭と足を交互にして並べましたが、そうでもしなければ死体が多くてどうにもならなかったんです。

そのとき、ワラがいると兵隊が言うので、己斐上町のだれもない家から、無断ではあるが、持って来させて死体の上にかぶせ、軍隊の持って来た石油をかけて焼くことにしました。最初の八日に、中隊からわたしのところに報告に来たときが六一七体でして、すぐに火をつけようかといいましたから、いま火をつけると夜になり、空襲の目印になっても困るから、明日にしてくれといいました。九日の朝、また兵隊が来たので、前の晩に死んだのもいっしょに焼くことにしたら、死体の数がちょうど八 体になりました。ですから一夜のうちに一八 人もなくなったわけです。その時は、己斐の町一帯非常にくさかったそうです。

一番困ったのは、死体が全部焼けずに頭や手などが焼残るので、夜になると野犬が集ってきて、それらをつつくのです。ものすごい光景でした。死体焼却が一段落ついて、その壕は埋めてしまいましたが、戦後食糧不足の時代に、そこらを畑にしてイモを作りまして、非常によくできたのに、だれも気味悪がって食べないので、わたしがまず食べてみせたら、他の職員もようやく食べだしたという後日談があります。

それから後はぼつぼつ死ぬるし、大竹町などからはトラックを持って来て、自分の町の人の死体を持って帰ったりしました。そのころは、用事があって市内へ出るときにはチョークを持って行きました。そうして、わたしの学校で処理した死体のうちで、住所氏名のわかっている人がありましたから、その町を歩くときには「〇〇氏八己斐国民学校で死亡、遺骨八学校二保管シアリ」というふうに、道路や焼残りの防火水槽などにチョークで書いておきました。おかげでだいぶん遺骨を取りに来られました。

そうこうしておりますうちに、多分十二日だったと思うんですが、鳥取県から医療看護班が食糧や薬品をもって救護にやって来てくれました。そのときの話に、何でも、以前に鳥取市の大火の際に、広島県から鳥取市へ救護班を派遣したことがあるんだそうで、そういう関係から、そのお礼に救護に来たのだということでした。医師がひとりと看護婦が五、六人でした。

これで救護活動も活気づきましたが、困ったことに、この人たちの泊るところがない。学校は今もお話したように、便所の隅から校庭にいたるまで、患者でいっぱいです。己斐町の人たちは、被爆と同時に山を越えて石内村のほうへ逃げて行ったので、空家同然の家が多かったんですが、だれもない家では何かにつけてお困りだろうからというわけで、当時町内会長をしていた土井卯一という植木商の家が広いので、土井さんに頼んでその家をお借りして、そうしてそこから救護に通ってもらったのです。

土方頼己

(当時軍医、中国電気通信局保健課長)

わたしは当時、大竹の陸軍病院の軍医として勤めていました。八月六日、下士官がオートバイで、休暇で休んでいたわたくしのところへ連絡に参りまして「広島がたいへんです。車(トラック)の用意がしてありますから、すぐ行って下さい。」というので、さっそくシャツとズボンのすこぶる軽装で下士官二人・看護婦五人を連れて広島へ参りました。

途中、早い患者は五日市あたりまで逃げていました。道路が避難者でいっぱい、車が思うように進まず、二時間ぐらいかかって、十二時前に広島の己斐救護所に着きました。

当時患者が校庭にいっぱいであったので、まず校舎をかたづけて部下の下士官と看護婦を火傷係と創傷係の二班に分けました。わたしは外科が専門でありましたが、原子爆弾がわからなかったので、普通の火傷と判断して、看護婦にその治療をまかせました。

わたしのほうは軍隊関係であったので、衛生材料はたくさんもっていました。六日、七日の二日間は食事もとらず、水もろくろくのまず治療に当たっていましたところ、八日の朝になって下士官が「どうもおかしい。軍医どの。今までの怪我とは全然違います。きのう軍医殿が治療された患者は、つぎつぎ死んでいきます。」というので「そんなばかなことはない。」と申しましたが、非常にたくさんな患者であったため、実はわたくしも自信なく、不思議に思いながらも次から次に来る患者の治療に当たっていました。

そのうち、八日の夕方になりますと材料がなくなりましたので、いったん死者を整理して帰り、また衛生材料を持

って参りました。当時の記憶でトラック四車両を使ったと思います。

九日に下士官が調べたところによりますと、治療した患者の数は万を下らないのではないかと申ししていました。火傷は当時治療方針が立たないので、ただチンクオイルのみ塗って治療していたというだけでありました。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎は小破程度の被害を受け、人的には教職員一人が死亡、生徒二人が動員先で死亡したのみで、他の教職員及び児童は健全であったため、第二学期を平常通り開始しても何ら支障はなかった。九月に入ると収容患者の数も減少したので、第二学期を開始する準備をはじめ、教室数二四室の整備(内、特別教室四室)をした。その結果第二学期は、九月二十日ごろ開始したが、当時の出席人数は教職員一六人、児童数は市内の焼失した天満国民学校の児童も含めて約八〇人程度集った。

なお、学用品などについては、資材不足の折で入手困難であったが、印刷済の用紙を父兄から提出させ、その紙の裏を利用したり、配給用紙を使用したりして授業を進めていた。また教科書については、その一部を墨で削除することによって旧教科書を使用したり、文部省発行パンフレット型教科書を五、六人一組で一冊を使用するなどして授業をした。

第二十三項 広島市大河国民学校...231

(現在・広島市立大河小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市旭町一、二六五の二番地

校長 小田信夫

教職員 二人

児童 概数五〇〇人

校舎 木造二階建・三一教室・延一、〇四〇坪

敷地面積 四、〇四坪

爆心地からの距離 約三・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十二日	比婆郡本田村峯田	五人 (寮母五人)	一五〇人		第一次疎開児童一五人
昭和二十年七月十六日	比婆群本田村木村 (現 庄原市)	四 (寮母三人)	一〇〇		第二次疎開児童一〇〇人
合計		九人	二五〇人		

広島市大河国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
自研自動車修理工場	千田町	一人	五〇人 高等科一・二年生の男子生徒	自動車修理	被爆当日、朝八時に教員が生徒を引率して工場に行き作業中。
網本食品工場	旭町	一	五〇人 高等科一・二年生の女子生徒	糧秣廠の仕事	被爆当日、朝八時に教員が生徒を引率して工場に行き作業中。
合計		二人	一〇〇人		

四、指定避難先と経路

(一) 緊急事態の場合は、学校内の防空壕に、学年ごとに避難する。

(二) 登校していない場合は、各町別に、仁保および霞町方面(当校から東南東約一・六キロメートル離れた地域及び北北東約四〇〇メートル離れた地域)に避難して行く。または近くの大河説教場・黄幡神社・稻荷神社などにも避難することにしていた。

(三) 一般的事態の場合は、教員が学年ごとに引率して、状況に応じ安全な道を通して避難することにしていた。

五、校舎の使用状況

校舎二階の全教室が暁部隊に貸与されており、約五〇〇人程度の兵隊が駐屯していた。そのため、講堂は被服庫として使用され、毛布・浮袋、その他、兵隊用物資が集積されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
低学年(一・二年生児童)の平日授業	三人	一五〇人	暁部隊 五〇人	六日の朝、登校した一・二年生児童は、原子爆弾炸裂前に教室に入った。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況...半壊

当校は爆心地から南東約三・一キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂による校舎の被害は、半壊程度であった。校舎の窓ガラスなどは、ほとんど破損し、屋根瓦が落下し、教室の柱がところどころ折られた。また、一部の校舎は傾いた所もあった。なお、校舎からも、また、学区内の各家庭からも、幸い火災の発生はなかった。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(一)人	人	()内は学校外での被爆者数
計	(一)		

六日当日はちょうど、低学年児童(一・二年生)の授業日になっており、登校した児童は、炸裂時には、すでに教室に入っていたが、大きな校舎の被害もなく、全員無事であったから、児童を急ぎ校庭に誘導して避難させた。その後父兄の中には心配して、学校にかけつけたものもあったが、児童には異常なく、学区内の各家庭も大きな被害がなかったから、児童たちを順次、父兄のもとに帰らせた。

なお、千田町の自動車修理工場に出動中の高等科一・二年生の男子約五〇人は、作業中に被爆したが、奇蹟的に全員無事で、学校または家庭に帰ってきた。しかし、動員生徒引率の女子教員一人は、不幸にも放射熱線を浴びて全身に火傷を受け、似島の救護所に収容されたが、三日後に死亡した。

八、被爆後の混乱

炸裂直後、たちまちのうちに当校校舎は一般被爆者の収容所に早替りし、各教室・運動場および防空壕などにはたくさんの方の罹災重傷者がつめかけた。学校では、緊急時の給食用として保管していた油及び医薬品を全部提供し、教職員・近所の医者および薬剤師・兵隊などが一緒になって、被爆者の看護に当たった。しかし、つぎつぎに死亡する者が多く、日夜、運動場の隅々で、死亡者の火葬が兵隊の手によっておこなわれた。学校の小使室では、消防団員や学区内の父兄などによる炊出しが始まり、また、教員室では、県庁と市役所からの関係者が中心になり、教職員、駐屯兵も手伝って罹災証明書作成に多忙をきわめた。このような状態で、学校は一時、教育の場としての機能を完全に停止され、被爆者の仮収容所として、八月六日から九月三十日まで使用されたから、児童は指示のあるまで家庭において学習することとし、教員は時々家庭訪問をすることにしていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月初旬ごろになって、授業を開始する準備ができたが、各教室はほとんど病室として使用されていたため、二学期の授業開始は、大河説教場および翠町の第三国民学校の一部教室を借用してはじめられた。また、九月十三日には、疎開先から集団疎開児童も帰校してきたので、本格的な開校が必要となってきた。当時の教職員は一七人、児童数は約五〇〇人で、人的にはほとんどの者が異状なく、一日も早く当校での授業開始を切望していた。十月五日、当校は

被爆者収容所としての役割が解かれ、残留負傷者は仁保国民学校(日本医療団病院仁保病院)に移されたので、父兄も一緒に学校内の大掃除をやり、中旬ごろから当校での授業が可能となった。幸い、校舎も学区内の各家庭も大きな被害をこうむらなかった関係で、児童用の教科書および学用品については、各自が持参していたのを使用して授業が進められた。

なお、昭和二十一年五月十四日から、破損した校舎の修理が開始された。昭和二十五年九月には、学校復興資金百万円の寄附募集をおこない、これが校舎の修理並びに教育設備品の拡充に大きな役割をはたした。

第二十四項 広島市矢賀国民学校...238

(現在・広島市立矢賀小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市矢賀町八四四番地

校長 田中稔

教職員 八人

児童 概数二三〇人

校舎 木造七教室・延一六二坪

敷地面積 五六〇坪

爆心地からの距離約 三・七キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年七月十六日	佐伯郡河内村	四人	一二〇人	不明	

三、学徒動員状況

なし

広島市矢賀国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

四、指定避難先と経路

避難先は、学校の北方約三〇〇メートル先の覚法寺に指定されていた。

五、校舎の使用状況

学校が災害時の第一救護所に指定されていたから、外傷用医療器具及び医薬品が、少量保管されており、救急措置について、婦人会が日ごろから実習していた。なお、軍隊関係は使用していなかった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
なし	一人	人	一人	被爆当日は学校休業中につき、児童の登校はなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破

当校は爆心地から東北東約三・七キロメートル離れており、原子爆弾炸裂による被害は、校舎南側の窓ガラス全部が破損し、階下西端の特別教室の天井が脱落、また、校舎内各所の壁に亀裂を生じた程度のものであった。しかし、幸いにも校舎内からも、また、学区内からも火災の発生はなく、各生徒の家庭も、被害は比較的になく、人的被害は無かった。

八、被爆後の混乱

(一)児童に対する緊急措置

被爆後、学校としては、各家庭ごとに児童の異状の有無を調査したところ、被害軽微で異状がなかった。

しかし、父兄の中には、広島市内に出ていて被爆し、重傷または死亡した人もかなりあったから、疎開先にその家庭の児童を連れに行った。なお、集団疎開児童は、九月十日に全員を帰校させた。

大混乱のなかにも、学校の機能は、停止するようなこともなく、全教職員および児童も健在で、疎開先からも無事に帰校した。しかし、学校は一般被爆者の救護所として解放していたため、九月になっても授業を始める教室がなかった。

(二)応急救護所としての役割と概況

被爆当日、全校舎を解放して一般被爆者約一五〇ないし一六〇人を収容した。その後も負傷者が続々と収容されたが、二、三日頃から死亡者が続出、初日は約三〇数体を焼いた。のちに十月六日、医療団矢賀病院を学校内に置き、引続き負傷者の治療がおこなわれた。この頃、各教室に分散していた負傷者を一教室にまとめて収容し、十一月一日からは患者の診療のみとした。昭和二十二年六月十五日までは引続き当校の一教室が治療室にあてられていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

学校は被害も少なく、学区内の家庭も火災を起こした所はなく児童も無事であった。昭和二十年九月十日、疎開地から児童全員が帰校したので、開校はすぐにもできる状態にあったが、全校舎が負傷者の救護所に使用されていたため、教室の使用ができなかった。そこで対策協議の結果、鉄道工機部の寮・覚法寺および中組・下組の青年会館の四か所を借用することができたので、九月二十五日に第二学期として分散授業を開始した。

十一月一日になって、校舎の六教室と職員室一室とが使用できる状態となり、児童は全員学校へ引揚げた。九月二十五日の二学期開始当時の当校教職員は八人で、児童は約二三〇人程度であった。

第二十五項 広島市江波国民学校...243

(現在・広島市立江波小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市江波町二ノ割九八ノ二
校長 本田亮作
教職員 一四人
児童 概数五五〇人
校舎 木造二階建・二〇教室・延五八四坪
敷地面積 一、六〇四坪
爆心地からの距離約 三・七キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十三日	双三郡吉舎町安田一寮	教員一二人	二五人	二四八八	疎開地には、その後、各収容所ごとに、一人の教職員を増加した。
昭和二十年四月十五日	双三郡吉舎町三寮	寮母七	一四五		
	双三郡八幡町二寮				
合 計		一九	一七〇	二四八	

広島市江波国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

特になし

五、校舎の使用状況

若干の軍隊がいたようであるが、確定的なことは不詳である。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
平日授業	八人	五・六年 六一人	三人	学区内において、次のとおり授業所を分散していた。 三・四年生 広島漁業会江波支所...七四人 二年生 長月院...九〇人 一年生 海宝寺...七八人

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破(一部は全壊)

当校は爆心地から南々西約三・七キロメートル離れており、原子爆弾炸裂による被害は全体的に小破程度であった。即ち、校舎窓ガラスなどは飛び散り、座板には穴があいて、階上の床からは、階下の見える危険な所がたくさんあった。また、古い教室などで、爆風を受けて、四教室が完全に倒壊したが、幸い火災は発生しなかった。また、学区内からも火災は発生せず、被害も小破か中破程度であった。

(二)人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	〇人	〇人	
重軽傷者		六(軽傷)	
行方不明者			
計		六	

校舎は軽い被害を受けただけであり、登校していた児童も、数人のものが軽傷を負った程度であった。被爆後、登校していた児童は全員帰宅させたが、教職員は学校に踏みとどまり、万般の警備にあたった。

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂後、小破程度の被害のみで残った当校には続々と罹災者が集合し、またたくまに講堂および、教室は満員になった。うめく者、死ぬる者などで地獄さながらの状態が毎日続き、広島陸軍病院江波分院から医療班が派遣されて、約七、八 人におよぶ収容負傷者の治療にあたった。しかし、死ぬる者が続出、死体置場に定めた一教室は、たちまちのうちに死体でうずまった。罹災者は、校舎の板壁などをはぎ取って、焚き物にしたり、書類を薪がわりにしたりして、秩序も何もなかった。また、時には運動場の片すみか火葬場になったりしたこともあった。本校校長みずからは学校に泊り、他の教職員もできるかぎり出勤して、校舎の警備と、火災発生のないように精一杯つくした。このような收拾つかない悲惨な末期的な状態が、同年十月六日、日本医療団病院として当校が指定されるまで続いた。

なお、日本医療団病院は、昭和二十二年十一月に解散することになり、翌二十三年三月、広島県へ移管された。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年十月二十一日、ようやく開校する運びとなったが、医療団が校舎の一部を使用している関係で、利用できる教室は八教室であった。そのため、二学級を一学級に圧縮したりして授業を始めた。

しかし、いずれの教室も、窓ガラスなどは全部なく、座板は破れて穴があき、階上の床から階下の教室などが見える状態であったから、各自がガラス戸を持ちよってきたり、応急的な修理をしたりした。酷寒の冬を迎えてからは、始業の時刻をおくらせるなどして、ふるえながら授業をおこなった。当時の教職員数は一四人、児童数は約六五〇人程度であった。

その後、爆圧による校舎建築のゆるみなどで、危険も感じられ、補強の副え柱などがとりつけられた。

なお、当校学区内は焼失地域でないため、古い教科書を使用できたが、用紙などの消耗品類には困った。しかし、他の焼失地区の各学校にくらべれば、全くよかった方である。

(現在・広島市立宇品小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地(本校) 広島市宇品町六丁目四三

(分校) 広島市元宇品町

校長 香川軍二

教職員(本校) 四五人

(分校) 四人

児童(本校) 約一、四〇〇人

(分校) 六〇人

校舎 木造二階建・(本校)四八教室・(分校)四室

敷地面積(本校) 一、〇七四坪

(分校) 七八坪

爆心地からの距離 約三・七キロメートル

広島市宇品国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十三日	双三郡三次町 双三郡布野村 双三郡作木村	約二五人	約四二〇人	約九〇〇人	七月二日および八月三日に追加疎開を実施した。
合	計				

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

(一)元宇品町...めがね橋を渡り分教場へ

(二)丹那.....丹那橋を渡り丹那穴神社へ

五、校舎の使用状況

講堂は入れ替りたち替り、終始軍隊が使用していた。四棟のうち一棟は、暁部隊が約四〇〇～五〇〇人駐屯し、一部は被服庫として使用した。

昭和二十年五月二十四日、元宇品町の分教場にも軍隊が駐屯した。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
職員朝会、作業	一八人	一〇数人	数百人(軍隊)	在校児童一〇数人は、作業のため登校した(六年女子)

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況.....小破

当校は爆心地から南方へ約三・七キロメートルも離れているが、それでも窓枠やガラス戸が飛散し、屋根瓦の一部は吹き飛ばされ、瓦の一部の配列は乱れて、屋根を葺きかえなくては使用不可能になった。また部分的に柱が折れるという事態も生じた。特に第二校舎にその被害が大きかったが、これは爆心地に面した最も長く、最も近い建物というところからであろう。しかし、総体的にみて構造上の被害よりも、造作的な被害が多く、被害が小破の程度にとどまったのは幸いであった。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
重軽傷者	四人	七人	

炸裂当時、登校していた児童は、一〇数人であったから、負傷していない児童は、教師が直接引率して帰宅させ、負傷児童は臨時治療所である現在の宇品学園で応急手当を受けさせた。負傷は、大概爆風によって飛散したガラスの破片を受けたものであった。

八、被爆後の混乱

被爆後は、学校に児童を集めて学習を進めるような余裕もなく、また校舎自体も児童たちを収容できるような状態ではなかったから、児童はすべて家庭に任せ、教師は随時学区内を巡視して児童の指導に当たった。この間、教職員は学校の整備と管理に専念することとした。

また、香川校長は南竹屋町の自宅で被爆し、火傷のため出勤できなくなったが、堀池良雄教頭は、ガラスの破片による負傷程度であったから、校長代理として学校を管理し、教職員を把握した。したがって、通勤可能な教師約一〇人は堀池教頭の指揮下にあつて、校舎の整備さえ完成すれば、何時でも開校に応ずることができる態勢にあつた。

昭和二十年八月十七日、罹災者四人が第二校舎に宿泊したのをはじめに、病院や救護所を退院した者の第二次収容所となり、約四〇世帯・一三〇人ほどの人々が第二校舎に収容された。この状態は翌年の四月二十八日に、これらの人々が宇品の引揚者寮に移転するまで続いた。

九、学校再開の状況

学校の再開

開校までは、教職員だけがほそぼそと校舎の整備に当たったが、九月一日、開校後は教職員と児童とが、力を合せて校内の整備に当たった。瓦やガラスの破片が取除かれ、柱の補強や屋根の補修などの大仕事もおこなわれ、吹き飛ばされて壊れたガラス戸の代りにベニヤ板や油紙が用意された。

(第二学期授業開始と状況)

昭和二十年九月一日開校

教職員 教頭以下 一一人

児童 四三二人

なお、教室に不足することはなかった。

九月十二日、集団疎開児童二七九人が帰広したのをはじめに、縁故疎開児童も次第に帰ってきたため、学級を再編成する必要に迫られ、同年十月二日、新しい学級を編成し、担任を決定した。

しかし、開校はしたものの、校舎の不備や、食糧の不足などで意の如く授業はおこなえなかった。相当期間は、午前中は学校でおこなえる範囲での授業、自由学習・校庭のイモ畠の手入れなどで過し、午後は家庭において、家庭内の復旧作業に協力することとした。

また、当学区は、火災による被害がなかったため、児童たちは学用品が焼失することもなく、特別の配慮をすることもなかった。他地区から焼け出されてきた者に対しては、児童間において助け合いをおこなうよう指導した。しかし、教科書については、開校当初は教科書による授業をおこなうことは少なく、そのうちに、占領政策により、既存の教科書はほとんど使用できないことになった。

[第二十七項 広島市古田国民学校... 254](#)

(現在・広島市立大古田学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市古田町字古江一二七五の一

校長 宮沢静一

教職員 一二人

児童 概数五〇〇人

校舎 木造二階建・一八教室・延五五八坪

敷地面積 一、一四二坪

爆心地からの距離 約四・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

当校は市周辺の山間部にあり、特別に集団疎開は実施しなかったが、防空壕を作り、空襲時には避難していた。

三、学徒動員状況

なし

広島市古田国民小学校 学校敷地・校舎配置(略図)

四、指定避難先と経路

学校の周辺にある小山に防空壕(入口が二つあり、その間が約二〇メートル・奥行約一〇メートル・中約三メートル・高さ約三メートル)を構築して、それに避難することになっていた。

五、校舎の使用状況

理科教室を市役所に貸与し、物資の集積場として使用された。集積物品には、電球・のこぎり、医薬品などがあつた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
児童全員登校して平常通りの授業予定(午前中のみ授業)	一二人	二四〇人	二人	

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破

当校は爆心地から西南西約四・二キロメートル離れた所の山間に位置していたが、爆心方向には障害物がなく、爆風によって小破程度の被害を受けた。すでに、老朽校舎ではあったが、校舎の柱が二、三本折れ、三つの教室では天井が落ちた。また、窓ガラスなどは、その大部分が破損した。しかし、火災は発生せず、学校機能に支障はなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考	
即死者	人	人		
重軽傷者				軽傷者 数人
行方不明者				
計		軽傷者 数人		

原子爆弾の炸裂による人的被害はほとんどなく、ただ二、三人の児童が軽傷を負った程度であったから、全員を急ぎ西側山地にある防空壕に避難させた。その後、時機を見はからって全員帰宅させた。

八、被爆後の混乱

学校としての機能にさしつかえはなかったが、八月九日から県病院救護所となったから、校舎は教育の場としての機能を事実上停止した。収容所となっても、最初の数日は医師はおらず、全くの放任状態であったが、四日目にしてようやく医師一人が来校し、看護にあたった。学校に保管されていた薬品・脱脂綿などを出して、教員も看護にあたったが、死んで行く人々が日々が増えてきた。その死体の処理は、校庭に作られた臨時火葬場でおこなった。

九、学校再開の状況

学校の再開

当校は県病院救護所として、多数負傷者を収容したため、授業を行なうことは不可能であった。そのため、他の場所を探さなければならなかった。当局との交渉の結果、古田町山間にある鬼が城の旧陸軍兵舎・求道寺および氏神社の三か所を借受けて開校した。しかし、極めて不正常なものであり、正規の授業ができないので、毎日作業や遊戯などをして過ごすことが多かった。なお、当時の教職員数および児童数は被爆前と大差はなかった。九月末、当校の収容患者を草津国民学校に移したので、十月から、分散授業をやめて、本来の校舎に帰った。しかし、学用品の支給もなく、家庭にある古い学用品などを使用して授業を進めていき、教科書などについても、プリント教科書を代用に

使用した。

第二十八項 広島市仁保国民学校...259

(現在・広島市立仁保小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町一〇の割一〇三〇番地

校長 平原沢城

教職員 二人

児童 概数七四〇人

校舎 木造二階建・二七教室、延一、一七五坪、鉄骨モルタル塗一・延一五四坪

敷地面積 四、四四一坪

爆心地からの距離 約四・二キロメートル

広島市仁保国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年五月二十七日	佐伯郡玖島(二か所)	五人	大町地方 } 一二〇人	〇人	善教寺ほか一か寺 大福寺ほか三か寺 打尾谷分教場
	佐伯郡上水内(四か所)	八	本浦作木 } 二二〇	〇	
合計		一三	三四〇	〇	

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
霞町軍用テント工場	広島市霞町	二	一五〇	テント部品制作	
鉄道電修場	広島市蟹屋町	一	五〇	電機関係	
合計		三	二〇〇		

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

当校の北校舎(一六教室)全部を陸軍暁部隊に貸与し、兵員の宿舎として使用していた。また、理科教室には救命胴衣・毛布などがぎっしり保管してあったが、被爆後にいづこかへ持ち去られた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
八時 教員朝会、八時三十分 学区内の四集合所にて授業開始(一・二年のみ)	八人	二〇〇人	軍人関係の数は不明	当時、学校の三年生以上の児童は疎開地にあったが、一・二年生の児童は親のところに残り、学区内の四集合所で午前中のみ授業を受けていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況.....小破

当校は爆心地から東南東約四・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂で、爆風によって小破程度の被害を受けた。すなわち、北側校舎の壁は相当にひどく破壊され、校舎の瓦も大部分がずれた。また、校舎および講堂の窓わく・ガラスあるいは建具類なども破損した。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	○人	○人	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	(一)	(一)	
行方不明者	○	○	
計	(一)	(一)	

一・二年生児童全員は炸裂時には、いまだ家庭にあったが、児童一人は当日治療のため、比治山本町を通行中に被爆して、重傷を負いながらも帰宅した。また、教職員のうち一人は、登校中に稲荷町付近で被爆し、重傷を受け、のち死亡した。

八、被爆後の混乱

三年生以上の児童は集団疎開をしており、一・二年生児童はおのおの自宅にあって、学区内の集合所(四か所)で分散授業をうけていた。原子爆弾炸裂のとき、一・二年生の児童は、各自が近所の集合所で授業を受けるため、集りつつあったか、または未だ家庭にいた。

被爆後は、各家庭の保護者の監督にまかすと共に、一方では集団疎開児童との連絡にあたった。

当校は、さいわいにも人的には被害も極小であり、校舎も小破程度の被害であったため、機能は停止しなかった。しかし、校舎の過半は、被爆負傷者の収容所に使用され、学区内の各集合所も社会の混乱のため使用もできず、学校としての児童にたいする指導は一時中止された。この指導中止は二学期の開校まで続いたが、中止の期間中に時々教員で学区内の巡視を行ない、児童の状況を知ること努めた。

また、被爆直後駐屯していた陸軍砲部隊の過半数は移動し、一部は市内の整理に出動した。校舎には、被爆者約四〇〇人が収容されて砲部隊がその治療にあたったが、数少ない教職員も、町の人々と共に可能な限り看護に当たった。その間にも、死亡する者が六〇人以上もあり、氏名の判明している遺体は、かけつけた遺族に渡し、不明の三四体は教職員もその火葬に協力した。火葬は猿猴川の堤防上・本浦火葬場のほか、運動場でも行なったが、死亡する被爆者は、時間がたつにつれて増加するばかりで、臨時火葬場(運動場)は超満員の状況であり、それに必要な燃料がなくなったので、焼夷弾よけに取除いて保管していた天井板まで使用して、火葬作業を続けた。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、児童の保護者と協議の上、修理費を捻出して、主として窓わくを中心に、ずり落ちた屋根瓦を修理したが、工事には約三か月を要し、完成したのは翌年の一月であった。原子爆弾による被害の軽少であった当校においては、収容者の減少により、あいた教室において、九月二十日ごろから、授業を開始した。しかし、十月六日から日本医療団仁保病院に指定され、大河国民学校の残留負傷者を再び収容したが、まもなく閉鎖されて、ようやく、本来の学校の姿を取戻した。

学校の開校は、九月二十日ごろであったが、疎開中の児童で、佐伯郡玖島方面に疎開した者は、九月十四日に引揚げて来たが、他の地区(佐伯郡上水内村)の疎開児童は、水害のため引揚げが困難となり、十月初旬に帰校してきた。当時の教職員数は二人、学級数は一八学級であった。

なお、学校も、児童たちの家庭も被害は僅かだったため、教科書は、別に入手のため苦心する必要はなかった。学用品などは各児童家庭で用意していた。

[第二十九項 広島市楠那国民学校... 265](#)

(現在・広島市立楠那小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市仁保町字楠那乙三の五

校長 扇畑良雄

教職員 九人

児童 概数三五四人(初等科 二九八人、高等科 五六人)

校舎 木造二階建・一二教室・延五一七・五坪

敷地面積 一、二二三坪

爆心地からの距離約 四・五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年五月十二日	比婆郡八幡村帝釈	四人	七九人	五人	
昭和二十年七月十八日		二	二五		
合 計		六	一〇四	五人	

広島市楠那国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	鶴見町	一人	一四人	疎開跡片づけ	竹屋国民学校に集って現場へ行く。

四、指定避難先と経路

(一)学校から丹那に至り、丹那説教場

(二)学校から日宇那に至り、日宇那説教場

五、校舎の使用状況

当校校舎の講堂(七〇坪)・教室五(一〇〇坪)・給食室(六坪)・倉庫(六坪)などの計一八二坪は陸軍暁部隊に貸与されており、常時ではないが約五〇人前後の兵隊が駐屯していた。物資の集積品としてはコーリヤン・米・麦・調味料・砂糖・酒・塩・菓子・衣料品・下駄・室内ばき・ボタン類・用紙類・ハサミ・カヤなどの物資が集積されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備考
	教職員	児童	その他	
高等科生徒は動員出勤中であったが、初等科児童は授業であった。	七人	七〇人	不明	原子爆弾炸裂時までに登校した児童は、教室の清掃中であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破

当校は爆心地から南東約四・五キロメートル離れた市の周辺部に位置していたが、原子爆弾の爆風によって講堂・裁縫室の壁一部が落ち、校舎の窓ガラス約五〇枚が破損した。しかし、倒壊した建物などはなく、幸い校舎からも民家からも火災の発生はなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	児童	備考
即死者	(一)人	人	()内は、動員先での被爆者数
重軽傷者		(一)	
行方不明者			
計	(一)	(一)	

原子爆弾炸裂時、登校児童は急ぎ校内の各所の防空壕に避難し、被害は軽微であった。

八、被爆後の混乱

被爆後は社会的混乱のため学校を八月二十日まで休業としたが、八月二十日から低学年児童(疎開児童を除く一・二年児童)の簡易授業を再開した。

当校は被害も小破程度であったから、人的には被害もなく、火災も発生せず、学校の機能に支障なかった。しかし、被爆後、臨時救護所として使用された関係で、児童に対する授業は、一時中止せざるをえなかった。

学校は、暁部隊衛生班の臨時救護所となり、理科教室および廊下を治療所として、一般被爆者の応急手当がおこなわれ、階上教室などを仮病室として収容された。当校に収容した被爆者は約二七七人にのぼり、罹災証明書交付手続きなどについても多忙をきわめた。しかし、当校臨時救護所も八月二十一日まで開設されたのみで、その後は大河国民学校へ患者が移された。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月二十日ごろまでは、罹災者のために収容所として開放されており、また、社会混乱のために一時休校していたが、収容所が閉鎖された八月二十一日から、低学年児童のため簡易な授業を開いた。正式に第二学期としての授業開始は、九月三日からであったが、九月十三日、疎開先から児童が帰校して、はじめて、全員が授業態勢に入った。当時の教職員は七人、児童数は約三五四人であった。

第三十項 広島市草津国民学校...270

(現在・広島市立草津小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市草津東町

校長 山下究二

教職員 二三人

児童 概数一、一〇〇人

校舎 木造二階建・三〇教室・延一、二三九坪、鉄筋校舎一・延一四三坪

敷地面積 三、五九四坪

爆心地からの距離 約四・七キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年七月二日	世羅郡吉川村 世羅郡上山村 世羅郡小国村	一六人	一七六人	二四九人	

広島市草津国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内小網町(土橋)	四人	一六七人	疎開跡片づけ	現場に行く途中(観音町土手付近)で被爆

四、指定避難先と経路

緊急を要する避難先として、当校の北方約三〇〇メートル離れた山の中腹の寺(広島市古田町の行者山海蔵寺)を指定していた。

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部(六教室・約九二坪)は、陸軍砲部隊に貸与されており、日頃は、約九〇人前後の兵隊が駐屯していた。また他の一教室(二〇・三坪)は県庁に貸与されて、県関係の物資(特に用紙類)が集積されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
平日授業	二二	五一二	暁部隊員 約九〇人	高等科男女生徒(一六七人)は、広島市小網町方面の建物疎開作業に出動

当校においては、学校外に四か所(学区内の寺一か所・会館三か所)分散授業所があり、当時、集団疎開をしない児童(三年生以下の低学年と、病気などで疎開をしなかった四年生以上の児童)を、計五か所の分散授業所に分けて学習をしていた。また教員は、本校での朝礼後、各受持の分散所に出張していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破

当校は爆心地から西南西約四・七キロメートル離れた市周辺部に位置しており、北側は山に囲まれてはいるが、爆風方向に向って延びた町であり、原子爆弾炸裂と同時に校舎窓ガラスの大半と、屋根瓦の一部が散乱した。また校舎内の壁や天井などの大部分が破損したり、落下したりして、小破程度の被害を受けたが、火災の発生はなく、学区内の家庭からも火災は起らなかったため、登校中の児童には、ただちに安全な措置をとることができた。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	○人	(二)人	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
重軽傷者	(三)	(七一)	
行方不明者	(一)	○	
計	(四)	(七三)	

炸裂による校舎の被害はあったが、登校中の児童(学校を分散授業所として通っていた一部の児童)の中には、幸い負傷者はなく、児童全員は、ただちに学校内の防空壕に避難した。その後、学校にも学区内の各家庭にも異状が見られなかったから、児童は急ぎ帰宅するよう指示した。また、学校以外の各分散所(四か所)の児童にも別段に異状がなかったため帰宅させた。

しかし、被爆当日、小網町付近の建物疎開作業に出動した高等科の男女生徒約一六七人は、作業現場へ急ぐ途中、観音町の土手付近で全員被爆し、約七一人の生徒が重軽傷を負った。そのため、引率教員はただちに、生徒全員を学校につれ帰り、負傷者は、応急手当をしてから帰宅させた。負傷の重い三人については、教員が家庭に送り届けた。

しかし、引率外の生徒(直接作業現場にむかった生徒)二人が即死した。

八、被爆後の混乱

校舎の被害も屋根瓦・窓ガラス・壁および天井などに小破程度の損傷を受けたが、倒壊校舎がなく、使用にはさしつかえなかった。そのため、全校舎はただちに被爆者収容所として開放された。市中から一般被爆者の群れが続々と避難してきて、校舎・講堂などには推定三、
人以上の患者が収容され、学校側は校長・教頭および教員数人が毎日出勤して、これらの被爆者救護活動に従事した。当校が救護所として活動した期間中には、約二万人以上の被爆者を受け付けているが、死亡する者も多数にあり、九月末までの約二か月間に校庭において火葬を行なった数は、約二〇七体もあった。

当校は、昭和二十年十月からは広島県病院に指定されて、昭和二十三年三月の移転の日まで、七教室が病室に使用され、付近の医師が交替で患者の治療にあたっていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

第二学期としての授業開始は、平常通り昭和二十年九月一日であったが、集団疎開児童などの帰校も未だなく、また校舎の一部(七教室)は患者救護所として使用中のため、教室は一四教室を整備の上で使用し、教職員二人、児童数約五四七人程度で授業が始められた。縁故疎開児童の方は、八月中旬ごろから九月初めにかけて帰校したが、集団疎開児童の帰校は、昭和二十年九月二十三日であった。

その後、世情の落ち着くと共に、破損校舎の修理もおこなわれ、授業も軌道に乗ってきた。教科書については、児童のほとんどが持ってあり、持たない者(約二〇人くらい)には、学校に保管中のものを使用させた。また、学用品などは家庭で各自が整えたり、市からの配給品を受けて学習を進めていった。

[第三十一項 広島市青崎国民学校...276](#)

(現在・広島市立青崎小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市仁保町青崎一八八の三番地

校長 佐藤茂

教職員 三〇人

児童 概数一、二〇〇人

校舎 木造二階建・二六教室・延八五〇坪

敷地面積 二、六四六坪

爆心地からの距離 約五・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十四日	比婆群庄原町	一二人	二五六人	三七七人	四月から逐次疎開していた。
昭和二十年八月一日	比婆郡庄原町	一	一〇〇		
合計		一三	三五六		

広島市青崎国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	二人	一六一人	機械部品製作	工場内の仕事が漸く減少したので、高等科一年生八六人は、更に市中央部の建物疎開に出動したが、往復の交通困難のため、八月四日で疎開作業を打ち切った。

四、指定避難先と経路

(一)当校から青崎を経て、西県道を通り、向洋本町広場に避難する。

(二)学校から東青崎を経て、堀越広場に避難する。

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
職員会	一二人	-	-	当日は集団疎開を除く残留職員職員会を開くことになっていた。学徒動員に出動した生徒以外の児童は休日となっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破

当校は爆心地から東南東約五・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂による被害は小破程度であった。しかし、校舎で西側に面した窓枠は半壊し、ガラス窓は全部がこわされた。また、校舎内からも、また学区内からも、火災発生がなかったから、被害も極小です。

(二)人的被害

原子爆弾の炸裂時、学校には児童はおらず、被害も窓枠・窓ガラスなどがこわれた程度の小さなもので、人的被害も無かった。

ただ、学徒動員により東洋工業株式会社に出勤していた高等科二年生の女子一人が、ガラスの破片で頭部に治療一週間の負傷を受け、すぐ大橋病院に収容し、家庭に連絡した。

八、被爆後の混乱

八月六日は、在校児童はなく、学区内もほとんど被害がなかったから、家庭や児童に対する心配はなかったが、当日、東洋工業株式会社に動員出勤していた生徒は、急ぎ会社から学校に誘導し、諸注意を与えて各家庭に帰らせた。

また、集団疎開児童に対しては、混乱はなかったが、家族調査名簿を調製して、疎開現地に家族の被害状況を連絡した。その後、八月三十一日に疎開地から帰校するように命令をだしたが、配車ができないため、すぐには帰ること

ができず、九月十四日になって帰校してきた。

なお、学校は原子爆弾の炸裂後、まもなく市中から一般被爆者が避難して来て校舎はたちまち収容所に早替りした。その後も負傷者が続々と収容され、各教室が、これら患者のために開放され、診察・治療・看護・給食の役割がほどこされた。当校収容所内での診察・治療および看護には、大橋年見医師(学校医)と看護婦二人、および学校全職員が昼夜兼行して従事し、また給食関係についても、職員が責任をもって、これにあたった。

当校の収容所としての役割は、被爆当日から九月末日までの五五日間であったが、その期間中、収容本部を職員室に設け、校舎の一三教室を開放した。被爆直後、応急収容所開設当初のころ、収容被爆者は約四、五〇〇人程度であったが、一日平均約一〇人くらいが死亡していったため、逐次、収容者は減少した。死亡者の処置については、警防団員がこれにあたり、校庭でつぎつぎ火葬し、納骨には工業教室を安置場所とし、氏名のはっきりした者は親族へ受渡し、氏名・親族などのはっきりしないものは市役所へ移管した。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎の一部は、九月末まで収容所として使用されたが、被爆当日に解放した一三教室も、逐次、収容人員が減少してきたため教室があいた。九月になってから、収容教室の後始末や、西側校舎のガラス窓などの補修を始めた。

九月二十五日から、第二学期としての授業が開始され、教室数は二六教室を整備した。しかし、工業教室だけは残留被爆患者の収容および納骨安置所として使用された。

授業開始期当時の教職員数は三〇人、児童は約八七七人であった。

第三十二項 広島市似島国民学校... 281

(現在・広島市立似の島小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市似島字家下

校長 桧垣徳次

教職員 九人

児童 三八七人

校舎 木造二階建・一〇教室

敷地面積 延八五〇坪

爆心地からの距離 約九キロメートル

二、学童疎開状況なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
陸軍兵器補給廠似島弾薬庫	似島町長谷	一人	五人	弾薬運搬	
高射砲基地	似島町	一	五一	材料運搬	
合計		二人	五六人		

広島似島国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

四、指定避難先と経路なし

五、校舎の使用状況

陸軍部隊の物資保管所として、理科教室が使用されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
六年以下普通授業	七人	二九〇人	-	高等科五六人は勤労働員で現地で作業、教師

				二人随伴。
--	--	--	--	-------

七、被爆の惨状

被害状況

爆心地の南面約九キロメートルにある当校は、被害は全く軽微で、ガラス窓が数枚飛散した程度であった。これは地形によって救われた点が少なくない。

したがって、児童に負傷した者はなかったが、ともかく急ぎ帰宅せしめた。

八、被爆後の混乱

児童に被害がなかったのは不幸中の幸いであったが、児童たちの家族には被爆者が多かったうえ、市内から来島した多数の避難者救護に奔走しなければならなかったから、授業は一時中止し、混乱も一応治まった十月に授業が再開された。

[第三十三項 広島市第一国民学校...284](#)

(現在・広島市段原中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市段原山崎町二八六番地

校長 金谷秀造

教職員 二二人(校長・教頭のほか男一五人・女七人)

生徒 概数六四九人

校舎 鉄筋・五教室・延二一三坪、木造二階建・二八教室・延九三九坪

敷地面積 三、九二五坪

爆心地からの距離 約二・六キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島第一国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
杉原縫製株式会社	広島市出汐町	一人	一五人	テント製作	
広島地方専売局	広島市皆実町	四	約一一〇	煙草製造	
昭和金属工業株式会社	広島市大洲町	二	約六〇	軍需器具の部分品製造	
児玉工業株式会社	広島市大洲町	二	約六〇	軍需器具の部分品製造	
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	二	約五〇	軍需器具の部分品製造	
三星製菓株式会社	広島市西蟹屋町	三	約八〇	軍需用携行食品製造	
駅前郵便局	広島市松原町	一	五五	郵便分配作業	
建物疎開作業	広島市昭和町	五	約一五〇	建物疎開作業跡片づけ	
合計		二〇	約五八		

(註)この他にも出勤があったと思われるが、資料がなく記載せず。

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部(工業教室四教室)にあった旋盤は、軍需工場の下請け作業に使用していた。また、校庭は、耕作用地として野菜・イモ類・カボチャなどの栽培に使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	

一、学校管理	二人	小使い 一人	全校生徒は動員先へ直接出動していた。
二、勤労働員先の生徒への給食調理	六人	一人	

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊(一部全壊)

当校は爆心地から東南東約二・六キロメートル離れたところにあり、原子爆弾の炸裂と同時に、北側木造校舎は東側校庭に全倒壊したが、西側校舎・東側校舎(鉄筋コンクリート造)・講堂などは、窓枠および窓ガラスが全部破壊されたのみで、幸い倒壊はまぬがれた。また、倒壊校舎からも、周囲の民家からも、火災発生はなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	(一)人	— (四六)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	(九)	(約五〇)	
行方不明者	〇	(二)	
計	(一〇)人	— (約九八)人	

当時、生徒は学徒動員で軍需工場や市内の家屋疎開作業に出動していた関係で、在校生はなかったが、学校長・教頭・給食係女教員と給食係手伝い女生徒数人および現業員一人が在校していた。

原子爆弾炸裂の一瞬、北校舎の倒壊により学校長・教頭・現業員の三人は倒壊校舎の下敷きとなり、打撲や切傷を全身に受けたが、自力で脱出した。給食係の女生徒のうち一人は行方不明となったが、約一か月後校舎の倒れた下から発見された。

また、昭和町方面(爆心地から南々東約一・六キロメートル地域)の家屋疎開作業に出動中の教職員および生徒全員は、衣服を裂かれ、火傷したものの、吹きとばされて負傷したもの、或いは比治山橋付近まで逃げ延びて、灼熱の苦しさに川に飛びこんだ者や、流されて溺死する者、逃げ延びる途中で、力つき倒れる者などがあって、凄惨の限りをつくし、その正確な死亡者数はつかめなかった。引率の教員も全身に大火傷を受けた。

教職員のうち七、八人が病床につき、十一月ごろまで加療静養した。

八、被爆後の混乱

被爆直後、急ぎ動員先の状況調査を行なったが、軍需品下請工場に動員されていた生徒は、その動員先が爆心地から約三キロメートル以上離れた比治山より以東の地域の出汐町・大洲町・西蟹屋町方面であった関係上、人的には全員無事であったから、それぞれ帰宅を命じた。

翌七日から、残存の宿直室を仮事務室として、生存教職員で勤務し、被害調査を開始した。前述のとおり市内軍需品下請工場に動員出動中の生徒は被害がなかったが、昭和町の家屋疎開作業に出動していた生徒は、突然の大事態発生で、一瞬にその規律が破壊され、火傷者や負傷者が続出し、各自がチリチリとなって逃げたから、その被害の究明は困難を極めた。校舎内の備品なども使用可能なものはほとんどなく、また、教職員をはじめ、生徒の家庭も多くは無残に破壊されたから、学校としての機能は、まったく一時停止した。

この学校に収容された火傷者の写真が現存するが、幸い当校は、被爆後火災も起らず、焼失しなかったから、一部の校舎(講堂・工業教室)は多数負傷者の救護所として使用され、十月まで収容されていた。また、校地の一部が仮火葬場として使用された。

九、学校再開の状況

学校の再開

残存校舎の講堂・工業教室は、一般の被爆者の救護所として、十月の上旬まで使用されていたが、救護所解散後に教室を整備して、十月中旬ごろから開校した。臨時の仮教室として講堂・工業教室・西校舎を当て、使用し得る机・腰掛を集め、応急措置をほどこして開校することにした。すなわち、一年生、および二年生を各二学級ずつに編成して教員一〇人余りで授業を開始した。生徒は一・二年生全部で約一〇〇人くらいで、教室数は八教室(講堂内を区分した二教室を含む)を使用し、工業教室の一部は職員室・事務室に使用した。

学用品は、各自あり合せのものを使用していたが、後に市から配給されたものを分配して与えた。教科書は、臨時印刷の仮教科書の配給を受けたが、部数が足りないので、数人が共同で使用した。しかも用紙の質が粗悪なため破損しやすく困った。また、指導も極めて困難で能率もまたあがらず、学力は低下の一途をたどった。

疎開作業隊の惨禍

増田 勉

昭和二十年八月初め、建物疎開の後片づけをするよう動員指令が学校に来た。作業場所は、比治山橋西側のたもとの南一角である。

この頃、二年生の男女生徒と一年生の男子生徒は、すでに各軍需工場に出動していて、学校に残っていたのは、一年生の女子だけであったから、これが作業に出ることになった。

八月六日朝七時ごろ、女教師四人(武田初子・富田富枝・川崎雪・山根ヨシ)及び私の計五人が、女生徒一五〇余人を引率して、目的地に向った。その途中、警戒警報が発令されたため、比治山の多聞院の前の道ばたに、一時避難した。しばらくして解除になったので、列を整えて目的地に到着した。

目的地の作業現場は、すべての建物が取払われたあとで、大きな材木などはすでに一か所に集積されたり、持ち去られていて、その残りの木切れなどが散在していた。その木切れを拾い集めて整地するのが、われわれの作業であった。国民学校高等科の子どもながら、みんな一生懸命に作業にあたった。

作業を開始して、一五分ばかりたったころであった。生徒たちが集めた木切れの山に、火をつけて二、三分したとき、そのゴミの山の中に火薬があったという印象を受ける爆発が生じた。まったく異様な爆発で、反射的に危険を直感した。

「しまった！」と思いながら、すぐ伏せた。しばらくして体を起し、すぐそばの京橋川の土手に上ると、現在の原爆ドーム付近に大きな火の玉が落ちていくのが見られた。そばの川岸につないである筏には、すでに、武田先生と一〇数人の生徒がへばりついていて、周囲を見廻すと、その他には、「自分のそばに爆弾が落ちた。」と言いながら逃げていく市民のほかは、生徒の姿も引率した先生の姿も見あたらない。みんな、バラバラに散ってしまったのであろう。その時、五、六人の生徒が「先生！助けてッ」と叫びながら、南の方から両手をひろげて、私の方へ駆け寄って来た。おカッパの頭髪はボサボサにさばけ、灰色の埃だらけの顔をしている。一瞬にして、この無残な姿！誰が予想し得たであろうか。私は、すぐに比治山橋を渡って、比治山公園の方へ避難するように指示したが、それが精いっぱいのことであった。生徒たちは私の指示どおりに逃げて行ったが、その後どうなったのであろうか。

土手を下りて、私は再び作業していた広場に行き、付近を一巡してみたが、その場に倒れている生徒は一人もいなかった。また、市民の姿も見あたらなかった。

作業現場に五、六本残っていた庭木の下に置いていた看護カバンが、偶然にもそのまま残っているのを見つけたので、カバンから繻帯を取りだして、負傷している足に巻き、ボロボロに裂けたシャツのまま、比治山橋を渡って、なんとなく東の方へ向った。

ついさっきまでたくさんいた生徒が、突然いなくなって、独りぼっちになった私は、ガクッと気が滅入り、わけの判らぬまま、ただトボトボと歩いて行った。無数の避難者の行列の中に私も加わり、安全と思われる段原の方へ出て、尾長へ向い、大内越峠を過ぎ、中山へ出て、太田川沿いに更に北上し、川を西へ渡って、夕方近く安佐郡安村の親類の家に辛うじてたどりついた。家にあがるや否や私は倒れ、そのまま一週間、意識不明であった。その後一か月寝たきりで、二か月日からようやく杖をついて歩きはじめ、三か月たって学校に出ることができた。

後日、判ったことであるが、比治山の防空壕に避難して、そのまま死んでいったであろう生徒や、家にたどりついて、何日かたって死んだものなど四六人の生徒と、三、四日後になって亡くなった富田先生の、ありし日の姿がしのばれてならない。

[第三十四項 広島市第二国民学校...292](#)

(現在・広島市立観音中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南観音町二丁目

校長 橋本千代

教職員 約三五人

生徒 概数一、三〇〇人

校舎 木造二階建・二九教室・延約一、 坪、鉄筋・六教室約一〇〇坪

敷地面積 五、〇四四坪

爆心地からの距離 約二・四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島第二国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
大和重工業株式会社	広島市南観音町三丁目	二人	約一〇〇人	鋳物の型ごめ	
昭和金属株式会社	広島市観音本町	一	約五〇	飛行機の部品製作	
広島印刷株式会社	広島市南観音町二丁目	四	約二五〇	印刷	
帝国兵器株式会社	広島市吉島羽衣町	一	五〇	雑役	
広島電鉄株式会社	広島市千田町	一	五〇	修理塗装等	
大木印刷株式会社	広島市古田町古江	一	五〇	タンサン紙製造	
熊野空缶株式会社	広島市舟入南町	二	五〇	空缶の洗浄	
建物疎開作業(県庁の北側)	広島市木挽町	五	約二五〇	疎開跡片付け	
小原製菓株式会社	広島市下水主町	三	一五五	菓子製造	
逓信局	広島市広島駅付近	一	五〇	書類整理	
合計		二一	約一、〇五五		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
全校二三学級中、五学級は建物疎開作業に出動、他の一八学級は学徒動員として工場に出動中であった。	約八人	三五人	一人	生徒三五人は、満蒙義勇軍候補者で、学校において、農業指導中のもの。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊

当校は爆心地から西南西約二・四キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂によって校舎の二階教室などは、天井が落ちて使用不可能となり、一階の東側教室などには、柱の折れた所も数多くあった。また、ガラス窓は全部こわれた。しかし、火災は発生せず、焼失はまぬがれた。

(二)人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	(六)人	(約二五〇)人	()は学校外での被爆者数
重軽傷者	(二)	(五)	
行方不明者			
計	(八)	(二五五)	

炸裂時の在校者及び生徒は少数であり、校舎被害も半壊程度で、全員が無事であった。また、学徒動員として市内南観音町の大和重工業株式会社に勤務していた生徒たちも異状はなかった。

しかし、建物疎開作業に出動していた教員および生徒は、大きな被害を受けたが、担任の教員が即死したので動静が不明であった。被爆の翌日、木挽町の作業現場へ急ぎ調査に行ったが、生徒の着ていた衣服は焼け、死体の確認は誰一人できなかった。また、川の石段に生徒が死んでいたことから、大部分の生徒は火傷のまま、川の方向に避難したものと推定された。この調査の結果、生徒約二五〇人のうちで氏名の確認できた者は、被爆後、福島町方面に避難していた三人のみであった。

八、被爆後の混乱

南観音町の大和重工業株式会社に出勤していた生徒は、全員が数メートルないし一〇数メートルも吹き飛ばされた

が、急ぎ人員点呼をして、負傷個所の手当をした。生徒の大部分が住んでいた観音町付近は焼けているので、工場に待機させ、昼食後、預金通帳を渡し、それぞれ帰宅させたが、もしも親と会えない時は、指定の避難先に行くことを指示した。例えば、南観音町の者は佐伯郡の廿日市町へ、その方面に避難した親のもとに行くことをすすめたが、それでも親に会えない時は、工場に帰って来るように指示した。なお、引率の教員は工場の防空壕に連絡所を設置して、生徒の動静や家庭との連絡につとめた。

被爆当時は、全生徒が学徒動員として、工場および家屋疎開作業に出動していたから、学校には校長・教頭・次席教員・女子上席教員・養護教員・小使および生徒三五人(男子・満蒙義勇軍候補者)しか残っていなかった。これら生徒は炸裂時に、一たん防空壕に避難したが全員無事で、教員の指導のもとに、校内に避難してきた一般市民の看護に当たった。その後、当校が仮救護所に指定され、さらに多数の被爆者が収容されたので、教員は、当校の工業教室に収容者の連絡所を設けた。当時、戦時における緊急避難救護所としては、観音国民学校(当時の東北東三五〇メートル)が指定されていたが、全焼したので、代りの救護所として当校が利用された。当校の校舎も被害を相当に受けてはいたが、総体的にみて半壊程度の被害で、火災も起らず、一時的救護所として罹災市民を収容し得る教室は幾つか残っていた。使用された教室は、講堂(約一〇〇坪)・理科室(約二八坪)・教員室(約二八坪)・教室三教室(約六〇坪)・家庭科教室(約二八坪)などである。

九、学校再開の状況

学校の再開

戦時における緊急の場合には、転居先などについては、速やかに学校に連絡するように、日ごろから生徒に指示していたから、被爆後は学校に連絡所を設け、各学級生徒の行方不明者・死者・転居先などの明確な把握に努めた。また、学校としては、急ぎ工業教室を学校側が使えるように整備し、窓枠などには紙をはった。このようにして、学校整備も少しずつ進み、昭和二十一年には木造校舎の半分について改築をはじめ、完全に使用できるようにした。しかし、教員の大部分は住居が焼失したので、九月からの二学期開始にあたり、出勤した者は、学校長・男子教員五人と女子教員二人の計八人であった。生徒の大部分も、親・兄弟および家庭を失った者が多く、田舎に転居した関係で、二学期になって集った生徒は約一〇〇人程度であった。学校としては、これら生徒を四級(高等科一年男子一組・女子一組、高等科二年男子一組・女子一組)に編成して授業をはじめた。

教科書は部数が少なかったから、教員用として使用した。生徒は、広島印刷株式会社が学校に疎開していた用紙を、ノート代用にして使用させてもらった。

第三十五項 広島市第三国民学校... 298

(現在・広島市立翠町学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市翠町一七九六番地

校長 迫隆一

教職員 一八人(右のうち、被爆時の在校教職員は校長・教頭・その他職員各一人と、雇員四人。その他は応召中のものと一人は出勤途上、また一人は動員に参加中であつた。)

生徒 約三一〇人(もともと一、一〇〇人定員の学校であつたが、縁故疎開して減少した。被爆時には、流下式塩田を作る作業のため生徒約一〇人が登校、その他はすべて出勤中であつた。)

校舎延面積 本館二階延一、四八三坪・工業教室二二四坪・倉庫三一坪・宿直室三一坪・便所四九坪、
計一、八一八坪(ただし、剣道場を除く)

敷地面積 約五、三〇〇坪

爆心地からの距離 約三・二キロメートル

広島市第三国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学生疎開状況

学生疎開

集団疎開...なし

縁故疎開...約八 人(退学者を含む)

高等科は、義務教育でないから、疎開命令は出なかったが、自発的な疎開や退学した児童が多かった。

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	広島市雑魚場町	八人	二〇九人	疎開跡片づけ 電気工事 兵器部品	教員六人・児童一四三人死亡 教員一人・児童九人死亡 死亡なし
中国配電株式会社	広島市立町	—	二〇		
東洋製缶株式会社	広島市広島市天満町	三	約七〇		
熊平金庫株式会社	広島市宇品町				
広島瓦斯株式会社	広島市皆実町				
合計		一二	約二九九人		

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

学校は本館北側一階の教室、および東側工業校舎の南半分を、暁部隊が使用しており、他はすべて空室であった。

ただし、当日、間借していた広島市立第二高等女学校の生徒が、月一回の登校日にあたり、約五～六〇人登校して、本館二階の西側教室にいた。

六、当日朝の学校行事予定

塩田作りのほか、校内では、予定がなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊

本館をはじめその他の校舎すべて、戸や窓はこなごなになって飛散し、屋根瓦はみな落ち、廊下は浮きあがり、柱などもはずれたところがあった。防災措置として、すでに天井はすべて取りのけられていたが、ともかく校舎の形骸だけは残った。ただ、運動場南側の仮剣道場が全壊した。火災は幸いに発生しなかった。

(二)人的被害

校内にいた者は、建具やガラスの破片で負傷した。第二高等女学校の生徒も大半が負傷し、血を流していたが、即死者はなかった。ただちに、生徒をみんな防空壕に避難させ、一人ずつ負傷の状況を記録し、グループに分けて、それぞれ帰宅するよう指示した。市街地全域が被爆していたことは、後で判ったことであったが、生徒の中には、家に帰れないで学校に引返して来たものが多かった。

一方、建物疎開作業で市役所東側の雑魚場町現場に出動していた生徒二〇九人のうち、その約半数が学校に帰って来たが、生徒たちは、顔面や手足に火傷を受け、髪も熱線の直射を浴びた部分は完全になくなり、すでに火ぶくれとなっていた。皮膚は剥けて垂れさがり、両手を胸まで力なくあげ、衣服はボロボロに裂け、まるで幽鬼のような姿であった。フラフラと頼りなく歩き、名前をきいてみてはじめて、それが誰かが判別できた。救護所を求めて歩いて行く者や、車で運ばれて行く者がたくさんいたが、大半はその日のうちか、二、三日のうちに死んだ。その数一四三人に達した。雑魚場町の作業現場で被爆し、恐しさのあまりただ走り続け、江波方面へ向った女子生徒の集団もあった。なかには、気がついたときには、佐伯郡廿日市町まで走っていたという者もいた。

また、中国配電株式会社(立町)に出動していた者は、炸裂直後、チリチリになって上幟町の泉邸(現縮景園)方面その他へ逃げたが、ここでの犠牲者は即死者を含め、引率教師一人と生徒九人であった。その他の会社工場に動員中のものも、大半がガラスの破片その他で負傷したり、火傷をおったりした。このほか、行方不明者はいなかった。

人的被害を集計すれば、次のとおりである。ただし、負傷者の数は、厳密に言えば、次表の数をずっと上廻ると言えよう。

区 別	教職員	児童	備 考
即死者	七人	一五二人	上の数はすべて動員中の犠牲者である。
重傷者	二	約八〇	
軽傷者	七	約五〇	
行方不明者	〇	〇	

計	一六	二八二	
---	----	-----	--

八、被爆後の混乱

被爆後、登校可能な生徒はきわめてわずかで、自然休校のかたちとなった。ただ一人、ある生徒は、被爆の日から一日も欠がさず登校し、惨状目にあまる校舎の整理に、教職員らと一緒にずっと働いた。

校舎そのものが使用できる状態でなく、生徒も前記のような状況であったから、被爆後しばらくのあいだは、学校の機能も停止して、校舎の整理だけをしていた。

なお、当校から陸軍共済病院が近く、南側には軍隊が駐屯していたから、救護所にはならなかった。軍隊は、その後もしばらくいて校舎を使用した。

九、学校再開の状況

学校の再開

(一) 貼紙により、八月二十三日、生徒を登校させ、生存の確認をおこない、全般の被害状況を調査し、その後の計画をたてた。

(二) 九月に入って、第二学期の授業を開始したが、復旧の仕事に追われ、普通の授業を進めることは困難であった。

(三) 学用品や教科書は、教職員・生徒ともに手を分けて集めることにつとめた。

第三十六項 広島県立広島師範学校男子部附属国民学校... 304

(現在・広島大学教育学部附属東雲実小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町一九四六番地

主事 是常正美

教職員 一五人

児童 二五一人

校舎 広島師範学校に併置されていたので同校との合計坪数

木造二階建・三四教案・延三、三四三坪

鉄筋コンクリート建・六教室・延五七九坪

敷地面積 一二、八四〇坪

爆心地からの距離 約三・八～四キロメートル

広島県立広島師範学校男子部附属国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日	集団疎開概数			縁故疎開者概数	備考
	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十五日	比婆郡敷信村	囑託医二人		一五五人	延命寮 西林寮 円福寮 成善寮
	" 大字新庄西光寺	七	四四人		
	" 大字板橋西林寺	七	四二		
	" 大字実留円福寺	八	四一		
	" 大字高門成善寺	五	二三		
合計		二九	一五〇	一五五	

児童授業校 比婆郡敷信村 敷信第一国民学校

国分教場

敷信第二国民学校

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

不明

五、校舎の使用状況

本校児童・師範学校生徒のほか、昭和二十年六月ごろから、陸軍高射砲部隊(ほぼ一個中隊)が南校舎の一階全部(六教室)を使用していた。この部隊は、戦後の九月七日午後五時撤去した。また、昭和二十年春から雨天体育館を陸軍被服支廠の被服倉庫として使用していたが、内容は極秘にされていた。後に空挺部隊用品であることが判明した。

六、当日朝の学校行事予定

夏休み中、残留児童は地域別に寺子屋式授業をやっており、八月五日(日)が学校に集合する日であったから、六日は代りの休暇としていた。

被爆時の在校者は教官一人・使丁二人であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破

本校は爆心地の東南東約三・八～四キロメートルの地点に所在しており、校舎の被害は小破程度であった。しかし屋根は爆風によって、瓦の吹き飛んだ部分が多く、窓ガラスはほとんど破壊され、窓枠も損傷を受けた部分が多く、ほとんどの天井は吹き上った。

(二)人的被害

教官の大多数は集団疎開地にあったが、残留教官のうち登校中であった川崎・上河内・井上訓導は被爆負傷し、たまたま疎開地から連絡のために帰校して、職員室で執務中であった内藤訓導、および是常主事は軽傷を負った。上河内訓導は重傷で兵器支廠に収容されたが、翌日死亡した。川崎訓導は宿直室に収容された。

児童は登校していなかったので、学校においての死傷者はなかったが、各家庭において被爆した者は相当数にのぼるものと思われた。

八、被爆後の混乱

被爆後直ちに学校の警備と共に復旧案を検討したが、人員の不足、校舎の破損、被災者の臨時宿泊、教官の負傷、死亡した教官の収容など、当面の応急事務に追われていた。軽傷の是常主事が登校して指揮をとり、奥村訓導は、学校に宿泊して、警備ならびに諸連絡に当たった。

地域別に開いていた寺子屋式授業も中止せざるを得なくなり、学校の機能は全く停止した。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月二十二日 残留児童登校。一・二年生、家庭調査を行なう。

八月二十三日 残留児童登校。是常主事疎開地へゆく。

九月一日 児童約五〇人登校。

九月四日 河野訓導、疎開地から児童を引率して帰校、それぞれ児童を家庭に送り届ける。

九月五日 工谷訓導、疎開地から児童を引率して帰校、家庭へ送り届ける。

九月七日 児童登校、校舎内外の清掃。軍隊撤去午後五時。

九月十日 児童召集。

九月十一日 新田寮母、児童一人(女子)をつれ帰校、引取人あるまで学校に宿泊させることとする。

九月十五日 登校児童約一〇〇人、六学級に編成し、南校舎を充てる。

学級担任... 初一・早志 初二・山本 初三・青木 初四・皆森 初五・奥村 初六・多田

九月十七日 登校日、約七〇人。当分の間雨天の際は雨もりはげしく休校となす。

九月十九日 六〇人登校。第一校時 授業。第二校時 作業。

九月二十日 九〇人登校。第一校時 授業、あとは作業というのがこのところ続けられる。

九月二十七日 広島市校長会開かれる。

九月二十八日 一・二・三と、四・五・六と三か年複式編成とする。

十月十一日 第二学期入調。

十月十二日 担任決定をおこなう。

十月十三日 複式をとぎ、各学年別となる。初一・多田 初二・奥村 初三・河野 初四・山本 初五・安田

- 初六・工谷 本館階下の修理。
- 十月十九日 登校者はなはだ少なし、二〇人。
- 十月二十四日 保護者会および幹事会を開催。
- 十一月十五日 全学年授業を実施。
- 十一月十九日 学童の疎開荷物広島駅に到着、保護者に引渡す。

第三十七項 広島陸軍偕行社附属済美国民学校...310

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

- 所在地 広島市基町三番地
- 校長 井上博
- 教職員 一九人
- 生徒 児童概数一五〇人(疎開児童を除く)
園児概数一〇〇人
- 校舎 木造一八教室・延五五〇坪
- 敷地面積 一、五〇〇坪
- 爆心地からの距離 約七〇〇メートル

校史概要

済美学校は、その源を遠く明治五年(一八七二)二月の私立開成舎創設(旧城内・能美円乗創立)に発する。校舎は、中島本町の慈仙寺鼻・播磨屋町と、転々と場所を変えたが、内容は次第に充実をしてきた。

明治二十一年(一八八八)、第五師団長(野津道貫)は、軍人子弟教育のため、この開成舎を選んで、能美円乗校主と交渉の結果、県知事(千田貞暁)の許可を得て、ここにはじめて、軍人子弟教育のために特別科を設置することとなった。特別科の始業式は同年十月二十四日挙行せられ、やがて明治二十四年九月には幼稚園も付設せられて、新しい教育への歩みは着々と進められていった。

明治二十六年十一月二十八日、当校は済美学校と改称され、陸軍偕行社の経営に移った。翌二十七年一月八日の陸軍始めの当日、開校記念式を挙行し、以後、この日をもって開校記念日と定められた。

校舎校地の変遷については、記録が不備で詳細不明であるが、当時播磨屋町にあったものと思われる。その後、旧西練兵場東端、基町の一角に移り、明治三十七年に、ドイツ式の特長ある外廊下の校舎が新築された。

本校の歴史を通じて顕著なことは、皇室から数々の殊遇を得たことであり、その創立の趣旨から考えて広島在住軍人の子弟の就学が主となったことは当然であるが、一般人の入学も許可していた。学級の構成は、各学年の男女を各一学級とし、一学級の児童数は四〇人ないし五〇人程度の編成とした。従って全校児童数は毎学年度だいたい五〇〇人ないし六〇〇人程度で、教職員は嘱託講師やその他を含めて、ほぼ二〇人余りの規模であった。卒業生の進学率は毎年極めて高くほとんど一〇〇パーセントに近かった。

男子卒業生は明治三十四年済々会、女子は同三十六年済美会なる同窓会を組織し、相互の連絡親睦をはかってきた。

昭和二十年十二月十日廃校となったが、昭和三十年八月の原爆十周年記念日を機として、男女卒業生が集り、済美校友会なるものを組織して、原子爆弾によって灰燼となり、ついに廃校になった学校の記念碑を建てた。

広島陸軍偕行社付属済美国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数	縁故疎開者	備 考

実施年月日	疎開先地名	教職員	児童	概数	
第一次 昭和二十年四月十五日	双三郡君田村及び河内村	九人	三〇〇人	一〇〇人	
第二次 昭和二十年八月五日	双三郡君田村及び河内村	三			

済美国民学校は双三郡の君田村及び河内村の二か村が指定せられ、一・二年生の児童及び特殊の事情ある者を除いて、全児童は父母の膝下を離れ、次の編成による集団疎開を実施した。

(一)福善寺班 君田村東入君福警守

六年生男子児童

主任、右太刀太一訓導と寮母の大林母

(二)善照寺班 君田村西入君善照寺

六年生女子児童約三〇人、四年生女子児童二人の計四三人

主任、正木逸吾・松岡多盛・神尾信子訓導と寮母の橋本しげ子

(三)教念寺班 君田村石原教念寺

五年生女子児童一四人、三年生男子児童二人、三年生女子児童一〇人の計三六人

主任、山岡きわ・竹田文江訓導と寮母梶上久子・井上於多賀

(四)西善寺班 河内村西善寺

五年生男子児童二九人

主任、寺脇広二・江藤千代訓導

(五)真楽寺班 河内村真楽寺

主任、久保田齊・森清子訓導

出発は昭和二十年四月十五日、広島駅前、父兄の手から児童を受取り、集団編成をおこなったが、遺言状を託する父兄もあり、親子涙を流しながら別離を惜しんだ。

疎開地にては、君田村の三か班は君田国民学校へ、河内村二か班は河内国民学校へ、それぞれ通学し、相当学年に編入せられて学業を継続した。

寮にあっては、朝夕種々の行事を通じて生活訓練を行ない、食糧補給・薪水補給などの労作をした。

村当局者・村民、特に寮にあてられた寺院住職らの好意、または、広島からの父兄の慰問もたびたび行なわれたものではあったが、馴れない山村の生活は疎開児童にとっては決してなまやさしいものではなかった。しかし、児童らはよく主任訓導の指導に従って、春から夏と移り変わる疎開生活の不自由を忍び、次第にこの山村の生活になれていった。

昭和二十年八月五日、校長は第二次疎開児童を引率して疎開地に赴き、君田村福善寺に一泊し、翌六日の朝は庫裡の座敷にあって寮職員から疎開生活の状況報告を受けていた。八時過ぎに、かなり強い震動を覚えたが、原子爆弾などとは知る由もなく、どこかでかなりの地震が起ったのだらうと思ったにすぎなかった。しかし、同日の夕刻に至り、同寮の児童が三次町の歯科医へ治療に行き、三次町には広島方面から続々と負傷者が避難しており、ただならぬ状態であるとの報告を受けて、重大事態を察知した。

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

空襲の際は、借行社構内の防空壕に避難することにしていたが、火災発生の際は、西側隣接の旧陸軍西練兵場方面へ避難することにしていた。

五、校舎の使用状況

借行社は陸軍関係の建物であり、当時は陸軍の特設警備第二五一大隊(通称号七一六部隊、隊長・陸軍少将世良孝熊)があった。この部隊の約三〇人くらいが、学童の集団疎開により使用しなくなった北側校舎に駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
当日は、残留組児童の実情把握のため招集日を定め、給食実施後に帰宅せしめる予定であった。	五人	約一五〇人	当校北側校舎に駐屯中の兵隊約三〇人	校長は第二次疎開の職員、児童を引率して、被爆前日疎開地に出張した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から東北東約七〇〇メートルの場所にあり、原子爆弾の炸裂の一瞬、全校舎は倒壊し、瞬時にして猛火に包まれたことと思うが、当時の目撃者が現存していないため、実情は不明である。しかし、翌日の状況より推察するに、全壊校舎は強力な熱線により炎上し、瞬時にして猛火に包まれ、完全焼失することによって自然鎮火したと考えられる。被爆当時の火勢がいかに猛烈なものであったかは、花崗岩の礎石と掌大に割れてモザイクの如く変化した屋根瓦のほかは、ほとんど一物も残さず、惨たんたる廃墟と化していたことからでも推察される。

(二)人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	二人	一〇人	
重軽傷者	二(後一人死亡)	三〇(後二〇人死亡)	
行方不明者	一		
計	五	四〇	

当時の在校教職員中で、上席者は出勤途上で負傷して倒れ、また登校していた教職員も即死したため、被爆直後に児童を指揮して避難するなどの措置はできず、児童の生存者は各自が自宅めざして逃げたものらしく、牛田町方面の児童の一人は、神田橋下流の京橋川を渡ろうとして力つき、川岸でたおれた者もあったという。

生残った児童は自宅めざして逃げて行ったが、ほとんどの者が途中で死亡したと思われる。校門前の道路に二体の伏した死体があったが、おそらく帰宅しようとして校門を出た後に、遂に力尽きて死に至ったのであろうか。その他に、児童の焼死体が五体発見された。しかし、他に相当数の犠牲者があるが、その児童ちは登校途中においてたおれたものと思われる(井上博校長手記)。

当時、本校児童の大部分は、双三郡君川村及び河内村の二か村に集団疎開をし、教職員の大部分も、その付添いとして同地であった。市内に残留していたものは疎開を希望しない児童と、低学年児童の大部分及び玉木・石井・難波・長坂の四訓導、それに大島事務職員・坂井給食婦の六人で、校長は前日五日に第二次疎開児童を引率して、双三郡に出張中であった。

あたかも当日は、給食日に相当し、食糧不足の折柄とて、残留児童は、この日を楽しんで早朝から登校していて、被爆した。

翌日、急ぎ出張先から駆け帰った校長の所見によって、その如何に惨憺たるものであったかを想像し得るのみである。

ほとんど原型をとどめぬまでに黒焦げになって、どこが頭か手足かわからず、いわんや氏名など知ることもできない児童の死体が、五、六体散在しているばかり、裏庭とおぼしい場所には、当時校舎の一部に宿泊していた軍人の、これは腕時計をはめたままの死体が一〇体ばかり、まさに鬼気迫る惨状というべき光景であった。残留教職員の状況については、先ず白島長寿園堤防の避難小屋に、負傷の玉木教諭を探しあてた。玉木教諭は登校しようと自宅の玄関を出た瞬間を襲われ、全身に負傷しながら、辛くも一命を取りとめたという。次に、上流川町の街頭に石井教諭のいたましい死体を発見、教諭はいったん登校後、家に残した母の身を案じて、急ぎ帰宅の途上、熱気にたえかねて、路傍にあった防火水槽に入ったまま息絶えたものと推察される。

他の教職員・児童の消息は、全然不明であったから、残留教職員が翌日から焼野が原と化した市内を、焼けた土や瓦を踏みながら、どこかに傷を負って倒れているのではないかと、児童の影は見当たらないかとさまよい歩いた。難波教諭の家は千田町であったが、何一つ心あたりのものを見出すことはできなかった。広島赤十字病院の多くの被爆者も、面相はすっかり変っていて、識別も困難であった。結局、難波教諭・坂井給食婦は出勤途中か、または幼稚園、もしくは給食室で、いたましい殉職をとげたものと推察するほかはない。大島事務員は、一度逃れて可部方面の収容施設に収容されたが、はげしい原爆症のため、日ならずして若い生命を失われたことが、後日判明した。

児童の父兄の中には、わが子の消息を知らせてくれと、しばしば牛田町の井上校長宅を訪れたものもあったが、校長や教職員がいくら探しても一人の児童にも会い得なかった。

八、被爆後の混乱

校長及び集団疎開付添い教職員は元気であったから、疎開地の指揮系統は保たれたが、市中に残留した教職員は、あるいは負傷し、あるいは死亡し、設立者である偕行社側の責任者は全部死亡、または行方不明となったため、学校の機能は完全に空白状態となった。校長は翌七日に急ぎ帰校したが、この惨状になすべきすべもなく、師団司令部に赴き、師団参謀長と打合せをしようとしたが、ここも実に惨憺たる状況で、打合せなどするどころではなかった。そ

ここで、先ず教職員及び児童の実情を明らかにしたいものと思つて、校舎焼跡に校長の住所を記し、なにぶんの連絡を願う旨の立札を立てた。その後は、廃虚の市内を隅から隅まで歩きまわり、教職員及び児童を探し求めた。

九、被爆後の応急処置

終戦となり、学校の応急対策としては、先ず集団疎開を解いて児童を無事に引取者に返すこと、第二に学校の存廃を決すること、第三に職員の身の振り方を考えることであつた。

第一の疎開児童の点については、八月二十三日、君田村教念寺において、疎開担当職員会議を開いて周到な打合せをし、父兄との連絡を十分にしておき、引取人の来訪を待って児童を引渡した。

九月十五日、教念寺において最後の職員会議を催し、疎開寮の閉鎖に関する打合せをしたが、引取者のない児童は、その後も寮に残り、最後に寮を閉鎖したのは十月末であつた。

第二の学校の存廃については、何もかもが虚無的に考えられ、七五年間は一草も生えることはできないといわれるばかりでなく、母体になる師団も、偕行社も壊滅に歸した状況下にあつては、学校の復興存続の如きことは全然考慮の余地すらなかつた。師団司令部は佐伯郡五日市町、府中町東洋工業株式会社内、日本製鋼所内と転々としていた。終戦前に、校長は疎開先より、たびたび司令部を訪れ、学校の処置につき、または教職員の身分などについて指揮を受け、大要次のように措置した。

(一)学校は廃校のやむないこと。よつて九月三十日に関係者一同は校舎焼跡に集り、廃校式を挙げ、互いに将来の無事を祈つて解散する。県学務課に廃校の手続きをする。

(二)教職員に対しては、退職金として少額ながら手当を支給し、廃校による自然退職の取扱いをする。このような場合だから他校に転任などの取計らいをする余裕はなく、教職員は、各自が後日の措置を考えるほかになんともすることができなかつた。なお、広島県が正式に廃校認可をしたのは、昭和二十年十二月十日である。

[第三十八項 光道国民学校...321](#)

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市猫屋町四六番地

建物の概要 (一)教室数 九室、鉄筋コンクリート建三階、延約三〇〇坪

(二)光道会館 一棟 約四〇坪

(三)光道幼稚園 一棟 約四〇坪

(四)小使室 一棟 約一五坪

敷地面積 約一、 坪

教職員数 一〇人

在籍児童数 国民学校児童 約二四〇人

幼稚園園児 約八 人

代表者 校長 石本豊一

爆心地からの距離 約六五〇メートル

光道国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学校の創設概要

創設概要

明治四年、猫屋町在住の真宗信徒大高十郎という青年が十名講を作り、町内の明教寺において法話会を開くかたわら、法門拡張の資金を得るため、毎夜内職に励んだ。この労益金によって、明治十年、「天名社」を設立、のち特留社と改め、護法報謝・育英報国・国家奉仕を目的とする巡回布教や法話会を行なつた。明治十一年に「愛国社」と改名、ついで翌十二年に「闡教部」と改名し、愛国主義から本来の宗教活動に立ち返つた。同年、大無量寿經の一節「光闡

道教」という言葉からとった私塾「光道館」を明教寺の末寺万福寺跡地に設立した。これが、原子爆弾の被爆後に廃校となった光道国民学校の前身である。

大正十一年、火災により施設の大半を焼失し、廃校の危機に陥ったが、財閥信徒の出資や一般寄附により、十三年に鉄筋コンクリート建三階の近代的校舎が竣工した。当時、鉄筋ビルは市内にも少なく、市民の目をひいた。ちなみに神戸以西では初めて、全国で十四番目の鉄筋建校舎で、幼稚園も併設した。クラス定員は四〇人で、男女共学。一学年一学級、全校で六クラス、月謝が二円(普通の約一〇倍)という高額であったが、当時としては、スチーム暖房つきという豪華な学校であった。

闍教部は、火葬場「向正館」を経営し、重要な財源としていたが、終戦直前、軍の命令で広島市に買収されたことは、大きな打撃あった。引続き、原子爆弾により闍教部(本部)と学校が壊滅し、財団役員もほとんど被爆死亡した。戦後の不安定な社会情勢の中で、学校再建の見込みが立たないまま、昭和二十年十一月に廃校を決定し、疎開先から帰った児童は、市内の各学校に転校した。爆心地に近く、被災の程度も高かったから、なかには孤児になった者も多数いた。昭和二十六年、学校再建の計画が進められたが、資金繰りが難しく実現しないまま今日に及んでいる。

三、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日 昭和二十年四月十九日

集団疎開先 山県郡都谷村 四・五年

山県郡原村 三・六年

疎開児童数 約一〇〇人

引率教師 四人

寮母 六人

縁故疎開児童数 約六〇人

四、学徒動員状況

出勤していなかった、

五、校舎の使用状況

校舎・校地とも広島憲兵分隊(隊長・藤井貞利憲兵大尉)が使用していた。

なお、児童疎開後は一・二年生のごく一部が残留していたが、被爆時には校内におらず、猫屋町明教寺で勉強していた。

六、被爆の惨状

被害状況

鉄筋コンクリート建てであったから、外観的にはそれほど壊れているようには見えなかった。また内部も焼けた形跡はなかったが、窓は全部吹き飛んでおり、廊下と教室の境となっている煉瓦積みは、かなりこわれていた。全体として小破程度であった。

人的被害は、明教寺で被爆した石本校長と現業員岩城夫婦二人の計三人が即死した。

当時、校内にいた生存者なく、炸裂下の状況は判っていない。

七、被爆後の混乱

石本校長が被爆死亡したため、元校長の土居愈吉が中心となり、西村清暁首席訓導が新しく校長に就任し、被爆後の一切の校務を推進した。

学校再開のため、多大の努力を払ったが、諸般の状況から、昭和二十年十一月三十日、ついに廃校のやむなきに至った。

学校が爆心地に近かったから、児童の家庭もその多くが破壊され、集団疎開児童のほとんどが、片親あるいは両親などを失った。なかでも榎町付近の家庭の児童がもっとも多数孤児となった。

四年生を例にとれば、疎開児童二七人のうち、まったくの孤児になった者二人、片親を失った者二〇人、両親は失ったが兄姉がいた者一人という惨状であり、両親などそろって生存していた者はわずか四人にすぎなかった。これらの児童は、全員親類その他縁故者に引取られて育てられたから、収容施設に入った者はなかった。

なお、廃校の際、残存していた児童はそれぞれ引取られた先で、その地の学校に転校した。

第一項 県立広島第一中学校... 326

(現在・広島県立国泰寺高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市雑魚場町一四七
 校長 渡辺豊平
 教職員 四九人
 生徒 約一、四〇〇人
 校舎 木造二階建・三八教室・延一、四〇〇坪
 敷地面積 五、四四〇坪
 爆心地からの距離 約九〇〇メートル

二、学生疎開状況

なし

広島県立広島第一中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
呉海軍工廠	呉市	二人	卒業生約一〇〇人	兵器弾薬製作	
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	六	三年生約二八〇	兵器製作	
旭製作所	江波町	一	五年生 五〇	兵器製作	
旭製作所 地御前工場	佐伯郡地御前村	一〇	五年生 約 九〇 四年生 約二六〇 二年生 約一七〇	兵器製作	
広島航空株式会社	古田町高須	四	三年生 五九 二年生 約一五〇	航空機部品製作	
建物疎開作業	広島市役所裏	四	一年生 約三〇〇	疎開跡片づけ	
建物疎開作業	土橋附近		三年生 五〇	疎開跡片づけ	
合計		二七	約一、五〇九		

(備考)卒業生が動員学徒の中に入っているのは、上級学校の理工科・医科および陸海軍へ進学の決定している者はそれぞれ入学し、その他の者は動員事業所に勤務するよう指示があったため、卒業後も継続して動員学徒の形をとっていたのである。

四、指定避難先と経路

火災の際、風向きにより避難先を選ぶ。

南...宇品、東...比治山、北...二葉山、西...己斐

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
一年生 建物疎開作業	八人	約三〇〇人	二人	場所・学校南側(雑魚場町)半数交代制

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から約九〇〇メートルの地点にあり、被爆と共に全建物は倒壊し、まもなく火災を発生、全焼した。

(二)人的被害

(イ)校庭南側(雑魚場町)で建物疎開作業中の一年生奇数学級約一五〇人のうち一部は即死、大部分は火傷・重傷を受け、一時は各自避難したものの、行方不明となったまま、生き残ったものはない。

(ロ)校舎内で待機中の、偶数学級約一五〇人のうち約五〇人は、校舎倒壊により即死、または、脱出不能のため焼死、約一〇〇人は校舎から脱出し、南の御幸橋方面、東方の比治山方面へ避難した。途中で行われとなった者、あるいは帰宅した者も、数日内にはほとんど死亡、生存者はきわめてわずかであった。

(ハ)土橋付近で、建物疎開作業中の三年生約五〇人のうち、一部は即死、残りの者は己斐方面に避難したが、行方不明のまま生存者はない。

被爆生徒の苦闘の状況については、校舎内で建物疎開作業の交代を待っていた生徒のうち、九死に一生を得たわずかな生存者によって記録された「校舎脱出中学生の手記」(全国高等学校長協会普通部会第十二回総会資料)によってうかがうことができる。

「その朝も登校した。学校の残留学級は僕ら一年生だけである。七時半朝礼。奇数学級は直ちに作業場へ、偶数学級は教室に入って交代の時間をまっていた。偶数学級の者は各自自習を始めたり、雑談を始めたりしていた。警戒警報は解除になったのに B29 の爆音がする。しかし『またか』といった調子で気にもかけないものもあれば、廊下の方へ出て見ているものもあった。その爆音が遠くなりかけた瞬間、パッと朱色の光、セルロイドを燃やしたような光、いや気味の悪い光がしたと思うと『あっ』という間もなく、我々は校舎の下敷きになっていた。上から落ちかかる赤土・瓦・背中の上の木材、それらを意識しながら、机の下で硫黄を燃やしたような強い臭気をかぐと共に、一時気が遠くなった。しかし、気がたっていたせいか、周囲から聞えるうめき声、断末魔の声を耳に浴びながら、すぐ前方の明かりを目当てに、腹ばいになって抜け出た。友人の岡本・岩宮両君や無事な連中は、僕を見るや否や『軍人勅諭だ』といって悲壮な声でふりしぼるように朗唱しだした。後から脱出してきた者も、これに合わせて朗唱した。

そのうち表現のしようのない臭気が次第に強くなっていく。我々は手拭で口を覆い、ひとまずプールの上までくる。途中校舎の中から『助けてくれ』『畜生！畜生！』『頑張れ精神だぞ』などという同僚の声をたくさん聞いた。救助を求めたく『本部へ行って来るぞ』と言い残し、職員室へ急ぐ。しかし何ということか、ああ本部はおるか一中が我々の一中が見渡すかぎりペシャンコではないか。プールの上にあがり、わが愛する学校を見渡せばすでに一番北側の歴史教室の方は火の手が上がって、見る見るうちに広がってゆく。ふと見れば、十四学級の三田村君は上衣やズボンの燃えているのも気がつかないのか、涙を流しながら『万歳』を叫んでいた。僕は、プールの水を手拭に浸ませてその火を素早く消し止めた、十四学級の幼なじみの佐々木一彦君は全身火傷、目はすでに潰れてしまい、皮膚ははがされ着物の袖のようにぶら下がっていた。そして『何も見えない』とつぶやいていた。十四学級の香川君は頭と足に大怪我をして血が吹き出ているが、それにもまげず、ゲートルで頭や足を巻いて出血を防いでいた。

元気な者や、歩ける者はひとまずここを逃れようと、プールの上から裏の墓地の間を通り、比治山橋の方へ走って行った。その途中、作業に出ておられた体操の川本先生と会った。先生もまた全身火傷で上衣もズボンも焼けてぶら下がっていた。同じ作業場で作業していた女学院の生徒も、先生と同じようにひどい火傷を受け、髪も着物も焼かれていた。

途中で先生や他の同僚たちとはぐれてしまい、十三学級の田中・名島両君と一緒に比治山の方へ逃げた。生徒の多くが比治山の方へ逃れていったのは、紙屋町方面・鷹野橋付近が既に炎に包まれていて、比治山の方は焼けていないと思われたからである。

田中・名島両君は全身火傷の上、目が見えないので、僕の肩にとりつかせて比治山橋を渡り、しばらくの間、あてもなく宇品の方向へ足を運んだ。僕はガスを吸っているために気分が非常に悪くなり、しばしば嘔吐し、歩行が苦しかった。その時後方からトラックがやってきて、乗務員から『乗れ』といわれた。三人は天にも昇る心地ですぐさま飛び乗った。トラックの上で皆ぐったりし、僕はまた嘔吐した。運ばれたところは広陵前の陸軍共済病院であった。大火傷の二人はすぐ治療室へ、僕は歩く気力がなくなり、看護婦に助けられて防空壕へ運ばれた。突然うめき声を聞いてその力を見ると、腹が破れて腸がとび出し半死半生の子供がいる。顔の形のわからなくなっている男の人、手がなくなって死んだようになっている女の人、壕の中はこういう人で一ぱいだ。僕は急に友人二人の様子が知りたくなって、杖にすがって壕の外へ出た。上空ではまた B29 の爆音がしていた...

(二)人的被害

区 別	教職員		生 徒		備 考
即死者	一人	(四)人	五〇人	(七)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	八	(一〇)	二五〇	(二八)	
行方不明者	三	(七)	一〇〇	(一五〇)	
計	一二	(二一)	四〇〇	(五〇〇)	

八、被爆後の混乱

中島秀継教諭は舎監長で、当日翠町の当校寄宿舍にいた。工場に動員中の二年生以上の舎生が、午後帰舎するのをまって救護班を編成し、中島・田中両教諭が陣頭指揮をとり、寄宿舍を応急救護所として、校長と舎生を寄宿舍に収容した。また、夜を徹して、治療を要する生徒を広島赤十字病院に運んだ。

翌日から翠町の校長官舎と、その隣りの寄宿舍を連絡事務所とし、生き残った教職員は毎日出勤した。そして、校舎の焼跡の死体の収容、校庭などにおける負傷者の治療、父兄との連絡などに従事した。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月十五日、次のとおり間借教室にて授業開始。

(一)第三国民学校(現在・翠町中学校)

教職員七人 生徒約一〇〇人

(二)佐伯郡廿日市国民学校

教職員四人 生徒約五〇人

(三)安芸郡船越国民学校

教職員四人 生徒約五〇人

しかし、教科書・学用品を焼失した者が約三分の二もあり、二、三人で一冊の教科書を共用し、紙・ノートを互いに分けあって授業を受けた。

現国泰寺高等学校構内の広島一中追憶の碑には、校章のもとに教職員・生徒合わせて三六四人の犠牲者氏名が刻まれて静かに眠っている。

(付記)

昭和二十年十月末、学校の生き残った教職員や生徒が、学校の焼跡を整理中、当校の南側の煉瓦塀と運動場との間の道において、倒れた煉瓦塀の下から、約二〇〇人の女学校の生徒(広島女学院の生徒か)の死体が発見された。これは、雑魚場町の建物疎開作業に来た生徒と思われる、作業にかかる直前、塀ぞいに整列していたところへ、爆風により煉瓦塀が倒れかかり、全員が下敷きとなって即死したものと思われる。この事実は、当時一中生徒で焼跡の整理作業に参加した湯木良平の目撃談である。

倒壊校舎から脱出

川本義隆

昭和二十年八月六日午前八時、朝会の時 B29 が北に飛んで行くのを見た。白シャツ一枚の自分たちはそれを見て涼しさを感じた。偶数奇数の組が一時間交代の作業で、自分は十二学級だったので交代番をまつことになった。自分は国文の本を取るために立った。その時、室の右側の三人が「B29!!」と叫んだ。私の方へ目を向けた時、青い光が目射した。アッと叫ぶ間もなく教室が倒れた。今聞くと大きな音がしたと言うものもあるが、私は青い光だけは記憶しているが音は記憶にない。どれだけの間か私は気絶した。私が気がついた時には身動きできなかった。四方から校歌やお母さんと叫ぶのを私は聞いた。私も何か叫んだ。自分たちは、ただ一中だけがやられたのだと考え、そのうちに救援が来ると思って待っていた。しかし待っても待っても誰も来ない。私は動かないわが身を一生懸命動かして、身の過りの板や木や竹などを、長い間力の限りヘシ折ったり、のけようともがいた。すると X 君が自分の名を叫んでいるのがかすかに聞えた。私は何応もそれに答えた。X 君は私の声がわかったのか私の上に来て板をのけてくれた。しかし X 君は「友だちを呼んで来るから」と言ってあちらへ行った。私は身が少し自由になったので一生懸命もがいた。すると頭が少し外に出た。そして助けを待っていた。大きな音がして何か落ちた様に思った。私はそれ以後力が抜けて気分が遠くなった。顔や手の傷は痛み、前歯はとれてシャツは赤くそまっていた。気分を上げましてもがいていると顔が外に出た。私はまた目がクラクラとした

一中は何もない。煙でおおわれているだけである。北西一帯は火の海、中国配電と思う建物からは、濛々たる煙の中に、何とも言うことの出来ない恐ろしい赤黒い火炎が窓から吹き出ている。私は逃げる道がわからない。誰か遠く叫ぶ「風上に逃げよ」の声。私は逃げようとした時、私の友の顔が浮んで来た。「田中！」と叫んだが、それに答えるものはない。私の耳に聞えるのは、苦しく歌う「君が代」「天皇陛下万歳！」「お母さん！」と泣き叫ぶ友だちの声だけであった。私はX君の倒れているのを見た。頭が裂け、手はもげ、少し左右に動いていた。私は「オーイ」と叫んだ。それに答える声が四方から聞える。私の立っている下で助けを求める友がいた。私はただ一生懸命その板を剥いだ。すると二人の友が身動きしているのが見えた。二人は漸く出て来たが、一人は胸を押えたままで腰かけている。よく見ると口から何かをはいており、胸のところから血を吹いている。一人は足が折れていた。私は何か大声で叫んではげましたが、倒れたままであった。「この板をのけてくれ！苦しい」と叫ぶ者がある。私は一生懸命板をのけると、三人の友の顔が出て来た。しかし二人は頭の肉がさけており、目は開いて口の中で何か一生懸命つぶやいている。私はもう一人の元気な友の顔を見た。頭や顔はただ血で真赤になっており、私を見ると「K君！」と叫んでいたが、私には誰かわからない。私は手を引っぱってやった。「はしる！いたい！」と言って泣き叫ぶ。周りの板をできるだけのけてやった。A君は足を大きな木と木の間にはさまれて、出る事ができない。私が逃げようと思ったときは四方が黒い煙で包まれ、時々火の焼け落ちるのを見た。私が逃げようとする、「お母さん！K君！」と叫び、「仇を打ってやる」と叫ぶ。私は逃げた。「K君！K君！」と叫ぶ声が遠くなる。私は墓場のところまで来ると「一中生徒万歳！お母さん！」と叫ぶのが聞えた。そこで前田君と会った。前田君は墓の上に立っていた。言葉をかわして、私は声のする方に逃げた。その時、桑田先生に出会った。先生は手足を縄でしばり、車に生徒をのせて引いておられた。私も先生と一緒に逃げた。私は手足を水で洗って逃げたため先生とはおくれた。一人で歩いているとクラスの木村君と出会った。木村君は福島町の者であった。私を見てK君と言うので、私はよく見ると木村君なのでびっくりした。身体全部が火傷していた。私はすぐ手拭で憲兵の置いて行ったヒマシ油を木村君につけてやった。木村君は家を見に帰ると言って私と別れた。私は呼吸が苦しくなり嘔吐した。今までの元気はなくなり、気分が遠くなって、後は、自動車に乗ったことより他、何も記憶がない。気のついたときは宇品にあり、夕方、坂町の「鯛尾」に送られた。そこに四日おり母が五日めに私をつれに来た。

第二項 県立広島第二中学校...337

(現在・広島県立観音高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市西観音町二丁目

校長 古田貞衛

教職員 約四〇人(ただし、応召中の者約一〇人?を含む)

生徒 約一、二〇〇人

校舎 木造二階建・四四教室(特別教室一二・普通教室三二)・延九七五坪。鉄筋講堂二二八坪。木造本館一四一・五坪。武道場二二八坪。寄宿舎三二九坪。その他三七三坪。合計延二、二七四・五坪

敷地面積 一一四・四一〇坪

爆心地からの距離 約一・八キロメートル

二、学生疎開状況

なし

県立広島第二中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
-------	-----	-----	----	------	----

三菱造船株式会社	南観音町	一〇人	約五 人	鑄鉄	
建物疎開作業	中島本町	八	三四三	疎開跡片づけ	六クラス全員
食料増産作業	二葉の里東練兵場	六	約二五〇	開墾・除草・整地作業	被爆時集合中
合 計		二四	一、〇九三		

四、指定避難先と経路

全校生徒動員のため、それぞれの作業場で決めていた。

五、校舎の使用状況

別になし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
動員と作業	不明	不明	不明	被爆当日は工場出勤中(三年生以上)以外の生徒は、市内中島本町の建物疎開作業、および東練兵場に出動して食糧増産作業に従事した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...大半が全壊・全焼

当校は爆心地から西南西約一・八キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂の一瞬に校舎の大部分は押しつぶされたが、校長官舎・講堂および寄宿舍などは半壊程度の被害で倒壊するまでにはいたらなかった。しかし、倒壊校舎の中で校舎南棟にあった保健室と小使室方面から、瞬時にして火災が発生し、火の手は、周囲の民家から発生した火災をも伴って、猛火と変じたが、消火する人手のないままに校舎の大部分が焼失した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(八)人	(三四三)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	(一二)	(不明)	
行方不明者	不明	(七)	
計	(二〇)	(約三五〇)	ただし不明分含まず

中島本町方面の家屋疎開作業に出動した一年生三四三人は、本川河岸で整列して先生の訓示を聞いているときに、全員まともに被爆した模様である。その作業場が、爆心直下とあってよい程の近距離にあったため、炸裂の一瞬、ほとんどの生徒および引率教員八人は、その場で即死した。このとき、一人の先生は「国のために死のう、泳げる者は向う岸まで泳げ、泳げぬ者は君が代を歌って死ぬんだ。」と叫んで倒れたという。現在なお、ほとんどの殉難者が、遺骨の判別も、拾い集めもできない状態のままである。

八、被爆後の混乱

被爆によって校舎の大半は焼失し、動員出勤中の教員および生徒(特に一年生は全滅の状態であった)は、その大多数が即死、または行方不明になった。また、学校も大被害を受け、機能も運営も完全に停止したが、生き残った教職員と生徒は、校長を中心に一丸となって、友の生存確認や遺体収容に全力をつくした、被爆後の学校施設は、プールおよび半壊の校長官舎・講堂および寄宿舍などを残すのみとなった。そこで、校長官舎と寄宿舍を学校本部に指定すると共に、半壊の講堂や寄宿舍に集った重軽傷者の手当てにも努力した。しかし、屋根瓦は飛び散り、天井も破れていて、雨もりもはげしく、危険も大きいので、他の収容所に移した。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、生き残った教職員および一部の生徒は、即死、または行方不明となった者の遺体確認や生存調査に全力をつくしたが、八月十五日の終戦日から九月上旬までの約一か月間は、生徒各自の家庭に帰休するように指示した。動員先が爆心地から遠距離にあって、被災がまぬがれた生徒も、終戦と同時に出勤も自然消滅の状態となり、各自、家庭に帰休した。その間、学校としては校長を中心に、教職員は学校再開につき協議し、外部にも働きかけて授業開始場所の探索に努めた結果、安佐部可部町・佐伯郡廿日市町および安芸郡海田町の三か所に分散授業所を開設することができた。生徒は交通・寄宿所・食糧などの関係で、各自が最も便利な分散場に所属することを認め、九月十三日に授業が開始された。その後、昭和二十一年十月末まで、約一か年の間、困難をのりこえて、この分散授業所で教育していたが、昭和二十一年十一月三日に、県立第二中学校の焼跡に、仮校舎が完成したのでようやく復帰した。

慰霊碑

昭和三十六年八月六日、若くして逝った多数の霊をしのいで、殉難の地、本川河岸に慰霊碑を建立した。

追悼の歌

なくさめの
言葉しらねば
ただ泣かむ
汝がおもかげと
いさを
しのびて

第三項 県立広島師範学校...343

(現在・広島大学教育学部東分校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町一、九四六番地
校長 山下直平
教職員 一〇三人
生徒 概数七四六人
校舎 木造二階建・三四教室・延三、三四三坪、鉄筋六教室・延五七九坪
敷地面積 一二、八四〇坪
爆心地からの距離 約四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

県立広島師範学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
金輪島暁部隊補給部 呉海軍工廠 農業実習	安芸郡 呉市 安芸郡奥海田		本科一年生 本科二・三年生 予科二年生	梱包作業 運搬作業 農業実習	
合 計					

四、指定避難先と経路

空襲時の負傷者は、当校の西北西約一キロメートル離れた比治山国民学校救護所、あるいは学校内宿泊の、高射砲隊衛生部で治療をすることにしていた。また、当校本科の一年生は本科寮に、予科一年生は学校内剣道場に、予科二年生は柔道場に、おのおの収容するよう指導していた。

五、校舎の使用状況

学校は、市内東雲町一、九四六番地の現在地にあり、本科生は校内の寄宿舍にあり、予科生は市内皆実町の予科寄宿舍に宿泊していた(当時は全員寄宿舍に入れる制度であった)。皆実町の旧校舎には、江波町の県立広島商業学校が昭和十九年五月十七日から移転して来ていると共に、部隊名は不明であるが、陸軍部隊が校舎を接收して常時駐屯しており、また、東雲町校舎にも、一部校舎を使用して陸軍暁部隊(高射砲隊)が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
予科寮警備	一人	二〇人		
本科警備	—	二〇		
家屋疎開作業	—	二〇		

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊(一部全壊)

当校は爆心地から東南東約四キロメートル離れた市周辺部にあったから、本科寄宿舎(東雲町の当校内)は、倒壊することは免れたものの、全棟の屋根瓦は飛散し、硝子戸および板戸は全然形なく、天井・壁などは落下し、倒壊寸前であった。また、皆実町の予科寄宿舎は、炸裂の一瞬、全壊したが、半壊校舎の東雲寮も、皆実町の予科寮からも火災は発生しなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	六(一)人	四(三)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	一八(一)	四六	
行方不明者	—		
計	二五(二)	五〇(三)	

予科寮(市内皆実町)の警備員については、東雲町の本校に集結するよう指示したが、充分徹底を期することが困難であり、約半数のものが集っただけである。この予科寮は、全校舎が倒壊し、警備員の中には、その時建物の下敷きとなり、重傷を負った者もあったが、電信隊の協力で救出し、東雲町の本校に運んで手当てをした。

八、被爆後の混乱

学生は被爆後には、できるかぎり本校(東雲町)に集結させて、負傷生徒の手当てや破壊した物件の取片付けなどを行なったが、その後、八月の終りまでは郷里に帰省を命じた。なお、家のない者については学校に収容した。

学校は被爆後、一時閉鎖し、第二学期から授業を開始できるようにと、校舎の整備作業・復旧作業をはじめ、八月二十二日までにだいたい終了した。その後、教職員および生徒に対し、一〇日間の休養を与えたが、その期間中も、学生五〇人・教官四人ずつ交代で動員し、学校の徹夜警備に当らせ、盗難・火災などの防止、あわせて整備作業を行なった。

また、負傷生徒に対しては応急手当をして、教官引率のもとに、比治山救護所において治療を受け、また学校に駐屯中の高射砲隊衛生部の厚意によって治療を受けた。その後、負傷者は本科寮および附属北側校舎に収容して治療看護した。その時三原市の師範学校女子部から急ぎ救護隊の派遣があって、直ちに負傷者の看護および炊飯に従事した。

九、学校再開の状況

学校の再開

本科寮(東雲町)は危険を感ずる程の被害(半壊)で、各教室は雨もりがはなはだしく、応急対策として鉄筋コンクリート建物内に校長室・生徒課を移し、同建物内の教室と講堂を寮舎に充てて生徒を収容した。一方、資材は全く無く、入手困難な状態であったが、陸軍暁部隊金輪島補給部の厚意で、ベニヤ板六〇〇枚と釘二樽、兵器廠から天幕四〇枚の分与を受けて、整理作業・復旧作業に努めた結果、八月二十二日までにだいたい終了した。その後は、生徒五〇人・教官四人ずつが交代で学校の警備や復旧にあたった。

九月五月、第二学期始業式を挙行し、五日から十月二十二日までは、予科および本科一・二年生は午前中授業、または校内整備および食糧増産作業をした。本科の三年生で応召しなかった者(一三人)は、九月六日から十月九日まで、本科附属および地方実習指定校で教育実習をはじめ、応召していた者(一六九人)も九月十五日から十月十八日まで、同じく教育実習をはじめた。

十月二十一日から十一月二十日まで、全校生徒の三分の二は農繁期で帰農し、残留組の三分の一は交代で本校警備にあたった。全学生に対する授業開始は十一月二十一日からであった。

なお、十月二十二日には、九月三十日付けの卒業証書による卒業式を挙行した。

第四項 県立広島工業学校…349

(現在・広島県立広島工業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町三丁目九七二の一番地

校長 大蘭平吉

教職員 五六人

生徒 概数一、二五五人

校舎 鉄筋・六教室・延六〇四坪

木造二階建・四〇教室・延三、五五四坪

敷地面積 一〇、七二六・七七坪

爆心地からの距離 約二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

県立広島工業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
呉海軍工廠	呉市	二人	電気四年 四一人 第二本科 電気三年 三四	電気に関する諸作業、電気溶接	
呉海軍施設部	呉市	三	建築三年 四五 土木四年 五一 土木三年 五〇	呉海軍施設工事監督、設計助手、測量	上記教職員とは別に土木課職員三人が現場を廻り巡回指導に当たった。
日本製鋼所広島製作所	安芸郡船越町	四	機械二年甲 五五 電気二年 五三 土木二年 五八 第二本科 電気二年 四一	機械加工	
日本製鋼所西蟹屋町分所	蟹屋町	一	機械二年乙 五七	機械加工	
三菱造船所造機部	南観音町	三	機械二年乙甲 一〇一 電気三年 四四	機械加工、電気作業	
電気試験場	横川町	一	電気科四年 八	計量関係電気作業	職員は陸軍暁六一四〇部隊と兼務(二人被爆死)
第十一海軍航空廠	山口県岩国市	二	機械四年 四四 第二本科 機械三年 一四	機械加工	
帝国兵器株式会社	吉島町	一	第二本科 機械科三年 二〇	機械加工	
陸軍暁六一四〇部隊修理部	金輪島	一	電気四年 四 第二本科 電気三年 二	電気作業	
丸二木工業株式会社	佐伯郡廿日市市	一	建築二年 五二	木製兵器製作	
倉敷航空機製作所県立広島工業学校工場	千田町県立広島工業学校	一	機械四年 三 第二本科 機械二年 二 機械三年 八	鑄造作業	
日本製鋼所広島製作所県立広島工業学校工場	千田町県立広島工業学校	二	第二本科 機械二年 四七	機械加工(弾頭製作)	
倉敷航空機製作所吉島工場	吉島本町二丁目	三	第二本科 機械科三年 約四〇	機械加工	
中国配電株式会社大洲製作所	大洲町		第二本科 電気科三年 一〇	機械工作	
建物疎開作業(県庁附近)	中島新町	三	機械一年甲乙 七五 電気一年 四〇 第二本科 機械一年 三三	疎開跡片づけ	出勤中の職員生徒全員は作業現場付近で死亡
荻野鉄工株式会社	大洲町	一	建築四年 二〇	機械加工	

旭兵器株式会社	吉島町	—	建築四年 二〇	兵器製作	
合	計	三〇	約一、一一一		

四、指定避難先と経路

各動員先において、その指示に従う。

五、校舎の使用状況

(一)校舎五棟(六九七坪)と運動場の一部(約二〇〇坪)は、呉海軍工廠造船実験部が使用していたが、当時の部員数および集積物資などについては不明である。

(二)学校工場として、倉敷航空機製作所(鑄造作業)および日本製鋼所(弾頭製造)が、校舎の一部を使用しており、当校生徒の一部動員学徒は、この学校工場に勤務していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
当校一年生一八七人(勤労報国隊)は、中島新町地区の建物疎開作業に出動。その他の生徒は全員が動員学徒として工場関係に出動中。	約一〇人	一人 その他 約六〇人	呉海軍工廠部員若干人 倉敷航空・日本製鋼所関係若干人	在校生徒数のその他約六〇人は、校舎内に倉敷航空機製作所と日本製鋼所の二工場が、学校工場として使用中の校舎があり、この学校工場に動員中の生徒が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊

当校は、爆心地の南方約二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、全校舎は一瞬にして倒壊した。当日の当直職員や登校生徒(特に動員学徒生)は、倒壊校舎の下敷きとなって、この大惨劇に、一時は呆然自失していたが、倒壊物の下から自力で脱出した軽傷程度の職員は、事の重大さを知り、微力ではあるが救助作業をはじめた。

校舎倒壊の直後、熱線による自然着火と思われる火災が、本館の柱の一部に起ったが、生残った少数の職員の手によって、これを消しとめた。また、校舎北側に道路(約二メートル幅)をへだてて民家の密集があり、その大部分は倒壊直後に火災となって、火の手は急速に広まっていったが、少数職員の消火活動で、校舎への延焼を防止することができた。

(二)人的被害

当時、二年生以上の生徒全員は、学徒動員として各地の工場へ出動中であり、また動員に参加しない一年生も、建物疎開作業隊として、市内中島新町地区の現場に直接集合することになっていたため、六日当日の登校指示はなかったが、所用で登校してきた生徒一人が倒壊校舎の下敷きで即死した。また、当校舎の一部は学校工場として、呉海軍工廠造船実験部と日本製鋼所の各工場が使用しており、この工場へ生徒約六〇人が出動することになっていて、炸裂時まで登校していた生徒の中には、即死した者や重軽傷を負った者が多数あったようであるが、詳細は不明。また、横川町の電気試験所へ出動中の生徒二人も被爆、死亡した。

なお、炸裂時が出動時刻前のため、在校職員は約一〇人くらいであったが、全員が重軽傷を負った。その中には、前日の防空当直者(香川教諭)で、建物下敷きとなり、共に名前を呼び合っているながらも脱出することも、救助することもできず死亡した職員もあった。一方、建物疎開作業の勤労のため、当校一年生一八七人が三教諭(野間茂己・兼本静衛・藤井正各教諭)引率のもとに、中島新町(県庁北側)に集合していたが、現場は爆心地から約六〇〇メートルの至近距離にあり、炸裂の一瞬に全員が即死するという非業の最期をとげた。現場に、あるいは川の中や堤防上に、無数に横たわる全裸の死骸からは、生徒の一人一人を識別することはできなかつた。辛うじて物陰に整然と整頓し置かれたと思われるわが子の衣服や、弁当箱の焼けた断片を見つけだし、涙と共に持ち帰る父兄の姿は痛ましい限りであった。また、引率教諭の一人は、死骸の片方の足に残っていた靴から当人であることが確認されたが、眼球は飛び出し、全身は焼けただれ、手を曲げ足を折り、エビのように曲った死骸からは、生前の端正な姿を求めることは不可能であった。

区 別	教職員	生 徒
即死者	四人(三)人	不明(一八九)人
重軽傷者		
行方不明者	即死者の死体を確認したものはないので即死すなわち行方不明でもある	
計	一四(三)	(一八九)ただし判明のみ

()内は動員先での被爆者数

八、被爆後の混乱

被爆後は、特に人的被害の大きかった一年生を中心に、生徒の安否や死骸の確認、遺留品蒐集などに全力をあげると共に、市内在住生徒の疎開先などについても調査をした。その結果、一年生の生残った者について、学級編成替えを次のとおりおこなった。

- (一)一年生機械科二組と電気科を併合して機械科一組とした。
- (二)建築科一組と土木科一組とを併合して建築科一組とした。
- (三)第二本科の一年生を併合して電気科一組とした。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、学校の指揮系統は失われなかったが、当時の広島市には約七五年間は居住不能の流説があり、学校も膨大な施設や設備を必要とするだけに、その去就につき賀茂郡八本松にするか、安芸郡祇園町方面にするかで迷ったが、昭和二十年秋に、現地復興と決定した。現地復興の決定と共に、学校長を中心に生残った全職員が協力一致して、復興計画のため東奔西走した。生徒も愛校心が強く、復興作業に専念した。戦災直後は、屋根や窓のない校舎工場と、運動場の一角に応急の露天教室を設備して、週三日程は午前中三時間の授業で、午後の時間と残り三日は、終日が復興作業に充当された。このような復興作業の結果、昭和二十一年二月から、生徒の手によってできたバラック教室や、露天教室において、晴天の日だけの授業が再開された。

第二学期開始当時の職員数は約五二人、生徒数は約一、〇〇〇人程度であった。そして、授業内容も学校機能も不完全ではあったが、学校復興の熱情は大なるものがあつた。学校の復興作業は全員の努力で継続され、その後の復旧と対策は次のとおり押し進められた。

- (一)昭和二十一年八月に、機械実習場・手仕上げ実習場とを県費一四万四、八〇〇円で応急修理した。
- (二)昭和二十一年十二月に、保護者会寄付金二七万円で十一教室の校舎建築を行ない、初めて室内授業が可能となった。
- (三)昭和二十二年四月に、県費と保護者会・校友会などか寄付金(一九万円)を合わせた一四六円で、特別教室および普通教室七教室を増築した。
- (四)昭和二十二年八月二日は、鑄造実習場・電気科本館・弱電実験室・ボイラー室・倉庫・小使室などが竣工して、ついに完成した。

学校復興は、戦後の窮乏生活の中でも全員の血のにじむ努力で、一步一步前進していったが、戦後の学校教育行政の再編成によって、昭和二十四年四月には、広島県立工業学校としての校舎も名称もなくなり、新しく生れた広島県皆実高等学校の中の工業科として新発足した。しかし、その後の社会情勢の発展から工業高等学校としての独立した教育の必要性が考えられるようになり、昭和二十八年に皆実高等学校から独立し、県立広島工業高等学校となった。

[第五項 県立広島商業学校... 358](#)

(現在・広島県立広島商業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市皆実町一丁目(元県立広島師範学校跡)
校長 福岡銃二
教職員 六〇人
生徒 一、一五〇人
校舎 木造平家建および二階建・約三〇教室・建坪不明
敷地面積 不明
爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	雑魚場町方面	約一三人	約四四〇人	疎開跡片付け	被爆当日、学校内で出動準備
三菱造船株式会社	江波町	—	なし		六日当日休暇
日本製鋼所広島工場	西蟹屋町	なし	なし		六日当日休暇
石田兵機所	中広町	—	二年一組 約四五		六日、土橋付近の建物疎開作業に出動中
亀田製砥所	大洲町	—	三年一組 約四五		六日、雑魚町長付近の建物疎開作業に出動中
合 計		約一六	約五三〇		

四、指定避難先と経路

万一の場合の避難先として比治山公園を指定していたが、被爆時には、千田町の広島赤十字病院や宇品町の陸軍共済病院(現在・県病院)へ避難した者が多かった。

五、校舎の使用状況

軍隊の駐屯・宿泊はなかった。また、官公庁の使用もなかった。

六、当日朝の学校行事予定

被爆二週間くらい前に、県の教育課から建物疎開作業に出動命令があった。六日は出動実施三日目であった。福岡校長以下教職員約一三人、および生徒四四〇人が雑魚場町の建物疎開作業に、校庭で出動の準備をしていた。一方、動員工場先からは雑魚場町付近、および土橋付近に引率教師二人、生徒約九〇人がすでに出動して作業をはじめていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊

昭和十九年五月十七日、江波町の本校舎が陸軍兵器学校広島分教所として使用されることになり、皆実町の旧県立広島師範学校校舎に移転して、教育業務を続けていたが、八月六日被爆全壊した。

江波町の本校校舎も相当な被害であったが、倒壊はまぬがれた。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	(三)人	(九〇)人	但し、当日は校内で、出動準備中に被爆
重軽傷者	(一三)	(四四〇)	
行方不明者	〇	〇	
計	(一六)	(五三〇)	()内は動員先での被爆者数

八、被爆後の混乱

福岡校長以下教職員の被害がはなはだしく、指揮命令の系統が崩れ、大混乱の中で、負傷した生徒は、広島赤十字病院や陸軍共済病院に多数運ばれた。

軽傷の教員三、四人だけが、当日学校に踏みとどまり、午後八時ごろまで、生徒の安否をたずねて来る父兄らに対応した。

学校の機能は完全に停止し、九月開校まで、校庭の防空壕に、福岡校長と三、四人の教員が起居し続けて、郡部出身の重傷生徒一〇数人の看護にあたった。

即死者は行方不明者であったから、遺体の捜索や確認・連絡など、その父兄縁故者の対応に忙殺された。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月上旬、一応開校したが、軍隊の解散にともない、陸軍兵器学校に貸与していた江波町の本校舎が使用できなくなったので、生き残った教職員や生徒たちの手で移転作業をおこない、昭和二十年十一月十日、なつかしい江波町校舎に復帰を完了し、授業を続けることができた。しかし、教科書・学用品などは入手困難で、もっぱら板書による。プリントを使用するようになったのは、半年以上もたってからのことであった。

第六項 県立広島第一高等女学校...363

(現在・広島県立広島皆実高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市下中町
 校長 岡猪真二
 教職員 約五〇人
 生徒 約一、三〇〇人
 校舎 木造二階建・延一、九四七坪本校舎並びに講堂一部二階建
 敷地面積 四、七八 坪
 爆心地からの距離 約六〇〇メートル

二、学生疎開状況

学生疎開

昭和二十年六月ごろ、千田町にあった寄宿舍を安佐郡八木町に疎開し、修練道場とした。
 舎監 一人
 生徒 四〇人

県立広島第一高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
広航空廠	呉市広町	六人	約三〇〇人	部品作業	五年生
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	六	約三〇〇	部品作業	四年生
被服支廠分所	安佐郡 河内国民学校	二	約一〇〇	部品作業	四、三、二年生の一部
広島印刷会社	南観音町	六	約三〇〇	部品作業	三、二年生の一部
広島航空会社	古田町	六	約三〇〇	部品作業	四、三、二年生の一部
建物疎開作業	土橋付近	六	二二〇	疎開跡片づけ	一年生
第二総軍 第一県女看護班	第一県女内	一一	約五〇	看護実習	四年生
合 計		四三	約一、五七〇		

四、指定避難先と経路

指定避難先はなかった。在校生徒が少数であったから、防空壕が四、五か所に造られており、空襲警報時にはそれらに退避していた。

五、校舎の使用状況

南側校舎二階の一教室は、第二総軍司令部に動員された第四学年生徒の一部約五〇人の看護講習に使用されていた。
 また同校舎二階の一教室は、軍人遺家族婦人の講習会場(参加者二〇人余)になっていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
第四学年の生徒一部看護講習日	約一〇	約五〇	校医一人	学校には、事務職員数人常勤し、他の職員は動員先より交互に帰校していた。
軍人遺家族婦人学級の講習	不明		受講生約二〇	

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から南東約六〇〇メートルの所にあった。炸裂当時の在校者中に一人も生存者がいないため詳細は不明

であるが、爆風により全校舎は倒壊し、西方の校舎が自然着火した。そして同窓会館と、講堂の東南の一部とを残して焼失し、午後四時ごろ、火災が終息したという。

(二)人的被害

土橋付近の建物疎開作業に出動していた第一学年生徒全員と、引率の佐々木教諭ほか数人が全滅した。一部の者は己斐国民学校に避難したということであるが、やはり全員死亡している。

被爆時に在籍していた生徒五〇人も、爆心地に近距離のため、全滅のありさまで、そのうち、落下した天井を破り、火災をくぐって辛うじて脱出した生徒二人(四年生中川波瑠美ほか一人)も旬余のうちに死去した。運動場には、手足を吹きとばされ、胴体だけの女生徒の死体がたくさん転がっていた(中山楽器店主人談)。

区 別	教 職 員	生 徒
即死・直後死・被爆死	一四(約六)人	六〇(約二二〇)人

()内は、土橋付近の建物疎開作業に出動して被爆した学徒数

八、被爆後の混乱

八月七日、生存職員は校内奉安殿焼跡を事務所として、父兄や家族との応接に当たるとともに、八月十日ごろから牛田町木村次席教諭宅を仮事務所として、死亡者の遺族、または、生存者との連絡にあたった。なお、八月二十五日ごろまで、校舎の焼跡に仮小屋を建て連絡所を設けた。なお、木村教諭は山口町東警察署内に仮設された県庁に出頭し、県知事に対して学校の状況報告を行なった。

八月二十日、東警察署から東洋工業株式会社内に再び移転した県庁において、各校の残存責任者が召集され、学校復旧会議が開かれた。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月末、広島県立呉第一高等女学校校長土橋幸之助が、校長事務取扱いを命ぜられて着任した。

九月二日、残存教員を草津町小泉邸に集めて、第一回職員会議を開き、続いて、安佐郡八木町の修練道場において、第二回職員会議を催し、開校に関する協議をした。その時、参加した職員は一四、五人である。

九月も終ろうとするころ、やっと開校にふみきることに決定し、とりあえず、安佐郡八木町の修練道場を仮校舎として開校することになった。

九月三十日、校舎の焼跡に残存生徒を集め、翌日から、八木町の修練道場において開校することを指示した。その後、草津町にある母子寮を校舎に当て、十二月末まで、ここと八木町の両所において授業を行なった。

昭和二十一年一月、旭町陸軍被服支廠倉庫の転用を受け、はじめて学校の体裁を保つに至った。これが昭和二十三年四月に有朋高等学校、昭和二十四年四月に皆実高等学校へと引継がれたのである。

[第七項 県立広島第二高等女学校... 369](#)

(現在・広島県立広島皆実高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宇品町(広島女子専門学校内)

校長 津山三郎(広島女子専門学校校長併任)

教職員 二〇人

生徒 約四〇〇人

校舎 木造二階建・二九〇坪

敷地面積 広島女子専門学校敷地七、〇六二・二坪の内

爆心地からの距離 約三・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考	
建物疎開作業	雑魚場町	三	二年生一組 四一人	疎開跡片づけ	一人のみ生存	
第二総軍作業場	東練兵場	一七	一・二年・三組 三年二組 四年二組 五年二組	約二五〇	疎開跡片づけおよび農耕作業	一人死亡
陸軍作業場	三輪島				造船作業	
広島地方専売局	皆実町				巻上包装作業	二人死亡
広島地方専売局	皆実町				巻上包装作業	
合計		二〇	約二九一			

四、指定避難先と経路

とくに避難先は指定せず、校庭に防空壕を四、五か所設置していた。

五、校舎の使用状況

県立女子専門学校と共用の講堂を、陸軍部隊が、時々使用していた。軍隊は多いときは一〇〇人くらい泊ったこともある。

六、当日朝の学校行事予定

在校生はなく、動員先で毎朝朝礼を行なうのが例であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊

本校は爆心地から約三・三キロメートルの地点にあって、校舎は半壊したが、焼失はしなかった。

(二)人的被害

生徒は直接各作業現場に集合し、すべて行事は現場で行なわれていたので、学校内で被爆した者はなかった。

しかしながら、爆心地から約一・一キロメートルの雑魚場町において、建物疎開作業に従事していた生徒、および教職員は悲惨であった。引率教職員三人全員、二年一組四一人中、実に四〇人が死亡した。

また、東練兵場で、農耕作業に従事していた生徒のうちでは、一人が死亡、広島地方専売局でタバコ巻上包装作業に従事していた生徒は二人が死亡した。

全滅に近い憂目に会った雑魚場作業班の、唯一の生存者である平田節子(旧姓坂本、国泰寺中学校に奉職中、昭和四十三年に死亡。)の次の回想記によって、当時の模様を知ることができよう。

ピカッと光ったと思ったが、その後の記憶はない。おそらく、爆風に吹き飛ばされて意識を失っていたのでしょう。しばらくして起き上がってみますと、私の周囲には誰一人見えず、急に一人ぼっちの世界に置かれたような気持ちで突立っていました。「これはやられた。」と気付くや、先生に教わったように口を開け、両掌を耳に当てて、地に伏せました。一〇分ばかりはそうしていたでしょう。再び立上がってみますと、暗闇の中に真赤な火の手が上がっていました。炎は見るまに広がり、あたり一面火の海になったようでした。この明るさに、チラホラ人影が見え始めたので、近寄ってゆきましたが、その異様な姿には全く驚きました。垂れ下がった皮膚、水ぶくれした顔、はれあがった唇、何物かの化身としか思えませんでした。慣れぬ地理に、この天変地異、全く方角のわからぬまま、たださまようだけでしたが、そのうち先生が見つかりました。既に数人の生徒が、両脇にしがみついていたのですが、先生もまた同じ被害を受けながら両手を広げ、ひなどりを抱きかかえるようにして立っておられました。私は自分の名前を告げて、先生にうなずいて頂いたものの、私にはすでに先生は生きている人のように見えませんでした。ただ、生徒のために責任感と精神力で突立っていらっしやったのではないかと思います。

うるたえている私は、いつの間にか、先生にもはぐれていました。面相のほとんど変わっていない私が、友人の目にとまったらしく、私を呼びながら走ってきました。そして自分には見えぬ、変り果てた我が顔を気にしながら漏らした、必勝を誓う言葉に、私は胸をつかれ、「今や友と一緒に地獄の道を切り開かん」、そんな気持ちが湧きあがってくるのを覚えました。三、四人が手に手をとって、一列横隊になり必死になって、逃げ路を探しました。全身油ぎり、素足の痛さを呪いながら走り回るうちに、北小路さんと二人だけになっていました。炎の熱気はますます激しく、ついには服に火がつき、二人は貯水槽にとび込む程でした。こうして、人の流れに混って右往左往するうち、ふと、皆

とは反対の方向に逃げる気になり、北小路さんの手を引っ張りながら走りましたが、幸いにも、やがて小さい石橋に出ました。二人は目をくっつけるようにして橋の名を読み、今朝通ってきた橋であることを確認して、比治山橋目指して駆け戻りました。

比治山橋を渡りきると、友人はもはや一歩も歩けないほど疲労していて、私に背負ってくれと頼むのです。私は、途中何度も休みながら、出汐町まで背負って帰りました。

比治山南端のハゲ山の麓に、臨時の救護所があるということ、兵隊から聞き、友人を連れて行くことにしました。その途中、また飛行機の来襲を受け、私たちはあわてて笹の茂みに逃げ込みました。そして二人は、暫くそのまま転がっていましたが、救護所の人が、私たちを防空壕に収容して下さいました。

後日、私の作業班で生き残ったのは私一人であることを知り、どうしようもない孤独感に襲われたことを今も忘れません。

この手記のように、そのほかの現場で焼死した者も、同じような生地獄であったに違いない。

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(三)人 (三)ほか若干人	(四三)人 (一)ほか多数	()内は動員先での被爆者数
計	(六)ほか若干人	(四四)ほか多数	

八、学校再開の状況

学校の再開

広島県女子専門学校の校舎の一部を借受け、残存教諭により復旧を計った。

八月末、教職員が召集され、九月五日ごろ、生徒は第一回の登校をおこなったが、授業には至らなかった。

十月初旬、生徒約二五〇人、教職員一二、三人により授業が再開された。

第八項 広島県聾学校...375

(現在・広島県広島ろう学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市吉島本町五七七

校長 末広賀治

教職員 二五人

生徒 一六三人

校舎 木造二階建・延四三五坪

敷地面積 一、九四八坪

爆心地からの距離 約二・七キロメートル

二、学生疎開状況

学生疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	生徒数		
昭和二十年四月五日	高田郡吉田町広島県広島農学校	一八人	九八人	六五人	応召中の教員四人

広島県ろう学校 校舎敷地・校舎配置図(略図)

昭和二十年二月十日、県学事課から疎開するようにとの指示を受けた。学校側では疎開先の選定を急ぐと同時に、保護者に連絡して、集団疎開希望者を調査したところ、九八人が参加することになった。他の六五人の中には、農村出身者が多くて、家庭に引取られる者、または、縁故先に疎開するものであった。

二月下旬には、疎開地物色のため、佐伯郡に中迫教頭、賀茂郡に妻沢教諭、高田郡に谷田教諭が出張し、それぞれ

の土地で交渉にあたった結果、高田郡吉田町に疎開することに決定した。職員は疎開地に送る荷物の整理を始めるとともに、トラックの配車の交渉にあたり、六台を借受けた。四月になり、教員類・重要書類・寄宿舎の食料品・疎開児童生徒などを運んで、五日を最後に疎開を完了した。吉田町では法専寺・浄円寺・蓮華寺の三か寺に分散し、法事寺に疎開本部をおき、隣家に居を移した末広賀治校長が全体の指揮をとった。法専寺には中迫教頭が寮長となり、初等部三年と中等部が、浄円寺には妻沢教諭が寮長となり、初等部四年・五年・六年が、また、蓮華寺には谷口教諭が寮長となり、初等部一年・二年の児童たちが宿泊した。授業は県立吉田農学校の教室を間借りして開始した。薄気味悪い空襲警報も、広島を六〇キロメートル離れたこの田舎町では、緊迫感もなく、日々おちついた学習や生活がおこなわれるようになった。しかし、一面ひっぱくした食糧事情の中で、配給される物資だけでは、児童生徒の胃袋を満たすことができず、その補給には苦労が多かった。職員は放課後を利用し、荷車をひっぱって、隣の村々への食糧の買出しに行くのが日課となった。

中等部や初等部上級生は、農学校の野菜畑の手伝いにでかけ、その代りに野菜をわけてもらった。長期戦のかまえにはいつてからは、五畝ばかりのたんぼを借り、また、山を開墾して畑にし、イモや野菜を作り、食糧補給の一助とした。このように、疎開地での生活は、文字通り困苦欠乏の日々であった。衣服その他の不足も、また甚だしく、洗たくも十分にできず、シラミなどの副産物までだした。しかし、そうしたうちに生徒たちは、下駄や草履など自分で作ることを学びとり、その生活に順応し、その生活の中から生きる知恵を見だし、力強く生き、多くの苦しみに耐えた。こうした生活の中であって、唯一の楽しみは、遠く離れた両親や兄弟が、時折り訪れてくることであつた。そして、そのひと時をお互いに元気であることを喜びあい、戦争の早く終ることを願い、次に会える日のあることを祈りつつ別れを惜しんだ。

三、学徒動員状況

学徒動員

昭和十六年八月にはすべての中等学校に学校報国隊が組織されたが、本校においてもこうした情勢にしたがって、学校報国隊を組織し、すべてが戦時下の教育に入ることとなった。日々の学習も、身体の鍛錬に大きなウェイトがかけられ、遠足行軍は毎月おこなわれた。一方、中等部生徒の勤労作業への参加もたびたびおこなわれた。浅野泉邸での草刈りや清掃作業、佐伯郡石内村での植林作業、陸軍病院での傷病兵の慰問などがそれである。

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

学校が集団疎開するや、まもなく東洋工業株式会社の下請会社である倉敷工場が校舎を借受け、飛行機の部分品の製造工場として作業を始めた。各教室や講堂にはいろんな機械が取りつけられ、天井には電線がクモの巣の如くはられ、たちまちにして工場にかわった。

六、当日朝の学校行事予定

疎開中であつたから記録することなし。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊

当校は爆心地から約二・七キロメートル離れていたが、屋根瓦が落ち、校舎は約三〇度傾き、柱の折れた部分が多く使用できなくなった。被爆前、大水害があつて基礎が不均一になっていた関係もあつて、講堂は脆くも倒壊した。教員・重要書類は疎開させていたから、被害はなかった。また熱線による火災の発生はなく、類焼もなかった。

こうした中であつて生徒・教職員に一人の被害者もでなかつたのは不幸中の幸いであつた。生徒のうち九八人は集団疎開しており、残り六五人は郡部の出身者であるから郷里にあつた。教職員は集団疎開者の教育に従事して、被爆当日在広していた者はいなかつた。

八、被爆後の混乱

校舎の復旧修理の見通しは全くたたず、ただ教職員が疎開先から交代で帰広し、警備に当つた。しかしこうした教職員の努力も、僅かな人員では行届かず、一部の不心得者のために、校具・その他の諸材料が盗まれ、手の施しようがなかつた。そこで一部の生徒を帰校させ、一室を修理して教職員も起居を共にすることによって、一般の人に、廃棄された校舎ではたいことを知らしめ、盗難への対策としなければならなかつた。二十年九月末、永浦教諭は、校舎

の留守番役として、海田町の自宅から、校内(浴場の隣室)に家族を連れて引越して来た。空地に野菜を植えたり、防空壕の取こわしをしたり、木工室の工具の移動もした。進駐軍の命令だと言われて戦時中の図書を風呂に焚いたりした。また、盗難も多く、倒壊した講堂下のパイプをはずして持ち帰るものもいた。失ったために持たざる苦勞をする学校もあれば、当校のごとく焼け残ったがためにまた別の苦勞を味わうなど、不安な世情であった。それでも教職員と生徒は跡片づけを始めたが、到底、学校を復旧するなど望むべくもなく、県当局に対して早急に復旧工事に取掛るよう陳情を繰返した。

また被爆直後、校内の寄宿舍の一部を避難者が使用した。寄宿舍には畳敷きの部屋が二〇室あったが、一棟は雨もりがひどく、他の一棟は倉庫にしていたので使用できる部分は僅かであった。しかし、避難者はそこへつめかけた。救護所となるような建物の少ないときであるから、できる限りの人員が収容され、足を踏み入れる場所もない有様であった。その中には、広島女学院の生徒たちもまじっていた。これらの避難者はつぎつぎと死んでいった。生き残った患者の中には、火傷のため、ただれた皮膚からウジ虫が出てくるものもあった。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十一年五月五日、校舎の第一期復旧工事が始められ、同年十二月に完了した。終戦後も引続いて集団疎開を続行し、疎開地の吉田町吉田農学校において授業を行っていたが、昭和二十一年十二月十六日、校舎の復旧とともに帰校した。いよいよ開校の運びとなったが、校庭は野菜畑と防空壕の残骸で使用不能、校舎は復旧工事とは名ばかりで、雨露を凌ぐ程度であった。だが幸いにも昭和二十二年五月から第二期工事が始められることになった。しかし修理に着手するとなれば、授業に支障をきたすことになる。在校生については何とか授業を続けることができても、四月入学の新生の受入れは現状では不可能と断定し、第二期復旧工事の完了を待って入学させるという非常手段を採ることにした。従って在校生の実質授業は不足し、新生の授業は遅れるという結果を招来したのもやむを得ないことであった。

[第九項 広島県盲学校...382](#)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市尾長町片河七五七番地
校長 八尋樹蒼
教職員 二七人
生徒 一五一人
校舎 木造二階建(本館)、その他平家建・建坪九三三・三坪
敷地面積 約五、 坪(うち校舎敷地六五〇坪)
爆心地からの距離 約三キロメートル

広島県盲学校 学校敷地・校舎及び寮配置図(略図)

二、学生疎開状況

学生疎開

昭和二十年になり、戦局が日増しに苛烈になるころ、盲学校では職員会議をひらいて、集団疎開を急ぐ協議をした。会議の結果、八尋校長は疎開を断行することに意を決し、県学務課と折衝した。同年三月下旬から四月初めにかけて、双三郡田幸村の双三実業学校へ疎開することに決定し、教職員はその準備に忙殺された。準備は、ある限りのテーブル掛で袋を作り、重要書類を入れ、学習と集団生活に必要な最少限度の物を運び、あとは一まとめにして特別教室に釘づけするという作業であった。

四月一日、全校生徒の一行は、芸備線を北へ三時間塩町駅に下車し、双三実業学校の生徒や職員に温かく迎えられて、いよいよ疎開先での生活がはじまった。

盲学校が借りた校舎は、学校の東側にある女子部の三教室と家庭科の調理室隣りの教室で部屋一つ、昼間は教室に、夜は初等部と女子の居室にあてるといふ全く不自由な状況であった。

男生徒は二班に分れて、光行寺と竜専寺に合宿した。

この頃、農村も食糧は窮乏していたから、高学年の生徒は、学習のかたわら職員と協力して米作り・芋植え・農家の手伝いなど、食糧増産に励まなければならなかった。

木の芽を掻きに山へ、シジミ貝を拾いに川へ、半盲生が荷車の梶をとり、全盲生が後押しをして農協へと、食糧確保のための苦勞をかさねた。そしてまた空襲の危険を避けるため、夏休みも、できるだけ疎開地にとどまるようにしたが、広島市に帰った者もあり、クボマサオ・ヤマモトアサコ・コウダタカシなどがたまたま帰省していて被爆の犠牲者となった。

三、被爆の災害と復旧

尾長町の学校は、爆心地から約三キロメートルも離れていたため、幸いに火災からはまぬがれた。しかし、校舎本館は爆風によってひどく傾いた状態で、寄宿舎の一部別館・食堂は全壊という被害であった。

疎開中、校舎は県労務課・動員課・通信講習所の一部が使用していたが、終戦と同時に、これらは立去り、留守番役として小使いの原田静夫夫婦と県労務課長松浦万年の一家が校長官舎にいた。

昭和二十年十二月、疎開地の双三郡から中等部三年一〇数人を連れて、本川元文教頭以下、福永・山本・熊野・中垣・西原各教諭及び山県炊事婦が先発隊として帰校し、被害の比較的軽少であった中寮を教室と寄宿舎に、宿直室を職員室にあてた。そして学習をおこなう片わら、手近なところから整備することにした。

暴徒の侵入

こうして、一致協力して復旧に努力を重ねていたやさき、昭和二十一年一月のある夜、この努力を踏みにじて暴徒の一団が校舎に侵入、懐中電灯をかざして破壊した木材を持ち去った。

宿直の熊野教諭は、これを制止して生徒に危害が及ぶことをおそれ、その夜は暴徒のするにまかせた。しかも翌朝も昨夜にまさる集団で来襲した。パールやハンマー、金棒などの道具をたずさえ、荷車を引いて来た。通用門には凶器をかまえた四、五人が張りこみ、見知らぬ者の出入りは一切できなかった。

電話も不通、一か所しかない通用門をふさがれて警察へ連絡のしようもなかった。目新しいものはどんどん持ち去られていく。生徒たちは恐怖におびえている。松浦万年労務課長は思案の末、木の葉隠れに裏山の崖道を降りて、やっとのことで東警察署に連絡した。

東警察署から二〇人あまりの警官がトラックでかけつけたときには、暴徒たちは警邏中の尾長派出所警官に追われて人影もなかった。

目ぼしいものの持ち去られたあとには、ピアノ一台が残されていた。ただ、生徒には一人のけが人もなかったのが、不幸中の幸いであった。

復旧工事に着手

以上のようなことがあったが、八尋校長の尽力によって、盲学校はいちはやく校舎の復旧工事を実施されることになり、二十一年四月、工事に着手した。

工事が進むにつれて、倒れかかった本館も立直り、塗装もされて見違えるようになった。しかし予算の関係上、講堂および全壊した建物の再建はできなかった。さしあたり食堂には雨天体操場をあてることにした。

講堂の再建には、八尋校長を先頭に、教職員は手分けして、同窓生や父兄にと、方々へ寄付を頼んで涙ぐましい努力の結果、約五万円が集って、ついに目的を達したのであった。残されたステージはもと大工で、中途失明者の生徒岡丸勇三の献身的作業によって立派にできあがった。

砂糖休暇

昭和二十一年六月一日、一四か月ぶりに、疎開地から生徒約一〇〇人、教職員約一〇人の全員が帰校して来た。

なつかしい校舎に帰り、心は落ちついたが、教材・教具は一物もなく、その上食糧事情は窮迫の一途をたどり、戦時中にもましての苦難が横たわっていた。そのため、やむなく幾度か臨時休暇をおこない、生徒の体力保持のため帰省をさせた。これは誰いうこともなく「砂糖休暇」とも呼ばれていた。

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市中広町
校長 富永勇男
教職員 三二人
生徒 概数九七五人
校舎 木造二階建・二二教室・延八 坪
敷地面積 七、 坪
開校 昭和十七年四月
爆心地からの距離 約一・四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島市立中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員,

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	小網町	七人	一、二年生 三五三人	疎開跡片づけ	
三菱重工業株式会社	南観音町	七	三年生 三〇〇	工場勤務	
合計		一四	六五三		

四、指定避難先と経路

当時の生徒は、登校前に警報の出た時は家庭において待機することとし、登校後において警報の出た場合は、その時の状況に応じて帰宅を命ずるとか、その他の方法で適当な避難処置を指示することになっていた。また、学徒動員で出勤中の生徒は、工場側の指示のもとに、帰宅するなり、その他、状況に応じた適当な行動をすることになっていた。

五、校舎の使用状況

校舎の中で、六教室は陸軍部隊が使用しており、常時、独立鉄道第二大隊(約六 人)が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	生徒	その他	
授業予定 一年生、二年生の各一組のみは当日授業予定となっていた。その他の組は、市内疎開作業で出勤する。	六人	一四七人	陸軍部隊約六〇人	疎開作業や工場勤務の者は、直接現場に集合することになっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は、爆心地から北西約一・四キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂の一瞬、校舎は押しつぶされた。当日が登校日となっていた生徒の中から、校舎の全壊で、多数の犠牲者が出た。炸裂の約二時間後(十時ごろ)に、南側(向西館方面)に火災が発生し、みるみるうちに火勢が強くなって、四方の民家に延焼した。当校が延焼で焼けはじめたところは、一面が火の海で、その猛火は約一時間のあいだに全校舎を灰にしてしまった。

(二)人的被害

区別	教職員	生徒	備考
即死者	(二)人	(一四〇)人	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
重軽傷者	六	九〇	
行方不明者	(二)	(二二五)	
計	六(四)	九〇(三六五)	

六日当日がちょうど授業日となっていた一・二年生の一部(一・二年生の各一組の生徒)は、朝礼のため運動場に出

ており、職員も教員室で職員朝礼を開始しようとした。その瞬間の炸裂で、瞬時にして一命を捨てた者もあり、辛うじて倒壊物の下敷きから這い出た職員や生徒もあったが、誰れもが重軽傷で、逃げる方向や措置などについては考える余地すらなかったという。

助かった職員の話によれば、その人が倒壊物の下から這い出た時は、すでに運動場の生徒は少数であったが、誰れもが歩行もできぬまでに大やけどをし、生死の境をさまよい歩いている者ばかりであった。できるかぎりの救助をしようと思い、これらの重傷者を付近の河原に仮の収容所をつくって収容した。夕方近くから、父兄や親戚の者が、生徒捜索のため来校したので、運よく、その生徒がおれば引渡した。残った数人の生徒は、その後広島赤十字病院の指示で安佐郡可部町の治療所に移された。また、その他の登校生徒の大半は、焼傷を受けながらも、各自が思い思いの方向に、逃げのびていったものと思われる。なかには顔貌もわからぬ重傷の身で、猛炎の中をくぐって己斐町の自宅までたどりつき、母に状況の一端を語って絶命した生徒(三上某)もあった。

生徒は一樣に、帽子から露出した部分の頭髪をきれいに焼き、半袖シャツはボロボロとなり、手足は腫れあがっていた。生き残っている生徒は、夕方近くに収容されたが、全身の焼傷とむくみで人相を確かめることが、ほとんど不可能な状態であった。これら生徒たちの、痛い痛いと呼ぶ声と、水を求める苦痛の声々が交錯して凄惨をきわめた。

八、被爆後の混乱

行方不明の職員二人と生徒二〇〇人余りの動静を確めるため、異常のなかった教員および工場出勤の三年生(市内南観音町 三菱重工業株式会社の工場に出勤していた生徒)は、手分けしてその行方を探し求めた。しかし、その後の調査で、死体の確認できなかった者は、死亡した者と認め、市内己斐町の蓮照寺において慰霊祭を催し、同時に遺族父兄会に相談して、年若く散っていった生徒たちの慰霊碑を、市内小網町三光寺内に建立した。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎が焼失して、開校するにも非常に困ったが、さしあたって比治山国民学校の校舎一棟(八教室)を借用する交渉が成立したので、昭和二十年十月一日から第二学期としての授業が開始された。授業再開当初の教員数は一五人で、生徒数約一九七人程度であったが、借校舎のなやみに加えて、学用品および教科書などの入手にも、非常に困難をした。職員の持参する教科書をプリントしたり、また、生徒は所有する教材を共有することによって、急場をしのいだ。

その後、社会不安の解消と共に生徒数が、日々に増加していったので、教室の不足や授業内容の問題が大きくなやみとなってきた。教室不足については、さらに講堂を借用することになったが、このままの状態では学校運営を継続することはできず、教員一五人は、各自の役割をきめて運営準備をなし、また、校舎再建運動も強力に押し進められた。

校舎再建についての対外的交渉で、旧陸軍幼年学校跡(市内基町)の敷地が、市立中学校校地として定められたので、再建資材として、安芸郡奥海田村の旧第十一空廠施設の払下げを受けた。被爆後、苦難の道をたどりながらも、ここに学校再建の道も開け、学校運営の基礎がきずかれた。

[第十一項 広島市立第一工業学校...393](#)

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町六五三番地

校長 勝盛豊一

教職員 三〇人

生徒 概数六〇〇人

校舎 木造二階建・三一教室・延一、五七八坪

敷地面積 九、四五一坪

爆心地からの距離 約三・一キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
東洋工業株式会社 (当日、出勤中の二部生徒は、左記の二つの地区の疎開作業に従事)	安芸君府中町	四	一四四	工作機械、小銃の部分品製造	
建物疎開作業	水主町	一	一四	疎開跡片づけ	東洋工業株式会社へ出勤中の一部生徒
建物疎開作業	鶴見橋	一	一二	疎開跡片づけ	東洋工業株式会社へ出勤中の一部生徒
呉海軍工廠	呉市	四	九九	電気溶接旋盤作業	
広島市役所	国泰寺町	一	五	事務手伝い	
富田製油株式会社	舟入町	二	五〇	油の精製	
中国配電大洲製作所	大洲町	二	五〇	モーター分解洗い	
建物疎開作業	皆実町	四	二〇〇	倉庫納品の整理と疎開跡片づけ	
本校機械科工場	東雲町本校舎	二	三〇	弾丸の部品製造	油谷重工業株式会社からの依頼製造
油谷重工株式会社	安佐郡祇園町		二〇	兵器製造	
合計		二一	六二四		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当校の本館二階一二〇坪には、陸軍砲部隊の通信隊約五〇人が駐屯して、講堂(一五〇坪)が通信隊の馬具および天幕などの物資集積場となった。その他、普通教室(六坪)には、火薬を入れる絹製袋が保管してあり、また、北側電気実習室の一部(五五坪)には通信器材があり、中央電気書室(一四〇坪)には、通信隊輸送材料とその箱類が保管してあった。運動場には野砲三門、連絡用自動車三台、トラック二台があり、中庭には通信機関係の発動機八台があって、校舎の内外は軍事物資の保管場所としても使用されていた。

なお、当校舎内の機械実習工場では、油谷重工業株式会社からの依頼で、砲弾の部分品製造をしており、その仕事には当校機械科四年生(約三〇人)が従事していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業予定なし		約三〇人 (油谷重工業に動員中の生徒)	約五〇人 (砲部隊)	全員学徒動員に出勤中であつたが、四年生約三〇人は学校内の工場に勤務していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...小破

当校は爆心地から東南東約三・一キロメートル離れた所にあり、爆心地方向には比治山公園があって、爆風からは保護されている状態にあつた。また、比較的遠距離にあつた関係で、窓ガラスおよび屋根瓦などが散乱したのみで、小破程度の被害であつた。また、被爆後の火災発生は、校舎からも周囲の民家からも起らなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	(三)人	(五〇)人	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
重軽傷者	(四)	(二四四)	
行方不明者	〇	〇	
計	(七)	(二九四)	

東洋工業株式会社に、出勤中の生徒の中で、一部の者は市内家屋疎開作業の援助のため、当日その現場(水主町付近 - 引率教員一人と生徒一四人、鶴見橋付近 - 引率教員一人と生徒一二人)に動員されて、不幸にも二四人が被爆死した。建物疎開へ行かなかつた残余の生徒は、被爆後、他校の生徒と共に、各町別の班を作り、班長には工場寄宿舎にい

た高等師範学校の学生を選出して、その引率のもとに帰宅することにしたが、不幸にして家が焼け父兄との連絡がつかない生徒は、工場につれかえり、寄宿舎へ収容した。その後、約一週間のあいだは父兄を探し連絡することにとめた。

(中国配電大洲製作所へ出勤した引率教師の手記)

市内大洲町の中国配電大洲製作所においては、工場建物の平家建事務所を除き、他の建物全てが破壊された。炸裂直後の混乱の中で、生徒を集め点呼してみると、モーター工場内で作業中の生徒一人が、屋根の合掌のボルトが落下して頭蓋骨折で重傷を受けており、また、その他に一人の負傷者があったほかは、重軽傷者が比較的少数にとどまった。それは生徒の大半が屋外作業場にいたためである。

無傷あるいは軽傷の生徒は、早々に帰宅させたが、残った負傷者については、手持ちの薬剤を使って治療した。午後三時、呉海軍病院に連絡して来た救援隊の病院車で、重傷者七、八人を呉へ送った。

一方、父兄との連絡がなかなかつかなかった。どうにかして連絡を試みようとする元気な生徒を連絡に出したが、夜になっても音信がなかった。その夜はついに一睡もせず夜を明かした。うす明かりの中で、はじめて自分自身も負傷していることに気がついた。すでに重傷者は鼻息状態になっていたが、わずかな配給の乾パンを水にとき、患者の口に流入しながら、生きていてくれることを心より願ったが、まだ父兄の誰れ一人も訪れがなかった。市内の火災は、天をこがす勢いで焼け広がっているのが見られたが、私としても、この重傷生徒を父兄に引渡さないうちは、帰宅も、学校への連絡も不可能と思い、いたずらに焦慮するのみであった。午後四時過ぎ、ようやく連絡ができたのか、重傷者の父が荷車を曳き工場に着いた。そこで、はじめて生徒を引渡し、学校への道を急いだ。

八、被爆後の混乱

炸裂の直後、出勤中の教職員および生徒(負傷者も含む)約七〇人が帰校してきた。学校はただちに、教室や廊下に柔道用の畳を敷き、また、宿直室も解放して患者の看護に当った。傷口の応急手当のみで、帰宅のできる者は帰したが、残った二六人の生徒については、家庭との連絡がとれず、またその自宅の焼失によって、帰宅するところもない生徒なので、学校に居残ることを指示した。これらの生徒は、約二〇日間から三〇日間位は学校で生活し、米の配給も受けていたが、その後、次第に父兄とも連絡がとれて、全員帰宅していった。

九、学校再開の状況

学校の再開

原子爆弾による被害は、窓ガラス・屋根瓦などが散乱したのみで、火災も起らず、小破程度のものであり、また、教職員も動員引率者三人が死亡したにすぎなかったため、学校機能および指揮系統についても失われることはなかった。ただ、生徒多数が犠牲となり、その対策が重大問題となった。また、大混乱による社会不安や学校の設備および備品についての盗難が多くて、その対策に苦労した。このような状態の中で、家庭やわが身に異常のなかった教職員と生徒により、修理可能な校舎の破損箇所を、応急的に修理して、第二学期の授業を、予定通り九月一日に開始した。その後は、漸進的に校舎の補修が進められていったが、昭和二十三年四月三十日、学制改革により廃校となった。

[第十二項 広島市立第二工業学校\(夜間制\)...](#) 400

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町三丁目 広島工業専門学校内(現在は広島大学工学部)

校長 北沢忠男

教職員 一二人(専任のみ)

生徒 概数五二六人

校舎 木造三教室・延一九二坪

爆心地からの距離 約二・一キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

なし

広島市立第二工業学校(夜間制) 学校敷地・校舎配置図(略図)

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

当校は夜間制の工業学校であり、また被爆当時は夏期休暇中のため、特別な行事予定はなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊

当校(広島工業専門学校の教室三教室を借用して開校された夜間制工業学校)は爆心地から南約二・一キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に屋根瓦・窓ガラスなどは吹き飛び、校舎全体が半壊よりも大破に近い被害を受けた。しかし、火災は発生しなかった。

(二)人的被害

区別	教職員	生徒	備考
即死者	○人	(五一)人	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	(三)	(六五)	
行方不明者	○	○	
計	(三)	(一一六)	

六日当日には、学校は夏期休暇中であり、また当校は夜間制工業学校であるから生徒の登校もなく、教職員についても夜間の宿直はあったが、朝となって自宅に帰る途中であったから、校内での人的被害はなく、教職員も生徒も大半が家庭において被爆したのである。

八、被爆後の混乱

校長は広島工業専門学校(現在は広島大学工学部)との兼任であり、また主事職員も工専からの人が任命されていた関係で、被爆後の措置についても当校のみに考慮が払われていたのではない。全体的な調査が、物的なものにも人的なものについてもおこなわれたようである。あの惨禍の中で、専任教員も、各自が戦災にあって混乱中であり、早急には立ちあがる気力もなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

当校は広島工業専門学校の敷地や教室を借用して開校した学校であり、また校長も工専と兼任であり、まさに他力本願の姿であった。したがって、原子爆弾による被害で使用不能となった工専校舎での授業再開は、工専側と同じく当校も再開できぬ状態となったが、当校独自の立場で復旧対策を考えることは、とうていできず、どこまでも広島工業専門学校の去就によって当校の運命は左右される状態にあった。

昭和二十年九月一日に平常通り第二学期としての始業式が、工専校内で挙行政され、本校専任教職員約一〇人余り(一人は被爆死亡)が登校し、生徒も約一六〇人が集ってきたが、始業式といっても教室の使用可能なものは皆無の状態であったため、まず跡片付けの作業をおこなった。その後、登校日は全員が校舎整備の作業をやり、また建築科生徒は実習を兼ねて、倒壊校舎の材料で仮小屋・職員室および事務室などを造った。しかしその後の学校対策運動の結果、広島工業専門学校は呉市広町に移転することが決定したので、当校はやむなく独自の立場において学校を再開をしなければならぬ方向に追いやられた。しかし、この倒壊校舎を目前にしては早急にはいかんともなしがたい有様であったから、当時、市内東雲町にあった第一工業高校の借用交渉をはじめ、これを借受け、はじめて授業を再開することができた。その後、次第に生徒の出席率もよくなっていったが、第一工業学校は理知的にも交通上からも非常に不

便なところであり、これからの授業継続が困難と思われた。そのため、いろいろ考えられたすえ、結局市内千田町の旧校舍跡に再び帰ることとなった。当分の間は教室が不足し、生徒にも青空教室で苦しい授業を続けていたが、その後工業専門学校も移転した呉市広町から帰ってくることになり、千田町の旧校舍について復旧工事が始まった。当校もこれによって次第に充実した。

昭和二十三年四月三十日、学制改革により廃校となる。

第十三項 広島市立造船工業学校...405

(現在・広島市商業高等小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南観音町

校長 檜山琢三

教職員 四五人

生徒 一、一一五人

校舍 木造二階建・普通教室二三・特別教室八・その他校長室・職員室・当直室など

建坪・一般校舎約一、〇〇〇坪・講堂一八〇坪・柔道場一八〇坪、計一、三六〇坪

敷地面積 九、二八一坪

爆心地からの距離 約二・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島市立造船工業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	材木町	五人	一年生 一九五人	誓願寺付近の瀬川倉庫疎開跡片づけ	教職員 全滅 生徒 一九四人死亡
三菱観音工場作業現場	観音町	約一三	二、三、四学年及び専攻科 約四〇〇	ボイラー製造など各種機械工作(昼夜三交替制)	戦争末期、佐伯郡廿日市町平良及び己斐町山ノ手に旋盤分工場疎開したため、生徒が出向した。
三菱江波工場作業現場	江波町	約七	二、三、四学年及び専攻科 三〇〇	リベット打ち、木工、溶接など各種作業	生徒 重傷者 三〇人 軽傷者 五〇人
呉海軍工廠	呉市	約七	二年生約二〇〇	軍事機密につき不明のまま	
広瀬国民学校	広瀬町		専攻科 三〇	防空要員(軍の下手間)	防衛召集により、三菱観音工場出勤生徒が行く。一五人死亡
合計		約三二	約一、一二五		

四、指定避難先と経路

病弱者を除く大部分の教職員・生徒は動員により現地にあり、すべて動員先の指示に従うことになっていた。従って、学校自体の避難計画はなかった。

五、校舎の使用状況

出征兵士約一〇〇人ばかりが、宇品港から出陣するまでのあいだ、常時校舎を利用して宿泊していた。

また、学校の西南の隅にある木造武器庫に広島中央放送局が設置されており、アメリカ側電波の妨害放送をおこなっていた。なお、兵器庫の兵器(三八銃・ゴボウ剣など)は、敗戦直後、海田市町の兵器補給廠にすべて納入した。

六、当日朝の学校行事予定

授業の予定はなかった。しかし、前夜、空襲警報の発令により出動した学校近辺の生徒と、学校防空要員として宿直した教師一人と、登校して来たばかりの事務職員三人、および小使一人が校内にいた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊後、自然発火によって全焼した。

被爆直後、校舎の窓ガラスなどは、一瞬に破砕され、二階建ての校舎の階上が半壊した。爆心に面する北側の理科教室が放射能熱線によって、まず自然発火した。水は出ず、消火の方法もなくたちまち全校舎に延焼、倉庫・武器庫を残して、他の建物は、完全に焼失した。

八月一日から十日まで、海田市町の日本製鋼所内で、学徒動員幹部講習会(一般軍事教練)があり、五日の夜は、東観音町二丁目三七一番地の自宅に帰って一泊した上枝宥元教諭は、動員先の三菱観音工場へ連絡に出かけようと準備しているときに被爆した。気づいた時はすでに家が吹っ飛んでいたが、家族三人は全く不思議にも、びよこんと取残されて傷も受けず、その場にいた。すぐに歩いて、二五〇メートルばかり先の学校へ行ってみると、学校はすでに焼けていた。

校舎は、自然着火して全体に延焼するまでに、ものの三、四〇分もかからなかった。完全に焼け落ちたのは、十一時ごろであった。

(二)人的被害

前夜から宿直の石崎・黒川・松田三教諭は交替者の登校するのを待っていた。松田教諭は、千田町の自宅が建物疎開になるため休暇をとり、午前八時ごろ帰宅した。

また、黒川教諭は材木町の疎開作業に生徒を引率して行っていて、その現場で被爆死亡した。石崎教諭は防空要員の生徒を玄関受付の階下のたまり場に集め、人員点呼を取っていたとき被爆した。二階の棟木が玄関に落下して来て、土煙があがった。とっさに伏せの姿勢を取った。周囲が真っ暗になった。みんな、直撃弾を受けたように感じた。生徒には負傷者はなかったが、事務職員三人は頭や顔に軽傷を受けて、そのうちに室内から脱出して来た。まず最初は運動場に避難した。ついで、防空要員で登校していた生徒はすぐに帰宅させた。

当校のもっとも大きな犠牲は、当日早朝から材木町の誓願寺付近にある瀬川倉庫の建物疎開作業跡片づけに出動していた引率教師五人(箱田教頭ほか黒川・岡本・青・森)と、生徒一九五人であった。作業中に気分が悪くなり、県病院へ診察を受けに行き、治療を受け、病院の玄関口に出たところで被爆した生徒一人が助かったほかは、引率教師も生徒一九四人も全滅した。

三菱観音工場に出動していた引率教師一二、三人と生徒約四〇〇人は、無事であったが、遅刻して出勤途上の生徒と、平良村および己斐分工場へ食糧運搬当番の生徒ら二、三人が行く途上で死亡した。

また、三菱江波工場に出動中の、引率教師六、七人と生徒約三〇〇人のうち、重傷者約三〇人、軽傷者約五〇人を出した。さらに、三菱観音工場に出動中の生徒のうち、当日、広瀬国民学校の防空要員として応召していた専攻科の生徒一五人が被爆死亡した。

午後五時過ぎ、三菱江波工場に引率教師として出動していた門田宏教諭が、同僚と協力して工場内の重軽傷生徒たちを一応救護し、動員生徒全体に、その後の行動などについて注意を与えてから、学校に駆けつけてみると、桧山校長がただ一人、校庭の防空壕の入口に横たわっているのを発見した。

桧山校長は、翠町の自宅から自転車で登校中に被爆、舟入本町の電車道のところで、失神して倒れていたが、自分の服に火がつき、その熱さで意識を回復した。ひどい火傷の重態であったが、押して登校してみると、学校はすでに焼けていたのであった。学校では治療もできないため、門田教諭が校長を三菱江波工場内の診療所に連れて行った。桧山校長は二十三、四日まで病院で看護を受けたのち、自宅で療養し一命を助かった。なお、六日の学校防空要員として、登校途中の約一〇人の生徒(三・四年生)が被爆死亡した。

(人的被害状況表)

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(五)人	(二四六)人	建物疎開・一九九人(教師五・生徒一九四) 動員生徒・五二人(広瀬校一五・登校中一〇・その他二七)
重軽傷者	(重 六 軽 二)	(重 三〇 軽 五〇)	教師六人のうち三人は八月末から十月中旬にかけて死亡した

行方不明者	不明	不明	
計	(一三)	(三二六)	上記数は、行方不明者含まず。

()内の数字は、動員先での被爆者数

なお、炸裂時、校内にいた宿直教員一人と、防空要員生徒約一〇人、小使一人は軽傷で助かった。

八、被爆後の混乱

学校が焼失したため、何らなすすべもなかったうえ、松山校長も重傷で動けず、学校の機能は、まったく停止した。

三菱江波工場に動員中であった門田教諭は、校長を三菱の診療所に運んだあと、翌七日から学校の焼跡に行き、鉄扉が爆風でネジまがったまま、焼失をまぬがれた鉄筋建倉庫を仮事務所とし、焼残りのボロ机二、三をおいて、出勤した教師ら五、六人と、連日、教職員の安否や生徒の死亡者・生存者の確認・各家庭との連絡事務をはじめ、学校の復旧などについて協議をかさねた。

当校は、防空計画では救護所に指定されていたが、校舎焼失のため、その役に立たなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月二十日過ぎ、安芸郡府中町の東洋工業株式会社内に避難していた県庁が、市内各学校の責任者を召集した。当校から校長代理として上枝教諭が出席したところ、県知事は「この場合、県はどうにもできないから、各学校の責任で、適当な場所をさがし、生徒を集めよ。」と、命令した。

そこで、種々協議し、折衝を重ねた結果、翠町の第三国民学校を借用して再開することに決定した。

昭和二十年九月二十四日、第三国民学校において第二学期の授業を開始した。

松山校長は体力が回復して、十月初めから出勤するようになった。

さらに、昭和二十一年五月一日、丹那の元暁部隊兵舎へ移転したが、昭和二十二年三月三十一日をもって、私立造船工業学校が廃止されると同時に、広島市立第一商業学校として生徒募集が認可された。

昭和二十三年五月三日、学制改革により、広島市商業高等学校として開校し、同年七月十四日に南観音町の新校舎に移転した。のち、高等学校再編成で廃校になったが、さらに昭和三十四年四月一日、復活された。昭和三十六年五月十三日に創立四十周年記念式を挙行し、昭和四十年、牛田新町浅野山に近代的な新校舎が建設されてここに移り、現在に及んでいる。

[第十四項 広島市立第二商業学校\(夜間制\)... 413](#)

(現在・広島大手町商業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市鍛冶屋町三九番地(本川国民学校校舎を商業高等学校)

校長 藤原勘太郎

教職員 専任教官九人(内応召中の者三人)

生徒 概数四二〇人(内本科生徒二八〇人、専修科生徒一四〇人)

校舎 借用使用教室一六教室(本川国民学校の鉄筋三階建校舎の二・三階教室を借用し、当校校舎として使用していた)

爆心地からの距離 約三五〇メートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

当校は夜間商業学校として開校された学校であり、避難地などについては指示していなかったが、警戒警報発令と同時に下校させていた。

五、校舎の使用状況

広島市第二商業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

六、当日朝の学校行事予定

夜間授業のためなし

七、被爆の惨状

被害状況

当校(本川国民学校)は爆心地から西北西約三五〇メートル離れた所に位置した学校で、爆心直下というべき近距離にあったから、炸裂の一瞬、校舎内外の附属物や備品類は吹き飛び、大火災となって全焼した。しかし、当校校舎は鉄筋建造物であり、外郭のみは残った。

当校は夜間制の商業学校であり、また、当時は夏季休暇のため、職員も生徒も幸い、登校者がなかった。しかし、市内在住者の中には、職場または家庭において、この大惨害を受けた者があった。

八、被爆後の混乱

市内舟入町に自宅のあった藤原校長は、家も家具類もすべてを焼失したが、幸い命は助かった。このように、在市委員の中には焼失によって家を失った者も多数にあり、また不幸にも二人の死亡者があった。これら被爆者は住む場所もなく、その上、夏季休暇中のできごとゆえ、職員間の連絡もつかないままに避難していったため、おたがいが消息不明の有様であり、校舎も全焼し、学校の機能は完全に停止した。被爆後、学校対策がたてられたのは、当校職員下縄教諭が、九月三日に復員してからである。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆による学校施設の焼失、または交通機関の混乱、社会情勢の不安などで、校長も夜間学校としての学校復旧には迷っていたが、九月三日に下縄教諭が復員するにおよび、市学務課との連絡をとり、復旧対策の協議をはじめた。生徒に対しては、とりあえず、市内の東・西・南・北と、中心部に「二商生徒は十月五日午後一時、市女裏門前(電車通り)に集合すること」と書いた貼紙をして告示したが、指定の十月五日に集合した者は、校長と下縄教諭二人と生徒一四人だけであった。集合生徒の大半は疎開した遠距離の者ばかりであったが、共に再会を喜び、罹災状況を語り合い、また、次の会合(十月十五日)を約束して別れた。十月十五日の集合日には、校長および教職員四人、生徒数一五人となり、次回の集合から授業再開する旨を申合わせて解散した。

第二学期としての授業開始は、第三回目の集合日でもあった十月二十五日からであるが、広島市立高等女学校(市内舟入町、現在舟入高等学校)の裏に集合したあと、舟入国民学校寄りの電車線路西側に倒れている電柱などに腰かけて、青空の下に教材を開き、各科目ごとに約二〇分間の学習をした。このような授業は、十二月の初旬まで晴天の日のみ続いていたが、十二月になって、市内己斐国民学校講堂を教室として、借用する交渉が成立して、解消された。その後、復員による教員の帰校や疎開していた生徒の登校も次第に多くなり、授業内容も日一日と充実していき、二学期末には、生徒数も三七人(一年生四人、二年生七人、三年生一人、四年生一五人)程度となった。

昭和二十二年三月二十八日、終戦後第一回の卒業生二九人を送り出した。

[第十五項 広島市立第一高等女学校...417](#)

(現在・広島市立舟入高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市舟入川口町八三二番地

校長 宮川造六

教職員 四三人

生徒 概数一、四二六人

校舎 木造二階建・四一教室・延一、九八三坪、鉄骨校舎一一四坪

敷地面積 六、三八七坪

爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島市立第一高等女学校 後者敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	材木町	八人	五四四人	疎開跡片づけ	県庁北(現在の平和記念資料館前帯)
大東亜食糧工業株式会社	西観音町一丁目	—	四五	缶詰の製造	
西部被服株式会社	舟入川口町	—	四〇	軍服裁縫	
関西工作所	舟入川口町	当日			関西工作所も日本製鋼所も当日は電休日のため、工場は休業であった。しかし生徒の中で当番の者数人が出勤した。途中で一人が死亡。
日本製鋼広島工場	西蟹屋町	電休日			
呉工廠広島工場	呉市広	—	専攻科 四〇	小銃弾の製造	
合計		一一	六六九		

四、指定避難先と経路

災害時の避難先として、近くの江波国民学校、または陸軍の江波射撃場が指定されていた。

五、校舎の使用状況

当校は軍隊関係による校舎接収はなかったが、当時の戦時非常措置方策にもとづき、男女学徒は工場などにどしどし狩り出されていった。しかし、女子学徒の工場勤務には、いろいろと問題となる点が多く、学校としては、その対策について非常に困っていた。最も良策として考え出されたのが、学校工場化ということであった。学徒の勤労は、たとえ学問はしなくても学校において勤労に従事することが最も大切であるという見解から、陸軍被服廠に赴き、学校工場化の希望実現のため、交渉を重ねた結果、許可となり、昭和十九年八月一日、学校において入廠式が行なわれた。校舎の一部(坪数二三〇坪)が工場となり、それに従事する当校生徒約三二〇人(三年生を主体)は、軍属として任命され、講習が八月二日と三日にわたり行なわれ、四日から作業開始となった。しかし、戦局は緊迫して、軍部から「軍服より弾丸の生産が第一である」と命令されるに至り、学校としても、その事態に即応し、学校工場における軍服生産を中止して、急ぎ軍需生産工場へ出勤した。そのため、昭和二十年三月末に、良策と考えられた学校工場も閉鎖され、大半の生徒が日本製鋼所で、昼夜四交替の弾丸生産に努力したのであった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業なし	一二人	〇人	〇人	当校一、二年生徒全員は、市内林木町の建物疎開作業に出勤(引率教師八人)午前七時、西福院土塀の南側へ全員整列して、朝礼後、直ちに作業開始した。その他の生徒については、大東亜食料工場に出勤した生徒をのぞいては、電休日のため休んでいた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...一部全壊と一部半壊

当校は爆心地から南南西約二・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に校舎の一部は倒壊したが、大半の校舎は半壊程度の被害で、窓ガラスや屋根瓦などは飛散し、天井・廊下および建具類が破壊された。

なお、本館中央部二階の屋根にある手摺付近が、放射能熱線で自然着火し、煙を出していたが、発見が早く燃えあがる以前に消し止めた。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒
即死者	(七)人	(五四四)人

重軽傷者 行方不明者	一〇	(二)
計	一〇(七)	(五四六)

()内は学校外(特に動員先)での被爆者数

六日の朝、市内材木町付近の建物疎開作業に出動した一、二年生たちは、原子爆弾が炸裂した一瞬、その熾烈な放射能熱線と、爆風圧をもるに受けて、地面に叩きつけられたり、吹きとばされたりした。まだ一三、四歳の少女五四四人が、突然、いけにえにされたのである。即死者と重傷者が折り重なっている中を、どうにか歩ける者は、近くの元安川や本川に逃げようとしたが、逃げる途中で倒れる者が多かった。荒れ狂う火炎に追われて、川の中に飛び込む者、灼けつく熱さに喘ぎながら、近くの水槽に入る者など、逃げまどったすえに全員が死亡した。ごく僅かの生徒が川べりにたどりつき、救援に来た軍の舟艇に収容され、似ノ島に運ばれたが、この生徒も生きることができなかった。

炸裂後は全市が火の海と化し、夕方になっても、なお、火炎・熱風はおとろえず、救助しようにも近づけない状態であった。ついに救助の人も来ず、到底助かることのできない自身を悟った生徒の中には、「天皇陛下万歳」を三唱し、また、「君が代」を静かに歌いつつ絶命した者もあったと伝えられている。

二年生山崎仁子の父山崎益太郎の手記(流燈掲載)に、次のとおり惨状が述べてある。

「...私が元安川畔の現場に辿りついたのは、あの日の昼過ぎであった。...元安川に架けられていた仮新橋は、その時既に半分落ちていた。ちょうど腰の辺まで水があったが、川を歩いて渡った。ああ何たる悲惨。河原一面、砂洲寄りに無残にも、何十何百の少女らが、或いは傷つき、或いは眠り、実は既に事切れしか、また斃れ、あちこちに僅かに蠢動し、かすかにウメキ声が聞える。

驚くことには、どれもこれも素はだかである。シュミーズもスカートも焼け、身体はユデ蛸のように赤黒色になっている。...私は漸く仁子を見出した。勿論、身体は焼けただれ、僅かに腰のあたりに手拭の切れ端と、名札と腰下げが残っている。膚は黄色となり、顔はうずばれていた。

『おとうさん、咽喉が痛い。』

私は早速川の水を掌ですくって飲ませた。私の家もこの土手の上(天神町)にあった。勿論、焼け落ちている。牛田の親戚に長女孝子を預けてあり、その安否も気にかかり、仁子を背負い牛田へ行くことにした。子供を負って、水の中に入って行ったものの、水が腰のあたりまであり、私自身(中国配電会社で被爆負傷)も相当弱っているとみえて、ともすると倒れそうになる。

幸いこの時、川下から、船舶部隊の兵隊さんが、舟で救援に来てくれたので、大手町側の岸に渡してもらおう。こうして、やがて西練兵場紙屋町入口まで来た。西練兵場では多勢の人が休んでいた。会社(中国配電)の人も四、五人見あたった。ここで暫く休憩し、再び子供を背負うて立つ。急に重くなったので、会社の人竹本君に少し上げてもらう。すると、竹本君がチョットおろして見なさいというので、何か異状を予感して、思わずハッとす。そのとき吾が子は、こときれていたのである。何とも譬えようのない思いであった。

それから骸を負って、八丁堀から常葉橋を経て、牛田町の二重堤防の奥まで行く。途中一〇〇メートル歩いて五分休み、一五〇メートル行って一〇分休み、自分も倒れそうになり、夢で遠い旅をしているような感じであった。

やっと牛田の親戚に辿りついた。長女の無事な姿を見て、まず安心。何時かと問うと、六時半という。紙屋町から牛田まで(約三キロメートル)、五時間余りかかった。」

このように絶命寸前の少女たちは、肉親が探しに来てくれることを、ひたすら願いながら、生涯で最も永くつらい時間に堪えていた。助けを求める声やうめき声が、余燼くすぶるなかで、あちらからも、こちらからもかすかに聞えていたが、多くは助けられず死んでいった。

なお、宮川校長は、生徒たちを建物疎開作業現場に引率したあと、尾長町の盲学校に疎開していた県学務課へ人事のことで出頭するよう言われていたので、教師にあとを頼み、生徒たちと別れた。

電車で広島駅まで行き、そこから徒歩で学務課へむかう途中、松原町の路上で被爆した。意識もうろうとして、そこから大正橋へむかった。大正橋を渡ると、日本製鋼所広島工場(もと日本綿花紡績工場)があり、市立高等女学校の生徒三、四、五年全員が、その工場に動員され、寮に泊っていたからである。

工場に入ると、すぐ指導員(引率教師)が宮川校長を見つけ、負傷している頭を洗い応急処置をした。しかし、疎開作業の生徒たちが心配になり、工場を出て大正橋を渡ったとき、西から逃げてくる避難者の群れの中で、生徒の親と

出あい、到底行かれないことを知らされた。その生徒の親が比治山公園へ逃げようと言うので、一緒に逃げていき、比治山の防空壕のなかに横たわった。防空壕の中には、負傷した電信隊の将兵が幾人もかつぎこまれて来たし、一般の負傷者もつぎつぎと逃げこんで来た。これがちょうど正午ごろであったが、大混乱の壕内に夜になるまで寝ころんでいた。

そこから皆実町の自宅(電信隊横)まで近かったので、夜になってからトボトボと歩いて帰った。家は大破していたが幸い焼けてはいなかった。

七日、舟入町の学校へ状況を見に出かけたが、フラフラとまた倒れそうになり、そばにいた教師に支えられて、校庭の防空壕に横になった。それから当分のあいだ動くことができなくなった。

爆風で吹き飛ばされ、右手くび・顔などに火傷した宮川校長は、その後、比較的被害の少なかった牛田町の知人宅に逃れて、八月末日まで臥床療養し、起きあがったのは九月になってからであった。

八、被爆後の混乱

八月六日、建物疎開作業に出動した引率教員および一・二年生全員の殉死の情報が入ってきた。また、校舎は使用不能なまでに破壊されたが、同日夕刻には、早くも校庭の防空壕内に受付所を設けて、生徒の安否確認、家庭との連絡など、惨禍の実状把握につとめた。

翌七日、本館を整理して、ここを仮本部とし、生存教員が手分けして、全市に生徒の姿を求めて搜索を開始した。

九、学校再開の状況

学校の再開

強烈な爆風により、校舎は全壊・半壊の被害を蒙った。窓は破れ、壁は落下し、柱は折れ、備品は散乱破損して、惨状は全く手のつけようもない有様であった。しかし、生存教員と生徒は一致協力して、校舎や校庭の清掃と整備を、たんねんに行なった。また安佐郡可部町から屋根修理の職人をやとって、本館一部の屋根を修理したり、海田市町の大工に、窓わくなどの修理を依頼したりして、ようやく六教室を整理することができた。

被爆直後から第二学期開始までの復旧状況は次の通りである。

八月六日 校舎南側の防空壕にて、生徒搜索の事務をとる。

八月七日 校長室・事務室・職員室・応接室を取片づけて、学校本部を開設、本日から被爆生徒の搜索を全面的に実施する。

八月十日 校舎および附属建物の倒壊や破損状況を、市役所や県内政部長あてに報告、学校長は市役所に出頭のうえで、修繕復旧方を請願する。

八月十一日 被爆後、はじめての職員会議を開く。

八月二十九日～三十一日 全職員は九時に登校し、復旧作業にあたる。

九月五日 有志生徒が登校して、復旧作業を行なう。

九月十七日 講堂および本館の教室を職員と生徒の手で修理する。

こうして、二十年九月十九日から第二学期の授業が開始された。しかし、登校は晴天の日のみとし、四年生・三年生および少数の一・二年生の生存生徒で三編成の組を作って、合併授業と復旧作業を行なった。雨天の時は家庭修練とし、また日曜日はもちろん休日であるが、雨天多き週には、つぎの日曜日を授業日とした。

第二学期開始当時の出席教員数は約三二人で、生徒数は約四一六人(一年生二〇人・二年生二二人・三年生一七八人・四年生一九六人くらい)であった。

登校して来る生徒の大半は、被爆による焼失をまぬがれた家庭や、被害は受けても軽い家庭の者であったから、学用品・教科書などはわりかた持っていた。また、学校も焼失をまぬがれたから、図書関係も無事であり、生徒に必要な書籍は貸与もして学習を進めた。また、日本製鋼所に動員していた関係で、ノートや鉛筆類は払下げがあり、その品物を生徒に交付するなどのやり方で、苦難をのりこえてきた。

本校は、広島市内各学校のなかでも、被爆による人的被害が最も大きかった学校であり、現在、平和大橋西側のたもとに、広島市立第一高女職員生徒慰霊碑が建立されている。この慰霊碑のほかに、戸坂町持明院内にある慰霊碑の碑陰に記された宮川校長の「教え子を水槽に入れ自らは掩ひとなりて逝きし師のあり」の短歌は、沓木良之教諭が被爆翌日、材木町西福院の所の水槽に、森政夫教諭が生徒を水槽につけて、自分の体でかばったまま死亡していたのを発見して、校長に報告したのが、作因となった。

幸恵の言葉

森本トキ子(動員学徒故・森本幸恵の母)

…以下は幸恵の言葉のままです。

一時間作業し、八時休憩になり、誓願寺の大手の側で腰をかけ、友だち三人で休んでいると、ああ落下傘が三つ、きれいきれいと言騒がれるので、自分も見ようと思い、一歩前に出て上を向くと同時に、ぴかりと光ったので、目をおさえ耳に親指を入れて伏せたら、その上に一尺はばもある大手が倒れ、腰から下が下敷きになり、頭の麦わら帽子は火がつき焼けていました。

長いことかかり、大手の下から出ることができ、あたりの友だちを見れば、皆、目の玉が飛び出し、頭の髪や服はぼうっと焼けて、お父ちゃん助けて、お母ちゃん助けて、先生助けてと、口々に叫んでおりました。その時目を抑えた者が三人だけでした。「どうせ生きられないんだから、みんな一緒に死にましょう。皆さん舌をかみなさい。」と言って、貴女は誰、貴女は誰と名前を呼びあい手をつないで、そこへ屈んでおりましたが、暑くてとてもいられませんので、目のある者だけ三人逃げられるだけ逃げましょうと、転びながら県庁の橋のところまで来たら、一人の友だちが、私死ぬると言って倒れたので、二人は離れまいねと言って手をつないで、ヒョロヒョロしながら川まで下りました。

その友だちも死ぬると言って、水の中へズブズブと倒れましたので、背中の服を捉えて水の無い橋の下へ引ずって行きました。

しばらくすると、大きな真黒い雨が降り出しました。初めは飛行機が油をまいたのかと思いましたが、咽喉が乾いてたまらないので、両手で受け、一口くらいたまったので、それを飲みました。

川に水があっても死人で埋まり、それに人が、があがあ吐きますので飲まれません。

そのうち私はたくさんの血を吐きました。それきり気を失い、夕方寒いので目が覚めて隣りの友だちを見れば虫の息でした。この人も、もうだめだと思い、こそこそ這いながら逃げようとしたら、兵隊さんが来て、此所に生きた子があるぞ、と言って、舟に乗せられ、またそのまま気を失いました。

二日後に気がついたとき、兵隊さんが、気がついたか、と言って親切に世話して下さいました。

その時、幸恵の傷はほとんど無く、額と右手を焼き、それに大手の下から出るのに足の膝を、両方ともくるりと皮が取れて、赤身が出ておった程度でした。(以下略)

[第十六項 広島市立第二高等女学校... 429](#)

(現在・広島市舟入高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市翠町七ノ割一、七九七番地

校長 迫隆一

教職員 一人

生徒 四一人

校舎 当時、第三国民学校(現在翠町中学校)の校舎を間借した。

創立年月日 昭和十八年四月一日

註・昭和十七年開校の広島市立実科学校を引継ぐ

爆心地からの距離 約三・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島市立第二高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
巢守金属工業株式会社	水主町一五二	一人	四九人	航空機エンジンの部品製造	

四、指定避難先と経路

別に定めなかった。

五、校舎の使用状況

第三国民学校の項を参照

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
平日授業	二人	二〇〇人		巢守金属工業株式会社へ学徒動員で出勤した生徒四九人を除き、他の生徒は登校した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊

当校は爆心地から南南東約三・二キロメートル離れた所にあり、炸裂と同時に屋根瓦は飛散し、天井や廊下は破損し、建具などの大半も破壊されたが、校舎は倒壊せず、出火もなかった。

(二)人的被害

原子爆弾炸裂の一瞬、その衝撃による校舎内の飛散物その他で、在校生徒の大半が負傷した。幸い死亡者はなかったが、学校はただちに地区別・班別に生徒の点呼をしたうえで、生徒数人を一組に編成し、全員の帰宅を命じた。

生徒は学校から出て行ったが、市中はさらに被害甚大で、いづこも猛火に包まれていたため、帰宅しようにもできず、また、逃げ場もわからず、その大部分が途中から逆戻りしてくる状態であった。

学校はいちじ、生徒収容所となったが、夕方ごろには、それぞれつてを求めて、その行先きに向うか、または自宅に帰っていった。

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	〇人	(七)人	()内は動員先における被爆者数
重軽傷者	二(一)	二〇〇(一二)	
行方不明者			
計	二(一)	二〇〇(一九)	

八、被爆後の混乱

在校の教職員や生徒たちが、爆風によるガラスの破片で負傷したけれども、在校者にも登校中であった生徒にも、死亡者が出なかったことは幸いであった。

最も心配であったのは、当日、市内水主町の巢守金属工業株式会社に出動中の生徒四九人の安否であった。

この工場は、爆心地から約一・二キロメートルの距離という近い場所にあったから、その被害も甚大なものと思われたが、全市的な惨状のなかでは、調査手段もまったくなかった。ただ、幾日かのち、登校して来た生徒の話を頼って、調査を進めていき、だいたいの動静をつかむことができたような状況であった。

校舎は半壊し、幾つかの教室は外郭だけを残すに過ぎないというあわれなありさまとなったうえ、生徒もまた、その家庭が破壊されて郊外へ移住した者が多かった。このほか死亡者もあり、重軽傷で床につく者などあって、学校の機能は、完全に停止状態となった。

しかも社会秩序の壊滅から、残存校舎についても資材の盗難が毎夜続き、その警備対策にすら困ったほどで、学校の復興措置など早急には思いもよらぬことであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、各教師は死亡者の調査を押し進めると共に、重傷者や遠地避難などによる特別事情のある生徒以外は、ただちに登校するか、出勤工場への復帰を命じて、戦災後の処理や生産について敢闘するよう促した。

八月十五日、戦争が終結するところとなり、当局側の指示にしたがい、農家の生徒は即時帰農させ、その他の生徒には特別の事情のある者を除き、なるべく登校を促して校舎復興作業にあたらせた。

八月二十三日、全生徒集合の事を街頭に公告して、生徒の掌握につとめるとともに、この日を授業開始の日とした。

公告によって集って来た生徒たちは、食糧増産と復旧作業などを主とする授業を開始したが、公告の伝達も思うよ

うに徹底せず、また遠地居住生徒の通信連絡も十分にできず、生徒の動向ははっきりとつかめなかった。

そこで学校としては、生徒動静確認のための調査状を作成し、九月十三日に再度これを発送したのであった。

九月から第二学期授業開始期における当校教職員は校長ほか一四人で、生徒数は一年生一〇二人、二年生九九人の合計約二〇一人程度であった。

第十七項 修道中学校、修道第二中学校、修道学校... 435

(現在・修道高等学校・修道中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南千田町一、一九九番地

校長 国崎登(当時出征中)

校長代理 戸田貫一

教職員 四五人

生徒 概数一、〇一五人

校舎 木造二階建・四九教室・延一、九五二坪、寄宿舍二六七坪

敷地面積 九、二三〇坪

爆心地からの距離 約二・四キロメートル

修道中学校 修道第二中学校 修道学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
合同製鋼所	三篠町	一人	三年生 三三人	旋盤作業 製品運搬	被爆による死亡者三人
日本製鋼所広島工場	安芸郡船越町	三	五年生 一八〇	兵器製造作業 製品運搬	一、工場の一部は、加茂郡西高屋村に疎開するにつき教諭一人と生徒三〇人がこの地に出動した。 二、被爆による死亡者四人
兵器補給廠	霞町	五	三年生 実講科生 三〇六	弾薬製造 兵器整備	一、弾薬製造部は、佐伯郡宮島町包ヶ浦にあり、上記のうち教諭二人と生徒八人はこの地に配属された。 二、被爆による死亡生徒三人。 三、教諭一人は中国五県報国隊特別軍事講習のため十日まで安芸郡船越国民学校に出張中。
三菱広島造船所	南観音町	四	四年生 二三五	造船作業	一、出動途中電車内で教諭一人死亡。二、生徒軽傷二〇人で死亡者なし。
呉海軍工廠	呉市	三	五年生 実務科生 一二〇	運搬作業 一般事務	一、教諭一人出勤途中で死亡。 二、出勤制途中日曜日帰宅し、出勤前に罹災死亡したもの五人。
建物疎開作業	雑魚場町 市役所南側	八 助手二	一年生 二年生 一八三	公会堂疎開跡 片づけ	一、ほとんど全生徒が被爆死亡。 死亡者 一八三 教諭 八 助手 二
合計		二六	一、〇五七		

四、指定避難先と経路

工場関係に出動していた生徒(三年生以上)は、各出勤先の実状に応じて、避難先をきめていた。学校残留組の生徒(一・二年生)は、緊急の場合には、第一に運動場へ集結し、その後の状況に応じて帰宅させるなり、または、緊急避

難を指示していた。

五、校舎の使用状況

被爆前には、軍隊関係による校舎使用や物資集積などについては何もなかったが、被爆後の八月九日から十一日まで三日間は、陸軍砲第一九八四一部隊約一〇〇人に校庭使用を許可した。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	生徒	その他	
家屋疎開作業(一・二年生)	三人 (外に理事一人)	九人		在校者八人は、登校日を間違えて登校してきた一年生。一人は疎開作業隊から連絡に帰ってきた二年生。

当時、中学校三年生以上の生徒は、学徒動員で各工場に出動していた関係から、各自は直接工場に集合していた。中学校一・二年生は、当時、勤労学徒隊として市内の家屋疎開作業に出動していたが、一年生と二年生は交替の隔日出動で、一日は休養日ということになっていた。しかし、交通や、その他の社会事情で事実は一・二年生の混成で作業をする状態が多くなっていった。八月六日は、三年生を主体として、一部の一年生を加えた混成で、作業に従事した。従って大部分の一年生は休養日として家庭にあったが、登校の日を間違えて八人の生徒(一年生)が登校していた。そのため、八人のうち、一人は倒壊物の下敷きとなり即死した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊と一部全壊

当校は爆心地から南方約二・四キロメートル離れた所に位置しており、炸裂と同時に、校舎の大半は完全に倒壊したが、一部校舎は屋根瓦や窓ガラスなどが吹き飛び、壁および天井にも破壊された所が何か所もあって、半壊程度の被害を受けた。炸裂による火災の発生はなかったが、当校隣接の帝国人絹工場に火災が発生し、火の手は急速に広まって大火となった。その火の粉が猛烈に校内にふりかかって来て、倒壊した東校舎四組の屋根や、校庭に集積中の防空資材に延焼した。一時は火勢が非常に強くて、手のほどこしようもなかったが、当直中の浜本書記・夜学生の名越某および近隣の人(二人)が必死の防火活動を行なって火災を消し止めた。

この防火活動は、火災から学校を守ったのみならず、町全体を守った行動として一般市民からも非常に感謝された。なお、当校校舎の被害実状は、次のとおりである。

全壊校舎	半壊校舎	備考
本館二階建 職員室・図書室・校長室・応接室・ 博物室・博物準備室・普通教室四 講堂式道場平屋 柔道場 剣道場 中校舎平屋 理科関係 七室 普通教室 六室 南校舎平屋 普通教室 十一室 寄宿舍(二六室) 倉庫	新校舎二階建 一 普通教室 四 工作室 一 事務所(二階建) 敬道館(二階建四室) 宿直室 舎監室	原子爆弾による校舎の被害で、全壊は五棟と寄 宿舍および倉庫などで、その面積は、五、〇二 六平方メートルにおよぶ。

(二)人的被害

区別	教職員	生徒	備考
即死者	三(一〇)人 即死者三人は財団役員、動員 中の即死者一〇人中八人は教 職員で二人助手	七(一八三)人 建物疎開作業出動中の生徒死亡者一八 三人の中で、一年生は三二人、二年生は 一三六人、工場動員中一五人である。七 人はその他	()内は動員先の被爆者数 ()以外はおおむね自宅での被害数
重軽傷者	若干人	若干人	
行方不明者			
計	三(一〇) ただし判明分のみ	七(一八三) ただし、判明分のみ	

六日当日には、大部分の教職員および生徒は勤労働員、または緊急動員作業に出動中で、学校には玉川教諭・夜学

生名越助手などの数人が残留組として在校中であった。校舎の倒壊により、玉川教諭は頭部を負傷し、入江理事は負傷と骨折の重傷であったが、残留組で生き残った者は、まず第一に御真影の避難を考え、負傷した玉川教諭は浜本書記の助けをかりて、御真影避難の任務をはたした。次いで校内の防火につとめて、隣接の帝国人絹工場からの飛火を防いだ。

登校日を間違っただけで登校してきた生徒八人(一年生)の中の一人は運悪く、倒壊した校舎の下敷きとなって圧死した。また、公会堂の疎開跡片づけに出動して、連絡のため学校へ派遣された二年生四竈揚は、校舎倒壊と共に頭部に深い傷を受けた。その他の生徒たちは浜本書記や、被爆直後、急ぎ動員先から帰校してきた白石・妹尾両教諭、また、軍事講習で出張中の景山教諭などが必死となって助け出し、半壊の敬道館内に収容し、ただちに生徒の家庭に連絡をとった。

また、学徒動員で出動中の生徒(三年生以上)は、その出動場所が市内でも段原町・観音町・三篠町・船越町、または呉市などの、爆心地からは、比較的離れた場所であったから、人的被害は僅かなものであったが、雑魚場町方面の家屋疎開作業に出動した生徒(一・二年生の混成)は、甚大な被害を受けた。ちょうど生徒たちが作業に取りかかった時に被爆し、全員がはげしい熱痛と強烈な衝撃を受けて吹き飛ばされたという。被爆直後、引率教員は事の重大さを知ると同時に、我身の重傷もかえりみず、生徒の統率と収容に全力をつくしたが、何程のこともできず、生残った生徒は、大混乱のなかで、ちりぢりになった。

被爆直後、動員先の工場から急ぎ帰校してきた景山・丹生谷・白石の各教諭は、生徒の安否について直ちに調査活動をはじめたが、ただ避難中の生徒の口から得た話をたよりに、その家族との連絡を保つように努めるのが精いっぱいであった。また、三教諭は、広島赤十字病院・県病院などの市内各収容所をたずねてまわったり、陸軍運輸部の舟艇で、似島や金輪島の収容所をめぐる生徒を調べた。

似島検疫所では、検疫所に入ると、通路といわず、コンクリートの土間といわず、焼けぶくれた人々が、赤チンを塗られて、雑然と倒れうめいていた。うめき声を出している者はまだよいが、うめき声すら出ず、意識も失いかけて、ただうごめくだけの者、何か声細く呼んでいる者など、凄惨な光景であった。

「修道中学の生徒はいないか、修道の生徒は返事をしてくれ」と、呼び続けて、生徒を求めた結果、一〇数人の生徒を発見したが、その中で、土間に横たわっていた生徒(一年生)は半身を起して、「先生、僕はさっき先生に会いましたよ。八丁堀の所ですよ、よく来てくれましたね。また来たのですか、うれしいですよ、僕の名前ですか - 」という。この生徒は意識が混乱しているのだろう。当時、動員に出ている教員を知るべくもない生徒が、生死の境をさ迷いながら、学校のことを夢見ているのであった。明日たずねて来る時には、この世にいないだろうこの生徒に、教諭らは言うべき言葉もなく、ただただ涙を流すのみであった。このような生徒たちを、その後、二回、三回とたずねて、ちくいち父兄に報告した。

八、被爆後の混乱

一年生および二年生に対しては、休校のままの状態、行方不明生徒の所在調査に終始した。三年生以上の動員生徒(各工場関係方面に出動)の職場は、各自により多少の相違はあるが、作業場が大被害を受けた所は休業となり、また、その他の現場も事態のショックで、半休業の状態のまま終戦を迎えた。学徒動員も終戦とともに消滅してしまった。

生徒の家庭は県下一円にわたっていたが、郡部の生徒の家庭は無事で、食糧や勉学のゆとりもあったが、市内在住の生徒の家庭は全てを失って、生計の手段さえなくなった者が多数あり、授業再開というような事は、全く不可能な状態に陥った。何よりもまず第一に家庭の落ち着きを待つ必要があったから、学校としては一定の期間中、社会状況の正常化を待って、家庭事情の調査を中心に、それに学校再建の寄付金募集をかねて、教員および父兄役員とで巡回することに決定した。また一年生・二年生については、八月末までを休校とし、九月一日を登校日に指定し、生徒情報を極力集めることに努力した。

九、学校再開の状況

学校の再開

当時、広島市には七五年くらいは人が住めないだろうという流説が盛んに話されていたため、学校再建についてもずいぶん評議された。その一案として、海田市町にあった旧呉十一空廠支所の建物が残っていたので、ここを一時授業所にしてはという考えがきまり、当局と交渉して、建物の視察に行くなどしたが、徒労に終わった。結局、現在地で残存校舎を修理し、九月一日から、一応授業を再開しようということになり、とりあえず四教室を作って生徒を集め、

九月十五日、第二学期の授業を始めた。授業再開当初の教職員は二三人、生徒数は約九〇五人(一年生二九七人・二年生九八人・三年生二六五人・四年生二四五人)程度であり、一年生および二年生は一週に四日(月火水木)の登校で、一日約四時間の勉強を続けた。また、三年生および四年生も一週に四日(水木金土)の登校で、一日約四時間の勉強といった変則授業であり、また、各学年は二学級を一組にした合併授業でもあった。このような授業内容で、被爆後の授業は再開されたが、校舎の屋根などがひどく破損しており、雨天の日などは休校といった不便さと、危険なことから、一日も早く校舎再建が望まれた。

昭和二十年十一月、学校関係者並びに父兄や同窓生などによって、修道中学校復興後援会が組織され、昭和二十一年一月十三日に、その発会式をあげたが、その計画書は次の通りである。

仮校舎の建築並びに破損校舎の修理

(一)建築並びに修理の総経費

一、〇七四、五一二円五〇銭

内訳 第一期 一、一一九、五三七円五〇銭

第二期 七五四、九七五円

このうち倒壊資材利用見込額

八、〇〇〇円

差引必要経費 一、〇七四、五一二円五〇銭

(二)経費調達予定は別途寄付金募集による。

調達目標額 一、一〇〇、〇〇〇円

内訳

在校生徒父兄 六〇〇、〇〇〇円

同窓会有志 五〇〇、〇〇〇円

このように復興後援会のもとに、逐次校舎の再建は進められていった。また、当校生徒の中には遠隔地の者も多かったが、被爆後の市内には、下宿生を置くゆとりのある家もなかったから、生徒の動員先であった小破程度の兵器廠の独身寮の払下げを交渉し、所有地主とも借地料などの話し合いを解決して、これを寄宿舍として使用することにした。

当校夜間部については、校長代理の高橋弥一ほか三人(教員は昼間部と兼務)をもって、十月一日より開校された。夜間部(修道学校・修道第二中学校)の生徒に対する授業内容は、修道学校の四年生と修道第二中学校の三年生とを合わせて約五〇人を一学級に編入し、午後五時から八時までの三時間を授業としたが、修道第二中学校の一・二年生は、生徒数も少ないため、希望者は昼間部の適当学年に編入した。

学用品や教科書などについての入手対策は全くなかったが、生徒の持合わせの旧教科書を共用し、できるだけ紙や鉛筆を、家庭から調達してくるといった状態で授業が開始された。昭和二十年も末に近づくころから、悪質ながら紙も出はじめ、物資なども出廻って来るし、生徒の日常もほぼ安定してきたので、授業も当初より一段と充実したものとなった。しかし、教科書や参考書などが比較的容易に得られるようになるのは、まだ後のことであった。

なお、学園構内、講堂の前の緑に包まれた修道中学校慰霊碑には、原子爆弾に散った先生・生徒合わせて二〇三人の霊がまつられている。

[第十八項 山陽中学校、山陽商業学校、山陽工業学校、山陽中学校附設広島中学校... 446](#)

(現在・石田学園)山陽高等学校、山陽商業高等学校、山陽工業高等学校

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宝町三五二ノ一番地

校長 石田賢一

教職員 概数九五人

生徒 概数二、〇〇〇人

校舎 木造二階建・五〇教室・延二、一八八坪・鉄筋三三五坪

敷地面積 五、四七一坪

爆心地からの距離 約一・二キロメートル

山陽中学校・山陽商業高校・山陽工業高校・山陽中学校付設広島中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
市内建物疎開作業	雑魚場町	六人	約四一〇人	疎開跡片づけ	
	天満町	一			
東洋製缶株式会社	天満町	一	約一〇〇	缶詰	
桐原容器工場	舟入本町	二	約一二〇	諸容器製作	
三菱重工広島製作所	南観音町	三	約二〇〇	造船船体修理	
呉海軍工廠	呉市広町	三	約二〇〇	砲弾製作	
旭兵器工場	佐伯郡地御前村	一	約一〇〇	兵器製作	
日本製鋼広島製作所	安芸郡船越町	一	約一五〇	兵器製作	
大東兵器株式会社	中広町	二	約九〇	兵器製作	
大竹三菱化成工場	佐伯郡大竹町	二	約七〇	有機硝子製作	
中国塗料株式会社	吉島本町	一	約六〇	酸素発生塗料製作	
中本鉄工所	大洲町	二	約五〇		
宇品造船所	宇品町	二	約五〇	造船修理	
宮本航機工場	皆実町	一	約五〇	信管製作	
合計		二八	約一、六五〇		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

校舎の一部(約一〇〇坪)は、陸軍部隊に貸与されており、常時約五〇人程度の通信技術練習生が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	生徒	その他	
職員および生徒は全員が学徒動員中であった。	六人	五人	(小使い)三人 陸軍部隊五〇	当日、在校していた者は、きわめて少数であり、事務員の中には登校中に被爆した者が数人あった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から南東約一・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に校舎は一瞬にして倒壊し、約一五分後には西側寄りの倒壊建物あたりに、熱線によって自然着火したが、消火の手もなく、火勢は急速に広まっていた。猛火に包まれた倒壊校舎は、約一時間半で完全に灰になったが、奉安庫と予備校校舎の一部は、焼失をかうじてまぬがれた。

(二)人的被害

区別	教職員	生徒	備考
即死者	四(一一)人	四(四七五)人	()内は動員先での被爆者数行方不明者
重軽傷者	二(五〇)	一五(二〇〇)	
行方不明者	〇	〇	
計	六(六一)	一九(六七五)	

当時、二年生以上の生徒は、全員が学徒動員隊として、各工場などに分散配置されて勤労していたが、一年生も昭和二十年七月からは授業を離れ、作業命令により、市内建物疎開作業に動員されていたから、学校は文字通り空家に等しく、被爆当日は、校長以下残留組の教員および生徒数人と小使三人が在校していたにすぎなかった。これら在校者の大半は、校舎倒壊で即死したが、生徒の中には、下敷きになりながら奇跡的に軽傷程度の負傷で助かり、宇品方面に避難した者もあった。

二年生以上の工場勤務生徒は、各工場が爆心地から比較的遠距離にあった関係で、重傷者や死亡者などは極めて少数であった。しかし、雑魚場町方面や天神町方面の家屋疎開作業に出動していた一年生は、大惨害をこうむった。

一年生の出勤場所は爆心地に近く、炸裂の瞬間、あっというまに即死した者もあり、また中には、作業前のいっときを上衣を脱いでラジオ体操中の者もあって、凄惨をきわめた。生徒のほとんどが着衣は焼け、顔・手・足などの皮膚が火傷で剥げて、たれさがったままの姿で、逃げ迷い、さまよい歩いた末に、両親の名を呼びながら息絶えた者、やっと家に辿りつくや息を引取った者、水を飲もうとして川に落ちて死んだ者もあって、その悲惨な状態は言語に絶した。

八、被爆後の混乱

家屋疎開作業に出動した一年生の大半が全滅し、その他の生存生徒も、市内在住者のほとんどが、家庭や家族を失って四散したため、連絡の取りようもなかった。また、校舎も全焼してしまい、いちじは手のほどこしようもない状態であったが、生存教職員もようやく自失の状態から立ち上がり、まず、生徒の安否の調査から始めた。被爆後、延焼をまぬがれ、僅かに形をとどめた予備校校舎が、その後の連絡場所に使用されて、誰が立てたか、山陽中学校本部の旗がひるがえり、壁面は生徒をさがしたり、お互いの安否を知らせる貼紙で埋った。

幸い、学籍簿は奉安庫に保存されていたため焼失をまぬがれ、教職員はこの学籍簿をたよりに、調査の手を四方にのばしていった。九月十二日、「東練兵場の東照宮前に集合」の貼紙を市内各所に掲示したところ、当日集った教職員は六人、生徒数は約八人くらいであった。共に健在を祝し、一週間に一回の集合を申合わせて解散した。第二回目の集合を九月二十日にし、集合の便宜を考えて、集合場所を二か所に分けた。この日、東照宮には約一五〇人くらい、横川駅前には約五〇人くらいが集ってきた。このようにして生徒の動向を知ると共に、停止状態にある学校機能の回復が望まれるところとなり、生存教職員は、学校復興のための協議をたびたび重ね、当局との交渉も始められた。さしあたり、佐伯郡廿日市町の山陽女学校の校舎一部使用が認められたため、十月初旬ごろから、授業再開の見通しができた。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、学校再建に乗り出し、対外的交渉も行なわれていたが、暫定的な措置として、佐伯郡廿日市町の山陽女学校校舎の一部を借用する話し合いがつき、十月初旬ごろから第二学期の授業を開始することができた。石田賢一校長、ならびに谷元坂一教頭の被爆死によって、村上教諭を校長代理に選任し、教職員一二人、生徒数約二〇〇人程度で授業が再開された。借用教室が四教室のため、授業は隔日に午前中のみとした。また、教科書などについては、旧教科書の持ちあわせを共同使用することとし、文部省および進駐軍関係からの指示勧告によって、旧教科書の訂正したものを使った。入手困難のものはプリント印刷のものを応急的に使用した。

その後、生徒も次第に増加して、学校再建の声も日一日と高まり、復旧のための交渉がたびたび重ねられた結果、昭和二十一年四月に、市内向宇品の旧陸軍高射砲隊兵舎の借用がきまったので、昭和二十八年末までに、校舎復興事業計画を次のとおり計画した。

(一)普通教室九〇〇坪・講堂一六五坪・特別教室一四一坪・その他、宿直・物置・浴室四〇坪などの建造を予定。

(二)その建造に必要な資金は、借入金と父兄および卒業生の寄付金によってまかなうこととした。

このように、山陽女学校での不自由な隔日授業(約二か年間)も昭和二十二年の秋で終り、向宇品の旧兵舎に移転してきたが、まだバラック建ての小屋が山上に点在するのみであり、また、交通上からも、これからの学校運営に多大の支障が起り得ることが予想された。このような状態から、旧校地への新校舎建設が、全校あげて熱望する声となり、復興事業計画の練り直しをした。石田専務は学校再建の資金調達に奔走すると共に、他の職員もまた、調達に協力することによって、復興事業計画も着々と進行し、旧校地(市内宝町)に、昭和二十三年三月初旬、復興第一期工事として延三二〇余坪の校舎が落成し、三月十二日に移転することができた。その後の復興事業工事は次の通り遂行された。

第二期工事 昭和二十三年十一月十日に竣工、木造二階建校舎延二三三坪の建築

第三期工事 昭和二十五年十月十日に竣工、木造二階建モルタル塗装校舎延三五一坪の建築

第四期工事 昭和二十六年十月二十日に竣工、木造平屋建(一部二階)モルタル塗装校舎と総合研究室一六五坪の建築

第五期工事 昭和二十七年十一月一日に竣工、木造二階建モルタル塗装の特別室延一四一坪の建築

第六期工事 昭和二十八年八月十日に竣工、木造平屋建宿直および小使室三六坪の建築

このようにして、校舎復興事業も順調かつ迅速に運び、今日の石田学園を作り上げたのであるが、その裏面には教職員・生徒および父兄などの涙ぐましい努力があった。

第十九項 崇徳中学校 ... 454

(現在・崇徳高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市楠木町四丁目三八番地

校長 竹野恵真

教職員 三七人

生徒 一、一七三人

校舎 木造・二六教室・延一、六五九坪鉄筋・五教室・延四六七坪

敷地面積 五、五二三坪

爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

崇徳中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	八丁堀	七人	五一四人	疎開跡片づけ	
水田金剛砥石工場	楠木町三丁目	—	四〇		
三菱重工業機械製作所から小網町建物疎開	安佐郡祇園町		一九七	疎開跡片づけ	
三菱重工業機械製作所	江波町		二一一	製缶工場の熔接	
兵器支廠	出汐町	—	六〇		
油谷重工業株式会社より水主町に建物疎開	安佐郡祇園町	—	六二	疎開跡片づけ	
海軍工廠	呉市	—	四五		
学校防衛隊	本校楠木町四丁目	三	四四		
合計		一八	一、一七三		

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

当時、鉄道第二大隊(第一三三五二部隊)が校舎の一部(第一校舎・道場・売店・小使室・宿直室・本館など)を使用しており、常時約二〇〇人くらい駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業なし、全員動員で出勤中	三人	四四人	鉄道第二大隊 約二〇〇人	当日・学校防衛隊として教職員三人・生徒四四人が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から北北東約二・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に木造校舎は一瞬にして押しつぶされてしまった。その後、約一時間くらい後に、南側の倒壊寄宿舍付近に火災が発生し、次第に倒壊校舎に延焼していった。本館の焼け始めたのは、炸裂後、約一時間半くらいあとであったが、鉄筋コンクリート造りの講堂

は、外郭のみを残して焼けた。夕刻近い五時ごろには、ほとんどの校舎は焼け落ちていたが、講堂内部には未だ所々に悪魔のような赤い火が出ていた。

原子爆弾炸裂後、駐屯中の鉄道部隊とともに、被害状況につき、軍部へ連絡したところ、校舎延焼は防止せよ、との返事であったが、学校の周囲は猛火で近づくことができぬ状況にあり、また駐屯兵や防衛隊・本校の職員および生徒の大半が火傷したり、負傷している者ばかりで、防火活動も十分なことができない状態にあった。そのため、校舎延焼に対しては手の施す術もなく、ただ元気な者が重要書類などの搬出を手伝い、負傷者には応急処置を施すことが、やっとできたというありさまであった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(一〇)人	(五一〇)人	()内は、動員先での被爆者数
重軽傷者	(三)	四四(四六)	
行方不明者	〇	〇	
計	(一三)	四四(五五六)	

炸裂後まもなく、空には入道雲が一面に出て、雲は雨を呼び、煤を含んだ雨がパラパラと降りはじめた。

本校関係で最も悲惨をきわめたのは、一・二年の生徒たちであって、当日市内八丁堀・白島線方面(爆心地から東方約八〇〇メートル)に出動し、家屋疎開作業に従事中であった。生徒五一四人と教師七人は、全員が重傷を負い、即死する者もいたが、大部分の者は火傷を負い、衣服は焼け、ボロボロに破れたまま、白島方面から常葉橋を経て、東練兵場方面へ、また、一部は北上して、牛田町・戸坂方面へと逃れていった模様である。

しばらく生存していた生徒引率の一教師の話によると、炸裂と同時に「わしについて来い。」と言いながら、無我夢中で走り続けたが、二葉山麓に辿りついて気づいた時には、周囲にわずか数人の生徒がいたに過ぎなかったという。またこの方面の生徒捜索にあたった父兄などの体験によると、国道至る所に、生徒がたおれて、すでに絶命した者、あるいは息たえだえに水を求め、救いを呼んでいたが、面相などによる識別もほとんど不可能な生徒ばかりであった。かろうじて着衣の破片や革バンドなどによる判別で、ごく少数の者が父兄などの手によって収容されたに過ぎなかった。

なお、当時この方面に出動していて、生存が確認されている者は二、三人に過ぎず、引率教師も生存者が無くて、今もって当時の実状を把握することは困難である。

八、被爆後の混乱

校舎焼跡の一隅に、天幕舎を作り、罹災者捜索本部を置いて各所からの情報収集にあたった。

竹野恵真校長は、当日約四〇人の生徒とともに、当校の南方約七〇〇メートル離れた水田砥石工場に出動中であった。炸裂と同時に倒壊物の下敷きとなって頭部に負傷したのもかえりみず、ただちに帰校して、集まった少数の教職員とともにテントを張って対策本部とし、各方面の情報収集にのりだした。また、被爆後、かけつけた生徒父兄の応待に当たるとともに、学校の北方約三〇〇メートル離れた大芝堤に、救護本部を置いて、避難して来る生徒および一般罹災者の救護にも全力をつくした。

被爆前は、一、 人余の生徒を収容し、施設の完備を誇っていた学校であるが、校舎附属建物・樹木など一切を、一瞬にして焼失し、今は見る影もなく、ただ鉄筋コンクリート造りの講堂が、その外郭をとどめているのみであった。人的被害も、教員一〇人余が被爆死し、一、二年生のほとんどの生徒が全滅するという大惨事を受けたほか、生き残っている教員や生徒も火傷者や外傷者が多く、登校に堪えられない者がたくさんいた。生徒の中には、家族とともに通学不可能な地域に疎開した者もあったが、それより被爆後の社会混乱と、交通機関などの不調から、十分な連絡ができなかったことも大きな理由で、学校機能は完全に停止した。しかし、幸いにして重要校務書類は罹災をまぬがれ、また、安佐郡祇園町油谷工業株式会社の好意により、会社の一室が借用できたので、ここを仮事務所として徐々にではあるが、再起の方策を立てていった。生徒は、当分の間は自宅療養ということにして、学校としては極力諸情報の収集と連絡に務めた。

九、学校再開の状況

学校の再開

学校再開については、まず関係者が仮校舎の選定と交渉に東奔西走して、市内猫屋町の光道学校(戦時中は広島憲兵分隊となっていたものであるが被爆により鉄筋コンクリート二階建ての外郭のみを残す)借用の交渉が成立したので、九月下旬、一部教職員と生徒を召集して、これを整備した。その結果、十月一日から、整備のできた六教室に、教職

員一〇人と生徒約三〇五人程度で、第二学期として開校された。しかし、授業再開といっても当初は机もなく、白墨さえ手に入らぬ状態であったから、郡部の生徒たちが文具店を探し歩いて求めてきた数本のチョークをたよりに、壁や板片を利用して学習を進めるという有様であった。このような設備不足の状態、日々が過ぎてゆき、なやみもだんだんと大きくなってきたが、学校当局は、校舎復旧の基本方針を、どこまでも原地復旧と定めていたから、一時的ななやみを全員でがまんするものとして、種々、対外的(進駐軍関係および県当局)な折衝を進めた。対外交渉の結果、旧陸軍工兵隊の牛田作業場に集積されていた木材の一部を譲渡された。この資材の運搬と原地焼跡の整理作業は、登校生徒が日々交替で、これにあたった。このような作業が生徒の日課ともなったが、全焼した校舎の中で、ただ一つ外郭を残していた講堂を利用しての応急的建築がはじまり、昭和二十一年十一月二十日に完成した。できあがった新校舎は、講堂の内部に木造二階建ての一二教室で、生徒の喜びは非常に大きなものであった。さっそく同年の十一月二十八日に光道学校を引払って、新校舎に入った。原地復帰しての再出発は、被爆後一年四か月ぶりに実現し、生徒数も約六〇〇人程度になっていたから、これを一二学級に編成した。以後、生徒数もだんだんと増加して来たので、木造校舎を、逐次増築して復旧を進めたのである。

第二十項 広陵中学校...462

(現在・広陵高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宇品町二一七の一番地
 校長 大阪竹治
 教職員 一二人
 生徒 概数九六四人
 校舎 木造二階建・一九教室・延九一〇坪
 敷地面積 五、八〇二坪
 爆心地からの距離 約三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広陵中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	雑魚場町より鶴見橋まで	四人	四〇〇人	疎開跡片づけ	
広島陸軍糧秣支廠	宇品町	二	一五〇	缶詰・穀類の手入れ	
広島鉄道保線区	大須賀町	一	五〇	鉄道保線工事	
広島鉄道第一機関区	西蟹屋町	一	一〇七	機関車関係雑事	
呉海軍工廠	呉市	二	九〇	製銅雑事	
	吉島町	二	一二〇	航空機に関する雑事	
合 計		一二	九一七		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当時、学校には、常時、陸軍暁部隊が駐屯し、講堂(一六七坪)と三教室(六〇坪)を使用していたが、兵隊の交替もはげしくて正確な数はつかめない。しかし、常に平均一〇〇人程度が駐屯していた模様である。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	

なし		暁部隊兵士 一〇〇人	当時、生徒は工場関係や建物疎開作業に出動しており、学校での授業はなくて、各々、生徒は出動先に集合していた。
----	--	---------------	---

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊(一部全壊)

当校は爆心地から南南東約三キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂と同時に、爆風と校舎のむきによって、一部校舎は倒壊したが、大部分の校舎は半壊程度の被害であった。

すなわち、講堂と北校舎(八教室)は炸裂の一瞬に倒壊したが、本館(校長室・事務室・九教室)は窓ガラスや屋根瓦などが散乱し、校舎自体も傾斜したので使用不能となった。なお、倒壊校舎からも、また、周囲の民家からも火災の発生がなくて、傾斜校舎ながらも残った。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(二)人	(三八)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	(六)	(四五〇)	
行方不明者			
計	(八)	(四八八)	

生徒動員によって出動中の生徒たちは、炸裂後は、各自がその出動先でちりぢりに避難した模様である。市内鶴見橋付近(爆心地の南東約一・ハメートル)の家屋疎開作業に出動した一、二年生の生徒の一部が、被爆して帰校してきたが、帰校できた生徒のほとんどは、軽傷の者ばかりであり、一同を陸軍共済病院(現在・県病院)で応急手当をさせた。しかし、避難途上で死亡した生徒が二二人もあり、また引率職員一人が死亡してしる。

その他、出動先での死亡者数は陸軍糧秣支廠七人、吉島航空機械工場三人、広島第一機関区三人、広島鉄道保線区三人である。

八、被爆後の混乱

校舎の被害は、雨天体操場・講堂・南校舎二階建及び北校舎八教室が倒壊し、また、本館は傾斜して使用不能となるなど、校舎の大部分に大きな被害を受けたが、倉庫・宿直室・小使室、それに三教室が使用できる状態で残っていた。人的被害については、生徒に大きな被害を受けたが、教職員関係の犠牲者は二人にすぎなかったので、被爆後一週間目に、校長は緊急職員会議を宿直室で開き、緊急措置などについて協議した。その結果、生徒の消息を調査するため、一度生徒を集めることが必要となった。九月一日を全生徒召集日と定め、その伝達などについては、被爆後一〇日ぐらいしてから、学校の安否を気づかって登校する生徒たちによって、伝達させることにした。すなわち、登校して来る生徒たちを通じて、動員先の状況や級友関係の消息について、できるだけ正確な資料を得ることにつとめ、死亡のうわさのある者は、教職員が自宅を訪問して、これを確認することにつとめたが、当分の間は、死亡のうわさのある者の、三分の一ぐらいが調査先さえ不明であった。

なお、九月一日の登校指定日に集った生徒は、約二〇〇人前後であった。

また、負傷して動員先から帰校した負傷生徒を、前記のとおり、一時は、陸軍共済病院において応急手当を受けさせたが、その後、学校の使用可能な教室を、救護所として収容し、尋ねて来るそれぞれの家族に引渡した。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月一日を登校日としたが、授業のできる教室などもないため、被爆倒壊した校舎の跡片付けや、使用可能な教室などの整備作業に、約一か月間をついやした。その結果、第二学期として、ようやく十月の中ごろから教室で授業がおこなえる状態となったが、一教室に約一〇〇人というスシ詰授業であった。昭和二十年の末まではこの状態で過ぎてゆき、昭和二十一年一月早々になって、ようやく本館の整備に取りかかった。工事は約一か月間で、普通教室一〇と校長室および職員室の整備を完了したが、窓ガラスなどはなく、ハترون紙をはって寒風をしのぐ有様であった。当時の出席者は教職員一三人、生徒約三八九人(四年生一〇七人・三年生三九人・二年生九三人・一年生一五〇人)程度であったが、生徒のほとんどは教科書その他を持っておらず、授業もプリントを用いたり、図書室の図書(被爆後も完全に残った)を利用したりして、辛うじて各学年別の授業を続けた。しかし、スシ詰授業と教材不足などで、授業実態は大へん困難なものであった。昭和二十一年の四月になって、普通教室四教室の新築にとりかかり、五月の末には完成した。このころから社会状況なども一段落してきたし、新校舎の完成もあり、授業内容もはじめて充実したものとなった。

(現在・広島県松本商業高等学校 広島県松本商業中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市尾長町二五五番地の一
 校長 松本豊次
 教職員 二五人
 生徒概数 五八 人
 校舎 木造一五教室・延三〇〇坪
 敷地面積 三、八五〇坪
 爆心地からの距離 約二・八キロメートル

二、学生疎開状況

なし

松本工業学校 学校敷地・学校配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
藤川製作所から建物疎開作業出動	大洲町	四人	七〇	兵器部分品の作成と家屋疎開作業	家屋疎開の現場としては 一、皆実町電信隊付近。 二、水主町県庁付近
広島駅電気工事区	大須賀町	一	二〇	駅構内の作業	
陸軍(暁部隊)	宇品町金輪島	一	五〇	兵器部分品の製作	
佐伯鋼業株式会社	舟入幸町	四	一一五	兵器部分品の製作	
三菱造船株式会社	江波町	四	一一五	兵器部分品の製作	
三菱重工業株式会社	南観音町	三	一〇〇	兵器部分品の製作	
東洋製罐株式会社	天満町	四	一〇〇	兵器部分品の製作	
合 計		二一	五七〇		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部と校庭の一部が陸軍部隊(中部一三三七七部隊 森川隊)に貸与されていたため、常時、一〇人程度の兵隊が駐屯しており、また、校庭の一部には、軍需物資の建築用木材が置かれていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
授業予定なし(職員の間接会議を実施する)	数人	なし	兵隊 約一〇人	連絡会議...各々動員出動先から職員一人が本校に登校し、行事の打合せをする

当時、生徒は学徒動員で、工場および家屋疎開作業に出動しており、学校への登校はなかったが、引率教職員一人は、出動先から登校し、出動先の報告と、日々の行事の打合せをするため、連絡会議をもうけていた。

なお、藤川製鋼所(大洲町)に出動中の一年生約七〇人は、工場作業の関係で、当日は皆実町方面(電信隊付近)と水主町方面(県庁付近)の二手に別れて、家屋疎開作業に出動した。原子爆弾炸裂時には、ちょうど集合して朝会を開催中であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...半壊、後に約九割程度が焼失

当校は爆心地から東北東約二・八キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂と同時に、多大の被害を受けた。炸裂直後、当校の西南にあたる陸軍東練兵場方面に火災が発生し、その猛火は一瞬にして周囲を焼きつくしていった。消火する者もないまま、その後も火勢はますます強くなるばかりで、ついに当校へ延焼した。校舎の焼けはじめたのは、午後四時ごろであったが、それから六時ごろまでの約二時間くらいの中に、校舎の九割程度にあたる講堂・教室(一三教室)、職員室及び事務室などの大半が焼失した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(一)人	(五四)人	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
重軽傷者	(四)	(一〇〇)	
行方不明者	不明	不明	
計	(五) 行方不明含まず。	(一五四) 行方不明含まず。	

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂時には、校内に生徒はいなく、全員が動員命令によって出勤中であった。動員中の生徒の中にも、特に当日、県庁付近の家屋疎開作業に出勤した一年生が甚大な被害を受けた。他の爆心地から距離的に遠く、比較的被害が少なかった出勤先の工場では、一応生徒を帰宅させて、その後は学校からの指示を待っていること(主に郡部からの通学生)とした。市内の生徒で自宅を失ったり、家族が生死不明な者は、再び出勤先の工場に帰って来ることを申合わせて、帰宅させたが、再び出勤先に帰ってきた者がたくさんいた。そこで、全員を陸軍暁部隊に依頼して、当分の間、日々の生活保護をお願いした。学校としては、その期間に極力生徒保護者の安否を調査して、生徒の引渡しに努めたが、これらの生徒全員が、保護者のもとに帰るまでには約一週間を要した。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎の九割程度が焼失したが、幸い五教室(工業科作業室を含む)は、焼失をまぬがれ、整備すれば使用できる状態にあった。学校としては、被爆生徒の捜索が一段落したころから授業再開のため、五教室の整備にとりかかったが、交通の混乱や戦後の社会不安などで、生徒への伝達が思うようにはゆかなかった。しかし、残存五教室の使用がどうか可能となったので、十月から第二学期として授業を開始したが、教職員八人で生徒数約一〇〇人ぐらいであった。その後、社会混乱が次第に回復するにつれ、登校人員も増加し、授業内容の充実と、校舎機能の完備が、強く望まれるようになってくると共に、校舎の新築や増築をおこなっていった。

[第二十二項 安田高等女学校... 474](#)

(現在・安田学園)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市西白島町一四一番地
 校長 安田リョウ
 教職員 二十八人
 生徒 概数一、〇二十八人
 校舎 木造二階建・二四教室・延五二九・二九坪
 寄宿舎 所在地 市内白島東中町
 木造 約二〇室・延約三〇〇坪
 敷地面積 一、八五・八五坪
 爆心地からの距離 約一・四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

安田高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	中島町	五人	二五六人	疎開跡片づけ	県庁北側
誉航空工場	楠木町三丁目	三	一六五	航空部品加工	
大橋製靴工場	三篠本町三丁目	二	一六四	軍靴製造	
興亜ミシン工場	横川町	三	九五	ミシン針製作	
広島軽金属(高密度機械工場)	三篠本町三丁目	二	一二九	飛行機部品製作	
合計		一五	八〇九		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

校舎一棟は通信隊兵舎として使用され、常時、陸軍通信隊(部隊名および兵数不明)が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

在校者数

行事予定	在校者数			備考
	教職員	生徒	その他	
平属授業(残留生徒の授業)	九人	約一五〇人	駐屯兵数不明	当時、大部分の生徒は学徒動員で工場及び市内疎開作業に出動中であつたため、学校には一部の先生と生徒が残留しており、残留組は教室で朝礼中に被爆した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

校舎は爆心地から、北北東約一・四キロメートルの所にあつた。爆発と同時に、校舎も寄宿舎も一瞬にして倒壊した。そのうち、あちこちから火の手が上がり、遂には、あたり一面大火災となり、あとかたもなく焼失した。

(二)人的被害

区別	教職員	生徒	備考
即死者	六(七)人	三(三〇八)人	()内は、動員先での被爆者数
重軽傷者	五(一)	一九(三七)	
行方不明者			
計	一一(八)	二二(六七九)	

生徒の大半は、学徒動員でそれぞれの作業場に出動中であつたが、たまたま、当日非番になつていた一部生徒約一五〇人が、学校において授業を行なうことになつていて、登校した。

原子爆弾が投下された時刻には、役付職員は校長室で会議中であり、登校生徒は教室で朝礼をおこなつていた。だから逃げ出す余裕もなく、職員も生徒も全員校舎とともに倒され、しかもその下敷きになつた。下敷きになつて圧死した者、身動きできず、救いを求めて泣き叫んでいる者、声をあげて脱出する者、降つてわいたようなこの大惨事に、たちまちにして学校は修羅場と化した。

幸いにして、下敷きから助け出された者や、自力ではい出した者は、教師も生徒も、何処に避難するという目当てもなく、たださまよひながら離散していった。これらの者は、避難者の流れにしたがつて、その大部分が北部戸坂村方面、祇園町方面に避難していった。不幸にも、下敷きになつて圧死した者と、脱出できなかった者は、その後襲いかかつた火災に呑まれた。また、動員先で、わけても中島町及び天神町方面の家屋疎開作業に出動していた全生徒のうち、白島の学校跡へ帰つて来た者は一人もなかつた。

(生徒日誌の前文から)

当日朝八時十五分ごろ、北方より B29 とされる飛行機の爆音を聞くと、間もなく異様な、しかも天地を震撼するような怪音と橙紫色の閃光の波打つようなゆらめきが空にも地にもして、一瞬覆いかぶさつてきたと思う瞬間、校庭で、空を仰いで機影を捜していた私たちは、何メートルかあちこちに投げ飛ばされて失神した。何分かの後、ふと気がついてみると、校舎はあとかたもなく押しつぶされ、瓦やガラスは四方に飛散し、樹木は裂けて倒れ、友だちは血だるまとなつて倒れて泣き叫び、はるか南の空には、入道雲の黄黒色の汚れたような毒々しい煙の塊が、数一〇〇メートルに立ち昇っているのを見て、あの閃光と何か関係があるのだろうかと思つた。そのうち、四方八方から火の手

が上がり、熱風に耐えられなく、苦悶の叫び声はますます激しく、見るもの聞くもの全て恐怖のどん底に陥り、まさに地獄絵図の展開であった。

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂直後の呆然自失の瞬間は去り、ようやく気を取直した生存職員は、事態の重大さを悟り、倒壊物の下で救いを求めている者の救助に全力を上げたが、火のまわりも早く、少数の力ではどうすることもできない現状であった。また、生存職員は重軽傷の生徒のために、避難場所を捜し求め、倒壊したがしばらくの間は火のまわらなかつた寄宿舎の壕内に、重傷者を収容して、そこを仮救護所とし、応急措置に当ることとした。しかし、医薬品といえば、衛生袋のきず薬だけで、とても全負傷者の治療を施すわけにはゆかず、大方は創口をふいてやるだけであった。そのうち、ここも間もなく火炎に包まれる状態となり、再び逃げなければならなかつた。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎は全壊全焼した上に、教職員および生徒の全般に、多大の犠牲者を出し、学校機能は完全に停止した。しかし、奇蹟的に無傷または軽傷程度の負傷で助かった六人の教職員を中心に、八月九日、戦災対策の仮事務所を寄宿舎の壕内に設けて、各方面との連絡を開始した。その後、八月二十日には、入院中の校長を中心とする学校再建問題を宇品町川瀬病院内で開き、仮事務所は校舎焼跡に置くこと、貼紙などによる伝達方法で、八月二十五日を生徒召集日にするなどを決定した。しかし、交通や社会不安の関係で伝達も不十分のため、八月二十五日に集合した者は、教職員五人、生徒八九人であった。なお、その場において、九月一日をもって各工場に出動中の動員生徒は一たん解散とし、生徒は家庭休業期間として、九月三日から二十四日までを休校する旨通告した。

その休校のあいだにも、学校としては授業再開の場所を求めて、運動を展開すると共に、復旧対策についても努力した。その結果、安芸郡船越国民学校講堂と附属建物三教室の借用がきまり、九月十三日、開校のための会議が開かれ、九月十七日に仮事務所を安芸郡船越国民学校に移し、二十五日から第二学期の授業を開始する旨、通知や貼紙などによる告示をした。当日出席した教職員は一〇人で生徒数は約一六五人程度であったが、ここによく、戦災後の授業が再開されたのである。また、翌日には教職員二人、生徒一六人参加のもと、原爆死没者合同葬儀を挙行し、不幸にして原子爆弾の犠牲となった幾多の生徒の霊にめい福を祈った。

学校の復旧対策については、土地や建物を求めて各方面と交渉を重ねていたが、十二月になって、市内白島中町にあった旧陸軍工兵隊跡の建物を使用する許可を得た。この兵舎は被爆によって木材・瓦などは飛散しており、当校女生徒の手で、できるかぎりの跡片づけ作業をしたが、到底、使用に耐え得る状態の建物ではなく、学校としての使用には不適当なものであった。しかし、この建物を一日も早く本格的工事を施して、使用可能な状態にしようと、関係方面との交渉が再三重ねられた結果、昭和二十一年一月五日より、校舎および寄宿舎などの復旧工事に着手した。また、二月二十一日には、この旧軍事施設を学校として使用する正式認可を得たので、校舎復旧計画も本格的に進められていった。

また、灰燼となった広島市においては、教科書は全然なく、被害を受けなかつた家庭の生徒が持っている教科書を共用して学習したり、そのつど、教師のガリ版印刷物などを使用していた。用紙なども各自が家庭から持ちよつた紙の裏面を利用することにおいて、その場をしのいでいたが、昭和二十一年四月ごろから国語・英語・物理などに関する教材は、粗簿ではあるが入手できるようになってきた。しかし、その他の科目については依然としてガリ版教科書による授業が続いた。

なお、昭和二十三年六月、現学園構内に自然石の学園慰霊碑が建立されて、原子爆弾に散つた数多い霊を祀った。

[第二十三項 進徳高等女学校... 481](#)

(現在・進徳女子高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南竹屋町

校長 永井龍淵

教職員 約五〇人

生徒 概数一、六五〇人

校舎 木造二階建・延一、一五〇坪

敷地面積 約四、七〇〇坪

爆心地からの距離 約一・四キロメートル

被爆後、現在の地、広島市比治山本町(現在・皆実町一丁目)の元暁部隊跡に再建した。

二、学生疎開状況

なし

進徳高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員*

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	鶴見町	一〇人	二年生 三三九人	疎開跡片づけ	
電話局	下中町	二	三年生 一七〇		
貯金局	千田町	三	三年生 一七五		
東洋製缶株式会社	天満町	三	五年生 八		
中国塗料株式会社	吉島本町	一	五年生 二〇 四年生 六〇		
日本製鋼所	安芸郡海田市町	八	四年生 二〇〇 五年生 一一七		
小川工業株式会社	出汐町	一	四年生 六〇		
市役所(軍人援護局)	雑魚場町	一	五年生 二〇 四年生 六三		竹屋町の当校で作業をする
合計		二九	一、三〇四		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	生徒	その他	
(イ)三年生以上それぞれ職場へ出勤 (ロ)二年生、今日から出勤	一一人	二年生 三三九人 四年生 六三 五年生 二〇		一年生全員(三六〇人)は、当日家庭待機の日で家庭にいた。

三年生以上の生徒は、女子動員学徒(報国隊)として各事業所(工場・役所など)の仕事に従事していたから、被爆当日も、各人が出勤先において指示を受けることになっていた。ただし、二年生全員(約三三九人)は、一度登校してから指示を受け、鶴見町付近の建物疎開現場に出勤することになっていた。そのため二年生全員は学校に登校しており、また、市役所関係(軍人援護局)の仕事をしていた五年生と四年生(約八三人)の生徒も、市の分室としてその仕事を本校内でやっていた関係から、当日、登校していたものと思われる。

なお、一年生については、被爆当日が家庭待機日となっていたため、幸い家庭にあったが、市内在住の生徒は、家庭において被爆した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から南々東約一・四キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂により、全校舎が壊滅し、約一時間半後には、隣接の民家と同様に大火災となり焼失した。

(二)人的被害

区別	教職員	生徒	備考
即死者	(一〇)人	(約三九八)人	()は動員先での被爆者数

重軽傷者 行方不明者	(八) 不明	(三六二) 不明	
計	(一八) ただし、行方不明者含まず	(七六〇) ただし、行方不明者含まず	

六日の朝、登校中であった二年生は、疎開場所や、作業に関する割当て、注意事項などを聞いてから、作業場へ出発する予定であった。原子爆弾炸裂時には、ちょうど生徒たちが校庭に集合しつつあった時で、強烈な熱線と爆風によって、全身を火傷した者、吹きとばされた者、倒壊校舎の下敷きとなって死んだ者、あるいは、救いを求める声などで、一瞬、阿鼻叫喚の地獄と化した。

当日の責任教官は一〇人であったが、八人が即死し、二人は重傷のまま動けず、生徒たちを救出したり、避難の指示を与えたりすることなどは、まったくできなかった。

この絶望的な惨劇の中から、自力により、数人の者が、辛うじて脱出できたのみである。

八、被爆後の混乱

校舎は二つの防火壁だけを残して跡形もなくなり、登校中の職員及び生徒はほとんど全滅という状態で、その上、市中は大混乱となり、職員の家庭も生徒の家庭も、甚大な被害を受けた。

学校は、生徒に連絡する手段も、機能も完全に失い、ただ瓦礫の廃坑を残すのみとなった。

被爆当日、学校におらず生き残った教職員は、廃墟の市中を探し歩いて、連日、熱心に捜索の手を抜げていき、ようやく即死者・行方不明者、および重軽傷者などの概数がかつめられるようになった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、学校の機能は完全に停止状態であったが、生徒の安否に対する調査と校舎復旧の対策について、学校長を中心に努力が続けられていった。

昭和二十年十一月十一日に、広島県佐伯郡地御前国民学校の校舎一部を借用する交渉がまとまり、授業が開始できるはこびとなった。十一月十二日、はじめて生徒を集め、第二学期としての授業が開かれたが、一同の喜びは非常に大きなものがあつた、この学校再開の知らせば、市内各所における掲示その他生徒から生徒への伝達などによっておこなわれたが、当日の出席生徒数は八二三人であり、その後も伝え聞いて集る者が漸く増加していった。翌二十一年三月二十八日、戦後第一回目の卒業式が施行され、困苦に充ちた青春の日々を思い出に、生徒たちは巣立っていった。引きつづき、四月二十七日に入学式がおこなわれ、新入生二三〇人が入学した。

同年五月十日、広島市比治山本町にあった旧陸軍暁部隊用地と兵舎の転用が許可されるにいたり、これを修築して、ここを本拠に学校復興にのり出したのである。その後、学制改革もあって、道徳高等女学校は、進徳女子中学校と進徳女子高等学校となり、校舎も逐次増築せられ、施設・設備も次第に整い今日に至っている。

校庭南隅の進徳高女慰霊碑には、原子爆弾に散華した先生・生徒の霊をまつり、香華が絶えない。

[第二十四項 広島女学院高等学校... 488](#)

(現在・広島女学院高等学校、広島女学院中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市上流川町三〇番地

校長 松本卓夫

教職員 三三人

生徒 概数八二六人

校舎 木造二階建・二九教室・延一、七七四坪

敷地面積 四、二一〇坪

爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	五人	二八人	兵器の部品製作と事務	
第十一航空廠	呉市広町	—	五〇	航空機部分品製作	
第二總軍司令部	二葉の里	—	四〇	暗号翻訳	
広島鉄道局審査部 用品庫 印刷所	上流川町 西蟹屋町 松原町	—	七二	事務	
建物疎開作業	雑魚場町	—二	三五〇	疎開跡片づけ	
師団司令部	基町		五	事務	
財務局・税務署	八丁堀	—	二九	事務	
合 計		二一	八二六		

四、指定避難先と経路

当校の北側約一〇〇メートル離れた場所に、泉邸があり、これを第一の避難所としていた。

第二の避難場所としては、当校から北の方向へ、市内電車の白島線づたいに上って、常葉橋を渡り、牛田町に通じている饒津(にぎつ)神社裏から、牛田町のふたまた土手に沿って東へ進み、牛田町東区の間にある広島女学院修練道場および農業作業場が指定されていた。

五、校舎の使用状況

校舎の西側一部(木造二階建延三二〇坪)を、広島鉄道局審査課に貸与していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
生徒は全員、学徒動員により出勤中	三人	数人 その他、広島鉄道局審査かに出動中の生徒約四〇人が貸与された校舎で事務をしていた。	鉄道局関係若干人	当日、学校では授業も特別行事もなく、校長以下数人の教員が登校し、事務の連絡整理と学校警備に当たっていた。当日、他へ出勤しなかった数人の生徒が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から東北東約一・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、全校舎は一瞬にして押しつぶされた。その後、瞬時にして校地内にあった幼稚園と、寄宿舎の倒壊個所に火災が発生し、急速に広がった。その猛火は、午前中で全校舎を焼きつくした。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	二(一六)人	三(二八一)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	一(六)	一(四三)	
行方不明者	〇	〇	
計	三(二二)	四(三二四)	

六日の朝は、数人の教員と生徒が残留するのみで、その他の教員および生徒全員は、動員出勤中であつた。ただ、鉄道局審査課(学校西側一部校舎を貸与していた)に出動中の生徒約四〇人が登校していた。原子爆弾の炸裂と同時に、登校者全員は、押し潰された校舎の下敷きとなつた。瞬時にして即死した者、あるいは自力で脱出した者もあつたが、ほとんどの者は、重軽傷のままの姿で身動きもできず、助けを求める叫び声などが交錯し、校内は一瞬、大混乱におちいった。軽傷程度で生き残った職員や鉄道局員たちが、必死の救出作業を続けたが、火のまわりが早く、約半数は火災の中に没した。救助された残りの約二〇人は、職員の誘導で泉邸に避難していったが、一部生徒の中には、自宅めざして避難していった者もいた。その後、泉邸も猛火につつまれはじめたので、避難中の生徒たちは、さらに泉邸の裏側から、京橋川を渡り、学院本部の避難場所に指定されていた牛田町東区の農業作業場へと避難した者が多かつた。教員の中には牛田農業作業場に近い元吉宅(元学校職員)で手当てを受けた者もあつた。

当日、当直教員三人のうち、二人は倒壊物の下敷きとなって即死した。炸裂時、窓際で誰かと話し中の田中教諭は、

一声の叫びをあげただけで、松本院長が何度も呼びかけたがすでに応答がなかった。また、生徒数人は、教室や講堂にいて、そのうち三人が即死した。二階図書室にいた生徒は、炸裂の一瞬、吹き飛ばされたものか、気づいた時には道路に立っていたという。しかし、この生徒も数日後には死亡した。そのほか助かった一人は、自宅に帰るつもりか、比治山公園方向に避難していった。

松本院長は、職員室(二階校舎)で執務中に被爆したが、押しつぶされた校舎の下敷きとなりながら、奇跡的に軽傷で脱出し、救助された生徒を泉邸に誘導し、引続き隣接の専門部の生徒の救出にあたった。

なお、当日、家屋疎開作業(市内雑魚場町方面)に出動した生徒たちは、大半の者が死亡したり、重軽傷を負った。その時の大惨状について、二年生村本節子は次のように手記をしたためている。

「広島県立第一中学校(現在国泰寺高等学校)の南庭に持物を置き、現場について作業を始めた一瞬、原子爆弾が炸裂した。何ら遮蔽物のない現場では、教職員および生徒は、まともに熱線を浴びた。一瞬、何が起ったのかわからない。私の眼に映じたものは、猛烈な光と恐ろしい煙、私はそのまま呼吸ができなくなって死ぬのだと思った。同時に非常な大音響と共に、大きな石のようなものが身体の周りに落ちてきた、胸がそれにはさまって呼吸がせつなく、全身がハツざきにされたように疼いた。その時、近くで聞きなれた声で、多くの友だちの死の叫びをきいた。」

八、被爆後の混乱

生徒動員で出動した生徒(三年生以上)および家屋疎開作業に出動した生徒(一・二年生)の中には、多数の被爆犠牲者が出た。また、校舎内で被爆した一部の生徒が牛田農場へ避難したほかは、大半の生徒が、炸裂と同時に死傷し、動ける者は各自ばらばらに逃れていったので、本部(牛田農場)との連絡がつかず、被爆生徒の足取りはまったく不明であった。また、校舎全焼により、記録類が焼失したため、生徒の出動先やその生徒数などについても不明で、生徒に対する措置については何らの施しようがない状態であった。しかし、被爆後、ようやく逃れてきた数人の生徒たちの報告により、出動場所と現地生徒の惨状が、おおよそ判明したので、生き残った教職員によって生徒の捜索を開始した。捜索は、現場方面を中心にして、できるかぎり広く、また、各地の収容所にも足を運んで、生徒の行方を捜し求めた。市内、及びその近郊の各収容所をたずねた結果を本校焼跡の門前に、探索する父兄のために掲示し、さらに、本部や父兄とも広く連絡を保ちながら、つとめて行方不明生徒の安否について捜索が続けられた。

生き残りの生徒については、毎週一回の定時登校を指示していたが、九月からは、登校を週二回として、情報交換と合同指導をおこなった。

九月二十日、生徒捜索も一段落したので、学校は第一回合同慰霊祭を行なって、遺骨の遺族引渡しをした。

当校の全施設が全壊全焼したため、学院本部と共に、救護所も牛田町の当校農場に移された。ここは地形上の関係で、誘導された被爆生徒のほかには、一般市民の避難はなかったが、軍人関係の避難者が多数にあり、被爆生徒の収容が一部できないほどであった。学校は、これらの避難軍人に対して、農場小屋の一部を解放したが、被爆生徒・被爆軍人の看護に必要な医薬品類が少なく、十分な手当をすることは、とうていできなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年九月から、週二回の定期登校日が定められ、牛田農場での合同指導を開始した。十月下旬になって、牛田国民学校の校舎(四教室)使用が許可されたのをきっかけに、生徒の再編成をなし、専門部および高等部による隔日午後授業を開始した。出席人員も、当初の合同指導のころは、教職員が二人ないし五人、生徒数も二〇人ないし五〇人程度であった。しかし、国民学校で授業を開始したころには、教員数も七人ないし一〇人くらいとなり、生徒数は八人ないし二〇〇人程度に増加していった。

被爆後、約二か月たってようやく授業らしい態勢も整っていくと同時に、一方では、学校復興運動も、職員と父兄が一致協力して、強力に押し進められた。学校と父兄の代表とで、学校復興委員会を組織して、官庁連絡および進駐軍関係との交渉をたびたび重ねた結果、江田島大原にあった旧海軍倉庫資材の払下げや、江田島旧海軍兵学校および大竹町の旧海軍潜水学校の机・腰掛などの払下げが許可となったので、牛田農場の一部に仮校舎二六〇坪(普通教室九・職員室一)を建築することができた。仮校舎ではあるが、再出発の基礎が、ここに力強く築かれ、昭和二十一年二月一日から、この新校舎で授業が開始された。その後、増築工事も着々と進行し、三月には二三〇坪(普通教室四・特別教室・講堂一)の増築が完成した。八月には、更に仮本部本館(五二坪)が完成し、校舎合計坪数も五四二坪となり、

教職員は一〇人ないし一三人と増加し、生徒数も約四〇〇人で、授業内容も一段と充実したものになった。

学校と父兄の一致協力で、学校再建は着々と進み、内容も充実していったが、牛田校舎は場所的に交通便も悪く、また、新入生徒を迎えて、専門部と高等部の発展からも、一日も早く旧校地(市内上流川町)に復帰することがのぞまれ、昭和二十二年八月、ついに高等女学校跡地(市内上流川町)に第二仮校舎が完成した。この新校舎には、当校の新制中学校と旧制高等女学校の生徒が移転し、牛田校舎は専門部だけが使用することにした。また、昭和二十三年八月には、元専門部校地(市内上流川町)を新制高等学校用の敷地として整理拡張し、新しい校舎の建設が進められた。

なお、昭和二十八年、牛田山の中腹、現大学構内に「女学院犠牲者の碑」が完成し、原爆死没学園犠牲者の霊をまつている。

第二十五項 比治山高等女学校...496

(現在・比治山女子中学校、比治山女子高等学校・比治山女子短期大学)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市霞町一丁目八一
 校長 国信玉三
 教職員 二十八人(ほか講師八人)
 生徒 八〇六人
 校舎 木造二階建・二〇教室・延七六六坪
 敷地面積 三、九七四坪
 爆心地からの距離 約二・九キロメートル

二、学生疎開状況

なし

比治山高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
十一空廠	呉市広町	二人	専攻科 一一〇人	事務・穿孔(飛行機製作)	
中国軍管区司令部	基町	二	三年生 九〇	通信(飛行機情報の受信発信と連絡に従事)	
陸軍需品廠	江波集積所 小姓町町集積所 安芸郡海田市町	一	専攻科 三 専攻科 一 専攻科 三九	事務	
第二総軍司令部	二葉の里	一	四年生 四〇	暗号通信教育	
広島鉄道管理部	大須賀町	一	専攻科 四〇	列車清掃及び看護学	
中国配電大洲製作所	大洲町	三	専攻科 四〇 四年生 一〇〇 三年生 四三	電池製作、ハンダ付作業	
合計		一〇	五〇六		

四、指定避難先と経路

黄金山の霞町側森林地帯、及び大河稻荷社の森林地帯を災害の避難先に指定していた。

五、校舎の使用状況

昭和十九年十一月二十二日から、二十年六月三十日まで、学校の南校舎の二階四教室を陸軍偕行社の「将校軍服縫工場」として使用。当校四年生四〇人が、この作業に従事したが、二十年七月解除された。以後、使用されなかった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	生徒	その他	
一、二年生全員・引率教職員八人、午前七時より学校に集合七	八人	三〇〇人	なし	

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破・一部大破

当校は爆心地の東南約二・九キロメートルの地点に所在し、校舎の一部は、ひどく破壊され、柱は全部折れて南方へ一〇度くらい傾斜したが、倒壊は免れた。南校舎は、屋根・ガラス戸・天井を破壊され、柱が四本折れたが、傾斜することはなかった。しかし、南校舎は北校舎と違って、大河の山で反射された爆風を強く受けたため、南側の窓ガラスが破れ、その破片で、室内にいた者は負傷した。

火災の発生はなかったが、北に面して、墨で書かれた張紙の黒い字の部分だけが、放射熱線により焼け落ちて穴があいた。炸裂の閃光後、まもなく、校舎南方の蓮田の葉面上を、西南方から東北方に向って、黄褐色にみえる空気の波(カゲロウ)が進むのを見た。このカゲロウは、大河の山で反射された熱線によるものであろうかと思われるが、ともかく、一種の焼夷弾かと危懼の念をいだきながら見守っていると、間もなく大音響が起り、天井は落ち、ガラス戸は吹き飛び、教室の内外は土煙のために薄暗くなった。

(二)人的被害

北校舎からは、三〇〇人に近い生徒(一、二年生)が悲鳴をあげながら出てきた。その中に、多数の負傷者・出血者を認めたので、これを南側運動場の防空壕に集めて治療にあたった。その中の二人は動脈出血(一人は腕他の一人はふくらはぎ)の重傷であった。すぐに中国軍管区司令部から軍医の派遣を要請するべく、男教師を自転車で連絡に出したが、五分にもならないうちに、それが帰ってきて、「市中は大変です。」という。それまでは、学校内に爆弾が投下されたものと思っていたが、連絡員の報告で、初めて治療の手を休めて、市中の方を見ると、まるで大きなポプラの並木のように、空高く煙がのぼっていた。

校内における負傷者は、主としてガラスの破片による負傷で、重傷者四人(うち一人はついに左眼失明)、軽傷者一人を数えた。負傷しなかった生徒は、ひとまず大河稲荷社の境内に避難させ、人員を点呼し、非常食糧を支給して帰宅させた。帰宅できない生徒四〇人・一般罹災者三五人・教職員八人は、校内に宿泊、非常炊出しをおこなって支給した。夕刻に至って、軍のトラックが非常食(乾パン)を配給して廻ってきたのを機会に、軍管区司令部の様子を尋ねてみると、「秘密であるがほとんど全滅だ。」という事であった。動員中の三年生約九〇人の安否が気遣われたが、火の海と化した市中へ入って行くすべはなかった。

また、学校から五〇メートル北側の路上を、登校中の女子商業学校の生徒は、爆心から約三キロメートルも離れていたのであるが、直接熱線をあびて、顔面および上膊部を一面に火傷し、当校へ避難して来たので収容し、治療を施した。後ほど、応急救護所に指定された大河国民学校に、担架で運んだが、殆んどこの生徒が死亡した。教職員は学校に八人とどまり、生徒と共に廊下に休み、一部は運動場に持出した椅子に腰をおろしたまま、六日の夜を明かしたのである。

翌七日、午前六時ごろ、当校の動員学徒二〇余人が、東練兵場北方、東照宮東側山ろくに避難しているとの報に接し、ただちに自転車で急行した。やはり中国軍管区司令部に動員中の生徒たちであった。生徒たち約二〇人は、厚さ約二〇センチメートルの鉄筋コンクリート建物の地下室で、通信事務に従事中であったから、生命をとりとめ、けなげにも「広島壊滅の第一報」を沈着に行なった(第五巻参照)。一方、外の広場で竹槍訓練中の七〇数人は、直接被爆した。歩くことのできる生徒たちは、広島城の裏御門から東方に向って避難し、泉邸まで逃れた。しかし、火災が迫って来たので、なおも牛田方面へ避難しようとして川を渡りかけたところ、突風に吹き倒されて四人が水死した。こうして避難してきた生徒たちが、精根のつき果てた姿で、東照宮の石段下に寄りそっていたのである。火傷を受けて横臥していたが、被服はボロボロになり、殊にモンペイは黒色であるから、吸熱して無残に破損し、見るに忍びなかった。ただちに引返し、パンツの類をかき集めて持っていき、着用させた。

これらの生徒たちを、軍の担架運搬に託して、白島の陸軍幼年学校跡の収容所に送った。更に東練兵場の壕の中で一人、常葉橋下の河原で一人の生徒を発見し、これも幼年学校跡の校庭に収容した。こうして運び込んだ同校庭は収容所とは名ばかりで、日よけとして板が張ってあるだけであった。ここには、六、七〇人の負傷兵士も収容されていた。

七日午後三時ごろ、大阪赤十字病院から医師一人と看護婦数人の医療班が到着したが、その医師の語るところによ

れば、収容者の八 %くらいは絶望とのことであった(しかし実際には、全員死亡したものである)。

つぎつぎと死亡者が出るため、校庭の一角に穴を掘り、火葬に付された。火葬を待つ死体の、焼けただれた皮膚には、砂礫がまぶれつき、あまつさえ蟻がたかって、そのただれた皮膚に食いついており、悲惨この上もなく、目をそむけた。

生存者は口々に渴きを訴え、異口同音に、「水を下さい。」と叫び続けた。その悲痛な叫びは、聴くに忍びず、「ふた口だけですよ。」と、言い含めて水を与えた。ふた口の水を、「ああ、おいしい。ありがとうございました。」と、満足そうに飲みほした負傷者が、つぎつぎと息を引取っていった。

八月九日、幼年学校跡を引払い、生き残った患者は、全部似島収容所に移されることになった。

なお、学徒動員で出勤中被爆した死亡者は次のとおりである。

出勤先名	教職員	生徒	備考
中国軍管区司令部	二人	六四人	三年生
第二総軍司令部	○	一	四年生
陸軍需品廠	○	三	四年生
広島鉄道管理部	○	一	四年生
出勤の途中にて	○	二	一年生
計	二	七一	

すなわち、九日までに、幼年学校校庭で死亡した生徒八人、十四日までに似島収容所で死亡した生徒七人、自宅に引取られたのち死亡した生徒三三人、水死者四人、行方不明者二人、計七三人(うち二人教師)の犠牲者をだした。

八、被爆後の混乱

倒壊しなかった学校には、八月七日、なお帰宅できない生徒および一部の父兄約三〇人、一般罹災者約三〇人が校舎に宿泊していた。

八月八日、生徒はほとんど帰宅したが、一般罹災者の中、一〇数人は八月十五日まで宿泊した。

八月十八日、中国軍管区司令部の解散式が挙行され、この日までこの職域を守り続けた生存動員生徒も帰校した。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月十八日から二十一日まで、教職員一〇余人・生徒五五人ないし七五人が登校して慰霊祭の準備をした。

翌二十二日午前九時から、校庭において、生徒七三人・教職員二人の慰霊祭をおこなった。来賓に軍管区司令部から参謀安永少佐ほか一人、県庁から一人、谷中將、遺族二〇人、教職員二〇人、生徒二〇〇余人参列。校長並びに谷中將の弔辞、生徒代表弔辞があり、焼香ののち、ほぼ一時間で閉式した。

被爆後、教職員は一日も休むことなく出勤し、罹災生徒の家庭との連絡、ならびに罹災状況調査、動員学徒引受け側との引揚げ交渉、学校の備品整備などの事務をとった。九月十五日、職員会議を開き、各自の調査事項について報告がおこなわれた。

九月十七日、午後九時ごろから翌朝四時ごろに至る大暴風雨の来襲により、おびただしい被害を受けた。

九月二十一日、職人の少ない折から屋根職人を雇うことは容易ではなかったが、どうにか屋根の修理をおこなった。

十月八日、再び暴風雨来襲、同八日から屋根職五人を入れて修理した。

十月十五日、始業式。教職員一五人・生徒二〇九人。式終了後、教室内外の整理をおこなった。

十月十六日、生徒は学年・組別に交替で登校し、一時間の授業を受けたあと、兵器支廠跡から、瓦や材木を譲り受け、校舎の復興材料の確保にあたった。

十一月十三日、授業三時間、作業一時間とした。

十二月、建具に紙を張り、天井も吹き飛んだままの教室で、次第に増す寒波を凌いでいたが、十二月も半ば過ぎたころ、授業は不可能となり、休校。十二月末から翌年二月七日まで、大工・左官を入れて修理をおこなった。それも天井にはボール紙を張り、建具はガラスの代用として金網にゼラチンを張ったものを使用する程度のものであった。

昭和二十一年一月三十一日、県教学課においてロウソク・鉛筆の配給を受けた。

二月一日、一応校舎の修理成って開校。授業は二時間、後は清掃作業を行なった。

二月十一日、紀元節の式を挙行した。

二月十二日、はじめて五時間授業を開始し、次第に正常な姿にかえていった。

生徒数 一年 一三八人 三年 九三人
二年 一一三人 四年 一五七人

(三年生が少ないのは、動員中死亡した者が多いため)

第二十六項 広島女子商業学校...505

(現在・広島女子商業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南段原町六七八番地
校長 山内常雄
教職員 三二人
生徒 概数一、一六五人
校舎 木造二階建・二〇教室・延一、五五二坪
敷地面積 四、七〇六坪
爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島女子商業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	鶴見町	一〇人	五〇〇人	疎開跡片付け	
広島通信局電気工作所	宇品町十三丁目	—	五五	現場作業	
広島県木材株式会社	猿楽町	—	五五	現場作業	
野村生命広島支店	横町	—	二	机上事務	
広島貯金支局分室	八丁堀	—	一〇	机上事務	
広島貯金支局	千田町	—	一一〇	机上事務	
中国塗料株式会社	吉島町	—	一一〇	現場作業	
広瀬軍需品会社	霞町	—	五五	現場作業	
網本食品会社	旭町	—	五五	現場作業	
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	—	一一〇	現場作業	
連合紙器糞会社	大洲町	—	五五	現場作業	
広島税務署	雑魚場町	—	一〇	机上事務	
合	計	二四	一、一四五		

四、指定避難先と経路

当校校地の西北側に接する比治山山麓は松林におおわれ、敵機の視界をさえぎり、また多数の防空壕のある絶好の避難場所で、学校としては、状況に応じて同所に避難することになっていた。

五、校舎の使用状況

当校の北側校舎二階の五教室(一三〇坪)には、常時陸軍船舶砲兵団(第六一八〇部隊)衛生教育隊(隊長・指田吾一大尉)約一五〇人が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業予定なし	数人	少数	駐屯中の兵隊 約一五〇人	当日、当直職員と身体の弱い者などの動員できないもの 少数が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...大部分全壊・一部小破

当校の位置する南段原地区は、爆心地から東南約二・二キロメートルの距離にある。その間に横たわる比治山公園によって遮蔽されていたため、爆風によって教室・講堂は倒壊したが、屋内体操場と白鳩記念館は、小破程度の被害

にとどまった。そのうえ、駐屯中の衛生隊の活動で辛うじて発火を消し止めたから、重要書類などは助かった。

(二)人的被害

被爆当日は、一部の教職員と病弱生徒が学校に残留していたほか、大部分の教職員・生徒は勤労学徒隊として、各所に分散出動中であつた。炸裂の一瞬、出動中のものほとんどが、それぞれの作業現場で即死または重軽傷を負つた。

しかし、当時の混乱した情勢下、的確な被害状況をつかむことは困難で、現在においてもなお不明の点が多い。信用しうる資料による人的被害は、別表のとおりであるが、このうち市内鶴見橋付近の建物疎開跡片づけ作業に出動中の学徒隊が、もっとも大きな被害を受け、強烈な放射熱線と、爆風圧による即死二六二人、重軽傷者約二〇〇人の犠牲者を出した。

また、広島貯金局分室(八丁堀福屋百貨店内)と野村生命広島支店(横町)においては、作業中の生徒三〇人が、一瞬にして、ほとんど全員即死した。

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(九)人 不明 不明	(三二九)人 約五〇 不明	()内は、動員先における被爆者数
計	(九) 判明分のみ	約五〇〇(三二九) 判明分のみ	

八、被爆後の混乱

校長以下職員に多数の被災者を出し、校舎のほとんどが壊滅したため、学校の機能は一時完全に停止したが、呆然自失の状態から立ちなおった学校当局は、ただちに残留職員全員を、各動員先に派遣し、被災者の救援や調査などに全力をつくす一方、壊滅校舎の整理、屋内体操場・白鳩記念館の応急修理などをおこなつて、開校のための作業を進めていった。

九、学校再開の状況

学校の再開

早急に開校するため、応急措置として一時的に校舎を移転することとなり、残存建物の整備作業に併行して、市内仁保町向洋丘上の、旧軍兵舎への移転のための作業が続けられた。

昭和二十年十一月、諸般の準備が完了し、向洋仮校舎において、ようやく授業を開始することができた。施設その他、最悪の条件下での授業であつたが、再開のよろこびは非常に大きなものであつた。

ついで、昭和二十一年九月、現位置に復帰した。急造の仮校舎ながら教職員二三人・生徒八三七人を一四学級に編成して開校、次第に教育の正常化と充実がはかられていった。

[第二十七項 安芸高等女学校...511](#)

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市打越町六三三番地

校長 青原慶哉

教職員 約二〇人

生徒 四八 人

校舎 木造二階建・延四八 坪

敷地面積 二、三一八坪

爆心地からの距離 約一・七キロメートル

二、学生疎開状況

なし

安芸高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	小網町	五人	一、二年生 二〇三人	疎開跡片づけ	
山陽工業株式会社	上天満町	一	三年生約八 余	航空機部品の製造	
東洋製罐株式会社	天満町	二	四年生約八	軍需機械部品の製造	
日本工業株式会社	広瀬町	一	補修科約四〇	軍需機械部品の製造	
海軍の工場	佐伯郡五日市町	一	補修科数人	軍需機械部品の製造	
合 計		一〇	約四〇三余		

四、指定避難先と経路

市の防衛計画に基づいて、安佐郡安村字大洲の大洲国民学校を指定していた。

五、校舎の使用状況

校舎四教室に、広島県庁耕地課、および調査課の各一部が疎開して、事務をとっていた。

また、運動場には高射砲隊があり、高射砲六門を据えていた。もっともそのうち五門は木製で疑装用、他の一門は本物とはいえ旧式の練習用のものであった。

六、当日朝の学校行事予定

授業の予定はなかった。したがって、教職員が四、五人だけで、生徒はほとんど出勤して校内にいなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊

爆風によって、校舎は全壊したが、火災には至らなかった。

(二)人的被害

校内にいた教職員のうち、青原校長は校門近くの御真影奉安殿の近くを歩いているとき、炸裂に遭遇し、校舎倒壊の際の飛来物によるものと思われるが、大腿部と頭部を打撲裂傷という重傷を受けた。

ただちに川向うの打越町字山手の菅原教信教頭宅に、元気な教員によって担送され、看護を受けたが、十日ばかりのち、ついに他界した。

もっとも悲惨をきわめたのは、動員学徒であって、建物疎開作業のため小網町付近に、松村富士雄(31歳)、桧木田好子(21歳)、青原郁子(22歳)、橋本幸枝(25歳)の四教師に引率されて出勤していた学徒報国隊員二三七人は総員全滅であった。松村教師は、小網町の現場に到着してから、再び連絡のため学校に帰って来たそのとき、原子爆弾が炸裂、倒壊する校舎の下敷きになって絶命した。何秒か何分か到着が遅れていれば、あるいは助かっていたであろう。

昼過ぎから、晩方にかけて三々五々と、天満町の東洋製罐工場や広瀬町の日本工業株式会社に出勤していた生徒たち約八 人が、ふた目とは見られない無残なすがたになって、学校へ帰って来た。外傷者あり、火傷者ありで、そのうち、六、七人が死んでいった。

医薬品はなく、単に消毒程度の治療をほどこして、安否を心配して訪れた父兄に、それぞれ引渡したが、家に帰った生徒もほとんどが、死んでいったのである。

区 別	教職員	生徒	備 考(場所別)
即死者	(四)人	(二六三)人	小網町・教師四人・生徒二三七人・東洋製罐・生徒一七人・日本工業・生徒九人
重軽傷者 行方不明者	一	(約八)	東洋製罐及び日本工業において 約八〇人
計	一(四)	(三四三)	

()内は、学校外での被爆者数

八、学校再開の状況

学校の再開

六日以後、ずっと教師五、六人が交替で登校し、生徒の情報の蒐集や連絡をおこなうと共に、学校の復旧について協議したが、被害があまりに甚大であり、社会不安もつるばかりで暗中模索の状態が続いた。そのうえ重傷の青原

校長がついに再起できず死去するに至り、学校としての機能は完全に停止した。

十一月一日、生存者の努力によって、やっと旧校舎あとにバラック建てながら、一部校舎を復興して、第二学期の授業を開始した。教師一人・生徒約八人くらいが集った。

当校敷地は、戦前からおこなわれていた太田川改修工事用地として、当局の土地収用にかかっていたため、学校元地に復興することが許可ならず、折衝を種々重ねて、昭和二十二年三月、比治山本町の船舶通信隊(元電信隊)跡にやっと移転することができた。

廃校に決定

しかし、昭和十四年三月二十四日に開学した当校は、そもそも「真宗安芸婦人会」を基盤にして設立された関係上、県下一円にわたる地方出身の生徒が多かったから、戦後の社会事情の急変と、学制改革の影響などにより、通学生徒がいちじるしく減少した。

これに加えて、打越町の学校元地を使用することができなかった痛手は大きく、ついに、昭和二十七年三月、廃校に決した。

現在、皆実町に学校法人安芸学園幼稚園(園長・多賀谷景尚)として、その名をとどめている。

なお、被爆歌人正田篠枝は同校の第四回卒業生で、通信隊跡の移転に関しては、陰になって大いに協力した。また、多賀谷園長には、短歌のことも批判を仰いだようで、その歌稿を同園長が所持している。広島平和記念資料館には正田篠枝真跡の「三十万名号」が寄贈された。

[第二十八項 西高等女学校...517](#)

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東観音町二丁目

校長 佐々木佐市

教職員 一六人

生徒 約四〇〇人

校舎 木造二階建・約四五〇坪

敷地面積 約一、〇〇〇坪

設立者 (校主)藤原力

註・昭和二年創立常盤高等女学校(創立者浮気モト)を引継いで改名した。

爆心地からの距離 約一・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島西高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	土橋近辺	不明 (うち校主一)	約一五〇	疎開跡片づけ	当日は臨時登校の予定であった。
昭和金属工業株式会社	西観音町	二	一〇〇	航空機部品製造	
帝国兵器工場	吉島町	二	一〇〇		
旭兵器製作所	南観音町	一	四年一組 六二	兵器、主として大砲の弾丸製造	
合計		五 (判明分の)	約四一二		

	み)		
--	----	--	--

四、指定避難先と経路

不明

五、校舎の使用状況

校舎を他に貸与使用させたことはない。生徒の登校日のため何時でも使える状態にあった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
臨時登校	三人	約一〇〇人	なし	

七、被爆の惨状

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

被害状況

爆心地の西北約一・三キロメートルに位置し、爆風により校舎全壊、北西からの延焼により全焼した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(三)人 一三	(二一七)人 多数 不明	()内は、すべて動員先での被爆者数
計	一三(三)	(二一七) 判明分のみ	

勤労働員生徒のうち、昭和金属工場への出勤組は、当日が臨時登校日になっており、集合時間前に被爆したため、その実態がつかめないまま、混乱状態に陥った。生存者から聴取した話によると、登校していた生徒はおおむね二階にいた模様で、倒壊した校舎から大部分脱出できたものと考えられる。脱出する生徒の中に、目に大きな棒切れが突き立っているのを見かけた者もいる。また、音楽室にいた一生徒の話では、「自分は校舎に閉じこめられたものの苦心のすえ這い出すことができたが、他の数人の学友は脱出不可能であった。」という。

教師三人は階下にいたので、脱出は困難を極め、うち一人が脱出したときには、校舎の大半が猛火に包まれ、火が眼前に迫っていた。辛うじて、付近の防空壕に避難し、壕内で自然鎮火を待つのみであった。

南観音町の旭兵器製作所に勤労働員されていた四年一組約六二人は、胡子唯夫教諭指揮のもとに、この日も出勤していた。そして、半数は作業現場へ向う途中、半数は更衣室で着替え中に被爆した。爆心地から約三・四キロメートル以上離れていたため、ガラスの破片などで軽傷を負った程度で、全員無事であった。胡子教諭は隊伍を整え、全生徒を引率して、市内電車江波終点まで出たが、すでに市内への通行は止められていた。やむなく引返して様子を見ていたが、市中の猛火は拡大する一方であったから、生徒各自の、自家のある地域によって組を作り、帰宅するよう指示した。恐怖におののいて、教師のもとを離れようとしぬ生徒を、叱咤激励して、ともかく作業隊を解いた。

また、藤原校長は、当日、生徒約一五〇人を引率して、土橋付近の建物疎開作業に出勤し、小高い所に立ち、生徒を指揮しているときに被爆、重傷を受けて、翌七日に他界した。作業中の生徒もほとんど全滅であった。現在(昭和四十四年十月)、西高等女学校の遺品として、卒業生名簿と、古びた人絹の国旗が、岡山県小田郡美里町藤原保乃(校長夫人)方に保存されている。

動員生徒被爆記

第四学年東組担任 教諭 胡子唯夫

広島西高等女学校第四学年東組在籍六二人は、動員生徒として、広島市南観音町にある旭兵器工場に出勤して、兵器製作の作業に従事した。

同工場には、広島県立広島第一中学校第三学年の一組の生徒も、生徒動員として出勤し、同じく、兵器の製作の作業に従事していた。

(一)原子爆弾炸裂の当日は、生徒集合の定刻に我が動員生徒は、工場の講堂二階に集合し、例により生徒朝礼を行ない、出席者の点呼をなし、出席および欠席者の確認をなしたる後、本日の諸注意事項について訓話をする。後、全生徒ば作業服に着替え、まさに作業に行かんとして、生徒の約半数が二階階段から降り、残りの半数は、講堂の二階に居た。その時、遙か東方、市の中央に、もの凄い閃光と爆発音がしたと思う瞬間、窓ガラスは、全部絹を引裂くが如き音と共に、こっぴみじんに、講堂内に飛散した。その爆発音と閃光と共に、生徒は机間に伏した。私は左手と右

股とに破傷を受け、鮮血は凜々と股を流れ、服は一瞬にして血染めとなる。しばらくして、階上に居た半数の生徒を誘導して、校庭に下り、全生徒を集合させた。

この時、生徒出席簿(血染めの出席簿として原爆資料保存会に提出)が講堂の二階に置いてあったので、四年東組副級長青木幸枝さんに出席簿を持ち来るよう命じた。彼女は少しも臆ずる事なく、走って階上に駆け上がり、出席簿を持ち出して来る。この出席簿によりて、二度生徒の安否を点呼し調査した。幸いに、朝礼時における人員点呼と異状なく、全員無事であることを確認し、先ず安堵の胸をなでおろした。

全生徒は更に服装を整え、鉢巻姿に、防空頭巾を背負い、隊伍を整え、江波電車線に進行した。市内は一面火の海火の波で覆われている。この辺りからは市中に入ることを禁止されていたので、やむなく折返して南観音町方面に向った。畑の中の小道を通り、市の西端を迂回した。市中のここかしこから、頻繁に時限爆弾の如き爆発音がする(火薬庫の爆破?)。その爆発音のするたびに、生徒と共にトウモロコシの中に伏す。畑の中、草むらの中、畑中の小道の、ここかしこから母を呼ぶ声、友を呼ぶ声、水を求める声、うわ言の声、これらの人々には、どうしてあげることもできなかつた。実に悲惨の極地であった。しかし、わが学徒は、少しの号泣の声を出す者もなく、沈着にして、不動心に燃え、落着いていた。当時の生徒は、実に忍耐強く、勇気に満ち、堅忍不拔、持久力が旺盛であったと思う。

にわかには、一天かき曇り、豆粒大の豪雨が降り始めた。この大雨をさけるに場所なく、傷口からほとばしる血は手拭で覆い、雨水の傷口に入るのは靴で覆い防ぐ。出席簿は鮮血で染まる。学徒に関する諸調査簿も、雨水と鮮血で波状の紋形に染まる。

爆発音の止む間合に、わが学徒を、地域別非常時班別編成表に依り、小隊を造り、各地域別に隊を作り、東西南北に班別で帰るよう指示した。しかし、わが学徒は、なかなかその指示に従わなかつた。彼女らは教師を思い、学友を思い、班別で帰らない。色々身身の安全なるを説き聞かせたあげく、やっと納得してくれた。各地域編成隊で別れた。原爆雲で覆われた大陽も、西山に没しかけた。この時、ただ一人の学徒は私につき添っていた。己斐の山手を迂回し、三篠付近に出たが、地面は熱く焼け、靴を通して来る熱気は強く、足の裏まで熱くなった。三篠の鉄橋を渡り、自宅のある長寿園の入口まで帰った。

ここで、私につき添っていた一人の学徒と別れた。いろいろと注意を与えた。彼女は汽車線路を、広島駅方面に向って足を運んだ。そのうしろ姿が、今に私の眼底から消えない。彼女ははたして無事で母のもとに帰ってくれたか、案ぜられた。

(二) 廃校

校長藤原先生は、当日、一学年の学徒を引率して、市内土橋付近の家屋疎開後の片づけ作業に出動して従事していた由。

先生は少し小高い所に立たれて、あれこれと学徒を指揮して居られたが、爆弾投下と共に高く飛ばされて、傷を受けられて、翌七日、遂に他界せられた由。先生は覇気に満ち、教育愛に燃えられた方で、西高等女学校を設立せられ、生徒数も著しく増し、創立以来、幾多の苦難を忍ばれ、苦心惨憺の結果、校運は日増しに隆盛を見るに至った時、古今未曾有の原子爆弾に見舞われ、遂に他界せられた。諸帳簿並びに校舎などは灰燼となり、学校の支柱を失い、物資不足の折り、再興不可能。遂に、廃校の悲しみを見るに至った。生き残れる生徒から、母校の無い悲しみにつき、たびたび音信を受く。

被災後、時の教頭らと集り、いろいろと後始末をした。

昨年、生存者(卒業生・当時の在校生)が集い、二葉の里に会場を求めて、同窓会を開催し、故人の冥福を祈り、いろいろと思い出話にふけた。

付記

わが住家(広島市白島北町長寿園下)は被爆のため倒壊したので、住むに家なく、長寿園の川辺に三日三晩野宿した。わが子は、広島県立広島第一高等女学校一学年に在学。学徒動員として疎開作業のため、土橋付近に出動す(担任生成、栗田先生。栗田静子先生の御尊父は当時広島文理科大学教授として在任)。原子爆弾投下により行方不明。捜すこと数日遂に見当らず。栗田静子先生は土橋付近にて学徒引率作業中被爆せられる。最後まで、生徒の安全避難にご尽力。生徒を激励せられる由、涙ぐましきものあり。

郡部からの応援の医者、長寿園・三樹園などに案内し、被爆者の治療に回る。

友人二人の子供さん(約三歳ぐらい)被爆死亡す。野花を供え、めい福を祈る。

第四節 専門学校・高等学校・大学...525

第一項 広島女学院専門学校...525

(現在・広島女学院大学、広島女学院短期大学)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市上流川町四六番地
 校長 松本卓夫
 教職員 一九人
 生徒 概数三一三人
 校舎 木造三階建・一五教室・延一、八四坪
 敷地面積 一、五〇七坪
 爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島女学院専門学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	四人	二七八	兵器の部品と製造の事務	八月六日当日は、東洋工業株式会社へ出勤中の一年生四四人は、職場配置転換指導のために市内上流川町の本校に登校していた。
広島財務局 広島税務署	八丁堀	—	二五	事務	
師団司令部	基町		—	事務	
合計		五	三一三		

四、指定避難先と経路

当校の北側約一〇〇メートル離れた場所に、泉邸(縮景園)があり、これを第一の避難場所として指定していた。第二の避難場所として、当校から北方の牛田町の山間にある広島女学院修練道場、及び農業作業場が指定されていた。避難経路は、白島線(電車)づたいに北上し、常葉橋を渡り、饒津神社西側の川べりの道を通り、ふたまた土手に出て、東に上る。

五、校舎の使用状況

当時、専門学校としては、軍隊関係や一般への校舎貸与はしていなかったが、校地内にあるゲインズホールの一部が陸軍将校の宿舎として使用された。また、国鉄本厨の審査課が疎開して来て、校舎の一部を使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
学徒動員中	一人	一四四人	陸軍将校および国鉄関係 若干人	各課の一年生全員は被爆当日に学校に登録し、学徒動員先(東洋工業)へ出勤準備のため、職場配置指導を受けることになっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は爆心地から東北東約一・二キロメートルのところであり、原子爆弾の炸裂と同時に、一瞬にして校舎は倒壊した。

その後、約三〇分してから当校の東・西に隣接する民家から火災が発生した。その火は寸時にして猛火となり、周

囲を焼きつくして、倒壊校舎に飛火が降りかかってきた、しかし、突然の大惨禍の中では、重軽傷を負った者同志が助け合い、下敷きになっている者を救出しようとする努力が精一杯であり、消火にまでは手が出なかった。

そのため、火災は大きくなるばかりで、正午過ぎまで燃え続け、学校は完全に灰燼に帰した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	二(四)人	二五(四四)人	()内は学校外(動員先など)での被爆者数
重軽傷者	七(九)	一〇〇(一二〇)	
行方不明者	〇	一四(一九)	
計	九(一三)	一三九(一八三)	

八月六日、各科の一年生(一四四人)は、学徒動員先に指定された東洋工業株式会社(安芸郡府中町)への出勤準備のため、いったん、学校へ登校して各人の職場配置と、職場に関する注意事項につき、指導を受けることになっていた。

八時十五分、全員が講堂で礼拝をすませ、次の行事に移るため、退場している時、原子爆弾が炸裂した。同時に校舎は倒壊、一瞬、下敷きとなり即死した者、ケタやハリの下敷きのまま自由を失っている者、戸外へはねとばされた者、または人相の区別すらできない重傷で、助けを呼び求めている者、奇跡的に壁土を被っただけで、大怪我もせず脱出できた者などで、大混乱となり、神聖であるべき礼拝場は、瞬時にして地獄と化した。

この大惨状の中で、比較的軽傷であった者や、幸いに救出された者は、誘導されて泉邸と、一部は栄橋を渡り、東練兵場方面(二葉山のふもと)に避難したが、泉邸に避難した生徒は、ここも火災による危険が迫ったので、泉邸の裏側から、京橋川を舟で渡り、学院本部の避難場所に指定されていた牛田町東区の農場へと避難した。その後、一部の生徒は、さらに中山村方面の農家へ分散収容された。

隣接の学院高等女学校の方において、危く命拾った松本院長が駆けつけた時、被服が裂け、血にまみれた重軽傷の教員が、校舎の下敷きになった生徒の救出に一生懸命になっていた。講堂内にはなお、数十人の生徒が下敷きになったままの模様で、院長も一緒になって救出にあたった。しかし、人手もなく、救出用具もなく、救出作業はかどらず、遂に猛火に包まれてしまった。

数日後、焼けた校舎の跡にたたずむと、廊下から講堂まで、点々と死者が続き、講堂には腰掛けたままの生徒たちが梁に圧せられたか、身動きもできず焼死した白骨が、一列に並んでいた。

市内八丁堀の財務局、および税務署に出勤していた生徒約二五人は、その半数が助かったが、当日、日本銀行支店へ使いに出た生徒一人は、途中で被爆し、行方不明となった。なお、基町の師団司令部に出勤中の生徒一〇人は全滅した。

八、被爆後の混乱

負傷しながらも歩行のできる教職員や、生徒の中には、直接、自宅や知人宅をめざして逃げのびるか、あるいは東練兵場方面に避難していったほか、大半の生徒は、牛田町の学院農場に避難していったが、この農場には軍人の避難者も多くて、生徒全員は収容しきれない状態となり、一部生徒はさらに山を越え、中山村方面の農家に依頼して分散収容をした。

被爆直後、学院本部は牛田農場に移されて、翌七日には、学院長を中心に、東洋工業株式会社出勤中の生存教員数人が集り、生徒に対する緊急対策を協議し、次のような措置をとることに決定した。

すなわち、独自で行動できる軽傷者は、各家庭の避難先を十分調査の上で帰らせ、重傷者は応急手当をなし、家族を探して、連絡することに努める。また行方不明生徒の捜索を開始して、その生徒の家庭と連絡を保つよう、できるかぎりの努力をする。しかし、校舎の焼失による学籍簿および名簿類の焼失、または被爆当日の登校生徒の大部分が、新しい一年生(合同指導は約一週間にすぎず、それ以前は前の高等女学校から学徒隊として、各工場へ出勤しており、各人の職場が違っていった)であったため、名前も顔も記憶が明瞭でなく、捜索や連絡にはなはだ困難があった。

なお、東洋工業株式会社に学徒隊として出勤していた生徒は、市内から送られて来る負傷者の看護を六日夕刻近くまでやっていたが、その後、生徒は各方面ごとに分隊を組織し、教職員や同工場に出勤中の、広島文理科大学の学生を隊長にして帰宅をはかった。しかし、郊外および市周辺部に在住する生徒以外は火災のため帰宅できず、再び工場に引返してきたので、工場の青年学校寮に収容した。翌七日に「以後、各人は避難先がきまれば本部(牛田農場)の方に連絡するよう」指示を与えてから、一たん、分隊組織を解散した。

また、校舎の全焼で、避難先に指定されていた牛田農場を、応急救護所として使用したが、当場所は、地形上の関係から、誘導された被爆生徒のほかには、一般市民の避難はなかったけれど、軍人関係の避難者が多く、学校として

は、これらの避難軍人に対して、農場小屋の一部を解放して収容所とした。しかし看護に必要な医薬品が少なく、十分な手当てをすることにできなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

上流川町の校舎は焼失し、その日登校した教員および生徒の大半と、市中心部に動員中の生徒のほとんどが死傷するという、物的にも人的にも多大の被害を出したので、一時、学校機能は完全に停止の状態に陥った。しかし、学院本部が牛田修練道場に移され、松本学院長を中心として、動員中の生存教員も加わり、生徒に対する緊急対策と共に、学校再建についても、その努力が日夜重ねられていった結果、牛田農場に仮校舎を建築することとなった。

生徒に対しては、九月から週二回の昼校日を定め、農場で合同指導を実施したが、当時は出席者も少なく、教員は一～三人程度、生徒数は約一〇人前後という状態であった。十月の下旬ごろから、牛田国民学校の校舎使用(四教室)の許可を得て、高女部と専門部とで、交替に変則授業を開始したが、そのころには出席教員も二～五人となり、生徒数も三〇～五〇人程度に増加してきた。

このように学校再開の道が着々と進んでいく一方、校舎再建の努力もはらわれ、大破している修練道場の一部を、応急的な修理をして教職員および生徒の合宿所とし、学校復興の足場にした。そして、学校および父兄の代表をもって、学校復興委員会が組織され、側面的な運動も強力に押し進められた結果、江田島の旧海軍倉庫の払下げを受けて、建築資材とし、また、海軍兵学校および大竹市の海軍潜水学校から机・腰掛などの資材の払下げを受けて仮校舎に運んだのであるが、これらの資材をもとに、牛田農場の一部を整地して、仮校舎二六〇坪(普通教室九・職員室一)の建築にとりかかり、昭和二十一年二月に完成した。

その後も、校舎増築の仕事は続けられ、同年三月に、二三〇坪(普通教室四・特別教室二・講堂)の増築工事が完了した。被爆の日から約六か月後に、はじめて校舎復興計画の夢が実現した。新校舎での授業も、高女部と専門部とが交替という、今までどおりの二部授業ではあるが、間借り教室での苦しい授業を続けてきた生徒たちにとって、新校舎完成の喜びは非常に大きなものであった。なお、同年八月、仮本部本館(五二坪)もできあがり、学校としての体面も内容も充実して、出席教員も四、五人となり、生徒数は一〇〇～一五〇人くらいに増加してきた。

その後、昭和二十二年八月に、市内上流川町の女学院本校の焼跡を整備して、ここに第二仮校舎の建設が完成したので、新しい学校制度による新制中学校および高等女学校は、この地で再出発することになり、牛田校舎は専門学校専用として使用されるにいった。

なお、学用品や教科書など、開校当初は、軍の廃品用紙やごく僅かな配給ノートなどでしのいだ。教科書は、焼残りの戦前のものを基とし、もっぱらノートによる授業であって、まともな充実した学問はなかなか望めそうになかった。

[第二項 広島女子専門学校...534](#)

(現在・広島女子大学)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宇品町十三丁目

校長 津山三郎

教職員 約三〇人

生徒 約四五〇人

校舎 木造二階建・一部平屋・一七教室・延二、〇六八坪

敷地面積 七、〇六二・二坪

爆心地からの距離 約三・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島女子専門学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
陸軍運輸部	宇品町	五人	一一五人	縫製・事務・その他軍衣補修	責任者 中村良策教授 十九年九月一日より動員
水島航空機製作工場	倉敷市	五	九五	航空機部品組立	責任者 後藤陽一、津島赴 両教授 二十年一月八日より動員
広島郵便局	細工町		五	事務	
広島師団司令部	基町		一	事務	
合計		一〇	二一六		

四、指定避難先と経路

運動場に、五〇人収容能力の防空壕が二か所に構築してあり、空襲警報発令に際しては、ここに待避することになっていた。

当時、教職員、および生徒はほとんど学徒奉国隊として出勤しており、病弱その他の理由で常時校内にいるものは約一〇〇人程度であったから、この防空壕でまにあった。

その他の避難対策については、東千田町の寄宿舎生の避難用として、二教室をあてていたほかは、学校が市中心部から離れていたことなどもあって、特別なことは考えていなかった。

五、校舎の使用状況

六日当日は校舎の一部(四教室くらい)に暁部隊の兵士約六〇人が、宇品港の乗船をまって、宿泊していた。時には約一〇〇人もの兵隊が宿泊することもあった。

また、二十年三月に入学試験を終えながらも、高等女学校時代の動員令が解除にならず、遅れて同年七月二十三日(月曜日)に入学した当年度の一年生約一六〇人が登校していた。これら新入生は八月六日の原子爆弾炸裂の日まで、午前中は普通の学科を受け、午後は一般教練をおこない竹槍やナギナタの訓練をしたが、これが講堂・四教室、および運動場を使用していた。もっとも運動場の大半は、サツマ芋などが耕作されていた。

二年生・三年生の病弱者約二〇人も二、三教室を使用し、このほか、防空および避難のための臨時寄宿舎として二教室(舎生半数ずつ交替)を使用、さらに職員約一〇人ずつ(一日交替)が、夜間の防空・警備要員として勤務するために一室を使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定 * 在校者数(教職員 * 生徒 * その他) * 備考

朝礼(国民儀礼)校長訓話のあと、一年生は各級ごとに動員準備の予定 * 約二〇 * 一八〇 * 陸軍暁部隊の兵士約六〇人 * 生徒一八〇人のうち 一年生一六〇人、病弱者 二〇人(二、三年生)

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況

講堂...全壊

その他、大破または小破全校に及ぶ。

(二)人的被害

区別	教職員	生徒	備考
即死者	〇人	一人	()内は校外(動員先)での被爆者数
重軽傷者	三	五	
行方不明者	二	七(六)	
計	五	一三(六)	

毎朝、八時から八時十分まで講堂で朝礼がおこなわれていたが、六日も同じように教職員、および生徒全員が集り、朝礼(国民儀礼)ののち、校長の訓話をきいた。講堂で朝礼をするようになったのは一年生が入学してからのことで、それまでは先生と生徒を併せても三〇人くらいの少数であったから、雨の降らないかぎり玄関前ですませていた。

津山校長は訓話を終え、講堂を出て、校長室に帰ろうとしていた。

校内の取締りは、学徒奉国隊大隊長早川甚三教授兼教頭(学年単位を中隊・組単位を小隊とする)が受持っていたが、七月に応召・出征してからのちは、第三中隊長園田均教授および第二小隊長縄田二郎教授が主としてこれにあたって

いた。

縄田教授は講堂の東南側の窓ぎわにたつて、訓話のあとすぐ各副小隊長(生徒)を集め、出席点呼を命令副小隊長が出席をとりつつあるそのときであった。

生徒たちが、突然、長椅子のあいだに全員一斉にピタッと伏せた。あとで聞くと、大きな妖しい光りがしたので、訓練どおり、瞬間的に全員が伏せたわけであったが、縄田教授は、その一瞬を、まばたいて目をとじていたのかも知れないが、光りを感じなかった。どうして伏せたのか、命令もしないのに...と、思いながら、何気なく窓から外の方をみると、異様な火の球がガラガラと光っていた。

その火の球は直径五〇メートルないし一〇〇メートルはあったが、虹を溶かしたようなガラギラの球で、横に幅ひろく・つい二、三〇〇メートルばかり離れたところあたり(現在の広大附属校辺)のように、瞬間的に見えた。まだ煙という段階ではなく、異様なその火球は実にエネルギーに奔騰していた。顔が痛いほどに熱かった。

「これは焼けるゾ。」と思った。

何秒かのち、縄田教授は、立っている窓ぎわから二、三メートル離れた長椅子のあいだに飛ばされていた。意識をとりもどしたのは何分のちであったか、二、三分くらいとも思われるが、倒壊した講堂の下敷きになりながらも、長椅子が落下物を支えていた。周囲がまっ暗のなかで、「わしは死んでしまった」という意識で、気がついた。

気がついてみると、講堂の反対側の方は倒れながらも柱が立っていて、外の明りが見えたから、それを頼ってガムシャラに外に這い出た。

もう、そこには誰もいなかった。

そこへ一人の生徒がやって来て、「先生こちらへ...」と、防空壕の方へさそったが、空を仰ぐと、すでに飛行機のすがたは見えなかった。

「みんな防空壕から出る。」と、縄田教授は大声で言った。

ガス弾が焼夷弾かわからないが、とにかく敵機はすでにいないし、校舎に火災が発生してはいけないと、まず考え、壕から出て来たものに、各校舎を四区分し、各小隊ごとに火もと点検にまわらせた。

三田喜代教授は、自己の受持ちの化学実験室にいき、アルコール・ランプがとぼっているのをみて、いち早く消した。

四個小隊から「火の気なし」の報告を受けてはじめて、出火のおそれなしとひとまず安堵した。炸裂後三〇分ぐらいだったであろう。

生徒のなかには、かなり流血の者もいたが数は少なく、ガラスの破片による負傷者四、五人ばかりを作法室に収容した。重傷の生徒一人には、大坪サキ教授がずっとそばについて看護した。

そして、校門をはじめ一切の門をとじて、しばらく警戒体制をとっていた。

津山校長は、訓話のあと校長室へ帰る途中、コンクリート壁になっている生徒昇降口にさしかかったときに被爆したが、壁が落下物をささえたので一命をとりとめた。

一方、東千田町の当校寄宿舎に病気のため寝ていた者、二人のうち一人村田静江は即死したらしく、もう一人杉原豊子は、学校までこのようにして辛うじて避難して来たが、発熱とひどい下痢症状が起り、二〇時間後に他界した。

その他、学校に登校途中で被爆した者、師団司令部および広島郵便局に出動中のもの六人が行方不明となり、その後、死亡したものと判断された。

爆心地至近の広島郵便局に出動中の生徒の一人堤洋子は、当日、通勤途上、乗っていた電車が十日市停留所にさしかかったとき被爆、辛うじて電車から脱出し、猛火をさけようと、相生橋付近の川で水をかぶったのち、経路不明だがその日の夕刻、安佐郡祇園町西の原放送局舎宅の自家にたどりついたまま臥床、出血多量で八月十七日ついに死亡した。

岡山県の水島に出動していた生徒稲毛恒子は、肉親が病気で、たまたま上柳町の自宅に帰っていて被爆、行方不明となった。

同じく水島に出動していた生徒望月登美子は、塩屋町一丁目の自宅が被爆し、一挙に両親を失い、昨日に変わる悲境に立ちむかわねばならなくなった。また、学校にいて被爆した浅井和子は、同時に水主町四八六番地の自宅も被爆し、前者と同じように両親を失った。

このほか、音楽担当の長橋ヤエコ講師は自宅で被爆死亡し、園芸係雇員一人が行方不明となった。

なお、宇品町の陸軍運輸部に出動中の生徒も、爆心地からかなり離れていたにもかかわらず、数人が軽傷を受けた。

このように原子爆弾の一閃は、嘗造物や人命のみならず、社会秩序も家庭生活も、それを彩る人間関係や文化も、その都市もろともに破滅させたのであった。

八、被爆後の混乱

被爆直後、火気の手締り、負傷者の収容手当などをして、校門をとじ、警戒体制をとっていたが、学校のまわりをゾロゾロと避難者が通るので、門をあけて通行者に「どこに爆弾が落ちたか、皆実町辺か?」と問うと、「みなやられている。ここら辺が一番軽い。」という。

縄田教授が二階のバルコニーに出てみると、全市が深々と黒煙につつまれていた。

これが十時ごろのことで、東千田町の寄宿舎の状況視察に、女の先生が出ていったが、御幸橋以西は火災にさえぎられて前進できず、引返して来ての報告で、自分たちの学校より外の方が大変だと知り、さっそく門をあけた。

このころ、隣の陸軍共済病院はすでに避難者で一杯になっていて、避難する場所も救護する人手もないありさまであったから、あふれた避難者がゾロゾロと校内に入って来た。

これら一般罹災者のうち、元気なものは、学校から再び、火災になっていない宇品海岸の方や、丹那の方へ避難して行った。あとに残った者は重傷者で、初めは一五〇人くらいであった。そのうち、暁部隊が来てこれらの人たちを似島や金輪島へ運んだ。

あとの負傷者はみな教室に収容した。重傷者二、三〇人だけは物理教室の大きな机をベッドがわりにして寝かせたが、このため机がベトベトになるほど淋巴液が流れたまり、剥げた皮膚が机上にへばりついていた。

これらの負傷者約二〇〇人の治療には、校内に駐屯していた暁部隊本部付の佐伯貢衛生兵長があたり、当校教職員・生徒の献身的な看護活動が続けられた。なお、校内駐屯部隊は、九日ごろ引揚げたが、佐伯兵長は一人踏みとどまって、八月二十九日までのあいだ救護活動を続けた。そのためか本人も原爆症状に苦しむ体となった。

避難者たちのうちから、最初の日に四、五人死亡し、続いて毎日四、五人ずつ死んでいき、一週間くらいのあいだに、身元不明者がほぼ二〇人くらい死んでいった。死亡する者は、重傷者よりもむしろ軽傷が無傷の人が多く死んでいき、明日はわが身かもしれぬという恐怖感におそわれた。

これらの死体は、学校事務室で被爆し、頭部にガラス片による軽傷を受けた事務職員池田実書記(元特務曹長明治三年生れ)が、もっぱらその処理にあたった。その遺骨が小高い山を作るほどになったが、池田書記は、死体の残留放射能の影響からか、下痢ををはじめ、十月十三日、南千田町三丁目の自宅ですいに不帰の客となったのである。

校内に避難して来た者のうち、重傷者ほぼ二〇人ばかり以外の避難者約一〇〇人は、行先がなく途方にくれていた人々であったが、八月十五日の終戦の玉音放送を聞いてから、どこへともなく四散した。

このように、被爆後、残存校舎は自然的に応急救護所としての役割をはたし、約三週間、職員家族その他身寄りのない生徒や外来避難者の救護と宿泊に使用された。

当初は二、三〇〇人にも達し、終りごろでも数十人の者がまだ残っていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

津山校長を中心として、職員・生徒一同が協力一致し、校内の秩序は一応保つことができたし、校舎も火災をまめがれたので、もっぱら校外の状況を知ることに関心を注いだ。

突発的な大惨事のさなか、正常な授業は到底できず、学校としての機能は停止した。

しかし、校舎が応急救護所としての役割を一応終えたあと、職員・生徒のうち、宿泊する場所がない者は校内に起居して、校舎の整理や業務連絡につとめた。

十一月五日、ようやく第二学期の授業を開始したが、十二月の休校になるまでずっと、登校者はわずかに数十人に過ぎなかった。授業はほとんどおこなわれず、校舎の応急修理や飢餓対策としての食糧生産などの作業に励んだ。

教室は、当時三年生は、終戦により動員解除になって自宅に帰ったまま、卒業式をせず、九月末付卒業証書をそれぞれに郵送したからおらず、一、二年生だけで、そのうえ登校者が少なかったため、教室不足の問題はなかったが、破壊がひどく雨や風の吹きさらしであったから、その対策に苦心した。

その冬、特に寒気きびしく、破壊された校舎では堪えきれなかったうえ、交通機関も整わず不便をきわめ、食糧不足も深刻になるばかりという悪条件が重なって、やむなく十二月十五日から翌二十一年二月十日まで臨時休校とした。

第三学期を迎えてから、登校者も漸増し、教師約三〇人、生徒約二三〇人となり、一七教室を使用するようになった。

生徒も中途退学する者が多かった。

なお、学用品や教科書は、校舎が焼けなかったのでさほど不便を感じなかった。また、海軍兵学校その他軍関係の放出・払下げなどがあったので、化学実験用資材などは、担任の三田教授がトラックに乗って呉海軍工廠へ受取りに行ったこともあった。

焦土と化した広島市内には、今や広島文理科大学なく、高等師範学校なく、高等学校なく、焼失をまぬがれた当校のみが、被爆後二か年間くらい、広島市の文化センター的な役目をした。復興しようとする市民は食糧難のうちにも、文化的なものを求めたし、また、進駐軍の将校らも原子爆弾のことを尋ねに来たりして、文化面にたずさわる多くの人々が入り出した。

一〇、その他

その他

(イ)原子爆弾の熱線による現象として、運動場に耕作していたサツマ芋その他の作物や校内の樹木の葉が、北々西の方の側、つまり炸裂した方向にむいていた側だけが焼け焦げて赤茶色になった。

(ロ)八月末か九月初めごろ、宇品に上陸した占領軍は、何隊かに分散して各方面から入市した。当校へも、丹那の方から幾分隊にもわかれて一列縦隊になり、銃を前にかまえた警戒体制をとって進入して来た。

その隊長は、いあわせた教授を案内役にして先頭に立て、市内のあちらこちらを視察した。

(ハ)終戦以後、半年間くらいアメリカ軍海兵隊が盛んに学校に来て、校内の様子をさぐった。兵隊らは勝手に占領記念物を物色し、ラジオや物理教室のちょっとした機械類とか、使っているマイクなどを持ち去った。倉庫から日章旗を見つけ出したときは、争って取りあった。

(ニ)終戦で軍隊の解散となり、宇品の暁部隊から復興資材提供の通知があったので、教職員一同が協力して、大八車で何度も、暁部隊使用の木材やタタミ・ツルハシその他を多量に運んだが、運ぶはしから盗まれてしまうありさまで、手のほどこしようもなかった。

第三項 広島工業専門学校...547

(現在・広島大学工学部)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町三丁目

校長 北沢忠男

教職員 一三五人

生徒概数 一、六五〇人

校舎 鉄筋教室三〇教室・延三九五坪。レンガ造教室四教室・延一二〇坪。木造二階建・一三五教室・延四、二八三坪

敷地面積 一七、一四〇坪

爆心地からの距離 約二・一キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島工業専門学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
海軍監督所 東洋工業株式会社 三菱機械工場	大手町 安芸郡府中町* 安佐郡祇園町*		全員七二九人		

日本製鋼所 中国配電大洲製作所 坂発電所 三菱化成工場 帝人三原工場 帝染福山工場 三菱電気工場 三菱車輛工場 ソノ田工場 新居浜化学工業株式会社新居浜工場 日本酒類門司工場 日東門司工場 東芝余部工場 東芝電気工場 川西機械大久保工場	安芸郡向洋* 大洲町* 安芸郡坂町* 大竹市* 三原市* 福山市* 福山市* 三原中 徳山市 愛媛県新居浜 福岡県大里市* 福岡県大里市* 兵庫県余部* 兵庫県網子* 兵庫県大久保				
--	--	--	--	--	--

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

校舎の一部に、海軍技術研究所研究分室(電波兵器・水測兵器の研究)が置かれ、研究員として本校の教官五人が依頼されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
残留学生の平目授業。残留中の一年生を中心にして、前項学生の約半数が登校した。		概数九二一		一年生は、四月に入学したが、八月一日が初登校であった。 三年生は九月卒業までの仕上げ教育を実施中で、一部学生は授業中であつた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊(一部大破)

当校は、爆心地から南約二・一キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、木造校舎の大部分は一瞬にして倒壊し、また、鉄筋校舎およびレンガ建校舎などの内部は、半壊、あるいは大破の被害を受けた。そのため、当日登校中であつた一年生を中心とした全校学生の約半数は、この大惨状に遭遇し、甚大な被害をこうむつた。

なお、倒壊物からの大火災はなく、電気科屋上のアンテナ塔などに発火箇所もあつたが、学生の消火作業により鎮火し、建築物の焼失だけはまぬがれた。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	一八人	六二人	
重軽傷者	六一	四五八	
行方不明者	三	五	
計	八二	五二五	

原子爆弾の炸裂時が、ちょうど授業を開始した直後のことであつたから、大半の学生は、飛散した窓ガラスや木片で負傷し、また、熱線の直射をうけた学生は火傷を負い、鮮血にまみれた。また、押しつぶされた屋根や天井の下敷きとなり、助けを求める声があちらこちらから聞え、一瞬、凄惨な地獄と化した。しかし、比較的軽傷者はこの重大さを悟り、鮮血を流しながらも、共に力をあわせて、救出作業に従事した。

重傷者は、奉安殿(現在の守衛所裏側)付近に収容し、また、歩行できる比較的軽傷者は、最寄りの赤十字病院で手当てを受けるように指示したが、同病院も被害甚大で治療するなどの余裕がないため、当校の配属将校が、陸軍共済病院(現在の県病院)に連絡をとって、随意に同病院へ赴かせた。

また、重傷者を何時までも校内に、収容しておくわけにもいかず、宇品の曙部隊に連絡し、トラック数台を借受けて広島港に運び、一般負傷者と一緒に、軍用舟艇で似島収容所に送った。

八、被爆後の混乱

この大惨禍の中では、救出作業だけがやつとのもので、他には何もできず、ましてや即死した者および重軽傷者の、名簿作成など考える暇すらなかつた、そのため、学生の所在は消息不明となつていたので、八月七日早朝、受付所を急設し、学生の顔を見るたびに、本人および知る限りの同級生や、友人関係について聞きだし、その消息を記録して、父兄の照会にこたえた。

市内および近郊の工場に動員中であった学生は、かねての指令どおり、消息を連絡してきたため、死亡者や重傷者以外は、意外に早く連絡がとれて、大半が八月十二日ごろまでに所在が判明した。しかし、一年生は四月に入学し、八月一日に初登校したので、授業を開始後、まだ一週間もたっていなかったから、学生相互に面識も薄く、被爆後は一緒に行動しながらもはっきりしないことが多く、連絡もむづかしかつた。上級生の中にも、勝手に知りすぎて随意に行動した者もあり、若干人が消息不明者の方にいられていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎は倒壊したり、大破して使用不能な状態となったため、学校再開の見通しが見つからないまま、その移転などの問題について、いろいろ協議された。

そのうち、倒壊校舎の整備を行ない、倒壊材料による仮小屋の建造がおこなわれて、どうにか使用のできる状態の教室ができあがり、三年生の授業が開始された。しかし、学生全員の授業再開は、とうてい不可能なため、他の施設がいろいろ物色された結果、呉市長の斡旋により同市広町の旧海軍第十、航空廠第二工員養成所の施設が目にとまり、借用の交渉が成立したので、昭和二十年十一月一日に当校一・二年生の学生が、この地において授業を始めた。しかし、この工員養成所施設には、教室が四教室、実習室が一教室と事務室があるだけで十分な教育もできないため、呉市の第三中学校の校舎一部と、呉港中学校の校舎一部を借用して、急場をしのいだ。当時の出席教職員は約一〇〇人で、学生数は約一、五二九人程度であったが、施設の不十分なことや、教育内容の不備のため、苦難な毎日が続き、一日も早く校舎の完成と内容の充実が望まれていた。その後、混乱状況も一段落ついて、人々が正常な姿になりはじめたころ、呉市広町仮校舎が進駐軍に接收された。そのうちに広島市の本校復興事業がようやく活発なものとなり、昭和二十二年一月、念願であった本校での授業が再開された。

[第四項 広島医学専門学校...554](#)

(現在・広島大学医学部)

一、被爆当時の概要

当時の概要

(一)所在地 広島市皆実町一丁目(元県立広島師範学校)

(二)校歴の概要

本校は広島県立として、当時の岡山医科大学清水学長が、岡山医科大学のメンバーで設立するよう文部省から委託されて、元県立広島師範学校跡の一部を校舎にし、県立広島病院を県立医学専門学校附属病院とし、修業年限は四か年・学生定員四一八人、初年度募集人員二二〇人で、入学試験は三月下旬に広島県立第一中学校でおこない、答案は岡山に持ち帰って採点した。

昭和二十年四月開校予定のところ、戦局の急迫により遅延して、同年八月五日(被爆前日)に開校式をおこなった。のち、県立医科大学に昇格、更に広島文理科大学・広島工業専門学校・広島高等学校などと共に、国立広島大学に移管昇格し、現在に至る。

科目は、当時の医学専門学校設置基準に従って設けられ、教授数・職員数も同様の内容であった。

(三)教授陣容

校長 林道倫(精神科)

教授 山崎義節(事務長兼公衆衛生学)・西田勇(生理学)・玉川忠太(病理学)・数野太郎(生化学)原爆症で昭和二十年死亡・稲田万作(解剖学)・北村直次(細菌学)・岡村岩男(衛生学)

(四)生徒数 約一六〇人

(五)爆心地からの距離約二・二キロメートル

二、疎開状況

疎開状況

八月五日午前十時、林校長以下全教職員および新入生約一六〇人が集合して、開校式を挙行了あと、山崎・西田・北村三教授らと共に、学生全員により学校の集団疎開をおこなった。

机・椅子などを馬車に積んで広島貨物駅へ運び、貨車三輛に積みこんだ。午後四時に作業終了。高田郡小田村高田原の高林坊(住職・福間最勝)へ発送する手続きをとった。

北村教授の手記「原爆日記」によれば、「丁度、同時刻にその貨物駅事務所に来合せていた砲兵大尉が、『明日、広島市に新兵器による大空襲があるとの情報が入っているから、現在、この駅に着いている野砲を、今夜中に貨車から下してくれ。』と交渉中。切迫したただならぬ空気がただよう。」とある。

午後五時、西田・山崎両教授は学生全員と広島駅に出て、学校疎開先の高林坊へ出発した。北村教授は広島に残り、五日夜は寺町の真行寺に宿泊した。

三、被爆の惨状

被害状況

皆実町の学校は、被爆により全壊したが、直前に学校ぐるみの疎開をしていたから、実害はあまりなかった。五日に広島貨物駅へ運んだ学校備品も、まだ発送されていたかったが、火災にあわず、そのまま無事に残った。

寺町の真行寺に泊っていた北村教授は同寺で被爆し、爆風で吹き飛ばされたが外傷少なく脱出、夕方牛田町ふたまた土手に到着し、多くの避難者らと共にその場に野宿。七日、広見貨物駅で学校用品の無事を確認してから、疎開先の高林坊に行った。

しかし、六日当日、残務整理のため、学校に残っていた事務職員は、すべて圧死したものである。

四、学校再開の状況

学校の再開

高林坊に疎開していた林校長以下の教職員や学生たちは、危く被爆から免れ、寺の本堂で授業を続けていた。七日に帰って来た北村教授も、八日から細菌学の講義をおこなった。

九月になって、本格的に学校再建にとり組み、林校長以下各教職員ら種々の対策を進め、広島医学専門学校の基礎を固めた。しかし、高林坊の食事は悪く、かつ原因不明の下痢(恐らく赤痢)に悩まされ、九月中旬、高林坊での授業は一応休校となり、職員・学生共に、それぞれ自宅に帰った。

県当局は、創立直後に被爆して内容極めて貧弱なままになっている当校の復旧を計り、昭利二十一年九月の県会に改善費七十万四千三百二十八円を提案し、設備の改善と共に職員の経費増嵩をはかったが、国の方針として大学に昇格しなければ廃止されるということになったので、直ちに医科大学建設委員会を組織し、これが実現を期した。

大学設置の当初計画は、賀茂郡安浦町の元海兵団兵舎を工事費約一二八万円で模様替えし、予科教室および寄宿舎として充当、更に学校本部学部および附属病院については、呉市民病院および阿賀伝染病院を、財産負債そのまま譲り受け、これに経費約二一四万円を投じて整備することとして、文部省との折衝を進めた。これが、現在の広島大学医学部となった。

なお、病理学の玉川忠太教授は、被爆負傷者の多数収容されている通信病院において、昭利二十年八月二十八日から十月十三日までの間、二九体の屍体解剖をおこない、原爆症に関する貴重な研究資料を得た。

[第五項 広島女子高等師範学校および附属山中高等女学校...558](#)

(現在・広島大学教育学部福山分校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町六六六番地

校長 松尾長造 附属山中高等女学校主事 広幸亮三

教職員 五四人

生徒 広島女子高等師範学校 一二〇人

附属山中高等女学校 一、四三二人

校舎 木造二階建・延二、八二五・六〇坪

(内訳)

教室四〇 九五五・五〇坪 木造

講堂 一 一四三坪 木造
体育館 一 一八九坪鉄筋コンクリート建
その他 九一九・一〇坪
寄宿舎 四五二坪
記念館 一六七坪
敷地面積 七、九七七・七七坪(道路改修により減ず)
爆心地からの距離 約一・七キロメートル

広島女子高等師範学校・附属山中高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、沿革概要

沿革概要

明治二十年十月二十七日、千田貞暁県知事など官民有志が発起人となって、広島高等女学校(本科三年・予科一年半)の設立発起人会が開かれ、校主に山中正雄・校長に千田県知事夫人蘇茂(そも)が推薦され、同年十二月六日、設立認可を受けた。

校主山中正雄は「嘉永元年六月八日、本県佐伯郡五日市海老塩浜に生る。家世々里正を職とす。明治初年東都に遊び、英漢法律の学を修め、後、広島に帰って弁護士を業とす。夙に女子教育の必要を感じ、明治二十年十二月本校を創設、爾來是が経営に努力し、校運の進展を図る云々(山中正雄翁頌徳碑正三位男爵浅野養長選書)」と、あるとおり、早くから女子教育の必要を感じ、千田知事に対して、県立の教育機関を設けるよう進言した。知事は、当時、宇品港築港の大事業に取り組んでいたから、山中正雄個人が設立を進めるようにすすめ、県は協力をおしまないと激励した(山中二雄未亡人トシ談・八九歳)。

当校は当時、広島における高等女学校の嚆矢であるとともに、全国を通じて第三番目に設立された女子学校であった。

明治二十一年一月十一日、広島市天神町の民家を仮校舎とし、開校式を挙行。生徒定員二五〇人、入学生七〇余人、松岡ミチが学監に就任。

同年二月十五日、広島市新川場町正清院に移転。

明治二十二年四月十日、初めて専任教員をおく。

明治二十三年一月五日、千田知事が新潟県知事に転任となったので、校長千田蘇茂が辞任、松岡ミチが校長事務代行。このころ、世間は欧化主義の風潮に流れ、入学志願者が激減し、登校生も二十数人という不振をまねいた。

明治二十七年四月一日、学則を改正し、本科(四年)、予科(二年)、別科(二年)、小学教員必須科(六か月)の課程を置く。小学教員必須科の設置は、師範学校女子部が廃止され、小学教員養成の道が絶えたから、県当局の勤めによって兼設された。

明治二十八年、高等女学校令発令により、学則を改正、小学教員必須科を廃し、補習科(一年)別科を廃し、技芸専修科(二年)と改める。

明治二十九年、卒業生をもって校友会を組織し、春秋二回会同、年一回会報を発行することとなった。三十七年に橘香会と改称。

この年、県費補助を得て、広島市小町に敷地六〇〇坪を買収、校舎二棟、寄宿舎一棟を新築。

明治三十年四月一日、新築校舎に移転し、六月二十七日に落成式を挙行。十一月に小学校裁縫科教員講習科(六か月)を設置して成果をあげた。

明治三十二年四月一日、高等女学校令に準拠して学則を改正、本科(四年)、補修科(八か月)、技芸専修科(二年)とする。生徒定員四〇〇人となる。

明治三十四年四月一日、高等女学校令施行規則により学則を改正、裁縫教員講習科と技芸専修科を合併(年限二年)する。

同年五月二日、校名を私立広島高等女学校と改称(この年、県立広島高等女学校が創設される)。

なお、県費補助を得て、校地三、余坪を国泰寺村(現千田町)に買収し、校舎増築を決定した。

明治三十五年四月一日、新築校舎に移転、生徒定員六〇〇人に増員。

同年六月十五日、松岡ミチが校長に就任、職員生徒をもって学友会を組織する。

明治三十六年一月四日、本年度から三十八年度にわたり、広島市費補助を受け、校舎新築拡張にともなう財政難を緩和した。

明治四十二年十月二日、山中校主、および松岡校長が教育功労者として藍綬褒章を受けた。

大正二年四月一日、実科を廃し、本科補習科のみとする。十月二十一日、定員八 人増加が認可される。

大正六年四月一日、校歌を制定。

大正八年九月五日、校名に私立の冠用文字を削除し、山中高等女学校と改める。

同年十一月十五日、校主校長山中正雄が死去、同月二十一日に誓願寺で校葬を執行、同年十二月十六日、校主に山中二雄が就任する。

大正九年七月五日、梅林寺勝三が校長に就任。

大正十年一月十七日、生徒定員一、 人増加が認可される。

同年十月十三日、財団法人山中高等女学校の設立が認可になり、山中二雄が理事長に就任。

大正十一年十月十日、洋式制服、および校章を制定。

大正十二年一月三十日、前校主夫人山中サキが死去、校葬。

大正十三年三月十五日、生徒定員一、二〇〇人増員認可される。

大正十五年一月二十八日、梅林寺校長退職し、同年九月九日、東原信之助校長に就任。

昭和三年十月十八日、天皇陛下御真影を仮に下賜される。

昭和五年十月二十六日、生徒管絃楽部が創設され、公開初演をおこなう。

同年十一月一日、校歌を制定。

昭和六年二月十日、天皇皇后両陛下御真影を下賜される。

同年十一月四日、明治神宮競技大会において、生徒石津光恵が円盤投げの日本新記録を樹立。

昭和七年三月十一日、教育勅語を下賜される。同年六月十七日、石津光恵が第十回オリンピック・サンフランシスコ大会に出発。

昭和八年一月八日、卓球部が全国大会で優勝。

昭和十二年十一月十五日、創立者山中正雄先生頌徳碑の除幕式をおこなう。題字従一位侯爵浅野長勲書。

昭和十三年十一月二十日、理事長山中二雄が死去、二十二日講堂で校葬を執行。

昭和十四年一月十八日、山中トシが理事長に就任。同年十二月二十六日、東原校長が退職。

昭和十五年二月九日、山中トシが校長事務取扱いとなる。同年十一月一日、佐々木信次が校長に就任。

昭和十六年五月二十二日、生徒勤労報国隊を結成、同年七月には学友会を橋報国団と改組。

昭和十七年三月、学則全条を改正。

昭和十八年四月一日、新たに高等女学校令が発令せられ、全教授要目を改正する。補習科を専攻科と改称。生徒数一、四一四人。

昭和十九年十月、本校の校地・校舎・校具をすべて国家に寄付する申請をし、同年十二月十五日、内閣閣議において受理が決定される。同時に、広島女子高等師範学校の創設を決定。

昭和二十年三月三十一日、山中高等女学校を廃止、五七年の光輝ある私学の歴史は、ここに幕をとじた。

開学以来、その教育方針として「柔而剛」の精神を貫き、日本女性の資質の向上につとめ、卒業生は実に一万三、 余人に達し、国内はもとより、世界各地において広く活躍している。

廃校に際し、在校生はすべて、広島女子高等師範学校附属山中高等女学校に、勤労働員のまま移籍すると共に、同年五月二十日、初めて一学年一二〇人を募集、入学が決定された。

同年七月二十一日、入学式。ただし鉄道寸断されて、新入生の登校はかどらず、毎日の授業ができなかった。

八月五日、日曜日に巖島神社前で報国団結成式を挙行。

翌六日は、最初の授業をする予定であった。

なお、全学あげての滅私奉公であり、教員、生徒ともに疎開などすることはなく、また、学校自体の避難先など考えられず、避難対策はもっぱら、各人の動員先の指示に従うことになっていた。

なお、校内に軍隊が駐屯することはなかった。

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
第二総軍司令部	本校校庭	約一五人	約一〇〇人	暗号班訓練	
日本製鋼所広島工場	安芸郡海田市町		約一〇〇	疎開跡片づけ	責任者 中村道枝 田中懋徳 平井栄一郎 } 各教官
建物疎開作業	雑魚場町	三	一年生一二〇 二年生二四〇		
三菱重工業広島工場	南観音町		不明*		
三宅製針株式会社	天満町	一	約一九(推定)	信管製作・六日は 防空壕を構築中	責任者 林やす子教官
倉敷航空機吉島工場	吉島町		約二一〇	旋盤・仕上げ	研磨など各種作業
山陽工作所	皆実町		約五〇		
陸軍糧秣支廠	宇品町		約二二〇		
合計		約一九	約一、〇五五		

四、最初の授業の日

「原爆記千代紙の小箱」(星野春雄著)には、緊迫した当時の状況を次のように伝えている。

「(その前夜)

私は、コツコツと靴の音をたてながら、灯火管制されている暗い街を鷹野橋から、己斐の方 - 西方 - へ歩いていた。その晩は、本年四月創設せられたばかりの広島女子高等師範学校の教授たち六人を、同校の土地建物の寄進者山中トシ女史が、学校将来の発展を祝福して、豪華な宴を催して饗応してくれたのであった。最早や、夜も更けて、市電もなくなったため、私は、三里の道をこれから歩いて、一睡の安眠を求めて帰ろうというのである。

住吉橋のたもとにさしかかると、橋の向うに人声がする。私が、そこへ着いた頃には、その人声は、更に前方 - 西方 - へ進んでいた。

突然闇の中から男の声

『どこへ行く』

見ると夜警の者らしい。

『家へ帰るんです。』

『どこへ勤めている。』

『広島女子高等師範学校』

『はあ、さようですか。どうも此頃ね、家を留守にして郊外で野宿するものがふえてね。それこそ焼夷弾一発落ちても、もう...』

『そうですが。困ったことです。ご苦労様で...』

私は、急ぎ足で進んで行った。そして、すぐ前に行く人群に近づいた。見ると、まるで荷物のかたまりが動いているようだ。二、三人のおかみさんと、その子供たちの一団だ。子供は子供なりに、それぞれの荷物を背負って、トボトボと歩いている。

『ねむいよう.....お母ちゃん』

『さっさとお歩きよ。この子ったら...』

『...』

私は、歩度を早めて、追越して行った。

街のあちこちから、十二時を報ずる時計の音が、静かに流れてくる。

(地獄行きの電車)

朝は五時に起きた。一時半頃帰ったので、漸く三時間半の睡眠をとったわけだ。まだ眠気が体中に満ちてはいたが、今日は広島女高師創設最初の授業をするというので、相当緊張をしていた - 私は、実践女学校前停留所で、宮島電車に後方から乗った。電車は、超満員であった。左は山、右は海、絵のような景色が、毎日ペールをとりかえて現れる。山際には、暁部隊の兵士たちが、洞窟陣地を作っている。この付近は、海と川とが迫っていて、漸く幅一メートルしかない。そこへ、山陽線と、この宮島電車線と、国道の新旧二線が通っている。その上に洞窟陣地を作っている。恐らくこの狭いことが、一ノ谷にも比すべき要衝なんだろう。出てきた岩石の量から考えて、相当人規模のものらしい。

右の海には、安芸の小富士と呼ばれている似島が、コバルト色の霧をたなびかせて、そのきれいな姿を見せている。広島は、褐色に包まれて、三菱造船所のクレンの頭が、その中から見える。鏡のような静かな海には、白いカモメが五つ六つ、羽ゆるやかに飛んでいる。

超満員電車は、運命の神の嘲笑も知らぬげに西広島駅へすべり込むように入っていく。私は、ここで市電に乗りかえて三〇分、電鉄前(千田町)で下車して学校へ急ぐ。

『お早う』

附属女学校の可愛い一年生たちが、雑魚場町の疎開作業へ行くのに会う。私は、教授法研究のため、数時間授業をしたことがあったので、よく生徒たちを知っていた。私が、激励してやると、ニコニコとして、はにかみながら通っていく...という、いつもと同じの朝の風景であった。」

五、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
一、学校創設最初の授業日。教室は二階裁縫室で各科合併授業。 二、県から動員学徒のことについて協議のため来校予定。	約一五人	八一人	第二総軍暗号係兵士・人員不明	勤労働員に行きたくない生徒を、事務室で二、三人使う。

六、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況...全壊全焼

当校は、爆心地から約一・七キロメートル離れたところに位置している。

六日朝、校庭に整列した生徒八一人は、いつものように軽い体操をし、立花達子教官の指揮のもとに、簡単な朝会をすませた。生徒らはサッサッと二階へ上がって行った。

第一時間は、広島女子高等師範学校創立最初の授業だから、多人数が収容できる二階の裁縫室が使われ、各科合併で学校長が授業することになっていた。附属山中高等女学校の生徒は、階下の調理室にいたが、料理の手伝いをする者や、哨空係の生徒たちは、まだ校庭にいる者もあった。

運動場では、第二総軍の暗号係として、内地戦にそなえ、近く動員される附属高等女学校の四年生約一〇〇人が、朝会のあと、訓練がはじまる前の数分の時間を惜しんで、元気にはしゃいでいた。

教職員約一五人は、朝会を終るとそれぞれの自室に入り、汗を拭く者もあったし、仕事に取りかかろうとしている者もあった。

そのとき、原子爆弾が投下された。

この一瞬の惨状は、星野教授の原爆記(前出)によると、次のようであった。

「突然、ピカッ!と光った。

この時、微かな衣ずれのような音を感じた。 - 羽目板の焦げる音? -

窓から外を見ると、楠木が光っている。あの葉一枚一枚が、キラキラと光る。玄関の側面にぬってあるコンクリートが、青白く照らし出されている。玄関の屋根裏まで、皎々と光っている。目がくらむ程だ。

来た! 焼夷弾!

エレクトロン焼夷弾が、窓のすぐ外側に落されたと誤解した私は、反対側へ逃げる。そこには、あたかも私をはばむが如く机と椅子が、行手を塞いでいた。思わずたじろぐ。光る窓を振り返りざま、更に新しい方向に、一步をふみ出そうとしたその一瞬、非常なショックと共に真暗になってしまった。と同時に、バリッとこの部屋の北の方の天井付近に、何か強い破裂音の幻覚を感じた...

炸裂の一瞬、校舎の屋根組はほとんど壊れないで、合掌造りのままで倒壊した。

つい今まで目前に整然と建っていた校舎が、完膚ないまでに打ちのめされていた。校内は古材の山と化し、飛散した瓦やガラスの破片が運動場一面をおおった。明治以来、わが国の子女薫陶に多大の功績を積んだ由緒深い学校の痛ましい終焉であった。」と、伝えている。

(二)人的被害

(在校生の状況)

山中トシ前理事長は、寄宿舎の土間で舎監や看護婦などと、病気になった炊事委員の交替の件について相談してい

るときであった。理科教室か裁縫室が光ったと直感した瞬間、建物の下敷きになったが、傍にいた女中に助けられて運動場に脱出することができた。

二階にいた女子高等師範学校の生徒も、階下にいた附属高等女学校の生徒も、倒壊した校舎の中で、木材や壁土、屋根瓦の間にうつ伏せ、あるいは横向きになって全身をおさえられ、ガラスの破片や木片で負傷し、血まみれになった。助けを求め叫び続ける声々。その声もいつしか出なくなり、そのまま死んだ生徒もいた。しかし、星野教授や幾人かの生徒は、自力で脱出することができた。ある生徒の体験(前出書)では、

「ピカーッ - 異常な光りが目をかすめる。私は、腰掛の上を素早く通り越して、机の下へ入ろうとしたが、腰掛が思うように動かない。もどかしいと思った瞬間、ガラガラガンと音がして、たちまち真暗になってしまった。

気がついた時は、私は、身動き一つできない体でした。木切れ・板切れ・土・瓦・あらゆるものがしっかり私を埋めつくしている。鼻の先・口もと・すべて瓦の割れと泥、幸いに呼吸だけが、僅かにできるのです。

あっ。そうだ。火！きっと来る。焼け死ぬ。いやだ。たとえここで今、もがき苦しんで死のうとも、ゆっくりシワリジワリと焼かれて死んで行くのはいやだ。私は、渾身の力をこめて、もがいて見た。右手の小指と、左手の手頸が、ほんの少し動くことがわかる。動かそうとすると、左手の手頸は、たまらないほど痛む。私は右手の小指を、全力をこめて動かして、次第に泥にゆとりをつけ、くすり指・中指・人さし指と順に動けるようにして、ついに右手の手頸の自由を得たのです。この時間はわからない。 - おおよそ二時間か - 左手の救出にとりかかる。右手で次第に掘ってゆくと、左の手頸にあたった。ぬらりとする、血だ。ほとんど直角に曲げられている。まもなく両手の自由をかち得た私は、体の横・下・背と順に木片を抜きとって、ついに這い出ることに成功したのでした。待避所に行き休んでいると、油断をしたらしく、ついに意識を失ってしまった。」

と、その様子を記している。

しかし、雑然と積み重なった倒壊物の下敷きになったままの生徒が、まだたくさんいた。脱出した教職員がそれぞれ力をつくして、救出作業にあたった。

このころ周囲の状況は「風は次第に強くなって、ついに五メートルから七メートルぐらいの強風となってきたのであった。普通の風と違って、息がない。吸い込むようにスーッと吹く。空には、積乱雲が、ムクムクと、うごめきながら昇って行く。青空との境目が、目の痛いほどクッキリしている。市の中央部は、紅蓮の炎が、高く昇って、どす黒い毒血が、たぎり立つようである。すぐ手前の広島赤十字病院が、純白の壁をくっきり浮び出している。窓は、鉄わくもろとも、こちら側にぶら下がっている。風上三〇〇メートルほどの所にも、火が出たらしく煙が立ちのぼっている。思わず身振りする。これは致命的な火だ。この強風に乗ったら、すぐ焼けてくる。西の方の河岸にも火が出た。必死の努力をしている人が、手にとるように見える。風音にまじって、パチパチと柱の燃える音が聞えて来る...。」というせっぱつまった最悪の事態が迫っていた。

それに救出作業は思うにまかせず、星野教授は、非常の際、女子高等師範学校へは、広島文理科大学から、兵隊が派遣されることになっていたもので、急いで救援を求めに行ったが、大学はすでに一面火の海であった。軍人は居そうになく市役所へまわったが、惨害はさらにひどく救援どころではなかった。手あたり次第に学生・巡查・若者などに救援を依頼した。学生や巡查は一応色よい返事をしたが、すぐには来なかった。それぞれのつびきならぬ立場にいて、来られなかったのである。

もはや、学内のことは学内のものでやるほかなかったから、助けられるだけ助けだそうと全力をあげた。

脱出した教職員らは、わが身の負傷もかえりみず、死力をつくして救出作業にあたったが、救出機具もなく困難をきわめた。その状況を星野教授は続けて、次のように記述している。

『おい、どこにいる？』

奥の方で、黒いものが動いている。私としては、目的物と、通路の幅を、十分見くらべておく必要があるのだ。

『おい、どうした』

暗さになれて、気がついて見ると、眼だけギョロリと光っている。

『出て、もいいですか』

『待て待て』

私は、十分検討してから、テコの応用をした。

『さあ出よ』

ゴソゴソと、音がして来る。途中で左へ曲ったらしい。出る側から見れば、こちらが明るいから、よく分るのだろう。漸く出る。

今度は頭からだ。足からは、コリゴリだ。泥のかたまりに毛の生えたような頭が、次第に上がってくる。私は、たまらなく嬉しい気持ちであった。しめ、しめ、この調子、この調子。救助法の発見の嬉しさが、助けを呼ぶ声々に結びつくのだ。

生徒は、頭を出し、順調に出られるかに見えたが、急に出られなくなってしまった。

『オヤ！変だな？』

水平なトンネルから垂直な出穴への曲りを考えなかったのかな？また失敗か？

『おい出よ、出よ』

やがて腰のあたりまで出た所で、全く出られなくなってしまった。

『どうした？』

私は、暗い、イライラした気持ちで促すように尋ねる。どこか痛いらしい。よごれた顔をしかめている。

「頑張れ！どうした」

私は、抱えるようにして引出した。

『えッ！』

驚いた。太股の筋肉が、斜に切れて、大腿骨が白く見えているではないか。柱の角で切ったものらしく、つぶしたような切れ方だ。

片輪になるのかな、気の毒にも。

つと頭をそんな感じががすめる。更に引用すと、その脚には、足先がない。

『オヤ！変だな』

そこには、白いスリコギ型の骨が、二〇センチメートルほど出ている。よく見ると、私からはちょうど見えない下側の方へ、足先だけがブラ下がっているのだ。かがとから、ふくらはぎのところまで皮膚が破れて、白い骨がにゅっと出て、その皮や筋肉で、かがとから先の部分が、ブラさげられ、その足先の部分が、私のズボンのところへ、軽くバサバサと触っている…。

まったくこのような正視に堪えられない悲惨な光景が、各所で繰りひろげられた。

小泉正雄教官は、他の地方で戦災に遭い、教職をやめて本校に来任し、手続き中の人であったが、ピカッと光ったときに生徒課から飛び出したところへ、裁縫教室が倒れかかって来て下敷きとなった。そのため骨盤破壊、尿道切断という重傷を受けた。

すなわち閃光があってから、爆風が校舎を吹き倒すまでの二秒ほどの間に、小泉教官は約一二メートル走ったのであった。小泉教官を押しつけている柱を、原・有馬などが必死で取りのぞくと、女子高等師範学校新入生であった杉山滋子が背負って校外へ脱出し、似島の収容所へ送った。

杉山滋子は体格がよく、健康優良児の候補になったほどであったから、小柄の小泉教官を背負うことができたのであったが、翌二十一年ついに原爆症により死亡した。

小泉教官は、被爆二年後に全快して教職に復すことができ、今(四十三年)も健在である。

動員学徒の惨状

(動員学徒の状況)

市内雑魚場町付近では、早朝から建物疎開作業がおこなわれていた。一年生一二〇人、二年生約二四〇人も出勤してこれに参加、約六万坪といわれる防空用地を作る整地作業をしていた。生徒は一割ぐらい欠席していたようである。七時五十分ごろ、出席者を調べて、一斉に作業に取りかかった。倒された家屋のあちこちに、生徒たちは一列にならんで、掛声をかけながら、瓦の手送りに励んだ。

白い短袖シャツに、白っぽい腕をむき出しにして、兵隊がロープで曳き倒した家屋の、あと片づけの作業に取りかかったところであった。

突如、パッと光った。

たった今、元気に掛声をかけあって作業していた生徒たちは、一瞬、灼熱の放射能線によって打ちのめされた。続いて強烈な爆風が襲来した。作業場は一転して残忍きわまりない修羅場と化した。

引率者の田中懋徳・平井栄一郎・中村道枝の三教官と、生徒は約三六〇人のうち鎌田律子一人を残して全員が生命をうばわれた。

鎌田律子の体験

私が、潰れた屋根に上がって、瓦運びをしていると、急にパッと光りました。私は、急いで伏せました。私は、どうしてこんなに早く伏せたのか自分にも不思議なほど素早く木と木の間に伏せていました。空には、星のようなものがやや斜に降りました。急に何か匂うたので、手で鼻と口を押えて、息をとめていると、爆風と共に、真暗になってしまいました。

クラスの人たちは、泣いたり叫んだりしていて、大分様子が変わったから、私は立ち上がりました。そして、友だちと一緒に逃げてきました。

私は、急に太陽が無くなったのだと思いました。途中には、倒れた家もあり、その他いろいろの物があるので、友だちは、それにつまずいたり、たおれたりして、途中で一緒に来られない人も沢山ありました。皆、大声で泣きながら走りました。

ほんの少し明るくなったので、他の人を見ると、他の人は裸になってしまっていました。皆、着物は焼けおちてしまって、ブルマーだけになっていました。下を見ると、電車のレールが見えたので、私は、此处でクラスの人と別れて、宇品の方へ逃げました。

他の人は、少し明るい方へ、逃げて行きました。鷹野橋のところで、初めて太陽を見ました。貯金局の前には、沢山の貯金通帳が落ちていました。ここで星野先生に会いました。途中、馬の倒れているのも見ました。男の人が、腹を潰して倒れていました。(以下略)

引率者中村道枝教官は、「五、六歩歩いて倒れられた」「いや七、八歩だそうさ」「生徒が、両側から先生を助けて、東の方へ逃げたそうさ」「いや先生が、生徒を二人抱えて東の方へ逃げた」という噂のほかは全く不明である。

同じく田中懋徳教官は、作業場の被害と、生徒の避難状況報告のため、学校へ到着してから、次第に視力を失い、体力も衰えて、五日後に、佐伯郡廿日市町の収容所で死んだ。

また、平井栄一郎教官は、数人の負傷した生徒を引きつれて、南方に脱出、のち陸軍共済病院の土間に倒れていたのを、他の工場に出動中であつた生徒に見つけられ、宇品の陸軍糧秣廠に収容されたが、翌晩ついにこの世を去った。

灼熱のルツボの中から脱出しようとする生徒の一部は、泣き叫び、苦しみ走り、暗黒の中で、声を頼りに寄り集まって、みずから一隊を作って西に進み、白神社のやや南方の電車通りに出ることができたが、そこは、不幸にも、爆心地へより近い地点であつた。

この時、宇品の方へただ一人別れて逃げた鎌田律子のみが生き残って、唯一の証言者となった。

屍体の位置から考えて、近所の県立広島第一中学校のプールへ向つた生徒もあつたようである。中には、そのプールに達しないで、求める水も口にしないまま、途中で息絶えた生徒もあつた。その後、広島赤十字病院・似島などで数人の生徒が見つけれただけである。

一方、己斐上町の三菱重工業広島工場の疎開先に出動していた生徒たち(人員不明)は、六日は男子工員や県立広島第一中学校の三年生たちが、工場を休んで土橋の建物疎開作業に参加したので、女子生徒も休みとなり、草津の海岸へ水泳に行くことになっていた。

一同は防空壕付近に集つて、昨日工場から配給でもらつた千代紙の小箱 - 千代紙を貼つたきれいな小箱、あけると中から次々に小さな小箱が、いくつも出る - を開けてみたり、頼ずりしたりして、広島街を眺めながら、引率者の教師の来るのを待っていた。

その時、一瞬の閃光におそわれた。同時にグワンと強い衝撃を受けた。思わず伏さるもの、防空壕に逃げこむもの、あるいは、裏山のビワの木の下の方へ逃げていった者もあつた。

裏山へは道一面に落ちているスレートや瓦のあいだに、ガラスの破片が無数に光っていた。見ると太陽の形相が変わっており、ちょうど、日蝕のときのように毒血のドス黒い塊となって、底気味悪い光りを放っていた。

あたふたと坂道を力いっぱいあえいで登って行くと、重油のような黒い雨が降り出し、白いシャツの上に、はつき

りとあとをつけた。

冷静なある生徒は、持っていた水筒の水の上に、雨つぶを落してみても油でないことを知り、「油をかけて焼くのではないか」という、みんなの恐怖を打ち消した。

この裏山へ逃げて来た生徒たちのほとんどは、ガラスや瓦の破片で、ひどい負傷をしていた。山の横穴防空壕にもたくさんの者が避難したが、火傷でむごい形相の人々が、坐ったり、横になったり、仰向けになったりしてたくさん並んでいた。

また、天満町の三宅製針株式会社に出動していた生徒約一五人(推定)は、信管のようなものを作っていた。

近く、三菱工場の方へ動員の切替えがあるということで、引率責任者の林やす子教官は、工場内を一巡して生徒たちを励ましてから、階上の控室で鉛筆を削っていたという。一部の生徒は、防空壕を掘っていた。

ピカッと光った。青白い不気味な強い光線であった。何だろうと思う瞬間、もの凄い音響と共に、猛烈な爆風がすべてを吹きとばした。窓ガラスが木の葉のように破れて襲いかかった。工場は倒壊し、みんなその下敷きになった。周囲はまっ暗のなかで、友人の名を呼びあい、必死で脱出しようともがいた。

助けてーと下から叫ぶ声がきこえる。火があちらこちらにチョロチョロと燃えはじめ、異常な早さで広がっていく。

辛うじて脱出した生徒益旧ミツアは、二、三人の友人と一緒にその場を逃げだす。どこをどう逃げたかわからない、福島橋にたどりつき、満潮の川のなかへザブンと飛びこんで泳ぎわたる。陸へたどりついて一目散に逃げ続け、己斐の山まで辿りついたとき、大粒の重油のような雨が降りはじめた。寒くて仕方がなかった。

しかし、この工場に出動していたほとんどの生徒は死んだのであった。引率者林教官は後日、焼跡から遺骨が発見された。肩の一方が上がっていたので、骨格も特徴があって確認された。

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	五(四)人 不詳	三九九(三七八)人 不詳	(動員関係の被爆死亡者内訳) 第二総軍司令部 二二 倉敷航空機吉島工場 九 日本製鋼所広島工場 七 三菱工業広島工場 一二 陸軍糧秣支廠 二 山陽工作所 二 三宅製針株式会社 一八 建物疎開作業 三三三 ()内は動員先での被爆者数
計	五(四) 判明分のみ	三九九(三七八) 判明分のみ	教職員および生徒計 四〇四人

七、被爆後の混乱

倒壊校舎の下敷きになった生徒は、すでに下半身は押しつぶされて死んでいるのに、上半身だけ生きていて助けを呼んでいたのか、やっと助け出されると死んでいく生徒もいた。火の来ないうちに助けようと、何人めかの生徒に取りかかっているとき、救援の兵隊五、六人と、広島高等師範学校の元気な生徒が来た。兵士たちは女子高等師範学校の生徒を救出し、広島高等師範学校の生徒は附属山中高等女学校の生徒のところを救出した。

校庭の待避所付近には、町内の人々も避難して来たが、負傷者を軍のトラックが来て他へ運んで行った。救出された生徒は、出ると急に血色を失って、待避所に収容されると、まもなく死ぬる者が多かった。

教官や救援隊(兵士・広島高等師範学校生徒)の必死の作業により、横倒しの防火壁の圧死者を残し、午後四時ごろ、一応救出作業を打ち切った。

火災発生

今までの南風が南西風になり、風速五～一〇メートルの西風になると共に、火災が押し寄せて来た。爆風で敷地西方堤防に二メートルの高さに積まれていた綿ようのものに、夜になって火がついた。二、三人で約二〇メートル離れた川の中へ、何度も着火した部分を取っては捨てたが、小さい綿毛は再び赤くなり、風にあふられてポツと火になった。遂に防ぎきれず火事となった。火は大破した寄宿舎をなめつくし、体育館に移り、つぎつぎ全校舎を火災につつんでいき、翌朝まで燃え続けたが、炎上して灰になっていく校舎を、じっと見守って立つ山中トシ前理事長の黒い影が、神々しく思われた。

受付所設置

翌七日、運動場のまん中に積んであって、火災からまぬがれた配給の生徒用機の材料を利用し、トタン板・焼釘・電線などを拾い集めて、バラックの受付を建てた。

まだ、完成しないうちに、雑魚場町で疎開作業をしていた附属山中高等女学校の一年生・二年生の父兄たちが多く訪ねて来た。

しかし、引率教官は行方不明(後死亡)であるし、話しようがなくて応接に困った。そこへ附属山中高等女学校の広幸主事が新任されて来着し、ただちに活動したが、後日、同主事も原爆症に罹り、生死の間を彷徨する身となった。

被爆した生徒たちは、いったん収容された所から、さらに他へ転送されたりして、その分布区域は、十里・二十里・あるいは瀬戸内海の島々へひろがって行き、到底連絡のできないものとなった。屍体も、氏名不詳のまま処理されるので、行方不明の生徒の出たのもやむを得なかった。

死体処理

なお、この日兵隊が来て、死体を収容し、寄宿舎跡の向う側の防空壕を利用して、火葬をはじめた。夜も昼もなく約二週間ぐらい続けたが、夜はその火炎が皎々として周囲を照らした。

一方、安全地帯へ避難していた女子高等師範学校の生徒たちの一部が、バラックに帰って来て、中には親もとへ帰らず残って、応接や連絡の仕事を手伝うものもいた。

こうして、一両日が過ぎるうち、焼跡に散乱している白骨を、できるかぎり集めて、防空壕のなかに安置した。

防空壕には、無残な姿となった生徒が、他の収容所から、バラックを訪れて来て一泊したり、休憩したりして、それぞれの郷里へ帰っていった。

数日後には、収容していた負傷者の数も減ったが、三阪看護婦は最後の一人まで、われを忘れて救護につくした。

なお、六日当日、生徒が避難していった主な場所の一つ吉島飛行場では、元気な生徒はその日のうちに帰った者もあり、翌朝、己斐行きのトラックに便乗して帰った者などがあったが、重傷者は、二十日ごろまでここで治療を受けた。

もう一か所似島へも多数避難していったが、ここからさらに宮島・金輪島・小屋浦・大竹などへ転送されたから、似島には長くいなかった。

八、学校再開の状況

学校の再開

八月十五日、終戦となったが、バラックで被爆後の処理にあたっている教職員には、目前の生徒たちの治療と、新しい校舎を得ることが急務で、そのほかのことは考えられなかった。

附属山中高等女学校の教官は、四八人必要であったが、退職者や被爆死亡者で、わずか一人となり、授業の再開などおぼつかないありさまであった。

その後、広島女子高等師範学校は、県下の高田郡吉田町へ移転した。吉田小学校の一部と、小田村の広島高等師範学校の修練道場の一部を借入れて応急校舎としたが、同年十二月、さらに呉市の東方安浦へ再度移転した。

しかし、ここが火災にあったため、福山の現在地に三たび移転した。

のち学制改革により、広島大学の発足と共に、男子の師範学校と合併して、広島大学福山分校となり現在に及んでいる。

第六項 広島高等学校...582

(現在・広島大学教養部)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市皆実町三丁目

校長 安藤祐専

教職員 三二人

生徒 概数六八九人

校舎 木造二階建・四五教室および木造寄宿寮四八室・延五、三五一・〇九七坪、鉄筋教室一と鉄筋講堂・延三〇八・〇五〇坪

敷地面積 二〇、〇四八・九八 坪

爆心地からの距離 約二・七キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島高等学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
日本製鋼所広島工場	安芸郡海田町	一〇人	約一二〇人	12 cm二連装高角砲の組立 25 mm機関砲弾の製作 15 cm砲弾の弾体製作	引率者・生徒主事 森義考教授
東洋鋼板下松工場	山口県下松市	—	約二八	高熱の鉄板をガラス炉から 引出し、圧延ローラーにかけ る作業 Cold mill にするジュラルミ ン圧延作業	引率者 真鍋義雄教授
呉海軍工廠	広島県呉市	—	約一三〇	高角砲の組立、水雷部におけ る人間魚雷の胴体削り作業	引率者 教官が交替で勤務
合 計		一二	約六二〇		

四、指定避難先と経路

広島高等学校の運動場

五、校舎の使用状況

陸軍安芸部隊の通信連絡班約二〇人が、寮の一部に駐屯して、隊長岩田中尉指揮のもとに、本隊(高知県)との連絡を任務としていた、なお、軍用物資などの集積はなかった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業実施せず。学生全員が動員出動中であつたが、身体故障で出動しない学生は、校内作業に従事していた。	二人	約六〇人	陸軍通信部隊 約二〇人	教官二人が交替で学校に宿泊し、防衛警備に当たっていた。原爆炸裂時には朝礼をおこなっていた。

七、被爆の惨状

(一)校舎の被害状況...一部全壊、その他大破・半壊

被害状況

当校は爆心地から南々東約二・七キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、校舎の一部には全壊したところや、大破または半壊などの被害を受けたところがあった。

炸裂後、化学実験室の実験台にあつたアルコール瓶から流れ出た液が発火して、室内備品などに延焼したが、発見が早く消火することができた。校舎の被害内容はつぎのとおりである。

全壊校舎 = 雨天体操場・銃器庫・柔剣道場・生物教室・学生ホール・生徒控所・寄宿寮(六棟の中で五棟全壊)。

半壊校舎 = 校舎本館・別館・図書閲覧室・炊事場・食堂・弓道場

大破校舎 = 音楽堂・物理教室・化学教室・寮事務室・宿直室・寄宿寮一棟

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(四)人	(約二四)人	()内は学校外特に動員先での被爆者数
重軽傷者	(五)	(約二)	
行方不明者		(約一六)	
計	(九)	(約六〇)	

学徒動員により出動中の学生で、日本製鋼所で勤務していた一部学生(約二〇人)は、六日当日、工場の電休日で作業休止のため、工場寮(安芸郡海田市町)から皆実町の本校へむかう途中の、広島駅付近や紙屋町付近において、炸裂に遭遇し、多数の犠牲者を出した。学生の中には、重傷の身でありながら、学校にたどりついた者もあったが、帰りつかずいずれかに逃げのびた者も多数にあった。学校にむかって逃げて来た者の中には、校門を入ると倒れる者、皮膚を焼き、裸体同然の姿で校内を彷徨する者もあって、凄惨な状況を呈した。学校は重軽傷者のために、大破した寄宿寮の第一寮の一部を応急救護所に切替え、生徒主事ほか数人の職員が火傷者に鯨油を塗って手当てをした。また死

亡者は、ゴザに巻き、穴を掘って火葬にしたが、負傷や火傷で姓名不詳の者もあった。また、教職員の家族の中で死亡した者も多く、学校に収容した後に、火葬にするなど混乱をきわめた。

八、被爆後の混乱

校舎のほとんどが使用不能な状態になったので、一時学校の機能は麻痺状態となった。しかし、学校としての指揮系統関係には、支障がなかったから、即時、混乱状態からの回復を待って開校準備をはじめた。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年九月上旬、日本製鋼所広島工場の補習学校(安芸郡海田市町)を借用し、第二学期としての授業開始をした。このとき、文部省から「軍用施設の転用を受け、至急に開校するよう」指令があったので、県下の軍用施設を物色した結果、賀茂郡黒瀬町の旧海軍衛生学校跡の全施設を学校とするよう運動を始めた。しかし、交通事情・食糧事情などから、この施設を学校として運用できるか否かに不安の意見もあったので、この運動は取りやめとなり、他の施設として、佐伯郡大竹町の旧海軍潜水学校校舎の転用を決定した。学校としては緊急の時であり、転用許可の出る以前から、すなわち、日本製鋼所の補習学校で授業を開始してから約二週間後には、この潜水学校施設で授業を始めていたのであった。その後、昭和二十一年二月に、転用許可がおりたので、ここに移転し、第三学期として本格的授業を開始したが、教室などについては、かならずしも十分とはいえなかった。しかし、教職員三〇人と学生約五〇〇人の授業進行には、別段支障となるようなこともなかった。

このように、苦難の道をたどりながらも授業は開かれ、内容も社会混乱の解消につれ、充実したものとなっていった。この間、本校再建運動も盛んとなり「復興後援会」が設立された。教職員および学生も、こぞって復興運動に参加して、募金運動(目標額三五〇万円)を開始したが、その熱心な努力もみのり、ここに、本館・別館の修築と寄宿寮二棟の新築が完成し、昭和二十三年八月下旬に、皆実町の本校への復帰がかなえられた。

第七項 広島文理科大学、広島高等師範学校、附属中学校、附属国民学校...588

(現在・広島大学文学部、理学部、教育学部、付属高等学校、附属中学校、附属小学校)

広島文理科大学、広島高等師範学校、附属中学校、附属国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地別建物概要				敷地面積 (坪)	在籍者数		校長または代表者	
所在地 (学部名)	構造別教室数(室)		構造別後者延床面積 (坪)		教職員 (人)	生徒 (人)	氏名	
	鉄筋 鉄骨	木 造	鉄筋鉄骨					木造
広島市東千田町及び千田町一丁目				二三、三五三				
広島文理科大学			三、三〇三		六、〇九〇	三三三	三八〇	学長 近藤寿治
広島高等師範学校						九〇	一、四〇〇	校長 近藤寿治
附属図書館						一五		館長 三村剛昂
附属理論物理学 研究所						六		所長 三村剛昂
附属中学校					一、二五四	二五	六〇〇	主事 河野通匡
附属国民学校	二六		一、一七八		二八四	三〇	四五〇	主事 森岡文策
臨時教員養成所						二五〇	管理者 近藤寿治	
広島市 平野町運動場				一〇二	六、七五八			
広島市千田町 三丁目農芸実習場				一九	七五九			
御調郡向島西村 臨海実験所				三六一	六、九八四	四		所長 安部余四男
豊田郡大乘村 臨界教育場				一九八	一、〇六六	二		

爆心地からの距離 約一・五キロメートル(東千田町・広島文理科大学)

二、学童疎開状況(広島文理科大学附属国民学校)

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十二日	比婆郡西城町 神宮寺 極楽寺 全政寺 西願寺 妙善寺 蓮照寺 能楽寺 浄久寺	二六人 (うち、九 人は寮母)	二七〇人	一六〇人	縁故疎開一六〇人といっても 厳密なものではなく、自宅と 疎開地を往復していた者もか なりあり、そのため原爆を受 けて直接死亡した者が一一人 もあった。

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
(広島文理科大学関係)					
日本製鋼所 (隊長 山本幹夫)	安芸郡向洋町	一〇人	一五〇人	工員の教育、工場の 作業行程の組織化 など	文理科系学生、終戦当 時は愛知県に出動の も帰広して合流して いた。
海軍砲熧研究部	東千田町大学 内		数人	研究補助	
学内動員	東千田町	応召外の理 科系教官	一〇〇	科学振興の為各専 門分野について研 究	理科系学生
学内動員 (高師を含む)	東千田町	八〇	三〇	学校建物の防衛	文理科系学生と高師 生徒のうち、他の作業 に動員不向き者(病 弱者)
(広島高等師範学校関係)					
三菱造船所	江波町	一〇	二、三、四年生 の学生大部分	船底の鋸打ならび に一般作業	第一派遣隊(四年生) 隊長 大槻正一 第二派遣隊(二、三年 生)隊長 森滝市郎
三菱機械製作所	観音町				
東洋工業株式会 社	安芸郡向洋町		一年生		隊長 晴山省吾
運輸部(暁部隊)	宇品町		文理科系の学 生一部		隊長 辻
被服支廠	旭町	四	一四	物資輸送(自動車 班)	物理二年B組隊長 長倉
軍需管理部	皆実町(旧広 高内)	五	三一	物資輸送(自動車 班)	物理二年A組隊長 長倉
機甲訓練所	宇品町		一四	物資輸送(自動車 班)	物理二年C組隊長 中野
糧秣廠	宇品町		一一	物資輸送(自動車 班)	物理三、四年隊長 中野
(臨時教員養成所関係)					
航空機工場	愛媛県		二五〇		
(附属中学校関係)					
農村動員	賀茂郡原村	四	一年生一二〇	農耕	
農村動員	豊田郡戸野村	三	二年生一二〇	農耕および貯水池 造成	
三菱精機株式会 社	安佐郡祇園町	五	一年生一一〇	航空機部品製作補 助	
被服廠	旭町	三	四年生一二〇	運搬作業	
(附属国民学校関 係)	比婆群西城町	一	高等科 一八	松根掘り作業	
合 計		一二五 (判明分の み)	一、一二五 (判明分の み)		

四、指定避難先と経路

当時学校内には、少数の女子職員がいただけで、国民学校児童はいなかったから、空襲時は全員防護活動に当たるとし、救急医薬器具などは、鉄筋建物や防空壕に整備した。また、避難先は別に指定していなかった。ただし、附属中学校の科学学級四年生は、学校において授業を継続していたから、避難先を比治山(当校より東北東約一キロメートル離れた場所)としていた。

五、校舎の使用状況

広島文理科大学および高等師範学校共用建物(鉄筋三、三〇三坪・木造六、〇九〇坪)のうち、大学本館(鉄筋三階建

二、四九〇坪)の三階全部・二階の大部分約一、四〇〇坪を中国地方総監府に貸与。

鉄筋平家建五〇坪は呉海軍砲煩研究部に貸与し、学生集会所(木造)の一部を第二〇五特設警備工兵隊(通称号二七八四部隊・隊長は陸軍大尉陰山稔)に仮兵舎として、一時貸与した。

木造渡廊下は延焼防止のため、取壊し作業中。木造建物は一棟おきに疎開計画を立てて一部実施中。

附属中学校用木造建物一、二五四坪のうち渡廊下および小建物は取壊し、または疎開作業中。

附属国民学校木造建物二八四坪は、疎開作業中。鉄筋三階建一、一七八坪は、一階を大学事務室に、二階および三階は図書、および重要物品の格納庫に使用し、官舎二戸(木造)一〇二坪は本来の目的に使用。

運動場の木造建物一〇二坪は、倉庫および便所であったから、本来の目的に使用。運動場は食糧増産のため、畑地として耕作した。また、農業実習場建物(木造)一九坪は農具庫および便所であったから、本来の目的に使用した。

富士見町官舎(木造)八 坪は学長官舎、吉島本町官舎(木造)四六坪は臨時寄宿舍として使用し、艇庫(木造)三二坪は本来の目的に使用した。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
広島文理科大学 平常どおりで別に集会の企画なし	二〇〇人	理件系 五〇人	三〇人	文科系、理科系学生は、ほとんど動員出動で教官の大半も付添いとして出動中
広島高等師範学校	三〇	病弱者二〇		学生の大部分は動員出動中
附属中学校	八	五七		一、二年残留組一五人・三年生一五人・科学学級四年二四人。 その他大部分は動員出動中。別に科学学級一、二、三年は比婆群東城町に疎開し、県立東城高等女学校で授業
附属国民学校	一〇			疎開中
広島臨時教員養成所		五		
傷痍軍人中等学校 広島教員養成所		一〇		

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況

大学は爆心地から南々東約一・五キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、校舎は一瞬にして全壊・大破などの被害を受け、さらに、火災発生によって、その大部分は焼けてしまった。校舎の被害は次のとおりである。

被害程度	建物延坪数		被害の細部
	鉄筋・鉄骨	木 造	
大学及び高師建物 (鉄筋)小破 (鉄骨・ガラス張)半壊 (煉瓦)全壊 (木造)全壊	(三、三〇三) 三、一〇四 八二 一一七	(六、〇九〇) 六、〇九〇	窓、出入口など破損、内部焼失。 温室、鉄骨曲り、ガラス完全に破損 南側に倒壊完全焼失
附属中学校 (木造)全壊	(一、二五四) 一、二五四		南側に倒壊後焼失
附属国民学校 (木造)半壊 (鉄筋)小破	(一、一七八) 一、一七八	(二八四) 二八四	南側に傾斜半壊後焼失 窓、出入口など破損、内部焼失
官舎全壊		一〇二	南側に倒壊後焼失
運動場建物全壊		一〇二	南側に倒壊後に解体処分
実習場建物全壊		一九	全壊、完全焼失
学長官舎全壊		八	全壊、完全焼失
吉島本町官舎半壊		四六	軸組傾斜、屋根大破
艇庫全壊		三二	倒壊後流失

本表のほか、上地・建物・定着工作物(門、電気、給排水など設備)も人部分損壊

被爆直後、木造建物の大部分は南側に傾斜倒壊し、特に二階建物の破壊状況ははなはだしかった。鉄筋建物も出入口・窓ガラスなど全部破壊し、内蔵物品のほとんどと共に四散した。このために死傷したのも少なくなかった。状況判断のため高層建物の屋上に出て、市内の一般状況を望見したところ、市内諸所に火災が発生しているのを認めた。また、校内の木造部分数が所からも煙の上がるのを認めた。そのため、さしあたり必要な重要書類を格納して、消火の手配のため、人員の集結を計ったが、皆、重軽傷を負い、働き得る者は数人のみであった。その少数の者で消火ボ

ンプ(ガソリンポンプ・自動車ポンプ=市消防隊用)の引出しにかかったが、いずれも倒壊した木造建物または防空壕の下敷きとなり、使用できないまま、午前九時ごろ、木造部分は全面的な火災となった。

南西風が強く、火のついたかたまりが風に乗じ、破壊された鉄筋建物の窓の中へ盛んに飛び込み、延焼の危険にさらされたので、これが防止に努めたが、人員少数のため、手のほどこしようもなく、午前十時ごろには、鉄筋建物内部も、随所に火が拡がりはじめた。

やむなく、消火活動を一時放棄、待避を決心して、負傷者に避難の指示を与え、働き得るものの数人は御真影を奉じて、平野町の運動場から御幸橋を経て、東雲町の広島師範学校へ到着した。その後、一部要員を残し、学校(東千田町)の様子を見るため引返した。途中、日本製鋼所に出動していた高師学生隊の救援隊と出会ったが、市街の火災にはばまれ、学校に到着した午後二時ごろには、木造建物は大部分焼失、鉄筋建物の内部も大部分が焼失していた。

鉄筋建物には、焼夷弾攻撃に備えて蔵書その他重要物品を格納していたが、これが数日後まで燃え続けた。

(二)人的被害

区 別	即死者		重軽傷者		行方不明者		計	
	教職員	生 徒	教職員	生 徒	教職員	生 徒	教職員	生 徒
広島文理科大学	一六人	二〇人	五六人	一五人	一人	人	七三人	三五人
広島高等師範学生	九	一四	二一	一〇	—	—	三一	二四
附属中学校	六	一五	五	六	—	—	—	五一
附属国民学校	—	九	—	四	—	—	二	一三
広島臨時教員養成所 (含傷疾軍人養成所)	—	四 (一)	—	—	—	—	—	四 (一)
合 計	三二	六二	八三	三五	二	〇	一一七	九七

(学校外での被爆者も含む)

被爆と同時に全在校生は、多少とも負傷し、無傷の者はほとんどいなかった。校内で即死者が出たが、重軽傷者の大部分は、各自指示に従い、平野町の本学運動場を経て、宇品方面へ避難し、それぞれ応急救護隊に収容された。また縁故者をたどり避難した者もあった。避難救護にあたって、集団的措置はとりえなかったが、翌日になって、校内に負傷者がいなかったことと、後日の状況から判断して、ほとんど避難し得たと思われる。なお、少数の職員は、少々負傷にもかかわらず、学校にふみとどまって、大学本館前に残存器具を集めて、午後四時ごろ、テント張りを完成し、大学本部を開設、職員・学生の状況把握に努めた。

勤労働員で出ていたため、学校内には、学生および生徒が僅かしかいなかったから、死傷者は割合に少なかった。しかし、職員には多く、とくに女子職員の負傷者は、ほとんど一時的とはいえ放心状態にあった。

当日死亡した者の大部分は、ガラスの破片その他の飛散物による外傷、または、木造建物の下敷きとなったもので、前者は特に目につき、凄惨を極めた。また、在校生の大部分が負傷し、皆多少とも血を流して、異様な空気をもした。翌日は死体の収容を行なったが、何分にも、夏季高温の時に、容貌が変わっており、氏名確認に困難した。八日には、遺体を校内で火葬に付したが、遺族とも充分の連絡がつかなかった。

なお、六日朝、教室において、大東亜共栄圏文化交流学生が授業中に被爆し、多数の死傷者を出した。この被害状況については、第一巻総説(一七三ページ、一八〇ページ)に記述するとおりである。

八、被爆後の混乱

(一)学生・生徒に対する緊急措置

(イ)広島文理科大学

動員出動中の学生は、そのまま動員を継続し、その他の学生は当分休校として居所を明らかにし、待機するよう校内に掲示した。

(ロ)広島高等師範学校・附属中学校・広島臨時教員養成所

文理科大学と同じく、動員学徒はそのまま動員を継続し、その他の学生は居所を明らかにして、待機するよう指示した。

(ハ)附属国民学校

集団疎開中の児童はそのまま継続し、その他の児童は、居所を明らかにして待機するよう校内に掲示した。

(二)傷夷軍人中等学校教員広島養成所

当分休校とし、居所を明らかにして待機するよう指示した。

以上のごとく措置したが、本人たちにはなかなか徹底しなかったようである。

(二)学校の機能停止と対策措置

(イ)人的被害 = 学長をはじめ、幹部職員に異状なく、教職員に一〇数人の死亡者、および多少の傷病者を出したが、学校の機能が全く停止するほどの損害ではなかった。

(ロ)物的被害 = 校舎延一二、 坪が被害を受け、これに伴い学生机などの校具を全部焼失し、この面より学校本来の機能は停止した。

学長をはじめ幹部職員は、何らかの手段で、校舎および校具などの確保に努力したが、当時は、まだ戦争継続中で、早急の措置が不可能であった。職員・学生および生徒の状況把握に努力しているうち、終戦を迎えたので、世相は一層の混乱を来し、八月中は、いかになるべきものかの見透しもつきかねる状況であった。九月に入り、学徒動員もおおかた解除されたので、学校は本来の使命である教育を再開すべき事態となった。本学では、応急の措置として、旧軍施設を利用して再開する方針を次のように決定した。広島文理科大学本部事務室を、市内東千田町旧校地焼跡に置き、元大学本館一階の一部を整理、応急修理して事務室にあて、ここを本拠として全般の指揮統括を計った。

(三)応急救護所としての役割

東千田町所在校舎は木造全焼、鉄筋は外形を残して内部完全焼失という惨憺たる状況であったから、応急救護所として使用することは全く不可能であった。ただし、その後の九月台風時には、避難所として有効に使用された。

九、学校再開の状況

学校の再開

(一)広島文理科大学

昭和二十年九月十三日

教授会 = 学園再開について議し、その場所決定については原村農場・仁方寮・竜王寮などがあげられ、卒業生も決定(九月二十九日卒業式挙行)した。

昭和二十年十月二十九日

教授会 = 学徒審査二件(国体学科改称改組の件については十一月五日委員任命)

昭和二十年十一月十四日

教授会 = 学科課程改正

昭和二十年十一月十九日

教授会 = 学科課程創設(公民学専攻)

昭和二十年十一月三十日

市内宇品町千暁寺において合同慰霊祭を挙行

昭和二十年十二月五日

学長近藤寿治退官につき、学長事務取扱教授は鈴木敏也(十二月九日死亡)

昭和二十年十二月九日

学長事務取扱教授は古賀行義

昭和二十年十二月十九日

教授会 = 学長選挙

昭和二十年十二月二十六日

学長長田新任命

昭和二十一年一月

江田島津久茂国民学校において大学三年の授業開始

昭和二十一年一月二十一日

協議会 = 授業措置決定、文科は江田島の津久茂、理科は乃美尾とする。津久茂で授業中の三年は一月で一・二年と交替し、その召集日は二月十七日とする。

昭和二十一年一月二十八日

協議会 = 学校復興方針決定。復興を三段階として、(イ)本復興(ロ)応急復興(ハ)暫定措置とする。

(イ)本復興 = 終局の復興位置(市内東千田町)は現位置とする。

(ロ)応急復興 = 大学は現位置、高師養成所は大原分校、付属中学校は西条、附属国民学校は現在位置

(ハ)暫定措置 = 大学文科は津久茂国民学校(なるべく早く大原分校へ)。大学理科は乃美尾衛生学校・高師養

成所は乃美尾衛生学校(なるべく早く大原分校へ)、附属中学校四年は三菱青年学校、他は原村旧陸軍兵舎、附属国民学校は大乗臨海教育場。

東千田町本校において理科実験を認める。その間、化学科学生は倉敷市において授業

昭和二十一年三月四日

教授会 = 戦災死亡教授の後任教授の大部分補充。

以上は、文理科大学が被爆後、学校の対策措置として歩んだ概略であるが、被爆直後の昭和二十年十月ごろから、早くも理科の一部には、被災校舎を整理して実験再開を計る研究室もあった。昭和二十一年一月には江田島の津久茂国民学校において大学三年の授業が開始され、続いて一、二年もこの地に召集されて授業再開された。また、まもなく化学科は倉敷市(倉敷レーヨン)に移動し、授業を再開した。続いて昭和二十一年四月に、理科が市内東千田町に復帰した。このように戦後の混乱の中にも、授業はようやく軌道に乗りはじめた。昭和二十一年九月に、東千田町の校舎の一部が仮修理でき、全学生の授業が再開されるにあたって、本格的復旧に努め、各室がどうか使用できるようになったのは、昭和三十五年である。しかし外壁にはいまだにその当時の傷痕が残っている。

(二)広島高等師範学校・臨時教員養成所

昭和二十一年二月十二日

広島県賀茂郡乃美尾村の旧海軍衛生学校跡で授業再開

昭和二十二年八月十二日

乃美尾校舎出火し大部分を焼失

昭和二十二年十月六日

三・四年を広島市出汐町の元陸軍被服廠跡に収容して授業再開

昭和二十二年十二月

二年生を被服廠跡に収容

昭和二十三年三月

一年生を被服廠跡に収容

昭和二十三年三月三十一日

広島臨時教員養成所を廃止

昭和二十四年五月三十一日

国立学校設置法公布、広島大学の包括学校となる(教育学部の母体となる)

昭和二十七年三月三十一日

広島高等師範学校廃止

昭和二十八年四月

教育学部校舎新築(市内東千田町)し復帰

(三)附属中学校

昭和二十一年一月

広島県賀茂郡原村の旧陸軍南部廠舎跡で授業再開

昭和二十一年四月

西条町吉土美小学校に移転

昭和二十二年一月

校舎新築(東千田町)し復帰

(四)附属国民学校

昭和二十年九月三十日

比婆郡西城町西城国民学校で実施中の学童集団疎開を閉鎖して各家庭に復帰

昭和二十年十一月一日

豊田郡大乗村臨海教育場施設(敷地一、〇〇〇余坪、建物約二〇〇坪)を使用して授業開始

昭和二十一年五月

市内東千田町の残存鉄筋校舎の仮修理がなり、ここに復帰して授業開始。

以上、学校の復旧とその対策措置については、いろいろ努力して来たが、戦後の国費復旧はなかなか捗らず、十数

年を経過した今日でも、なお復旧には至らないという状況である。附属学校にいたっては、復旧経費の大部分は、生徒・児童の父兄の負担に待つという状況であった。

授業開始については前記したとおり、第二学期においては、その準備施策の時期で本格的授業はおこなわれなかった。ようやく始つた授業も校舎の不足、校具の不足などで困難を極めた。その上、遠路通学している学生は食糧不足を補う手段がなく、寄宿舎などの設備も不十分で、健康を保つ上に困難を感じ、しばしば休校とせねばならぬ実状であった。

また、戦災により、かねて準備していた消耗品その他器材を全部失ったので、学校の事務用紙類入手にも困難をきたした。この対策として、学校事務機構を改めて、学用品確保のための専任係を置き、各方面との折衝に当らせ、別に厚生課を全国大学にさきがけて設置して、職員・学生・生徒の学用品・生活必需品の斡旋に当らせた。何分、当時は物資が極度に不足していたから、その成果は十分とはいえなかったが、かなりの効果はあった。

なお、生徒・児童用の教科書はプリントを作成して使用した。

出陣学徒の回想

安丸一郎

(昭和二十二年広島文理科大学卒業。現在・福井大学学芸部助教授)

広島への原爆投下の報を、私が知ったのは、四国の宇和島海軍航空隊に所属して、土佐沖に予想されたアメリカ軍上陸作戦に備え、高知県境に近く陣地構築中のできごとであった。

もとより、当時は特殊爆弾であることは報告されても、これが原子爆弾であることを知ったのは、もっとあとになってからであった。

当時、戦局の逼迫は、国民一般には十分に知らされていなかったが、長期の戦争による極度の物資欠乏は、航空機生産や飛行燃料の上にも枯渇を生じ、ついには友軍飛行機は、往路のための片道燃料だけを積みこんで出撃するという常識を絶した悲劇にまで立ち至ったのである。消費経済のゆたかな(?)戦後の今日の状況下では、到底想像され得ない環境のもとで、背水の陣をしいていたのであり、われわれの部隊もまた、“鳥が変じてモグラとなる”の類に化していた。

私は終戦の直前に、海軍省から佐世保への転勤命令を受け、終戦時のひどい混乱期に現地へ赴任、沖縄経由で上陸したアメリカ軍に対する連絡武官の仕事をしねばならぬことになり、さまざまな苦勞の体験をなめた。その後ようやく解任されるや、ふたたび母校の教室へもどってきた。

想えば、私は広島文理科大学教育学科在学中、第三期海軍予備学生の一員として、昭和十八年十月、江田島の海軍兵学校へ召集を命ぜられ、ここで短期教育をうけて、激戦下の部署についたわけである。当時の海軍予備学生は、それぞれの職種に応じ、旅順・青島・館山・土浦・江田島に分散して入隊したが、われわれ江田島組は武官教官として、多くは練習航空隊に配属されたのである。南方の戦線に配属されていたら、おそらく友人の多くと共に、すでに地上から消えていたであろうと考えると、そぞろに戦争のもつ機械的暴圧に抵抗を新たにせざるを得ない。

私は、海軍兵学校で訓練をうけていた当時、寸暇を利用して、母校の教育学研究室を訪れた。物資窮乏の戦時下の情勢にあってもなお、アカデミックな面影を宿している大学内の重々しい空気の中を、無量の気持ちで階段をのぼった当時の模様が忘れられない。

突然の訪問のこととて、学友があわてて連絡してくれたとみえ、研究室のスタッフや友人たちとしばらく歓談できたことはよく憶えているが、同席された方々がはっきりしていないことは、残念の至りで何とも申訳がない。ただ、私の出身の福井中学の関係で、親しくしていただいた西洋史の渡辺教授がおられて、お話した印象が強く残っている。

当時、空爆による災禍を予想して、研究室の図書文献を田舎へ疎開させるという計画、国家総力戦に協力を要請される大学の研究陣の話題(特に自然科学分野)、勤労働員の状況、陸軍や海軍への学徒出陣や徴兵延期短縮化の話などは、時の話題によくのぼった。

また一面、リベラリストとしての教授連も健在で、永遠の真理を説いて時局の動向を偏見なくとらえるあたり、内面ひそかにたのもしさを覚えたことも事実である。

当時の学徒のなかには、一般論ではあるが、きびしい戦火のさ中にあってもなお、学問と芸術を愛する心情を失わない態度を高しとするムードが底に流れており、戦線の長期化にともない、陣中へひそかに文庫本などをたずさえる学友も多かった。

やはりこの基盤には、死生観とか世界観、国家観などを、各人各様の形で調えたいとする根本衝動のあせりでもあったろうか。

私は昭和十四年四月に、広島高等師範学校英語課に入学したが、太平洋戦争勃発は、千田町(みやこ通り)の下宿先武田さん宅の二階で、この劇的なラジオ放送を耳にした。

昭和期にはじまった満州事変は、やがて日支事変にまで拡大し、ついに米英などの民主陣営を向うにまわして、第二次世界大戦への突入である。大変なことになるぞと実感したところである。

当時の広島は、われわれ学徒にとっては、軍都としてよりは、はるかに、海をのぞむ水都として、また、城下町として、広島弁と共にユニークな薫りを放つ学都であった。瀬戸内の微風が街なみをつつんで、そよ吹くあたり、街路樹と散歩道にこと欠かなかった広島の、さわやかなたたずまいが、たまらなくなつかしい。

特に、大学に近い鷹野橋の交叉点付近は、広々として清潔な明るさを漂わせていたが、戦後、この付近一帯が狭く立てこんできて、かつての面影を失った感じは何とも惜しい気がしてならない。

しかも当時の学園には、さまざまな有志活動が行なわれていたように思う。とりわけ印象の強く残っているものに、西晋一郎先生を招いての大乘起信論などの講読会、白井教授や福島教授を中心とする仏教研究会、平塚教授や村上教授を中心とする原始キリスト教研究会、岡本教授を中心とする言霊短歌会、その他禅学会、聖書研究会など、多彩に咲き乱れていた。

第二の故郷ともいべき広島の姿も、あののろわしい原爆投下と共に、一瞬にして廃墟と化し、お上品で親切だった広島の知人たちも、ピカドンで倒れあるいは傷ついた。

英文学の竹中教授も、心理学の高橋教授も、生物学の井上君たちも、大学で倒れたとのこと、何とも無念の至りで筆舌につくしがたい。

恩師の長田新教授も、あのとき重傷を負われた由である。昨今の広島の復興状況を見て、今浦島のごとく茫然として、今昔の感にたえない。「パンタ・レイ(万物流転)」とは夙にヘラクレスの言葉であるが、まさにこのことではあるまいかと疑う、

過ぎし日の、広島での青春の思い出はつきないが、他方では、戦後たくましい新生を実現した不死鳥広島が羽ばたく平和都市への構想に、心からの期待と拍手をおくってやまない。(四四・一・七記)

警備隊員被爆記

田原正人(談)

(被爆地・千田町高師校内、当時・宇品造船所勤務・二七歳)

八月三日、私は一定期間だけの臨時的警備召集を受けて、第二〇五特設警備隊工兵隊(通称号・二七八四大隊長・陰山稔大尉)の小原中隊に入隊した。

中隊本部は、当時学徒動員で空室になっていた東千田町の広島高等師範学校の寄宿舎に駐屯しており、そこに私は所属した。

六日の朝、いつもの点呼がすみ、臨時召集兵約一五〇人が急いで朝めしを終ると、私は各小隊の作業班に、円匙やノコ・トビグチを分配した。作業班が、市役所裏側(富士見町)の建物疎開作業現場に出動していったあと、校舎階下の小隊本部事務室に入り、曹長ら四、五人と事務をとりながら話しているときであった。

ピカッ!と怪しく光った。白昼の明るいなかで、電車の架線がスパークしたような青白い閃光であった。

一瞬、みな立ちあがった。

急いで廊下まで出た。

と、見ると校舎と校舎とのあいだの空間に、白い煙が、ボンベから洩れる高圧ガスのようなシューッという音と共に、降下して来た。危い!と、反射的に、また室内にとびこんだ。とたんに、ガラカラと物の崩壊する音がした。

何分たっていたのかわからないが、意識を取りもどしたとき、私は、落下した建物のハリとハリの交叉したところに横たわっていた。腰が何かにはさまれて抜けない。

私はもがいた。手をあげると、そこには落ちて来た二階の屋根があった。こっぴに破れた屋根の上に、やっと追いついてみると、向う側の崩れた科学教室らしいところに、チョロチョロと、赤い火が舌を出していた。

焼けるぞ、と逃げようとしたが、足が動かない。腰をひどく打っている。腰がたたない。必死で、起きあがろうとしているところへ、坂本炊事軍曹(庚午の人)が通りかかって、私をかつぎあげてくれ、学校の東門を出たところ、大

学のみ裏にあたる場所で、防火用水槽の傍に私はおろされた。「火が来たら、その水をかぶれよ。」と言いおいて、坂本軍曹は、再び救出作業のために校内に入っていった。

市の中心部は、すでに大火災になっていたのであろう。火勢は、次第に私の方にむかって襲って来るように感じられた。

そのとき、風速四〇メートルもあるかと思われる荒々しい風が、吹いて来た。身体を深く斜にしなければ、とうてい歩きまわることのできないほどの風であった。私は、動けないまま、坂本軍曹がもどって来てくれるのを待つほかなかった。

燃えあがる火炎はボールのように千切れて、ポッと空間を飛んでは、あちらこちらの焦っている倒壊物に移った。

このようにして火勢は、ドンドンと市中一面に拡がって行ったようである。

私が救けだされてから、ほぼ一時間ばかり経っていたであろう、傷を受けなかった者らが、馬車を見つけて来た。馬は生きていたが、ひどい火傷でピフテキようになっていて使えなかった。私をかかえてその馬車に乗せると、元気な者たちが手で引っ張り、後から押して、御幸橋まで脱出することができた。

御幸橋の上は、すでに負傷者や避難者でいっぱいであった。そこへ暁部隊が来て、私はみんなと一緒に安芸郡坂町鯛尾の収容所へ送られた。すでに夕方であったが、収容所内には、もう声すら出なくなった重傷者や息たえだえに呻吟する少年、発狂して輾転反復している若い裸体の女性など、悲惨このうえもなかった。

私は、移動演劇さくら隊の俳優丸山定夫と同室であった。彼は背すじから腰にひどい打撲を受けたらしく、横たわっているのさえ苦痛のようであった。「兵隊さん、起してください」、「兵隊さん、寝かせてください」と、幾度も力のない小さな声でたのんでいた。人手を借りなければ、自分の身体を動かすことができなかったが、私が去るまでは、生きていた。

この鯛尾の収容所に、私は八日までいた。草津の自宅との連絡もつかず、心配であったことよりも、死人の続出する収容所に寝ていることが苦痛で、脱け出したかったのである。やっと、どうにかこうにか歩けるようになったので、八日の朝九時ごろ、便船を得て宇品に上陸した。そこからずっと宇品十三丁目の広陵中学校前まで、約一・八キロメートルの道程を約八時間もかけた午後三時ごろに、痛む腰をひきずりながらようやくたどりついた。

広陵中学校前には、臨時の衛兵所ができていた。私はそこに行って頼み、ちょうど草津の方へ行くトラックに便乗させてもらった。

トラックには佐官級の軍属が乗っていたが、彼は「これは原子爆弾という爆弾だ。」と、説明してくれた。それまではみんな、新型爆弾という名しか知らなかった。こうして、八日の夕刻に、やっと自宅についたが、妻も被爆していた。

妻は、その朝、市役所へ妊産婦用の特別配給ミルクを受取りに出て、途中、電車が国泰寺に差しかかったとき被爆し、一たん日本銀行内に收容され、さらに富国ビル内に転送されていたところを、收容者名簿により、近所の人が発見し、連絡してくれたので、家族が引取って帰ったところであった。

ちょうど、私と同じ日に家に帰って来たのであったが、顔面いっぱい黒焦げの火傷を受けた身は、生き抜くことができず、十日、ついに不帰の客となった。

燃えはじめた高等師範学校のところから私を馬車に乗せて、引っぱってくれた人々は、その後、みんな死んだようである。

また、私と同じく警備召集兵で、富士見町疎開作業隊長をしていた津田さん(津田ポンプ社長の長男)は元気で、十二、三日ごろ、私の状態を確認かたがた見舞いに来られたが、これも二十日ごろに死なれた。惨害の処理に焼跡を歩きまわり、残留放射能を受けたためであろう。

第一節 序説...612

神社

毛利輝元の広島城築城以前から存在した神社は、安芸国神名帳(豊田郡本郷町楽音寺所蔵)に記された衣羽明神(羽衣神社)・白島明神(碇神社)・仁保姫神社のほか、白神社(小町)・明星院八幡宮(のち鶴羽根神社)・神田神社(牛田村)・太宰原天満宮・(明星院村)尾長天満宮(尾長村)などがあったと言われる。

その後、毛利・福島・浅野の各時代ごとに、多くの神社が創建され、それぞれ民衆の崇敬を受けた。また、稲荷社・愛宕社・金毘羅社なども多く勧請され、それぞれ深い民俗信仰を集めた。

これら由緒深い神社も、原子爆弾の炸裂によって、市の周辺部を除き、すべて壊滅したのであるが、戦後の復興は、占領軍による宗教団体法の廃止・氏子制度の廃止など、一連の宗教政策により比治山神社・鶴羽根神社など二、三の神社を除いて、非常に困難をきわめた。特に稲荷社など民衆に親しまれてきた小祠などは、消滅したり、その影の薄くなったものが多い。

被爆直後、全焼した比治山神社(黄幡大明神)跡において、第二総軍司令官畑大将ほか、宇品の曙部隊司令官佐伯中将、呉の海軍鎮守府派遣救援隊長山崎大尉、県・市当局代表、警察署長らが集合して、広島市の復旧対策・罹災者救護対策などを協議した。また、二葉ノ里の鶴羽根神社境内には、第二総軍司令部がバラック兵舎を五棟建設して入居し、半壊の同社参集殿には、同隊の負傷将兵や一般の負傷者を収容した。このほか被爆直後、住吉神社・饒津神社・東照宮石段下・早稲田神社・神田神社など市周辺部の神社には負傷者が雲集したため、それぞれ臨時救護所、あるいは収容所となった。

寺院

広島城開府以前から存在したと伝えられる寺院は、曹洞宗の瑞川寺(尾長村)・海蔵寺(佐伯郡後田村)・真言宗の正観寺(白島九軒町)・光明院(白島九軒町)・明星院(明星院村)・日蓮宗の本運寺(白神五丁目)・慈光寺(古江村)、浄土宗の福蔵寺(古江村)、真宗の広寂寺(比治山町)・海宝寺(江波村)・光円寺(牛田村)などであるという。

神社と同じく毛利・福島・浅野の各時代を通じて多くの寺院が建立されたが、被爆前の市内には、曹洞宗一四・臨済宗五・真言宗一三・浄土宗一九・真宗六七・日蓮宗一一の寺院があって、大半が原子爆弾により全壊全焼した。

これら寺院のなかには、疎開しなかった国民学校の低学年(一・二年生)児童の、分散授業場に使用されていた所もあり、三川町の円隆寺(爆心地から約九五〇メートル)では、竹屋及び袋町両国民学校の児童約三〇人が、本堂で授業中、被爆して下敷きとなり、負傷者二人が生き残ったほかは全員死亡した。

また、舟入南町の唯信寺(爆心地から約二・六キロメートル)のように、防空計画であらかじめ負傷者収容所に指定されていた寺院が、焼け残ったために負傷者が殺到して阿鼻叫喚の地獄を出現、大混乱に陥った。このように、三滝寺(爆心寺から三・二キロメートル)・国前寺(爆心地から三キロメートル)・不動院(爆心地から約三・九キロメートル)・千暁寺(爆心地から四・三キロメートル)などの周辺部に所在した寺院には、多数の負傷者が逃げこんで、自然に救護所・収容所となった所も多い。

比治山公園西麓の多聞院(爆心地から一・七キロメートル)は、中国地方総監府・県庁の緊急避難先に指定されていたため、被爆当日の夕がた、負傷した服部副総監・石原県警察部長、及び備後に出張していた高野県知事らが集合して、ここに仮の県防空本部を開設し、中央への惨状報告、県下各地への救援隊出動命令などを出したのであった。

被爆後の復興は、神社ほどではなかったが、檀信徒の死亡、あるいは四散により、財源も乏しく、また資材の入手も困難であったから、遅々として進まず、二十三年ごろからようやく復興の緒についたと言えよう。戦後、都市計画により、中心部の寺院の多くは、他への移転を余儀なくされ、墓地の整理・移転などが次々におこなわれた。

教会

戦前、広島のキリスト教は、一三の各派教会があったが、流川教会・幟町カトリック教会・広島教会などをはじめ、多くの教会が原子爆弾によって全壊・全焼、あるいは大きな損傷を受けて壊滅状態に陥った。

戦争中、一部国粹主義者などからは白眼視されるような事もあったが、日曜日の礼拝やクリスマスなどの集会は、細々ながら続けて信仰を守る一方、神父(牧師)も一市民として、広島市の防衛に参加し、それぞれの部署で働いた者が多かった。

流川教会は、その日曜学校の建物が陸軍被服廠関係の軍服製造工場となり、ミシン数十台を置いて、連日作業を続

けていた。同教会の谷本牧師は町内会の防衛部長に就任し、被爆当日は避難者の殺到した泉邸(縮景園)において、その後三日間、邸内に野宿しつつ救援活動をおこなった。

広島教会は、広島市警防団本部に指定され、常時一二人～五人くらい団員が詰めており、自動車ポンプ四台が設置されていた。なお、四竜牧師は、広島県盲学校の教師となって奉仕した。

この二つの教会の例に見るように、他の教会もそれぞれ戦争遂行の態勢にしたがい、永い苦難の日々を送ったのであった。

戦後、占領軍の民主化政策による宗教界の大改革がおこなわれ、宗教界は混乱状態に陥ったが、その中で最も早く活動を開始したのは、キリスト教であった。その復興にあたっては、占領軍の自然的な理解と援助が大きな原動力となったことは言うまでもないが、海外の欧米諸国民の積極的な救援もまた見のがせないものがあった。加えて、各教会が、伝統的な街頭での宗教活動を、いち早く実施して信者の獲得に努力したことは、あずかって大きな力となったと言えよう。

神社・寺院と同様な打撃の中において、二十二年春から早くも幟町カトリック教会・流川教会・広島教会など、次々に復活し、二十三年には、各派を集めてキリスト教連盟が発足し、市民クリスマス合同集会在盛大に開催された。年月を経ると共に、ますます教勢は拡張していき、各教会とも敷地の拡大・建物の増改築を次々に実施し、幼稚園・英語学校・料理学校・洋裁学校・音楽学校などの教育施設や社会福祉施設を開設した。

宗教連盟発足

被爆一周年を迎えた二十一年八月六日は、市内各宗派とも個々に慰霊祭を執行したが、第二周年の二十二年八月六日を迎えるにあたって、仏教・キリスト教・神道の各宗派が集り、「広島県宗教連盟」を結成し、中島町慈仙寺鼻の焼跡の仮堂において、合同慰霊式典をおこなうことを決定した。以後、毎年続けられて現在に及んでいる。

第二節 神社...617

広島護国神社

広島護国神社

当時、広島市基町一番地(現在広島城跡内)・爆央から社殿まで約二〇〇メートル・社司足立達(厳島神社兼務)。

神殿一〇坪二三、拝殿一六坪、渡殿一〇坪五、参列所四四坪六、神饌所八坪、祭器庫八坪、社務所五五坪、番舎一五坪五、倉庫六〇坪、廁一坪の建物のほか、社標・鳥居・神灯・制札・狛犬・手水舎・瑞垣、その他があり、植樹築庭も美しく荘厳をきわめていた。

被爆当時、足立社司は厳島神社にあり、社掌青祇章一家三人が居住して全員死亡した。従って、当社の倒壊炎上などの状況は不明であるが、鎮火後に立っていた物は、社標一基・石造の狛犬一對・青銅製の唐獅子一對と、電車通りに面した石造大鳥居(爆源から一二〇メートル)だけであった。爆源直下という所にありながら、この大鳥居が何事も無かったかのように立っており、鳥居の真中に掛けられた「広島神社」の扁額も、内側のは、昭和十八年に、落下しかけたため取りはずしたままになっていたが、爆源に向いた外側の扁額は、少し傾いただけで、吹きとばされもせず奇蹟的にそのまま掛っていた。

なお、青銅製の唐獅子(向かって左のものは、頭上耳裏の部分に放射熱線による焼痕を、風雪に薄らぎながら現在も残しており、境内に敷きつめられた玉石(第一巻写真集)にも、その焼痕が多く見られた。

この付近は、文字どおり灰燼に帰し、人畜すべて圧死または焼死し、草木もことごとく枯死、焼失したが、被爆後(九月下旬以降)の調査(岡田要報告)によると、護国神社の鳥居の脇において、ミミズ・ナミゴミムシ・エンマコオロギ・コガネムシ幼虫・名称不詳の蛾のサナギ・ナメクジなどを得た。これらは、構造や生態ともまったく正常であり、地下に棲息する下等動物は放射能線の影響をあまり受けなかったという実例として示された。

被爆後二日目(八日)、厳島の神職が焼跡に来て、御霊代を厳島の千畳閣に奉遷した。その後、昭和二十一年二月には、河本和昌が祓宜として就任した。

昭和二十二年八月四日、焼跡を整地して仮神殿を造営、厳島から御霊代を奉迎し、八月六日、第一回原子爆弾犠牲者及び戦没者の慰霊祭を執行した。八日、名称を「広島神社」に変更(三十五年、宗教学法人広島護国神社と再び改称)、二十二日に足立宮司が辞任した。後任に速谷神社宮司山田厲が就任し、三十二年病没まで勤めた。

この間、昭和三十年、広島城跡に神社復興をはかり、文化財保護委員会の認可を受け、三十一年六月に立柱祭執行、三十三年一月十四日、社務所造営工事を完了、同年四月五日、祢宜河本和昌が宮司代務者に任命された。同年五月、広島護国神社復興奉賛会小谷伝一会長が、社殿以下一切を奉献した。

昭和三十四年九月十五日、横井時常宮司が就任、四十一年三月一日辞任し、巖島神社宮司森安忠が後を継ぎ現在に至る。

白神社

白神社

当時、広島市小町六番地(現在・中町七ノ二四)・爆心地から約 六キロメートル・社司野上克彦。

白神巖山上に神殿(七・五坪)があり、その前南方に幣殿(一二・〇坪)あり、更に前方に拝殿(二七・五坪)があった。拝殿の西方に社務所(三 坪)があった。

重要書類及び神事装束類の大部分を、安芸郡海田市町奥海田の出崎森神社社務所及び牛田・井口などの民家へ疎開した。なお、白神社境内地東方の森林中に地下防空壕を作り、その中にも収納していた。

境内の鳥居横の住吉社側に防空壕を作り、参拝者などの待避場所とした。社司は、東方森林中の地下壕へ、非常の場合ご神体を移すことができるように決めていた。

市内中央に所在する当社は、境内に地下壕があっても、最悪の場合に備えて、前記奥海田出崎森神社に避難することとしていた。出崎森神社社掌宗像久男が、白神社社掌を兼務していたからである。

八月五日の夜は、常のごとく戦勝祈願の参拝者が三々五々と続いていたが、午後九時過ぎの警報発令後は、まばらとなった。

六日の朝、また参拝者がひっきりなしに続き、午前七時過ぎの警報発令のときは、社前の二か所の防空壕に入り切れないほどの人がいて、なかには二か所をあっちに行きこっちに行きして、あわてている人もあった。野上社司は、神前にぬかづいたままであった(社司の義妹田中房子談)。

午前七時三十一分の警報解除後は、家に帰る者、あらためて参拝する者などあったが、野上社司の義妹田中房子は、壕内の奥の方に他の二、三人の人々と共にいて、原子爆弾の炸裂下にも一命を拾った。

原子爆弾の炸裂により、神社の各建物は東南方位にむかってペシャンコに倒れ、瞬時に炎上した。

野上社司及び家族は、社務所茶の間でその遺骨が発見された。境内における被害は、即死者五人・負傷者三人であった。被爆後、最初に参拝した大手町五丁目某の話によれば、社前に一人軍人風の焼死体があり、更に石畳中央に一焼死体があったという。被爆直後も参拝者があり、人々は露出した白神巨巖を拝した。

海田市町にいて被爆を免れた同社社掌宗像久男は、被爆後ただちに篠竹を立てて、縄を張り、霊域を標して境内を取りかたづけた。野上社司及び家族の全滅により、宗像久男(現在・宮司)及び家族(五人)が引継ぎ、昭和二十年十月二十九日、早くも仮殿を組んで祭事を執行したが、ボロボロの着物をきたある参拝者は、祭事やみこ舞などを見ながら、祭事の仮台の丸太棒にしがみつき、感きわまって泣いたという。

天満宮

天満宮(現在・天満神社)

当時、広島市天神町一二〇番地(現在・中島町六ノ一)・爆心地から約 六キロメートル・社掌坂本潔。

境内地は二〇四坪六合、社殿約八 坪は寺院風の木造瓦葺、明治二年の神仏分離まで満松院という寺院であった。

防空設備としては、境内に大型防火水槽一個を置くだけで、防空壕その他は無かった。社掌の自宅が舟入本町にあり、常時居住していなかったからであろうか、社殿の電線も軍用に接収されたため、無灯火となったので、夜間必要な場合はロウソクで過していた。

この地域一帯は、第六次建物疎開作業が実施されたが、天満宮のみは、由緒深い故を以って解体されず、付近町民の家財の疎開場所となり、境内も狭くなるほど積まれていた。また、疎開作業隊の休憩所、炊事場などにも使われた。

神社の古文書その他は疎開しないまま、すべて焼失したが、ご神体のみは、被爆五日前に佐伯郡五日市町の信者杉田宅に疎開していて、被爆を免れた。

被爆による炎上の状況は不明であるが、爆心地に至近のため、瞬時に倒壊し、火災を発生したと考えられる。坂本社掌の父虎雄は行方不明となり、遺骨も発見されないままである。坂本社掌は、前記自宅で被爆し、江波へ避難して助

かったが、自宅は延焼により焼失した。

被爆後、神社の復興をはかったが、資材の入手困難と資金不足のため、計画が実現せず現在に至っている。
現在、被爆前の石造門柱と、天満宮一千年祭に建立された石造記念碑が残っているだけである。

空鞘神社

[空鞘神社](#)

当時、広島市空鞘町六五番地(現在・本川町三丁目三ノ一)・爆心地から約 〇・六キロメートル・社掌内田克雄。
社殿は木造瓦葺、約四八坪で、境内地の北側に約二〇人収容できる防空壕が作ってあったという。物資疎開は無不明である。

避難先は、安佐郡古市町方面に指定されていたが、内田社掌ほか家族四人は、被爆により死亡した。

ある被爆者が被爆直後、対岸(輜重隊)へ避難して、空鞘町を振りかえってみたとき、広瀬町・西引御堂町方面(当神社からは西方に当る)から延焼して来たようであったが、被爆したその日夕方に避難先から帰ってみたときは、すでに社殿は灰燼に帰しており、火も消えていたという。なお、六日朝、本川国民学校児童約二〇人と教師一人が戦勝祈願に参拝していて、全員即死したといわれる。

昭和三十二年一月、戦地から内田克雄が復員し、あとを継いで宮司となり、昭和二十八年十月、現在の神社を復興した。

広瀬神社

[広瀬神社](#)

当時、広島市広瀬元町一五〇番地(現在・広瀬町一ノ一九)・爆心地から約 〇・八キロメートル・社司山崎頼男。

境内地一、一五五坪、社殿は木造瓦葺七〇・七五坪、なお、境内西側には末社、稻荷神社・恵美須神社・天満宮及び清陽社の四社があった。

神器・古文書その他物資の疎開状況は不明であり、社殿は、避難者が被爆の夕方に帰ってみたところ、すでにまったく焼失していたという。

被爆当日、社司ただ一人が神社内にいたが、安佐郡新庄山下方面に脱出して助かり、昭和二十二年九月に焼跡に復帰し、引続き同年十月、本殿及び拝殿を復興した。

昭和三十一年に内田社司が死亡したため、野上正徳宮司がこれを引継ぎ、昭和三十三年十月十九日、終戦後をはじめて例祭を執行した。

胡子神社

[胡子神社](#)

当時・広島市胡町四一五番地(現在・胡町五ノ一四)・爆心地から約 〇・八七キロメートル・社掌新延佳一。

社殿は、木造瓦葺本殿及び拝殿一三坪、その他神官居間二〇坪、往昔から商売繁盛の神社として栄え、現在に及んでいる。

焼失状況は不明であるが、延焼により焼失したのと考えられる。被爆当日、社掌一人が社内にあり死亡した。のち家族三人も死亡した。

一望の焼野原のなかに、昭和二十年十一月、社殿一坪・拝殿一二坪を復興し、引続き十一月二十日に、町内生存者二〇余人が集り、戦後最初の祭典(第二巻二九二ページ写真。但し説明の昭和二十二年は誤植)をおこなった。神官は生き残った新見金司(昭和二十一年死亡)一人だけであった。当分のあいだ焼野原の中に、この新社殿ただ一つがボツンと立っていて人目をひいた。

住吉神社

[住吉神社](#)

当時、広島市水主町五五番地(現在・加古町)・爆心地から約一・三キロメートル・社掌内田末雄。

神殿・祝詞殿・拝殿・渡廊下など木造平家建約四〇坪の建物があった。浅野藩時代に水軍の守護神として祭られ、戦後も崇敬者多く毎年六月十四、五両日(旧暦)の祭典は盛大である。

原子爆弾の炸裂により、社殿はじめ社宝・重要文書などすべて焼失し、境内に茂っていた老松もほとんど枯死したが、ただ一本、川べりの松が現在まで残っている。被爆当日、境内に罹災者が雲集し、臨時救護所が設置された。また、ここから暁部隊の舟艇によって多数の負傷者が似ノ島その他へ運ばれていった。

昭和二十年六月十五日、社掌内田末雄が戦死(フィリピン)したので、内田熙雄(昭和四十五年一月二十七日死亡)が昭和二十三年十月六日宮司に就任し、復興対策を進めた。

昭和二十三年、バラック建てながら神殿と社務所を再建し、同年六月、戦後最初の例祭を執行した。しかし、世情なお不安で参拝者はなかった。

三篠神社

三篠神社

当時、広島市三篠町一丁目一番地ノ五(現在も同じ)・爆心地から約一・七キロメートル・社掌野上敏鷹。

境内地八一二坪、社殿は六五坪、社務所六二坪その他倉庫一〇坪などがあった。

被爆一週間前に、御笑代を神社境内の防空壕内に移し、神具及び調度品の大半を安佐郡佐東町川内の中調子八幡神社に疎開していた。

八月六日朝・野上社掌(現在・宮司)一人のほか、三篠青年学校の小迫一二三校長及び同校生徒が神社境内において授業中に被爆したが被害状況は不明である。野上社掌は健在であった。

社殿は半倒壊し、社務所は倒壊した。鳥居三基も爆風により崩壊し、引続き火災により全焼した。建物がほとんど焼けつくした六日夕方の五時頃、大雨が降って火を消した。被爆直後、数人ここへ避難して来た者があったが、重傷者であったためか再び逃げられず皆焼死した。また、樹齢三〇〇年におよぶ境内の樹木がことごとく枯死した。

被爆から約一か月のちの九月十日、疎開地から神社焼跡に出張し、防空壕内の御笑代を現在大宮町の当社御旅所に奉遷した。しかし、この御旅所も爆風によって破壊されており、辛うじて使用できる程度であったから、応急修理をおこなった。

昭和二十三年四月から十月までの間に、社殿及び社務所を復興し、ついで昭和三十一年に拝殿を建立した。

現在の境内樹木は数本を除くほか、すべて苗木または種子をまいて育成したものである。

比治山神社

比治山神社

当時・広島市桐木町九二七番地ノ一(現在・比治山町五ノ一〇)・爆心地から約一・八キロメートル・社掌大己正晴。

本殿拝殿の木造瓦葺流れ造り四二坪、社務所六五坪、手水舎三坪その他稲荷社一坪その他があった。

神社の背部が比治山公園であるから、山腹に小さな横穴を掘り、ご神体及び重要書類をその横穴へ疎開し、本殿の板壁を抜き取り、拝礼に妨げないよう造作した。その他の建物はそのままにしていた。

神社そのものの防衛態勢はとっていなかったが、地域の防衛組織と連絡を取り、災害発生に備えていた。

万一の場合には、神社のうしろ比治山公園参道横に防空壕(社務所から約五〇メートル)があったから、これに避難することになっていたが、原子爆弾の被爆に際しては災害があまりにも大きく、安芸郡府中町へ避難した。

被爆により、社務所の二階東端付近から、放射熱線による自然発火で、本殿拝殿へ延焼し、ついに全焼するに至った。なお、境内の樹木も樹齢三〇〇年以上のもの数十本を含めてすべて焼失し、焼跡にはわずかに石鳥居・石唐獅子・石灯籠・玉垣を残すだけとなった。火災は自然鎮火したようである。

社掌は応召して外地にあり、代理社掌及び出仕職員が留守を預っていたが、八月六日はちょうど江波(羽衣)神社の祭典奉仕のため出張途中、被爆して行方不明となった。代理社掌妻は、神社付近で倒壊建物の下敷きとなり、脱出できず焼死した。また、社掌妻は、社務所内にいて手足を負傷したが、子一人を連れてすぐに安芸郡府中町へ避難して助かった。

昭和二十年十二月、社掌大己正晴(現在・宮司)が野戦から帰還し、ただちに復興に着手した。翌二十一年七月、佐伯郡大野町の親類の山林から木材を伐採購入の上、仮建築ながら本殿及び拝殿二五坪を建築、続いて二十二年三月に本建築で社務所四五坪を完成し、祭祀を奉仕した。以後、着々と復興工事をおこない、現在の建物約一、余坪に及んでいる。

なお、被爆直後、第二総軍司令部の主催により、陸海軍部隊・残存官公署の各代表らが、この比治山神社境内にお

いて、応急救護対策・復旧対策など、炎天にさらされながら会議をおこなった。この時、海軍救護隊代表は死傷者約二〇余万人と報告した。

饒津神社

饒津神社

当時、広島市二葉ノ里一番地(現在も同じ)・爆心地から約一・八キロメートル・社司男爵上田宗雄。常は東照宮の神官久保田幸重夫妻が居住。

本殿は木造桧皮葺流れ造り四坪、拝殿三〇坪、渡廊下三〇坪、及び能舞台・楽屋五〇坪、社務所五〇坪、神馬舎三坪、神輿舎八坪、神饌所八坪、宝庫一〇坪、中門瑞垣一五坪などの建物があった。天保六年藩主浅野斉肃(あさのなりたか)の創建にたるもので、宏壮な構えであった。また、萩の名所として親しまれた。

神社は市の中心部から離れた二葉山麓にあり、境内には老松林立して、一般市民の避難場所に指定されていたほどであったから、安全性高いものと考えられ、社宝その他一切のものを疎開しないでいた。

境内の能舞台は、白島国民学校の林間学校として解放され、被爆当時、すでに数人の児童が来ていた。

神社では、午前七時過ぎに警報解除となってからも、神官夫妻と使丁夫妻計四人が警戒態勢をとっていた。

原子爆弾の炸裂により、本殿及び唐門が一瞬に倒壊し、その他の建物も大破傾斜した。放射熱線により、まず本殿から出火、火勢猛烈をきわめ、つぎつぎ延焼してついにすべて灰燼に帰した。消火のすべなく自然鎮火したが、老松は無残に吹き倒され、参道にならぶ藩士寄進になる一〇〇余基の石灯籠は、頂上のギボシを吹きとばされたり、倒れたりしていた。被爆後、この境内に多数の市民が避難してきて修羅場と化し、臨時救護所が設置された。

久保田夫妻は、被爆直後、隣りの明星院が出火したとき、火傷した子どもが逃げて来たので、その子を少し先の鶴羽根神社に預けに行き、引返してみると、社殿は炎上中でどうすることもできず、約五〇〇メートル東寄りの東照宮下の国鉄の防空壕へ避難した。使丁夫妻も脱出して助かった。

久保田神官は顔面・両手・両足を火傷し、一時生死の境をさまよったが、大破した東照宮の一室で治療に当り、八月二十四日に広島赤十字病院に入院して、ようやく回復した。

昭和二十一年四月、神社焼跡に半坪ほどの拝所を建てたが、すでに参拝者があり、崇敬者の協力により、二十四年から神殿の再建に着手した。本殿再建工事は安芸郡矢野町の峠尻大工棟梁によるもので、建築資材も当人が運搬した。昭和二十四年、久保田神官は東照宮に帰り、社司上田宗雄も辞任し、後任に浅野柴門が宮司となり現在に及ぶ。

鶴羽根神社

鶴羽根神社

当時、広島市二葉ノ里三七番地ノ一(現在も同じ)・爆心地から約一・八キロメートル・社司石井博光。

本殿は木造瓦葺流れ造り、その他祝詞殿・神饌所・参集殿・手水舎・社務所・祭器倉庫など建坪約二六〇坪があった。

この地帯は二葉山麓にあたり、樹木密生し、別に防衛態勢をとることなく、疎開もしていなかった。ただ、万一の場合には、本殿裏の二葉山に防空壕があり、そこへ避難することにしていた。

原子爆弾の炸裂下、本殿・祝詞殿・拝殿・参集殿・社務所・倉庫・手水舎・神職宅を除き、その他の建物はすべて爆風により倒壊した。しかし、自然発火もなく、また境内が広い他からの類焼もなかった。

神社前が第二総軍司令部(旧騎兵第五聯隊)であったから、半倒壊の参集殿(一〇〇坪余)に同隊の将兵や一般の負傷者を多数収容した。また、本殿裏の防空壕にも同様に収容した。

ご神体はすぐに二葉山防空壕に移したが、祭事は一時停止のやむなきに至った。

被爆から数日後、第二総軍が境内にバラック建兵舎を五棟建設して入居したほか、被災市民や兵隊が境内に充満して凄惨をきわめた。

参集殿は収容者がいなくなったあと、引続き宿泊施設として利用され、被爆により焼野原となった市内では、大いに役立った。

石井社掌(現在・宮司)は、負傷していたが、被爆後、一か年を出ずして自力で本殿を再建し、御遷祭を執行した。引続き現在参集殿に使用している建物を再建した。

碓神社

⑫ 碓神社

当時、広島市白島九軒町一六二番地(現在も同じ)・爆心地から約一・八キロメートル・社掌稲井鉄操。ただし、稲井社掌の応召により、饒津神社勤務中の久保田幸重が祭事を行なう。

建物は、本殿一坪・幣殿三坪・拝殿一〇坪五八・社務所一七坪があったが、被爆当日全焼した。同時に、重要書類および諸記録をすべて焼失した。ただ、石造鳥居三基のうち、一基は爆風により折損倒壊したが、他の二基は無事であった。また、稲井社掌夫人は、辛うじて脱出し助かった。

なお、応召中の稲井社掌は、第五師団司令部付陸軍曹長として勤務中に被爆し、遺体は行方不明となった。

昭和二十一年三月、元工兵隊広場に祭祀されていた小祠を移転して、社殿再建の基礎とし、二十三年に拝殿を建設した。

昭和三十六年以後、鉄筋コンクリート造りで再建に着手、四十年四月に完成した。現在、東照宮の久保田宮司が兼務している。

東照宮

⑬ 東照宮

当時、広島市二葉ノ里六番地(現在も同じ)・爆心地から約二・二キロメートル・社司久保田主令。

本殿四坪、拝殿一〇坪、瑞垣二四間は権現造り、幣殿一二坪、神馬舎四坪など、慶安元年領主浅野光晟(あさのみつあきら)の創建になるもので、祭神は徳川家康、二葉山の中腹よりやや下った高所に、青丹塗りの社殿を構えていた。参道から高い石段を登って社殿に入るのは、現在も変わっていない。

被爆前、境内の回廊を利用して、第二総軍通信隊が無電機数台を備え、通信兵約二〇人が常駐していた。

地域的に安全性高く、なんら疎開しなかったため、社宝の大部分を焼失した。防衛態勢としては、当局の指示どおり防火用水槽の設置、バケツ・梯子の備えつけなど行なっていた。このほか、境内西側に通信隊用防空壕(一個所八坪位)が二か所あり、また石段下に鉄道局用の防空壕(一〇坪位)が一か所設けられていた。

原子爆弾の炸裂下、爆風により本殿・幣殿・拝殿・瑞垣・神馬舎が倒壊し、まず拝殿が放射熱線によって出火、ついで瑞垣・本殿へ延焼していった。神馬舎も焼失した。神輿舎・手水舎も大破したが、通信兵の活躍によって延焼だけはまぬがれた。しかし、これら残存建物も、六寸角材の柱が至るところ裂け、吹きとび、瓦が散乱し、天井も吹きとび、屋内の家財道具や土壁も吹きとばされ、ただ焼失をまぬがれたというだけの惨状に陥った。

社司夫妻と孫娘一人は、石段下の鉄道局の防空壕に避難したが、翌七日は境内の残存建物内に帰って負傷を治療した。しかし社司妻チエは同年十月十八日に死亡し、ついで翌二十一年一月十二日に社司も死亡した。久保田主令の子息久保田幸重は、居住していた饒津神社が焼失したため、被爆の八月六日から東照宮に帰り、広島赤十字病院へ入院などして、治療を続け、ようやく元気を取りもどした。

東照宮の境内及び石段下は、被爆当日、市中からの避難者で大混乱をきわめた。石段下には、臨時救護所が天幕を張って設けられ、境内に駐屯していた通信兵や、急遽来援した陸海軍救護隊や郡部医師会派遣の医療救護班などによって、当分のあいだ治療活動がおこなわれた。

久保田幸重が亡父の跡を継ぎ宮司となったが、被爆後体調すぐれず、翌二十一年三月ごろからようやく境内の飛散瓦の取除きなどを始め、境内の山林の半焼松材や市中の半焼電柱を入手して製材し、形ばかりの拝所を設けることがやっとであった。

その後、境内山林に松喰虫が発生したため、これを払下げた資金により、徐々に修理整備を進め、昭和四十年東照宮三百五十年祭を期し、ようやく社殿を再建するに至った。

なお、東照宮裏山に昔から金光稲荷神社があり、信者多く、昭和二十年十月ごろからすでに参拝者があり、現在に及んでいる。

早稲田神社

⑭ 早稲田神社

当時、広島市牛田町八八三番地(現在も同じ)・爆心地から約二・二キロメートル・社掌池田喜代登。

本殿は木造瓦葺一・八坪、拝殿三〇坪、その他境内に金比羅神社・稲生神社があり、いずれも木造トタン葺一・五

坪の建物であった。

市の北端に位置し、通称早稲田山の山中の独立建物であったから、神具などの疎開もせず、万一の場合は牛田町内会の指示によって避難することになっていた。

原子爆弾の炸裂に際しては、神社の本殿及び拝殿が山上にあったため、爆風を強く受け、屋根瓦はほとんど落下し、天井は全壊、壁は二割程度剥落した。また、金比羅神社・稲生神社が全壊した。屋内の神具なども半壊の被害であった。

幸い火災は発生せず、居住者も二人のうち一人池田久雄がガラスの破片によって負傷しただけであった。

神社が牛田町内会の避難場所に指定されていたため、被爆直後、境内は避難者が充満し大混乱に陥った。

ただちに町内の太田萩枝医師や疎開していた深川喜久雄医師が駆けつけ、社務所前に応急救護所を開設して、負傷者の救護にあたった。日をたつに従って死亡者が続出し、池田社掌その他二、三人の者が死体を荷車に積んで、何度も牛田公園に運び、そこに急設された火葬場で焼いた。

応急救護所は十一、二日まで開設されていたが、社掌本宅も負傷者を多数収容していた。この神社へ来た避難者は、軍人と中学生が半々くらいで一般町民は少なかった。中学生たちは建物疎開作業に従事していて被爆し、ようやく神社まで逃げて来たのであったが、いずれも口もきけぬほどの重傷で、「おかあさん、おかあさん」と、つぶやくように呼び続けながら、つぎつぎと死んでいった。中に上流川町の広島女学院の生徒が二、三人いたが、この女学生たちは、学校から電車の白島線に出て、常葉橋を渡り、焼津神社の横を通り、牛田のふたまた土手に出て、早稲田神社にたどりついたと語った。

社殿や神具の被害は意外に大きく、建具はまったく用をなさず、神具も破損して使えない状況であったが、多くの氏子崇敬者の努力で、次第に復旧されていった。まず、氏子の手によって屋根瓦が復旧され、逐次、神具が整えられ、被爆後一か月余りにして、もとどおりの神事が行なわれる状態になった。

昭和三十二年二月十七日、池田久雄が亡父のあとを継いで宮司となり現在に至る。

旭山神社

⑮ 旭山神社

当時、広島市己斐町一一二番地・(現在も同じ)爆心地から約二・八キロメートル・社掌内川末雄。

建物は、流し造り社殿約四〇坪・絵馬堂九坪で、被爆時には居住者が無かった。

爆風によって社殿(本殿を除く)の屋根が吹き飛ばされ、押しつぶされた。絵馬堂は若干傾いた程度であった。

神社の所在する旭山が、放射熱線によって、爆心地方向東側の三か所に火災が起き、山頂に向って火勢が伸びたが、地元の消防団の活躍と、急に激しく降りはじめた黒い雨によって鎮火し、神社も焼けなかった。

市中からの避難者は山火事のため、この神社付近に避難せず、ずっと奥の己斐国民学校や学校裏の山腹に築かれた三か所の大きな防空壕に避難した。内田末雄社掌は応召中戦死し、内田達雄が後任宮司となる。

神田神社

⑯ 神田神社

当時、広島市宇品町三一三番地(現在・宇品御幸四丁目一ノ一五)・爆心地から約三・九キロメートル・社掌池田公司。

境内地総面積五四五坪のうち、東側広場、西側幼稚園(宇品学園)、南側神社境内、北側空地で、社殿及び社務所は同一場所にあり、神社は南向きで本殿は北側にある。本殿は木造銅板葺二・六坪、社殿は木造流し造り四七坪、社務所は木造二階建瓦葺延三〇坪の建物があった。

神具などの疎開はしていなかったが、万一の場合に備えて、本殿地下に家族用の待避壕を作り、東側広場にタコつぼを掘り、簡単な遮蔽をしていた。緊急避難先としては東側広場及び西方約一〇〇メートル先の宇品国民学校に指定していた。

原子爆弾の炸裂による爆風で、本殿の屋根が吹きとばされ、拝殿は天井が落下し、釣屋のガラス窓は全壊し、座が落下、屋根瓦も多数破損した。総じて建物全体が若干傾斜した。被爆時、屋内に家族五人と親類の婦人一人がいたが、この婦人がガラスの破片により負傷し、すぐ全員で待避壕に入った。

この日正午ごろ、市中から続々と負傷者が境内に避難して来はじめ、神社前の川瀬外科病院にも負傷者が押しかけ

たが、家族のつきそった者、単身の者など種々雑多で拝殿で休養、応急手当をほどこした。重傷者で見込みのない者は、西隣りの宇品学園に収容した。

しばらく休養し、応急手当を受けたあと負傷者たちは、また繰り返されるかも知れない空襲をおそれ、宇品港から船で似ノ島その他へ渡って行った。

負傷者は次々とあとを絶たず約一か月間収容が続いたが、その数約一六〇人に達した。この間、多数の死亡者が出たので、宇品学園裏の空地で火葬にふした。

拝殿が収容所ようになっていたので、その間、全然神事がおこなわれなかった。

神社の復旧について、同年十月ごろに信者の総代会を開き、対策を講じたが、世の中がなお混乱していて寄付も集らずどうすることもできなかった。

しかし、雨漏りがひどく、放置できない状態に陥ったので、池田社掌の私有地約一〇〇余坪を売却して応急の修理をおこない、翌二十一年正月からなんとか神事ができるようになった。昭和三十三年五月二十日、池田公明が父の死亡のあとを継いで宮司となり現在に至る。

第三節 寺院…636

慈仙寺

⑰慈仙寺

当時・広島市中島本町三八番地(現在・中町五ノ一五)・爆心地から約〇・二キロメートル・住職梶山仙令。

境内総坪数一、一〇〇坪のうち墓地約三〇〇坪、本堂約一〇〇坪、座敷・庫裡約一〇〇坪、倉庫六〇坪、貸家約一〇〇坪の建物があった。

本尊の阿弥陀如来像及び歴代過去帳、什器などを郡部へ疎開し、座敷の裏庭に約五坪の防空壕を掘っていたが、万一の場合には安芸郡中野村の父方実家に避難するよう決めていた。

原子爆弾の炸裂下、爆心直下とも言えるこの寺は、一瞬に壊滅し、全焼した。このとき、住職は墓地の入口の門のところで清掃しており、妻は浴室で洗濯中で、ほかに二人の者が本堂の掃除をしていたが、住職と本堂の二人は即死した。住職の妻は、重傷で動くこともできず、当日の夜は焼跡に野宿して明かし、翌七日、親類の者が探索に来て見つけ、田舎へ護送中に絶命した。

結局、寺院内にいた全員が死亡したわけで、寺務は完全に停止した。

焼跡は、足の踏み場もないくらいに焼けた瓦が散乱し、墓石もほとんど倒壊しており、炸裂の強大な威力をまざまざと示していた。

即死した住職の後継者梶山仙順は、このとき応召中で野戦にいたから、早急な復興対策はできなかった。翌二十一年四月に仙順が復員し、ようやくもとの寺のあとに仮設住宅を建てて、復旧作業に着手した。

しかし、職員も仙順住職ただ一人きりであり、檀家や信徒もほとんど死亡、あるいは負傷し、生き残った者は遠くへ四散したため、連絡のつけようがなく、復興は遅々として進まなかった。一応の形の整ったのは、被爆から約五年後であった。

浄宝寺

⑱浄宝寺

当時、広島市中島本町六九番地(現在・大手町三丁目一ノ二)・爆心地から約〇・三キロメートル・住職諏訪了海。

境内地総坪数三〇〇坪(墓地を含む)、木造平家建ての本堂及び庫裡は、被爆前の昭和二十年一月、火事により焼失していた。従って被爆時には新庫裡の木造二階建て及び茶室約五坪があった。

本尊の聖徳太子像・親鸞聖人像・蓮如上人絵像、及び門徒過去帳を安佐郡佐東町緑井の専蔵坊へ疎開していた。また、親鸞聖人絵伝図は安芸郡熊野町の西光寺に疎開していたが、その他はほとんど焼失した。

五日後、己斐町の増田宅に泊り、六日早朝に帰院した了海住職は、法事のため出かけねばならぬと、その朝七時過ぎに浄宝寺に行った安佐郡緑井の清水某に言っており、原子爆弾の炸裂時には、まだ在院していたか、すでに出かけていたか詳細不明で、遺体も未確認のままとなった。なお、清水某は警報発令中であったから急ぎ用件を済ませて帰

る途中、新庄(市の北端)の付近で被爆し、数年後に死亡した。

妻クニと長女玲子は、前夜安佐郡緑井の美浦宅(妻の実家)に泊り、六日早朝、クニは帰院したが、炸裂時にすでに浄宝寺に到着していたか、途中であったか不明で、これも遺体未確認のままとなった。女学校四年生の玲子は、天満町の東洋製罐工場に出動中に被爆し、当日正午前についに死亡し、遺体が確認された。なお、四男了我は、中島国民学校六年生で双三郡三良坂町に学童疎開中で、同年九月十六日に帰広したが、両親も姉玲子も死亡しており、親類の世話になった。

これら住職の家族のほか、浄宝寺役僧の津川豊水(東洋工業勤務)が、五日夜から浄宝寺に宿泊していたと言われるが、詳細は不明である。また、天満町の教念寺が建物疎開になったため、住職夫人と娘一人が、境内の茶室に仮住いをしていて、ここで被爆し、その遺体は確認されたようである。

浄宝寺は爆心直下に近く、まったく一瞬の惨劇であったと思われるが、住職もその妻もまた他の居住者も、寺のなかで被爆したのであったならば、もちろん即死であったに違いない。

寺の焼跡には、ただ放射熱線によって焼けただれた瓦が崩れ落ちており、多くの墓石が無残に焼けて倒れているだけで、他には何もものも見あたらなかった。

親類の世話になった了我は、父令海のあとを継ぐことになり、翌二十一年から、学校から帰ると、消息の判った門信徒の家を訪ねてまわって、寺院の復興をはかった。

諏訪了我が年少のため、昭和二十五年になって島根県から奥野真成師を招き、代務住職を依頼して寺の運営を進めた。昭和二十七年、都市計画事業の進捗により、所在地中島本町が平和公園になったため、現在地に換地を受け、翌二十八年に本堂を再建した。昭和三十五年、諏訪了我が新たに浄宝寺第十六世住職となり現在に及ぶ。

浄岡寺

⑱ 浄圓寺

当時、広島市材木町四番地(現在・中島町三ノ二五)、爆心地から約〇・四キロメートル・住職上園志巖。

本堂は慶応元年(一八六五)頃建立された木造瓦葺の寝殿造り約一〇〇坪、庫裡は木造瓦葺九七坪であった。

本尊の阿弥陀如来像は、安佐郡高陽町玖村の圓正寺に疎開しており、難をのがれた。また、重要書類や過去帳などは、墓石の地下に埋蔵して助かった。

寺院の防衛態勢としては、簡易消火器数本を備えつけ、本堂向拝の軒下に一間四方の穴を掘り、板切れを渡して土を覆う程度の防空壕を作っていた。

万一の場合は己斐町の蓮照寺に避難することに決めていたが、住職自身は、“死ぬるときが来れば死ぬるがよし、避難できればこの上もなし”という心境であった。

爆心地に至近距離で、本堂も山門も、また庫裡も一瞬に炎上し、墓石もすべて倒された。建物近くにあった墓石は特にひどく焼けただれて、赤い皮をかむった丸いタマネギ状になった。

周囲二メートル余もあった樹齢一五〇年の松の大木も、全部枝が焼け落ち、四、五メートルばかりの丸太棒のようになって立っていたが、四、五か月のち自然に倒れた。

火災が完全に自然鎮火したのは、一昼夜後であったが、焼けるものはすべて焼きつくされ、寺の跡には瓦礫の小山が散乱しているだけであった。

院内で被爆した住職夫妻は即死した。被災直後、嗣子上園志水が郡部から帰って来たが、ただの焼野原ではどうすることもできず、坊守の里方である島根県赤名町の西蔵寺にひとまず寄留することにし、八月から十月まで行っていた。しかし、浄岡寺の復興を計るため、同年十月から広島市仁保市湊崎の西福寺内に、浄圓寺仮寺務所を設け、毎日、そこから焼跡を訪れ、門信徒との連絡につとめた。門信徒は被爆した墓碑の安否を気づかって、次々に浄圓寺の焼跡に参詣したから“浄圓寺後継者は健在である”と、それらの人々に告げると共に、お互い命のあることをよろこび、励ましあった。

昭和二十一年三月初旬住宅営団の罹災者用の組立家屋(二四メートル四方)一式を購入して、焼跡に仮寺務所建て、仁保町から移り住んだ。

昭和二十二年五月、似ノ島の門徒中の寄付協力により二八坪の仮本堂を浜田組の請負工事で建立した。

昭和二十五年春、所在地一帯が平和公園となることになったので、その換地を受けて、同年九月に墓碑の移転を開始し、十月に完成した。またこの十月に、建物一切を曳き移転方式で木挽町十番地に移した。

翌二十六年九月、本堂(六五坪)・庫裡(三八坪)の建立に着手し、二十七年三月に完成した。続いて二十七年に保育所を建設した。

しかし、昭和三十五年七月二十九日、失火により庫裡全焼、本堂半焼の災難にあったので、同年十月、再び復興工事に着手し、翌三十六年三月に完成して現在に至る。

妙法寺

⑩妙法寺

当時、広島市材木町四番地(現在・中島町三ノ六)・爆心地から約〇・四キロメートル・住職関根龍雄。

本堂は木造瓦葺平家五六・五坪、庫裡木造瓦葺平家八二坪、山門木造瓦葺四坪、及び境内に瘡守堂二〇坪、稲荷堂四坪、及び墓地があった。

本尊の日蓮聖人像及び壇家各家別過去帳、瘡守本尊は、宮島の縁故宅に疎開してあり、被爆から免れたが、年別過去帳をはじめ仏具・什器などはすべて焼失した。

寺の境内に三坪ほどの防空壕を掘り、防火用水槽二、三箇備えていた。非常の場合は町内会指定の場所に避難することになっていたようである。

爆心地に至近距離であったため、原子爆弾の炸裂下、瞬時に全壊全焼し、寺内にいた者四人は即死した。檀家の生存者より聞くとところによると、この日は某家の法要の準備をしていたようである。

墓石はほとんど倒れ、建物に近い墓碑は特にひどく焼けて、ボロボロになって崩れていた。焼失した家屋の下から二人分くらいの遺骨が発見された。住職は応召中であったが、復員後、焼跡に行ってみると、長いコンクリート塀はすべて倒され、倒れた墓石の中でも、熱線を受けた墓石は、皮をはいだように崩れ落ちていた。また、家族が土中深く埋めていた什器・陶器類も、爆圧によるものと思われるが、ほとんど壊れていた。

復興対策は住職が応召中であったため、復員するまで何ら講ずるところなく、寺務も停止した。関根住職が復員して、復興対策を進め、約半年後に焼跡にソギ葺の木造平家(二六坪)を建て、ここによろやく宗教行事を復活することができた。

寺の再開にあたって、住職ほか一人が荒廃した境内の墓碑の整理・復元、あるいは檀家の死亡者の確認や連絡などを進めた。

広島市の平和公園建設により、旧来の材木町四番地(現在・公会堂の付近)から現在地へ、昭和二十六年から二十七年にかけて換地移転して現在に至る。

誓願寺

⑩誓願寺

当時・広島市材木町一〇二番地(現在・三滝町三二二)・爆心地から約〇・四五キロメートル・住職成田準弘。

境内地は広く、本堂・庫裡・書院・位牌堂・鐘楼・経蔵・明神堂・廻廊・茶室などの諸堂宇があったが、建坪は不明である。山門は殊に堂々としていたから“大きいのは誓願寺の門”という比喩があったほどである。池には無数のカメがおり、家バトもたくさんいて、人々に親しまれた。

爆心地に近く建物は全壊全焼、住職その他居住者の消息もいまだに不明である。寺内で被爆したとすれば即死したものと推察される。

住職はじめ寺族関係者全滅により、本山当局から昭和二十一年六月に後任住職広瀬準隆が着任し、復興対策を進めることになったが、この寺院の跡地が平和公園になることになったので、広島市復興事務所の建築許可が出ず、換地先の中島新町に一部寺院を再建した。

しかし、墓地を三滝墓苑に移転改葬した関係上、寺を墓苑近くに移転することにし、敷地を得て本堂・庫裡・書院・客殿・茶室・山門などの諸堂宇を再建した。

国泰寺

(22)国泰寺

当時、広島市小町(現在・中町七一七)・爆心地から約〇・六キロメートル・住職西沢天海。

広島藩主浅野氏の菩提寺で、紀州から入城した浅野長晟(あさのながあきら)をはじめ、その他一門の墓碑が広く開

静な敷地に幾基も並んでいた。このほか境内には豊臣秀吉遺髪塚・赤穂義士大石氏の墓、ならびに赤穂義士追遠塔などがあり、一般藩士の墓も多く、頼家はじめ藩儒者などの筆になる碑銘も数多く、好事家の心を惹いていた。

境内に旧仏閣造りの堂塔一二棟三八〇坪が建てられてあり、堂々とした構えであった。

陸軍船舶部隊(暁部隊)約八〇〇人くらいが常時駐屯していたので、防衛態勢は充分と考えられ、重要書類その他も疎開しないでいた。しかし、万一の場合には、草津町海蔵寺の山に避難するよう決めていた。

爆心地に近く、原子爆弾の炸裂と共に、一瞬に堂塔ごとごとく倒壊し、炎上したと思われるが、天海住職ほか修行僧五人が全滅したため、炎上の状況についてはつまびらかにしない。

境内に駐屯していた将兵の被害は不明であるが、寺族及び疎開して来ていた者ら即死四〇余人、負傷者一人(三日目死亡)を出した。

被爆の翌七日朝、草津の海蔵寺住職らが焼跡を調査したが、なお、所々に残火がくすぶっており、足を踏み入れることもできなかった。

天海住職死亡のため、昭和二十年十一月、宗規により法類福原英巖(海蔵寺住職)が、その跡を継いで国泰寺住職に就任し、復興対策を進めた。翌二十一年二月十日、本堂の焼跡にトタン小屋を建て、手弁当で毎日草津から通い、瓦礫や焼残りの廃材の整理に着手した。

昭和二十八年秋から、境内地を処分して復興資金を得、以後十か年余にわたって、鉄筋コンクリート建てによる本格的な堂塔の再建を進め、現在、総建坪四三〇坪(工費一億一千万円)に及び、なお続行中である。

本覚寺

(23)本覚寺

当時、広島市左官町一五番地(現在・十日市町一丁目四一〇)・爆心地から約〇・六キロメートル。住職金川龍洗。

本堂木造平家四二坪、庫裡三〇坪、客殿四〇坪、門八坪、妙見堂一二坪いずれも木造瓦葺の建物があった。妙見堂の祭事は、市の西地域の人々に親しまれ、西部ではこの祭りの日から浴衣を着はじめるという習いがあった。

本尊は安佐郡八木村の辻家に疎開し、重要文書は寺内の井戸の中に入れていた。防空態勢としては、境内に防火用水槽を設けており、戦後の現在も町内用水として活用されている。

万一の場合の避難先としての指定場所は不明であるが、被爆直後、龍洗住職は佐伯郡宮内村に避難して、九日に死亡、また住職妻は安佐郡古市の中本家(実家の疎開先)において十一日に死亡した。

住職夫妻と家族の五人(二人屋内死亡)がすべて死亡し、また寺院付近の人々も皆死亡したから、現在では被爆時の惨状を知るべくもない。寺院が爆心地に近く所在していたから、原子爆弾の炸裂下、堂宇はすべて倒壊し、放射熱線による自然着火で全焼したものと考えられる。

昭和二十一年三月から、渡部正康が郡部から資材を入手し、焼跡にバラック建て一三坪の仮本堂を建てて復旧に着手した。同年十月、正式に渡部正康が本山から招待状を受けて入山し、家族四人と共に復興対策に従うことになった。

昭和二十二年七月一日から、四散した檀信徒の連絡を開始し、盆会を修行するとともに、境内の整理をおこなった。

昭和二十九年、都市計画事業により、墓地の改葬移転を実施、換地問題も解決した。

昭和三十三年十二月、現本堂を建立、翌三十三年八月に庫裡を建立し、続いて三十四年に妙見堂を建立した。ただし、鳥居と石造の獅子は戦前のままである。

円隆寺

(24)円隆寺

当時、広島市三川町二九番地(現在・同町八九)・爆心地から約〇・九五キロメートル・住職中谷慈経。

本堂木造平家建七〇坪、庫裡五五坪のほか、稲荷堂三〇坪、日朝堂一〇坪いずれも木造平家の建物があった。古くから“とうかさ”と呼ばれて親しまれ、この宵宮の日から浴衣を着初める習俗があり、戦後、さらに全市的な民俗行事として隆盛を続けている。

重要書類・寺宝などを境内の防空壕の中に入れていたが、水に浸ったため八月六日の朝、本堂の縁側に出して乾かしていたところを被爆し全焼した。しかし過去帳だけは佐伯郡廿日市町の常国寺に疎開していて難を免れた。

境内の防空壕は、町内会の人々の緊急避難場所と指定されていたが、原子爆弾の炸裂下では何ら役に立たなかった。

強烈な爆風により、堂宇は一瞬に倒壊し、放射熱線により自然着火、たちまち大火災となって全焼した。

この朝、竹屋及び袋町両国民学校の児童約三〇人が、本堂で授業していたが、皆下敷きとなり負傷者二人が生き残ったほか、他は全員即死した。この二人の児童は奇蹟的に助かり、現在も健在である。このほか留守番の中村イワが台所で即死した。

中谷住職は、ちょうど比治山の墓地に出向き、読経中に被爆して負傷した。

昭和二十年九月、すなわち被爆一か月後、焼跡にとりあえず仮設の本堂(三坪)と庫裡(二坪)を建て、復旧に着手した。更に翌二十一年三月、三五坪の小屋を建てて復興対策にあたった。

昭和二十六年十一月十九日、原子爆弾症により慈経住職が遷化したので、戦地から復員していた中谷善行が、そのあとを継いで住職となり、更に復興対策を進め、昭和四十年、鉄筋コンクリート建ての堂宇一三〇坪を建立して現在に至る。

広島別院

(25)本願寺派広島別院

当時、広島市寺町一番地ノ一九(現在も同じ)・爆心地から約一・一キロメートル・輪番榎藤哲蔵。

建物は、本堂を中心として、対面所・庫裡・茶室・会館・山門など木造平家建四〇坪があった。

本尊及び法宝は、安佐郡安佐町後山に本願寺の工員養成所として設備した後山道場へ疎開し、その他のものは郡部の各寺院へ疎開していた。

境内に完備した防空壕を作ったほか、防空対策も一般と合わせて実施し、万一の場合には前記の後山道場あるいは郡部の寺院へ避難することになっていた。

八月六日は例日のおり午前六時勤行をおこない、七時過ぎの警報解除後は輪番室において要談中、被爆した。本堂及び他の建物も全壊に近い被害であった。

原子爆弾の炸裂下、まず放射熱線により中庭の樹木が燃えはじめたので、職員が棒ぞうきんに水を浸して消火しようとしたが、ぞうきんの方が燃えだし、こちらを消せば他が燃えはじめるという状況で、ついに本堂に延焼し、次々と燃え移っていった。火の粉をさけようと、ふとんをとり室内に入ってみると、爆風で天井は吹きとばされており、そこにふとんが舞いあがって、ひっかかっていた。

火勢は急激に高まり、各自無我夢中で近くの本川に逃げるのが精一杯であった。夕方になってようやく自然鎮火したが、榎藤輪番と職員一人、雇員の老翁一人及び参詣者二人計五人が即死し、一〇人が負傷した。

寺内にいた職員の猪原俊成(現在・品龍寺住職)は、落下物の下敷きとなって気絶し、三、四〇分して気がつくと、大本堂がなくなっており呆然としたという。

林副輪番は、ちょうど本山に出張中で難を免れ、八月十日帰広し、生き残った職員を集めて戦災処理の対策を協議し、とりあえず安芸郡坂町の西林寺に教務所を移した。

さらに同年十二月、坂町の西林寺から、己斐町の善法寺に教務所を移し、仮堂の建築を企画し、翌二十一年一月ごろから、林副輪番と職員一〇人により教務所態勢を整え、復旧対策に取組み、同年五月、復旧資材など門信徒の寄付や勤労奉仕によって、もとの焼跡に仮堂を完成した。

なお、境内には現在、被爆しながらも奇蹟的に枯れなかった蘇鉄樹が残っており、また、納骨所石碑が一部欠けたまま立っている。

多聞院

(26)多聞院

当時、広島市段原町(現在・比治山町一〇五一)・爆心地から約一・七キロメートル・住職亀尾宥賢。

本堂木造瓦葺平家一六坪庫裡七〇坪、客殿五〇坪倉庫(土蔵)一〇坪、本門三坪の建物があった。

多聞院は比治山公園の西側山麓にあって樹木にかこまれており、比較的にお安全と思われていたから、寺物は何も疎開せず、むしろ木挽町の福寿院の仏堂荘厳具を預かっていた。境内に防空壕を二か所掘っていたほか、別に防空設備はしていなかった。万一の場合には、町内会が指定した安芸郡温品村へ避難することになっていた。

原子爆弾の炸裂にとまなう爆風によって、諸堂宇の瓦が全部剥げて落下し、約三〇センチメートルばかり、建物全体が傾斜した。また堂内の建具が破損し、諸器具が飛散した。山門は倒壊し、居合せた身元不明の母子二人が圧死していた。

院内から火災は起らなかったが、寺の下の電車道西側の民家から発火し、つぎつぎと延焼すると共に、午前十時ごろ、桐木町から段原町へむかって火勢が南下し、危機に陥ったが、午後一時ごろ、呉海軍鎮守府の救援隊によって、ようやく延焼が食い止められ、多聞院以下一〇数戸は辛うじて焼失を免れることができた。

院内の居住者五人及び合宿者の警察警備隊三〇人は無事で、それぞれ避難した。また、町民も全員避難したが、町内会長の亀尾住職はただ一人踏みとどまり、町内を巡視して、倒壊物の下敷きになっている者を救出し、数人の負傷者の応急手当をおこなった。

六日夕刻、中国地方総監府の服部副総監、県警察部の石原部長、高野県知事などが多聞院に集合し、「仮総監府」と掲示すると共に、ここに「県防空本部」が設けられ、広島被爆の報を内務省に通報するとともに、県下各機関あるいは隣県に対して救護班の出動命令が出された。七日早朝、これらは山口町の東警察署に移転したが、この間、多聞院は県下各地からの救援物資の受付所となり、比治山に逃げて来た多数の被爆者や付近の焼跡にとどまっている人々に“にぎりめし”の配給をおこなった。

被爆後、二、三日たって、避難先から帰って来た町民約五〇人近くを、ひとまず寺に收容したが、十日ごろ、臨時配線により電灯がつくようになったので、收容町民に対し、バラック小屋の建設をすすめた。その資材は、焼け残った倒壊木材を利用し、屋根にするトタンは、一枚一枚で焼トタンを買い集めて、それぞれに配分した。また、寺の持つ畳を一帯帯につき二枚ずつ、布切れ、土びん、茶わんなどの生活用品もあるだけ配分して急場をしのいだ。

寺の復旧は、檀信徒の被害も甚大でその方途も立たず、屋根も焼トタンや古ダタミを載せてつくろう有様であったから、雨も激しく、雨降りの日は眠る場所もないという状態であった。

しかし、寺務だけは続けて、昭和二十年九月の彼岸に、第一回原爆死者合同法要をおこない、昭和二十一年から、拡声器二個を購入して、市内の焼跡各地を巡回し、多数死没者の読経供養を実施した。

昭和二十四年、平和の鐘(一六〇貫)を作製し、毎朝八時十五分に追善供養と平和祈願のため鐘をついて現在に至った。

この平和の鐘の「鐘楼」は被爆前からの木造建物で、その天井は爆風のため破損したまま現存している。柱は熱線によって焼けていたが、二五年間を経過した今日では、風雨にあたって残痕を認めがなくなっている。

本堂その他建物の本格的修理は、昭和二十六年秋からようやく着手したが、昭和三十一年失火により焼失、昭和三十五年に再建して現在に至った。

唯信寺

(27)唯信寺

当時、広島市舟入南町三丁目八番地ノ二二(現在・舟入南町四ノ六三)、爆心地から約二・六キロメートル、住職大内義直。

本堂木造平家建六五坪、庫裡一五〇坪、茶室二〇坪いずれも木造の建物があった。

本尊阿弥陀仏像ならびに諸仏像・重要書類・過去帳などを、安佐郡狩留家の知人宅へ疎開していたが、寺が市の中心部よりはずれ、周囲に田畑多く、広島市防空計画により災害時の重傷者收容所に指定されていたから、薬品類や医療器材をはじめ、民間人も種々な物資を本堂の中へ疎開していた。

境内には防空壕・貯水槽など設置して防衛態勢を整えており、また、万一の場合に備えて、江波港町の元県立広島商業学校へ避難することになっていた。

大内住職は、舟入連合町内会長兼国民義勇隊舟入大隊長であり、この日午前七時半から雑魚場町の建物疎開作業に出動する町民約二〇〇人を、電車道(江波線)の東側の歩道に集合させ、三分間ほど激励の言葉をのべて帰院し、次男と長女を連れて散策中、B29一機が上空にあらわれたので、眺めながら話していて被爆した。

長女は全身に火傷を受け、庫裡にいた者は、轟音とともに凄い上下震動を感じて庭に飛び出した。

諸堂宇は八割損壊の状態、寺の周囲の板垣が熱線により自然着火したが、みんなで消し止め、建物への延焼は免れた。

そこへ、乳母車に幼児をのせて出動した若妻もいた舟入学区一〇か町の国民義勇隊員をはじめ、同じく雑魚場町付近の疎開作業に出動していた県立第二中学校の生徒、進徳高等女学校その他各学校の女生徒たち、また土橋一帯の重傷者が、電車道づたいに唯信寺に殺到しはじめ、ついに本堂から庫裡・境内・墓地にいたるまで約七三〇人余の負傷者でいっぱいになった。

大内住職ら家族七人総がかりで、もっぱら救護につとめたが、生徒たちの親を呼ぶ叫び声、死を自覚して「君が代」を絶唱する声、また断末魔の苦悶の声など、唯信寺は一挙に生地獄と化した。こんな大混乱の中で重傷の二人の妊婦が出産した。しかし、水道管が用をなさないため、寺の古井戸の水を汲んで産湯を使わせねばならなかった。大内住職がその名づけ親になった。

収容者が、連日五人ないし一五人くらいずつ死んでいくので、野戦の経験者の指導により、寺の西側の農地に、南北の溝を掘り、離散した寺の縁側の板を上置き、五人か一〇人の死体をならべ、溝の底にタキ木を入れ、風上から火を放って一度に焼いた。一体ずつ横に名札を立てて目じるしとし、遺骨は白布に包んで整理した。作業は二か月半に及んだが、その間、収容者のうち自力で歩けない者はほとんど死亡した。たとえ歩いて家族の所へ帰った者も、二、三か月のうちには死亡したようである。

大内住職は、神崎学区の西村幸蔵連合町内会長が被爆死亡したので、とりあえずこれを兼務し、同時に避難者の殺到で大混乱中の江波地区の食糧配給業務をも担当することになった。

被爆後も敵機がしばしば飛来し、再度の攻撃におびえる市民は、郊外へ続々と避難したが、大内住職とその家族は踏みとどまざるを得なかった。多数の負傷者の救護と死亡者の処理・読経供養・遺骨の整理など約二か月半のあいだわが身を忘れた日々であったが、舟入学区その他の被爆町民に対する配給業務も加わり、境内に配給所を仮設し、一色匠を事務主任、加藤カズ子を職員に決めて生活物資の確保に万全を期したのであった。

九月十七日夜半からの枕崎台風の襲来により、ひどく傾斜していた本堂その他の建物が完全に倒壊したので、ただちに五坪の仮設住宅を建て、すべての業務を続行したが、この打撃は大きかった。市内の各寺院が壊滅したので、唯信寺は一層寺院としての活動も発揮しなければならぬところへ、不慮の災害に遭遇して途方にくれた。

幸い信徒の建築業者により、倒壊した寺の廃材や郡部から新資材を入手し、昭和二十二年四月、本堂と庫裡を建立した。更に昭和二十四年に、庫裡を二階建てとし、一階に幼稚園舎と事務所を設けた。翌二十五年には新たに二階建ての幼稚園舎を新築し、三十九年には新様式の庫裡を再建立して、現在に至る。

瑞川寺

(28) 瑞川寺

当時、広島市尾長町天神谷(現在・山根町)・爆心地から約二・七キロメートル・住職(代)曾根田恵明尼。

本堂及び庫裡木造ワラ葺六五坪、鎮守金比羅堂銅板葺一五坪、稲荷堂瓦葺一〇坪、山門三坪、土造倉庫六坪があった。防衛態勢の詳細は不明であるが、一応の施設はととのえていたと思われる。

原子爆弾の炸裂直後、放射熱線により本堂のワラ葺屋根に着火し、瞬時に全焼した。本堂から約五〇メートル離れていた金比羅堂・稲荷堂・土蔵などは焼失をまぬがれたが、爆風により倒壊寸前の被害を受けた。少し東寄りの国前寺は火災にならず、被爆直後、臨時救護所となり軍人や一般市民の負傷者が多数治療を受けたが、放射熱線にムラがあるという一例であろう。

田中哲翁住職が、昭和十三年九月から同二十七年九月まで、アメリカ合衆国ハワイ曹洞宗教師として渡米していたため、小町の聖光寺住職下野大展が兼務住職となり、その代替者として曾根田恵明尼が居住管理していて、被爆負傷した。

恵明尼は八二歳の老齢のうえ、負傷も相当ひどく、復旧対策もなかなかはかどらなかったが、焼失しなかった鎮守稲荷堂を本堂代用として、一応宗教行事を続けた。約五〇軒の檀信徒も、ほとんど被爆者であり、生活にも追われて早急な協力は望むべくもなかったから、檀信徒及び付近住民の協力によって、寺有の山林を伐採し、その資材により応急措置をおこなった。

兼務住職下野大展は、昭和二十年九月四日、原爆症によって死亡し、恵明尼はしばらくして下関に転居し、昭和三十年ごろ老衰により死亡した。

昭和二十七年九月、アメリカから田中哲翁が帰朝し、二十八年三月瑞川寺に入り、復興対策を進めた。昭和四十年から寺有地約一万坪を整備し、現在宅地造成中である。

三瀧寺

(29) 三瀧寺

当時、広島市三滝町四一一番地(現在も同じ)・爆心地から約三・二キロメートル、住職佐藤要憲。

寺は広島市の北辺山腹に所在し、三つの滝があって四季美しく、市民遊行の所でもある。山中に諸堂宇が散在し、観音本堂三〇坪、庫裡三五坪、離れの庫裡一二坪、天神堂五坪、三鬼堂一二坪のほか、一〇坪から二〇坪の参詣者休憩所が三、四か所に分散して建っていた。登道の各所には石造の供養仏が、古色蒼然として多数立ちならんでいる。

山中の寺ゆえ、三滝町その他周辺地区の避難先として指定されていたほどで、市立中学校の理科実験用具や縁故者の重要物品が寺内にたくさん疎開されていた。万一の場合に備え、防空壕を作っているときに被爆した。防火用には、滝の水量が豊富であったからこれを利用することにしていた。

また、市内から檀信徒の矢島(四人)・高(四人)・斉藤(三人)ほか一人が疎開居住していた。

原子爆弾の炸裂のとき、住職は三鬼堂に参堂して勤行をしていたが、爆風により落下した木材で首を負傷した。寺内にいた他の二人の者も負傷した。

諸堂宇は半倒壊し、屋根瓦は吹きとばされ、ガラスは木端微塵に破砕、床板やタタミは跳ねあがり、壁は半分崩れ落ちた。寺は火災から免れたが、山中にあったワラ葺の家が放射熱線により着火、全焼し、山の立木の一部が焼失した。また、山中の各所に火災が起きたが、炸裂の一時間後に大粒の黒い雨が降って来て自然に消火した。

山中の木々には、爆風によって吹きとばされたトタン板や焼けてボロボロになった洋服などが、高いところに引っかかっていた。

建物の中は、足の踏み場もないほど乱れていたが、市中から避難者が押し寄せて来て、諸堂・休憩所すべて身動きができない状態に陥った。

六日七日は、寺で炊出しをし、三日目に、はじめてムスピの配給があった。しかし、真夏の暑さに腐りやすく、また炊き直して避難者にくばった。寺が保有する食糧も衣類もすべて提供したが、あまりにも多数の避難者で、すぐ品切れとなった。

山したの三滝橋付近に臨時救護所が設けられたが、薬品とぼしく赤チンキを塗る程度のことであった。避難者が次々と死亡したので、参道途中の鐘つき堂付近が火葬場となった。

避難者は一週間くらいして、それぞれ縁故者をたより、次第に下山していったが、どこへも行くところのない人も多く、長いあいだ残っていた。

天神堂・三鬼堂・観音堂は、廃材やトタン板を使って被爆一年以内にはほぼ修復し、庫裡は昭和二十六年に新築した。観音本堂は損傷ひどく危険になったため、解体して現在、再建中である。

昭和二十二年、佐藤天俊が戦地から復員し、佐藤要憲のあとを継いで住職となり、現在に至る。

法雲寺

(30)法雲寺

当時、広島市宇品御幸通三丁目六四番地(現在・宇品町二九七)・爆心地から約三・六キロメートル・住職山本正念。本堂木造瓦葺七六坪、納骨堂レンガ造二坪半、仮庫裡一五坪の建物があった。

昭和二十年三月、宇品地区を南北に火みちを切るため、疎開命令が出て一三二号の札を貼られ、陸軍運輸部の労務者約一〇人と門徒婦人会一四、五人が、五月中旬から二か月余かかって、本堂と納骨堂を約二〇メートル奥(現在地)へ引き移した。

本尊及び宗祖・七高僧・聖徳太子木像・及び重要書類を安佐郡へ疎開し、大藏経その他の仏書は、寺内の建物から離れた場所にトタン屋根の小屋を建てて、そこへ移し、火災にかからないようにしていた。

防衛態勢としては、一〇数個のバケツに常時水をたくわえ、七、八個の砂袋、手提げポンプなどを整備し、防空壕は、宇品地区は一メートルも掘れば水が出て掘れないから、酒造りの大樽を矢野町から求めて地下に埋め、材木で蓋をして代用にした。万一の場合には、安佐郡口田村小田の教円寺講師部屋を避難先に決めていた。

六日朝、住職が聞きなれないカランカランと聞える飛行機の音を聞いて、北方を見ているうち、青紫の波のような電光を感受したとき、大音響が起った。

このとき、法雲寺の境内は静寂であったが、筋向いの家一〇戸ばかりは、疎開で引き倒すことになっていたもので、四、五人の者が集りかけていたところであった。

原子爆弾の炸裂直後、強烈な爆風が襲来し、本堂の屋根の棟瓦と共に、南側の瓦が三メートルほどずれ落ち、北側の柱(五寸角)が一本途中で折れ、本堂の建物全体が若干東へ傾斜した。天井板はほとんど吹き飛び、納骨堂の棚から数個の骨が転げ落ち、水屋は転覆した。しかし、火災は発生しなかった。住職は午後二時、燃えさかる広島市内を北

へ進み、安佐郡口田村の教円寺に避難したが、翌七日早朝、被爆死亡者の葬儀をおこなうため、まだ煙り続けている市内を通過して法雲寺に帰着した。同日昼頃、山県郡から来た救援隊の宿舎に指定され、その夜から本堂に四、五日間泊めた。

なお、被爆当日、宇品地区から雑魚場町付近の建物疎開作業に出動していた人々が、多数死亡し、現在、寺に残っている過去帳には、二〇八人が記録されている。

破損した本堂は雨もりがひどく、韓国人の屋根職人二、三人が一週間かかって修理し、また、県庁からガラスの配給を受けて、本堂の障子をととのえることができた。

不動院

(31) 不動院

当時、広島市牛田町七八番地(現在も同じ)、爆心地から約三・九キロメートル、住職関龍暁。

金堂木造こけら葺、山門木造二階建瓦葺、鐘楼木造二階建ワラ葺、不動堂木造瓦葺、庫裡木造平家瓦葺など五棟の建物があった。いずれも国宝で現存する。

市の中心部からかなり離れた山麓に位置し、すでに郊外とも言える環境であったから、重要書類その他の疎開もしなかった。防衛態勢としては、寺院近辺の人々約三〇人による防火隊が組織されていた程度である。

八月五日夜から六日朝にかけても、特に変わったことはなく、住職夫妻と子供一人が住んでいたが、原子爆弾による負傷者も出ず、火災も発生しなかった。

爆風による被害は次のとおりである。

- 一、金堂 大柱四本が折損した程度で、仏像などの被害はなかった。
- 一、鐘楼 ワラ葺屋根のため、雨漏りが激しくなり、白壁がほとんど落ちた。
- 一、不動堂 瓦屋根の破損があった程度で、仏像などの被害はなかった。
- 一、山門 瓦屋根が破損した程度。
- 一、庫裡 瓦屋根・天井・建具などが破損した程度。

被爆後、市中から親類縁故者及び信徒関係の人々をはじめ、一般の罹災者が避難して来て、庫裡・不動堂に充満し、ついに境内にはみ出し、しばらくのあいだ起居していたが、中には、広島陸軍病院関係の軍医なども負傷して避難して来ていた。

被爆後の復旧状況については、次のとおりである。

- 一、金堂 昭和二十五年改修
- 一、鐘楼 昭和三十一年改修
- 一、山門 昭和三十五年改修
- 一、不動堂 被爆後三年めぐらいに修理
- 一、庫裡 昭和三十五年四月再建

なお、関住職は昭和三十年一月十二日に死亡し、後任として昭和三十二年一月、脇坂善暁が住職となり、現在に至る。

千暁寺

(32) 千暁寺

当時、広島市宇品海岸二丁目三番地ノ一(現在も同じ)、爆心地から約四・三キロメートル、住職日下教護。

境内地五〇〇坪に、東に面して本堂木造平家一〇〇坪があり、南側に庫裡木造二階建七〇坪があった。その南及び西は建物疎開により空地となっていた。

この寺は宇品港に近く、陸軍船舶司令部の戦死者の遺骨安置所として使用されていたので、常に兵隊が駐屯していた。兵隊は防衛の任にもあたっていた。

防火対策としては、境内の地下に水槽を掘って備えていたが、本尊や重要書類の疎開などは別におこなわなかった。

被爆時、住職は檀家の法事に行っていて無事であり、坊守は裏の空地にいて負傷した。

原子爆弾の炸裂による爆風で、本堂の屋根が浮き上がり、周囲の壁・建具が落ちたり飛散したりした。庫裡も同じような状況で天井が落下した。

被害は全体としては半壊程度で、すぐにバラック式の修理をして、被爆死亡者の葬儀その他寺の活動をおこなった。

七日、他の寺で修業していた長男早善暁(現住職)が帰宅し、寺内に殺到した避難者の救護や、死亡者の供養をおこなった。

第四節 教会…662

流川教会

(33)日本基督教団広島流川教会

当時、広島市上流川町八番地(現在・上鞆町八の三三)、爆心地から約〇・九キロメートル、牧師谷本清。

礼拝堂は鉄筋コンクリート造一〇〇坪・日曜学校は木造二階建二〇〇坪(以上、流川町)、牧師館三〇坪、婦人伝道師住宅二〇坪、婦人会集会所一〇坪、木造平家建(以上、鞆町上組一三四)の建物があった。

礼拝堂は日曜日朝と夕方、水曜日夕方の三回以外は集会なく閑静であったが、日曜学校は、階下は陸軍被服廠関係により徴用され、軍服製造の工場となり、小集会室・教室(五部屋)にミシン数十台を置いて軍服を作っていた。また、階上は講堂であり、広島中央放送局の合唱団練習所として使用されていた。これらに使用されている場所に入出入りする人数については、教会側は関知するところではなかった。

礼拝堂には、堂守高島能一夫妻が居住しており、牧師館には谷本牧師夫妻と娘計三人、婦人伝道師住宅には独身の草間千世一人が住んでいた。婦人会集会所には居住者がなかった。

教会の重要書類は牧師館の庭に防空壕を掘り、火災にあっても焼けないように大型火鉢などを利用して地下に埋蔵した。ピアノ・オルガン・聖壇用のテーブル・椅子など重要道具(礼拝用聖餐式・洗礼盤)は、牛田町東区多田宅と江淵宅に、更に、牧師館の家具・衣類・書籍などは郊外の緑井中田勘市宅に疎開した。

防火態勢としては、礼拝堂は堂守夫妻が防空・防火の責任者となり、日曜学校は使用する軍隊が担当していた。この二つの建物で囲まれた庭に、二〇人収容の防空壕が作られた。また、牧師館と婦人伝道師住宅の庭にもそれぞれ防空壕を掘り、双方が使用することになっていた。なお、谷本牧師は町内会の防衛部長として、町民の防空・防火指導をおこなった。

鉄筋コンクリート建ての礼拝堂は、上流川町の臨時避難場所として指定され、牧師館や婦人伝道師住宅では、近くの泉邸を避難場所に決めていた。教会員は全市内外に散在していて、それぞれの地域の指示にしたがって避難することになっていた。

五日の夜、警戒警報発令と共に、谷本牧師は妻子を牛田町の多田宅に避難させ、自分は町内の防衛指導にあたった。六日夜半の空襲警報発令に応じて町内巡視をおこない、一晩中警戒にあたった。

六日午前七時過ぎの警報解除で、高島夫妻が守っていた教会も、日常の生活に立ちもどった。礼拝堂は人の気配もなかったが、日曜学校校舎ではすでに軍服工場の作業が始っていた。牧師館の谷本牧師は急ぎ朝食をすますと、家具の疎開を手伝うため、町内会副会長(松尾馨蔵)と荷車を曳いて、己斐町の佐藤宅に行った。その目的地に到着した瞬間に被爆した。

牛田町に避難していた妻谷本チサと幼女紘子は、牧師館に帰って来てから、隣家の高木敏子と玄関で用談した直後に被爆した。

焼夷弾や普通爆弾に対する防衛態勢ではひとたまりもなく、礼拝堂は全焼し、鉄筋コンクリートの壁だけが辛うじて残った。

日曜学校は全壊全焼、牧師館も婦人伝道師館も全壊全焼したほか、防空壕も役にたたず、収納していた重要書類も全焼した。

礼拝堂には人はいなかったが、堂守部屋にいた若夫婦二人は倒壊建物の下敷きになり、辛うじて脱出した。牧師館の牧師夫人と幼女も、草間伝道師も家の下敷きになったが、脱出することができた。

軍服工場の状況は不明であるが、相当の被害であったことは察せられる。

ともかく、居住者が生理め状態の中から脱出したときには、すでに火が付き燃えはじめていた。放射熱線による自然着火ではなく、周囲からの延焼と思われた。

教会員四〇〇人は、軍に徴用される人、老人の疎開などで、被爆前すでに人数が半減していたが、このうち七五人

はそれぞれの職場や居住地で死亡した。他はことごとく傷つき、郷里に帰る者、県外に移住する者など多数あり、終戦後、会員は広島市の近郊に住む者三五人ばかりしかいなくなった。

谷本牧師は、己斐町で被爆してからただちに己斐街道を東へむかって進み、大混乱の市内に進入した。全裸で火傷裂傷を受けた避難者の行列を掻きわけるようにして、己斐から第一の橋と第二の橋を渡ったが、それ以上前進は不可能であった。全市は崩壊し、各所から火が噴き出していた。二番目の川土手を伝い、上流へ上流へと出て、横川駅構内にたどりついた。そこから大芝公園に到り、太田川に飛びこんだ。川を泳いで渡り対岸牛田町につき、そこから南下して饒津神社前を通り、町内会の指定避難場所である泉邸に入った。

幟町一帯は猛烈な火炎に包まれていて近寄ることができず、牧師館やその他の住宅の様子は見ることもできなかった。ましてや更に市中心部の教会へ行くことなどは不可能であった。泉邸は幟町や流川町の町民はもちろん、他町の人々が立錫の余地もないほど逃げこんで来ており、まったくの修羅場と化していたが、谷本牧師はその中を歩きまわり、幟町上組の人々を泉邸内のもっとも奥まった川べりの一定場所に集合させた。防衛部長としての責任感から、ここで町内の人々を守り抜こうとしたが、午後三時と思われるころ、泉邸内の森林に火炎が移り、木や竹のはじけ裂ける音、ゴウゴウと燃えあがる凄まじい音がおそって来た。邸内に逃げこんでいた避難着たちが、この猛火に追われて、ドッと奥(川べり)へ押し寄せて来た。そのためそれまで川べりにいた人々は、押されて川の中に転落し、そのまま溺れて死ぬる人もたくさんあった。

川べりには、以前から緊急避難用のテンマ船が繫留してあったから、谷本牧師はその竹竿を持ち、何度も対岸(大須賀町)の砂地に人々を運び、安全と思われる牛田町方面へ避難するよう指示した。こうして夕方を迎えたが、邸内にはなおたくさんの避難者がうずくまり、よこたわって呻吟していたから、これらの人々の食事を考えねばならなかった。ようやく鎮火した町内へ出て行き、余熱のこもる防空壕をあさって、焼残りの備蓄米を持ち帰り、川土手で炊き、にぎりめしを配って歩いた。まだ余力のある避難者がこれを手伝った。

谷本牧師は被爆当日は泉邸内ですごし、翌朝はじめて教会の焼跡に行った。礼拝堂は無人であったから探す必要もなかったが、堂守の高島夫妻の姿は見えなかった。また日曜学校の工場の人々についてはどうなったか判らなかった。しかし、大きな被害であったに違いない。

八日から、焼野原となった市中をここかしこ歩いて、信徒の消息を集めたが、泉邸の土手で野宿して以来、血便が続いていたうえ、炎天下の焼野原を歩きまわったため、数日後ついに動けなくなった。

そのうち妻子が、無事に牛田町に避難していることが判り、大破状態の家屋を借りて住むことにした。十日間四〇度の発熱が続き、回復しはじめてからも二か月間病床に伏した。

牛田国民学校裏の佐藤家が、被爆後、香川県坂出市に帰郷したので、谷本牧師一家はそのあとを借り受け、住宅兼仮集会所としたが、教会員はほとんど被爆負傷者であって、集会を開くことができなかった、また、婦人伝道師草間千世は、広島には医師もおらず、負傷の治療もできず、宗教活動もできないため、郷里栃木県へ帰っていった。

被爆の年の十二月二十五日夜、クリスマス祝会を数人の信徒と共に、大破したままの家で催したが、終生忘れられないほどの感銘深いクリスマスであった。

教会の建物は、全部火災保険(十五万円)をつけていたが、金融凍結で使用できず、教会員も献金能力を失っていたから、広島駅頭に出て街頭伝道を開始した。しかし、それは風に向って種を蒔くようなものであった。教会堂は是非とも復興しなければならず、翌二十一年三月から、もとの焼跡に少人数の集会を移して礼拝を守り、その間、教会の再建に取りかかった。一つは、教会堂焼跡でバザーを開いた。もちろん教会員が品物を出せるわけではないので、闇市の商人の委託販売である。二つは、旧陸海軍の建物などの転用を受けて建築資材を確保すること。以上の二つに全力を集中してようやく成果があり、いち早く教会堂の屋根を葺くことができ、荒涼たる焼野原の中での、一偉観となった。以後、谷本牧師はアメリカに渡って、各地の教会や大学などで広島教会復興の運動を精力的に推進し、昭和二十三年(一九四八)から昭和二十五年にわたり、数度の工事をおこなって、ついに復旧完成を見るに至った。

なお、復興状況は次のとおりである。

一、昭和二十一年秋、礼拝堂の焼壁を利用して、その上に屋根を作った。

二、昭和二十二年、礼拝堂の窓・床を作る。その隣りに教育館(木造二階建二〇〇坪)を建てた。アメリカ募金を目当てにして借金。

三、昭和二十三年～二十五年、アメリカ募金で借金返済、土地を購入して敷地を増加した。その間、英語学級(約一、〇〇〇人二部制)・幼稚園(二〇〇人)を開設、教師(各一〇人)は教会員の奉仕により、当初は幟町小学校の校舎を借り、

教会の建物ができるようにしたがって、自前経営とし、この益金で教会堂の整備充実を進めた。

天主公教会

(34) 幟町天主公教会(現在・世界平和記念聖堂)

当時、広島市幟町一四九番地(現在・幟町四ノ三九)・爆心地から約一・二キロメートル・司祭フーゴ・ラ・サール(帰化名・愛宮真備)。

建物は、すべて木造で聖堂八〇坪・司祭館約五〇坪・伝道師宅及び家政婦宅約二〇坪があり、被爆時には、ラ・サール神父ほか神学生その他八人が居住していた。

防空対策としては、庭に防空壕を一か所掘り、その他防火用水槽を設置し、バケツを備えていた。また、ピアノ一台を郊外へ疎開していた。万一の災害時には、栄橋を経て東練兵場へ避難することになっていた。

八月六日の朝、ミサのあと、ラ・サール神父は食事をすませて、司祭館にいたときに被爆した。

ほとんどの建物は倒壊したが、司祭館だけは壁・瓦・窓ガラスなど破壊されただけで倒壊せず、ラ・サール神父をはじめ神学生は負傷しながらも、すぐ外に出ることができた。星島伝道師の家族は、倒壊建物の下敷きになったが、クラインゾルゲ神父が救出した。しかし、その後混乱にまぎれて行方不明となった。神父・神学生は、栄橋まで避難して行ったが、東練兵場に行かず、安佐郡長束の修練院に避難した。深井秘書は、栄橋から再び町なかに引き返した後、火炎に包囲されたのであろうか、そのまま行方不明となった。

教会は、他からの延焼により完全に焼失し、二十年十二月、長束修練院から資材を運んでバラック小屋を建てるまで、祭事ができなかったが、この月神父二人で再開した。二十一年三月、住宅営団から三棟分の資材を得て、十二月に司祭館を建設した。

私の、見たもの(原文英語、小倉馨訳)

司祭 フーゴ・ラッサール(帰化名・愛宮真備)

日本での最初の空襲は、昭和十九年十一月、東京を襲ったものである。神田周辺が、大半燃えた。そして、ほぼ八、〇〇〇人が死んだ。以来、首都めがけての空襲は、頻々と続いた。大阪・名古屋、その他の大都市も攻撃を受け、大損害を蒙った。同時に九州もいたるところ爆撃された。

広島でも、いずれ順が来ると考えていた。実際、昭和二十年三月十九日には約一三〇機が、広島上空に現われたが、二、三発落としたのと、機銃掃射を少し受けただけで、別に何も起こらなかった。損害も無かった。

数日後、神戸の住宅地区が爆撃されて、市街の大半が焼け、逃げおくれた者が、何千と炎の中で命を失った。広島でも、何度か警戒警報が発令された。時には何百という飛行機の編隊が、市近辺を通過するのを見たが、広島市は素通りで、わずかに一度四、五発爆弾を落とし、二、三人死んだ。人々はだんだんと、何故広島が爆撃されないのか不思議に思いはじめた。いろんな噂が流れた。敵機の落とした宣伝ビラによると、広島は洪水で破壊されるのだという。その洪水も、山の中の水源池の土手をこわして、大洪水を引起すのだという。わずか二年前、この種の洪水が、豪雨のために起って、広島地方の多くの人を殺し、大損害を与えている。中には、もし洪水となれば、全市は水浸しになって、二、三の建物が残り、人間の大半は海に流されて死ぬるものと信じていた。これは、勿論誇大な言い方ではある。中には、多くの者がスパイとして、敵陣に奉仕してきているから、広島は決して爆撃されることはない考える人もいた。

こういう噂は、私たち外国人にとっては危険であった。あるとき、私たちと親しくしていた人が、もしそのような空襲で広島が破壊されたならば、教会にとっては、噂を消す意味において、かえっていいと言った。また、他の説明では、敵側で、広島・京都など二、三の大都市に手をつけない理由は、日本に上陸した場合に必要なからとも言っていた。また、ある楽観論者などによると、広島には爆撃しても、それほど価値のあるものがないからと言う者もあった。

これらの噂も七月二十九日に岡山市が爆撃されてからは立ち消えた。岡山は広島の東約一六〇キロメートルの所にある。しかし、その注目すべき点は、地理的に近いというより、不意を衝かれたということである。真夜中の出来事で、警戒のサイレンも鳴らず、起きてみれば、岡山市はすでに燃えていた。九五パーセントの家屋を焼失したが、幸いに人的損失は少なかった。人々は、いよいよ広島の順番が近づいたと感じ、不意を衝かれないよう、ほとんどの人々が毎夜市中を離れ、市外の何処かの寺院とか野天で夜を過した。そして、夜が明けてから自分の家に帰っていった。

ほとんどの人が火災とたたかうことに望みを失っていた。が、二、三週間経過しても、警報こそたびたび出たが、広島島の爆撃は無かった。だんだんと人々は自信を回復しはじめ、毎夜毎夜うろついて、外で夜を過ごすことに疲れてきて、再び自分の家で夜を過ごすようになった。家はやはり火災の場合守らなければならぬと考えたのである。

実際、ずっと前から(戦争開始時から)、日本人は消火訓練を繰り返してきた。焼夷弾が落ちた時は、どうすれば良いかということを知っていた。訓練の警報は日夜鳴らされた。小学校の生徒を疎開させ、何千もの家屋が、防火・防空用地を確保するために取り壊された。水槽も用意された。また、川が市内に七本も流れているので、緊急の場合には、そこに逃げようと、何らかの望みももっていた。

あの近づく最後の日々、その週のころは、警報がほとんど毎晩発せられた。ラジオは敵機の行動ニュースを放送していた。しばしば大編隊が広島湾沖に集結したと聴かされた。そのたびに今度ははいよいよ市の攻撃がはじまると思ったが、また何回も何回も何処か他の方に向うのであった。

いうまでもなく、これはみな人の神経をひどく疲れさせ、市民も、いつそのこと爆撃されて、すべてが済んでしまえばいいとすら考えた。これが八月初めの状況であった。

そして、八月六日がやって来た。美しい朝であった。空には一点の雲もない。七時九分に警報が鳴った。二、三機市の上空に現われた。私を含めて市民の多くはいつこうに構わなかった。こんなことは今まで何度となくあった。半時間後、警報解除となった。

その間、私は自室に入り、日常の仕事に取りかかった。八時少し過ぎ、またプロペラの音が聴えてきたけれども、警報は鳴らなかった。私は飛行機の様子が見たくて、階下に降りて外へ出ようと思い、立ちあがった。机の傍に立って、部屋を出ようとした瞬間は、ちょうど八時十五分であった。

この瞬間、まったく突如、不思議な光りが家の内と外で光った。それは稲妻にもたとえられるが、実はまったく同じものではない。私も稲光りとは思わなかった。しかも、その朝は雷の来るような大気現象でもなかった。

私には一体何だろうと、瞬間的に自問するだけの時間があつた。一秒ぐらいのものであつた。

次の瞬間は、説明するのがむづかしい。

建物全体が、大音響と共に崩壊してゆくようであった。たちまち部屋は真暗になった。光線は音波よりも速く、爆発音の聞える以前に、すでにその効果は届いていたのである。暗闇は決して光線のために眼がくらんだのではなく、周囲に落下してきたものの埃のために、視野が遮られたか、あるいは爆発の煙のためかとも考えられる。窓・ガラス・柱・壁・天井・家具など、それこそ建物の骨格以外のすべてが、衝撃で壊れ、大半が崩壊した。何だか、あらゆるものが起爆力を持ったようであった。後に判ったことであるが、錠のかかっていたトランクも、爆風圧のために弾き開かれ、錠は潰され、中のものは一部吹きとんでいた。ガラスも粉々に割れて飛散し、トランクや物入れの箱の下にまでくい込んでいた。私のポケットの中からも、ガラスの破片が見つかった。

しかし、私は失神もせず、倒れもしなかった。戸の方を目ざして飛び出した。部屋を走り出る間にも、ものの破片が降ってきた。炎暑の最中、私はしのぎよいうように、シャツとズボンしかはいていなくて、傷や打ち身だらけになった。ともかく外に出るまでのあいだ、今にも家が倒壊するのではないかと、不安にかられた。幸い、私の住んでいた司祭館は、木造ながらも非常に頑丈な柱組みであった。材木は、何百という頑丈なボルトでつながれていたから、骨組みがバラバラにならなかった。耐震用に造られていたから、下敷きになることもなく、どうにか階段を降りて、外に飛び出すことができたのである。私は生命は助かったが、全身血まみれの負傷をしていた。周囲を見ましたが、なお薄暗くて、何一つ見えない。チャペルも見えない。しばらくして塵埃がおさまり、明るさを取りもどしてみると、チャペルは完全に地上に叩きつけられていた。この建物は、付近の民家と同様の建て方であったから、ひとたまりも無く倒壊したのであろう。それにしても、その中に住んでいた三人の神父は、どうなったのであろうか。死んだか！と、頭をかすめる。外に出たのは私が最初であったから…。ややして、神父の一人が、血まみれの顔をして出て来た。そして次、そして最後の一人が出て来たが、最後の神父がもっとも重傷であった。這い出ることはできたが、出血激しく顔面蒼白、まったく死人の顔である。

このとき、私は、「運が悪かった！最初の爆弾が家の近くに落ちたのだ。」と考えた。そして、防空計画でかねてから定められた所へ急いで救護を受けに行こうと思い、道路に出てみると、いずこも同じように倒壊していた。壊れた家屋の破片が、道路の上に散乱し、歩くことさえ困難なほどで、救護所に行けるような状況ではなかった。

火の手が、あちらこちらに上っていたが、まだ私たちの所までには達していなかった。

私は裏庭に出てみた。すると、学生に声をかけられた。幼稚園の保母二人が、建物の下敷きになっているという。

すぐ救出作業にかかった。二人は生きていたが、動くことができないで、救出は困難をきわめたが、相当の時間をかけて、ようやく引っぱり出すことができた。そのとき、他にも二人、伝道にたずさわっている人を救出した。

そこで、引続き、火のついた幼稚園の消火にあたらうとしたが、消防ポンプも無く、火は急速に拡がり、不可能な状態であった。

私は、二階の自室に駆けあがった。何も取り出さずに飛び出していたからである。しかし、その室内を見て驚いた。壁に面していた大机は、前向きになって倒れており、机の上にあった本棚の姿が見えない。扉は蝶つがいの所から引き千切られている。

私は左脚に大きな裂傷を受けており、塞がった入口を這いあがることができない。周囲を見廻わしたが、何一つとして助かっている物が無い。過去何週間か、毎夜、万に備えて小さな小包に必要なものを入れて用意しておいたのに、それも無い。何一つとして残っていない。

ふと、助けてくれという声が出た。神父の一人が、下敷きになった近所の婦人を救出するのに、手助けを求めたのである。この婦人も救出して、また、建物の方へ帰った。

この間に、みんな一応この場を離れ、神父の一人と、クラインゾルゲ神父と、司祭館の秘書である六〇歳の日本人の方(深井)と、私が居残ることになった。

火災は刻々と迫って来て、立ち去らねばならなかった。が、私は今一度、部屋に帰ってみた。何も持って出るものがないとは、信じられなかった。しかし、やはりムダであった。

引返して私は、階下にあった半壊のトランクを二つ三つ取り出して、防空壕の中に投げこみ、ありあわせの物で壕の入口を閉めた。

これが、襲い来る猛火の中での、精一ばいの行動であった。

こうして、私たち三人の神父は、そこを立ち去ったが、老人の秘書は、負傷しているにもかかわらず、私たちと一緒に行くことを拒否した。地面に坐りこんで、行きたくないと言った。私たちは無理に外の道路に連れ出して歩きはじめた。そのとき、向うから子供を背負った婦人が寄って来て、夫を助けて欲しいと懇願した。秘書は、自分の事をおまわらずにその婦人を助けてあげてくれと言った。しかし、婦人の家が何処かわからないうえ、大火の中では不可能なことであった。私たちは婦人に、一緒に逃げましょうとすすめたが、婦人はきかず、荒れ狂う火炎の中へ向って入っていった。

火災は、すっかり私たちの四方を取り巻いた。脱出口を探したが、時すでに遅く、逃げようがなかった。ただ一つ、川沿いの道(上柳町側)を他の人々が逃げていたので、それらと一緒に公園(縮景園)に向った。勿論、ここですら安全というわけではなく、園内の樹木に火が燃え移るようになったら、公園の裏の川に飛びこもうと考えた。

ここに入る前に、私たちは老秘書を置いて行くことになった。彼は私たちと一緒に行くことを頑として拒んだ。言葉や力づくで連れて行けるようなものではなかった。

後日、聞いた話であるが、秘書が二、三日前に洩らした言葉で、「日本帝国が亡びる姿を見るよりは、広島への爆撃で死んだ方がましだ。」と、語っていたそうである。また、これも聞いた話であるが、彼はその前日、郊外の親戚を訪れ、その晩泊のように言われたのを、断って市内に帰り、被爆したのである。

私たちは多数の避難者と一緒に、園内に入った。そこには、教会でいつも会っているような人もいた。前に述べた重傷の神父も来ていた。まだ出血が続いていて、止まりそうもなかった。今日のうちに死ぬるのではないかと心配した。園内のもっとも奥の、河岸に坐って、川向うの町(大須賀町付近)が、盛んに炎上しているのを眺めた。それは凄惨な火災であった。幸いに風はこちらに向って吹いて来なかった。もし吹いていたら樹々は大火災となったであろう。実際には少し燃え移ったが、避難者が小さいうちに消しとめた。

その時、雨が降りはじめた。同時に颱風が私たちの方に向って吹きはじめた。五〇メートル先の樹々の折れるのが見えた。枝々は千切れて川の中に飛ばされた。川岸に避難している人まで、風の力に耐え切れず、川の中に吹き飛ばされた。私たちのいた所から、さほど遠くない所では、病院全体が川の中にほうり込まれた。非常に危険が迫っていたが、幸いに颱風は他の方向に移動した。もし舟がたくさんあったら、難をのがれることのできた人があったかも知れない。舟は一隻しかなかった。それを見つけた人(流川教会谷本牧師)は、精一ばいできるだけの人を乗せて対岸へ、何度も繰り返し運んだ。が、大半の人は、私らを含めて火災が自然に終るのを待つほかなかった。

午後四時ごろ、火災はほとんど下火となった。私たちは教会がどうなったか、帰ってみることにした。帰る途中、余燼なお熱く、一か所に二分は立って居れなかった。防火水槽で衣服を濡らし、焼けないようにしながら行った

が、教会は完全に灰燼に帰していた。作っていた野菜は、地面の上できれいに煮えて料理のようにでき上っていたので、夕食がわりにそれを食べた。

私は脚の負傷のため、もう歩くことができなかった。そこでグループの三人が、三マイル離れた市外(安佐郡長束)のジュズイト修練道場に住んでいる友人を呼びに出かけた。そこにはほとんどが外人で、一〇人ばかり屈強な先生が揃っていた。

夜八時ごろ、彼らは軽食をもってやって来た。速やかに二つの担架が造られた。

そのうち日本人たちは、ご飯を炊いたが、それは、逃げる時持って出たものであった。私たちは、皆一家族のような気がした。グループのなかに行きわたった非常に温い思いやりがあった。

何時のまにか集った人々は、何人いたかは知らないが、六、七〇人くらい居たのであろう。このうち二〇人以上は重傷で、ほとんど動くことができない。これらの人の多くは二四時間以内に死んだ。

人々は、知人の話や助けることのできなかった人たちのことについて語りあった。一人の婦人は、倒壊物の下敷きになった夫の話をした。彼女はのし掛かった大きな木材を持ち上げることができず、生きたままの夫を、火炎のまっただ中に置いて、立ち去らねばならなかった。しかし、誰一人として不平の言葉を洩らす者はいなかった。

時は戦争中であつた。国のためには、あらゆる艱難に堪える覚悟があつた。後に聞いたことであるが、ある婦人が愚痴をこぼしはじめたら、他の者たちがそれを制したという。

日本人は不運に直面したとき、それを耐え忍ぶことに雄々しさを感じる国民である。

今一人の神父と私の二人がもっとも重傷であつたから、舟に助け入れられ、次の橋(常葉橋)の所まで行った。この橋の近くで川が大きく曲っていた。遠くからそちらを見ると、たくさんの人がいて、皆火事の鎮まるのを待っているように思われた。近づくにつれ、私たちの方に向かって助けを求めて叫んだ。あまりにもひどい傷を負っているため、そこから動かせない人ばかりであつた。しかし、私たちは何もしてあげることができず、そのまま舟を進めていった。

午後二時ごろであつたか、長束の修練道場に到着し、院長のアルペ神父に傷の手当を受けた。アルペ神父は、僧職につく以前に医学の勉強をしていたのが役立った。しかし、負傷者は私たち二人だけではなく、神父や修業僧に助けられた者とか、自力でたどりついた者など、総数八〇人以上の負傷者が収容されていた。

この修練道場と礼拝堂は、共に爆心地から四マイルほど離れているが、ひどく損害を受け、広島市の中心に向っている側の窓は全部壊れた。ガラスだけでなく、木製の窓枠も壊れた。礼拝堂の外壁の三本の柱が折れ、内部の扉もほとんど潰れ、天井はわん曲して形を変えた。ガラスの破片が到る所に飛散しており、天井のタイルは爆風圧のために吹き飛ばされていた。ここが、そのまま病院として変つたのである。

市内で社会福祉事業に従事していた修道尼は、その居宅を焼失し、ここに避難して来たが、その日から収容負傷者の看護に力をつくした。私はここで、これら院長・先生・修道尼たちが、近所の貧しい人々、別に信者でもない人々のために、懸命に救助の仕事をしたことを詳細に述べることはしない。ただ、言えることは、これらの多くの人々が、キリスト教が何であるかについて、眼を開いたということである。

翌日、私たちは、たった一発の原子爆弾が、あれだけの惨禍を招いたということを知った。二、三日後に聞いたことであるが、憲兵隊が言うのでは、多分二〇万人から二五万人の生命を奪つたと推測したという。

戦争はまだ続いていた。毎夜、そして時には、同じ晩に何度も、警戒警報が鳴らされ、そのつど窓の破れた家は、すべて灯を消した。負傷者はすべて防空壕に運ばれねばならなかったが、私は部屋から動かなかつた。が、爆弾が落ちれば、すぐ窓から飛び出せるように用意していた。勿論、死ぬる覚悟もできていた。

長崎に原子爆弾が落とされたこと、他の都市が焼夷弾攻撃を受けたことが報道されたが、原子爆弾被爆の結果、戦争は終結すべきだという声は、一つも聞かなかつた。それがたとえ如何なる条件であっても、私の判断するところ、日本人はまだ最後まで闘う決心をしていて、日本が降伏することはないとかたく信じていた。八月十五日、天皇陛下が全国民にラジオを通じて話をするので伝えられた。このような事は、いまだかつて一度もなかつたことである。中には、これで戦争も終結するのではないかと考える者もいた。歩ける者は、ラジオのある部屋に、メッセージが何であろうかと聞きに行った。

日本が敵国に降伏したと発表されたとき、中には泣く者がいた。原子爆弾のあの恐ろしい威力を見た者が、戦争の終わったのを悲しむとは、まったく驚かざるを得なかつた。

彼らの祖国が、天皇を中心にして過去から現在まで、榮譽に満ちていたことが、日本人の心の中に壮大な建造物として聳えていたのである。勿論、彼らとしても、原子爆弾が使用される以前から、戦争の局面が危機に瀕しているこ

と、そして、戦争に勝つ望みは、も早少なくなかったこと、また、たとえ平和条約が結ばれるとしても、日本の条件は、戦争開始のときと比較して、程遠いものであることは判っていた。が、この降伏は、今一つの原子爆弾が落ちたようなもので、古い日本の壮大な建物が、まさしく地に叩きつけられたようなものであった。それは、広島原子爆弾よりも強烈なものであった。原子爆弾の悲惨さに、涙もこぼさなかった人たちでさえ、降伏が発表された時には泣いた。

私の知っている一人の若いキリスト教徒の婦人が、友だちのキリスト教徒でない者と一緒に、祖国の名誉のために、自殺しようと考えていた。キリスト教徒の彼女は、神父の一人に、どうするべきかを尋ねた。神父は、「天皇陛下が降伏を決断されたご意志は、国民の生命を救うためにあったのであって、決して自殺して欲しいためのものではなかった。」と、彼女に答えた。それでその事はケリがついた。

この降伏が、日本人にとって、どういう意味であったかは、戦時中、彼らと生活を共にした者でないと、理解できないであろう。

陸海軍共に、降伏は毛頭考えていなかったから、素直に陸海軍が、天皇の言葉に服従したとは、信じられないことであった。国民すべてが天皇の命に従うように教育されていた。天皇以外の権威である全智全能の神とか、法皇のようなものを認めた上で、天皇というものに、何故、何ら抵抗なく従うことができるのであろうか？

すべての試練を、カトリックの神父は経験しなければならないが、多く発せられる質問は、「あなたの信じる神は、天皇より優位なるものなのか？」である。また、時々キリスト教徒は、次の質問を受ける。「もし法皇が政敵となった場合、カトリック教徒はどうするか？天皇に向かって戦うのか？」これは、私たちにとって難問ではあった。

八月十五日、日本国民が天皇の命に従わなければならなかったことは、神の恵みであった。何故なら、天皇自身にとっても、また自分の親愛な国民のためにも、降伏声明は、英雄的な自己犠牲であった。天皇は、国家を完全な崩壊から救ったのである。

(註)

このフーゴ・ラッサール神父の手記は、「広島で被爆—爆心地から六〇〇ヤード離れた所で、自ら視ての証言—」の中の一部である。即ち、目次…一、原子爆弾・1、私の見たもの、2、私の聞いたこと、3、私の考えたこと、の中の最初の一節全文である。()内は、編者註記

広島教会

(35) 日本基督教団広島教会

当時、広島市国泰寺町四八番地(現在・大手町一丁目四ノ一)・爆心地から約一・四キロメートル・牧師四竈一郎。

教会堂は木造モルタル塗り二階建六八坪、牧師館は木造平家建二五・五坪の建物があった。なお、この教会は明治十六年十一月二十八日に創立(牧師・中島留吉)された広島最初の教会である。

教会堂は、昭和十八年一月から町内会の総会や常会などに随時使用されていたが、二十年四月二十九日から、広島市警防団本部に指定され、常時一二人～五人くらい団員が詰めており、自動車ポンプ四台が設置されていた。

教会の集会は、特に聖日礼拝及び祈祷会は原子爆弾の炸裂に遭う前日の日曜日まで、ずっと牧師館の座敷において守り続けられた。

教会堂が警防団本部になったため、防衛措置は充分で、焼夷弾攻撃には全建物を焼失から守るという約束があり、会党内の一切の物資はなんら疎開を要しなかった。従って夢想だにしなかった原子爆弾によって、すべて烏有に帰した。

四竈牧師は、戦時中の奉公として、みずから望み広島県盲学校(尾長町)の教師となり、昭和十九年九月から勤務し、日曜日だけ教会の任務についていた。

万一の場合の避難場所は、己斐(西方)を経て佐伯郡観音村(宮島沿線)へ避難するよう町内会で指定されていた。

四竈牧師と妻子(妻わくり・長男揚、修道中学校二年・長女佑子、広島女学院四年)四人は、五日(日曜日)夜からの警報続出で防空着のまま、牧師館の縁側で仮眠をとり一夜を明かした。この頃、県盲学校は双三郡塩町の双三実業学校に疎開しており、そのあとに宇品から広島通信講習所が移っていたが、四竈牧師は毎週月曜日午前八時半から二時間精神講和をすることになっていた。六日朝七時半に牧師館を出て尾長町に行き、原子爆弾の炸裂時には、盲学校の職員室にいた。夫人は牧師館で被爆したが、玄関にいたため頭部を負傷しただけで脱出し、吉島町の蓮池付近に避難した。長女は上流川町の広島女学院で被爆し、三か所負傷したが、矢賀国民学校の臨時救護所に辿りつき、そこで応急手当を受けた。長男は市役所隣の公会堂が解体されたあとの片づけに出動中、南千田町の修道中学校に連絡

に派遣されて被爆、校舎倒壊と共に頭部に深い傷を受けた。

教会堂も牧師館も、強烈な爆風によって倒壊した、教会堂の隣りの広島県農業信用組合連合会の二階建家屋が発火し、みるみるうちに延焼、その日午後二時ごろまで燃えつづけてようやく自然鎮火した。

教会堂に詰めていた警防団木部職員は、倒壊家屋の下敷きとなって八人即死、四人が負傷した。一瞬の出来事で消火にあたり得る者が誰もなく、消防自動車四台も焼失した。

四竈牧師は、教会の様子を見るため尾長町片河の県盲学校から、避難者で大混乱の愛宕町を通り、猿猴橋に出たが、橋のたもとに警官が二人立っていて入市することを禁じていた。また、市内も炎上中で、このままで入って行けなく思われたから、猿猴川に降りて川水に上衣を浸し、頭からそれをかぶって電車比治山線沿いに南下し、比治山橋東詰めにとどりついた。橋の付近は、三〇〇～四〇〇人の死者や負傷者がたむろしていて、橋も渡れそうになかったから、引き返して比治山公園の共同墓地に登って行った。そこから市中を見渡したが黒煙もうもうとして遠くは見えなかった。これが午前十一時過ぎごろであつたらうか。周囲には兵隊や一般市民が多数逃げて来ていて、惨禍の激甚さをますます感じ、ほぼ一時間ばかり呆としてなすところなかった。再び比治山橋へ行くと消防車と軍のトラック二台が橋を渡って入ったので“これなら行ける”と、死者や負傷者の間にできていた通路を渡っていった。倒れた電柱や電線その他の飛散物を踏みこえて、昭和町一宝町一富士見町と前進した。広島文理科大学や県教育会館が猛炎を高く噴きあげて燃えている最中であつた。

鷹野橋に到着したのは午後二時ごろであつたが、電車交叉点の前の防空壕から出て来た二人の警官に出あつた。警官二人は、外廻りして被爆したと語ったが、その一人は肩のところから右腕が千切れていた。この二人から、四竈牧師は、教会堂壊滅炎上の模様を聞くことができた。家族の様子は判らなかつたが、どうすることもできないので、いったん尾長の盲学校へ引きかえした。

七日午後一時半ごろ、再び教会堂の焼跡へ行ってみると、ポツンと立っている教会の石門に、焼け墨で「母無事、吉島蓮池にいる」と書いてあり、その下に「揚無事、大河にいる」と書いてあつた。四竈牧師は、更にその下に「父無事、盲学校にいる」と続けて書いて、尾長へ引きあげた。その夕方六時ごろ、石門の連絡書きを読んだ長男揚がスコップをかついで盲学校へ来たので、二人で早速、吉島へ向い、午後七時過ぎごろようやく家族三人が出あつた。しかし、長女佑子の行方は、なお判らなかつた。

修道中学校で被爆した長男は、六日夜は大河に避難して、大破した民家に泊めてもらい、七日朝、教会堂跡に行ったのであつた。とにかく三人は、当分、盲学校の半壊の寮に泊り、長女を探すことにした。そして五日めの朝、四竈牧師が広島女学院の焼跡に行くと、石の門柱に貼紙してあり、長女は負傷したが生存していることがわかり、考えたすえ、やっと矢賀町の知人宅に避難していることを突きとめた。八月十日の朝、家族四人そろつたので芸備線に乗って双三郡和田村向江田の知人の家に、更に避難したが、九月四日、長女は家人に見守られながら、ついに神に召された。

教会員は、被爆時には市内に四五人くらい疎開もせず踏みとどまっていたが、このうち死亡した者二四人、負傷者一八人を出し、教会の活動も一時停止のやむなきに至つた。九月初めごろ、四竈牧師は双三郡和田村の避難先から広島に向いて、教会員の仮宅を訪ね、被爆死亡した教会員の霊を慰める初めての記念会を催した。

翌二十一年五月、佐伯郡五日市町楽々園に住む教会員玉垣宅で、日曜日の聖日礼拝を守って、ここによりやく教会の行事を回復することができた。しかし、集つた教会員はわずかに七人に過ぎなかつた。

昭和二十三年(一九四八)八月、旧教会堂敷地の鷹野橋(国泰寺町六八)に、教団本部を通じてアメリカ進駐軍のジュラルミン組立家屋(一〇万円)を入手して、仮教会堂を建設し、聖日礼拝を守つた。このとき、県盲学校を辞任し、家族も仮教会堂に移住したから、教会の復興再建に専念することができるようになった。同年八月六日の被爆死亡者の追悼集会には、遠近より旧新の教会員が相集つて五六人に及んだ。その後、教勢が発展し、毎日曜日の礼拝出席者が常時一〇〇人を越えるようになったので、仮教会堂の狭隘を感ずるようになり、大手町五丁目一六一二に新敷地を求め、ここに本建築の教会堂を再建した。

第一節 序説…682

緊密な連繫

戦争の苛烈化にともない、広島市と県下各市町村との関係は、急速に緊密化し、広島市を取りかこむ安芸・安佐・佐伯三郡下の各町村は、特に広島市の防衛計画上に重要な役割をはたした。

食糧の増産

まず、各町村とも戦時下の重要な食糧生産地であり、軍隊および軍需工場の多い広島市への供給源として寸暇もない増産活動を続ける一方、農村にあつては、木材の伐採・供出、松根油の採取・製造など、漁村にあつては、魚貝類は勿論、塩の大増産運動などを強く要請され、それぞれ戦力増強の大きな基盤となった。

しかし、農村も漁村も青年がほとんど出征して、労働力がいちじるしく低減していたため、当局が必要とする増産目標達成のためには、なみなみならぬ努力と創意工夫が必要であった。

疎開受入れ

このような県下各市町村を背景にして、他都市に比類なしと言われた広島市の防衛計画が立てられ、常に機能的な組織的連繫が取られていたのである。広島県下のこれら市町村は、焼夷弾攻撃による火災の延焼防止と避難空地を作るための、建物強制疎開による立退者の受入れをはじめ、災害回避のための人員・物資の両疎開先となった。すなわち、軍関係では聯隊区司令部や陸軍病院・被服廠・糧秣廠・兵器補給廠などが安佐郡可部町はじめ県下の各市町村へ分散疎開を実施し、官公庁も主体はその性格上郊外への疎開はできなかったが、用紙など文具類や帳簿などを疎開し、一般市民も、留守番一人を残して家族や物資の疎開を行なった者が多かった。市民の任意疎開は、戦争末期になると、市内の防空要員確保のため禁止となったが、それでも空襲の多い夜間だけ郊外へ行って泊り、翌朝帰って来る者も多数という状況で、昭和十七年に約四二万であった人口が、昭和二十年六月調査では半分に近い約二四万人という人口の激減をまねいた。

防空計画に基づき、市内各町内会は万一の災害の場合の緊急避難先として、近郊各町村を前もって指定し、所によっては、食糧品・医薬品、その他の救急物資を備蓄していた。例えば、本通り商店街付近各町内会は、第一次避難先を西練兵場・袋町国民学校、第二次避難先を安佐那可部町に指定し、ここの民家の倉庫を借用して、常に二〇〇人分の食糧品・薪炭・塩などの調味料、及び薬品と町籍簿の写本・文具などを保管していたし被爆後の九月十五日、本通りの播磨屋町町内会は、被爆を免れた町籍簿により各自の疎開先に連絡して、可部町に近い八木村に疎開中の町民の家で、戦後第一回の播磨屋町町内会を開催した。

疎開児童受入れ

昭和二十年四月から七月にかけて、市内国民学校児童三年生以上約一万人・引率教師約四六〇人が、比婆・山県・双三・高田・世羅・安佐・佐伯の七郡下各町村に集団疎開を行なったほか、各自の縁故疎開児童約一三、〇〇〇人が県下各町村に疎開し、危うく原子爆弾の惨禍からまぬがれることができたしこれら児童を各町村は心温く迎え入れ、多くの支援と激励を惜しまなかったから、被爆後の九月から十月にかけて広島市へ復帰するまで、児童たちは窮乏生活の中ながらも、比較的安穩に過ごすことができたのである。

例えば、竹屋国民学校は、山県郡の加計町・安野村・戸河内町・筒賀村・殿賀村に、引率教師一五人・児童三〇〇人が集団疎開を行なったが、加計町香草の正念寺に疎開した高井正文訓導の話にも、辻の川原部落の富樫山次部落長の家に児童が疎開の挨拶に行ったとき、富樫部落長は、「よく来られた。なんでもお困りのときは、いつでも遠慮せずに相談に来なさい。」と、一同を励まし、皆は白い粉のふいた甘いつるし柿を一つずつもらって大喜びした。また、夏になって蚊が多くなったときには大きな蚊帳の提供を受けるなど、いろいろと温情あるもてなしを受けた。また、他の農家の人々も、麦刈や田植、あるいは麻の収穫などの手伝いをするという事にかこつけて、たびたび児童を招き、ムスビを腹一杯食べさすという深い思いやりに感謝したという。この一例のように、農村各地に疎開した児童たちは、人々の厚い人情に守られて、親から離れている淋しさをまぎらすことができたのであった。

救援出動組織

広島市が空襲され、非常事態に陥った場合に備えて、地域内の医師・看護婦その他医療関係者による救援医療班、あるいは警防団・国民義勇隊の出動態勢も取られており、婦人会はムスビの炊出しなど、いざというときにただちに

手配できるよう準備されていた。

広島壊滅の報が、警察電話その他によって県下各市町村に伝わるや、これら救援出動組織は、ただちに行動をおこし、トラックや汽車、あるいは船によって、続々と入市し、山口町の東警察署内に設けられた仮県庁の指示に従い、修羅場と化した焼跡の各所において、必死の救護活動を展開した。当時、豊田地方事務所所長であった竹内喜三郎の日記に「八月六日、午前九時半より専売局竹原出張所において、塩増産蹴起大会あり。この頃、広島市空襲の報あり。電子爆雷使用のため、全市潰滅死者算なしとの情報に接す。夜、広島市に救援物資急送手配をなす。」と、ある。

国民義勇隊の犠牲

また、この日、多数の国民義勇隊が広島市内の建物疎開作業に出動していて、次表のとおり多大の犠牲者を出した。これらの安否を気づかって、広島市に出ていく者も多く、特に市周辺の町村は、広島市から流れこんだ避難者をも含めて、上を下への大混乱を惹起したのであった。

市周辺の各町村では、負傷して逃げ帰った国民義勇隊員や殺到した避難者の収容・救護作業に、全住民が起ちあがって奉仕したため、広島市に救援隊を出動させるという余裕は、まったく無かった。

建物疎開作業に出動した地域国民義勇隊の被爆状況表

地域名	被爆場所	出動者総数	被爆による被害者数			備考
			即死者	負傷者	行方不明者	
1. 大竹市	小網町、土橋、十日市、福島町	九五三人	一五九人	一二人	七八二人	
2. 安芸郡瀬野川町	比治山橋付近、鶴見橋西側	一五二人	〇人	一三八人	一人	帰村後死亡者一二人
3. 安芸郡船越町	不明	不明人	不明	不明	不明	
4. 安芸郡矢野町	鶴見橋付近	九四人	一人	九一人	〇人	
5. 安芸郡坂町	鶴見橋付近	一八〇人	〇人	一六〇人	〇人	帰村後死亡者一五人
6. 佐伯郡甘日市町	榎町	五七人	二九人	二八人	〇人	
7. 佐伯郡能美町	袋町付近	三人	二人	〇人	一人	
8. 佐伯郡大柿町	不明	五人	一人	四人	〇人	
9. 安佐郡安古市町	水主町県庁付近	六六人	三〇人	一人	三二人	
10. 安佐郡佐東町	中島新町付近	五〇〇人	二五〇人	二〇〇人	〇人	
11. 高田郡甲田町	横川橋付近	七人	〇人	〇人	〇人	土木工作隊として小田村より
合計		約二、〇一七人	約四七二人	約六三四人	約八一六人	

〔註〕一、この被爆状況表は、広島原爆戦災誌資料表の提出された四三か市町村のうち、出動した一市一〇か町のみによる集計であって、実数はこの数以上と考えられる。

二、行方不明者は死亡者で、遺体の確認できなかったものである。

三、市町村名は戦後の町村合併による新しい市町村名である。

炸裂時の状況

広島市の北東約六キロメートルへだたる三次市では、原子爆弾の炸裂時に、遠い爆発音と閃光、そして僅かであったが人体に震動を感じたという。また、同市の巴橋の上で爆風を感じた人もあり、広瀬国民学校の児童が疎開していた源光寺(当時・双三郡酒河村)は、炸裂の衝撃で建物がグザグザと揺れたと引率教師が語っている。また、七キロメートル離れた庄原市でも、閃光が見られたという。

佐伯郡能美島の南部にある大柿町は、広島市から約二・六キロメートル離れているが、ここでは、なま温かい風と電光のような強い光が感じられ、しばらくして鈍い爆発音が聞え、少し遅れて人体に感ずる爆風があった、炸裂後約五分ぐらいては広島方面を見ると白煙の上がるのが見られ、やがて白煙が雲のように拡っていき、それが上昇し、次第にあざやかなキノコ雲となっていくのが、はっきり見られた。初めは、江田島の火薬庫の爆発かと思うほど近く感じたともいう。

佐伯郡五日市町、および廿日市町は、爆心地から八～九キロメートル離れているが、海岸線に沿う地域では、乗っていた自転車もろとも爆風に吹きとばされ、意識不明になった者もあり、家々の瓦は落ち、窓ガラスや障子が破損し、

土壁も落ちるといふ被害があり、負傷者も多数あった。

単に家だけでなく、広島市に面する山腹は、多数草木が折られ、衝撃波により、大きく山崩れした場所も各所にあった。特殊な現象としては、一山へだてた裏側にあたる場所(佐伯郡)の家屋が爆風によって損傷した。

降雨

原子爆弾の炸裂直後、早い地域は二〇分後から、遅い地域では二時間もたってから、降雨現象(五〇^{ミリ}から一〇〇^{ミリ})があったが、爆心地から北西部の地域、特に北部が著しく、安佐郡安佐町では、午前十一時ごろから午後二時ごろまで、凄い勢いで黒い雨が降り、濡れたシャツが乾くと黒い斑点が無数に附着していた、爆心地から西方にあたる佐伯郡五日市町では、炸裂後、二・三時間たって、白い普通の雨が降りはじめ、かなり長時間降り続いたと報告されている。

飛散降下物

爆心地から北西部の山間に、降雨の少し前から降雨中にかけて、焼トタン板・屋根のソギ板・蚊帳やふとんその他の布切れ、名刺・紙幣などが、広島市内から吹き飛ばされて来た。

降下物の中で最も多かったのは紙片で、佐伯郡水内村(爆心地から二二キロメートルの地点)付近では、午前十時ごろから十一時ごろにかけて、夕やみのように薄暗くなった空から、広島通信局の文書らしい紙片や通信済みの郵便葉書・商店の伝票などが広島市の方から多数飛んで来た。

山県郡加計町(爆心地から五五キロメートルの地点)一帯にわたって種々な物が多数飛来したが、吉水園付近で、炸裂後二、三時間たったころ、広島商工会議所会頭藤田定市名入りの未交付賞状が、少し角の所が焦げたまま飛来したり、茶色に汚れた伝票などが名数落下して来たが、その文字によって広島市から飛来したことを知り、人々は大変事が広島市に勃発したことを推察した。

連絡拠点

全市壊滅状態に陥った広島市は、交通も途絶し、電信・電話も不通となったので、市外の機関を使用しなければ、中央への報告も、県下、及び隣県への救援隊出動要請もできなかった。この大混乱の最中、生き残った関係者が連絡や報告のため、それぞれの立場からその拠点とした所は、東部方面では安芸郡海田市町、北部方面では安佐郡可部町、西部方面では佐伯郡五日市町・廿日市町で、南部方面では、比較的被害の少なかった市内宇品町の広島港に沿う陸軍船舶部隊であった。

備後に出張中であった高野知事は、急ぎ帰広し、まず海田市町警察署に寄って状況報告を受け、六月午後六時半ごろ、市内比治山の多聞院(予定避難場所)に入り、その夜、中国地方総監府の服部副総監、石原県警察部長らと協議し、内務省への報告、近県へ応援要請、県下各警察署及び地方事務所に対し救援隊出動を指令した。これらの連絡に伝令が徒歩やオートバイなどで、海田市町・可部町・五日市町にと急いで行った。宇品の船舶司令部は、軍として独自の立場から大本営へ報告すると共に、呉の海軍鎮守府にも連絡して、いち早く被爆者の救援活動を展開したのであった。

救援隊出動

広島市救援の命令を受けた県下各市町村は、多数の避難者が殺到した近郊町村をのぞき、かねてからの医療救護班・警防団などの組織を動員し、トラックや汽車、あるいは船によって続々と出動した。

例えば、甲奴郡上下町(爆心地から約七〇キロメートル)は、被爆当日ただちに出動し、約二〇日間、延二五人の医療救護班がトラックで入市し、警防団は、翌七日から約一か月間、実人員約一二〇人、延約四〇〇人が市内一円で、東西両警察署の指揮に従い、救援作業に従事した。

海をへだてた因島市(爆心地から約六〇キロメートル)は、八日午後になって因島警察署の命令で、医療救護班一四人・警防団九〇人が、日立造船所の北斗丸で尾道に到着、尾道市から海田市まで汽車を使用し、そこから徒歩で入市し、警察の指示により横川駅付近で救援に当たった。

避難者受入れ

地獄と化した広島市から、安芸・安佐・佐伯三郡下その他の各町村へ、自力で脱出した市民、あるいは軍のトラックや汽車で送りこまれた負傷者は約一五万人に達したが、たどりつくと共にその約二〇パーセント強が死亡し、その後も引続き多数死んでいった。

一五万人に近い避難者は、その三分の二以上の一一人が、広島市を取りかこむ安芸・安佐・佐伯三郡下へののがれたが、これは、広島市の避難計画により、あらかじめ市内各町内会の避難先として、これら佐伯・安佐・安芸三郡下の近郊町村が指定されていたことと、三郡下出身の市民が多く、その親類縁故を頼って行ったからである。しかし、

広島市が復興すると共に、次々と復帰し、避難したままでその町村に定着居住した者は少なかった。

避難者郡町村別内訳表

なお、県下へ避難した市民の郡町村別内訳は次表のとおりである。

避難者郡町村別内訳表

安芸郡	四五、〇八六八	中山村 六、〇〇〇 府中町 五、四〇〇 海田市町 五、一五〇 温品村 四、五〇〇 船越町 三、九〇〇 音戸町 一、五〇〇 瀬野村 一、三〇〇	矢野村 一、〇五〇 倉橋島村 一、〇〇〇 畑賀村 六四六 戸坂村 三、三〇〇 奥海田村 二、八三〇 中野村 二、五〇〇 坂村 二、五〇〇	江田島村 一、五〇〇 下蒲刈島村 五〇〇 上蒲刈島村 五〇〇 大屋村 四一〇 熊野町 四〇〇 昭和町 二〇〇	
佐伯郡	一九、七五五人	五日市町 五、一八五 地御前村 四、〇三九 宮内村 一、五〇六 八幡村 一、三三〇 廿日市町 一、三〇〇 観音村 一、一〇九 平良村 一、〇六三	巖島町 五二四 大竹町 四九二 砂谷村 四八五 沖村 四五七 友和村 四五〇 高田村 二八八 浅原村 二〇五	水内村 八五六 原村 一二〇 四和村 九四 河内村 二〇一 木野村 五一	
安佐郡	五一、八七五人	祇園町 八、六〇〇 安村 七、〇〇〇 古市町 六、〇〇〇 福木村 五、〇〇〇 可部町 三、七〇〇 狩小川村 三、〇〇〇 口田村 二、五〇〇	伴村 二、五〇〇 深川村 二、五〇〇 緑井村 二、〇〇〇 八木村 一、八〇〇 飯室村 一、六九八 川内村 一、四〇〇 亀山付 一、二一五	日浦村 七七四 久地付 五八二 戸山村 五五二 鈴張村 五〇七 小河内村 二四〇 大林村 二一五 三入村 九二	
双三郡	八、三〇〇人	山県郡	五、七〇〇人	比婆郡	四、〇〇〇人
高田郡	五、九七二人	豊田郡	五、〇〇〇人	賀茂郡	三、五〇〇人

(昭和二十一年版市勢要覧)

第二節 各市町村…690

第一項 呉市…690

地区の概要

呉市は、明治十八年(一八八五)以来、海軍の軍港として繁栄を続けた都市で、広島市の東南、爆心地から約二〇キロメートルへだたったところに位置している。

第二次世界大戦中は、日本海軍の大根拠地として、軍令・軍需・造艦の中心地となり、人口が急激に膨脹し、昭和十八年には、ついに四〇万人余に達した。

戦争末期、呉市に対する敵機の空襲は、日増しに激化し、昭和二十年六月二十二日に大空襲を受け、その被害は甚大なものがあつた。同年七月一日午後十一時五十分ごろから、二日午前二時半ごろまでにわたる深夜の大空襲は、呉市全域にわたって B29 延約八〇機の攻撃で、焼夷弾約八〇、一一〇個を投下し、罹災者一二二、〇〇〇人余に達し、市の中心部はほとんど焼野原と化した。このとき、まだ無傷であつた広島市から、救援隊が呉市へ出動した。

呉市は、明治三十五年市制施行以来、昭和三年に吉浦・警固屋・阿賀の三か町を編入合併し、昭和十六年に仁方町・広村の編入合併をおこなつて、市域を拡大した。

戦争中に人口四〇万人余にも達していたが、昭和二十年に入つてからは、戦災と終戦による海軍の解体、これにともなう軍需産業の閉鎖などにより、必然的に住民の大量分散を招き、一挙に人口一五万人に激減した。

その後、呉市の人口はあまり伸長せず、昭和三十一年十月一日、安芸郡天応町・昭和村、ならびに賀茂郡郷原村を編入合併して、ようやく人口二万九千九百六十八人、市域面積一四三・九五平方キロメートル(昭和三十六年刊・広島県自治名鑑)となつた。昭和四十年十号一日の国勢調査では、六三、七〇二世帯・人口二二万五、〇一二人となつていて、人口の伸びはあまり良くない。

一、八月六日の状況

侵入機目撃

呉市警防団第五分団班長平田操(東辰川町八)は、六日朝、対空警戒にあたっていて、広島市へ侵入する敵機を発見、爆弾の投下までつぶさに目撃した。

すなわち、B 29 二機が野呂山南寄りから灰が峯→焼山→広島と侵入し、一方、厳島(宮島)上空方面からは、別のB 29 二機が前後にならんで、広島市の上空に侵入するとともに、その先頭の一機が黒いものを投下したのを確認した。

「爆弾をおとした！」と、その瞬間・叫んだ。急ぎ自宅へ帰ろうとすると、その間二秒くらいであったか、パッと明るくなったように感じた。自宅に入ると同時に、衝撃動揺を感じ戸が倒れた。敵機の爆弾投下を見てから、自宅に入るまでの時間は、約一七秒くらいであったという。

炸裂の影響

このような原子爆弾の炸裂による衝撃は、呉市内の各地点で多く見られた。三十一年に呉市と合併した賀茂郡郷原村では、衝撃により戸のはずれた家が三戸あり、異様な閃光に、瞬間目をとじた。そのときわずかながら熱さを感じられた。そして、ちょうど西方の山上に、奇怪な形をした煙雲が、たかだかと立ち昇り、長いあいだ消えないでいた。

海岸通りの家では、爆風によって庭前の砂が、室内にパッと飛びこんで来た。この砂は、関東地方でみるような黒くねばっこい灰様の土ではなく、瀬戸内海沿岸特有の白く光るサラサラした微粒で、軽く美しい砂である。そして、ここから小屋浦方面の山の上方に、キノコ型の巨大な雲の上昇するのが望見された。その雲は最初は白く、ついで五色に変わった。

天応駅では、異様な熱風が吹きつけて来たし、海軍軍需部では、閉じてあった鉄扉に、グワンと衝撃音があり、地震のような震動が感じられ、空遠く桃色の積乱雲のような噴煙が見られた。阿賀町冠崎では、窓の建具が約一〇秒間コトコトと揺れつづけた。

第十一航空廠では、微温と爆風を感じ、魚見山隧道内でも、爆風が感じられた。また、鍋港栈橋では、顔に微温を感じ、爆風で身体が少し揺れた。

吉浦駅では、頬に微温を感じると共に、ピンク色の綿菓子のように輝くキノコ雲が見られた。

宮原通りからは、立ち昇る煙雲の柱のなかから、さらにまた、モクモクと雲が湧き出て、拡ってゆくのが望見された。

警固屋町からは、宇品の方向に異様な雲柱の立ち昇るのが望見せられ、二河公園からは、金立火葬場の上空に、火山の爆発を思わせるような白・黒・灰色の噴煙が湧きあがり、凄まじく上昇するのが望見された。

辰川町では、衝撃と動揺を感じてから、三〇秒ないし四〇秒経過して、広島上空に小さく白い雲状のものが認められ、それが次第に柱状に盛り上がり、モクモクと湧き立って、上部の方は、なんとも名状しがたいほど美しいピンク色の雲が、エネルギーに奔騰上昇するのが望見された。また、市内中心部からは、二河峡の方向に、巨大なキノコ雲の上部が認められた。

このように市内の各地点において、相当な影響があったが、風向きの関係からか、爆発による広島市からの飛来物は何も無かった。なお、広島市内の建物疎開作業には出勤しておらず、その方の被害は無かったが、七月一日から二日深夜にわたる空襲のあと、広島市の防衛力強化のため、呉消防署から消防自動車八台と、消防隊員四八人が広島市へ派遣されていたため、即死者九人を出し、消防自動車五台を焼失した。

また、警察警備隊呉小隊も広島市へ派遣され、比治山の多聞院に駐屯していて、被爆した。

二、避難者の状況

避難者殺到

被爆直後、電話など通信機関が一斉に不通となり、広島に何事が勃発したのか、まったく判らなかつた。

この朝、呉の市場で青果物を仕入れ、トラックで広島市に向っていた一市民(平本某)が、途中の向洋付近から引返して来て、「広島が大変なことになっている。市内には入れない。」と、人々に語ったのが午前十時過ぎごろであったが、このころ初めて、一般の人々は惨状を聞き知ったようである。

午前十一時ごろになって、広島市から無残な姿の負傷者が、続々と到着しはじめた。火炎地獄の広島から脱出し、海田市町を経て、大屋村に四〇〇～五〇〇人の人々が、担架にかつがれたり、トラックに積みこまれたり、あるいはトボトボと歩いたりして、命からがらたどりついた。これらの人々を大屋橋で止めて、同所の国民学校に収容し、応急的に食用油の塗布をほどこした。

避難者たちは、すでに息絶え絶えの状態に陥っており、身体一面に、あるいは身体のどこか一部に繃帯を巻いた者、血ウミにまみれた者、ボロボロに裂けた衣服の切れ端を垂れさがらせ、半裸の身体は皮膚がズルリと剥けており、直

径五センチメートル以上もあるような大きな水泡を生じている者など、この世の人間とは思われなかった。

汽車に乗って逃げて来た人々が、呉駅前に多数出て来たが、これらは、さらに郷原村や仁方町以東、あるいは昭和村などへと脱れていく人が多かった。昭和村だけでも約二〇〇人が逃げて来た。

臨時収容所

このような避難者の群れは、八月十日の夕方午後五時ごろまで続いたが、次のとおり臨時収容所が設けられた。

(イ)坂町小屋浦 日勝温泉

坂町小屋浦 小屋浦海水浴場

(ロ)東二河通り一丁目 海仁会病院(現在・呉市民病院)

東二河通り四丁目 呉共済病院

(ハ)広町 広警察署

(ニ)その他、天応町などにも急設された。

収容者・死亡者

これらの収容者の治療には、海軍の医療救護隊が大いに活躍した。的確な資料がないため、収容人数などははっきりしないが、相当な数字になるものと思われる。坂町付近のみの被爆死亡者に関して、昭和二十七年七月三十一日付中国新聞紙上に、「安芸郡坂町に散在する原爆遺骨の発掘は、町当局の手で去る二十八日(昭和二十七年)から始められ、三十日までに小屋浦小只谷など五ヶ所から二百十九柱が発掘された。このうちすでに供養塔をたてて葬り、遺骨数の判っていたものは百五十六柱で、残り六十五柱は被爆後七年間野ざらしになっていたもの。また火葬ののち埋められたものは三十六柱で、百八十三柱が死体のまま土葬されていた。同町役場では、八月二日までこれら五ヶ所の発掘作業を続けるほか、確認されているニヶ所も発掘するが、三日には全町あげて丁重な法要を営んだのち、遺骨の一部を広島市へ引き渡し、中島慈仙寺鼻の供養塔に合祭し、残りは同町内の適当な場所に集め、供養塔を建てて永久に葬る。」と報ぜられているところからみても、当時、如何に多数の負傷者が収容せられたか推察できよう。

このほか、収容後死亡した人たちは、火葬して、遺骨を関係者に引渡したのもかなりあった。現在、小屋浦駅の西方第一隧道西口付近に、広島原爆罹災者の納骨無縁塔がある。

定住者

呉地域に避難した罹災者たちのうち、そのままこの土地に定着居住するようになった人々は、当初かなり多かったが、結局、一〇〇世帯程度に落ちついた模様である。呉市も空襲により焼野原とたっていたため、住みつくかに見えた人々も、その後、つぎつぎに広島市へ復帰した。

三、広島市救援状況

救護班出動

六日、被爆直後に海軍の救援隊が、いち早く出動し、医療をはじめ食糧配給などの救護活動を積極的に行なった。呉市役所の救護班も、連日、トラックで通い、約一週間、広島市役所をはじめ、広島赤十字病院その他で大いに活躍した。その他、第十一航空廠救護班・呉共済病院救護班なども出動した。

なお、呉市役所は、翌七日に溝辺速雄助役の引率する呉市吏員約三〇人が出動して、壊滅的打撃を受けた広島市役所に到着、同庁舎前の広場で、罹災証明書の発行や尋ね人の相談などの緊急用務を、全力をあげて応援した。

また、呉市警防団は、トラック四台に約一〇〇人が分乗して出動し、住吉橋や県庁付近、その他で活動した。勿論、警察署員も出動した。

郷原村からは警防団が出動し、己斐国民学校において、食糧の運搬や死体処理にあたった。

[第二項 大竹市](#)…697

地区の概要

大竹市は、県西部の県境に位置し、広島市からは西南にあたり、爆心地から約三〇キロメートル離れている。

昭和二十九年九月、大竹町・小方村・玖波町・栗谷村・友和村松ヶ原地区が合併して、あらたに大竹市として発足した。

江戸時代は、浅野藩家老職上田氏の知行地として栄えたが、飛躍的發展をとげたのは、第二次世界大戦中、海軍潜

水学校に続く大竹地区新開地に海兵団などが設置され、海軍の重要な基地となつてからである。

戦後は、瀬戸内海臨海工業都市として発展し、大工業地帯を形成、県西部の重要な経済的中心都市となり、隆盛の一途をたどっている。ただし、公害問題も多い。市域面積は七七・三五平方キロメートル、世帯数九、四〇四世帯、人口三八、一四五人(昭和四十年度国勢調査)である。

一、八月六日の状況

国民義勇隊の惨状

八月六日は、早朝からよく晴れていたが、幾分涼しさを覚えるような日であった。午前六時、大竹地区の国民義勇隊員は、最寄りの駅に集まり、上り列車で、広島市の建物疎開作業に出動した。すなわち玖波隊一〇五人(隊長・田丸清助役)は玖波駅から、小方隊(隊長・谷保次郎村長)は八六人のうち、主として三ツ石地区の二〇余人が玖波駅から、残りの立戸地区約六〇人が大竹駅から、また、大竹隊(隊長・沖本誠二助役)は七九九人のうち、約三〇〇人(責任者・長門春一)が大竹駅から出動した。残る大竹隊約五〇〇人(責任者・日野義隆)は後続隊として、次便の列車で出動した。

玖波・小方・大竹の各先発隊は、己斐駅に到着後、それぞれ四列縦隊を組み、玖波隊は小網町へ、小方隊は土橋・十日市町付近へ、大竹先発隊は天満町・榎町付近に到着した。さらに大竹後続隊は小網町に向って出発、己斐橋を渡って、福島町に差しかかろうとしたとき、原子爆弾の炸裂に遭遇した。強烈な爆風を受けて、全員はなぎ倒され、無残な姿に一変した。

この日、佐伯地方事務所を通じて、出動命令を受けたとき、玖波・小方両義勇隊はもっと多人数の出動予定であったが、五日夕がた、減員の命令変更があり、町村役場は連絡可能な近辺の隊員だけ取消してから、編成替えを行なつて出動したのであった。連絡を受けて出動しなかった人々は命拾いをした。

被爆により、玖波隊は即死者は無かったが、負傷者九五人、行方不明一〇人を出した。しかし、負傷者は旬日のうちに九〇数人が死亡し、結局全滅した。小方隊は、大半の者が行方不明となった。その他の者は路傍または救護所において死亡し、帰って来た者一〇余人も一兩日中に死亡し、これも全滅に近い状態に陥った。大竹隊は、即死者八人、負傷者不明という状況であったが、九月十日までに八四人が死亡した。死亡者の中には、無傷で帰って来た者も多く含まれている。

動員学徒の惨状

また、当地出身の動員学徒も多大な被害を受けた。大竹地域の中学生(旧制)以上の学生は、ほとんど広島市の学校に通い、大部分が学徒動員令によって、広島市内で作業に従事していたから、その惨禍は大きかった。

動員学徒の犠牲者を地区別に見ると、大竹町六二人、玖波町二九人、小方村二九人で、いずれも即日または被爆後二週間以内に死亡した。ただし、そのほとんどは二、三日以内に死亡したのである。

また、学徒の行方不明者が玖波町・大竹町で、義勇隊員のそれをはるかに超えていることは、それだけこれら学徒の被爆地が、爆心に近かったことを物語るものといえよう(大竹町医師会史)。

地元の状況

一方、地元では、そのとき一瞬ピカッと光る青白い閃光を感じ、五、六分たってドドーンという重苦しい轟音を聴いた。

小方村では、役場の窓ガラスが、爆風によって四、五枚壊れ、民家の戸障子のガラスも壊れて飛び散ったが、いずれも広島市の方向(東側)にむかった所であった。また、鏡台のカガミが落ちて割れた家もあった(役場末岡書記談)。

小方村の浜への製塩場にいた岡田盛三郎の談によれば、閃光のあと、キノコ型の雲が上っているのが望見され、不思議に思っていると、ドーンという爆発音を聴いたという。

大竹駅では、窓ガラスがピリピリとひびいたが、壊れはしなかった。しかし、列車の乗客はほとんど驚いて下車し、近くの防空壕へ退避した。このとき駅にいた平藤虎幸は、閃光のあと、まもなく宮島の山上に、雲型でなく炎状のものが大きく昇ったのを見、それからドーンという音を耳にしたと語っている。

このように住民の多くは、広島方面の閃光を認め、そのあと重圧を感じる轟音を聴き、入道雲状の白雲が上昇するのを認めたが、それが何ものか判らないまま、不吉な予感をいだいていた(太田慶長医師会史)。なお、広島市に侵入する原子爆弾搭載機を見た者はいなかった。

二、救援状況

救援隊出動

小方村役場の末岡書記が、この変事に、すぐ佐伯地方事務所に電話で様子を問い糺したが、「広島市において相当の

被害があったけれども、他言してはいけない。」と、あとの電話で知らせてきた。これは容易ならぬ事態が発生したのだと考え、村内の担架を急いで集め、万に備えた。今朝出動した国民義勇隊員が負傷して帰ってくるかも判らないと、不安にかられ、村民を各所に配置して待機していると、午前十時ごろ、大竹駅に小方村出動隊員の一人が、傷だらけになって帰って来たので、村役場へ収容して治療を行なった。

昼前ごろ、出動隊員救援のため、米二石を炊きムスビを作り、トラックに積んで、警防団員約一五人が出発した。己斐町・小網町・広島赤十字病院など各所を、四、五回まわって隊員を探し、負傷者や死亡者を小方村に連れて帰った。

大竹町でも、午前十時ごろ、同町高杉医院前に、トラックで上半身ならびに顔面に熱傷を受けた裸体の、大竹町義勇隊員男女各一人が運ばれて来て、初めて広島市の全滅したことが知らされた。同町役場は、ただちに役場二階を救護所にあてると共に、警察署が召集したトラックに乗って、まず隊員の関係者が救援に出発した。また、大竹国民学校も救護所にした。

玖波町も、同じころ負傷者が送られて来て、重大事態の発生を知り、ただちにトラックや汽車、あるいは船などを利用して、救援隊を派遣した。

これら救援隊は、ほぼ十一時過ぎに広島市へ到着したが、市中は火の海で、義勇隊の作業現場に乗りこめるような状況ではなかった。むしろ逆に、避難する群衆が続々と宮島沿線の五日市町や廿日市町方面に向って、逃げて行くありさまであった。その群衆の中に、地元出身者もまじっていたが、いずれも容貌が崩れており、一見して誰か見当のつかない者が多かった。救援隊は次々に出発し、町村別の救護標識を持って、負傷者のたまり場や救護所を、血まなこで探しまわった。

正午過ぎごろから、義勇隊員・動員学徒、その他の負傷者がトラック・汽車(廿日市駅折返し)・船などで、続々と自力で帰って来だした。

玖波町は玖波国民学校を、大竹町は前記のとおり役場二階や国民学校に負傷者を収容し、応急手当をおこなった。小方村からの出動者は、もっとも被害が大きく、帰って来た者はごくわずかであった。これらの状況については大竹医師会史(大竹医師会編)に詳述するところであるが、この地域は、広島市から相当な距離があるため、地元出身者以外の避難者が殺到するということはあまり無かった。

地元からの出動者の搜索や救護作業に精いっぱい、広島市への救護班派遣はできなかったが、混乱の最中、十一日に金輪島に収容されていた地元以外の負傷者が、軍用船によって次表のとおり送りこまれて来て、さらに町や村をあげての悲愴な救護活動が展開された。

収容所名	所在地	開設月日	八月十一日以降の収容者数	死体処理数	埋火葬場所	閉鎖月日
小方国民学校	小方村	八月六日	一一三	約半数	不明	不明。九月十七日の水害時に一〇人位残っていた。
小方避病院	小方村	八月六日	二〇	二〇	不明	
大竹国民学校	大竹町	八月六日	二六三	不明	大竹火葬場	
玖波国民学校	玖波村	八月六日	七八	不明	不明	

なお、これらの収容者のほかに、小方村の海岸に死体が漂着したので、これを引揚げて火葬したこともあった(大竹市役所新出収入役談)。

収容者の看護は、各地区とも婦人会など町村民から看護要員が出て、昼夜をわかたぬ努力が続けられたが、地元出身の負傷者にさえも治療薬剤が無いほどで、手のほどこしようにも無かったから、毎日のように、五日市町の楽々園に駐屯していた暁部隊や大竹海軍病院に、油薬その他を受取りに出かけた。また、収容設備がととのっておらず、ふとんその他の必要器材が無かったから、町村民が抛出してこれをおぎなった。

収容した人々が次々に死んでいき、玖波町だけでも、七八人中二一人が八月中に死亡するというありさまで、それを火葬する人手もたらないほどであった。

八月十五日、日本敗戦の報に接し、住民の張りつめた心もゆるみ、一時は虚脱したかの感もあったが、ふたたび気持ちを取りもどして看護活動を続けたのであった。

三、その他

生存者僅少

建物疎開作業のため出動した大竹国民義勇隊十箇中隊の隊長および責任者の数は一二人であったが、このうち現在

(昭和四十一年)まで生き残っている者は、左記の五人である。また、他の先発男子隊の現存者藪人に過ぎない。もつとも、後続の男女部隊の第十中隊長は五年後に、第八中隊長は一八年後に死亡したのである(吉川房太郎資料)。

後続部隊責任者 日野義隆(僧侶・五八歳)

第四中隊長 長門春一(会社社長・五四歳)

第五中隊長 二階堂哲朗(大竹市長・五二歳)

第六中隊長 田淵郡一(会社重役・八〇歳)

第九中隊長 吉川房太郎(元公民館長・七六歳)

(註・第九中隊男子隊員九四人中、現存者は吉川房太郎一人である。)

国民義勇隊大竹隊の惨状

吉川房太郎

(当時・国民義勇隊第九中隊長)

昭和二十年八月六日晴

土用明けもあと二、三日。晴れてはいたが、真に秋をしのばせて、今朝は幾分涼しさを覚えた。

去る六月、国家非常時における本土防衛は国民の義務とあって、県よりの指令に基づいて編成された「国民義勇隊大竹隊」は、広島市の要請により、建物疎開作業に奉仕するため、全隊員のうち男女合計約八〇〇人に対して、動員令が発せられ、六日の午前六時に大竹駅集合の白色召集令状が、各自に交付された。第九中隊長の私は、定刻約一〇分前に到着したが、もう全員集合しており、大隊長(望戸町長)代理の本日出動部隊の責任者沖本誠二助役の訓辞を受けていた。

…かくて約三〇〇人の先発男子部隊(責任者・第四中隊長 長門春一)は、午前六時十分発の上り列車で出発した。わが第九中隊は、残された男女部隊とともに、第二陣として後続する予定であったのであるが、第一小隊長(相川嘉三)をはじめ各小隊長は、こころはやって相談した結果、男子部隊九四人だけ先発隊に加わって出発した。

私は残った女子隊員四四人を引率して、後続部隊の男女約四五〇人と共に、午前六時五十分発の列車で出発して、午前七時三十分己斐駅着、ただちに駅前広場において、後続部隊長(責任者・日野義隆)の点呼を受け、暫時休憩ののち、四列縦隊の徒歩で指定地区小網町の本隊に合流するよう、おもむろに出発した。

わが女子部隊は、この隊列の約中央部であったが、やがて己斐橋を渡り、先頭部隊が約三〇〇メートルほどの地点、福島橋との中間、舗装道路の両側は土地が低く、所々に水たまりがあり、アシが茂り、野菜畑が点在するあたりへ差ししかかったと思われるころ、真夏の晴れわたって澄みきっている碧空から、爆音が聴えた。見ると B29 らしい飛行機がただ一機悠々と飛んでいた。当時、警戒警報が発令されていたそうであるが、まったく通報されていなかったから、われわれは何らの不安をいだかず、日本の哨戒機なのであろうと軽く考えて行進していた。

ところが、全員は突如砂塵を交えた旋風のごとき強風にあふられて、一挙になぎ倒された。私は、とっさに両腕で頭を抱えて、うつ伏した。同時に一発の轟音がひびき渡った。私は掌で顔をおおっていたから、閃光は見なかった。

…私は、身体に異状がないように思われたから、すぐに起ちあがったのであるが、爆弾の投下か焼夷弾の投下か、いずれにしても、未だに飛行機の爆音が聞えていたから、全員に大声で退避命令を下しながら、一緒に道路脇のくぼ地に飛び降り、畑のあぜのかげに身を潜めていた。しばらくして、爆音も聞えなくなり、何故か無気味な静寂が付近を閉じこめているのに気がついた。一抹の不安が、ひしと身に迫る思いに、不吉な予感におそわれたが、このままの状態を、責任者として見過すこともできなかったから、身を起して路上に駆け上り、周囲を見廻して愕然とした。私が立っている道路は、初めて踏んだ土地であったが、先刻までは決してこのような場所ではなかったはずである。いつのまにこのように変わってしまったのか、どのような間違いから、このような所へ迷いこんで来たのか、まったく不思議である。と言って夢でもなさそうである。やはり、このとおりに先程歩いていた所に相違なく、意識もたしかに取り戻している。それなのに、この変り果てた視界の様相はどうなったのか、見わたす広島空は、寸前まで晴れていたはずなのに、一面灰色のモヤにとざされたばかりか、今まで確かに建ちならんでいた市街地はもとより、周辺の家屋はすべて消え失せて、あとは一望何もかも見え、模糊として、ただ所々から細い黒煙が立ち昇っているのみであった。先ほど渡って来たばかりの橋向うの己斐の町並みもすっかり倒壊して、所々に火災が起きているのが見られただけにとどまり、あたかも茫漠たる荒野に独りたたずむ思いであった。言いしれぬ孤独感と悲愁の気が、ひしひしと身にせまり、これは大変な事態が生じたと思った。ただちに隊員たちを呼び集めたが、路上に立ちもどって私の身边

を取りかこんだ彼女たちの哀れというか無残というか、異様をきわめた姿態を見て驚いた。いずれも顔面や手足に火傷を受け、帽子は飛ばされて髪は乱れ、衣服は裂けて、中には全裸に近い者さえもいた。口々に狂気じみた大声で、「どうしよう。」「どうしたらいいのか。」と言いたて、「痛い、痛い。」と泣き叫ぶありさまである。何ら手のほどこしようもなく、ただただ呆然として、まったく途方にくれた。しかし責任者としてできるだけことはしなければならず、この際、引き揚げるべきが当然の処置と考えたから、本部からの指令を待たず独断で、各自随意に、取りあえず古江電車停留所(宮島線)まで引揚げるよう指示を与えた。

私一人はともかくとどまって、先発の本隊からいずれ連絡があるだろうと考えて、そのまま路上に突っ立っていた。この時まで、私はあまりに突然であったこの事態に対する驚きと緊張、その上に応急処置に専念していたためと、先発隊の安否も気づかわれて、みずからをかえりみる暇もなかったが、幾分気持ちに余裕ができ、落ち着きを取り戻すと両手首から指先へかけて多少の痛さを覚え、水泡のできているのに気がついた。

その間、どれ程の時間が経過したか判ってはいないが、暫くして市街中央部の方面から、異様な形相をした群衆が、人通りも途絶えて荒涼としている路上を、こちらへ向って来はじめた。彼らは老若男女の別なく、いずれも半裸か全裸で、頭から顔から、胴体から足から、血潮の流れでそのままに任せて、親は子を、子は親を、妻は夫を、夫は妻の名を呼びかわして、助けあいながら、氣息えんえん、倒れたかと思えば起ち上り、起ち上ったと思えば、また倒れ、あたかも幽鬼に愚かれてさまようがごとく、フラフラと正気を失って歩いた。中には、路傍に倒れて起きあがれない者もあれば、くぼ地にたまっている水を求めて頭を突っ込み、そのままになっている者もあった。わけても十歳たらずの男の子が、全身に火傷を受け、皮膚は焼けただれて垂れさがり、黒褐色に変わった体は、いたるところから流れる血に染り、自由のきかなくなった手を差しのべて、「おじさん、痛いよう。どうにかしてよう。」と、泣き叫び、私にすがりついて来たのには、ほとんど困ってしまった。その子の悲痛な叫びが、今も耳底に残っていて、胸を刺す思いになやまされることがある。

このように生死の境を彷徨しながら、流れるように死の行進を続けている人々の数は、刻々と多くなっていった。そのうちに安否の気づかわれた先発隊員の、無事な姿が見られて、小隊長の相川氏も現われた。相川氏は不思議にも火傷は受けておらず、元気に両手を差しあげて、お互いの健在をよろこび合い、足早やに通り過ぎて行った。他の隊員も案外元氣らしく、続々と引揚げて来たから、各自に声をかけてよろこび合った。この間、どれ程の時間が経過したか知らないが、ほぼ全員引揚げたものと見きわめがついたから、私も二、三人の隊員と共に、人の流れに交り、己斐の山すそぞいに歩いて、指定の集合場所古江電車停留所付近にたどりついたが、わが隊員たちの姿は一人も見られなかった。

そのとき、これまで晴れていた空が、にわかには暗雲にとざされ、大粒の雨が烈しく降りはじめた。雷鳴もともなっていたようであるから、また敵機の来襲かと怖れおののき、とにかく一歩でも前進しようと思い、電車の線路づたいに、いつのまにか独りになりながら、トボトボと歩きつづけて、次の草津停留所まで来たが、ここにも隊員の姿はなかった。

途中、己斐に一か所、草津辺りに一か所、救護所が開設されていたが、いづこも満員で混雑をきわめていた。私はそれほど火傷の痛みを覚えなかったから、そのまま通り過ぎて井ノ口病院についた。ここで、一応の手当を受けてから、近くの停留所へ行くと、そこにはわが中隊数人と他の中隊員たちを交えた一〇数人が、電車の来るのを待っていた。大混乱の最中で電車もなかなか来ず、イライラしていると、折よく一台のトラックが通りかかった。それを呼びとめて乗せて貰い、廿日市駅へようようの思いで到着した。駅前広場には先着の隊員たちが大勢集って混雑をきわめ、救援列車の来るのを待っていた。みんな生命に別条がなかったことを喜びあいながらも、重傷の人、軽傷の人、あるいは無傷の人たちなどみんな憔悴しきって、一刻も早く大竹に帰りがたっていた。たびたび駅長に対して、強硬に交渉したが、駅長の意のままになるわけはなく、列車はなかなか来なかった。ここでもどれほどの時間が経過したか知らないが、その間に、婦人会や地方事務所の職員から火傷に油を塗ってもらったり、氷水を振舞われたり、至れりつくせりの看護をうけた。

待ちわびていた列車がようやく到着したが、重傷者は歩行困難に陥り、担架で運びこまれた。また、軽傷者のうちにも顔面がひどく腫れあがって、盲目同様となり、手をひかれて乗車する者もあらわれた。この列車には、大竹地区から出ていた動員学徒や一般の人たちもいて、お互いの無事をよろこびあい、超満員の混雑ぶりであった。

この救援列車が到着するまでに、駅前に集合していた人達のうち、何人かは通りがかりのトラックに便乗して帰ったようで、一応これで全部隊員が引揚げたものと考えられた。

これより先、大竹では午前十時ごろ、トラックで帰着した二人の被爆者によって、広島市の全滅と、隊員全部が大惨事に遭遇したことが知らされたため、町は大騒動になった。たしかな情報を得ようにも通信杜絶で果せず、不安のあまり大竹駅へ駆け集った人々で、駅は混雑をきわめたようである。

列車が駅に到着すると同時に、心急ぐままに、反対側に飛び降りて、駅裏手近くのわが家に帰った。妻は心配して皆と一緒に駅へ迎えに行ったものか留守であったから、近所の人に無事であったことを伝言するよう依頼して、自転車をとばし、海兵団の医務室に勤務中の知人薬学士堀内実氏を訪ねて、軍医の診察を受けた。しかし、当時は、まだ原爆そのものに対する知識などなく、人体に与える影響も判らず、ただ火傷の手当を受けただけであった。手当よりも、広島の被害状況や爆破の原因は何であったかを、多くの海兵たちや将校に取りかこまれて、しつこく聴かれて当惑した。

わが家に帰っていると、駅に行っていた妻も帰って来たので、町内会事務所に行って、会長に広島市の状況や九中隊は現地においては一人の死者もなく、全員無事に引揚げたことを報告した。午後五時ごろであった。

昼食はとっていなかったが、疲労のためか、あまり食欲がなく、軽く夕食をすませると、すぐ床を延べて体を横たえた。しかし、極度の興奮のためと、両手の火傷の痛みが烈しくて眠られず、朝の明けるのを待ちわびた。

八月七日晴

今日も晴れて暑さには変りがなかったが、午後、炎天下を海兵団へ治療を受けにいった。昨日とは違い身心ともに疲れがはなはだしかった。それと、昨夜から火傷を受けた顔の左半面に痛みを覚えて、徐々に脹れあがり、左の臉を開くことも困難な状況で、熱もあるようであったから、終日、床に伏せていた。

こうして旬日、火傷の痛みは変わらず、熱も下らず、悶々のうちに過していた。その間、六日に一緒に被爆した人々のなかで、火傷もせず、無傷であったことをよるこびあった人たちが、帰ってから数日中に頭髪が抜けはじめ、歯ぐきから血がにじみ出るようになり、先ず小隊長の相川氏、引続いてわが九中隊の男子二人、その他全町にわたって六〇数人の急逝が伝えられたのには、まったくおどろいた。今にも死の魔手がわが身に襲いかかってくるのではなからうかと、不安にかられ、極度の恐怖感に堪えられぬまま、眠られぬ夜が続いた。

もっとも、これら亡くなった人たちは、原爆症の恐ろしさを知らず、安静にすべきが最も大切であることも知らなかったから、折りから迎えた終戦により、海兵団や潜水学校が閉鎖され、貯蔵物資が無償で放出されたから、炎天下を運び出しに行き、重労働に従事したための過労が大きな原因になったとも思える。

第三項 三次市…710

地区の概要

三次市は、広島市の北東約六二キロメートルを距る位置にあり、単に広島県下ばかりでなく、中国地方全体からみても、岡山県下の津山地方と共に、中国山系中の古い文化地帯として、東西の双壁である。

この地方の人間生活の歴史は、はるか数千年前の原始時代に始り、その後も連綿として中絶することなく、古代・中世・近世・近代と、各時代の貴重な史料を豊富に残している。

昭和二十九年三月末、町村合併促進法にもとづいて新しく三次市が生まれた。初め三次・十日市両町と、酒河・神杉・田幸・和田・河内・粟屋村の八か町村が合併し、ついで川地・川西の二村も加わり、地域面積二五二・三四平方キロメートル、人口三七、八七一(昭和四十年十月一日国勢調査)の田園都市となった。

なお、三次市には、次表のとおり広島市内の国民学校児童が集団疎開していた。

収容場所		所在地	学校名	収容者数		期 間 (昭和二十年)
寺院名	住 職			教師	児 童	
西光寺	深水晃範	双三郡酒河村 大字青河	広島通信学校	四	四〇	五月～九月
浄泉寺	寺瑛精	双三郡酒河村 大字西酒屋	広瀬国民学校	二	(二年～四年) 二三	四月十三日～十月三日
源光寺	福間玄英	双三郡酒河村 大字西酒屋	広瀬国民学校	一	(二年～四年) 二〇	四月～九月
長円寺	佐々木良忍	双三郡酒河村 大字西酒屋	広瀬国民学校	一	(二年～四年) 一〇	四月～九月
覚善寺	常光純乗	双三郡十日市 町大字十日市	本川国民学校	二	六〇	五月～九月

善立寺	桑名静樹	高田郡粟屋村	牛田国民学校	二	六五	四月～九月
照善坊	福間廊象	双三郡田幸村 大字糸井	袋町国民学校	三	三〇	四月五日～十月三十一日、 一部分十二月二十日
専正寺	深水正道	双三郡川地付 大字上志和地	広瀬国民学校	教師 一 寮母二	二〇	四月～十一月
円勝寺	菟晃隆	双三郡川地村 大字下川立	広瀬国民学校	教師 一 寮母 一	(一年～六年) 三〇	七月～十二月
善徳寺	長谷川実範	双三郡神杉村 大字廻神	袋町国民学校	教師 一 炊事婦 寮母 三	五三	四月～十一月
専法寺	梵宝英	双三郡三次町	大芝国民学校	二	六〇	五月十日～九月三十日
妙栄寺	小山広秀	双三郡三次町	大芝国民学校	二	四〇	五月十日～九月三十日
常順寺	高樋憲隆	双三郡三次町	宇品国民学校	四	四〇	四月十二日～八月三十一日
浄念寺	泰増博愛	双三郡三次町	宇品国民学校	三	四〇	四月十二日～八月三十一日
浄伝寺	福万鉄円	双三郡三次町	大芝国民学校	二	七〇～八〇	四月十六日～九月三十日
照林坊	秋山晃赫	双三郡三次町	大芝国民学校	六	九〇	四月十二日～八月三十一日

(註)右の表は、三次市から提出された資料によるものであるが、本川国民学校のことなど学校当局から提出された資料と相違するものがあり、なお、調査を要する。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市へ侵入した原子爆弾搭載機とは別の飛行機と思われるが、六日午前七時五十分ころ、三次町の上空を B29 二機が、北西に向って飛行するのが目撃された。しかし、相当な高度であったから、これに気づかない者が多かったようだという。

原子爆弾が炸裂したとき、三次町では遠い爆発音とともに、わずかに人体に震動を感じた。広瀬国民学校の児童が疎開していた酒河村の源光寺は、炸裂の衝撃でグサグサと揺れたという(当時引率者後藤琢三談)。

十日市町役場では、爆発音は不明であったが、役場内において庁舎南側の窓ガラスの、その内側が金色にピカッと光った。

また、三次町と十日市町を結ぶ巴橋(ともえばし)の橋上を通行している人が、ハッとするような爆風圧を感じた。

三次町の比熊山の山頂付近で、炸裂当時に草刈りをしていた人の体験では、異様な閃光を感じると共に、広島市方面の空に、ゆるくキノコの形をした雲が、立ちのぼるのを望見した。それから二、三分くらいあと鈍い爆発音を聞いた。

広島市から遠隔の地であり、風向きも別方向であったから、被爆地広島からいろいろな物が飛来するというようなことはなかった。

広島市被災の報は、一般の通信施設(電話)は全部不通となったが、午後二時ごろになって、ようやく鉄道電話によって、備後十日市駅(現在の三次駅)に広島全滅の報が入った。

なお、遠隔地のことで、この日、三次地方からは広島市の建物疎開作業には出動していなかった。

二、避難者の状況

六日、午後になってから、国鉄芸備線によって、広島市から避難者が続々と殺到しはじめた。避難者らは、矢賀駅や戸坂駅から鈴なりになって列車に乗りこんだ人たちであったが、皆、どす黒く汚れほとんど半裸体の姿で、備後十日市駅にドッと下車して来た。

特に第一回の列車に乗って来た避難者には、広島県以外の人たちも、多勢入りまじっており、ともかく山間部に脱出することにより救われるという心理状態から、逃れて来た者が多かったようである。

罹災者の群れは、連日続いて到着し、結局八月十日の夕方五時ごろになって、ほぼ一段落した。

殊に翌七日からの避難者には、むごい重傷患者が増加し、悲惨をきわめた。これらの人々を、大八車やリヤカーに乗せて、三次町・十日市町の両国民学校に設けられた応急収容所へ運びこんだ。さしもの広い講堂もたちまち一ぱいとなった。

これらの罹災者らは、地元の医師・婦人会・青年団・警防団および中部第三二〇六一部隊の隊員(在郷軍人によって編成された特殊警備隊で二十年四月、双三郡を単位として編成)によって、応急手当をうけた。

なお、警防団は八月九日から八月十五日まで延人員約一二〇人、基町を中心に本川・元安川の死体処理に出動した。

十日市国民学校に収容された重傷の被爆者小坂千世子(当時・女学生鉄砲町で被爆)は「原爆の記」のなかで、当時の

状況を次のように伝えている。

「(前略)一駅行っでは時間をすごし、一駅行っでは予想のたため鉄道…ようやく備後十日市についたのは、もう夕方です。それも、もうこれから先は明日でないと通らぬとのこと、仕方なく汽車をおりて、一まず病院にかかるため、その避難者収容所となっている十日市国民学校へ収容されましたが、リヤカーに乗って着いて見て、おどろくではありませんか。この田舎に、広島をのがれて来た負傷者が、広い講堂を一杯にうずめているのです。一人一畳の割であてがわれた畳の上に、泣きわめき、うめいているのです。重傷者の来るたびに医者が集まり、手配して治療にあたっていました。またしても光るメス・消毒薬・白衣の人々…。

(中略)近郷の婦人会や、青年団の人々の厚い手当は、一人一人の顔はおぼえてませんが、今でも頭がさがります。毎日のたき出し、負傷者への看護と他人の世話を良くして下さいました。モンペ姿で、国防婦人会のタスキが、今日でも目にうかびます。

からだ全身大火傷に苦しむ人、前半身の火傷に泣く女の子、家の下敷きになって打撲傷に苦しむ老人、ガラスの破片を全身に受け苦しむ泣く私など…、片田舎の講堂に、そのうめき声が、人々の苦しむ声が満ちているのです。

いったん、火の都から命からがらにげて、この片田舎に来て、ともかくにも医者の看護を受けつつ、今度は死を目の前に迎えるのです。今日は何人、明日は何人と枕もとを通っていく人、もう二度ともどって来ないのです。先程まで、うめき声をとぎれとぎれに生死の間をさまよっていた人、昨日まで同じ市内で負傷し、親しくしていたのに、夜なかに急転してつめたくなった人々…。

来る日も来る日も、四、五日の間に三分の一くらいの人々が、重い負傷と激闘のすえ、はかなく死の国へ行くのです。

今日は人の身、明日は我が身とは、この事でしょうか。ところどころに畳のあいているところの空虚なこと、夜が明けると自分の番ではないか、朝が来るとあたりを見まわす。

こんな気持ちの明け暮れは、精神的にやりきれないことです。同じ死んでゆくなら、傷の痛さを毎日味わわないうちにと願うようでした。(後略)。」

このように六日当日、避難者第一陣の到着により、直ちに収容所開設の手配をおこない、三次町では、三次国民学校をそれにあてて収容をはじめた。ここに約一〇〇人余を収容したが、力つきて死ぬる者が多く、約五〇体を寺戸の火葬場で荼毘にふし、遺骨を安置した。

また、十日市町の十日市国民学校にも多数の罹災避難者を収容したが、苦悶する声々がその講堂に充満した。また、三次高等女学校(現・十日市中学校)にも収容したが、ここでも修羅場を現出した。

なお、十日市町南畑敷の県立三次中学校(現・三次高校)には、戦争末期の昭和二十年六月二十五日から、広島第二陸軍病院三次分院が開設されていたが、ここに、五〇〇余人の被爆軍人・軍属が収容された。同病院が閉鎖される同年九月末までに、ここで一八〇余人が死亡した(昭和三十九年八月十日付 中国新聞・三次旧陸軍病院慰霊式 記事)。なお、避難者でそのまま三次市内に定住した者が約一五〇世帯であった。

三、広島市救援状況

救護活動

広島市被爆の惨状が判って、ただちに三次町から医師・看護婦六人ずつ計一二人の救護班が出動し、実日数一〇日間ほど救援活動をおこなった。

また、広島県立双三実業学校(双三郡田幸村大字塩町)の女子生徒一年・二年生約六〇人、若鳥鉄男教諭に引率されて広島市被爆の翌日、翌々日から救護隊として、塩町駅を出発した。

男子生徒も、実業学校の野菜などを持って広島へ出動、さらに双三実業学校より五、六日おくれて、広島県立三次高等女学校(双三郡十日市町)の生徒も動員されて出発した。

四、疎開学童の状況

被爆後、疎開学童たちは、その父兄保護者あるいは縁故者の生存している者は、逐次それらに引取られていった。父兄の安否がまったく不明の者や、縁故者の引受けも得られない学童たちは、三次町と双三郡三良坂町に集められた。ついに、最後まで引取手のなかった三〇数人は、佐伯郡五日市町の戦災孤児収容所に収容された。

地区の概要

庄原市は、広島市の北東約七六キロメートルの地点にあり、中国山脈の麓の山間盆地である。北部に勝光山(九四七メートル)、北東部に大黒目山(八〇二メートル)があり、南および西にむかって傾斜している。両地を切り北東から流れて来て中央低地をうるおす西城川があり、中心集落は西城川の河岸段丘上に市場町として発達した。

昭和二十九年三月三十一日、比婆郡庄原町と高村・本田村・敷信村・山内東村・山内西村・山内北村の六村が合併し、新しく庄原市として発足した。

備北の政治・経済・文化の中心地で、国鉄芸備線・国道一八三号線が市のほぼ中央を斜断し、四方に通ずる県道もここに集り、交通の中心地でもある。しかし、全体的には農村都市で良質の米を産し、古くから酒造もおこなわれている。また、付近一帯は比婆牛の産地で家畜市場もあり、南部の七塚原牧場は殊に名高い。

さらに、名勝帝釈峡の西の入口であり、観光客が多く訪れる。

市域は二四五平方キロメートルで、三次市につぎ県下第二位の広さであるが、人口は少なく二六、五一五人(昭和四十年度国勢調査)である。

一、疎開児童受入れ状況

広島市の国民学校児童を、昭和二十年四月から同年十月ごろまで、地域内の各寺院・集会場に次のとおり受入れていた。

収容場所	所在地	児童数	学校名	備考
妙延寺	比婆郡山内西村	一五〇 (教師六)	段原国民学校	各収容所とも、昭和二十年四月に開設、同年十月に閉鎖した。
光徳寺				
薬師寺				
永明寺	比婆郡山内東村	二〇〇 (教師八)		
勝光寺				
正中院				
西楽寺	比婆郡庄原町	七〇	青崎国民学校	
雲龍寺		五〇		
金福寺		二五		
説教場		一五		
常林寺		五〇		
観音寺		五〇		
宝蔵寺		二五		
西明寺		(教師一三)		
公会場		比婆郡高村		一一四 (教師五)
世尊寺				
龍福寺				
西念寺				
光縁寺	比婆郡北村	八八 (教師四)		
瑞泉寺				
八谷太郎宅	比婆郡本田村	二五〇 (教師九)	大河国民学校	
滝口一三宅				
仲蔵寺				
丘音寺				
明見健一宅				
宝住院				

二、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市から相当離れているこの地区においても、原子爆弾の炸裂の閃光が見られた。

同日夕方七時ごろ、戸坂から芸備線で続々と負傷者が送られて来はじめ、十日ごろまで続いて、庄原国民学校(広島赤十字病院)に六八〇人、山内西国民学校に二八〇人を収容したが、その惨状は言語に絶した。全員といってもよいほど高熱と下痢で苦しみ、発狂状態になる人もたくさんいた。

死亡一、二日前ごろになると、きまって肉親の名を呼び、また肉親の姿が目前に見えるかのように、急に立ちあがって走ろうとする者など、断末魔の修羅場を出現したのである。

頭髮の抜ける者、傷ぐちの膿にウジがわいている者などほとんどであったが、治療といっても単純な対症療法であって、高熱に対しては解熱剤、下痢に対しては下痢止め、衰弱にはブドウ糖・ビタミン、外傷にはマキーロクローム・ヨーチン・リバノールガーゼなどを使用した。

広島第一陸軍病院庄原分院藤高茂明院長以下全職員は、不眠不休の治療活動を続けたが、死亡者が続出、同年十二月中旬、収容所を閉鎖するまでに、山内西国民学校では八八八人、庄原国民学校(庄原分院)では二〇〇人が不帰の客となった。

収容者は、地元とは関係のない者が多く、全国各地から応召した軍人・軍属で、戸坂国民学校(陸軍病院分院)で収容しきれなくなった負傷者などが転送されたのである。

死体の埋葬は山内西村字大歳の葛城山でおこなったが、その跡地に大歳部落の婦人会が発起人となり、昭和三十三年三月、「原爆犠牲者の碑」を建立し、死亡者八八柱をとむらった。以後毎年、春分・秋分の日、および原爆記念日には、地元婦人会が中心となり、各寺院の協力を得て法要をおこなっている。

庄原国民学校における死亡者は、軍において処理したため、地元では不明である。

三、広島市救援状況

救援隊出動

六日、広島市救援の出動命令を受け、ただちに医師・看護婦・保健婦などによって教班の医療救護班を編成し、交互に九月十五日まで広島市に出動した。広島市では、大芝・江波・己斐・戸坂の各国民学校、被服廠・通信病院・東洋工業株式会社などの各臨時救護所において治療活動をおこなった。

また、庄原町・山内東村・山内西村その他各町村から警防団(庄原町六〇人・山内東村五〇人・同西村三〇人・その他不明)が、六日夜、出動し、約一四日間にわたり、庄原町・山内西村両警防団は楠木町・福島町付近で、山内東村警防団は東練兵場付近及び尾長町一帯で、それぞれ救護活動を展開した。警防団はトラックに分乗し、庄原から三次・戸坂をへて入市し、帰途は戸坂から汽車芸備線を利用した。

更に、庄原実業学校(庄原本町)の生徒約三〇〇人(三、四年生及び別科生徒)は、八月十四日から一週間(第一班一五〇人)、及び八月十七日から一週間(第二班一五〇人)が、教師五人に引率されて、広島市救援に出動し、白島町の通信病院および三篠町の竹藪のなかの応急救護所において、負傷者の救護に従事した。しかし、多数の生徒が下痢になやまされたので、第二班をもって出動を打ち切った。出動当時の記録は、県庁からの指示により、焼却処分にしたため現在残っていない(当時、引率教師藤原恵談)。

四、その他

被爆当時、この地に避難して来た多数の人々は、終戦後、次第に広島市内あるいはその近郊に復帰をはかり、庄原町その他に定着居住した者はごく少数であった。例えば山内東村においても、一〇世帯ばかりが定着しただけである。

第五項 因島市…721

地区の概要

因島(いんのしま)市は、広島市の東方、約六八キロメートル離れた瀬戸内海上の島である。本土の三原市・尾道市に近く、古来、造船工業が発達し、現在も日立造船所因島工場では優秀な船舶が次々に建造されている。

なお、因島には因生部隊が駐屯し、日立造船所でエスピーという軍用船舶の修理をしていた。

昭和二十八年五月一日、御調郡重井村・大浜村・中庄村・三庄村・田熊町・土生町、および豊田郡東生口村が対等合併して一市を形成した。面積は五〇・二五平方キロメートルで、世帯一万二九一世帯・人口四五、一二八八(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市が被爆し、大事態が発生しているらしいということが判ったのは、八日、因島警察署に救援隊出動命令が下ったときであった。それまでは海上遠く離れた因島市では、直接的な状況を知るべくもなかった。

広島市が焦土と化し、無残な容相の死体や負傷者が数多く出ているという詳細がわかったのは四、五日もたってからであったという。

二、救護活動状況

救援隊出動

八月八日午後、因島警察署の命令で、医師三人・薬剤師二人・看護婦四人・産婆二人、その他三人の医療救護班と、警防団九〇人が広島市救援のため急ぎ出動した。

日立造船所因島工場の「北斗丸」で、尾道市まで行き、広島市の東の入口である安芸郡海田市町まで汽車で往った。そこから徒歩で市内を通過し、広島市北の入口である横川駅付近の農業会事務所(洋館二階建)に到着し、そこを活動の拠点とした。これは、海田市警察署において指示された場所であったと思われるが、横川町に着いたときは、まだ、そこの倉庫や焼け残りの電柱などが燃えていた。

農業会事務所は臨時救護所になっていて、到着するとただちに赤チン・リバノール・チンク油を使って治療活動を開始した。予想外の惨状で、その夜遅く救護隊一同はその農業会事務所の二階や、外に張ってあった天幕の中で眠った。天幕は負傷者を治療した場所である。

九日朝、救援隊長から「死体の収容にあたって手掻きを使用してはならない。丁重に扱うよう」指示があった。

農業会事務所における収容者は約五〇〇人に達したが、そのうち半数の二五〇人は死亡した。続々と死亡者が出るので、救援隊を三班(一班二〇人)に分け、一班と二班は事務所内の死体の処理にあたり、三班は外部の瓦礫や材木などの清掃にあたった。

死亡者は、一〇メートル先の場所に爆弾によってできたと思われる大きな穴(直径約一〇メートル、深さ約四メートル)があったので、そこへトタンの担架で運びこんだ。

九日の午後になって、負傷者をムシロの担架で屋外に運び出し、三滝陸軍病院分院横の竹ヤブを切りひらいて収容所を作り、そこへ収容した。治療には、下関から来援した看護兵一四人がかいがかいしく働いた。また、食糧は、山県郡加計町方面からムスビが送られて来て、患者に配給された。

十二日に因島救援隊は引揚げたが、九日午後からこの日までに収容した負傷者は、約二〇〇人で、そのうち三〇人が死亡した。

負傷者は口々に「兵隊さん、水をくれ」と叫んでいた。ある負傷者は全身が水ぶくれとなっており、またある人は、自分の手の火傷部分に里芋の皮を張っていたが、その下からウジ虫がわいていた。そして、ほとんどの負傷者は配られたムスビを食べる力を持っていなかった。

十二日朝、後続の救援隊と交替して帰路についたが、因島救援隊の一人織田兼市は、帰った翌日の十三日から一週間ほど下痢をわずらった。

なお、昭和四十三年十二月三十一日現在、因島市における原爆手帳発行状況は、次のとおりである。

特別手帳	一六四通
普通手帳	四九通
計	二一三通

[第六項 佐伯郡五日市町…724](#)

地区の概要

五日市町は広島市の西に位置し、爆心地からの距離は約七・六キロメートルである。

昭和三十年四月一日、五日市町・観音村・八幡村・石内村・河内村の五か町村が合併して、現在の五日市町となった。

東・北・西の三方は山に囲まれ、南は広島湾に臨んでいる。

西は極楽寺山の尾根で廿日市町に接し、北には窓山(七一・八メートル)・向山(六六五・六メートル)などあり、東には鈴ヶ峯(三二〇・六メートル)・鬼ヶ城山(二七八メートル)など、美しい山々が連なり、清流八幡川および岡の下川が縦貫している。

海岸沿い一帯の平地は、昔から健康保養地と称され、高名な歌人中村憲吉もかつてこの海沿いの家で療養した記録

があるが、現在は広島市の衛星地区として、急速に発展しつつある。

五日市町域の総面積は五九・八平方キロメートルで、人口三一、九九三人(昭和四十年年度国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、隣町の廿日市町で、午前九時から在郷軍人の会合が開かれるので、自転車に乗り国道二号線(観光道路)を西へ急いでいた同町農協理事木村貞夫が、ちょうど町の西端「西隅の浜」にさしかかったとき、突然、東方の空、仰角四〇度に B29 一機が、東南から北面にむかって侵入しているのが見られた。この侵入敵機は、同町役場の西北約三〇〇メートルの路上にいた主婦加藤清子も認めており、他にも気づいた者があったと思われる。

そのとたん、突如、ピカッと青白い閃光をみた。しばらく意識を失っていたが、気がついてみると、自転車もろとも爆風によって、路上に投げ出されていた。

周囲は、何も異状はなかったが、見ると東方の広島市方面に白い雲状のものが、ムラムラと昇っていた。

爆風の衝撃は相当強く、五日市町全般にわたってその被害を出した。家々の屋根瓦は落ち、窓ガラスや障子が破損し、壁の落ちた家も多く、中には天井が吹きあげられたり、家が傾いたりしたものもあった。

このため、負傷者も多数出たが、とくに北側の石垣を背にした家々は、窓ガラス・障子・天井が大破した。

午前十時半ごろから、約一時間にわたって紙や布の破片が、龍巻のあとのように、灰や塵と一緒に、町全域に降って来た。

また、二、三時間後、雨が強く降りはじめ、かなり長く降り続いた。

五日市町は、この六日には広島市の建物疎開作業(榎町付近)に出動する予定であったが、前日に大竹町・小方町と交替することになったため出動せず、被爆から免れた。なお、広島市内の国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

二、避難者の状況

この日、午前九時過ぎ、広島市から罹災者の大群が、国道づたいにドッと町内になだれこんで来た。ほとんどの人が徒歩で、命からがらという状態であった。

トラックで運ばれて来る者もあったが、みんな素足で、全身をまつ黒に火傷し、あるいは全身ガラスの破片が刺さり、肉が千切れ、脹れあがっていた。

中には、赤チンを顔中に塗った者や帽子をかぶっていた者は、帽子でかくれていた部分だけ頭髪が残り、クッキリと剃ったように露出部分が焼けてしまっている者もあった。

着物の形はなく、ボロボロに裂けた布ぎれを垂れさがらせているだけであった。

これら罹災者らの大部分は、被爆の衝撃にただ茫然としており、「どうなったのか」と聴きただしても、「わからない…」の一語だけで、何も語ろうとしなかった。

この異常な状況から、広島市に重大事態が発生したらしいということは直感された。

町ではすぐに、役場前にテントを張り、医師・看護婦を召集した。当初は医者四人・看護婦二人で治療にあたったが、負傷者は時々刻々と増加するばかりで、治療がまにあわないありさまであった。暁部隊も出動して治療活動を開始したが、それでも捌ききれず、五日市役場では、急いで町内会長、警防団・婦人会・看護婦などの非常召集をおこない、役場・学校・寺院に負傷者を収容した。しかしすぐ満員となったので、協議の結果、避難者を各隣保班に割当て、各民家(一戸に三、四人)に収容することとした。

収容者は約六、〇〇〇人以上に及んだが、当時五日市町(現在の五日市地区)の人口は約八、〇〇〇人であったから、町の人口は一挙に約二倍になったのであった。

役場吏員はほとんど徹夜で看護にあたり、火葬から罹災証明書の発行、それに消毒・防疫作業までおこなった。

また、楽々園に駐屯していた暁部隊二〇人は、昼夜交替で、主に役場や学校にテントを張って収容中の者の治療や看護にあたった。

避難者には重傷の者が多く、収容当日から毎日平均七、八人の死亡者が出て、その数は三〇〇体を超えた。

各民家に収容中の負傷者を、当初は地元の医師が巡回診療していたが、不便この上もないので、四、五日後に国民学校と町役場の二階、および寺などに全員収容した。これらの負傷者は四、五日のあいだに髪がほとんど抜け、一週間ぐらいで体中にウジやシラミがわいた。

町内の光禅寺にも十時ごろから、罹災者が殺到した。光禅寺には、以前から暁部隊が約五〇人ばかり駐屯していたが、翌七日ごろ、寺へ軍の医療団七、八人が来て治療をほどこした。寺の庫裡は避難者でたちまち満員になり、境内

にムシロを敷いて寝かせなければならなかった。全部で約一〇〇人ぐらいいた。

光禪寺は、広島市内にも多くの門徒がいたから、ここに来た避難者は門徒の関係者が多かったようである。このため毎日縁故者が探しに来て混雑した。一日に三〇人もたずねて来たこともあり、八月十二日ごろには、ほとんど引きとられていった。

観音村では、国民学校や地区の会館に約四〇〇人收容したが、その半数が死亡した。

八幡村では、己斐峠を越えて殺到した避難者を国民学校に收容し、村民こぞって救護にあたった。八幡公民館の野村慶一館長の報告によれば、四十三年八月に八幡村役場の罹災者收容名簿が発見され、六日午後一時から收容を開始し、合計一、三四二人に達している。

石内村でも、己斐峠を通して来る避難者を浄土寺に收容し、村民総出で救護活動をおこなった。

これら避難者に対して、翌七日から炊出しをおこなった。炊出しは婦人会が中心になってやり、警防団が運搬にあたった。しかし、多くの罹災者は、配給された一個のにぎりめしもノドを通らないありさまであった。また看護にあたった者の中にも、一週間ばかりろくに食事のできない者があった。

当時、軍隊が五日市町に米を何千俵も疎開し、民間にあずけていたが、炊出し用の米はそれを使用せず、加配米によった。炊出しは米のほかトウモロコシのムスピ・梅ぼし・ナスの漬物などであった。

八日には、広島市内の罹災者の救援にムスピを作って送ったが、トラックがなかったので消防自動車を使い、十五日ごろまで約一週間続けた。

なお、各地区の收容者の状況は、つぎのとおりである。

收容所名	開設月日	收容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
各民家	八月六日	約二、七〇〇	不明	五日市火葬場	不明
五日市国民学校	八月六日	約九〇〇	三〇〇	五日市火葬場	九月末日
光禪寺	八月六日	約一〇〇	三五	五日市火葬場	九月末日
楽々園遊園地	八月六日	約八〇〇	不明	五日市火葬場	九月末日
五日市隔離病舎	八月六日	約三六	三三	五日市火葬場	九月末日
石内浄土寺	八月六日	約六〇	一五	石内火葬場	九月末日
八幡国民学校	八月六日	一、三四二	一〇〇	八幡火葬場	九月末日
観音国民学校及び地区会館	八月六日	約四〇〇	二〇〇	観音仮火葬場	九月末日
五日市町役場	八月六日	約一、一〇〇	二〇〇	五日市火葬場	九月末日

ただし、各民家の收容者、光禪寺などの收容者は、八月十二日から五日市役場へさらに二〇〇人、五日市国民学校へも四〇〇人ほど移したが、これらのうち約半数が死亡し、五日市火葬場で荼毘にふした。

五日市地域全般の收容者総数約六、〇〇〇人のうち、身元判明者はわずかに五五〇人であったという。

九月以降は、これら身元不明の負傷者は、全員を廿日市工業学校(現廿日市高等学校)に收容した。九月の末、避難者の救護作業に努力した役場の職員二人が、過労のためか、あるいは避難者のおびていた残留放射能による障害か、ついに病床にふした。

三、広島市救援状況

救援隊出動

被爆当日は、町内になだれこんで来た避難者の收容と救護に、地域全員が努力を傾注したが、翌七日からは約一週間、広島市内の救援に警防団が出動した。

五日市班五〇人…九日間出動で延三五〇人、観音班四〇人…延二八〇人、八幡班三〇人…延二一〇人、石内班および河内班各二〇人…延各一四〇人が、炊出しのムスピを積んで、広島市の西部地区の救護や清掃作業に連日出動した。各班とも出動にはトラックや消防自動車を使った。

医療救護班は、町内收容の負傷者の治療だけで手一ぱいで、出動は思いもよらなかった。

被爆のその日

佐久間作一郎

五日市の磯の香の匂う海岸地帯の、夏の夜の星空は清く、海から吹きよせる冷めたくて涼しい夜風、岸辺に打ちよせる小波の音も静かに聞える。

完全なる灯火管制をして、枕頭のラジオを聞きながら、久しぶりに体の疲れ癒える思いがする。

警報が鳴っても飛び出る必要もない。人家もまばらな、こんな郊外の海岸地帯に敵が爆弾を投下する心配はない。ただ、灯火管制を完全に行えば、ここばかりは極楽である。

すでに岩国・呉も戦禍をうけた。広島は今日まで小型機で二、三回小型爆弾を投下せられたに過ぎない。大型 B29 は、広島の上空を数回通過するばかりで、爆弾はおとされない。今日はやられるか、明日はやられるか、どうも広島ばかり残されているので、疑問でさえあった。

夜になると、空襲警報のサイレンが鳴りわたった。ラジオに聞き耳をたてている。近くの人家には、誰一人として騒ぎたてる人もない。

海上遠くの島の山頂に、防空サーチライトが交差しているが、敵機らしいものは見当たらない。しかし、一万メートル以上の上空を通過しているらしい無気味な爆音が聞える。臨時ニュースが、「敵の B29 数機は広島湾の上空に集結して、広島市の上空を北進し、山陰地方に向うものの如し。」と、伝えていた。

今夜も迎えざる客は来なかった。やっと警報解除となって、ほっと一息ついたが、召集中の長男博は、司令部兵務部で警備の体制についたであろう。次女の久子は、司令部の地下室で敵機の来襲を、各室に放送しているであろう。

広島横川町本宅で、今夜私と交代して、ただ一人いる妻は、今の警報で町内の人たちと、指定の場所に退避したであろうか、または防空警備についたであろうか。妻のことが何となく気にかかる。何ともいえない気味の悪い夜は更け、いつのまにか深い眠りに入った。

短い夜は明けた。八月六日である。黒いカーテンの隙間から、まばゆい朝の光がさしこむ。今日も爽々としたよい天気である。トンビの群れが海上を飛びかう。ここばかりは何事もない平和境のような朝である。

七時を過ぎて、出勤(日本通運広島支店副長)のため畑道を、五日市駅に急いだ。朝の静けさを破って、空襲警報のサイレンが、あの嫌なブーブーの響きが無気味に鳴りわたった。

突如として、南方海上からロッキード二機が、低空で真一文字に、私を襲うかのように突進して来た。とっさに、横に積み重ねてあった麦ワラの中に這いこむようにうずくまった。頭上をかすめた機は、左に旋回して西の方向に飛び去ってしまった。畑の中で私一人で生きた気はしなかった。今日は何となく不吉を感じる日である。

遅延した満員の列車に乗って、広島駅に着いたが、土用の朝の太陽はアスファルト道路に反射して暑い。すでに出勤の時刻に近かった。

午前八時、恒例の朝礼は形のごとく行なわれた。支店長の、陛下から賜った勅語の奉読、訓示、諸種の伝達と注意事項があって、みな各自の持場に散ってしまった。

私は自席の前の柱に取りつけてある直通電話で、妻に急ぎ疎開先に帰るよう連絡のため、自宅の電話を呼んだ。電話の呼出音は、ブーブ!と耳に反応するが、応答がない。そのまま二、三分待ったが、多分帰ったのではないかと、ガチリと受話機を下して、左に体を向けた。

八時十五分、まさに世界的一瞬であった。西の窓からピカリと、眼もくらむフラッシュのような、電車のスパークの如くもの凄い光がきらめいた。アラッと思う間もなく、何とも言えない地鳴りとともに、事務所を押し破るような爆風がドスンと来た。

本能的に電話機の下に身を伏せたが、すぐ身の危険を感じて、無我夢中で外に飛び出した。大勢の人の叫ぶ声が聞えたと思ったら物の落ちる音に消されてしまった。

何処をどうして、どんなにして出たか、支社の前を通ったか、皆目記憶がない。もとより原爆の炸裂音などは知らなかった。

何分くらい時がたったか、他の幾人のもとの酒樽防空壕(醸造用の木製型樽の利用壕)のなかで、恐怖におののきながら入っていることを知った。一時的に気を失っていたらしい。我にかえり、恐る恐るハシゴをのぼって、壕の入口から首を出して、四圍を見わたすと、支社の建物は倒れかかって土煙が渦巻いている。二階事務所は凄い音をたてて、崩れかけていた。線路向いの人家は、屋根瓦が飛び散り、板やアエン板が空に舞い上っている。目の前が暗くなったようで、何も見えなくなり、気が遠くなる思いがする。

私は脚が痛く、自由を失って立ち上ることができない。私の顔面に温かいものが流れている。血潮であった。

西の空は爆風で砂塵が巻きあがり、キノコ型の雲が高く大きく広がっていた。すでに防空壕のあたりには、数人の見なれた者が倒れていた。細川副長は顔面に大きな傷をうけ血に染って、何事か叫びながら出てきた。藤原一二三支店長は机の下に伏して、奇蹟的に無傷である。二階経理室は完全に倒壊している。「助けて…助けて!」と、泣き叫ぶ声、女子事務員の悲痛な叫び声、阿鼻叫喚の巻と化してしまった。森広経理課長は事務所の倒壊する瞬間に、奇蹟的に脱出したが、階上にはなお数人が残っている。

急遽、作業員の一団が駆けつけてきた。作業監督の波多野秀男氏も参加して、必死の救援活動が開始された。梁や

柱の下敷きにたった重軽傷者が救い出されたが、ついに死者、重傷者一〇数名の犠牲者を出した。

大手町六丁目付近で被爆したらしい支店長専属の自動車運転手が、顔面を火傷し、血に染って、息せき切って帰ってきた。彼は震えながら容易に発言をしない。多数の人が集って来てから広島全滅の第一報をようやく語ってくれた。

皆のものは、この付近に限られた爆撃であると思っていて、他所の事まで気にする余裕は持たなかったのである。刻々と情報が流れてくる。火炎と煙は風に吹きまくられて火炎は荒神町から西蟹屋町の一部に延焼しつつありとの情報が来た。私は経理課長に命じて、経理書類の搬出をはじめさせた。負傷の軽い元気なの一〇数人が勇ましく活躍する。また、作業員は懸命に什器書類を持ち出している。

私は膝関節のひどい脱臼で、歩行の自由を失い、何となく頭が痛い。耳鳴りがする。口が開かない。顎関節が脱臼したのである。茫然として線路わきの石に腰を下して、皆の緊急作業を眺めているばかりである。声が出ない。無理に声を出そうとすれば、「アア」ばかりで発言できない。支店長から話しかけられても、ただ頭を上下にするばかりで返事ができない。皆は気が狂ったと思ったであろう。誰れが手当をしてくれたか、頭の傷に三角布が巻いてあった。

階下の机の上に、大金庫の鍵を置いたまま飛びでたことを思いだした。何としても持ち出さねばならない。痛い足を引いて事務所に入ると、机の上に天井がおおいかぶさり、柱が傾き、壁土は崩れ、こま竹が錯綜して、足の踏み場もない。自席の机で金庫の鍵は見つかったが、机の上に置いた腕時計がない。懐中物を入れた上着は、爆風で何処にとんだか見つからない。

またも警報のサイレンが鳴る。また退避しなければならない。空には無気味な爆音がする。火災は西蟹屋町の西部を焼き、東に延焼して、会社の一五〇メートル先くらいに近づいてきた。鉄道構内から退避命令が出た。「タイヒ、タイヒ」と、矢つぎ早やに叫びながら伝令が来た。駅構内には強力な火薬を積載した貨車が七、八輛ある。これに引火または爆撃をうけると、付近一帯は木端微塵になって吹きとんでしまう。即時に全員退避せよとの命令である。

出勤の途中で、鉄道線路から爆風で下に突きおとされた小方部長、無傷の横須賀部長、顔面に大きな怪我をした細川副長、無傷の藤原支店長などと緊急協議の結果、ひとまず全員退避することになった。

線路向いの愛宕町の間あたりから、火の手が上って盛んに燃えだした。荒神町・西蟹屋町は旋風にあおられ、黒い煙、赤い炎が猛烈に渦巻いている。私有の自転車を持ち出した。支社の津田君と同道するように小方部長が頼んでくれた。彼と私の居住地が同じ方向であるからである。

駅前から白島町を経て、横川町に至る道をえらんだ。それは横川町の本宅に妻がいるはずであるからであった。

荒神町の広島荷造工業・浄光寺が盛んに燃える。真紅の炎と黒煙が立ちのぼり、逃げまどう人、火傷でもう息の絶えた子どもを、堅く抱きしめて狂気のごとく叫びながら走って行く母親、逃げのびることに懸命で、火を消すどころではない。隣組の、玩具みたような手押ポンプなんか、何の役にもたないで各所に放り投げてある。

火災は突風でますます拵がり、火炎と人間の波が渦巻いて、さながら火炎地獄である。

東練兵場から牛田の方面へ抜けることにした。牛田に出たが、太田川は満潮で渡れない。饒津公園に出て、大須賀踏切りを渡り、栄橋を経て、泉邸前を通り、白島に出た。三篠橋は不通らしく、どうしても太田川鉄橋を渡らねばならない。厄介な古自転車は、津田君がかついでくれ、横川にたどりついた。横川も荒涼たる廃墟で、津田君に自転車を托し、五日市への連絡を頼んだ。

一方、この日の五日市では、私の出勤後、長男の嫁は、八時前に妹の美津江を学校に送り出して、台所であと片づけをしていた。東の力から凄い光がした。裏口から屋外に出ようとする時、地震のような地響きがあった瞬間に、大音響とともに家が倒れるように揺れ、爆風はもの凄いい音をたてて戸障子を破り、家の中に入り、裏側の小窓を破壊し、庭の石灯籠を倒した。大地震であろうと思った。近所の人に叫びながら、隣組の人が集った。恐怖を話しあっている。まったく生きた気持もしなかった。広島に爆弾が投下せられたと叫びながら駆けまわっている人がいた。

「大変だ、大変だ。」と、叫びながら提防の土手に、多数の人がかけあがりだした。広島には、無気味な大きな黒雲が立ちのぼり、紙や板らしいものが空に舞いあがっている。見る見る全市に火の手があがり、広島は黒い煙におおわれ、赤い炎に包まれてしまった。

この辺の人は広島に通勤する者が大部分で、家族の身の上を案じ、提防から駆け降りる人、提防に上るもの、一瞬に部落は大混乱となってしまった。

間もなく広島全滅の情報があり、正午を過ぎるころとなると、広島から火傷を受けた家族が帰りだした。みな顔面・手・足にひどい火傷をうけている者ばかりである。どの家にも罹災者のいないうちはない。やれ薬だ、やれ医者だと駆けずりまわって、狂人のように、この部落は上へ下への大狼狽となった。夜に至るも帰って来ない人も多数あり、

どの家にも、知人や親戚の罹災者、または避難民でごったがえしていた。

五日市国道は、罹災者の西へ向う行列がつづき、顔面が腫れあがり、両手足はゾウキンのようにぶらりと垂れ下がり、男も女もほとんど全裸、または破れた衣類を着ている。女は下の方を隠そうとはしないで、気もうつろの夢遊病者のように、低い声で「アア」といっている。何をきいても返事はしない。何処から来たかと言っても「アッチ」、何処に行くかと聞いても「アッチ」…。

こんなむごたらしい人の群れが、一晩中続いた。みな底知れない恐怖におそわれてしまった。広島にいる家族四人の者も、あんな姿で、あのおそろしい傷を受けて、死んでしまったのではあるまいかと心配し、嫁と娘は終日泣きながら抱きあって「ドウスル」、「姉さん、どうしたらよいの…みんな死んだらどうすれば良いの…」と、繰り返かえしていた。

その夕ぐれ近く、日通の津田さんが立寄って、お父さんは無事である、お母さんは火傷をうけて救護所に収容せられたと、嫁たちに告げた。この夜は、妻の姉婿の兼本金次郎氏と、軍医で召集せられた秋本(的場町 秋本外科医院)の奥さんが子供を連れて避難して来て、夜の明けるまで恐ろしい話が続いた。長男の博と妹の久子の消息は二日間も判らなかった。

[第七項 佐伯郡廿日市町…735](#)

地区の概要

廿日市町は、広島市の西にあたり、爆心地から約一〇・八キロメートル離れた地点である。

昭和三十一年、廿日市町・平良村・原村・宮内村・地御前村が合併し、翌三十二年・五日市町の一部(佐方)が編入されて、現在の廿日市町に発展した。

廿日市町は古来、宮島との交流深く「宮島杓子」などの郷土工芸品の製造から始まり、現在の木材加工業の隆盛をみるに至った。

国立公園極楽寺山(主峯六七四メートル)は原始林に包まれ、山頂にある古刹極楽寺からは、内海が一望せられ、眼下に宮島が眺められる。

また地域内には、安芸国総鎮守の速谷神社・桜尾城址、あるいは毛利氏と陶氏との合戦地として知られる折敷畑古戦場がある。

地域の面積は四五・七四平方キロメートルで、人口二四、五二八人(昭和四十年十月一日国勢調査)で、近時ますます開発が進んでいる。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、海面もおだやかでよい風であった。

宮島と地御前(ちのごぜん)村のあいだの沖に、上空高く白けむりを長蛇のように曳きながら、敵機二機が広島市へむかって侵入して来た。廿日市町役場にいた吉田勇・林竹佐一、宮島にいた広藤鼎、地御前の漁港側にいた吉岡浅太郎など、その侵入機をはっきり目撃した。吉岡浅太郎は、ちょうどそのとき地御前港近くの空地で夫婦一緒に、通称つば網という漁網を干し、網の修理をしていた。

ふと、宮島上空遥かにゴロゴロ、ゴウゴウとかすかに音がするので空を仰ぐと、B29 が銀翼を輝かし、白煙を長くえがいて、広島方面へ侵入していた。

いちじ爆音がやんだと思うと、江波山の上空に千切れ雲のような白黒の雲ならぬ爆煙があがった。それが次第にヒョウタンをさかさまにしたような、いわゆるキノコ型の大きな入道雲になり、その最下部から青白色の閃光を發した。とたんにドンドンと物凄い音を響かせた。

吉岡夫婦は、まるで達磨のように投げとばされ、腹が裂けたかのように感じた。体が投げとばされるとき火をあてられたように感じた。仰天してそのまま草原にしばらく転んでいたが、「こうしてはいけない」と立ちあがって、広島市の方を眺めると、各所にモウモウと白煙・黒煙・火煙が立っており、時々、物凄い爆発音もきこえて来た。

同時に、今まで穏やかに風いでいた海面は、江波方面からどす黒い猛烈な嵐が、白波をともなって押し寄せて来て、異様な海面と化した。

炸裂時、町域の沿岸部の宮内村や地御前村では爆風のため、四五パーセント以上の家屋が、戸障子がとび、壊れ、ガラス窓はこな微塵に砕けた。原村や平良村でもこれと同様で、壁などが落ちた。

八時二十五分ごろ、警防団員林竹佐一は、自動車で広島市に急ぎ向う途中、セメント袋のようなものが一個空中を飛んで廿日市町の岩戸山(山陽高等女学校)付近に落下するのを目撃した。それは敵機からの落下物のように思われたという。

廿日市町からこの日、広島市内へ建物疎開作業のため、五七人出動していたが、被爆により即死者二九人、負傷者二八人を出した。

なお、市内の国民学校の疎開児童は、この町にはいなかった。

二、避難者の状況

六日正午ごろ、広島市から一級国道二号線を伝って、徒歩で避難者がぞくぞくと廿日市町にはいつて来た。

かねて防衛計画により、市の近郊町村への戦災者收容割当ができており、観音町は地御前村へ、天満町は宮内村へというように、受持ちがそれぞれ決められていたが、避難者の行列はあとを絶たず、後にはトラックで輸送されて来たので、予定計画も何もない大混乱をひきおこした。

避難者の大群はみな異様なすがたであり、三〇歳前後の女性は楽々園までトラックで運ばれて来たと言っていたが、頭髮は赤土まみれ、顔面は血みどろ、着物はワカメのように破れて恥部も曝け出し、息もたえだえに走って来た。

この様な避難者が次々と血まみれになって走り来る者その数を知らず、中には、重傷者を軽傷の人が肩に寄せ、あるいは背負って来た。

廿日市国民学校はたちまち收容者で埋ったから、地御前・平良・宮内・原の各国民学校、および串戸会館をも收容所にした。学校の教室や講堂にムシロを敷き、毛布を敷いたところもあったが、ほとんど町民からムシロ・ゴザ・毛布を徴収してこれを敷き、その上に寝かせた。

夕方ごろから、町民の家庭から着物が集められて收容者に一枚ずつ渡された。しかし、それも間に合わないで死んでいく人が続出した。火葬場もすぐ一ぱいとなり、死体の收容ができなくなったので、国民学校の校庭の隅に臨時火葬場を設けて茶毘にふした。

各家から救護に出た婦人たちは、あまりにもひどい姿や臭気のなかながら、多数の收容者のために黙々と立ち働いた。応急手当といっても赤チンキを塗布するくらいのことであった。收容者は口々に、水を水をと叫び声をあげたが、水をのむとそのまま倒れていった。

しばらくして婦人防衛隊の炊出しのにぎり飯が送られて来たが、食器がないので有合せの物にのせて、重傷者には枕べに置いた。軽傷者には各自手で取ってもらい急場をしのいだ。時間が経つに従い食器も毛布もふとも集められ、充分ではなかったが、かなりの措置が取られるようになった。

重態の避難者のなかには、一緒に逃げて来た近親の者から、念仏をとなえ聴かされているという最期の光景も各所にながめられた。

また、精神異常を起した避難者もあり、あちらこちらとまどい歩き、所定の場所に坐っておれず、「私はどうすれば良いのですか」と、絡みつくように救護班の者にたずねたりなどする人も数あった。

ある中年の女性は、すっ裸になって走りまわり、大声で何か言いながら、錯乱状態をむきだしの姿であった。これら精神異常の人々は、多くはまもなく死んでいった。

父母を失った幼い兄弟二人がいたが、兄は一〇歳くらいで重傷であった。弟は七歳くらいで軽傷で、名をケンジと言うらしく、兄はしきりに「ケンジ！水をくれーや」と、喚き叫び苦しんでいるのに、弟のケンジは何もわからず、ただ無邪気に、物珍らしげに走り廻りはしゃいでいた。見る者、その幼い兄弟の姿になみだを流した。

大政翼賛会地御前支部の吉岡浅太郎班長も涙を流しながら、その兄に水を与えようとしたが、医師に注意されて与えることができなかったという。

このような凄惨な状況を繰り返りひろげながら、八月六日もようやく夜となった。夜は苦しむ被爆者のためにせめてもの蚊遣りを焚き、重傷者にはおかゆの用意もできた。

翌七日、各組の役員は交替で收容所に出て救護活動にあたることになった。

海岸に出てみると、焼けた柱・家具、その他いろいろな残骸が、漁網の張り場もないほど海面を埋めていた。そのあいだにゴム人形のように脹れあがった死体が無数に浮流しており、大きな木材には必ず一、二の学生や男女の死体が抱きついてた。

地御前港内にも、丸はだかの学生らしい死体やその他男女の死体が五体ほど、岸辺に打ちあげられていた。七日以後も、広島湾沿岸一帯の浜には、かなり永いあいだ遺体が漂流して来て、浜の上に点々と打ちあげられていたが、その遺体の収容をする者がなかった。

地御前の臨時収容所では、被爆直後から数日間は、一日に一〇数人の死亡者がでたが、死体を納める棺は四、五個しかなかったのので、この四、五個をもって火葬場まで運んでは棺をあけて持ち帰り、また遺体を納めて運んだ。これを数回繰返してやっと全遺体を葬ることができた。

吉岡浅太郎・世良六一両名が死体を棺に納める役にあたったが、棺に納めるとき、死体はおおむね火傷のため皮膚が破れ、臭気もはなはだしく納棺の作業は困難をきわめた。思わず顔をそむけることもあったが、とにかく冥福を祈りながら作業を進めた。

この地御前以外の各収容所も同じような悲惨な状況を展開した。殊に海面の惨状も陸上に劣らないほどのありさまであった。なお、市内からの収容者の地区別状況は次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日	備考
廿日市町	廿日市国民学校	八月六日	二、九七九	三五二	廿日市火葬場	九月末日	八月六日に広島市から舟に乗り、重傷者六一人、串戸港に運ばれて来た。
平良村	平良国民学校	八月六日	不明	一七八	平良火葬場	九月末日	
原村	原国民学校	八月六日	三七	八	原火葬場	九月末日	
宮内村	宮内国民学校	八月六日	七一二	一六九	六本松火葬場	九月末日	
地御前村	地御前国民学校	八月六日	一、九四八	二二六	地御前火葬場	九月末日	
宮内村	串戸会館及び増井工場倉庫	八月六日	九一	四二	串戸火葬場	九月末日	

三、広島市救援状況

救援隊出動

町内では多数の避難者の収容作業に全力をあげて努力する一方、各地区の警防団員は救護班を編成して広島市の救援に出動したのであった。まず、廿日市町は、当日から十三日まで八日間、実人員四二人・延三一人が、廿日市町から紙屋町までトラックで乗りこみ、主として大手町一丁目から同町八丁目、紙屋町から鷹野橋までの電車道路の清掃に従事した。

翌七日からは、平良村・原村・宮内村・地御前村の各警防団員が出動し、同じく十三日まで七日間活動した。

平良村は実人員六一人＝延三七九人、原村は実人員三七人＝延二一人、宮内村は実人員五七人＝延三四四人、地御前村は実人員四〇人＝延二三二人であった。

平良村班は、廿日市町から己斐まで電車を利用、そこから徒歩で行き、広瀬町・小網町付近に、原村および宮内村両班は、その村から天満町までトラックで行き、天満町の一帯から小網町付近に、また、地御前村班はトラックで入市し、土橋の電車停留所から相生橋付近にかけての清掃作業に活躍した。ただ、各地区とも避難者を多数かかえていたので、医療救護班は広島市へ出動する余力がなかった。

なお、廿日市町地域に避難した市民が、そのまま地域内に定着居住した状況は、次のとおりであった。

地区名	概数	説明	備考	
廿日市町	五二一人	被爆から昭和二十五年までの世帯数	昭和二十六年以降、広島市の復興するに伴って、次第に、広島市へ復帰する者が出て来て、昭和三十七年十月現在では以下のとおりである。	
平良村	三二五			四一人
原村	二七			二七六
宮内村	二〇一			二六
地御前村	二九二			一七七
佐方	三九			二一九

第八項 佐伯郡沖美町…742

地区の概要

沖美町は、広島市の臨海地から、南方約二二キロメートルへだたった西能美島に所在する町で、広島湾のほぼ中心地点におたる。

同島能美町・東能美島の大柿町、ならびに東方江田島湾をへだてた江田島町とは、陸続きとなっている。

現在の沖美町は、広島市被爆当時は、佐伯郡三高村と同郡沖村の二か村であったが、昭和三十一年九月三十日、この両村が合併して沖美町となった。同町の美能がね・絵の島は海水浴場で、また奈沙美は釣場で名高い。

町域面積は、二七・五四平方キロメートル、人口は六、五八四人(昭和四十年国勢調査)で、爆心地からの距離は、至近距離約一五キロメートル、最遠長距離は約二三キロメートルである。

被爆当日、当町から広島市へ通学していた生徒たちは、学徒動員で市内各所の建物疎開作業に出動していた。また、女子挺身隊が舟入町方面、および吉島町方面へ出動していた。

なお、当時は広島市からの集団疎開児童は受入れていなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市へ侵入する敵機の爆音を、かすかに聴いたという住民がいるが、その機影を見た者はほとんどいない。

爆音がきこえても、あまりに毎度のことなので、馴れっ子になり、上空をそのたびに仰いでみるようなことはしなかった。

三高村北岸の、三吉の今田俊造の語るところによれば、相当の高度で、一機南から北に向って飛行するのを見たという。

敵機からの投下物は、何もなかった。

原子爆弾の炸裂時、ピカッと閃光がきて、電力線がショートした事故かと直感された。

閃光後、しばらくしてドーンとかなり大きな爆発音がひびいて来た。爆発音の程度は、往年、毎日正午に当島へきこえて来ていた比治山の午砲(ドン)よりも余程大きな音であったという。

広島市側に面した窓ワクや窓ガラスが、かなり壊れた。しかし、海岸部でも向きによっては、窓ガラス一枚が壊れたという程度のところもあった。

例えば、三高村高祖(こうそ)海岸の耐火煉瓦工場では、工場内に何ら異状なく作業を続けた。

しかし、広島市に面した海岸線道路を、自転車而走っていて、衝撃で身体がハンドルの前に飛んだという人もある。

小高い山畑で、農作業をしていた人は、炸裂時に、広島市に面するがわの片頬が、チカッと少し熱かったと語っているが、樹木や農作物には何らの影響も見られなかった。

三高の海岸からは、日常は似島の山影によって、広島市の東部望見がさえぎられるほかは、広島市の過半が海を距てて展望される。

その日、突然の爆発音・衝撃によって、広島市に何事が起ったかと、海上を望見すると、市の上空に巨大な煙柱がモクモクと立ち昇り、すぐにキノコ型の雲となって湧きあがった。その形のまま雲はかなりの時間を持続し、だいぶん経過してから流れはじめた。

目のあたりにキノコ雲の全容を、住民の誰もがはっきりと眺めたが、みんな皆実町のガスタンクの爆発だろうかと話しあった。なかには、その方角がガスタンクよりやや西寄りであると、指摘した人々もあった。

広島市の被爆による当町への飛来物は何もなかった。

なお、この日動員令による建物疎開作業には両村とも出動していなかったが、疎開跡の廃材を持ち帰るために出向いていて被爆した者が若干いた。

二、避難者の状況

六日午後二時ごろ、広島市へ出ていた島の者が戻って来はじめた。

これらは宇品の県営棧橋・市営棧橋からの定期船によって、続々と帰って来たが、中には、自家用船で広島市の本川に碇泊中に被爆し、その帆柱を焼かれて、ホウホウの態でもどって来た者もあった。

炸裂時にちょうど三高村から宇品に向っていた一隻の定期船が、似島付近の海上で、爆撃を見て驚きあわて、そのまま三高棧橋へ引きかえして来た。

翌七日になると、広島市内から続々と避難者が、親類や縁故をたよって来島しはじめた。次々に上陸して来るこれらの避難者は、火傷や負傷の身体にボロボロの衣服をまとい、実にむごい姿であった。

その数は、ほぼ四、五〇〇人に達した。

なお、両村出身者で広島市に居住していた人たちは、その大部分が死亡した。

島の者で、広島へ出向いていて被爆帰島した者も、市内から縁故をたよって来て、各家庭に収容された者も、共にかなりの人数が死亡した。

当地の火葬場は完備していたから、死亡者の火葬には何も支障なかったし、その遺骨はそれぞれの家庭や縁故先の家が引取って安置した。

また、海岸の砂浜には、被爆死体をはじめ雑多な物が打ちあげられた。その状況について、当時、学童疎開で行っていた桧和田紀久子の手記に、「翌日から、島の海岸には、大きな丸太、荒々しい木片、燃え残りの塵、それらに混じって、男や女、またそのいずれさえ分らぬ死体が、水脹れの姿で浮遊し、岸べに打ち上げられた。子どもたちは、『あれ、あれ、ここに、あそこに』と、この異様なさまを見つけしだい大人たちに告げ歩いた。死体には、何時しれず藎がかけられていき、子どもたちのいない遠くの砂場で、石油をぶっかけぶっかけ焼かれた。

島には、連日連夜ヤケドを負った人々が運びこまれ、医者はテンテコ舞いで、垂れ下がったり、脹れあがった火傷の皮をバリバリと剥ぎ、その上に、赤チンキとチンク油を色あざやかにぬった。手も足もズルズルになった火傷患者は、みるみる白い繻帯に包まれ、重病人の姿で、縁者の家々に運ばれた。」とある。

三、広島市救援状況

救援隊出動

翌七日から、連日、警防団員約三〇〇人が、広島市へ出動し、焼跡の各所で多数の死体処理にあたった。

これら救援隊員は、毎朝の定期船によって出動したが、連日、死体処理にたずさわったため、まったく気持ちがヘンになってしまい、身心ともに弱りきった。しかし、現在では健康を取りもどし、異状はない。

四、避難者の定住状況

広島市から渡島避難して来た人々の、相当多数の世帯が、一、二年間は島内に定着居住したが、その後、社会が一応安定しはじめると共に、次第にまた広島へ復帰し、今ではまったく稀となった。

現在、沖美町の被爆手帳交付状況は、特別手帳六二〇人・一般手帳一〇人、計六三〇人となっている。

第九項 佐伯郡宮島町…746

地区の概要

宮島町は、広島市の西南にあたり、爆心地から約一六・七キロメートル離れた島で、昭和二十五年十一月、厳島町を宮島町と町名をあらためた。全島が特別史跡及び特別名勝都市計画風致地区に指定され、瀬戸内海国立公園に編入されている。島内には一基の墓もない清浄の地とされており、また島の山地は、天然記念物「弥山原始林」として植物生態研究上、貴重な価値があり、民俗学的にも興味深い伝統遺跡が多く、厳島神社の宝物は、平氏の栄華を伝える国宝や重要文化財を網羅している。

町域は、宮島一島で、周囲三〇・九キロメートル、面積三〇・一七平方キロメートル、人口四、二四一人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

宮島の東北岸部、包が浦(つつみがうら)付近から広島市上空に高く立ち昇ったキノコ雲が望見された。

炸裂の閃光と、音響の衝撃を相当ひどく受けたが、当時、包が浦に広島兵器補給廠の分廠があったので、町民はそこが爆撃されたものと思った。

爆風によって、鉄道栈橋付近の民家五、六か所の屋根瓦が少し壊れた。

広島市へ侵入する敵機の目撃者有無については、今では判っていない。

なお、国民学校児童の疎開受入れはおこなわず、この日、広島市内の建物疎開作業にも出動していなかった。宮島町は、八月四日に出動して任務を果していたからであるが、学徒はその通学する学校から、それぞれ動員学徒として出動していて、被爆した者があった。

二、避難者の状況

六日午後四時ごろ、己斐方面から徒歩で宮島口にたどりつき、漁船によって、三人五人と罹災した者が島へ帰って来た。翌七日からは、佐伯郡廿日市駅から電車を利用し、宮島口から船に乗って宮島に渡って来た。

八日、似島から船で二回にわたって約三五〇人の罹災者を町内の寺院に収容した。

避難者収容所の状況は、次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
大願寺 大聖寺 光明寺 存光寺 徳寿寺 宝寿寺 真光寺	厳島町 (現宮島町)	八月八日	五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇	三三五	佐伯郡大野町赤崎	八月末日
以上七ヶ寺			三五〇	三三五		

八月末日、収容所を閉鎖後、生存者は広島市へ送り、死亡者の遺骨も引取人のないものは広島市へ渡した。なお、移動演劇さくら隊の丸山定夫が、十六日、存光寺で死亡した(第二巻 二九九ページ)。

広島市からの避難者で、そのまま宮島町へ定着居住したものはおおむね三〇人ほどであった。

なお、宮島町から救護班や警防団員の出動はせず、もっぱら地元で活躍した。

なお、本町出身の動員学徒の死亡者内訳はつぎのとおりである。

動員学徒死亡者数 四六人

(内訳)

崇徳中学校	九	広島市立中学校	四
県立広島工業学校	一	県立広島第二中学校	四
広島高等師範学校	一	山陽中学校	二
県立広島第一中学校	一	県立広島商業学校	一
山中高等女学校	四	西高等女学校	七
広島女子商業学校	五	県立広島第一高等女学校	二
広島市立高等女学校	三	安芸高等女学校	二

三、厳島神社の被害

厳島神社本社などの国宝建造物に対しては被害はなかった。しかし、末社のうち一、二社は被害があったようであるが、記録がないのではっきりしない。

広島市に面した場所、すなわち杉の浦、包が浦各社や今伊勢神社には、多少の損害がみられ、原子爆弾によるものであることが確認されている。

また、長浜神社の社宅の戸障子のはずれたり、屋根瓦が一部飛んだりした。

広島市からの避難者が、神社内に来たということはなかった。被爆三日目、罹災者が多数運ばれて来たが、これも厳島神社ではなく、島内各寺院に収容された(厳島神社野坂元定宮司の報告)。

第一〇項 佐伯郡大野町…750

地区の概要

大野町は広島市の西南にあり、爆心地から約二〇キロメートル離れたところにある。

昭和二十五年四月、町制を施行して新発足した。大野村時代から地域面積の八割以上を占める山岳地帯に、山林の保護・育成を行いたい、立木や副産物による収益を大きくあげている。

町の東南は大野瀬戸をへだてて、景勝地宮島に相對し、平地部は海岸、および永慶寺川の細長い帯状の流域一帯に沿って、町がひらけている。

林産物農産物のほか、水産業も盛んで「広島かき」・「あさり貝」は特産として名高い。

戦後、生産工場が発達し、各種工場の誘致がおこなわれ、町の近代化を進めている。

観光では宮島口(山陽本線宮島駅)として賑わうほか、地域内に「妹背の滝」があり、天然記念物ベニマンサクの群生地は有名である。

地域の総面積は七〇・三平方キロメートルで、世帯数三、六五八世帯、合一三、一九七人(昭和四十年十月一日国勢

調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

原子爆弾の炸裂のとき、大野町では異様な光線を感じ、続いて強烈な爆風を受けた。戸・障子をたおし、ガラス窓をこわし、激動を身に覚えた(広島県大野町誌)。

大野町字深江の大西栄太郎の体験談によれば、その朝、広島市役所へ退職挨拶に行くため準備をしていたとき、八時のラジオが、広島県内に敵機がいるから警戒を要するというのを放送した。それを聞いて家を出て国道まで行ったとき、ピカッと光った。二、三分後に音がきこえた。

通りかかった道で両側の家のガラス戸のガラスが壊れた。異変を感じて海岸まで出て見ると、広島方面に雲のような煙がのぼっていた。すぐ家に帰ったところ、戸が内側に向かって倒れ、タタミの上には煤がたくさん散在していた。前夜、陸軍が火薬実験をおこなうとラジオ放送があったので、多分そのためだろうと思った、という。

また、宮島口駅長の談(原子爆弾災害調査書広島気象台調査報告)によれば、パッと光ったので、室外に出てみると、白雲がまんまるい火の玉のまっ赤になったのを中心に、渦巻き拡がりだしており、その中心の火の玉の部分は白雲になり、天上高く昇った。三分も経ったかと思うころ爆風が来た。

窓ガラスは三割程度以下の破損である。戸外で爆発に直面した人は、パッと顔面の熱くなったような僅かな熱さを感じた。

炸裂後、火の玉部分のまわりの白い煙状の雲は、高度三、〇〇〇メートルくらいを急速に波状をなして拡がると見るまに爆風を受けた。のち暫くして市の中央に火災の煙昇る。その後数個所に火の手がのぼり、一晚中燃えつづいた。

また、大野浦付近の住人の談(前同書)では、光った瞬間、海上で顔面が温かった。爆風が来て大野駅裏付近の家屋、および工場のガラスが壊れたが、丸石の陸軍病院付近は壊れなかった。広島の方に真黒い煙が立ち、相当高く昇り、段々白くなったという。

なお、この日、大野町の義勇隊は建物疎開作業には出動していなかった。七日が出動予定日となっていて命拾いをした。

二、広島市救援状況

救護状況

広島市被爆の報を受けて、当日すぐ大野町からも救援の手をのぼしたが、市内は己斐以東に進むこともできず、救援隊はむなしく雨に打たれて帰って来た。

それから毎日負傷者が大野下国民学校に運ばれ、一六教室を収容所にあてて、医師四人・軍医四人と女子青年団員・婦人会員、その他僅かに残る男子の地元奉仕者によって介抱したが、その惨状は筆舌につくしがたいものであった。

ゆでダコのように焼けた皮膚からは、ウジがわき、腫れた身体は、男女のけじめさえたためという有様で、日々数十人ずつ、トラックに乗せられては、当時夏休み中の大野下校の救護所に運ばれ、日に数人ずつ死んでいった(広島県大野町誌)。茶毘に付した死体は約二五〇体と見られる。

収容所としては、前記大野下国民学校のほかにチチヤス牧場・大野病院・大野西国民学校・西教寺などにも急設された。チチヤス牧場には、暁部隊の病弱者が駐屯していて、そこへも多数の負傷者が収容されたが、ここでも、ずいぶんの死者があつて、つぎつぎに火葬がおこなわれた。そして引取人不明の遺骨は後に広島市へ移送した。

広島原爆医療史に、広島市に隣接する佐伯・安佐・安芸などの各郡の医療関係者は、被爆とともに避難を始めた市民の長い行列が続き、街道にも農家の軒下にも、あふれるような始末であったから、医療班の広島市への出動はおろか、自宅や近辺の国民学校などで、救護に従事するのさえ人手不足で意のごとくならなかった、と記載されているが、この大野町も例外ではなく、地元における救護活動で動きがとれず、広島市救援の医療団は出動しなかったようである。

国民学校へ収容された人々は、軍人・軍属並びに民間罹災者多数の混合であり、九月下旬までは、これら学校も国民学校ではなくて、陸軍病院の分院といった性格のものになっていた。

地区の概要

湯来町は、広島市の西北に位置し、爆心地からの距離は約二二キロメートルである。昭和三十一年九月三十日、砂谷(さごたに)・上水内(かみみのち)・水内(みのち)の三村が合併して町制をしいた。

太田川の支流水内川の流域、および八幡川の上流域を占め、水内川は岩魚と鮎のすぐれた産地であり、わさび・椎たけ・こんにやくなど山菜や酪農産物でも名高い。

湯来および湯の山温泉はずっと古い時代から親しまれて来たところで、厚生省国民保養温泉として現在でも県下唯一を誇っている。

町の総面積は一六一・三三平方キロメートル、人口は七、四八六八(昭和四十年十月一日国勢調査)で将来、高原地帯の開発と共に、広島市の郊外休養地として発展する可能性がある。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、突然、一大音響が聴こえてきた。砂谷地区からは、山合いの関係で視野がきかず、炸裂のキノコ雲は見えなかったが、村民らは、火薬庫の大爆発か、よほど大きな砲撃かと感じた。わずかに雨が降ってきた。

村役場の障子が、音響と同時に倒れた。午前十時ごろ、相当ひどく焼けた紙片が飛来したが、それはどこかの事務所の伝票の破片のようであった。

水内村役場付近では、稲妻のような光と共に大音響がきこえ、役場の窓ガラスなども軽震程度の音をたてた。被害は別になかったが、村民は互いに戸外に飛び出し、広島方面が爆撃されたのではないかと話しあった。

高さ五〇メートルばかりの山林で、木材の伐採に従事していた人のいうところによれば、大きな立木が爆風にあって倒れんばかりであったのにおどろき、大事がおこったと思い、おそろしくなったので、仕事をやめて帰って来たと話している。

爆発後、数分たって東北方面、祇園町方面の空かと思われる山頂から入道雲のような雲がムクムクとのぼり、次第に空一面をおおい、大粒の雨がパラパラと降って来た。

十時、ころから十一時ごろにかけて、広島通信局の文書らしいものが、夕やみのようにうす暗くなった空から、黒焦げになってたくさん飛んで来た。

上水内村では、山林などで作業中の者が、人体に何かサァーとあたる風と青光りを感じた。草木も風でなびいたが、別に被害はなかった。

爆発音と共に黒煙が東の方向の上空に立ち昇り、たちまちにして日蝕のように太陽も見えず、薄暗やみとなった。

正午前後、東方上空から薄暗やみの中を、小風に乗じて通信済みの郵便葉書、商店の伝票、その他広島市内からの紙片が、多数飛来した。

当時、各村には、次のように天満国民学校児童が疎開していた。

所在地	収容場所	児童数	収容年月日	閉鎖年月日
砂谷村	大通寺	四五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
砂谷村	西光寺	四五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
砂谷村	最広寺	四五	昭和二十年四月十九日	昭和二十年八月二十日
砂谷村	正楽寺	四五	昭和二十年四月十九日	昭和二十年八月二十日
水内村	明法寺	四六	昭和二十年四月十九日	昭和二十年九月二十日
水内村	妙安寺	二五	昭和二十年四月十九日	昭和二十年九月二十日
水内村		二五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年九月二十日
水内村	常福寺	二〇	昭和二十年四月十日	昭和二十年九月十五日
水内村	一松寺	二五	昭和二十年四月十日	昭和二十年九月十五日

校名不詳であるが、上水内村の各寺院にも国民学校児童が疎開していた。

所在地	収容場所	児童数	収容年月日	閉鎖年月日
上水内村	万正寺	三五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	西法寺	二五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	善福寺	五〇	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	正円寺	三五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	内尾谷分校及び八幡神社	三〇	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	大福寺	四〇	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日

二、避難者の状況

広島市内から避難者が押し寄せるといことはなかったが、村民で広島市へ出ていて被爆した者や、村内の親類を頼って来た者が無残な姿でたどりついた。

六日当日は、一応五日市町や観音村の収容所へ運ばれたり、休み休みただ自力で、海岸の鉄道線路、電車線路を伝って歩いたりして、翌七日になって、砂谷へは午前十時ごろ、水内へは午後五時ごろ、やっと辿りついたのであった。

ひどい者は着物などほとんどまとわず、ただパンツだけ、その他はボロボロに裂けた布ぎれをひっかけた姿で、顔・手・足など血にまみれていた。これが八月十五、六日ごろまで続いたが、到着してまもなく死んだ者も多い。

なお、六日当日、各村とも広島市内の建物疎開作業へは出動していなかった。

三、広島市救援状況

救援隊出動

水内村では、六日ただちに広島市救援のため、警防団・防衛隊を召集し、徒歩でその夜出発した。水内から砂谷を通り、楽々園に出て五日市町を経て、草津で佐伯郡防衛隊と合流したのは七日の昼ごろであった。草津の寺で休んで市内へ入ろうとしたが入れず、そこで解散した。

八日また徒歩で警防団員二五〇人、家庭防衛隊員一〇〇人が出動、市の西部地区で活動した。

上水内村では、七日、村から玖島・廿日市町經由徒歩による者、あるいは砂谷村經由で自転車やトラック便乗などの方法で、警防団一八〇人、義勇隊員三六〇人が出動し、市内己斐町方面から天満町・紙屋町・宇品方面にかけて、地方事務所長の指揮により、食糧配達その他の任務に活動し、午後八時ごろ帰村した。

砂谷村では、七日から十日まで四日間出動した。警防団員一五〇人、家庭防衛隊員四五〇人が毎日、砂谷村から原村・平良村をへて廿日市町に出、徒歩あるいは電車で市内に入り、消火作業や死体の処理、負傷者の救護にあたった。

なお、親類など頼って来た避難者で、そのままその場所に定着居住した者が、砂谷村一二世帯、水内村一五世帯、上水内村四五世帯あった。

[第一二項 佐伯郡能美町](#)…758

地区の概要

能美町は、広島市の南、爆心地からの距離は約二三キロメートルの地点にあり、広島湾上にうかぶ島の一つ能美島三か町の中央に位置している。

昭和三十年四月一日、高田村・中村・鹿川町(かのかわちょう)を合併して新しく発足した町である。

高田・中村は風光温かな江田島湾に面し、鹿川は鹿川湾から安芸灘を距てて遠く大島を望む。水産業が盛んで、特にイワシは煮干鯛として各市場に出荷され、その名が高い。近年はカキ養殖も発展し、東京方面にも進出している。

中村(現在中町)の港に近い崖上にある廻船問屋下田屋敷は明治三十八年、鈴木三重吉が学生時代に訪れ、処女作「千鳥」を執筆したゆかりの家である。

町の総面積は一六・五四平方キロメートル、人口は八、二二九人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、この町でも、突然、強烈な閃光と熱を感じ、そのあと爆発音と共に強い爆風を受けた。

広島市に最も近い高田地区では、警防団の山本久市団長の語るのによれば、ガス会社のガスタンクが爆発したかのように直感し、広島市の上空にはモクモクと黒煙が昇っているのをはっきり望見したという。

道を歩いている人が爆風によって身体ごとよろめいたし、窓ガラスの破損した家も一部にはあった。しかし、農作物には被害がなかった。

市内へ侵入する敵機を目撃した者はなかったが、原子爆弾炸裂後に爆発音だけきいたという者がある。

この日、鹿川村から、広島市の建物疎開作業に三人出動していたが、被爆によりそのうち二人が即死、一人が行方不明となった。

なお、当時鹿川村においては、都市から疎開による人口流入のため、学校では教室が不足する状況となり、県(佐伯地方事務所)より広島市内国民学校の建物疎開した建材が必要なら無償で払下げする旨の通知に接し、五日に大島助役が広島市の現地に赴き建材を受取った。翌六日、当村の港から貨物船の出航を依頼し、広島市の本川に入航、荷役の準備中被爆し、船長・荷役人夫及び船長の子供(二人)が即死し、助役は行方不明(死亡)となった。

なお、能美町には、広島市の国民学校児童の疎開はなかった。

七日になって、被爆者が親を求めて、また肉親を求めて帰って来た。この年は赤痢の発生があったが、その患者の多くは被爆者であった。患者数は確かでないが、鹿川村で七、八人ほどいた。

広島市に島から出ていた世帯で、被爆後、引きあげて来て、そのまま定着居住した世帯が、鹿川村四〇世帯、中村三〇世帯、高田村二〇世帯ほどあった。

二、広島市救援状況

救援隊出動

医療救護班として、鹿川村から医師・看護婦など五人が、六日当日から九日まで四日間連日、別船を仕立てて出動した。鹿川港から宇品港に上陸し、徒歩で爆心地一帯に行き、救護活動にあたった。

一方、警防団は、江田島警察署から、応援協定に基づく、非常出動の要請があり、鹿川村は六日当日から、高田・中村両村は七日から十三日まで救援に出動した。

鹿川村出動員数一〇人延七〇へ高田村二〇人延一四〇人、中村一八人延九〇人(この村は五日間)で、医療団と同じく別船仕立てにより宇品港に上陸、徒歩で爆心地に行き、半径三キロメートル以内の各地区で救援活動に挺身した。

[第一三項 佐伯郡大柿町…760](#)

地区の概要

大柿町は、広島湾と安芸灘に横たわる能美島の南部に位置し、広島市の南にあたり、爆心地からの距離は約二六・二キロメートルである。

昭和二十九年十一月三日、深江村・大柿町・飛渡瀬村(ひとのせむら)の三か町村を合併して新発足した町で、能美島の政治・経済・文化・教育などの中心地である。

北東は江田島と隣接し、北部の一部は江田島湾に、東南部は倉橋島と接する。また西部は大黒神島を見通して、遠く山口県岩国市と相対している。

地形はほとんどが丘陵山嶺地帯で、陀峰山(四三二・六メートル)はもっとも高い。沖積作用ないしは人工埋立てによる平坦地や傾斜地に集落が発達し、段々畑は山頂まで続いている。

町の総面積二六・二七平方キロメートル、人口一四、二〇七人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機を、大柿町役場の職員中本浅夫ほか一人が、大柿町と深江村の出張先で目撃した。

建物内の廊下で、サツというなま温かい風が吹いて来たあと、しばらくして爆発音をきいた。

また一人は室内にいて、電光のような強い光を感じ、屋外に出てみていると、約一四、五秒後ににぶい爆発音をきいた。さらに五秒後に人体に感ずる爆風があったという。深江村では、爆発音をきくと同時に、家に地響きによる振動のようなものがあった。

広島方面を見ると、炸裂後五分くらいであったろうか、遠くの山の上空に白煙のあがるのが見えはじめた。初めは江田島の火薬庫の爆発かと思われるほど近く感じたが、やがて、白煙は雲のように拡がっていき、それが上昇し、次第にあざやかなキノコ雲となっていくのが、はっきりと望見された。

なお、広島市から爆風に乗って紙ぎれなどが飛来するという事は別になかった。

この日、広島市の建物疎開作業に各地区から出動していたが、大柿町では出動者五人のうち一人は即死、四人は負傷した。深江・飛渡瀬地区の出動者の状況は不明である。

この町へ広島市の被爆者は直接には避難して来なかったが、八日ごろから、町出身者が被爆して生活の場を失ったため、帰郷して来はじめた。これらは宇品港から船で小用へ上陸して帰町した。しかし、そのまま定着居住するということはなく、広島市が復興すると共に、また出ていったようである。

二、広島市救援状況

救護活動

医療救護班は出動しなかったが、警防団が六日当日から七日夕方まで出動して、救護活動をおこなった。

深江村五人延一〇人・飛渡瀬村五人延一〇人・大柿町二〇人延四〇人が、六日午前十一時ごろ、江田島警察署から

連絡あり、車で迎えに来たのでそれに乗車、江田島へ出て、そこから船で宇品港に上陸し、徒歩で入市、袋町・紙屋町・相生橋間の被爆死体の処理にあたった。

第一四項 安佐郡祇園町…762

地区の概要

祇園町は広島市の北方に隣接し、爆心地からの最短距離は約三・二キロメートル、最遠長距離は約六・七キロメートル、総面積一五・〇七平方キロメートル、人口二五、八一二人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。当時は農村地帯で、広島市の野菜の供給源として重要な役割を占めていた。また一面、三菱重工業株式会社第二〇製作所と油谷重工業株式会社とが、軍需品を生産し、軍需工場としての意味も大きかった。したがって、平穏な農村ならば格別空襲を恐れることも少ないが、軍需工場がある以上、当町への空襲は必至と思われていた。各会社には職域救護班が編成され、町内にも防空体制が強力に敷かれるなど、あわただしい日常であった。

なお、広島市内国民学校学童の疎開の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日、敵機が広島市牛田山の方向、約一万メートルの上空から、高度を下げながら侵入し、反転するかのように方向を転じて呉方面へ飛び去る機影が見られた。この機影は、爆撃直前、気象偵察飛行にきたものと考えられる。

原子爆弾の炸裂時には、爆心地から四キロメートル以内の家屋は、屋根瓦を吹きとばされ、天井もまた吹き破られ、壁は用をなさない程度に破壊され、建具のガラスで破壊されなかったものはほとんどない。建物の開口部が爆心地に面している家では、内部もかき廻されたようになり、タンスは倒れ、棚の品物が散乱して足の踏み場もない有様であった。四キロメートル以上の地域では、被害程度も次第に減少しているが、なお爆風のすさまじさを示すいくつかの事例があった。

建物内にいた者の中には、家財道具と共に倒されたり、場所によっては倒れた壁の下敷きになった者もあった。建物の外にいた者が、数メートルも吹きとばされたことがいつまでも話題になった。

当町では、熱線によって火傷したという人は聞いてはいないが、長束地区(三・五キロメートル以内)の藁葺の屋根は、熱線によって自然着火し炎上した。長束の山や、牛田町の山に、火の手が上っているのが望見された。

炸裂直後の雲はたちまち傘のような雲になった。しかも急速に巨大な「キノコ雲」に発達し、天を覆う感があった。

閃光後約一時間ぐらいたったころ、雨が降ってきた。広島市に近い所では土砂降りが二時間以上も続いたが、遠い地区ではパラパラの雨であった。

なお当日朝、動員令による建物疎開作業のため出動していて多大の犠牲を出したが、その出動状況は、つぎのとおりである。

出動先	出動者	即死者	負傷者	行方不明	備 考	
天満町・小網町	二三六	二一九	一七	〇	三菱重工業株式会社第二〇製作所	両社編成の職域義勇隊として出動
水主町・天神町	一六一	一二八	〇	三三	油谷重工業株式会	

即死者数は、被爆後数日間における死亡者数を含む。

二、避難者の状況

当町へ、広島市中から被爆者が避難したのは、六日午前九時ごろから始まり、翌七日夕刻まで間断なく続き、その数は恐らく三、〇〇〇人を超えたものと推定される。被爆者は新庄橋、大芝町からきた者、己斐町、戸坂村を迂回してきた者もあって、その経路は一定しておらず、また、必ずしも祇園町を目標に避難してきた人たちではない。火災のない安全な地を求めたり、危険だという噂の地区を避けて逃れてきたところが祇園町であったというのが実情であろう。したがって、他に頼るべき縁故のある人や、当町にもなお安心して居れない人は、可部町方面へさらに北上していった。

これらの人々は、交通が途絶していたので、そのほとんどが徒歩であったが、少数の人は川舟に乗せられてきた人もあった。それにしても避難者の形相はこの世の人とは思えない空恐ろしいものであった。引き千切れた衣服、物凄く大火傷、その上黒いゴム状になって垂れ下がった焦げた皮膚、死線をさまよう歩きぶりなど、再びこの世で見ることのできないものであった。

避難者の収容所の開設ならびに埋火葬状況はつぎのとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
油谷重工救護所	祇園町南下安	八月六日	二六〇	二〇〇	工場から百米離れた島の中	八月二十日
祇園青年学校	祇園町北下安	八月六日	八〇〇	一〇〇	北下安安川の豊島橋河畔	八月二十日
三菱重工臨時救護所(会社診療所及び寮に収容)	祇園町南下安	八月六日	一、〇〇〇	二〇〇	北下安町立火葬所及びその付近	八月末日

ほのぐらき収容所の廊下　生きながら死体と共に寝てうめけるも　栗原貞子(短歌)

引取人のない遺骨は無縁墓地に合祀されている。墓地の所在地は祇園町南下安。

なお、避難者がそのまま定着居住した世帯は、三五世帯である。

三、広島市救援状況

救援隊出動

救護班出動人員概数

町内にある三菱重工業株式会社第二〇製作所及び油谷重工業株式会社の職域救護班が、トラック、川舟または徒歩で入市して、材木町及び天神町で、多数犠牲者の救護に当たった。

三菱重工業(株)の救護班

	実人員	期間	日数	延人員
医師	一	八月六日～八月十二日	七	七
助手	二	八月六日～八月十二日	七	一四
看護婦	一五	八月六日～八月十二日	七	一〇五
その他	三五〇 二〇〇		四 三	一、四〇〇 六〇〇

油谷重工業(株)の救護班

	実人員	期間	日数	延人員
職員	一三〇	八月六日～八月十一日	六	七八〇

なお、被爆当日早朝から、広島市内の家屋疎開作業に多数の町民が、それぞれの職場から、職域義勇隊として出動していて、そのほとんどが被爆死したし、また市内から負傷者が町内に殺到して来たため、その救護にあたらねばならず、警防団・国民義勇隊・婦人会・一般住民などが、市内に出動する余地はなかった。

第一五項 安佐郡安古市町…767

地区の概要

安古市町は、昭和三十年七月一日古市町と安村が合体して、安古市町として誕生した。当町は広島市の北方にあって、爆心地から最短距離が約六・二キロメートル、最遠長距離が約一一・二キロメートル、面積一九・二五平方キロメートル、人口一三、四〇〇人(昭和四十年十月一日国勢調査)の農村である。

なお、広島市内国民学校学童の疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機を目撃した者がいたかどうかは、はっきりわかっていない。

原子爆弾の炸裂の影響は、戸をたてきった家が開け放しの家よりも被害が大きかった。戸をたてきった家の戸や障子は大破したうえ、飛散したガラスの破片が柱や家具に深く突き刺さり、容易に取り除くことができない程であったし、天井は全体が吹き上げられた。屋根瓦も魚のウロコを逆立てたように配列が乱れ、一部破損した。修復も意の如くならず、その後雨漏りに悩まされ続けた。幸運にも被害らしい被害を受けなかったわずかな家屋を除いて、被害家屋は約一、七三〇戸、九五パーセントにもものぼった。

野外にいた人は、爆風と同時に地に伏せたが、一様に口中に多量の砂を吸い込んでいた。これは激しい爆風のショックで吸い込んだものであろうが、当時は、何とも説明のつかないことであった。

凄絶なキノコ雲の状況を、古市町のカンダ橋たもとから、松重三男(レントゲン技師)が、正確に写真にとらえている(第二巻に所載)。また、正午には、黒煙のもうもうと立つ状況も撮影した。

なお、当日午前九時ごろ、広島市方面から、多数の紙片や焼けた布切れが降ってきた。

建物疎開作業隊の出動状況は次のとおりである。

当時の行政区域名	出動者数	被爆による被害者数			備 考
		即死者	負傷者	行方不明	
中州地区義勇隊	五一	二五		二六	出動場所 水主町県庁付近
安地区職域義勇隊	一七	八		九	
安(小瀬)地区地域義勇隊	一五	五	一	六	
古市地区職域義勇隊	一七	七		一〇	
古市地区動員学徒	七七	三〇	三	三五	
安地区動員学徒	五五	二〇	二	二三	

古市義勇隊は一日違いで出動しなかった。

二、避難者の状況

六日の午前九時ごろから避難者が殺到しはじめ、十二時ごろから重傷者が数を増した。こうして八日まで避難者が絶えなかった。

避難者は炎熱の中を歩いて避難してきた。途中の祇園町の救護所に收容しきれなかったり、なお先へ逃れたい気持ちから当町までやってきた人々や、やっとの思いで縁故先に辿りついた人々であるが、いずれも見るとたえない悲惨な姿であった。

広島市の広瀬地区のものは古市へ、三篠、三滝地区のものは安村と避難先が直ちに決められた。古市櫻鳴国民学校に開設した收容所には、午前九時を過ぎたころから正午ごろまでの間に、実は一、五六〇人の避難者を受けつけた。

当日、身元引受人に引き渡した人員は八五〇人で、翌七日、一二五人を引渡し、引受けのない残りの避難者五八五人は、青年会館及び学校の一一教室を応急收容所として收容した。

大須国民学校に殺到した避難者は約二四〇人であった。付近の住民は総出で救護・炊出しにあたった。避難者は、ひとまず教室に六五人を收容し、残りは付近の民家に分散收容した。

翌七日、重傷者は安国民学校に移した。一部の人は、親せき縁故を頼って散って行ったから、收容者数は次第に減少した。

收容所の開設ならびに埋・火葬状況

收容所名	所在地	開設月日	收容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
櫻鳴国民学校	古市町大字古市	八月六日	五八五	一一五	古川河原	九月三十日
大須国民学校	安村大字中須	八月六日	六二	一八	山中火葬場	八月十三日
安国民学校	安村大字上安	八月六日	五〇	四〇	山中火葬場	十月二十七日
正伝寺	安村大字相田	八月六日	三八	一二	山中火葬場	八月二十九日

なお避難して来てそのまま定住した世帯はなかった。

三、広島市救援状況

救援状況

(1) 医療救護班は地域内で活動したため、出動できなかった。

(2) 警防団出動状況

古市町

イ、期 間 八月六日～十五日 延六二〇人

川舟によって入市

ロ、作業場所 上柳町防空本部

常葉橋付近

袋町国民学校付近

宇品町～十日市町

宇品町～海田市町

安村

イ、期 間 八月六日～十三日 延四二〇人

川舟により入市

ロ、作業場 三篠町、三滝町、水主町 各二日間ずつ

地区の概要

佐東町は、広島市から北方にあたり、昭和三十年七月一日、八木村・緑井村・川内村が合併して、新しく発足した町である。

地域面積は一六・〇四平方キロメートル、人口は一、五四〇人(昭和四十年国勢調査)である。

爆心地からの距離は、最短距離約七・二キロメートル、最遠長距離約一三・七キロメートルへだたっている。

広島市からの国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日朝、東南の上空約八、〇〇〇メートルの高度に、敵機二機を発見した。しかし、この重大さを知る由もない村民は、ただ機影を見たというだけの印象であったにすぎなかった。

原子爆弾搭載機の随伴機から投下された落下傘が、安佐郡亀山村方面に落下するのを認めた人は多い。

爆弾の炸裂時、爆風が襲いかかって来ると同時に、激しい音をたてて窓ガラスが破壊され、ほとんどの民家は、天井が二、三寸吹きあげられ、屋根瓦が飛ぶやらして、見るかげもないありさまとなった。村民には、まるで降って湧いたような事態の発生で、みんな驚きあわてた。

爆風は熱風のようにあったが、農作物には何らの異状もなかった。

南方まじかに、奇怪な煙の柱が、モクモクと発達しながら上昇し続けるのを見て、やはり広島市の方に、何か大へんなことが起ったに違いないと、人々の不安はつのるばかりであった。

この日、広島市内の建物疎開作業のため、川内村から義勇隊約五〇〇人が出動していた。作業場所は、中島新町、およびその付近であった。

五〇〇人のうち、先発隊約二五〇人は、炸裂時までに、すでに現場に到着しており、作業に着手していたと考えられるが、隊員は全滅という惨劇であった。これは一挙に未亡人世帯の発生となり、多数の家庭を破壊した。後続の二五〇人は、行く途中で被爆し、約二〇〇人が負傷、残り五〇人は無傷で帰って来た。

緑井村は、前日の五日に出動しており、この日は非番で出動しなかった。

八木村は、高田郡の飛行場の作業の方へ出動していたから被害皆無であった。

炸裂下の広島市から、爆風によって当地域へ飛来したものが、あったかどうかについてははっきりしない。

二、避難者の状況

六日午前十時前ごろから同日午後八時ごろまでにかけて、避難者が陸続として絶えなかった。

夕がた、トラックで運ばれて来た負傷者のほかは、ほとんど徒歩でやって来たが、その異様な風態を見て村民一同、初めはあつけにとられていた。避難者から広島の惨状をつぶさに聴くにおよんで、事態のただならぬことを知り、急ぎ収容所の設置に取りかかったのがあった。

当地区に設置した収容所の受入れ状況は、つぎのとおりである。

収容所名	所在地	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	収容所開設期間
八木国民学校	八木村	八〇	一五	太田川の河原	八月六日から八月末日まで
浄楽寺	八木村	三〇			
民家(割当)	八木村	二〇〇	六〇		
緑井国民学校	緑井村	三〇〇	一〇〇		
民家(割当)	緑井村	二〇〇	五〇		
今井病院	緑井村	三〇〇	八〇		
川内国民学校	川内村	一五〇	三〇		
川内公民館	川内村	一〇〇	二〇		

なお、この地域に避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、川内村一〇世帯・緑井村一八世帯・八木村二一世帯である。

三、広島市救援状況

救護状況

この地域は、広島市内から安全地域に脱出する主要避難路の一つにあつたから、避難者がひきもきらず流入した

ので、住民はあげて救護活動を展開した。

地域内に集った負傷者の救護に手いっぱい、広島市内へ直ちに、救護班が出動するということはできなかった。ただし、警防団員三〇人が、八月八日に出動し、被服支廠・兵器支廠・広島市役所などの臨時救護所において救護作業に従事した。

出動するにあたっては、電車で八木から三滝町まで行き、そこから歩いて作業現場まで行った。

第一七項 安佐郡安佐町…774

地区の概要

安佐町は、昭和三十年三月三十一日町村合併により、久地村・日浦村・小河内村・鈴張村・飯室村が合体したもので、人口九、一五〇人(昭和三十九年度国勢調査)、面積一〇七・九三平方キロメートルである。爆心地から最短距離は約一〇・二キロメートル、最遠長距離は約二四キロメートルある。広島市の北方にあつて、原子爆弾投下機は当町の上空を通過して飛び去ったといわれている。

なお、広島市内からの疎開児童の受入れ状況は、次表のとおりである。

受入れ場所	所在地	児童数	受入れ年月日	閉鎖年月日
長覚寺	鈴張村	三六	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月六日
称名寺	鈴張村	五五	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月二十日
妙法寺	鈴張村	三〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月六日
万福寺	小河内村	一〇〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日
安楽寺	小河内村	七〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日
正法寺	久地村	二〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日
西正寺	久地村	*五〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市襲撃の敵機を目撃した者はいなかった。

閃光に驚いて屋外に飛び出し、どうした閃光だろうかと取り沙汰しているうちに、広島市の方角から白い布切れが落下して来るのを発見した。その白いものは、亀山村の山林に姿を消した。当時、飯室村に滞在していた広島兵器支廠八田隊の軍事任務についていた憲兵隊の話だと、爆発物をつけた落下傘だということであった。

閃光があつて何秒か過ぎると、突然強烈な爆発音と共に、爆風がたたきつけるように吹きつけた。爆風は小さな砂を巻きあげて、顔や手足の露出部分に突き刺すように吹きつけた。飯室村毛水部落の者で、身を隠すべく家へ向かって走りながら振り向くと、広島の方から村の方へ、白い綿のような大きな雲が凄い勢いで移動してくるのが見られたという。想像に絶する強烈な爆風に見舞われて、誰も気が転倒してしまった。

建物の被害は、日浦村筒瀬付近に、建具・窓ガラスの破損が相当数あり、天井の落下が若干あつたほか、他の地区ではなかった。また農作物の収穫も例年と変るところなく、樹木にも異状は認められなかった。

爆発音を聞いて五分も経過したころであろうか、幕の内峠と森山の間(この方角は広島市に当る)に、鮮明な白雲があたかも「松タケ」の型で立ち昇った。

およそ三〇分近くたったころと思うが、この「松タケ型」の白雲は、黒紅色に変わった。その方角に、砥園町の三菱精機株式会社があるので、住民は三菱がやられたと思つていた。それからしばらくすると、白雲が立ち昇った地点の上空は、一面黒い煙に覆われた。そのうちに、当地区の上空もまた黒煙に覆われ、辺りは夕暮同様の薄暗さになった。

午前十一時ごろから午後二時ごろまでの三時間、凄い勢いの雨が降ってきた。それは黒い雨で、濡れたシャツを乾かすと無数の黒い斑点が付着していた。

なおこの日、動員令による広島市内の建物疎開作業へは出動しなかった。ただし、五か村とも、高田郡郷野村飛行場に出動した。

六日午後四時、広島市から、避難者が来はじめ、八月十一日まで、トラックで続々運ばれてきた。被爆者の身なりは、切れ切れになった衣服をそのまま着用して見る影もなかったが、負傷箇所は簡単な手当を受けていた。手当といつてもまことに粗末なかぎり、顔を火傷した人には目、鼻、口だけ開けてガーゼを巻きつけた程度、手足を火傷した人には、油または赤チンを塗った程度の手当がしてあつたが、それは治療という概念にはほど遠いものであつた。

避難者収容所ならびに収容中の死者数

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
長覚寺	鈴張村	八月八日	一五〇	九〇	鈴張村字市火葬場	九月七日
飯室国民学校講堂	飯室村	八月六日	八〇	三五	幕の内峠県道付近	九月十日
養専寺	飯室村	八月六日	六〇	四〇	幕の内峠県道付近	九月十日
教雲寺	日浦村	八月六日	一〇〇	六〇	教雲寺付近の畠	九月十日
久地国民学校教室	久地村	八月六日	三〇〇	一八〇	久地村本郷火葬場	九月十日
小河内国民学校教室	小河内村	八月六日	一五〇	一〇〇	学校近くの山林	九月十日

なお、昭和二十一年三月、飯室村と亀山村との村境にある竹坂部落で、耕作中の農夫が、長さ二五センチメートル、直径一〇センチメートルぐらいの円筒を発見した。それは軽金属製で、塗ってあったブルーの塗料もほとんど剥げかかっており、かすかにU・S・Aの文字が判読できるぐらい古びたものであった。中にコイルが僅かに覗かれた。

被爆以来、爆発物に対して、極度に恐怖を抱いていた村民は、その地点になわを張り巡らして近寄らなかった。部落の代表者が役場に届け出たので、役場ではアメリカ軍の兵器だろうということで警察に引き渡した。後に警察からアメリカ空軍の信号器だと知らされた。

二、広島市救援状況

救援状況

- (1) 救護班は出動しなかった。
- (2) 警防団出動状況

村名	出動期間	出動日数	延人員	作業場所	出動方法
鈴張村	八月七日～九日	三	一八〇	相生橋一帯及び中広町中央橋	トラック
久地村	八月七日～十日	四	二八〇	相生橋一帯	トラック
小河内村	八月七日～十日	三	二七〇	横川町・十日市一帯	トラック
日浦村	八月七日～十日	四	二〇〇	横川町・十日市一帯	トラック
飯室村	八月七日～十日	四	三二〇	横川町・十日市・相生橋一帯	トラック

鈴張村の警防団が、中広町中央橋付近に罹災者収容のためのバラックを建てたほか、他は何れも罹災者の収容と死体の処理が主な仕事であった。

なお当地区の避難者の定着世帯は、つぎのとおりである。

鈴張村 一〇世帯 久地村 一五世帯
 飯室村 二〇世帯 小河内村 一〇世帯
 日浦村 二〇世帯

第一八項 安佐郡沼田町…779

地区の概要

沼田町は、広島市の西北に位置し、爆心地からの距離は約一一・八キロメートルである。

昭和三十年四月一日、伴村と戸山村が合併し、沼田町として発足した。

町の四周に標高三〇〇ないし六〇〇メートルの連山をめぐらし、さらにその中央をほぼ東西に走る山脈によって、町内が大きく二つの地区に分かれている。その北の地区には、吉山川、南の地区には安川が東に流れて、太田川にそそいでいる。

町の総面積は六七・〇九平方キロメートルで、人口は六、一二〇人(昭和四十年度国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

伴村の川崎義男は、役場から侵入敵機を目撃した。

突然、閃光が走り、巨大な爆発音が聞こえ、しばらくすると、広島市の上空に、実に巨大なキノコ雲が昇るのを望見した。それが次第に大きくなっていくので、ただごとではない事態が勃発したことを直感した。

字名大塚の市本秀子(当時二〇歳)は、自宅の中座敷に病気で臥床していて、炸裂の閃光を感じた。朝から非常に暑く、部屋の障子を全部あけて、遠くをボンヤリ眺めていたところ、ちょうど、その時、警戒警報のサイレンが鳴り出した。ああ、また B29 が来たかと、空を見ていると、向うの山の上の方に白い雲のようなものが、フワッと湧いた。

次の瞬間、大きな火炎がグワッと立った。紅蓮の炎というか、美しいハスの花が咲いたような型というか、緑の山の上で美しく、黄色とも桃色とも赤ともつかず、入りまじった色彩で、それは巨大なロウソクの炎を集めたように見えた。言いかえれば、満開のレンゲ草の花のような型であった。

何の火であろうかと、一生懸命考えているうちに、家中がガタッガタッと地震のように揺れ、大きな音をたてたという。

このとき戸外にいた者は、爆発音を聴くや地面に伏して、難を避けた。

南向きの家屋は、爆風の衝撃によって五ないし一〇センチメートルも天井が破れ、窓ガラスはほとんど破損し、障子の棧は折れ、建具も表側がはずれたり、破損したりした。

ふとんで急に押さえつけられたように爆風を感じたが、樹木もその青葉が一挙に吹きとばされた。農作物も、勿論一様に倒伏したが、日が経つにしたがい元どおりに回復していった。

キノコ雲は、ムクムクと遅しく拡がり、ついに村の上の空一杯になった。炸裂から二〇分くらい経っていたと思われるが、まっ黒い雨が降りはじめた。約二〇分間降り続けたが、その雨で池や川の水が黒くにごり、鯉やその他の小魚が死んで浮いた。

午前九時ごろから夕方にかけて、焼け残りの新聞紙・屋根のソギ板・ボロ切れ・トタン板の切れ端などが、たくさん村内に落下して来た。

この日、戸山村と伴村から、高田郡の飛行場作業に出動していたが、広島市の建物疎開作業には出ていなかった。午前十時ごろ、防衛召集が発令されたので、飛行場作業に出動していた全員に、急ぎ帰村するよう伝達、全員は当日夜十二時ごろから七日未明にかけて、徒歩で帰って来た。

なお、戸山村の浄宝寺・正善寺・法隆寺、及び伴村の専念寺・願行寺には、広島市の国民学校児童が疎開して来ていたが、特別に動揺は見られなかった。

二、避難者の状況

被爆当日午前十一時ごろから、無残な姿の避難者が続々と、村内に入って来た。みんな、頭・顔・背なか・腹・腕・足などに火傷、あるいは負傷しており、トボトボと今にもぶっ倒れそうになりながら、徒歩でたどりついた。中には、自転車に乗って来た者もあったが、いずれも命からがらの状態で、コモを身体に巻いたり、布の切れ端で前をかくしたりしている人が多く、裸体に近い姿であった。

避難者たちは、安佐郡の祇園・古市・安・細坂経由の県道を伝って来た者、長束・山本を通り、炎天下、山道の権化峠を越えて来た者、あるいは己斐町から己斐峠・畑峠の山道を越えて来た者が多かった。午後三時ごろから五時ごろまでが、最も多く、夕方からは、軍のトラックなどで負傷者が大量に運びこまれ、混乱は夜どおし続いた。

このような状況から、広島市に大変な事態が発生したということが解ったが、ただ一発の原子爆弾の惨劇とは、誰一人、気づくものはいなかった。避難者は翌七日夜(午後九時ごろ)まで続き、それぞれ次表のように収容されたが、その約三分の二は死んでいった。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
隔離病舎	戸山村	八月六日	三六	二二	村営火葬場	九月十日
寺院	戸山村	八月六日	一一〇	七六	村営火葬場	八月三十日
民家	戸山村	八月六日	一四六	一三〇	村営火葬場	八月三十日
学校	戸山村	八月六日	七四	六〇	村営火葬場	八月三十日
隔離病舎	伴村	八月六日	六〇	五四	村営火葬場	九月十日
寺院	伴村	八月六日	三〇	二一	村営火葬場	八月三十日
民家	伴村	八月六日	三五〇	二八〇	部落火葬場	八月二十日
学校	伴村	八月六日	一一〇	九三	村営火葬場	八月二十日

すなわち収容者総数九一六人、このうち死亡者総数七三六人に達し、悲惨限りない修羅場を出現したのである。辛うじて生き残った人々の中には、そのまま戸山村に二五戸、伴村に六五戸が定着居住した。

三、広島市救援状況

救援隊出動

医療救護班は、村内に殺到した負傷者の治療活動で精いっぱいであったが、警防団は、七日から連日二十日まで、トラックにより細坂・安・古市経由で入市し、横川町・寺町・八丁堀・大手町・猿猴橋一帯などにおいて、負傷者の救護活動、あるいは清掃作業に従事した。戸山村・伴村両警防団とも出動日数一四日間で、出動者は、戸山村一四〇人延一、九六〇人、伴村二〇〇人延二、八〇〇人に及んだ。

地区の概要

可部町(かべ)は、広島市の北にあたり、爆心地からの距離は約一五・四キロメートルである。

昭和三十年三月、可部町・亀山村・三入村・大林村の四か町村が合併して新発足した。

安佐郡の中部に位置し、古来から陰陽を結ぶ交通の要地であり、文化・産業・交通・経済の一中心をなし、近時、広島市の衛星都市として急激に発展している。

健全なレクリエーションの場として、南原峡・福王寺・柳瀬など、四季を通じてにぎわっている。殊に福王寺は、海拔五〇〇メートルの金亀山の頂上、うっそうたる密林に囲まれ、西の高野山とも称せられている。

町の総面積は九一・七四平方キロメートルで、人口は二〇、九四四人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

快晴のおだやかな朝のしじま、一瞬、ピカッと光った。おやっと感じたとき、ダーンと何か大爆発音と震動があり、なま温い不気味な風圧がドッと吹き寄せて来た。

屋内にいるものでも、家がぐらつき微震を感じ、熱風を感じた。

亀山村大畑の綾西国民学校分校は、やや高台にあったが、ピカッと光ったので「何ごとか?」と、教師が窓のところへ出ていったとたん、衝撃波ではねかえった扉に、その首をはさまれたという。

閃光後、しばらくして広島上空にモクモクと雲のような煙が湧きあがっており、燃料タンクに爆弾が落下したのかと思われた。

可部町大毛寺あたりから南方を見ると、太田川下流右岸にそびえる阿生山(あぶざん)の頂上の、少し南西寄りの空に、白味がかかった異様なキノコ型入道雲がモクモクと湧きあがっているのが望見された。キノコ雲は見守るうちに、ダイダイ色―赤色―黒色を帯びた雲に変わり、つぎつぎに奔騰した。

見ていたものは我にかえると共に「これは広島に何か大ごとが起きたのだ!」と、期せずして叫びかわした。

それから僅か数分、可部上空を敵の大型飛行機が通過、まもなく三つの大きな落下傘が、風にゆれてキラキラと輝きながら、だんだん落下しはじめた。落下傘は、その下に長い物体を吊っていた。

時刻は、午前九時十五分ごろであった。

消防団員は、急遽出動。サイレンは激しく鳴りわたり、「時限爆弾だから二〇〇メートル以上は逃げるように…」との警報が出た。

住民はそれぞれ、散り散りバラバラになって一生懸命走って逃げた。

それから数時間、不安な時間がたったが、何にも起る様子がなかった。

三個の落下傘は、亀山村大字大毛寺福王寺山麓の若藤丈太郎宅から三〇〇メートル離れた山林中に一個、同じく福王寺山麓で、上記のものより約六〇〇メートル離れた上大毛寺山林中に一個、もう一つは大毛寺の報恩寺裏から五〇メートルばかり離れた田の中に、それぞれ落下していた。

安佐部隊(安佐郡三入・大林・亀山・久地・日浦各村一〇〇人の防衛隊。隊長熊谷予備准尉)も、非常召集された。亀山村今井田の隊員神田実(当時一九歳)は、畦の草を刈っていて閃光を感受した。そのあと役場吏員が自転車で連絡に来て、直ちに出動し、大毛寺に落下した落下傘についている円筒の警備にあたった。円筒の周囲にアゼを作って水を引き、遠まわりから注意していた。そのうちに軍人が来て、その命令で馬車に恐る恐る乗せ、可部の地方事務所へ運び、そこの廊下に置いた。これを第二総軍司令部が持ち帰った。

落下傘の大きさは、いずれも八畳(五二・八平方メートル)くらいで、下に長さ四、五尺(約一・五メートル)、丸さ直径約五寸(約一五センチメートル)くらいの円筒がついており、ちょうどラジオの真空管と同型で、中に種々な電線のあることが、まるい穴から見えた。

落下傘の紐は、現在、願船坊と広島平和記念資料館に保管されている。住民の中にも幾らか拾って記念に所持している者もあるという。

炸裂後、朝の快晴はどこへやら、昼からはどんより曇って今にも雨が降り出しそうな空模様となった。この日、可部地区から広島市の建物疎開作業には出動していなかったが、広島市から白島国民学校児童が、次のとおり疎開して

いた。(第一巻六五ページ)

収容場所	所在地	収容者数	収容年月日	閉鎖年月日
大林説教場	大柿村	六〇	昭和二十年四月十四日	昭和二十年九月十日
報恩寺本堂	亀山村	五〇	昭和二十年四月十六日	昭和二十年九月一日
行森説教場	亀山村	三〇	昭和二十年四月十六日	昭和二十年九月一日

二、避難者の状況

六日午前九時ごろ、全身黒く汚れ、火傷で火ぶくれとなり、たくさん血を流した裸同然の避難者が、広島市から可部街道を伝って殺到しはじめた。

衣服はボロぎれのように裂けて焦げていたし、頭髪は乱れ、裸足のままの姿であった。

避難者はみんな呆然自失のありさまで、ゾロゾロと力なく歩いて来た。

男も女も判別しがたい無残な形相であったが、中には顔面・背・手など露出部に直接閃光を受けたと思われる部分は、いちように火傷し、何かの蔭になっていたと思われる部分は火傷していなかった。ひどい負傷で、腕がぶら下がっている人も歩いて来た。

初めのうちは軽傷者が多く、徒歩で逃げのびて来たが、午後二時ごろから重傷の兵隊や市民がトラックや荷馬車によって、はこばれて来はじめた。

避難者は九日の昼すぎごろまで続いたが、これらは次のように収容された。死亡者も続々と出て火葬にされた。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
大林国民学校	大林村	八月六日	一五〇	二〇	遠ヶ滝火葬場 姥ヶ迫火葬場	昭和二十年十二月初旬
三人国民学校	三入村	八月六日	二三〇	三五	根谷川河原	昭和二十年十二月初旬
亀山国民学校	亀山村	八月六日	一五〇	三七	原ヶ迫火葬場	昭和二十年十月下旬
亀山農協	亀山村	八月六日	二〇	六	原ヶ迫火葬場	昭和二十年十月下旬
超円寺	可部町	八月六日	一〇〇	二〇	中島火葬場	昭和二十年九月下旬
勝円寺	可部町	八月六日	一二八	八七	根谷川河原	昭和二十年十一月初旬
顧船坊	可部町	八月六日	八〇	三五	可部町火葬場	昭和二十年十一月初旬
可部国民学校	可部町	八月六日	一〇〇	二六	根谷川河原	昭和二十年十一月初旬
品窮寺	可部町	八月六日	一〇八	三二	根谷川河原	昭和二十年十一月初旬

この町に避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、大林村二〇、三入村二一、亀山村一三、可部町三八であったが、避難先での生活を続けた人々は、食糧や物資の配給の少なさに極度になやまされたという。

三、広島市救援状況

救護状況

医療救護班として、七日から十四日まで、大林村四五人延一二〇人、三入村一六〇人延二四〇人、可部町二〇〇人延三六五人、亀山村一七五人延二八〇人が出動した。これらは三入村の医師一人を除いて、すべて一般町民で市内での医療活動を補佐した人々である。

また、警防団も出動した。大林村は十二日から十四日まで、連日一五人延四五人が牛田町方面で、三入村は十一日から十三日まで、連日三〇人延八〇人が三篠・中島・十日市・紙屋町一帯で、亀山村は八日から十三日まで、五〇人延一二〇人が三篠・中島・福島・白島各町一帯で、可部町は八日から十三日まで、七五人延一八五人が三篠・十日市・中島・紙屋・福島各町一帯で、それぞれ救援活動にあたった。これら警防団員はみんな徒歩で出動した。延人員が実人員と出動日数の倍数になっていないのは、日によって出動者数が違ったからであろう。

更に、安佐部隊も十日昼ごろ、救援に出動した。白島の常葉橋たもとの交番所跡に本部を置き、負傷者約五〇人を天幕に収容して看護すると共に、死者約一〇人を、近くの時計店跡で焼き、遺骨を瓦の上に置いて、縁故者が少しでもわかるようにした。隊員は皆、野宿で、一週間任務についた。

第二〇項 安佐郡高陽町…788

地区の概要

高陽町は広島市の東北に位置し、爆心地から約一五・〇キロメートルの距離にある。

昭和三十年三月三十一日、深川村・狩小川村・落合村・口田村の四か村が合併して新発足した町で、町の西部は広島市に直結している。

東南部は山岳が連なり、西南部は太田川、北部は三篠川に沿って展げているが、河川に沿う流域は一般に肥沃なため、蔬菜園芸が盛んで郊外園芸地帯として、急速に発展している。

町の中央を国鉄芸備線が横断し、町内には六か所の駅があり、県道も四方に貫通して交通も比較的便利である。

総面積は五一・五五平方キロメートルであるが、耕地はそのうち一三・九パーセントに過ぎない。人口は九、五三六人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

町内で、もっとも広島市に近い口田地区では、広島市へ侵入する敵機一機が、北方から一万メートル以上の高度を保って入市し、やがて北西に向って逃げていくのが見られた。

また、広島被爆直前にやってきた気象観測の一機と思われるが、深川地区の高下郡作もやはり一機を目撃したと語り、狩小川地区の花本陸蔵は侵入敵機は二機であったとも語っている。

口田地区では、爆風によって家の屋根が一部破損し、天井は三、四メートルはねあがった。建具もほとんど破損した。

深川地区では、役場庁舎の軒や天井が破損し、民家では一〇数戸の戸障子が吹きとばされたが破損程度はさほどでもなかった。爆風や熱線を少しばかり感じたが、樹木や農作物には被害は認められなかった。

しかし、屋外にいたものは突発的な異変に、おどろきあわてて屋内に急ぎ入ったもの、あるいは物かげに逃げてひそむものなどさまざま姿が見られた。

狩小川地区では暴風のような衝撃を受けたが、ガラス窓が飛ぶというほどではなかった。爆風におどろき表に出て見ると、広島市の上空に血のような赤いキノコ型の雲がムクムクと立ち昇っていた。それが昇るにつれて次第に大きくなり、数分間消えなかったという。

深川地区からでは、爆発音を聞いた直後、南方の空に巨大なキノコ型の黒雲が生じ、雲の中央に赤・黄・紫色の閃光が望見された。

燃えあがった広島市から、高陽町域に飛来落下したものはなかった。

広島市へ侵入した敵機は、落下傘のようなものを落としたが、西北方へ流れ去るのが、深川地区から認められた。

また、狩小川地区では、白色の落下傘二個が、狩小川村方向へ飛来するように思われたが、北方へむかって落ちたのが見られたという。

なお、この六日は、動員令による広島市の家屋疎開作業には、各村とも出動していなかった。

また、広島市から国民学校児童が口田村一円に、二〇〇人ほど昭和十九年八月に縁故疎開をして来ていた。これらは翌二十一年七月にそれぞれ復帰した。

狩小川村には、舟入国民学校児童が集団疎開し、同村狩留家に八〇人、同村小河原に八〇人がいた。疎開して来たのは昭和二十年五月で、同年九月に広島市へ復帰した。

深川村にも個人的な縁故疎開で児童が来ていたが、集団疎開はなかった。人数その他は不明である。

二、避難者の状況

広島市に近い口田村には、六日の午前九時ごろから、狩小川村には正午、深川村には午後一時ごろから、翌七日の夕がた六、七時ごろまでにかけて、多数の負傷者が逃げて来た。

避難者らはいずれも被服はボロボロに破れ、中には素裸のまま、顔は俗にいう乞食風のようにみにくくふくれあがり、腫れあがった手を力なくぶらさげて、男女の別も分らぬあわれな姿であった。

避難途中に息絶えた子どもや負傷者を背負ったいたましい姿もまじって、底知れぬ惨禍をまざまざと見せつけられた。

口田村へは、広島市から県道あるいは鉄道線路沿いに、または山道を通して北へ北へと上って来た。口田村の国民学校や農協事務所の二階は避難者でうずまったから、隣村の落合村へ残りの人々は上っていった。

狩小川村へは、大部分の避難民が温品福木線によって入って来たが、中には太田川沿いに深川村を経て入村したものもあった。

深川村へは、牛田町あるいは中山村を経て戸坂一口田一落合村を通り、入村したものが多かった。

これら多数の避難者は、ほとんどが徒歩であった。七日、狩小川村にトラックで運ばれた重傷者約三〇人中半数は途中で死んでいた。

各村における避難者の収容状況は、次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	火葬場所	閉鎖月日
口田国民学校	口田村	八月六日	三〇〇	五五	矢口火葬場	九月十日
口田農協事務所	口田村	八月六日	八〇	一五	矢口火葬場、小田火葬場	九月十日
小河原説教所	狩小川	八月六日	五〇		不詳	八月十日
狩小川国民学校	狩小川	八月六日	七五〇	二〇	国民学校の裏の河原	八月三十日
狩小川隔離所	狩小川	八月十日	二〇	六	右同所又は火葬場	九月十五日
深川国民学校 (落合村)不明	中深川	八月六日	一三〇	約二六	中深川、中堂火葬場ほか	十一月五日頃

なお、深川国民学校に収容した負傷者は、九月以降、隔離病舎に移したが、縁故者不明の遺骨一体は明光寺に預けた。

また、市から避難してそのまま土地に定着居住した世帯が、口田村では一八〇世帯もあった。

三、広島市救援状況

救援隊出動

広島市の大惨禍が伝えられ、救援命令を受けた狩小川村では、医療救護班として医師三人・薬剤師三人・看護婦一〇人が、六日当日から八日まで三日間、狩小川村から温品を経て汽車で連日出動した。

また、同村の警防団員九〇人(延二三〇人)も七日から九日まで三日間、連日トラックで福木・温品経由で広島に出動、主として白島町および土橋付近で救護その他整理などの作業に活動した。

口田村からも警防団員五〇人(延五、〇〇〇人)が、六日当日から十五日までの十日間、連日出動して救護活動を展開した。

第二一項 安芸郡府中町…793

地区の概要

府中町は、古代、律令制度の国府の所在地であったと言われ、その遺構も発掘されている。広島市の東方に隣接して位置し、最短距離は東方約四・二キロメートル、最遠長距離東北東約八・二キロメートル、面積一〇・二三平方キロメートル、人口二九、一六七人(昭和四十年十月一日国勢調査)で、広島市とは地理的にも行政的にも密接な関係をもって現在に至っている。

広島市内国民学校の学童疎開の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

爆風によって主として西側、すなわち爆心地の側の窓ガラスはほとんどが破壊され、窓枠には損傷を生じたものがあつた。天井は吹き上げられ、壁が落ちたり、剥離した家も相当数あり、中には畳がはね起された家もあつた。炸裂後、埃が視界をさえぎり、自然に埃がおさまるまでの数分間は、周囲の状況が如何なるものか全くわからなかつた。

田の草取りをしていた老婆は、爆心地の側の皮膚に熱さを感じたと話しているが、熱線で火傷を負つたという話は聞かない。また農作物に対する被害はなかつたようである。

府中国民学校では、当日児童が登校していたが、飛散するガラスの破片で負傷した者が多数あつた。

だれもが閃光や爆発音に驚いて、とっさに地に伏せたから、その瞬間を些細に観察する事ができなかつた。しかし、広島市の西部上空に、ムクムクと盛り上がる雲が、七色に変化しているのを望見した(第一巻に写真掲載)。

二、避難者の状況

六日の午前八時半を過ぎたころから、当町に流入する避難者を見はじめた。この人たちは、矢賀町を経て府中大橋に至り、そこから各方面に向つたもので、府中町に避難した者は、主として府中国民学校を目指して集り、時間が経過するに従つて、その数は増す一方であつた。顔や手足の露出部分はひどい火傷を受け、皮膚は千切れたようにぶら下り、ボロボロになつた被服のまま、必死の形相で逃げてくる様は、生地獄さながらの感があつた。

この中には、府中在住の者で広島市内で被爆した者もいたが、ある者は、町に逃げ帰つたという安心感から気が緩んだのか、または精魂つき果てたのか、わが家にたどり着く途中で倒れるものもあつた。

学校では、机類を片付けた教室や講堂に収容したが、次第に増加する避難者のために、応急措置として、校庭にテ

ントを張って休養所とした。しかし、医療を施そうにも医師もいなければ薬もない有様で、全くお手上げの状態であった。被爆者は、ただ暑さを凌ぐため、ボール紙や薄板を扇子代りに涼を求めるだけであった。

町役場による炊出しが実施されたが、食糧のたくわえが充分でなかったので、支給は困難をきわめた。

翌七日ごろから、死亡者が続出しはじめ、義勇隊員が薪や藁を集め、死体搬送用に荷車を準備し、警防団員は府中大川堤防で死体を火葬した。義勇隊員は昼夜も分たず看護に尽力したのであるが、死亡する者は後を絶たなかった。

こうした被爆者の実体を目のあたりに見た町民の恐怖は、はなはだしいもので、何時襲われるかも知れない爆撃を恐れて、竹藪や河原などに仮住いをする者まで現われ、その起居は、非常事態に際しての用意のために、着のみ着のままであったが、それが不自然に思われないほど町民が受けたショックは大きなものであった。

当時、国民義勇隊員として、負傷者の輸送や避難所の設置に従事していた田村繁信が、六日午後帰宅中、西方上空に敵機らしいものが飛来したので、国道下の暗渠に退避した際、そこで広島赤十字病院の重藤文夫医師に出会った。重藤医師は猛火に包まれている広島市内を見ながら、「どうしても病院に帰らねばならないのだが」と思案していたが、その時「原子爆弾が投下されたのではないだろうか」と語った。しかし、それが如何たる内容をもつ爆弾か、町民は知る由もなかったという。

昭和二十八年、広島市から避難してきた被爆者で、死亡して引取りのないまま当町の龍仙寺に安置してあった遺骨八〇柱を、広島市平和公園内の、原爆犠牲者供養塔へ合祀のため広島市社会課へ引渡した。被爆者が府中町へ避難して、その後定着居住したものは一五〇世帯あった。

被爆者手帳発行状況

特別 二、四五五通 一般 四一九通(昭和四十年十月一日末現在)

[第二二項 安芸郡船越町](#)…796

地区の概要

船越町は広島市の東方約七キロメートルの地点にあり、海田湾に面している。町域の東は海田町、西は広島市、南は海田湾をへだてて矢野・坂両町と相對し、北は畑賀・府中町に接し、面積三・三平方キロメートル、世帯数三、六三六世帯・人口一三、六四七人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

幹線道路は船越峠を経て、府中町・広島市に通ずる旧国道と鉄道線路に沼って新国道(一級国道二号線)呉-広島間が通じている。

大正九年に日本製鋼所が来るに及んで、逐年発展し、耕地は急激に住宅・工場用地となり、昭和時代に入って飛躍的に人口増加をみた。

隣町に軍需工場東洋工業株式会社があり、軍都広島市の街星都市として重要な地位を占めていたから、戦争中は空襲の災害を覚悟していた。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市襲撃の敵機影を、船越町竹浦の三沢税元町助役は、自宅の裏に出ていて目撃したが、一機であったようであるという。

ある目撃者は、北方面から南方へ黒い影が飛んでいくのを見たといい、ある目撃者は、広島市付近の上空を北方面へ、一機飛んでいたかと思うと、ピカッと光って、ドカーンという猛烈に激しい音が聴こえ、そのため一瞬前に突っこみそうになったという。

また、ピカッと光る数分前に、落下傘が二個ほど風に流されて、落下しているのを見た者もあった。異様な閃光と爆発音で地面に伏せた人もあり、起ちあがって見ると、巨大な雲がモクモクと回転しながら拡がり、後光の射すような光線が眺められたという。

炸裂の衝動で、家の西側(広島市方面)の壁が落ち、障子や襖などの建具がはずれた。また、爆風で天井も吹きあげられ、屋根瓦も少しずれた。

しかし、樹木や農作物には被害がみとめられなかった。また、広島市から爆風で品物が飛んで来るといこともなかった。

この日午前九時ごろから、新国道(呉街道)づたいに大洲町を經由して、多くの負傷者がゾロゾロと裸足で歩いて来はじめた。

衣服はボロボロに焼け、裂けていた。身体は水ぶくれになり、アゴと胸がくっついているような人もあった。

続々となだれこんで来る避難者に対して、同町字二場の日本製鋼寮(現在・船越アパート)で、各地区の婦人たちが炊出しをおこなった。また、負傷者は日本製鋼所の病院をはじめ、船越国民学校・正明寺・正専寺などの臨時救護所に收容した。六日当日の收容者数ほ約三〇〇人から三五〇人くらいであった。

治療は薬品がなく、ただ油薬を塗ることだけであった。

負傷者は收容するはしから死亡していき、死体を何度も大八車で、瀬野川の堤防内側に運んで焼いた。その数は、現在では概数さえ不明であるが、かなりの数であった。

なお、町内の住民で、当日朝から広島市内へ出勤していた者、学校が広島市内であった中学生、あるいは、建物疎開あとの廃材を取りに広島市へ出かけて行った者などが、いずれも被爆し、死亡者も重傷者も出たが、その数は不明である。

二、広島市救援状況

救援状況

六日当日は、広島市から町内に流入する多数の避難者の救護や治療活動で精いっぱいであったため、広島市内の救援には出勤しなかったが、七日から十日ごろまで、広島市役所方面へトラックでムスビを送った。

また、警防団は、吉から九月十五日までの間に約一〇回(一回につき五〇人)ほど、船越から船越峠を通る旧国道を歩いて広島市に出勤し、市内各地で罹災者の救護や死体の処理その他の作業にあたった。

[第二三項 安芸郡安芸町…799](#)

地区の概要

安芸町は昭和三十一年三月三十一日、温品村(ぬくしな)と福木村とが合併して安芸町となった。

広島市の北東にあり、爆心地からの距離は最短距離約五キロメートル、最遠長鹿離約一一・五キロメートルである。面積二二・六六平方メートル、人口七、三九七人(昭和四十年十月一日国勢調査)で呉姿々宇山の裾野において農耕を主とする農村である。

なお、広島市内国民学校学童の疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

温品国民学校前で、向洋上空から市中へ侵入する敵機二機を確認した(篠原次子談)。高度についての正確な記憶はないが、相当上空を飛んでいたという。

物凄い炸裂音に驚いて屋内に逃げ込んだので、敵機の行動をずっと視てはいなかったが、炸裂音と爆風の混乱から静寂に戻ってきたとき、家から出て空を見上げると、福木村の方面に大風船が一個流れていた。敵機二機もまたその方向に飛び去っていた。

温品地区は爆風による衝撃が大きく、ほとんどの家屋は建具が倒壊していた。とくに、地区によっては天井が五・六寸吹き上げられ、屋根が大破し、棟木が狂ったほか、床にもひずみを生じたところもあった。

立木や農作物には、さほどの被害はなかったが、田で作業中、身体に熱線を感じた者もあった。

福木地区は、地形や距離の関係上、温品地区と比較して、被害は少なかったが、大字馬木地区では爆風により建具・屋根の被害があった。

キノコ雲は、灰黒色で凄まじい勢いで発達しながら上昇していった。そしてその煙の中にすごく赤い炎を見たという者もいる。

この爆発による広島市からの物件飛来はなかった。

またこの日、広島市の建物疎開作業隊の出勤はなかった。

二、避難者の状況

避難者は午前九時過ぎから来はじめ、この人たちは中山の大内越峠、矢賀町を経て徒歩で到着した。最初に来たの

は婦人で、乳呑児を抱き、身体の各所にひどい火傷を負っていた。真黒い顔で馬木方面へ行く道を尋ねてきたが、先ず温品国民学校で治療を受けるよう勧めて案内した。総じて避難者の容貌は衣服と皮膚が識別も困難な状態で垂れさがり、奇怪というはかなかった。重傷者は精根も尽き果てて、ここまで辿りつくのがやつのことであった。中には路傍に行き倒れる人もあり、しきりに「水、水。」と、苦しみ訴えた。しかし、その声に末期の水を与えるだけで、治療などなす術がなかった。

収容所の開設ならびに埋葬・火葬状況

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
温品国民学校	温品村	八月六日	約一四〇	約五〇	室釜火葬場、鶴江付近堤防	九月五日
福木国民学校	福木村	八月六日	約一二〇	約四	大原演習場	九月七日
陸軍馬木大原演習場兵舎	福木村	八月六日	約二五〇	約七	大原演習場	九月七日

なお、広島市から避難して定着居住した世帯数は、つぎのとおりである。

温品村 二〇世帯

福木村 三〇世帯

両地区とも戦後一〇年ぐらい居住して、また出て行った。

第二四項 安芸郡海田町…801

地区の概要

海田町は、広島・呉両市の中間にあり、広島市の東南東に位置し、爆心地からの距離は、最短距離が約六・二キロメートル、最長距離が約一一・七キロメートルである。町域の一部は広島市に近接し、被爆時には大混乱を起している広島市と、東部一帯地域との中継地的な役割をはたした。

山陽本線は海田市駅から、呉線を分岐し、これらに沿って新旧国道が並走している。

町北部を西流する瀬野川は海田湾に注ぎ、宇品港は指呼の間にある。

昭和三十一年九月三十日、海田市町と東海田町が合併して、海田町となったが、海田市町は、歴史的に古くからひらけた場所で、物資の集散地として繁栄し、安芸郡における重要な地区の一つである。

地域の総面積は、一三・九二平方キロメートルで、人口一八、九八〇人(昭和四十年国勢調査)である。

被爆当時、海田町域に所在した陸海軍諸部隊や集団は、次のとおりである。

軍隊名	所在地	人員	備考
陸軍需品廠	海田市町	約七〇	
第十一航空廠	東海田町	約二〇〇	この他朝鮮の志願兵が六〇〇人いた。
陸軍松根油製造班	東海田町	—	男女挺身隊
陸軍松根油製造班	東海田町	—	
陸軍軍隊宿舎	東海田町	約三〇	八月十五日夕刻、陸軍軍隊宿舎を去る。

なお、海田町は、広島市内の国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

ちなみに、現在、海田町の被爆者健康手帳の受給者数は、一般手帳一六三人・特別手帳一、四五六人となっている。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

海田市駅の仲岡助役の談(原子爆弾災害調査報告集記載)によれば、「ピカッと光って、ドーンと音が来るまで一〇秒ないし一二秒あるかなし。西北側の窓ガラス上方がみな破れ、枠も折れた。屋根は波型となる。柱時計が下に落ちた。

戸外で熱感はあるが火傷しなかった。屋根を吹きあげ、障子を内側に吹きこみ、屋外灯の電灯笠も破れた。雷を聴いた。」という。

改札係の若山知は、五日から夜どおしの勤務を終り、六日は非番で宮島の自宅へ帰ろうとしたとき、敵機の爆音をきいた。直後、閃光を感受し、そばのホームに作られた防空壕にサッと飛びこんだ。壕の入口に坐って広島の方をみると、落下傘が二個、北の方へ落ちていくのがみられた。同時に、広島駅付近の上空にお碗のような白雲が昇っていた。

事務室に入っていくと、天井から煤が一面に落下していた。何気なく、ラジオにスイッチを入れると、泣くような声で、「大阪放送局、大阪放送局…こちら広島放送局…」と、大阪の放送局を必死に呼び出そうとしているアナウンサー

一の声聞いた。

何か変事が発生したと直感され、心配になったので、ちょうど発車する貨物用の機関車に乗って、広島駅に向った。しかし、その機関車が途中で停車したので、やむなくそこから歩いて入市した。

また、水木俊之の談によると、爆風におどろいて地面に伏せ、掌に突き刺さったガラス片を抜きとり、駅前広場に出て、空を見あげると、はるか北の空を B29 が北上していた。そして、落下傘がその下をゆっくりと、落下しているのが見られたという。

炸裂後、白いハスの花べんの無数に重なったような煙が、もくもくと発達して、天に沖する巨大な柱となった。その後、小雨らしいものが少し降ったが、それもわずかであった(木下イサミ・千柄吉郎談)。

海田市駅のプラットホームで、上り列車を待っていた人は、「広島に通じる鉄道の線路上に、真っ赤であったか、白熱であったか、火の塊が見えると、まもなく轟音とともに、戸のガラスが飛び散り、掲示板も広告板も飛散した。」と、報告している。

木下イサミ宅では、爆風で庭の柳が折れ、広島市の側に向いた建具やガラスが、ほとんど大破、飛散した。また、屋根や天井には、たいした被害はなかったが、屋根瓦がずれて、雨もりがひどく、困ったところもあった。

人体には、被害というほどのものはなかったが、炸裂後にはじめて警報が発令されたようなことで、住民はひどくあわてて不安にかられた。

原子爆弾の炸裂直後、東海田町役場では、駐在巡査によって、電話は一切使用禁止の赤紙が貼られ、外部からの情報は、役場の上司と警察官だけで交換されていた。

なお、広島市から爆風などによって、紙や板ぎれなどが、飛来するという事はなかった。

また、海田町から、八月五日まで、一日約一〇〇人ぐらいの作業隊が、広島市内の竹屋町付近の建物疎開に出動していたが、六日当日は非番で出勤せず、犠牲者も出さなかった。

当日午前十時ごろから、翌日午前八時ごろまで、仁保町堀越・船越町を経て、徒歩やトラックで避難して来るものが絶えなかった。避難者はいずれも火傷・裂傷を負い、血まみれであった。

東海田町役場では、六日の朝、ただちに収容可能な場所、神社境内や学校などを、収容所として開設する準備をした。

収容は当日午前十一時ごろから開始し、大型トラックで運ばれて来た負傷者は、まず東海田国民学校の四教室に収容した。

六日の午後七時ごろまでに、四九人の負傷者を収容したが、翌朝二人死亡し、九月十五日の収容所閉鎖の日までに一〇人死亡した。

収容者以外で、負傷の治療に通うものが三〇人もいた。

六日の夜、広島市を望見すると、市内上空は赤く、何時までも夕焼け空をながめているような状況であった。

避難者収容所の開設、ならびに死体の処理状況は次表のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
海田市国民学校	安芸郡海田市町	八月六日	一三〇	五〇	海田市火葬場	九月十日
明顕寺	安芸郡海田市町	八月六日	三〇	二〇	海田市火葬場	九月十日
真宗寺	安芸郡海田市町	八月六日	一五	五	海田市火葬場および船越堤防	九月二十日
為野病院	安芸郡海田市町	八月六日	二〇	一〇	海田市火葬場および船越堤防	九月十日
東海田国民学校	安芸郡奥海田村	八月六日	四九	一〇	寺迫火葬場	九月十五日

二、広島市救援状況

救護状況

かねて防空法に基づき、医療救護班が編成されていたが、広島市へは出動しなかった。

むしろ、広島市からの避難者が、続々とやって来たので、この救護に全力をあげた。

東軍医中尉・為野医師をはじめ、東海田町の疎開先から急ぎ駆けつけた松村医師によって、救護活動がおこなわれ、前記のとおり町内五か所の収容所に、続々と到着する罹災者の治療にあたった。

これらの救護活動には、地元の婦人会なども収容所が閉鎖されるまで、積極的に協力した。

六日当日は、罹災者の受入れが精一ばいで、炊出しもできなかったが、翌七日の昼食から三日間、東海田町内各部落婦人会により、農協から渡された米でにぎりめしを作り、トラックで警防団員と役場職員が、広島市内各所の被爆

者収容所に届けてまわった。

海田市町に避難して来た人々は、海田市町も、広島市と同様に、他の農村へ疎開するものもあつたほどで、避難者が定着居住することは困難であつた。したがって、避難者は、その後、それぞれの親類縁者を求めて、海田市町から去って行った。

被爆した当日は、広島駅が炎上したため、海田市駅から折返し運転で避難者が運ばれたが、二日後には、山陽本線・呉線ともに、時刻どおりの運行はなくとも、上り下りが全通し、次第に平常な海田市町を取りもどしていった。

原爆記

椋芳三

昭和二十年の五月の何日かに、瀬野川左岸の畠のなかに爆弾が五個投下された。

幸いに付近の農家に被害はなかったが、水田に落した弾の穴の太さは、直径六メートルぐらい、深さ二メートルぐらいであつた。

案外、その被害が軽かつたので、これを軽視する者もいた。

そのころ、夜になると敵機が来襲しはじめたので、警防団員は、常に非常体制を取っていた。

七月二十日ごろ、いよいよ広島市の爆撃必至という事態が迫つて来たので、海田市町においては、町長肥田厚・助役木田申一らが、十人の戸長を召集して、広島市の防空対策である建物疎開作業の出動命令を出した。

当時、海田市町は、町域を五部分に分けていたが、八月一日が一部、二日が二部、次が三部と四部という出動計画をたてた。

私は、第三日目の作業隊に所属して、朝七時半に総勢二〇〇人近い人々とともに、海田市町を出発、比治山の下の京橋川下流の対岸一すなわち富士見町の家屋解体作業に出動したのであつた。

このようにして、被爆当日前に海田市町の五部落の人々は、だいたい全部出動したことになる。

六日その朝、私は、老衰のため食事のできなくなった七二歳の父のために、かねてから甘酒をたのんでいた知人のところへ出かけた。知人は妻の実家の知合いで、国鉄海田市駅の信号所に勤務していたので、そこへ私は行き、明日は是非…と頼み、しばらく戦争の成行きなどを話している時であつた。

突然、目の玉をつらぬくような光が走つた。同時にその場に居合わせた五人の者は、信号所内に倒れた。五、六秒ののち、ドンと大きな音がして、さらにみんなは驚いた。

この四十何歳になるまで、未だかつて聞いたことのない音、見たことのない稲光りであつた。

私は、病床の父がどうしていることかと気になり、転ぶようにして飛んで帰つた。見れば障子は全部はずれるか倒れていて、まったく見当のつかないありさまであつた。

父は父で「病人のわしをそのままにして、どこへ行ったか」と、突発事態の不安から泣くやら叱るやら、何とも言えぬ表情をしていた。

海田市町付近には、幸いに怪我人は無かつたが、二、三時間たつたころ、広島市内からふた目とは見られない無残なすがたの人々が、ゾロゾロとやって来はじめた。

衣服は形がないほどに破れ、血まみれで正常な歩き方をする者は一人もなかつた。時間が経つにしたがって、刻々と避難者の数が増えていった。重傷者は動けなくなつてその場に死んでいくのもあり、苦痛に呻吟する声が町中に溢れた。

私は一日違いで、被爆からまぬがれたことが、不思議な運命のめぐりあわせのように思われた。

しかし、弟(勝海)が、市内東観音町二丁目に住んでいたのが心配で、すぐ出かけようとしたが、市中は猛火に包まれているという。夕方、じっとしておれず自転車で、東大橋から比治山下を通り、比治山橋を渡り、富士見町辺まで行ったが、すごい熱気にはばまれて前進できず引返した。

その翌日、町内の警防団員は全員出動することになり、私も出た。

八日、土木出張所に勤務していた妻の弟(林信夫)を探しに行ったが、庁舎は全焼していた。たまたま福屋デパートのところまで行ったとき、デパートの石壁に「戸坂に転送される一林信夫」と書いてあつた。探しまわつたあげくようやく発見し、家に連れて帰つたが半死半生の重体であつた。十日間看病したがついに不帰の客となつた。

地区の概要

坂町は広島市の南東にあり、広島市とは海を隔てて指呼の間にある。爆心地から当町への遮蔽物は、仁保町の黄金山があるのみで、それも町全体を遮蔽するには至らない。爆風によって被害を受けた建物が広範囲にわたったのも、こうした地形によるものである。

また、中国配電坂火力発電所および三菱広島造船所の修理ドックは当町において大きな存在であったが、それだけに敵機の空襲によって爆撃される可能性もまた大きいものであった。しかしながら、当町自体の防衛よりも、広島市の防衛が主であったといっても過言ではなく、原子爆弾投下の当日も、国民義勇隊一八〇人が鶴見町付近に出動を命ぜられ疎開作業に従事していた。

爆心地からの最短距離	爆心地からの最長距離	面積	人口	備考
約六・二km	約一二・五km	一四・三六 k m ²	一四、〇九三人	昭和四十年十月一日国勢調査

なお、当町へは広島市内国民学校学童の疎開の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

坂国民学校父兄会に出席していた菅田房ほか四人は、校庭において、坂町の北西部上空に敵機二機を目撃したが、余りにも高度を飛行していたので、進行方向など詳しいことはわからなかった。

炸裂時の爆風によって、当町の西北に面して建ち並んでいる家屋のほとんどは、天井が約三〇センチばかりふき上り、建具は五メートルから一〇メートルも吹き飛ばされ、ガラス戸のガラスは飛散した。

家屋の外にいた者、また、高い所にある田畑で野良仕事に従事していた者は、かるい熱気を感じた。

農作物や樹木に被害は見られなかった。

炸裂音に驚いて屋外に出てみると、西北の方向中国配電坂火力発電所のちょうど真上にあたるところに、大きなカボチャ様の白い雲が見え、それがムクムクと急速に発達していた。発電所に爆弾が投下されたものと錯覚し、急いで家に帰ったものもいた。

炸裂後に、広島市から物件が飛来することはなかった。

なお、当日朝、動員令による建物疎開作業従事隊の広島市内への出動状況はつぎのとおりである。

名 称	出動者総数	被爆による被害者数			備 考
		即死者数	負傷者数	行方不明者数	
坂村国民義勇隊	一八〇	〇	一六〇	〇	作業現場鶴見町付近 帰町後死亡 一五

当日帰坂しなかった者が一〇人ぐらいたが、三日後には全員帰坂した。

二、避難者の状況

六日午前十時ごろから十日の午前中にわたって、全身に火傷している者、顔面火傷で誰とも判別のつかない者、負傷して身動きのできない者、こういった人たちが向洋・海田市町を経由して、三輪車・トラック・荷車で間断なく運ばれたり、または自力で歩いてやってきた。中には収容されるや精根尽きて死亡した者もあって、死亡者が続出し、その処置に手がまわりかねるほどで、火葬せず遺体をそのまま土中に埋めたものも多かった。

なお、被爆後、救護作業のため広島市への出動はなかった。

三、避難者収容所の開設ならびに埋・火葬状況

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
坂国民学校講堂	坂町字勿条	八月六日	二〇〇	火葬 二〇	旧浜宮火葬場	八月二十日
横浜国民学校講堂	坂町字横浜	八月六日	二〇〇	火葬 一五	横浜火葬場	八月二十日
小屋浦国民学校	坂町字小屋浦	八月六日	六〇	火葬 四〇	小屋浦火葬場	八月二十日
小屋浦海水浴場	坂町字小屋浦曙部隊野戦病院	八月六日	三〇〇	埋葬 一五〇	小屋浦付近	八月二十日
横浜海岸	威第一九八〇六部隊	八月六日	一五〇	埋葬 一五〇	横浜海岸付近	八月二十日

横浜海岸における埋葬は、熱気に耐えかねて、川や海にとび込んで溺死したと思われる被爆者が、潮に流され、浜辺に打上げられたのを、軍隊によって収容され、埋葬されたものである。

なお、広島市から避難して定着居住した世帯はなかった。

被爆者健康手帳の受給者数は、つぎのとおりである。

被爆者手帳発行状況

特別 九九二人

一般 九八人

計 一、〇九〇人(昭和四十二年七月三十一日現在)

第二六項 安芸郡瀬野川町…812

地区の概要

瀬野川町は、広島市の東方にあり、畑賀・中野・瀬野の三村が、昭和三十一年九月三十日町村合併を行なって誕生した町で山陽本線および国道2号線に沿っている。爆心地からの最短距離は約七キロメートル、最遠長距離は約一九・七キロメートルで、面積五八・二一平方キロメートル、人口一二、四三七人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

なお、当町には広島市内の国民学校の学童疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

畑賀村においては、役場にいた者は、すぐ上の国民学校に爆弾が落ちたのではないかと、疑ったほど激しいもので、国民学校二階のガラス窓は、ほとんど吹き飛ばされた。

乗来宅では、西向きの土蔵の頑丈な板戸が、敷居や鴨居に何らの異状もないのに、吹き倒された。また、住家のたてりに狂いを生じたものもあった。

中野村村長は、閃光の直後、黒黄色の雲が物凄い勢いで渦巻きながら、上昇するのを見た。すぐ関東大震災のとき、大火災によって発生した雲を連想したが、周囲の事情が全く異っているので、ただ不思議な現象だと思っただけであったという。爆発音と爆風はそのあとやってきた。山王部落でも湯殿のガラス障子が壊れた。総じて中野村の多くの人は、隣村の畑賀村へ爆弾が投下されたと思っていたようである。

瀬野村では、生暖かいものを感じたあと、大きな爆発音と爆風が襲いかかり、役場にいた婦人の中には、声をあげて外へ逃げ出す者もあった。上瀬野龍善寺でも、閃光のあと、もの凄い爆発音と異常な大震動とともに、本堂西側(広島市に面した側)の障子四枚が、本堂内に吹き飛ばされた。

畑賀村の者は、盛り上ったキノコ雲はちょうど五色のカボチャのようであったといい、中野村の者は、赤黒い雲が、キノコ状に拡大したと知っているが、ともにキノコ雲を認めながら、その色彩の表現は必ずしも一定していない。

炸裂時に畑賀村では、黒煙が流れ込んだが、これは広島市の火災の煙が流れてきたものと思われた。その他に飛来したものはない。

なお、建物疎開作業隊の広島市への出動状況はつぎのとおりである。

村名	出動者 総数	被爆による被害者数			備考
		即死者数	負傷者数	行方不明者数	
畑賀村	二〇	〇	一九	〇	帰村後死亡者 二
中野村	七五	〇	七三	〇	帰村後死亡者 九
瀬野村	五七	〇	四六	一	帰村後死亡者 一

二、避難者の状況

畑賀村では、六日午前十一時ごろから避難者が到着しはじめた。畑賀村への避難者は、船越峠と旧国道砂走方面から、中野村への避難者は、旧国道から到着した。これらの人は、ほとんどが火傷を負いながらも徒歩できたが、極く少数の人は、担架や荷車に乗せられてきた。避難者の列は、六日午後八時ごろまで続いた。

避難者の中には、どこかでひとまず治療を受け、繃帯に包まれている者もいたが、そのほとんどの人は、至るところに負傷し、ひどい火傷のうえにすすけた黒い顔、焦げた衣服のまま裸足で列をなすという姿であった。そして、誰が誰とも判別は困難であった。日ごろから親しい村の人が帰り着いたときでさえ、それが誰であるか全然判らなかった。

なお、安芸中野駅の国道を徒歩で通過する避難者には、無料で、東方のそれぞれの避難目的地に行くよう駅長が指示したので、ここからは汽車で逃げていった。

各村の警防団ならびに婦人会は、それぞれの任務に就いて多忙を極めており、人手不足になっていたから、避難者

の収容には、残余の僅かな人員があたるという状況で、十分な手当ができなかった。

避難者収容所の開設ならびに埋・火葬状況

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋・火葬数	火葬場所	閉鎖月日
畑賀国民学校臨時救護所	畑賀村	八月六日	二八〇	四二	畑賀村 寺東山火葬場 赤羽根火葬場	八月二十六日
日本医療団畑賀病院	畑賀村	八月六日	五〇		花玄山火葬場 揚倉山火葬場	九月三十日
中野村専念寺臨時救護所	中野村	八月六日	一〇〇	約二〇	中野村 蓮華寺火葬場	八月三十一日
中野国民学校臨時救護所		八月六日	六〇			八月三十一日

避難してきたまま定住した世帯概数

畑賀村 一九世帯(二十二年までは一〇四世帯であった)

中野村 二〇世帯

瀬野村 一二世帯

三、広島市救援状況

救護状況

各村の婦人会は、炊出しに従事し、警防団がトラックで広島に搬送した。食糧搬送のつど、途中の海田市警察署で指示を仰ぎ、広島市内各所へ配達した。

中野村＝八月六日から十二日までの七日間、警防団員約二〇人が食糧搬送に従事した。六日は、東部地区一帯が火に包まれていたため、市の中心部へは到底立入ることができず、大正橋のたもとで食糧を分配したが、翌七日からは、市内各所へ配給することができた。

畑賀村＝八月六日から八日までの三日間、警防団員約一二人が、比治山下・元騎兵隊裏その他へ出動した。

瀬野村＝八月六日、警防団員約四〇人が、東練兵場・十日市方面へ出動した。

また、警防団山王地区の二野宮分団長は、警察補助員として、三日間広島市へ出動した。

[第二七項 安芸郡矢野町…816](#)

地区の概要

矢野町は、広島市の南東にあり、爆心地から最短距離約七・七キロメートル、最遠長距離約一〇・三キロメートルである。

地域面積は約一一・六平方キロメートル、人口一、四七〇人(昭和四十年国勢調査)である。

この地域は歴史的にも古く、考古学上の貴重な古墳遺跡が無数にあり、往昔は文化の一中心地であったことを物語っている。

また、地域の伝統的産業として「かもじ」の製造は全国的に有名であり、戦後は洋髪用マゲやブラシなどの生産が、戦前にも増して発展している。

なお、この地域には広島市内国民学校児童の疎開はなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

当日、広島市攻撃の敵機は、目撃できなかったが、かすかな爆音を聞いた。

また、敵機からの落下物は何も見えず、気もつかなかった。

八時に警戒警報が発令された(呉地区の発令か)ので、矢野町役場屋上の防空監視所に登ると同時に、大音響が起り、思わずその場に伏したが、監視所が吹きとんだような感じがした。

広島市内に爆弾が落下したものと直感したので、すぐ監視所から降りて警防団その他に連絡をとった。

役場に各地区の状況を集めてみると、当町の海岸線一帯は、窓ガラスをほとんど破壊されており、戸をあけていた家の天井は、五寸ばかり吹きあげられ、棚においてある品物は落ちていた(武田信次郎談)。

人体にも大きな衝撃を受けたが、それは普通の爆弾よりも一種独特なものであった。しかし、農作物には何ら異状を認めなかった。

爆発音は、矢野町からでは広島市の西地区江波町あたりで起ったように感じられたが、監視所から望見すると、円周五〇メートルほどのキノコ雲が昇っていた。それが青松葉に火をつけたときのように、次から次に煙が勢いすさまじく盛り上り、天に沖するばかりであった。

しかし、この爆発による広島市からの飛来物は何もなかった。

この日、矢野町七部落(奥坊条・稲荷町・高下谷・西条・祇園・姫宮町・鯨迫)から編成された国民義勇隊九四人は、午前七時半ごろ、比治山橋東詰めの山ふもとに集合し、鶴見橋付近の建物疎開作業開始の準備中に被爆した。

この時、この義勇隊を引率した町職員は、広島市の疎開作業事務所(竹屋国民学校内にあったようである)に、作業場所及び作業内容の指示を受けに行き、その帰途、比治山橋西詰付近で被爆負傷した(吉田広資料)。

すなわち、矢野隊は、疎開作業場所が未決定のまま、原子爆弾の炸裂に遭遇し、隊員一人が即死、九一人が負傷という災害をこうむった。

なお、この矢野隊のように、事務所の指示を待機中に被爆したという作業隊はほかにも幾つかあった。

二、避難者の状況

矢野町から出動の義勇隊員全滅の第一報により、役場はただちに各部落の義勇隊を動員し、その救援体制を取っていたとき、負傷はしているが、全員無事に帰路についているという第二報が伝えられた。

そこで町民総出で、国道矢野川橋付近にその帰りを待っていたところ、午前十時ごろ、広島市内からの罹災者が続々と、呉街道を徒歩で避難して来はじめた。

役場はただちに矢野国民学校を収容所に定め、これら避難者を誘導して収容につとめた。その数二一七人で、そのほとんどが負傷していた。

当時、矢野町内に暁部隊が駐屯していたので、軍医二人・衛生兵一〇数人により、負傷者の治療と看護にあたった。

夜は、国防婦人会が不寝番をして看護につとめた。

収容者のうち重傷者は、八月十二日ごろまでに身元不明のまま、症状が日々悪化し、つぎつぎと死んでいったが、努力した結果、八月二十日ごろまでには、全部身元が判明したので、その家族に連絡するなどできる限りの手をつくした。

これらの収容者は、特別に矢野町を頼りにして避難して来たのではなく、苦しまぎれに血路を矢野町にむけたものと思われる人が多かった。

避難者収容所の開設、ならびに埋・火葬状況はつぎのとおりである。

収容所名	所在地	収容者数	死体の埋・火葬数	火葬場所	開設期間
矢野収容所	矢野国民学校	三六一	二九	小越火葬場	八月六日から二十五日まで

なお、矢野町に避難して来てそのまま定着居住した世帯数は、矢野町西条二・同原一・同祇園町一・同本町二・同宮下四・同綿町一・同大井四・同姫宮一・同砂原二、以上合計一八世帯である。

昭和四十二年八月一日現在、被爆者手帳交付状況は、特別手帳九四八・普通手帳一一二、以上合計一、〇六〇通である。

三、広島市救援状況

救護状況

広島市の惨禍に対し、矢野町は当日ただちに救護班を派遣した。

救護班は呉線の汽車を利用して、出動人員六〇人が六日から十六日までの一〇日間出動して、救護作業に従事した。

また、警防団員五〇人が六日から九日まで四日間、矢野町からトラックで入市し、広島市内全域にわたって罹災者に対する炊出しをおこなった。

第二八項 安芸郡熊野町…820

地区の概要

熊野町は、広島市の南東にあたり、爆心地からの距離は、最短距離が約一〇・七キロメートル、最遠長距離が約一六・七キロメートルである。

海拔二五〇メートルの高原の町、熊野町は呉市に通ずる二河川や広の大河、海田湾にそそぐ瀬野川の水源をなし、

平和で静かな文化性の高い伝統を守っている。

俗に筆の町とも云われ、毛筆製造は一二〇年の歴史を誇る。その生産高は、全国の約九割を産し、住民の約八割が専従している。

当町は山林にかこまれた盆地であるが、やはり、原子爆弾炸裂の影響を受けた。

しかし、避難者が殺到するという事態は起らなかった。

町域面積は、三三・九平方キロメートル、世帯数二、二〇九世帯、人口九、三八五人(昭和四十年国勢調査)である。

なお、広島市からの国民学校疎開児童の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

原子爆弾を投下した敵機と考えられるが、六日朝、その時刻にあたるころ、二機が熊野町西方面にあらわれ、飛行雲ができる高度で北西方面に向って進行したようである(中村正談)。

原子爆弾の炸裂時には、一瞬ものすごい閃光を見、つぎの瞬間、大音響とともに強烈な爆風におそわれた。建物の東南に面する二階の窓ガラスの多くが壊れ落ち、住民は恐怖を感じた。

また、熊野町第一国民学校(現熊野小学校)は、ほとんど破損した。

熊野町の北西にある観音平山上から、まっ白いキノコ型の雲が望見されたが、ちょうどま夏の入道雲のようであった。

これをみた住民は一様に、海田市町の火薬庫が爆発したものと想像した。

被爆地広島から、爆風などによって熊野町に飛来したものはなかった。また、この日、広島市の建物疎開作業に出動している者もいなかった。

当日午後二時から三時ごろにかけて、わずかの被爆者が、町内の縁故をたよって避難して来たが、そのあと殺到して来るといったようなことはなかった。

しかし、工員・会社員・挺身隊員、あるいは学生として、広島市に出ている肉親や縁者の安否を気づかって、捜索にかけた者はおびたしい数であった。

二、広島市救援状況

救援状況

当町から医療救護班は出動しなかったが、警防団が次表のとおり出動し、被爆者の輸送に従事した。

(警防団出動状況)

町名	出動期間	出動日数	出動数		出動場所	入市経路
			人員	延人員		
熊野町	八月八日から 八月二十二日まで	七日	—	一〇〇人	比治山付近	熊野～広島駅～比治山本町 トラック利用

なお、当町においては避難者収容所を設置する必要なく、死亡者を火葬するということもなかった。

わずかな避難者も、熊野町にずっととどまって定住者になるものもいなかった。

[第二九項 安芸郡熊野跡村…822](#)

地区の概要

当村は、広島市の東方面にあり、爆心地からは最短距離約一三キロメートル、最遠長距離約二三・五キロメートルの範囲内に位置している。

地域面積二〇平方キロメートルで、人口一、二八一人(昭和四十年国勢調査)、ほとんどが農作を生業としている。

村域の大部分が、山林で占められているという地形上からか、原子爆弾の炸裂時における大きな影響はなかった。

また、広島市から避難者が殺到するということもなく、わずかの人が縁故をたよった程度であった。

なお、当村には、広島市内国民学校児童の疎開はなかったが、呉市内の警固屋国民学校児童が集団で疎開していた。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日当日、広島市を攻撃した敵機を目撃したものはなかったようである。

原子爆弾が炸裂したときも、ピカッと光ったのを感じてから、しばらくしてわずかな地響きと同時に、建物が微動した程度であって、建具や屋根などの被害はなかった。

村民も、不審をいやくというようなこともなく、平日の静かな山村にかわりはなかった。

しかし、当村の西方に位置しているホコトリ山の上に、キノコ型の雲がムクムクと昇っているのが望見された。

正午ごろ、縁故をたよって来た避難者の語るところにより、広島市内に大きな爆弾が投下されたことが推察された。

避難者は、自転車で海田市町・瀬野川町を経由して入村したが、着のみ着のままの姿であり、惨禍のひどさを示していた。これら避難者のうち約一五世帯が、そのまま当村に定住した。

避難者収容所の開設、ならびに死体の埋・火葬状況は、つぎのとおりである。

収容所名	所在地	収容者数	死体の埋・火葬数	埋・火葬場所
民家	熊野跡村	二〇	一	熊野跡村火葬場

なお、被爆当日、広島市内からの爆風による飛来物は、何も見受けなかった。

また、広島市内の建物疎開作業に、当村からは出動していなかった。

二、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は出動しなかったが、警防団が次表のとおり出動して、被爆者の輸送に従事した。

町名	出動期間	出動日数	出動数		出動場所	入市経路
			人員	延人員		
熊野跡村	八月七～八日	二日	四〇	八〇	(一)横川付近・三滝の竹ヤブにいる負傷者救護 (二)東練兵場	荒神町ー比治山ー横川 トラック利用

三滝の竹ヤブや東練兵場に避難した負傷者を、トラックで広島赤十字病院へ運んだ。

第三〇項 安芸郡江田島町…825

地区の概要

江田島町は、広島湾上にある島嶼で、広島市の南に位置し、爆心地からの距離は約一七キロメートルである。

江田島の南端は、佐伯郡能美島に境界を接しており、昭和二十六年町制をしいた。

島の中央に秀峯古鷹山(三七六メートル)があり、その麓に、終戦まで約六〇年間、海軍兵学校が所在し、日本海軍揺籃の地として全世界にその名をとどろかせていた。終戦後は外国軍隊の駐留基地として接收されたが、昭和三十一年に返還され、現在は海上自衛隊第一術科学校、幹部候補生学校などがあり、自衛官養成の中核基地となっている。

島の面積は二九・九一平方キロメートルで、人口は一八、〇二六人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に最短距離である島内の切串地域では、写真に使用するフラッシュが発光したように光った。かなり間隔をおいて、強力な爆発音と共に爆風を受けた。

「広島が大火事だ」と、誰かが叫び、広島市の方を見ると、焼けただれたようなクラゲ雲が見え、上部が赤く紫色の煙が出ていた。

クラゲ雲の端から端にかけてムラムラと煙が湧きあがった。その湧きあがる煙から、あたかも降りそそぐ雨のように、無数の線が、広島市の街地に落ちるのが望見された。

爆風によって、畑や路面の土埃が家のなかへ舞いこみ、天井の煤がタタミの上一面に落ちた。広島市に面した一部の家では、ガラスが破損した。

樹木の被害はきわめて少なく、立木の小枝が少し折れた程度であった。農作物には被害がなかった。また、人体に感じた爆風はかなり強いものがあったが、熱さはさほど感じられなかった。

なお、広島市へ侵入する敵機を目撃したものはなかったし、爆発後、島内へ広島市から何かの破片が飛来するということもなかった。

二、避難者の状況

六日午後二時ごろ、広島市の宇品港から切串へ小型船で避難者が運ばれて来はじめたが、どの姿も顔面は火傷でふくれあがり、一見ただけでは誰かわからないほどの悲惨な姿であった。

島から広島市へ行っていた家族のものや親類などを探しに、連日船でかよったが、その帰途、広島を逃れようとする被爆者にたのまれて連れ帰ったのも多い。

避難者は当日から十六日の夕がたまで、約十月間続き、その数は約四〇〇人に達した。

山崎医師はもっぱら、これら避難者の治療にあたったが、薬品が不足し、負傷者のうち一二〇人に馬血清療法を行なったと、語っている。

六日当日、広島市の建物疎開作業には江田島村からは出動していなかった。また、広島市内国民学校児童のこの地への疎開もなかった。

なお、避難者収容所の開設、ならびに埋・火葬の状況は次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋・火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
山崎病院	切串	八月六日	四〇〇		身元引受人が判明、それぞれ引き取った。	九月十七日の水害で病院は全部流失、同時に収容所も閉鎖。
切串国民学校講堂	切串	八月六日				
正念寺	切串	八月六日				
津久茂国民学校	津久茂	八月六日	一四	不明	津久茂墓地	八月十日頃

広島市から避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、向側一・鷺部五・飛渡瀬一・秋月一・小用一・切串三・大須一・津久茂一の一四世帯であった。

三、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は、江田島村へ逃げて来た負傷者の治療だけに追われたので、市内へ派遣できなかったが、警防団は、町内各地区から七日、それぞれの船に分乗して出動し、八丁堀福屋から白島方面にかけて救護活動を展開した。

第三一項 安芸郡音戸町…828

地区の概要

音戸町は、倉橋島の北部にあり、広島市からは南、爆心地からの距離は約二五・〇キロメートルである。

隣町倉橋町と共に古くから開けた土地で、古刹来光山梵潮寺は名高い。

町の総面積は一八・一四平方キロメートルで、人口は一八、二二人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機は目撃しなかったが、その朝、恵木友一(当時・警防団副団長)の体験によれば、炸裂と同時に閃光を見たという。

ガラスの破損とか、建具が吹きとばされるということはなかったが、家屋が震動し、ビリビリとかなり響いた。

しかし、キノコ雲も見ず、広島市から焼けた物などが飛来するという事もなかった。

なお、この日、広島市の建物疎開作業にも出動していなかった。

二、避難者の状況

広島市からの避難者は別になかったが、当日、通学や商用で広島市へ行っていた町民とか、また、建物疎開による廃材を取りに行っていた人などが負傷したので、その関係家族が、舟で収容所に行き、連れて帰った。

昭和三十八年一月二十二日現在、原爆手帳保持者は三六九人、うち特別手帳保持者は一六三人である。この特別手帳保持者は、当日、通学や通勤、商用、あるいは廃材を取りに広島市に行っていて被爆したものである。

被爆者のうち死亡したものが相当数ある。

三、広島市救援状況

救援隊出動

医療救護班は出動しなかったが、十日、警防団員五〇人が舟で音戸町から市内江波町に上陸し、そこから徒歩で水主町県庁の焼跡に集合したうえ、トラックで小網町付近に出動し、救援活動をおこなった。

地区の概要

倉橋島(倉橋町)は、広島県の最南端にあり、愛媛・山口両県境に接している。古名を「長門島」と呼び、万葉集にも詠まれているが、神話時代すでに神武天皇御東征のときの軍船あるいは神功皇后の軍船の建造など伝えられ、奈良時代には遣唐使などの用船を建造、修理した。源平時代には平家の軍用船を多数建造、徳川時代に入ると各藩の用船を続々と建造し、明治以後、現代に至るまで、この優れた造船技術を継承している島である。

しかも国立公園瀬戸内海に浮ぶ島の一つであり、風光明媚、その桂浜は白砂青松の海水浴場として、広く一般に知られている。

造船工業のほか、ミカンの栽培が盛んで、海外にまで輸出されている。また、島の東部は野菜類を産出し、西部の葉タバコ耕作と共に有名である。

なお、海上輸送業は古い伝統に立脚して、独特な発展を続けており、町内の一部落所有の機帆船数は、その戸数に比例するという盛況で、全国一と称される。さらにまた、石材工業も全国的に名高く、特産サクラ御影石は国会議事堂に使用され、外国にも輸出されている。

倉橋町は、島の最南端部にあり、広島の爆心地からは約三二・八キロメートル離れている。町の総面積は、五四・一五平方キロメートルで、人口は一四、一七四人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機を目撃したものはなかったが、突然閃光を感じ、爆発音がきこえて来た。

しかし、爆風による被害はなく、家屋も農作物などにもなんら異状はなかった。

飛渡瀬の重油タンクか吉浦の火薬庫が爆発したのかと思われたが、そんな感じの入道雲が望見された。

この町には、広島市の国民学校児童の集団疎開はなく、またこの日、広島市の建物疎開作業には出動していなかった。

二、避難者の状況

六日午後七時ごろ、宇品から海路船便によって避難者が来はじめた。

歩行可能な者は、宇品～高尾間一日一往復の定期便を利用した。その他は別仕立ての、主として機帆船によって運ばれて来た。

避難者のほとんどは、この町出身者であったが、みんなボロボロのシャツやブラウス姿であった。それも外傷や火傷の程度のひどいものほど、衣服も損傷ひどく多くは半裸であった。

町に帰ることができず、広島市円の各収容所に収容された負傷者や、死者四一人を出した動員学徒の捜査のために、別船を仕立てて広島市に行き、見つけしだいこれに乗せて運んだ。これが八月十三日ごろまで続いた。

広島市から避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、次のとおりである。

区域名	世帯数	区域名	世帯数	区域名	世帯数	区域名	世帯数	区域名	世帯数
才の浦	三	石原浦	一	室生浦	二	長谷浦	二	大迫浦	一
松原浦	一	須川浦	三	灘浦	二	尾立浦	一二	海越浦	三
上河内浦	二	西宇土浦	一	宇和木浦	九	室尾西浦	八	鹿島下浦	一
小林浦	二	大向浦	一	釣士田浦	四	室尾東浦	一〇		

三、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は出動しなかったが、警防団員が、特別に船を仕立てて出動した。

室尾東浦は六日当日から八日まで、毎日九人延二七人が出動し、紙屋町付近で救護活動にあたった。

翌七日は大向浦二人、灘浦三人、釣士田浦四人がそれぞれ出動し、大向浦は千田町の広島赤十字病院及び宇品町十二丁目付近で九日まで、釣士田浦は似島収容所で同じく九日まで、また灘浦は丹那国民学校収容所で十日まで救護活動にあたった。

八日には、室生浦三人が島内大向国民学校で十二日まで働いたが、陸軍運輸部の機帆船に便乗して同校へ通った。

また、宇和木浦一人、海越浦三人が十日まで連日出動し、宇和木浦は御幸橋以南宇品地区周辺で、海越浦は住吉橋付近で活動した。

九日は鹿島上浦から一人、十日は鹿島下浦から三人、共に水主町付近で救護活動にあたった。

第三三項 高田郡白木町…832

地区の概要

白木町は、広島市の北東に位置し、爆心地から約二六・四キロメートルの距離がある。

往古から瀬戸内海文化と出雲文化の交流の要路にあり、国鉄芸備線の駅が井原市・志和口・上三田・中三田と四か所ある。

白木山(標高九〇〇メートル)は風光よくハイキングコースとして広く親しまれている。

昭和三十一年九月三十日、町村合併促進法に基づき、志屋・井原・高南・三田の四か村を加えて現在の白木町が発足した。

面積は九九・七八平方キロメートルで、人口九、三八五人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日午前八時、高田郡三田監視所の国友雪夫監視員は、広島市へ侵入する敵機を目撃した。機数はわからなかった。

監視員交替のとき、広島地区本部からの情報が入った。それによると B29らしい機体が四国豊後水道を北上し、江田島上空を旋回し、南方面に消え去ったということである。同時に警戒警報も解除となったが、そのあとであった。

午前八時十五分ごろ、ピカッと光ったかと思ったら、大きな音響が遠くからきこえてきた。

屋外に飛び出してみると、煙のようなキノコ雲が、大きくモウモウと広島上空に舞いあがり、それが周辺に広がると、たちまちにして薄赤色を帯びて広がった。今までの晴天の白木町上空は、そのため、霞がかかったような状態となった。

そして、落下傘らしい物が安佐郡方面に、落下するのが見られた。

大爆発音と同時に家屋が震動し、数秒後、爆風が襲来して、樹木はひどく音をたてて倒れんばかりになびいた。

なお、当日、現町域内各町村から広島市の建物疎開作業には出動していなかった。

二、避難者の状況

六日午前十時三十分ごろから、芸備線によって、続々と避難者が、町内の各駅に送られて来た。

これより先、広島市は火災となり、被爆者は相当数に上るとの情報があり、各地区の役場職員はさっそく被爆者の受入れ準備をおこなうよう命令が出て、午前十一時ごろまでに、各地区ごとに学校や隔離病院を臨時収容所として体制をととのえた。

中三田駅・志和口駅・井原市駅において、在郷軍人分会ならびに婦人会員が駅頭に避難者を出むかえ、湯茶の接待をおこなうと共に、在郷軍人会員は、被爆負傷者を担架にのせて駅から収容所へ運んだ。

被爆者はみんなひどく火傷するか、ガラスの破片その他で相当の負傷をしており、まともには見られない姿であった。

交通機関は杜絶して、芸備線鉄道による被爆者転送用列車も窓は破壊されたままで、矢賀駅から折りかえし運転した。

どの汽車も満員で、悲痛な叫び声が至るところから洩れきこえていた。無数の負傷者で救護活動も思うように手がとどかず、ただ列車の停車時間を利用してわずかな応急措置をとるのが精一杯であった。

三、避難者収容所の状況

白木町内の各駅に下車した負傷者は、次のように措置された。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
三田村立国民学校 (陸軍病院三田分院)	三田村	八月二日	八〇	一〇	三田村有	九月三十日
秋越村立国民学校 (右に同じ)	秋越村	八月二日	八〇	一五	秋越村	九月三十日

市川村立国民学校	市川村	八月二日	六〇	二〇	市川村	九月三十日
井原村隔離病舎	井原村	八月六日	三〇	五	井原村	八月二十日
井原村立国民学校陸軍病院	井原村	七月三十日	一〇〇	三〇	井原村	十一月二十日
志屋村立国民学校	志屋村	八月六日	—	—	—	八月二十日
秋越村隔離病舎	秋越村	八月六日	五〇	五	秋越村	八月二十日

なお、白木町に避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、三田村八〇世帯・秋越村六〇世帯・市川村四〇世帯・井原村五〇世帯・志屋村四〇世帯、合計二七〇世帯である。

四、広島市救援状況

救援状況

惨禍なまなましい広島市へ、井原村から医師一人が、七日から十一日まで五日間出動して医療救護にあたった。

また、警防団は七日から同十三日まで七日間毎日、秋越村・市川村・井原村・志屋村が、それぞれ二五人ずつ計一七五人が出動し、市内八丁堀付近の清掃作業をおこなった。出動にあたっては、それぞれの駅から汽車で矢賀駅まで行き、そこからトラックで入市した。

第三四項 高田郡向原町…836

地区の概要

現在の向原町は、昭和二十九年三月町村合併促進法により、有保村を吸収合併してできた町で、人口六、七五三人（昭和四十年十月一日国勢調査）である。

爆心地から東北約三四・六キロメートルの地点にあり、面積約八三・五一平方キロメートルで、その約八〇パーセントが山地、残り二〇パーセントが耕地である。町の南境に郡内最高峯の鷹の巣山（海拔九二二メートル）があり、和牛の改良など酪農産業が発展している。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

よく晴れていた。午前八時過ぎ、突然ラジオの騒音と同時に、電光に似た光りが障子にうつった。しばらくして、大砲を発したような音がきこえて来た。また何処かへ爆弾が投下されたなど直感した。

向原町役場の有田貢は、ちょうどそのとき、家のうちにいたが、外に出てみると、西方の彼方にはっきりと、松タケ型の白雲が立ち昇っているのを見た。

白雲は次第に上昇し、そのカサは大きくなると共に、ひだの部分黒くなり、あるいは赤くなっていくようであった。

その間、落下傘のようなものが落下していくのが見えた。煙はその後、長方形に変形して、長く雲間に残っていたようであった。

なお、広島市に侵入した敵機の目撃者は無く、原子爆弾炸裂による衝撃とか、爆風による飛来物などは別になかった。

また、向原町には、動員令による建物疎開作業隊の出動もなく、広島市からの疎开学童も受入れていなかった。

二、避難者の状況

当日、午後二時三十分ごろ、広島市矢賀駅から出た汽車によって、無残に引きさかれた着物に、まっ黒い顔をした避難者が向原駅に送られて来た。

汽車は、高田郡白木町井原の平岡薫（当時広島工機部勤務）が、矢賀駅にあった汽車を運転したものであった。以来、毎日数十人の被爆患者が収容された。

これらの避難者は、向原町坂の向原国民学校を収容所として救護し、収容所の閉鎖された九月三十日までに一、二〇〇人に達した。

このうち、死体の埋火葬概数は約一二〇体で、向原町坂の大宋山火葬場において処理された。

なお、広島市からの避難者のうち、そのまま向原町に定着居住した世帯は概数一〇世帯である。

地区の概要

吉田町は、広島市の北東約四五キロメートルを距てる位置にあり、天正十九年（一五九一）に毛利氏の広島入城まで、三〇〇年近くのをあいだ、その拠城を置いていたところである。

広島市の被爆当時の行政区域は、従前からの吉田町と、丹比村・可愛村・郷野村の四か町村に分れていたが、昭和二十八年四月一日、この四か町村が合併して新しく吉田町として発足した。

町域面積八五・三四平方キロメートル、人口一、三三五人（昭和四十年年度国勢調査）である。

なお、爆心地からの至近距離は約三七・六キロメートル、最遠長距離は約五四・九キロメートルである。

被爆当時、吉田町には、広島陸軍幼年学校および広島女子高等師範学校が疎開して来ており、さらに、広島聾啞学校や呉市の国民学校児童が、次表のとおり町内各寺院に相当数疎開して来ていた。

広島市内の国民学校児童の疎開に関しては聾啞学校関係の児童以外には受入れていなかった。

疎開児童受入れ状況

收容場所	所在地	学校名・收容児童数	期 間
徳栄寺	吉田町大賀屋	呉市 清水国民学校 六〇人	昭和二十年四月から九月まで
善立寺	郷野村八江	呉市 上山田国民学校 四〇	
広浄寺	郷野村桂	呉市 上山田国民学校 四〇	
長楽寺	丹比村多治比	呉市 清水国民学校 五〇	
法円寺	可愛村竹原	呉市 上山田国民学校 六〇	
円浄寺	可愛村山手	呉市 清水国民学校 六〇	
浄門寺	吉田町大賀屋	広島市 広島聾啞学校 五〇	昭和二十年五月から昭和二十一年十二月十五日まで
法専寺	吉田町六日市	広島市 広島聾啞学校 六〇	

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市侵入の敵機も、また原子爆弾投下後に急ぎ離脱した機影も、目撃者がなかったようである。

また、敵機からの落下物は何もなかった。

当町の中心部は山間の盆地であるから、広島市被爆時、強い閃光をその上空に感じた。

その直後、ダ・ダ・ダ・ダーンと地ひびきに似た衝撃がつつわって来たが、さして強烈なものではなく、営造物などの被害はなかった。

ほとんどの住民は、当時高田郡根野村に建設中であった海軍飛行場が爆撃されたものと直感した。

そして、しばらくしてその方向にあたって巨大な入道雲が望見された。これが原子爆弾の炸裂によって、広島市上空に立ち昇ったキノコ雲の上部であったと思われる。爆風による飛来物などは何もなかった。

広島市の惨状は、当日午前十時ごろに可愛村常夏の杉村六郎と、吉田町の南条某の両人が、被爆負傷した姿のまま、町役場に立ちより、広島市が一瞬にして火災となり、ほとんどの人が火傷を受け、死亡しているだろうと口頭で伝えてから、はじめて知った。

当日正午過ぎごろから、広島市からの避難者群の最初の人々が、吉田町へ到着しはじめた。

これらの人々は、そのほとんどが半裸体姿であり、火傷のため赤黒く腫れ、重傷や軽傷を受けていた。

すでに息たえだえで、今にも倒れてしまいそうな避難者もいた。

辛うじて広島市を脱出した人々は、安佐郡祇園町・可部町を経て、国道を徒歩やトラックで当町にたどりついた者や、国鉄芸備線によって吉田口駅まで逃げて来て、そこから歩いて町へ入って来たものであった。

多くの負傷者のなかには、ごくまれに普通の戦時服姿の無傷の人も見受けられたが、後から後から見るにたえないすがたの避難者群が続いて来た。

このような状況が、被爆翌々日の八日の正午ごろまで続いた。

二、避難者の状況

陸続と町に入って来る避難者の、見るも無残な様相を見て、当町ではただちに收容と治療を開始した。

これら負傷者を、吉田病院に收容して手当をしたが、つぎつぎに到着する多数の人々を收容しきれず、臨時に高田地方事務所の会議室、ならびに吉田国民学校の特別教室とを收容所にあてた。

町内の医師・看護婦・婦人会員・女学生などを総動員して、被爆者の看護や施療、炊出しをおこなった。

收容人員は、八月六日から同月三十一日まで約二二〇人で、この間約一〇〇人が死亡した。

これら死亡者は、青山火葬場、ならびに吉田町貴船に急設した貴船仮火葬場とで荼毘にふした。身元判明者の遺骨は、その遺族や縁故関係者に渡し、身元不明者の遺骨三六体は、徳栄寺に埋葬した。

毎年の盆会には、吉田町社会福祉協議会・同婦人会・同原爆被害者の会が、この埋葬場所で供養を続けている。

なお、郷野村では、郷野国民学校内に郷野収容所を開設し、六日当日から二三人を収容し、八月十四日に閉鎖した。

三、広島市救援状況

救援隊出動

六日朝九時ごろ、吉田警察署から医療担当機関および各町村駐在保健婦に対し、広島市救護についての出動要請があった。

一同は、ただちに吉田警察署に集合し、吉田の井上敏夫医師を団長として、九時半にトラックで急遽広島市へ出動した。

この迅速な行動は、かねて県当局から配布されていた「医療関係者召集要綱」に基づく、平常の組織的な訓練で、いつでも出動できる体制が整えられていたからであった。

医療救護班は、可部・緑井・広島市と、転々と各救護所をめぐって活動した。

吉田町の吉田農学校に本部を置く高田部隊(広島地区特設警備隊中国三二〇四九部隊)では、約二〇人の警備隊を編成し、午後七時三十分ごろ、トラックに乗り町内の人々の見送りを受けて出動した。

また、翼賛壮年団員約一〇人が、本部からの指令を受けて、救援のにぎりめし四、〇〇〇人分を準備し、同夜、広島市へ向け出発、午後十時ごろ横川町の三篠信用組建物内の、仮設救護指令所に届けた。そのあと、七日午前二時ごろまで付近の整理作業にあたった。

広島市救援に出動した警防団の活動状況は、つぎのとおりである。

吉田町	三〇人ずつ三日間	延九〇人
可愛村	三〇人ずつ三日間	延九〇人
丹比村	一五人ずつ三日間	延四五人
郷野村	一五人ずつ三日間	延四五人

いずれも六日・七日・八日の三日間出動したもので、国道広島～松江線をトラックに乗って往復し、入市後は、横川町から爆心地付近の猿楽町にかけての地域で、焼跡の整理作業にあたった。

広島駅へ行って、ただ広島の様子を見ただけで帰ってきて、髪の毛が脱け出した例があった(広島原爆医療史、未兼英一医師談)と、いわれているが、吉田町から広島市救援に出動した人々で、現在、原爆症状の出ている人はいない。

四、避難者の定着状況

広島市から避難して来た人々で、結局そのまま現在の吉田町区域内に定着居住した世帯数は、つぎのとおりである。

高田郡吉田町 六三世帯

高田郡丹比村 三三世帯

高田郡可愛村 四九世帯

高田郡郷野村 四二世帯

なお、被爆者健康手帳保持者は、昭和四十二年七月末現在で次のとおりである。

特別手帳 七二一人

一般手帳 九〇人

[第三六項 高田郡甲田町](#)…843

地区の概要

甲田町は、広島市の東北にあたり、爆心地からの距離は約四五・八キロメートルである。

昭和三十一年四月一日、甲立町と小田村が合併して新発足した町で、町名は当時の大原博夫県知事の命名による。

町の中央を可愛川が貫流し、これを中心として農耕生産が発展した。また川を挟んで東南に国鉄芸備線が走っており、北西に一級国道広島～松江線が貫通していて、近時さらに町勢の進展を見せている。

この地域は往古から開けた土地で、五龍山城跡、祝城跡、釜が城跡、中山城跡など史蹟が多く、高林坊はその庭園と共に、安芸の名刹として名高い。

町の総面積は七二・九四平方キロメートルで、人口は七、四三三人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

八時過ぎ、稲光りのように空が光った。そして大砲の音くらいの爆発音がして、甲立町西南方面の山上からキノコ雲の立ち昇るのが目撃されたが、爆風の衝撃は感じなかった。キノコ雲は小田村からも望見された。

この日、広島市の建物疎開作業に勤労奉仕隊として小田村から七人が出動していた。

なお、広島市から国民学校の児童が約六〇人ほど縁故疎開で来ていた。

二、避難者の状況

六日午前十一時ごろ、広島市から汽車で最初の避難者が到着して、はじめて惨禍の実態に触れた。

矢賀駅から芸備線に乗って来たものであるが、トラックで運ばれた避難者も多勢いた。トラックの避難者は負傷者や火傷者がとくに多かった。

広島市からの第一便午前十一時着の列車では比較的軽い負傷者が多かったが、午後三時ごろの第二便からはひどい火傷者や重傷者が続々と到着しはじめた。

この町出身者のみでなく、他の町の避難者もいたので、その縁故へ連絡したり、負傷の手当をしたりして土地の人は多忙をきわめた。

甲立町では一応全員を甲立国民学校に収容したが、重傷者はタンカや荷車を利用して運んだ。そして近辺に知人や親類などのある人はすぐに連絡を取った。

トラックで運ばれた重傷者は、荷台の床にワラを敷いて寝かされていたが、トラックの震動で、腫れあがった火傷場所がつぶれており、なんとも言えない異様な臭気を放っていた。しかし、これら負傷者に対してどんな治療をしてよいのか判らず、ただアカチンを塗るのが精一杯であった。

治療には、吉田町の吉田病院と、県立甲立保健所並びに足利医院から医師・看護婦の応援を求めた。

また、甲立町婦人会は、にぎりめしや漬ものを避難者に配給すると共に、広島市内へもにぎりめしをトラックでどんどん運んだ。

小田村では、平日の九時四十分ごろの汽車が十一時ごろ延着したが、これで負傷した村民が二人かえって来て、広島市の実情がようやく詳しく判ったのである。

午後三時ごろの第二便で相当数の人が帰って来たが、村出身者だけでなく他の人も幾人かがここで下車した。

吉田口駅前の木坂旅館、松村旅館に避難者を収容し、負傷者の治療をおこなった。しかし治療は、医師が全員広島市救援のため派遣されたし、薬品もなかったので、小田村の保健婦に依頼しておこなった。この保健婦もまた西村医師と共に広島市に派遣されたので、役場吏員三人が自宅にも帰らず、昼夜の別なく看護にあたった。その間一週間くらいであった。

各収容所の状況については、次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
甲立国民学校	甲立町	八月八日	約一六〇	八	公設火葬場	八月十八日
木坂旅館	小田村	八月七日	三五	—	—	八月十四日
松村旅館	小田村	八月七日	四一	—	—	八月十五日

広島市からの避難者で、そのまま町内に定着居住した世帯は約一七世帯である。

三、広島市救援状況

救護状況

甲立町から医師一人が、八日から二十四日まで一七日間、出動して医療活動をおこなった。一方甲立町警防団は、七日から十五日まで九日間、一日平均五二人が甲立駅から汽車で広島に出動し、相生橋・横川・三篠付近一帯にかけての死体処理作業にあたった。

小田村からは、医師並びに看護婦各一人が六、七両日トラックで、つぎに十七、十八両日、さらに二十二日から二十四日まで汽車で出動、六、七日は市役所で、他は観音国民学校収容所で医療活動をおこなった。

また、小田村警防団は、八日から十五日まで八日間、二六人延一九二人が芸備自動車に分乗し、吉田町経由で入市、横川橋付近に下車して数班に分れ、それぞれ救援活動にあたった。

地区の概要

志和町は、広島市の東北東に位置し、爆心地からの最短距離は約一五・二キロメートル、最遠長距離は約二七・五キロメートルである。

昭和三十年八月一日、東志和村・志和堀村・西志和村が合体して、志和町となった。

地域面積は六六・四九平方キロメートル、人口七、五六四人(昭和四十年年度国勢調査)で、山間に所在する農村である。

地形的に周囲が山でかこまれており、距離的にも爆心地から遠くはなれていたから、原子爆弾炸裂の影響は、わずかに閃光と爆発音を認めた程度で、まったく軽微であった。

なお、志和町には、広島市内の国民学校児童の疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市を襲撃した敵機を目撃したものはなかった。

爆弾の炸裂時には、閃光が感ぜられ、爆発音をきいたが、何らその影響はなかった。

入道雲状の大きな黒煙が見られたが、村民には、ただ火事のけむりくらいにしか思えなかった。

広島市の周辺地区のような、原子爆弾の炸裂による飛来物はなかった。

なお、六日朝、広島市の建物疎開作業に出動した者はなかった。

また、広島市からの避難者もなかった。

二、広島市救援状況

救護状況

警防団は、六日当日から十五日までの十日間、広島市へ出動して救護作業にあたった。

出動にはトラックが使用され、作業場所はその日その日の指令に従って従事し、その範囲は火災地域全般にわたっていた。

出動人員

東志和村 延約一二〇人

志和堀村 延約一二〇人

西志和村 延約二四〇人

なお、現在、原爆手帳の発行状況は、つぎのとおりである。

特別手帳 四九八通

普通手帳 五三通

地区の概要

当町は、呉市の北東に隣接し、広島市の爆心地から最短距離東南に約一五・五キロメートル、最遠長距離東南に約二七・五キロメートルへだたったところに在る。

昭和二十九年三月三十一日に、上黒瀬・乃美尾村・中黒瀬・下黒瀬の四か村が合体し、あたらしく黒瀬町として発足した。後に、板城村の一部が編入されて現在に及んでいる。

地域面積は、約六五平方キロメートルで、そのほとんどが山林で占められている。人口は九、一八八人(昭和四十年年度国勢調査)で、もっぱら農業によって生計をたてている。

黒瀬町への交通便としては、呉方面や山陽本線沿線の西条町からの便は多いが、広島市方面からの道は難路のため、わずかのバス便しかないほど交通不便である。

なお、この地域には、広島市からの国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機の見撃者は、一般住民のうちにはあまり無かったようである。

黒瀬町は山林地帯で、周囲が山にかこまれているためか、六日朝、ピカッと光ったのと同時に、地ひびきを感じ、しばらくして戸や障子がビリッビリッと震動したが、それ以上の大きな衝撃はなく、家屋の被害もまったく無かった。

爆発後、当町の西北西の町ざかい付近にあるコタ山とイラスケ山のあいだがら、五〇メートルぐらいの上空まで、白い雲が盛りあがっている状態が見られた。

乃美尾村の賀茂海軍衛生学校では、将来海軍の中堅幹部となる普通科練習生たちの卒業試験がはじまっていたが、その生徒の一人西家明男衛生上等兵は、次のように状況を報告している。

「八月六日朝、教室に向っていると、突然、空襲警報が鳴り、何(機種)の来襲かと空を仰ぎみれば、すでに上空を高く B29 が飛来しており、待避命令は出されない。B29 一機や二機が高空で飛んでいるのは、最近毎日のことで、そのたびに待避していたのでは、勉強ならず『また B29 か』と思いながら校舎に入り、廊下を歩いていると、一瞬、稲光りのような閃光と同時に、ガラス越しに、針のようなものに刺される感じを受け、底力のある音のようなものがした。びっくりして外をのぞくと、西の上空を B29 が急旋回しており、思わず外にとびだした。見ると、西方の山の稜線から、何か広く大きな煙の雲がのぞき出し、それがだんだんと上昇しはじめ、ちょうど大型の入道雲に似て成長した。この異様な雲は、長い尾を引いて、なおも無気味に上昇を続けた。

相当高空に達するまで見ていたが『これは何かあったな』と直感した。その日の夕がたごろ、広島市が敵の新兵器爆弾らしきもので全滅したと聞いた。そして、近くの兵舎にいた衛生学校の学生隊が救護のため、急ぎ出動した。」

また、八日に出動した同衛生学校の杉村脩一救護隊長は「空襲警報がなり、急ぎ外へ出て、頭上 B29 機が西方へ行くを見ていると、まもなく目もくらむような閃光、つづいてキノコのような雲がモクモクと空に昇るのが見られた。そして、耳の底にズーンとくるような重い爆発音がし、そのあと二つか三つの落下傘が見えた。ある者は日本に新兵器ができて、B29 を一挙に落したとか、或いは、広島火薬庫が爆発したとか、新しい爆弾を投下したとか言って諸説紛々…」と、報告している。

なお、この地域には、広島市からの飛来物は何もなかった。

広島市内の建物疎開作業への義勇隊出動はなかった。

二、避難者の状況

距離的に言えば、広島市からさほど遠く離れているわけではなかったが、山の坂道を通らねばならない不便さのためか、他の広島市周辺地区のような混乱は起きなかった。

被爆直後、ただちに帰って来た村民は少なく、当日は一応、焼失をまぬがれた市内の親類や知人の家に一泊して、翌日か翌々日になって帰って来たようである。

このような状況であったから、当町においては、特別に避難者収容所を設置するということとはしなかった。

各村に帰って来た負傷者のうち、ただちに死亡した者はなく、相当な期間が経って死亡した者は、その縁故者が各自、普通の方法で茶毘に付した。

なお、当町に避難してそのまま定着居住した世帯は次のとおりである。

上黒瀬村 一三世帯
乃美尾村 三四世帯
中黒瀬村 一〇〇世帯
下黒瀬村 三二世帯

三、広島市救援状況

救援状況

広島市被爆による医療救護班は賀茂海軍衛生学校を除いて一般では出動しなかったが、警防団員はつぎのとおり出動して、大いに活動した。

村名	出動期間	出動日数	出動数		出動場所	入市経路
			人員	延人員		
上黒瀬村	八月八日	一日	一五人	一五人	市内一円	黒瀬－西条－海田－広島 トラック利用
乃美尾村	八月八日と九日	二	一〇	二〇	己斐国民学校	広経由－広島 トラック利用
中黒瀬村	八月八日	一	二五	二五	草津国民学校	黒瀬－広－海田－広島 トラック利用

下黒瀬村	八月八日	一	一五	一五	市内	広―海田―広島	トラック利用
------	------	---	----	----	----	---------	--------

第三九項 賀茂郡八本松町…853

地区の概要

八本松町は、広島市の東方にある。昭和三十一年九月一日、川上村・原村・吉川村の三か村が合体して八本松町となった。

爆心地からの距離は、最も近いところが約一七・五キロメートルで、最も遠い地点は約二四・七キロメートルである。

面積五四・八九平方キロメートル、人口八、五九二人(昭和四十年十月一日国勢調査)で、農業を主とする山村である。

被爆時、広島市内国民学校の疎開児童受入れはなかったが、原村の教順寺ほか一か所に、農村動員で高等師範学校附属中学校の引率教師四人、一年生一二〇人が宿泊していた。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

当日午前七時過ぎごろ、川上村大字宗吉の海軍弾薬庫上空と思われるあたりに、高度約一万メートルの敵機三機を認めた。二、三回旋回して東方に去り、約一〇分くらいの後、もとの位置にもどって来て、再び旋回すること二、三回で進路を東方にとり、川上村大字正力上空において、機首を南方にめぐらして去ったが、そのまま現れることはなかった。

後日の情報を総合してみると、広島市を攻撃した原子爆弾搭載機の待機の飛行機であったのではなかろうかと、目撃者の同村伊藤実成(伝承場僧侶)が報告している。

八時十五分ごろ、室内にいた者でも閃光が感じられた。そのあと一分ぐらいして、鈍い音響を聞いた。

障子が、爆風の影響でいくらかビリビリと震動した。

村民たちは、みんな宗吉の弾薬庫か、瀬野川あたりに爆弾が投下されたのではないかと思った。

八本松辺からは、落下傘三個が北の方へ落ちていくのが望見された。また、陸軍演習場のあった原村の役場付近では、別添の久保木勝美の報告のごとく、広島市上空に立ち昇るキノコ型の雲がよく眺められた。しかし、爆風による広島市からの飛来物は何もなかった。

二、避難者の状況

六日正午ごろから、汽車で村の身内をたよって避難者が来はじめた。それ以後、汽車の到着するたび三時、五時と夜間にかけて、ポツリポツリと避難者が到着した。八本松駅前の倉田セツ子宅には、身内の避難者がいちじに一七人になったので、村の公会堂を借りて泊らせるようなこともあった。しかし、特別に収容所を開設するほどのことはなかった。

三、広島市救援状況

救援隊出動

六日から三日間、警防団が三か村から出動し、いずれも東練兵場・基町・流川町・八丁堀・袋町・猿楽町・水主町・比治山で、負傷者の収容や死体の収容作業にあたった。

出動にあたっては、トラックで直接広島市内に入った班と、汽車を利用した班とがあったが、汽車を利用した班は、八本松駅から海田市駅まで汽車で行ったものの、海田市駅からは汽車不通で、あとは徒歩で市中に入った。

出動人員は、川上村が延約四五〇人、原村延約三六〇人、吉川村延約一五〇人である。

四、その他

広島市から避難して来て、そのまま定住した世帯は、川上村二〇世帯、原村五世帯、吉川村二世帯である。

その瞬間、望見の記

久保木勝美(談)

(望見場所・賀茂郡原村(現在八本松町)爆心地から約二二キロメートル。当時、西條農業学校二年生)

警戒警報も解除になったし、腹具合が悪くて学校も休んでいたのも、朝食後、ゆっくり母や兄と食卓をかこんで雑談をしているときであった。

突然、家の真上で、金属性の特徴のある B29 の爆音がきこえた。

兄も私も「あ、B29 だ。」といった。

「飛行機雲を見たことがないから、出て見よう。」と、母が起ったので、兄も私もついて起ち、家の裏へ出た。家の裏は、一帯が畑地で、広島市が真西にあたるころであった。

空を仰ぐと、ちょうど頭上の、相当な高度のところには飛行雲が二本出ていた。いつもなら、ずっと後方遠くから飛行雲がえがかれているのに、その日にかぎり、頭上ま上から飛行雲が生じて西の方へ走っていた。今から考えると、仰ぎみた頭上がまさに、原爆搭載機が超高空から急降下して来て、投下姿勢を取った原点であったことがうなずかれる。

そして、三個ほど横にならんで相当大きな落下傘が、ふんわりと気流に乗ってただよいながら、降下していくのが眺められた。

同時に一機の B29 が、その落下傘の列と交叉する角度の、北の方にむかって、まるで慌てふためいて逃げ去るという形容がピッタリの姿で、飛び去っていくのを見た。その B29 は、わりと大きく見えた。朝日に美しく映えて銀色の機体をキラキラと光らせていた。

落下傘を見ながら「あれは何だろうか」と話しあっているそのとき、一瞬、巨大な白熱光がまぶしく眼を射た。まるで朝日が西から出たようであった。とっさに三人とも家の中へとびこんだ。

おそるおそる裏木戸のところから顔をのぞかせてみると、上ツつらが桃色で下方が紫色に染まった綿菓子のような雲が、中天にむかって、内側から外側へ、外側は内側へ巻きこまれながら、ぐんぐんと膨脹して昇った。

巨大な、今にもこちらに迫って来るようなその怪雲をみているとき、爆風に襲われた。

爆風は、体を押しつけるように非常に強く通過した。家がギュッときしむような感じがした。畑の野菜や樹木があまり震えざわめいた。

「ガスタンクがやられたのだろうか」と、こもこも話していると、まっ黒く鈍重な、夕立雲をもっと黒くしたような、わりあい扁平な雲が湧き出た。二、三時間後には、西方一帯を雲とも煙ともつかないとぼりが、ずっと広くおおっていた。翌日になってもこのとぼりが広島市上空にかかっていた。

広島市全滅の報は、午後になってから隣家の婦人が知らせてくれた。

六日の夜なか、所用で広島へ出ていた村のある中年夫婦が、焼けただれて帰って来て、不安は深刻になるばかりであった。

警防団出動の記

賀茂郡八本松町大字正力

蔵田良見(当時・警防団救援隊)

一、この日は、朝から暑さもきびしい様相の日でありました。俗にいいます処の日本晴れの雲一点とない、良いお天気でございましたので、私は、この朝早くから食糧増産にと思い、田圃に出まして草とりをしておりました。

二、そのため原爆投下時は、田の中においてあの青白い強烈な閃光を見ました。田圃よりふり仰ぐと、西の空高く、銀色に輝く四発の敵飛行機が、一機また一機、急旋回しており何か落下傘の様な物が一つ、二つ落ちていくように見えましたが、やがて地軸をゆるがすような大音響が、ドドーンとひびき、虹のような赤、青、茶褐色を帯びた巨大な煙が、雲の柱のように立ち昇ると見るまに、どンドン茸状に広がって白煙と黒煙との物凄く有様となりました。余りの奇怪さに家族一同の者と呆然とし、「広島市のガスタンクの爆発じゃろう。」「いや火薬庫の爆発だろ。」、あるいは「向洋の製鋼所が爆破されたらしい。」と、とりどりの推測に不安はつのるばかりでありました。

三、十時頃であったと思います。賀茂郡川上村(現在・八本松町)役場からの伝令が、私の部落に参りまして、広島市に新型爆弾が投下され、全市が壊滅的打撃を受けたことを伝え、警防団員に救護活動出動要請をしました。出動を命ぜられた団員半数は、ただちに救援に向いました。救援隊は第一班・第二班・第三班の三班に別れ、被災者救援にあたるよう、役場より通達があり、第一班は、六日午後三時頃、列車あるいは自動車にてむかい、その日団員は救援後東練兵場で野宿の一泊をして、明朝第二班と交替をしました。私はこの二班に入っておりました。

第二班は七日、八本松駅に集合をして、八本松発午前六時の列車にて向洋駅に到着し、徒歩にて広島駅を目標にと

参りました。はっきりしたことはわかりませんが、西蟹屋町あたりから爆風によって満足な建物はほとんどみられず、東練兵場に近づくにつれて、次第に街は焼土の原と化し、コンクリートの建物の原型だけが残っていたり、ボロボロに破れたわずかの衣服を身にまとい、さまよう被災者にでくわしました。

四、このような状況の中を通り過ぎて、私たちは車練兵場に到着しました。その後わずかな休憩の後、東照宮付近であったと思う仮収容所に、タンカで被災者を運びました。被災者の多くは、顔がズルズルになったり、皮膚をたらしたりして、中には、我が子を我が親を、呼び捜す人々、息絶えだえに「死んでもよいから、水をくれ」と手を合わせて訴え、余りにも頼みに水を与えると、呑みほしたまま目の前で、息をひきとる者もありました。

仮収容所の医師は、水を与えると死んでしまうから、絶対に与えないようにとのことでしたが、このような状況下にあっては、無理におし通すことも出来ませんでした。最近被爆者の中には、あの時水を飲んだので、私は助ったのだと言う人もあり、我々素人には、どれが真実か、わかりません。

また、七日午前三時ごろから、大日本国防婦人会が、被災者のための食糧にと作ったにぎり飯をも配りました。このにぎり飯は、川上大日本婦人会が、六百戸の農家から集めた三石位の米で作られたもので、急なことで大変なご苦労を、なされたようです。配給においては、元気なかたは食べられましたが、中にはにぎり飯をもったまま死んでしまわれた人々も、沢山ありました。

七日午後三時頃まで、このような救援にあたり、その後西條警察署命令により、東練兵場の被災者たちに名残りを告げて、栄橋を通り、広島城の北を通って、己斐駅付近にある明法寺にいき、境内にある死体処理にあたりました。

第四〇項 賀茂郡西条町…859

地区の概要

現在の西条町は、町村合併促進法に基づき、つぎの町村が合併したものである。

下三永村・賀永村、昭和三十年一月一日西条町へ編入

郷田村・板城村、昭和三十年三月三十一日西条町へ編入

寺西町、昭和三十四年十月一日西条町へ編入

当町は広島市の東北東にあつて、最短距離約一八キロメートル、最遠長距離約三二・七キロメートル、面積九三、七八平方キロメートル、人口二二、四一三人(昭和四十年年度国勢調査)で、近辺山間町村の指導的地位にあり、行政的にも重要な役割をもっている。

また、広島市との関係は政治的にも経済的にも密接なものがあり、一例では、賀茂鶴酒醸会社は、西条糧秣支廠となり、某大尉のもと、女工約二〇〇人が牛肉その他の罐詰を製造していた。

とくに当町の住民の中には、広島市やその近辺に職を求めている者、広島市内の学校に通学している学生が相当数あつて、この日もまた平常通り通勤・通学していた。遠隔地からの通勤・通学であるから、警報の有無によって出勤を操作するのは困難なことで、時間どおりに出勤するのは日常のことであつた。通勤・通学者以外の人も、同じ状況であつた。

なお、広島市内国民学校の学童の疎開受入れはなかつた。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市襲撃の敵機と思われる一機が、西から東南へむかつて行くのを、西条町大字下見の下見農業協同組合から目撃された(井村武刀談)。

原子爆弾炸裂時には、閃光を感じたが、人体に対して衝撃はなく、建物・樹木・農作物にも被害はなかつた。閃光を感じたのはほとんどの人であるが、爆発音は、聞いた人もあり、聞かなかつた人もある。爆発音を聞いた人は、何の爆発か不審に思って話合つたが、広島のカスタンクの爆発ではないかぐらいのことであつた。昼を過ぎて、被爆した西条町の者が帰り着いて、はじめてその実態を知り、被爆者の様相から爆発の物凄さをうかがい知つたのであつた。

一部の人は、爆発音と同時に「キノコ雲」が瀬野の大山方面に上がるのを望見し、その後、広島方面が白雲に覆われたと報告している。

なお、炸裂時に広島市から物件が飛来するという事はなかつた。

広島市内の建物疎開作業には、西条町近辺の町村が交替で出動することになっていたが、当日は賀茂郡河内町が当番にあっていたため、当町から出動した作業隊員は一人もいなかった。

前日五日に出動した作業隊はつぎのとおりである。

西条町 一人
郷田村 一人
板城村 一人
下三永村 一人

二、避難者の状況

六日午後一時ごろから、九日午後十時ごろまでの間、大部分の被爆者は汽車で、一部の人はトラックに便乗して避難してきた。これらの人のほとんどは、当町在住の通勤者・通学者で、九死に一生を得てやっと逃げ帰ることができた人たちであった。

その姿は、被爆したときの姿そのまま、着物は焼け千切れ、全身各所に火傷や負傷を受けて血まみれになっており、爆発の強烈さを如実に偲ばせるものがあった。

降って湧いたような負傷者の到来に施す術もなかったが、とりあえず国立広島療養所を応急収容所にして、次のように被爆者を治療した。

収容患者数 一五四人
外来患者数 一三八人

このほか、一時的には西条町望月料亭、及びその付近の民家に相当数の患者を収容した。

死亡者で身元不明の者一〇体が、西条町猪道の町有山林に埋葬してある。

なお、広島市から避難して定着居住した世帯数は、つぎのとおりである。

西条町 一〇〇世帯
郷田村 二〇世帯
板城村 二〇世帯
下三永村 二〇世帯

三、広島市救援状況

救援隊出動

(1) 救護班出動概況

西条療養所において救護班が編成され、八月六日から九月十日頃まで出動した。

(イ) 出動人員

医師 五人 延一〇〇人
看護婦 二〇人 延四〇〇人
その他 四人 延八〇人

(ロ) 出動の状態

八月十五日まで毎日 総員約二九人
八月末日まで毎日 総員約一五人
九月以降は一日おきに総員約一五人

国立療養所へ警察署から救護班の出動の要請があり、ただちに救護班が編成され、警察署のトラックで広島市大洲町の派出所前までいったが、警官によって、市中への立入りをしゃ断されていた。救護班は警察の要請によって出動した救護班であることを告げたが、命令の不徹底のためか、立ち入ることの危険性を考えての措置であったのか、市中へ一歩でも入ることは許可されなかった。やむなく改めて指示を受け、青崎国民学校の避難者の救護治療に当ることになった。その日は、患者の強い要望もあって、遅くまで治療を行ない、治療をおわって療養所に帰ったのは、夜半の三時ごろであった。

八日、はじめて市中の被爆者の治療に出動することになり、本川国民学校・己斐国民学校・草津国民学校の各応急収容所を巡回したが、殊に本川国民学校収容所の患者は悲惨であった。床の上にゴロ寝している患者は、みな灰をかぶっていて、一見して生死の区別がつかなかった。膨大な負傷者を前にして、動いている者だけを、二階の教室に運んで治療をしたが、その他の人は見捨てる結果になった。この事実は、救護隊員にとって、今なお古傷のように脳裏

から消え去らないという。

八月十七日、岡山療養所から医官など七人が応援に馳せつけて来て、大いに医療活動がはかどった。

九月四日に至って、「本日午後一時より大会議室に於て所長殿より原子爆弾の人体に及ぼす影響に就いて研究的発表あるを以て左記各位は事務支障なき限り集合相成り度回章候也」という回章があった。医療に関する指示があったのはこれが初めてであったが、これにより病状及び医療法が明示された。

(2) 警防団出動概況

(イ) 出動人員

町名	出動期間	日数	実人員	延人員
西条町	七日～二十日	五	一八〇	九〇〇
郷田村	七日～二十日	三	一三〇	三九〇
板城村	七日～二十日	三	一二〇	三六〇
下三永村	七日～二十日	三	五五	一六五

(ロ) 出動地区

西条町 広島駅前・八丁堀・流川町

郷田村 同右

板城村 流川町を主にし、その東側地区

下三永村 八丁堀・横川地区

なお、板城村は白米一石五斗の炊出しを行ない、トラックで己斐派出所に送り届けたという記録が残されている。

第四一項 山県郡戸河内町…865

地区の概要

戸河内町は、広島市の西北にあたり、爆心地からの距離は約二九・八キロメートルである。

昭和三十一年九月一日、戸河内町と上殿村が合併して新発足した。

町は西中国山岳群に源を発する河川に沿って、耕地・集落があり、産業は林業主体の農業地帯である。

特別名勝県立公園三段峡は、溪谷・山岳・高原の総合的景勝で名高く、春夏秋冬まったく別世界のように美しい。

また、深入山、恐羅漢山群は、関西地方屈指のスキー場である。

町の総面積は一九一・〇九平方キロメートルで、人口は六、〇一九人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日朝、飛行機の爆音をきいたという者もあるが、それが原子爆弾搭載機のものであったかどうかは不明である。

突然、光ったのが見えた。それから五〇メートルくらい歩いたころ、地ひびきが伝わって来た。軽度の地震のようであった。

町内の建物などの被害はなかったが、午前十時過ぎごろから雷鳴、稲光りがあり、山の上に黒雲がはじめポーッと昇り、たちまち空全体をおおった。

終日、うす暗い天候となり、太陽もまともに見ることができるといえるほど赤く見えた。

昼ごろ、葉包紙・新聞紙・雑誌類、その他軍関係のものと思われる書類の焼けた紙片、あるいは焼けてないものが多数飛来した。中には十円札も多数あったし、変わったものでは石の破片がたくさん飛んで来た。

この日、広島市の建物疎開作業のための出動はなかった。

なお、広島市の国民学校児童が、次のとおり町内の各寺院に集団疎開をしていた。

収容場所	所在地	収容者数	収容年月日	閉鎖年月日
専正寺	戸河内町	四二	昭和二十年四月十四日	昭和二十年九月二十五日
道教寺	戸河内町		昭和二十年四月十四日	昭和二十年九月二十五日
西善寺	戸河内町	四九	昭和二十年四月十三日	昭和二十年九月二十五日

戸河内町に疎開したのは竹屋国民学校児童であったが、専正寺と道教寺に収容していた児童のうち、終戦後、父兄が連れに来ない児童一六、七人が、収容所閉鎖後は二、三日くらい民家に引取られていたが、後に、広島市へ収容された。西善寺の児童二、三人は、帰る家がなくなったが、一応広島へ歩いて出たという。

二、避難者の状況

広島市の被爆によって交通はまったく杜絶した。避難者のうち二、三人は、身寄りのないものであったが、ほとんどはこの戸河内町からの出身者であって、それぞれの縁故先をたよっていった。身寄りのない二、三人も、民家が世話をしたが、混乱が落ち着くと、またいずれかに移って行った。

避難者はいずれも着のみ着のままで、何一つ持っているものはなく、命からがらのありさまであった。しかも、市内から徒歩でほとんどの者が、横川町－可部町－飯室－加計経由で、やっとたどりついた。途中、大半のものが飯室付近で一泊して翌七日に帰って来た。

避難者らはその縁故先に身を寄せたので、特別に収容所を開設することはなかった。昭和三十八年九月二十六日現在、原爆手帳保持者が二四五世帯約三〇〇人くらいいる。

町に避難して来てそのまま定着居住した世帯は、戸河内町三〇世帯、上殿村五世帯である。

三、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は出動しなかったが、警防団員は、被爆の翌七日から十日まで、戸河内町七〇人、上殿村三〇人が出動した。出動は、七日午前四時に加計警察署に集合し、そこからトラックに分乗して、横川町の駅前付近に到着して指揮を受けた。

三篠国民学校校庭に死体を収容整理する一方、横川食糧倉庫から米を出して、市内各所に配給するためトラックに積込む作業にあたった。団員は、夕がた作業終了後は安佐郡可部町まで帰って、同町の神社や寺院などに分宿して四日間救護を続けた。

第四二項 山県郡加計町…868

地区の概要

加計町は、広島市を貫流する太田川の上流約五五キロメートルほどへだたった山間地帯にあり、藩政時代から栄えて現在に及んでいる。

産業は、往古、砂鉄の採取精練できこえたところであるが、現在では主として林産物の集産地として発展を続けている。

明治三十一年二月十日、加計村を加計町に改称、昭和二十九年八月一日に加計町に殿賀村が合併し、さらに昭和三十一年九月三十日に安野村と合併して、現在の加計町となった。

名勝吉水園は、加計町中心部から徒歩で約五分の山麓にあり、園中に棲息するモリアオガエルは日本特有の蛙で、天然記念物に指定されている。なお、園内の吉水亭は鈴木三重吉が小説「山彦」の構想をねったところとして、一般に知られている。

加計町は、爆心地から約四〇キロメートル離れており、総人口は八、五三六人(昭和四十年年度国勢調査)で、地域面積は九六・一八平方キロメートルである。

戦争末期には、広島市立竹屋国民学校の児童が、集団疎開で来ていたが、この疎開当時の詳しい状況は、第四巻第二編各説第三章広島市内各学校の部に記述してある。

ちなみに、地元の疎開児童受け入れ状況は、つぎのとおりであった。

収容場所	所在地	学校名・児童数	備考
正覚寺	山県郡安野村本郷	（竹屋国民学校） 平均四〇人	(一)各所とも、ほぼ昭和二十年四月十二日から同年十一月十五日まで疎開。 (二)担任訓導 一六人、寮母 一五人 養護婦 一人、作業員一五人 (三)通学した国民学校名 イ、修道国民学校 ロ、加計国民学校 ハ、殿賀国民学校 ニ、筒賀国民学校 ホ、戸河内国民学校 ヘ、四合国民学校 ト、松原国民学校
正念寺	山県郡加計町	四〇	
礼安寺			
西円寺	山県郡殿賀村堀	四五	
明願寺			
報正寺	山県郡筒賀村	四五	
西方寺			
道教寺	山県郡戸河内町本郷	一三〇	
専正寺			
西善寺	山県郡戸河内町柴木		

※昭和二十年七月初め、海軍の設営隊が二〇〇人ほど、戸河内町本郷の国民学校に駐屯し、一教室二〇人で一〇教室を占拠、松根掘り、炭焼き、川原の砂あげなどを終戦までしていた。このため疎開児童は、ここで勉強ができなくなり、寮のお寺で勉強した。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

アメリカ軍飛行機が、広島市上空へ侵入するときも、爆撃後に脱出するときも、その通路から加計地域がはずれていたものか、一度もこれを目撃した住民はいなかった。

無論、六日の日、原子爆弾を搭載していたと考えられる敵機を認めたものもいなかった。

しかし、広島市が原子爆弾攻撃を受けてからの数日間は、敵機の編隊が何度も加計盆地の上空を通過し、そのつど地元民は緊張した。

原子爆弾が投下された時、加計町では、屋内にいた人々でも、一瞬、目を射るような閃光を感じた。何ごとかと、ハッとして戸外に出てみたところ、四、五秒後、耳の底を突くような大爆発音がとどろいてきた。熱風的なものは感じなかったし、人体や物体には影響なかったが、明らかにズシンと来る衝撃と微動を感じた。

町の人々はみな戸外に出て、当時約一〇キロメートル離れた下流にある中国配電の坪野、あるいは間な平の発電所に爆弾が落ち、高圧線がスパークしたのではないかと話しあった。各駐在所でもそう言ったし、消防隊がブーブーと警笛を鳴らせて駆けつけたが、発電所は何のこともなかった。

爆発の閃光・音響・衝撃を感じたあと、しばらくして、太田川の下流方向にあたる南方の山上に、キノコ型の雲が湧きあがるのが、加計町一帯から望見された。これが午前八時二十分から三十分ごろまでのことで、山から田から皆驚いて家路に帰ったという。

そのキノコ型の雲が崩れるにつれて、快晴の夏の朝であった加計町一帯が、急に異様な暗さにつつまれたから、人々は不審に思った。炸裂後二、三時間たったころ、大つぶの油まじりのような雨が降って来た。白い衣服は、この雨に濡れてみな黒い斑点で汚れた。

また、この時間ごろ、加計町方面一帯にかけて、広島市から舞いあがったいろいろの物が飛んで来た。

帳簿のページ切れ・伝票類・電車の切符、その他の紙片や、屋根のソギの破片などが、なかには一部焦げて欠けた形のものもまじって、たくさん落下してきた。

中野徳夫(加計町駅前)の話では、吉水園の近くに、広島商工会議所会頭藤田定市名入りの委付賞状が、少し角のところ焦げたまま落下してきたという。

殿賀村方面にも相当落下し、茶色によごれた伝票などの文字によって、広島市から飛来したことを知り、大変事が勃発したものと推察した。

夕がた近くなって、まず、三人の土地の人がひどい姿でたどりつき、続いてこの地域に疎開している竹屋国民学校児童の父兄が到着しはじめたが、父兄らの異様な被災姿を見、こもごもに語る被爆状況から、はじめて想像外の大惨事を蒙ったことを知ったのであった。

当日夕がたの六時ごろから、被災者たちが加計地区に到着しはじめたが、これらは、太田川に沿って横川駅から安佐郡飯室駅まで鉄道が通じていたので、飯室まで汽車を利用し、そこから加計までは、バスやトラックに乗って逃げて来たのであった。

避難者の多くは、ほとんどがこの土地に縁故のある人たちで、そのほかこの地域に疎開して来ている学童の父兄たちであった。

すべて、見るかげもなく無残な姿であり、かなりの重傷者もいた。

当時、広島市では各町村の国民義勇隊の出動を得て、建物疎開作業を連日にわたって実施していたが、加計町ははじめ安野村・殿賀村とも、距離や交通機関の関係から出動命令はかけられていなかった。しかし、公共機関の書類や物資などの運搬をおこなうため、加計町からしばしばトラックを出動させていた。

二、広島市救援状況

六日の朝、ただたぬ事態の勃発が感知されたので、山県郡特設警備隊本部からオートバイで、広島市の救護状況状況偵察に向つたが、可部町付近で、すでに広島から殺到した避難者の大混乱に出あい、その模様をまず電話で、本部へ通報した。しかし、本部はいくら説明しても容易に理解しなかった。

ちなみに、山県郡特設警備隊は、不時の変に対処するため、昭和二十年四月に、在郷軍人山県郡聯合会を主体に、郡内を三個中隊(隊員四六〇人)にわけ、郡内各町村にも町村警備隊を結成した。町村警備隊は、伝家の日本刀、槍をはじめ、竹槍などで、武装していた。本部は加計町役場に設置、常に体制をととのえていた組織(加計町史下巻)で、敗戦後一か月で解散した。

連絡を受けた警備隊本部は、ようやく事の重大がわかると、加計町・戸河内町・筒賀村・殿賀村・安野村・上殿村以上六か町村の合計三〇〇人に及ぶ救援隊を編成し、中野徳夫を隊長とし、トラック八台に分乗して広島市へ進発した。

六日夜から十四日まで九日間にわたって出動し、まず連絡場所を横川町の三篠信用組合内においた。最初ごろ二晩は、西練兵場に野営した班もあるが、第一日の夜は可部町の寺を、第二日の夜は長束の国民学校を根拠にして、連日、焦土と化した広島市にかよい、横川町・左官町・八丁堀までの間の地域で、死体の整理と道路の啓開・清掃にあたった。横川から相生橋に至るあいだ、死体を藪のうえにならべて、探訪する遺族や縁者らに、よく目につくように配慮した。

連続的な出動人員は、加計町約八〇人、安野村四〇人、殿賀村三〇人程度で、安野・殿賀両村民の出動は三日間ぐらいであった。

死体の整理などのほかに、横川踏切のところの県の農業倉庫の米に火がついて焼けるので、これを搬出したようなこともあった。また、横川駅構内で機関車の炭水車の燃えるのを消火したりした。

収容した死体は、三篠国民学校運動場で、油をかけて焼いたが、小町の市立浅野図書館で焼いたこともあった。

この地域の医師・看護婦は広島市からの避難負傷者の治療にあたる一方、六日、広島市救援の出動命令を受け、すでに組織してあった救護班員を召集し、急ぎ広島市にむかって出発した。途中、可部町品窮寺救護所に雲集した負傷者の救護をおこなった。

医療救護班は、医師九人・歯科医二人・薬剤師二人・看護婦六人のほか、助産婦三人が四班を編成し、六日から十七日まで、品窮寺をはじめ、市内の被服廠・三篠信用組合・勸業銀行などの各救護所において、全力をあげて救護活動を展開した(広島原爆医療史)。このほか、随時に天満橋の橋の下の河原や本川国民学校などにおいても治療をおこなった。

広島市から逃れて来た人々は、みなそれぞれの縁故先や関係先の家庭に入ったので、町村役場としては、特にこれら罹災者のための収容所を開設する必要はなかった。

この地域へ避難しようとした人々のうち、重傷者の大部分は、市中から来る途中の近郊地域、ないしは到着前の途中で絶命したから、加計町へたどりついてから死亡したものは四〇人たらずの数であった。

これらの死亡者は、それぞれ各部落の火葬場で荼毘にふし、ねんごろに葬った。

現在の加計町立護国神社には、戦没軍人・軍属・学徒動員犠牲者の六〇二霊が祀られていて、毎年五月一日に慰霊式が挙行される。

この神社の傍に慰霊碑が建立されて、軍人・軍属・学徒動員の原爆死没者の霊を合祀し、平和記念塔と称している。

なお、広島市からの避難者のうち、この地域にそのまま定着居住した世帯は約一〇世帯程度あったが、その後社会の正常化とともに、いつとなく再び外に出て行った。

原子爆弾の惨禍は、あまりにも悲惨をきわめたので、当時、種々のかたちでこれに関与した人々も、つとめて語らないようにし、忘れ去るようにして来たが、広島市への関連は深く、折りにふれては話が出て、若い世代へも語りつがれている。

[第四三項 甲奴郡上下町](#)…875

地区の概要

上下町は、広島市の東北、約七〇キロメートルの地点にあり、町内全般に山岳がつらなり、大古から隣国出雲路に通ずる高地(海拔四六〇米)で、陰陽の分水嶺を形成し、矢多田川は芦戸川に、上下川は馬洗川にそそいでいる。流域は一般に肥沃で農産物の生産に適している。

上下とは、往古に「城下」と書いたと云われ、府中・庄原間の要衝にあたり、昔は山陽と山陰をつなぐ宿場として

栄えた。現在、福塩線が東西を貫通し、上下駅・矢野駅があり、郊外バスの発着地でもある。風光明媚な土地で、千余年の歴史を持つ矢野温泉は、今もって賑わっている。

昭和二十九年三月三十一日、甲奴郡南部五か町村(上下・矢野・清岳・階見・吉野)が合併、越えて昭和三十三年六月十日に世羅郡甲山町の松崎部落を編入し、現在の上下町となった。

地域面積は八三・八七平方キロメートルであるが、耕地面積はその一パーセントに過ぎず、ほとんど山林地帯で、世帯数二、〇六六世帯、人口八、八〇一人(昭和四十年十月一日・国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市へ侵入する B29 の機影を認めた者はいなかったし、原子爆弾の炸裂による衝撃も感じられず、キノコ雲も望見されなかった。また、被爆直後、広島市から爆風による飛来物などは何もなかった。

被爆当日、広島市の建物疎開作業に出動していた者はいなかったが、私用や勤務関係、あるいは、応召などにより広島市内にいて被爆した者があった。甲奴・神石両郡一円の予後傭兵で編成された甲神部隊は、歩兵第一補充隊に応召中被爆し、多くの犠牲者を出した。

六日午後九時三十分ごろ、終列車で約二〇人が到着した。全身焼けただけ、裸足で、衣類はボロ布同然の姿でホームに降りたとき、ちょうど灯火管制下で、その形相は筆舌に絶するものであった。

重傷者は、最寄りの病院に収容し、軽傷者は警察署の武徳殿を仮収容所として収容し、それぞれの家族に連絡した。

さらに翌日、三次市の広島陸軍病院分院に重傷者を護送し、収容所に軽傷者のみを収容し、応急手当を施して家族に引渡した。

上下警察署、武徳殿(上下駅前)の仮収容所は、六日当日から八月三十日ごろまで開設され、その間、約三五〇人を収容したが、死体の埋・火葬などはおこなわれなかった。

二、広島市救援状況

八月六日から約二〇日町、看護婦七人延二五人くらいが、医療救護班として出動した。入市経路は、上下救援隊出動から三次―吉田―可部を経て市内三篠町に入り、県の指揮により活動した。

また、警防団は翌七日から約一か月にわたって、実人員約一二〇人延約四〇〇人が、東・西両警察署の命令を受けて、市内一円で救援作業に従事した。入市経路は、看護婦隊と同じである。

なお、広島市から逃げて来た罹災者のうち五世帯は、そのまま町内に定住した。

甲神部隊の惨状

藤井一夫

(当時・甲神部隊油木分屯隊長・陸軍少尉)

私は昭和二十年四月に設置された第二四特設警備隊(甲神部隊)油木分屯隊長で陸軍少尉であった。

本部所在地は、甲奴郡上下町で、編成区域は、甲奴郡および神石郡一円であった。常置員は将校三名、下士官六名計九名(文屯隊の名を含む)で、構成隊員は三箇中隊約三〇〇名であった。

その下部組織として、甲神部隊油木分屯隊が神石郡油木町に所在し、神石郡一円を編成区域とし、常置員は将校一名、下士官二名、計三名であった(文屯隊の常置員も原則として本部に勤務)。

私は上下町の本部に常置員として勤務していて、油木分屯隊長の命を受けていたけれども、本部に勤務して、油木にはほとんど行かなかった。

甲神部隊に対して、八月一日、広島市の警備のため、聯隊区司令部より出動の命令があったので、八月三日、上下駅に集結し、早朝より汽車で出動した。

歩兵第十一聯隊(当時、歩兵第一補充隊)に到着、編成は三箇中隊に分けて、私は第三中隊長として、また油木分屯隊長としての任務についた。

この三箇中隊は、分散して各兵舎に落ちついた。

出動命令は、広島市の警備のためであったが、実は市民の避難場所開設のため、建物疎開作業をやることであった。

八月四日から元陸軍病院第一分院の建物を壊すために現地に出動した。

八月五日は、警戒警報と空襲警報が激しく、睡眠もとらず警備についた。

八月六日の朝も出動のため、身仕度はほとんど終り、早いものは舎外に出ていたものもあった。私は営門の入口側

にある兵舎の二階の一室(練兵場が見える)で、四名ほどが在室していたときである。もちろん、歩兵第一補充隊員も、同一の営内にいた。何か光ったように感じた。炸裂のとき音は聞かなかったと思う。

瞬間的なことで、目がくらんだと思ったら、何かに押えつけられていた。下敷きになっていた。

正気にもどったとき、「藤井少尉殿、どこにいるか」と、瀕りに声がかきこえるけれども、まっ暗で、どうなっているのか見極めることができず、その上身動きも出来ないで、どうすることもできなかった。

しばらくして、隙間から光線が洩れて、局部的に物が見えるようになって来た。

このとき下敷きにたっている事を知り、手探りしていると細い棒が手にかかる。頭をあげることもできないので、その棒で、上につきあげて「ここだ、ここだ。」と叫んで合図してみた。この合図が通じたのか、木を取り除いているような気配がする。

恐しかった。取り除きようでは、大きな木材が私を圧して、助かるのが助からないのではないかと考えていた。

この間も「助けてくれ」と叫ぶ声がする。また、うめき声もきこえていた。

こうして助け出されることができたが、助け出される時の状態は意識を失っていたのか記憶がない。

下敷きになる前、寝台に腰かけて、出動を待機していたが、爆風によって、整理棚と寝台のあいだに入ったため、寝台が天井や屋根の材木の支えになって隙間が作られたので、圧死をまぬがれたようである。

救出されて私は、市の東部へむかって避難した。白島町のところを流れている川原へまず逃げた。川原では、吐気はするし、気分が冴えないので、砂原に寝ていた。

重傷だった。腹がすいたような感じもなく、食欲は全然なかった。カボチャの小さい一片を食べた。

寝たままで、牛田方面の燃えているのを見た。そして、身の砂が舞いあがっていた。火災のためか、風が起きて上がったのかも知れなかった。

また常葉橋のところにある鉄橋で貨物列車が転覆して燃えているのを、不思議に思いながら見つめたりした。

これらは、いずれも寝たままで見たので、周囲のことは見られなかった。

夕方まで、この川原にいたが、ここで夜を明かすのもどうかと思い、奥地へ向うことにした。

戸坂に近い牛田の町はずれまで行き、農家の軒先きに避難した。その夜は、農家でお茶を一杯飲んだ。ムスビを持って来てもらったが食べなかった。ムスビを見ると食べそうに思えたが、口まで持ってくると食いたくなかった。ここで夜をあかした。

七日朝、うすく切ったトマト二切れをもらったが、これは食べられた。

中隊長としての責任もあるので、戸坂の国民学校へ行って見ることにした。翌八日だったと思うが、戸坂へ行った。戸坂国民学校が陸軍病院にあてられていたからである。

ここに来てみると、門のところで、手車に患者を乗せて入ろうとしているのを、門の内側から外へ押し出そうとしているのを見たが、これは、収容者が一杯で、収容できないからと言って、外へ追い出しているのであった。

運動場には、一面にわたって人が転がしてあって、これ以上搬入させても、どうすることもできなかったのであろう。すでに車に乗せたままで放任されている者も見た。

受付を備えて、受けつける様子もなく、帳簿とてない状態で、誰がいるかも調べることもできなかった。

教室をあちこち歩いていたら友人にあったが、友人の傍には人が死んでいて、友人は知らずにいるのであった。

学校の裏の農家へ行ってみると、軒先や土間にところ狭いほど死体や負傷者がいて、手当てをするものもなく、家の奥さんは「こんなに来てもらっても、どうすることもできないし、これからどうすればよいのか判らない。」と泣いていた。

ここまで逃げて来ては、次々に、どこということなく避難民が入って来たのであろう。中には「水をくれ、水をくれ」と言っている者もあったし、死んでいる者もあったが、誰も手助けする者はなかった。

戸坂駅まで行った。その途上、半焼けの死体が姓氏不明のまま転っていた。不思議なことに、これまで赤ちゃんを見なかった。

多分、今日で、二日ぐらいたったなと思った。戸坂で汽車にのったが、乗ると言っても貨車であった。しかも切符は買わずに乗ったと思う。

車中、私に敬礼してくれるが、誰だかわからない、顔の形相も変っていて見分けがつかないが、話してみて、やっと判った。

十日市駅に着くと、婦人たちが担架を持って迎えに来ていた。汽車に乗っている者みんなふた目とは見られないよ

うな姿なので、婦人たちは泣いていた。

十日市駅の近くにある女学校(陸軍病院)へ患者を運んで行く。私も行った。ここで「食事をするか」というので注文したけれども、いざ食べようとして、その香をかぐだけで食べる気を失った。

わが隊員の消息を調べるため、女学校を出たら、駅前でトコロテンを売っていたので買った。このときは食べられた。

十日市駅から汽車で、私は上下駅まで帰ったが、このときは切符を買ったと思う。

この列車には避難者(負傷者)が乗っていなかったようであった。

上下の屯所で、夕食を出してもらったが、全然食欲がなく、温かい蒸気で酔ったような気持であった。体はひどく衰弱していた。

風呂へ入ってあがっても、しばらく休まなければ衣類を着ることさえもできないほどであった。

この屯所で、十日市町の陸軍病院(女学校)や東城の陸軍病院など、その他各町村へ隊員の消息について電話連絡した。誰が死亡したとか、誰が危篤状態とか知らせた。これらの隊員は一人残らず全部死亡したようである。

元気の隊員を、広島市内へ調査に出したが、消息すらも判らないありさまで、ただ、被爆のときいた兵舎のところにある遺骨を拾って帰るのであった。

これらは、逃げる途中で死亡した隊員とともに部隊葬をおこなった。

私は、常に中隊長としての責任を感じ、任務を離れた行動はしなかった。歩いて、ここまで来るあいだも隊員を探し探し歩いて来たのであって、どこまでも責任ということがこびりついていて苦しかった。

家に帰ってから、髪が抜けたりして、まともに枕もすることができなかった。また歯ぐきが痛んで苦しんだ。このため歯が全部駄目になった。

私が負傷して歩いているとき、私の郷里の神石郡豊浜村の警防団員がトラックに乗って、広島市内の救援に行くのを見た。ともかく、部隊は全滅の状況となり、私も発熱が激しく極度に衰弱した。

甲神部隊の建物疎開兵として

豊田久夫

(当時・陸軍二等兵四四歳)

わしは原爆が落とされた三日前の八月三日広島市内の第二部隊「歩兵第一補充隊」に甲神部隊の建物疎開作業兵として召集をうけ、朝、営庭で隊伍を組んで出ているところをやられた。まるで広島へ原爆を受けに出てきたようなものであった。

爆弾が落ちたとき、一瞬にわが身がはねかえって、地面に倒されるように伏さった。それはまったく人事不省という恰好だった。帽子も、かついでいた槌も吹っ飛んで、だんだん正気づいてくるにつれ、全身がひどう痛んだ。

「広島じゃけ、爆弾を落とされた。」とわしは咄嗟にこう思った。青松葉をくすねたように、目の前は、真白い煙が渦巻き、どのくらい不省に陥っていたかよくわからない。ただ、背中から頭へかけて、瓦や壁土がバラバラ落ちかかって痛かったことを覚えている。

やっと、地上が三尺くらい灰色になって、上は白い煙にかわった。わしは、戦友のことが頭にきて、あたりをギョロギョロ探した。しかし、誰一人見えなかった。後日、みんなに聞いてみたが、わしと同様に、自分が一人しかいない、と思ったと語っている。

気分が馬鹿になっていたのか、やっと、こうしては居れんと、脅えるように身を引いて営門の方へ出ようとした。すると、宮の神木がかやったように大きな樹木が三本、落雷のときのように折れている。気づくと、兵舎もつぎつぎ吹っ飛んでいる。一階はあるが、二階の部分がどれも崩れている(これはわし錯覚で、一階から崩れてたのだが、そこまで気が付かなんだ)。そうこうしている間に、あちこちでチョロチョロ煙が上がり、やがて火を噴きだした。朝の炊事の火などがまだのこっていた為だろう。

やがて人影が北へ南へと路上を駆け出した。わしの目の前を、婦人が子どもを背負って逃げて行こうとする。ちょっとこちらに顔を向けたが、顔は八寸ぐらいなのに、血に割れたその傷は一尺二寸ぐらい、ほんまにウリを割ったように見えて、ゾツとした。大方、倒れた柱の角ででも傷をしたかに見える。しかも、それが、婦人も子どもも痛いと言って泣きもせず、逃げ脅えている恰好だった。わしは一体、どうしてこんな爆弾が落ちたかと、不思議でいけざった。

やがて、わしは兵舎の裏門を出て、兵隊や市民といっしょにゾロゾロ逃げたが、そこに戦友がいた。見ると、身動きできなくなった戦友、一人は腕を持ち、一人は足を一本持ち、もう一人が股をもって、ちょうど、三人の兵隊がモッコを支えて歩いとるようだった。それぞれ誰もが、怪我をしたり、打撲をうけているので、いきおい、こうした恰好になったのだろう。

その一人が、わしを見つけて、「オーイ、豊田手ごをせい」と言う。言われて仕方なくわしは残りの手をさげてやった。

途中、「敵の飛行機が来た。」というので、防空壕にかくれたが、さげてやった兵隊は、現在も生きているとのことだ。

防空壕を出て北へドンドン逃げていたら、同村から出ている小川太郎・藤井百石・東山らを見つけた。三人のこれらは、どうしたはずみか、屋根の上へかけ上がって逃げてゆく。「オイ、藤井、お前らそが一なところへ上がって、どうするんか」と叱るように声をかけると、「オー」というだけで、なおも屋根瓦の上を渡って逃げようとする。大方、この三人は神経の感覚を失って馬鹿になっていたようだ。体から顔までひどく焼いていたし……。

もう町は一面火の海になった。目の前に川が見えた。石垣のガンギの窪みがあり、それを伝って、川へ飛びこんだ。戸板や柱や布団が川の水面いっばいに浮いて、岸には人があふれて死んだり倒れたりしている。男ははぶさに、女は仰向けに死ぬるといふが、ほんまにこのような姿勢で死んでいた。

やっと川(猿猴川)を、水につかって渡り、饒津神社前へ逃げたが、その葦の川原は身動きもできんほどの死人や病人だった。いがったり、わめいたり、のたうったり、わしの身一つ入れ場がないほどで、前の方から詰めてもらいたい気がして、「あんたらしっかりつめいや」と何べんも言った。

元気な女がポンプをついていた。「わしは何事もないんじゃけ、飲ませてくれ」と水をせがんで、それをガブガブあふり飲んだ。戦友と三人づれで、お互いはぐれまいと言いつけて逃げるのだが、一人が倒れると一人は正気になる。一人が元気になると一人が動けなくなる。このようにしてあずっていると、また、空襲の飛行機がきたという。

みんなわれさきにと防空壕へはいった。見ると、動けなくなっていた藤井もいつの間にか穴にはいつていた。死ということになると、こんなにも人間は元気がでるものかと思った。

外に出ると、目まいがして、そこに身がらを横たえた。横腹に何かひどくささって痛い。

これまで腹に刺さって気になっていたが、よくみると、竹藪の竹の根株だった。やっと抜き取って捨てた。このとき思うたことだが、「これが自分の家で病気したのなら、たいへんな病人で、おそらく、家人も、親戚のものも気づかってくれる重病人だがなあ」と、自分の身を考えながら、何んだか、ひとりおかしかった。

そうこうしていると、わしら甲神部隊の小隊長である木野山氏に出合った。わしを見るなり、小隊長は、「僕の部下を呼んで来い。」と言う。わしは反抗もできず、藤井や小川といった戦友をのこして饒津の方をさがしてみた。頭と足を切って痛むし、それに耳鳴りがしどうして、体がだるい。

あとで気づいたことだが、神石・甲奴郡から召集をうけた建物部隊兵が、朝、隊伍を組んで作業へゆくとき、大方は原子爆弾の直射光線をうけたが、さいわいわしらは兵舎の陰だったために救われた。

小隊長の命令だし、仕方なく常葉橋のところの川べりに引きかえすと、歳のいった男が小舟をあやつって人を渡していた。しかしみんな必死にとりつくので、一度ならず転覆した。

わしは、「そうじゃ、財布、タバコを水に濡らしては」と、あらかじめ、かくしから出して掌に高くさし上げて舟にすがって渡った。実は、財布の中には壱百円とほかに村の谷内から入隊している友人に預ってもっていた三十円の大金があった。作業に出る兵隊は殆んど金は班内の准尉にあずけていて無一文であったが、わしは、人からの預り金を上官に知られまいとして、ポケットにかくしもっていたわけだ。このことがこのあと少し役立つのだが。

さて、舟から陸へ上がって、体が動かなくなった。気づくと、向こうから同村の田頭(たんどう)から出ている吉岡が、戸の棧の木切れを杖にし、毛布を頭からかぶってビッコをひいて来た。苦しそうな顔をして、わしに気づかず行き過ぎようとする。

「オイ、吉岡」

と声をかけた。吉岡はつらそうに、

「助けてくれえ……」

と、哀願するようにすがりついた。

「元気を出せ！」

とはげましたが、こちらもひどく心細い気がした。二人は川原で水をあふり飲んだ。ところがこれがたたって、口へ吐きあげるし、下へさげるし、黄水が出るまで腹の中のものをみんな吐き出してしまった。しんどいというてきりが無いほどだ。

二人はあちこちとふらついた。途中騎兵隊のところで、サイダーを一本もらって飲んだ。

神石郡から入隊した知った男が、軍刀や皮カバンを五つくらいばねて手にし、そこに通りかかってきた。

「そんなもの、どうする？」

と問いかけると、その男はしたり顔に、

「これだけ持っとりゃ、どうでもなるがや。戦争はハア終りよう、これで儲けたるねえ」といって駅の方へ去って行った。

わしは吉岡が、さっきから毛布をかぶっているのがひどく気になっていた。

「あんた、この暑いのに、どうしたんじゃ、毛布なんか捨てい」と言うと、

「今晚寝にゃいけんじゃろうが」

と言う。(まことそうよの)と、吉岡の知恵のよさに教えられる思いがした。わしも急に夜のことが気になって、騎兵隊のところで、干してある毛布を盗もうとしたが、気づくと救援隊が飯をくっていたので、ハッとしてやめた。

東練兵場へまたもどってきた。そこでムスビをもらったが、塩気がなく、うまくもなかった。またそれをも吐き出した。地方医が数名テントを張っているのを見つけ、傷の手当をたのむと、

「あんたらの怪我じゃ、薬はやれん」

とあっけなく見すてられ、気おちしていると、「豊田さん」とまた誰かが呼ぶ、それはやはり同村から出て入営している殿川義弘君であった。胸のネームで誰とわかるが、顔一面焼けただれている。

「すまんが、わしの家内が二部隊のうしろの病院に居る。看護婦じゃけ、早う連絡してくれ」とせがむ。

「そがあなことをいうても、できん」とわしは拒んで、「それより、タバコを吸え」というと、手をのすけ、「ああ、うまい、うまい」と一〇服(口)くらい吸った。もちろん、目も見えず、手が焼けて汁が出ているので、わしが口にあててやった。そうこうしていると、殿川が、

「すまんが、腰の袋をとってくれ」

と言う。やっとならって口の紐をほどいてみると、それは、あんこ餅が三つ紙に包んであった。

血水にしみたそのあんこ餅をわしは殿川に食べさせようとする、

「バカ！あんた食べ、あんたが食うんじゃ」と怒るように言う。それではと、わしも空腹しきっているし、おがんで大口をあけて食うた。

すまんで、その代償として、わしは殿川に金をやることに気づいた。

「あんた金をもっとるまい」

と問うと、

「何ももつとらん」

という。

「よし、それじゃの、わしが三十円札銭のつもりでやるけ、捨てるなよ」

と、腰袋にしっかり入れてやったが、大金なので気になった。

夕方になるし、わしは中隊長の命令を思い出して気にかかり、一緒に連れ歩いた吉岡とも一応わかれた。

広島駅に近づくと、構内は火がもう焼け抜けて、余燼が熱く身にかぶさってきた。

知らん兵隊が、カンヅメを倉庫からとってきて食っている。立ちどまって、「わしにもくれえ」というと、こそこそ三個とってきてくれた。火で熱くなっているので、水道の水につけて、やっとなら中のミカンの果肉を食った。だが、それも束の間、またみんな吐き上げてしまった。

わしは最早、歩く力もなかった。夜間は迫るし、この兵隊と互いにトタンをさがしてきて、体の上にかぶせ、いつのまにか倒れてしまうように眠りこんでいった。

以上がわしの被爆の日の有様であるが、それから翌二日目に、東練兵場の山麓の民家へ収容され、頭や足に切り傷をしとるし、どのくらい難儀をしたかわからん。収容されるところは、長男の清史がこまこう書いてくれとるので省くが、夕方矢賀駅に出て、芸備線で三次から上下町へと帰りつき、そのまま寝ついて、死にる生きるの苦しみをした。当時のことやその後の苦しきは、簡単に表現することは到底できないが、要約すれば発熱が激しく、四十度に近

い熱が長くつづき、ものがおいしくなく、極度に衰弱した。組内の友人の横儀が、まだ秋に早い出来たての蕎麦を掘ってきてくれ、これを食べるのがうまかった。しかも、原子爆弾ということもお互い知らず、このせついでをどうして治療してよいかわからず困った。そうこうするうちにサルファ剤(ズルファミン剤)が良いと聞き、医者を呼んだりしてやっと一命をとりとめた。一時は他と同じように髪も脱けかけ、村へ一緒にもどってきた兵隊が死んだと聞き、自分ながら心細いこと、きりがなかった。

あとで聞いたのだが、上下町の本部に残留した下士官が、香奠を用意して自宅を訪れてくる途中、わしがまだ死んではいないということを村民にきき、「そがあなことはあるまア」とびっくりして、不思議がり、家まで来ず、引きかえしたそうである。

あとになったが、甲神部隊の常置員は、将校三名、下士官六名で一般兵は約三百名であった。そしてわが旧、牧村から編成に加わった者みな三、四十代の老兵(二等兵)で、約三十名。このうち即死や行方の知れぬ者十名、帰宅後死亡者十数名で、わしと共に六名だけが現在生存していることになる。

わしも幸い一命をとりとめさせてもらったが、被爆してからは風邪をひきやすく、足腰が冷えて痛むし、視力もすっかり衰えて、農業をしながらも、余り働くこともできず、孫の守りをしたり、ブラブラと町会議員をつとめたりして、六六歳の今日まで生かしてもらっている。現在、傷病恩給をほんのわずかほどもらっているが、原爆死亡者や傷病兵に対して、もっと政府は手がうてんかと思う。だが、こうして生きて居ることを考えると、そがあな不平も言えん気持になる。

(昭和四十二年二月十一日記)

主要付図・一覧表

- 一、広島市学童疎開実施表…12
- 二、集団疎開児童の記…15
- 三、広島市内各学校の建物疎開作業出動状況…33
- 四、広島市内各学校被災状況表(動員学徒を含む)…37
- 五、建物疎開作業に出動した地域国民義勇隊の被爆状況表…685
- 六、避難者郡町村別内訳表…689
- 資料提供者氏名表…888

広島原爆戦災誌・資料・体験記・その他提供者名簿

第一編 総説関係

木元真作、神田正昭、大野茂、長岡省吾、長屋龍人、永原敏夫、銭本三千年、木内信蔵、金井利博、田原伯(以上資料)

佐伯敏子、林福順、アリフィン・ベイ、稲富栄次郎、(以上体験記)

佐々木研治、久城革目、土田康、橋本不二夫、松窪熊市、森宗寿人、陸勝利、北山二葉、石原虎好、福井信立、広瀬自助、木村経一、木内信蔵、栗田要、山田稔、藤原映平、蜂谷道彦、平岡敬、アンナ・ドレイゴ(以上手記)

山崎与三郎、正田篠枝、重藤文夫、有末精三、新妻清一、田淵美津雄、斉藤義雄、都築正男、朱定裕、柳田博、増本春男、大佐古一郎、田村治郎、加納竜一、相原秀次、浜岡功一、崔益守(以上資料・談話)

佐伯文郎、斗榭良江、野村清、飯島信一、島筒康夫、酒井文三、山崎増一、西村春芳、寺崎隆治、栗田健男、伊藤実、佐伯尚、今井和夫、小川義男、福井信立、荒木勲、白田正雄、下林良政、井街譲、堀江文人、元吉慶四郎、吉村実、吉田一、絹谷オシエ、住吉アヤコ、江畑郁恵、山隅文子、安達久子、徳永芳子、松浦幸子、木崎俊子、森田千代喜、児玉春美、栗原タカエ、木下セツ、堀内真佐子、古賀久子、植木正造、小山綾夫、蜂谷道彦、峯長大、吉富正一、浜崎邦夫、日高忠男、上原亨、加賀呉一、喜多嶋慎一、西川清一、松岡新平、鴉田藤太郎、松坂義正、台寿治、川田兼三郎、竹内喜三郎、井西隆人、米田真治、飯塚忠治、熊谷雄二、中村トシエ、大下薫、下田正人、藤田雄二、増原由一、松村米吉、森脇康治、下間伸一、肥後研吉、中島武三、芝光太郎、山平文子、山田等、大橋操、山崎留美、林秋子、高原琴枝、福永明、河上初枝、井上梅子、中野松枝、服部智恵子、花房光一、杉田鉄之助、松原泰、水野宗之、藤本敦、浅山吾三、大下朝子、藤森進、倉上正男、古前秀松、寺迫久子、山本テルコ、川西幸夫、崎原英夫、金子豊、矢部弘子、土居清、立松タケヨ、日野一男(以上資料・体験記)

杉村脩一(資料)

木村経一、長谷川巴、山田隆夫、野村好光、西家明男(以上体験記)

石塚恒蔵、柴田富雄、三吉義隆、指田吾一、和田功、高原きよ、竹原精一、西義美、佐々木博、川綱重治、新保正信、

竹田ハツエ、井上梅子、土橋慶治、金森芳松、前重春美、横田健一、土居源一郎(以上手記)

篠原優、田村治郎、田村繁雄(以上談話)

小林吾一(資料)

梶秀逸、篠原優、三吉義隆、野村清、広瀬自助、堀川松太郎、北山勇、富田稔、斉藤義雄、清水健、石塚恒蔵、半井良造、田村繁雄、西塔光喜、高田三郎、新保正信、佐伯常夫、野田昭夫、大荷康夫、西義美、松本宇八、小川武志、戸嶋頭、篠原正身、川綱重治、山村重定、佐々木博、和田功、荒井勇、岩下一夫、古本源吾、松井幸雄(以上体験記)

齋粉連(体験記)、任都栗司(談話)

二一六人

※被爆状況写真(各巻掲載)

山田精三・松重美人(以上中国新聞社)、木村権一・川原四儀・尾糠政美(以上暁部隊軍属)、宮武甫・松本栄一(以上朝日新聞社)、黒石勝・斉藤誠二(以上広島赤十字病院)、菊池俊吉・林重男(以上学術調査団)、岸田貢宣(陸軍報道班)、岸本吉太(写真館)、川本俊雄(県警察部囑託)、佐々木雄一郎(元、内閣情報部)、林寿鷹・鴉田藤太郎・空博行・松重三男・深田敏夫・尾木正己(以上一般)、北勲(広島地方気象台)

二二人

第二編 各説関係

※市内各地区関係

節順	地区名	地区委員及び体験記その他資料提供者氏名
2	国泰寺	四竈一郎、吉村浩明、川本福一、中山良一(以上委員) 柴田富雄、藤田琴子(以上体験記) 喜多輝子、横本数満、藤井五平(以上談話) 田中稔純、黒須さかみ、戸谷しげの、後かめよ、白木ふさの、福地弘、山村城造、四竈わくり(以上談話) 浅沼辰男(詩) 藤田文子(資料) 赤井了介(手記) 西家明男(資料)
3	中島	上蘭志水、坂本潔、小林倉次郎、谷口与一郎、(以上委員) 野村英三、黒瀬重吉、山崎益太郎(以上体験記) 伊藤順平(談話) 藤堂イワ、尾崎芳夫、坂田寿章、福原亮輔、栗栖薫、木村律、土井積(以上座談会) 横田健一(資料)
4	本川	三戸忠之、横田侃(以上委員) 柳田博憲、竹野兵一郎(以上談話) 高本光信(日誌) 藤田松雄(談話)
5	基町	奥村武司(委員) 松村秀逸、大佐古一郎、松尾公三(以上体験記) 竹原精一(日誌) 大下春男、恵美敏枝、岡ヨシエ(以上手記) 守木豊一(資料)
6	白島 二葉の里	鍬谷信男、香川卯八、今村正範(以上委員) 尾木正己(体験記) 紺野耕一(談話) 荒井誠一、久都内智子(以上手記)
7	牛田	任都東司、高井一夫、西本義見(以上委員) 小野勝(体験記) 山下寛治(資料)
8	戸坂	木村八千穂(委員)
9	幟町	上甲力一、三谷直吉、的場弘(以上委員) 有木重雄、桑原房枝、乃木年雄(体験記)・中津知二(資料)・菊島真一(談話) 小林政助、諸岡千恵子、佐渡久男(以上資料)
10	荒神	寺川勝三(以上委員) 橋本くに恵(体験記)
11	大洲	天野悦胡(委員) 山本伊留満(委員・体験記)
12	尾長	和田実、満田林之助(以上委員) 原田守行(談話)
13	矢賀	宍戸義太郎(委員) 山田隆夫(資料)
14	中山	中村忠実(委員)
15	段原	鈴木貢、赤井喜市、渡部功(以上委員) 前原静枝、杉本直治郎(以上体験記) 沖土居春子(談話)
16	比治山	横田信一、佐々木勇、本川則清(以上委員) 指田吾一(手記)
17	皆実	松島弥、吉本北男(以上委員) 古川惣二(資料) 新田美登里、河元きくの(以上体験記) 久永三郎(談話)
18	仁保	津村数一(委員)
19	大河	河口祉三、浜根肇(以上委員) 溝口悦子、金行満子(以上体験記)
20	青崎	沢井博(委員)
21	宇品	久米勝一、竹本利夫、熊本泰子、田村才四郎(以上委員) 木村玉二、柴田富雄(以上体験記)
22	似島	堀口修一(委員) 義之栄光(体験記) 堀田福美、山本治郎助、奥本カヤノ、黒木マツエ、高田治、浜本乙松(以上談話)
23	竹屋	大下直平、植木定吉、笹栗弥(以上委員) 栗栖勉、原熊太郎(以上体験記) 石川ミサヨ、石野ヨシノ、柴田シゲコ(以上談話)
24	千田	土岡喜代一、宮本一男、田中隆雄、香川軍二(以上委員) 近松幸一、瀬川博(以上体験記)・三輪俊二(資料)
25	吉島	竹内真吾(委員) 黒瀬重吉、安沢松夫(体験記) 森宗寿人(手記)
26	神崎	福永信蔵、増田美利(以上委員) 那須秀雄(手記)
27	舟入	大内義直、亀田正士(以上委員)・亀田富子(体験記) 斉藤好、浜岡辰夫、高橋積(以上談話)・水田よし(資料)
28	江波	野間源一、丸本京一(以上委員)・坂本潔、坂本文子、平川義明(以上体験記) 松下ハマノ(談話)

29	広瀬	野地兼松、小畑ヒサ(以上委員) 熊本善導(談話)
30	天満・中広	四方盛一、吉川益三、荒木武(以上委員)
31	観音	下川正一、奥田脩一、田頭新太郎(以上委員) 原田文子、金河東伯、井上美史(以上体験記) 高田靖一(談話)
32	福島・南三篠	益田与一(委員) 益信之(手記) 金崎是、神崎常夫(以上資料)
33	三篠	北山孝吉、岡村清一、中村一郎、末田実吾(以上委員) 岡村アヤコ(体験記) 石見博(談話)・ 野呂昭夫(手記)
34	己斐	川本精一、和田満苗、土井宇一(以上委員)・水岡義輝(談) 安部アヤ子、森本英子、近藤幸子 (以上体験記)
35	草津・庚午	川本実、安光歳丸(以上委員)
36	古田	清水数男、田川静男(以上委員)
37	井口	西田久登、東穰(以上委員)
九五人		

※官公庁関係

項順	官公庁名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者氏名
1	中国地方総監府	原田貢、武藤文雄(資料) 高本達寿、庭山慶一郎(体験記)
2	広島県庁	三谷昇、田中圭二、藤原一美、水野知文(以上体験記)・小笠原優、涌島秀行、永岡退蔵、 藤井五平、児玉秀一、黒田増夫、武井明、佐久間浩、竹内喜三郎、喜多島健磨、山村重定(以 上資料)・嘉屋文子、筏敏行、大道博昭、西村伊勢松、柿本四三(以上手記)・横田健一(記 録)
3	広島県警察部	久城革目、妹島正、石原虎好、松本進、田辺至六、飯田久都、小椋惣三郎、浜井信三、須 沢隆(以上手記)・矢吹静男・菅田四郎(以上体験記)・広島県議会及び県警察部資料
4	広島市役所	圓山和正、川本軍次郎、岡村直一(以上体験記)・野田益、中村正忠、矢吹憲道、浜角喜久 一、平井憲太郎、伊藤勇、岩原和一、迫田周作(以上資料)・金河東伯、浜井信三、秋山ア サ子、喜多輝子(以上手記)・柴田重暉(体験記)・亀井留吉、池内邦政(以上談話)・広島市 役所文書
5	広島鉄道局	入田茂雄、倉本進、村岡寛、花谷正(以上資料)・中村敏(手記)・荒井誠一(談話)広島鉄道 局資料
6	広島通信局関係	広藤正人(体験記)・木村玉二(手記)・中国電気通信局(資料)
7	広島管区气象台	北勲(体験記・資料)山崎正博、吉波良一(以上資料)広島管区气象台資料
8	広島地方専売局	山岡英三(資料)
9	広島財務局 広島税務署	相原勝雄、宮本忠親(以上体験記)・武永三太郎、橋本敏子(以上資料)
10	広島控訴院	福永寛(資料)・広島高等地方検察庁(資料)
11	広島控訴院検事 局	細川辰三郎、高山忠万(以上資料)
12	広島地方裁判所 広島区裁判所	益田保男(資料)
13	広島地方裁判所 検事局・広島区裁 判所検事局	稲垣康一(資料)・角田俊次郎(体験記)
14	広島刑務所	古橋浦四郎(資料)
七七人		

※銀行・会社・その他団体

項順	銀行名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
1	日本銀行広島支店	桜井誠一郎(資料)
2	株式会社芸備銀行	谷川市郎(資料)
3	株式会社日本勧業銀行広島支店	堺原幸橘(資料)
4	株式会社日本貯蓄銀行広島支店	清水清一(資料)
5	株式会社帝国銀行広島支店	制野忠雄(資料)・坂本潔(談話)
6	株式会社安田銀行広島支店	藤井竹次郎(資料)
7	株式会社三菱銀行広島支店	高橋敏夫(資料)
8	株式会社住友銀行広島支店	吉村隆(資料)
9	株式会社三和銀行広島支店	古谷清(資料)
10	広島中央放送局	森川定案、中村寅市、藻塩一海、倉田三郎(以上資料)・広島中央放送局(資 料)
11	合名会社中国新聞社	大佐古一郎(体験記・資料)・糸川成辰(資料)・大牟田稔(資料)・中国新聞社(資 料)
12	広島県食糧営団	山口松造(資料・手記)
13	広島電鉄株式会社	三甲卓爾(資料)・大嶺詮義(資料・体験記)・山崎与三郎(談話)広島電鉄株式 会社(資料)
14	広島瓦斯株式会社	大塚昇、栗原住三(以上資)・山口勇子、久永三郎(以上談話)
15	中国配電株式会社	山田隆夫(資料)・杉本均(体験記)・中国配電株式会社(資料)
16	株式会社福屋百貨店	大西英一(資料)・河内貞子(体験記)

17	三菱重工業株式会社 広島機械製作所 広島造船所	熊谷馨城(資料)・丹羽周夫(記録)・山口彊(体験記)三菱重工業株式会社(資料)
18	東洋工業株式会社	中峠定(資料)・栗田要、山本稔、角田光永(以上体験記) 天野カオル(談話)
19	株式会社日本製鋼所広島製作所	小栗堯(資料)
20	中国塗料株式会社	堀忠(資料)
21	藤野綿業株式会社	桧山武(資料)
22	株式会社熊平製作所熊平商店	熊平清一(資料)・高田俊秀(資料)

四二人

※各国民学校

項順	学校名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
	序説	高井正文、児玉勘五(以上資料)
1	本川国民学校	長尾正一(資料)
2	袋町国民学校	室田法雄(資料)
3	幟町国民学校	臺治、下土井豊(以上資料)
4	中島国民学校	山玉璋(資料)・北川まち子(手記)
5	大手町国民学校	伊藤幸(資料)・山崎湖寿子(手記)
6	広瀬国民学校	岡沢水(資料)
7	神崎国民学校	鮎川照夫(資料)・秋山ミチ子(談話)
8	天満国民学校	井林良二(資料)
9	観音国民学校	中野繁美、岸田一雄(以上資料)・下川正一(談話)
10	竹屋国民学校	大中陸三・高井正文(以上資料)
11	白島国民学校	坂江重雄(資料)・土田康(体験記)
12	千田国民学校	臺岐武雄(資料)・円崎正二(体験記)
13	段原国民学校	本家権三(資料)
14	三篠国民学校	坪田省三(資料)
15	舟入国民学校	石田昌義(資料)・脇谷愛子(手記)
16	皆実国民学校	酒井盛正(資料)
17	荒神町国民学校	今田親人、山田要(以上資料)・吉田達雄(体験記)
18	大芝国民学校	沢井達雄(資料)
19	牛田国民学校	蒲生信夫(資料)
20	尾長国民学校	木村足穂(資料)
21	比治山国民学校	中島文人(資料)・河元きくの(体験記)
22	己斐国民学校	桑田正清(資料)・真木賢三、上方頼己、津田哲三(談話)
23	大河国民学校	後藤琢三(資料)
24	矢賀国民学校	網本政雄(資料)
25	江波国民学校	伊原武(資料)
26	宇品国民学校	河崎英三(資料)
27	古田国民学校	渡辺俊(資料)
28	仁保国民学校	下村越夫(資料)
29	楠那国民学校	新仏英雄(資料)
30	草津国民学校	小畑稔(資料)
31	青崎国民学校	加田師一(資料)
32	似島国民学校	加藤章(資料)
33	第一国民学校	島本順一(資料)・増田勉(体験記)
34	第二国民学校	橋本千代(資料)
35	第三国民学校	長屋裕智(資料)
36	広島師範学校男子部附属国民学校	広島大学事務局(資料)
37	広島陸軍偕行社附属済美国民学校	井上博(資料)
38	光道国民学校	石本豊一、西村清暁、尼子成美(以上資料)

五八人

※各中等学校

項順	学校名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
1	県立広島第一中学校	越智證武(資料)・川本義隆(体験記)・木村玉二(手記)・湯木良平(談)
2	県立広島第二中学校	竹本勇(資料)土井久寿美(談)
3	広島県立師範学校	平賀春二(資料)
4	県立広島工業学校	加藤正照(資料)
5	県立広島商業学校	末田賢、畠山環、田部正夫、松崎豊一、寺地操(以上資料)
6	県立広島第一高等女学校	木村二郎、今村チエ(以上資料)・中川繁尚(手記)・中山良一(談話)
7	県立広島第二高等女学校	木村二郎(資料)・平田節子(手記)

8	広島県豊学校	山田正明(資料)・ろう学校(資料)
9	広島県盲学校	盲学校(資料)
10	広島市立中学校	正月定夫(資料)
11	広島市立第一工業学校	馬谷猛(資料)
12	広島市立第二工業学校	笹岡二三登(資料)
13	広島市立造船工業学校	上枝宥元、門田宏、高木義夫、高亀茂雄(以上資料)
14	広島市立第二商業学校	加藤惣一(資料)
15	広島市立第一高等女学校	宮川造六、外林秀夫・木良之(以上資料)・森本トキ子(体験記) 山崎益太郎(手記)
16	広島市立第二高等女学校	外林秀夫(資料)
17	修道中学校 修道第二中学校 修道学校	山代辰治(資料)
18	山陽中学校 山陽商業学校 山陽工業学校	石田成夫(資料)
19	崇徳中学校	福島利美(資料)
20	広陵中学校	数田猛雄(資料)
21	松本工業学校	土橋幸之助(資料)
22	安田高等女学校	安田穰(資料)
23	進徳高等女学校	永井竜淵(資料)
24	広島女学院 高等女学校	広瀬ハマ子(資料)
25	比治山高等女学校	国信玉三(資料)・倉田美佐子、板村克子(以上手記)
26	広島女子商業学校	沼田實(資料)
27	安芸高等女学校	青原慶哉(資料)
28	西高等女学校	佐々木佐市、胡子唯夫(以上資料)

※各専門学校・高等学校・大学

項順	学校名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
1	広島女学院専門学校	広瀬ハマ子(資料)
2	広島女子専門学校	土井忠生(資料)
3	広島工業専門学校	山本博(資料)
4	広島医学専門学校	水野知文(資料)・北村直次(資料・手記)
5	広島女子高等師範学校及び附属山中高等女学校	中山トシ、鎌田律子(以上資料)・星野春雄(資料・手記) 益田ミツエ(手記)
6	広島高等学校	広島大学教養部(資料)
7	広島文理科大学 広島高等師範学校 附属中学校 附属国民学校	広島大学事務局(資料)・安丸一郎、田原正人(以上体験記)

六〇人

※市内主要神社・寺院・教会

神社資料表及び体験記提供者名	
森安忠、宗像正臣、坂本潔、内田達雄、野上正徳、尼子清松、内田熙雄、野上敏鷹、大巳正晴、久保田幸重、石井頼義、池田久雄、内田達雄、池田公明、(以上資料)・岡田要(手記)・田中房子(談話)	

寺院資料表及び体験記提供者名	
梶山仙順、諏訪了我、上園志水、関根龍雄、広瀬準隆、福原英巖、渡部正康、中谷善行、高都持了誓、亀尾宥賢、大内義直、田中哲翁、佐藤天俊、山本正念、脇坂善暁、日下善暁(以上資料)	

教会資料表及び体験記提供者名	
谷本清、桧垣栄次、四竈一郎(以上資料)フーゴ・ラ・サール(体験記)横田工(談話)	

三七人

※関連市町村

項順	市町村名	資料及びその他体験記提供者名
1	呉市	田口稔(資料)・平田操(談話)
2	大竹市	平藤虎幸、岡田盛三郎、末岡書記、児玉亀吉、植木吾市、岡田盛三郎(以上資料)・吉川房太郎(資料及び体験記)・新出収人役(談話)
3	三次市	富士原久雄、世良武彦、三原辰美(以上資料)・柴田重暉、小坂千世子(以上手記)後藤琢三(談話)
4	庄原市	滝口倫弘(資料)・藤原恵(談話)
5	因島市	織田兼市、泰忠市(資料)・矢野脩(談話)

6	佐伯郡五日市町	古池里司(資料)・加藤清子、木原貞夫(談話)・野村慶一(報告)・佐久間作一郎(体験記)
7	佐伯郡廿日市町	高本鎮郎、吉岡浅太郎(以上資料)
8	佐伯郡沖美町	加納透、松本宝一、三浦沖三郎(以上資料)
9	佐伯郡宮島町	平野勝(資料)・野坂元定(報告)
10	佐伯郡大野町	三上豊、大西栄太郎(以上資料)
11	佐伯郡湯来町	上野郡市、沢田豊重、河野弘(以上資料)
12	佐伯郡能美町	藤本司(資料)・山本久市(談話)
13	佐伯郡大柵町	山下政行(資料)・中本浅夫(談話)
14	安佐郡祇園町	祇園町資料・木内秀明(談話)
15	安佐郡安古市町	中村実夫(資料)
16	安佐郡佐東町	松井高二、両祖保(以上資料)・田中美代子、新川園江(以上談話)
17	安佐郡安佐町	福島公三(資料)
18	安佐郡沼田町	荒植義信(資料)・川崎義男、市本秀子(談話)
19	安佐郡可部町	岡本楽市、米重忠一(資料)・神田実(談話)
20	安佐郡高陽町	杉原茂、花本陸蔵、宗像秀樹(以上資料)・高下郡作、高橋房子(以上談話)
21	安芸郡府中町	田村繁信(資料)
22	安芸郡船越町	中井章、三沢税、佐古田光太郎、国吉俊見(以上資料)
23	安芸郡安芸町	垣坂実男、長谷政類(以上資料)藤原次子(談話)
24	安芸郡海田町	尾木正巳、熊野嘉一、木下クサミ、千柄吉郎(以上資料)椋芳三(体験記)・仲岡助役(談話)
25	安芸郡坂町	平田明子(資料)・菅田房(談話)
26	安芸郡瀬野川町	乘末正志、式百免精喜、野間冬至郎、井上昇、野村正美(以上資料)・二野宮智(談話)
27	安芸郡矢野町	吉田廣(資料)・武田信次郎(談話)
28	安芸郡熊野町	梶川豊、榎崎薫(以上資料)・中村忠(談話)
29	安芸郡熊野跡村	古井正昭、池田静夫(以上資料)
30	安芸郡江田島町	山中淳(資料)
31	安芸郡音戸町	* 栄谷積(資料)・恵木友一(談話)
32	安芸郡倉橋町	加納善一郎(資料)
33	高田郡白木町	酒井寿郎(資料)・国友雪夫(談話)
34	高田郡向原町	井上泰順(資料)・有田貢、平岡薫(以上談話)
35	高田郡吉田町	波多野要夫(資料)・末兼英一(談話)
36	高田郡甲田町	徳山志都一(資料)
37	賀茂郡志和町	関友要、財満幸美(以上資料)
38	賀茂郡黒瀬町	中野是重、西家明男(以上資料)
39	賀茂郡八本松町	伊藤実成、木村隆夫(以上資料)久保木勝美、蔵田良見(以上体験記)
40	賀茂郡西条町	高橋高明、尾畑一夫(以上資料)井村武刀(談話)
41	山県郡戸河内町	深野政實(資料)
42	山県郡加計町	猪論(資料)・中野徳夫、佐々木安芸男、上手惣一、馬本末三(以上談話)
43	甲奴郡上下町	重森一六、岡田薫(以上資料)・藤井一夫、豊田久夫(以上体験記)

一二二人

資料提供者計 八二二人

〔備考〕

- 一、(委員)は、広島市作成の「広島原爆戦災誌資料表」に記入した広島市委嘱の「地区委員」で、多数の被爆者の証言をもとに資料表に取りまとめた代表者名である。
- 二、(資料)は、当時の官公庁・陸海軍の公文書、あるいは、被爆関係諸事項の個人的な調査メモ・報告書などの提供者名、及び、使用した単行本の中の、その部分の証言者も含まれている。資料提供者氏名の中には呉市のように、市民一五〇人からの証言を取りまとめて、一人の代表者が提出している場合が多い。
- 三、(体験記)は、本誌の編集に当って体験記を提供した執筆者名である。
- 四、(手記)は、既存の刊行物の中におさめられている体験記、あるいは報告書(一部分使用)の執筆者名である。
- 五、(談話)は、本誌編集に当り、被爆体験その他必要事項について語った人、及び新聞・雑誌その他個人的に「談話」を発表した人である。
- 六、(写真)は、各種被爆状況を撮影した人々で自作写真の提供者名である。ちなみに、被爆関係初期の状況の撮影者は、軍人及び学術調査団員など含めて、三五、六人いると言われ、撮影写真約二、〇〇〇枚(但し、現在行方不明のものも多い)という。
- 七、一人の人が、各方面にわたって、数種の資料を提供されている場合があり、氏名の重複していることもある。
- 八、ここに掲載した人々のほかにも、貴重な助言や指摘を与えてくださった方が、たくさんあり、深く感謝してやまない。

原爆戦災誌参考図書一覧表

書名	編・著者	発行年月日	発行所
空の護り	陸軍省つわもの編集部	昭和 11.10.15	帝国防空協会
家庭防空	西部防衛司令部	昭和 13.1.20	国防思想普及会
燈火管制規則	照明学会雑誌第二二巻	昭和 13.4.4	照明学会雑誌
沿革誌	広島市警防団矢賀分団	昭和 14.4.1	広島市警防団矢賀分団
警防団教養訓練要綱	広島県警察部	昭和 14.9.	広島県警察部
空襲下ニ於ケル食糧薪炭配給対策要領	広島市西・東・宇品警察署	昭和 15.	広島市西・東・宇品警察署
家庭防空	広島県警防課	昭和 16.3.5	日本防空普及会
家庭防空の手引(週報)	情報局	昭和 16.9.3	内閣印刷局
時局防空必携	防衛総司令部	昭和 16.12.10	大日本防空協会
出動計画書	広島市警防団荒神分団	昭和 17.1.	広島市警防団荒神分団
改正防空法及関係法令集	広島県警察部警防課	昭和 17.2.1	日本防空普及
防空待避施設指導要領	大日本防空協会	昭和 17.7.25	大日本防空協会
写真週報	情報局	昭和 19.12.20	内閣印刷局
東警察署永年防空計画	東警察署	(記載なし)	東警察署
広島県史	広島県庁編纂	大正 12.6.13	広島県庁
広島新開地干拓史	木元真作	昭和 28.9.28	広島県耕地協会
新編広島県警察史	警察史編集委員会	昭和 29.4.28	警察連絡協議会
広島県議会史一～七	県議会事務局	昭和 34～42	広島県議会
広島県の姿	広島県統計協会	昭和 34.7.10	広島県統計協会
広島県自治名鑑	広島県町村議会事務局	昭和 36.4.10	広島県町村議会
広島県市町村合併史	広島県町村議会事務局	昭和 37.3.	広島県町村議会
広島県の人口	総理府統計局	昭和 42.2.15	
広島市史一～五	広島市役所	大正 11～14	広島市役所
広島市報	広島市役所	昭和 7～18	広島市役所
広島市議会議事録	広島市	昭和 20.	広島市
広島市勢要覧	広島市総務局調査課	昭和 21～45	広島市役所
概観広島市史	市史編修委員会	昭和 30.1.25	広島市役所
新修広島市史一～七	市史編修委員会	昭和 33～37	広島市役所
広島市役所原爆誌	広島市役所	昭和 41.3.31	広島市役所
比婆郡誌	日野篤信	大正元.11.10	比婆郡役所
山県郡巡り道中記	名田富太郎	昭和 6.12.20	広陵社
山県郡史の研究	名田富太郎	昭和 28.1.1	山県・名田朔郎
岩国市史	岩国市史編纂所	昭和 32.6.1	岩国市役所
加計町史(上)	加計町役場	昭和 36.3.1	加計町役場
加計町史(下)	加計町役場	昭和 36.9.15	加計町役場
加計町史資料(上)	加計町役場	昭和 36.11.1	加計町役場
加計町史資料(下)	加計町役場	昭和 37.5.1	加計町役場
大竹市史(第一巻)	田端武敏・末永栄	昭和 36.3.31	大竹市役所
広島県大野町誌	大野町郷土誌編纂委員会	昭和 37.3.31	大野町役場
東京都戦災誌	東京都	昭和 28.3.30	東京都
大阪市戦災復興誌	大阪市役所	昭和 33.3.25	共成社
長崎市制六十五年史	長崎市総務部調査統計課	昭和 34.3.31	長崎市役所
原爆の長崎	高嶋雄三郎	昭和 34.9.20	東京学風書院
戦災復興誌(九巻)	建設省	昭和 35.11.1	都市計画協会
終戦記	下村海南	昭和 23.10.30	鎌倉文庫
ニッポン日記(上)	マーク・ゲイン	昭和 26.11.5	筑摩書房
ニッポン日記(下)	マーク・ゲイン	昭和 26.11.30	筑摩書房
終戦史録	外務省	昭和 27.5.1	新聞月鑑社
大本営発表	松村秀逸	昭和 27.5.20	日本週報社
原爆か原子平和か	谷口二郎	昭和 27.6.15	新時代社
広島一戦争と都市	岩波書店編集部	昭和 27.10.25	岩波写真文庫
太平洋戦争秘史	毎日新聞図書編集部	昭和 28.11.10	毎日新聞社
記録写真太平洋戦争(上)	ロバート・シャーロッド/中野五郎	昭和 31.6.20	光文社
記録写真太平洋戦争(下)	ロバート・シャーロッド/中野五郎	昭和 31.6.30	光文社
終戦外史	R・J・Cビュート	昭和 33.8.15	時事通信社
実録太平洋戦争(6)	伊藤正徳	昭和 35.10.25	中央公論社
広島師団の歩み	村上哲夫	昭和 36.3.21	十一会
太平洋戦争への道、日米開戦	角田順	昭和 38.5.15	朝日新聞社
太平洋戦争への道、資料編	稲葉正夫昭和	昭和 38.6.30	朝日新聞社
世界大戦原因の研究	鹿島守之助	昭和 38.10.10	鹿島研究所出版会
アメリカと極東	鹿島守之助	昭和 38.11.10	鹿島研究所出版会
現代史の瞬間	米国海外記者クラブ	昭和 40.6.25	弘文堂
核戦略批判	豊田利幸	昭和 40.8.20	岩波書店

日本の百年①新しい開国	鶴見俊輔	昭和 42.1.20	筑摩書房
日本の百年②廃虚の中から	鶴見俊輔	昭和 42.2.20	筑摩書房
日本の百年③果てしなき戦線	鶴見俊輔	昭和 42.3.20	筑摩書房
戦争と平和の心理学	チャールズ・オスグッド	昭和 43.1.30	岩波書店
戦争と国際法	松井康治	昭和 43.8.20	三省堂
我等は隠るべきか	R・E・ラップ	昭和 25.1.15	南条書店
0の暁	W・L・ローレンス	昭和 25.1.20	創元社
原子爆弾の効果	米国原子力委員会	昭和 26.2.15	主婦之友社
恐怖・戦争・爆弾	P・M・S・ブラケット	昭和 26.5.1	法政大学出版局
ノーモアウオー	ポーリング	34.7.31	講談社
もはや高地なし	F・ニーベル/C・ベイリール	昭和 35.10.15	光文社
ヒロシマわが罪と罰	C・イーザリー/G・アンデルス	昭和 37.8.5	筑摩書房
私が原爆計画を指揮した	レスリー・R・グローブス	昭和 39.9.5	恒文社
チャーチル第二次大戦回顧録抄	毎日新聞図書編集部	昭和 40.2.20	毎日新聞社
原爆投下決定	L・ギオワニティ	昭和 42.1.10	原書房
マンハッタン計画	ステファーン・グルーエフ	昭和 42.11.15	早川書房
ヒロシマへの七時間	ジョセフ・L・マークス	昭和 43.7.29	日本経済新聞社
ヒロシマ・パイロット	田口憲一	昭和 43.8.1	講談社
原子爆弾	武井武夫	昭和 20.9.20	同盟通信社
原子爆弾	嵯峨根遼吉	昭和 20.10.	朝日新聞社
被爆による建物被害状況等調査綴 No.1No.2	広島市調査課	昭和 21.8.	広島市調査課
原子爆弾による人的被害及び一ヵ年後 状況調査綴	広島市調査課	昭和 21.8.	広島市調査課
原子爆弾の話	嵯峨根遼吉	昭和 24.12.10	講談社
原爆ヒロシマの記録	原爆ヒロシマの記録編集部	昭和 25.5.5	瀬戸内海文庫
原子爆弾災害調査報告書	原爆災害調査報告書刊行委員会	昭和 26.8.1	日本学術振興会
原爆第一号写真記録	梅野彪・田島賢裕	昭和 27.8.14	朝日新聞社
原子爆弾災害調査報告集(一・二)	日本学術会議	昭和 28.3.	日本学術振興会
原爆と消防	山澤亀三郎	昭和 28.11.1	原爆と消防刊行会
原水爆実験	武谷三男	昭和 32.8.22	岩波書店
広島における原子爆弾の炸裂点の決定	長岡省吾	昭和 35.	私家版
原水爆被害白書かくされた真実	原水爆禁止日本協議会	昭和 36.7.31	原水爆禁止日本協議会
長崎における原子爆弾炸裂点および爆 心決定について	長岡省吾	昭和 36.12.25	私家版
原爆関係文献目録	横田工	昭和 40.10.15	原爆資料存会
核兵器の恐怖	島村喬	昭和 43.7.15	清風書房
原爆はなぜ投下されたか	西島有厚	昭和 43.7.15	青木書店
原爆被災資料総目録(1)(2)	原爆被災資料広島研究会	(1)昭和 44.8.6 (2)昭和 45.8.6	原爆被災資料広島研究会
原水爆被害問題資料集	原水爆禁止福岡市協議会	昭和 44.9.10	原水爆禁止福岡市協議会
写真記録ヒロシマ 25年	佐々木雄一郎	昭和 46.6.30	朝日新聞社
原爆関係文献目録	ヒロシマ会議委員会	昭和 45.11.29	ヒロシマ会議委員会
原子力と医学	森信胤	昭和 28.9.15	創元社
驚異の原子力	岸本康	昭和 29.12.1	偕成社
原子に関する報告	ゴードン・ディーン	昭和 30.2.15	読売新聞社
原子力と産業	A・クラミッシュ/E・M・ザッ カート	昭和 30.5.15	紀伊国屋書店
原子力画報	大阪書籍	昭和 31.11.1	大阪書籍株式会社
原子力年鑑三二年版	日本原子力産業会議	昭和 32.5.10	日本原子力産業会議
原子力の歴史	吉羽和夫	昭和 32.8.15	日刊工業新聞社
放射能の利用と障害	山根文男・西脇安・三好和夫	昭和 32.9.5	朝日新聞社
原子力とエネルギー	伏見康治・安芸皎一	昭和 32.10.15	朝日新聞社
原子力ハンドブック・爆弾篇	S・グラストン	昭和 33.1.15	商工出版社
原子力と原子時代	C・F・ワイツゼッカー	昭和 33.6.17	岩波書店
原子力と人類	R・E・ラップ	昭和 34.4.10	東洋経済新報社
原子力と平和利用	松浦悦之	昭和 34.11.1	夕刊新聞株式会社
発見への道	八木勇	昭和 36.9.8	岩波書店
放医研ニュー昭和 37.1、昭和 37.8	放射線医学総合研究所	昭和 37.1.25～ 37.8.25	放射線医学総合研究所
放医研の放射能調査	放射線医学総合研究所	昭和 37.4.20	放射線医学総合研究所
放射線医学総合研究所年報	放射線医学総合研究所	昭和 37.7.1	放射線医学総合研究所
絶後の記録	小倉豊文	昭和 23.11.30	中央社
天よりの大いなる声	未包敏夫	昭和 24.4.10	東京トリビューン社
ヒロシマ	ジョン・ハーシー	昭和 24.4.25	法政大学出版局
ひろしま	衣川舜子	昭和 24.7.20	丁子屋書店

平和のともしび	吉川清	昭和 24.8.15	京都印書館
世紀の閃光	稲富栄次郎	昭和 24.12.20	広島図書
ヒロシマを忘れるな	中村武雄	1950.8.1	自由青年出版社
原爆記千袋の小箱	星野春雄	昭和 25.8.1	広島女子高等師範学校理学教室原爆五周年刊行
原爆体験記	広島市民生局社会教育課	昭和 25.8.6	広島平和協会
原爆を浴びて	那須秀雄	昭和 26.9.17	下関水産振興協会
原爆の子	長田新	昭和 26.10.2	岩波書店
故藤野七蔵氏追懐録	藤野七蔵氏追懐録編集委員会	昭和 27.4.25	広島瓦斯株式会社
原爆に生きて	原爆被害者の手記編集委員会	昭和 28.6.25	三一書房
花の命は短かくて	小島順	昭和 28.8.6	共同出版社
広島県教育八十年誌	広島県教育委員会事務局	昭和 29.3.31	広島県教育委員会
追憶	広隆群	昭和 29.4.25	広島一中遺族会
星は見ている	秋田正之	昭和 29.8.3	鱒書房
八時十五分原爆広島十年の記録	世界平和集会広島世話人会	昭和 30.1.10	世界平和集会広島世話人会
HIROSHIMA 広島	吉川清	昭和 30.3.1	広島八・六友の会
広島原爆誌	大泉周蔵	昭和 30.8.6	中国電気通信局
原爆の実相	柴田重暉	昭和 30.8.6	文化社
らくがき随筆	重富芳衛	昭和 31.5.1	毎日広告社
中国新聞六十五年史	社史編纂委員会	昭和 31.5.5	中国新聞社
ヒロシマ日記	蜂谷道彦	昭和 31.7.20	朝日新聞社
思出ばなしとところどころ	涌島秀好	昭和 31.10.1	私家版
創立七〇周年記念誌	加納哲雄	昭和 31.10.1	広島女学院
広島商人	久保辰雄	昭和 31.11.15	平凡社
あの日から今もなお	副島まち子	昭和 31.11.25	東都書房
流燈	真田安夫	昭和 32.8.6	広島市女遺族会
原爆は母を奪った	熊谷孝兵衛	昭和 32.11	私家版
「和」石田学園五〇年記念誌	藤晃	昭和 32.12.3	石田学園
千羽鶴	豊田清史	昭和 33.8.6	昭森社
原水爆時代(上)	今堀誠二	昭和 34.7.21	三一書房
その死を超え行くもの	四竈揚	昭和 34.12.20	私家版
原水爆時代(下)	今堀誠二	昭和 35.8.6	三一書房
広島原爆遭難記	佐久間作一郎	昭和 35.8.6	私家版
愛子 原爆悲記	木村玉二	昭和 35.8.6	私家版
灰嘘の光	ロベルト・ユンク	昭和 36.2.10	文芸春秋新社
ピカドン	福島菊次郎	昭和 36.7.1	東京中日新聞社
かえらぬ鶴	瀬戸奈々子・林田みや子	昭和 36.10.12	二見書房
HIROSHIMA	長岡吾吾	昭和 36.10.30	私家版
平和をもとめて	広島大学新聞会	昭和 37.3.25	広島大学新聞会
あの日あの時	兵庫県原爆被害者の会	昭和 37.5.27	兵庫県原爆被害者の会
山中高女沿革史	山中トシ	昭和 37.7.2	山中高等女学校
一闪轟音(ぴかどん)	田辺至六	昭和 37.8.6	県庁職員被爆者更生会
倒壊校舎脱出手記	広島一元中生徒	昭和 37.10.16	広島県高等学校長協会
耳鳴り	正田篠枝	昭和 37.11.30	平凡社
きのこぐも	嘉屋文子	昭和 38.4.20	私家版
広島随筆	豊田清史	昭和 39.3.30	広文館本通店
広島市立学校志	広島市教育委員会	昭和 39.3.31	広島市教育委員会
広船の歩み二十年史	二十年史編集委員会	昭和 39.5.	三菱造船株式会社広島造船所
続きのこぐも	嘉屋文子	昭和 39.7.28	私家版
若い軌跡	勝丸博行	昭和 39.8.15	広島産興
ヒロシマ・ノート	大江健三郎	昭和 40.6.21	岩波書店
ああ広島原爆	亀田正士	昭和 40.6.26	私家版
原爆ゆるすまじ	原爆ゆるすまじ編集委員会	昭和 40.7.5	新日本出版社
原爆体験記	広島市原爆体験記刊行会	昭和 40.7.20	朝日新聞社
この世界の片隅で	山代巴	昭和 40.7.20	岩波書店
碑はみつめている	中国新聞社編集部	昭和 40.7.20	中国新聞社
暗雲を越えて	嘉屋文子	昭和 40.7.25	私家版
市民の日記(14)	昭和戦争文学全集編集委員会	昭和 40.7.30	集英社
ガンマ線の臨終	八田元夫	昭和 40.7.31	未来社
その日の広島	新教出版社編集部	昭和 40.7.31	新教出版社
あさ第二号	山下会誌	昭和 40.7.1	山下会
ヒロシマ・愛と死	竹内進	昭和 40.8.20	芸文社
原子爆弾投下さる(13)	昭和戦争文学全集編集委員会	昭和 40.8.30	集英社

思い出の記	竹内助四郎	昭和 40.9.1	私家版
げんばく記	土田康	昭和 40.10	私家版
安田学園五十年史	茶園義男	昭和 40.11.5	安田学園
五十年史	山田正明	昭和 41.3.19	広島ろう学校
原爆被災誌	松田幸雄	昭和 41.3.22	広島中央放送局
広島県盲教育五〇年のあゆみ	横山卓郎	昭和 41.3.30	広島県盲学校
炎の日から二〇年	中国新聞社	昭和 41.6.15	未来社
証言は消えない	中国新聞社	昭和 41.7.30	未来社
ヒロシマの記録年表・資料	中国新聞社	昭和 41.8.6	未来社
中国支社三〇年史	川原太郎	昭和 41.10.31	国有鉄道中国支社
粟屋仙吉の人と信仰	津上毅一	昭和 41.12.25	待屋堂
原爆慰霊碑巡礼の案内	後藤純	昭和 42.8.1	原爆慰霊碑研究所
爆心地	平和を訴え続ける児童生徒	昭和 42.8.5	広島折鶴の会
原爆五〇〇人の証言	朝日新聞社	昭和 42.11.20	朝日新聞社
原爆市長	浜井信三	昭和 42.12.15	朝日新聞社
原爆の記	伊達宗彰	昭和 42.12.25	私家版
動員学徒誌	広島県動員学徒誌委員会	昭和 43.3.30	動員学徒犠牲者の会
紫色の閃光	森宗寿人	昭和 43.4.10	私家版
ぼく生きだかった	竹内淑郎	昭和 43.7.12	宇野書店
ひろしま平和の歩み	広島平和文化センター	昭和 43.8.1	広島市役所
昭和史の天皇 4	鈴木敏夫	昭和 43.8.1	読売新聞社
ドームは呼びかける	広島市役所	昭和 43.8.6	広島市役所
広島碑林	三田嘉一	昭和 43.8.6	三田蠟染堂
広島原爆の思い出	木場博	昭和 43.9.1	私家版
ヒロシマの原爆	長谷川唯夫	昭和 43.9.5	警察新聞社
被爆者は夜も眠れず	脇水聖子	昭和 43.10.1	私家版
ドキュメント日本人 8 アンチヒューマン	田寺正敏	昭和 44.3.25	学芸書林
原爆地獄(びかどん第二集)	柿本四三	昭和 44.6.10	私家版
花を友に	石橋シヅヲ	昭和 44.6.10	私家版
原爆爆心地	志水清	昭和 44.7.20	日本放送出版協会
原爆の記録	広島高等地方検察庁	昭和 44.8.6	広島高等地方検察庁
ドーム崩れる日	内田豊	昭和 44.8.6	私家版
炎のなかに	旧比治山高女第 5 期生の会	昭和 44.8.6	旧比治山高女第 5 期生の会
ヒロシマの証言	広島平和文化図書刊行会	昭和 44.8.6	日本評論社
原爆の記	指田吾一	昭和 44.8.6	社会新報
ある惑星の悲劇	旭丘光志・草河達夫	昭和 44.12.8	講談社
原爆から二十五年悲願に生きた信仰体験記	本山雲彬	昭和 45.新春	俵右考堂
原爆日記(一)	広島県医師会広報部	昭和 45.4.30	
核権力	金井利博	昭和 45.6.15	
碑(いしづみ)	久保田忠夫	昭和 45.6.20	
原子雲の下に生きつづけて	下島準三	昭和 45.7.25	全電通広島被爆者連絡協議会
被爆二十五年の歩み	兵庫県原爆被害者連絡協議会	昭和 45.8.6	兵庫県原爆被害者連絡協議会
わたしの二十五年	中国放送	昭和 45	中国放送
原爆回想記	吉田一	昭和 45.8.6	私家版
閃光は今もなお	宮崎県原爆被害者の会	昭和 45.11.8	宮崎県原爆被害者の会
原爆二十五年	毎日新聞	昭和 45.12.1	毎日新聞広島支局
広島ヒロシマ	翠町中学校吉岡みどり他四人	昭和 46.1.30	私家版
広島原爆医療史	原爆医療史編集委員会	昭和 36.8.6	原爆障害対策協議会
岡山県医師会報	岡山県医師会	昭和 37.8.25	岡山県医師会
大竹市医師会史	大竹市医師会	昭和 39.6.10	大竹市医師会
原爆被爆者対策事業概要	広島市役所	昭和 40	広島市役所

〔備考〕

ここに掲載した図書は、主として本誌に、その一部を引用したものであるが、単に参考資料として利用したものも含まれている。なお、新聞・雑誌・パンフレット・地図類は記載しなかったものもある。

また、小説など創作された文学作品は、資料として採用しなかった。

広島原爆戦災誌 第四巻 第二編 各説

第三章 広島市内各学校の被爆状況

第四章 広島市内主要神社・寺院・教会の被爆状況

第五章 関連市町村の状況

昭和四十六年十一月一日 印刷

昭和四十六年十一月六日 発行

編集兼発行者 広島市役所

広島市国泰寺町一丁目六番三十四号

印刷者 中本総合印刷株式会社

広島市大州五丁目一番一号

昭和四十六年十二月八日刊行
広島原爆戦災誌 第五巻資料編
広島市

例言

一、本巻は広島市原爆戦災誌全五巻のうち、「第五巻資料編」である。すなわち本論の裏づけとなった多数資料から、特に重要と思われる十三編を収録した。なお、本論に於てその一部を使用したものがあるが、重要な事項が含まれているので、重複をいわず全文をここに掲載した。

一、本巻に収録した資料のうち、本誌編集にあたって提出された体験記・覚書、及び日誌などの一部のものは、活字印刷としたが、その他は、なるべく原形のまま写真によって収録するようにつとめた。

ただし、紙幅の関係から、寸法は原形どおりではない。

一、本巻に収録した資料のうち、(県政)雑記帖は、記録者本人に依頼して、内容の各事項につき、補訂を行い「註」を加えていただき、理解しやすいようにした。

一、本誌編集にあたり、各位から提供された体験記その他関係資料は、本誌刊行後に、それぞれ整備して、広島市が永久に保存するものである。

一、本巻に収録した資料の選択、配列は小堺吉光がおこなった。

一、各巻の監修は、今堀誠二・後藤陽一・四竈一郎がおこなった。

一、各巻の背文字は、広島市長山田節男の揮毫になる。

一、各巻の編集にあたり、資料の貸与、提供など、諸種のご協力を受けた各位に対し、深く感謝の意を表する。

以上

昭和四十六年十二月八日

一、(イ) 広島市永年防空計画...1

(ロ) 昭和十六年度広島市防空計画...99

当時、焼夷弾やTNT爆弾の攻撃に対しては、完璧に近い防空態勢と言われていた軍都広島市の防空計画書である。昭和十六年 広島市発行

二、広島県下に於ける空襲被害状況表...321

広島県警察部新畑十力警部補(当時)により作成されたもので昭和十九年二月二日午前十時十五分ごろ、B29一機が御調郡原田村山林中に、焼夷弾一二発を投下したのを最初とし、昭和二十年八月十四日午後八時四十分ごろ、B29一機が、呉市中心に飛来し、宣伝ビラ約二万枚を撒布したことまでを、その被害程度と共に記述した一覧表である。昭和二十二年頃 広島県警察部発行

三、防空日誌...341

昭和二十年一月一日から同年八月十五日までの警戒警報・空襲警報及び解除時刻などを、克明に記録した帳簿で、矢賀警防分団(山田隆夫)に保管されていたものである。当時の連日にわたる頻繁な警報発令状況と警防団の活動を知ることができる。

四、炎のなかに...379

当時・動員学徒として・第二総軍及び中国軍管司令部に出勤して被爆した生存者の「原爆で逝った級友の二十五回忌によせて」作られた体験記集で、猛火迫る司令部の地下壕指揮連絡室から、広島全滅の第一報を九州の第十六方面軍(福岡)など、三か所に、電話報告したことなど、貴重な証言が多く、また炸裂下、軍の中樞機関の惨状を如実に伝えている。一九六九年八月六日 旧比治山高女第五期生の会発行

五、被爆者救援活動の手記集(暁部隊)...419

被爆直後の暁部隊の活動記録で、本誌刊行にあたり提供された当時の将兵三十九人の体験記集である。猛火狂う被爆当日、いち早く救援隊として進入した広島市の凄惨な光景が、なまなましく記録されている。

六、(県政)雑記帖...567

被爆直後、豊田郡地方事務局長から広島県人事課長(食糧対策委員)に就任し、県の被爆救援対策・復旧対策などにあたった竹内喜三郎の事務覚書で、八月七日から九月二十一日まで、大混乱時における食糧対策を中心とした県行政の克明な記録である。

七、比治山国民学校迷子収容所・五日市戦災児育成所...633

被爆直後、家や両親を失い、路頭に迷っていた幼少年を収容した記録で、心にしみる保育活動が綴られている。当時、収容所の教師として活躍した斗樹訓導の手記である。

八、広島原子爆弾被害調査報告(気象関係)...687

(付)終戦年の広島地方気象台(北敷記)...723

原子爆弾被害調査委員会(学術研究会議)の行なった気象部門の調査記録で、昭和二十年八月から十二月までに収集した資料に基づいて、取りまとめられた気象関係の報告書である。広島管区気象台の発行

九、原子爆弾に依る電気工作物の被害調査...733

昭和二十年十一月下旬から年末までの間、電気工作物の被害について、実地調査した記録で、原子爆弾の激甚な破壊力が、多くの写真とともに解説されている。中国配電株式会社広島支店の作成。なお、本書は、連合軍総司令部経済科学局工業課電気ガス係長心得ハワード・エヤース砲兵大佐の要請により、昭和二十六年四月二日、英訳して総司令部に提出した。

十、8・10 広島陸軍兵器補給部二於テ新型爆弾二関シ研究会...795

仁科博士一行その他調査団、及び広島市の陸海軍の調査結果に基き、投下爆弾が「原子爆弾」であるという結論を得た研究会に出席し、落下傘付無線装置について陳述した呉海軍工廠電気部無線工場主任大野茂海軍技術中佐のメモ(電気部設計係・見取帳)で、原子爆弾の確認に至る各員の陳述が記録されている。この研究会の結論が大本営に報告されて、終戦の大きな要因となった。なお、大野中佐の陳述内容は、別項に記載されており本誌の第一巻六六ページにその全文が浄書して収録されている。

十一、軍関係災害調査報告文書集...803

被爆当時、呉海軍鎮守府及び中国軍管区司令部の発行した災害調査報告書で、原子爆弾を確認するに至る経緯、及び被爆症状の究明、防護対策などを示した記録である。全文書を実物の写真により掲載したかったが、紙質が粗悪なうえ、タイプ活字の摩滅により写真では判読の難しいものがあり、一部は浄書して活字印刷とした。ここに収録した文献は、広島平和記念資料館が所蔵するもの、或いは、中国管区軍医部・衛生速報(井街譲提供)のように本誌編集に当り、広島市に提供されたもの、及び、個人所有のものを複写または浄書した。

(一) 中野探照灯台広島爆撃目撃状況(呉海軍警備隊)

(二) 八月六日広島空襲被害状況並に対策(第二報呉鎮守府衛生部)

(三) 八月六日広島市空襲戦訓(第三報呉鎮守府衛生部)

- (四) 八月六日広島市空襲戦訓(第四報呉鎮守府衛生部)
- (五) 陸、海軍合同特殊爆弾研究会決定事項(要項撃卒呉鎮守府衛生部)
- (六) 八月六日広島空襲二対スル研究会議事概要(呉工廠)
- (七) 八・六広島市被害状況(中国軍管区司令部)
- (八) 広島市二於ケル原子爆弾二関スル調査(一般調査呉鎮守府衛生部)
- (九) 衛生速報(第二号・第三号・第四号・第五号・第六号・第九号中国軍管区衛生部)

十二、原子爆弾傷研究綴(広島第一陸軍病院)…935

被爆当時、多数の負傷者を救護した広島陸軍病院関係の各軍医が提出した報告書の一部で、ここには広島第一陸軍病院江波分院、及び櫛ヶ浜分院からのものを写真で収録した。なお、紙面が汚損のため、写真に撮れないものは割愛した。また、「傍線」は、原典の複写に、後人が加筆したもの。国立柳井療養所所蔵

- (一) 八月六日広島市戦災二関スル経験並所感(江波分院)
- (二) 原子爆弾症報告(江波分院)
- (三) 原子爆弾症報告(江波分院)
- (四) 原子爆弾傷二就テ(櫛ヶ浜分院)

十三、被爆広島の写真記録者たち…971

未曾有の惨禍の中で、学術調査団の随員として、あるいは個人的に被爆の実情を撮影した人々について、調査できた範囲で、本誌の刊行に際し、川西恒夫が取りまとめたもの。

編集後記…1003

刊行の経過…1007

(一)

秘

○秘

廣島市永年防空計畫

目次

第一編	總則	……七
第二編	防空方針	……九
第三編	防空實施	……九
第一章	防空の實施ノ開始又ハ終止	……九
第二章	防空實施機關	……一〇
第二節	通則	……一〇
第二節	警防隊	……一〇
第三節	特設自衛隊	……一一
第四節	家庭防衛隣保班	……一一
第五節	其ノ他	……一二
第三章	防空監視	……一二
第一節	任務	……一二
第二節	編成任免及服務	……一三
第三節	開始及終止	……一三
第四節	海上防空監視	……一三
第四章	防空通信	……一四
第二節	通則	……一四
第三節	警報通信	……一六
第四節	指揮連絡報通信	……一七
第五章	防空警報	……一七
第六章	燈火管制	……一八
第一節	通則	……二五
第二節	屋外燈類	……二六
第三節	屋內燈類	……二八
第四節	自動車前照燈携帶燈火招類	……三一
第五節	漁業用燈類	……三二
第七章	音響及交通管制並ニ交通整理	……三二
第八章	防護監査及防護警報	……三五
第一節	防護監視	……三五
第二節	防護警報	……三六
第九章	消防	……三七
第一節	通則	……三七
第二節	家庭（船舶）消防処置	……三八
第三節	警察機關及消防隊ノ消防	……三九
第四節	調査	……三九
第十章	防毒	……四一
第一節	通則	……四一
第二節	消防機關	……四一
第三節	一般人ノ措置	……四三
第四節	調査	……四四

第十一章 救護……四四

第一節 通則……四四

第二節 警防隊……四五

第三節 救護所……四六

第四節 特設救護所……四七

第五節 調査……四七

第十二章 退去避難及待避……四八

第一節 通則……四八

第二節 退去及避難……四八

第三節 待避……五一

第十三章 配給……五三

第十四章 工作……五三

第十四章 偽装店……五四

第四編 營造物ノ防護……五五

第五編 設備及資材ノ整備……五五

第一章 總則……五五

第二章 防空監視……五六

第三章 防空通信……五六

第四章 防空警報……五六

第五章 燈火管制……五六

第六章 防護監視……五七

第七章 消防……五八

第八章 防毒及救護……五八

第九章 避難及待避……五九

第十章 其他……五九

別紙

別紙第一號 広島市家庭防衛隣保班組織要領……六一

別紙第二號 漁舟群監視ニ関スル件……六七

別紙第三號 主ナル漁業場調査表……六七

別紙第四號 和文通話表……六八

別紙第五號 西部軍司令官（広島師團長）防空警報伝達系統表……六九

別紙第六號 全 海上……七〇

別紙第七號 防空通信特定各語……七一

別紙第八號 指揮連絡報項末一件様式……七二

別紙第九號 広島地区、呉地区一覽表……七二

別紙第十號 掲燈（吹流）信號燈設置計画表……七四

別紙第十一號 防空警報受領書様式……七四

別紙第十一號ノニ 同……七五

別紙第十二號 日没 日出時刻標準表……七六

別紙第十三號 漁業用燈火類ノ燈火ノ指定告示……七七

別紙第十三號ノニ 漁業用燈火管制参考圖……七八

別紙第十四號 空襲管制実施及訓練ノ時ニ於ケル自動車及自転車ニ用ユル燈火ノ告示……八一

別紙第十五號 防火改修構築区域表……八三

別紙第十五號 附圖……

別紙第十六號 防空救護組織要項……八三

別紙第十七號 防空建築規則抜粋……八六

別紙第十八號 防空壕構築要領……八八

別紙第十九號 要偽装物調査表……九五

第一編 總則

第一條 本計画ハ広島県防空計画ニ準據シ広島市ニ於ケル防空ノ実施並ニ之ニ関シ必要ナル人的要素及資材ノ整備ニ付永年ニ亙ル事項ヲ設定ス

第二條 市長ノ擔當スベキ防空業務左ノ如シ

- 一 市ノ為ス防空ノ実施ニ必要ナル人員ノ召集、配置、構成、勤務及補充ニ関スル事項
- ニ 防空監視哨會ノ設置準備、呼集等ニ関スル事項ニシテ本計画ニ定ムルモノ
- 三 海上防空ニ関スル事項ニシテ本計画ニ定ムルモノ
- 四 市長ノ為ス防空ノ実施ニ必要ナル通信ニ関スル事項
- 五 市内ノ警報伝達ニ関スル事項
- 六 燈火管制及消防ニ関スル事項ニシテ本計画ニ定ムルモノ
- 七 防毒、救護、退去、避難及待避ニ関スル事項但シ実施上警察ニ関スルモノヲ除ク
- 八 配給、工作、及偽装ニ関スル事項
- 九 市営造物ノ防護ニ関スル事項
- 十 防空ノ実施ニ関シ必要ナル人的要素設備又ハ資材ニ整備ニ関スル事項
- 十一 其ノ他知事又ハ市長ニ於テ必要ト認ムル事項

第三條 市長ハ防空計画ノ設定ニ當リテハ必要ナル事項ニ付警察署長ト連絡協議スルト共ニ関係官公衛、関係事業者団体等ト連絡ヲ密ニシ計画ニ遺憾ナキヲ期スルモノトス

第四條 市長ハ毎年度市防空委員會ノ意見ヲ催シ左ノ事項及知事ヨリ特ニ示シタル事項ニ付年度防空計画ヲ設定シ知事ノ認可ヲ受クルモノトス

- 一 本計画ニ於テ年度毎ニ定ムヘキコトヲ示シタル事項
- ニ 知事ヨリ年度毎ニ定ムヘキコトヲ示シタル事項
- 三 本計画ノ定ムル所ニ依リ難キ事項
- 四 當該年度ニ整備スヘキ設備又ハ資材ニ関スル事項
- 五 特ニ當該年度ニ限り必要ナル事項
- 六 其ノ他市長ニ於テ必要ナリト認メタル事項

第五條 市長ハ前條ニ依リ防空計画ヲ設定シタルトキハ必要ナル事項ヲ本市警防団及必要部分ハ市民一般ニ指示シ置クモノトス

第六條 市長ノ指定シタル市営造物ノ所屬長ハ所轄警察署長ト協議シ本計画ニ準據シ防空警報ノ受領並ニ伝達、通信連絡燈火管制、消防、其ノ他ノ防護ニ関シ具体的防護計画ヲ作成シ市長ニ報告スルモノトス

第七條 警察署長、市長ト協力シ左ニ掲クルモノノ管理者又ハ之ニ準スヘキ者ニ對シ広島県防空計画ニ準據シ防空計画ヲ作成セシメ警察署長ヲ經由シ知事ニ報告セシムルモノトス但シ国ニ於テ管理スルモノ及特別防空計画設定者ヲ除ク

- 一 百名以上ノ従業員ヲ有スル工場、事業場、會社、銀行、商店（百貨店ヲ除ク）
- ニ 病床五十以上ヲ有スル病院
- 三 定員五百名以上ノ興行場及集會場
- 四 五百名以上ノ学生、生徒、児童ヲ有スル学校
- 五 其ノ他前各號ニ準スルモノ

第二編 防空本針

第八條 広島県ノ防空方針ハ沿海州及太平洋方面ヨリスル敵ノ空襲ニ對シ主トシテ瀬戸内海ノ諸要地特ニ広島、呉、及其ノ附近ヲ掩護スルニ在ツモノトス

第九條 前條ノ方針ニ基ク本市ノ防空事項ハ防空全般特ニ防護ニ重点ヲ置クモノナルモ緩急順序概ネ左ノ如シ

- 一 消防、救護
- ニ 工作
- 三 防空監視、情報通信
- 四 防空警報ノ伝達、燈火管制
- 五 防毒、避難（待避）、配給

第三編 防空実施

第一章 防空ノ実施ニ開始又ハ終止

第十條 市長知事ヨリ防空実施ノ開始命令ヲ受ケタルトキハ監視及之ニ伴フ通信ニ関シテハ直ニ之ヲ実施シ其ノ他ノ事項ニ関シテハ何時ニテモ防空警報ニ即応シ得ル如ク其ノ準備ヲ為シ適宜之ヲ実施シ防空警報ヲ受ケタルトキハ之ニ応ジテ通信、警報伝達、燈火管制ヲ実施シ且防護準備ヲ補強シ敵機ノ空襲ヲ受ケタルトキ、全力ヲ挙ケテ防空活動ヲ行フモノトス

第十一條 市長知事ヨリ防空実施ノ開始又ハ終止ノ命令ヲ文書又文、電話ニ依リ受領シタルトキハ直ニ文書、口頭、又ハ電話等ニ依リ町内会長ヲ経テ管内一般ニ伝達スルモノトス但シ揭示其ノ他ノ方法ニ依リテハ公示セス

第二章 防空実施機関

第一節 通則

第十二條 市長ハ防空実施ノ際當該業務ヲ担任シ本市役所ニ防空本部ヲ設置スルモノトス但シ防空実施中状況ニ依リ之ヲ設置セサルコトアルベシ。本部ノ組織、編成、業務分掌ハ年度防空計画ニ之ヲ定ム

第十三條 警察署長ハ市長ト協力シ本計画第七條ニ掲グル施設ノ管理者又ハ之ニ準スヘキ者ニ對シ防空ノ実施ニ従事セシムル為且、自衛防護ノ目的ヲ以テ特設自衛隊ヲ組織セシムルモノトス

第十四條 市長ハ警察署長ト協力シ一般市民ヲシテ自家防衛及隣保共助ノ目的ヲ以テ防空ノ実施ニ従事セシムル家庭防衛班ヲ組織セシムルモノトス

第二節 警防団

第十五條 市長ハ警防団ノ組織、編成及担任業務ヲ年度防空計画ニ之ヲ定ムルモノトス

第十六條 警防団ノ出勤計画ニ定ムヘキ事項ハ概ネ左ノ如シ

一 団員ノ召集方法

二 命令ノ伝達及通信連絡方法

三 団員ノ配置分担、交替及補勤

四 設備資材ノ配備

五 其ノ他配備及行動ニ必要ナル事項

前項ノ出勤計画ニ際シテハ特ニ長期ニ堪ユル如ク交代制ヲ報リ空襲警報発令中ハ全員部署ニ着ク如ク定ムルモノトス

第十七條 警防団ハ警察部長又ハ警察署長ノ指揮ニ従ヒ行動ス但シ緊急已ムヲ得サル場合ニ於テハ市長又ハ団長ノ指揮ニ従ヒ行動スルモノトス市長ハ其ノ担当スル防空業務ニ付警察署長ニ協議シ警防団ニ指示スルコトヲ得ルモノトス

第三節 特設自衛団

第十八條 本計画第十三條ニ依リ特設自衛団ハ工場、鉱山、事業場、会社、銀行、商店、病院與行場、集会場、学校及之ニ準スルモノノ名称ヲ冠シ自衛団ト称スルモノトス

第十九條 特設自衛団ハ平時ノ消防並ニ防空ニ必要ナル設備資材ヲ整備スルモノトス

第二十條 市長及警察署長ハ其ノ年度防空計画ニ特設自衛団ノ名称、組織、編成並ニ設備資材等ヲ明カルニスルモノトス

第四節 家庭防衛隣保班

第二十一條 市長及警察署長ハ協力シ防空ノ実施ニ従事セシムル為町内会隣組ヲ以テ家庭防衛隣保班ヲ組織セシムルモノトス（別紙第一號家庭防衛隣保班要領参照）

第二十二條 隣保班ハ隣保共助ノ精神ニ基キ空襲ニ因リ生スヘキ危害ヲ防止シ又ハ之ニ因ル被害ヲ軽減スルタメ應急的ニ自家防衛ヲ為スト共ニ班内ニ於ケル警報伝達、燈火管制、消防、其ノ他ノ防護ノ共助ヲ任務トシ状況ニ依リ隣保班間ニ於ケル消防其ノ他ノ防護ニ付共助スルモノトス

前項ノ隣保班ノ任務ハ特ニ防火ニ重点ヲ置クモノトス

第二十三條 隣保班ハ隣保協力ニ便ナル十戸内外（海上生活者ニ在リテハ十隻内外）ヲ以テシ班長ハ隣組長ヲ充テ班長事故アルトキハ月番之ヲ代理シ池ニ後員ヲ設ケサルモノトス

第二十四條 隣保班ト警察署、市、警防団トノ連絡機関一八町内会長又ハ隣組長ヲ以テ之ニ充ツ

第二十五條 隣保班ノ育成、主トシテ市長ノ行動ノ指揮統制ハ警察署長及其ノ指揮ニ従ヒ警防団長ニ任スルモノトス但シ市長ハ其ノ担当スル防空業務ニ付警察署長ト協議シ指示スルコトヲ得

第二十六條 市長ハ年度防空計画ニ隣保班ノ組織、編成及資材ヲ明カニシ置クモノトス

第五節 其ノ他

第二十七條 市長及警察署長ハ関係業者ト協力シ防空ノ実施中使用スベキ各種自動車（自動自転車ヲ含ム）ノ動員系統車輛数等ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第三章 防空監視

第一節 任務

第二十八條 防空監視ノ主要ナル任務ハ航空機又航空機ヲ搭載シ若ハ其ノ搭載ノ疑ヒアル敵艦艇（敵ノ疑ヒアルモノヲ含ム）ヲ監視シ之ニ関シ得タル情報ヲ確實且迅速ニ報告スルニ在ルモノトス

第二節 編成任免及服装

第二十九條 防空監視署消長ハ概ネ在郷軍人タル資格ヲ有スル者又ハ在郷軍人タル資格ヲ有シタル者ヨリ防空監視消員ハ青年学校生徒、青年団員等ニシテ身体強健、視力及聴力健全ナル者ヨリ之ヲ任命シ監視隊本部員ハ思想現実ニシテ通信ノ技術ヲ有スル者ヨリ之ヲ任命スルモノトス

第三〇條 市長、在郷軍人分会長、青年学校長、青年團長ハ防空監視消員ノ詮衡、呼集配置及防空監視消ノ建築等ニ関シ警察署長ノ要求ニ応シ之ニ協力援助スルモノトス

第三節 開始及終止

第三十一條 市長、警察署長ヨリ防空監視隊員ノ呼集配置ニ関シ委嘱ヲ受ケタルトキハ年度防空計画ニ定ムル時間内ニ配置ヲ完了シ又ハ応急監視ノ処置ヲ講シタルトキノ直ニ其ノ旨警察署長ニ報告スルモノトス

第三十二條 市長ハ警察署長ノ行フ防空監視隊員ノ服装点検及訓授ニ立会スルモノトス

第三十三條 市長ハ防空監視隊消員名簿ヲ備ヘ異動ヲ明カニスルト共ニ呼集呼集方法ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第四節 海上防空監視

第三十四條 漁業見積所ノ見張従事者ハ防空監視ノ任務ニ當ニ適當且速カナル方法ニ依リ漁業（水産）組合又ハ最寄ノ警防団若ハ警察官速報セシムルモノトス

第三十五條 警防団及漁業（水産）組合前條ノ情報ヲ受ケタルトキ、最寄ノ警察官署ニ通報スルモノトス

第三十六條 航行中ノ一般船舶ハ防空監視ニ任シ其ノ情報ヲ最寄海岸局、漁業無線局ヲ経テ呉鎮守府ニ報告スルモノトス

第三十七條 集団漁労ニ従事スル漁舟ハ一群ノ漁舟ニ對シ群長船及當番舟（別紙第二號参照）ヲ定メ輪番對空監視、情報通信、（警報伝達ヲ含む）ノ任務ニ従事シ情報ハ漁業（水産）組合又ハ最寄ノ警防分団若ハ警察官署ニ報告スルモノトス

第三十八條 警察署長ハ市長、漁業（水産）組合長ト協力シ集団漁労ニ従事スル漁舟及其ノ他ノ魚舟ノ調査ヲ毎年十二月一日現在ニテ之ヲ行フト共ニ群長船及當番舟ノ状況及専務監視員ヲ毎年十二月二十日迄ニ知事ニ報告スルモノトス（主ナル漁業場調査ハ別紙第三號参照）

警察署長及市長ハ漁業（水産）組合長ト協力シ前條ノ漁舟ト陸上トノ情報通信ニ関シ其ノ方法系統及実施ノ責任者ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第三十九條 群長船及當番舟ハ標識、眼鏡「ラチオ」「ノロシ」花火、手廻「サイレン」等ヲ準備シ出漁スルモノトス

第四章 防空通信

第一節 通則

第四十條 防空通信トハ防空ノ実施ニ直接必要ナル通信ニシテ関係陸海軍官憲、関係官公署及之等ノ命ヲ受ケ防空ノ実施ニ従事スル若相互間ニ発受スルモノヲ謂フ

第四十一條 防空通信ヲ分チ左ノ三種トス

一 警報

二 情報

三 指揮連絡報

第四十二條 防空通信ハ通信電話（電報）ニ依ル場合ハ防空通信規則（昭和十三年一月廿八日通信省令第九號別紙第六號参照）及防空通信取扱規程（昭和十三年一月廿九日公達第百二十五號）警察電話ニ依ル場合ハ広島県警察電話防空通信取扱規程（昭和十三年二月十五日訓防第一〇八號別紙第七號参照）鉄道電話又ハ其ノ他ノ電話ニ依ル場合ハ其ノ定ムル所ニ依ルモノトス。

第四十三條 防空通信ノ順位ハ左ニ依ルモノトス

一 警報ハ最先順位ヲ以テ取扱フコト

二 情報ハ警報ニ次ク先順位ヲ以テ取扱フコト

三 指揮連絡報ハ通信電話ニアリテハ至急通話（電報ノ場合ハ至急官報）ト同一順位ヲ以テ之ヲ取扱ヒ警察電話ニアリテハ警察上特に緊急ヲ要スル通信ヲ除クノ外一般通信ニ優先シテ取扱フコト

第四十四條 防空通話ノ請求ニ方リテハ左ノ如ケ申込ヲ為スモノトス（訓練ノ場合ハ「訓練」ナル語ヲ冠ス）

一 優先取扱ヲ受クヘキ通信電話ノ場合

指導連絡報 中局五三一五番

第四十五條 年度防空計画ニ定メタル主系統及副系統ノ電話使用不能ノ場合ニ於チ指揮連絡ヲ為サントスルトキハ電令ニ依ルモノトス

第四十六條 防空通信ノ通話ノ際意味通セサルトキ、別紙第四號和文通話表ニ依ルモノトス

第四十七條 市長、特別警報受領者（官公衛、学校、会江工場、其ノ他ニシテ通信電話ニ依リ直接警報ノ伝達ヲ受クルモノヲ謂フ）ハ防空実施ノ開始命令アリタルトキハ晝夜ニネ拘電話受発ノ責任者ヲ配置スルモノトス

第四十八條 無線電信ノ有セサル船舶（概ネ汽艇以上トシ電燈設備ヲ有スルモノヲ基準トス）ニハ「ラヂオ」受信機ヲ整備シ當直一名ヲ在船セシムルモノトス

第四十九條 防空通信施設ノ破壊又ハ故障ニ際シテハ概ネ左ノ配置ヲ講スルモノトス。

- 一 第二次第三次通信連絡線ノ使用
- ニ 他ノ通信線ノ利用
- 三 鳩通信、自動車、伝令ノ使用
- 四 祖覚通信ノ使用
- 五 工作修理ノ派遣
- 六 警察署長ニ援助協力
- 七 警察署又ハ隣接市町村ト連絡

第二節 警報通信

第五十條 警報通信トハ西部軍司令官又ハ広島師団長並ニ呉鎮守府司令長官又ハ其ノ指定シタル者発シタル防空警報ニ市内全般ニ伝達スル通信ヲ謂フ

第五十一條 西部軍司令官又ハ広島師団長ノ発令スル防空警報ノ伝達系統ハ別紙第五號ノ通トス

第五十二條 呉鎮守府司令長官ノ発令スル防空警報ノ伝達系統ハ別紙第六號ノ通トス

第五十三條 前二條ノ防空警報発令伝達ニ際シ電話使用不能ノ場合ニ於テハ別紙第七號ノ防空通信特定略語ニ依ルコトアルベシ

第五十四條 防空警報ノ発令ハ概ネ左ノ通トス

- 一 警報地区名
- ニ 警報ノ種類
- 三 發令官

第五十五條 市長、特別警報受領者、指定警報受領者ニ對スル警報伝達系統ハ年度防空計画ニ之ヲ之ヲ定ム

第三節 情報通信

第五十六條 情報トハ防空監視ノ事務ニ従事スル昔ヨリ航空機ヲ搭載シ若ハ其ノ搭載ノ疑ヒアル敵艦艇（敵ノ疑ヒアルモノヲ含ム）ノ行動ヲ報告スル通信ヲ謂フ

第四節 指揮連絡通信

第五十七條 指揮連絡報トハ防空機関相互間ニ於ケル防空ノ実施上必要ナル燈火官制、防空監視、消防、消毒、救護等ニ関シ指揮又ハ之カ借置報告等ニシテ緊急ヲ毒スル通信ヲ謂フ

第五十八條 防空通信規則ニ依リ無料取扱ヲ受クヘキ指揮連絡報ノ区間ハ左ノ通トス但シ之カ電話番号ハ年度防空計画ニ之ヲ定ム

- 一 広島県庁ト市役所間
- ニ 警察署ト市役所間

第五十九條 市長ハ防空機関、指揮連絡報ヲ行ヒタルトキハ別紙第八號ノ様式ニ依リカ顛末を明カスルモノトス

第五章 防空警報

第六十條 防空警報ハ警戒警報、警戒警報解除、空襲警報、空襲警報解除ニ分ケカ警報發令官及警報地区名並ニ其ノ区域ハ左ノ如シ

發令官	警報地区名	區域
西部軍司令官	西部軍艦區全地區	海軍擔任區域ヲ除ク西部軍管區ノ全區域
	西中国地區	海軍擔任區域ヲ除ク広島師團管下ノ全區域
	広島地區	広島縣一圓但シ海軍擔任區域タル吳地區ヲ除ク
呉鎮守府司令長官	吳地區	海軍擔任區域（但シ徳山地區ト同時ニ發令セラルルコトアリ）
	内海西部海面	広島縣ノ属スル海面
	瀬戸内海	他縣ニ属スル内海頭部海面ト内海西部海面トヲ合シタルモノ
	呉鎮守府海上區	呉鎮守府管下ノ全海面
	呉鎮陸上擔任区域及海上區	呉鎮守府管下ノ陸海全地區

備考 一 西中国地區 広島地區ニ對シテハ広島縣師團長ヨリ空襲警報ヲ發令セラルルコトアリ

二 広島地區 吳地區ニ付テハ別紙第九號参照

第六十一條 市民ニ對スル防空警報ノ傳達ハ迅速確實ニ之ヲ徹底スルヲ主眼トシテ一斉操作ヲ為シ得ル警報器ノ充實ヲ圖ルト共ニ海上ニ對シテハ其ノ重要性ニ鑑ミ掲燈（吹流）信號燈ヲ整備スル如ク措置スルモノトス

第六十二條 防空警報ノ傳達區分及責任者ハ左ノ各號ニ依ル

- 一 市長

イ 通信当局ヨリ通信デンワニ依リ警報ヲ受領シタルトキハ直チニ本市設置ノ「サイレン」又ハ電話、傳令等ニ依リ町内會長又ハ警防分團ヲ經テ市内一般ニ傳達スルモノトス

ロ 海上ニ於ケル警防傳達ハ警察署長ト協力 之ヲ傳達スルモノトス

ハ 警報ノ受領及傳達ノ擔當責任者ヲ定メ置クモノトス

二 特別警報受領者

イ 通信電話又ハ副系ニ依リ警報ヲ受領シタルトキハ 各其ノ定ムル所ニ依リ部内及一般ニ傳達スルモノトス

ロ 警報ノ受領及傳達ノ責任者ヲ定メ置クモノトス

第六十三條 空襲警報解除セラレタルトキハ警戒警報ノ体勢ニ移ルモノトス

第六十四條 本市及特別警報受領者ニ對スル警報傳達系統ノ主系統、副々系統ハ年度防空計画ニ之ヲ定ム

第六十五條 各警報受領者ハ其ノ計画セル各方面ヨリ防空警報ノ受領ニ遲速アルトキハ最先ニ受領セルモノニ依リ所定ノ傳達ヲ爲スモノトス但シ警報解除ノ傳達ハ主系統ヨリ受領ヲ持チテ之ヲ行フモノトス

前項ノ警報ノ受領者主系統又ハ副系統ニ依リ受領シタル警報ニシテ相違アル場合ハ警察署長ト協議シテ適當ナル處置ヲ講スルモノトス

第六十六條 市長ハ市内全般ニ對スル警戒警報及空襲警報ノ傳達所要時間ヲ年度防空計画ニ定メ之ヲ短縮スル如ク計画スルト共ニ特ニ島嶼部漁舟航路標識（通信省並ニ海軍省管理ノモノヲ除ク）ニ對スル警報傳達ノ方法及之カ責任者ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス（航路標識ハ廣島縣永年防空計画別紙第十四號参照）

第六十七條 防空警報ノ信號ハ左ニ依ルモノトス

區分	「サイレン」又ハ汽笛	警鐘	電燈点滅	煙火	掲燈（吹流）信號	其他
警戒警報	—	—	—	—	夜間赤燈三個連掲	口頭又揭示
警戒警報解除	—	—	—	—	夜間消燈	
空襲警報	三秒ヲ間シ六秒宛十回（急発休止ノ装置アル「サイレン」） ----- 断続吹鳴十回（急発休止ノ装置ナキ「サイレン」）	○ ○—○—○—○ 一点ト四点ト班打線返十回	数秒ヲ間シ 点滅五回以上	打上 四爆音	晝間ハ吹流一旗掲揚 夜間ハ赤燈三個二分間点滅行ヒタル後消燈	口頭又揭示
空襲警報解除		○ ○—○ ○ ○—○ 一点ト二点ト班打線返十回	行ハス	—	晝間ハ吹流降下 夜間ハ赤燈三個点燈	口頭又揭示
備考	一 警戒警報ノ發令ナク直ニ空襲警報ヲ發令セラレルトアリ 二 離島又ハ交通不便ノ土地ヲ除クノ外ハ「ラヂオ」ハ概ネ副受信用トシテ設置スルコト 三 訓練ノ場合ニ於ケル防空警報ノ呼稱ハ「訓練」ノ語ヲ冠スルコト 四 訓練ノ場合ニ於ケル掲燈信號ノ最下端赤色信號燈ノ下部ニ白色信號燈ヲ一個ヲ附加シ点滅信號ハ警報ニ應シ赤色信號ト同様ニ行フコト					

第六十八條 市長ハ警察署長及「サイレン」（汽笛ヲ含ム以下同シ）管理者ト協議シ管理者ニ對スル警報傳達方法、吹鳴責任者ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第六十九條 市長ハ設置セル「サイレン」ノ無響到達訓練セサル範圍又ハ「サイレン」ノ使用不能ノ場合ニ於テハ手廻「サイレン」ニ依リ傳達スル順路又ハ吹鳴場所並ニ防空警報ノ傳達用ニ使用スル警鐘ノ位置管理者、警報ノ傳達方法及打鐘責任者ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第七十條 市長ハ電燈点滅可能區域ヲ調査シ之ヲ年度防空計畫ニ定メ一般ニ周知セシメ置クモノトス

第七十一條 市長ハ警察署長ト協議シ燈火打上場所ニ使用スル筒、煙火ノ保管場所、打上責任者及之ニ對スル警報傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十二條 掲燈（吹流）信號ハ別紙第十號掲燈（吹流）信號燈計畫表ニ市長、警察署長ト協議シ之カ位置ヲ選定シ左ニ依リ施設スルモノトス

- 一 信號燈ハ等間隔ヲ以テ垂直ニ配置ス
- 二 燈火ノ間隔ハ三米ヲ標準トス
- 三 信號燈ノ高サハ施設地ノ狀況ニ依リヘキモノナルモ概ネ最下端ノモノヲ地上又ハ施設場所ヨリ三米以上トス
- 四 燈火ハ上空ニ對シ光源ヨリ直接發スル射光カ十五度以上ノ上空ニ向カハサルコト
- 五 電球ノ大サハ一〇〇ワツト程度ヲ標準トス

前項ニ基ク設計參考圖ハ廣島縣永年計畫別紙第二圖ノ通トス

第七十三條 掲燈（吹流）信號燈ハ左ノ事項ニ付注意スルモノトス

- 一 信號燈ノ設置位置ハ海上ヨリ見易キ箇所ヲ選フコト
- 二 警戒警報解除セラレタル場合ハ空襲警報未ダ解除サレザル場合ト誤解サルル虞アルヲ以テ警戒警報解除ニ際シ赤色燈ノ消燈ハ附近陸上ノ燈火ノ概ネ点燈ヲ了シタル後行フコト
- 三 信號燈ハ上空ヨリノ發見ヲ困難ナラシムル為一箇所ニ多數集中ヲ適當ナル間隔ヲ置キ設置スルコト

第七十四條 市長ハ掲燈（吹流）信號燈ノ責任者及之ニ對スル警報傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十五條 市長ハ警察署長ト協議シ警報傳達ノ困難ナル地域又ハ海上ニ對シテハ警戒警報發令アリタルトキハ（空襲警報解除アリタルトキ亦同シ）ヲ掲出シ警報傳達ノ万全ヲ期スモノトス

前項ノ規定ハ漁場見張ニ従事中防空警報ノ發令アリタルトキニ之ヲ適用ス但シ之カ掲出責任者ハ所属漁業（水産）組合長トス

市長ハ前二項ノ提出場所提出責任者及之ニ對スル警報傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十六條 口頭又ハ揭示ニ以テ防空警報ヲ傳達スル場合ハ左ニ依ルモノトス

一 警報地区名及警報ノ種類

二 夜間口頭ヲ以テ傳達スル場合空襲警報解除ノ際ハ「今ヨリ警戒管制」ナル語ヲ附加ス

第七十七條 市長ハ防空警報ヲ傳達スルニ際シ口頭ニ依ル場合ハ擔任區域順路及従事人員ヲ揭示ニ依ル場合ハ揭示場所及揭示責任者ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十八條 市長ハ防空警報副受信ノ目的ヲ以テ「ラヂオ」ヲ聴取スル箇所ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス但シ離島又交通不便ノ土地ニシテ主受信トスルノ必要アル箇所ハ警察署長ト協議シ副系統ト共ニ之ヲ定ムルモノトス

第七十九條 放送局ノ刑法放送ハ左ノ要領ニヨリ實施スルモノトス（訓練ノ場合ニハ警報ノ種類ノ前ニ「訓練」ナル語ヲ附ス）

警報、警戒、警報（三回）

何々司令（長）官（廣島縣團長）發令只今何々地區ニ對シ警戒（空襲）警報（解除）カ發令サレマシタ（二回） 夜間空襲警報解除ヲ傳達スル場合ニ在リテハ「今ヨリ警戒管制」ナル語ヲ附加スルモノトス

第八十條 各汽船會社（支店、代理店、出張所ヲ含ム）ハ防空警報ノ發令中ノ區域ニ入ル豫定ノ船舶ニ對シテハ其ノ旨通達スルモノトス

第八十一條 市長ハ警察署長ト協力シ前條ノ汽船會社ヲ調査シ之ニ對スル防空計畫ノ傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定メ且全會社ヲシテ防空警報ノ發令又ハ解除ノ通達責任者及通達方法ヲ定メシテ所属船舶名ヲ適當ニ定メシメ附属船舶名ヲ適當ナル場所ニ明示セシメ置クモノトス

第八十二條 第三十七條所定ノ群長船掲燈（吹流）信號ノ陸上ヨリ第七十五條ノ方法ニ依リ若ハ「ラヂオ」等ニ依リ防空警報ヲ受領シタルトキハ當番舟ニ傳達セシムルモノトス

當番舟前項ノ方法ニ依リ防空警報ヲ受領シタルトキ亦同シ

第八十三條 集團魚労ニ従事セサル漁舟ハ掲燈（吹流）信號ノ手旗又ハ「ラヂオ」等ニ依リ防空警報ヲ受領スルモノトス

第八十四條 群長船（當番舟）又ハ掲燈（吹流）信號ニ依リ防空警報ヲ受領シ得ザル水面ニ出漁シ且漁舟群ニ加入シ得サル漁舟ハ「ラヂオ」受信器ヲ備ヘ防空警報ヲ受領スルモノトス

第八十五條 本計畫ニ依リ防空警報ヲ受領スルモノハ警報受領（傳達）責任者ヲ定メ別紙第十一號ニ依リ防空警報ノ受領ヲ明カニスルモノトス

第六章 燈火管制

第一節 通則

第八十六條 燈火管制ハ準備管制（燈火管制規則第四條ノ規定ニ基ク燈火管制）警戒管制及空襲管制ニ分チ日没ヨリ日出迄ノ間之ヲ行フモノトス之カ標準ハ別紙第十二號ノ通トス

第八十七條 準備管制ハ國民ノ日常生活上ノ必要比較的少キモノ及防空警報ニ應シ迅速ニ處置シ得サル一般屋外燈（廣告、看板裝飾燈類、門軒燈類、特別屋外燈類）ヲ秘匿シ都市ノ暈光ヲ減ズルト共ニ警戒管制ヘノ移行ヲ速力ナラシムルニ在リモノトス

前項ノ準備管制ハ知事之ガ燈火ヲ指定シ期間ヲ定ムルモノトス

第八十八條 警戒管制ハ敵機來襲ノ虞アル場合行フモノニシテ暈光ヲ消滅シ敵機ニ對シ航行上ノ目標ヲ與ヘズ且空襲管制ヘノ移行ヲ容易ナラシムルニ在ルモノトス

警戒管制ハ空襲判断及地理的關係等ニ依リ其ノ秘匿程度ヲ甲乙ニ分ツ

第八十九條 空襲管制、敵機來襲ノ危険アル場合行フモノニシテ敵機ニ對シ航行上ノ目標及攻撃目標ノ認知並ニ攻撃實施ヲ困難ナラシムルニ在ルモノトス

第九十條 警戒管制及空襲管制ハ防空警報ノ發令ニ基キ一齊ニ若ハ別ニ定ムル警戒地域（第六十條參照）ニ之ヲ實施スルモノトス

第九十一條 沿岸水域（陸岸ヨリ資格通信可能範圍トシ距岸概不三浬ヲ標準）ノ燈火管制ハ警報發令官ノ如何ニ關ラズ最モ速カニ到達セル警報ニ依リ之ヲ為シ解除ノ遅キ方ニ依ルモノトス

第九十二條 速ニ空襲管制ヲ行フコト困難ナル場合並ニ空襲警報ノ受領困難又ハ著シク遅延スル場合ニハ燈火ハ警戒管制ト氣ヨリ豫メ空襲警報ノ處置ヲ為シ置クモノトス但シ之ガ為テ燈火管制施設及警報傳達施設ヲ忽セラセサルモノトス

第九十三條 知事ハ空襲管制時ニ於テ情況ニ依リ陸海軍並ニ通信局及電氣事業者ト協議ノ上縣下一齊ニ若ハ地域ヲ指定シ停電セシムルコトアルモノトス

第二節 屋外燈類

第九十四條 警察署長ハ市長ト協力シ標識燈類中重要ナルモノニ對シテハ電源停止ノ場合ニ備ヘ豫備光源ヲ計畫シ置クモノトス

第九十五條 標識燈ノ標識記號ハ左ノ通トス

種 類	記 號	種 類	記 號
火災報知機燈	火	消防官署標識燈	Y
非常報知機燈	非	消火栓標識燈	*
避難所防護室標識燈	ヒ	警防團標識燈	★
救護所標識燈	+	障礙注意燈	赤色
警察官署標識燈	示		

第九十六條 交通保安上必要ナル箇所ニハ警戒管制時街路燈類ニ代用スル門軒燈ヲ残置スルモノトス

第九十七條 残地區ノ設備ニ付テハ左ノ事項ニ留意スルモノトス

- 一 一定地域内ノ残地燈ヲ統一ノ管制ヲ行フ設置ナキモノハ各別ニ適當ナル黙滅装置（防水型プルスイッチ等）ヲ附スルコト
- 二 遮光具ハ内面白色ニシテ大ナルモノヲ有利トシ取付ケニ當リテハ路面ヲ成ヘク廣ク有効ニ照明スル為幅員大ナル箇所ニハ長キ枕木又ハ張線等ニ燈器ヲ懸吊スルコト

第九十八條 警戒管製乙程度又ハ甲程度ノ場合ニ於ケル残置燈ノ燈火ノ間隔又ハ燈器ノ高サ等ニ付テハ左ノ事項ヲ参照整備スルモノトス

一 警戒管製乙程度ノ場合街路ノ幅員ト残置シ得ル燈火ノ間隔トノ關係

路幅米(A)		3	45	5	6	9	10	11	15	18	20	22	25	30	35	36	40	44	73
街路燈ノ 最小(B) 米間隔	三燭光	67	45	40	33	22	20	18	13	11	10	9	8	67	57	55	50	45	27
	八燭光	178	118	107	89	59	53	49	36	30	27	24	21	18	15	15	13	12	7
	一六燭光	355	237	214	178	118	107	97	71	59	53	49	43	36	30	30	27	24	15

二 警戒管制甲ノ場合ニ残置スル街路燈ノ光源ト燈器ノ高サトノ關係

電燈燭光数	一燭	二燭	五燭	八燭	一〇燭
電燈ノ高サ	2.6 米	3.6 米	5.8 米	7.3 米	8.2 米

備考 燈器ニ依ル光ノ反射ハナキモノトス

第九十九條 本市内ノ街路ノ燈類管制ハ一定地域内ノモノヲ統一ノ行フ如ク整備計畫スルモノニシテ之カ設備ナキモノハ個々ノ燈火ニ付管制方法管制責任者ヲ定ムルモノトス

警戒管制乙ノ地域ニ於テ統一ノ減光又ハ消燈シ得ル街路燈類ハ燈火管制規則第五條第二號及第十條ノ規定ニ依リ遮光ノ省略又ハ緩和スルコトヲ得

- 一 三燭光以下ニ減光シタル場合遮光ヲ省略スルコトヲ得
- 二 三燭光以下ニセル場合ハ光源ヨリ直接發スル射光ガ水平以上ニ向ハサル程度迄遮光条件ヲ緩和スルコトヲ得

第一百條 交通標識燈中障礙注意燈ハ管制下ニ於ケル障害ヲ防止スル為必要ナル燈火ナルヲ以テ必要ナル位置ニハ必ず設置スルモノトス

第三節 屋内燈類

第一百一條 一般住宅ニ在リテハ生ヘク適當ナル方法ヲ講シ日常生活上特ニ必要ナル室ハ之ヲ隱蔽スルモノトス

第一百二條 左ノ如キ場合ニ於テハ成ヘク適當ナル隱蔽施設ヲ整備セシムルモノトス

- 一 業務上高照度ヲ必要トスルモノ
- 二 空襲管制下ニ於テ特ニ作業ノ繼續ヲ必要トスルモノ
- 三 速カニ作業中止ノ困難ナルモノ又ハ消燈ヲ不利トスルモノ

第一百三條 隱蔽ヲ行フニ當リテハ左ノ事項ニ付留意スルモノトス

- 一 既設ノ扉、雨戸ノ類ヲ成ルヘク利用スルコト
但シ節穴、割れ目、合せ目等ヨリノ漏光ナカラシムル様十分注意スルコト
- 二 開口部ハ之ヨリ多少大ナル材料ヲ用ヒ隱蔽スルコト
- 三 出入口ハ前號ニ依ル外二重ニ隱蔽設備ヲ為シ出入ニ際シ光ノ漏レサル用留意スルコト
- 四 換氣通風ニ留意スルコト

第一百四條 隱蔽材料ハ光源ノ光度ニ應シ成ヘク光ノ透過率ノ小ナルモノヲ使用スルコトヲ要スルモノトス（左表参照）

工場等ニ於テハ火氣ノ危険アル箇所ニハ金属板ノ如キ耐火性ノモノヲ又ハ破損ヲ受ケ易キ箇所ニハ筵、木版、木綿、等ヲ使用スルヲ適當トスルモノトス尚隱蔽材料ハ成ルヘク對価處理シタルモノヲ用ユルヲ可トス

種別	隱蔽材料		所要重枚数	一枚透過率
	名 称			
金属木板類	金属板、木板		1	0
布類	黒洋繻子、両面ゴム引布、黒帆、木綿		1	0
	黒ガス、毛繻子		2	0.0002
	人絹黒繻子		2	0.0003
	黒繻子		2	0.0005
	黒新モス、黒天竺木綿		4	0.005
紙類	馬糞紙、黒ラシヤ紙		1	0
	両面黒塗新聞紙		2	0.0001

	両面刷新新聞紙	5	0.14
--	---------	---	------

備考 本表ハ大体ノ標準ヲ示シタルモノニ過キス

第一百五條 普通屋内燈ノ反射光ニ對シテハ別段ノ制限ナキモ鏡面等ニ反射シ屋外ニ強キ光ノ漏ルルコトナキ様注意スルモノトス

第一百六條 遮光具ニ付テハ左ノ事項ニ留意スルモノトス

一 遮光具ノ材料ハ透過率ノ可及的少ナルヲ可トスルモ大体ノ標準ハ〇.〇〇三以下即チ紙ナラバ両面印刷新聞紙三枚ヲ重ね合セタル程度又ハ布ナラバ黒縞子一枚、黒木綿又ハ黒新モス二枚重ね合セタル程度以上タルコト

二 遮光具ノ材料ニハ成ヘク耐火性ノモノ又ハ耐火處理シタルモノヲ用ユルヲ可トスルコト セルロイドノ如ク燃エ易キ材料ノモノ密閉型ノモノ或ハ極メテ小型ノモノ等ハ火災ノ危険アルヲ以テ不適當ナルコト

三 遮光具ノ内面ハ白色、銀色等ノ如ク反射率ノ良好ナルモノガ適當ナルコト

四 使用ニ當リテ遮光條件ニ反ゼザル限り必要ナル範囲ヲ廣ク照明スル様燈具ノ位置及深サヲ加減スルコト

第一百七條 減光且ツ遮光ノ廣サト許容シ得ル電燈ノ燭数及最大光度トノ關係ヲ示セバ左ノ如シ

※	屋ノ廣サ		台数	1	2	3	4.5	6	8	10	12
			平方米	1.5	3	4.5	6.75	9	12	15	18
乙	(イ)	50		5	10	15	22.5	30	40	50	(60)
	(ロ)	5		0.5	1	1.5	2.3	3	4	5	(6)
甲		2		0.25	0.5	0.75	1.1	1.5	2	(2.5)	(3)

※警戒管制別 燈ノ最大燭光数

〔備考〕 標柱括弧セルハ許容量最大燭光ヲ超過スルヲ以テ二燈以上ヲ使用スベキモノトス

例へバ乙(イ)ノ場合五十燭光ト十燭光又ハ三十燭光二燈等又乙(ロ)ノ場合五燭光ト一燭光等

第四節 自動車前照燈携帶燈火焰類

第一百八條 自動車前照燈ノ減光方法ヲ示セバ概ネ左ノ如シ但シ警戒官制甲ノ場合ハ遮光具ヲ必要トスルモノトス

警戒管制程度ノ區別	前照燈ノ光度	減光方法
警戒官制乙ノ場合	一萬独光以下	遮光率〇.〇三ノ材料(例、金巾新モス、天竺、シルカ等ノ黒布一枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト
	一萬独光以上	遮光率〇.〇一ノ材料(例、ガスモス等ノ中手黒布一枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト
警戒官制甲ノ場合	一萬独光以下	遮光率〇.〇〇七ノ材料(例、黒雲才等ノ中手黒布一枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト
	一萬独光以上	遮光率〇.〇〇二ノ材料(例、薄キ黒縞子一枚又ハガスモス等ノ中手黒布二枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト

第一百九條 携帶燈ヲ使用スル場合ニハ直射光ヲ上空ニ向ハシメサル様注意スルモノトス

第一百十條 火焰ヲ發スル工場等ニテ空襲官制時ニモ作業ノ繼續ヲ必要トスルモノ又ハ速ニ作業中断ノ困難ナルモノハ火焰ノ隠蔽設備ヲ整備スルモノトス之ガ隠蔽設備ニ関シテハ左ノ事項ニ就キ注意スルコト

一 隠蔽材料及遮光材料ハ必要ニ應シ耐熱耐酸等ノモノヲ用フルコト

二 建物内ノ換氣通風ヲ計ルコト

第五節 漁業用燈類

第一百十一條 漁業用燈類ハ防空警報ニ應シ速ニ消燈又ハ減光且遮光シ得ル様遮光具ヲ備ヘ電氣集魚燈ニ在リテハ切替装置等ノ設備ヲ為シ「アセチレン」反射集魚燈及石油集魚燈ニ在リテハ「アセチレン」瓦斯及石油ノ供給ヲ調節シ得ル調節弁等ヲ取付クルモノトス尚「アセチレン」瓦斯集魚燈及石油集魚燈ハ成ベク前項ノ如キ電氣集魚燈ニ轉換セシムルモノトス

前項ノ漁業用燈類ノ管制(昭和十五年三月二十二日廣島縣告示第八十五條)ハ別紙第十三號之ガ管制參考圖ハ別紙附圖ノ通トス

第一百十二條 流網延縄定置網其他ノニ類スルモノノ標識燈ノ燈具及遮光具ハ特ニ風波ニ耐ヘ得ル堅牢ナルモノトシ且燈器水平ヲ保ツ構造トスルモノトス

第七章 音響及交通管制並ニ交通整理

第一百十三條 防空實施ノ開始命令アリタルトキ又ハ之カ終止命令アリタルトキト雖モ別命ナキ限り正午ノ時報其他ノ報告用「サイレン」汽笛ニシテ三十秒以内連續吹鳴スルモノヲ除クノ外防空警報類似ノ音響ハ之ヲ使用スルコトヲ得ザルモノトス但シ必要ニ依リ此等音響ノ管制ヲ行フコトアルベシ

第一百十四條 燈火管制規則第四條ヲ適用スル期間該地域内ニ在リテ保安上特ニ必要ナル場合及一斉吹鳴装置アルモノヲ除クノ外「サイレン」汽笛及之ニ類似ノ音響ノ使用ヲ警戒警報又ハ空襲警報ノ發令ヨリ警戒警報解除ニ至ル迄ノ期間ニ互テハ警報トシテ使用スル場合及保安上特ニ必要ナル場合ノ外「サイレン」汽笛警鐘等之ニ類似ノ音響及航空機類似ノ爆音ハ一切之ヲ禁止セラルルモノトス(昭和十三年七月十九日廣島縣例題二十九號音響使用取締規則参照)

第一百十五條 空襲警報發令中ハ必要ニ應シ陸上一般ノ交通ヲ制限シ又ハ交通機關ノ速力ヲ減ゼシメ海上ニ在リテハ必要ニ依リ航行及就漁ヲ停止セシメラルルコトアルモノトス

第一百十七條 燈火管制中ノ道路ニ於ケル各種車輪ノ運行ハ左ノ制限ニ依ル(知事指定シタル車輪ハ此ノ限りニ非ズ)但シ電車ニ對シテハ待避ヲ行フ場合ノ外空襲官制時ニ於テ停止セシムルコトアルモノトス

種別	警戒管制時	空襲管制時
----	-------	-------

電車	最高速度毎時十軒	最高速度毎時五軒
自動車（自動自轉車ヲ含ム）	最高速度毎時二十軒	停止
自轉車	平常ノ儘	下車歩行
牛馬車及其他ノ車	平常ノ儘	停止
乳母車	平常ノ儘	平常ノ儘

第百十八條 官公衛其他ノ車輪ニシテ防空上緊急已ムヲ得サル用務ニ依リ使用スル車輪ハ燈火管制規則第十五條ニ基キ特別ノ事情ニ依リ知事ノ指定スルモノ並ニ道規則第六條第二號ニ基キ特別ノ必要ニ依リ警察署長ノ許可シタル車輪ハ前條ノ運行制限ニ依ルヲ要セス尚空襲管制時ニ於テハ別ニ定ムル程度（別紙第十四號自動車、自轉車ニ用ユル燈火ノ告示）ノ燈火ヲ以テ運行スルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ車輪ノ前後ニ左ノ様式ノ標識ヲ附スルモノトス

警察署用	示	尚海軍ノ車輪ノ標識ハ左ノ通トス
縣廳市役所用	公	陸軍用
警防團用	★	海軍用
通信官署用	〒	Λ Λ
鐵道官署用	工	[碇マーク]
放送局用	放	
救急用	+	
電氣工作用	電	
瓦斯工作用	瓦	
警察署ノ許可シタルモノ	急	

第百十九條 防空陣地（高射砲、照空燈、聴音器陣地等）ノ配備中及防空監視哨ノ立哨中ハ之ヲ中心ニシテ五百米以内ノ區域ニ於テハ電車各種自動車及發動機船等ハ音響ヲ停止シ徐行スルモノトス尚之等ノ任務ヲ妨害スル音響及航空機類似ノ爆音ヲ管制スルモノトス

第八章 防空監視及防護警報

第一節 防護監視

第百二十條 防護監視トハ住居又ハ施設付近ニ襲來スル敵機ノ行動特ニ其ノ投下彈ノ落下位置及之ニ因ル被害狀況等ヲ監視シ速ニ之ニ當該防護機關（分團長、團長、警察署長）ニ報告シ以テ防護ヲ迅速適確ナラシムルヲ以テ目的トス

第百二十一條 防護監視ノ為メ（通常空襲警報發令ヨリ同解除ニ至ル迄）防護監視所ヲ配置スルモノトス但シ狀況ニ依リ警戒警報發令間モ隨時配置スルモノトス

特別防空計畫設定者並ニ本計畫第七條ノ施設其他ノ施設ノ管理者又ハ之ニ準ズベキ者ハ各其ノ適當ノ場所ニ防護監視所ヲ配置スルモノトス

第百二十三條 防護監視所ノ位置ハ擔當區域全般を通視シ得ル高所ニシテ且ツ成バク通信機關ヲ利用シ得ル場所ヲ選定スルモノトス

第百二十四條 防護監視所ハ通常長以下七名ヲ以テ服務シ立哨ハ常時二名トス其ノ勤務方法等ハ年度防空計畫ニ之ヲ定ム

第百二十五條 防護監視所ハ概ネ左ノ事項ヲ當該防空機關ニ簡明ニ報告スルモノトス

- 一 敵適航空機ノ発見、飛去、特ニ敵航空機ノ擔任區域ニ入り又ハ去リタル狀況
- 二 投下彈ノ落下狀況
- 三 投下彈ニ依ル被害狀況

第百二十六條 警察署長ハ市長ト協力シ防護監視所ノ警報等ニ之ガ連絡方法ヲ其年度防空計畫ニ定ムルモノトス特ニ広島瓦斯電軌株式会社ニアリテハ電車及乗合自動車ノ待避等ニツキ防護監視所トノ報告連絡關係ヲ具体的計畫ニ樹立スルモノトス

第二節 防護警報

第百二十七條 防護警報トハ火災ノ發生又ハ毒瓦斯攻撃ヲ受ケタルコトヲヲ局地住民ニ報告シ防護ヲ實施セシムル為メノ警報ヲ謂フ

第百二十八條 防護警報ヲ分チテ火災警報、火災警報解除、毒瓦斯警報及毒瓦斯警報解除ノ四種トシ左ニ掲ケルモノコレヲ發ス

一 火災警報及火災警報解除

警察署長又ハソノ指定シタルモノ但シ緊急ノ場合ハ火災ヲ発見シタル者其ノ附近ニ對シ火災信號ヲ發スルコトヲ得

二 毒瓦斯警報及毒瓦斯警報解除

警察署長又ハ其ノ指定シタル者但シ毒瓦斯ナルコトヲ確實ニ認知シ緊急ノ場合ニ於テハ認知者ソノ附近ニ對シ毒瓦斯警報ヲ發スルコトヲ得

前項ノ指定標準等ニ關シテハ年度防空計畫ニ之ヲ定ム

第百二十九條 防護警報ハ左ノ方法ニヨリコレヲ傳達スルモノトス

一 火災警報及火災警報解除

平時ノ於ケル出火又ハ鎮火ノ報知法ニ依ル但シ前條第一號但書ノ場合ニ於テハ空罐、金屬製器具ヲ連打シ「焼夷彈」又ハ「火事」ト連呼スルモノトス

二 瓦斯警報

太鼓又ハ拍子木ヲ連打シ「毒瓦斯」（一時性、持久性ノ區別判明セサルトキ）又ハ「一時性瓦斯」「持久性瓦斯」ト口頭ニテ連呼ス

三 瓦斯警報解除

口頭にて「毒ナシ」又ハ「毒瓦斯ナシ」ト連呼ス

第九章 消防

第一節 通則

第三百十條 空襲時惹起スル火災ハ同時多發ノ特異性ヲ有スルヲ以テ木造家屋ノ密集セル現状ニ於テハ特ニ防火第一主義ヲ徹底スルモノトス

第三百十一條 自家防護ノ信念ヲ堅持スルト共ニ隣保共助ノ精神ヲ涵養強化シ火災発生ノ初期ニ於テ家庭及ビ隣保班ノ総力ヲ以テ沈着勇敢且ツ機敏ニ防火ニ従事シ以テ自衛防火ノ徹底ヲ圖ルモノトス

第三百十二條 焼夷彈攻撃ト共ニ毒瓦斯攻撃ヲ受クルコトアルトキモ凡ユル手段ヲ講ジテ消防作業ヲ繼續シ常ニ火災防御ニ重点ヲ置クモノトス

第三百十三條 知事空襲警報發令中消防上必要アリト認ムル時ハ瓦斯又ハ電気事業者ニ對シ瓦斯又ハ電気ノ供給ヲ一時停止セシムルコトアルモノトス
前項ノ措置ハ緊急ヲ要スルトキハ警察署長之ヲ行ウコトヲ得

第三百十四條 警鐘ニ依ル火災警報ノ信號ハ左ニ依ルモノトス

品 別	信 號
近火信號	○—○—○—○—○—○ 連点打
区域内火災信號	○—○—○ ○—○—○ 三点打
區域外火災應援出動信號	○—○ ○—○ ○—○ 二点打
鎮火信號	○ ○—○ ○ ○—○ 一点ト二点班打
備考	火災警報中近火信號区域内火災信號及區域外火災負應援出動信號ハ凡ソ五分間繼續打鐘シ鎮火ノ見透シアリタルトキハ其ノ時間内ト雖モ直ニ停止スルモノトス 鎮火信號ハ適宜打鐘スルモノトス

第二節 家庭（船舶）消防處置

第三百十五條 警戒警報發令アリタルトキハ各戸ノ適當ナル箇所ニ放水用水、防火器具其ノ他ヲ整備シ且ツ發火及延焼防止ノ為メ並ニ消防活動ヲ妨害セル為メ引火性危険物品ヲ所定ノ場所ニ收藏スルト共ニ建物内外ノ可燃物其他ヲ整頓スルモノトス

警戒警報ノ發令ナク空襲警報ノ發令アリタルトキモ亦同ジ

第三百十六條 空襲警報發令アリタルトキハ炭火、石油、電熱器其他ノ火ヲ始末シ瓦斯ハ主要栓ヲ閉止スルト共ニ隣家ニ近接シタル雨戸硝子戸等ハ鍵又は錠ハカケテ全部閉塞シ防空従事者ハ直ニ防護用服装ニ改メ更ニ屋内其他ヲ見回ルモノトス

第三百十七條 所謂家庭防空ノ従事者（家庭防空隣保班参照）ハ他ノ隣保班ニ應援セザルヲ原則トシ但シ隣接ノ隣保班ニ焼夷彈落下シ應援ヲ必要トスル場合又ハ他ノ隣保班内ニ火災發生シテ未タ警防團ノ來着ナキ場合ニ於テ所属班ノ警戒ノ要ナキトキハ之ニ應援スルモノトス

第三百十八條 家庭防空従事者ハ其ノ長ノ命ニ依リ警防團來着シ消防作業ヲ開始シタルトキハ直ニ消防作業ヲ之ニ委ネ其ノ要求ニ依リ之ヲ援助スルモノトス

第三百十九條 港内ニ在泊スル船舶ハ火災發生（沈没ノ場合ヲ含ム）ノ火災ニ必要ナル消防器具ヲ整備スルモノトス

第三節 警察機關及警防團ノ消防

第四百條 火災現場ニ於ケル消防従事者ノ行動ハ最モ敏活且勇敢ヲ旨トシ一舉ニ鎮滅ヲ期シ其狀況畧鎮火ニ至ラバ迅速ナル引揚又ハ移動ヲ為シ残火ハ一部ノ消防團及家庭防衛隣保班ヲシテ處置セシムルモノトス

第四百十一條 警防團員不發又ハ未發ノ投下彈ヲ發見シタルトキハ標識ヲ立テ人ノ触レサル要周囲ニ繩張ヲ行ヒ警察署長又ハ警防團長（分團長）ニ報告スルモノトス

前項ノ投下彈ヲ發見シタル者ハ直ニ警察署長又ハ警防團（分團）ニ報告スルモノトス

第四節 調査

第四百十二條 警察署長及市長ハ特設自衛團體並ニ會社、工場、倉庫及店舗又ハ規模大ナル建築物等ノ消防用具ヲ整備セル者ノ名稱、所在地及消防用器具ヲ年度防衛計畫ニ定ムルモノトス若シ整備不十分ナルモノニ對シテハ應急處置ヲ講セシムルモノトス

第四百十三條 警察署長ハ市長ト協議シ消防車其他ノ消防器具防火用砂溜及防火用水池（槽）其他消防設備資材ノ位置及保管責任者ヲ年度防空計畫ニ定ムルト共ニ左ノ標識ヲ設置シ應援隊ノ水利部署ニ便ナラシムルモノトス尚井戸ハ飲用及消火用ノ區別ヲ明ラカニシ引用ハ白地ニ「井」ヲ消火用ハ赤字ニ「井」ヲ表示スルモノトス

- 一 地色ハ白、文字ハ黒、縁ハ水色トシ、縁ノ幅ハ四五耗トス
- 二 記號ハ左ノ例ニ依ルコト



- 掘抜ポンプ・・・掘抜
- 井戸・・・・・・井
- 河川・・・・・・川
- 池沼・・・・・・池
- 泉川・・・・・・泉

貯水槽・・・・・・・・槽

防火栓・・・・・・・・栓

三 板内適当ナル箇所ニ使用可能ポンプノ種類、台類等ヲ記載スルコトヲ得

第四百四十四條 市長ハ警察署長ト協力シ消火栓ノ配置状況ヲ年度防空計畫ニ定ムルト共ニ之ガ位置ニハ「消火栓」ナル旨ヲ表示スルモノトス

第四百四十五條 警察署長ハ市長ト協議シ警鐘ノ位置及之ガ打鐘責任者を年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第四百四十六條 市長ハ防火的改修構築區域ニ関スル年度及區域ヲ永年計畫ニ定ムルト共ニ昭和十六年度ノ實施區域ハ年度防空計畫ニ明ニスルモノトス
(別紙第十五號)

第十章 防毒

第一節 通則

第四百四十七條 防毒ハ主トシテ敵航空機ノ使用スル毒性ノ瓦斯、煙霧液体等（以下之等ヲ毒瓦斯ト稱ス）ニ對シ機宜ノ防護處置ヲ講シ以テ被害ヲ防止又ハ軽減スルニアルモノトス

第四百四十八條 防毒ハ一般ニ對シ防毒知識ノ向上ヲ圖リ努メテ防毒面又ハ應急防毒具ヲ整備セシメ簡易ニ自衛ノ處置ヲ採ラシムルト共ニ防毒機關ヲ編成配備シ防毒設備資材ヲ整備シテ防毒業務ニ従事セシムルモノトス

第二節 防毒機關

第四百四十九條 市長ハノ其所屬人員ヲ以テ直轄防毒機關ヲ編成シ被害大ナル地ノ防毒業務ニ従事セシムルト共ニ警防團ノ防毒業務ヲ援助セシムルモノトス

前項ノ組織編成ハ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第四百五十條 警防團防毒部ノ編成管掌業務裝備ハ概テ左ニ豫ルモノトス但シ編成人員ニ付テハ大体ノ基準ヲ定メタルモノニシテ被毒ノ程度ニヨリ適宜増減スルモノトス

	編 成	業 務	人 員		装 備
防 毒 部	総務係	班内ノ統制 防毒資材ノ整備 各部トノ連絡	部(班)長 一名	係長一名 係員二名	防毒面、防毒衣、防毒手袋、防毒靴、毒瓦斯檢知資料、消毒材料 警報器材 被毒地域標示材料
	警戒係	毒瓦斯投下ノ警戒 毒瓦斯檢知及被毒地域ノ表示 毒瓦斯警報ノ發令及傳達 毒瓦斯避難ノ誘導整理		係長一名 係員九名	
	消毒係	被毒セル地域及物件等ノ消毒		係長一名 係員五名	

第四百五十一條 市長ハ防毒ノ為メ特殊技能者ノ派遣ヲ求ムル必要アリト認ムル時ハ警察署長ニ協議ノ上速カナル方法ニヨリ知事ニ申請スルモノトス

第四百五十二條 防毒機關ハ毒瓦斯ノ檢知、消毒、毒瓦斯警報ノ發令オオビ解除被毒地域ノ交通規制被毒物件ノ使用制限等ノ防毒業務ニ當ルモノトス

第四百五十三條 有害地帯及毒瓦斯警報發令地域ハ適宜交通制限ヲ行ヒ特ニ持久性毒瓦斯ノ被毒箇所ニ對シテハ警防團防毒部員繩張等ヲ以テ区劃シ赤旗又ハ青旗ヲ立テ之ヲ表示シ夜間ハ障害注意燈ヲ用ヒ立入りヲ禁止スルモノトス尚必要ニ依リ瓦斯ノ種類及適当ナル地点ニ迂回路ヲ明示スルモノトス

第四百五十四條 防毒部員ハ關係機關ト協力シ毒瓦斯警報發令地域内ノ非難者ヲ誘導ニ當ルモノトス之ガ避難誘導ニ當リテハ風向、地勢建物等ヲ考慮シ方向ヲ定メ誘導スルモノトス

第四百五十五條 本市ノ住民ニハ防毒面ヲ所持セシメ各自ニ防毒ノ方法ヲ採ラシムルヲ主眼トスルモノトス但シ防毒面ナキ場合ニ於イテハ已ムヲ得ス應急對策トシテ縱令完全ヲ期シ得ザルモ無キニ優ル意味ニ於テ主トシテ致命傷ノ傷害ヲ被リ易キ呼吸器ノ防護ニ着意シ應急處置ヲ講ゼシムルモノトス

第四百五十六條 毒瓦斯ノ徴候ヲ知り又ハ毒瓦斯警報ヲ聞キタルトキハ左ノ如ク處置スルモノトス

一 防毒面ヲ有スル場合ニハ速カニ装着シ之ヲ有セザル場合ハ呼吸器等ニ對シ應急防護ヲ講ズルコト

二 速カニ風上等ノ無毒地帯ニ避ケルガ又ハ防護室準防護室若クハ防毒設備ヲ施セル防空壕ニ避ケルコト上記ノ箇所ニ避ケ得ザル場合ハ防毒室ニ避ケルコト

三 液状持久性毒瓦斯ナル場合ハ被毒地域ノ風下ニモ相當濃度ノ氣状毒瓦斯ノ流動持續スルヲ以テ危険ナル範圍ノ者ハ防空機關ノ指示ニ從ヒ避難等ヲ處置ヲ講ズルコト

四 液状ノ持久性毒瓦斯ハソノ毒効力ガ永久持續スルヲ以テ已ムヲ得ズ被毒地域ヲ通過スルトキハ「ゴム」靴、高下駄、「ゴム」底履物等ヲ使用シ毒液ノ身体、被服等ニ附着セザル様注意スルコト

五 液状ノ持久性毒瓦斯ニ被毒セル箇所又ハ物ニ觸ルル時ハ防毒手袋又ハ「ゴム」手袋ヲ使用シ已ムヲ得ザル場合ニ於テモ手袋ヲ用ヒ素手ニテ觸レザルコト

六 持久性毒瓦斯雨下ニ際シ屋外ニ在ル者ハ液状毒瓦斯ヲ避ケル為メ直チニ屋蓋下若ハ適當ナル掩護下ニ避ケルカ又傘「マント」外套、布片、紙（油紙、包装紙等ヲ可トス）等ニテ身体ヲ防護スルコト

第四節 調査

第百五十七條 市長ハ防毒ノ業務ニ従事スベキ醫師、齒科醫師、獸醫師、薬剤師、看護婦ヲ調査シ年度防空計畫ニ明カニスルモノトス
前項ノ者ニ對シテハ可成防毒用具ヲ整備セシメ之ガ整備ヲ明カニスルモノトス

第百五十八條 市長ハ警防團員ニ對スル防毒面及其ノ他ノ防毒用具ノ現存狀況及之ガ保管責任者ヲ年度防空計畫ニ明カニスルモノトス

第十一章 救護

第一節 通則

第百五十九條 本市ハ空襲ニヨル傷病者（毒瓦斯被毒者ヲ含ム以下之ニ同ジ）ヲ救護スル為メ左ノ機關ヲ設ケ救護ヲ實施スルモノトス

- 一 警防團救護部
- 二 救護所
- 三 特設（特別）救護班

第百六十條 各救護機關ノ組織編制擔任區域業務等ニ関シテ法令及別紙第十六號防空救護組織要綱ニ依ルノ外本防空計畫ノ定ムル所ニ依ルモノトス

第百六十一條 警察署長又ハ市長又ハ救護ノ為メ特殊技能者ノ派遣ヲ求ムル必要アリト認ムルトキハ協議ノ上速カナル方法ニ依リ知事ニ申請スルモノトス

第百六十二條 市長ハ警察署長ト協力シ警防團員並ビニ一般人ヲシテ左ノ家庭救急藥品ヲ整備セシムルモノトス

- 一 アルコール
- 二 稀ヨード丁幾
- 三 オキシドール又ハオキシフル
- 四 胡麻油
- 五 重炭酸ソーダ錠
- 六 クロラミン錠
- 七 石鹼（薬用石鹼）
- 八 繃帶
- 九 三角布
- 十 ガーゼ
- 十一 脱脂綿
- 十二 油紙
- 十三 薬瓶
- 十四 留針
- 十五 薬包紙

第百六十三條 市長ハ警察署長ト協議シ空襲時ニ發生スル傷病者ニ對スル應急處置ノ應急知識ヲ徹底セシメ置クモノトス

第二節 警防團

第百六十四條 本市警防團救護部ハ主トシテ空襲時現場ニ於ケル傷病者ノ救急收容等ノ應急救護業務ニ従事スルモノトス

第百六十五條 警防團救護部ハ必要ニ應ジ適宜應急處置所（救護所ニ收容スルニ先立ち應急處置ヲ施ス所）ヲ設クルモノトス

第百六十六條 警察署長及市長ハ警防團救護部ヲシテ常ニ救護所及特設（特別）救護班並ニ消防機關及防毒機關等ト連絡ヲ保持セシメ救護上潰漏ナキヲ期スルモノトス

第三節 救護所

第百六十七條 主トシテ傷病者ノ治療、收容ニ充ツル為メ救護所ヲ設クルモノトス

第百六十八條 救護所ハ成ベク既存ノ救護所防護室官公署ノ管理スル診療所、一般診療所及之ニ所属スル醫師、齒科醫師、獸醫師、薬剤師、看護婦等ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

尚一時ニ多数ノ患者ノ救護ヲ要スル場合アルベキヲ豫想シ学校、寺院其他適當ト認ムル場所ヲ救護所トシテ指定シ置クモノトス

第百六十九條 市長ハ關係官公署及關係醫師會、齒科醫師會又ハ薬剤師會ト協議シ適當ナル箇所ニ救護所ヲ開設シ区域内ノ醫師、齒科醫師、薬剤師、看護婦其他ノ者ヲシテ救護ニ従事セシムル計畫ヲ設定スルモノトス

前項ノ計畫ニ基キ官公立診療所ノ管理者ニ對シ救護所ノ開設ニ関シ協力ヲ求ムルモノトス

第百七十條 市長ハ前條ノ計畫ニ基キ看護婦、女学生、國民学校高等科高学年、女子青年團等ヲ以テ特別救護班ヲ組織シ空襲時救護ニ従事スルベキ者ノ出勤方法並ニ擔任救護所ノ關係者ト協議ノ上上年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第百七十一條 醫師會ト齒科醫師會ハ第百六十九條ノ計畫ニ基キ所属ノ醫師、齒科醫師ヲシテ救護所ノ開設セシメ救護業務ニ従事セシムルモノトス薬剤

師會ハ同條計畫ニ基キ薬剤師ヲシテ救護所ニ於テ調剤ノ業務ニ従事セシムルモノトス

第七十二條 救護所ノ所有者又ハ管理者ハ警戒警報發令アリタルトキハ直チニ救護所ヲ開設シ何時ニテモ救護ヲ為シ得ル如ク設備資材其他諸般ノ準備ヲ為スモノトス

前項ノ準備完了シタルトキハ救護所ノ所在及入口ヲ著明ニ表示シ夜間ハ標識燈ヲ掲クルモノトス

第四節 特設救護班

第七十三條 市長ハ其ノ所屬ノ醫師、薬剤師、看護婦等（救護所ニ於テ救護ニ従事スルモノヲ除ク）ヲ以テ防空本部（年度防空計畫ニ定ムルモノ）ニ直屬ノ救護班ヲ編成シ警防團救護部（班）又ハ救護所ノ應援ソノ他ノ救護業務ニ従事セシムルモノトス

第七十四條 市長ハ特定ノ病院ヲ指定シ其ノ管理者ヲ以テ所屬ノ醫師、薬剤師、看護婦等（警防團又ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スルモノヲ除ク）ヲ以テ特設救護班ヲ編成シ警防團救護部（班）又ハ救護所ノ應援其他ノ救護業務ニ従事セシムルコトヲ得

第七十五條 醫師會、齒科醫師會、薬剤師會ハ警察署長及市長ト協議シ本市区域内ノ醫師、齒科醫師、薬剤師（警防團又ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スルモノヲ除ク）ヲ以テ特設救護班ヲ編成シ警防團救護部（班）又ハ救護所ノ應援ソノ他ノ救護業務ニ従事セシムルモノトス

第五節 調査

第七十六條 市長ハ救護所ノ位置従事者ノ氏名収容範囲、収容人員ニ整備シアル設備資材並ニ之ガ保管責任者及特設救護班ノ編成並ニ應急處置所ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十七條 市長ハ救護用緊急薬品ノ現存状態及之ガ保管責任者ヲ明ラカニスルモノトス尚救護薬品ノ欠缺シタル場合ヲ考慮シ之ガ購入ノ統計ヲ年度防空計畫ニ明ラカニシ置クモノトス

第十二章 退去避難及待避

第一節 通則

第七十八條 空襲時ニ於テハ一般住民ハ自衛防空ノ精神ニヨリ各々各自此ノ持ち場ヲ守リ防空其他ノ業務ニ従事スルヲ本則トスルモ特ニ認メタルモノハ退去又ハ非難セシムルコトヲ得ルモノトス

第七十九條 退去又ハ避難（事前避難及緊急避難トニ分ツ）トハ危険ノ場所ヨリ退去シテ生命、身体等ニ對スル危険ヲ避クルヲ謂ヒ待避トハ自己ノ持ち場ヲ守リつつ生命、身体ニ對スル危険ヲ避クルヲ謂フモノトス

第八十條 本市ハ退去避難及待避ニ付行ハルモノトス

第二節 退去及避難

第八十一條 退去ハ特ニ認メラレタル者空襲ニヨル危険ヲ避クル為メ空襲危険區域（本縣指定市町村ハ勿論其他ノ廳府縣ノ指定市町村ヲ含ム）以外ノ地ニ退去セシムルモノトス（廳府縣ノ危険區域調ハ廣島縣永年防空計畫別紙第二十五號ノ通トス）

前項ノ退去場所ハ私人ニ於テ其ノ縁故等ニヨリ自ラ選定スルヲ本則トスルモ自ラ選定シ得ザル者ハ指定ノ場所ニ退去スルモノトス

第八十二條 事前避難トハ特ニ認メラレタル者空襲ニヨル危険ヲ避クル為メ附近ノ防護室準防護室強固ナル建物地下室防空壕其他ノ之等ニ準ズルモノニ避難スルモノヲ謂フモノトス（別紙第十七號防空建築規則抜粋及別紙第十八號防空壕構築要領参照）

第八十三條 緊急避難トハ空襲ニ因ル火災、毒瓦斯ノ被害發生ノ為メ已ムヲ得サル者主トシテ公園、運動場、緑地、其他ノ空地（事情ノ許ス限り前號ニ掲クル場所ヲ之ニ充ツコト）ニ避難スルヲ謂フモノトス

第八十四條 退去及事前非難認ムル者ハ左ノ各號ニ當スル者ニ限ルモノトス

- 一 老幼者（「老者」トハ概ネ六十五歳以上ノ者「幼者」トハ概ネ十四歳未満ノ者）病者不具者妊婦等ニシテ防空活動困難ナル者
- 二 前號ニ掲クル者ノ保護ノタメ必要ナル者（自衛防空ノ重要性ニ鑑ミ已ムヲ得サル者ニ限ル）

第八十五條 退去ノ時期ハ知事之ヲ指示スルモノトス

事前非難ハ空襲警報ノ發令ト共ニ之ヲ開始シ空襲警報ノ解除マデ之ヲ行フモノトス

第八十六條 退去ハ空襲時其他混乱ヲ惹起シ易キ時ヲ避クル等其ノ實施時期ノ選定ニ注意シつ逐次之ヲ行ヒ戰時重要ナル交通機關ノ活動ヲ妨害セサル如ク留意スルモノトス

第八十七條 市長ハ関係警察署長ト協議シ左ノ事項ニ付毎年九月末現在ヲ以テ調査計畫ヲ樹テ年度防空計畫ヲ定メ置クト共ニ所要ノ退去又ハ避難ノ場所ヲ設置又ハ準備スルモノトス

- 一 退去者又ハ事前避難者ノ数
- 二 退去者又ハ避難ノ場所避難所ノ種類及収容能力
- 三 退去又ハ避難ノ場所ノ割當（自ラ退去先ノ選定シタルモノニ付テハ其ノ退去先）
- 四 退去又ハ避難ノ場所ノ管理
- 五 其他必要ナル事情

第八十八條 市長ハ本市内ニ於テ適當ナル退去ノ場所ナキトキ或ハ退去者ノ収容困難ナル場合ニ於テ其他ノ市町村ヘ退去セシメントスルトキハ関係市

町村及関係警察署長ト豫メ協議シ適當ナル退去場所ヲ定ムルモノトス但シ他府縣内ヘ退去セシムル必要アルトキハ知事ニ之ヲ報告スルモノトス

第百八十九條 市長ハ退去者若ハ避難ノ場所ノ設置又ハ陣日ノ為メ必要アリト認ムル時ハ防空報第五條及同施行令第三條ノ規定ニ依ル措置ヲ知事ニ申請スルコトヲ得ルモノトス

第百九十條 退去者ハ避難ニ際シテハ左ノ事項ニ留意スルモノトス

- 一 誘導者ノ指示ニ從ヒ秩序整然ト行動スルト共ニ言動ヲ慎ミ他ニ迷惑ヲ興ヘサルコト
- 二 少量ノ重要物品及食料品ノ外他ノ物品ハ之ヲ携帯セザルコト

第百九十二條 市長ハ設置又ハ準備シタル退去場所ノ管理ハソノ市町村長ニ委任スルコトヲ得

前項ノ管理ハ當該市町村長警察署長ト協議シ警防團ニ指示シテ之ヲ為サシムルコトヲ得ルモノトス

第百九十三條 退去ハ避難ノ場所ニ充テラレタル施設ノ管理者又ハ所有者ハ防空實施ノ開始後何時ニテモ之ヲ使用シ得ル様諸般ノ準備ヲ為スモノトス

第百九十四條 市長ハ適時警察署長ト協力シ其ノ設置又ハ準備シクル退去又ハ避難ノ場所及所設備資材ノ準備状況ヲ点檢シ退去者ノ収容ニ遺憾ナキヲ期スルモノトス

第百九十五條 市長ハ防空實施ノ開始後直チニ避難場所ノ方向並ビニ避難ノ場所ニ其ノ出入口ヲ標示（夜間ハ之ヲ明瞭ナラシムル手段ヲ講ズ）ズルト共ニ避難者ノ見易キ場所ニ収容定員及注意事項ヲ掲出スルモノトス

第百九十六條 市長ハ必要ニ應ジ退去者ニ給與スベキ物資ノ配給ニ付キ具体的計畫ヲ樹キテ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第三節 待避

第百九十七條 待避ハ敵航空機視界若ハ廳音界ニ在リ間又ハ軍防空機關ノ戦闘中投下彈其他ニ因リ危難ヲ避クル為反防空機關ノ防護活動ヲ阻害セザル為之ヲ行フモノトス

第百九十八條 待避ハ一般國民ガ努メテ自發ニ行フヲ本旨トシ且一時的ニ之ヲ行フモノニシテ危険去リタルトキ又ハ燒夷彈ノ落下等アリタルトキハ直チニ出勤シテ自衛防空ニ仕ズルモノトス從ツテ防空期間ト雖モ任務ニ支障ナキ限り之ヲ行ヒ無益ノ損害ヲ避クルモノトス

第百九十九條 待避ノ場所ニハ最寄ノ防護室準防護室、堅固ナル建物、地下室、防空壕其他之等ニ準ズル施設ヲ以テ之ヲ充ツルモノニシテ之等ノ待避施設ナキトキト雖地形地物ヲ利用シ且努メテ低キ姿勢ヲ採リ被害ノ輕減ニ努ムルモノトス

第二百條 待避施設ハ各戸（家）ニ之ヲ設クルヲ原則トス但シ状況ニヨリテハ近隣共同（例ヘバ隣保班一箇又ハ二隣保一箇ノ如シ）シテ之ヲ設クルモ妨ケナキモノトス

第二百一條 市長ハ自家用待避施設ヲ設ケ得ザル者屋外通行者（電車、自動車、其他ノ車ニ乗車スル者ヲ含ム）等ノ待避ノ用ニ供スル為必要ナル公共防空壕其他ノ待避施設ヲ設クルモノトス

第二百二條 市長ハ待避場所ノ設置又ハ準備ノ為必要アリト認ムトキハ防空報第五條及同施行令第三條ノ規定ニ依リ待避ニ供用シ得ベキ施設ノ管理者又ハ所有者ニ對シ待避ニ必要ナル設備ハ資材ノ供用ニ關シ知事ニ申請スルコトヲ得ルモノトス

第二百三條 警察署長ハ市長ト協力シ電気、瓦斯水道ノ工作物、軌道工場、学校劇場、市場等ノ施設ノ管理者又ハ所有者ヲシテ従事者又ハ収容者ノ待避施設ヲ設ケシムルモノトス

前項ノ施設ヲ設ケタル者ニ付テハ之ガ所在及設備内容ヲ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第二百四條 市長ハ警察署長ト協力シ平時ヨリ一般ニ對シ永久ノ待避施設ノ整備奨励スルト共ニ戰時又ハ事變ニ際シ所要ノ待避施設ヲ完備シ得ルヨウ計畫準備セシムルモノトス

第二百五條 市長ハ防空實施ノ開始直後直チニ公共用待避施設ノ方向等ニ之ガ施設ノ出入口ヲ標示（夜間ハ之ヲ明瞭ナラシムル手段ヲ講ズ）スルト共ニ見易キ場所ニ収容定員及注意事項ヲ掲出スルモノトス

第二百六條 待避ハ防火ノ他ノ積極的防護活動ニ便ナル様最寄ノ待避施設ニ之ヲ行フモノトス

第二百七條 屋外待避者ハ最寄ノ公共用待避施設又ハ其ノ待避施設（第百九十九條參照）ニ避難スルモノトス

第二百八條 車輛ニ乗車中ノモノハ通常下車シテ最寄ノ公共用待避施設又ハ其他ノ待避施設ニ避難スルモノトス 車輛ハ道路ノ交叉点、曲角、橋梁等ヲ避ケテ其ノ左端ニ通行ノ妨害トナラザル如ク疎開停止スルモノトス

第二百九條 防毒設備ナキ待避施設ニ入ルトキハ可成防毒面ヲ携帯スルモノトス

第二百十條 市長ハ警察署長ト協力シ待避施設（隣保班ノ防空壕ヲ含ム）又ハ待避ニ供用シ得ベキ施設ヲ調査シ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第十三章 配給

第二百十一條 市長ハ警察署長ト協力シ市内ニ於ケル防空ノ實施上必要ナル資材及罹災証明並ニ救護者等ニ給與スベキ物資ヲ調達シ警防團ニ指示シテ之ガ配給ヲナサシムルモノトス

第二百十二條 市長ハ警察署長ト協議シ罹災者及救護者ニ配給スベキ食料品及寝具等ノ所在、配給所、配給従事者、配給用ニ供スベキ車輛及其ノ所有者ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十三條 市長ハ罹災者及救護者等ニ配給スベキ食事ノ万全ヲ期スルタメ主要ナル工場、学校、飲料店、料理店、仕出店、其他ニ付炊事能力ノ状況

ヲ調査シテ之ヲ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第二百十四條 市長ハ配給品ノ缺乏シタルトキハ應急處置ヲ講シ得ル様關係者ト協議シ之ガ購入先及配給品名ノ種別ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十五條 市長ハ配給ニ従事スベキモノ不足ヲ生ジタルトキハ婦人團體中等學校以上ノ女學生其他ノ者ト協議シ應援團體名及召集連絡方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第十四章 工作

第二百十六條 市長ハ本市防空本部ニ直屬工作班ヲ編成シ且所要ノ資材ヲ準備シテ左ノ業務ヲ実施スルモノトス

- 一 市ノ管理スル重要施設ニ對スル偽裝遮蔽防彈等ノ工作
- 二 市ノ管理スル道路、橋梁、河川、水道、下水道等ガ空襲ニヨリ被害ヲ被リタル場合ノ復舊工作

前項ノ所在ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十七條 市長ハ前條工作班ノ組織、編成、配置車輛及處置ニ要スル資材ノ所在ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十八條 前條ノ工作班ハ左腕其他ニ「廣島市」ノ工作班ナル旨ノ標示ヲ附スルモノトス

第二百十九條 電気瓦斯軌道等事業者ノ編成シタル工作班ノ組織、構成、配置、車輛及應急處置ニ要スベキ資材ノ所在ハ毎年十一月現在ニ依リ整備シ之ガ狀況ヲ十二月二十日マデニ知事、警察署長及市長ニ報告スルモノトス

第十五章 偽裝

第二百二十條 警察署長及市長ハ協力シ高層又ハ重要建築物、主要ナル工場、發電所、橋梁、水源地、貯水其他ノ他ニ對シ別ニ定ムル所ニヨリ偽裝ヲ行フモノトス

(要偽裝建物調査票ハ別紙第九號参照)

第二百二十一條 警察署長及市長ハ協力シ主要ナル石油貯藏槽(タンク)及ガス溜槽(タンク)等ノ所有者又ハ管理者ヲシテ左ノ通り偽裝セシムルモノトス(之ガ所在ハ前條参照)

- 一 石油貯藏槽(タンク)及瓦斯溜槽(タンク)ノ外部ハ周圍色ト近似ノ暗色ニ塗裝シ周圍色不特定又ハ複雑ナル時ハ「プターブルー」色(註鼠色ト空色ノ合シタ黒ズンダ色)ニ塗裝スルモノトス
- 二 輕油ニシテ平素暗色塗裝スルトキハ貯藏ノ目的ハ違セラレサルカ如キ已ムヲ得ザルモノハ「プターブルー」色ニ塗り替エ又ハ不燃(耐火)材料ニテ適切ナル掩覆偽裝ヲ為シ得ル計畫準備アル場合ニ限り銀色塗料其他ノ白色塗料ニテ塗裝スルコトヲ得
- 三 自己設置スルモノハ右ニ依リ整備スルコト

第四編 營造物ノ防護

第二百二十二條 市廳舎ノ防護方法及防空機關ノ編成配置ハ年度防空計畫ノ定ムル所ニ依ル

第二百二十三條 市長ノ指定シ足ル市營造物ノ所屬長ハ關係警察署長ト協議シ防空警報ノ受領並ニ傳達、通信連絡燈火管制消防其他ノ防護ニ關シ防空計畫ヲ定ムルモノトスル

第二百二十四條 市長ハ前條ニ順次其ノ所管ニ屬スル造營物ニ付防空計畫ヲ設定セシムルモノトス

第五編 設備及資材ノ整備

第二百二十五條 市長ハ防空全般特ニ防護ニ重点ヲ置キ之ガ設備及資材ヲ整備スルモノトス

第二百二十六條 官公庁又ハ堅及氏ノ管理スル營造物並ニ特設自衛團ヲ設置スベキ工場、會社、銀行、商店、病院興行場、事業場、集會場、學校及之ニ準ズルモノハ前條ニ準シ防空實施ニ必要ナル設備、及資材ヲ整備スルモノトス

第二百二十七條 市長ハ市内ニ於ケル防空ニ必要ナル設備材料ノ製造業者ヲ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第二章 防空監視

第二百二十八條 群長及當番舟ハ標識眼鏡「ラヂオ」「ノロシ」花火手廻「サイレン」等ヲ整備スルモノトス

第三章 防空通信

第二百二十九條 無線電信ヲ有セザル船舶(概ネ汽船以上トシ電燈設備ヲ有スルモノヲ基準トス)ニハ「ラヂオ」受信機ヲ整備スルモノトス

第四章 防空警報

第二百三十條 市長ハ速ニ一斉操作ヲ為シ得ル警報機ヲ整備スルモノトス

第二百三十一條 市長ハ「サイレン」使用不能ノ場合ヲ考慮シテ手廻「サイレン」及警報傳達要具ヲ整備スルモノトス

第二百三十二條 市長ハ島嶼部ニ對スル警報傳達ノ万全ヲ期スル為メ適當ナル資材ヲ整備スルモノトス

第二百三十三條 市長ハ速ニ掲燈(吹旗)信號燈ヲ整備スルモノトス

第五章 燈火管制

- 第二百三十四條 市長ハ警察署長ト協力シ街路燈類（公共用燈火一般屋外等ヲ含ム）ノ管制ハ一定地域内ノモノヲ統一ノニ行フ様整備スルモノトス
- 第二百三十五條 市長ハ警察署長ト協力シ準備管制時又ハ警戒管制時ニ於テ点燈シアル主要ナル屋外燈類ヲ空襲管制時ニ於テ統一ノ消燈シ得ベキ設備ヲ整備スルモノトス
- 第二百三十六條 警察署長ハ市長ト協力シ各家庭ヲシテ燈火管制ノ資材ヲ整備セシムルモノトス
- 第二百三十七條 警察署長ハ市長其他ト協力シ航路標識燈及氣象特報暴風警報用信號等ノ管制設備ヲ整備スルモノトス
- 第二百三十八條 警察署長ハ市長及関係業者ト協力シ漁業用燈類ノ管制設備又ハ資材ヲ整備スルモノトス
- 第二百三十九條 規模大ナル建築物工場等ニ在リテハ電燈配線ハ可及的統一ノ管制ニ為シ得ル如ク整備スルモノトス
- 第二百四十條 警戒警報發令後直チニ管制シ得ザル工場火焔類ハ工業ノ管理者又ハ之ニ準ズルモノニテ速ニ之ガ管制設備ヲ整備スルモノトス

第六章 防護監視

- 第二百四十一條 市長ハ警察署長ト協力シ防護監視ノ位置ヲ選定シ之ガ哨舎並ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス
- 第二百四十二條 防護監視ニハ概ネ左ノ資材ヲ整備スルモノトス

- 一 双眼鏡
- 二 航空機識別圖
- 三 投下彈識別圖
- 四 報告用具

第二百四十三條 前二条ノ規定ハ防護監視ヲ立哨セシムルモノノ管理者又ハ之ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

第七章 消防

- 第二百四十四條 市長ハ警察署長ト協議シ自然水ノ利用施設ヲ為スト共ニ消防機械器具貯藏槽（池）消火栓其他消防ニ關スル器具ヲ整備シ之ニ第四十三條ニ定ムル標識ヲ付スルモノトス
- 第二百四十五條 警察署長ハ市長ト協力シ特設自衛團體ヲ設置スル工場、鉱山事業場、會者、銀行商店、病院、興行場、集會所、学校及其他ヲシテ消防用器具ヲ整備セシムルモノトス
- 第二百四十六條 警察署長ハ市長ト協力シ會社、工場、倉庫及店舗（引火シ易キモノ特ニ各種油其他危險物貯藏所、火薬貯藏所、ガソリンスタント瓦斯溶接所セルロイド製造所等）又ハ規模大ナル建築物ノ所有者又ハ管理者ヲシテ消防用器具ヲ整備セシムルモノトス
- 第二百四十七條 警戒警報發令アリタルトキハ各戸又ハ隣保班ノ適當ナル箇所ニ防火用水、防火用砂其他防火用器具ヲ整備スルモノトス
- 第二百四十八條 構内ニ在泊スル船舶ハ火災ニ必要ナル消防危惧ヲ整備スルモノトス

第八章 防毒及防護

- 第二百四十九條 市長ハ警察署長ト協議シ、空ノ要務ニ従事スベキモノノ防毒面、防毒衣其他防毒又ハ消毒用資材ヲ整備スルモノトス
- 第二百五十條 醫師、齒科醫師、薬剤師、看護婦其他特別技能者ハ速ニ防毒面防毒衣其他ノ資材ヲ整備スルモノトス
- 第二百五十一條 市長ハ警防團其他ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス
- 第二百五十二條 本市内各家庭ニ救急藥品ノ整備ヲ為サシムルモノトス

第九章 避難及待避

- 第二百五十三條 市長ハ警察署長ト協力シ先ニ必要ナル場所並ニ避難ニ必要ナル防護室準防護室公共防空壕又ハ公共用待避施設ヲ整備スルモノトス
- 第二百五十四條 市長ハ都市計画上定メアルモノノ外公園緑地ヲ整備スルモノトス特ニ防空緑地計畫ニヨリ繼續事業トシテ整備スルモノトス
- 第二百五十五條 電気、瓦斯、水道ノ工作物軌道、工場、学校、劇場、市場等ノ施設ノ管理者又ハ所有者ハ従事者又ハ収容者ノ待避施設ヲ整備スルモノトス
- 第二百五十六條 防空壕ハ各戸毎ニ又ハ隣保班毎ニ之ヲ構築整備スルモノトス

第十章 其他

- 第二百五十七條 市長ハ工作ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス
- 第二百五十八條 市長ハ警察署長ト協議シ本編ニ掲クル防空各般ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス
- 第二百五十九條 本市ニ對スル國庫補助ニヨル整備スベキ設備資材ハ年度防空計畫ニ定ムル所ニ依ル別紙第一號

廣島市家庭防衛隣保班組織要領

第一 組織並目的

- 一 廣島市町内會愛隣組ヲ以テ家庭防衛隣保班（以下單ニ隣保班ト称ス）ヲ組織スルモノトス
- 二 隣保班ハ隣保相扶ノ精神ヲ基調トシ空襲ニヨリ生ズベキ危害ヲ防止シ又ハ之ニ因ル被害ヲ軽減スルタメ警報傳達、燈火管制、消防其他ノ防護ニ共助スルモノトス

三 隣保班ハ警防團ノ一翼トシテ常ニ緊密ナル連絡ヲ保持シ相互一帯ノ精神ヲ以テ行動スルモノトス

第二 役員

隣保班ニ左ノ役員ヲ置ク

一 隣保班長 一名

隣組長ヲ以テ之ニ充ツ

班長ハ班内ニ於ケル防衛業務一切ヲ指導統括スル

班長事故アルトキハ月番之ヲ代理スルモノトス

第三 指導連絡

一 隣保班ノ育成指導ハ主トシテ市長行動ノ指揮統制ハ所管警察署長及其ノ指揮ニ從ヒ警防團長（警防分團長）之ニ當ルモノトス

ニ 町内会長ハ隣保班ノ統括指揮、設備機材、整備対策及警防團（警防分團）其他トノ連絡ヲ圖ルモノトス

第四 任務

一 隣保班ハ応急的自衛行動ノ原則トスルヲ以テ消防其他ノ防衛ニ付警防団員來着シタルトキハ之ニ讓ルモノナルモ要求アリタルトキハ應援スルモノトス

二 隣保班ハ隣組内ニ於テノミ行動スルモノトス但シ隣接隣班ト共同シ若ハ他ノ隣保班ニ對シ自班警戒ノ要ナキトキハ之ニ應援スルコトヲ得

三 隣保班ハ豫メ班員ノ防火、防毒、非難、救護、傳令等各係ニ定メ置クモノトス

四 隣保班ハ平素在宅スル者ヲ以テ各家庭防衛擔任者ヲ定メ置クモノトス

五 隣保班ハ防衛上必要ナル設備機材ヲ整備ニ努ムルモノトス

六 隣保班ハ避難該當者ニシテ防衛活動困難ナル者ヲ調査シ明ラカニ置クモノトス

七 隣保班ハ訓練上左ノ点ニ留意スルモノトス

(一) 滅私奉公、國土防衛ノ精神強化ニ重点ヲ置クモノトス

(二) 老幼病者、妊婦其他已ムヲ得サル事情アル過程ヨリ強イテ出勤セシメサルコト

(三) 可成夜間ノ任務ニ婦人ヲ出勤セシメサルコト

(四) 婦人ヲシテ梯子登、火先等ノ如キ危険ナル作業ニ従事セシメサルコト

参考 (廣島縣指示要項)

家庭防衛隣保班要項

一 家庭防衛隣保班（以下單ニ隣保班ト稱ス）ハ隣保共助ニ基ツキ航空機ノ來襲ニ因リ生ズベキ危害ヲ防止又ハ之ニ因ル被害ヲ軽減スル為メ應急的ニ自家防衛ヲ為スト共ニ平素ニ於ケル火災警防防犯、防諜防疫等ノ自治防衛ヲ為スヲ以テ目的トス

二 隣保班ハ隣保班内ニ於ケル消防、燈火管制、警防傳達、防犯、防疫其他防護ノ共助ヲ任務トス隣保班ニ於イテハ狀況ニヨリ消防其他ノ防護ニ付共助ヲ為スモノトス

三 隣保班ハ警察署長及市町村長ノ協議ニヨル指示ニ基キ概ネ左記ニヨリ町内會又ハ部落會ノ隣保組織ニ準據シテ之ヲ組織シ隣保班内ノ活動トシテ之ヲ行フモノトス

(一) 隣保共助ニ便ナル區域ニ於テ陸上ニ於テハ概ネ十戸内外ヲ水上生活者ニ於テハ概ネ十隻内外ヲ以テ組織ス

(二) 世帯主、主婦、其他活動能力アル者ニシテ平素住宅（在船）スル者ヲ以テ其家庭ノ防衛擔任者トス

(三) 隣保班ニ班長及副班長各位地名ヲ置キ班ノ指導統制ニ任ズ概ネ班長ハ町内會又ハ部落會ノ隣保班長ヲ以テ之ニ充テ副班長ハ班内各戸ノ推薦ニヨリ之ヲ定ム

四 隣保班ニ警察署、市町村、警防團トノ連絡機關ニハ町内會長又ハ部落會長ヲ以テ之ニ充ツ

五 警察署長ハ隣保班ヲ指導監督ス警防團長（分團長）ハ警察署長ノ命ヲ受ケ隣保班ヲ指導ス

六 市町村長ハ隣保班ヲ育成スルト共ニ其擔當スル防空業務ニ付之ヲ指導ス

七 隣保班員ハ防空上必要ナル設備資材ヲ整備スルノ外班ニ於テ必要ナル設備資材ハ共同ニテ之ヲ整備スルモノトス（別紙参照）

八 隣保班ハ隨時訓練ヲ實施シ防空其他ノ警防ニ關スル必要ナル研究ヲ為スモノトス

九 隣保班員中井戸、梯子ノ所有者ハ表入口ノ見易キ箇所（井、[梯子印]）ヲ表示スルモノトス

十 隣保班ニ關スル經費ハ班員ノ負擔トスルヲ原則トス 但シ必要ニ依リ市町村費又ハ部落協議員ヨリ之ヲ支出シ又ハ補助スルコトヲ得

十一 隣保班ハ別記第一號様式ニヨリ編成表ヲ作成シ町常會長又ハ部落會長ニ報告スルト共ニ班内ニオケル防護計畫ヲ樹立シ置クモノトス

十二 町常會長又ハ部落會長ハ別記第二號様式ニヨリ其編成表ヲ作成シ警防團長（分團長）ニ提出スルモノトス

第一號様式

何町〇〇家庭防衛隣保班編成表																
世帯主氏名	職業別	家庭数	隣保員数	防衛担当者氏名	家庭防衛器具其他										摘要	
					消火器	バケツ	浴槽	屋外貯水槽	水道ホース	井戸	砂箱	防毒面	シヤベル	梯子		何々
備考 一、本表ハ町内會長又ハ部落會長ノ許ニ備付ケ移動アル毎ニ整理スルモノトス																

第二號様式

昭和 年 月 日 町内會長 (部落會長) 何 某															
何長家庭防衛町内會 (部落會) 編成表															
町内會長 (部落會長)	組合内戸数	組合内組合員数	組合ノ施設器具其他										摘要		
			消火器	貯水池	井戸	梯子	消火栓	警報用具	何々						

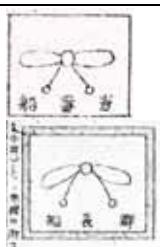
別表

要項七ノ規定ニヨル班員並ニ町内會 (部落會) ニ整備スベキ設備資材ハ概ネ左ノ標準ニヨルコト但シ地方ノ状況ニヨリ之ヲ変更スルコトヲ得

各戸ニ整備スベキモノ			各戸ニ整備スベキモノ		
種別	員数	摘要	種別	員数	摘要
防火水	一〇〇立以上 (五斗五升)	二階以上ハ各階ニ設備ヲ要ス	防火水	一立方米以上 (五石五斗)	井戸、池、流水等ヲ利用スルモ可
バケツ	一箇以上	要領八立 (四章) 程度ノモノ	二人押輕便ポンプ	一台以上	長サ一五米ノホース二本以上ヲ備フルモノ
ホース	若干	水道線井戸ポンプニ取付ケ得ルモノニシテ屋根ニ放水シ得ル程度	綱	若干	非常線用
防火砂	約五〇立以上 (二斗五升)		シヤベル	若干	
古筵	若干		梯子	若干	
火叩	若干		燈火管制用具	若干	残置燈ニ用フルモノ
水柄杓	若干		防空壕	若干	
消防作業被服	所要数	可成活動ノ便ナルモノヲ設備スルコト	警報用具	若干	振鈴ノ如キモノ
燈火管制用具	所要数		メガホン	若干	
懐中電灯、ローソクマッチ	若干		泡沫消火器	一以上	油類ノ火災ニ用フルモノ
防毒面	所要数		防護又ハ監視所	一	
防毒蚊帳	所要数	防毒室を以テ代フルコト得			
手拭	各自二枚平均				
救急剤	若干				
警報旗	二 (赤白、各一)	横三〇センチ縦一五センチノ三角旗 (風位ヲ知ル)			

別紙第二號

漁船群監視ニ関スル件

群長船 當番船 配備標準	表示・旗	監視法其他	實施ノ責任者	記事
當番船 一、漁舟一〇隻以内ニ付一隻 二、漁舟五隻ヲ増ス毎ニ一隻 群長・船 一、當番船二隻以外付一隻 二、當番船二隻ヲ増ス毎ニ一隻 三、當番船ノ一隻ハ群長船ヲ兼スルコトヲ得		一、當番船ハ漁撈ニ従事スル者ノ外最小限一名ノ事務監視員ヲ乗船セシムルモノトス 二、群長船 (當番船) ニハ無線又ハ「ラヂオ」受信機ヲ装備スルモノトス 三、群長船 (當番船) 及之ニ連絡スル海岸見張所ニ情報通信ニ必要ナル花火 (ノロシ) 等ニ準備ヲ為シ置クモノトス	水産組合 (漁業組合) 及之ニ準スル組合	群長船 (當番船) ト連絡スル見張ヲ出シ置クモノトス (本件ハ附近監視哨又は漁業組合事務所ヲ利用スルハ好都合ナルベシ) 通信上必要なる規約ヲ定メ置クベシ

別紙第三號

主ナル漁業場調査票					
漁業種類	漁期	出漁見込漁船数	主要漁場	漁獲物	摘要
(沿岸漁業)					
(1) 打瀬網	周年自六月盛期至十一月	三〇〇隻	備後灘、安藝灘、廣島灣	エビ	夜間操業スル関係上航海燈兼作業燈使用ス
(2) 鱈流網	自五月 至六月 自九月 至十一月	五〇隻	縣下全海面	サワラ	夜間操業スル関係上作業燈使用ス

(3) 鯧船曳網	自四月 至十二月	二〇隻	広島湾、安藝灘、備後灘	イワシ	夕方漁獲セル鯧ヲ製造スル際ニ火焰ヲ生ズ
(4) 火カヲ用フル鉾突	自十月 至五月	一五〇隻	縣下前沿岸	チヌ、タナゴ等	カーバイトヲ点シテ集魚シ漁獲ス
(5) 鱧延網	自六月 至十一月	二〇〇隻	同	ハモ	夜間操業スル關係上作業燈ヲ使用ス
(6) あなご延網	自十一月 至四月	一五〇隻	同	アナゴ、ホゴ	同
(7) 牡蠣養殖	自十月 至三月	五〇〇人	縣下干潟海面	カキ	夜間干潮時作業スル關係上作業等ヲ使用シ
(8) 海苔養殖	自十二月 至四月	三〇〇人	広島湾干潟	ノリ	同
(9) 餌虫堀	自十一月 至四月	二〇〇人	広島湾	餌虫	同

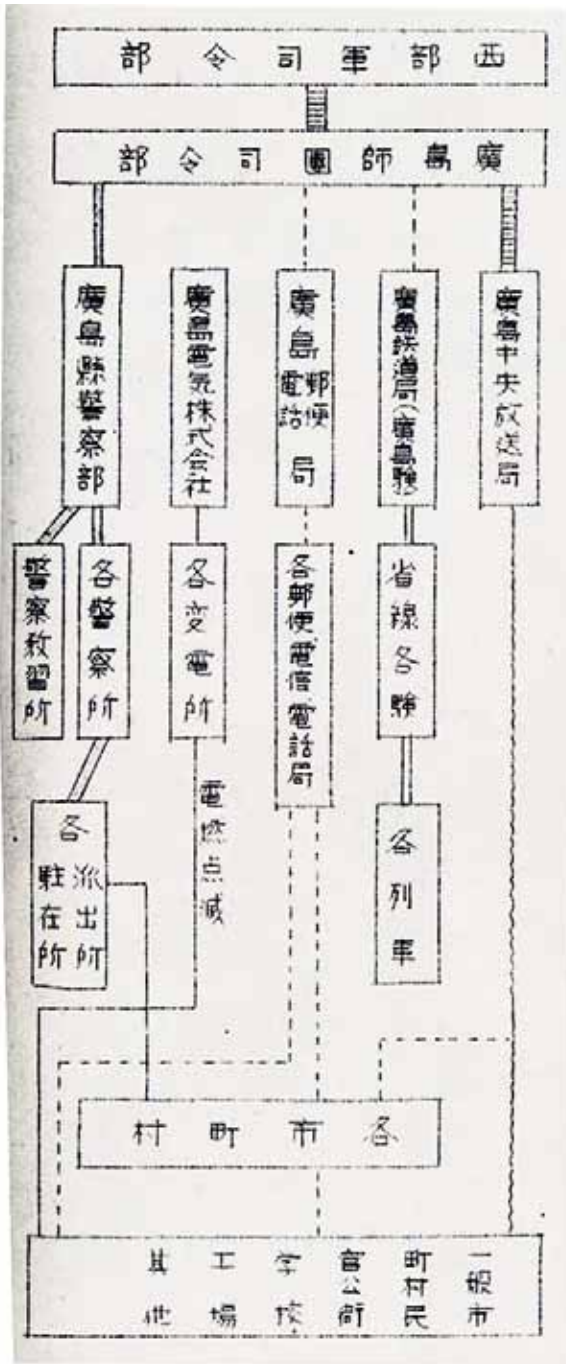
別表第四號

和文通話表

文字	ア 朝日ノ ア	イ イロハノ イ	ウ 上野ノ ウ	エ 英語ノ エ	オ オノ オ
	カ 為替ノ カ	キ 切手ノ キ	ク 車ノ ク	ケ 景色ノ ケ	コ 子供ノ コ
	サ 櫻ノ サ	シ 新聞ノ シ	ス 雀ノ ス	セ 世界ノ セ	ソ 算盤ノ ソ
	タ 煙草ノ タ	チ 千鳥ノ チ	ツ 鶴亀ノ ツ	テ 手紙ノ テ	ト 富山ノ ト
	ナ 名古屋ノ ナ	ニ 日本ノ ニ	ヌ 沼津ノ ヌ	ネ 鼠ノ ネ	ノ 野原ノ ノ
	ハ 葉書ノ ハ	ヒ 飛行機ノ ヒ	フ 富士山ノ フ	ヘ 平和ノ ヘ	ホ 保険ノ ホ
	マ 燐寸ノ マ	ミ 蜜柑ノ ミ	ム 無線ノ ム	メ 明治ノ メ	モ 紅葉ノ モ
	ヤ 大和ノ ヤ		ユ 弓矢ノ ユ		ヨ 吉野ノ ヨ
	ラ ラヂオノ ラ	リ 林檎ノ リ	ル 留守居ノ ル	レ 蓮華ノ レ	ロ ローマノ ロ
	ワ 蕨ノ ワ	ヰ 井戸ノ ヰ		エ 釣ノアル エ	ヲ 尾張ノ ヲ
ン オ終ノ ン	ゝ 濁点	° 半濁点			
数字	一数字ノ ヒトツ	二数字ノ ニ	三数字ノ 三	四数字ノ 四	五数字ノ 五
	六数字ノ ロク	七数字ノ ナナ	八数字ノ ハチ	九数字ノ 九	〇数字ノ マル
記號	一 長音	ゝ 區切点	L 段落	(下向括弧) 上向括弧

別表第五號

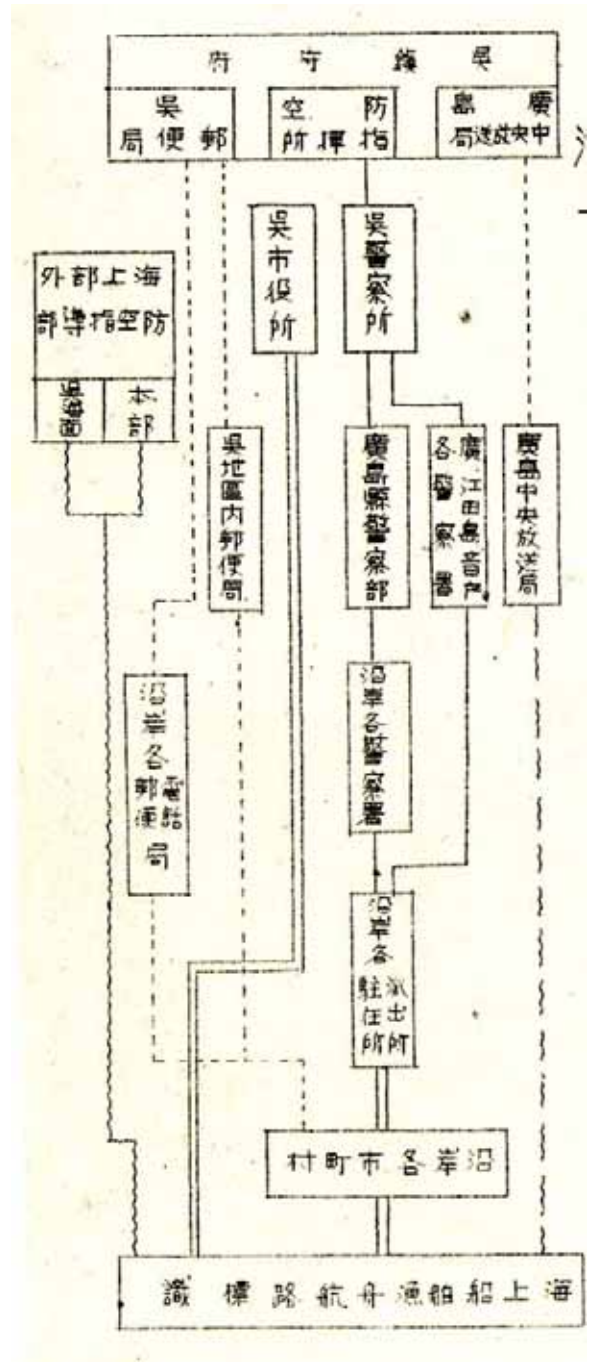
西部軍司令官 (廣島市團長) 防空警報傳達系統表



陸軍專用電話	警察電話	電信電話	航海電話	ラジオ放送	其他 (口頭、電燈、電報)
--------	------	------	------	-------	---------------

別表第六號

海上



警察電話	專用又ハ電信電話	無線電信	ラジオ放送	其他
------	----------	------	-------	----

〔備考〕 一般船舶ニ對スル警報ハ無線電信ヲ有スルモノニ對シテハ直接沿岸局漁業無線局ヲ經テ吳鎮守府司令官之ヲ令セラル、モノトス

別表第七號

防空通信特定略語

呉鎮守府	クレチン	内海西部海面	ナイセ
西部軍司令部	セイボ	西部軍管区全地区	セセ
廣島師團司令部	ヒロ	西中國地区	セチ
呉鎮陸上担任区域及海上区	クレゼン	廣島地区	セヒ
呉地区徳山地区	クレトク	警戒警報	ケハ
呉地区	クレ	警戒警報解除	ケカ
呉鎮守府海上区	クゼン	空襲警報	クハ
瀬戸内海	ナイ	空襲警報解除	クカ

別表第八號

指揮連絡報頭末一件様式

通信月日	通信先	通信ノ概要	開始時	終了時	受信者	発信者	受発信者印

〔備考〕 防空ニ関スル指揮又ハ之ガ指揮ヲ受ケタルトキハ朱書キニテ之ガ措置報告ヲ為シタルトキハ墨書ニテ記載スルモノトス

別表第九號

廣島地区呉地区一覽表

一 廣島地区

廣島市、尾道市、福山市、安佐郡、山縣郡、高田郡、豊田郡、御調郡、世羅郡、深安郡

安藝郡ノ内

海田市町、矢野町、熊野町、船越町、府中町、奥海田村、温品村、瀬野村、戸坂村、畑賀村、中野村、坂村、中山村

佐伯郡ノ内

廿日市町、巖島町、五日市長、玖波町、大竹町、津田町、地御前村、原村、宮内村、井口村、石内村、井口村、八幡村、觀音村、平良村、大野村、玖島村、木野村、浅原村、吉和村、小方村、栗谷村、砂谷村、水内村、上水内村、友和村、四和村

賀茂郡ノ内

西條町、竹原町、三津町、西高屋村、東高屋村、賀永村、莊野村、早田原村、吉川村、熊野跡村、志和堀村、原村、郷田村、川上村、西志和村、造賀村、下野村、東野村、上黒瀬村、板城村、下三永村

二 呉地区

呉市

安藝郡ノ内

音戸町、大屋村、昭和村、倉橋島村、江田島村、上蒲刈島村、下蒲刈島村

賀茂郡ノ内

内海町、三津口町、野路村中切村組合、川尻町、安登村、郷原村、下黒瀬村、中黒瀬村、乃美尾村

佐伯郡ノ内

飛渡瀬村、中村、高田村、鹿川村、三高村、沖村、大柿町、深江村

別紙第十號

掲燈（吹流）信號燈設置計畫表			
番號	管轄警察署名	設置計画箇所	設置見込年次
1	西警察署	廣島市草津町	昭和十六年度以降
2		同 江波町	同
3		同 南觀音町	同
4	宇品警察署	同 元宇品町	同
5		同 似島町	同

別紙第十一號

防空警報受領書様式

警報通信用紙 (陸軍関係)	月 日
	西部軍管区全地区
	西中國地区
	廣島地区
	(訓練) 空襲警報
	(訓練) 警戒警報
	(訓練) 警戒警報解除

西部軍司令官發令				
廣島師團長發令				
受領時刻	時 分	當務者	發信	
			受信	
備 考	警報地区防空警報發令官ニハ〇印ヲ付スルコト			

別紙第十一號ノ二

警報通信用紙 (海軍関係)	月 日			
	(訓練) 警報呉鎮守府發令			
	呉鎮陸上担任区域及海上区			
	呉地区及徳山地区			
	呉地区			
	呉鎮守府海上区			
	瀬戸内海			
	内海西部海面			
	(訓練) 空襲警報		(訓練) 空襲警報解除	
	(訓練) 警戒警報		(訓練) 警戒警報解除	
受領時刻	時 分	當務者	發信	
			受信	
備 考	警報地区防空警報發令官ニハ〇印ヲ付スルコト			

別紙第十二號

日没日出時刻標準表												
日別 月別	一 日				十 一 日				二 十 一 日			
	日没		日出		日没		日出		日没		日出	
	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分
四月	5	30	5	58	6	38	5	45	6	47	5	32
五月	6	54	5	21	7	01	5	11	7	09	5	04
六月	7	17	5	00	7	21	4	57	7	26	4	58
七月	7	27	5	00	7	25	5	07	7	21	5	12
八月	7	13	5	19	7	03	5	27	6	52	5	35
九月	6	38	5	43	6	23	5	50	6	09	5	58
十月	5	55	6	05	5	43	6	12	5	30	6	20
十一月	5	18	6	26	5	09	6	39	5	03	6	49
十二月	5	00	6	58	5	01	7	06	5	04	7	13
昭和十七年一月	5	10	7	17	5	18	7	17	5	28	7	15
二月	5	39	7	09	5	49	7	01	5	58	6	51
三月	6	06	6	40	6	14	6	27	6	22	6	14

別表第十三號

漁業用燈火類ノ燈火ノ指定告示 (昭和一五. 三. 二二 廣島縣告示一八五號)					
種 類	警戒官制		空襲管制	遮光條件	
	乙	甲			
漁業用燈類	水中集魚燈類	消燈 減光且遮光一隻合計二〇〇燭 以下トスルコト	消燈 減光且遮光一隻 合計一〇〇燭以 下トスルコト	消燈 但シ訓練ノ場合ニ於 テハ一隻合計五〇燭 以下ニ減光且遮光シ テ残置スルコトヲ得	光源ノ下端ヨリ遮光具ノ下端ニ引キタル線ガ光線ノ下方ニ向ヒ且水面ト二十度以上ノ角ヲ為スコト
	水上集魚燈類				光源ヨリ發スル直遮光及水面ヨリノ反射光ガ上空ニ向ハザルコト
	流網延定置網其他之ニ類スルモノノ標識燈	消燈 減光且ツ遮光漁具ノ長サ一〇〇米ニ付一燈トシ一燈二燭 以下トスルコト	消燈	消燈	燈器水平ノトキ光源ノ下端ヨリ遮光具ノ下端ニ引キタル線ガ三十度以上ノ上空ニ向ハザルコト
	作業燈	消燈 減光且ツ遮光一燃五燈トシ一 隻合計三〇燭以下トスルコト	消燈	消燈	直遮光ガ舷外及上空ニ向ハザルコト

別紙第十三號ノ二

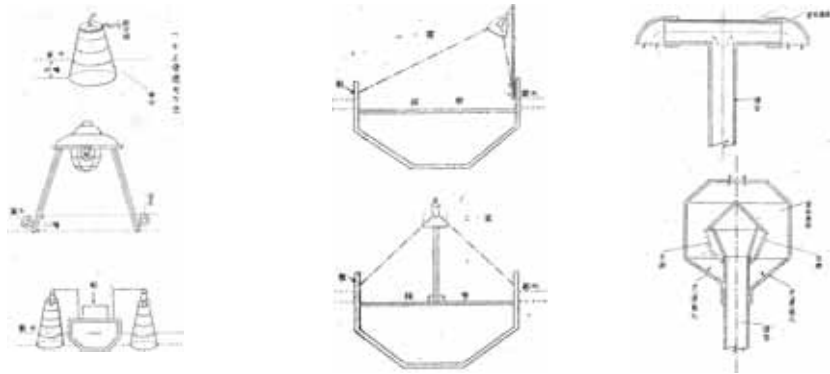
漁業用燈火管制參考圖

一、水上燈遮光方法

二、作業燈遮光方法

舷外及上空遮光ノ状態

鯛乾燥用煙突火焰完成參考圖



一隻二燈以上ヲ使用スル場合ハ之ヲ一ヶ所ニ集中セザルコト

別紙第十四號

空襲管制實施及訓練ノ時ニ於ケル自動車及車輛ニ用ユル燈火ノ告示

一、空襲管制實施及訓練ノ時ニ於テ自動車ニ用フル光

(1) 自動車ノ種類

(イ) 防空ニ従事スルタメ縣廳、警察署、警防團、市役所、町村役場及放送局ニ於テ使用スル自動車但シ市役所、町村役場及放送局ニ於テ使用スル自動車ハ所轄警察署長ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ル

(ロ) 警防團用自動車

(ハ) 防空上必要ナル鉄道及通信官署ノ自動車

(ニ) 緊急已ムヲ得ザル場合ニ使用する鉄道及通信官署ノ業務用自動車

(ホ) 救急用自動車

(2) 光ノ秘匿ノ程度

透視距離二百米以下ニシテ (3) 項ノ様式ニヨリ標識ヲ車輛ノ前後ニ各一個宛附シタル場合ハ前照燈及側燈ハ合計二燈以下トシ角燈ノ燃器ヨリ十米ノ地点ニ於テ光軸ニ垂直ナル面ニ於ケル最大照度〇.七「ルクス」以下ニ減光シ且遮光スルコト

遮光條件ハ自動車水平ノトキ燈器ヨリ直接發スル遮光ハ十五度以上ノ上空ニ向ハザルコト但シ鉄道及通信官署ノ自動車ニシテ其廳ニ於テ別ニ定メアルモノハ之ニ從フコトヲ得

(3) 車輛ノ前後ニ附スベキ標識ノ様式

警察署用	示
縣廳、市役所、町村役場用	公
警防團用	★
鉄道官署用	工
通信官署用	〒
放送局用	放
救急用	+

二、空襲管制實施及訓練ノ時ニ於テ自轉車ニ用ユル光

(1) 自轉車ノ種類

(イ) 防空ニ従事スルタメ縣廳、警察署、警防團、市役所、町村役場及放送局ニ於テ使用スル自轉車但シ市役所、町村役場ニ於テ使用スル自轉車ハ所轄警察署長ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ル

(ハ) 防空上必要ナル鉄道及通信官署ノ自轉車

(ニ) 緊急已ムヲ得ザル場合ニ使用する鉄道及通信官署ノ業務用自轉車

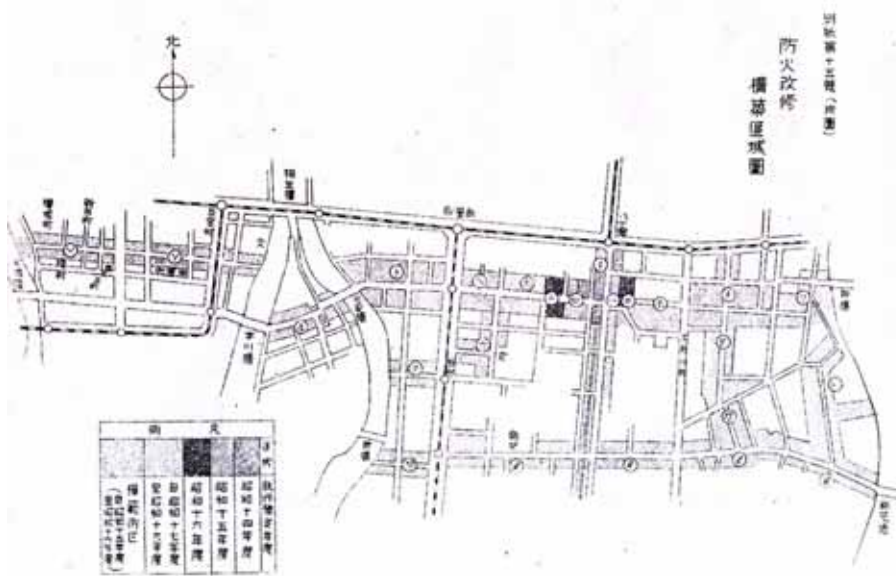
(2) 光ノ秘匿ノ程度

一燭以下トシ燈器水平ノトキ其光源ヲ地表上三百米以上ノ何レノ点ヨリモ認メ得ザルヨウ遮光スルコト但シ鉄道及通信官署ノ自轉車ニシテ其廳ニ於テ別ニ定メアルモノハ之ニ從フコトヲ得

(3) 車輛等ニ附スベキ標識ノ様式ハ前項自動車ノ標識ニ準ス

別紙第十五號 (附図)

防火改修構築區域圖



別紙第十三號

防火改修構築区域表

執行豫定年度	區域 (府圖参照)	改修壁面積(坪)00
昭和十四年度	イ	5,000 00
昭和十五年度	ロ ハ 及東魚屋町(模範街区)ノ一部	3,000 00
昭和十六年度	ニ 及東魚屋町(模範街区)ノ一部	4,783 00
自 昭和十七年度 至 昭和十九年度	ホ ヘ ト ナ リヌ ル オ ワ カ ヨ タ レ ソ	868,702 50
計		81,485 50

別紙第十六號

防空救護組織要綱

第一 總則

一、空襲ニヨル傷病者(毒瓦斯患者ヲ含ム以下之ニ同ジ)ノ救護ハ左ノ救護機関ニ於テ之ヲ行フコト

- (一) 警防團救護部(班)
- (二) 救護所
- (三) 特設救護班

二、書ク救護機関ノ組織、編成、擔任區域、業務等ニ関シテハ法令及本要綱ニ依ルノ外廣島縣防空計画市町村防空計画ノ定ムル所ニ依ルコト

三、本要綱ハ原則トシテ防空法第二條ノ規定ニヨル指定市町村ノ區域ニ之ヲ適用スルモノナルコト

四、前項以外ノ町村ニ在リテハ本要綱ニ準據シ救護所ヲ指定シ且特設救護班ヲ設ケ置クコト

第二 警防團救護部(班)

一、警防團救護部(班)ハ空襲時現場ニオケル傷病者、救急處置、收容等ノ應急救護業務ニ従事スルコト

二、警防團救護部(班)ハ必要ニ應ジ其区域内ニ應急處置所ヲ設置スルコト

三、警防團救護部(班)ハ常ニ救護所、特設救護班等ト緊密ナル連絡ヲ保持シ傷病者ノ救護上遺漏ナキヲ期スルコト

四、警防團救護部(班)ハ消防機関、防毒機関ト特ニ緊密ナル連絡ヲ保持スルコト

五、警察署長ハ医師会ト協議上警防團救護部(班)ノ部(班)長等ニハ成ルベク医師ヲ以テ之ヲ充ツルコト

第三 救護所

一、救護所ハ主トシテ空襲ニヨル傷病者ノ治療、收容ヲ擔當スル

二、救護所ハナルベク既存ノ救護所防護室、官公署ノ管理スル診療所、一般診療所及之ニ屬スル医師、歯科医師、薬剤師、看護婦等ヲ以テ之ニ充ツルコト

尚一時ニ多数患者ノ救護ヲ要スル場合アルベキヲ豫想シ学校寺院其他適當ト認ムル場所ヲ救護所トシテ指定シ置クコト

三、救護所ハ敏速ニ救護ノ処置ヲ講ジ得ル様成ルベク多数之ヲ配置スルコト

四、警察署長及市町村長ハ協力シ廣島縣防空計畫又ハ知事ノ指示ニ基キ關係官公署及醫師會、歯科醫師會又ハ薬剤師會ト協議シ當該市町村ノ区域内適當ナル箇所ニ救護所ヲ開設シ区域内ノ醫師、歯科医師、薬剤師、看護婦、女学生、國民学校高等科女子上級生、女子青年団員及其他ノ者ヲシテ救護ニ従事セシムル計画ヲ設定スルコト

- 五、警察署長及市町村長ハ前項ノ計畫ニ基キ看護婦會、女子青年団、学校當局等ト空襲時救護ニ従事スベキ者ノ出勤等ニ関シ豫メ協議ヲ為シ置クコト
- 六、醫師會、齒科醫師會ハ第四項ノ計畫ニ基キ所属ノ醫師、齒科醫師ヲシテ救護所開設セシメ救護業務ニ従事セシムルコト
- 薬剤師會ハ第四項ノ計畫ニ基キ所属ノ薬剤師ヲシテ救護所ニ於テ調剤ノ業務セシムルコト
- 七、救護所ノ所有者又ハ管理者ハ警戒警報發令アリタルトキハ直チニ救護所ヲ開設シ何時ニテモ救護ヲ為シ得ル如ク設備資材其他諸般ノ準備ヲ為スコト
- 第四 特設救護班
- 一、知事及市町村長ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スル者以外ノ所属ノ現有機関ヲ以テ直屬救護班ヲ設ケ知事警察署長又ハ市町村長ノ支持ヲ受ケ警防團救護部(班)又ハ救護所ノ應援ニ従事セシムルコト
- 二、醫師會、齒科醫師會ハ警防團救護部(班)又ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スル者以外ノ所属ノ醫師、齒科醫師ヲ以テ適宜救護班ヲ設ケ知事、警察署長又ハ市町村長ノ指示ヲ受ケ他ノ救護機関ノ應援其他救護業務ニ従事セシムルコト

別紙第十七號

防空建築規則抜粋(昭和十四年二月十七日内務省令第五號)

- 第一條 市街地建築物法第十二條ノ規定ニヨル建築物ノ構造設備又ハ敷地ニ関シ防空上必要ナル事項ハ本例ノ定ムル所ニ依ル
- 第二條 本令ハ内務大臣ノ指定スル区域ニ之ヲ適用スル
- 第三條 本令ニ於ケル用語ハ左ノ例ニヨル
- 一、耐火木材トハ耐火液ヲ注入シタル木材ニシテ内務大臣ノ定ムル規格ニ適合シタルモノヲ謂フ
- 二、床又ハ屋根ノ耐震構造トハ鉄筋「コンクリート」造(鉄骨鉄筋「コンクリート」造ヲ含ム以下之ニ同ジ)ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ
- (イ) 板ノ厚サハ四十センチメートル以上ニシテ各部分ニオケル鉄ト「コンクリート」トノ容積比ハ〇.〇四以上且複筋及繫筋ヲ配置シ主筋ノ間隔ハ十五センチメートル以下ト為シ上下ノ鉄筋ハ千鳥ニ配シ適當ニ溶接シタルモノ
- (ロ) 版ノ圧特ニ大ナルモノ等ニシテ地方長官(東京府ニ在リテハ警視總監以下之ニ同ジ)前號ト同等以上ノ耐震力在リト認ムモノ
- 三、防護扉トハ左ノ各號ノ位置ニ該當スルモノヲ謂フ
- (イ) 鉄製ニシテ鉄板ノ厚ノ合計三ミリメートル以上且防毒上有効ナル構造ヲ有スルモノ
- (ロ) 木造ニシテ厚六センチメートル以上且防毒上有効ナル構造ヲ有スルモノ
- (ハ) 其他地方長官前各號ニ準ズト認ムルモノ
- 第十四條 防護室ノ構造設備ハ左ノ規定ニ依ルベシ
- 一、收容室ト前室トニ区畫シ又ハ臨時區畫ノ設備ヲ為スコト但シ地方長官防護室ノ位置其他ノ狀況ニヨリ支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニアラズ
- 二、收容室ノ床面積ハ百平方メートルヲ超エザルコト但シ地方長官建物ノ用途其他ノ狀況ニヨリ已ムヲ得ズト認メ又ハ支障ナシト認ムル時ハコノ限りニアラズ
- 三、上部ノ床又ハ屋根ハ耐震構造ト為スコト但シ防護室ノ上部ニ二以上ノ版アル場合ニ於テ地方長官支障ナキト認ムルトキハ耐震構造ノ條件ヲ輕減スルコトヲ得
- 四、周壁ハ鉄筋「コンクリート」造ト為スコト但シ建物ノ外壁ニ接シ且第一階以下ノ階ニ防護室ヲ設クル場合ニハ其部分ノ周壁ハ特ニ堅固ナル構造ト為スベシ
- 五、防護ニ際シ使用スル出入口ニハ防護扉ヲ設クルコト
- 六、外壁ニ設クル開口ハ其面積ヲ三平方メートル以下ト為シ且第二階以上ノ階ニ在ルモノニ付テハ防護扉ノ類ヲ設ケ又ハ之ニ代ル臨時設備ヲナシ得ルモノト為スコト
- 七、外壁ニ非ザル周壁ノ開口ニシテ面積四平方メートルヲ超ユルモノニハ防護又ハ扉ノ類ヲ設クルコト
- 八、出入口一ナル場合ニ於テハ適當ナル位置ニ非常脱出口ヲ設クルコト
- 九、防毒上有効ナル構造トナスコト

別紙第十八號

防空壕構築要領

第一 總則

- 一、防空壕ハ投下彈ノ破裂ニ基ヅク彈片、爆風等ニ因ル危害サラニ出来得レバ毒瓦斯ニ因ル危害ヲ防止スルコトニ留意シテ構築スルコト
- 二、防空壕ハ応急ノ定費施設ナルモ防護活動ニ便ナル如ク其位置、規模、構造等ヲ決定スルコト
- 三、防空壕ハ成ルベク各戸ニ其敷地内空地ニ設クル原則トスルコト但シ敷地ノ狀況ニヨリテハ近隣共同シテ設クルモ妨ゲナキコト
- 四、防空壕ハ成ルベク小規模ノモノヲ分散シテ設クルコト大規模ノモノニアリテモ二十人程度ヲ限度トスルコト

五、小型防空壕ト稱スルハ一般家庭ノ用ニ供スベキ収容人員五人程度ノモノヲ大型防空壕ト稱スルハ作業場集合住宅等ノ用ニ供スベキ人員二十人程度ノモノヲ謂フ

第二 位置

- 一、防火ソノ他ノ積極的防護活動ニ便ナルト共ニ家屋ノ崩壊、火災等ノ場合速ニ安全地帯ニ脱出シ得ル位置ニ設ク
- 二、成ルベク分散シテ配置資格防空壕間ノ間隔ハ大型防空壕ニ在リテハ一〇米（五間五分）以上小型防空壕ニ在リテハ五米（二間八部）以上ト為スコト
- 三、危険物貯蔵庫瓦斯「タンク」石油「タンク」等ノ附近ヲ避クルコト
- 四、石造、煉瓦造等、崩壊ノ虞アル建造物塀其他ノ工作物ノ附近ヲ避クルコト、已ムヲ得ズ之等ニ近接シテ構築スル場合ニ在リテハ崩壊ニ因ル危害ノ防止ニ留意スルコト

第三 型式及規模

一、防空壕ハ成ルベク掩蔽型ト為シ已ムヲ得ザル場合ニハ開放型ト為スコト妨ゲザルコトニ、防空壕ハ地下式ヲ原則トスルコト湧水其他特別ノ事情アル場合ニ於テモ成ルベク半地下式ト為シ已ムヲ得ザル場合ニ限リ地上式ト為スコト

三、大型防空壕ハ成ルベク両側席ト為スコト

四、収容室ノ内法寸法ハ左ノ標準ニ依ルコト

種類		幅	高	長
小型	片側席	七〇糎(約二尺三寸)	一四〇糎(約四尺六寸)	腰掛長一人當四五糎(約一尺五寸)ヲ標準トシテ決定スルコト
防空壕	両側席	一〇〇糎(約三尺三寸)		
大型	片側席	八〇糎(約二尺六寸)	一五〇糎(約五尺)	
防空壕	両側席	一一〇糎(約四尺)		

防空壕ヲ防毒敵構造ト為ス場合ハ収容室ノ空氣容積ヲ一人當〇.六五立方米（約二三立方尺）以上ト為スヲ要スルヲ以テ概ネ左ノ標準ニ依ルコト

種類	幅	高	長
片側席	八〇糎(約二尺六寸)	一五〇糎(約五尺)	腰掛長一人當五〇糎(約一尺七寸)ヲ標準トシテ決定スルコト
両側席	一四〇糎(約四尺六寸)	一六〇糎(約五尺三寸)	同 五五糎(約一尺八寸)ヲ標準トシテ決定スルコト

五、腰掛ハ奥行三十糎（約一尺）高サ三十六糎（約一尺二寸）ヲ標準ト為スコト

六、出入口ノ幅ハ六〇糎（約二尺）ヲ標準ト為スコト

七、防空壕ノ敷地面積ハ概ネ一人當一五平方米（約〇.四五坪）ヲ標準トシテ決定スルコト

第四 構造

収容人員	敷地面積
五人	七.五平方米（約二.三坪）
二十人	三〇. 平方米（約九坪）

第四 構造

一、地下式防空壕ノ構造ハ左ニ依ルコト

(イ) 壁体

地質軟弱ナル場合ニハ土留壁ヲ設クルコト土留壁ノ杭ニハ丸太又ハ角材ヲ用ヒ土留板ニハ板波型鉄板（生子板）等ヲ用フルコト

(ロ) 掩蓋

(一) 掩蓋ハ梁及板ニテ天井ヲ設ケ其上部モ厚五〇糎（一尺七寸）程度ノ土砂ヲ盛り又ハ厚三〇糎（約一尺）程度ノ土囊ヲ積ムコト但シ土囊、土砂ノ厚ヲ不必要ニ増加セザルコト

(二) 天井板ニハ成ルベク勾配ヲ附シ防水紙布類ヲ敷キ雨水ノ浸入ヲ防グコト

(三) 土留板及天井板ノ厚及杭梁ノ大サ間隔ハ左ノ標準ニ依ルコト

板ノ厚(正味)	杭梁ノ間隔	杭梁用 丸太ノ直径(正味) 角材ノ辺長(正味)
一二糎(約四分)	三六糎(約一尺二寸)	七.五糎(約二寸五分)
一八糎(約六分)	五四糎(約一尺八寸)	七.五糎(約二寸五分)
二四糎(約八分)	七二糎(約二尺四寸)	九糎(約三寸)

(ハ) 床面

床面ニハ排水溝及溜桝ヲ設ケ必要ニ應ジ板、砂利、藁等ヲ敷クコト

(ニ) 出入口

(一) 出入口ハ成ルベク二箇所ヲ設クルコト

出入口一箇所ナル場合ハ之ト距リタル位置ニ非常口ヲ設ケルコト

(二) 収容室ニ弾片、破片、爆風等ノ直接侵入セザル如ク出入口ヲ屈折シテ設ケルカ又ハ防護塀ヲ設ケルコト

(三) 出入口通路ハ斜路又ハ階段ト為シ雨水ノ流入セザル如ク防水口ヲ昂上シ又ハ溝ヲ設ケルコト

(ホ) 非常口

非常口、梯子、足掛り等ヲ設ケ脱出ニ便ナル構造ト為スコト

二、地上式防空壕ノ構造ハ左ニ依ルコト

(イ) 壁体

壁体ハ内側ニ板壁、支柱等ヲ設ケ衝撃、振動ニヨリ崩壊セザル如ク左ノ何レカニ依リ堅固ニ構築スルコト

(一) 外側ニ土砂ヲ盛上ゲタルモノ

厚一〇〇糎（三尺三寸）以上

(二) 外側ニ土砂ヲ充填セル箱又ハ土嚢ヲ組積トスルモノ

厚 七〇糎（約二尺三寸）以上

(三) 二重壁ノ間ニ土砂ヲ充填セルモノ

厚 七〇糎（約二尺三寸）以上

(四) 二重壁ノ間ニ煉瓦及石等ヲ充填セルモノ

厚 五〇糎（約一尺七寸）以上

(ロ) 掩蓋其他

地下式防空壕ノ場合ニ準ズルコト

三、半地下式防空壕ノ構造ハ地下式及地上式防空壕ニ準ズルコト

四、防護塙ノ構造ハ地上式防空壕ノ壁体ニ準ズルコト

第五 防毒の構造

一、出入口、非常口ニ氣密扉ヲ取付且ツ成ルベク其後方一米（三尺三寸）以上ノ處ニサラニ氣密扉又ハ防毒幕ノ類ヲ設クルコト

氣密扉ハ爆風ノ直接当ラザル如ク出入通路ヲ屈折シテ設クルコト

(イ) 氣密扉

氣密扉、救戸ニ薄鉄板（トタン板）又ハ不滲透性紙布ノ類ヲ貼付ケタルモノトシ其取付ハ梓木ニ切込ヲ設ケ摺合セニハ羅紗（フェルト）ノ類ヲ用フルコト

(ロ) 防毒幕

(一) 排開式

排開式防毒幕ハ不滲透性ノ布ヲ左右二枚用ヒ中央二十糎（約七寸）以上重ネ合ワセタルモノトシ其取付ハ出入リシ得ル程度ニ於テ棧木ヲ以テ梓木ニ充分打附クルコト

巻クノ裾ニハ砂等ノ錘ヲ附シ床ト密着スルヤウ工夫スルコト

(二) 捲上式

捲上式防毒幕ハ不滲透性ノ布ニ棧木ノ横骨ヲ附シタルモノトシ傾斜セル梓木ニ沿ヒ捲キ揚ゲ得ルヨウ取付クルコト

二、天井、板壁ノ隙間ハ不滲透性ノ紙布ノ類ヲ用ヒテ目張りスルカ又ハ「パテ」粘土等ヲ用ヒテ充填シ氣密ニスルコト

三、不滲透性ノ紙片ニハ「ゴム」引布、防水布、毛布、厚織布「セロファン」紙「バラフィン」紙「ハトロン」紙等ヲ用ヒ毛布、厚織布等ハ使用ニ際シ水又ハ油ヲ以テ濕スコト

四、換氣及採光ノ為ノ開口又ハ監視孔等ヲ設クル場合ハ隨時之ヲ閉室シ得ル構造ト為スコト

第六 施工

一、防空壕ノ構造ニ當リテハ概ネ左ノ順序方法ニテ施工スルコト

(イ) 収容人員形式、位置及大サヲ決定スルコト

(ロ) 堀ヲ行ヒ其土砂ヲ施工ノ支障トナラザル位置マデ運搬シ置クコト

(ハ) 杭ヲ打ち込ミ支柱ヲ組立ツル等骨組ヲ成スコト

(ニ) 板ヲ張り土ヲ盛り又ハ土ヲ充填スル等周壁及掩蓋ヲ設クルコト

(ホ) 腰掛等ノ設備ヲナスコト

(ヘ) 盛上又ハ充填土ハ二十糎（約七寸）ノ各層毎ニ充分搗キ固メテ盛上クルコト

二、防空壕ノ構築ニ要スル材料及器具ハ成ベク平素ヨリ之ヲ準備シ置クコト

別紙第十九號

要偽装物調査表（昭和十五年十一月末現在）

番號	名 稱	用 途	所在地	備考
1	大日本紡績株式會社廣島人絹工場	人造絹糸製造	廣島宇品町	
2	日本製鋼所廣島製作所	機械製造	全 仁保町	
3	東洋紡績廣島工場	綿糸紡績	全 西蟹屋町	
4	ライジングサン石油株式會社 石油タンク	石油タンク	全 横川町	
5	広島瓦斯電軌皆實工場	瓦斯タンク	廣島市皆実町	
6	日本製鋼所内爆発物貯蔵及火工製造所	爆薬及火工品製造貯蔵	全 仁保町	
7	國道二號線	軍用及物資輸送用	自 岡山縣界 至 山口縣界	主要經過地 廣島市
8	府縣道 廣島松江線	同	自 廣島市 至 双三郡布野村	主要經過地 可部、吉田、三次町
9	同 廣島宇品線	軍用	廣島市	国道二號線ト宇品軍港連絡
10	宇品港市宮棧橋 宇品港公共荷揚場	貨客乗降 貨物積卸	同 宇品町	
11	廣島市水源池	上水道浄水及貯水	同 牛田町	

別紙第 號

和文通話表		

○秘

昭和十六年度廣島市防空計畫

目次

第二編 總則	五
第二編 防空方針	五
第三編 防空實施	六
第一章 防空實施ノ開始及終止	六
第二章 防空實施機關	六
第三章 防空監視	六
第四章 防空通信	七
第五章 防空警報	七
第六章 燈火管制	九
第七章 防護監査及防護警報	九
第八章 消防	一〇
第九章 防毒及救護	一一
第十章 避難及退避	一一
第十一章 配給工作及偽裝	一二
第四編 營造物ノ防護	一三
第五編 設備及資材ノ整備	一三
別紙第一號 廣島市防空本部規程	一五
別紙第二號 各種車輛及船舶現在調査表	二二
別紙第三號 廣島市警防團組織編成表	二二
別紙第四號 廣島市警防團出動計畫	二七
別紙第五號 特設自衛團組織編成表	三〇
別紙第六號 自動車動員調査表	七一
別紙第七號 防空監視哨要員服務順位呼集方法	七一
別紙第八號 出漁船舟調査表	七二
別紙第九號 漁舟ト陸上トノ情報通信方法系統表	七二
別紙第十號 防空警報傳達系統	七三
別紙第十一號 指揮連絡報指定番號表	七六
別紙第十二號 「サイレン」(汽笛ヲ含ム)所有者及管理ニ對スル警報傳達	七六
別紙第十三號 防空傳達用警鐘打鐘責任者表	七九
別紙第十四號 警防團警報傳達計畫表	七九
別紙第十五號 島嶼部ニ對スル連絡調査表	九三
別紙第十六號 電燈點滅可能区域表	九七
別紙第十七號 燈火打揚ゲ責任者表	九七
別紙第十八號 島嶼部及漁舟ニ對スル警報傳達方法並ニ責任者表	九八
別紙第十八號ノ一 群長船(當番船)等ニ依ル警報傳達不可能漁舟ニ對スル警報傳達方法責任者表	九八
別紙第十九號 防空警報傳達揭示場所及責任者表	九九
別紙第二十號 ラヂオ聴取場所表	一一〇
別紙第二十一號 汽船會社(支店、代理店出張所ヲ含ム)所屬船舶ニ對スル防空警報傳達方法調査表	一一一
別紙第二十二號 火焰ヲ發スル工場等調査表	一一二
別紙第二十三號 燈火管制狀況檢視場所	一一三
別紙第二十四號 警防分團防護監視所位置表	一一五
別紙第二十五號 主ナル危險物調査表	一一六

別紙第二十六號	消防車其ノ他消防用設備器材配置表……一八
別紙第二十七號	消火栓配置表……一三五
別紙第二十八號	消防改修構築区域表……一三八
別紙第二十九號	自然水利用区域表……一二八
別紙第三十號	防毒業務ニ従事スベキ医師、齒科医師、獸医師、薬剤師、看護婦表……一六二
別紙第三十一號	防毒用部及救護用
別紙第三十二號	特設救護班員表（医師）……一六五
	同（薬剤師）……一六八
	特別救護班組織編成表……一七一
別紙第三十三號ノ一	廣島市私立病院医院診療所救護所調査表……一七三
別紙第三十三號ノ二	學校救護所調査表……一七七
別紙第三十四號	救護藥品購入系統……一七八
別紙第三十五號	三層以上（地下アルモノハ二階）ノ鉄骨鉄筋コンクリート造ノ建築物調査表……一七九
別紙第三十六號	火災及耐火防毒ノ避難場所調査表……一八一
別紙第三十七號	退避防空壕調……一八九
別紙第三十八號	工作班ヲ編成シムベキ事業者表……一九一
別紙第三十九號	米穀類配給所一覽表……一九二
同	ノ二 寝具ノ種類数量所在地調査表……一九六
同	ノ三 配給ノ用ニ供スベキ車輛及所有者調……二〇四
別紙第四十號	罹災者及救護者ニ配給スベキ食事ノ炊事能力調査表……二〇五
別紙第四十一號	食糧品購入先調査表……二一五
別紙第四十二號	配給従事者應援団体調……二一六
別紙第四十三號	市長ノ指定シタル營造物調査表……二一七
別紙第四十四號	防毒資材ノ製造一覽表……二一八
別紙特第一號	防空監視隊長副隊長哨長一覽表……二二〇

昭和十六年度廣島市防空計畫

第一編 總則

第一條 本計畫ハ昭和十六年廣島縣防空計畫ニ準拠シ廣島市ニ於ケル防空ノ實施並ニ之ニ監視必要ナル設備資材ノ整備ニ関スル事項ヲ規定ス

防空實施ニ関シテハ本計畫ニ定ムルモノヲ除クノ外廣島市永年防空計畫ノ定ムル所ニ依ル

第二條 市長、警察署長、及其他ノ者ニシテ防空計畫ヲ設定スル者ハ昭和十六年三月末迄ニ永年防空計畫ト共ニ設定スルモノトス但シ工場學校ノ防空計畫ハ年度防空計畫ニ全部ヲ計画スルモノトス

第二編 防空方針

第三條 本年度廣島市ノ防空方針ハ永年防空計畫ニ示シタル方針具現ノタメ特ニ左ノ事項ニ重点ヲ置ク

- 一 消防及防毒ノ施設ヲ増強ス
- 二 避難施設ヲ充實整備ス
- 三 工作班ヲ充實強化ス
- 四 家庭防衛隣保班ノ防火訓練ノ徹底
- 五 防空監視及情報通信ノ人的組織ヲ三十二班ニ充實整備ス
- 六 空襲管制ヲ空襲警報発令后遅クトモ二分以内ニ短縮ス
- 七 警報傳達（警報、空襲警報）所要時間ヲ短縮ス

第三編 防空實施

第一章 防空實施ノ開始及終止

第四條 市長ハ知事ヨリ防空實施ノ開始又ハ終止令ヲ受領シタルトキハ文書、口頭、又ハ電話ニヨリ警防團及町内會會長ヲ通シ市内全般ニ傳達スルモノトス

第二章 防空實施機關

第五條 廣島市防空本部ノ組織、編成、業務分担等ハ別紙第一號ノ如シ

第六條 本市ニ於ケル各種自動車（自動自轉車ヲ含ム）ノ現存状況ハ別紙第二號ノ如シ

第七條 本市警防團ノ組織、編成及担任業務等ハ別紙第三號ノ如シ

第八條 本市警防團ノ出勤計画ハ別紙第四號ノ如シ

第九條 特設自衛団ノ名稱、組織、編成、並ニ設備資材等ハ別紙第五號ノ如シ

第十條 家庭防衛隣保班ノ組織、編成ハ本市永年計画別紙第一號家庭防衛隣保班組織要領ニ依リ各町内會隣組ヲ以テ組織シ其ノ数六千四百四十三班トス

第十一條 防空実施中使用スヘキ自動車ノ動員系統車輛数ハ別紙第六號ノ如シ

第三章 防空監視

第十二條 廣島市防空監視哨ノ位置ハ廣島市役所廳舎屋上トス

第十三條 防空監視体ノ配置ハ知事ヨリ配置命令ヲ發シタルトキヨリ遅クトモ四時間以内ニ之ガ整備ヲ完了スルモノトス已ムヲ得ザル事由ニ依リ所定ノ時刻ニ配置ニ就キ難キトキハ警察署長又ハ市長ハ応急ノ監視ノ方法ヲ講ズルモノトス

第十四條 市長ハ警察署長ヨリ知事ノ任命シタル防空監視員ヨリ翌月分ノ勤務日割ノ指示ヲ受ケタルトキハ直チニ之ヲ各本人ニ告知シ置クモノトス

第十五條 防空監視隊長、副隊長及監視哨長等ハ別紙特第一號ノ如シ

第十六條 防空監視対象員ノ呼集順位及呼集方法ハ別紙第七號ノ如シ

第十七條 群長船及當番舟ノ海上ニ於ケル防空監視ノ終始ハ呉鎮守府指令官長ノ通知ニヨル但シ特ニ通知ナキ場合ハ警戒警戒警報發令ヨリ同解除迄ノ間ニ従事スルモノトス

第十八條 本市海面ニ於ケル出漁船舟ノ現存状況ハ別紙第八號ノ如シ

第十九條 漁舟ト陸上トノ情報通信ニ関スル方法系統及実施責任者ハ別紙第九號ノ如シ

第四章 防空通信

第二十條 警察署長市町村長、特別警察受領者、指定警報受領者ニ對スル防空警報傳達系統ノ主系統副系統副々系統ハ別紙第十號ノ如シ

第二十一條 指揮連絡報ノ指定電話番号ハ別紙第十一號ノ如シ

第五章 防空警報

第二十二條 警察署、市、特別警察受領者指定警報受領者ニ對スル警報傳達系統ハ別紙第十號ニ依ル

第二十三條 市内ニ於ケル「サイレン」（汽笛ヲ含ム以下同シ）所有者又ハ管理者ニ對スル警報傳達方法及吹鳴責任者ハ別紙第十二號ノ如シ

第二十四條 「サイレン」ノ音響到達範囲外ノ地域又ハ「サイレン」使用不能ノ場合ニ於ケル防空警報伝達用ノ警鐘ノ位置管理者伝達方法打鐘責任者等ハ別紙第一三號ノ如シ

第二十五條 口頭ニ依リ防空警報ヲ傳達スル場合各分團ノ末端責任区域順路従事人員等ハ別紙第十四號ノ如シ

第二十六條 市長ハ防空方針ニ基キ市内ニ對スル防空警報ノ傳達所要時間ヲ短縮スル如ク傳達方法ヲ具体的ニ定ムルモノトス

特ニ島嶼部漁舟ニ對シテハ永年計画ニ定ムル所ニ依リ迅速徹底ヲ期スルモノトス（島嶼部ニ對スル連絡調ハ別紙第十五號参照）

第二十七條 本紙ニ於ケル空襲ニ際シ一齊ニ若ハ地域ヲ指定シテ停電セシムル可能区域ハ別紙第十六號ノ如シ

第二十八條 燈火打揚場所ニ使用スル筒煙火保存場所打揚責任者等ハ別紙第十七號ノ如シ

第二十九條 警報傳達困難ナル地域又ハ海上ニ對スル警戒警報（空襲警報アリタルトキ亦同シ）掲出場所、掲出責任者傳達方法等ハ別紙第十八號ノ如シ

第三十條 一般ニ對シ防空警報ヲ傳達スル場合ノ掲示場所掲示責任者ハ別紙第十九號ノ如シ

第三十一條 防空警報副受信ノ目的ヲ以テ「ラヂオ」ヲ聴取スル箇所ハ別紙第二十號ノ如シ

第三十二條 各汽船會社（支店、代理店出張所ヲ含ム）所屬ノ船舶ニ對スル防空警報傳達方法ハ別紙第二十一號ノ如シ

第六章 燈火管制

第三十三條 本市ノ警戒管制ハ乙程度トス

第三十四條 燈火管制ニ相當ノ時間ヲ要スル燈火ノ内誘蛾燈ノ点在状況及特殊火焰類調査表ハ別紙第二十二號ノ如シ

第三十五條 本市ニ於ケル燈火管制ノ檢視場所ハ別紙第二十三號ノ如シ

第七章 防護監視及防護警戒

第三十六條 本市警防團同分團ノ防空監視所ノ位置別紙第二十四號ノ如シ

第三十七條 防空監視所ノ勤務ハ左ニ依ルモノト任ス

一 所長ハ所員ヲ指揮シ航空機及被害状況ノ監視報告ニ任ス

二 所長ハ通常所員ヲ監視員二名連絡員一名及控員三名ニ分チ監視中一名ハ航空機ノ監視ヲ他ノ一名ハ被害状況ノ監視ニ當ラシメ連絡員ハ監視員ノ得タル情況ノ報告其他ノ連絡ニ服セシメ控員ハ休憩セシムルモノトス

三 所長ハ監視員及連絡員ヲ通常三十分乃至一時間毎ニ在員ト交換セシムルモノトス

隣保班ノ防護監視従事者ハ概ネ三十分毎ニ交代セシムルモノトス

第三十八條 防護警報発令者ハ概ネ左ニ掲クル者ヲ指定セラルルモノトス

一 火災警報及火災警報解除

警察官吏、警防團長、同副團長、同分團長、同副分團長、同消防部（班）長同部員

二 毒瓦斯警戒警報及毒瓦斯警報解除

警察官吏、警防團長、同副團長、同分團長、同副分團長、同消防部（班）長同部員

第八章 消防

第三十九條 警察署長及市長ハ防空実施開始セラレタルトキハ速ニ左ノ事項ヲ点検指導シテ消防ノ万全ヲ期スルモノトス

一 各戸ニ付防火準備ヲ点検シ貯水其他ノ防火資材ノ準備ヲ行動セシムルモノトス

二 警防團ノ消防機械器具ヲ点検シ故障アラバ速ニ修理シ置クコト

三 市内ノ給水設備ヲ点検シ不十分ト認ムルトキハ努メテ応急的ニ貯水鑿井ノ處置ヲ成スコト

四 廣島縣永年防空計画第二百一条第二百二条ノ主要ナル工場、事業上等ノ消防施設ヲ應急的ニ整備セシムルト共ニ瓦斯及電気工作危険物大量貯蔵所等ノ處置ヲ点検指導スルコト

第四十條 本市ニ於ケル消防活動上危害ヲ及ホス虞アル危険物ノ所在ハ別紙第二十五號ノ如シ

第四十一條 本市ニ於ケル消防車其他消防用設備器材ノ配置状況ハ別紙第二十六號ノ如シ

第四十二條 本市ニ於ケル消火栓ノ配置状況ハ別紙第二十七號ノ如シ

第四十三條 昭和十六年度実施スル防火改修構築区域ハ別紙第二十八號ノ如シ

第四十四條 本市ニ於ケル自然水利用区域ハ別紙第二十九號ノ如シ

第九章 防毒及救護

第四十五條 廣島市防空本部直轄防毒及救護ニ関スル組織、編成業務分掌等ハ別紙第一號廣島市防空本部規定ニヨル

第四十六條 本市ノ防毒及救護ニ従事スベキ医師齒科医師、獣医師、薬剤師、看護婦等ハ別紙第三十號ノ如シ

第四十七條 本市警防團員ニ對スル防毒面及其他ノ防毒用具ノ現存状況ハ別紙第三十一號ノ如シ

第四十八條 本市ハ左ノ病院ヲ指定シ其管理者ヲシテ所属ノ医師、薬剤師、看護婦等ヲ以テ特設救護班ヲ編成シ警防團救護部又ハ救護所ノ應援其ノ他ノ救護業務ニ従事セシムルモノトス

一 廣島市舟入病院

第四十九條 本市ニ於ケル救護用薬品ハ速ニ整備スルモノトス

第五十條 本市警防團ニ属セザル医師、齒科医師、薬剤師、獣医師、看護婦等ヲ以テ組織スル特設救護班並ニ女学生國民学校高等科生徒、女子青年団員等ヲ以テ組織スル特別救護班ハ別紙第三十二號ノ如シ

第五十一條 本市ニ於ケル私立病院診療所又ハ開業医ニシテ病床アルモノノ学校寺院等ニシテ適當ナルモノヲ救護所所ニ指定シ之ガ収容範圍人員等ハ別紙第三十三號ノ如シ

第五十二條 救護用ノ救急薬品ノ購入系統ハ別紙第三十四號ノ如シ

第十章 避難及退避

第五十三條 市長ハ防空実施ノ開始命令アリタルトキハ警察署長ト協力シ其計画ニ依ル避難所及諸資材ノ準備状況ヲ点検シ避難者ノ収容ニ遺憾ナキヲ期スルモノトス

第五十四條 一般家庭及街路ニ於ケル退避ノ應急的施設ハ防空実施開始セラレタルトキ之ヲ設ケシムルモノトス但シ状況ニ依リ防空実施ノ開始前豫メ準備ヲ命ズルコトアルモノトス

第五十五條 退去ノ時期ハ知事ノ指示ヲ受クルモノト

第五十六條 本市ニ於ケル防護室並ニ準防護室ニ充ツヘキ三層以上ノ鉄骨及鉄筋「コンクリート」造ノ建築物ハ別紙第三十五號ノ如シ

第五十七條 本市ニ於ケル緊急避難場所ハ別紙第三十六號ノ如シ

第五十八條 本市ノ待避施設（隣保班ノ防空壕ヲ含ム）又ハ退避ニ共用シ得ヘキ施設ハ別紙第三十七號ノ如シ

第十一章 配給工作及偽装

第五十九條 市長ハ警察署長ト協議シ七月一日現在ヲ以テ配給ヲ要スル主要物資及運搬材料ヲ調査シ置クト共ニ其状況ヲ其月末迄ニ知事ニ報告スルモノトス

第六十條 本市防空本部直轄工作部ノ組織編成業務分掌ハ別紙第一號ノ廣島市防空本部規定ノ定ムル所ニ依ル

第六十一條 本市永年防空計画第二百十六条ノ整備復舊工作ハ廣島市防空本部規定ノ定ムル所ニ依ル

第六十二條 知事ニ於テ工作班ヲ編成シセムヘキ事業者ハ別紙第三十八號ノ如シ

第六十三條 本市ノ罹災者及救護者ニ配給スベキ食料品及寢具等ノ所在、配給所、配給従者、配給用車輛並ニ其所有者等ハ別紙第三十九號ノ如シ

第六十四條 罹災者及救護者等ニ配給スベキ食事ノ炊事能力状況ハ別紙第四十號ノ如シ

第六十五條 配給品缺乏シタル場合ニ於ケル購入先及配給品名等ハ別紙第四十一號ノ如シ

第六十六條 配給従事者ニ不足ヲ生シタル場合ニオケル應援団体名等ハ別紙第四十二號ノ如シ

第四編 營造物ノ防護

第六十七條 本市廳舎ノ防護方法及防護機關ノ編成配置ハ別紙第一號ノ如シ

第六十八條 市長ノ指定シタル市營像物ノ所屬長ハ官益警察署長ト協議シ防空報告ノ受領並ニ傳達通信連絡、燈火管制、消防其ノ他防護ニ関シ防空計画ヲ定ムルモノトスル

第七十條 市長ノ指定シタル市營造物ハ別紙第四十三號ノ如シ

第五編 設備及資材ノ整備

第七十一條 本市ハ永年防空計画ニ定ムル設備資材ノ外防空緑地地下道及左ノ資材ヲ整備セントス

設備資材	數量	備考
貯水槽	一五	基本額ハ別ニ指示スルトコロニ依ル
大型消防ポンプ	七	同
小型消防ポンプ	一〇	同
腕用ポンプ	五〇	同
防毒面	六〇〇	同
防毒衣	八〇	同
木造建物防火改修費補助	四,〇〇〇坪	同

第七十二條 市長ハ廣島縣永年防空計画ノ基キ設備及資材ヲ整備スルモノトス

第七十三條 本縣下ニ於ケル防空ニ関スル資材ノ製造販売業者ハ別紙第四十四號ノ如シ

第七十四條 國庫補助ニヨリ本市ニ整備スベキ設備資材ハ別紙第七十一條ノ如シ

別紙第一號

廣島市防空本部規程

第一條 本規程ハ警戒警報又ハ空襲警報ノ発令アリタル時ヨリ警戒警報解除迄ノ間之ヲ適用ス

第二條 廣島市防空本部（以下單ニ防空本部ト稱ス）ハ防空ノ實施業務並ニ防空實施ニ關聯シテ発生シ又ハ発生ノ虞アル各種ノ事態ニ則シ關係方面ト緊密ナル連絡ヲ圖リ迅速且適切ナル手段方法ヲ講シ以テ之カ完璧ヲ期スルヲ以テ目的トス

第三條 防空本部ハ廣島市役所内ニ之ヲ置ク

第四條 防空本部ハ市長及其ノ指名シタル職員ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 防空本部ニ左ノ部及班ヲ置ク

一 總務部

庶務班

二 情報部

庶務班、警報班、情報班

三 經理部

財務班、會計班

四 水道部

庶務班、工作班

五 土木部

庶務班、土木班、下水道班、營繕班

六 食料部

庶務班、調達班、配給班

七 防毒部

監察班、防毒班

八 救護班

調査班、救護班

九 援護部

庶務班、退去班、避難班、救済班

第六條 各部ノ所營業務概ネ左ノ如シ

一 庶務部

- (一) 部内令達ニ関スル事項
- (二) 防空本部内連絡ニ関スル事項
- (三) 記録ニ関スル事項
- (四) 部員ニ関スル事項
- (五) 他部ニ属セザル事項

二 情報部

一 庶務班

- (一) 部内庶務班並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項
- (二) 隣保班ノ指導ニ関スル事項

二 警報班

- (一) 警報ノ受領及傳達ニ関スル事項
- (二) 軍及関係官廳ヨリノ式命令ニ関スル事項
- (三) 官公衙等トノ通信連絡ニ関スルコト

三 經理部

一 財務班

- (一) 豫算編成ニ関スル事項
- (二) 豫算經理ニ関スル事項
- (三) 市會市參事會並ニ市長專決ニ関スル事項
- (四) 土地家屋物件使用収容補償ニ関スル事項
- (五) 其ノ他財務ニ関スル事項
- (六) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 會計班

- (一) 物品其ノ他ノ調達ニ関スル事項
- (二) 經費支拂ニ関スル事項
- (三) 防空本部員給食ニ関スル事項
- (四) 其ノ他會計ニ関スル事項

四 水道部

一 庶務班

- (一) 配給本支管ノ警備ニ関スル事項
- (二) 防護修理其ノ他ニ要スル資材整備ニ関スル事項
- (三) 勞力資材ノ徴用ニ関スル事項
- (四) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 工作班

- (一) 配水本支管及水管橋ノ防護並ニ應急處置ニ関スル事項
- (二) 水道施設破損ノ復旧工事ニ関スル事項
- (三) 取水場浄水場ノ防護並ニ應急處置ニ関スル事項
- (四) 取水管送水管及送電線ノ防護並ニ應急處置ニ関スル事項
- (五) 上水防毒及消毒ニ関スル事項
- (六) 上水ノ衛生的應急處置ニ関スル事項

五 土木部

一 庶務班

- (一) 防護修理其ノ他ニ要スル資材整備ニ関スル事項
- (二) 勞力資材ノ徴用ニ関スル事項

(三) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 土木班

(一) 道路橋梁堤防及渡船場ニ関スル應急處置ニ関スル事項

三 下水道班

(一) 下水道抽水所及溝渠各種樋門破損ノ應急處置ニ関スル事項

四 營繕班

(一) 偽装及遮蔽ニ関スル事項

(二) 避難所、配給所等ノ建設ニ関スル事項

六 食料部

一 庶務班

(一) 内部業務企画ニ関スル事項

(二) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 調達班

(一) 食料ノ調達ニ関スル事項

(二) 食料ノ保管並ニ関スル事項

三 配給班

(一) 配給実施計画ニ関スル事項

(二) 配給実施ニ関スル事項

七 防毒部

一 監察班

(一) 被害地監察ニ関スル事項

(二) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 防毒班

(一) 防毒業務ニ関スル事項

八 救護班

一 調査班

(一) 要救護者調査ニ関スル事項

(二) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 救護班

(一) 救護業務ニ関スル事項

九 援護部

一 庶務班

(一) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 退去班

(一) 退去者ノ集合及整理ニ関スル事項

(二) 退去者ノ誘導援助ニ関スル事項

三 避難班

(一) 避難場所収容人員及要救護事項等ニ関スル事項

四 救済班

(一) 避難場所ニ於ケル焚出ニ関スル事項

(二) 被服寝具等給與ニ関スル事項

第七條 防空本部長ハ市長自ラ之ニ當リ次長ハ助役ヲ以テ之ニ充ツ、部ニ部長、各班ニ班長ヲ置キ市長ハ之ヲ任免ス

必要アルトキハ部ニ副部長班ニ副班長ヲ置キ市長ハ之ヲ任免ス

第八條 防空本部長ハ本部ニ属スル一切ノ業務ヲ指揮統轄スル

本部長及次長故障アル場合ハ本部長ノ指名シタル職員ヲシテ其業務ヲ代行セシムルモノトス

第九條 警戒警報發令アリタルトキハ情報部長ハ直チニ部員ト共ニ所定ノ部署ニ就キ其他ノ部員ハ本部長ノ命ヲ受ケ行動スルモノトス

第十條 空襲警報発令アリタルトキハ本部長ハ直チニ所定ノ部署ニ就クモノトス

第十一條 警戒警報及空襲警報発令中ニ於ケル重要事項ニ付イテハ各部長ハ之ヲ本部長ニ報告スルモノトス

別紙第二號

各種車輛及船舶現在調査票 (昭和十六年二月一日現在)

名稱別	市名	廣島市
貨物自動車	二.五噸車以上	103
	二噸車以上	176
	噸半車以上	26
	小型車	143
	三輪車	524
荷車	馬車	468
	牛車	114
	手輓車	1,599
自轉車		33,146
自轉車用后車		2,378
自動車運転者	普通	1,462
	小型	1,443
自動車人夫		900
荷車用人夫		762
船舶	発動機船	286
	帆船	116
	小舟	319
	漁舟	531

別紙第三號

廣島市警防団組織編制表

本団 団長 一 副団長 三 常備消防部 部長 一 班長 三 警防員六〇																
分団名	団員 総数	分団 長	副分 団長	消防部			警備部			防毒部			救護部			
				部長	班長	警防 員	部長	班長	警防 員	部長	班長	警防 員	部長	班長	警防 員	
青崎分団	110	1	1	1	2	20	1	3	30	1	-	10	1	2	15	
矢賀	70	1	1	1	2	20	1	4	40	-	-	-	-	-	-	
尾長	150	1	1	1	3	30	1	5	50	1	-	10	1	2	22	
荒神	160	1	1	1	3	30	1	4	40	1	2	20	1	2	20	
牛田	110	1	1	1	2	20	1	3	30	1	-	10	1	2	15	
白島	140	1	1	1	3	30	1	4	40	1	2	15	1	2	16	
幟町	190	1	1	1	4	36	1	5	50	1	2	20	1	3	30	
竹屋	270	1	1	1	6	60	1	9	90	1	2	20	1	3	30	
段原	250	1	1	1	6	60	1	8	80	1	2	20	1	3	30	
比治山	210	1	1	1	4	40	1	7	70	1	2	20	1	3	24	
仁保	130	1	1	1	3	30	1	4	40	1	-	12	1	-	12	
楠那	110	1	1	1	2	28	1	2	20	1	2	13	1	-	10	
大河	130	1	1	1	3	27	1	3	33	1	2	16	1	2	16	
皆実	140	1	1	1	3	30	1	3	36	1	2	18	1	2	18	
宇品	230	1	1	1	4	40	1	4	56	1	3	27	1	3	27	
似島	110	1	1	1	2	28	1	2	18	1	-	10	1	-	10	
千田	170	1	1	1	3	39	1	3	48	1	2	18	1	2	18	
大手	160	1	1	1	3	32	1	4	43	1	2	18	1	2	18	
袋町	170	1	1	1	4	36	1	5	47	1	2	18	1	2	18	
中島	190	1	1	1	4	41	1	6	56	1	2	18	1	2	23	
廣瀬	130	1	1	1	3	37	1	4	38	1	2	13	1	2	13	
本川	140	1	1	1	3	32	1	4	43	1	2	13	1	2	13	
神崎	210	1	1	1	5	50	1	7	65	1	2	18	1	2	23	
舟入	120	1	1	1	2	23	1	3	34	1	2	13	1	2	13	
江波	110	1	1	1	2	23	1	3	34	1	-	10	1	-	10	
観音	210	1	1	1	5	50	1	7	65	1	2	18	1	2	23	
天満	170	1	1	1	4	36	1	5	47	1	2	18	1	2	18	
福島	110	1	1	1	2	23	1	3	34	1	-	10	1	-	10	
三篠	310	1	1	1	7	73	1	10	20	1	3	117	1	3	29	
己斐	150	1	1	1	4	36	1	5	47	1	2	13	1	2	13	
古田	118	1	1	1	2	28	1	3	36	1	2	12	1	2	10	
草津	172	1	1	1	4	38	1	6	57	1	2	14	1	2	16	

合計	5,150	32	32	32	109	1,116	32	148	1,527	31	50	492	31	60	566
----	-------	----	----	----	-----	-------	----	-----	-------	----	----	-----	----	----	-----

分団名	配給部			工作部			海上部			計			摘要
	部長	班長	警防員	部長	班長	警防員	部長	班長	警防員	部長	班長	警防員	
青崎分団	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	7	95	整備部中一ヶ班海上班 兼務トス
矢賀	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	6	60	
尾長	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	10	132	
荒神	1	2	14	1	2	13	-	-	-	6	15	157	
牛田	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	7	95	
白島	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	11	122	
轅町	1	2	14	1	2	14	-	-	-	6	18	164	
竹屋	1	2	20	1	2	18	-	-	-	6	24	238	
段原	1	2	15	1	2	14	-	-	-	6	23	219	
比治山	1	2	14	1	2	14	-	-	-	6	20	182	
仁保	1	-	10	1	-	11	-	-	-	6	7	115	整備部中一ヶ班海上班 兼務トス
楠那	1	-	10	-	-	-	-	-	-	6	8	94	海上部ハ整備部ノ兼務 トス
大河	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	10	112	
皆実	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	10	122	
宇品	1	2	16	1	2	16	1	2	19	7	20	201	
似島	1	-	10	1	-	10	1	-	11	7	4	97	
千田	1	2	13	1	2	12	-	-	-	6	14	148	
大手	1	2	13	1	2	13	-	-	-	6	15	137	
袋町	1	2	13	1	2	13	-	-	-	6	17	145	
中島	1	2	13	1	2	13	-	-	-	6	18	164	海上部ハ整備部ノ兼務 トス
廣瀬	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	11	111	
本川	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	11	121	
神崎	1	2	13	1	2	13	-	-	-	6	20	182	
舟入	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	9	103	
江波	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	5	97	
観音	1	2	13	1	2	13	-	-	-	6	20	182	海上部ハ整備部ノ兼務 トス
天満	1	2	18	1	2	13	-	-	-	6	17	145	
福島	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	5	97	
三篠	1	2	18	1	2	18	-	-	-	6	27	275	
己斐	1	-	10	1	-	10	-	-	-	6	13	139	
古田	1	-	7	1	-	8	-	-	-	6	9	101	海上部ハ整備部ノ兼務 トス
草津	1	-	13	1	-	12	-	-	-	6	14	150	海上部ハ整備部ノ兼務 トス
合計	31	50	372	31	28	368	2	2	30	190	435	4,471	

別紙第三號ノ二

廣島市警防團担任區域表

分團名	担任區域
青崎分團	仁保町ノ内打越部落及向洋部落
矢賀分團	矢賀町
尾長分團	尾長町、東蟹屋町、愛宕町、若草町
荒神分團	西蟹屋町、荒神町、猿猴橋町、松原町、大須賀町
牛田分團	牛田町
白島分團	二葉ノ里、東白島町、白島九軒町、白島東中町、白島中町、白島西中町、西白島町、白島北町
轅町分團	上柳町、橋本町、轅町、上流川長、鉄砲町、八丁堀、下柳町、石見屋町、山口町、銀山町、東胡町、斜屋町、胡町、弥生町、堀川町
竹屋分團	薬研堀、下流川町、三川町、平塚町、田中町、竹屋町、鶴見町、宝町、富士見町、昭和町
段原分團	台屋町、京橋町、的場町、金屋町、比治山町、松川町、稲荷町、土手町、段原大畑町、桐木町、段原町、段原末広町、段原東浦町、比治山公園、比治山本町
比治山分團	大洲町、南蟹屋町、段原新町、段原日出町、段原山崎町、段原中町、南段原町、東雲町
仁保分團	仁保町ノ内本浦部落及洲崎部落
楠那分團	仁保町ノ内日宇那部落及丹那部落
大河分團	霞町、出汐町、旭町、仁保町ノ内大河部落
皆実分團	皆実町一丁目、皆実町二丁目、皆実町三丁目、翠町
宇品分團	宇品町、元宇品町
似島分團	似島

千田分團	東千田町、千田町一丁目、千田町二丁目、千田町三丁目、南千田町、平野町、東竹屋町
大手分團	國泰寺町、雑魚場町、大手町六丁目、大手町七丁目、大手町八丁目、大手町九丁目
袋町分團	基町、東魚屋町、立町、研屋町、紙屋町、平田屋町、播磨屋町、革屋町、鉄砲屋町、新川場町、中町、下中町、袋町、西魚屋町、小町、塩屋町、尾道町、猿樂町、細工町、横町、鳥屋町、大手町一丁目、大手町二丁目、大手町三丁目、大手町四丁目、大手町五丁目
中島分團	中島本町、天神町、材木町、木挽町、元柳町、中島新町、水主町、吉島長、吉島羽衣町、吉島本町
廣瀬分團	寺町、西引御堂町、廣瀬北町、廣瀬元町、錦町、西九軒町
本川分團	空鞆町、鷹匠町、左官町、十日市町、鍛冶屋町、油屋町、猫屋町、堺町一丁目、堺町二丁目、塚本町
神崎分團	西新町、西地方町、小網町、舟入町、河原町、舟入仲町、舟入本町
舟入分團	舟入幸町、舟入川口町
江波分團	江波町
観音分團	東観音町一丁目、東観音町二丁目、観音本町、西観音町一丁目、西観音町二丁目、南観音町
天満分團	堺町三丁目、堺町四丁目、西大工町、榎町、横堀町、新市町、北榎町、天満町、西天満町、上天満町
福島分團	福島町
三篠分團	楠木町一丁目、楠木町三丁目、楠木町四丁目、大芝町、横川町二丁目、横川町三丁目、三篠本町二丁目、三篠本町三丁目、三篠本町四丁目、新庄町、三滝町、打越町、山手町、中廣町、南三篠町
己斐分團	己斐町
古田分團	古田町
草津分團	草津東町、草津本町、草津浜町、草津南町、庚午町

別紙第四號

廣島市警防團出動計畫

總則

第一條 廣島市警防團本部ハ廣島市役所内ニ置ク

第二條 分團長ハ豫メ分團事務所ノ位置警報命令ノ受領方法及分團員ノ集合場所ヲ定メ團長ニ報告スヘシ

召集方法

第三條 團員ノ召集ハ電話又ハ傳令ヲ以テ之ヲ行フ

第四條 分團長ハ團員ノ召集計畫ヲ樹立シ團長ニ報告スヘシ其ノ変更アリタルトキ亦同ジ

第五條 警報並ニ命令ノ傳達又ハ通信連絡ハ電話マタハ傳令ヲ以テ之ヲ為ス

第六條 分團長ハ警報又ハ命令傳達ノタメ相当数ノ傳令ヲ任命シ置クヘシ

第七條 分團長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ所轄巡查派出所又ハ駐在所ニ傳令ヲ出シ爾後命令受領ニ遺憾ナキヲ期スヘシ

第八條 分團長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ分團事務所ノ電話ニ專任者ヲ附シ受信上過誤ナキヲ期スヘシ

第九條 分團長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ管内所官衙工場其ノ他一般ニ對シ迅速且確實ニ之カ傳達ヲ為スヘシ

第十條 分團長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ管内家庭防衛隣保班長ニ連絡ヲ採リ即應シタル活動ヲ促スヘシ

第十一條 海岸其ノ他ニシテ警報傳達通信連絡上不便ナル地域ヲ管轄スル分團長ハ豫メ之ニ備フル專任傳令ヲ定メ置クヘシ

第十二條 分團長豫報ナクシテ「サイレン」「ラヂオ」等ニヨリ警報ノ発令ヲ知り足ルトキハ命令ヲ俟タスシテ第七條乃至前條ノ手配ヲ為スヘシ

第十三條 分團長第七條乃至第十二條ニヨリ手配ヲ終了シタル時ハ其ノ旨團長ニ報告スルト共ニ管内ヲ視察シ特異ノ狀況アリタルトキハ都度之ヲ團長ニ報告スヘシ

團員業務分担交代及補助

第十四條 團員ノ業務分担左ノ如シ

(一) 消防部

平時ニ於ケル水火其ノ他ノ災害警防業務ハ分團区域内ニアリテハ直チニ出動シ他ノ区域ハ命令ヲ以テ出勤スヘシ所防空実施ニ當リテハ警防業務ニ服ス

(二) 警備部

平時ニ於ケル災害ノ場合ハ命令ヲ以テ出動シ交通整理警護等ノ業務ニ任シ防空実施ニ際シテハ警報傳達、燈火管制、交通整理警護其他ノ業務ニ服ス

(三) 防毒部

平時ニアリテハ特ニ命令アリタル業務ニ服シ防空実施ニ當リ投下瓦斯彈ノ性能檢知並ニ防毒業務ニ服ス

(四) 救護部 (避難所管理ヲ含ム)

平時ニ於ケル災害ノ場合ハ命令ニヨリ防空実施ノ場合ハ直チニ出動シ死傷者ノ救護避難者ノ誘導及避難所管理ニ服ス

(五) 配給部

平時ニ於イテハ命令ヲ待チ防空実施ニ際シテハ直チニ出動シ必要ナル資材及狀況ニ依リ食料其ノ他ノ整備配給ニ服ス

(六) 工作部

平時ニ於イテハ命令ヲ待チ防空実施ニ當リテハ直チニ出動シ土木其ノ他ノ必要ナル工作業務ニ服ス

			外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名
設備機材	消火栓21/2 3、消火栓11/2 3、21/2ホース60尺 5、11/4ホース50尺 6、11/4ホース30尺 2、ゼットパイプ21/2 2、ゼットパイプ11/4 3、21/2両口スタンド 2、瓦斯消火ポンプ 2、消火弾 2、用水桶 2、水囊 30、水曹車 1、器具運搬車 2、梯子 2、斧 2、担架3、提灯 5、ロツプ 3、防毒衣 1、防毒マスク 9、薬囊 1、検知剤収容囊 1、ゴム手袋 3、ゴム長靴 3、ゴロ長靴 5、メガホン 2、信号器 3、消防用ヘルメット 2									

本場関戸蚊帳株式会社特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	警備部	設備器材
広瀬分團	-	-	部長 以下若干名	部長 以下若干名	部長 以下若干名	消火弾 5、バケツ 40、器具運搬車 3、梯子 2、2ホース 30、1ホース 30、消火器 15、消火栓 2

砲弾筒機械製作所特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	警備部	設備器材
広瀬分團	-	-	部長 以下若干名	部長 以下若干名	部長 以下若干名	消火栓 3、消火弾 35、ホース 5、バケツ 25、鳶口 5、梯子 7、提灯 10、用水桶 3

桐原容器工業所特設自衛團

分團名	團長	副團長	救護部	配給部	管制部	工作部	避難部	防毒部	庶務部	警備部
舟入分團	1	1	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名
設備機材	消火栓 5、スタンド 4、ホース 26、ノーズル 6、梯子 2、スツバナ 12、鳶口 15、先手頭刀 10、用水樽 23、バケツ 122、担架 3、電話機 1									

第一印刷株式会社特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務部	警備部	消防部	救護部	配給部	管制部	工作部	避難管理部	防毒部
古田分團	1	1	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名
設備機材	消火栓 1、ホース60尺 3、ゼットパイプ 1、両口スタンド 1、消火弾 10、手鳶 5、六尺鳶 2、担架 1、提灯 22、瓦斯消火ポンプ(一斗五升入) 1、梯子 1、バケツ 10、アツトウ式消火器(一ガロン入) 2										

昭和印刷製罐工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	警備部	消防部	救護部	配給部	管制部	工作部	避難管理部	防毒部
古田分團	1	1	附 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名
設備機材	消火栓11/4 2、11/4ゴム20尺 2、11/4布30尺 2、消火銃 10、消火液 23、消爆式消火器 15、消水桶 2、砂囊 40、器具運搬車 3、バケツ 15、鳶口 2、梯子 2、筒橋 2、斧 2、ロツプ 3、担架 1、提灯 10											

田村工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警備班	消防班	救護班	防毒班	避難管理班	管制班	工作班
三篠分團	1	1	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名
設備機材	消火栓二吋 5、消火栓11/2 1、二吋ホース60尺 8、11/2ホース20尺 1、二吋ゼットパイプ 5、11/2ゼットパイプ 1、用水桶 14、水囊10、バケツ 15、鳶口 2、斧 2、ロツプ30尺 3、担架 2、提灯 10、梯子 3、鶴嘴 2、掛矢 2									

三次製紙所廣島工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務部	警備部	消防部	管制部	工作部	救護部	避難管理部	防毒部	總計
三篠分團	1	1	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	45名
設備機材	消火栓二吋 2、消火栓一吋二分 2、二吋ホース71尺 2、一吋二分93尺 1、一吋二分111尺 1、二吋ゼットパイプ 1、一吋二分ゼットパイプ 2、用水桶 3、水入籠 18、消光器 3、瓦斯消火ポンプ 1、鳶口 2、梯子 1、担架 1、鶴嘴 2、掛矢 1、斧 1、ロツプ20尺 2、提灯 10										

山陽木材防腐株式会社廣島工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	消防部	工作部	總計
舟入分團	1	1	若干名	部長以下 若干名	59	若干名	總計120名
設備器材	消火栓3 1、3ホース50尺 2、3ホース40尺 3、3ゼットパイプ 1、両口スタンド 1、消火銃 2、消火弾 4、水囊 10、鳶口 10、梯子 1、鶴嘴 2、掛矢 2						

広島電氣特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	警報班	警護班	消防班	燈火管制班	救護班	配給班	總計
袋町分團	1	1	若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	總計 120名
設備機材	消火栓21/2 6、消火栓3 2、21/2消火栓49尺 6、3消火栓60尺 2、消火器 9、消火銃 3、消火弾 4、用水桶 1、小砂箱 6、梯子 2、ロツプ 2、提灯 6、バケツ 10、メガホン 5、スコツプ 10、警報用鈴 1									

広島市商業学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務	警護班	警報班	防火班	防毒班	搬出班	避難管理班	救護班	總計
観音分團	1	1	若干名	部長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	職員45名、 生徒115名
設備機材	防火栓室内 8、屋外2、給水栓 11、給水装置(吸上ポンプ) 2、防毒面 18、防表衣 3										

広島県立第一中学特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護係	總務係	防火係	防毒係	警備係	避難係	救護係	救護班	設備機材
-----	----	-----	--------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

袋町分團	1	1	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
------	---	---	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

大手町國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警衛班	警備班	防火班	避難誘導班	交通整理班	救護班	設備機材
大手分團	職員使丁等ヲ以テ組織ス									

袋町國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務	御真影奉護係	警備係	避難係	防火係	救護係	報知係	設備機材
袋町分團	1	1	1	職員使丁高学年ヲ以テ組織ス						

天満國民學校特設自衛團

分團名	團長	御真影奉護係	總務	防火係	警備係	避難係	救護係	設備機材
天満分團	1	職員使丁看護婦等ヲ以テ組織ス						

本川國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報係	燈火係	警衛係	警備係	防火係	防毒係	避難誘導係	救護配給係	設備機材
本川分團	1	1	教職員高学年児童ヲ以テ組織ス								

三篠國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	設備機材
三篠分團			教職員児童ヲ以テ組織ス バケツ 100、校庭ポンプ 1、廊下設付ポンプ 4、メガホン 3、縄 50本

廣瀬國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報應急班	警護奉遷班	災害防止班	避難管理班	救護接待班	設備機材
廣瀬分團	教職員児童ヲ以テ組織ス							

中島國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班
中島分團	教職員児童ヲ以テ組織ス									
設備機材	ホース校庭水道線 1、ホース校庭廊下備付 7、拡声器 44、サイレンー馬力 1、鐘 1、担架 1、寝台 1、救急薬品箱 1									

神崎國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班	設備機材
神崎分團	教職員児童ヲ以テ組織ス	1												

崇徳中学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	情報通信班	庶務班	御真影奉護班	報知班	防空監視班	消火班	防毒班	警護班	運搬班	救護班	燈火管制班	救護配給班	設備機材
三篠分團	教職員生徒ヲ以テ組織ス	1														防毒衣 1 防毒面 35 バケツ 60

舟入國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務	御真影奉護係	避難係	防火係	警備係	救護係	設備機材
舟入分團	教職員児童ヲ以テ組織ス								

壽座特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
神崎分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス						

新明映画劇場特設自衛團

分團名	團長	副團長	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
神崎分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス					

榮座警報班座特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
神崎分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス						

廣島市高等女學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護班	總務班	防火班	警備班	避難班	救護班	設備機材
舟入分團	職員並ニ上級生徒ヲ以テ組織ス								

廣島縣立廣島第二中学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護班	總務班	防火班	警備班	避難班	救護班	設備機材
觀音分團	職員並ニ上級生徒ヲ以テ組織ス								

江波國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護係	總務係	防火係	警備係	避難係	救護係	設備機材
江波分團	職員並ニ兒童ヲ以テ組織ス								

第二國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班	設備機材
観音分團	教職員並ニ兒童ヲ以テ組織ス												

旭製作所特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務部		防護部	避難管理部	防毒救護班	配給部	防課管理部
観音分團	1	1	部長、次長、班長、班員 220 名						
設備機材	消火栓 2、消防ポンプ 4、機銃式消火器 1、転倒式消火器 15、消火彈 20、バケツ 30、担架 2、提灯 10、消火砂 20、貯水桶 5								

廣島縣立廣島第一高等女學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	奉護係	總務係	防火係	警備係	救護係	避難係	設備機材
江波分團	職員及四、五学年生徒ヲ以テ組織ス								

別天座特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
大手分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス						

観音國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護係	總務係	防火係	警備係	避難係	救護係	設備機材
観音分團	職員及高学年兒童ヲ以テ組織ス								

己斐國民學校特設自衛團

分團名	團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班	設備機材
己斐分團	職員及高学年兒童ヲ以テ組織ス											

鯉城館特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
三篠分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス						

高千穂館特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班
中島分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス					
設備機材	消火器 2、消火栓 1、梯子 2、鳶口 5、バケツ 10、非常繩 2						

済美學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務係	奉護係	避難班	防火係	救護係	設備機材
袋町分團	職員ヲ以テ組織ス							

廣島縣立豊學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備係	消防班	防毒救護班	避難班	設備機材
中島分團	職員ヲ以テ組織ス								

草津國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備係	消防班	避難班	防毒救護班	予備班
草津分團	職員及高学年兒童ヲ以テ組織ス								
設備機材	旗 50、メガホン 3、バケツ 7、拍子木 2、非常持出運搬用囊 2、櫃 1、砂箱 4、防毒代用布片 40、救急箱 2、晒粉水 1、晒粉代用石灰 1、繃帶 2、脱脂綿 2、ワセリン 2ポンド、毛布 2、テープ赤 2、風向指示器 1								

福屋特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部付長	防火避難班	燈火管制班	防毒班	救護班
幟町分團	1	3	1	1	1	1	1
			班員 25 名	班員 190 名	班員 6 名	班員 8 名	班員 8 名
設備機材	非常ベル 10、スピーカー 16、大消火器 30、小消火器 22、梯子 1、非常梯子 5、バケツ 10、受信盤 1、報知器 19、消火栓 24、救命袋 11、消火彈 1、防毒面 2、擔架 2						

中國新聞印刷工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	幹事	警護班	警報班	工作班	防毒班	救護班
幟町分團	1	2	1	1	1	1	1	1
			本部員 8 名	班員 14 名	班員 9 名	班員 10 名	班員 7 名	班員 8 名
設備機材	消火栓 6、ホース 15、管鎗 6、消火器 2、消火液 24、消火砂 4、貯水槽 3、梯子 4、バケツ 20、防火用水槽 6、筵及粘土、シヤペル 4、表示板 6、巻脚絆 55、晒粉入消毒、撒布箱 2、防毒面 2、防毒手袋 10、消毒靴 2、小旗 4、							

比治山分團	1	1	1	1	1	班長 1 班員 7	班長 1 班員 4	班長 1 班員 5	班長 1 班員 10	班長 1 班員 若 8	班長 1 班員 7	班長 1 班員 7	班長 1 班員 5
-------	---	---	---	---	---	--------------	--------------	--------------	---------------	----------------	--------------	--------------	--------------

安田学園特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警護班	防火班	交通整理班	燈火管制班	防毒班	工作班	配給班	設備機材	
白島分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	
			副班長 2	副班長 3	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 1	副班長 1
			班員 10	班員 12	班員 12	班員 10	班員 5	班員 10	班員 5	班員 5	班員 5	

東洋紡廣島工場特設自衛團

分團名	團長	消防部長	燈火管制班	防火班	工作班	總務部長	情報班	警備班	保護班	配給班	救護隊長	救護班	防毒班
荒神分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	部長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	1	班長 1	班長 1
	傳令 1	傳令 1	班員 4	班員 20	班員 4	傳令 1	班員 4	班員 3	班員 3	班員 4	傳令 1	班員 5	班員 4
設備機材	スプリング装置ヘラー 一式、ハードランド装置放水栓 24、ホース 24、ノズル 12、ピストル消火器 4、電管用消火器 5、消火用携帯手押ポンプ 51、バケツ 514、用水桶 11、ガソリンポンプ(25馬力) 1、手斧 1、クリツパー 1、大鋸 1、鳶口 10、ヘルメット帽 10、提灯 20、ガスマスク 5、貯水囊 1、消火玉 29、防毒マスク 3、擔架 1、消火栓水道連接用スタント及ホース 1組												

東洋工業特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警備班	燈火管制班	消防班	防毒救護班	待避班	工作班	設備機材
青崎分團	1	若干名	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1
			班員若干名	班員若干名	副班長 26 班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名

竹屋國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警報班	警備班	警衛班	消防班	防毒救護班	待避班	予備班
竹屋分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	部長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1
			班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名
設備機材	ポンプ 1、用水桶、バケツ、防火砂、擔架 2、莫塵、藥品 一揃、シヤベル、梯子、消火栓、ガーゼ、繃帯、脱脂綿									

新天座特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
竹屋分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火彈 7、梯子 1、バケツ 20、鳶口 8、救命袋 1、消火栓 3、スピーカー 1
	傳令 1		班員 6	班員 13	班員 8	班員 10	班員 2	

帝國座特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
竹屋分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 1、消火彈 4、梯子 2、バケツ 10、鳶口 5、救命袋 1、救助繩 5、消火栓 2、スピーカー 1
	傳令 1	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	

花月特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
竹屋分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火彈 6、梯子 2、バケツ 10、鳶口 5、救命袋 1、消火栓 2、スピーカー 1
	傳令 1	班員 3	班員 13	班員 3	班員 6	班員 3	

廣島東宝劇場特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	燈火管制班	防毒班	設備機材
幟町分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 4、消火彈 5、梯子 2、バケツ 10、鳶口 6、消火栓 3、スピーカー 1
	傳令 1	班員 4	班員 10	班員 6	班員 18	班員 9	

太陽館特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
幟町分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 9、消火彈 1、梯子 2、バケツ 10、鳶口 5、救命袋 1、消火栓 2、スピーカー 1
	傳令 1	班員若干名	班員 15	班員 11	班員 4	班員 3	

東洋座特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
幟町分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 3、消火彈 5、梯子 3、バケツ 10、鳶口 7、救命袋 1、消火栓 3、スピーカー 2
	傳令 2	班員 1	班員 6	班員 6	班員 3	班員 2	

幟町國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警報班	警備班	警衛班	消防班	防毒救護班	避難班	予備班
幟町分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	部長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1
			班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名
設備機材	用水桶、唧筒、送水管、消火栓、梯子									

廣島女学院特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警護班	消火班	消毒班	救護班	避難班	設備機材
-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

幟町分團	1	2	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火栓 3、吸上ポンプ 3、 ホース(十五間) 3、バケツ 30、擔架 5
			副班長 1	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	
			班員 10	班員 22	班員 28	班員 22	班員 24	班員 24	

段原國民學校特設自衛團

分團名	團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班
段原分團	1	班長 1 班員 12	班長 1 班員 2	班長 1 班員 6	班長 1 班員 27	班長 1 班員 59	班長 1 班員 23	班長 1 班員 18	班長 1 班員 32	班長 1 班員 22	班長 1 班員 1
設備機材	バケツ 若干、消火砂 若干										

仁保國民學校特設自衛團

分團名	團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	救護配給班	避難誘導班	交通整理班	設備機材	
仁保分團	1	班長 1 班員 12	班長 1 班員 2	班長 1 班員 6	班長 1 班員 27	班長 1 班員 59	班長 1 班員 22	班長 1 班員 18	班長 1 班員 32	用水桶 若干、バケツ 若干、 防火用水 若干、シャベル 若干	

青崎國民學校特設自衛團

分團名	團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班
青崎分團	1	班長 1 班員 16	班長 1 班員 16	班長 1 班員 16	班長 1 班員 16	班長 1 班員 16	班長 1 班員 16	班長 1 班員 43	班長 1 班員 41	班長 1 班員 17	班長 1 班員 16
設備機材	用水桶 若干、バケツ 若干、防火用水 若干、シャベル 若干										

廣島瓦斯電軌株式會社特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警備班	防火班	防毒班	救護班	配給班	第一工作班	第二工作班	第三工作班
千田分團	1	2	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
設備機材	消火栓 8、貯水槽 10、バケツ 55、ホース 370 米、消火彈 25、消火銃 16、梯子 若干、シャベル 若干										

帝國人造絹糸株式會社廣島工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	第一消防班	第二消防班	第三消防班	第四消防班	唧筒消防班	砂防班
千田分團	1	2	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
	防毒班	水道工作班	瓦斯工作班	電氣工作班	警戒班	救護班	搬出班	焚出班
	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
設備機材	ガソリンポンプ 1、消火栓 17、用水桶 17、濡蓆 50、貯水池 1、掘抜井戸 1、消毒撒布箱 4、晒粉 20 缶、防毒面 10、擔架 1							

大和紡績廣島工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	警備部	消防部	防毒部	救護部	工作部	配給部	庶務部	會計部
宇品分團	1	2	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
設備機材	ガソリンポンプ 25 馬力 2、屋外消火栓 28、屋内消火栓 40、運搬用ポンプ 30、薬品消火器 100、消火彈 20、擔架 2、 防毒衣 6、防毒面 16									

宇品造船特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	會計班	連絡班	防護班	警報班
	1	1	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
	燈火管制班	消防班	防毒班	救護班	避難待避班	工作班	圖書班
	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
設備機材	防毒面 6、防毒衣 3、擔架 2、晒粉 若干、防毒靴 3、救急箱 1、ガソリンポンプ 1、消火栓 4、井戸 1、 消火彈 各工場各 1、輕便消火器 7、瓦斯消火器 2、濡蓆 5、砂 若干、梯子 1						

小川工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	配給班	傳令班	警衛班
大河分團	1	1	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス
	遮光班	工作班	消防班	警護班	防毒班	避難班
	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス
設備機材	防空壕 2、消火栓 2、消火器 1、消火彈 50、井戸 1、バケツ 10、擔架 2、防毒面 10、防毒衣 5、救急箱 1、砂火叩 若干					

廣島文理科大学校特設自衛團

分團名	總指令	監視哨班	警報班	警備班	避難指導班	救護班	配給班	防火班	防毒班
千田分團	1	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス
設備機材	水管車ホース 300 尺、吸上自動ポンプ、梯子、鳶口、麻繩、荷棒、非常持出袋、消火栓 9、消火器各室								

廣島高等工業学校特設自衛團

分團名	團長	警報班	消防班	防毒班	避難指導班	救護班	工作班
千田分團	1	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス
設備機材	防毒面 173、ゴム手袋 5、自轉車 4、バケツ 110、提灯 16、毛布 20、疊 10、如露 11、瓦斯檢知器 2、噴霧器 6、						

	消毒罐 30、中和剤 35封塞、重曹 800グラム
--	---------------------------

廣島縣立工業学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	消防班	消毒防護班	避難指導班	予備班
千田分團	1	1	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス
設備機材	消火栓 4、堀抜井戸 10、バケツ 10、梯子 2、防毒面 64、担架 1、救急箱 1、防毒衣 6、防毒手袋 10、検知器 2								

修道中学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	防護監視班	警備班	警報班	消防班	消毒班	避難指導班	庶務班
千田分團	1	1	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス
設備機材	貯水槽 1、防空壕 1、梯子 1、縄梯子 2、バケツ 20、晒粉 1袋、救急箱 1、脱脂綿繃帯ガーゼ 若干								

進徳高等女学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護班	警備班	消防班	防毒救護班	避難指導班	予備班
千田分團	1	1	班長及班員ヲ以テ組織ス	班長及班員ヲ以テ組織ス	班長及班員ヲ以テ組織ス	班長及班員ヲ以テ組織ス	班長及班員ヲ以テ組織ス	班長及班員ヲ以テ組織ス	班長及班員ヲ以テ組織ス
設備機材	バケツ 60、消防砂 若干、梯子 1、用水桶 4、担架 5、提灯、資材入 1、小旗、繩、懐中電燈								

千田國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	消防防毒班	救護班	避難指導班
千田分團	1	1	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス
設備機材	消火栓 1、送水管、バケツ、金盥、拍子木、防火砂							

廣島女子専門学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警護班	警報班	防火班	防毒班	避難指導班	救護班	避難所管理班	配給班
宇品分團	1	1	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス	班長班員ヲ以テ組織ス
設備機材	バケツ、消火器、ホース、晒粉、消防砂、救急箱、防毒室 1										

廣陵中学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	連絡班	警備班	消火班	防毒班	救護班	搬出班	待機班
宇品分團	1	1	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス
設備機材	防空壕 1、非常召集簿 1、貯水池 1、消火栓 1、ホース、防火砂、バケツ									

宇品國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護班	警備班	消防班	防毒救護班	避難指導班	豫備班
宇品分團	1	1	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス	班長以下班員ヲ以テ組織ス
設備機材	ホース大 2、ホース小 13、バケツ 30、メガホン、手旗								

廣島高等学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警護班	防火班	避難所管理班	防毒班	救護班
皆実分團	1	1	班長副班長及班員ヲ以テ組織ス	班長副班長及班員ヲ以テ組織ス	班長副班長及班員ヲ以テ組織ス	班長副班長及班員ヲ以テ組織ス	班長副班長及班員ヲ以テ組織ス	班長副班長及班員ヲ以テ組織ス
設備機材	水管車 1、ホース 9、スタンド 3、水袋 10、斧 4、鳶 10、手鳶 10、消火栓 6、小型消火栓 26、消火器 45							

第三國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	消防班	防毒班	避難指導班	燈火管制班	豫備班	設備機材
皆実分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	
			副班長職員 1 児童若干名	副班長職員 1 児童若干名	副班長職員 1 児童若干名	副班長職員 1 児童若干名	副班長職員 1 児童若干名	副班長職員 1 児童若干名	副班長職員 1 児童若干名	副班長職員 1 児童若干名	

廣島縣立師範学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	消防班	防毒班	避難誘導班	燈火管制班	豫備班
比治山分團	1	1	班長係長ヲ置ク	班長係長ヲ置ク	班長係長ヲ置ク	班長係長ヲ置ク	班長係長ヲ置ク	班長係長ヲ置ク	班長係長ヲ置ク	班長係長ヲ置ク
設備機材	消火栓 3、津田式ポンプ 2、梯子 4、バケツ 25、貯水池 2、防毒面 40、防毒衣 2、防空壕 1、擔架 1、救急囊 4、救急箱 若干									

昭和高等女学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警備班	消防班	防毒救護班	生徒監護班	設備機材
大河分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	防空壕 1、バケツ 30、防火砂 若干
			班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	

大河國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	防護監視班	警備班	警備班	防火班	避難指導班	交通整理班	救護班
大河分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1
			班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名
設備機材	ホース 7									

山中高等女学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	警備班	通信連絡班	防護班	搬出班	避難班	救護班
千田分團	1	1	各班長以下 325 名ヲ以テ組織ス						

楠那國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警備班	警備班	防火班	救護班	連絡班	非難指導班
楠那分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1
			班員 3	班員 5	班員 10	班員 10	班員 14	班員 1	班員 12
設備機材	井戸 2、ホース 4、バケツ 30、ビツト 1								

似島國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	防火班	防毒班	救護避難班	団員
似島分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	78 名
			係長 1	係長 1	係長 1	係長 1	係長 1	係長 1	
設備機材	貯水槽 1、防空壕 1、梯子 1、縄梯子 2、バケツ 20、晒粉 2、救急箱 1、繃帯脱脂綿ガーゼ 若干								

皆実國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警備班	消防班	非常持出班	防毒救護班	避難班	豫備班
皆実分團	1	1	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名
設備機材	防空壕 1、消火栓 6、消火彈 10、バケツ 各室 2、防火砂 若干							

廣島中央放送局自衛團

分團名	團長	副團長	班長	先駆班	第一班	第二班							
幟町分團	1	1	9	実動員 7 人	実動員 7 人	実動員 7 人							
				豫備員 15 人	豫備員 15 人	豫備員 15 人							
				第三班	第四班	第五班	第六班	緩急班	特務班				
設備機材	品名		局所	本局	分室	放送所	計	品名	局所	本局	分室	放送所	計
	移動ポンプ			2	1	1	4	シヤベル		15	5	10	30
	自轉車			1	1	1	3	木桶		1	1	1	3
	消火栓(20 間ホース付)			2	-	1	3	鶴嘴		5	2	2	9
	消火器			4	7	5	16	鐵		5	5	10	20
	貯水槽			4	-	1	5	擔架		2	2	2	6
	貯水桶			4	-	3	7	藁蓑		2	2	2	6
	竹梯子			3	-	1	4	擔棒		3	4	3	10
	バケツ			20	20	20	60	麻繩		2	2	2	6
	バツト			4	2	2	8	提灯		3	3	3	9
	蕈			20	20	20	60	メガホン		13	3	2	18
	手斧			5	5	5	15	呼子		5	2	2	9

別紙第六號

自動車動員調査表

分團名	種別	自動車所有者	電話番号	動員車輛数
廣瀬分團	乗用	廣島交通株式会社	西 二一七八	10
千田分團	貨物用	廣島貨物運送株式会社	中 四九一、二四六三	20

別紙第七號

防空監視哨要員服務順位呼集方法 (九月以降)

順位	班名	呼称方法	順位	班名	呼称方法	順位	班名	呼称方法
1	牛田班	電話又ハ特使	12	草津班	電話又ハ特使	23	白島班	電話又ハ特使
2	荒神班	電話又ハ特使	13	天満班	電話又ハ特使	24	宇品班	電話又ハ特使
3	袋町班	電話又ハ特使	14	神崎班	電話又ハ特使	25	福島班	電話又ハ特使
4	舟入班	電話又ハ特使	15	似島班	電話又ハ特使	26	矢賀班	電話又ハ特使
5	尾長班	電話又ハ特使	16	竹屋班	電話又ハ特使	27	段原班	電話又ハ特使
6	青崎班	電話又ハ特使	17	幟町班	電話又ハ特使	28	江波班	電話又ハ特使

7	仁保班	電話又ハ特使	18	千田班	電話又ハ特使	29	古田班	電話又ハ特使
8	大河班	電話又ハ特使	19	皆実班	電話又ハ特使	30	本川班	電話又ハ特使
9	中島班	電話又ハ特使	20	三篠班	電話又ハ特使	31	楠那班	電話又ハ特使
10	大手班	電話又ハ特使	21	己斐班	電話又ハ特使	32	観音班	電話又ハ特使
11	廣瀬班	電話又ハ特使	22	比治山班	電話又ハ特使	33	大芝班	電話又ハ特使

別紙第八號

出漁船舟調査

管轄署名	出漁舟数 (一日ノ出漁船舟)
東署	53
西署	100
宇品署	114

別紙第九號

漁舟ト陸上トノ情報通信方法系統表

沿岸分團名	連絡場所	情報通信報告先	情報通信方法	実施責任者
似島分團	似島漁業組合	宇品警察署	傳馬船ニよる依ル傳令又ハ手旗「メガホン」等ニ依ル口頭、電燈、提灯点滅信號ニ依ル	組合長 島名 宗吾
草津分團	草津漁業組合	西警察署		組合長 中西 静生
江波分團	江波漁業組合	西警察署		組合長 米田 米一
宇品分團	宇品警防分團	宇品警察署		宇品警防分團長
楠那分團	丹那漁業組合	宇品警察署		組合長 馬本 庄一
楠那分團	日宇那漁業組合	宇品警察署		組合長 沖田 一信
青崎分團	青崎警防分團	東警察署		青崎警防分團長

別紙第十號

防空警報傳達系統

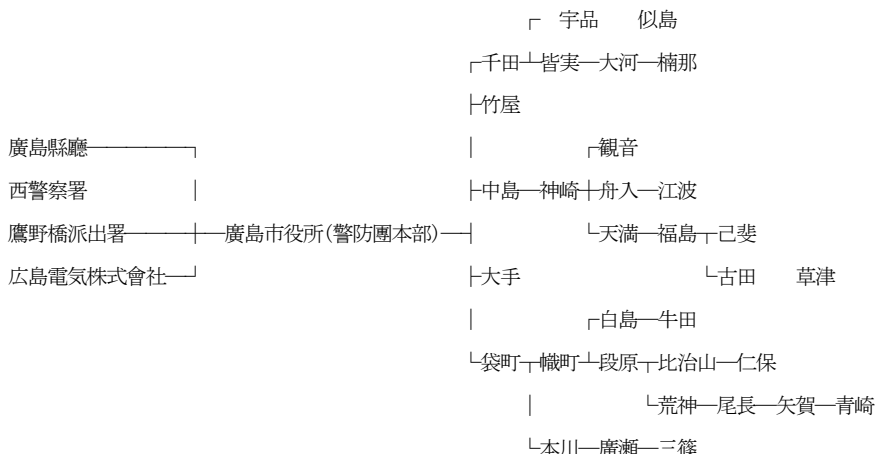
- 備考 一、(通)ハ通信電話ノ署
 二、(警)ハ警察電話ノ署
 三、(鉄電)ハ鉄道電話ノ署
 四、(広電)ハ廣島電気株式会社電話ノ署

傳達先	主系圖	副系統	副々系統
廣島市役所 (廣島市警防團)	(通) 廣島 中 五三一四番 五三一五番	(警) 高野橋派出所特使一丁半	(廣電) 本社特使三丁
廣島市青崎分團	(通) 廣島 中 九七五番	(警) 青崎派出所特使二丁	(廣電) 府中散宿所特使六丁
廣島市矢賀分團	(通) 廣島 中 四〇〇九番	(警) 尾長派出所特使十丁	副系統ニ同ジ
廣島市尾長分團	(通) 廣島 中 二〇一八番	(警) 尾長派出所特使四丁	東署特使十三丁
廣島市荒神分團	(通) 廣島 中 二〇一九番	(警) 愛宕町派出所特使六丁	(廣電) 東支店特使七丁
廣島市牛田分團	(通) 廣島 中 五七九八番	(警) 牛田駐在所特使五丁	副系統ニ同ジ
廣島市白島分團	(通) 廣島 中 二〇二一番	(警) 東白島派出所特使三丁	東署特使十三丁
廣島市幟町分團	(通) 廣島 中 二〇二二番	(警) 幟町派出所特使三丁	東署特使七丁
廣島市竹屋分團	(通) 廣島 中 二〇二三番	(警) 下柳町派出所特使四丁	東署特使十八丁
廣島市段原分團	(通) 廣島 中 二〇二〇番	(警) 段原東派出所特使四丁	(廣電) 東支店特使六丁
廣島市比治山分團	(通) 廣島 中 六九三三番	(警) 兵器廠前派出所特使五丁	(廣電) 東支店特使十二丁
廣島市仁保分團	(通) 廣島 中 三五〇八番	(警) 本浦駐在所特使五丁	東署特使一里
廣島市大手分團	(通) 廣島 中 二〇二五番	(警) 鷹野橋派出所特使丁	(廣電) 大手町変電所特使二丁
廣島市袋町分團	(通) 廣島 中 二九二八番	(警) 平田屋町派出所特使三丁	(廣電) 本社特使三丁
廣島市中島分團	(通) 廣島 中 二二三五番	(警) 水主町派出所特使一丁半	(廣電) 大手町変電所特使七丁
廣島市神崎分團	(通) 廣島 西 二二三一番	(警) 舟入町派出所特使二丁	(廣電) 西部出張所特使五丁
廣島市本川分團	(通) 廣島 西 二〇二六番	(警) 左官町派出所特使五十間	(瓦電) 櫓下変電所特使三丁
廣島市廣瀬分團	(通) 廣島 西 二〇二七番	(警) 寺町派出所特使一丁	(廣電) 北部出張所特使六丁
廣島市観音分團	(通) 廣島 西 七五二番	(警) 観音町派出所特使一丁	(廣電) 西部出張所特使三丁
廣島市舟入分團	(通) 廣島 西 一七八七番	(警) 舟入町派出所特使八丁	(廣電) 舟入散宿所特使二丁
廣島市江波分團	(通) 廣島 西 二五五〇番	(警) 江波駐在所特使三十間	(廣電) 舟入散宿所特使四丁
廣島市天満分團	(通) 廣島 西 二二三二番	(警) 天満町派出所特使二丁	(廣電) 三篠変電所特使七丁
廣島市福島分團	(通) 廣島 西 二八八二番	(警) 福島町派出所特使二丁	(鉄電) 己斐駅特使八丁
廣島市三篠分團	(通) 廣島 西 三二一〇番	(警) 横川町派出所特使一丁	(鉄電) 横川駅〇〇〇特使二丁
廣島市己斐分團	(通) 廣島 西 一六七三番	(警) 己斐町派出所特使一丁	(鉄電) 己斐駅特使五丁
廣島市古田分團	(通) 廣島 草津 一一五番	(警) 古田町駐在所特使二丁	(廣電) 草津散宿所特使十丁
廣島市草津分團	(通) 廣島 草津 一〇七番	(警) 草津東駐在所特使一丁半	(廣電) 草津散宿所特使一丁
廣島市宇品分團	(通) 廣島 中 二〇三〇番	(警) 本通派出所特使二丁	副系統ニ同ジ
廣島市皆実分團	(通) 廣島 中 二六〇五番	(警) 皆実町派出所特使六丁	副系統ニ同ジ
廣島市千田分團	(通) 廣島 中 二一六四番	(警) 千田町派出所特使五丁	副系統ニ同ジ
廣島市大河分團	(通) 廣島 中 二二八九番	(警) 皆実町派出所特使三十丁	副系統ニ同ジ
廣島市楠那分團	(通) 廣島 中 八六五番	(警) 大河派出所特使一里十五丁	副系統ニ同ジ
廣島市似島分團	(通) 廣島 中 七五四番	(警) 宇品署特使三哩	似島駐在所特使一丁半

広島電気株式会社	(通) 広島 中 四五〇〇番	(警) 大手町四丁目派出所特使二丁	副系統ニ同ジ
----------	----------------	-------------------	--------

別紙第十號ノニ

広島市防空警報傳達副系統

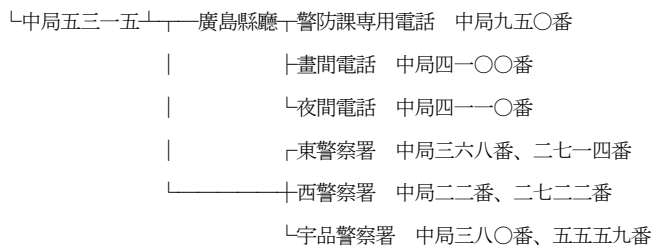


備考 本表ニ依リ各警防分團ハ下段ヨリ順次通傳系統ニヨリ自轉車ヲ乗用シ得ル傳令ヲ派シ置クモノトス

別紙第十一號

指揮連絡指指定電話番号表

広島市役所 中局五三一四



「指揮連絡指指定中局五三一五番」ト申込ムモノトス (訓練ノ場合ハ何レモ訓練ナル語ヲ冠ス)

別紙第十二號

「サイレン」(汽笛ヲ含ム)所有者及管理者ニ對スル警報電達方法、吹鳴責任者表

分團名	警報傳達方法	「サイレン」又ハ汽笛ノ設置場所	電話番号	管理者又ハ所有者	吹鳴責任者
青崎分團	○	青崎國民学校	中局 九七五	廣島市長	澤田 良知
青崎分團		日本製鋼所廣島工場	中局 四〇一〇	前川 清	前川 清
青崎分團		東洋工業株式会社	中局 五二五〇	松田 重次郎	松田 重次郎
尾長分團	○	尾長國民学校	中局 二〇一八	廣島市長	大原 良宅
尾長分團		藤野製綿株式会社	中局 五三〇	藤野 七藏	藤野 七藏
荒神分團	○	荒神國民学校	中局 二〇六九	廣島市長	奥本 鉄漢
荒神分團		東洋紡績株式会社廣島工場	中局 一三六	丹羽 慶二	丹羽 慶二
段原分團		廣島女子商業学校	中局 一一〇七	笹野 雄太郎	中井 萬藏
比治山分團	○	第一國民学校	中局 六六三	廣島市長	野口 進
仁保分團	○	仁保國民学校	中局 三五〇八	廣島市長	木村 益相
大河分團	○	大河國民学校	中局 二二八九	廣島市長	三宅 峯吉
楠那分團	○	楠那國民学校	中局 八六五	廣島市長	馬本 庄一
皆実分團	○	廣島地方專賣局	中局 七九〇〇	廣島地方專賣局長	尾上 忠雄
宇品分團	○	宇品國民学校	中局 二〇三〇	廣島市長	飯田 興津吉
宇品分團		大和人絹株式会社	中局 六六〇〇	藤田 効一	藤田 効一
宇品分團		宇品造船所	中局 四四三	俵 彦三郎	俵 彦三郎
宇品分團		廣島女子専門学校	中局 五〇四〇	清水 芳徳	飯田 奨津吉
宇品分團		西井製作所	中局 一八一五	西井 伊久馬	岡田 昇一
宇品分團		廣島通信講習所	中局 三六八〇	水野 喜代松	山形 恭太
白島分團		廣島工業試験場	中局 一八二八	金丸 寛一	尾川 伊六
轅町分團		廣島株式取引所	中局 一〇五〇	吉本 正太郎	丸岡 才吉
轅町分團		中國新聞社印刷工場	中局 五〇〇一	山本 実一	山本 実一
轅町分團		轅町國民学校	中局 二〇二一	廣島市長	丸岡 才吉
竹屋分團		山陽中学校	中局 二七〇七	石田 賢一	香川 菊三

竹屋分團	○	竹屋國民學校	中局 二〇二三	廣島市長	香川 菊三
袋町分團		縣立第一高等女學校	中局 四三一	岡 猪眞二	藤重 彦一
袋町分團		袋町國民學校	中局 二〇二四	廣島市長	藤重 彦一
大手分團		廣島市役所	中局 五三一四 五三一五	廣島市長	小川 朋一
大手分團		大手國民學校	中局 二〇二五	廣島市長	高橋 道之助
中島分團		中島國民學校	中局 二〇二六	廣島市長	朝田 良一
廣瀬分團		廣瀬國民學校	西局 二〇二七	廣島市長	小宇羅 讚一
本川分團		本川國民學校	西局 二〇二六	廣島市長	佐伯 辰二郎
舟入分團		長谷川護謨製作所	西局 一四五	長谷川 幸作	長谷川 幸作
舟入分團		山陽木材防腐株式會社	西局 一六二	田中 好一	田中 好一
三篠分團		中田製針工場	西局 一六四九	中田 太一	中田 太一
三篠分團		三篠國民學校	西局 八二四	廣島市長	日原 範一
三篠分團		田村工業株式會社	西局 一〇〇一	田村 秀太郎	田村 秀太郎
三篠分團		住野工業株式會社	西局 九四	住野 重太郎	住野 重太郎
三篠分團		大芝國民學校	西局 八六一	廣島市長	中田 収藏
天満分團		東洋製罐株式會社	西局 三一五一	和田 義一	和田 義一
觀音分團		廣島市商業學校	西局 二二三二	廣島市長	前濱 百太郎
神崎分團		神崎國民學校	西局 二二三一	廣島市長	西村 幸藏
福島分團		福島町一致協會	西局 二八八二	福島町一致協會	菊崎 正行
己斐分團		己斐國民學校	西局 三五二〇	廣島市長	上垣内 勝太郎
古田分團		古田國民學校	草津 一一五	廣島市長	刀田 周一
草津分團		草津國民學校	草津 一〇七	廣島市長	蘭 福藏
矢賀分團		矢賀國民學校	中局 四〇〇九	廣島市長	宍戸 義太郎
江波分團		江波國民學校	西局 二〇二九	廣島市長	小林 李太郎

備考 警報傳達方法欄中○印ハ通信電話ニヨリ直接警報ヲ受領ス 其他ニアリテハ「ラヂオ」又ハ本市内「サイレン」汽笛ニ呼應シ及本市ヨリノ電
話傳達ニ依リ吹鳴スルモノトス

別紙第十三號

防空警報傳達用警鐘打鐘責任者表

一、「サイレン」ノ音響到達範圍外ノ地域

警鐘ノ位置	管理者	警報傳達ノ方法	打鐘責任者
東白島消防車庫隣	廣島市警防團長 古川 正彦	白島分團ヨリ特使派遣	細田 義親
江波	廣島市警防團長 古川 正彦	江波分團ヨリ特使派遣	小林 李太郎
己斐町上町官有地	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	上垣内 善徳
庚午町二三一	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	打越 茂
古田町字田方	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	前田 辰一
古田町字田方	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	浅川 福一
古田町字古江	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	丸山 甫
草津町南町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	湯尻 伊得
草津町東町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	綱岡 伊三郎
宇品町海岸通	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	山口 貞吉
仁保町字本浦	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	萬谷 交次郎
仁保町字大河	廣島市警防團長 古川 正彦	大河分團ヨリ特使派遣	中野 得惣
			山本 昇

二、「サイレン」使用不能ノ場合

警鐘ノ位置	管理者	警報傳達ノ方法	打鐘責任者
尾長町消防車庫隣	廣島市警防團長 古川 正彦	尾長分團ヨリ特使派遣	藤田 嘉太郎
愛宕町	廣島市警防團長 古川 正彦	尾長分團ヨリ特使派遣	山本 平次郎
段原末広町	廣島市警防團長 古川 正彦	段原分團ヨリ特使派遣	古川 信一
東白島町	廣島市警防團長 古川 正彦	白島分團ヨリ特使派遣	細田 義親
薬研堀	廣島市警防團長 古川 正彦	竹屋分團ヨリ特使派遣	三宅 四郎
大手町四丁目	廣島市警防團長 古川 正彦	袋町分團ヨリ特使派遣	木本 重太郎
大手町九丁目	廣島市警防團長 古川 正彦	大手分團ヨリ特使派遣	落合 幸一
水主町	廣島市警防團長 古川 正彦	中島分團ヨリ特使派遣	武田 忠一
基町	廣島市警防團長 古川 正彦	幟町分團ヨリ特使派遣	高田 嘉一
西地方町	廣島市警防團長 古川 正彦	神崎分團ヨリ特使派遣	湯蓋 久太郎
江波町	廣島市警防團長 古川 正彦	江波分團ヨリ特使派遣	小林 李太郎
寺町	廣島市警防團長 古川 正彦	廣瀬分團ヨリ特使派遣	湊 龜太郎
天満町	廣島市警防團長 古川 正彦	天満分團ヨリ特使派遣	新山 繁一
福島町	廣島市警防團長 古川 正彦	福島分團ヨリ特使派遣	谷口 明
己斐町本町	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	福本 調二
己斐町上町	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	土井 卯一
己斐町上町官有地	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	上垣内 善徳

庚午町二三一	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	打越 茂
古田町字高須	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	田原 恭
古田町字田方一二三七	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	前田 辰一
古田町字田方一二一〇	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	浅川 福一
古田町字田方官有地	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	丸山 甫
土手町消防車庫隣	廣島市警防團長 古川 正彦	段原分團ヨリ特使派遣	井上 利助
東警察署前	廣島市警防團長 古川 正彦	東警察署ヨリ特使派遣	藤倉 秀一
牛田國民学校前	廣島市警防團長 古川 正彦	牛田分團ヨリ特使派遣	増岡 健一
矢賀町消防車庫	廣島市警防團長 古川 正彦	矢賀分團ヨリ特使派遣	山縣 啓一
西警察署	廣島市警防團長 古川 正彦	西警察署ヨリ口頭	湯尻 伊得
古田町字古江四七二	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	綱岡 伊三郎
草津南町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	山口 貞吉
草津東町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	萬谷 交次郎
宇品海岸通	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	高畑 品次郎
御幸通八丁目	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	山中 正一
御幸通千田銅像前	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	中野 得惣
仁保町字本浦	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	中尾 順造
仁保町上大町	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	荒木 若人
仁保町字柞木	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	戸野 九一
仁保町字日宇那	廣島市警防團長 古川 正彦	楠那分團ヨリ特使派遣	和田 徳造
仁保町字大河	廣島市警防團長 古川 正彦	楠那分團ヨリ特使派遣	山本 昇
似島字家下	廣島市警防團長 古川 正彦	大河分團ヨリ特使派遣	矢野 勇
仁保町字青崎	廣島市警防團長 古川 正彦	青崎分團ヨリ特使派遣	澤田 良知
仁保町字向洋	廣島市警防團長 古川 正彦	青崎分團ヨリ特使派遣	澤田 良知
仁保町字堀越	廣島市警防團長 古川 正彦	青崎分團ヨリ特使派遣	大和 貞雄
南観音町二丁目	山本 哲治	観音分團ヨリ特使派遣	山本 哲治
南三篠町説教場	高橋 辰蔵	三篠分團ヨリ特使派遣	高橋 辰蔵
中廣町説教場	藤本 昇観	三篠分團ヨリ特使派遣	藤本 昇観
横川町薬師堂	蠣田 明光	三篠分團ヨリ特使派遣	蠣田 明光
打越町(横川駅踏切)	古田 昇	三篠分團ヨリ特使派遣	古田 昇
楠木町二丁目監視台	品川 邦莊	三篠分團ヨリ特使派遣	品川 邦莊
三篠本町二丁目光隆寺	光寺 滉瀧	三篠分團ヨリ特使派遣	光寺 滉瀧
三篠本町三丁目西薬寺	沖重 吾六	三篠分團ヨリ特使派遣	沖重 吾六
横川町三丁目説教場	渡辺 實成	三篠分團ヨリ特使派遣	渡辺 實成

別紙第十四號

警防團警報傳達計畫表

分團名	方面	順 路	徒歩又ハ自 轉車ノ別	所要 時間	傳達責任者
青崎分團	第一方面	本部発青崎方面	自轉車	3分	神崎 利喜夫
	第二方面	本部発堀越方面	自轉車	6分	白井 勝
	第三方面	本部発向洋方面	自轉車	7分	兒玉 隆二
矢賀分團	第一方面	本部発中組、市組、上組	自轉車	15分	峠本 正人
	第二方面	本部発下組、岩鼻、南組	自轉車	25分	大久保 二一
尾長分團	第一方面	本部発山根町	自轉車	2分	山下 健次
	第二方面	本部発一若草町一愛宕町	自轉車	5分	新見 三代三
	第三方面	本部発一東蟹屋町一荒神町通	自轉車	5分	上川 緑
	第四方面	本部発一三本松町一片河町一尾長町一岩鼻町	自轉車	7分	山根 次六
荒神分團	第一方面	本部発一西蟹屋町	自轉車	2分	警備部員
	第二方面	本部発一西蟹屋町一荒神町	自轉車	3分	警備部員
	第三方面	本部発一西蟹屋町一荒神町一猿猴橋町	自轉車	4分	警備部員
	第四方面	本部発一西蟹屋町一荒神町一猿猴橋町一松原町	自轉車	5分	警備部員
	第五方面	本部発一西蟹屋町一荒神町一猿猴橋町一松原町一大須賀町	自轉車	8分	警備部員
牛田分團	第一方面	本部発一神田区一丹土区一新町区	自轉車	18分	橋本 又一 柿田 勘之助
	第二方面	本部発一本町区一旭町区一早稲田区	自轉車	13分	品川 晴之 田中 成一
	第三方面	本部発一本町区一早稲田区一南町区	自轉車	15分	日野 久吉 大島 庄吉
白島分團	第一方面	本部発一白島中町一白島北町	自轉車	10分	兒玉 繁夫
	第二方面	本部発一西白島町一白島西中町一白島東中町	自轉車	20分	室住 退三
	第三方面	本部発一白島東中町	自轉車	15分	竹腰 和登
	第四方面	本部発一東白島町一白島九軒町	自轉車	30分	湯浅 信男
	第五方面	本部発一東白島町一二葉ノ里	自轉車	20分	下田 久雄
幟町分團	第一方面	本部発一上柳町一橋本町一下柳町一弥生町	自轉車	7分	吉本 秀夫
	第二方面	本部発一山口町一銀山町一斜屋町一堀川町一胡町一東胡町	自轉車	7分	上岡 喜代一
	第三方面	本部発一幟町下一石見屋町一幟町上	自轉車	4分	村上 直喜
	第四方面	本部発一流川町下一鉄砲町下一鉄砲町中一鉄砲町上	自轉車	5分	高野 又一

	第五方面	本部発-流川町中-流川町上-八丁堀上-八丁堀中-八丁堀下	自轉車	5分	田中 新八
竹屋分團	第一方面	本部発-北平塚町-東平塚町-平塚元町	自轉車	4分	沖中 春一
	第二方面	本部発-西平塚町-鶴見町-鶴見町南組	自轉車	3分	河村 光登
	第三方面	本部発-宝町東-宝町西-昭和町東-昭和町西-昭和町南	自轉車	4分	徳田 正守
	第四方面	本部発-田中町-竹屋町-三川町-下流川	自轉車	3分	市原 芳一
	第五方面	本部発-薬研堀-東新天地-新天地	自轉車	3分	楨田 隆嘉
	第六方面	本部発-富士見町上組-富士見町下組-富士見町本通	自轉車	3分	大方 幸次郎
段原分團	第一方面	本部発-一の場町-京橋町-台屋町-稲荷町西組	自轉車	7分	福島 周典
	第二方面	本部発-松川町-稲荷町東組-比治山町-金屋町上組	自轉車	7分	田頭 豊
	第三方面	本部発-桐木町-段原町-比治山本町-土手町	自轉車	7分	小林 猛
	第四方面	本部発-金屋町下組-段原東浦町-段原末廣町-段原大畑町	自轉車	7分	辻作 亮
比治山分團	第一方面	本部発-段原日出町-段原下組段原上組	自轉車	12分	東 信一
	第二方面	本部発-段原山崎町-南段原町一丁目-南段原町二丁目	自轉車	12分	杉山 信雄
	第三方面	本部発-東雲町上組-東雲町南組-南蟹屋町-大洲町	自轉車	13分	寺田 鶴渡
仁保分團	第一方面	本部発-本浦町一組-三十五組	自轉車	5分	小松 正
	第二方面	本部発-洲崎町一組-二十八組	自轉車	8分	大友 恭夫
	第三方面	本部発-柞木町一組-二十三組	自轉車	10分	亀島 浅一
楠那分團	第一方面	本部発-日宇那町	自轉車	2分	住田 實夫
	第二方面	本部発-丹那町	自轉車	2分	谷口 佐護一
大河分團	第一方面	本部発-旭町-大河	自轉車	15分	浜村 信之
	第二方面	本部発-旭町-大河	自轉車	15分	大竹 貫松
	第三方面	本部発-旭町	自轉車	7分	岩崎 為美
	第四方面	本部発-出汐町	自轉車	10分	岡本 啓
	第五方面	本部発-霞町	自轉車	15分	増田 勉
皆實分團	第一方面	本部発-皆実町一丁目	自轉車	5分	中井 哲夫
	第二方面	本部発-皆実町二丁目	自轉車	3分	河野 國雄
	第三方面	本部発-皆実町三丁目東	自轉車	10分	脇田 光雄
	第四方面	本部発-皆実町三丁目西	自轉車	10分	宮地 茂三郎
	第五方面	本部発-翠町	自轉車	15分	満居 良雄
宇品分團	第一方面	本部発-御幸通五丁目-御幸通七丁目御幸通西浦	自轉車	6分	小林 一一
	第二方面	本部発-御幸通五丁目-春日通-住吉通	自轉車	6分	深瀬 進
	第三方面	本部発-御幸通五丁目-神田通ヲ南進シ四丁目ヨリ電車通	自轉車	6分	山下 辰夫
	第四方面	本部発-御幸通五丁目-神田通ヲ北進シ十七丁目	自轉車	6分	武市 圭介
	第五方面	本部発-御幸通五丁目西通-元宇品町	自轉車	6分	大竹 勝
	第六方面	本部発-御幸通一丁目-昭和通-中通-北通	自轉車	6分	宮崎 忠
千田分團	第一方面	本部発-南千田町-三丁目西組-三丁目北組	自轉車	5分	古川 喜三太郎
	第二方面	本部発-千田町二丁目-千田町一丁目	自轉車	5分	中村 進
	第三方面	本部発-平野町-南竹屋町-東千田町	自轉車	7分	竹内 清
大手分團	第一方面	本部発-大手町六丁目-大手町七丁目	自轉車	3分	警備部員
	第二方面	本部発-大手町八丁目-大手町九丁目	自轉車	5分	警備部員
	第三方面	本部発-国泰寺町-雑魚場町	自轉車	5分	警備部員
袋町分團	第一方面	本部発-袋町-西魚屋町-紙屋町-革屋町-播磨屋町-研屋町	自轉車	7分	岩崎 栄助
	第二方面	本部発-中町-立町-東魚屋町-平田屋町-鉄砲屋町-新川場町-下中町	自轉車	9分	伊勢 慎一郎
	第三方面	本部発-大手町一丁目-猿楽町東-猿楽町西-細工町-横町-鳥屋町	自轉車	8分	櫻井 貞七
	第四方面	本部発-尾道町-塩屋町-大手町二丁目-大手町三丁目-大手町四丁目-大手町五丁目-小町	自轉車	9分	警備部員
中島分團	第一方面	本部発-上水主町-中島新町-木挽町	自轉車	6分	渡田 清志
	第二方面	本部発-天神町下組-天神町上組-材木町-元柳町	自轉車	8分	宮本 保
	第三方面	本部発-中水主町-下水主町	自轉車	3分	木本 勘二郎
	第四方面	本部発-吉島町-吉島羽衣町-吉島本町一丁目-吉島本町二丁目	自轉車	8分	澤井 馨
廣瀬分團	第一方面	本部発-寺町-廣瀬北町一丁目	自轉車	2分	友本 正登
	第二方面	本部発-廣瀬北町二丁目-廣瀬北町三丁目	自轉車	1分	宝迫 清馬
	第三方面	本部発-西引御堂	自轉車	2分	渡辺 市太郎
	第四方面	本部発-廣瀬元町-錦町	自轉車	2分	磨野 豊一
	第五方面	本部発-西九軒町	自轉車	2分	土井 正男
本川分團	第一方面	本部発-鷹匠町東部-空鞆町東部-空鞆町西部	自轉車	7分	大場 元平
	第二方面	本部発-鷹匠町西部-中組-下組	自轉車	4分	武田 太一
	第三方面	本部発-鍛冶屋町-十日市町-左官町	自轉車	4分	安田 政夫
	第四方面	本部発-塚本町-塚町一丁目-猫屋町	自轉車	7分	友竹 軍一
神崎分團	第一方面	本部発-舟入仲町東組-舟入町-河原町西組-河原町北組-西新町南組	自轉車	5分	警備部員
	第二方面	本部発-河原町東下組-河原町東上組-西地方町-西新町上組	自轉車	5分	警備部員
	第三方面	本部発-小網町小舟区-小網町新明区-小網町西組-小網町東組-小網町南組	自轉車	5分	警備部員
	第四方面	本部発-河原町神崎組-舟入本町東組-舟入本町西組-舟入仲町西組	自轉車	5分	警備部員
舟入分團	第一方面	本部発-舟入幸町中組-舟入幸町東組	自轉車	2分	道田 政雄
	第二方面	本部発-舟入川口町公園組-舟入川口町西組-舟入幸町西組	自轉車	3分	三上 芳一

	第三方面	本部発-舟入川口町中組-舟入川口町東組	自轉車	3分	栗根 重一
	第四方面	本部発-舟入川口町中組	自轉車	2分	戸林 和男
	第五方面	本部発-舟入川口町中組-舟入川口町南組	自轉車	4分	五石 一宝
江波分團	第一方面	本部発-江波港町	自轉車	2分	宮本 勇
	第二方面	本部発-江波東町	自轉車	2分	小松 徳次
	第三方面	本部発-江波本町	自轉車	2分	沖山 理行
	第四方面	本部発-江波南町	自轉車	2分	森田 正登
観音分團	第一方面	本部発-観音本町-東観音町-一丁目北組-東観音町-一丁目南組	自轉車	10分	警備部員
	第二方面	本部発-東観音町二丁目西組-東観音町二丁目北組-東観音町二丁目東組-東観音町二丁目中組-東観音町二丁目南組	自轉車	7分	警備部員
	第三方面	本部発-東観音町-一丁目-西観音町-一丁目	自轉車	10分	警備部員
	第四方面	本部発-西観音町二丁目中組-南観音町二丁目北組	自轉車	5分	警備部員
	第五方面	本部発-南観音町二丁目南組-南観音町三丁目	自轉車	15分	警備部員
観音分團	第一方面	本部発-塚町四、三丁目-西大工町-榎町	自轉車	7分	吉田 春彦
	第二方面	本部発-北榎町-横堀町-新市町	自轉車	6分	田村 一男
	第三方面	本部発-天満本町-天満南町-天満中町	自轉車	5分	賀口 勇
	第四方面	本部発-西天満町-上天満町-天満本町	自轉車	7分	寺内 敏雄
	第五方面	本部発-上天満町東通-上天満町北町	自轉車	6分	山中 一角
福島分團	第一方面	本部発-福島中町-本町-北町	自轉車	20分	角山 助夫 柿原 豊
	第二方面	本部発-福島中町-本町	自轉車	15分	正宝神 実人 八木 義夫
	第三方面	本部発-福島中町	自轉車	30分	梶川 睦夫 高曲 輝夫
	第四方面	本部発-福島南区西	自轉車	15分	今本 倉造 高木 峯義
	第五方面	本部発-福島南区東方面	自轉車	20分	眞砂 辰一 山本 茂
三篠分團	第一方面	本部発-三篠本町-中島町-南三篠町	自轉車	30分	坂本 幹一 瀬田 晋
	第二方面	本部発-横川町-楠木町下-打越町	自轉車	20分	安田 豊蔵 古田 卓一
	第三方面	本部発-横川本町-柳河内-三瀧町	自轉車	18分	田島 喬 太田 亀三
	第四方面	本部発-大芝町-楠木町上	自轉車	22分	澤村 卓吉 渡辺 稔
己斐分團	第一方面	本部発-上町区	自轉車	7分	近藤 里士
	第二方面	本部発-中町区東北部	自轉車	7分	西村 巧
	第三方面	本部発-中町中央部	自轉車	5分	西山 正夫
	第四方面	本部発-中町西部	自轉車	5分	山岡 勉
	第五方面	本部発-本町区國道筋	自轉車	7分	谷口 昌作
	第六方面	本部発-本町区裏通	自轉車	7分	田村 義登
古田分團	第一方面	本部発-古田町古江-高須-田方	自轉車	6分	幸田 末一
	第二方面	本部発-古田町古江-高須-田方	自轉車	15分	西山 繁夫
	第三方面	本部発-古田町古江-高須-田方	自轉車	18分	田中 稔雄
草津分團	第一方面	本部発-草津東町	自轉車	5分	橋本 啓次郎
	第二方面	本部発-草津本町	自轉車	7分	石田 惣一
	第三方面	本部発-草津南町	自轉車	10分	高木 八百太郎
	第四方面	本部発-草津浜町	自轉車	10分	濱本 徳松
	第五方面	本部発-庚午町	自轉車	20分	森原 弥平
似島分團	第一方面	本部発-家ノ下南部	徒歩	15分	中下 正則
	第二方面	本部発-家ノ下一大黃-東大谷-長谷	徒歩	20分	竹田 和助

別紙第十五號

島嶼部ニ對スル連絡調査表

島嶼部	所在地名	最寄電報配達局	同上距離	連絡便ノ種類
似島	廣島市仁保町	宇品郵便局	二十七丁	発動機船
辨天島	廣島市仁保町	宇品郵便局	一里五丁	発動機船
金輪島	廣島市仁保町	宇品郵便局	七丁	発動機船

別紙第十六號

電燈点滅可能區域表

町名	戸数	町名	戸数	町名	戸数	町名	戸数	町名	戸数
平塚町	766	富士見町	216	薬研掘	131	大手町四丁目	10	木挽町	59
昭和町	289	富士見本町	62	猿楽町	32	大手町九丁目	154	荒神町	267
平野町	111	東胡町	10	細工町	17	塩屋町	21	鷹匠町	429
寶町	270	胡町	8	尾道町	48	紙屋町	9	空鞘町	294
鶴見町	328	八丁堀	76	平田屋町	5	塚町	38	西引御堂町	72

上流川町	70	大手町六丁目	40	播磨屋町	8	千田町一丁目	185	寺町	91
下流川町	108	大手町七丁目	133	革屋町	10	千田町二丁目	268	十日市町	32
鉄砲町	139	大手町八丁目	220	上天満町	516	千田町三丁目	277	横堀町	158
轅町	130	斜屋町	3	國泰寺町	137	大手町一丁目	32	廣瀬北町	421
三川町	120	銀山町	18	小町	97	大手町二丁目	7	錦町	139
田中町	143	榎町	75	南千田町	183	大手町三丁目	22	元柳町	16
堀川町	31	研屋町	16	鉄砲屋町	27	水主町	320	大手町五丁目	18
上柳町	72	立町	38	中町	43	天神町	110	新市町	87
左官町	32	東魚屋町	17	西魚屋町	28	材木町	117	油屋町	21
下柳町	159	石見屋町	25	新川場町	159	吉島本町	328	猫屋町	28
竹屋町	107	橋本町	7	雑魚場町	136	鳥屋町	6	塚本町	15
南竹屋町	237	山口町	5	袋町	46	中島本町	92	鍛冶屋町	19
西大工町	41	天満町	207	小網町	243	東雲町	137	京橋町	50
浜崎町	471	西天満町	206	楠木町	1,084	土手町	79	比治山本町	233
北榎町	193	中島新町	108	三篠本町	870	松原町	150	松川町	141
廣瀬元町	269	草津本町	154	段原末広町	233	白島東中町	119	向洋	739
船入仲町	298	草津南町	210	段原新町	383	段原町	63	尾長町	890
船入本町	373	草津浜町	241	段原中町	293	段原山崎町	46	南蟹屋町	310
中廣町	512	打越町	256	比治山町	51	段原東浦町	244	大洲町	344
吉島町	254	西白島町	180	稻荷町	105	段原大畑町	172	二葉ノ里	113
吉島羽衣町	350	白島中町	109	の場町	115	出汐町	122	大須賀町	302
河原町	581	東白島町	201	東観音町	790	皆実町一、二、三丁目	1,020	東蟹屋町	326
船入町	356	白島九軒町	187	西観音町	699	本浦町	254	旭町	121
南観音町	434	三滝町	163	観音本町	204	段原日ノ出町	130	御幸通 自 一丁目 至 十七丁目	1,351
福島町	757	横川町	584	古田町	136	宇品ノ土手ノ下	325	神田通	593
江波町	610	白島西中町	115	草津東町	244	日宇那	190	海岸通	77
己斐町	825	白島北町	26	牛田町	645	丹那町	164	元宇品町	236
庚午町	82	西九軒町	43	猿猴橋町	48	大河町	451	西蟹屋町	577
船入幸町	393	若草町	220	愛宕町	180	桐木町	108	翠町	148
船入川口町	484	西地方町	85	堀越町	283	金屋町	160	荒神町	567
南段原町	202	西新町	138	矢賀町	199	台屋町	121		

別紙第十七號

煙火打揚責任表

煙火打揚場所	煙火保管場所	傳達方法	打揚責任者
横川町一丁目空地	横川町一丁目火薬庫	電話西局一〇二六番又ハ傳令	横川町一丁目 牛田 源重
皆實町三丁目空地	皆實町三丁目火薬庫	電話中局五七二九番又ハ傳令	皆實町三丁目 牛尾 保之

別紙第十八號

島嶼部及漁舟ニ對スル警報傳達方法並ニ責任者表

島嶼又ハ漁業ニ従事スル場所	陸上トノ距離	警報傳達方法	傳達責任者	備考
似島(島嶼)	宇品ヨリ 3,060 間	手旗又ハ提灯信号	宇品警防分団長	電話中七五四番似島陸軍検疫所
似島沖	似島ヨリ 100 間 宇品ヨリ 3,160 間	手旗又ハ提灯信号	似島漁業組合長 渡里利松	
草津沖	草津ヨリ 1,200 間	手旗又ハ提灯信号	草津漁業組合長 中西静生	
草津(入漁權内)	草津ヨリ 1,200 間	手旗又ハ提灯信号	草津漁業組合長 中西静生	
江波沖	江波ヨリ 1,000 間	手旗又ハ提灯信号	江波漁業組合長 中前政次郎	
吉島沖	吉島ヨリ 1,200 間	手旗又ハ提灯信号	江波漁業組合長 中前政次郎	
吉島沖	吉島ヨリ 1,760 間	手旗又ハ提灯信号	江波漁業組合長 中前政次郎	
宇品沖	宇品ヨリ 720 間	手旗又ハ提灯信号	宇品警防分団長	
丹那沖	丹那ヨリ 720 間	手旗又ハ提灯信号	丹那漁業組合長 馬本正一	
日宇那沖	日宇那ヨリ 720 間	手旗又ハ提灯信号	日宇那漁業組合長 沖田一信	
向洋沖	向洋ヨリ 800 間	手旗又ハ提灯信号	青崎警防分団長	

別紙第十八號ノ一

群長船(當番船)等ニ依ル警報傳達不可能漁舟ニ對スル警報傳達方法並ニ責任者表

傳達場所	傳達方法	傳達責任者
草津町海岸	提灯手旗	草津警防分団長 蘭 福藏
観音町海岸	提灯手旗	観音警防分団長 前浜 百太郎
江波町海岸	提灯手旗	江波警防分団長 小林 奎太郎
千田町海岸	提灯手旗	千田警防分団長 上迫 猛一
宇品町海岸	提灯手旗	宇品警防分団長 飯田 興津吉
楠那町海岸	提灯手旗	楠那警防分団長 馬本 庄一
青崎町海岸	提灯手旗	青崎警防分団長 澤田 良知
吉島本町南海岸	提灯手旗	中島警防分団長 浅田 良一

別紙第十九號

防空警報傳達揭示場所責任者

分團名	揭示場所	揭示責任者	分團名	揭示場所	揭示責任者
牛田	牛田國民学校前	村上 勘一	尾長	尾長町三本松水坂宅前	今田 菊三郎
牛田	新町区日通寺前	牛尾 卷太郎	尾長	尾長町片河津村宅前	村上 源次郎
牛田	神田区神田橋東詰	田羅 賢一	尾長	尾長町山根酒店宅前	有野 前三郎
牛田	早稲田区早稲田神社前	中石 喜三郎	尾長	尾長東隣保館前	天本 基一
牛田	南区饒津神社裏	森田 勇	矢賀	矢賀町岩鼻	松谷 俊幸
荒神	松原町波田幸次郎宅前	波田 幸次郎	青崎	仁保町大原小松順吉宅前	沢田 良知
荒神	荒神町林政一宅前	林 政一	青崎	仁保町賀屋青年会會前	沢田 良知
荒神	旧荒神小学校四ツ角	中村 辨吉	青崎	仁保町大森向洋巡査駐在所前	沢田 良知
荒神	西蟹屋町八木範一宅前	八木 範一	青崎	仁保町向洋説教所前	山崎 末次
荒神	荒神國民学校前	佐々木 範一	青崎	仁保町洋堤青年会會前	岡田 憲三
荒神	猿橋町廣陵信用組合前	中村 政司	青崎	仁保町伊藤寛一宅前	岡田 憲三
荒神	大須賀町柴橋東詰	中村 庄一	青崎	仁保町青崎國民学校前	新井 早一
荒神	大須賀町田中政吉宅前	田中 政吉	青崎	仁保町宮本房吉宅前	新井 早一
尾長	東蟹屋町津島寅槌宅前	津島 寅槌	青崎	仁保町堀越消防車庫前	本多 静仁
尾長	愛宕町佐古代宅前	眞木 光藏	青崎	仁保町橋本徹郎宅前	本多 静仁
尾長	若草町修道院前	山高 審太郎	段原	桐木町坂井商店前	坂井 喜作
尾長	荒神通廣島育兒院前	金谷 数男	段原	稲荷町電車停留所附近	宮田 徳一
段原	稲荷町仁井見実一宅前	仁井見 実一	段原	稲荷町山田医院前	宮田 徳一
段原	段原大畑町住田木材店前	奥坊 生道	段原	段原北町速水宗十宅前	大和田 政夫
段原	段原東浦町坂本商店前	沖永 善次郎	段原	段原中町中央	小野 英雄
段原	段原町中田植木店前	田中 孟	比治山	段原日出町岩村木材店横	宮原 長治
段原	段原町長性院入口西角	村田 萬太郎	比治山	段原日出町安藤砂雄宅前	江川 三吉
段原	土手町佐伯久吉卓前	佐伯 久吉	比治山	南段原町広場前	栗原 祐一
段原	段原國民学校前	平井 信次	比治山	東雲町井上脳病院前	金井 源一
段原	金屋町専立寺南角	松原 笹一	比治山	段原山崎町杉山商店横	杉山 九平
段原	台屋町駅前橋通	野上 鶴松	比治山	東雲町北土手通	金井 源一
段原	台屋町専光寺裏川野潔宅前	川野 潔	比治山	仁保國民学校前	森本 兵之助
段原	的場町堀宅宅前	堀 宅吉	比治山	比治山國民学校裏	森本 兵之助
段原	的場町川崎源市宅前	川崎 源市	比治山	南蟹屋町打越真一宅前	川本 勘三郎
段原	的場町山崎源助宅前	山崎 源助	比治山	南蟹屋町今中庄吉宅前	川本 勘三郎
段原	京橋町向井煙草店前	向井 一三	比治山	南蟹屋町三宅郡三宅前	川本 勘三郎
段原	京橋町大杉鉄吾宅前	大杉 鉄吾	比治山	南蟹屋町亀田多吉宅前	川本 勘三郎
段原	京橋町三宅齒科医院前	三宅 正男	比治山	東雲町菅藤卓二宅前	田中 一索
段原	松川町中央四ツ角池田龜太郎宅前	池田 龜太郎	皆実	皆実町一丁目電信隊正門前	瀬戸 政一
段原	比治山町電車通下東南	有池 秀松	皆実	皆実町一丁目電信隊通門前	田口 佐太郎
段原	比治山町鶴見橋東詰	倉田 健治	皆実	皆実町一丁目旧縣師正門前	中井 哲夫
段原	比治山町大河通入口	星野 中佐五門	皆実	皆実町一丁目瓦斯會社瓦斯溜前	宮崎 義人
段原	段原末広町坂田熊藏宅前	坂田 熊藏	皆実	皆実町三丁目	脇坂 國登
皆実	皆実町三丁目	古川 繁太郎	大河	大河漁業組合前	小西 友人
皆実	皆実町三丁目	田村 重次郎	大河	大河國民学校前	山村 筆松
皆実	皆実町三丁目	有間 茂	大河	大河三宅峯吉宅前	山村 筆松
皆実	皆実町二丁目説教所前	山下 俊雪	大河	大河岩倉飲料店三叉路	山村 筆松
皆実	皆実町凱旋記念碑前	田中 豊秋	大河	大河玉井助吉宅前	浜井 芳太郎
皆実	翠町一中寄宿舎前	福原 京槌	楠那	日宇那中西理髮店前	中西 義美
皆実	翠町池本浅吉宅前	西本 春登	楠那	日宇那説教場前	中西 義美
皆実	翠町秋原親照宅前	川本 重太郎	楠那	日宇那説教場通入口	和田 徳進
皆実	翠町山下信夫宅前	川本 重太郎	楠那	丹那消防倉庫前	谷口 佐護一
皆実	翠町佐々木孫市宅前	香川 景幹	楠那	丹那山根理髮店前	岡本 尚文
仁保	仁保町本浦説教所前	田岡 啓造	楠那	楠那國民学校前	枕岡 馨
仁保	仁保町久保清一郎宅前	田岡 啓造	宇品	宇品國民学校前	松本 治郎一
仁保	金中農園正門前	田岡 啓造	宇品	宇品御幸通八丁目十字路	重森 盛人
仁保	仁保町浜田増義宅前	田岡 啓造	宇品	宇品町十丁目十字路	畑井 信一
仁保	仁保町瀨崎地方浜村直一宅前	大島 岩夫	宇品	宇品町十二丁目十字路	池田 次郎平
仁保	仁保町中洲々崎郵便局前	大島 岩夫	宇品	宇品町十四丁目十字路	木村 勝之助
仁保	仁保町柞木三保折蔵宅前	静村 重市	宇品	宇品町十五丁目千田銅像前	中村 常一
仁保	仁保町中村大二郎宅前	三保 重市	宇品	宇品神田通十四丁目十字路	田坂 松太郎
仁保	仁保町單田元大河町役場前	三保 重市	宇品	宇品神田十一丁目十字路	加藤 純
宇品	宇品神田七丁目大和人絹会社前	堺 武兵衛	幟町	山口町本通	大浜 正三郎
宇品	宇品神田二丁目千應寺前	米本 五平	幟町	銀山町山口町通三二	篠崎 雷三
宇品	宇品海岸通御幸松前	塩本 廣一郎	幟町	弥生町山口町通一三二	島井 金松
宇品	宇品國民学校分教場前	松田 佐市	幟町	幟町カトリック教会前	山本 孫六
似島	似島國民学校運動場前	沖野 儀三郎	幟町	幟町下同上一六八	天野 悦胡
似島	似島城平ノ丘	堀口 信吉	幟町	斜屋町二一	佐々木 学
似島	似島西宇根ノ丘	岡本 品吉	幟町	上流川町同進社前	今岡 卓弥
似島	似島井出ノ上峠	松本 松吉	幟町	上流川町中	山王 徳次

白島	東白島巡查駐在所前	松村 憲一	幟町	上流川町下中國新聞社前	藤井 謹作
白島	白島九軒町神田館西詰	横山 重雄	幟町	東胡町四三	三津井 稲市
白島	白島東中町西村春三宅前	西村 春三	幟町	胡町胡神社前	小田 政次郎
白島	白島中町佐々木牛肉店横	大杉 三次	幟町	鉄砲町六一	今田 壽盛
白島	西白島町長壽園入口	村上 長次郎	幟町	鉄砲町甲三六	横田 喜太郎
白島	白島中町中央	山根 芳太郎	幟町	鉄砲町乙一二三	景山 佐市
白島	白島北町金谷富介宅前	金谷 富介	幟町	鉄砲町下飯田商店前	谷口 宇三郎
白島	双葉ノ里饒津公園入口	川手 武一	幟町	八丁堀二六	松田 義一郎
幟町	上柳町中央	斉藤 正雄	幟町	八丁堀中四〇	森 繁雄
幟町	石見屋町三〇	香川 乘九三	幟町	八丁堀下八四	島村 讓一
幟町	下柳町三五	三宅 四郎	幟町	堀川町一五二	高杉 保兵衛
袋町	立町あづまや鶏肉店西側	古林 都一	袋町	小網町電車通福德生命前	山藤 清一
袋町	立町熊谷孝兵衛宅前	熊谷 孝兵衛	袋町	尾道町内會事務所前	木原 八十吉
袋町	研屋町筒井商店前	吉田 幸一	袋町	下中町町揭示場	神田 彦一
袋町	平田屋町安田銀行前	杓木 勝吉	袋町	小町秋山医院前	秋山 實吉
袋町	平田屋町斉藤帯店前	杓木 勝吉	袋町	袋町浜井薫造宅前	藤重 彦一
袋町	平田屋町牛尾糸店前	杓木 勝吉	袋町	袋町山縣徳兵衛宅前	山縣 徳兵衛
袋町	平田屋町湯澤寝具店前	杓木 勝吉	袋町	革屋町明治堂前	山本 彌助
袋町	播磨屋町徴兵保険前	北村 茂	袋町	西魚屋町中本幸藏宅前	光保 熊次郎
袋町	播磨屋町ホテル前	北村 茂	袋町	紙屋町長崎屋町食料品店前	長崎 勝
袋町	播磨屋町金明堂前	北村 正	袋町	紙屋町森本義足店前	森元 虎三
袋町	鉄砲町地藏堂南二軒目	佐伯 光太郎	袋町	紙屋町松井用具店前	安井 文太郎
袋町	中町佐竹医院前	庵藤 文造	袋町	猿楽町東組片倉雜貨店前	片倉 彦太郎
袋町	中町森政平宅前	庵藤 文造	袋町	細工町斉藤眞一商店前	斉藤 眞一
袋町	新川場町内會事務所前	藤井 清	袋町	細工町廣島郵便局前	斉藤 眞一
袋町	革屋町安田生命前	松木 松一	袋町	大手町一丁目田頭喜一宅前	田頭 喜一
袋町	革屋町三井銀行前	坂部 佐一郎	袋町	鳥屋町々内會事務所前	中村 静彦
袋町	西魚屋町灰田正一郎宅前	光保 熊次郎	袋町	鳥屋町虎屋旅館前	先の 勝三
袋町	西魚屋町倉橋發造宅前	光保 熊次郎	袋町	大手町二丁目藤井両替店前	藤井 徳兵衛
袋町	大手町五丁目武家屋弥太郎宅前	吉岡 師頭	袋町	大手町五丁目町内會事務所前	吉岡 師頭
袋町	大手町三丁目町内會事務所前	石原 肇	袋町	大手町三丁目一七街路	岡田 幹三
袋町	大手町三丁目二六街路	武田 市太郎	竹屋	竹屋國民学校前	金澤 信夫
袋町	大手町三丁目二三街路	荊尾 梅太郎	竹屋	西平塚大通松原青物店前	小寺 禮三
袋町	大手町三丁目街路	井関 俊郎	竹屋	西平塚鶴見橋通平本糸店前	小寺 禮三
袋町	大手町三丁目街路	山田 幸之信	竹屋	東平塚町土手中程	増井 諒三
袋町	大手町三丁目三八街路	増山 亮三	竹屋	東平塚町金比羅通中程	増井 諒三
袋町	大手町三丁目三三街路	青木 松太郎	竹屋	薬研掘中央	森田 克巳
袋町	大手町三丁目日華生命保険会社前	石川 定吉	竹屋	薬研掘彈昌寺前	森田 克巳
袋町	大手町三丁目田所電文會前	田所 繁一	竹屋	平塚町一ノ組団旗掲揚台前	吉本 芳太郎
袋町	大手町三丁目帝国生命保険会社前	藤原 好松	竹屋	東新天地東入口	杉山 浩二
袋町	大手町四丁目巡查派出所前	松島 彦太郎	竹屋	東新天地西入口	杉山 浩二
袋町	大手町四丁目日清生命保険会社前	渡辺 数太郎	竹屋	新天地劇場前	永井 克朋
袋町	大手町四丁目奥山五六宅前	奥山 五六	竹屋	田中町藤見湯前	岡本 秋松
袋町	塩屋町松島信吾宅前	松島 信悟	竹屋	新天地小田煙草店前	落藤 竹次郎
袋町	塩屋町杉本清吉宅前	杉本 清吉	竹屋	新天地椋田紙店前	椋田 九右兵衛
袋町	尾道町村雨商店前	大原 八十吉	竹屋	下流川町常林寺西北隅	小林 武雄
袋町	尾道町坪井八百屋前	大原 八十吉	竹屋	竹屋町巡查派出所前	井崎 末吉
袋町	大手町三丁目八街路	伊藤 小三郎	竹屋	三川町常休寺西北隅	三宅 万次郎
竹屋	鶴見町々會館前	山崎 稔	竹屋	寶町岡本学宅前	細川 継次
竹屋	鶴見町有政正善宅前	有政 正善	千田	東千田町久保吉郎宅前	長藤 八次郎
竹屋	鶴見町今中小三郎宅前	今中 小三郎	千田	東千田町赤川忠利宅前	小浪 義美
竹屋	鶴見町秋友隆利宅前	秋友 隆利	千田	東千田町坂本松藏宅前	佐々木 勘一
竹屋	鶴見町高尾宅前	高橋 六太郎	千田	南竹屋町中央	近藤 民次郎
竹屋	富士見町中央	平川 作吉	中島	中島本町向井章一宅前	向井 章一
大手	國泰寺町市公會堂前	道管 貫一	中島	元柳町上田角吉宅前	上田 留吉
大手	大手町六丁目中村医院前	馬場 竹三	中島	材木町緑竹藏宅前	緑 竹藏
大手	雑魚場町荒神堂境前	岡田 作太郎	中島	天神町丸島出張所前	天城 慶一
大手	雑魚場町大谷商店前	長崎 千代三	中島	木挽町持明院前	光本 半次郎
大手	國泰寺町荒木樂器店前	荒木 正	中島	中島新町木村長次郎宅前	木村 長次郎
大手	國泰寺町田中薬店前	田中 近太郎	中島	水主町上組佐久間豊次郎宅前	佐久間 豊次郎
大手	國泰寺町青谷辨理士宅前	青谷 茂富	中島	中水主町朝田良一宅前	朝田 良一
大手	大手町九丁目中林金物店横	手原 鶴一	中島	下水主町伊藤順一宅前	伊藤 順一
千田	千田町一丁目福原医院前	尾山 徳一	中島	吉島町三村峰次郎宅前	三村 峰次郎
千田	千田町巡查派出所前	宮本 福松	中島	吉島羽衣町天下惣吉宅前	天下 惣吉
千田	南千田町修道中学校前	平田 龜三郎	中島	吉島本町川口学一宅前	川口 学一
千田	南千田町旭製材所前	大田 福松	中島	水主町中島國民学校前	朝田 良一
千田	南千田町宮本吾策前	宮本 吾策	廣瀬	西九軒町田淵謹一宅前	田淵 謹一
廣瀬	西引御堂中本壽右衛門宅前	中本 壽右衛門	廣瀬	西九軒町原前榮造宅前	横山 茂太郎

廣瀬	廣瀬町廣瀬神社前	莊川 徳一	神崎	小網町綿枝幾松宅前	綿枝 幾松
廣瀬	廣瀬北町土手久賀仙吉宅前	久賀 仙吉	神崎	小網町大田卯三郎宅前	綿枝 幾松
廣瀬	廣瀬北町前田政武宅前	貞森 阪雄	神崎	小網町揖野節宅前	田葉西 信吉
廣瀬	廣瀬北町平本勇次郎宅前	田部 行雄	神崎	小網町田葉西信吉宅前	田葉西 信吉
廣瀬	廣瀬北町沖田八百屋前	石村 初次	神崎	小網町巡查派出所前	田葉西 信吉
廣瀬	錦町太田富蔵宅前	太田 富蔵	神崎	小網町小舟地区遊郭事務所前	洞木 覚
廣瀬	錦町井隅浅吉宅前	井隅 浅吉	神崎	西地方町伊藤順茂宅前	藤巻 國平
廣瀬	錦町砂田健一宅前	砂田 健一	神崎	西新町八木昆布店前	土屋 史
廣瀬	廣瀬北町野村フサ宅前	平本 勇次	神崎	西地方町岡精米所前	大田 興
廣瀬	廣瀬北町木下八百屋前	石村 初次	神崎	西地方町宮本酒店前	大田 興
廣瀬	錦町福原吉太郎宅前	福原 吉太郎	神崎	河原町東上組港弥太郎宅前	港 弥太郎
廣瀬	錦町塩谷愛次郎宅前	塩谷 愛次郎	神崎	河原町八木常吉宅前	港 弥太郎
廣瀬	錦町田部良雄宅前	田部 良雄	神崎	河原町北組河原町集会所前	松島 正
廣瀬	錦町増田常吉宅前	増田 常吉	神崎	河原町松島正宅前	松島 正
廣瀬	錦町石本弥太郎宅前	石本 弥太郎	神崎	河原町西組佐々木倉一宅前	藤居 完一
廣瀬	錦町山田又右衛門宅前	山田 又右衛門	神崎	神崎組古田嘉一宅前	藤居 完一
廣瀬	錦町小字羅興一宅前	小字羅 興一	神崎	舟入町山根興蔵宅前	前田 一二
神崎	小網町三光寺前	瀬川 常吉	神崎	舟入町羽田別荘東門前	前田 一二
神崎	小網町倍川光蔵宅前	瀬川 常吉	神崎	舟入町東組杉村米太郎宅前	鈴木 才吉
神崎	舟入町清水定次郎宅前	鈴木 才吉	神崎	舟入町鈴木才吉宅前	鈴木 才吉
神崎	舟入町西組高木吾一宅前	森岡 平太郎	観音	東観音町一丁目村武寅吉宅前	吉村 秀吉
神崎	舟入町東組岡崎主税宅前	稲葉 春一	観音	西観音町一丁目目田辺太郎宅前	港 義夫
神崎	舟入町西組舟入託児所前	藤田 俵三郎	観音	西観音町一丁目浜口罐詰会社前	岩崎 泰雄
舟入	舟入幸町東組通田製材所前	梶田 徳松	観音	東観音町三丁目観音院前	田頭 浅吉
舟入	舟入幸町河合箸箱店前	梶田 徳松	観音	東観音町三丁目観船橋西	島津 市太郎
舟入	舟入幸町中組千鳥湯前	山田 権太郎	観音	西観音町一丁目山田留吉宅前	山田 留吉
舟入	舟入幸町西組井澤英夫宅前	井澤 英夫	観音	西観音町一丁目河野直一宅前	梅田 辰次郎
舟入	舟入幸町炭本商店前	井澤 英夫	観音	西観音町二丁目記念会館前	小山 惣一
舟入	舟入川口町東組桑原文次郎宅前	桑原 文次郎	観音	第二中学校前	小山 惣一
舟入	舟入川口町高橋積宅前	桑原 文次郎	観音	観音本町観音橋東詰	前浜 百太郎
舟入	舟入川口町中組田中廣吉宅前	田中 五郎	観音	南観音町二中寄宿舎横	山本 鉄次
舟入	舟入川口町中組金光良純宅前	久保田 次郎	観音	南観音町市商運動場前	加藤 吉郎
舟入	舟入川口町松本勇宅前	久保田 次郎	観音	南観音町小方記念碑前	宮原 庄助
舟入	舟入川口町南組石原光一宅前	石原 光一	観音	南観音町大師堂前	山本 實太郎
舟入	舟入川口町吉村竹次郎宅前	石原 光一	観音	南観音町二丁目第二国民学校前	田中 数太
観音	観音国民学校前	藤井 正男	観音	南観音町三丁目坂本榮吉宅前	一本 一貫
観音	東観音町三丁目観音信用組合前	北山 雄三郎	福島	福島町南区菊崎貫一宅前	菊崎 正行
観音	東観音町一丁目山口罐詰工場前	山口 柳太郎	福島	福島町河野カヨ宅前	菊崎 正行
福島	福島町中区山崎行政宅前	高橋 直吉	福島	福島町昭和冷蔵庫前	菊崎 正行
福島	福島町南区山崎末次郎宅前	高橋 直吉	己斐	己斐上町区土屋雜貨店前	土屋 数男
福島	福島町南区高橋直吉宅前	高橋 直吉	古田	古田町高須郵便局前	西素 一郎
福島	福島町本通区杉本秀一宅前	杉本 秀一	古田	大島團一宅前	西素 一郎
福島	福島町本通区石川春一宅前	石川 春一	古田	古江石川多郎宅前	小川 三郎
福島	福島町北組岩井常吉宅前	岩井 常吉	古田	田方信用組合前	森田 宗一
三篠	三篠町小河内橋	坂本 幹一	草津	草津町電車草津駅前	小田 茂
三篠	楠木町三篠橋西詰	安田 富蔵	草津	草津国民学校前	柳坪 東一
三篠	横川橋北詰	武本 清太郎	草津	草津小川早苗宅前	小川 早苗
三篠	新庄橋南詰	沢村 常吉	草津	草津吉本青物店前	石田 總一
三篠	打越町中央橋	古田 卓一	草津	草津魚市場前	木谷 竹次郎
三篠	南三篠橋町己斐橋東詰	瀬田 晋	草津	草津矢島自轉車前	島原 廣次
己斐	己斐本町区西光菓子店前	西光 勘治	草津	草津浜町草津港角	橋本 唯七
己斐	己斐本町香月靴店前	兼品 耕造	草津	草津青年会館前	横山 政次
己斐	己斐本町坂口花店前	坂口 徳人	草津	草津産業組合前	野村 力松
己斐	己斐本町中区旭神社下森廣店前	森廣 誠一	草津	庚午町高須停留所横	久保田 勝美
己斐	己斐本町中区谷村宅前	竹本 常吉	本川	空鞆町空鞆神社前	武田 隆史
己斐	上町地区消防警鐘台前	土井 卯一	本川	空鞆町東部南組中通	迫原 登
己斐	己斐国民学校前	高村 佐一	本川	空鞆町西部道路中央部	三上 丹一
本川	鷹匠町表通中央	柏木 朔	本川	鷹匠町東土手南入口	岡田 斌
本川	鷹匠町中部北端	小林 宇佐一	天満	横堀町木村亮一宅前	木村 亮一
本川	鷹匠町中部中央	今村 一	天満	北榎町岩井大吉宅前	岩井 大吉
本川	鷹匠町中部南端	寄木 一二	天満	天満町巡查派出所	竹内 半之助
本川	岡本鉄工所前	寺尾 尚司	天満	西天満町道路入口藤川理髮店前	杉山 廣作
本川	鷹匠町勝行寺前	丸子 丈三	天満	上天満町山口壽一宅前	山口 壽一
本川	鷹匠町大和又吉宅前	岩崎 智祐	天満	上天満町橋本龜一宅前	橋本 龜一
本川	鷹匠町石場愛之助宅前	石場 愛之助	天満	上天満町新井庄次郎宅前	新井 庄次郎
本川	本川国民学校前	熊澤 寶一	天満	上天満町長見利喜輔宅前	長見 利喜輔
本川	塚本町長谷病院前	白川 清次	天満	上天満町太田喜一宅前	太田 喜一
本川	油屋町本通筋石井薬局前	郷田 金太	天満	上天満町免出香作宅前	面出 香作

本川	油屋町中央	松村 悦二郎	天満	上天満町多田逸三郎宅前	多田 逸三郎
本川	左官町佐伯辰次郎宅前	佐伯 篤一	天満	上天満町河崎直太宅前	河崎 直太
本川	十日市町電車停留所北	井上 彦助	天満	上天満町山田寅藏宅前	山田 寅藏
本川	十日市町南側	木村 浅次郎	天満	榎町高橋剛宅前	高橋 剛
天満	堺町四丁目金口酒場前	塚脇 邦吉	天満	榎町木村寅吉宅前	平田 秀吉
天満	天満橋東詰	塚脇 邦吉	天満	天満町武内半之助宅前	武内 半之助
天満	西大工町信濃助次郎宅前	信濃 助次郎	江波	江波町山本文義宅前	沖山 隆司
天満	新市町稻荷神社前	秋山 一	江波	江波町田中正幸宅前	沖山 隆司
江波	江波町元市内バス終点車庫前	沖山 隆司	江波	江波町江波郵便局前	沖山 隆司
江波	江波町森中正行宅前	沖山 隆司	江波	江波町中田倉次宅前	松村 正晴
江波	江波町江波温泉場前	沖山 隆司	江波	江波町国民学校前	松村 正晴
江波	江波町羽衣神社前	沖山 隆司	江波	江波町米田金槌宅前	米田 金槌
江波	江波町美村繁一宅前	松村 正晴	江波	江波町浅金群治宅前	松村 正晴
江波	江波町藤田倉司宅前	松村 正晴	江波	江波町中島光治宅前	木下 清一
江波	江波町中山甚一宅前	松村 正晴	江波	江波町笹木龜太郎宅前	木下 清一
江波	江波町中村観吉宅前	松村 正晴	江波	江波町木村神三郎宅前	木下 清一

別紙第二十號

「ラヂオ」聴取箇所表

警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名
廣島市警防團本部	比治山分團	袋町分團	三篠分團	幟町分團	大手分團	福島分團
尾長分團	大河分團	廣瀬分團	古田分團	段原分團	中島分團	己斐分團
荒神分團	宇品分團	神崎分團	青崎分團	仁保分團	本川分團	草津分團
白島分團	似島分團	江波分團	矢賀分團	楠那分團	舟入分團	廣島市役所
竹屋分團	千田分團	天満分團	牛田分團	皆実分團	観音分團	廣島電気株式会社

別紙第二十一號

汽船會社（支店代理店出張所ヲ含ム）所属船舶ニ對スル防空警報傳達方法調査表

分團名	所在地	會社名	警報傳達方法	通達責任者氏名	責任者ヨリ通達方法
宇品	宇品町	合資会社廣島郵船組	分団ヨリ電は又ハ特使	大石 長次郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	廣島湾汽船株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	仁田 竹一	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	合資会社尼ヶ崎汽船部廣島支店	分団ヨリ電は又ハ特使	時惣 節二	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	國際汽船株式会社廣島出張所	分団ヨリ電は又ハ特使	濱田 一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	瀬戸内海商船株式会社宇品出張所	分団ヨリ電は又ハ特使	塩本 廣一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	石崎汽船株式会社宇品支店	分団ヨリ電は又ハ特使	塩本 廣一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	檜山汽船部	分団ヨリ電は又ハ特使	塩本 廣一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	加藤海運株式会社廣島市店	分団ヨリ電は又ハ特使	中山 忠一	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	廣島合同運送株式会社宇品支店	分団ヨリ電は又ハ特使	蜂谷 衡平	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	戸田海運合資会社	分団ヨリ電は又ハ特使	戸田 茂夫	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	株式会社松田商会	分団ヨリ電は又ハ特使	安井 藤造	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	廣急海上トラツク株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	大西 誠	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	合資会社廣島商船組	分団ヨリ電は又ハ特使	平川 潔	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	宇品海運運送株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	中村 藤太郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	合資会社宮本本店	分団ヨリ電は又ハ特使	宮下 条吉	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	興亜海運株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	吉山 梅吉	無線、手旗又ハ口頭

別紙第二十二號

火焰ヲ發スル工場等調査表

分團名	特種火焰類ノ種類	位置	管制責任者	
矢賀	鋳物工場	矢賀町四五〇	宍戸製作所	宍戸 義太郎
比治山	電気製鋼工場	大洲町一七一	藤川工業合名会社	藤川 長市
比治山	鉄工場	大洲町一七八	児玉製作所	児玉 登九平
宇品	鋳物工場	元宇品町三〇〇	宇品鋳造所	俵積 穂
中島	合金製造工場	吉島本町六五三ノ一	梅野合金製造所	梅野 五郎
中島	鋳物工場	吉島町二〇三	平石鋳造所	平石 修二
舟入	鋳物工場	舟入川口町五七八	山中鋳造所	山中 悦治
舟入	鋳物工場	舟入川口町七四四	松本鋳造所	松本 佐
観音	鋳物工場	南観音町二四一一	観音鋳造所	田中 一郎
天満	鋳物工場	上天満町六〇四	益田鋳造所	益田 京一
天満	鋳物工場	上天満町四四一	大田鋳造所	大田 喜一
天満	鋳物工場	上天満町四四一	太田鋳造所	太田 政一
三篠	唧筒製造工場	中廣町九九八	津田式唧筒製作所	津田 喜次郎
三篠	鋳物工場	中廣町九九八	高橋鋳造所	高橋 等夫
三篠	鋳物工場	中廣町七八六	王吉鋳造所	王吉 喜太夫
三篠	鋳物工場	中廣町四四ノ一	荒木鋳造所	荒木 豊司
三篠	鋳物工場	打越町一	廣島鋳造所	松井 繁太郎
三篠	鋳物工場	打越町一三ノ二	森田鋳造所	森田 竹三郎
三篠	鋳物工場	打越町二五六ノ二	三篠鋳造所	加藤 榮

三篠	鋳物工場	打越町二三ノ四	廣徳鋳造所	廣徳 忠男
三篠	鋳物工場	楠木町六一ノ一	石井鋳造所	石井 留一
三篠	鋳物工場	三篠本町一四八五	土井鋳造所	土井 重行
三篠	鋳物工場	新庄町一一一三	大田鋳造所	大田 忠
三篠	鋳物工場	打越町二六	石田鋳造所	石井 春蔵
三篠	鋳物工場	打越町二六	坂本鋳造所	坂本 金一
三篠	鋳物工場	打越町九	坂本鋳造所	坂本 亀吉
三篠	鋳物工場	打越町一二ノ一	堀田鋳造所	堀田 文作

別紙第二十三號

燈火管制状況検視場所

検視区域	検視場所	検視区域	検視場所
全市	廣島市役所屋上	青崎分團区域	仁保町青崎堤丘陵地
全市	八丁堀福屋百貨店屋上	矢賀分團区域	矢賀国民学校々庭
北西両方面	比治山公園御便殿附近	段原分團区域	段原国民学校々庭
牛田分團区域	牛田国民学校消防警鐘台上	比治山分團区域	東雲町廣島脳病静養院屋上
荒神分團区域	荒神国民学校屋上	皆実町一丁目一円	皆実町一丁目九七九ノ二番地屋上
尾長分團区域	尾長町片河丘陵地	千田町南部一円	廣島貯金支局屋上
皆実分團区域	比治山公園西南隅高地	中島本町一円	中島本町大正屋呉服店屋上
皆実町二丁目一円	皆実町二丁目一二九三番地屋上	水主町一円	中島国民学校屋上
皆実町三丁目一円	皆実町三丁目八三一番地屋上	吉島町一円	吉島本町聾学校屋上
皆実町三丁目一円	皆実町三丁目九七六番地屋上	廣瀬分團区域	廣瀬国民学校屋上
仁保分團区域	仁保町本浦説教場警鐘台上	本川分團区域	本川国民学校屋上
仁保町湊崎一円	仁保町大浜潮湯	舟入分團区域	舟入幸町長谷川護謨工場屋上
仁保町湊崎一円	仁保町皿山	江波分團区域	江波公園高地
大河分團区域	仁保町御茶ノ山丘陵地	天満分團区域	天満国民学校屋上
楠那分團区域	楠那国民学校屋上	廣瀬横堀町一円	横堀町木村亮一宅屋上
宇品分團区域	宇品学園屋上	観音分團区域	観音国民学校屋上
似島分團区域	似島国民学校屋上	福島分團区域	福島町一致協會屋上
白島分團区域	東白島町通信局本館屋上	三篠分團区域	三篠信用組合屋上
幟町分團区域	上流川町勸業銀行廣島支店屋上	古田分團区域	古田町天狗山頂上
袋町分團区域	袋町国民学校屋上	草津分團区域	草津町柳峠東一宅屋上
竹屋分團区域	竹屋国民学校屋上	己斐分團区域	旭山神社高地
大手分團区域	大手町八丁目藝ビル屋上	千田町北部一円	文理科大学屋上
翠町及附近一円	翠町一〇一〇番地屋上		

別紙第二十四號

警防分團防護監視所位置表

本團及分團名	立哨位置	所員数	本部又ハ分断トノ連絡	本團及分團名	立哨位置	所員数	本部又分断トノ連絡
警防團本部	廣島市役所屋上	6	傳令	福島警防分團	福島町一致協會屋上	6	口頭
牛田警防分團	牛田国民学校門前消防警鐘台上	6	口頭	仁保警防分團	仁保町皿山	4	傳令
荒神警防分團	荒神国民学校屋上	6	口頭	大河警防分團	仁保町御茶ノ山丘陵地	4	傳令
尾長警防分團	尾長町片河丘陵地	6	傳令	楠那警防分團	楠那国民学校屋上	4	口頭
青崎警防分團	仁保町青崎堤丘陵地	6	口頭	宇品警防分團	宇品学園屋上	6	口頭
矢賀警防分團	矢賀国民学校々庭	4	口頭	似島警防分團	似島国民学校屋上	6	口頭
段原警防分團	段原国民学校々庭	6	口頭	白島警防分團	東白島町通信局本館屋上	6	傳令
比治山警防分團	東雲町廣島脳病静養院屋上	6	傳令	幟町警防分團	上流川町勸業銀行廣島支店屋上	10	傳令
皆実警防分團	皆実町一丁目九七九ノ二番地屋上	4	傳令	袋町警防分團	袋町国民学校屋上	6	口頭
皆実警防分團	翠町一〇一〇番地屋上	4	傳令	竹屋警防分團	竹屋国民学校屋上	6	口頭
皆実警防分團	比治山公園西南隅高地	4	傳令又ハ手旗	大手警防分團	大手町八丁目藝ビル屋上	6	傳令
皆実警防分團	皆実町二丁目一二九三番地屋上	4	傳令	千田警防分團	文理科大学屋上	7	傳令
皆実警防分團	皆実町三丁目八三一番地屋上	4	傳令	千田警防分團	廣島貯金支局屋上	7	傳令
皆実警防分團	皆実町三丁目九七六番地屋上	4	傳令	中島警防分團	中島本町大正屋呉服店屋上	7	傳令
仁保警防分團	仁保町本浦説教場警鐘台上	4	傳令	中島警防分團	中島国民学校屋上	7	口頭
仁保警防分團	仁保町大浜潮湯	4	傳令	中島警防分團	吉島本町聾学校屋上	7	傳令
本川警防分團	本川国民学校屋上	6	口頭	廣瀬警防分團	廣瀬国民学校屋上	7	口頭
舟入警防分團	舟入幸町長谷川護謨工場屋上	5	傳令	三篠警防分團	三篠信用組合屋上	12	傳令
江波警防分團	江波公園高地	5	傳令	古田警防分團	古田町天狗山頂上	6	傳令
天満警防分團	天満国民学校屋上	6	口頭	草津警防分團	草津町柳峠東一宅屋上	9	傳令
天満警防分團	横堀町木村亮一宅屋上	6	傳令	己斐警防分團	旭山神社高地	2	手旗
観音警防分團	観音巡査派出所屋上	2	傳令	神崎警防分團	神崎国民学校屋上	4	口頭
観音警防分團	観音国民学校屋上	2	傳令	神崎警防分團	西遊郭京都樓屋上	4	傳令

別紙第二十五號

主ナル危険物調査表 (昭和十五年十一月末現在)

署名	危険物ノ種類	場所	所有者名
----	--------	----	------

東	石油	大洲町一六二	常盤グリース製造所
	石油	大洲町一四五	大原ゴム工業所
宇品	火薬	皆実町三丁目	牛尾火薬店
	石油	宇品町	山戸太一
	石油	皆実三丁目	児島石油貯蔵所
	石油	千田町三丁目	廣島瓦斯電気株式会社
	瓦斯タンク	千田町三丁目	廣島瓦斯電気株式会社
	石油	千田町三丁目	村越郁之助
	石油	千田町三丁目	山音石油店
	石油	千田町二丁目五一二	本名政一
	石油	宇品町	尾崎汽船部広島支店
	石油	元宇品町	富士谷砥油店
	人絹用二硫化炭素	宇品町大河通	王子化工株式会社大和紡績株式会社広島人絹工場
	石油	似島町家下七五〇	沖野儀三郎
	石油	似島町	川崎利夫
	火薬	似島町	藤本丈吉
	火薬	似島町	似島浜本組
	西	石油	広島市役所内
石油		尾道町七五	三浦義美
石油		楠木町七一一ノ二	エルエッチ ラブリュー
石油		三篠本町三丁目一四四七	村川三郎
石油		楠木町三丁目三九七	田村秀太郎
石油		吉島本町四一六	中國塗料株式会社
石油		横川町三丁目七三九ノ一	ジョン チェスター グールド
石油		舟入川口町五六七	中國石油株式会社
石油		三篠本町三丁目九九三	亀井武
石油		吉島羽衣町二〇六	谷川勝
石油		新庄町一四四三ノ二	丸山市助
石油		新市町三一六ノ一一	井口福市
石油		吉島町六七六ノ一	清水亀次郎
石油		東観音町二丁目九七	昭和製罐印刷株式会社
石油		古田町大字古江二七八	八島秋二郎
石油		塚町三丁目三〇	八島玄蔵
石油		中島本町五四ノ三	伊藤藤吉
石油		三篠本町三丁目一四五〇	ライジングサン山根石油会社三篠販売所
石油		舟入川口町	日本理化学工業株式会社広島支社
火工品		三滝町二四八、二四九	藤田源重
火薬		三滝町三五二	牛尾章一
火薬		横川町三丁目八八二ノ一	牛尾章一
火薬		天満町五三九	渡辺佐兵衛
火薬		江波町字上山三二ノ二	渡辺佐兵衛
火薬	古田町古江六八	田川伊三郎	

別紙第二十六號

消防車其ノ他消防用設備機材配置表

分團又ハ部名	消防ニ関スル設備資材ノ種類	員数	位置	保管責任者	備考
東警察署	ハドゾンロータリ式自動車ポンプ	1	東警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 498
	ガソリン直立式タービン自動車ポンプ	1	東警察署	警防團長	
	ホース	12	東警察署	警防團長	
	スタンド	4	東警察署	警防團長	
	鳶	4	東警察署	警防團長	
段原分團	手輓水管車	2	土手町火防倉庫	警防團長	
	ホース	12	土手町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	2	土手町火防倉庫	警防團長	
	鳶	24	土手町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	土手町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	比治山火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	比治山火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	比治山火防倉庫	警防團長	
	鳶	23	比治山火防倉庫	警防團長	
シャベル	1	比治山火防倉庫	警防團長		
比治山分團	手輓水管車	1	段原末広町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	段原末広町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	11	段原末広町火防倉庫	警防團長	
	鳶	27	段原末広町火防倉庫	警防團長	
荒神分團	手輓水管車	1	荒神町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	荒神町火防倉庫	警防團長	

	スタンド	1	荒神町火防倉庫	警防團長	
	鳶	31	荒神町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	荒神町火防倉庫	警防團長	
白島分團	手輓水管車	1	東白島火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	東白島火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	東白島火防倉庫	警防團長	
	鳶	22	東白島火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	東白島火防倉庫	警防團長	
幟町分團	手輓水管車	1	弥生町火防倉庫	警防團長	
	ゼツトパイプ	1	弥生町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	弥生町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	弥生町火防倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	2	弥生町火防倉庫	警防團長	
	鳶	25	弥生町火防倉庫	警防團長	
	バケツ	2	弥生町火防倉庫	警防團長	
	自動車ポンプ	3	弥生町火防倉庫	警防團長	
	自動車ポンプ	1	八丁堀火防倉庫	分団長	
竹屋分團	手輓水管車	1	下流川町火防倉庫	分団長	
	ホース	6	下流川町火防倉庫	分団長	
	スタンド	1	下流川町火防倉庫	分団長	
	鳶	25	下流川町火防倉庫	分団長	
	シャベル	2	下流川町火防倉庫	分団長	
	手輓水管車	1	宝町火防倉庫	分団長	
	ホース	6	宝町火防倉庫	分団長	
	スタンド	1	宝町火防倉庫	分団長	
	鳶	26	宝町火防倉庫	分団長	
尾長分團	手輓水管車	1	尾長町火防倉庫	分団長	
	ホース	7	尾長町火防倉庫	分団長	
	スタンド	1	尾長町火防倉庫	分団長	
	手輓ガソリンポンプ	1	尾長町火防倉庫	分団長	
	鳶	23	尾長町火防倉庫	分団長	
	シャベル	3	尾長町火防倉庫	分団長	
牛田分團	手輓水管車	4	牛田町火防倉庫	分団長	
	ホース	34	牛田町火防倉庫	分団長	
	スタンド	5	牛田町火防倉庫	分団長	
	自動車ポンプ	1	牛田町火防倉庫	分団長	
	腕用ポンプ	1	牛田町火防倉庫	分団長	
	鳶	31	牛田町火防倉庫	分団長	
	シャベル	3	牛田町火防倉庫	分団長	
矢賀分團	腕用ポンプ	2	矢賀町火防倉庫	分団長	
	ホース	25	矢賀町火防倉庫	分団長	
	梯子	1	矢賀町火防倉庫	分団長	
	運水用バケツ	20	矢賀町火防倉庫	分団長	
	手輓水管車	1	矢賀町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	矢賀町火防倉庫	警防團長	
	鳶	16	矢賀町火防倉庫	警防團長	
シャベル	3	矢賀町火防倉庫	警防團長		
西警察署	ハドソンロータリー式自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 400 勺
	ハドソンロータリー式自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 500 勺
	レオタービン式自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 27.3、放水量 550 勺
	六気筒直立式バランスタービン梯子自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 593 勺
	ドジー水管自動車	1	西警察署	警防團長	馬力 23.0
三篠分團	フォードタービン自動車ポンプ	1	三篠分團倉庫	警防團長	馬力 30.0、放水量 500
	腕用ポンプ	1	三篠分團倉庫	警防團長	
	鳶	40	三篠分團倉庫	警防團長	
	シャベル	3	三篠分團倉庫	警防團長	
草津分團	腕用ポンプ	1	草津東町分團倉庫	警防團長	
	鳶	7	草津東町分團倉庫	警防團長	
	シャベル	1	草津東町分團倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	草津南町分團倉庫	警防團長	
	鳶	7	草津南町分團倉庫	警防團長	
	シャベル	1	草津南町分團倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	庚午町分團倉庫	警防團長	
	鳶	6	庚午町分團倉庫	警防團長	
シャベル	1	庚午町分團倉庫	警防團長		
	クロハムロータリー自動車ポンプ	1	草津分團倉庫	警防團長	馬力 24.0、放水量 400

己斐分團	クロハムロータリー自動車ポンプ	1	己斐本町区分團倉庫	警防團長	馬力 24.0、放水量 400
	腕用ポンプ	2	己斐上町車庫	警防團長	倉庫二ヶ所
	鳶	20	己斐上町車庫	警防團長	
	シャベル	3	己斐上町車庫	警防團長	
古田分團	フォードロータリー自動車ポンプ	1	古田分團倉庫	警防團長	馬力 24.0、放水量 350
	腕用ポンプ	1	古田分團倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	古江火防倉庫	警防團長	
	鳶	6	古江火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	古江火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	田方火防倉庫	警防團長	
	鳶	6	田方火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	田方火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	高須火防倉庫	警防團長	
	鳶	6	高須火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	高須火防倉庫	警防團長	
	江波分團	森田式ブランジヤ手輓ガソリンポンプ	1	江波町火防倉庫	警防團長
手輓水管車		1	江波町火防倉庫	警防團長	
鳶		13	江波町火防倉庫	警防團長	
シャベル		3	江波町火防倉庫	警防團長	
中島分團	手輓水管車	1	中島新町火防倉庫	警防團長	
	鳶	7	中島新町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	中島新町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	上水主町火防倉庫	警防團長	
	鳶	8	上水主町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	上水主町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	下水主町火防倉庫	警防團長	
	鳶	8	下水主町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	下水主町火防倉庫	警防團長	
袋町分團	フォード自動車ポンプ	1	下水主町火防倉庫	警防團長	馬力 35.00
	手輓水管車	1	新川場町火防倉庫	警防團長	
	鳶	10	新川場町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	新川場町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	大手町四丁目火防倉庫	警防團長	
	鳶	10	大手町四丁目火防倉庫	警防團長	
神崎分團	シャベル	1	大手町四丁目火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	西地方町火防倉庫	警防團長	
	鳶	28	西地方町火防倉庫	警防團長	
本川分團	シャベル	3	西地方町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	油屋町火防倉庫	警防團長	
	鳶	18	油屋町火防倉庫	警防團長	
大手分團	シャベル	3	油屋町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	大手町九丁目火防倉庫	警防團長	
	鳶	9	大手町九丁目火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	大手町九丁目火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	雑魚場町火防倉庫	警防團長	
	鳶	9	雑魚場町火防倉庫	警防團長	
廣瀬分團	シャベル	1	雑魚場町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	寺町火防倉庫	警防團長	
	鳶	15	寺町火防倉庫	警防團長	
天満分團	シャベル	12	寺町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	天満町火防倉庫	警防團長	
	スタンドパイプ	1	天満町火防倉庫	警防團長	
	ゼットパイプ	1	天満町火防倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	2	天満町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	天満町火防倉庫	警防團長	
	鳶	27	天満町火防倉庫	警防團長	
観音分團	シャベル	3	天満町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	観音町火防倉庫	警防團長	
	鳶	14	観音町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	観音町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	西観音町火防倉庫	警防團長	
	鳶	14	西観音町火防倉庫	警防團長	
福島分團	シャベル	2	西観音町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	福島町火防倉庫	警防團長	
	鳶	13	福島町火防倉庫	警防團長	
仁保分團	シャベル	3	福島町火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	2	本浦火防倉庫	警防團長	
	吸水管	6	本浦火防倉庫	警防團長	

	ゼットパイプ	2	本浦火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース	4	本浦火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース車	2	本浦火防倉庫	警防團長	
	鳶	12	本浦火防倉庫	警防團長	
	上水道用スタンド	1	本浦火防倉庫	警防團長	
	上水道用スタンドホース	3	本浦火防倉庫	警防團長	
	ゼット	1	本浦火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	本浦火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	湊崎火防倉庫	警防團長	
	ゼット	2	湊崎火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース	4	湊崎火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース車	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	鳶	10	湊崎火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	3	湊崎火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	柞木火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	柞木火防倉庫	警防團長	
	ゼット	2	柞木火防倉庫	警防團長	
	ホース	4	柞木火防倉庫	警防團長	
	ホース車	1	柞木火防倉庫	警防團長	
	鳶	12	柞木火防倉庫	警防團長	
	上水道用スタンド	2	柞木火防倉庫	警防團長	
	ゼット	2	柞木火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	6	柞木火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	柞木火防倉庫	警防團長	
楠那分團	腕用ポンプ	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	日宇那火防倉庫	警防團長	
	ゼット	3	日宇那火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	日宇那火防倉庫	警防團長	
	ホース車	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	鳶	17	日宇那火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	3	日宇那火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	丹那火防倉庫	警防團長	
	ゼット	3	丹那火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	丹那火防倉庫	警防團長	
	ホース	5	丹那火防倉庫	警防團長	
	ホース車	1	丹那火防倉庫	警防團長	
	鳶	15	丹那火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	丹那火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	3	丹那火防倉庫	警防團長	
シャベル	2	丹那火防倉庫	警防團長		
宇品警察署	フォードロータリー自動車ポンプ	1	宇品警察署	警防團長	馬力 24.0、放水量 250
	カーマスロータリー消防艇	1	宇品警察署	警防團長	馬力 24.0、放水量 250 ㍥
	消防艇ホース	8	宇品警察署	警防團長	馬力 24.0、放水量 250 ㍥
宇品分團	ガソリンポンプ	1	宇品町火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	宇品町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	5	宇品町火防倉庫	警防團長	
	運搬車	1	宇品町火防倉庫	警防團長	
	ホース	73	宇品町火防倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	16	宇品町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	9	宇品町火防倉庫	警防團長	
	ゼット	9	宇品町火防倉庫	警防團長	
	吸水管	6	宇品町火防倉庫	警防團長	
	鳶	37	宇品町火防倉庫	警防團長	
シャベル	18	宇品町火防倉庫	警防團長		
青崎分團 (東署)	腕用ポンプ	3	青崎火防倉庫	警防團長	
	梯子	6	青崎火防倉庫	警防團長	
	鳶	17	青崎火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	青崎火防倉庫	警防團長	
千田分團	フォード水管自動車	1	千田分團倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	千田分團倉庫	警防團長	
	スタンド	2	千田分團倉庫	警防團長	
	ホース	12	千田分團倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	3	千田分團倉庫	警防團長	

	ゼット	1	千田分團倉庫	警防團長	
	鳶	38	千田分團倉庫	警防團長	
大河分團	手輓ガソリンポンプ	1	大河分團倉庫	警防團長	
	鳶	15	大河分團倉庫	警防團長	
	シャベル	3	大河分團倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	大河分團倉庫	警防團長	
	ホース	20	大河分團倉庫	警防團長	
	運搬車	1	大河分團倉庫	警防團長	
似島分團	腕用ポンプ	4	似島分團倉庫	警防團長	
	吸水管	10	似島分團倉庫	警防團長	
	ビットパイプ	8	似島分團倉庫	警防團長	
	ホース	16	似島分團倉庫	警防團長	
	鳶	31	似島分團倉庫	警防團長	
	シャベル	3	似島分團倉庫	警防團長	
皆実分團	手輓水管車	1	皆実町分團倉庫	警防團長	
	吸水管	4	皆実町分團倉庫	警防團長	
	スタンドパイプ	2	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ゼットパイプ	2	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ノーズゼット換口	5	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ホース	18	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	6	皆実町分團倉庫	警防團長	
	スツパナ	1	皆実町分團倉庫	警防團長	
	カツプリング	4	皆実町分團倉庫	警防團長	
	鳶	24	皆実町分團倉庫	警防團長	
	シャベル	3	皆実町分團倉庫	警防團長	
舟入分團	三輪自動車ポンプ	1		警防團長	馬力 16.00、放水量 100 ガロン

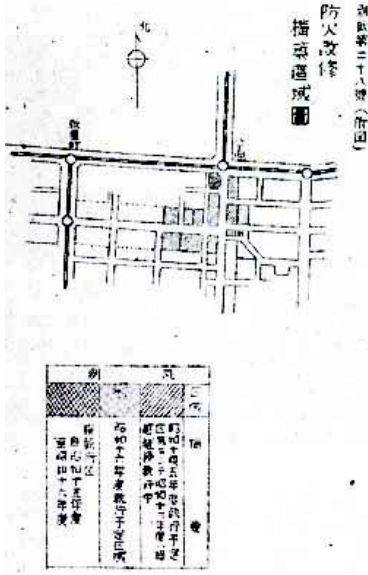
別紙第二十七號

消火栓配置表

分團名	位置	員数
青崎	仁保町ノ内堀越部落及向洋部落一円	61
矢賀	矢賀町一円	10
尾長	尾長町、西蟹屋町、愛宕町、若草町一円	47
荒神	西蟹屋町、荒神町、猿猴橋町、松原町、大須賀町一円	44
牛田	牛田町一円	64
白島	二葉ノ里、東白島町、白島九軒町、白島東中町、白島中町、白島西中町、西白島町、白島北町一円	56
幟町	上柳町、橋本町、幟町、上流川町、鉄砲町、八丁堀、下柳町、石見屋町、山口町、銀山町、東胡町、斜屋長、胡町、弥生町、堀川町一円	68
竹屋	堀川町、下流川町、三川町、平塚町、田中町、竹屋町、鶴見町、宝町、富士見町、昭和町一円	94
段原	台屋町、京橋町、的場町、金屋町、比治山町、松川町、稲荷町、土手町、段原大畑町、桐木町、段原町、段原末広町、比治山公園、比治山本町、段原東浦一円	83
比治山	大洲町、南蟹屋町、段原新町、段原日出町、段原山崎町、段原中町、南段原町、東雲町一円	49
仁保	仁保町ノ内本浦部落及洲崎部落一円	34
楠那	仁保町ノ内日宇那部落及丹那部落	29
大河	霞町、出汐町、旭町、仁保町ノ内大河部落一円	41
皆実	皆実町一丁目、二丁目、三丁目、翠町一円	52
宇品	宇品町、元宇品町一円	84
似島	似島一円	
千田	東千田町、千田町一丁目、二丁目、三丁目、南千田町、平野町、南竹屋町一円	87
大手	國泰寺町、雑魚場町、大手町六丁目、七丁目、八丁目、九丁目	45
袋町	基町、東魚屋町、立町、研屋町、紙屋町、平田屋町、播磨屋町、革屋町、鉄砲屋町	58
中島	中島本町、天神町、材木町、木挽町、元柳町、中島新町、水主町、吉島町、吉島羽衣町、吉島本町一円	117
廣瀬	寺町、西引御堂町、廣瀬北町、廣瀬元町、錦町、西九軒町	30
本川	空鞆町、鷹匠町、左官町、十日市町、鍛冶屋町、油屋町、猫屋町、堺町一丁目、二丁目、塚本町一円	34
神崎	西新町、西地方町、小網町、舟入町、河原町、舟入仲町、舟入本町一円	64
舟入	舟入幸町、舟入川口町一円	54
江波	江波町一円	31
観音	東観音町一丁目、二丁目、観音本町、西観音町一丁目、二丁目、南観音町一円	95
天満	榎町三丁目、四丁目、西大工町、榎町、横堀町、新市町、北榎町、天満町、西天満町、上天満町	49
福島	福島町一円	28
三篠	楠木町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、大芝町、横川一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、新庄町、三滝町、打越町、山手町、中広町、南三篠町一円	152
己斐	己斐町一円	41
古田	古田町一円	21
草津	草津東町、草津本町、草津浜町、草津南町、庚午町一円	50

別紙第二十八號

防火改修ノ構築區域



区域 (附圖参照)	改修面積	摘要
平田屋町、胡町、堀川町ノ一部 東魚屋町 (模範街区) ノ一部	8,000 00 坪	昭和十四年、五年度執行予定 区域ニシテ昭和十六年度へ繰越継続執行中
平田屋町、胡町、堀川町ノ一部 東魚屋町 (模範街区) ノ一部	4,783 00 坪	昭和十六年度執行予定

←別紙第二十八號 (附図)

防火改修構築区域圖

別紙第二十九號

自然水利用區域表

分團名	区域	利用可能潮時
青崎	仁保町向洋三〇三番地地々先=同三五〇番地地々先間猿猴川	満
	仁保町堀越三四二番地地々先=同一六七五番地地々先間船越入川	満
矢賀	矢賀町大字大須三七六番地地々先府中川	満
荒神	大須賀町一〇二番地地々先=駅前橋間京橋川	満
	松原町一〇四八番地地々先=猿猴橋間猿猴川	満、干
	荒神橋、猿猴橋、駅前橋、大正橋各橋下猿猴川	満、干
	栄橋々下京橋川	満、干
牛田	西蟹屋町、東洋紡績株式会社広島工場内貯水池	満、干
	工兵橋=牛田町一番地々先間京橋川	満、干
	不動院境内貯水池	満、干
白島	牛田町字院内ヨリ大字大坪対重ヲ貫流セル小川	満
	饒津神社上手=常盤橋間二葉ノ里側京橋川	満
	常盤橋橋々下京橋川	満、干
	白島九軒町二〇二地地々先=常盤橋下手間京橋川	満
	工兵橋=神田橋間京橋川	満
	白島北町長壽園=下手鉄橋間太田川	満
幟町	鶴羽神社境内内貯水槽	満、干
	三篠橋々下太田川	満
竹屋	縮景園上手=柳橋間京橋川西岸	満
	栄橋、京橋、柳橋、各橋下京橋川	満、干
	柳橋、鶴見橋、比治山橋、各下京橋川	満、干
	柳橋=昭和町六三九地地々先間京橋川	満
	富士見橋附近竹屋川	満
段原	竹屋橋々下竹屋川	満
	竹屋町一番地地々先竹屋川	満
	駅前橋、猿猴橋、荒神橋、大正橋、各橋下猿猴側	満、干
	台屋町三四番地々先=猿猴橋間猿猴川	満
	大正橋=同下手鉄橋間猿猴川	満
比治山	京橋、柳橋、比治山橋、各橋下京橋川	満、干
	台屋町八六番地地々先=比治山橋間京橋川	満
	省線大洲口駅地先=大洲町四七八番地々先間猿猴川	満
仁保	東雲町東部猿猴川沿岸一帯	満
	東大橋々下猿猴川	満、干
楠那	仁保町瀧崎三六七番地々先猿猴川下流渡口	満
	仁保町字露霞渡九六六番地々先=同字軍田一七番地々先間猿猴川下流	満
	仁保町字東條二五番地々先附近海岸	満
同町字	同町字浜新築地海岸一帯	満
	同町字菖蒲崎地区港内海岸	満

	同町字山城屋四番地々先海岸	満
大河	省線たんな橋駅附近入川海岸一帯	満
皆実	比治山橋、御幸橋各橋下京橋川	満、干
	皆実町一丁目二五〇番地々先＝同町三丁目三四二番地々先間京橋川	満
	高等学校内貯水池	満、干
宇品	宇品町十五丁目八七番地々先海岸	満、干
	同町八丁目四六番地々先海岸	満、干
	同町右場所＝同町一丁目三九番地々先間海岸	満
	同町一丁目三番地（御幸松）地先ヨリ眼鏡橋ヲ経テ元宇品町水ヶ谷三五七番地々先間海岸	満、干
	宇品町水ヶ谷西側海岸	満
	同町江村岡四〇〇番地々先＝同小中谷一九八番地々先間東側海岸	満、干
	同町小中谷二六五番地々先海岸	満
	宇品町市営棧橋通路	満
	大和紡績株式会社廣島人絹工場内貯水池	満、干
省線たんなばし駅附近入川	満	
千田	竹屋川全流	満
	修道中学校内貯水池	満、干
	御幸橋々下京橋川	満、干
	千田町三丁目八二八番地々先京橋川	満
	御幸橋西詰＝南千田町一〇七五番地々先間京橋川	満
	南大橋東詰＝南千田町一五九番地々先元安川	満
	南千田町二五九番地々先＝同町二四九番地々先間元安川	満、干
大手	大手町九丁目二二五番地々先＝同二二四番地々先間元安川	満、干
	万代橋＝大手町八丁目五六番地々先間元安川	満
	明治橋＝大手町九丁目一九〇番地々先間元安川	満
袋町	縣立一中貯水池	満、干
	新橋元安橋各橋下元安川	満、干
	産業奨励館前＝元安橋間元安川	満、干
	相生橋下太田川	満
中島	相生橋T字橋本川橋新大橋各橋下太田川	満、干
	住吉神社前＝住吉橋間太田川	満
	吉島町六七四番地々先＝同刑務所前間太田川	満、干
	吉島本町七三五番地々先＝瀦溜池ヲ経テ同町四九九番地々先間海岸	満
	南大橋西詰＝吉島羽衣町三九八番地々先間元安川	満、干
	水主町百五十六番地々先＝明治橋西詰間元安川	満、干
	万代橋、新橋、元安橋各橋下元安橋	満、干
南大橋、明治橋各橋下元安橋	満	
廣瀬	横川橋、横河新橋各橋下太田川	満、干
	北広瀬橋、廣瀬橋各橋下天満川	満
本川	相生橋、本川橋各橋下太田川	満、干
神崎	新大橋々下太田川	満、干
	住吉橋々下太田川	満
	河原町一六六番地々先＝同二七九番地々先間太田川	満、干
	小網町一七五番地々先天満川	満
	観船橋観音橋各橋下天満川	満
舟入	舟入幸町一〇〇〇番地々先＝舟入川口町一〇九〇番地々先間天満川	満
	舟入川口町五七八番地々先＝同六九一番地々先間太田川	満
	舟入川口町六九一番地々先＝同七一八番地々先間太田川	満、干
江波	江波町一番地々先＝同六〇番地々先間太田川海岸	満、干
	江波港内	満
	江波町一二三番地々先＝瀦溜池間天満川	満、干
	皿山下沿岸（天満川口）	満
観音	天満町電車停留所附近＝観船橋間天満川	満
	観音本町四三六番地々先＝観音橋館天満川	満
	同町一〇五八番地々先＝観音橋間天満川	満、干
	同町一〇五八番地々先＝南観音町六六八番地々先間天満川	満
	南観音町六六八番地々先八七二番地々先間天満川	満、干
	同町一九九〇番地々先ヨリ南方へ天満川一帯	満
	南観音町沖新開海岸一帯	満
	西観音町二丁目四四六番地々先＝西大橋ヲ越テ同町一〇〇六番地々先間	満
縣立二中校内貯水池	満、干	
天満	北広瀬橋廣瀬橋各橋下天満川	満
	天満橋々下天満川	満、干
	天満小学校前＝天満橋間天満川	満

	小河内橋、福島橋各橋下福島川	満
福島	福島橋、西大橋、各橋下福島川	満
	福島町六八九番地々先=同町六九九番地々先間福島川	満
	己斐橋、旭橋、各橋下山手川	満
三篠	大芝公園東側太田川	満
	三篠橋々下太田川	満
	横川橋、横川新橋各橋下太田川	満、干
	中央橋、小河内橋、福島橋下福島川	満
己斐	金鑄橋、己斐橋各橋下山手川	満
	己斐橋、旭橋各橋下山手川	満
草津	庚午町一五八二番地々先=御幸川口間海岸	満
	御幸川口	満
	草津浜町一九九六番地々先=草津南町一七五二番地地先間草津港内東北沿岸	満

別紙第三十號

防毒業務ニ従事スベキ醫師、齒科醫師、獸醫師、薬剤師、看護婦表

○印ハ警防團員

[K=慶應、A=安政、M=明治、T=大正]

分團名	職業別	住 所	氏 名	年 令	摘要	分團名	職業別	住 所	氏 名	年 令	摘要
青崎	医師	仁保町向洋1098	大橋年見	M26. 8. 6	○	尾長	薬剤師	愛宕町190	原田實	M29. 1. 10	
青崎	医師	仁保町延命日本製鋼所内	大森孝男	M41. 2. 20		荒神	医師	荒神町	原田尚	M37. 3. 20	
青崎	医師	仁保町字伏蛸366	大橋良造	M16. 4. 4		荒神	医師	西蟹屋町	吉田博	M22. 4. 8	
青崎	医師	仁保町字伏蛸135-2	三戸玄三	M17. 10. 27		荒神	医師	荒神町129	野村司馬之助	M18. 9. 4	○
青崎	歯科医師	仁保町青崎字洋82	田村三平	M34. 5. 29		荒神	医師	西蟹屋町東洋紡廣島工場	山崎富士登	M22. 1. 1	
青崎	歯科医師	仁保町青崎字洋135-2	有馬伸生	T5. 10. 13		荒神	薬剤師	大須賀町	三浦篤夫	M32. 4. 10	
青崎	薬剤師	仁保町向洋大森1060	児玉恒造	M32. 11. 5		荒神	薬剤師	猿猴橋町	坂本重範		
矢賀	歯科医師	矢賀町官有1	林倉一	M34. 7. 12		荒神	歯科医師	猿猴橋町35	上田城久	M22. 8. 20	
尾長	医師	愛宕町69	浅海政一	M25. 10. 5	○	荒神	歯科医師	荒神町7	児玉ミネ	M33. 3. 3	
尾長	医師	愛宕町	植坪敏之			荒神	歯科医師	荒神町134	重廣花	M29. 12. 27	
尾長	歯科医師	愛宕町45	福岡貞爾	T3. 316		荒神	歯科医師	荒神町189	歌野原静馬	M32. 7. 25	○
尾長	歯科医師	愛宕町26	澤田克己	M23. 12. 5		荒神	歯科医師	松原町631	木村ハルミ	M40. 2. 15	
尾長	歯科医師	尾長町三本松276	吉田高之	T5. 2. 25		荒神	獣医師	荒神町203	河内格	T2. 3. 10	
尾長	薬剤師	尾長町599	早澤鉄雄	M28. 1. 1	○	荒神	薬剤師	大須賀町352-1	橋本良輔	M19. 3. 1	
尾長	薬剤師	尾長町315	角谷悟	M31. 8. 1		荒神	薬剤師	大須賀町1073-2	橋本健一	T5. 7. 31	
荒神	薬剤師	大須賀町123-3	築田俊康	M43. 1. 3		白島	薬剤師	東白島町	河内一人	M28. 1. 15	
荒神	薬剤師	猿猴橋町21	折田茂幸	T3. 5. 21	○	白島	医師	白島東中町29	小田亮	M19. 12. 30	
荒神	薬剤師	猿猴橋町85	中本実	M25. 5. 19	○	白島	医師	白島東中町24	永山研吉郎	M31. 7. 31	○
荒神	薬剤師	荒神町土手161	植木俊夫	M43. 1. 25	○	白島	医師	白島東中町	永富一也	M17. 9. 9	
荒神	薬剤師	猿猴橋町11	網本芳人	M40. 9. 8	○	白島	医師	白島九軒町官有56	國友國	M14. 7. 18	
牛田	歯科医師	牛田本町区	小林義尚	M14. 5. 2		白島	医師	白島中町62	天野進作	M16. 6. 1	
牛田	薬剤師	牛田町	田淵善衛	M23. 12. 3		白島	医師	東白島町164	三好義雪	M27. 2. 3	
牛田	薬剤師	牛田町	森田幹子	M42. 2. 10		白島	歯科医師	白島東中町52-1	高橋一三	M15. 1. 1	
牛田	歯科医師	牛田町201	宮岡忠男	M41. 9. 2		白島	歯科医師	西白島町135	中村隆	M36. 1. 25	
牛田	医師	牛田町1270	太田穰	M10. 12. 2	○	白島	歯科医師	東白島町227	藤井貞雄	M33. 3. 15	
牛田	医師	牛田町旭区1214	久保田五三美	M26. 12. 15	○	白島	歯科医師	東白島町44	浅野亀	M29. 6. 1	
牛田	歯科医師	牛田町官有16	田部フミ	M39. 2. 19	○	白島	歯科医師	東白島町203	三宅一郎	M9. 9. 13	
牛田	歯科医師	牛田町400	日盛篤一	M23. 9. 9	○	白島	獣医師	二葉ノ里2	蜂須賀定根	M33. 9. 13	
牛田	獣医師	牛田町旭区979-1	森長盛人	M28. 12. 20		白島	薬剤師	二葉ノ里74-3	吉田正遠	M33. 3. 15	
牛田	薬剤師	牛田町六島1266	森田秀樹	M39. 4. 1		白島	薬剤師	東白島町14-2	松本精	M36. 2. 25	○
白島	歯科医師	東白島町	宗像利三	M42. 12. 13		白島	薬剤師	白島東中町17-1	平野権之助	M7. 4. 22	
白島	薬剤師	東白島町	鎌谷信男	M42. 8. 4		幟町	医師	上流川町67	西下正己	M31. 6. 28	
白島	医師	二葉ノ里吉田療養院	関三毅			幟町	歯科医師	石見屋町40	正木史郎	M28. 5. 13	
幟町	歯科医師	上流川町83	植木直忠	M22. 7. 5		幟町	医師	下柳町35	串田光造	M19. 6. 10	
幟町	歯科医師	鉄砲町132	佐々木博文	T2. 11. 26		幟町	八木看護婦会長	橋本町29	村上マヌエ	M36. 1. 20	
幟町	歯科医師	銀山町3	東仁平	M41. 2. 29		幟町	看護婦	橋本町29	高橋ハマエ	T2. 1. 2	
幟町	薬剤師	幟町	前田栄次郎	M30. 4. 26		幟町	看護婦	橋本町29	段松定美	M41. 4. 10	
幟町	薬剤師	上柳町	安原泰蔵			幟町	看護婦	橋本町29	黒河トシエ	T3. 10. 24	
幟町	医師	上柳町	田坂重実			幟町	看護婦	橋本町29	沖田ハナノ	T2. 11. 20	
幟町	医師	上柳町	吉永福太郎	M13. 3. 1		幟町	看護婦	橋本町29	甲藤ハル子	T3. 6. 6	

幟町	医師	上流川町	木谷祐寛	M18. 1. 18		幟町	看護婦	橋本町 29	大島節江	T6. 6. 1	
幟町	医師	山口町 16	遠山憲臣	M21. 10. 1	○	幟町	看護婦	橋本町 29	森本トシ子	T7. 9. 29	
幟町	医師	下柳町 31-3	藤堂一郎	M13. 2. 9		幟町	看護婦	橋本町 29	扇田マスコ	T9. 6. 21	
幟町	医師	上柳町 4	豊島義徳	M29. 12. 15		幟町	看護婦	橋本町 29	芳基文子	T5. 6. 30	
幟町	医師	上柳町	豊島中蔵	A6. 3. 28		幟町	看護婦	橋本町 29	早樋政枝	T2. 3. 31	
幟町	医師	幟町 63	神田薫	M31. 6. 1	○	幟町	看護婦	橋本町 29	早川マサヨ	T8. 4. 9	
幟町	医師	斜屋町 30	吉田寛一	M28. 6. 22		幟町	看護婦	橋本町 29	荻原キサ子	T5. 4. 23	
幟町	医師	堀川町 88-1	田中一郎	M20. 9. 20		幟町	看護婦	橋本町 29	竹支ユリコ	T2. 1. 6	
幟町	医師	堀川町 98	伊達昌二	M35. 9. 30		幟町	看護婦	橋本町 29	應儀タケコ	T2. 2. 1	
幟町	医師	上流川町	坪井賢次	M31. 11. 13		幟町	看護婦	橋本町 29	後田サイヨ	T2. 1. 7	
幟町	医師	上流川町 43 (県病院勤務)	頼武夫	M37. 10. 27		幟町	看護婦	橋本町 29	山本重子	T6. 8. 25	
幟町	看護婦	橋本町 29	沖田ミツキ	T6. 2. 20		幟町	看護婦	橋本町 29	中島ユキエ	T11. 11. 17	
幟町	看護婦	橋本町 29	賀林都	T6. 10. 10		幟町	看護婦	橋本町 29	安藤シズ子	T11. 11. 30	
幟町	看護婦	橋本町 29	菅田千代子	T10. 9. 19		幟町	看護婦	橋本町 29	萩原弘子	T7. 3. 13	
幟町	看護婦	橋本町 29	宇野ツル子	M42. 10. 1		幟町	看護婦	橋本町 29	平山ミエ子	T10. 2. 13	
幟町	看護婦	橋本町 29	長谷川キクエ	T9. 9. 30		幟町	看護婦	橋本町 29	沖屋ホシエ	T14. 2. 27	
幟町	看護婦	橋本町 29	宮川豊み	T11. 4. 24		幟町	看護婦	橋本町 29	光久文子	T9. 10. 7	
幟町	看護婦	橋本町 29	斉藤アヤノ	T9. 5. 17		幟町	看護婦	橋本町 29	花本スバコ	T6. 9. 15	
幟町	看護婦	橋本町 29	松浦スエ子	T9. 9. 19		幟町	看護婦	橋本町 29	山口シズコ	T2. 3. 29	
幟町	看護婦	橋本町 29	松下ノブ	T9. 9. 3		幟町	看護婦	橋本町 29	前田マツヨ	T7. 5. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	山本正江	T9. 2. 20		幟町	看護婦	橋本町 29	守次秀子	T2. 2. 6	
幟町	看護婦	橋本町 29	福島康江	T10. 5. 13		幟町	看護婦	橋本町 29	熊谷京	M34. 3. 18	
幟町	看護婦	橋本町 29	西村シゲ子	T9. 9. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	西口シズエ	T11. 8. 30	
幟町	看護婦	橋本町 29	竹内ヤス子	T9. 2. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	矢吹王代	T11. 9. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	原早苗	T8. 7. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	佐藤恵み子	T12. 1. 3	
幟町	看護婦	橋本町 29	向井オケイ	M45. 5. 27		幟町	看護婦	橋本町 29	岩崎コシマ	T12. 2. 21	
幟町	看護婦	橋本町 29	原本タミ	M16. 1. 16		幟町	看護婦	橋本町 29	佐川浪子	T11. 11. 18	
幟町	看護婦	橋本町 29	吉村貞子	T13. 1. 1		幟町	看護婦	橋本町 29	杉原みち子	T11. 11. 23	
幟町	看護婦	橋本町 29	植田一子	T10. 10. 21		幟町	看護婦	橋本町 29	川口文恵	T13. 2. 6	
幟町	看護婦	橋本町 29	山田カネ子	T12. 5. 18		幟町	看護婦	橋本町 29	横田ヒデ子	T13. 5. 20	
幟町	看護婦	橋本町 29	佐藤ヒラト	T12. 7. 18		幟町	看護婦	橋本町 29	板谷啓子	M44. 10. 26	
幟町	看護婦	橋本町 29	山崎一子	T13. 2. 5		幟町	看護婦	橋本町 29	甲越裕子	M41. 9. 8	
幟町	看護婦	橋本町 29	萩原チサコ	T11. 4. 1		幟町	看護婦	橋本町 29	間処豊乃	M11. 5. 23	
幟町	看護婦	橋本町 29	田形ミノヨ	T12. 4. 28		幟町	看護婦	橋本町 29	松岡シズ子	M44. 12. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	大本一子	T10. 10. 7		幟町	看護婦	橋本町 29	曾戸文子	T14. 3. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	込山みき子	T13. 4. 25		幟町	看護婦	橋本町 29	當宮タカ子	T14. 5. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	瀬尾恵み子	T11. 8. 10		幟町	看護婦	橋本町 29	清水一子	T13. 1. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	篠垣静子	T11. 11. 11		幟町	看護婦	橋本町 29	松岡ハル子	T14. 3. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	柴田シズエ	T12. 12. 23		幟町	看護婦	橋本町 29	板東ハル子	T13. 5. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	藤岡照子	T12. 11. 5		幟町	看護婦	橋本町 29	村岡ヤス子	M41. 3. 27	
幟町	看護婦	橋本町 29	窪田トミコ	T12. 11. 4		幟町	看護婦	橋本町 29	中村末恵	T8. 1. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	濱本イツコ	T12. 12. 16		幟町	看護婦	橋本町 29	中村ケイ子	M44. 1. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	横山モトコ	T13. 1. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	岡田経子	M30. 1. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	室坂ナツミ	T13. 9. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	高山マツノ	M31. 7. 7	
幟町	看護婦	橋本町 29	田中キエ子	T14. 1. 10		幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽 看護婦会内	林ヒサ子	M45. 5. 8	
幟町	看護婦	橋本町 29	菅原シズキ	T13. 10. 10		幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	三好清子	T5. 1. 24	
幟町	看護婦	橋本町 29	竹安三重子	13. 11. 1		幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	大野トミエ	T3. 10. 21	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	相島幹子	T10. 1. 4		幟町	看護婦	鉄砲町 48	有光伸子	T12. 5. 16	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山近淳子	T10. 12. 11		竹屋	医師	下流川町 9	井樋義明	M34. 3. 1	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山川マツノ	T13. 3. 24		竹屋	医師	田中町 64	井倉訣	M28. 10. 10	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	江角美記枝	T6. 7. 7		竹屋	医師	平塚町 56	原田篤郎	M27. 3. 9	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山田多津子	T11. 4. 20		竹屋	医師	田中町 58	細川要	M12. 8. 22	○
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山根オトヨ	T11. 4. 10		竹屋	医師	昭和町 565	織田健太	M7. 9. 4	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	福場宮子	T13. 12. 5		竹屋	医師	三川町 40	香川卓子	M25. 12. 15	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山根チエ子	T12. 6. 9		竹屋	医師	三川町 36	横山察道	M19. 1. 12	
幟町	明治看護	鉄砲町 48	谷キミ子	M43. 9. 11		竹屋	医師	田中町 54	竹本巖	M21. 8. 16	

	婦会長	明治看護婦会内									
幟町	看護婦	鉄砲町48 明治看護婦会内	今岡アイヨ	M41.9.25		竹屋	医師	竹屋町60	田坂三友	M33.5.20	○
幟町	看護婦	鉄砲町48	奥迫綾子	T10.9.1		竹屋	医師	三川町17	多田繁	M23.4.10	
幟町	看護婦	鉄砲町48	保田テツヨ	T10.2.18		竹屋	医師	富士見町202 (縣立病院)	長田一明	M39.7.16	
幟町	看護婦	鉄砲町48	古益カツ子	T11.9		竹屋	医師	平塚町22	山根栄興	M29.2.3	
幟町	看護婦	鉄砲町48	西谷フサノ	T14		竹屋	医師	田中町49-2	己斐言	M17.8.12	
幟町	看護婦	鉄砲町48	田中ナカ	M11.8.19		竹屋	医師	下流川町42	佐伯望	M27.2.8	○
幟町	看護婦	鉄砲町48	大形シズヨ	T41.2.1		竹屋	医師	三川町6-1	下田唯一	M13.4.28	
幟町	看護婦	鉄砲町48	石名カズヨ	T1.8.11		竹屋	医師	竹屋町71	白井潔	M18.11.25	
幟町	看護婦	鉄砲町48	石原ヒサノ	M38.5.5		竹屋	医師	竹屋町66	百谷三郎	M17.2.1	
竹屋	医師	富士見町15-19	森一夫	M15.4.27		竹屋	歯科医師	下流川町9	榎原謙一	M21.2.28	
竹屋	医師	竹屋町94	久保完二	M31.7.4		竹屋	薬剤師	三川町	小出松枝	T6.7.1	
竹屋	歯科医師	平塚町39-6	青木一枝	M36.2.4		竹屋	薬剤師	鶴見町	深川馨	M42.8.11	
竹屋	歯科医師	鶴見町510-1	森田順次	M31.3.30		竹屋	薬剤師	富士見町	井上小一	M36.2.30	
竹屋	歯科医師	宝町423	森河内一長	M38.4.29		竹屋	獣医師	平塚町51-1 友田方	垣内行雄	M31.7.1	
竹屋	歯科医師	三川町17-1	後藤五郎	M30.5.14		竹屋	獣医師	南竹屋町687	河原重信	M43.2.19	
竹屋	医師	田中町	遠山霞	M33.4.20		竹屋	獣医師	平塚町256-1	池田春一	M15.1.5	
竹屋	医師	平塚町	中村一夫			竹屋	薬剤師	平塚町51-1 友田八郎方	垣内行雄	M31.7.1	
竹屋	歯科医師	竹屋町57	斉藤滝夫	M28.5.7		竹屋	薬剤師	田中町1-3	友田憲司	M41.1.3	
竹屋	歯科医師	三川町57	田中隆造	M34.9.15		竹屋	薬剤師	平塚町174	岡本節郎	M31.2.19	
竹屋	歯科医師	薬研掘甲7	武田正幸	T2.2.11		竹屋	薬剤師	富士見町三丁目90	渡辺千枝子	T2.3.7	
竹屋	歯科医師	西平塚町27	岸本豊人	M30.6.20		竹屋	薬剤師	富士見町三丁目302	川村竹二郎	M34.4.15	
竹屋	歯科医師	富士見町	玉岡和子	M41.11.20		竹屋	薬剤師	宝町415	加藤弘之	M44.2.5	
竹屋	歯科医師	田中町10	木浦羊一	M40.1.9		竹屋	薬剤師	下流川町1	伊達良法	M19.1.3	
竹屋	歯科医師	昭和町	神岡貞子	M33.7.25		竹屋	薬剤師	富士見町201	谷口隼人	M23.3.25	○
竹屋	歯科医師	宝町410	山田英雄	M33.7.22		竹屋	薬剤師	下流川町9-4	野田巧	M24.3.29	○
竹屋	歯科医師	富士見町201	中村篤一	M21.4.20		竹屋	薬剤師	田中町61-1	山本淳二	M32.2.12	
竹屋	歯科医師	田中町33	梶谷惣一	M25.3.9		竹屋	薬剤師	昭和町3-1	坂本頼一	M28.2.8	
竹屋	中央看護婦会長	田中町23 中央看護婦会内	朝川チヨノ	M36.3.29		竹屋	看護婦	竹屋町13 至誠看護婦会	植田岩子	T3.3.28	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	木村初子	T11.2.26		竹屋	看護婦	竹屋町13 至誠看護婦会	滝本一子	M38.3.1	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	川本サ、ノ	T2.5.9		竹屋	第一看護婦会長	三川町26 第一看護婦会	百々小昌	M32.12.12	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	林敏子	T9.4.26		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	梨川シヅノ	M38.4.27	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	金田八重香	T8.10.1		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	橋羽ミドリ	M39.8.28	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	市場トシエ	T11.2.1		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	桐山フミ子	M45.4.25	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	白根ヨシエ	T9.2.14		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	百々チエミ	T5.2.20	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	峠田須ナ子	T13.9.28		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	福永英代	T11.7.2	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	山光ナツエ	T12.8.5		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	内山信恵	T13.2.27	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	増田アキミ	T13.3.15		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	石田孝子	T11.2.27	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	日高英江	T12.8.15		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	上内員子	T11.1.17	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	横潮俊子	T3.11.14		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	栗栖竹子	T14.3.13	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	夏木千恵子	T11.7.20		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	面矢キヨミ	T13.4.22	
竹屋	看護婦	田中町23 中央看護婦会内	藤田トシエ	T10.8.10		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	雨田伸枝	T13.7.3	
竹屋	至誠看護婦会長	竹屋町13 至誠看護婦会	角田千枝子	M31.1.6		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	橘高壽満子	T12.10.30	
竹屋	看護婦	竹屋町13 至誠看護婦会	平賀イサ子	M35		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	川口冬子	T13.12.10	
竹屋	看護婦	竹屋町13 至誠看護婦会	倉田トシ子	M42.9.13		竹屋	看護婦	三川町26 第一看護婦会	安信オヨシ	T6.3.30	
竹屋	看護婦	竹屋町13	有本春子	T6.3.3		竹屋	回生看護	宝町358-2	坂本キク	M22.1.5	

		至誠看護婦会					婦協会長	回生看護婦協会			
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	宮本政子	M44.6.1		段原	医師	段原大畑町	澤崎嘉衛		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	坂本ヨシ子	T3.1.8		段原	医師	的場町	高雄竜道		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	山本ミチ子	T5.5.23		段原	医師	的場町	高雄修		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	安部ミヤノ	T14.4.17		段原	医師	的場町	石田正城		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	玉野哲子	T12.3.26		段原	医師	京橋町	佐々木篤行		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	田淵キミエ	T10.10.6		段原	薬剤師	比治山本町	堀博之	T3.10.14	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	水田シズ子	T9.7.11		段原	薬剤師	段原大畑町	桧崎邦衛	M33.6.25	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	藤田コトミ	T8.1.16		段原	薬剤師	段原末広町	福原義景	M22.1.17	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	桐川栄子	T12.5.25		段原	薬剤師	的場町	木村和三一	M20.5.10	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	太田タメヨ	T8.3.30		段原	薬剤師	金屋町	大野木信一	M27.5.18	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	重藤政江	T12.10.12		段原	歯科医師	比治山本町 1151	本永智鶴子	T9.3.20	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	初治春子	T13.5.23		段原	薬剤師	京橋町	井出弘	M27.8.1	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	末永一江	T13.8.31		段原	薬剤師	金屋町	内海了二	M13.5.1	○
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	岡タツ子	T13.12.25		段原	薬剤師	京橋町	土谷巖郎	M36.2.28	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	山平ミチエ	T14.3.20		段原	薬剤師	的場町22-2	石田俊雄	M18.2.20	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町358-2 回生看護婦協会	河村ミツエ	T13.8.19		段原	薬剤師	京橋町69	石川省三	M19.12.20	
段原	医師	金屋町22	黒川吉郎	M31.2.22		段原	薬剤師	段原大畑町 108	長谷川正子	M39.1.19	
段原	医師	稲荷町	結城英夫			段原	薬剤師	比治山本町 1082	堤長次郎	M11.9.28	
段原	医師	的場町77	月岡陽一	M20.1.3	○	段原	薬剤師	段原大畑町28	林衛	M30.7.26	
段原	医師	的場町	中西トシ	M40.6.10		段原	薬剤師	段原大畑町 62-1	原田静夫	M42.2.15	
段原	医師	比治山本町 1154-1	野坂実	M16.12.1		段原	薬剤師	京橋町104	吉崎喜助	M27.2.10	
段原	医師	土手町1	長壽人	M16.3.1		段原	薬剤師	京橋町32	谷本芳樹	M41.3.2	○
段原	医師	京橋町85	佐々木千左子	M40.9.10		段原	薬剤師	比治山町33	坪田旗之助	M20.9.23	
段原	医師	稲荷町官18	平岡忠美	M12.1.30		段原	薬剤師	比治山町70	野田好子	M41.7.16	
段原	歯科医師	京橋町37	橋本米一	M25.8.25		段原	薬剤師	比治山本町 1329	山崎盛太郎	M28.7.25	
段原	歯科医師	金屋町99-1	花本満	T2.3.29		段原	薬剤師	段原東浦町 788-7	山本勉	M44.10.13	○
段原	歯科医師	的場町99-3	野村熊雄	M33.7.4		段原	薬剤師	松川町78	山下とく江	M34.7.23	
段原	歯科医師	稲荷町官12	山田寛一	M24.10.15		段原	朝日看護婦会長	土手町48 朝日看護婦会	有岡ソノヨ	M30.9.8	
段原	歯科医師	段原東浦町 818-4	松本正路	M40.10.4		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	有岡ヨシコ	M40.3.20	
段原	歯科医師	的場町87	三戸要	M36.9.21		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	行友ヒデコ	M41.9.11	
段原	歯科医師	京橋町20	三宅正雄	M33.4.25		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	蔵田ミサノ	M41.2.25	
段原	歯科医師	段原東浦町 821	徳田静二	M43.2.26		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	三浦スミコ	T7.5.7	
段原	歯科医師	桐木町881	前野武央	T3.4.12		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	池田梅枝	T5.4.5	
段原	歯科医師	的場町34	末永敏二	M43.9.16		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	中村重子	T8.4.2	
段原	獣医師	台屋町45-2	吉岡要	M5.12.1		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	蜂須賀トモエ	T9.1.20	
段原	獣医師	稲荷町25	井上清作	M2.12.2		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	北川朝子	T9.9.9	
段原	看護婦	土手町48	望月光子	T10.2.1		段原	看護婦	土手町48	井上勝子	T10.4.10	

		朝日看護婦会						朝日看護婦会			
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	山木戸シズエ	T12.8.1		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	森永静江	T9.1.25	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	若宮ワカノ	T12.2.1		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	北浜カツ子	T2.5.4	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	角シデコ	M41.1.10		段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	泉芳江	T9.1.6	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	望月子色	T11.3.20		段原	法正看護婦会長	松川町1 法正看護婦会	泉原ヨシノ	M14.6.22	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	父田アヤコ	T7.5.9		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	佐々木敏子	T2.1.1	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	大江ササコ	T9.9.10		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	三上波子	T5.3.11	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	佐々木登美子	T11.2.20		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	吉村笙子	T5.7.2	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	今田フタミ	T9.9.30		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	中島貞子	M41.8.26	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	土居キミエ	T9.8.19		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	槌本イチノ	T7.8.10	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	江種キミコ	T10.9.8		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	伊藤キヨミ	T8.10.16	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	中村安子	T10.11.15		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	伊藤ヤス子	T6.8.14	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	友田ミツル	T11.7.15		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	山内久子	T10.12.58	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	山口ヤエ子	T9.10.10		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	清尾キスオ	T11.5.31	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	石堂イトコ	T11.8.13		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	太郎スゞ子	T8.4.27	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	正地博子	T12.2.10		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	清水三菊	T9.10.15	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	六郎万マス子	T10.3.4		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	小野ライ	T3.11.22	
段原	看護婦	土手町48 朝日看護婦会	中家澄枝	T7.9.29		段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	高橋一重	T7.9.30	
段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	澤野ハル子	T9.7.20		大河	歯科医師	旭町	能瀬茂	M32.2.11	○
段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	佐川ミツ子	T9.2.18		大河	獣医師	旭町1298-5 (縣病勤務)	高田義定	M19.12.9	
段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	滝田キクミ	T10.9.15		大河	薬剤師	出汐町706-3	山口久平	M43.9.5	○
段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	下木シズエ	T11.2.20		大河	薬剤師	旭町1700-2	古前秀松	M26.10.1	
段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	藤田キミエ	T11.11.1		大河	薬剤師	旭町1683-1	正田善吉	M32.3.5	
段原	看護婦	松川町1 法正看護婦会	皆本文枝	T12.1.20		皆実	歯科医師	皆実町945	河野剛吉	M32.3.4	
比治山	歯科医師	段原新町365	井口守	M22.7.28		皆実	獣医師	翠町1490-9	三佐尾元吾	T5.3.1	
比治山	医師	東雲町	益田霞	M37.2.1	○	皆実	薬剤師	皆実町三丁目	山下秀夫	M34.4.28	
比治山	医師	段原山崎町598	河合純三	M33.6.3		皆実	歯科医師	皆実町福原医院内	大屋清花		
比治山	医師	段原新町370	高井禎造	M22.2.20	○	皆実	医師	皆実町二丁目429	吉永三代人	M21.12.15	
比治山	医師	南段原町668	三戸敬登	M15.2.9	○	皆実	医師	皆実町三丁目竹田医院内	杉山家壽夫	M25.10.15	
比治山	獣医師	段原新町366	戸川弘	M40.3.20		皆実	医師	皆実町三丁目939	西村潔	M26.2.23	○
比治山	獣医師	南段原町661	山田丹二	M30.7.8		皆実	医師	翠町	於保源作	M37.10.12	
比治山	薬剤師	仁保町本町211	樽本正司	M42.1.12		皆実	医師	皆実町三丁目967-13	川村北海	M15.8.17	
楠那	-	-	-	-		皆実	医師	皆実町三丁目949-3	竹田璋一	M21.3.12	○
大河	薬剤師	旭町	溝口久治	M43.4.9	○	皆実	医師	皆実町三丁目941-2	中村章	M12.3.15	
大河	医師	仁保町字浜	久保兼松	M15.4.10	○	皆実	医師	皆実町二丁目531-2(縣病院勤務)	上田美穂子	T6.3.24	
大河	医師	仁保町大河201	佐伯益三	M24.3.19	○	皆実	医師	皆実町三丁目975-1	福原躍	M25.7.20	

皆実	医師	皆実町三丁目27	平野一	16. 3. 25M		宇品	医師	宇品町九丁目川瀬医院内	佐藤秀夫	M43. 3. 1	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目949	新田実能留	M33. 3. 2	○	宇品	歯科医師	宇品町328	阿佐軍一	M23. 7. 20	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目937-3	安原弘吉	M37. 6. 11		宇品	歯科医師	宇品町六丁目327-20	須磨文武	M36. 8. 23	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目350-1	佐々木博士	M15. 2. 7		宇品	薬剤師	宇品町328	岡田経三	M21. 5. 1	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目943-3	三宅泰策	M18. 3. 8		宇品	薬剤師	宇品町328	岡田新一	M43. 3. 10	○
皆実	獣医師	皆実町三丁目949-7	北條徳全	M14. 4. 29		宇品	薬剤師	宇品町679-25, 26	米沢治郎平	A4. 正月	
皆実	獣医師	翠町1788	関田茂男	M30. 7. 25		宇品	薬剤師	宇品町11-8	山本繁	M21. 12. 8	
皆実	薬剤師	翠町1555-2	山本茂	M41. 11. 20	○	宇品	薬剤師	宇品町360	木島闇	M19. 12. 12	
皆実	薬剤師	皆実町二丁目	向井栄次郎	M20. 4. 3		宇品	安井看護婦会長	宇品町433-7安井看護婦会	安井キク	M37. 10. 15	
宇品	歯科医師	宇品五丁目170	大川市六			宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	越智トモ	T11. 6. 1	
宇品	医師	宇品神通五丁目	川本重雄			宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	今井カヲル	T2. 5. 23	
宇品	医師	宇品町五丁目	福原嘉門			宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	山本美知子	T9. 7. 14	
宇品	医師	宇品町九丁目	田辺薫吉			宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	佐多賀ツヤ子	T2. 4. 9	
宇品	医師	宇品町327-1	加藤隆造	M12. 7. 12		宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	角田春子	T8. 3. 28	
宇品	医師	宇品御幸通327-26	岡崎一郎	M28. 3. 14		宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	青野百合	T9. 8. 13	
宇品	医師	宇品町13	高山肇	M26. 2. 18	○	宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	阿部キミ子	T10. 5. 11	
宇品	医師	宇品町1100人絹社宅	桑原亮造	M28. 5. 1		宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	阿部ツカ子	T11. 8. 3	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	久保君江	T10. 2. 6		千田	薬剤師	千田町	宮本正	M14. 12. 27	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	栗栖ヒサエ	T9. 7. 26		千田	医師	赤十字社支部	伊藤嘉夫		
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	川本小雪	T11. 12. 16		千田	医師	赤十字社支部	倉元巖		
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	白川ヒサノ	T11. 2. 10		千田	医師	赤十字社支部	高原滋夫		
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	越智スマ子	T8. 2. 20		千田	医師	東千田町435-1	西川弘	M32. 3. 20	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	原田モヽヨ	T10. 3. 20		千田	医師	南竹屋町252	東儀乾三	M20. 2. 10	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	木原富	T11. 11. 3		千田	医師	千田町三丁目877-3(縣病院勤務)	小山祐	M31. 2. 19	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	岩本梢津子	T10. 7. 17		千田	医師	東千田町882	吉村喜作	M12. 5. 25	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	高原ミュキ	T12. 1. 1		千田	医師	南竹屋町761	村上敬二	M10. 10. 15	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	阿原丁枝	M43. 11. 8		千田	医師	千田町二丁目626-4	松林保太郎	M23. 9. 4	
宇品	看護婦	宇品町433-7安井看護婦会	江口ヨシ子	T7. 4. 20		千田	医師	千田町一丁目509-1	福原泰蔵	M19. 11. 12	
宇品	看護婦	宇品町433-7	西林ヤスエ	M34. 2. 3		千田	医師	東千田町384	寺田正人	T2. 1. 16	
宇品	看護婦	宇品町433-7	迫田ハルエ	T9. 4. 12		千田	医師	千田町一丁目330	京極一久	M33. 4. 1	
似島	医師	似島字家下603	杉江驥	A3. 11. 7		千田	医師	東千田町399-1(縣病院勤務)	金森芳松	M31. 12. 11	
千田	歯科医師	千田町三丁目908	田中米蔵	M22. 9. 35		千田	歯科医師	十日市町一丁目527-1	土井図策	M19. 12. 23	
千田	歯科医師	南千田町1035	中西東洋男	T2. 7. 17		千田	歯科医師	十日市町二丁目630	川北静三	M37. 2. 7	
千田	薬剤師	東千田町	江口太郎	T2. 3. 17		千田	歯科医師	十日市町二丁目779	青木重助	M17. 12. 10	
千田	薬剤師	千田町	澤井千万人	M27. 9. 5		千田	獣医師	千田町708	反田慶一	M22. 5. 11	
千田	獣医師	南千田町	蔵保繁護	M24. 3. 10		千田	看護婦	千田町五丁目	永谷チズエ	T8. 2. 5	

		1072-1						中國看護婦会			
千田	獣医師	南千田町 1064-20(縣廳勤務)	月藤義一	M17. 3. 10		千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	三田百合枝	T9. 7. 21	
千田	薬剤師	南竹屋町 270	吉田隣太郎	M17. 2. 18		千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	小川セキヨ	T11. 1. 4	
千田	薬剤師	南竹屋町 234	松本良一	M27. 3. 21	○	千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	管コスエ	T12. 6. 5	
千田	薬剤師	千田町二丁目 643	栗林フジ	M42. 10. 16		千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	管ミュキ	T12. 7. 10	
千田	薬剤師	千田町一丁目 571-5	光田満亀雄	M24. 3. 15		千田	看護婦	千田町三丁目 833-1	佐々木キミエ	T12. 8. 17	
千田	中國看護婦会長	千田町三丁目 852	幸野鈴子	M38. 8. 17		大手	薬剤師	大手町七丁目	河村要一	M23. 8. 2	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	一本木シゲ子	T6. 3. 10		大手	薬剤師	大手町八丁目	香口静枝	T6. 7. 1	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	原田シズカ	T6. 12. 10		大手	医師	大手町八丁目	田村矯朗		
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	重永ヤス子	T6. 9. 17		大手	医師	堀田病院	高橋謙		
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	高間栄	T7. 5. 19		大手	医師	國泰寺町 愛國婦人会	平野サク		
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	川角ハツエ	T7. 3. 29		大手	医師	大手町六丁目	中村力	M31. 1. 1	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	上田愛子	T6. 7. 7		大手	医師	國泰寺町	窪田孝	M20. 10. 3	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	村上ヒフミ	T8. 3. 25		大手	医師	雑魚場町 329 (縣病院院内)	石橋脩三	M24. 6. 20	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	井川チエ子	T7. 2. 10		大手	医師	國泰寺町 82	林哲雄	M35. 10. 19	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	高松フズ子	T6. 11. 20		大手	医師	大手町九丁目 121	西徹	M3. 10. 3	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	今永テル子	T5. 10. 20		大手	医師	大手町八丁目 202	堀田莞三	M2. 5. 13	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	秋山ハルエ	T8. 3. 20		大手	医師	雑魚場町 319 (千田町赤十字社内)	渡辺宏大	M40. 8. 26	
大手	医師	大手町八丁目 6-1	我部政法	M38. 4. 20		大手	歯科医師	雑魚場町	横山進	M39. 2. 25	
大手	医師	大手町七丁目 89-1(縣病院勤務)	上田太郎	M39. 3. 28		大手	獣医師	大手町八丁目 7	柳沼省吾	M31. 1. 7	
大手	医師	大手町八丁目 110	黒川巖	M16. 7. 16		大手	獣医師	大手町八丁目 77-1(縣廳勤務)	山崎耕治	M27. 4. 8	
大手	医師	大手町八丁目 143	正岡一薫	M25. 5. 16		大手	薬剤師	大手町七丁目 41-2	大草善儀	M30. 10. 4	○
大手	医師	大手町七丁目 87(縣病院勤務)	松本操一	M27. 4. 19		大手	薬剤師	雑魚場町 371	名主守三	M19. 1. 22	○
大手	医師	雑魚場町 319	兒玉省吾	M37. 12. 3		大手	薬剤師	國泰寺町 31-1	内山順一	M30. 1. 15	
大手	医師	雑魚場町 123-2	相澤四郎	M7. 2. 17		大手	薬剤師	大手町八丁目 62	松岡裕	M29. 10. 9	
大手	医師	大手町八丁目 110	新井保重	M41. 12. 18		大手	薬剤師	大手町八丁目 125	三原彦三郎	M15. 1. 15	
大手	医師	大手町七丁目 37-1(縣病院勤務)	比企野千代四	M33. 9. 8		大手	太田看護婦会長	大手町七丁目 65 太田看護婦会	太田秋子	M16. 9. 12	
大手	医師	大手町七丁目 89-5(赤十字社勤務)	角井臻	M34. 3. 25		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	竹中ミサ子	M42. 2. 20	
大手	歯科医師	大手町八丁目 30	渡辺秀夫	M23. 4. 5		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	高畑ヨシ子	T2. 12. 4	
大手	歯科医師	大手町七丁目 4	若狭一雄	M36. 2. 3		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	藤本満代	M31. 4. 11	
大手	歯科医師	國泰寺町	藤田一士	M25. 10. 29		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	貴船清子	T8. 11. 26	
大手	歯科医師	國泰寺町 87	福地弘	M26. 1. 3		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	小西艶子	T8. 5. 2	
大手	歯科医師	國泰寺町 110	中村和子	M34. 1. 28		大手	看護婦	大手町七丁目 65	山内早子	T11. 3. 3	

								太田看護婦会			
大手	歯科医師	國泰寺町85	木本利男	M37.12.18		大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	本田由基子	T10.3.25	
大手	歯科医師	大手町九丁目 228	小山次郎	M33.5.7		大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	光田ヨリエ	T10.10.27	
大手	歯科医師	大手町六丁目 14	志波竜子	M37.6.20		大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	矢野シヅヨ	M42.3.10	
大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	松江ミチエ	T8.9.5		袋町	薬剤師	立町	菅田輝彦	T3.2.20	
大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	大島アサノ	T11.8.7		袋町	薬剤師	猿楽町	横山秀吉	元治 1.10.2	
大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	山岡ヲマツ	T11.8.7		袋町	医師	中町	廣藤文造		
大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	南マシコ	T9.5.23		袋町	医師	中町	東三平		
大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	妹尾恒香	T7.11.14		袋町	医師	紙屋町	田中政治		
大手	看護婦	大手町七丁目65 太田看護婦会	石田ツル	T12.1.2		袋町	医師	細工町	坂井久吉		
大手	林看護婦 会長	大手町八丁目 54 林看護婦会	林ヒデ	M28.3.14		袋町	医師	堺町三丁目	森田俊市		
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	吉岡春子	T8.7.15		袋町	医師	中町	佐武伸生	M17.2.25	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	廣実満江	T13.6.10		袋町	医師	大手町二丁目 11	野津謙吉	M1.2.18	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	亀井ユキエ	T12.1.26		袋町	医師	袋町29	恭時彦	M16.7.8	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	牧原スエ子	T12.1.9		袋町	医師	袋町1	力石勇夫	M39.1.16	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	三上英子	T11.8.3		袋町	医師	尾道町29	渡辺英吉造	M15.8.15	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	田村百合子	T12.10.19		袋町	医師	猿楽町83-1	若井均	M31.4.5	
袋町	医師	尾道町	佐藤皋一	M31.6.18		袋町	医師	小町30-1	香川三之助	M24.7.14	
袋町	歯科医師	中町1-1	亀田馨	M21.4.6		袋町	医師	猿楽町27	田丸要槌	M14.6.4	
袋町	歯科医師	東魚屋町	水野金二郎	M44.2.12		袋町	医師	大手町二丁目 25	田中百太郎	M31.1.15	
袋町	薬剤師	新川場町	河村忠雄	T6.7.19		袋町	医師	小町61-2	常久哲	M27.5.9	
袋町	薬剤師	播磨屋町	末田惣一郎	M12.3.18		袋町	医師	立町49	難波成喜	K2.11.23	
袋町	医師	大手町五丁目 63	中道吉良	M12.7.3		袋町	歯科医師	細工町31	岡田正行	M42.12.15	
袋町	医師	立町49	難波丈夫	M35.4.17	○	袋町	歯科医師	塩屋町57	渡辺友一	M29.5.12	
袋町	医師	小町17-2	生塩元	M27.2.5		袋町	歯科医師	鉄砲町	河村雅夫	M18.11.11	
袋町	医師	細工町12	黒川節司	M23.5.15		袋町	歯科医師	下流川町5	香川凱二	M43.11.1	
袋町	医師	西魚屋町47	日下部且三	M29.7.23		袋町	歯科医師	鉄砲屋町62	河村行夫	T2.6.25	
袋町	医師	立町26,27	松江竜一	M42.12.25		袋町	歯科医師	紙屋町57-2	中島榮三郎	M23.11.20	
袋町	医師	小町55	秋山賢吉	M26.1.10	○	袋町	歯科医師	立町31	仲間久人	M34.4.19	
袋町	医師	下中町23	荒木次郎	M23.7.16		袋町	歯科医師	中町35	深井繁雄	M32.2.25	
袋町	医師	西魚屋町35 (舟入病院勤務)	天野勲	M25.10.11		袋町	歯科医師	新川場町34	讃岐幸一	M21.6.19	
袋町	医師	細工町19	佐波古直明	M16.7.16		袋町	歯科医師	猿楽町101	森田正易	M32.7.28	
袋町	医師	塩屋町28	阪田良一	M33.3.16		袋町	歯科医師	西魚屋町49-1	森勝	M34.10.1	
袋町	医師	袋町39	清水憲介	M23.7.13		袋町	獣医師	大手町五丁目 23,24	坂本小助	M29.10.20	
袋町	医師	細工町29-2	島薫	M30.7.2	○	袋町	薬剤師	大手町五丁目 26	池田利男	M34.11.18	○
袋町	医師	細工町19	濱茂基	M15.3.16		袋町	薬剤師	中町14	長谷川近正	M37.3.1	
袋町	医師	尾道町47	杉本茂憲	M36.11.18		袋町	薬剤師	小町24	花岡チヨ	T2.3.12	
袋町	歯科医師	大手町四丁目	石光美智恵	M40.6.10		袋町	薬剤師	新川場町20	錦織正恵	M43.5.31	
袋町	歯科医師	袋町57-1	外浪良助	M24.11.10		袋町	薬剤師	鉄砲屋町10-1	小田勝	T4.3.17	
袋町	歯科医師	尾道町53	岡本直一	M26.10.30		袋町	薬剤師	研屋町36	横田善四郎	M19.12.22	
袋町	薬剤師	研屋町	横田一郎	T3.11.20		袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	野田雪枝	T5.9.17	
袋町	薬剤師	研屋町14	永田清次郎	M36.7.9	○	袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	渡辺サミエ	T11.7.8	
袋町	薬剤師	尾道町98	中津盛夫	T2.8.28		袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	小笠原モリ ノ	T10.6.7	
袋町	薬剤師	播磨屋町9	野村嘉夫	文久 2.8.29		袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	西三四	T10.8.16	

袋町	薬剤師	大手町一丁目 3-1	山本宥太郎	M12. 4. 22		袋町	看護婦	塩屋町 39	大下亀代	T11. 2. 24	
袋町	薬剤師	大手町一丁目 3-1	山本達子	T2. 9. 28		袋町	看護婦	塩屋町 39	中田アヤコ	T13. 2. 15	
袋町	薬剤師	大手町一丁目 3-1	山本安次郎	M44. 7. 22		袋町	看護婦	塩屋町 39	前田秀子	T13. 5. 20	
袋町	薬剤師	播磨屋町 25, 26	赤松又四郎	K2. 10. 11		袋町	看護婦	塩屋町 39	三明スミエ	T14. 2. 13	
袋町	薬剤師	播磨屋町 25, 26	赤松幹一	M22. 8. 26		袋町	看護婦	塩屋町 39	桑原キミコ	T13. 1. 16	
袋町	薬剤師	紙屋町 8	佐伯アヤ子	T2. 5. 31		袋町	鯉城看護 婦会長	尾道町 44 鯉城看護婦会	西原コムラ	M36. 1. 31	
袋町	薬剤師	大手町五丁目 50	三原清兵衛	M35. 5. 5		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	中村イツヨ	T13. 9. 15	
袋町	薬剤師	紙屋町 28	水戸松太郎	T2. 4. 26		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	村本竹子	T11. 9. 10	
袋町	薬剤師	新川場町 18-1	林秀人	M39. 8. 25		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	山崎年子	T13. 2. 20	
袋町	厚生看護 婦会長	塩屋町 厚生看護婦会	藤原キクミ	M38. 5. 20		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	細谷コノブ	T11. 7. 23	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	猪キミヨ	T4. 5. 25		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	吉岡露子	T11. 10. 13	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	谷川ヤスコ	T6. 2. 25		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	新矢一枝	T13. 5. 11	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	盛川鶴枝	T5. 12. 16		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	藤原久枝	T9. 4. 28	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	大久保冬子	T9. 2. 15		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	三東澄江	T9. 11. 20	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	岡田鶴子	T11. 6. 6		中島	医師	天神町 111	築柴秀雄	M8. 2. 5	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	吉崎ヤス子	T9. 3. 11		中島	医師	中島新町 1	坪井義晴	M30. 11. 13	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	高木トミ子	T12. 11. 20		中島	医師	天神町 96	津田享平	M29. 11. 1	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	山田ハヤノ	T14. 3. 20		中島	医師	天神町 38	植田秀嶺	M34. 10. 7	
中島	歯科医師	吉島羽衣町官 有 10	對馬恵	T4. 8. 14		中島	医師	天神町 40	蔵元積	M32. 5. 28	
中島	医師	広島縣病院内	近藤良吉			中島	医師	中島本町 23-1	松井林太郎	M17. 6. 20	
中島	医師	天神町	酒井丈一			中島	医師	中島本町 91	小泉稲子	M27. 2. 4	
中島	医師	材木町浄円寺 内	林彦三郎			中島	医師	水主町 326	小先誠一	M26. 7. 28	
中島	医師	広島縣病院内	林諭喜夫			中島	医師	天神町 36	東恒一	M13. 5. 1	
中島	医師	広島縣病院内	世木田務			中島	医師	中島本町 21	阿戸源佐衛 門	M25. 10. 20	
中島	医師	広島縣病院内	松原恭			中島	医師	天神町 117	酒井文一	M18. 8. 1	
中島	医師	広島縣病院内	箕越中			中島	医師	木挽町 26	光本天造	M16. 11. 25	
中島	医師	元柳町 28	市川佐興吉	M19. 4. 5		中島	医師	水主町 38-1	三宅良一	M8. 10. 27	
中島	医師	中島本町 54-2	原田多良穂	M35. 6. 19		中島	医師	天神町 52	進藤哲郎	M29. 2. 24	
中島	医師	中島本町 54-2	原田弘道	M7. 6. 12		中島	歯科医師	水主町 375	矢谷二宗	M33. 10. 31	
中島	医師	水主町 131-1	大山宗一	M13. 12. 3		中島	歯科医師	水主町 27	吉田頼一	M24. 11. 30	
中島	医師	中島本町 53-2	越智シゲル	M26. 2. 10		中島	歯科医師	木材町 91	竹内清	M34. 1. 24	
中島	医師	水主町 33	谷野敬之	M20. 11. 11		中島	歯科医師	天神町 97	野坂昇	M14. 1. 20	
中島	歯科医師	上水主町 6	中山哲三郎	M38. 5. 5		中島	薬剤師	木挽町 22	正岡繁三	M40. 3. 8	
中島	歯科医師	中島本町 18	熊谷鉄之助	M6. 9. 4		中島	薬剤師	吉島羽衣町 305-1	正岡武士	M38. 9. 5	
中島	歯科医師	元柳町 24	山瀬優	M21. 1. 10		中島	薬剤師	中島本町 142-1	後藤三郎	M34. 10. 22	
中島	歯科医師	中島本町 33-2	山田守三	M17. 4. 1		中島	薬剤師	水主町 392	畔地俊造	M40. 2. 17	
中島	歯科医師	中島本町 4	合屋眞澄	M34. 4. 15		中島	薬剤師	中島本町 23-1	木原彌之助	M43. 2. 25	
中島	歯科医師	水主町 519	坂木秋夫	M41. 4. 1		中島	薬剤師	中島本町 27-1	三宅車作	M19. 2. 9	
中島	歯科医師	水主町 241	御堂美来男	M22. 8. 20		中島	薬剤師	中島本町 11	森本信一	M16. 2. 15	
中島	歯科医師	元柳町 33	光谷峰代	M29. 2. 21		中島	八千代看 護婦会長	天神町 78 八千代看護婦会内	兒玉ツル	M21. 11. 20	
中島	獣医師	水主町 14-1 原ヨシ方	大仲恭二	T9. 1. 12		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	藤田二三四	M41. 5	
中島	獣医師	中島本町 375	八重垣徳光	M43. 1. 15		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	迫本ヨシエ	M6. 1	
中島	獣医師	中島新町 43-4	野村武男	T3. 5. 18		中島	看護婦	天神町 78	馬場伊和	M5. 7	

								八千代看護婦会内				
中島	薬剤師	天神町70	仁井谷松輔	M39.11.3	○	中島	看護婦	天神町78 八千代看護婦会内	津村登美恵	M8.7		
中島	薬剤師	中島本町16	岡本礼二	M15.5.10		中島	看護婦	天神町78 八千代看護婦会内	鷺尾スヅエ	M9.1		
中島	薬剤師	中島本町16	岡本浩一	M44.11.14		中島	看護婦	天神町78 八千代看護婦会内	藤原春子	M5.2		
中島	薬剤師	水主町236	片島秀雄	M20.2.26		中島	看護婦	天神町78 八千代看護婦会内	仁ノ木郁子	M9.5		
中島	薬剤師	水主町官103	吉川正子	T2.2.3		中島	看護婦	天神町78 八千代看護婦会内	藤原フヂエ	M14.9		
中島	薬剤師	水主町6-3	中山美彌子	M43.2.15		中島	看護婦	天神町78 八千代看護婦会内	横山ヒサヨ	M4.7		
中島	薬剤師	水主町533-2	永谷喜美代	T4.4.16		中島	看護婦	天神町78 八千代看護婦会内	井川ミツエ	M10.1		
中島	看護婦	天神町78	山本幸江	T11.6		本川	医師	塚本町	長谷信夫			
中島	看護婦	天神町78	開前トミエ	M45.7		本川	歯科医師	左官町32	尾山顕一郎	M38.3.13		
中島	看護婦	天神町78	安長幸枝	T6.10		本川	薬剤師	塚町一丁目	國居道憲	M41.8.21		
中島	看護婦	天神町78	土井シソ	M41.4		本川	医師	猫屋町66	今井蔵六	M28.1.1		
中島	看護婦	天神町78	村井菜	M45.3		本川	医師	猫屋町15	今井卓治	M29.11.9		
中島	看護婦	天神町78	早志ミドリ	M43.9		本川	医師	鍛冶屋町38-1	浜島秀治	M10.11.28		
中島	看護婦	天神町78	林ユキ	M37.2		本川	医師	塚町一丁目11	山崎要	M34.9.5		
広瀬	医師	西寺町	植木良雄	M43.2.5		本川	医師	十日市町17-1	松本易二	M20.11.2		
広瀬	歯科医師	廣瀬北町43	小川好夫	M36.9.17		本川	医師	猫屋町13	正岡旭	M35.4.25		
広瀬	医師	西引御堂町8	高田敦二	M16.12.20	○	本川	医師	十日市町45	松原千鶴	T6.5.27		
広瀬	医師	西引御堂町32 (縣病院勤務)	小西菱子	M21.2.28		本川	医師	猫屋町61	小東四郎	M21.1.4		
広瀬	歯科医師	廣瀬北町114	高品保	M35.7.22	○	本川	医師	猫屋町85	坂井次郎	M18.10.20		
広瀬	歯科医師	廣瀬元町145-1	森文雄	T4.3.28		本川	医師	十日市町11	斉藤禎之吉	K3.10.18		
広瀬	薬剤師	廣瀬北町109	坪井徳一	M26.8.25	○	本川	医師	鍛冶屋町71	斉木賢一	M25.7.20		
広瀬	薬剤師	西引御堂町3	中村定助	M29.7.20	○	本川	医師	鷹匠町99-1	三宅坦	M23.1.12		
広瀬	薬剤師	廣瀬元町1456	住田道治	M42.10.3	○	本川	医師	鷹匠町99-1	三宅綾子	M32.3.11		
広瀬	薬剤師	廣瀬北町209-3	久賀仙吉	M4.11.17		本川	医師	十日市町42	進藤憲	M22.2.28		
本川	医師	鷹匠町 橋本土俣方	土屋五三六			本川	医師	塚本町52	森田親一郎	M17.11.11	○	
本川	医師	空鞘町78	森杉延吉	M19.11.1		本川	看護婦	猫屋町1 川上看護婦會	大塚ヨシノ	T9.11.3		
本川	医師	塚本町66	村越弘	M37.8.22		本川	看護婦	猫屋町1 川上看護婦會	原久子	T9.11.3		
本川	歯科医師	左官町32	尾山一彦	M43.1.10		神崎	歯科医師	河原町	古澤秀夫			
本川	歯科医師	猫屋町55	沖田健吉	M10.12.5		神崎	医師	西新町	鉦村弘	M41.4.15		
本川	歯科医師	鷹匠町618	中川高美	M33.8.5		神崎	獣医師	舟入本松 660 赤木内(縣病院勤務)	笹木幸	T4.5.12		
本川	歯科医師	鷹匠町124-2	廣澤久男	M28.9.25	○	神崎	薬剤師	西新町	奥窪昌治	T6.3.11		
本川	歯科医師	十日市町1	島津次郎	M33.4.2		神崎	薬剤師	河原町	盛生亮一			
本川	歯科医師	十日市町1	中谷眞	M38.3.5		神崎	医師	河原町	古川雄吉			
本川	薬剤師	猫屋町47	石井安太郎	M23.3.23		神崎	医師	河原町	江下良彦			
本川	薬剤師	十日市町4	池田武夫	M3.10.10		神崎	医師	西新町	田原紀之			
本川	薬剤師	左官町21	細末嘉七	M32.11.21		神崎	医師	舟入仲町96	板岡一雄	M28.11.13		
本川	薬剤師	鷹匠町98	岡田斌	M39.11.14		神崎	医師	河原町213-30	畠山恒三	M22.10.30		
本川	薬剤師	榎町二丁目20	向井薫	M25.1.8		神崎	医師	舟入本町	香川景久	M29.10.6		
本川	薬剤師	塚本町38	熊谷哲	M31.9.11		神崎	医師	西新町126-1	樽屋五郎	M24.10.28		
本川	川上看護婦会長	猫屋町1 川上看護婦會	新田セツ	M20.12.15		神崎	医師	小網町103 (縣病院勤務)	田中次郎	M39.2.26		
本川	看護婦	猫屋町1 川上看護婦會	江口マス子	M42.11.20		神崎	医師	西新町3-1	土谷剛治	M33.9.7		
本川	看護婦	猫屋町1 川上看護婦會	服部アキ代	M36.9.26		神崎	医師	西新町	成川光吉	M18.7.25		
本川	看護婦	猫屋町1 川上看護婦會	村本イサ子	T4.2.17		神崎	医師	西新町	長沼幸之助	M29.3.31		
神崎	医師	西新町132	中村一枝	M34.11.28		神崎	薬剤師	西新町32	藤谷國平	M15.5.7		
神崎	医師	河原町174-2	松尾信吉	M30.9.11		神崎	薬剤師	小網町103	寺島菊次郎	M32.4.17		
神崎	医師	西新町113	笹岡操	M12.5.4		神崎	神田看護婦会長	舟入仲町111 神田看護婦會	林秀枝子	M35.11.25		
神崎	歯科医師	西新町4-1	西川二郎	M43.8.1		神崎	看護婦	舟入仲町111 神田看護婦會	神島貞代	T3.5.12		
神崎	歯科医師	西新町4-1	西川幸子	M44.9.1		神崎	看護婦	舟入仲町111 神田看護婦會	鈴木ウメ	T5.7.14		

神崎	歯科医師	西新町 123	曾田嘉將	M38. 1. 16		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	八重崎久子	T7. 9. 15	
神崎	歯科医師	小網町 103	熊谷力	M33. 5. 1		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	平田ミツエ	T12. 2. 9	
神崎	歯科医師	小網町 熊谷力方	岡野専一	M41. 11. 15		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	鷺尾コスエ	T11. 7. 20	
神崎	歯科医師	西新町 5-1	浅野廣見	M40. 2. 2		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	山田トモエ	T12. 9. 20	
神崎	歯科医師	河原町	青山巖	M36. 7. 18		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	亀井イワ子	T13. 3. 21	
神崎	歯科医師	小網町 107	三島貞次郎	M34. 11. 11		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	井上弥生	T13. 3. 13	
神崎	歯科医師	舟入仲町 158-2	重本虎一	M23. 1. 1		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	前野清代	T12. 9. 10	
神崎	歯科医師	河原町	清水義夫	M42. 5. 10		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	藤本登喜枝	T13. 1. 10	
神崎	薬剤師	河原町 225-1	折重將一	M29. 1. 2	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	幸野富士枝	T13. 1. 15	
神崎	獣医師	舟入仲町 183- 2(縣病院勤務)	多幾山右近	M13. 2. 3		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	中本シゲ子	T12. 7. 5	
神崎	薬剤師	舟入仲町 128-11	總平孝一	M22. 5. 23	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	有田勝枝	T13. 3. 18	
神崎	薬剤師	舟入本町 214	紙田末男	M29. 11. 7	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	清水フジ子	T5. 4. 13	
神崎	薬剤師	河原町 42	松島正	M31. 7. 4	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	穴水アイ子	T12. 1. 12	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	須原千代子	T10. 11. 20		舟入	薬剤師	舟入川口町 570	岩田吉忠	M3. 6. 7	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	永安保子	T13. 3. 31		舟入	薬剤師	舟入川口町 485-7	上杉一二	M27. 7. 22	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	古河政子	T14. 8. 10		舟入	薬剤師	舟入川口町 570	栗山周作	M18. 9. 1	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	月明サツキ	T14. 5. 21		舟入	薬剤師	舟入川口町 570	池川晋四郎	M5. 8. 15	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	森本トメヨ	T14. 5. 15		江波	医師	江波町 1238-52	芳野セク	M21. 5. 21	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	藤井ヤエ	T15. 1. 1		江波	薬剤師	江波町 618-3	岩空世紀子	T7. 3. 1	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	竹下ヒロエ	T13. 6. 5		江波	薬剤師	江波町 1283	香口静枝	T6. 7. 1	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	木村トシ	M35. 6. 15		観音	獣医師	南観音町 1291 (縣廳勤務)	石川隆則	M45. 3. 18	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	口村時子			観音	医師	南観音町 1291 西診療所	平野智慧徳	M17. 10. 2	
舟入	医師	舟入幸町(市立 新生試験所)	後藤文彦			観音	医師	南観音町 586 (舟入診療所内)	小篠浩	M18. 9. 1	
舟入	医師	舟入幸町 (舟入病院)	田中秀徳			観音	医師	南観音町 554-1	矢田耕造	M12. 3. 19	
舟入	薬剤師	舟入幸町	池田フミ子			観音	医師	東観音町二丁 目 374-1	藤中正	M23. 11. 15	
舟入	医師	舟入幸町	眞鍋英一			観音	歯科医師	東観音町二丁 目 371	山田不二雄	M29. 6. 13	○
舟入	医師	舟入幸町 (舟入病院)	福井孝道			観音	歯科医師	東観音町官有 59	木谷三郎	M43. 2. 25	
舟入	医師	舟入幸町 (縣病院勤務)	田中静香	T4. 11. 24		観音	歯科医師	西観音町一丁 目 2239	荒木将徳	M37. 10. 11	
舟入	医師	舟入幸町 63	福本次郎三	M33. 4. 12		観音	歯科医師	南観音町 587	中邑房江	M40. 9. 10	
舟入	歯科医師	舟入川口町 124-1	大原乙彦	M41. 7. 5		観音	獣医師	南観音町 1091 (縣廳勤務)	多斐山城馨	M23. 12. 6	
舟入	歯科医師	舟入幸町 257	久留井一彦	M43. 5. 6		観音	獣医師	南観音町 1202 (縣廳勤務)	福原芳彦	T9. 9. 12	
観音	獣医師	南観音町 897 (縣廳勤務)	藤井政敏	M28. 12. 4		天満	医師	天満町 26-2	梶川重蔵	M41. 11. 1	
観音	獣医師	南観音町 583 (縣廳勤務)	吉田五十五	M19. 12. 1		天満	医師	天満町 57-1	玉垣作一	M18. 3. 4	
観音	獣医師	南観音町二丁 目 711	藤本清	M33. 10. 10		天満	医師	横堀町 296-2 (縣病院勤務)	木幡華子	T8. 1. 7	
観音	獣医師	南観音 671 観 音アパート (縣廳勤務)	関毅一	M44. 7. 14		天満	医師	塚町四丁目 14	白井貞之	M36. 2. 7	
観音	獣医師	東観音町二丁	世良盛人	M23. 11. 29		天満	医師	西天満町	兒玉克巳	M27. 8. 9	○

		目 378-3									
観音	獣医師	東観音町二丁目 146(縣廳勤務)	西原良一	M24. 2. 2		天満	歯科医師	天満町 38-1	寄田数人	M24. 10. 12	
観音	獣医師	観音本町 1050(縣廳勤務)	入江菅一	M27. 2. 13		天満	歯科医師	榎町 1	古川潔水	M30. 9. 15	
観音	薬剤師	西観音町一丁目 2200	加藤安子	M41. 6. 6		天満	歯科医師	榎町 46-1	新谷衛	M31. 9. 6	
観音	薬剤師	西観音町二丁目 987	高橋好美	T4. 7. 22	○	天満	獣医師	上天満町 564	野村修一	M25. 9. 26	○
観音	薬剤師	西観音町二丁目 527-2	間宮静雄	M25. 8. 28		天満	薬剤師	堺町三丁目 39	新述修一	M23. 2. 7	○
観音	薬剤師	東観音町二丁目 148-1	中村菊枝	M44. 11. 25		天満	薬剤師	西天満町 512-9	鬼武國男	M37. 9. 6	○
観音	薬剤師	西観音町一丁目 499-1	古内治夫	T4. 7. 6		天満	薬剤師	天満町 27-1	渡辺佐兵衛	M38. 5. 1	
観音	薬剤師	西観音町二丁目 373-8	榎本鐘一	M42. 4. 10		天満	薬剤師	堺町四丁目	高橋和	T4. 4. 23	
天満	医師	堺町四丁目 5	笠防博之	M24. 12. 1	○	天満	薬剤師	堺町四丁目	高橋剛	M20. 3. 2	○
天満	歯科医師	天満町 87	吉川貞人	M23. 3. 15		天満	薬剤師	堺町四丁目 7	松井武雄	M23. 2. 15	
天満	歯科医師	西天満町 410	前田哲雄	M40. 7. 3		天満	薬剤師	堺町四丁目 48	後藤和蔵	M29. 7. 11	○
天満	歯科医師	天満町	藤井正毅	T1. 10. 4		天満	関西看護婦会長	上天満町 553 関西看護婦会	奥田ヨシ	M21. 12. 19	
天満	医師	堺町四丁目	伊藤醇造	M23. 9. 15		天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	來山久代	M32. 6. 16	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	佐々木婦美子	T8. 10. 10		天満	看護婦	上天満町 553	中村ミサエ	T10. 6. 16	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	飯山キクコ	M44. 4. 27		天満	看護婦	上天満町 553	佐々木登美子	T10. 8. 14	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	松中マサル	M42. 9. 20		天満	看護婦	上天満町 553	重年トシエ	T11. 1. 20	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	折出光子	T7. 6. 2		天満	看護婦	上天満町 553	平川八重美	T11. 4. 20	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	田村富士	T4. 12. 24		天満	看護婦	上天満町 553	高橋アサ子	T10. 10. 25	
天満	看護婦	上天満町 553	宮田アヤ子	T11. 4. 13		天満	看護婦	上天満町 553	立花マサト	T2. 9. 19	
天満	看護婦	上天満町 553	土井タカヨ	T9. 6. 25		天満	看護婦	上天満町 553	海部フミ子	T6. 11. 17	
天満	看護婦	上天満町 553	大島鶴子	M41. 7. 15		天満	看護婦	上天満町 553	宮崎正子	T12. 1. 15	
天満	看護婦	上天満町 553	杉本ミス子	T8. 9. 10		天満	看護婦	上天満町 553	堀内貞枝	T10. 5. 26	
天満	看護婦	上天満町 553	木坂千代子	M35. 1. 24		天満	看護婦	上天満町 553	長見恒子	T12. 5. 2	
天満	看護婦	上天満町 553	松本ユキエ	T11. 9. 12		天満	看護婦	上天満町 553	漆谷多美子	T10. 11. 7	
天満	看護婦	上天満町 553	松永イツ	M32. 9. 27		天満	看護婦	上天満町 553	山岡松子	T13. 2. 7	
天満	看護婦	上天満町 553	富士川小重	M39. 1. 5		天満	看護婦	上天満町 553	石村千都枝	T7. 7. 25	
天満	看護婦	上天満町 553	長本シズヨ	T12. 4. 29		福島	—	—	—	—	
天満	看護婦	上天満町 553	福本シン子	T11. 5. 25		三篠	医師	中廣町	桑原寛		
天満	看護婦	上天満町 553	河野尚子	T12. 6. 12		三篠	歯科医師	楠木町二丁目 456	沖高澄子	T8. 1. 15	
天満	看護婦	上天満町 553	森本スミエ	T9. 1. 5		三篠	歯科医師	南三篠町	墨田壽子	M42. 10. 12	
天満	看護婦	上天満町 553	藤田ハルエ	T4. 2. 12		三篠	歯科医師	横川町三丁目 77	本地和市	T7. 12. 6	
三篠	獣医師	大芝町 2423(縣廳勤務)	川村利房	M42. 5. 23		三篠	歯科医師	三篠本町一丁目 580	片島キク	M34. 1. 1	
三篠	薬剤師	中廣町	太田得一	T3. 7. 16		三篠	歯科医師	横川町二丁目 638-6	竹腰要吾	M39. 5. 12	
三篠	医師	横川二丁目	亀井一郎	M18. 3. 19		三篠	歯科医師	横川町二丁目 628-6	角田達治	M25. 6. 5	
三篠	医師	三篠本町二丁目 1395	谷川亀太郎	M24. 3. 3	○	三篠	歯科医師	打越町 864	熊谷達吉	M14. 1. 1	
三篠	医師	横川町一丁目 1005	津田秀雄	M39. 7. 15		三篠	歯科医師	横川三丁目 738-1	斉木実	M38. 8. 6	
三篠	医師	三篠本町一丁目 821-2	長崎五郎	M17. 11. 29		三篠	歯科医師	横川町二丁目 621	宮崎速雄	M44. 2. 12	
三篠	医師	三篠本町二丁目 415-1	杓内一知	M21. 5. 20	○	三篠	歯科医師	三篠本町一丁目 820	森本盛夫	M27. 5. 2	
三篠	医師	三篠本町一丁目 825-2	後藤了	M32. 10. 21		三篠	獣医師	横川町二丁目 996-4	岡田斉	M28. 6. 12	
三篠	医師	三篠本町一丁目長崎病院内	北義彦	M22. 11. 14		三篠	獣医師	楠木町四丁目 125-2	金崎明治郎	M8. 12. 10	
三篠	医師	横川町二丁目	白上義男	M29. 9. 12		三篠	獣医師	大芝町 2433-3	牛尾克馬	M28. 10. 1	

		644-1						(縣廳勤務)			
三篠	医師	横川町二丁目 1020	泰泉寺尚	M32. 10. 27	○	三篠	獣医師	三篠本町一丁目 (縣廳勤務)	望月巖雄	M35. 10. 7	
三篠	医師	横川町三丁目 737	桧山俊次	M15. 9. 10	○	三篠	獣医師	三滝町 1251 (鉄道省勤務)	木下千代貞	M34. 5. 8	
三篠	医師	横川町一丁目 1057-2	平松武子	T3. 4. 15		三篠	薬剤師	横川町二丁目 644-1	井上政次	T4. 2. 3	
三篠	医師	楠木町二丁目 315-1	澄川準	M38. 12. 27		三篠	薬剤師	横川町一丁目 399-3	畑村利三郎	M20. 8. 3	○
三篠	医師	楠木町二丁目 315-1	澄川儀三郎	M8. 1		三篠	薬剤師	三篠本町二丁目 798	林出勝	M31. 4. 9	
三篠	歯科医師	楠木町二丁目 331	堀部義克	M35. 4. 25		三篠	薬剤師	横川町三丁目 797	沖本源太郎	M34. 2. 21	○
三篠	歯科医師	楠木町二丁目 333	大川重作	M23. 4. 26		三篠	薬剤師	横川町三丁目 212	小笠原重治	M19. 3. 3	
三篠	歯科医師	横川三丁目 767-4	和田稔	M36. 7. 2		三篠	薬剤師	横川町三丁目 626-2	川崎逸男	M32. 6. 1	○
三篠	薬剤師	楠木町一丁目 723-4	横山正治	M2. 3. 17		己斐	歯科医師	己斐町343-13	勝田純一	M19. 6. 13	
三篠	薬剤師	楠木町二丁目 456-1	田辺拙爾	M40. 8. 21		己斐	獣医師	己斐町2505-1	反木律雄	M23. 6. 3	
三篠	薬剤師	三篠本町一丁目 859-1	中村正	T3. 7. 19		己斐	薬剤師	己斐町2532-4	岡田武三	M29. 11. 14	
三篠	薬剤師	三篠本町一丁目 816-3	清水英子	T5. 10. 25		己斐	薬剤師	己斐町2546-1	塩谷憲光	M38. 7. 15	○
三篠	国際看護婦教会	横川一丁目 1037 国際看護婦会	大下百合乃	M44. 3. 23		己斐	歯科医師	己斐本町2533	田中辰男	M37. 5. 20	
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	二岡トキエ	T6. 2. 24		古田	医師	古田町	永田悟朗		
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	滝本カメノ	M39. 10. 19		古田	医師	古田町	永田六朗		
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	小田ヒデ子	T4. 8. 20		古田	医師	古田町	森維次郎		
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	乃美アサノ	M36. 12. 15		古田	医師	古田町古江 1163	永田熊太郎	M6. 4. 26	
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	寺川秀子	T7. 12. 10		古田	薬剤師	古田町古江 967-1	隠岐壽衛	M24. 2. 25	
己斐	歯科医師	己斐町2533	田中辰男	M37. 5. 20		草津	医師	庚午町530 (広島市役所勤務)	松林鎔三	M24. 4. 29	
己斐	薬剤師	己斐町	栗栖侗雄	M38. 7. 15		草津	医師	庚午町	小玉弘武		
己斐	医師	己斐町27	津田哲三	M31. 5. 10		草津	医師	草津南町633	佐藤健美	M31. 9. 27	
己斐	医師	己斐町351-1	松本千々石	M28. 3. 14		草津	医師	庚午町555-9	瀬尾哲男	M14. 6. 5	
己斐	医師	己斐町142	児玉元蔵	K3. 9. 5		草津	歯科医師	草津本町618	熊谷勝	M28. 2. 20	
己斐	歯科医師	己斐町2514	長上豊子	M36. 8. 6		草津	薬剤師	草津本町374	川本盛人	M23. 10. 15	

別紙第三十號ノ二

防毒用部類所有ノ醫師、歯科醫師、薬剤師、獣医師、看護婦表

○印ハ警防団員

[M=明治、T=大正]

分團名	職業別	住所	氏名	年令	摘要	防毒面	防毒衣	防毒靴	防毒手袋	其ノ他
尾長	薬剤師	尾長町559	早澤鉄雄	M28. 1. 1	○	團要甲1	1	1	1	救急箱一組
尾長	薬剤師	愛宕町190	原田実	M29. 1. 10		團要甲1	—	—	—	—
荒神	薬剤師	猿猴橋町85	中本実	M25. 12. 19		團要乙1	—	—	—	—
荒神	薬剤師	大須賀町1073-2	橋本健一	T5. 7. 31		團要甲1	—	—	—	—
荒神	薬剤師	猿猴橋町21	折田茂幸	T2. 5. 21	○	團要甲1	—	—	—	—
牛田	薬剤師	牛田町大島1266	森田秀樹	M39. 4. 1		團要甲1	—	—	—	—
白島	薬剤師	東白島町官有14-2	松本精	M36. 2. 25	○	團要甲1	—	—	—	—
幟町	薬剤師	東胡町甲50	加藤恒一郎	M10. 1. 1		團要甲1	—	—	—	—
幟町	薬剤師	幟町	前田常次郎	M30. 4. 26		團要甲1 團要乙2	—	—	—	—
幟町	薬剤師	堀川町26-5	山下憲吾	M28. 7. 25	○	團要甲1	—	—	—	—
竹屋	薬剤師	昭和町553-1	坂本頼一	M28. 11. 8	○	團要甲1	—	—	—	—
竹屋	薬剤師	下流川町9-4	野田巧	M24. 3. 29	○	團要甲1	—	—	—	—
皆実	薬剤師	翠町1555-2	山本茂	M41. 11. 20	○	團要甲2	—	—	—	—
千田	薬剤師	千田町一丁目517-5	光田満龜雄	M24. 3. 25	○	團要甲1	—	—	1	—
大手	薬剤師	大手町八丁目62	松岡祐	M29. 10. 9		團要甲1	—	—	—	—
袋町	薬剤師	大手町一丁目21-1	山本宥太郎	M12. 4. 22		團要甲1	—	—	—	—
広瀬	薬剤師	西引御堂町30	中村定助	M29. 7. 20	○	團要甲1 團要乙1	—	—	—	—
広瀬	薬剤師	広瀬北町109	坪井徳市	M26. 8. 25	○	團要乙1	—	—	—	—

本川	薬剤師	堺町二丁目 20	向井薫	M25. 1. 8		—	—	1	1	—
本川	薬剤師	鷹匠町 98	岡田斌	M39. 11. 14	○	團要甲 1 直結甲 2	1	1	1	探知機 1
神崎	薬剤師	舟入仲町 128-11	綿平孝一	M22. 5. 23	○	團要乙 1	—	—	—	—
神崎	薬剤師	河原町 225-1	折重將一	M29. 1. 2	○	團要甲 1 團要乙 1	—	—	—	—
天満	薬剤師	堺町四丁目 48	後藤吟蔵	M29. 7. 11	○	團要甲 5 團要乙 12	2	2	2	蚊帳 1、カルキ 撒布車 1、噴霧 器 2、カルキ
天満	薬剤師	西天満町 512-9	鬼武國男	M37. 9. 6	○	團要甲 1	—	—	—	—
三篠	薬剤師	三篠本町一丁目 212	小笠原重治	M19. 3. 3		團要乙 1	—	—	—	—

別表第三十一號

防毒用具及救護用救急薬品ノ現存状況表

部名又ハ 分團名	防毒用具ノ種類					員数	救護用救急薬品の種類		員数	現存位置	保管責任者
	消毒車	防毒面	防毒衣	防毒手套	防毒靴		救護箱	担架			
広島市防空本部	3	17	1	1	1	23	1	3	4	広島市役所	広島市長
青崎分團	—	13	—	—	—	13	1	1	2	分団事務所	澤田良知
矢賀分團	—	7	—	—	—	7	1	1	2	分団事務所	穴戸義太郎
尾長分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	大原良宅
荒神分團	—	17	—	—	—	17	1	1	2	分団事務所	奥本鉄漢
牛田分團	—	11	—	—	—	11	1	1	2	分団事務所	大田穰
白島分團	—	17	—	—	—	17	1	1	2	分団事務所	尾川伴六
幟町分團	—	22	—	—	—	22	1	1	2	分団事務所	丸岡才吉
竹屋分團	—	49	—	—	—	49	1	1	2	分団事務所	香川菊三
段原分團	—	20	—	—	—	20	1	1	2	分団事務所	中井萬蔵
比治山分團	—	27	—	—	—	27	1	1	2	分団事務所	野口進
仁保分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	木村益相
楠那分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	馬本庄一
大河分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	三宅峯吉
皆実分團	—	26	—	—	—	26	1	1	2	分団事務所	高橋浦太郎
宇品分團	—	26	—	—	—	26	1	1	2	分団事務所	飯田興津吉
似島分團	—	11	—	—	—	11	1	1	2	分団事務所	濱本友吉郎
千田分團	—	26	—	—	—	26	1	1	2	分団事務所	上迫猛一
大手分團	—	23	—	—	—	23	1	1	2	分団事務所	高橋直之助
袋町分團	—	42	—	—	—	42	1	1	2	分団事務所	藤重彦一
中島分團	—	18	—	—	—	18	1	1	2	分団事務所	朝田良一
廣瀬分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	小宇羅謙一
本川分團	—	25	—	—	—	25	1	1	2	分団事務所	佐伯辰次郎
神崎分團	—	38	—	—	—	38	1	1	2	分団事務所	西村幸蔵
舟入分團	—	19	—	—	—	19	1	1	2	分団事務所	佐々木強平
江波分團	—	12	—	—	—	12	1	1	2	分団事務所	小林奈太郎
観音分團	—	23	—	—	—	23	1	1	2	分団事務所	前浜百太郎
天満分團	—	19	—	—	—	19	1	1	2	分団事務所	高橋剛
福島分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	菊崎正行
三篠分團	—	34	—	—	—	34	1	1	2	分団事務所	中田収蔵
己斐分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	川本精一
古田分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	力田周一
草津分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	蘭福蔵
計	3	681	1	1	1		33	32	65		

別紙第三十二號

一、特設救護班員表（醫師）

氏名	科名	所属学区	住所	電話	備考	氏名	科名	所属学区	住所	電話	備考
太田 穰	内	牛田校	牛田	中 4627		野坂 貢	内	比治山校	比治山本	中 1654	
國友 國	内	牛田校	白島九軒町	中 1316		平野 一	耳	皆実校	皆実町三	中 6413	
野村 萬之助	肛	荒神校	荒神	中 5336		中村 亨	内	皆実校	皆実町三	中 3758	
佐々木 篤行	内	荒神校	京橋	中 3497		於保 源作	内	皆実校	翠	中 1317	
中西 トシ	内	荒神校	段原大畑	中 4966		三戸 玄三	内	仁保校	南段原		
関 三毅	肛	尾長校	二葉の里	中 4768		大橋 良造	内	仁保校	仁保	中 6514	
佐々木千佐子	眼	尾長校	京橋	中 1908		久保 兼松	内	大河校	仁保	中 5344	
月岡 陽一	内	矢賀校	的場	中 6480		佐伯 益三	内	楠那校	仁保	中 5344	
高橋 修	全	矢賀校	的場	中 2588		川本 重雄	耳	宇品校	宇品	中 6177	
石田 正城	小	段原校	的場	中 1710		高山 肇	全	宇品校	宇品	中 3286	
平岡 忠美	内	段原校	稲荷	中 2771		福原 嘉門	内	宇品校	宇品	中 7832	
長 壽人	小	段原校	土手	中 2257		岡崎 一郎	内	宇品校	宇品		
内海 了二	外	段原校	金屋	中 2125		永山研吉郎	内	白島校	白島中	中 4307	

黒川 吉郎	内	段原校	金屋	中 2096		小田 亮	内	白島校	白島東中	中 1364	
横坪 敏之	内	比治山校	段原東浦	中 4367		山田 トミ	小	白島校	白島西中		
高井 禎造	内	比治山校	段原新	中 2412		三次 義雲	内	白島校	東白島	中 2433	
豊島 義徳	内	幟町校	上柳	中 4692		細川 要	内	竹屋校	田中	中 1099	
斉藤 清	内	幟町校	上柳	中 1865		白井 潔	眼	竹屋校	竹屋	中 2855	
藤堂 一郎	眼	幟町校	下柳	中 1002		百谷 三郎	内	竹屋校	竹屋	中 1614	
木原 富子	婦	幟町校	下柳	中 1762		久保 完二	内	竹屋校	竹屋	中 3353	
遠山 憲臣	内	幟町校	山口	中 2015		兒玉 省吾	眼	大手校	雑魚場	中 628	
三枝 助太郎	内	幟町校	石見屋	中 1231		高橋 謙	眼	大手校	大手八	中 6394	
平岡 確一	内	幟町校	上流川	中 4615		正岡 薫	内	大手校	大手八	中 4840	
下岡 圖南雄	皮	幟町校	東胡	中 1814		織田 健太	内	大手校	昭和	中 4672	
深川 喜久雄	眼	幟町校	鉄砲	中 3094		相澤 四郎	内	大手校	雑魚場	中 1328	
荒木 次郎	耳	袋町校	下中	中 877		東儀 乾三	内	千田校	南竹屋	中 5932	
泰 時彦	婦	袋町校	袋	中 2221		寺田 正人	内	千田校	東千田	中 1159	
清水 憲介	内	袋町校	袋	中 5143		福原 泰造	内	千田校	千田一	中 3613	
田丸 要槌	眼	袋町校	猿楽	中 5085		松林保太郎	内	千田校	千田二	中 3615	
若井 均	小	袋町校	紙屋	中 4482		村上 敬二	内	千田校	南竹屋	中 4621	
佐伯 望	皮	竹屋校	下流川	中 1952		松林 禎子	眼	千田校	千田二	中 3615	
下田 唯一	内	竹屋校	三川	中 6910		幸野 密二	外	中島校	中島本	中 1221	
原田 篤郎	内	竹屋校	平塚	中 7743		小泉 稲子	小	中島校	中島本	中 642	
中村 一夫	外	竹屋校	平塚	中 7743		阿戸源左エ門	内	中島校	中島本	中 944	
田代 登	皮	竹屋校	田中	中 5588		松井林太郎	内	中島校	中島本	中 5824	
小先 敬一	内	中島校	水主	中 3410		眞鍋 英一	小	舟入校	舟入幸	西 1517	
大山 宗一	内	中島校	水主	中 5282		芳野 セク	内	江波校	江波	西 188	
市川 佐與吉	内	中島校	元柳	中 401		古川 雄吉	内	江波校	河原	西 3203	
槌本 良雄	内	廣瀬校	寺	中 1351		森田 俊郎	小	天満校	堺三	西 1983	
森杉 延吉	内	廣瀬校	鷹匠	西 1321		玉垣 作一	内	天満校	天満	西 2019	
桑原 寛	皮	廣瀬校	中廣	西 2442		奥田 長人	内	天満校	横堀	西 2370	
森田 親一郎	内	本川校	塚本	西 1737		矢田 耕造		観音校	南観音		
村越 弘	内	本川校	塚本	西 2872		田中 次郎	皮	観音校	小網	西 58	
斎木 賢一	内	本川校	鍛冶屋	西 2395		藤中 正	内	福島校	東観音	西 2525	
三宅 綾子	内	本川校	鷹匠	西 2426		香内 一知	内	大芝校	三篠本二	西 1943	
上山 千鶴	内	本川校	十日市	西 1323		谷川亀太郎	耳	大芝校	三篠本二	西 526	
小東 四郎	内	本川校	猫屋	西 2405		黍泉 寺尚	内	三篠校	横川一	西 1397	
畠山 恒三	内	神崎校	河原	西 2286		平松 武子	内	三篠校	横川一	西 2217	
吉澤 秀夫	内	神崎校	河原	西 1779		亀井 一郎	全	三篠校	横川二	西 617	
中村 丹美	眼	神崎校	西新	西 2132		檜山 俊次	内	三篠校	横川三	西 3706	
笹岡 操	内	神崎校	西新	西 1682		澄川儀三郎	内	三篠校	楠木二	西 3546	
鉾村 弘	小	神崎校	西新	西 2325		松本千々石	外	己斐校	己斐	西 906	
水澤 貞二	内	舟入校	舟入本	西 1007		津田 哲三	内	己斐校	己斐	西 573	
板岡 一雄	婦	舟入校	舟入中	西 2073		兒玉 元蔵	内	己斐校	己斐	西 2654	
永田 悟朗	婦	古田校	古田	草津 7		佐藤 健美	内	草津校	草津	草津 120	
森 鶏次郎	全	古田校	古田			尼子 俊子	内	草津校	草津	草津 55	
瀬尾 哲男	肛	草津校	庚午								

二、特設救護班員表 (薬剤師)

担任所	担任セシメラレタキ 救護業務	業務別	電話	氏名
袋町分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 377	赤松 幹一
袋町分團	調剤 (薬剤部員)			中澤 盛夫
袋町分團	調剤薬剤部員	病院勤務	中 1734	三原 清兵衛
袋町分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 641	山本 宥太郎
袋町分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 641	山本 安次郎
袋町分團	薬剤部員	薬局	中 4431	森 秀人
舟入分團	薬剤部員	中		栗山 周作
舟入分團	薬剤部員	薬局勤務		小林 義尚
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局	西 1564	石井 安太郎
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局		熊谷 哲
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局		細末 嘉七
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局	西 1775	池田 武夫
本川分團	薬剤部員	勤務		國井 道憲
大手分團	薬剤部員	薬局勤務		河村 忠雄
大手分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 4713	松原 裕
大手分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 1841	三原 幾三郎
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局		岡本 節郎
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 3714	垣内 行雄
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 4653	友田 憲司
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 4613	伊達 良三

幟町分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 1824	加藤 恒一郎
幟町分團	藥品衛生材料部員	薬局		加藤 貫一
神崎分團	薬剤部員	病院勤務		奥窪 昌治
神崎分團	藥品衛生材料部員	薬局		綿平 孝一
天満分團	藥品衛生材料部員	薬局		松井 武雄
中島分團	薬剤部員	病院勤務		正岡 武士
中島分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 2411	三宅 隼作
中島分團	藥品衛生材料部員	薬局		二井谷 松輔
中島分團	薬剤部員			永谷 喜美代
廣瀬分團	藥品衛生材料部員	薬局		久賀 仙吉
三篠分團	薬剤部員	病院勤務		小笠原 重治
三篠分團	藥品衛生材料部員	薬局		清水 英子
三篠分團	薬剤部員	病院勤務		中村 正
三篠分團	藥品衛生材料部員	薬局		西村 美代子
白島分團	藥品衛生材料部員	薬局		河内 一人
白島分團	薬剤部員	病院勤務		吉田 正遠
白島分團	藥品衛生材料部員	薬局		錢谷 信男
己斐分團	藥品衛生材料部員	薬局	西 610	岡田 武三
段原分團	薬剤部員	薬局		大野木 信一
段原分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 3160	坪田 旗之輔
段原分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 7349	原田 静夫
段原分團	藥品衛生材料部員	薬局		林 衛
段原分團	藥品衛生材料部員	薬局		山本 勉
段原分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 712	吉崎 吾助
段原分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 6748	木村 和三一
皆實分團	藥品衛生材料部員	薬局		山下 秀雄
千田分團	薬剤部員	病院勤務		江口 太郎
千田分團	薬剤部員	薬局		吉田 勝太郎
皆實分團	藥品衛生材料部員	薬局		山下 茂
宇品分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 7481	岡田 経三
宇品分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 2247	木島 開
宇品分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 5111	山本 繁
荒神分團	薬剤部員			柴田 俊康
荒神分團	藥品衛生材料部員	薬局	中 2438	橋本 健一
尾長分團	藥品衛生材料部員	薬局		角谷 悟
牛田分團	藥品衛生材料部員	薬局		森田 幹子
江波分團	藥品衛生材料部員	薬局		岩空 世紀子
江波分團	薬剤部員	病院勤務		香口 静江
福島分團	藥品衛生材料部員	薬局		水間 歌子

三、特別救護班組織編成表(警防團二属セザル医師、歯科医師、薬剤師、看護婦、女子学生、女子青年團員等)

救護所名	担当者別	担当者ノ組織及人員
広島中央特別救護所	医師 松坂 義正	医師 36 人、薬剤師 12 人、歯科医師 12 人、看護婦 36 人、女子青年団員 50 人、j 高等女学校上級生 250 人
青崎国民学校特別救護所	女子青年団長 寺田 栄	庶務係 1 人、班長 2 人、看護婦 1 人、女子青年団員 26 人、高等科女生 36 人
矢賀国民学校特別救護所	女子青年団長 林 伍一	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、女子青年団員 40 人
尾長国民学校特別救護所	女子青年団長 西尾 静夫	庶務係 1 人、班長 1 人、女子青年団員 20 人
荒神国民学校特別救護所	女子青年団長 前田 曉	庶務係 1 人、班長 4 人、看護婦 2 人、女子青年団員 60 人
牛田国民学校特別救護所	女子青年団長 川崎 政信	庶務係 1 人、班長 2 人、看護婦 2 人、女子青年団員 67 人
白島国民学校特別救護所	女子青年団長 近藤 辰治	庶務係 1 人、班長 5 人、薬剤師 1 人、看護婦 3 人、女学生、女子青年団員 40 人
幟町国民学校特別救護所	女子青年団長 栗屋 信夫	庶務係 1 人、班長 5 人、薬剤師 2 人、看護婦 6 人、女子青年団員 36 人
竹屋国民学校特別救護所	女子青年団長 浜田惣右衛門	庶務係 1 人、班長 4 人、女学生 128 人、女子青年団員 20 人
段原国民学校特別救護所	女子青年団長 伊藤 幸	班長 5 人、班員 40 人
比治山国民学校特別救護所	女子青年団長 小林 宇一	班長 3 人、女子青年団員 100 人
仁保国民学校特別救護所	女子青年団長 宮武 千穎	庶務係 7 人、班長 2 人、産婆 2 人、高等科上級女生、女子青年団員 60 人
楠那国民学校特別救護所	女子青年団長 松田 常一	看護婦 4 人、高等科上級女生、女子青年団員 96 人
大河国民学校特別救護所	女子青年団長 林 鉄夫	庶務係 1 人、班長 1 人、薬剤師 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 10 人、女子青年団員 17 人
皆實国民学校特別救護所	女子青年団長 佐々木 哲	班長 4 人、薬剤師 4 人、女学生班員 59 人
宇品国民学校特別救護所	女子青年団長 有田 基武	庶務係 1 人、班長 1 人、薬剤師 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 180 人
似島説教場特別救護所	女子青年団長 伊藤 四郎	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 6 人、女子青年団員 40 人
千田国民学校特別救護所	女子青年団長 檜垣 兵市	班長 3 人、薬剤師 3 人、看護婦 3 人、班員女学生女子青年団員 137 人
大手国民学校特別救護所	女子青年団長 伊藤 一義	班長 8 人、医師 9 人、薬剤師 1 人、看護婦 8 人、高女生女子青年団員 173 人
袋町国民学校特別救護所	女子青年団長 間賀田 琢爾	庶務係 1 人、班長 4 人、薬剤師 4 人、看護婦 8 人、女学生女子青年団員 120 人
中島国民学校特別救護所	女子青年団長 松本 知	庶務係 1 人、班長 8 人、薬剤師 8 人、看護婦 8 人、女学生女子青年団員 165 人
廣瀬国民学校特別救護所	女子青年団長 香川 軍二	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、女子青年団員 20 人
本川国民学校特別救護所	女子青年団長 惣野 眞澄	庶務係 1 人、班長 5 人、看護婦 3 人、女学生高等科上級女生女子青年団員 134 人
神崎国民学校特別救護所	女子青年団長 戸津川 繁藏	庶務係 5 人、班長 2 人、薬剤師 1 人、看護婦 9 人、女学生高等科上級女生 57 人、

		女子青年団員 76 人
舟入国民学校特別救護所	女子青年団長 砂本 静一	庶務係 3 人、班長 3 人、女学生高等科上級女生女子青年団員 70 人
江波国民学校特別救護所	女子青年団長 高沖 駿	庶務係 4 人、班長 4 人、女子青年団員 75 人
観音国民学校特別救護所	女子青年団長 管尾 格郎	医師 2 人、薬剤師 1 人、歯科医師、1 人、看護婦 2 人、高等科上級女生 57 人、女子青年団員 76 人
天満国民学校特別救護所	女子青年団長 堀川 一眞	庶務係 1 人、班長 1 人、薬剤師 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 57 人
福島国民学校特別救護所	女子青年団長 田辺 博人	庶務係 1 人、看護婦 2 人、女子青年団員 60 人
三篠国民学校特別救護所	女子青年団長 日原 範一	庶務係 1 人、班長 10 人、医師 5 人、薬剤師 10 人、看護婦 20 人、女子青年団員 76 人
己斐国民学校特別救護所	女子青年団長 中村 美之	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、女学生女子青年団員 70 人
古田国民学校特別救護所	女子青年団長 塩本 千代	庶務係 1 人、看護婦 1 人、女子青年団員 43 人
草津国民学校特別救護所	女子青年団長 原田 知	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生、女子青年団員 248 人

前項ノ特設救護班ヲ組織シタルモノハ之ガ人名ヲ明ラカニシ同時ニテモ出勤シ得ル如ク準備シ置クモノトス

別紙第三十三號

廣島市私立病院、医院、診療所、救護所調査表

氏名	科名	学区名	住所	電話	収容人数	氏名	科名	学区名	住所	電話	収容人数
久保田五三美	内	牛田校	牛田町	中 3658	30	益田 霞	婦	仁保校	東雲町	中 7348	
原田 尚	内	荒神校	荒神町	中 3485		三戸 玄三	内	仁保校	南段原町		
吉田 博	内	荒神校	西蟹屋町	中 1224		杉江 驥	内	似島校	似島町		20
浅海 政一	内・皮	尾長校	愛宕町	中 3635		加藤 隆造	内	宇品校	宇品町	中 4361	
大橋 年見	内	青崎校	仁保町向洋	中 1356		佐藤 秀夫	外	宇品校	宇品町	中 6123	
石川 省三	内	段原校	京橋町	中 3125		天野 進作	神	白島校	白島西中町	中 1257	200
井出 弘	耳	段原校	京橋町	中 4885		藤井 正和	外	幟町校	橋本町	中 3738	
土谷 巖郎	眼	段原校	京橋町	中 6587		町井 剛	内	幟町校	橋本町	中 4686	
石田 俊雄	内	段原校	的場町	中 1710		串田 光造	耳	幟町校	下柳町	中 2899	
結城 英夫	婦	段原校	稻荷町	中 6512	50	毛利 吟吉	耳	幟町校	下柳町	中 2126	
澤崎 嘉衛	婦	段原校	段原大畑町	中 1384		森 恒三	婦	幟町校	山口町	中 1309	
長谷川正子	婦	段原校	段原大畑町	中 7906		松坂 義正	皮	幟町校	石見屋町	中 1608	
堤 長二郎	内	皆実校	比治山本町	中 1192		田坂 重實	小	幟町校	上流川町	中 2570	
西村 潔	婦	皆実校	皆実町	中 6058		坪井 賢次	皮	幟町校	上流川町	中 4143	
福原 慧	内	皆実校	皆実町	中 1533		西下 正己	内	幟町校	上流川町	中 3177	
杉山家嘉夫	小	皆実校	皆実町	中 3487		吉田 寛一	内	幟町校	斜屋町	中 3384	
川村 北海	外	皆実校	皆実町	中 765		田中 一郎	小	幟町校	堀川町	中 458	
山縣 貞臣	内	幟町校	堀川町	中 7737		清茂 喜	皮	袋町校	細工町	中 1210	
伊藤 昌二	内	幟町校	堀川町	中 996		黒川 節司	内	袋町校	細工町	中 872	
難波 丈夫	外	袋町校	立町	中 887	50	島 薫	外	袋町校	細工町	中 156	
松江 竜一	内	袋町校	立町	中 4953	50	田中 政夫	耳	袋町校	紙屋町	中 806	
佐武 伸生	耳	袋町校	中町	中 1421		井槌 義明	婦	竹屋校	下流川町	中 5339	
廣藤 文造	外	袋町校	中町	中 1377	90	多田 繁	小	竹屋校	三川町	中 1207	
東 三平	外	袋町校	中町	中 1643	50	香川 卓二	皮	竹屋校	三川町	中 1437	
日下部旦三	外	袋町校	西魚屋町	中 2016		横山 寧道	耳	竹屋校	三川町	中 135	
生塩 元	眼	袋町校	小町	中 5529		山根 栄道	内	竹屋校	平塚町	中 4981	
香川三之助	婦	袋町校	小町	中 3013		己斐 言	内・呼	竹屋校	田中町	中 2972	
常久 哲	内	袋町校	小町	中 2154		井倉 詠	内	竹屋校	田中町	中 5140	
秋山 賢吉	婦	袋町校	小町	中 3614		竹本 巖	肛	竹屋校	田中町	中 171	
阪田 良一	外・皮	袋町校	塩屋町	中 3339		田坂 三友	外	竹屋校	竹屋町	中 4478	
渡辺英吉造	婦	袋町校	尾道町	中 307		窪田 孝	婦	大手校	國泰寺町	中 6022	400
佐藤 串一	外	袋町校	尾道町	中 5540		林 哲雄	外	大手校	國泰寺町	中 1586	
杉本 茂憲	眼	袋町校	尾道町	中 1197		中村 力	小	大手校	大手町六丁目	中 856	
田中百太郎	耳	袋町校	大手町二丁目	中 1054		堀田 筧三	眼	大手校	大手町八丁目	中 127	
中道 吉亮	耳	袋町校	大手町五丁目	中 3387		田村 矯郎	小	大手校	大手町八丁目	中 475	
佐波古直明	婦	袋町校	細工町	中 2667		黒川 巖	内	大手校	大手町八丁目	中 1130	500
吉村 喜作	内	千田校	東千田町	中 1159	100	三宅 坦	外	本川校	鷹匠町	西 2426	
京橋 一久	内	千田校	千田町一丁目	中 2053		進藤 憲	婦	本川校	十日市町	西 1289	
越智シゲル	内	中島校	中島本町	中 7619		松本 易二	婦	本川校	十日市町	西 2338	
原田 弘道	外	中島校	中島本町	中 1221	150	大内 五良	外	本川校	堺町一丁目	西 393	
坪井 義晴	婦	中島校	中島新町	中 4314	100	伊藤 驥造	婦	本川校	堺町一丁目	西 3465	
東 恒一	皮	中島校	天神町	中 1084		長沼孝之助	外	神崎校	西新町	西 3734	
植田 秀嶺	婦	中島校	天神町	中 978	150	樽屋 五郎	外	神崎校	西新町	西 306	
筑紫 秀雄	眼	中島校	天神町	中 1583		成川 光吉	皮	神崎校	西新町	西 1666	
蔵本 積	内	中島校	天神町	中 1288		土谷 剛治	外	神崎校	西新町	西 873	
津田 享平	婦	中島校	天神町	中 47		香川 景久	内	神崎校	舟入本町	西 994	
酒井 文一	内	中島校	天神町	中 4912		江下 良彦	外	神崎校	河原町	西 1074	
進藤 哲郎	小	中島校	天神町	中 97		松尾 信吉	外	神崎校	河原町	西 628	
光本 天造	耳	中島校	木挽町	中 2745	50	笠坊 博之	皮	天満校	堺町四丁目	西 2091	
三宅 良一	眼	中島校	水主町	中 3333	150	白井 貞之	外	天満校	堺町四丁目	西 510	

長谷 信夫	皮	本川校	塚本町	西 1698		兒玉 克己	内	天満校	西天満町	西 3796	
坪井 次郎	外	本川校	猫屋町	西 2405		高田 敦二	内	廣瀬校	西引御堂町	西 571	
今井 蔵六	耳	本川校	猫屋町	西 553		網本次郎三	婦	舟入校	舟入幸町	西 821	
今川 卓治	内	本川校	猫屋町	西 2061		白上 義男	肛		横川町一丁目	西 3253	
正岡 旭	婦	本川校	猫屋町	西 3747		津田 秀雄	内		横川町二丁目	西 2156	
後藤 了	外		三篠本町一丁目	西 1485		日本製鉄所 広島製作所 医務局診療所	全		仁保町延命	中 4010	
長崎 五郎	内		三篠本町一丁目	西 2436		大和紡績広 島人絹工場 医務局診療所	全		宇品町	中 6600	
永田熊太郎	呼	古田校	古田町	草津 7		仁保の浦病 院	内		仁保町楠那	中 317	
東洋紡績広 島工場医務 局診療所	全		西蟹屋町	中 1205							

別紙第三十三号ノ二

学校救護所調査表

分団名	救護所名	担当者名	収容人員
	広島中央特設救護所	医師 松原 義正	1,000
青崎分団	青崎国民学校特別救護所	国民学校長 寺田 栄	1,000
矢賀分団	矢賀国民学校特別救護所	国民学校長 林 伍一	500
尾長分団	尾長国民学校特別救護所	国民学校長 西尾 静夫	1,000
荒神分団	荒神国民学校特別救護所	国民学校長 前田 暁	1,000
牛田分団	牛田国民学校特別救護所	国民学校長 川崎 政信	500
白島分団	白島国民学校特別救護所	国民学校長 小迫 一二三	1,000
幟町分団	幟町国民学校特別救護所	国民学校長 台 嘉治	2,000
竹屋分団	竹屋国民学校特別救護所	国民学校長 間賀田 琢爾	1,000
段原分団	段原国民学校特別救護所	国民学校長 香川 軍二	1,000
比治山分団	比治山国民学校特別救護所	国民学校長 小林 宇市	1,500
仁保分団	仁保国民学校特別救護所	国民学校長 宮武 千穎	3,000
楠那分団	楠那国民学校特別救護所	国民学校長 松田 常一	1,000
大河分団	大河国民学校特別救護所	国民学校長 林 哲夫	1,500
皆実分団	皆実国民学校特別救護所	国民学校長 佐々木 哲	800
宇品分団	宇品国民学校特別救護所	国民学校長 檜垣 兵市	2,000
似島分団	似島説教場	国民学校長 伊藤 四郎	300
千田分団	千田国民学校特別救護所	国民学校長 砂本 静一	500
大手分団	大手国民学校特別救護所	国民学校長 伊藤 幸	1,000
袋町分団	袋町国民学校特別救護所	国民学校長 玉木 知	1,000
中島分団	中島国民学校特別救護所	国民学校長 伊藤 一義	300
廣瀬分団	廣瀬国民学校特別救護所	国民学校長 小松 百合男	1,500
本川分団	本川国民学校特別救護所	国民学校長 惣野 眞澄	3,000
神崎分団	神崎国民学校特別救護所	国民学校長 戸津川 繁藏	1,500
舟入分団	舟入国民学校特別救護所	国民学校長 畠 耕造	500
江波分団	江波国民学校特別救護所	国民学校長 高沖 駿	500
観音分団	観音国民学校特別救護所	国民学校長 菅尾 格郎	1,000
天満分団	天満国民学校特別救護所	国民学校長 堀川 一眞	3,000
福島分団	福島国民学校特別救護所	国民学校長 田辺 博人	2,000
三篠分団	三篠国民学校特別救護所	国民学校長 日原 範一	5,000
己斐分団	己斐国民学校特別救護所	国民学校長 中村 美之	1,000
古田分団	古田国民学校特別救護所	国民学校長 橋本 千代	1,000
草津分団	草津国民学校特別救護所	国民学校長 原田 智	1,000
大芝分団	大芝国民学校特別救護所	国民学校長 金谷 秀造	3,000

別紙第三十四号

救護薬品購入系統

薬品名	購入先	購入先缺乏ノ場合注大系統
一、アルコール	猫屋町 石井豊三薬店	本縣警察本部ヲ通シ三共株式会社ヨリ購入ス
一、オキシドール又ハオキシフル	中島本町 三宅準作薬店	
一、重炭酸ソーダ錠	天満町 日野直作薬店	
一、石鹼(薬用)	大手町八丁目 大和屋薬店	
一、三角巾	大手町一丁目 山本宥太郎薬店	
一、脱脂綿	宇品町 山本繁薬店	
一、薬瓶	段原東浦町 山本勉薬店	
一、薬包紙	廣瀬元町 住田薬店	
一、胡麻油		
一、クロラミン錠		
一、繃帯		
一、ガーゼ		
一、油紙		
一、留針		

一、稀コード丁幾	塚町四丁目 後藤薬店 其他市内薬店	
----------	----------------------	--

別紙第三十五號

三層以上（地階アルモノハ二階）ノ鉄骨及鉄筋コンクリート造ノ建築物調査表（昭和十五年十一月末現在）

建物所在地	所有者		名称	用途	構造	階数	面積建坪	建築経過年数
	住所	氏名						
國泰寺町	國泰寺町	廣島市	市役所	廳舎	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	6,803 平方米 2,036 平方米	11 年
袋町	袋町	廣島市	国民学校	校舎	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	676 平方米 413 平方米	3 年
鍛冶屋町	鍛冶屋町	廣島市	国民学校	校舎	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,090 平方米 176 平方米	11 年
基町	廣島商工会議所	廣島商工会議所	廣島商工会議所	會議室其他	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	2,045 平方米 588 平方米	3 年
猫屋町	猫屋町	財団法人關教部	光道学校	校舎	鉄筋コンクリート	地上三階 地下ナシ	442 平方米	15 年
上流川町	上流川町	中國新聞社	中國新聞社	營業所及講堂	鉄筋コンクリート	地上三階	1,071 平方米	12 年
上流川町	上流川町	中國建物株式会社	中國ビル	事務所	鉄筋コンクリート	地上十階	1,431 平方米	3 年
上流川町	東京都麹町内山下町一ノ一	日本勸業銀行	日本勸業銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上二階 地下一階	1,857 平方米 714 平方米	8 年
下柳町	下柳町	廣島合同貯蓄銀行	廣島合同貯蓄銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,034 平方米 109 平方米	2 年
八丁堀	大阪御堂通一ノ一五	福德生命	旧館福屋	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	2,758 平方米	9 年
八丁堀	八丁堀	福屋	百貨店	營業所	鉄筋コンクリート	地上八階 地下二階	8,790 平方米 2,056 平方米	2 年
中島本町	中島本町	呉服店大正屋	呉服店大正屋	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	839 平方米 142 平方米	11 年
袋町	東京日本橋区本名町	日本銀行	日本銀行	營業所	鉄骨鉄筋コンクリート	地上二階 地下一階	2,076 平方米 1,057 平方米	3 年
大手町三丁目	大手町三丁目	瓦斯電軌	日本發送電廣島支店	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,244 平方米 189 平方米	4 年
大手町二丁目	大手町二丁目	銀行集会所	銀行集会所	集会所	鉄筋コンクリート	地上三階	1,181 平方米	4 年
大手町二丁目	大阪市東区今橋三ノ二一	三和銀行	三和銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	1,986 平方米	9 年
紙屋町	大阪市東区北浜町	住友ビルディング	住友ビル	營業所	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	2,554 平方米 184 平方米	11 年
紙屋町	紙屋町	藝備銀行	藝備銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上五階 地下一階	3,914 平方米 749 平方米	13 年
平田屋町	東京麹町永樂町	安田銀行	安田銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	587 平方米	16 年
革屋町	東京麹町区鑑河岸	安田生命	安田生命	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	475 平方米	18 年
袋町	東京麹町区鑑河岸	明治生命	明治生命	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	1,435 平方米	10 年
小町	小町	廣島電気会社	廣島電気会社	營業所	鉄筋コンクリート	地上五階 地下一階	3,913 平方米 864 平方米	19 年
東魚屋町	東京日本橋区通	日華生命	八千代ビル	事務所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	665 平方米 321 平方米	12 年
南千田町	大阪市北区中島二二五	帝國人絹会社	帝國人絹会社	事務所	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	1,811 平方米 333 平方米	15 年
三篠本町	廣島市小町	廣島電気	電気試験所	事務所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,114 平方米 33 平方米	2 年
堀川町	横浜市鶴見区生麦町	株式会社金港商店	キリンビヤホール	飲食店	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	612 平方米 354 平方米	2 年

別紙第三十六號

火災及耐火防毒ノ避難場所調査表

分団名	避難所	火災時又ハ耐弾防毒ノ別	收容範圍	收容人員
牛田	早稲田区早稲田神社	火災	早稲田、本町区	1,600
	南区教員養成所	火災	南区	1,500
	新町区日通寺	火災	新町区	600
荒神	荒神国民学校	火災	荒神町、西蟹屋町	1,000
	荒神町常光寺	火災	荒神町	1,000

	東練兵場	火災	大須賀町外一般	無限
	大須賀町萬景寺	火災	大須賀町	600
	松原区広島駅前広場	火災	松原町、猿猴橋町	1,000
尾長	尾長町片河山	火災	尾長町外一般	無限
	東蟹屋町藤野製麵会社広場	火災	東蟹屋町	2,000
矢賀	矢賀町矢賀山	火災		無限
	矢賀町古城山	火災		無限
青崎	仁保字大原大原神社	火災	向洋一円	無限
	仁保字大森向洋説教場	火災	向洋一円	500
	仁保字堀越今宮神社	火災	堀越一円	無限
段原	桐木町比治山神社	火災	桐木町	100
	稲荷町稲荷神社	火災	稲荷町	200
	松原町法正寺	火災	松川、比治山、稲荷町	300
	比治山長広寂寺	火災	松川、比治山、稲荷町	300
	松原町東浦明泉寺	火災	東浦、大畑町	300
	段原長多聞院	火災	土手、比治山、段原町	150
	比治山公園	火災	段原、大島、東浦、山崎、日ノ出、桐木、比治山町	無限
	長性院	火災	段原町	200
	金屋町専律寺	火災	金屋町、京橋町	200
	段原末広広報徳説教場	火災	段原末広町	300
	比治山本町善教寺	火災	比治山本町	250
	比治山中町仙光山広場	火災	比治山本町	150
比治山	比治山公園	火災	全般	無限
	私立女子商業学校	火災	南段原、段原中町	2,000
	段原中町養立寺	火災	南段原、段原中町	2,000
	段原新町菊湯西側広場	火災	段原新町	1,000
	第一国民学校	火災	段原山先町、段原日ノ出町	3,500
	比治山国民学校	火災	東雲町	1,500
	南蟹屋町亀田製砥所	火災	南蟹屋町	1,600
	大州町競馬場	火災	大州町	1,600
皆実	翠町縣立第一中学校寄宿舎	火災	翠町	400
	翠町中村壽一宅北側広場	火災	翠町	300
	縣立師範学校々庭	火災	皆実町一丁目	600
	皆実町福原一宅前空地	火災	皆実町一丁目	600
	皆実町電信隊北側空地	火災	皆実町一丁目	800
	皆実町二丁目南国民学校	火災	皆実町二、三丁目	800
	皆実町二丁目説教場	火災	皆実町二、三丁目	120
	皆実町三丁目凱旋碑前	火災	皆実町三丁目	100
	光円寺跡空地	火災	皆実町三丁目	500
	広島高等学校	火災	皆実町三丁目	3,000
仁保	仁保町本浦仁保神社	火災	本浦区全般	300
	仁保町本浦説教場	火災	本浦区全般	300
	仁保町濱崎西福時	火災	濱崎区全般	1,000
	仁保国民学校	火災	東浦濱崎	3,000
大河	大河国民学校	火災	霞町、旭町、出汐町	1,500
	大河町説教場	火災	大河全般	200
	霞町 城山	火災	全般	無限
	比治山	火災	全般	無限
	出汐町説教場	火災	出汐町	200
楠那	日宇那説教場	火災	日宇那全般	300
	日宇那愛育園	火災	日宇那全般	100
	楠那国民学校	火災	日宇名、丹那区	2,000
	丹那説教場	火災	丹那区	200
	丹那 工場	火災	丹那区	50
宇品	宇品町御幸通千曉寺	火災	御幸通自一丁目至四丁目	500
	宇品国民学校	火災	御幸通自七丁目至十丁目	2,000
	宇品朝鮮だ公園	火災	御幸通自十一丁目至十七丁目	2,000
	宇品町広陵中学校	火災	御幸通自十一丁目至十七丁目	2,000
	広島女子専門学校	火災	神田通自八丁目至十四丁目	1,000
	宇品町神田神社	火災	神田通自四丁目至七丁目	200
	宇品学園	火災	神田通自四丁目至七丁目	300
	内務省埋立広場	火災	海岸通一円	3,000
	元宇品町元宇品分教場	火災	元宇品町一円	500
似島	似島国民学校	火災	似島町全般	300
白島	東泉寺河原	火災	白島九軒町、中町、東白島町	無限
	長壽園河原	火災	西白島町	無限
	工兵隊河原	火災	白島西中町、白島北町	無限
	饒津神社	火災	二葉ノ里	無限

幟町	上柳町土手空地	火災	上柳町	1,600
	下柳町合同貯蓄銀行浦空地	火災	下柳町、銀山町	1,600
	幟町カトリック教會	火災	幟町	400
	幟町國民学校	火災	幟町、東胡町	2,000
	上流川町泉邸前松原	火災	幟町、上流川町、鉄砲町	2,500
	上流川町安田空地	火災	上流川町	400
	第一徴兵保険株式会社	火災	上流川町、斜屋町	500
	鉄砲町杉江空地	火災	鉄砲町	240
	鉄砲町超覺寺	火災	鉄砲町	400
	西練兵場	火災	鉄砲町、八丁堀、其他	5,000
	橋本町明神社	火災	橋本町	240
	石見屋町正光寺	火災	石見屋町	400
	山口町、下柳町電車通空地	火災	山口町	400
	銀山町徳永寺	火災	銀山町	100
	胡町古川空地	火災	胡町	250
	胡町胡神社	火災	胡町	100
	堀川町永照寺	火災	堀川町	300
	堀川町般舟寺	火災	堀川町	500
	弥生町遊郭事務所	火災	弥生町	500
	上流川町日本勸業銀行	耐震	上流川町、東胡町、斜屋町	100
下柳町広島合同貯蓄銀行	耐震	下流川町、山口町、石見屋町	100	
八丁堀福屋百貨店	耐震	八丁堀、東魚屋町、元町	230	
八丁堀福屋百貨店旧館	耐震	八丁堀、東魚屋町、元町	160	
八丁堀福德生命保険会社	耐震	八丁堀、東魚屋町、元町	100	
中國新聞社	耐震	胡町、鉄砲町、上流川町	100	
中國ビル	耐震	胡町、鉄砲町、上流川町	300	
袋町	東魚屋町中ノ棚魚市場	火災	東魚屋町	300
	立町崇徳教社	火災	立町	200
	立町誓立寺	火災	立町	150
	研屋町勝順寺	火災	研屋町	150
	憲兵分隊前	火災	研屋町	500
	袋町國民学校	火災 耐震	播磨屋町、革屋町、紙屋町、西魚屋町	300 180
	中町長谷川小路広場	火災	中町	90
	中町東医院広場	火災	中町	140
	新川場町妙慶寺	火災	新川場町	500
	新川場町聖光寺	火災	新川場町	500
	下中町広島医師会館	火災	下中町其他	500
	下中町縣立高等女学校	火災	下中町其他	2,000
	小町國泰寺	火災	小町	300
	小町白神社	火災	尾道町、大手町	300
	広島護國神社前	火災	猿楽町其他一般	5,000
	記念碑前	火災	猿楽町其他一般	1,000
	細工町西向寺	火災	細工町	100
	細工町西蓮寺	火災	細工町	100
	鳥屋町、元安川大手町三丁目河原	火災	鳥屋町、大手町	100
	大手町二丁目三和銀行	耐震	大手町二丁目	100
	大手町二丁目銀行集会所	耐震	大手町二丁目	120
	大手町三丁目日本放送電広島支店	耐震	大手町三丁目、鳥屋町	230
	大手町五丁目神宮境内	火災	大手町五丁目	150
	塩屋町専勝寺	火災	塩屋町北部	100
	袋町日本銀行南側	火災	塩屋町南部	100
	袋町日本銀行	耐震	袋町、塩屋町	160
	袋町山陽記念館	火災	袋町、塩屋町	150
	袋町妙蓮寺	火災	袋町、塩屋町	50
	西魚屋町明治生命保険会社	耐震	西魚屋町	100
	紙屋町住友銀行	耐震	西魚屋町、紙屋町	370
	紙屋町藝備銀行	耐震	紙屋町、猿楽町	150
	猿楽町産業奨励館	耐震	猿楽町、横川細工町、鳥屋町	600
	基町広島商工会議所	耐震	基町、猿楽町、細工町	500
	平田屋町安田銀行	耐震	平田屋町、鉄砲屋町	30
	革屋町安田生命保険会社	耐震	革屋町	50
	小町広島電気会社	耐震	小町、大手町七丁目	490
東魚屋町日華生命保険会社	耐震	東魚屋町、立町	130	
金港商会	耐震	平田屋町	220	
竹屋	三川町、広島地方裁判所構内	火災	三川町、新天地、竹屋町	1,000
	三川町円隆寺	火災	三川町、富士見町	1,000
	進徳女学校	火災	富士見町其他	1,000

	広島文理科大学グラウンド	火災	昭和町其他	1,000
	下流川町常林寺	火災	下流川町、田中町	700
	薬研掘禪昌寺	火災	薬研掘、新天地	500
	平塚町興善寺	火災	平塚町、鶴見町	500
	平塚町順教寺	火災	平塚町、鶴見町	200
	竹屋国民学校	火災	宝町、鶴見町	1,000
	山陽中学校	火災	宝町、鶴見町	1,000
大手町	縣立第一中学校	火災	国泰寺町、雑魚場町、大手町	4,300
	雑魚場町通信省用地	火災	国泰寺町、雑魚場町、大手町	2,600
	広島市公会堂	火災	国泰寺町、雑魚場町、大手町	200
	広島市役所地下室	耐震	国泰寺町、雑魚場町、大手町	600
	大手国民学校	火災	大手町	1,000
	大手町七丁目金比羅神社	火災	大手町	50
	大手町七丁目普門寺	火災	大手町	100
	大手町七丁目長遠寺	火災	大手町	180
	大手町七丁目元電気会社跡	火災	大手町	100
	大手町七丁目三宅兼一宅	火災	大手町	150
	大手町七丁目本選寺	火災	大手町	200
	大手町七丁目長久寺	火災	大手町	300
	大手町七丁目佐野昆布工場	火災	大手町	100
	大手町七丁目広島貯金支局	火災	大手町	50
	広島高師付属国民学校	火災	雑魚場町	1,500
	大手町八丁目堀田医院	火災	大手町	80
	東本願寺別院	火災	大手町	450
	広島電気会社変電所	火災	大手町	220
	広島水産会社	火災	大手町	1,000
	別天座	火災	大手町	400
千田	広島文理大学運動場	火災	千田町、東千田町	2,000
	修道中学グラウンド	火災	東千田町	2,000
	広島貯金支局地下室	耐震	東千田町	600
	進徳高等女学校グラウンド	火災	南竹屋町、平野町	2,000
	南千田町帝國人絹会社	耐震	南千田町	350
	千田国民学校	火災	管内全般	2,500
中島	中島本町慈仙寺	火災	中島本町	1,000
	元柳町浄法寺	火災	中島本町	450
	天神町起念寺	火災	天神町、元柳町	700
	天神町天城慶一宅	火災	天神町、元柳町	500
	材木町誓願寺	火災	材木町	700
	材木町妙法寺	火災	材木町	200
	木挽町持明院	火災	木挽町	300
	木挽町福壽院	火災	木挽町	400
	中島新町西應寺	火災	中島新町	500
	中島新町善福寺	火災	中島新町	500
	水主町武徳殿	火災	水主町	700
	水主町住吉神社	火災	水主町	300
	水主町説教場	火災	水主町	700
	水主町浅野邸園	火災	水主町	300
	水主町円八寺	火災	水主町	1,500
	吉島町南部空地	火災	吉島町	1,600
	吉島長北部空地	火災	吉島町	300
	吉島羽衣町浅野男爵空地	火災	吉島羽衣町	1,900
	吉島本町畑地三ヶ所	火災	吉島本町	2,800
	中島国民学校	火災	管内全般	1,000
中島本町大正屋呉服店	耐震	中島本町、材木町	130	
廣瀬	廣瀬国民学校	火災	広瀬北町	1,500
	寺町本願寺広島別院	火災	寺町、西引御堂町	1,000
	廣瀬神社	火災	広瀬町、西九軒町、西引御堂町、錦町	1,000
本川	空鞆神社	火災	空鞆町東部	100
	鷹匠町清住寺	火災	鷹匠町東部	500
	鷹匠町幼稚園	火災	鷹匠町中組	80
	鷹匠町土井木材店倉庫	火災	鷹匠町南組	250
	本川国民学校	耐震 火災	鍛屋町、塚本町、左官町	160 3,000
	塚本町古川商店倉庫	火災	塚本町	150
	塚町一丁目養徳院	火災	塚町一丁目其他	450
	左官町本覚寺	火災	左官町	100
	猫屋町光道学校	耐震	猫屋町	45
	猫屋町妙教寺	火災	猫屋町東	300

	猫屋町教西寺	火災	猫屋町西	500
神崎	河原町集会所	火災	河原町、西地方町	30
	小網町三光寺	火災	西新町、小網町、小舟	50
	神崎国民学校	火災	舟入町、舟入仲町、舟入幸町、河原町	2,000
舟入	舟入幸町伊達医院	火災	舟入幸町	20
	舟入国民学校	火災	舟入幸町、舟入川口町	2,000
江波	江波公園	火災	江波町一円	無限
	射の場	火災	江波町一円	無限
天満	小網町土手広場	火災	榎町三、四丁目	200
	天満国民学校	火災	天満町外全般	2,000
	北榎町電話局広場	火災	北榎町其他	500
	新市町車置場	火災	新市町	100
	横堀町辻本工場広場	火災	横堀町	200
	天満町宮原倉庫	火災	天満町	100
	天満町明治足袋会社	火災	西天満町	150
	西天満町正山説教場	火災	北天満町	100
	西天満町廣瀬橋下北土手	火災	北天満町	200
西天満町長行寺當太郎宅前	火災	西天満町	100	
観音	縣立第二中学校	火災	西観音町一丁目、観音本町	1,500
	私立商業学校	火災	南観音町三丁目	1,000
	観音国民学校	火災	東観音町一、二丁目	1,000
	西高等女学校	火災	東観音町二丁目、西観音町一丁目	500
	南観音町大師堂	火災	南観音町三丁目	300
	東観音町二丁目観音院	火災	東観音町二丁目	500
	西観音町一丁目稻荷教会	火災	西観音町一丁目	500
	第二国民学校	火災	南観音一、二丁目	1,000
福島	福島国民学校	火災	福島町	2,000
	福島町愛光園	火災	福島町	1,000
三篠	三瀧町三瀧山	火災	管内全般	無限
	大芝町大芝公園	火災	管内全般	3,000
	大芝国民学校	火災	管内全般	2,000
	三篠国民学校	火災	管内全般	5,000
	三篠本町三篠神社	火災	三篠本町	500
	新庄町元新庄神社跡	火災	新庄町	3,000
	三篠本町興隆寺	火災	三篠本町	1,000
三篠本町広島電気試験所	耐弾	三篠本町	190	
己斐	己斐国民学校	火災	管内全般	1,000
	旭山神社	火災	管内全般	無限
	己斐上町区	火災	管内全般	無限
古田	古田町高須会館	火災	高須区一円	200
	古田町古江会館	火災	古江区一円	200
	古田町田方産業組合	火災	田方区一円	200
草津	草津東町鷺森神社	火災	草津東町	50
	草津東町慈光寺	火災	草津東町	30
	草津国民学校	火災	草津東町	1,000
	草津託児所	火災	草津東町	70
	草津本町西楽寺	火災	草津本町	250
	草津本町教専寺	火災	草津本町	250
	草津本町浄教寺	火災	草津本町	200
	草津本町常盤座	火災	草津本町	250
	草津南町魚市場	火災	草津南町	450
	草津浜町青年会館	火災	草津浜町	200
	草津浜町共同牡蠣処理場	火災	草津浜町	200
	庚午町光明團本部	火災	庚午町一円	200

別紙第三十七號

退避防空壕調

分團名	設置場所	収容人員	施設者	分團名	設置場所	収容人員	施設者
大手	大手国民学校々庭	20	大手国民学校	皆実	皆実国民学校々庭	30	皆実国民学校
牛田	牛田国民学校々庭	20	牛田国民学校	舟入	舟入国民学校々庭	20	舟入国民学校
尾長	尾長国民学校々庭	20	尾長国民学校	本川	本川国民学校々庭	20	本川国民学校
宇品	宇品国民学校々庭	20	宇品国民学校	袋町	袋町国民学校々庭	20	袋町国民学校
似島	似島国民学校々庭	20	似島国民学校	大河	大河国民学校々庭	20	大河国民学校
竹屋	竹屋国民学校々庭	20	竹屋国民学校	荒神	荒神国民学校々庭	20	荒神国民学校
轅町	轅町国民学校々庭	20	轅町国民学校	矢賀	矢賀国民学校々庭	20	矢賀国民学校
中島	中島国民学校々庭	20	中島国民学校	青崎	青崎国民学校々庭	20	青崎国民学校
神崎	神崎国民学校々庭	20	神崎国民学校	段原	段原国民学校々庭	20	段原国民学校

大芝	大芝国民学校々庭	20	大芝国民学校	比治山	比治山国民学校々庭	20	比治山国民学校
天満	天満国民学校々庭	20	天満国民学校	楠那	楠那国民学校々庭	20	楠那国民学校
観音	観音国民学校々庭	20	観音国民学校	白島	白島国民学校々庭	20	白島国民学校
福島	福島国民学校々庭	20	福島国民学校	千田	千田国民学校々庭	20	千田国民学校
三篠	三篠国民学校々庭	20	三篠国民学校	廣瀬	廣瀬国民学校々庭	20	廣瀬国民学校
己斐	己斐国民学校々庭	20	己斐国民学校	江波	江波国民学校々庭	20	江波国民学校
草津	草津国民学校々庭	20	草津国民学校	古田	古田国民学校々庭	20	古田国民学校
比治山	第一国民学校々庭	20	第一国民学校	宇品	神田通十五丁目	20	隣保班
皆実	第三国民学校々庭	20	第三国民学校	宇品	神田通千秀園	20	田中喜四郎
白島	白島国民学校裏側	10	白島警防分團	似島	似島町	180	各隣保班
皆実	皆実町三丁目鷹ノ記念碑構内	50	皆実警防分團	大河	昭和高等女学校々庭	20	昭和高等女学校
大手	國泰寺町公会堂構内	20	大手警防分團	大河	小川工場前	40	小川工場
本川	左官町清住寺境内	20	本川警防分團	大河	出汐町716	43	石井助一
舟入	舟入川口町小公園豫定地	50	舟入警防分團	楠那	日宇那漁業組合市場	15	日宇那漁業組合
江波	江波町自動車ポンプ車庫	50	江波警防分團	皆実	翠町1490	20	田中秀徳
観音	観音本町市商裏バス停留所前	30	観音警防分團	皆実	翠町1589	10	上村龍夫
草津	草津国民学校正門前空地	30	草津国民学校	皆実	皆実町二丁目250	20	隣保班
千田	市立第二工業学校々庭	20	市立第二工業学校	皆実	皆実町二丁目484	25	隣保班
千田	進徳高等女学校々庭	20	進徳高等女学校	皆実	皆実町二丁目789	20	隣保班
千田	修道中学校々庭	20	修道中学校	皆実	皆実町二丁目136	30	隣保班
千田	広島高等学校々庭	20	広島高等学校	皆実	皆実町三丁目官有31	20	隣保班
千田	千田町三丁目	20	吉村喜作	幟町	広島女学院校庭	20	広島女学院
千田	廣島縣立工業学校々庭	20	廣島縣立工業学校	尾長	松本商業学校々庭	20	松本商業学校
千田	山中高等女学校々庭	20	山中高等女学校	竹屋	山陽中学校々庭	20	山陽中学校
宇品	広陵中学校々庭	20	広陵中学校	比治山	広島女子商業学校々庭	20	広島女子商業学校
宇品	広島女子専門学校々庭	20	広島女子専門学校	段原	比治山本町鈴川寛一裏	20	縣設置
段原	比治山公園遊技場北東端	60	段原東浦町十五、十六ノ隣組ニテ設置	観音	西高等女学校々庭	20	西高等女学校
段原	段原新町今田金ペン工場内	10	今田工場	三篠	崇徳中学校々庭	20	崇徳中学校
段原	段原東浦町岡村方裏	5	段原東浦町十七、十八ノ隣組ニテ設置	三篠	安藝高等女学校々庭	20	安藝高等女学校
段原	的場町三木方裏	5	的場町渡辺請負業	江波	縣立商業学校々庭	20	縣立商業学校
大手	縣立第一中学校々庭	20	縣立第一中学校	袋町	縣立高等女学校々庭	20	縣立高等女学校
観音	縣立第二中学校々庭	20	縣立第二中学校	舟入	市立高等女学校々庭	20	市立高等女学校
観音	市立商業学校々庭	20	市立商業学校	廣瀬	広島別院境内	50	寺町々内会

別紙第三十八號

工作班ヲ編成セシムヘキ事業者表(昭和十五年十一月末現在)

事業者別	名稱	所在地	代表者氏名
電気事業	廣島電気株式会社	廣島市小町三三	鈴川 寛一
電気事業	大崎電気株式会社	廣島市昭和町	山口 吾一
軌道	広島瓦斯電軌株式会社	廣島市千田町	同人
瓦斯事業	広島瓦斯電軌株式会社	廣島市千田町	同人

別紙第三十九號ノ一

米穀類配給所一覽表

分團名	配給所名	所在地	電話番号	配給ニ従事スヘキ責任者氏名
青崎分團	向洋配給所	仁保町青崎175-1	②呼出 0975	沖田 峯治
仁保分團	湊崎配給所	仁保町伏纏316	②呼出 2743	櫻井 律太郎
大河分團	大河配給所	仁保町大河1885	② 2444	浜西 健一
尾長分團	尾長配給所	尾長町299	② 5079	角谷 保吉
尾長分團	愛宕配給所	愛宕	② 3243	三升 益太郎
比治山分團	大洲配給所	大洲町135	②呼出 4658	久保田 唯夫
荒神分團	荒神配給所	西蟹屋町222	② 2246	大西 未登
荒神分團	松原配給所	松原町642	②呼出 6930	田中 政吉
段原分團	京橋配給所	京橋町89	② 1331	山田 栄蔵
段原分團	段原配給所	段原大畑町26	② 2155	加納 利一
比治山分團	日ノ出配給所	段原日ノ出町	②呼出 1216	神明 五郎
段原分團	東段原配給所	段原末広町	② 5785	増原 順太郎
段原分團	柳橋配給所	土手町	② 4837	楠田 勇夫
段原分團	比治山配給所	金屋町34	② 4541	松村 清一
皆実分團	下皆実町配給所	皆実町三丁目2011	② 3144	田村 才四郎
皆実分團	上皆実町配給所	皆実町被服廠通	② 4659	中祖 焚次郎
宇品分團	宇品上組配給所	宇品町御幸通十一丁目	② 6585	坂本 孫義
宇品分團	宇品中部配給所	宇品町御幸通五丁目	② 6963	村井 又四郎
宇品分團	宇品海岸通り配給所	宇品町328	② 1473	國廣 積
宇品分團	向宇品配給所	元宇品町	②呼出 1735	大須賀 勇二
竹屋分團	薬研掘配給所	薬研掘町34	② 3737	坪谷 多作

竹屋分團	平塚配給所	平塚町 338-1	② 2414	小谷 彌市
幟町分團	鉄砲町配給所	鉄砲町 16	② 5087	八木 午吾
幟町分團	鶴見橋配給所	平塚町 52	② 1146	平松 正義
竹屋分團	下流川町配給所	竹屋町	② 5845	木下 三郎
幟町分團	幟町配給所	幟町 14	② 7874	平岩 清
竹屋分團	昭和下組配給所	昭和町 562	② 5270	横山 喜一
竹屋分團	昭和上組配給所	昭和町 559	② 5239	田原 稔
竹屋分團	竹屋橋配給所	竹屋町 38	② 4772	景山 静人
大手分團	富士見橋配給所	雑魚場町 273	② 1653	木谷 英荘
袋町分團	新川場配給所	新川場町 273	② 3029	小畑 巖
袋町分團	猿楽町配給所	猿楽町	② 6047	木村 松之助
袋町分團	尾道町配給所	尾道町 90	② 4926	梶川 寅一
大手分團	大手町八丁目配給所	大手町八丁目 65	② 2840	丸山 滝蔵
千田分團	千田町配給所	千田町二丁目	② 3141	上田 正純
大手分團	鷹野橋配給所	大手町九丁目	② 2065	古田 徳太郎
中島分團	中島配給所	中島新町 99	② 1627	木村 律
中島分團	水主町配給所	水主町 518	② 4660	朝田 良一
江波分團	江波配給所	江波町	③呼出 3640	清見 庄一
舟入分團	舟入川町配給所	舟入川町	③ 1291	勝矢 開治
神崎分團	神崎西部配給所	舟入本町 208	③ 0918	上岡 勇人
神崎分團	神崎北部配給所	河原町 72	③ 1826	新見 米司
神崎分團	神崎中部配給所	河原町 132-8	③ 1333	光廣 三郎
神崎分團	神崎東部配給所	河原町 194	③ 1124	藤居 豊三
観音分團	観音東部配給所	東観音町二丁目 181	③呼出 1174	古田 三津蔵
観音分團	西観音配給所	西観音町二丁目	③ 3775	橋田 好之
観音分團	天満配給所	西観音町一丁目	③ 2511	正岡 登
天満分團	上天満配給所	上天満町	③ 2424	大本 壽一郎
三篠分團	中広町配給所	中広町		山本 繁
本川分團	本川第二配給所	塚本町	③ 1968	渡辺 戎三
天満分團	新市配給所	西大工町	③ 2050	中川 友吉
広瀬分團	広瀬第二配給所	広瀬元町	③ 2960	又田 悟
広瀬分團	広瀬第一配給所	広瀬北町	③ 1117	西原 源一
広瀬分團	本川北組配給所	西引御堂町	③ 2695	西浦 敏郎
白島分團	西白島配給所	西白島町 33	② 0741	保田 廣市
白島分團	東白島配給所	東白島町官有 46	② 3464	石原 友一
牛田分團	上牛田配給所	牛田町 1269	② 3065	高野 久雄
牛田分團	下牛田配給所	牛田南町	② 4017	橋本 一二見
三篠分團	横川配給所	横川町二丁目 1025	③ 0524	武分 豊
三篠分團	三篠第一配給所	三篠本町二丁目 1222-1	③ 2655	黒田 定四郎
福島分團	下福島配給所	福島町 445-2	③ 2314	原 詳次郎
福島分團	上福島配給所	福島町 81-1	③ 2594	吉田 徹郎
己斐分團	己斐配給所	己斐町 227	③ 0772	竹本 常吉
古田分團	高須配給所	古田町高須 234		品川 君雄
草津分團	草津配給所	草津浜町 784	草津 1	諏訪 勲造
似島分團	似島配給所	似島		清見 ヨシ子

別紙第三十九號ノ二

寝具ノ種類数量所在地調査表 [※印は本誌中「分團配給部員」]

寝具ノ種類及数量(枚)			所在地	氏名	配給従事者	寝具ノ種類及数量(枚)			所在地	氏名	配給従事者
掛布団ノ数量	敷布団ノ数量	其他数量				掛布団ノ数量	敷布団ノ数量	其他数量			
32	16	—	西地方町	土井 ハツノ	※	45	40	—	東魚屋町	佐々木 綾子	※
24	12	—	河原町	谷原 静太郎	※	100	50	—	紙屋町	元木 クシ	※
30	20	—	新川場町	田中 助太郎	※	60	30	—	紙屋町	村田 ツネ	※
60	35	—	新川場町	上野 トク	※	30	30	—	紙屋町	徳橋 ナツ	※
50	40	—	立町	松浦 ツル	※	50	30	—	紙屋町	佐伯 トク	※
25	25	—	立町	渡辺 サツヨ	※	30	17	—	研屋町	草田 フサミ	※
40	30	—	立町	和泉 ミチヨ	※	80	43	—	紙屋町	檜山 市蔵	※
130	65	—	立町	平岡 サカエ	※	45	30	—	大手町一丁目	友芳 清一	※
60	25	—	立町	原田 シゲ子	※	270	90	—	大手町一丁目	松本 茂子	※
40	20	—	東魚屋町	今井 ヒサ	※	60	10	—	鳥屋町	吉野 サダ	※
120	70	—	東魚屋町	高橋 キミエ	※	70	37	—	大手町一丁目	阿部 シズエ	※
90	40	—	東魚屋町	岡村 定	※	40	30	—	猿楽町	杉浦 タマヨ	※
45	40	—	東魚屋町	末本 アキヨ	※	25	16	—	猿楽町	檜山 セキ	※
80	50	—	東魚屋町	木原辰右衛門	※	65	40	—	猿楽町	秋島 春三	※
35	25	—	東魚屋町	井原 ハル子	※	20	10	—	猿楽町	小川 チヨノ	※
115	115	—	鳥屋町	寺田 武蔵	※	150	300	—	鉄砲屋町	田中 定吉	※
100	70	—	鳥屋町	泉 サト	※	20	40	—	播磨屋町	平石 トラヨ	※

80	80	—	鳥屋町	中近 茂	※	90	50	—	猫屋町	林 アサノ	※
28	28	—	鳥屋町	武林 テツノ	※	100	90	—	大手町三丁目	新田 トヨコ	※
33	36	—	鳥屋町	花野 シゲ	※	47	40	—	大手町三丁目	杉原 ヤス	※
60	50	—	中町	中山 キヨ	※	60	40	—	大手町三丁目	沖田 光太	※
60	40	—	中町	坂口 ミツヨ	※	105	35	—	大手町三丁目	片岡 ハル	※
120	80	—	中町	田村 博	※	80	40	—	塩屋町	森 マツ子	※
60	30	—	鉄砲屋町	水野 トシノ	※	10	15	—	塩屋町	谷 ヒデ子	※
70	40	—	鉄砲屋町	平井七右衛門	※	170	150	—	大手町五丁目	長屋 範一	※
150	150	—	鉄砲屋町	山本 富蔵	※	110	90	—	大手町五丁目	矢野 ハマヨ	※
200	100	—	鉄砲屋町	山縣 リカ	※	80	40	—	大手町五丁目	中村 千代子	※
80	120	—	鉄砲屋町	後藤 良吉	※	80	50	—	大手町五丁目	浜松 コハル	※
120	60	—	鉄砲屋町	田中 ハルミ	※	150	80	—	大手町五丁目	大谷 タツ	※
21	11	—	鉄砲屋町	内富 ヤスエ	※	240	200	—	大手町五丁目	山本 イト	※
170	75	—	鉄砲屋町	馬場 秀夫	※	80	50	—	大手町五丁目	野田 クマ	※
50	30	—	鉄砲屋町	木村 マツミ	※	100	60	—	大手町四丁目	宮本 スエノ	※
300	200	—	鉄砲屋町	平井 新七	※	100	70	—	大手町四丁目	飯田 クマ	※
80	70	—	大手町四丁目	白川 ノブ	※	40	30	—	鍛冶屋町	伊井賀田ハヤ	※
40	30	—	尾道町	有馬 柳子	※	60	30	—	鍛冶屋町	惣田 ミネ	※
80	40	—	尾道町	松田 イチヨ	※	70	40	—	鍛冶屋町	白須興 茂作	※
20	20	—	尾道町	大島 リウ	※	80	50	—	鍛冶屋町	兒玉 貞夫	※
40	20	—	尾道町	河下 キクノ	※	160	60	—	鍛冶屋町	橋本 一	※
20	10	—	西観音町二丁目	石田 ワカヨ	※	80	50	—	鍛冶屋町	大倉 ハヤノ	※
20	10	毛布 5	西観音町二丁目	中島 千太郎	※	80	40	—	鍛冶屋町	川本 キヨコ	※
150	8	—	西観音町二丁目	島村 繁雄	※	60	30	—	鍛冶屋町	松田 ハヤコ	※
20	10	—	西観音町二丁目	亀田喜和太郎	※	80	50	—	鍛冶屋町	夜陣 トモ	※
26	13	—	天満町	白井 カツエ	※	50	40	—	塚本町	吉本庄右衛門	※
20	10	—	西大工町	中山 ツネ	※	50	50	—	塚本町	吉崎 政一	※
20	10	—	西大工町	藤田 笹一	※	25	20	—	塚本町	木村 アサ	※
10	8	—	西天満町	大隈 イト	※	90	40	—	油屋町	浅枝 衛壯	※
30	15	—	東観音町一丁目	角一寛	※	100	100	—	猫屋町	石岡 通人	※
10	5	—	東観音町一丁目	友清 シン	※	17	17	—	猫屋町	川本 ヨシコ	※
14	7	—	堺町二丁目	西半 イセ	※	50	30	—	猫屋町	平本 ヒサ	※
60	30	—	新市町	江藤 幸一	※	100	40	—	猫屋町	豊用寺 登	※
19	24	—	新市町	龍川 正一	※	40	30	—	猫屋町	勝本 ツイツ	※
50	30	—	猫屋町	山田 イトノ	※	5	5	—	猫屋町	佐伯 猪三郎	※
50	50	—	猫屋町	三次 マサ	※	30	15	毛布 10	寺町	宮原 長次郎	※
50	50	—	猫屋町	坂本 ハル	※	15	10	—	寺町	山下 重代	※
30	20	—	猫屋町	門田 豊松	※	35	15	—	寺町	堀田 ツナ	※
200	200	—	猫屋町	高橋 十兵衛	※	4	4	—	三篠本町一丁目	三輪 モン	※
80	80	—	猫屋町	片山 コメ	※	40	20	—	三瀧町	松本 吉平	※
60	40	—	猫屋町	岩上 朝之助	※	67	44	—	横川町	岩崎 栄吉	※
100	50	—	猫屋町	伊藤 キシ	※	60	50	—	横川町	横崎 鶴松	※
150	80	—	猫屋町	郷田 金太	※	7	5	—	横川町	落合 タツコ	※
50	30	—	猫屋町	田村 サヤ	※	43	20	—	横川町	岡田 正人	※
30	20	—	鷹匠町	加計 直人	※	40	25	—	横川町	小谷 ミサヲ	※
50	40	—	鷹匠町	瀧廣 清	※	30	15	—	横川町	泉 カズヨ	※
30	20	—	鷹匠町	調子 フミエ	※	70	30	—	横川町二丁目	小沢 俊一	※
70	50	—	鷹匠町	兒島 キヨフ	※	26	12	—	横川町二丁目	岩崎 マツ	※
100	50	—	鷹匠町	原田 清蔵	※	60	25	—	横川町二丁目	井上 ツマ	※
20	10	—	塚本町	宮本 リヨ	※	5	5	—	横川町二丁目	中野 ミネ	※
20	10	—	鍛冶屋町	高橋 廣一	※	40	40	—	横川町一丁目	兒玉 タツエ	※
10	5	—	鷹匠町	向井 ハヤ	※	16	16	—	横川町一丁目	河内 玉市	※
25	13	—	横川町一丁目	宮川 タツエ	※	40	25	—	己斐町	円石 ヤオ	※
30	25	—	楠木町二丁目	住吉 綱一	※	20	10	—	己斐町	弘田 ハヤ子	※
22	10	—	楠木町一丁目	川口 ハル	※	20	13	—	己斐町	藤田 貞一	※
30	30	—	楠木町一丁目	奥野 ハル	※	16	14	毛布 2	草津本町	森本 マス	※
4	2	—	楠木町二丁目	松岡 柳一	※	50	40	—	庚午町	住田 都三	※
5	10	—	楠木町三丁目	中野 キセ	※	22	13	—	福島町	渡辺 ミネ子	※
30	14	—	大芝町	藤田 熊吉	※	35	20	—	福島町	塩田 ツイ	※
16	10	—	己斐町	浜中 年代	※	30	25	—	福島町	堤 チョ	※
15	10	—	己斐町	木下 スミ	※	15	50	毛布 2	上天満町	上手 幾太郎	※
24	12	—	己斐町	田中 三郎	※	15	10	—	上天満町	清水 満郎	※
28	15	—	己斐町	玉重 ミヤ	※	40	25	—	小網町	坂口 ナカ	※
20	10	—	己斐町	平木 タツ	※	10	5	—	小網町	吉川 勇	※
30	16	—	己斐町	岩崎 良雄	※	10	5	—	小網町	新納 賢吉	※
14	7	—	己斐町	若林 ハル	※	10	—	—	小網町	勝野 アイ	※
28	14	—	己斐町	村上 ノブ	※	15	15	—	小網町	八木 イワ	※
34	17	—	己斐町	兼品 耕造	※	20	15	—	西新町	平本 ヨシ子	※

20	10	—	己斐町	住田 トミノ	※	8	8	—	小網町	川崎 ヨシ	※
20	10	—	己斐町	大泉 フジ	※	11	11	—	小網町	市川 治郎一	※
41	20	—	観音本町	川崎 シン	※	80	40	—	天神町	対島 蔵一	※
40	25	—	観音本町	川崎 イネ	※	20	20	—	水主町	住田 昌枝	※
86	80	—	中島本町	堀 マチノ	※	15	10	—	江波町	野間 タケノ	※
45	31	—	中島本町	川野 上兵八	※	10	5	—	江波町	村上 シナ	※
35	25	—	中島本町	川本 アヤメ	※	25	20	—	江波町	香口 カト	※
74	50	—	中島本町	前田 イチヨ	※	170	80	—	大手町六丁目	綿谷 イソ	※
81	41	—	元柳町	村上 正明	※	200	200	—	大手町六丁目	渡辺 キヨコ	※
65	52	—	元柳町	佐々木 コメ	※	40	20	—	大手町八丁目	藤井 シゲノ	※
82	58	—	元柳町	高橋 サト	※	30	15	—	大手町八丁目	片島 チヨ	※
80	50	—	元柳町	田辺 昇作	※	35	27	—	大手町八丁目	鳴川 数太郎	※
60	30	—	中島新町	恵川 保太郎	※	100	35	—	大手町九丁目	小松 ハツノ	※
20	15	—	中島新町	曾我部 シン	※	60	50	—	大手町九丁目	土屋 健一	※
3	6	—	中島新町	遠藤 アテノ	※	25	15	—	國泰寺町	宇多 静夫	※
30	10	—	水主町	小林 幾照恵	※	6	6	—	國泰寺町	久保 ミツヨ	※
60	30	—	水主町	原 ヨシノ	※	12	6	—	國泰寺町	栗原 ヒサ子	※
60	30	—	水主町	王島 春枝	※	50	30	—	雑魚場町	上田 リウ	※
100	80	—	天神町	今村 吉蔵	※	100	35	—	雑魚場町	建畠 シズ	※
510	350	—	天神町	天城 慶一	※	100	100	—	雑魚場町	高木 マスエ	※
150	80	—	古田町	福原 英巖	※	55	22	—	松原町	野村 ハルヨ	※
22	11	—	舟入本町	木村 ナス	※	45	20	—	松原町	小迫 シズヨ	※
計	12,614	8,415	19			70	30	—	松原町	石原 栄太郎	※
30	15	—	竹屋町	下郷 熊一	※	16	10	—	松原町	中本 熊登	※
25	15	—	平塚町	緒本 ユク	※	240	155	—	松原町	沖田 幾太郎	※
38	14	—	鶴見町	田中 正一	※	50	30	—	松原町	中本 初代	※
26	13	—	平塚町	福島 リン	※	62	34	—	松原町	西谷 豊	※
12	24	—	平塚町	吉村 タマヨ	※	100	58	—	松原町	小林 三蔵	※
120	40	—	平塚町	梅原蔵左衛門	※	145	105	—	松原町	谷本 若佐	※
100	60	—	東白島町	中山 ヨシ	※	130	90	—	松原町	沖田 熊四郎	※
73	50	—	松原町	岩淵 文治	※	40	30	—	松原町	沖田 漆志	※
80	60	—	松原町	大平 チカ	※	25	25	—	松原町	中道 ツネ	※
80	75	—	松原町	岡原 澄人	※	195	110	—	松原町	土屋 タマ	※
160	70	—	松原町	沖田 國代	※	24	12	—	松原町	吉田 岸三郎	※
120	80	—	松原町	沖田 辰治	※	40	30	—	松原町	原田 唯夫	※
36	18	—	松原町	瀬越 セイ	※	48	30	—	松原町	倉本 滝蔵	※
40	20	—	松原町	加藤 リキ	※	40	20	—	松原町	川島 トラ	※
60	60	—	松原町	川島 健造	※	35	20	—	松原町	石本 タセ	※
60	30	—	猿猴橋町	大戸 チェ	※	48	35	—	東胡町	松永 ハギノ	※
42	18	—	猿猴橋町	原田 イトヨ	※	75	27	—	銀山町	南羽 智三登	※
12	8	—	猿猴橋町	原田 マス	※	32	27	—	銀山町	西谷 ツル	※
75	45	—	猿猴橋町	佐々木 障子	※	55	25	—	東胡町	奥田 トシ子	※
28	14	—	猿猴橋町	宮田 正一	※	140	32	蚊帳 166	東胡町	阿部 利之助	※
16	10	—	大須賀町	若木 タシ	※	174	27	毛布 36 蚊帳 160	東胡町	田原 十助	※
59	55	—	大須賀町	野田 和七郎	※	35	15	—	堀川町	宗像 マツ子	※
20	15	—	台屋町	野上 セキ	※	80	90	蚊帳 10	堀川町	宮本 シユ	※
40	20	—	京橋町	木村 仁助	※	100	100	蚊帳 8	堀川町	右近 角一	※
70	25	—	京橋町	下山 貞次	※	80	37	—	堀川町	先小山 静夫	※
24	15	—	金屋町	竹原 松治	※	260	116	—	堀川町	芦原 ヨシ	※
34	17	—	京橋町	三上 コマエ	※	60	35	蚊帳 9	堀川町	吉津 アヤノ	※
45	18	—	京橋町	三木 ヤヲ	※	20	20	—	堀川町	奥村 トモ	※
41	22	—	稲荷町	原田 サヨ	※	32	18	蚊帳 4	堀川町	坂本 ベソ	※
64	31	—	稲荷町	國森 マサ	※	75	32	蚊帳 7	堀川町	小早川シナヨ	※
191	22	—	東胡町	加藤 兵衛	※	133	30	蚊帳 149	胡町	川野 弥三郎	※
290	160	蚊帳 20	山口町	古川 史郎	※	40	37	蚊帳 51	胡町	井原 盛吉	※
43	35	—	斜屋町	掟田 マツヨ	※	32	16	—	下流川町	山田 タカ	※
40	20	—	下流川町	大室 フク	※	65	26	蚊帳 6	鉄砲町	川越 研三	※
75	75	—	下流川町	今井 安太郎	※	25	12	—	幟町	作田 重子	※
78	35	—	三川町	今村 ハルエ	※	25	12	—	幟町	南 タマエ	※
17	17	—	三川町	長門 市助	※	30	10	蚊帳 40	橋本町	川手 瀬市	※
30	30	毛布 4 蚊帳 4	三川町	迎林 フサヨ	※	30	13	—	石見屋町	石井 ハヤ	※
26	15	—	三川町	藤原 サツノ	※	22	10	—	幟町	門田 平一郎	※
33	30	—	三川町	吉田 マツエ	※	12	12	—	上流川町	杉 乙氏	※
60	40	蚊帳 5	三川町	香西 輝一	※	40	20	—	幟町	浜田 ヨシ	※
170	100	毛布 30	三川町	天城忠右衛門	※	計					

		蚊帳6				6,078	3,391	684			
50	25	—	三川町	水田 貞一	※	50	50	—	宇品町	大和紡績広島 人絹工場	※
120	70	蚊帳4	三川町	吉野 正造	※	3	2	—	皆実町三丁目	中川 正一	※
45	41	蚊帳8	八丁堀	福原 ミサヲ	※	3	2	—	翠町	森山 信一	※
40	30	毛布4 蚊帳7	八丁堀	大月 節子	※	計53	54				
60	30	蚊帳8	鉄砲町	泉尾 正一	※						

別紙第三十九号ノ二

配給ノ用ニ供スベキ車輛及所有者調

車輛ノ種類及名称	車輛 番号	積載 屯数	所有者	車輛ノ種類及名称	車輛 番号	積載 屯数	所有者
貨物自動車シボレー	119	1,500	広島市役所	貨物自動車インター	2930	2,500	広島市役所
貨物自動車新フォード	857	1,500	広島市役所	貨物自動車フォード	1834	1,500	広島市役所
貨物自動車ベツトフォード	1285	1,500	広島市役所	貨物自動車フォード	993	1,500	広島市役所
貨物自動車新フォード	274	1,500	広島市役所	貨物自動車フォード	626	1,500	広島市役所
貨物自動車新フォード	2450	1,500	広島市役所	貨物自動車オールドモービル	356	2,100	広島市役所
貨物自動車新フォード	1433	1,500	広島市役所	貨物自動車オールドモービル	139	2,000	広島市役所
貨物自動車シボレー	131	2,000	広島市役所	貨物自動車ニッサン	3341	2,100	広島市役所

別紙第四十号

罹災者及救護者ニ配給スベキ食事炊事能力調

分團 名	場所名	一回可 能限度	所在責任者	分團 名	場所名	一回可 能限度	所在責任者
牛田	牛田町丹土区魚瀬仕出店	100	瀬川 巖	荒神	松原町吉川旅館	100	沖田 光太
牛田	牛田町本町区田村仕出店	100	田村 雄	荒神	松原町マルイチ旅館	100	沖田幾太郎
牛田	牛田町本町区安楽寺	100	登世岡界雄	荒神	松原町土屋旅館	100	土屋 タマ
牛田	牛田町南区広島教員養成所寄宿舎	100	松江 利作	荒神	西蟹屋町荒神国民学校栄養調理所	300	前田 暁
荒神	松原町羽田辨當部	2,000	川崎栄次郎	矢賀	矢賀町森安飲料店	200	森安 俊夫
荒神	松原町廣島館(旅館)	100	沖田 光太	矢賀	矢賀町石津飲料店	50	石津徳太郎
矢賀	矢賀町国民学校	50	林 五一	幟町	堀川町千松旅館支店	50	宗像 マツ
比治山	大洲町建具学校	80	吉田 幸一	幟町	堀川町小早川旅館	50	小早川シチヨ
比治山	大洲町	50	馬場 為八	幟町	堀川町奥村旅館	50	奥村 モト
比治山	大洲町藤川鉄工所	100	藤川 長一	幟町	堀川町宮本旅館	70	宮本 修
比治山	南段原二丁目	400	内田 薫	幟町	堀川町右近旅館	100	右近 角一
比治山	南段原二丁目	50	藤田 宣彦	幟町	堀川町田中屋旅館	70	先小山静夫
比治山	段原中町上組	50	小野 見三	幟町	堀川町山佐屋旅館	50	芦原 ヨシ
比治山	段原中町上組	50	稲野浩二郎	幟町	下柳町大石旅館	70	大石 武彦
比治山	南蟹屋町九一食堂	50	物部 セイ	幟町	下柳町あたりや旅館	60	山本 友吉
比治山	南蟹屋町中村屋	50	中村 丹六	幟町	下柳町防府館	100	加富田倉吉
比治山	南蟹屋町広島製砥所	100	亀田 多吉	幟町	東胡町加藤旅館	200	加藤 リエ
比治山	東雲町南組	50	森本兵之助	幟町	山口町中國旅館	100	古川 史郎
皆実	皆実町二丁目片山旅館	150	片山善太郎	幟町	八丁堀京口旅館	100	福原ミサオ
白島	東白島町とらや旅館	50	中山 寅吉	幟町	鉄砲町川越旅館	60	川越ナミ子
白島	白島東中町安田高女寄宿舎	100	安田 リウ	幟町	東胡町大竹屋	100	大島 和吉
白島	白島中町簿記学校寄宿舎	50	廣兼 吾一	幟町	鉄砲町水月	50	内富 良一
幟町	堀川町吉津旅館	100	吉津アヤノ	幟町	鉄砲町大竹屋(四〇番地)	50	大島 和吉
幟町	堀川町博多屋旅館	50	坂本 ベン	幟町	斜屋町大衆食堂	80	手島 四郎
幟町	鉄橋楼(堀川町)	100	渡辺 政一	竹屋	三川町旅館	50	今村ハルエ
幟町	胡町仙波屋	100	仙波 雅光	竹屋	三川町料理業	50	常川 タザ
幟町	胡町名井屋本店	50	名井次三郎	竹屋	竹屋町飲食業	50	島本ミツヨ
幟町	堀川町スシホール	100	沖田 善行	竹屋	竹屋町旅館	60	下郷 熊一
幟町	堀川町キリン食堂	600	唐須 義雄	竹屋	新天地食堂	130	森 敬三
幟町	堀川町汽車食堂	50	栗栖 敬三	竹屋	新天地食堂	50	山根ミチ子
幟町	堀川町イロハ食堂	70	山田 聖一	竹屋	新天地食堂	50	横溝ミサオ
幟町	銀山町富士食堂	100	金澤シヨ子	竹屋	新天地食堂	70	栗栖 敬三
幟町	山口町敷島食堂	150	大浜 タキ	竹屋	薬研堀食堂	55	田中 シナ
幟町	八丁堀高木しるこ店	70	柳原ソタヨ	竹屋	薬研堀カフェー	60	挽田 三郎
幟町	八丁堀株式会社福屋食堂	400	岡崎 武雄	竹屋	薬研堀料理業	70	高島 庄吉
幟町	鉄砲町廣島食堂	60	川口 リキ	竹屋	薬研堀料理業	100	植田 萬蔵
幟町	鉄砲町バカ盛食堂	400	田中 猛僂	竹屋	東新天地飲料店	65	河原崎又治郎
幟町	鉄砲町田村食堂	500	高橋 要	竹屋	下流川町食堂	55	南 健一
幟町	上流川町広島女学院専門学校寄宿舎	50	日野原善輔	竹屋	下流川町食堂	100	岡本 照夫
幟町	上流川町高等文学部寄宿舎	50	日野原善輔	竹屋	下流川町食堂	80	徳永 信男
竹屋	三川町旅館	90	吉野 政造	竹屋	下流川町食堂	80	廣兼チズヨ
竹屋	三川町旅館	50	天城忠右衛門	竹屋	下流川町料理業	80	山根 龜代
竹屋	下流川町飲食業	50	船本治次郎	大手	雑魚場町旅館	50	上田 リウ

竹屋	薬研掘旅館	60	伊藤富士子	大手	雑魚場町旅館	50	山口 貞美
竹屋	宝町竹屋国民学校	150	香川 菊三	大手	雑魚場町魚幾	150	栗川 小幾
竹屋	宝町飲食業	50	折宮 友助	大手	雑魚場町三國屋旅館	200	建畠 静
竹屋	昭和町飲食業	50	中原 ヨシ	大手	雑魚場町廣島縣教育会館	200	廣島縣教育会館
竹屋	昭和町飲食業	50	山口 常人	廣瀬	寺町廣島別院	200	別院輪番
竹屋	鶴見町旅館	50	生駒ヒデヨ	廣瀬	寺町光福寺	50	堀住職
竹屋	鶴見町飲食業	50	田中 正一	廣瀬	寺町報専坊	50	富樫住職
大手	大手町八丁目さな多旅館	50	土屋 健一	本川	鍛冶屋町川本旅館	70	川本 富造
大手	大手町八丁目藤井旅館	50	藤井シゲノ	本川	鍛冶屋町本川屋旅館	70	楠本 一
大手	大手町八丁目仕出業	100	松谷寅治郎	本川	鍛冶屋町伊賀井田旅館	50	伊賀井田ハマ
大手	大手町八丁目飲食業	50	大星セキオ	本川	鍛冶屋町夜陣旅館	50	夜陣 トモ
大手	大手町八丁目廣島鉄工所	50	河野 佐一	本川	鍛冶屋町高橋飲料店	80	高橋 寛一
大手	大手町八丁目ますみや旅館	100	渡辺 清子	本川	鍛冶屋町丸一飲料店	60	増原 タカ
大手	大手町八丁目亀屋旅館	50	松村 マツ	本川	塚本町廣濱旅館	50	吉崎 政一
大手	大手町八丁目鷹野橋旅館	50	先小山サハミ	本川	塚本町まるか旅館	50	白川 清一
大手	雑魚場町芳乃屋旅館	50	高木 益枝	本川	塚本町塚本食堂	100	船越 サメ
大手	雑魚場町八つて屋旅館	50	佐伯八重子	本川	塚本町岩三旅館	50	木村 勘一郎
本川	塚本町明教寺	70	新田 節子	本川	鷹匠町西村呉服店	80	西村平次郎
本川	塚本町郷田旅館	50	櫛田金兵衛	本川	鷹匠町池田鉄工所	80	池田 友吉
本川	塚本町教傳寺	50	尼子 爾郎	本川	空鞘町二宮すし店	160	二宮 謙蔵
本川	塚本町高橋旅館	50	高橋十郎兵衛	神崎	小網町南組汽車食堂	50	北山 光儀
本川	塚本町教西寺	50	武田住職	神崎	舟入町羽田別荘	1,000	羽田謙次郎
本川	塚本町石岡旅館	50	石岡 道人	舟入	舟入川口町日本工業株式会社	50	重住 孫一
本川	堺町三宅商事本店	50	三宅幸太郎	舟入	舟入川口町桐原容器株式会社	100	桐原秀太郎
本川	左官町高木しるこ店	250	高木松次郎	舟入	舟入川口町砲弾ポンプ株式会社	50	佐伯治九郎
本川	左官町敷島食堂	200	梅津 義頭	三篠	三篠本町一丁目光隆寺	150	三篠婦人会 長増田シナ
本川	左官町吉野食堂	250	吉野 綾子	三篠	三篠三丁目西導寺	150	三篠大芝 吉田マサ
本川	左官町喜久屋食堂	50	西本 正治	己斐	己斐本町区敷島食堂	50	影廣 義雄
本川	左官町左官町食堂	50	藤谷 久代	己斐	己斐中町山口仕出業	50	山口 正一
本川	左官町天下鉄工所	150	大下 吾一	段原	台屋町二葉旅館	50	野上 鶴松
本川	左官町妙頂寺	200	頂 岳日	段原	京橋町吉本屋	800	吉村 恒吉
本川	左官町本覚寺	90	岳住職	段原	京橋町デカ盛食堂	500	石川 福治
本川	左官町眞名志鉄工所	80	眞名志光太郎	段原	的場町あつさりや食堂	50	石田 勉
本川	鷹匠町清住寺	70	耕田 八洲	段原	段原末廣町煮豆商	50	唐津松五郎
本川	鷹匠町花屋旅館	70	兒高キヨノ	段原	桐木町比治山神社境内	50	桐 喜 町 内 会々々長
草津	草津南町高坂料理店	300	高坂 儀滋	天満	榎町中村壽司店	40	中村
草津	草津東町草津国民学校	400	原田 智	天満	榎町植松壽司店	80	植松
草津	草津浜町塩亀仕出店	300	塩本 亀雄	中島	中島本町相生旅館	50	前田チヨノ
宇品	宇品海岸通東部	100	山縣 浅吉	中島	中島本町吉川旅館	50	吉川 末太
青崎	仁保町青崎下宿業	100	堀川 節造	中島	中島本町福亀旅館	100	福島亀次郎
青崎	仁保町青崎仕出業	50	千北 忠義	中島	中島本町慈仙寺	100	梶山 仙令
青崎	仁保町	50	山本 一	中島	中島本町どん亀旅館	50	大林 敦夫
青崎	仁保町仕出兼旅館	60	廣畑 タネ	中島	中島本町櫻湯旅館	50	川野上平八
青崎	仁保町塩浜館	50	谷本 繁一	中島	中島本町加川旅館	50	堀 政子
天満	榎町	250	清水 文雄	中島	中島本町大松旅館	50	吉田 久吉
天満	西大工町信濃罐詰工場	750	信濃罐詰工場	中島	中島本町極楽旅館	100	竹縄 正治
天満	榎町新見罐詰工場	750	新見罐詰工場	中島	天神町吉久亭	50	対馬 歳江
天満	上天満町楠原罐詰工場	200	楠原罐詰工場	中島	天神町藤林	50	藤永 太郎
天満	上天満町河本罐詰工場	100	河本罐詰工場	中島	天神町天城旅館	100	天城 慶一
天満	上天満町松尾罐詰工場	100	松尾罐詰工場	中島	木材町漁福	50	渋谷虎次郎
天満	上天満町畜産罐詰工場	600	畜産罐詰工場	中島	天神町清岸寺	100	藤井 興隆
天満	上天満町天満国民学校	50	天満 警防分団長	中島	天神町教念寺	80	宮木 思雲
天満	榎町湯浅飲食店	60	湯浅	中島	材木町	50	山香 嘉夫
中島	材木町	100	渡辺 凜太	中島	中島新町佐伯製菓	100	佐伯 福松
中島	材木町	50	山登徳太郎	中島	中島新町三津石酒場	50	三津石ナミ
中島	材木町善福寺	30	鈴木 正道	中島	中島新町本川旅館	50	恵川保太郎
中島	材木町妙法寺	80	中島 龍温	中島	上水主町五島旅館	50	長谷 彦一
中島	材木町	50	藤茂 順一	中島	上水主町	50	横田 雅一
中島	材木町誓願寺	100	成田 順光	中島	上水主町原旅館	50	原 ヨシノ
中島	材木町安楽院	50	大西佐賀雄	中島	上水主町小林旅館	50	小林 十六
中島	材木町魚秀	80	矢川 秀一	中島	中水主町中島警防分団本部	200	朝田 良一
中島	元柳町田辺旅館	50	田辺 昇作	中島	中水主町住吉亭	70	新家幸太郎
中島	元柳町共栄旅館	50	高橋糸太郎	中島	中水主町キクヤ	50	小川 清

中島	元柳町村上旅館	100	宮原 惣吉	中島	下水主町小原製菓	50	小原 米藏
中島	元柳町	50	成宮惣五郎	中島	吉島本町日本精機株式会社	250	食堂係
中島	元柳町森永	50	森永製菓山根販売会社	中島	吉島本町寄宿舎	250	食堂係
中島	木挽町西福院	50	長森 勝恵	中島	吉島本町塗装会社	50	食堂係
中島	木挽町福壽院	100	田村 公優	中島	中水主町魚長	50	佐久間豊次郎
中島	木挽町持明院	100	光森 公龍	中島	中水主町	50	宮本 貫二
中島	中島新町西應寺	50	平秀 哲	千田	東千田町精養軒旅館	50	堀出 ウメ
中島	中島新町善福寺	100	藤 勇哲	千田	千田町一丁目丸福	100	佐々木興一
千田	千田町一丁目魚船	100	船本 五一	江波	江波東町仕出業	50	丸本 久雄
千田	千田町一丁目アルプス	80	金山 時子	江波	江波港町縣立商業学校寄宿舎	200	河村 通介
千田	千田町一丁目一本松旅館	50	渡辺コトシ	仁保	仁保町湊崎(町内会)	350	板村 信一
千田	千田町二丁目魚光食堂	100	阿部 三笠	仁保	仁保町大浜塩場	100	大浜善太郎
千田	千田町二丁目松村旅館	50	松村イトヨ	仁保	仁保町柞木(町内会)	300	藤川 政吉
千田	千田町二丁目大阪屋食堂	50	宍戸竹二郎	仁保	仁保町本浦(町内会)	350	津村 数一
千田	千田町二丁目仕出業	50	渋下常四郎	仁保	仁保町国民学校	50	宮武 千穎
千田	南竹屋町福原食堂	100	川上 小芳	福島	福島町(町内会)	90	菊崎 正行
千田	千田町三丁目メリー食堂	100	羽田シズノ	袋町	革屋町廣楽	200	山本 弥助
千田	千田町三丁目南組御幸旅館	50	小山アキ子	袋町	革屋町木村屋	300	川野 政一
千田	千田町三丁目下宿屋	50	和田 秀子	袋町	革屋町廣島ホテル	50	松川了之助
千田	千田町三丁目	50	山下 芭	袋町	平田屋町ちから飲食店	200	小林 角藏
千田	千田町三丁目飲食店	50	佐藤 レマ	袋町	鉄砲屋町金水館	50	山本 富藏
千田	千田町三丁目丸一旅館	200	潮 忠義	袋町	鉄砲屋町山金旅館	50	山縣 節雄
千田	千田町三丁目共栄旅館	100	福永 フヂ	袋町	鉄砲屋町山万料理業	50	米田 鶴平
江波	江波本町江波旅館	50	野間 源一	袋町	鉄砲屋町中賀料理業	50	平井七右衛門
江波	江波南町江波温泉	100	香口 カト	袋町	鉄砲屋町神田旅館	70	後藤 豊吉
江波	江波東町山文料理店	50	山本 久藏	—	—	—	—
袋町	鉄砲屋町千歳旅館	50	馬場 丈吉	袋町	尾道町市松旅館	50	松田 秀一
袋町	鉄砲屋町松万旅館	50	松田万之助	袋町	尾道町日の出旅館	50	大島 リエ
袋町	中町山中旅館	50	山中 忍	袋町	尾道町菊の屋旅館	50	川下きくの
袋町	中町田村旅館	50	田村 博	袋町	塩屋町芙蓉館	50	林 浅の
袋町	下中町縣立第一高等女学校	300	岡猪 眞二	袋町	塩屋町山陽せんべい店	100	村田 安藝
袋町	新川場町すし徳料理業	100	市田安之助	袋町	塩屋町しるこや	100	杉本 清吉
袋町	新川場町正清寺	100	三浦 義法	袋町	塩屋町中央旅館	50	森 マツコ
袋町	新川場町本照寺	50	紀野 俊耀	袋町	塩屋町旅館	50	谷 彦三郎
袋町	新川場町聖光寺	50	下野 大展	袋町	塩屋町専勝寺	100	中野 実英
袋町	新川場町海雲寺	50	井上 富禪	袋町	塩屋町山陽長飲食店	80	湯浅 貞吉
袋町	新川場町金龍寺	50	鹿翁 寛宗	袋町	塩屋町すみだや菓子店	100	住田 綱吉
袋町	新川場町福林寺	50	松本 指導	袋町	袋町精養軒	50	青木 志郎
袋町	新川場町盲学校寄宿舎	100	八尋 樹蒼	袋町	袋町妙蓮寺	70	法山 時範
袋町	小町ゑびす餅	100	木谷勤次郎	袋町	西魚屋町生命保険会社	70	俣野 景彦
袋町	小町國泰寺	150	西沢 天海	袋町	大手町五丁目大谷旅館	50	大谷 たづ
袋町	尾道町魚屋	50	湯川 玉一	袋町	大手町五丁目寒月堂菓子店	80	三村 司郎
袋町	尾道町村雨飲食店	50	高畑 義照	袋町	大手町五丁目山本旅館	80	山本 イト
袋町	尾道町稲荷餅屋	50	西森辰太郎	袋町	大手町五丁目天野旅館	60	天野はな枝
袋町	大手町五丁目松屋旅館	50	中村 千代	袋町	鳥屋町中近館	50	中近 リエ
袋町	大手町五丁目五明館	50	浜松 小春	袋町	鳥屋町鳥屋館	50	花野 シゲ
袋町	大手町五丁目蔵内旅館	50	長屋 範一	袋町	鳥屋町今坂餅屋	100	中村 静彦
袋町	大手町四丁目ゑびす館	50	飯田 くま	袋町	細工町木村パン	50	木村八十二
袋町	大手町四丁目蔵内旅館	50	宮本 勇	袋町	細工町更科飲料店	50	田中 誠作
袋町	大手町四丁目渡辺旅館	100	白川 弥市	袋町	細工町西向寺	100	高松 洸
袋町	大手町三丁目吉川旅館	150	沖田 光太	袋町	西猿楽町角初飲食店	50	角田五郎
袋町	大手町三丁目日本放送電食堂	50	田部文之助	袋町	西猿楽町さくや飲食店	50	松浦 玉よ
袋町	大手町三丁目金明館	50	杉原 やす	袋町	東猿楽町興行銀行	50	戸澤 英一
袋町	大手町三丁目田中旅館	50	玉野 栄富	袋町	紙屋町菊水館	50	元木 隣
袋町	大手町二丁目三和銀行	50	田村 千之	袋町	紙屋町住友銀行	150	馬場 博
袋町	大手町二丁目銀行集会所	50	銀行集会所	袋町	紙屋町藝備銀行	3,000	伊藤 裕
袋町	大手町一丁目第一銀行	80	大野又四郎	袋町	紙屋町檜山旅館	50	檜山 市藏
袋町	大手町一丁目松本館	150	松本はさの	袋町	研屋町済世軍	50	田中 儀傳
袋町	大手町一丁目常盤旅館	70	友芳 清一	袋町	研屋町泉屋旅館	300	泉 完一
袋町	鳥屋町淀川すし	70	吉野 権藏	袋町	立町櫻羊羹商	200	有本 武男
袋町	鳥屋町虎屋旅館	100	寺田 武藏	袋町	立町誓立寺	50	武田 得成
袋町	鳥屋町泉周館	50	泉 朝吉	袋町	立町さかいや	50	平東サカエ
袋町	立町白砂女学塾	80	白砂 進弘	観音	観音本町宿屋業	100	川崎 繁一
袋町	立町高橋旅館	50	松浦 ソル	観音	観音本町飲食店	100	川村百合子
尾長	尾長国民学校	250	西尾 静夫	観音	観音本町下宿業	100	川崎善次郎
尾長	愛宕町仕出業	70	松下 小一	観音	観音本町日産自動車会社食堂部	100	日産自動車会社

尾長	東蟹屋町仕出業	50	網本林太郎	楠那	仁保町丹那料理屋業	50	岡本 好松
観音	観音本町飲食店	100	平木 身利	楠那	仁保町日宇那宿屋業	50	住田 隼人
観音	観音本町仕出業	100	牧村 太郎	-	-	-	-

別紙第四十一號

食料品購入先調査表

分団名	種 類	購入予定先	配給所	配給従事者
天満分団	食料品	北榎町旧市場問屋業組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	北榎町旧市場仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	新市町旧市場問屋業組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	新市町旧市場仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	横堀町廣島漬物製造卸業組合	警防分団	警防分団配給部員
荒神分団	食料品	荒神町青物市場問屋業組合	警防分団	警防分団配給部員
千田分団	食料品	千田町一丁目廣島水産仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
草津分団	食料品	草津町草津魚商仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
神崎分団	食料品	舟入仲町廣島漬物製造業組合	警防分団	警防分団配給部員

別紙第四十二號

配給従事者応援団体調

応援団体名	事務所所在地	応援人員数		召集連絡方法	応援団体名	事務所所在地	応援人員数		召集連絡方法
		男	女				男	女	
牛田青年團	牛田国民学校	13	3	電話又ハ傳令	大手青年團	大手国民学校	15	17	電話又ハ傳令
荒神青年團	荒神国民学校	14	5	電話又ハ傳令	千田青年團	千田国民学校	11	6	電話又ハ傳令
尾長青年團	尾長国民学校	12	2	電話又ハ傳令	中島青年團	中島国民学校	11	7	電話又ハ傳令
矢賀青年團	矢賀国民学校	1	3	電話又ハ傳令	廣瀬青年團	廣瀬国民学校	17	7	電話又ハ傳令
青崎青年團	青崎国民学校	8	8	電話又ハ傳令	本川青年團	本川国民学校	41	25	電話又ハ傳令
段原青年團	段原国民学校	13	7	電話又ハ傳令	神崎青年團	神崎国民学校	8	5	電話又ハ傳令
比治山青年團	比治山国民学校	17	33	電話又ハ傳令	舟入青年團	舟入国民学校	25	5	電話又ハ傳令
皆実青年團	皆実国民学校	25	1	電話又ハ傳令	江波青年團	江波国民学校	10	7	電話又ハ傳令
仁保青年團	仁保国民学校	1	5	電話又ハ傳令	天満青年團	天満国民学校	7	-	電話又ハ傳令
大河青年團	大河国民学校	1	7	電話又ハ傳令	観音青年團	観音国民学校	57	31	電話又ハ傳令
楠那青年團	楠那国民学校	3	4	電話又ハ傳令	福島青年團	福島国民学校	2	5	電話又ハ傳令
宇品青年團	宇品国民学校	60	3	電話又ハ傳令	大芝青年團	大芝国民学校	-	22	電話又ハ傳令
似島青年團	似島国民学校	-	-	電話又ハ傳令	三篠青年團	三篠国民学校	20	15	電話又ハ傳令
白島青年團	白島国民学校	3	2	電話又ハ傳令	己斐青年團	己斐国民学校	21	10	電話又ハ傳令
幟町青年團	幟町国民学校	29	12	電話又ハ傳令	古田青年團	古田国民学校	10	23	電話又ハ傳令
袋町青年團	袋町国民学校	38	12	電話又ハ傳令	草津青年團	草津国民学校	14	17	電話又ハ傳令
竹屋青年團	竹屋国民学校	7	10	電話又ハ傳令	備考	動員可能人員ノ約三分の一			

別紙第四十三號

市長ノ指定シタル營造物調査表

所在町名	種 別	所在町名	種 別	所在町名	種 別
國泰寺町	廣島市役所	仁保町	楠那国民学校	江波町	江波国民学校
旭町	大河国民学校	宇品町	宇品国民学校	西天満町	天満国民学校
國泰寺町	公會堂	元宇品町	宇品国民学校分教場	東観音町一丁目	観音国民学校
比治山公園	旧御便殿	似島	似島国民学校	福島町	福島国民学校
舟入町	船入病院	東白島町	白島国民学校	大芝町	大芝国民学校
安藝郡畑賀村	畑賀病院	幟町	幟町国民学校	打越町	三篠国民学校
牛田町	牛田国民学校	袋町	袋町国民学校	己斐町	己斐国民学校
西蟹屋町	荒神国民学校	田中町宝町	竹屋国民学校	古田町	古田国民学校
尾長町	尾長国民学校	大手町八丁目	大手町国民学校	草津東町	草津国民学校
矢賀町	矢賀国民学校	東千田町二丁目	千田国民学校	段原山崎町	第一国民学校
仁保町	青崎国民学校	水主町	中島国民学校	南観音町	第二国民学校
段原大畑町	段原国民学校	廣瀬北町	廣瀬国民学校	翠町	第三国民学校
東雲町	比治山国民学校	鍛冶屋町	本川国民学校	南観音町	市立商業学校
皆実町一丁目	皆実国民学校	舟入仲町	神崎国民学校	舟入川口町	市立高等女学校
東雲町	仁保国民学校	舟入川口町	舟入国民学校	小町	浅野圖書館
尾長町	東隣保館	尾長町	授産場	福島町	家畜市場
福島町	西隣保館	宇品町	棧橋	牛田町	浄水場
稻荷町	東公益質屋	松原町	公設市場	基町	水道部基町分室
天満町	西公益質屋	大手町九丁目	公設市場	己斐町	己斐調整場
宇品町	保養院	天神町	公設市場	安佐郡原村	取水場
福島町	授産場	福島町	屠場		

別紙第四十四號

防空資材製造業者一覧 (昭和十六年一月末現在)

署別	種別	住所	氏名	材料	備考
東	暗幕	廣島市愛宕町	田宗 俊三	黒繻子	

	バケツ	廣島市仁保町青崎	梶川 定	鉞力	
	代用バケツ	廣島市京橋町	落合 義雄	馬糞紙	
西	砲弾ポンプ	廣島市舟入町	佐伯 次九郎	鑄鉄ゴム	
	バケツ	廣島市南観音町二丁目	田村 政市	トタン板	
	バケツ	廣島市三篠本町一丁目	稲田 實	トタン板	
	バケツ	廣島市舟入幸町	脇田 長市	トタン板	
	バケツ	廣島市舟入幸町	田村 政市	トタン板	
	暗幕	廣島市紙屋町	熊野 秀吉	スフ地落綿地更生糸織	
	バケツ	廣島市平田屋町	内海 幸一	トタン板	
	電燈カバー	廣島市平田屋町	内海 幸一	馬糞紙	
	暗幕	廣島市大手町二丁目	横山 重助	スフ地	
	ポンプ	廣島市錦町	津田 喜次郎	鑄鉄	
	バケツ	廣島市猫屋町	伊藤 信一	トタン板	
	ポンプ	廣島市廣瀬元町	横山 加志美	鑄鉄直論砲金鋼材	
	ポンプ	廣島市左官町	佐伯 次九郎	鉄材	
	暗幕	廣島市西九軒町	田淵 謹一	スフ地	
呉	バケツ	呉市宮原通二丁目	香川 義一	トタン板	
	暗幕	呉市泉場町	高林 秀雄	毛繻子	
	電燈カバー	呉市泉場町	高林 秀雄	毛繻子人絹製	
	担架	呉市泉場町	高林 秀雄	純綿麻	
	バケツ	呉市泉場町	高林 秀雄	綿麻	
	バケツ	呉市泉場町	川上 兵一	亜鉛鋳金鉄板	
	バケツ	呉市寺西町	中米 幾次	亜鉛鋳金鉄板	
	バケツ	呉市本通十丁目	坂野 繁蔵	亜鉛鋳金鉄板	
	バケツ	呉市東雲町三丁目	小林 正行	亜鉛鋳金鉄板	
	電燈カバー	呉市東雲町三丁目	小林 正行	亜鉛鋳金鉄板	
電燈カバー	呉市本通十四丁目	長山 哲造	亜鉛鋳金鉄板		
バケツ	呉市本通十四丁目	長山 哲造	亜鉛鋳金鉄板		
祇園	消防自動車	安佐郡安村字上安	土井 莊市	鉄板其ノ他	車体ノ古キモノヲ買入レ改造ス 山火事用、腕甲自動車用
	消火具	安佐郡安村字上安	土井 莊市	帯鉄	
	ホース巻取器	安佐郡安村字上安	土井 莊市	鉄	

別紙特第一號

防空監視隊副隊長哨長一覽表

廣島監視隊長警防課長 宗 玉生

廣島監視副隊長警部 若谷 芳松

廣島監視隊警部 寺岡 盛人

廣島監視哨長 藤本 徳太郎

可部監視哨長 朝枝 亮

鈴張監視哨長 坂井 徳夫

瀬野監視哨長 下野 國助

巖島監視哨長 伊藤 貫一

玖島監視象徴 山村 興一

吉和監視哨長 早田 耕介

加計監視哨長 前田 兼吾

大朝監視哨長 (代理) 稲垣 唯三

八重監視哨長 富田 義和

吉田監視哨長 三好 清九郎

三次監視哨長 増原 鶴一

	軍港中心 来襲)					数													
昭20.4.12 13:25頃	呉市警固 屋町	B29一機	6						1										
昭20.4.12 14:30頃	佐伯郡小 方村可部 島沖合	来襲機ナ シ																	大竹潜水学校所属潜水艦一隻 (乗組員一二〇名) 演習中触 雷沈没全員殉職
昭20.4.13 09:38頃	呉市	B29一機							1										被弾なし 軽傷者一名は友軍高射砲弾破 片に依る
昭20.4.19 自06:15頃 至06:17頃	備後南部 沿岸尾道 市及沼隈 郡高須村	B29一機	12						2				3						
昭20.4.22 13:38頃	安佐郡祇 園町畑中	B29一機	6										1						
昭20.4.30 06:55頃	広島	B29一機	10				10	5	11			14	15	5	5			200	其他被害 学校半壊二棟 電車軌道破壊一ヶ所 水道破壊二ヶ所 瓦斯管破壊一ヶ所 電信電話ケーブル切断 一ヶ所 電話不通 約一、七〇〇個 電燈発電力線切断 四ヶ所 停電戸数約五〇〇戸
昭20.5.5 05:35頃	双三郡 作木村 高田郡 船佐村	B29一機	8				7							2					其他被害 牛一頭斃死 送電線切断三ヶ所
昭20.5.5 自10:27頃 至11:07頃	県下沿岸 部主トシ テ呉市広 町方面	B29延約一 三〇機	93				28	6	15	4	61	163	34	3				1,000	其他被害 曳船三隻沈没 三隻大破 四隻小破 貨物自動車六台全壊 馬車一〇台全壊 馬一四頭斃死 広駅(呉線)一部破壊 投下弾により構内路 線一ヶ所切断上下線 共不通 重要倉庫 (在中品は軍関係の被害な り) 1米倉庫 (二、五二〇俵入) 一棟全焼但し四割程 度残存見 込 2セメント倉庫 (一、〇〇〇俵入) 一棟全焼但し六〇〇

																			依程度使用可能見込 3日通軍需倉庫一棟全焼 4日通事務所一棟全焼 軍関係被害 (詳細不明なるも概ね左の如し) 広工廠 六棟全焼 六棟大破 七棟中破 十一空廠 四棟全焼 十棟大破炎上 二棟大破 四棟中破 三棟小破 呉航空隊 二棟大破倒壊 三棟大破 一棟中破 坂下部隊 (設営隊) 一棟全壊 四棟半壊 三棟小破 海軍共済食堂 一棟全焼 航空機被害 一機大破 十機中破 其他被害 徴用船 (小破) 二隻沈没 三隻中破 貨物自動車 十五台全壊 人的被害 1 広工廠 死者五八名 重傷二七名 軽傷相当あり 尚死傷者増加見込 2 十一空廠 死者四三名 負傷三七名 尚死傷者増加見込 3 呉航空隊 死傷者不明 4 坂下部隊 死者五名 負傷六名
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

																			5 呉海兵団(広駅前) 死者一名(水兵) 6 徴用船乗組員 死者三名
昭20.5.5 自夜半 至昭20.5.6	広島湾及 備後灘	B29 三機				相当数													被害なし
昭20.5.10 自09:30頃 至10:30頃	佐伯郡 大竹町	B29 延約一 三〇機	7								3	1							その他の被害 警察電話切断一ヶ所 電話線切断一ヶ所 電力線切断一ヶ所 対岸山口県岩国市陸 軍燃料廠及興亜石油 会社に相当の被害あり
昭20.5.11 12:43頃	賀茂郡 原村山中	B29 一機	2																被害なし
昭20.5.15 07:15頃	広島湾安 芸郡江田 島村南方 海中	B29 一機	推定6																被害なし
昭20.5.21 13:05頃	安芸郡戸 坂村ヲ中 心トシテ 備後一円	B29 一機					約80,000												被害なし
昭20.5.22 13:10頃	安芸郡海 田市町	B29 二機	5								2								その他の被害 送電線切断一ヶ所 軍関係被害倉庫 倉庫二棟半壊 事務所一棟半壊 鉄道引込線 二十米切断
昭20.5.25 13:10頃	安佐郡祇 園町中心 県下西部 一円	B29 一機					約11,000												被害なし
昭20.5.27 05:40頃	呉市警固 屋	B29 一機	3						1	1			1						
昭20.5.31 06:05頃	広島市ヲ 中心トシ テ県下沿 岸一円	B29 一機					約20,000		1	1									人的被害は宣伝ビラ在中の爆 弾型鉄銅製よう気落下による
昭20.6.9 06:30頃	広島湾佐 伯郡深江 村西北方 海中	B29 一機						3			13								本被害は昭二〇、四、一夜半 頃より同四、二未明に至るま での間に適期が投下したる掃 海漏の機雷に触れ発生したる ものと認められる
昭20.6.22 自09:30 至10:40	呉市及安 芸郡音戸 町	B29 延約二 九〇機	58				69	3	9	1	46	153							その他の被害 送電線切断一ヶ所 通信電話切断一ヶ所
昭20.6.30 00:35頃	佐伯郡吉 和村	B29 一機	6																被害なし
昭20.7.1 自23:50頃	呉市全域	B29 延約八 〇機		約80,110			1,817	116	337	52				22,052	116			122,535	その他民間関係被害 全焼

至翌2日 02:30頃																			工場 呉重工業外三 官公衛 呉警察署外二 学校 清水国民学校外 一八 病院 日赤病院呉市部外 三 半壊 病院一 重要倉庫一 全壊 神社一 仏閣一 軍関係被害 呉海兵団木造建物一部、呉海 軍病院、呉海軍共済病院、求 交社、呉海軍経理施設、軍需 各部、呉鎮守府、十一空廠倉 庫一棟 外一一二棟
昭20.7.11 20:55頃	備後灘 (沼隈郡 宇治島北 方海中)	B29一機				4													被害なし
昭20.7.17 17:45頃	安芸郡 坂村	B29一機	小 型 (径 3 寸 長 8 寸) 3																被害なし
昭20.7.17 13:45頃	安芸郡 祇 園町ヲ中 心	B29一機					約40,000												被害なし
昭20.7.22 10:30頃	賀茂郡安 芸津町	B29一機	小 型 (模 型 飛 行機) 1				1		3										昭和二〇、七、二二 自〇八、四〇頃 至〇九、二〇頃 投下せるものと認めらる
昭20.7.24 自06:00頃 至12:00頃	県下沿岸 部主トシ テ呉市及 呉軍港ニ 対シ銃爆 撃	艦載機ヲ 主トシテ ル小型延 約八七〇 機	166				59	53	86	5	173	118	24	8	4	1,095			其他民間関係被害 学校全焼一 学校一部損壊一 工場倉庫半壊一 船舶沈没四 機帆船沈没一 魚舟沈没二 船舶小破一 気船小破一 魚船小破一 牛一馬一爆死 軍関係被害 軍艦伊勢、日向、 八雲、出雲、岩手、

至 12 : 50 頃	海中																				被害なし																				
	豊田郡豊浜村中心																																								
昭 20. 7. 31 14 : 00 頃	豊田郡大東村中心	B29 一機																																							被害なし
昭 20. 7. 31 22 : 55 頃	福山市中心	B29 一機																																						被害なし	
昭 20. 8. 6 08 : 16 頃	広島市全域	B29 四機																																							一、重要官公署被害 全焼 中国地方総監府 広島県庁中国軍需監理局 広島市役所 中国海運局 広島控訴院 広島地方裁判所 広島区裁判所 広島鉄道管理部 広島通信局 広島駅 広島貯金局 広島財務局 広島郵便局 広島駅前郵便局 西警察署 東消防署 西消防署 広島国民勤労働員所 広島税務署 広島営林署 地方鉱山監督局広島支局 半焼 広島地方専売局 半壊 宇品警察署 東警察署 (破損) 二、学校被害 全焼 広島文理科大学 中等学校八校 国民学校六校 三、重要会社被害 全焼 中国新聞社 広島中央放送局 同盟通信広島支局 日発広島支店 中国配電 日銀支店 住友銀行支店 芸備銀行本店 帝銀支店 勸銀支店 日通広島支店 自動車配給会社

																		劇場映画館一二 全壊 広島電鉄 四、重要工場被害 全焼 東洋軽金属 大橋工業 東洋製罐 広島瓦斯（工場共） 全壊 旭兵器 倉敷航空 中国塗料 帝国兵器 藤川製鉄 中国配電製作所 半壊 帝人工場 三菱機械 三菱造船 東洋工業 其他の工場 半焼六、〇二八工場 罹災工員 二六、四二〇名 全半壊一五六工場 罹災工員 三四、八一七名 五、其他被害 全焼 大本宮跡 広島城 護国神社 山陽記念館 県病院 通信病院 鉄道病院 全壊 比治山御便殿 六、其他軍側に於ても相当 大なる被害ありたる模様なる も詳細不明
昭20.8.8 自22:25頃 至23:35頃	福山市全域	B29 延約五 〇機	約50,000	242	90	303	33					10,154	25			46,358	一、重要施設被害 全焼 福山市役所 福山警察署 福山勤労動員所 深安沼隈地方事務所 福山駅 福山郵便局 県土木出張所 福山区裁判所 福山保健所 福山城	

																				福山商工経済会 中等学校二 国民学校二 半壊 三菱電機 日本火薬 中等学校二 二、その他軍側に於ても被害 ありたるが詳細不明
昭20.8.9 12:00頃	佐伯郡大 柿町中心	B29 三機					約20,000													被害なし
昭20.8.11 自10:12頃 至11:15頃	呉軍港広 島湾及県 西部沿岸 部ニ対シ 銃爆撃	小型艦載 機延一九 機	10																	被害なし
昭20.8.14 自11:30頃 至12:22頃	県下中沿 岸部及広 島湾銃爆 撃	小型艦載 機延一二 機	2															1		
昭20.8.14 20:40頃	呉中心	B29 一機					約20,000													被害なし
計		3,091 内訳 大型865 小型 2,226	582 内訳 普通 爆弾 581 原子 爆弾1	130,126	100	相当 数	391,000	80,477	9,769	29,000	14,083	7,340	4,488	5	87,309	2,459	4	44	350,116	(註) 投下弾数は軍用地内に投下し たるものは調査不能に付計上 していない。

(編者註・原点の誤植及び計算違いは、これを改めた)

(三)

防空日誌

矢賀警防分団

昭和二十年

一月二日*午前中は各個人、午後は各隣組注水競技会国民学校校庭にてあり。

*警防員下村釣再度応召入隊

三日*警戒発令

午後三時七分発令、同三時五五分解除

六日*空襲発令

午前八時五〇分警戒発令

午前九時一五分空襲発令

同十一時一五分空襲解除

同十一時二五分警戒解除

九日*警戒発令

午後二時一〇分発令、同三時解除

十三日*牛田山防空用松材伐採出動

本日より一月二十五日迄(二十四日休)

夜、本部にて出動の仲間員総寄り協議、各自の自覚に待つ事となる。

二十日*警戒発令

午後七時四〇分発令、同八時解除

二十一日*牛田山松材搬出慰労会、山にてあり

二十六日*宍戸分団長宅にて出費の件協議(幹部)

男子一日拾円、女子手伝五円

団特別会計より出費と決定

二月二十日*警戒発令

午後八時二〇分発令、同八時四八分解除

二十三日*警戒発令

午前四時三〇分発令、同四時五〇分解除

二十五日*警戒発令

午後二時四五分発令、同三時解除

国民学校にて中西海軍中佐町葬の最中なりき

三月一日*警戒発令

午前四時発令、同四時二五分解除

三日*警戒発令

午後一時三〇分発令、同十一時四〇分解除

五日*警戒発令

午後八時発令、同八時四〇分解除

六日*警戒発令

午後一時三〇分発令、七日午前〇時四〇分解除

八日*警戒発令

午前〇時三〇分発令、同一時四〇分解除

午前十一時一五分発令、同十一時四〇分解除

九日*防空壕設備分団本部南隣消防部員出務

十日* // 警備部員出務

午後九時本部集合、各家庭灯火管制設備点検

午後一〇時三〇分終了、北官舎寄宿寮に裸火赫々とあり。

十一日*警戒発令

午前一時発令、同二時二〇分解除

防空壕設備分団本部南隣警備部員出務

十二日*警戒発令

午前〇時一五分発令、同〇時四〇分解除

十三日*警戒発令

午後九時二五分発令、同一〇時五分解除

十四日*警戒発令

午前一時二五分発令、同二時解除

十五日*警戒発令

午前二時三〇分発令、同二時五〇分解除

*警戒待機

敵機大空襲の予想の為、午後一時本部へ集合警戒待機す。午前〇時四〇分四国地区、近畿地区一機来襲するも当地区警戒に入らず、情報放送中止により解散

十七日*警戒発令

午前二時二五分発令、同三時三〇分解除

十八日*警戒発令

午前八時二五分発令、同一〇時三〇分解除

十九日*空襲発令

午前七時一〇分警戒発令

午前七時二〇分空襲発令

呉方面上空に敵機多数来襲、弾幕砲音に快感さへ覚ゆる程なり。午前九時過ぎ敵機七機府中方面より矢賀上空に飛来、尾長・山根方面へ機関銃掃射、爆弾投下す。当分団より、尾長、矢賀防空小区長への報告次の通り、三月十九日午前艦載機七機来襲状況報告(第一次報告)

ガソリン空罐一ヶ広島鉄道局工機都南門左前田中へ落下、家屋人畜被害なし

本空罐並に残存ガソリンの一部は東署へ提出せり、其の他機関銃掃射の被害、人命に被害なくも家屋損傷程度調査中

(第二次報告)機関銃掃射の弾丸は拾得せざるも正午迄に主として矢賀町市組中組にて葉菜一〇八

ヶ(ケース付)ケース二拾得せり

被害は三戸に於て瓦三枚破壊セル他、家屋人畜に損傷なし以上

午前一〇時五二分空襲解除

午前一一時空襲発令、同一二時空襲解除

午後〇時五二分警戒解除

午後〇時五七分警戒発令、同一時四九分解除

午後四時三五分空襲発令、同五時一五分解除

午後五時二五分警戒解除

時宗豊、中山政夫、団服支給

二十日*警戒発令

午前一時一四分発令、同一時四五分解除

午前三時一二分発令、同三時四〇分解除

午前六時四三分発令、同七時一二分解除

二十一日*岩本徳一氏応召、下関〇〇部隊

二十三日*警戒発令

午前〇時五〇分発令、同一時二〇分解除

府中町茂藁火災出動、午後六時三〇分から八時迄分団長、副分団長、宍戸重男、宮崎浅吉、高砂徳三、時宗豊

二十四日*警戒発令

午前〇時二〇分発令、同一時一分解除

午前二時七分発令、同二時三〇分解除

二十七日*警戒発令

午前〇時一分発令、同一時四〇分解除

*建物強制疎開跡整理

午前六時岩鼻集合、三川町稻荷神社前へ、午前中四〇名、午後四名増、総員四四名出勤、終日熱心に倒壊跡整理、矢賀分団受持終了後、幡町分団、更に大洲分団に応援、五時作業終了、敷島食堂にてビール飲み、七時小切木を宍戸倉庫へ入庫して解散

空襲発令

右作業中、午前九時五〇分警戒発令、一〇時空襲発令、直に作業止め急ぎ帰り分団本部へ、午前一時一七分空襲解除、午前一時二六分警戒解除、中食後一時前再度作業場へ

二十七日*警戒発令

午後一〇時七分発令、二八日午前〇時四二分解除

二十八日*警戒発令

午後五時二〇分発令、同五時三八分解除

二十九日*警戒発令

午前五時一七分発令、同六時解除

午前六時五分発令、同七時五分解除

午後一時一分発令、同一時四六分解除

木村金次郎氏応召、鹿児島〇〇部隊へ

三十一日*警戒発令

午前〇時発令、午前一時四五分解除

四月一日*警戒発令

午後一〇時発令、同一〇時五〇分解除

二日*警戒発令

午前〇時五〇分発令、同一時五〇分解除

午後一時五〇分発令、四月三日午前一時四五分解除

三日*警戒発令

午後一〇時五三分発令、同一二時解除

六日*警戒発令

午前一時二五分発令、同一時五〇分解除

八日*警戒発令

午前一時五五分発令、同二時解除

午後一時五〇分発令、四月九日午前〇時一七分解除

十日*警戒発令

午前〇時一五分発令、同一時八分解除

十二日*警戒発令

午後一時発令、同一時四五分解除

十三日*警戒発令

午前五時四四分発令、同六時一五分解除

午前九時四〇分発令、同一〇時解除

午前一〇時一七分発令、同一〇時四五分解除

十五日*沢井好藏氏応召

十六日*警戒発令

午前一〇時九分発令、同一〇時二七分解除

十七日*警戒発令

午前四時五五分発令、同五時三五分解除

午後二時三〇分発令、同三時一二分解除

本日ガソリンポンプ操法講習あり

十八日*警戒発令

午前〇時四分発令、同〇時二七分解除

二十日*警戒発令

午前七時発令、同七時一七分解除

二十一日*警戒発令

午後一時四〇分発令、同一時五五分解除

二十二日*警戒発令

午前五時二五分発令、同五時四二分解除

午前六時三二分発令、同七時一三分解除

午後一時四〇分発令、同二時五分解除

二十三日*警戒発令

午前五時二〇分発令、同五時四九分解除

午後一時二三分発令、同一時三五分解除

二十四日*警戒発令

午前五時一八分発令、同五時五五分解除

二十五日*警戒発令

午後一時発令、同一時二五分解除

二十六日*警戒発令

午前五時四七分発令

空襲発令

午前六時一五分発令、同七時空襲解除

同七時一五分警戒解除

二十七日*林倉一救護部長、中山政夫、時宗豊消防部警防員推薦

警戒発令

午後一時四〇分発令、同二時解除

二十八日*警戒発令

午前五時四〇分発令、同六時三五分解除

午前一〇時三〇分発令、同一〇時五五分解除

午後一時四五分発令、同二時三〇分解除

二十九日*警戒発令

午前九時四五分発令、同一〇時五分解除

警戒発令集合を期にウイスキーにて天長の佳節を祝い、健闘を誓ふ

三十日*警戒発令

午前六時一五分発令、同七時一五分解除

小町中国郵便局附近へ爆弾投下、火災発生

警戒発令

午前一〇時一〇分発令、同一〇時二二分解除

五月二日*警戒発令

午前五時三三分発令、同六時五分解除

三日*警戒発令

午前五時八分発令、同五時四五分解除

午前六時五五分発令、同七時五分解除

午後一時五〇分発令、同二時六分解除

四日*警戒発令

午前〇時五分発令、同〇時一五分解除

午前六時二五分発令、同六時四五分解除

午前八時二分発令、同九時一分解除

午後二時一五分発令、同三時一五分解除

五日*警戒発令

午前五時二八分発令、同五時五八分解除

午前一〇時一八分発令

空襲発令

午前一〇時二〇分発令、同一一時二四分空襲解除

同一一時三五分警戒解除

(広一空地爆撃)

警戒発令

午後〇時一三分発令、同一時一分解除

午後一時四二分発令、六日午前一時七分解除

六日*警戒発令

午前六時二一分発令、同七時一二分解除

午前一〇時三七分発令、同一〇時五五分解除

七日*警戒発令

午前八時発令、同九時解除

午後一時発令、同一時一分解除

八日*警戒発令

午前五時一五分発令、同五時四五分解除

午前七時四〇分発令、同八時三〇分解除

九日*警戒発令

午前五時一八分発令、同五時四〇分解除

十日*警戒発令

午前七時二〇分発令

空襲発令

午前七時二八分発令、同一一時一分空襲解除

同一一時二三分警戒解除

(岩国陸空爆撃)

十一日*警戒発令

午前四時四五分発令、同四時五〇分解除

午前六時四〇分発令

空襲発令

午前七時四五分発令、同八時二五分空襲解除

午前八時三二分発令、同九時一二分空襲解除

同九時三二分警戒解除

(阪神・佐伯・大分爆撃)

警戒発令

午後一時一五分発令、同一時五〇分解除

午後二時二五分発令、同二時四〇分解除

十二日*警戒発令

午前九時一分発令、同九時一七分解除

午後〇時三〇分発令、同一時二〇分解除

十四日*警戒発令

午前〇時三〇分発令、同一時三七分解除

午前一一時五五分発令

空襲発令

午後〇時発令、同一時空襲解除

同一時七分警戒解除

警戒発令

午後二時一五分発令、同二時四〇分解除

十五日*警戒発令

午前七時一〇分発令、同七時四五分解除

午後〇時四〇分発令、同一時二五分解除

午後二時二〇分発令、同二時四〇分解除

幹部新編成申請

十六日*警戒発令

午前五時一五分発令、同五時五五分解除

午後一時四三分発令、同二時三分解除

十七日*警戒発令

午後一時七分発令、同一時三〇分解除

十八日*警戒発令

午前五時四三分発令、同六時一〇分解除

十九日*警戒発令

午前〇時四〇分発令、同二時一〇分解除

午後〇時二五分発令、同〇時五一分解除

二十日*警戒発令

午前六時三〇分発令、同六時五七分解除

二十一日*警戒発令

午前〇時発令

*空襲発令

午前〇時二〇分発令、同一時二二分空襲解除

同一時四六分警戒解除

警戒発令

午前一一時五五分発令、午後〇時三分解除

午後一時発令、同一時三二分解除

二十二日*警戒発令

午前五時二〇分発令、同五時五〇分解除

二十三日*警戒発令

午前〇時四〇分発令、同二時二五分解除

午後〇時三八分発令、同一時二〇分解除

(海田市へ爆弾投下四発)

二十四日*警戒発令

午前五時三三分発令、同六時二八分解除

二十五日*警戒発令

午前〇時五五分発令、同二時解除

午後一時一〇分発令、同一時二四分解除

二十六日*警戒発令

午前五時三五分発令、同六時解除

二十七日*警戒発令

午前〇時五分発令、同一時五〇分解除

午前五時四五分発令、同五時五五分解除

午後一時三〇分発令、二十八日午前一時二五分解除

二十八日*警戒発令

午前八時四六分発令、同九時七分解除

二十九日*警戒発令

午前五時一〇分発令、同五時三〇分解除

平塚町疎開跡道路整地作業勤労奉仕

午前六時岩鼻集合、同七時出発、鶴見橋を下って平塚町跡へ消防自動車並に人員避難道路の長石除却、午後四時終了。帰って六時頃より分団長宅にて慰労酒あり、団員久し振りに悦に入る。午後七時頃逐次散会、出動人員二十九名。

三十一日*警戒発令

午前六時一分発令、同六時三〇分解除(広島上空ビラ投下)

六月一日*矢賀警防分団本部を東消防署矢賀出張所へ貸与しあり、従前より宍戸製作所事務所を分団本部とせり。よって今般警察署へもこの旨届けたり。

分団本部常置員班長宍戸重男

警防員時宗豊兩名とす

警戒発令

午前〇時一五分発令、同〇時二九分解除

午前九時八分発令、同九時四七分解除

三日*警戒発令

午前五時二五分発令、同六時二分解除

午後〇時二五分発令、同〇時四一分解除

五日*警戒待機、警報発令なきもサイレン吹鳴により本部へ集合待機。午前四時一五分一同五時迄

七日*警戒発令

午前五時三五分発令、同六時一五分解除

(大阪爆撃)

午前九時発令、同一〇時七分解除

午前一一時八分発令、午後〇時一〇分解除

十日*警戒発令

午前〇時一〇分発令、同一時一二分解除

十一日*警戒発令

午前五時二分発令、同五時五五分解除

十二日*警戒発令

午前〇時二分発令、同一時一〇分解除

十五日*警戒発令

午前八時六分発令、同一〇時二五分解除

(大阪空襲)

午前一時六分発令、同二時二七分解除

(山口県機雷投下)

午後〇時二〇分発令、同〇時三九分解除

午後一時四一分発令、十七日午前〇時一一分解除

十七日*警戒発令

午後〇時五六分発令、同一時二二分解除

飯田義弘君応徴中の処応召、中部一〇四部隊

十九日*警戒発令

午後一時三〇分発令、同二時一〇分解除

二十日*警戒発令

午後一時二五分発令、同二時一〇分解除

二十一日*警戒発令

午前九時五〇分発令、同一〇時解除

二十二日*警戒発令

午前〇時発令、同〇時五八分解除

午前六時一〇分発令、同六時二〇分解除

午前八時三三分発令

呉・空襲発令

午前八時三五分発令、同一一時解除

同一一時五分警戒解除

警戒発令

午後一時二分発令、同一時五三分解除

二十三日*警戒発令

午後一時四六分発令

空襲発令

午後一二時発令、二十四日午前一時四〇分空襲解除

二十四日*午前一時五〇分警戒解除

二十五日*警戒発令

午前五時五分発令、同五時一〇分解除

午前八時発令、同八時五〇分解除

午後二時発令、同二時四三分解除

二十六日*警戒発令

午前七時一〇分発令、同八時七分解除

午後〇時一〇分発令、同一時二分解除

午後一時三〇分発令、二十七日午前〇時一〇分解除

矢賀町国民義勇隊結成査閲。午後五時よりキリンビール会社にて、市本部より村上哲夫査閲官、
警防団は警防隊として参加

二十八日*警戒発令

午後〇時七分発令、同〇時二七分解除

二十九日*警戒発令

午前三時五分発令、同四時四三分解除

(岡山空襲)

午後一時五四分発令

空襲発令

午後一時五九分発令、三十日午前〇時五〇分空襲解除

三十日午前一時三〇分警戒解除

(下松爆撃)

七月一日*警戒発令

午前〇時二三分発令、同〇時四六分解除

午前〇時五〇分発令、同一時解除

午後一時九分発令

呉、空襲発令

午後一時三五分発令

二日*午前四時二五分空襲、警戒共に解除

二日*呉焼夷弾攻撃、罹災民救急用ムスピニ回に亙り運搬

矢賀町国民義勇隊炊事隊出動、団員四名宛便乗し、二河公園迄

三日*警戒発令

午前〇時一八分発令、同一時三分解除

午後一時一分発令

空襲発令

午後一時三八分発令、四日午前一時五分空襲解除

四日午前二時一分警戒解除

四日*警戒発令

午前二時発令、同四時三二分解除

午後八時五〇分発令、同九時三二分解除

五日*警戒発令

午前八時五〇分発令、同九時五四分解除

午後一時二七分発令、同二時四二分解除

六日*警戒発令

午前九時四三分発令、同一〇時一八分解除

午後一〇時五〇分発令、七日午前〇時三分解除

七日*警戒発令

午前八時五〇分発令、同九時三七分解除

八日*警戒発令

午後一時三五分発令、同二時二分解除

十日*警戒発令

午後二時五八分発令、岡三時三〇分解除

本夜より別紙の通り、分団本部へ宿直制実施。午後八時より翌朝午前五時迄二名宛

十一日*警戒発令

午前四時三〇分発令、同五時九分解除

午後〇時一六分発令、同一時二九分解除

午後八時五八分発令、同一〇時四〇分解除

十二日*警戒発令

午前〇時一〇分発令

空襲発令

午前〇時一五分発令、同〇時五五分空襲解除

同一時二〇分警戒解除

警戒発令

午前九時五六分発令、同一〇時三〇分解除

午後一時四五分発令、同一時五四分解除

午後一〇時二五分発令、十三日午前一時四〇分解除

十三日*警戒発令

午後八時五〇分発令、同一〇時四七分解除

十四日*警戒発令

午前〇時二七分発令、同二時一分解除

午後一時三〇分発令、同二時三六分空襲解除

同三時一分警戒解除

警戒発令

午後三時二八分発令

空襲発令

午後三時三八分発令、同四時三七分空襲解除

同四時四六分警戒解除

中国地区来襲、呉来襲、広島上空にて一機撃墜、火を吐き落つ。

十五日*警戒発令

午前一〇時五三分発令

空襲発令

午前一〇時五九分発令、午後〇時五分空襲解除

午後一時六分警戒解除

(山口県へ戦艦連合来襲)

高橋部長以下五名、東署破壊作業出動

警戒発令

午後一時五五分発令

空襲発令

十六日午前〇時四五分発令、同一時一分空襲解除

同一時一七分警戒解除

十六日*警防員三浦漸君、応召中国一〇六部隊

警戒発令

午後〇時一五分発令、同一時一三分解除

午後一時一八分発令、十七日午前一時四〇分解除

十七日*警戒発令

午後一時四五分発令、同一時五五分解除

午後八時五二分発令、同九時四二分解除

午後一時五五分発令、同一時三三分解除

十八日*警戒発令

午後〇時三分発令、同一時八分解除

(戦艦幾一機広島上空へ来襲)

午後一時二五分発令、十九日午前〇時一五分解除

十九日*警戒発令

午後〇時五一分発令、同一時二四分解除

午後八時三〇分発令、同九時三五分解除

午後一時三五分発令、同一時二二分解除

二十日*警戒発令

午前一時七分発令、同二時二分解除

二十一日*ウイスキーを配給す

二十二日*警戒発令

午前八時四八分発令、同九時三四分解除

午後〇時三六分発令、同一時二九分解除

午後一時四五分発令、同一時四八分解除

午後九時一三分発令、同九時五六分解除

午後一時一八分発令

空襲発令

午後一時五〇分発令、二十三日午前一時一二分空襲解除

二十三日午前一時三四分警戒解除

二十三日*警戒発令

午前五時四分発令、同五時三七分解除

午前六時四八分発令、同七時一〇分解除

午前七時三三分発令、同七時四四分解除

午前八時五五分発令、同九時一六分解除

二十四日*警戒発令

午前五時五五分発令

空襲発令

午前六時六分発令、同八時四五分解除

午前九時一八分発令、同一〇時三七分解除

同一一時五八分警戒解除

午前七時過ぎ、敵艦載機十数機、仁保方面より矢賀上空を過ぐ。本日は中国地区主として呉方面来襲

警戒発令

午後〇時二七分発令

空襲発令

午後〇時三三分発令、同二時五〇分解除

午後三時二分発令、同三時一〇分解除

同三時一六分警戒解除

警戒発令

午後三時五五分発令

空襲発令

午後四時一四分発令、同五時二〇分空襲解除

同五時四〇分警戒解除

二十五日*本日も前日に続き中国地区へ来襲、広島上空には編隊見ず、呉来襲

警戒発令

午前四時四三分発令、同五時九分解除

午前五時三〇分発令

空襲発令

午前六時四八分発令、同八時二〇分空襲解除

同八時三三分警戒解除

警戒発令

午前九時三二分発令

空襲発令

午前一〇時九分発令、同一〇時五五分空襲解除

同一一時九分警戒解除

警戒発令

午前一一時二三分発令

空襲発令

午前一一時三一分発令、午後〇時三三分空襲解除

同〇時四八分警戒解除

*警戒発令

午後一時一九分発令、同二時六分解除

午後二時一五分発令

空襲発令

午後二時一九分発令、同二時四二分空襲解除

同三時一一分警戒解除

警戒発令

午後九時二八分発令

空襲発令

午後九時三六分発令、同一〇時二三分空襲解除

同一一時三〇分警戒解除

二十六日*警戒発令

午前〇時一二分発令、同〇時五〇分解除

午前九時三〇分発令、同九時四四分解除

午後一時四九分発令、同二時二七分解除

午後一〇時五四分発令

空襲発令

午後一一時五分発令、二十七日午前〇時二九分空襲解除

二十七日午前一時一五分警戒解除

二十七日*警戒発令

午後〇時一七分発令、同〇時四六分解除

午後一〇時発令

空襲発令

午後一一時三五分発令、二十八日午前〇時一二分空襲解除

二十八日午前〇時五〇分警戒解除

二十八日*警戒発令

午前五時四八分発令

空襲発令

午前五時五六分発令、同七時五五分解除

午前九時三〇分発令、同一〇時三八分空襲解除

同一一時二分警戒解除

警戒発令

午前一一時三三分発令

空襲発令

午前一一時三六分発令、午後一時七分空襲解除

同一時一五分警戒解除

警戒発令

午後一時二五分発令

空襲発令

二十九日*警戒発令

午後〇時二六分発令

空襲発令

午後〇時一三分発令、同一時二二分空襲解除

同一時四二分警戒解除

警戒発令

午後九時三五分発令

空襲発令

午後九時四二分発令、同一〇時三五分解除

午後一〇時五〇分発令、同一一時四五分空襲解除

三十日午前〇時二八分警戒解除

三十日*警戒発令

午前八時五分発令

空襲発令

午前八時一五分発令、同八時四六分空襲解除

同八時五一分警戒解除

警戒発令

午後一時一八分発令、同一時四八分解除

三十一日*警戒発令

午前一時四二分発令、同二時一〇分解除

矢賀警防分団防空当番日割表

勤務時間(午後八時より翌朝五時まで)

七月十日	天道種吉・高砂徳三	十八日	山下弥一・松永慶三	二十六日	飯田源五郎・飯田敏夫
十一日	三浦漸・長谷川数一	十九日	小林重太郎・大久保幾太郎	二十七日	飯田武・飯田雅一
十二日	宮崎浅吉・新島三之助	二十日	石田孝・福本茂	二十八日	飯田潔・増本勇
十三日	北田庫太・溝手一人	二十一日	住田勝志・木村義博	二十九日	江島一男・三浦順一
十四日	横山元重・小寺篤三	二十二日	国司乙次郎・大久保節夫	三十日	太田初吉・宍戸重男
十五日	中山政夫・植木卯三郎	二十三日	宗田静人・谷川秀雄	三十一日	高橋増雄・難波章三
十六日	大田正吉・大久保豊	二十四日	山田隆夫・藪野政一		
十七日	山代義雄・秋山登	二十五日	出雲直吉・浜本茂男		

八月一日*警戒発令

午後九時六分発令

空襲発令

午後九時一二分発令、同一〇時二分空襲解除

同一〇時一五分警戒解除

警戒発令

午後一時一分発令

空襲発令

午後一時二二分発令、二日午前〇時一二分空襲解除

二日*午前〇時一七分警戒解除

四日*警戒発令

午後一時五〇分発令、五日午前〇時三五分解除

五日*警戒発令

午後九時二〇分発令

空襲発令

午後九時二七分発令、同一時五五分解除

六日*午前〇時二五分発令、六日午前二時一〇分空襲解除

六日午前二時一五分警戒解除

六日*警戒発令

午前七時九分発令同七時三一分解除

午前八時一五分、B29 数機三機が四機、広島上空にあり、ウラン原子爆弾投下、広島市は一瞬にして廃墟となる。以後電気停電にて警報伝達徹底せず、記録せず。

当時分団長は矢賀町義勇隊長として市内鶴見町にあり負傷、直ちにオートバイにて帰町、町内一巡して罹災状況視察、団員に指示後、尾長町方面火災発生、防火の指揮段取の為再度出動、防空小区長に連絡、よりにて団員残員計七名ガソリンポンプを挽き三本松へ行く、高橋消防部長、時宗豊、中山政夫、宮崎浅吉、谷川秀雄、増本勇、飯田雅一氏は火傷を押して消火に従事す。午後五時頃より午後六時頃迄従事す。

矢賀国民学校には直ちに救護所開設、林救護部長と浜本従事、午前一時頃 B29 一機が状況視察に來た様なり。(以上はお自記)

警防分団本部(宍戸製作所) 詰める団員数名

午後九時三〇分空襲発令、同一〇時五分空襲解除

同一〇時一〇分警戒解除

午後一時四〇分警戒発令

七日*午前一時頃空襲発令あり

夜は宍戸製作所前道路畔へ蚊帳より野宿し警戒警報伝達は口頭なり、ムスピの配給あり道路通行者へ給与、救護所林部長、浜本

八日*矢賀救護所山田出、警防分団本部を学校へ移し団員充実を計る。

(二時三〇分～二三時三〇分福山市焼夷弾爆撃、中配記録より転記)

九日*矢賀救護所

警戒九時発令

(一時四三分～一二時三〇分岩国海軍航空隊銃爆撃、中配記録より)

十日*矢賀救護所にて

午前三時頃警戒発令

十一日*大竹町海軍潜水学校爆撃、午前一時頃空襲発令

警戒発令

午後一時三五分発令、同一一時三〇分解除

十二日*警戒発令

午前六時三九分発令、同七時四分解除

十三日*警戒発令

午後八時四五分発令、同八時五五分解除

十四日*午前一時三〇分頃B29 編隊で来る。空襲発令

岩国駅前爆撃午後光市

十五日*正午停戦の詔勅換発玉音拝聴、涙を流し泣く

二十日*聖旨により正午を以て準備管制解除

二十一日*午前一時三〇分、宍戸重男宅へ高橋部長、増本、浜本、難波、宍戸重男、山田部長集合、中食後東警防団へ報告の書類調製、午後三時三〇分迄

六日*空襲による死者、重傷、軽傷、行方不明、健在、特功労者報告、職名、氏名、生年月日

(死者)

太田初吉警防部長、国司乙次郎班長

(重傷)

宍戸義太郎分団長、坂本信太郎副分団長、三浦順一、福本茂、木村義博、住田勝志、石川孝、山下弥一、松永慶三、宮川丈一、中村万太郎、植木卯三郎、太田正吉、大久保豊

(軽傷)

飯田雅一、難波章三、林倉一、宍戸重男

(行方不明)秋山登

(健在)

高橋増雄、山田隆夫、中川勘助、新島三之助、飯田潔、飯田敏夫、北田庫太、小林重太郎、宮崎浅吉、大久保節夫、飯田武、藪野政一、天道種吉、浜本茂男、大久保幾太郎、増本勇、谷川秀雄、宗田静人、横山元重、飯田源五郎、長谷川数一、小寺篤三、江島一男、石本二夫、出雲直吉、高砂徳三、溝手一人、時宗豊、中山政夫

(特功労者)

林倉一、高橋増雄、谷川秀雄、難波章三、浜本茂男、増本勇、中山政夫、溝手一人、宗田静人、宍戸重男、時宗豊、山田隆夫、飯田雅一、宮崎浅吉、宍戸義太郎

二十五日*会計係太田初吉氏死亡により不取敢、貯金通帳、会計帳簿、判取帳、買物帳等本部長山田隆夫受継ぐ

二十九日*警防団員へ罹災当時勤務せし者へ清酒、煙草配給あり

矢賀警防分団防空当番日割表

勤務時間は午後八時より翌朝五時まで

八月一日 〃二十四日 九月十六日	宮川丈一 中村万太郎	八月九日 九月一日 〃二十四日	山代義雄 秋山登	八月十七日 九月九日 十月一日	出雲直吉 浜本茂男
八月二日 〃二十五日 九月十七日	天道種吉 高砂徳三	八月十日 九月二日 〃二十五日	山下弥一 松永慶三	八月十八日 九月十日 十月二日	飯田源五郎 飯田敏夫
八月三日 〃二十六日 九月十八日	林倉一 長谷川数一	八月十一日 九月三日 〃二十六日	小林重太郎 大久保幾太郎	八月十九日 九月十一日 十月三日	飯田武 飯田雅一
八月四日 〃二十七日 九月十九日	宮崎浅吉 新島三之助	八月十二日 九月四日 〃二十七日	石田孝 福本茂	八月二十日 九月十二日 十月四日	飯田潔 増本勇
八月五日 〃二十八日 九月二十日	北田倉太 溝手一人	八月十三日 九月五日 〃二十八日	住田勝志 木村義博	八月二十一日 九月十三日 十月五日	江島一夫 三浦順一
八月六日 〃二十九日 九月二十一日	横山元重 小寺篤三	八月十四日 九月六日 〃二十九日	国司乙次郎 大久保節夫	八月二十二日 九月十四日 十月六日	太田初吉 宍戸重男
八月七日 〃三十日 九月二十二日	中山政夫 植木卯三郎	八月十五日 九月七日 〃三十日	宗田静人 谷川秀雄	八月二十三日 九月十五日 十月七日	高橋増雄 灘波章三
八月八日 〃三十一日 九月二十三日	大田正吉 大久保豊	八月十六日 九月八日 〃三十一日	山田隆夫 藪野政一		

九月二日*宍戸重男宅にて午後五時頃より六日以来の慰労会あり

四日*矢賀尾長小区へ罹災死傷者報告提出

死亡太田初吉・防空当番にて防空監査視中、梁にて頭部負傷為に死亡す。

〃国司乙次郎…

〃難波章三…尾長町へ警防団として消火作業に従事中、頭部負傷其後も数日、警防業務に従事為に遂に死亡す。

火傷宍戸義太郎…義勇隊長として鶴見町へ勤勞奉仕に出動中火傷、首の後、左肱より掌、左股火傷、当日町内巡視し尾長消火作業の指揮にあたり一〇日間の治療を要す。

〃坂本信太郎…義勇隊として出動中首、背、両手、顔口周

〃大久保豊…〃背、首、右手

〃宮川丈一…〃首、顔半面、右手

〃山下弥一…〃首、両手

〃石田孝…〃首、左手

〃住田勝志…〃顔全部、両手、両足

〃福本茂…〃顔左半面、両手、両足

〃木村義博…〃右手、首、背部

〃大田正吉…〃顔、胸、両手、両足

〃中村万太郎…〃首、両手

〃松永慶三…〃顔、両手

裂傷林倉一…防衛召集の件にて大手町校へ集合中、講堂倒壊により頭部負傷、其の後矢賀救護所勤務、その間貨物自動車にて二回転、胸部圧迫尚約二十五日間勤務、数日

前よりガス中毒にて重態に落入る。

火傷飯田雅一…私用にて愛宕町踏切付近にあり顔面胸上部火傷

当日尾長消火作業に従事

裂傷植木卯三郎…私用にて市内にあり家屋倒壊にて頭部負傷

打撲傷穴戸重男…分団本部にあり警鐘打たんとし家屋倒壊、右股打撲傷を受く。

裂傷三浦順…市役所勤務中ガラスにて体全部裂傷を受く。

行方不明秋山登…義勇隊として出勤中行方不明

以上二十一名負傷種別、住所、職名、氏名、生年月日、負傷事由、部位

十月六日*矢賀救護所閉鎖。日本医療団矢賀病院となる。

十四日*午後二時より戦災戦没者合同慰霊祭、覚法寺にてあり、警防団員太田、難波、国司、秋山四氏へ五十円の香典贈る。

十七日*午前十二時より覚法寺にて町内会と警防団にて戦時中の終戦処理等の慰労宴あり、団員、復員者も加えて甚だ盛会なり。

十二月二十五日*次に貼付の如く年末夜警を行う。

三十一日迄*今年は青年団加入せず、警防団単独なり。青年団夜警を行わざるは本年始めてなり。

一夜の経費三十円支出す。合計二百拾円也

(四)

炎のなかに 原爆で逝った級友の25回忌によせて

旧比治山高女第5期生の会

第二総軍に動員された学徒

秦政子

(1) 安宅先生に会うまで

朝からてりつける陽をかざすすべもなく、部厚い防空頭巾と非常袋を肩に、青いゴム草履をバタつかせながら駅裏の藤の茶屋へいそいだ。

第二総軍(畑司令官)の暗号班に動員された女学校四年生菊組二十名が藤の茶屋に集まる。私はその引率教官であった。我等のオアシス藤の下で隊伍をととのえ、もんぺ姿も凛々しく歩調をとっていつもの様にぎっしり並んだ兵士の右端に一行で 朝礼の位置についた。それは又最後の朝礼でもあった。

戦争たけなわの十九年秋、南校舎が軍服縫製工場となり三年菊組が動員されて毎日毎日将校のズボンを縫った。出来たズボンが山と積まれてもミシンを踏んだ。翌年の春頃から「広島もあぶないのでこの工場もずっと山奥へ疎開するらしい」と借行社から派遣された人達が噂をはじめた。それを裏づけるかのようにズボンが段々少なくなった。梅雨空にも増して暗い気持の六月、ついに学校工場は閉鎖された。

こんな時に第二総軍の暗号班に動員された生徒は、まことに意気軒昂、国に殉じるの心意気でもあったのだろうか。

その朝も一死報国の誓いと体操が終りいつものように生徒は本館に消えた。(暗号班の性質上、身分を拘束するようになるからと、朝礼までしか生徒の行動はわからなかった。)

本館からずいぶん離れた別棟平屋の控室、その控室は時々倉庫のかわりにもなるらしい。隣の部屋へ女学院の一年生が動員されて、毎日数学の書き方練習でもしているように見えたがその内容はだれにもわからなかった。

控室ではよく本を読んだ。長塚節、赤彦、百科辞典だけは疎開させたいと思っていたので、とても疎開出来そうにないものを片端から読んだ。生徒にも貸した。丁度その日は亡くなった木村一二三[ひふみ]さんに「レ・ミゼラブル」を貸した。次は「緋文字」をもって来る約束もした。戦争で焼けなかった私の書棚には、「あゝ無情」のカバーとその日の一二三さんの美しい笑顔がのこされた。

控室にはたくさんの机、腰掛が積み上げられていた。しかし外から入るとヒンヤリと気持ちが良い。腰をおろしてホットした瞬間がああ尖光である。文字通り何が何だかわからない。どれだけ時間がたったのかも。

自分のまん前へ爆弾が落ちたのだと思った。白く、いや黄色く光った様な気もする。ただ落ちつこうと思った。やっ和外へ這い出すと今まで全然気のつかなかった大きな煙突が、目の前に突立っているではないか。そのうしろにはガランとした白っぽい建物も。誰もいない。音もない。異様なにおい。控室も隣の部屋も押しつぶされて屋根だけが巨像でも伏した様に横たわっている。耳をすますと蚊のなく様なうめき「おあさーん」「じょうとうへいどのー」ときこえるではないか「大変だ」うちの生徒も? はじかれたように走った。すぐ本館が見えた。もとのまま泰然とそびえているではないか。よかった。つぶれたのは私たちのところだけらしい。早く兵隊さんに連絡しよう。それにしても誰にも会わないのはどうしたことだろう。営庭も爆弾の煙で見通しが悪い。煙のはるか向こうにバラバラと小さく走っている黒い影。生徒だ。私は息を切らして走った。だのにその影も屋敷のように消えてしまった。きめられた小高いたまりまで一息に走った。そこにも、もう生徒のかわりはなかった。しかし全員無事に逃げたのだと安心した。早くかえって、学校長に報告しよう。片方しかないゴムぞうりを右に左に何べんも穿きかえたが歩くと足の裏がチリチリいたむ。

目の前がバツと明るくなった。黒々とそびえていた本館はみかん色につつまれ菊の紋章があざやかに光る。みるまに本館は火を吹きぐらっとゆらいでくずれ落ちた。美しく壮観とも見える本館の最後であった。町が燃える。線路の枕木さえも燃える。メラメラと。地獄火さながらに。

尾長の町から愛宕町へ出て学校へ帰ろうと思った。しかし焼け落ちた家も道路も燃えくすぶりどこからも向こうへは渡れない。それにしても穿くものがほしい。又二葉の里まで引き帰した。木立の中の人影に思い切って声をかけると「どれなりとおほきなさい」とやさしく親切に下駄をもらったことがひどくうれしい。足もかるく駅に向かったトタンに安宅先生にパツパツ会った。

「先生…生徒は皆焼ける前に逃げました…」あとはもう声を出して泣いた。「元氣出しなはれ」「学校は無事よ。」よかった早く学校に帰ろう。

(2) 傷ついた学徒との出会い

ずいぶん歩いた筈なのに広島駅はまだまだ遠い。焼けただれた被爆者が練兵場へ避難して来る。男女の見わけもつかぬ顔。帽子のあとだけ白い兵士。焼けのこりの布切を引きずり、つぶやきながらさまよう老婆。それなのに涼しいところもない。救護所らしいところもない。牛田の道から、わかめのようなもんぺをぶらさげて夢遊病者のような女学生がやってくる。あ、生徒だ。「加治さん。」又一人「新内さん」こんなに広い練兵場でよくまあ…。それにしても新内さんはひどい。あのパツパツした目もあけない。加治さんは二葉の里の家まで帰れるだろう。新内さんをどうにかしなければ……。

(加治さんも新内さんも、学校工場が閉じまるまでの受け持ちの生徒で軍管区に動員されて被爆したのだ)

新内さんをどうしよう。陽は又やけにサンサンと照りつける。

暑い練兵場を歩きまわった。テントの張られたところは皆のぞいた。とにかくあの子をどうにかしたい。どのテントも半裸の被爆者がぎっしり。すでにうごかぬ人もいくたりか。

だからともなく、「重態のものは幼年学校に収容される」私は新内さんのところへとんで帰った。新内さんがいない「先生が帰るまでここにいるのよ」と言っておいたのに。どなたか傷ついた学徒をあわれんで涼しいところへ運んで下さったにちがいない。ガッカリして草の深いところに腰をおろした。

みると少しはなれて「先生ココニイマス、ニイナイトシコ」焼けぼっくいで書かれた立札が目についた。新内さんはまるで箕虫のように拾い集めた木片[きぎれ]でかこまれ、その前に私に知らせる立札が置かれていたのだ。

「新内さん。先生がかえったのよ」うめきに似た反応…。

「すぐ病院へつれて行って貰うからね」「……」「かぜをつくってもらって涼しかったね」「……」「元気を出すのよ」「……」「先生はもうどこへも行かないからね」「……」

新内さんは何にもいわない。返事が声にならないのだろうか。

蔭をつくって、立札を立てて、学徒をいたわってくださった親切な方。ここでこうしてじっと待ってくれたこの子…二人の心情をいく度も思っただけをぬらした。

それにしても幼年学校へ収容される作業はどこではじまっているのだろうか。ながくながく二人で待った。日も暮れはじめ、ひどかった暑さもやわらいだ。担架が来た。待ちに待った担架が。「ここにいます。お願いします。学徒です。」新内さんは、軽々とかつがれて牛田に通じる道をゆっくり運ばれて行った。

いつまでもいつまでも黒い担架の列を見た。

トボトボと二葉山ろくの第二総軍のたまりにかえって、木村さんの亡くなった事を知らされた。残照が一瞬あたりをあかるくして、長がかった一日の終りを告げた。

(3) 加治さんを見舞って学校に帰る

朝ざりか、人影はまだ黒い。ふもとの茶屋で口をすすいだ。その流れに動かぬ人がはまっている。屍なのだ。私にはもうこわいとかむごいとかいって神経が麻痺してしまったのだろうか。加治さんの家はましーんとしていた。空襲を案じてか庭につくられた大きな壕にやわらかそうなふとんにくるんで顔だけ出してねかされていた。

「加治さん。」「千世ちゃん、あなたの好きな先生が来て下さったのよ」お母さんと二人で声をかけたが返事もない。「昨日はずい分苦しみました。」はた目には安らいだぬりに見えたがもうすでに意識もないのか。枕元におかれた、たえて久しく見たこともない果物の缶詰ま口も切られていなかった。その足で駅前、荒神橋、東雲町を通過して学校に帰った。道で「肩に血が流れていますよ」と注意されたことを思い出し傷ついた頭にソツと手を触れて見た。

(4) 亡くなった木村一二三さんのこと

(学友灘岡さんの話)

朝礼がすんで、今日からいよいよ特別の仕事をして貰うからと二階の別の部屋へ引率されました。私は柱の前に、木村さんは私の隣にいました。説明をきき初めたとたんにあの爆弾です。まっ暗な下に落ちましたが木や道具にはさまって身動きも出来ません。「学徒を出せ…」「一番に学徒を」きき慣れた上官の声がきこえます。私も兵隊さんに出して貰いましたが並んでいた木村さんはいませんでした。

(お母さんの話)

その日主人がひどいやけどで、かえって来ました。その騒動でごたごたしましたが、どうも胸さわぎがして落つきません。「一二三がかえらんが、第二総軍まで行って見てくれんか」と姉をやりました。夕方おそく「お母さん。何を云うても力を落しなさんな。一二三が死んだのよ」やっぱりそうか、からだ中の力が皆ぬけたような気がしました。翌日すぐ第二総軍にまいりました。一二三は書類専用のエレベーターに押しつぶされて足だけ見えていたそうです。私がまいりました時は死なれたたくさん兵隊さんをつみかさねて焼いておられました。一二三は学徒だからと一人だけ白い毛布に包んで焼いたと云ってかたわらの骨をみせて下さいました。見おぼえのあるバックルが形をのこして灰になっておりました。よく揃った歯もきれいにそのまま残っておりました。一二三にちがいはありません。むごやむごや、私はくらくらして気分が悪く立っていられませんでした。慰霊祭がすんでからお骨はとどけるからと言って貰いましたがそのまま一二三をおいて帰る気になれませんでしたのでお舍利さんだけもらって帰りました。

歩けなかった野村さんの話

兵隊さんに出して貰いましたが足が立ちません。仕方なく大きな私をおぶって走って下さいました。途中学友がかわって戸板で東照宮の下まで運んでくれました。救護所というのでしたが別に手当もうけず伏したままでした。夕方上に運ばれましたが女学院の生徒がたくさん避難しておりました。比治山の生徒は私が一人でした。その夜小さな乾パンとコンペー糖の配給がありまして、翌日母が荷車で迎えに来てくれるまで板の上に伏しておりました。

その日の学徒

第二総軍では木村さん一人が亡くなり他はそれぞれに安全なところへ落着いた筈であるがその日の学徒で今わかっている者の氏名をかかげしておく。

天登典子、蔵田美紗江、後藤富士恵、定森茂子、底押町子、樽谷重子、中村コトミ、灘岡幸子、野村栄子、林間子、平村キヌエ、福川妙子、細川民恵、松宗静子、満田綾子 以上

原爆の思い出

平松イチ子

その時、事務室で転出生徒の事務手続をしていました。瞬間、校庭の南側を鋭い五色の強い光線が目につくと同時に、玉沢ミサエ先生と私は事務机の下にもぐり込みました。何かしらただならぬ胸さわぎ。何分位たつてか、ようやく頭をもちあげてみると、天井は、あわや落ちる寸前、窓ガラスは吹き飛び、屋内で朝礼して居られた校長、山地両先生は、頭から血を流しておられる…。生徒も傷をしたり、あまりに突然のことで、泣いたり、さわいだり一瞬こして全く修羅場と化しました。

ガラスの破片があちこちにとったりした生徒は、私の手になるものは抜いてみましたが、ただ一人目の中にさきった石木さんののは、あまりの恐ろしさにどうすることも出来ず、早く市内の医師のもとにと帰してしまいました。

この状態を一刻も早く借行社と司令部へ連絡するよう校長先生から御注意を受け、直ちに電話しても不通。どうしてもかかりません。学校のが故障とばかり思い、大河の警防分団へ走りまして、はじめてただならぬことを知りました。

全身大火傷、男女の区別すら見分けられない姿で町からとぼとぼ歩いてくる人達に出逢いました。

中国軍管区司令部（旧大本営跡）暗号通信係として学徒動員で出動中の生徒、第二総軍（大須賀町）、中電製作所（大州町）に動員中の生徒等々を気づかぬ、校長先生は、日夜東に、西に生徒の姿をさがし求められ、情報を学校にもって帰られ、自宅のことも多少しも振り返られませんでした。私は翌日、焼けただれた町なかを、幼年学校跡に収容されている生徒の様子を見に出かけました。さわれば落ちるようなバラックの下に、紺のもんぺの制服、白いきれいな名前を書いて縫いつけたのも、むざんに焼きちぎれている姿。

だれもが息苦しさの中からもただ職務のことばかりで、一言もあの苦しさを訴えない、忠実なその貴いおとめの姿、胸をえぐられる思いでした。

観音様のような顔をしていた水野さん。家族に看られながら荒城の月を口ずさんでいた躍場さん等々…。引率の富樫先生は全身火傷、下帯までちぎれています。晒の一片でも不自由な時代、ようやく新しい手ぬぐいで縫い、校長先生から半分いただいたトマトを手で小さくちぎっては口に入れてあげれば、とてもよることで、「ああおいしいおいしい」と両手を合わさんばかりの感謝いっぱい表情があふれていました。

それから幾日か、似島に収容されている生徒を気づかぬながら、様子を見に行きますと、なんと白布に包まれた小さな箱を沢山渡されました。夕陽の沈む頃、泣きながら学校に帰り、校長室に安置いたしました。

校長先生と毎日水や香花をたむけ、一日も早く、御遺族ことよびかけて、お渡しすることが出来ました。

まだまだ、たくさんの方が走馬燈のように浮かびますが、とうてい私には書き表わすことが出来ないのが残念でございます。

合掌

（尚、気づかっておりました石木さんの目、ガラスのさきつた方は、とうとう駄目になりましたが、結婚されて二人のお子様にも恵まれて、お幸せにお通りの御様子を承り、ほんとうによかったとよるこんで居ります。）

軍管区司令部に動員されて

荒木克子

（旧姓板村）

昭和二十年八月六日午前八時十五分

中国軍管区司令部指揮連絡室。ピカッと光った瞬間まっ暗になった。“B29”の警戒警報を送信している最中である。ピカッ!電気のショートかと思ったとたんドカーン。机上の電話機はふっとび、もちろん机もとばされた。立ち込めるホコリで一寸先も見えない。気がついた時日頃習った通り指で目と耳をおおっていた。今の護国神社大鳥居の南側の壕である。

比治山女子高校（当時の比治山高等女学校、国信玉三校長）の三年生のうち約九〇名がここに動員され三〇名ずつ班を編成し、三交代で昼夜兼行である。主な仕事は中国地方の監視哨、飛行場、高射砲隊などへの警報の連絡事務だった。

「日本が絶対勝つ」「一億総決起」「進め一億火の玉だ」。勝利を信じきっていた私達も唯一すじにお国のためと感激し、大事な仕事を任せられ身がひきしまる思いだった。勿論出席率は一〇〇%だった。五日夜は私達二班の勤務。その夜から翌六日朝にかけて、相ついで敵機の襲来（七月下旬から十数日間一度も空襲がなかったのは太平洋上の低気圧のため）があり、一睡もしなかった。夜勤は一班が二つのグループに分かれ、午前一時を機に交代するシステムになっていた。交代の直後、敵機の襲来があってやっと眠りについた前班も含め全員部署につけの指令。その後は警報の解除のいとまもなく、四時すぎまでB29が広島上空に進入していた。やっと解除となり疲れた身体に思いきり吸い込んだ明け方の空気は冷ややかに気持ちがよかった。生気を得て友だちとの会話を楽しんだ一時でもあった。

七時すぎ宿舎にかえって朝食をすませる。しつけにきびしい富樫先生の優しい思いやりのある「君達は欲しくなければ無理するなよ。腹でもこわしたら大変だからな。残飯にして捨ててもいいから体を大切にすなさい」とのお言葉が心に残る。いつもなら御飯を少しでも残そうものなら、もったいないことをするとよく叱られていたものだから。食事を終えて再び勤務にかえる途中、出勤の一・三班に出会い無邪気に朝のあいさつをかわした。それから数分後、あの恐ろしい原爆

投下。

壕内で被爆したため、私達驚愕もなく、殆んど全員無事避難することができた。私が壕の外へ出た時はあたり一面、煙幕をはったみたいで何も見えなかった。只倉田さんが顔一面に血が流れてまっかに見えたので、皆びっくりしたが大したことがなくてホッとしたのを憶えている。その直後大倉さんと二人で消火のためのバケツをとり壕内に引き返したのだ。四国軍管区司令部のある善通寺からの通信をいらいらしながら受けたのもその時。今思えば全市火の海になる位の被害の中でよく電話が通じたものだと不思議に思うがその時は早くすませたいの一心だった。案の定、外に出てみると級友は一人もいない。大倉さんと二人だけの行動はこれからはじまる。

下敷になった兵隊さんの救出。大した力もない私達にはどうにもならないことだったが傭員の松井さんと三人で死ぬ思いで一生涯懸命やった。(でもそのおかげでただ一人ではあるがその方は今も健在と聞く。)私達が大本營そばの土手こまけ上った時こは、全く目を疑うばかりの光景に出会った。見渡す限り火の海なのだ。最初壕の中で連絡にかまか込んで来た兵隊さんは「お堀に爆弾が落ちた」、と云われただけだったのに、一体どうなっているのか、これなら私の家も家族も全滅だとぼんやり思ったその瞬間に、広島城の表・裏門共に焼け落ちたとの知らせ。ついに脱出出来ず燃えさかる火の中にとどまらざるを得なかった。

ついさっきまで広島を誇りとしてそびえていた美しい鯉城の天守閣も、大本營の建物もあとかたもない。司令官のいらした本館もかき消す如くで、あたり一面は、がれきの山。

丁度本館の建物のほのか下の方から「たすけて」と助けを求めろか細い女の人の声が聞きとれたが、全く手の施しようがない。どうにもならず焼死するであろうその人の最後の声に耳を蔽ってしまった。一番ひどかったのは何時頃だったかさっぱり判らなかつた。大本營近くの小さな池の傍で、何物をものみ込んでしまいそうな火の海に取り囲まれて、ほんとうに身が焦げてしまいそうであった。池の水とはいっても底に少しばかりあるだけのきたない水だったがそれを浴びても数秒とはもたずすぐ乾いてしまう。何度も何度も本能的に水をかぶっていた。一緒にいた青木参謀は、上半身真裸でその背中には指二本大のくさった木のかけらがささり込み、そばに横たわっていた中尉さんは頭が落ちてしまって脳まで見えていた。負傷者も数多くいたが、もう恐ろしさなど全然感じなかつたように思う。ただ水を欲しがるその人達に一口の水さえあげられなかつたのがお気の毒だった。どれ位たったか例の「黒い雨」が降った。痛い位大きな今迄に見たこともない気味悪いほどの大粒の雨であった。動ける者は近くの退避壕に身をさけた。おかげで火勢は大分下火になり、九死に一生を得た思いだった。科学的な理由等全然判らぬ当時としては、ただ神の救いと思えなかつた。それに元気づけられて、動ける者はみんなで一日本本營あたりで傷ついた人達の救助作業に当たった。一・三班の人達は一体どうなっているだろうか。丁度あの時刻だけやりを持って朝礼の最中だった筈だが、早く見つけ出さねばと心はあせった。先ず兵隊さんの指図で下敷きになった人々を運び出し、運よく焼失をまぬがれたお米で御飯を炊き、おむすびを作り兵隊さんの短剣を包丁代りに野菜を切りお汁を作って、出来る限り手わけし配って歩いた。大本營の下敷きから救出した富樫先生、藤本弘子さん、野村とし子さん、とは口をきくことが出来た。殊に先生は、御自分は今にも死にそうな息の下から「みんなをこんな目に会わせて申し訳ない。許して欲しい」と繰り返し生徒達にわびておられた。

旧陸軍幼年学校に面した土手近くで浜岡緑さんと須川裕子先生に会った。ひどい傷だった。多くの人は誰とも判らぬほどかわり果て、衣服は爆風ではぎ取られその上皮膚もまるでボロボロのようにぶら下がっていた。浜岡さんの片手は手首がほんの少しくっついていてだけでブラリとたれ下がっていた。幼年学校へ医療作業のお手伝いに行く私達の後を追ったのか、それにお水が欲しかったのか、浜岡さんはお堀にかかった城東橋の所までたどりつき後は何処を探しても姿は見えなかつた。多分あやまってお堀の中に。

その夜は勤務室だった壕の中にねた様に思う。一夜郊外などへ避難していた級友達も三々五々帰って来た。元氣な姿を確かめ合った時には思わず抱きあつてうれし泣きした。

明けて七日は共に元氣な五・六名がジリジリ照りつける真夏の太陽を背に級友を探して歩いた。私たちのグループは常盤橋方面。河原で木本典子さんを見つけた。全身大やけどですでに冷え切っているため皮膚は堅くなり、担架に移す時「ズルッ」とむけてしまう。あまりのむごさに言葉もなかつた。八丁堀の福屋百貨店に収容されていた稲住幸恵さんを見舞う。救援物資として送られて来たミカンのかんづめを持って行ったのだが福屋の建物は外壁のみを残し内部は階段のみ、多くの人達が収容されていたが彼女は二階に寝ていた。

今の県庁、市民病院のあるあたり(当時の西練兵場)を通って行ったのはもう日が暮れてからだったが、広い練兵場ではあちこちに、あお火が燃えていた。無念の思いで死んでいった陸軍病院(近くに第一、第二分院があり傷病兵は多数練兵場に出て黒こげの状態で死んでいた。)の兵隊さん達の魂の燃焼だろうか、何か訴えているようだと同僚の樺村美代子さんと話したのを憶えている。広島通信病院に西崎満枝さん。よく肥えて、明るく愉快な人だったが、「お風呂に入りたい」とうごごとを云い続ける。「心臓の丈夫な人で、普通ならもう駄目な症状」とお医者さんが話して下さった。

その夜は山中助市先生と友人と三人だったが、その帰途先生は無残にくずれた城をぼんやりと浮かびあがらせている月を見上げながら「あの月は何と云うか」と聞かれる。何のためらいもなくまた情緒もなく「上弦の月」と答えた。私達にあれこそ荒城の月だ。としみじみおっしゃった。その場の光景をその言葉と共にあざやかに思い浮かべる事が出来る。

造力満子さん、坪井喜代子さん、佐伯俊子さん、水野タケ子さん、奥野奈智子さん、躍馬昭子さん、山崎美枝子さん、斎藤借枝さん、森本允子さん、土屋匡子さん、武田和子さん。次々と救護所にあてられていた幼年学校の校庭に運ばれて来た。意識はわりとはっきりしててみな一様に自分の仕事を気にし、私達に問いかける。「敵機襲来、警報を出せ」、「勤務の交代をたのむ」、「通信器具を運んでくれ」、「監視哨へ情報を送れ」、などなど。地獄の様な責め苦にさいなまれながら、心はひたすらお国を思う十五才の少女の純真な気高い心。ある人は「手にしたワイヤーが重い」という。校長先生がかわつてあげるから宿舎にかえってひと休みしなさいといわれると、「ありがとうございます。ではお願ひします。」といつてそのまま永久の眠りについてしまった。山崎さんは生きながらにハスの花

のうてなこのって、極楽を夢見ながら死んでいった。校長先生と一緒に泣いた。躍場さんはお姉さんに「荒城の月」を歌ってもらいながら死んで行った。全身の大やけどに一杯たまつたうみで、無数こわいたうじ、あまりにむごいの中で水野さんはおほえみながら息を引き取った。その瞬間の天使のような美しい顔が今も印象深い。

薬など十分になかったが、みんな一生懸命働いた。水を欲しがらる人達に傷に悪いかからと殆んど飲ませてあげられなかったのは今もって心残りである。校長先生、秦先生、平松先生方の献身的な看護が続き、私達に無言のほげましを与えてくれた。翌日は宮川さんと二人で兵隊さんの作業を手伝い、幼年学校の校庭の片隅に掘られた穴の中で死体を焼いた。大きな木材に油が注がれて燃え盛っていた。どこの誰とも判らぬ人達、誰の骨なのか。この人達は家族のもとにちゃんとかえられるのか。ひそかに案じながら遺骨を拾った。焼いても焼いても死体はふえる。夜になってもその火は消えず、お堀端の大木の夜となく昼となく燃え続ける炎も、あたりが暗くなると、くつきり浮き上がってその恐ろしさを一層かりたてた。

その頃だったか長崎に広島と同じ型の新型爆弾が落とされるかも知れないという噂を聞いたのは、全国各地から救援隊が到着した。救援物資も送られて来た。心強かった。負傷者は以島などの仮救護所に運ばれ治療を受けた。安否を気づかして次兄がたずねて来てくれた私は安心して作業に精を出した。我が家にやっと帰れたのは十日の夕刻と思う。紙屋町の交差点に立つと、はるか彼方の宇品も己斐も広島駅も一目で見渡せた。同じ仁保方面にかえる佃さんと一緒に元気づけながら数日前配給になった地下足袋をひきづって歩いた。その夜も空襲、黄金山の堀にある小屋に避難し両親と共に一夜をすごした。久しぶりにくつろいだ一時だったが、翌朝直ちに司令部へと急いだ。それからは山中先生の監督のもとに壕内に寝泊りしながら十五日の終戦の日迄通信事務に力の及ぶ限りはたらいだ。

十五日正午のあの玉音放送は日本の必勝を信じていた私たちにいいようもない衝撃だった。兵隊さん達は尚更のこと。将校さん達もみなくやし涙を流していた。ただ勝つことを信じて死んで行った級友達は一体どうなるのか。やり場のないくやし気持ちにとらわれたことを忘れることは出来ない。

十八日私達動員学徒の解散式があった。二十日に級友数名と再び司令部を訪ねた時、不思議にも須川先生の御臨終に立ちあうことになった。やさしく美しく日本の女性らしい凛とした気魂の感じられた先生だった。思えば被爆前夜、はじめて先生の剣舞を見せてもらって皆その素晴らしさに感動させられたのだった。最後に児島高德の詩を父上と共に朗詠されながら息を引き取られた。

級友六十五柱の霊よ。安らかに眠って下さい。年毎にめぐり来る八月六日、校長先生と生き残った者のうち七・八名は被爆当時の現場に集まり、花束を捧げてめい福を祈っています。

そして二度とあのような恐ろしい事を繰り返さぬように。

通信室・終戦まで

恵美敏枝

(旧姓西田)

太平洋戦争も終り近い頃であった。

アッツ島、グアム島とあいつく日本軍の玉砕、沖縄をはじめ本土も度々空襲をうけ、教室でも悲しいニュースを聞かされ、先生も生徒も共に泣き、又励まし合ったことも幾度かあった。その頃学校でもすでに上級生は学徒動員で出動して居り、今度は、いよいよ私達三年生の出動となった。三クラスの中から六十余名が選ばれ、基町の広島師団司令部へ出動が決った。

終戦の年の四月。一カ月間は軍事事務に必要ないろいろなどを習った。それは飛行場や監視所の名称、そして気象通報、通信記号、等々情報部担当の兵隊さんに習い、皆ただ一生懸命覚えた。そして五月からいよいよ実務につくことになった。

私達は三つの班に分けられ、私は二班の一員となった。そして何かしらひきしまる思いで副官殿の訓示を聞いた。その中で特に印象深く今も残っている言葉がある。

「君達が女子学徒であっても、本日より一兵士として扱う。各自よく心して最後まで任務を全うされたし。」この訓示も直立不動の姿勢で聞き、誰の顔も兵隊さんに負けてはならないといった強い気持ちがあふれ出ていた。「広師」と印刷された白いはちまきを固くしめ、カーキ色のユニホームにもんぺ、そして素足に下駄をはき、救急用品と非常食を入れた救急袋を肩からさげ、身支度をして家を出る。

「今日もしっかりがんばりなさいね」といつも変らぬ母の言葉に励まされて、営門前の橋の所へと急いで集合、引率の先生と共に門に入る。そして司令部前に整列、分隊長殿に人員報告、それがすむと大本営跡で朝礼がある。五カ条の御誓文を大声でとなえ、上官殿の訓示の後、ほげしい教練が行なわれた。

午前八時半、私達は前後の勤務の人と交代をして、情報室、指揮連絡室、作戦室の三つの部屋に分かれて勤務につく。情報室には情報機が多く並べられ、監視所からしきりと敵味方の情報が入り、パチパチと情報機で次の場所へ送っていた。

「〇〇監視所、東南〇〇キロ。敵味方不明機が一機、北に向かって進行中。以上。」とかいろいろな情報が次ぎ次ぎに送られて、一刻も休憩暇も無いこともあった。一方、作戦室では参謀殿が壇上にずらりと並び、壁に作られている大きな地図の中の豆ランプの進行(赤いランプは敵、青いランプは味方)をじっと見守っていた。そして敵機が近づくと警報が出される。指揮連絡室の電光板に出された文面を次ぎ次ぎと電送するのが私の仕事であった。空襲の烈しい時は昼夜続行したこともあったが、誰も弱音を吐く者はいなかった。みんな、はりきってよく働く、それを誇りとしていた。

しかし苦しいことばかりでなく楽しいこともあった。私達が歩調とって歩くと、すこい下駄の足音がするので、「下駄部隊が来た。」といって兵隊さんに笑われ

た。その後全員に地下足袋が配給された。でもそれは、もともと兵隊さんので、十半とか十一文しかない。学徒の中では足にあうものは二、三人しかいなかったのだから下駄をはくより仕方なかった。

宿舎は堀のそばの石垣の上の建物であった。そこで食事や、寝起きをしていた。各自が家から持って来た、どんぶり一個と皿とはしが、きちんと食器棚に並べられ、炊事当番は肥桶同様の桶二つに御飯とおかずを炊事場から運び分配した。いわゆる質より量の食事でとても食べきれず、先生の目を盗んでは窓から堀へドボンと落したこともあった。兵隊さんは皆食事が少なく足りないので、私達のを、おむすびこしてそと渡してあげたこともあった。

夜は一人に毛布が五枚づつ手渡され、一枚はくるくると巻いて枕にし、二枚を上、あと二枚を敷き、消燈ラッパの合図でいっせいに寝た。朝は「総員起し五分前！」との先生の合図で目をさまし、ラッパの合図で飛び起き、洗面清掃、そして朝食であった。

中国管区に警報が出された時を除き、二交代で夜の軍務についでいた。夜中に起こされる時は、皆目をこすりこすり交代した。

六月のある晩、「〇〇岬南方〇〇マイルの海上に敵の大軍が日本に接近しつつあり。」との情報が入り、にわかに室内には重苦しい空気が漂い、次の情報を待機していた。「先の敵の大軍は現在一向に進行せず。以上。」そして息づまるような時が二時間過ぎて、「先に報告せし敵の大軍は、夜光虫の群と判明せり。以上。」この知らせに皆はどっと歓声をあげ、安心と空腹が同時となり、皆で乾パンをバリバリ食べたことだった。

しかし七月に入って大都市に空襲が烈しくなり、ぞくぞくと被害情報が入ってきた。その度毎に胸が痛かった。今度は広島が爆撃されるかも知れないと誰もが思い、生死を共にする覚悟を固めた。学校工場に残っていた人や中配へ出勤していた人の中からも、「先生師団へ行かせて下さい。あそこで死ぬま本望です。」と口々にいっていたとか。その言葉通り、空襲が頻繁となり十四、五名増員された。そして一週間後に広島市民の忘れることの出来ない八月六日となった。その前夜、呉地方が集中攻撃を受け、作戦室には師団長閣下も参謀殿も非常召集され、非常警戒に備えて地図をみつめて居られた。私達も一睡もせず、目を真赤にして勤務した。来襲した敵機は大変な数だったが広島市には一発の爆弾も投下されなかった。

六日、午前四時頃、一応警報がとかれ、師団長閣下以下皆自宅や兵舎にひきあげられた。そして七時過ぎ、又敵機が広島の上空へ近づき、警報が出され、その後日本海へ脱出し、旋回中ということで警報もとかれた。私達も交代で朝食をとり、帰宅の準備を始めていたが、その頃又、「先の敵機が反転して広島県へ侵入しつつあり。」との情報で又、警報が電光石火に出された。「八時十三分広島県警戒警報発令。」私は宇品高射砲と吉島飛行場への二つの電話に電送を開始した。その時が八時十五分。運命の時だった。私は受話器を耳に当てたまま、机の下に入っていた。一瞬、鈍い音がして電燈が消え、君の悪い静けさが続いた。それは長いような短いような時間だった。誰かの声をたよりに手さぐりで外に出て友を探し求めその姿に驚嘆した。すぐ前にあった木も建物も皆こぼされ、勿論広島城も見えなかった。そしてなぜか息苦しくハンカチで口をおさえて大本営跡の前へ急いだ。そこには私達と交代する人々が朝礼の後でわら人形を相手に竹槍の練習をしていたらしく、下敷になっていた人は手に竹槍を固くにぎっていた。その姿は本当に痛々しかった。

誰もかれもすぐには名前を思い出せないような変りようで、ただあつ気にとられていた。そのうちに二部隊方面から火の手が上がって、皆城の裏の方へ逃げだした。そこでは元気な人は鍵山さん、宮田さんで、末盛さんや、藤井清子さんは服もぼろぼろで傷ついていた。

城の石垣をずるずるとすべって下へおりた。幼年学校へ通ずる橋も穴だらけだったけれど、どうにか渡ることが出来た。くずれた学校の建物の中から、助けを呼ぶ声がしきりにしていたが、幾重にも大きな材木が重なっていて、とても私達の手にはおえなかった。それよりも傷ついた友人を早く安全な所へ連れて行きたくて、見て見ぬふりをして多くの人と共に白島の方へ出ていった。そして知らず知らずの間に泉邸に来ていた。川ぞいの土手は、兵隊さんや町民でいっぱいであった。

ときわ橋の鉄橋の上では貨車が燃えていた。そして泉邸の木にも火がつき、じりじりと音をたてていた。頭に深い傷をしてすっかり元気がなくなった末盛さんは、「死にそうだ。死にそうだ。」と本当に苦しそうだった。藤井さんは、わりあい元気で、よく身なりを気にしたり、「連れて逃げてね。」と何度も云った。そこで毛布をみつけたので、川の中に入って毛布を皆でかぶって水のひくのを待っていた。

そのうち、牛田の不動院へ行けば何とかなると思い出した。土手では、ぐったりと疲れはてた人々。「天皇陛下ばんざい！」と叫んでいる兵隊さん。泣きわめく子供等さまざまで、無傷の者は私達二、三人だけのようだった。その時、にわかに空が曇り、大豆でも落ちてきたのかと思われる大きな雨と、すごい風で、あつという間に私は川底へ押し沈められた。ずるずるの川の石と傷ついた人にはさまれて、もうこれで死ぬのかと思った。やつとの思いで起き上がり、あたりを見ると、一緒だった木元さん、鍵山さんが見えなかった。あのさわぎで川下の方へ流されたのだった。

向岸の河原が大分出て、川幅がせまくなってはいたけれど、流れがきついで傷ついた人を連れては、とても泳ぎきることが出来なかった。その頃倉田さんの声がして、近くに藤井清子さんも居られるとのこと。でもどうしたらよいのか考えが浮かばない。

宮田さんが、たるが流れて来たので、それにつかまって川を渡ろうとして泳ぎ出されたが、その姿も見えなくなってしまうた。

そのうち川上から二艘の小舟が下って来た。その舟には兵隊さんが乗っていた。そして「師団の者はないか。」と呼んで居られる。私たちは大声で、「ここに居ります。」と答え、一番先に向岸に渡してもらった。その時の嬉しさは今も忘れられない。

河原には逃げるのに疲れきった人々が、ごろごろ寝ころんでいて、口々に「水を下さい。」といていた。そこで西崎さん、稲住さん、上野さん他十名位の人々を見た。佃さんや井田さん等元気な人々にも出あった。

日暮れが近づくと肌寒く、一枚の毛布を七、八人が取りっこしていた。不動院に行けば毛布もあるだろうと思い、倉田さん、井田さん、私は、不動院へ急いだ。着いた頃はもううす暗く、兵隊さん達の姿は一人もなかった。しかたなく寺の床下の石の上に三人はころんで、うとうとと眠ってしまった。

しばらくして「おむすびですよー。」といて起こされ、たくわんとおにぎりを食べた。町民の人が作ってくれたのでしようけれど、とてもおいしかった。そし

て有難かった。

その頃広島島の空は真赤だった。消す人もない街は燃え続け続けたのだ。そこではじめて自分の家はどうだろうか。親、兄姉は、と次々と皆の顔を思い出し、胸がいっぱいになった。ただ黙って皆真赤な空を眺めていた。

あくる朝、四時頃であつたらうか。未だうすぐらい道を私たちはときわ橋へ急いだ。そこではもう傷ついた人を幼年学校へ運ぶ作業が始まっていた。テントの中には多くの人が集められていた。その姿の悲惨なこと、中には男女の別さえ分らない人もあつた。負傷していない人は数えるほどで、重傷者ばかりだった。

情報室に須川先生が居られた。先生は下敷になられたとかで、火傷はしておられなかった。指先の傷が痛むし、臭くて厭になる、といわれて手を出来るだけ遠くへのばすようにして座って居られたが、その時は二週間後に亡くされるとは思われなかった。

その頃友人のお母さん等、家の人も心配して、つぎつぎ師団へ子供を尋ねて来られた。そして我が子の姿に驚く人、無事をよるこぶ人で大変だった。私もおにぎりを作りながら誰か来てくれないものかと待ちわびていたが、誰も来なかった。倉田さんのお姉さんが来られて一緒に家に帰ることにした。

紙屋町へ出るまでの悲惨な有様は一言では書き表わせない。馬は両足をのばしたまま、ひっくり返って目は五センチも飛び出していた。堀の水を飲もうとしてそのまま死んでいる人。堀の中に浮いている人。立ったまま死んでいる人。焼跡から逃げようともがきながら死んでいた人。電車の中でつり皮を持ったままの人等々。それは此の世とは思えなかった。

電車道はまだ熱く、電線がいっぱい落ちていて歩くのは大変だった。その中をやっと日赤病院迄たどりつき、貯金局裏の我が家へ帰ってみると、やはり家は焼けていた。誰もいなくなったけれど、防空壕の中に蚊帳がはってあつたので誰か生きていると思って焼炭で“敏枝無事”と書きのこして三人は学校へ行った。日はすっかり暮れて学校へ着いた時は真暗であつた。「誰か居られませんか。」と大声でいったので、先生が出てこられた。中本先生だった。そこで師団の話をして、その夜は校庭の壕の中で寝た。学校は無事だったので、本当によかったと思った。その頃母は火傷の身を、舟で金輪島へ運ばれていたのだった。そして又大竹小学校へ移され、私が尋ねた時は八月十五日終戦の日だった。講堂の板敷の上に寝かされていた母は、いつもの母ではなく、うつろな目で私を見つめるだけだった。もう食欲もなく、時々うわ言をいっていた。あんなにきれい好きの母がこの姿になって、と思ってたまらなかつた。四才の男の子、(甥)は何も分らず講堂の中を走り廻っていた。母の足の傷に、うじ虫が群がりうずうずしていた。母は「足がゆいから水をバサッとかけてくれ。」といった。うじ虫がいるともいわず私は泣き出してしまった。母を父に頼んで私は甥をつれて殺人列車にもまれて広島へ帰った。八月十八日朝四時、母は亡くなった。思えば余りにも悲惨な最期だった。

私にとっては誰よりも母を亡くしたことが最大の悲しみであつたが、今自分が母親となって考えれば、我が子を失った親の気持が痛い程分るように思う。多くの友のお父様お母様方の深い悲しみは、二十数年後の今日でも消え去ることはないであろう。

山縣さんのこと

大島麗子

(旧姓増原)

八月六日から二、三日たったぐれ、私達ときわ橋の河原に死体の収容に行きました。ぐれのせまった河原には砂浜だけが白く無気味に浮上がって見えました。

放置された遺体は木本さんと山縣さんでした。でもその時はまだ山縣さんは生きていたのです。木本さん達をたなかのせると兵隊さん達がつかいで帰路つきました。総てが焼けた町を夜がすっかり包んでいました。その時不意に、たなかをつかいでいた兵隊さんが「増原さんと言う人いるか。」と言ったのです。はつとしました。何とも言えずこわかつたのです。誰だろう。「山縣さんが呼んでいるぞ」。ああ山縣さん。私はすっかり忘れていたのです。六日の朝河原に避難した時彼女と会つたのです。彼女は空襲がひどくなった大阪から家族と共に広島に疎開して来たのです。そして芸備線の沿線から通学していました。

友達になかつた彼女と学校工場の頃から割合親しくしていました。やさしくおとなしい目だたない人柄でした。暗く空を覆った雲と対岸を狂う様にもえている火の海をみながら、経験した大阪の空襲のこわさを語りました。大阪の爆撃もひどかつたけどこんなにおそろしくひどくなかつたと彼女は言いました。その彼女を河原に放つたまま二、三人の友達と川を渡り祇園の方に避難したのです。彼女は牛田小学校の先生と言う方と二人でふとんにくるまって河原ですごしたのです。そうして私がきつと迎えに来ると言った言葉を信じて今までまっていたのです。

「今から福屋(当時の病人の収容所)に行くから、あんたもついていってあげなさい。」私ほどまどいました。恐怖が黒い闇と共に私をおそつて来ました。友情、その様な美しいもの一つもなかつたのです。ただ死のこわさがひしひしと身にせまって福屋に行くことをしきりにこばみました。今もあの時の情景がはっきりと浮かんできます。

彼女のよぶ声は死者の声の様に心につきさりました。夜の焼跡で死体をやく真赤なほのおが目によきつきました。五、六人の友達は広島城の壕に帰り私一人仕方ない気持で白鳥線のやけあとをとぼとぼとついて歩きました。福屋の収容所は遺体とやけどの人でいっぱいでした。異様な死臭がただよい、くらい電燈の下で苦悶している人々のうめきがひしめいていました。

今夜一晩泊まってあげなさいと言う兵隊さんの言葉もきかないで、私は山縣さんにあすの朝はきつと来ることを約束して帰つたのです。

私はこのことが二十余年たった今も深い傷として心に残っています。色白で柔和な顔がいまも心の中にはうふつとしてほまえています。純粹で一番美しいと

きに汚れを知らずただ戦争に勝つことのみを信じて死んだ友が悲しく思われます。あくる朝、彼女は亡くなりました。今思えばその夜が彼女にとってどんなに
らく悲しい長い夜だったことでしょう。

友達を裏切った様な気持ちが自身の心の中を去来します。そしてあの夜山県さんと一緒にいたら自身をこんなにくるしめることはなかったでしょうに、おそらく
一生忘れることの出来ないことです。

交換台と共に

岡ヨシエ

(旧姓大倉)

昭和二十年八月六日。

忘れることの出来ない日である。

私はその朝、前夜から勤務していたので、中国軍管区で朝をむかえた。昨夜はいつになく多かった敵機の侵入の為、一寸ほけた頭で朝食を済ませ、真青に晴れ
上がった空をあおぎながら元気をとりもどして、交替迄の勤務に壕に入った。今日は何時もよりおそい交替だなあと心の中で思っている中に、八時頃より敵機の
侵入である。そしてすぐ去る。“空襲警報解除”ホッとする気持ちも東の間、又敵機は広島方面に侵入。八時十五分警戒警報発令の伝令が飛ぶ。私は警報を各司令部、
報道関係に知らせる役目をして居たので、交換機に一度に数本のコードをさして相手をよんだ。(何時もの事なのでさほど緊張感もなかった。)一せいに
出た相手の方[かた]に、「広島山口、警戒警報発令を言いかけた途端ものすごい紫色の閃光が目を射り、何か事故が…と思う瞬間、意識を失った。二、三分もたつたであ
ろうか。回復しかけた、意識のぼやけた目に灰色一色だけが目に入った。

舞い上がった砂塵がしたいにおさまり、意識も完全にはっきりして次第に明るくなった部屋の中、私はすわって居た元の位置より二米位飛ばされていることに
気づいた。机は横たおしになり、いすはこわい、ただごとでない光景を目で追う中に、まだうすぐらい部屋の隅に板村さんが手て顔をおおってしゃがんで居る。
思わずかけ寄せると彼女が手をはなした。目のまわりに血が…。

でもよかった、臉にわずかの傷であった。二人は机をざっと元にもどして外に出ようと隣の部屋に入る。どの部屋も誰一人居ない。

板村さんより一歩おくれで外に出た私は一瞬呆然となった。今迄あった司令部も、あっちこちの建物も、ないではないか。ただの木屑と壁土が山になっている
だけ。私は思わず壕[まり]の土手の上にかげ上った。広島は御ま…。その目に映ったのはあまりにも残酷な瓦礫の町と化した広島であった。赤茶けた想像する
ことも出来ないむごい光景を目にやきつけながら私はその時始めて、「大変だ。」と血のさがる思いをしたのである。下の方で兵隊さんが「新型爆弾にやられたぞ
う。」とどなって言うのが聞こえる。私は元の部屋にかげ込んだ。そうだまだ通話の出来る所へ早く連絡を、そう思いながら電話機を持った。九州と連絡がとれた。
そして福山の司令部へ、受話機に兵隊さんの声が聞こえるのもどかしく

「もしもし大変です。広島が新型爆弾にやられました。」

「なに新型爆弾！ 師団の中だけですか。」

「いいえ、広島が全滅に近い状態です。」

「それおほんとうか。」大きくわれる様にひびく声。その内に火の手があがったのであろうか。壕上の草がパチパチ燃える音が耳に入った。

「もしもし火の手がまわり出しました。私はここを出ます。」

「どうかがんばって下さいよ。」と兵隊さんの声を後に受話機をおく。再び外に出ると炊事場のあたりではもう火がまわりパチパチと木のはげ音をする。その
音にまじり建物の底から女の人の助けを求める声が耳に入った。

たまたまなくなって水をかけようと板村さんとバケツを持って池の水を汲みに走った。でも池の中は建物のくずが飛び散りほこりと砂でゴミすて場の様になって
水は一滴もありません。ああ駄目だ他に出来ることは何か…、兵隊さんが下半身を建物の大きな柱にはさまれてもがいて居られる。助けよう、出来るだけやっ
て見ようと二人でかけ寄せた。でも組んだ様になってくずれている大きな柱は十五才の少女が力一杯持ちあげても、ビクともしない。傭員の松井さんがそこへ来
て下さる。三人は頑丈な棒を持って来て、力一杯柱をおこす。少しづつ上がった。身体をねじらせて兵隊さんも一生懸命は出る努力をされる。そして一人を
助けることの出来た喜び。三人は手を取り合って喜んだ。でもまだたくさんの方が…。二人は走る様にして大本営跡の広場へ上った。大本営のまわりの芝生には
負傷された兵隊さんが四、五人おられた。その芝生に火の粉が散ってきて火がつきそうになる。大本営の後にあった兵舎から軍服をとって来て火のついた草をた
たいてまわる。そのうちに手に負えなく

なった。火の手はあちこちにあがりぐると火に囲まれてしまった。幾百年の歴史を秘めた城門も完全に火に包まれてしまった。土手の草々も真赤になって、私
達は物すごい熱気にたまらなくなり、泥水となっている大本営前の池につかった。バシバシに乾燥した髪、あつくなっている服、頭から泥水をかけても一寸の間
にからからにかわいてしまう。

今何時かしら？…あの瞬間からどの位時間がたったのかしらと思いつつながら仰いだ空は、けづってどんより暗い。その中に此の世の色とは思えぬ不気味な赤さに
くっきりと太陽が見えた。その時でさえ、父の顔も母の顔も浮かんで来なかった。ただひたすらに国の為と教育され職場で何時でも死ねる覚悟は出来ていたか
らであろう。不意に、大粒の真黒い雨が降って来た。それはドロドロのまるで泥水である。ものすごい豪雨になってあわてて負傷者を壕に運んだ。十分か十五分

かたつものすごい雨が嘘のようにやんだ。私達は友達の姿を探した。幼年学校に通じる城東橋迄来ると浜岡さんに逢った。彼女は右手の関節の内側の皮がさけ肉がはみ出て、関節はくだけ右手はブラブラになっていた。何というむごさだろう。むしように水をほしがる彼女！でも飲み水なんてどこにもないのだ。赤ちゃんをなだめる様にして皆の行方を聞く。

「幼年学校の方へ皆行ったのよ。」というので「後ですぐ来るからね。」と念をおして橋を渡りかけて途中迄来た時後でドボンという音。とっさに私は浜岡さんではないかと思った。どうかちがうようにと祈る気持で走って帰ると、水を飲みたい一心の友は、堀に飛び込んですでに助からない状態で浮かび上がっていた。全身火ぶくれになり、目がつぶれてしまい手はボロボロがさがったように皮が剥がれてしまった可哀想な奥田さん。

私は全身無傷の自分がみんなにすまなくてつらい気持でいっぱいだった。お城の裏の方に逃げまどっている友はいないかとお城の下を板村さんと一周した。時間も何時かすぎ木も草もやけ切れて、日もくれかかった頃、一緒に班だった古池さんや、宮川さん森田さん達が帰って来た。再会を喜びながら、他県から救護に来られた兵隊さん達と一緒ににおにぎりを作った。そして負傷されても割合元気な方達に配る。私はおいしいと思って食べた。そういえば朝から何も食べていなかった。仮の収容所が幼年学校に出来て、大本営跡の芝生に居られた兵隊さんもそちらへ移られた。背中に二十センチ程の棒切れが突きささった青木参謀は青ざめた顔で、看護兵の手当てを受けて居られる。

大の男の兵隊さんが脱脂綿を大目に背中に当てて、力一杯棒を抜きとられた。見るまに脱脂綿が血に染まって少々では足りない。

色々な傷を見た。脳天に穴のあいた兵隊さん、脈うつ度に中の肉と一緒にヒクヒク動く。全身黒こげで死んで居る兵隊さん。空をにらんだまま目をむいて死んでいる兵隊さん。お腹が破れて腸がはみ出て死んでいる兵隊さん。負傷した兵隊さんが地の底からうめく様な苦しい声で「おおかさーん」と叫んでいるのが暗い夜空に尾をひいて、まるで地獄に居る様な思いだった。つかれ切って何時の間にか私はおぼろになってしまった。

八月七日は朝早くから森田さん板村さん達と仮収容所へ看病に行く。太田さんもいた。水野さんも向井さんも。全身ひどい火傷のクラスメート、夏の暑さの為に傷に蛆がわいてそれを痛いとひと言も言わず「仕事をさして下さい。」「私も行かなければ…。」「交替の時間です。」と健気[けいげ]な友の声に私達は涙が止まらなかった。一日中看護につきっきりで七日の夕方に来た。一人二人と兵隊さんが亡くなって行く。友達四、五人で表の城門の方へ水を汲みに出かけた。第一の城門わきに、まだ年青いアメリカ兵が横になっていた。しきりに「ウォーター、ウォーター」と私達によびかける。少し可哀想だけど水なんかやれない。

私達の広島を、私達の同胞を、こんなにいためつけた国の人に。

あちらこちらにまだ火がくすぶって居る。城外に出ると、やけにアスファルトが足の裏にあつい。まだとても紙屋町迄行くのも無理であろう。父や母はどうしているであろうか、帰れるものなら帰って元気な姿を見せて安心させてあげたいと思った。夜、壕の中では仕事が続けられた、また戦争は終わっていないのだ。情報が入りそれを送らなければならぬ。あちこちに手伝いにちらばっている為夜の伝令も必要だ。私は幼年学校への伝令をかって出た。途中傷ついた人のうめき声にびびりして走り出せば何かにつまずいた。見れば死体である。暗い夜道はただでさえこわいのに、歯をくいしばってこわさにたえた。帰り道は二、三人の友と山中先生も一緒であった。死の町に月がのぼり真上にあつた。それは細い上弦の月であった。山中先生が「皆はあの月を何と見るか。」と言われた。私は「上弦の月ですか。」と尋ねた。みんなも口々に何か言った。最後に山中先生が「あれは荒城の月だよ。」と言われた時みんな一瞬しんとした。昨日迄そびえていた五層の天守閣はもうそこにはない。くずれおちてしまったその上にぼんやりと月が光る！まさに荒城の月でなくてなんであろう。

明けて八日。友達は次々に亡くなって行く。美しい純粋な気持を持って清らかな少女は最後迄仕事のことばかり口にして死んで行った。竹槍を持ったまま即死に近い状態で死んだ西丸さんや佐藤さん服部さん。歌を口ずさみながら全身やけどなのに美しい笑い顔さえ浮かべて息をひきとった友。日本刀を杖にタヤミ迫る空を、じつとにらむ様にして立っていらした美しい須川先生。自分のシャツを引きさいて生徒の看護に懸命につくされた、校長先生の慈愛と悲しみにみちた姿！

二十四年たった現在も忘れることは出来ない。

生き残った私達のつとめは、続けられる限り毎年八月六日には集まって若くして逝った亡き友の冥福を祈り、思い出を新たにしたいと思う。

最後に原爆の日に福山の司令部に連絡電話をした兵隊さん、小川国松さんに四十二年二月、東京で奇しき対面をしたことをつけ加えてこの筆をおく。

通信部の解散まで

倉田美佐子

昭和二十年八月六日

前夜空襲警報の鳴りつけで、とうとう徹夜勤務となった。明けがた、その警報も解除され、ほっとした気持で、あとにただ、八時に交替勤務する筈の級友を待つばかりであった。

当時、比治山高等女学校三年生であった私達は、学業を棄て、中国軍管区司令部通信部に学徒動員として勤務していた。女学生という甘さはなかった。兵士と同じ自覚をもち国の大事に馳せ参じた気魂で張りつめた毎日であった。総員九十余名を三分隊に編成し、二十四時間を交替で勤務していた。飛行情報の受発信、連絡が主な仕事であったため、そこは特に厳重な防禦設備の整った鉄筋コンクリート造りの半地下壕であった。

八時十五分、その壕の開かれた小さな窓一杯に突然、ピカッと閃光が光った途端、室内の電気は消え、ものすごい風圧に目の前の情報機の倒れる音、誰かのかん高い悲鳴、一瞬茫然と立ちすくんでいた私までつきり壕内で大変な事故が起こったのだと思った。周囲のわめき声に慌てて目と耳を両手で押さえ机の下にごそ

ごともぐりこんでいたが戸口にいた兵隊さんの「外にでろ！！」と叫ぶ声につられて壕の外に出てみて再びがく然とした。真暗であった。やがて一面の砂塵がはれるにしたがって目にとびこんだものは、すぐ前にくずれおちた庁舎であり、樹木は残された太い幹だけが虚空に立ち、目を移せば全身血みどろの人々がそこかしこに、のたうちまわっていた。私の顔の血をみて西田さんがとび上がり、早く救護班をとおりおろしながら止血をしてくれたが、その時、大本営跡の広場をころげるように走って土屋さんが助けを求めて来た。それによると残る二コ分隊の六十余名は、朝の竹槍の稽古のあとの訓練中やられたのだという。すぐにその場に駆けつけてみると、もう誰彼の識別さえつかぬ一団となっていて、一様に着衣は縦に切りさいたようにこぼろぼろになり、火傷のために表皮はむけ、手を前にゆうれいのようにかざしたその指の先から、めくれた皮膚がだらりとぶら下がっていた。真赤にたれたその体で、わずかに這い上がろうとしては倒れ、一歩進んでは転び、さながら地獄絵図をみる思いで手のさしのべようがなかった。くずれた大本営跡の建物の下に誰かのもんぺだけが見え、「助けてくれ」と叫んでいる声が出た。元気なものの数人で、くずれた建物の瓦を一枚一枚リレーしてとりのぞいていたが、一かかえもある梁が邪魔して、私達の手だけではどうにもならなくなった時、あちこちから火がたち始めた。とっさに自分の身に危険を感じ、火のない方へ火のない方へ、追われるように逃げだした。城の石垣を滑りおちるように降り、堀にかかっていた非常用の小さな橋をつたって幼年学校にでた。くずれた建物のあちこちから、怪我人の「助けてくれ、助けてくれ」という絶叫をあとにどんどん逃げていったが、急に行手の建物がぼさりとやけおち逃げてゆく道がなくなった。しかし、引返すこともならず、まよと一目散に煙の中にとびこみ、無我夢中で走り抜けた。とんでくる火の粉を払いながらやっと道を見つけて進んでいると、くずれおちた石垣の蔭こうずくまっている友を見つけた。空襲の時、白いシャツでは目立つからといってグレーに染めていた見覚えのあるユニホームである。名札を見ると藤井純子さんだった。みなにはぐれて一人だった私は嬉しかった。重傷の彼女は「もう私は駄目だわ」と拒んだけれど、強引にひっぱってやっと土手まで逃げた。浅野泉郎の裏だった。燃えさかる火から逃れるため、本能的に水のあるところを求めて川川堤の上は避難者でいっぱいだった。しかし、ここは瀬が早くで渡ることができない。百米先に見える常盤橋は両端が火の海で渡れないし、その向こうの鉄橋には、貨車が横倒しになったままで燃えていた。

気のあせる人達は泳いで渡り始めたが、急流におしやられ、向こうの川原に辿りつける人はわずかしかなかった。その時だった。小さな木片につかまって浮きつ沈みつ流されて行く富田さんを見た。堤の上から「あっ」と叫んだまどうすることもできない。のちに鎌山さんも同じ溺死体となって川下で発見されたときいて、せつなく壕の中にいて助かった組なのことと思うと猛火をくぐる時、はなればなれになったことが悔まれて仕方がない。

刻々と増す避難者の中に一人の若い兵士が、うやうやしく捧げもっていた詔勅の白い巻物が印象的だった。その人はかぶっていた戦闘帽のあとだけをくっきりと残して頭髪がやけていたが、隣にいた士官らしい人が替って受けようとする。「いや、これは自分が死守するであります」と直立の姿勢で答えた。傍で私の肩につかまって立っていた藤井さんが「憎い米英に負けてなるものですか」とやけただれた目をきつと見すえで歯を喰いしばっていた。

そこへ突如として、対岸から大たつまきが舞いおこった。燃えさかっている木片をふきあげながらみるみるうちに火の渦川を越えて私達の立っているところまで近づいて来た。周囲の人達はなだれのように一斉に川にとびこんだ。藤井さんと、私は倒れた大木の幹を伝って川にすべりこみ、その枝をしっかりとって体を水に没した。上から火のついた木片がバラバラと落ちてくる。慌ててもぐればすぐに息が苦しくなる。顔を水面にだせば、じりじりと髪の毛のやける音がする。あとで思い出してもこの時が一番恐ろしかった。本当にもう駄目だと思った。やがて、竜巻が去って周囲を見渡してみると、いままでも勢いいた避難者が今の猛火で川下まで押流されて少なくなっていた。藤井さんは私の腰に両手を回してしっかりとつかまっていたので、二人とも助かった。「ああ、これで生きのびた」という実感がひしひしと湧き上がってきた。そのうち、大粒の黒い雨がたたきつけるように降ってきて私達は、水に入ったまま、寒さにぶるぶる震えていた。「お腹に力を入らんと入れてごらん。寒くない

わ」と藤井さんに逆に元気つけられながら、私は対岸の山ふところに、その春、葬ったばかりの母が、じっと見守っていてくれるような気がして、自然に口から念仏がほとぼり出てとめようがなかった。

やがて、救援の舟が出て、対岸の砂浜に着いてみると、川原に打ちあげられたように寝ている人の群の中に、「水、水」とうめいている級友達を見つけ、元気な者三、四人で応急のかまどを拵え、川の水を汲み、川底からみつけた救急用の一握りの米を入れ、おもゆをつくった。焼けた家庭菜園の親指ほどの太きのさつま芋も抜いて一緒に煮た。そうしてそれを寒さにふるえて寝ている友にあげると、皆、むしゃぶりつくように飲んでおいしいと喜んでくれたが、あとからあとからつくづく被災者の行列に、やがて疲れ果ててしまった。

空を覆う煙のため暗いのか、それとも夕方なのだろうか。傍にいた兵隊さんから、広島への三日位足も踏み入れられないくらい焼けつづけるだろうときかされ、この時、初めて家のこと、家族のことを思い、心細さに手を取り合って泣いた。

ふと、通信部の緊急避難場所が不動態であったことを思出し、ともかく連絡と指示を得るため、西田さんと井田さんと三人で目の落ちた土手を牛田に向かって走って行った。

その夜、真赤に空をこがす街の火をみながら、救援隊の人々が傍にいた安心感から、一度に疲れを覚えぐっすり寝た。

八月七日

恐怖の一夜が明け、救護班の炊き出しのむすびで元気を得た私達は、配給された乾パンをもって、昨日、友をおいて来た川原に引返したが、藤井さんは、しかし、もう乾パンを食べる力さえなく、わずかに井戸水を口にただけだった。

軍管区司令部のある職場に帰ってみると、全滅した本部は、負傷者でごった返していた。その夜は一先ず学校に帰り、運動場の防空壕の中で夜をあかした。

八月八日～十一日

市中にあった家は焼かれ、親戚で一夜をおくり、翌日初めて疎開中の家族のもとに帰った。

途中、ソ連の参戦の報をきき、絶望的な恐怖にかられた。

八月十二日

日頃、職場は死守せよと教えられた通り、一応家族に対面したあと、すぐ職場に復帰。しかし、通信線はなかなか回復せず、怪我人の救護にあたる。毎日死者の数は増えるばかり。

八月十五日

正午より、玉音放送を暗い壕の中できいた。あとで日本が退けたときかされ、十名ばかりいた私達は声をあげて泣いた。勝つことだけを信じ、最後の兵まで戦うと固く誓っていた私達に敗戦は考えられないことだった。

八月十八日

中国軍管区司令部の解散式。

一生懸命任務を遂行することがお国に奉公することと、ただそれだけを固く信じて疑わなかった私達の前に、国は破れ、軍隊は亡び、街は焼土と化し、学友は逝き、感無量の思いで参列した。

二葉の里のことなど

児玉典子

(旧姓中川)

その時、窓際に立っていた水野少尉の首がカクッと折れた、と思った。瞬間、私も立っていた部屋の中央から廊下へとばされていく。私たちが動員された師団司令部兵務部は幼年学校の二階、一番つきあたりの部屋で、中央の出入口がそのまま廊下につながっていた。

気がついた時、何か分らない土、壁、瓦、ガラスらしい中に首まで埋まっていた。「助けて！。誰か助けて！」と思わず叫んだ。

その時の不気味な静けさと暗さは、二十余年たった今も鮮やかに私の中に残っている。

右腕だけが機械的動いたので肩をゆすぶり動かしながら、腕を上げてみると、案外早く土から抜けた。目をつぶって顔を撫でてみると眼鏡は無かった。手が血だらけになったのが、ぼんやりながら見える。「目が見える！助かった！」と思った。とっさに、とにかく早くここから出なければと思い、自由になった右手で左肩あたりの土や瓦をのけると、少しづつ体全体が動くようになった。

やっと抜け出して明るい方へ這い出してみても驚いた。建物の半分は崩れ落ち、いきなり外が見える。階段もどうなっているのか分らない。下を見ると中二階のあたり、柱や棟木が、めちゃくちゃに折れ重なっている。とても降りられない。「誰か来て！。誰か助けて！」と大声で叫んでみた。「よし！」という声が伝って来て、兵隊さんがすぐ真下に来て下さる。やっとそこまで降りて貰ったが、下まではどうしても跳び降りなければならぬ。目をつぶって跳んだ。しりもちをついて、この持したたか腰を何かこぶつ付けた。地上のあらゆるものは瞬間吹きあげられ、激しく叩きつけられたように崩れ、散乱していた。大木は裂け、屋根も机も飛び、書類が舞い上がっている。軍刀を支えに荘然と立ちつくしている将校も、あちこち動いている兵隊さん達も、殆どが頭、顔から血を流している。その中に中村トモヨさんの姿があった。私達は思わず駆け寄り、抱き合っておたがい無事をよるこんだ。そしてどうやってあの二階から抜け出したかを、自分でも分かるほどうわずった声で話しあった。

級友のほとんどは通信の仕事についていたが、あまり体の丈夫でない私達五人が、事務の方に廻されていた。中村さんとは家が同じ方向で、いつも一緒に通っていたのである。

気がつくると他の三人の姿が見えない。私達は名前を呼びつづけた。その時、突然、火の手があがって建物（幼年学校）は、たちまち火に包まれてしまった。私達がやっと抜け出してから、時間はいくら経ってはいなかった。目の前でぐんぐん火力を増し、生きもののように燃えひろがる焔をみて、握りしめた手も、足も、とめようなく震えてたちすくんでしまった。

「衛戍病院に行け！衛戍病院に行け！」（陸軍病院の旧称）と中佐がさきから叫んでいた。しかし火は、あちこちから燃えてくる。中村さんと、「火の無い方へ逃げよう！」とまだ炎の見えない方をさして歩きはじめた。

白島線の電車道に出て、私は息をのんだ。

真黒い電車が鉄骨だけの姿でとまっていた。電車の周辺には、中から這い出したらしい人達が半裸で倒れていた。乗降台にも折り重なっている。よろよろ歩いている人達の衣類も焼けちぎれ、身にまとっているものは殆ど無い。肩ひものちぎれたシュミーズを肌にあきつけ、髪をふりみだした若い女の人がふと立ち上がると、八丁堀の方へ歩きはじめた。十メートルも行かない中に崩れるように倒れそのまま動かなくなった。

目を遮るものは何もなく、見えるかぎりの家屋は崩壊していた。黒く枝だけになった木が目に入る以外、一面が瓦礫の山であり、原っぱであった。瓦や梁の下から、嘯き声や、「助けて！助けて！」と叫びつづけるのを耳にしたが、その姿は見えなかった。私達は顔を見合わせながら、追って来る火から逃げた。

途中、加治さんに会った。私の顔が血だらけだといって驚き、「しっかりしてね。がんばってね。」といって下さる。しかし加治さん自身火傷で顔はふくれあがり、よくみないと分らないほどに変っていた。「下駄が履けないの。」といって胸に抱いていた。そしてこれから家に帰るといって別れた。それが加治さんを見た最後だった。

私達は燃えていない方へと気を焦りながらも、中村さんは釘をふみぬいた足をひきずり、私も体がふわふわして、思うようには歩けない。たくさん馬鈴薯がころがり、毛布が何枚か散らばっていた。私達は一枚ずつ拾ってみたが、重くてとても持ち歩けなかった。泉邸の中は大きな木が二つにも三つにも折れ重なり、からみ合った枝葉の中を、くぐり抜け、かきわけながら進んだ。足許や木の間のあちこちに、逃げる気力も尽きてか、備伏せに倒れ、そのまま息絶えている人がたくさんいる。

川岸は逃げて来た人達でいっぱいだった。みんな襲ってくる火から遁れ、向う岸に渡ろうとして、石垣は人で埋っていた。私達も人の少ないところを探して川の中に降りていった。

川上の鉄橋で貨車が横倒しになっている。川に落ちた積荷の玉葱の木箱が、たくさん浮き沈みしながら流れて来る。

傷の少ない人で泳げる人は、向う岸をめざして離れていった。私達は川の中に入ってはみたものの、私が全く泳げないので、つかまっている石垣から離れられない。流れてくる木ぎれや、樽こつかまってはみても、思うように体お浮かない。何度かくり返した後、私はもんぺや靴が氷でだぶだぶ重いまま、四、五歩川の中に向って歩いてみた。足はすぐ水底を離れた。たちまちぶくぶく沈みそうになり、むちゃくちゃに足を動かしたが、浮かない。叫ぼうにも声も出ない。「もう駄目！」そう思った時、長い竿が投げられ、それに掴まってやっと助けられた。「泳げないものが動くな！」大きな声が石垣の上から降って来た。竿を投げて下さった人だ。

若しその時助けられなかったら、私は溺れ死んでいたに違いない。(そして此の川で、無傷で助かりながら、鍵山さん、宮田さんが溺れて亡くなっている。)

他にも泳げない人がたくさんいたようで、兵隊さん達が、どこから持って来たのか、長い竹や木を組み合わせて筏を作り、四、五人がその上に乗せて貰い、男の人達が担いで川岸を離れた。川の中程に来た時、突然激しく雨が降って来た。叩きつけられ痛いような大粒で、重油でも降って来たかと思われる黒い雨だった。たちまち筏は押し流されそうになり、今離れて来たばかりの岸にやっと戻った。雨はますます激しく、誰かが渡してくれた一つのカップを、三、四人で被り、寒さに震えながら止むのをじっと待った。

ほどなく雨も上がり、私達は再び筏にのせて貰い、無事川を渡ることが出来た。

たどりついた河原は一層すさまじかった。

川原に首をつっこみ、並んだように大勢の人が死んでいた。火傷であか茶色に爛れた手脚が二、三度わずかに砂の上を泳いだり、もうそれだけで動かなくなった。

広い河原を埋めるほどに、負傷者が倒れ、死体が転がっていた。死体の殆どは俯伏せになり、あるいは横に身をまるめて死んでいた。

すぐ足許に、手は空を掴み、目をかっと見開き口をひきつらせた老人が、仰向けに死んでいる。中村さんは一言も、ものを言わない。ずっと両手で顔を覆い、わずかに指の間から目をのぞかせ、私の後からついて来る。

死体の間から嘔き声が聞え、「水！水！」と私達に声をかけた。

「お水をのませて！ お水！」「水をくれ！」水を欲しがるとつづく。

少し離れたところで、水道管が破れ、水が勢よく噴きあげていた。容器のものはないかと探していると、朱塗りのきれいな菓子鉢が転がっていた。

それから、どれ位の人達が水を運んだらうか。一人に飲ませていると、次の声が待っている。火傷の人にあまり飲ませてもらえない、という声が伝わり、「少しね」「もう一口だけね」といっては、動けないでいる人達にもふくませてあげた。火傷で赤く大きくふくらんだ顔が、かすかにうなづいて口を動かした。ありがとうといっているようで、私は、年も見わけられないその女の人の側から、暫くは立ち去り難かった。

私達は、皮が剥け、裸でぶくぶくになっている死体につまづかないよう、そのすごい形相に、なるべく目をむけないようにして進んだ。

二葉の里も避難者でいっぱいだった。

よくここまで歩いて来たと思われる重傷者が、そこ、ここに倒れたように寝ている。

近くに仮救護所が出来ていると聞く。中村さんも太い釘を踏み抜いた足が痛いといい、私も顔の傷がどうなっているのか気にかかって来た。手の甲にささったガラスも自分ではとれないので、行ってみることにした。大勢の人が並んで、油のようなものを塗って貰っている。やっと順番が来た時、戦闘帽をかぶった軍医らしい人が、「こんなのは傷じゃない！。次！」と、二人共の治療もして貰えなかった。全く私達の傷に恥ずかしい位のものだった。

しかし二人共疲れきっていた。どうにか横になれる場所を見つけると、朝からの疲労と安心感もあって二人はそのまま寝てしまった。

断続的な声で目が覚めた時、日はまだあった。すぐそばに、両足を投げ出して座っている兵隊さんがいた。棒で体を支え、足を交互にすり合せながら「チクシヨウ！ チクシヨウ！」とくり返している。目は、空の一点を見据え、いつまでも動かなかった。

炊き出しの大きなおむすびが来た。

火傷の両手に、カンパンの紙袋をかぶせた男の人、その両手にまっ白いおむすびがひとつのせられた。

あたりは次第に暗くなって来た。

私達は近くにあった防水カバーを被って寝た。

寒くて何度か目が覚めたが、火勢は一向に衰えず、広島街は空っぽに燃えていた。

翌朝、木田さんが亡くなったことを知った。

私達のところがいくらも離れていないところで、夜を明かしたのを私達は知らなかった。木田さんは、級でも一番小さい方だった。あどけないおもかげは、火傷ですっかり変り、重そうに目を閉じていた。未だ子供のままのような、その小さな胸に、もものあたりから、蟻と蛆が、列をなしてのぼってゆく。(何とい

うこと! どうしてこんな姿で死なねばならないの!)

涙が一度にふきあげて来た。昨日からの様々な死が、今、木田さんの小さな体に集まった。私お泣いた。

校長先生が来て下さった。師団のみんなのことを心配され、懸命に探されているということだった。私達は、歩けるからというので、先生と一緒に帰る事になった。大分崩れてはいるが燃えていない段原を通して、昼すぎやっとう旭町の家に向きついた。

昨日は、私を探して歩いたという姉達私を見て暫くは偶然と立っているだけだった。

八月六日

中川トモヨ

(旧姓中村)

昭和二十年七月、三年生で最後迄学校に残っていた私達五名が師団司令部兵務部(現在基町高校)に勤務する事になりました。仕事の内容は五県の中学校の人員調査で事務的な仕事でした。

当日は前夜空襲がはげしかったので仕事は一時間遅く始まることになっていました。

山中尉の私用で参謀部に行くことになって、手紙を受取るうとした途端何の前触れもなくドーンと言う音を聞いたと同時に目の前が真黒になってまるで夢を見ている様でした。五分か十分位かと思えます。時間的にははっきりしないのですが少し明るくなりかけたのであわてて傾きかけた二階より飛び降りた途端に大きな釘が靴の底に突きささりました。夢中で釘を抜いて外へ飛び出しました。

それから間もなく中川典子さんが出て来られたので抱きあって喜びました。後の三名は?中川澄枝さん三浦さん藤本さん、呼び続けましたが、とうとう姿を見ることが出来ませんでした。一階におられた人は材木に挟まれて、助けを求めて叫び続けておられました。助けに行きたくても出来ずそのまま火に包まれてしまいました。三方火の海でわずかに浅野邸の方角だけ火の手が上がっていませんでしたので二人で手をにぎって逃げました。叩きつけられた体を走る気力も無くぞろぞろと歩き続けました。途中で毛布を拾ってかゝえたものを持って歩く気力も無く二人で顔を見合わせて其の場を捨て去りました。

途中で山崎さんに会いました。全身焼けた守れて両手をだらりと下げて見るも痛ましい姿に私はわあわあ声をあげて泣きました。

河岸には焼けただれた人が真黒になるほど集っていました。とにかく川を渡らなければ火の手より逃げることが出来ないので水の中に入ったものの、中川さんが泳げないのでほっておいて逃げることも出来ず、流木を拾って来ては色々やってみたのですが浮くことも出来ず、どうしたものかと思案している所へ、同じ兵務部の兵隊さんが来られて、筏を作って泳げない人を乗せ泳げる人は筏をおして渡りました。途中真黒な大つぶの雨が降りだして、油を飛行機でまいたのではないかと皆で心配したものでした。其の晩は家に帰ることが出来ず不安なまゝ二葉山で一夜を明かしました。

夜中こは友、造力さんの亡くなったことを知り、深い悲しみにおそわれました。

翌日十時頃校長先生がこられて歩ける者だけ比治山高女へ避難させられました。

帰る途中は死体の山で間を通して歩く有様でした。私は幸いなことに家が仁保に有ったので、焼けていませんでした。安心と同時に寝こんでしまいました。間もなく全身に赤い斑点が出来、歯ぐきから血が出て止まらなくなり、熱は四十度以上の高熱で十日間位生と死の間をさまよって続けました。

蓮の花の思い出

西田安子

(旧姓古池)

昭和二十年八月、太平洋戦争は、じりじりと本土にせまり、B29の襲来は、日夜東京の空を焦がしていた。

広島は、まだ爆撃らしいものは受けてはいなかったが、食糧は窮乏を極め、警報の不気味なサイレンの音は、日毎に回数を増し、人々の心を肌寒くゆさぶっていた。

そんな逼迫した空気の中で、広島城だけはうっ蒼とした緑の木立ちの中に、静かな佇まいをみせていた。城を囲む堀には、長い時を経たであろう蓮の葉が一面を覆い、ぼつたりした見事な花を咲かせていた。城を中心に、当時の中国軍管区司令部がおかれ、私達はその中の地下室に設けられた情報部に学徒動員で勤務していた。十四才になっていた。

六日の朝、あと僅かで昨夜からの勤務が終ろうとする時、地下室の窓に黄色い光線が走ったのを見た。と同時にものすごい圧力が、体をバシッとしめつけた。

夢中で机の下にもぐり込んで、闇の中の不気味な静けさを感じていた。

自分達の居る場所にだけ、何かが起ったのだらうと思ったが外に出てみて、はじめて事の重大さを知った。

空に黒く吹きあげられた塵埃が、舞い降りるにつれて、目の前に次第にはっきりしてくる光景を見て、ただ呆然と立ち竦んでしまった。地上のあらゆるものが、くずれ落ち、その中を人間が、のろのろ動きはじめたのである。衣服は形もなく焼け散り、髪の毛は一本一本が総立ちとなって、白くふやけた皮膚ははげけてぼろぎれのようにぶらさがっている。それは外にいた学友が一団となって、オロオロしている姿であった。これが生きている人間であろうか…。つい先程賑やかな笑

拶を交して別れた友なのであろうか…。

恐怖が背筋を走った。

「何とこして…」その声は、まぎれもなく、北海道育ちの色の白かった八木さんではないか。とても面影は見付け出すことは出来ない。今まで白く見えている全身の火傷の皮膚は、真赤に熟した柿の皮が、破れたのを見るように変っていた。

全裸の死体のごろごろ転っている中を、皆の足は自然に広いところへ動いていった。

くずれ落ちた建物から、上半身だけ出て、もがいている人。兵舎の屋根に塗られたコールタールが、熱でとけてそれを全身に浴びている人…。私は、ふっと、小学校で習った「阿鼻叫喚の巷」という言葉を、思い出していた。若く美しい須川先生が軍刀にすがり、宿舎の方にじっと眼を据えて、下敷きになっている生徒を助け出すよう、指揮される悲壮な姿があった。

「助けてくれー」血だるまの兵隊さんに呼び止められ、私は、その人の体を小高い場所に移そうとしたけれど、ぶよぶよになって握みどころのない肉体は、すりりと手から滑り落ちてしまう。一人の力ではどうしようもなく、「わしを殺す気かー。」の絶叫を背に浴びながら、私はその場を去った。

そこら中に散らばっていた白い紙ぎれが、自然にメラメラ燃えだした。あまりの恐ろしさに、足も宙に浮いた感じで救出を手伝っていたが、ふと逃げることに気がついた時には、既に城郭のあたりは火の海となって、堀を渡した橋を塞いでいた。

いつの間にか皆とも離れて、一人になっていたのだから、私は逃げるのをあきらめて、水が一番近い堀端に降りて、いざという時には、堀に飛び込むつもりでいた。あれほど覆い茂っていた蓮の葉は、きれいになくなり、茶色に焼けた茎だけが、残って立っていた。その時、フラフラと歩いている福本さんの姿を見た。顔色は悪かったが、鼻のわきの小さな突き傷が目についた。他は、別に変った様子は見えなかった。宿舎の下から自力で這い出したのであろうか…。

二人になって力強くなった私は、倒れた大木の中で、自分達の囲りを燃やすまいとして、力の限り、木の枝で火の粉を叩いた。そこは堀垣の内側に窪地になっている為、視界がきかず、人影がなかった。堀の向こうは、二部隊、幼年学校、と軍隊が広がっていたが、それらは、轟々と、ものすごい唸りをたてて燃えている。

そうこうするうちに、黒い大粒の雨が、バラバラと落ちて来た。空を見ると頭上で真赤な太陽が凜々と燃えている。太陽の位置から察すると、正午をいくらか過ぎていたのであろうか。

私達から少し離れた所に、軍隊は不釣合な柳行李が一つころがっていたので、それを引っ張って来て、蓋と底を二人がそれぞれ背中にかぶって、向き合って腰をおろし雨を避ける。堀向うで時折り「ポーン」と気味の悪い爆発音がする。以前、二部隊の堀端には、ガソリンの入ったドラム缶が埋めてあると聞いていた。雨が降った安心感と、疲れとで、二人は、いつの間にか眠り込んでいた。

眼が覚めた時には、雨もあがって、何もかも洗い流されたような静けさであった。眠っている福本さんを起こして、おそろおそろ窪地を出た。

しばらくは、自分の立っている場所が、何処であるか、判断がつかない位に、きれいに焼けていた。兵舎の焼跡には、まだブスブスと、くずぶついている人間の胴体があった。唯一か所、小高い場所にあった城と、大本営跡といわれている建物だけがうず高く、くずれ落ちたまま、火から免れて残っていた。

重苦しい夕暮れが近づいた中で、負傷者は、足許に、死んだようになって、横たわっていた。その中を無事であった学友二人（板村、大倉）のたち働いている姿を見て、私は、今迄眠っていた等とはいえなかったのだから、唯、黙っていた。

夜になっても市内の炎上は、赤々と夜空を焦がしていた。それを見てはじめて、私は家族を思った。母は…。祖母は…。幼い弟は…。

B29 がやって来たが、地上にはもう何も残っていない。避難する必要もなく、私は貯水池の側に寝ころんで、空を見ていた。時々火傷でふくれ上がった軍服の人が、水欲しさから私の側までフラフラと歩いて来て、ゴトンと倒れる。飲める水などありはしない。近くの堀の中から、ぼしゃぼしゃと水音がして、馬のいななきが聞こえる。未だ生きているのだ。

その時、同じ方向から夜の空に向かって叫ぶ男の人の声を耳にした。「おっ母さん。おっ母さあー。」私は耳をおおいた気がしたが、それっきり、又もとの静けさにかえった。城内を出て行った友は、皆、無事でいるだろうか…。

一夜あけて、真夏の太陽の下で見る現実は一層、苛酷を極めていた。

広島城を中心として、縦横に広がっていた軍隊と、陸軍病院は、全滅に近かった。炎天下を負傷者の肉体と、屍は、徐々に腐敗して行く。火傷の体は、狂ったように水を求めて、フラフラと歩いては、硬直した体で、ゴトンと倒れる。

救援隊の到着で、幼年学校跡に、屋根だけの収容所が出来て負傷者は荒むしろの上に横たわる。広い校庭は、負傷者でいっぱいになった。かたわらでは、死体を焼く黒い煙が立ち上っている。

級友の生きた肉体から蛆が這い出ている。その白い小さな生物は焼けただれた顔の窪みで、モゾモゾと動いている。まだ十四才という純真な心は、禁じられた水を、決して無理に求めず、静かに苦しみに耐えていた。口からもれる言葉は、自分達に課せられた、情報のこと、それをくり返すばかりだった。

二十四年間の歳月の厚みは、記憶をこまぎれなものにしてしまったが、それらは決して私から消え去るものではない。足りない私の言葉では、私の中にあるものを全部書きつくすことはとても出来ない。

八月六日以来、傷ついた生徒の為に、寝食を忘れて奔走して下さったり、そして今もなお、亡き生徒に深い慈愛の祈りを捧げて下さる国信玉三先生に、心からの感謝を申し上げて、拙い手記を結びたいと思います。

あの日のこと

花田艶子

(旧姓森田)

昭和二十年八月六日午前八時十五分！

やっとの思いで、地下壕から逃げ出した私達数人は、朝の交代の人々に逢った。皆、手にボロをまとっているようだった。顔はただれ服は焼け、わずかに残る服ともんぺ…。私達は右往左往するばかり。女子宿舎の前を通りかかると、宿舎は猛火に包まれ、今焼け落ちる寸前である。二十数段の石段を引きつような笑いをうかべ、足をひきずり、一段ずつ降りて来る女生徒があった。髪は千々に乱れ、服は焼けこげ、カスリ模様らしいもんぺ姿。よく見ると川上さんだった。周囲はすでに火の海で、近づくことも出来ず、唯遠くから名前を呼ぶばかり。やっとの声がとどいたのか「私にかまわず逃げて。」という石段の下の方へうずくまってしまった。

兵隊さん二人を加えた私達数人は、川上さんの身の安全を確かめ、焼け落ちる幼年学校の門を通りぬけ、白島の土手まで辿りついた。橋は焼け落ち、仕方なく川へ飛び込んだ。

川は死人と、助けを求める人々でいっぱいだった。

あてもなく、唯、ゾロゾロと人について歩くだけ…。途中で二、三人私達の方角へ加った。そしてお互い励まし合いながら、又もくもくと歩く。その時突然すごい雨が降り出し、背中が痛いようだった。そこがどの辺か見当もつかない。歩きつかれ、皆地面にへばりついたと思ったら、清住さんが、コックリコックリ居眠りを始めた。ホホを叩いたりして励ましたが、清住さんは再び起き上がろうとしなかった。どこだったか、覚えていないが、玉田さんと逢った。手の皮は指先にブラ下がり、顔は大きく腫れていた。でも気分はしっかりしていた。「私、駄目だから先に逃げて」という。そして私達はそんな友達を気にしながら、どんどん歩いた。

やがて日が暮れかけた頃、やっとならぬと祇園に着いたことを知った。その夜は上野歯科で一夜を過ごし、翌朝、司令部の方へ帰っていった。

司令部はすでに野戦病院となり、まるで生地獄そのまま。

「水をくれ水をくれ」と叫ぶ人々、兵隊さんや動員学徒のむざんな姿、そしてあちこちに死体が横たわり、目を覆う有様。私達は休む間もなく、兵隊さんや生徒に、白い火傷の薬をぬって歩いた。その中に藤井純子さんが居た。何か言いたい様に口の中でモグモグ言っている。私達二人は、家も大手町で近所だったし、通学もいつも一緒だった。でも一寸したことで、ケンカして口をきかないこともあった。私は側に行き、一生懸命「ごめんなさい。」「しっかりがんばって。」と、くり返した。そして髪をなでてあげた。両手を出し、情報機を入れている仕草。そして「森田さん。アメリカがにくい。私はただだけれど、どうしてもカタキを打って…。」「私に「必ず」といって約束した。安心したのか、そのまま静かになってしまった。

私はその場を去った。被災者の多くは次々とローソクの火が消えるように、ひっそりと死んで行った。友達の顔を見て廻った中には、私が一番最初に見た朝の交代の人、森本さんの顔もあった。静かに眠っている様だった。

鼻をつくような異様な臭気、お父さんやお母さんもない中で、級友は唯一人、何を考え、何を思って死んでいったのだろうか？

猿俣川を渡って

三浦富美枝

(旧姓三浦)

私達の女学校時代は、戦争のため一年生の時から臨時動員があり、二年生もあまり勉強せず三年生になってからは、もっぱら動員の毎日であった。はじめは学校が軍服工場となりミンカで過した。その後師団司令部へ配属となり皆一層張切ったものであった。

その頃の自分達の気持ちもそれそのもので、国のため、戦争に勝つため、どんなことにも喜んで参加した。それに加え、師団司令部は兵隊さんと同等ということで、そこで死ぬなら死んでも悔いがないと考えるほど真剣であった。

しかし勤務がはじまると、最初の夜勤はとて辛く、あけの帰り道、的場あたりから、我が家段原につくまでは、半分目をつむりながらやっとの帰宅であった。それでもぐちもこぼさず、炎天の毎日を通った。

八月六日交替で食事をすまし、一番奥の台（たしか川上さんの受持であった広島台）に座っていた様な気がする。その時はあまり忙しくなく、何もしないで窓の方に向いていた。突然、電気がショートしたと思った。青い光がパツと見え、その後は真暗になってしまった。皆のワイワイ騒ぐ声。手さぐりで表に出た。外に出てみると、丁度霧がはれてゆくように土ぼこりか何か、ゆっくりと地上におり、だんだんあたりが明るくなる場所だった。視界がひらけるにつれ見渡す限り建物も見えず、ひろびろとしている。その中から、あちこちと火の手があがり始め、近くの大木の先も燃えている。何が何だかさっぱり分らず、ただただ茫然とするのみ…。かたわらに、そびえていた広島城も、私達の宿舎もあとかたもない…。

通信室から出た人達は、それでも元気で、少しの怪我ぐらい気にもせず、あたりの様子に気をとられていた。

何時もなら交替の時間は過ぎているのに、今朝は朝礼が長びき、他の二班の人達は、屋外で竹ヤリの練習などしていたらしい。竹ヤリは何時も建物の横でやっ

ていた。丁度その時竹ヤリを持って藁人形に向かっていた人達だけは、きれいな体のままで即死であった。

他の人達は皆ひどい火傷で、顔の変わった人も大勢居り、全身の火傷で服も黒いところは焦げついて居る。手は皆、前にさしだし、その手から、手袋をぬぎかけた恰好に皮膚がたれ下っている。

恐怖にかられ、人の動く流れについて行く。お城のくずれ落ちたそばを通り、崖から落ちるようにして、お堀にかかっていた一本橋を渡り、幼年学校へと出る。そこは一段と人が増し、はじめに一緒に居た人が何処で離れたかも分らず、それでもつねに誰かと一緒に手をとり合って、あちこちから火の手の上がる中を火に追いかけられながら、火の無い方へと進んでゆく。途中から一緒になった樺村さんとは最後まで一緒であった。

(しかし樺村さんは終戦後盲腸炎でなくなられ、唯一人の昔語りの友人を失って淋しい) その中、川縁に出て来た。(今思えば泉邸あたりらしい) その時は何も分らず、立っていると、火の渦がすぐそこまで迫っている。川は弓潮で流れている。背に火が迫り、地下足袋のまま土手よりザブンと飛び込む。火傷を負った人も泳げない人も逃げ場を失い、川の中へ…。火傷を負った人は、一人で泳ぐ力もなく、ただオロオロするばかり。木切れをつかまえて浮かんでいく人。かろうじて自力で泳ぐ人。そして手を貸してほしいと頼んでいる人。私も(今はもう名前が思い出せないが) そばの人の片手をしっかりつかまえて、必死に泳いだ。泳ぎ着いた河岸には、大勢の人が横になっていた。私と一緒に居る人も疲れたので、そこで休んだ。

そこには兵隊さん達も多く、「お母さん」「お母さん」と叫んでいた。私は樺村さんと又手を取り、常盤橋のふもとに出た。途中、動けなくなり、うずくまっている人や、黒こげの死体がたくさんころがっていた。目の前に塀のようなものが突然現われた。それを二人でよじ登り、こえるとどうやら東練兵場らしい。その頃上空に侵入した敵機が悠々と飛んでいる。私達はこわくなって、くぼみに体を隠しながら、やっと山の上まで辿りついた。そこも大勢の負傷者の群、すでに動けない人、息絶え絶えの人、人、人。しかしここには友達の姿はあまり見られない。

その中救護班が呉の方から来られた。でもその人達にも、この火傷は手のほどこしようがないらしい。

「こんなひどい全面火傷おはじめてだ。今までは焼夷弾の火傷ぐらいしか見ていないので。何の兵器が使われたのだろう。こんなにひどいのだから新兵器?…。」皆、わけがわからず、「ひどい、ひどい。」と繰り返すばかり。夕方近くやっと炊き出しのニギリメシを貰う。ほんとにおいしかった。

夕陽が沈んだ。あちこちの火は勢も衰えずあかあかと燃えつづける。自分の家の方向を考えながら、あの火は今家が焼けおちているのかも知れない。母や妹はどうしているかしらと心細くなるばかり。

広島駅構内の貨車が、突然大音響と共に火を高く噴きあげ、めらめらと燃えはじめた。二人は家族や、友人達はどうしたであろうかと語りながら、燃えあがる炎をみつめていた。その夜は練兵場の草むらで野宿をした。

翌朝、空は青れていた。友と別れた私は家へと急いだ。道は瓦や塀のくずれ等でせまく、やっと焼けていない我が家についた。

壁は落ち、玄関の戸も吹き飛び、大黒柱には小さなガラスの破片がつきささっている。天井も床も落ち、戸はあとかたもなくなり、水道の水は出っぱなしの中に、やっと一部屋落着ける場所があった。

母は基町の方なら探しに行っても無駄だと皆に言われ、あきらめて私のために線香をあげていた。母や近所の人達が私の帰りをわがことのように喜んでくれる中を、食事だけそそくさとすますと仕事があるからといって私は家を出た。

友人の家は誰も居らず、あきらめて師団へと急いだ。市の中央部に入るに従い、死人があちこちと多く、練兵場では馬が火ぶくれとなり、内臓がとび出しているのもあった。堀のそばまで来ると堀に頭をたれたまま死んでいる人、堀の中に落ち込んだ人々を見た。師団につくと友人の誰彼れとなく互いの無事を喜びあった。それからは友達探し、数多くの人の看護、と立ち働いた。通信部は故障ながら任務をつづけた。私達は通信室の一室で寝泊りして、終戦まで務めた。

校歌

聖のみあと 神さび立てる
比治山かみざの 松のみどり葉
千とせときわの 色ぞかわらじ
やすけき光 永遠に湛へて
幸豊かなる 太田のながれ
源遠く 水ぞつきせじ
ここに生いたつ 吾等ほらから
松をこころに 水をかかみ
やまと乙女の 道や励まん

(五)

被爆者救護活動の手記集(晩部隊)

被爆者救護活動の手記集(晩部隊)

一

梶秀逸

(当時弾薬船本廠・陸軍少将)

被爆時、部隊は爆心から約六軒の金輪島に駐屯しており、朝礼を終って廠舎に入り、作業を開始した直後であった。突如屋外にオレンジ色の閃光がギリギリと輝きわたるを見、たちまちにして大音響とどろき、廠舎振動して一同思わず机の下に退避。出てみれば、屋根裏の梁(当時延焼防止のため、天井なし)から落ちた一面の塵・埃であった。弾薬庫か或いはガスタンクの爆発かと思ひ、屋外哨にただすと、然らずとの答。そのうち、後にいわゆる原子雲の高く上がるを見、何か異常事態と感じた。廠舎は爆心に対し島陸に当たるため、爆心直面の僅かの部位以外はガラスの損害もなく、建物殆ど異常なし。

直ちに状況偵察のため、舟艇にて宇品に渡り、乗用車にて市内に向う。御幸橋あたり(時間は九時三十分か十時ごろか)まで到ると、路上は、市内から避難して行く市民で埋まる。火傷のため、皮膚だらりと剥離したもの、着衣を失ったもの(屋外勤務奉仕中のものの大半は着衣を吹きとばされたらしい)のほか、顔面がはれあがったため、事実上の盲目となったものが、路上を徘徊しているため、車行不可能となり一日帰隊。当時御幸橋付近の日本家屋は損壊多きも倒壊は少なかった。十時ごろから方々に火勢上がり、十八時ごろには市内は炎上し尽したようであった。

第二総軍壊滅のため、船舶司令官が当日午後、広島警備司令官を命ぜられた。八月七日、広島市内を東、中、西警備地区に分け、小職は西警備地区司令官を命ぜられた。県庁・警備司令部打合せ会を比治山近くの神社にて開き、応急措置を決定。(1)負傷者の手当(2)屍体の収容、奈毘(3)道路の啓開(4)避難者への証明書交付を当面の任務とされた。小職は隷下部隊約三〇〇人をつれ、戦闘指揮所を觀音町に前進、八月十一日まで野営しつつ前記任務に当たった。負傷者に対しては火傷の応急手当を行なったが、市外の小学校等の臨時病院を見舞ったところ、火傷化膿のため病室一杯の異臭であった。屍体は広場に溝を掘り火葬、河中の屍体は似島等に舟艇にて運び埋葬したが、人数は不明。道路啓開は二、三日で終了したところへソ連の参戦あり、戦備を敵にすることを兵力を撤収した。

作業終了直後には、被爆時付近にいた者を除いて原爆症状はなかった。戦後においては、小職自身に異常はない。終戦後、消息不明のものが多かったのでわからないが次の事例はある。

(例) 部隊副官、村本周三氏。当時三十歳。八月六日偵察のため夕刻から市内徘徊、爾後小職と行をともにす。昭和二十五年白血球三、〇〇〇まで低下。半年間白血球増強注射にて回復。

二

篠原優

(当時船舶司令部船舶参謀・陸軍大佐)

一、救援部隊の規模

イ、広島市を東西南北の四地区に分け、各地区に司令官をおいて救護活動を行った。

ロ、救護所は次の所へ分散して軍医が長で救護を行った。

ハ、看護兵・看護婦をこれにつけた。

二、施設は材料倉庫を使用した。

ホ、場所一金輪・鯛尾・似ノ島・楽々園・宇品等に分散配置。

二、被爆直前の患者収容状況

なし

三、被爆の体験(船舶司令部内にて被爆)

イ、閃光の感受状況

凱旋館内にて二階廊下を通行中、眼前十メートルに写真のマグネシウムをたいたいような強烈な閃光を感じた。

ロ、轟音の聴取状況

同時にドンという轟音を聴取した。

ハ、炸裂直下の状況

その数分後、屋上に上ってキノコ雲を見た。

二、一時間位の後には市内各所に火災発生。

ホ、収容患者の状況

現六管一階(元凱旋館大広間)に続々として、負傷者百数十名が自力で徒歩で来たが、ここで気力尽き、身動き

ができなかった。

へ、船舶司令部の破壊

ガラスがこわれた程度である。

ト、病院従事者の被害状況

軍医二名・衛生兵三名・看護婦五名程度が服務していたが、被害はなかったと思う。

チ、負傷状況とその後の行動

私自身は負傷しなかった。

炸裂直後二時間、私は第五師団司令部へ連絡を命ぜられ、市役所前まで来たが、附近は電柱や倒壊物が燃えており、路上の前進は不可能であった。

四、臨時救護所の状況

船舶司令部では、軍医・衛生兵を増員して、凱旋館の患者の応急手当を行った。

五、救護活動の状況

イ、八月六日から八月十三日まで

佐伯司令官訓示

「船舶作戦の本務をすてても、広島市の救護に立て。」

ロ、場所

広島市内を四地区に分ち、船舶司令官自ら市役所南側空地に天幕を張り、一週間泊り込みで、救護・復旧作業を指揮し、都市機能の早急回復にあたった。

金輪・似ノ島・鯛尾・楽々園・坂・宇品各方面に臨時救護所を設置し、負傷者の輸送につくした。収容人員は、不明なるも、六千人を下らざらうと思う。

ハ、死体の処理

焼却・埋葬(数は不明)

六、その他書きのこすべき事項

イ、当時大阪中部軍司令部より救護活動のため

防疫給水機関若干

野戦病院一個

救護班五個

を急ぎよ広島へ応援派遣することになった。

ロ、広島駅前、探索者の便宜をはかり、戦災相談所を設けた。収容負傷者の氏名・年齢などの記録簿を置く。

ハ、佐伯司令官が、市役所に対して、上水の給水能力の復旧を要請した。

三

三吉義隆

(当時教育船舶兵団・陸軍大佐)

兵団司令部の朝礼を終り、参謀長室に入り机に向はんとした八時十五分、突然写真のフラッシュの如き閃光が、空一面を覆った瞬間、猛烈な爆風音に襲われ、ブラック建の司令部参謀部は半壊の状態となった。砂塵もうもうたる裡より逃れ出て中庭に出れば、司令部内騒然、若干の負傷者も出た模様。早々に軍医部を動員、司令部員負傷の処置に当らしめ、一方司令部横の小丘に登り、何処が如何たる爆弾によりやられたかを視察したが、紫赤色のもうもうたるキノコ雲が、空高く向く登るを眺め、ガスタンクに爆弾命中のためか、空中魚雷式の爆弾破裂か、何物か半じ難く、その詮索の暇もないまま司令部に第一陣の一般市民の負傷者が、トラックにて運び込まれた。皆大ヤケドにて皮膚ははがれ、人相も半崩し難く、地獄より匍い出たと思われる悲惨さである。とりあえず軍医総動員で手当して倉庫に収容した。九時頃ではなかったかと思う。

目前の悲惨な状況に一時眩惑されたが、広島市内は全部灰色になり、崩壊されて人影もないことが観察されたので、手兵である司令部のものを市内偵察に出したが、いずれも惨憺たる状況の報告で、いずれの部隊の出動救援の模様なく、緊急を要する状態であることが半明し、急遽、船舶通信隊の出動命令を出した。

しかし、船舶通信隊も上を下への大騒ぎで、大部分が負傷者であったため、少数人員の救護班を作らせ、市民の救済に当らしめた。司令部へも続々負傷者が救助を求めて殺到するに至り、司令部全員看護に当らしめたが、これら患者は一週間内に千数百名全員死亡した。

船舶司令部命令により地方散在の部隊へ広島救援を命じ、市内秩序の維持、傷者の収容看護をしたが、数千名

の部隊では、なかなか作業がはかどらぬ状態であった。

小生も市内巡察指揮、死体収容焼却等に従事し、軽度の原爆症となり、一ヵ年間療養の必要を生じたが、現在は健康である。

四

野村清

(当時陸軍船舶練習部副官・陸軍少佐)

宇品町七丁目一、一〇〇番地陸軍船舶練習部副官室(旧大和船積構内)にて被爆した。

主として船舶兵将校教育の任務を有する当隊は、当日(八月六日)も対空監視哨、対空射撃部隊、及び衛兵等の勤務者を除く、各部課教導隊等はそれぞれ日課予定表に基づき作業準備又は教育作業に従事する。

また、公用で船舶司令部基地関係諸隊に外出中の者、あるいは部隊外居住者(営外居住者)で、課業時間の関係上未登庁の者も若干在ったが、その数は極めて少数であった。

閃光・音響の聴取について、私の体験によって述べれば、副官室で机上の書類を閲覧中、突然ピカリと淡黄色の強烈な閃光を感じ、それより一秒～二秒間をおいてゴーンと地鳴りの様な爆音と共に、強烈な爆風が私の座席の正面から襲来し、窓枠、窓ガラス、帽子掛、刀架等が散乱してきたので顔面を両手でおおって床にひれ伏した。

隣室の部隊長の安否確認のため、部隊長室に入室した。芳村中将はガラスの破片で腹部に軽傷しておられたが全般の状況知得のための措置を指令された。

私は双眼鏡を持って屋上の対空監視哨に走り上り、市街の状況を展望し、灰色の煙(モヤ)に包まれて未だ火災をあげていなかった異様な街相を見て、部隊長に対する適切な報告の言葉に困った。

六日の午前八時三十分頃(被爆直後)における当部隊の状況は、各部・課・隊からの報告並びに視察により、次の状況を知る。

イ、爆発物は異常な爆弾らしいが詳細については不明。

ロ、被害状況(隊内)

人員＝ガラス破片又は器物の散乱等により、若干の軽傷者を発生したが、隊内者にて生命に関わる程の重傷者なし。

兵器・器材＝異常なし。

船艇にて練習部棧橋にあったものは若干破損又は沈没せるものあり。

ハ、外出中の者については未だ不明。

六日朝九時三十分頃から一般市民の負傷者逐次隊内に収容されつりあったが、午後三時ごろには、その数は続々増加して数百人に及び、午後六時～七時から、逐次トラックにて収容される重傷者、また船舶部隊にて編成した船艇にて、河口から市内各河川に進航した船艇救護隊にて救援された市民が、続々と収容され、終夜不眠不休の救護活動が続行され、翌七日朝迄に収容された数は約三千名～四千名と概算された。

救護隊は陸上からのものと、海上から、河口から市内各河川に進入したものがあつた。陸上よりの隊は自動車及び乗用車各々二、三輛程で部隊から御幸橋までのものと、比治山橋附近までのものがあり、この附近まで脱出して来た者で、比較的重傷者から先に隊内に収容したと思う。水上救護隊は各河川から進入して、水中生存者を救援し各収容所に搬入しては、これを続行し、逐次川岸に近く脱出して来る者を救援した。

救護収容されて来る者の形相は、老若男女の別も定め難く、特に夜に入ってから作業は、学生教育(将校)の各教室・講堂等利用し得る所は余す所なく利用して、これに収容する作業と、応急手当ての作業に、八月六日午後から八月七日朝迄の活動は、部隊長以下全員の終生忘れることのできない事態であった。

翌七日早朝、市内現地偵察の命を受け部下一名をつれて御幸橋～鷹野橋～紙屋町～西練兵場附近～鉄砲町(自宅住居)～八丁堀～宇品と任務についたが、自転車の通行も困難な状態で、市中にはまだ重傷にて歩行不能な者等が市役所附近、紙屋町の練兵場入口附近及び練兵場内にはまだ多数いることを知り、その旨を芳村中将に報告、特に道路を開設して、自動車の進入路開設の要を意見具申した。

七日午前十一時頃、船舶司令官(佐伯閣下)の命により芳村部隊長は中地区警備隊長となり、北は白島北端から東は京橋川以西、西は本川以東という広島市の中央部の警備救援の任に着き、私は副官として前記地区偵察の常備知識を活用、道路の障害物を排除して御幸橋～鷹野橋～紙屋町～第五師団司令部～工兵隊～二葉の里～上柳町～八丁堀を経て現地偵察に随行し、紙屋町と葦屋町本通り入口北側芸備銀行(現広島銀行)附近焼跡に中地区警備隊本部開設に従事した。

隊員を召集し同所にて八月九日早朝まで、担当地区内の生存者の救援、手当、道路の開設、死体の集結、警備等の任に服し、九日には大多少佐(教育部教官)と交代して、宇品の部隊本部に帰り練習部副官業務に就き、隊内に収容されている負傷者の救援業務、死体処理等に関する区処に任ずると共に、また戦時中のことであり、対空撃・防空等に関し練習部長補佐の任に服した。

収容の負傷者の手当看護には、軍医、看護兵等の衛生部員を主軸とし、女子筆生打字手、印刷工等全員不眠不休の状態であつたり、食事の準備、運搬、配給等から氏名調査(出来る限り記録)等に至るまで、又近親者、知人、友人等の安否連絡の処置をおこなつたが、混乱中での仕事の困難さは言外であつた。

死体処理を行った将兵の労苦もまた多大であり、特に燃料欠乏下における処理の状況は、筆舌に尽し難いものがあつた。火葬できず、そのまま地中に埋葬された

ものも多々あったと考えられる。

私自身について言えば、終戦の詔勅を拝した八月十五日以降、心身共に虚脱奪え、生きていること自体が不思議で

あり、又無意味の様にも覚えたが、これが原爆症状ということができたかどうか判らない。現在迄生きているが、目下高血圧と糖尿病に心配しながら仕事に追われて働いている。ただ次に来るべき時代のいない手である若い人達の良い肥料となることを念願するのみである。

五

広瀬自助

(当時船舶練習部・陸軍少尉)

私は大和紡績広島工場の工場長として勤務中・同工場が陸軍に借上げられ、船舶練習部として使用されることになり、元々一年志願兵出身の陸軍少尉であったため、同部隊に召集されて経理課に所属していました。被爆場所は出勤途上のときで、同工場の門前百米の地点の所でした。丁度、頭上八千米の高度にB29三機が飛来し、落下傘を三個投下するのを目撃しました。異様な感じに打たれ、何故の落下傘(註・この落下傘は数日後広島市の西方五キロの山中で兵が発見しました。そして勿論照明弾用でなく、原子爆弾炸裂の諸状況をマリアナ諸島にある米軍基地に自動発信する装置が仕込まれて、いたことが判明しました。)であろうか、昼間に照明弾を投下する筈もないがと不審に思ううちに、視界が真白になり閃光というより、あたかもマグネシウムを何トンも焚いたという感じでありました。その瞬間頭脳をかすめたのは、これは何か新兵器に違いないということでした。そして二秒乃至三秒を経て、「ドン」という音響が耳に入り、同時に身体は爆心地より右側(南の方向)に約三米、吹き飛ばされました。その附近にあった木造建物の破片が、爆風により、私の身体の上に落下しましたが、私自身は負傷(少なくとも外傷)しませんでした。直ちに部隊(会社の工場)に行き、状況を観察しましたが、鉄筋コンクリート造の工場本館は異状なく、木造の寄宿舎社宅は1/3位破壊していました。ただ爆心地側の窓ガラスは一概に破れていたのは申す迄もありません。工場事務所の二階より爆心地を眺めて、初めて例の柱状の太いキノコ雲を見ました。何れともあれ、爆雲の立っている地点に行ってみようというわけで、下士官・兵三人を連れ、御幸橋の東詰まで自転車で行きました。その地点までは火災はなく無事に行き得たのでありますが、向う岸の市街地は、既に一面の火災で、到底市街中心部には入り得ませんので、工場に帰りました。その道すがら、被爆により負傷した罹災者多数に会い、また工場に収容されている負傷者を見て、これは普通ではない新兵器により負傷しているものである事が、ハッキリと判りました。私の住居は宮島沿線「古江」でありましたから、その日は、同沿線から通勤しておる勤務者のため、舟艇を一隻部隊から出し、約三十人位の者が乗り、「草津町」の岸壁に上陸して、自宅に帰りました。幸い、自宅は半壊していましたが焼失しておらず、当夜は自宅で寝たわけでありました。翌日、部隊から当番兵が来宅して、船舶練習部は広島市の罹災地を三分したうちの中央地区の部分を担当し、死体の整理収容、跡片付の任務が下命された由を伝えました。よって翌七日から一週間十三日まで、練習部本部となった住友銀行広島支店(紙屋町)焼跡で夜警し、任務に就きました。私自身の任務は部隊が担当地区で片付作業しているので、その個々の部隊に給食をする給与係主任ということでありました。ちなみに食事は、工場の炊事場で作った「むすび」をトラックで運んで、各部隊ごとに配給するというわけでありました。死体の収容といっても松根油をかけて纏めて焼くわけでありました。約三日間で担当地区内の死体は完全に片付きました。その悲惨さは多くの人の語るところで、私は省略いたします。私自身は所謂原爆症は出ず無事でした。しかし昭和二十六年に約半年間下痢に悩まされました。強いて申せば、これが原爆症であったかと思えます。

六

堀川松太郎

(当時船舶練習部・主計軍曹)

宇市町七丁目の船舶練習部経理課は、元大和紡績株式会社正門から二〇メートルばかり入った所の右側木造二階建の部屋にあった。

六日午前八時から、全隊員の朝礼、及び軍刀術を行なった。私はそのあと経理課に入り、北側の窓のところで、北側に背を向けて衣服をぬぎ、流れる汗を拭いていたときである。突然、閃光が起った。ピカリとして、背なかの熱いと思ったところへ、ドンという爆発音がして、天井が二、三寸ほど持ちあげられるのを見た。しかし、建物は倒壊しなかった。

自分の至近場所へ、敵機が爆弾を投下したと直感し、北西の方を振りむいてみると、キノコ雲が立っており、見る見るうちに、上方及び横に大きく広がっていた。課内にいた者の幾人かは、窓ガラスの破片で負傷したのもあったが、まもなく救出出動命令が発せられた。

私は、現在の千田町広島大学尚志会館裏のグラウンドの借家に、妻子三人で居住していたので、被爆後一〇分ほどあとに、妻子の確認と破壊状況調査のため、自転車で出発した。御幸橋を渡り、広島電鉄本社前まで来たが、引込線のある車庫の所から市の中央部に向っては、すべての建物が倒壊しており、道路は倒れた電柱や落下した電線が散乱していて、自転車で進むみ切れなかった。私はやむなく徒歩で、地面に押しつぶされている屋根の上を踏み渡って、ようやく家族を見に行った。

つぶれている借家の中にもぐって入って見たが、流血のあとではなく、また家族の姿も見えなかったもので、一応帰隊すると、家族は負傷もせず先きに部隊に来ていた。

そこでこんどは、家族の貴重品を取りに、また引返した。やっと取り出して外に出ると、三軒目の家が燃えはじめていた。

部隊へは、午前十時ごろから多数の被爆者が、治療を受けにプロゾロ入って来た。これらの負傷者の治療は、医務室と兼ねてあった医療研究部(正門から三〇〇

メートル先)が行なったが、被爆当日から三日三晩というものは、正門から医務室まで、負傷者の列が続いていた。

治療の途中、あるいは此処にたどりついて死亡した者は、毛布に包んで一ヶ所に集め、夜中に焼却した。

元大和紡績工場にいた船舶練習部、あるいは船舶工兵教導隊等は、部隊内に溢れた負傷者を、大型、小型の発動艇を駆使して、似ノ島や金輪島などの臨時収容所に輸送した。

七

北山勇

(当時西部第八十七部隊・陸軍主計軍曹)

市内宇品町七丁目(元大和紡績)西部第八十七部隊(船舶練習部)経理課所属。昭和二十年八月六日午前八時から朝会を行い、経理課の室に入った瞬間、爆弾の炸裂の音と同時に青白の強力なる光線を感じた。爆風圧により天井が落下し、室内は一寸先も見えなかった。

爆発音のした瞬間、天井が落下、直ちに軍人軍属に対して、防空壕に避難する様命じ、二ヶ所の壕に待避する。其の際の建物はガラス窓は殆んど破損し、屋根瓦は、爆心地から大分離れていたけれども、その三分の一位が爆風の為にはぎ取られた。幸いに部隊内には余り負傷者はない模様であったが、公用にて市内に外出者の中には、頭・手等に負傷したものが二、三人あった。

木村経一課長(主計少佐)も頭に負傷された一人であった。尚当時は日曜・祭日も返上で勤務していた関係で軍属が交替で休んでいた。女子職員が、爆風により家が倒壊し、その下敷きになっていたのを助けだし、部隊に連れ帰り手当ををしているうち、二、三日後には頭の毛が全部抜けて遂に死亡した。

原子爆弾の炸裂直後、隊内にはわずかの兵を残し、ほとんど全員が市内に出動し、負傷者の収容作業に連日勤務した。私も木村課長殿の命令を受け、兵三人を連れ、市内に自動車にて出動中、千田町電鉄本社前からは、火災の為に道路のアスファルトが沸き、自動車の通行が困難の為に引き返し、小型戦車に乗り替えて再び市内に出動し、千田町から鷹野橋一紙屋町を経て、西練兵場に行ったが、負傷者と避難者などで混雑しており、はっきりした数もつかめぬが、約三千人位の負傷者が動けなくなり、苦しんでいた。速かに中隊に連絡して負傷者の収容を行う。二、三日の間に我々の部隊に収容した負傷者は約千五百人位に達した。

私は当時経理下士官であったから炊事の兵隊に握飯を作らせ、負傷者のいる所に運搬供給を行うこと約一週間、なお、被爆当日は盛夏でもあり、薄着していたから、爆風の余り強力な為、人々の着物はほとんど飛ばされ、多くの人々は素裸であったから、被服を与える作業を行った。

我々の属していた隊は船舶練習部で、船舶兵三ヶ中隊長佐尉官、学生約百名位で人数も少なかったが、負傷者を収容すると共に死体の整理を行う。船舶練習部は舟があるので常にこれを利用して、負傷者並びに死体の収容作業を行う。

又、市内の部隊は殆んど被害を受けたので、曉部隊の活躍が特に期待されたように思う。

作業中、急に体がだるくなったので、八日に、部隊の医務室にて診断を受けた。白血球が約半分に減じており、毎日注射を行い、食物等も注意し、十日間位経った頃、検診を受けたところ、大体標準位に回復していた様であるが、未だに健康体になれず、少しの労働にても疲労し易くて困っている。

八

富田稔

(当時船舶練習部第十教育隊・陸軍大佐)

海上挺進第三十戦隊(以下三〇レと略)及び配属の海上挺進第三十基地大隊所属の整備中隊は宮古島へ船舶輸送中、三月一日奄美大島において空襲のため海没、再編成のため江田島へ帰還し、以後内地防衛の海上挺進第三十一〜第六十戦隊の訓練の基幹部隊となり、船舶練習部第十教育隊に所属していた。

五日は日曜日のため教育隊長斉藤少佐外、広島に在任の将校も帰宅し、私は部隊に宿泊し、教育隊の指揮に当たっていた。

(爆発時出動中の船は以の島にあったものと記憶する)

被爆当時、私は江田島幸ノ浦海岸にあった教育隊長室で海(広島方向)を背にし、窓を開放して事務を執っていた。(その直前空襲警報は解除されていた。)突然室中が目がくらむように光り、首筋が焼けるように熱く、後方(広島方向)上空に大炸裂音を聞いた。海岸に多数の燃料ドラム罐が集積されていたので、その爆発と直感し、海岸へとびだしたが異常はなかった。上空にB29一機が、広島上空から西南方向へ飛ぶのが見え、間もなく広島市に黒煙が上り始め、同時に上空に異常な雲状が認められた。然し私達は原爆とは知る由もなく、宇品にあったアセチレン工場の爆発であると話し合った。幸ノ浦の兵舎は、これという破壊は受けなかったが若干の板が吹きとばされていた。兵員の損害なし。

爆発により宇品との有線電話は不通となり、無線により次の連絡を受けた。

(イ) 爆撃直後

広島は原因不明の爆発(撃?)により各所に火災発生した。

(ロ) 十時頃

敵は原子兵器らしい兵器を使用した。広島は損害甚大にして大混乱に陥っている。第十教育隊は即時救助作業に出動し得るよう準備せよ。

(ハ) 十一時頃

直ちに救助作業に出動せよ。

右(口)の連絡により、教育隊長より先ず第三十戦隊を基幹として出動の準備命令を受け、(ハ)の命令により第一回の発動艇を三〇レ第一中隊長面高大尉の指揮によって宇品へ進発せしめた。十二時頃と記憶する。

一、第一次進発、面高大尉指揮。十二時頃、第二次進発。私は午後一時頃、第二次部隊と共に幸ノ浦を進発。千田町の電鉄本社に至り、先に出発した面高大尉と会い、概況を聞く。私達が宇品へ上陸し、逐次市中に北上する間、救援作業中の部隊民間団体等全く見ず、焼野原と死傷者のみの広島であった。

当時の私達の推察では六、七千人位の死者かと話し合ったが、第一日午後のみ収容人員(死者)は八千人を数え、事の重大さに驚いた始末である。第十教育隊は訓練中の部隊のうち、出陣間際の者は残置し、残余を以て作業に従事すること。従ってその詳細については記憶していない。私はその後引続き、到着した斉藤教育隊長と全般の作業計画を行った。

千田町電鉄本社を救援部隊本部とし、逐次北上しつつ先ず露出せる死傷者の救助を行い、負傷者は宇品(似の島)へ送った。死者は若干ずつ安置した。(その後泉邸に壕を掘り火葬した。)終局的に担当地区は相生橋以南、元安川以東、主として市電に添う地区であった。そのうちに逐次柳井の船舶工兵隊も進出し、川に浮遊する死体及び負傷者の収容に当たった。

赤むけの負傷者が這いながら手を合わせて水が欲しいという姿は、誠に地獄絵図そのまま、水を与えれば死ぬことは分っていたが、見るに忍びず水を吞ませると、目前でそのまま息絶えた。

乗用車の損傷したもの一輛を苦心して修復し、二、三日連絡用に使用していたが、県庁の所有と判りお返ししたこともあった。真夏のこととて、死体は直ちに腐敗し、衣服は焼けてその処理に追われ、申し訳ないながら氏名の確認等到底できなかった。

若干日後、漸く破損家屋の下敷きになっている人々の処理に手をつけたところ、思うようにはかどりはしなかった。又逐次消防団等の組織が動きはじめたが、八月十四日夕、江田島へ引揚げる命を受けて、幸ノ浦へ帰投した。

右、八月六日より十四日迄全員広島市内に露営して作業に当たった次第である。

復員後、私自身には異常はないが、所属下士官の一人が、悪性貧血で発病後、二か月位して死亡した。しかし、田舎の医者にかかっていたため、原子爆弾による障害とは認めてもらえなかった。

九

斉藤義雄

(当時の訓練部第十教育隊隊長・陸軍少佐)

一月間に一回の帰宅休養の夜を、空襲警報に乱されて、寝過ごし昭和二十年八月六日(月曜日)の朝八時頃、警戒警報が発令されたが、暫くして解除されたので、安芸郡中山村(現広島市中山町)の家族の疎開先の家を出た。この日、空は一点の雲もなく晴れて暑かった。中山から尾長に越える峠道を登って行くと、B29のいつもの特色のある唸り声が何処からか聞こえて来た。大編隊ではなく、二機か三機の音であった。空を見上げながら歩いていて、快晴の空には何も見えない。相当の高度のようであった。警報は解除されているのに、ブーン、ブーンと聞こえてくる唸り声に、何となく異状なものを感じた。前進しながら退避所を探したが、運よく大内越火葬場の反対側の斜面の峠道から十メートルばかり上がった所に、素掘りの小さな横穴を見つけた。穴の前までよじ登り、空を見上げて機影を探した。横穴は入口が北側にあり、高さがメートルばかりの三、四名は収容できる浅い小さなものだった。

ふと府中方向の東の空に小さな落下傘が二箇相前後して、フワフワと静かに落ちて来るのを認めた。(戦後の米側の資料によると、予め受信装置を投下したものである。)「はて何だろう?」と思いつつも、B29の唸り声は、引き続き何処からともなく聞こえてくるし、妙な落下傘は落ちてくるし、何か不安な胸さわぎを感じながら、眼を東から南、西の方向に移しつつ更に機影を求め続けた。視線を真西に向けた頃、相当上空に、B29の一機が右旋回する姿が、キラッと銀色に光った。万年筆位の大きさに見えた。その附近の空を、機影を求めて凝視していると、その下の方で、今迄に見たこともない強烈な閃光が目に入った。これが史上かつて無い大惨劇を、広島市民にもたらしたいわゆるピカであった。私は予め注意していたためか、反射的に穴に飛び込んでいた。穴の中に居た直後、大音響と共に地震のように大地が揺れて、素掘りの穴の天井からバラバラと落ちた大量の山土を全身に浴びた。穴の向う側の山の松の太木が狂ったように揺れ動いて、互いに交差する様子が土煙の中に見えた。瞬時の後に、あたりは不気味な程に静かになった。私は直接の爆風は受けなかった。穴が北向きであったのが幸運だったようであった。

暫くすると、中年の婦人がベシヤンコになったパラソルを持って、穴に登って来て入った。峠の堀割道を歩いている時に、爆風を受け、パラソルを握ったまま吹き飛ばされて、道路の崖にたたきつけられたらしく、今朝初めておろしたという新品のパラソルは無残に破れていたが、婦人は外傷は受けていなかった。続いて馬車屋さんが、穴に飛び込んで来た。「今のは何でしょう?あしア崖にたたきつけられました。馬も一緒にがんですが、馬は生きとります。」馬車屋さんも外傷はないようであった。暫くの間穴の中の三人は不安な会話を交しながら居たが、周囲の静けさには変化がないので外に出た。穴の前から広島市を見下すと、二葉山麓の松の木から点々と煙の上がるのが見えたが、市内からは火災らしい煙も上がっていなかった。いわゆるキノコ雲は、猛烈なスピードでぐんぐん垂直に上昇していたが、大きく広がった傘型の雲はまだ発生していなかった。雲の色は見たこともない不気味な、赤と紫と黒の混合したような異様なものでもあった。大きな雲の柱はどんどん上昇を続けながら次第に傘の部分が増大していった。

二人の人と別れて、宇品行きに乗るため、広島駅に向かって峠をくだり始めた。附近の家は、窓の建具はないが、倒壊はしていなかった。峠道の東側に沿って点

在する大きな洞穴の中には、泣き叫ぶ子供でいっぱい。ほとんどが上半身裸体で、全部が何処からか血を流していた。硝子の破片で受けた傷のようであった。私は持ち合せたメンソレータムを塗ってやろうとしたが、数名過ぎて手の付けようがなかった。大きな子どもにメンソレを渡して応急手当を頼み、先を急いだ。一刻も早く、部隊に到着しなければの一念が先に立った。家族の様子を見るために引き返すことは頭にも浮かばなかった。愛宕町に出る頃には、市内の方々から火災の煙が高く上っていた。附近の家は倒壊したもの、半壊のもの柱だけのものなど、多種多様で、道路は、瓦その他の雑多なものが散乱していて、歩きにくかった。倒壊した家屋から発火したことを告げて、消火を呼びかける地元の人があったが、消火に赴く人はほとんどなかった。駅の方からの人波は次第に増加してきたが、どの人を見ても、呆然自失した空虚な目をしていて、衣服は着けていたが、埃にまみれ、ほとんどが裸足で、髪は乱れ、顔も頭もチリカ埃で汚れていた。外傷を受けた人はまだ見かけなかった。時々、どちらへ逃げたらよいかと問いかける人もあったが、私には答えようがなかった。愛宕町の踏切を渡る頃には、避難者が道一杯に拡がり、逆行する私の前進を阻止する程であった。この頃も、大きな負傷をした人は、まだ目に付けなかったが一人の兵隊が無帽裸足で無表情のまま通り過ぎた。頭を見ると後頭部の動脈が切れているらしく血が勢いよく吹き出している。呼びとめて、携帯していた三角巾で包帯してやった。私の服が手当中に吹き出る血を浴びてひどく汚れた。

広島駅附近は、火災のため近寄れないので、宇品行きを断念し、歩いて南蟹屋町に出た。妻の実家に立寄って見ると、建具・壁は完全に飛び、柱が三本折れていたが、家は倒れてはいなかった。家の中を方々探したが、義母の姿がない。シチリンの火を消している、消防団の人が、老夫人は負傷していたが、何処かへ収容されたと告げたら去った。義母の生存を確認したので、安心して東大橋を渡り段原に出た。市内の火勢は、ますます強くなっているが、比治山の東側の家屋には、大きな損傷はないようであった。旭町附近の畑のそばで、夫婦と見える老人二人が、荷車ごっこしながら合掌していた。車には二十歳前後の娘さんが既に息絶えて横たわっていた。思わず拝礼して、無言でそばを離れたが、今日初めて見た死者であった。勤務している義妹の安否を確認する為、宇品の共済病院に立寄った。まだ出勤していないのことに、少々不安を感じたが、どうにもならない。病院は負傷者で充満していた。上空を旋回する敵機を避けて防空壕に入る人、入れたくて右往左往する人、動く力もなくなって、小砂利を敷きつめたように硝子の細かい破片が一面に散乱した土間に横たわる人、既に息絶えて動かない人等々、まことに混乱した地獄であった。

午前十時前に船橋練習部に到着して、幸ノ浦の部隊と連絡したが、「異常なし」との報告で安心すると共に、広島市への出動を準備せよとの命令が出たことを知り、先ず富田少佐の指揮する第三戦隊を基幹として出動を準備するよう指示して桧橋へ急いだ。附近の家は余り損害は受けていないようであった。宇品市菅棧橋から江田島行きの連絡船に乗った。当時船橋司令部で運航していた船である。便乗して来た娘さんを見ると、肩、片腕、背中の薄皮がペロリとむけて大きくぶら下がっていた。当人は比較的元気であったがその後どうなったことであろうか。海上から振り返ると広島市は東から西まで火煙の切れ目がないように見えた。焼夷弾の集中攻撃を受けて、一夜で東京の下町が焦土と化した昭和二十年三月の空襲をこの目で見た私には、一発で広島全市が火の海となったことが、不思議に思えてならなかった。よほど特殊な強力な爆弾であることは、想像出来たが……。海面は平素とかわりなく、美しく静かにキラキラと光っていた。

午前十一時少し前であったか、部隊に到着した。隊員が一名、硝子の破片で手に軽傷を受けたのみで、人員その他に異状のないこと、広島市に出ていた将校三名がまだ消息不明であること、似ノ島検疫所の要請により、約五十名の隊員を派遣したこと等の報告を受けた。当時私は、船橋練習部第十教育隊長として、江田島北岸の幸ノ浦に基地を置き、陸軍海上挺進戦隊の訓練を担当していた。海上挺進戦隊は、既に比島及び沖繩における戦闘で、相当の戦果を収めていた陸軍の海上特攻隊であり、本土決戦を予期して日夜の別なく猛訓練を実施していた。本部、整備隊と、十二個の訓練中の戦隊があり、総計約二千名の秘密部隊であった。広島市の火勢はますます強く、幸ノ浦から眺めると、全市火の海であったが、広島市が全滅的打撃を受け、軍隊、警察、消防団等組織的団体が、完全に機能を停止したとは知らなかった。午前十一時過ぎであったか、船橋司令官佐伯中将から、直接の電令が来り、「広島市は全滅的打撃を受けた。君の部隊は、訓練も大切だが一時中止して、全力を以て、広島市の救援に行け。」との命令である。既に準備命令は受けていたので、直ちに全戦隊長を集めて、状況を説明し、なるべく速やかに広島市に進出して、救援作業に当る旨を指示し、幕僚に細部の指示を委せて、私は船橋司令部に先行し、細部の指示を受けるため現地に向った。命令された救援地域は、東は京橋川から、西は本川に亘る、市の中央地域であった。白島地区には船橋練習部教導隊が配置された。中央部地域の全般指揮は、船橋練習部長芳村中将がとり、東部地域は沢田中将が全般指揮をされたが、西部地域の状況は不明であった。

広島電鉄本社の一階を借用して指揮所とし、斉藤部隊本部の標識を掲げて、救援業務を本格的に開始したのは、火の衰えはじめて午後三時過ぎであったろうか。既に作業を開始していた戦隊もあったが、逐次到着する各戦隊を、次々展開させて作業を命じた。現地に進出した頃には、市の中心部でも火災をあげている建物や、煙の上がっている場所が多く、市内を元気に動き廻る人は、あまりなかった。広島電鉄本社の建物も、天井がぶら下り、建具はなく、机は散乱し、硝子の破片が床、机に一面に光っており、柱や壁にも無数の破片が、突き刺さっていた。部屋の中に居た人達は、恐らく相当の負傷をされたものと想像された。各戦隊が、当初着手した作業は、地区によって異なるが、爆心に近い戦隊は、道路の啓開と死体の搜索、収集であり、比較的爆心を離れた地区では、収容所の開設と負傷者の収容、看護及び道路の啓開であった。部隊の特性上、特別の器材もなく、作業に困難を極めたが、それぞれに工夫して必死の活動をした。爆心に近い場所の死体は、眼球が飛び出ている、皮膚は茶褐色の黒みがかった色をし、水気はなく、苦悶を示す色々な姿態をして倒れていた。高熱による焼死が先か、爆圧による圧死が先か、いずれにしても、想像を絶する一瞬の光と圧力による即死と思われる。焼けた電車の中の死体は死亡した後に電車と共に焼けたものか、電車の火災によって死亡したものか不明だが、白骨化してはいなかった。河、古井戸、水槽、池等水のある場所には多数の死体があったが、即死しなかった人達が、火災を避けて、水を求めて行って、力尽きたものであろう。負傷者は収容所に集め、舟艇及び自動車によって、似ノ島・金輪島その他の大きな収容所に護送した。赤十字病院にも多数の負傷者を収容したが、収容力に制約されて、遠方の収容所に送付せざるを得なかった。焼け落ちた福屋デパートの中に収容された負傷者の惨状は目を覆うものがあり、全く地獄とはこんな所ではあるまいかとさえ思った。兵隊や、年若い電車がバスの車掌と思われる人が、多数目についた。部隊本部を置いた

電鉄本社の横にも、収容所への護送を待つ間の負傷者が集められたが、待ちきれなくて、そのまま息を引きとる人が、毎日相次ぎ、どうしようもない無力さを嘆きながら、辛い思いで死体処理を命じた。

戦後数年を経てからも、時々夢に見た忘れられない悲しい場面があった。七日の午後であったか、三、四歳の男児と十一〜十二歳の女児、それに顔が腫れあがって限のつぶれた年令の不明な婦人の、親子と思われる三人の負傷者を収容して来て、私の机の位置から直接見える窓の下に、並べて寝かせた。三人とも汚れてはいたが衣服は着けていた。男児は収容されて、暫くすると呼吸を止めた。「兵隊さん水ちょうだい。」と言うのが、重傷者の口にする唯一の言葉であったが、既にその力も無くなった母親が、自分の右側に横たわっている女児の顔に、時々手を伸ばして、呼吸を確かめていた姿には、強く胸を打たれて、正視することができなかった。早く、早く、と何回も督促したが、収容を待ちきれなくて、女児、それから母親と、母子三人共、次々に私の限の前で息を引きとっていかれた。男児は、私の長男と同年輩であり、他人事とは思えず、崇高強烈な母性愛に、胸を引き締められるような、本当に辛い悲しい思いをした。

日を経るに従って、救援隊の作業の主体は死体の処理となった。死体の処理はすべて火葬によった。薪にするものが不足がちだったので、重油・軽油を使用した。氏名不明の遺骨は、地区毎にとりまとめて、仮埋葬し、簡単な標識を立てておくように指示した。従って、広島市が復興の歩みを踏みだしてからは、市内の方々から遺骨が出たものと思う。氏名の判明した遺骨は、区分して遺族に渡せるようにしたが、とりに来たい遺骨もあった。処理した死体の中には半焼のものでも、男女の区別すら素人には判別できないものもあった。ほとんどの死体は全裸であって、氏名の確かようもなかった。赤十字病院の入口の近くに、急造の火葬場を作り、刻々に死亡する人達の死体を火葬したが、まことに止むを得なかったこととは言え、病院と火葬場と同じ場所にあった例は、あまり聞いたことがない。

出動して五日目と思う頃、川面に浮んで、潮の干満と共に上下していた無数の死体を処理することになり、吉島刑務所から作業隊が出て手伝ってくれた。舟で河から死体を収容し、岸までの運搬をこの作業隊が担当し、岸から後の作業を部隊で処理した。数十体の膨張しきった全裸の死体がずらりと並べられた有様は、見るに耐えないものであった。腐敗した死体は、その手を持って引き上げようとしても皮がツルリとむげず、収容に困難を極めたとのことである。

処理した死体のうち、氏名の判明したものは、部隊本部前に掲示したので、家族や親戚を探して来る人が連日多数あった、五日目頃であったか、探しに来た人が、求める人も見つからず、疲れはてて暫く休息しておられたが、終日食事もしていないとのことであった。隊員のさしだした握飯を、非常によろこんで食べ、礼を述べて二、三步外へ出て、バツリ倒れ、そのまま再び立てなかった。外傷も無かったのに、炎天下に連日焼野原を誰か最愛の肉親を探し求めて歩き廻るうちに、放射能の影響を強く受けられたのかも知れない。また、掲示した氏名を見て、「私はこの通り生きておりますが」と申し出た人があった。いろいろ聞いてみると、六日の朝、吉島の工場に出勤して、門の附近に上衣を脱ぎ捨てたまま、丁場で救助作業をしているうちに、服がなくなったとのことである。誰か、全裸の負傷者が避難の途上で、落ちていたこの上衣を着た後に息が絶え、これを部隊で処理したものらしい。死体の処理で手を焼いたのは馬の死体であった。しばらくの間は、手が廻らないままに放置してあったので、腐敗して大きく膨張し臭気もはなはだしくなっていた。火葬することも出来ないもので、空地に穴を掘り、これに引き込んで埋葬した。

当初、道路の啓開作業で困ったのは、クモの巣のように道路一面に拡がって落ちていた電車の架線の除去であった。

ワイヤー切断機を入手してやっと作業がはかどった。電鉄本社附近の家屋は、半壊のものも多かったが倒壊したものも多く、県立工業学校や工業専門学校には避難者が充満していたようであった。ここには救援隊員が運びこんだ負傷者も多かった。倒壊した家屋の屋根瓦の下を、火がくぐって半壊の家が燃え始めた。燃え上っては、更に南の方に延焼することは明瞭である。本部こいたわずかの人員が全員出て、瓦をはいで消火に努めた。数回繰返して、完全に延焼を食い止めるまでには相当の時間を要した。毎夜、夜が来るのがつらかった。昼間の服装のまま、机の上や防空壕の中、椅子の上でござ寝をしたのであるが、蚊の多いのには全く参った。人間が少なくなったので、特に集中して来たのかも知れない。

投下された爆弾が、原子爆弾であることは、八月六日の夜、アメリカからの短波放送を聞いて知った。

水道の修理工事を実施した人達が、八月六日の一日の作業で次々に倒れたので、工事を取止めにしたと聞いたが、吾々は作業を放棄する訳にはいかなかった。七十五年間は人間が住めないだろうというデマが、真実味をおびて流布されていたが、五日目であったか、焼野原で雑草を見つけた時うれしかった。

井戸の中に死体が折重なっていたこと、河岸で数人の学生が、腕を組み合ったままで死んでいたこと、倒れた塀の下敷きとなって一列に並んで死んでいた生徒のこと、小さな池に集って死んでいた多数の人達のこと、等々、日々聞く報告は総て悲慘と言うには言葉の足りない事実のみであった。部隊の軍医であった内田大尉は、連日夜遅くまで精力的に走り廻って救護作業を実施していたが、夜遅くなっても、毎日私に報告してくれた。ある晩、報告に来た内田大尉が、憤然として「部隊長殿、戦争には負けられませんよ。今度の爆弾は実に非人道的なものです。死体の解剖所見によると胃袋の内部を、ワイヤーブラシでこさいだようになっていたものや、内臓の小さな管までも血液で閉塞していたもの等、真に残忍なものです。」と話した言葉が、今も忘れられない。赤痢のような症状で死亡した無数の人達の胃袋は、このようになっていたのかも知れない。私をはじめ、出動者の多数の者が二日目ごろから下痢を始めた。人により程度の差はあったが、その後一カ月も続いたものや、復員後も下痢を続けた者もあった。私も胃袋がどうにかになったのではあるまいかと心配したものである。

似ノ島検疫所に支援のため派遣した隊長からの報告によると、当初は衛生兵の補助として、被災者の看護を手伝っていたが、死者の続出のため派遣人員を更に約三十名増加して、死体の処理に専従させたとのことである。又似ノ島に一箇所あった火葬場では間に合わず、多数の死体が腐敗するに至り、止むを得ず一部の死体を防空壕に土葬としたとのことであった。部隊の将校夫人が一名、似ノ島に収容されて死亡されたこと、方面軍の参謀であった李グウ公殿下が、似ノ島で逝去されたこと、御付武官が責任を感じて自決されたこと等も知った。

出動中、全員の食事は幸ノ浦から運搬した。既に物資の欠乏していた頃であったから、極めて質素なものではあったが、毎日三食を運搬してくれた残留部隊の

労苦も、大変なことであった。約一週間の救援作業を一応終り、八月十二日から逐次幸ノ浦に引揚げた。処理した死体のみで一万を越え、収容した負傷者の数は幾万あったのか、正確には記憶していない。当時の隊員は、大部分が満洲特別廓部候補生出身の少年で、いずれも十六ないし十八歳の若者であった。死臭の漂う焼野原で、二次放射能の影響も知らず、炎天下を連日活躍し、夜間作業も実施して疲れ果てて、瓦を片付けた僅かな平地にゴロ寝の露営をしつつ頑張り続けた少年兵の姿は尊く、今も忘れられない。

部隊の将校家族に数名の死亡者及び行方不明者があり、将校の中には火傷を受けて長い間苦しみ続け、今もなお不安な生活を送っている者もある。隊員のうち一名が、昭和三十五年頃血液病で死亡した。他にも出勤者の中には、二次放射能の影響を受けて苦しんでいる人が、多数あるものと思われるが、連絡不能のため不明である。幸ノ浦帰還後、白血球の検査を受けたが、ほとんどの者が三千以下になっていた。幸い下痢は重症者はなかった。点状出血や脱毛の症状もでた者は余りなかった。一部の隊員は再び出勤して、終戦後まで各種の作業に従事したが、部隊の主力は終戦まで訓練に熱中した。

任務を解かれて初めて、当時材木町の浄円寺にあった私の祖先の墓を探したが、墓石がなかった。方々を探した後に十メートル位西南方に飛ばされている墓石を見つけ、当番兵の協力を得て、やっとのことで旧に復した。墓石は、新しい刻字の部分が焼けて少し壊れていた。墓地の他のお墓も、墓石の坐っているものは全くなかった。お寺の本堂その他は、完全に瓦礫となり、物淋しい姿であった。家族のことが気になって、十四日、中山村の家に帰ってみると、柱だけになった部屋に、義母と義妹が寝ていた。義母は硝子の破片で腰を負傷したが、東練兵場で二夜を越し、少々元気になるから私の家に辿り着いたとのことであり、義妹は出勤の途上、的場町で倒壊家屋の下敷きとなったが、運よく近所の婦人二救出され、乳母車に乗せられて、私の家に届けてもらったとのことで、その後も長い間腰が立たなかった。部屋の壁、柱には無数に鋭利な刃物のような硝子の破片が突き刺さっていた。建具類は使用できるものは一つもなかった。家族（三・五人）は負傷もなく無事であった。当日の朝、長男が飛行機を見上げて庭に立っていたのを、妻が呼び込んで、膝の二男と親子三人が二階への階段のある狭い部屋で抱き合った時、あの閃光を見、爆風を受けた。

部屋の中に居たらガラスの破片と家具類によって、相当な負傷をしていたことであろう。近い親戚のうち、行方不明三名、一週間以内の死亡者五名であった。部落から出ていた家屋疎開の勤労奉仕の人達は、一名を残して全部死亡されたという。妻は三男を妊娠していたので、勤労奉仕を免除されて家に居たのであった。中山村の小学校も収容所になっていて、妻も看護の奉仕に出っていたので、その惨状を色々と話してくれた。部落の河岸では、毎日火葬の煙が絶えず、私の帰った十四日の夕刻も、ものがなく煙が立ち昇っていた。

一〇

清水健

(当時第四十九戦隊・陸軍大尉)

江田高幸ノ浦にて、徹夜の演習後で、仮眠中突然音響が聞こえた。

斎藤隊長と同じく、相生橋及び県庁を通過した記憶あり。具体的には記憶不明確。活動場所は遺憾ながら具体的には記憶しておらず。他の戦隊と同様、斎藤少佐の指揮下にあり、同じく行動した。

隊員の復員後の状況については遺憾ながら熟知せず。

私は、救護活動のあと二次放射能による白血球減少症(三千以下)にかかった。

――

石塚恒蔵

(当時海上挺進隊第五十戦隊・陸軍大尉)

一、その日は朝から快晴の日であった。江田島の北側東能美島幸ノ浦の海辺波うちぎわに面した九尺二間程もある週番司令室で、波穏やかな瀬戸の海を眺めながら、九州出身のY見習士官が命令受領に来て、土間に立っていた。二言三言話していた時、突如宇品方向の右側と覚しき方向に、白金色の閃光が走ると見る間に、朝日の数十倍の大きさの真紅に燃焼した赤タンの火の玉が拳がると同時に、ぱっと身体に感ずる圧力を受けた。

その、量八量敷もあろうかと思う大火玉を何事かと見ていると、ドーンという大音響と共に屋根のトタンの錆と煤がバラバラと頭の上に落ちてきたので、これは付近に別の爆弾が落ちたのだと、錯覚を起した。今から考えると閃光が先で、爆発音は後であったのだ。その火の玉は約三十分以上も地上すれすれの処にぶら下がっていたので、火薬庫の大爆発で火の玉を起したのだと思った。その大火圏がダイダイ色にあせる頃から、層の厚いキノコ雲が火山の大爆発を想わせるように、中天高くモクモクと濃く厚く、まるで生物の如く、後から後から湧いて、一日中それを繰り返していた。

始めは火薬庫の爆発の火が、ガスタンクか、或いは付近の重油タンクに引火してその燃料に燃え移ったのかと思った。そのうち船舶司令部から、広島市内が敵空襲の爆弾によって大火災を起しているの、部隊全員が救援に出ようとの報を受けた。私は折悪しく週番司令だったから、部隊と離れることができないため、前任将校の指揮で戦隊全員を船に乗せて宇品に向わせた。その時刻は、正午ごろであったろうか。海は相変わらず潮水を思わせるように静かに穏やかであったが、中天に達するキノコ雲は相変わらずますます層を厚くして、無限のエネルギーを放射していた。部隊全員を送りだした島は、ガランとしていたが、宇品の船舶司令部からの情報は、午前中適確なものは余りなかった。が、しかし怪我人や火傷を負った人達が似ノ島の検疫所に、陸続と送られている情報が風の便りにはいった。部隊は午後を過ぎても夕刻になっても、帰って来なかった。これは相当の被害だと想像した。翌日になると、似ノ島の検疫所では、裸体の無残な負傷者が、

次々と運ばれている事が判り、李グウ公も軍司令部へ出勤の途中遭難され、同検疫所へ運ばれた事を聞いた。三日目になって、週番勤務が解散になったので、船で送られて宇品に向った。途中行き交った舟艇には白い包帯を巻いた怪我人がたくさん乗っていた。宇品の棧橋でも同様で、おびたしい怪我人が、舟艇に乗せられていた。これは大変な事になったと思った。船舶司令部から貨物自動車を出してもらって、それに乗車した時、宇品の街の屋根瓦は大震災に逢った時のように、みなずれて今にも落ちそうであった。私の部隊は、西練兵場の手前の聯隊の入口の道路をへだてた前付近にたむろしていた。その付近が、原爆爆発の中心地であることが、ずっと後になって判ったが、私が其処へ着いた時は、市内電車軌道からはずれ、電線は寸断され、電柱は傾き、街路樹も聯隊付近の松の木も軍司令部付近の松の大木も、宇宙の怪物が折ったように中途からへし折れて、真黒く焼けていた。また、コンクリートの建物は爆砕され、木造家屋は全部焼失していた。住民は一瞬にして爆発の衝撃で打ち倒され、後の火災で焼かれて男女の区別がつかぬ程黒く焼かれて、到る処に放置されていた。それを私の部隊の若い候補生達は、焼けたタンを利用して急造の担架を作り、焼け残った遺体をそれに乗せては、十四、五体ずつ一ヶ所に集めて、焼け残りの家屋の木材を積んでは、それに乗せて、茶毘にふしていた。遺体は指が残っていて、割合短時間で茶毘にふすことができた。二時間位、原爆中心地付近の夥しい屍体を何ヶ所で焼いた。この作業を一週間続けた。その頃から新型の爆弾の被害であることが少しずつ判ってきた。その夜、私は部隊を駐屯地に集めて訓辞をした。敵アメリカは遂に勝つ為に手段を選ばず非戦闘員である住民に対して天人共に許さざる悪虐非道の殺戮をした。我々はこれを肝に銘じて、きたるべき決戦の時、敵の心臓に向って、必殺の体当りをするように。しかし現在さし当っては、不幸にして被災せる広島市民の遺体収容と、治安維持に従うようにと述べた。そうした間にも夜通し火傷をした人が部隊を訪れたり、道路を通過して行ったりした。候補生の話聞いてみると、宇品から市内中央事夜行軍で来た時に、多数の重傷者が、その沿道にころがったり、うずくまっていた。軍靴の音を聞くと、「兵隊さん、水をくれ!」「水をくれ!」とうめいしている声が耳について一晩も二晩も眠れなかったという。私の部隊の本部は広島市内の最も繁華であった処に位置したらしい。私は翌日、私の部隊の救援受持区域を巡視の為、今の原爆ドームから太田川の附近まで足を延した。太田川の中は、三日経っても、四日経っても屍体の片づけ手がなく、夥しい数の遺体が氷に浮んで満潮の時はおし上げられ、干潮の時はおし下流に流れていた。陸上の屍体取片づけが先だったので、河の中までは手が届かなかったのだ。原爆ドームの入口付近に白人の屍体がうずくまっていた。通行人が憎しみをこめて石を投げたらしく、こぶし大の石がたくさん当たっていた。

聯隊の反対側の広い道路の側で遺体を焼いた中に、モンペ姿の胸に焼け残った衣類に「的場文子」と書いた遺骸を茶毘にふしたが、若い人らしかったのでどういふわけか、今でもその名前だけ覚えている。私はうら覚えのお経を誦しつつ、それ等の遺体を手を合わせた。

私の本部それより東の方にあったが、バスの停留所や電車の停留所の所と覚しき所では遺体の数が特に多かった。

中には防空壕に半分這入りかけて死んでいる人や、お百姓さんらしい牛車で肥料あげに来て、牛もろ共に死んでいる人が銀行付近にあった。この牛の屍体を三日経って焼く時は、腐臭と共に手間がかかって困った。何処へ行っても被災者の累々たる遺体で、如何に大きな被害であるかがしみじみと身にしみた。そうこうしている間に、八月九日、長崎がまた原爆でやられたとの報を受けた。

この屍体収容作業も一週間目にはどうやら片がついたが、被災地で昼夜兼行で働いたためか、疲労と二次放射能の影響を受けて、軽い頭痛と、目まいと発熱を感じた。だがその時はちっとも気にとめなかった。一週間目に、部隊から帰還命令があったので、幸ノ浦に帰って来て、やっとホッとした感じであったが、惨たんたる広島の被災地が眼底から去らずに、二日程過している中に再度広島へ救援作業に赴くようにとの命令が来た。毎日焼けつくような暑い日が続いた。再び広島市内へ直行し、原爆中心地とは少し離れた広島貯金局へ陣取るように、配置された。貯金局の大きな建物は被災以来ガランとしていて、無人の建物であった。窓ガラスは見るも無残に破れ、広い事務室にはガラスで傷ついたらしい人の血痕が、あちこちに飛び散って、黒くへばりついていて、事務机をあけてみると、ご飯のいっぴい詰まったアルミニウムの弁当が腐ってカビを生じていた。出勤した人達が爆風のため傷ついて四散してしまっただけに違いない。第二回目の救援は此処を本拠に市内の受持区域を巡視巡察をして、警戒の任に当たった。私はこの頃から発熱激しく、ありあわせの長椅子に毛布にくるまって臥床し、水で頭を冷やしてもらった。原爆の症状は、四十度位の発熱と激しい下痢と、頭髪が抜けた。夏の盛りであったから、学校の生徒も召集日で短いシャツ。市民も腕をだして、身軽な服装の人が多かったから、皮膚をひどく焼かれた。最初は水泡状態だったが、放射能の浸透と共に前記発熱と下痢と脱毛がひどくなって、次々と倒れていた。私の熱は二日位でよくなったが、忘れもしない八月十五日午後一時頃、終戦の詔勅を聞いた。全身の力が一度に抜けた感じだった。何のために今まで苦勞したのだろう。虚脱状態とはこういう状態をいうのだろう。私は一日中放心した状態だった。B少尉は机にしがみついて声をあげて泣いていた。慰めるすべもなかった。

部隊へ帰って来て医務室で、白血球の数の調査をもらった時、軍医が首をかきげていた。「どうしたんだ」と聞くと、私の白血球は大部減っていて八百位とか言っていた。その頃お治療法がはっきりしていなかったのも、お灸か、レバーのようなものを食べたらよいだろうと言われていた。

一二劫火

半井良造

(当時海上挺身隊第四十二戦隊・小隊長)

一、八月六日

[閃光と爆風]

朝早くから空襲警報が発令されてバタバタしていたのが、八時前に解除されて警戒警報中であった。(広島では既に警戒警報も解除されていたらしいが、部隊では解除が遅れていた。)

朝食後、訓練の準備で兵舎内では皆それぞれ仕度をしていて。私も自室で机に向かって調べものをしていて、真夏の朝日を反射して明かるい窓の外が、一瞬、まるで写真のフラッシュをたいたようにピカッと光ったように思った。

私の部屋は兵舎の南端にあって窓は南面しており、海岸すなわち広島の方角とは正反対に開いているのだが、五〇メートル程向うが丘陵で、部隊の防空壕もここに掘ってあるのだが、その斜面と、近くにある建物(便所等)がまぶしい程明かるくなった。

オヤッ?と、窓の外を見ると、前を歩いている兵隊が立ち止って広島の方の空を見ている。「おい、どうした。」と、私は声をかけたが窓際へ歩み寄り、窓から身体をのりだして広島の上空を見た。

実を言うと、その時の空の状態がどうであったかは、はっきりした記憶がないのだが、北方の広島の上空が、太陽の輝くように明かるく光っていたように思う。音は何もしない。

「何だ、あれは?」と、つぶやきながら元の席に戻って、腰をおろしたその時、ドッカーンと大地もひっくり返るかと思うような大音響と木造トタンぶきの兵舎が、ふっ飛ばかと思うようなものすごい大爆風がビューンとやってきた。

海岸に立っていた塹壕は倒れたり、ひん曲ったり、兵舎の扉は開いていたものは開き、開いていたものはパターンとこわれんばかりの勢いで閉り、棚からはガラガラと色々なものが落ちてくるし、遠くではチャリンチャリンとガラスの割れる音はするし、いやいや全く、台風と大地震が一緒に来たような状況だった。

私は今の爆風が来たなとすぐに解ったが、舎内にいた大部分の兵(特幹生)は、閃光も何も見ていないからそれこそびっくり仰天だ。はだしてかけたさずやら、地面にひれ伏す者やら、上を下への大騒動だった。

閃光から音響と爆風まで二〇秒近くもあつたのだろうか。これが私が肌で感じた原子爆弾の最初であった。

[きのご雲]

大騒ぎがやっとおさまり、防空壕から兵舎へ戻るころになって気がついてみると、広島の上空に大きな黒い煙の塊がポッカリと浮かんでいる。そしてそれがまるで生きもののようにモクモク、モクモクと動いており、しかもその所々にチヨロチヨロと、真赤な炎が見えかくれしている。それは、さながら悪魔が御物を前にして舌なめずりをしているかのような、不気味な感じがした。

爆発から五、六分もたっていたかと思う。勿論我々は、これが原子爆弾などとは夢にも知らず、敵機も去ってからのことだから多分、広島のカスタックでも爆発したのだらうと思ひ、やがて平常通りの訓練にとりかかった。それから更に一〇分以上も経ってからだと思う。さっき見た真黒の煙の塊はいつの間にか真白な煙の塊と変わっていて、尚もムクムク、ムクムクと不気味な活動を続けており、煙塊の下の方には所々で、赤い炎が白煙をピンクに染めてメラメラと顔をだしている。煙塊の大きさは三倍も四倍大きくなっていて。原爆のいわゆる「きのご雲」はそれから更に一〇分以上、爆発してから三〇分以上もしてから現われたように思えた。

ピンクがかつた白煙の塊は、更に更に大きくなって尚も活動をやめず、そしてその中央の辺から真白な煙の柱が、風のない澄みきつた青空に、まっすぐに上へ上へと伸び、やがて遙かな上空で花が開くように左右に拡がって、さながら「きのご」のような形となり、真夏の陽光を受けて輝くように見えた光景は、二〇数年を経た今も尚忘れられぬ美しい光景であった。

このきのご雲がいつ消えたか知らないが一時間以上も続いていたように思う。最後に見た時は北東の空のあなたにちぎれ雲のように、いや羽衣をつけた天人が天上へ消え去るようになっていた。

広島に災害に気がついたのでそれからまた後であった。

[出動]

部隊から(レ)艇で偵察に行った者が、「広島が大火でひどい災害らしい」という情報を持って来たのは、もうかれこれ最近になっていたように思う。海岸に立って、双眼鏡で見ると広島は街が薄雲でつまれたように煙で見える。さっきの爆発で火災が起きたのだらうとは思像したが、それ程の大災害になっているとは知らず、昼食後、午後の訓練も予定通りに始められた。この日、私の所属する戦隊(草深隊)の訓練は、午前「私の担当で『機関の教育』」。午後は「陸上における戦闘教練」で藤から海岸沿いに一キロメートル程東の方にある砂地の広場へ戦隊長以下全員で行った。

私は翌日の勢門の準備があるから兵舎に残っていたが、皆が出て行って間もなくだったと思うから、午後一時半頃であつたろうか、部隊長から全員に広島へ出勤のための非常呼集がかつた。

急ぎ帰隊した我が第四十二戦隊が、出動準備を整え、戦隊長草深上二大尉、戦隊付中校江頭政中尉以下小隊長(見習士官)・班長(下上官)・兵(特別隊候補生)総員約百名のほとんど全員が舎前に整列したのは、午後二時半か三時頃であった。

服装は水上作業衣袴・巻脚絆・軍靴、携行品は水筒・飯盒・雑嚢等であつたと思う。

私は前述のとおり教育を担当していたため残留を命ぜられたから、自分の小隊長に「お前達をはじめ、お国の為の御用をする時が来たのだ。しっかりやっ来てい。」と訓辞した。

やがて戦隊毎に大型発動艇に乗って宇品港へ向って出航していった。

各戦隊とも私と同様の教育担当の小隊長が残留したところを見ると、この時は部隊本部も広島救援の作業が、一両日で済むものと判断していたのであろう。

夕食は私と週番下士官・週番上等兵そして数名の練兵休患者だけだから、気楽に将校室と一緒にとった。おかずは珍しく牛肉が沢山あつたように思うが、あるいはこれは広島で爆死した牛の肉であつたかも知れないのだが、勿論そんなことはつゆ知らず、みんなで食べた。

余談になるが、広島救援作業から帰ってから数日の間も牛肉の副食物がよくでたが、これこそきつと被曝した牛であったのだろうが、皆うまいまいと喜んで喰った。放射能の値はそれこそ焼津港のマグロの数千倍もあったのだろうが、どの兵舎もどの兵舎も部隊全部がひっそりとしている。点呼も週番が適当にやったのだろう。私は少し早目に床に入った。

[宇品栈橋]

よい気持ちで寝ていたなら「教官殿、教官殿」と不寝番にゆり起こされて目を醒ました。「何だ」と起きると、部隊長の命令で、私も出動せよとのこと、夜の十時過ぎであったかと思う。眠い目をこすりこすり服装を整えて部隊本部へ行くと、各隊から集った私と同様の見習士官が数十名になった。

全員、直ちに舟艇に乗船し、真黒な海上を宇品へ向って進んでいった。宇品の栈橋へ着いたのは、多分夜中の十二時頃であったと思う。

最近、二度、幸ノ浦の部隊跡へ行ったが、宇品港の変貌には驚いた。どこがどう変わったのか正確なことは知らないが当時の宇品港はガタビシと揺れる栈橋の上だとお粗末な改札口があり、そこを出るとちょっとした広場があって、右の方へ行くと船舶司令部、左の方へ行くと宇品の電車通りへでたように記憶している。

八月六日の夜の月齢が何日であったかは知らないが、月明かりのない真暗闇であった。勿論、電灯たども一つも灯っていないから、それこそ鼻をつままれてもわからないくらい。足元のコンクリートの白さだけを頼りに、二列に並んで広場へ出ると、ものすごい消毒薬の匂いが鼻をつき、広場全体が何とも言えない異様な雰囲気につつまれているような感じがした。

ハテ????と歩きながら闇にすかしてよく見ると、通路の両側に積み上げられた貨物の前に、居るワ居るワ、手や顔に繻帯をグルグル巻いた負傷者が、坐ったり、横になったりしてぎっしりと並んでいる。苦痛の為にうめき声をだしている者もあり、ヒョロヒョロとさまよい歩いている者もあるが、大部分は音もたたく声もなく、かと言って眠っているようでもなく、ただ悄然と坐っているかのように見られた。

私は思わず背筋に冷たいものが走るような感じがした。多分、昼間来た我々の仲間が、救出し、応急手当をして船舶司令部や、島の島の検疫所へ移送途中の患者であったのだろう。

我々はそこから、用意されたトラックに乗って、暗闇の町を爆心地へと走った。宇品の町は火災こそなかったが、どの家もどの家も、程度の差こそあれほとんど例外なく斜めに傾いたり、屋根がふっ飛んだりして、窓や扉のガラスはそれこそ一枚残らず割れて、開放の状態。時折り見える警防団や自警団の灯の他は、灯りもなく、人もなくまるで死の街のような感じがした。災害は爆心地に近づくにつれて激しくなり、やがて着いた所は部隊本部(電鉄本社)であつたらしい。

[消防ポンプ]

「とにかく、あの火を消さなければならん。お前達、直ちに消火作業にとりかかれ。」と本部の前で命ぜられた。我々の立っている所から四、五〇〇メートル向うは火の海である。この時、部隊の上官から命ぜられたのか、自分達で考えたのか忘れたが、見習士官一〇名程が再びトラックに乗って、宇品へ引き返し警防団の詰所へかけあって消防ポンプを一台借りた。先方もすぐには貸してくれなかったが、もうこの時分には、我々も殺気立っていたし、軍の威力でいや応なしにポンプをトラックに積みこんだ。警防団からもポンプ操作の為一、二名乗りこんだ。トラックは電車通りを再び爆心地へ向って走った。

途中、貯金局の前ではガラスがふっ飛んで開放された窓から、何千と知れぬカードの散乱しているのが見えた。こんなことで貯金が分るのだろうか?——と思った。やがて火災現場へ到着した。多分夜中の零時半頃であったかと思う。電車通りから左側(西側)が全く物すごい火の海で、炎の向うに赤十字病院が見えた。電車通りの右側は燃え尽きていたのだろうか、どうなっていたのか記憶がない。我々は赤十字病院の北側?附近の広場(疎開跡)にポンプを下ろし、消火作業こついた。この時一緒にいたのは一〇人程だったように思う。

幸ノ浦から来た他の戦隊までこへ行つたのだろうか。私は、グンと全身に力を入れ、ホースの筒先を持ち、火焰に向って走り、「筒先ヨーシッ」と後へ向って手を挙げた。「風下から注水」ということが頭にくるが、今は風向を判断している余裕はない。ただ目の前の火に水をかけることしか考えていなかった。ところがいつまで待っても水がでてこない。猛火の輻射で顔や手が熱くて仕方がない。物陰にかくれるようにして「おーい、早く水を出せーッ」と、大声で叫ぶのだが何をモタモタしているのか一向に水が来ない。「エンジンが動かからない」と、後方で言っている。私は部隊でも機関の教育を担当していただけに、多少はエンジンに自信があったので後へ下がって点検してみた。消防ポンプは二気筒のガソリンエンジンだった。プラグは?……発火しているはず、燃料は?……と調べると、タンクからのパイプのコックが閉まっている。これではいくらやってもエンジンは動かからない訳だ。コックを開けて手動のクランクを数回したら始動した。私は再び筒先へ行き、もう一人の見習士官と共に火炎に向って注水した。ところが火炎との距離は二、三〇メートル程であったかと思うが、熱くて熱くて仕方がない。勢いよく水も出ているのだが、筒先が焼けてきて素手では持てない程になった。然しこの時、幸か不幸か又も水が止まってしまった。注水しだしてからまだ三分か五分ぐらいしか経っていない。ポンプの所へ戻ってみると、エンジンは動いているのだが、水がホースの方へ行かず、ポンプの真下に向ってジャージャーとえらい勢いで噴出している。水抜き栓の蓋が飛んでしまったらしい。火災の明かりで地面を這うようにして探したが、瓦や石ころがゴロゴロしていて、いくら探しても見当たらないので遂にポンプを断念した。しかもこの猛火に対して小さなポンプ一台の水では、余り有効とは思えなかったが。

こんなことでゴタゴタしている時だった。立派な軍服を着た将校の団が自動車から降りて、我々の作業を見ている。誰かが、「ハイッ、十教(第十教育隊の略称)の者です。」と答えているようだった。するとすぐ近くで「ご苦労!!」という声があったので頭を上げると、胸には船舶部隊の胸章をつけた「へた金」の将校が立っている。暗いところで顔もよく見えなかったし、星の数も分らなかつたが、まぎれもなく将官だった。私は思わず身体が硬直した。後になって考えてみると、あるいは船舶司令官佐伯文郎中将であつたかも知れない。

[家屋倒壊]

我々はそこから一〇〇メートルか二〇〇メートル程南の電車通りから、斜めに通っている余り広たい道路まで戻り、火道を切るため、この通りの北側の家屋を破壊することになった。火はまだそこへまでは来ていない。

丁度、そこへ来た二〇名程の他の部隊と合流して共同で作業をした。人数は向うの方が多いが、階級はこちらが上だから我々が指揮する形となった。

家を倒すのは簡単なもので既に爆風で傾いているから、二階の柱が棟木に二、三本ロープを結びつけて皆でオイッチニイ、オイッチニイと引けばおぼ、ひとたまりもなくつぶれてしまう。

私が最初にロープをかかに行った家は電車通りの角の薬局だったと思うが、土足のまま二階へかき上って見ると、嫁入前の娘さんでもいたのか、たんすの抽出しが抜けて、その中にあつた物資不足の折にもかかわらず、新しい着物や肌着類それに白足袋などがぎっしりと詰っていた。私にも年頃の妹がおり、母が同じようなことに腐心していたのを思いだし、数分後にこれらもみんな灰になってしまうのかと思うと惜しいような気もし、又気の毒のような気もして家の人がいるなら投げてやりたいなあとも思ったが、勿論そんな所にいるのは我々ばかりだからどうしようもなかった。

柱にロープをくくりつけては引き倒し、又次の家へ行っては引き倒して、道路の北側の家を次々と倒壊しているうちに、火が迫って来たので作業をやめた。これは相当効果があつたらしく、大きな火は大体この線でくい止められたようだ。私は倒した家が燃えるのを見て、向い側に延焼しなければよいかと心配していたのは憶えているが、その後どうしたのか、又、それが何時頃であつたか全然想いだせない。次の朝、明け方の冷気に「おお寒いッ」、身を震わせて目を醒ますと、市電の安全地帯で寝ていたのだ。他の連中もその近くにゴロゴロと寝ころんでいる。どうやらあれから部隊本部の近くまで帰って来て、電車道で寝てしまつたらしい。火事はもう消えていた。

二、八月七日

〔負傷者〕

起きたのは朝の七時頃であつたと思う。そのうちに皆ムクムクと起きた。そこは市電の車庫の前であつた。部隊本部がここにあり、私の所属している草深部隊もこの中にいることが後でわかつた。起きて、まず驚いたのは、電車通りの両側に負傷者が二列、三列になつてへたばつている。疎開跡と思われる広場にもギッシリという。それと昨夜、宇品で見たのとは比較にならないほど大勢の負傷者だ。しかも彼らは傷(大部分は火傷)の手当ても受けず、とにかく火の中から助けだされただけという状態で寝かされているのだ。我々が近づくと「兵隊さーん。兵隊さーん。」と泣くような声で呼び、早く助けてくれ、手当てをしてくれ、と必死になつて訴える。見ると皆、顔も腕も脚もひどい火傷で水ぶくれになり、紫色の皮膚はブヨブヨにふくれあがつている。そして手も足も痛さの為か、あるいは死期が近づいているのか動かすことができない。若い母親が、横に寝ている幼児にムシロをかけてやってくれと頼む。すぐ横にあるムシロに手が延びないのだ。私がムシロをかけてやるとよく見ると、子供はもう息絶えていた。又ある女の人は死にもの狂いで水を飲ましてくれと頼む。ところがその顔は水ぶくれでブヨブヨして目をあけているのか、あけていないのか分らない。唇も鼻も腫れあがつて、まるで怪物のようで気味が悪い。しかしやともいえないので、私は目をつぶるようにして、水筒から水をのませた。又、ある少女は家の中で被爆したのか、火傷はしていないが、病身らしく青白い顔で私に「自分は病気で牛乳の特配を受けているから取って来てくれ」と言う。災害がひどくてとても牛乳どころではないと言っても仲々納得しない。やがて軍医がや来て負傷者一人々々の肌に触つてみて「これは駄目」「これも駄目」と随従の衛生兵に言つて行く。それは診察ではなく、生死を区別して行くだけであつた。そして三人に一人は既に死んでいた。

〔地獄絵図〕

そのうちに車庫の中に入った私の所属部隊「草深隊」を探しだし、私は戦隊長の指揮下に入った。だが私の小隊員はあちらこちらに散在して、どうしているのかわからない。しかしそれを探しているいとまもなく、朝食後直ちに戦隊長に呼ばれ、三本(みつもと)見習士官と共に、各々部下三名を連れて、所定の地域内の負傷者の状態や人数及び死体の数等の調査を命ぜられた。

三本見習士官は朝鮮人だが、真面目で律儀な人だつた。私とは割合に仲が良く、私の言うことにはほとんど異議なく、いつも同意してくれた。さてその時、調査に行つた地域がどこであつたか、正確にはわからないが、文理科大学から北方へ約一キロメートル程、電車通りから四、五〇〇メートル程の地域ではないかと思う。私達四人と三本見習士官達とは、東西に一五〇メートル程の間隔をもちながら北行した。

家の焼跡か、庭か、道路か、区別もつかない一面の焼野ヶ原を、負傷者や死体を探し探し進んで行つたが、案外死体も負傷者もすぐには見つからなかつた。初めて死体を見たのは、焼跡を歩きだして五、六分もしてからだつた。年令一五、六歳かと思われる少女で被服も焼けてしまったのか全裸で、四つばいの姿で真黒焦げになっているのを見た時は、内心ギクリとした。ところがこれくらいはまだほんの序の口で、それから三分もせぬうちに本当にどぎもをえぐられるような凄惨な状景にでくわした。

それは中学校の校庭と思われる所で、その周囲に立っている樹木の陰に三人、四人と幾組かの負傷者がいる。我々が近づくと、ここでも、ああしてくれ、こうしてくれとせがまれた。その隣の一段高差している所にプールがあつたが、三へ上つた時思わず「アッ!!」と息をのんだ。

二五メートルプールの周囲に二、三〇人はいたかと思うが、原爆の閃光や、爆風に痛みつけられ、その上面の猛火に追われて逃げて来たのであろうか、男も女も(ここでは案外、男の人の方が多かつたように思う)半裸体で、しかも半分以上の人が、何故か絵の具でも塗つたように皮膚が真赤に焼けている。(水ぶくれにはなつていなかったと思う。)瞬間私は、学校の理科教室にあつた人体の解剖模型(筋肉や血管を赤や青で着色したもの)を連想したが、本当にこれが生きている人間かと疑いたくなるような凄惨さ、勿論、この人達も苦痛が激しく折からの真夏の太陽に照りつけられて、痛い痛い、熱い熱いとうめき苦しんでいる。プールにつかつて死んでいる人も四、五人あり、中には片手でプールのふちを持ち、無念の形相で天をにらんで死んでいる人もあつた。又、プールへ手をつけては身体に水をかけている人もいたが、その手の動きはまるで、ゼンマイのなくなりかけた玩目のように緩慢に、そしてごちなくつている。きつと死期が近いのであろう。

全く“地獄絵図”を目前に見るような気がした。

我々は焼け残りの板やトタンやムシロ等を集めて日除けをしたが、とても十分なことはしていられなかった。その後、焼跡を進んで行くとあちらこちらに二体、三体と焼死体が藪がっているのが見られた。大分進んだ時だった。向うの方で「半井見習士カーン、半井見習士カーン」と呼ぶ声が聞こえた。三本が例の変なアクトをつけて呼んでいるのだ。「どうしたーッ」と返事をする。「ちょっと来てくれーッ」と手を振って招いているので、私達は皆そちらへ向って走った。

〔老母〕

三本らのいる所へ来て“ウァ!!”とばかりに立ちどまった。長さ一五メートルか二〇メートルもあったろうか、長い煉瓦塀がコンクリートの基礎を残してバツリと倒れ、その下に二〇人以上の人がずらりと並んで死んでいるのだ。町内会で勤労奉仕か、防空演習をするので町会長が訓辞をしている所を後ろからドカンとやられたらしい。死んでいるのはほとんど女のばかり、ところがその中に一人、いや二人だけ生きているのだ。一人は町内会長らしい。運よく煉瓦塀から少し離れてはいるが、腰でも強く打ったのか、いざりのように腕でソロソロと身体を動かしている。五五、六歳の白髪まじりの男の人だ。「〇〇町〇丁目の、自転車屋の太田と申します。家の者に誰かを迎えに来るように言ってもらえませんか？」と言うのだが、我々にはその〇〇町というのがどの辺か分らないし、附近一帯全部灰になっていて家らしいものは何もないのでどうすることもできない。そしてもう一人は、煉瓦塀の下敷きになっていながら奇蹟的に命を捨てたお婆あさんが助けを求めている。年は六〇をいくつか越していたかと思う。我々が身体を引きだしてやろうと思うと、「痛い痛い」と言う。脚を隣の人の口にはさまれて出ることができないらしい。倒れている煉瓦塀の高さは二メートル以上もあるから、五人や六人の力ではどうすることもできない。途方にくれていると、一〇〇メートル程向うの方を兵隊が一〇人程歩いている。「おーい、ちょっと来てくれーッ」と応援を頼んだ。彼らは訓練隊ではなかったが(工兵隊?)都合のよいことにスコップやつるはしやロープ等を持っていた。私は煉瓦塀を少し強い衝撃を加えると案外もろくこわれることを知っていたので、つるはしを借りてお婆あさんの足もとの煉瓦を割り始めた。すると予想通りボロリボロリと割れて、暫くするうちに四、五〇センチメートル程のネズミの通路のような形の穴があいた。そこでのぞきこんでみると、お婆あさんの右側に二二、三歳の大柄な女の人がひざを折り、うつ伏せになって死んでいるのだが、その人の腹とひざの間にお婆あさんの右脚が入っているらしい。穴をもう少し大きくあけてはみたが、モンペをはいた大きな尻が見えるだけで、手のつけようがない。私は軍刀でこの尻を切つてやろうかとも考えたが、骨もあることだし、大根を切るようにすっぱりと切れる訳もないし、第一死体を切るのは刀が汚れるような気もしたのでやめた。そこで死体の左の足首にロープを結びつけて、皆の者に「一・二、一・二」と引っ張らせたらポーンと太い脚が穴から飛び出した。これはうまくいったと思い、老婆を引きだそうすると、又「痛い痛い」という。まだどこかにはさまれているらしい。そこで死体の右脚も同じ要領でいこうと思って、右の足首にロープをかけようとすると、足の皮が腐りかけた桃の皮のようにズルリとむけて、血かみかみ?私の手袋がグッショリぬれた。一瞬、私もゾクッと身震いして思わず手を引きかけたが、皆の者が見ている手前、やめるわけにもいかず、目をつむってロープをかけ「よし引けッ」と号令をかけると右脚もうまくでた。これでやっと老婆も外へ出ることができた。「おーきに、おーきに」と涙をこぼして喜んでいる。「お婆あさん、後で助けに来るから気をしっかり持っていなさいよ!!」と励まし、町内会長にも同様に言って我々はその場を離れた。午後、他の隊員と共に助けに行くと、町内会長の姿は見えず、お婆あさんは元の煉瓦の下へもぐりこんで静かに死んでいた。“ヤレ助かった!!”と気が緩んでガックリしてしまったのかも知れない。こんなことで、あっちこっちで予想外の時間をくいと、予定の調査をして帰ったのは、二時間ぐらい経っていただろう。戦隊長に調査報告をすませた他の隊員は、既に手近なところから作業を始めていた。午後は、私達が案内役となって負傷者の救助や死体の運搬をした。かますやドングロスに青竹を通し急造の担架に負傷者や死体をのせて大通りまで運び、それをトラックがどこかへ連れて行くというようなことだった。

〔新型爆弾〕

右を見ても左を見てもあたり一面焼野ケ原、東方比治山から北方にかけての山並みは、丁度、京都の東山から北山を想わせたが、それらがすぐ近くに見えた。西の方は大きな川を隔てて、その向うもすっかり焼けきっている。南の方は文理科大学のあたりまで焼けて、その向うは火災を免れているようだ。午前中は町に行く人の姿も余り見かけなかった。前記『地獄絵図』といった学校のプールの調査をしている時、七、八人の人が我子、我妻、兄妹などを探しに来ていた。血走った眼・破れた衣服・きっとその人達も火に追われ逃げまどい、肉親と離れ離れにたつたのであろう。午後になると、大通りを往き来する人がチラホラ見えた。食べ物や身の周りの品々をバケツやリュックサックに入れて、行く先のあてがあるのか、ないのか、疲れきった様子でフラフラと歩いている人が多かった。そんな時に一人の警察官に会った。我々は死体の着衣についている名札などで姓名・性別・年齢などを軍用箋(通称「通信紙」)に記入していたが、着衣が焼けたりして大抵は姓名は不明、年齢も推定が多かった。女の人の死体を調べている時、背中に鉄帽を負った四〇過ぎの警察官がやって来て、同じ死体を見ているので、私は二〇歳前後かと思ひ「これはまだ若いね」と言うと、「いやあ、この乳は出産経験のある者ですよ。まあ二六、七ですね」とさすがに専門家らしく教えてくれた。「ひどいですねえ。これは一体どうなったんですか」と問うと、「新型爆弾でがんさア」と、広島弁で答えた。「ほう、ガスタンクが爆発したんじゃないのですか?」「いやあ、そんなもんじゃ、ありませんがなア、日本も早うあれを使わんけりゃいけませんかなア。」と言って立ち去った。軍に対する不満をぶちまくようにして……。

私も昨夜来の物凄い災害とその範囲の大きさから見て、とてもガスタンクどころではなさそうだとは思っていたが、今、改めて「新型爆弾」と聞いて少なからずガッカリした。日本軍にあんなものがあれば、とっくに使っているはずだから……。「原子爆弾」という名称は数日後、部隊へ帰ってから聞いた。

〔夜間作業〕

こんな作業を繰り返しているうちに、夏の日もようやく西に傾き、作業を打ち切って戦隊本部になっている市電車庫へ帰った。夕食になって、やっとあちらこちらに散在している自分の小隊員の顔を見た。昨日からの昼夜に亘る作業と余りにも無残な状景を見続けてきたせいであろう。皆グッタリとしていた。ここでの

編成は、部隊での小隊編成とは全然違っていった。夕食後、隊長の指示により、各小隊から一名か二名が、私の小隊員となって一〇名程の第八小隊ができた。誰と誰だったか名前も顔もすっかり忘れてしまったが、下士官も兵長もいないので、たしか三好光男(現在川村光男——松阪市東黒部町)が班長代理をしていたように思う。宿舎は車庫の中にある電車の車輦で、一台に二、三ヶ小隊宛入って寝ることになった。電車の座席に腰をかけた横になったり、床にムシロを敷いて寝たりして、着のみ着のまま思い思いの姿でゴロ寝した。

電灯もなく、月明りもないから外も中もまっ暗闇、星が大空一面に美しく輝いていた。電車の中で数名の兵がゴソゴソ話をしながら暗闇の中を行ったり来たりしている。やがて私の小隊員もドンゴロスに罐詰を入れて、電車の中へ持ち帰って来た。「どうしたのだ」と聞くと、少し離れた所にある罐詰工場から取って来たという。火事で焼けてあたり一面に散乱しているということだ。そういえば先程から、遠くでボンボンと、鈍い爆発音が時折聞こえてくるが、罐詰の破裂する音らしい。持って帰って来たミカンの罐詰も半分以上は罐がふくらんでいる。しかしこれは火事でふくれたのだから大丈夫だろうと言って皆でわけて喰った。思いがけぬ甘味品の特産だった。

一寝入りした夜の十一時頃だったろうか。戦隊本部の当番が起こしに来た。寝入りばなの睡目をこすりこすり聞くと、戦隊長の命令で、直ちに夜間作業の用意をせよと言って来た。「全員か」と聞くと、「いえ八小隊と七小隊だけです。」「八と七?」「はい建制逆順です」と言って走り去った。私は内心大いに不服だった。特別の事情がない限り、

建制順に第一・第二と行くのが当然なのに、こんな時に建制逆順とは一体どういうわけか……。

みんなへトへトに疲れているのに……。しかしそんな理屈や不平が通るところではないのだ。いやそれらは絶対禁物の軍隊だから仕方なく八小隊を一人一人ゆり起こした。第七小隊も三本見習士官が隊員をゆり起こして、電車から飛びだして行った。私は腹が立っているからわざとゆっくりとして、しかも電車の外で隊員に体操をさせた。夜間だから小さな声で私が号令をかけ、「一・二・三・四、二・二・三・四、三・二・三・四……」手・足・首・腰・背・腹・胸と基本体操を順番にしていたら、当番が、又、呼びに来た。「隊長殿がすぐに来いと言っておられます。」まだ体操が三つ、四つ残っているが仕方がないから「深呼吸始めーツ」と、深呼吸をして体操を終り、戦隊本部のテントの前に行った。第七小隊は三本小隊長以下さきから整列して待っていた。「第八小隊、半井見習士官以下——名ただ今参りました。」と整列すると、予想通り、隊長はカンカンになって怒っている。「三本の隊はすぐに来たのに、貴様はなぜすぐに来ないのかッ。」勿論、こちらでも覚悟の上、「ハイツ夜間作業で事故があつてはいけませんから、ねむけ醒ましに体操をしていましたッ。」と、まっ向から切り返した。こんなときには気合負けをしてはいけない。隊員全部の士気に影響するから……。隊長もそれ以上お追及しなかった。夜間作業は電車通りのあちらこちらに垂れ下がっている架線の除去であった。トラックの荷台に脚立を立て、工兵隊の使う鉄線鉋でブンブンと切りとり、下にいる者がそれを整理して行った。作業は二、三時間で終り、再び電車の中で眠った。

三、八月八日以後

六日夜と七日の印象が余りにも強かった為か、八日以降のことは断片的な記憶は色々あるが、朝から晩までの行動を順序だてて思い出すことができない。きつと毎日々々死体とつき合っていたので「死体ボケ」をしたのだろう。

今、頭の中に浮かぶ色々な状景を思いつくままに書いてみる。

〔死体さまさま〕

八日の作業は、紙屋町附近ではなかったかと思う。負傷者はもう殆んどなく焼跡のあちらこちらに点在している死体を探して集め、これを所定の場所に運搬した。集めるのは、例の急造の担架で集め、運ぶのはリヤカーか大八車などを使ったように思う。どこへ運んだのか知らないが、電柱に“比治山下”という文字があったように思う。そこにはテントが幾つか張られて、その中にも外にもムシロを敷いて、その上に死体がゴロゴロ並べられていた。我々の持ちこんで来た死体もここへ並べられたのだが、最初の方でも書いたように、火傷で生前硬直に不気味な姿になっていたのが死体となって、一層無残な有様となり、死体置場は真夏の熱気とむせ返るような屍臭で、とても長い時間はいられない程。これを監視している兵隊もつらいことであつただろうと思う。そしてその中を親子兄弟の遺体を探しに来ている人達もハンカチで鼻を押え顔をしかめながら、一つ一つの死体をのぞきこんでいた。

母娘らしい二、三人がしゃがんで抱き合って泣いているのは、探す肉親の遺体を見つけたのであろう。死体は老若男女色々にあったが、やはり女の人や老人が多かったように思う。准尉の肩章をつけた軍人が長靴を片方だけおいて、しゃがむような格好で死んでいるのもあり、泥まみれの娘さんの死体もあり、着衣も頭部も全部焼けて胴の部分だけ残っているものもあり、又外傷も火傷もなく腐りかけているものもあつて、そのむごたらしさは、全く筆にも口にも現しようがない程だ。そんな死体にすがりつくようにして泣いているのは肉親なればこそだ。

死体もすっかり焼けて、まっ黒になってしまっているのは、一番始末がし易い。臭気は全然ないし、目方も半減しているからだ。半焼けの死体もそれ程ひどい悪臭はない。どうかすると焼肉のような“よい香り”のするものもある。「おい、これはピフテキみたいな匂いがするぞ。」などと、冗談を言いながら運んでいる。一番いやなのは、殆んど焼けないで腐りかけている死体である。悪臭はひどい裏返えすとウジ虫がウヨウヨはっている。へたに触ると皮も肉もグシャとつぶれる。悪いけれどもこんなのはスコップでゴロン、ゴロンと転がして担架にのせる。遺族の人に見られたら叱られるだろう。それにもう一つ、始末の悪いのが、牛馬の死体である。大きな図形で四股を硬直させて横倒しになっているのは、とても五人や六人の力で動かすことができない。とはいえ、これも何とかせねばならないから、その横に大きな穴を掘ってその中へズルズルとすべりこませ、上から土をかけておいた。

どうせ十分な深さには掘っていないから、多少は上の方へはみだしていることが多かったが、限られた時間に一つでも多くの作業をしなければならぬのだから、やむを得なかった。

「軍は拙速を尊ぶ」の格言を我々も実行したわけだ。

〔焼却作業〕

八月九日、死体の運搬をしていたが、こんな状態で作業は仲々思うようには捗らなかったらしい。九日の午後からは各個に現場で焼却することになった、多分作業能率を上げる為と、今一つは集積場でも死体の始末に困ったからではなかろうか。ところがこれも仲々焼くべき材料がないのだ。焼け残っているものといえば、家の柱や棟木といった大きなものばかりで、集めて来るのが一仕事、そしてこれを燃え易く砕いて組み、その上へ死体を二、三体置いて重油をふりかけて火をつけたのだが、何といっても慣れない仕事、顔をしかめしかめして、やっていたのだから実際にはチグハグなことばかりやっていたのだろう。死体は火炎に包まれると、腕や大腿の皮がはり切れるように破れ、松の樹の皮のようにひび割れたかと思うと、その破れ口が開き、そこから青い炎を噴きだして燃えていった。気が立っていたから怖いとも気が悪いとも思わなかったが、夕方になって、焼跡のあちこちであんな火を見た時は、何となくわびしい感じがした。

〔山根大尉と姫田班長〕

山根大尉にひょっこりと出遇ったのはこんな作業している時だった。私が最初に入った和歌山の船橋部隊で幹部候補生の集合教育を受けた時、教育隊の中隊長であった。全く思いがけぬ時、思いがけぬ所で逢ったので大変懐しかった。聞けば、山根大尉の家がこちらにあって、災害を受けた為に来られたというようなことだったと思う。

又、同じ教育隊の姫田班長にも逢った。大変私に目をかけてくれたので懐しさもまた一入であった。たしか公用でこちらに来たということだった。和歌山にいたころは伍長だったが、今は軍曹になっている。私は更に上の見習士官にはなっているが、やはり頭があがらない。

「半井、お前見習士官になったんじゃろうがな。」「ハイッ」「軍刀はどうしたッ」と言われて頭をかめた。実をいうと作業中邪魔になって仕方がないので、八日以降は軍刀も凶囊も電車の中へ置いて来ているのだ。それに服装は水上作業衣、曹長の階級章は安全ピンで左腕につけていたが、赤地の布に白糸で金筋や星を織ったもので見にくいのに、油とほこりで一層わかりにくくなっている。だから兵隊が将校かも区別がつかない。皮脚絆を着けていたのと戦闘帽が私物で少しばかりいい格好をしていたぐらい。

山根大尉にも姫田班長にも、和歌山で随分とお世話になったのだから、一目、見習士官の精気姿覽でもらいたかった。

ところで軍刀ではもう一つ大失敗をやらかした。

〔参謀肩章〕

多分九日の夜だったと思う。その日はどこで作業をしていたのか分らないが、部隊本部から大分遠い所だったようだ。昼食は毎日携行しているのだが、その日は夕食も作業現場へ届けられた。作業を一時間でも長くする為にこんなことをしたらいい。ところが飯盒は汚れたままであり、その上飯杓子も汁杓子も来ていないのでとりわけることができない。結局折角届けられたが、やはり車庫へ帰ってから夕食をとることにして、日の暮れるまで作業をした。

真夏の日は暑い。きっと七時半頃まで現場にいたのだろう。帰る途ですっかり暗くなった。そこを一〇〇人近い部隊が四列縦隊とはいえ、飯桶や汁桶をかついで、ゾロゾロと歩いている姿は、余り立派なものではなかっただろう。ましてみんな綿のように疲れているのだ。やがてある町角へ来た時(勸業銀行の建物が見えたように思う)がテントの中から提灯を持った兵隊が二、三人走って来て、列の先頭が止まった。私は縦隊の中程を歩いてたが、前へ行ってみると“憲兵”の腕章をつけた人が何か言っている。不審尋問らしい。この時、部隊を引率していたのは岩田見習士官であったと思うが、元来おとなしい人だったから、憲兵の尋問を受けてモタモタしている。しかし、よく見ると憲兵は上等兵の階級章をつけている。“何だこちらは見習士官だぞ、しかも将校を取調べることのできるのは、憲兵でも下士官以上”と聞いていたので、岩田の応答が歯がゆくなり「どうしたんだ」と、私が前へ出て行った。憲兵も私の気迫に押されたのであろう。「ハイッ、この部隊の名前と行き先や目的をお尋ねしているのであります。」と、俄に口調も変わった。「我々は十教(第十教育隊の略称)の者だ。今まで作業をしていたのだが、市電車庫にある部隊本部へ帰るところだ。」「あれは何ですか」と飯桶や汁桶を指す。「あれは我々の夕食だ。作業現場へ届けられたのだが杓子がないのでとりわけることができないから本部へ帰ってから食事をするのだ。」「ハイッ分りました。どうか行って下さい。」と敬礼をした。“ざまあ見ろ”と内心ちよつといふ気になったまではよかったのだが、その時、暗闇の中から、「十教か、ご苦労!!」と声がかかり、立派な軍服を着た将校が四、五人の憲兵の横から私の前にでて来た。ハッとして見ると、先頭の人は肩から胸にかけて参謀肩章が垂れ下がっており、階級章は“金べた”だ。星は一つか二つしか分らなかったが……。いや驚いたのなんの、今まで憲兵を押しまくっていたのが逆になり、直立不動ですっかりあがってしまった。「この部隊は誰か」私の名前を問われるかと思ったがそうでもないのちよつと安心。「ハイッ戦隊長殿は陸軍大尉草深圭二殿でありますッ」「いや今、この部隊の指揮をとっているのは誰か」私は一瞬迷ったが、今更、岩田の名前をだすのも責任免れで卑怯なように思っただけでエーイママヨ!!と「ハイッ陸軍兵科見習士官、半井良造でありますッ」と答えた。「半井見習士官か、よしご苦労、行けッ」「ハイッ行きますッ」と、私個人で敬礼をし、更に部隊の敬礼をする段になってサア、シマッタ!!軍刀がない!!前述したように邪魔になるから持って来ていないのだ。それだけでも既に服装違反だが、今、部隊の敬礼の指揮をとるのに指揮官である私は、当然軍刀を抜いてしなければならぬ。しかも相手の人は将官である。ラッパ手がおれは敬礼ラッパも吹奏せねばならない人だ。えらいことになったと思ったが、その時、「但し夜間ニ於テハ抜刀シナクテモヨイ」ということが陸軍礼式令に明記されているのを思い出した。よしッ腹を据えて、全員に対して「気ヲツケ、上官閣下に対してカシラー右ッ!!」と号令をかけた、私自身は拳手の敬礼をした。「ご苦労!!」と答礼されたのでヤレヤレ、「直レッ前へ一進メッ」と歩きだした。これで今までの疲れもどこかへふつ飛んでしまつて、冷汗をグッショリかいた。戦隊長や江頭中尉は列の後の方で、じっと見ていたらしい。

〔醜と美〕

終戦の詔勅のでた八月十五日は部隊に帰っていたから、広島には十三日頃までいたように思っていたのだが、最近、斉藤部隊長殿にお目にかかった際聞くと、

八月十一日に幸ノ浦の部隊に帰ったということだから、これは十日のことになる。焼跡には「〇〇家、転居先……」「太郎皆無事……で待っている」といったような木片があつちこち立っている。今は家族の消息が分らないということが一番悲しいことであつたのだろう。往来する人の数もだんだんふえて来た。背中や両手に焼け残った家財道具(ガラクタ同然のもの)を持って行く人、そうかと思うと何も持たずに夢遊病者のようにフラフラと力なく歩いている人、三人四人の家族が一同となって肉親の行方や遺体を探す人々等、モンペ姿の女の人が、偶然にも知人に会つたのか、「まあッ。」と言つたきり、物も言えずに手をとり合つて泣いている姿もあつた。こんな所で知つた人に会えばきつと懐しさも、感慨も無量であつたに違いない。

この日の作業は大きな川の左岸で、現存の「原爆ドーム」が二、三〇〇メートル向うの川上に見えた。小学校の焼跡と思われる所、校庭にある二つの防空壕の中に、何十人という児童(女児が多かつたように思う)が、まるで蜂の巣をむし焼きにでもしたように着衣もそのまま、折り重つて死んでいるのを見た時は、死体にはもう大分慣れた我々でも胸が痛んだ。そして、我が子の遺体を探し求める母親達が、あつちにもこつちにも立ちすくんで運びだされて来る死体をのぞきこんでいた。しかし、遺族に抱かれた死体は一体だけで、あとの児童の死体は分らなかつた。その一体は、他の遺骨と混じらぬようにして火葬した。中には又、遺体は見つからなかつたが弁当の包みがあつたと言つて泣き、もう一人の母親は、何も見当らないといつて抱き合つている姿を見た時は、年若い我々も思わず目頭が熱くなつた。川ぶちにある死体はひどいのがあつた。これは大人の死体だったが、六日以来雨も降らず真夏の太陽に照りつけられていたので、死体の中にガスが発生したのであろうか、半裸又は全裸状の死体の顔も胴も、二倍くらいに膨張、目の玉が飛びだし、口はあごがはずれる程に大きく開いて、中から舌かとびだししている。まるで怪物が野球のボールをくわえているようだ。胴ははちきれんばかりに膨らんでいるから、乳で男女を見分けることはできない。そして、幾十とある死体の三分の一程は、腹の皮が破れて内臓が風船玉か氷ノウのように出ている。色はネズミ色だったか、黄色だったか忘れたが赤ではなかつたように思う。肛門からも腸が飛びだしており、男子の睾丸は焼物の狸のそれより大きくふくらんで股間を押し広げている。おそらく遺族が見てもすぐには判別できないであろうと思う程の物凄い形相で天をにらんでいた。丁度、ここでの作業をしている時だった。長崎の原子爆弾が誤り伝えられたのだろうか、京都も爆撃でひどい災害を受けたらしい、というデマがささやかれた。私の戦隊には京都出身の者が一〇名程いたのでみんな蒼くなつた。私も家にいる母や妹がこんな格好で死んでいるのかと思つたときは全身から力が抜けた。焼却作業も少し慣れが貫れて歩つた。午前中は一山に死体を一〇体程ずつ積んで焼いたが、昼食の時に隊長に報告したら「一〇体は多過ぎる。五体までにせよ」と叱られた。しかし燃やす材料が仲々ないことを説明したら「それなら今までに焼いたものが白骨になつていればよし。さもないれば焼き直せ。」と命ぜられた。午後行つてみるときれいに白骨になつたので、他の小隊に呼びかけて共同作業をすることにした。人員の三分の二程で焼く材料を集め、三分の一で死体を運んで積み重ねというようにして、一挙に二〇体三〇体と焼いた。更に都合のよいことに、青い服を着た刑務所の囚人が川岸や川面に浮かんでいる死体をどんどんあげてくれたので、我々の作業は一層捗つた。最後の作戦は川岸で焼け残りの材木を井桁に組み、その上に積みも積んだり一山に五四体の死体を積み重ね(この中に、会社や役所の同僚らしい三、四人の人が見つけた遺体一つあり、これをトタン板にのせ、針金をつけて引きだせるようにしてのせた)、重油をふりかけて火を放つた。一山火をつける毎に我々はその前に整列して哀悼の礼を捧げていたが、この最後の山で敬礼をした後へ、ちょうど通りかかつた三、四人の墨染めの衣を着た僧侶が読経してくれた。

焼野ケ原の大川のほとりで、夕焼け空を背景にして、黒々と煙をあげ、すさまじい勢いで燃える火焰の前に立つ僧侶の姿は、深い印象を与えた。

一三

田村繁雄

(当時海上挺進特別攻撃隊第四十四戦隊・陸軍中尉)

当時、江田島幸ノ浦にいた私は、広島市の戦災救援というような主旨の命令により、六日十五時頃、宇品に船で渡り、徒歩行軍により宇品から広島電鉄本社付近に出動した。

第一陣の出発は午前中に出発していたようである。私が出動した時は、残留していた部隊(人数不明)を引率して行つたのであつた。佐伯船舶司令官が、広島警備担任司令官として発令され、われわれの救援作業の総指揮官になられたということも、作業中に聴いて知つた。

千田町の電鉄本社に到着したのは、十八時頃か?宇品より電鉄本社までは電車通りを行軍して来た様な記憶があるが、途中の建物の状況、火災の状況は記憶にない。電鉄本社には、幸ノ浦部隊の本部がはかれていたから、ここにて、先発の戦隊長の指揮に入る。

一、到着後、電鉄本社付近において、七日朝まで、私は待機していた。その間の作業は、市中心部から来る負傷者を建物内外の空地に仮収容して休ませる作業が主体であつた。

他方面の隊の情報では、夜、赤十字病院・南大橋付近に仮収容している負傷者に対し、火災が西北の方向より延焼して来ているので消火命令がでて、宇品方面各所の手動ポンプ(市内の消防ポンプは皆無)を官民の別なく集結し、重点を南大橋東もと付近、及び赤十字病院の類焼防止に當つていた様である。八月七日二、三時頃か、風向き関係もあつてこの消火活動は一段落した様に記憶している。当時南大橋もと、赤十字病院(内部だけでなく庭の中一面)はかかなり多数の負傷者が集結した模様である。

八月七日早朝、電鉄付近に収容されていた(と言っても道路のすみや廊下などに寝ていた)負傷者の大部分が、空が白々明ける頃、非常に寒さを訴えた。毛布等も手持ちがないので、電停前付近の半壊家屋の中から布団類を探して来てかけてやる様にしたが、それも全員に届かなくなつた。夜が完全に明けたとき約半数は死亡されていたようであつた。

この七日朝、戦隊の約半数小隊長四人か五人と、兵四、五十人を連れて戦隊長とは別隊として、主目的は①負傷者を収容車の通行路の要所々々に集結し、②死

亡者はできるだけ限りの記録(氏名・性別・年齢等)をした上、火葬する。以上二つの内容をもった作業を行う。

八月七日朝より八月十二日迄(六晩七日)の行動。受持区域は紙屋町～鷹野橋～富士見橋～比治山橋～現稲荷橋(当時・電車専用橋)に囲まれた区域と記憶している。ただし紙屋町～鷹野橋の電車道をはさむ両側地域は、他隊もいたようで袋町国民学校、白神社、第一中学校、市役所地域は、救援隊が重複していたようである。

われわれは行軍で、別図の経路(俗称別荘通り)を通り①の地点に行き、この地を中心とし各小隊毎に分散、主目的を負傷者(単独歩行のできない者)を富士見橋～比治山橋線の道路に集結し、逐次通行する収容トラックに収容することとし、同時に自力でこの線(この付近でトラック等の出動できる道路はこの道路が最もよかつた様に記憶する)に出て来ている負傷者のトラックに乗り込むのを補助することとした。

この付近おほとんど焼けてしまって、比治山橋西詰め付近に直接間風の洋館が傾いて焼け残っていた事が印象に残っている。この建物(使用に耐えない)の前を指揮連絡地点としていた。(使用には耐えないが目標にはなった。)

①の地点で二泊(指揮所の北側別荘通りに面して、庭園風のところがあって、地面が焼けていなかった。)勿論着たまの野宿である。

八月九日頃から、作業を死亡者の火葬に主目的を移したのである。死亡者の火葬は班別に十～二十人集った地点で、氏名、性別、年齢等を各小隊長において記録の上、周囲の焼けた残材により火葬し、終了後は、その地点に埋葬した。(ほとんどの死亡者が氏名を確認する事は不能で、性別とおおむねの年齢を推定し、男約〇〇歳の様な記録がほとんどであった。)

八月九日①より指揮所を②に移した。(この場所は新川場町の北側に建物疎開がなされ平田屋川の西側付近は川側一帯に空地となり、共同の防空壕が設けられてあった。)

八月十日、十一日頃から、一部は現稲荷橋より比治山橋間の京橋川中に浮遊している死亡者の収容を行う。当時の川の水面には家屋の破壊した材木が水面一杯ご埋まり、潮の干満につれて橋と橋の間を上下に流れ死亡者もこれにはさまれて上下していた。

八月七日から八月十二日(時間不覚)の部隊引揚がずに火葬した死亡者の数は二百名ばかりのような気もするが、はっきりした記憶がない。

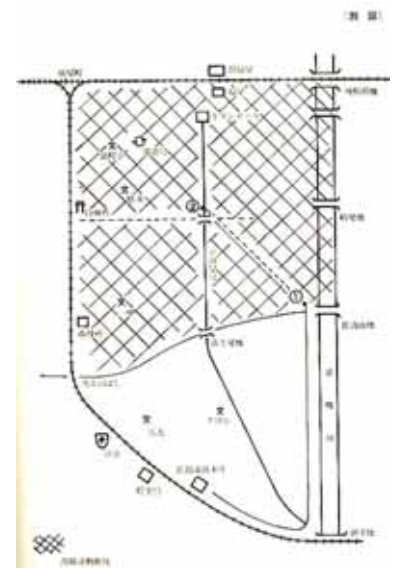
火葬者の名簿は幸ノ浦帰隊後、部隊本部に提出した。(船舶司令部で集められたように記憶する。終戦後、宇品に於て、終戦処理業務に従事中、他の事で船舶司令部の高級副官のところに行った際、見たような記憶がある。)

一、八月十二日、幸ノ浦帰隊

九月十二、十三日頃(広島地方に台風の来る直前)幸ノ浦撤収。

十月末迄、宇品船舶練習部において残務整理、その後復員。

昭和二十年十一月～十二月頃、歯ぐきから出血を見たり、ちょっとしたことに下痢したり発熱し、風邪をひきやすいようなことがあった(後で考えて放射能の影響かと思った)。その後は現在迄別に異常ない。



一四

西塔光喜

(当時水上特別攻撃隊・特別幹部候補生)

江田島幸ノ浦海岸に於いて熱線を受けると共に、非常に爆発音を聴取、直ちに広島市に出動命令を受ける。隊員は何か何だか全然わからず、上官は、広島酸素会社が爆発したと知らせる。

六日午前十時頃、宇品に上陸。木造建築は傾き、鉄筋の建物の窓破損、その中を破れた衣服をまとい、半狂乱の婦女子を見、ただならぬ感ずる。すぐ爆心地に向う。近づくと従って被害の甚大なるを知る。正午前、爆心地到着。四方火の海。我々も身の危険を感じる。

道路には焼けただれた死体が累をなし、傷者のうめき声は地獄からの声であった。

爆心地に到着後、直ちに傷者の救助に当る。私達は四人一組で、主としてタンカを持って重傷者を医療所まで運ぶ。その数多く誰を先にしたらよいか苦しむ。重傷者の多くはタンカの上で息をひきとる。その夜から上流川町に夜営をし、一週間傷者の救助、屍体の処理に当るが、屍体は山をなし、平和な現在に於ては考えることもできない集団埋葬をする。埋葬前に性別、大体の年齢を調べる、大半は半死不能の状態であった。

復員直後、健康診断で、私は白血球に異常ありと言われたが、特別自覚症状もなかったので、そのままにしているが、結婚後十年たっても子供ができないので医師の診察を受けたところ、生殖細胞に異常があることであった。十年程前から時々めまい、頭痛あり、又、二、三年前から耳なりが激しい。

一五

高田三郎

(当時海上挺身隊第四十一戦隊第三中隊・兵長)

江田島の北端幸ノ浦基地において、我々は訓練が終つて、朝食後の休養をとっていた。みんな内務班にいたので、閃光にはまったく気づかぬかつたが、その後

の爆風と音響で初めて気づいた。

爆風は相当強く、内務班の窓ガラスが破れて飛び散り、音響によって、兵舎がかなりひどく揺れ動いた。その直後、外に出てみると、広島上空に黒煙と虹色の爆煙と、キノコ雲の立ちのぼっているのが眺められた。

午前十時二十分ごろ、宇品の船舶司令部から、出動救助命令が出された。我々はただちに装甲艇に乗って、広島に出動した。他の隊員も大型発動艇(大発と略して呼ぶ)やその他の舟艇に乗りこんで、いっせいに動出した。

宇品に上陸し、船舶司令部にて各部署の指令を受けた。我々は、太田川の周辺にたむろする負傷者の救助作業を受け持ち、その周辺の応急仮設救護所に負傷者を運んだ。また、川の中の材木にすがっている負傷者や浮いている死亡者を、大型発動艇に収容し、安全地帯に運んだ。

さらに、国民学校が倒壊炎上していたので、その中から負傷者や死亡者を急ぎ救出する作業をおこなった。

この救出作業は、十一時ごろ現地に着いて、すぐに開始したわけであるが、一段落すると、倒壊民家の下敷きになっている人々の救出を、夜七時ごろまで続けた。

夜になってからは、死体の焼却作業した。

このような作業を約二週間にわたって毎日毎日交代で行なったが、その間、作業現場にずっと露営し、食事もにぎり飯で、クタクタに疲れるまで活動した。

死体の処理を行なうにあたっては、その人の遺品を確実に集めておいて、探しに来る縁故者のために判り易いようにしたが、勿論、何もない人も多数あった。八月二十日の昼ごろ、幸ノ浦の原隊に復帰し、九月十三日に復員した。復員後、救助作業にあたった戦友(静岡県)が、被爆者と同様の症状を患って、ついに死亡したが、私もまだ作業中の八月十二日ごろから、倦怠感・頭痛・目まいなどがあり、復員前三、四日ごろから、下痢・腹痛・脱毛などがあり、更に眼痛をともなうようになった。復員後も同様の症状がずっと続き、治療のききもなく、昭和二十六年九月末、ついに左眼は失明した。

一六

新保正信

(当時船舶練習部第十教育隊・陸軍兵長)

六日午前八時ごろ、幸ノ浦海岸において水上特別攻撃用連絡艇(レ)整備中に原子爆弾の炸裂に遭い、八月九日から八月十三日(期間は確実でない)まで広島市の救援作業に赴く。昭和二十年八月中旬ごろ、某基地に赴くべく七月下旬から本格的な夜間演習の毎日であった。たまたま八月六日は連夜の演習で、起床も遅く七時頃であった。点呼が遅れじと練兵場に駆けだした。一点の曇もない澄みわたった真夏の朝であった。敵機B29が二機、超高空に銀色を輝かせて飛んでいる。そのうちに警報があった。しばらくして解除となり、点呼も終わって、それぞれ朝食前の作業日課にとりかかる。私は練兵場裏山海岸にあるレの整備に数人で向った。氏名は忘れてしまった。この海岸岬島、そして広島市を一望することができるしゃべり物一つない場所である。復員の時は、この海岸でレを焼却して、機関は砂浜に埋め、後始末をした場所でもあり、また水泳場でもあった。

暫くして舟艇整備も終る頃、艇内から顔を上げた瞬間ピカッと鋭く光った。と同時に、轟音と熱さにより、無意識のうちに両耳を押え、「アツイ!」と悲鳴を発して艇内に伏せた。同僚もそのようであった。場所的にはまともに受けたものの、距離(約十三キロメートル)が幸いした。その閃光は一目から火のである」の表現以上の瞬間的の光であって、目がくらみ、顔は針で刺されたような痛みを感じた熱さで、轟音は耳を突きさすドカーン!という爆発音であり、「アツイ」と叫んだあの瞬間の状況は、今でも脳裏から離れないが、今もって適当な表現ができないままになっている。そしてすぐさま顔を上げる。爆発地点は広島市と思われた。爆発と同時に、あたかも消火ホースで全市を水平に水をかけたように、スーッと市一面が白幕をひくように硝煙に覆われてゆく。中央からは、傘状に白煙がモクモクと上昇して、次第に黒煙と化し、その中からチラッチラッと、ちょうど水平線に沈みゆく夕陽のような真赤な火の玉が見える。この黒煙は上昇にしたがいキノコ状となり、その傘の中は真赤な火の玉である。火の玉を包んで上昇するキノコ状の黒煙と真白な硝煙に包まれた広島市を見つめた。

軍需工場勤務のある経験者は次のように言った。「多分工場のガスタンクが爆発したか、それにしても異様な爆発であって余りにも大きい。それでは先刻の警報の際、B29がパラシュートに機雷をつけて投下し、空中爆発をさせたのか(B29は、時々瀬戸内海に機雷を投下した。)」と種々な想像話も出つくし、呆然と広島市を見つめていた。兵舎に帰ると、窓枠まへし折れていた。昼ごろになると海上のニュースが入る。それによると広島市は全滅し、大火であって、似ノ島検疫所に負傷者がぞくぞくと収容されている。悲観的な戦局を感じつつ、その夜の演習が開始された。広島沖に停泊中の戦傷油重送船(十八年型八千トン)を仮装敵船として爆雷投下演習を実施したが、広島市の炎上は海面にうつり夜間演習にはならない程であった。

その火災は三日程続き、手のつけようのない惨状であって、救援は鎮火を待って、八月九日午前八時出発ときまった。身仕度は水上作業衣、鉄帽、手袋そして負傷者にさしあげるべく水筒を持参し、急ぎ装甲艇で向う。救援作業用具は何一つない有様である。

宇品棧橋から広島専売局を通って、大橋(御幸橋)を渡り、市内路面電車軌道に沿って、銀行、百貨店街および借行社(陸軍将校クラブ鉄筋四階建)周辺の繁華街道路の啓開、遺体処理、及び負傷者収容作業を行なう。私もお道路整備作業班に属した。

先ず、宇品に上陸した途端驚いた。木造家屋の壁、窓は吹飛んで柱が残っているだけの惨状であり、街路樹は葉が落ちて、あたかもこがらしが吹きすさんで荒れ果てた有様で、真夏の季節には余りにも無情な哀れた光景である。

専売局前を通り一歩広島市に入ると、一望焦土と化し、点々と見えるは、爆風で傾斜している鉄筋高層建物である。その中に目を覆わせる遺体と、死を待つばかりに苦しんでいる重傷者、そして肉親・知人等を探し求めて右往左往している罹災者たち。何たる惨状であろう。

往きかう人は、後頭部から頭にかけて、または顔がそれぞれ黒ペンキを塗ったように黒く（高熱を伴った閃光で焼けたものであろう。）、衣服がボロボロになっている者、下着だけの者、裸足の者など、様々であって、変り果てて誰であるか判らない。ただ何爆弾であるかと考えつつ市の中心部に入る。帰隊する頃には、道路も整備されて、交差点には「更生爆弾」と表示してあったのが目についた。

爆弾投下の時刻は、学徒動員等の出勤時間であったのか、道路上には学徒の遺体が多かった。作業と言ってもスコップ一つない状態のため、焼けた鉄棒、タンク板等を利用して行く。

日も暮れて、爆風で荒れた借行社の四階に寝具一つなく、そのままの姿で一晩を明かしたり、焼野原に焼タンク板を敷いて野宿の一夜を過ごしたこともあった。灯火一つない夜の広島市にまた一つ悲惨な状況に直面した。それは家屋の下敷きとなった遺体のリン（脂肪が燃焼の現象と思われる）がチョロチョロと黄緑色の炎をあけて燃えているのが無数に目に入る。

とにかく、遺体が爆発の惨状を物語っている。それは、煙にまかれて窒息死している状態である。逃げ場を失い、防火用水槽に母と子が真赤にただれて、抱き合っている姿、煙と火に追われて川に逃げ場を求めて繁れている者など、数々の惨状は一段と悲痛を感じさせた。

また、重傷者は数も多く、収容の手がまわりきれず、放置されたまま苦しんでいて、明日の死を待っているといった悲惨さである。

救援区域の作業も大詰を迎え、最後の道路整備となった頃のできごとであったが、五歳位の両眼失明となった男児を預けたまま若い母親はついで姿を現わさず、とうとうこの児は捨子となってしまったことが忘れられない。この児は今ごろは開眼し、社会人として元気だろうか……。

ついこの原子爆弾とは知ることでもできぬまま作業を終り帰隊した。

草木は八十年位生えず、被爆した女子は永久に妊娠しないと聞かされていたが、復員途上の広島駅に草の生えていたのが目に入りつつ、無蓋車に乗って故郷長野へ向ったのであった。

一七

佐伯常夫

(当時海上挺身隊第十教育隊・見習士官)

私たちは江田島幸ノ浦にあった船舶司令部・海上挺進隊第十教育隊に訓練要員として勤務していた。同隊は斎藤義雄大佐を隊長として第四十一戦隊～第五十戦隊——戦隊につき——五人一から成り、これに整備隊要員三〇〇人程度。総人員一、五〇〇人程度の部隊であり、私は第四十七戦隊の小隊長として勤務していた。

当日は朝から快晴であったが、早朝から空襲警報がだされ、朝の行間演習もときれとぎれとなり、八時頃警報解除の合間を縫って朝食中であつた。その時運命の八時十五分。パッと目を射る白紫色の閃光!今でも眼底に残るスパークの様な鋭い光線。皆々顔を見合わせ、「一体何だろう。」「高射砲陣地のサーチライトに太陽が反射したのだろうか。」等の雑談を交える間があつた。(幸ノ浦基地と広島市は十二キロメートルの距離がある。)直後、まさに天地も轟く大音響、兵舎が爆撃されたと直感し、反射的に舎外へとび出す。

遙かに望む広島の上空、キノコ状の原子雲が終日消えなかつた記憶は現在も生々しい。あの広島の大爆発は何だろう。しばらく啞然として業務も手につかない有様であつた。

正午頃、宇品の本部(船舶司令部)から命令がだされ、「広島市でガスタンクが大爆発し、相当の被害がでているので部隊の半数を救援に出動させるように。」とのことであり、部隊の半数が出動した。ついで十五時頃、更に残存部隊の全部について出動命令が出され、私はこれに参加して十七時頃、宇品港に上陸した。宇品へ上陸(六日十七時ごろ)、直ちに千田町の赤十字病院の延焼防止作業に従事するよう命令を受けて現地に向う。途中、皆実町のガスタンクは二基とも健在なのに驚く。広島市内の、地獄絵さながらの阿鼻叫喚のちまた、筆舌につくしがたいというよりほかない。

赤十字病院には多くの負傷者が収容されていたため、これを延焼から守ることが急務であり、私達の部隊は破壊消防により、赤十字病院の延焼防止に徹夜で従事した結果、さいわい病院を延焼から守ることができた。

翌七日から十二日頃まで、私達の部隊は鞆町、八丁堀、柳町方面の死者の収容作業にもつぱら従事した。同胞のむごたらしい死体に手を合せながら、毎日何千、何百の死体を収容し、重油をかけ茶毘にふした。

一八

野田昭夫

(当時砲隊・上等兵)

二十年七月から、特攻隊員として、安芸郡江田島町幸ノ浦にて(レ)艇(二五〇キロ爆雷を装置したベニヤ製モーターボート)の舟艇訓練中、出動命令を受けた。幸ノ浦の海岸から宇品の船舶司令部の方を眺めているとき、広島全市に強い閃光を見た。二秒間ぐらいの閃光が消えると、スーッと一条白い煙が舞い上り、大きな音響がたつわり、窓ガラスが少し破損した。

六日午前九時ごろ、広島市内に家族のいる者に対して、直ちに出動するよう命令が下つた。また一方、上陸用舟艇で宇品～島の島検疫所間の負傷者輸送を行う。同日午後三時頃、残留全隊員に出動命令が下り、上陸用舟艇に分散し、午後四時ごろ宇品棧橋に上陸した。

各船隊ごとに分散し、第四十四戦隊は、宇品からトラックで千田町広電本社前まで行き、救助活動に入る。

六日の午後五時頃から工業専門学校裏元安川の川辺に臨時収容していた多数の負傷者を広電本社前まで運ぶ。深夜、広島赤十字病院を火災から守るため、病院裏の民家を取りこわしに行く。取りこわしにかかったが、火の勢が強いため二時間位で引揚げた。八月六日から約一週間、紙屋町、市役所、鷹野橋、東千田町、福屋裏一帯の道路整備、死体収容、鶴見橋附近の京橋川に浮いた死体収容、馬の死体の埋葬。朝早くから夜遅くまで救助活動をしたため、昼間の少しの休憩時間にも炎天下の道路に横になって寝たのを記憶している。

帰隊後、発熱・倦怠感あり、多くの者現在肝臓障害、白血球減少。

一九

大荷(広岡)康夫

(当時第四十二戦隊・特別幹部候補生)

江田島幸ノ浦海岸の基地において特攻隊員として、昼間は広島湾上における航空母艦その他の艦を攻撃目標としての魚雷艇を操縦、一艇当り練習要員として下士官を長とする四名位の人員で、ほぼ四十五度の斜角から突入、体当り寸前にて魚雷を投下し、直ぐ退避するという猛訓練の明け暮れ、及び艇の故障にそなえて機関の講義を受けておりました。又、夜間において小隊編成にて隠密作戦として接岸行動及び歩兵の散開その他に準じる舟艇行動を実施されておりました。

八月六日は朝食を終り、演習にそなえて何かと準備をしておりましたところ、空襲警報発令、隊員は直ちに裏の洞穴に退避しましたが、警戒警報解除と共に兵舎に戻りました所、時刻を経ずして兵舎屋根に、B29の機銃掃射を受け、思わず兵舎内土間に伏せておりました。暫くしてもすごい耳をつんざく爆発音と共に、閃光が走りました。みんなと直ちに舎外へ出ましたところ、対岸宇品の方向にムクムクと煙が中天高く発達していくのを見ました。一同顔を見合わせ平和な広島市が爆撃されたことを知りました。また舎外に伏せていた戦友は、非常な爆発ショックを感じたとのことでした。

その六日午後五時半頃、戦隊令により完全軍装、大発舟艇にて宇品着港、船舶司令部より命令受領の間、暫く、血染めの布をまとって続々集って来る負傷者群を見て、爆撃の惨禍を痛切に感じた次第です。

私達は暴心地に向って行動、放置された電鉄会社の電車を小隊毎に割当てられ、清掃の上、車内を仮宿舍とし、又根拠地としてドーナツ化的に向う七日間の救援作業に従事することになりました。先ず行動開始に当り、小隊長から広島飲料水等に関して細菌類、毒物等防止の必要絶対飲まぬこと、被爆者には死期を早めるから絶対に各人の水筒の水を飲まぬ様にとの厳重な注意がありました。だが、これが私の生涯忘れ得ぬ辛い思い出となっております。何故ならば、当時は盆前の酷暑の盛り、被爆者の奇跡的な回復を願う弱冠二十歳の私には、朝から全身焼け爛れ、あるいは爆風症による身の苦痛との戦いに敗れ、明日は精根つきで死んで行ったであろう人達の必死の願いを聞き届けることなく、ましてや、あちらこちらから無念の形相でひしと掴まえられた水筒の手を振りしきらざるを得なかった。被爆者達は、我々救援隊の出現をいかに待ち待ったことでしょうか。私は戦後二十三年の今日、病死した愛児の事を想うかべるにつけ、ああ一滴の水でもいから口にひたしてやるべきだったと、後悔のほぞを強くかみしめるものです。願わくば在天の霊よ。どうかお許し下さい。

又、私達は死体を一度に七十五人も火葬しました。先ず焼け残りの柱とか角材とか木片を附近から集めて、幾段か井桁に組んで、その上に死体を積み上げ、重油を注いで火をつけました。間もなく濛々たる黒煙と異臭でした。然し私達は間もなくその様な光景に慣れてきました。その場に居合わせた人々が冥福を祈っておりました。私達は完全に燃焼されることをただ心に念じるばかりでした。時間の経過はすっかり忘れられました。が、焼き終ってまだ温かい骨を戦友と一緒に手頃な壺を探し出して来て、入るだけ入れて土中に埋め、上に墓標代りに木片を立てたり、石を積み重ねたりして集って来た人々と合掌、念仏を唱和した次第です。又ある時私達は軽、重傷者を担架に乗せて待機するトラック迄運び乗せていました。その時です。忘れもしません。多分女生徒だったろうと思います。突然「兵隊さん、私助かるでしょうか」と言います。あたりは夜のとばりに包まれてまっくらです。まさに血の叫びとはこのことでしょうか。私と運搬した戦友は思わず絶句しました。ややしばらくして、一人は「絶対に助かってもと通りになるから」と、やっと答えました。少女は何か言いたそうでしたが、それきり黙ってしまいました。無理もありませんでした。トラック上は全身焼けた重傷者で身動きならぬ程いっぱいでした。又、或時は重傷者を赤十字病院の広場まで運搬しました。看護婦が脱脂綿が何かでヨーチンをぬっておりました。苦痛にゆがむ顔、顔。すでに病院内は満員でした。こうして通り一辺の治療とて明るく日は皆暑熱にさらされ、担架上で死んでしまいました。また或る時私達は道路の両側に別れて小休止しておりました。その時道の真中を杖をついた老人が、トボトボと今にも倒れん許りに、一步一步やって来ました。私達は突如救護を求めにやって来たのだらうと凝視しておりました。ところが皆の目前でバツリ倒れました。軍医が走り、傍へ寄って脈博など調べておりましたが、それっきり幽明境を異にしたのです。気力の限界に達したのでしょうか。このような情景は各所で見られたらろうと思われまふ。又、被爆当初、各所に発生した火災により、瓦礫と化した周囲の中に、ひどく破壊されたとはいえ、形骸を残している産業奨励館(原爆ドーム)の姿、或いは家屋の倒壊した中で圧死のまま発見された娘さん、涙もすっかり潤れ果て、これをじっと見つめる母親の姿など、又、朝礼時整列中に、突如被爆して死屍累々の校庭の女生生群、防火水槽の中の死体、眼球が飛びだし舌が口からはみ出た死体、川に流れる夥しい死体、それを舟艇上から網にて収容する広島刑務所の囚人の活躍ぶり、又、自分の家のあったと思われる所を確認し、必死になって妻子の姿を求めて掘り起こす人、その手伝いもできぬまま開けば彼は軍人、呉から許可を受けて宙を飛んで今帰って来たとのことでした。とにも角にも、私達生涯忘れ得ぬ悲劇悲惨の連続又連続でした。最後に私達は障害物を除去し、道路を清掃して、わずか一週間とは言え今次大戦の終局的な大惨禍を体験して血と涙の広島を去ったのです。

二〇

西義美

(当時第十教育隊第四十四戦隊・上等兵)

幸ノ浦基地にて、昭和二十年八月六日朝食後、漸次の休憩時間、内務班にて雑誌を読んでいました。突如閃光、頬熱く、さっと雑誌を顔をおおう。急ぎ海辺に走る。みかん色の火の玉が水上にて燃える。自分とはとっさに秘密特攻兵器の(レ)艇が炎上すると判断。突如強い爆風に襲われ戦闘帽が飛び体が揺れる。戦闘帽を拾うや内務班末下に避難するも、腰下が入る迄に兵舎のガラスが破碎し、足の方に落下するを知る。その後少し間をおいて轟音する。その後何の音もなし。おもむろに同僚とそろそろ海岸に出ると、最前の火の玉は宇品運輸部屋根の上になり、その後火の玉は大きくふくれるにつれ上空に昇ってゆく。色はだんだんみかん色が薄くなり、後に雲となり原爆雲となり上へ上へとあがって行った。

六日の午前九時頃、広島市出身候補生は出動装備にて本部前集合のラッパを聞き集合する。〇〇少尉以下数名は二台のレに搭乗、宇品軍用栈橋に急行し、運輸部貨物自動車にて中心部に急行するも、皆実町電停手前にて電車の架線落下のため進行できず、車を捨て、鉄カブトをかぶり、架線(電車及電線)の下をくぐり、御幸橋を渡り、駆足で紙屋町に到着する。時刻は午前十時五分位であったと思う、電鉄前あたり迄は、建物半壊全壊あるも炎上はまだしていた。鷹野橋付近から国泰寺、紙屋町はほとんど全壊に近かった。印象に残るは、国泰寺の楠木が根本十尺位を残し、ロウソクみたいに炎上していた。電柱は勿論である。福屋、中国新聞社の道路側壁には数十名の人が電車を待っていたのであろう。立ちすがったまま髪は焼け、衣類もなく、顔は骨がでる位に焦げていた。顔を見たのでは、男性と女性の区別ができない。硬直と角度の関係が収容しようとしても、前に倒すことは割合困難であった。紙屋町交差点の西側の電車は木片はなく、丸焼で顔を窓に近づけることができない。鉄骨が熱く、車中にはがいこつとなった骨類が山のように散乱していた。福屋前、白島線角の公衆便所横には二、三歳位の子供が彫刻の如く四つんばいとなって硬直していた。生きた人数はあまりなく静かであった。ぞくぞく消防(自警)、消防団の人が入って来た。相生橋まで来て状況報告のため帰隊した。時の指揮者他中隊の幹候上りの少尉二、三名、同僚の兵の名前は他小隊のため記憶がない。その報告と部隊連絡(曉部隊本部)の指示により、江田島幸ノ浦戦隊より二次三次にわたり救援、道路の開通に派遣された。その後小生は輸送に代り、負傷者の輸送に上陸用舟艇を指揮し、軍用栈橋から似ノ島、金輪島方面にかわり、その後上陸部隊の湯と食糧を朝、昼、晩輸送する。勤務替えとなったのも市内出身のため、身内の心配等があったためであろう。

七日であったとおもう。軍用栈橋で李グウ公殿下死亡の見舞いにゆかれた第二総軍司令官畑元師に勤務中の報告をしたけれど、畑元師の後姿は取色強く沈み、重くわびしかった。

十年前後から白血球不足、体がだるく、心臓が弱り、顔色が蒼白にたった。昨年検査、広島上川役所原爆福祉センターで要注意と言われ、最寄りの病院で精密検査をするようにとのことであった。

二一

松本宇八

(当時海上特別挺身隊第四十九戦隊・見習士官)

江田島幸ノ浦において、朝食のあと休憩時間で室内にいた。閃光を感じた後、しばらくして突如爆発音と風塵の中に入った。敵機の襲来と思った。負傷者はなかった。それから待機指令があり訓練は中止となった。基地から広島を眺めると、火災の煙が広い範囲にあり、たしかにキノコ雲が上空に見えた。ガスタンクの爆発かも知れぬと話し合った。昼になって広島へ救援の出動命令あり、大型舟艇で宇品へ向った。

私は船舶司令部に部隊到着の報告を命ぜられ、伝令一名を連れ部隊をはなれた。市電の事務所が本部が置かれ、消防班と救護班に分かれた。私は救護班となり、市電の事務所後方を担当した。負傷者を本部前の広場に運んだ。夜を徹して作業した。翌朝四時近く私は次の転進地、市役所の偵察を命ぜられ、伝令二名を伴って瓦礫の街を縫って進んだ。広島文理科大学の建物が窓に灯がともっているように静かに燃えていた。赤十字病院の前に出たところ、前庭に人が集っていた。近づくと私達の靴音が聞こえたのか、どよめきがあった。水筒の水を分けてやりながら奥へ進んだ。所々に人が倒れている中を白衣の勇士が救護活動に働いていた。婦長らしき人に救護隊は間もなく来るでしょうと告げて市役所に向った。

夜が白々と明けて来るころ市役所に到着した。建物はほとんど全焼していたが、地下室や隣接の公会堂跡に負傷した生存者が残っていた。救援作業は昼すぎまで続いた。被災者におにぎりが届いたが、食べ得る人はほとんどなかった。収容者は次々に息を引きとっていった。

夕方県庁跡へ転進した。翌朝近くの広場で勤労学徒の屍体収容を数日続けた。中学生、女学生の折り重なって倒れた姿は目も当てられぬ悲惨さであった。この作業の後半になって地方の人の救援隊や、肉身を探し求める人々がやって来た。ここで検視のあと、骨にした。

それから焼土の街に再び入り、縫針の会社で本部をおき、その周辺の焼屍体の収容をした。

二二

小川武志

(当時船舶練習部第十教育隊・兵長)

江田島幸ノ浦第十教育隊兵舎内(爆心地から約十二〜十三キロメートル)にいた。突然兵舎内がフラッシュをたい様な強烈な光で明るくなり、少時(二、三秒位か?)してスッと元に戻った。稲妻の様な感じとも言えそうであるが、光の色は全く異り、又、稲妻やフラッシュよりも光の持続時間がやや長いように感じられた。閃光後暫くして(三、四〇秒位か?)大音響と共に強烈な振動が襲って来た。余りの激しさに直撃弾を受けたかと思った程である。この音響と振動は一回だけで、

後は元の静けさに戻った。爆音振動の直後舍外に飛びだして広島方面を見渡したが、異状はないようでこの時はまだ原子雲には気づかなかった。その後時間を経るにつれて広島上空に巨大な積乱雲が急激に発達して行くのを認めた。昼頃にこの雲は異常な迄に発達し、頭上におおいかぶさるかと思われる程で肉眼でその盛上って行く様子が明瞭に確認され、更に発達の様相を見せていた。積乱雲の下の広島方面は煙ってまったく視界に入らなかった。この間に皆実町のガスタンクの爆発という情報(恐らく単なる推測)が流れた。隊内には何かという疑問が主で、不安や動揺は見られたかった。

六日即日出勤を下令され、被甲(ガスマスク)、鉄帽携行との指示があった。出勤時間については明確な記憶はないが、午後であった。大発(上陸用舟艇)連絡艇(小型高速の特攻用モーターボート)に分乗、宇品へ向う。宇品港へ入ると多数舟艇が負傷者を満載して来るのに出会った。負傷者はおぼろげにも手、顔等の露出部に真白に薬をぬり、服装はボロをまとったとしか言い様のない悲惨な状態であった。これらの負傷者は以ノ島病院があるいは宇品港周辺にあった船舶部隊兵舎を仮病院として、収容され屋上にあったものと推測される。宇品港に入った時は、それ程遅い時刻でもないのに、夕ぐれの様なうす暗い感じがした。市宮橋西側の舟だまりの石段から上陸、一応船舶練習部(宇品港方面から見て電車通り右側大煙突がある)に入る。ここ負傷者の収容所であっていた。船舶練習部を出て電車通りを市の中心部へ向う。この時は又明るくなっていくと記憶する。途中、ほとんど人影はなく消防署の前を通ったが、消防車はそのままで包帯をまいた署員が唯一一人だけであった。宇品附近の状況は御幸橋に近づくにつれて家屋の被害が目立ちはじめたが車が傾いている程度であった。特徴は市の中心部に向いた屋根は余り被害がないのに、反対側は魚のうろこを逆に撫で上げた様子が瓦立って乱れていたという事である。これは強烈な爆風通過に生じた急激な気圧の下降により、吸い上げられたものと推測された。御幸橋より広電本社前に到り、ここを部隊本部として一応待機する。日没後宿所集め偵察を兼ねて、広島文理科大学(広島高等学校かと思っていたが、地理的に見て高等師範学校か)に入ってみた、コンクリート造りの校舎はしっかりしていたが、内部は全壊していた。窓ガラスが散乱し軍靴の下でバリバリと音をたてて、到底すぐに利用できる状態ではなかった。

六日夜再び広電本社前に戻る。広電本社の社屋は健在であったが、隣接の建物などは延焼していた。前方赤十字病院付近に火災が残っており、消火と患者の救出にあたる。間もなく火災もおさまり、患者の動揺も静まった様なので退去する。この病院のビルであったか、その近くの建物であったか記憶が明確ではないが、コンクリート造り三、四階位のビルの正面屋上が、爆風のため巨大なハンマーで打たれた様に凹んでいるのを見た。

七日早朝、市役所を経て、紙屋町交差点に進出。旧県庁跡地に戦隊本部を置き救護活動に当った。市役所正面玄関の石段は熱線の浸透した所から打撃を与えると、平らに剥離する状態であった。この建物は内部を片づけて負傷者の収容所にきめられていたと記憶する。紙屋町交差点では電車数輛が脱線あるいは覆し、赤茶けた鉄材だけを残して全焼しているのを見た。下士官兵集会所(紙屋町交差点手前の道を右へ百〜二百メートル)の建物は外観は残っていたが内部は一物も余さず全焼し、床に厚く灰がつもっていた。どこであったか記憶しないが(市立病院かと思っていたが当時市立病院はなかったとのことである)木造棟(あるいは校舎であったかも知れない)二、三棟が残り、周囲に負傷者が多数集っていたと記憶する。以後八月十二日頃まで現地において救護に当った。

(以上の記述中の方向は全て宇品より紙屋町に向って記した。)

六日夜、広電本社前まで進出。赤十字病院付近に残っていた火災の消火と患者の救出にあたる。七日早朝紙屋町交差点に進出。県庁跡地に戦隊本部を設置。以後八月十二日頃まで現地にて負傷者の救出、遺体処理、焼跡の整理・道路の開通等その場に応じて必要な作業を行なったが、余りに多くの事がありすぎ忙ざたされて、個々の詳細については余り記憶に残っていない。

私は戦隊伝令として焼跡の瓦礫の中をずいぶん歩き回ったことを記憶している。私の所属した第四十九戦隊の主な行動場所は紙屋町交差点を中心として紙屋町、大手町、八丁堀、及び現平和公園方面であった。市役所の建物は先にも述べたように、負傷者の収容所にあてられていた。船舶司令官佐伯中将が広島戒厳司令官、救護司令官として、袋町付近であったと思うが、瓦礫の中に天幕を張り総指揮に当っておられた。

尚、当時江田島幸ノ浦にあった第十教育隊というのは、船舶特別幹部候補生(旧制中学三年修了以上の志願者で、年齢は満十五歳以上二十歳以下)を中心に編成された水上特攻隊の訓練基地で、広島に出動したのは本土決戦に備えて訓練中の第四十一戦隊〜第五十戦隊と五十三戦隊の十一ヶ戦隊(一ヶ戦隊約百名)の全員であった。中国地方最大の都市であり、且つ最大の軍事基地であった広島が一撃の下に壊滅し、爆心地付近にあった歩兵補充隊をはじめほとんどの陸軍部隊が全滅した時、直ちに出勤し得たのは、爆心地から離れた宇品方面にあり被害の少なかった船舶部隊であったのは当然と言える。

帰隊後一部の者について軍医の検査があった。九月上旬、復員迄の間に四十九戦隊に関する限りでは、全員健康に異常はなかったと思う。又、第十教育隊内でも当時特別の病人がでたという事は聞いていない。私自身も今日迄放射能によると思えるような病気はしていない。

二三

戸嶋頭

(当時船舶練習部第十教育隊・上等兵)

江田島幸ノ浦基地にて本土決戦という状況に備えて連日(レ)艇訓練に熱中していた。八月六日午前八時頃、その日の任務に備える前の注意事項などを聞く為に、舎内に整列していた。同十五分頃、舎内が一瞬稲妻の何十倍もあるような光に「ピカッ!」と輝いた。我々は、ハッと思っただけで、後は「何の光だろう」とささやき合った。そして三、四〇秒後「ドカーン!」という大音響と共に兵舎の出入口の扉がちぎれる程の爆風がきた。隊員各自は敵の至近弾が炸裂したと思い、とっさに整頓棚の下で毛布にくるまった。すぐ「防空壕に入れ!!」という命令がでて隊員は裏山にある防空壕に入った。しかし、その後光も爆音も爆風も何もなく、静けさを取り戻した。壕から出てみると対岸の広島市の上空に見たこともない程巨大なキノコ状の煙雲が上っていた。正午頃「広島でガスタンクが爆発したらしい。」という情報が入った。午後四時頃「広島でガスタンク爆発で被害が大きいから救援に行くべし。」との命令がでた。この時出勤した戦隊数

は不明であるが、小生ら四十六戦隊(百〜百五十名)は、五時頃大発艇で宇品へ向つた。

幸ノ浦基地を五時頃大発艇で出発し、宇品に夕方着く。棧橋へ着いた途端、町の光景は異様さを漂わせていた。負傷者がトラックで山のように乗せられて運ばれてくる。被服はちぎれ、髪を振り乱し、黒焦げの顔、手、足の折れた者、これらの患者は舟で似の島へ行くらしかった。宇品町一帯は大した建物の被害もなかったが、一歩市内に近づいてみると、それまでの町は消えていた。

道路の両側は老若男女の死傷者で、足の踏み場もない程であり、苦しみのうめき声、泣き叫ぶ悲しみの声、これが地球上の光景だろうかと思われた。

たまに、一つ二つくずれ残った建物には負傷者が満員で、ごった返していた。死んだ人はそのまま放置されていた。

焼野原は一面炎々と燃えつくし、夜はかわらなくの間から青白い火のおが異様な匂いの煙と共に燃え上り、まるで地獄絵であった。

くずれかかった板塀に誰が書いたのか次のようなビラがはってあった。「特殊爆弾が投下された。町は無くなったが、日本にはまだ山河あり、我らはいよいよもつてこの戦いを勝抜くために奮起しよう。」この時、小生は初めて特殊爆弾による被害であることを知った。

直径三〇〜四〇センチメートルぐらいの松の木が幹の途中で折れて折れていた。爆風が如何に強かったかを思い知らされた。

閃光を受けた人々の膚は黒く焦げただれ、白い歯と、むきだしの眼球だけをギョロつかせて助けを求める負傷者は、口を覆うものがあった。「兵隊さん、助けてちょうだいや。」とせがまれても、我々はなすすべを知らなかった。

わが戦隊は四〜五班に分かれて作業した。作業内容は死体の火葬、道路の整備、患者の看護など、市民に対しては最大限の救援活動をした。

八月六日、戦隊集合、各班編成をしたのが日没後、場所は電鉄本社付近。作業は夜十時頃まで続けられた。小生は死体の火葬をなす。四人一組で扉のようなものでタンカを作り、死者を方々から集めて一定の場所に十数体を積み重ね、その上に薪を積み、重油をかけて火葬した。

八月七日、駐屯地を浅野泉邸に変えて火葬作業、浅野邸は壊滅していたが、ヨロイ、カブト、刀剣などの類が焼けていた。邸の庭園らしい所に十数人死んでいて、当時では珍しい服装(洋装や和服の女性)の死体であった(註・当時、邸内に第二総軍の女性通信員がおり外電を傍受した)。

八月八日、町名は不明であるが河岸の空地に駐屯。火葬作業を行う。ドラム罐半切の風呂にさかさまに裸のままつかみ、そのまま死んでいる中年女。閃光がいかに熱かったか想像される。暑い夏の陽ざしに死体は内臓が腐乱して大きくふくれ上り、鼻穴からはドス黒い血状の液、肛門からは腸の一部があふれだしている。軍需工場の焼跡で揃いの服装でゴロゴロ死んでいる女子学生達。百人以上いるはずだということで発掘したが五十数体しかわからなかった。何列隊にくずらりと並べた死体は悲惨さあまりないものであった。河の名は不明だが、河に死体が木片などと共に大きくふくれ上って何十体となく流れてきた。

八月九・十・十一日、この三日はどこに駐屯したかは全然思い出せない。しかし従事していた作業はやはり死体火葬、道路整備などである。

八月十二日、いったん帰隊したが翌士一百再び「救援作業に出動すべし。」との命令を受けた(この救援には小生は身体をこわし不参加)。二度目の作業は二、三日続けたと思う。この時前記作業の他、似ノ島で患者護にあたった班もある。隊員の話では患者は髪が抜けたり、ケロイドのものや、全然外傷はないがコロリと死んでいくものなどあった由。

六日から十一日まで救護作業に従事し、十二日に帰隊、直後の身体の調子悪く、特に胸部がつかえるような症状であったから、診断を受けた結果、「急性気管支炎」とのことで練兵休を言い渡された。従って二度目の救援作業には参加しなかった。四、五日で回復した。

二四

篠原正身

(当時第十教育隊四十四戦隊・上等兵)

幸ノ浦基地にて朝食準備中、(レ)艇が炎上したのかと思われる様な真赤な閃光と大音響で、窓硝子が破損し、隊員は床下へ入る者防空壕に逃げる者で混雑した。暫くして出て、海岸から広島を望むと原子雲が天高く盛上り、海は津波を思わせるように波が打ち寄せていた。隊員の中に広島市出身がいて、都市ガスのタンクが爆発したのではないかと想像した。

六日の午後、演習で整列の際「広島に緊急事態が発生したので、救援に出動するから部隊に帰って来なくても良い様に準備して當庭に集合せよ。」との命令があり、十三時半集合し、広島に出動する者と、似ノ島検疫所に行く者、小隊毎に別れて出発、私は高速艇にて宇品棧橋に上陸しました。棧橋からそれに通ずる道は、衣類がボロボロ、衣類に覆われない部分は火傷で腫れあがり焼けただれ、むごい姿で立っている者、死者も多数いた。まさに生地獄の感の衝撃を受く。

六日、収容した負傷者を宇品棧橋へ搬出。一方千田町の山中高女の消火に当る。宇品電車庫側に野営。勤労学徒男生徒らか、翌朝生徒の死者多し。

八月七、八日、昭和町の整理に行く。京橋川に勤労女学生徒の死体あり、伝馬船で引き揚げ、田村中尉が身許確認の上火葬にする。六体位と覚ゆ。昭和町は疎開した跡で生徒が跡片付けをしていて被曝し、川へ飛び込んだものと思われる。又、看護婦がセメントの門柱が倒れた下敷きになって死んでいた。同様に火葬にする。町の整理を行う。

九日、赤十字病院にて死体の処理を行う。通路内外に死者多く足の踏み入れる余地なし。正門前の広場にて数十体を火葬にする。芦品部隊の死者が多数あり。

十日は、二部隊前哨に整理に行く。牛一頭巴桶車と共に倒れている。道路作業を行う。

十一日には、控衛隊附近の整理に行き、道路作業を行う。

八月十二日、ソ連参戦の為部隊に帰營。

二五

川網重治

(当時特別攻撃隊・特別幹部候補生上等兵)

幸ノ浦基地1隊(師団直屬特別攻撃隊訓練隊)の兵舎、一階で、小生が小隊長の朝食後の食器の跡かたづけの為に小隊長の部屋に入った途端ドカン。ピカッ!続いて再びドカンと猛烈な爆発音があり、まさに兵舎が爆撃にやられたかのようにグラグラと揺れた。とっさに空襲されたと思い、眼と耳を両手で押えベットの中にもぐりこんだ。しばらくして、誰かが宇品の方を見ろと言うので二階の窓から見たら似ノ島と峠島間の宇品方面が白煙でうもれ、大きなキノコ雲がニョキニョキと上方に拡大して行く。皆何か大事件が広島に起ったといういろいろなわさ話でもちきりであった。

午後1時に乗って広島へ視察に行った連中が帰って来た。報告によるとある者はスパイによる火薬庫が爆破された。ある者はガスタンクが爆発したとか誰もはっきりした原因は分らなかった。原因が分ったのは、次の日広島へ着いてから、ある学者みたいな人の話によって分った。その人は原子爆弾とはっきり言った。又、パラシュートで落ちて来たとも言った。

その夜は1日の訓練があり、一晩中(夜間訓練一週間の三日目であった)広島湾で乗りまわした。市内は紅蓮の炎に包まれ猛烈な火焰がなめつくしていた。我々は一体何事が起こったのだらうと不安と恐怖、又、好奇心もあり明日の出発が待ち遠しくもあった。訓練隊(三十名)以外はその日(六日)のうちに救助作業に出発した。我々はあとから命令が来た。

翌七日前午七時ごろ宇品棧橋上陸。隊員は中隊長以下三十名、四列縦隊で行進した。棧橋は破壊され倉庫は倒壊していた。宇品から御幸橋迄の間は、両側の家屋が倒壊又は半壊しており広場に負傷者が一杯ゴロゴロしていた。トラックで宇品方面へどんどん運ばれてくる人に出遇った。御幸橋の上に立った時、市内が己斐・横川の方面まで一面の焼野原にたっていたのにはびっくりした。一週間前に公用で市内に来たのが、今は夢のようであった。川には死体が浮いており道路の両側にはムシロをかけた死体が多数あった。市役所で休憩し、各小隊毎に分かれ作業部署についた。市内電車の惨状は宇品・市役所前・紙屋町と行くに従ってひどくなっていった。

作業場所は、市の中央にあたり、七日は幡町と電車道との間で、京橋川迄の区域の重傷者運搬を午後から行った。重傷者運搬作業中、京橋川の橋のたもとに老夫婦が足をやられて歩けないで「兵隊さん、助けて」と言ったが、「我々は、今、重傷者を収容中だからケガ人は待って下さい。」と答えた。助けたくとも命令に従わなければならぬ。翌日もまだ橋の所にいたから、ようやく収容した。運んだ場所はどこか、今は記憶がないが、そのビルの一階(現在の福屋デパートかと思う)に運んだ。そこには医者や看護婦がいて手当てしたと思う。その晩は今のキリンビール三階に軍服のままゴロ寝した。一時間交替で不寝番にたつた。夜立っている時「兵隊さん」と言ってまるで幽霊みたいな髪をした老婆がパッと倒れ、「水をくれ」と言って、そのまま次の朝近くに死んでいた。又、防火用水槽やの三川町の平田屋川の中に多数の人が死んでいた。八日目から死体収容の命令が下った。作業場所は中心部である。死体は幡町の寺(現在は教会になっている所)の境内の墓地に埋めた。最初は火葬にするため、崩れている煉瓦や倒れている墓石で焼場を作った。そして焚き木を探したが、この辺はきれいに燃えつきて、たき木がなかった。そのため5m²(深さ3m)の溝穴を掘り、そこに最初の日は五十人位埋めた。死体の上に死体を降した。死体が途中でつかかって下に落ちない時、死体の上に立ち下からつのはして引きずりおろさなければならなかった。次の日(九日)も死体運搬をし、埋葬作業を行った。この日は約五十三名であった。同じように穴を掘って埋めた。死体収容はタンカでおこない四人一組で五組があり、埋葬・穴掘りは六人でやった。小生は埋葬の方だったが臭くて、支給された”ノリのかんずめ”のノリを手拭の中に入れ、それをマスクにして作業をした。母親が両脇二人の幼子を抱いて自分は黒焦げなのに子供はそのまま、離そうとしても離れない位しっかり抱いていたのには涙がこぼれた。夜は十一時頃、食カンを取りに、火事になって両側から燃えている町の中をひた走り、市役所まで取りに行った。八日、九日、十日は幡町、放送局隣の小さい焼けたビルに泊った。屋上にあった防火用水槽の金魚が、生きて泳いでいたのには何かホッとした。ハエも蚊も全然いないし、緑のない死の町で用水の赤い金魚だけが涙にちらついて離れたかった。

一人の母親が、幡町国民学校前で泣いていた。自分の娘、国民学校一年生が潮空襲警報でいったん帰り、警戒警報で再び登校し、そのまま帰って来ないと言っていて、八日の日泣いていた。またある人は、疎開先から急ぎ帰って来て、自分の家の跡で灰を「兵隊さん、これは人間の灰ではないのか」と尋ねていた。夜、流星の如く真黒な空の中を火の玉が飛んで行くのが、再三見えた。十日は受持ちの道路を自動車が通れるように清掃作業をした。ある婦人から取り立てのブドウをもらって食べた時とても美味だった。軍律厳し中、地方人から食物はもらえなかった。腹が減っても地方の消防団のたきだしをもらったら叱られた。十日、ソ連参戦のため特攻隊要員は全員十一日の朝引き揚げた。

戦後、長湯をするともまいが起り、よくフラフラして倒れたりしゃがんで急に立ち上るとフラフラする時もあった。十年前広島へ来てから原爆病院でみてもらったら何でもないと言われた。三年前、人と話している時、眼がかすみ二重にその人が見える時があった。すぐに治ったので病院には行かなかった。何か手術とか怪我人を見ると汗がでて真青になり血が頭から下るようになることがある。戦前はそんなことは一度もなかった。

なお、私は昭和二十年九月五日、広島駅発の貨物列車で郷里福島県郡山市へ復員したのである。

二六

山村重定

(当時陸軍水上特別攻撃隊第四十六船隊・陸軍船舶特別幹部候補生)

小豆島の船舶特別幹部候補生隊の出身者を根幹とする陸軍水上特別攻撃隊は、別名を海上挺進隊ともいい、特別幹部候補生隊員の特殊訓練を、江田島最北端の

幸ノ浦で行っていた。二十四ノットの、高速艇はベニヤ板製ではあったが、二五〇キロ爆雷を装備して必死の猛訓練を行っていた。この隊は防諜上第十教育隊(船舶練習部)と呼ばれ、その真相は戦後も発表されざる状態にある。即ち自己の所属部隊四十六戦隊以外のことは、全く知ることができない秘密部隊であった(現在戦死者一、六三六名と発表されています)。

八月六日午前八時十五分、ピカッと閃光が走った。続いてドンと地底から響く大音響で兵舎で坐っていた隊員は、五寸位もはね上がったようであり、又、通行中の隊員は爆風ではね飛ばされた。全員兵舎を出て宇品港の方角を向くとはるか洋上、広島市の上空は今迄の晴天が曇天に変わり、巨大な原子雲が生きもののように対流作用を続けていた。

突然ラッパが鳴り響いた。各戦隊長集合である。「敵の新型爆弾広島市に投下さる。中国地区各基地の陸軍船舶部隊は、全力をあげて復旧作業に従事すべし。」と、船舶司令官佐伯文郎閣下の命令が来た(世にこれを布告という)。基地お活動を開始した。大発(大型発動艇)・小発・イ号高速・カロ艇・レ(特攻艇)が宇品へ輸送を開始したのだ。私は丁度、三時間後に宇品町に上陸、そこで建物の倒壊と負傷者を約二十名見たが、まだ本当の内容を知らないまま広島市内に入る炸裂後、三時間しか経過していない広島市内は、地面が焼け土のように熱く、己斐行き(違うかも知れない)の標示をした電車が爆風で三十メートルも飛ばされており、線路もアメのように曲り、又、どうした訳かなくなっている箇所もあり電車を北上しようとしたが歩行困難であった。負傷者を一定の箇所に運びながら、先ずふさがった道路の(幹線) 開通を目標と定められた。山あり谷ありで、全く道路一本に三時間もかかり、午後三時頃ようやく軍用トラックが通れるような道路となった。治安維持も僕らの力のみと住民を守った。

明治橋から見ると川底に死体が並び、又、中国新聞社も社屋を残して人影もなく、芸備銀行は外郭が残り、事務室内の約十五名程死んでいた。又、浅野侯の邸という大きな屋敷があったが完全に残っていたのは能倉のみであった。街中の残った建物の一部には、負傷者が最後の力をふりしぼって書いた焼炭書きの「このうらみ忘れるな」とか「人類の敵」とか子供や親に書いた伝言・遺言でいっぱいであった。小さな橋(名称不明) 渡ったとき、ランカンに手をはさんでブラ下っていた死亡者を、おろした。各隊とも、死体収容・負傷者救護作業を続け、火葬を毎日々々おこなった。ある所で背丈位の大型金庫があったが、開けてみると紙幣は全部燃えていた。広島赤十字病院へ八月十五日、負傷者を運んで行った。医者も看護婦も血だらけであった。廊下は負傷者で埋り、投棄も余り行われず、傷口の治療もヨーチン、赤チン程度、全部の治療が間に合わず廊下で次々と死んでいく。若い僕ら(満十八歳)の胸は痛んだ病院の丸型大時計のガラス破れていたのが印象にある。ここで終戦を知ったが、作業は毎日々々果しなく続き八月三十日に及んだ。

広島県庁の広場には、黒塗りの自動車も鉄クズとなっており大きな谷のような穴ができていた。これらを平らにした。八丁堀附近も整理した。死体が多かった。師団司令部附近を整理したが完全な死体は一つもなく、身元不詳の首三個・足六本位しかなかった。全く無人の師団とも誤解されるような状態であり、小銃の鉄の部分が十個位と大砲の車輪が一個あったのみ全くの平地であった。八月十六日作業に着いたとき、服を換え、靴を換えたが、皮は手で引っぱるとちぎれる程の焼けようであった。師団司令部の作業後、大学と広島高等師範学校の跡で作業した。校庭に寝たが水は地面からでている水道管から呑んだ。作業地点が判らなくなったがミカンの罐詰が沢山あって、負傷者や兵隊も仲よく食べた。

食糧の配給は毎日々々生存者が一列に並んで配給を受けていたが、全く動けない負傷者には僕らが渡して歩いた。全部に支給するカンパン数がなく、又水筒の水は「兵隊さん、水をおくれ」という声で何時もからっぽになっていた。まったく地獄の広島市であった。

八月三十日作業終了、九月十二日幸ノ浦を出発、十六日夜帰宅した。

体がだるく通院したが、医師は栄養失調と診断した。一カ月位で元気になり現在に至るが、風下の黒い雨にあたった人は死亡していると聞いている。

二七

佐々木博

(当時の船舶練習部第十教育隊・兵長)

江田島幸ノ浦第十教育隊兵舎の中で、朝食後演習にでかける準備をいそぎながらしている時、すぐ近くに爆弾が炸裂、大音響と共に兵舎が地響を立てたような具合に感じました。ただちに、裏山の方の防空壕に避難しました、兵舎の中で私は閃光を感じませんでしたが、外で掃除をしていた者は爆発音の前にポーッと熱く感じたということです。

私たちは、訳が判りませんが、「広島市皆実町のガスタンク爆発したもの如し。負傷者多数につき救助作業に、広島に出動すべし。」との命令により、昼食後幸ノ浦から出発。宇品の岸壁に上がると、多数の負傷者が火傷をして赤いはれあがったり、白い薬を塗ったりしてトラックで運ばれて来た。それを見ると胸がつかまって何とも言えない気持ちでした。隊員の中で、二名真っ青になって、倒れそうになり、幸ノ浦に帰されたものもありました。

電車通りを宇品から北上。住宅は硝子窓などこわれ、家財道具はちらばり或いは傾き、住民は何かしらボカーンとして虚脱状態。電車は、所々にあったが窓がほとんどこわれていた状態。空には時々煙が回って来て、うす暗くどんよりしていた。御幸橋の辺りから三輪車で食糧を運んで来たので、人々が群って貰っていた様です。

千田町辺りの家が燃えていたが、広島電鉄会社の建物を本部として、各戦隊毎に救援の受持区域に向った。爆心附近は余燼がくすぶり、大変熱く目的地迄やっとなどついた程でした。

赤十字病院のみ残ってその廻りは、見渡す限り焼失してしまったようでした。

宇品→御幸橋→赤十字病院と北上して、左に入った橋の近くを四十一戦隊の本部にして、先ず負傷者の救護作業につく。焼残り板があれればそれで応急タンカを作

って、川の土手には沢山の負傷者が火傷を負い、火災の熱さをのがれるために川に入ったり、土手に這い上がったりして、我々を見ると「兵隊さん水、水！」と水を求めていた状態でした。舟艇で負傷者を運ぶとかで、橋のたもとに運ぶ作業を夜通しかかって行いましたが、集めた負傷者の中には朝方明るくなるにつれて、死んでいったものも多かったです。

次の日も負傷者の救出に当り、三日目か四日目あたりから、屍臭が鼻を突くようになり焼く事にした。遺留品を集め、死体を集め、焼残り木を積んで火をつけ、毎日々々夜おそく迄かかって火葬にしました。これも二日～四日位かかったと思います。夜、あちこちで焼く無数の火を思いだすたびに、戦争のむごたらしさをこれ程痛切に感じたことはありません。

我々四十一戦隊は出陣も近いので、終戦前に江田島に帰り、(レ)艇の訓練を始めましたが、二～三日後に終戦になりました。

二八

和田功

(当時船艇練習部第十教育隊・上等兵)

広島県安芸郡江田島町幸ノ浦海岸地区に、昭和四十二年十二月三日、旧陸軍海上挺進戦隊訓練基地跡に建設した慰霊碑の碑文にありますごとく、昭和十九年戦局の頽勢を挽回すべく陸軍船艇特別幹部候補生(風光明媚なる瀬戸内海、小豆島、現東洋紡績株式会社跡で三カ月訓練)の当時十六歳～十九歳までの少年を主体とし、全陸軍から選抜せる下士官、将校の精鋭を以て編成されたる陸軍海上挺進戦隊(第一戦隊～第五十三戦隊)は、二百五十キログラム爆雷を装備せる「ベニヤ製」モーターボート(元第五戦隊赤穂友義氏の談、第五戦隊は比島派遣の途中海没し、台湾の高雄に上陸、そのまま台湾軍に編入され台南市の南部に基地を設営していましたが、比島・沖繩戦での教訓により、海岸の基地は敵軍の上陸前に徹底した攻撃を受け、出撃不能となる恐れがありとのことで、急きょ山地に秘匿し、出撃の際はトラックで海岸まで輸送する方針が決まりました。そこで新竹市から二十キロメートルも奥へ入った高砂族の蕃社も、ほゞ丘、台湾山脈の山ひだの谷間へ進んだわけです。そして八月十五日終戦を迎え、九月に中国軍が接収に来るといので、戦友六人語り合って記念のため、台湾人の写真屋に撮ってもらったのが第一巻二五七頁の写真である。)により一艇以って一船署を任務とし、昼夜を分かたぬ猛訓練を励み、私達は三菱造船所沖、安芸郡坂町の横浜沖に、停泊中の輸送船をめぐって突撃訓練を、一艇に三、四名が教官(小隊長)と共に乗りこみ実戦さながらの訓練を行った。ある時はその輸送船に撃突し、あわやボートが横転沈没と言っているような場面もあった。二百五十キログラム爆雷を敵艦の心臓部に、やみに乗じて静かに接近し、爆雷を投下して六～八秒位の間に、安全圏まで全速力で逃げる。接触の角度やあらゆる状況を仮定し攻撃、爆雷投下の呼吸等訓練した。第一戦隊より第三十戦隊が十九年九月以降続々沖繩・比島・台湾へと征途のぼり、昭和二十年一月比島リンガエン湾の特攻をはじめとし、二十年三月以降沖繩戦に到るまで、壮烈鬼神も避く肉薄攻撃を敢行し、その任務を全うせし者、あるいは戦局の赴く所やむをえず挺身陸戦に奮戦せし者を含め、戦闘参加の勇士二千二百八十八名中、再び帰らざる隊員実に一千六百三十六名の多きに達し、挙げたる戦果敵艦船数十隻、誠に赫たるものありしも、当時は秘密部隊として全く世に発表されざるままに終った。而して又、第二次訓練が再開され第三十一戦隊以下十二個戦隊が九州・四国・紀州の各地に展開し、米軍の本土上陸に備え更に第四十一戦隊以下十一ヶ戦隊は、当時幸ノ浦基地で訓練中であった。第四十四戦隊は、戦隊藤井昌三(現伊丹市陸上自衛隊)・中隊長は田村繁雄(現広島市在住)以下、各小隊長は小立乾、金谷大蔵、増田則三(現東京都在住)、宮崎文雄、高倉美夫、渡部五郎、田村勝美、金田碩述、米良高德(鹿児島県出身、私の小隊長、昨年未より二回文通したが返事なし)、渡淳(現島根県在住)以上。小隊長は大学勉学中、学徒動員令が下り軍務につき、見習士官であったが後少尉に任官、その下に特幹二期生一～二名、特幹三期生五名位で編成されていたと思う。

昭和二十年八月六日当日、我々は朝食後朝の訓練にとりかかる直前の間、突然海を隔てた広島方面よりピカッと閃光が輝き(我々の兵舎は広島市内が一望に見える海岸にそってあり、入口があった)、何事が起きたかと光の来た方向へ目を向けた直後、今度はドーンという大音響があり兵舎が激しくゆれた。私は直感として、皆実町にあるガスタングが爆発したものと思い戦友と話し合っていた。多くの戦友もその様に思っていた。後に一期生で北海道の佐々木博氏(第四十一戦隊助教)もその様に伝えて来ている。みるみる内に広島市内一円が雲につつまれ、市街が次第に見えなくなり、遂には完全に見えなくなった。キノコ雲が市街中心部付近から、すさまじい勢いで中天にかけ昇っていく。段々と高くなり地の底から湧き出る如く次から次へと立昇り、今さらながら恐ろしく壮大たる光景であり、私は呆然と眺めていた。

当日午後、広島市が特殊爆弾により大火災を起し建造物が倒壊し、市中は全滅になった。又、広島の一部隊も被爆、負傷者が続出、全滅したので、我々は直ちに救援部隊を編成し、広島市の復旧、負傷者の救護に向うべく出動命令が下った。直ちに上陸用舟艇に乗船、宇品船艇練習部にある軍用栈橋に上陸した。一步広島市へ足を入れた一瞬、唾然となり身の毛がよだち身振りがした。すでに運輸部の岩壁にみんな血の海からはい出たような姿をして、我々の救護を待っていた。頭から顔・手・足、全身血だらけとなり、瀕死の体を横たえていた。うめく者、目だけが血走りギラギラと輝き、何とも言えない異様な光景であった。ただむごいの一言である。後日、茶谷君、西君らの広島在住者に聞いたのであるが、広島市内出身者六十七名位が原爆投下直後、偵察隊として市内の被害状況等を調査に出たと話していた。

我々は徒歩で、東千田町二丁目広島電鉄本社に到着した。社屋は相当破壊されていたが、右側の建物を我々部隊救護本部とされた。午後四時過頃到着したように思う。広島電鉄本社の周辺、並びに上陸してから木部までの途中の状況もすでに伝えられている如く、見渡す限り猛爆を受けた如く、一軒の家もなく焼野原となっていた。服はボロボロに焼けて垂れ下り、膚を出し、頭から血を流し、全身血に染り、傷口は痛々しく、ぼう然と歩いている者、皮膚を焼かれてまるでボロをぶら下げたように垂れ下り、歩く力もなく我々の救援を待っていた。まさに地獄の絵それ以上の悲惨な状況であった。多くの人が走った如く、「兵隊さん、水を下さい!」「水を下さい!」と哀願された。虫の息で全身の力をふりしぼり、「水!水!水を下さい!」と言っていた。最初は水を多く与えてはいけないと注意さ

れていたが、誰言うとなく、どうせ死ぬのなら水を請われた通りに与え、死後の冥福を祈ってやろうではないかということになり、多くの人に水を与えた。一滴一滴の水を、おいしそうに飲みまし、まったく満足した様子で、負傷者はよろこんだ。その一滴が最後の死水であったかも知れない。幸いにして広島は水が多くあり、至る所水道管が破裂してふきだしている所が多かったので我々ものどが乾いたとき、しばしば飲んだ。

一日目の六日は、広島電鉄本社の周辺、工業専門学校周辺に逃げて来た負傷者を背負いながら、その学校の校舎の中へ応避難させた。タンカもなく近くにあった古い戸板を探しだし、タンカの代りに使用した。重傷を負った人、元気な者でも古い戸板のせると痛いのに、その当時は止むを得ず乗せて運んだ。痛い痛いといううめき声を聞きながら作業をした。又、中には痛さのあまり「兵隊さん、殺して下さい!」という重傷者もいた。当初はその様な作業を夜遅くまでした。その様な状態にて食欲もなく、二回分位の携行用乾パンもあったが負傷者に与えた。その夜は寝る所もなく、学校の校庭に青天井の夜空を眺めながら寝たが、なかなか寝つかずその日の出来事が走馬灯の様に頭の中に浮かび疲れがでてか、そのうち浅い眠りについた。救護本部に到着した直後、比治山橋西詰こ部隊葬部が居住されていたので将校(氏名不明)と私と二人で、鷹野橋から比治山橋に通じる大通りの中央を通りながら探して行った。途中は電柱が倒れ、電線は垂れ下り、家屋という家屋はみな倒壊して焼け、燃えつづけていた。熱くて道路の両端は歩けなかった。どうにかたどり着いたが、附近一帯は焼野原となり消息不明であった。

八月七日、比治山橋西詰附近一帯の死体、特に川に浮いて流れている死体を川から引揚げる作業をした。その日はこの附近にて野宿したが、この日の記憶は余りなく、舟はあったが舟をこぐ者がいなくて困った。小隊長が探していた。作業にも慣れぼつぼつ食欲もでてきた。

八月八日、相生橋東詰の産業奨励館(原爆ドーム)の下の川岸にたどり着く。元安川に流れている死体の収容作業が始まった。満潮になると舟に乗って上へ流れ、引潮になると下へ流れて行く死体を一つずつ引揚げた。川の中に飛び込み、泳ぎ、足に綱を掛けて岸から引寄せる。一日約五十〜六十体位火葬した。特に軍人が多かったように思う。みんな水死体にある如くブクブクと膨張し、鼻から水がブクブク、泡を吹いていた。水に漬った皮膚はすっかりふやけて青白く面変りしていた。強く皮膚を引張ると、ズルッと皮がむけたりした。材木を探して来たと言っても、焼け残った樹木で、たかなか燃えにくくて苦労した。先ず探して来た木を並べ、その上に死体を並べる。又、木を並べ又死体という具合に重ねて火葬するのであるが、火つきが悪いため宇品から船舶用の重油をもらって来てかけた。勿論、住所・氏名・性別・年齢・特徴等全部記録した。分らないのは推定にて小隊長が一人ずつ記録した。全員合掌し冥福を祈る。時間が経過するに従って、だんだん悪臭が強くなった。川の中へ爆風で飛ばされたのか、暑いので川の中へ入り溺死したのか、猛火に包れ煙に巻かれ、逃げ場を失い、川へ飛びこみ死んだのか、案外水死体が多かった。当時、柳井の船舶工兵隊という兵隊も来て、同じ作業をしていた。夜は紙屋町電車停留所の安全地帯(当時は三角形をしていた。一個所で広島駅〜己斐・広島駅〜宇品・己斐〜宇品各方面に乗車できるようになっていた。)、自動車等が飛び込まない様に火を燃し、不寝番に見張りを頼みゴロ寝をした。七日と八日と二晩寝た。次第に悪臭にも作業にも慣れてきたのと、腹も減り食欲も順調になってきた、食糧は市内では調理できないので幸ノ浦から直接運搬したようであった。

八月九日は七日八日両日で相生橋での作業、水死体の収容・火葬も終わったので、大手町筋を南下しつつ建造物の下敷き、特にブロック壁の下敷きとなって焼死体となっているのを掘出して一個所にあつめ、一つずつ記録に書きながら火葬する。半焼死体となったのが多かった様に思う。姓別・年齢等も判明できず、一塊の肉の塊とたっていたのもあった。その他想像にあまる千差万別の形をしていた。段々と日時が経つに従って悪臭がひどくなり、傷口にはウジ虫が湧き、鼻の中、口の中、所構わずウヨウヨと身の毛もよだち、冷汗が背中を流れることしばしば。夜が来ると、その場へゴロ寝をし、朝起きてみると、その傍に半焼死体があり、びっくりするという事もあった。

結局八月六日以来六日間八月十二日頃まで、我々は負傷者の救援と死体の火葬が主な作業であった。その間死体の処理は約三百体位に達したと記録している。幸いに雨も降らず作業も順調に終わった。

幸ノ浦に帰隊後、数日間下痢が続いた。食当りか寝冷え位に思って征露丸を飲み続けた。復員後二年位してから激しい胃けいれんが周期的に起り、約二年位困った。別に原爆病も現在感じないが、消化器系統が弱くなった。

二九 炸裂

柴田富雄

(当時船舶練習部第十教育隊・上等兵)

梅雨もあけた。いよいよ本格的な夏の訪れた。仕事の手を休めて一服つけると、じっとしていても汗がにじんでくる。窓外に目を向けると紺碧の空に怪異な入道雲が重なり合い、地上の空には陽炎がもえている。ふと、もえ立つ陽炎の中に、あの日の「広島」の光景が浮かびあがった。火焰狂う焦熱地獄からはいあがったような全身焼ただれた人達、父母兄弟を求めて泣き叫ぶ子供の顔。ホコリで髪も黄色く見える婦人。累累と折り重たる死体、どこまでも続く瓦礫の山。修羅の絵巻を思わせるこれら地上とは、およそ対照的な雲一つない青一色の空。笑いを失った顔こうつろな目。力なき人々がトボトボと陽炎の中に見えかくれしながら、消えてゆく。

一、八月六日

ここは江田島の幸ノ浦にある陸軍水上特別攻撃隊の基地である。昭和十一年八月六日の朝、次の学課までまだ暫くの時間があり内務班では雑談一しきり、やがてそろそろ準備とこりかかろうとざわつき始めたその刹那、ピカーッ!と目もくらむような強烈な青白い閃光が室内をつつ走った。同時に皆の目が天井からぶら下っている裸電球に注がれた。「漏電だろ。」「いやそれにしては余り強すぎる」など、再び騒しくならんとした時(閃光を見てから爆音を聞くまでこの位の余裕

があった。)ズドン!と、あたかも百雷一時に落ちたかと思わせるような地軸をゆるがす大爆音が起った。一瞬爆弾投下の四文字が胸中をよぎる。場所は海岸にある衛兵所付近か?事務室の窓ガラスが大きな音を立て割れた。ハッとその場にうつ伏し、今来るか、今来るかと全神経を背中に集中して、次の爆弾の落ちるのを待つ。何秒経ったか、期待した音は全く聞こえない。そおと頭をもたげてあたりを見ても何の変化もありはしない。ただ天井の裸電球がブラブラ揺れているだけ。外を見ても何事もなかった様子だ。遂に重苦しい沈黙は破れた。そこここで小声でしゃべりだしたのが次第に大きくなり、皆起き上がった。爆弾投下ではないとすると、一休何の音だったのか…急に海岸付近が騒しくなった。何かと飛びだしてみると、おお!!思わず呆然として広島の上空を見上げた。そこには、この世のものとも思われぬまことに巨大な噴煙が空高くそびえ立っている。形は傘を開いた茸同然、広島市全域にわたりどっかと根をおろし、今にも戦いをいどまんとして、下界の人間を睥睨している怪物のようだ。何という不思議なそして不気味な煙だろう。あくまで澄みきった紺碧の空に騒然とうそぶくが如き怪煙の下は、どんよりと濁り漂う濃霧にも似た煙で、全く見えない。怪煙の右手にある太陽はその方にたなびく煙に包まれて、あたかも日食を見るように真赤だ。怪煙は一見微動もしないようだが、よく見ると、キノコ型の柱の部分には炎を包み、たつ巻にも似てかなりの速度で回転しながら一路上昇を続けている。一万メートルか、あるいはそれ以上にも達していると思われる。市街の方に目を転ざると、雨を伴っているようなドス黒い煙の下から時折サーッと火柱のあがるのが望見される。到底人間のかした業とは思えぬこの光景に一同驚愕の目を見張っていると、突然特徴のある爆音が聞こえた。見るとB29が一機、今しも煙の切れ目に輝きだした太陽にキラキラ光りながら退去しつつある。多分偵察にきたのだろう。畜生!!悪事からさめたような、一回思わず歯ざりした。上層から崩れだした怪煙は、あたかも急にできた白雲のように浮遊しはじめ、次第に下層に至り、やがてまったくその影を没し去った。かくも烈しい煙をうちあげた原因は、一体何だろう?やはり爆弾投下か?もしそうだとすると、よほど大量の爆弾を落としたのに違いない。あるいはまた、広島位一挙に壊滅できる程の威力をもつ新型の爆弾か?…想像を重ねるたびに、かたくなな頭は、ますます混乱する。正午、どこからともなく、先刻の爆音は市内にあるガスタンクの爆発によるとの噂が伝って来た。なるほど一応はうなずけないこともないが、何となく割りきれない気持ちだ。午後連絡艇の運搬訓練に引き続き、そのまま海岸で学課に移る。真夏の強烈な太陽の光線は容赦なく、さすがに元氣な兵士達も流汗淋漓、学課の早く終るのを待つかのようにふらふらしている。その時、わか隊の週番上等兵が走って来た。救われたような面持ちで、両注視する中に、上等兵は小隊長に報告した。「石塚隊は作業を即時中止して、直ちに本部前に集合すべし。」と……。一同素早く隊伍を整えて、本部前に駐足集合する。週番司令が広島出動の命令を掲示板に書き、今後の行動につき何彼と注意を与える。早速携帯口糧の受領にでかけた。炊事当番を除き他の者は内務班に帰り、またたく間に出動準備完了する。第一戦だけでなく内地も正に戦渦の中にあるのだ。広島被害の容易でないことは、あのすさまじい煙によってもうかかひ知ることができる。外地への出動ではないが、武者ぶるゝにも似た異常な闘志の全身にみなぎるを覚える。「小倉隊が行くぞ、次は草深隊か、石塚隊はまだか……」等、我々の間断なき無駄話の最中にも他中隊は続々と棧橋に集合しつつある。出動間際の緊張に皆黙々と歩を急がせている。早くも乗艇を完了したのか、ザザーッと、スクリューの騒音が殿(シガラ)にまわされて亢ぶっている。我々の神経をますますいらだたせる。漸く命令下る。今までの愚痴ほどこへやら、またたく間に舎前に整列・乗艇を終る。我等の艇はすこぶる快調、号令一下、幸ノ浦湾口から猛然と滑りだした。すでに宇品まで幾往復した操舵手の声高に語る市内の被害状況に耳を傾けたがら、前方を睥睨一同の面上には、何ものにも屈せぬ気迫がみなぎっている。宇品港が近づくにつれて、爆風の跡も生々しく瓦が吹っ飛んだり、トタンがめくれた屋根、ガラスのなくなった窓が視界にとび込んで来た。今しも負傷者を満載した一隻の大発が、似ノ島めがけて矢のように走っていく。目的の棧橋は負傷者、避難者を運ぶ大小の船が入り乱れて、舟艇の割り込む余地もない。負傷でもしたか、片腕を首についた一将校は、これらの整理に躍起になっている。止むなく別の棧橋から上陸する。本部(練習部本部)前には先発した他中隊も待機中だ。ここで次の命令を待つ。ふと我々は、そこここにうずくまる異様な人達の姿に思わず目を見張った。煤を刷いたように黒く汚れた顔…ボーボーに振り乱した髪は黄色く見える位のほりをかむり、ボロボロの衣類を身につけた素足の婦人…半分ちぎれたようなシャツを身にまとい、じつとうなだれたままの男…今にも何か叫びんとするように口をあけ、カッと目をむき、我々の方に視線を向けている一婦人の表情にはたとえようのない恐怖を抱いていることがうかがわれる。我々の通行に対してもドンヨリとしたうつろな目を向けるだけで、何の反応も示さない人達…。余りにも大きな苦しみが思考力を奪いとったようにも思われる。だが無気味な感じさせるその無表情な顔をじっと見ていると、そこには、「自分達いつの間、どうしてこんなみじめな姿になったんだ…教えてくれ…自分達だけがなぜこんな苦しみを受けなければならないのか…想像を絶するこの出来事は一体何が原因なのか…兵隊は何をしているんだ…早く助けてくれ」と、必死の思いで訴えているような胸迫るものが感じられる。ちょうど鋭利な刃物で切って無理にこじあけたかのように思われる大きく裂けたすさまじい火傷を負った人もある。長さ二、三十センチメートルにも達する位の火傷を手と言わず足と言わず、無数に受けているのだ。そこからは割れたザクロを連想させる赤黒い肉がのぞいている。折りしも負傷者を満載したトラックが入って来た。トラックの上に軍刀を手にして起つ一将校の唇がドス黒く変色し、ひきつるようにして、異様にふくれあがっている。この人達も又、烈しい苦痛に顔をゆがめ、車から降ろされるや、たちまち崩れるようにその場こうずくまってしまった。そこら中に満ちあふれる、地に引きずりこまれるような呻今の声、それにまじり、一層強く胸にひびく血を絞るような子供の叫び、死に直面しつつもお愛着断難く肉親を泣き求める傷者の姿。余りにも悲惨なこの光景はまさに地獄絵図同然。見る者をして思わず目を覆わしむる。本部付近では素足の女子職員達がコマネズミのように走り廻っている。土間には無帽の兵士が一人倒れている。外傷はないようだが、ここまで逃げて来て力尽きたものか…命令受領に行った将校の帰りが遅い…いいよ事態のただならぬものが察しられる。こうして待機している間にも市内の惨状が忍びだして、どうしようもない焦燥感を覚える。ようやく命令下る。石塚隊の目的地は八丁堀だ。ここは被害の中心地と聞く。あたりの空気を震わせて側刺と胸を衝く悲痛なる傷者の慟哭に必死の努力を誓いつつ号令一下、長蛇の前進が開始された。進むにつれて左右に立ち並ぶ家屋の被害の度はますます大きくなる。急に視界がひらけて瓦礫打ち重なる焦土が目に入る。燃え落ちた家、倒壊した家屋、壁など崩れおちて辛うじて立っている家、幹の焦げた樹木、道路に散乱する瓦、トタン、材木、板切れなど…道路沿いに建ち残った家も瓦がとんで大穴ができたり、雨戸、障子がはずれたりして、中はガラス、食器などが足の踏み場もないほど、乱雑を極めていく。そこここでくすぶる家の困りには火災特有の異臭が漂っている。崩れかかっ

た塀や防火水槽、壁板等人目につき易い箇所には、「〇〇健在、〇〇で待つ、これを発見次第すぐ来たれ。「〇〇は健在です。〇〇を探しに行く」等、家族の安否を気づかう言葉や連絡先がケシ炭でところ狭しとばかり、雑然と書き連ねてある。右手にある比治山にも飛火したかグングン火勢を強めながら燃え広がっている。御幸橋を通過する頃から障害物はいよいよその数を増してゆく。無残にも破壊された自動車、電車、倒れた電柱、切断されて道路一杯に垂れ下った電線、コンクリート、瓦の破片、レンガ、木材、枝切れ等、あらゆる障害物で広い道路も埋まっている。前進も遅々としてはかどらない。前方に見える三、四階建の内部が猛火に包まれて、総ての窓から炎と黒煙を吐きだしている。断末魔の形相にも似て悲惨だ。炎に照らされて、附近は真昼のように明かるい。足下に注意しながら進むうち何気なくそこら中に散乱する黒いものに月を向けて思わず寒々としたものを背に感じた。死体だ。衣類を着けた死体に混じり、これは又、何という無残！！形容もできない程全身焼けただれている死体もある。上陸以来、始めて真近に見る死体心引緊るものを覚える。死体が燃えているのか、何とも言えぬ異臭が鼻を衝く。ようやく目的地に到着する。直ちに各小隊の作業担当区域が指示される。我々は芸備銀行前の道路整備だ(障害物の除去作業)。先ず負傷者を一ヶ所に集める作業にとりかかる。担架の代りに附近に散乱する戸板やトタンで運ぶ。全身焼けただれたような人々が、仰向けやうつ伏せにある。何物につかまるようにして横たわっている。呻く者、声をだす元気もない者、頭や顔、手足に切り傷、火傷を負った人、流れる血、ドス黒く固ってこびりついた血、兵隊が助けに来たぞ！！頑張るんだ！！傷は浅いぞ！！……一人一人に声をかけながら次々と運ぶ。兵隊さん助けて！！目を閉じたまま、か細い声で訴える市民を夢中で介抱、救助しながら戦争に直接かかわりあいのない市民をこんなにまで苦しめる敵に対し、烈しい怒りを覚える。どうやら作業も順調に進み、ある建物の近くまで来た時、どこからともなく人の叫ぶような声が聞こえた。ハットして耳をすますと、確かに建物の中から聞こえてくる。よし、気負いこんだ一同、中に飛びこんだ。途端にジメジメした冷氣と共に、嘔吐をもよおすような異臭が鼻をつく。ポトンポトン水道のめれる音が聞こえる。うす暗い壁の近くに、五、六人の男女が倒れている。助けて！！助けて下さい！！弱々しい声が訴える。よし今助けてやるぞ、次々と外に運びだし、最後に残った肥満体の男をかつごうとすると、奥にもう、一人いると言う。入ってみるとなる程うずくまっている人がいる。お婆さんだ。お婆ちゃんしっかりしろよ！！声をかけても返事が無い。体に触れてみると冷たい。死んでいるのだ。間に合わなかったか……肩にかついで外にでる。既に燃え尽きた建物が多いが、そこここには紅蓮の炎をあげながら燃えさかっている所もある。今度は一ヶ所に集めた負傷者を赤十字病院まで運搬する。全く息つく暇もない程の忙しさだ。ともすれば、ゆるみがちになる体に気合をぶちこみ、再び戸板に乗せて運びこかかる。到る所、散乱する障害物で歩くのがひと苦労だ。やがて十字路にさしかかると、五、六人の市民が恐怖におびえた目付きでボソボソ語りあっている。その足下には一人の男がうつ伏せにたっている。死者であろう。微動ともしない。ようやく目指す赤十字病院にたどり着く。玄関前の広場ですでに、おびただしい死傷者で足の踏み場もない程埋まっている。地獄！！正にこの世における地獄の出現だ。これらの人達の多くがあたかも熱湯に放りこまれたタコのように、硬直した体は赤黒く変色し、一糸まとわぬ裸体なのだ。苦しさの余り、身をよじらせて悲痛な叫びをあげる者、ひどく物憂げに我々の方に首をまわし、じっと見つめる顔は無表情に近いが、余りにも烈しい苦しみで、精根も尽き果てて、声がかたないようにも見受けられる。どの顔を見ても、怒りと苦痛と悲哀の入り混じった実に複雑な表情である。鬼気迫るようなその光景は、まことに悲惨であり凄惨の極みである。何回か往復して負傷者の運搬を終えると、忘れていたどのの渴きを猛烈に覚えた。かたわらに蓋がはずれて地上にあふれだしている消火用水がある。腹がいなくなって、むさぼるように飲んでいると、そばに横たわっていた負傷者がむくりと頭をもたげて、水……とかすかな声をだして渴きを訴えた。重傷者に水は禁物であることは知っているが、余命いくばくもないこの負傷者へのせめてもの心づくしだ。拾って来た茶碗になみなみとついで、ロもとにあてがってやると、ゴクリゴクリと二口、三口飲んで又、横になり目を閉じた。向うの建物の入口付近で四、五人の男女が右往左往している。何かと行ってみると、狂人がいて困ると言う。見ると階段の中央に頭をモジャモジャにした男がお医者さんの診察着を失敬したのだろう。白衣を身につけステッキを手にして笑っている。近づくとステッキを振り回すらしい。なる程よく見ると常人と違っている。戦友と階段をのぼり暴れる男をつかまえた。男を連れて帰途に着くダーンダーン！！続けざまに爆発音が聞こえる。ドラム缶でも爆発したのだろうか。ここここで石炭の山が火の塊にも似て真赤に燃えあがり、四方を照らしている。近くを通ると体が焼けるようだ。はじめは幾人もいなかった十字路付近には、十数人の市民が集っている。誰とでもよい、とにかく口のきける人は話さえていければ、幾らかでも不安と寂寥感から解放されるのかも知れない。しばらく行くと市の衛生課の職員と称する人が飛びだして来た。戸板等ではなかなか渉れないから担架を借りに行きたいと言う。一緒に来てくれと頼む。我々も困っていた矢先ではあり、一も二もなく承諾した。職員に分けてもらった乾パンをかじりながら、水道のパイプが破れて噴出している水を飲むのでたちまち腹が張る。夕食もくついでない我々だ。味など全くないこのパンも空腹の時は実にうまい。元気をとりもどした我々に、いつの間にか、かばんに手にした中年の婦人が、近くくついでいる。どうも病院の婦長さんらしいタイプの人だ。「ガスタンクの爆発ぐらいで、広島が壊滅するとはどうも解せぬ」等話していると、その婦人が「私はおそらく原子爆弾ではないかと思えます。」と言った。仲々物知りだ。今朝以来、何か釈然としたい気持を抱いていた我々はこれを聞いて、はじめて納得がいき、原子爆弾の物すごい破壊力の前に一瞬にして崩壊し去った広島を改めて眺めた。途中で婦人とも別れ、ある建物の近くに来た時、一人の学生が道端に倒れているのが目についた。脚絆をつけ、学生服(ズボン)を着ているが、帽子はなくなっている。額に大きく裂けた傷口があり、こびりついた血のかたわらを新しい血がたいて落ちていた。おいしっかりしろよ！！傷は浅いぞ！！元気をだすんだ！！皆でとり巻くようにして介抱する。額を手拭で拭く。兵隊さんありがとぅ！！……弱々しい声で礼を言う。ボツボツ話すところによると、我々と同年位の中学生だ。動員学徒として市内のある工場に通っていた。今日も同じように家を出て歩いていると、突然周囲がパッと光り、気がついたらここに倒れていた。一体何が起きたんですか？と聞く。それには火傷も負っていない。閃光が走った時、体が何かの物陰にあり、強烈な熱線をじかに浴びなかったのだろう。しかし重傷だ。助かればよいが……。通りかかった他の戦友に後事を託し、再び歩を進めていると、おとうちゃん！！おかあちゃん！！と必死に父母を求めて泣き叫びながら歩み来る男の子に会った。五、六才か？火傷の跡も生々しく、顔一面に白い膏薬を塗っている。目、鼻、口がのぞいているだけだ。聞けば父毎、兄弟どこに行ったのか分らないと言う。不びんな……早速皆で乾パンを与える。戦友が付近で負傷者の救護にあたっている兵士達に後事を頼む。「まあそこには兵隊さんがおるだろ、そこまで行ったらすぐ助けてくれるよ。」等口々に声をかけると大きくうなずいて

ロボロ涙をこぼし、しゃくりあげながらトボトボと歩いて行った。何の罪もないこれら子供の親兄弟を泣き求めさまよう者が幾人あつたろうか。戦争が生んだこの痛ましくも悲しき犠牲者よ。と、言い切らぬ悲哀が波紋のように胸中に広がってゆく。目的の家に到着、先ず水を御馳走になり、担架を借りて外に出る。橋のそここが燃えている(外側の下部)。しばらく行くと、来る時はさほどまでなかった火勢がグングン強まっている。烈しい火は風を巻きおこし、突発した風は怒り狂う火の海をますますあおりたてている。大きな家がものすごい音をたてて倒壊する。バリバリ!!ガラガラ!!飛びあがるような震動と共に崩れ落ちる有様はまことに悲惨。天に沖する煙の下からさつとあがる火の手は、魔の跳梁にも似て凄惨だ。担当区域に帰ってみると、他の兵士達は道路整理に一生懸命だ。野田小隊長に担架借用の報告をなす。「おおご苦労。命令あるまで仮眠せよ。」そう言って労をねぎらってくれる。やれ嬉しや、ゴロリと道端に横になると、スーツと泥沼にひきずりこまれるような眠りに落ち入ろうとした。その時一人の市民に起こされてしまった。宿舎(あるいは工場だったかも知れない)に孤立している動員学徒を救助してくれと頼む。不眠不休の連続作業に心身共に綿の如く疲れ果て、ともすれば猛烈な睡魔に襲われがちな体に気合をぶちこみ、担架を持って駆けだした。現場に着くと、無事脱出に成功したか、我々と同年位の二、三名の学徒が立っていて、我々も一緒に行くと言ってきかない。だが、ようやくの思いで脱出したであろう彼等を再び危険な場所に連れて行く気にはどうしてもなれない。折角の好意を断って、渦巻く黒煙の中に身を躍らした。ドツと吹きつける煙が目にしみて、顔もあげられない。上からは火に包まれた破片が容赦なく落ちてくる。熱気に顔がはてる。先刻覚えた堪え難き眠気も完全に吹飛んでしまった。つまづきながら走り目指す屋内に飛び込む。助けに来たぞ!!もう大丈夫だ!!一同激励の言葉を発しながら担架に乗せる。担架の足りたものは肩を貸したり、背貰ったり、もと来た方へ急いだ。結果を小波中尉に報告し、担架を渡す。今度は死体の収容だ。燃えてわずかに残っている衣類を身につけている者、血汐にまっただ顔、手、足……体半分黒焦げになった死体。まるで熱湯に放りこまれたように赤黒く変色した素裸の死体は、火傷の大きな傷口がバリバリと裂けて、皮膚がめくれあがっている。全く想像を許さない異様な、そして不思議な死体だ。ひじから先と足だけが既に白骨化している死体もある。これら多くの死体に混じり、一個の炭のように真黒い塊と化した幼ない子供の死体、ズシリと重い大人の死体に比べて、子供の何と軽いことか。ここにもしも今、敵がおるならひっ捕えてハッ裂きにして叩きつけてやりたい……身内をかけたぐる火のような憤怒の情こいよいよ闘志を燃やし、元気に作業を進める。次第に広い道路がひらけてくる。窓が白んできた。夜明けも近いようだ。野田小隊長(見習士官)が来て、仮眠を命じた。他の兵も交代で仮眠していると聞く。道路に横になると、いつの間にか深い眠りにおちていった。

一、八月七日

どの位眠つたろうか。僅かな時間だがずいぶん長く眠っていたようにも思える。起床して被害の大きいのに改めて驚く。障害物と瓦礫が山のように折重なるこの焦土は、一体どこまで続いているのか……気の遠くなるような惨憺たる状況である。昨日から街全体をおおいつくした鬼気迫るような愁傷をヒシヒシと感じていた我々であるが、今、明るい光線の下に晒された焦土の姿は、まさに荒涼の一語につきる。完全に壊滅し去った街には生氣全くなく、ただ、余燼なおくすがる中に目の届く限り倒れ伏した死者あるのみだ。練習本部のトラックが砂塵をあげて疾走して来た。待望の飯重搬車だ。一同の顔がおのずからほころぶ。我々炊事当番は早速飯桶を受領して、ニギリメシを作る。分配終るや首を長くして待っていた一同、むさぼるようにかぶりついた。食後、昨日に引続き道路整理にとりかかる。昨日も随分整理したようだが、今こうして、あたりを見まわすと整理した範囲は僅かなものだ。飯をくったあとだけに、作業にも自然気合がよめる。散乱する電柱、トタン、壁板、瓦等を道路の両側に運ぶ。道路の整理は急を要する。一同黙々と作業に従事する。午後は附近の死体収容だ、到る所に横たわる悲惨な焼死体を次々と一ヶ所に集める。水道の水が流れて水溜りを作っている所には、いたいけなオカッ頭の少女の死体が半分水にぬれながら横たわっている。直接熱線にあたらなかったのだから比較的きれいだ。幼ない犠牲者を目にするたびに烈しい怒りを覚える。次々と片づけているうちに思わず慄然とするような死体こぶつかつた。仰向に倒れている妊婦の腹が大きく裂けて、露出した大小の腸がそこら一面に散らばり、然もその先には胎児が転んでいるのだ、何というむごたらしい死体だろう、思わず釘づけされたように、一同その場につつ立ったまま動こうともしない。この死体を収容し、黙々と、だが元気一杯に作業を進め、ある大きな建物の向う側に出た我々の目前に、実に驚くべき光景が展開された。烈しい爆風に吹飛ばされたのだから、建物の方に数百かそれ以上もあるか。『ユデ蛸のような裸体の死者が見上げるような高さに果々と折り重なっているのだ。その殆んどが満足な格好をしておらず、硬直した体こふくれあがった唇は南洋の土人を彷彿させるものがある。両手を広げた者、エビのように体を折り曲げた者、両足の間から頭がのぞき、人の頭をふみつけ、逆立ちしたり、仰向に或いはうつ伏せになっている。これは現実の姿なのかと思わず類をつねりたくなる。ホーッとため息のような声一同の唇をついて出る。何とも凄しい光景である。

この時、身内の者でも探すのか、そここに転がる死体をあらためていた三人連れの男が近づいて来た。山のような死体の前に立ち、何事か話合っていたが、やがて端の方から次々と調べはじめた。しばらくすると、どうもこれらしいと言って、道端に運び出したのは、年齢はおろか、男女の別さえつかないような全身赤黒く焼け爛れた死体である。まったく火傷の程度から格好から酷似したこの死体の群れに求める死体があつたとしても、見つけるのは不可能だと思っていた我々の予想は見事にくつがえされてしまった。同時にたえようのない感動の湧きあがるのを覚える。

元気がない足どりで担架をかついで行くその人達の後姿を見つめる一同の表情は複雑だ。作業を続けるうちにふと物蔭に勤めく人の姿が見えた。行って見ると髪をボウボウと振り乱し、ほんの申し訳程度のボロボロを身にまとった一人の女が坐っている。我々が近づくと、急に空を仰いで、空襲!!空襲だ!!空襲!!と叫ぶ。突然襲いかかった原子爆弾の炸裂に発狂したのだろうか?戦慄を覚えるような恐怖に怯えた顔が痛ましい。近くには手足をちぢめ、頭からつつ込むような格好をした幼児の死体が黒焦げになって転んでいる。到る所、目に入るものはすべてこれ修羅の絵巻である。今しも軌道を横断しようとする、急にむせび泣くような呻き声が聞えてきた。半焼のまま立往生している電車の中をのぞいてみると、車掌服をつけた若い女性がうつ伏せに倒れている。車内は乱脈をきわめ、あたりには綿のようなものが散乱していて、負傷者が苦しみ反転するからであろう。その首にも一様こからみついている。ウーンウーンと蒼ざめ、苦痛にゆがむ顔。通りかかった一般の救護班に後事を託して再び作業を続ける。

小休止の命ありて早速水を飲みに行く。営内の炊事場、洗面所跡にある水道のまわりには、水を求めて集ったのだろう、どの水栓にも五人から十人位の焼け爛れた死体が折り重なるようにして倒れている。死体をとり除こうとしても、それぞれの手足がからみあって仲々ははずれない。無理にはなそうとすると皮膚がペロリとむける。ようやく除いて水にありつく。此処の死体は殆んど軍人である。

強烈な太陽の光線を浴びて転がる死体の周囲には、特有の悪臭が物の焦げた匂とともに漂っている。上半身はユデ蛸のように焼けているが焦げた軍袴をつけ、グジャグジャにそして細くなった茶色の長靴をはいった将校の死体、かたわらには指揮刀が転っている。水に漬けたあと天日で乾かしたように硬直した軍靴のみをつけた裸体の兵士、軍刀、帯剣、飯盒、食器類が散乱している。一尺四方のトタン切れを頭に乘せた男が、破れた水道パイプから流れてくる水溜りに両膝を立て、膝の前に両手を組んで坐っている。勿論死んでいるとばかり思いこんでいた我々は、何気なくその顔をのぞきこんで思わずその場に立ちすくんだ。目玉が動いたのだ。生きている。何という痛ましい姿であろうか。全身赤黒く変色し、足には凄まじい傷口がいくつもあり、一糸まとわぬ裸体なのだ。表情もなく、この世のものと思われぬ物凄く姿でありながら生きている。正に生ける屍の姿だ。畜生!! 目にはいるものすべて目を覆わしむるような悲惨な状況に仇敵必殺の憤怒の情いやが上にも燃えあがる。素裸のまま仰向に倒れている一兵士の胸には両手の指を組み合わせるようにして、銃剣がしっかりと抱かされている。強い太陽の光線を受けた白っぽい目はギラギラと輝やき、両のまなじりからは、涙にも似た液が絶えずタラタラと頬を伝い、耳・口・鼻からはドロ黒い血が生物のように流れている。如何にも無念そうなの形相は、飛上るような激痛をグッとこらえているようでもあり、或いは又、限りなき恨みを天に向かって訴えているようでもある。ただ悲哀のみがヒタヒタとそのまわりをつつんでいる。

見はるかす焦土の彼方まで陸続として横たわる大量の死者を見つめ乍ら、撫然として腕をくむ。兵器の発達した近代戦が人類の消耗を要請し、ふたたび起つ能わざるような災害をもたらすことも知り、これまで烈しい空爆の跡も幾らか見てきた我々であるが、今、目の前に見るこのような悲惨極まる大殺戮の場面に遭遇したのは、聞くも見るもまったく始めてである。ただ空想として説かれ記憶されてきた地獄の世界もかくやとばかりに思われる凄じい修羅場が現世にも存在することが、はっきりと実証されたのである。

あたかも、沸騰するかまに投げ込まれたかのように、全身火傷に焼け爛れた幾万、幾十万の死体、あらゆる苦しみと悲しみの入り乱れて天地を震わす阿鼻叫喚の負傷者の群、祖国の勝利を祈り、東洋の平和を望みながら、変り果てた姿となって焦土に横たわる多くの死者を前にして、やる方なき痛恨の情と共に胸にこみあげるものは、ただ断腸の思いである。

練習部本部から中隊長が帰って来た。忽ち指令がとぶ。我々は牛の焼却を命ぜられた。現場に行ってみると、牛は崩れ落ちた壁土に殆んど埋まっている。堀りはじめると糞袋でも破れたのかムシ焼みたいになった糞が、驚く程大量に出てくる。実に何とも言えぬ悪臭だ。ようやく掘りおこし、その上に丸太棒や板切れなど積みあげて火をつける。最初は湿気をおびているため、なかなか燃えず黄白色の煙が濛々齡と立ちこめ物すごい悪臭に、むせかえるようだったが、そのうちブスブスイびりながら勢よく燃えはじめた。骨を埋めて帰途につく。

一、八月八日

朝食後、本部(中隊)を中心として、まわりに各小隊毎に掘立小屋の組立てにかかす。材料部附近に散乱する丸太・板切れ・トタン等を利用して忽ちできあがる。強風の場合を考慮して、屋根の上に焼け奄線を縦横に張りめぐらす。中は板切れの上にムシロを重ねた。免かきは至って貧弱だが大丈夫。これで雨露だけはどうやら防げる。

昨日に引続き死体処理にでかける。そこここに大小の金庫の転っているのが目につく。棒で叩いてみると、一つの金庫のトビラがあいた。中には札束がぎっしりつまっている。如何に堅牢に作られていても、この大火災の炎を浴びているのだ。つい興味を覚えて、きおんな札束の山にそ一つと指をあててみた。するとどうだろう。その部分がポコリとへこんでしまった。形だけはきおんに残っているが、熱気で灰同様にもろくなっている。トラックがおしつぶされ、自転車がアメのように曲っている。

ドアがはずれて、そこここに赤茶けた鉄骨をのぞかせて、立往生している電車がある。通勤途中の人で満員だったに違いない。電車の中は吊り皮につかまったり、窓際に寄りかかるようにしたりして死んでいる人が何人かいる。ドアから逆さまに落ちかかっている死体、中でも一人の男は片手で吊皮をもち、立ったまま死んでいるが、もう一方の腕だけが燃えて、ヒジから手首あたりまで、既に白骨化している。しかもその先には真白なハンカチでつつんだ弁当箱がぶら下がっている。奥をのぞくと、多数の男女が折り重なるようにして倒れている。

営庭の入口付近で、ニタニタ笑っている負傷者が目に映る。近寄るとサッと逃げる。狂人だ。散々手こずってようやく捕まえる。道路の中央でオートバイにまたがったまま死んでいる人がいる。両手でハンドルを握り、両足は地面につけている。車体は燃えさびたようにたっている。焼け爛れた死体を乗せたまま、根が生えたように立っている。オートバイは引けども押せどもビクともしない。パンクした前後の車輪と両足が地面にぬいつけられたように密着している。原子爆弾の炸裂と同時に、物凄く熱線が放射されたものと思われる。地面にくっついた部分が溶解して固まったものだろう。丸太棒を車体に差しこみ、肩にかついで持ちあげようとしても、ビクともしない。よしそれならと、三人がかりで持ちあげると、バリバリバリッ!!音をたてて、やっと離れた。地面にくっついた部分は、黒くシミのようにになっている。ハンドルを握りしめた指を離そうとしても、ズルズルと皮がむけるだけでとれない。やむなく一同で車体も入とも持ちあげ、道端に運ぶ。

午後、営庭に横たわる死体を数える。一列櫛笥にたらんで、そのまま真直ぐ歩を運ぶ。一人で一〇〇体も数えた頃、突如、空襲警報のサイレンが捨てだした。頭上にかすかな爆音を聞いただけで、間もなく解散となる。他の現場から保った戦友に、広島にあった特幹の通信隊が全滅したと聞き、暗い気持ちに襲われる。広い営庭も数知れぬ程の死体の放つ紛々たる臭気が満ち溢れている。強い太陽の光線をうけて半開きの口からは、無数の泡がブクブクと沸りたっている。これ等の

死体の上を早くも飛来した糞バエが、うなりを立てて群れ飛んでいる。四、五百体も数えたらうか、途中で再び死体の搬出作業にかかる。當庭の横につらなる石垣に沿って、防空壕が設けてある。念のためぐつてみると、鍋・カマ・布とん・衣類・大小のビンや米の詰った袋などが散らかっている。奥の方をのぞくと、人が倒れている。見ると衣類はきちんと身につけているし、どこにも外傷はない。煙にまかれて窒息したものでしょうか？戦友と二人で天井に頭をぶちつけ乍ら、外に運び出す。作業終わって帰途につく。途中いつの間にかできたのか、簡単な公衆便所が建っている。急を聞いてかけつける人達の多くなった時、これは大助だ。露営を始めてから、不寝番は忘れたように実行されなかったが、次第に備品も増えて来たので、愈々今日から実施されることになった。第一回目の不寝番を命ぜられ、戦友と本部前に立つ。時折り、吹きくる風がむせるような屍臭を運んでくる。

一、八月九日

起床!! 大声一下、ガバとはねおき、素早く服装を整えて直ちに整列、露営とはいえ、平常と何ぞ変らぬ厳しい朝の点呼だ。早くも練習部本部の自動車が飯を運んで来た。食事終わ、担当区域等が指示される。わが小隊は死体焼却だ。現場に到着すると、連日の猛暑に早くも腐敗しはじめた百余の死体が物凄く悪息を放っている。片手に日傘を持って仰向きに倒れている若い女性の両の目玉が飛びだしている。驚く程の大きさだ。腹が破れて露出した大小の腸が、海黄白色の乾いたハダをみせて、そこら中に散らばっている。

横を向いて倒れているこれも若い女性の指先に、真っ赤な指輪が輝いている。防空頭巾をかぶったまま倒れている婦人、赤黒く焼けて硬直した特徴のある死体にまじり、衣類を身につけているこの人達は、割合見易い方だが、何れも目は白く混濁し、太陽の光線をうけて異様に輝き、半開きした口はブクブクと泡立っている。腐り始めた死体は、あつかもにくい。持とうとすると、ペロリと皮がむけて手がすべる。これ等の死体を、金網を敷きつめた防空壕に積み重ね、その上付近近くに散乱する丸太・板切れ等を山のように放りあげ、火をつけると死体特有の臭気を発しながらジューツ、ジューツ!! 黄色い煙を立てて火勢は次第に強くなる。やがて下の方にある死体が燃えつきたものか、時々ドサッと上にある死体がずり落ちる。と、三人そこに残り、他の者は、そこら帯にまた収容しきれぬ死体がないか手分けして探すことになった。いたいた、石ころや板切れなどに埋った五、六人の死体を発見する。

「おい此処にもあったぞ。」戦友の声にかけ寄ると、蓋のとれたマンホールの中に四、五人の焼死体が転がっている。拾ってきた電線を穴にたらしてもらい、戦友と二人で穴に降り、死体を電線でしばり引揚げてかかる。硬直したような死体は一見軽そうだが、やはり重い。首がグニャグニャして扱いにくい。死体の引揚げを漸く終り、他の死体と共に燃える防空壕にほうりこむ。焼却は案外早く終わった。金網の上は、まさに白骨の山だ。火勢が強かったので、焼けすぎたようだ。トタンを箱のように叩きまげて穴の隅に置く、交代しながらエンピで骨をすくい入れる。折しも通りかかった一人のお婆さんが、「兵隊さん、その骨を少し分けてくれませんか……」と言った。お婆さんは純白の布でつつんだ箱を首に吊っている。「あげるのはいくらでも、誰の骨だか分かりませんよ」と言うと、「この辺に、子供の勤めていた会社があったのですが、幾ら探しても死体が見つかりません。かまいませんから分けて下さい。子供と亡くなられた方々の冥福をお祈りしましょう」。重ねての懇願に一握りの骨を分けてやると、何回もお礼を述べて立ち去る。老婆の後姿を見送る一同の面上には、更に烈しい闘志がみなぎる。骨を入れ終り、容器をきれいに埋めて、もう一度担当区域を丹念に調査する。突然サイレンが今心りだした。空襲警報だ。瞬間フテフテしい反抗心がムラムラと湧きあがる。溶解して奇妙に固まった固まったガラスや、瓦の破片が散乱する建物の前には、最近召集されたらしい若い兵士が整列している。建物の入口には赤十字の旗をかかげ、負傷者の仮収容所にあてられている。焦土特有の匂いと、死体の臭気、それに薬用品の匂いのまじる中で、負傷者の手当にあたる衛生兵は、多忙を極めている。横にまわると通行人が黒山のようにたかっている。何事かとのぞいてみると、大きな亀裂を生じた壁に、市役所の係員であろう、判明した生存者と死亡者の氏名を書きつらねた紙を貼りつけている。行方不明の肉親、或いは知人を探す人達にとって、またとない広報(写真・第一巻二〇四頁)である。このどさくさの最中に懸命に活躍する吏員の努力の程がしのばれる。広報の氏名を追う市民の表情はきびしい。どうか無事であってくれ、祈るような、或いははすがりようなまなざしで、われ先にと前に出ようとする。あった!! 思わず声をあげる人、肉親の名前を生存者欄に見つけて勇気づいたか、そそくさと立ち去る人、求める人が死亡者の中にあっただのか、或いは何れにも見あたらないのか、ションボリと左右の人達を見ながら立ち去る人等、さまざまである。そのほか目につき易い箇所には、手の届く限り隙間もない程、ケン炭・白、赤のチョークで「父母健在、どこに在りし。」「何某ま……に在り発見次第すぐ来たれ。」「……は無事……で待つ」等、父母兄弟知人の安否を気づかう文字が雑然と書かれている。帰途につき、西練兵場横を急いでいると、左手の方で土を掘っていた一人の将校が呼び止めて、「見習士官。候補生を一名貸してくれ」と言った。指令されて早速将校の下に駆けつける。上等兵の従者がいる。「ご苦労だが、ここら掘ってみてくれ。実は俺の家族が埋ってしまったらしいんじや、よく分らんが此処らだと思ふんだ。」そう言って、中尉は上等兵が掘りかけている穴を指さした。先ず掘りかけの穴を、更に掘り下げ、そこを中心にも掘ってみるが、骨らしきものは一片も出ない。出たのはへしやげたヤカンとニュームの鍋だけ。負傷したのか、片腕を首に吊っている中尉は、黙念として穴を見つめていたが、「候補生まで頼んで探したのに出ないようでは、とても望みがない。ヤカンのみからでも出たのが、せめてもの慰めだ。」そう言って、上等兵を振り返った。悲痛な中尉の胸中が察しられる。上等兵は同情に堪えぬもののように、だまって頭を下げた。暫時穴に目を落していた中尉は、急に思いだしたように、「おお、ご苦労だった。どうもありがとう。俺は北台山病院の渡辺中尉だ、帰ったら小隊長によるしく言ってくれ。」そう言って再び目を穴におとした。しばらく行って振り返ると、矢張り元の位置に立ったまま、上等兵と話している。本部に到着。小隊長に報告して、小屋にとびこむと、「ご苦労!!」戦友はすかさず労をねぎらってくれる。

一、八月十日

あちこちに憲兵が立って道行く人に新聞を配っている。附近の壁にも朱線を入れた各社の新聞が何枚も貼ってある。近づいた我々の目に飛び込んだのは、「長崎にも新型爆弾」の大きな見出しだ、瞬間、懐き故郷の姿が脳裡をかすめる。ああ長崎もまたこのような悲惨な廃墟と化したか。おのれ憎き奴!! 切齒扼腕するも空しく、じっと目を記事にとめたまま一同化石のように動かない。市内出身の戦友は、われわれ以上に深刻だ。林田・小林両候補生は、宣話線の架設係として金

丸兵長の指揮下にはいり、他の者は死体処理などに従事する。リュックを背負い、トランクを下げた人達がせわしそうに行き来する。肉親や知人の安否を気づかって、入市した人達だろう。被害の余りにも大きいのに驚嘆の目を見張っている。あちこちの電柱などに貼られている『広島市民けっせよ。船舶司令官』のビラに対しても一瞥するだけで、市民の表情には、何の変化もおこらない。原子爆弾の投下と共に彼等は笑いを失ってしまった。時折もらず微笑にも言い知れぬ悲しみが口辺に漂っている。

昼食後、村田候補生達と交代を命ぜられ、廃墟の中をよぎって行く。まだ収容し切れぬ死体が、そこそこに転っている。目的地に到着、交代する。練習部本部から応援に来た斎藤軍曹の指揮をうけ乍ら電話線を延ばしてゆく、障害物を除き、或いはさけながら、漸く目的地に到着する。作業終了、カンパンをかじり乍ら雑談していると、本部から命令が送られてきた。「石塚隊を除く他の中隊は、直ちに帰営準備をなし、本日中に帰営すべし」という。早速、丸山中隊に伝令すべく戦友と出発する。途中、某病院近くの倒壊した塙の下には、休憩していた動員中の女学生十数人の死体が埋っていると聞き、暗然たる気持ちに襲われる。命令を伝え、引き返し、途中でふり返ってみると、兵達があわただしく装具を整えている。帰着すると、金丸兵長が任務終了を伝える。漸く架設係から解放されて帰途につく。

夕食後、馬の死体焼却を命ぜられる。小隊長の引率で現場に行くと、すぐ近くに、西警察署の建物(商工会議所跡)がある。早速道端に横たわる馬の焼却とどろかか。やがて物すごい臭気を発し乍ら燃えはじめた。馬を焼き乍ら、あたりを眺めると奇妙な物が目に映った。何だろうか？しばらくすると、手製の車をつけた木箱に人が乗って、両手で地面を叩きながらやってくるのが見えた。四十年配の男である。イザリだろうか？あたりをキョロキョロ見まわし、休みながら近づいて来た。どこからやって来たのか。あの体でよくも無事でいたものだ。飄々とした顔で箱を動かすこの人物が、凄じい焦土にそぐわないような気がする。丸山見習士官が、川を流れる死体の引揚作業に来てくれと、応援を求めに見えた。すぐ近くの川だ。行ってみると、焼け爛れた焼死体が浮き沈みながら流れている。早速、竹竿や棒切れで引寄せ、一先ず岸に穴を掘って埋める事にする。岸を左右に走りながら、作業を続けているうち、何かにつまづいた。見ると、砂に埋った死体の両手が、ニョッキと突きでている。あたかも虚空をつかむようなその格好は如何にも無気味だ。川を流れる死体は、橋脚にあたると、まるで一本の棒杭にも似て、一瞬グッと止まり、半回転しながら、すぐまた何事もなかったように静かに流れて行く。作業を終り、再び馬の焼却を続けていると、警察署から一人の警官がやって来て、小隊長に話を始めた。かたわらで聞いていると、原子爆弾の炸裂した頃、海軍に籍をおく或る皇族の方が自動車でのこの付近を通過中、行方不明になられた。何か遺品でもないか、探すようにという連絡があったので、今から探そうと思うので協力してもらえないか、このような主旨である。ホー!!一同驚いたようにお互いを見まわした。幸い月夜だ。小隊長の命令で直ちに警察署附近を手分けして探す。将校なら軍刀があるはずだ。だが、幾ら探しても何も発見できない。橋の上、川岸近くの障害物の中、ヤブの中、かなり遠くはなれた所までくまなくまわり探す。文字通りシラミつぶしの搜索だ。布切れを見つけて、ハッとすると、あかりにすかしてみると別のものだ。どの位の時間が経ったろうか。幾ら探しても遺品らしき物は一片も出ない。やむなく搜索を打ち切り、現場に戻る。馬も殆んど焼けて、頭だけがグロテスクな格好で転っている。ひとしきりの雑談も終ると、交代で仮眠する事にする。連日の奮闘につかれた戦友が早くも軽いイビキをたてはじめた。

一、八月十一日

自動車のエンジンの音に目を覚ます。空にはまだ星がまたたいている。馬の骨を埋めて帰途につく、午前中、死体の搬出、障害物の除去及び焼却作業に従事する。午後、帰営準備をなし一路宇品に向う。原爆炸裂から早くも六日目を迎え、市外から駆けつける人の数も急速に増してゆく。一時は死の街と化したかと思われた焦土のあちこちに、焼けたトタン板等を利用した掘立小屋が現れはじめた。宇品町にはいると、瀕死の状態にあるような負傷者が虫の這うような足取りで歩を運んでいる。一歩進んでは倒れ、ようやく立ちあがったと思うと、二、三步も進まないうちにバツリとつんのめって、そのまま長々とびてしまう者もある。素裸でユデ蛸のように変色した人、ホコリで黄色く見える髪は、ボウボウと乱れるに任せ、目を宙に据えて、口は半開いたまま放心したような表情で、トボトボと歩く裸の婦人、自分もすさまじい火傷を負い乍ら、肩を貸すつもりだろう、これもユデ蛸のような男に、だきつくようにして介抱しながら歩く人。道端に坐り込んだまま、放心状態にある人。歯をむき出し、足を引ずりながら歩く人。これらの殆んどの人々は、手と言わず、足と言わず、バリバリと大きく裂けて周囲がめくれあがった傷(やけど)を負っており、足の傷口には、白いウジが無数にうごめいている。

体中が焼け爛れて赤黒く変色し、一糸まともぬ負傷者が呻き泣きながら、三々五々と歩いて行く。どこか遠い国で、異民族の行列を見ているような錯覚にさえとられる。然し残念な事に、この悲惨な恐ろしい行列は、現実の姿なのである。栈橋に到着すると、此処にもまた二人、三人と肩を寄せあい乍ら坐り込んでいる。我々が通ると、無表情な顔を力なく向ける。だが、その目の色には、すがるような思いが、かくされているような気がする。

基地に到着すると、待ちかまえていた残留の兵士が、ご苦労ご苦労と心から労をねぎらってくれる。やがて夜気を震わせて消灯ラッパが鳴りだした。声高く市内の模様を話していた戦友達も、何時の間にか静かになった。

一、八月十二日

起床!!叫咤するような不寝番の大声に、ガバとはねおき、服装を直し、毛布・蚊帳をたたみ、直ちに舎前ことび出す。何時もながら、朝の点呼は実に活気が溢れている。午前中、内務班の整理、午後は休養だ、夕食後、広島再出動の命令が下る。瞬間生地獄さながらの市街が目に入り、同時に勃然たる敢闘精神の体内にみなぎるを覚える。

一、八月十三日

出発準備まったくなくなり、緊張した面持で、待機する一同に漸く命令下る。軽快なるエンジンの音は、われらの活躍を期待するもの如く、艇上飛沫をあげて猛然と滑り出した。上陸するや、息つく間もなく前進が開始される。目的地は丸山中隊本部跡、市民もようやく生気を取り戻したか、何となく復興の息吹きが感じら

れる。目的地に到着すると、本部を貯金支局の四階に置くことに変更になり、再び前進が開始される。目指す貯金支局は焦土の中で、ひととき目立つ高層の堂々たる建物だ。割当てられた室内の掃除が終ると、各小隊毎に作業の担当区域が指示される。われわれは水道のパイプ修理だ。破損して洩れる箇所はコルク栓を打ちこむだけだから作業は極めて簡単だ。障害物が取り除かれて、広くなった道路を歩いて行くと、焦土の中に不思議な煙突のみが、枯木のように立ち残っている。無事だったのだろう。早くも縄張りして「立入り禁止」の札をぶら下げている所もある。水道の破損箇所は至るところにある。コルク栓はいくらあっても足りない。止むなくパイプを折り曲げて洩れを止めてゆく。作業の性質上、活動範囲も広がる。負傷者を励まし、直接死体に触れながら行なう。息づまるような作業と違って、如何にも地味で単調な軽作業である。ともすれば、ゆるみがちな体に気合を入れ乍ら、どこまでも歩く。終日この作業に従事、夕刻本部に戻る。

一、八月十四日

気合充実せる日、朝点呼終りて、本日の作業が伝えられる。われわれは昨日に引続きパイプ修理だ。空は文字通りの日本晴、水道関係の仕事をしてたという四十位の臨時召集兵が派遣されて来た。真夏の太陽の直射を浴びながら道沿いに、或いは焦土の中にも入りこみ、水洩れ箇所の目につき次第コルクを打込む。新聞の記事には今後七〇年間は、草木も生えず砂漠のような不毛の地になると、解説してあったが、どうやらこの予想は覆えされたようだ。そここの皮を焼かれた樹木の幹に、目にしみるような青い芽がのびていて、自然の遅い生命力を感じさせる。やがてある建物(最初芸術と思っていたが後日住友銀行と知った。)の入口附近の壁に、人の影が黒く鮮やかにうつっているのが目についた。何故だろう？石段をのぼり近づいて見る。トビラのあくのを待って、壁にもたれて坐っていた人が、原子爆弾の強烈な熱線をまともに浴びて出来たものだろう。死体の代りに影が残る。こんな不思議なことがあるのか。じっと見つめていると、今にも壁のうしろから本人が現れてきそうな気さえする。それにしても底知れぬ威力の下に、一瞬にして広島を死の街と化さしめ、しかも、これだけ鮮明な影が残る程の強烈な熱をもたらした原子爆弾は、一体どんな性質を持っているのだろうか？向うには、丸い形をした屋根が、無残にも焼け爛れて赤くなった鉄骨を白日の下に晒している。召集兵から産業奨励館だったと聞く。昼食後、今日から実施されることになった衛兵勤務の第一回目に勤務することになった。道路をはさんで両側に立哨する。支局の玄関に立つと、道路の向う側の立ち残った門柱に「広島文理科大学」の文字がくすんで見える。局の職員もボツボツ復職しはじめたようだ。勤務を終り、屋上にあがって見ると、焦土と化した市街が一望のうちに眺められる。広漠たる焦土に打ち重なる瓦礫の山が、果していつになったら取り除かれるであろうか。

一、八月十五日

厳しき中にも活気溢れる。朝の点呼終了。やがて昨日に引続き、パイプ修理に出かける。日を重ねるにつれて、歩きまわる範囲も次第に遠くなってゆく。まだどこかに死体が埋まっているのだろう。ムツとするような一種独特の悪臭が鼻をつく。昼食をすますと再び出かける。一通り作業を終り、エンピを返納すべく戦闘司令部に向う。天幕で急造した司令部には、多くの将校が働いている。エンピを返納し、近くの民家の軒下で一息入れる。地獄のような市街の惨状をよそに、樹上では蟬がやかましく鳴き立てている。此处で召集兵とも別れて本部に戻る。今度は戦友と警備にでかける。トサクサにまぎれて悪事を働く不心得者が出没すると聞く。我々の警備も、盗難予防が第一の目的だ。暫時、日陰にあつて、時折、吹き寄せる風に頬をなぶらせていると、風に乗って強い屍臭が、漂ってくる。何気なく近くの防空壕をのぞくと、ムツとするような屍臭がたちこめ、男の死体が、一つ転っている。既に腐爛状態にあるのを地上に引ずりあげる。折よく通りかかった市民の救護班にあとを頼み、再び警備を続ける。夕陽が沈むと、いつのまにか降りそそぐように夜の帳がおりてゆく。

そここの堀立小屋から、夕餉の煙が立ちのぼり、子供を呼ぶ父母の声が聞える。「ご苦労さんです。」心から労をねぎらってくれる市民に対して、われらの責務愈々重大なるを痛感する。不意にわれわれは異様な光景の出現に思わず偶然として目を見ひらいた。見渡す限りの焦土に、今、幾千、いや幾万、幾十万にのぼるであろう数知れぬ燐の大群が、忽然として、青白き光を放ちながら、明滅しはじめたのである。幽魂漂うその光景は、慄然として思わず別に粟を生ぜしめる。じっと見ていると、現実の姿ではなく、何処か別世での出来事のような錯覚にさえとられるのである。高さは、二十五種から三十種、氷にも似た冷たい光を放ち、トロトロと燃えては消え、消えては燃える燐の群は、万斛の恨みをのみ乍ら、悲命に倒れ去った人々の、やるかたなき痛恨の叫びにも似て悲しく、成仏しきれぬ魂が、無理矢理に奪いとられた屍の周囲を彷徨し、悲しき死体の存在を告げんとしているようでもあり、誰いぶちまけようもなき烈しい怒りと、言語に絶する苦しみを抱き乍ら、その悲運に哭いているようにも見える。

驚愕から悲しみへ、そして憤りに…。われわれと共に、そこここで見つめる市民の表情は複雑だ。トロトロと燃え上った燐が、近くの燐とくっついて急に大きく、又、はなれてスーツと消える。次から次へと、小止みたく繰り返される。燐の明滅は、恰かも死の街「広島の悲歌」をうたっているようにも思えるのであった。

三〇

岩野庄志

(当時船舶第十教育隊・特別幹部候補生)

幸ノ浦基地において、夜間訓練を終り、朝食をすまして就寝したとき、突如、閃光が起った。約三十秒から一分間後に爆発音がきこえると共に、兵舎に激震があった。何事も判らないまま、午前十時ごろ、広島市救援の出動命令が出た。直ちに舟艇を駆って、我々は宇品に向った。

宇品から御幸橋を経て、鷹野橋に至り、さらに水主町の県庁付近に前進した。我々救援隊は、市内を貫流する七本の川の、川と川のあいだの区域を作業分担し、それぞれが負傷者優先に救護作業をおこなった。死者は一ヶ所に集めて焼いた。

我が救援隊は、爆心地の中島地区(元安川と本川との間の区域)から、下流の吉島町の刑務所北側を担当したが、八月六日から一週間は負傷者の救出作業と死体

の火葬作業をおこなった。

八月十五日、終戦になってから一週間は、雑多な残骸で埋まっている道路の開通作業、及び倒壊建物の清掃作業などをおこなった。他の戦隊員の一人が、踏み抜きをしたのが直接の原因で、死亡したため、それまで船舶靴を着用していたのが危険とされて、以後は軍靴を着用して作業をおこなった。

この救援作業後、幸ノ浦に帰り、下痢のため一週間入室したが、現在に至るも消化器系が弱くて太らない。

三一

榎本武次

(当時海上挺進隊第四十八戦隊・上等兵)

我々は、江田島幸ノ浦基地から出動した。六日の朝、基地内で閃光を認め、数秒後に一大音響を聴取した。異常を直感して、すぐに防空壕に待避した。防空壕は海岸に沿う兵舎のすぐ裏の小高い丘陵に三、四個所設けられていた。人間が立って自由に出入りできる大きな壕である。万一の場合には戦闘指揮所にも使用できるような洞窟である。

いったん壕に入ったが、何事も起らないので出てみると、広島上空に巨大なキノコ雲の上昇しているのが望見された。

その日(六日)の午後五時か六時ごろ、出動命令が下り、我々は舟艇に乗りこみ、宇品に到着した。宇品に上陸して、その近辺の建物が多数半壊状態になっており、被害の大きさに驚いた。

救助作業を開始したのは、午後七時ごろからで、主として建物疎開作業に出動していた人々(大竹方面の人多数)を救出した。全員上半身火傷で重傷者が多く、己斐方面の学校に運びこんだが、治療すべき医薬品は皆無の状態であった。

七日からは、紙屋町附近の工場跡で負傷者を救出するとともに、死体の焼却作業をおこなった。爆心地に至近のためか、死体のほとんどは、男女の性別さえ判らないという惨状であった。

十日ごろ、一応、幸ノ浦に帰隊し、翌十一日再び出動、こんどは八丁堀附近の負傷者の救出作業にあたり、十三、四日ごろ幸ノ浦基地に引揚げた。

三二

佐々木稔

(当時船舶練習部第十教育隊・一等兵)

江田島幸ノ浦基地の草深隊兵舎において、朝食後、突如、異様な閃光を感じたあと、大きな爆発音を聞いたので海岸に飛び出した。その時、広島市上空にキノコ雲ができて、その雲が次第に巨大になっていくのが眺められた。

どうしたことだろうかと、皆であれこれ話があったが、午後になって斉藤部隊長から命令が出て広島市の救援に出動した。

我々は幸ノ浦基地から舟艇によって、宇品に到着、宇品から市中まで徒歩で前進し千田町の広島電鉄本社(半壊)を救護本部とした。ここを処点にして、それぞれの分担区域に進入したが、私の戦隊は大手町一帯の区域で、まず負傷者の救出を優先的におこなった。焼け残りの戸板を拾って来て、動けない負傷者をこれに乗せ広島赤十字病院へ運搬したが、一方では、その橋(失名)の所から、大型発動艇に乗せて川を下り島の方へも運びこんだ。発動艇は、宇品の船舶練習部から出動したもので何度も繰り返し運んでいった。

六日は夜になると消火作業にあたったが、火道を切るために、半壊の家屋にロープをかけて、次々に倒していった。どこであったか学校の体育館が盛んに炎上していたのを思い出す。赤十字病院の北の方で郵便局があったのを覚えている。

七日、夜明けと共に作業を開始し、昨日に続いて負傷者を救出した。救出場所は、赤十字病院の北西の方面一帯で舟艇で島へ運んだり赤十字病院に運んだりした。赤十字病院は負傷者で埋っていたが、その中でみずからも負傷した医師や看護婦たちが、大活躍で応急治療をおこなっていた。

赤十字病院前の庭に、ドラム罐の重油があったが、一応負傷者の救出が終ってから死体の運搬に取りかかった。焼け残りの材木を集めて来て、その上に死体を積み上げ重油をかけて焼却した。

田舎から、肉親を探しに出て来た婦人が、自分の子どもを多くの死体のなかから見つけたし、遺骨を持ち帰りたいと申し出たので、この一体だけは別のトタン板の上に乗せて火葬したことがあった。また、ある寺の池の中にある死体を引上げる作業をしている時、その近くの防火用水槽の中に、母親と子どもが丸くなって入ったまま死んでいたのが忘れられない。

終戦後、復員してから眼底出血があったが、現在のところは異常ない。

三三 似ノ島にて

義之栄光

(当時船舶練習部、斉藤部隊・津留隊)

一、概況

(イ) 出動命令を受けた場所

江田島北岸幸ノ浦戦隊兵舎内

(ロ) 部隊員の様子

当早前十時から軍装検査正午頃広島を経て九州五島へ、出戦の内示を受け、最高に戦意が昂まっていた折であったから全員切齒した。まもなく軍装検査は一時中止、舎内待機の指示が出たように思う。しかし、広島被害を推定して、早期に偵察員を出し、又救援隊を組織して繰り出す必要ありというのが、兵舎での話題であった。

(ハ) 閃光と音響

小生は丁度、舟艇番で海上にあり(レ)艇の整備作業をしていたが、北方上空仰角五〇～五五度位のところに、突然、強いマグネシウム花火のような光があり、それがユラユラとおりて来て、約四五度位の高さの場所で、白が金色にかわり、ダイダイ色のような丸い火の玉になった。「熱い!」と思った。暫時の後、強烈なしかも熱い爆風に叩かれ、つづいて間もなく、ズ・ズーンと鈍重な爆発音がひびき渡った。あらゆるものがビリビリと震え、ゴソゴソと小突かれたような感じであった。

二、出動の経路とその際の周囲の状況について

時刻ははっきりしないが、記憶の断片をつないでみたところから、当日午後、(レ)艇K-12号に四人便乗して宇品棧橋に向かう。棧橋は大変な混雑で、上陸困難のため東に向かう。上陸できそうな場所がなく、あまりの混乱と海岸に殺到する人波に上陸をあきらめ、金輪島・峠島を経て帰投する。報告は「広島は何しろ大変な被害で状況の正確な把握は不能、上陸も困難、海岸には被災者が雲集、市内の救護収容施設は殆ど壊滅又は使用不能のため、海上輸送によって周辺の収容可能施設に極力輸送中。」ぐらいな事しか出来なかった。

建造物などの被害よりも、人間の被害の大きさと悲惨さに気をとられて此頃あいまいになる。その夜、広島は炎々と燃えつづけ、北の空は真っ赤。翌朝食後、五十三戦隊を二つ又は三つに分けて小生の編入された分隊は、大発動艇に乗り北上。服装は体操衣袴。似ノ島の検疫所棧橋につき、構内にはいってすぐ左手の建物に拠点をおき、向い側(棧橋から上って右側にあたる)の舎内に収容されている患者の看護と次々に棧橋に着く船や艇からの患者を担送、又、誘導する。これが作業のはじまり。被災者の輸送には機帆船や艇が多かったが、中に一隻りばな客船が混っていた。「フクセイ」という船名であった。

三、活動場所とその状況

八月七日、患者の看護と担送、そして生者の氏名・住所などを聴き取り、荷札に書いて身体のどこかに結びつける。内服薬はなく、外用薬としてはマーキロ液と唾鉛華胡麻油くらいしかない。食器とコップは孟宗竹の輪切り。ハエがすぶる多い。患者も飯を食い、水を呑み(おおむね死水となる)、ハエを追ひ払う。目玉の動き、目の光りが止まった時が「死」を迎えたときらしい。死体は次第にふえて置場なくなる。棧橋から海岸伝いに南へ三、四〇〇メートル行ったところにある厩舎へはこぶ。作業止めが効かかったのは、夜八時頃であった。ロウソクをつけて部隊から運ばれた握り飯を喰う。汚れた被服の代りはない。手を洗う水も不便な島だった。

八月八日、朝から死体運搬。死体からは身元の荷札と何か遺品になりそうなもの(毛髪が多かった)を封筒に入れて、それに氏名を書き、本部(?)へとどける。又、一〇体かそこらは同じ穴の中へ材木を入れ、死体を並べて、その上に麦ワラやタタミ、材木をつみ上げて火を放って茶隼に付し、その骨灰をとりあつめた。死体そのものは、最初の一、二体は火葬窯で焼いたが、そのあとが防空待避壕を少し掘りひろげて、一穴当り六〇～八〇体配を入れ、上に土をかけて土饅頭とした。それでも間に合わなくなると、最後には後で運ばれて来た死体を南側の崖に穿った横穴待避壕の中へ直接担ぎ込んだりした。穴の中には死体を狙って小さな赤い陸蟹が沢山いた。夕方、離家のようなところで死んだ吉成弘陸軍中佐の死体を棺に入れて運び出した。何でも朝鮮の李王家の中のどなたかの侍従武官だったとかで、拳銃で頭部を撃たれたと言う話であった(人に撃たれたのでなく自決)。その頃、火葬窯の中では、鍋島大尉と某下士官(伍長あるいは軍曹)の、二体が煙になっていた。この夜もロウソクとランタンの灯でおそくまで作業をした。

八月九日、午前十時頃迄作業をすると、皆のびてしまった。昼前、部隊から迎えの大発動艇が来て、一旦幸ノ浦へ引揚げた。交代が出向いたかどうかについては不詳。その夕方から小生は高熱を發し寝こんでしまう。翌夜だったと思うが、軍医の診察を受けると「破傷風」の疑いありという事で、夜中、青森県北津軽郡鶴田町出身奥瀬勇一候補生殿の付添いで広島市の赤十字病院へかけこむ。そのまま入院という事で、小生の救護・死体処理作業はそれまでとなる。この間、日時不詳たるも広島市へ行き、御幸橋付近で救護活動・焼跡整理などを半日位やり、過労で倒れたことがあった。

四、その後

赤十字病院は建物が多層型に変型し、窓はちぎれとび、階下は一般患者とハエの渦巻きで、気分が悪くなるような環境。小生は軍人の故をもってか階上に収容される。二階はハエもすくなく、悪臭も薄く、重症患者も少ない。破傷風ではあるまいという事で、二日程で退院、奥瀬氏と共に帰隊。しかし熱はあり、下痢は続き、全身から力が抜けて、何か重い病気がかかったらしい感じが濃厚で、起きられるようになったのは十三日頃であったと思う。復員後、ひどい視力障害。毛穴からの出血、殆ど一年を周期とする発熱・発疹・下痢症状などが昭和三十三年頃までつづく。それが原爆症状であったか否かは不詳。昭和四十三年春、申請して被爆者手帳をうける。

三四

扇勇

(当時陸軍船舶練習部雇員・軍属)

私は、昭和二十年八月六日の朝、公用のために出て、舟入川口町の民家の中にて被爆いたしました。あの当日を思いうかべますと、生地獄とは、このようなことかと思えます。小生も家の下敷きとなりましたが、ようやくの事にて這いだし、すぐ舟入本町五間道路から住吉橋・御幸橋と渡り、部隊に帰隊いたしました。部隊では、部隊・雇傭人全員が、負傷者の収容の用意で、いそがしく働いていました。また、午前十一時過ぎ、軍属には家族の安否をたしかめる様に命令があり、全員市内にいく途中、御幸橋にて負傷者を暁部隊自動車隊にて宇品船舶部隊並びに陸軍船舶練習部に収容する手伝いをする。また出勤は六日夕方に命令がでました。

翌七日、袋町の元精養軒一階に船舶練習部負傷者収容所が開設されました。

部隊が、宇品七丁目元大和紡績にありましたので、宇品電車通りから専売局前の御幸橋を渡ると、千田町では、赤十字病院・貯金局の建物が残っただけ、また市役所・浅野図書館・中国配電・精養軒など鉄筋ビルだけがのこって、木造家屋は全部焼け、死体があちこちころがって、まだ焼け残りの煙が上っていました。

革屋町附近や袋町精養軒に救護所を開設した陸軍船舶練習部(後西部八十七部隊)衛生班は軍医指揮のもとに、全身やけどした一般市民ならびに西部軍関係の兵隊達の負傷者を、一階広場に収容し、応急の手当をして自動車にて暁部隊に送り、暁部隊並びに練習部では患者が満員にて収容できないので似島に船にて送る等の活動を十日頃まで中心地附近にておこないました。

私は足と手に切傷がありましたが、それがなかなか治りにくいので、東京から医療班がこられましたとき、血液検査をしてもらった所、白血球が六、〇〇〇という事で、中心地にあまり出ない様に注意されましたから、其後は余り中心地を通らない様に宇品線を利用し、広島駅・横川駅経由で通勤いたしました。

三五

金子鉄夫

(当時暁部隊機砲隊・上等兵)

一、被爆直後二週間以内の状況

昭和二十年八月六日午前八時頃、広島市比治山にて部隊命令に依り、八月十五日頃迄、復旧整理作業に従事。

爆発による轟音を聴取した。

閃光を受けた人は隊にて五、六人いたが、一人は八月二十二日頃死亡。

一、広島市内は倒壊炎上にて、地上は煙雲に包まれ、何が何だかまったく不明。部隊の活動場所には死体だけ。

昭和二十年八月六日午前八時頃、比治山本町通りで行進中に投下され、被爆直後に帰隊、部隊命令に依り八月六日正午より八月十五日早朝まで野営しつつ、宇品町ー千田町ー小町ー吉島町ー紙屋町ー松原町ー大手町方面にて負傷者の救護、死体の処理、火葬、市街地の復旧整理作業に昼夜兼行に従事した。その後、八月十五日一時帰隊し、八月十六日より八月三十日頃まで連日、市街地の復旧作業等のため派遣された。その後九月十四日復員した。

一、直接原爆症状はないと思う。

特別被爆者健康手帳を持っている。昭和四十三年五月二十九日に健康診断を受けた時は

赤血球数四七〇万

白血球数六、八〇〇

血色素量一〇〇%

色素係数(ザーリー)一

判定異常なし

大体は健康である。

三六

荒井勇

(当時船舶通信補充隊・上等兵)

昭和二十年八月六日の朝、宇品から市電を利用し、千田国民学校へ帰途途中、御幸橋を渡る手前にて警戒警報解除を聞き、橋を渡って間もなく、突然に電気がスパークした様な光が目映った。電車はそのまま走りつづけていたようであった。電車が停まって車外に出ても何も見えず、目の前が明るくなった時は、広島電鉄本社の少し手前で停車したようであった。電鉄本社の建物は全壊を免れており、建物内から何人かの職員が表に飛び出してきた(女性で頭に日の丸のはち巻をしていたので乗務員と思う)。

私の本隊は、比治山の麓の暁第一六七一〇部隊(船舶通信補充隊)で、私達船舶特別隊部候補生(三期生)は千田国民学校の校舎を利用していた。被爆当時、私の乗った電卓には、約四〇〇人の候補生が乗っていたと思われる、私は乗降口近くの窓際に立っていて、右手の指二本火傷したのみであったが、正面に立っていた人は顔等を火傷した。

千田国民学校へ向う途中も家屋の倒壊がひどく、どの様にして学校に着いたか、今は思い出せない。候補生が当時幾人程残っていたかもわからず、校舎も全壊

していた。

私達が着いた時は、学校の前の公園(グラウンドとのこと)に、候補生の負傷者が収容されていた。また校舎の下敷きになっている候補生がいると皆が言っていたが、大きい校舎の梁の下敷きになっているため救出することができず、そのうちに火の手が大きくなり、遂に不帰の人となった(二期生で指導候補生故加納氏)。昨年判ったのですが、もう一人下敷きになり、救出された方がおられます(東京都在住の二期生指導候補生で円崎氏)。

学校を出て、御幸橋を渡り電車通り沿いに比治山の部隊(本隊)に到着したが、兵隊はあまりいない様で、兵舎は全半壊、負傷者が何人程度いたかも不明である。皆比治山に掘った洞窟や山頂に避難していたと思う。

私も、山頂で一夜を過ぎたが、当時、山頂には、多勢の兵隊や市民等が集っていた。被爆後何日目か忘れたが、その比治山から裏の鉄道(宇品線)を横断して仁保国民学校に収容された負傷者の看護をした。学校の破壊状況は半壊程度より少しよいと思われた。収容人員については記憶がないが、階下のどの教室にも、相当数収容されていた。被爆後の死者は、記憶では石綿・志村両候補生の二人だが、千田国民学校に残っていた候補生も多数死亡者が出た由聴いている。

九月十日夜、広島出発、十五日札幌着。現在は身体には異常がない。

三七

岩下一夫

(当時陸軍船舶部隊・見習士官、(中略)航海長)

暁部隊の輸送潜航艇は二五〇トン、乗組員二五人。八月六日朝は、一隻だけが離部岸壁に接舷していた。松山沖へ訓練に出るため、出航用意で艇長など五人、艇の司令塔上に出ている。艇内には二〇人入っていた。

爆音は聴いた記憶もなく、落下傘・照明弾的なものも見なかった。見張りが二人立っていたが、何も気づかなかった。

司令塔の上でピカッとして、熱くてかなわぬので、私は舵手の陰にかくれた。見ると、艇長は立っているのに立ちあがり、艇長と「熱いですね」と会話をした。その時、太陽のような火の玉を見た。瞬間、その火の玉の下に、火の玉と地上を結んだように火柱が立った。これを確認。煙雲はまだ立たなかった。

とても熱く(上半身)、何が何だかわからぬが、とにかくにも出港しようというので、すぐにエンジンかけて出航し、直ちに潜航、呉寄りの沖で浮上して見たら広島上空に茸雲。その茸雲は浅間山の火山の噴煙そっくりと見た。郷里が長野県なので、見なれた浅間山の火山の噴煙そのままのようにモクモク盛り上っていた。

艇内にいた二〇人は、出入口四〇センチメートル角のハッチから、その大きさ一杯の巨大な丸太棒が飛びこんだような感じだったと皆言った。

何が起ったのか、わからぬまま松山沖に行き訓練。四、五日たってから帰り、広島荒廃に驚きつつ、戦災証明書の発行(紙屋町)や屍体処理などに一週間ぐらい従事した。

原子爆弾投下の時、潜航艇の司令塔の上だったので、火の玉の形は実にハッキリと見た。厚味のある火の玉であった。

八月五日の夕方、紙屋町付近で、高等学校時代のクラスメートと酒を飲み、別けて宇品に帰ったが、その友人は原子爆弾で翌朝は被爆死した。その友人の墓参に神奈川県鶴沼に行き、鶴沼海岸で戦後処理の火薬の大爆発を見た時、それが広島の原子爆弾の火の玉とソっくりだったので、驚いて思わず身をちぢめた。

火の玉・火柱、それはキレイというよりも、異様な恐怖感を強烈にいだかせるものであった。

三八

松井幸雄

(当時船舶通信隊・特別幹部候補生)

一、キノコ雲望見

昭和二十年八月六日午前八時十五分頃、私は山陽本線瀬野駅のなか程を、広島へ向って進んでいる列車のなかをいた。

同年二月一日、第三期陸軍特別幹部候補生として小豆島の若潮部隊に入隊した自分は、適性検査の後、広島市の比治山のふもとにある陸軍船舶通信隊補充隊通称暁第一六七〇部隊に配属され、船舶無線通信の訓練をうけて、あと一ヶ月程で実戦勤務につこうとする七月下旬、郷里から中隊長あてに「チチキトク」の電報があり、七月三十一日午後六時より八月六日の午前八時三十分までの一週間の帰省休暇をもらい、六月ぶり家に帰った。まだ息のある父親の顔をみて、当時、大阪に嫁いでいた姉にも会い、目前に実戦勤務を控えて心残りのない様に、時間のある限り、知人にも会った(父親は八月七日の朝息を引取った)。そうして休暇期間の前日の八月五日、まだ息のある病の父に気を残しつつ、帰隊するため家を辞し、午後九時三十分頃の神戸発下りの満員の夜行列車に乗り込んだ。ところが、岡山の手前あたりから警報が発令されて、列車はマイザリの如くじりじりしか動かない(ちょうどこの時阪神間、とくに西宮は空襲をうけていた)。

この状態では、とうてい定刻午前七時三十分には広島に着くことはできそうにない。ようやく尾道を過ぎたあたりからまともに走り出し、海田市の一つ手前の安芸中野に臨時停車したときは、これで広島に着いた様な気持になってやれやれと思った。ところがしばらくしてから、駅員が、いま広島が空襲でやられているから、西方面に行く人は歩いてくれと言う。ただそれだけで他のことは何もわからない。仕方なく駅のホームに出て外を見渡したとき、西方の山の真上に白い雲がもくもくと湧き、たちまちそれが頭デッカチな、まるでキノコの様な異様な形をして、さらにそれがむくむくと広がっていくのが見えた。

列車の人達よ、あの雲の下が広島あたりで、恐らく爆撃の煙であろうという、距離からしてもおおよそそれと思われたが、変な雲が出た程度でさして気にもと

めなかった。ともかくこれから広島に向って西へ三里(一二キロ)ほど、レールの上を歩かねばならない。私は、八時三十分という門限があるので、すぐ近くの中野村役場で「通過証明」をもらうことにした。同乗の人達も、列車がこれ以上動かないので、不満の表情をあらわしながら降りた。戦時体制の防空服の服装にこまじって、軍服姿も見られた。

自分は、軍服に雑のうと水筒を十字にかけ、帯剣の装備、雑のうの中には母の心づくしのにぎりめしと、おはぎが少し残っている。それは部隊に着いたら、どうということになるか判らないので、たくわえておく事にした。

列車から降りた人達は、自然に幾つかのかたまりになり、レールの上を西へ向って歩きだした。真夏の太陽がざらざらと体を焼きつけ、汗が背中(に)にじんできてくる。はるか西方を望めば、依然としてあの無気味な白い雲の広がりがあり、いっこうに消えそうにない。あの雲の下は広島だ。広島に異変があったのではたいかと、一まつ不安を抱きながら、レールの上をただ黙々と歩いた。

約四キロほど歩いたであろうか。もう少しで海田市駅という所で、我々と反対にレールの上を、こちらに向いて、やって来る一団がある。私は間近になって、その一団の様子がおかしいことに気づいた。両手をぶらつかせたり、手を首から手ぬぐいでつったり、顔をほろまわしたり、また、その顔は黒紫色で、皮膚がズルズルして、中には、出血している人もある。

「どうしたんだ。」と聞くと、「乗っていた上り列車が、丁度、広島駅に着いた瞬間、いきなり爆発が起き、列車ごと吹き飛ばされて、訳のわからぬままにこの様こやられた。足を痛めた者はそのまゝ広島にいるが、われわれはやっとの思いでここまでやって来たが、広島の町はひどい被害で入れない。おそらく時限爆弾が落ちてから、広島へ入ったらいつ爆発するかわからない。」という。

しかし、時限爆弾が無数に落ちているものでもないし、ともかくこの目で確かめなければと思いつつ、更に西へ西へと歩いた。しばらくして広い道路と交差する所に出たら、軍用トラックに出会った。これは助け舟とばかりに運転手に事情を説明すると、トラックも広島へ救援に行く所だということで、広島駅までという約束で、荷物台に乗れるだけ乗って一路広島へ向ってひた走った。

海田市を過ぎ、広島の一つ手前の向洋あたりから建物の窓ガラスが壊れ、広島へ近づくにしたがって、被害が大きくなった。今まで広島市街ま一回の空襲もなく、呉軍港に対する昼夜兼行の爆撃にも上空を飛行する程度(たしか外出のとき、不発弾が落ちたことを記憶している。)で、呉に比べて広島は、無気味なほど平穏な日々であったが、最後にはまったく無傷の広島をねらったものであろう。

戦略爆撃とはこんなものかと、米国に対する憎悪の念が胸に迫った。

二、被爆直後の広島に入る

トラックはやっと広島市街に入ったらしい。腕時計は正午を少し過ぎていた。「ここが広島だ。」と降ろされたが、

帰郷の際にあった広島駅がわずか残骸をとどめているばかりで、市電もレールが吹っ飛び横倒しとなって、架線はズタズタに切れている。それと、不思議に附近には人影は見当たらない。被爆した人達は避難場所を求めて散ったのであろう。すでに火災が至る所に発生しているらしく、火の海に入っている様でパチパチという音がする。全市が被災して手がつけられないため、消火活動はまだできていたらしい。それに一番困ったことは、目標になる建物が壊れて方角の見当がつかないことだ。

広島市の船舶通信補充隊に配属されて、すでに六ヶ月になるが、なにぶんカゴの鳥で、月二、三回の外出は、八丁堀附近のもっぱら繁華街をうろつき、たまに広島城附近に出かけたが、市内全体の土地勘には案外うとく、それに加えて目標の建物が無くてはめくら同然、まことに心もとなげ次第であったが、とにもかくにも部隊に辿りつかねば一念で、比治山目ざし南へ南へと走った。

火災が大きいところへさしかかると熱くて通れない。思わず道ばたの防火用水槽を見つけて、水をかぶり走る。三番目位の防火用水槽で黒いものが目につくので、よく見れば、それは五、六歳の男の子が、おそらく熱いために無意識に水槽に飛び込んだのであろう。そのまま黒焦げになって、頭をつつ込んだまま冷たくなっているのだ。思わず合掌してその場を離れ、やがて橋のたもとに着く。この附近にいる人は、身にまとっている物は皆ボロボロ、顔のずりむけたまっ黒な人が群れをなして、重傷者はじっとしてうずくまり、横たわっている人もある。川の中に目をやれば、ぎっしりとやられた人が水際こうずくまっている。熱いために無意識に水のある所へと寄って来たのであろうか。皆、動きがこぶく、ただ呆然と水にひたっている。

その前を通り過ぎようとする、その中の二、三人の婦人が突然駆け寄り、私の水筒にしがみついて、「兵隊さん、水くださいー。」と、三拝四拝のおがみ倒し、あまりの気の毒さに水筒を差し出すと、栓を抜くのもどかしく、ゴクンゴクンと飲んで、たちまちなくなってしまった。それでもまだ飲み足りないような顔をする。その顔は、いずれも正視できぬほどにやられている。橋を渡りきった所でたむろしている集団に、また水をせがまれたが、すでに水筒のお茶はからっぽであるが、承知してくれない。しかたがないので栓を開けて、水筒をさかさにして、やっと納得さすが、やられた人達はよほど喉が乾くのであろう。

交差点で警備している憲兵からは、水を飲ましたら死んでしまうからいけないと、注意された。むごい事になったものだ。まったくこの世にあるまじき、さながら生地獄の様相、すべてが常識はずれの事ばかりで、無我夢中でわけがわからないが、自分は軍隊の一員であるという自覚で、やっと恐怖を抑制することができた。

三、船舶通信隊の状況

やっと部隊の営門が見えたが、今日程、広島駅からわずか一キロ半余りの部隊までを遠くに感じたことはなかった。兵舎は全壊ないし半壊で、まともな建物はなくなっている。営門に衛兵が五名立っているだけで、営庭には人は見当たらない。

衛兵に帰隊した事情を報告し、休暇証明と中野村役場でもらった通過証明を渡し、同時に被害の事情を聞いたが、詳しく語ってくれず、兵員の八割程度負傷し

て、現在部隊は比治山の洞窟に避難しているから、直ちにそちらに行くようにと指示するだけである。

営庭を横切り、裏門をくぐって急いで比治山の洞窟に這い上がった。洞窟は通信器材の疎開場所として、わが部隊が昼夜の突貫工事で行ない、夜間にはよくドカンドカンとダイナマイトの爆発音がしたものだ。比治山は部隊と余り離れていないが、不思議に被害をまぬがれている。息せき切って自分の所属のイ中隊の収容所に入った。

洞窟の中は、裸電球の照明を各所に行ない、通行には不便を生じない。特四班の所をたどり着き、まず班長(失名・香川県出身)に帰隊の旨を報告すると、班長は、「よく無事で帰ってくれた。」と、涙を流さんばかりに喜んでくれた。班長も首から上の顔全体をやられていた。もともと気のやさしい班長だったが、被爆して一層気が弱くなったようだ。班の人員はだいたい揃っているようだが、日夜顔を会わせている戦友の顔が、「誰か?」と聞かなければ、判らないほど変形している。

三重県出身の藤森候補生や福島県出身の柳田候補生などの顔は、フット・ボールのようにふくれ上っている。首から上や手・足などのやられている所は、すべて被覆していないので、直接太陽光線に露出していた所ばかりである。

被爆したときの状況を総合すると…いつもの通り、朝の点呼が終って、八時三十分の演習整列の時間で、部隊の九割程度整列ができたとき、いきなり上空でピカリと閃光を感じた瞬間、顔や手の露出部分に激しい熱さを覚え、同時にものすごい圧力で地面にたたきつけられた。その時に、熱さを覚えたところが火傷のようになった。地面にたたきつけられたとき、人の下敷きになった者は、火傷をまぬがれている。太陽光線が直接当たっている部分がすべてやられ、被服で包まれている所は助かったと言うのである。これは、今までの常識では考えられない不思議な爆弾を、奴さんは持って来たものだ。…(この爆弾の呼び名は、海田市で聞いた時限爆弾に始まり、特殊爆弾、ピカドン、原子爆弾と変っていった。)以上の通り自分の部隊は、演習整列という最悪の状況で被爆し、人的被害は八割だという。わが部隊に限らず、被爆した午前八時十五分という時間は、広島市民にとって一番不幸な時間であった。それは、主人は通勤、子供は通学途上と屋外に出ている時屋外に出ている時間であり、しかも市外から市内への通勤路と人口間であり、しかも市外から市内への通勤と、人口表裏にふくらみつつあったからだ。

部隊でも、まったく無傷な一割程度のもは、すでに市民の救護活動に出動している由、ただひとり無傷で、何もしていない自分は、やられた戦友に対して申しわけのない気持ちでいっぱいであった。

広島市内は、被爆した夜から三日三晩の間、燃えつづけた。われわれが避難している比治山は、市街の南方面で高台にあるので、市内の展望がよくきき、昼は警防団が救助活動とあわせて消火活動をやるので、火勢は衰えているが、夜ともなると燃えひろがって、それは悪魔の焰の如く、市民を恐怖のどん底に落とし入れてもするようなすさまじさで、夜空を焦がしていた。しかし、広島はもうなす術もなく、運を天に任せているのだ。私は、悪魔の火よ、燃えるだけ燃えろと叫びたくなった。

四、救護活動に出動

二、三日して宇品の船舶司令部から、わが船舶通信補充隊に対し、「被災者の救護に出動すべし」の命令が出た。広島市内の軍隊もほとんどやられ、特に広島城附近の中国軍管区諸部隊では、出陣式的最中に全滅し、この爆弾は、広島城附近になるほど被害が大きいとの情報を聞いた。

陸軍病院をはじめ、そのほかの市内の主要な医療施設が潰滅して、人的被害に対する救助ができない。幸い市内から離れている宇品は、大きい被害をまぬがれ、ここに砲部隊のセンターである船舶司令部と船舶練習部がある。この練習部へ軍民一体の収容が始まった。道ばた、橋の下などあらゆる避難場所から、歩きたい被爆者を担架に乗せてトラックへ。そうして宇品の船舶練習部へと、五日程連続しただろうか。収容人員次第にふくれあがり、約二、〇〇〇人の軍民合同の収容で、名簿作成にひと苦労。重傷、重体者もかなりおり、口もきけないので完全な収容名簿ができない。

被爆者に気の毒なことは、せつなく収容しながらも医師や医薬品が不足していて、満足な診療ができないことである。われわれが衛生兵の代用をやるわけで、傷口に火傷用の黄色い塗り薬と包帯の取替えを行なうが、それも人手不足で満足にはできない。真夏で、暑いので傷口から化膿をおこしてくる。それと甚だしく食欲がない。炊出しのにぎりめしはほとんど口にしない。しかたがないのでオカユにする。手や口をやられて自由がきかない人には、われわれがスプーンで口に運んであげる。(後に聞いたことだが、放射能で体の細胞が犯されて、胃腸障害が生じたため、食物が体内に入らたかったのだそうだ。)

それに一番困ったのは、収容後一週間ほどしてから化膿面がはえがたかり、それが卵を生みつけるために、ウジ虫がわくことである。ウジ虫の発生はすぐ早く、とつてもとつても湧いて際限がない。包帯をはずした傷口の中で、ウジ虫がうようよしている。それをピンセットで一匹一匹根気よくつかみ出しては殺す。中には、つかみ出す前に傷のすき間に入りこんでしまうすばしこいものもある。このウジ虫退治の要求にも、人手不足でとても応じきれない。患者にとつてもこの傷口の客には、気持ちが悪くつらいことは表情でよくわかる。ほかのことを省いてでも、ウジ虫退治はできるだけ入念にしあげる。それはなによりも喜ばれた。さらに気の毒なのは婦人たちで、頭の毛も乱れるだけ乱れ、手入れをしてあげたいが、首から上をひどくやられていて、手のつけようがない。

夜の不寝番のつらいことは、平常の内務班の比でない。それは患者のうめき声に混って、訳のわからぬウワ言を言いだしたら、翌日は必ずといってよいほど冷たくなってしまふからだ。連日連夜、その繰り返しである。近くの福山、それに大阪、福知山の陸軍病院から応援に来てくれた。それでも手が足りないのだ。

八月十五日の朝、救護に当たっているわれわれは、重大ニュースのあることを知らされ、正午にラジオのある一室で、陛下の玉音を拝聴した。雑音が入って聞きとりにくかったが、日本がボツダム宣言を受諾したことにはかならなかつた。それは連合国に対する日本の無条件降伏を意味するものである。とたん張りつめていた気持ちが抜けて、何をやるのもいやになった。

九日には、長崎市にも、広島のような爆弾が投下されて、甚大な被害をうけたということだし、この二つの新型爆弾で、日本は手を上げたのだろうか。軍民一体、一億総決起の本土決戦、日本海軍の誇る連合艦隊はどうなったのか。何を言ったところですべてが終わったのだった。

やがてわれわれ軍隊にも武装解除をしなければならぬことが伝えられる。それにつけても、広島このひどい状況を目前にして敗戦とは、どうしたことであろう。泣くにも泣きたい気持は、自分一人の感情ではなかったと思う。やがて、この船舶練習部の収容所から、軍は手を引き、引続き看護は公共機関に委ねられることとなった。

僅かな期間で、しかも満足な看護ができず、いまだ数多く病床に伏した人達を目の前にして立ち去ることが心残りであった。しかし、後を引き継いだ地元の人達は、被爆者に対する手厚い看護と広島復興に立ち上ってくれるだろう。それからわれわれは、郊外の国民学校の校舎に移動して復員をまった。時期は九月十日前後であった。

五、復員

九月十九日に復員するまでの間、いまだ軍規も乱れず、規律のある生活を送ったことは、せめてもの軍人としての誇りであった。しかしながら、この間、われわれが最も恐れていたことが現実となった。

それは、直接被爆者でない者までもが、脱毛・血便の症状が出てきて収容されたことだった、(当町これが原爆症といわれた。)それからというもの、元気な者までがすっかり原爆症ノイローゼにかかり、朝、起床したらお互いに同僚の頭髮をつかんで引っ張り合って、毛が抜けなければ安心したものだ。また、当時原子爆弾で被爆した広島にいたので、自覚はなくても、多少の放射能の影響を受けていたらしく、ほとんどの者が、蚊にかまれた部分が化膿するといった具合だった。

復員式は、比治山の部隊にかえり、顔面半分を火傷された部隊長より、「それぞれ郷里に帰り、祖国日本の再建に努力されたい。」との訓示のあったことを思い出す。暇さえあれば、「眺めゆる瀬戸の海、昇る朝日の島影に…」と、わが陸軍砲隊の歌を軍歌演習したなつかしの比治山とも、いよいよ別れを告げることになった。二月に入隊するときは、夢にも考えなかった丸腰の復員である。被爆のケロイドを顔にとどめ、今やそれが薄赤くなった数多くの戦友、いや同僚とともに焦土と化した広島をあとにして、復員の途についた。

三九

古本源吾

(当時船舶練習部経理室・陸軍業務手)

被爆した場所は、宇品町七丁目の元大和紡績工場内(船舶教導聯隊)です。八月六日午前八時ごろ、向洋へ作業に行くため、長谷川曹長と小田女子職員と私の三人(時間も早く出勤者三人でした。)が、船舶練習部経理室で更衣中、突然、青い閃光を窓側に見たとたん、猛烈な爆発音と爆風を同時に受けました。

工場の厚いガラス窓枠が室内に飛び込んで来て、私は頭部三カ所に負傷し、急いで教導聯隊の医務室に行きましたが医局は足の踏み場もないほど薬品が散乱していました。

幸い陸軍の医療公用行李が見つかり、ヨードチンキとデルマトールで応急措置をしました。まだ、誰も来ていませんでしたが、私が自分で応急手当をした頃から、続々と聯隊の兵士がやって来ました。いずれも相当の負傷です。ガラスの破片で強く切られた人が多いようでしたが、死亡者はなかったようです。

爆弾の威力から察して、普通のものではあるまいという噂でした。私も原子系の放射線状のものかも知れんと思いました。隊内は一瞬にして、例えて言えば、敵味方の区別できない混戦状態とも言えたでしょう。市内の方は火災が起き、音信不通、無統制の状態に陥り、詳細は不明でした。

しかし部隊内の建物は、爆風によって窓枠やガラスが飛散しただけで、主体構造物の倒壊はなかったようです。七丁目付近では人畜・建物の被害も比較的に少ないように見受けられましたが、市の中心部の方は大火災で、踏み込める状態ではありませんでした。

午後二時頃になって、私は宇品七丁目から丹那に出て、比治山の東裏の段原町を通り、段原は比治山の関係か、半倒壊の家が多く道路の通行は困難でしたが、ここから大正橋を渡り、広島駅の東側を通り、岩鼻に出て、火傷者が路上にいつれの矢貫村を通り、中山峠を越え、戸坂村にたどりつきました。戸坂の国民学校は負傷者の収容所となって混雑していました。戸坂から、また歩いて口田村の自宅に帰りつきましたので、午後四時ごろでした。口田国民学校も多数負傷者が収容されていましたが、治療せず、ただ寝ころんでいるだけの状態でした。

私は頭部の負傷で、治療一週間を要しましたので、その間の市内の状況はわかりません。八月十二日、歩いて口田村の家から牛田に出て工兵橋付近に至りますと、被爆後七日目ですのに、堤防付近にまだ兵士の死体がたくさんあり、悪臭紛々。ふくれあがったその死体は工兵作業場のあちらこちらで火葬されていました。白島町から電車道に沿って歩き、八丁堀に出て、瓦礫ばかりの中心部を経て、御幸橋を渡り、宇品の原隊に帰りました。

隊内は、軍隊的秩序がなく、兵士の戦意喪失、敗戦の色は濃厚で、軍人軍属の家族や知人の治療に精一杯のように感ぜられました。私達の業務と申しまして、周囲がこんな状況で特別に記述するほどのことはありません。

終戦後に、宇品の陸軍共済病院が日本医療団病院となりましたので、此処に船舶練習部経理課長であった木村経一氏と共に就職し、院長小見山泰造博士(元軍医小將)のもとで、医療業務に従事しましたが、同病院は原子爆弾の被害も大きく、建物の損傷いちじるしく、広大な二階建も、内部はひどく崩壊していましたから、一部分の片づけを行ない、石橋元県病院長を副院長として業務を続けました。黒川博士が小見山院長と交代され、石橋副院長は井口県病院の方へ転任されましたとき、私も井口病院の方へ先生と共に移りました。

石橋先生は、戦前水主町の県病院の院長でしたが、病院の建物が倒壊すると同時に、その下敷きになられました。幸い先生は建物の合掌のすき間から、一縷の光線を発見され、これを頼りに這い出して助かったと語っておられました。先生は看護婦七人の遺骨を、井口病院に持って来て、七年間、仏間に安置し毎朝お経

をあげて冥福を祈っておりましたが、在職中に逝去されました。後任には、院長の長男高橋洪一氏が院長となりました。洪一氏は、己斐町で被爆負傷者の治療にあたっておられ、原爆症に関する貴重な研究論文を、現在でも持っておられると思います。

(六)

(県政)雑記帖

竹内喜三郎

八月六日

豊田郡九名

衛生課へ三名杉野精八日一一一日(秋光)

大迫礼三八日一一〇日・一二日→

田中魁八日一一〇日・一二日→

(学務課長)

援護課へ五名佐伯鼎八日一一二日

西村必二八日一一二日

山田三千三九日→

林秋雄八日一一一日井出上

外一名

食糧課へ一名中本圭市→

(註)これは、昭和二〇年八月六日正午前、西条警察署長を通じ、当時豊田地方事務所長であった私宛連絡の電話により、豊田地方事務所より応援のため、広島県庁に派遣した割当人名表である。

広島市空襲被害予想外に多し。

一、食糧、救護班できるだけ多く送れ。

二、警察官、警防団員を応援派遣せよ。

三、貨物自動車できるだけ多く送れ。

四、ローソク、マッチ、給水用具(四斗樽の如きもの)できるだけ多く送れ。

五、県庁職員は多数死傷ある見込み。指揮連絡に支障あり、各署(警察署)は応援の後も自署同様に行動すべし。

六、警察部長は多聞院、長官は安芸高女にあり。

(註)県庁舎焼失に備え、県では、予め県庁舎焼失の場合における庁員参集の場所を次のとおり定めてあった。

安芸高等女学校(広島市打越町)

広島県立第二中学校(広島市西観音町)

元・広島師範学校(広島市皆実町)

八月七日

罹災患者救護所の設置

(救護所)東練兵場・泉邸跡・被服廠・県庁跡・御幸橋東側三叉路・赤十字病院・府中国民学校・市役所・比治山西

側聖橋・東警察署・観音町中央十字路(市商北側)・工兵聯隊・舟入本町・似島・宇品船舶練習部・暁六一

八〇部隊・坂金輪部隊・住吉橋・横川駅・古田国民学校・己斐駅・中山村・土橋・廿日市町

(註)被爆直後逸早く設置された臨時救護所である。

昭和二十年八月七日午後二時より、東警察署二階会議室(現在・広島銀行銀山町支店)における広島県庁部長会議の内容その他の記録

一、新聞

大阪ヨリ一〇万部・門司ヨリ一五万部・松江ヨリ一、二万部配給方連絡

二、部長会議開催午後二時

イ、食糧ソノ他ノ物資配給計画

ロ、屍体処理二村、刑務所囚人四〇〇人使用、僧侶ノ動員

三、経済第一部長中心二農務課長、地方事務所員等協議

(食糧配給対策)

イ、缶詰二〇万人分二五万個

ロ、蔬菜二〇万人分

ハ、砂糖一人宛一斤

配給対象……負傷者・官公衙・防空要員・放送局・新聞社・警防団・消防署・警察署・救護班

二、水産食品イリコ一人当一五匁・鰯一人当三枚・海苔一人当五枚・削鯉一人当一五匁・昆布一人当一〇匁

ホ、酒・葛酒一人当三合・煙草一人当一〇本

配給対象……砂糖ノ配給対象ニ準ズルコト、但シ、負傷者ヲ除ク

へ、配給機構(配給挺身隊ノ組織)

西署一〇ヶ所安佐郡

東署〃安芸郡

宇品署〃佐伯郡

ト、食器ノ供出安佐・安芸・佐伯ニ於テ各家庭ニ点宛

チ、草履ノ供出山県・賀茂・豊田・高田・御調・世羅一戸毎二二足宛

四、東地区警備隊長(晁沢田部隊長)

中地区〃(〃芳村〃)

西地区〃(〃梶〃)

五、屍体処理箇所

イ、山陽中学北側

ロ、市役所

ハ、紙屋町・八丁堀附近

二、土橋

六、天幕及ヒ菰ノ配給

七、水道ノ復旧一日約八万立方米使則ノ所、現在四万立方米

八、バスノ運行開始

九、罹災民相談所開設

一〇、燈油ノ配給

一一、罹災証明書ノ発行……警備隊ニ移ス……一応一週間後

戦災相談所ノ設置(町内会)

一二、炊出シハ、八日間行ヒ、順次通常配給ニ切替ヘ

残存町内会、部落会ノ整備

一三、便所ノ建設、收容バラックノ建設

一四、地方人ニ対スル案内所設置

八月八日

中国復興財団設置

設置年月日昭和二十年八月八日

事務所広島市小町中国配電(株)内

事業中国地方復興に必要なる資材の獲得及びこれが運分並びにこれに伴う一切の業務

組織委員長(鈴木貫一)、常任委員、委員若干名

対四ヶ国宛通告(昭和二〇・八・八)

一、天皇陛下は、世界平和を衷心より希望し、ソ連を通じて和を講じ、ポツダム宣言を受諾する。

二、但し、天皇陛下の大権を侵害しないこと。

三、天皇陛下は、陸、海軍に対し交戦中止を命令し、軍事行動を停止せしめる。

四、天皇陛下は俘虜の輸送を確保する。

五、日本の政治、経済は自由を希望する国民の総意を以てこれを決定する。

六、必要のときまで連合軍の武装占領を認める。

八月十日

広島県庁内連絡会議

一、八月九日「ソ聯ト交戦状態ニアル旨」呉鎮長官ヨリ通報アリ

二、町内会ニ於テ、共同湯沸場、共同便所ノ設置ヲ希望

三、縁故無キ者ノ収容方法、修覆用資材ノ配給如何

四、海軍兵学校保管、朝鮮米二、〇〇〇俵(六〇kg入)一時借受

五、海軍潜水学校及ビ大竹海兵団ヨリ、各朝鮮米四、〇〇〇俵一時借受

山口県萩ヨリ、毎日二〇輛、一、六〇〇石廻送(四、〇〇〇俵)

六、警察署ニ於テ給食継続中

八月六日～八月九日、三日間ノ給食状況

乾パン三五五、九八〇食握飯七五七、七一―食

七、(非常用食糧配給要綱)

警察給食二日間、三日以後平常配給、一日以後ハ、町内組織ノ確立地区ヨリ順次通常配給→

目下、配給所ノ設置準備中

八、庁員罹災状況

総数健在数負傷者死者不明

警察部二七八七五七二一五一一六

其ノ他八二九一七九一九五四二四一三

計一、一〇七二五四二六七五七五二九

全軍將兵ニ告グ

ソ聯遂ニ戈ヲ執テ皇国ニ冠ス名分如何ニ粉飾スト難大東亞ヲ侵略制覇セントスル野望歴然タリ

事茲ニ至ツテハ又何ヲカ言ハン斷乎神州護持ノ聖戦ヲ戦ヒ抜カンノミ仮令草ヲ食シ土ヲ嗜リ野ニ臥スルトモ斷シテ戦フ所死中自ラ活アルヲ信ス是即チ七生報国

「我一人シキテ在セハ」ノ楠公救国ノ精神ナルト共ニ時宗ノ莫妄想慕直進前以テ醜敵ヲ撃滅スルノ闘魂ナリ

全軍將兵宜シク一人モ剩サス楠公精神ヲ具現スヘシ而シテ又時宗ノ闘魂ヲ再現シテ驕敵撃滅ニ慕直進前スヘシ

昭和二〇・八・一〇陸軍大臣阿南惟幾

八月十二日

高野広島県知事自ら起案された災害復旧対策三案(昭和二〇・八・一二)

第一案災害復旧対策

一、民心安定策……宣伝、啓蒙

二、食糧対策……通常配給へノ切替

三、生活必需物資ノ配給へノ切替……配給機構ノ確立

四、給水対策……水道復旧

五、配電……主要地区個所へノ急速ナル配電

六、傷病者ノ医療救護

七、屍体処理

八、道路ノ啓開清掃

九、交通対策……鉄道ノ復活

バスノ〃

電車ノ〃

其ノ他ノ輸送機関ノ利用

貨物自動車ノ運用統制

軽車輛ノ〃

自転車ノ運用統制

荷牛馬車ノ〃

一〇、集団罹災者ノ収容対策ト孤児収容所ノ開設

一一、新聞報道機関及ビ放送局ノ復活

一二、金融機関(銀行、組合、保険会社)ノ復活

一三、防疫対策

一四、治安維持ト流言蜚語ノ取締(敗戦、厭戦思想ノ取締)

一五、慰安並ニ士氣ノ昂揚

第二案広島市復旧対策

一、恒久的都市建設計画ノ戦後ニ譲ルコト

二、焼失地域ノ暫定的建設計画(戦争遂行中)ヲ策定スルコト

暫定的建設計画ヲ樹立ニ当リテモ、可能ナル範囲ニ於テ、恒久的計画ヲ考慮

三、焼失地域ニハ、一般民家ノ建設ヲ認めサルコト

但シ市民自己独立ニテ半地下式又ハ壕式

一、主要道路ヨリ一〇〇米、其他五〇米

二、間隔二〇米ヲ存スルコト

三、河川ヨリ五〇米、橋側ヨリ一〇〇米

四、市内外山間部ニシテ軍事上支障ナキ地域ヲ選定シ、横穴式又ハ簡易ナル住宅ハ、所要ニ応ジ、其ノ建設ヲ認めルコト

五、残留スルヲ必要トセサル市民ハ、出来得ル限り市外縁故地ニ疎開シ、極力増産ニ挺身セシムルコト

六、市内ニ残存スル者ノ居住分布ヲ適当ニ決定スルコト

七、市内ニ残留ヲ要セサル官庁・学校・銀行・会社・組合・統制会社等ハ、夫々適当ノ地ニ疎開セシムルコト

八、残存堅牢建築物ノ利用統制ヲ図リ(軍関係ヲ除ク)戦争遂行上、必要ナル向ニ重点的ニ之ヲ利用セシムルコト

第三案罹災工場復旧対策

(註)この災害復旧対策三葉は、当時東警察署楼上(県庁仮舎)に泊り込んでおられた高野広島県知事が、深夜自ら鉛筆をとって起草され、傍らに同じく泊り込んでいた私に検討の上、謄写版にかけるよう渡されたものである。

焼失地域内における配給対策協議会の決定事項(昭和二〇・八・一二)

馬鈴薯四五、〇〇〇貫(安佐・安芸・佐伯ノ三郡ノ罹災民一人当三〇〇匁・地方事務所ニ委ス)何レモ話合済

(75,000 貫)

三〇、〇〇〇貫(市内ノ分ハ賀茂郡ヨリ受入市内罹災者一人ニ付三〇〇匁)

蔬菜(市内九日～一一日)三日間、安佐・安芸・佐伯三郡ヨリ

青果物配給統制株式会社ヨリ手配(五万貫出荷)

(一二日・一三日)今明二日間蔬菜配給ヲ停止

切替用……混食大豆萩ニ在リ

朝鮮米……三五、〇〇〇俵＝一四、〇〇〇石

大豆……二〇、〇〇〇俵

一五日迄(一、七六〇石)ノ分ハ配給済

外ニ、政府手持外白米四五五石五九五石

〃三五〇俵＝一四〇石

外ニ兵学校、海軍ヨリ融通ヲ受クル分一〇、〇〇〇俵又ハ萩ヨリ廻付ノ分ヲ融通

(註)私は八月十三日、市内各配給所を自転車で廻り、末端配給の実情を視察したが、充分配給方法が徹底しておらず、副食物の配給を更けていないところもあったので、翌十四日から毎朝、配給責任者会同を催すこととした。(食糧配給統制組合、青果物配給統制組合、県食糧課、広島市配給課)

防衛会報

昭和二〇・八・一二一四・〇〇於・広島市市横空地天幕内

一、軍管区司令官ノ発令ト共ニ、戦災復旧ノ指令ハ、地区司令部ニ移ル

本日ヨリ地区司令部ニ於テ、防衛会報ヲ主催ス

二、今後段々技術的ナ細カイ問題ニ入ルモノト考ヘルカラ、一般的会報ハ進捗状況、一般的連絡、之ニ対シ打ッベキ手等ヲ協議スル程度トナラン

細カイ技術的打合せ(分科会)ハ別ニ其ノ都度開ク

(以上、軍管区参謀)

一、地区司令部ハ、現在北地区ノミノ警備ナレドモ、今後ハ全部ノ地区ヲ受持つ

明日カラ比治山ニ一時移リ、将来ハ己斐町上野ガーデンニ移ル

隷下、地区警備隊ト県下特設警備隊トヲ以テ警備ニ当ル

兵力ノ援助ハ今後困難可成各自ニ心配セヨ(地区将校)

二、放送機械回収終ル、流川放送局ノケーブル発見、中継所迄ノ連絡ハ、近日中回復ノ見込ミナルモ、通信省線ノ被害復旧程度如何ニ依ル(放送局)

三、第二総軍・中国軍管区・船舶司令部・県庁・其他主要官庁・茲一兩日中ニ復旧可能ナラン、関係回線ハ電報モ本日ヨリ受付開始……中央電話局ニテ受付……

送信不能ノ区間ハ通送ニヨリ中継(通信局)

将来横穴ニ移転ノ予定……中央電話局配線ニ付特別工配意ヲ望ム(通信・放送局)

四、山口県ヨリノ防空情報ハ山陽回線ノ為、大阪ヨリ四〇分モ懸カル、コレデハ防空情報ノ価値ナシ、何トカ考慮ヲ望ム

広島監視隊本部ノ情報ハ、県庁ノ中継回線破壊ノ為、送ルコトヲ得ス、何トカナランカ

中国軍管区ノ放送ハ、四国復旧後(一七、八日頃)開始ス(軍管区)

五、機関区水道水圧不足、タンクニ上ゲルコト不能(水道部)

幹線送水停止、注水場ノ機関車低下設備ヲ研究スルコトニ決定

六、電車復旧三五人、高師八〇人応援、電柱ヲ建テルコトニ全カヲ注ギツツアリ

電柱毎日一軒一七日間ニテ完了、電線ノ整理(スパンワイヤー、ドリルワイヤー)一〇日以内ニ運行開始ノ意込ニテ進行中(電鉄)

復旧後ノ停留所ヲ予メ決定、会報ニ懸ケヨ

七、電灯ハ明日中ニ完了(総軍・中軍・県庁・市庁・測候所・地区司令部)

八、郵便物……隣組配給、局止メ

差出シ……駅前、貯金支局内(ポストニ四ヶ所ノ復活)

主要官公署間……連絡郵便ヲ開設

九、落橋、一部落橋、橋脚低下ノ復旧……資材入手難

一〇、市内一六ヶ所、配給所二八二八表ヲ割当配給済(蔬菜其他ノ総合配給実施準備中)

一、四〇〇表……海軍軍需部

△字品ハ昨日八〇〇表、本日六〇〇表……今日トラック五台ニテ引取中

三、〇〇〇人……▽三〇……◎三篠方面切替ニ心配シツツアリ

隣組、町内会ノ急速整備、戦災保護法ニ依ル救護ノ徹底

山口萩一、三〇〇石

外米二、〇〇〇表ハ字品ニ入荷……荷役未済(二〇輛一、六〇〇石)

一一、(赤痢患者発生状況)

日赤二三人、軍人六人、廿日市方面、観音町、地御前、女専、太田川上流ニ散発(本川、袋町?)

市周辺七ヶ所、市内三ヶ所ニ救護所ヲ集約ノ予定

市内ニ現在イル患者一、〇〇〇人程度、今後ハ市外ニ重点ヲ指向スベシ

軍患者及平民患者五、〇〇〇人近ク字品ニ在リ、三、五〇〇人転送済

収容所ニテ医薬品不足ノモノハ、軍ニ於テ補給ス(己斐・向宇品隊部補給所)

一二、白血球三、〇〇〇以下トナルト生命ヲ失フ

火傷ハ白血球ガ増エル管ナルニ、似島ニテ検査ノ結果、事実減少ノ事実アリ(検査官ハ軍ナリ、顕微鏡検査)

ラヂウムヲニ糎(半径)範囲、ウランノ原子爆弾ト決定ニ糎内ニ放射

一三、海上、島附近漂流ノ死体ハ町村ニテ処置スルコトニ取計ハレタシ

一四、戦闘司令部ハ連絡所ト変更

軍管区ノモノ、外関係ノモノ数名残留、当分勤務継続

(一般会報一時間(一五時~一六時)、引続キ一時間(一六時~一七時)、分科会(二時間)ヲ開ク)

(明日ノ分科会ハ輸送ト衛生)

一五、収容患者死亡ノ場合ノ孤児ノ収容(比治山校三五人収容)

(編者註・欄外記入ノモノ)山口萩ヨリ一〇輛着荷、至急荷役スルコト

八月十三日

食糧配給計画

味噌一人当五〇匁~三〇匁一五、〇〇〇貫・楠原味噌工場(中広町)

曉六一四〇西警備隊ヨリ一部配給方希望(二、〇〇〇貫～三、〇〇〇貫希望)

(神崎国民学校跡・連絡員本庄長正主計中尉)午後一時

一八〇、〇〇〇人×五〇匁=九、〇〇〇貫

安芸・佐伯・安佐郡ニ各一、〇〇〇貫

救護用一、五〇〇貫四五〇〇貫

計一三、五〇〇貫

輸送……八・一四トラック一台要求、油手配

容器……八・一四市周辺地帯ヨリ借集メ、楠原非常用味噌ヲ詰替配給

配給……八・一五

◎患者ニ鶏卵ヲ配給方手配セヨ…(長官指令)…農業会、配給方法ハ衛生課ト連絡セヨ

缶詰類五日市ニ在リ六二、四〇〇缶

牛乳毎日六〇〇～七〇〇人チチヤス(配給責任者・和田)配達人アリ

砂谷酪農組合(六斗～七斗)……油又ハ自動車手配ノコト

八・一三ヨリ衛生課ノ指示ヲ受ケ、配給ノコトニ決定

食器類救護課ヨリ地方事務所ヘ手配ノコト

附添人食糧、患者ニハ粥食、味噌、塩、自炊設備ヲ用意セヨ……(生活物資課)

◎現在、町内会整備中、順次通常配給ニ移ス

主食ハ営団

副食ハ食配主任及ビ配下二人位配置済

◎宇品・村上康夫(醤油醸造場) 醤油、調味相当アリ……現状ヲ見テ修理ノ上保管セシムルコト

塩尾道ヨリ六〇俵、入荷分ヲ署長ニ任ス

炊事ハ学校教員、八・一五日ヨリ開始……女学生一五〇人応援

救護所ノ責任者ヲ決定、鍋、釜ハ援護課ニテ手配

蔬菜出荷(安佐郡)当初計画ノ約半分ニ過ギズ

八・一四(広島)二、〇〇〇貫(呉)二、四〇〇貫

一五三、〇〇〇貫二、四〇〇貫

一七二、九〇〇貫二、九〇〇貫

一八二、九〇〇貫二、七〇〇貫

一九二、四〇〇貫二、九〇〇貫

二〇三、九〇〇貫三、二〇〇貫

計(広島) 一七、一〇〇貫(呉) 一六、五〇〇貫

安芸郡一〇、〇〇〇貫(一〇日間)

佐伯郡一〇、〇〇〇貫

市内一五、〇〇〇貫

八・一八二ハ、二一日～三一日迄ノ計画ヲ、立テルコト

郡内ノ大口消費ハ青果統滞組合及ビ軍需ヲ含ム軍民ノ振分ケ折衝中

白米既ニ八・一五迄配給済

軍ヨリニ、〇〇〇俵……宇品ヘ着荷

八・一四山口萩ヨリ順次送出ノ予定

非常配給

警防団(警官ヲ含ム)一、六五〇人

救援地三四八人

〃(訓導) 三一人

〃五二人一人当ニ・一合宛

土木八一人今後市ノ救援ガ増加スル予定

耕地三一人

重傷患者二、三六〇人

計四、五五三人約一〇石

防衛宿直ニ対スル食糧ノ問題(官公署、直接監督指導ノ責任者)今マデ、一合程度加配

浜井市配給課長ト連絡

八・一三・〇〇市役所ニ於テ聯合町内会長召集(三三人中、三〇人出席)

一、聯合町内会長会議ニ於テ、下部組織ノ整備、食糧配給ノ切替ノ趣旨、之が実施上ノ協力等指示スルコト

二、綜合配給所従事者ノ勤務、陣容ノ整備、配給確保ニ対スル配意等ニ付、一層ノ精進ヲ望ムコト

三、各配給所ノ視察ヲ当分ノ間実施スルコト

(註)浜井市配給課長は、後に広島市長となった人である。

(編者註・欄外記入ノモノ)

◎砂糖◎野菜◎缶詰

大森経済第二部長静養先可部町署附近”笹木旅館”

食糧荷役(食糧事務所へ連絡員ヲ出スコト)

一〇輛帯貨二、〇〇〇俵(自動車六輛)馬車配車一一五日ヨリ五屯一車輛一最低二四〇俵積

四、〇〇〇俵×七日間=二八、〇〇〇俵爾後毎日二〇輛ノ予定

計三〇、〇〇〇俵(一二、〇〇〇石)(軍ノ警備、警防団ノ応援=六〇人、トラック配車)

◎福山物産焼失製麦設備糧秣廠(八木村)……第二総軍へ話スルコト

(自動車一台六〇俵~四〇俵一日四往復)

宇品ノ分八月一二日一八、〇〇現在

朝米九〇〇俵……八、一三日完了

食糧當団外米六五〇俵……八、一四日完了

”三五〇俵……五〇俵ヲ似島、三〇〇〇人配給

八、一三イリコ一人一〇匁見当一、三八〇貫=一三八、〇〇〇人配給

現在当イリコ六、〇〇〇貫(外ニ愛媛ヨリ、一〇、〇〇〇貫入荷見込)

鰻五、〇〇〇貫(八、一六一人半枚一八〇、〇〇〇人分準世帯共第一回分)

削節五、〇〇〇貫

昆布一二、〇〇〇貫

白米約九〇〇俵

腐敗センモノ雲丹漬

工場関係一八、一四日中ニ労政課ヨリ資料取纏回付アル筈

隣接町村転入者ニ対スル特配……実情調査ノコト(員数)

◎非常配給完了後、水産関係団体協議会……水産課草津ニ選定

◎暁部隊ノ協力ニヨリ、イリコ六、〇〇〇俵入荷、内一割六〇〇俵ノ暁部隊へ配給、罹災者用及ビ市へ五〇〇俵配

給セリ、改メテ長谷川少佐ニ懇談ノ上措置スル筈、残数二、〇〇〇~三、〇〇〇俵@一貫俵

双三郡ヨリ計画外入荷ノモノ

漬物(梅干、沢庵漬)トラック一台……救護所へ配給

トマト、胡瓜、南京”一台……大手町地区へ配給

富国ビル収容ノ患者

燐寸、ローソク、白米、味噌、醤油、塩、副食物配給手配ノコト

長官室用白米特配ノコト

八月十四日

味噌五日市鷺見旅館、山門醤油味噌組合理事ヲシテ業者ノ応援方手配…味噌ノ詰替(配給所へハ大樽、収容所へハ小樽)

一般世帯七、〇〇〇貫(三五〇丁)(八六丁空樽借入使用)

白米積卸シニ、〇〇〇俵、警防団員六〇人、貨物自動車六輛

野菜広島向・安佐郡差出シ分二、〇〇〇貫内五〇〇貫市民向一、五〇〇貫軍需向

梅干収容所へ配給

スルメ一、〇三八貫一人当六匁(半被)

乾麺(三星製菓所)二、〇〇〇梱

内一、〇〇〇梱…農林省…箱入

内一、〇〇〇梱…県……呷入

塩一人当二〇〇瓦

みかん缶詰収容所患者ニ配給(郡部ノラモ含ム)…衛生課渡

四八個入一四四箱六、九一二個

大手町配給所

従業者一人配給所タルノ表示ナシ(野菜、乾物)

秤ノ備付ナシ目分量ナリ(八、一一開設)

イリコハ配給課ニテ取扱フ

燃料ハ別ノ処ニ保管

主食糧ノ配給設備不充分ナリ、改善ヲ要ス

千田町二丁目町内会事務所電鉄前花咲印刷所

千田町三丁目北組〃〃森信商事

千田町三丁目南組〃〃池田良雄(二八二人)

千田町配給所……主食ノ配給ナシ市役所ヨリ何等ノ連絡ナシ塩ノ配給現在手配中

南竹屋町下組町内会事務所高師プール事務所内

近藤、原田代行……(米、塩、イリコ、玉葱、配給済一二九人)

南竹屋町上組、平野町町内会高師プール一町下土井方……(イリコ、塩済、米、野菜ナシ)

◎大手町食糧配給所

(千田町三丁目電鉄裏＝糧秣精粉工場)

主任・中川小一(元鷹野橋主任)

(元昭和町、千田町配給所ヨリ一名宛応援ニ来ル)

三滝ヨリ配給ヲ受ケニ来ルモノアリ

一二、一三、二日間ニテ九四俵現在手持ナシ

(配給区域本川・中島・袋町・千田・神崎・竹屋各学区)

皆実町下配給所(皆実町三丁目)

在庫玄米七〇俵白米八〇俵外米三〇俵

麦七〇俵大豆三八俵玄高粱七二俵

馬鈴薯一二俵(コノ分本日出荷)

皆実町学校区(比治山本町・皆実町一丁目・二丁目西部・焼失・二丁目東部・三丁目西東・翠町)

(聯合町内会長→町内会長→隣組長→配給)

◎事務整理期間(一〇日間)ヲ置キ、夫レ以後ハ通常配給ニ切替フルノ措置ヲ講ズルコト→広島市復興ノ方針ヲ

早ク示スコト→罹災者証明ト通社配給トノ複雑性ノ解消ヲ考慮スルコト

副食物ハ、従来ノ綜合配給所(笹田氏)ヨリ聯合町内会長ニ引渡シ、聯合会長ハ之ヲ町内会長ニ引渡ス

◎毎朝、関係者ノ打合会、連絡会ヲ開クコト

慰問用葡萄

八、一七一八、二一毎八一、〇〇〇貫集荷予定五、〇〇〇貫

仁保工業指導所九・〇〇

大洲橋一三・〇〇

八、一九九・〇〇(平時切替)

蔬菜出荷打合会…当課・生産課・配給課・統制会社・経済保安課

八、一五宇和島ヨリ海苔八、〇〇〇枚到着

八月十五日

特高主任会議内容昭和二〇、八、一五

- 一、市民の動静につき署員一体となり協力すること。
- 二、軍隊、在郷軍人、右翼、左翼、内鮮関係の動向を査察すること。
- 三、朝鮮独立運動の警戒。
- 四、流言取締。
- 五、詔書の内容を体し、指導者の責任遂行を期すること。
- 六、経済界、金融界を攪乱し、事務の延引渋滞を図るが如き行動の警戒。
- 七、物資買溜め、窃盗、強盗、職務怠慢者の増出の警戒。
- 八、戦災者、戦死者、出征軍人遺家族への対策強化。

八月十六日

世界平和確立についての動き

二〇、八、六原子爆弾使用。

〃〃九ソ連参戦、最高戦争指導会議及び臨時閣議

御前会議においてポツダム宣言受諾決定。

〃〃一〇重臣会議、臨時閣議。

二〇、八、一一ポツダム宣言受諾通告。

〃〃一二首相参内、御前会議、皇族会議梅津、豊田、東郷、平沼、鈴木参内。

〃〃一三正式回答決定。最高戦争指導会議、閣議開催(国体護持につき意見一致せず)。

〃〃一四二回首相参内、元帥会議、御前会議、遂に聖断を仰ぐ。

三回閣議を開き、遂に詔勅換発。

阿南陸軍大臣自刎。

ストックホルム発同盟=戦争終了を発表。

〃〃一六鈴木内閣総辞職内務次官、警保局長、警視總監辞職申出、勅選議員補充。

(註)終戦処理要綱

一、停戦協定の順序

戦争中止を全軍に布告

停戦取り決め

敵の保障占領

協定委員会にて条約協定

二、戦災者、戦死者遺家族の処遇に留意

三、大御心を奉戴し、軽挙妄動を慎み、職務に挺身せよ

四、動員学徒の取扱農業関係については、引続き動員

工業関係は、都合によっては引揚げ

五、疎開学童の取扱親元に引揚げ

大竹海兵団並びに大竹海軍潜水学校よりの食糧借受けと、その引取り計画

(編者註・欄外記入ノモノ)

欄外記入の数字は、大竹海兵団、潜水学校より借受けの食糧引取りに要する鉄道貨車の両硬車輜数である。

ワム二四〇俵(一五屯)〜一六〇俵(一〇屯)屯=一六俵乃至一七、八俵

二〇車輛(大竹) 一〇輛(大野) 三輛(玖波) 四輛

〃一〇〃三〃三六輛

〃六〃

八、一七一三輛二、六〇〇俵

八、一八一〇輛二、〇〇〇俵

海軍兵団

四、〇〇〇俵大竹駅付近倉庫ニ在リ、積込ニ付、兵員ヲ援助セシム

貨車配車ノ件、積込時間ノ件鉄道電話ヲ以テ連絡ノコト

海兵団掌衣糧長森福正蔵氏ニ連絡ノコト

潜水学校

・敵島一、二〇〇俵……高船棧橋附近(六〇キロ入)

小方村(玖波ニ近シ)一、〇八〇俵……内地米五〇キロ入

大竹精米所一、一三八俵……内地米五〇キロ入(内八一—俵ハ駅ヨリ七、八町アリ)

・玖波(駅附近)三九七俵……(六〇キロ入)

・駅前三二七俵ハ人力運搬可能

大野六〇〇俵(内地米五〇キロ)……曉部隊ノ附近

トラック手配ノモノ兵員運搬可能ノモノ

小方村一、〇八〇俵敵島一、二〇〇俵(船の手配を要す)

大竹八二俵大竹駅前三二七俵

大野六〇〇俵玖波三九七俵

計二、四九一俵計一、九二四俵

総計四、四一五俵

自動車実動八輛・油手配貨車輸送二、四九一三、二一五俵

七二四

荷牛馬車実動一二輛

蹄鉄修理ニヨリ尚一二輛蹄鉄、飼料ノ補給蹄鉄鉗旋

(註)蹄鉄師一回三〇(主計中尉伊藤勉作)

日通実動車六~四輛(陸然)

(1)敵島一、二〇〇俵(一日)ハ曉部隊ヨリ配船……日取連絡……兵員援助ニヨリ積込

(2)トラック一輛六〇俵宛トシテ

一日……大野一〇輛(東亞陸運ノ応援)＝二輛

一日……大竹一四輛……馬車二変更

一日……一、四〇〇俵＝小方村一八輛一輛六往復二輛

玖波町七輛

(陸然…三輛)

日通井上氏……海兵団四、〇〇〇俵(六〇kg)兵員ホーム出、積込

潜水校三二七俵……兵員ホーム出

八一—俵……荷馬車五輛……兵員ホーム出

鳥居原駅長……貨車ノミナラス機関車ヲモ連絡ヲ要ス(特別列車ヲ仕立テルコト)(一〇輛宛二回)

貨物主任・中川氏貨物係長・土生氏司令部・川平氏

◎馬鈴薯……広島二二輛、矢賀二一輛、至急引取ラレタシ

◎昨日ノ大詔煥發ハ朝鮮人ヲ強気タラシム(帰国申出者アリ)

◎本日ノ出勤状況三〇人、平常ノ三〇%以下ニ低下(四五〇人中、一〇〇人出勤)一火ノ消エタ如シ

◎房総半島、名古屋方面ニハ既ニ敵ニ陸開始ノ噂ヲナスモノアリ

潜水学校ト連絡ノコト

玖波一、四七七俵一小運搬六輛ニテ貨車三輛以上ハ(操業困難)

大野六〇〇俵一〃

八、一七一三輛海兵団二、六〇〇俵

〃一八一〇輛〃一、四〇〇俵

八、一八潜水学校六〇〇俵(直二三二七俵、荷馬車二七三俵)

〃一九三輛〃五三八俵(大竹)

〃〃三輛〃六〇〇俵(玖波)
〃〃三輛〃六〇〇俵(大野)兵員不要
〃二〇四輛〃八七七俵(玖波)
〃二〇船舶司令部ノ〃一、二〇〇俵
二一船舶ニヨル

八、一八大竹馬車ニテ積込一、〇六八俵

(小山)五俵午前八、〇〇

〃一九大竹小方ヨリトラックニテ積込一、〇八〇俵五〇人

二輛六往復(陸然ヨリ二輛借上)(小山・田川)五輛八、二〇広島へ

〃二〇玖波五一二俵三輛五〇人

トラック(日通一輛)五〇人

〃〃大野浦六〇〇俵(陸然ヨリ二輛借上)三輛五〇人

トラック(日通一輛)(小山・田川)

〃二一厳島……曉部隊ノ都合ニ依ル、一旦宮島棧橋ニ着ケ、兵員ヲ乗セテ行クコト

(日通伊藤氏)

(註)終戦の詔勅を拝したその日、私は大竹海兵団、大竹海軍潜水学校に走り、下野大竹警察署長と共に食糧借受けの交渉を済ませ、翌十六日は、広島鉄道管理部に貨車の手配を依頼、その足で再び大竹に引返したが、列車遅延のため深夜に大竹へ着いたので、その夜は遂に大竹駅前の防空壕に一夜を明かした。輸送車輛の手配については、小山静二氏(後比婆地方事務所長)が、寝食を忘れて当たられた。

(極秘)八、一六長官會議決定

一、戦争終結ニ伴フ国民生活安定策

イ、軍需生産態勢ノ切替……民需、民生ノ安定、民心涵養、穩密裡切替

軍需ヲ民需ニ移ス……経路ヲ不明瞭ナラシメ置クコト

軍需物資ヲ速ニ配給シ民有ニ移セ(一〇日間ニテ轉換セヨ)

ロ、国民義勇隊、戦闘隊編成解除

国民義勇隊ノ其儘トス

国民義勇隊ノ使命

(1)国民ノ師表タルベシ……戒心自肅、民心ノ向フ所ノ道標タレ

(2)焼跡処理、罹災民救護、疎開ノ後始末

(3)会社工場……経済復興、生産能率昂揚ニ挺身

◎警防団ニ防空、防火、水害要員存続

(隣組ノ結束)配給、自給精神ノ昂揚

誓詞

“承詔必謹”誓ッテ総力ヲ国体ノ護持ト将来ノ建設トニ傾ケ、一日モ早く皇国ノ再興隆ヲ図リ、以テ聖慮ヲ安シ奉ランコトヲ期ス
安佐郡阿村長会
〃農業会長会

ハ、輸送機関ヲ民需、食糧関係ニ指向

二、(工場ノ転用……)

ホ、軍需生産……停止

民需物資生産ニ重点ヲ置き自由ニ生産

農具、建築材、セメント、繊維、紙……生活物資

松根油、松脂……人手ナケレバ後廻シトス

へ、食糧増産ト供出……特ニカヲ入レヨ、綜合計画ノ完遂ヲ図レ

ト、薪炭確保……繼續セヨ重点ヲ入レヨ(農業土木工事)

チ、未開墾地ノ開墾……労力ノ確保(土地改良)

リ、漁業ノ復活……油・網ノ確保

ヌ、応徴士、指定要員、女子挺身隊近々解除・復員対策ノ急速ナル確立(一、〇〇〇万人)

ル、住宅ノ建設……農村方面ハ資材が許スナラハ制限セズニ坪数制限

都市方面ハ制限スニ戦時住区、戦時住宅

ヲ、軍人遺家族、戦災者、戦死者ノ援護

生活援護、生活再建ニ戦災者援護ノ徹底(七〇〇万人へ)

新シイ軍事援護対策ノ徹底ニ遺族援護、傷疾軍人ノ再起

衣料品、食料品、其ノ材料

医料品

通信、電話

ワ、学徒動員ノ解除

力、学童疎開ハ適当ノ時期ヲ見テ帰家セシム

ヨ、一、運輸、通信、食糧増産、戦災処理等、引続キ動員差支ヘ工場方面ノ学徒ノ操業ノ実情ニ応ジ決定

二、農村出身ハ農村へ、其他ハ戦災処理又ハ食糧増産へ

三、附設課程ノ学徒ニ校長ノ指示ニ依リ解散帰宅

◎凡テノ施設ハ軍ダト言ワセヌ様指導セヨ

◎都市疎開者ノ引揚抑制

(1)都市ヨリ地方農村へノ疎開ハ出来ルダケ援助スル

(2)現在、農村へ疎開中ノモノハ、食糧事情其他カラ今直グ都市ニ帰ラセズ、之ヲ抑制スル……農村カラ都市へノ移動証明書ヲ発給シナイ

◎呉市治安維持連絡会(毎日)

預金引戻シノ状況……(払込制限ヲナスガ如キコトナキ様注意セヨ)

供出表ノ保存方法……(農家ニ保存セシムベシ)

◎甘藷ノ早掘り……五〇〇万貫……◎甘藷、砂糖ヲ原料トスル燃料生産ノ即時停止

◎交易物資……罐詰、塩鮭、繊維品其他至急配給スベシ

◎海軍志願兵、徴募検査取止メ

八月十七日

昭和二〇・八・一四～八・一七広島市内配給所視察結果

◎草津、古田……順調ナリ管理米二、〇〇〇俵ノ内七〇俵ヲ憲兵隊取得セリ

古田……配給米手持ナシ至急手配ノコト(営団ニ連絡済)

◎己斐……戦災者入込ミタル為、人員確定セズ目下調査中

(中通ニ在リ旧配給所ニテ取扱ヒ居レリ、燃料、副食共綜合配給ス)

◎天満……配給所調査スルモ判然セズ福島交番所……倒壊家屋ヲ利用再調◎調味料、野菜、燃料ノ配給ヲ熱望シ居レリ

◎江波

◎三篠三丁目……コルク会社昨ニテ米ノ配給ヲナス(配給円滑ナリ)

副食、燃料等ノ配給所、停留所前

◎牛田…主…旧配給所…概ネ円滑、家庭持込常会渡

…副…牛田信用組合前…家庭持込常会渡

◎尾長……町民ノ協力ニ依リ、倉庫ヲ守リタリ、綜合配給中、連絡完全、配給所主任亦優秀

◎向洋……被害ナシ。精米機ノ設備ヲ希望、副食等ノ配給ハ如何

大州…

◎仁保・湊崎……被害ナシ

八月十八日

県庁部課長会議午前一一時

県庁本部東洋工業三階ニ移転……事務

①衛生、救護、食糧、輸送、警察ノ一部門ハ残留

2合宿関係ヲ切替フル為、合宿希望者ヲ会計課ニテ取纏ムルコト

③各課、傷病、死者、生死不明者ノ調査……人事課ニ連絡

4健康者中出勤セザル者ヲ調査、欠勤届出、官吏秩序維持、復員ノ後ハ優秀者ヲ充実シ、怠勤者ヲ整理

⑤地方事務所ヨリ転勤替ヲ行フタメ適任者ヲ詮衡、人事課ニ連絡ノコト

⑥家族ノ住居所ヲ明確ナラシメ置クコト(救助金、俸給支給等)

7従来ノ指示通報ノ整理、官報等ノ取揃(人事課)

⑧島根県石橋内政部長、広島県内政部長兼任発令

⑨政府ノ方針等ハ新聞ニ依リ、推測ノ上善処ノコト

⑩軍需ノ民需ヘノ転換(民間倉庫ヘノ入替、民間ヘノ配給)

11 農村関係……農耕中心、余力ヲ松根油ヘ、自給製塩、アルコール、草刈、麦供出、調整米、貯金引戻

(調整馬鈴薯)疎開者、疎開学童ニ飛行機積納金ノ件

12 戦災応急物資ノ急速払下ゲ

地区司令部ヘ取纏メ申出ノコト(食糧、衣料、建築資材、用紙其他、医薬品)

品物ノ内容ヲ早く知ッテ手配ノコト

内政課長中心ニ、関係課長協議ノ上手配

交貿物資ノ処分

13 応召見合せ、応召解除ヲ行フ

14 学徒動員解除、徴用工ノ解除

15 軍需工場転換ノ場合ノ失業問題(土地改良、土地開墾)

16 指導要項(別記ノ通り)

17 デマノ取締リ(児庁員トシテデマヲ飛バスコトナキ様)

(註) 県庁ノ東洋工業ヘノ移転は、八月十八・十九日に行われ、八月二十日から本格的に同所で事務が始められた。二十日午後一時同社講堂で長官の訓示があった。

◎(横川八・〇〇)発通勤用バス一台ヲ出ス、停留所等細イコトハ通知スル

指導要項

一、政府公表ノ経過内容及ヒ戦争終結ニ至ルノ己ムナキ状況ヲ詳細ニ伝ヘ、全国民ノ結束ト奮起ヲ要望スルコト

二、国内輿論ハ全国民結束ヲ保持シ、国体護持ト国難ニ当ルベキコトヲ根軸トシテ、コレカ指導取扱ヲ行フコト

具体的内容左ノ如シ

(イ) 現下最大ノ問題ハ大御心ヲ奉戴シ、飽迄モ国体ヲ護持シ君民親和シ、一億全国民一致結束シテ臥薪嘗胆、未曾有ノ艱難ニ当ルコトヲ強調スル

(ロ) コノ未曾有ノ国難ヲ招来セルニ付、国民悉ク責任ヲ分チ、上陛下ニ対シ奉リ深ク謝シ奉ル。不射ノ誠ヲ竭シ奉ルト共ニ、皇国伝統ノ精神ヲ遺憾ナク発揚シテ、一切ノ事態ニ対処スルコトノ特ニ必要ナル所以ヲ強調スル

(ハ) 今後ノ難局ヲ打開スル為ニハ、戦争以上ノ苦難ニ耐ヘル覚悟ヲ持チ子々孫々トトモニ、一意皇国興隆ニ邁進スルコトヲ強調スルニ国民ヘノ杞憂ヲ取除ク様説明スルコト

(ニ) 時局ヲ痛憤ノ余リ同胞互ニ傷ケヘ含ヒ、又ハ経済的、社会的、道德的混乱ヲ惹起スルコトアラバ、皇国滅亡ニ至ルベキ杞憂ナドヲ強調スル

(ホ) 共産主義的、社会主義的言論ハ、徹底的ニ取締ル

(ヘ) 事茲ニ至レルニ付、一般的寛赦又ハ悲哀或ハ批判ハ、コレヲ認ムルモ勅諭決定方針ニ、全然相反スル戦争継続論又ハ国内結束ヲ素ル論議ハ之ヲ取締ル

(ト) 軍政府ソノ他指導層ニ対スル所謂戦争責任追及ノ論議ハ之ヲ取締ル

(チ) 直接行動ヲ惹起スル如キモノ又、自暴自棄的言論ハ之ヲ取締ル

(編者註・欄外記入ノモノ)

“言論集会、文書頒布ノ禁止”

御真影ノ件

昭和二〇・八・一八午後一時市長、地方事務所長会議

長官訓示

戦争終結ノ事由、戦災者、戦没者及ヒ其ノ遺家族ノ援護

万難克服将来へノ建設、国民ノ衷情、輕挙妄動ヲ戒メ、信義、道義ノ確立、陛下御自ラ勅語ヲ賜フ(ラヂオ)

一、大御心ノ指導者階級へノ徹底

二、国民学校教職員へノ徹底ト青少年ノ奮起ヲ促ス

三、中等学校教職員ハ県ニ於テ代表者ニ対シ徹底ヲ期ス

皇國護持……日本国民タルノ矜持ト氣魂トヲ失ハサル様指導スベシ

指導要領ノ説明

大藏大臣談ノ説明

安佐郡よりの蔬菜出荷計画(昭和二〇・八・一八)

出荷量計(呉軍需、呉民需、広島軍需、広島民需)

八・二一九、〇〇〇貫広島民需分六五〇貫

二二九、五〇〇貫一、一〇〇貫

二三一、一〇〇貫一、一〇〇貫

二四一〇、〇〇〇貫一、一〇〇貫

二五一〇、五〇〇貫一、一〇〇貫

二六一〇、七〇〇貫一、一〇〇貫

二七九、〇〇〇貫一、一〇〇貫

二八九、五〇〇貫一、一〇〇貫

二九一〇、一〇〇貫一、一〇〇貫

三〇九、〇〇〇貫一、一〇〇貫

三一〇、一〇〇貫一、一〇〇貫

計一〇八、五〇〇貫一一、六五〇貫

八・二八安佐地方事務所九・一〜九・一〇の出荷計画打合せ

八・二九広島市役所……配給計画打合せ

(註) 広島市民に配給する蔬菜の出荷が思うように進まず、この供出督励には一方ならぬ苦勞があった。

この計画にもとづき辛うじて広島市民への蔬菜配給は、細々ながらも続けることができたが、この供出には当時の安佐地方事務所長榎本米一氏(既に故人)、県青果統制組合専務理事瀬川義士氏、県食糧配給統制組合理事長寺川正雄氏との並々ならぬ御尽力を得た。

八月十九日

◎最高司令官マッカーサー政治顧問ヲ置ク

分割占領セララルコトナカラシ(八・一九朝ノニュース)

◎保障占領軍ノ本土進駐ハ停戦協定成立後……上陸日時ハ政府ニ於テ其ノ都度予メ発表

停戦協定成立ノ順序

一、軍事代表派遣

二、全戦線ニ於ケル正式停戦時協定

三、日本軍武装解除ノ方法、軍船、飛行機其他武器ノ引渡、軍隊ノ処分、捕虜ノ引渡、占領軍ノ上陸地点、保障占領地域等ニ於テノ敵側ノ通告受理

四、協定調印

五、本土進駐

進駐軍ニ対スル便宜供与……輸送、宿舍、食物ノ供給保障、占領ハ軍事占領ニ非ラズ、戦闘部隊ニアラズ、從テ直接ニ食物、宿舍其他民需品ノ徵発ヲ行ヒ、預貯

金ヲ差押フルガ如八月二十日

馬鈴薯配給手配の件(昭和二〇・八・二〇)

綜合配給用……四〇六万貫

蔬菜用……一〇〇万貫(調整用ヲ轉換)

調整馬鈴薯五〇六万貫

(日甘及ビ青果)

|| ||

綜合用蔬菜用

貫当……五五錢一円二〇錢

八月二十一日

◎昭和二〇・八・二一豊田郡下各種団体長会同における豊田地方事務所長の伝達事項

- 一、御真影焼却問題
- 二、戦死者ノ碑文抹消問題
- 三、救護会ノ強化又ハ停止問題
- 四、燈火管制ノ解除
- 五、貯蓄ノ件
- 六、大詔奉戴日ノ件
- 七、藁工品供出物資等ノ件
- 八、呉市疎開児童受入設備費ノ件(一人二〇円ハ板代ニ足ラス)
- 九、馬鈴薯ノ供出
- 一〇、藤皮、蓬ノ供出
- 一一、松根油設備費補償

(註)御真影焼却、戦死者の碑文抹消など終戦当時の気の配り方が窺われる。

履歴書から軍籍に関係ある履歴事項を抹消したのもこの時である。

◎外食券食堂設備の件…昭和二〇・八・二一より広島駅前、己斐駅前、県庁前(東洋工業前)に設置

◎県下抑留外人優遇の件

缶詰、食肉、砂糖、バター、油……外人(八一人)

油、臍物、雑穀……支那人(三一〇人)

(註)この措置は終戦と同時に直ちに手配したものである。

八月二十二日

昭和二〇・八・二二午前一〇時日本製鋼所広島製作所における軍需物資転用に關する打合せ記録

◎引取ノ準備ヲ為シ置クコト

引取責任者総監府……広島県ガ代行

一、兵器補給廠(經濟保安課)……霞町

ガソリン、油、軍刀、双眼鏡(通信機械)

二、被服廠(生活物資課)……旭町比治山裏

防寒具・被服等四四万着(内一割～二割保留)

材料三〇万着分

保管物品……西条保留分以外ヲ紀給ス

八・二二一、〇〇打合セヲナス

三、需品廠……海田市高女本部……矢野需品廠……総監府

竹内副参事官→需品廠在庫品轉換場所照会ノコト(地方事務所、警察署)

建築材料、通信材料、銅、鉛其他、輕車輛

(生活物資課、土木課、農務課、地方事務所五人……三次、廿日市等)

帳簿ノ査定ト實際数量ト一致セザルモノ可然取計レタシ

四、糧秣廠(食糧課)……宇品……主食ナシ

削節、茶、イリコ、甘味材料、〇〇〇屯

釘、ブリキ板、藁工品等……宇品海岸倉庫、海田市、海田市附近民間倉庫(各県毎ニ各県ノモノヲ取ル)

糶込……愛媛県ニ相当量アリ……「小運搬具二七輛、鞍、庁中用品、用紙、ブリキ、ハンダ、釘、一升壺、王冠」二〇日頃受領ノコト

五、衛生材料(衛生課)……府中町教徳寺

島少佐東城一八、
┌ 〇〇〇梱……現品所在地ニテ引継タシ
└

広島一、〇〇〇梱

△輸送関係……明日改メテ協議

食糧、ガソリン、其ノ他重要度ニ応ジ順位決定

広島市罹災者ニ一〇〇、〇〇〇枚ノ被服給与…福山モ考慮

△総監府へ受領明細報告、各官庁毎へノ割当ハ有償ナレドモ決済ハ後ナリ

(編者註・欄外記入ノモノ)

関東厚木飛行場ニ、二六日空挺隊到着

(千年四隻、鮎崎二隻、浦崎三隻)ニ宇野一四隻

(曳船日立二隻、占部一隻)

◎(大豆油三、五〇〇*、落花生一、三〇〇*、菜種油五、五〇〇*、ガソリン四、〇〇〇*)…大三島、

盛口ニ在リ

防府(東亜化学)

大豆粕三、三〇〇屯雑穀米六、六〇〇屯曉部隊トモ折衝ヲ要ス

油二、八〇五屯砂糖一、六五〇屯

◎広島陸軍燃料廠防府出張所…中国海軍局ニテ配船手配ノ予定(八・二二午後一、三〇打合セ字品税関)吉田大尉

八・二二一三、〇五中国海軍局トノ物資輸送懇談、管理部へ連絡、輸送配車関係ハ、本日管理部ニ於テ打合中

西日本地区(千年・浦崎・鮎崎)石炭輸送

八・二四午前中一〇〇屯(尾道署)

艇、平均二七〇*曳船

八・二四日中、午後三時迄ニ海軍局ニ連絡

(小幡氏大阪支店長)三菱、水野、占部、日立(曳船組合、日産)

(須波一五〇屯～四五隻使用可能)

警防団員ノ応援手配ノコト

◎ラジオ発表……八・二二正午警防団解散

◎吉田大尉ノ話……可成砂糖カラ荷捌シタシ、三田尻二一〇〇輛帯庫中、遂次五〇輛宛廻送

◎田川氏ニ依頼……船舶司令部応援ノ件打合セ

◎オート三輪車、借入方ノ件交渉(東洋工業)

◎大竹潜水学校

岩永少佐(内務長)……八・二四日連絡ノコト=(青果会社倉庫ニ入レ替へ)

耐火粘土五*セメント二〇〇袋耐火煉瓦二、〇〇〇個

◎船舶重営会広島支部業務部副参事伊藤健次郎(宇品三二八一九)配船手配協力ニ付来所…配船程度回答アル筈

◎大竹海兵团

宮島白米約三、〇〇〇俵……二八日ニ兵員援助ニ依リ引取ルコト

乾パン一、四〇〇箱

麦粉二、〇〇〇梱(船内)

大竹町内缶詰二、〇〇〇箱二八日以降ニ相談

白米三、〇〇〇俵

帰還要員ノ食糧ニ充ツル為、引渡不能、九月三日頃頃今一度打合セ

◎大竹海兵团、大竹潜水学校所有ノ被爆相当アリ一呉軍需部大竹支部…呉ニ連絡ノ上引取措置ノコト

安佐地方事務所糧秣廠物資

山県地方事務所

八・二五…実情調査山県倉庫ト看板ヲ掛替へ

曉部隊ノ物資ノミー〇ヶ所へ分散保管ス(有木中尉・佐藤曹長)

壬生町へ八重ヨリ砂糖一五〇俵米二五〇俵(藤井商事)

◎軍需転用物資ノ入手、獲得、配給糧秣廠

戦災者配給物資ノ未端迄給付状況ノ把握呉鎮軍需部

今後/戦災者配給物資ノ末端配給状況ノ把握

◎各物資別受払簿ヲ備付クルコト

物資別基礎調査

物資需給状況

(註)この会議は、昭和二〇・八・二六に連合軍隊のわが国進駐が開始されるという情報が入ったのに備え、終戦処理のために成立した東久邇内閣の決定に基づき、八月二六日まで引取りを完了するようにとのきびしい中央からの指令で行なわれたものである。

しかし、輸送能力も潰滅に等しい状況で、このようなことは無理な話であり、一策を案じて看板を民間名義のものに書き換え、糊塗するというような措置も採られた。

私の前記メモの中に、八・二五…実情調査、山県倉庫と看板を掛け替えとあるのはその例である。

八月二十四日

食糧検査所の運営について

調査課八・二〇現在収獲予想調査

健在者所長成田泉田川鉄雄主任梶原技師加藤技師長谷技師新宅

(一六名中、八名死亡、二名負傷、六名健在)

事務室ノ供与方手配ノコト

事務室ニ区劃ヲ設ケ、落付テ仕事出来ル様ニ考ヘルコト

八月二十五日

醸造指導所の事務について

原料…脱脂大豆、焼麦、フ

醤油、味噌ノ種糶…焼失…醤油、味噌ノ仕込ニ支障アリ

西条分場…来月五日頃迄ニ種糶ノ製造ニ看手

塩入手ナキ為在庫ナシ醤油ノ仕込ノ見込アルモ味噌見込ナシ、味噌ノ種糶ノ製造ニ依リ仕込促進ニ努力

本所長橋本負傷静養中当分出勤見込ナシ(西条指導所福島属)

(従来技術員七人)酒井技師、樋口技師、西脇嘱託

(酒井、樋口氏…西条分場ニテ従事ニ、三人雇入レノ上)

現在、仕込中の葡萄酒…一〇〇石程

自給製塩ノ援助

◎三原国民学校乾パン一〇万食

◎東警察署乾パン二〇万食玄米三〇俵代替配給

苺ノ特配

◎救護班三五班ノ給与ヲ厚クセヨ酒ノ特配

牛乳ノ特配

坂村…小屋浦救護所二八六六…食糧配給手配ノコト

昭和二〇・八・二五―三・〇〇広島県政協力会議

(県会議員代表五人、県下市町村代表、翼賛会関係代表その他三〇人位)

一、福山ノ戦災跡地整理ノ為、農機具ノ斡旋、焼土ノ効力如何(質問者福山中島議員)

加里分肥料ハ含ムモ窒素肥料ハ僅少又ハ含マザルベシ

二、戦災地土地物件使用関係(質問者呉市葉山氏)

一ヶ月後ノ物件ノ所有権ヲ失フ

二ヶ月後ハ土地使用権ヲ失フ

三、進駐軍占領後ノ治安維持方策

警察隊、武装警察隊、憲兵、海兵隊ニ依リ治安ヲ維持

四、ラジオ放送

八・二四―一八・〇〇以後一〇〇屯以上ノ船ノ運行禁止、飛行機ノ航空禁止

広島市戦災者ノ救護ヲ徹底(特別二) セヨ

八月二十六日

長官命令

- 一、県庁員ノ出頭連絡広告ラジオ放送ノ件
 - 二、県庁員ノ募集広告ノ件中卒以上、高小卒以上(厳選主義)
 - 三、自動車運転手募集広告ノ件軍トノ連絡(船舶司令部海軍)
 - 四、大工、守衛、小使、給仕等ノ雇入
- 庁員ノ死亡確認取扱ノ件……部長協議ノ上決定スベシ

八月二十七日

戦災復旧官公署連絡会議午後一時より於県庁

広島県高野源進知事

- 一、永野経済部長を鳥取、島根両県に派遣し、近畿方面向け食糧の当県への転換方を手配せしめた。
- 二、製表設備の拡充＝福山にある軍の施設を引受けた。
- 三、甘藷二・七億万貫(全国)、本県は五〇〇万貫の早掘供出を計画した。
- 四、医療救護関係

昨日(八月二十六日)を以て患者全部を軍より引受け三三ヶ所に収容した者二、一〇〇人、通院患者二、〇〇人、各町村に収容の患者二、〇〇〇人計六、一〇〇人。各府県よりの応援救護班の派遣、軍帰還軍医の応援を得て救護に当たっているが、昨今死者が続出。収容患者の二割程度が死亡している。

- 五、県庁は、現在東洋工業に移転しているが、中国地方総監府も昨日(八月二十六日)東洋工業に移転した。

後任の児玉九一総監は、明日(八月二十八日)着任の予定である。

- 六、浴場、理髪所、簡易宿泊所の建設が急がれる。
- 七、橋梁の復旧＝当面福島橋、己斐橋の復旧が急がれる。
- 八、破損建物の修復援助と焼跡地への仮設住宅の建設

広島市柴田助役

- 一、仮設住宅建設用木材の斡旋を得たい。一五坪程度のもの六万戸で九〇万石を必要とする。
- 二、応急土木建設団による大工、左官等の斡旋を得たい。

上記に対し広島県知事より

- 一、建設用木材は斡旋するが当面真にやむを得ざるものに限る。
- 二、大工、左官等の斡旋は考慮計画中である。
- 三、焼跡地バラック居住者の実情を調査せられたい。

なお自活の道なきものも調査せられたい。戦災保護法により保護する必要がある。

(これに対し、広島市助役より江波方面に、一〇〇世帯程度ある旨を述べられた。)

検事局

- 一、検事局職員の大部分は着のみ着のままなり。食糧及び衣料の配給について特に考慮してほしい。

(毛布、靴下等)

中国配電

- 一、電灯の復旧状況

電業局全滅したるも県下の応援を得て三篠町、千田町以外に配電、残存区域、主要幹線は概ね復旧せり。明日位より三篠方面配電線の一回線復旧の見込。(福島町、尾長町方面未点灯)

- 二、残存家屋の点灯

復旧班一〇班を以て実地につき調査し、概ね復旧したるものなお重ねて調査の上、破損程度により点灯するか否かを決定する。

上記に対し

- 一、収容所になお点灯せざるところあり
- 二、準世帯、街灯の点灯
- 三、電鉄の電柱にも点灯せよ

等の要望あり。

逓信局

県庁、総監府の電話架設は至急手配する。

郵便局広島駅前局舎建築の計画あり。協力を望む。敷地関係は公共的のものにつき、地主との手続を簡易ならしむるよう配慮を得たい。

三、県庁、総監府のために郵便局分室を県庁内に設置したい。

広島電鉄

一、電車、バスの運行回復計画

駅前―県庁。県庁―東警察署間のバス運轉は増加は、現状においては困難なり。

己斐―左官町間。(但し土橋迄に止まることあり)

宇品―電鉄前間(電鉄前―土橋間はバス連絡)開通せり。

二、架線工夫の援助要望

架線工夫なきため架線復旧工事が遅延しているので援助を得たい。

(これに対し、架線工夫の援助派遣方を京都方面に依頼しては如何との話も出た。)

鉄道局

一、通勤列車の運行目下研究中。遂次実施に移すが、可部線との直通運行は困難なり。

二、水道については軍の協力により補修中。

軍側

一、呉及び尾長方面に自衛団を設置したが、成績良好である。

二、屍体の処理を迅速に行え。

三、水道、電灯の復旧に力を入れよ。(大国部隊の援助を得て努力中)

四、被服一〇万着のうち、どの位配給せりや。

一五屯貨車四〇輛二、三日前積込み本日到着の筈。

一〇万着中には、鉄道局、逓信局の分も含む。

貯金局

一、焼失貯金通帖の再交付に全力を挙げて努力中。

そのため地下室に合宿。寝具類、窓枠用材、地方応援者の食糧について配慮を得たい。

◎戦災死者の叙位叙勲、官等陞叙の手続をすること。

◎救護所用として収容者一人当り詰二個、砂糖二斤特配すること。

八月二十九日

中立国利益代表、広島県知事を訪問、広島市内の罹災状況を視察、このうちに国際赤十字社マルセル・ジュノー博士あり、視察案内中の小職にたいし、

一、余の友人で、ビルフィンガーという宣教師が尾道に居る筈につき所在を確め連絡を乞う。

二、蚊や蠅の発生、目を蔽うものありて見るに忍びず。驅除薬D・D・Tの撒布を行わん。

D・D・Tは撒布後数分間、眼及び皮膚を刺戟することあるも、人体に害なし。

飛行機により、空中より撒布すべきにつき、その旨連絡手配せられたし。

との申し入れがあった。

九月二十日

呉鎮守府通信隊司令高内大佐の要請

一、呉一中焼跡を呉鎮守府通信隊において使用したい。

二、現在、呉一中では夜間中学開設中であるが十月中旬閉鎖、電信設備をなし海軍通信所として存続、十一月頃まで借用したい。(呉一中側に連絡、諒解済)

三、上記のため、兵員約一〇〇名宿営、電信設備をなす。

九月二十一日

風水害対策協議会PM一・〇〇

(安芸)死者二四七人田畑流二四三町

一、土木技術者ナキ為護岸修覆等ニ困難ヲ感ズ

二、災害状況調査ニ付町村の繁瑣ヲ避ケヨ……報告書取纏考慮セヨ土砂流出河岸の方却テ堤防ヨリモ高クナッテイル所アリ

(豊田)田畑ノ被害甚大

“幸河麦一、〇〇〇俵、米五〇〇俵浸水”

(山県)道路破損甚大一〇、〇〇〇間決潰

堤防七、一五八間決潰

田流失五一・二町畑流失三五町

米収穫皆無二一四町

甘藷七三町

雑穀二二町

(高田)水稻土砂流入二三一町

畑〃九五・四町

◎呉線一〇・三開通

山陽線一〇・六〃

可部線見込ナシ

芸備線近日中開通

(註)昭和二十年九月十七日、暴風雨襲来し、県下の被害甚大なりしも通信杜絶し詳細判明せず。その収まるを待って警察署長、地方事務所長会議を招集、対策会議を開催した。

九月二十七日

第一〇軍団駐先遣隊レイノア中佐との会見記録

昭和二〇・九・二七午後二時より呉鎮守府司令長官官邸において

(註)この会見は、日本側中国地方総監府山口参事官、広島県石橋経済部長以下関係課長二〇名。第一〇軍団側は先遣隊将校レイノア中佐外に黒人の大尉の二名によって行われたが、この会見におけるレイノア中佐の態度はまことに謙虚そのもので、日本側関係者に煙草をサービスするなど、戦勝に驕る様子の無いことには心打たれるものがあった。以下この会見でレイノア中佐から日本側に要求されたことについて記録する。

レイノア中佐の発言要旨

私は、第一〇軍団駐先遣隊に伴う土地、建物その他の便宜を得ることを役目としている。

この会合では、如何なる方法により接収するかを説明する。

私の諒解するところでは、装置、土地、便宜の獲得はすべて日本の機関を通じて行うことになっている。

山口氏は、東京の中央の責任者であるが、そちらからこちらへ人を寄越して連絡に当ることになっている。

各県にその事務の主任者を置かれることになっていると聞いたが、このたびの台風で、全部揃っていないがそれを待つわけには行かないので、それが揃うまでに事務は始めておいて貰いたい。

多分十月三日前後に部隊が呉、広方面に上陸すると思う。そして当分の間この方面に駐屯することになっている。

今のところ、広島に軍隊を出すことにはなっていないが、飛行場を作ることになるかも知れない。

十月末には、五、〇〇〇人が岡山に駐屯する筈である。

獲得接収には軍隊の必要なものは、秩序ある方法で為すことになっている。

上陸して必要なものは、直接取るのではなくそれぞれの機関を通じて与えて貰うということになっている。

日本設置委員会で差し出されるものは、明朝申し上げることになっている。

実際には呉、広において必要であるが、供給して貰うものについては、広島県及び他の県から供給して貰うことになろう。

軍隊の単位単位に接収獲得の部ができて、その単位単位の要求を本部に持って来る。たとえば、岡山に居る軍隊が呉に何か必要とするものがあるときは岡山に持出して要求する。(接収するものは土地、建物等で、食糧や被服類は要求しないことになっている。)

この要求は次の事項を記載した四枚綴りの書面で中央のボードに提出する。

一、必要な設備の装置、設備等の種類

二、位置(木材等の場合には位置の記入はしない)

三、所有者(所有者の判っている場合に限る)

四、数量又は分量(たとえば二階だけというような場合)

五、条件(よく判っている場合はこれを書くが、判らない場合は、後から書くこととなる。))

六、引渡の方法(日本側で輸送するか、軍の方で取扱うか等について)

七、引渡期日

八、何の目的で必要とするかの明示

九、何処の分団のために必要とするかの表示

一〇、備考

この要求に対し、軍の全体接収委員会では、これを承認するが、次の例外を附する。

一、引渡された場合報告せよ。

二、同様な要求が沢山ある場合は、シリーズ、ナンバーを附する。

三、それに主計官がリマークする。

日本側においては

一、要求された物件が間に合うか或いはかかる団体に連絡すれば判る旨のコピーを二枚作って一枚を連絡委員会に送る。

二、若し要求に応ぜられたいときは、その理由を申し出ることとし、これに対しては事由を調査し、司令官に申し出ることになっている。

引渡しが出来ない例は色々あるが、たとえば一つの物を両方から要求されるような場合は、司令官の裁決によって決定する。

又或る場合には、日本の経済的事情のためにできないこともある。又要求されたものが全然ない場合もある。この場合は軍隊の方でこれを作ることに努力しなければならない。

以上のことは二枚に書き入れて主計官に出すことにして欲しい。

主計官は要求したものが調達されるとそのうちの一枚にサインして一枚を返すことにする。

以上は通常の場合の調達方法を述べたものであるが、急の場合は直接軍が接収を行うこともある。しかし、成るべく左様なことはないよう、又、あつても自制するよう努力する。

次に我々の方からは、如何なる種類の食糧も要求しない。市場等から買うことも禁止する考えである。それは左様なものに日本が困っていることを承知しているからである。

被服についても食糧と同様に考えている。しかし、個人が着物や人形などを買うということまで禁止するわけには行かない。

飛行場や海軍が必要とするかも知れぬが、極めて狭い場所である。

暴風雨のため当初の予定は変更されたが、具体的ことは後から知らせるが、一五、〇〇〇人位だと思ふ。

例えば、水雷艇基地を要求することは、私自身でマークして示すが、大体のことは明朝にする。軍隊が来るまでに正式の手続をとることのできないものは、先に措置して後から手続をとるが、普通には事前に手続を済ます。

委員会の重要性についてはよく判っていることと思うが、今直ぐに機構を整えて如何なる要求にも応ぜられるようお願いしたい。

私は今、ただ一人で助手もいないので、コピー四枚を作ることに困難を感じるので鉛筆書きをお願いすることもありますが、よろしくお願いする。

呉は海軍関係の委員会であることを諒解されたい。

警備隊は軍と一緒に来るから、よく警察と連絡して打合せする。

輸送については、鉄道輸送は日本に依頼するがトラックは日本の貧弱なことを知っているので恐らくは軍自体でやるであろう。

船舶輸送についてはどうするか。その時に決めることとする。

差し当たり土地、建物、木材、コンクリート、セメント等を要求する。

次に我々も左側通行とするので、この点よく連絡して道路標識を作る考えである。

九月三十日

中国地方総監府の連合国軍艦隊対策連絡会議午前八時五〇分より

一、本日正午迄に、食糧課員一、会計課員一、都市計画課長及び課員一、建築課員(技術者)一、動員課員二、労政課員二を出頭させよ。

二、事務用品相当数手配せよ。

三、九月三十日現在で呉、広地区伝染病発生の過去一年間の統計を、十月二日までに提出せよ。

四、労政関係の機関とその責任者を報告せよ。

五、労務者一、〇〇〇人を確保せよ。

(本件については海軍側労務者六、〇〇〇人を流用することに、山口参事官から海軍側に折衝済)

六、昨日来呉地区関係の建物接収について続々要求あり、現地職員更に充実の要あり、改めて要員要求をする。

十月一日

山口参事官発青木第一部長宛書簡

貴部主管武器保管引継に関する警察部課長会議は、十月五日午後二時呉市役所において開催することに決定。呉鎮守府管下関係者召集せらるるにつき、各県に至急連絡召集願いたし。

(註) これは最初の武器保管引継打合せ会の召集についての連絡文書である。

◎オーバン号入港延期

海軍中将ヒル坐乗のオーバン号は十月二日以前入港せず、ホビー号先遣視察団を乗せて十月一日午後三時広に入港す。

オーバン号入港期日は追って通知す。

(註) これは九月十七日、呉地区を襲った風水害の被害が甚大であったため広島県知事から進駐延期を要請したのに対し発せられた回答である。

十月二日

広島県庁連合国軍進駐連絡会議午後五時より

一、乗用車、貨物自動車の供出数を明確ならしめること。(輸送課関係)

二、道路標識を至急手配すること。(道路課関係)

三、呉港の航行禁止が、十月四日午前〇時から行われる。

四、自動車車輛及び運転手の手配。

十月三日

中国地方総監府の連合国軍進駐対策連絡会議午後二時より

一、労務者一、〇〇〇人分の宿舍を手配せよ。

(海軍施設部のものを利用することに決定。寝具、食器等用意あり)

二、労務者特配手続のため建築課員を派遣せよ。

三、通訳二〇名、十月六日までに呉に集結せしめ労務者使用の際の通訳に当らしめよ。

四、洗濯設備は、海軍施設部に一度に一、〇〇〇人分の洗濯をなし得る施設あり。

五、食糧として、フリカケ食、のり、缶詰、味噌、醤油、馬鈴薯、塩を至急手配すること。

乾パン一、〇〇〇人分二日間の用意あり。

(註) これお進駐に備え、労務者確保のために行われた当面緊急措置である。

◎進駐軍兵員三〇人宇品に上陸

十月三日、宇品凱旋館に進駐軍兵員三〇人上陸した。(警察電話こより連絡)

十月八日

広島県庁連合国軍進駐連絡会議午後二時より

一、進駐軍に対する事故の申入れ。

二、軍需物資受入課の設置(転用課設置に決定)

三、陸軍との打合状況の連絡

四、海軍関係食糧中、現に腐敗の虞のあるものの所在場所、品目、数量を海軍と連絡の上至急内政課宛報告のこと。

(註) 十月六日進駐軍の呉、広地区への上陸が開始され、十月七日には海田市に進駐して来ている。

十月十八日

広島県庁連合国軍進駐連絡会議

一、道路課長、十月十九日午後一時までに総監府へ出頭のこと。

- 二、進駐軍経費支払の件写を総監府に送付のこと。
- 三、R・マスター中佐の通告文(進駐に関するもの)を隣組に配付すること。
- 四、通訳の待遇問題、日当五円五〇銭を、一〇円に引上ぐることに決定。
- 五、呉市長に糞尿汲取り清掃等について警告を要す。

慰安婦の活動状況(保安課報告)

場所	期間	慰安婦延数	客数	水揚金額
吉浦	自十月十一日五日間 至十月十五日	四四六八	七、四九三人	一五七、四二九円
白石	自十月七日七日間 至十月十四日	三六四八	七、七四五人	一六五、六七〇円
呉市広つばさ	自十月九日五日間 至十月十三日	八四八	三四六八	一九、三〇六円
計		八九四八	一四、五八四八	三四二、四〇五円

(註)慰安所開設には随分苦勞したが、広島県遊興協会会長であった山本久雄氏(後広島市助役、衆議院議員、現在死亡)の手を煩わして阪神方面から一人、一万円の身代金を以て三〇名を募集した。

この資金三〇万円は小笠原会計課長(後県議会議事務局長)によって調達された。

十月二十五日

官庁復興に関する打合会午後一時より於県庁

長官(中国地方総監児玉九一氏兼任)挨拶の後

海軍局は、軍の施設をその後転換使用

専売局は、現在庁舎を補修の上使用

通信局は、広島駅前局及び鞆道郵便局は旧位置に再建。電話局及び電信局は日本製鋼所精心寮において取り敢えず開設。

広島市利用床面積一、〇〇〇万坪の内五〇〇万坪を住宅地とし、残りを緑地帯(一畝毎に五〇〇米の緑地帯)とする。

広島市役所は、現在の庁舎を補修の上使用するも市役所総坪数六七三坪、補修資材としてセメントニ、二五〇袋、石灰七、六五一袋、木材九五六石、硝子一九一・二九平方尺を要し、補修費が測定し難し。

控訴院、地方裁判所は、府中青年学校を借入れ開設。目下、別に府中に一、〇〇〇坪程度のものを建設することに計画中。

放送局は、事務所は東洋工業の第九食堂にあり。大手町に約一、〇〇〇坪の土地あり。応急的には流川町の旧館を利用するも、宇品凱旋館又は富国ビル(袋町)借入を考慮中。

食糧事務所は、現在の場所を利用。倉庫八棟、食糧五万石の収容能力あり。

通信局業務部長は庁員の宿舎建設に配意を乞う。

以上各関係者よりの報告説明に対し

児玉長官より

移転の希望地、庁員数、建物延坪数、特殊の建物(例えば、法廷、倉庫など)、敷地坪数、復旧の場合の所要資材等、又、職員住宅についても希望戸数を調書にして、十一月五日までに提出するよう指示された。

(七)

記録

比治山国民学校迷子収容所

五日市戦災児育成所

斗栴良江

比治山国民学校迷子収容所・五日市戦災児育成所

斗栴良江

被爆場所段原末広町の自宅

当時の勤務学校比治山国民学校

教え子被爆

ピカッと、軒先に異様な光を見たのは、風呂場のたらいに洗濯物を投入した瞬間だった。無意識に「靖子ッ」と、我が子の名を呼んで外へ出ようとしたが、玄関で立ちつくしてしまった。頭の上に何やらいろんなものが落ちて来て真暗になった。しかし幸い家はどうやら倒壊だけは免れた。塵埃がおさまるに従って、家中の惨憺たる光景が目についた。

窓硝子はふっとび、壁は崩れがされ、天井はぶらさがっていた。机が庭になげ出されているかと思えば、テーブルかけは反対の方へとんで、畳の下へ入っていたりした。

何まさておき、学校が気になるので、ごみをかぶったままの体の上に上衣を着て登校する。途中のどの家を見ても同じ様なこわされ方をしているの、不思議な気持ちで歩いて行くと、同僚の若い女の先生が二人来られるのに出会った。

「どちらへ。」と聞くと、

「校長先生の命令で、今から市役所へ行くところなんです。学校の近くに爆弾が落ちたので、報告しようと思っても、電話が通じないので、歩いて行って来い、と言われてまして。」との事、ますます不可解な気持ちになった。

とにかく私は学校へ急いだ。と、右の道から、フラフラとやって来る奇怪な人に目を見はった。

髪が灰をかぶったようであり、顔はしらけて年の頃がわからない。

「あなたは一体どうされたの、焼夷弾でそんなになられたの。」

「どうしたのかさっぱりわかりません。私は女子高の生徒ですが、鶴見橋の方へ勤労奉仕に行きとって、ピカッと光ったと思ったらこんなになってしまっ。

よく見ると、焼け残った服から女学生と察することが出来るだけで、はじめはおおあさんかと思ったぐらいである。手足はちょうど魚を焼いた時のように、皮がはげてぶら下がっている。腫れた足に、はき物もなく、でこぼこ道を痛そうに歩いて行く。

ともかく学校が救助所だからと、その子を伴って学校へ急いだ。

私は校門を入るなり、またもドキッとした。

「先生!!」と言って、跳びついて来た化物のような者、ほんとうに化物とでもいっかねば言い現わしようもない。むごたらしいこの姿。

「先生、苦しい、殺して下さい。」

「貴女は一体だれ。」

「私は空です。」

今年、第一高等科へ入った空美智子という教え子である。全身火傷で腫れ上り、どこにもその面影は見られない。

先生方は給食用の食用油を持出して、来る人ごとにぬってあげて居られるので、私もそれをもらって来て、空さんにぬってやる。

「先生つらい、先生殺して。」と訴える。

「かわいそうにね、つらいでしょ、元気を出すのよ。」と力づけるばかり。何ら手のほどこしようもない。そばにいた先生が、

「先生、あの子の側へ行かないでよ、私はあの子の声を聞くのがすごくてたまらないわ。」と言われる。

私達は、これらのひどい火傷の人を前にして、なすすべもなく、ただうろろするばかりであった。

しばらくして、空さんの母親が来た。

(短歌)

先生!!殺してととびつける教え子は

むざん全身の火傷こくるう

悲運

運の悪いことに、ちょうどその朝、比治山国民学校から、第二集団開兒童の荷物を積んだトラックが、佐伯郡友和浅原方面に向かって出発していた。

そのトラックには、山田教頭先生、養護訓導の平川先生、若い今田、久保両女先生、販売部の甲野さん、それに疎開地の子供に面会したいという母親数人が同乗していたのである。

安否を気づかっている所へ、トラックが帰って来た。帰られたのは教頭先生だけであった。聞くところによると、トラックが住吉橋にさしかかった時、原子爆弾の光線を浴びたそうだ。

教頭先生は、あたり一面火の海となって、逃げ場がなくなりそうなので、皆安全と思われる方向へ逃げるように言って自分は荷物についた火を消したりして、とてもトラックが通れそうもないところを、やっとの事で帰って来たと言われた。

トラックがこうして帰って来られるのだったら、皆を乗せて帰って来られたらよかったのにと、歯がみして残念がったが、所詮後のまつりであった。

石田校長先生と、山田教頭先生は、早速これらの先生方をさがすために出て行かれた。

市の周辺部にある避難所や救護所を一つ一つ廻って

「比治山の先生はおりませんか。」

と叫んで歩かれたそうであるが、誰一人見出すことが出来なかったと言って、夕方、ヘトヘトになって帰って来られた。

あくる日も、又あくる日も、校長先生は先生方や長男の行く方を捜して歩かれたが無駄であった。

八月六日の夜

わが広島にとって最悪の日八月六日も、次第に夕闇が濃く、学校もたくさんの負傷者を容したまま、夜を迎えようとしている。

私は一応段原末広町にある自宅に帰ったが、火災がここまで及ぶかどうかを確かめるために、大正橋のところまで行って見た。

電車の線路より向う側は、コンクリートの建物を残して全部倒壊しているのに驚いた。まだあちこち盛んに燃えつづけているところもあったが、線路に近いところは余じんがくすぶっているだけで、こちらまで火災になることは先ずないと思われた。

昨日に変わる今日の姿、ただ一発でこの大都市を壊滅させるこの威力、わが到底及ぶべくもない科学の進歩の差をまざまざと見せつけられたようであった。

私は家に帰ると必需品だけを乳母車につみこんで、子供を背負い、父母と共に夜を明かすべき所をさがしに出かけた。

比治山の学校近くやって来たが、大きな建物は焼夷弾の的になりそうな気がして、少しでも離れたかった。だいぶん遠ざかった蓮田の中の道にゴザをしいてみんな落ちついた。

蚊が多いのと、昼間の興奮とで、私と母は一睡もせず夜を明かした。私らは炎々と燃えさかり、また衰えたりする火をまんじりともせず見つめていた。市民の人々のお通夜であった。

(短歌)

逃げし田に子の蚊を追いて眠らねば

町の炎は燃えつおとろえつ

八月七日の朝

夜が明けた。昨日のように朝からジリジリと夏の太陽が照りつける。畠の野菜や道端の草が枯草のようにになっているのは、あの光線のためであろうか。

学校の裏の築島さんの離屋をかりて、家族はそこを仮住居とした。私は子供を母に託して登校した。

昨夜の中に、こと切れた人があちこちに見られた。空さんのお母さんが

「先生、とうとう駄目でした。先生によろしくと言って死にました。」と言った。

空さんは防空壕の中で死んでいた。ふとんがかけられて枕元に練香がゆらゆらとたちのぼっていた。

(短歌)

先生によろしくと言って逝きし子の

面影少しく元の形に

検視

警察の人が来られて、検視に廻るからついて来るようにとの事で、それに従った。

運動場の片隅に、玄関に、廊下に、工作室の机の上に、講堂に、丸太ん棒のように横たわっている上に、何歳位の男(女)検視済と書いた紙をおくだけのことである。

死体の枕元には、昨日配られた乾パンが、そのままころがっていた。

高山先生が、

「私がお米からお米を持って来る。それでおかゆをたいて食べさせようよ。」と言われ、早速持って来られた二升の米に、うんと水を入れ、おかゆを炊いた。それを、バケツに入れて罹災者のいる講堂へ持っていった。おわんについて渡すと、私はおかゆが喉を通りませんという人が多いので、又このおかゆに水を大分入れて、おもゆとおかゆの二通りにして持って廻った。手の自由のきかない人にはさじで少しずつ口に入れてあげた。

祈り

その当時、比治山国民学校の南校舎は、鉄道の臨時工夫として徴用された人達の宿舎になっていた。ちょうど広島駅附近の工事に行って居られた人は、ひどい火傷を負って帰っておられた。

帰宅出来そうな者は、任意に帰ってもよろしいとの指揮者の命令が出ると、それらの人々はフラフラと裏門から出て行かれた。

私は思わず後を追った。

「貴方はどこまでお帰りになるのですか。」

「私は小郡まで。」

「そのお体で大丈夫ですか。」

「どうかわかりませんが行けるところまで行ってみます。己斐まで行けば汽車があるそうですが、何とかなると思います。」

「それで何かおあがりになったのですか。」

「いえ、何もほしくないのです。」

「では一寸お待ちになって下さい。」

私は大急ぎで、我が家の仮住居に行き、みかんのかんづめをあげ、その汁をコップに入れて持って来た。

「これなりと飲んでお帰りなさい。」

といってコップを渡すと、

「ありがとう。」と受取って二三口飲まれたところへ同じような人が通りかかれた。

「すみませんが、この人に半分あげて下さい。」

と頼んだ。快よく二人で飲んで

「お陰で元気が出ました。ありがとう。」

と立去って行かれる。

焼けたれた背中に夏の光がようしゃなく照りつける。ふくれ上ったはだしで、やけつくような道を行く一足一足が痛々しい。

どうかお二人がそれぞれのお家に無事にお帰りになりますよう祈らずには居れなかった。

(短歌)

炎熱の道をただれし素足にて

帰りゆく人をただ祈りいる

葡萄園の夜

七日の夜は、葡萄園のほとりに蚊帳をつつてねた。その葡萄園は、一体どの辺にあつたかよくわからない。ここには大勢の避難者が入りこんで、寝る場所を探していた。

葡萄園の持主が来て、出てくれとしきりにどなるけれども、誰も聞かぬふりをして一人として出る者はない。

とうとうあきらめて、帰って行ってしまった。寝つかれない夜だったが、昨日からの疲れでいつの間にか眠りにおち込んでいった。

(短歌)

葡萄園の主の怒る声しきりなれど

出でんともせず避難者の群

治療

明くれば八月八日

大分家に引取られていった人もあるが、まだまだ講堂は罹災者で一杯だ。医師に従って治療に廻る。火傷すでに化膿し、全身うみにおおわれている。うみが目をおおって、目が見えないという婦人の目の廻りを、脱脂綿でそうっとぬぐってあげた。

医師の治療といっても、薬は赤チンとオキシフル位しかないのである。

とても助かりそうもない人は、治療しても無駄だからと、一向に手を下さないのである。

まことに残酷この上もないことであった。

死体はトラックが来てまるで材木をつむ様に積み重ねて帰って行った。

迷子収容所発足

八日の午後であった。

市の社会課長さんが子供を一人だいて来られた。

「今日から、此の学校を迷子の収容所にするから、子供を預ってもらいたい。」との話なのである。

見れば二歳くらいの女の子、すっぱだかにワイシャツをひっかけた抱いて居られる。この手をだき取ったものの、私達は顔を見合せて途方にくれた。

当時、比治山国民学校の職員の大半は疎開地にあり、後は女子職員がほとんどであった。

校長先生の長男が行方不明、教頭先生の長女、谷村先生のお父さん、久保先生のお母さん、米重先生の主人、藤川先生の弟さんが死亡されていた。

梶谷先生は疎開地から帰っていて罹災されたということであった。狩山先生は顔をけがして居られた。

だから、家族すべて無事故というのは、高山先生と山崎先生と私の三人だけであった。

私達は非常時なのであるから、出来るだけのことはせねばならぬと、各自の心に誓ったのであった。

この子は、名前を聞いても答えない。非常におびえていて、絶体こひざからおりようとしな。おろせば立きわめいてすがりつくので、三人かわるがわるだっこしてあげなければならなかった。

何といってもはだかではどうにもならないので、私は末広町の家へ帰って服とおしめを取って来た。

それから学校裏の仮住居へ、今日から迷子の世話をするようになったので、夜も帰れない旨を伝え、子供の世話を母に頼んだ。

まだ母を離れて寝たことのないわが子、きつとおばあちゃんを困らせることだろうと心配だかいたし方がない。やっとなかしてそっとぬけ出す。学校への足は重い。

学校では、高山先生と山崎先生が、代る代るだっこして、私を待ちかねて居られた。日はとっくに暮れていた。

今夜は運動場で夜を明かそうということになった。校長先生がゴザを持って来て、イモの植えてある側にしき、ゴロリとねて星空を眺めて居られる。きつと行方不明のご長男の事を考えておられるのであろう。

空襲警報が出るたびに、待避壕へ走り、ろくに眠れない一夜を過した。

恐怖の夜

夜更けに、土間を通りぬけようとする、いきなり闇の中から

「すみませんが、水を一ぱい下さい。」

という声、私はとび上らんばかり驚いた。頭から水をかけられたほど恐しくて、声が出ない。私は思わずかけ出していた。

明るる朝、その人は目をあけたまま、一点を見つめて死んでいた。

「ああ昨夜水をあげれば、まつごの水になったのに、気の毒なことをした。」

あの人はきつと私を恨んで死んでいったに違いないと思うと、気持ちが悪かった。

(短歌)

水をくれとわおにたのみし人は今朝

息絶えてあり眼ひらきて

頬に穴のあいた子

日時が記憶に明らかでないが、若い男の人が、誕生日前かと思われるふつらとかわいしい男の子をつれて来られた。見ればかわいそうに左の頬にぽっかりと穴があいているのである。

この子は母の乳ばかり飲んでいたらしく、ミルクを与えても、ゴムの乳首になじまず、てんで飲もうとしない。私はほとんど自分の子供と顔を合わすことも出来ない状態であったから、私の乳はかなりはっていた。試みに乳房をくわえさせるとおいしそうにゴクゴクと飲みはじめた。

また恐怖の夜が来た。毎夜毎夜、空襲警報におびやかされ、壕への待避をくりかえしていると、しまいには私達も子供もへトへトにつかれ切ってしまった。はじめの中は、子供達皆をつれて待避していたが、しまいには目のさめた子供だけつれて待避するようになった。

夜更けて壕の中にいると、突然赤ちゃんの泣く声、あのほっぺに穴のある子供が目を見ましたのだ。黒々と横たわる巨大な校舎は、何か魔物を思わせる不気味さである。その校舎も砕けよとばかり母を求めて泣き叫ぶ赤子の声は、全く悲痛の限りで、私の肺腑をえぐられるようであった。たまりかねた私はいつの間にかその子のいる衛生室に向って歩き出していた。

暗闇の中で、声をからして泣きつづけている子をだきあげ、乳をふくませてやると、母にあった安らかさをおぼえたのか、腹一杯乳を吸いつくすと、やがてスヤ

スヤと眠りはじめた。

(短歌)

魔の如き校舎も砕けと泣き叫ぶ

赤子はひたに乳をほりつつ

吾を母と思いで乳を吸いつくし

眠りぬ頬に穴のあきし子

焦土のなか母を慕いて泣き叫ぶ

赤子の声は今も聞ゆる

この子の世話を段原山崎町のある奥さんが、引受けて下さって、ほっぺの穴はきれいになおして頂いたのであるが、その後だんだんやせ衰えて死んでしまった。

ソ連参戦

衛生室を取片づけて、六畳の間を寝室にした。ガラスの破片がものすごくあった。

昼のうちには、何とか過すことが出来たが、灯のない夜の心細さといったらない。この時程灯火が人間にとって、どんなに大切なものであるかということ、痛切に感じたことはない。警防団の奥平さんが、カンテラを持ってコツコツと見廻って下さる。その灯を見て、私達ほどこんなに勇気づけられた事だろう。それはただ便利であるというだけでなく、人間に生きる力というものを与えてくれているという事実である。

しかし、その人からソ連参戦を聞かされた時は、断崖からつき落された様な気がして、目の前が真暗になるのをおぼえた。ピカドンにあってもまだ私達は負けるという気はしていたかった。しかし、この張りつめていた心も、グラグラと倒壊して行くのを禁ずることが出来なかった。

水を求める女学生

夜、私達が壕に待避していると、講堂の中から

「水ッ、水ッ。」と、悲鳴に近い叫びが起った。女学生の声である。あたりの闇と静けさを破って必死に叫びつづける。そしていつまでも止みそうもない。たまりかねて高山先生が

「あの火傷ではとても助かる見込みはないわ、どうせ死ぬものなら飲みたがる水を飲ませてやろうじゃあないの」といわれる。私も前夜のこともあるし、すぐに賛成した。

暗闇の職員室に入り、手さぐりでやかんとコップをさがしあて、水を入れて持って出た。高山先生と私は、恐ろしさと気味悪さで肩をしっかりと組んでいた。講堂の中は罹災者で一ぱいである。灯はつけられないし、足さぐりで一步一步進む。うっかりあやまってつまづこうものなら、火傷の人か、死人の上に倒れねばならない。相変わらず、「水ッ、水ッ。」と叫びつづけているその声をたよりに、やっとの事で辿りついた。

「さあ水よ。」とコップに水を入れて与える。

「ゴクン、ゴクン。」と喉をならしてのみ、

「ああおいしかった、もう一杯。」

「もうこれでまんしなさい。明日はおいしいおもちを作っておあげるからね。」

といって、そこを引揚げた。

(短歌)

水ッ水ッと叫びいる子に闇のなか

水与えんと足さぐりゆく

吾が子を探しあてて

真夜中である。突然大八車の音がして講堂の所どとまった。昼間探しあてた家族を連れに来たらしい。

「〇〇〇〇はいますか」と呼んで灯が点じられる。

「今、空襲警報中ですよ。灯をつけてもらっては困ります。」と校長先生。

しかし、聞えぬふり、一時も早く我が子を連れて帰りたいばかりである。

校長先生はたまりかねて、つかつかと側へより

「なぜ灯をつけるんです。講堂には沢山の動けない人がいるんですよ。もしもの事があつたらどうします。」と言葉鋭く叱られたが、さっさと子供を大八車に乗せて帰って行った。

「よう生きとってくれたね、お母さんが来たからもう大丈夫、きつとなおして上げるからね。」と母がいつている。どうか母の真心で元の体こと祈りつつ見送った。

おびえる子ら

十日、己斐方面からトラックで、子どもたちが十三人一ぺんに来た時どうなることかと思った。

ひどい火傷の子もいる。けがをした子もいる。これらは市役所から松林先生が来られて、毎日手当てをしてくださる事になった。

食事は鉄道の人がついでにおかゆをたいてくださった。

衛生室へは小さい子を寝かせ、一人で便所へ行ける子は、となりの教室にゴザをしき、蚊帳をつけて寝かせた。

「お母ちゃん、おしっこ。」

といて起き上る幼児には涙をさそった。

暗い廊下を通って便所までつれていく。殆んどの子が下痢便なので、便所までもたないことがある。一人すませたと思ったら、また次が目をさます。おしっこがわかって起きる子はまだよいが、わからない子が、一、三人いる。

朝起きて見ると惨憺たる状態である。ふとん、毛布、蚊帳まで粘液便、血便でヌルヌルになっている。朝はおしめやこれらの洗濯で大変である。早く洗濯をし、その日の中に乾かしておかないと、数少ないおしめや夜具に事かかるとなるのである。

地獄のような猛火をくぐって九死に一生を得て来た子供たちは、ひどく神経過敏になっていて、空襲警報のサイレンを聞くと

「先生こわい!!逃げよう、早くつれて逃げて!!。」とわめきたてる。そして私達の手を引張るようにして運動場の待避壕へと走るのであった。全く恐怖の夜の連続であった。

ある早朝の事である。早く目をさました一人の子が、突然、

「火事だ!!炊事場が燃えている!!。」

と叫び出したからたまらない。その声に目をさました子供らはみんな、「キヤーッ。」

「火事だ!!。」と奇声を上げて廊下を右往左往しはじめた。

それは鉄道の人が朝飯を炊いている火であったのだ。

あの市内の焦熱地獄を体験して、やっと自分だけ助かって来た子供たちは、体中おびえ切っているように思われた。

婦人会の協力

被爆以来の収容作業で私達もうすっかり疲れ切っていた。

そこで町の婦人会の方々が、毎日三人ずつ出て協力して下さることになった。

「先生方は夜が大変なので、昼間はゆっくり休んで下さい。」

といて、お掃除や洗濯などかまわいしくやって下さって全くありがたかった。

何日ごろからか、これもはっきり憶えていないが、市の保母の方が毎日一人か二人出勤して、子供らの世話をして下さいになってからは、大分楽になって来た。

しかし、夜は私達の役目で、殆んど家に帰れず子供と寝食を共にした。

豚

十二日

廊下を歩いてふと目を庭に移すと、あっとばかり驚いた。そこには二つの教壇がおかれ、それがまなびたになって、豚が五、六人の徴用工の人たちによってさばかれていたのである。そこに展開した血なまぐさい光景に私は目をそむけた。

この豚は給食のざんぱんで飼うようにと、各学校に配られたもので、はじめは二頭もいたのである。一頭は児童が疎開する前に殺して給食にした。あとの一頭は飼料に困りはてていた。六日後は誰も豚に餌をやるものはなく、豚は腹をへらして、小屋を出て野菜畠をあらした。夜も街の中を歩き廻ると街の人から苦情が出た。

校長先生も困りはてて、徴用工の方に処分を頼まれたらしい。「こんなことは朝飯前ですよ、支那で十分経験していますから。」と、御馳走にありつかれたのを喜んでおられた。

「夕食を御馳走しますから来て下さい。」といわれたが、あいにく校長先生は居られず、私たち三人でいった。

ぶた飯、ぶた汁、焼ぶたとぶたづくめで、皆舌つづみを打っていたようであるが、私は昼の光景が目の前に浮んで、喉を通らなかつた。子供らが、あんなに世話をしていたのに、子供らの口には入らず、みんなこの人らの口に入ってしまうのかと思うと、今は居ない子供らがかわいそうでならなかつた。

私はせめて近くに居られる狩山先生のお宅へでもと思って、自分に頂いたものを届けに行った。

春川さん

春川さんは沖縄の人だった。主人は行方不明との事、赤ちゃんがいて仕事は出来ないし、食べていく事が出来ない。「食べさせてもらうだけで良いから、何でもしますから使って下さい。」と言って来られた。

校長先生にお願ひして洗濯をしてもらうことになった。

十二月末、子供らが五日市に移る時、山下所長さんにお願ひして、ここでも洗濯をしてもらうことになった。

後に入って来られた引揚者の玖島さんと一緒に働かれた。

五月頃、春川さんは故郷の沖縄に帰って行かれた。私たちに、とても名残りを惜しんで、今でもどうして居られるかと時々思い出す。

お見舞

久保先生と今田先生は、家族の方に見つけ出されて、自宅で療養されていると聞いて見舞に行った。久保先生は矢賀、今田先生は船越であった。久保先生の宅へ先に行き、数日して今田先生を見舞った。どちらもトボトボと歩いて行った。

二人とも全身の火傷で、身動きも出来ない状態であった。

久保先生のお母さんも、建物疎開に出ておられて死なれたそうで、お姉さんが看護して居られた。私達はガーゼや脱脂綿をお渡しして帰った。しばらくして私は心臓に良いという薬を届けてあげた。

この二人の先生は、その後すっかり回復されたということを知ったが、平川先生と甲野さんは遂に行方がわからなかった。誠に申し訳ない事であった。

終戦

八月十五日、終戦の詔勅が下って戦いは終りをつけた。その日から空襲の恐怖は去ったが、占領軍が懸注して来るという、新たな不安が私たちをおびやかした。

鉄道徴用工の方達も、解散ということになって帰って行かれた。

学校の中央校舎には、兵器廠のいろいろな材料部分品が疎開してあった。

終戦数日後、六、七人の人がトラックで乗りこんで来て山積みして持って行った。

私達は何の疑いもなくこれを見ていた。大分たつてからその人らは盗んでいったのだということを知った。

ここに監視人がおかれたのは、ずいぶん運び出された後であった。

尋ね人

此所が迷子の収容所だということが世間に広まると、毎日のように、我が子はいないか孫はいないかと訪れる人が絶えなかった。

「あ、いたいた。」と走りよっていただきあい、喜び勇んで帰って行く、うれしそうな様子にも幾度か出合った。その反対に、待てど暮せど迎えに来てもらえない子供の表情は、日がたつにつれて暗くなっていった。

「もう死んだに違いないと思って葬式をすませたのですが、生きていてこんなうれしいことはありません。ほんとうにお世話になりました。」と、心から礼を言って帰って行かれる姿を見送って、ああよかった思うと同時に、後に残された子供があわれで、一日も早く親子対面が出来るよう祈らずにはおられなかった。

入浴

子供らは着たきりすずめの垢もふれであった。何とかして入浴と思って、考えついたのが給食用の桶であった。

釜で湯をわかして桶に入れ、ほどよい温度にして、子供を一人ずつ入れて体を洗った。

湯はたちまちどす黒く汚れてしまった。新しい湯を入れては次々と洗っていった。中には気持ちいいといって出ないのがんばる子もいた。

この方法も厄介なので、高山先生のお家の風呂を借りることになった。

先生の家は学校の前にあった。一人でも入らない子は、先生が入って一人ずつ洗ってやられた。

それで、とうとう先生は子供の皮膚病をもらってしまわれた。

三悪

終戦後の三悪に、皮膚病、眼病にしらみがある。共にしぶといものばかりである。

松林先生が、子供の体中に薬をぬりつけたり、洗眼をしたり、根気良く治療して下さった。当時はまだDDTもなく、やせ細った子供らの体を、なおもこれらがいじめつけた。

日だまりで、しらみをつぶしている子らの姿など、実にあわれであった。

私達も、この三悪を一通り体験させられた。

食事

終戦までは、鉄道の徴用工の方が食事を作ってくれましたが、それ以後は私らの手でやらねばならなかった。

子供らは、殆どが下痢しているので、おかゆを炊いた。おかずは、梅干、味噌、運動場に作られたいも、いものほっば、などであった。毎日のように、近所を歩き廻って、農家で野菜をわけてもらって来た。

カッチちゃんという子がいて、れんこんを煮てやると、

「せんせい、カッチちゃん、デンコンすき、デンコンすき。」と言ってついて来た。

こうりゃんの配給があった時は、うすを借りて来て粉にし、だんご汁にして与えた。

時は五目めしや、ばらずしなどして、子供連をなぐさめてやった。

おやつには、僅かばかりの牛乳や乾パンなどの配給があった。

衣服

古着がほとんどであった。子供にあう物ばかりはなかった。ズボンのすそや袖口を折りまげて子供にあうようにして着せた。

ある婦人の方から、新調のネルの着物を十枚を寄贈していただいた時は感謝で一ぱいだった。子供らも新しい着物に手を通した時は、さすがにうれしそうであった。

ふとんはなく、軍隊からの払下げの毛布を寝具とした。

配給物

終戦後、数日たってからと思う。毎日何の配給があるかわからないから、一度は市役所へ来てみるようにとのことである。

これも私達にとってつらい仕事であった。

配給物があるうがなかるうが、毎日のように大八車をひいて市役所へ通った。大八車はタイヤでなく、金のついた重い車輪で曳くとガラガラと大きな音がした。

行けども行けども、炎天の下に廢墟の街はつづいて、出会う人はほとんどなかった。くずれた瓦礫の下に、人の骨が見えたりした。ある時は黒人兵がいたという恐れ、誰もこの役をきらった。

結局、若い山崎先生や私が行くことになった。配給物は、ミルク、味噌、しょうゆ、塩、梅干、乾パン、その他毛布、シーツなど軍隊の払下げ物資であった。

子らの最期

下痢のひどい子供らは、頭の髪がうすくなり、次第にやせ衰えて、次々と倒れていった。そのたびに私達は、運動場の片隅に運び、わる木を重ねた上にのせて焼いた。その数は遂に十一名になった。

ある時は、長雨のため焼く事も出来ず、階段のおどり場に置いて雨の止むのを待った。今度行ってみると、ウジが一ぱい湧いて、手がつけられなくなっていた。

今思っても不思議でならないのは、誰一人、つらい苦しいと訴えたものがいなかった事である。みんな静かな最期だった。しかし、もしそこに母がいれば苦しみを訴えたであろうに。

自分の名さえ知らぬ子、自分の名がやつと言える子らが、私達に甘える事もようせず死んでしまった事を思うと、ふびんでならないのである。

これらの幼な子は、戦争も原爆も恨みはしなかったであろう。しかし、最期まで母をどんなに慕ったことか。私はこの子供連を母の膝の上で死なせてやりたかった。

保母さんにお寺の方があって、十一名の幼な子の霊にお経をあげてもらった。子供らは皆小さな手を合わせておがんでいた。

長雨

原爆の後、長いこと雨は降らなかった。降り出したのは九月の半ばごろであったか、記憶がはっきりしない。降り出すとたかなか止まなかった。あっちもこっちも雨もりがみおげしい。天井にはあってある馬糞紙のようなのが、水を吸って重くなって落ちて来る。

子供のいる衛生室は、幸い、雨もりは少なかったが、それでもあちこちにバケツや洗面器をおいて寝た。

廊下は洪水のようで、長靴をはき、傘をさして歩かねばならなかった。

炊事場は屋根がはがれて露天同様だったので、おかゆを炊くのも傘をさしかけてもらってなければならなかった。

それにもまして困ったのは、洗濯物が乾かない事であった。

橋詰ひろみさんのこと

五歳位の目のぼつちりしたかわい子であった。この子が、ここに来る少し前に、この子のお母さんがたずねて来られたのであるが、それからいくら待っても姿を現わされなかった。

ひろみちゃんは、暗いじめじめしたこの生活に、すっかり嫌気がさしていた。そして家族の者に次々と引とられていく友達が、うらやましくならなかった。

ある日、子供がましいといつて来られた奥さんは、この子なら世話をしたいと言われる。ひろみちゃんもついて行くといつて聞かない。

「ひろみちゃん、あなたはお母さんがきっと迎えに来られるから待っていきましょうね。」

といっても、まだついて行くと言う。その晩はとうとう私の家へ一晩泊らせて機嫌をとった。

年が明けて二十一年三月末、幼児は五日市戦災児育成所へ移ることになった。

ひろみちゃんは、一度は頭の毛が全部ぬけたが、その頃にはきれいに生えて、よく太り、元気なかわいい子になっていた。

それから間もなくであった。お母さんとおばあさんに涙の再会をしたのは…

私が、あの当時の事を話すと、お母さんはあれからずっと休養しておられたという事であった。

ひろみちゃんは今どうしているかな、もうお嫁こいつているかしら、もうお母さんになったかしら、と思ひ出し、いつも幸せを祈っている。

名づけ親

幼児に唾の子がいた。高山先生がこの子に田中正夫という名をつけらるる他、カッチちゃんというだけの子、姓名もわからない子もあって、米の配給を受けるにも、名簿をつくるにも困るので名をつけてもらった。

名づけの親はすべて高山先生であった。

高松宮殿下御来訪

日時をはっきり記憶していないが、ある小雨の降る日、一台の黒い車が学校の前に止まった。

天皇陛下の御名代として、この収容所をお見舞下さったのであった。

「ひどいな。」と、一言おっしゃって衛生室にお入りになり、子供らの状態をいろいろとお聞きになってお帰りになった。

戦災児育成所開設

五日市戦災児育成所は、元農事試験場であった所を、山下義信先生が、戦災によって迷児あるいは孤児となった者を育成する場所として開設されたものである。昭和二十年十二月の頃である。

子供を収容するには十分の建物があり、小高いところに小さいお寺のような建物(後に童心寺と名づけられた)があった。その丘にはびわの木が植えられていた。そこからは海が見え、風光明媚、気候はよく、子供らを育成するには絶好の環境であった。

ここは職町国民学校の分教場として、子供らの教育方面を担当することになった。

一、二年、三、四年、五、六年の複式授業であった。

教室は子供らの寝室が早がわりした。第一児童館の第二号室が一年生の教室、食堂が三、四年生の教室、第二児童館の二階が五、六年生の教室であった。

五、六年が主人(斗栴正)、三、四年が藤原先生、一、二年が私の担当であった。

一、二年合わせて五、六人しかいなかったが、これを部屋に集めることからしてむずかしかった。風の中の風船とでも例えようか。

子供らの気持は、何かうつろでワフワフしていた。おしっこへ行ったら、なかなか戻って来なかった私の取扱いも下手だったと思うが、何をやらしても根気がなく、すぐあきてしまった。何かをしたいという気力は、全然といってよいほどなかった。

これらの子供に勉強させようとする事は、水を飲みたがらない馬に、むりやり水を飲ませようとする事だった。

だからその歩みはなめくじよりもおそく、毎日ため息の連続だった。

父となれ、母となれ

山下先生は宗教家であった。次男を原爆で失って居られた。原爆で両親を失った子供を放っておけなかったのである。どうにかして一人前になるまでと、戦災児育成所設立を思い立たれたのであった。

先生はいつも職員を一堂に集めて法話をされた。

「私達は常に広い愛とまごころを以て子供らの面倒を見てやらねばならない。もしここに親がいたらどうするだろうか。というを常に念頭におき、父となり、母とたつて世話をしてやってほしい。」

私は子供らを中流以上の家庭の子供としての、教養と躾を身につけさせたいと思っている。それには親となるものが、自分を磨き向上していくよう努めなければならぬ。」

いつも魂にくい入るような先生のお話であった。

林田先生

山下義信先生の手足となって、育成所の基礎を築かれたのは、何といっても林田先生である。

出身は九州と聞いていた。戦争のために最もひどい痛みを受けた戦災孤児、これを見捨ててはいけないと立上られたのが山下先生である。その義侠心と熱意に共

鳴されて、はるばる九州から広島の地に馳せられた森田先生には、一べんの名誉欲も利己心もなかったと思う。

山下所長も林田先生も、まず子供らを飢えさせてはならないと東奔西走の明け暮れであった。

夜なども、明け方までコウコウと電灯がともっているので行って見ると、机にうつ伏して眠って居られる。

「先生、もうお休みになつては、風邪をひかれますよ。」

「あ、ねていましたか。もうすぐねます。もう少し仕事が残っていますから。」

といって、また帳簿の整理をなさっていた。そんな事は一度や二度ではない。文字通り寝食を忘れて子供らのために努力されたのである。

先生は大学を出られて間もない純情な方で、且つ敬虔の念の厚い方であった。私達のようなつまらない者でも、子供らの師として扱ってくださった。私達が子供らの事について、いろいろなお願いをしても、いやな顔をせず、聞き入れて下さった。お風呂なども、私達が人つてからでないと絶対に入られなかった。どうか先に入つて下さいとお願いしても駄目だった。

先生の我が身を忘れて子供連のために努力して居られる姿には、頭の下がる思いがした。先生は心から子どもを愛された。だから子供達も兄の如くなついていた。先生は今どうしておられるかなとなつかしく思う。

はじめはさびしそうな子供たちをどうしたら慰めることが出来るか、どうしたら元気を出させることが出来るかと、そればかりを考えた。

夜など一堂に集って歌を歌ったり、レクリエーションをして気分を引きだせようとした。しかし、その時はさびしさを忘れてはがらからかしているけれども、すんでしまえば、ただ空しさだけが心に残るようであった。

子供らの前途には、いざらの道がつづいている。このいざらの道を切り開いて、進みやすくしてやるのがほんとうの愛であろうか。

子供たちが悲観のどん底から、悲しささびしさに耐えて自らの力で、はい上つてくれることを切望した。

朝の礼拝

起床の鐘がなると、皆とひ起きて夜具をたたみ、洗面をすますと、童心寺に集る。幼児も保育さんに手をひかれて、丘に登っていく。

重本先生を中心に、十二礼を一斉に唱える。終りには、幼児もおぼえて、やさしいところだけ声をはり上げて読んでいる。丘をおりる頃には朝食の用意がととのっている。

しらみ退治

比治山の収容所から持って来たのか、よくはわからないが、しらみが子供たちの間で横行した。

その頃、まだDDTはなく、その機織に手をやいた。そこで子供達の衣服を全部ぬがせてふる釜に入れ、煮沸することにした。ところが白いものも、黒いものも一緒に煮たから大変だった。

きれいな女の子のセーターも、見るかげもないきたないものとなり、私達は「ごめんね、ごめんね」と子供たちにあやまった。

お骨拾い

四月のある日、子供達はおのおの自分の家の焼跡を訪ねることになった。だいたい地域別に三班に分れた。

私達は、井上みちこ、大黒美都子、茂子姉妹を伴って出かけた。町名を忘れてしまったが、どこまでも瓦礫の町がつづいて、住む人はごく僅かだった。ところどころ水道の水が噴き出していた。道はだいたいぶん片づいていたので、さすがに子供たちはよくおぼえていた。

「この小路に入って何軒目だったから、ああここです。ここです。」と、なつかしそうにあたりを見廻し、早速お骨はないかと探しはじめた。井上さんは、お父さんと二人暮らしであった。お骨が出て来た。ねまきの焼け残りも出て来たのでお父さんの遺骨とわかった。大黒さんの方もすぐ見つかった。

用意して来た箱に入れた。焼跡に花を供え、みんなで拜んでから、そこを後にした。

脱走

籠の鳥は籠の中に居さえすれば、餌も水も与えられ、危険にさらされることもない。しかし、それに満足せず、外はもっと自由な世界があると思ってとび出す。

子供らもそんな気持なのか、脱走者が相ついで出た。居ないということは食事の時こわかった。わかるとすぐ職員が宮島方面と、広島方面の二手に別れて探しにいった。運よく見つかって、連れて帰ることもあったが、殆どは行方がわからなかった。

ある時は、二人で夜の脱走を計画し、事務所の金や倉庫の食料品などを持出したこともあった。

個別指導

戦争によって家を失い、両親を失った子供らの心の中には、大きな空洞が出来、他からどんな手がさしのべられても、容易にみだすことの出来ないものであった。

向学心など要求するさへ苛酷と思われた。しかし、私達はどうかして一日も早く立直ってくれることを望んだ。どうしたら子供をなぐさめることが出来るか、どうしたら勉強しようとする意欲が湧くだろうかと、毎夜のように職員会議が続いた。

そして、主人の発案によって、朗読、漢字、計算力のテストを、随時個人別に行なうこととした。朗読は自分で練習して自信がいたら、好きな時やって来て、先生に聞いてらう。良かったら合格の印を押してもらい、次に進む。

漢字、計算力テストは、何段階に分けてテスト用紙が印刷してあって、程度の低いものからやって、出来ればいくらでも上のテストを受けられるようにした。これは、割合、子供の競争心をあおったようで、よろこんでテストを受けていた。

下村先生

若い女教師であったが、教育熱心で子供のことを親身になって考える方であった。

子供らは先生のように甘えた。そして何でも先生に話した。子供らはどんな環境に生い立ったのか、家族構成はどうだったか、くわしく調査されていた。

子供らの寝た後は、毎夜のように、三人で話し合った。話題は子供の事ばかりだった。

きょうの出来事、子供らの言動、個々の子供の性格、なお、その性格が形成された過程についての探究など、話はつきず、十二時を過ぎてねることが多かった。あまりたくさんな子供ではないし、たえず密接な話合いによって、すべての子供について、大体を把握することが出来たと思う。

ひし型のよもぎ餅

主人の一中時代の友達が、宇品でひし型のよもぎ餅をつくっていると聞いて、尋ねて行った。

よもぎと米の粉、胚芽、ぬか、みかんの皮を粉にしたものをつきませ、それをひらたくして、ひし型に切ったものである。餅というにはあまりにもお粗末な物であった。

これは、工場のおやつにというて作られているもので、街こでも出ると、たちまち行列が出来、とぶように売れたのである。

主人がおねがいすると、取りに来られるなら、毎日、子供の人数ぐらいはあげますとの事、最年長の子が、毎日、宇品まで取りに行き来ることになった。子供にとっては、貴重なおやつで、これをやるからお掃除を代ってくれといったら、よろこんで代るといった具合であった。

運動会

秋日和の一日、育成所の中庭で運動会が行なわれた。職員も交って、かけっこ、二人三脚、置きかえ競争などをした。また、マラソンもした。女の子は遊戯をした。全員で村祭を踊った。

林田先生が目かくしで走る時、一生懸命走られて、第一児童館の板べりに、いやというほど頭をぶっつけられて、気の毒だったことを、今でもはっきり思い出す。所長さんも、平常よりしっかり食べさせてやってくれといわれて、子供らも大よろこびだった。

遠足

明日は遠足というので、炊事の人たちは弁当作りに忙しい。子供らの好きそうな卵焼き、煮豆、てんぷらなど、物資の少ない時なのに、いろいろと考えて作られたおかずを、夜おそくまで折箱に詰めておられる。普通の家庭では、これだけのご馳走は出来ないだろうと思われる。

所長さんはじめ、職員の方々のご苦労がうかがえる。

食べる時間は二十分もかからないのに、これを作るために要する時間と労力、そして心配はなかなかではない。

このことを、子供たちにもよく知らせねばならないと思った。

明るく日、一日を楽々園に遊んだ。

お月見

いつも腹いっぱい食べさせてやるという事が出来ないから、今夜だけは、とにかく腹いっぱい食べさせてやってくれとの、所長さんのお達しで、夕食はいろいろとご馳走して下さった上に、子供らの作ったさつまいもを、たくさんふかしていただいた。

子供達は、歌ったり、踊ったり、レクリエーションに楽しい一ツ時を過ぎた。

野炊き

所長さんが、どこからか牛肉を求めて来られた。牛肉など、近來見たこともない貴重品だった。今日の夕食は野炊きという事になった。

各母親を中心としたいくつかのグループに、牛肉・野菜・鍋・食器などが配られた。子供たちのはしゃぎ方は大変なものである。男の子は薪集めをする者、丘の上を走り廻って場所を探る者、女の子は鍋や野菜を洗う者、野菜を切る者、やがて鍋のものは煮えたらしく、あちらでもこちらでも夕食がはじめられ、丘の上はほがらかな笑い声に満ちあふれた。

農作業

私たちは一家庭に割りあてて、畑が定められていた。

食物を作るとなると、子供らも真剣だった。一生懸命掘りおこして、堆肥を入れてうねを作り、いもづるをさした。時々、水やこえをやり草取りもした。

秋になるといも掘りをした。大きないもが出来ていた。子供のよろこびようは大変なものであった。それがおやつとなった時は、どんなものよりもおいしいといった表情であった。

外出

子供らも少しは外出させて、外の空気を吸わせねばということで、時々七、八人の子供をつれて広島方面へ出かけた。

その頃、已斐行の電車は、全線が復旧しておらず、天満橋のあたりで、少し歩かねばならなかった。そこに露天の闇市が出来ていて、いろんなものを売っていた。

人だかりがしていると思って、のぞいてみると、必ずそこには食べ物があった。

子供らをつれてそこを通ると、みんなはふり返って私たちを見ていた。

私たちは海藻で作ったそうめんでもなく、ところてんでもなく、春雨でもないが、まあそれらによく似たものを売っていたので、それを買い、段原末広町の自宅へ持帰って、子供らに食べさせた。

たにしどの

職員と子供らが、一堂に会して食事を共にする時など、決って歌われた歌に「たにしどの」がある。これは望月先生の音頭ではじめられた。しまいには子供らが、皆おぼえて手拍子面白く歌われた。

私は数年たって、この歌を口ずさんで見ると、一ヶ所だけどうしても思い出せない箇所があるので、畑重熙君に手紙を出して問うて見た。細君はすぐ返事をくれた。

たにしどのたにしどの

あたご参りにおじやらぬか

いやで候いやで候

丁度去年の夏の頃

おどじょうどのにさそわれて

ちよろちよろ小川をわたる時

とんびやからすやふくろめが

あちやつきこちやつきつきだす

そのきずがそのきずが

ずっきらずっきら

ずっきらずっきら

うずきだす

何か妙薬ござらぬか

ござるともござるとも

山の上なる蛤と

海の底なる松茸と

のみのきん玉

しらみのはらわた

これを丸めて飲むなれば

効能たちまちあらわるる

効能たちまちあらわるる

畑君の手紙

畑君からの手紙を読んで、その生長に驚いた。文章も実に立派で、思想も堅実であることがうかがえた。

自分らが原爆によって両親を失い、悲歎のどん底にあった時、あたたかい手をさしのべて救い上げて下さったのは、山下所長さんである。所長さんは終戦後の物資の少ない時代に、われわれの親に代ってかならず廻り、食物を、衣服を心配して下さった。

私達は所長さんをはじめ、職員の方々のあたたかき愛に守られ、また広い社会の方々の寄せられた厚意によって、ここまで生長することが出来たのである。われわれ、この育成所に育った者はみな兄弟である。喜びも悲しみもわかち合い、励ましあうために重心会を結成している。みんなで、しっかり手をつなぎ励まし合って、社会のために働きたい。というような内容であった。

松村先生

集団疎開児童を引率していつて居られた松村先生は、原爆で家族全部を失われた気の毒な方であった。自身が身を以て体験して居られるだけに、子供たちへの愛情は深かった。三、四人の子供の母として世話をして居られたが、大きな子供が「お母さん、お母さん。」と甘えている様子は、ほほえましいものであった。先生は、主として炊事の方を担当して居られたが、くるくるとこまのように働いておられた。何事にもよく気のつくやさしい先生であった。

増田君からの手紙

先生、本日はなつかしいお便りをいただきまして、涙の出る程嬉しく思いました。さて開所満八周年の記念行事を昨年の暮に催しました。年月の過ぎ去るのは早いものです。人生五十年にして時計の如くコツコツと短かくなっています。朝に夕にと日々を送り、いつのまにかは白骨となる身です。当育成所も一月十五日に、市移管式を挙行政致しまして、おじいちゃん、おばあちゃんたち(山下所長夫妻)は、基町のバラックの方に移転されております。これからは市営になり、今迄の職員は、臨時雇員として勤められています。先生はみんなの名前をよくおぼえていらっしゃいましたね。みんなの様子を簡単にお知らせ致します。全部は書かれませんので、これをよき機会と致しまして度々お便りを差上げますからね。先生、よく私の事を忘れずにいて下さいましてどうもありがとうございました。では時節がらお体をお大切になさませ。

井上美智子昭和二十二年頃、伯母の所に引取られ子守などしています。

大黒美都子家事見習のため、二、三日前退所しました。

大黒繁子職員代りとして所内で働いています。よく肥えていますよ。

岡田浩二自衛隊に入っています。

岡田登美育成所で働いています。

斎藤章パン屋に勤めていましたがやめています。

畑俊夫佐伯郡原村国立療養所で療養中です。

重熙、誠二、良則の三人は元気でよく勉強しています。

岩田雛恵畑君と同じく療養中です。

他の兄弟は元気です。

菅隆夫野球好きでよく肥え、よく何でも食べます。

堤六方学園に入りましたが、間もなく病気のため亡くなりました。

堀イネ子幼い時と変わらず、少し叱るとすぐ大声で泣きますが、元気でいじが悪くてなりません。

田中止夫ろうあ学校の寄宿舎に入っています。

大昇元気です。

縫部職業補導所へ通っています。

中湯尾道市の東洋せんいの方で働いています。盆や正月には帰って来ます。

増田君へ

早速お返事をどうもありがとう。

とてもとてもうれしかったですよ。一々丁寧に消息を知らせて下さって、皆の様子がよくわかりました。

増田君はあの頃も上手だったけれど、とても字が上達しているのでびっくりしましたよ、学校でもよく勉強が出来るのだらうと想像しました。

一月十五日から市営という事になったそうですね。長らく可愛がって頂いたおじいちゃん、おばあちゃんとお別れするのはつらかったですよね。あなた方の一番つらかった時代をよくめんどろを見て下さったおじいちゃん、おばあちゃんの深い御恩を忘れないでね。

細君とヒナちゃんは可愛そうね。病気、ひどくなければ良いけど、早く元気になって下さるよう祈っています。

堤君は亡くなったって、可愛そうな人だったわね、きつとお父さんお母さんに会って喜んでいるわね。

なつかしい皆さんに会いたいなあ、お話をしたいなあ、あの頃小さかったうちの子も、中学へ進みます。皆が大きくなっている筈だね。またお便り下さいね、楽しみにしています。では元気で御勉強の程を祈ります。

斉藤君へ

お久しう、どうです、お元気ですか。

お別れしてからもう六年にもなりますね。

ずい分変わったでしょうね、六年間どんな道を歩んで来ましたか。育成所での平凡な様な生活の中にも、いろいろと何かを経験し、心のなやみにもぶつかり、或いは之を切り開き、試練の年月を経られた事と思います。過去をふりかえっての感想をお聞かせ下さい。

これまでおたよりをしないでいましたが、決してあなた方のことを忘れていたのではありません。どうか正しく明るくのびて行かれるようにと祈って居りました。戦争の痛手を被ったのは何といってもあなた方です。戦争はいやです、ほんとうにいやですね。それを最も、痛切に感じられるあなた方が、強く世界に向って叫ばなければなりません。その使命に生きてこそ、あなた方の生涯は意義づけられるのではないのでしょうか、希望に向って突進して下さい。あなたらの将来は長いのです。こつこつと築いて行くのです。未来に光明をえがいて、いかなる困難にも克って勇しく邁進して下さい。

階段のおどり場で、よくうちの先生と議論しましたね。斉藤君はなかなか面白い子だといっていました。あの頃と今では多少あなたの人生観も変わっていることでしょう、あなたと紙上討論をしてみたいです。おひまの折またお便りを下さい。

元気で明朗な日々をお送りの様、祈っております。

中湯さん、進藤君へ

中湯さん、進藤君、お元気ですか。

ずい分しばらくですね、私をおぼえていてくれますか。

育成所も変わったでしょうね、そしてあなた方も見違えるほど大きくおなりでしょう。開所当時の先生方もすっかりお変わりになり、あの頃の友達もだいぶ減った事と思います。

新聞に育成所のことが出ていると、目をみはっていつも読みます。そして思うのは皆さんの事です。なつかしい色々の思出です。一度お会いしてあの頃の思出話がしてみたいいつも思います。

中湯さんと進藤君の事が、このあいた新聞に出ていましたね、中湯さんはアート洋裁学院に通っていらっしやるそうね。洋裁がお上手におなりでしょうね。進藤君はもう中学生ですって、進藤君が勉強したいといって困らせたわね。一年生だったわね、あの時からどなたに背が伸びているかしら、どんなに中学生らしくなったかしら、ほんとうに見たいですよ。そしてあなたが小さかった時の話を上げたいわ。

他にこうちゃん、藤田君、小野ケイ子さん、岩田君などがいましたね、藤田君はお父さんが復員されてつれて帰られたという事が新聞に出ていたので、よかったですねと喜びました。藤田君が比治山にいたころは髪はぬけるし、ひよろひよろにやせてとてもだめだろうと、松林先生もおっしゃっていましたのにね。ほんとうに運が良かったのですよ。

他の人はどうしましたかしら、両親や親類に引取られていった人がいますか。あつたらおひまの時知らせ頂けませんか、お願いします。

では又、お二人とも元気で勉強にはげんで下さいね。

教え子の手紙

今日はお手紙ありがとうございました。

突然の手紙なので内心びっくりしましたが、拝見しているうちに何時の間にか涙で文字が見えなくなりました。先生は私のような者を今もまだお忘れにたらないで色々とお心配下さっていることが判り、何と申上げてよいかたまた親にも勝る先生の愛情をしみじみと身に味わい幾度も読んでお立きました。

先生のお手を離れてもう十年になりますね、その長い間私は数えきれない程、いろいろな経験をしました。その中で最も忘れられないのは言わずとも、原爆の惨禍です。私の生涯はその日から見事に左右された様に思います。

終戦直後、人々の頭の中を混乱させていたあの苦しみの中で、私は訴えようにも訴える所のない、怨もうにも怨む人も判らない、さながら地獄そのものの毎日を送って暮らしました。

なにも知らない幼子達は、私を見ると「鬼が来た、鬼が来た。」と言って逃げました。私はその子達を本当に鬼になった様な気で泣き乍ら追い廻しました。亡くなった人がどんなにうらやましいと思っただか知れません。其の度に母に「殺して呉れれば良かった。」と言っては困らせました。私達は死にも勝る苦しみを味わいました。しかし周囲がだんだん平常の生活に戻っていくうちに私の気持も少しずつ静まって、結局どうにもならないことを悟りました。いくら悲しんでも、泣いてみても、今更どうにもならないことを……

自分で自分の気持を変えるより方法はありません、でも気持を変えることも、そんなに簡単には出来ませんね。又、そうすることも一つの苦しみです。

私は学校を卒業して、交換手という職業につきました。私のような不幸な人間には、顔の見えない声を主要とする事務が適していると考えたのです。恥しい思い

をすることもないでしょう。悲しいこともないと思いました。もう四年半になります。その間に本当に自分の生きる喜びを知り、希望が与えられました。この職業について本当に良かったと思い、毎日感謝の生活をしています。

皆明かるく親切です。友達もすぐに出来て私の暗い気持ち一時にふっとんでしまいました。少々の苦しみや悲しみは誰もが持っています。私は仕事に何時しか愛着を感じ、私から手離せないものになりました。私は体全体のサービスを声に託して一生懸命働いています。

最近各方面から私達を原爆乙女と、あんまりありがたい代名詞をつけて呼びかけていますが、私だけはそれらの人々より異った生き方をして行こうと思っています。

先生と今はなき多くの友達と送ったなつかしい小学校時代が思い出されて涙がやみません。あの頃は、皆生きていてみんな幸せでしたね。どんな小さな事でも記憶しています。本当に幸せでした。私は忘れません。

教え子へ

早速ご返事をありがとう、私は貴女からのお手紙を拝見してどんなにうれしかったか知りません。貴女は苦しみのどん底から雄々しくも立ち上っていて呉れたのね。私がつまらない自分の一人合点で、あまりにも敬遠していたことを今更のように恥しく思います。

でも、私の思っていた通り貴女は心のしっかりした人であったとうれしく思いました。そして、思い切ってお手紙を出して良かったもっと早く出せばなお良かったのにと後悔の心も起りました。広島へ出るたびに会ってお話したい、手紙が出したいと何度思ったことでしょうか。そのたびに何か私の心をためらわすものがあったのです。

貴女のお手紙を読んで、私の心の深い霧はすっかり晴れてしまいました。よくここまで更生してくれましたのね、しかし、この心境に達しられるまでには、苦しい幾多の過程を越えられたに違いありません。

むしろ私はこの苦しい時にこそ温い手をさしのべるべきであったのです。しかし、貴女はもう救われていました。貴女は若くして深刻な体験をされました。そして見事にそれを克服されました。その点私の師であると思っています。泣いて泣いて泣きあかし、どうにもならないことを知って、その苦しみのどん底から立ち上り、今は希望にみちた職場に自分の生き甲斐を感じ、感謝の毎日を送っていらっしやるとは、何と美しくも尊いことではありませんか。お友達の誰もが進み得たところの心境です。私もとてもそこまで行けてはいないのです。

貴女は高いところに立っていらっしやる、明るさといっても普通の明るさではないのです。澄み切った明かるさです。

どうかこれからも、この気持ちを持ちつづけて元気で働きなさい。

古城澄子さん

古城澄子さんは、比治山国民学校で五年、六年と受持って、山中高女に入学、原爆当時は二年生になっていた。

お父さんは、アルゼンチンで貿易商をしておられた。日本人は日本の学校で教育されねば、ほんとうの日本人にはなれない。というお気持ちから、お母さんは澄子さんと妹の栄子さん弟の徹さんを連れて、帰国されたのであった。

澄子さんは、容姿端麗、努力家で成績もよく、性格は素直で明かるく、級友のみんなから愛されていた。山中高女でも成績優秀で、級長をつとめていた。

私が迷子の世話にあけくれている時、お母さんが学校へ来て下さった。

「澄子は、あの日の午後、まるはだかでお家に帰って来ました。私はそんな姿になって、苦しかったろうに、ようがんばって帰って来たね、とほめてやりました。澄子は、自分の苦しいのも忘れて、栄子ちゃんはどうしたかしらと、妹のことばかりしきりに案じていましたが、あくる日の夕方なくなりました。栄子は似島にいるというのを聞いて、かけつけましたが、この子もとうとう駄目でした。先生、ほんとうにいろいろとお世話になりました。これは澄子が学校で縫ったもんぺです。あの子の記念品と思ってはいいてやって下さいませ。」という渡されたもんぺは、紺の服地でミシンでまことにきちんと縫われてあった。私は数日後、仁保町にある古城さんの家をお訪ねした。仏前にお供えして、あかりをともし合掌した。明かるい笑顔で「先生」と呼びかけてくるような気がした。

「こんないい子が、どうしてこんな可愛そうな目にあわねばならなかったんでしょう。」

私は涙があとからあとから湧きでるのをおさえることが出来なかった。

「あの子は、先生が日記をつけることは、とても良いことだとおっしゃったといて、六年生の頃からずっとつけていましたんですよ、あの子を思い出す唯一の記念品になってしまいました。」と話された。

一年位経って、古城さんの家を訪れた時、お母さんは、たった一人残された徹さんをつれて、御主人のいらっしやるアルゼンチンに帰られるという直前だった。折角、子供の教育をと思って帰って来られたはずなのに、何ということだろう。こんな事になるのなら、なぜ日本に帰って来たのだろうか。悔いても悔いてもあまりあるものがあるだろう。

帰って行かれるお母さんの気持ち、それを迎えられるお父さんの気持はどうだろうと、胸があつくなるのであった。

八月六日の朝、建物疎開のため、動員されて出ていた勤労学徒はずいぶん多かった。私の教え子も女学校一年二年に在学し、殆どが被爆した。

私は、伝え聞いた限りその家を訪ね、霊前にお参りさせていただいたが、私の知らない人もたくさんある事だろう。

私は舊のまま死んでいったこれらの教え子がいとおしくて、何時までも忘れられないのである。

戦争さえなかったら、皆生きているのに、そしたらどんなに楽しい事だろう。

私は北治山国民学校の収容所で、淋しく死んでいった幼な子と、亡き教え子の冥福を祈ると共に、戦争のない、原爆水爆のない平和な世界が、一日も早く来ることを切望するものである。

育成所こいた子供の姓名

河村二人、井関二人、谷口・山中・増田、岩田四人、川井二人、井上・杉本・中和、大黒二人、畑四人、縫部・進藤・藤田・吉永・岡田二人、野崎・中津・田中・加藤・橋詰、今田三人、大昇・中湯・小野・菅・堀

職員

山下所長・森・林田・校正・望月・温品・橋羽・松村・伊藤・松本・迫間・林・佐々木・らんしょう・重本

学校職員

藤原・楠木・下村・田中・渡辺・斗樹二人

原爆で亡くなった教え子(わかっているだけ)

古城登子・中村田鶴子・浅野琴美・田村滋子・上坊幸子・上野美代子・今中葉子・黒崎幸子・保田延江・佐々木順子・空美智子・山中順子・山本晴子・浜崎幸子・原静子・瀧房子・仁井佐枝子・中辻・佐藤・峯野・新見・木村

(八)

広島原子爆弾被害調査報告(気象関係)

Meteorological Conditions Related to the Atomic Bomb Explosion at the Hiroshima City. (Synopsis) by Mititaka Oda.

Nov. 1947

The Hiroshima District Central Meteorological Observatory

昭和22年11月

広島管区气象台

内容

1. はしがき……………1
2. 爆発当時の景況……………1
3. 一般の風の状況……………5
4. 火災に伴った旋風(龍巻)現象……………7
5. 爆撃と火災に伴った驟雨現象……………10
(他の都市の爆撃に伴った驟雨現象との比較、降雨状況、雨水の性状、降雨量、降雨機巧)
6. 雷鳴……………19
7. 飛散降下物……………19
8. 破壊現象……………23
(状況、分析区域、程度、爆風傳播速度、爆風圧)
9. 傷痕現象……………26
(火災状況、自然着火、火傷、熱感、植物の焼損、縞状の焼夷現象)

広島原子爆弾被害調査報告書(気象関係)

広島管区气象台

§一、はしがき

本調査報告は原子爆弾被害調査委員会(学術研究會議)の第一分科C班(宇田道隆技官主任)の行った気象部門の調査に於て、広島管区气象台長菅原芳生技官並びに同台員北勲、山根正演、中根清之、西田宗隆各技官の協力により、昭和20年8月~12月までに蒐集した資料に基づいて宇田技官が主となって取纏めた成果である。

これを今回(昭和22年11月)印刷に附して関係のある向に配布することに致した次第である。

§二、爆発当時の景況

(1) 昭和20年8月6日朝8時15分頃、米軍(B29)3機が高度8500米ぐらい(高射砲隊の測高機観測)で広島市北東方上空から飛び来つて前古未曾有の原子爆弾1発*を略々広島市中心に向つて投下、地上より600米前後の高さの空中で爆発せしめた為瞬時に殆んど全市の家屋建造物を破壊し、市内大部の火災発生による焼失と死者数十万、商社住数万の殺傷の惨状を残して、市南西方上空に飛び去つた。

*同時に白色落下傘を付したラジオゾンデの如きもの3箇を投下し、それらは亀山村に落ちた。

該機は爆弾投下後反轉して急速に離脱を図つたが、炸裂時には約16秒離れていて、恰も高射砲至近弾を受けた様な衝撃を感じたと放送された。

(2) 爆発当時の景況に関しては第一回(a', a", b, c, d)に図解した通りである。即ち当時晴天無風に近い静穏であつたが突如中空で「火の玉」が爆発し、恰も大量にマグネシウムを焚いた閃光のような(或ひは炭素弧光が、電車のスパークの如き)白晝の太陽に直面したよりも更に強烈に眩しい自熱的閃光(人により紫色と云ふ者あり)が「ピカーツ」と光つた。**

*太陽光線を凌ぐ自熱的閃光より判断すれば、火の玉の中心温度は1万度乃至それ以上であつたのであらう。学友明治工業専門学校教授柴橋博辰氏の長崎に於ける調査研究によれば、火の玉の温度は2~3万度、火の玉の直径70米位と推算された。同氏の御教示に深謝する。

市民の各人は皆自己の側近に爆弾乃至焼夷弾が炸裂したかの如く感じた(第1図a', a", 参照)

次に火の玉を中心に円形に広がった火焰の前面は白色乃至赤白色の光幕の如く驚くべき速さを以て(秒速集料と推定)四方に走り直径4料に亙り殆んど全市を傘で上から伏せたように或は赤い朝顔の花を逆さに伏せたように蔽ひ包んで見えた。(第1図b参照)

次は第1図Cに示す如く黒煙が殆んど同時に市中央部の地上より立ち昇つて高度数千米に及び全市を蔽ふたが、一方火の玉は消失すると共に白い煙の様な雲に化して更に高く昇つた。

この状況を遠望すると白い雲を頂にして赤黒い雲を中心とし黄色を帯びた雲を側面に繞らして、五色の雲海は恰も松茸の生え出る様に、又は南瓜の上へ上へ伸び上つて行くような形をして左右にモクモクと白黒赤黄ともつかの彩雲を渦巻きつゝ入道雲状に発達して第1図Cに示す如き形態に成長した。

一方火光の走るに続いて煙が波状に広がると見る間もなく疎密波をなして爆風が襲ひ来り、ドーンと瞬間的に次から次へと破壊力を逞しうした*。

※当地では原子爆弾のことを俗稱「ピカドン」と云ふ。「ピカーツ」と光った後に「ドーン」と来たことを示す。

斯うして閃光に続いて爆風の通つた後暫く経つて黒い煙の條が行く本も市中から立ち昇つて火災の発生を示し、第1図dの示す如く大火災による巨大な塔状の積乱雲を終日発達せしめ、且つ黒雲（積乱雲）は爆発後20～30分から北々西方に次々に移動してその進行につれて第2図に示す様な顕著な驟雨現象（9～16時）を示した。火災は9時頃から大きくなり10～14時頃最も盛んで夕方には稱々衰へたが、尚3日間も燃え続けたくらいで、6日の午後には殆んど全市火災の煙で包まれていた。



(3) 当時の体験者に就て調べた所、下記の事実が判明した。即ち爆心より2軒以内の圏内では光つて直建物、土壁などが倒壊し、土埃が黒煙の様に一時に四方に立つて急に周囲が夕闇乃至日食時程度の暗さになり、はれて明るくなる迄に5～30分位も要した***。(爆心の直下の者は鏡餅大の白き光物落や数條の大流星の如く次に数百の爆弾の様にも地上近くで炸裂の観ありと云う。)

※※広島で頻りに「ガス」を呑んだ者は原爆症がひどいと云うがこの「ガス」は恐らく高放射能を持つ有害物質を含む黒塵の立つたものを指すと思われる。爆心より2～5軒の県内にあったもので、山上とか会場とか廣い野原とか展望の開く所に居たものは前述の第1図a, b, cの如き火の玉爆発の景況をよく観察している。

5軒以上の圏内に居た者は入道雲の立つて変化するさまを観察し且つ閃光と爆風との時間的間隔をよく認める余裕があつた。従つて爆発して火焰光陣面が広がつたと殆んど同時に市の中心部2軒以内の圏内より黒塵煙の柱が立ち昇つて全市の上を蔽ひ、続いて生起した驟雨によつて洗ひ落されて市西方の黒雨現象となり、雨に會はず気流に運ばれた分が黒塵の降灰現象となつたのである。

斯の様な黒塵の昇騰は如何なる機功によつて起つたのであろうか？ 恐らく爆発そのものとこれに基づく高熱が爆心附近のガスと空気に急激な膨張を與へ、先づ爆風により地面を叩き且つ家屋、土塀、壁などの崩壊による塵埃と爆発物の微粒子(放射性物質を含む)を混入し、恰も灰神楽のように舞ひ立てゝ、次に爆発中心部に於ける気体の膨張と高熱で軽いための昇騰による低圧吸引の作用が中天に迄急速に黒い塵煙を舞い上らしたものであろう。以上の事柄が起るには光つてから数秒を要しなかつたくらいの速さであつた。

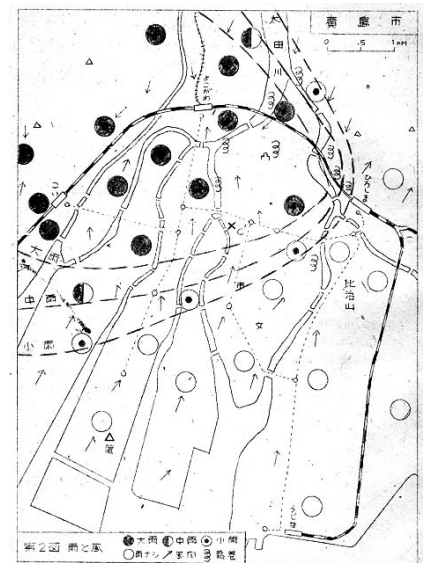
(4) 爆心位置
爆心の地上に投影された位置は第8図に示す通り大体護国神社の南方300米付近で相生橋東方の商工陳列所の直ぐ南の墓地付近が倒壊物、折損物の示す方向、焦痕の示す方向、墓石等の倒れ方、破壊の一般状況から判断してこれに該当する。

爆心の高度は第1表に示すが如く焦痕による吾々の調査によれば600米前後と見られる*。
*長崎に於ける爆心の高度は柴橋博辰氏の推算によれば530米位でよく似ている。

表1表 爆心高度(h) 北、中根技官計測

(イ)	二葉山鶴羽根神社社務所 米梅柱 熱線により黒塵の痕 入射角(θ)測定(ハンドベル使用) θ=20° 55' 爆心よりの距離 Δ=1870m h=714m
(ロ)	同社拝殿庇、檜、焦痕 θ=18° 01' Δ=1850m h=601m
(ハ)	三滝橋～新庄間堤防竹林幹上の焦痕 θ=16° 30' Δ=2500m h=740m
(ニ)	三滝橋附近竹肌(橋欄干の影と看做されるもの、稍不確実) θ=16° 30' Δ=2500m h=740m
(イ)(ロ)(ハ)	平均685m、(イ)(ロ)(ハ)(ニ)平均615m

(5) 爆発音は山口県の柳井(60軒)でも聞かれたが、これは音響異常傳播の疑ひがある。閃光は壬生(34軒)、呉(20軒)、岩国(38軒)の如き遠地に於ても認められた。



§三、一般の風の状況

(1) 地上風
(イ) 当日の気象状況は付録1の通りであるが、市内外の人々の火災時の煙の靡き工合や風当り等に基づく経験風向を図示したのが第2図である。これを流線化した

たのが第3図である。

爆発当時は海陸風の交代時の朝凪で、既に陸風が衰へて海風になり、海風の強まりつゝあつた時で、市の北方は北寄りの風、市の中部以南は南よりの風を示していた。

瀬戸内海でも特に海陸風の顕著な広島で、その最も卓越する盛夏8月であるが、その範囲は大体海岸から数キロ以内を見られている。

当日の南北風の境界線は略々地形的に二葉山から白島、横川を経て茶臼山に亘る…広島駅～横川駅～己斐駅の鉄路に近づき…線に沿ふて存在するものと見られる。これは略々海陸風の限界線に近いから、発生した前線が特に持続発達したものであらう。

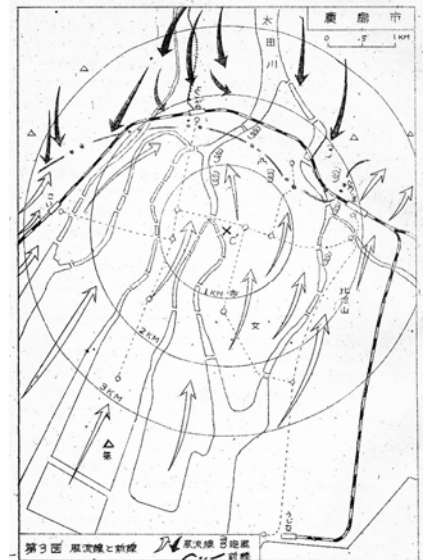
(ロ) 第2図、第3図に於て注目すべきは前記の南風と北風の収斂する前線の存在であるが、爆心地C'はこの前線の少し南方に位置するため、中心部附近の上昇気流補填のため吸入せられる南偏気流は一層発達し、特に火災の盛んなるに及び一段強くなつて、6日夜には少し弱まつたものゝ、遂に陸風に転ずることなく、南寄りの風を続ける異常を示した。尚南風系は北上するに連れ南風から南東風、東風と次第にC' に対し北偏風系と共に反時計回りの施風分布帯を含んでいる。

(二) 市西部の江波山の風は北技官の調査によれば、8時5分頃、陸風から海風に交替し、南西風3～5米/秒で市内に流入し平常なれば22時過ぎ陸風に転ずる筈のが、火災のためか引き続き南風を吸引して翌朝に及び、この間の南西風2～3米/秒で、平常の陸風1～2米/秒を加減して4米/秒ぐらいの流速で火災現場のC' 方面へ吸収された気流を推察出来る。(附録2参照)

(2) 上層風

黒雲、黒煙と共に北西方向に流れ動き黒雨を降らし、黒塵灰を降らせたことから高度五百米以上数千米に及ぶ上空に南東風があつたことがわかる。この推定流速は1～3米/秒である。

当時の高層観測資料を欠き実測の意味のできぬを遺憾とする。



§ 四、火災に伴つた旋風（龍巻）現象

(1) 火災の勢い最も猛烈なるに及んで11～15時を中心に市の中心より北半部に局所的に激しい旋風現象を発生した。

(2) 旋風は特に前線附近に発達している。(第2図、第3図)

(3) 太田川の主流及びその支流の神田川から京橋川にかけての分流域を中心に河川流域に旋風の顕著なものが発生し、龍巻現象を示している。両側陸岸部の火災による激しい上騰気流と、河川上の冷たいための下降気流とがよれ合つて激しい旋風の一群を河川上に連ねるに至つたものと判断せられる。

関東大震災の火災時に東京隅田川に沿ひ旋風の著しかったのも同様である。

(4) 旋風の威力は甚だ甚大で、体験者中には生命に危険を幾度となく感じたといふものが多い。次にその実例を挙げよう。

(イ) ドラム罐を巻き揚げ、径3尺くらいのトタン板も巻き揚げ、屋根に葺いたトタン板は紙を剥く様に舞い飛んだ。(泉邸、常盤橋附近)

(ロ) 鉄板が舞ひ飛び暑さ1寸位の厚い板も吹き飛んだ。(白島、太田川附近)

(ハ) 衣類入り行李が巻き上げられた。(柳橋附近)

(ニ) 人を何人も巻上、大人でも橋につかまつて暫く昇天を免れ得た。小供など中に舞ひ上つた。(栄橋附近)

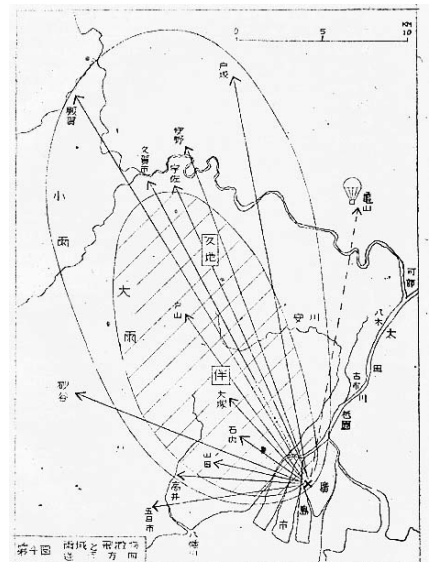
(ホ) 1章酒瓶が宙に浮かひ踊り、ビール瓶3本転り来る。(大塚町、常盤橋附近)

(ヘ) 客車が旋風のため独りでに転がり動き出した。(広島駅)

(ト) 火焰を北から南に数十米吹きつける強風を示した。そして火のついた木材が舞ひ上つた。(横川町附近)

(チ) 神田川の河水7～8尺も龍巻をなして昇り、その水が又沛然と雨下した。当時の豪雨をこのようにして生じたものとして浅野泉邸附近や猿猴橋附近の体験者で考へていたものがある。

以上を通観するに旋風がこの場合特に前線帯の河川流域に発達したのは前述の通り、河川の兩岸に於ける火災による著しい高温のための上昇気流に対し、河川域で比較的低温で下降気流を示し、両者の間に温度差が甚だしく、此處に先づ河川の兩岸の各々に沿ひ水平軸の渦を2列作り、次に之等が垂直渦に立ち上がつて、丁度河川の北方は北風、南方では南風と相反する二大気流の衝突、収斂する前線帯では火災の最盛期に最も激しい旋風を発生するに至り、それらの垂直渦が、一般気流の方向に流れ動いたものと解せられるのである。これは旋風系列を人工的に作り出す方法を暗示している。



§ 五、爆撃と火災に伴つた驟雨現象

(1) 都市焼夷爆撃に伴つた驟雨現象との比較

昭和20年6月1日、7日、15日の大阪市爆撃の例、さらに8月の福山市、福岡市の例など到るところ各都市の焼夷爆撃に際して発生した特異な驟雨現象が観察せられた。6月1日大阪に於いては煤煙を雨水

に含めるためか黒雨で、鉄帽や防空服に泥塵の付着を認めた。この爆撃は9時40分～11時30分頃あり、火災が弓続き起り、13時頃最も盛んで夕刻に及び、雨は11時48分～16時37分に降った。11時23分～12時19分の間雷鳴を伴った。(国富大阪管区気象台長の御教示による)

廣島の今回の場合は以上に対し驟雨現象が特に局部的に激烈顕著で且比較的廣範囲で、直径19軒、短径11軒の楕円形乃至長卵形の区域に相当激しい1時間乃至それ以上も継続せる驟雨を示し、少しでも雨の降った区域は長径29軒、短径15軒に及ぶ長卵方をなしている。(第四図参照)

さらにこの雨水は黒色の泥雨を呈したばかりでなく、その泥塵が強烈な放射能を停止人体に脱毛、下痢等の毒性生理作用を示し、魚類の斃死浮上其の他の現象をも表はした。そして其後も長く2、3ヶ月も廣島西部地区の土地に高放射能性を留める重要原因をなした。

同じく原子爆弾攻撃を受けた長崎では廣島に比し遙かに小規模な驟雨現象があったに過ぎないが、これは恐らく廣島の場合の如き前線の現はれはなかつたことゝ火災がずっと小規模であったことが一般気象による成雨条件の他の大きな因子となったからであろう。

以上の爆撃による驟雨現象、特にその降雨機巧に就ての探究は人工降雨法の見地よりするも極めて重要な意義ありと思料せられ、将来の研究に多大の示唆を與へるものであらう。

(2) 降雨状況

(イ) 降雨域の範囲 (第四図参照) は廣島市中心の爆心附近に始まり、廣島市北西部を中心に降つて北西方向の山地に伸び遠く山縣郡内に及んで終る長卵形をなして居る。これをさらに細かに廣島市附近に拡大して見ると第2図に示す如くである。

(ロ) 始雨時の分布は第五図に示す如くである。

始雨時は爆撃の閃光があった後15分～4時間に亙るが、光つて20分乃至1時間後に降り始めたものが多く、前線域では1時間以上2時間も後に降っているが(白紙までは4時間後)これは恐らく火災によって発達した収斂性上昇気流に起因するものであらう。

即ち今回の降雨は爆撃による直接的な上昇気流による降雨と、爆撃から起こつた火災による間接的な作用に基く上昇気流のための降雨の重つて現はれたもので前線の存在により強化されたものと認められる。

(ハ) 降雨継続時* (第六図及第四図参照)

継続時30分以下数分程度に及ぶバラバラ雨の区域を少雨域30分以上1時間に及ぶザーザー降りの区域を中雨域、1時間以上を大雨域とし、2時間以上は土砂降りの甚だしい豪雨区域として第6図に示した。

驟雨区域は白島の方から三篠、横川、山手、廣瀬、福島町を経て己斐町、高須より石内村、伴村を越え、戸山、久地村に終る長楕円の区域である。

*降雨継続時(t分)の増すほど雨量(r糎)の増すのは当然であつて、その関係はケツペン氏によれば $r = n\sqrt{t}$ (独乙では $n=8$) 強雨の強さ $i = n/\sqrt{t}$ と與へられる。(岡田武松著「雨」による。)

(ニ) 終雨時 (第七図参照)

終雨時は当日の9時～9時半から始まり、15～16字頃までに亙つて居り夕方迄には終つたが、爆心から北西方向に向かつて順應れになつていて始雨時の分布と趣を異にするが、やはり前線帯に沿つて突出した終雨時の遅い古状部を示して居る。

(ホ) 降雨分布の偏倚

(i) 降雨域 (第2図及第四図参照)、降雨継続時 (第6図、第四図)、始雨図 (第5図)、終雨時 (第7図)の何れの分布を見るも、爆心位置から北西方向に引いた線に對し著しく北よりに偏倚し、前線帯を中軸とするが如き特殊の分布を示している。このことは爆撃及火災による同心性上昇気流が爆心附近を中心とする上空に生じ、これが上昇の一般気流によつて北西に流されつづ降雨を生じたと共に前線性の持続的な上昇気流による降雨によつて強化されたものと考えらる。

(ii) 山岳の向斜面即ち武田山、山手、茶臼山、己斐山より古江の北裏の鬼城山に続く連山の南東斜面及石内村、伴村、安村北方連山の南東斜面、戸山村、久地村方面山岳の南東斜面に降雨量が比較的多く、これ等の反対側の山脈の裏側即ち北西斜面には降雨量が比較的寡い。

(3) 雨水の性状

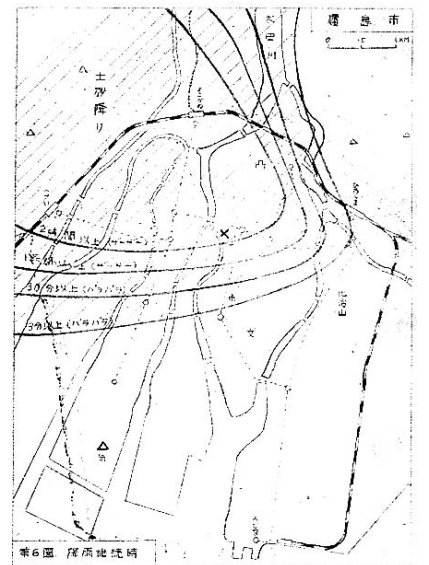
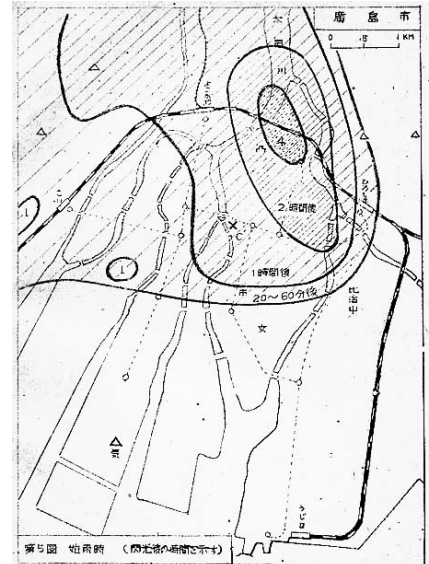
(イ) 黒雨 (泥雨)

(i) 始雨時の少雨の雨粒には特に黒き泥分多きため粘り気あり、当時「油を落とした」と騒がれたが、匂ひもなく油とは異つていた。しかし白い衣服も紺状になり、あるいは笹の葉などに黒泥が残つた。

(ii) 谷川を轟々と流下する黒雨による出水は眞白い泡を立てて流れた。流れる河水は墨を溶いたように黒かつた。

(iii) 雹の如き大粒の雨、裸の身には痛いほどの粗い粒の雨が土砂降りに降つた。

(iv) 大雨の最中は盛夏の暑い日であつたに拘らず気温が急降し、裸か薄着で身を以て脱出した人々が多くて震える程であつた。



(v) 雨水中の泥分*は理化学研究所調査班の佐々木、宮崎両氏の調べられた結果を承ると、放射能が瀕る最大であつて爆発後2ヶ月経過しても50Nat.と云ふ爆心地の数倍を算していた。

*資料の泥分は高須に於ける筆者の宅の雨戸（爆発当時爆風により庭先に飛び雨に打たる）に付着した泥分を採取したものである。筆者の次男が山奥の学童疎開から帰ってきて、その雨戸の傍に寝ていたため髪毛が脱毛し始め、驚いてその雨戸を取り片附けたことであつた。

(vi) 池の鯉や川の鯰、鰻等の漁族が黒雨水の流入によつて斃死浮上した。蝦、蟹は生残った。

(vii) 牛が泥雨のかまつた草を喰べて下痢をした**。

**己斐、高須方面の人は爆発後3ヶ月に亘つて下痢するものが瀕る多数に上つた。これは水道破壊のため井戸水（地下水）を飲用したことが関与するものと推察せられる。

(ロ) 白雨と泥の本体

1～2時間黒雨の降つた後は続いて白い普通の雨が降つた。虚空に含まれた泥の成分は爆発時に黒煙として昇つた泥塵と火災による煤塵を主とし、これに放射性物質片など爆弾に起源して空中に浮遊し或いは地上に一旦落ちた物質塵をも複合したものと見られる。

事実前記の倒れた雨戸に黒雨が降つた為に残った泥を採集してこれに水を注いで検査して見せた所、広島市内外に普通に存在する黒色微細な泥塵と種々粒の粗い附近の畑地や丘陵にある風化花崗岩の茶色の碎砂泥塵との混合物を主体とすることが容易に看取せられた。これにより推察すれば昇騰した泥塵煤塵の空中に浮遊懸垂せるものを洗ひ落した後の雨が白くなったので、それ迄は汚染のため黒かつたと云える。即ち大気中の塵埃は1～2時間の雨水洗滌により概ね除去せられそれが地上に降つたため、この降水量の多い地区即ち広島市西方の高須、己斐方面に高放射能性を示すに至つたのであろう。

(ハ) 雨の降り方

豪雨域では大概始めボツボツ降り、30分～1時間もザーザー来て小止みになり又ザーザー来たのが多く、波状的で最初のザーザー降りは黒雨で、後のザーザー降りには白雨が多い。

(4) 降雨量の推定

今回の降雨域内には遺憾乍ら一ヶ所も気象観測所を含めため定量的に降雨量を決定することは出来ないが、己斐の谷川や伴村、安村を還流する安川などに9月17日、18日の颯風時*と殆んど同程度の出水を短時間に示したことから、土砂降りの豪雨域には1～3時間位の間には50～100耗の降雨があつたものと判断せられる。

W. Koppen の式** $強雨量 = n\sqrt{継続時間(分)}$ により、 $n = 8$ とし、継続時間1～3時間に対し総雨量は60～110耗となり、略々上記の推算と合致する。従つて本雨域の全雨量は14万～24万立方米程度と推算される。

この大雨で、己斐、山手方面の山火事はすっかり消されてしまった。

*総雨量200耗に近し、この場合は2日間に亘る降雨であり、且雨量に対する出水率を1/2程度と見て相当雨量を50～100耗とした。

**岡田竹松著：雨（大正五年刊）参照

(5) 降雨機巧

本爆撃による降雨機巧はその著しく激しく且持続的の豪雨を示した点から見て、單純に爆撃及火災による旺盛なる上昇気流のみ起因するものと異なり、之等の因子に加へて何等か原子爆弾炸裂による放射能物質の分裂壊変に伴ふ放射線（β線或は中性子の如きもの）の射出が働いていて恰も巨大なウイルソン霧函内に於ける如く、大気中の塵を連続的に多数のイオンに化し、之等が凝結核となつて大気中に浮遊するため引續いて激しい降雨を呼び起こす様になつたのではあるまいかと考へる。

このような驟雨現象の解明には確かに新しい原子物理学的な知見を従来の地球物理学的な見方に取り入れて研究する必要があるであらうし、人工降雨法に放射能物質の作用を取り入れることも将来の研究問題であらう。

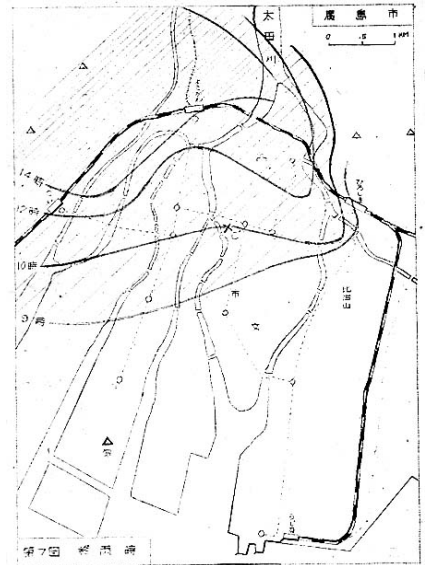
§ 六、雷鳴

10～11時頃降雨中乃至其の後の数回爆発音が砲声に似た特異な雷鳴を聴いた。その音は爆心より10耗以上離れた所でも聴かれ、山県郡殿賀村、安野村の如き20耗も隔つた地点でも聴いた。

§ 七、飛散降下物（第2表及第四図参照）

(1) 五日市、八幡村、古田町北西など雨域の外周数耗の範囲まで黒い灰埃が降つて居り、南瓜の葉など眞黒く見えた。

(2) 降下物は焼タン板、屋根のソギ板、蚊帳の片、蒲団綿の片、布片、紙片、切符、名刺、紙幣、債権、埃など軽重、大小、種々雑多のものが無数にあり*



トタン板のような重いものが4軒以上も北西に降ったのは一見不思議な程である。

爆風で灰神楽のように上昇った灰、紙片などの他に焼け焦げたものが多いのは火災の盛時に都心の旋風及上昇気流で昇騰したものであろう。

※亀山村へ落下した落下傘は地上から騰つて飛んだものとは異なるから、此處には一緒に取扱はない。

第2表 原子爆弾による飛散降下物

拾得場所	爆心よりの方向 及び距離	飛集時間	落下物件	飛来出所	摘要	推定速度 km/時
伴村細坂	北北西9.5	9～10時	蚊帳切れ	不明	木にかゝる	9
戸山村	西北13		十円札、百円札			
伴村大塚	西北7	9時頃	紙片、とたん板		雨と共に降る	7
山縣郡安野村	北北西20		焼けた布片、紙片、歌の本、そぎ板等			
同 穴	北北西18					
同 宇佐	北北西19		武徳殿證書		元県庁附近	
同 澄合	北北西19		紙片、そぎ板			
水内村久日市	西北16		住友銀行傳票、藝備銀行用紙	紙屋町		
			五十銭札束			
殿賀村西調子	北北西25		紙片少し		雨と共に降る	
都谷村長笹	北25		そぎ板等			
久地村瀬谷	北12		紙、布切			
石内村原田	西北6	9～10時	綿切、とたん板、薄板		雨降る最中落る	6
			焼そぎ板、名刺、経本	寺町		8
石内村湯戸	西8	9時	焼残り十円札、五円札、銀行通帳	爆心南百米位		
			広島郵便局(貯金用紙片、電報為替)			
石内村利松	西8	9～11時頃	そぎ板、紙片		焼けてをる	4
石内村高井	西8		十円債権、五十銭紙幣		焼けてをる	
砂谷村	西北16		紙片多数			
高井越	西8	9時	郵便本局用紙、藝備銀行用紙	革屋町		
			そぎ板、綿片			
			広島合同銀行			8
			福屋のはがき			5
己斐峠	西北5	9～10時	そぎ板、びら、焼トタン板		雨の最中降る	
			切符、綿片、紙片		雨の最中降る	
己斐山	西北5		紙片、板片、ぼろ片、びら			
鬼城山	西5.5		広島郵便局為替領収證	革屋町		
			縣廳用紙(願書)	縣廳		
			富国徴兵保険用紙	袋町		
			中国配電会社	白神社附近		
			藝備銀行領収證	紙屋町	雨の前記に落つ	6
古田町山田	西6	9時頃	埃、新聞紙、帳簿			
五日市坪井	西南西10		新天地劇場びら、黒埃	新天地		
			ガス会社収金帖	大手町三丁目		
同 揚上		9時頃	住友銀行通等、名刺	紙屋町		
			防空頭巾、黒幕、郵便本局用紙	革屋町		
同 地毛			名刺、紙片、杉板、ゴミ埃			

◎飛散物の爆心附近より飛来せるものとして推定速度5～9軒/時 平均7軒/時=2米/秒。

(3) 降下物の中で最も多かったのは紙片であつて、その範囲は30軒北方まで拡つて居り紙片中には官庁、銀行、郵便局の傳票、帳簿の紙など目立つて多く、発源所在の明らかなものを調べると、悉く爆心より1軒以内の市中心部にあり、紙屋町、八丁堀、革屋町方面のものが多い。

こゝから拾得された所まで直線で結ぶと略々北西～西向の気流で流され飛散されたことが判る。

紙片は山中や田圃の中へ数限りなくヒラヒラ落ちて来て農山村の人々を驚かした。(第4図参照)

(4) 降下は概ね降雨の前から始まつて降雨中にかけて見られた。これから降下物の飛行してきた速さを概算すると1～3米/秒位になる。

(5) 降下物の分布区域は広島市内に少なく、爆心より3軒以上離れた市北西方山岳地帯を主として(山脈の峠を超えた所から多い)雨域よりも廣く、砂谷村、八幡村、五日市、亀山村に亘るが、その分布の濃密状態は降雨域とは異なり、爆心から北西方に引いた軸線に対してその南西方に偏倚して多い。このことは爆心が前線帯(前記)の南方にあり、降下物の発源域が前線の南方にあるため昇騰した後何等よりの一般気流に流されて前線南西方の下降気流域に多く降つたのは当然と解せられる。

(6) 爆発後の高須、己斐方面の放射能の著大な分布は降雨による持続的な放射性物質の雨下(特に爆弾による高放射能物質の混在)と南東気流による降灰中に放射性物質を含有し、その最も強く高須、己斐方面に指向されたためであらう。

§ 八、破壊現象(第8図、第9図参照)

(1) (イ) 鉄骨建造物、学校、工場、家屋、鉄塔、煉瓦壁、木柱、煙突、樹木、石碑、墓石などの破壊状況を倒壊、折損、傾斜、凹入に方向などで示したものは

菅原技術編製の第8図に見られる。之によれば爆心C'の位置、堅固な建築物の倒壊は中心より1～1.5 軒以内、脆弱な工場倉庫など2～3軒の地点でも倒壊した。折損は概ね中心部より2～3軒以内、傾斜は2～4軒に及んでいることがわかる。

(ロ) 倒壊方向は大概暴風波の進行した方向にあり、窓硝子の飛散もその方向であるが、稀に180° 製反対方向に倒れた鉄柱、煙突、樹木があり、横川～舟入町道路沿ひ4例を見た。又硝子小片の逆飛散も見られた。

(ハ) 北枝官の調査に筆者の調査を加えてみると、住家破壊状況は第9図に示すとおり、倒壊範囲は2.5～3軒、大破範囲は3～4軒、中破範囲は4～5軒、小破範囲は5～10軒程度であるが、窓硝子1枚でも破れた範囲といえば玖波の如き、27軒の遠方に迄及んでいる。(大、中、小破の区分は第3表参照)

◎第3表 住家破壊状況調査基準

区分	柱	屋根	壁	建具	硝子窓	摘要
倒壊	折	破	落	—	破	住居に堪えず
大破	折	破	破	—	破	半以上破壊、住むに不適
中破	外れ、傾き	破	破	—	破	半は破壊、住むに不適
小破	全	傷	傷	—	破	少し傷んだ程度、住むに差支えなし
全	全	全	全	—	全	住むに適

備考：二階建と平屋とは区別す

(2) 破壊分布区域は海岸線に沿ふて南西方にと海上に向かつて南方に遠達拡大して居るのに反し北方に山地に向つては短距離に阻まれている。即ち北方の14軒の可部町には被害なく、南西方の20～27軒の宮島、大野、玖波には硝子窓の破損があり、南東方の江田島兵学校(20軒)でも窓硝子が破損した。又南方海上10軒の似ノ島は同距離の海岸沿ひの廿日市町(西方)、矢野町(東方)に比し遙かに被害が大きい。

(3) 破壊程度は

(イ) 爆風に直面した側に大きく、反対側に小さい。

(ロ) 同距離でも高所では被害が大きく、低所の地表に近いほど小さい。例へば小高い山上では平地より大きく、二階は階家(平屋)より大きい。緑井村(北方8軒)では二階の硝子窓は皆破れたが、一階のは余り破れなかつた。

(ハ) 戸障子を閉めてあつたところは開けてあつた所より被害が階段に大きい。八木村(北方9軒)、廿日市(西方12軒)では硝子戸を開けてあつた所は3分通り以上壊れたが、開けてあつた所は殆んど破れなかつた。

(4) 爆風傳播速度

第4表は当時の光つてから音を聴くまでの動作を反復して貰つて測りし推算したのと、記憶によるもの(表中括弧す)とを調べたものである。

第4表 爆風傳播速度(V)

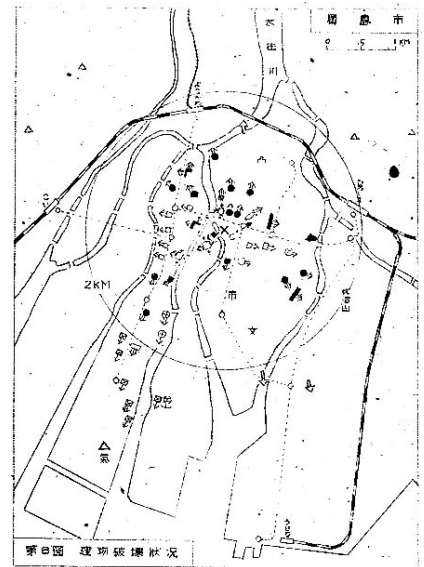
場所	爆心よりの距離	経過時間	V米/秒	摘要
江波山	3.6軒南	5秒	700	北枝官測定
草津町	5.2軒西	8-9秒	600	—
五日市町坪井	10.2軒西	15秒	680	井街博士測定
古市駅	6軒北	(6-8)秒	600-800	—
江田島	20軒南東	(22)秒	800	充分正確を期し難し
玖波	27軒南西	(120)秒	230	多少不確實
下黒瀬村	18軒東	(30-60)秒	300-600	多少不確實

以上を閲覧して信頼すべき数字として爆心より3～10軒の間は700米/秒内外で、600～800米/秒の程度で音速の大約2倍であり、恐らくVは距離の遠くなる程度通減していくものであろう。

(5) 爆心圧は

爆心から2～4軒の所に於ても体重50～60斤の大人が数米も吹き飛ばされる程の強さを持っていた。しかし、1軒以内の爆心附近でも眼球が飛び出したとか、鼓膜を破つたとか云ふ人の話は聞かない。

(6) 2～6軒の距離の所に残った破損家屋でよく認められる天井、床、畳の吹き上げられた様な状況は単一爆風波の進入にのみよるものではなく、爆発の負圧による吸引力域は直達暴風波と地表に沿ふ暴風波の時間的位相差による吸上げの力が加まつているのではあるまいか。



§九、焼夷現象

(1) 火災状況

(イ) 今回の火災は従来の焼夷弾域は襲撃による火災とは異なり、建物等の倒壊により最初より火気のあつた所から発火した火元の他に、爆発時の熱線そのもの及爆発破片の直接点火による多数の着火火源があり、之等無数の着火点によつて生じた火災は次第に拡大し合流を繰り返して大火となる一方、市民は防火用具、

用水を瞬時に失ひ、負傷と精神的に虚を衝かれた狼狽の為避難に汲々として防火に従事する者少く、為に著しい大火災になつて了つたのである。

(ロ) 江波山よりの観測によれば、火災は爆發5分経過してから、市中より転々と煙が立ち始め、爆發30分後には既にかなり大きな火災群を舟入町、天満町、国泰寺方面其他に見るに至り、10~14時間頃最盛、夕方になつて稍衰へたが業火は夜空を炎々と焦し市内一帯火の海で、爾后も各所に延焼、翌日10時頃から段々部分的になつたが、局部的には尚3日間以上燃え続き、余燼よ一週間に及んだ。

(ハ) 消失区域 (第10図参照)

宇品、大河、江波等の周辺地区を除いた全市の殆んど大部分は消失した。大体爆心より円を描いた様に2軒以内の区域が消失している。

(ニ) 炎症は概ね風向に従つて起こつた。前述の如く当時市の北部では北風が北方への延焼を妨げ、東西方向には比較的延焼の自由を許されたため、第10図に示すように、消失区域は同心円とは云へ東西方向に幾分扁平に広がっていることが認められる。

(ホ) 2~4軒の区域では着火点源が明示されており、特に藁屋根の家屋が比治山、二葉ノ里、牛田町、三篠町、新庄、三滝、山手、己斐の局部的消失斑状部の火源となつていることがわかる。

(2) 自然着火

(イ) 自然着火は第11図に見る通り爆心地より概ね3軒の圏内に含まれる。

(ロ) 自然着火の認められるものとしては藁屋根、畑の藁藁、桧皮葺の神殿(饒津神社、東照宮)、紙障子、生ゴム、セメント、入紙袋とか尾長、牛田、二葉、山手、己斐方面の山林の松葉等、電柱の頭、線路脇棚杭木、枕木、柱の折れ目、棕櫚等で大体乾燥した引火し易い物が主である。山手の鉄路脇の焼杭及び横川付近や己斐、福島鉄橋枕木は後から見ても明らかとそれ自体に着火して焼つたもので延焼ではないことは確認できる。

(ハ) 黒色体は白色体の反射能の大なるに反し、熱線をよく吸収して燃えつき易いことを実証し、1~2軒の区域で服の黒い部分のみ焼け抜けて白地を残した例(白島、広島駅前、鷹野橋)、表札などの黒文字のみ焼けた例(牛田町)、石碑の中で黒字にしたものだけが裂け割れた例(下柳町)、同じ場所に並んでいた夫婦で黒服の夫人が重い火傷のため死亡、白服の夫は火傷が軽くて助かった例(的場町)など枚挙に遑がない。

(ニ) 三滝北方の川緑りの堤の竹林の幹に熱線による焦痕が焦茶色に現はれていて堤の陰影を現はしている。(爆心より2.5軒)

又鶴羽根神社(爆心より1850米)の焦痕も庇の影を示して居り、己斐町、皆実町にも見出されたように3軒以内の圏内では気をつけて見ると方々に木材や石などに焼焦の後が見えて、これが爆心の高度と方向線を決定するのに大いに役立つ。

(ホ) 西方8軒位の山村で草刈中の農夫が光つた時、笹の葉影の鮮明に地面に映つたのを見た。爆心近くでも熱線は帽子を着た者の頭髪を帽子を着た部分のみ残して焼いた。又偶々地下防空壕にいた者は爆心附近でも無事であった。

(3) 火傷 (第11図参照)

熱線によって黒焦になるような最強度の火傷者は当然死亡し調査もできないが、爆心より0.5~2軒の圏内では皮膚がズルリと剥げる程度の強度の火傷である。2軒以内では洋服(鉄道の黒制服)なども焼け裂け或は燃えて居る。弱度の火傷は日焼け程度のもので、爆心から概ね2~4軒に分布しており、戸外にあった者が大概蒙った。西天満町東洋製罐会社(1.2軒)では戸内の者は窓際でも火傷しなかったのに金庫近くに居たものは光線の反射で全治1ヶ月の火傷を負ふた。

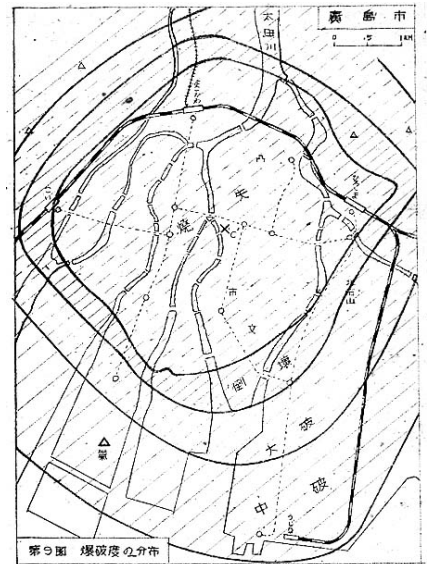
(4) 熱感 (第11図参照)

熱線の照射を受けて「熱い」と感じたのは4~5軒の圏内の戸外に居たものである。1~2軒以内に入った者は恰も感電したような激しさで熱を感じ同時に火傷を起こしている。

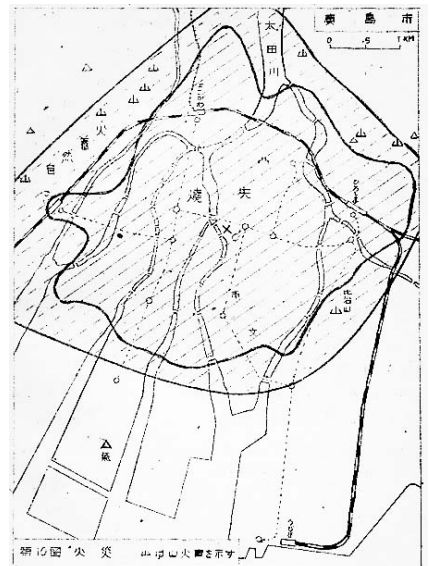
「温い」「暖かい」と云ふ程度に熱を感じた者は20軒遠方に迄分布し、可部や玖波、大野の方まで及んで居り、皆戸外に出て働いていた人である。

(5) 植物の焼損 (第11図参照)

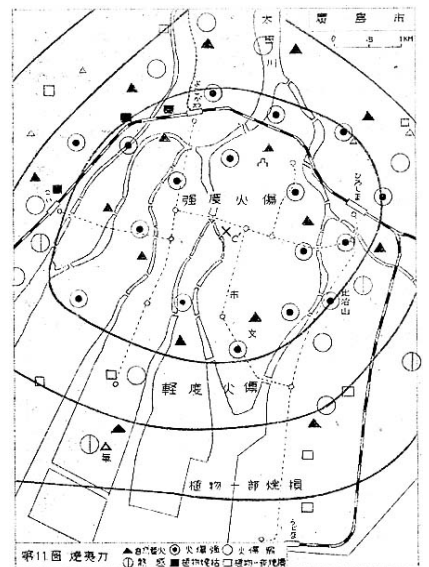
作物では稲の穂先や葉、黍、粟など、茄子、南瓜、蓮の葉、里芋や甘藷の葉など柔らかい繊弱な植物体が焼損され、樹木では松、櫻、榎、柃、木犀などの葉が焼損した。焼損は2.5軒以内の範囲で一部焼損は



第9図 破壊度の分布



第10図 火災 山手山火源を示す



第11図 焼死力 ▲火災 ●火傷 ○火傷死 □一部焼損

約4軒以内の範囲に見られた。

比治山、双葉山、牛田、己斐、山手の山々の樹葉が火災により他に熱線で直接焼けて、盛夏に一時秋の紅葉の様になり、山色為に変わる状況であったが、1ヶ月以上経過すると新芽が出て殆んど旧に復した。

(6) 縞状の焼夷現象

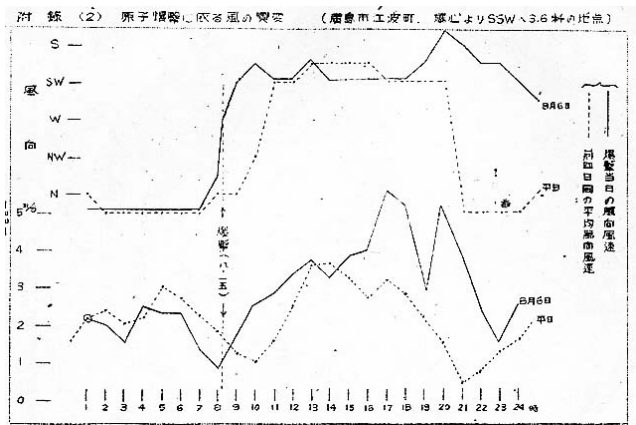
双葉山が波上に焼けた後を緑と赤茶と交互に見せたこと、打越や牛田方面で数米の幅で家や草や畑の作物も焼けている例など、道路に沿って爆発直後日光の走ったのを見た報告など原子爆弾の焼夷被害の縞状濃淡を想はしめているが、これに対し確かな決定は出来ない。

又電線に沿ひ火傷などの被害の大きいことも言はれたが判然としない。参考のため付記して置く。

— 終 — (昭和20年12月稿)

附録1. 昭和20年 原子爆弾ヲ受ケタ当時ノ気象 広島管区气象台

附録1. 昭和20年 原子爆弾ヲ受ケタ当時ノ気象 広島管区气象台										
月	日	時	気温(°C)	湿度(%)	風向	風速(m/s)	天候	雲量	視程(km)	状況
8	6	0	62.3	25.6	ENE	1.5	○	0	—	(6 上A)
	1		62.0	25.0	NNE	2.0	○	0	—	同上
	2		62.1	24.7	NNE	2.0	○	0	—	同上
	3		62.1	24.2	NNE	1.5	○	2	—	同上
	4		62.5	23.9	NNE	2.5	○	2	C.S.K.	同上
	5		62.7	23.7	NNE	2.3	○	4	K.C.S.K.	同上
	6		63.1	23.6	NNE	2.3	⊙	8	S.C.K.S.K. K.C.	同上
	7		63.3	24.7	NNE	1.3	⊙	8	K.C.S.K.	同上
	8		63.6	26.7	N	0.8	⊙	10	C.S.K.	同上
	8	15	63.6	26.8	W	1.2	—	—	—	(7 上A)
	8	16	63.6	26.9	W	1.2	—	—	—	同上
	8	20	下	27.0	W	1.2	—	—	—	同上
	8	30	下	27.0	W	1.0	—	—	—	同上
	9		63.5	27.3	SW	1.7	⊙	9	K.N.C.	同上
	9	30	64.0	28.4	SSW	2.3	—	—	—	同上
	10		63.9	29.3	SW	2.5	⊙	7	K.N.	同上
	10	30	63.6	29.6	WSW	2.5	—	—	—	(観測)
	11		63.3	30.0	WSW	2.8	⊙	5	K.N.C.	同上
	11	30	62.8	30.4	WSW	3.2	—	—	—	同上
	12		62.5	30.7	WSW	3.3	⊙	6	K.N.	同上
	13		62.1	30.7	SW	3.7	⊙	8	K.N.C.	同上
	14		61.9	31.0	SW	3.2	⊙	6	K.N.C.	同上
	15		61.5	30.0	SW	3.8	⊙	7	K.N.C.	同上
	16		61.4	30.7	SW	4.0	⊙	5	K.N.C.	同上
	17		61.3	29.7	SW	5.5	⊙	4	K.N.K.	同上
	18		61.6	28.3	SW	5.2	⊙	4	K.N.K.C.	同上
	19		62.1	28.2	SSW	3.0	⊙	9	K.C.S.K.N.	同上
	20		62.3	27.5	SSW	5.2	⊙	9	S.K.K.C.S.	同上
	21		63.0	26.9	S	3.7	⊙	10	S.K.	同上
	22		62.9	26.7	S	2.3	⊙	9	S.K.	同上
	23		63.0	26.6	SW	1.5	⊙	10	S.K.	同上
	24		62.7	26.5	WSW	2.5	⊙	10	S.K.	同上
8	7	1	62.8	26.3	WSW	3.0	⊙	10	S.K.	同上
	2		62.9	26.5	WSW	2.2	⊙	10	S.K.	同上
	3		62.3	26.0	WSW	2.3	⊙	10	S.K.	同上
	4		63.0	25.7	WSW	1.2	⊙	10	S.K.	同上
	5		63.1	25.6	WSW	1.3	⊙	10	S.K.	同上
	6		63.5	25.6	—	0.0	⊙	10	S.K.	同上
	10		63.9	30.3	SE	3.0	⊙	3	K.K.C.	同上
	14		62.2	29.4	SSW	4.2	⊙	2	K.	同上
	18		61.6	26.8	SSW	3.8	⊙	1	K.	同上



附録(2) 原子爆弾に依る風の異変 (広島市江波町、爆心よりSSW×3.6軒の地点)

(付)

終戦年の広島地方気象台

北 勲

測候時報第38巻第1号別刷(昭和46年1月)

終戦年の広島地方気象台

北 勲*

551.5:623.451.746.083.2(521.84)

*広島地方気象台

目次

1. はしがき
2. あらまし
3. 原爆投下以前
4. 広島に原爆投下さる
5. 一原爆被災以後
6. 枕崎台風襲う
7. 枕崎台風以後
8. あとがき

1. はしがき

終戦から既に25年経過し、人々の記憶もうすれ、当時の職員も四散し少なくなった現在、あえて当時の記録を綴ろうとする動機はつぎのような理由による。

- (1)終戦ごろの地方気象官署の窮状を記述しておくことは気象資料を取り扱う場合参考になり、戦時の気象業務がいかなる状態で続けられたかを知る資料になる。
- (2)枕崎台風(昭和20年9月17日)の際、悪条件が重なったため、広島県だけでも、死者・ゆくえ不明・傷者あわせて3066人というまれな大被害を生じたことに対する防災面からの反省材料として書き残しておきたい。

記述の形としては、広島地方気象台に保存されている当番日誌を主軸として、月日を追いながら必要な事項を再録し、これに補足するに各種調査報告物・新聞記事・官公庁記録・個人の記憶を加えて理解を助けたいと思うが、資料の精粗により片手落ちの記載になるやも知れず寛容を得たい、職員の名前も必要なものを除き省略して簡素化を図った。

2. あらまし

昭和20年、各気象官署とも相つぐ空襲、人員ならびに物資の不足から、業務の遂行が困難であった。とくに広島は人類最初の原子爆弾を浴びて、物質的にも精神的にも相当参ってしまった。

8月11日に管区気象台に昇格したが、名目だけで実質的には測候所なみの仕事しかできない状態であった。9月にはいって新台長を迎えて復興の第一歩を踏み出したが、職員の3分の1は半病人で、また食糧補給のため郷里に帰省するものが多く、全員20名のうち約半数しか出勤できないありさまであった。

9月17日枕崎台風が来襲した。気象特報は出していたが、各官公庁・報道機関も体制不備で、一般県民に十分伝達されたとは言いがたかった。一方、台風の勢力が格段に強かったため、いたるところで山が崩れるような土石流が発生し大被害が起こった。原因の第1は豪雨、第2は取壊に伴う防災体制の不備と言いがた得る。

3. 原爆投下以前

(当番日誌より抜粋転記する)

昭和20年6月26日

早朝、午前、夜半ニ警戒警報発令サル。

(注、以下空襲、警戒警報ともにケイホウと略記する)

電信局、広島一大阪間、有線、無線トモ不通ノ由。

当番者以外ハ全員防空壕完成作業ニ従事ス。

6月27日

夜半ケイホウ発令。

2日間局留ニナッテイタ気象電報ハ19時頃ヨリ特別措置ニヨリ發送サル。

6月29日

夜半3回ケイホウ發令。

3時ヨリ電話故障、5時復旧。

7月1日

夜半ケイホウ發令。

呉市大空襲ニヨル火災望見。

7月2日

平野台長米子へ出張中ノトコロ夕刻歸台。

有線不通、無線モ不達ノモヨウ（気象電報関係）。

7月3日

コノトコロ毎夜半ケイホウ發令。

有線、無線モ不通ノトコロ、夕刻一時過ジタノデタマッテイタ電報ヲ發信スル。

7月4日

夜半例ノ如クケイホウ發令。

有線ハ不通、無線ニヨリ07時ト18時ニマテ電報ヲ暗号化シテ發信ス（局扱）。

4、5月分宿直料ノ支払アリ。

7月7日

気象原簿ヲ防空壕内へ移ス（151冊）。

気象台義勇隊へ出動命令が發令サル。

木材運搬（ゾンデ室建築用）ノタメ、午前午後全員製材所ニ行ク。

7月8日

義勇隊員5名出動ス。0730-1700、本川国民学校付近家屋疎開。

7月9日

義勇隊員本日モ5名出動ス。

本科生3名実習ノタメ來台。

7月10日

義勇隊員5名出動ス。

山麓ノ残材全員ヲ運び上げ完了ス。

今朝ヨリ以後、台長直々ニ職員ノ呼名点呼ヲ実施。

自今14時ノ実況ハ6時使用天気図ノ裏面ニ記入。

7月12日

鉄道警報（テケ）發布中。

17時気象特報發布。

本科実習生5名、本日ヨリ実習開始。

技手以上參集ノ上、台長ヨリ夜間ノ防空ニ関シ訓示アリ。

専用線、電信、電話共不通。

ケイホウ3回出ル。

7月18日

加入電話モ不通。

正午頃、敵機（P-38）続々來襲。

7月19日

本台伊藤技師気象電報ノ件ニツキ來台、午後電信局ニ赴ク。

ケイホウ3回。

台長ハ米子ニ在勤中。

7月22日

遠藤技手乱数表受領シテ帰宅ス。

山路技手入営ノタメ社行会。

ケイホウ3回。

7月24日

早朝ヨリ敵機五百数十機来襲。

西郷、松江、津山、岡山、松山、高松、室戸各測候所ノ氣象電報ヲ広島テ暗号化スルヨウ依頼アリ。

7月28日

早朝ヨリ敵機二百数十機来襲。

可部分室(疎開先トシテ用意シタモノ)整備ノタメ職員4名大八車ヲ引イテ出発。

7月30日

事務整理ノタメ本日ヨリ地震計観測ヲ中止(中。央氣象台通牒ニヨル)。

8月1日

本日ヨリ ロビッチニヨル日射観測ヲ中止ス。

8月2日

庁舎外壁ヲ塗装シテ偽装ヲ完了ス。

10時台風氣象特報ヲ發布。

台長ヒル前、米子へ出張ス。

8月3日

軍船舶司令部25名見学。

カネテ不通ナリシ電信15時ヨリ回復ス。

台長米子へ出張中。

8月4日

氣象特報ヲ101時ニ解除。

夜ケイホウ。

台長米子へ出張中。

8月5日

夜ケイホウ。

台長米子へ出張中。

8月6日

8時15分頃B-29広島市ヲ爆撃シ当台測器及当台附属品破損セリ・台員半数爆風ノタメ負傷シ一部ノ江波陸軍病院ニテ手当シ一部ノ軽傷ノタメ当台デ手当セリ。

盛ニニ火事雷発生シ、横川方面大雨降ル。

台長米子へ出張中。

上記のとおり当時は氣象専用線、電信局との専用電話とも不通の日が多く、加入電話も時々断線し、電報の送受に支障が多かった、一部郵送している日もある。

広島電信局と大阪電信局との間ハ状況により無線を代用していた。そのため電文ハ暗号化を必要とした。

空襲警報に悩まされ、義勇隊として出動など作業日数も多く、落ち着いて業務ができなかった。台長は官舎が米子にあり、米子と広島を半々に勤務していた。

4. 広島に原爆投下さる

8月6日朝、広島市街は前日来の油照りの青空を迎えた。市民がこの日の活動を始めたばかりの午前8時15分運命の原子爆弾が市の中央部上空600mで轟然と火を吹いた。

一瞬にしてこの世の地獄と化した広島市の南部(爆心より南南西へ3.6km)に位置した气象台にも、恐ろしい閃光が見舞い、その直後をすさまじい爆風が襲った。气象台の内部および近傍でも、熱傷・ガラス傷・骨折などの重軽傷者多数を出した(台員の約半数)。大混乱がやや静まったころ、建物・器械などの損傷を、点検してまわったところ、RC3階建の堅牢な建物の窓ガラスは鉄製のサッシが無惨にへし曲がり、飛散したガラス破片が壁面などに突立っていた。一部の扉は吹き抜かれ爆風のとおりに抜けた跡を示していた。

氣象測器は意外に損傷が少なく、露場の百葉箱内のガラス温度計なども破損せず、もとの位置にあった風力塔の器械もほとんど無事であった。椀型風速計は爆風によって急激に回転し、200mの走行距離を記録していた。2階屋上に設置してあったロビッチ日射計は大破して使用不能になった。気圧・気温・湿度の自記器はその性能上、ごく短時間の変化は記録できなくて、ショックの跡を示していた。地震計室は内部が2重構造の室であったが、爆風の突入によってガラスが破損

して器械に当たり、地震計はすべて大破していた。

こんなわけで、幸い気象観測は1回も欠測することなく続けることができた。職員が多く負傷し、住家を焼かれ、肉親などを亡くしたため、毎日気象台に出勤して業務を続けることが困難となり、欠勤者が多くなった。加えて食糧事情が一段と悪くなり、勤務中にもその方の心配がつきまとった。重傷の職員2名は動かせないで、そのまま庁舎内に収容して、家族・同僚の看護で1か月以上過した。

このような悪条件の中で、少数の職員で昼夜連続の観測を続けることは至難の業であったが、観測を一刻も欠測してはならないという使命感に徹して完遂した。敗戦とともに敵国軍が進駐してきて、施設・記録を接収されるという不安はあったが、その時までには決して観測を放棄しないという測候精神を堅持した。またこのことに生きがいを感じていた。

ここで被爆当時の広島市の状況を述べよう。被爆10分後、江波山(高さ30m)から見た市内は、死の砂漠のように茶褐色で、上空は一面黒灰色のものにおおわれていた。15分後にはもう市内の各所から火の手が上がり、9時ごろには市内の中央部一帯は黒煙に包まれ、舟入町、観音町方面の火の手がはっきり見えるほかは、一面真黒な煙に包まれて行った。

黒煙の上部は天をつく雄大な積乱雲に発達し、その頂きは目測で10数kmにも達した。火災は10時から14時ごろが最盛期で夕刻には次第に衰えたが、夜にはいってもなおあちこちの火点が指呼できた。

江波山の気象台では終日南よりの風が吹いたため、視界は良好で、市街の火災の状況は手にとるように観察できた。火災から昇る煙や雲はほとんど北～北西の方向に流れていた。市の南部、江波山では終日、日照があり、青空が見えて、北部の暗黒と強烈な対照をなしていた。

風について、後日の調査結果を合わせて考えると、大火災の発生後、市内の火災地域に流れ込む気流が終日続き、気象台では平常日の風の流れ方(海陸風)を差し引いて、約4m/secの風が火災現場に吸引されていたことが判明した。市の北部、山陽本線付近に沿って、南からと北からの両気流が集まる収束線が発生し、盛んな上昇気流を生じ、たつまきが起っていた。

つぎに「黒い雨」について述べると、気象台では当日1滴の雨も降らなかったが、後日気象台員の行なった調査によると市の北西部を中心に、2時間以上に及ぶ土砂降りの雨が降っている。この原因として考えられるものは原爆大火災に伴う強い上昇気流によって、上空で多量の雨粒が作られ、雷雨性の雨が降ったと見られる。旋風・爆風で多量に舞上がった灰、その他が雨に混って黒い雨になったと考えられる。

大火災の際には雷雨が発生することがあるが、広島原爆の場合は一段と規模が大きかった。これは、上に述べた上昇気流の他に、核爆発による放射性物質から多数の凝結核の生成が考えられている。

5. 原爆被災以後

8月7日

観測室ノ破損セル窓ガラスヲ取除ク。台内ノ整理、負傷者ノ手当、食糧準備ニ職員敢斗シアリ。

有線、無線共ニ不通。電灯ナシ。

台内ニテ南瓜給食ヲ行フ・当番ノ4名分ヲ江波高射砲隊ヨリ給食サレルコトナル。

8月10日

台内整理ハ急ヲ要スルコトナルモ現在出勤可能人員ワズカニ6名ニテハナカナカハカドラヌノ遺憾。

有無線、電灯復旧ナラズ。

本夕敵機広島来襲ノ声高シ

8月11日

台長未ダ帰任セズ。尾崎田村不在。

防空壕ノ拡張ヲ急グ。原簿類ハ3ヶ所ノ防空壕ニ埋メル。

8月12日

台長2時頃帰台セリ・

北枝手午後ヨリ市庁及中国配電等ニ打合セニ行ク。

8月13日

午後電灯復旧ス。

本日ヨリ気象電報(02, 06, 10, 14, 18, 22時)ヲ電信局へ持参ノコトス。

8月14日

本日ヨリ「トヨハタ」受信ス。

8月15日

正午ヨリ天皇陛下自ラ証書ヲ朗読サル。台員一同謹ンデ拝聴ス。

8月16日

古市技手病気（原爆症）ノタメ高松市ニ帰郷

8月17日

台内ヲ雑炊給食。

8月18日

「アシヘ」放送シテナイノデ乙種電報ハ發送スルニ及バズト台長ヨリ達シアリ。

14日ブリニ微雨アリ。朝夕冷涼ヲ覚エル。

吉田技手本日カネテヨリ所在不明（原爆死）ノ職員栗山雇搜索ノタメ市内ニ出張ス。

8月20日

2時頃米子測ヨリ岡田、本村両氏連絡ノタメ来台ス。

本日ヨリ準備管制解除トナル。

当番者ニハ大豆1合宛配給サレル。

8月21日

本日ヨリ塔上、露場、百葉箱ニ点灯スル。

8月22日

「トヨハタ」今朝ヨリ暗号化セズニ送信シツツアリ。気象電報ハ本日ヨリ暗号化ヲヤメ、乱数表ヲ焼却ス。

本日ヨリ航空気象電報トリヤメニナル。

土中ニ埋メシ原簿ヲ掘出ス。

国民義勇隊ハ解散サル。

8月23日

米子測ヨリ応援ノタメ大谷雇来台ス。

（注、この後引き続き米子ヨリ応援者交代して来台す。）

8月24日

晴雨計室、観測室ノ応急修理ヲ行ヒ、第2蔵室ノ晴雨計ヲ元ノ位置ニ復ス。

本日ヨリラジオノ音楽放送ガ開始サレ、ラジオ、新聞ニヨル天気概況ノ発表行ハル。

（注、後日の新聞資料の調査によると8月23日から復活している。）

8月25日

台風ガ室戸岬南方ニ現ハレタノデ暴風警戒ノ指示書ヲ川本定夫ニ市役所へ持参サス。

8月26日

台風アツケナク日不海ニ出テシマフ、

金子、加藤両雇原簿保管ノタメ出張ス。

（注、進駐軍による原簿竊取を恐れて田舎の職員の家へ疎開した。）

新台風四国南方ニ現ハレ北ニ進行中ノモヨウニテ警戒体制ニ入ル。21時気象特報ヲ、点灯ス。

8月27日

平野台長米子へ赴ク。

菅原台長来台。（注、新台長の発令昭和20年8月11日）

8月28日

隣組ヨリ郵便ヲ持参ス。

9月1日

「トヨハタ」放送内容ニ変更アリ。

9月2日

本日菅原新台長着任。

9月5日

戦時体制ヨリ平時体制ニ復スー出勤時刻ソノ他

9月6日

新旧台長事務引継。平野台長送別会ヲ行フ。

9月7日

第1号官舎ノ屋根修理ヲ行フ。

9月17日

台長上京中。

台風接近ノタメ臨時観測ヲナス。

10時気象特報、テケ、発布。

(注、この日枕崎台風襲来す)

9月18日

昨日ノ台風モハヤ通過シ、本日ハ約ケルガ如キ天気トナル。台風ノ被害大ナリ。

10時気象特報解除ス。

停電中。

9月19日

夜間ハ冷込ミ秋冷一時ニ加ハル。

県庁ヨリ台風調査ノタメ来台。

停電中ノトコロ16時復旧。

6. 枕崎台風襲う

中央気象台彙報第33冊によれば以下のとおり、「昭和20年9月17日九州南端枕崎付近に上陸した台風は九州、中国を横断して日本海に出、さらに奥羽を横断して太平洋に出た。

この台風は沖縄付近にあったころ、既に中心気圧720mm以下に推定されたが、九州に接近上陸するに及び、著しく強力なことがわかった。しかし、当時終戦後の電信線の復旧不完全のため確かな状況はわからなかった。枕崎からの暴風報告に接するに及んで、この台風は稀有の強さのものであることが明らかとなった。枕崎の最低気圧687.5mmは、昭和9年の室戸岬で測られた世界的記録684.0mmに匹敵し、且つ台風の規模も室戸台風に劣らず、そのもたらした被害は多大なものであった。

大分付近で約710mmを示した台風は19時半ごろより伊予灘を通過して時速55kmで北東へ進み広島に近づいた。広島における最低気圧721.5mmは22時43分に観測されていて、このころ風が一時衰えている。風向は訓練している。広島気象台の報告によれば台風中心は広島の西方15kmを通ったという、広島における風速は中心の通過時に南の25m/sec、通過後3時間で北の30m/secの最大値が出ている。雨は前日の朝から降りつづき、17日の中心接近直前に最も強く1時間雨量57mmを示し、総雨量は218.7mmに達した。

被害については、岩国より東の方へ行くと被害が目立ち、大之浦にいたる間は、流木や押し流されてきた大石等のために潰された家、流された家が所々に見つけられた。水田は土砂で埋没し、線路も埋められて、惨たんたるありさまである。厳島の被害が大きく山津波が起り多数の死者が出た。呉市内の水害による死者は500名を越えたのは同地方として未曾有のことである。

山陽本線に沿って、海田―西条―三原の間でやはり小河川や谷合いにあるれ出た水が急湍となって流出し、大石小石を押し流し、土砂は水田を埋め、線路を埋没し、道床をはぎとった。山から流されたと思われる木材や根こそぎにされた樹木が累々と横たわっている。このため山陽本線だけで復旧に要した人員約18,500人となっている。山津波の起こった時刻はいずれも中心の近づいた、雨の最も強かった時刻に一致し、今回の災害の起こり方の一つの特徴である。」

さて、この台風の襲来に敗戦直後の広島県民がどう対処したかは問題のあるところであるが、県庁・市庁は原爆で消え失せ、職員の大半が死亡四散した状況下で、猛台風が接近しつつあるのを知っていたのは何人あったろうか？ 気象台ですら1日数回の無線受信をして最小限度の天気図を作成して、業務の参考にしていく程度で、とても予報に使えるような代物ではなかった、台風襲来日の朝10時に気象特報と鉄道警報(テケ)を出しているが、内容とか通報先は記録がないのでわからない。加入電話は生きていたので、何箇所かには通知したであろうが、受けた方でそのあとどう扱ったか、当時の状況では一般に周知困難な状況であった。

今回の調査をするに当たって、各方面から資料を集めて見たが、いずれも周知されたという確証があげられない、まず当時の新聞であるが、昭和20年4月21日以降、政府の指示により新聞は中央紙、地方紙の合同発刊が行なわれている。同年10月1日からは単独発刊にもどっている。広島市立、呉市立の両図書館の所蔵を合わせても、新聞のない日がかかなりある。ちなみにこのころの新聞は1日2ページ建、定価1部10銭である戦時中の気象管制が解除され気象記事がはじめて掲載されたのは8月23日である、以下日を追って新聞の見出し文を列記してみる、

昭和20年8月23日

当分早天続き

けふの天気は八月二十二日から復活、気象概況をラジオで放送。

8月26日

台風四国付近に上陸の恐れ、西日本は警戒

お天気：概況を記す。ただし九州を対象に中央気象台福岡支台の発表。

8月27日

早天に慈雨，蘇生の畑作物。

8月28日

颱風日本海で腰くだけー中央気象台

山口県の水害。

8月29日

天気予報二十九日

(注、はじめての掲載、ただし福岡地方のものらしい)

8月30日

思ひかけぬ颱風予報，沖縄近海“死の測候所”から入電。

9月4日

颱風けふかあす，くれば風速三，四十米，壕舎生活は特に颱風に注意。

9月5日

颱風は日本海へ

9月11日

二百二十日は大丈夫(中央気象台観測)。

9月15日

コラム欄“百万一心”

二百十日から二百二十日後にかけて殆んど二十日間にわたり中国地方に降雨が続いている気象は珍しい記録である。

梅雨と同じ気圧配置，ここしばらくはバラックは御難。

9月17日

.....

(気象関係の記事全然なし，この夜枕崎台風が襲来した。)

9月18日

橋は落ち道路は湖，颱風広島県下を襲ふ。

八月の末から，まるで梅雨のように執ように降りつづいた雨は十七日朝になってどっと豪雨になった。「洪水にならなければこの雨は止まんのではないか？」という心配は不幸適中して昼ごろから風を伴ってますます降りしきり本格的颱風になった。八月六日に原子爆弾といふ「火」の試練をうけた広島市民に今度は「水」だ。みるみる河川は増水する。下水は逆流していたところに激流をつくる。焦土に建ったバラックや半壊の家屋は吹きとぶ。

農村方面も低地の田畑は湖のようになった。戦々競々たるうちに夜を迎えたが風雨はますます激しくなり電気も消えた橋梁は流れる，汽車も不通となった。不安は刻々と増す……だが火に生き抜いてきた市民は敢然とこの天の猛威と戦った。暗夜に不断の警戒がつづけられた。かくて夜半ようやく雨は止んだ。やがて風もおさまった。

被害は県下一円に相当あるらしい。だが新しい日本建設にたくましく進む更生県民にはこれしき何ぞ苦難を乗り越えて起き上がるだろう。

—写真1枚(新聞に写真が出ているという意味)—

洪水と戦ふ村民(広島市外温品(ぬくしな)村中国新聞社疎開工場付近)

9月19日から9月30日の間は新聞見当たらず。

これは枕崎台風の被害によるものと推察できる。中国新聞社はこのころ広島市向洋東洋工業内に仮事務所を置いていた。

10月5日

颱風また本土を狙ふ。

けふの天気：岡山・香川・徳島・鳥取・愛知・岐阜・福井・石川・富山(広島は出ていない。)

10月7日

けふの天気：12地方が出ている。広島はなし。

10月9日

四国に気象特報(松山発)。

けふの天気：8地方。広島はなし。

10月10日

本年掉尾の大颯風来る。稔りの秋に大打撃、西日本各地は警戒の要。

けふの天気：12 地方。広島はなし。

以上のような調子であった広島地方の天気予報が戦後はじめて新聞に掲載され始めたのは昭和21年3月13日からであった。

つぎに当時のラジオ放送(NHK 広島)の状況について調査したものを示す。なお放送所は郊外にあって原爆の際に直接の被災は軽くてすんでいる。広島中央放送局所蔵の放送番組表〔昭和20年1～12月(2～8月の間は記載していない)〕から抜き書きすると天気予報は第1放送で0500, 0600, 0700, 2100, の各時刻に時報、報道、天気予報とあり、1850に天気予報、番組予告とあり、合わせて1日5回放送していた。この天気予報も全国中継からローカルなものか区別がはっきりしない。

台風がきた9月17日のページを見たが平日どおりの放送で台風に関する特別な放送は見当たらない。10月5日のページに午前0時と3時に台風警報(紀伊水道に接近し東北東へ進路をかね東沖に去ったもの)を臨時に放送したと記載してある。放送内容はわからないが中央から流れてきたものを放送したもようである。

また当時、広島管区気象台長として赴任されたばかりの菅原芳生氏に手紙で当時のようすをお尋ねしたところつぎのような回答が寄せられた。

「取急ぎ赴任せよとのことで、駅に下車して見た光景は只見渡す限りの広漠たる廃墟で、家畜の屍はまだウジがわいたまま放置されていたのを覚えており、一体どうなることかと思いました。

気象台の晴雨計室には原爆でこわれた硝子の破片がそのままに散らばり、官舎は雨漏りで、本台の担当者に見て貰うようそのままにしてあるとのことでした。小生もとりあえず台長官舎の屋根に登って応急修理したのを覚えています。気象台は市内中心部に比較して幾分被害は軽かったとはいえ、職員の大部分が被災しており、まず差し当たって職員の生活を、住居をどうするかが当面の大問題でありました、そこでお尋ねの件ですが

(1) このような状況のもとで広島県や市の機能がまだまひ状態から回復していなかった。気象台でも観測の現業を続けるのがようやくであり、当時トヨハタを受信してあったとすれば、まだ大出来の方でしょう。9月にはまだ予報を出せる態勢にあったとは考えられません。またこれを県内に伝達するための機能も回復していたとは考えられません。

(2) 日本中がいわば虚脱状態にあり中央あるいは近県からの業務援助など(皆自分のことで手一杯)期待できるふん囲気ではありませんでした。

(3) 広島の壊滅的打撃のため、管区気象台の機能を米子に移す方がよいのではないかと等の意見もありました、そのようなことで小生も米子に出張中であつたと思えます。」

枕崎台風の被害のとくに大きかった理由として考えられることは、前にも述べたように、第一に台風が階段に強烈で豪雨を伴っていたこと第二に気象台をはじめ各公共機関とも壊滅状態にあって、一般県民に周知できなかったこと。第三に戦災を受けて、民家をはじめいろいろな施設が荒廃していて、暴風雨に耐え得なかったことによる。

いわば戦災に積重なった猛台風によって、広島県民は打ちのめされ、不幸の上ないき目を見たのである。

7. 枕崎台風以後

9月21日

県農産課ヨリ台風調査ノタメ来台。

9月22日

広島工業港所長台風調査ノタメ来台。

9月23日

県警防諜ヨリ台風調査ニ来台。

9月24日

地震計室片ヅケル。

9月27日

図書室ソノ他片ヅケル。

無線受信機ヲ修理スル。

時報サイレン鳴り始ム。

9月28日

宇田道隆博士来台。

北枝手、原爆、台風被害調査ノタメ本日ヨリ引続き市内出張ス。

10月3日

台長原爆調査ノタメ本日ヨリ引続き市内出張。

10月7日

ヒキツツキ停電中。

電話ノ修理ニ局ヨリ来ル。

18時電信課ト連絡ス。08時ヨリ18時マデラシイ。

10月8日

16時過ヤット点灯シ、18時ヨリ「トヨハタ」ニピカドン以来2ヵ月目ニハジメテ広島気象が延着ニテ入ル。

10月10日

台風接近ノタメ気象特報発布。

昨日15時ヨリマタ電話不通ナリ。

10月11日

県河港課ヨリ台風調査ノタメ来台。

10月12日

本台地震課佐野技師他1名原爆調査ニ来台。

10月13日

正午ヨリ1時間ニワタリ米軍人5名通訳同行視察ニ来台。

8. あとがき

昭和20年戦況不利となるとともに日夜をわかつたため空襲に苦しい勤務がつづき、つい8月6日朝世紀の原爆を受け、潰滅状態の中で観測を死守していたころえ、再び猛烈な枕崎台風め襲来を受けた広島の惨状を記録して、後日の参考とする。

げに昭和20年は広島県民にとって最悪の年であった。

(九)

原子爆弾に依る電気工作物の被害調査

昭和21年3月

中國配電株式会社廣島支店

目次

- I. 緒言・・・・・・・・・・ 1
- II. 一般被害状況・・・・・・・・ 3
- III. 配電線路の被害・・・・・・・・ 18
 - 1. 支持物・・・・・・・・・・ 18
 - (1) 木柱・・・・・・・・・・ 19
 - (2) 鉄柱・・・・・・・・・・ 29
 - (3) 鉄筋コンクリート・・・・ 35
 - 2. 電線・・・・・・・・・・ 38
 - 3. 碍子類・・・・・・・・・・ 39
 - 4. 変圧器開閉器・・・・・・・・ 40
 - 5. 地中電線（高圧電纜）・・・・ 41
- IV. 発電所の被害・・・・・・・・ 43
 - 1. 千田町発電所・・・・・・・・ 45
 - 2. 大手町変電所・・・・・・・・ 49
 - 3. 三篠変電所・・・・・・・・・・ 51
 - 4. 段原変電所・・・・・・・・・・ 52
 - 5. 南部江波庚午変電所・・・・ 53
 - 6. 櫛下変電所・・・・・・・・・・ 53
- V. 送電線路の被害・・・・・・・・ 55
 - 1. 架空送電線・・・・・・・・ 55
 - 2. 地中送電線・・・・・・・・ 55
- VI. 結言・・・・・・・・・・ 56

I. 緒言

昭和20年8月6日8時15分米軍飛行機B29、1機は広島市上空に1個の落下傘を投下して飛び去った。落下傘は風に流されて市街の中央に迫り約5~6000mの高度にて轟然と炸裂、稲妻の如き閃光を發し、次の瞬間には広島全市は蒙々たる密雲に閉ざされてしまった。人類史上未曾有の大破壊が行はれたのである。この恐るべき爆弾の威大な破壊力のため附図に示す如く市の中心約20平方軒が破壊され時を移さず發生した大火災により全くの灰塵に歸し、貴き幾多人命を奪ひ去つたにであるが之等原子爆弾に依る甚大なる被害のうち電気工作物の被害に付ては早急に調査すべきも当時の複雑なる事情により調査は手に着かず漸く8月下旬より概略の調査を開始し、本格的には11月下旬より来年に亘って実施調査を行つたにである。従つて幾分整理後片付をなした地域もある、調査地域も被害全域に比すれば極く僅く僅で大略の被害状況を調査することを得た。

本調査に當つて爆心地点は各調査団により既に發表せられたる（廣島市細工町本広島郵便局）附近とし爆心よりの離間距離による被害の特異性並に部材の消失、破壊の状況等を調査の主目標に置いた。尚当時居合わせた関係者の見聞談を参考として推定せる所も尠くない。

II. 一般被害状況

原子爆弾による一般の被害は全く壊滅的なもので人的には放射熱による火傷、爆圧による傷害並に放射性物質に起因する爆弾症等により死亡せる数は8月15日現在に於て約6万人と推定されていたが12月末広島市役所発表によれば市在籍者のみにて約10万人に垂んとし夫に当地の在広諸部隊並に隣接町村よりの疎開作業出勤の国民義勇隊死亡者を加られば実に15万人乃至20万人に達すとも謂れている。

次で建築物は爆心より2,000m迄は完全に倒壊消失、2,000~3,000m迄は半壊し鉄筋コンクリートの堅牢な建物が僅かに外壁のみを残す状態である。

第一表 建築物被害戸数（昭20.12 広島市役所調査）

被害程度	被害家屋数
全焼	55,001 戸
全壊	6,835 戸

半焼	2,295 戸
半壊	3,735 戸
計	67,866 戸

写真1、本社屋上より爆心地付近略西北方を望む

写真2、本社屋上より東北方（広島駅方向）を望む

写真3、本社屋上より西南方（大手町変電所方向）を望む

写真4、本社屋上より南方（宇品方向）を望む

写真5、大手町通り附近の建物の破壊状況（0.5km）

写真6、爆心方向のため被害のなかつた栄橋（1.5km）

当社に於ては本店社屋（市内小町33）は爆心地点より約650mの距離にあり建物は鉄筋コンクリート五階建てにて爆発と同時に窓枠、什器類、硝子等破損し、防空幕並に机上の用紙類より発火（放射熱によるものと推定）建物内部より一編の可燃物を残さず全壊し従業員340名（出張休務者を含む）の内建物内に於て死亡せるもの34名避難後死亡せる者44名負傷者（軽傷者を除く）78名計156名の被害者を出した。尚建物は鉄筋コンクリートの堅牢なる建築物なる為倒壊並に天井等の脱落に至らず假改修の上再使用中である。

写真7、本社全景（被害状況）0.65km

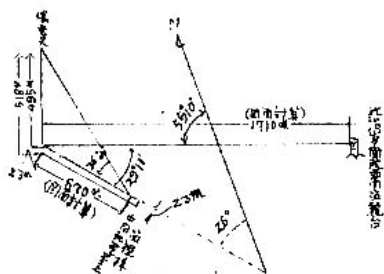
写真8、四階総会場の被害状況（0.65km）

広島支店並に広島電業局（市内研屋町）は爆心より約500mの距離にあり建物は木造モルタル塗装二階建てにて爆圧により完全に倒壊、之に加へて放射熱と類焼のため全焼し、従業員157名（出張者を含む）のうち当日出勤せる者で死亡88名負傷20名（休務者を含む）計108名の被害者を出せり。尚爆発点に就ては当時いち早く本社屋上の欄干並に防空監視塔木窓の焼焦状況並に市内残存電柱の焼焦状況より、大略市内細工町広島郵便局上空五百数十米の点ナルは確認せるも、その後理化学研究所、広島文理大等の調査団による精密観測の結果も全く同一であった。その大要を記すと一般に木材の表面は爆撃炸裂によって生じた熱線のため焼け焦げている。若しこの前方に熱線を遮る障害物があるとその部分は焦げずその木材の表面に障害物の影を明瞭に寫して居る。

こんな類例を当市内に幾箇所も発見せられた。

其の陰影からこれを焼焦した熱線の発点の仰角並に方位角を観測せば爆撃炸裂の位置を算出することが出来る。本調査に於ても本店社屋上の欄干及防空監視窓枠並に比治山本町町開院附近の防空監視櫓等の焼焦した部分より仰角並に方位角を測定爆発点を算出すると大体爆心地は細工町広島郵便局北端附近（島病院の南前）で高度約520mで爆発して居る。

第一図 原子爆弾爆発点測定図



備考1、中国配電よりの仰角は監視窓の焼焦に依る角度（36° 30'）

2、中国配電よりの方位角は屋上欄干並に監視窓の焼焦による其の平均観点より逆に図面上にて計りし角度（26°）

3、比治山本町町開院西南監視台よりの方位角も（2）と同様なる過程なり（55%）

写真9、本社屋上の欄干の放射線によつて焼焦さる状態（爆心方向が黒く焼焦げている）（0.65km）

写真10、本社屋上防空監視窓枠の放射熱によつて焼焦せる状態（爆心方向が黒く焦げて居る）（0.65km）

III. 配電線路の被害

広島市内の配電線路は附図に示す如く段原、大手町、三篠、千田町、南部、江波等の各変電所より市内全般に施設せられていたのであるが爆発時の内向（放射熱）並に爆風により混線、断線、損傷、倒壊、傾斜等が殆んど同時に起こり時を移さず発生した大火災により凡てが焼失し盡くされた感がある。

1. 支持物

施設支持物は殆んど木柱にして鉄柱、鉄筋コンクリート柱は主幹線並に特殊場所の一部に施設されたに過ぎなかつた、これ等の被害は下表の通りにして木柱は大部分消失、鉄柱は倒壊、コンクリート中のみ割に頑丈であった。

第二表 支持物被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0~500	8	5	27	5	4	231	280
500~1000	34	27	67	3	3	550	684
1000~1500	185	29	22	0	13	883	1132
1500~2000	384	15	24	6	17	743	1189
2000~2500	1006	0	0	0	4	41	1051
計	1617	76	140	14	41	2448	4336

(1) 木柱

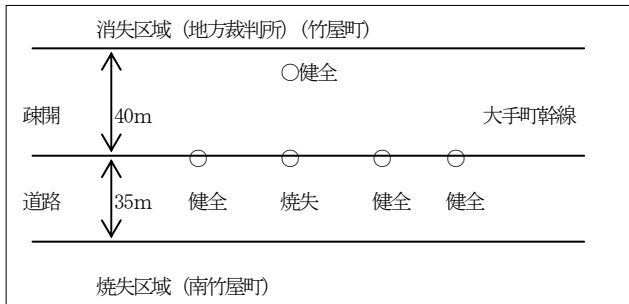
木柱は他の支持物と異なり燃え易きため類焼によつて殆んど焼失し盡くされた感があつた。然し疎開地等の空地で類焼を免れた木柱を調査した結果、放射熱、爆風、類焼と其の被害を大別する事が出来る。

第三表 木柱被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0~500	6	5	18	5	4	231	269
500~1000	33	26	37	3	3	550	652
1000~1500	182	29	20	0	13	883	1127
1500~2000	347	15	5	6	17	743	1133
2000~2500	1006	0	0	0	4	41	1051
計	1574	75	80	14	41	2448	4232

先づ放射熱に就て見るに爆心地付近では直上にて爆発し熱線を垂直に受けたため消失、或ひは焼焦した形跡が非常に少く 500m~1,500m附近では放射熱のために消失、或ひは半焼したと認定し得るもの約10%~20%程度あつたが同じ距離でも消失せざるものも少なからず、木柱の状態により或ひは地域的に熱線の強弱があつて斯く左右せられたのではないかと思考せられるのである。

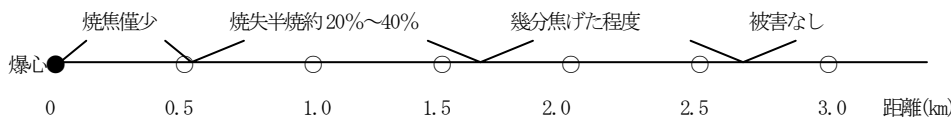
第二図 放射熱により消失せるもの及焼失せざるもの



1,500m~2,500mの距離では爆心側が深さ1mm~3mm程度焼焦し、焼失までには至らなかつた様であるが、1,700m~2,000mの距離にある広島刑務所に於ては上部腕木取付部分に於て燃焼を生じ、防火上當日切倒せしもの(5本) 頭部のみ燃焼し残存せるもの(2本) あつた。

写真11、放射熱により木柱の爆心方向が焼焦せる状態(木柱前面が准路樹の葉のため焦げずに模様を残して居る)(段原大町附近) 2km
2500m以遠になると放射熱のためには何等被害を受けた形跡が認められず、結局放射熱のために焼失した木柱は500m~1,500m内に点々と間散的に存在し大部分は多少焦げた程度で焼失までには到らなかつた様である。

第三図 放射線による照射程度



次で爆風による被害であるが100m以内の爆心直下には垂直荷重を受けたため被害極めて軽度(約10%)で100m~1,000m附近が折損倒壊せるものが一番多かつた様である(約30%程度)特に線路方面と直角に爆風を受けたものは線路方向に受けたものより数倍多かつたのは勿論である。

1,000m~2,000mでは折損倒壊は約10%程度で傾斜せるものは相当あつたが漸線其の他による不均張力の為に依るものと思考せられたものが多かつた。
2,000m以遠になると傾斜せるもの僅かに数本あつたのみで爆圧力は颱風時の数圧約200kg/m²(風速約40m/5)程度と推算出来るのである。
以上の折損倒壊せる木柱を視るに地際にて折損せるものが最も多く約70%程度地上2m~3m程度の処で折損せるもの約20%あつたが、大体に於て横加重を受けたものには柱の下部で、縦荷重を受けたものは柱の途中で折損せる傾向があつた。

何れも折損倒壊並に傾斜の方向は爆心よりの放射方向である。結局爆風のために被害を受けた木柱は100m~1,000m附近が最も多く距離の増加に従つて漸減し3,000m以遠になると皆無の状態である。

第四図 爆風による折損倒壊程度

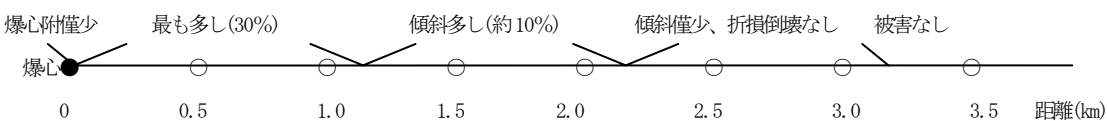


写真12、地際にて折損せる木柱(鷹野御所附近の連続折損木柱)

写真13、本社前(大手町通り)の傾斜木柱(0.6km)

写真14、横川幹の傾斜木柱1000m(爆心方向と直角)

写真15、線路方向が爆心方向のため近距離なるも被害のなかつた旧第二舞台裏門附近の健全柱(1,000m)

写真16、僅かに傾斜せる木柱(京橋附近1.4km)

写真 17、僅に傾斜せる木柱（爆心方向と直角） 修道中学校付近 2.3km

尚最も被害の少つた類焼であるが建築物より 5m 以内にあつた木柱は殆んど焼失し、爆心よりの距離とは無関係であつた。

風の方向建物の種類或いは建物との距離距離により差異はあつたが、火力の強力であつたと推定せられる附近のものは完全に燃焼して居るが、処によつては傾部約 1/4~1/5 程度残つたものもあつた。

之は建物の倒壊後、火災発生して木柱の下部に燃え移り、大体鎮火した頃に木柱が焼け折れて残つたものと推定せられる。以上の如く木柱の被害は類焼最も多く、折損倒壊之に次ぎ放射熱に依るものは僅少であつたと推定せられるが殆んどが焼失せる為確然たる判定の出来ないのは甚だ残念である。

(2) 鉄柱

鉄柱の施設数は木柱に比し極めて僅少で約 2% に過ぎないが被害は相当なもので爆風のため 2000m 以内に於ては約 75% が倒壊し、不思議な現象を示したのであるが、之を距離的に究明すると次の如くなる。

第四表 鉄柱被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0~500	1	0	8	0	0	0	9
500~1000	1	1	30	0	0	0	32
1000~1500	0	0	2	0	0	0	2
1500~2000	18	0	19	0	0	0	37
2000~2500	0	0	0	0	0	0	0
計	20	1	59	0	0	0	80

爆心地付近では直前に於て、爆発のため爆風を垂直方向（垂直荷重）に受けたが広島郵便局（本局）跡に 3 基の鉄柱鉄塔が完全に残つた点から考へると相当数設置されていたとしても被害はごく僅少であつたものと推定出来る。

次で 200m~1,000m の範囲では、本通り筋及横川~十日市間の鉄柱が悉く倒壊して居り実に 95% の倒壊率を示した。この垂直面に対する爆風の荷重は一般風圧の荷重と趣を異にするか又は鉄柱が他の円筒支持物に比し、安全係数が小さいのではなかつたかと思考せられるのである。

1,000m~2,000m では尚相当倒壊して居る鶴見橋付近（大手町線）は線路方向に爆風を受けたもの等数基を残し他は悉く倒壊して居たが、この大手町幹線の比治山西側はコンクリート柱と鉄柱が連続して施設せられ同距離同方向なるに拘らずコンクリート中は健全に残り、鉄柱のみ倒壊したのである。

第五図 比治山西側鉄柱コンクリート柱被害状況

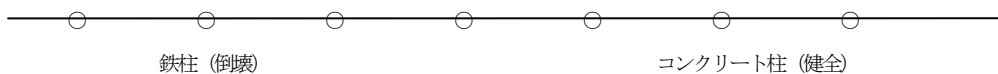


写真 18、爆心地（郵便局跡）（爆発直下なるため鉄柱折損せず）

写真 19、鉄柱連続倒壊状況（段原大畑町付近）爆心方向と直角にして鉄柱倒壊コンクリート柱は健全に残る。（1.8km）

写真 20、船入支線の鉄柱連続倒壊状況（1km）

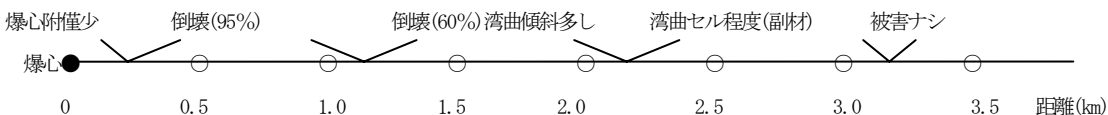
2,000m 以遠になると倒壊傾斜せるものなく副材の曲がつたのが少しあつた程度である。

以上の倒壊せる鉄柱を視るに線路方向に爆風を受けたものは地際より 1m~2m の所で殆んど倒壊し（本通り筋）直角方向に爆風を受けたものは 1m~4m の処から倒壊して居る様である。之は建物等の影響を受けたものと思考せられた。

写真 21、船入支線の鉄柱連続倒壊中の一基の倒壊 爆心方向と略直角（1km）

起訴は何れも強固であつたが主脚材の継合部或いは主脚材のボルト穴（副材取付用）で殆んど折損倒壊の状態になつて居り何れも爆心よりの放射方向であつた。結局鉄柱は 200m~1,000m では全壊し 2,000m に到るも尚高率を示して居るが 2,500m 附近にて漸く皆無の状態であり他の円形支持物に比較し被害甚大であつた事は否めない事実である。尚放射熱其他放射生能物質の影響は殆んど認められなかつた。

第六図 爆風による折損倒壊程度



(3) 鉄筋コンクリート

施設数僅か 23 本にして全部継合式鉄筋コンクリート柱であつたが、木柱鉄柱に比して被害非常に少なく煙突と共に爆風に対しては非常に頑強であつた。

第五表 鉄筋コンクリート柱被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0~500	1	0	1	0	0	0	2
500~1000	0	0	0	0	0	0	0
1000~1500	3	0	0	0	0	0	3
1500~2000	19	0	0	0	0	0	19
2000~2500	0	0	0	0	0	0	0
計	23	0	1	0	0	0	24

先ず爆心より 200m (西警察並に本通り附近) に 2 本施設されてあつたが、本通り筋の 1 本折損倒壊したの 1 本は少し割れ目の出来た程度で大した被害はなかつた。

次で 1,800m の地点でなる段原大畑町附近の大手幹線に 12 本のコンクリート柱が鉄柱と連続施設されてあつたが鉄柱は全壊、コンクリート柱は 1 本の被害もなく又同距離程度なる西観音町のコンクリート柱 5 本も健全であつた。

残念ながら 500m~1,200m 間に施設なく被害程度の推定に苦しむのであるが、円筒形煙突が殆んど完全に残った点から考へて相当施設されていたとしても被害は僅少であつたものと思せられるのである。

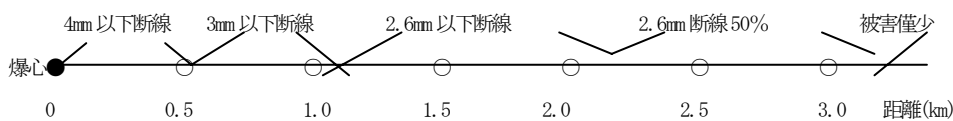
写真 22、旧西警察署前の鉄筋コンクリート柱 (200m) (折損倒壊焼失を免る)

2. 電線

電線の被害は支持物同様類焼に依つて焼鈍せるものが最も多く、焼失区域の殆んど全部がこの被害であつたが、一部疎開空地等にして焼鈍を免れた電線の被害状況を距離的に調査せるに爆心地付近に於ては 4.0mm~3.2mm 当の電線は悉く断線し、5.0mm 以上になると漸く断線を免れて居た様である。被害は爆発以前の程度が不明であり何れによる損傷か推定に苦しむのであるがゴム混和物並に燃綿糸が相当損傷脆弱になつたものと思せられた。

次で 500m~1,000m 附近も爆心地と大差なく 3.2mm 程度は断線し被害も幾分劣化して居たが、1,000m~2,000m 附近になると 2.6mm の引込線でも幾分断線を免れており、被害も何ら異常が認められず 3,000m 以上になると電線の被害は全く皆無の状態になつて居る。

第七図 電線被害状況



結局電線の被害は類焼による焼鈍が大部分で断線損傷せるものは爆心よりの離隔距離の増加に依つて漸減し 2,000m~3,000m 以上になると被害皆無の状態であつた。

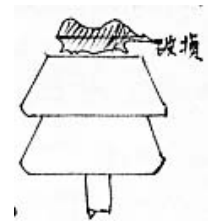
3. 碍子類

碍子類の被害は類焼によるもの最も多く 50%~60% を占め支持物の折損倒壊等機械的原因に依つたもの約 20%~30% 程度で直接爆風のために約 10% 程度破損して居たが、放射熱では恐らく被害はなかつたものと推定さる。

第八図 頂部の破損された碍子

先ず類焼によつては碍子が高熱で過熱せられ磁器が脆弱となり磁器とピンとの結合部分に使用して居る硫黄乃至セメントが変質 (膨張係数の差異によつて二重碍子の中心より亀裂を生じ硫黄が溶解流出、硬化脆弱等) 殆んど破損、茶台碍子、碍子管等は幾分弱い様ではあるが使用に耐へ得るものは可なり多い様であつた。

又図に示す如く碍子の頂部がもぎ取られたものが爆心より 1,000m 附近迄の間で傾斜並に健全柱に可なり残つて居たが之は恐らく電線に受けた爆風が湧様にもぎ取つたものと推定せられる。



1,500m 以上になると爆風のみによる破損は殆んど皆無の状態であつた。其他の支持物の折損倒壊により破損せるものは折損倒壊並に地盤等の状態又は加熱後の倒壊或は倒壊後の過熱等により破損の程度は複雑で距離的には木柱の被害程度と略同様の傾向にあり加熱後に落下せるものが破損率最も大であつた。

4. 変圧器開閉器

柱上変圧器及油入開閉器は類焼により焼損せるもの最も多く実に被害の 90% を占めて居るが柱上よりの落下に際し外函の破損せるものも可なり多数あつた様である。放射熱に依つては大した被害は無かつたものと推定して居る。先ず類焼に依つては焼失区域の殆んどが損傷して居り之を部分的に観察するに外函は焼損せし一部破損を除き再使用可能コイル並に絶縁物は焼損又は焼鈍せるもの多くも修理により大部分再使用となりと推定せり。従つて絶縁物並にコイル取替による修理可能なるもの大部分をしむるものと思せり。

次で爆風に依つては柱上より直接落下域まばら下り (主に変台上に取付けしもの) 外函其他破損せるものが可なりあつたが、これも爆心より 1,000m 以内にして 1,500m 附近になると殆んど被害なく取付不十分であつたと思へるものが僅か変台上にて傾斜したに過ぎない。

従つて 2,000m 以上になるとこれら被害は皆無の状態であつた。異常変圧器の被害は距離的には木柱、碍子類と同様の被害率を示し、被害別では類焼、破損の順位である。

5. 地中電線 (高圧電線)

主として大口需要家の高圧引込に使用されて居たのであるが、埋設部分は 0.6m~1.2m 以上の深さに埋設せられて居るため恐らく被害はなかつたものと思して居るが、終端変電所附近に於て爆風域は建築物の焼失により損傷又は焼損したものがあつた。

即ち爆風による支持物の損傷、倒壊により地中よりの引上鉄管が倒壊し電線が折損したものであり距離的には支持物の折損、倒壊率の多い 1,500m 以内の被害である。

次で類焼によつては火力の強弱によつて差異はあつたが、一般に絶縁混和物並に鉛被が溶解絶縁紙が焼失して居り、本社の高圧引込に使用して居た電線にしても柱側並に地下変電室内の終端の数米が焼損して居り現在はこの部分を切斷使用して居る。

尚この調査は相当に困難のため多くの施設に就ては調査して居らず、詳細なる被害は不明である

IV. 発電所の被害

発電所の被害は暴風に依る建物の倒壊、器具計器類の破損並に類焼による建物及諸施設の焼失であり、大手町変電所及千田町発電所が最も被害甚大で、段原、三篠変電所等は之に次南部、江波、庚午変電所等の被害は極めて軽微であつた。

各変電所の施設概要を示せば次の如し

第六表 発電所

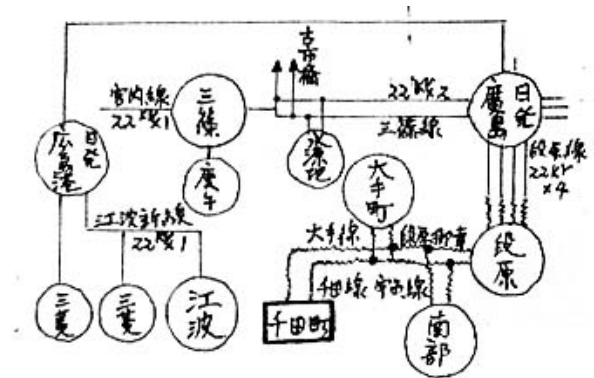
発電所名	原動力	出力(予備) R. VA	汽罐		汽機	
			種類	箇数	種類	廻轉数
千田町	汽力	6000	ハイネ水管式	6	混合式スチームタービン	3,600

発電機			変圧器			
容量kw	電圧KV	箇数	容量KVA	相数	電圧kv	箇数
3000	3.3	2	1500	1	22 11/3.3	4

第七表 変電所

変電所名	出力 KVA	変圧器			
		容量KVA	相数	電圧kv	箇数
大手町	6000	2000	1	22 11/3.3	3
三篠	6000	1000	1	22 11/3.3	7
段原	6000	1000	1	22 11/3.3	7
南部	6000	1000	1	22 11/3.3	7
江波	6000	2000	1	22 11/3.3	3
庚午	3000	1000	1	22 11/3.3	3

第九図 広島市附近送電系統図



1. 千田町発電所

千田町火力発電所は既に所内機械も老朽で最近数年間は殆んど使用せず廃止の予定だったもので、当時は配線用変電所として使用して居たに過ぎない。煉瓦造の建物にボイラー発電機、配電盤室、屋外に変圧器、遮断機が施設されていたが、暴風により瓦葺屋根窓が前倒、煙道の一部が倒壊した。続いて附近木材倉庫に火災発生しボイラー発電に配電盤室に延焼し、燃焼物の悉を消失した。然し、ボイラー、タービン、及発電機が附近の燃焼により何の程度の被害を受けたかは今だ精密調査が行われず詳細不明であるが恐らくボイラー、タービンは修理可能と推察さる。屋外鉄鋼並に変圧器、開閉器等諸施設は何れも被害はなかったが配電盤室の消失により変電所としての使用も不可能な状態である。

- 写真 23、千田町発電所全景 (屋根全壊屋内全焼) (2.3km)
- 写真 24、千田町発電所発電機並に配電盤室 屋根全壊全焼 (2.3km)
- 写真 25、千田町発電所 ボイラー室屋根全壊 全焼 (2.3km)

2. 大手町変電所

大手町変電所は昭和20年6月までは広島市の中央へ配電供給して居たが、7月から疎開のため運転休止、変圧器4台中1台は既に江波変電所へ疎開されて居たのである。建物は鉄骨モルタル塗装三階建にして屋外に変圧器が施設されていたが暴風により建物壁全周破壊し僅に主鉄骨のみ残り屋外の鉄構の大部分が湾曲倒壊したが附近家屋よりの類焼により屋内外とも大部分は消失せり。即ち配電盤は消失し油入開閉器類引火或は転倒して殆んど使用不能只主変圧器が現在の処被害程度の詳細不明なるも、焼失を免れて居り外函は一部は存して居るが修理せば使用可能と思考せり。尚変電所北側の旧製作所は完全に倒壊消失して全くの廢墟となれり。

- 写真 26、大手町変電所破壊状況 (0.8km)
- 写真 27、大手町変電所及旧製作所破壊状況 (0.8km)

3. 三篠変電所

三篠変電所は煉瓦造りで屋根は木造瓦葺屋根に配電盤並に高圧開閉器類を屋外に特高開閉器類並に変圧器が施設されて居たが、類焼を免れたため千田町、大手町変電所等に比し被害は割合軽微であつた。即ち暴風により木造屋根、及窓が全壊し配電盤が倒壊一部計器類の破損があつたが屋外鉄構の主脚材(アングル)二本が約5cm程度湾曲せる外、変圧開閉器類にも何ら被害が無かつたため(防破片壁が暴風方向に施設せられて居た為、屋外施設の被害が漸く僅少であつたものと思考さる)應急修理により8月末日より運転中である。

写真 28、三篠変電所の倒壊せる配電盤 (1.6km)

4. 段原変電所 (爆心より 2.5km)

段原変電所は鉄筋コンクリート壁の木造瓦葺で屋内に配電盤並に高圧開閉器類と屋外鉄工に特高開閉器類並に変圧器が施設されていたが三篠変電所と同様類焼を免れたため排外はわりに軽微であった。

即ち爆風により木造屋根及窓が大破し配電盤の一部計器類が破損したが屋外の特高器類に何ら被害の無かつたため應急修理の上 8 月 8 日より運転中である。

5. 南部江波庚午変電所

各変電所共爆心より 4.0km~4.5km の距離にあり電気施設の被害はごく僅少にして特に鉄筋コンクリートの南部変電所は窓の大部分が破損した程度に留まつており電気器具並に計器類の破損はなかつた。

江波、庚午変電所いずれも木造ストレート葺建物であつたため屋根一部、天井窓等が破損し庚午変電所は約 10° 建物が傾斜した程度である。

電氣的には江波に於て天井の一部脱落により碍子数箇と継電器 1 箇破損し庚午に於ては蓄電池数箇が転倒破損せる程度である。

6. 櫓下変電所 (爆心より約 0.15km)

広島電鉄電車様変電所にして水銀整流器及廻轉變流器を設置されて居たが爆心より近距離のため建物 (煉瓦造) 全壊各電気器具計器の殆んど破損、続いて火災により完全に消失し盡くされた。

写真 29、櫓下変電所の被害状況 (0.2km)

V. 送電線路の被害

送電線路の被害に示す如く架空、地中、線路が施設されて居たが遠距離のため被害極めて僅少であつた。

1. 架空送電線

架空送電線は三篠線及宮内線の一部が爆心より 2,000m でいちばん近距離にあり爆風、類焼等爆弾に依る被害は皆無であつたが架空電話線に於て混線、断線せるもの次の如し。

第八表 架空電話線の被害

	三篠線	宮内線	計
断線	4	3	7
混線	4	2	6
送電線と混線	3	1	4
計	11	6	17

2. 地中送電線

ケーブルは御幸大手線が爆心地より 700m~2,000m で一番近距離にあつたが高圧引込ケーブル同様、地下埋設部分は異常なく大手町変電所に於ける終端接続函並に其の附近が消失迄には到らぬも絨斗並に鉛工部のハンダが多少溶解せる程度である。

御幸、千田線、其他には何等被害なし。

VI. 結言

原子爆弾に依る電気工作物の被害は以上の如く地上施設に対しては放射熱爆風及類焼のため壊滅的な被害を受けその範囲も爆心地より 2,500m 附近まで及んでゐるが地下施設 (地中電線) には何ら被害が無かつた。

之は爆発が空中約 5,600m の高度で行はれた為で長崎市に於ては爆心地と思われる附近 (浦上川の西側) に大爆発孔が出来て居り結局爆発の高度により距離的の被害並に地下に及ぼす影響は大変異なつて来るが何れにしても原子爆弾に対する防護対策としては殆んど考えられず地下施設にすれば被害を極度の現象出来得る事は勿論である。

尚電気工作物は放射性物質によつては何ら被害が認められなかつた。

写真 30、爆心地附近の永安橋 (0.15km) (爆心方向のため橋欄干が両外側に倒れ燈籠が僅かに移動す) (爆心附近なるため木柱が爆風等の被害なく健全に残つた)

(十)

8・10 広島陸軍兵器補給部ニ於テ 新型爆弾ニ関スル研究会

当時・呉海軍工廠電機部無線工場主任

海軍技術中佐

大野 茂

2) 8.10. 広島陸軍兵器補給部ニ於テ新型爆弾ニ関シ研究会

○機銃見習士官陳述

落下傘三個ヲ認ム。距離ハ爆発位置ヨリ 4km、高度 9000m、方向 700 南 爆発点ハ高度 500m、方向 0

○七研所員陳述

△比治山ノ見習士官ノ談 野外ニテ放育中 V 3機ヲ見タ 目測 6000~7000、頭上デ急降下落下傘 (大) ヲ見ル 吊下物ヲ見ズ暫クシテ「シューツ」音ヲ聞ク。熱ク感シ閃光ヲ見タ后伏ス。火傷者ナシ 3ヶ所ニ火災発生ヲ望見ス。

△二十日市ニ居タ者ノ経験、屋内ニ居タ、閃光ヲ見タ、己妻ノ方向ニ高度 2000~3000 青黒イ雲ヲ見ル虹ヲ重ネタ様ナ Ring ヲ見ニ人ガ近ヅク

△爆発音ハ 1丈感ジタ

△二十日市ノ直后油用ノ雨が落ちタ。5分~10分以内直グ止シタ

○永松少佐 (衛生関係)

死亡者ハ家屋等ノ圧壊ニ依ル死死者ト爆死者トガアル

傷者ノ 90%ハ焼ケド、一部挫骨等アリ。大部分ハ顔ト四肢、被服ガ一寸コゲテキルニモ係ラズ此ノ下ノ皮フ焼ケドノヒドイモノモアル。火傷ノ性質ハ痛ガ少イ 觸感ハアル。水泡ノ出来方ガ早イ。

光ヲ見タ者デ中心点カラ 3km 以内ノモノハ大抵火傷ヲ受ケテオリ、耳、目ノ傷害ハナシ。入院者ノ死亡率大、死因ハ火傷。

レントゲンフィルム、日赤ノモノハ感光シテイタ。地下格納ノモノハ感光ガ少イ (ナシ)

○海軍整備隊砲術長

0814 ナカノ砲台当直員西條方向ニ大型 V 爆音ヲ聞ク

0815 B29 1機続行 1機 ナカ上空通過 広島方向ニ向ク 高度 7000、間隔 200~300、先頭ノ一機 北ニ変針、次ハ南ニ変針旋回ト同時ニ閃光ヲ見ル 南ニ旋回シタモノハ殆ンド垂直旋回 (未ダカハル急旋回ヲ見タコトナシ) 右ニ旋回シタモノハ 落下傘 4ヶ投下。最初ノ 1ヶハ不開 3ヶ開傘ス。見エナクナツ タノチ閃光ヲ感ズ

電話員ハ瞬間過電流 (ガガーツ) 音ヲ感ズ。同時ニ手足ニ電氣ヲ感ズ。閃光ノ発光セン位置ハ左ニ旋回セル V ノ附近ニ認ム

爆音ヲ 6000m 位ト認メタ

落下傘ヲ認メタ、ソノ落下速度ハ 150m/sec

爆心ノ 15000m 離レテカラノ相当ノ爆風ヲ感ズ

○火工部長

爆発中心護國神社南方 500m

高度 550m (文理大学ノ其ノ北方、防空壕内閃光ニヨル焦グ跡カラ測定)

閃光ハ近クハ黄、遠クハ藍ガカル

熱感アリ

爆音一回、近クノモノハ爆音ヲ聞カズ

遠イ所デハ螢ノ光ノ様ナ落下物ヲ認ム

日本家屋半径 2km 以内全壊

鉄筋コンクリートハ爆心デヒビガ入ツタ

防空壕ノ丈夫ナモノハ完全ニ残ル

道路異状ナシ

地下ケーブル、水道等異状ナシ

V 掩堆外ノモノ 1機焼ケタ

竹網ニテ防護シテアツタモノハ有効デアツタ

爆心附近ノ相生橋ハ波ウツテキル

550m 圏内ニアツタ者ハ内臓ガ露出シテキタ

1200m圏内デハ衣ガ裂ケテキタ

藁、紙ハ直接着火ス

木ハ着火セズ

山火事ガ起キテキルガ原因不明ノ螢火カ? カナリ遠クデモ発生シテキル

落下傘ガ広島ノ北13km 龜山村大毛寺デ1km 離レテ3個接着シテキタ

○捕虜ノ話

基地硫黄島

東京ヲ12日ニヤル

電気装置デ高度ヲ規正シテ破裂セシメル

強烈ナ爆発ヲナシ白イ煙ガ上ル

GE デ研究、重量500lbs、長さ30~36" 巾15~24" 尾部 6~8"

威力圏 3哩

爆発スルト電気嵐ヲ生ズ

日中殊ニ雲間ナク地上ノ明ルイ時ノ方ガ効果的 夜間、雨天ハ効果少シ

○大野

落下傘附無線装置説明

○軍医少佐

白色下着用ハ侵サレテキナイ

黒色デモ厚イモノハ侵サレテキナイ

宇品ニテ鼓膜ノ破レタ例アリ

水中爆傷ト相以ノ有モ調査中

外傷火傷共少ナクテ死亡セルモノアリ、死因研究ヲ要ス

失明者ナシ

露出ハ絶対不可 白色下着ヲ着ス 伏セテスルコト

中心ヨリ1km 離レテ防空壕ガ無事ナリシ者アリ

硝子ノ飛散

地区司令部(練兵場)防空壕デ無事ナリシ者アリ

結論

① 本弾ハ爆弾デモナク、焼夷弾デモナイ

仁科 ウランノ原子全部ガ有効ニ働イタトスルト2000Tノ爆弾ノ40倍ニ作用〇〇ガナル、 v 13乗ニ反比例スル

レントゲンノフィルムニ感光シテイルモノガアル

下ニアツタ物質ガ放射性トナツテイル筈

寿命ガ短イガ資料ヲ東京ニ持ツテ行ツテ調査シナイ

放射性ガヤケドノ原因トナツテキタカ否カ調べル要アリ

放射線ガ沢山出テイル間ハ 白血球ガ増ス筈

時機ガ少シオソイ

6kg/c m²ノPヲ出スニハ10,000tノTNTヲ要ス

ウランハ100kg以内 純粋ノウランニハ数kgナラン濃度?

地上物体デ放射性ヲ持つテイル時間ハ物ニヨリ中性子ニヨリ異ル 塩ヲ調べルトヨイ

中性子ハ人体ニ対スル影響ハ白血球ヲ増ス

energyヲ温度ニシタトスルト100,000度ニモナル

反応ノ時間ハ計算シテ見タガ長イ

原子弾或ハ同種類ノモノト考ヘル

②爆発地点

護国神社ノ南300m 高度550m

③爆王

施設部 草津 硝子破レテチル 0.2 kgノ圧力ナリ

己斐 家半壊 0.6 kg //

$R^2 = \text{反比例スルトシテ計算スルト爆心ニ於ケル地上大気圧ハ} 6 \text{ kg/c m}^2 \text{ トナル}$

爆原地上ニ於ケル爆圧ハ} 6 \text{ kg/c m}^2 \text{ ト推定セラルトモ更ニ研究調査ヲ要ス}

④火傷ノ原因

半径2km 完全ニヤケドシテキル

半径3kmデモヤケドシテイルモノ多シ

更ニ遠クデモヤケドシテキル者アリ

仁科 β 線デハナイトイフ考エモアル β 線ナラバ3km行クニハ1/10 秒クライカカルト想像セラルルガハツキリハ判ラヌ

硝子ヲ透過シナイ例ガ β 線トモ考ヘラレル

紫外線ナラバ目ヲ損ス 熱線ハ硝子ヲ透過ス

白色布ヲ透サナイ点カラ考ヘルト 光熱線デアル

若シテ混ツテイルカモ知レヌ

宮島 (12km) デニ総軍ノ少尉ノ話 1秒間以上続イタト思ハレル

光線ノ作用アルハ確實ナルモ更ニ β 線ノ作用アル疑アリ 持続時間ハ瞬間デハナイ

⑤火災ノ原因

燃エ易イモノハ着火シテキル

ワラ、ヒハダ屋根、コールタール塗柱、防空黒カーテン

引火シヤスキ物質ノ光線ニヨル着火ニヨリ火災ノ原因トナル

⑥投弾方法

此ノ爆弾ハ単機又ハ少数機ノ投下ニヨリ必ずシモ落下傘ヲ伴ハズ

対策

①非難ノ方法、警戒警報中ト雖モ敵V近接を知らノ直ニ蓋ヲ有スル

防空壕ニ退避スベシ間ニ合ワナイ場合ハ遮蔽下ニ姿勢ヲ低クシ閃光ヲ見ル瞬間ニ空地ニ飛ビ出スベシ

②服装 露出ヲサケルコト、厚着ノコト、白色ノ下衣 (木綿ガ可)

③建物 硝子戸ハ外スコト 日本家屋ハ半地下壕舎ニ改ムベシ

軍関係

①本弾ヲ持ツテ第一Vデ異状ヲ認メナカツタ

②V、Vガ野外ニアツタモノ (3km) ハニツニ折レタ

Vハ有蓋掩タイ若クハ地下ニ入レルコト

③被服

④高角砲台ノ防御

調査研究問題

爆圧ヲ更ニ精密ニ調査 (今月中)

焼ケドノ問題更ニ限界ヲ明ニスルコト (今月中) 原因強力等

(β 線ナラバ方向性アル管 歩哨、兵士等モ更ニ調査)

寫真ノフィルムヲ調べルコト

落下傘附発信キ〇〇今月中ニ到着

京大、大傷ノ原因ガ熱トキキ水疱ガ早く出ル

放射線ノトキハ遅イ

(十一)

軍関係災害調査報告文書集

中野探照灯台廣島爆撃目撃状況

呉海軍警備隊

時刻	記 事
〇八一四	現當直員電話員下士官一見張員二西條方向ニ大型機爆音ヲ聴取ス
〇八一五	西條上空B29一機進行方向西向首對勢ナリ續イテ一機計二機十二種双眼鏡ノ同一視野内ニ映ズノ時肉眼ニテモ二機ノ機影ヲ認め得タリ 中野上空ヲ通過通過時稍々南寄りニシテ進行方向西（廣島方向）稍右横通過對勢ニ二機共B29ニシテ同一型雁行ス（高七千間隔二百乃至三百ト推定）
〇八一七	先頭ノ一機右ニ旋回次デー、二秒後後ノ一機左ニ殆ト垂直旋回ト思ハル程ノ大角度（高度七度計算高度一八〇〇米）トナリタル為眼鏡ヲ外シ右旋回ノモノヲ捕捉ス先頭機右旋回中落下傘降下三箇開ケモ最初ノ一箇開ケ後續機旋回開始メントスル瞬間閃光ヲ認めタリ 閃光ヲ發シタルトキ露天ニ在ル者ハ眼眩ミ丁度マグネシウムノ燃焼ニ似タリ土中壕内ニ在ル電話員耳ニ過電流大ナル震動感ノ感覺ト身體ニ微弱ナル電流ノ通過スルヲ感ゼリ閃光發光ノ位置ハ左旋回ノ敵機ノ位置ヨリ發シタル如ク認め目眩ミタルモノノ後直チニ右旋回ノ敵機ヲ捕捉スルニ支ナク目ハ元ノ情況ニ復ス若干遅レタル時爆煙ヲ見ル（爆煙高角二十二度、自己標高五〇〇米、計算高度六五〇〇）落下傘ハ中野ヨリ三百度
〇八五八	仰角三十二度ノ地点ヲ北北西ニ流レ中野三〇度仰角四度ニ於テ消滅ス落下傘ハ小型約二米位下部ニ円筒頭部円形白色ノモノヲ吊ルス内一ケニハ紐状ノモノ附着セリ落下速度一分間約百五十六米ニシテ落下地点鈴張カ八重民防空監視所附近ト思考ス天候快晴雲量一視認距離三〇〇〇風向北北西風速〇米/秒爆風ハ山林ノ立木皆動キテ身體ノ衝動相當大ナル程度ナリ

板城探照灯台廣島爆撃目撃状況

時刻	記 事
〇八一五	西條上空B29一機發見信仰方向西
〇八一七	廣島上空ニ於テ變針ト同時刻ト思ハル頃落下傘三箇投下七倍稜鏡ノ一分劃位ニ針中ノB29見エタ瞬間強烈ナル閃光ニ驚キ目ヲ轉ジタル時二八〇度乃至二九〇度ノ中間ニ一大火災ノ猛烈ナル勢イニテ石ヲ水ニ投ジタル如ク擴大シツヽ中ヨリ中ヨリ湧出シ積雲ノ天ニ昇ルガ如キ勢イニテソノ上辺ハ赤黄黒白入り乱レタル雲柱ヲ認めタリ 其ノ頃敵機ハ東方ニ變針落下傘ハ西北ニ流レ
〇八五八	中野北方ノ雲中ニ機影消滅ス

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三三(八月十日送付)

八月六日広島空襲被害状況並ニ対策(第二報)

呉鎮守府衛生部

A 事件ノ概要呉鎮司令部ヨリ各鎮警宛ノ電報済ニ付省略

B 症状ノ大要

一、熱傷(大多数)

1、街頭ニアリタルモノ一般ニ程度強シ又屋内ニアリタルモノ熱傷ナキ例多シ

2、熱傷ニ方向性アリ

(イ)閃光ニ直面セル露出皮膚面ヲ主トス

(ロ)光線ノ死角ノ部(例之足趾)ハ侵サレズ

(ハ)頭髮ハソノ側ノ頂上ニ近キ程焦ゲ方強シ

3、同一部ニテ熱傷度ニ強弱アリ即チ同一部位ニテ濃淡アリ

4、女子ニ多シ(薄着ノ為)

5、閃光ニ気付キタルト同時二一四秒間露出皮膚面ニ熱氣ヲ感ゼシモノ多シ

6、色トノ關係

(イ)白色部ハ侵サレズ

例一、白布中黒字ノ部分ノミ焦グ

例二、白紙中黒字ノ部分ノミ焦グ

例三、下着ノ白ノ部分(禰)ノミハ侵サレズ

例四、舟上ニ在リタル少年パンツノ部分ノミ侵サレズ

(ロ)青色焼ケル

(ハ)薄赤色侵サレズ

備考黒クテモ厚ケレバ侵サレズ

7、死因トノ關係

爆発中心地ニテ観ルニ熱傷度ハ死因ト考ヘラルル程度ナラズ(詳細調査中)

(+日射病モアルベシ)

8、熱傷ハ総人口ノ八〇%位ト推定サル

備考生松ガ燃エタル事実アリ相当ノ温度ト考ヘラル

ニ、爆風傷(創)

1、救護隊取扱患者(比較的周辺ノモノ)ニテ鼓膜損傷、難聴ヲ来セルモノ稀ナリ(但シ确实ニ存在ス)中心部ノモノハ不明

2、中心部ヨリ西練兵場ニ於ケル屍体ハ腸脱出眼脱出ノモノ散在ス其ノ数中心部多ク周辺部少数

備考

(イ)水中爆傷(爆雷ニ依ル)ト相似ノ症状ナルモ解剖施行困難ナルニヨリ詳細不明從テ肺損傷等モアルベシ故ニ東練兵場ニテ軽度ノ咯血例アリ

(ロ)両外眦部ニ結膜溢血アルモノアリ(呉病ニテ観察)

(ハ)西練兵場ニ於ケル屍体ノ内腸脱出ノモノハ裸体ニテ同場所ニテ労働中ノモノニシテ圧死等ノ跡ヲミズ死因ハ腸脱出ト認ム

3、中心部ニ於ケル死因ハ概ネ之等爆風ニヨルモノカ爆風傷ニヨルモノト推定ス(要検討)

三、眼症状

1、煤煙火焰ニヨル結膜炎ナシ(焼夷弾トノ相違)

2、両外眦部ニ結膜下溢血ヲ認メタル例アリ(於呉病)

3、失明者ハ取扱患者中ニナシ

(イ)光ハ頭上ヨリ来ル為

(ロ)反射的ニ閉眼ノ為

(ハ)光ノ出タルニ氣付キ頭ヲ反射的ニ廻頭セルモ費消時アル為

(ニ)結膜ハ白ク虹彩(黒目)上ニハ角膜(無色)アル為

四、倒壊家屋ニヨル負傷

直後及八一七相当人員圧セラレテ救助ヲ求メタルモノ多シ

五、飛散破片ニヨル負傷

硝子片種々ナル断片(例之木片)ノ鼠入多シ

C 負傷状況(八一八県警察及県衛生課調査概数)

一、広島市民

総人口—25 万

罹災—20 万

火傷—16 万

手当ヲ要スル物—5 万

要入院者—2—3 万

死者—2—3 万

二、八一八現在陸軍対策

1、八一七医務隊一中隊(門司ヨリ)(約二〇〇名)

2、八一八〃(小倉ヨリ)(〃)

3、現在収容数約七〇〇〇(陸軍部隊ニ於テ収容一部部外者ヲ含ム)

4、陸軍部隊続々到着中

備考八一九附海軍救護隊及救出隊派遣ヲ解カレタリ

D 戦訓

1、露出不可

2、白色ノモノヲ少クモ下着ニ着ス要アリ(状況之ヲ許セバ最外表モ)

3、伏セノ姿勢耳目ヲ塞グ(閃光ト同時ニ)

4、防空壕ハ爆心地ニ於テテスラ簡単ナルモノ(但シ被蓋板張又ハ丸木渡シ)ニテ崩壊ヲ認メズ

5、同右ニヨリ中心地ニ近キニ不拘助リタル一家アリ(衣服ニモ変化ナシ)(距離爆心ヨリ一軒)

6、硝子ニ白ペンキ又ハ白紙ヲハルコト

7、又ハ黒幕(展張用)ノ外ニ白幕ヲ張ルコト

8、落下傘監視ヲ要ス(紫外線ヨク眼鏡ヲ見張員ニ装備)

E 新兵器ヘノ考察

落下傘付新爆弾ヲ落下地上五〇〇米ニテ起爆セシム

其ノ際閃光及爆風ヲ生ズ閃光ハ熱線ヲ伴ヒ副射ニヨリ皮膚面ニ熱傷ヲ生ズ之ニ或物質粒子ヲ附随スルヤ否ヤハ不明

(2) 爆風ニヨリ負傷ヲ生ゼシム

傷者多発ノ原因トシテハ当時警戒警報解除後ニシテ多人数屋外ニアリ又伏セノ姿勢ヲ採ラザリシ為ナラト

思考ス

(終)

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三三ノニ(八月十四日送付)

八月六日広島市空襲戦訓(第三報)

呉鎮守府衛生部

其ノ後判明セル事実ニヨリ前報加除訂正ヲ行フコト左ノ如シ

A 症状

一、熱傷(大部分)

- 1、白色ノ遮断性ハ比較的ナリ白色以外ニテモ厚キ程侵サレズ
- 2、閃光前面ノ皮膚後面ノソレニ比シ熱傷広ク高度ニシテ原因物体ノ反射性ヲ考ヘシム(白壁ノ前ノ草一様ニ両面焦アリ)
- 3、一度二度三度ニ近キ二度多シ中心部程広ク強シ

4、死因トノ関係

(イ) 中心地ニテ一次的熱傷死アリ之ニ引続キ日射病ヲ併発シ死亡セルモノモ考ヘラル

(ロ) 挫傷後二次的ニ熱傷(延焼ニヨル)ニヨリ死セルモノアリ

二、爆風傷

1、腸脱出、眼脱出、咯血ハ中心地ニ於テテスラ絶対ニナシ(前回ノ觀察ハ破片ニヨル創面又ハ之ニ死後変化ヲ伴ヒタルモノナリキ)蓋シ水中ト異リ身体ハ大爆風ノ前ニハ木ノ葉ノ如ク吹飛バサルル為ナラン

三、死因ノ考察

1、爆心ヨリ五〇〇乃至六〇〇米範圍迄ニ在リシモノ

(イ) 熱傷死(全身熱傷)

(ロ) 熱傷後日射病合併(熱傷面比較的狭)

(ハ) 圧死

(ニ) 挫傷セルモノ火災ノ延焼ニ依リ焼死

(ホ) 爆風傷ニ依リ死亡セルモノナシ

(ヘ) 脳震蕩症(?)ニ依リ死亡ノ者アリ(死体傍所持弁当箱アリ)

註、中心地ニアリシガ掩体又ハ家屋間ニ半姿勢ニアリタル者無事ナリシ例アリ

2、收容患者ニ付

例之收容五六〇中死亡一五〇(死因熱傷)(詳細調査中)

B 物的被害

一、家屋

	全壊	半壊
木造	二一三軒迄	同上ヨリ六一七軒迄
煉瓦又ハ石造	五〇〇米迄	同上ヨリ一〇〇〇米迄

註、鉄筋(中心地) *ノ入ル程度但シ窓硝ハ全部破壊内部焼失

二、水道及道路被害ナシ

三、爆心地上ノ圧力ハ6km/cm²ト概算サレアリ(詳細後報)

(終)

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三三ノ三

八月六日広島市空襲戦訓(第四報)

呉鎮守府衛生部

其後判明セル事実ニ依リ前報加除訂正ヲ行フコト左ノ如シ

A 経過

閃光及音トノ関係

- 1、中心地ヨリ約十二軒地点ニ於ケル閃光ヨリ爆発音迄ノ経過時間三〇秒(体験者直後追試秒時計ニテ測定)
- 2、爆心一広島駅ヲ結ブ圈内ニ在リタル者ニシテ爆発音聴取者ナシ

B 統計的觀察(全体ニ就キ未ダ不明ノ為個々ニ付記述ス)

一、病類別

例1 海軍甲救護隊取扱患者

熱傷九〇%有傷創一〇%骨折アリ(頭蓋底骨折、肋骨、四肢)

註熱傷内訳

程度/月日	八一七	八一八	八一九	計
重症	七八	一二四	三一	二三三
中等症	一二九	二六二	五〇	四四一
軽症	二〇八	六三〇	一二七	九六五
計(実数)	四一五	一〇三六	二〇八	一六五九
%	二五・〇	六二・四	一二・五	

例2 海軍乙救護隊取扱患者

熱傷六二名挫傷一六名熱傷兼挫傷一七名

例3 陸軍收容患者(二〇〇〇名二付)

熱傷約七六%挫傷約二%異物鼠入約一九%

二、死亡率

二、〇〇〇名中八二〇名(約三〇%)死亡者ハ全部熱傷ヲ有ス(陸軍)

C 症状

一、爆風傷

中心地ニ於テハ狂死セル者多カルベク屍体收容当時既ニ相当死後変化著明ナリシ為陸海軍共未ダ確実ナル例ヲ證明セズ

二、破傷風、ガス壊疽八月十二日現在陸海軍共未ダ一名モ認メズ

三、眼症状

1、眼瞼熱傷多シ瞼縁ノ摩擦多シ将来魚眼症ヲ続発スルモノ多カルベシ

2、結膜浮腫及眼脂アルモノ多シ

3、角膜皸裂ニ一致スル表在性熱傷多シ(殊ニ重症者ニテ)

(事件当日表層ニ瀰漫性混濁ヲ認メタル一例アルモ速隔成績ヲ得ズ)

4、水晶体爆風性白内障ニ関シテハ将来ノ例ニ俟ツ

5、虹彩瞳孔変化ナシ

6、網膜バルリン氏混濁、黄斑部浮腫トシテ認メラルルモノ多シ(定型例ニアリ)

備考陸軍調査ニヨレバ現在(八一十二)ノ処中心性暗点電気性眼炎、角膜剥脱、羞明、煙ニヨル結膜炎ヲ認メズ眼瞼部熱傷及之ニ続発セル結膜炎ニ依ルモノナリト

四、耳

1、爆心ニ近キ程熱傷側ノ鼓膜穿孔多シ(二四例中一四例確実陽性)

2、熱傷患者其ノ他客観的ニ異常ヲ認メザル者ニ於テモ極メテ多数ノモノニ眩暈悪心嘔吐ヲ認メ之等ノ症状ハ迷路障碍ニ関係スルモノト推察セラルルモ確実ナルコトハ今後ノ専門的調査ニ俟ツ

五、血液

1、爆撃当時広島市ニアリシモノ二三名ニ就キ調査セル成績別表ノ如シ(検査続行中)

2、收容患者ノ血液ノ時間的追究ハ目下施行中

○熱傷患者ニ幼若細胞ノ出現アリト(陸軍但シ検査例数少シ)

○事件後来広セルモノニ〇名三日間滞在現在ニ於テ変化ナシ

○八一十二派遣調査団員四名現地滞在(四時間)前後変化ナシ

六、尿

- 1、熱傷患者ハ何レモ酸性十三例中十一例ハ蛋白、円柱、白血球、赤血球何レモ陽性(陸軍)
- 2、呉病収容患者中「リバノール」様着色尿ノモノ多シ(十時過現地溝在ノ調査班員ニモアリタリト)

七、一般症状

- 1、熱傷患者中ニハ高熱四〇度ニ及ブモノ可ナリ多シ(陸軍)
- 2、閃光後三十分乃至二時間ニシテ悪心嘔吐ヲ来セルモノ多シ其ノ程度種々ニシテ現地水飲用ト関係ナキモノノ如シ
- 3、事件後六日目尚食欲不振。悪心嘔吐吐量、頭痛、口渇、便秘(時ニ下痢)ヲ訴フルモノ多シ(陸海軍収容患者)

D 熱傷効果線ノ作用機転

- 1、方向性、色トノ関係、竝ニ遮断線性(死角存在ノ事実)ヲ肯定スル事実増加シツツアリ
- 2、硝子ニ依リ遮断セラル事実アルモノノ如シ(詳細調査中)

(イ)熱傷面ニ就キ

(ロ)エーテル、ベンゼン等発火セザリキト(於広島日赤病院)

E 要研究事項

前回報告ノ他(関係各部ヘノミ通知済)尚左ニ付検討ヲ要ス

- 1、放射線ニヨル直接焼死ノ有無
- 2、現地ニ於ケル放射性物質残存ノ有無。位置及其ノ消長(生物学的竝ニ地理学的検査)人体ニ及ボス影響、対策
- (3、農作物ニ対スル影響)

F 対策(追加)

- 1、適当ナル塗料(人、物ヘノ)ノ研究
- 2、煙幕展張効果
- (3、要スレバ立入禁止区域制定)
- (4、農作物ニ対スル対策)

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三四

陸、海軍合同特殊爆弾研究会決定事項(要項抜萃)

呉鎮守府衛生部

一、日時二〇一八一一〇自一〇〇〇至一六三〇

二、出席者

海軍側兵科、技術科(中央及現地、技研)軍医科(呉病一部長)

陸軍側兵科、軍医科、技術科(中央及現地)

理研仁科教授(原子物理)

京大荒勝教授(同)其ノ他

木村教授(病理)

杉山教授(同)



三、決定事項

1、弾種

原子爆弾乃至之ニ類以ノモノナラン(爆弾ニ非ズ)

2、熱傷ノ原因

熱傷ノ作用アルハ確實ナルモβ線及X線ノ附加ノ疑濃厚ナリ

持続時間ハ少クモ瞬間的ナラズ

3、火災原因

光線ニヨリ引火性物質ニ点火シ発火セルモノナラン

4、投弾形式

落下傘ト無関係

5、対策

(イ)警戒警報中ト難又一機ナリトモ油断セズ様

- (ロ) 角材又ハ丸材ノ被蓋ヲ有セル屋外待避壕ニテ可
- (ハ) 閃光ヲ見タラ伏セヨ(殊ニ遮蔽下ニ) 余裕アレハ屋外待避壕止ムヲ得ザレハ屋外空地ニ飛出シ伏スルコト
- (ニ) 露出不可少クモ下着ハ白トセヨ厚キモノ程ヨシ木綿ノ方ヨシ
- (ホ) 建築物

窓硝子ヲトレ日本家屋ハ地下壕舎式トスベシ

追記 會議終了直後阪大浅野教授(原子物理学)一行到着参会者ト談合呉病帰着後現地土塊ヨリ放射性物質ノ存在ヲ證認ノ旨報告アリタリ
(終)

八月六日廣島空襲ニ對スル研究会議事概要

二〇.八.一〇 呉工廠

一、日時、場所 八月十日 於廣島陸軍補給廠

二、出席者

陸軍 二總軍兵器部長(主宰者) 佐野參謀 新妻軍務局課員 其ノ他 兵器、医務、砲台、監視哨関係者、目撃者等

海軍 呉砲術部長、電氣部長、火工部長、大野技中佐呉病一部長、技研 北川技中佐、二總軍 花岡參謀呉警砲術長、呉衛生部 酒井医少佐、横砲校 大野少佐兵校教官、佐鎮傳聴者等

學界 理研 仁科、京大 荒勝、木村、杉原博士等

第三、議事大要

(陸軍側) 海軍調査以外ノ事項次ノ通

(イ) 落下傘投下点ト爆發点トハ別ナリ(宇品船舶部觀測)

區分	高度(米)	方位(密位)
落下傘	約九、〇〇〇	〇
爆發点	五五〇	七〇〇

(ロ) 日赤所在ノ「レントゲンフィルム」ハ全面的ニ感光ス、地下格納ノモノハ感高度薄シ

(ハ) 硝子ノ陰ニ在リシモノハ熱傷ヲ受ケザルモノアリ

(海軍側)

(イ) 敵機ノ運動及遠方ヨリ視タル状況 呉警砲術長

(ロ) 一般被害状況及其ノ考察 呉廠火工部長

(ハ) 落下傘付短波發信機 呉廠電氣部長

(ニ) 醫務関係 呉病一部長

(ホ) 呉鎮ノ採レル対策

説明シ多大ノ參考資料ヲ提供セリ

四、判決

(イ) 彈種、通常ノ爆薬又ハ焼夷剤ニアラズ 原子爆彈又ハ威力之ト同等ノ特殊爆彈ナルモノト認ム

(ロ) 爆發位置 護国神社南方三〇〇米、高度五五〇米

(ハ) 爆圧、爆心地上ニ於テ六軒ノ平方程度ト推定スルモ 尚検討ヲ要ス

(ニ) 火傷原因 光線ノ影響ナルモ尚β線及X線ノ影響アルベシ、光線ノ持續時間ハ瞬間ニ非ザルモノノ如シ

(ホ) 火災ノ原因 熱戦ニ依リ引火シ易キ物質(藁、黒幕等) 發火シ火災ノ原因トナルコトアリ

(ヘ) 投擲法 必シモ落下傘ヲ伴ハズ

五、對策

(イ) 一般ニ達スベキモノ

(一) 警戒警報中ト雖モ敵機上空ニ近接ヲ知ラハ掩蓋アル屋外防空壕ニ退避スベシ

(二) 間ニ合ハザルモノハ遮蔽下ニ低キ姿勢トナルベシ、閃光後直チニ空地ニ飛ビ出スベシ

(三) 服装ハ露出部ヲナクシ、厚着ヲナシ白色ノ下着ヲ着スベシ

(四) 火傷薬ヲ所持セヨ

(五) 硝子窓ハ負傷ノ原因トナルヲ以テ撤去シ、日本建築等ハ半地下式ニ改造スルヲ可トス

(ロ) 軍関係対策

(一) 投下機ノ外觀ノ特異点ハ不明ナリ。投下時急旋回セリ

(二) 基地飛行機ハ有蓋掩体若ハ地下ニ格納スベシ

六、爾後ノ要調査事項

(イ) 爆圧ノ検討

(ロ) 火傷程度

(ハ) 野外ニ在リシ兵器彈藥ノ損傷状況

(ニ) 寫眞材料ノ感光程度

(ホ) 落下傘附發信器ノ研究

七、其ノ他

(イ) 荒勝 (海軍)、仁科 (陸軍) ノ兩戦研ニ對シ兩軍ハ優先、強力ニ援助シ、兩者緊密ニ連絡シ成果ヲ速ニ得ル如ク最大ノ努力ヲナスコトヲ要望セリ

(ロ) 被照射物質 (同、鉄、亜鉛、食塩、砂等) ノ放射性トナクアルヤヲ調査ス

(ハ) 今後ノ兩軍調査事項ヲ交換ス (二總軍平野參謀、吳廠火工部長)

(ニ) 海軍ニテ空中寫眞撮影セバ陸軍ニ提供ス

F

軍事機密

八、六廣島市被害状況

昭和二十年八月十三日

中國軍管區司令部

目次

一、概況

二、空襲状況

三、軍部関係被害

四、一般被害

五、戦災後ノ状況

一、概況

今次爆撃ヲ蒙リタル廣島市ノ被害ハ破壊或ハ焼失セル建物約九十%死者約三萬以上 (恐ラクハ六七萬ニ上ルベシ) ニ及ビ特ニ軍隊諸官公廳等ノ中枢指揮機關ノ機能喪失或ハ潰滅ニ依リ爾後ノ復舊ニ甚大ナル障碍ヲ来セルモ漸次増援機關終結整備セラレ應急復舊業務ハ着々進歩シアリ目下死体處理ノ大部ヲ終了シ復舊重点ヲ重軽傷者ノ本格的収容シ吸水、照明、交通、通信機關等ノ恢復ニ指向シアリテ概ネ八月中旬末概成セラルハ豫定ナリ

二、空襲状況

(イ) 氣象状況

1、空襲直前

晴天南風ニ米程度高雲少量視程一五—二〇浬

2、空襲後

晴天南風七—八米局部的ニハ風速一〇—一五米ニシテ且旋風起ル

尚火災延焼中市内中央部一部ニ少量ノ驟雨アリテ西北部ニハ局部的ニ相当多量ノ驟雨アリ

(ロ) 敵機ノ襲來並ニ警報發令状況

〇七〇九廣島縣警戒警報發令

豊後水道及国東[クニサキ] 半島ヲ北上セル敵六型三機ハ廣島縣西部ヲ經テ廣島縣中部ヲ旋回後〇七二五逐次播磨灘ニ脱去セリ

〇七三一廣島縣警戒警報解除

〇八〇六大松永監視哨ハ西北進中ノ敵大型二機ヲ發見〇八〇九更ニ同哨ヨリ三機ト訂正

(イ) 軍管區部隊人的被害差表ノ如ク細部別紙ノ如シ

人員被害状況一覧表					
階級別—區分	健在	戦死	戦傷	行方不明	計
将校	151	81	330	307	869
准下士官	315	80	375	342	1,112
兵	1,718	331	1,963	1,719	5,731
文官・雇傭人	131	93	305	409	938
合計	1,315	585	3,973	2,777	8650

(ロ) 臨時動員部隊被害状況

1、第二二四師團司令部ノ師團長、幕僚負傷時ニ參謀二名共相當重症ナリ

獣醫部長以外の部長ハ戦死セリ

2、第二二四師團隷下部隊タル歩三四〇、工兵隊、通信隊、輜重隊ハ第一期充足人員タル基幹要員ノ大部死傷ス

動員担任各補充隊罹災シ動員實施ニ支障アルモノ一部ノ担任換ヲ行ヒ豫定ノ如ク二十日完結ノ見込ナリ

歩三四〇聯隊ハ編成地廣島オリシモ山口市歩兵第三補充隊ニ変更セリ

3、独混一二回旅砲兵隊、工兵隊、通信隊ハ第一期人員ノ充足ヲ終了シアリタルモノ共ニ殆ント潰滅セリ

4、独工一一六大隊ハ總人員ノ約半数死傷セリ

5、独工一一七大隊ハ輕傷者ノミニテ人員戦用品共ニ異状ナシ

6、第一五四師團砲兵隊（護路）ハ殆ント潰滅セリ

(ハ) 砲兵補充隊罹災後、現況上左記部隊ハ中部軍本状況ニヨリ警戒警報ヲ發令セントスルヤ〇八一五爆撃ヲ受ク

(ハ) 爆發時ノ状況

1、B-29 三機（B-29 三機小型一機ト称スルモノ或ハB-29 一機ト称スルモノアルモ詳細不明）ハ高度約八千五百ニテ市東北方ヨリ進入投擲セリ投擲後左方向ニ反轉シ急遽炸裂點ヨリ離脱セルモノ、如シ（敵側放送ニ依レバ炸裂時飛行機ハ約一六秒間隔シアリト）

2、投下物ハ特殊大型爆彈ナリ（三個或ハ落下傘三落下セリト称セルモノアリ）

3、炸裂状況

遠距離ヨリノ自認者ノ言ニ依レバ最初「マグネシウム」燃焼時ノ如キ赤黄色ノ鋭キ閃光ト同時ニ火煙ヲ以テ全市ヲ叩キ伏セタルガ如キ状況ヲ呈シ次デ爆發點ノ上方ニ白煙上昇シ同時ニ黒煙累々ト捲上ルヲ認ム

4、本爆彈ノ破壊威力ヲ推測スルニ家屋全壊半径約二—三軒半壊半径約四—五軒硝子窓破損半径約二十軒熱風ニヨル火傷半径概ネ左ノ如ク推測セラル

表皮一瞬ニシテムケタル程度ノ大火傷 約二軒

普通程度ノ火傷 約三—四軒

熱風ヲ感ズル最大限 約一五軒

尚家屋ニ対シ若干ノ燒夷効力ヲ有シ市内数個所ヨリ火災ノ發生ヲ見タリ

一、軍部關係被害

管區部隊ニ於テ再建セラレ度当該軍ニ連絡中ナリ

第一五四師團砲兵隊

独混一二四旅砲兵隊

(二) 軍管區司令部及地區司令部再編成ノ為其ノ大部ノ將校、下士官ヲ二十日迄ニ隷下各隊ヨリ補充スベク示達済ナリ

四、一般被害

(イ) 市内一般被害

1、人的被害

死者 約三萬

重輕傷者 約十萬

重輕傷者 約十萬

罹災者 約二十萬

其他行方不明 多数（死者大半ナルベシ）

負傷者ノ大半ハ火傷ニシテ普通爆彈ノ如ク鼓膜ヲ破リ眼球ノ飛出セルモノ皆無ナリ尚強力ナル光線ヲ發射セルモノ之ガ為失明セルモノナシ

2、物的被害

全焼 五五、〇〇〇

半焼 一二、五九〇

全壊 六、八二〇

橋梁全壊 約四

全焼セル主要建物

中國地方總監府、縣廳、市役所、控訴院、地方裁判所、地方専売局、中國海運局等、大本宮跡、廣島城、護国神社、縣病院、通信病院、鐵道病院、比治山御便殿ハ全壊

(ロ) 鐵道被害

1、人的被害

従業員約六〇〇名中死亡約七〇名重傷約一二〇名輕傷約二五〇名行方不明約七〇名

2、物的被害

焼失車輛 客車一〇 貨車四〇 電車六

大破 機関車一 客車三〇 電車二

小破 客車三五 貨車五五

焼失施設 廣島駅、横川駅、横川電車區、横川自動車區、廣島管理部

大破 廣島鐵道局、己斐駅、廣島操車場

其他橋梁、通信線若干被害アリ尚現在山陽線及藝備線ハ開通シアリ

(ハ) 通信被害

市内通信電話ハ全部焼失目下重要軍艦機關ノ復舊ニ勉メツ、アリテ十八日頃開通見込尚長距離電話ハ二十日頃開通見込警察電話ハ縣警察部ノ焼失ニヨリ縣下ノ通信連絡不能目下復舊ニ勉メツ、アリ

主要通信現業機關中消失又ハ大破セルモノ

廣島電氣通信工務局、同複送電氣通信工務局ハ同電話中継所、同中央電話局等現業員ノ死傷者約七〇%ナリ

(ニ) 工場関係

市内輕工場四分ノ三全壊

宇品、江波方面ノ重要工場ハ被害ヲ蒙ラザルモ勞務者ノ被害甚大ナル為一時創業ヲ中止スルノ已ムナキ現況ナリ

輕工場ノ復舊ハ当分見込ミナク重要工場ニ在リテハ要員ノ就業ヲ得、直チニ生産ヲ開始セラル、モ概ネ二週間後ト豫想セラル

主要ナル戰災工場左ノ如シ

東洋製罐、旭兵器、廣島瓦斯、帝人人絹

重要物資ノ既ニ郡部ニ疎開シアリタル為殆ント被害ナシ

五、戰災後ノ状況

第二總軍ノ戰災直後之ガ復舊業務ノ為在廣軍官民ヲ直接指揮スルニ決シ船舶司令官ヲシテ之ガ業務ヲ統括處理セシメタリ船舶司令官ハ異常ノ熱意ヲ以テ之ヲ指導シ為二軍官ノ中枢機能多大ノ損害アリタルニ拘ハラズ恢復ハ着々進歩セリ軍官司令官ノ御着任ニ伴ヒ總軍ノ直接指揮ヲ解カレ本来ノ系統タル軍管區業務ニ轉移スルコトナリタリ而シテ船舶司令官ハ日々防衛會報ヲ實施シ其ノ対策ニ遺憾ナキヲ期シアリテ民心ノ動向ニ關シテハ特異事象ヲ見ズ逐次平靜ニ復シツ、アルモ今次敵空襲ニヨル慘狀就中敵使用爆彈ニ對シテハ極度ノ恐怖心ヲ抱キアリ今後戰意ノ昂揚ニ勉ムルト共ニ防衛都市廣島市ノ再建ニ關シテハ大局の見地ニ立チテ地方官廳ノ指導スルノ要アルモノト認ム

昭和二十年九月

廣島市ニ於ケル原子爆彈ニ關スル調査

(一般の調査)

〔附録 被害地寫眞帖〕

呉鎮守府

内容

第一概説

一 經過

二 成果

第二詳論

一 敵機ト當日ノ事情

- イ 氣象狀況
- ロ 鉄器ノ行動ト防衛對勢
- ハ 爆発前後ノ敵機ノ行動

二 投下物

- イ 投下ノ時期ト爆発ノ時期
- ロ 落下傘付超音波発信器
- ハ 爆発物本体

三 爆発時ノ徴候

- イ 閃光ト熱感
- ロ 爆発音又ハ爆風
- ハ 爆煙又ハ塵煙
- ニ 敵機発見ヨリ爆発生起迄ノ実験談三例

四 被害發生ノ狀況

- イ 人体火傷
- ロ 家屋倒壊
- ハ 火災

五 被害ノ範圍

- イ 爆心ノ判定
- ロ 建造物及一般地物被害
- ハ 人的被害
- ニ 其他ノ生物ノ被害

六 爆発本体ノ究明

- イ 爆風威力ノ検討
- ロ 原子爆弾タルノ実証
- ハ 原子爆弾ノ原理的可能性
(附葉四葉添)

「終」

調査者

呉廠火工部
砲填實驗部

報告作成者

海軍大佐 三井 再男
海軍少佐 神津 幸直
海軍技術大尉 西田 亀久夫

廣島市ニ於ケル原子爆弾ニ関スル調査 (一般的調査)

第一概論

一、経過

八月六日米國機ガ廣島空襲ニ使用セル特殊爆弾ニ関スル調査ハ主トシテ、

- 一、爆發源ノ位置及使用數量ノ推定
- 二、危害効力ノ原因及其ノ程度ノ判定
- 三、市街地被害狀況ノ概観及其ノ特徴ノ把握
- 四、都市防衛対策ノ樹立

等、諸項ヲ基準トシテ現地踏査ヲ行ヒ其ノ蒐集セル資料ニ基キ数次ノ研究会又ハ調査ヲ行ヒ更ニ

- 五、敵機ノ行動及投下物ニ対スル事實調査
- 六、特殊爆彈實用時ノ各徴候ノ綜合判定
- 七、爆發物本体ノ各種可能性ノ検討

等問題ニ関シ可及的廣範圍ノ判定資料ヲ得。以下此等ヲ綜合統一シ若干ノ取捨ヲ加ヘテ報告トシテ取纏メタリ

尚本資料ノ根據トナシル調査、研究会及文献ヲ左ニ採録ス。

〔調査隊〕 八月六日一七三〇—二二〇〇 呉廠調査隊 五名

八月七日一〇三〇—一六〇〇 呉廠調査隊 十一ヶ班

八月八日〇九三〇—一四三〇 大本営海軍部調査團

〔研究会〕 八月七日一八〇〇—二二三〇 呉鎮調査隊

八月八日二〇〇〇—二三〇〇 大本営海軍部調査團

八月十日陸軍補給廠 二總軍、陸軍々務局、砲台監視哨、呉鎮、呉警、呉廠、一技廠、仁科、荒勝、木村

〔文献〕 ①八月六日廣島空襲被害状況調査報告概要（八月八日呉鎮機密第三九六）

②八月六日廣島空襲被害状況竝ニ対策（第二報—第四報）

③中野及板城探照燈台廣島爆撃目撃状況（呉海軍警備隊）

④八、六廣島被害状況（八月十三日中国軍管区司令部）

⑤敵新型爆彈調査ニ関スル意見（八月七日呉廠電気實驗部長）

⑥廣島市爆撃ニ関スル報告（廣島文理科大学三村教授他二名）

⑦原子爆彈ノ可能性ニ就イテ（八月十三日京大野間氏講演）

⑧廣島市街地土壤β線放射能測定成績（八月十二日於西練兵場）

⑨中國新聞記事

（①乃至⑨番號ハ本文中ニ其ノ引用ノ出所トシテ附記セリ）

二、成果

イ 爆撃機數ハ大型三機ニシテ内一機ハ別行動ヲ取レル算大ナリ。

ロ 特殊爆彈ハ別行動ノ一機ニヨリ投下セラレ他ノ二機ハ落下傘付超短波発信器ヲ降下セシメタルモノノ如シ。

ハ 特殊爆彈其ノモノノ確實ナル爆發經過ハ不明ナリ。

ニ 超短波発信器ハ氣圧変化ニ依リ發信電波周波數変化スルコトヲ知レルモ爆發機構ト關係不明ナリ。

ホ 爆発ハ廣島市内護國神社南方約三百米高度約五百五十米ノ上空ニ於テ行ハレ閃光、爆風及各種放射線ヲ發生セリ。

ヘ 閃光及放射線ハ瞬時ニシテ半径に於テ以內ノ人畜ニ被害ヲ与ヘ熱傷又ハ原子爆彈症ヲ發生セリ。

ト 爆風ハ閃光ヨリ遅レテ爆心ヨリ等方的ニ伝播シ半径に於テ以內ノ木造家屋ヲ全壊セシメ遠ク十數軒迄硝子破壊ヲ生ゼシメタリ。コノ為人員ヲ爆風死及破片傷等ヲ發生セリ。

チ 爆彈ノ焼夷力及倒壊家屋内ノ火氣ニ依リ爆發後數分乃至數十分ヲ経テ各所ニ火災發生セリ。当初ノ火勢劣弱ナリシモ防火機能消滅セル為被害地域ノ大部分ヲ消滅セリ。

リ 各種特徴ヲ綜合スルニ原子核破壊ノ莫大ナル發生「エネルギー」ヲ應用セル特殊爆彈ナルコト確實ナルモ實際構造ハ原理的推測ノ範圍ヲ出デズ。

第二詳論

一、敵機ト當日ノ事情

イ、氣象狀況

晴天、高雲少量 視程一五—二〇軒 南風に米程度（④）

（雲量一 視界三〇軒 南々東風 ③）

ロ、敵機ノ行動ト防衛體勢（附面第一參照）

八月六日 〇七〇九 廣島縣警戒警報發令 豊後水道及國東半島ヲ北上セル敵大型三機ハ廣島湾西部ヲ経テ廣島縣中部ヲ旋回

〇七二五播磨灘ニ脱去ス

〇七三一廣島縣警戒警報解除

〇八〇六松永監視哨ハ敵大型二機ヲ發見

〇八〇九同哨ヨリ三機ト訂正（以上④）

〇八一四中野探照燈臺西條方面ニ大型樹葉音を聴取ス

○八一五西條上空B29進行方向西

(十二種及双眼鏡内同一視野ニ二機ノミヲ認ム中野上空通過時稍、南寄り高度七千間隔二百乃至三〇〇米(以上中野探照燈台)

(西條上空一機ノミ発見)(板野探照燈台)

ハ、爆発前後敵機ノ行動

各種ノ所見一致セズ不適確ナルモ概ネ次ノ如シ

④ノ所見 B29 三機(或ハ大型三小型一トイヒ或ハ大型一トモイフ)高度八千五百東北ヨリ廣島上空ニ進入投擲シ後左方向ニ反轉翻脱セルモノ、如シ

③ノ所見 ○八一七B29 二機雁行中先頭機右旋回ス(中野ヨリ望見セルマ、ノ光景)旋回中投擲セルモノアリ最初ノ一機開午セズ

後三機ノ落下傘開ケリ後續機ハ先頭機ヨリ一乃至二秒後レテ垂直旋回ニ近ク左ニ急旋回ス此ノ後續機旋回始メントスル時閃光アリ

③ノ所見(板城探照燈台) ○八一七廣島重空ニテ変針ト思ハレル頃落下傘三箇投下七倍稜鏡ノ一分劃位ニ変針中ノB29 見ヘタル瞬間強烈ナル閃光ニ驚ケリ(板城ヨリ望見センママノ光景)

爆撃後ノ行動ヲ見タル者少々○八二〇板城探照等ハ右旋セル敵一機ガ東方ニ変針シ中野北方ノ雲中ニ消滅センヲ認メタリ

以上ヲ綜合スルト總機数ハ三機ナルベク及市内ノ觀察者或ハ一機ト云ウト三機ト話モ不同ナリ中野、板城両探照燈台其双眼鏡ノ視野狭少ニシテ三機中一機ガ高度或ハ進路ニ於テ別行動ヲ採ラン為別目標ヲ捕捉セント非ズルトノ推定モ可能ナリ之ハ前述ノ松永監視哨ノ初メ二機ト云ヒ後三機ト訂正センコトニモ關聯ス市内ニテ爆撃直前敵一機ノミヲ認メタルモノ三例アリ(⑤)市中ニテ三機ヲ見タリト謂フモ落下傘三箇ト機数トヲ關聯セシメ漠然ト事後判断ヲ加ヘ居レルモノヲ見ルハ處々ナリ尚小型一機ガ爆撃直前南方ヨリ飛来シ低空ニテ頭上ヲ通過セリトノ意見モアリ(第二總軍參謀長談)

二、落下物

落下物ニ就イテハ落下傘付ノモノ三個トイフ意見一致シ(別々一箇傘不開ノモノアリトアル中野探照燈台所見アルモ概ハ投下用ノ付属具ナルヤモ知レズ)

其ノ他確実ナル意見モ居ナラズ而ルニ此ノ三箇ハ爆発物ナラザルコト判明セリ

イ、投下ノ時期ト爆発ノ時期

中野探照燈台(③)ハ○八一七東方又ハ東北方ヨリ廣島市方向ニ侵入スルヤ前述ノ如ク先頭機右旋回シ落下傘投下後續機ハ一乃至二秒後レテ急左旋回セントスルヤ閃光ヲ認メタリ(附圖第二参照)

廣島文理科大生久間助教授(⑥)ハ大學南側ヲ歩行中爆音ヲ聞キ上空東方約十度二三個ノ白ノ日光ヲ反射スル物体ヲ認ム。此ノ時其ノ西方ヤ久十五度ニ機影一個北進(落下傘略同一高度)スルヲ認メ之ヲ目シツ、アリシニ暫時ニシテ閃光ヲ認メタリ

廣島女學院院専門學校生徒(⑥)ハ海田市ニ於テ瀨野方向ヨリ一機飛来シ廣島市上空ニテリ続キ三個白キ物ヲ投下落下傘付ナルヲ確認シ間モナク閃光ヲ感ズ

以上ヨリ敵機ハ廣島市上空ニ侵入シ右旋回北進セル敵機ヨリ三個投下セルモノナルハ確實ナランモ爆発閃光迄ハ一乃至二秒トイヒ暫時トイヒ定ムベカラザレモ路上通行者ノ開傘ヲ目撃シテ閃光ヲ感ジタル迄ノ話説ハ少ナクモ数秒以上後ノ時間々隔ヲ認メザルベカラズ

ロ、落下傘付超短波発信器(附録高眞帖参照)

三個ノ落下傘付投下物ハ廣島市北方約十七料ノ安佐郡龜山峠附近山中ニ三個共殆ンド毀損ナク発見セラレタリ

外貌ハ輕金屬性ノ円筒ニシテ一端ヲ傘ニテ垂直ニ懸吊シ下端ハ半球形ノ有機「ガラス」ニテ覆ハレ内部ノ時計式発停装置ヲ透視スルヲ得。円筒内部ハ強力ナル電池ト超短波発信装置ノ一郭ヲ有シ有機「ガラス」内ノ電気装置及其ノ末端ニテ外郭ニ露出セル気圧板ト關聯シテ外圧変化ニ應ジテ周波数ヲ変化シツ、強力ナル電波発信ヲナス本装置附圖第四ハ電路系統ハ附圖第四ノ如シ「アンテナ」ハ円筒ガ傘ニ接続スル端ニ出口ヲ有シ傘ト共ニ上方ニ展帳セルハモノ、如シ

傘ハ人造絹布製ナルモノ、如ク展開直径十一、六米更ニ全重量三十一匁ナルヲ以テ推定落速毎秒約二米ナリ

本装置中ニ爆発物ナリ特殊爆彈ト如何ナル關係ヲ有スルヤ不明ナリ

ハ、爆発物本体

本件ニ關シテハ何等實証的資料ヲ得ル能ハズ(申読不能)

時、認メタルモノ少々且落下傘ハ二機中ノ一機ヨリ行ワレ而モ廣島市東方高々度ニテ爆発生起時迄ノ時間的余裕少キヲ以テ爆発物投下ハ別行動ノ一機ニ依リ行ワレタル算大ナリ

三、爆発時ノ徴候

体験者ト望見者トヲ問ハズ瞬時ノ突發聲ナルヲ以テ事後ノ判断不明確ニシテ所見一致セズ概ネ次ノ如シ

イ、閃光ト熱感

一般者ノ体験ハ「マグネシウム」ヲ空ハパイニ燃焼サセタル如キ光景トイヒ或ハ青白色或ハ黄赤色ナリト稱ス一般ニ強度ノ閃光ノ色感ハ直接印象ノ他補色残像ノ印象ヲ相加セラレ必ズシモ明瞭ナラズ著シキ幻感作用ナク眼症ヲ發熱セルコトナキハ光源巨大熱感ハ一般ニ閃光輻射ハ同時的ナル他ニ熱風ヲ相當レテ感知セルモノアリ閃光ノ特徴ハ瞬時的トイフモ数々ノ事実ヲ綜合スルニ二乃至四秒位トイヘル説妥当ナルベシ(②)尤モ閃光ハ瞬時ニシテ熱感ノミ持續セルモノナルヤ知レズ

更ニ附記スベキハ中野探照燈台土中壕内ノ電話器ハ閃光ト同時ニ強烈シキ雑音ヲ聞キ又身体ニ微弱ナル感電ヲ經驗センコトナリ(③)

ロ、爆発音及爆風

爆風ハ何処モ例外ナク強烈ヲ感知セルモ著シク急峻ナル疎密波ト云ハンヨリハ暴風ヲ以テ巨大ナル運動気流ガ近く衣服帽子ヲ吹飛バサレ或ハ柔軟ナル竹ニ至マデ完全ニ吹き倒サレ「トタン」板ノ廣ク散乱セル等著シキ特徴アリ

爆風ハ爆心ヨリ隔タルニ從ヒ閃光ニ後レテ傳播セルコト殆ンド例外ナシ例ヘバ廣島文理大学南部（約二軒）ニテ数秒（⑥）、十二軒隔テタル処ニテ約三十秒（②）ヲ経過シテ爆風ヲ感ゼリトイフ

聊カ奇怪ナルハ爆心ヨリ二軒以内ノ鷹野衛附近或ハ駅ニ至圍内ニ於テ爆発音ヲ聞カザリシトイフ者少カラズ爆発ト同時ノ破壊音ニ紛レタルカ爆発源ニ近キ為ノ特異現象カ或ハ全クノ心理的錯覚ナルカ不明ナリ（②）

但シ遠距離ノ地ニテハ明カニ山野鳴動ノ爆音ヲ聞キタリ（⑤③）

ハ、爆発マタハ塵煙

廣島市内ニ於テハ爆発ト同時ニ一面暗黒トナリ砂塵蒙々トシテ視界ニ米程度トナリ息苦シクナリ間モナク太陽ヲ認め得タリト云フ（⑤⑥）遠隔地ヨリ望見セル状況ハ爆発後殊ニシテ白煙天ニ宙シ其ノ状初メハ白色ノ柱ニ茸状ノ笠ヲ戴キ次第ニ笠ヲ拡大シ上方ニ持上テ爆発後四分ニシテ頂高約六千八百米（呉ヨリノ實測）約八分後ニハ上部ノ笠ノミ一團トナリテ上方ニ昇リ柱ハ崩レテ次第ニ笠ト分離セリ笠ハ白色ナレド淡紅色ヲ帯ビ柱ハ白ニ鼠色混ジリタリ砂塵ヲ包含セルモノナラン（呉ヨリノ観測）

ニ、敵機発見ヨリ爆発生起ノ望見談三例（⑤）

1、呉廠工具 於古江（広島西方約四軒）

敵一機広島上空ニ来リ光強キモノヲ投下（又ハ発射）セリ最初ノ照明彈ヲ投下セリト認めタルモ其ノ形状ハ煙突ヨリ出ル煙ノ輪ノ如ク次第ニ降下シテ漸次拡大スルト共ニ光カ増大ス直径廣島市ヲ蔽フト思ハレル程度トナリ炎ハ太陽ヨリモ明ルクナルヲ以テ危険ヲ感シ伏セリ

2、呉廠工具（三名） 於安佐郡伴村奥畑（広島北西約十軒）

熱氣ヲ感ズル光線ヲ感ズル瞬間空ヲ見レバ敵機ヲ中心ニ快晴ノ空色ヨリ濃キ色ノ円形ノ波動ガ中ニ二箇所ノ白煙ヲ混ゼ大キク拡ゲルヲ望見ス直チニソノ場ニ伏スト同時ニ大音響ヲ一回聞テ廣島市方向ヲ白煙ノ立上ガルヲ認め

3、呉校技術士官 於広島駅前停留所

南北ニ立並ブ列中ニテ直上ヨリ北寄りニ高々度三、右旋回中ノB29 ラシキ敵機ヲチラト認めタル瞬間其ノ後方（南側上空）ニ照明彈炸裂ノ如キ烈シキ閃光（〇。一乃至〇。二秒間）ヲ感シ照明彈投下ト判断シ其ノ火炎ヲ避クル為メ駅建物内ニ退避セント数歩前進セントスルト背後ニ爆風ヲ受ケタルメ以テ直チニ地面ニ伏セテ顔面ヲ覆フ

四、被害発生ノ状況

1、人体火傷（又ハ熱傷（②）（尚本件詳細ハ今回報告中ノ『医学的方面』ノ部参照）火傷発生ニ次ノ特徴ヲ認め。但シ火災ニヨル二次的モノヲ除ク。

- (1) 屋外ノ者殆ンド被害シ屋内又ハ物蔭ニテ免レタルコト多シ。
- (2) 熱傷部ニ方向性アリ。即チ爆心ニ面セル側甚シク陰側ハ侵サレズ。
- (3) 選考ニ気付キクルト同時ノ二乃至四秒間位ニ皮膚面ニ熱氣ニ感ズ。
- (4) 同一面内ニシテ白色部侵サレズ黒色部ノミ焦ゲタルコトアリ。
- (5) 皮膚露出面甚ダシク厚ク被ハワレタル程被害ナシ
- (6) 白色面ノ輻射線反射ニ依ルモノカ白壁前ノ草一様ニ両面焦ゲタルアリ。
- (7) 同一部ニテモ熱傷度ニ強弱アリ

何レノ場合モ閃光発生ヨリ熱感ハ直チニ発生シ若干持續シ、其ノ短時間内ニ熱傷ヲ蒙レルコト明ラカナリ。但シ閃光発見後直チニ物蔭ニ入りテ火傷ヲ免シ、同一場所ニテ退避セガリシモノ火傷セル例少ナカラザルハ熱傷進行ニ若干時間ヲ必要トスルノ推定セラル。然シ之ハ爆心ヨリ遠距離ニテ比較的ハ火傷軽度ナリシ地方ニ適用セラルハコトナリ。

次に（1）乃至（6）ノ特徴ハ熱傷原因ガ完全ニ輻射的ニ存在セシコトヲ示スモノト云フベク、而モ被服面ノ色彩ニヨリ熱効果ニ選擇性ヲ示スコト或ハ反射性アルコト等何レモ注目スベキ特徴ナラン。爆心ヨリノ遠近ニ関セズ閃光ト同時ニ熱傷ヲ蒙レルコトモ熱輻射的ナル一証據ナラン。

ロ、家屋倒壊

閃光ト同時ニ何人モ伏臥人ハ退避スルヲ常トスレバ爆風ニヨル家屋等ノ破壊状況ヲ詳細ニ觀察セル者ナシ。唯轟然タル音響ト共ニ一瞬ニ崩壊シ正氣トナレル時ハ殆ンド其下敷ナリシ実状ナリ。家内ヨリ直チニ脱出シ崩壊ノ下敷ヨリ免カレタル者殆ンド皆無ナリシハ倒壊作用ノ極メテ急速且威力的ナリシヲ知ル。蒙々タル爆煙砂塵ノ霽ルハヤ既ニ一切ノ破壊終了セルヲ皆謂ヘリ。

倒壊状況調査ノ際一方的強圧ニ依ルモノカ或ハ暴風ノ二屋根ヲ持上テ風ヲ孕ミ柱梁ヲ分解セシメタルモノカ觀察ヲ詳ニセシモ爆心附近ハ必ズシモ此ノ區別ナク全壊半壊ノ限界附近ニ後者ノ例多キヲ見タリ。

ハ、火災

本特殊爆彈ニハ一般ニ著シキ焼夷性アリトハ認め難キ实例多シ。熱傷著シク発生セルタメ焼夷彈ト誤解セラルハモ一般家屋ニ対スル火災ノ副次的原因ニヨルモノ多クヲ認めラル。被害直後市内ヲ踏査セシ検分ニハ倒壊後相當時間ヲ経テ発火セル記録アリ。爆発後三十分頃市中ヲ通過ノ際四、五百米置キニ小火発生スルヲ認

メ後忽チ火災拡大スルヲ見タル例アリ。(5) 通常早クモ数分、遅キハ数十分ヲ経テ火ノ手ヲ見タリトセリ。

但シ、破壊ガ全ク豫想ヲ裏切りテ短時間ニ終結シ、且ツ多大ナ数ノ家屋ニ一旦下敷ニナリ専ラ之ヨリ救出スルニ急ニシテ心ニ餘裕ナク更ニ火傷患者ノ惨憺タルアリテ市民ヲ絶望ナラシメタル等殆ンド積極的消火作用ヲ放棄セルコトニヨリ悉ク焼失セシメタル結果トナレリ。(其ノ一根據トシテ全壊領域ニハ例外ナク焼跡ヲ見、半壊領域ハ火災ノ拡大セルコト僅少ナリ) 被害地ヲ踏査シテ悉ク一瞬火災ナリシヲ想像スルハ真相ニ非ズ。例ヘ 廣島城及大本營跡等類焼ノ眞ナキ建物ハ比較的爆心地下記ニ拘ラズ單ナル倒壊ニ終レル実例アリ。然レドモ特殊爆撃ニヨル火災原因モ無キニ非ズ寧々特異ナル現象トシテ注目ニ値スルモノアリ。例ヘ 爆撃直後附近ニ見ルベキ火災ナキニ街路ノ電柱ガ局部的ニ虫喰ヒノ如ク火ヲ吹き居リ炭火ノ如ク次第ニ火ノ浸透シ行ク例或ハ木橋ノ橋桁、鉄橋ノ枕木等ガ燻レル事

実(5) 或ハ附近ニ全ク火災ノナキ遠方ノ山林ニ点々山火事ヲ生起セル事等單ナル輻射熱トハ別ニ相當広範圍ニ撒布セラルハ火点ノ存在ヲ保証スルモノナリ。爆撃直後地上ニ蛍光ノ如ク青白ク弱キ光ヲ発スル物質ノ散布セラル事実ヲ市内泉邸附近及江波飛行場ニ聴取シ又己斐附近ノ木造家屋ノ棟木ニ同様ニ火點發生シホニテ容易ニ消滅セザリシヲ傳ヘタリ。(此ノ青白キモノハ皮膚ニ附着セバ水泡ヲ生ジ次第ニ蔓延シ痛感アリトイヘリ。同様ノ事ハ長崎ニテ聞ケドモ此ノ方痛ミナシトイ(リ) 熱傷發生ト同一原因ノ火災ヲシキモノアリ。藁屋根、黒幕等ガ爆撃直後発火セル実例アリ。(1)

五、被害ノ範圍

イ、爆心ノ判定

当初被害状況ヨリ威力ヲ推定センガ為、主トシテ爆撃源ノ位置ト数量ヲ求メントシ廣島全市ノ各建物及樹木ノ崩壊状況ト其ノ方向性ヲ普ク調査ヲシニ何デモ爆心ガ唯一ニテ概ネ紙屋町ト相生橋ノ中間ニシテ護國神社南方三百米附近ナルコトヲ確メ得タリ。更ニ広島文理大構内及牛田方面ニテ熱輻射ニヨル木材表面炭化ガ輻射線障礙物ノ比較的明瞭ナル陰影ヲ留メ居ルヲ発見シ之ヨリ略正確ニ輻射源ノ方向ノ仰角ヲ決定シ、同地点マデノ水平距離ヲ假定シテ爆心ノ高度ヲ求メ夫々五百八十米及五百十米ナル値ヲ得タリ。之ヲ以テ炸裂高度約五百五十米ト判定シ監視哨ノ報告ト一致スルヲ確カメ得タリ。

ロ、建物及一般地物ノ被害

(1) 概観スルニ爆心ヲ中心トシテ等方的ニ被害波及セルヲ認メラル 就中構造物トシテ統計的觀察ノ對象トナルハ日本式木造家屋ニシテ一全壊(完全ニ倒壊シ、殆ンド棟、梁、柱等ノ原構造ヲ留メザルモノ) ト半壊(一部崩壊又ハ著シク傾斜スルモ完全ニ分解シ居ラザルモノ) トノ領域ハ比較的明瞭ニ指摘シ得。其ノ境界ハ附録寫眞帖ニ示ス如ク爆心ヨリ半径約二軒ナリ。

半壊ト稱シ得ベキ限界ハ半径四乃至五軒、硝子窓破損ハ東方ハ海田市西方ハ草津、北方ハ壁附近迄ニシテ七乃至十三軒程度ナリ。

倒壊家屋ハ廣島城、大本營跡ヲ除キ全壊区域ハ殆ンド全部火災ニテ消滅セルモ、半壊区域ハ特殊ノ領域ヲ除キ火災ノ發生少シ。

(2) 洋式建造物例ヘ 鉄筋「コンクリート」造リハ極メテ強キナルコトヲ立証セリ。爆心数百米内ノ至近距離ノモノハ受圧面崩壊又ハ天井、梁、挫屈等ヲ生起セルモ、概ネ原型ヲ維持シ得タリ。(附録寫眞帖参照)

但シ窓、扉悉ク吹拂ハレ内部ハ火災ヲ發生セルモノ多シ。大ナル建物ガ燃エル際ハ屢々爆撃音ヲ聞ケリト謂フ ⑤熱風ニヨル發生「ガス」充滿シ爆撃燃焼ヲ起セルモノナラントノ説アリ。

(3) 橋梁ハ廣島市ニ多数アレドソノ構造上比較的被害少ナク、全壊ハ僅カカニ四箇所餘リト云エリ。爆心至近ニアリシ相生橋モ欄干崩落、一部陥没或ハ亀裂セルモ猶當分ノ使用ニ堪ヘル状態ナリ(附録寫眞帖参照)

(4) 船舶ニ関シテハ太田川所在ノ小型和船ニハ殆ンド被害ノミルベキモナク又字品方面ハ遠隔ニテ全ク威力圏外ニアリシ為其ノ例ヲ聞カズ

(5) 護岸工事ハ爆心ニ近キ相生橋ノ橋畔片方ニ多少ノ陥没ヲ生起セル他崩壊ノ跡ヲ認メズ

(6) 爆心ヨリ五百米附近ニテモ半土中式ニシテ丸太柱ヲ使用セル堅牢ナル防空壕ハ完全ニ爆風ニ堪エヘ得タリ。天井ヲ薄板等ニシテ渡シ、其ノ兩側ノ固メ不充分ナルモノハ何レモ天井陥没セリ(附録寫眞帖参照)

(7) 樹木ハ木造家屋全壊区域マデハ殆ンド全部板吹拂ハレ、大部分ガ転覆又ハ挫折セリ。爆心附近ハ直径四、五十糎ノ松、樟等モ吹折レ、泉邸附近(距離約千三百米)ニテモ直径三、四十糎ノ檜、直径二十糎ノ竹等ガ幹ノ中間ヨリ吹倒サレタリ。

(8) 電柱、架空線柱等、木造ハ固ヨリ、鉄塔構造式ノモノモ爆心ヨリ二軒附近迄倒壊又ハ屈曲セリ。

(9) 爆心ヨリ三・五軒隔テタル飛行場ノ無掩蓋体内ノ金屬製双発高練習機(陸軍)ハ胴体構造円管及外銃座屈シ、掩体外ニアリシ小型戦闘機ハ座席部ト方向舵(布張)炎上シ居レリ。掩体上面ヲ竹・網ニテ覆ヘルモノ良好ナルモノノ如シ

(10) 被害統計(④ニ依ル)

全焼 五五〇〇〇戸 全壊 六八二〇戸

半焼 一二六〇〇戸 半壊 三七五〇戸

(全焼ハ全壊又ハ半壊後全焼セルモノヲ含ム)

焼失又ハ崩壊セル官公署、施設及工場

中國地方總監府、廣島文理大、広島高師、縣廳、市役所、控訴院、地方裁判所、地方専売局、中國海軍局、大本營跡、廣島城、護國神社、縣病院、通信病院、鉄道病院、広島駅、横川駅、廣島鉄道管理部、中央電話局、東洋製罐、旭兵器、広島瓦斯、帝人絹

ハ、人的被害

警戒警報解除中ニシテ全ク退避セルモノナク朝ノ始業時ニテ人員ノ都心集中行ハレタル後ナリシ為、人的被害ハ豫想以上ニ惨烈ヲ極メタ。八月二十五日現在ノ統

計 (9) に依レバ

死者 (男二、一一二五名、女二、一二七七名、性別不明三七七三名) 計四、六一八五名

行方不明 (男八五五四名、女八八七五名) 計一、七四二九名

重傷 (男九八五七名、女九八七四名) 計一、九六九一名

軽傷者 (男二、一九四七名、女二、三〇三二名) 計四、四九七九名

罹災者 (男一〇、三六四九名、女一三、二〇〇八名) 計二三、五六五六名

本統計ハル後ノ死亡者ヲモ含ムモノニシテ、所謂原子爆彈症トシテ研究中ノ難症發生シ幾多ノ問題ヲ提供スルモノナリ

人的被害ノ内内容及其ノ各種ノ特徴ハ本報告別冊「醫學的方面」參照ノコト

ニ、其他ノ生物ノ被害

的確ニ此ノ見地ヨリ調査セル資料ナク詳細不明ナルモ、確實ナル二、三ノ兆候ヲ挙グレバ次ノ如シ

- (1) 市内泉邸池中ノ鯉多数死亡浮上セリ
- (2) 太田川ノ分岐点附近 (白島) ノ河中ニハ魚類反死状態ニテ浮游セリ
- (3) 比治山山林中ニテ屢々鳥類ノ屍ヲ発見セリ
- (4) 災害三日後市中踏査ノ際モ、人間以外ノ如何ナル生物ニモ遭遇セズ死屍累々タルニ一匹ノ蠅等ヲ見カケズ
- (5) 災害後兩三日市中ニ起居セル者ハ虫蚊類ヲ経験セザリシトイフ
- (6) 市内到ル處ニ牛馬ノ死体ヲ発見セリ

六、爆發本體ノ究明

イ、爆風威力ノ検討

本爆風威力ノ最モ顯著ナルモノハ廣大ナル爆風威力圏ナリ。家屋全壊半径約二軒トシテ、地上大藥爆發式ニヨリ通常炸藥量ニ換算セバ優ニ数万噸ヲ凌駕スベシ。米國モ八月七日「ホノルハ」放送ニヨリ TNT 二千噸ニ相當スル爆風威力アリト宣傳セリ。而モ敵機極メテ少数ナリシコトハ特殊ノ「エネルギー」源ヲ使用セルコト必セリトナス。

ロ、原子爆彈タル實證

米國ノ宣傳セシ如ク原子爆彈「エネルギー」ヲ其ノ根源トスルトセバ、使用地或ニ顯著ナル放射能反應ヲ檢知シ得ベキニ付、各方面ヨリ之ヲ實驗セラレタル處、何レモ爆心附近ニ其ノ兆候ヲ発見セリ

- (1) 日本赤十字病院 (爆心ヨリ約二軒) 所在「レントゲンフィルム」ハ全面的ニ感光シ居レリ、地下格納ノモノハ感高度弱シ。
- (2) 「ガイガー・ミュラー」計數管ニ依ル放射能測定ニ於テ次ノ成果ヲ得タリ

八月十一日 市内各地土壤ハ放射能 (回/分) (2)

護國神社 一二〇

中國軍管區司令部 四〇

西練兵場入口 九〇

八丁堀 三七

己斐橋 九〇

宇品運輸部 三七

「註」自然放射能ハ八、二七ナリ 阪大 浅田教授測定

- (3) 其ノ後市内所在ノ被照射物質 (鉄、砂、人骨等) ニ放射性アルコト判明セリ (9) ハ原子爆彈ノ原理的可能性 (7)

「ウラニウム」原子ノ原子核ヲ中性子ニテ破壊シ S r T X e 及中性子ニ分解スルトキ、此ノ中性子ニ依リ更ニ次ノ U 原子ヲ破壊スル如キ連鎖反應ヲ生起セシメ得レバ莫大ナル「エネルギー」ヲ放出スル爆發反應ヲ考ヘ得。

然レドモ此ノ連鎖反應ヲ生起スル為、中性子ノ通過スベキ酸化「ウラン」ノ厚サニハ最小値アリテ、速キ中性子ヲ其ノ儘使用セバ酸化「ウラン」ノ量莫大トナルヲ以テ、適當ナル方法ニ依リ中性子ヲ反復反射セシメテ使用スルカ、或ハ中性子源ヲ水又ハ「パラ クオン」等ニ依テ包容シ極メテ遅イ中性子トシテ使用セシムレバ略實用的ナ量ニテ可能トナル。又何等カノ方法ニテ U (二三五) ノミヲ分離シ得タリトセバ遅イ中性子ニテ連鎖反應セシムルニハ一乃至一、五噸ニテ足ルコトモ推定セラル。

然レドモ以上ノ原理ヲ實現スベキ技術的ナル各種ノ問題ハ今後ノ研究ニ俟タザルベカラザル状態ナリ。

酸化「ウラン」ノ原子破壊ニ依リ得ラルベキ「エネルギー」ハ一噸當リ、約 1.6×10^{10} 「キロカロリー」ニシテ TNT 爆藥ノ約千七百倍ナリ。

「終」

附図第一 広島附近関係地名



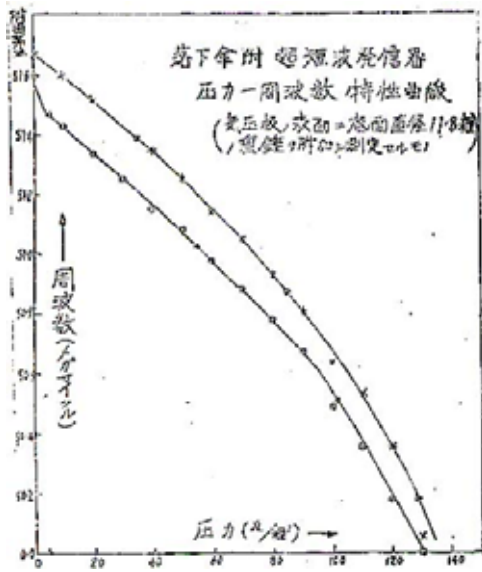
附図第二 中野探照燈台ヨリ敵機望見状況

(8月6日 0815頃ヨリ)

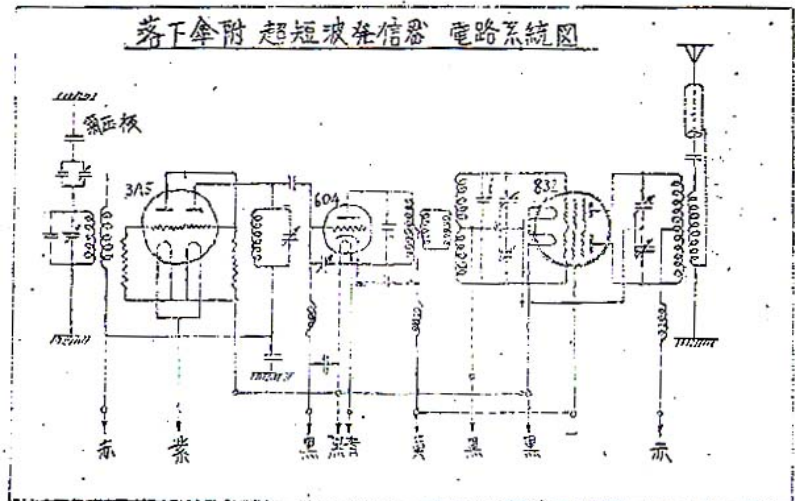


附図第三 落下傘付長短波発信器 圧力-周波数 特性曲線

(気圧板ノ表面ニ底面直径11.8 ㎝ノ重錘ヲ附加シ測定セルモノ)



落下傘付超短波発信器 電路系統図



衛生速報 第二號 昭二〇.九.二 中国軍管区軍医部

一、被爆地ノ人体ニ與ヘル影響

1、検査ニ供セルツ対象及其ノ行動概要

船舶練習部第一教育對

(イ) 石塚隊 八月六日夕刻ヨリ紙屋町ニ露營シ八月十一日ニ至ル間紙屋町一八丁堀一太田川ニ亘ル間ノ死体發掘其ノ他作業ニ服ス 十二日ヨリ宿營地ヲ貯金局ニ移シ之ヲ中心トシ一六日作業ヲ終ル

(ロ) 清水隊 八月八日八丁堀軍人会館九日天神町産業組合一〇日文理大校舎内ニ夫々轉々宿營シツ、宿營地附近ノ清掃ヲ行ヒ十一日夜半歸隊

(ハ) 本郷隊 似島ニ於テ患者ノ收容援助ヲ為シ特異作用ヲ受ケアラザルモノト判定セラル

何レモ特攻隊ニシテ二〇歳ニ充タザルモノナリ

2. 検査成績

赤血球沈降速度 (一時間値 ㎉)

隊	人員	0-10	10-20	20-30	30-40	40-50
石塚隊	65	46	12	3	4	1
清水隊	55	47	6	2	0	0
本郷隊	59	53	3	0	0	1

白血球数

疝気赤血球沈降速度ノ促進ヲ示スモノ（三〇耗以上）ニ就テ白血球ノ算定ヲ行ヒタルモ五〇〇〇以下ヲ示スモノナカリキ

一般身体検査

下痢、發熱ヲ示スモノアリタルモ原因明瞭ニシテ特ニ戰災ニ基因セル脱毛出血性素因、全身倦怠ヲ示スモノナカリキ

3. 結論

當時、爆心乃至特異作用ノ限界以遠ニアリシモノ直後ニ爆心ニ於テ作業セルモ特ニ異常ヲ呈シ来レルモノナカリキ

二、晩期障碍ニヨル死亡者ノ骨ノ放射能ニ就テ

晩期障碍ニテ死亡セル兵九名ニツキ其各部分ノ骨ヲ焼却シ骨灰一瓦ニツキ放射能ヲ檢シタルニ其ノ判定値ノ略器械ノ自然漏洩ト同一ナル値ヲ有ス（測定器械ノ誤差ノ範囲ヲ一〇%トシ）即チ放射能ハ有セザルモノ、如シ

尚前期死亡者ノ受傷地ハ三名ハ一〇四部隊營内（中心地ヨリノ東北約一粁）四名ハ中島國民學校（中心地ヨリ西南方約一粁）他ノ一名ハ不明ナリ

[前回配布セン衛生速報第二号ヲ第一号ニ訂正相成度]

衛生速報 第三號 昭和二〇.九.一二 中国軍管區軍医部

一、治療ノ状況

1、廣一用品分院ニ於テ 30/VIII 来都築教授指導ノ下ニ行ヘル治療ノ成果左ノ如シ

ソノ後ノ成績ハ目下調査中成リ

九月四日現在

治療法	治療数	成果			摘要
		良好	不変	不良	
自家輸血	31	16	4	11	良好十八 脱毛停止 喀痰輕快 鼻出血停止 溢血斑減少 ヲ示ス
自家輸血 カルシウムビタミン注射	15	12	2	1	
自家輸血 カルシウム注射	5	1	1	3	
自家輸血 ヴィタミン注射	3	1		2	
カルシウムヴィタミン注射	2		2		
カルシウム注射	2	1	1		
計	58	31	10	17	

2、5/IX 北京大學久保教授ノ談ニヨレバ同教授ハ戸坂高杜國民學校（廣一分院）ニテ原子爆彈症患者ニ對シ「ツベルクリン液（一〇〇〇〇〇〇〇倍希釈）」ヲ連日皮下ニ、一晝宛注射シ經過頗ル良好ニテ四六例中總ベテ輕快セリト目下用品分院ニ追試ヲ依頼シアリ

二、原子爆彈症患者ノ骨ノ放射能ニ就テ

原子爆彈症ニヨル死者ノ骨灰ニツキ其ノ後放射能ヲ檢セルニ僅カニ放射能ヲ認め得ルモノ一例アリタリ

受傷場所ノ放射能ノ關係左ノ如シ（前回報告ノモノモ含ム）

骨灰「一g γ 」ノ放射能測定値

氏名	受傷場所	爆心ヨリノ距離	器械ノ自然漏洩	測定値	測定日	放射能ノ有無
〇〇	一〇四部隊	一粁	0.060	大腿骨 0.030	31/VIII	ナシ
			0.071	脛骨 0.071	31/VIII	ナシ
			0.071	骨髓 0.066	31/VIII	ナシ
			0.071	胸骨 0.062	31/VIII	ナシ
			0.071	脊椎 0.076	31/VIII	ナシ
〇〇	不明	不明	0.071	肋骨 0.083	31/VIII	ナシ
〇〇	一打撲傷 中島國民校	八〇〇米	0.071	0.062	1/IX	ナシ
〇〇	一打撲傷 中島國民校	八〇〇米	0.071	0.062	1/IX	ナシ
〇〇	一〇四部隊	一粁	0.071	0.066	1/IX	ナシ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.071	0.066	1/IX	ナシ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.060	0.060	2/IX	ナシ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.060	0.060	2/IX	ナシ
〇〇	一〇四部隊	一粁	0.102	0.153	5/IX	アリ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.113	0.120	5/IX	ナシ
〇〇	轅町國民校	一粁	0.113	0.113	5/IX	ナシ
〇〇	不明	不明	0.110	0.120	5/IX	ナシ
〇〇	一〇四部隊	一粁	0.110	0.100	5/IX	ナシ
〇〇	自宅ノ間	一粁	0.110	0.094	5/IX	ナシ
〇〇	不明	不明	0.062	0.071	31/VIII	ナシ
備考	測定誤差ヲ一〇%トス					

衛生速報 第四號 昭二〇.九.一二 中国軍管區軍醫部

一、晩期障害患者ノ状況

宇品分院患者中各種治療ノ効ニ依リ (治療法トノ関係ハ調査中) 稍輕快ニ赴ケルモノヲ認ムルニ至レリ 本日調査セル七名ハ解熱シ白血球増加シツヽアリ

氏名	白血球数	
	九月五日	九月八日
〇〇	1800	6400
〇〇	1300	2200
〇〇	700	3600
〇〇	1000	2900
〇〇	1900	3900
〇〇	1300	4900
〇〇	900	2800

二、病理所見

4/IX以後 8/IX午前迄ニ五例ノ剖検例アリ

前回所見ト異ル所左ノ如シ

1、出血性素因特ニ肺臟ノソレハ著シク輕減ス 大腸ノ壊死性炎モ亦同様減少ノ傾向アリ 2、腎臟腫大著明ニシテ貧血性閉塞ヲ沈着 高度ナル所謂リポイド腎症 (ネフローゼ) ナル者ニ例ヲ認ム

尚、腎盂ニ出血シシニ血尿ヲ出スモノ三例アリ

3、皮膚ニハ着色著シカラザルモ内臟、漿膜、粘膜ニ黄疸ノ中等度ナルモノ一例アリ

4、全身血液ノ凝固性度ハ増加セルモノノ如クヌリポイド含有量ハ減少シツヽアルモノノ如シ

以上即チ

出血性素因特ニ肺ノ出血性水腫ニヨル死因ノ者次第ニ減シ全身ノ新陳代謝障礙ト考ヘラレル腎症ニ例ヲ見得タリ

衛生速報 第五號 昭二〇.九.一二 中国軍管區軍醫部

一、広島市内ノ放射能ニ就テ

イ、空氣中ニ於ケル放射能ノ強サ

自動車上ニテ市内ノ各所 (附図第一) ニ就キ放射能ノ強サヲ主トシテ東西ノ線ニ沿ヒ測定セルニ第一表ノ如キ値ヲ得タリ

八月中旬ノ測定値ニ比シ其ノ値減少ニ逐次放射能ノ減弱シアルヲ認メ得之等ノ値ヲ爆心地ヨリノ距離ヲ横軸トシ放射能ノ強サヲ縦軸トシ示セテ附図第二図ノ如キ結果ヲ得 (南北ノモノハ前同測定ノ再記ナリ)

尚此ノ値ハ主トシテ地表ヨリノγ線ノ強度ヲ示スモノニシテ地上ニ家屋ヲ構築セル際ノ室内ノ強サニ畧匹敵シ人体ニ障礙ヲ與フル量ト百倍以上ノ程度ノ差アリ 再ビ広島駅日赤病院ヨリ依頼ニテ全所ノ放射線ノ強サヲ測定セルモ何レモ自然漏洩ノ値ヲ超ヘズ

ロ、翠町ニ於ケル特異ナル現象

爆発直後翠町 (宇品広島高校附近爆心地ヨリノ距離三.五軒) 畑中ニ落下物アリタルトノ報ニ接シ同地畑中ノ放射能ヲ測定セルニ局所的ニ自然漏洩ノ三倍程度ノ放射能ヲ認メタリ 落下物ノ性状ニ関シテハ不明ナリ

二、人工放射能物質ニ就テ

爆発ニヨリ發生セル中性子ニヨリ各種物質ハ人工放射能ヲ有スルニ至ル

中性子ノ強度分析ヲ知ル目的ヲ以テ比較的ノ人口放射能ノ壽命長キモ硫黄ト燐ニ就キ其ノ強度ヲ測定セリ 硫黄ハ碲子ノ他絶縁材料ヲ燐ハ燒跡ヨリノ人骨ヲ用ヒ其採取場所ハ附図第三ノ如シ 硫黄ハ $_{16}S^{32}+ON'$ $=_{15}P^{32}+H'$ ニテ放射性燐トナリ $_{15}P^{32} \rightarrow_{16}S^{32} + \beta$ β線ヲ放出シ再ビ硫黄トナル 其ノ半減期ハ十四日ナリ

燐ハ遅イ中性子ニヨリ $_{15}S^{31}+ON'$ $=_{15}P^{32}+H'$ ニテ放射性燐トナリ $_{15}P^{32} \rightarrow_{16}S^{32} + \beta$ β線ヲ放出シ硫黄トナル 其ノ半減期ハ同ジク十四日ナリ

之等ノβ線ノ強度ヲ測定スルニ第二第三表ノ如キ値ヲ得タリ

爆心地ヨリノ距離ヲ横軸トシ放射能ノ強サヲ縦軸トシ示セテ附図第四ノ如クナリ 何レモ距離ニ應ジ急速ニ強度弱ルモ燐ノ方稍曲線急ナリ

尚詳シキ値ニ関シテハ東京ニテ再測定ノ予定ナリ

三、広島西方地区ノ放射能ニ就テ

先ニ仁科博士ノ採取セル高須附近ノ土ニ放射能多カリシ事ト當日ノ風速風向同地区ニ降雨アリタル事實ヨリ (氣象狀況ニ関シテハ目下調査中) 推定シ同地区ニ爆発物ノ灰残骸ノ沈積セル虞アルニヨリ同地区ノ放射能ヲ附図第五ノ位置ニ於テ測定シ第四表ノ値ヲ得タリ

高須附近ヲ中心トシ東北-南西-西北-東南ノ断面図ヲ描ケテ附図第六ノ如クナリ等放射線曲線ヲ想定セテ附図第六ノ如シ

尚同地区附近ノ桶中ノ土ノ放射能 (主トシテβ線) ヲ測定スルニ $g\gamma$ ニテ一〇倍以上ノモノアリテ降雨ニヨル沈積ヲ想像セシムルモノアリ 之等ノ意義ニ関シテハ後ニ報告スルモ先ズ人体ニ障礙ナキモノト推定サル

第一表

測定地點	放射能強度 (測定値/自然漏洩)
1. 柳橋	×1
2. 中国新聞社	×1.7
3. 福屋デパート	×1.5
4. 紙屋町	×2.6
5. 護国神社鳥居	×3.9
6. 電話局西文局	×1.3
7. 天満町	×1

第二表

碍子硫黄採取場所並ニ測定値 γ 0.10 0.06

場所	爆心ヨリノ距離(km)	測定値	場所	爆心ヨリノ距離(km)	測定値
1. 柳橋	1.14	0.06	16. 市廳	0.98	0.067
2. 中国新	0.98	γ 0.11	17. 駅東		1.76
3. 福屋	0.68	γ 0.11	18. 駅	1.87	γ 0.107
4. 紙屋町	0.17	0.11	19. 比治山下	1.67	γ 0.113
5. 鳥居	0.06	0.05	20. 住吉橋	1.67	
6. 相生橋	0.08	0.09(0.06)	21. 観音橋	1.75	γ 0.12
7. 左官町	0.18	γ 0.1	22. 西大橋	2.1	γ 0.13
8. 電話局	0.98		23. 古江	3.0	γ 0.107
9. 三篠橋	1.8	0.06	24. 己斐橋	2.08	
10. 横川橋	1.17		25. 小河内橋	1.72	γ 0.11
11. 二病	0.9	γ 0.10	26. 天満橋	1.30	γ 0.10
12. 一病	0	γ 0.14	27. 白島神田橋	1.85	γ 0.10
13. 元安橋	0.17	0.05	28. 104 部隊	1.0	γ 0.10
14. 袋町校	0.50	0.08	29. 聯隊区司令部	0.63	
15. 楠	0.75	0.088	23. ガード (白島)	1.46	γ 0.11
備考 自然漏洩 其ノ他0.06 γ 0.10					

第三表 焼死者骨採取場所並ニ測定値

場所	爆心よりの距離	測定値
1. 鳥居南	0	γ 1.6
2. 細工丁	0.07	γ 1.46
3. 紙屋町	0.25	γ 1.23
4. 一病	0.53	γ 1.45
5. 福屋	0.68	
6. 八丁堀	0.70	γ 6.25
7. 天満町	1.28	[半読不能]
8. 西大橋	2.0	
備考 自然漏洩 其ノ他0.10 γ 0.06		

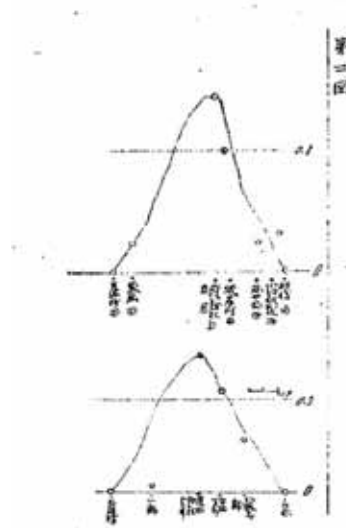
第四表

測定値	放射能ノ強サ (測定値/自然漏洩)
イ. 己斐橋	×1.4
ロ. 己斐西方踏切	×2.4
ハ. 高須	×3.
ニ. 高須上野ガーデン入口	×3.6
ホ. 草津踏切	×1.9
ヘ. 井口踏切	×1.3
ト. 五日市	×1.
チ. 高須広中新開	×1.5
リ. 古江広午新开	×1.2
ヌ. 高須踏切	×2.6
ル. 福蔵寺	×4.2
ヲ. 福蔵寺裏山	×5.1
ワ. 山田	×1.9
カ. 国有	×1.
コ. 己斐上町	×1.
ク. 田方北方1.5 軒	×1.8
ケ. 八幡村吉田	×1.

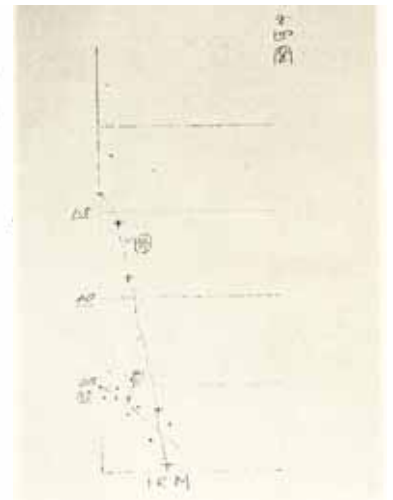
第一图



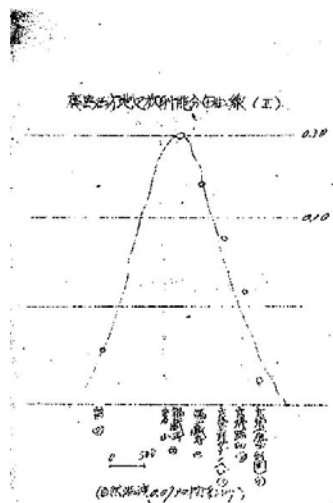
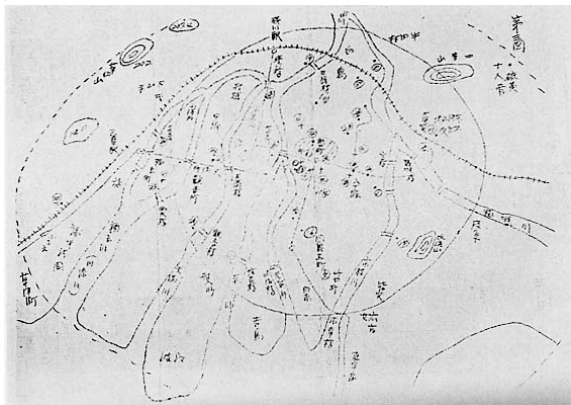
第二图



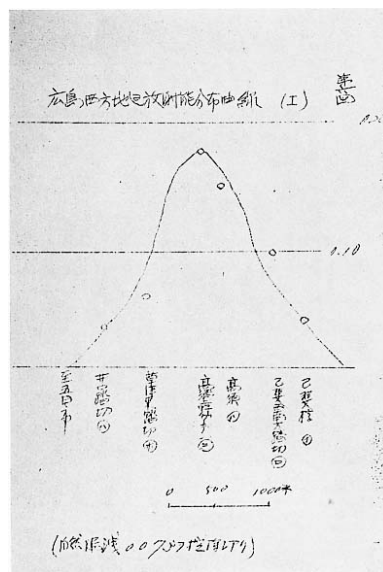
第四图



第三图



附图第五图



一、廣島地方ノ放射能ニ就テ

先ニ報告セル広島西方地区ヨリ土ヲ採取シ其ノ放射能ヲ検スルニ

- ワ 山田峠土 ×1.2
- ヲ 福藏寺裏山〇ノ土 ×3.1
- ル 福藏寺庭土 ×4.6
- ル 福藏寺種ノ土
- ホ 草津町種ノ土 ×1.2
- コ 上野が一でん種ノ土 ×4.9
- ヨ 己斐上町種ノ土 ×1
- タ 古田町田方種ノ土 ×2.3 (土ノ目方ハ1 g γ)

自動車上ニテ測定セル値ト平行ス

但シ種中ノ土ニ著シク放射能ノ大ナルモノアルハ爆発物ノ灰等ノ沈積ニヨルモノナルベシ

二、爆発後外来者ガ作業シ晚期障碍ヲ呈セル土地ノ放射能

爆発後早期ニ爆心地区ニ作業セル人員中ニ晚期障碍ト同様ノ症状ヲ起セル者存在セル事實ハ其後ノ情報ニ依ルニ必ズシモ否定シ得又後述ノ理由ニ依リ理論的ニモ承認シ得ザルニ依リ斯ル患者ノ發生セリト言フ土地ニツキ 10/IX放射能ヲ検スルニ

測定値	爆心ヨリノ距離	放射能ノ強サ (測定値/自然漏洩)	測定値	爆心ヨリノ距離	放射能ノ強サ (測定値/自然漏洩)
一〇四部隊	0.8-1.0 秆	×1.3	護国神社境内	0.3 秆	×3.5
中国軍管区	0.8-1.0 秆	×1.1	爆心地附近		×3
寺町	1 秆	×1.3			

ニシテ現在人体ニ障害ヲ与ヘル量ノ 1/100 以下ナルヲ以テ考慮ノ必要ナシ

三、原子爆弾ニ対スル考察

原子爆弾ニヨル機械的障害竝ニ熱傷ハ別トシ放射線 γ 線ニヨル障害ニツキ考察セントス 爆発ニヨリ多量ノ中性子竝ニ γ 線放射セラレ中性子ハ各種元素ニ作用シ各種ノ人工放射性物質ヲ形成センメタリ之等ノ人工放射性物質ハ短キハ数秒長キハ数十日ニ達スル半減期ヲ以テ β γ 線等ヲ放射シツハ減弱ス 而シテ斯ル中性子ノ作用ハ零距離ノ自來ニ逆比例スルニヨリ爆発高度ヲ五〇〇米ト推定セバ爆心地ヨリ五〇〇米ノ地点ニテハ強度 1/2 ニ一秆ノ地点ニテハ 1/5 トナルナリ従ツテ人間ハ爆心地附近ニテハ最モ強ク距離ガ遠ザルト共ニ二次第二弱ク中性子竝ニ一時的ニ發生セル γ 線ノ照射ヲ受ケタル事ナリ造血器官ヲ始め其他ノ器官ニ障害ヲ生スルニ至レリ

中性子ガ多量ニ放射セラレタルコトハ土地ノ放射能ノ増加セルコト爆心附近ニテ死亡セル人間ノ骨ガ燐ノ放射能ヲ有スル事ニ、三ノ物質ニ尚放射能ヲ照明シ得ル事ノヨリテ明ラカナリ

爆発當時ハ殆ト總テ物質ガ放射能ヲ有シ之等ヨリ半減期ニ應ジタ多量ノ β γ 線ノ放射セラレタル事ヨリ考クレバ爆発直後二、三日ノ間ハ爆心地ニ於テ作業シタル人間ニ β γ 線ニヨル障害ヲ生シタラン事ハ肯定シ得ベシ

扱爆時廣島ニ在リシ人間ノ障害ヲ考フルニ中性子 γ 線ノ障害ヲ大イニ受ケタル人間ハ熱傷機械的損傷モ大ニシテ即死或ハ比較的早く死亡シタル者ナラン 之ガ為爆心地ノ死体骨比較早期ニ死亡セル人間ノ中幾何カニ骨ノ放射能ヲ證明シ得タルナリ

中性子 γ 線ノ障害ヲ受ケ中等度ノ熱傷創ヲ有センモノハ其ノ次ノ時期ニ死亡シタルモノナルベシ 前回ノ調査 (13/VIII-19/VIII) ニテ受傷セル者ノ赤血球ノ著シク少ナカリシハ此ノ例ニ属シタルモノナルベシ

次イテ距離ノ関係受傷時ノ位置等ニ依リ外部的損傷ヲ受ケテオラズ主トシテ一時的二次的 γ 線ノ照射ニ稍多量ニ受ケウルモノハ斯ル放射線ハ幼若或ハ分裂期ノ細胞ニ強ク作用スルガ為人間ノ機能上障害直チニ發現セズ一定ノ潜伏期ノ後ニ各種器官ノ Disfunktion ノ状態ヲ呈シ所謂晩期傷害トシテ認めラレルニ至リタルナリ

之等ノ症状ハ死体ノ骨ニ殆ト放射能ヲ證明シ得ザリシ關係上中性子ニヨル人体内元素ノ人工放射性物質ニ変化シタル事ニヨル慢性障害ニアラズシテ主トシテ爆発時ニ受ケタル γ 線ニヨル急性障害ナルベシ

然シテ此ノ急性主外ノ派生ニハ個人ノ抵抗力受傷後ノ休養給与ノ關係若干ナガラ距離ノ差遮蔽物ノ影響アリテ同一部隊同一内務班内ニテ或ハ同一家庭内ニテ死亡セルモノヨリ発病セザルモノニ至ルマデノ変化ヲ生シ尚症状發現セルモノニテハ輕重ノ差ヲ生スルニ至リタルモノナルベシ

更ニ外来患者等ニスルニ更ニ爆心地ヨリノ距離稍遠キモノニハ白血球ノ減少ヲ認ムルノミニテ他ニ症状ナキモノアリ又抵抗力強キ者ニテハ白血球減少ハアリタルモノ骨髓ノ再生ヨリ不知ノ間治癒シタルモノナルベシ

更ニ爆弾ノ一部ノ破片ヲ落下 (翠町ノ畑) ニヨリ地位的ニ稍放射能ノ高マリタル土地ヲ生シタル事モアルベシ

又同日ノ風向(弱キ東風カ?)ニヨリ爆発物ノ灰様ノ分裂産物ノ一部高須方向ニ流サレ一〇時ヨリ約二時間ニ亘リ降雨ノ為同地附近ニ沈積シ放射能ノ高マ
リタル事實等モ存在スルモ其ノ後ノ降雨風等ニヨリ之等ノモノモ略均等化サレ測定値ノ示ス如ク現在ニテハ放射能ヲ有セザルニ至リウルモ当初ハ若干ノ影響ヲ人
体ニ與ヘクルヤモ計ラズ

以上ヨリ推定的ニ結論ヲ下セバ

- 1、骨ガ人工放射能ヲ得ル程度ニ中性子ヲ受ケタル人間ハ他ノ原因或ハ他ノ原因トノ共同ニテタラバ死ニ至リタルモノナルベシ
- 2、晩期障害ヲ発生セルモノハ主トシテ時的二次的 γ 線ノ障害ニヨルモノナルベシ骨ニ放射能ヲ與ヘザル程度(前回報告ノ如ク測定誤差 $\pm 10\%$ トシ)ノ中性
子が障害ヲ與ヘタルヤ否ヤハ更ニ研計ノ予定
- 3、晩期障害発生ノ時期ノ輕重ハ γ 線ノ硬サ線量人間ノ抵抗力再生能力ニ關係スルモノニシテ前者ニ關シテハ更ニ研計ノ予定ナルモ新患ノ発生ハ次第ニ減シ輕症
型トナリ死亡率ハ次第ニ減少スル見込ミナリ
- 4、広島市内ニ於ケル生活ノ安全性ニ關シテハ今後顧慮ノ要ナシ特ニ外来者ガ入廣ニヨリ今後障害ヲ得ルガ如キ事ハ絶対ニ否定シ得
- 5、広島西方地区ニハ現在以後ハ人体ニ障害ヲ與ヘルガ如キ事ナシ

種中ノ土ノ放射能ハ相當ナルモ斯ノ如キ一部ノ強キ放射能ハ土量ノ少ナキ事距離ノ關係ヨリ心配ニ及バズ不安ナレバ其ノ土ヲ處分スレバ可ナリ

四、将来ニ對スル意見

γ 線ノ硬サ線量ハ高研計スルモ将来起コリ得ル障害トシテ想像シ得ルモノハ

- 1、白内障ノ発現 数ヶ月以上後
- 2、生殖異常

男子ニ手ハ名用ナラザルモ女性ニ手ハ月經異常ニ留意スル要アリ(当初二、三ヶ月ハ卵ノ成熟程度ノ關係ヨリ発現シ得)

十一、二月以後無月經ノ者アラバ γ 線障害ヲ考慮シ得流産モ生ジ得ルモ他ノ因子ニヨル事アルヲ以テ明カナラズ

- 3、不明瞭ナル點ハ帰校後検討ノ予定

衛生速報 第九號 中国軍管区軍医部 二〇.一〇.二三

原子爆彈症ニ關スル研究

目次

- 一、緒論
- 二、症状
- 三、血液所見(末梢骨髓)
- 四、剖検所見
- 五、診断
- 六、経過並後
- 七、治療法
- 八、總括並考按

一、緒論

昭和二十年八月六日廣島市ニ投擲セラレタル原子爆彈ニ依ル人的損傷ハ八月六日當日或ハ當日以降一週間内外ニシテ死亡セシ患者ト爆撃後概ネ二—三週日ヲ經
タル後亜急性症状惹起シ死亡セル患者ト二種類ニ之ヲ區別シ得ベシ

抑モ原子爆彈ノ如何ナルモノナルカヲ解セナル限り之ガ言ワハ避クベキモノナランモ前者ニ屬スル死亡者ハ原子爆彈爆発ニ伴ヒ發セル熱線ニヨル火傷並ニ其他
不明ナル放射性物質爆風等ノ共同作用ニヨル所謂「ショック死」或ハ中毒死ト考ヘラルベク後者ハ所謂不明ナル放射性物質ノ徐々ニ作用シテ惹起セルモノニ
シテ火傷トハ全く無關係ニ経過セル興味アル症状ナリ

本報告ハ主トシテ校舍ニ屬スル患者五百余例ノ臨床経過並ニ血液学的方面ヨリノ檢索(三五〇例)及剖検例(四例)ヲ併セ考察シタルモノニシテ現在尚受傷當
日ヨリ五十日ヲ経過せるノミニシテ数多誤謬ノ多カラコトヲ慮ルハモ取敢ヘス研究ノ結果ヲ述ベテ大方ノ御批判ヲ仰ガントス

二、症状

(1) 八月六日原子爆彈爆発當日廣島市ニ在住シ然カモ爾今二—三週間症状全く無キ者モ原子爆彈爆発直後嘔吐或ハ嘔氣ヲ際シタルモノ或ハ發熱三八.〇—三九.
〇度ニ及ヒタルモノ多數ナリ

然ルニ其後全く症状ナク日常生活ニ支障ナカリシ者カ漸次全身倦怠感高度疲労感ヲ覺ユルニ至リ顔面蒼白トナリ心悸亢進ヲ訴ヘ次デ出血性素因トシテ
身体諸所ニ散発スル皮下溢血斑ハ衄血齒齦出血ヲ認ムルニ至リ加フルニ脱毛(主ニ頭髮)ヲ招来シ更ニ高熱持續スルニ及ビ肝臓ニ潰瘍性病変ヲ来シ食思不振著明
ニ加ハリ死ノ轉歸ヲ執ル者多シ

下痢ハ水様性或ハ血性ナル者アルモ亦便秘ニ傾クモノモアリテ一定セズ 出血傾向ノ著シキモノニアリテハ血尿子宮出血月経經過多ヲ認ムル者モアリ 黄疸ハ必発ノ症候ニ非ザルモ余ノ觀察セシ死亡症例七五例中四例ニ著明ナル黄疸ヲ認メタリ

(2) 爆心地ヨリノ距離ノ關係ニヨル障碍ノ差異

概ネ白血球算定ニヨリ「ウラニウム放射性物質ノ人体ノ影響ノ差異ヲ論セルモノナリ 爆心地ヲ護国神社南方三〇〇米地上五〇〇米ノ地点トシ概ネ該地点ヲ中心トシ半径一糎圈内ニ居住セル者(一九八例)ハ悉ク著明ナル白血球減少症(三〇〇—三、〇〇〇)半径一糎以上二糎圈内ニ居住セル者(一〇二例)ハ約四〇%(四九例中一九例)ニ軽度ノ白血球減少症ヲ認メタリ

著明ナル症状惹起セシ者ハ概ネ半径一糎圈内ニ居住セル者ニ多ク一糎以上に糎圈内ニ居住セル者ハ概ネ全身倦怠疲労感ヲ訴フル者多ク他ノ一般症状具備セル者ヲ多シニ糎以上三糎圈内ニ居住セル者即チ白血球減少著明ナルサル者ハ症状殆ンド無キ者アリ上記ノ個人的差異ハ触レズ概ネ一般ニ取扱ヒタルモノナルモ爆心地ヲ距ル距離ニ於テモ方角ニヨリ白血球減少症並ニ一般的症状ニ可成相異アルハ「ウラニウム放射性物質ノ同質性ニ放散セズ即チ放射性物質ノ濃淡ノ存在スルヲ窺ハシムヘシ

(3) 爆心地ヨリノ距離並ニ方角ノ關係ハ上記ノ如ク原子爆彈ニハ頗ル重要ナル役割ヲ演スルモ遮蔽物如何即チ建築物ノ中ニアリテ直接光線ニ當ラサル者即チ火傷無キ患者モ火傷ヲ受ケタル患者モ「ウラニウム放射性物質ノ影響ニハ著明ナル差異ハナイモノ、如シ

(4) 性別ニヨル障碍差異ハ無キモノ、如キモ年令ニヨル差異ハ可成アルモノ、如ク余ノ取扱ヒシ死亡症例七五例中六四例(八五%)ハ一八—三〇歳ノ者ナリ調査ニ比較的困難ナルモ青年期ノ者障碍著明ナルガ如シ

(5) 爆撃当日ハ廣島市ニ在セス八月六日以降廣島市ニ於テ作業ニ従事ハ其ノ他ノ用務ヲタメ同地ニ滞在セシ者一三六例中八九例(六五%)ニ白血球減少症(二、三〇〇—五、〇〇〇)ヲ認メタリ

中程度以下ノ減少者ハ概ネ八月六日爆撃直後ヨリ直チニ爆撃後始末死体収容等ノ為廣島市内就中爆心地ヲ距ル五〇〇米圈内ニ這入りシ者ニ著明ニシテ滞在日数ノ長キ者程著明ナル影響ヲ蒙リ爆心地ニ遠距離モ地点ニ滞在セシ者ハ減少ノ程度尠シ

一三六例中四例ニ於テ白血球増加症(二、〇〇〇—二〇、〇〇〇)(著明ナル核形左方移動「エオジン嗜好性白血球增多症)認メタリ「ウラニウム放射性物質ノ適當ナル刺激ニ依レルモノナルカ

上記両者供五十日ヲ経過セル今日マデ重篤ナル症状惹起セル者ハ僅少ニシテ死亡セル者ナン

(6) 性欲ニ関スル調査ハ現在重篤ナル者ニ於テハ衰弱ノ為的確ナル判定不能ナルモ概ネ影響無キモノ、如シ

上記ノ如キ症状著明ナルモノハ漸進性貧血極度ニ加ハリ高熱ヲ発シ遂ニ死ノ轉帰ヲ執ル者多キモ受傷當時ヨリ絶對安静ヲ守リ適當ナル治療(自家輸血、カルシウム注射、肝臟製剤、鉄剤内服、ビタミンBCPK注射・内服)ヲ施セル者或ハ比較的軽症ナル者ニアリテハ概ネ三—四週日頃ヨリ身体諸所ニ散発セル皮下溢血斑ハ漸次消失シ粘膜ノ潰瘍性病変ハ治癒シ出血性素因(衄血齒齦出血)脱毛止リ筋衰弱感疲勞感漸次消褪顔色勝レ血液学ノ方面ノ考察ハ後述スルモ白血球血漿何ノ恢復ヲ先驅トシ遂ニ赤血球数ノ恢復ノ途上ニアリ(受傷後五十日現在)全身性貧血ノ途上遽高熱ヲ発スルハ豫後不良ノ徴ニシテ概ネ死ノ轉帰ヲ執ルモノナリ

三、血液所見(末梢骨髓)

(1) 末梢血液所見

(イ) 赤血球

赤血球数ノ影響ハ初期ハ比較的輕微ナルモ病勢進行ト共ニ漸次減少ス病床中程度ノ者ニアリテハ二〇〇—三〇〇萬程度ナルモ死亡症例ニアリテハ一〇〇萬以下ニ減少セル者アリ 此ノ場合比較的大型赤血球並ニ畸形赤血球等認ムルモ多染性赤血球塩基性斑点並ニ有核赤血球ノ出現ハ認メス漸次赤血球数ノ恢復ニ從ヒ軽度ノ多染性赤血球並ニ不同症ハ屢々認ムルモ其等強度ノモノ及塩基性斑点等ハ極メテ稀ニシテ有核赤血球ノ出現ヲ認メス

(ロ) 白血球

一般ニ著明ナル変化ヲ招来ス

1 白血球總数

原子爆彈爆発直後ノ変化ハ不明ナルモ漸次減少ノ一途ヲ辿リ著明ナルハ一、〇〇〇以下(甚ダシキハ三〇〇)ニ及フ 概ネ三—四週日ヲ終タル頃ヨリ回復ニ向ヒツハアリ白血球總数ノ減少ハ主ニ中世嗜好性白血球リンパ球トノ絶對数減少ニ基因ス恢復ハ比較的速ニシテ赤血球数ノ恢復ニ先驅ス

2 中性嗜好性白血球

著明ナル変化ヲ蒙リ白血球總数ノ变化トヨク一致シ絶對数相對数共ニ減少ノ恢復ニ赴クニ從ヒ著明ナル核形左方移動ヲ招来ス主ニ桿狀形多數出現スルモ時ニ骨髓細胞ノ出現ヲ認ム一般ニ核ハ萎縮シ原形質ノ顆粒ハ粗大暗染シ病的形狀ヲ呈ス

3 淋巴球

著明ナル変化ヲ招来シ白血球總数減少ノ一因ヲ為シ絶對数著明ニ減少シ相對数ハ稍々増加傾向ニアリ恢復ニ赴クニ從ヒ小淋巴球ノ出現著明ナリ

4 「エオジン」嗜好性白血球

絶對数相對数共ニ減少シ恢復ニ從ヒ比較的速ニ出現ス

5 大単核白血球及移行型

一定ノ変化ヲ認メ難キモ一般ニ相對的ニ増加シ絶對的ニハ稍々減少シ恢復ニ赴クニ從ヒ増加ス

6 塩基嗜好性白血球

一定ノ変化認メ難シ

7 分類不能ナル細胞

骨髓リン巴系共ニ病的細胞ナルベシ

(ハ) 血小板

著明ニ減少シ (一—三萬) 時ニ算定不能ナルコトアリ恢復ニ赴クニ從ヒ比較的著明ニ激増シ然カモ大形血小板ノ出現著明ナリ

(ニ) 出血時間

定型的ニ遅延ス一五—三五分 (デューク氏法) 恢復ニ赴クニ從ヒ著明ニ短縮ス (五—一〇分)

(ホ) 凝固時間

凝固ノ開始ハ遅延スルモ完全凝固ノ時期ヲ測定シ難シ

(2) 骨髓血液所見

穿刺液ハ血性ニ乏シク油様水様ノ感ヲ與フ固定標本ニ於テ細胞成分著減ス

(イ) 白血球系統ニ属スル細胞

著明ニ減少シ骨髓母細胞前骨髓細胞ハ殆ンド消失シ骨髓細胞後骨髓細胞桿状核分葉核細胞ハ僅ニ存在スルモ形状ハ比較的區別困難ニシテ各原形質ノ変形セルモノ多シ恢復期ニ赴クニ從ヒ核形左方移動著明ニ起リ前骨髓細胞認メラル

大単核細胞モ定型的ナルモノヲ発見セス

(ロ) 赤血球系統ニ属スル細胞

重傷貧血者ニ在リテハ殆ンド有核赤血球見当ラス比較的輕傷者ニハ多染性有核赤血球少数ヲ認ムルノミニシテ恢復ニ赴クニ從ヒ白血球核形左方移動ノ如ク著明ナラサルモ有核赤血球多数出現ヲ認ム有核赤血球原形質ハ概ネ多染性ナリ

(ハ) リン巴系統ニ属スル細胞

病勢極期ニアリテハ小リン巴球多数出現シ恢復ニ赴クニ從ヒ相対數減少ス

(ニ) 骨髓巨能細胞

塗抹標本ヲ叮嚀ニ觀察スルモ病勢極期ニ於テハ之ヲ認メス恢復ニ從ヒ骨髓巨能細胞ノミナラス大形血小板遊出ヲ認ム

(ホ) 骨髓網状織内被細胞系統ニ属スル細胞

病勢極期ニアリテハ大小類リン巴性網状織細胞類プラズマ細胞性網状織細胞貧食性網状織細胞内被細胞副腎細胞及其ノ他分類不明ナル細胞並ニ病的ト思惟セラレハ核ハ萎縮シ原形質顆粒ノ粗大ナル者出現ス恢復ニ從ヒ赤血球白血球系統細胞ノ著増ニ伴ヒ相対數著明ニ減少ス

上記血液所見ヲ綜合スルニ白血球血小板ノ著明ナル減少ヲ先驅トシ出血性素因著明ニ現レ漸進性赤血球減少ヲ招来シ恢復ハ先ズ白血球血小板増加ヲ以テ初リ次テ赤血球數ノ恢復スルモノ多シ此ノ際ノ白血球數ノ中性嗜好細胞ノ著明ナル核形左方移動ヲ認メ赤血球系統ニ於テハ輕度ノ多染性ハ認ムルモ幼若赤血球ノ増加ハ著明ナラズ

死ノ轉帰ヲ執ル者ニ於テハ白血球數概ネ一、〇〇〇内外 (甚シキハ三〇〇) 血小板概ネ一萬以下ニ減少シ赤血球數モ概ネ二〇〇萬以下著明ナルハ六〇萬ニ減少セシ例アルモ亦三〇〇萬程度ノ者モ相當數アリ比較的セ血球數ノ減少甚キハ死亡マデノ病床日數ノ尠キ者ニ多シ白血球數血小板數ノ現象ハ絶對的ナリ

四、剖検所見

五例病理解剖ニ伏セシモ詳細ハ之ヲ省畧ス

肉眼的ニ著明ナル変化トシテハ通常ノ造血性赤色骨髓ハ被造血性ノ脂肪髓ニ變化セリ其他漿膜狀出血胃腸粘膜ノ出血斑ハ認ムベキ變化ナリ

五、診断

上述ノ症状経過並ニ血液所見解剖的檢索ヨリ我々ハ顆粒細胞消失症アグラスロチトーゼ或ハ再生不能性貧血 (或ハエールリヒ氏ノ所謂出血性アロイキ一或ハフランク氏ノ全骨髓癆パンミエロフチーゼ) ノ二者ヲ考フルコトヲ得

疾病ノ起始ハ比較的明瞭ヲ缺キ漸進性貧血 (蒼白) 高度疲労感ヲ以テ初リ出血性素因トシテ皮下溢血斑衄血齒齦出血ヲ認ムルニ至リ粘膜ニ潰瘍性病變ヲ起シ漸次衰弱死ニ赴ク点並ニ血液所見即チ白血球血小板並ニ赤血球ノ著明ナル減少赤血球ノ幼若形即チ有核赤血球多染性赤血球等ノ出現ナキコト出血時間ハ著明ニ延長シ血餅収縮性モ不良ナル点及剖検所見ニ依リ赤色骨髓ガ脂肪髓ニ變化セル点ヲ併セ考察シエールリヒ氏ノ出血性アロイキ一或ハフランク氏ノパンミエロフチーゼ然骨髓癆或ハ再生不能性貧血ト思惟シテ差支ハ無カル可キモ屢々スカル亞急性型ガ急性経過ヲ執リ突然高熱稽留シ胸腔並ニ咽喉粘膜ニ潰瘍性病變進行シ扁桃腺ハ腺窩性アンギーナ或ハチフテリ一様義膜ヲ呈シ急激ニ死ノ轉帰ヲ執レル者ニアリテハ顆粒細胞消失症トノ鑑別併々困難ナルモシュルツ氏ノ定型的ナル顆粒白血球消失症ノ疾病ノ起始ハ極メ急激ニシテ赤血球血小板ノ減少並ニ出血性素因ハ通例之ヲ認メサルコト等ヨリ本症ハ全骨髓癆パンミエロフチーゼヲ支持シタキモシュルツ氏以來ノ諸報告ニ赤血球並ニ血小板ノ現象ヲ認メタル報告例相當數アリテ遠ニ両者何レカヲ斷シ難キモスカル急激ナル型ヲトリタル症例ハ顆粒白血球消失症ノ假面ヲ冠リタル「パンミエロフチーゼ」ナルベシ蓋シ「ウラニウム放射性物質ノ作用ガ短時間ニ骨髓機能全般ヲ破壊スルモノトモ思考サレズ逐次破壊セラレハ首肯セラルハコトニシテ白血球ノ現象ヲ先驅トスルハ不明物質ノ白血球系統ニ對スル影響ガ大ナルカニ依ルモノナルヘク赤血球系統モ後ニ至リテ侵サルハ

ハ当然ニシテ漸進性貧血ヲ招来スルモノナラン

唯受傷後比較的経過日数短ク急性経過ヲ執リ死亡セシ症例ノ中ニ白血球減少ノミ著明ニシテ赤血球減少ノ著明ナラサルハ尚破壊作用ノ赤血球系統ニ波及シ得サリシ時期ノ於テ高熱其他ノ要約ニ依リ死ノ轉帰ヲ執リタルモノト思考シテ可ナルヘク大多数ハ白血球血小板赤血球数ノ減少著明ニシテ然カモ剖検例ノ如ク骨髓ノ赤色髓ノ脂質髓ニ変化セル点ヨリエーレルヒ氏ノ再生不能性貧血或ハフランク氏ノバンミエロフチーゼ全骨髓癆ト思惟シテ大ナル誤謬ナカルベシ

急性ロイマーゼノ白血球減少顆粒細胞減少ノアルモノト鑑別ニ重要ナランモ概ネ幼若型白血球ノ遊出等血液像所見ニ依リ明白ナリ漸次恢復ノ途上ニアル者ハ再生機能減弱性品貧血ト見做スヘク「ウラニウム放射性物質ノ比較的輕微ニ作用セシモノナルベシ

六、経過並豫後

前述セシ如ク三—四週日頃ヨリ白血球血小板ノ増加ヲ先驅トシ出血性素因即チ皮下溢血斑衄血齒齦出血脱毛漸次止リ粘膜炎鼻性病変治癒シ赤血球ノ漸増ヲ来シ高度疲勞感筋痿弱感モ薄ラキ受傷後五十日ヲ経タル現在恢復ノ途上ニアルモノハ、如ク思考セラル、モ蓋シスカル物質ノ人体ヘノ影響ヲ論スルハ今面初メテニシテ予後ヲ正確ニトスルハ至難ナリト謂フヲ得ヘシ

爆心地ヲ距離距離ノ關係ハ最モ予後ヲトスル上ニ重要ナル役割ヲ演スルモノナリ然シ個人的素質ニ依ル骨髓ノ反應ノ差異ハ相当ニアルモノナルベシ 最初ヨリ安静ヲ旨トシ治療施セシ患者ハ現在恢復途上ニアルモ激動其他日常業務ニ從事途中ヨリ臥床セシ者ハ現在尚血球減少症ヲ繼續セル者多シ

七、治療法

絶対安静ヲ命シタル上左記治療ヲ施セリ

1. 自家血液腎筋内注射 (二〇—三〇cc)
2. 輸血 (一〇〇—二〇〇cc)
3. カルシウム静脈内注射 (二〇cc)
4. 肝臟食及肝臟製剤ノ内服注射
5. 還元鉄剤投與
6. ビタミンB. C. P. K製剤ノ内服注射

上記各種治療法モ何レカ良キカ速ニ断定シ難キモ第一條件トシテ絶対安静ハ必須缺クカラサルモノト思惟ス 蓋シ爆撃日家ノ下敷キニナリ幸イニ受傷セス其後元氣ニ燒跡ノ整理屍体発掘等業務ニ從事セル者ガ症状悪化速ニ不帰トナレル者多数ニ上レル事實竝ニ爆心地附近ニ居テ火傷ヲ受ケタルタメ只管安静入院加療セル者ノ漸進性貧血ヲ克服シ漸次恢復ノ途上ニアル者アルハ安静ノ第一條件タルヲ窺知スルニ充分ナル事實ナリ

八、總括並考按

上記ノ所見ハ原子爆彈爆發当日ヨリ五十日ヲ経過セル今日マデノ経過検索所見ヨリ言々セルモノニシテ的確ナル記載トハ謂ヒ難キモ殊ニ熱線ニ依ル火傷並ニ放射性物質ニ依ル骨髓破壊ニ基ク恰モ相反セルニ作用ノ重複セルモノニシテ判定ニ困難ナルモノナルモ上述セルハ主トシテ後者不明放射性物質ニ依ル骨髓破壊ニ基ク症候ヲ論セルモノナリ

死亡症例ノ如ク骨髓ノ赤色髓ノ脂質髓ニ全ク変化セルカ如キハ完全骨髓癆ニ陥レル者ニシテ諸治療モ其甲斐無キモノナランカ上述ノ如ク漸次恢復ノ途上ニアルハ再生機能減弱性貧血ト稱セラル可適當ナル治療ニ依リ恢復ニ赴クモノナルベシ安静ハ最モ重要ナル條件ナリ 然ルニ所謂原子爆彈ノ放射スル不明物質ニ依ル斯ル影響ハ今回初メテニシテ予後ヲトシ難キモ一應恢復セルカ如ク見エタル患者モ業務ニ服スルヤ又再発ノ憂ヘ無キニシテ非ズヤト思考セラル激動ヲ避ケ精神的肉体的安静ヲ守リ新鮮ナル空氣ヲ吸ヒ造血ニ必要ナル滋養ニ富メルモノヲ選ヒ努メテ紫外線ヲ浴ヒ保養ニ努ルヲ最善ト思考ス 原子爆彈ニ依ル障碍トシテ上述ノ骨髓破壊ヲ起ス他諸種ナル影響アルコトハ想像ニ難カラサルモ時日ノ経過ヲ待チテ判定スヘキコト多カルベシ

確言ハ性差ヲ待チニ為スヘキモ同一地点ニ於テ火傷ヲ蒙リシ者ト蒙ラザル者トノ予後ハ一般ニ火傷ヲ蒙リタル者良好ナリ想フニ軽度ノ火傷ナレバ骨髓機能鼓舞トシテ効アルモノナルカ

(十二)

昭和二十年八月

原子爆弾傷研究綴

廣島第一陸軍病院

八月六日廣島市戦災ニ関スル経験並所感

一、原子爆弾炸裂時病院廊下ニ於テ特有ノ閃光ヲ見タリソレ以後病棟ノ陰ニ退避セルニ約二―三秒後特有ノ強烈ナル爆風ヲ感ジタリ姿勢ハ立位ニテ停止シアリタリ

二、光ハ「マグネシウム」発光時ノ如ク白ク強烈ニ感ジタリ熱波ハ全然ナク爆風、振動臭氣ハ特別ノモノナシ爆音ハ聴取シ得ズ

三、四、五、特別ノ事項ハ点数ノ關係上ナシ

六、第一救護状況 別紙ニ依リ直接分院長殿ニ對シ報告済

但シ自ラハ救護班トシテ住吉橋東詰及縣病院裏手ノ堤防ニ於テ八月六日午後九時ヨリ翌朝六時マデ看護婦五名ト共ニ救護ニ當タリタリ。患者ハ概テ重傷ノ全身火傷ニテ呻吟シアリテ爾後概テ死亡セルモノト想像セラル。救護中患者ノ呻声ト堤防、池等ニ散乱スル死体ノ多数ナノニ阿鼻叫喚ノ地獄ヲ想像ス

◎治療ハ重曹水ノ洗滌、搬出ノミニシテ植物油欠亡、強心剤ノ欠乏ハ治療ニ関シ良心的自信ヲ喪失セルニ残念ナリキ。班長トシテ恐ラクカカル重症患者ニハ萬全ノ治療ヲ望ムハ無益ナリト思フモセメテ強心剤ノ投與、救急火傷剤等ノ携帯ヲ切實ニ必要ト感ジタリ。

尚、衛生材料ハ亀山等ノ遠隔疎開セズ病院内、各院内、救護所等各適当ナ場所ニ埋没乃至格納シアラハ急場ニ望ミ直ニ使用可能ニシテ治療上遺憾ナカリシト痛感ス。尚江波分院ニ外科ノ簡單ナル治療具ナカリシ点ハ軍医トシテ残念至極ニシテ今ニ當時ヲ回想シ無念ノ涙ヲ禁ジ得ズ

七、自己所属分院（収容所、救護所）ノ位置ニ関シテ詳細別紙ニテ各病院長殿ニ報告済

患者ノ到着時ハ状況 爆発後殆ンド六、七分後ニハ一時ニ多数ノ患者雲集殺到シ軍医ハ治療ニ関シソノ發揮ニ混乱スル状態ナリキ

火傷ノ状況トシテ殆ンド全身特ニ顔面、上肢、下肢、前胸部等露出部ガ殆ンド全員ヤラレ黒褐色ニ顔面ソノ他ガ着色シ皮膚全部剥皮シ水泡等ハ少ナイ様デアツタ。特有ノ臭氣ハ發現シアリタル如ク思ハル

主訴 熱感、疼痛、口渴、悪寒、顔面火傷ノ多浮腫ヲ生ジ目ガ見え誘導ニ就テ看護婦ノ手ヲ借ル状態デアツタ

八、水泡、離皮ノ発生時期ニ関シテハ患者病院到着時既ニ発生シアリタリ患者ノ言ニ依レバ最初ノ発光ニ於テ既ニ火ガ燃エ移リ爆発後氣ガ附イテ見ルト既ニ水泡ヲ生ジ然カモ露出部ハ完全ニ剥皮シアリタルヲ見タリト云ウ

治療マデノ日数ハ収容期間ガ短キタメ鮮明ニナシ得ザリキ

化膿ノ程度ハ殆ンド多数ノ患者ニ之ヲ見タルモ二度ノ程度ノ火傷ニシテ水泡ニ膿ヲ持ツ状態デアツタ

有効ナリシ治療トシテ虹液一―二粒宛一週間又一―粒宛一週間ヲ服用シ服用セザルモノト相違ヲ檢セシニ収容時期及期間等ヨリ遠隔成績ヲ知り得ザル。点アルモ少ナクトモ肉芽ノ清浄ニ関シ何等ノ好影響ヲアタヘタルモノト思考ス尚副作用等ナク病氣ニ對シ悪影響ナカリシカ斷言出来ル。然シ一時ニ多数ノ患者ヲ診察セルタメ看護力ニ限界アリ多数ノ死亡者ヲ出セルハ遺憾ナリ。

普通ノ火傷トノ差ハ原子爆弾ノ他ノ放射能ノ作用アリタルタメ食思不振、最初ノ嘔吐等一般全身状態ノ悪化アリ死亡者多カリシモ遠隔成績ヲ知り行ザルタメ斷言不能ナリ

療法ノ概要 (1) 強心剤、チンク油塗布、重曹水ノ塗布、リングル氏液注射最初ノ数人ノ患者ニ對シ3%タンニン酸水ノ湿布ヲ使用セシモ薬品ノ欠乏ノタメ継続不能ナリシハ残念ニシテ之ニヨリ疼痛ノ軽減、収斂作用ニヨリ初期ニ於テ火傷ノ予後ヲ良好ナラシムル可能性ガアリハシナカツタト思考ス

リングル氏液ノ製剤直ニ欠セルタメ左記ノ要領ニヨリ生理食塩水ヲ製造シ使用セリ

先ズ八、五%ノ精製食塩水ヲ清水一〇〇〇cc ニトカシ之ヲロカシ直ニ煮沸沸騰シ冷却再ビロカシ之ヲ速製リングル氏液トシ多数ノ患者ニ使用ス。付ル悪害ヲ見タルモ口渴等ノタメニ減減シ強心剤ノ伴用ト共ニ火傷ノ治療ニ好影響ヲアタヘタルモノト信ジ爾後蒸留水ナキタメ之ノ方法ニテ製造シ赤痢等ノ患者ニ利用シ好結果ヲ見タリ。

(2) 原子爆弾傷ノ初期ノ病状 最初全身倦怠、下痢、蒼白(顔面)、食思不振、胸部ニ於ケル出血斑点、脱毛、発熱、口咽頭痛等ヲ以テ発病ス。検血スレバ白血球減少ヲ見ル。

◎白血球減少ハ八月一杯ニテ発病セルモノハ一五〇〇―一六〇〇マデハ全部約一週間位デ全身ノ出血エソ性口内炎、鼻血等ニテ死亡ス。

◎九月一日以後ニ入院セルモノハ白血球八〇〇位ヲ見タルモ次第ニ回復シ治癒ス。治療後トシテハ師管区軍医部ノ指示ヲ遵法セリ只温灸ヲ手及足ノ三里ニ施療シ之ガ白血球増加ニ好影響ヲアタヘタリト思考ス。

(3) 伴発症 今マデ発表サレザル以外特記スベキモノナシ

九、八月六日以後救護ニ従事セル職員特ニ軍医、看護婦、衛生兵ノ中ニ概テ九月初旬頃ヨリ全身倦怠ヲ以テ発症シ軽キ発熱、食思不振ヲ訴ヘ白血球二〇〇〇―三〇〇〇台ニ減少セル者ヲ約五〇%ニ見タリ。但シカヘア白血球ノ増加ヲ見タルモノモアルガ之ハ極メテ少数デアツタ。前患者ハ概テ一週間乃至二週間ノ安静加療ニヨリテ恢復セリ。之ノ輕キ原子爆弾症ト思考セリ。

都野大尉
増田少尉
石井少尉

原子爆弾症報告

江波分院 藤田少尉

- 一、江波分院第五号病棟医官室東側廊下ニ於テ柳少尉ノ「焼夷弾」ト云フ聲音ニ舍前ニ出シ瞬間赤キ光リ及熱キ爆風ヲ感ジシ為危険ヲ思ヒ防空壕中ニ退避ス
目前ノ（約五米）第六号病棟ノ屋根トタン板ノ飛散スルヲ見シノミ
 - 二、赤キ光リト同時ニ熱キ爆風ニテ類ヲナグラレシ感シ振動、臭気ハ感ゼズ（自分ノ身近ニ油脂焼夷弾（實際ニ見タルコトナシ）ノ落下ト同時ニ爆弾ノ落下セシ感ヲ持テリ）
 - 三、閃光ヲ感ゼザリシ
 - 四、江波分院ニ於テハ火災発生セズ。但シ兵ノ話ニヨレバ院庭ニ乾シアリシ葦ニ引火セリト。（時間不明）
 - 五、火災発生セズ
 - 六、原子爆弾炸裂ヨリ約五分経過シ手術場ニ到レバ院内ニ於テ打撲傷、ガラス破片ニヨル創傷（出血多量）木材破片ニヨル創傷（出血多量）約数十人參集セリ
約十分経過セシ頃ヨリ地方人ノ參集ヲ見ル
約二十分経過ノ頃ヨリ火傷患者ノ參集ヲ見ル
地方人ノ創傷、火傷共ニ砂、ホコリニテオ染サル
創傷ハ出血多量、火傷ハ水泡ヲ生ゼリ骨折患者アリ
第一救護所（広サ二〇×一〇m）軍医三名、看護婦六名
創傷ニハマーキユロ、リパノールガーゼ、火傷ニハ亜鉛華オレーフ油塗布（量ハ不明）
 - 七、江波分院
初期ハ創傷患者（主トシテハ江波住民）中期以後ハ火傷患者多数ヲ占ム
創傷ハガラス破片、木片等ニヨルステイツヒブンデ多ク為ニ出血多量ナリシ
骨折患者モ相当数ヲ占ム
火傷患者ハ顔面手背脚部等露出部火傷ニシテ到着時ハ既ニ水泡ヲ生ゼリ。砂、ホコリノ為ニオ染サレ亜鉛華オレーフ油ノ塗布ニ困難ヲ感ゼリ
火傷患者ノ主訴ハ皮膚ガヒリヒリスルカラ油ヲ塗ツテクレ油ナクテ、生理的食塩水塗布ノ患者ハ乾燥スルト此ノ種訴ヘガ多クナル一定時経過スルト口渇ヲ訴ヘリ
 - 八、火傷ノ経過
1、水泡ハ二四一四八時間ヲ経過シ膿泡発生セルモノ多シ
治癒迄ノ日数、軽傷ハ二週間、重傷ハ一ヵ月半
火傷ノ面広キモノ殆ト化膿セリ
鎮痛ニ有効ナリシ療法、化膿セルモノニ対シテハアクチゾール注射ヲナスト患者ハ痛ミ少シト云ヘリ。乾燥ハ痛ミヲ増セシモ治癒ニ対シテハ、殊ニ化膿ニ対シテハ良好ト思ヘリ
亜鉛華オレーフ油ナキタメニマーキユロ塗布ノ程度ナリ
 - 2、原子爆弾傷ノ初期症状及経過
最初氣付キシハ赤痢疑ニテ入院セル患者ガ（血便一日二十行乃至五十行）入院後一日又ハ二日ニテ死亡、症状ハ血便ノ他ニ小出血斑、齒齦出血、頭部毛髮脱落、高熱稽留共ニ必発症状ナシニモ初期（原子爆弾炸裂後二週間頃）ニ於ケル患者ニハ出血斑ハ散見スル程度ナリシ。患者死亡一日前頃ヨリ皮膚ハ亜黄直色トナリシ。
脾臓ハ殆ト見ズ肝臓亦ワズカニ触レル程度ナリ
中期及後期（原子爆弾炸裂後一ヶ月乃至一ヵ月半）ニ於テ発病セル患者ハ高熱稽留。出血斑ハ必発ノ條件ナリシモ齒齦出血ナキモノ又ハ血便ナキモノ毛髮脱落ナキモノ等アリ前記初期発生患者ニ於テハ前記初期症状全部前
後期発生患者ノ治方ハ自家輸血（一日一〇珄）毎日約一週間続行、治方前白血球一〇〇〇前後ノモノガ二週間後ニ四〇〇〇一六〇〇〇ニ恢復セリ
初期ハ中間発生患者ニ於テハ輸血（三〇〇珄一五〇〇珄）シナスモ効果ナシ
 - 3、併発症
脳症ヲ起スモノヲ散見ス
- 九、1、中期発生患者ノ初期症状（自己ノ経験セシモノ）

患者ハ二十一才男子

八月二十四日発熱（三九度前後）感冒気味トテ臥床ス

八月二十六日初診、所見、左側扁桃腺僅カニ肥大白斑点附着齒齦出血ハナキモ口腔粘膜一般ニ発赤ス。小出血斑ハ胸部ニアリシト云フモ自分ハ気付カズ普通ノ扁桃腺炎ハ診断ス

アミノピリン〇.五ヲ与ヘ、アクチゾール五〇注射

八月二十八日依然トシテ下熱セズ（但シ下熱劑（アミノピリン）ニハ支處スルモ亦スグ高熱トナルト云フ）扁桃腺肥大アルモ口内炎悪化シ齒齦出血ヲ少量見ル、小出血斑ヲ胸部及背部ニ二十数個見ルモ髮脱毛、下痢ナシ。食欲良好ナルモ口内炎ノ為痛ミアリテ充分食ベラズ

此所ニ於テ原子爆彈症ト診断ス

八月三十日輸血一〇〇㊦

八月三十一日他家血液二〇㊦筋注

九月一日右ニ同ジ

其ノ他ビタミン剤、肝臓製剤、葡萄糖注射ヲナス

九月一日頃ヨリ毛髮脱落アルモ高度ナラズ齒齦出血此頃ヨリ多量トナル血便ナキモ下痢此頃ヨリ始マル

齒齦出血多量トナリ九月九日遂ニ死亡ス

2、初期発生患者ニ於ケル経験

火傷患者中高熱毛髮脱落出血斑、血便、齒齦出血（又ハ鼻出血モアリ）等ニテ死亡スルモノ多発ス最初ハ全部敗血症ト考ヘズルフォンアミット剤リンゲル等ヲ治方ス何レモ死亡スルニ依リ之レハオカシト考ヘ居ルトキ柳少尉受診ノ患者中赤痢疑ニテ入院セルモノガ前期症状ニテ一、二日中ニ死亡スニヨリ柳少尉モ赤痢ニ疑問ヲイダキ白血球数ヲ調べレバ何レモ四〇〇以下ナリシニ依リ自分受診ノ火傷患者中前期症状ヲ起セルモノ（敗血症考ヘシモノ）ノ白血球数ヲ調べレバ亦四〇〇以下敗血症ナレバ白血球増多症ナルニヨリ疑問ヲイダク、依ツテ三名ノ患者ニツキ血液培養ヲ行フモ何レモ陰性ナリシ。依ツテ敗血症ニアラズト断定セリ
シカラバ何カト云フ疑問ヲイダクニウラニウムハ放射線ヲ放出スルカラ白血球減少ハX線ニヨル白血球減少ト同一ノ症状ニシテ強度ナリシモノト考ヘニ到着セリ

爾後新聞等ニテ之レノ正シキヲ知ル

一〇、特記スベキ事項ナシ

以上

原子爆彈症報告

江波分院 柳少尉

一、江波分院第五号病棟廊下ヨリ外ニ出デントスル時ニシテ服装ハ上衣ヲ脱ス

二、突如、約二米奥手方位ノ白色ノ閃光ヲ認メ「エレクトロン」焼夷彈ト感シ直チニ地上ニ臥ス當時夢中ナリシ為ヤ熱気、爆風、臭気等ヲ殆ント感ゼズ
家屋ノ破壊音モ感ゼザリキ

三、四、五、—————

六、閃光ヲ認メタセリ約五分後入院患者ガ負傷セリトテ診シ求ム、診ルニ硝子破片ニヨリ軽度ノ擦過程度ナル故手術室ニ運搬スルニ（既ニ患者数名居レリ）又手術室ハ硝子散乱、物損倒壊シ足ノ踏ミ場モ無也キ故屋外ニテ治療ヲ始メントス

而ルニ其ノ頃ヨリ（約十五分後）地方患者續々来院セルニヨリ直チニ二号病棟一番室ヲ救護所ニ当ツベク準備シ軍医三名看護婦若干名ニテ治療ヲ開始ス

而ルニ多数ノ患者一時ニ殺到シ全ク〔2字判読不能〕ニ治療室内ニ侵入シ吾先ニ處置ヲ受ケントシテ軍医ノ所ニ押シ掛ケ殆ンド強要スルガ如キ態度ナリシ為重軽症ヲ區別スル暇ナク又姓名住所歳ヲ聞ク事モ不能ニシテ手当リ次第ニ處置シ従フテ患者数、症病別等全ク不明ナリキ。

材料ハ大傷患者ニハ始メチンリエールヲ使用セルモ間モナク欠乏セルニ至リタンニン液後ニハ食塩水、マーキユロヲ用フ。外傷患者ニハマーキユロ、リバノー、ガーゼ治療法ハ材料ノ〔1字判読不能〕保モアリチンクエール、マーキユロ食塩水ヲ使用セリ

（2）八月十三日頃ヨリ粘血便ヲ訴フ赤痢疑ニテ續々入院セル患者ニシテ粘血便一日十数行程度全身衰弱モ著明ナラザルニ入院後、三、四日ニシテ嘔吐（淡黄色）ヲ頻發シ約一日後突然死亡シ或ハ死ノ直前痙攣（牙關緊張、四肢痙攣）ノ起シ死亡スル患者續出セリ

今迄ノ赤痢患者ト全ク様子ヲ異ニスルヲ以テ始メテ赤痢ニ非ラザルモノナランカト思ヒ調査セル結果總テ、火傷、外傷ナキモ爆撃ニ直接關係セルヲ認め且カカル患者ニテハ白血球数三〇〇—七〇〇ナリシヲ以テ之ハ一種ノ血液病ヲ起セルモノナラント考クルニ至レリ

而テ、始メハ赤痢ト考ヘタリシ為一般赤痢ノ療法ヲ起ヒタルタメカ、スベテ数日ニシテ死亡セリ

八月十六日頃ヨリ更ニ発熱（三九.〇—四〇.〇度）ヲ訴フチフス患者ノ疑ニテ入院スル患者現ハル

省事強キ口内炎或ハ齒齦炎、頭髮脱毛アリ漸次鼻出血、齒齦出血重度トナリ紫斑全身ニ現ハレ出血死ノ如キ状態ヲ呈スルモノアリタリ

八月末ヨリ発熱ヲ訴へ白血球減少ヲ示セルモ脱毛、紫斑、出血等ノ各症候ヲ定型的ニ示サズ、二ノ症候全アル者或ハ、單ニ全身倦怠ノ之ヲ訴クル程度ノ者現ハルニ至ル

病院職員ニ於テモ自覚症状ナキモ殆ンド全員ヲ使用ス

七、患者ハ殆ンド全部半裸体又ハ裸体ニシテ女子モニューミーズ等ボロボロニナリズ羅斯ノミノ者アリ。完全ナル恢復ヲセルハ極メテ僅カナリキ。是ハ大傷患者ガ大部分ヲ占テ居リシ点ニモヨルカ、勿論其ノ他破片創、骨折、腸露出（数名ノ子供）モ居リシモ、比較的少数ナリキ

火傷患者ハ避難中ノ苦難ヲ思ハス如ク殆ンド總テ砂、泥ニマミレ、殊ニ全身火傷患者ハ来院后處置込ニ地上ニ或ハ廊下ニ臥シ轉ビ、疼痛ヲ訴へ、水ヲ呑マシテクレ、或ハ甚シキハ苦シイ殺シテクレ等ノ悲痛ナル叫ビヲ発スル等主トシテ疼痛、乃至苦悶感、口渴ヲ訴へ轉々反側シ居レリ。

火傷ハ第一度程度ハ僅カニシテ大多数ハ水泡ヲ形成シ或ハ既ニ表皮剥脱シ全身腫脹セル如キ感アリ殊ニ顔面ニ甚シクテ幼齡ノ女子ノ如キモ殆ンド年令ヲ想定スル事全ク不可能ノ如キ顔貌ヲ呈ス

大傷面ハ砂、泥ニマミレ是ガ清拭ニ甚ダ困難ヲ覺エシメタリ。

八、

(イ) 受傷後暫時（一―二日）ニシテ殆ンド總テノ患者ニ於テ化膿シ、消毒、看護ノ不充分ノ為カ蛆ノ発生セル者モ相当數認メラル。治癒ハ一般ニ順調ニシテ輕症ニ於テハ三、四日頃ヨリ乾燥シ約二週間后ニハ僅カノ皮膚着色ヲ呈セル程度ニ治癒セルモノモアリタリ。重傷者ニ於テモ大体一ヶ月后ニハ殆ンド總テ創面乾燥セリ。

二 白血球減少ヲ示セリ（三〇〇〇―五〇〇〇）

カカル隔離患者ニ於テハ安静、自家血注射ニテ比較的早く白血球數恢復セルモ勤務等ニテ再び減少ヲ來セル者アリタリ。

少尉ハカカル白血球減少症ノ患者ハ直接治療セズ從フテ治療性ノ比較時等全ク不明。

原子爆彈傷ニ就テ

広島第一陸軍病院櫛ヶ浜分院

原子爆彈傷ニ就テ

広島第一陸軍病院櫛ヶ浜分院

一、昭和二十年八月六日広島市ニ於テ原子爆彈ニ依ツテ爆心ヨリ一軒以内ニ於テ受傷セル後六日目（八月十一日）ニ當院ニ收容セル患者總數二〇八名中九月廿日現在マデニ判明セル死亡者ハ五四名（内五名ハ帰郷療養中死亡）ナリ。而シテ當院ニ於テ死亡セル四九名中三八名（七七％）ハ受傷後八日乃至十七日間ニ於テ死亡セリ。受傷十一日以後ノ死亡者ハ概ネ晩期障害ニヨルモノナリ。（第一表参照）

二、死亡者五四名中火傷患者ハ四五名ニシテ他ノ九名ハ火傷ヲ受ケザル打撲傷、破片創或ハ骨折等ニシテ早期ニ於テ之ガ直接死ノ原因トナルモノナシ。

三、臨床的症狀（第一表参照）

(1) 早期障害、火傷ニヨル發熱・食思不進ニシテ特異ナル症狀トシテ下痢多ク便通一日三十乃至五十行ニ及ブモノアリ。多クハ水様便ナルモ粘液血液ヲ混ズルモノアリ赤痢様症狀ヲ呈シ体液欠乏状態トナリ死ノ轉歸ヲトレルモノ多シ。而シテ脳症狀現ハレ興奮状態ヲ呈シ不眠、多辯、多動、叫喚シ轉々反側シテ心臓衰弱ヲ惹起シ死期ヲ早メタルモノ多シ。

火傷ハ收容時痂皮形成セルモノアリシモ痂皮下層ハ概ネ化膿ヲ呈セリ。痂皮ノ黒色ヲ呈セルハ特異ナル所見ナリ。之レヲ剥離シ清拭シ2%マーキクローム液ヲ塗布シ然ル後オレーフ油ヲ塗布セリ。

火傷死ハ火傷面積ノ大小ヨリモ火傷部位ノ如何ガ關係ヲ有スルモノノ如ク特ニ顔面ノ火傷ニ於テ死亡率ノ大ナルヲ認メタリ。（死亡者ノ五五％）

症例	姓名	症病名	火傷部位						症 状						歸	
			頭	顔	胸腹	背	上肢	下肢	發熱	食思不振	脱毛	出血	咽頭炎	下痢		脳症
1	玉〇康〇	火傷	+	+	+	+	卅	卅	輸送中死亡						6	
2	安〇俊〇	火傷	-	-	+	+	-	-	收容直后死亡						6	
3	廣〇正〇	火傷	-	+	-	-	-	卅	+	+	-	-	-	-	7	
4	坂〇正〇	火傷	-	-	-	+	-	-	+	+	-	-	-	水様	+	8
5	吉〇五〇	火傷	-	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	水様	-	8
6	平〇眞〇	火傷	-	+	-	-	-	卅	+	+	-	-	-	水様	-	8
7	菊〇信〇	火傷	-	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	水様	卅	8
8	権〇清〇	火傷	-	+	-	-	卅	卅	+	+	-	-	-	粘血	+	9
9	井〇茂〇	火傷	-	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	水様	+	9
10	末〇悟〇	火傷	-	+	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	9
11	大〇眞〇	火傷	+	+	-	+	卅	-	+	+	-	-	-	粘血	+	9

12	渡○健○	火傷	-	-	-	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+		9
13	佐○一○	火傷	-	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	+		9
14	西○修○	火傷	-	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	水様	+		9
15	島○國○	火傷	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	升		9
16	田○政○	火傷	+	-	-	+	-	-	+	+	-	-	-	水様	-		10
17	廣○七○	打撲傷	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	水様	+		10
18	伊○三○	火傷	-	+	-	-	升	-	+	+	-	-	-	粘血	+		10
19	町○忠○	打撲傷	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	水様	-		11
20	兼○秀○	火傷	-	+	-	-	升	-	+	+	-	+	+	-	-		11
21	小○遊○	火傷	-	+	+	-	升	升	+	+	-	-	+	粘血	+		11
22	神○廣○	火傷	-	+	-	-	升	升	+	+	-	-	+	-	+		11
23	鳥○栄○	火傷	+	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-		12
24	引○義○	火傷	-	+	-	+	升	-	+	+	-	-	+	-	+		12
25	[25は欠く]																
26	紅○震○	破片創	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	水様	-		12
27	大○信○	火傷	-	+	-	+	升	+	+	+	-	-	-	水様	-		12
28	岩○武○	破片創及骨折	-	-	-	-	-	-	+	+	-	+	-	血性	-		12
29	田○晴○	打撲傷	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-		12
30	平○茂○	火傷	-	-	-	+	-	升	+	+	-	-	-	水様	+		13
31	大○善○	火傷	+	-	-	+	升	-	+	+	-	-	-	水様	+		13
32	西○津○	火傷	+	+	+	+	升	升	+	+	+	-	-	-	+		13
33	神○元○	火傷	-	+	-	-	升	-	+	+	-	-	-	水様	+		13
34	増○勝○	火傷	+	-	-	-	-	-	+	+	-	+	-	水様	+		14
35	難○義○	火傷	+	-	-	+	-	-	+	+	-	-	-	水様	-		14
36	森○晃○	火傷	-	+	-	+	升	-	+	+	-	-	-	水様	-		14
37	平○退○	火傷	-	+	+	-	升	-	+	+	+	+	-	粘血	-		17
38	宮○勝○	火傷	-	+	-	-	-	-	+	+	+	升	+	水様	-		17
39	石○一○	火傷	+	+	-	-	+	-	+	+	+	-	+	水様	+		17
40	狩○勝○	火傷	-	-	-	+	升	升	+	+	+	+	-	水様	-		17
41	佐○照○	火傷	-	+	-	+	升	-	+	+	+	-	-	水様	-		17
42	新○善○	骨折	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+	水様	-	尿閉	19
43	光○尚○	火傷	-	-	-	-	升	升	+	+	+	+	-	-	+		22
44	竹○清○	火傷	-	-	-	+	升	升	+	+	+	+	-	-	+		23
45	請○清○	火傷	-	-	-	-	-	升	+	+	+	+	升	水様	-		25
46	石○童○	火傷	-	+	-	-	+	-	+	+	+	-	+	水様	+		25
47	上○精○	破片創	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	水様	+		26
48	加○陽○	破片創	-	-	-	-	-	-	+	+	-	+	+	水様	+		30
49	井○英○	破片創	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	粘血	+	黄疸	33

(2) 晩期障害

(イ) 出血受傷後十日目頃ヨリ出血傾向ヲ示シ鼻出血、齒齦出血、皮下出血、咯血、吐血、下血及ビ受傷部位ヨリノ出血ヲ招来セリ。第廿八例ハ頻回ノ咯血ニ依ツテ失血死ニ陥レリ。

(ロ) 咽喉炎ハ主トシテ咽喉扁桃腺ノ腫脹發赤、疼痛ニシテ第四九例ハ腫脹強度ノタメ摂食不能ヲ訴ヘタリ。

(ハ) 脱毛モ亦晩期ニ於テ著明ナリ。

(ニ) 下痢ハ晩期ニ於テモ現ハレ主トシテ水様性ニシテ粘液、血液ヲ混ズルモノアリ。

(ホ) 發熱食思不進ハ打撲傷、骨折等ニテ早期ニ之ヲ訴ヘザルモノニ於テモ現ハレ来ル。

(ヘ) 黄疸ヲ呈セルモノアリ (第四九例)

(ト) 脳症状ハ晩期ニ於テハ著明ナラズ。

四、血液所見

白血球ノ減少ハ特異ナル所見ナリ。即チ顆粒白血球ノ減少ヲ認ム。受傷後五十日目 (九月廿五日) 白血球ノ百分率ヲミルニ中性嗜好性白血球ハ左方核移動ヲ呈シ幼稚型白血球ノ出現ヲミルモノアリ。リンパ球ハ概ネ五〇%内外ヲ示シ未ダ比較的リンパ球過多症ノ像ヲ呈セリ。

(第二表参照)

症例	1	2	3	4	5	6	7
姓名	川○義○	酒○昭○	中○守○	松○太○	廣○正○	坂○安○	延○忠○
月日	26/9	26/9	26/9	26/9	26/9	30/9	26/9
白血球数	16,000	4,300	2,300	5,200	2,500	5,800	7,300
中性嗜好性 白血球	幼稚型	7	3	1	1	0	4
	桿状型	13	8	14	8	23	8
	二葉型	42	39	20	27	31	27

	三葉型	7	13	16	9	4	13	6
	四葉型	0	1	0	1	0	1	0
	總數	69	64	51	45	58	41	45
リンパ球		30	36	49	55	42	59	55
塩基性嗜好性細胞		0	0	0	0	0	0	0
エオジン嗜好性細胞		1	0	0	0	0	0	0

九月上旬ヨリ逐次経過ヲ追ヒテ觀察セル患者ニ於ケル白血球數ノ移動ヲ見ルニ漸次増加シ九月廿六日正常値ニ達セルモノアリ、又正常値ヲハルカニ超過シテ六、〇〇〇ニ達セルモノアルモ概ネ二、五〇〇乃至五、〇〇〇ヲ示セリ。白血球數ノ増加率ハ個人的差異ニ依ツテ一定ナラズ全ク増加ヲ見ザルモノアリ。(第三表参照)

九月卅日現在赤血球數ハ概ネ三〇〇万乃至四〇〇万ニシテ軽度ノ貧血症ヲ認メリ。(第四表参照)

第三表 九月中ニ於ケル白血球數移動

例	姓名	症病名	日	白血球數	日	白血球數	日	白血球數	日	白血球數	日	白血球數
1	川○茂○	打撲傷	8	800	16	2,200	20	5,800	23	6,300	26	16,000
2	酒○昭○	打撲傷	17	3,800	22	3,800	26	4,300	30	4,400		
3	中○安○	骨折	17	2,500	21	2,800	23	2,500	26	2,300	30	2,400
4	松○千○	破片創	17	4,700	22	5,700	26	5,200	30	3,900		
5	福○正○	火傷	5	1,200	16	2,300	22	5,800	26	2,600	30	3,400
6	坂○安○	火傷	17	3,200	21	4,500	23	4,600	26	5,800	30	6,100
7	延○忠○	火傷	17	4,500	23	4,500	26	7,300	30	7,300		

第四表 赤血球及ビ白血球數 (30/9)

症例	1	2	3	4	5	6	7	8
姓名	川○	酒○	中○	松○	福○	坂○	延○	西○
赤血球數	302万	360	371	523	422	323	380	304
白血球數	16,000	4,400	2,500	3,900	3,400	6,100	7,300	3,400

五、男性生殖機能ニ關スル觀察

患者 西○久○ 二十一才 一〇四部隊 (爆心ヨリ一浬以内)

初診 昭和二十年九月廿九日

原因及ビ経過 昭和二十年八月六日廣島市ニ於テ原子爆彈ニテ受傷、木材ニテ頭部及ビ両頰部ニ切創ヲ受ケタルモ火傷ナシ。切創ハ約一週間ニテ治療セリ。然ルニ九月二日頃ヨリ齒齦出血アリ二十二日頃ヨリ尿ノ黄褐色ニ着色スルニ気付ケリ。齒齦出血ハ漸次止マリシモ黄疽ハ次第ニ著明トナリ腹部膨滿感ヲ訴ヘ毎日一回軟便アリ食思不進ヲ訴フ。

現症、体格營養中等体温卅六度八分脈拍八〇至皮膚及ビ可視粘膜ハ亜黄色ヲ帯ビ齒齦出血アリ扁桃腺ノ腫脹發赤ヲ認メズ。肺域著變ナシ。心骨正常ナルモ心尖部ニ於テ収縮期雜音ヲ聴取ス。腹部一般ニ膨滿シ心窩部ニ軽度ノ圧痛アリ肝臟朝韌ハ之ヲ觸レズ

血液所見、赤血球三三〇万白血球三四〇〇ヘリンパ球45%中性嗜好性白血球若幼型2%桿状型9%二葉型26%三葉型4% 塩基嗜好性細胞0 エオジン嗜好性細胞0

尿所見 淡白陰性 (ズルホザリチール酸法) 糖陰性 (ニーランデル氏法) ビリルビン陽性 (グメリン氏法) ウロビリノーゲン陽性 (エールリッヒアルデヒード法) ウロビリン陽性 (シユレージンゲル氏法)

精液所見 採取直後ノ精液ヲ檢スルニ精虫ハ多数存在スレド一視野ニテ活動シツハアルモノ一ニ匹ニシテ他ハ静止状態ニアリ、精虫ノ活動ハ概ネ活発ナラズ頭部ノ振子運動ハ敏活ナルモ前進運動ハ不活発ナリ。採取後約十分間急動ヲ觀察シ得タリ。

本症例ハ爆心ヨリ一浬以内ニアリ火傷ヲ受ケザリシモ明ラカニ晩期障害現ハレ特ニ肝臟機能障害アリ各臟器ノ機能障害ガ考ヘラル。精虫ハ多数存在スレドモ運動可能ナルモノハ少数ナリ。

六、死體解剖例

患者 竹○清○ 第二總軍司令部 (爆心ヨリ一浬以内)

原因及ビ経過 昭和二十年八月六日廣島市ニテ原子爆彈ニテ受傷、顔面、背部、両下肢及ビ左上膊ニ火傷ヲ受ク。八月十一日當院ニ收容ス。

現症、体格營養中等体温卅九度脈拍一〇〇至脳症狀著明ニシテ興奮状態ヲ呈シ不眠、多辯、多动、床上ニ轉覆反側ス。食思不進缺損ス。皮膚及ビ可視粘膜ノ貧血著明ナリ。肺域著變ナシ。心骨正常ナルモ心尖部ニ於テ収縮期雜音ヲ聴取ス。腹部没 [1字判読不能] スレド圧痛ナン肝臟及ビ脾臟ヲ觸レズ。四肢正常膝 [1字判読不能] 腱反射正常。

上記ノ症狀ニテ火傷ノ處置ヲ施行ビタミナー注射施行セルモ食思不進ニシテ八月二十日頃ヨリ下痢一日數行水様便ノ排泄アリ脳症狀輕減セズ全身衰弱加ハリ八月廿八日死亡セリ。

直ニ死體解剖スルニ肉眼的ニ各臟器ノ貧血著明ニシテ肝臟及ビ脾臟ハ萎縮ヲ呈セリ。胃腸管表面ニ多数ノ點状溢血斑ヲ認メタリ。(標本保存)

十三、被爆広島の写真記録者たち

川西恒夫

人類史上初めての原子爆弾の犠牲となった広島市の記録は、平和理念をつちかう原点として、非常に有意義なものであるが、各種の文献や資料の中でも、その惨状を赤裸々にとらえた数々の写真は、重要な歴史的証言として、正しく後世に伝えられなければならない。

あの日、私は中国新聞社に出勤しようとする直前、上天満町の自宅で被爆した。突然、家屋が倒壊して下敷きとなったが、運よく傷も軽く、妻を助けて脱出することができた。

たちまち火災となり、危険の襲い来るなかを、かねて町内会が決めていた佐伯郡宮内村目ざして、妻と二人でようやく逃げた。そのときの惨状は、多く体験記やその他に語られているとおりであるが、写真は言葉や文字に言いあらわせないものを、その時点において明確に把握しており、迫力をもって見る者の胸を打つ。これらの貴重な写真を、後世に遺した人々の功績は実に大きなものがあり、その写真がどのようにして撮られたかということも記録しておく必要がある。被爆者の一人として、また、平和を願う者の一人として、ここに幾人かの撮影者について、調査できた範囲内のことを取りまとめた。

なお、アメリカ占領軍のきびしい干渉にも屈せず、映画に記録し、学術的にも貴重な撮影をおこなった加納竜一・菊池俊吉・林重男三氏については、加納氏及び水野肇氏の共著「ヒロシマ二十年」から抜粋し、三氏の手記形式にして、再録させていただいた(敬称略・順不同)。

加納竜一(当時・四一歳)

昭和二十年八月十五日、大東亜戦争はついに終わった。

「新西爆弾とは何か。これを急いでドキュメンタリーとして、記録しなければならぬ」という考えは、私たちが所属していた日本映画社の文化映画部や演出者たちのあいだには、当然あった。ともかく広島へ行こうという者、まずは、その製作資金を作る方が先だという者もあった。この時、会社自体は軍御用の社団法人から、自発的解放の方針を決めており、新しいニュース映画会社が、どういふかたちで再編されるか、まだいっこうに見通しもたないという状況下にあった。しかし、ともかくプロデューサーが私で、生物班・物理班・土木建築班・医学班・ニュース及び遊撃班など三三名の撮影スタッフと、ネガフィルム四万フィート、サウンドフィルム二万五千フィート、ポジフィルム四万三千フィート、ロケーション費二万七千円が決定した。

こうして、九月十四日、製作スタッフはいちおう次のとおり決定した。

[プロデューサー] 加納竜一

[生物班] 演出/奥山大六郎、演出補助/豊原慶人、撮影/鈴木善代治、撮影助手/今野敬一、佐野勇

[物理班] 演出/相原秀次、演出補助/伊豆村豊、撮影/坂斉小一郎、伊野公男、撮影助手/関口敏雄、城所敏雄

[土木建築班] 演出/伊東寿恵男、演出補助/水野肇、撮影/三木茂、撮影助手/金子宝次、菊地周

[医学班] 演出補助/吉田庄太郎、撮影/山中真男、栗田玄忠、撮影助手/小島明、林七郎

[ニュース及び遊撃班] 撮影/藤波次郎、演出/小畑長蔵

[進行係] 水上公成、山村圭三郎、笠井信太郎

[照明係] 城戸惣作、徳田輯、林栄之

[スチール担当] 菊池俊吉、林重男

ただし、このスタッフ編成は、出発後、少し編成替えが行なわれた。

できあがりはどうであろうと、広島・長崎の映画撮影は、日本の歴史の一つのドキュメントになるだろう、私はそう思って、終戦まで海外宣伝の仕事をしていた文化社の木村伊兵衛氏にたのんで、同社からスチール写真のカメラマン菊池、林、田子の三氏を派遣してもらった。

一口に言って、この原爆記録行というのは、初めから終りまで、ないないづくしのいわば無謀な取材であった。なんとか記録しておかなければという執念にかられて、しゃにむにぶつかっていったというよりほかに、言いようがない。

撮影開始が九月二十四日、第一次の撮影が終ったのは十月二十九日。さらに第二次の物理班の撮影は、十二月二十二日から翌年の一月二十六日、第三次は一月二十七日から二月十五日までかかった。

私たち一行の宿舎は、郊外の海田市町の日本製鋼所の第一報国寮と決まり、撮影隊の送り迎えに、一台のオート三輪車が提供されることになった。宿舎から爆心地へおよそ六キロの街道を走ると、爆風にたたかれた家並みが次第にひどくなっていく。そして、広島駅に近づく、見渡すかぎりの焼野原で、人影のない繁華街跡があった。

私たちは、この赤銅色の荒廢地で大部分の日数を過ごした。いたるところで、八月六日の惨状を目撃することができた。日本銀行前の焼跡のトタンに、白墨で、「この下に女中さんが死んでいます」と、書いてあった。そっとトタンをめくってみたが、そこには平らな土があるだけだった。

万代橋の上には、そのとき歩いていたらと思われる人の影が焼きつけられていた。一人、二人、荷車をひく姿の影もある。この荷車はどなんぐあいに吹きとばされたものか。そばのランカンにはキズ跡一つ残っていない。焼きついた人影に、自分の足を合わせてみると、一人はやや大股である。おそらく身体の大きな男か、あるいは急いでいたのであろう。

爆心から五〇メートル、島病院前の墓地で御影石の焼け方や、動き方を調べていると、人体の腐敗したような臭いがする。倒れた塀のコンクリートや墓石をころ

がしながら、犬のように臭をかきわけていくと、小さい子供の片腕が石の下からでてきた。五歳ぐらいではなかろうか。このあたりは、真上から爆風を受けたところなので、おそらくここで無心に遊んでいた子供に違いない。それにしても、身体他の部分は、どこへ飛んでいったのだろう。爆心が真空状態になったとき、天空高く吸いあげられたものとすれば、あるいは灰となり、己斐の茶臼山の方面に泥雨となって降ったのかも知れない。取りだしてみると、関節の骨の見える部分に、赤く血痕が残っていた。

広島・長崎で撮影したフィルムの編集と録音は順調に進み、二十一年四月中旬、完成の見とおしがたつた。

ところが、ある日、日映本社の岩崎洋製作用長に面会にきた二人のアメリカ軍人が、一通の書類を示した。それには、この「原爆記録映画」の完成作品だけでなく、使ったフィルムいっさい、ネガフィルムはもちろん、NGやラッシュプリントの一コマに至るまで、資料すべて残らずGHQに提出せよという命令であった。こうして、完成品「原子爆弾の効果(広島・長崎)」は、一九巻(一万五千フィート)、その撮影に要したネガ約三方フィートのいっさいは没収され、海の彼方へ持ち去られてしまった。

しかし、「原爆映画を返せ」との日本国民の激しい返還運動に圧倒されたアメリカ政府は、二十数年ぶりに、この“幻のフィルム”の返還をOKした。帰ってきた“幻のフィルム”が、テレビでいっせいに放映されたのは、全国民の記憶にまだ生々しいところである。

菊地、林、田子の三氏の撮影したスチール写真は、一部を映画に挿入したが、広島・長崎に派遣された仁科博士ら学術調査団の報告に多く利用され、広島・長崎の記録として公表された。

菊池俊吉(当時・二九歳)

二十年十月一日から二十一日まで、広島に滞在した。広島赤十字病院・陸軍病院宇品分院(船舶練習部跡)・通信病院・及び袋町・大芝両国民学校などの救護所をまわり、被害状況とその救護状況をカメラにおさめた。その数七八〇枚である。

大芝救護所で撮影した負傷者の写真説明に、咳・呼吸困難と記入したが、その大半は二、三日後に死亡した。また、負傷し子供を看護していた母親(三十一歳)が、まったく外傷もなかったのに、突然発病して危篤状態に陥った。原爆症を目前にみて、私は栗然とした。

東京から広島に来るとき、尾道までは汽車で来たが、そこからは汽車不通のため、尾道港から便船で宇品に上陸したのであった。

林重男

文化社(東京)写真部のカメラマンであった私は、社命により、昭和二十年九月三十日、学術調査団のメンバーに加わって、広島入りした。

主として、爆心から五キロ以内の物理的破壊状況を撮影して回った。十月十日まで滞在して、その間に約一〇〇〇枚も撮ったであろうか。カメラを向けるたびに、原爆の巨大な破壊力に背すじの寒くなるのをおぼえた。東京―広島間、往復とも鉄道を利用したが、山陽線も東海道線もバタ遅れで、片道に三十数時間もついやさねばならなかった。

木村権一(当時・四一歳)

支那事変が勃発したとき、新聞社をやめて陸軍運輸部(宇品町)に写真班員として志願し、中国大陸から南方戦線へと駆けめぐった。帰国後、運輸部から陸軍船舶練習部に転属したが、そこで私は被爆した。

その日、練習部の練兵場南側で、軍馬の厩舎移転作業に従事中、強烈な閃光とともに、左頬と左肩に熱湯を浴びせかけられたような感じがしたので、素早く地面に伏せた。とたんに、そばにあった古い厩舎が背中の上に倒れかかった。幸い少し間隙があって、下敷きにはならず、そのままの姿勢で閃光のあった方角を見れば、市の中央部に白煙があがっていた。大したことはたいと思っていますと、白煙の頭頂部が次第に膨れ上り、うすもも色に変わった。そして、あたかもキノコが立ったような形になった。約三秒くらいほど経ったかと思うあいだに、もの凄く太い爆発音が腹にひびいた。とっさに私は「カメラに収めておこう」と考え、立ちあがろうとしたが、倒れた柱が背中につかえていてどうにもならない。身体を反対にして、仰向けでジリジリと背中を地面にこすりながら、這うようにしてようやく脱け出た。

写真室まで約二〇〇メートルの距離を、一目散に走った。爆風で窓ガラスの飛散している部屋に入り、机の右抽出の中からカメラ(マミヤシックス)を取りだし、その場ですぐに撮ろうとしたが、キノコ雲があまりにも大きく広がっており、出張った雲の端の方は、太陽の光が射して黄色に見え、雲の裏側は柿色のところもあり、茶褐色・灰色の部分もあり、見るからに気持ちが悪い。ファインダーでのぞいたが、附近の邪魔物が写るので、また元の現場まで走った。もうその時は、練兵場には人影無く、思うにまかせてシャッターを切った(第三巻グラビア写真)。

しばらくして、西部の方から火災の煙らしいものを見たので、三階屋上まで鉄はしごを登り、市中を望見すると、おおいぶさった灰色のなかに、七カ所ぐらいのところから、火炎が立っていた。そのうちに全市に広がっていき、空一面、灰色の煙につつまれた。ここで全景を二枚続きに撮影した(第一巻グラビア写真)。写真室に帰る途中、医務室を見れば、たくさんの負傷者が行列を組んでおり、大食堂付近では、誰もが心配そうな顔で右往左往していた。中には、家族の安否を気づかい、もう帰り仕度をしている者もあった。私は、戦時下の心得として、常日頃から父や妻に、何時何処で別れることになるかも知れぬから、覚悟しておくと言っていたので、何もあわてることはなかった。大切な写真は、カメラに装填したまま、入口の防空壕の中に仕舞いこみ、戸締りを厳重にしておいた。この写真が辛うじて戦後まで残ったのである。

もう正午近かった。腹が減ったら戦争はできないの例えて、食堂に行ったが、係員も誰もいない。私は一人で残飯の雑炊を食べてから、営門を出て、宇品七丁目の電車道まで行くと、電車は各所で停っており、運転手もいない。架線は切れて垂れさがり、その間を負傷者を戸板に載せ、次々と運んでくるのであった。大変

なことになったぞと思ひながら、専売局付近まで来ると、皆実町一帯は、火災の煙で見とおしがつかず、御幸橋東詰では、憲兵が立っていて、そこから市中へ立入らせないよう警戒していた。私は、向う岸の平野町の自宅に、どうかして帰ろうと考え、憲兵の間を見て京橋川東手下を、石垣伝いに行き比治山橋にたどりついた。途中、土手上の家が燃えて川の中へ落ちてくるので、私は上の方を注意しながら歩かざるを得なかった。幸い潮瀬で川水が少なかったので良かった。橋の上に出て、西側へ渡ったが、昭和町の道路が灰色の煙で見えない。死んだ子供を抱えた親が、その中を気遣いのように泣き叫びながら走って行った。また、水道の傍で老人が死んでいた。私の父もこの様に死んでいるのではないかと心あせり、西側の土手伝いに平野町へと下って行った。前方に中国新聞社の社長宅が盛んに燃えており、傍に写真部の吉岡豊君が呆然として立っていた。お互いに安全を祈って別れ、そこから約三丁ほど西寄り自宅を目指した。焼け落ちて熱い瓦の上を渡っていく途中、焼けた下水蓋を踏込んで右足を奪われ、火傷した。ようやく自宅の跡に辿りついたが、むろん父や妻の姿は無かった。以前妻の父が、牛田の山に避難小屋を建てていたので、そこへ逃げたものと思った。また比治山橋にかえり、比治山を左手に見て上大河の汽車の線路伝いに、広島駅前に出、饒津神社の横の川土手を通った。もう夕闇が迫っていたが、対岸の浅野泉邸裏の砂浜では、所々で焚火をしたが、多く負傷者が応急手当を受けていた。川面には、上流の工兵隊の兵士の死骸が赤く膨れあがって何人も浮いていた。遙か後方を見ると、広島街がきれいに灰土と化し、余燼がくすぶっている。紫色のもやが横にたたびき、深い哀愁を感じた。何とも言えないさびしさであった。

私は足を早め、山の小屋にたどりついたが、誰一人帰った形跡が無い。しかし、もう真っ暗な夜、どうすることもできず、錠をこじ開けて中に入った。仮眠しようと思ったが、心配で眠れず、翌朝四時ごろ小屋を出た。裏山の畠のトマトをかじってから、市内へ出て行った。白島の電車の終点付近では、電車が丸焼けとなって脱線し、運転手が投げだされたまま死んでいた。また、前方の通信局や通信病院など窓ガラスが飛び散り、火災のために黒くくすぶっていた。八丁堀から西練兵場へさしかかると、黒い雨に濡れた兵士の死骸が点々と横たわっており、凄惨このうえもない。紙屋町から妻の実家(大手町二丁目)、広島瓦斯会社近くに行く途中、住友銀行広島支店の所で、霧のように余燼の立っている中から、頭から顔までピツリ血のついた小柄な人が浮んで、近寄って来た。それが、私の名を呼んだ。驚いてよく見ると、まさに父であった。かたく手を握りあって健在をよこした。私は急に元気が出て、妻の実家跡に行ったが、妻の両親は白骨死体に変っていた。繰り返して念仏を唱えて合掌していると、妻の兄弟も探しに来た。私は、なお行方不明の妻を捜し出そうと焼跡を歩きまわった。夏の日射しはきびしく、のどはカラカラに乾き、腹も減った。破れた上水道からもれ出る水を両手に受けて飲んだ。県立高等女学校付近に来ると、負傷した女性が倒れていた。見れば、肩のつけねから、大きな口をあけて腕が切れかかっており、水が欲しいと訴えた。私が布切れに水を浸ませて口もとに注いであげると、目を白黒させてよこした。とうてい生ききれなかったであろう。そこから千田町の広島文理科大学のグラウンドのプール付近に行き一体みした。そこで救援隊から炊出しのにぎりめし二個をもらったが、胸につかえて気分が悪く、食べられなかった。

また宇品国民学校へも廻ったが、入口から土間に至るまで負傷者がぎっしり収容されていて足の踏み場もない。その中を血まなこになって捜したが、妻はついに発見できなかった。

この日から毎日妻を捜し廻ったが、一週間目に、同じ船舶練習部の運転部写真班の尾糠政美君と、皆実町で出会い、妻が丹那橋東詰の衛生部隊の板垣に貼られている死亡者名簿の中に掲載されているということを知った。すぐに駆けつけてそれを確認し、無言の遺骨を抱いて、牛田の山の小屋に帰った。在りし日の妻の日常の言葉や面影、その他のことが忍びだして、どうしようもない悲しみがこみあげて来た。

さて、被爆の日から数日後、東京から都築博士一行が船舶練習部に来られた時、放射能で死亡する者を重点的に写真撮影するよう依頼された。私は部隊の上司の許可を得て、博士と伴って、キャビネの組立暗箱を持って、たくさん負傷者の中を立廻ったが、中には撮影中に死んでいく者もあって、心ふさがる思いをなめた。負傷者の多くは兵士や軍属で、約五日間ぐらいうちに六ダースばかり撮った。その中から最も研究資料になる写真を、博士がネガのまま東京へ持帰えられた。その他の乾板も、進駐軍上陸前に船舶練習部構内の土中に深く埋めたり、今まで写した作戦用の映画フィルムと共に、確実に焼却したりして処分し、昭和二十年十月九日、軍隊から永遠に別れをつげたのであった。

この頃、すでに進駐軍が立入っており、部隊大講堂にある据付けの映写機二台も、進駐軍に引渡すため、一応計理部に預けた。その他カメラも相当数あったが、それがどうなったかは知らない。

尾糠政美(当時・二四歳)

宇品の陸軍船舶司令部(砲部隊)の写真班に所属し、砲部隊の行動を記録し、作戦報告・或いは防空対策の資料とするのが私の任務であった。

五日の日曜日に、楠木町の下宿に引越したばかりで、慣れぬこともあり、引越した夜は警報続出のうえ、大変暑くて寝苦しかったから、六日の朝は何時もより早く起き、八時前にはもう部隊に出勤していた。

私たち写真班七人は、凱旋館の前庭で、毎日のごとく訓示を受けている時に被爆した。突然、強烈な黄色い光が目前に広がり、ドンと腹にこたえる轟音が伝わった。一瞬、その場に伏せた。しばらくして頭をあげると、建物の中にいた者が、窓ガラスの破片で顔を切って血だらけになり、悲鳴をあげていた。しかし、爆撃を受けた様子もない。

写真室に戻ってみると、棚が落ちていて、ほとんどのガラスが割れている。「こればかり大きな爆発だな」と思い、兵器庫のガスタシクの爆発だろうかと話した。しかし、それをつかの間のことで、市内の方向に黒煙が立ち昇り、空は入道雲が幾重にも重なったような不気味な様相になっていた。

時が経つにつれ、市内各所が大火災となり、壊滅的な打撃を受けたことが伝わった。参謀部の某中尉が、命令で「市内の居住者は帰宅せよ。」と伝えてきた。私は皆実町に母と義姉、平野町に実姉がいたので、まず皆実町に向って司令部を出た。

その頃、すでに表通りには、負傷者が続々と避難して来ていた。真黒く脹れあがった顔、ザンバラ髪、ボロボロに焼けた服など、文字通り幽鬼の群が続いていた。電車通りは、港に向う被爆者で埋っていたから、汽車の宇品線に沿って歩いた。皆実町の家は、少し傾いたぐらいであったが、誰もいない。隣り近所も人影がない。タンスが裏庭に吹きとばされていた。私は平野町の実姉の家に行くことにし、電信隊の前を通り、比治山橋まで行ったが、それ以上は火の海で、とても行かれない。そこで、下宿先の楠木町に向った。比治山の西側道路も通れそうにないので、比治山の裏側の段原町を、「水をくれ、水をくれ。」と呼ぶ声の中を泳ぐようにして歩いていった。

水槽の中に首をつけて死んでいる婦人、家の下敷きになっている子供や老人を目に見ながら、ようやく広島駅の手前までたどりついた。これまで、ガダルカナルの撤収作戦やブーゲンビル島の戦線で、多くの悲惨な場面を見てきたが、それどころではない惨状である。私は下宿先に帰るのを諦めて、宇品の司令部へ引返した。

翌七日、午前中は、司令部に殺到した負傷者の収容作業につき、似ノ島に収容する死亡者の運搬、ならびに負傷者の救護にあたった。午後は、収容所の活動状況を撮影のため、似ノ島に渡り、多数カメラにおさめた。軍医の指示により、焼けただれた負傷者や一か所に集められた死体などを次々に撮影した。

八日と思うが、憲兵隊の要請により、憲兵二人と私の三人で、市内の収容所を撮影してまわった。比治山や段原など二、三か所の収容所を経て、相生橋まで行き、爆心地に近い商工会議所の残骸に上がり、その三階から相生橋の破壊状況を撮影した。この写真一枚は、現在、川原四儀氏が保管している。その後、水主町の県庁など撮したように思うが、その間、どこで憲兵と別れたか、はっきり憶えていない。

広島赤十字病院や福屋百貨店の収容所、被服廠の収容所、袋町国民学校の一部の収容所などへも行ったが、「苦しい、苦しい。」と訴える少年の姿、無残な姿の女学生、動員学徒など、ファインダを通して見ると、いつもの冷静さではいられなかった。

母を探しながら平野町に行ったとき、比治山の橋の下に集まっている人々の中で、母の名を呼び続けたが、ついに見当らなかった。三次から出て来た兄と二人で、さらに母を求めて焼跡を歩きまわったが、これも徒労に終わった。現在まで行方不明のままであるが、西練兵場で火葬するために集められた死体の山の中に、あるいは富士見町付近にあった死体の山の中に、探す母がいたのではないかとと思われる。それとも、二十六年間、似ノ島の上の中に埋っていた死体の中にいたのではないかと思う。このとき、使用したカメラは、キャビネ暗箱・マミヤシックス・三五ミリ版ライカとハンザーキャノンであった。

川原四儀(当時・二四歳)

陸軍船舶司令部の写真班員であった私は、被爆の翌々日八日に、司令部の命令で、軍の施設及び焼跡の臨時収容所数か所を撮影した。使用カメラは、ライカ、セミパール二機である。

終戦とともに占領軍が進駐することになり、司令部の命令で、多くの機密書類にまじって、被爆者の写真も焼却処分にあつた。占領軍に発見されたら厳罰というわけで灰にしたのであるが、今にして思えば、「歴史の証人」として残しておくべきであった。

しかし、焼却した数百枚のうちから、二十五枚だけ、私はひそかに残しておいたのである。

山田精三(当時・中国新聞社運動部勤務)

その時、私は広島市郊外の水分峡(ミクマリキョウ)(安芸郡府中町)の入口を歩いていた。爆心地から二キロメートルくらい離れた地点である。上空を、機体を光らせたB29が飛んでいた。当時、もうB29は見なれた存在で、そう珍しくはなかった。ひよいと見たら、飛行機の下に白い落下傘があった。たしか三個あったように覚えている。雲一つない澄んだ青い空。朝日にキラキラ機体を光らせ、旋回するB29、ゆらゆら落ちてゆく落下傘、きれいだった。

そんなとき、急に目の前で写真のフラッシュ、マグネシウムをたかれたような、強烈な光りがきた。「何だろう」、友人と二人、そんな話をしていた。そのうち、いと不思議な現象があらわれた。池の中に小石を投げこんだとき、起る波紋、ちょうど、そのように、松の向うから虹が次から次と出てきた。とても美しかった。

ドカーン、ものすごい爆発音と爆風が襲ってきたのは、その直後である。

すぐ目の前、直径三〇センチメートルもある松の木が大きくゆれていた。しばらくして、いわゆる原子雲がムクムクと頭をもたげてきた。真赤、いや違う、黒味がかった朱色、そんな気もする。とにかく、過去一度も見たことのない、あざやかな、強烈な色だった。

私がシャッターを切ったのは、最初、ムクムクと原子雲が頭をもたげてきたとき(第一巻グラビア写真)。そのあと、最初の雲はかなり高く上がり、そして、次の大きな雲の魂がまた出てきた。私はシャッターをつづけて切ったが、あまりにも大きいため、ファインダーに入らなかった。

松重美人

あの朝、私はどんな事態が発生したのか、何も判らないまま、勤務先の中国新聞社と広島師団司令部へ駆けつけるべく、翠町の自宅を飛び出した。師団司令部へは、私がその報道班員でもあったためであるが、都心はすでに猛火に包まれており、行手はさえぎられていた。引返して、御幸橋西詰の交番所前へ到着したときは、炸裂後すでに二時間ばかりたった十時半ごろであった。そこには、ただ一人の警察官が、半裸で群がって来る何百人もの被爆者の傷の手当をしていた。一人残らず火傷で、火ぶくれが破れ、皮膚がボロボロになって垂れさがっていた。なかには、「痛い、痛い!」と、泣き叫びながら、路上をた打ちまわっている者もある。

油の一斗罐をぶち抜いて、応急手当をしている警察官も、頭を負傷しているらしく、無造作に巻いた包帯が、帽子の下からのぞいている。

時がたつにつれて、負傷者の数はぐんぐん増えて、あの長い御幸橋の両側が、負傷者でいっぱいになった。髪は焼けちぢれ、衣服は引き裂かれ、男女の識別もつかない。全身焼けただれて意識もうろうの母親の体にすがりついている幼な子は、泣き声も出ないらしい。

「熱い。助けてくれ。どこかへ連れて行ってくれ!」

「水、水、水を飲まして……」

絞るような断末魔の声が潮府を突く。鬼も顔をそむけるであろう空前の惨劇のなかで、今、私はカメラ・マミヤシックスをかまえている。それを撮ろうとしている。この「私」を、尋常な神経を持つ人間ではないと言うであろう。冷酷無残な行為と思われるに違いない。

私は一瞬心を殺してシャッターを切った。いつの日にか告発すべき証拠として、この惨状をありのままに撮影しておかなくてはならない。私は、新聞社のカメラマンとして、また陸軍の報道班員としての使命がある。

呻吟する多数の負傷者に、許しを乞う気持ちで、非情なシャッターを切ったのであったが、二枚目を撮るとき、私は泣いていた。ファインダーがうるみ、かすんでいた(第一巻グラビア写真)。

それから半月後、安芸郡温品に疎開していた新聞社で、このフィルムを現像した。暗室は横穴防空壕を予定していたが、設備があるわけではなし、折りからの月明りを利用しておこなった。仮眠テントのそばを流れる岩清水で水洗いし、近くの木枝にぶらさげての乾燥であった。これほど心のやり場もない苦しい撮影は、決して二度とこの世にあってはならないと願っている。

宮武甫

当時、私は朝日新聞大阪本社の写真部員で、中部軍報道班員もかねていた。

広島が“新型爆弾”らしいもので全滅したという報が伝わると、中部軍では、ただちに情報収集と被災者の厭戦気分掃などの任務で、在阪各新聞社の記者・写真部員、放送局のアナウンサーなどの報道陣と、将校・下士官・兵約五〇名の宣伝工作隊が編成された。

一行が臨時列車で広島へ着いたのは、八月十日であったと思う。これには、放送局の宣伝車も貨車で運ばれるという大がかりなものであった。

まず、爆風で押しつぶされた広島城天守閣の横に、テント張りの基地を作り、それぞれ活動をはじめた。

「焼夷弾」に焼かれた他の被災地では、かなりひどい焼跡でも、判別できるものが残っていて、すぐ復興に立上がる人々の元気な姿が、あちこちに見られた。

しかし、広島は町々は違っていた。一面粉微塵の焼野が原である。あとから考えると、私は爆心地を撮影して歩いていたのであろう。ビルは腰がくだけ、天井は吹抜け、鉄筋はアメのように曲っている。常識では考えられない状況であった。

焼跡には、復旧に立上がる人たちもなく、さながら“死の町”といった異様な印象が、わずか三日間の取材であったが、今でも強く目に焼きついている。

私は、まだくすぶり続ける被災地や、救護の状況、爆風で倒された宇品方面の民家を、コンタックス・カメラを使って、35ミリフィルム七〇枚ほどに収めて引揚げた。

すでに“新型爆弾”とは「原子爆弾」らしいとうわさされていたが、帰阪ののち、トルーマン放送で「原子爆弾」だと聞かされ、謀略とは思いながらも、慄然とした。

松本栄一(朝日新聞東京本社出版写真部勤務、当時三十一歳)

草も木も、今後七〇年は生えない不毛の地になると、当時まことしやかに伝えられていた。被爆の状況を撮影のため、長崎・広島に行けと言われてるとき、まず、脳裡にきたのが、この得体のしれない惨害のことであった。残留放射能のことも二次感染のことも、甚だ漠然としていた頃なので、私たちが現地を送り出す上司は、かなりの決断が必要であったと思われる。

東京で得ていた情報では、終戦を迎えて、長崎では跡片付けも手につかず、惨状もそのままになっているということなので、まず長崎に直行することにした。

さて約二週間にわたって長崎の取材を終え、広島へ向ったが、折悪しく枕崎台風(九月十七日)に遭い、ズタズタに切られた鉄路を見かぎり、山口県の下松から内海航路の運搬船の便を見つけて、これに乗りこんだ。この木造のポンポン船は、広島にいる肉親や親戚たちの安否を気づかう人たちが満員であった。

宇品に上陸した私は、広島市内に向かって足を運ぶにつれ、長崎で味わったと同じような驚異をここでも見せつけられた。ただ一発の爆弾の炸裂で、本当にこれだけ広い範囲の破壊ができ、何万ともしぬ人命が消費され、何十万にも及ぶ市民に治癒もおぼつかない傷を負わしたのか。それまでに各地の爆撃の被害などを見て来たが、いずれも何十何百の爆弾であり、焼夷弾の数による被害であったことにくらべ、私はすごく恐怖を感じた。放射能の恐ろしさについては、ずっとあとになって判ったことである。

「科学朝日」という雑誌に掲載予定の取材であったから、例のドームを中心にして一〇〇メートル、二〇〇メートル、三〇〇メートルと地図上に円を描き、その中で建造物や人体などの被災の状態を撮影して歩いた。これは結局足を使って焼土の中を歩く以外に手はなかった。

中古の軍靴の、重い足を引きずるようにして、廢墟の中を歩きまわるのは、時間ばかりかかって、一日の仕事の量は知れたものであった。夕陽に映えて、一本の煙突が、赫い地の底から突っ立っているのを、流川町の中国新聞社の残骸の屋上から眺めた印象は、いまだに忘れることのできないほど、強烈なものであった。食糧も乏しいときであった。当時の朝日新聞広島支局の若い人たちが手分けをして手に入れた僅かな米や、イモなどで自炊をしながら、山手に残った盲学校の寄

宿舎を根城にして活動した。こことて、天井も屋根も吹き飛ばされて、寝床の中からは、仰げば星空がながめられた。こうした生活を約一〇日ほど続け、約七〇〇枚(使用カメラ・ライカ)を撮影して、広島を発った。

岸田貞宣

広島師団司令部の報道班員であった私は、あの日、司令部の命令で、高田郡の吉田へ出張していたが、広島空襲の報に返して、太田川の岸伝いに大芝土手にたどりついたのは、原子爆弾の炸裂後四時間もたっていたであろうか。

ボウボウの髪、ふくれあがった顔、めくれて垂れさがった皮膚、全裸・半裸の姿、この世とは思えない惨状である。路傍には、火傷で手も足も顔も腫れあがった人々がうずくまっている。「水、水、水をください。」と、うめいている人もあるが、多くは声もなく動きもない。すでに死んでいる人もあるようである。

郊外へ郊外へとのがれていく避難者をかき分けるようにして、私は市内に入っていた。ようやく基町にたどりついたが、陸軍病院や輜重隊までこへいたのだらう跡形もない。広島城の天守閣も消えて無くなっている。傍の溝の中には、白衣や褌のままの兵士が、頭を突っこんで死んでいる。溝の黒い水求めて、腹這いでやっとたどりついて、そのままこと切れたのであろう。

ふと、わおにかえった私に、傷ついた無残な格好の兵士たちが、あちらこちらから寄って来た。まともに歩けない人たちがばかりである。私がまともな服装で負傷もしていないのを見て、救助を求めに来るのであった。

「いまに衛生兵が来る。今しばらく辛抱してください。」

どうすることもできないで、そう叫ぶ私の声はうつろであった。

報道班の私は、このとき肩にカメラ(コンタックス)をさげていたが、どうしてもシャッターを切る気になれなかった。

翌七日になって、この未曾有の被害状況を後世に残さねばならないと、ようやく決意し、廃墟の町々をフィルムのある限り写しつづけた(第一巻グラビア写真、その他)。

松重三男(当時・レントゲン技師)

その時、私は安佐郡安古市町に住み、病氣療養中であった。

ピカッと光った一瞬、屋外に飛びだすと、広島市の上空に、オレンジ色に似た火球が、尾を曳くようにして、超スピードで上昇するのを目撃した。急いで部屋に引返し、友人から預っていたカビネの暗箱で、そのオレンジの雲を撮影した。炸裂直後二分の光景で、風向きなどを立証する貴重な記録となった(第二巻グラビア写真)。

このあと、午前九時十五分頃、一時間たっても残っているキノコ雲を撮影、そして、正午ごろ、市の上空いっぱいには拡がった雲と煙を撮影した。

最初に私が目撃したのは、キノコ雲になる前の光景で、名状しがたい美しい色彩の火球の下に、水泡のような灰色に近い白煙が噴きあがっていた。

時間を区切って撮影したのは、まったくの偶然で、もちろん原子爆弾とは知らなかったが、特殊な爆弾だとは直感していた。

そのうち、奥の可部方面へ被災者を運んでいくトラックが、自宅の前を数十台通りすぎるのを見たが、あまりにも無残な姿であったから、撮影するにしのびなかった。ただ一度だけ、記録にとどめておこうと思ってシャッターを切った(第一巻五六八頁所載)。

この避難する写真の乾板は、いつのまにか紛失したが、残った古い写真からは、二〇人ばかりの避難者が、荷台の上に横たわっている姿が薄く出ている。

故川本俊雄(長男・川本逞雄報告)

当時、大手町五丁目に店住、家は県警察部の要請で警察寮になっていた。その関係から警察部の写真班員に委嘱されていた。

五日、西条へ出張し、六日の朝、広島に帰る予定であったが、遅れて帰ったため被爆からまぬがれたのであった。

帰って来てから、爆心地を中心に約一〇〇枚ぐらい被爆状況を撮影した。しかし、そのうちから幾枚かがアメリカに持ちかえられたとも言われる。トラックの上から撮影したものが多いようである。

林寿彦(当時・五〇歳)

私は当時、福屋デパートの商品課長から、南観音町の三菱総合配給会社の総務部長として出向していた。この会社は、三菱造船所の従業員とその家族数万人に、生活物資を配給する会社で、実に多忙な勤務であった。この会社の寮で被爆したのである。

私は山が好きで、広島山岳会設立のメンバーの一人でもあり、若き日にたびたび北アルプスへ遠征した。山男の伴侶といえればカメラというわけで、ローライフレックス、ライカなど数台を愛用していた。

被爆後は、家族の疎開先である賀茂郡志和堀で生活していたが、同胞救護会(立町)のお世話をすることになり、毎日、広島へ通った。そして、山へ向けて切っていたカメラ(スーパーセミ)のシャッターを、瓦礫の町へ向けて切ることになった。

被爆から一か月後の広島には、まだバラックらしいものは一軒も建っていなかった。しばらくして、いまの天満屋の横に、胡神社の粗末なやしろができた。

そして、どこで手に入れたのか、破れたいこが置かれた。見渡すかぎり焼土の中に、ポツンと建ったので鮮やかな印象を受けた(写真・第二巻二九二ページ参照説明の二十二年は二十年の誤り)。

私の写真には、高所から眺めたものが多いのは、福屋デパート、中国新聞社、市役所などの焼け残ったビルの屋上から、たびたび撮影したからである。

岸本吉太(当時三三歳)

目に入れても痛くない娘、澄江(当時・八歳、済美学校二年生)を原子爆弾失った私たち夫婦は、その年いっぱい、何をする気力もたく無為に過した。

しかし、無残な原子砂漠にたたずんでいるうちに、この広島悲劇を記録しとどめておこう、それが生き残った一人の市民としての義務であろう、一そう思った私は、二十一年の春ごろから、爆心地を中心に市内の各所をカメラに収めてまわった。幸い写真館を経営していたので、写真材料は豊富であった。

また、広島復興を記録に残しておくため、同じ位置の被写体を一年おきに十年間写し続けた。

深田敏夫

崇徳中学校(旧制)在学中、学徒動員令により、陸軍兵器廠に出勤し、繰上げて卒業後も、そのまま同廠で勤務にはおづんでいた。一七歳の若い血潮は、日本の必勝を堅く信じ切っていた。

八月六日の朝、六時四十五分ごろ、張り切って大芝町の自宅を出て、白島の電車終点近くの自転車店に向った。この朝、物資欠乏の折りながら、ようやく手に入れた新車に乗りかえる日であったからである。

自転車店に行くと、もう二、三時間かかるとのことで、待っていても出勤時間に遅れてしまう。やむなく諦めて兵器廠に向った。途中で、古い愛車レージがパンクし、それを押して出勤したが、朝とはいえ、汗でビショリ、暑い日であった。朝礼にぎりぎりに間にあった。

朝礼を終えて、二号館の西口に着き、今日の作業の指示を待っていたときである。もの凄く激しい、今までにない閃光がきらめいた。明るいダイダイ色のように感じた。「何か起きたぞ。」と直感し、兵器庫の奥の方へ走りこんだ。その直後、爆風に吹きとばされた。兵器庫の中は、砂と埃で一瞬のうちに暗やみとなり、私はずっと更に奥の方へ転がされていた。幸いにも負傷はしなかった。左側を見ると、兵器庫の鉄の扉がひん曲り、その隙間から差しこむ光線が目に入った。それを目当てに駆け寄り、体をななめにして外に出た。まだ屋外は砂埃でかすんでおり、遠方までは視野がきかない。西方の上空を仰ぐと、もの凄い煙が立ち昇っている。「何かあったな。」と思い、兵器庫の二階に駆け上り、北側の窓から首を出してびっくりした。かつて見たこともない大爆煙である。

さて、この頃、学友のなかでカメラに熱中している者がかなりいて、私もその一人であった。私は、ベビーパール(小西六製)というベスト半截判のカメラを、いつもズボンの後ポケットにしおぼせていた。フィルムも入手困難な時代であったが、わけのわからぬフィルムながら、ちょうど愛機に装填していた。

思わずポケットに手がかかる。だが、ここは兵器廠内である。見つかるは銃殺ものである。市中においてさえ、カメラを持つことは許されない時代で、その嚴重な取締りは、現在では想像もできないであろう。広島市は軍事基地であったから、特に防諜にきびしかったとも言える。

しかし、手はカメラを取り出していた。級友の江田君が誰かに付近の見張りをたのみ、数分間のうちに四枚のシャッターを切った(第四巻グラビア写真)。

それが、世界最初の原子爆弾の爆煙であるとは、夢にも思わなかった。兵器廠内の将校も兵士も、また工員の誰もが、火薬庫が爆弾の爆発としか、思い至らなかつたであろう。

そのあと、廠内を見ると、たくさんの負傷者が右往左往している。二階いた女子挺身隊員は、ガラスの破片で一〇数人負傷、中には重傷の人もある。鉄筋コンクリート建の油の倉庫では、油を積んだ鉄骨の棚が吹きとばされ、若い工員の一人は、それに頭をぶっつけ、油の中に顔を突っこんだ。それを引っ張り出して助けたが、数日後に死んだ。

午前十時ごろであったか、動員学徒に対して、家に帰れる者は帰れとの指示がでた。

電信隊(現在、進徳高校)の南側を通り、タバコ屋の所(現在、皆実町二丁目)を左に曲り、被服廠正門前に抜ける道の間で、初めて倒れている婦人を見て身ぶるいをした。御幸橋、電鉄会社前の方は火災で通行できないと、すれ違う人から聞いたので、やむなく兵器廠に引返した。もうこの頃、無残な姿の負傷者が溢れていた。再び、家に帰って来るように言われて、今度は宇品線鉄道沿いに北へ道をとった。大洲鉄橋の中央まで来たとき、向うから来た人に状況を聞くと、大洲から広島駅、二葉山付近へは通り抜けできないという。私は、鉄橋の中央部の線路待避所に坐りこんだ。

的場町の方を見ると、電車停留所付近から南に向って、もの凄い火災である。何分たったか、大正橋近くまで燃えあがったのを見て、またも兵器廠に引返した。時間は、昼をまわり午後一時頃か。空腹にはなるし、家のことも心配だし、頭の中はゴチャゴチャである。どうしたものかと、廠内の職場にもどると、顔見知りの人が昼食を食堂でとるように教えてくれた。食堂は、いつも満員なのに、今日はまばらである。ほとんどの人が、負傷者の救護や収容作業についていたからであろう。

二時が過ぎた頃、また家に帰ってみようとのことで、三たび帰途についた。江田君と一緒にいる。こんどは比治山の南側の電信隊横を通り、鶴見橋を渡り、竹屋町か田中町の土手に出た。一面ただ荒野が原である。熱気にやられてはいけないと思い、江田君と防火用水槽で作業衣をビショリにぬらし、頭からかぶって、建物疎開跡の道を右し左しながら西へ向った。

ようやく大手町の川土手(現在の平和大橋の所)に出たときには、作業衣は熱さでパリパリに乾いていた。ここまで来る途中の惨状は、もう口では説明しきれない。川下の水主町辺の元安川の砂浜を見ると、何十人か何百人かの負傷者や火傷者が、悲鳴とも何ともつかぬ声をあげて、苦しんでいる。

中島町の方へ渡りかけたとき、将校と二人の兵士に出会った。土橋方面の様子を聞くと「お前たちは何処に帰るのか。」という。大芝町の自宅へ帰ると答えると、今から基町の師団司令部の様子を見に行くから、その方から帰ったほうが良い、一緒に行こうとさそわれ、そこから土手下の川べりを歩いて元安橋へ向って歩いた。元安橋の土手の上でみると、電報配達の人が、自転車がまたがったまま、黒焦げになって倒れている。また、母親が乳飲み児を負い、もう一人の子を胸の内に抱いたままで死んでいた。

ここから、産業奨励館の残骸の立つ土手下を通過して相生橋東詰に出た。何十人か、それ以上の人が倒れている。馬も焼けて火ぶくれになっている。

相生橋の上も惨憺たる有様である。ここで将校たちと別れて左官町に出た。電車通り沿いに歩いて十日市町の所から横川線の方へ曲った。横川の終点から国鉄横川駅の東側に出て、第二踏切(現在・国道五十四号線)の所から、大芝の自宅の方を見ると、やはり焼野が原である。大芝公園の記念碑の所に大きなドングリの木があったが、よく見ると、その木の葉がちらついているように見えた。ひょっとすると家は焼けなかったかも知れんぞと、一目散に走って行くと、大芝国民学校裏門近くから、煙にかすんだわが家が見えた。一っ気に走った。

家屋は、爆風のためにひどくやられ、ただ在るといだけの有様であった。家には骨折で寝ていた父と姉が二人、そして近所へ嫁いでいる姉がいたが、いずれも無事であった。三番目の姉は、日興證券に勤めていたから死んだらうと思っていたが、前日に建物疎開作業に出て気分が悪くなり、出勤していなかったため、命拾いをした。

わが家も、二度か三度火がついたが、近所の人や大芝公園の防空壕にいた兵隊、鉄道部隊の兵隊、あるいは自動車学校の人などが消火につとめられて、火災を免れたと聞いた。

六日の夜は、ほとんどの人が公園で野宿したが、私は壊れたわが家の中で、蚊帳をかむり、日本刀を抱いて一人で寝た。近所の人々は夜遅くまで、焼跡に放水して延焼防止につとめていたが、そのため、わが家の所から大芝町のほとんどが火災をまぬがれたのであった。

終戦後、母の実家(現在・安芸町福田)に行き、疎開していた写真の現像液や現像タンクで、フィルムを現像し、小川で水洗いした。その中に、兵器廠の窓から撮影した「原子雲」四枚があったのである。

放射能の最も強烈な爆心地を通過したにもかかわらず、フィルムがやられなかったことは、今もって不思議でならない。

空博行(当時・二八歳)

現在、広島大学医学部(霞町)になっているが、そこは私たちが終戦まで勤務していた陸軍兵器廠であった。今も赤煉瓦の建物が残っており、つわものどもが夢の跡をとどめているが、この赤煉瓦建には、小銃から野砲にいたるまでの大小の兵器、無線機などがぎっしり保管してあった。第一線からの要請にこたえて、これらの兵器を軍用船に乗せて運んだ。

あの朝、私たちは三号兵器庫の二階で朝食をしたためていた。閃光に続いて爆発音がとどろき、爆風が襲った。私は北側の窓から南側の窓まで吹き飛ばされた。ガラスの破片で顔は血まみれとなったが、附近にいた女子挺身隊たちも、みんな顔を真赤に染めていた。

私たちは、この傷つた女子挺身隊員を励まして、ひとまず比治山の防空壕に避難した。

暫くすると、罹災者がどんどん比治山へ逃れてきた。しかし、ここには救護施設がないため、山を降りて兵器廠へなだれを打って逃げこんできた。兵器廠では、車輛三棟を解放して、これらの人々を収容した。廠内には小さな診療所があったが、軍医も看護婦もおらず、衛生曹長が所長格で、作業員の小さな傷や風邪の手当をほどこすのが精いっぱいという貧弱な施設であった。

そこで、兵器廠の無傷の作業員が総動員で救護にあたった。タネ油は兵器の手入れに使用していたので多量にあり、火傷の手当に使った。私も救護作業にあたったのだが、ガラスの破片で負傷した顔の痛みが激しくなってきたので、ひとまず安佐郡深川の自宅へ帰った。

二日後に兵器廠へ出勤したが、地獄図さながらであった。死体は空地に運んで火葬こふしたが、死亡者続出で、白煙は夜も昼ものぼっていた。

こんなわけで、カメラはいつも携帯していたし、兵器廠の倉庫には、南方で押収した戦利品のコダックのカメラやフィルムがたくさんあったが、惨禍の衝撃で撮る気が起らなかった。

原爆廃墟(ツアイスの大名刺判)に収めておこうと思ったのは、翌二十一年の春であったと記憶している。ある朝、深川を自転車で出発。まず流川町から八丁堀、大手町、中島町、水主町、千田町のコースをめぐる。バックフィルで二十四枚を撮影したが、県病院(水主町)あたりには建物がなく、異様なまでに高い煙突が遊跡にぽツンと立っていて、ひどく不気味な印象を受けた。

北勲

あの朝、私は气象台に勤務中であつた。爆心から相当距離があるのだが、江波山の高台にあるので、さえぎるものがなく、強い爆風に飛ばされた。官舎が江波山の下にあったから家族は無事で、市中から続々とのがれてくる被災者の救護に立ち働くことができた。

カメラを瓦礫の町へ向けるようになったのは、その年の九月末頃から十月中頃までであつた。広島もいつの日にか復興するであろうが、この悲惨な姿を写真に残して、戦争がふたたび起きないようにしなければ――原爆から免れた市民の犠牲者に対する義務であると思ったからである。

広島城跡、大手町、紙屋町、八丁堀などの都心部をはじめ、比治山、段原町方面にかけて、精力的に撮り歩いた。四十枚以上も撮影したであろう。

黒石勝(当時・広島赤十字病院レントゲン技手)

原子爆弾の炸裂直後、広島赤十字病院(当時は日本赤十字広島支部病院と称し陸軍病院赤十字分院となっていた。)の北側にあった山中高等女学校から出火し、隣接の看護婦の寄宿舎に延焼、病院も危険に陥ったが、医師・看護婦をはじめ、入院中の軽症患者たちの必死の消火作業によって食い止めることができた。火災の心配が去って、ほっと息つくひまもなく、こんどは被災者が市中からどっと押し寄せて来た。そのほとんどは熱閃光によって、顔や身体を焼かれた人々であった。

私が撮影した写真は、主として赤十字病院へ逃がれて来た人々のうち、手術前と手術後の医学的資料である。五〇枚近く撮影したであろうが、このうちの多くは、その後、亡くなられている。

病室に収容し切れず、廊下や庭先に横たわり、苦悶にあえぎながら医師の手当を待つ、あの日の被災者を思うかべると、今でも思わず合掌するのである。

斉藤誠二(当時・広島赤十字病院病理検査技手)

戦時中の広島赤十字病院は、外来患者は一般市民の治療をほどこしていたが、入院患者は全部陸軍の将兵であり(数名の海軍軍人がいたが)、病院長も竹内鉦陸軍軍医少将であった。

被爆時には、医師二十七人、看護婦・看護婦生徒四四二人、薬剤師・職員八五人、及び入院患者二五〇人がいた。

強烈な爆風によって、診療室も手術室も病室もことごとく破壊され、大手町九丁目方面から襲って来た火の手が、看護婦の寄宿舎を焼き払い、本院に迫った。このとき、院内にいた者は軽症患者も含めて、すべて立ち上って消火にあたったが、急ぎ来援した海軍(睦部隊の特攻隊員かもしれない。)の救援隊のめざましい活躍によって延焼をまめがされたのである。

竹内院長が重傷で動けなくなったのをはじめ、医師や看護婦たちも出勤の途中で被爆したり、病院内や寄宿舎で重傷を負い、無傷の者は数えるほどしか居なかった。私は幸い無傷であったから、被災者の救護にあたっていたが、救急材料も底をつき、食糧もなくなった。そこで、私と林庶務課主任は、入院患者たちの協力で、水道管が破裂して噴出している構内の空地で、夜、おかゆの炊出しをしたが、皆にゆきわたることができず、ほとんど飲まず食わずの救急活動を続けた。そうこうしているうちに、周囲が明るくなり、七日の朝を迎えた。昨日からの死者は、病院前に並べたが、訪れた親類縁者たちが、泣きながら捜しまわる姿に、胸の詰まる思いがした。

私が仕事をしていた地下の病理検査室に保管してあったレントゲンの乾板一二枚は、放射能を浴びていた。地下室に嚴重に保管されているものがカブるとは!原子爆弾の恐怖を知って慄然とした(第一巻・八六ページ参照)。

私が、その年の夏から秋にかけて撮影したものは、主として広島赤十字病院内部のものであって、負傷者ばかりではなく、病院の破壊状況も含まれている。

佐々木雄一郎(当時・二九歳)

新型爆弾によって広島が壊滅したという情報を東京で聴いた。当時、私は日本写真公社に勤務し、内閣情報局の「写真局報」のカメラマンでもあった。

八月九日、公社から派遣されて、被爆の惨禍も生々しい広島駅に降り立ったが、一望の焼野が原と化した市街地を見てただ茫然、言葉や文字では表現できない異様な感に打たれた。

広島は、私のなつかしい古里でもあったが、憲兵や特高警察の監視が厳重で、撮影まかりならぬと取材活動を禁じられた。ついに一枚も撮影せず、また家族の安否も確められず、焦燥感にかられながら、やむなく帰京した。

八月十五日、終戦となり、同時に公社も解散し、退職金代りにもらった三五ミリフィルム一〇本と、私物のハンザキヤーンを持って、十八日に広島に帰って来た。まず西十日市町(爆心地から西方七〇〇メートル)の自宅付近に向って、約三キロメートル焼跡の中を歩いた。母と長兄家族、妹たちが住んでいた所は跡形もなく、勿論誰の姿も見当らない、軌道からはみ出て焼けた電車が近くにあり、カメラに収めようと近づいてみると、その電卓に長兄(利男)の行先が書いてあった。「あッ、生きている。」と思うと、もう目がしらが熱く、その足ですぐ田舎の叔母の家すなわち避難先をたずねて行った。ここで長兄から家族の様子を知らされた。

長兄の話では、兄は倒壊物の下から母(トク)と兄嫁(道子)を救出しようとしたが、猛火が襲って来て、わが身が危険に陥ったため、やむなく火焰をくぐり、辛うじて天満川に逃げた。夕方まで川の中につかって火災の熱気をしのいでいる固に、黒い雨が降り、泥水と化した川には、木ぎれや死体がたくさん流れて来たという。無傷であったこの長兄が、八月三十日に原爆症状を発して死亡、また、長兄の幼い三男(道孝)は、そのとき近所の婦人に抱かれていたまま行方不明となり、現在なお消息が判っていない。

千田町の広島貯金局(爆心地から一・八キロメートル)に勤めていた次兄(末爾)は、爆風によるビルの窓ガラスの破片で頸動脈を切り、赤十字病院に収容されたが、二日後の八日に死亡。兄嫁(喜久子)と次女(潤子)は鉄砲町の家で即死。七歳の長女(由子)は、白鳥九車町(爆心地から一、五〇〇メートル)の祖母の家に行ったが、直接熱閃光を浴びて衣服に着火、半身を火傷し、その夜ついに息を引取った。

姉(八重子)は、わずか一歳の次女(智美)と共に、塚本町(爆心地から四五〇メートル)で被爆即死。社用で町に出ていた兄(勘六)は、被爆直後、似ノ島へ避難してから八月二十三日に死亡。一二歳の長男(稔)は、動員学徒(広島市立中学校)として小網町の建物疎開作業に出動中、道路上で被爆し、佐伯郡五日市町まで逃げたようである。昭和三十年に、新聞紙上で五日市町のお寺に遺骨が保管されていることが判った。妹(富美江)は、天満町の楠原製糖会社で被爆死亡した。

このように肉親一三人が死亡した九か所を歩いてまわり、一つ一つその現場を確認してフィルムに収め、冥福を祈った。これが私の撮影活動の動機である。この

時から廢墟と化した死の町のあちこちを歩きまわり、あとに遺された家族のことを思いながら、シャッターを切った。

焼野が原を写し歩いているうちに、ただ一発の爆弾の惨禍が如何に激甚であるかということに改めて知った。その非情非道性を赤裸々に撮影しておくことは、いつの日か何か役に立つであろうと、カメラに追い続けているうちに、気がついてみると二〇数年も経っていたというわけである、

昭和四十六年(一九七一年)十一月二日、本誌編集担当者の小堀氏と似ノ鳥に渡った。二六年間、埋められたままになっていた当時の被爆死亡者の遺体が、次々に発掘され、作業員の判断ではついに六一七体(法医学的には、二二〇体という)に達したのであるが、まことに沈痛のきわみで、合掌しながら、その発掘状況をカメラに収めた。残船無類の原子爆弾の傷あととは、このようにまだまだたくさん広島には残っているのである。

(註賀茂郡西条の傷疾軍人療養所から原子雲を撮影した鶴田藤太郎氏は、第一巻の五〇三ページに、また、原子雲その他被爆状況を撮影した尾木正己氏については、第二巻の二二四ページに記載されているから略す)

編集後記

戦後すでに二六年を経たが、原子爆弾による惨禍は、なお消え去ってはいない。徹底的に破壊された家庭の悲劇、被爆者の放射能障害など、一般の戦災都市とは違う多くの社会問題が、経済大国と謳われるその陰に、悪魔のごとく伏在しているのである。

被爆者は、あの日の凄惨な体験を、今、眼前に見るようにありありと語り、戦争を憎み、原子爆弾の没人間性を訴える。そして、この事実を後世にはっきりと伝えることは、広島の実責任であると説く。

広島市が、広島原爆戦災誌の編集をおこなうことについて、被爆者はいうまでもなく、多くの人々から、多年の願望がとげられるという思いでもって、予期しないほど多大のご協力を得、担当者は深い感動をうけた。

全国各地から、次々に送られて来る新しい資料や体験記は、戦災誌の記述に貴重な肉づけとなり、全五巻としてここに公刊の運びとなったが、一日も早くという人々の声が、編集作業を遂行する上で、常に大きな励ましとなり、推進力となったのである。

第一編総説は、序章を含めて五つの章から成る。広島という軍都の歴史的な背景の上に、突如、原子爆弾第一号が投下され、一瞬に壊滅。死の世界と化した広島が、終戦後、世界の平和祈念の聖都として、多くの苦難の中に新しくよみがえっていく模様を記述した。

第二編各説も、五つの章から成る。まず広島市内を三六地区(戦後合併した井口・中山・戸坂を含む)に分け、それぞれの地区での被災状況を項目別に記述した。各地区はきわめて密接な相関関係を保ちつつ、終局的には、広島市全域の状況が把握できるように企画した。記述するにあたって、市域全般にわたる普遍的な事象であっても、必ずしも各地区ごとにそれを記入していない面もある。それは、他に重要な課題がある場合とか、重複のわずらわしさを避けるために割愛したのであって、他の地区に記述されていないことであっても、その地区独自の事象とは限らない。すなわち、程度の差はあるとしても、各地区ごとに典型的な事象がたくさん存在しているということである。

各章の記述は、主として「広島市原爆戦災誌資料表」(以下、資料表と呼ぶ)を基礎資料とし、これに被爆者や関係者の手記・談話、あるいはこれまでに出版された原子爆弾被災に関する多くの図書なども、適宜に使用して、実状の把握につとめた。

前記の資料表は、市内各地区用・教育機関用・官公庁用・事業所用・宗教団体用・市町村用の六種に分けられており、これは広島市が調製した。「各地区」の資料表は、広島市が委嘱した地区委員八二人(主として被爆者)によって、それぞれ項目別に調査記入された書冊である。内容は、主要項目を二項目に分ち、そのうち七項目は、さらに延二九項目の細目に分けてあり、時間的な微妙な推移・変化の追求につとめた。

資料表に記入した地区委員は、被爆以前から永くその地区内に居住し、地域社会における種々の役職などで活躍し、その当日、わが身も被爆しておりながら、救出活動に献身した市民、あるいは危くも被爆から免れた人を、市内の各地区社会福祉協議会長からの推薦によって、広島市が選定委嘱した。

資料表記入のための調査は、当時の状況調査に数般的調査をも併せておこなったが、非常に困難をきわめ、基本的な数字の判明しないものもかなり多くあった。爆心地に近い地区ほど生存者も少なく、関係記録も焼失しており、被爆直後、肉親や縁故者を探しに入市した人々の記憶や推察によるほかは、記述の手がかりのないこともあった。尚、基町地区は、中国軍管区司令部を中心とした陸軍諸部隊の所在地であり、爆心地にも近く、一挙に壊滅したうえに、被爆につぐ敗戦で、軍の徹底的な解体により、その記録が残らなかったから、他の一般地区と同じような形式の記述ができなかった。従って、被爆時に、その営内において助かった人、あるいは直後に乗りこんだ市民の体験記、あるいは既刊の関係図書を軸として取りまとめた。

「各官公庁・事業所・学校・宗教団体・関連市町村」の各資料表は、地区用資料表よりは簡単で、内容を八項目とし、個々の機関に記入を依頼した。中には、中国新聞社・広島中央放送局・広島通信局・広島鉄道局などのように、その機関が発刊した社史や各種の出版物によって、その他の関係資料を渉猟しつつ記述したものもある。なお、東洋工業株式会社及び日本製鋼所広島製作所の二社は、市外であるが重要な役割を果たした工場であるから特に加えた。中国地方総監府・広島県庁(警察部を含む)及び広島市役所は、被爆当時、その職員として活躍した多くの人々の記録や証言、その他関係図書などによって記述した。また、関連市町村は、主として学童疎開先、あるいは医療班・国民義勇隊・警防団など救援隊の出動した地区を選んだ。以上のような方法で作成した原稿は、それぞれの資料表記入者(地区委員及び事業主体)に送付して、校閲を受け、補足訂正のうえ、ご返送を願い、さらに書きあらためて充実を期した。この作業を三度や四度にとどまらず繰り返したが、そのつど、被爆者その他の方々が、わが事のようにして繁雑をいとわずご協力下さり、ようやくここまで漕ぎつけることができたのである。しかし、なお、「広島師範学校」のように、国立(昭和十八年)になったものを、「県立広島師範学校」と誤記しているごとき箇所が幾つかあり、深くおわび申しあげる次第である。

原子爆弾の惨禍は、社会の各分野にわたって、あまりにも底深く、幅広く、かつ複雑をきわめているので、この戦災誌のみでは、すべてを書きおこせるものではなく、不正確な箇所も多い。今後、さらに調査活動を続け、あたらしい資料を発掘して、不備不明の箇所を次々と埋めていく必要がある。(小堀記)

刊行の経過

年月日*経過説明

昭和三五年二月二日*新修広島市史編集委員会(昭和二十五年設置)において、同市史全七巻の刊行終了後、なるべく速やかに「広島原爆戦災誌」を編集刊行する必要性が話しあわれる。

昭和三七年三月三〇日*最終の新修広島市史編集委員会において、戦災誌編集事業の大綱が審議される。

同年四月一日*新修広島市史編集委員会の解散後、企画調査室(室長向井一貫)が戦災誌編集を受持つことになり、同室次長森弘助が基礎資料の収集方法について

て検討をはじめ。

同年五月*企画調査室主事平砂唯嗣が編集事務を補助することになり、被爆前後の精密な状況を記入する「広島原爆戦災誌資料表」の作成に着手すると共に、市内を広島市福祉協議会の区割による三六地区(ほぼ学区別と同じ)に分け、各地区に調査担当の地区委員八〇人(主として被爆者)が選定される。後に二人追加する。

同年七月以降*市内各地区のほか、主要官公庁・事業所・各学校・関連市町村に対して、各部門別の「広

九月まで*島原爆戦災誌資料表」を送付する。この間、各地区委員に対して説明会を開催、調査協力を依頼する。

同年九月一日*広島平和記念資料館館長岡省吾の退職こともない、森弘助治が同館長兼務となり、企画調査室と資料館の双方において、編集業務を続行する。

同年一二月七日*企画調査室主事平砂唯嗣が、広島平和記念資料館主査となり、戦災誌編集に関する一切の業務を、同資料館においておこなうこととなる。主事川本義隆(昭和三八年三月末まで)が、編集業務を補助する。

昭和三八年八月*各部門別に依頼した前記資料表による回答が思わしくなく、編集作業が渋滞しはじめ、広島市公報、及び報道機関を通じて、一般への協力を呼びかける。

同年一二月九日*加藤助役・広島大学教授その他一般の有識者の参集を求め、編集方針を検討する。三か年計画で約八〇〇ページ内外のもの一冊にとりまとめることとする。

昭和三九年四月一日*主事網井正義が資料館勤務、編集業務を補助する。

昭和四〇年四月一日*編集担当主査平砂唯嗣が、同資料館の庶務担当主任となる。

同年一月一日*福利課同和係長小堺吉光が、広島平和記念資料館主査となり、戦災誌編集業務を担当する。ただちに資料の収集状況を点検し、編集作業の積極的推進をはかる。

同年一月一日*主事網井正義が専出、主事竹永豊日子が後任にきまり、編集作業を補助する。

昭和四一年二月一日*広島原爆戦災誌の編集目的・編集内容・編集方法などについて、市長(浜井信三)の決裁を得る。

同年二月以降

七月末まで*各種資料表を精査する。すなわち、既集資料表において、無記入、あるいは不明確で再調査の必要なもの、未回収資料表の記入督促、新規に資料を必要とするものなど、各部門別に分類整備するというそれぞれの作業を進め、執筆準備をおこなう。

同年八月以降*第二編各説の市内各地区一帯町地区から執筆に入る。主事竹永豊日子が退き、小松清興が後任に決る。四三年七月末までに、一応全原稿を書きおろす。

昭和四三年八月一日*戦災誌の監修委員として、広島大学教授後藤陽一・同今堀誠二・日本基督教団広島教会牧師四電一郎を委嘱し、順次に原稿を送付して閲読を受ける。

同年九月以降*随時、監修委員会を開催し、執筆事項の疑問・不備・追加・削除その他についての指摘により諸事項の再吟味、再調査を行ない、出版予定の巻数・ページ数にこだわることなくひたすら内容の充実につとめる。

これらの作業遂行中に、広島市内は勿論、全国から各種の貴重な資料の提供や情報があり、監修委員の指摘事項以外にも、実に多くの事がらを書きあらため、書き加える。

昭和四四年四月一日*編集作業の増大こともない、新しく主事笹山昭子が加わり、原稿の浄書、諸資料の整備を進める。小松清興は主として、現地調査の補助、及び、各種の図表・一覧表の作成補助にあたる。

同年八月一日*第二編各説に、新たに「主要神社・寺院・教会」の一章を加えることにする。また、資料編一卷を加えることにする。

昭和四五年四月一日*広島平和記念資料館長森弘助治が退職、後任に広島平和文化センター主幹小倉馨が発令される。

同年九月初め*各巻の体裁を整え、印刷準備に入る。すなわち当初の編集計画を大きく変え、本論四巻・資料編一卷、計五巻とする。

同年一〇月七日*最後の監修委員会を開催し、全巻の原稿完成を確認する。掲載写真など細部点検を重ねる。

昭和四六年六月初旬*印刷所を中本総合印刷株式会社決定する。発行部数二、七〇〇部。

同年八月六日*第一巻を刊行

同年九月六日*第二巻を刊行

同年一〇月六日*第三巻を刊行

同年十一月六日*第四巻を刊行

同年一二月八日*第五巻を刊行

昭和四七年二月下旬*全五巻を配布

広島原爆戦災誌第五巻資料編

昭和四十六年十二月一日印刷

昭和四十六年十二月八日発行

編集兼発行者広島市役所

広島市国泰寺町一丁目六番三十四号

印刷者中本総合印刷株式会社

広島市大州五丁目一番一号